ウルトラマンレジェンド　Episode.CROSSOVER

ハジケハムスター・ポッポ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

伝説の戦士ウルトラマンレジェンド

光り輝く宇宙の神とも呼ばれる彼はあらゆる世界を行き来して今日も平和の為に戦うのだ

友人のキングやノアに振り回され後輩のサーガらに労られる彼が向かう事になったのはかつてトラブルを解決した事もあるドラゴン強しなあの世界！

怪獣超獣宇宙人だけでなくまさかの部隊とあのウルトラマンも登場し果ては夢の産物まで出て来るカオスな事態に……

作者の推しトラマン、レジェンド主役の欲望全開ご都合主義満載で矛盾あっても気にしない自己満足小説です

【注意事項】

本作は超多重クロスオーバーのため、超が付くほどありえない展開が当たり前のように発生します（例・ウルトラマンが人間大で巨大ロボに乗る、本来ロボと無関係どころかまず関わらない作品のキャラがロボに乗る）。

そういったものが嫌な方はブラウザバック推奨。

また、低評価を付けたいがために適当な話を読んで低評価付けるのは作者のモチベーションに直結するのでやめて下さい。

少なからず楽しみにして下さっている方々の為にモチベーションを維持したいので、この点はどうか御理解下さい。

２０２３／０１／１２
現在ガンダムＳＥＥＤ編を展開中。独自設定で特別編に参戦中のＦａｔｅ／Ｇｒａｎｄ　Ｏｒｄｅｒ、本編にも参戦しました。
〈現在参戦中の作品〉
（ウルトラシリーズ・ハイＤ除く）

・グランブルーファンタジー
・コードギアスシリーズ
・鬼滅の刃
・ＢＬＥＡＣＨ
・鬼灯の冷徹
・ＩＳ―インフィニット・ストラトス
・ハリー・ポッターシリーズ
・ＴｏＬＯＶＥる―とらぶる―
・ゴジラシリーズ
・天元突破グレンラガン（劇場版含む）
・ガンダムシリーズ（参戦作品多数）
・勇者シリーズ
・真マジンガーＺＥＲＯ　ＶＳ暗黒大将軍
・真（チェンジ）！ゲッターロボ　地球最後の日
・スーパーロボット大戦シリーズ（オリジナルのみ）
・討鬼伝シリーズ
・ロマンシングサガシリーズ（現状武器のみ）
・聖剣伝説３　※キャラの外見
・ポケットモンスターシリーズ
・特捜戦隊デカレンジャー
・キン肉マンシリーズ
・ドラゴンボールシリーズ（現状技や会話内のみ）
【以下、幕間其ノ四から参戦】
・ソードアート・オンラインシリーズ
・ＳＳＳＳ．ＧＲＩＤＭＡＮ

・リリカルなのはシリーズ
※詳細は主人公設定にて

目　次

主人公設定（一部ネタバレ注意）・参戦作品 ―――― 1
本作に登場する惑星・地名など（ネタバレ注意） ―――― 14
特別編各種
特別編・正月大決戦 ―――― 24
特別編・超集合！究極ウルトラ大正月 ―――― 38
特別編・バレンタイン黙示録 ―――― 63
特別編・バレンタイン狂想曲 ―――― 81
特別編・リゾート島を開拓しよう ―――― 103
特別編・リゾート島を増やそう↑え？ ―――― 116
特別編・バビロニア島を更に開拓しよう！ ―――― 138
特別編・惑星レジェンドで休暇を取ろう！ ―――― 160
特別編・映画を作ろう！――提案―― ―――― 187
特別編・映画を作ろう！――始動―― ―――― 198
特別編・映画を作ろう！――上映（1）―― ―――― 215
特別編・映画を作ろう！――上映（2）―― ―――― 231
特別編・映画を作ろう！――邂逅―― ―――― 252
特別編・レッツ・ジョブチェンジ!! ―――― 266
特別編・ウルティメイト・サマー・バカンス！ ―――― 286
特別編・サーヴァントを呼ぼう！オカ研編その1～レジェンドは不憫光神である～ ―――― 315
特別編・サーヴァントを呼ぼう！オカ研編その2～ビギナーズラックは上級者も欲しい～ ―――― 330
特別編・サーヴァント歓迎会！その1～彼らは真なる魔境を知る～

特別編・サーヴァント歓迎会！その２～一人頑張っていた貴方達へ～ ―― 353
特別編・サーヴァントを呼ぼう！オカ研関係者＋α編～真面目な奴ほどヤベー奴を呼ぶ～ ―― 372
特別編・サーヴァントを呼ぼう！レジェンド関係者＋α編～召喚の二次被害による被害者が一番ヤバい～ ―― 394
特別編・サーヴァントを呼ぼう！勇治１１連編～爆死王は爆死じゃなくても結局ヤバい～ ―― 425
特別編・サーヴァントを呼ぼう！レジェンド＋α編～一番ヤベーのは意外な人物でした～ ―― 451
特別編・サーヴァントを呼ぼう！閑話～お休みだってヤバいのです～ ―― 466
特別編・サーヴァントを呼……ぶ前に今回は下準備しよう ―― 488
特別編・サーヴァントを呼ぼう！～ストック召喚前半戦・こいつら愉悦したんだ！～ ―― 512
特別編・サーヴァントを呼ぼう！～ストック召喚後半戦・涙の種、笑顔の花～ ―― 537
特別編・宴開始まで新入りを案内しよう！ ―― 551
特別編・宴、開幕～バカ騒ぎはウルトラ騎空団の華～ ―― 577
特別編・最大級イベント、光神感謝祭!!……の、予定を立てておこう ―― 591
特別編・サーヴァントも操縦訓練！ ―― 621
特別編・戦艦を作ろう！↑は？ ―― 642
特別編・彼女らの生まれた世界 ―― 662
683

特別編・ＩＳ～本当にさよなら、私達の故郷 ―――― 692
特別編・スーパーロボット対戦ＵＬＴＲＡ・序章 ―――― 723
特別編・スーパーロボット対戦ＵＬＴＲＡ・開幕 ―――― 732
特別編・スーパーロボット対戦ＵＬＴＲＡ・激闘 ―――― 747
特別編・皆で過去を振り返ろう！～プロローグからエクスカリバー編～ ―――― 764
特別編・皆で過去を振り返ろう！～次回に備えて～ ―――― 801
特別編・ギルガメシュ叙事詩新伝～それは、星を救う物語～其一 816
特別編・プロモーションビデオを作ろう！撮影篇 ―――― 844
特別編・それぞれの日常を見てみよう～第一回 ―――― 871
特別編・それぞれの日常を見てみよう～第二回 ―――― 894
特別企画各種
特別企画・予告編・正月お祭りバージョン!! ―――― 916
特別企画・バビロニア島大座談会～まだ未登場でも関係無い～ 930
特別企画・どうなる!? 本作の『ＳＥＥＤ ＦＲＥＥＤＯＭ』 953
原作開始前
レジェンド、かの世界へと旅立つ ―――― 964
レジェンド、かの世界にて活動開始！ ―――― 970
レジェンド、魔女と真龍とメイドを連れてくる ―――― 978
レジェンド、黒猫を拾う ―――― 988
レジェンド、幼いシスター（見習い）を救う ―――― 999
レジェンド、新たな事態を知る ―――― 1007

番外編―それぞれの陣営にて・後編 ―――――――― 1014
番外編―それぞれの陣営にて・前編 ―――――――― 1025
旧校舎のディアボロス、駒王町のレジェンド一家
新たなレジェンド一家、駒王での日々 ―――――――― 1030
学園での日常、火星での激闘 ―――――――― 1040
一つの疑念、拘束具は変装を兼ねるべし ―――――――― 1105
現在の光神達、超神とシスターの再会 ―――――――― 1106
レジェンド一家、アーシア奪還作戦 ―――――――― 1107
アーシア奪還開始、現れる邪悪の尖兵 ―――――――― 1108
生徒達を護るために、変身！ウルトラマン８０！ ―――――――― 1109
レジェンド一家、新しい家族 ―――――――― 1111
戦闘校舎のフェニックス、レジェンドｉｎ京都
アーシアのお引越し、遊撃隊での青い師弟 ―――――――― 1123
レジェンドのお悩み相談室、アーシアの転入 ―――――――― 1135
彼方より来たる戦士達、入部と顧問で協力者 ―――――――― 1144
登場人物紹介（レジェンド一家・光神編） ―――――――― 1156
レジェンド＆双龍京都へ、神話と不死鳥の来訪 ―――――――― 1165
漆黒の監視者の来訪、ライザーの受難 ―――――――― 1179
伝説・無限・真龍、京都リサーチぶらり旅 ―――――――― 1199
妖怪母子救出、レジェンド一行ＶＳカラス人間（堕天使に非ず） 1210
強化合宿開始……前に、白黒和解とお師匠縁壱 ―――――――― 1221
挑む覚悟と望む答え、強化合宿本格始動 ―――――――― 1235
ゲンの実力、ジーッとしててもドーにもならないお仕事問題 1247

オカルト研究部、それぞれの修行へ ―――― 262
合宿初日の夜、京都に起こる怪異 ―――― 276
現れる地獄の門、目指すぜ！天辺!!（前編） ―――― 284
現れる地獄の門、目指すぜ！天辺!!（後編） ―――― 298
事件後翌日の京都組、新戦力ってどんな人達？ ―――― 325
ホントにウルトラやばい一大事、現在の光神達Ｐａｒｔ２ ―――― 333
それぞれの修行進展、男と男の誓い ―――― 342
希望の光メビウス、吼えろ！コンパチガリバー ―――― 353
決戦前、最後の休息日 ―――― 369
ゲーム開始、始動！新生オカルト研究部 ―――― 383
戦慄するライザー眷属、圧倒する騎士と女王 ―――― 402
手にしたもの、受け継いだもの ―――― 417
番外編―ある者、ある家族の現在（前編） ―――― 433
番外編―ある者、ある家族の現在（後編） ―――― 453
日輪は時を超えて、ライザーとの決戦と決着 ―――― 477
弟子達を救え、レオとゼロ変身の時！ ―――― 499
赤龍帝＆トライスクワッド、バディゴー!! ―――― 518
ゲーム終わって、魔王様来訪 ―――― 538
カプセル怪獣と使い魔、レジェンド一行は駒王へ ―――― 554
月光校庭のエクスカリバー、光神サーガと神衛隊
レジェンド一行の帰還、先遣隊の旅立ち ―――― 567
先遣隊到着、ついでにもう一匹……？ ―――― 582
久々の学園登校、神衛隊は早速お仕事？ ―――― 598
ダイブハンガーでの一時、生徒会との顔合わせ ―――― 614
アーシアｉｎ惑星レジェンド、休日の兵藤家にて ―――― 633

登場人物紹介（伝説九極天・神衛隊編）――――1650
球技大会、荒ぶるオカルト研究部――――1660
特別編―緊急招集!?グラブル×鬼滅コラボ――――1677
教会の行った禁忌、巫女がもたらす希望――――1685
聖剣使い来たる、そして彼女はキレる――――1696
激突と蹂躙、そして宇宙の危機？――――1713
尽きる路銀、手を差し伸べたのは光神――――1727
月の侍と風来坊、『鬼』と『鬼』――――1740
力と思いを重ねて、猛激せし鋼の悪魔（バルバトス）――――1751
明かされる真実、ターンX起動――――1777
勇者との約束、ご唱和ください我の名を！――――1811
絆、次元も時間も超えて――――1838
面談、それぞれの成すべき事――――1862
幕間――――1888
オカルト研究部の新たなる出発――――1906
それ行け！空の世界先行調査隊――――1921
柱と宇宙帝王（笑）と「グラハムスペシャル！」――――1940
停止教室のヴァンパイア、集結せし勇士たち――――1961
新しい家族、新しい生活――――1976
奴、襲来――――1993
薔薇堕とす悪意の霧――――2010
ほのぼの日和とプール開き（前編）――――2027
ほのぼの日和とプール開き（後編）――――2046
白龍皇、そして……――――2061
湖に咲く薔薇――――2061

ＳＩＤＥ　ＧＡＩＡ　救国の忠騎士と赤き大地の巨人 ―― 2082
一喜一憂の授業参観 ―― 2121
続・授業参観と魔王少女と……魔法少女？ ―― 2194
突発的保護者面談とグレモリー眷属の『僧侶』 ―― 2217
一歩ずつ、前へ ―― 2215
ＳＩＤＥ　ＡＧＵＬ　大海戦！巨人対巨人 ―― 2144
開幕、三大勢力会談 ―― 2213
思い出が紡ぐ、怒りの理由 ―― 2246
これがウルトラの国だ！ ―― 2260
銀河遊撃隊結成秘話―ベリアル、英雄へ ―― 2275
襲撃、事態急転 ―― 2296
Ｐａｒａｄｉｓｅ　Ｌｏｓｔ ―― 2313
迫りくる異形達 ―― 2322
集結せし勇士たち ―― 2335
小さな勇者 ―― 2354
烈火 ―― 2377
炎（ほむら） ―― 2397
星の隼、黒き獅子 ―― 2412
俺たちを誰だと思っていやがるッ!! ―― 2432
父の背中 ―― 2447
新世代（ニュージェネレーション）ウルトラビッグファイト 2469
ＵＬＴＲＡ　ＭＵＳＣＬＥ ―― 2486
踊り狂う暴風 ―― 2503
星を空に…… ―― 2549

激戦の果てに　2568
幕間・其ノ二
後日会談、ダイブハンガーにて　2750
やってみよう！シミュレーター［入門編］　2729
蛇と恋と獄卒兎　2704
再会！最高の友と最強のライバルの巻　2684
激闘！奇跡の超人タッグ!!の巻　2659
死闘！真のスペシャルマッチ!!の巻　2641
壮絶！見せたかったもの！の巻　2620
決着！栄光の２大超人!!の巻　2602
「白」の求めていた「力」　2583
逆襲決戦のゴーデス、この星の明日のために
迫るぜ！夏休み！　2766
狂気の傀儡　2781
悪夢からの使い　2793
『赤』が齎すもの　2809
決戦の足音　2826
誓いを君に　2839
突入！ゴーデス島!!　2858
狙われた仮住居　2874
悪を断つ剣　2889
蘇る邪悪　2915
Ｂｌａｃｋ　Ｓｔｒａｎｇｅｒ　2930
重なる絶望　2946
ＲＥＳＴＡＲＴ　2964

地球からのメッセージ ―― 1
目覚めよ勇者 ―― 29
烈風の戦乙女（ヴァルキリー） ―― 30
勇気ある戦い ―― 48
どんなときも、ひとりじゃない ―― 71
この星の明日のために ―― 96
Ｌｏｓｔ ｔｈｅ ｗａｙ ―― 123
まだ見ぬ世界を目指して ―― 145
幕間・其ノ三
彼らのとある一日 ―― 160
ゴーデス戦後の各勢力 ―― 173
白は堕ち、闇は深く ―― 231
蒼穹世界のグランブルー、旅立ちの季節
古き悪魔の終焉 ―― 202
再会、不死鳥の少女～Ｚな最新鋭機～ ―― 218
約束の空へ～七番目の恐怖～ ―― 238
二つの出会い ―― 255
Ｄｅｐｅｎｄ ｏｎ ｙｏｕ ―― 266
旅立ちの季節 ―― 279
北の大陸から ―― 293
血を吸う花は少女の精（前編） ―― 309
血を吸う花は少女の精（後編） ―― 328
天翔る龍、来たる「店長オオオオオオ!!」 ―― 357
光を繋ぐもの ―― 377
若き騎空士の旅立ち ―― 404

あの蒼い空へ　3421
ウルトラマンティガ＆ウルトラマントリガー　光の世界の戦士たち
新しい日々　3436
星の世界より来るもの　4513
クリオモス島～刷り込まれる恐怖　4593
望まれぬ来訪者　4783
嘆きの空　4963
突き付けられた現実～宣戦布告　5133
決戦に向けて～『光』と『克服』　5303
恐怖を乗り越えて　5423
ウルトラ騎空団ＶＳモネラ軍団　5543
二つの赤い爆発力　5643
人の光～ＴＩＧＡ　5833
帰ってきた男たち!!　6043
光の世界の戦士たち　6283
ＳＨＩＮＩＮ，　ＯＮ　ＬＯＶＥ　6533
幕間・其ノ四　6873
空へと宛てた手紙　6873
月づくし～リターン・ザ・兎　7233
頭アウギュステな休息とこれから　7433
暗躍する者たち　7713
平穏崩壊のヘリオポリス、新たなる旅の始まり
新たなる世界へ　7953
コズミック・イラ　8053
偽りの平和　8053

ストライク、イージス、ネオ・バルバトス ―― 3819
カウントダウン ―― 3838
崩壊の大地（前編） ―― 3854
崩壊の大地（後編） ―― 3874
逃避航行のアークエンジェル、追う者と追われる者
サイレントラン ―― 3889
フェイズシフトダウン ―― 3915
赤い彗星 ―― 3939
消えるガンダム ―― 3965
宇宙の傷跡 ―― 3991
来たりし厄災 ―― 4010
敵軍の歌姫 ―― 4032
消えていく光 ―― 4052
分かたれた道 ―― 4072
宇宙（そら）と月 ―― 4102
目覚める刃 ―― 4114
試される覚悟 ―― 4136
アメノミハシラ陥落 ―― 4150
宇宙に降る星～ゼータの発動 ―― 4164
苦戦必至のツインロード、出会いと別れの積み重ね
移りゆく戦場 ―― 4186
それぞれの想い ―― 4197
月は出ているか？ ―― 4210
地底国家バラージ ―― 4231
結ばれた縁 ―― 4250

手に手を取って ―――――――

主人公設定（一部ネタバレ注意）・参戦作品

光神　零（ウルトラマンレジェンド）

身長・１８９ｃｍ　体重・７７ｋｇ

本作の主人公。

名前は【ぜろ】と読むが別にウルトラマンゼロと血縁がある訳ではなく、自身の出身とされている宇宙が誕生する前の、何も無い場所で既に存在していた事から取った。

性は【こうがみ】と読む。ハッピーバースディ！なあの人とも関係ない。由来はお察しだが、当初は超（ウルトラ）とか名乗ろうとしてたらしい。

ちなみに本作でゼロが人間体になった時の名前は【レイト】である。

公式との違いは、本作の彼がオリジナルであり、劇場版登場の方はコスモスとジャスティスが一体化して一時的にレジェンド化して能力の一端を見せただけ、という点。

故に本作ではノアやキングを始めとするチートラマンが可愛く見える程ブッ飛んだ能力を発揮、まさに元祖三大チートラマンの面目躍如である。

例えるならガタノゾーアとエンペラ星人を同時に相手にして圧倒出来るレベル。変身（生身）前で。

キング、ノアと共に『光の三超神』と呼ばれ数多の平行宇宙を次元や時間を超えて守る存在。二人とは公私ともに長い付き合いで友人関係だったりする。サーガらは後輩にあたる。

年齢はなんと『桁が５０万個』歳。５０万歳ではない。

そしてサーガの年齢は桁が３０万個らしい。因みにレジェンドの場合『最低でも』と頭に付くため、実際は更に桁が増える可能性がある。

ウルトラマン時、通常はレジェンドマントと呼ばれる薄紫とグレー（つまりレジェンドのボディカラー）の専用マントを着けている。

人間体は、分かりやすく言うとスパロボＯＧのキョウスケ・ナンブをベースに後髪を長くして首元で纏め、銀河伝説以降のウルトラ兄弟の人間体が着ている衣装の特別Ｖｅｒを着用。

性格も本来のものはそのまんまキョウスケなのだが、普段は親しみやすさを考えて穏やかだったりハイテンションだったりと割と感情豊かに振る舞っている。
もちろんイメージＣＶは森川智之さん。
駒王町はそもそもお膝元らしく、元々買ってあった土地にちょっと大きめの三階建和洋折衷な屋敷を建てた。
…そう、表向きはそこで生活している事になっている。
実際はその家の中にある簡易スターゲート、つまりワープ装置にて二ヶ所の、家と職場的な場所を行き来しており、本来の家として使っているのは一部海域を買い取ってそこに創り上げた、まさかのダイブハンガーである。内部の施設や各種ギミック、果てはアートデッセイ号などの防衛メカまで完備。何なのコレ。
さらに職場的な場所、というのもとある場所を改造して創り上げたウルトラ警備隊秘密基地。
やっぱりギミックやメカも完備しており、マジで地球守る気満々である。
メインとなるサーヴァントは、ギルガメッシュ（クラス・ウルティメイト）、エルキドゥ（クラス・エルキドゥ）、マーリン（プロトタイプ）＝プーリンの三人。
ギルガメッシュは自身が育ての親にして師でもあることから、エルキドゥも同じく我が子のように可愛がったから。そんなこともあって二人との絆は深く、おかげでエルキドゥが土に還る原因となったイシュタルが大嫌い。
プーリンは偶然……かと思いきや彼女に見初められたからしい。
カードゲーム・デュエルモンスターズにおいてスタンディングデュエル・ライディングデュエル共に殿堂入りを果たしている。使用デュエルディスク及びＤ・ホイールはボルガニック遊星号の色違い（スペックも違うが）。
エースモンスターは万物創世龍（テンサウザンド・ドラゴン）とスターダスト・ドラゴン。
デュエルモンスターズはご覧の通りだが、反面バトルスピリッツはそこまで強くないとか。

生活は大丈夫か？大丈夫だ、超神パワー（つまりご都合主義）で問題ない。

ちなみに同居人でヒロイン確定しているのは以下の通り。

※第４章時点

『ハイスクールＤ×Ｄ』

○オーフィス（メインヒロイン）

○アーシア・アルジェント（メインヒロイン）

○グレイフィア・ルキフグス

○黒歌

○ロスヴァイセ

○姫島朱乃

○ティアマット

（他にセラフォルー・レヴィアタンとガブリエルが第４章後から同居予定。八坂と九重は更にもう少し後）

『コードギアス』

○Ｃ．Ｃ

『グランブルーファンタジー』

○スカーサハ

『ＩＳ〈インフィニット・ストラトス〉』

○篠ノ之束

○クロエ・クロニクル

『鬼滅の刃』

○胡蝶カナエ

○胡蝶しのぶ

『ＢＬＥＡＣＨ』

○卯ノ花烈

○四楓院夜一
○松本乱菊
○ティア・ハリベル

『Ｔｏ　ＬＯＶＥる～とらぶる～』
○御門涼子

《変身時》
身長　５０ｍ　体重　５万トン
変身アイテム　不要（一応専用のものはある）
まず簡単にスペックから言うと
公式の５０万倍である。
倍ではない、万倍だ。マジで何なんだお前。
一応普段は公式のスペックまで落としているが忘れてはいけない。公式におけるレジェンドの謳い文句は今世紀最強のウルトラマンだという事を。
そもそも公式でマッハ３５の飛行速度にたった一機で二人（しかも劇場用の最強形態）のウルトラマンとやりあえる奴が数十機でようやくまともに戦えるかもしれないレベルが弱体化している状態とか笑えない。

〈技・能力〉
○スパークレジェンド
レジェンドの代表的な技。
宇宙最強の究極技というとんでもない二つ名があり発動されたら最後、防御不可能で一撃必殺。相手は死ぬ。
しかし、本作においてレジェンドにはノアよろしくさらにその上に位置するレジェンド三大伝説技というものが存在する。
○オーロラルパワー

相手の放ったエネルギーを吸収・増幅し、それを利用して攻撃を押し戻す（他にも色々出来るらしい）という放出系の攻撃に対して天敵レベルのチートパワー。
地球全生命リセット光線？効きませんそんな攻撃。
後述のレジェンドプロテクト同様、概念系にも効果があるという。
これと後述の能力のおかげか、ノアやキングからしばしば盾扱いされる事がある。オメーら盾いらなくね？

○レジェンドプロテクト
いわゆる絶対防御。オーロラルパワーがエネルギーに対してならこっちは物理に対して発動する。
そもそもそんなもん使わなくてもどうにかなるんだが。
前述のオーロラルパワー同様に概念系にも効果があるが、本当に恐ろしいのはこれらの能力が敵の攻撃に対して常時発動するという点だろう。
かつて因果律さえ干渉する武器に対して発動した際には完全防御で無効化するどころか、その効果を逆流させて使用者もろとも跡形も無く消滅させたらしい。
まさしくジーッとしててもドーにでもなる。

○レジェンドキネシス
所謂ウルトラ念力だが、レジェンドのものは固有名詞が付くほど特別かつ強力。
様々な特殊効果を有しており、悪魔将軍とのタッグマッチではお互いの能力をリンクさせる「ウルトリンク」という効果を使い、悪魔将軍はレジェンドキネシスによる接着力を、レジェンドはダイヤモンドパワーを同調使用した。

○次元・時間移動能力
読んでその名の通り。
次元移動はノアの方が上（ノア・ザ・ファイナルの性能やノアイー

ジスの有無が原因）だが、時間移動においてはあらゆる制約を無視出来るアホみたいな性能を誇る。
キングが宇宙を繋げ、レジェンドが過去への道を開き、時間を超えて集結した多数のウルトラ戦士をノアがさらなる別次元に送り出すという連携も可能。
ただしそこまでやるくらいなら三人のうち誰かが物理的に解決した方が早い。

○フューチャーフォース
コスモスと同種の技。本来は自身のエネルギーを他者に分け与える技だが、黒歌に対して使用した時はコズミューム光線の特性を付与することで彼女の中にあった悪魔の駒を、完全分解・性質変化・元素還元というプロセスを経て妖怪に戻した。

○ウルティメイトスクリュー
幼少期アーシアの住まう協会と孤児院を救うべくバリケーンに対して使用。
純粋にジャックのウルトラプロペラの強化版だがその威力は比べ物にならない。

○リカバリーオーラ
『特定の被害にあったもの』を修復・再生させる光線。無機物・有機物問わず効果がある。
特定の被害とは、例えば『○○という怪獣・宇宙人』などから『○○という計画』などの大規模なものまで多種多様。
レジェンドによって第一線で活躍中のウルトラ戦士にはほぼ漏れなく伝授されているものの、得手不得手があるようで、最も効果や範囲が大きいのがレジェンド。
その気になればクライシスインパクト級の被害さえ完全修復可能らしい。

○スプラッシュデトネーション
サーガのサーガプラズマーに相当する技。こちらは片手かつ拳から放つため、グレートのナックルシューターに近い。ただし一度に放たれる数が尋常ではなく、その威力と相まって多数の雑魚の駆逐に効果的。
第一章の火星での戦いにて使用した際にはダイナとの連携技で使用し、ゴーデスを逃がそうとした無数のスフィアをまとめて消し飛ばした。

○バーチカルギロチン
ご存知エースの得意技の一つと同じ技。京都にてレイビーク星人の親玉に対して使用し、見事真っ二つにした。

○ウルトラサークル
ジードとキリエロイドⅡの戦闘中、京都の人々をキリエル人の洗脳から解放した広域結界。同時に人々の意識の中にウルトラマンの姿でメッセージを送る効果もある。
レジェンドを中心として決められた場所にウルトラサインを書く必要があり、規模に応じて力の伝達が遅れて発動に時間を要するなど手間が掛かるのが欠点。

○スペシウム超光波
超闘士激伝でおなじみの必殺技。今回はサーガとのダブル必殺技として使用し、コカビエルと堕天司ベリアルの意表をついた。ちなみに超闘士ウルトラマンの声はレジェンドのイメージＣＶと同じ森川さんである。

○アブソリュートレジェンド
ノアの鉄拳技ノアインフェルノと対になる技。
マイナス一兆度の冷気エネルギーと超次元波動を纏わせた拳を相手にブチ込む。言っておくがどっかの究極生命体らとは全く関係な

い。
ノアインフェルノとの打ち合いで小規模の宇宙を消滅させた前科アリ。

○ハイパーライトニングカウンター
ノアに対してお仕置き（ツッコミ）で使用。
おそらくメビウスのライトニングカウンターに相当する技なのだろうが、相手が相手なことと使用した状況がアレなため正確な威力は不明。

○身勝手の極意
時々レジェンドが発動する銀髪＆銀色の瞳になる形態。
例の如く、七つの竜の珠を集めると願いが叶うあの作品に登場したものだが、まだ本人から明確には告げられていない。胡蝶カナエが一度かつ一瞬だけ口にした。
元々レジェンドがチートを軽く超えた存在のため戦闘では殆ど使わないそうだが、サーガ曰くこの状態でキレたレジェンドを止めるには光神や【エリア】中の実力者を総動員してノアとキングの力まで借りないといけないらしい。
地獄のタッグマッチ終盤にて遂に本気で発動。
レジェンド本人からではなくやはりカナエの口から（かいつまんで）説明された。

○キン肉バスター
カナエの話ではノアに対してお仕置きとして使用したらしい４８の殺人技の一つ。ただしノアはすぐに復活。
ヴァンパイア編終盤にて、ノアに使ったのは偶然だが使えたのは偶然でなかった事が判明。
ゼットの当面の最終目標として課題になっていた。

○タワーブリッジ

正式名称アルゼンチン・バックブリーカー。
とある仮面紳士の意向で故国の建造物の名を貰った技。
その体勢から「人間マフラー」とも呼ばれる。
ゼットが一番最初に伝授された技となった。

○スピニング・トゥ・ホールド
ゼットに伝授した技の一つ。
基本的にテコの要領で仕掛ける関節技なため、ゼットのみならず胡蝶しのぶも使えた（ただし威力が完全かは不明）。
また、見様見真似の模倣技をフーマも使用。こちらは戦闘中にチラ見したのを使ったため、間近で何度も見たしのぶよりも更に不完全。

○ウルトラヘッドクラッシャー
元々はティガ・パワータイプの技。
悪魔将軍とのタッグマッチにて鬼舞辻無惨に使用。
この技で無惨は頭部に大打撃を受け、おまけに舌も噛んだ。

○フライング・ブレーンバスター
特訓時にゼットがかけられた技。
ブレーンバスターの最中にその体勢のまま飛びあがり、落下の衝撃も加えたもの。
シンプルだが元々ブレーンバスター自体が大技なのでレジェンドの力も相まって相手にはかなりのダメージとなる。

○マッスルリベンジャー
ある種族の三大奥義の一つ。
やはりというべきか特訓中ゼットに（ペナルティとして）炸裂させた。
レジェンドはその三大奥義の残り2つは勿論、さらにはその原型とも言うべき奥義まで完璧に使えるらしい事が示唆されている。
正式使用は悪魔将軍とのタッグマッチにて鬼舞辻無惨に放ち、頭部

に致命的なダメージを与えた。

○ナパームストレッチ

ゼットの精神世界での回想にて使用が確認された、ある人物のオリジナル技。

その回想内ではある人物の放ったキン肉バスターとの合体技となった。

○マッスルダイナマイト

ウルトラダイナマイトのレジェンドバージョン……ではなく、上記のナパームストレッチをレジェンドが放ち、タッグパートナーがキン肉バスターで肩車のように乗っかる事でレジェンドキネシスによる安定性をキン肉バスターに、そして二人分の重量をナパームストレッチに追加して極める合体技。

一番下になるナパームストレッチをかけられた相手が最もダメージをくらうのは勿論、それをかけているレジェンドにも相当な負担が来るがレジェンド自身には気にならないレベルらしい。

土壇場で奇跡的に放てた技で、完璧に成功した理由は『友情パワーがあったからこそ』というのがレジェンド及びタッグパートナーの弁。

○アッパーボディ・ブレイクダウン

悪魔将軍との合体技（ツープラトン）。

レジェンドのフライング・ブレーンバスターと悪魔将軍の新技リバース・デモンズベアハッグを一人相手に同時に仕掛ける。

『＋』の横線がズレたような体勢になり、それぞれが首と顔面、両腕と胴体を剛力で締め付けながら叩きつけることでその名の通り上半身を纏めて粉砕する。

仮に脱出するとしても特異な体型で足を柔軟に使えるなど下半身側に特化していて、かつそちら側が十二分に鍛えられていなければならない。

また、この技を受けても上述の通り下半身は無事だが上半身、それも頭部に致命的なダメージを負う為、あとは実質サンドバッグ状態になるも同然である。

これによってコカビエルは殆ど試合続行が不可能に近い状態に陥り、最終的にもう一つの合体技（ツープラトン）で無惨共々叩き潰された。

○双極の処刑台

悪魔将軍との合体技（ツープラトン）。

レジェンドの『キン肉バスター』と悪魔将軍の『地獄の断頭台』の合わせ技だが、レジェンドキネシスによる技の安定性・確実性及びダイヤモンドパワーによる攻撃性能の大幅な向上をレジェンドキネシス・ウルトリンクによってレジェンドと悪魔将軍双方に付与し、さらにレジェンド得意の加重力戦法まで組み合わせたとんでもない技となった。

この技を受けたコカビエルと鬼舞辻無惨が、亡者でありながらすぐ復活せず長時間死亡したままという事態に陥る程の威力を誇る。

レジェンド三大伝説技や他の技・能力などは随時更新予定。

〈現在キャラ・メカ登場中の作品〉

（ウルトラシリーズ・ハイD除く）

・グランブルーファンタジー

・コードギアス反逆のルルーシュ

・コードギアス反逆のルルーシュ　ＬＯＳＴ　ＣＯＬＯＲＳ

・コードギアス反逆のルルーシュＲ２

・鬼滅の刃

・ＢＬＥＡＣＨ

・鬼灯の冷徹

・機動武闘伝Ｇガンダム

・ＩＳ～インフィニット・ストラトス～

・ハリー・ポッターシリーズ
・ＴｏＬＯＶＥる―とらぶる―
・ゴジラシリーズ
・天元突破グレンラガン（劇場版含む）
・∀ガンダム
・機動戦士ガンダム
・機動戦士Ｚガンダム
・ＡＤＶＡＮＣＥ　ＯＦ　Ｚ　ティターンズの旗のもとに
・ガンダムセンチネル
・機動戦士ガンダム００８３　ＳＴＡＲＤＵＳＴ　ＭＥＭＯＲＹ
・機動戦士ガンダムＳＥＥＤ
・機動戦士ガンダムＳＥＥＤアストレイ
・機動戦士ガンダム鉄血のオルフェンズ
・機動戦士ガンダム　逆襲のシャア
・機動戦士ガンダム　逆襲のシャア　ベルトーチカ・チルドレン
・ＣＣＡ―ＭＳＶ
・機動戦士ガンダム　Ｕ．Ｃ．０９９４　アクロス・ザ・スカイ
・機動戦士ガンダムＵＣ
・機動戦士ガンダムＵＣ　Ｏｎｅ　ｏｆ　Ｓｅｖｅｎｔｙ　Ｔｗｏ
・機動戦士ガンダム閃光のハサウェイ
・機動戦士ガンダム００
・機動戦士ガンダム００Ｖ戦記
・劇場版機動戦士ガンダム００　―Ａｗａｋｅｎｉｎｇ　ｏｆ　ｔｈｅ　Ｔｒａｉｌｂｌａｚｅｒ―
・機動新世紀ガンダムＸ
・ＳＤガンダム外伝　騎士ガンダムシリーズ
・ＳＤガンダムＧＧＥＮＥＲＡＴＩＯＮシリーズ
・ガンダムトライエイジ
・勇者シリーズ
・真マジンガーＺＥＲＯ　ＶＳ暗黒大将軍
・真（チェンジ）！ゲッターロボ　地球最後の日

・スーパーロボット大戦シリーズ（オリジナルのみ）
・討鬼伝シリーズ
・ロマンシングサガシリーズ（現状武器のみ）
・聖剣伝説３　※キャラの外見や性格（？）
・ポケットモンスターシリーズ
・特捜戦隊デカレンジャー
・キン肉マンシリーズ
・ドラゴンボールシリーズ（現状技や会話内のみ）

【以下、幕間其ノ四から参戦】
・ソードアート・オンラインシリーズ
・ＳＳＳＳ．ＧＲＩＤＭＡＮ
・魔法少女リリカルなのは　ＧＥＡＲＳ　ＯＦ　ＤＥＳＴＩＮＹ

【以下、特別編にて参戦】
・ファイナルファンタジーシリーズ
・ＳＳＳＳ．ＤＹＮＡＺＥＮＯＮ
・機動戦士ガンダム　水星の魔女
・Ｆａｔｅ／Ｇｒａｎｄ　Ｏｒｄｅｒ

※キャラやメカが一人（一つ）だけ参戦しているのもあります。シミュレーターや現在特別編にのみ出ているキャラや機体も含みます。

本作に登場する惑星・地名など（ネタバレ注意）

【惑星レジェンド】

レジェンドが創り出し、一応母星としている惑星。元々は一人で住んでいたのだが、レジェンドが平行世界を含む他の世界・宇宙において訳ありで保護した者が増えていき大勢の住民が住むようになった。

怪獣超獣宇宙人、妖怪や人外に果てはロボットまで平等な立場で豊かに暮らす、理想郷の一つの完成形。ここからギャラクシーレスキューフォースなどの各組織に出向している者も多く存在する。

現在はサーガとスペリオルドラゴンもここを母星としており、直属の眷属も同じく移り住んでいる。拠点は各々別の場所にあり、惑星上での距離はそこそこ離れているが交通機関は多種多様であるため交友自体は然程難しくない。

星の大きさは光の国（ウルトラの星）とほぼ同等だが、重力は地球とあまり変わらない。また、四季や風土による文化や生活面での違いはあるが、住むもの同士が助け合う傾向にある（これはレジェンド自身の意向でもある）ため貧困層というのが存在しない、極めて稀な星である。ただし一般家庭か裕福な家庭かの違いは存在し、裕福のレベルの差も存在する。

大まかな地理としては、レジェンドが住まうクリスタルシティのある中央大陸（あくまで基本となる地図上での中央）を中心に東西南北の四大大陸、そこから島国などへと分かれていく他、浮遊大陸や海上・海底都市なども存在し、旅行先には事欠かない。

その他、ドラガイトを始めとする惑星レジェンドに属するスペースコロニーも数多く存在するだけでなく、月に相当する衛星や親交のある惑星も同星系に確認されている。

レジェンド自身が彼方此方に赴き活動を行っている為、光の国以外にも次元を超えて親交のある国や星は多い。その縁で移住してきた者達も数多く存在する。

基本的にあらゆる面で（無論良い方に）水準が高いので生活に苦労

はしない。また、多種多様な文化が混ざり合って共存しているので娯楽なども豊富。それでいて天然自然も多い。
欠点があるとすればその美しさと裕福さから狙われやすい事だが、それは昔の話。レジェンド自身の能力は元より、サーガやスペリオルドラゴン、伝説九極天や神衛隊、シャッフル騎士団を始めとする戦力によって護られ（侵略者を尽く徹底して叩きのめし）続けた結果、それも無くなったらしい。
一応まだ狙ってくる連中（作中での例を挙げるとバド星人）もいるにはいるが、大抵防衛隊に根こそぎ殲滅される。南無。

［中央大陸］
惑星レジェンドの中心とも言える大陸で、他の四大大陸の文化がバランスよく集まっているだけでなく、特有の文化もある。山岳地帯や湖もあり、中央というだけあって交易は盛ん。

○クリスタルシティ
レジェンドの住まう『光神殿』がある中央都市であり、都市の大きさはその光神殿のこともあって惑星レジェンドで最大。ライやモニカ、伝説九極天の家もここにあるのだが、九極天の方は東方不敗やダンブルドアのように留守にしがち、もしくは仕事柄別の所で暮らしていることが多い者もいる。
その為、九極天で明確にここで暮らしていると言えるのは縁壱一家や、レジェンドと暮らしている卯ノ花、ユーリら紫天一家ぐらい。東はクロエとしょっちゅうドラガイトに行くし。近日中にライトニングとヴァニラも引っ越してくるとか。
また、レジェンドが拠点としている場所であるからか、建築物は多くが光の国と同じようなものになっており、それがクリスタルシティという名の由来。

○ポケモンアイランド
厳密には中央大陸ではないのだが、比較的中央大陸に近くかつレ

ジェンドが絡んでいるので特例で含まれている、中央大陸から少し離れた所にある島国。
その名の通り、レジェンド及びベリアルとジード（リク）が冒険した世界でゲットしたポケットモンスターが生活（生息にあらず）しており、都市や村などもちゃんとある。観光地としても有名で、親子連れに大人気。
まとめ役はレジェンドの手持ちポケモンが担当し、基本はパートナーのピカチュウ。偶にミュウツーが代わるときもあるらしい。

［東方大陸］
現代風・日中系の文化が多い大陸。噴火はしないが火山なども多く、温泉が大陸各地に多数あることでも有名。名前から東方不敗が治めていそうな気がするが、そんなことはない。実はスノウとセラが新婚旅行で真っ先に行った大陸だったりする（案の定レジェンド絡み）。

［西方大陸］
その名の通り西洋文化が多い……のだが、加えてファンタジー的な文化も多く存在する大陸。それ故に惑星レベルの冒険イベントでは一気に賑わう。加えてこの大陸でしか採れない薬草なども数多く存在し、文化的な関係でエルフや妖精、魔族など最も多くの種族が生活している大陸でもある。
スペリオルドラゴンやその眷属の拠点としている大陸であり、機兵など独自の機動兵器も開発されている。

［南方大陸］
超古代文明がそのまま残っているような、神秘的な文化が多い大陸。西方大陸と並んで冒険イベント時には大きく盛り上がりを見せる。また、文化的に外部からの客人にも人気が高い。実は四大大陸で最も歴史がある為、レジェンドの石像なども立てられている。

［北方大陸］

未来・近未来的な文化が主となる大陸。分かりやすく言うと某猫型ロボットが産まれた世界のような感じといえば御理解頂けるだろう。その所為か天然自然が他の大陸に比べて少ない（ただし他の大陸と比べて、なので一般的に見れば割と多め。人工的な自然もある）。

［浮遊大陸エイディオン］

首都であるホグワーツ及びホグワーツ魔法魔術学校で有名な、惑星レジェンドで唯一空中にある大陸。万が一に備えて、海上都市や海底都市の無い海の上に存在している。魔法ではなく惑星レジェンドに満ちた光気の他、様々な力が働いて浮遊が維持されている為、落下は有り得ないと言っても過言ではない（大陸を構成している岩や大地自体が浮遊する性質を持っていることも示唆されている）。ここで行われる魔法スポーツ競技『クィディッチ』は惑星レジェンドで屈指の人気を誇る。

○ホグワーツ

エイディオンの首都であり、ホグワーツ魔法魔術学校を擁する惑星レジェンド最大の魔法都市。地上から行く場合は直接飛んで向かうか、もしくは特殊な路線の特殊な列車に乗る必要がある。魔法都市ではあるがそれ一辺倒ではなく、現代文化と共存しているので魔法が使えずとも問題はない。普段の生活では魔法があると便利ぐらいの認識。

［海上都市］

浮遊大陸と違い大小様々な都市がいくつか存在する。特産品は例によって海の幸各種で、都市独自の野菜や果物が特産品に含まれるところも。場所が場所だけに木々などは植林等によるものが殆どなのだが、マングローブが群生している都市もある。

○アクアエデン

サーガが拠点とする、惑星レジェンド最大の海上都市。交易が盛ん

なことでも有名で、地理的な部分もその一つ。神衛隊も皆ここに居を構えているのだが、巌勝のように別の所に自宅を持つ者もいる。また、神衛隊が機動兵器を主とするだけあって、運用に必要な施設が他の場所に比べて充実しているのも特徴。

［海底都市］

数こそ少ないが、いずれも大きな都市がそれぞれ離れた場所に存在。場所が特殊である為、直接赴く以外に物資等の交易専用転移ポートがどの都市にも設置されている。木々や土などは人工的なものか地上から運んできたものに限られるが、水に関しては各種濾過設備が充実しているので惑星レジェンドでも最高品質で、天然水にも匹敵する。

［スペースコロニー］

宇宙世紀のコロニーにおけるサイド・バンチに相当する『エリア』『ピース』という名称で結構な数が建造されている。束を始め、技術者や科学者はコロニーに別荘を持っていることが多く、神衛隊専用のコロニーなどもある。

○ドラガイト

エリア４（大体惑星レジェンドと月相当の衛星の中間辺り。衛星軌道寄り）・８ピース。束の別荘や神衛隊の訓練施設があり、比較的技術者が多く在住しているコロニー。ライとモニカの機体など、ＭＳがメインに開発されているが、特機が開発されないというわけでも出来ないというわけでもない。このコロニーのホテルが非常に快適だというのも有名。

［月（仮称）］

惑星レジェンドのある星系において、太陽に相当する恒星はレジェンドによって光気で構築された（!?）言わば文字通り光の星。対して月も光気で構築されたものだが、太陽系にある月と同じような衛星の

為、便宜上は月と呼ばれている。惑星レジェンドに比例するように、衛星の大きさが太陽系のものより遥かに大きい。

レジェンドが開発した機体に搭載されたサテライトシステムに関係するマイクロウェーブ送信施設もここにある。レジェンド謹製のサテライトシステムは、ここから送信された照準レーザーとスーパーマイクロウェーブが次元間をぶち抜き、対応機体へと送信される。

その世界の月に相当する衛星から送信されたように見せるようにすることと、同時に『月』という同異併せ持ったものを擬似的に繋げることで可能とした特殊なシステムである為、レジェンド製サテライトシステムは月が出ていることが使用条件となる。逆を言えば、月相当の衛星が出ているなら朝昼だろうが異次元だろうがシステムが起動可能。

【月王国（ルナ・ブリテン）】

とある世界の月に存在する、月神沙耶と月影勇治の故郷。先代女王は妖精國より移住・月星人化したモルガン（ＦＧＯ）。レジェンドが絡んでいるからか、宇宙人や亜人など多くの種族が暮らしており、数多の世界に存在する月の中でも有数の大国家。

文化も多種多様に取り入れており、技術関係もレジェンドとヤプールのおかげで大幅に進歩している。その為、ＭＳに独自の構造や装備のものが存在したり、フレームアームズ（通称ＦＡ）という機動兵器が開発されていたりする。

ＭＳ関係では『ベネリット・グループ』という一大企業が中心となっているものの、ある事件以降は先代女王の伝手で惑星レジェンドと頻繁に交流するようになり、そちらにあるＭＳ以外にも特機やＰＴなど多品目を扱う『クルーガー・インダストリー』からの輸入に月全体が傾いているらしい。ついでにその事件が切っ掛けでベネリット・グループの一人娘ミオリネ・レンブランが家出したことも拍車を掛けているとか。

目下の問題はレジェンドのパートナーであったキャストリアことアルトリア・キャスター、現在名アルトリア・アヴァロンがやたら健

啖家であることと、ミオリネだけでは水星たぬき……もといスレッタ・マーキュリーのやらかしがフォローしきれないこと。ついでにモルガン以下数名が原因でヤプールの精神的・肉体的負担も半端ないこと。

結論・レジェンドと勇治を呼んでこい（ただし、前者は過去の出来事からモルガンも追加で混ざる可能性があり確実とは言えない模様）。※後者はもれなく明日のパンツ、ではなく映司（火野映司）―２（前上流）もついてくる！……何かおかしい。

○喫茶リコリコ

先代女王のモルガンも利用している、月の組織『リコリス』に属する二人が働いている喫茶店。食の文化は星を超えるというか、他の星の宇宙人にも大人気。最近、七星剣の数名が食事しに来てウェイトレスの二人が腰を抜かしたらしい。ランチタイムのパンが非常に好評なのだが、その手ほどきをしたのはまさかのウルトラマンエースこと北斗星司。

時折レアキャラのドンムラサメが働いているときもある（普段は勉強中であるため）。看板娘としてその世界の月にのみ生息するルナラビット（ネザーランドドワーフの大きいバージョンみたいな種類。体重は約５ｋｇ）が一羽おり、この兎目当てに沙耶が頻繁に出入りしている。

○北斗のパン屋

排熱大公ウッドワスに頼まれたエースが、レジェンド出資でヤプール協力のもと開店した月随一のベーカリーショップ。エースは立場上オーナーで、普段はウッドワスが取り仕切っている。エース＝星司に徹底して仕込まれたパン作りの技術を持つ店員達によって製作・販売されており、どれも毎日完売するほどの人気。

かの健啖家が恐ろしいほど買い漁っていく日もある為、購入したければ常日頃から目を光らせておくべし（しかも嫌がらせではなくガチで美味しそうに食べるので責められない）。

○機動兵器教習所

比較的最近、月に設立されたＭＳや特機等の教習所。大型の乗り物ならやはり操縦を覚える場所がないといけないだろうというモルガンとヤプールの言葉で作られた。因みに月ではＭＳはジムⅢ・ザクⅢ・ダナジンが人気がある。出資にやはりレジェンドが絡んでいるらしく、こういうことをするからモルガンの好感度が恐ろしい勢いで上がっていくんじゃないかとはヤプールの談。

惑星レジェンドで開発された最新シミュレーターが導入されている為、チャレンジモードを使用することも可能。ただし使用出来るのは免許取得後。

最近ではシミュレーターで、誰がゲットマシン何号に乗るか揉めてる妖精騎士達がいたり、ニコニコ笑顔で「お揃い」とグランゾンのブラックホールクラスターをぶっ放すキャストリアがいたり、養子である沙耶の機体に乗って無双するモルガンも見かけられる。

【ダイブハンガー】

ハイＤ世界におけるレジェンド一行の住居で、ご存知ウルトラマンティガにて登場した基地と同じもの……なのは外見のみ。内部は圧縮空間技術でより充実しており、施設・設備も大幅に増加。『仮住居』とは転移用ゲートで繋がっている他、シークレットロードによって本土とも繋がっている。

【ウルトラ警備隊秘密基地】

ご存知ウルトラセブンで登場した秘密基地……なのだが例のごとく圧縮空間技術で内部はより充実している上、メフィラス星人ジェントを始めとした宇宙人ハンター（プラズマソウルを採取してガネー（金）を稼ぐ宇宙人の総称。宇宙人を狩る連中ではない）が生活し仕事を請け負う『ハンターズギルド』としても機能しており、多種多様の宇宙人が暮らしている。

当然だがここにいる宇宙人ハンターも有事の際には防衛隊の一員

として活躍する。星の民ルシファーによるレギオノイドとギャラクトロンの駒王町侵攻時には、苦戦するグルンガスト参式ヘジェントや新世代七星剣が中心となって切り札となる参式斬艦刀を基地から射出。勝利に貢献した。

【ガーディアンベース】

銀河遊撃隊の移動基地。移動基地というより宇宙空間都市ペガッサ市のような移動都市に近い。レジェンドと、ヒカリを中心とした光の国の宇宙科学技術局の有志達によって、双方の技術の粋を結集して建造された。人間とウルトラマン双方の姿での生活に対応しており、閉鎖的空間にも関わらず快適に過ごせるだけでなく、各種施設も完備されているためアイテムの開発等もここだけで可能。

次元間移動能力や超高性能防御設備なども備えられており、幅広く活動する銀河遊撃隊にとって頼もしくも疲れを癒せる憩いの場でもある。

若干娯楽が少ない為、外から持ち込む必要があるのが悩み。現在レジェンドに相談中。

【ウルティメイ島】

空の世界において、ウルトラ騎空団の拠点となった島。詳しくは『特別編・リゾート島を開拓しよう』を参照。他の島にはない娯楽施設や設備、食べ物が多数存在する為、今や空の世界では最高峰の観光地（島）となっており、レジェンドの別荘も建てられている。

問題があるとすれば、前述の通り娯楽施設が充実しまくっているからか、ウルトラ騎空団の団員は一度寛ぎだすと中々離れたくなくなってしまうことか。

【魔闘地獄】

日本地獄に新しく設立された地獄。管理者は悪魔将軍。所謂『超人レスリングで呵責を行う』という、ただ呵責するだけでなく見ている者にも配慮した、『地獄を盛り上げる』ための新しい試みの一環で設

立。時折悪魔将軍の出身世界の超人達もやってくるらしい。
記念すべき第一回はレジェンド＆悪魔将軍ＶＳ鬼舞辻無惨＆コカビエル、並びにレジェンドＶＳ悪魔将軍（エキシビジョンマッチを含むなら芥子ＶＳバルパー・ガリレイ）。特に後者のファイトは『最初にして最高』と呼び名が高く、これに感化されて冥界からサイラオーグ・バアルとその眷属が悪魔将軍の下に弟子入りしたほど。
現在はここの呵責ファイトを『激闘！魔闘地獄』という番組で放送中。あまりＴＶを見ないレジェンドが楽しみにしている唯一の番組のようで、地獄においても屈指の人気番組だという。最近、芥子が可愛いという理由で沙耶も見始めた（やってることはえげつないのだが……）。

特別編各種
特別編・正月大決戦

駒王町でもダイブハンガーでも空の世界でもなく、惑星レジェンドにて新年を迎えたレジェンドを始めとする面々だが……

「お……俺のネオ・グランゾンがァァァ!!」

新年早々、何やらレジェンドは不憫を炸裂させているようだ。

今、彼らの目の前には門松仕様のネオ・グランゾンが鎮座しており、レジェンドが両手両膝をついて絶望している。

年明け直後から他者に希望を与えるレジェンドが他者から絶望を与えられるとか今年は不安しかないのだが。

「一機で三つ分の門松役って……」

「はい！え～っと……あ！『えこ』ってやつですね！」

「ネオ・グランゾンを門松仕様にする事の何処がエコなのよ……」

アマリの困惑に対するルリアの明るそうな返答にリアスがげんなりしている。

しかしこんな事をやらかした（命知らずな）元凶は誰なのか。

「イーウィヤ？」

「んにゃっ!?（ちっ!?ちちち違うのじゃ！いくら悪戯をするにしてもあんな光神の逆鱗に触れることするわけないのじゃ！全く、オーフィ

スもイーウィヤと同じ上位存在ならさっさと気付くのじゃ！）」
「ワムも違うよー」
「つーか六竜のうち二体がこっちに来てていいのかよ……特にロスヴァイセの飼ってる二匹とキャラ被りまくりなそこの猫」

レイトの言葉に雷が走ったモフモフ猫こと空の世界で強大な力を持つ六竜『翠』イーウィヤ。
しかしイーウィヤがショックを受けたのは役目云々ではなく『キャラ被りまくり』という部分だったりする。

（な……な……！この偉大な六竜の一角であるイーウィヤが、あの置いてかれた戦乙女の使い魔な二匹とキャラが被っているなんて……！）
「あっちはウォンとかに任せてるからへーき。皆で双六しよ」
「我やるー」

ついでにさっきからいる美少女も六竜の一体、六竜『碧』ワムデュス。
どうやらオーフィスと六竜はどういうわけか面識があったらしく、目覚めてすぐに接触してきた。

「どうやら効果覿面だったようだな光神！」
「どうだ!?戦争する気になったか!?」
「アーシアを僕に渡すなら元に戻してあげてもいいけど？」

どこからともなく聞こえた声の主。
日本地獄で呵責中のはずの頭無惨、焦げ付いたチキン、ドスケベゲス野郎の三馬鹿である。

「「おい名前!!」」

何か叫んでいるが何故奴らが惑星レジェンドにいるかが問題なのだが、その答えは鬼灯からの通信でアッサリ判明した。

『すみませんレジェンド様。閻魔大王(バカ)が二日酔いのせいで処理ミスって刑期無期限にするはずが刑期無効と書きやがりまして、アホが数名地獄から開放されてしまいました』

「……閻魔のクソジジイィィィィ!!」

アルベールが言った方が似合うような台詞を叫びながら身勝手の極意を発動しかけているレジェンドを総員で抑え込むが、三馬鹿がゴリゴリと理性を削ってくる。

「やはり私は間違えない!あのガラクタが光神の大切なものという推測は当たっていたのだ!」

「……ガラクタ……?」

「あの力を制限無しで振るえば大戦争間違いなしだというのにつくづく腑抜けだな!」

「……腑抜け……?」

「そう!さあアーシア!そんな腑抜け光神より僕のところへ!」

「絶対嫌ですっ!!」

ゲス野郎は永遠拒絶なアーシア、存在の絶対否定もそう遠くないうちに叩きつけるかもしれない。

それはそうと、間違えないだの言ってる頭無惨は普通に間違いを犯し、焦げ付いたチキンは自らが腑抜けである事を棚に上げての罵倒……レジェンドのみならず、彼を好いている人物らから尋常でない殺意を向けられ、三馬鹿は顔を真っ青にした。

今ここに、惑星レジェンドを舞台とした盛大な逃走劇が始まる。

「あまーいお汁粉！美味しいおせち！いっぱい食べたい、ババハムート！」
「「ぎゃあああああ!?」」
ルリアの（食欲全開で）召喚したプロトバハムートが大いなる破局をぶちかます。
辛うじて避けられたものの、その衝撃で大きく吹っ飛ばされた三馬鹿は地面に叩きつけられた。
「何だあのドラゴンは!?俺は見た事も聞いた事もないぞ！」
「私が知るか！」
「ご唱和ください武器の名をオオオオオ!!」
「「!?」」
何やら絶叫が聞こえたかと思えば――
「ハイメガ・バスター・ランチャー発射ァァァ!!」
ゼットの駆るＥＸ―Ｚガンダムの最強武装、ネエル・アーガマのハイパーメガ粒子砲と同等の威力を誇る携行火器ハイメガ・バスター・ランチャーをフルチャージでぶっ放されてまたも大きく吹っ飛んだ三馬鹿は別々の位置に落下。
☆
「ちいっ！ここは一先ず隠れ「られるとおもっておるのか？」!?」
まずは頭無惨、その前方には金色に輝くガンダムゴッドマスターとネオマスターガンダム。
加えてグルンガスト参式にターンＸまで揃っており、もはや四面楚

歌。

（ま……まずい……！こうなったらミスター・ポップコーンと呼ばれた私の逃走能力で……！）

「逃さない！ＳＴＲＩＮＧＳ！」

「ぬお!?」

縁壱との戦いの時と同じく分裂して逃げようとするも突然現れたアマリの魔法で拘束されてしまい分裂能力を封じられる。

「くっ……！こんな小娘に……！」

「にゃお～ん」

「何だこの毛玉は……!?こっちを見るな！」

（誰が毛玉じゃ、ワカメの分際で！このイーウィヤの真の力の一端を見てひれ伏すがいいのじゃ～！）

毛玉もとい猫状態のイーウィヤがギュピーンと目を光らせると、何処からともなく隠しボスのＢＧＭみたいな曲が流れ出し、無惨は強風に飛ばされて宙を舞い、鎌鼬でズタズタに引き裂かれたあと明らかに威力のおかしい猫パンチを食らい、そのまま気絶。

「ふぅむ……儂らは殆ど役に立たなんだ」

「うむ！しかしあの猫は強い！よく分からんが！」

「パムパ～」

「しかし凄まじい猫パンチだったな……」

（そうそう♪もっとイーウィヤを讃え崇めるのじゃ～♪）

「妙に傍若無人でふてぶてしいがな」

「んにゃっ!?」

結局イーウィヤはこんな扱いだったが、頭無惨に関しては新しい伝説が生まれた。

――巫山戯た猫に負けた鬼、と。

（地の文にまで巫山戯た猫扱いなんて納得いかないのじゃ～!!もうヤケじゃ、今年は寝正月なのじゃ!!）

☆

一方、黒焦げチキンはオカ研機動部隊によって追い詰められていた。

「イッセー!・タイガ!・フォーメーションΔ!あの時のようにはいかないと思い知らせてやるわよ!」

「了解!」

シナンジュが黒焦げチキンを先回りし、量産型ゲシュペンストＭｋ―Ⅱ改とゲシュペンストＭｋ―Ⅱ・タイプＳが挟み撃ちにするように後方から並行して突撃してくる。

「先程から黒焦げチキンだと……!俺はコカビエルだァ!!」

「煩いわね!・悪魔将軍とのファイトではレジェンド様から逃げたチキンのくせに!」

「ぬぐっ!?」

「格下と思って喧嘩売ったら格上だったから逃げ出したんだろ!」

「レオさんはガンタンクに乗ったセブンさん相手に最後まで挑んだぞ!」

怯んだスキにシナンジュのロケットバズーカで吹っ飛ばされたところを見計らい、２機のゲシュペンストが飛び上がり――

「「超!・究!・極!・ダブルゲシュペンストキィィィィック!!」」

「ボギャァァァァ!?」

２機が一つの巨大な弾丸となって突撃してきたせいか、黒焦げチキンはその重量に押し潰される形で地面に激突、潰れたチキンと化した後に日本地獄へ強制送還されていった。

「「イエーイ！」」

３機の機動兵器がハイタッチする光景は色々シュールだったが、それよりも気になったのは――

タイタスの乗ったボルトガンダムが巨大な臼を抱え、フーマの乗ったガンダムシュピーゲルが杵を持ち、既に餅を食っていた他のオカ研メンバーである。

「リアスさんズルい……私だってイッセー君と……」
「我慢……我慢ですわ……ちゃんと修行を積み重ねていけば私もきっと……」

何やら嫉妬の炎を燃やしながら一心不乱に餅を食べ続けるイリナとレイヴェルが一際目立っていたが、オカ研メンバーに混じって一緒に餅を食べているサーガに小猫が聞いてきた。

「あれ……？ソランさん、アーシア先輩の姿が見えませんが……」
「おそらく先輩と一緒だろう。変質者がまだ残ってるからな」
「あ、確かに……ゼノヴィア先輩、あんまり急いで食べると喉に詰まりますよ」
「どうせ本編では地獄の修行やロクでもない目に合うのは目に見えて明らかなんだ。ここでヤケ食いでもしなげフッ！？」
「おい大丈夫か！？」
「言わんこっちゃない、です」

例によって餅を喉に詰まらせたゼノヴィアと、本気で心配するサーガと呆れ気味の小猫。
その後、先に食べていたことをリアスらに文句言われつつ、合流したソーナ達生徒会やウルトラ騎空団のメンバーの数名と和やかな正月を迎えるオカ研メンバーであった。

「このあと皆で羽根突き大会よ！」
「こりゃアレだな。また匙が旦那のスマッシュを股間に受ける未来しか見えねぇや」
「おいフーマ!?球技大会のトラウマ掘り起こすんじゃねーよ!!」
「よし……ランスロット、ヴェイン、パーシヴァル。鎧は準備しておけ。もっとも鎧を破壊する威力があるかもしれんがそうなったらその時だ」
「「途中で考えるのをやめてませんかジークフリートさん!?」」
「やめろランスロット、ヴェイン。もはや『勝てばよかろうなのだァァァァァ!!』思考になっているジークフリートにそんな言葉は通用しない……！」

……いや、確かに元『柱』なカナエか同じく元『柱』のしのぶを半ば強制的に連れて来てるけども。
それより空の世界出身でよくそのネタを知っていたな四分の三騎士よ。

☆

そして今回の元凶最後の一人、ドスケベゲス野郎は門松ネオ・グランゾンｗｉｔｈアーシアに加えてＺ・Ｏ羽子板を装備したアストラナガンと、羽子板ックス・ガンを装備したガリルナガンを連れ、何故か艦橋部分が神社風装飾を施されたクロガネに追われている。
ついでにそのブリッジではオルガや三日月のみならず、アズやミツ

バ、さらに千歳とナイン、おまけにジャグラーやサギリにウルトラマンオーブであるクレナイガイまで集結してる始末。
皆晴れ着なので見栄えは良いが状況的にはカオスである。

「姉さん、サーガさんから連絡があってあっちは片付いたそうです」
「あ、そうなんだ。教えてくれてありがとね、ナイン。私達はあっちに合流しよっか」
「はい。それでは皆さん、私達はこの辺で失礼します」

そう言って転移していく二人を手を振って見送りつつ、アズ達は外の修羅場を眺めながら雑煮を食べている。
ブリッジに畳を敷いて。

「意外としぶといんですね、アレ」
「あの様子だとアーシアさんに平手打ちされても諦めなさそうね。それよりキツいものが撃ち込まれそうだけど」

晴れ着姿のアズとミツバだが、どことなく機嫌が悪い。
レジェンドに見てもらおうとおめかししたはいいが三馬鹿がやらかしたおかげでレジェンドがブチ切れてしまいそれを追い回しているため、想い人がそっちに意識を向けてしまったのが原因である。
その横でジャグラーがガイにからかわれながらサギリに絡まれてるのもその要因の一つだったりする。

「だから今日みたいな日は仕事のことを頭から離しなさいってば。オンオフの切り替えがしっかりしてるのがデキる女のコツなんだから」
「俺は男だっつってんだろ。数日後にはまた空の世界で経営戦略考えないと駄目だと年末から言ったの忘れたのかよ」
「まあ落ち着けジャグラー。で？式はいつだよ」
「だから何でお前は当たり前のようにそこにいてラムネ飲んでんだよガイィィィィ!!」

新年早々ツッコミお疲れ様です店長。

「クロガネまで持ち出す意味あったか？カミナ達はダンブルドア校長んとこ行っていないから多少静かだけどよ、馬鹿騒ぎするためだけに動かしてる感ハンパねーんだけど」

「でもオルガ、笑ってるよ。俺も楽しいし」

「違いねえな。あーあー、こちらブリッジ。悪いんだが何でもいいからメシ持ってきてくれ。俺、新生阿頼耶識動かしてるから移動できねえし」

「あ、俺の分もおかわりで」

「すまん、ミカの分追加」

弁当感覚で抱えながらおせち料理を食べている三日月だが、三段重ねのソレは生活班が彼のために拵えた特別品だったりする。

そして一方、レジェンド達はというと……

ｗｉｔｈアーシア、とは言ったが普段乗らない彼女がこっちにいるだけで実際はオーフィスやセラフォルー、ガブリエルなんかも同乗してコックピットはキツキツなネオ・グランゾン。

レジェンドには当然の如く大きく柔らかいものがムニュムニュと形を変えながら自己主張しており、その様子が見えていないのに、ルリアは近場のウルトラ騎空団の料理をヒュゴゥし、アマリはやけに出力が高い魔法を適当に連発し、アズは黒いオーラを纏いつつ割り箸をベキリとへし折ってしまう。

「ぷんすこー」

やっぱりオーフィスはこうなった。

アーシアはドスケベゲス野郎は生理的に無理になっているようで

レジェンドから離れようとせず、当のレジェンド本人はそんな状況にいるにも関わらず……

「貴様らの存在をこの【エリア】から抹消してくれる……!!」

キレているため他の事には目を向けず容赦無く縮退砲をブチ込むためネオ・グランゾンを発射シークエンスに移行させている。

いやここお前の星だろ。

「束さんもやっちゃうよー!・もうインフィニティ・シリンダー使っていいよねあいつには」

「結局消滅させるのでしたらアキシオン・アッシャーを使っておきたいのですが」

こっちの二人も大概だった。

実は今日、束がちょっとしたお遊びでクロエにシスター服を着せていたところをそのドスケベゲス野郎が偶然遠目とはいえ見初めてしまったらしく少し前までは逃げながら彼女をナンパしていたのだが、それがレジェンドどころかこの二人にも火に油を注ぐ結果となり現在の状況に至ったわけだ。

アーシアにアプローチしていながら、やはりゲスである。

「そんなところにいないで二人とも僕のところへおいで!・カモン!・いや……僕が君達の中にカモンしちゃおギャアアアアアア!!!」

「この露骨な下ネタドスケベ腐れ悪魔ァァァ!!クーちゃんが変な影響受けたらどうすんだ!!」

激昂する束がガン・ファミリアとT―LINKフェザーを雨霰と発射してるが、彼女も結構アウトな発言していた気がする。

とはいえこの状況でそんなこと言えるのは凄いかもしれない。

「気持ち悪い方ですね～」

「ガブちゃんもそう思うよね☆レジェンド様の前で悪魔の面汚しだよアイツ」

「ん。サーゼクスはシスコン親バカタロウバカだけど常識は弁えてる……最近は」

ガブリエル、セラフォルー、オーフィスからも酷評相次ぐ……が、さり気なくサーゼクスをディスっているオーフィス。

最初のやらかしのインパクトが大き過ぎた。

「はうぅぅぅ……私の中にって何なんですかぁ……」

「アーシア、奴の寝言なぞ聞く必要も覚えている必要もない。とりあえずロスヴァイセのハクとフウをモフらせてもらう事を考えてなさい」

（モフるならイーウィヤをモフらせてやるのじゃー！）

幻聴が聞こえた気がする。

「そろそろアイツの面見るのも嫌になってきたし、元旦からあの野郎に構い続けるのも面倒くさいからさっさと済まそう。スパークレジェンド砲、発射シークエンス起動」

「「「「え？」」」」

「思い返してみればこのバカ共のために俺の星が被害を被る必要ないわけだし、こっちの方が『エコ』じゃないかと」

説明しよう！スパークレジェンド砲とは！

発射すると相手は死ぬ。以上。

「「「「何その雑な説明!?」」」」

「あいつらのためにこれ以上尺割いてやりたくねーんだよォォォォォ!!ジュワッ!!」

砲、とか言いつつコックピットハッチを開いて生身でスパークレジェンドを放っただけだったが、宇宙最強の究極技という二つ名に相応しいそれを間抜けな表情で受けたドスケベゲス野郎は光となって弾け飛んだ。

こうして門松ネオ・グランゾン騒動の元凶は討たれ、日本地獄へと強制送還された後、悪魔将軍・芥子・サイラオーグとの３ｏｎ３の正月スペシャル呵責ファイトにてお茶の間を沸かせたという。

無論、派手なリアクションのサンドバッグとして。

「ぷんすこー」

帰って来たレジェンドはオーフィスのぷんすこーを聞きながらグレイフィアに膝枕されつつ耳掻きをされている。

「(＝゛ω゛＝)」

さすがグレイフィア、レジェンドが台詞を顔文字で表現してしまうくらいの気持ち良さらしい。

「レジェンド様は耳垢等は発生しませんがこうされるのが好きらしいのです」

「もう片方は私がやらせて頂いても宜しいですか？」

「構いませんよ、朱乃様」

「ありがとうございます」

なお、ロスヴァイセもやりたそうだがハクとフウをアーシアやカナエに取られ、そこにイーウィヤが突撃してきたためそっちを構うのに大忙し。

「んにゃ～ぉ」

「……何か私や夜一と同じで猫被ってそうね、コイツ」

確かに六竜が猫に化身しているので黒歌の意見は当たっている。

年明けからドタバタ大騒ぎな彼らであったが、今年は本編でどんな事が起こるやら。

色々ハジケた奴らの冒険は続く。

特別編・超集合！究極ウルトラ大正月

「「「正月なんざクソ食らえだバカヤロー!!」」」
「「「「またこのパターンかー!!」」」」
「「「「またって何ィィィィ!?」」」」

例によってレジェンドとサーガ、Uスペリオルドラゴンの【レジェンドエリア】トップ3はまた大噴火した。
しかも、今回は最悪なことに――。

「そうですよサボりの口実になるような行事なんて無くなればいいんですよバカー!!」

カーマのようにレジェンド達と同調する者がウルトラ騎空団や他の光神（真面目勢）から出てくる始末。
正直バレンタイン黙示録の比ではないスケールの緊急事態……【レジェンドエリア】は未曾有の危機に陥った。

☆

事の始まりは新年の朝に遡る。

「あけましておめでとう!!　今年も破天荒かつ何でもありでいくぞ！
ふはははは！　それはそれとして貴様らにお年玉を恵んでやろう!!　大奮発な我に最大限の敬意を払うがいい！　ふふはははははは!!」

年明け早々ギルガメッシュの高笑いを聞かされるハメになったウルトラ騎空団の面々であったが、指パッチンでポチ袋（しかもやたらデカくて分厚い）がほぼ全団員に配られたので文句は言わない。

「おおう太っ腹！　もうこれは儂の敦盛で返礼するしかないんじゃない？」
「土方さん残念ですねー。呼ばれてたらこれで沢庵買い放題だったでしょうに。あれ？　マヨネーズでしたっけ？」
「さすがマスターがマイベストサーヴァントと豪語するだけありますね！　え・ち・ご・の・塩で有名な無敵の景虎ちゃんがトップサーヴァントじゃないのはこのお年玉で譲歩しましょう！　サーヴァント枠のメインヒロインは私でしょうし！」
「ちょっと待ってネコ軍神。それは私達マイロードの先輩サーヴァントに対する挑戦状かな？」
「最近ルーラー☆5になって調子こいてません？　私なんかアサシンとアヴェンジャーの両方で☆5ですよ」
「甘いですねカーマ。私、アルトリア・ペンドラゴンは常に☆5ですが？」
「え？　オルタとか☆4混じってますよね貴女」
「オルタと本人は別です！　そう、お姉ちゃんとオルタが別人であるように!!」
「全くもってその通りよね。けどアンタは私の姉じゃないって何度も言ってるでしょうが!!」

前回はいなかったメンバーが大勢いるのに加え――。

「ゼウスです。書き初めは『ＳＲＸ』『バンプレイオス』と書きました。うむ、我ながら力作」
「そこは『大神』『雷霆』にすべきだったのでは!?」
「せめて漢字にしろよ！　何でアルファベットか横文字なんだよ!?
テメェは一番書き初めに合いそうな単語持ってんじゃねえか!!」
「私は常にグローバルを心掛けている。というのは建前で、ホントは『天上天下念動爆砕剣』とか『天上天下一撃必殺砲』を書きたかったんだけど文字数の多さに断念したんだなコレが」
「あの顔がダセェロボの必殺技かよォォォ!!」

カイニスがキレのあるツッコミを炸裂させる程に愉快なトップのオリュンポス＆アトランティス勢。

「……」

「オルトリンデ、ヒルド……スルーズは何故真っ白になっているのだ？」

「いえ、何でも『ギャルゲー福袋』なるものを買ったそうですが……」

「どうも難易度がやたら高いのだとか鬱展開の連続だとかでハズレだったらしく……」

「意地でもクリアした結果、ああなりました」

「一応クリアまでしっかりやったのだな……」

最近ギャルゲーマーとして定着しつつあるスルーズに起こった惨劇（殆ど自業自得）を憐れむ北欧勢。

そして……。

「さて、月王国の者達。正月にまずすべきことは分かっていますね？」

「挨拶！」

「当たり前のことですがそれが出てくるのは良いですね、アルクェイド」

「月見うどん！」

「それは貴女が年越しそば代わりに食べていたでしょう、武蔵」

「……年明け早々の書類整理……」

「ヤプール、それからは目を離しなさい」

「皆分かってないね。月王国最つよ妖精騎士にして無敵のつよつよドラゴンな僕には一発で分かっちゃったよ。つまり恋人同士の――」

「姫　始　め　で　す」

「「「「ぶうううっ!?」」」」

頭我が夫我が娘が大半を占めるモルガンを中心とした月王国の

面々。つーか新年早々何ぶっこいてんだこの先代女王！

「しかし姫始め、というのは王女たる我が娘バーヴァン・シーの方が相応しいですし……むう、女王始めもどちらかと言えば今は我が娘沙耶の方が良い気がします。やはり我が夫とならば『妻始め』と呼ぶのが良いでしょう」

「えー……恋人同士なら恋始めでも良いじゃない」

「甘いですね、メリュジーヌ。恋始めでは『恋を始めたばかりの初心者』から抜け出せないと思われかねません。だからそのように赤龍帝から恋愛対象として見られているか微妙な扱いなのです」

「そんなことないもんんん!!」

一撃でメリュジーヌを泣かせたモルガンはやはり沙耶の養母であった。振袖姿でえぐえぐしているメリュジーヌを慰める沙耶であったが、ふとモルガンが辺りを困った表情で見回していることに気付く。

「お母様？」

「沙耶……我が夫は何処です？　究極英雄王がこの場の中心となるのは構いません。我が夫を師父と呼ぶ彼もカリスマ持ちなのは言うに及ばず、血の繋がりは無くともしっかり我が夫からそういったものを受け継いだのでしょう。ならばと思い彼らしく一歩引いて見守っているかと探してみてもその姿は見えず……」

落胆するモルガンだったが、彼女の言葉を聞いてかつて『バレンタイン黙示録』を経験した団員達に戦慄が走った。

一度騎空団壊滅どころか【エリア】レベルの大事になりかけた経験のある彼らはすぐさま行動を開始する。

「総員！　レジェンド様とサーガ様、それからこちらへ来ているだろうスペリオルドラゴン様を緊急捜索！　書類仕事をしていたら有無

を言わさず強制終了させて連れ出すように！」
「え？　え？」
「もしかして何かのイベントか？」

切羽詰まった様子のミツバの号令で先輩団員達が本気で動き出す光景に立香とキリシュタリアは混乱する。しかしながらとりあえずは従っておこうと村正やカイニスを引き連れて捜索に参加。

「あの、ゼットプロデューサー。これは一体……？」
「ぶっちゃけ言うと超師匠ら三人が大暴走する前兆でござりんす」
「「「「……は？」」」」

オフェリアの質問に答えたゼットの声色は至極まともであり、近くにいたペペロンチーノやアシュヴァッターマン、デイビットにハマーンとガトーなどが間抜けな声を出した。

「何で正月にいないぐらいで団長達が暴走するのよ。世界の終わりでもなし」
「いや……前回はバレンタインが全【エリア】から消える寸前までいった上、ウルトラ騎空団の殆どが戦闘不能になり暫くまともに活動出来ないレベルにまでなった」

通り掛かったゲンにより、ヒナコの発言はあっさり覆される。実際、スペリオルドラゴンすらバルバドロまで持ち出して敵に回ったぐらいだから相当であり、下手したら日本地獄にいる鬼灯すらシン・ゴジラと共にあちら側に付く可能性まであったのだ。

「その時はアーシアちゃんのおかげでどうにかなったのだけれど……時と場合によってはそれが出来ない、もしくは通じない状態だったらどうしようかと……」
「確かにあの団長が相手では、オカ研一の暴走女と名高い胡蝶カナエ

でも太刀打ち不可能だな……！」
「ちょっと待ってカドック君!?　物凄く不名誉な二つ名が聞こえたんだけど!?」
「そうよカドック、オカ研一のシスコン親バカに変更してあげなさい」
「悪化してるわアナスタシアちゃーん!!」

この状況でもいつも通りのアナスタシアは炬燵から動かない。だってぬくぬくなんだもの。ちなみににゃんこも炬燵にて丸くなっている……そこ、最初から丸い奴がいるとか言わないにゃー。

「ともかく、レジェンド様が怒ると大変なのはメソポタミア時代から理解しているのだわ！　エルキドゥが犠牲になった時なんてほぼ全神の権能を一時剥奪して地上に叩き落としたぐらいだったんだから！」
「だよねー！　こっちもその時はマジンガーＺＥＲＯに乗って超極悪ルナティックデスハード状態だったから納得！」
「一刻も早くレジェンドを仕事から離さないと……！　父さんや爺ちゃんも本気になったレジェンドだけは相手にしたくないって震えてたし！」
「つーわけでセイバーも手伝ってくれよ！　平和に飯を食いたいならな!!」
「無論です。今の私はエクスカリバー持ちの機体に乗りたい新生騎士王、団長の機嫌を損ねる真似はしたくありませんから」

ウルトラ騎空団古株の一誠・タイガ・ジータに加え、メソポタミア時代にイシュタルの我儘の結果エルキドゥが土に還った時を思い出したエレシュキガル（ぶっちゃけ被害がなかった神は彼女くらい）もブチギレジェンドの真のヤバさは百も承知。最近一誠もセイバーアルトリアの扱いに慣れてきたのか上手く誘導し、戦力に加える。
そんな感じで先輩団員がその時のヤバさを語り後輩団員や参加者もメンバーに加えつつ、三人を捜索し漸く見つけたものの時既に遅

し。
一足先に発見したカーマが最愛のマスターであるレジェンドの置かれていた惨状に悲しみ、それによってやってきた面々が次々とレジェンド側についてしまい……。
冒頭に至ったわけである。

☆

あの時に比べて大幅に団員も増え、目に見える程戦力的に増強されたウルトラ騎空団だが……それでもレジェンド達【レジェンドエリア】トップ3にはまるで勝てるビジョンが見えない。それこそゴジラ達カプセル怪獣を総動員してもだ。

「そもそも真面目にやってる側が被害を被るのは祭り事があるからなんですよ。だったらそんなもの無くしてしまえばいいんです」

幼女モードから美少女モードをすっ飛ばして美女モード（第三再臨）になっているカーマは相当マジになっている。何というか、水着を着るとアヴェンジャーになる理由がこんな所で判明したような気がしないでもない。

「で……何でそっちにおるのだ、カルナは⁉」
「「「「はあ⁉」」」」
「勇治のためだ。勇治は日夜、己に出来ることを精一杯やっている。それは正当に評価されるべきであり、勇治自身がどう思おうと他者が蔑ろにしていいわけではない」

嫁ネロの発言により、まさかのカルナが敵（？）に回っているのは本気で驚いたがマスターである勇治を思いやっての行動であるため納得出来なくもない。キアラのように我欲全開ならコヤンスカヤあたりが容赦無く撃沈させただろうが。

「フォーウ！　マーリンペットノセワホウキフザケロフォーウ!!」
「いやちょっと待ったキャスパリーグ!?　それは死ぬ！　ウルトラギロチンとかどれだけ殺意込めてるんだソレ!?」

この間のバカンス時に来たエースに直接教わったらしいギロチン技をマーリンにブチ込もうとするウルトラけもの、フォウくん。ついでにピカチュウも八つ裂き光輪の構えだ。

「例によって我が夫の傍らに立つか、アルトリア。よろしい、そうであれば遠慮無くロンゴミニアドを叩き込んでやれるというもの」
「生憎ですがそうは行きませんよ、モルガン。今の私はレジェンドとのお正月デートをサボり光神に邪魔されて怒りに震える『レジェンドだけの剣』アルトリア・アヴァロン。私の持つウルティメイトカリバーンはエクスカリバーやロンゴミニアドより更に上位に座する剣だと、その身に教えてあげます」

……何か宿命の対決っぽいけど思いっきり私情丸出しの激突になりそうなモルガンとキャストリア。ただし……アルトリア、サボり云々はお前が言うな的意見があることを心に留めておくように。
そして最難関たる三名。
Uスペリオルドラゴンはそのままだからまだいい。いやそれでも強さが別次元過ぎて良くはないが、二人よりはマシだ。
次にレジェンド。よもやよもや『身勝手の極意〝兆〟』状態。完成された身勝手の極意でないだけマシ……と言いたいが、元々防御が異常に分厚過ぎるレジェンドがそんな形態になろうものならまず勝てない。
戦いは攻めるより守る方が難しい、とよく聞くがレジェンド相手には余程綿密に練られた策や技すら容易に防いで逆に勝敗を決してしまうレベルであり、安易に攻めたが最後となるケースが殆どである。
最後に、何故最後なのかと疑問に思われるだろうサーガ。よりに

よってビースト状態。ただでさえハイパーゼットン（イマーゴ）を倒せる必殺パンチを持つサーガが本能解放とも言えるビーストになってしまったことで、もはや普通のパンチ＝通常時のサーガマキシマムというあたおか状態になってしまっていた。当たれば死ぬ。

「レジェンドもヤベーけどサーガの何アレ!?」
「あ……あれは噂に聞くマーリンを冗談抜きで殺しかけた形態・ビースト!!」
「ホントに今回は私も死ぬかもしれない！　あっちもそうだし、さっきからキャスパリーグが何かウルトラギロチンよりヤバそうな技を放つタイミングを狙ってる気配がするんだが!?」
「ギロチンショットだね、おそらく。バイバイ男の私」
「あまりに薄情過ぎないか女の私！」

マイロードの敵は私の敵なプーリンもあっさりマーリンを見捨てた。彼女も（偶然だったが）デートの邪魔をされたり歳のことでドヤ顔されたりと色々あったのでそんな扱いをされても仕方ないだろう。
かくして、レジェンド派という史上最強の敵を相手にウルトラ騎空団＋その他同盟は立ち向かうことになった。

……のだが……。

「「「「無理無理無理無理!!　勝てるかこんなのー!!」」」」

瞬く間に大ピンチであった。
キャストリアの対粛正防御によって初撃を防がれ、お返しとばかりにカルナの砲撃でまず多くがダウンした。恐るべし施しの英雄、その砲撃は施さないで下さい。彼に関しては勇治のサーヴァント勢が対処中。キアラは数名の味方からも狙われ真っ先に脱落。

その後、カーマによってアザゼルが攻められ「そんな格好をしてる方が悪い」とゲスい反撃をしようと考えていたアザゼルだが、レジェンド直伝の股間ブレイクカーマストライクでアザゼルのムスコが文字通り大打撃を受け、オカ研の司令塔の一人が脱落。残る司令塔の一人である矢的を狙うもオルジュナが防御に入り現在戦闘中。オカ研、引いてはウルトラ騎空団のサーヴァント最強クラスのオルジュナ相手に互角な今日のカーマは一味違う。

フォウくんは問答無用でギロチンショットをマーリンに放ち、マーリンは間一髪回避したもののピカチュウのムーンサルトキックを例の如く股間にダイレクトアタックされ倒された。現在、ウルトラ騎空団のグランド猫＆マシュＷｉｔｈにゃんこ軍団と激突中。マスコットが一番派手にやり合ってないかコレ。

キャストリアはモルガンのみならずセイバーアルトリア（エクスカリバー発言で火が着いた）も同時に相手取り、デートおじゃんの怒りパワーでまさかの二人を圧倒。妖精騎士勢の加勢で一時持ち直すも、一誠にいいトコ見せようと突撃してきたメリュジーヌを彼女すら超える機動力でカウンター、一撃で沈めてしまった。何だこの魔術師詐欺の超闘士。

Ｕスペリオルドラゴンにはゼロガンダムを中心とした剣士勢が大戦……もとい対戦。しかし初手閃光斬で大半を戦闘不能にし、ゼロガンダムを相手取りつつ恐ろしい勢いで他の団員を倒していくＵスペリオルドラゴンはやはり危険な相手。イリナも少しは粘ったが敢え無く倒れた。

レジェンドには十天衆・十賢者・六龍にウルトラ戦士が総動員して対抗するも、ものの数分と持たず九割が戦闘不能。そもそも元祖防御カウンター型チートラマンな彼相手に生半可な攻撃は命取りでしかない。というか、レジェンド相手に通じる攻撃のハードルが異常に高過ぎて対処不可能が正しい。

で、問題のサーガには残る全戦力を投入した。だがこの状態であれば攻撃性能だけならレジェンドをも上回るため、レジェンドと同じ様に九割方戦闘不能。ゼウス達も最悪真体（アリスイア）を起動させねばと思った直

後にやられる始末。尚、スルーズだけは一番やりたかったギャルゲーを顔面に全力投擲され虚しく気絶。頑張れスルーズ。
……と、散々な状態であった。

「ヤバいヤバいヤバい……！　想像の何十倍もヤバかった！」
「まずいぞ！　立香と村正が戦闘不能になった！」
「こっちはサーガにジータがやられた！　ってか実質サーガマキシマムされたのに戦闘不能になるだけって凄いな彼女!?」

次々とやられていく団員達に残ったメンバーは焦りを隠せない。拮抗してるのはカルナを相手している勇治組と、フォウくん&ピカチュウを相手しているグランド猫&マシュＷｉｔｈにゃんこ軍団……おい、前者はともかく後半おかしくね？
だが、ここで奇跡の一手が投じられた。

「ハッハッハ！　たまには一人で遊……視察に来たぞ、レジェンド！」
「む……？　取り込み中だったか？」

一人はとある人物の姿をモデルにした、人間態のノア。そしてもう一人、何か以前凄い立場にいた人をモデルにした、人間態のキング。
この二人がとんでもないタイミングでやってきたのだ。

「あれ……もしかしてノア様!?　……と、誰？」
「ウルトラマンキングだ。しかしレジェンドとサーガ、それとあれはスペリオルドラゴン……だったか。どうやら暴走しているようだな」
「ふむ……でなければ私達がやるしかあるまい。そういうレベルだ」

おお！と周りが予想外の援軍に感激しているが、何故三人がこんな状態になっているか事情を知らない二人はまず近くにいたカドック

に理由を聞いてみたところ……。

「どうやら他の光神達の正月サボりのとばっちりを食らったらしく、だったら正月を無くしてしまえばいいと考えたようなんだ」

「「……あ」」

「え？」

何だ今の間は。そうカドックが言いかけたところ、二人の姿に気付いたレジェンドとサーガは急に動きを止めて懐から何かの用紙を取り出した。ただし形態はそのまま、いつでも動けるようになっている辺りまだ油断ならない。

「「……」」

「どうしたんだ？　急に何かを見出したぞ？」

「あの二人と用紙を何度も交互に見てる……？」

直接戦闘には力不足だからと邪魔にならないよう隠れていたアズが言うように、レジェンドとサーガは書類とノア＆キングを交互に見ることを繰り返している。

……そこで偶然にも今回は同席していた、レジェンドの婚約者たる立場の女傑――ロンド・ミナ・サハクは察した。

「成程、合点がいったぞ」

「な……!?　本当か、ミナの姐さん！」

「ああ。おそらくはあの二人もレジェンドらに仕事を押し付けた面々の一人、いや二人なのだろう」

「「「「!!」」」」

「考えてみるがいい。そもそも、レジェンドと同じ位に存在するならば仕事量も多少の差異はあれど同等のはず。しかし、それを知らないレジェンドではないだろうし、招待しているのならば予定は空けておくだろう。他の【エリア】の光神がどうなのかは分からんが、それを

差し引いても基本は同じ仕事量・仕事の質ならば下の者に投げてもどうにもならん。つまり、あの二人と同格……最高位である同じ光神のレジェンドにしかそんな事をやれる相手がいない。いたとしてもそこのサーガとUスペリオルドラゴンだけだ」

詳しく説明してくれたミナの言葉を手っ取り早く解読すると『自分達の仕事は部下達に出来ないから丸投げ出来ない。あ、そうだ！　さり気なくレジェンドに送っとこう！』みたいなノリだったというわけだ。しかも図星だったのかノアとキングからとんでもない量の汗が流れ出ている。

「レジェンドは自分に回ってきた仕事は嫌なものであろうと愚痴を言いながらでもしっかり終わらせる性格だ。ところが今回は自分の【エリア】の他の光神のものも同時に送られてきた結果、こうして爆発してしまったのだろう」

「いや……そういうわけではなくてな」

「部下達に便乗して我々もたまには羽目を外してみようかと――」

そうノアとキングがそう言った直後、二人の頭が途轍もない威圧感と共に掴まれた。ビクッとするノアとキングにさらなる追い打ちが掛けられる。

「たまにはだァ……？　年がら年中羽目外しまくってる奴らが何ほざいてんだコルァ」

「俺達が日々どれだけ苦労してるか分かって言ってるんだろうな……？」

ノアの頭を掴むのはいつの間にか完全な身勝手の極意へと変身していたレジェンド、そしてキングの頭を掴む目の血走り具合と顔に浮

かぶ青筋の多さがヤバいビーストなサーガ。二人共口だけは笑っているが、雰囲気と空いているもう片方の手が危険なことになっている。

その様相に互角のバトルをしていたモルガンとキャストリアさえ涙目で抱き合う始末。ついでにグランド猫の一匹、ハクだけは欠伸して丸くなった。メンタル最強だろコイツ。

「待て！　まずは相互理解を――」
「こういう時こそ対話の重要性をだな――」
「「死　に　さ　ら　せ」」
「「ぎゃあああああぁぁぁ!!」」

かくしてレジェンドとサーガ、Uスペリオルドラゴンの三人を中心とした史上最大の事件はレジェンド以外の最高位光神二名の尊い犠牲によって終結したのであった。自業自得とも言う。

☆

あの後、レジェンドはノアとキングをそれぞれの【エリア】まで返ぴ……強制送還し、サーガとUスペリオルドラゴンは残っていた書類を各光神の元まで送り返した。『提出が間に合わなければ神格及び能力全剥奪、後にバイオレンスな世界に一生命体として叩き落とす』とまで付け加えて。

無論、真面目に働いている光神並びに光神候補にはしっかりと休んで英気を養うようお達しをしておいた。

他の光神の所為とはいえ暴れたのは事実だったため、レジェンド達三人が協力して今回の騒ぎで被害を受けたもの全てを治療・回復・修繕等瞬く間に終わらせ、宴会再開。

「最初からそうやって突っ返していいんだよ、父さん」
「そうです。確かに部下の不始末は上司の責任と言われることがあり

ますが、基本的に各々だけで完結出来る仕事が殆どの光神職務をレジェンド様が肩代わりする必要ないんですよ？」
「だがな……あんなもん見せられると早く処理しなければならんと考えてしまうというか」
「あー……父さんいつも膨大な量の仕事捌いてるから感覚麻痺してない？」

養子であるライとその彼女から婚約者に昇格したモニカに苦笑されながら、二人が予め準備しておいてくれた雑煮を食べるレジェンド。

さしもの二人も相手が相手だけに分が悪いと思ったため、有志を募ってレジェンド達の怒りが収まった時のことを考え料理を作っていたのである。

「では、改めて新年ということで！」
「私とマスターから一言言わせてもらいたい」
「え、……マスターとダニ神父で何言う気ですか」
「「正月には麻婆を食え!!」」
「予想通りの台詞ありがとうございましたっていうかアーサーに強制麻婆はやめ――」
「オゥァァァァァァ!!」
「遅かったー!!」

のんびりした団欒も束の間、スレッタとラスプーチンによりいつも通りアーサーが激辛麻婆豆腐を食わされ撃沈。これを皮切りにいつもの馬鹿騒ぎへと発展する。

「さて……我が夫も元通りになったところで、姫始めです。早速ですが寝室に行きましょう、我が夫」
「だから私と新年初デートだと言っているでしょう、モルガン。貴女はハベトロットを吸っていて下さい」

「何で唐突にボクが出るの!?」
「ん？　ああ、姫始めはしないといかんな」
「「「「!?」」」」

レジェンドの爆弾発言にモルガンはぱぁっと笑顔になり、キャストリアは真っ青、他の者も有り得ないといった表情になる。
だが、レジェンドはそういう意味で言ったわけではない。

「新年始めの釜飯だ、豪華にいくぞ！　ジャグラー、イクラドカ盛りのイクラ丼、激盛りだ!!」
「任せろ。新年一発目の注文は派手に受けてやるぜ」
「「「「……はい？」」」」
「おう、儂もいいかい店長」
「あいよ村正、何に……お前ら何固まってんだ」
「え……いや、姫始めって……」

キャストリアがそう言うと、レジェンドは頭にハテナマークを飛ばしながら村正と一緒になって説明する。

「だから姫始めだろ？」
「新年迎えて最初に釜で炊いた飯を食うことだろうが。なあ団長？」
「だよな？　ちなみに村正は何頼んだ？」
「そりゃ勿論カツ丼だ。この団と蛇倉苑の常勝も願ってな」
「嬉しい事言ってくれるなオイ。ジャグラー、飯の後に一杯俺の奢りで村正に」
「よしきた。俺のとっておきを開けてやる」
「おお！　悪ぃなお二人さん、ありがたく頂戴するぜ」
「「「「……」」」」

そう、姫始めとは何もアッチの事だけではない。村正が説明したような意味もあるのだ。そもそも本来は割と食欲旺盛なレジェンドが

平然と言うこと自体、何かあると考えるべきだろう。ついでに何やかんやでこの三人、仲が良い。
……で、案の定キャストリアがモルガンを煽り始める。
「おや？　もしやかつて女王の立場にあった貴女がまさか姫始めを一つの意味でしか捉えてなかったと？」
「黙れアルトリア。それはお前もだろう」
「私は知ってましたよ、ご飯大好きですので」
「真っ青になっていたことをこの私が見逃すとでも？」
「……やりますか？」
「受けて立ってやろう、ティンタジェルの猪」
――大喧嘩勃発。二人共魔術師なのに剣と槍で殴り合いしている……魔術師とは何なのか。
「おいおい、せっかく収まったのに花が散っちまうぜ。ここは一つ『よいではないか、よいではないか』で帯をクルクル回して外すっていうやつをだな」
「とおー」
ブスリ。
「ギャアアアアア!?」
アザゼルのオッサン的な発言にどうしてくれようかと思っていた一部女性陣だが、件のアザゼルはオーフィスによる千年殺しならぬ無限殺しを後ろの穴に炸裂させられ、戦闘不能。実際はブスリどころかラスボス大爆発的な効果音だった。
「てててーてーてーてってててー」
「何か勝利のファンファーレ的な事を言ってるんだけどこの娘」

「地獄のセイバーにやられるよりマシだとおもうけどね、私は。しかし彼の意見も――」
「そうか、俺のをお望みか」
「「「「え、」」」」

マーリンを始め、数名がギギギ……と首を後ろに向けると青いツナギならぬ青い和服を来たイイ男が何故かベンチに座ってマーリンを見ていた。そう……彼こそ日本地獄が誇る獄卒の一人にして、かつてマーリンがサーヴァントとして呼んだこともある地獄のセイバー・阿部高和である。

「!!!!」
「そこまで言われちゃ俺も意地を見せなきゃいけないな。さて」
「うわあああああ!!」
「おっと鬼ごっこがお望みかい？　受けて立とうじゃないか」

そう言うと地獄のセイバーは常識外れの速度で逃げたマーリンを追い始めた。さすが曲者だらけの罪人すら恐れる地獄のセイバーと地獄のアサシン……その片割れ。とりあえず誰かが決定的瞬間を見ずに済むことを祈ろう。

「まあ、アレだよな。ここは流が１０００回記念パンツならぬ賀正パンツ履いて祝うしかねえな」
「何それ!?　しかもピンポイントで俺がやらないといけないの!?」
「お前見た目も性格も火野映司だろ！　大金星な婚約者がいること除けば殆どオーズだろ！」
「オーズじゃなくてオリジンだから俺！　あれ、ジョブにはあったっけ……」

レイトも若干暴走気味だがまだ正気は保っている。ただし流に変なことを言い出して場の空気に飲まれつつあるのは少々マズい気も

するが。

「最近良いところ無いわね、メリュ子」
「そんなことないもん！　相手が揃いも揃って異常なスペックだったりなってたりするだけだもん!!」
「確かに彼女の言うことも一理あります。今日のキャスターな私はおかしな強さでした」
「ほら、そんなものぷるるんさせてないで冷静に考えなよ」
「……その申し訳程度なモノを絶壁にしてあげようかしら」
「やってみなよ。僕最強だし」
「じゃあ私は最『胸』ね」
「ぷんすこぉぉぉおおおおお!!」

互いに煽り合った結果、リアスとメリュジーヌも激突。スペック的にはメリュジーヌの方が圧倒的に上なのだが、逆に冷静さを失いかけているためリアスにも勝機はある。勝機があって正気がないとはこれ如何に。
例によって爆心地にいる一誠も巻き込まれたのは言うまでもない。
「いや今回の俺マジで何も悪くねえよな!?　何も言ってないしやってないしさあ!?」

――一方、エレちゃん冥界――

「今日って何か特番あったっけ？」
「うーん……何もないね」
「じゃあタイガ達ウルトラマンの過去の記録を観てみたいのだわ！」
「あ、それいい！　タイガ、オススメとかある？」
「そうだなぁ……ドラマ性だとセブンさん、父さんのは割とコミカルさが出てるから見やすいと言えば見やすいかも」

徹ガンならぬ徹ウルすることにした三人。正直本作で一番ほのぼのしていて、見てて安心なタイガ・ジータ・エレシュキガルであった。
ちなみに懲りずに逃げてきたイシュタルは三人のもとへ辿り着く前に『ルーゴくん』にぶっ飛ばされて日本地獄へ逆戻りだったとか。

「何アレあんなのまでいるなんて何なのよあの冥界……」
「脱走常習犯のお前に正月なんてあると思ったか。キビキビ働け駄女神」

――さらに、ネオ・アクシズ――

「はい、またアスランの負け」
「うおあああああ!!」
「アスラァン！　俺以外に負けるなと何度言えば――」
「イザークもダイゴさんに負けてんじゃん。ミラーフォースで全滅とか始めて見たぜ、俺」
「ぐっ……！」

ネオ・アクシズのモウサにて建設された特設宴会場で、そこに所属しているメンバーやキラ達はデュエルモンスターズに興じていた。
無論、先刻の大騒動後はデイビットやガトーも戻っている。

「何かアスランって最近よく絶叫してるよね。歌いながら戦う作品でも見たの？　ほら、レヴィちゃんとか景虎さんによく似た声の青いのとか、ユウキちゃんや沖田さんによく似た声の黄色とか出てくるアレ」
「そういえばリアス様似の方もいらっしゃいましたわね。竜馬様やカタリナ様に似た声の方も出てらっしゃいますし……あ！　キラと似た声の方も！」

「……なあ、燕もラクスも何の話してるんだ……？」
「んー？　えっと……フォウくんがファイヤーバルキリーに乗って歌いながら戦場を飛び回ったらパワーアップしそうな子達だらけのバトルアニメ」

一応、他にもミモネやティコ、カナエに似てる声もいたのだが……黙っておくことにしよう。

彼方此方の場が混沌としてきたので、食後はギルガメッシュやエルキドゥの所まで逃げてきたレジェンド。今は彼特製のスイーツをへばり付いてきたフォウくんやピカチュウとも一緒に満喫している。

「ふはは、真冬に炬燵にてジェラートを食すとは何たる贅沢か。我らには冬だろうが夏だろうが好きな愉しみ方が出来るということよな」
「よし、これバターケーキに合わせよう。カロリーの暴力しようぜ」
「やるやる。ナッツとかどんどん付けよう」
「フォーウフォーウ（生クリームほしーい）」
「ぴっかちゅ（クッキーそぼろ付けてー）」

先程まで熾烈な激戦を繰り広げていたとは思えない、ユルすぎるメソポタミア最強チーム＋α。
超速で完成させたバターケーキに上記の物をトッピングし、出来上がったメソポタミア最強チーム専用バターケーキ『カロリーの暴力』を堪能する三人と二匹。
ふと思い出したようにレジェンドが提案した。

「そういや、今は問題なさそうに見えるが後々看過出来なくなる特殊特異点がいくつかあったぞ」
「ほう？　師父よ、それはつまり我らの叙事詩にまた新たなページが加わるということで相違ないな？」

「今度はどんなとこー？」
「んー……一つは恒星レムにある惑星オールドラントという所だな。音素がどうたらこうたら……あれだ、嫁ネロは絶対連れて行くな的な」
「アレの超音波が何かの間違いで大増幅されようものなら天変地異、下手すれば惑星崩壊が起こりかねんというわけか……」

つまりファイヤーバルキリーに乗せてはいけません、割と本気で。もしサウンドブースターが装備出来ようものなら悪夢的な意味でデカルチャーしてしまう。

「他は？」
「個人的に気になるのはやたら範囲が狭いこの米花町を中心とした平行世界の地球の一つなんだよな。どうやら犯罪、それも殺人事件がやたら起きるらしい」
「何その魔境」
「フォウキュー……（ここも似たようなもんだけどね）」
「ぴかっぴー……（レジェンドに影響されたのか不憫になる人が増えてるし）」

ついでに主にアザゼルボイスの名（迷）探偵が解決してるとか……いや大丈夫なのかその世界。人口減りまくってたりしないのか。

「あと……いやこれ異聞帯じゃね？　三国志の登場人物が揃いも揃って女になって、おまけに貂蝉と卑弥呼がムキムキマッチョって何その悪夢」
「どれどれ……我は見なかった。何も見なかった」
「異聞帯どころじゃないよねビジュアルがさ」
「フォッ……（ごふっ……）」
「ピッ……（がはっ……）」
「ギルとフォウとピカチュウがやられたんだけど。この外見別の意味

で殺意高過ぎだろ」

ついでにその世界、確実にレジェンドやギルは美味しく頂かれそうになって逆に頂いてしまいそうな気もする。そしてアーシア達も黙っておられず……修羅場待ったなし。

「とりあえず最後のは放っておくぞ。一番危険度が低いし」
「他の二つが結構危ないね。ていうかギル達まだ復活しないけど大丈夫かな？」
「見せたあれらはミルたんと同種の存在だからこのダメージも仕方がないか」

とりあえずアーシアにフォウとピカチュウを預かってもらい、ギルを部屋まで運んだ後は自分も部屋に戻るレジェンド。エルキドゥはまた宴会場で馬鹿騒ぎに参加するらしい。

「はてさて、今年はどんな年になるのやら。

……で、お二人さんは何故に俺のベッドでスタンバイしてるのかね？」

寝間着姿のモルガンとアルトリア・アヴァロンがいつの間にかレジェンドの部屋で添い寝スタンバイしてた。もう次元の隙間にでも部屋作るしかないんじゃないかと思うばかりのプライバシー侵害っぷり。

「だって……姫始め出来ないから……」

「あれじゃデートどころじゃなくなって……」

二人して両手の人差し指をちょんちょんと突き合わせながら頬を赤らめて上目遣いとか反則である。レジェンドが理性の化け物とか呼ばれるレベルの鉄壁精神で助かった。

「やれやれ……寝正月になるが、それでもいいなら好きにしろ」

何だかんだでレジェンドは二人に甘い。先の大騒動でもほぼ中心的存在だった三人は、ほんの少しばかり静かな正月を過ごすべく穏やかに寝息を立てるのだった。

余談だが、一度目を覚ましたレジェンドはいつの間にか二人以外にアーシアやプーリンらレジェンドサーヴァンツ、オーフィス・スカーサハ・ティアマットのドラゴン三娘などがレジェンドの部屋で挙って寝ており……。

「……まあいいや。二度寝しよ」

現実逃避して宣言通り寝正月にすることになった。

今年も彼らの旅路に幸あれ。

――おまけ――

「ハァ……ハァ……ここまでくれば……」

「レッドファイ!!」

「!?」

地獄のセイバーから逃げられたと思ったマーリンは、地獄のアサシン・レッドマンに遭遇。本気で命からがら逃げおおせたとか。

特別編・バレンタイン黙示録

バレンタイン――それは乙女の聖戦。
ついでに一部の男にとっても運命の日。
そんな中で――

「バレンタインだからって職務放棄した挙げ句俺に押し付けるなこのダメ光神共がァァァァァ!!」

男女問わず、時間軸無視でバレンタインに勝負を仕掛けるべく仕事を上司である最上位光神に押し付けた部下達に対し、レジェンドの怒りは頂点に達してしまった。

☆

怒りながらも異常な速度で仕事を捌きまくるレジェンドは流石としか言いようがないが、その両隣ではサーガに加えてスペリオルドラゴンまで仕事に忙殺されている。
彼らも彼らで部下に仕事を押し付けられたようだ。

「父上!あのエヒトルジュエ、またやらかしてます!シバきますか!?」
「もうあれは俺が今度直々にシバきに行く!あいつに付き従うバカ共含めて首を洗って待ってろと伝えとけ!」
「先輩!『気に入ったから』と明らかに転生特典付けまくってこちらでも把握が難しいぐらいの特典持ち転生者を送り出した神がいるぞ!神と転生者の双方をどうする!?」
「転生者は第二種光神特命にて転生者の転生特典を全部巻き戻し回収!その後必要なものだけ再度渡して残りは適当に何だこれ的なもんブチ込んどけ!あと神は神格を一時剥奪、能力制限かけてその転生者

と同じ世界に叩き落とせ！反省しなけりゃそのまま帰って来させなくてよろしい！」
「了解ッ!!」

なんていい子達なのだろうと自身が選んだ双璧の立派さに心の中で涙しつつ、レジェンドは二人と共に書類の山どころか大海を片付けていく。

しかし、不満があるのは彼らだけではない。

彼らの仕事場にはＫＥＥＰ　ＯＵＴのロープに加えて、文字通り彼らが許可した人物以外出入り不可能な術式まで張られたため、彼らにバレンタインのための品を渡そうとした女性達が二の足を踏む事態になってしまっていた。

協力しあって無理矢理解除出来なくもないかもだが、それをやって好感度が下がれば元も子もない。

結局、ただ待つことしか出来ず悶々とするのであった。

☆

そんな彼らや彼女らとは裏腹に、一誠を始め一部の男性らはしっかりと貰っていた。

「はい、イッセー。ハッピーバレンタイン！」
「マジっすか部長!?いよっしゃあああ!!ありがとうございます!!」
「タイガ達にもあるからね。イッセーのやつほどの完成度ではないけれど」
「いや、貰えるだけでありがたいんだけど！」
「私はネフティ王女からも送られてきたぞ」
「もうアレだ、旦那も身を固めた方が良くねーか」

一誠は早速というかトライスクワッド共々リアスからバレンタインのチョコレートを受け取りハイテンション。

「やっぱり一番手はリアスさんだったかー……」
「ですが！クオリティなら負けませんわ！」

遅れてイリナとレイヴェルもやってきたが、彼女らは気付いているのだろうか。
トライスクワッドのことも考えているという時点で一誠とタイガ達の中でリアスの評価が頭一つ抜けていることに。
それで例の如くやってくるのは――

「リーアたーん！お兄ちゃんにバレンタインチョコは――」
「パパにバレンタインチョコは――」
「あるわけないでしょうがッ!!」
「ごふうっ!?」

突然沸いて出たサーゼクスとジオティクスを全力ボディブローで沈める二人の妻のルミナシアとヴェネラナである。

「お嬢様にチョコを強請るとは……私の分は不要だとでも？」
「い、いや！そんなことはないぞ！君のが一番だルミナシア！」
「でしたらそういった事はやめなさい、サーゼクス。あなたもですよ」
「う……うむ。いやしかし、もし用意してくれていたなら受け取らねば……」
「無いわよ？」

サーゼクスとジオティクス、轟沈。
涙を流しながら真っ白になって横たわる魔王とその父親はもはや威厳など滅んでしまっていた。
その近くではギャスパーがリクに渡していたりする。
しかもギャスパー、おめかししているため傍から見たら美少女にチョコを渡される好青年でしかない。

……二人とも、敵には腹黒っぷりを見せつけるけど。

「リク兄さん、あれがよく言う『まるでダメなお兄さんとお父さん』略してマダオなんですね」

「うん。他にも『まさにダンディなお父さん』とか良い意味でも使われるけど、そういう場合は普段からそんな感じの雰囲気出てるから、あれは文字通りダメな例だよ」

さらりと言い放つ二人は容赦なかった。

ちなみに一誠とタイガが兄と慕うアスカことダイナは器の大きさを表現して「まさしくダイナミックなお兄さん」という、リクいわく良い意味のマダオである。

別のところではレイトとゼットは貰ったチョコをどうしようか悩んでいる。

レイトはそのまま食べれば問題ないが、ゼットはレジェンドの身体を借りて食べるしかないためそれでいいのか悩んでいたのだ（渡した生徒会所属のファンや騎空団の子供達は普通にそれでよかったのだが）。

「お前がこんな感じになれりゃ良かったがそんなことを言っても仕方ねえ。予定通りレジェンドに身体借りて食うしかないだろ」

「ですよねぇ……超師匠自身もウルトラブッ飛んだ数貰ってそうだし、大丈夫かな……」

注・まだ一個も貰ってない上に諸事情で貰えませんというか渡せません。

「あれ、二人ともどうしたの」

「メビウス（兄さん）！」

偶然通りかかったメビウスことヒビノミライの両手には四つの包

みが。

「メビウス兄さん、それ……」

「ああ、これか。リィちゃんとニィちゃん、それにイルちゃんとネルちゃんから。手作りなんだって」

（オイ性悪チキンに渡さずメビウスに渡したのかよ、あのダブル双子）

異世界修行に出る直前に懐かれて以来、事ある毎にこんな調子である。

まあ、サイコキノ星人であったカコを妹として扱ったくらいだしと思ったが、『ミライお兄ちゃん大好き』というメッセージカード付き（四種）に気が付いたレイトは敢えて見て見ぬふりをした。

「二人もやっぱり貰ったんだ。８０兄さんもユリアン王女から送られてきたし、レオ兄さんも駒王町に少し顔出した時に結構貰ってたよ。あれ？時間軸……まあいいか」

「そういやレオ、チンピラを威圧だけで土下座させたりしてあそこじゃ割と有名人なんだよな……」

「やっぱ半端ねぇわ大師匠」

☆

その頃のヒリュウ改の食堂、普段はジャグラーが料理長を務めているが現在は休憩時間。

例の如く同じ席の正面にはサギリが座っている。

「ジャグ、ハイこれ」

「あ？何だこれ……ああ、今日はバレンタインか」

「結構頑張ったわよ。味には自信あるから」

「物好きだな、お前も」

「お返しは3倍返しが常識だぜ、ジャグラー」

「だから毎回何でサラッと混じってんだガイィィィ!!」

どーん、という効果音が似合いそうな、片腕をテーブルにおいて背後に山程のチョコを積みながらラムネを飲むクレナイガイことオーブへ店長渾身のツッコミ。

「で?.式はいつだよ」

「またか!.またそれか!.お前それ持ちネタにしてるつもりか!?そういうのはレジェンドにやれよ!.」

「何言ってんだよ。レジェンドさんに聞いたらウルティメイト・ギガバスター待ったなしだろ」

「俺なら言っても大丈夫だと思ってんのか!?よーし上等だ表出ろコノヤロー」

ギャーギャー騒ぐ二人を頬杖つきながら笑って見守るサギリ、大人である。

……私生活は大雑把なのだが。

他にもシモンやヴィラル、狛治ら嫁持ちは当然伴侶から貰っている他、ラフタが昭弘に渡していたりアザゼルへシェムハザが板チョコ型の爆弾（協力者・ヒカリ）を「貴方のファンからだそうで」と投げつけたり、何故かゼロガンダムがヒッポリトタールならぬチョコレート漬けにされて固まってたりと……って後半カオス過ぎる。

「先生ー!?」

「……」

「へんじがない。ただのチョコレートのようだ」

「どこがただのなの!?」

しかし、件の三人には依然としてバレンタインの贈り物が出来ない。

特にガブリエルはスペリオルドラゴンへの贈り物を膨大な数の女性天使達から預かっているため、彼女らに申し訳が立たなくなる。

「困りましたね～……」

「光神様も私達と同じって分かった……と言えば聞こえは良いけど……」

「そのおかげでレジェンド様達は要らぬ苦労を強いられ、私達もこうしてただ待つのみになっているわけだが」

「……このままじゃ駄目ね。ここは一つ、別の手段を考えましょう」

ミツバが静かに告げた……いや、艦長何でいるんだよそこに。

「レジェンド様達は今も尚仕事中。しかも仕事中は許可した者を除き立ち入り禁止にまでする徹底ぶり。変なことを考える面子ではまず入れません」

「変なことを考える……」

「面子というと……」

「そこ、何で私と夜一を見るにゃ」

「ショタコンのケがあるミツバに言われてものぅ」

「シっ!?ちちち違いますよ!私は断じてそういうわけでは……」

二人を名指したわけではないのだが、普段の行いからか視線を集めてしまった黒歌と夜一は一応ミツバに反撃しておく。

「ミツバ艦長……だからカリオストロさんの作った身体が小さくなる薬をレジェンドさんに飲ませようとしてたんだ」

「アズ!?」

ここにきてアズからとんでもないことが大暴露。

「みっつんも変なことするメンバーの一人だね。小さいレジェくんは

見たかったけど」
「ていうかここにいるメンバーの殆どはレジェンド様が絡むと変になるでしょ」

そう言った乱菊も乱菊で大概なのだが、言われてみれば確かにそうである。
サーガやスペリオルドラゴンに懸想している面々はそうでもないのに……。

「と、ともかく！このままでは私達はバレンタインが終わるまでレジェンド様達に贈り物をすることが出来ません！それは由々しき事態です！したがって今日この場は互いがライバルであることを一先ず捨てて共闘すべきと断言します!!」
（ライバルも何も一夫多妻制かつその権利をレジェンドが有しているからあいつが娶るかどうかだけなんだがな……）

力説するミツバを冷めた目で見つつ、C．C．はピザをパクついている。
それはそうなのだが、やはり大抵は想い人の一番になりたいという欲求を持っているわけだ。

「具体的にはどうするのかしら、ミツバ艦長」
「はい、やはり一番良いのはレジェンド様達が自ら出て来られるよう仕向けるのが得策です」
「しかしお主が言ったであろう……吾らの説得でレジェンド達が動くとも思えぬ」
「そこです。故に多段階にステップを踏んで攻略します」

ミツバが考案した戦略はこうだ。
①まずは入室可能なメンバーに入ってもらい、レジェンド達の状況を把握。

②同時にレジェンド達に仕事が捗るよう差し入れ。訪問組はこの時贈り物を手渡してもＯＫ。
③そのまま退出し、ある程度時間を置いて再び①、②を繰り返す。ただし、一度訪問した者は不可。
④最後、仕事を終わらせたレジェンド達が出て来て寛いでるところにまだ渡していない者達で渡す。疲れているだろうから決してがっつかないこと。

「……という作戦です」
「①～③はともかく、④が不確定要素有りね。レジェンドさん達の仕事量がどれだけあるか分からないけど、今日中に終わるとは限らないわよ？」
「ええ、そこだけは半ば賭けになります。ただ私も何度かレジェンド様の仕事光景を見たことがあるのですが、元々反則的な速度で進めているのでモチベーションさえ上がれば何とかなるレベルではないかと」
「今回のような事をすれば他の光神にとってはレジェンド達に自身らの仕事状況が筒抜けになるからな。やたら仕事を溜め込んでいようものなら降格、最悪は神格剥奪だ。他の光神もバカみたいにサボってはいないだろ」

涼子の疑問にミツバとＣ．Ｃ．が答える。
何にせよ、ここまできたらやるしかない。
とりあえず入室許可が下りてるのはレジェンドが許可した分だけだと、グレイフィア、卯ノ花、アーシアにアマリ、そしてアズ……予想より少ない。

「何で我とルリアとミツバは駄目？」
「オーフィスちゃんはレジェンドの膝に乗りたがるからじゃないでしょうか？」
「ルリアもよく乗ってる」

「ああ、それが仕事を邪魔することになりそうだからなのね。しの……ミツバ艦長は……うん、さっき明らかになったわ」
「だから違いますって！」
「誰と間違えそうになったのかよく聞かせてもらえるかしら、姉さん？」

声や（自分以外への）口調が似ているからか、しのぶとミツバをよく間違えるカナエに若干しのぶが青筋を浮かべている。
十数年一緒に過ごした妹と知り合って間もない他人を間違えるなと言いたいのだろう。
それはともかく、常識人枠であるハリベルやしのぶらが入っていないのはブレーキ役として機能してもらうためである。
一応カナエもそれに数えられてはいるのだが、ロスヴァイセがいる＝ハクとフウがいる、というわけでブレーキ役そっちのけで猫２匹を愛でてしまい役に立たない。

「まずは筆頭とも言えるグレイフィアさんからです。レジェンド様達の仕事量、状況によってはこちらで出来る範囲で手伝った方がいいかもしれません」
「私は構いませんが、手伝いはレジェンド様自身が許可されるかどうか……」
「その時はその時です。ではお願いします、差し入れに関してはこちらでいくつか種類を揃えておきますので」

かくしてミツバ考案の、題して『アポカリプス・バレンタイン』作戦が開始された。

「「「「いや名前不吉過ぎる！」」」」

☆

「……サーガ、スペリオルドラゴン……どれくらい処理完了した？」
「当初から見てみると……!?やっと半分だ……！」
「なん……だと……!?」

彼らは朝7時から始めてかれこれ約8時間、ぶっ続けかつ飛ばしまくりで今までやってきたのだ。
にも関わらず、やっと半分。
三人は揃って机に突っ伏した。

「俺だけではなく、処理能力が俺に次いで早いサーガとスペリオルドラゴンまでいたというのにまだ半分……!?あり得ん!!」
「その通りだ、先輩……おそらく処理していく傍らさり気なく増えていると見て間違いない……！」
「私も当初の枚数を正確に覚えているわけではないが、少なくとも総量が今より少なかったのは確かだ。何処ぞのバカ共が分からぬだろうと思って転送して紛れ込ませたな……！」

既に三人のフラストレーションはとんでもない事になっている。
何故日々真面目に仕事をしている自分達がこんな目に合わねばならないのか……そう考えた時、レジェンドが遂に吹っ切れた。

「そうだ……これも全部バレンタインってやつの仕業なんだ」
「先輩？」
「父上、どうされました？」

「壊してやる……バレンタインなんて」
「「異議なし」」

「お待ち下さいっ!?」

ドス黒い空気を纏いながら物騒な事を言い出した三人の気配に気がついたグレイフィアが慌てて入ってきた。

彼女から見てもヤバかったのだろう、三人の目が据わっている。

「どうしたグレイフィア……そうか、お前も他者に頼み事されまくってバレンタインが嫌になったか。そうだろう、そうだろう」

「ならば私達と共に『バレンタイン抹消団』を結成しようではないか」

「この世にはバレンタインというだけで不幸になる者達も大勢いるんだ。故に俺達はバレンタインを駆逐し未来を切り拓くッ!!」

「御三方落ち着いて下さい！サーガ様！格好良く言っても駄目です！」

他の光神（バカ共）のおかげで割とガチにヤバい状況だった。

レジェンドの憶測も全てではないが他人から頼み事をされているという点はビンゴであるため、残る二人も何かしらやる気ではあるだろう。

「グレイフィア……よく考えてみろ。何故このバレンタインを発案した奴より前から生きていて、かつ神より上の俺達がこんなものに踊らされなければならない？むしろ光神記念日的な何かがあってもいいだろう。アスカことダイナなんてネオフロンティアスペースで『アスカ記念日』が出来てるくらいだぞ」

「あ……あの……」

「言われてみれば尚更父上の言う通りだ。私はスダ・ドアカで神をし

ていた頃、最も有名かつ信仰されていた自負はあるがそれにしたって記念日などは設立されていなかった。バロックガンを封印したりコロナ・ノバから命がけで世界を守ったりしたのに……！」
「いや、えっと……」
「結局俺達は生ける伝説的な部分があるから『生きていればそのうちまた出てくるかもしれない』という理由で過去に生きて今は故人な人間界の偉人達のようには扱われないのか……不公平過ぎる」
「ですから、その……」
「「即ちバレンタインなど要らん!!」」

もう三人とも拗らせまくっていた。

☆

しばらくした後解放され、グッタリしたグレイフィアがトボトボと戻ってきた。
想定外の様子に全員が驚く。

「ど……どうしたんですかグレイフィアさん!?」
「ああ、ミツバ様……駄目です。御三方は相当怒り心頭で、全【エリア】からバレンタインそのものを抹消しようとしています」
「「「「えええええっ!?」」」」

Q：何がどうしてこうなった!?
A：全部バレンタインってやつが悪いんだ
こうですかわかりません。

「レジェンド様も残る御二人も話し合いの余地すら与えてくれません。今のままでは確実にありとあらゆる場所のバレンタインが消えるでしょう」
「た、ただのバレンタインが何でそんな大事に……!?」

「それは当然、【エリア】最強の光神三名が手を組んだらそうなるだろうな」
「ソランさんやスペリオルドラゴンさんもですか!?」
「つまりバレンタインに色めき立った他の光神の方々の仕事の皺寄せがレジェンドさん達にまとめて降りかかってきて、そのおかげで遂に爆発してしまったのね」

C・C・と涼子はやけに冷静である。
……が、他の面々はそうではない。
下手をすればウルトラマンレジェンド&マジンガーZERO&ウルトラマンサーガ&Uスペリオルカイザーという『負けイベント確定』なメンバーと激突するハメになるのだ。
最悪、そこにハイパーゼットンやゴジラさえ上回る最強のカプセル怪獣、シン・ゴジラまで加わりかねない。
何故か?……閻魔大王がバレンタインに期待してめかし込んで鬼灯の逆鱗に触れたから。

「ここは日本地獄なんですよね。行事は盆や正月、雛祭りとかあれば十分です。異国の行事に手を伸ばしてる暇があるならとっとと仕事しろ穀潰し」

と、容赦なくシン・ゴジラを呼び出してバレンタインに浮かれた連中共々制裁したわけだ。
……あれ?とどのつまり……

「鬼灯さんも間違いなく加担しますね」
「「「「予想通り最悪の結末しか思い浮かばないっ!!」」」」

何その悪夢通り越した絶対絶望。
超グランゼボーマすら可愛く見える。

「何か……！何か手は……ハッ!!」
「姉さんはまずハクくんとフウちゃんを離して」
「アーシアちゃん!!」
「「「「は？」」」」
「わ、私ですか!?」

カナエが何を思いついたかアーシアを指名する。
そう、確かに彼女は聖剣騒動時に何やかんやあってブチ切れモードのレジェンドを穏便に鎮めた実績がある……が、今回はサーガとスペリオルドラゴンまでいるため効果の程は分からない。
「他のお二人はレジェンド様を敬愛してるし、レジェンド様が思いとどまってくれれば残る二人を説得してくれるかも！」
「な、なるほど！」
「……そう上手く事が運ぶとも思えんが」
「レジェンド、マジンガーＺＥＲＯに乗ってる」

スカーサハがぼそりと呟いた直後のオーフィスの一言が場を凍らせた。
いや、ソレがぶっ放すのは炎だけど。

「ダブルオークアンタフルセイバーも出てる」
「それ本来対話用ですよね!?明らかに殲滅しに行こうとしてるんですが!!」
「スペリオルドラゴン様は!?」
「何か知らないのに乗ってる」
「……ちょっと待ってあれレジェくんが作ってたやつじゃないかな。何だっけ……バルバドロ？」

圧縮粒子ブラスターキャノンとかナノスキン装甲とかＩフィールドとか詰め込んだヤベーやつである。

しかもガンダム試作3号機より遥かにデカい。
何処に収納してたソレ。
それを見たミツバは即座に指示を出した。
「ウルトラ騎空団総員！マジンガーＺＥＲＯ、ダブルオークアンタフルセイバー、それからバルバドロ？の三機を死力を尽くして止めて下さい!!全【エリア】からバレンタインが消えます!!」
『いやソレどういうことォォォ!?』
そりゃそういう反応にもなるわな。

☆

結論から言うと、アーシアのお願いによってレジェンドとマジンガーＺＥＲＯが沈静化したため、それに伴ってサーガとスペリオルドラゴンも落ち着き、バレンタイン消滅の危機は去った。
……が、代償として機動部隊は当面出撃不可能な程の壊滅的被害を被り、ヒリュウ改やクロガネもどうにか航行は可能というレベルの大打撃を受けた。
エリアル・ベースは辛うじて無傷。
さすがに今回ばかりは三人が責められる……ということはなく、逆に三人が大変な時に浮かれてしまっていたとウルトラ騎空団の団員達も反省し、お互い謝り合うことでこちらは無事解決に至る。
しかし、事の発端であるレジェンド達に仕事を押し付けた光神達はそうもいかず、事態のあらましを大暴露されしばらく彼らへの敬意が跡形も無く吹っ飛んだそうな。
それからのレジェンド達だが……

「レジェンド様、魔神様！ハッピーバレンタインですっ！」
「どうしようマジンガーＺＥＲＯ、俺今ならノアインフェルノをデコピン一発ではね返せそうなんだけど」
『我はマジンガー軍団が来ようとエンペラー艦隊が来ようと瞬殺出来そうだぞ』
「レジェンド、チョコあげるー」
「……何か欠けてね？」
「我、味見した」
「元の形どんなだったのコレ」

最大の功労者であったアーシアから貰えたレジェンドとマジンガーＺＥＲＯが喜びに震えつつ、オーフィスの持ってきたチョコに疑問を持ったりしながら無事他の者も手渡すことが出来た。
勿論、サーガやスペリオルドラゴンも同様である。

「……」
「ルリア、どうした？」
「はわっ!?な、何でもないですよ!?」
「……一緒に食べるか？」
「っ……はいっ！」
「……カリオストロさん」
「やるにはやったがアイツに効力があるかわからねぇぞ。仮に効いても良くて一日だ」
「いえ、十分です。ありがとうございます」
「ならいいけどな。……団長さん☆カリオストロからもチョコあーげる☆」

「ソランさん、あの、これ……」
「俺にくれるのか？ありがとう、小猫」
「い……いえ……」
「……姉さん、小猫さんはかなり強敵です」

「ナイン、私達も玉砕覚悟でいくわよ！」
「玉砕したら駄目だと思いますけど……」

「これ、天界の女性天使達からです～。義理ですが私からのもありますよ～」
「わざわざすまないな、ガブリエル。一つ一つありがたく頂かねば……!?」
「……」←チョコレート漬けのゼロガンダム
「な……!?どうした!?何でこうなった!?」
「へんじがない。ただのチョコレートのようだ」
「もうそれいいから！誰でもいいから先生元に戻してぇぇぇ!!」

一部相変わらずなところがあったものの、概ね平和な終わりである。

ハッピーバレンタイン！

「ハロー光神サマに特異点達。ところで今日はバレンタイン。俺にプレゼントとか」
「『あるわけねーだろ発禁天司!!』」

特別編・バレンタイン狂想曲

バレンタイン――色々と思惑が交錯する行事であるが、ウルトラ騎空団にとってはある意味世紀末か否かが決まる日と言っていい。

理由は言わずもがな、かつてレジェンド・サーガ・Uスペリオルドラゴンによって引き起こされた【エリア】レベルでバレンタイン消滅の危機にある。

そもそもの原因は他の光神がよりによって上司、それも最高位とそれに次ぐ立場にあるレジェンド達に仕事を押し付けたのが事の発端であり、実際はレジェンド達も被害者……というか最初の被害者が彼らだった。

その後も正月にはノアやキングまでもそれに加担した結果、レジェンドとサーガとスペドラも堪忍袋の緒が切れて案の定大暴れすることになってしまったのは記憶に新しいだろう。

さて、今回はというと……何もなかった。

だがこれで「やった、今回は平和だ!!」……などと喜べるような事態でないことは今までの彼らが遭遇してきたことを思い返せば自ずと分かるはず。

――そう、チョコレートそのものが原材料を含めて無くなったのである。

☆

――ウルティメイ島・レジェンド別荘――

「……で、俺らにどうしろと」

「決まってます！　チョコレートを根刮ぎ奪った犯人を捕まえてほしいんです！」

「却下」

「「「「えええええ!?」」」」

「お前らここのところ俺が休み無し、今日の今まで完徹で仕事してるの見えないのか？　まあ、今まで通り他の光神に仕事押し付けられてるわけじゃないからそれはいいんだが」

ウルトラ騎空団の女性陣を代表した面々がレジェンドの別荘に集い、ミツバが直談判したがレジェンドは有無を言わさず拒否した。理由は上記の通り、彼は別荘でも普通に仕事をしているわけで。

現在、彼はギルガメッシュと打ち合わせをしながらマクロス・ウルクの建造をハイペースで進めている。その証拠に、空間ディスプレイにはギルガメッシュが映り通信状態になっており、あちらも仕事中。

『貴様らはイベントを愉しんでいるだろうが我や師父は仕事中だ。別に貴様らがイベントを愉しむのはよい。士気高揚になるのだし大いに結構。だがそれで何かトラブルがあったからといきなり師父に頼むのは筋違いであろう。まずは己等で努力せよ』

「そんなぁ……」

「あのなあ……ギルの言うように何でもかんでも俺に頼んでハイ解決お疲れ様でしたーじゃ何も成長せんぞ？　ていうか俺以外にも頼る奴やうってつけの奴なんざウルトラ騎空団にはごまんといるだろうに。ついでにメリュジーヌ、こういう時こそ月王国最つよ妖精騎士として活躍すべきじゃないのか？」

「無理。今の僕はよわよわドラゴンだから一誠とかに助けてもらわないとダメなの」

「じゃあハナっから俺じゃなくて一誠頼れや!!」

いい加減にレジェンドはブチギレた。とはいっても今回はマシな方だが……しかし今のはメリュジーヌの言い方が悪い。

「ほ……ほら！　究極英雄王、セイバーアルトリアさんからチョコレート貰えなくなるかもしれないよ!?」

『たわけ。むしろこの程度のトラブルを解決したところでセイバーが

我にチョコレートを寄越すと思っている事自体、浅慮が過ぎるというものよ』
(((((凄い……説得力だ……!!)))))

スン……と虚無った表情になるギルガメッシュとその発言に女性陣も納得してしまった。頑張れ英雄王負けるなＡＵＯ。

「……我が夫と究極英雄王の言う通りでしょう」
「モルガン!?」
「そもそも我が夫に渡すチョコレートを準備しようとしているのに我が夫を頼るなど、本末転倒もいいところ。私の愛の大きさと質……真に我が夫に伝わる方法があるとするならば、それは私自身の力で元凶を屠る他にありません」
「いやミツバさんだって捕まえてとは言ったけど屠るとか命を取ろうとはしてなかったよね!? 何でもう殺すことが前提になってるの!?」
「よく覚えておけアルトリア。私と我が夫の愛の道を阻む外道に生きる資格無しと」

ゴォォォと効果音が聞こえてきそうな熱意を込めた目を見せる月王国先代女王モルガン。ついでにその隣にて無言で無限殺しの素振りをしているオーフィスが対照的で実にシュール。
○モルガン→物理的に殺す
○オーフィス→色んな意味で死ぬ
おそらくこんな感じになりそうだ。
結局、モルガンの気迫に圧されて他の女性陣も成り行きとはいえ彼女ら自身の手で此度の犯人を見つけなければならなくなってしまった。

☆

「何か団長が不憫じゃなかったからこっちに回ってきた気がするぅ

……」
「立香、そういうこと言わないの。彼の受けている不憫が本気でこっちに回ってきたら私達は今頃誰か命を落としてるかもしれないんだから」
「オフェリア……貴女も結構ディスってるわよ、団長のこと」

そんなこんなで別の島々へ捜査へ繰り出した女性陣。留学生組の女子三人は何やらレジェンドが聞いたら本気でお仕置きされそうなことを言っているが、強ち間違いでもない。
以前起きたことを思い返せば、常人なら大怪我か過労死になることが割とある。
それはさておき。

「でも、犯人の目星はどう付けたら良いんでしょうか……？」

アーシアの言うことは尤もである。正直、全空レベルの大事になっている以上は何かしらの痕跡ぐらい残っているはずなのだが……。

「目星はまだだけど、ある程度絞り込めてはいるわ」
「「「「えっ!?」」」」

そう答えたのは「別にチョコじゃなくてもいいか」と別の物を用意しようとしていたところをアルクと武蔵に拉致られた、さやぴーこと現月王国女王陛下の月神沙耶。

「さすが我が愛娘。して、それはどのような？」
「まず考えられるのは、チョコレートを何らかの理由で独り占めしたい者ね。ここから細分化して『バレンタイン嫌いか何かでチョコの受け渡しを見ることさえ嫌な者』や『バレンタインチョコを作るために材料を多く必要な者』なんて感じに理由が分かれていくわ」
「ふむふむ」

「でもそれだけで全空レベルの事態は起こせない。よってそこに『この事態を引き起こすだけの力を持つ者』というより限定的な理由がプラスされるわけ。財力や幅広いコネクションなど、それも相当な……ね」
「なるほどー！　……あれ？」

ここでキャストリアは思い返してみる。そういえば極限状態だったとはいえ、かつてレジェンドやサーガはバレンタインを無くそうとした。即ちバレンタイン嫌いに当て嵌まるといえば当て嵌まる。
ついでに財力やコネクションも途轍もなく、財力に至ってはもはや底無しだ。無論良い意味で。
つまり……。

「レジェンド、凄く容疑者っぽいんですけどー!?　ついでにギルガメも！　だって言ってたじゃん、セイバーはこんなトラブル解決してもウンタラカンタラって!!」
「……はっ!?　まさか協力を拒んだのは自分達が犯人だからなのでは……」
「それはないと思うよ？　だって以前に起きた出来事の理由、バレンタインにかこつけて他の光神がマイロード達に仕事を押し付けたからだって聞いたし……さっきも言ってただろう？　今やってる仕事はそうじゃないってさ。あと、マイロードの機嫌もそう悪くなかった……メリュジーヌが失言する前までは」
「何で僕なの!?」

絶賛仕事中だったレジェンドを頼ってきたのに「一誠とかに助けてもらわないと」などと言えばそりゃ機嫌が悪くもなろう。
ともかく、レジェンドでないことはまず確定。

「それに究極英雄王はプライドも高いですし、セイバーのアルトリアからチョコが貰えないと知っててもこんな暴挙には出ないと思いま

すけど」
「それは……確かに」
「むしろそんなことしたらマスターが怒るでしょうし……」
「レジェンド様の拳骨一発で何度も冥界に来てたから、流石にそんな愚行は起こさないと思うのだわ」

カーマ・千代女・シャルロット・エレシュキガルの証言からギルガメッシュの線も消えた。そうなるとエルキドゥかとも思ったが、エルキドゥの場合は自分達と同じく犯人をシバくために奔走してそうな気がする。なんとなく。

「そうなると……やっぱしどこぞのボンボンとかじゃないの？　国王関係者とか」
「しかし小国レベルで動かせる事態ではあるまい。うーむ……」
「アグロヴァルさんとか？」
「あの人、こんなことする必要無くない？」
「ていうかやったらそれこそ国終わるでしょ」

乱菊の言葉は正しくその通りなのだが、ぶっちゃけギルガメッシュのことを訝しんだ時に気付いてほしかった。いや、やらかしてもギルガメッシュなら大丈夫という安心があるとか言われたらどうかとは思うが。

「う～ん……大分範囲は狭まったけど、そこからが手詰まりだよ～」
「せめて何かの手掛かり……目的がより鮮明になるやつがあれば一気に進むんだけど……」
「物々交換狙いですかね。チョコを返してほしければ酒を持ってこいみたいな」
「景虎は酒に執着しすぎでしょ」

全員揃って頭を悩ませている時、突如としてその場に声が響く。

「ハハハハハ!!」
「……！　何!?　この落ち着きを無くしてウザさを足した、オルジュナに似た声は!?」
「思い込みが激しくて暴走してやらかしそうな感じのする笑い声は!?」
「あー……なーんか思い出せそうで引っ掛かるのよね。別に思い出さなくてもいいってことかしらコレ」
「オイ最後オオオオオ!?」

サギリの発言に反応した声の主が絶叫し、空から巨大な影が落下してきて大きく土煙を上げつつ着地した。

「けほっ……何なのもー!?」
「え……!?　あれって！」
「エゼキエル!?　何で!?」
「久しぶりだなウルトラ騎空団！　本編はおろか特別編でも最後に出たのは何時だったか!!」
「へ？　アンタは！　……ゴメン多分私会ってないわ」

またしてもサギリに精神的ダメージを負わされたその人物。登場時こそインパクトあれど、それ以上に癖のある人物が山程登場した現在ではもはや没個性に近付きつつあるマダオ感満載のそれは――!?

「エルステ帝国クジャン隊隊長の！　イオク・クジャンだ!!」

そう、コイツである。

「「「「誰コイツ」」」」
「ちょっと待て新顔増え過ぎだろう!?」

キャストリアやモルガンを始め、初対面がべらぼうに多過ぎた。それもそのはず、このイオク・クジャンが本作に登場したのはグランやジータの故郷・ザンクティンゼルを襲撃した時……つまり空の世界に来て最初の頃で、しかもジャグラーの駆るマスターフェニックスに部下共々ズタボロにされて敗退したという情けないデビュー戦だったのだ。

忘れられても仕方ないし、会ってなくても無理はない。

「……思い出した！　私達の故郷で襲ってきたダメ坊っちゃん!!」
「誰がダメ坊っちゃんだ!!　まあ、いい。お前達が探しているのはこのチョコレートだろう？」
「え……あっ！」

エゼキエルのバックパックに括り付けられていた巨大な袋、うっすらとだがその中に入っているチョコが見えた。

「えええええ!?　予想外にも程があるんですけどー!?　如何にもモブっぽいじゃん!!」
「言いたい放題だな田舎出身丸出しの小娘！」
「何だとー!?」
「何故私がこれを持っているか、知りたくはないか？」
「いやいいよ。さっさと返してもらってマイロードに愛情たっぷりのチョコムースケーキを作るんだから」
「「「「プーリンレベル高っ!?」」」」

どうだ聞きたいだろう、とドヤ顔するイオクだったが、そもそもコックピットの中なんて簡単に視えないし時間が押していることもありバッサリとプーリンに言い捨てられた。

「フッ、ならば教えてやろう！」
「うわ、逆にこっちの話を聞く気ゼロじゃん」
「これはお前達の企んでいる全空支配の野望を挫くためだ!!」
「ほらまた訳の分から……」
「「「「……はい？」」」」

いやマジで訳の分からない理由だった。何でいきなり全空支配だの出てくるのか意味不明、理解不能。
「はあぁぁあああ!?　何処をどうしたらそんな考えに達するのよ!?」

そう声を張り上げたのはラフタ。出身世界にて因縁がある彼女は、相変わらずのぶっ飛び思考にツッコまざるを得なかった。いや彼女でなくともツッコむわこれは。

「チョコレートはアレルギー等が無ければ容易に口に運べるもの……それを利用した恐るべき侵略を企てているとタレコミがあったのだ。匿名……

バド星人という者からな!!」
「「「「むしろ侵略企ててるのソイツぅぅぅぅ!!」」」」

案の定騙されていた。
いや、バカがバカを呼んだというか……匿名で種族を堂々と言う連中もアレだが、あっさり引っ掛かりオマケにタレコミ主を隠すこと無

く大音量で言い放つイオクも大概である。

「それを聞いた私は義憤を感じ！　エルステの権力を持って全空のチョコレートを回収し、貴様らの野望を阻止したのだ!!」
「こっちは義憤どころか呆れと怒りしか感じなくなったよダメ坊っちゃん」
「ダメ坊っちゃん言うな！　しつこいぞ田舎娘２号!!」
「……いいもん、後でタイガとエレちゃんに慰めてもらうもん」
「あー！　よくもジータを泣かしたわね！　こうなったら私の冥界から冥神獣の２体、伝説宇宙怪獣と伝説深海怪獣のシラちゃんとコダちゃんを召喚してやるのだわ!!」

とんでもないものを召喚しようとしてるエレシュキガルを何とか制止し、一先ずイオクのエゼキエルを撃破ないし戦闘不能に追い込もうと考えたウルトラ騎空団女性陣代表達。
しかし、イオクのエゼキエルには『何でお前のにそんな機能付いてんだ』的なものがあった。

「生憎だったな！　拾った時から高性能だったこの機体だが、空の世界に対応し『魔力攻撃無効』処理を施してある！　魔力が絡んだ攻撃は一切合切通じんぞ!!」
「「「「いやおかしいでしょおおお!?」」」」

終盤のボスかラスボスが持ってそうな特殊能力を搭載していやがった。
正直これにはキレてもいいと思う。クルーゼやベリアルのエゼキエルが持っていたなら「クソッ！　なんて嫌な装備を！」と悪態をつき激戦を繰り広げただろうに、よりによって何でコイツが引っ提げてくるんだと。

おかげで女性サーヴァントの攻撃はほぼ通じず、仮に魔力を使わない攻撃であってもG・テリトリーと分厚い装甲に阻まれダメージが碌に通らない。

「は……腹立つぅぅぅ!!」
「はははは！　たとえ数で負けていても正義は必ず勝つのだ!!」
「あんなんが正義なら悪でもいいと思う儂……是非もないよネ」
「数の暴力が大きさの暴力になっただけでしょうが!!」
「ヒーローにあるまじき行為だよね☆」
「この状況で☆付けないで下さいお姉様！」

キャストリアと信長とジャンヌ・オルタの発言に納得しか出来ない女性陣。とりあえずセラフォルーは余裕そうである。

「こうなったらこちらも機動兵器を持ち出して……！」
「ダメ！　そんなことしたら、チョコが溶けちゃう！」
「「「「！」」」」
「あの機体、何でか発熱の影響がバックパックのチョコには出てない。でも、私達の機体が攻撃したら……」
「影響が出る可能性が大……ね。迂闊に攻撃も出来なくなったわ」
「正義とか言ってるけど、やってることド外道だぞー!!」

アズにより気付かされた女性陣。蛍と沙耶に解説され、やはりキャストリアが騒ぐが――。

「悪党に貸す耳は無い!!」
「マジでブチ殺すぞテメェ!!」

こんなんだから、カイニスも青筋全開でブチ切れた。生身でなら確実に殺していただろう雰囲気だし、実は景虎とかカーマもノリそうな空気。

「ソワカソワカ。このままだと私達は敗北し、あのいけ好かないパイロットに慰み者にされ……あふん!?」
「鼻息荒く言わないでくれません!?　何期待してるんですかこのエロ菩薩!!　私はマスター以外断じてお断りですわ!!」

何かキアラが左手の指で丸を作り、そこに右手の指を出し入れしながらハァハァと頬を染めて言い出したのでコヤンスカヤが思い切りぶん殴った。偉いぞひかコン。

「でもキアラさんの言う通り、このままじゃ敗北必死ですね」
「うむ、キャットもご主人と同意見。いくらニボシサンマが集まってもクジラにはディナーでしかないと缶詰の値段が如き差を見せつけられているのだワン」
「魔力攻撃無効で防御フィールドと重装甲……しいて言うならパイロットのあの方がド下手くそなのが救いですわ」
「マスター、容赦ないのぅ……いや確かにそうだけどネ!」

小猫は普通に、タマモキャットは少々分かりにくいがまあ理解出来る感じで相手を脅威だと言ったが、朱乃は後半どストレートにイオクをディスった。ノッブもそれに同調、まあやってることがやってることだし是非もないよネ。

「しかも「クジャン・パンチ!!（※ガイスト・ブロー）」」
「さっきからこ「クジャン・ソード!!（※レーザー・ブレード）」」
「いい加減に「クジャン・ミサイル!!（※スパーク・トピードー）」」
「いちいちクジャン何たらと煩いのよ!!」

ブチ切れたのはリアスだが、他の面々もそう思っていた。第一、そのエゼキエル……ルシファーが性能検証のために作って用済みになったやつをポイ捨てしただけなのだが……ドヤ顔しながら家名を

拾い物の武器に付けるとか恥曝しもいいとこじゃなかろうか。
――だが、そこへまさかの人物が現れた。
「おや？　皆さんこんなところでどうしました？」
「卯ノ花先生!?」

レジェンド専属の主治医にしてレジェンド一家最凶とも言われる、ウルトラ騎空団医療班班長・卯ノ花烈。
先日、セイバーアルトリアとの模擬戦でエクスカリバーの一撃を真正面から軽々と真っ二つにしてトラウマを植え付けたマジモンの化け物である。ちなみに縁壱やドギーも出来るらしい。

「いえ、それを言うなら先生もどうしてここに……」
「どうしてと言われてもここはアウギュステですよ。レジェンド様が動けないからと代わりに手紙を預かりまして、それをアウギュステで重役を務めている方に渡しに来たのです。よくベネーラビーチを貸し切りにさせてもらっているのでその御礼も兼ねて」

言われてみれば、犯人探しで手当り次第当たっていたため今何処の島か気にしていなかったがここはアウギュステ列島。ファータ・グランデ空域に範囲を絞って捜索していたのは、万が一迷っても捜索時に見当が付くようにしていたからだったのだがそれが二つの意味で功を奏したようだ。

「それで、貴女達は？」
「チョコレート喪失の犯人を探していたら向こうからやって来まして……アレです」
「ああ、あれですか。しかし貴女達であれば容易に対処可能に見えますが」
「実は斯々然々で……」
「それは何ともまた面倒な事をしでかしてくれましたね。仕方ありま

せん、もう一つの頼まれ事もありますし……あれは私が処理しましょう」

卯ノ花の申し出に「え、マジで？」な顔になる女性陣一同。この時点で結果は決まってしまったのだが、相手を見誤る事に定評があるイオクは別の意味で期待を裏切らなかった。

「新たな幹部の登場か！　しかし悪の女幹部は生き残りはしても勝つことが出来ない！　もはや詰みだ!!」

いや、お前がな。ウルトラ騎空団関係者女性陣はもれなくそう思った。無論心の中でだ。

目の前の女傑が幹部どころか裏ボス級に気付かぬうつけは間もなく退場させられるだろう。

「さて……その機体、徹底した防御能力の高さを武器に力押しで攻めるコンセプトにしたようですが、攻略法は極めて単純かつ簡単。それは――」

「今こそ決着の時！　くらえ！　クジャン・グレート・ブラス……」

イオクがクジャン何たら（※オルガ・キャノン）を準備し、発射しようと構えた時……卯ノ花は抜刀しようとして納刀。

次の瞬間――。

イオクのエゼキエルと構えたクジャン以下略に無数の線が走り……。

「全防御機構ごと解体する。それだけです」

「な……!?　オゥアァァァァ!!」

イオクのエゼキエルは、コックピットのイオクを残してサイコロステーキ状に解体された。これは新たなワード『サイコロステーキ隊長』誕生の瞬間だったという。隊長じゃなくて先輩はノアの【エリア】にいたらしいけど。

「え、今何したの!?」

「卯ノ花先生の話を解説するなら……防御フィールドや重装甲、その他機能を纏めて斬り刻んだようね。しかも一欠片のサイズを考えると、恐ろしい程に細かく。加えて誤爆しないようにも配慮されてるわ」

「のぅ沖田に景虎」

「あんなの無理に決まってるじゃないですか！」

「倒すだけならまだしもあれは私にも無理です。ていうかあれ、一種の芸術的神業ですよ」

へべれけ軍神からも称賛される卯ノ花。改めて言うと彼女、殺人集団と呼ばれていた初代護廷十三隊で戦闘専門部隊の異名を持つ十一番隊の隊長を務めた初代『剣八』にして、四番隊に移籍してなお隊長職に就いていた人物である。その頃、彼女以外で創設期のメンバーといえば総隊長の山本元柳斎重國のみ……もうこの時点で二人だけぶっ飛んでるのがよく分かるというもの。

サイコロステーキ隊長なイオクがようやく瓦礫から這い出ると、目の前には微笑を浮かべた卯ノ花が斬魄刀を片手にスタンバっていた。当然、イオクは顔面蒼白。

「どんな気持ちですか？　最高潮の勢いから一気に地べたを這いずり回ることになった今の心境は」

「ヒッ……!!」

黒い笑み、とは正に今の卯ノ花の笑顔だろう。しかも少しだけ斬魄刀を鞘から抜いているので尚更怖い。沖田と信長など涙目で抱き合って震えているくらいだ。

イオクは瞬歩もかくやな速度でその場を離れると……。

「おや、予想外の早さですね」

「きっ……今日のところは勝ち星をくれてやる！　だが何れ悪は私が駆逐してやるからな！　首を洗って待っていろォォォォォ!!」

「あ！　お決まりの捨て台詞エスケープ！」

「……」

予想外の速度と予想通りの逃走。イリナが指摘するも命には代えられなかったのか更に速度を上げて逃げるイオク。それを黙ってみていた卯ノ花だが、変わらぬ笑顔で納刀した瞬間――

――イオクの服が全て斬り裂かれすっぽんぽんに。要らぬファンサービスだァ!!

「「「「何でぇぇぇぇ!?」」」」

「いえ、もう既に斬ってあったのですが……ほら、見たくないモノは見ない方が宜しいでしょう？　小さい子や純な子もいますし」

「我が夫のであれば写真・映像記録・模写してでも残しますが」

「そこの先代女王、お願いだからちょっとは自重して」

逃げてるイオクは逃げるのに必死で気付いていない。さすがにマッパなんだから気付けと言いたいが、下手に声を掛けて振り向かれたらどちらにとっても悲惨な結果になるので放って置く。

こうして、肉体的ダメージよりも精神的ダメージを多く食らいながらもチョコレートは奪還されたのだった。

☆

奪還したチョコレートは必要分を確保し、ちょうどアウギュステに集まっていたシェロカルテを始めとする全空商業協会によって各地へ送り届けられることになったのだが……。

「……もう暗いね」

立香が呟いた。そう、各種手続きや送り返すための準備を手伝ったことで一般的には夕餉の時間になってしまっていた。

「チョコレート作り、今からじゃ多分間に合わないな……人数も人数だし」

「うん……色んな所のキッチンを借りても足りるかどうか……時間的に夕食の支度してるとことかもあるだろうから厳しいかも」

食後のデザートなら間に合わなくもないが、人数が半端ないので当然作れない者が出てきて不公平だろうし、渡す相手の状況によっては渡す前に寝られてしまうかもしれない。寝ないと過労死待った無しなＡＵＯとかＳＫＳとか。

「いっそこのまま渡しちゃったらどうですかね。お酒の一つでも付ければ良くないですか？」

「あのね景虎、誰も彼もが貴女みたいに考えるというのは無理なのだわ。第一未成年だっているんだから」

「あれです、元服ってあるじゃないですか。それにかこつけましょう」

「それなら合法……って駄目なのだわー!!」

一度認めそうになり慌てて腕でバッテンするエレちゃん。良いリアクションノリツッコミだ。

ほぼ全員が暗い気持ちになっていると、ふと思い出したようにプー

リンが卯ノ花に尋ねる。

「そういえばもう一つ頼まれ事があったんじゃなかったかい？」

「ああ、それでしたら皆さんをウルクのジグラットに連れて行くことで完了ですからお気になさらず」

「「「「へ？」」」」

いつもと変わらぬ笑顔で答える卯ノ花に対し、間抜けな声を出した一同。

「ウルクのジグラットなら確実に英雄王が絡んでるでしょうが……先刻のあれにはさすがに無関係でしょうし」

「案外団長も絡んでないかのー。そこんとこどう思う？　ちーちゃん」

「ちーちゃ……!?　ゴホン、お館様や英雄王は拙者らに悪巧みを仕掛けるとは思えぬでござるが」

「悪巧みはしなくても何かしてきそうな感はありますね。あの二人、ダニ神父と同じ愉悦部関係者ですから」

アムール（カレン）に言われ、全員が納得してしまう。兎にも角にも彼女らはバビロニア島のウルク、ジグラットを目指すのであった。

☆

「お務めご苦労！　ふはははは!!」

ジグラットで待ち受けていたのは案の定我らが究極英雄王ギルガメッシュ。玉座ではなく広間にて何やら巨大な水晶球と共にいつもと変わらぬ高笑いで彼女らを出迎えた。

「卯ノ花もよく働いた！　さすが師父が選びし女傑よ！　お疲れ様で

した！」
「はい、お疲れ様でしたギルガメッシュ王。して、レジェンド様は？」
「うむ、これの準備を終えた後はウルティメイ島の別荘にとんぼ返りよ。既に必要なものは各種全て十二分に取り揃えてある。我も確認済みだ。やはりこういう場面では常日頃から料理している師父が何歩も先を行くものよな」
「安心の度合いは凄まじいのですが、お二人共御身ご自愛ください。過労極まって妙なテンションでとんでもない事をしでかさないか気が気でありません」
「ふはははは！　過労極まるときたか！　我がクラス・ウルティメイトであることを掛けた見事な返しよ！　九極天はボキャブラリーも極まっているな！　ヨシ!!」

そう言って現場猫なポーズを取るギルガメッシュは愉悦というか愉快な王である。アーチャー慢心王ならこんなことは絶対に無いであろう。

「いい加減本題に入ってよギルガメ。こっちは精神的にもうクタクタなのに」
「たわけ。クタクタなのが貴様らだけど思うなバカトリアめが。だから貴様はバカトリアなのだ」
「アルトリアであることを全否定かー!!」
「さて、恒例のバカトリア弄りも済んだところで貴様らに此度の報酬をくれてやる。我と師父の連名でな」
「「「「はい？」」」」

突然の報酬発言にやっぱり間抜けな声を出す女性陣（卯ノ花除く）。
「何故と聞かれる前に言ってやろう。貴様らは此度の事件の首魁を見つけ出し――あ、いや自分から出て来たがそこはよい。最終的に卯ノ花の助力はあれど見事我らを頼らず自分達のみで事態を収拾した。

無論、アフターケアもな。チョコレートが全空へ送り返されることに時間が掛かるのは仕方あるまい。しかし、此度の案件を解決した貴様らも影響を受けるのは我や師父とて忍びない。よって貴様らが抱えている問題を全て一挙に解決する術を用意した！　それがこのダイオラマ魔法球の原典たる師父の秘宝!!

『ユートピア始源球』よ!!」

「「「「ユートピア始源球!?」」」」

「このユートピア始源球は内部の時間の流れが外であるこちら側と異なり、こちらの一時間が中では一年となる。まあ手っ取り早く説明するなら、師父が目を掛けている世界にある『精神と時の部屋』と同じと思えばよい。更に、ダイオラマ魔法球では複数繋げねば全く別のエリアを用意出来ぬがユートピア始源球はそれ一つで無数のエリアを内包している。つまり機能的にも置きスペース的にも圧倒的に上な、正に秘宝と呼ぶに相応しきものよ！　ふはははは!!」

一応改めて言っておくが、これの所有者はレジェンドであってギルガメッシュではない。

「どうせ解決したとしてチョコレート作りの時間もスペースも取れんことに悩むだろうと考えた我は師父に相談し、これを出してもらったのだ。内部にはチョコレート作りに必要な器具や設備、領域に説明書が準備してある。万が一チョコレートが不足した場合の補充用チョコレート及び原材料も備え済み、後は貴様らの思うがままチョコレート作りに没頭するがよい」

「ふ……太っ腹過ぎるぞギルガメェ！」

「我の玉体はシックスパック全開だがな！　ふはははは!!」

レジェンドとギルガメッシュによる、自力で事件解決したことへの報酬。それは本当に今、彼女らが欲しいもの……即ち時間と場所。そのどちらも満足させるものを二人は言われずとも汲み取り用意したのだ。

「ネオ・アクシズ側にいた燕やラクス、ハマーンなどは影響を受けていなかったので義理本命関係無く手渡しも出来ていたのだ。さすがに不公平であろう」
「月王国を代表して礼を言わせて頂きます、究極英雄王。我が夫には珠玉の品と共に直接伝えますので」
「北欧からは私が代表して礼を述べよう。多大なる恩賜に感謝する」

次々と述べられる感謝の言葉に気を良くするギルガメッシュ。そこに良い意味で最大の爆弾が投下される。

「英雄王、此度の礼は粗品を持って返させていただきます……義理ですが」
「!!!

「ラピュタじゃん！　ここラピュタじゃん!!　しかも城下町付き!!」
「あっちの魔法陣に入って別のエリア行ったらさ……油屋があったんだけど。カオナシとかいないよね……？」
「ねえ、あそこの魔法陣……世界丸ごとブチ込んでない？　何か夜の森があったと思ったらデイダラボッチ出て来たよ!?　あれ、もののけ姫の世界そのまんまだよ絶対!!」
「それ言ったら向こうの魔法陣、行き先は魔女の宅急便な街だったわよ。海もあったし。ここの内容量どうなってんのマジで」

※上からキャストリア、メリュジーヌ、立香、バーヴァン・シー。

特別編・リゾート島を開拓しよう

それは、依頼として頼まれたことから始まった。
何でも寂れた故郷の島をリゾート開拓し、活気を取り戻したいということを事業責任者であるプロトポロスから聞いたシェロカルテが、ウルトラ騎空団に協力依頼をしてきたのである。
グランや一誠を始め、大半の者は引き受けようとしたのだが、レジェンドや数名の者は難色を示していた。

「そもそもな、リゾート開拓したからって簡単に活気なんて戻らんぞ。それに掛かる費用、人員、その他諸々……やっても戻らなかったらそれこそ無駄になる上、この手の事業は施設の維持費もバカにならん」
「明確なプランがあるならともかく、気持ちや勢いだけで何とかなるというものではありません。『何何がしたい、何何をやりたい』では見通しが甘いと言わせて頂きます」
「島民が普通に暮らしていけるようにとかなら問題ないけどさ～。盛り上げよう、ってなると話は別だよ。近隣から遠方にかけて宣伝もしなきゃだし、そういうのって遠出出来る騎空艇持ちとかに限られるでしょ？」

特にレジェンド、グレイフィア、そして束の意見はグランや一誠など、商売の難しさをあまり理解出来ていない者達にも直撃。
本気で不安になってしまい、遂にはレジェンドへシェロカルテとプロトポロスが直々に頼みに来る始末。

「いくらお前の頼みでもな……商売の難しさは一番よく分かってるだろ？」
「はい～……それは重々承知の上でお願いしたいのですが～……」
「お願いします。私の手前勝手な我儘ではありますが、島に生きる者達もやる気になっているんです」
「……」

ガシガシと頭を掻きながら難しい表情を崩さないレジェンドに、団員達もまた不安になっていく。
実を言うと、レジェンドはもっともらしいことを言ってはいるが、本心では協力しても構わないと思っている。
しかし、問題はウルトラマンとして力を使う必要が出てきた場合、それをどうするかということなのだ。
それぞれの正体を知る者は少なからずいるものの、大っぴらにバラすような人物達ではないからと信頼出来る相手だからまだいい。
だが今回は島規模、かなり広範囲に知れ渡ってしまうことになる。
メビウス――ミライがそうだったが、彼が助けたことのあるヒルカワという心無い人間のように、世間にバラすような者がいないとは限らない。

「……お前は俺達の事情を知っているのか？」
「はい、勝手で悪いとは思ったのですが」
「ハッキリ言う。そこは好感が持てるが、あくまでそれはお前個人にだ。他の者もそうとは言い切れん……こちらも悪いがな」
「いえ、その……実は開拓に協力頂けるかもしれない以上、島の皆には予め説明してしまったんです」
「はあ!?」

プロトポロスの返答にレジェンドは顎が外れるほど驚愕した。
彼だけではなく、サーガやレイトを始めウルトラ戦士の殆どがあんぐり状態で、ゼットだけが平常運転。

「あれじゃないですかね、超師匠が心配してももう意味がないっていうか」
「あっけらかんと言うな馬鹿野郎！これは『断ったら全空にウルトラマンの正体がうちの団員だってバラすぞ』と脅されてるのと同じなんだぞ!!」

「えええ!?」

ようやくここでゼットも事の大きさに気付いたようで、身をのけぞらせつつ驚くが、レジェンドは片手で額を押さえ俯いてしまう。

「す、すみません！ですが、重要なことだとは分かっていましたから、決して島外には……」

「出てないと言えるのか？噂というのは尾ひれはひれが付いて急速に広まるぞ。安易にお前が喋ったことで俺達の生活が害されることを、全く考えていなかったようだな……!!」

レジェンドは本気で怒りつつあった。

しかも、以前はアーシアのおかげで止められたが今回はアーシアのみならずレジェンドやサーガ、その眷属や家族にまで被害が及ぶレベルだ。

いつもふわふわしたシェロカルテですらあたふたするような事態に、誰もが絶望的になっていたその時――

「じゃあこっちも一つ利用させてもらおうか。それならどうだ？レジェンド」

「「「「!?」」」」

少し意地悪げな笑みを浮かべて提案したのは、我らが店長ことジャグラー。

どういうことかと聞いてみると以下の通り。

○かなり大きな島らしいので、最低でもウルトラ騎空団用の別荘ないし専用宿泊施設を用意する。ただし、建設費用やその為の必要物資はこちら持ち。

○島民がウルトラマンの正体（※隠している者）を島外へと故意に

洩らした場合、その島民及び情報を渡した者の記憶を消去し、島民は島外追放。
○島民の意見を尊重しつつ、ウルトラ騎空団団員が望む施設の建設にも協力する。当然、宿泊施設同様に費用や物資はこちら持ち。
分かりやすく言うと『島に自分達の寛げる所を造り、秘密厳守。島の開拓に協力するから、自分らで好きな施設を造るのも承認しろ』というもの。

「島民だけの意見じゃ限界がある。幸いウチの団は多種多様の面子が集まってて、ネタには苦労しないからな。俺達は俺達で責任持つから好きにやらせろってわけだ」
「なるほどな……で、その本心は?」
「そんなのいよいよ蛇倉苑チェーン店計画の壱号店、空の世界支店のオープン狙いに決まってんだろ」
「だと思ったよ!!」

商魂たくましいぜ店長。
サギリなんて「さっすがジャグ!」なんて指パッチンしてウインクしてるぐらいだし、他の者達も「ならウルトラコロセウム作ろうぜ」とか「バトスピスタジアム建設!」とか好き放題言い出している。
何というジャグラー効果……と思ったが、プロトポロスが承諾するか……

「是非お願いします!」

一発で通った、いいのかそれで。
ここまで来たらレジェンドも腹を括るしかない。

「……やれやれ、ここで折れずに断ったら俺が悪者だろうがこの大馬鹿者共が」
「じゃあ……!」

「ジャグラーが言った条件を飲むなら引き受ける。破った場合、何が起きても文句は一切受け付けんぞ」
「はい、勿論です！宜しくお願いします!!」

レジェンドもようやく首を縦に振り、グレイフィアや束もレジェンドが言うならと承諾。
かくして『つけるぜ！活気！寂島ウルトラ復興計画!!』は実行に移されたのである。

☆

問題の島の開拓だが、島民のやる気は十分、さらに秘密厳守も「それは当然」としっかり納得してくれていた様子で、次々と団員達から出る施設案にも「むしろ自分らも使いたいくらい」など好意的に取ってくれたことで一気に推進。
同時に島全体の整備や開発なども行う必要があったのだが、そこは粒揃いのウルトラ騎空団。
予想を遥かに上回る早さで終わってしまった。
例えば――

「掘るのは俺の専売特許だ！行くぜアニキ!!」
「おうよ！見せてやれシモン、お前の天さえ突くドリル捌きを!!」

グレンラガンを筆頭に掘削作業は難なく進み。

「ゲッタァァァ！トマホゥゥゥク!!」

ブラックゲッターによる巨大薪割り。

「ゴジラ、ファイト」
「ゴモちゃん、あと一息です！」

「モスちゃん、これ終わったらご飯よ～」

カプセル怪獣らも精力的（大体ご褒美のため）に働き。

「ディアッ!!」
「トリガー!次こっちー!」
「メビウスー!これ切ってー!」
「シュアッ!!」

ウルトラ戦士まで大活躍。
これで作業が進まぬわけがない。
あれよあれよと施設等の建設や中心部の開発は進みまくり、異常とも呼べるスピードで島の開拓は行われていった。
その結果作られた新しい施設を少しずつ紹介していこう。

☆

まずは別荘及び専用宿泊施設。
これに関してはレジェンドのみ別荘を建てることにし、他は宿泊施設ということで合意していた。
元々レジェンドには無理を言って引き受けたのだから、と団員の総意で決まった事である。
専用宿泊施設の方は、オカルト研究部やその関係者が中心となって建設。
洋風のホテルから和風旅館まで和洋折衷様々なモノが完成、泊まる時は団員皆で協力して管理するようにした。

「レジェンド、別荘凄いの出来た」
「本気出したからな」
(((((そういうレベルじゃねえ!!)))))

ちなみにレジェンドの別荘、光の国や惑星レジェンドのクリスタルシティにあってもおかしくないものだったりする。
光りまくりで明らかにそこだけ世界が違う。
なお、このレジェンドの別荘の使用者はレジェンドの他、レジェンド一家の面々である。
次に、リクやギャスパー、杏寿郎、さらにマリーダと竜馬に加えて、ヴェインや流らの要望で建設された、まさかのバトスピスタジアム。
当然カードパックやスターターセットなどに加え、カードプロテクターなんかのアクセサリーも販売するし、各種スペースも完備。
東協力のもと完成したため、迫力・臨場感抜群で島の目玉施設の一つとなっている。

「いやもう、ホントにリアルでアニメのバトスピ出来るとは思わなかったよ！ゲートオープン界放!!あれは一度やるとハマるね！」
「バトルも迫力ありましたぁ！」

一番ノリノリだったリクとギャスパー。
ついでに流はというと、何か仮面ヒーローのコラボカードを使い出して渾名が『オーズ』になってしまったらしい。
続いて、島内限定のプラモバトル・ネクサスオンライン――通称ＰＢＮプレイ施設。
空の世界ではまだ流通していないプラモデルだが、この島発として空の世界に広めつつ、より深く楽しんでもらうためにと、前述のバトスピスタジアム同様に品物の販売も同時に行う。
どこかの世界のものと違い、プラモデルなら何でもＯＫなのがポイントだ。
発案はレイトことゼロに加えゼット、そしてまさかのルリアやアマリ、アーシア、そしてオーフィスと、レイト以外はかのノース・ヴァスト転移組だったりする。
「シミュレーターはさすがにアレだけどよ、これならいいだろ」

「商品はバトスピスタジアム側同様に惑星レジェンドとか各所から転送、と。後々こっちでも作れれば万々歳でございますね」

そんなレイトとゼットの手には最近発売されたばかりの彼らの愛機のキットの箱が……しかもＲＧかつ特別限定版だった。

そしてやはり計画の中心人物たるジャグラー……この男の城、蛇倉苑・空の世界支店壱号店オープンが今回最大の目玉と言える。

ジャグラー自ら選出し、空の世界各地で引き込み、技術を徹底的に仕込んだ寄りすぐりの料理人達のデビューでもあるそれは本店と同等規模の店舗。

オーナー兼本店店長のジャグラー全面指揮のもと建設され、サギリが広報部長を引き受けたことで瞬く間に全空に広まる。

「いやお前ら気合入りまくりだろ」

「最初が肝心なんだよ最初が。躾だの何だのと違って最初に嫌なイメージ持たれたらどうしようもないからな」

「元々、ジャグが彼方此方の島で腕前披露してたからね。やりやすかったわよ、既にファンもいたぐらいだし」

その他、ソーナ達生徒会の意見を取り入れた、空の世界にはない本（レプリカ）を大量に収めた大図書館、ゲンやミライを筆頭に訓練したい者達の意見から建設されたウルトラコロセウム、島民達が当初から予定していた乗艇港を始め、繁華街や温泉郷、工匠都市に採石場やレジャーランド、行政庁舎なども次々と作られた。

まあ、一部問題があったものもある。

例えば――

「……おい誰だ、この『大人のホテル』作った奴!?」

ちょっと町外れとはいえ未成年ダメ絶対なホテル。

「え、あたしじゃないですよ。あたしはほら、居酒屋」

乱菊のはまあいいだろう、リゾート開拓なのだから憩いの場はあって困らないどころか必要だ。

「私はハーブ農園ですが」

ハリベルは元々そういう方面で心配していなかった。

案の定まともなのでよし。

「これだけの規模であるなら大きめの病院は必要でしょう」

「あとは医者よね。私達がいつもいるわけではないし」

「ハリベルさんのところでついでに薬草も栽培してもらえないか頼んできましょうか」

卯ノ花、涼子、しのぶの医療班による病院もこれまた必要施設、なければならないものだ。

「そうなると……」

「「……」」

あ、黒猫ツインズが目を背けた。

「おまえらか！！」

「にゃあああああ!?お助けぇぇぇぇぇ!!」

「別にいいじゃろ減るもんじゃなしぃぃ!!」

……その後、何故かそのホテルが盛況なのに若干凹むレジェンドであった。

他にも――

「何で二条城建ってんだよ!?」
「「……」」
「そこのこんこん母娘」※八坂＆九重
「「ごめんなさい（なのじゃ）」」

とか――

「にゃー」「にゃー」「にゃー」「にゃー」
「「「「にゃー」」」」」
「……カナエ、アズ」
「猫カフェ！猫カフェのためです！」
「有志の方がお世話してくれるって……」
「……まあ、いいか」

カナエとアズ発案の猫カフェが出来たり（たまにハクが紛れ込んでるのはご愛嬌）。

「コスプレハウス……？」
「「私達でーす！」」

東、セラフォルー、ガブリエルの三人が作ったコスプレ衣装専門店だったり。

「……『劇場版ウルトラマンオーブ　絆の力、お借りします！』……これチョイスしたの裕斗とジャグラーだろ」
「あはは……はい」
「俺も出てるからな」

多くの者達の希望で映画館も完成。

「神社……か、奉られてるのは……何で俺なんだ!?」

「うむ！我ら十二神将皆が異議無しの一発決定じゃぞ、団長殿！」
「俺が異議ありだ!!」

アニラを筆頭に十二神将の総意で設置されたウルトラマンレジェンドを奉る神社なんかも出来る始末。
最後に、これらの施設を効率的に運用すべく、レジェンドが開発したのが『エーテル循環式高エネルギー発電所』。
正直一番ぶっ飛んだ施設であり、本来なら一箇所建てるだけで島の全施設の電力を半永久的に賄えるというとんでもないものを、レジェンドお得意の「念の為」で複数箇所に建設。
何処かが機能不全に陥っても他で十分過ぎるほどカバー出来るようになっており、また何らかの理由による停電などにも即座に対応可能。
おかげでこの島のみ、空の世界では殆どお目にかかれない電化製品や街灯設備などが普及しまくる結果となった。
なお、この施設の運用に関しては特に細心の注意が必要の為、レジェンド及びサーガによる人員の選定・育成された人物らが行うことになっている。
こうして廃島寸前の島はリゾート島として、その名を『ウルティメイ島』（サーガ命名）と変え再出発したのである。
そしてその結果――

☆

「皆さん、本当にありがとうございました!!」

レジェンド達の尽力でウルティメイ島は想像を絶する大反響となっており、嬉しい悲鳴だという。
島への移住希望者も増え、島開拓時にレジェンド……というかジャグラーの出した条件＋α（割と緩い）を守れるならばそれも許可する方針だ。

「ここでしか手に入らないものが多くて、商人達の間でも有名なんですよ～うふふ～」

プロトポロスや、最初に協力依頼を頼みに来たシェロカルテも嬉しそうにしている。

それは良いのだが……

「あいつら……この島に入り浸り過ぎじゃね？」

「先輩、俺もＰＢＮ行きたいんだが」

「ブルータス、お前もか」

やたら細部まで作り込まれたダブルオークアンタフルセイバーのプラモを手に、キャリーケースまで準備しているサーガ。

正直手を貸し過ぎたか、と額を手で押さえつつ溜息を吐くレジェンド。

「まあ、出来てしまったものは仕方ありませんよ」

「ミツバ……お前のその手に『コスモスＶＳジャスティス』のパンフレットが無ければそう思えたけどな」

あの映画館、ウルトラ映画の上映が一番盛り上がるらしい。

それぞれの推しが出ている作品なら尚更。

「これからライブスペースでリアスさん、ティコ先生、カナエさんにティナさんの四人で『戦姫絶唱☆ＬＩＶＥ』ですって」

「何か本来ならリアスが一番年上じゃないといけないのに一番年下になってる気がするんだが。アニラ達も必要じゃないか？それ」

「その後、レイトさんの『儚くも永久のカナシ』、ゼットさんの『めぐりあい』、オルガ団長の『フリージア』……」

「オイ待て二人はまだしもオルガは何かトラウマ掘り返しかねん気が

するぞ！」
「それから束博士、セラフォルーさん、ヴァンピィさんの『リリカル☆シスターズ』による二曲連続披露に、一誠さんとトライスクワッドの皆さんによる『Ｂｕｄｄｙ，ｓｔｅａｄｙ，ｇｏ！』、グランさんとビィさんによる『Ｔｒｉｇｇｅｒ』……」
「どうすんだソレ俺が当初懸念した正体バレにもろ引っかかってくんだけど。ゼットが参加する時点であれだけどな」
「そして締めに私、アズ、アーシアさん、オーフィスさん、ルリアさんにアマリさんの六人で『エアーマンが倒せない』です！」
「今からでも選曲変更しろ阿呆!!」

何でラストにあれ持ってくるんだと、またも額を押さえるハメになったレジェンド。
結局無難に『そして僕にできるコト』になったらしい。
ミツバも艦長職でストレスが溜まりがちとはいえ、別の意味でヤバいことになりかけていた。
しかし、よく選曲変更直後に問題なく歌えたものである。
こうして、ウルトラ騎空団の新たな拠点が出来上がったわけだが――

「よう光神サマ。ちょっと聞きたいんだが……この本、達するパフ？」
「……」

――いつの間にか観光客に紛れ込み、生徒会副会長の書いた同人誌を手に取って見ていたどこぞの堕天司が、レジェンドによって簀巻きにされた挙げ句、空の底へと投げ捨てられたらしい。

特別編・リゾート島を増やそう←え？

「我も！島開拓を！したいッッッ!!」

　究極英雄王の一言に場は騒然とした。ちなみに格好はいつもの全盛期スタイル。死を知らずエルキドゥと共に野を駆け覇を競い、やらかしを高笑いで流そうとしたら師父（レジェンド）にぶん殴られ冥界と現世を行ったり来たり繰り返していたあの頃の姿。

「今もの凄く地の文にこき下ろされたような気がするがそんなことはどうでもよい！繰り返し言うが我も島開拓をしたい！いいや、やる!!」

「そうは言うけどさ、一応ウルティメイ島って決定権は団長さんにあるんだよね。その団長さんは了承してるのかい？」

「我が頼むのだ問題なかろう！」

「……それがまかり通りそうだから怖いんだよなあ……」

　ロマニはプリンアラモードをつつきながら嘆息するが、かくいう彼も島開拓とやらは興味がある。何故って？アイドルステージを作りたいからに決まっているだろう。

　とはいえ既にある程度主要な娯楽施設は完備されているし、マニアックなものもいくつか存在している以上そこから何をどうやって作ろうかという問題になってくる。島の面積的なこともあって無計画に施設を増やしたりは出来ないのだ。

「私は今のままで十分ですね。美味しい食べ物があるお店が沢山ありますし」

「もっきゅもっきゅと可愛らしく食事をしている貴様は満足であろうなセイバー！だがウルトラ騎空団に所属している者、もしくはしておらずとも関係深い者共の中には当時島開拓に不在ないし不参加だった者も多い！そういう連中にとっては自分もまた望む施設を作りた

いと思うのは至極当然であろう！バカトリア！」
「いきなり私を名指しで言うなっていうかバカトリアって言うなギルガメェ！そういうとこだぞギルガメェェェ!!」

がおー！と効果音が付きそうなくらいギルガメッシュに噛み付くキャストリア。そんな二人をセイバーアルトリアはクレープに食らいつきながらのんびり見守っている。

「だが究極英雄王の言うことも一理ある！今や私達もウルトラ騎空団の一員、島開拓に参加したいというのは真っ当な要望ではないだろうか!?」
「テメェがやりたいだけだろキリシュタリア」
「応ともさ!!」
「ちょっとは隠せよ!?」

相変わらずコントじみたやり取りをするキリシュタリアとカイニス。ここで意外な返事をしたのがアナスタシア。

「別に私はやりたいと思わないわ」
「へ？アナスタシア、どうして？」
「それはね立香……カドックを弄るのは何処だって出来るからよ」
「そうかそうだよなちょっとだけ夢見た僕がバカだった!!君はそういう性格だったな畜生!!」

――アナスタシアは平常運転であった。ちょっとカドックが可哀想に思えなくもないが、まあいつも通りなのでいいだろう。
結局多数決……というか究極英雄王のノリと勢いでレジェンドへと直談判することに決定。
ちなみに当のレジェンドはというと……

「いい加減にしてくれないかい？男の私。せっかく私が正々堂々と今日のデート権を獲得出来たのに何でしつこく邪魔してくるのかな」
「単に町でお嬢さん方と楽しくお喋りしようと思ったら君だっただけなんだって！ホラ、キャスパリーグも言ってくれ！」
「フォーウ？フォウフォウ、キュー（え？ただオマエが見境無しだっただけなのに何でボクがフォローしなきゃいけないのさ。ボク達はアーシアのピュアフォースを感じるのに忙しいんだ）」
「ぴかっちゅ（要は女性かつ見た目良ければ誰でもいいんだね、このグランドクソ野郎）」
「つーか何で俺までマーリンのやらかしに巻き込まれなきゃいけないわけ？どうにかしろよ光神様」
「フォウとピカチュウを抱きかかえてるアーシアとか絵になるなオイ」
「はうぅっ……」
「ホンットにアンタって巫女とやらの事になるとやたら頭湧くよな!?」
『当然だろう燃やすぞ貴様』

プーリンとデート中、ナンパしに街に出ていたマーリン（と付き合わされたオベロン）と、マジンガーＺＥＲＯ護衛の下でピカチュウやフォウとお出かけ中のアーシアと遭遇。カオスフィールド生成不可避。

☆

「……で、帰って早々俺はその直談判を食らってるわけか」
「うむ。どうにかならぬか師父よ」
（（（（せめてこんな大規模な頼み事するときくらい腕組みタメ口はやめろよ））））

ソファーに寝転がり、腹の上にプーリンが座った状態のレジェンド

に先刻（半ば強制的に）決めたことを相談するギルガメッシュ以下数十名。……多いなオイ。

「どうにかねぇ……大半の施設は出来上がってるからな～……被りとか無いようにしたいし」

「では『私と我が夫のメモリアル記念館』なら被りはまずあり得ませんしどうでしょう？あとそこを退けプーリン。羨ましい」

「それってまさに自己満足じゃないかな？あとモルガン、君は私の2・5倍以上重いよね。マイロードの負担になるだろうからそれは聞けないな」

「殺す」

「おい待てモルガン魔槍構えるな俺に刺さる！それにプーリンも煽るな今だと被害は全部俺に来る！結論から言うと俺が割を食うだけだろうが!!」

不憫がここでも炸裂するレジェンド。言っておくがモルガンの身長やスタイルを考えれば体重そのものは理想的だと思われる。プーリンが規格外なだけで。

それはそれとして、どうしたもんかとレジェンドは目を瞑ってこめかみをトントンと人差し指で突きながら考える。何処からか「ポクポクチーン♪」という効果音が聞こえ、レジェンドが導き出した答えは想像を絶するものであった。

「島自体、作ってしまおうか」

「「「「……はい？」」」」

☆

レジェンドが辿り着いた答えとは『新しく島そのものを創造し、それを開拓する』というぶっ飛んだ発想。さすがギルガメッシュ育ての

親にして師匠、やることのスケールが違う。

「んー……ベースは古代メソポタミア、大地が理想的だ。湖とかは……アウギュステのお株を奪うわけにもいかんから程々に。ティグリスとユーフラテスも付けるか、当然だな。無論杉の森も作って――」

自らの光気を利用して新しく島を創り上げていくレジェンドに顎が外れんばかりの驚きを隠せない。ギルガメッシュやエルキドゥは自分達の故郷が大切な人物によって再現されていくことにご満悦。

「ふはははは！見事も見事、完璧ではないか師父よ！メソポタミアの大地が今再び遠く離れた異世界にて息を吹き返し、新たな歴史を刻もうなど我ですら考えなかったわ！ふはははは！」

「ちゃんとあの森も作ってくれたんだ。よし、僕はあそこを担当しようっと」

「おーう諸君らよ。島製作ついでに施設のガワ作ってやるから、島の方仕上げてるうちに要望まとめとけ。各種施設の発展とかＰＲ活動は自分達でやれよ、そこまで面倒は見れん」

「「「「……！はーい！」」」」

レジェンドによって現実世界へ引っ張り戻され、彼らは各々の要望をまとめることにする。そんな中、既にギルガメッシュだけは完成していたらしく施設案を提示してきた。

「我は無論、これよ！」

○城塞都市ウルク、ジグラット、大型全天候プール『わくわくざぶーん』

「「「「いやちょっとは遠慮しろよ!?」」」」

「たわけ！最初の労力無くしてその後の成功などあるものか！」
「むしろ最初の労力はあのぴかぴかがやるんだろうが！テメェは一体何をする気だよ!?」
「決まっておろうが狗！民草の呼び込みや育成、各種追加施設の建設・増設・増築から始まり！空の世界各所へのＰＲ活動やコネクションの構築などは我の職務よ！我が治めしウルク、この空の世界においてもそれは唯一無二の栄華を極める都市と知らしめてくれる！ふはははは!!」

のっけからとんでもないものを希望してきたギルガメッシュにドン引きの面々。クー・フーリンがツッコミを入れるも割と真面目なカウンター発言で返されて黙らざるを得ない。残るはレジェンド自身がアウト発言を言うしかないわけだが……。

「わくわくざぶーん何処置くよ？」
「うむ、ジグラットのすぐ近くにな」
「「「「オイィィィィ!?」」」」

やる気満々だった。ここで彼らも気付く、レジェンドも古代メソポタミア最強チームの一人だったと。ギルガメッシュと共に図面を見ながら改築案を提示し合い、落とし所を見つけてはすぐさま建造。恐ろしい勢いで空の世界にウルクが創り上げられていく。

「いやこれはちょっと予想外だったなー」
「いやレオナルド、これそういうレベルかい!?一晩で高層ビルが出来上がるよりぶっ飛んでるんだけど!?」
「何を言います？我が夫が主導なのです、この程度造作もないでしょう」
「あれぇぇぇ!?先代陛下も当然みたく仰られてるんですけどおかしいのボクの方!?」

困惑しているロマニ。安心するんだ、君が正しい。王とか天才とか兵器とか光神とか周りが……いやロマニはソロモンで魔術王だった。

最終的には彼も戸惑いつつ参加し、ウルティメイ島属島『バビロニア島』として新たな島は成立。

では改めて、バビロニア島の施設や都市を見てみよう。

☆

○首都・城塞都市ウルク、王の聖塔ジグラット、大型全天候プール『わくわくざぶーん』

「ふはははは！見るがいい、師父に友よ！既に移住希望者が我が宝物庫の如く溢れかえっておるぞ！」

「「「「えええええ!?」」」」

「ふっ、レジェンド式お引越しサービスや究極☆英雄王職業斡旋サービスも功を奏したか。掴みは上々、滑り出しも文句無し、ここからだ」

「僕達は結構留守にすると思うから、ちゃんと僕達がいなくても機能するように武官文官両方育てないとね」

恐るべし英雄王カリスマというか、暴君ではなく慢心もないギルガメッシュはここまで人を惹きつけるのかと言わんばかりの大盛況。理由は様々だが、文字通りウルクの民にならんとする精神の持ち主ばかりが集まったようでギルガメッシュは大満足。

「我がウルクの民にならんとするその精神、我自らが汲んでやらねば王たる我の名が廃るというものよ！皆並ぶがよい！我が直々に面談し、適した希望の仕事を割り振ってやろう！師父が我の望みを叶えてくれたように、我もそうしてくれるわ！ふはははは――!!」

そう言うや否や、ジグラットの玉座に腰掛け次々と人々の仕事を割り振っていくギルガメッシュ。ノリノリな彼によって瞬く間にウル

クは空の世界で有数の富裕都市となり、同時に王とその師父や友の名声は爆発的に広まった。
「ウルクには偉大かつ寛大な王がいる」
「都市神（イシュタルにあらず）が凄すぎる」
「最終兵器が常に稼働して民と国を守っている」
　などなど、彼らだと分かる噂もちらほら聞こえてきたくらいである。

「僕、最終兵器だって。神造兵器より強そうじゃない？」
「空のウルクは俺が都市神なのか」
「あの邪神めと違って師父は人間と共にあるのでな。神代の頃は神が民に紛れて街を遊歩したりもあったのだ、師父の在り方は正しくそれではないか。ふはは」

　ギルガメッシュの鶴の一声で空のウルクはレジェンドを都市神に。ウルティメイ島の属島であるのだから、そこの最終決定権保有者であるレジェンドがそうなるのも別段間違ってはいない。メソポタミアのウルクではないし、シドゥリ自身もレジェンドには最大限の敬意を持って接していたので問題ないだろう。
　あるとすれば万というか億が一イシュタルが来た時、絶望したり暴れたりしないかという点だが、もし暴れようものならレジェンドを始めとしたチート軍団に鎮圧されるだけだ。

「あ、そうだ。ギル、エルキドゥ、それにお前達もついて来い。ジグラットの一角に面白いものを設置した」
「「「「「……？」」」」」

　○スーパーマリオ６４な各種ステージに行けるスペース（レジェンドによるおまけ設備）

「ふはははは!!我の甲羅ライディングテクニックを見るがいい!!」
「これ、イシュタルにイタズラするとき便利だね」←透明エルキドゥ
「フォウ!」←はねフォウくん(帽子の代わりに背中に可愛らしい羽根が生える)
「ピッカァ」←メタルピカチュウ
「「「最後ちょっと怖い!!」」」」
「そのウサギを捕まえろォォォ!」
「!!」←さやぴー超速反応
「なるほど、これが噂の人間砲弾というわけですね――」←大砲で発射され空の彼方へ飛んでは落ちていくモルガン
「お母様ー!?」
「何このペンギン!最強種の僕より早いとか腹立つなぁ!」
(ワンワン……もう少し、もう少しだけ可愛いらしいフォルムにはならなかったのでしょうか……!?)
「ウォーターランド、即ち私のキャストオフ(※水着)が輝くステージというわけだね!」
「レインボークルーズやだー!ファンタジックっぽいけど全然そんなことないアスレチックだったよー!!」

運動不足解消用に設置したものだったが、楽しそうで何より。尚、キャストリアはレジェンドに救助された。

○月王国(ルナ・ブリテン)大使館

「ふむ、まあウルトラ騎空団に属しているというわけではないし、これがあるのも納得よな」
「そうでしょう、そうでしょう。やはり究極英雄王は聡明でよろしい。私とバーヴァン・シーや沙耶のようですね」
「あれ?もう色々運び込んでるんだ」
「箪笥の中には何があるのかな~?」
「あっ……アルトリア、プーリン!二人共止め――」

過激な勝負下着を見つけた！

「へうっ!?」

「うわあ……これ絶対マイロードとのホニャララな日に着けるやつだよね」

「〜〜っ！お仕置きです!!」

「「うわあああああ!?」」

魔槍を振り回しながら二人を追いかけていくモルガンを尻目に、他にも見てみる者がいたり。

「確かにこれまた過激じゃのー。殆ど紐じゃない？突風で飛ばされそうじゃし、正しく風と共に去りぬ的なアレ？でも去ったらダメだよネ！」

「ノッブまさか自分も似合うとか思ってません？ノッブのマスターさんやモルガン先代陛下ならともかく、体格がへなちょこなノッブだとなんかこう『コレジャナイがっかり感』がとんでもないことになりますね〜」

「なんじゃと沖田ァ！そういうお主に勝負下着は後３００年早いわ！晒布と褌で十分じゃろ！」

「それなら敢えて下着を着けずに私は薄着物一つで色っぽくしますよーだ！」

ぐだぐだファイトレディーゴーな状態へシフトしたノッブとおっきー。まあ朱乃やモルガンが着たら即ルパンダイブするのが大多数な物だったが、人のプライベートなものを勝手に見ておきながらギャースカ言うのはどうかと思う。プライバシーの侵害である。

「時に究極英雄王、光神様はどんな下着を好むか分かりますか？」

「たわけ！そんなことを我に聞くな！一糸まとわぬ姿を晒して『私を

食べて』でも何でもすればよかろう！」
「私はそういうの大歓迎だからね！きっと光神様も好きなんじゃないかな？」
「フォーウ！フォウフォウ！（自分を基準に言うなグランドスケベめ！オマエをそういう状態にしてやろうか！）」
「ぴっぴか、ぴかちゅ（ギルさんも女の子にそういう後半のセリフ言っちゃだめだよ）」

ジャンヌの問いに投げやりな返答をしたギルガメッシュを諌めるピカチュウは良しとして、フォウはマーリンをひん剥こうとしている。要らないファンサービスを見せられる前に次に行くとしよう。

「要らないファンサービス!?」
「フォウフォウ、プフー」

○出会茶屋『花の都』

「フォーウ!!（パリに喧嘩売ってんのかテメー!!）」
「ごはあっ!!」
「凄まじい一撃です！イッセーが兄と慕うアスカの変身するウルトラマンダイナのストロングタイプが如き鉄拳がマーリンの横っ面に見事ヒットしました！」
「ふむ、セイバーは実況もイケるようだな」

マーリンの発案した施設を律儀に作ったレジェンドには申し訳ないが、とフォウは思いつつマーリンにキャスパンチをブチ込んだ。ついでに何故かセイバーアルトリアもちょっと嬉しそうだったりする。

「待て、待つんだキャスパリーグ！コレは少子化が進む現代にこそ必要な施設だぞ！男と女、この世に生まれ落ちた二つの性……互いに惹かれ合う特性を十二分に利用した画期的な施設は必ずや現状を打破

し未来を輝かしいものにしてくれる筈だ！」
「フォーウ、フォフォウ？（それで、その心は？）」
「私も色々な女の子達と仲良くなれてウルトラハッピー！」
「ぴっぴかちゅー!!（結局欲望丸出しかー!!）」※コスモミラクルボルテッカー発動
「ちょっ……!?何そのＺワザならぬトンデモワザうわあああああ!!」

何か合体しないと使えなさそうな技を単独で発動しマーリンを中心に大爆発させるという離れ業を披露したレジェンドのピカチュウ、略してレジェピカ。フォウくんが尊敬の眼差しで見ている！

「まあ、放っておいてもいつの間にか復活してくるであろう。次を見に行くぞ！にしてもさすが師父の使い魔よな……」

○スペシャル工房（ウルク出張所）

「各種プリズムやアイテム交換には是非御贔屓を～」
「なあ、ガネーを使って武器を強化したりは出来ねぇのか？」
「う～ん、それはちょっと……」
「仕方ねえ、カネゴンに頼むか」
「ガーン!?」

実を言うと、クー・フーリン自身も最初はまさかゲイ・ボルクを物理的に強化出来る奴がいることに本気でビビったのだが、今や彼もカネゴン・ア・キンドの店はよく利用するようになっている。そんな彼の落胆以上にダ・ヴィンチちゃんは自分より技術力のある者の存在にショックを受けていた。多分、会ったら外見的なことにも衝撃を受けると思われる。

「ちなみにハンターランクは如何様だ、狗」
「あ？そりゃマスターやジェントの旦那と狩りまくってんだから途中

参加だがそれなりだよ。ほれ」
「何ィ!?おのれ狗の分際でブラックカードとは生意気な!ドーベルマンだとでも言う気か貴様!」
「うるせえよ!?大体テメェの関係者なあのぴかぴかはプラチナカードだったじゃねえか!しかもオーダーメイドの特注品!アレ最低でも旦那とか他の七星剣じゃねえと発注出来ないやつだろうが!何で持ってんだあのチートラマン!?」
「当然であろう!ハンターとしても最上位に君臨する師父がただのカードで満足すると思ったか!プラズマスパークよろしくカードも輝いて然るべきだということよ!」

○ハンターズギルドへの転送ポート

「あれよな、『御都合主義は時として最強』というようにサザエさん時空は便利だということの証明となったか」
「ま、ハンターとしちゃあサーヴァントの中じゃ俺は先輩だからな。色々教えてやるぜ」
「ほう?ではグランドキングをソロ討伐してみよ狗!」
「いきなり無茶振りしてくんじゃねえよ金ぴか!?」
「たわけ!我と友は師父に連れられ初狩早々プラズマキラーザウルスとやり合う羽目になったわ!無論我らの完勝、初にして大捕物であったがな!ふはははは!!」←実はプラチナカード所持
「「「「何ィィィィィ!?」」」」

そう、ギルガメッシュとエルキドゥはレジェンドや七星剣に次いで早く最高ランクのハンターになったことで一躍有名になっていたりする。しかも討伐したのがしたものだけに彼らの所持ガネーは桁がおかしいことになっているのだ。

「ねえカネゴン、何かイタズラ系アイテムで良いのない?」
「んーと、こういうのは如何ガネ?」

○蛇倉苑・ウルク支店

「ヤッホー、マシュ。今ウルクでウチのＰＲ活動してるのよ。王様も食べてかない？今なら開店一番乗りだし、今日は特別にジャグも来てるのよ」

「一番だと!?ならば入らぬわけがなかろう！ウルクにおいて我は常にＮｏ．１であるのだからな！ふはははは！」

「よう、来たな英雄王。例のスペシャルメニュー、ウルク支店限定で載せてるぜ。マシュも食ってけ、俺の奢りだ」

「あ、ありがとうございます店長！先輩もお疲れ様です！」

やはりウルトラ騎空団と言えば蛇倉苑。ウルティメイ島の属島とあればこの店が立たぬ訳がない。レジェンドの縁者たるギルガメッシュが治めるウルクなら尚更だ。

「よし、では行くぞ！『黄金のカツ丼・ギルガメスペシャル』を注文する！ウルクでの客第一号たる我を見事満足させてみるがいい！」

「任せな。俺の本気を見せてやるぜ、最強最古の英雄王。古今無双の丼物王の実力！その胃で味わいな！」

「ふはははは！丼物王ときたか！よかろう！いかなる料理が出てこようが我が残さず完食してくれるわ――!!」

――食後――

「店長……いや、丼物王よ。アレは我専用メニューとする!!アレを味わって良いのは我が共に来店し認めた者のみが食すことを赦される逸品よ！実に美味だったぞ！ふふはははは!!」

ギルガメッシュ御満悦。余程気に入ったらしく専用メニュー化までしてしまった。ちなみに専用メニューは蛇倉苑の入口横にて貼り

出されており、ウルク支店初の専用メニューであるギルガメスペシャルは金の箔押しで真っ先に貼り出された。

「何このレアカード感」

「ふはははは！金箔とはニクいことをするではないか丼物王！それでこそ我が専用メニューというものよ！」

「ずるいぞギルガメェ！職権濫用じゃないのかそういうとこだぞギルガメェ!!」

「たわけバカトリア！我は丼物王の出した条件を全てクリアした後に注文を出しておいたのだ！よって正規条件を満たした特殊召喚だということ！何ら問題は無いわ！」

「剣ドラな私には優しくしてるのに、私には全然優しくない！いいもんレジェンドに慰めてもらうから！ばーかばーか！」

「ぬうう！バカトリアの分際で我をバカ呼ばわりとは！」

「あはははは、二人とも兄妹みたいだね」

「う～ん……ということは私とマイロードが結婚したら二人が私の子供になるのかー……」

「おいプーリン！仮に貴様と師父が番になったとして、断じて母とは呼ばんぞ！そしてこれを妹など絶対に認めん！」

「プーリンにもギルガメにも断固として反論するよ私は！お母さんともお兄さんとも絶対呼ばないもんね！」

「よかろう！呼ばずとも良いがどちらが格上かだけはその身にしかと刻んでくれる！」

「ふふん！生憎私はサーヴァントじゃないし特別な星持ちだし、何より完全完璧ダメージカットの対粛正防御というレア中のレアな能力がある！レジェンドに怒られたければエヌマでも何でもどーぞ？」

「ぐぬうううう!!おのれおのれおのれェェェ!!」

たった四人（ほぼ二人）で会話が長々と成立してしまうレジェンド関係者。他の面々が置いてけぼりになる前に、一番話が分かりそうなエルキドゥに断って彼らは逆に彼らを置いてけぼりにして別のとこ

ろへ向かった。
……実はエルキドゥが一番話が分からない（故意）タイプだと、彼らは知る由もない。

○ハベにゃん工房出張所（ハベトロットがウルクにて寝泊まりする所）

「ついさっき完成したところだぞ、ハベにゃん」
「あ、レジェンド様！だからいなかったんだ！」
「まあな。何というか……あの四人がいないのは」
「ギルガメッシュとアルトリアが言い合いになりまして、プーリンが油を注いだ形に」
「エルキドゥは……駄目だ、あいつは面白がって傍観するか、燃え盛る火へ油を注いだ後に薪を焚べるようなことをして悪化させかねん」

このハベにゃん工房はレジェンド直々に建設したらしく、やたら豪勢であった。常に最良の状態を維持する術が全体に施され、長期間留守にしても全く新築新品のまま。布団はふかふか、機材も錆びないし材料も傷まないといたれりつくせり。キッチンなどもハベにゃん仕様になってるので自炊も可能。浴場も大きめ。

「わあ！すごいすごい！これならフルパフォーマンスで仕事が出来るぞー！」
「当然だろう？劣悪な環境で満足のいく仕事なぞ出来るものか。一流の職人を活かすのは一流の職場環境だ。それにはオンオフ双方において整える必要があるからな」
「そんな頑張り屋さんのレジェンド様に御褒美！ボクを吸っていいのだわ！」
「「「「!?」」」」

これはハベ吸い――ハベにゃんセラピーの一種らしく、様々な疲労

回復の効果があるとかなんとか。とはいえ異性がやるのは少しマズくないかと思う。当然だがレジェンドはそこらへんしっかりしていた。

「いやさすがに男の俺がやるのはいかんだろう」

(((((是非ともアザゼルやマーリンに見習ってもらいたい立派なお返事です!!)))))

※代わりにモルガンがハベ吸いしました

○ふれあい動物園　園長・光のコヤンスカヤ

「本当はカジノでもお願いしようと思いましたが、万が一にもマスターを破産させるのは不本意ですし、光神様や英雄王が来た場合確実に潰れそうですし」

「とはいえ、まともな施設だ。よくやったコヤンスカヤ」

「まあ、ウルトラ騎空団やそれ絡みならあの子達に酷いことしないでしょうし……!?」

「どうし……」

※ホッキョクウサギの群れに囲まれて幸せそうに寝転んでるさやぴー

(((((女王陛下――!?)))))

「バーヴァン・シー、カメラです。最高水準のものを、早く……!!」

「大丈夫よお母様、こんなこともあろうかと沙耶と出掛ける時は常に携帯済み!」

「よく判断しました。では早速……」

親バカとシスコンが大福の如きもこもこに包まれる沙耶を激写。自分達に害はないと分かっているからか、ホッキョクウサギ達は動揺していない。

「そういえば現女王は兎好きでしたわね……」
「沙耶にとってあれは天国だろ。勇治もあれ、人間は選り好みするが動物は種類関係なく可愛がってるぞ。偶にハクとか撫でながら読書してるし」
「マスターが動物好きなのはいいとして、あの猫に関してはあまり騒いだり悪戯したりしないからなのでは……？」

○???

「何だ？ここ……」
「何かの研究施設みたいだけど」
「ならばここは騎士王として、僕が先陣を切ろう」
（私も騎士王なのですが……）
「……ん？」

正体不明の施設の前で悩む面々の前にアーサー・ペンドラゴン（プロトタイプ）――通称プーサーが仁王立ちする。セイバーアルトリアは内心彼の言った称号にツッコミをいれたが、レジェンドはその施設の入口横……少しだけ離れた所にあったインターホンと、そこに貼られていた『研究中・用事があるときは乱暴にノックせずこれを押すように』という紙を発見する。丁寧な字で書かれた筆跡に、この施設が誰のものか気付いたのはレジェンドと綾香。

「あの、団長さん……」
「みなまで言うな、大体わかる」

そんな二人の心情などいざ知らず、プーサーは何かあった時のために聖剣を手に強くノックした。

「頼もう!!」

「あ、ダメ!!」
「む?どうした綾香よ。セイバーがやっていることに間違いでもあったのか?」
「間違いどころか地雷踏みまくってるぞアイツ」
「我が夫、それは……あっ」
「気付いたか、モルガン……」

ここまでヒントが出ればモルガンも分かってしまう。何故なら彼女も一応、『彼』の関係者と言えるからだ。あと沙耶も。
そして、轟音を立てて入口の扉が開く――。

「さあ、鬼が出るか蛇が出るか……」

出てきたものは――。

「……」
「「「「!?」」」」

ムーンブロリー（月影勇治・激情態）。

「な……な……!?」
「イエッ!!」
「うわあっ!?」

月出身の悪魔はプーサーの胸ぐらを掴み施設の中へ力任せに引きずり込むと、扉が勢いよく閉まり……。

ふぉあああああああぁぁぁぁぁ!!
(声の出演?コウ・ウラキ(友情出演))

何かプーサーじゃない断末魔の叫びが聞こえ、一部の者以外は戦慄する。
そんな中、レジェンドは――。
「あの調子じゃ今日はこれ以上無理だな」

プーサーの心配ではなく、施設巡りの時間を気にしていた。他の者がいないことに漸く気付いたギルガメッシュらが追いかけて来て合流したので、彼はこう告げる。

「夕飯何処で食うべ?」
「私はラーメン屋がいいわ」

くいくいとレジェンドの裾を引っ張るアナスタシアは、さながら父におねだりする娘のようだったとマスターのカドックは語る。
レジェンドの調べでラーメン博物館的な施設があることが分かったため、そこへ向かうことにした一行。ちょっとした問題があるとすれば……。

「我もいく。レジェンドとご飯」

……いつの間にかいたオーフィスが、レジェンドに肩車される形でくっついていたぐらいだ。とはいえ彼女に関してはキリシュタリアを始め、ぺぺやオフェリア、シグルドなどが微笑ましく見ていたり、立香が「抱っこさせてー」とぴょんぴょんレジェンドの近くを飛び跳ね

たりした程度なので可愛いもの。
もっと深刻な問題は――。

「何なんだぁ？今のは……」
「そんなバカな!?聖剣の一撃だというのに何故無傷――」
「まずはお前から麻婆祭りにしてやる」
「え!?麻婆!?誰か！誰かーッ!?」
「フハハハハハ!!」

「フォウ……（麻婆祭り……白米があったらレジェンド相手じゃ御褒美にしかならないよね、ピカ先輩）」
「ピッカァ……（だよね、フォウくん。でも僕達は今からいくラーメン屋へ期待で胸を膨らませておこうか）」

フォーウ、と了解の返事をして共にレジェンドの元へ駆け出すマスコット二匹。ムーンブロリー（繰り返すが月影勇治・激情態）にしばかれ続けるプーサーを誰も助けようとしないことが、自業自得とはいえ一番の問題であった。

「強く生きよ、セイバー。相手が相手だけに助ける気は毛頭ないがな」

（一応）恋敵の安否を気遣っていたプロトギルだが、自身が真に認めた恋のライバル（勇治）の暴走モードが相手かつ、少なくとも食事の間は綾香の隣を独占出来ることから割とあっさり見捨てていた。是非も無し。

――おまけ――

「くっそぅ！復活に時間がかかって皆を見失ってしまった！今何処に（ピロン♪）……ん？」

マーリンが花のお兄さん専用スマホ（仮）を見ると――。

○貸し切りにしたラーメン屋にてプーリンやキャストリアと共にラーメンを啜るピカチュウ、モルガンに抱っこされつつ餃子を頬張るフォウくん

メッセージ？美味しいご飯を皆と一緒に。お前には分けてやんない。　フォウ

「キャスパリィィィィグッ!!」

特別編・バビロニア島を更に開拓しよう！

ピカチュウにコスモミラクルボルテッカーをブチ込まれたマーリンを放ったらかしにして、皆で夕食にラーメン店を訪れ和気藹々と食事し、ウルクの宿泊施設（レジェンドやギルガメッシュらはジグラット）にて一泊した次の日。

諸事情で早く出るとレジェンドやゼットから聞かされていたギルガメッシュは二人が既にいないのを確認後、合流してきたオカ研メンバー他数名を伴い、先日は回れなかった施設へ赴くことにした。オカ研メンバーらは先日の施設も気になったのだが、そこは我慢して後日自分達で確認しよう、とメンバー全員が納得。

「ふはははは！先日より豪華なメンバーではないか！その中においてやはり我は一際輝いているな！さすが我！」

「まあ、メソポタミアベース兼ウルク中心兼名称バビロニア島だもんね」

「であろう、であろう。世界と時代は違えどウルクが絡めば我が一番目立つのは必然というものよ。師父も基本は一歩引いて見守るタイプ、あの自己主張激し過ぎな天の邪神とは違っていたな」

あんたも相当自己主張激しいんですが、とは誰も言わない。慢心しないのはともかく、自己主張しない英雄王はホント誰おまだからである。

それはともかく、ウルティメイ島とは違う施設に皆興味津々。ただしプーサーに限り昨日の事が尾を引いているのか青い顔で窶れており、時折「麻婆……麻婆祭り……」と虚ろな目で呟いていた。かなりドン引きだが勇治は一体何をしたんだ。

「マーリンボイスのセイバーが稀にトランス状態になっているがこの際それは無視する！」

「えええ!?」

「綾香、あれはセイバーの自業自得というものだ。それに極めた我はあの光神でなければ言っても聞かんだろう」
「そういうことだ旧型の我！」
「せめて原型と言え！」

比較的落ち着いた対処のプロトギルに対してゴーイングマイウェイな究極英雄王。まあ、賢王もそれらしいところはあるが、一番はやっぱりウルティメイトなギルガメッシュであった。

「師父やゼットともそのうち合流出来るであろう。これよりバビロニア島施設巡り二日目の幕開けだ！ふはははははー!!」

☆

○るりふぃすさやぴー＋α用総合仕事場

「こ……ここはっ……!!」
「誰が建てたのか何となく理解出来ますが、良い物ですね」
「そういえばオーフィスちゃんと沙耶ちゃんの姿が見えなかったし、もしかしてルリアちゃんも合流してレッスン中とか!?」

上からオフェリア、モルガン、ロマニ。いずれもるりふぃすさやぴーファンな方々である。オフェリアはまだ常識的だが、残る二人はスペック的に本気を出すと色々ヤバいことになるので警戒していたのだが、3人揃って「中に入ろう」とキラキラお目々で訴えてきたので残りメンバーは撃沈。駄目だと言ったら先代女王と魔術王が戦争モードに突入しそうだったんだもの。
で、中に入ると確かにオーフィス達がいたのだが……。

「あ、皆さん！おはようございます！」
「はよー」

「早かったのね。もしかして一番最初かしら？」
「うむ。して３人揃ってレッスンでもなく何をしている？」

ギルガメッシュが尋ねると同時に何やらピンチの時に逆転しそうな音楽が流れ始め、数名を除き他全員が驚く。沙耶達三人が指差したのはガラスの向こう側でレコーディングしている人物。
なんと――。

「「「「ゼット（さん／プロデューサー!?）」」」」

そう、ゼットである。彼のイメージソングとも言える『Ｐｒｏｍｉｓｅ ｆｏｒ ｔｈｅ ｆｕｔｕｒｅ』を収録中だったのだ。しかもゼット自身がやる気を出すために自身の機体・ＥＸ―Ｚガンダムの映像まで流している本気ぶり。実は同機のＰＲも兼ねたミュージックビデオを作ろうとしているとか。

「う……上手い……！」
「何あのＭＳ！私達の希望リストに入ってなかったよ!?」
「立香、あれはゼットさんだけの専用機よ。基礎設計は彼がやって、開発協力には噂のアムロ・レイや束博士らが携わった正真正銘ワンオフの超高性能機なの」
「ゼットプロデューサー自ら基礎設計を!?」
（オフェリアの食いつきが凄いな……）
「ちょっと待った、アムロ・レイだって!?」

実際にリアスらはゼットに対してアムロからも協力を申し出た上に特訓に付き合っていたところを目撃している（空の世界へ旅立つ直前のこと）。しかもゼットはアムロの直筆サイン入り著書まで持っているわけで。
カドックが驚くのも無理はなく、留学したばかりの頃に当然シミュレーターを留学生組は体験したのだが……全員同時出撃し、開始５秒

と持たず全滅という初回にして最速全滅記録が出てしまった。その時のシミュレーターの相手ＣＰＵがアムロだったのだ。

「アムロさんってヤベーくらい強いんだよな……先輩や小猫ちゃんの姉ちゃんだけじゃなく、巌勝さんや三日月さんも同時に相手して本体無傷で全滅させんだもん。しかも本人は最強機体じゃないっていう」

「ゼロ隊長や黒歌なんて絶望してたよな」

「え？マスターのお師匠さんが負けたんですか!?嘘ですよね!?」

「巌勝さんにとってはＭＳ操縦や機械関係に関しての師匠らしいぜ、アムロさん」

沖田が真っ白になって吐血した。慌ててゼノヴィアが支えたが、周りの人物もあまりにとんでもない戦績に愕然としている。ちなみに、留学生組のシミュレーター成績はというと……。

○立香→そこそこ優秀。インファイト大好き娘。しかし三日月のバルバトスにボコられまくってガチ泣きした。相手が悪かったよ……。

○キリシュタリア→優秀。愛機はＲ―ＧＵＮパワード。ただしランダムバトルでガンダム・エアリアル（モルガン）と当たる不幸を発動。ガンビットでリンチにされた。

○デイビット→やたら強い。レジェンドにより一日に記憶出来る時間を５分から１２時間へと大幅に伸ばしてもらってから、ファンネルが使えるようになった。ＭＡ乗り。

○カドック→元は平凡だったが、努力して開花。ワンオフの試作機よりカスタム機の方が良い結果を出す。堅実かつ現場にも優しいタイプ。

○ペペロンチーノ→結構優秀。特殊な機体の操縦が得意。ただし声がどうとかで阿頼耶識搭載ＭＳを操縦出来たりはしない。割と何でも乗れる。

○オフェリア→支援機の扱いはピカ一。反面、前線型の機体は苦手。というよりも接近戦が不得手。誰かと組んでこそ真価を発揮。

○ぐっちゃん→問題外。

「ちょっとー!?私だけ問題外って何よ!?」
「開始早々自爆スイッチを探す時点で問題外でなければ何だと言うんだ!」
「パイセン駄目だよ!せめて全弾撃ち尽くしてからじゃないと!」
「そもそも自爆前提にするなよ!?」
「なーんか儂が関わらなくてもぐだぐだし始めたんじゃが?これって儂=ぐだぐだって方程式が否定されたことにならない?それで良くない?」
「え?ノッブからぐだぐだ取ったら何が残るっていうんですか!」
「さっき真っ白吐血してから早い復活の上に何ちゅう物言いじゃ沖田ァ!」

――結局最後にはいつもの二名が参戦しぐだってしまったので、るりふぃすさやぴー(とゼット)と別れて次の施設へと行くことにした。オフェリアとモルガン、ロマニが名残惜しそうにしてたのは言うまでもない。

○風雲キリシュ城

「「「「何じゃこりゃあああ!?」」」」
「中世日本風の城型アトラクションさ!忍者屋敷地味た仕掛けも用意してあるぞっ!是非楽しんで行ってくれ!」
「ほほう……どれ、あのステージとはまた一味違うというところを見せ――」

城内へ堂々と入ったギルガメッシュは早速バカン!とド派手に開いた床の落とし穴(無駄にデカい)へと落ちていった。

「デカッ!?落とし穴デカいよ!そして広いよ!」

「ちょっとちょっと!?英雄王ったら落ちて行っちゃったけど大丈夫なの!?」
「安心してくれ立香にぺぺ！この風雲キリシュ城は落ちてからがスタートなのさ！」

よく耳を澄ませてみると、下の方から「オーソドックスだが中々やるではないか、ふはははははー！」とか高笑いが聞こえてきた。

直後――。

『レッドファイッ！』
『何ィ!?よもや貴様がこんなところにいようとは！よかろう！ここからがウルトラＡＵＯファイトよ！』

――今度は聞こえてはいけない声が聞こえ、どっかで耳にしたことのあるＢＧＭまで流れ出し何かが刺さる音や爆発音、転がり落ちていく音なども聞こえ始め本気でビビる一行（キリシュタリア除く）。

とりあえず、落とし穴を避けて暫く進むと少々汚れているが満足気なギルガメッシュが立っていた。

「ふはははは!!久々に我も本気になってしまったわ！アレはグガランナなどより余程手強い！それさえも下した我はやはりメソポタミア最強ということよな！無論、師父は別次元よ！」

……どうやらあの赤い通り魔をタイマンで撃破したらしい。恐るべし究極英雄王。そのうち何処その白い猿も倒しそうである。その後も十分楽しんだのだが、やっぱり落とし穴の先にいる赤いやつはやめておけと言われてキリショボン。

○レディースファッションストア

「これは……良い品揃えですね」

「ここって誰がリクエストしたの？」
「えーっと……スカンジナビア・ペペロンチーノ？」
「ハァイ、私よ小猫ちゃん」
「あ、ペペさん……ですもんね」
「そ♪これでもファッションコーデには自身があるから、悩んだら声掛けて頂戴」

ファスティバといいペペといい、ウルトラ騎空団の漢女とかオネエは濃いのと同時に人格者だったりする。ペペも相談に乗ったりするうちにいつの間にか仲良くなっていた。ミルたんとは違うのだ。

「団長さんも副団長さんも、適当に相槌打つんじゃなくてちゃんと見てくれる人だから、しっかりキメていけば褒めてくれるわよ～。自信を持ってね」
「確かに我が夫は正しく評価してくれますね。では私も早速――」

ペペの言葉に頷きつつ、モルガンも何か買っていこうとした矢先にある人物が来店していたのを目にする。
しかもその人物がとんでもなかった。

「ふむ……オルトリンデ、ヒルド、スルーズ。レジェンドはどちらを好むと思う？好きに述べてみよ」
「レ、レジェンド様は……ですか」
「やっぱりスカディ様に色合いが合う方だと思います！」
「でもデザインとしては此方の方が……」

オフェリアが飲み物を変なところに入れてしまったのか咳き込み、シグルドの眼鏡が一瞬で曇った。

「マスター、何やら眼鏡が曇って良く視えない。当方は眼前に北欧を統べる女神がいたように見えたが――」
「シグルド、疲れているなら私達に無理に付き合わずゆっくり休んでいていいのよ。夢の中で奥さんと幸せな時を過ごしたって良いじゃない、今を生きているんだもの」
「何故ここにいるのです？スカサハ＝スカディと愉快なワルキューレ」
（（気付かないフリをしていたのに!!））

モルガンの一言で周りが驚愕する中、オフェリアとシグルドは両手両膝を着いてガックリしている。そりゃ、自分達の関係者が当たり前のように一般人宜しくショッピングしているなどと誰が予想するか。しかも異国どころか異世界なのに。

「おや、モルガン・ル・フェではないか」
「もう妖精國の王ではないと何度も言っているでしょう。それより質問に答えてもらっていませんが」
「先日我が伴侶たるレジェンドが『偶には統率係のワルキューレと一緒に休暇旅行でも行きなさい』と言いに来てな。良い場所が無いか聞いてみたところ、ウルティメイ島を提案されたのだが……気が付けばこんな愉快な島が出来ている。ならば童心に帰って散策してみようと思い立っただけだよ」

原因・レジェンド、しかもモルガンの「我が夫」発言に匹敵する「我が伴侶」発言。モルガンがぷくーっと頬を膨らませている。対してギルガメッシュは「愉快な島」に気を良くしていた。愉悦部部長なだけにそこを褒められるのは嬉しいということか。

「時にレジェンドは何処にいる？私達に休暇を取れと言う割に当の本神は忙しなく動いているわけではなかろうな？」
「案ずるな氷麗の美神よ。今、師父は皆の為だけでなく己が愉悦の為

に奔走しているのだ。まあ自身の目で見てみるのが一番確実かつ早かろう。我らについて来れば自ずと出会うだろうよ」
「そうか。ではオルトリンデ達共々、同行させてもらうとしようか」
「皆様方、突然のことで申し訳ないのですが」
「よろしくね！」
「こちらがオルトリンデとヒルド、そして私がスルーズです」

毎回思うがアザゼルがいたらまた騒ぎ出すだろうが、生憎イングウェイやオイゲンらと飲みに行っているのでそれは救いか。彼女らに狼藉を働けばそれこそ彼女らの統べる北欧全土、ついでにオフェリアやシグルドが敵になる可能性まであるのだ。
と、そこでエルキドゥが核爆弾どころかスルト真体級の爆弾を落とした。

「ああそうそう。レジェンドがね、ロスヴァイセのサーヴァントを召喚するんだって。しかも特定召喚で、その人物がブリュンヒルデ。ロスヴァイセがオーディンの護衛してたこともあって、シグルドやワルキューレの事を聞いてから予定してたらしいよ。ついでに召喚後はエラー部分を治療して『シグルドとほのぼのラブラブさせる』って意気込んでたから、もう殺しに掛かってこなくなるんじゃない？」

とんでもない情報をポコポコ出しまくるエルキドゥに周囲は唖然。シグルドは「我が愛と……」、オルトリンデ達三名は「お姉様に会える……？」と呆然。内容からして物凄く無茶なことをしようとしているのだが、レジェンドにとっては旨い珈琲を作るより簡単だとか。

「これは楽しみが増えたな。これも愉悦というものか？最古の英雄王」
「当然よ。師父の完全な特定召喚で呼ばれたのは我とエルキドゥのみ。それを聞けば師父がその方法で召喚するのがどれほどかよく理解出来るであろう。そして師父がいる場所も検討はついている。行

くぞ皆の衆！」

ギルガメッシュが先頭をノリノリで進み、その後ろをエルキドゥ……と、シグルドが歩いていく。何か「当方の我が愛レーダーが反応している」とかでブリュンヒルデに敏感になってるとかなんとか。それに続いてワルキューレ三名。この四人はどうしてもブリュンヒルデに会いたいらしい。

そして、ギルガメッシュが聞いていた場所――レジェンドがとある施設を作ったという場所へと赴き、その施設と置かれていた乗り物を見たとき、ギルガメッシュすらも驚愕に染まった。

○バビロニアガーデン（バラムガーデン）

「「「「何イィィィィ!?」」」」

そう、ガーデン自体から周辺の地形まで全て完全再現・バラムガーデン。ただし名称はバビロニア島なのでバビロニアガーデンというわけだ。しかも既に学生がいるらしく、制服を着て過ごしている生徒達がいる。

さらに、迎えに来たのはサーガとユウキ、そしてアカネ。つまり映画で主演を務めたことのある三人だった。

「もしやここをリクエストしたのは……」

「……すまない、俺達だ。しかしまさか飛空艇ラグナロクまでセットで再現してしまうとは思いもよらなかった」

「今までボクが操縦して乗り回してたんだ～」

「ゲームより快適だったね～」

「何イ!?飛空艇ラグナロクだと!?何処だ!?我も操縦したい！」

「あっちの専用ポートに置いてあるよ」

指差した先に沈黙しているのは『竜機』の伝承に基づき建造された
と言われる、赤き竜が如き飛空艇『ラグナロク』。北欧組としては名前
に何かを感じなくもないが、外見はかなりカッコいい。

「おおおお!!」
「ねえアレ、イッセーの専用機？じゃあ恋人の僕が乗っても問題ない
よね！」
「何イッセーの恋人宣言してるのよノーパン剣豪！」
「つーか俺の専用機でもねぇからな!?」
「じゃあブリテンの赤き竜ということで私が」
「待て待てセイバー。我が操縦して共に空の旅とでも洒落込むとしよ
うではないか」

——ちょい待ち、レジェンドやロスヴァイセを探しに来たんじゃな
いのか。シグルドやオルトリンデらは件の人物を探しているというの
に。

「誰か探してるの？」
「ああ、貴殿は……」
「ユウキだよ」
「ユウキ殿、団長殿がこちらの施設にいると聞いたのだが」
「レジェンド様なら食堂でカレー作ってたけど」
「「「だから毎回何やってんの!?」」」
「レジェンド様だしね～。あ、何かロスヴァイセさんがすっごい美人
を連れてたけど——」
「「「!!」」」

アカネが口にしたことに反応したシグルド＆ワルキューレ三人娘
は何処へともなく爆走していく。食堂が何処かも聞いていないのに。

「感動の再会を邪魔する気は無いのでな。どれ、私はゆっくりと追うとしようか」
「食堂……カレー……行ってきまーす!!」
「イッセー！一足早く食堂で待っています!!」
「ごはーん」

スカディは良いとして、ダブルアルトリアに加えいつの間にか合流していたオーフィスは食堂とカレーという単語に釣られて先に爆走していった四人を追跡。オーフィスのテンションに和みつつ、かつ後々操縦しに来ようとラグナロクを名残惜しげに見たあと一行は食堂へと歩を進める。

☆

直感……というかシグルドの我が愛センサーを信じて食堂に到達すると、ちょうどトレーを持ったロスヴァイセと鉢合わせる形になった。載っかっているのは当然レジェンド特製カレー。もう匂いからして食欲をそそる。

「あら？シグルドさん……と、どちらさまですか？」
「ロスヴァイセ殿、実は……」

斯々然々――シグルドの説明に少々驚くロスヴァイセだが、そこでカレーを用意していたレジェンドが顔を出す。

「おおう、シグルド。それにオルトリンデにヒルド、スルーズもお久し」
「団長殿！」
「「レジェンド様もお元気そうで何よりです！」」
「ふ……お目当ての人物ならロスヴァイセと一緒の席にいるぞ。ロスヴァイセ、案内してやれ」

「は、はい！」

そうこうしているうちにダブルアルトリアとオーフィスが顔を出し、ギルガメッシュらも到着。同時にシグルドやオルトリンデ達は念願の人物と対面する。

「――我が愛」
「また会えましたね、貴方。そして妹達」
「「ブリュンヒルデお姉様……」」

ブリュンヒルデ。正しく神が生み出した至高の一品とも評される外見と、比類なき性能を誇るワルキューレの長姉。そしてシグルドと愛を育んだ、ロスヴァイセのサーヴァント。
本来であればその性質によってシグルドを殺そうとしてしまうはずだったのだが、そんなエラー程度レジェンドが「呼んだ時に明日の献立を考えながら指パッチンで修正してしまった」らしい。何だその理不尽な修正方法。

「我が愛よ。身体は、何ともないか」
「ええ、貴方。かつてのような反作用もなく、調子が良いのです」

穏やかに笑うブリュンヒルデを見て、シグルドにも笑顔が戻る。よく見るとオルトリンデ達は必死で涙を堪えているようだ。それに、オフェリアや何故か立香にアーシアらも。というか乙女属性にこの再会はかなり効果覿面らしい。

「え!?ブリュンヒルデがシグルドを殺さずハッピーエンドって、何これエモすぎるじゃないの！」
「これはコルワもニッコリだな」

ペペとデイビットも（後者は分かりにくいが）二人を祝福している。キリシュタリアは何処からともなく取り出した『イイねボタン』を超神速で連打していた。何かグキッとかいう音と共に彼の顔色が悪くなったのでアーシアが急遽治療。

「団長殿、そしてロスヴァイセ殿……当方の為に我が愛を呼んでくれたと聞き及び、いくら言葉にしても感謝しきれぬ大恩を得てしまった。我らは今生涯、共にこのウルトラ騎空団とあることを誓わせて頂きたい」

「私もです。こうして、内側から英雄殺しの衝動もなくシグルドと共に在ることが出来るなど夢にも思わなかったこと。現界したこの身が朽ち果てるまで、ここで尽力させて下さい」

「ふむ、じゃああれだ。まだここの学園長決まってないし、ゲームだとシドって名前かつ眼鏡装備で美人の奥さんもいたんだが――」

「我が愛、早速我らにお誂え向きの仕事が出来たようだ」

「そうですね、貴方。団長様、私達がその任を受けさせて頂きます」

――シドとイデアの代わりにシグルドとブリュンヒルデという最強夫婦の一角がバビロニアガーデンのW学園長に就任。何気にギルガメッシュも祝福するというのだから反対する者はいるはずもない。いたらレジェンドどころかロスヴァイセや乙女軍団がブチ切れるだけだ。

「つぅかマジでアザゼル先生いなくてよかったよな。絶対ブリュンヒルデさんをナンパしてただろうし、シグルドさんに惨敗する光景も目に浮かぶし」

「壊劫の天輪（ベルヴェルク・グラム）がブチ込まれて真っ二つになりそうだ」

「メリュジーヌ、シグルドさんとやり合ったらどうなる？」

「ヤダ竜殺しコワイ」

『何だお前、普段最強種だとか言ってるくせに』

「五月蝿いマダオ！グラムで真っ二つにされてイッセーに力だけ残し

てバイバイしちゃえ！」
『んだとコルァ!!』

相変わらず賑やかな面々を見ながら穏やかに笑うシグルド・ブリュンヒルデ夫妻。それを見て、一仕事終えて休憩モードになったレジェンドは思い出す。

「そういやいたな、禍の団の英雄派にシグルドの子孫とかほざく三下が」
「いたー。でもこっちのシグルドと全然違う。理知的じゃなく強くもなく、レジェンドにカウンターされて一撃だった」
「神器粉砕したら急激に萎えたよな。シグルド学園長はグラム無くても素手で打ち込んできそうだし、下手すりゃそこいらの木片を超高速で打ち出してくるかも分からんというレベルなのに」

全員、レジェンドとオーフィスの話を黙って聞いていた。他にもジャンヌとかレオナルドとかいた気がするけど、リーダーの曹操含めてもれなく瞬殺（神器消滅）してしまった連中ばかりなので大して記憶に残っていない。ジークフリートも空の世界で活躍してる彼の方が圧倒的英雄ぶりと万能ぶりを発揮しているし。

「さり気なくシグルドを学園長呼びしたね」
「何だアルトリア。折角だからブリュンヒルデも学園長呼びしてやれと？」
「ふむ……団長殿、もしや団長殿とアルトリア・キャスターは当方と我が愛のような関係なのだろうか」
「へう!?」
「「「「!?」」」」

天然なのか狙っているのかイマイチ分かりにくいシグルドだが、アルトリア他レジェンドスキーには効果抜群だったようだ。ブリュン

ヒルデは「まあ」と言いながらものほほんとしているだけだし。

「んー……まあ、パートナーという意味ならそうなんだろうな」

「そ……そうだよね、うん！焚き火のそばで肩を寄せあって眠ったりとか――」

「待てアルトリア。それは初耳だが？」

「私は疲れている我が伴侶を膝枕したこともあるぞ？」

「「「!!」」」」

何かモルガンから嫉妬の炎が燃え上がったかと思えば、スカディが爆弾発言で油を注ぐ。

……しかし……。

「我、一緒にお風呂入って髪洗ってもらった」

「「「「えええええ!?」」」」

（あれはどちらかといえば娘の世話のような感覚であろうな）

大半が絶叫する中、やはりスカディは冷静だった。実際その通りな上にオーフィスは寝る時服を脱ぐので、レジェンドの部屋へ突撃した連中はそういうものだと知っているはずなのだが……恋は盲目ということか。

その後もリアス達の世界のオーディンがレジェンドでグングニル（レジェンド作の超性能版）を試そうとしてお仕置きということで日本地獄行きになっていたエピソードでは、改めてロスヴァイセや北欧組から本気で頭を下げられた。彼女らは何も悪くないのに。

「これは責任を取って私がレジェンドに娶られるしかないというもの。然らば式場は我が居城にて――」

「それはさすがに看過出来ません、スカサハ＝スカディ。そも、我が夫は既にその者に罰を与え済みで気は済んでいるとのこと。貴女が責を負う理由はありませんが」

「世界が違い、過ぎた事であろうと不敬どころか永久刑罰を受けても仕方のない事をしでかしたのだ。北欧であれば身内同然、少なからず禊は必要であろう」
「……などと述べておるが建前などどうでもよい。詰まるところ師父とどうしたいのか、二人とも本音を述べよ」
「「我が夫／我が伴侶と添い遂げたい！」」
「「「「どストレート過ぎぃ!!」」」」

結局アーシアやキャストリアらも参戦してぐだぐだになったためお流れになり、モルガンもスカディも膨れっ面でレジェンドの両腕に引っ付いている。仕方なく今回はこれで我慢することになったそうだ。

「よし！ではそろそろラグナロク試乗といくか！ふはははは！お誂え向きに空の世界で飛空艇とは、正しくこれとないベストマッチよ！全員、トリプルトライアドのカードは持っているな!?」
「何それ!?」
「やべーよ俺のカード全部Ａなんだけど。セイムとかプラスとかのルール適用されると簡単に取られんだけどコレ」
「レジェンド持ってたの!?」
「メリュ子は下が1か。まさにノーパン剣豪」
「大丈夫だもん！左右Ａだから！」
「このカードゲーム、バラつきのあるステータスでも勝てたりするのが良いんだよね。ていうかコレさ、ピカチュウ物凄く強くなかった？」

またもエルキドゥにより投下される爆弾。だから何なんだあのマスコット軍団。

「低ステカードで全取りとか普通にやってくるぞアイツ」←被害者その1・飼い主

「その弟子なフォウも強いんだよね」←被害者その２・飼い主の第一サーヴァント
「ニャ～」←被害者その３・グランド猫の一匹
「「「「お前いつからいたの!?」」」」
「私がいるからいても不思議じゃないと思いますが!?」

あまりに独立行動しすぎて頭から抜けやすいが、そもそもハクは猫の姿のファミリア――つまり使い魔である。もう一度言おう、使い魔である。そして主はロスヴァイセである。
――それはそれとして、誰もハクがカードゲームしてることにツッコまないのだろうか。

「「「「そういやそうだった」」」」
「さすがに泣きますよ私ッ!?」

ちなみにピカチュウとフォウくんは本日ポケモンアイランドに蛇倉苑御一行を案内中。あそこにも支店を構える気らしい。店長、飽くなき業務拡大ぶり。

そんなこんなで本日最後はバビロニアガーデンの訓練施設にてモンスターとバトル。

「……」←アルケオダイノスにガブリンチョされてるキリシュタリア
「……」←同じくガブリンチョされてる立香
「大丈夫なの二人共ー!?」
「アレだ、血が出てないし平気だろ」
「そういう問題か！」
「ていうかよく考えるとアレこの訓練施設にいて良いものじゃないわよね!?」

そこへ何やら轟音と共に食べる音が聞こえ、振り向くとオーフィスが軽くげっぷしていた。

「――美味しかった」

「「「「食べたー!?」」」」

いつ習得したのか『食べる』コマンドを実行したオーフィス。変なものを食べるとお腹を壊すので乱用禁止とレジェンドから言われていたのだが、アルケオダイノスはゴーサインが出たため美味しく頂きましたとさ。何故か食べてる最中は『しばらくお待ちください』のテロップと花畑が出てくるので、食事風景を見ないで済むのは唯一の救い。

なお、立香とキリシュタリアはそれをミスして逆にあんなことになったという。

「何で食べようとしたんだ君達は!?」

「だってさぁ、恐竜だよカドック!」

「この機会を逃したらいつ食べれるか分からないぞ!」

それで食われてりゃ世話ないだろ、とカドックは胃を痛めながら思う。

本日の宿泊地は当然バビロニアガーデン。しかも全員に個室。本来は正式なＳＥＥＤ（とどのつまりガーデン所属の傭兵）専用なのだが、レジェンド一行は特別ということでシグルドとブリュンヒルデが許可した（特にレジェンドは創立者だったり建設者だったりで別格）。

「私用で済まないが、早速学園長権限を使わせてもらった」

「いやいやむしろ助かったぞ」

「今回の勝者は私ッ！」

本日、同室権を得たのはキャストリア。ハベにゃんがモルガンと同室だったのでオーフィスはスカディに引き取られた。

「さて、明日は山や杉の森の方に行くとしようか」
「常々予想外が出てきて我大満足よ」
「ふっふー、杉の森は僕のテリトリー。レジェンドにお願いしたアレもあるんだよねー」
「ついでにだな二人共。それぞれの部屋で寝る前に愉悦情報を一つ」
「何だ!?何があった!?」
「わくわく♪」
「実は今日不在だった勇治も追加でサーヴァントを召喚したんだが――」

「余だぞっ！」←ネロ・ブライド
「何故だァァァァァ!!私はカルナに、カルナに来てほしかったのにィィィィィ!!」
「私のジョブと被ってる。ムジナさん嫉妬ブラスター準備」
「……このままでは『余ダヨー』とソドムズビーストが来る可能性も有り得ますわね……」
「まだだ！まだ私には3回分の聖晶石があるッ！」
「マスター、落ち着いて下さいな!?」

○激辛麻婆豆腐
○激辛麻婆豆腐
○激辛麻婆豆腐

「……」
「元気出して、勇治」

「沙条綾香は留守ですが、ミオリネ・レンブランも呼び出して全員で手分けして食べれば問題ありません。しかしまさかの大爆死とは……」
「ちょっと待て！余はハズレではなかろう!?」

「ふふはははは!!まさに我の腹筋大激痛よ!!」
「あの召喚システムって食べ物も呼び出せたんだ」
「むしろあの麻婆に釣られて何かしら呼べそうな気がするんだが」
「我ではない我が出会ったらしい麻婆神父とやらが呼べても不思議ではなかったのだがな。ふはは、就寝前に良き愉悦を聞いたぞ。とりあえず超音波コンビの片割れはもう片方を呼ばぬようにしなければならんか」

さり気なく明日の昼食リクエストを行いつつ、三人とも割り当てられた部屋へ別れる。レジェンドが入室すると、パジャマを着たキャストリアが準備万端とばかりに布団に入って隣をポフポフと叩いていた。

「わかったわかった。全く……あの頃二人で旅してた頃はこんなゆっくり寝れなかったからな」
「えへへへ～……」

寝間着代わりにしている専用の作務衣に着替え、寝床に入ると即座にキャストリアが抱き着いてくる。やはり、何だかんだ言いつつアーシアやオーフィスと並ぶくらいには他よりリードしているかもしれない。
寝床に入ったものの当時の二人旅のことを思い出して少し話し込んでしまったため、二人が眠りに入ったのはそれから約３０分後のことであった。

――おまけ――

「いや、あの……誰か私の出番が今回影も形もないのを気付いてくれないのかい!?（ピロン♪）……ん？」

『ポケモンアイランドで沢山の先輩やお世話してくれた皆さんと。この人達を見習え、ばーかばーか』

※ジョーイさんに抱えられて葡萄を食べるフォウくんと、マシュと一緒に出来立てのジュースを飲むピカチュウ。他にもサギリやジャグラー、エミヤにローアイン達もエンジョイ中の画像。

「またか！またなのかキャスパリーグ！一体オマエはどれだけ私をおちょくれば気が済むんだ！」

今回同じ出番が無かったもの同士でも、明らかに差があるマーリンとフォウくん達であった。

――更におまけ――

「か……辛いっ……！」

「すまん、ミオリネ……私が大爆死したばかりに」

「勇治さんおかわりありますか!?」

「「「何で平気なのスレッタ!?」」」

三連激辛麻婆豆腐はご飯を炊飯ジャーごと持ち込んだスレッタ（ミオリネに通信で呼ばれた）が完食してくれました。

特別編・惑星レジェンドで休暇を取ろう！

相変わらず賑わうウルティメイ島とバビロニア島。
ウルティメイ島は元より、バビロニア島も首都ウルクにて王たるギルガメッシュが不在であろうと、もはやウルクの民となった住民達は王に頼り切りではいけないと常に自立して生きている。自身が政務を行わずともウルクが発展していけることを喜ぶギルガメッシュだが、それが愉しいので彼も政務に全力を注ぎ、結果さらなる発展を遂げ民もそれに触発され一層努力するという良き循環を生み出していた。
……が、ここで民は気づいてしまう。

――王、働き過ぎじゃね？――

普通であれば過労死待ったなしの仕事量、それを平然と捌くギルガメッシュは紛れもなくレジェンドの家族だろうが、この二人……あまりに働き過ぎて思考が可怪しくなる時があるのだ。レジェンドで言えばバレンタインの時などいい例だろう。
そこで、民達は普段から市場を回っては声を掛けたり商品を買ってくれたりしている我らが王へと暫し休暇を取ってもらうよう頼み込んだ。
別に島にいる以外は割と好き放題してリラックス状態な究極英雄王。しかしながらアーチャーな慢心王ではない彼は民の言葉を無下にはしない。
とはいえ、休暇を取るにしてもウルティメイ島もバビロニア島も娯楽は網羅しているのでどうすべきか悩む。

「折角の休暇を寝て曜日で終わらせるには忍びない。さて、どうしたものか……」
「え？食っちゃ寝ゴロゴロ別に良くない？」
「今まさにその状態であろうが友よ。ふはは」

エルキドゥがベッド上でゴロゴロしながら言い、かくいうギルガメッシュも腕組み状態で寝転んでいた。

「しかしバカトリアめ、師父を引っ張ってまで『かいぞくのいりえ』をクリアするんだー！」と意気込んでおったが……」

――その頃のキャストリア――

「やだー！レジェンドあのウツボの尻尾のスター取ってスター！」
「結局俺頼みか！沈没船の中だって俺が取ったし何がしたいんだお前は!?」
「スターコンプしたい！」
「今の君じゃ厳しいとプーリン思うワケ」
「やれるもん！アルトリア頑張るもん！ほら、粛正防御！」
「……いやお前がそれで行けばいいだろ」
「ヤダウツボコワイ」
「何で片言？」
「お前アレよりぬんのすの方がヤバかっただろーが」
「ケルヌンノスはレジェンドがワンパンだったじゃん!!」

……何となくキャストリアがやらかしてそう（事実である）なのはさておいて、ギルガメッシュがピコーン！と頭に電球を光らせた。

「そういえば師父が作りし惑星レジェンド。行ったことはあれどゆるりと過ごしたことはなかったな、友よ」
「だねぇ。ポケモンアイランドにピカ君連れ出しに行っただけだったし、レジェンドの家どころかクリスタルシティにさえ行ってないよ。行きたいな～凄く行きたいな～観光しつつデパートで外食してレ

ジェンドの家で食っちゃ寝したいな～」
「ふはははは!!あからさま過ぎるぞこの欲張りさんめ！しかし我もまたそれに同意せざるを得んということだ！然らば我らがすべき事は分かるな？エルキドゥ！」
「とりあえずスター獲得に苦戦してるだろう、キャスターなアルトリアの目の前で代わりにスター取っちゃおうか」

鬼か貴様、と笑いながら起き上がるギルガメッシュに一足早くおちょくりに行ったエルキドゥ。無論、ビクビクしながらゆっくり壁のウツボに近付いていくキャストリアの前を平然と泳ぎ、勢いよく出てきたウツボの反応にビビり逃走したキャストリアに対し、エルキドゥは余裕綽々で出てきたウツボの尻尾のスターを取得。これ見よがしに決めポーズまで取るという、正しく鬼畜の所業を実行した。

「うわあああああん!!今日こそ成功させたかったのにいいいいい!!」
「夢は見てこそが夢なんだよ」
「さすがエルキドゥ、キレッキレな煽りを良い笑顔で言い放ったな」
「というかアヴァロンモードはどうしたんだいアヴァロンモードは」

いつの間にか来ていたオーフィスによしよしと撫でられているキャストリアを尻目に、レジェンドはエルキドゥに質問する。

「んで、今回はどした？」
「んー、例によってギルがね……」

☆

――惑星レジェンド――

ヒリュウ改を始めとしたウルトラ騎空団各艦艇は惑星レジェンドに到着。艦艇ごとに拠点とする場所を決め、それぞれ希望の場所へ行

く艦艇へと乗り別々に休暇を取ることにしたのだ。
　ではヒリュウ改、ペガサスA、クロガネ、そしてアークエンジェル。今回の休暇で惑星レジェンドに来た艦艇は何処を拠点とするのか、どんな休暇を取るのか覗いてみよう。
　ちなみに、例によってグランサイファーやエリアル・ベースは空の世界にある。空の世界（ぶっちゃけウルティメイ島やバビロニア島）で休暇を過ごしたい者もいるということである。

○ヒリュウ改・拠点クリスタルシティ
　例の如くレジェンド率いる面々はクリスタルシティ。宿泊する場所は多数あり、アーシアやギルガメッシュらは当然レジェンドの住まいである光神殿での宿泊だ。特に彼の家はそこにも某図書館島のようなトンデモ書斎があるということで、後日そこを冒険することになった。
　ということで初日はデパートに突撃。必要なものを買ったら後はお待ちかねの外食及び趣味の時間。
　ギルガメッシュやエルキドゥはレジェンドやアーシア、プーリンにキャストリアを連れてゲームコーナーへ赴き、データカードダス『ウルトラフュージョンファイトSP』をプレイ中。何でも惑星レジェンド製ということで、排出されるカードが全てウルトラレアかシークレット仕様という超豪華仕様。偶にスペシャルシークレットという虹箔押しで専用ホログラム加工されたものが出てくるらしい。

「ふはははは!!見よ！グリッターティガのスペシャルシークレットを手に入れたぞ!!」
「うわ、すっごいゴージャス」
「元が金色だからなぁ、グリッターティガ。そりゃゴージャスにもなるわ」
「あ、レジェンド様！私はレジェンド様のスペシャルシークレットですっ！」

「「「「何イイイ!?」」」」
『さすが巫女よ。奉仕の見返りで超幸運ＥＸというわけか』

お約束というか、レジェンドが絡むとギルガメッシュをも超える運を発揮するアーシアである。

一応全員がスペシャルシークレットを手に入れられたようで、ギルガメッシュは先のグリッターティガに加えて初代ウルトラマン。さすが最強最古の英雄王。エルキドゥはセブンとゼロの親子。しっかりセブンを手に入れているあたりギルガメッシュとタッグを組む気満々だ。

アーシアは無論レジェンドのみ。しかし性能がぶっ壊れだったので問題もなし。プーリンはコスモス・フューチャーモードとジャスティス・クラッシャーモード。こっちもレジェンド絡みなのはさすがだった。キャストリアはまさかのグレートとパワード、リブットの師弟三枚セット。

ちなみにレジェンドは……。

「いや何で俺にノアが出てくるんだよ」
「ぬう……アーシアの引き当てた師父のカードに匹敵する壊れ具合ではないか……！」
「まあ、最高位光神だしね」

後日、サーガがユウキやアカネ達と来たときにキングやサーガ本人のカードのスペシャルシークレットを引いたのは余談。

「よし！次はデュエルモンスターズの新弾を――」
「は、箱買いとかですかっ!?」
「一人6パックまで選んでよし！別に新弾じゃなくてもいいぞ！」
「まさかのパック買い!?」
「箱買いの方が効率が良いのは分かるが、パック買いの方が雰囲気を楽しめるということよな。さてどの弾にするか……」

「いい罠カード入ってるのどれかな～？」
「あれ？何かマイロードがパッケージになってるパックがあるんだけど」
「「えっ!?」」

プーリンが見つけたのは、所謂デュエリストパック。どうやら殿堂入りしたことでレジェンドが殿堂入り当時に使っていたカードを収録した特別記念パックらしく、全て特殊なレアリティとイラストで収録されているそうだ。やっぱりレジェンドを除く全員が最低1パックはそれを購入。アーシアはそれのみ6パックなのだが。

「これの開封は夕食後のお楽しみにしようではないか！ふはは、我に開けられることを今から待ち望んでいるかのような雰囲気を感じるぞ！」
「マイロード殿堂入り記念パックかぁ、開けるの勿体無いかも」
「俺、これ見るたびに恥ずかしくなるんだけど」

ここでキャストリアがあることに気付く。今更な気がしないでもないが、全員がハイテンションだったので仕方ない。

「あれ？そういえばアーシア、ジャンヌと一緒じゃないの？」
「えっと……何か乱菊さんと黒歌さん、夜一さんにC．C．さんが引き摺っていってしまって……」
「布陣的に着せ替えさせられてるね。しかもC．C．以外は下手なサーヴァントじゃ太刀打ち出来ない戦闘力だし」
「あの魔女も不死持ちであろう。耐久EXは伊達ではないな」
「まあ、案外途中で合流出来るかもしれんぞ。よし、フードコートで豪華な昼飯にするか」
「ラーメン店もあったよね。今アナスタシアにメッセージ送ったら写真も送って欲しいって返ってきたよ。さすがラーメン大好き皇女」

その後、彼らはフードコートにてオーフィスにルリア、アズとアマリを発見。カタリナやヴィーラ、ミツバもいたので結構な大所帯になったという。

「わ、ここもメニュー凄い。アルトリアは何にする？」
「えーっと……スタミナチャーシューメンに特盛チャーハン、あとデザートに――」
「ル……ルリアと同じくらい食べるんだな、君は……」
「ふはは、食べた分だけカロリー消費せよバカトリア」
「そこうるさいぞギルガメェ！そういうとこだぞギルガメェェェ！」
「騒ぐな騒ぐな。ちゃんと俺も付き合ってやるから」
「レジェンドさんは何にするの？」
「新商品カロリーブラザーだ」
「それ栄養食だよね!?しかもここに来る途中で買った感じの！というかアズも一緒になって食べようとしないで!?せめてこういうところでは普通に食事しよう!?」
「今日はアマリが絶好調だな。いや、ツッコミだけに舌好調か」
「ふはははははは!!」
「レジェンドの言葉がギルのツボに入りましたー」

こういった場で騒ぐと大抵迷惑がられるがここは惑星レジェンド、かつクリスタルシティにして彼らはレジェンド一行。普段忙しなく働いている彼らを知っている者ばかりなので、ゆっくり出来ているのだと微笑ましく見守る民ばかりであった。

☆

――継国家及び継国道場――

呼吸剣士、及び鬼殺隊には始まりの剣士として有名な縁壱が大黒柱兼師範を務める継国道場には縁壱の実兄にして師範代の一人である巌勝や、元鬼殺隊の柱である杏寿郎（とパム治郎）にしのぶ、小芭内

と蜜璃、そして弟子のカナエとそのサーヴァントのジャックが訪問。
結果、巌勝以外は絶句。

「ぐはあああああ!!」
「何ィ!?刃吉が開始2秒でやられがボォ!?」
「「「「影狼ォォォ!?」」」」
「即座に師範代二人が戦闘不能とか、また強くなってないか師範!?」
「兄上が熾烈な戦いを繰り広げているというのに私が堕落するわけにはいかない。日々進化する電子機器に対応し切れぬ私だが、武芸くらいは兄上の力になれるようしなくては」
「「「「理由が一部切実ゥ!!」」」」

パッと見しただけでも柱クラスの剣士だというのに瞬殺する縁壱に戦慄する杏寿郎達。そこへ遅れて狛治や恋雪、慶蔵も到着。

「やっぱりやってたのか、師範相手に一撃打ち込む特訓」
「「「「一撃!?」」」」
「うむ。あれは私もここにいる間、参加していたがどうやら縁壱もまだまだ伸びているらしい。今の私がどれだけ持たせられるやら」
「ゼノヴィアさんが聞いたら顎が外れそうな発言が聞こえましたけど」

そういうレベルの相手なのだからそうもなるだろう。この縁壱とガチでやり合えるとすれば最低でも直接戦闘型の九極天クラス、そして剣術に限定するとなればレジェンドを除きドギーか卯ノ花しかいない。逆に素手でやり合えるのが限定されるのが東方不敗、魔法ならばダンブルドアだ。鬼灯や束、ユーリは特殊なタイプ。そして最後の一人だが、正直分類が難しいのでここでは置いておこう。

「然らばっ！縁壱先生の弟子である私も参戦してきますっ！」
「おかあさん!?」

「姉さん、やめておいた方が……」
「ジャックちゃんにいいとこ見せたいっ!!」
「うん、尚更やめるべきだと思うわ」
「先生、いざっ!!」

――しばらくお待ち下さい――

「……」
「「「「うわあ……」」」」
「わあああああん！おかあさん、おかあさん!!」

一応、カナエの実力が予想以上に上がっていたからか縁壱が一瞬本気になってしまい、カナエに思い切り強烈な一撃を叩き込んだら壁をぶち破って外に放り出され気絶してしまったのだ。そんな状況なのでジャックはガチ泣き、縁壱もさすがにオロオロ。

「すげえなあの娘……師範の本気の一撃受けて死んでないどころか原形保ってるぞ」
「んなこと言ってる場合かァ!!」
「おい、確かレジェンド様の巫女様が凄い治癒術使えるって言ってなかったか!?」
「このクリスタルシティにいるはずだ！すぐに連絡を取れ!!」

師範代や門下生がてんやわんやになっているとき、件の縁壱は娘のかなでに怒られていた。

「父上！相手が女の子だからとか言わないけど、試合以外で思いっきりやっちゃ駄目って言われてるでしょ！」
「……すまぬ、かなで……」

「私じゃなくてあのお姉さんと女の子に謝るの！」

愛娘に叱られ、少し小さくなっている縁壱。かの最強の一角である実弟を叱る姪を見つつ、巌勝は思う。

「うむ、強く育っているな」

「巌勝さん、あの子……こころなしか禰豆子さんに似てる気がするんですが」

「禰豆子？ああ、無惨が言っていた娘か」

（すっかり無惨を呼び捨て、もう大丈夫ですね）

もう彼は鬼ではない、としのぶもニッコリ。それはそれとして、今度は縁次がやってきた。

「あ、叔父上。もしかして父上、またやりました？」

「縁次、お前の思っている通りだ」

「あちゃあ……」

（（竈門（少年／炭治郎）に激似ー!?））

（（えええええ!?炭治郎君ー!?））

まさかの竈門兄妹そっくりの子供が縁壱にいるとは聞いていなかった四人は唖然としている。無論、他人の空似なのだが。

その後、タイミングよく食事を終えていたレジェンド一行がデパート組全員を伴って緊急来訪、無事に事なき事を得た。

「まあ、その程度で済んでよかったであろう。我など馬鹿をやれば師父からの一撃で冥界送りにされたものよ。何度行ったか忘れるぐらいにな、ふはは」

「……それ、笑えるの貴方ぐらいですよ英雄王……」

「かくいう私も銃弾が頭を貫通したことがあってな」

「今回の事情的にソレはアウトじゃろ、C・C・」

「下手すればカナエの頭が吹っ飛んでたかもしれないにゃ……」
「「「「その表現が一番アレなんだけど!!」」」」

結局、この馬鹿騒ぎで継国家もドタバタして夕食の用意に支障が出た為――。

――光神殿――

「待たせたな。俺特製マーボーカレー、完全な形で完成だ」
「ようやくか！待ちわびたぞ師父よ！」
「当時怪我をしていたレイトさんは仕方ないですが、オーフィスちゃんだけモネラマザー戦後に味わってたのはズルいですね～」
「我だけじゃない。レジェンドも食べてた」
「七割以上お前に横取りされたがな！」

――継国一家やそこの使用人も含めレジェンドの自宅にて大食事会の運びとなったのだ。人数が人数だけに、グレイフィアやうたを始めとした料理上手を総動員。ジャグラーがいなかったのはかなりキツい。

「うまい！うまい！うまい!!」
「ホントお館様のご飯美味しい！何杯でも食べれる！」
「……お館様」
「安心しろ小芭内。マーボーカレーとは別の料理をいくつか教えてやろう。それに独自のアレンジを加えてみろ、愛する者の手料理ほど相手に効果的なものは無いぞ」
「感謝致します……！」

何度も言っているがこの主従、出会った頃とはエライ違いである。

「レ、レジェンド様っ！」
「うん？」
「あ……あ～ん、です……」
「「「「!!」」」」

アーシア、勇気を出して大衆面前あーんを実行。興味津々で見ている者や自分も参戦せねばと考える者が出てくる中、アーシアにしてもらって御満悦なレジェンドと、巫女の頑張りに満足なマジンガーＺＥＲＯ。ちなみにギルガメッシュ的にもアーシアはかなり高ポイント。

しかもレジェンド相手の時程の初々しさはないが、マジンガーＺＥＲＯもやってもらい魔神パワーフルブースト気力５００。今なら霊帝だろうが至高神だろうが複数出て来ようとまとめて瞬殺可能だという。

トドメに、あーんはしなかったがギルガメッシュにはワインを注いであげた。これによりギルガメッシュは最高に機嫌が良くなりＮＰ３００％＋チャージレベル２増加＋『「アーシアの敵」特効』状態に。レジェンド絡みの人物アーシア好き過ぎる。ついでにエルキドゥとは一緒にデザートを食べた。

「この王も神も笑顔で敬うアーシアのなんと尊いことか……万が一にも此奴の側にイシュタルは置けぬ。何処ぞで会おうものなら真っ先に排除せねば」
『任せろ。魂の欠片さえ残さず掻き消してくれる』
「いいかい、アーシア。自分を美の女神とか崇めろとか言う空飛ぶ邪神に会ったらすぐ僕やギル達を呼ぶんだよ？まあ、レジェンドから無二の秘宝を貰った君があれに劣るなんて寝ぼけてても有り得ないんだけど」

……同時に過保護でもあった。
それからレジェンドへの「あ～ん」バトルは激しさを増し……。

「ほい、レジェくんあーん！」
「ふごっ!?」

無理矢理突っ込んでくる束は、実はマシな方で。

「ん……ん！」
「いやユーリ、お前それポッキーゲームだろ」

勘違いしてるユーリもまあ、まだ良い。便乗してやりに来るシュテルやレヴィ、ディアーチェに目を瞑れば。

「ちょっと攻めてみようかな？」
「!?」
「「「!!」」」

なんと恥ずかしがりながらも少し開けた胸元にクッキーを挟んで差し出すプーリン。破壊力が凄まじ過ぎた。多分レジェンドでなければ確実に獣どころかケダモノと化していただろう光景。

さすがにキャストリアやルリアのリミットゲージがＬＩＭＩＴＢＲＥＡＫしてしまい、それを鎮圧するためにプーリン以外は出来なかった。それこそ乱菊とかがやってたらどうなっていたことか。

「オイ誰だルリアにマテリア穴のあるブレスレットとバハムート零式のマテリア渡したのは」
「それよりも私はアルテマ連発してくるアルトリアが恐ろしかったよ……」
「まあ、あれはＭＡＳＴＥＲになっていなかったから分裂した方であろう。マスターマテリア各種は師父が所持している上、それ以外の熟練度ＭＡＳＴＥＲした個別マテリアは我の宝物庫にあるからな」
「ぷんすこー」

どうやらいつものノリで時間操作しつつ特異点攻略して手に入れた戦利品を同行していなかった二人が所持していたようで、疑問が残ったもののそれ以上にその特異点はオーフィスも凄く行きたがっていたのに置いていかれ久々にぷんすこーモード。宥めるのに時間がかかった。

「よし、ウルティメイ島の俺の別荘にはＲＰＧ系、バビロニア島のウルクにはアクション系であのステージみたいなの増やすか。いっそＲＰＧはフルダイブＶＲにでもしてしまうかね」
「ならば師父よ！次はゼルダの伝説だ、神々のトライフォース！」
「ムーンパールだっけ？それないとウサギにならなかった？」
「沙耶さんはウサギのままの方が強くなりそう」

ギルガメッシュ希望・ゼルダシリーズ。

「えー、やっぱり魔界村でしょ」
「やだー！敵からステージまで全部怖いやつじゃん！間違えてやり始めたら絶対トラウマ出来るって！」
「え？ゾンビとか、鬼みたいなものですよね？脆いけど」
「いや虫とか出てくるからモルガンも嫌がるんじゃないかな……しかもボスキャラだし」

エルキドゥ希望・魔界村シリーズ。

「ＭＯＴＨＥＲ！ＭＯＴＨＥＲシリーズじゃろう!?」
「夜一がモネラマザーとの戦いより必死にゃ……」
「お前それつまりあのゲップーと２回ほどやり合う上、色違いともバトる羽目になるんだぞ」
「「「「……うわぁ……」」」」

夜一希望・ＭＯＴＨＥＲシリーズ。

「私はがんばれゴエモンシリーズがいいなぁ。ほら、あれは本家がアクションで外伝がＲＰＧだったりするじゃないか。外伝２・天下の財宝とかスケール大きくて私好みだよ」
「それインパクトどうするの？ギルガメインパクトとか出てきたら多分笑いが止まらなそうなんだけど」
「たわけ！イシュタルインパクトが出てきたらどうする気だ!?我は即行キセルボム連発するぞ!!」
「そこは自分の専用機とかでいいんじゃないかなぁ。機体によっては相手のからくりメカが可哀想になるけどね」
『レジェンドが我に乗るとかな』
「「「「誰が勝てんのそれ!?」」」」

プーリン希望・がんばれゴエモンシリーズ。
皆あれこれと希望を言っているが、実はあの設備……本来物凄く労力がかかるもので、あそこまで簡単に作れたのはレジェンドだからというわけなのだが、それを知るのは精々本人ぐらいなので態々言うまでもないと黙っている。家族の心からの笑顔、そして感謝の言葉が彼の動力源。

「他所で過ごしてる奴の要望も聞いて作るから次元拡張の必要もあるか。ま、それはその時に考えるとしよう」
「ううむ……しかしこの究極英雄王たる我がいくら師父相手とはいえ貰うばかりではな。こちらも何か返礼せねばなるまい」
「じゃあ明日はさっきの案の詳細を考えるのも兼ねて、ウチで全員出掛けずぐーたらしてくれ。俺としてものんびり出来る時間が確保出来て助かるし、何なら書斎探検しても構わんぞ」
「確かにそもそも今回はお館様や英雄王殿のための休暇でもある！皆、ここはお館様の希望を叶えよう！」

杏寿郎の半ば号令に近い形の発言であったが反対する者は誰一人

おらず、翌日はのんべんだらりとすることになった。
無論、明日以降もまだ休暇は続くのでそうなったらやることは唯一つ。

「それではお泊り会の醍醐味！合同夜更しといこうではないか!!」
「「「「いえーい!!」」」」

完全にノリが修学旅行のソレである。堂々と宣言したギルガメッシュがいそいそと取り出したるは、昼間購入したデュエルモンスターズのパック。

「さあエルキドゥ、プーリン、バカトリアにアーシア、そして師父よ！今こそパック開封の時だ！」
「レジェンドの殿堂入り記念パック以外は綺麗にバラけたね」
「アーシアの一途っぷりが眩しい……」
「息を吐くようにバカトリアって言うなギルガメェ！そういうとこだぞギルガメェ！」
「も、もったいないけど勇気出して開けますっ」
「いやそれは大袈裟な……」

最初のパックを開けて早々に「ふはははははー!!」と高笑いするギルガメッシュ。どうやらお目当てのカードを高レアリティで初っ端から引き当てたらしい。
エルキドゥやプーリンらもそれに続き、狙ったものではないものの有用なカードを入手出来たようでホクホクしている。
……で、別段引きとかそこらへんは問題なさそう……むしろ良さそうなアーシアはちょっと困ったことになっていた。

（じぃぃ～……）
「あ……あぅ……」

ジャンヌがガン見しているため、なかなか開封に踏み切れない。別に怒ってたりとかむくれてたりするわけではなく、単にレジェンドの殿堂入り記念パックが気になって仕方ないだけなのだが。
久々に賑わうレジェンドの自宅。テーブルデュエルならぬ布団ｏｒベッドデュエルトーナメントを即席で行なったり、縁壱が巌勝や束らによる機械講座で頭から煙を出したりと夜遅くまで盛り上がり、次の日は揃いも揃ってお寝坊さんになってしまったのは御愛嬌。

☆

――時を遡り、別の場所。
そこにいるのはペガサスＡチーム、通称月王国関係者組。
「我が夫と一緒が良かった」とちょっとばかり不機嫌なモルガンを宥めつつ、とある町の港にペガサスＡを預けた彼らが向かう浮遊大陸のホグワーツ。例によって立香とキリシュタリアのテンションがマキシマムブレイクを発動するぐらいヤバいことになっており、最近よく出没するスカサハ＝スカディやワルキューレ三人娘、ついでにロスヴァイセとブリュンヒルデ（シグルドやオルトリンデらの為にとロスヴァイセが気を利かせた）……に、ハクとフウも同行。
そんな彼らがレジェンドから別れる前に切符を渡され言われたホームとは――。

「……９と４分の３番線ってどういうこと？」
「こういう時に頼りになるのはデイビットやカドック、そしてハマーン様だね！」
「待て、キリシュタリア・ヴォーダイム。生憎私はそちらの方面とは全くの無縁だ。期待するだけ無駄だぞ」
「俺らにはニュータイプってのも十分神秘の範疇なんだがな」

ハマーンの言葉にカイニスが言うも、ニュータイプは優れた者こそ数少ないが能力持ち程度なら割と多い。おまけに基本的に魔術師ほ

ど秘匿する必要もないので宇宙世紀では特に珍しくなかったりする。カツとかあれでもニュータイプだぞ。

「時間に余裕はあるけれど……」
「９と、４分の３……」
「フ……気付いたか、デイビット」
「無縁だとは言ったが、分からないとも言っていなかったな」
「「「「！」」」」」
「そういうことだ」

ハマーンはそう答えるとデイビットと共に９番線と１０番線の間にある柱へと歩を進め、止まることなく柱にぶつか――らなかった。

「「「「えっ!?」」」」

二人はスッ……と柱の中？へ消えていったのだ。かと思ったら上にハマーン、その下にデイビットが頭だけ柱から出し……。

「「つまりこういうことだ」」
「「「「いやどういうことオオオ!?」」」」
「むう、私達が実演しても理解出来んのか」
「百聞は一見に如かず、やってみればいい」

いや、その一見が目の前で行われて尚理解不能なんですが……と大半が考えていたが、あーぱーなアルクに引っ張られて沙耶が突入。

「レッツゴー、レッツゴー、沙耶アルク！イェイ！」
「やっぱりこうなるのね」

相変わらず冷静な沙耶である。そんな娘ｏｒ妹に触発されモルガンとバーヴァン・シーが動き出し、続けて何故かハクを先頭にオフェ

リアとロスヴァイセ＆フウにシグルド・ブリュンヒルデ夫妻。村正に俵抱きされた立香とカイニスに足蹴されながらキリシュタリアも……とどんどん進んでいき、さり気なく逃げようとしたぐっちゃんことヒナコは――。

「逃げるな芥ヒナコォ！激辛麻婆豆腐食わせるぞコルァ!!」
「何なのよもぉぉぉ!!」
「ヒナコさん！逃げたら一つ（辛さだけ）、進めば二つ（辛さと旨味）手に入るんですよ!!」

両手に花ならぬ激辛麻婆（また爆死した）を出前の如く持った勇治と、それを食すべく片手にレンゲ・もう片方に持ち運び可能な炊飯ジャーを抱えたスレッタに追われる形で泣きながら柱の向こう側へ。そして主の醜態を見た蘭陵王と、想い人＆一応職場違いの同僚がはっちゃけ気味なミオリネが……。

「我が主が申し訳ございませんでした」
「いえ、こちらこそ艦長と問題児が……」

謝り合っていた。そんな二人の肩をカドックがポンと叩く。かくいう彼も二人側だ。こんなことならアクアエデンに行くんだった、と軽く後悔している。あちらには矢的もいるし。
それから、激辛麻婆豆腐を持って駆け回る勇治を見て使い物にならなくなったプーサーはプロトギルが仕方なく引きずって行く。綾香から謝罪と感謝を受けたので彼としては満足である。
ちなみに、グエルとシャディクは試しに激辛麻婆豆腐にチャレンジしたところ二人揃って撃沈。現在ペガサスＡにて療養中だ。
そして、隠されていたホームにて彼らを待ち受けていたのは――。

「待っていたよ、月王国関係者の方々」

なんとタキシード姿で二足歩行している、ステッキを持ったイケメン紳士風の猫。

「新しいグランド猫キター!!」
「いやグランド猫……いやそもそも猫なのか!?」
「猫だよ、一応ね。私はフンベルト・フォン・ジッキンゲンという。君達をホグワーツまで案内するように頼まれたものだ」
「ヤバい、名前カッコ良すぎるんだけど。え、レジェンド様の作った惑星ってこんなイケメン猫までいるの!?」

立香のテンションもヤバい。このフンベルト・フォン・ジッキンゲンという紳士猫、ノリも良いらしくキリシュタリアの自撮り要望にも応えてツーショットでピースしている。

「いやあ早速素晴らしいものを手に入れたよ！よし、時計塔の皆に送ろう」
「な……何かいきなり度肝を抜かれたぞ……！」
「そうそう、何分私はこんな感じで名前が長くてね。覚えてくれるとありがたいが、面倒だと思ったなら私の爵位である『男爵（バロン）』とでも呼んでくれ」
「……駄目だこのイケメン猫、そんじょそこらのイケメン俳優よりよっぽどイケメン過ぎる」

立て続けに彼の立ち振る舞いを見てしまい、立香の語彙力が怪しくなった。何名かは彼が爵位持ちだと言うことにこれまた驚愕。さすが惑星レジェンド、あらゆるネタに事欠かない。

「さて、これから浮遊大陸エイディオンの首都ホグワーツへと向かうわけだが……こちらの魔導汽車に乗っていただく」

フンベルト・フォン・ジッキンゲンことバロンがステッキで指したのは現代では珍しくなってしまったレトロな汽車だ。しかし、逆に中はハイテクかつ各種魔法によって様々な恩恵がもたらされた良い意味でアンバランスな乗り物である。

「おおぅナイスゥ！昔ながらの汽車良い感じ～！」
「内部は圧縮空間が当たり前に採用されているのか……とんでもないだろうとは予想していたがここまでとは」
「おっと、説明を忘れるところだった。君達には個室が割り当てられているが、もう一組この汽車には招待客が乗っているから、気を付けてほしい」
「まあ、貸し切りではないだろうしそれはいいが……もう一組？」
「実質貸し切りのようなものなのだがね。ほら、噂をすれば――」

バロンがそう言って見た方向を、全員が揃って向いてみると……。

「将軍様、芥子先輩、鬼灯殿。我々は次の車両のようです」
「御苦労、サイラオーグ」
「いやホント有能ですね、サイラオーグさん。あのアバズレや駄目大王に爪の垢を煎じて飲ませたいほどです」
「真面目で頼れる後輩はとても重宝してるので～すよ」

まさかの魔闘地獄重鎮と九極天が乗り合わせていた。しかも噂に聞く悪魔将軍を見て何名かは本気でビビっている。そして芥子を見る沙耶の目が輝きまくり。そりゃ、普通にしてれば喋る兎だもの……喋る兎はその時点で普通じゃないが。
当然、相手が気付くのは確定であり、今回の面子において京都での邂逅から比較的付き合いが長いロスヴァイセが鬼灯から声を掛けら

れる。

「おや、ロスヴァイセさん。お久しぶりです」
「こ、こちらこそお久しぶりです鬼灯さん。それに、悪魔将軍さんと芥子さんと……サイラオーグ、さん？」
「ああ。確か、光神様の下で働いているヴァルキリーだったな」
「ニャ～」
「むっ……！この猫、かなりの強者と見た……！」
（（（（ええええ!?））））

何故か主人より注目されるハク。ロスヴァイセはだばーっと滝のような涙を流し、相方のフウも何処か遠い目をしている。フウの方も優秀ではあるのだが、ハクが理由不明な超有能ぶりを発揮しているためどうしても存在感が薄れてしまうのだ。
それに何やらスレッタもスレッタで芥子に怯えてミオリネを盾にする始末。言わずもがな水星タヌキ騒動の所為である。誤解は既に解けているが、どうにも苦手意識が消えないらしい。

「ちょっといいかしら。貴女のふわもふを味わいたいのだけれど」
（（（（女王陛下ァァァ!?））））
「どうぞなので～すよ」
（（（（こっちも許可したァァァ!?））））

バンザイして準備万端な芥子を満面の笑顔で抱き上げる沙耶。凄まじく幸せな表情だ。
……そう、ここまではいい。問題は圧倒的強者オーラとカリスマを同時に放っている悪魔将軍。他の二人と一匹のようにフランクに話し掛けるなど出来る雰囲気ではない。見た目の威圧感も相まって萎縮している者が大半である。

「なるほど、そなたが我が伴侶の言っていた悪魔将軍か……うむ。神代でもあまり見られぬ程の覇気ではないか」
「我が夫との死闘は幾度もＤＶＤで拝見しています。今は我が夫ら同様に異世界修業中とか」

やはり月王国先代陛下と北欧を統べる女神は格が違う。レジェンドが絡むからか平然と話しかけている。悪魔将軍もどうやら異世界におけるレジェンドの活躍に興味があるようで、共通の話題が切っ掛けとなり会話が弾む。
相変わらず本神がいようがいまいがネタにされるレジェンドであった。
そして汽笛と共に浮遊大陸エイディオン・首都ホグワーツ行きの魔導汽車が発車する。この魔導汽車、ホームから続く線路はマスドライバー宜しく途中までしか存在しない。
何故ならば――。

「おおおおお！すごーい！虹色の光の線路を作りながら進んでるー！ファァァンタジィィィ!!」
「コラ、あんまし身を乗り出すんじゃねぇ。落ちるかもしれねぇだろうが」

立香の言うように『虹光路線（こうこうろせん）』を自動生成して進むからだ。
飛行機や戦艦の類ではない空の旅ということでハイテンション改めテンション・ハイマットモードな立香は村正に首根っこを引っ張られて席に戻される。似たような状況になっているのはキリシュタリアとカイニス、沙耶とアルク。ちなみに後者はアルクが立香側。彼女はフリーダムなのでさやぴーは色々大変。

「あれ？そういえばバーゲストとメリュジーヌは？」
「ハベトロット……は、先代陛下の膝の上か」

「バーゲストは空の世界のダルモアにて同世界のガウェイン共々騎士団の訓練の手伝い（自主的）、メリュジーヌはアクアエデン組に混じっているそうです」
「あ……なるほど」

他にも不在のメンバーはいるが、それぞれちゃんと休暇を満喫しているようだ。バーゲストのように休暇なのか判断に困る者もいるけれど。
そんなことを考えていると外……つまり、空でバロンを呼ぶ声が聞こえる。全員で外を見てみると、いかにも魔女っぽい格好をした美少女が箒に乗って手を振っていた。

「おおおおお！リアル魔女っ子！美少女で箒に乗るという鉄板を外さないとはさすが惑星レジェンド！」
「おや、イレイナ。ミスタ・ダンブルドアのお使いかな？」
「はい。せっかくなので、こちらに到着したお二人の訓練も兼ねて……あ、どうも！私、イレイナです！宜しくお願いしますね！」
「「「「ご丁寧にどうも」」」」

どうやら彼女――イレイナはガチで魔女、この惑星レジェンドに住まう魔法使いにおいてダンブルドアの『魔導神』を別格とすれば数種類存在する最高位の称号を持っているという。魔女というなら空の世界にもマギサを始めウルトラ騎空団に属している者が何名かいるが、それとはまた別物らしい。

「ダンブルドア校長先生からお聞きしてます！それで、レジェンド様は……」
「団長さんなら自宅に行くって」
「データカードダス、とかいうのをギルガメッシュ達と遊んでる動画が送られてきたぞ」

――ふはははは！食らうがいい、グリッター・エヌマ・エリシュ!!
――いやタイマーフラッシュスペシャルじゃん！
――レジェンド様がウルトラマンの姿で身勝手の極意を!?
――あ、スペシャルシークレットの必殺技ってこれホントに限定モーションなのか

和気藹々としているのはいいが勇治に送られてきた動画で発せられたアーシアの台詞から、モルガンやらスカディやらが勇治の頭を後ろにグイグイと押しやるように横から見ようと覗き込み――否、半奪い取りのような体勢で画面を凝視。

「マスター!?」
「ちょっ……腕痛いし、首も……」

普通なら美女二人に挟まれてるため羨ましいだろうが、勇治もモルガンとスカディもその気は全く無いのでそんなハッピーなわけもなく、逆に腕に負担が掛かってツラい。
なお、送ってきたのはエルキドゥとプーリン。絶対愉悦狙いだろこいつら。

「プレイ画像まではハッキリ見えません……！」
「仕方あるまい。試しにウルティメイ島もしくはバビロニア島にあれを設置出来るか頼むとしよう」

……御二方、そろそろ勇治の腕がミシミシと悲鳴上げてることに気付いてほしい。
ミオリネや綾香があたふたしているのはともかく、コヤンスカヤとムジナは引き離すべく銃火器ならぬ重火器（バズーカやロケットランチャー、グリッドビームキャノン（ムジナ自作）など）を構え出しているぐらいにヤバい。花嫁衣装のネロことネロ・ブライドは勇治が注目してくれない（この状況で出来るか！　ｂｙ勇治）ことに涙目で頬

を膨らませている。この花嫁皇帝はまだいいか。

「むむ……ここにいないのは仕方ないとして、早くお使い済ませてクリスタルシティにいかなければ！それでは皆さん、休暇中にまたお会いしたら仲良くして下さいね！それでは失礼しまーす！」

そう言って箒のスピードを上げ飛び去っていくイレイナ……は別によかった。

問題は彼女が連れていたとされる、到着した二人。その二人が誰か、イレイナに続くように立香達の目の前を通り過ぎようとした時に気付いて思いっきし全員が固まった。

魔女っ子ルック、そして笑顔かつウインク状態でサムズアップしながらこちらを見つつ通り過ぎていくマーリンとオベロン。

そして激辛麻婆豆腐によってダウンし、ペガサスAで休養中のはずのグエルとシャディクがそれぞれの箒にぶら下げてられてる始末。

あまりに衝撃的な光景に鬼灯や悪魔将軍すら固まっている。モルガンでさえいきなりのことでミニアドれなかったトンデモサプライズ。レジェンドあたりは予想してそうだが。

明らかにこの一行は穏やかに休暇を過ごせなさそうな予感がビンビンである。

さて、彼らとまだ見ぬ他のチームの休暇は……

「待て!!　次回!!
ふはははは――!!」

……ということで。

〈おまけ〉

「……ふふっ」
「ん、どうしたC・C・」
「いや何、レジェンドにも送られてきてるだろう？」
「ああ、これか」

――惑星レジェンドのポケモンアイランドに招待されたルルーシュ以下コードギアス世界のメンバーと、暫しポケモンアイランドにて休養していたことのあるマシュとフォウくんに二人の面倒を見ていたピカチュウ。彼らのポケモンアイランドでの集合写真。
そして……その中心で笑顔とピースサインをしているのは、『ポケモンアイランド・トップブリーダー』のマオ。

「漸く、本当の意味で肩の荷が下りた気がするよ」
「一度あのマサラタウンの坊主と会わせてみたらすぐに仲良くなったからな。また今度連れて行ってやるか」
「ならその時は私も含めてこの全員を連れて行ってもらおうか、その少年の憧れの『ポケモンマスター』？」
「フォウを連れて行ったらポケモン扱いされないか不安なんだけど」
「それよりも私は枢木がポケモンから毎回攻撃されないかが気になるぞ」

特別編・映画を作ろう！――提案――

――それは……あまりに唐突だった――

「映画を作ろう！」

この瞬間、リアスの滅びの魔力を纏わせた鉄拳が遊びに来ていたサーゼクスの顔面に叩き込まれた。

「ぐあああ!!」
「遊びに来たのはいいとして、いきなり何言い出すのよ！」
「すげえ……！一切無駄の無い動作から素早い一撃だったぜ！」
「何だろう……サーゼクスさんを心配しなきゃいけないはずなのに、イッセーと同じくリアスに感心するしか出来ない気がする」
「これでビルドアップすれば完璧だな！」
「いやいやビルドアップいらねーだろリアスは。むしろイッセーのためにバストアップだ」
『最近フーマがツッコミを放棄し始めたな』
「いかん！一誠が鼻から流血しているぞ！」

ダ・ガーン、それは一誠の妄想の結果だ。
それはそれとして、休息のために空の世界・ウルティメイ島に来ていたウルトラ騎空団の元へ、多くの知己が遊びにやってきたのはいいのだが……いきなりサーゼクスが冒頭の台詞を吐いたのが事の発端。
何でもウルティメイ島に映画館があったことでインスピレーションが湧いたとかどうとか。まあ、冥界でサタンレンジャーとかやってるぐらいだしそれは構わない。問題はウルトラ騎空団まで巻き込んで映画製作をしようとしていることである。

「あのねぇ……」
「よく考えるんだリーアたん」

「ナチュラルにそんな呼び方しないで」
「自由に（未来の義弟）一誠君とのラブロマンスが作れるとしたら素敵じゃないか！」
「私とイッセーだけで映画が作れるわけないでしょう？大体演者二人じゃ短編映画にさえならないわよ」

溜め息を吐きながら額を押さえるリアス。こういうプライベート的な時に限り、昔から思い立ったが吉日なサーゼクスは無駄に行動力があって困りものだ。チラリと周りを見ると妻であるルミナシアも頭を抱えており、二人の息子のミリキャスは何が何だかよく分かっていない。サーゼクスと同じく乗り気のジオティクスも嫁のヴェネラナにぶっ飛ばされていた。

「映画製作ねぇ……そういやサーガやユウキにアカネ、そして神衛隊による製作・出演で作ってたよな。実写版『ファイナルファンタジーⅧ』」
「「「「!?」」」」
「ちょっ……！先輩、それは言わないでくれ!!」
「サーガとユウキがそれぞれ演じた、主役のスコールとヒロインのリノアのラブシーンとか再現度凄すぎてなあ。あとは個人的にニールの演じたアーヴァイン・キニアスがお気に入りだな、俺は。ベストマッチ過ぎるだろアレ」

そう言ってレジェンドは件の映画のＢｌｕ―ｒａｙＢＯＸ（特別限定生産盤）を取り出す。他にはアカネがエルオーネ、オルガがキロスといった風に配役がされており、しかも何故か全員やる気満々だったので惑星レジェンドでは大ヒットした。そのせいでユウキが御使い以前に『サーガの嫁』認識になってしまったのはどうかと思うが。
ちなみに自分では言わなかったがレジェンドもラグナ役で出演している。

「……」
「超師匠、小猫ちゃんが怖いです」
「じゃあ実際に見せたらどんな反応するか試してみるか」
「そのＢｌｕ―ｒａｙＢＯＸ壊されるかもしれないでございますよ!?」

さすがにそれは……と思ったが恋心はニュータイプでも予測不能と言うし、有り得なくはない。

「というか、どんな映画作る気だ。まさかとは思うが大人向け作品じゃなかろうな」
「ふっ……よくぞ聞いてくれましたレジェンド様！ズバリ私が作るのは!!」

バッと出された横断幕には――

『シン・ウルトラマンタロウ』

と書かれていた。

「「「「は？」」」」
「なお、『シン』には新・真・神・進など複数の意味を持たせている。既にタロウ本人とウルトラの父殿や母殿の協力も取り付けてあるぞ!!」
「何してんだあいつら!?」

サーゼクスだけじゃなかった、こんなこと考えていたのは。タロウはともかく、ウルトラの父と母は最終確認とかまだ常識的なのかもしれないが、実際は分かったもんじゃない。レジェンドがツッコミを入れるのも当然だ。

「……いかんな、ノリノリで協力するタロウ兄さんの姿が容易に想像

出来てしまう」
「父さん、サーゼクスさんのことよく話してたし……」
「師匠とタイガが言うから結構マジなんじゃねーか、その映画……」

同じウルトラ兄弟と実子の言葉の説得力よ……。
なお、後々判明したことだがゾフィーも一枚噛んでたらしい。これを知ったウルトラマンは本気で銀河遊撃隊への転向届けを出そうとし、エースに必死で止められたそうな。

「話は聞かせてもらったよ！」
「私達も全面協力するからね☆」

ここで束とセラフォルーが乱入。絶対この二人が揃うと厄介なことになりかねない。ガブリエルはまだ良識があるのだが……。

「ズバリ！いくつかのチームに分かれて映画を製作し、一番人気があったものを作ったチームには――」

ここまで束が言ってレジェンドは気がついた。大抵このパターンはどうなるかといえば――。

「レジェくんからスペシャルボーナスが進呈されるよ!!」
「スペシウム超光波ァァァ!!」

案の定レジェンドだけが割りを食う形になりブチギレる結果となった。当然である。何でその場にいただけの彼がそんなことせにゃならんのかと。

「レジェくんが勝ったら束さんやセラちゃんを好き放題出来るんだよ!?あんなことやこんなことしちゃったって『優しくしてね？』で済ませちゃうんだから！」

「俺が俺にスペシャルボーナスとかアイスラッガーみたいなもんだろーが」
「つまり宇宙ブーメランでございますね」
「ともかく決定！変更なし！決まり！というわけでチームに分かれるよー！」

結局話を聞かない束によって強引に進められたわけだが、そのチーム分けはあまりにとんでもないものになった。

☆

○三大種族＋α
オカ研や生徒会に加え、サーゼクスやセラフォルー、ガブリエル、さらに束やゲン、リクなどもいるチーム。やる気は（一部が）十分。反面、その世界の三大種族または出身ということで無理矢理参加させられているメンバーはやる気マイナス。

○サーガ＆御使い＆神衛隊
御存知サーガやその御使い、及び眷属たる神衛隊。前述のファイナルファンタジーⅧで大成功を収めた実績がある。特別にレイトやミライもこちらにチーム分けされている他、千歳とナインもこちら。

○グラサイ＆エリアル・ベース組
グラン＆ジータを中心にグランサイファー組と我夢や藤宮もいるエリアル・ベース組。メンバー数では最多。ダイゴやムサシ、アサヒまでいる。

○レジェンド一家＋α
例によってレジェンド一家だが、一部離脱して一部インしてる状態。リーダーである家長（レジェンド）が強制参加かつ損しかしないも同然のためやる気は殆ど無い。しかも現在何人か休暇の為、不在。

一応、レジェンドのチームメンバーを説明しておこう。以下の通り。なお、アーシアは残りたがったがオカルト研究部所属のためマジンガーＺＥＲＯ共々三大種族側に引っ張られていった。

○ウルトラマンレジェンド
○ウルトラマンゼット
○オーフィス（一応ゴジラ付き）
○スカーサハ
○ルリア
○アマリ・アクアマリン
○アズ・セインクラウス
○ミツバ・グレイヴァレー
○Ｃ・Ｃ・
○紫天一家（シュテル、レヴィ、ディアーチェ、ユーリ）
○鬼討組（しのぶ、小芭内、蜜璃のみ）
○クレナイガイ（ウルトラマンオーブ）
○ジャグラスジャグラー
○サギリ・サクライ
○九重（八坂は卯ノ花らと休暇で惑星レジェンド内を旅行しているため不在）
○前上流
○月神沙耶
○月影勇治（＋手持ち怪獣三体）
○皇ライ
○モニカ・クルシェフスキー

こんなところである。結構いるじゃないか、と思われがちだが他のチームに比べれば全然少ない。そもそも映画を製作するに当たって人数が足りないし、何より映画製作を理解している人物が殆どいないのも問題だ。

「オイうちのメンバー全然いないんだけど。死神絡みの四人とか黒歌とか何でいないの。グレイフィアやロスヴァイセまで……って三大

勢力の方にいるじゃねーか!!」
「それじゃ、チーム同士お互い頑張ろう！」
「いやちょっと」
「仕方ない、やるからには本気でやらせてもらう」
「だから聞けって」
「タイガと別々かー……ま、いいや。一番になればどうにでもなるもんね！」
「聞こえないフリしてんのかコラ」
「「正々堂々勝負!!」」
「テメーら正々堂々の意味調べて言えやコノヤロー!!」

かくして、それぞれ騎空艇や戦艦で別々の場所へと移動し、レジェンド一家＋αとヒリュウ改はその場に残されてしまった。ちなみに三大種族チームは戦艦が無かったので仕方なくスペースマミーをレジェンドが貸し出す形に……やはり一人だけ不憫。

「……で、どうする気だ？いっそこのまま私達も休暇に入ってしまう手もあるぞ。卯ノ花や黒歌達もいないしな。無理に参加する必要もないだろ」
「ぶっちゃけその通りなんだがな……個人的にスペシャルボーナスを払わされるのは御免だと思っている自分がいる」

C．C．の尤もな意見にレジェンドは溜め息を吐きながら言う。懐的に全く問題はないのだが、不在メンバーに後から何だかんだ言われるより、自分達が勝って穏便なものに済ませた方が精神的にもマシな気がするから。
まあどっちにせよ、ぶーたれるのはいそうな気もするが……それは一先ず置いといて。

「でもレジェンドさん、私達だけで映画製作なんて出来るの？自慢じゃないけど私はあまり詳しくないし……」

「アマリだけに？」
「違うから!?」
「そこの方は俺がどうにかする。あとは惑星レジェンドに住んでいるあいつらに協力を頼むか。別に内容や外部協力者については何も言ってなかったし、どうしようと構わんということだろう」

そう言うとレジェンドは誰かに通信を入れる。どうやら繋がったらしいが、その会話から誰に協力を申し込んだのか予想もつかない。一部の者を除いて。

「あ、もしもし。俺俺、レジェンドだけど。どんな感じよ新婚旅行。……うん……うん……やっぱり子供はまだちょっと先か。いいんじゃないか？待たせた分しっかり二人の時間を過ごしなさい。揃いも揃ってうちに来たんだから寿命とか心配せんでよろしい！で、ちょいと相談なんだが……」
「誰とお話してるんでしょうか？」
「新婚旅行とか聞こえたけど……」
（ああ、あいつらか）

ルリアやアズなどはレジェンドの通信相手が誰なのか気になっていたが、C．C．は察しがついたようだ。ライやモニカは？マークを飛ばしているのだが。

「そうか、助かる。劇場公開時は特等席に夫婦揃って招待するからな。ん？……え、ちょい待ち。あっちはともかくあいつそんなにヤバいの？……いやいや何で俺がヤバい目に……そーいうことかよォォォ!!」
「「「「!?」」」」
「お前ら夫婦の実姉でお前にとっちゃ義理の姉だろ!?そこ抑えてくれよ今後毎回会う度に襲われたら洒落になんね……いや俺が覚悟決めたらもう一人も黙ってないだろ!?あいつの方は元々黙ってない気がするけどな！相方がまさかのあいつとくっつくとか予想出来ねーよ

普通逆だと思っ……あーもう！その問題はそうなった時考える！そっちはクリスタルシティが一番近いんだな？じゃあそこに集合だ！呼べそうなメンバーだけでいいから！任せたぞ！ではまた後でな！」

何やら焦った感じで通信を終え、また溜息を吐いて肩を落とすレジェンド。何だ何だと周りは気になっているが、事情をなんとなく理解したC．C．はレジェンドの肩をポンと叩き――

「自分で蒔いた種は自分で枯らせ」

「あいつらは枯らそうとしたら何十倍にも逞しくなって伸び盛るだろ。どこぞの宇宙の帝王の兄貴みたいな台詞言うな」

「お前も大概失礼だな。あいつらも乙女だぞ？」

「乙女はともかく、一人ならどうにか出来るが二人がかりで抑えつけられて服を脱ぎ出した時は本気で終わったと思ったわ。特にエクレの方はスペックフル活用してくるし」

エクレ？とほぼ全員が疑問に思ったものの、とりあえず女性だと分かったのでオーフィスが相変わらず『ぷんすこー』モードになったりしたが一段落したことでレジェンドが改めて口を開く。

「話としては俺があいつらと冒険した最初の物語をベースに、様々な要素を盛り込んだファンタジー映画にする予定だ」

「ファンタジー映画……被らないかな？」

「安心しろ、アズ。ファンタジーというジャンルで被る可能性があるのは予め想定済みだ。俺達は三部作、スタント無しの全員体当たり演技でいく。三部作にしそうなのはサーガ達もだが」

「ちょっ……!?大丈夫なんですかそれ！」

「製作期間に関しては惑星レジェンドで割とどうにでもなる。ノースタントの方は……まあ、うん」

「「「「すっごい不安!!」」」」

確かに不安だが、実際はむしろスタントいらねー的な人物が多過ぎるので、本当に大丈夫だろう。問題は男が少ないということだが、惑星レジェンドでの撮影ならエキストラには困らないし、そもそも今ここにいるメンツが誰も彼も濃いから気にならないんじゃないか？と納得。

そうなると当然、物語のあらすじがどんなものか気になってくる。それを聞こうとした時、レジェンドが気になる単語を並べ始めた。

「主演メンバー誰にするかな……最低でも六、いや七人はいるし、その中で二人はカップリング確定。だとすると小芭内と蜜璃か、ライとモニカ。次点でジャグラーとサギリしかいないだろこの面子じゃ。それに召喚獣にしても一人につき一体、ドライビングモード有りなの俺のゼファーだけだしな……また創るハメになるのか、これは仕方ない」

「父さん、何か僕達とか店長と奥さんの名前聞こえたんだけど」

「おいそこ勝手にサギリを奥さん呼びすんな」

「召喚獣？星晶獣と同じものなんでしょうか？」

「まあ、『創られた』という意味では同じかもしれんな。レジェンドやあいつらの持つ召喚獣は。尤もレジェンドのやつはその中でも特別……いや、格別らしいが」

「???」

ルリアの疑問にだけ、C．C．は含みをもたせつつも答えた。モニカとしてはドライビングモードとやらが気になっているようだ。そして何より『創る』とはどういう意味なのか。

「まあ、何にせよ惑星レジェンドに向かわねば始まらんか。さっさと行くぞ。俺も向こうに着き次第、早急に（迎撃）準備を整えなければヤら……やられる可能性があるんでな」

「言い直す必要あったの？」

「意味的な問題ですよ、アズ」
「え？」

やられるという意味に違いがあるのと聞きたげなアズをミツバは（構いたいけど）スルーしておく。
兎にも角にも、レジェンドの言う協力者と合流し、映画の撮影を始めるべく、彼らは惑星レジェンドへと向かうのだった。

――おまけ――

「超師匠」
「何だゼット」
「カップリングどうこう言ってましたけど」
「……！おい待てそれ以上言うな!!」
「超師匠なら選び放題じゃないですかね」
「「「「!!」」」」

この一言で（女性陣が）大騒ぎした挙げ句、ゼットはレジェンドの拳骨で特大のたんこぶを頭に作ることになってしまった。

特別編・映画を作ろう！――始動――

レジェンド一家が惑星レジェンドに向かった頃、他のチームはというと……。

☆

〇三大種族＋α

「ねえサーゼクスちゃん」
「な……なんだい？セラフォルー……」
「この台本見てるとさ、サーゼクスちゃん主演でタロウさんメインなのはいいよ？ただ……」
「ただ？」
「レジェンド様のことが影も形もないじゃん!!タロウさんがメインどころかタロウさんしか殆どウルトラマン出ないじゃんっ!!」

案の定というか、台本で揉めていた。そりゃサーゼクスの欲望マシマシで詰め込みまくった内容だし当然といえば当然だろう。ウルトラ兄弟ナンバー6と言われてるしせめてウルトラ6兄弟ぐらい、と思ったがそちらもない。セブンと仲の良い彼女にしてみたらそこもアウトな内容なのだ。一番の理由がレジェンド絡みなのは分かりきっているので割愛。

「束ちゃん！これは私達で修正しよう！これじゃただのファンが作った映画で終わっちゃうよ！」
「……うん、確かにこれはないね。ちょこっとウルトラの父と母が出てるだけじゃん。ターくんとか何で出してあげないのさ」
「うぐっ……」

言葉に詰まるサーゼクス。その少し後ろではタイガが「俺、脇役に

すらなれないのか」と落ち込んでおり、一誠やリアスどころかルミナシアまで慰める始末。
と、ここで予想外の案が小猫から出される。
「でしてたら短編アニメ映画で子供向けに一つ作ってはどうですか？ゼロガンダムさん達みたいに二頭身サイズでタイガさん達を表現すれば……」
「……！それよ！ナイスだわ小猫！」
「多少苦労してでもそれなら作れるぜ！」
「でしたらやっぱりほのぼの路線ですわね」
「アニメで二頭身なら怪獣も出せそうですし」
「シン・ウルトラマンタロウってどことなく大人向けの雰囲気あるし、いいんじゃないか？」

口々に賛成する声が聴こえ、約１０分程度のアニメ映画を作成し同時上映することに決定。これならレジェンドもサーガも出せるということで束も快く了承、モーションを実際にタイガらが行い、それをベースに各ウルトラマンのアニメ体を作成と調整。声無しＢＧＭのみのアニメになった。
割と早く完成したので視聴したところ、賛成派大満足の出来。

「あ、可愛い！これは子供向けピッタリ！」
「これ、何を参考に？」
「サイフィスが持ってたレジェンド様のぬいぐるみですが……」
「「「「何それ欲しい!!」」」」
『あげませんよ？』

本人がいないのに相変わらずレジェンドを想い続けるヒロイン達を見てアザゼルが嫉妬気味。

「これでもよぉ……俺、結構モテてたんだぜ？」

「井の中の蛙だ」
「久々に出てきたと思えば速攻でソレか邪竜騎士！」

ゼロガンダムから短くも大ダメージを受ける一言がアザゼルに炸裂する。

和気藹々とやっている反面、肝心の『シン・ウルトラマンタロウ』に関してはサーゼクスがメンバーの協力を得て書き直している真っ最中。今から書き直して間に合うのだろうか。その理由はせめてもの情けとして公開順を、三大種族→グラサイ→サーガ組→レジェンド一家の順に決めたからだ。

彼らは知らない。普通〆を任されると少なからず緊張するものだが、それがどうしたとばかりにレジェンド一家がガチで半端ないモノを用意してくることを。しかも、サーガ組まで。

☆

○サーガ＆御使い＆神衛隊

サーガを中心とした面々、即ち通称サーガ組は早々に何にするかを決めて満場一致で可決。既に台本も完成し撮影に入っていた。

タイトルは『ＲＥ？ＦＩＮＡＬ　ＦＡＮＴＡＳＹ　Ｘ』。

『Ⅷ』で主役とヒロインを演じたサーガとユウキは裏方に回るということで演技指導役になっており、主人公のティーダとヒロインのユウナを演じるのはシモンとニアの夫婦。この作品を実写化するとなると当然あの結婚式シーンをどうするかになったのだが、そのまま演じるとシモン・ニア共に嫌だろうということで多少の変更を加えることで合意。

他のメンバーはワッカにキタン、ルールーにヨーコ、リュックにラフタ、さらにジェクトを演じるのはカミナと順調に決まり、アーロンは声が似てるということでまさかの竜馬が抜擢されたのだが、これもメインキャラということでやる気になった彼が抜群の存在感を発揮。

無論ＣＧや幻術カメラも使うが、出来る限りメインキャストは本人を活かしたいということで難航したのはキマリとシーモア。
前者は単に見た目、後者は物語全体で重要な人物のため、本気で悩むがここでシーモアにはなんと厳勝が立候補。試しにやらせてみたところハマり役で大好評。異体以降では久々に黒死牟だった頃の雰囲気を纏い、ティーダを演じたシモンが「これの後にアニキ版ジェクトまで控えてんのかよ」と本気でビビるほど。
キマリの方は結局ロージェノムがスーツアクターを行い、会話部分では幻術カメラを使用する形に落ち着いた。仕方ない。
ユウナレスカなどもＣＧ表現にはなるが、ブラスカの究極召喚となったジェクトはしっかりカミナの特徴を加味して再構築された。武器も大剣から太刀に変わったことで原作とは別の空気を纏っているものの、圧倒的大迫力はそのまま。
そういうわけで、彼らサーガ組は概ね順調なのであった。さすが大ヒット作を世に送り出した実力派集団は違う。

「『シン』に飲み込まれたのも！スピラに放り出されたのも！ザナルカンドに帰れないのも！全部！すべて！みんな！なにもかもあんたのせいだ！」

現在、ティーダ（シモン）とアーロン（竜馬）のシーンを撮影中。堂々とした竜馬と、本気で動揺しているかのようなシモンの迫真の演技が光る。

「……ねえ、サーガ様」
「何だ、ユウキ」
「あの人、ホントにシモンって名前？本名ティーダだったりしない？」
「ブリッツボールも何故か得意だしね～」

ユウキがドリンクを飲みながらもはや本人かと思うような演技を

見せているシモンに感心している。なお、ブリッツボールが得意だと分かったシモンだが、ジェクトを演じるカミナはその更に上をいった。さすがブリッツボールのトップスター選手……ではなく紅蓮の団長。

「生憎だがシモンはシモンだ」
「だよね、うん……うん」
「ね～ユウキ、達観してるとこ悪いけど……リノアやってた時のユウキもあんな感じだったからね。サーガ君と一緒でガチハマりしてたもん」

アカネがそう言った途端にボフン！と一瞬で顔を真っ赤にしたユウキ。何せあの作品公開後は暫くアクアエデンを歩くだけで『サーガ様の奥様』とまで呼ばれたぐらいであった。嬉しいことには変わりないが、恥ずかしさが天元突破。

概ね問題無く順調なサーガ組。何かあるとすれば……先述の三大種族チームにいる小猫がどういうわけか不機嫌モードだったことぐらいだが、それはあちら側の問題なのでスルーしておく。

☆

○グラサイ＆エリアル・ベース組

空の世界出身者が多いということで、ウルトラ騎空団中子供も多く属するチームでもあるためダイゴの案で子供がメインで楽しみつつ、大人も一緒に盛り上がれる作品を撮ろうと方向性はあっさりと決まる。

「――というわけで、終盤ではトリガーと出会った仲間とウルトラマンが次々と駆けつけ、ラストで全員集合して強大な最後の敵に立ち向かう。王道だけど、捻りを入れすぎるよりいいと思うんだ」
「僕はいいと思います。何か今まで結んだ絆、って感じがあって」

「これなら沢山の人が活躍出来てハッピーですね！」

ムサシやアサヒを皮切りに主役に抜擢されたグランらも賛成の意を示し、すんなりと決定。

強いて言うなら――

「ラスボスは胡散臭い人物ファータ・グランデ空域第一位のシエテが担当か？ならば遠慮なくいけるな」

「何となく悪役が似合いそうですしね、シエテは」

「博也ちゃんもカトルも変な方向にやる気満々じゃない!?ていうか俺がラスボスで決定なの!?」

「う～ん……何でだろ。シエテはラスボス戦直前でやられる最後の大幹部的な奴で、ジークフリートが強大な存在感を醸し出して相手を絶望的な状況に叩き落とす感じがピッタリに見えるんだけど」

「ジータちゃんまで!?」

ジークフリートが別の究極生命体とか悪魔とかと似た声だからとかは言わないでおこう。結局シエテがあまりにしつこく拒否したので（当然だろうが）没になり、幸いにも我夢や藤宮のおかげでＣＧ技術に不自由しなかったためラスボスはＣＧで作ることにした。まあぶっちゃけ、ジークフリートがラスボスだと勝てる気がしないと思われたのも理由の一つではある。じゃあシエテは？気にしちゃいけない。

映画のタイトルは『ウルトラマントリガー　ＢＥＹＯＮＤ　ＧＥＮＥＲＡＴＩＯＮＳ』。

ウルトラマンが世代を超えて活躍するように、世代を超えて楽しめる作品にという意味で名付けられたという。

☆

○レジェンド一家＋α

惑星レジェンドに帰ってきたレジェンド達は件の人物らとの合流場所――クリスタルシティにあるレジェンドの自宅に向かう。惑星レジェンド自体に来たことはあってもクリスタルシティやレジェンドの自宅に来たことはない者もいるため、二重の意味で期待が高まっていた。

そして、クリスタルシティに到着するなり感嘆の声が聞こえる。

「うおっ!?すっごいなぁ～！都市全体がきらびやかだ！」
「何でも光の国と同じような感じにって父さんが言ってたよ。ん？光の国がこっちを模したんだっけ……まあどっちでもいいか」
「モニカとライの家もここに？」
「ええ。今は二人揃ってこっちに来てるからハウスキーピングの魔法をかけてもらってるけど」
「父さん達と合流する前はスペースコロニー・ドラガイトのホテル住まいだったからね。アムロ先生の指導を受けるためそっちにいたから長いこと帰ってないし……時間が出来たら一度帰れるように父さんに頼んでみようか」
「それもそうね。レジェンド様なら撮影場所と転移陣で繋げそうな気もするわ」

確かに、と笑うライとモニカの清純系カップル。彼らはまだ知らないが、今度の映画は彼らがメインの一角を張ることになるということを先に記しておく。

「えええええ!?何か昔の日本家屋っぽい豪邸が！」
「一際際立っているが、あれは……」
「あれは継国師範の自宅兼道場ですね。聞いているでしょう？カナエさんのお師匠さんで伝説九極天の一人、継国縁壱さんのこと」
「始まりの剣士……！」

どーんとある意味自己主張しまくりな日本家屋に住まうのは縁壱

一家とそこで住み込みで働く者達。縁壱一家が人格者なのも相俟って日々賑やかだそうだ。
そして、天を衝くが如くそびえ立つ巨大建築物――それがレジェンドの自宅。

「「「「何これ!?」」」」
「お兄様や私達の自宅ですが」
「私『達』!?シュテルちゃん達はレジェンドと一緒に暮らしてるんですか!?」
「そーだよー！何か『若気の至り』？とか何とかですっごく大きく作っちゃったんだって！」
「度が過ぎているとは思うがな」

そういうレベルじゃない、とツッコミを入れようとしたが、辺りを見回していたユーリが気になったことを聞いてくる。

「そういえば、レジェンドがいませんよ？」
「「「「え？」」」」

そう、惑星レジェンドに招いた本人がいつの間にか不在になっていたのだ。何故か今の今まで誰も気付かなかったらしい。ついでと言っては何だが、ゼットもいない。どういうことかとミツバに聞いて見ると、どうやら惑星レジェンド到着と同時に先行したそうだ。それなら一言言っておいてくれれば、とは思ったが理由はすぐに判明することになる。

レジェンドの自宅の前に到着すると、そこには汗だくで座り込んでいるレジェンドがいた。それだけならハテナマークを浮かべるだけで済んだだろう。
問題は、そのレジェンドに抱きつく赤みがかったツインテールの女

性や、レジェンドの隣に座り込んでいる凛とした雰囲気の女性である。
　オーフィスを筆頭としたレジェンドヒロインズの纏う空気がヤバい。他にも笑っている、２ｍはあるだろう屈強な体格の男性とそれに寄り添い申し訳無さそうな表情の女性がいるが、この二人はまあいいか。

「ぷんすこー」
「ふむ、やはりこうなるか」

　どうやら男性がこちら側に気付いたらしく、大きく手を振っている。見た感じ、ライやモニカに向けたもののようだ。ライとモニカも知人なのか同じ仕草で返す。

「二人はあの人を知ってるの？」
「うん。僕もモニカもお世話になったことがあるんだ」
「一応、レジェンド様の義理の弟さん……になるのかしら。隣の女性とはご夫婦で、そちらが妹さん。それからレジェンド様の隣で座ってるのがお姉さんね。確か二人が生まれた世界で、レジェンドが引き取って育てたらしいの」
「で、父さんはずっと見た目があれだから義理の兄ってことにしたみたい。僕は普通に父さんって呼んでるけどね」

　そんな話を聞いて「へー」と声が上がるが、当然の如くある疑問が浮上。

「じゃあ、レジェンドさんに抱きついてる人は？」
「あー……」

　ライどころかモニカも目を逸らす。少なくとも男性や姉妹のように義理の血縁関係があったりするわけでは無さそうだ。更に追求し

ようとしたところ、軽い足取りで夫婦の方が近寄ってきた。

「よう、ライ！ちゃんとモニカと仲良くやってるみたいだな！ニッ」
「スノウさんは相変わらずセラさんと常時新婚ムードだね」
「そりゃ実際新婚だしよ。常時ってのは合ってるが」

スノウと呼ばれた男性がライと話している間に、モニカの方は女性と再会を喜んでいた。

「モニカ久しぶり！私達はドラガイトに行くのもう少し先だったからここで会えるなんて思ってなかった！」
「セラさんもお元気そうで何よりです。今はどちらに？」
「そこを決めるために惑星レジェンド中を見て回ってる感じかな？ここだと都会とかそういうのが別に気にならないし、海底都市もいいかなってスノウと相談してたの」
「いいなぁ、海底都市……」

何やら話し込みそうだったので、二人以外に知り合いであろうC・C・とスカーサハを促して聞くことにする。前者は面倒くさそうにしていたが、レジェンドがあんな調子なので仕方がないといえばそれまでだ。

「ブーニベルゼとやらを叩きのめした頃とは違い、すっかり元通りのようだな、お前達」
「お！C・C・！お前も久しぶりだな！まあ、あの時は色々あったしな……けど、義姉さんや義兄さんのおかげでこうして念願叶ったわけだ。俺達だけじゃなくて、あいつらもさ」
「……で、何故にレジェンドはあのような状態になっておるのだ？」
「えっと……包み隠さず言うと、お姉ちゃんが原因というか……」
「しかもヴァニラの奴がそれに悪乗りした結果というか……」

それを聞いてレジェンドが早急に準備を整えるとか何とか言っていたのを思い出し、一行は何となく察する。とりあえず自己紹介は残りの二人も含めて、ということで未だそこから動くどころか立とうとすらしないレジェンドと二人の元へ全員揃って赴く。

「なあ義兄さん、大丈夫か？」
「だったら助けろとまでは言わんが止めろよこいつらを……」
「いやあの状態の義姉さんとか止めたら逆に俺が死にそうだから」
「シ骸になりかけてたくせにそこでビビるなっての」
「シ骸どころか俺じゃ死体になるからな、アレ。義姉さんの召喚獣、オーディンからライディーンに進化してるし」
「こうなるなら召喚獣をリバースなんてしなかったぞ畜生」

とりあえずレジェンドの方は何だかんだ言いつつ大丈夫のようだ。シ骸が何なのかはこの際置いといて、セラという女性の姉は相当強いらしい。

「さっきから黙っていれば二人して好き勝手言ってくれるじゃないか。ん？」
「コラ、抓るな」
「ふん」

え、何このやり取り……もう恋人のソレじゃね？義兄妹じゃねーの？と一行の殆どが思いつつ、注目されていることに気付いた女性が自己紹介をする。

「ライトニングだ。以後宜しく頼む」
「……本名？」
「いや、コードネームだが」

何故にコードネームかと思ったが、ここでお気付きだろう。それよ

り真っ先に気付かねばならないものがあることを。そう、レジェンドがいるということは彼と一体化しているゼットもいるはず。

「あの、ライトニングさん」
「何だ？」
「えっと、何というか……銀と青の人見ませんでしたか？」
「ルリア、それじゃさすがに分からないからもう少し詳しく――「見たぞ」見たのっ!?」

黙ってライトニングが指差した先には――

頭から地面にぶっ刺さったゼット。

「「「「何故だろう予想通りの光景ッ!!」」」」
「その元凶が俺にくっついてるコイツなんだけどな」
「ゴメンナサイっ!!」

元凶と言われ、すぐさま頭を下げた女性。普通に可愛くスタイルも良いということもあって、そんな彼女がレジェンドに抱きついていたという事実は即ちレジェンドの不憫の始まりである。
結局、また暫く鬼ごっこ状態になった。

「バハムートバハムートバハムートバハムートバハムートバハムートバハムートバハムートパフェムースバハムート!!」
「おいルリア！バハムートに混じってスイーツの名前言ってんぞォォォ!?奢れってか!?奢れってことなのかァァァ!?」

「レジェンドさん、少し頭を冷やそうか」
「とか言いつつ炎のドグマ出してんのは何でかなアマリちゃんんん!?」
「今のはナノハと同じ台詞ですね」
「あー……ティアナが怒られた時の」
「でも、声的にはキリエっぽいですよ？」
「ユーリ、そこは触れるな」

カオスである。その発端となった女性だが……。

「ふふっ、やっぱりレジェンドと一緒だと楽しい」
「あのなあ……義兄さんがあんな目に遭ってんの、お前が原因だぞ？ヴァニラ」
「うん、それは……分かってるんだけど」

えへへ、と笑うヴァニラと呼ばれた女性。色々とんでもないことをされながらゼェゼェと息を切らしつつも全くの無傷という、普通なら信じらないような状態が当たり前になっているレジェンドへ満場一致で『マジでどういうスペックなのこの人』的な視線で凝視したあと、漸く自己紹介に入る四人。
一応、ゼットはスノウが引き抜きヴァニラが治療。責任は感じていたらしい。

「改めて、ライトニング。そこの人外とはそれなりに長い付き合いだ」
「スノウ・ヴィリアースだ。嫁のセラ共々よろしくな！」
「セラ・ヴィリアース、旧姓だとセラ・ファロンだよ」
「あれ？セラさん、ライトニングさんの妹さんなんですよね？じゃあライトニングさんの本名は？」
「……エクレ？」

ルリアが疑問に思ったことを口にし、オーフィスが呟くと少しだけ

驚いたのかライトニングがオーフィスを見る。
「……エクレール・ファロンだ。誰から聞いた？」
「レジェンドが一回だけ言った。スペックフル活用して脱ぐって」
「「「「!?」」」」
――その瞬間、ライトニングがいつの間にか召喚していたライディーンによってレジェンドは再び鬼ごっこするハメになった。正しく閃光、ホントどうやったんだ。
「おまっ!?本気で今真っ二つにしようとしただろ!?」
「お前が変なことを吹き込むからだろうが!!私が露出狂扱いされたらどうする気だ!!」
「オーフィスが曲解してるだけだ！そもそもヴァニラと組んで抑えにかかったのは事実……」
「問答無用!!」

クリスタルシティの中心部で大爆発が起こる。しかし、レジェンドの自宅の前からということで住民は耐性が出来ているのか「ああ、またか」と苦笑しながら眺めているだけ。こんなことがしょっちゅう起きてる時点で惑星レジェンド……というかレジェンド一家が色々常軌を逸してることが理解出来る。理解していいのかは疑問だが。
「……とりあえず、お兄ちゃんとお姉ちゃんは放っておこっか」
「だいぶ逞しくなったな、セラ……」
「スノウも巻き込まれたくないでしょ？あの調子だとお兄ちゃんもゼファー召喚してドライビングモード対決に発展しそうだし」
「確かにな。そうなったら九極天クラスじゃなきゃ止めるのは無理だ」
九極天レベルの兄妹喧嘩ってどういうこと？と冷や汗を垂らしな

がらも、最後の一人であるヴァニラも自己紹介を聞くことにする一行。当のヴァニラも慣れたものなのか件の二人はスルーしておく方針らしい。

「私はヲルバ＝ダイア・ヴァニラ！え～っと日本名？と同じでヴァニラの方が名前だから、そっちで呼んでね！」

「なっ……!?」

「ゼットさん？」

「まさかっ……『ヲ』から始まる激レア人名だとォォォ!?」

「「「「そこに驚くの!?珍しいけど！」」」」

相変わらずゼットの注目点は訳が分からないというか、何というか……独特だ。ヴァニラとしても初めてのリアクションだったらしく、こちらもこちらで笑っている。その遥か後ろでは今も爆発が定期的に起こっており、物凄くミスマッチ。何だこの状況。

「で、だ。自己紹介も一段落したところで本題に入りたいんだが……義兄さんが義姉さんに追っかけられてあっちに行っちまったからなぁ……一応、大体のことは聞いてるけどよ、都合ついたのは俺達だけだ」

「なら手っ取り早くいくぞ。毎回懲りずにレジェンドが不憫を巻き起こして映画を作る羽目になり、しかも勝負形式になって勝てばレジェンドから特別ボーナスが出ることを強制的に決められたから協力しろってことだな」

「「何その理不尽な賞品!?」」

ジャグラーのざっくばらんな説明に三人が反応した理由、それはやはりレジェンドだけは損しかしない内容。スノウも「そりゃ義兄さんも文句言うよな……」と頭を掻きながら溜息を吐く。セラも自分が何かと迷惑をかけてしまった経験があるからか額を押さえていた。

「いくらお兄ちゃんが途方も無い財力の持ち主だからって甘え過ぎだと思うな……」
「じゃあここは私達でレジェンドのチームを勝たせてあげよう！そのために集まったんだし」
「そういえばお前達、他の連中はどうした」

Ｃ．Ｃ．の質問の答えは、スノウによるとホープとファングは一緒に惑星レジェンド全土を舞台とした冒険イベントにペアで参加中、サッズは休暇で息子と旅行中らしく、どちらもクリスタルシティから離れた遠くの大陸にいるため合流が難しいようで、写真付きの手紙だけ預かったという。

「……まさかホープがファングとってのは顎が外れたよな。そこは義姉さんかヴァニラじゃないのかって」
「う～ん……私は弟みたいにしか思わなかったよ。けど心は移ろうって言うし」
「写真見たけど、お兄ちゃんに憧れて体鍛えてるらしくて凄く背が伸びてたなぁ」
「そこはスノウも含まれてると思うけど……」
「いや、あいつからの最初の印象最悪だったからな、俺」

とどのつまりこの場にいる殆どがレジェンドに何らかの影響を受けたというわけだ。色々脱線したものの、レジェンドがライトニングをおぶって戻ってきたことで本格的にレジェンド一家も映画の制作を開始。

主役は当然レジェンド……かと思いきや、レジェンドは物語のキーパーソンになり、主演のメンバーは主役となる６名がライ、ガイ、流の男性陣とモニカ、スカーサハ、沙耶の女性陣。これは明確に恋愛パートでメインになるのがライとモニカだからだ。

さらにガイがメインにいるのは当然、ライバル役としてジャグラーが出演、それを支えるパートナーにサギリが抜擢されたため。レジェ

ンドから「恐らくガイ演じるキャラのライバル役が一番花形」と決定してから言われたジャグラーはやる気満々だった。

他にも飛空艇の操舵士に勇治、他の面々も道中で様々な役割を果たす人物として出演が決まる。

そして、ジャグラーを含むメインキャストには撮影するにあたり、ガチで本気の撮影をするためあるものがレジェンドより託されることになり、これが結果として大反響を呼ぶことになる。レジェンドいわく「これが一番頭を悩ませたがその甲斐があった」とのこと。

他にも協力者を得ると共に惑星レジェンド各地を飛び回って撮影したことで広大な景色も印象付けられ、無事撮影を終えた頃には皆が皆満身創痍だが満足気な表情だったという。

不在だった例の三人ともビデオ通話で久々に話せたことで、彼らは惑星レジェンドにおいてウルティメイ島と同時公開するための宣伝に協力してくれるということで、レジェンドがその礼に二組が行きたがっていたポケモンアイランドのご招待セットを贈っておいた。

彼らの渾身の一作(2チームは三部作)がウルティメイ島に集い、公開されるまであと僅か――。

特別編・映画を作ろう！――上映（1）――

ウルトラ騎空団の空の世界における拠点、ウルティメイ島――かつて寂れた島であったそこはウルトラ騎空団の協力と現地住民のやる気によって今や空の世界最高峰とも言える観光地へと成長している。

そして、今日……ウルティメイ島は過去最高の盛り上がりを見せている。理由は言うまでもなく、全空にその名を轟かすウルトラ騎空団のメンバーによる自主制作映画（とアニメ）が映画館にて日毎に入れ替わり公開されるからだ。彼らが映画の制作を始めた（理由は判明していない）話は瞬く間に全空に広がり、数え切れない人々が公開を今か今かと待ち望んでいた。

そして協力者たるシェロカルテの情報によって公開日が知らされ、同時に優先チケットも彼女経由で販売。ある意味世界現象と表現されても可笑しくない大イベントと化している。

上映スケジュールは四日間。初日は三大種族チームとグラサイ＆エリアル・ベースチーム、二日目がサーガ組、そして三日目がレジェンド一家で四日目は複数の映画館に分けて全チームの映画を同時公開する予定。ロングラン上映や映像ソフト化は反響によって検討するらしい。上映作品のグッズも日によって替わるため、そちらも大混雑が予想される。

少なくとも言えるのは、どのチームの作品も力作揃いということだ。

☆

「一時はどうなるかと思ったね～」

「束ちゃん頑張ってたもんね☆」

「いやだってウルトラマンとか宇宙人、怪獣……いや、外星人や禍威獣を全部ＣＧで表現するっていうからさ。私主導でやるしかないじゃん？」

一番手を担う三大種族チーム、どうにか『シン・ウルトラマンタロウ』を完成させてこの日に望んだようだが、同時上映作品の『ちびトラマンほのぼの物語』は早くも可愛いもの好きや子供達の間で話題になっている。
レジェンドヒロインズは数量限定のちびレジェンドぬいぐるみを手に入れようと、神経を張り詰めているぐらいだ。
「けど納得がいくもの作れたしそこは上々だね。さてさて、一番になったらレジェくんに何おねだりしよっかな～？」
そこへやってきたのが黒歌や夜一など当時不在だったメンバー。映画云々は置いといて、何故か優勝チームにレジェンドからスペシャルボーナスが出るという部分に速攻食いついている。
「何それ!?そんなことになってたならどうして教えてくれないのよー！」
「だってくろにゃん、絶対アダルティな方向で推すでしょ」
「……否定出来ないにゃ」
「黒歌姉様……」
「少しはごまかせんのかお主は……」
正直な黒歌に小猫と夜一は揃って頭を痛める。そこにやってきたのは舞台挨拶を控えた主演のサーゼクスやルミナシア、それにリアス、加えて一誠。全員スーツやドレス姿でビシッと決めており、一誠だけは「俺場違いじゃねーかな」とガチガチに緊張していた。まあ一般家庭出身だし、よもや自分がこんなことをするなど夢にも思わなかっただろうから仕方ない。
「今回は皆の協力のおかげで素晴らしい作品が出来たよ。本当にありがとう！」
「ま、ターくんとターくんのお父さんのメンツもかかってるわけだし。

最後の相手は気合い入れまくったからさ」
「あれは正しく最後の戦いに相応しい相手だった。完成したものを見た私も目が離せなかったよ」

そんな会話をしていると、他のチームも続々と集結してくる。

「皆さーん、この度は……」
「「マジでお疲れっしたー！ウェーイ!!」」
「うん、ローアイン達もお疲れ様。仕出し弁当美味しかったよ！」
「「あざーっす！」」

グランの労いにいつものテンションで返すローアイン、トモイ、エルセムのトリオ。基本グランサイファーのキッチンで腕を奮っている彼らは、今回エリアル・ベース組と協力して『マジパネェ』量の仕出し弁当を何度も用意した。人数が人数な上、最大戦力のレジェンドや総料理長のジャグラーがいないため大層苦労したはずだ。

「いや～しかし今回、改めてダンチョとテンチョの凄さを実感したっつーか」
「それな。滅茶苦茶料理スピード早いのに全然クオリティ落とさねーし」
「勇治さんもすげーべ？アレ不言実行する隠れ行動派だってマジで」

言動はチャラいが、彼らはよく周りを見て気遣いが出来るタイプなのである。実際、ジャグラーから蛇倉苑ウルティメイ島支店の店長代理を任せられるくらいの腕前やコミュ力もあり、チャラ男という第一印象で全てを表せるわけではないのだ。

「えーと何々？『シン・ウルトラマンタロウ』……タイガが主役じゃないの!?」

「いやジータ、それ一番最初に言われてたじゃねーか……」

ガーン！とショックな顔をするジータにビィが力無くツッコんだ。確かに作品名は最初から開示されていたものの、まさか本当にそう作るとは思っていなかったようだ。ちなみに今のジータのジョブは舞台挨拶もあるからとエリュシオン。発育のいい身体に優雅さが組み合わさって高貴な雰囲気を纏っている。……のたが、本人は涙目で舞台挨拶には出ないタイガに引っ付いている。優雅さは何処行った？

「ほら、俺今回はモーションアクターやって、それからモデルになっただけだから」

「うーうー！」

「参ったな……」

中々拝めない、半泣きの美少女に抱きつかれているウルトラマン。そんな彼女に触発されたのか、アーシアや小猫も各々の想い人が早く来ないかキョロキョロと周囲を見回している。

そこに姿を現したのはサーガ率いるサーガ組……なのだが、何故かサーガとユウキ、アカネはそれぞれスコール・レオンハート、リノア・ハーティリー、そしてエルオーネの衣装でやってきた。聞いた話ではこの三人は今回裏方に回ったということだが……。

「ソランさん！」

「小猫か。あの日以来敢えて連絡をとっていなかったが、元気そうで何よりだ」

「その衣装……舞台挨拶用じゃないですよね？」

「ああ、せっかくだから前作の衣装を引っ張り出してみた」

前作、と聞いて束にビシリとヒビが入った（気がする）。まさかサー

ガ達はかの作品の他のナンバリングタイトルを実写化したのでは、と汗をダラダラ垂らしている束だが、案の定その通りである。サーガが映画のタイトルを告げ、しかも三部作だとも説明するとガックリと項垂れた。

「た、束？どうしたにゃ？」
「くろにゃん……あのね、サーくん達とんでもないもん引っ提げてきたよ。あれガチで泣くから」
「え？」

サーガ組の演技力や各種スキルの高さは既に周知の事実。しかも付き合いの長い上、九極天である束が言うのだから余程のものなのだろう。

ただ、衣装は作品絡みだろうが今日舞台挨拶があるのは三大種族チームやグラサイ＆エリアル・ベースチームだけで、サーガ組とレジェンド一家に関してはそれぞれ二日目と三日目の上映時に行われる。

何せその二日間、二チームは時間をずらし各々三部作全てを一日一回ずつ上映するという、正に公開初日だけの大判振る舞い。しかも一日目の今日と二日目、最後の上映の終わりに翌日公開作品のトレーラー映像を流すというから観客は期待しっぱなし。

そして、最後のチームであるレジェンド一家も漸くヒリュウ改と共にウルティメイ島に到着。やる気無さげで被害ばかり被ってたし、映画を作ることも観ることもせずにすっぽかすか独自に休暇と洒落込むかと思われていた彼らだが、他の三チームの予想の斜め上を行く。

何故なら全員……それこそミツバも含めて衣装が全然違っていたからだ。舞台挨拶用のではないとは分かるが、揃いも揃って別衣装とはどういうことか。

「あ……あの、レジェンド様……？」
「ふぃ～……ん？おお、アーシア。これは幸先良さそうだ。こっちに戻って一番最初に見たのがアーシアの顔とはな」

ふとした瞬間にこういう台詞を吐くから天然ジゴロと言われるということをレジェンドは分かっていない。真っ赤になるアーシアはいいとして、問題は彼方此方から羨望や嫉妬の炎が燃え上がっていることだ。

しかし、今はそれよりもレジェンド達の状態の方が気になっているため一先ず置いておく。

「時間ギリギリまで納得のいく形に仕上げたかったからほんのちょっと前まで撮影してたんだが、危うく遅刻するところだった」
「おかげで着替える間が無かったものね」

三チームは「え!?」と本気で驚く。どうやら今日も合流時間寸前まで撮影（もしくは編集）していたという。当然といえば当然なのだが文句しか言わなかった彼がどういう心境の変化をしたのだろうか？

「……へえ、やっぱりそう来たか」

ニヤリと笑ったのはロングコートの上にショルダーアーマーを付けたような衣装のジャグラー。蛇心剣の代わりに長めの刀を二振り腰に下げた彼の姿は、予想通りというか恐らくは敵役か何かだろう。似合いすぎてローアインらはかなりビビっている。

「オイオイオイ、テンチョから強キャラオーラがヤバババハムート級にガチ漏れしてんだけど」
「ちょい待ち、マジでダンチョ達に何があったんだよ!?」
「っべーわ、沙耶っちから感じる主役エネルギーがパネェじゃん」

撮影時の雰囲気が残ったままなのかもしれない。全員が普段とは違う空気を纏ったままだったが、そんな中いつも通りの男が一人。例によってゼットである。

「あれ?ゼロ師匠は出ないんでありんすか?」
「おう、俺やメビウスはサーガ達と一緒に裏方だよ。っつーかゼット、お前変わった格好してんな……」
「いやまあ、ネタバレは控えたいんで詳しくは言えませんけど、最強の護衛みたいな感じなんで」

装飾を追加されたゼットランスアローを一回転させて脇に挟むように構えたゼットの動きは、サーガ組の映画に出てきても遜色無いものだった。その姿にエリアル・ベースにいたウルトラ騎空団所属の子供団員達はキラキラとした目でゼットに群がる。相変わらず子供人気が高い。

「そういやあいつらは?」
「一足早く現地入りして島の娯楽施設を楽しんでると言っていたからな。大方、凱や命らと一緒に色々回ってるんじゃないか?」
「あー……確か凱達も現地集合だったっけか」

どことなく巫女のような装束を纏ったC・C・が言うと、レジェンドはやたら長い刀身を持つ刀をブレスレットに収納し、伸びをする。撮影中離れていたからか、オーフィスがとてとてとレジェンドに近付いてきては背中によじ登りぶらんと首にぶら下がった。

「レジェンドおんぶー」
「はいはい」
「レジェンドちゃん、ちょっと気になったんだけど……今の刀何!?」

予想通り、剣・刀マニアなシエテが食いつき、レジェンドとオーフィ

スが同時に口を開く。

「「正宗」」

「……アカネ、何か今とんでもないことを聞いた気がするんだけど」

「あの刀身の長さでその名前って、多分ユウキの考えてるのと同じだろうね～」

「……本物なの、それ」

「我がおねだりしたら作ってくれたー」

「オーフィスに強請られたからパッと思いついたものを作ったらコレだった」

何という規格外……いや、分かりきってたことである。動機はどころか生み出した経緯まで適当なのだが、それでそんなもん作れるあたりレジェンドはぶっ飛び過ぎていた。久しぶりに甘えられてオーフィスもそこはかとなく嬉しそうだ。

☆

既に劇場への入場は始まっているが、ウルトラ騎空団は別荘だの宿泊施設だので見れるので、一般客の方を優先して入れてもらう。舞台挨拶は最も大きな劇場で行われる為、他はリモートでの鑑賞になるがそもそもチケット自体の倍率が半端なかったので見れるだけでも十分、な客が多い。

その中でも関係者各位に配られた専用特等席は他の観客席とは違う場所で観ることが出来る。とはいえ前述の通りウルトラ騎空団は観る場所を選ばなくていいので、それは文字通りチケットを配られた関係者各位『から』貰った人物らがそこに座れることになる。

「チーフは誰を呼んだんだ？」

「俺の義弟と妹……義妹達だな。あと協力者」

「え!?チーフって妹さん……と弟さんいたんですか!?」

「やっぱりそういう反応になるよな」

そんな時、特等席を見た沙耶が思いっきり固まった。不思議に思った勇治と三体の怪獣（マスコットモード）もそちらを見てビシリと固まる。またまたどうしたのかとやってきた流が二人の見た方向を向くと、絶世の美女とその御付きらしき人物らが笑顔で手を降っていた。

「あれ、沙耶さんと勇治さんの知り合い？」
「知り合いと言われれば間違いない。あれは――」
「……お母様とその直属の護衛よ」
「……は？」
「「「「えええええ!?」」」」

まさかの先代女王が遠路遥々護衛まで引き連れて観に来たらしい。しかも……。

「あいつ普通に応募してきたぞ。目立つように応募ハガキにレインボーカラーで色付けして」
「何やってるのお母様!?」

レジェンドの爆弾発言は核弾頭級の威力があった。ちゃんと正規の手順で応募して当選したという。その理由は沙耶が「親しい人がウルトラ騎空団にしかいないから、先生が誰かに渡して」とレジェンドに配券を任せてしまったからでもあるのだが。で、結局知り合い相手に鑑賞希望者の募集を出してすぐに応募してきたのが先代女王だった。恐るべし沙耶の母。

「つーか若過ぎじゃね？沙耶の母親……しかもべらぼうに美人じゃん」
「あー……多分俺の光気が原因だな」

「それはそれとして、だ。旦那が見えないってことはお近付きになれる可能性があるんだろ？こりゃ声掛けねえと」
「止めておきなさい。お母様、異性として意識してる男性は先生だけだから」
「またかよチクショー!!アンタのモテ力を俺に分けてくれ!!」
「……そーは言ってもなー……」

滝のような涙を流しつつレジェンドの肩を掴んでガクガク揺らすアザゼルだが、当のレジェンドは自分の所為じゃないと達観している。確かに打算的な行動はしていないが、最終的にはレジェンドのしたことが原因なのでそう思われても仕方ない。

「「……」」
「おい、ミライにゼット。目が怖いぞ」
「いやだって……」
「あそこでこっち拝んでんのヤプールじゃなかですかい!?」

拝んでるのではなく、申し訳ないと謝っているというのが正しいのだが、そもそも何故ヤプールが先代女王の近くにいるのかというのが問題のようだ。しかし、レジェンドと沙耶にとってはさしたる懸念材料でもないらしい。

「まあ、確かにヤプールだがあいつは全ヤプール人中トップクラスにまともな奴だぞ。正直周りの騎士の方がクセ強過ぎる」
「こう言うとどうかとは思うけど……彼のおかげで私達の世界の月の王国は上手く機能してるようなものよ。お母様も指導者として文句無しとはいえ、あんな感じで自由過ぎて……」
「「兎にも角にも王国の生命線（良心）」」

テレパシーで分かったが、どうやら先代女王の親バカが発動しそれに便乗して護衛の騎士もくっついて（約1名焚き付けられて）鑑賞に

来たという。まあ、先代女王はレジェンド絡みもあるのだろうが……それはともかく、当時の女王は色々と忙しなく動いていたため、沙耶の面倒はもっぱらヤプールが主となって見ていた。故にヤプールは育ての親みたいなもので彼女が絶対の信を置く人物なのである。

なお、一度エースと対面したことがあり、エースの方が一触即発の空気になっていたところをレジェンドや先代女王に抑えられ、話してみたところ意気投合してしまった。主に身内（組織内で）が面倒事を起こす関係で。

あの大のヤプール嫌いであるエースも和解した、という事実からミライとゼットも漸く警戒を解く。何よりあの邪悪の体現というべきヤプールが、ああも頭を下げること自体が本来なら有り得ないことだし。

さらに、久しぶりに顔を合わせる人物らも続々と現れる。

「レジェンド様、この度は御招待と休暇の方ありがとうございます」

「お、鬼灯来てくれたのか。あのバカの様子はどうよ？」

「効果覿面ですね。ゼットライザーの原理を利用して鬼舞辻無惨とコカビエル諸共融合させられるのは余程嫌だったようで、必死に仕事してますよ。そもそも始めるのが遅かったんですがね、閻魔のクソジジイ」

「ちっ、融合してしまえば普通の亡者と同じ扱いで折檻しても良心の呵責に苛まれんのだが……まあ、鬼灯の休暇をもぎ取れたからよしとするか」

仮にも日本地獄を代表する存在をこんな風に扱えるのは恐らくこの二人ぐらいなものだろう。脅して仕事をちゃんとさせるというより、脅しが効かなかったらマジで実行して何かする気満々なレジェンドと鬼灯に大半の人物は震え上がっている。

悪魔将軍は宣告通りしっかりとローテーションで魔闘地獄を運営

しつつ修業の旅を行っているというのに。

「あ、それからレジェンド様。これが御所望のやつです。個人的にゴモラさんがコカビエルの尻の穴に角ぶっ刺して超振動波をブチ込んだのが傑作でしたね。いやあ、あの時の表情といったらもう」

(((((!?)))))

「おお、頼んどいたあれか。助かる。無惨の関節を力任せに無理矢理ひん曲げてかましたゼットンバスターとか、罰ゲームで『しんごじ』に真正面からレーザー熱線による股関貫通をされる童磨とか気になってしょうがなかったんだよ」

「レジェンド様それ御一緒しても!?」

これ、先日カプセル怪獣が何体か出張してやってきた『大怪獣ファイトｉｎ魔闘地獄』の内容である。以前はレジェンド＆悪魔将軍という規格外にも程がある化け物タッグを相手にした無惨とコカビエルだが、ちび状態のゴモラとハイパーゼットンになら勝てる！……と思ったそうだがレジェンド所有のカプセル怪獣がそんなに甘いわけがなく、待っていたのは圧倒的実力差による返り討ちだった。しかも向こうは童磨も加えてるにも関わらず。

無惨と童磨という、胡蝶姉妹にとって毛嫌いしている鬼同率一位の二人が身内にボコられているとあっては、観ないという選択肢など無い。

その主役となったゴモラとハイパーゼットン、特に後者は別件でも自主的に役目を果たしたこともあって、ウルティメイ島のレジェンドの別荘にて留守番という体でのんびりしている。一体で大浴場を独占してみたり、ふかふかお布団で惰眠を貪ったり。

ちなみにゴジラは敢えて出なかった。マジンガーＺＥＲＯとよく関わっているからか、他のカプセル怪獣に比べて多少大きくなれるようなので、仮に出てしまうとワンサイドゲームになってしまうかもという懸念があったからなのだが……別に出なくてもワンサイドゲームだったから意味は無かったらしい。残念。

「久しぶりじゃの、レジェンド様に鬼灯殿」
「おや、ダンブルドア校長」
「ダンブルドア校長先生！」
「おう巫女様、少し見ぬ間にまた一回り立派になったみたいじゃな」
「ありがとうございますっ」

もはや三大種族達の中で悪魔にとっては忘れてはならない人物の一人、アルバス・ダンブルドアも休暇を取って来島。何せ様々な形で公開作品に魔法が出るとあって、年甲斐にもなく楽しみにしていたようだ。

「おいサーゼクス、何もんだあの爺さん。最低でもオーディン並のヤベー奴だぞ」
「あの方はレジェンド様の九極天の一人だそうだ。都市レベルの大きさを持つ魔法学校の創設者兼校長と聞いている」
「はあ!?」

彼の素性を知れば、体験入学でいいから一度は惑星レジェンドのホグワーツに通ってみたいという魔法使いは数知れず。特に魔法使いのスポーツである『クィディッチ』はホグワーツ、ひいては惑星レジェンドの名物の一つ。大会での実況はやはり鬼灯、解説にレジェンドが出席、かつ双方弄りはせず真面目に行うというからそれも驚きだ。

「いやはや、召喚獣というのが特に楽しみでの。フォークスも気になって仕方ないようで付いてきてしまったんじゃ」

ほれ、とダンブルドアが腕を上げると突如炎が燃え上がり、それが収まると美しい真っ赤な体毛を持った鳥が留まっていた。

「……その子、もしかして悪魔じゃない幻獣のフェニックス……？」

「いかにも。フェニックスのフォークス、儂の大切な友人じゃよ。元の世界で儂の葬儀が終わってからはレジェンド様の元にいたらしくての、またこうして一緒になったんじゃ」
「……こりゃ俺らの世界の魔法使いが知ったら腰抜かすぜ」

アザゼルが冷や汗をかくも、アーシアは笑顔でフォークスを撫でており、フォークスも嬉しそうだ。胆力半端ねぇ。

「アーシアさん、凄いですわね……」
「っていうか召喚獣？星晶獣を召喚するのとは違うのかしら？」
「まあ俺の方にせよ、サーガの方にせよ、見てのお楽しみというやつだな」

ここで、暫し休暇を堪能中のアークエンジェル他同盟艦に属する一行が到着。ただ他の施設を回りまくってただけであるが。

「また僕の勝ちだったね、アスラン」
「キラ、どうしてそんなに引きが強いんだ……」
「それよりアスラン、何でお前その『Ｄ―ＨＥＲＯ』とかいうの使うと口調とか変わるんだよ？」
「『僕のタクティクス、見せてやる！』とか言ってた割にプレイングミスしてたりするよな」

先に姿を現したのはキラ、アスラン、ミゲル、そしてラスティ。休暇を満喫しているらしく、全員私服でその手にはデッキケースが握られている。先日、レジェンドの希望で完成した各種ショップ併設のデュエルスペースで今までデュエルしていたようだ。
ちなみにアスランは言わずもがなだが、キラはダイゴを師に持つインフェルニティデッキ、ミゲルが無駄に格好良く銀河デッキ、ラスティは予想外というかジャンクデッキだ。……ダメだこの師弟、鬼畜

過ぎる。

「お、キラ君やってるな？」

「ダイゴさん！はい、今回は3ターン目から上手く回りました。決まるとすっごく爽快ですね！」

「だろう？次々と場が埋まっていくのは怪獣相手に防衛メカが集結していく感じがして……」

この犠牲になったのだ、アスランは。どっちかというとグランかランスロット、ベリアル総司令が使いそうなデッキなのだが……。

そしてこちらでの初代決闘王（デュエルキング）及び殿堂入りデュエリストは当然レジェンド。次点でなんとゼット。エースモンスターのホープ・ザ・ライトニングで並み居るデュエリスト達をブチのめしていく様は「だからお前就職先間違ってんだろ」と散々言われるくらいだった。

「ウルトラかっとビングだ！」

「いきなり何言ってんのお前」

……そこ、レジェンドのエースモンスターは万物創世龍じゃなくてレッドアイズじゃないのかとか言わない。アルベールが普段しないような高笑いしてたりもするけども。エゼクレインが「全速前進ＤＡ！」なんて言い出してるけれども。

閑話休題。

それからはアスカ一家がやってきてシンが主役だと告げたグランをキラキラした目で見たり、ステラが先日合流したアーニャ共々ゼットに抱きついてアザゼルが絶望したり、イザークがレジェンドにデュエル挑んだら完膚無きまでに叩き潰されたり、まあ色々あった。

「イザーク、大丈夫か……？」

「上映開始時間が迫ってるからって容赦無さ過ぎじゃね？今の……」

効果で２回攻撃可能になった攻撃力１００００のダイレクトアタック二連発はオーバーキル過ぎだ。ちなみにラスティの発言にあるよう、時間短縮の為にＬＰ４０００ルール……５回負けている計算になる。

「誰かそいつ担いでこい。俺は招待者の着席状況の最終確認があるからな」

「「「「ちょっとは心配してあげて!?」」」」

とりあえず、レジェンドは遠目でライトニングらも着席したことを確認、団員達にも自分達の鑑賞スペースへと移動するよう促し、公開一作品目の主演たるサーゼクス夫妻やリアス＆一誠は舞台挨拶の関係で登壇の為に別行動。

いよいよウルトラ騎空団大映画祭、開幕。

――おまけ――

「……ヤプール」

「何でしょう、先代女王陛下」

「帰りにデュエルスペースとやらに寄りますよ。あの御方と沙耶もやっているそうですし、私も興味が湧きました」

（……アレ？これまた月の娯楽が増えて先代女王が抜け出す事が増えるパターンじゃ……）

大映画祭後、月の王国に新たな施設が建てられたらしい。ついでにヤプールが（肉体的＆精神的）過労でぶっ倒れた。

特別編・映画を作ろう！――上映（２）――

いよいよ開幕したウルトラ騎空団大映画祭。

一番手を飾るのはサーゼクスの熱意と仲間達の（ほぼ強制的な）協力で完成した『シン・ウルトラマンタロウ』。公開告知ポスターは比較的シンプルなもので、彼いわく「中身で勝負」らしい。

現在、舞台挨拶中の彼やルミナシア、一誠にリアスを各々の観賞場所で見ながら、三大種族チーム以外のウルトラ騎空団の面々はやっとこさ一段落ついたとリラックス気味だ。あとは観に来てくれた人々が楽しんでくれることを願うのみ。

「しかしまあ、一誠の奴もそこまで緊張することはなかろうに。少なくとも空の世界じゃ有名人だぞアイツ」

「そういや騎空団として依頼を捌いてるから割と顔割れてんだよな」

「依頼じゃなくてもウルトラ騎空団所属でやたら有名なお前はどうなんだ、ジャグラー」

「食をナメんなよ、ガイ」

撮影時の衣装のまま、ウルティメイ島にあるレジェンドの別荘に招かれたレジェンド一家チーム。一応、各施設の近くへ転移出来る魔方陣は用意してあり、無理に映画観賞しなくてもいいのだが……やはりというか、観客の反応や他のチームの作品が気になるのか少し離れたりする者はいれど、観ないという選択をした者は皆無。

舞台挨拶以外は何処で観ても構わないため、久しぶりにアーシアがレジェンドの右隣に陣取り、その膝にマジンガーＺＥＲＯ、さらにレジェンドの左隣には朱乃が座っている。なお、ゴモラは依然として布団で爆睡中。

最大の勝利者は、ある理由から映画でレジェンドのパートナー枠を獲得出来たユーリ。彼女は見事、彼の膝の上をオーフィスから奪取。オーフィスはというと、先刻レジェンドの背中に引っ付けたことでと

りあえず満足しているらしく、卯ノ花の膝の上でおとなしくしている。
……ゴジラは自分が出られなかったのが不満なのか、早々に大浴場に行ってハイパーゼットンと入れ違いに大浴場を占拠。当のハイパーゼットンはマッサージチェアで夢心地。
いよいよ上映開始の時間。
これに合わせてレジェンドの別荘でも映画館のように照明を徐々に落とす。他の団員が見ている場所もだ。
まずはリラックスしてほしいとばかりに小さなウルトラマン達によるショートアニメ。
小さなタロウと、それより小さなタイガが手を繋いで出た瞬間、ジータが幸せそうな笑顔でぶっ倒れた。ついでにラビドッグも登場し、カナエと沙耶が反応。
そこからハイパーゼットンを育てているレジェンドや、落とし穴を掘るサーガ、ジープに乗ったセブンに追い回されるレオなどほのぼのしたり笑えたりする場面が続き、買い物を終えて夕日の中二人と一匹が帰るところでショートアニメは終了。
すっきりしていて見やすく、続編も作れそうだと大好評。

次がシン・ウルトラマンタロウ――サーゼクスいわく『情熱を全て注ぎ込んだ渾身の一作』。

「さて、アーシアや朱乃が協力して完成したものはどれほどのものか、見せてもらおうか」
「あぅ……実は、その……」
「レジェンド様には申し訳ないのですが、あまり私達は手出ししていないというか、手伝える場面がありませんでしたわ」
「束さんが頑張ったからね！」

そもそも束がいるチームでＣＧやら何やらを手伝えるとすれば、ク

ロエレベルが最低ラインになる。
レイトやアスカ達が裏方であったように、他の手伝いやちょい役で出演する程度だった。はっきり言って、レジェンド一家のチームにいればかなり出番はあっただろう。裏方にしても相当感謝されただろうし。
それは後々知って愕然とするから良し（？）として、遂に始まる『シン・ウルトラマンタロウ』。
冒頭はよくある政治家達の会話、そこからサーゼクス演じる主人公・東（あずま）紅太郎（こうたろう）がジョギングしているシーンに入る。それからシャドーボクシング。

「ほう、さすがにそこもちゃんとしたか」
「レジェンド、何がちゃんとなんですか？」
「タロウが地球にいた頃……一体化というかタロウの命を得て変化したというべきか、そこはともかく地球での名は『東光太郎』。あいつの夢はプロボクサーになることでな、ＺＡＴ入隊後もジムでの特訓は欠かさなかったし、アマチュアの大会で優勝したこともあった」

ユーリの質問にレジェンドが答えると、何故か全員サーゼクスとタロウの絆の深さを理解した。タロウが地球にいた頃の思い出に配慮し、そこを設定に取り入れたわけである。ポニーテールのサーゼクスは貴重らしく、何気にファンが出来たらしい。
余談だが、レジェンドも光太郎のスパーを手伝おうとしたことはあったが、例によってその身体能力を目の前で見せられた光太郎はこう言った。
「やめて下さいチーフ！死んでしまいます！」
奇しくも殆ど同じセリフをおおとりゲン（後輩）が言うことになってしまったのは全くの偶然だ。多分。

そしてやはり怪獣……否、禍威獣の登場。束のぶっちぎりのＣＧ技術によって構築された新たな姿のアストロモンスは予想以上にド迫力。

右手の鞭は一振りしただけで無数の触手が如く大地を砕き、抉っていく表現が成され、オリジナルのアストロモンスの二つ名である『宇宙大怪獣』に相応しいものであった。

そこから満を持して現れた赤い巨人、ウルトラマンタロウ。この瞬間、各劇場は大いに盛り上がる。

今回のタロウはゼロやタイガのような目、即ち黒い部分が無い。スタイル自体はタロウ自身が完璧とも言えるスラッとした体格だったので然程弄っておらず、またカラータイマーはピンチ時に点滅するのではなく、色が変化した後に発光する形を取っている。

「何この溢れ出る強者感」

「あれがタイガの父親か！拳で語り合いたいぜ！」

「ったく、アレはタイガの親父を元にした別モンだって聞いてんだろ！まあ、あんまり変わってはいないらしいけどよ」

初めて見る（少し違うが）タロウの姿に空の世界出身組も大興奮。ジータなどは「タイガのお父さんスラッとしてて羨ましい」と思いつつ、自分らの父親はどーせ筋肉ついたヒゲ野郎ってパターンなんだろーなーと苛立ちを募らせた。ちなみに筋肉とヒゲはウルトラの父にも当てはまる。

突如として飛来したタロウはゆっくりと立ち上がり、咆哮するアストロモンスに対して構えを取ると跳躍。カメラはタロウを後ろから映し、アストロモンスを正面になるよう、タロウと連動しているかのような視点になる。

アストロモンスが空中のタロウへと狙いを定めた時、タロウは空中を蹴り凄まじい勢いで回転しながらキックの体勢へ移行した。そう、スワローキックだ。

束のＣＧ技術によって静から動へと急激な変化を表現されたそれは、スワローキック発動から炸裂までにタロウからアストロモンスへと自然に視点変更が起こり、アストロモンスに迫るスワローキックはまるで自分が食らわされるような錯覚さえ覚えた。

「うわっ!?あ、いや大丈夫か……」

「迫力が凄過ぎて一々ヒヤヒヤしちまうぜ……」

グランやラカムもつい防御態勢になってしまう。なお、近くで見ていたローアイン、エルセム、トモイの三人は迫力のあまり色々とんでもない顔になっていた。

そして決め技、タロウといえばストリウム光線。今回は掛け声こそ出すものの必殺技名を叫ばないタロウだが、それの反動か束がぶっ飛んだ演出を用意。

動作そのものは本来のタロウと変わらないが、タメの演出からが大きく違う。

大自然のエネルギーを吸収するがごとく周囲から光を集め、徐々にタロウの身体が強く発光していき、最高潮に達した瞬間に腕を組む。

両腕が一瞬、より強く光ったと思えば発射の反動で少しばかりタロウが後退するほどとんでもない勢いと威力のストリウム光線がアストロモンスへと放たれた。

衝撃波で大地の粉塵を巻き上げ、容易にアストロモンスを撃ち倒したストリウム光線は、射線上にあった山岳地帯を軽々と貫通し曲がりながら空へと消える。

「……え、タイガの親父ってこんなに強かったっけ？」

カミナもちょっと間抜けな声が出てしまうほどの衝撃であった。ミライに関してはキラキラとした目で「さすがタロウ兄さん」とかつ

ての教官でもあるタロウ（別人）を見ている。

「……これ『シン・ウルトラセブン』とかあったら親父もこんだけヤバくなんの？」

レイトは別の意味で戦慄している。あ、なら俺もシンゼロで、などと一瞬思ったが同時に一瞬でそれすらシン化したセブンに掻き消された。お前にはまだ早い、と言わんばかりに。

「サーガ君がシン化したらどうなるんだろうね～？」

「えーっと……パンチが相手に当たった瞬間ビッグバンが巻き起こり、光線技撃ったら確定で相手は死ぬ、とか？」

「……あ、ユウキそれレジェンド君じゃん」

ノアのノアインフェルノとのぶつかり合いで前半が起こった例があり、かつ後半はスパークレジェンドがまさにそれだ。我らが主人公はシン化せずともヤバかった。殴り合いした相手もヤバかった。

ここで紅太郎はストリウム光線の衝撃で粉塵と一緒に舞い上がり、同じく舞い上がった子供と猫（まさかのギャスパーとハク。ミリキャスだとまだ危険だろうという判断だった）を抱き込むように庇い落下の衝撃を一人で受ける形で瀕死の重傷を追う。それを見たタロウが地球人を理解するため、そして紅太郎の命を繋ぐために一体化するという展開。

「ここらへんリアルだな。あっちの光太郎だと『痛ってー！』で済むから」

「それもおかしいと思いますけど。というか、ハク君も撮影に参加してたんですね……」

レジェンドは感覚が麻痺しているが、普通はしのぶのような反応が（大分マイルドとはいえ）当然だろう。
ついでに現在ハクはシュテルの膝の上。シュテルは困った顔をしているが、カナエや沙耶が抱き抱えようとすると何故か全力で抵抗する。恐るべしシュテルの猫に好かれ体質。

「ニャ～……」
「なっ……なんで……普通は簡単に抱っこ出来るのに……!?」
「こうなったら……」

沙耶は引き剥がすことを止め、倒れるように猫吸い状態へとシフト。ハクはともかく、シュテルとしては重くなってあまり良い気はしない。ふと気が付くと横にスペースが空いていたので、そこに移動させた（カナエや沙耶だとテコでも動こうとしなかったのに）。ちょうどシュテルの隣だったからハクもゴネず、沙耶も引き続き猫吸いモード。
カナエ一人が負けてしまい涙目……かと思いきやいつの間にかフウを抱き抱え、自身の頭にモスラを乗せた定例スタイルになっていた。

「お兄様」
「どうした？シュテル」
「ファミリアである二匹が主の側に殆ど居ないというのは如何なものでしょうか……」
「フェイトとアルフに関しても地球とミッドチルダという境があっても問題なかったしな……アレ？そういやハクフウ二匹もロスヴァイセとは空の世界とコズミック・イラに別れてたっけ」

……しかし、皆は覚えているだろうか。
ティアマットも一応レジェンドの使い魔扱いだということを。
ぶっちゃけゼットが使い魔と言われた方が納得出来てしまう。頑

張れティアマット。

そこからは怒濤の展開。
かつて現れた巨人に倣い『ウルトラマン』、個体としてあまりの光線の威力から『太陽』をもじって『タロウ』、ここで遂に『ウルトラマンタロウ』と呼称されたことで観客も「やっとその名前が出た」と歓声が。
そして第二の禍威獣ライブキングはより不気味な雰囲気と笑い声で観客を怯えさえ、続いて現れたバードンとタロウの激しい空中戦で空を飛ぶ者や騎空艇など空に関わる者達が大熱狂。
この辺りでは自衛隊の最新戦闘機も出撃し、微力ながらタロウの援護に回るなどの活躍も。
極めつけは――

『裁定者としての役目を忘れたのか、我が父ゼクス。いや、地球での名をウルトラマンタロウ』
『まさか、トライなのか』

そう、タイガが敵としてタロウの前に立ち塞がったのだ。
本作でのタロウの本名ゼクスは『６』を意味する、つまりウルトラマンＮｏ．６ということに絡ませると同時に、主演であるサーゼクスの名前も絡めており、タイガの方であるトライは文字通りトライスクワッド……そしてタイタスとフーマは出られなかったもののそれをタイガ一人に集約し『一人で三人分の戦闘力を持つウルトラマン』を意味している。
予想を超えてきた衝撃展開に絶句する観客。ジータなど真っ白になって動かない。
「あ……え？タイガ敵？はい？」

「ジータが壊れた!?」
「つっても予想外だろこれは……」

しかもタロウに戸惑いがあるとはいえ、経験で勝るタロウを終始圧倒。タイタス並のパワーとフーマ並のスピードを披露し、観客は息を呑んだ。

だがトライは傷付きながらも街に近付けさせまいとするタロウの戦い方に思うところがあったのか「じきに裁定の時が来る」と言い残し撤退する。

トライの正体・久藤（くどう）博之（ひろゆき）を演じたのは当然、一誠。リアスの演じた紅太郎の妹、紅音（くおん）の幼馴染みでボーイフレンドであるという彼が、タロウの正体を知ってしまうどころか最初から知っていて最大の敵となるドンデン返し。

トライはタロウよりも一足早く地球に飛来し、タロウとは違い『指示によって』紅太郎と同じように瀕死の重傷を負っていた博之と一体化、そのまま地球人として裁定を下すための調査を行っていた。

そして、遂に裁定の時――クライマックス。

世界各地から出土し、何の反応もなかった『オーパーツ』が突如として輝きだし日本へと飛び立っていき、そこで集まったオーパーツが合体し超巨大惑星殲滅兵器グランドキングが姿を現す。

元のグランドキングより派手に、かつ機械的になっており、怪獣大好きなアカネ発狂。

「ヤバい何あれ何あれ！私の好み！すっごい大きくてすっごい強そう！ううん！絶対強い！」
「オイオイオイつまりアレだろ？グレンラガンみたく合体に合体重ねまくった感じだろ？そりゃ強えに決まってんだろ!!」

全身に武装を搭載し、間近で圧倒的戦闘力を目撃させ『裁定には何

があろうと抗えない』と思わせるべく、全長は１５００ｍ程（それでも相当な大きさだが）。
　両手の五指からレーザーを放ち、背中には無数の光子魚雷、可動式の重金属粒子砲二門まで持ち、腹部や尻尾からも光線を発射。頭部アンテナから超音波、口からは冷気や炎を吐き出す、正に文明を破壊するために生み出された最強最悪の殲滅兵器。

　やがてタロウが到着するも、トライとの戦いで消耗していた上に次元が違うグランドキングが相手では手も足も出ず、遂に倒れ伏してしまう。どうにか立ち上がろうとするが、力が入らないタロウへグランドキングの巨体がゆっくりと迫り、観客からも悲鳴が聴こえ始めた時

――――

グランドキングの前に、トライが立ち塞がった。

　裁定者として、タロウよりも早く地球に潜伏していたトライ。タロウに比べ裁定者の自覚は強かった為、タロウと相対した時もその姿勢を崩さなかったものの、撤退後に紅音との思い出を始め、地球で過ごした日々を振り返り、先日のタロウの戦い方が最後の決め手となって彼と同じく地球を守ることを決めたのだ。
　満身創痍の父の前に駆けつけた息子というシチュエーションもあって、観客の盛り上がりは最高潮。

「ヤプール、これ沙耶もやってくれないでしょうか？」
「そもそも先代……モルガン様がピンチになること自体滅多に無さそうなので難しいかと」
「むぅ～……」

可愛らしくむくれる月王国の先代女王モルガンだが、沙耶以上の化け物スペックな彼女の危機的状況などあまり予想出来ない……というか、そんな状況になれば明らかにウルトラ騎空団総出の案件だ。
タロウの代わりに奮闘するトライであったが、規格外の相手であるグランドキングには三人分の戦闘力を有するトライであろうと太刀打ち出来ず吹き飛ばされ、彼もが倒されてしまう。
タロウは限界である身体を鞭打って、倒れたトライの元に辿り着くと彼からの最後のメッセージが告げられる。
『自分の力を融合する形で取り込めば勝機はある』
そう言い遺し、トライは逝った。この時点で館内各所から嗚咽が漏れる。映画のこととはいえ、ジータやリアスなど本気で泣いていた。リアスらも自身が出ている場面以外は知らされていないのだ。

息子の亡骸を抱き、覚悟を決めたタロウはトライの亡骸を光に変換・吸収することで超絶パワーアップを遂げる。スーパーウルトラマンタロウの誕生である。
本来はウルトラ6兄弟による合体だが、今回はまさに親子合体。物語のラストを締め括るファイナルバトルが幕を開けた。
グランドキング相手に互角へと持ち込んだスーパータロウだが、それでも勝負を決するには至らない。さらに、特別対策室が導き出された衝撃の事実がタロウへと知らされる。たとえグランドキングを倒しても、その瞬間グランドキング内部に搭載された対消滅爆弾が起動、その影響で地球は消滅するという。
これを聞いたタロウは最後の手段に出た。
そう、ウルトラダイナマイト。
コスモミラクル光線ではなく、今回のスーパータロウ最大の必殺技はウルトラダイナマイトなのだ。他の6兄弟が出ない以上、インパクトのある技が必要……となるとやはりこの技しかないと、満場一致で可決された。
『グランドキングを宇宙へと運び出し、地球や他の惑星に影響のない

宙域でウルトラダイナマイトによって完全に破壊する』
これしか方法が無いと判断したタロウは全身に力を込め、周りの大気が揺らめくほどの高温を発しながら、足元より炎を巻き起こしタロウの全身を包んでいく。
その最後の大技とも言えるウルトラダイナマイトの演出は束の全力を注ぎ込んだと言っても過言ではない会心の出来。
激しく燃え上がるタロウは、近付けさせまいとするグランドキングの猛攻に怯むことなく突き進み、その土手っ腹目掛けて突撃しそのままグランドキングを宇宙へと連れて行く。
赤く燃える星が天に昇っていくという光景は幻想的とも言えた。そして、地球がよく見える場所まで離れたタロウは一度だけ地球の方へと振り向き、再びグランドキングを見据え――ウルトラダイナマイトによってグランドキング諸共爆発した。

誰もが言葉を失ったその光景。直後にタロウが無事な姿で地球へと帰還すると、映画の中と映画館内両方で大歓声が響くが、それはすぐに悲鳴へと変わる。
帰還直後タロウは倒れ、そこから光が溢れると、隣に綺麗に並ぶようにトライの遺体が現れた。
トライだけでなく、タロウもまたウルトラダイナマイトによって命を燃やし尽くし――親子は地球を守り抜いて、その生涯を終えたのである。
ルミナシア演じる紅太郎の婚約者・白鳥サユリや紅音を始めとした登場人物らが涙を流し、二人の戦士の遺体を見ている中、赤と青の発光体が飛来し、タロウとトライの遺体を運び去ってしまう。
その発光体こそタロウの父母でありトライの祖父母、ケインとマリア（ケンとマリーの名前捩り）。彼らは我が子や孫の信じた地球人を自分達『光の民』も信じるという決定を地球人に伝え、二人を蘇生するために連れ戻すことにした。
その際に、タロウとトライは紅太郎と博之から新たな命を与えられ

ると共に分離され、意識を失ったまま地上へと帰された。
喜びを隠せないサユリらを眺めつつ、ケインとマリアはタロウとトライの遺体を光に変換、発光体の中へと取り込み地球を去っていく。
紅太郎とタロウ、博之とトライ――短くも濃く、共にいたそれぞれの命は別れを惜しむことが出来ぬまま、知らぬ間に別離することになったのだ。
地球を去っていく二つの発光体……それをサユリらが見送り、小さくなって見えなくなると同時に、主題歌である『M八七』が流れ出し、エンディングへと移行する。

「……何か、凄えもん見たなとしか言えないや……」

リクがそう呟く。ギャスパーもちょい役で出たが、彼らは内容を知らされていなかったからこそ、先が気になったのだ。
リアスは一誠とタイガに抱きついて泣いたまま、そこにジータがタイガに向かって泣きながら突撃してくる始末。他にもスノウに慰められるセラ、そしてアーシアやユウキなども涙を流しているし、ミライは「グランドキング見つけたら即ブッ殺す」と性格まで変わっていた。
ここで、ある一つの奇跡が起こる。
スタッフロールが終わり、場面は紅太郎とサユリの結婚式。博之や紅音らに祝福され、新しい門出となったその日に、何かの気配を感じた紅太郎は自然と空を見るが、何も無い。
――しかし、空の向こう……宇宙では、その結婚式を星の海から見る二つの命があった。そしてそれは踵を返し、遥か彼方へと飛び去っていく。
タロウとトライは無事に復活を遂げ、紅太郎らが未来へ歩みを進めるのを見届け――新たなる星へと旅立つ。
――そこで『シン・ウルトラマンタロウ』は本当の完結となった。

☆

最後の最後でハッピーエンド、これには全映画館……いや全観賞場所から拍手喝采。

唯一心配事といえば、モチーフ……というかほぼそのまんまなタイガが今後女性に人気にならないかというジータ個人の懸念。

一先ず休憩となり、レジェンド一家の別荘に多くの団員達が、集合していた。

「ほらジータ、食事とか昼休憩入れて終わったら次はそっちだぞ。涙拭けって」

「ぅぅ〜……」

タイガが丁寧にジータの顔を拭いていく。ちなみに、キラの隣ではラクスが涙を拭いながら笑っている。ゼットもステラを宥めるのに忙しそうだ。

「初手からハードル爆上げしてくれたな、全く」

サーゼクスのタロウ愛はガチだと思い知らされた形になったが、タイガ（作品上、正しくはトライ）の見せ場も確保されており、傑作と呼んでいいだろう。

確かにサーゼクスが言っていたようにクライマックスは盛り上がりの連続だった。

「僕達は感動より熱血やロマン路線で行ったからなぁ……ちょっと心配になってきた」

「俺達も似たようなものだが」

「サーガ……元の作品知ってる身としては『何言ってんのお前？』としか言えんぞ」

レジェンドがサーガの発言に溜め息を吐き、グランは期待を込めた目で見てくるシンやマユが落胆しないか少し不安らしい。一発目からクオリティが想像以上だったので無理もないが。

「けどさ……少なくともサーくんとこの作品はこれ以上に泣かせてくるよね、絶対」

「……ただ、先輩の方は予想もつかないぞ（ライトニングらの姿は見えたが、先輩の事だ。そのまま彼女らとの物語を映像化するはずがない）」

ぐで～っとなる束に、サーガはそう考えつつも追求はしない。彼としてもレジェンド達の作品は気になるのだ。二日後の上映を楽しみに待っていようと考える。

暫しの休憩の後、次に上映されるグランやダイゴが軸となった『ウルトラマントリガー　ＢＥＹＯＮＤ　ＧＥＮＥＲＡＴＩＯＮＳ』――一体どんな作品になったのだろうか。

――ウルティメイ島・乗艇港――

伝説九極天の一人ドギー・クルーガーとその妻であるスワンが、多くの者達を伴って到着した。

「さて、此処からは俺やスワンと別行動になるが……リブット、ソラ、本当に任せていいのか？」

「はい。いつもクルーガーご夫妻にはお世話になってますし、たまにはご夫婦でゆっくりなさって下さい」

「彼らも幼児とか、手のかかる年齢ではないですし」

「……手のかかる、という意味ではその通りな気もするんだけどね？」

ソラの言葉にスワンは困ったような笑顔で返す。リブットとソラはいい、二人共真面目だし幼馴染みで互いのことをよく知っているから連携行動も取りやすい。
問題は連れてきた面々だ。

「ガウマ隊！全員ちゃんと小遣いその他必要なモン持ったかァ!?」
「怪獣使い組ィ！忘れもんねぇだろうな!?」
「「「「はーい」」」」
「「声が小せェ!!」」

……勇治絡みのガウマ隊と元・怪獣優生思想組（現・怪獣使い組）、そして――
「グリッドナイト同盟～！全員いますね？」
「二人だけですが」

グリッドナイト同盟……というか、二人組。こっちも勇治絡みだが、片方は勇治やシンと声が似まくり（しかも前者に至っては声のトーンまで）という特徴まで持っている。

（話によればアカネもいるということだが……今更会って何を話せばいいのか）
「ナイト君、何考えてるか丸わかりですけど。そういうのは予め考えてても、いざ会ったら言えないものですよ」
「……確かに、そうかもしれません」
「ところで、アレなんですか？」
「アレ……？」

ナイト君ことグリッドナイト＝アンチ、並びに二代目ことアノシラス（二代目）が見たものは――

「じぇっとん！」
「キィ！」

リヤカーに乗ったリムエレキングと、そのリヤカーを引っ張るハイパーゼットトン。どうやらこの二匹がお迎えらしい。

「「「何この天国……!!」」」
「いやおかしいだろ!?何このちっこい二匹の怪獣!?」
「片方はエレキング……だっけ。もう片方はゼットトン？にしてはデータのと形が違うような……」
「ハイパーゼットトンだ。見たところイマーゴまで成長しているようだが、このような姿の個体は初めてだな」

アンチが屈んで二匹を見ていると、ハイパーゼットトンがある方向を指し示した。アンチのみならず、全員がそちらを向くとほんわかしていた怪獣使い組がビシリと固まり、反対にガウマ隊が驚きの声を上げる。

「おお!?ウッドさんじゃねえか！」
「え？じゃあ、あの凄い美人が噂の先代女王って人？」
「他は護衛の……あれ？三人じゃないの？普通に多いけど……」
「一人はヤプールさんです。先代女王さんの腹心の方ですね。もう一人は……知らない顔です」

どうやら沙耶の故郷である月の王国の面々も一緒に宿泊場所へと案内することになっているらしく、集合場所に姿を現した。その際どうしても分からない人物が一人紛れていたようだが、少なくとも先代女王であるモルガンが傍に置いている以上、不審者ではないだろう。

というか、仮に不審者でも余程でない限りあの面子に喧嘩売ったら一瞬で返り討ちにされる。

「ねぇドゥギー、彼女もしかしてあれじゃない？ほら、ある世界の月に『ベネリットグループ』って名前の一大企業があったでしょ。一応私も会社経営してるし、そこらへんはよく調べてたの」

「……！そうか、あそこの一人娘が親の言いなりになりたくないと家出したと聞いていたが……成程。そういう道を選んだんだな」

「ボスはあいつの事知ってるのか？」

「名前だけだがな。確か名前はミオリネ・レンブラン……だったか？スワン」

「それで間違いないわ。でも、ただ親への反発ってだけじゃないみたいね。そこは本人に聞いた方がいいかも。勝手な憶測で誤解してしまうのもマズイし」

そうだな、とドギーもスワンの言葉に頷き、ミオリネをこれ以上詮索にしないようにした。

何にせよ、自分達も相手側も休暇で来ているのだ。ここまで来ていらぬ諍いを起こしたくはないし、聞くところによるとまたもレジェンドが不慣発動してピリピリしているとも噂されている（その結果が今回の映画祭なのだが……）。

――それからもう一ヶ所――

「えぇぇぇ!?もう終わっちゃったのか『シン・ウルトラマンタロウ』！」

「だから言ったんだ、変に着飾るより普段通りにしろと！悩んだ結果が上映時間超過だ全く……仮にもラウンズの一人が時間にルーズでどうする！」
「まあまあ……ルルーシュ、そこまで怒らなくても」
「そうですよ、お兄様。せっかくゼットさんやC．C．さんが御招待してくださったんですから。それに四日目は全作品同時上映されるみたいですし」
「む……ナナリーがそう言うなら仕方ない」
「いや、僕にもちょっとは触れてほしいんだけど……」

C．C．の出身世界であり、ライやモニカにとっては平行世界であるかの異世界からもルルーシュ・ランペルージを始めとする面々が招待されていた。
どうやらジノ・ヴァインベルグがめかし込んでいたおかげで、シン・ウルトラマンタロウを見逃したらしい。
あの世界で一通りやることをやってから帰ってきたレジェンド一家だったが、彼らのやったことの成果か随分と和解出来たようだ。

「ともかく劇場で席の確保をするぞ。幸い二作目には十分間に合う。地理も事前に記憶済みだ」
「お母様やお父様達にもお土産頼まれていますものね。映画のパンフレットとか」
「……ポスターをガン見してたよな、皇帝陛下」
「本当に、あのレジェンドって人はどうやって親父をあそこまで変えたんだ……」

そうこうしていると、カレン以下アッシュフォード学園組や他の面子が聞き込みから帰ってきた。

「やっぱりこっちで間違いないってさ！もう少し進んだらまた聞いてみようぜ」

「カレンってば機動力ありすぎ。何で病弱設定にしたのよホントに」
「だ……だって二重生活がバレないように細心の注意を――」
「ルルにはバレてたじゃん」

レジェンド一行が関わり、ほんの僅かながらあの世界で過ごしたことで多くの人物らの関係が劇的に改善された。彼女らもそうである。
一応、彼らにも迎えは来ていたのだが……。

「ニャ～」
「む、どうされましたハク殿」
「フニャぅ」
「成程……」
(((((何か猫と会話してる……っていうか何この猫の数!?)))))

よりによって猫を師と崇めるダーントと、ハクまで混じったリベラ達ダーントの師（つまり猫）。
ルルーシュらをそっちのけで猫達に構いっぱなしで全然進まない為、仕方なく自分達で行動を起こしていたわけだ。
ただ一人、スザクだけは「あの人に教えを請えば、アーサーと仲良くなれるかもしれない！」と尊敬というか何というか……そんな視線を向けている。

「そういえばアーニャはどうした？彼女に迎えに来てもらえば早かっただろうに」
「『めんどくさい』だそうだ」
「おい!?元とはいえラウンズが……いや、やらかしそうだったな、元々……」
「ニャ～」
「ん？」

ハクがルルーシュに近付いていき、スルリと横を抜けると振り返っ

て前脚を片方持ち上げ――

「ニャニャ、ニャニャ」

「こっち、ということか？」

「すごーい！ちゃんと案内出来るんだね！」

「当然だ。ハク殿は常識に縛られず、日々緩やかに過ごしつつも相手のことを考えられておるのだ」

何故かダーントが誇らしげに言っているが、本来誇るべきは主であるロスヴァイセのはず。まあ、ハクはフリーダム過ぎてロスヴァイセどころかレジェンドすら何処にいるか把握しきれないという、何気に凄い能力があったりするのだが。

それはさておき、兎にも角にも相変わらず有能なハクの導きで彼らもまた劇場へと足を運ぶのだった。

「ムジナさん、あのミオリネさん？を見たとき雰囲気が鋭く――」

「多分、彼女はライバルだから」

これを聞いた何名かが騒ぎ出したものの、ハイパーゼットトンのドロップキックで強制的に黙らされた。

この事は以後『邪神さんドロップキック』と言われた（命名・南夢芽）のだが、レジェンドが育てたハイパーゼットトンは滅亡の邪神でも何でもないということでハイパーゼットトン自身は酷く遺憾だったらしい。

特別編・映画を作ろう！――邂逅――

一作目の『シン・ウルトラマンタロウ』から既に大盛り上がりのウルトラ騎空団大映画祭。休憩時間でもその話題で持ちきりで、続く『ウルトラマントリガー　ＢＥＹＯＮＤ　ＧＥＮＥＲＡＴＩＯＮＳ』にも期待が高まっている。

一応少しだけ紹介があり、比較的明るい作風で冒険と絆をテーマにしているとのこと。キャッチコピーは『光の絆は世代を超える』。ポスターではトリガーを中心にティガやガイア、アグル、さらにコスモスやグリージョまで描かれており、お祭り映画に相応しく撮影チームに所属した全ウルトラ戦士が出演する。

尚、トリガーが主役とあって、彼に憧れるシン・アスカ（１４　）は興奮しっぱなし。何気にポスターの大物さ漂うティガを見たキラも内心テンション爆上がり中。

まだ上映開始までに時間はあるが、早くも各映画館は席が埋まりつつあった。毎度の事ながら特別招待客の着席状況を一人確認していたレジェンドは、とりあえず現時点の確認を終えて一息ついていたところ、一人の少女から声を掛けられる。

「あ……あのぅ……」

「ん？」

茶色よりな赤い髪と麻呂眉っぽい眉毛の少女。一言で表すと「たぬきっぽい」……が、レジェンドは敢えて口にしない。

「どうした、上映開始まではまだ猶予がある。売店ならそこを右に曲がってすぐ、トイレは売店を目の前にして左手側だ」

「い、いえ！そうじゃなくてですね！えっと……」

「……迷子か」

「ぴぃぃぃっ!?違いますそんなんじゃ……はいそうですごめんなさい……」

焦ったかと思えばしゅんとなって涙目で謝ってくる少女を内心「面白いな」と思いつつ、レジェンドは探し人の特徴を聞くことにした。ついでに「ひ」ではなく「ぴ」と言ったことはスルーしよう。

「ええっと、銀髪？白髪？の長い髪で、沢山護衛の人が一緒で、美人さんで……」

「……ん？」

「それと、その護衛の中の一人にその人と同じような髪の……なんていうかツンとしててもいきなりデレるというかそんな感じの人がいて」

（……気の所為か）

「あ！もう一つ！私と一緒に来た、すっごく食べる人とそっくりな顔してるんです！」

「思っきし心当たりあるんだけど」

「ええええ!?」

驚く少女を余所に、レジェンドの頭にはかつて共に旅したパートナーの少女と、つい先刻見かけた一団の姿が思い浮かんだ。ツンデレの件は知らないが、最初と最後でドンピシャである。

つーかあいつも来てるんかい、とレジェンドは思ったが逆に『彼女』が一緒に来たなら大方飯屋に一人爆走して置いてかれたんだなと予想出来てしまった。

「あいつに置いていかれたんだろ？」

「いえ、私が先走って『うどん屋』ってところに入って食べ終わったらいなくなってました」

「まさかの逆かいイイイ!!」

「ごぉっ!?ごごごごめんなさいぃぃぃ!!」

よもや逆に『彼女』の方が食べ物関係で置き去りにされるとは予想

出来ずツッコミを入れたレジェンドだった。

☆

「「「「……」」」」
「はぐはぐはぐ……んっぐ……」
「「「「……」」」」
「ごくごくごく……ぷはぁ！ふぅ……」

案内された先でクルーガー夫妻と別れ、時間短縮のために転移ポートを使い映画館の近くまで来たリブットとソラ、月王国組にガウマ隊、怪獣使い同盟にグリッドナイト同盟は眼前で爆食いする少女を引き攣った顔で見ていた。

控えめに言っても美少女で、長い金髪が美しい……が、それを消し飛ばすように積み上げられた皿がその食欲を物語る。何処となくモルガンに似た顔立ちのその美少女こそ、レジェンドのパートナーだったキャストリアことアルトリア・アヴァロン。かの少女が逸れたという人物だった。

「すいませんデザートお願いします！」
「「「「まだ食うんかい!!」」」」
「え？あ！モルガン御一行！……と、どちら様で？」
「ギャラクシーレスキューフォースに参加されている方々です。失礼の無いように……相変わらず戦場に出る時以外は『お転婆』な喋り方とは」

モルガンが軽く溜息を吐くと、アルトリアはムッとした顔で爆弾を投下。

「別に良いじゃないですか。モルガンだってレジェンドに『我が夫』とか言ってるくせに」

「なっ……!?」

真っ赤になってどもるモルガンであったが、別の者は他のところで衝撃を受けていた。

まずはリブット。

（レジェンド……まさか既にご結婚なされていたのか!?今の今まで気付かなかった……普段から本人だけでなくクルーガーご夫妻にもお世話になっているというのに、失態にもほどがある！）

何か勘違いしているようだが、『我が夫』はモルガンがそう呼んでいるだけで別にレジェンドと婚姻関係にあるわけではない。ついでにアルトリアの方も。

ヤプールや排熱大公、妖精騎士達は寧ろ賛成している（モルガン大好きな妖精騎士トリスタンことバーヴァン・シーすらも）ので、あとは二人次第なのだが……二人共言わずもがなということだ。レジェンドはいつも通りだが。

続いてミオリネ。

（えええ!?そんな重要な事、ここで言っちゃっていいの!?でもそうすればここにいる全員が証人で……私もいつかあの人とこんな感じで……こんな……）

何やら妄想が滾ったからか「きゅう」と顔から湯気を出して気絶、立派な体躯の妖精騎士ガウェインことバーゲスト（通称バゲ子・命名アルトリア）に支えられるハメになった。ちなみに近くでムジナが似たような状態になっているが、向こうはどうやらギリギリで踏ん張っている。代わりに鼻息荒くなっているので、とりあえずこの場に勇治がいなくてよかったと言っておこう。

最後に、妖精騎士ランスロットことメリュジーヌ……そして『アルビオン』。

（『赤い龍』の彼はどういう呼び方が好きなのかな。夫？ダーリン？あなた？それとも……ハニー？）

誰とは言わないが、ある人物について考えていたものの少しばかりズレていた。他の二人（三人？）と違って幾分落ち着いているのでまだマシなのかもしれない。問題は彼女が興味を持ってる人物の悪友二人が、彼女の容姿を見ようものなら確実にその人物は（モテない嫉妬で）襲われるということか。

ギャーギャー言い合っているアルトリアとモルガンだったが、ふと気が付いてアルトリアが質問してくる。

「あ！そうでした！あの子見かけませんでしたか？」
「誰とも言わずにあの子で分かるわけがあるまい」
「あの子ですよ！ほら……えーっと……水星たぬき？」
「え、……」

復活したミオリネがその単語に反応。水星たぬきと聞いて一番最初に反応したのは彼女だが、月王国の面々はどうやら分かるらしく各々異なる反応を示した。

ガウマ隊らは水星たぬきというから誰かのペットかと思いきや、そうではなく渾名だと聞いてますます混乱。そもそも何故に『水星』たぬきなのか。

「何で水星たぬきって呼ばれてるんです？」
「さあ？」
「「「「知らないの!?」」」」
「いえ私、彼女と顔見知りではありますが特別親しいというわけでもなく、どちらかといえばＭＳ絡みの方々のほうが詳しいんじゃないですか？」

彼女というから女性なのだろうが、女性をたぬき呼ばわりは如何なものかと思う。どこぞの不憫光神は桃姫とか黒猫ツインズとか言ってるけど。

「……眉毛とか、色々な色合いからそういう渾名がついたのよ。水星から留学してきたから、それも相まって」

「「「「水星から!?」」」」

「こちらの世界では我がっ……ごほん、あの御方のおかげで水星も問題無く住めるような環境が整っていますので」

「あ、今我が夫って言おうと……何でもないですごめんなさい」

無表情で槍を向けられて引き下がるアルトリアはさておき、水星出身ということで話題になったのだが、ミオリネが何故詳しいかが気になる。何となく同期だからっぽい気はするが、それだけで最初の反応にはなるまい。

そんな彼女に助け舟を出したのはヤプール。

「ミオリネは学生時代にある人物共々、その娘がトラブル起こす度にフォローのため駆け回っていたからな」

ある時は何故かミオリネの代わりにＭＳで決闘することになって相手を完膚なきまでに叩き潰し、ある時はそれが原因で惚れられてプロポーズされたり、ある時は入寮するところが当日まで決まらず途方に暮れたり……その度に何かと二人が面倒を見たらしい。

卒業後はミオリネがモルガンの護衛に、その少女は月のＭＳ部隊の精鋭に抜擢された。本来はミオリネもそちらに行くはずだったのだが、どうやらある人物と再会する機会に恵まれるようにとその少女が焚き付けた結果こうなったそうな。

「根は悪くない、それどころか良い子ではあるのだが、何分行動力が凄まじいというか……良く言えば活発、悪く言えば考え無しというのが

一番例えやすい」
「……」
「ねえリブット、今レジェンドと一体化してる彼のこと思い浮かべなかった？」
「!?」

幼馴染の一言は図星だった。その少女を評したヤプールの言葉はそのままゼットにも当て嵌まる。まあ、ゼットは何故かＭＳに乗ると途端に色々考えるようになっているのだが……。
そこにハクが先導してルルーシュ達もやってくる。ハイパーゼットンとリムエレキングに案内されたモルガン達も人の事は言えないが、何とも珍妙な光景であった。

「ニャ」
「まさか本当に案内してくれるとは……」
「偉いね～いいこいいこ」

シャーリー・フェネットに撫でられてご満悦なハク。役目は果たしたとその場を立ち去ろうとするも、モルガンがひょいと抱き上げる。どうやら沙耶の影響かふわもふなものに弱くなったらしく笑顔で抱いたまま、されど必要以上に撫で回したりしない。
立場と容姿的に完璧な『富豪とその飼い猫』の絵面になっている。本来の主は貧乏性で、飼い猫ではなく使い魔なのだが。

「よしよし」
「ニャ～」
「もしかして貴女の猫だったんですか？」
「違いますよ？」
「「「「は!?」」」」

まあ、モルガンとロスヴァイセは似てなくもない。見た目だけな

ら。ハクものんびりしすぎじゃないかと思うが、もはや言うだけ無駄。
誰もがこの空気にどうやって切り出すべきか悩む中、それは現れた。

「ここで待ってればそのうち来るだろ」
「うう……最悪一人で観ることになるのかなあ……」

二人分、それも人によっては二人共知っていそうな声を耳にして皆がそちらを向くと、ビニール袋を腕に下げ、両手にそれぞれおにぎりとペットボトルを所持し、手にしたおにぎりに齧り付きながら並んで立つレジェンドと先程の少女。
それを見たミオリネはガコンと顎が外れ、アルトリアとモルガンは凄まじい早さ（しかもモルガンに至ってはハクを抱き抱えてるとは思えないほど）でレジェンドに近付いた。

「レジェンド！」
「我が夫！」
「あ？」
「ほえ？」
「私にもおにぎり下さい!!」

アルトリアのアホみたいな台詞でこの四人（と一匹）以外が盛大に

ズッコケた。実際はモルガンもだが、ハクを抱き抱えているということでどうにか踏ん張ったらしい。
パートナーに会えたことよりおにぎりなのかとツッコミ班がツッコミを入れようとするが、それ以上にミオリネが少女の方に突っ込んで行く。
……ついでに誰もモルガンがレジェンドをナチュラルに我が夫呼びしたことに触れない。

「スレッタァァァァ!!」
「あれ?ミオリネさ「この不敬者ぉぉぉ!!」ひゃういいいいいい!?」

ミオリネのあまりの剣幕に少女――スレッタ・マーキュリーは涙目でレジェンドの後ろに隠れてしまう。レジェンドはその様子を、アルトリアの口に適当なおにぎりを突っ込みながら観察中。当のアルトリアは幸せそうにおにぎりを頬張っている……いいのかそんな食べさせ方で。

「アンタそれ誰に買ってもらったの!?」
「買ってもらった前提!?いや確かにそうですけど!こちらのお兄さんです!」
「ハーイ」

アルトリアに引き続きおにぎりを食べさせつつ、空いている片手を上げて応えるレジェンド。めっちゃ軽い。
そんな彼にハクを抱えたモルガンが擦り寄っている。間違いなくリア充爆発案件。そして沙耶がいれば修羅場案件……になるか?

「学生時代に散々教科書で見たでしょ!?こちらの方はね!先代女王陛下の頃から月王国のために御助力して下さった光神ウルトラマンレジェンド様よ!!そんな方に貢ぐどころか無条件の施し受けてるって何してんのッ!!」

「ふえええええ!?あ、そういえば言われてみると何処かで見たような」
「ふんっ!!」
「いひゃいっ!?」

思っきしど忘れしているスレッタに、彼女の背後へ回り込んだミオリネの『学生時代の教科書アタック（角）』が直撃。本気で痛かったのか頭を押さえ涙目でしゃがみ込むスレッタ。というかソレ（教科書）常備してんのかい。

「え？俺、教科書に載ってんの？」
「当然ですよ、我が夫。皆の活躍を載せ、偉業を成し遂げた者達の中でも最たる存在の貴方の活躍を載せないなど、王国そのもののメンツに関わります」
「それにレジェンド、光の国でも貴方はウルトラ学校の教科書でまず最初に覚える偉人として載せられています。むしろここまでして何故、貴方自身が知らないのか疑問になるくらいなのですが……」
「いやだって俺は彼方此方飛び回ってて教科書の内容確認なんてしたこと無いし。惑星レジェンドで使ってる教科書はダンブルドアとかが確認してるからなあ」

モルガンとリブットの言葉に対してレジェンドはう～んと頬を掻きながら答える。そのスキにガサゴソとレジェンドのビニール袋を漁るアルトリア……どんだけ腹減ってんだ、というか何してんだこの娘。それをスルーしてるレジェンドもどうかと思うが。単に諦めただけのかもしれない。

しかし、ここで気になっているのが直接レジェンドと対面したことのあるルルーシュ一行……ではなく、レジェンドとは初対面のガウマ隊や怪獣使い同盟。一応ウルトラマンであり光神であり、かつクルーガー夫妻の上司だというのは分かる。逆にそれ以外は全くと言っていいほど知らないのだ。

当然その活躍もあまり知らず、凄いとか偉大とか言われても実感が

無い。

「なあ、ウッドさん。あのレジェンドって人は何やったんだ？」

「そうだな……私達や先代陛下を救うのみならず、今の月王国はあの御方無しには有り得ないレベルの貢献を成された。特に『食は心を豊かにする』と食の面において何かと手を回してくれてな」

ウッドワス自身、レジェンドやエースからパン作りのレクチャーを受けた。ぶっちゃけエースはともかく、レジェンドは自分が彼方此方で美味いもの食べたいがための打算的な行動である。その証拠にエースが教えたのは普通にパンだったが、レジェンドはあろうことかピザ。C・C・かお前は。

「でもそれだけじゃないよな、絶対」

「気になるのならば先代陛下か、あの小娘に聞くといい。二人は一番近くであの御方の偉業を目にしている。あとは……先程来た連中はどうだ？」

そう言ってウッドワスが指差したのはルルーシュ達。何やら青か藍色の髪の少年がレジェンドを羨ましそうに見ているが、その彼が血涙流しているのは見なかったことにしようとガウマ達は自然と意思疎通した。

……しかし、レジェンドの持っているビニール袋を漁るアルトリアにはツッコまないのか。

「各々興味が尽きないのは分かるが、上映開始時間が迫っている。本日はそれが最後だから、終わったらグッズ買うなり何なりしてそれぞれ予定している宿泊場所へ移動しろ。空間次元弄って場所繋げてやるから、聞きたいことはその時に聞け」

「「「「サラッとヤバいこと言ってるんですが!?」」」」

「レジェンドですし」

「そういうお前は少しぐらい俺の分を残しとけ。何食い尽くしてんだ」

ゴン！と拳骨落とされて涙目のアルトリア。スレッタと並んで食い意地が張った結果の自業自得。

月の飲食店総元締めのウッドワスは内心アルトリアをいい気味だと思ったらしい。やたら食いまくるので彼女が行った店は当日食材不足に陥るからだ。

尚、その結果喫茶リコリコという店は売上が赤字になったこともある模様。

「ねえ、レジェンド様。トライになってた彼はどこで観てるの？」
「多分ウルトラ騎空団用の宿泊施設だ。というかメリュジーヌ、そこは沙耶を聞くんじゃないのか」
「だって現陛下はレジェンド様の所でしょ」
「何でそこピンポイントで当ててくんのお前」

頭ドラゴンなこの娘、一誠に興味を持ったからかそっちに行きたがっている。が、バーゲストに首根っこ掴んで持ち上げられていった。

まあ上映終了後には会えるだろうし、メリュジーヌも暴れずなすがままにされているから今のところ構わないだろう、うん。

レジェンドに持ち上げられて連行されるオーフィスと似たようなものだ。

「……ヤプール」
「……大体予想出来ますが、何か？」
「私は我が夫のいる、別荘とやらの方へ宿泊場所を変えます。沙耶もいるようですし丁度いい。どうせアルトリアもそちらに泊まるでしょうから」
「一言一句予想通りですありがとうございました」

間違いなく修羅場になるだろうことが予想され、隠すことなくヤプールはレジェンドに向かって合掌した。
もう一層のことモルガンと沙耶、二人一緒に既成事実でも作ってさっさと貰ってくれないかと思っていたりするが、ああ見えて沙耶だけでなくモルガンも純情のため既成事実作戦はまず不可能。

（『あの子』同様、ゆっくり育んでもらうしかないか）

そう思いつつ、ヤプールはウッドワスや他の者達と共に映画館へと入場する。

「先代陛下、その猫は返してあげてください」
「……どうしてもですか？」
「ニャー」

ハクは相変わらず大人気である。

――月王国・喫茶リコリコ――

「……あのさ」
「だから限定販売チケット外れたんだよ畜生！」
「俺は平和に過ごせるからいいかな、あははは……ハァ……行きたかったなぁ」

「何で態々僕の座ってる席を探して愚痴るの？」

ヤプールの養子であるエラン・ケレスは、月王国ＭＳ部隊のグエル・ジェタークとレオス・アロイに愚痴を聞かされてうんざりしていた。

自分も二日目に合流する手筈になっているため、この二人バレようものなら確実に粘着されると口を噤んでいる。

何より今日は養父経由で手に入れた『マルディアス戦記』を熟読しようとしていたのに何故こんなことになっているのだろうか。

「お前、親父さんから貰ってたりしないのか!?」

「僕は（父さんが確保してるから）応募してないし」

こっちは十中八九スレッタ絡みだろう。色んな意味で連戦連敗中なのは同情するが、こっちに飛び火してほしくない。

レオスはスレッタのやらかしによる被害者だが、行きたい反面あっちに彼女がいるということで踏ん切りがつかないようだ。こっちはグエルよりマシではあるが、面倒だということは同じ。

「ここでウダウダやってるぐらいならシミュレーターでアムロ・レイにでも挑んできたら？」

「「殺られる未来しか見えない!!」」

「そんな迫真の表情で言われても」

ギャースカ喚く知人達に溜息を吐きつつ、放置することに決めたエランであった。

その後、騒いでいたグエルとレオスは客として来た七星剣の一人・ナックル星人ブランケによって力づくで黙らされることになる。案の定ウエイトレス二名が腰を抜かしたのは言うまでもない。

特別編・レッツ・ジョブチェンジ!!

最近、よくウルトラ騎空団の艦艇内で見かけるようになった月王国の先代女王やその側近及び護衛、並びに関係者。そしてギャラクシーレスキューフォースに出向しているはずなのに、何故か全員揃っているガウマ隊を始めとする面々。

そんなやけに賑やかな一時……それはメリュジーヌの一言で始まった。

「僕、ジョブチェンジっていうのしてみたい！」

お前は何を言っているんだというような顔で彼女を見るウルトラ騎空団＋α。当の彼女はジョブリストを見ながらキラキラと目を光らせている。

ちなみにグランとジータに借りたそれだが、実際ジョブチェンジが可能な人物は限られているのを大半の者は知らない。とは言ってもそのジョブチェンジが可能な人物だらけだったりするのだ、この人外魔境のウルトラ騎空団は。

レジェンドの膝の上を独占しているオーフィスよろしく、一誠の膝の上を独占中の頭ドラゴンな妖精騎士はやりたいやりたいと足をバタバタさせている。上を向いて一誠の顔を笑顔で見ながら。

当然、リアスやイリナ、レイヴェルは面白くないが……一誠としてはこの状況をどうにかしてもらうべく、レジェンドを見るものの……あっちはあっちで修羅場だった。

「その手を離せアルトリア。アウギュステでのバカンスに備えて、我が夫は私と水着を選びに行くのだ」

「私は名実共にレジェンドのパートナーですよ？こういうところでこ

そ女王として、器の大きいところを見せたほうが良くないですか？」

……モルガンとアルトリア、両者共さり気なくスキルバフ掛けてレジェンドを引っ張っている。何かメキメキとか嫌な音が聞こえ、レジェンドの顔が青くなっていってることに二人は気付かず、尚もそれを続行。

「パートナーなら散々時間を共有したのだろう？」
「立場的に離れてても話す機会が多かったんでしょう？」
「「むうぅ～！」」

二人共、『カリスマ』持ちなのに威厳ほっぽりだすような行動は如何なものか……まあ、ある意味良いことではあるのだが。一人の少女、女性として生きられているということなのだから。……そのおかげで一人被害を被っている者がいることを除けば。

その被害者たるレジェンドの膝に座っているオーフィスは、華麗にそれをスルーしてメリュジーヌに尋ねる。

「アルビオン、どうしてジョブチェンジしたい？」
「それは勿論イッセーがどんな反応するか気になるからだよ！あと僕のことはメリュジーヌって呼んでね、オーフィス」
「ん、わかった」

ぶっちゃけこの面子ではアルビオンだと二天龍の片割れと、ランスロットだとウルトラ騎空団にも居るし、二つ合わさればＫＭＦ（ランスロットだけでもそうだが）と一緒になってややこしいため、その呼び名が一番だろう。

ついでにレジェンドの『母港』にも女性かつアルビオンという軽空母のＫＡＮ―ＳＥＮはいるが、あっちは『軽』空母とは思えないほどたゆんたゆんである。後にそれを聞いたメリュジーヌは「貧乳はステータスだもん」と落ち込んだらしい。

「そうなると色々素材集めも必要になるな」
「そうなの？で、レジェンド様……顔青いけど大丈夫？」
「だいじょばない。キツいし痛い」
「アルトリア、我が夫が痛がっているぞ」
「モルガンが力を込めて引っ張るからじゃないですか？」

よく見ると、知ってか知らずか二人してレジェンドの腕の関節を極めに掛かっている。相手が相手なため力づくで振り解けないし、そもそも膝にオーフィスが座っているので派手に動くことも出来ない。
……が、予想外というかある意味予想出来たというか救世主が現れた。

「お二人とも……それ以上レジェンド様に負担をかけるようなことをするなら、特大の注射を後ろの穴に刺してあげますがいかがでしょう？」
「すみませんでした」

レジェンド一家最凶の女傑・卯ノ花烈。アルトリアはまだしも先代女王すらその気迫だけで土下座させた。
バーゲストとバーヴァン・シーは抱き合いながら涙目で震えており、ガウマ隊と怪獣使い同盟、グリッドナイト同盟は壁際に退散、ミオリネとちゃっかり付いてきたスレッタは勇治のところまで逃走。
唯一メリュジーヌだけが……。

「（・ω・）？」

こんな感じで動じていなかった。恐るべし頭ドラゴン。まあ、彼女は（一般的に）悪いことはしていないし。
で、結局ジョブチェンジには当人の才覚以外にＪＰが必要だとか、クラスが上がるほどジョブチェンジするための対応職をマスターし

たり、果ては称号や証なんかが要ると言われ――。

「行くぞお前ら！パンデモニウム周回すぞ!!」
「「「「「おー!!」」」」」

ソシャゲお約束のクエスト周回である。
彼らは今、各種ジョブの証やたまに英雄武器のレプリカがドロップするというパンデモニウムへと赴いていた。
今回のメンバーは、レジェンドと卯ノ花（保護者）、グラン＆ジータ（ジョブチェンジ先輩）を中心にゼット、オーフィス、オカルト研究部にガウマ隊、怪獣使い同盟、グリッドナイト同盟、沙耶、モルガン、妖精騎士三名、アルトリア。
そしてムジナに引っ張られてきた勇治とミオリネ、スレッタと完全に巻き込まれただけの流にライ＆モニカカップル……こうして見るとかなりの大所帯かつ戦闘可能メンバーが大半だ。

「じゃあ俺は最下層の第六層でアスタロトしばらくボコってくるわ」
「我が夫、私も同行します」
「あ、じゃあ私も！」
「我もー」

速攻で一番ヤベー連中が組んで最下層へと突撃。姿が見えなくなってすぐ、その方向から何やら獣の断末魔の叫びや女性の悲鳴が聞こえた気がするが気の所為だ。
星晶獣だけどアスタロトという名前が悪かったに違いない。特にレジェンドにとって。

「何か行ってみたいような行きたくないような……」
「あーやめやめ、私達が行ってもお母様達の邪魔にしかなんないし。こっちはこっちでさっさと済ませばいいじゃん」

バーヴァン・シーはやれやれといった様子で肩をすくめて言い切る。まあ、アルトリアによるバフがかかったあの三人をどうにかしろと言われたら誰でも逃げ出すだろうが。
全員がどんな人物か知る沙耶と勇治は静かに頷き、バーヴァン・シーは「お姉ちゃんが守ってやるからなー」とモルガンやレジェンドが相手の時同様、沙耶に笑顔を向けながら態度がガラリと変わる。

「えっと……彼女、特定の人にだけあんな感じになるんですか？」
「ああ。先代陛下と光神様、そして現陛下に限る。私やランスロットにも中々辛辣だからな」

リアスが控えめに聞くと、バーゲストは普通に答えてくれた。身長１９０ｃｍと人間態のレジェンドより僅か１ｃｍとはいえ大きい彼女だが、一見凛としているものの中身は乙女。偶然レジェンドがお姫様抱っこしたときは顔を赤くして慌てふためき、可愛らしい本来の喋り方になってしまったという。

「さて、それでは私達は第一～第四階層までを周回しましょう。第五階層と最終階層である第六階層は敵が強いので行かないように」
「「「「!?」」」」
「気にしないで下さい。幻聴です」
――また大して落ちなかったな。アルトリア、バフだ。モルガン、オーフィス、徹底的に搾り取るぞ。
――分かりました。行きますよ。
――醜く足掻きなさい。その方がアガります。
――おやつのためにがんばるー。

耳をすませば先程の四人がアスタロトとやらをサンドバッグにしているであろう爆音と悲鳴、無慈悲な発言が聞こえてくる。誰もが冷や汗を垂らす中、卯ノ花だけは普段通りに微笑みながら「幻聴です」と言うだけ。

とりあえずバーヴァン・シーの言うようにさっさとすませてしまおう。

「よーし！じゃあ行こう！僕に続いて！」
「何でお前が仕切ってんだよランスロット」
「駄目よ姉様、言っても聞かないから彼女」
「陛下の言う通りだ。好きにやらせてやればいい」

ノリノリで歩き出すメリュジーヌ。気が付くと一誠の左手を握ってズンズン歩いており、リアスらがそれを追う。

他の面々はグランとジータから「最初は皆ファイタージョブからのスタート」と聞き、まずは素材集めしつつ経験値を稼ぐことに専念するのだった。

――そして、戦い続けること約数時間。

「ほらほら、まだまだ行くよ！でぇい！」

連続コンボを叩き込んで星晶獣を倒すメリュジーヌ。恐ろしいほど体力があるロリっ娘だ。一誠はゲンとの特訓でまだいけそうだが、リアスやイリナ、レイヴェルはそろそろ限界。

「なあ、そろそろいいんじゃねーか……？」
「そうかなぁ？まあ他の皆の様子も気になるし、一旦戻ろっか」

「「た……助かったぁ……」」

だらしないなぁ、とリアス達に言うメリュジーヌだが別の事が原因でリアス達が復活することになる。それは勿論――。

「僕、頑張ってたよね？」
「へ？あ、ああ。滅茶苦茶強かったよな」
「えへへ～……じゃあ、御褒美に抱っこ！」
「「!!」」

にぱーと笑って両腕を開くメリュジーヌを見てリアス達の底力が今頃爆発。しばし追いかけっこするハメになった。

追いかけっこしつつ、最初の集合地点に戻るとまず目に入ったのは魂が口から抜けつつある勇治。話を聞くとまたスレッタがやらかしてピンチになり、それを勇治や他の面々が助けることになったらしい。しかも何度も。

一応、ガウマ隊・怪獣使い同盟・グリッドナイト同盟にミオリネ、そして流とライ＆モニカが一緒に行動していたので戦力的には問題なかった。特にナイトと流。

次に有り得ない速さで斬魄刀を振るい魔物や星晶獣を斬り刻みながら一誠やリアスら以外のオカ研メンバーを連れて帰ってきた卯ノ花。何か「もうこの人だけでいいんじゃないかな」レベルの強さを見せつけ、現在進行系で無双中。

おそらくパンデモニウムの生態系が壊れたら彼女が原因だ。

最後にバーゲストにバーヴァン・シー、沙耶、そしてグラン＆ジータにゼット。唯一卯ノ花に許可されて第五階層にいたのだが、やはりジョブチェンジの先輩である二人に加え、妖精騎士がいるメンバーは強かった。

ゼットが霞んでしまうような面子だったが、おかげでゼットランスアローの扱いが上手くなったのでよしとしよう。

「お母様達はまだ戻ってないの？そういえばまだ下の方から泣き喚く声が聞こえてたけどさ」
「あの四人に限っては何かあると思えませんが……レジェンド様以外は皆女性ですし」
「……案外向こうでしっぽりと……」
「「「「!?」」」」

ムジナがぼそっと言った一言にレジェンドガチ恋勢の顔色が真っ赤になったり真っ青になったりと大忙し。何名かはそのシーンを脳内再生してしまい気絶してしまう。アーシアやらミオリネやら。
ちなみにムジナ本人は勇治の方を見ており、勇治が他の怪獣使い同盟へと視線を送るも――。

（三人共、万が一があればムジナを止めてくれ）
（（いや、無理））
（即答するなァァァ!!）

三人が無理無理、と頭と手を横に振りながら全く同じ動作と速度（しかも高速）で拒否された。オニジャいわく、以前同じようなことが起きた時に止めようとしたら逆に半殺しにされたらしい。
どうやら束同様、想い人に関わるとスペックが一時的に猛烈アップするタイプのようだ。
こうしてはいられない、と考えるレジェンドガチ恋勢。アーシアのように止めようと考える者や、あわよくば自分も参戦しようと思ってるバーヴァン・シーなど様々な思惑が交差し――いざ行かん、と駆け出そうとしたところにレジェンド達が馬鹿でかい風呂敷を背負って帰還。
「これだけあれば十分だろ。すぐに使うというか使えるわけでもなし……グラジーは使えるかも」
「私も我が夫も不要ですから」

「というか私はジョブチェンジしたら『腹ペコ王』とか言われそうなので、したくないです。何故かは知らないけど」
「お腹すいたー」
「「「何かごっそり持って帰ってきた!?」」」
何でもアスタロト、最後の方は泣きながら「こんだけやるからもう二度と来んな」と大量の宝箱を投げつけてきたらしい。どんだけ一方的だったんだこいつら。
「別にしっぽりしてたわけじゃなかったんですね！」
「「「は？」」」
「なっ……!?バカ！スレッタ!!」
「え？」
勇治とミオリネが気付くも、スレッタの爆弾発言を聞いたレジェンド達四人のうちレジェンドを除く三人はハッとする。同時にレジェンドの背筋に悪寒が走った。
「……そうでした。言われてみれば私や我が夫のプレッシャーが魔物を寄せ付けていなかったわけですし、絶好の機会だったというのに……仕方ありません。我が夫、戻り次第速やかに身を清めて部屋まで赴きます。今日は寝かせませんよ」
「いやちょっとお前、娘いる前で何言ってんの。つーかここんとこ俺は安眠出来る方が少ないんだけど」
「そうですよ。レジェンド、背中流してあげますので早く帰りましょう！」
「そういうオメーは何ナチュラルに混浴しようとしてんだ」
「レジェンド、我お腹すいた」
「あー、よしよし。何だろうこの一番オーフィスがまともな感は」
案の定大暴走。オーフィスの癒やし感が半端ないが、それ故にモル

ガンとアルトリアの発言のぶっ飛び具合が分かりやすくなってしまっている。この場でことに及ばないだけマシなのかもしれない。
ついでにやらかしたスレッタは猛追してくる伝説の超月星人と化した勇治から逃げるべく出口へと爆走。そんな勇治の背中にはミオリネ……と、ちゃっかりムジナも乗っていた。

「ふえええええ!?勇治さんが勇治さんじゃなくなって足音まで変わってるぅぅぅ!!」
「マァァァキュリィィィィ!!」
「「「「いや誰だアレ!?」」」」

何か声もパプテマス・シロッコっぽくなっているという激変状態。もう勇治のジョブチェンジこれでいいだろ。体型や髪型も変わるんだし。
今のモルガンやアルトリアはレジェンドのことしか頭にないので気にしていないが、バーゲストやバーヴァン・シーもどうやら初めて見るらしく唖然としている。

「何あれ……私らは後天的に月星人になったけどさ、あそこに先住してた月星人て皆ああなんの？」
「いや、それはないだろう。だとしたらミオリネもああなるはずだ」
「気色悪いこと想像させんじゃねえよ!?」

バーヴァン・シーは同じようになったミオリネを想像してブルリと身体を震わせた。自分で言ってなんだがバーゲストも似たようなことになっている。
よかったなスレッタ、君は水星出身で。
……とはいえ、エランはともかくグエルやシャディクといった勇治の知り合いも月星人なので変な想像されかねない……アレ？グエルは割とイイ感じな気がしないでもないような。
ともかく、何処その星を得て光り輝く配管工よろしく（勇治から逃

げるため）魔物を体当たりで（結果的に）ぶっ飛ばしながら突き進むスレッタと、ミオリネとムジナを乗せたままギュピギュピとかガシュガシュとか変な足音を立てて「フハハハハハ!!」と高笑いしながらそれを追う勇治（でいいのか不安な生物）を放ったらかしには出来ないので、早いとこ追いかけようとパンデモニウムを後にするレジェンド一行。

余談だが、後々遭遇することになる人物――普段の勇治、ナイト（アンチ）、そしてシン・アスカと物凄く似た声の――をモルガンが壁にめり込ませていた。

☆

その後、ヒリュウ改に戻った後で戦利品（大半がレジェンド達最下層組や卯ノ花ら実力派集団）を確認し、改めて最初のジョブチェンジ先を決める一誠達。

ちなみにレジェンドは元々そのままで何でも出来るし、着せ替え人形にされるのも御免だと早々に退散。アルトリアは上記の理由でジョブチェンジしたがらず、モルガンも万能型だし衣装は別の時に変えればいいと不参加。

オーフィスが腹を空かせているので四人揃ってジャグラーの城である食堂へと向かっていった。

「僕はどーれにしよっかなー？」

相変わらず一誠の膝の上をメリュジーヌが独占中。彼女としては格闘や槍をメインに出来るジョブが良いらしいが、槍はまだしも格闘メインのジョブは上位クラスのジョブでもあまり無い。

ただ、どうやら月星人化した影響かそれとも長年の経験があるからかは不明だが、妖精騎士である彼女らは比較的緩い条件で上位クラス

やＥＸクラスへのジョブチェンジが可能だということが判明し、メリュジーヌは速攻であるジョブに決めた。
　そのジョブとは――。

「じゃじゃーん！ジョブ『剣豪』ー！」

　通常とは違う『ＥＸクラス』、それも上位クラスのジョブ・剣豪にジョブチェンジしたメリュジーヌ。襟巻き付きの和服に身を包み、片方の肩を出した服装は体型云々を差し引いても扇情的だ。というか、別に格闘か槍がメインでなくとも良かったのか。
　レジェンド達が持ってきた素材を使って早速専用の英雄武器・無銘金重を作成し、ぶんぶん振るっている。

「戦い方変わるのに随分様になってんなー」
「レジェンド様がよく刀を使うからね。見て覚えた」

　所謂天才肌らしい。バーヴァン・シーと沙耶は『ウォーロック』という魔法使い系にジョブチェンジ。何故妖精國出身でない沙耶もいきなり上位クラス可能なのかはさておき、それぞれ赤と白が基調の衣装になった二人はレジェンドやモルガンを探しにそそくさとその場を退散。
　最後の妖精騎士であるバーゲストは『ベルセルク』か『クリュサオル』かで悩んでいる。
　だが何故だろうか。一応、ウルトラ騎空団にも男でガウェインという騎士はいる。しかも出会った当初は強さ故に傲慢だったが、最近は初心を取り戻して騎士らしく、そして英雄らしくなった。金髪で眉目秀麗、黄金の鎧も着るようになって声が……アレ？

『蹂躙するとはこういうことよ!!』

……一応言っておくが、あまりに似ていても彼は決して空の世界の英雄王ではない。
『王の財宝（ゲート・オブ・バビロン）』も『天地乖離す開闢の星（エヌマ・エリシュ）』も使えないので間違えないように。
――ここである出来事が残っている面々を襲う。襲うといっても物理的にではなく、人によっては精神的にも気にならないことだ。
ノリノリで無銘金重を振るい「我が太刀に断てぬものなーし！」と言っていたメリュジーヌだが、ちゃんと着物の下には晒布や和服スカートっぽいものも着ていた。
……着ていたのだが、自分の振った刀の風圧で少しだけそのスカートが捲れたとき、一誠の時間が止まった。彼だけがメリュジーヌの前にいたのでそれだけが救いだったかもしれない。
そして……。

「ちょっ、おま……！

履いてないのかよっ!?」
「「「「!?」」」」
「うん」

メリュジーヌ、剣豪にジョブチェンジしてノーパンになっていた。
正確には自分から脱いだらしい。つーか平然と答えるな騎士だろお前恥じらいを持て。

「着物って下着とかつけないんだって」
「誰に教わったのっ!?」
「え？黒歌と夜一」
「「「「あの二人かよォォォォォォ!!」」」」

ある意味予想通りの返答に盛大にツッコミを入れるが、一応知識としては間違っていない。一誠は何とは言わないがツルツルでスベスベなモノを見てしまい鼻血が凄まじいことになっているのに対し、メリュジーヌは然程気にしていないのが何ともはや。

「おい！イッセーがヤバいぞ！誰か治療出来るジョブ選んだのはいないのか!?」
「いや普通にアーシアに頼めよ!?そういうお前はこの状況で『アサシン』とか洒落になんねーぞタイガ!!」
「くっ……！同じ妖精騎士として仲間の不始末は私がつけねば！『ドクター』に私がジョブチェンジしよう！」

バーゲストが意を決してドクターにジョブチェンジするが、ぶっちゃけそれはトドメである。何せバーゲスト、長身であるがスタイルの良さもまた素晴らしい。そんな彼女がドクター……即ち医者になろうものなら。

「んっ……白衣は少し着崩せば良いけど、胸がキツイ……」

金髪でスタイル抜群な女医さん（露出少し多め）の完成。若干素が出た喋り方になったことも相まって一誠は一瞬鼻血を更に暴発させた後に気絶した。実に幸せそうな笑顔で。

「あーっ!!」
「イッセー!?卯ノ花先生、鬼道で治りますか!?」

「出来なくもないですが、折角ですから『プリースト』系のジョブになった人の『ヒール』を試してみましょう」
「ならば私だな！」
「「「「!?」」」」

声の主はタイタス。勿論衣装を纏っており、実にムキムキプリーストだ。

「「何でだよォォォォォ!!」」
「タイタス、貴方グラップラーとかそっち系にジョブチェンジしたんじゃないの!?」
「プリーストじゃなくてもいいから回復！回復!!」
「あのさ……ちょっといいかな？」

おずおずと声を掛けてきたのは流。何だかんだ流されててもいざというときは頼りになる彼ならば、と声のする方向を振り向くと、更に予想外の光景が。

「俺、ジョブチェンジ項目に『オーズ』しかなくて、なってみたらこんなになったんだけど」

タカトラバッタが基本形態なメダルのライダーと化した流。遂にお前はそこまで火野映司になったのか。

「「「「それジョブ!?」」」」
「いや知らないよ俺だって!?」
「赤と緑は良いけど腕のとこ青にして！じゃなきゃＢｕｓｔｅｒ・Ａｒｔｓ・Ｑｕｉｃｋが揃わないよ！」

「お前は何をグランドオーダーする気だノーパンドラゴン娘!!」
「しかもそれじゃコンボじゃなくてチェインになるし！ってどうでもいいわそんなん!!」

ギャーギャーやってるうちに結局アーシアが治療することになり、騒いでいた面々は卯ノ花の無言の圧力を受けるハメになった。

「「「「ごめんなさい」」」」
「よろしい」

メリュジーヌは「僕、最強種なのに……」とボヤいていたが、ウルトラ族を始めチート種族が多く存在するためもはや『爬虫類（多分）では』が頭につくことを彼女は理解出来るのだろうか。
そもそもティアマットはチキンだし、ドライグはマダオ、オーフィスは純粋無垢とドラゴンはどこかしらネジが飛んでいるのかもしれない。
それからは引き続きジョブチェンジを行ったわけだが、流の件もあるし何も起こらないわけがなく――。

「あの……何か私『ミコーン』とか言わなきゃいけない気持ちになるんだけど……」

ミオリネ、ジョブ『玉藻の前』。何故こんなジョブがあるのか？そんな疑問はオーズとかいうジョブがある時点で捨ててしまおう。
勇治がそれを見て何かを思うが、思い浮かべた人物は今日も一夫多妻去勢拳をどこぞの緑茶に炸裂させているだろう。ミオリネがそうしてこないことを祈る。

「ミオリネさんはいいじゃないですか！私なんて……私なんてっ……！」

スレッタ、ジョブ『スレッたぬき』。早い話、赤い配管工が主役の三作目に出てくるたぬきスーツを装備したスレッタである。尻尾攻撃や空を飛べたり、地蔵になって無敵状態に……アレ？強くね？
地蔵モードのスレッタをグエルが拝む光景が浮かんだバーゲストとメリュジーヌは笑いを堪えていた。

「俺達ガウマ隊は全員、グラップラーだァ!!」
「シーフとかになりたかったなぁ……」
「ちせとかやる気満々だけど」

ガウマ以下ガウマ隊は揃ってグラップラー……ダイナゼノンに乗らなくても怪獣と戦えそうである。まあ、女性も露出度が若干高めなのはアレだが。
こちらはまともだったのに、怪獣使い同盟の方が問題だった。

「「「「……誰？」」」」
「え？シズムだよ。見て分からない？」
「「「「別人なんですけど!?」」」」

シズム、ジョブ『バナージ・リンクス』。とりあえずニュータイプ的な事が出来る。見た目もそうなるので明らかに別人としか思えない。一応、性格だけはそのままなのでそこで判別……出来るか!!

「な……何でお前がここにっ!?」
「いや、俺オニジャだぞ」
「「「「違和感しかねェェェェェ!!」」」」

オニジャ、ジョブ『トレギア』ってなんつーモンにジョブチェンジしてんだお前ェェェェェ!!

「割としっくりくるな……」
「あれだな、女装したら男か女か議論が飛びそうな」

ジュウガ、ジョブ『ティエリア・アーデ』。同じメガネキャラだからか悪くはないが、さっきから個人名が何故ジョブにあるのか訳が分からない。

そして、彼女が一番の大問題。

「ここまでしたからには早く教会に行かないと」
「オイ待てェェェ!!確かにジョブと言えばジョブっぽい！ジョブっぽいけどな!!」

ムジナ、ジョブ……『ジューンブライド』。六月云々はさておき、丸々花嫁衣装。というかどうやって戦うんだとか対勇治用のジョブじゃないかとか、これを見たら確実にモルガンらもジョブチェンジするだろとしか思えないものになっている。

当然、ジョブチェンジ用のリストにこんなジョブは無い。

「で、当の勇治は何処へ行った？」
「ああ、彼なら……」

ザッ、と音がした方向を向くとそこに居たのは……。

「……空の世界の『ソルジャー』ジョブはこうじゃない気がするんだが……」

勇治、ジョブ『ソルジャー・クラス１ｓｔ』。どっかのバスターソー

ド担いだ、主役になったこともある人物まんまだった。
ここでミオリネとムジナがジョブ『花売りの古代種』を探し始め、誰かが「レジェンドのジョブに『片翼の天使』とかあるよな」とか言い出したりとやはりカオスに。つーかその二人ともう一人が揃ったら鬱展開になる未来しか見えないんだが。
徹頭徹尾まともなの、沙耶とバーヴァン・シーぐらいな気がする。特に問題にも巻き込まれてないし。
一応、他の人物の珍妙ジョブも少し見てみよう。
一誠、ジョブ『アリババ』。

「結構まともじゃね？これ」
「誰かジョブ『シンドバッド』とか持ってねーか？」

ゼット、ジョブ『ＺＥＸＡＬ』。

「シャイニングドロオオオオオ!!」
「「「何この無敵感と違和感の無さ!!」」」

モニカ、ジョブ『禁則事項です』。

「き……禁則事項です？」
「「「モニカビームありがとうございました」」」
「お前ら人の彼女に何鼻の下伸ばしてんだちょっとそこ並べ」

最後の最後でライがキレた。これは仕方ない。
その一部始終を見ていた卯ノ花とグラジー兄妹はこう語る。

「ジョブチェンジがあんな混沌としたの生まれて始めてだった」
「レジェンド様達の選択が一番無難でしたね」

オーフィス以外は確実に着せ替え人形にされるだろうと思い、レ

ジェンドの英断を讃える三人であった。

なお、バーヴァン・シーと沙耶はレジェンドらと共に食堂にいたモルガンにジョブチェンジした姿を見せたところ、「二人ともよく似合っていますよ」と撫でられて喜んでいたという。

それからアマリとルリア、アズも合流したのでオーフィス・ルリア・アルトリアによるプチフードファイト状態になったそうな。

トドメに、沙耶とオーフィスとルリアが揃ったことで記録映像にあった『うまぴょい伝説』を生披露した結果、モルガンとバーヴァン・シーが萌死してしまったのでレジェンドが部屋まで運ぶ羽目に。

今回は比較的、不憫としては軽い方であった……のだが、あろうことかどっかのグランドクソ野郎がその光景を盗み見てレジェンドを誂おうとしたことで――

息子（サーガ）が怒りで限界突破、サーガビーストに覚醒して悲惨なことになったらしい。

「マーリンジゴウジトクフォーウ！」

特別編・ウルティメイト・サマー・バカンス！

――彼らの発想は常に唐突である。

「というわけでアウギュステでバカンスだこの野郎!!」
「「「「団長いきなりキレてない!?」」」」
「お前らが『休みほしい、バカンスしたい』ってしつこいからだろうが！俺やギルは日夜大量の仕事をサーヴァいてんだぞ!?ギルはサーヴァントだが!!」
「ふはははははは!!そこでそう来るか師父よ！さすがだふはははは!!」

そう、団員の度重なるバカンス希望の願いを仕方なくレジェンドが実行し、一行は約一週間バカンスを行うべくアウギュステにやって来ていた。

なお、レジェンド他ギルガメッシュやハマーン、シグルド・ブリュンヒルデ学園長夫妻などは仕事持ち込み。まさに上司の鑑というか、ワーカーホリックというか……単にそうしないと終わらない、というわけでもない。揃いも揃ってこいつらは仕事を終わらせる速度が尋常ではないから。

さらに、当然の如く月王国組や北欧組、オリュンポス組まで混ざってる。「オメーら団員じゃねーだろ」などというツッコミは無粋だ。

「さて、俺らは艦内で涼みながら仕事だな。チョコパフェでも食いながらサクサク終わらせて昼寝すんべ」
「「「「えー!!」」」」
「黙らっしゃい！バカンス許可して連れてきてやっただけでもありがたく思え！俺達が仕事して何が悪い！というか仕事しないほうが悪いだろうが!!」

流石に今回はレジェンドが正論だ。なお、エルキドゥは駄弁れれば

何でも構わないので基本文句は言わない。

「私は一刻も早くマスターさんとだらけるため、マスターさんをお手伝いします。とはいっても差し入れしたりするだけですが」

「では、拙者は邪魔しようとする者がいないか警備に回るでござる」

「えっと……私は簡単なお料理くらいなら！」

「じゃあ私はマイロード達がリラックス出来るような香りでも風に乗せようか。男の私とは違うところを見せないとね」

プーリン＋アサシンガールズはレジェンド肯定派。カーマの言う通り、早く終わらせれば早くレジェンドとの時間が取れるのだからそっちを選択すればいいだけのこと。

アーシアは敢えてバカンス側に。というのも、オカ研＆留学組合同訓練があるためだ。訓練とは言うが以前にバカンスした時同様、遊びを含んだものなので難しいが厳しくはない。提案は例によってゲン……なのはいいとして、オカ研のためにレポートを纏めておこうとする矢的には逆に申し訳無く思うくらいだが、もう一人の顧問であるアザゼルはフェルグスやマーリン共々ナンパに繰り出す気満々。

「ホント懲りないわね……」

「紅姫の嬢ちゃん、フェルグスだけは勘弁してやってくれ。アイツは昔からああだし、何だかんだ言っても義理は通すし面倒見良いからよ……」

「心配しないで、クー・フーリンさん。アザゼルは今の立場的に駄目なのよ。堕天使総督はともかく、教職……それもオカルト研究部の顧問なんだから」

「……苦労してんな、嬢ちゃん」

オカ研メンバー及び留学組のサーヴァントも彼らに同行することになっているので、本来なら顧問であるアザゼルとそのサーヴァントであるフェルグスもそちらに行かねばならない筈なのだが……なお、

オルジュナは良い機会だからと矢的の下でレポートの書き方を学ぶらしい。件の人物よりよっぽどまともであった。

「ねえねえイッセー、僕の水着姿どう？今の僕は夏のつよつよドラゴンだよ」
「おー……いいんじゃねーか、色とかピッタリだし」
「でしょー！うーん、もっとつよつよドラゴンになったおかげでイッセーのこと食べちゃうかも――」
「食われたくねーし食われたらタイガ達も逝っちまうから向こう行きまーす」
「あーっ!?本気で行こうとしてる！ウソウソ冗談！冗談よー!!」

何やら一誠はメリュジーヌとラブコメしている。当然リアスは面白くないので、すぐさま一誠の隣まで行き腕を組――まず、一誠の腕を胸の谷間に挟むような形で改めて組み直した。

「ふおぉおっ!?」
「あああーっ!!」
「ふふん。メリュ子、貴女には出来ない方法で一誠にアプローチさせてもらうわ」
「ぐぬぬぬ……そんなぷるるん悪魔にしか出来ないことで攻めてくるなんて……！」
（いやぷるるん悪魔ってなんだよ）

変な呼び名を付けられたリアスだが、別に気にしないことにした。逆に一誠が心の中でツッコむ。
……が、そんなことよりお気付きだろうか。
この場において一誠絡み、かつ胸が絡むと怒りに震える人物がもう一人いることを。

「――束ねるは星の息吹。輝ける命の奔流」
「「……え？」」
「お仕置きを受けなさい！
約束された勝利の剣（エクスカリバー）ッ!!」
「おい待てよ悪魔に聖剣はアーッ!?」

案の定、セイバーなアルトリアであった。ちなみにウルトラ騎空団所属になった一誠ら悪魔の面々は聖剣の一撃を食らってもすぐさま消滅、とかは無くなった。代わりに物凄く痛いけどそれは仕方ない。
ちなみにリアスとメリュジーヌは一誠が盾になって無事。相変わらず土壇場で漢になる赤龍帝である。
……ついでに、射程的に他の人も巻き込みそうだったので、三人より後ろにいた団員達はピカチュウがリバウンド光線を使用し彼らではなく上空へエクスカリバーの光を反らしたことで無事だった。マジでおかしいこのポケモン。
あと、それがバド星人の円盤に直撃して爆散したけどそれはどうでもよかったので割愛。

☆

結局レジェンド達の考えが変わらなかったので、機嫌を損ねバカンスが中止にされるよりはと彼ら抜きでアウギュステのベネーラビーチへとやってきた。
まず、シェロカルテの海の家に陣取るは御存知ジャグラーを筆頭とした蛇倉苑のメンバー。加えて焼きそばを作るためにグラサン＆アロハシャツの巌勝と、ラーメン作りにねこラーメン道も参加。正しく無敵の布陣。
「すみません麻婆焼きそばとかありますか!?」
「格別の辛さで頼みたい。言い値を払おう、これでもクエストで稼い

でいるのでね」
「だから二人してキングゴールドスライムを狩りまくってたんですか……」
「「麻婆の為なら労力は惜しまない！」」
アムール（もしくはカレン）が溜め息を吐きながら眼前のスレッタとラスプーチンをジト目で見た。しかもちゃんと巌勝も作ってくれているので申し訳無く感じる。
そして麻婆の為に資金になった多くのキングゴールドスライム（命を散らした）へと黙祷を捧げるアムールであった。

ライとモニカが砂浜にシートを敷き、微笑ましくカップルらしい会話をしている時、それは目に入った。
「ねえ、ライ……あれは何かしら……？」
「うん？……あれ、何処かで見たような……」
この二人が見たもの、それはにゃんこの一種ネコ漂流。割と砂浜に近い場所を筏の上で仰向けになりながらぷかぷか流れている。何であんなとこ漂流してんだとかヒゲの生え方がオッサンだとかツッコミどころは多々あるが、とりあえずマシュに伝えたら無事救助（？）された。
ドデカい水上戦艦に。
「「!?」」
「あ、お二人ともご心配なく。あれは『超無敵艦隊シーガレオン』、エリート海兵ＵＭＩＮＥＫＯの皆さんが乗船・運用する究極戦艦ですから」
確かによく見ると多数のにゃんこが乗ってカレー食べたり砲弾用

意したり洗濯物を……。

「ちなみにドリル完備です！」

「「何その神衛隊大歓喜な水上戦艦!?」」

……そんなとんでもない戦艦を運用するにゃんこ達と日々近くで問題無く暮らしてるマシュは何なのだろうかと思ったライとモニカだったが、彼女と同時期に保護されたフォウくんがああなので無理矢理納得することにした。そもそも、にゃんこが絡んだ時点で深く考えたら負けだ。

それから海の家に行ってみたら、シーガレオンに乗ってたにゃんこの多くが寛いでおり、それに紛れて流が一緒に海軍カレーを食べていた。

「ん!!これ美味しい!!」

「「「「にゃー！」」」」

「やるなあ、ＵＭＩＮＥＫＯの皆！俺もチャレンジしてみようかな？」

……恐るべしコミュ力お化け。あれやれこれやれと仕事を押し付けられない分、下手したら本気でペガサスＡから異動してしまいそうな気もする。

「そうなったらペガサスＡ、誰がブリッジクルーになるんだろう？」

「元々大半をＡＩに任せてたって聞いてるから、案外何とかなるかも……」

――ペガサスＡの制御ＡＩであるシエル、実は勇治が無理しないよう監視することを重視しており流が異動するとそれがほぼ出来なくなるため既に流へ泣き落としていた。これも勇治がワーカーホリックなのがいけないんだ。

なお、以前はふらついていた勇治の秘孔をレジェンドが突いて気絶

させ、無理矢理休ませたそうな。平然と、かつ簡単に秘孔を突くとかいよいよ本気で何なんだあの伝説。

「ではこれより陣取り合戦ならぬ『ビーチフラッグ取り合戦』を行うぞ！……その前に一誠、その怪我どうした？」
「部長とメリュ子庇ってカリバられました」
「「……」」

ゲンにそう答えた一誠と、目を逸らす三人。ちなみに治療はナイチンゲールにしてもらった。スタイルの良いナイチンゲールの水着姿は股間に悪い（我慢させる的な意味で）。

「無理なら早めに言うんだぞ」
「はい」
「あの……ボクもやらなきゃ駄目なのかな？あまり体力に自身がないというか」
「これはシングルマッチではなくチーム戦だ。一人では無理なことも複数人で行うことに意味がある」
「のう、おおとり師範。儂、沖田と連携取る自信皆無なんじゃが？足の引っ張り合いとかにならんかのう」
「私も下手したらノッブを背後から斬「刃物禁止!!」そんなー！」
「いや当たり前だろ……」

ゲンに刀を没収され、涙目な沖田へ冷ややかな視線を向けるクー・フーリン。彼も槍を持っておらず、ちゃんとルールに則って素手のままだ。

「というか、何故私やオルタさんまで参加させられてるんですか？姉はオカ研に所属してますけど」
「こういうところで改めて姉妹の親密度を上げないと！」

「お姉ちゃんが参加するなら妹も参加する、何もおかしなところはありません！」
「アンタの頭っていう重要な場所がおかしいでしょうが」

……姉（一応）二名のおかげで無理矢理参加させられてるしのぶとジャンヌ・オルタはやる気が殆ど無い。元々二人は昨日まで依頼で数日出ていたので、今日は海の家で冷たい食べ物や飲み物を頂きながらのんびりする予定だったのだ。

だが、やる気を出させる術を用意していないゲンではない。取り出したのはとある券。

「何よそ……れ……」
「優勝チームは全員にこれを進呈する。バカンス期間中ならいつでも使用可能だ」

ジャンヌ・オルタが絶句した、ゲンの持っている券。それは――。

「海の家スイーツ食べ放題!?」

――乙女なら大抵一度は夢見るであろう、スイーツの食べ放題チケットであった。尚、協力に蛇倉苑やシェロカルテが関与しているのは言うまでもない。寧ろレジェンドやギルガメッシュが関与していないことのほうが驚きだ。

「ちょ、ちょっとそれマジ!?後で何かと理由付けて『実は使えなくなった』とか無いわよね!?」
「そんな卑怯な真似はせん。ジャグラーやシェロカルテの確認も兼ねて頼めるスイーツメニューも作成した。優勝チームにはこれもセットで渡す」
「やるわよしのぶ。どんな相手だろうと焼き潰すのみ！」
「今レジェンド様みたいな台詞出ましたね、オルタさん」

などと言いつつ、しのぶもやる気を出しているのは内緒だ。多分カナエを負かす！とか考えてるんじゃなかろうか。
――だが、忘れてはいけない。

「一緒にアイス食べようね、おかあさん！」
「悪いわね……皆、ジャックちゃんの為に散ってもらうわ」
「「「「ひいいいいい!?」」」」

バキボキと笑顔で指を鳴らす、このカナエ本気（おかあさん）戦闘モードを。ライザーを一方的に叩きのめした、あの状態である。何名かサーヴァントもビビっているし、流石あの縁壱を本気にさせた彼の継子。オカ研の決戦兵器の二つ名は伊達ではない。
今、ベネーラビーチが激震する。

「「ぐはあァァァァ!!」」
「ウソだろ!?タイタスとレオニダスさんがまとめて吹っ飛んだァァァ!!」
「ランダムチーム分けの結果とはいえ、カナエを敵に回したらとんでもないってことが説明ついたわね！」
「しかもジャックが霧を発生させることで、彼女が何処から誰に突撃してくるか分からなゴフゥッ!?」
「ソロモンが飛んだァァァ!?つーか何だかんだ言ってロマニやる気だったんじゃねーか！ソロモンモードとか！」

☆

今回は監視員やライフセーバーも多数いるということで、サーガは

ユウキとアカネを伴って海の家にいた。近くには勇治一行も……というか、勇治とカルナとコヤンスカヤの三名だけだ。ネロはディアンサ達ティクニウトリ・ショロトル&るりふぃすさやぴー合同サマーライブに飛び入り参加すべく(絶望)そちらに行っており、モリアーティは言わずもがな。そしてキアラは……。

「……」

「ねえ、サーガ君……」

「アカネ、あれは見なくていい」

「いや無理だってば。なんか少しずつ動いてるんだけど、あの上半身埋まってる下半身」

犬神家の一族ならぬ、猫縛り極上……もとい、キアラ縛り極上と化した殺生院キアラ。本来なら恵まれた身体を武器に勇治へと迫っているはずが、コヤンスカヤに止められたことで偶然そんな体勢に。どんな偶然だとかいうツッコミは厳禁。

「軽くホラーだよアレ」

「――あ、すみませんカーマさんですか?ちょっと御相談が」

『あのスケベ菩薩のことでしょう?ペンシル爆弾でも尻に撃ち込んでやれば静かになるんじゃないですかね』

「「「「えげつない!?」」」」

コヤンスカヤが電話したカーマから告げられた言葉は容赦なさすぎで殺意100%じゃ……と錯覚するような発言。

……が、ここに本気で実行しようとする者がいた。

「なるほど、キアラの尻に宝具を撃ち込めばいいのか」

「「「「カルナァァァァァ(さぁぁぁ)ァ(ん)!?」」」」

そう、生真面目故に言われたこと(と近いこと)をやろうとするカ

ルナである。これも勇治のための行動なので、欲望第一のキアラと違い悪気が無いのは言うまでもないが。

「宝具じゃなくて、平和的にネギにしようよ！ここにネギあるし」
「ユウキ!?」
「そういう問題じゃないし何で持ってんの!?」
「レジェンド様がこの間インベーダーをネギで微塵斬りにしてたから」
「「「本気で何なんだあの人は!?」」」

ネギを微塵切りなら分かるが、ネギ『で』微塵『斬り』って何してんだ元祖三大チートラマンの一角は。ちなみにノアは投げたニンジンで多重ガンダニュウム合金を平然とぶち抜き、キングはレンコンでスペシウム光線を弾けるらしい。もう何なのコイツら。

「よし……！」
「いやだから待てカルナ！ネギにエネルギー充填するなっていうかエネルギー充填出来るネギって何だ!?」

今日も勇治のツッコミは絶好調である。レジェンドに比べて迫力やインパクトは劣るが、ボケだらけのウルトラ騎空団には貴重。近頃増々ボケが増えてきたので仕事が増えてニッコリ――。

「なわけあるか!!」

☆

ネオ・アクシズのメカニック班。当然彼らもバカンスの真っ最中……のはずなのだが……。

「お嬢オオオオオ！それは駄目だって！いくら彼がティガに憧れてるからってフリーダムパックに続いてミーティアパックとかストライクフリーダムパックなんて作って3タイプ換装させようとか考えたら！」
「あの強化型メサイアバルキリーってのスペックでも限界ギリギリなのに！」
「つーくーるーのー!!」
「ゼッさんも止めてくださいよオオオ！お嬢、よくわかんないけど馬力上がってて俺らだけじゃキツイっす!!」
「よし、麻酔銃準備」
「いや何で猛獣扱い……あ、今のお嬢猛獣並だったわ」

あ、メカニックの一人が鳥になった。
――そう、VF―25をキラが喜んでくれたことによる燕大暴走を食い止めんとメカニック班が総出（？）で踏ん張っているのだ。だが今の彼女は通常の約三倍のパワーで以て己が欲望を果たさんとしている。
そこに舞い降りる正義！

「すまない！俺にもバル「却下」早くないか!?」
……正義（アスラン）、散る。先日キラに乗せてもらうことを断られ、とあるバルキリーの操縦もよりによってフォウくんに負けるという衝撃的結果に終わったアスランは再起を賭けて直談判に来たが……瞬殺であった。
「だってバルキリーの華はミサイルだよ？組み付き自爆やキック、ブーメラン飛ばしじゃないんだから」
「自爆はともかく他はキラもやってたぞ!?」
「じゃあレジェンド様専用のデュランダルバルキリー（ウルティメイトパック装備）でテストして及第点取れたら」

「あんなモンスターマシンどころかゲットマシン超えて『乗ったら死ぬ』なデスマシンなんて普通に使い熟せるのは団長だけだろう！」
「もうヅラめんどくさい!!」
「ヅラじゃない桂だ！あ、間違ったアスランだ！」

ノアのとこの長髪な攘夷志士が盛大にくしゃみをしていたが知る由もなく。なお現在専用バルキリー持ちは燕（基本強化型メサイア）、レジェンド（専用パック有りのバグスペックデュランダル）、ガトー（専用パック有りの性能ぶっ壊れＹＦ―１９）、キラ（専用パック有りの強化型メサイア）、そしてデイビット（ＶＦ―２２）の五人。面子的には戦隊が組めそうだ。

……どいつもこいつもヤベー技量の持ち主しかいねえ。

「じゃあこの白い旧式らしいバルキリーは!?」
「レジェンド様からのお願いで作ってるんだよ。何でも乗せたい人がいるんだって」
「もしや俺――」
「無いね」

バッサリ切られたアスランは思いっきり凹んだ。接近戦・格闘戦大好きなアスランにバルキリーが合うとは思えない、というのが燕やアポロンゼストの見解である。燕の方は多分に個人的趣向も絡んでいるだろうが。

……というか、レジェンドとアスランはまだ然程仲がいいというわけでもない（かといって悪いわけでもない。特に接点が無いだけ）から、乗せたいとかそうなるはずが無いのは少し考えれば分かること。

結局、アスランの願いは容易く打ち砕かれたのだった。

「育毛剤に関してなら相談に乗ろう」
「ゼッさんそれ追撃ダメージ与えるやつですよ」
「若いのに苦労してそうだもんなあ、彼。割と自分からそうなりに

行ってそうだけど」

なお、アスランはこの後カガリに回収された。

☆

ヒリュウ改――にあらず、実はウルティメイ島のレジェンドの別荘。見ていた者が戦慄するほどの速度で仕事を終わらせたレジェンド達は、他者の邪魔が入らないようにさっさとこちらへワープしてのんべんだらりの真っ最中。

ハマーンやシグルドとブリュンヒルデはあちらに残ったが、メソポタミア最強チーム及びアサシンガールズ改めレジェンドサーヴァンツ（女性陣用呼称）はもはやぐでまくり状態。凛々しさの欠片もなかった。

「エアコンの効いた部屋で敢えてふかふか毛布と敷布団に挟まれ眠る。これもまた贅沢の一つよな。ふはは」

「んへ～……」

相変わらずギルガメッシュは腕組みしつつ布団の中で笑い、エルキドゥはだらしない顔で涎を垂らしつつ爆睡。快適過ぎて暫くは布団から出てこなさそうだ。

「全く幸せそうな顔をしおって。ま、我も似たようなものか。さて……今なら我も良い夢を見れそうであるし、セイバーと挙式する夢でも見てハッピースリープするとしよう」

一方、レジェンドはリビングにてソファーで横になりつつ久々にリラックスお昼寝モード。その腹の上には幼女モードのカーマが座っている。

「マスターさん、お疲れですねー」
「おやははは、ふぁいひんれれないようれ」
「千代女さん、飲み込んでからにしましょうね」
「んぐっ……お館様、最近寝てないようで。逆に眠くなった拙者を部屋まで運んで下さったりと手間をかけさせてしまったでござる……」
「千代女も普段から寝ずの番してるからねぇ。たまには立場逆転でもいいんじゃないかい？」

レジェンドサーヴァンツが見てるのはレジェンドのアルバム。かつて歴代防衛に所属した時の写真や最近大冒険した特殊特異点でのものなど珠玉の物を厳選してある、というのでこの機会に見せてもらうことにしたのだ。

「あー……何か写り込んでますね、あの空賊三兄妹」
「英雄王殿に懸想してましたからな、あの娘」
「プーリンさん、こちらの黒と金色のツンツン頭のお二人は？特に黒い方はマスターと仲が宜しそうですけど」
「ああ、そっちはマイロードを『兄貴』って慕ってるからね。その写真のそこの娘とちゃんとくっついたよ。いやー……にしてもあの世界ではずっと前から大立ち回りしてたんだねぇ、マイロード。皆が憧れた英雄がかつて憧れた伝説、だもの」

つんつん、と指でレジェンドの頬を突付くプーリン。そういえばあの二人、ロマニとダ・ヴィンチに声似てたなー、と考えながらあの特殊特異点でのことを思い出す。

「貴重な体験したなぁ……マイロードと英雄王がゼットとエルキドゥにスノーボード代わりにされたり」
「どういう状況ですかソレ」
「皆がタイニーブロンコで移動してるのを大型クルーザーで見下ろし

ながら見ていたり」
「それ相当意地悪に思われたのでは？」
「マイロードと観覧車デートしたり」
「「ちょっとそこ詳しく!!」」

女三人寄れば姦しいとは言うが、とりあえずレジェンドがカーマの真下で寝てることを配慮してあげてほしい。
騒ぎ出した彼女らの影響なのか、それとも普段のストレスの蓄積からか……寝ているレジェンドの顔色が悪いことに彼女らが気付くのはそれから少し経ってからであった。実に不憫（？）。

☆

初日にして色々あったが、夕食の時間。
バカンス組は当然、浜辺でバーベキューメインの豪華な夕飯だ。そこで幅を利かせているのはまさかの――。

「いいかお前ら、肉だけでなく野菜や魚も食え。感謝をしつつな。それから、兄弟の国じゃ『頂きます』って言って食事を始めるそうだ。命を頂くことに感謝するのは良いことだ、忘れるなよ」

――まさかのテスカポリトカ。『死は喰うもの、生は捧げられるもの』というスタンスだけあってそういうところはきちっとしているらしい。

「うむ！テスカポリトカ殿の言う通りだな！彼らが俺達の血肉となってくれるからこそ、今日の自分より明日の自分は強くなれる！」
「良いこと言うな、兄弟。そう、こいつらの死を喰らい、俺達はまた一歩先に進むのさ。というわけで頂きます」
「「「「頂きまーす!!」」」」

表現がちょっとばかりアレな気がするが、それでも割とマイルドな方だったので良しとしよう。

「すみません、私達がまだ参加していなかった前回のバカンスではマグロのお刺身が出たと聞いたのですが、今回は無いのですか？」

「ああ、バコさんが捌いたアレな。あのマグロはそうそう水揚げされる代物じゃねえから、こないだのはラッキーだったんだよ」

オルガの言葉にセイバーアルトリアがガーン！と効果音が聴こえそうな程にショックを受けアホ毛がしおれてしまった。ここにレジェンドなりギルガメッシュなりいれば指パッチン一つで出してくれそうなものだが、生憎彼らはウルティメイ島のレジェンドの別荘にいる。

「にゃー」

「……おや……？」

気落ちしているセイバーアルトリアのところへやってきたのはシーガレオン搭乗員たるＵＭＩＮＥＫＯの一匹。どうやら彼女を見かねて海軍カレーを持ってきてくれたらしい。

「……ふふ、ありがとうございます。頂きますね」

「にゃ！」

――この後、すっかりＵＭＩＮＥＫＯ海軍カレーの虜になった彼女が流やＵＭＩＮＥＫＯ達と共にそれを食べまくっている光景を度々目にすることになるのは言うまでもない。

「アナスタシア、貴女もこのカレーの美味しさを知るべきです」

「確かに美味しいでしょうね。でも私はこのラーメンこそ至高だという意見を変える気はないわ」

……何故か『ＵＭＩＮＥＫＯ海軍カレー派』セイバーアルトリアと『にゃんこラーメン派』アナスタシアによるバトルが勃発するようになったのは予想外だったが。
……ちなみに。

「うむ、このネコカンは前代未聞の美味である。一口食べただけでキャットの毛並みと精神状態がとてもよくなったぞご主人。恐るべしにゃんこ達の御馳走缶詰」
「にゃー」

タマモキャットがネコカンに興味を示し、食べてみたところ一発でハマってしまったことはある程度予想出来ていたことである。ついでに白黒姉妹とハク＆フウ、あとイーウィヤも……。
ってかイーウィヤ、お前六龍六龍言ってる割に立派に猫してんじゃねーか。

☆

一方、レジェンドの別荘でも豪華な夕飯タイム。今回は何とも珍しいことにギルガメッシュが厨房メンバーに入っていた。レジェンドとエルキドゥは揃って料理することが多いものの、ギルガメッシュはあまり料理しない。無論、出来ないのではなく彼は基本饗される側だからなのだが。

「ギルがこっち側ってことはデザートはアレだな？」
「うむ、アレよ。今やかつてのメソポタミア料理を完全に再現出来るのは我等三人しかおらぬからな」
「一応エレシュキガルも作れるだろうけど、彼女が作るとしたらタイガが絡まないとダメっぽいし」
「おまけにイシュタルはつまみ食いして仕置きくらうだけだ。つーか

あいつ、こないだ逃げてきたときに俺が仕舞っといたプリンアラモード食いやがった。後で日本地獄行ってアロガントスパークかましてやる」

……何か最後ヤベーこと言い出している光神がいるんだが。

それはそれとして、別荘にいるのはレジェンド一行以外に北欧・オリュンポスの一部メンバー、他にもチラホラといった感じ。

厨房班はジャグラー達蛇倉苑メンバーが不在の為、レジェンドを筆頭にギルガメッシュとエルキドゥ、北欧からスカディとオルトリンデ・ヒルド・スルーズのワルキューレ統率個体三姉妹、オリュンポスからエウロペとアデーレが参加。

何故この面子に月王国メンバーがいないのか？それは女王も先代女王も妖精騎士も、揃いも揃ってバーベキュー側にいるからだ。大体はるりふぃすさやぴーが原因。

「時に師父よ、バカトリアはどうした？」

「あいつもモルガン達と一緒にバーベキューの方へ行ってるぞ」

「店長達があっちにいたからだね。よく考えればそうなったらこっちではレジェンドが料理する可能性高くなるってことぐらい分かると思うんだけどなぁ」

「言うな、友よ。故に奴はバカトリアなのだ。重大な場面でなければ欲に負け、浅くしか考えぬからな」

キャストリア、散々な言われようである。

レジェンド達の夕食は基本ビュッフェ形式。というのも調理人数と団員総数の関係上、一人分ずつ作ると到底間に合わないからだ。時間をバラけて来るならその限りではないが、その場合は大抵朝昼夕から外れた時間に来る面子などそれこそ特殊なケースに限る。

今回は大半がバーベキュー側の為、加えてそこそこ厨房の人員が

揃っていたことも重なり想定していた以上に自由なメニューが作れた。
そして更に、予想外の戦力が加わってくれたのだ。

「よし、良い出来だ。皆、焼けたぞー！」
「待ってました！エース兄さん！」

そう、ウルトラマンA（エース）こと北斗星司がゼットの様子を見に来るという名目でウルトラ騎空団を訪れていた。その立場ゆえ、月王国に店舗を構える『北斗のパン屋』のオーナーとしてはほぼ名義貸しの体になっているものの、ウルトラマンとして貴重な『料理が出来て、しかも美味い（上手）』というのは伊達ではない。
広範囲に広がる焼き立てパンの香りは一朝一夕で出せるものではなく、その腕前が年月の積み重ねによって培われたものであることを物語っている。

「これが北斗のパン屋の元祖……！見た目も匂いも既に普通の菓子パンとは風格が違うぜ！」
「君達がリクエストしたグラタンコロッケバーガーも出来てるぞ」
「だって、凱！」
「ああ！ありがとうございます、北斗さん！」

敢えて店長達が作ってくれているカツ関係を除いたハンバーガーをリクエストした凱と命。レジェンド直属の組織となったＧＧＧメンバーとウルトラ兄弟はそこそこ顔を合わせることがあるため、北斗とも割と親しい部類に入る。

「ゼウスです。ヤバいです。彼の焼いたパンにエウロペの作ってくれた玉子焼きをサンドしたら半端ない美味さになって語彙力消失しそうです」

何処その異聞帯の大神は是非見習ってもらいたいぐらい、幸せな表情で玉子焼き入りバターロールを頬張るゼウス。エウロペも幸せそうで何より。

「ねえ、デメテル」
「何かしら？」
「このパンの作り方とか、焼き方とか……食べてみて解析出来る？」
「厳しいわね。そもそもただ作るだけならそこまで難しくはないのだけれど、隠し味的なものがどうしても分からないの」
「そう……仕方ないか。こうなったら私の身体の柔らかさをパンに見立てて――」
「待ちなさいアフロディーテ。自分なりのパンか、せめて料理のカテゴリで攻めなさいな」

……デメテルはともかく、アフロディーテが何やら年齢制限に引っ掛かりそうなことをしでかそうとしていた。かくいうデメテルも少し前の召喚イベントで真っ先に身体を差し出そうとしていたからアフロディーテをどうこう言える立場ではない。

「あの、スカディ様」
「どうかしたか、スルーズ？」
「えっと……今のブリュンヒルデお姉様はそうなってないみたいなのですが……人間とそういう関係になったら神性が下がると――」
「相手が我が伴侶のように最低でも神以上ならば問題あるまい。ふふん」

ドヤ顔で言い放つスカディにスルーズは若干引き気味。というか何かバレてないか。オルトリンデもヒルドも耳ダンボ状態だし。
まあ理由に説得力はある。神以上なら大丈夫なのか、スカディが例に挙げたレジェンドならどうにかなる（もしくはどうにでもしてしま

う）という意味なのかは不明だが。
……ところで。

「チキチキ予定外召喚！気分が乗ったからやるぞー！」
「ふはははははー！」
「いえーい♪」
「「「何でこの人達いつも唐突なの!?」」」
何かレジェンドがギルガメッシュとエルキドゥ引き連れて始めるらしい。

「え……カルデアでもないのにどうやって召喚――」
「んなもんこうして作りゃいいだろ」
パチン！とレジェンドが指を鳴らすとカルデアのシステム・フェイトと全く同じものが現れた。もうヤダこのチート光神。

「「「「えええええ!?」」」」
「何で!?どうやって作ったのソレ!?」
「その場のノリ」
「ノリで作るレベルじゃないからね!?」
バーベキュー側だと団長さんがいないから、と残っていたダ・ヴィンチちゃんすら本気でツッコミを入れる始末。だが忘れてはいけない。メソポタミア最強チームに常識は通じないのだと。

「尺の問題もあるし巻きでいくぞ」
「うむ、フレポガチャやルピガチャではない課金制ｏｒチケット制のレアガチャならランダムでも壊滅的な結果にはなるまいよ」

ものっそいメタな理由に加えて相変わらず召喚をガチャ呼ばわり。強ち間違いじゃないだけ文句のつけようにに困るというか……。

そうこうしているうちにレジェンドがヒョイと聖晶石を投げ入れた。召喚サークルが回りだし、金色の輝きを放つ。

「お、悪くなさそうだな」

「パールヴァティー来たらスパーキングしますから。パールヴァティーを」

「そっちを!?」

「さて、誰が来るのやら」

「越後の龍、毘沙門天の化身！長尾景虎です！とりあえずお酒あったら出してくれると嬉しいです！」

「……誰だコイツ」

ドンガラガッシャァァァン!!

レジェンドの一言にギルガメッシュとエルキドゥを除き、たった今召喚されたばかりの景虎までド派手にズッコケた。

「師父よ、奴はアレだ。にゃんこにおったであろう、戦国バサラーズでマシンに乗った廓言葉の」

「ああ……上杉謙信の初名か、長尾景虎」

「そうですその長尾景虎です！知ってるじゃないですか！確かに私は人でありながら人を知らない変人ですが――」

「バカかお前は。どんな万能な人間だろうが人間の全てを知っている

わけがないだろう。何か？お前はこれから生まれてくる人間全ての一生を年表の如く書き記せて全て的中させられるとでも言う気か」

レジェンドにピシャリと言われ、召喚された美女――景虎とはポカンとした。自分が普通じゃないのは自分が誰より分かっている。だがまさか会ってまだ数分の存在に言い負かされるのは初めてだ。

「ええっと……貴方、人間ですよね？」

「え、違うけど」

「師父は毘沙門天よりも遥か上位の存在よ。あらゆる神仏が頭を垂れて跪く程のな」

「……何なんですか、ここ」

彼女の言葉はご尤もである。ゼウスとか玉子焼きサンドをむぐむぐと頬張りながら見ているし、フォウくんピカチュウはまだしもにゃんことか最近よく見かけるし。

そんな光景を見て、彼女は衝撃のあまりこう叫んだ――。

「にゃー!!」

「「「「!?」」」」

北欧組やオリュンポス組は驚いたが、レジェンドを筆頭とするウルトラ騎空団……特にレジェンドと近しい者には大して効果は無かった。伊達に白黒姉妹や夜一、各種グランド猫にダーントの師匠の猫達、そして騎空団自体で飼ってる猫ににゃんこ軍団と猫だらけの中で生活しているわけではないのだ。

改めて見ると猫多過ぎだろこの騎空団。

「まあいいか。あと一人だけにしておこう」

「えーとマスター、お酒下さい」

「馴染むの早いのはいいが図々しいなオメー」

さっきまでの雰囲気は何処へやら、レジェンドのコートを引っ張りおねだりしてくる景虎。猫のように気まぐれというか、どんだけ酒飲みたいんだ。

仕方ないからと最近販売を始めたウルクサワーを見せたらパァッと笑顔になっていきなり膝に乗っかって飲み出した。というかそれをやると毎度毎度レジェンド大好き女性陣が嫉妬するのだが……それより一応武田の勢力に属していた千代女が物凄く景虎を見ているが大丈夫なのかこの『にゃー』大名。

「凄く聖晶石投げにくいんだけどこの体勢」

「あ、私のことはお構いなく！」

めっさ近い。恋愛とか無縁そうな台詞言ってたが湿度が高いなコイツ、なんてレジェンドは考えながらやっとこさ聖晶石を投げ入れた。今度も金回転だ。

「悪くない……と、思いたいが」

「晴信だけは呼ばないで下さい。叩きのめしたくなってマスターとの時間が減りますから」

「「「「すっごく物騒な事言ってる上にその行動分かっててやってるじゃん!!」」」」

「あはははははっ！」

酒が入って上機嫌な景虎は笑って流すだけ。取ったもん勝ちとはよく言ったもんだ。

で、肝心の結果は――。

「雑賀の蛍。雑賀孫一でもいい。雇用は条件にもよるけど、三食お昼

寝おやつ付き、あと出来れば住むところもほしい。それから……」
「……今度はオーフィスと誰かを合わせたようなの来たな」
「我らはブラック企業ではないからな、そこは安心するがよい」

何やらちまっとした美少女が召喚された。雑賀孫一とも言っていたから蛍という名前とどちらを呼べばいいか悩んだが、「マスターは蛍、他の人は孫一か雑賀で」と本人が言ったのでそう呼ぶことにした。

「もしかして今ご飯時？」
「そうらしいですねー。あ、私は長尾景虎です。同じくたった今マスターに召喚されたばかりですよー」
「長尾……上杉謙信？」
「はい！越後の龍、軍神こと長尾へべれけ！あ、間違った景虎です！」
「間違ってないよな、へべれけ」
「何でそんなこと言うんですかー！にゃー！」

マジで虎じゃなくて猫じゃねーか。漸くアサシン以外が来たかと思えば癖のあるランサーとアーチャー……アレ？これそれぞれエルキドゥとギルガメッシュが普通に呼ばれた場合のクラスじゃね？とかレジェンドが思っていると蛍が雇用契約書を欲しいと言い出したので、とりあえず重要事項を記したものを渡してみる。

「……私の要望が全部通ってる。しかも銃持ちの大型機兵の貸与（功績次第での正式授与有）……その他、蛇倉苑の限定メニューの注文自由、各種施設利用料金特安、しかもサーヴァントに限りその施設にマスターが関係する場合は更に割引などなど……おおー……！」

目をキラキラさせながら雇用契約書をじっくり眺める蛍は微笑ましい。景虎などそれを聞いて「お酒安くなります!?」と聞いてきた。可愛いのは良いとして、飲ませたのがウルクサワーで助かったと思う

レジェンド。普通の酒だったら絶対酒臭いだろう。

「マスター、終身雇用による特典とかはある？」
「んー？範囲拡張して惑星レジェンド及び所属衛星その他でも適用されることだとか、あとは……うん。蛍の場合、俺の家に同居が基本になるな。で、俺の家や別荘こんな感じ」
「……城!?」
「やー、俺の本来の姿基準だから普通の城よか全然デカいだろうな。あとだだっ広い地下施設もあるし」
「終身雇用契約でお願い」

即答だった。レジェンドやギルガメッシュ相手に物欲があるものはまず勝てない。まあ、二人の気分如何で決まることはあるが、財力において彼らは無敵過ぎる。
兎にも角にも契約成立、ちょうどご飯時だったため早速蛍もご飯タイムに参加。……景虎？既に飲みまくってますが何か？

「よし、どんどん空けましょう！」
「その前にマスターさんの膝から退いてください新入り。サンモーハナしますよ？サンサーラがいいですか？」
「おおー……！この機兵、なんて名前？」
「ガンダムサバーニャ・タイプE、僕の専用機だよ。ホルスターもビットだから撃ちまくり天国のトリガーハッピー状態さ。出て来ないかなー、イシュタルインパクト」
「ふはははは！エルキドゥ、そんなものが出たらすかさず我のフェネクス・タイプGが虹の翼で完全分解してしまうところよ！いや待て、ビーム・マグナムで全身狙い撃ちも捨てがたいな……」

そう遠くない未来、彼らは数多の特異点や世界にてさらなる出会いや、無論別れもあるだろう。それでも彼らは歩みを止めることはない。

「何……!?ロールアウト前だというのにバンプレイオスのプラモがRGモデルで発売!?予約は……まだ間に合う！即刻申し込まねば!!」
「よもや噂の大神がここまで愉快だと誰が思うだろうか……」
「スカディ様もゼウス様の事を言えないかと……」
「スルーズ、一ヶ月ギャルゲー禁止」
「!!」

少なくとも彼らには、全ての思い出が忘れることのない悠久のものだろうから。

――おまけ――

「……お母様、姉様……」
「どうしました、沙耶」
「……北斗のパン屋のオーナー、今先生達の所でパンを焼いているみたいよ」
「な……!?」
「お母様！沙耶！田舎妖精が有り得ない速度でかっ飛んで行った！」
「メリュジーヌは……ダメね。いつ飲んだのか酔っ払ってよわよわドラゴンになって一誠の足にへばり付いてる」
「くっ……バーゲストは空のガウェインと良い雰囲気で邪魔することは憚れます……！」

勇治を除く月王国の面々は急ぎレジェンドの別荘へと向かうも――。

「――むぐ？」
「やあ、キャストリアちゃん」
「うわあああああん!!」

既にパンは新顔の蛍と、そしてあろうことかまさかのミライによってすっかり食い尽くされていた。
蛍はともかく、ミライは全然北斗のパンを食べる機会が無かったしこれからも難しそうだからと、この機会に食い溜めておいたらしい。
哀れキャストリア。……と、月王国の面々。

――も一つおまけに――

「ふっ……」
「お……お嬢、まさか……」
「ミーティアパックもストフリパックも駄目だっていうならと、パーフェクトストライクフリーダムパック作ったよ！二つ作るのを一つに絞って全部乗せてんこ盛り状態にしたんだから文句無いよね！さすが私！」
「何で一番ヤベーやつ作ってんのォォォ!!」
「あ、フリーダムパックはアメイジングストライクフリーダムパックにレベルアップさせといたから」
（（（（駄目だ……バルキリーが絡んだら誰もお嬢を止められねぇ……!!））））

後日、シミュレーターにてラクスの歌をバックにゲペルニッチの本体を蹂躙するメサイアバルキリーがいたという。

特別編・サーヴァントを呼ぼう！オカ研編その1～レジェンドは不憫光神である～

皆さんお忘れではないだろうか。

オカルト研究部部長であるリアスはまだ女王・騎士・戦車・僧侶・兵士がそれぞれ一人しかいないことを。

女王は当然として、兵士の一誠も駒８個分だから仕方ないとしよう。それを差し引いても騎士・戦車・僧侶がそれぞれ後一人ずつは欲しい。

しかしながら、現在無期限中止状態のレーティングゲームは再開の目処が立っておらず、代わりに『三大種族関係者でなくとも参加可能な新レーティングゲーム』をソーナが提唱し始めている。それに備えて少しでも手札を用意しておきたいのはレーティングゲームに関わる全員が思うところだろう。

新レーティングゲームでは問題視されている『悪魔の駒』の役割ではなく、ゲーム毎にポジションを割り当てる『編成システム』を採用するらしい。

それによって今までの駒が無意味なものになってしまうのでは、という懸念もあるためそこを調整中だ。

そういうわけで、リアスは上記に加えて兵士七つ分、そしてソーナは兵士三つ分の駒のメンバーを補充することが可能となる。

……とは言っても、理由が理由だけに参加してくれる人物を探すのは大変手間がかかるし、異世界修行も行いながらでは機会も限られるだろう。休む時間や自由時間も大事にしたい。

そこで沙耶が提案したのが、月に出来た比較的新しい組織である『人理継続保障機関フィニス・カルデア』の『守護英霊召喚システム・フェイト』による英霊召喚。

何でもヤプールと、例によってレジェンドまで絡んで完成したらしい。本来ならば記念すべき最初の英霊召喚はレジェンドが行うはず

だったのだが、レジェンド自身「いや俺一人で何でも出来るから別にいいや」と簡単に召喚権を放棄。
加えてモルガンの「我が夫には私がいるのでサーヴァントなど不要です」という意見や、アルトリアの「ほら私『キャスター』ですし？もうレジェンドの最愛の英霊は私でいいじゃないですか。ちゃんとパートナーですし」との言葉で結局流れてしまったのである（御存知とは思うが、彼女らはサーヴァントではない。月星人だ）。
まあ、そんなわけでヤプールが真っ先に召喚することも躊躇ったため、どうしようかと今までズルズル来たわけだが先のリアスらの話を聞いてこれ幸いにと提案した。

☆

「というわけでやってきました月王国（ルナ・ブリテン）～。ちなみに本日モルガンは故あって早退しました」
「え、何で？あのレジェンド様ＬＯＶＥな先代女王が早退って……」
「俺が保護してたハベにゃんがどうやら知己の人物だったらしくてな。会わせた直後に無言で涙しながら抱きしめちゃったもんだから、空気の読めるレジェンドお兄さんはハベにゃんの月王国へのお引越しも兼ねて二人でお話させてあげることにしたのだよ」

ハベにゃんとはハベトロットのことであり、旧名はトトロット。まだモルガンがトネリコだった頃の友人なのだが訳あって記憶も何も失った状態で惑星レジェンドにいたという。そこで暫し過ごした後、モルガンから話を聞いていたレジェンドが試しに連れてきたところ、前述の通りになった上に記憶まで戻ったという奇跡（ミラクル）が起きたわけだ。
なお、ハベトロットのお仕事は簡単に言うと衣装作り。実は以前映画撮影でレジェンド一家の使った衣装はいずれも彼女の渾身の逸品。今頃それを聞いたモルガンが同じ雰囲気の服を強請っているかもしれない。
それはさておき、沙耶の提案によるカルデアでの英霊召喚。実は希

望者が殺到した為、何回かに分けての実行となった。初回はリアスらオカ研メンバー＋α。説明各種やトラブルシューティングにレジェンドとアルトリア、ヤプールに妖精騎士三人、そして発案者の沙耶。

ウッドワスはモルガンとハベトロットの為の空間を用意すべく奔走、ミオリネはスレッタを含む面々と共にペガサスＡに突撃。後者はどうやって嗅ぎつけたのかムジナとそれに引き摺られてる怪獣使い同盟＋ガウマ隊＋グリッドナイト同盟（つまりその三チームはムジナ以外全員が引き摺られてる）まで合流。

流は婚約者が目覚めた時を夢見て現在までの冒険の内容を執筆中……あれ？今回まともだぞ火野映司２ｎｄ　ＩＧＮＩＴＩＯＮ。

ライモニは月王国に着いたら揃って別行動。おそらくデートだろう、と誰かが溢した途端に何処からともなくレオスが現れ二人を追っていった。何がしたいんだアイツ。

そんなこんなでヤプールの先導により英霊召喚ルームに到着した一行を待っていたのは――。

「やあ諸君！はじめまして、こんにちは、久しぶり！皆の大好きなマーガゴッ!!ぶふぉっ!?」

「おい誰だァァァ!!コイツここに通したの!!もうやる気無くなっただろーがコルァほら撤収だ撤収」

「「「「いや待って帰らないで!?」」」」

よりにもよって、レジェンドが見たくない人物の中でも上位にランクインする花の魔術師（グランドクソ野郎）が何故かスタンバっていた。さっきの音はレジェンドのぶん投げたゼットが、スーパー頭突きの体勢でマーリンの顔面に激突した音である。ゼットスラッガーが良い仕事をしたようだ。

「だってさァ……サーガから聞いた話じゃ俺がモルガンとバーヴァン・シーをレジェンドキネシスで支えながらおぶって部屋まで送ったことを誂おうとしたらしいし、それ以外にも余罪がスフィア宜しくモリモリ出てくるしでコイツが直接絡んでくると良いことなんて一つもないんだけど。例えて言うなら最低☆３×１０の☆４×１は保証されてる１１連ガチャで☆１×１しか出ないくらい最悪な感じ」
「最低以前に個数すら合ってねーじゃん!!え？何この人そんなに最悪なんスか!?」
「は？お前お母様と光神様笑い者にしようとしたわけ？ふざけんなよマジでそのモッサリした頭丸刈りにしてやろうか、あ？」
「さり気なく姉様も馬鹿にしようとしてたわね。丁度いいわ、アルテミス要塞で鍛えられた対変態格闘術でも試してやろうかしら」
「見事に私への印象が最悪みたいだね……そりゃあ千里眼を使って様子見してた時に偶然そっちのアルトリアの脱衣シーンを覗き――」
「くたばれゲス野郎!!」

――見しそうになった、と未遂だったのだがアヴァロン状態のアルトリアの神聖剣ウルティメイトカリバーン（レジェンド作・アルトリアいわく愛の絆）による一撃が炸裂。マーリンは意識を刈り取られた。
唯一ヤプールだけは穏便に済ませようとしていたが、バーゲストはすぐさま警備隊を手配し、メリュジーヌはマーリンの足を掴んでズルズルと表に引き摺っていく。どんだけ信用ないんだよコイツ。
どうせ逃げるんだろうが、警備隊へマーリンを引き渡したメリュジーヌが戻ってきてから簡単な説明が行われる。どうやら一体化した相手が魔力持ちの場合、ウルトラマンも相手の魔力を利用することで召喚が可能になるとのこと。ゼットならレジェンド、トライスクワッドなら一誠といった具合に。
魔力を利用……と言っても直接使うわけではなく、本人に適した英霊選抜を行うための情報をフェイトに送るために使う、言わば電話や

ネットの回線みたいなもの。よって極小で済むので魔力量の少ない一誠でも問題はないのだ。
ただ、完全な形になったとはいえ一度も慣らし運転をしていないのでとりあえずは一人一回ずつということで決定。ここでレジェンドが今回最初の不憫……魔力のないカナエの分まで負担するということになる。それはよかったのだが……つまり、魔力があろうがなかろうがレジェンドのを使えばいいとなってしまい疲労が必要以上に蓄積される羽目になった。……あ、マーリンと遭遇したことで既に不憫だったか。

「ふざけんなバカヤロー」

アーシアやアルトリア、バーヴァン・シーらが必至でレジェンドを慰めてあげたのは納得して頂きたい。

さて、いよいよ英霊召喚だがそれには呼符や聖晶石なるものを使う。しかし当然開発者であるヤプールや直接関係してるレジェンドぐらいしかこの場では持っていないので――。

「「「「……じぃ～……」」」」
「お前らいい加減にしろよコノヤロー。俺は財布でも石の貯蔵庫でもねーんだよォォォォォ!!」

やっぱりヤプールではなくレジェンドに視線が送られる。しかもオロオロしてるバーゲストはいいとして、メリュジーヌまで参加する始末。更に今回はサーガがいないので止めるのに一苦労。
例のごとく献身娘達の頑張り、そしてコストはヤプールと折半する

案で一先ず落ち着いたレジェンドであったが、今度はこっちで問題が発生。
その理由が――
「いつまでグダグダやっている。この我(おれ)が財をくれてやるのだ、さっさとやらぬかうつけ共」
「「「「誰ェェェェェ!?」」」」

光り輝く玉座に座って左手で頬杖をつき、尊大に振る舞うレジェンドの姿。いやマジで何があったの。
「いや、どうしてそうなったの？スレたの？スレジェント？」
「たわけ、民草に財を擲つのが王。ならばその王を愉しませるのは民草の責務よ。良きリアクションを期待する」
(((((性格変わり過ぎィィィ!!)))))
「そら、所望の聖晶石だ。受け取って各々のサーヴァントを呼ぶがいい。尤も、我の弟子であり友であり……そして我が子とも言える者は呼べぬだろうがな。フハハハハハ!!」

空いていた右手の指をパチンと鳴らすと、リアス達の目の前にドッサリと聖晶石が落ちてくる。マジで誰だコイツ。アーシアやアルトリアなどは「ストレスのあまりレジェンドがおかしくなってしまった」と自分達のケア不足を嘆いているが、バーヴァン・シーは熱っぽい目で見ている。どうやらこの状態のレジェンドはより彼女のハートに突き刺さるらしい。
もうこうなったらやるしかない、と真っ先に名乗りを上げたのはや

はり部長のリアス。

「ほう、やはり貴様か『脱げまくりプリンセス』。略して脱げプリよ」

「誰が脱げプリよ!?」

「フハハハハ！脱ぎまくりの間違いであったか！惚れた男の隣で毎晩キャスト☆オフしているのだからどちらでもよかろう！……やっぱ疲れるわこの喋り方と態度。アイツに反面教師として見せたけどモロ受け継いじゃったんだよな。育ての親として反省せんと」

「「「「元に戻ったァァァ!?」」」」

唐突に元のレジェンドに戻ったことに混乱と安心がゴチャ混ぜになる一行。バーヴァン・シーだけはちょっと残念そうだ。というかリアスの癖の一端が盛大に暴露されたわけだが……一先ずスルーしてもらいたい。

「各員手順は頭に叩き込んだな？これから呼び出すのはお前達のサーヴァントだ。俺は問題が起きたときだけ対処してやるから、あまり当てにするなよ。まあ召喚で問題が起きるなんて殆ど無いだろうが」

寧ろレジェンドがいることで恐怖のあまり英霊側が萎縮して召喚に応じないとかそんなとこだろう、問題があるとすれば。

「さあ脱げ☆プリよ！さっさとその石で召喚サークルを起動させるがいい！」

「いい加減その呼び方やめて頂戴！しかも何か悪い意味で進化してる気がするし！」

聖晶石を使い、装置を起動させると途端に凄まじい反応が起きる。

「な……何!?」

「まさかいきなり失敗とか!?」

「んなわけあるか。しかしまあ一発目から凄いの来るぞこれは」
「マジでございますか!?」

相変わらず玉座で頬杖をついて若干気怠げなレジェンドの言葉に、誰もが期待を込めて輝くサークルを見つめる。そして凄まじい光が一瞬強くなった後、そこにいたのは……。

「良いよなあ、この『るりふぃすさやぴー』！僕が熱中出来るのはマギ☆マリぐらいかと思ったけど想像以上じゃないか！どの娘も可愛くて頑張ってるけど僕としての推しはやっぱりセンターの沙耶ちゃんかな、うん……え？」

何かドルオタでネットいじってる、新しい勇治ボイスの色黒が召喚されてた。

「……」
「「「「……」」」」
「あ、こいつソロモンじゃん。魔術王ソロモン」
「「「「えええええ!?」」」」

双方気まずい雰囲気になりながら、少しの沈黙が場を支配していたがレジェンドがあっさり真名をバラして大絶叫。古代イスラエルの王であり、ソロモン72柱と呼ばれる悪魔を使役したとされる魔術王。そんなものをリアスは呼び出したのだ。

「え!?初対面なのに僕の名前バレてるの!?しかも全然気にすらしてな

さそう！ってここカルデア!?ちょっと待ってカルデアは滅んだはずだし僕も巻き込まれ……駄目だ情報量多すぎて何から手を付ければいいか分からない！教えてそこの偉い人！」
「お前だってその偉い人だろうが。後でまとめて説明するからリアスの後ろでネットやっとけ」
（（（（かの有名過ぎる魔術王を物凄く雑な扱い――!?））））
「あれ!?もしやあそこにいるのはるりふぃすさやぴーの沙耶ちゃんかい!?じゃあここはるりふぃすさやぴーの世界なのか！ということは二人も――」

……能力的にもそうだが、性格的にもヤベーのかもしれない。そもそもまともな性格だとキャラが埋もれそうな気がするくらい濃いメンツが揃ってるけどな、オカ研。

「彼、本当にソロモンなのかしら……」
「マジだぞ、ドルオタだけど。ちなみにマギ☆マリというのはさっき引き摺られていった――」
「はい！ではちゃきちゃき行きますよ！次！」

一応当たりを引いたリアス。レジェンドがとんでもないことを口走ろうとしたのをアルトリアが滝汗流しつつ強引に終わらせ、次に英霊召喚を行う朱乃を呼ぶ。そしてリアスと同じように聖晶石を使い、召喚サークルを起動。
その結果来たのは……。

「わーっはっはっはァ!!いよいよ受肉！顕現！降臨！第六天魔王織田信長の凱旋じゃあああ!!長かった！実に長かった！だって地獄からどうにか出ようと考えてるときに限ってあの鬼神から『バカなこと考えるな』とか言われるし！せめて上司に話してくれてもいいじゃろ!?わしの言葉を聞けばその上司もイチコロに――」

「やってみろ大うつけ」
「ぎゃっふァァァァァ!?」

織田信長、またも有名なのが出てきた……のはいいが、何故に女性なのかとかいやにハイテンションだなとか、結局ソロモンと同じく中身の方が大分問題ありのようだ。なお、予想通りだろうが彼女の言っていた鬼神と上司とは即ち鬼灯とレジェンド。閻魔大王?知らんな。

「誰がイチコロだ言ってみろ」
「じゃからあの鬼神の……もしかして」
「俺がその上司だよ尾張の大うつけザル」
「ちょい待てェェェ!!サルが!サルが混じっとるじゃろ!?前半部分はまあ是非も無しとして……いやいや無くないぞ!わしは――」
「やかましい。尺の都合もあるんだし、朱乃の後ろで黙ってろ」
「この人でなしー!!」

バーゲストによって引っ張られていく信長。とりあえず躾は朱乃に任せることにしよう。別の部分で覚醒してしまいそうな気もするが。

アルトリアも楽しくなってきたのか「次の召喚!次の召喚!」と急かしている……アヴァロン状態で。色々シュールだ。

次は祐斗。多分彼に関してはセイバーかバーサーカーが来そうな気がする。早速サークルを起動。

しかしてその結果は……。

「サーヴァント、ランサー参上したぜ。まあ仲良くやろうや、マスター」
「「「兄貴属性キターッ!!」」」

祐斗が呼び出したのはランサーのクー・フーリン。『クランの猛犬』

と呼ばれたアルスターの英雄。またも有名所を呼び出すとは凄いぞオカ研。

「この感じからしてマスター達の何人かは人外か。見た目もそれっぽいのがいるし……つーかあそこの金ぴかならぬぴかぴかは何もんだ？まるで勝てる気がしねぇ」

「神様とは別格の光神様です。ところで人外って……私も？」

「ん？そりゃ当然だろ」

「ガーン!!」

クー・フーリンは言い淀むこともなく、ハッキリとカナエを人外扱い。初対面なのにそう言われてますます凹むオカ研最強女子。

「カナエがあの調子じゃ召喚後回しだな。次は（俺の）本命のアーシア！あの娘はクるなこれ。確実に」

レジェンドが明らかに当たりを確信しているアーシアの召喚。想い人に期待されてるとあって若干緊張気味だが、サークルを起動させたら後は野となれ山となれ。

彼女が呼び出したサーヴァントは……。

「ルーラー、ジャンヌ・ダルクです。これから宜しくお願いします、マスター」

「「「「聖女が聖女呼んだァァァ!!」」」」

「え？聖女が聖女？」

ある意味予想通りというべきか、アーシアが呼び出したのはジャンヌ・ダルク。当のジャンヌは自分を呼び出したのが聖女と聞いてキョロキョロと周りを見回し、アーシア、そしてレジェンドの姿を発見した。

「……あ」
「あ、あの……これから宜しくお願いします！」
「はい、こちらこそ」

何故視線を向けられたのか分からないレジェンドだったが、良いコンビと思った直後あることに気がついてしまう。

（ウルトラ騎空団にも『ジャンヌダルク』いるじゃねーかァァァ!!しかも光と闇の二人!!）

そう、ジャンヌダルクは既にいたりする。まあジャンヌダルクとジャンヌ『・』ダルクで違いはあるが、どちらもジャンヌ呼びなのでややこしいことこの上ない。また呼び方を考えねばと変なところで苦労する羽目になりつつ、一誠の番となった。

「ドラゴンだーめ、ドラゴンだーめ」
「何言ってんのお前」
「ドラゴン関係が来ないように念飛ばしてるの」

何やら妙な願掛けというか、自分以外のドラゴン系は一誠の相手に不要と言うメリュジーヌにバーヴァン・シーは呆れつつ、また大きな溜め息を吐いているレジェンドを内心気遣っていた。
そんなメリュジーヌの念飛ばしの結果――

「問おう、貴方が私のマスターか」
「「「「え？」」」」

「サーヴァント、セイバー。アルトリア・ペンドラゴン、これより貴方の剣となりましょう」
「「「「とんでもないモンキター!!」」」」
「剣ドラな私ー!!」
「腹ペコ王の原点か」

まさかの青セイバーことアルトリア・ペンドラゴン――騎士王と呼ばれしアーサー王その人である。腹ペコ王だけど。
ここでメリュジーヌがガクッと両膝を着いた。一応剣ドラ（命名・キャストリア）もドラゴンが絡んでいるのでメリュジーヌの願いは外れたことになる。しかもそれだけではない。身分（リアス）、金髪（レイヴェル）、騎士（イリナ）、そしてドラゴン絡み（メリュジーヌ）と全ての属性を兼ね備えた圧倒的ヒロイン力。そんな彼女が一誠のサーヴァントになるとあって一誠ラバーズの面々は戦慄していた。

「すみません、召喚されたばかりなのに恐縮なのですが……」
「な……何か困ったことあるのか？」
「はい。お腹が空いて力が出ません」

やはりアルトリア属性であった。先程の凛とした態度は何処へ行ったのか、この時の一誠やトライスクワッドは今後レジェンドが味わっていた苦難（主に食事関係）を、まさか自分達も味わうことになるとは思いもしなかったという。

「……ここいらで一息入れるか」
「「「「えぇぇぇーっ!!」」」」
「やかましい。毎度解説しなければならん俺の苦労も考えろ。しかし……そうだな、多少興がのったし俺も一回だけやってみるか。家事が出来たりする奴が呼べれば万々歳なんだが」

そら、と聖晶石を遠慮なく使うレジェンドだが、その場でレジェン

ドを日常を知る者なら誰もが思うだろう。それはフラグだ、と。
リアスが起こしたような超反応が発生し、そこから現れたのは色んな意味で衝撃的な人物だった。
その人物とは――

「やあ、はじめまして！これからこのマーリンお姉さんと一緒に冒険に出掛けようじゃないか☆」
キ　ラ　リ　ー　ン　☆

女版マーリン、或いはレディ・アヴァロンとも呼ばれるプロトマーリン……通称プーリン。本来ならばサーヴァントではないのだが、ノリで好き勝手にサーヴァント化しては何かとちょっかいかけてくるという、マジで見た目が違うだけの中身マーリンな『グランドクソ女郎』。
唖然としながら全員がレジェンドを見ると、『銀魂　ショック顔』で検索したら出てくるような、この世の終わりの如き表情になっていた。是非も無いよネ！

「……」
「『マーリン』で『アヴァロン』で『女性』……トリプル役満ですね」
「え？あれ……キャスターのアルトリア？って何その聖剣、私知らないよ？」
「知る必要はありません。これからその首を刎ねますから」
「いきなり物騒だね!?助けてマイロード！」
「待ちなさい！マーリン共々粛清してあげます！」

ドタバタと走り回るアルトリアとプーリン、魂抜けたレジェンド。今回大丈夫なのかこの主人公。

ウルトラ騎空団の台所事情（主に剣ドラことセイバーアルトリア）やレジェンドの精神的・肉体的事情（元凶プーリン）、その他諸々の問題が一気に襲い掛かってきているこの状態で、彼ら（主にレジェンド）は後半まで持つのだろうか。

――おまけ――

現在の蛇倉苑・主戦力

○ジャグラー（オーナー兼本店店長）
○ローアイン、エルセム、トモイ（空の世界支店・店長代理）
○サギリ・サクライ（広報宣伝部長）
○セワスチアン（各種指導役）
○エルメラウラ（厨房主任）
○マシュ・キリエライト（看板娘）→Ｎｅｗ！
○フォウくん（専属マスコット）→Ｎｅｗ！
○エミヤ（ジャグラーのサーヴァント、オーナー補佐）→Ｎｅｗ！

「この調子で戦力・業務拡張していくぜェ！」

※今回のベストマッチ・ジャグラー＆エミヤ

特別編・サーヴァントを呼ぼう！オカ研編その2～ビギナーズラックは上級者も欲しい～

――マズい事態が起こった。

レジェンドがプーリンを召喚した結果、ショックのあまり使い物にならない状態になってしまったのである。普通に考えれば当たり枠の彼女だが、生憎それはゲーム内の話であって実際呼び出すと単なるストレス発生源でしかない。

これを重く見たバーゲストは無礼を承知でハベトロットと談話中のモルガンへと即座に連絡。モルガンのみならずハベトロットもレジェンドが心配であるため現場に急行。

そして彼女らが見たものは――

「む？もう良いのか？久々に会ったのだ、満足するまで談笑し合うがいい。こちらは我（おれ）がパーフェクトに完遂してやろう！フハハハハハ!!ハァーッハッハッハ!!」

「我が夫ー!?」

「レジェンド様ー!?」

上半身裸で下は光り輝く道着、そして『王（ゲート・オブ・バビロン）の財宝』の完全上位互換とも言える『光神（ジ・インフィニット・プレシャス）の無限秘宝』をプーリンへ連発しまくっているレジェンド（尊大モード）。

案の定モルガンやハベトロットもこんなレジェンドを見たことなど無く、普段のレジェンドとはかけ離れた性格で大暴れする彼に大混

乱。
　どうせまたプーリンが何かしでかしたんだろうが、よく見ると部屋の端に皆が震えながら集まっている他、ゼットとマーリンの尻に剣やら槍やら注射器やらメスシリンダーやらがぶっ刺さって気絶している。逃げ出すのはえーよマーリン。

「一体何が……」
「とりあえず、あの女マーリンが変な誂い方をしたらしく、レジェンド様がブチギレてああなりました」
「ゼットって奴は単純な巻き添え。マーリンはザマァとしか思わないけどね」
「それもこれもイッセーがブリテンの赤き龍なんか呼ぶからいけないんだ」
「俺⁉いや俺悪くないだろ⁉」
「ドラゴンなら僕がいるじゃん！オンリーワンでいいじゃないかぁ！」
『俺はスルーかよ真っ黒アルビオン！』
「うるさいマダオ」
『ガーン⁉』

　痴話喧嘩してる一誠とメリュジーヌ（とドライグ）は放っておいて、正直このままでは召喚どころかカルデアが全壊しかねないので、全員でどうにかレジェンドを諌め召喚にこぎつけた。

「命拾いしたな。例え我が眼前に幾億幾兆幾京の神霊が集結しようとも我から見れば所詮三下が徒党を組んでいる程度に過ぎんということを己が身で理解しただろう。これに懲りたら金輪際バカな真似や言動は控えることだなバカ娘」
「だっておかしいじゃないか……乖離剣並の宝具がバンバン飛んでくるんだよ？しかもタイムラグも予備動作も無しで有り得ない軌道を描きながら！」

「たわけ！相手に読まれぬ戦術戦法は戦いの常識よ！ブラフもガチも敵に悟られんレベルで切り替えて攻めたてることなど出来て当然！手緩い悪戯ばかりで頭の中まで緩くなったようだな！フハハハハハ！ハハハ！ハァーッハハハハハ!!ハハハッ……ゲホッゲホッ」
「「「「むせたァァァ!?」」」」
「やっぱキツイわこの喋り方……アイツよくこんなん常時喋ってたなマジで」

むせて元の喋り方に戻るレジェンド。やっぱり無理をしていたらしい。

「あのぴかぴか、金ぴかの縁者じゃねえだろうな」
「むしろ彼が英雄王の原点に見えたのですが」
「宝具なんてそのまま……いや明らかにこっちの方がヤバそう、というより彼死んでないよね？そもそもあれが宝具とも断定しきれないし。で、結論から言うと……」
「「「「どうやったら倒せんのアレ!!」」」」
「まずダメージ与えることさえ超高難易度だと思うわ。だって先生だもの」

召喚されたサーヴァント達の意見をバッサリ切り落とした沙耶はさすがバーヴァン・シーの義妹と言わざるを得ない。容赦の無さはトップクラスだ。

「んじゃ今日やるメンツの残り片付けんぞー。残りの連中はっと……」

小猫、ギャスパー、イリナ、ゼノヴィア、カナエ、タイガ、タイタス、フーマのオカ研組。
それにゼット、沙耶、ついでに勇治。流やライ、モニカは断固拒否したそうな。おのれリア充め。

「後半のが多いな、まあいい。そら、さっさと回せ」

例によってパチンと指を鳴らしては聖晶石をドッサリと彼らの目の前に出現させるレジェンド。驚くなかれ、その個数のべ３００００個。リアルＦＧＯユーザー全員を敵に回しかねない所業を平然とやってのける最高位光神な我らが主人公。逆に言うとそれぐらいしなければピックアップされていようとお目当てをすり抜けてしまうのが確実とも取れる。ぴえん。

……それはそうとして、本気で泣き震えているプーリンを膝の上に乗せて慰めているあたり少しは心配してくれたらしい。マーリンとはいえ一応別人だし声がアルトリアそっくりだからとかもあるだろう。モルガンやアルトリアがプーリンに嫉妬の炎を燃やしているのはこの際無視。

「不平等だ！理不尽だ！だったら私にも少しは優しくしてくれてもいいじゃないかぁ！」

「うん、黙ってくれないかなクズ野郎♪」

「「「「ドルオタ魔術王キレた!?」」」」

ソロモンが青筋を浮かべて笑顔でクイッと指を動かすとマーリンは拘束状態に。ちょっとは同じ状態のゼットにも触れてあげて。

なお、指輪に関しては何故かレジェンドが全部持っていたため『ちゃんとオカ研に協力すること』を条件に返還された。どの道、反抗したとしても先のレジェンドの戦闘力的に問答無用で鎮圧されて座に強制送還されるだろうし、ソロモン自身最初からその気もない。

「気を取り直して回せ！ペドロ！」

「私が最初なの!?っていうかそれやめて下さいお願いですからぁ！」

もはやソレで弄られるのが定番と化しているイリナが聖晶石を使

い召喚サークルを起動。「天使、天使」と祈っているが、悲しいかな『人間（一応）』でなければ呼べない。例外はあるらしいが。
後半第一号、その結果は――

「患者がいるなら私が殺してでも治します」
「「「「確かに（クリミアの）天使!!」」」」

ナイチンゲール、通称婦長。ある意味修行やら何やらでボロボロになるイリナにうってつけの『天使』が召喚された。というか、ボロボロになるのは元相方であるゼノヴィアの方が多い気がするが……どっちにせよウルトラ騎空団医療部の一員になるだろうし、あの部署も少なからず武闘派（例・医療部長卯ノ花烈）がいるので問題はないだろう。

「医療関係者が充実するのはいいことだな。次、ドM脳筋」
「それは私なのかレジェンド様?」
「厳勝に何度も同じ事で扱かれてるし」

妥当だろ、とすっぱり言われて凹むが誰もフォローしない。ドMはともかく脳筋はジャストミートだから。筋『肉』だけに。
そんな彼女の呼び掛けに応じたのは――

「どもどもー！お呼ばれしました新選組一番隊組長の沖田さんでーっす！もうこれからバッサリバッサリ斬っていきますよー！」
「あああああ!?何でそこでお主が来るんじゃあああああ!!」
「あれ？ノッブ？ノッブじゃないですかやだー！これじゃ私の活躍シーン減っちゃいそうですし！マスターは主役ポジですか!?ですよね!?」
「「「「師匠にボコられてぐったりするポジションです」」」」

「何ですかその土方さんに折檻される私みたいなポジションー！」
「わーっははは！正しくお主にピッタリのマスターではないか！悔しいのう？悔しいのう？」
「むっきぃぃぃぃ！」
「……これ厳勝の胃が心配になってきた」

早速ぐだぐだ始まったノッブ（織田信長）とおっきー（沖田総司）。しかし彼女らは知らない。いくらぐだろうとレジェンド一家ではそんなもの当たり前だということを。そして既にそれはウルトラ騎空団全域に広がっていることも。

「よし、ここで一先ず逆転の一手を投じよう。小猫、ニャンとしても挽回せよ」
「やっぱりレジェンド様まだはっちゃけてませんか？」
「ニャンのことやら」

……そこはかとなくムカつくのは気の所為だ、うん。とりあえずハズレたらレジェンドに八つ当たりしようと思いつつ、小猫はサークルを起動。
レジェンドが八つ当たりされるかどうかを賭けた運命のサーヴァント――

「お呼ばれしたからやってきたぞ、ご主人。台所事情はキャットにお任せである」
「「「「猫っぽくて狐っぽいメイド!?」」」」

小猫が呼んだのはタマモキャット。どこぞのミコーンな狐から生まれたというか派生したというか……ともかく、そんな感じのサーヴァント。ちょっと飄々としたところはあるが、変なことを言いつけなければ基本いい子。しかしこれは小猫以上にジャグラーの戦力

アップな気がしないでもない。

「よろしくだぞ、ご主人」
「あ、はい。お料理とか教えてもらっても……」
「キャットにはお安い御用である。まずはハムエッグから」

このコンビは割と問題なさそうだ。

「戦いも出来るが戦うだけが全てではない、当然だな。次、ギャスパー」
「はっ……はいぃ……」
「今の君なら大丈夫だ、ギャスパー。自信を持つんだ」

リクが諸事情で離れているからか弱気なギャスパーを肩に乗ったバーンが励ます。多分ロボっぽいのか吸血鬼絡みのサーヴァントだろうと皆が推測する。
推測通りとなるか、否か……。

「私は、ローマである」
「「「「……はい？」」」」
「そなたらも、そして……貴方もまた、ローマなり」
「「「「すみません出る作品間違ってませんか!?」」」」
「……ああそうか、ロムルス・クィリヌスか」

よりにもよって神祖ロムルスを呼び出した。ローマをミーム化しそうではあるが、とんでもない大当たり。しかも器の広さであれば光神クラスなのでギャスパーにとってありがた過ぎる人物。

見た目が星座の闘士達が活躍する作品に出てきそうとか既に出てたんじゃないかとかいうツッコミは無しだ。

「あ……あの、僕は……」

「案ずることはない、マスター……ギャスパー・ヴラディ。そなたもローマであり、我が愛し子（ローマ）。なればこそ、私が汝（ローマ）らを庇護するは当然である」

もうローマが何なのか、何がローマなのか分からなくなってきたが、何名かは「おお……ローマ……」とか言い出している。何という無茶苦茶な説得力。

「オカ研メンバー凄くね？……おいプーリンちょっとは落ち着いたか？」

無言でキュッと服を掴んで小さく頷くプーリン。おとなしく、かつしおらしくしてると普通に美少女だな、とレジェンドは思いつつ暫しそのまま膝の上に乗せつつ背中を優しくポンポン叩いてやる。

……モルガンとアルトリアのＮＰゲージが５００％をも突破しようとしているが気にしちゃいけない。

「よし、次はカナエだ。そろそろ大丈夫だろ」

「すぅー……はぁー……うん！行きます！可愛い子来ますように！」

（あ、レジェンド様同様フラグだこれ）

しのぶがいたら確実に拳骨かまされそうな事を口走りつつ、誰かがフラグ判定してしまうほどの願いを聖晶石に込めて召喚サークルを起動するカナエ。

して、その願いは届いたのか――？

「ジャック・ザ・リッパーだよ。よろしくね、おかあさん」
「ＹＥＳッ!!」

カナエ、大歓喜のあまり渾身のガッツポーズ。そこからすかさずジャックを抱き上げ頬擦り。まさかのフラグへし折りとは思わなかったのかオカ研メンバー驚愕である。

「おかあさん、くすぐったいよ」
「私、母親になります」
「「「何時になくガチな表情?!」」」
「……ああ、なるほど。そういう類の英霊か。一般常識とかちゃんと教えてやれよ。ついでにしのぶへの釈明も」

しのぶがカナエを問い詰める光景が全員の脳裏をよぎる。まず確定だろう。

ここまではいいとして、次は遂に前代未聞。タイガ達ウルトラマンの英霊召喚だ。

トップバッターはやはりタイガ。一誠が大当たりを引き、リアスに至っては冠位――グランドクラスであった経験もある超大物を呼び出した。否が応でもプレッシャーはかかる。

「タイガ、頑張って!」
「お前ならやれる!お前は凄いやつだ!」
「リアス、イッセー……よ、よし!」
「カップラーメンのおかわりあります?」
「えっ!?るりふぃすさやぴーの新曲新衣装!?生放送見れるかなぁ……最悪アーカイブでも」
「「「そこ空気読めよ!!」」」

セイバーアルトリアとソロモンの発言で台無しにされて総ツッコミが入る。あとモルガンとバーヴァン・シー、沙耶が注目されてて嬉

しいのは分かるけどうまぴょいダンス踊るのやめなさい。
誰もが気になる結果は――!?

「ふ……ふふ……」
「「「「!?」」」」
「……」
「遂に来たわー!ギルガメッシュはいない!エルキドゥもいない!辛酸なめさせられた誰もいないこの地に!天の女しゅ――」
「エルキドゥの仇イイイイ!!」
「ぼぐふぅっ!?」

現れたのは何やら露出の多い美女……なのだが、プーリンを抱き抱えたままレジェンドが尋常ならざる一撃を顔面に叩き込んだ。ついでに女性が出していい声でもなかった気がする。

「タイガ!これはハズレだハズレ!例外だから引き直してヨシ!」
「えええ!?」
「ちょっと!いきなり何を……ひいっ!?ま、まさか貴方は……」
「あ、鬼灯?すまん、バカ一匹日本地獄に送るから最下層落としてくれ。そう、あのアバズレ。一発で分かるとは流石だな、では頼むぞ。……あばよワガママクソ女神。地獄を楽しみな」

怯えるクソ女神（仮）の頭を鷲掴みにし、思いきり地面に叩きつけるとそこからクソ女神（仮）の姿が消えていく。

「え、待って待って話を――」

冷たい笑顔で握り拳から親指を立てそのまま逆さに向けるレジェンドは、ぶっちゃけどこぞの永遠なライダーそっくりだった。終始そんな感じなのでクソ女神（仮）は絶望しながら日本地獄へと叩き落され、タイガの英霊召喚は仕切り直しとなる。

「あれ、結構凄かったんじゃ……」
「男を性的に食うこととワガママの度合いと財産への意地汚さと……まあ、そういうところは凄かった」
「「「「何一つ褒められねー!?」」」」
「姉の方ならなー、可愛いし良い子なんだけど」

それはいいからやり直しやり直し、とレジェンドに急かされ再びタイガは聖晶石で召喚サークルを起動させた。
今度こそ、まともなのが来ますように――

「え……あれ？何かイシュタルが来たような感じがするのだけど……と、とにかくご挨拶ね！冥界の女主人エレシュキガルなのだわ！」
「「「「お姉さんの方来たァァァ!?」」」」
「噂をすれば影とはよく言ったもんだ。ようエレちーお久し」
「ヘァァァァッ!?あわわわ……光神レジェンド様御無沙汰してます、はい！」
「ウルトラマンに呼び出されてその驚き声とは、やはりあの駄女神とは違うな。様式美を知っている」

冥界の女主人たる女神エレシュキガル。先のイレギュラーはともかく、これまたとんでもないものを引っ張って来たタイガ。同時にやはりというか、古代メソポタミアの神々さえ萎縮してしまうレジェンドの凄さも改めて思い知らされた。

「ま、お前を呼び出したタイガは真面目で純情なルーキーだ。そこは

安心しとけ」
「えっと……よろしく」
「あ、呼び出したウルトラマンってそういう……ええ、宜しく。なら折角だから光の国の話を聞きたいのだわ！何分冥界って暗くて寒いところだし……」
「そういうことなら全然ＯＫだ！」

順調にコミュ力が育っているタイガなら問題はないだろ、と次に指名されたのはタイタス。

「ぶっちゃけお前と合いそうなやつ多すぎて何が来るか想像もつかないわ。とりあえず性格に難がなきゃ誰でも良いか」
「頼むぞ！私のウルトラマッスルに同調出来る者を！」

召喚サークルを起動する時もマッスルポーズを忘れないタイタス。その後ろでマーリンがソロモンの拘束から逃れようとビッタンビッタン跳ねてるのはやたら笑いを誘う。フォウがここにいたら大爆笑待った無し。
ウルトラマッスルに導かれし者は――

「サーヴァント、ランサー！スパルタ王、レオニダス！ここに推参ッ!!」
「「「イメージ合いすぎィィィ!!」」」」
「聞いたことがあるぞ！１０万の大軍に対し僅か３００という極小数で立ち向かったという英傑！筋肉も素晴らしいが頭脳もまた卓越していたという！」
「ほう！そういうマスターも私と同類と見受けました！」
「名乗ってもらった以上返さねばなるまい！『力の賢者』ウルトラマンタイタス！これからよろしく頼む！」

ガチで被りまくりの二人は早くも意気投合。早速二人揃ってスクワットを始める始末。
残るフーマだが、もうこいつはあいつしかいないだろとレジェンドの中では疾風のごとくマッハで確定してしまった。
最早語るまい、呼び出されたのは――

「風魔、小太郎。これより主のために粉骨砕身で望む所存です」
「「「「Wフーマ!!」」」」
「そりゃウルトラマンコーガとウルトラマンイーガとかいねーもんなー!・やっぱり忍びっつったらフーマだよなー!・」
「主も『風魔』なんですか!?」
「おうよ!・ウルトラマンフーマってんだ。宜しくな!」

やはり忍者にはトップ意識があるのかこちらも意気投合。ヤバイことに『ザ・ニンジャ師匠』直伝の技を小太郎にまで教えようとしている。超人レスリングのタッグマッチでリングに上がるかもしれない。
……で、一通りオカ研メンバーは終わったところで残り3名。ゼット、沙耶、そして勇治。勇治絡みで見学者が大変なことになっているが、月王国所属の面々は先代と現女王が揃っていることもあってガチガチだ。

「次、ゼットいってみ」
「俺でございますか!?」
「他の二人絶対何かとんでもないの来るもん。だとしたら何が来るか予想出来ないお前からやった方が衝撃も和らぐだろ」
「えええぇぇ……」

イマイチ納得がいかないが、遅かれ早かれやらねばならないのだからと頭を掻きながら聖晶石で召喚サークルを起動。「燃えろ俺の何

かァァァ！」と叫びながら腕を動かすゼットを見ながら「寧ろそれギンガが言うべきじゃね？」とレジェンドは思う。
何かを燃やしてゼットが呼び込んだのは――

「私はガレス！円卓第７席の騎士です！」
「「「「わんこだ……」」」」
「え？わんこ？……あああっ！ま、まさかっ！」
「おや、ガレスではないですか。貴女もどうです？カップラーメン」

円卓の騎士第７席に座するガレスが呼び出されたのだが、彼女が目にしたのはカップラーメン（２個目）を啜るセイバーアルトリア。ちなみに用意したのはレジェンド。後で一誠の給料から天引きされるらしい。

「あ、まずはちゃんとマスターに挨拶しなさい。礼を失すれば騎士にあらず」
「いやこの場で堂々とカップラーメン２個も平らげてる奴が礼儀云々言っても説得力皆無なんだが」

レジェンドのツッコミが容赦なくセイバーアルトリアに炸裂。コイツそのうち騎士王でなく拉麺王と呼ばれる日がくるかもしれないと思いつつ、レジェンドはガレスの行動を見守っている。

「俺はウルトラマンゼット！目標はゼロ師匠！アムロ師匠！アタル師匠！それから……」
「お師匠さん沢山いるんですね!?」
「ぶっちゃけゼロ師匠だけはまだ認めてくれないけど……俺はへこたれないぜ！」
「ご立派なマスターです！ちなみに私が尊敬する方はアーサー王に、ランスロット卿に……」

「お、こっちにもランスロットって名前の人いるぜ！」
ゼットの言葉にふふん！と胸を張るメリュジーヌだったが――
「円卓の騎士じゃないけど白竜騎士団の団長をやってるウルトラ凄い人なんだ！」
「騎士団長！しかも白竜騎士団ってカッコいいです！」
『ランちゃん』の方だったことでドシャアッとメリュジーヌが崩れ落ちた。哀れ頭ドラゴン娘。
そんな彼女を心配しつつ、いよいよ本命の片割れ……沙耶の番がやってきた。
「沙耶が絡む要素は数多いからな。月や超人、趣味や姫……うまぴょい」
「最後のは確実に関係ないわ」
「おぉうドライな対応。しかし赤く染まった頬が全てを物語っている！」
レア映像！とソロモンが自前のＰＣカメラで録画している傍ら、必死にマーリンは拘束を脱しようと芋虫のように動き――それを見たモルガンが「死になさい」と一撃ブチ込んでまたも黙らせた。粘るなマーリン。
大物な彼女は何を呼び出すのか――!?
「愛と勇気の美少女吸血姫！プリティーアルク！にゃんこに代わってお仕置きよ！」

「「「「……はい？」」」」
「あれ？外しちゃった？」
（おいお前、星の触覚だろ。何してんのマジで）
【いえ、今表に出ている人格は別と言いますか……】

ガチでヤベーやつ呼びやがった。アルクェイド・ブリュンスタッド……アーキタイプ・アース。真祖と呼ばれる吸血鬼。何故沙耶と繋がりがあるか？そりゃ勿論『月姫』シリーズメインヒロインですから。

「サーヴァント扱いはともかく、ちょっとこいつの責任者んとこに話しつけに行ってくるわ」
「へ？あいだだだだ!!アイアンクローやめて！何これ痛さが尋常じゃないんだけどぉぉぉ!?」

パチンと指を鳴らして開いたゲートを悠々と通るレジェンドと、本気で痛がって涙目なアルクェイド。
とりあえず、プーリンは玉座に座らされたため待っている間はマーリンを弄ることにする。

「あーあ、みっともない。花の魔術師どころか花の芋虫だね」
「へえ？本作じゃ前回特別編まで設定すら出てこなかったぽっと出の新参者が言うじゃないか」
「設定があってもマイナス面が圧倒的に多いよりマシだよ。それに私と男の私には明確かつ決定的な差がある！」
「決定的な差……!?」
「そう！こう見えても私ってば結構純情かつ高望みするタイプでさ。なんと色々な初めてはまだ全て未経験！夢魔の特性的にそりゃあ我慢するのは厳しかったとも！でもいつか相応しい相手が現れてくれるだろうと辛抱強く待ち続けた結果が今日！まさに運命の相手に巡り会えたというわけだ！」

何と生娘であることを大々的に暴露したプーリン。それだけ嬉しかったのは良かったのだが、何もこんな場で言うことはなかろうと思う。とはいえ、ビシィとマーリンを指差して言い切った次の台詞は、先の発言がなければ説得力は無かった。

「それに対して君はあっちこっちで女性を取っ替え引っ替え！まさしく女性の敵にして男性の敵でもあるじゃないか!!」

「うぐぅっ!?」

ずばーん！という効果音がピッタリな指摘にマーリンは言葉を詰まらせ、モルガンやアルトリアはうんうんと頷いている。ついでにレオスが物陰から「マーリン爆発しろマーリン爆発しろ」と嫉妬の念を飛ばしていることを勇治は目撃したがスルーした。

「私が関わった者達は立派に育ったみたいだし、これからは私も私の好きなように生きる！というわけで私はより近くで花嫁修業をするべく彼のサーヴァントになったということさ！なに、時間はあるんだ。じっくり愛は育めばいいからね」

……何故か周囲のプーリンへの好感度がここに来て急上昇。すぐさま襲いかかるかと思ったが予想に反しかなりまともであった。逆にマーリンへの好感度は更に下落。いよいよヤバイぞ！味方がヤプールしかいない！

そうしていると、レジェンドがゲートから半身だけひょこっと現れるが、何やらおかしい。

「ヤベ、引っ掛かって通れないんだけど。たんこぶ引っ込めろよ能天気真祖」

「無理だって!?というか指パッチンでゲート広げられるんじゃないの!?」

「おま、こんな特大たんこぶの所為で通れないからゲート広げるとか

バカ丸出しだろーが！お前が！」
「泣くわよ!?」
「泣いたら置いてくぞ」
「ごめんなさい」

コントかよ、と満場一致で思った直後に力技でゲートを通って帰還したレジェンドとアルクェイド。後者の頭にはレジェンドの言うとおり特大のたんこぶが拵えられていた。重くないのかなアレ。

「いやあ話しつけたのは良いんだけどな。俺の正体知ったらコイツ以外青褪めて一箇所集中砲火で拳骨プラスお説教よ。しかも呼び出した人物の詳細話したら更に倍率ドンでな」
「お願い誰か治して頭重い……」

そりゃ頭より何倍もでかいたんこぶとかギャグ漫画でも滅多に見ないだろうし、当然だろう。アーシアが治したがこんなんでこの先大丈夫なのかと不安になる一行だったが、まあ沙耶なら何とかするだろうと考えた。さやぴー謎の安心信頼感。

「よろしく、アルク」
「こっちこそね、沙耶！あ、あとそこの子ありがとー！」
「い、いえ！」

そして……今回最後にして、ある意味一番問題な勇治のターン。何が問題か？見物客の大半が勇治絡みだから。何かあれば絶対騒ぐ。

「別に私は必要ないんだが……」
「ペガサスAの運用とか楽になるかもしれんぞ。あと家計簿つけてくれたり料理用意してくれたり背中流してくれたりあっちの処理――」
「おい！アンタ最初から私のサーヴァントは女性が来ると決めつけてないか!?」

「他に何が来るってんだリア充バーカ!!」
「ブーメランどころか分裂アイスラッガーで返ってきてること認識しろ天然ジゴロ野郎!!」

……何だかんだ言って仲良さそうなモテ男連中。シャディクはその様子を見てけらけら笑っているが、レオスなど極地に達したのかヴァリアブル・サイコ・ライフルをスナイパーのように構えさせたエクストリームガンダムを遠隔操作で配置する始末。もうコイツどうにかしろよ本気で。

「覚悟決めろよジードみたく運命変えろよ畜生」
「後で顔面に失敗作のパイをスパーキングしてやるからな」

レジェンド相手にここまで言えるのは彼か沙耶ぐらいだと思う。さすがに本気で喧嘩売ったりはしないだろうが。
勇治が渋々聖晶石を使い召喚サークルを起動させている時に、ミオリネはハラハラしながら見ているだけなので良しとしよう……だがムジナは『女性サーヴァント断固拒否』の法被を着てバズーカ装備。

「「「「いや物騒過ぎるだろ!?」」」」
「警戒はしておくことに越したことないから」
「いやお前普段アンニュイ――」

――ムジナバズーカの一撃でオニジャが爆発した。ついでにグエルも巻き添え食らった。

「「「オニジャァァァ!?」」」
「「「グエル（さん）ー!?」」」
「何あの人容赦ねえ!?」
「もう彼女がサーヴァントでいいんじゃないかな」
「おいバカやめろ！彼女は魔力供給の方法の一つが――」

「……うん、その手があった。合法的に既成事実作れる方法が」
「――そういうことだって知ってるからと言おうとしたのにイイィ!!」

もはや一挙一動に馬鹿騒ぎ状態の勇治連合（仮）。当の勇治はさっさと終わらせたい気持ちが勝っている。
そんな彼のもとにやってきたのは――

「はい、ＮＦＦサービスです♪」
「「「「へ？」」」」
「今回は個人同士の個人的契約とのことで参りました♪」
「こ……コヤンスカヤ!?」
「ちょ～っと違いますね。私はタマモヴィッチ・コヤンスカヤにあらず！ひ・か・り・の・コヤンスカヤですわ。ちなみに闇のもいますのよ」

勇治の知己のコヤンスカヤと似て異なる『光のコヤンスカヤ』が呼び出された。その際は何処か営業トーク的なものがあったが……それはまあいいとして、格好が……。
「せめてそのコスプレした峰不二子みたいな格好どうにかしろ」

女スパイ的なというか、無駄にスタイルが良いこともあってアザゼルいなくてよかったな的なものになっている。
「あら、お気に召しません？でしたら、正式にご契約頂けたら特別に！霊基再臨でバージョンアップしますわ」

「……まあ、いいか。とりあえずムジナはバズーカしまえ私にも当たる。そしてレオスお前いい加減にしろ」
「では、改めましてこちらのご契約書をよくお読みになられてからサインをお願いします♪」
「しっかりしてるな……」

他のサーヴァントとは一味違うということか、内容も割とちゃんとしたことを簡潔に纏めてあり読みやすかった。これならばと頷き、サインしようとしたときに気付く。そう、気付いたのだ。魔術的な制約でもなく、催眠的なそれでもないあるものに。

「……」
「あ……あら？」

何やら焦り気味な光のコヤンスカヤ。サインをする最後の一枚……のはずが、勇治は気付いたそれを丁寧に『剥がしていく』。つまり複写式の契約書の下に隠されていた物は……

婚　姻　届

「「「「アウトオオオオオ!!」」」」

何やってんだお前と言わんばかりの大絶叫。まともかと思ったらこれである。

「どういうことだこれは!?サーヴァント契約書じゃなかったのか!?」
「勿論、サーヴァント契約書ですわ。こちらはおまけです」
「おまけの規模が大き過ぎるわ!!」
「だって素敵な雄と番になりたいのは雌としての本能でしょう!!」

「何か逆ギレされたんだが!?何だこれ私が悪いのか!?」
「そうだ、お前が悪い。さっさと籍入れて幸せになれ」
「モテるのに途方もなく独身のアンタが言うな!!」
「独身で何が悪いんだリア充テメー!!」
「だから自分にスパークレジェンド返ってきてるって理解しろ天然ジゴロ野郎!!」
「リア充死すべし慈悲はない！エクストリーム、ＥＸＡフェース!!」
「どうしようもない私怨にそんなもの使うなバカタレ!!」

もはや混沌としてきた初のサーヴァント召喚はノッブと沖田が召喚されたからかぐだぐだで終わった。
なお、光のコヤンスカヤは婚姻届の部分だけ破棄されてちゃんと契約したらしい。当の本人は諦めていないが。

「ほーらー！ノッブが召喚されたからぐだぐだになったじゃないですかー！」
「煩いぞ沖田ァ！貴様ならぐだぐだにならなかった理由があるのか!?無いじゃろ?無いじゃろ!?」
「レジェンド、今回余った聖晶石は……」
「モルガンとハベにゃんにプレゼントだ。引っ越しには何かと物入りだろ」
「我が夫……！」
「レジェンド様ありがとー！」

月王国では価値が高い聖晶石を大量に贈られた二人は感動。すぐさま厳重に保管し、このあとウルティメイ島にて行われる『祝！初サーヴァント歓迎会』後に使うことを決めた。
一先ず、これにて一件落着。

「私の拘束が解けてないんだけどなー！誰か気付いてくれないかなー!?」

【フォウフォーウ】（やーいやーいボクを空から投げ捨てた罰だネカマーリン。精々ボクの今の充実した生活を見て羨んでろバーカ）※フォウくんテレパシー

○マシュに抱き抱えられ、セワスチアンにブラッシングされながらエミヤ特製のスイーツを頬ぼるフォウくんの映像。

○ジャグラー店長の新作味見係で満足なフォウくんの映像。

○ユイシスやアンスリアらエルーン女子とルームランナーで汗を流し健康的カロリー消費を行なうフォウくんの映像。

○拾って大事にしてくれてる御礼にと美味しい果実を取ってきたら、半分こしてくれたのでレジェンドの膝の上で一緒に食べるフォウくんの映像。

「ぬあああああ!!厄災の獣のはずがいつの間にか幸せ振り撒く獣になってるキャスパリィィィグ!!これもあれか！彼の庇護下にあったからか！クラスチェンジか噂のジョブチェンジか!?くっそ羨ましい！というかセイバーなアルトリアは助けてくれても良かったんじゃないかな!?私よりカップラーメンの方が大事だったの!?ねえアルトリアー!!」

※このあと、今回の参加・見学者全員がウルティメイ島に転移し終わったら無事解放されました。

特別編・サーヴァント歓迎会！その1～彼らは真なる魔境を知る～

マーリンを放ったらかしてウルティメイ島へと向かった一行。レジェンドは片腕に引っ付いているプーリンを剥がそうとせずにそのままにしており、もう片手はちゃっかりアルトリアが占拠。

というのも、プーリンがちゃんとした倫理観を持っていたり、まさかの中身がガチ清純乙女（悪戯はするが）でマーリンと言い争いしたから、変なことしなければそう何から何まで制限する必要はないだろうという結論に達したからだ。

実際、彼女もレジェンドに本気で嫌われるような真似はする気も考える気も無いらしい。

モルガンはハベトロットと手を繋いでおり、身長の高い彼女が非常に小柄なハベトロットに腕の高さや歩幅を合わせて歩くのは苦ではないかと思われたが……。

「モルガン、辛くなーい？」

「大丈夫ですよ、ハベトロット」

二人とも笑顔で尊い……とバーヴァン・シーや沙耶はほっこりしていた。空気の読める養女姉妹。

他の面々の一部を見てみよう。早速交流が始まっている。

☆

「まずはウルトラ騎空団そのものに馴染んでもらうって聞いてるけど……」

「ええ、まずはそこから……なんだけど。貴方の場合、ソーナやレヴィアタン様が腰を抜かしそうで……私の家族もそうね」

「じゃあ人間の姿になっておこうか？……ほら、こんな感じで」

「うん、全くソロモンらしからぬチキンドクターって感じ。それならイケるわ！」
「それ褒めてる!?違うよね絶対!!」

「人工太陽、プラズマスパーク……冥界にも小さいのでいいから欲しいのだわ」
「叶うかは確約出来ないけど、レジェンドに頼んでみようか？悪用するわけじゃないし、小型ならディファレーター光線の影響も無いだろうから」
「いいの!?その時は私も一緒に頭を下げるから！それが当然の礼儀だし、その……不出来な妹のしでかしもあるし……」
「俺が一回目呼んだのってそんなに駄女神だったんだ……あ！そうだ、ウルトラタワーっていうのもあってさ。中には――」

「ノッブあんまり調子にのってヘマしないで下さいよー？マスターの師匠の人ってサーヴァント瞬殺出来るヤベーやつみたいですし」
「それはお主じゃろう？バッサリ斬るつもりがいつの間にか斬られてましたぐわー！じゃカッコつかんからのー」
「私の師匠である卯ノ花先生もそういうレベルですわよ？」
「……え？」
「むしろ本気で怒らせたらヤバいのは卯ノ花先生だな。師範は普通に怒りが分かりやすいからいいが、卯ノ花先生は笑顔の圧がとんでもない」
「ノッブのバカー！大うつけー！マスターとの胸囲の格差社会ー!!」
「何じゃと沖田ァ！似たような顔が沢山おる平凡顔のくせにー！それに胸囲の格差社会は是非も無いでしょー!!」

「ったく喧しいったらありゃしねえな」

「あはは……まあ、これが僕達の日常で……クー・フーリンさん、ハンティングは得意ですよね？」
「おお、生前は仲間達と大地を駆け回って狩りをしまくったもんだ……おい、まさか」
「実は僕達『ハンターズギルド』に参加してて、プラズマ怪獣っていう超大型の獲物をハンティングしてるんですよ。正確にはその怪獣のプラズマソウルを獲ってるんですが……今度、御一緒にどうですか？」
「いいねえ、超大物！どんなやつだ!?」
「身長１００ｍ前後は最低ライン、もっと大型だとその数倍はありますよ」
「ますます気に入った！狩りもやれる、報酬も手に入る、おまけに上手くいけば飯も手に入るとくりゃあやらない理由はねーな！そうと決まりゃ、体慣らしとかねえと！後でちょいと付き合ってくれや、マスター！」

「……白野、これが今回呼ばれたメンツ……やっぱりこのコヤンスカヤは別人か。いや人じゃないが。何？ロムルス・クィヌルスと聞いてからネロが？コレばっかりはギャスパーやロムルス自身の意見を尊重するからな。あとカールに言っといてくれ、こっちの女性陣に手を出すと確実にチートラマン軍団が報復に向かうから絶対やめろと」
「あのローマさんがどうしたんですか？」
「スレッタ……せめてロムルス王と言いなさい。あの方は本気で凄い英雄なのよ」
「ローマ出身の奴が知り合いにいてな、ロムルスの名を聞いた瞬間に自分が統治してるエリアを見せたいと上に直訴してきたらしい。納得だがな……って光の、マジで霊基再臨とやらしたのか」
「勿論、正式にご契約頂いたわけですから。お約束の特別サービス、バージョンアップ・コヤンスカヤ（光）！どうです？このもふもふ具合、スパイより優雅に見えるこの衣装！当然ですが以前の姿にも戻れ

るので、マスターのお好みに合わせて差し上げますわよ♪」
「「「「もふもふ……」」」」
「ちょっと!?これはマスター専用の……お、重いですわ……！」
「そりゃ一気に5人に引っ付かれりゃサーヴァントでも重いだろうよ」

☆

何だかんだ言いつつ、己のサーヴァントと仲良くなれそうで何より。あとは合わせていない騎空団のメンバーと何事もなければ良いのだが。
とはいえ、一度や二度ぶつからないと分からないこともあるだろうと、レジェンドは多少の揉め事程度なら許容することにした。
一先ず、ウルトラ騎空団用宿泊施設各種と空間を繋げておいたレジェンド一家別荘へと歩を進める一行。そして、そこでは早速ウルトラ騎空団の洗礼が待ち受けているのだった。

「えっと……こう、かな？」
「違う。ここを、こうやってこう」
「ディアンサさん、皆さんも頑張ってください！ゼットさんが帰ってきたら御指導お願いしましょう！」
「ル……ルリアやオーフィスちゃん、沙耶さんってこんなハードなレッスンしてたんだ……」
「まだ初歩の初歩」

第一弾はルリアとオーフィスがディアンサらティクニウトリ・ショロトルのメンバーに『るりふぃすさやぴー』の新作ダンスを教えてい

る真っ最中に遭遇。当然、これにはソロモン大歓喜で即反応。
「生レッスンならぬ生指導!?しかもルリアちゃんもオーフィスちゃんも私服姿！相手は友人？後輩？まあいいか！貴重な瞬間をありがとうー!!」
「どんだけ嬉しいんだよアンタ!?」
「何か今レジェンド様をあそこに投げ込んだら暫く解放されない気がするわ。でも仕方がないわね、レジェンド様（プーリン・キャストリア付）をエサに突破するわよ！」
「オイ待てコラァ！誰がエサだ！脱げ☆プリィ!!」
「私達のサーヴァントの紹介の為に逝って頂戴!!」

逝くの字が間違い……じゃない気もするが、ドンッとプーリンとアルトリアをくっつけたままレジェンドはルリアやオーフィスらの近くまで押されてしまう。

「あ、レジェ……ああーっ！また新しい女の人くっついてます！ずるいですー！」
「正面がガラ空き。とおー」
「ちょ、ま……！両腕塞がってて受け止められないっつーの！」
「団長さん！おかえりなさい！とりあえずその二人について聞きたいんだけど……」
「一人は見たことあるような、無いような……」
「ぽ～……あれじゃない？大食いの魔術師の」
「何で私そっちで覚えられてるんですか!?今はアルトリア・アヴァロンの姿ですが、せめてキャスターと言ってください！名実共にレジェンドのパートナー！アルトリア・キャスターと！」
「アルトリア、こういうときは必死すぎると逆に引かれるんだ。敢えてスルーしたりして先輩の余裕を見せつけないと」

焦るでもなく、落ち着いてレジェンドの腕にギュッとより強く抱き

着くプーリンに女性陣衝撃。先輩後輩でいえばプーリンが最も新参者なのだが。
　そんなレジェンドやプーリン達を尻目に、リアス達は悠々と奥へと進むのだった。

「いいのかな……放っておいて」
「ソロモン、彼の犠牲を無駄にしてはいけません。私達はご飯に向かって進み続けなければならないのです！」
「結局メシじゃねえか！……まあ、あのぴかぴかなら自分で何とかするだろうけどよ」
「ああ、主よ……貴方を助けられぬ私をお許し下さい。代わりに立派に姉としての役目を果たします……！」
「そこは聖女じゃろ!?何で姉!?いやいやそーかそーいうことかー！そのぷるんぷるんした胸で聖女は無理じゃのう！畜生め！」
「ノッブより全然大きいですもんねー！あ、沖田さんは十分な大きさあるから平気ですー！」
「千切るぞ沖田ァァァ!!」
「何をですかノッブゥゥゥ!!」

　ぐだぐだな二人で〆られたが、ぶっちゃけウルトラ騎空団に染まり始める前兆は全員にある。

「き……緊張してきたのだわ……」
「大丈夫だって。皆割と気さくだし」
「でもタイガ先輩はエレちーさんを守っといた方がよござんすよ」
「何でだ？」
「ジータちゃん」
「……あ」

　ゼットの発言でタイガは気づいてしまった。あのアグレッシブ美少女騎空士はタイガにゾッコンだ。エレシュキガルの方はまだ芽が

出そうな気がしないでもない程度だが、ジータの方はまず確定。
対してゼットの方はステラにせよアーニャにせよ、性格的にポジティブに受け止めそうなのでガレスが加わろうと気にしないはず。ついでにそのガレスも天然わんこ系。

「さて、パーティーとは即ち大勢の人々がいる場所。そこに向かうということは他者への衛生面での気遣いも重要です。自分一人でもしっかり注意することで、他者への菌の感染等を未然に防ぐことが出来ます。親しき仲にも礼儀あり、仲間の健康を害するようなことをしてはいけません。いいですね？」
「「「「はーい！ナイチンゲール先生！」」」」

返事をする素直組の後ろではロムルスがうむうむと優しい笑顔で見守っている。

「やはり、ローマを保つのはローマ（健康管理）である」
「御理解頂けて何よりです、神祖ロムルス。御身もご自愛下さい」
「うむ。私もまたローマせねばなるまい」

☆

――ある場所の赤セイバー――

「頼む！頼む奏者！あのレイオニクスに連絡して神祖ロムルスがここに来られるよう便宜を図ってくれ！いつかはと夢見たそれが手の届く位置まで来たのだ！余のローマ領域を是非神祖にいいいいい!!」

――後日、勇治に頭を下げられギャスパーやロムルス本人から許可が出たことでレジェンドに一時的にあちらへ送られたロムルスによって、彼女のローマ領域にロムルスお手性のテルマエが制作されました。無論素手で。

「「「「ローマすげえ!?」」」」
「このローマが、さらなる飛躍を遂げることを信じて我がローマを贈る」
「おお……!神祖ロムルスの手によって余のローマがますますローマになってローマではないか!」

ローマが何なのかはもはや分かる人物が殆どいない。とりあえずローマは偉大である、とだけ覚えておこう。

☆

何やらローマがローマしたことで閑話休題状態だったが、レジェンド（&プーリン&キャストリア）を犠牲に奥に進んだオカ研＋αが次に会ったのは――

「「おおおおお……!」」

明鏡止水（ハイパーモード）なゲンと狛治。どちらもゴッドガンダム、ガンダムゴッドマスターという超性能ＭＦを駆るガンダムファイターだ。しかも前者はウルトラマンレオ。

もうパッと見でサーヴァントを一撃粉砕しそうな二人に早くも戦慄するサーヴァント達。ジャックなどカナエの背後に隠れてギュッと裾を握っているほどに。

「「「「何あのヤベーやつら!?」」」」
「片方は俺の師匠だぜ」
「師匠!?イッセーの師匠ですか!?」
「貴方のお師匠様はサーヴァント!?」
「いや、違うけど……って先輩イイイイ!?」

一誠が発見したのは犬神家の一族なレイトの姿。おそらく修行中、ゲンにやられたものだろう。

「ゼロ隊長ォォォォォ!?」
「まさか、一人でレオに挑んだのか!?」
「隊長無茶しすぎだろ!?」
「ゼロ師匠の意志は俺が継ぎます！行きますよレオ大師匠ォォォォォ!!」
「「ゼット！やめろおおおおっ!!」」
「イヤアッ!!」
「ごぶにゅっ!?」

ゼ　ッ　ト　瞬　殺　！　！

「「ゼットォォォォォ!?」」
「マスタァァァァァ!?」

よもや召喚早々ゼット（マスター）の戦闘不能シーンに直面するなど思いもよらなかったガレスはトライスクワッドと共に大絶叫。

「お……俺はやっぱりウルトラ戦士としてはまだまだ三分の一人前……」
「いやレオさんの一撃が急所に当たってるにも関わらず意識保ってるだけ凄いけどな!?」
「やべーよウルトラ戦士として三分の一人前の定義がどんくらいか分かんなくなってきた」
「アレ受けて息があるのに、これでもまだ三分の一人前ってウルトラ戦士の敷居は高いんですね！新選組も真っ青ですよ！」
「ま、お主じゃ未来永劫無理じゃろうなー。ちょっとしたことで『ごふぅっ！』じゃもんなー」
「どういう意味でゴッフゥゥゥゥゥ!!」

「ぎゃあああああ!?こっち向いて吐血するでないわバカ沖田ァァァ!!」

沖田の盛大な吐血を顔面に直撃しパニクる信長。病弱スキルは伊達ではない……が、一応スキル無効とかそのへんをレジェンドにどうにかしてもらったほうがいい気がする。今後のために。

結局、あまりの惨状にキレたナイチンゲールによって強制終了。全員総出でレイトとゼット、ついでに沖田の治療をしてから話を聞いた。

「すまん、狛治君との特訓に熱が入り過ぎてしまった」
「以前俺と恋雪さんの結婚式でやってくれた東方不敗老師とレジェンド様の演武が凄すぎて、俺も今回の歓迎会で披露しようとしていたらまさかの特訓になってな……」
「「「「演舞する人のスケールが色んな意味で大き過ぎるんですがそれは」」」」

むしろその二人に演武をしてもらえた狛治と恋雪が凄いのだ。大抵はどちらかが留守のため、惑星レジェンドであっても結婚式に双方が揃うのは難しい。

「しかしお二人共……立派な筋肉ですな！」
「む？そういう貴方も無駄がない身体だ。計算された肉付きとみた」
「おお！分かっていただけるとは！マスター、どうやら貴方のいるウルトラ騎空団とは予想以上に素晴らしいところだ！」
「その通りだとも！他にも良い筋肉を持つ者が大勢いるぞ！やはり頭脳と筋肉の組み合わせは至高だな！」

二人揃ってマッスルポーズを決めるタイタスとレオニダスに若干

引き気味な一行。いや、二人とも人格者なのは分かるし、筋肉趣味大いに結構ではあるのだが……如何せん相性が良すぎるというか、ブレーキが効かないというか。
　そして、そこに追加でやってきたのがウルトラ騎空団の誇る有能マスコット、ロスヴァイセの使い魔の片割れハク。

「ンニャ」
「おおう、キャットの同類か？見るからにもふもふだ。可愛いもの好きの心を鷲掴む気だな」
「ニャニャ～」
「ふむふむ、皆が待ちわびているのだな。ご主人、急ぐぞ。そら急げ、はよ急げ」
「わわ……！押さないで下さい、キャットさん」

　軽く小猫を押すタマモキャットの後ろから、待ちわびているというタマモキャットの発言を聞いて騒ぐの大好きなアルクが沙耶を引っ張って大爆走。

「パーティー会場にいざ突撃！フルスロットルよ、沙耶！」
「……人って引っ張られるだけでも宙を浮けるのね。漫画やアニメの中だけだと思ってたわ」

　……引っ張られるだけで空の底に落ちかけた我らが主人公は一体何なのか。思えばそれもゼット（＆オーフィス）のやらかしだった。
　にしても沙耶は冷静過ぎないか？今回は当事者なのに。

「……質問攻めにされるのが目に見えている。ペガサスＡに帰っていいか？」
「駄目……ですわ……！折角のお披露目……ですのにっ……！」
「おい光の、お前変に意地張るな。そのモフモフ尻尾に何人へばり付いてると思ってるんだ」

「少なくともさっきの倍はいますわね……！」
「いい加減離れてやれ！どんだけダメ人間化してるんだお前らは！」
「「「「ええぇぇぇ～……」」」」

ガウマ隊や怪獣使い同盟、ついでに二代目、加えてスレッタまで光のコヤンスカヤの尻尾にへばり付いてりゃ流石に勇治も怒るわな。
どうしたものかと悩んでいたら、置いていかれて怒ったレジェンドがプーリンとアルトリアに加えてオーフィスとルリア、更にティクニウトリ・ショロトルの5人を引っ付かせたまま大爆走してきてストレス発散代わりに引っ剥がしてくれた。ちょっとだけ毛が抜けて涙目のひかコンのためにレジェンドが適当な技でもふもふを回復させてくれたので、とりあえず安心。

「また随分引っ付いてるな、そっちも……」
「軽いからまだマシだ」
「そういう問題か？」
「鍛えているからな。一応ケアの一つもしてやれ、お前のサーヴァントだぞ」
「……さっきと違って私への対応がまともなことに違和感を感じるんだが」
「いいからさっさと行け。ウダウダやってるとまた弄るぞお前」
「ソレは御免被る」

そう言って光のコヤンスカヤに近付いていく勇治を見送り、自身も引っ付きまくっている連中を一旦離して会場である『レジェンドの別荘と宿泊施設の中庭を次元ぶち抜き繋げた所（仮）』へと足を運ぶ。

「凄い無茶するんだね、マイロード」
「自分で言うのもあれだが、俺はまだ控えめな方だ。キングなんざ誕生日が来たというだけで宇宙繋げたレベルのバカだぞ」
「大丈夫なんですか？それ……」

アルトリアの懸念は尤もだが、実際問題ないからツッコミどころに困るわけで。
例によって肩車状態のオーフィスをそのままに会場へと到着すると、何やらリアス達も困っている様子。
その原因というのが、先日レジェンドが連れてきて蛇倉苑の新しいスタッフとなった一人と一匹、そして実はレジェンドでもヤプールでもなくモルガンが召喚したサーヴァントにあった。

☆

「うわあぁぁぁぁぁ！マシュ！フォウ！レオナルドおぉぉおおお!!」
「ド……ドクターロマニ、そんなに泣かないで下さい」
「フォウフォーウ、キュー（マーリンだったらスパークフォウくんでぶっ飛ばしてたけどなぁ。連絡があった女マーリンは……ぶっ飛ばさないけどどうでもいいや。構ってきたらさり気なく拒否しよ）」
「いやいや感動の再会だけどさ、まさか揃いも揃って『あの世界のカルデア』の面々がまたこうして顔を合わせるなんて思いもよらなかったよ。実はサーヴァント枠であと二人、キャプテン・ネモとシャーロック・ホームズがいるんだけどさすがに皆留守にするのはマズいってことであっちに残ってるんだ」
約一匹ヒドイこと考えてる気がするが、美女と美少女と可愛い小動物に囲まれてるソロモン――ロマニ・アーキマンは一向に泣き止む気配はない。
「……会わせるのは時期尚早でしたでしょうか」
「そうでもないだろう」
「我が夫……」
「顔見知りだったのは驚きだが……俺があの子達を保護した以上、召

喚されたとあれば何れ否が応でも顔を合わせていただろう。遅いか早いかの問題に過ぎん。何より――」

慰めているマシュやレオナルドと呼ばれた女性――レオナルド・ダ・ヴィンチ、通称ダ・ヴィンチちゃんの目にも涙が見えるし、フォウは慰めているのかちょっとお叱りなのかてしてしと前足でロマニの頭を叩いている。

「あるのは悲しみではなく喜びの感情だ。俺達が悲観するような理由もない」
「そうですね。少なくとも、会わせたことが間違いではなかった」
「むー……何かレジェンドとモルガンの会話が夫婦じみてます」
「うーん……私も少しはグイグイ行くべきなのかな？でもあまり強引に迫って嫌われたら元も子もないし」

オロオロしてるリアス達とは反対に、穏やかに三人と一匹を見守るレジェンド達四人。
……しかし、空気の読めない者はどこにでもいるようで……

「やっと解放されて到着したぞぅ！酷いじゃないか皆！あのシステム・フェイト開発に協力したのは紛れもなく私――」
「マーリンシスベシフォーウ！」
「ごっふァァァァァ!?」
「「「何かレオキック炸裂したァァァ!?」」」

マーリン復☆活からの撃☆沈。

レジェンドに保護されて以来、その本質を徐々に変化させ『幸運振り撒く獣』となったフォウくんは可愛くて強いのだ。錐揉み回転キックではなく赤熱化キックでも十分過ぎる威力を発揮する！

※普通は赤熱化キック自体出来ません。

「シスベシシスベシフォウ！マーリントットトクタバレフォーウ！」

「いだだだだ!!いつにもまして辛辣な対応じゃないかキャスパリーグ!?」

簡単な話、アヴァロンから紐なしバンジーさせたマーリンと、拾ってからちゃんと家族として大切にしてきたレジェンドの差をまざまざと感じたフォウは、ここで一気に恨みを清算してしまうべく猛攻に出たわけである。

マーリンに本気で噛みつき、毛刈りレベルでぶちぶちと髪の毛を引っこ抜くフォウ。凄まじい。

「フォーウ！（ここでボクにボコボコにされたら今までのことはチャラにした上で、後は『知ったこっちゃねー』ってしてやるから大人しくやられろネカマーリン！）」

「相当パワーアップしてるからか本気で痛いんだけど!?さてはあの映像にあった美味しそうなものをたらふく食べたからだな！」

「マーリンゾクブツフォーウ！（それだけだと思ってるからオマエはクズなんだよ。美味しいご飯と適度な運動、周りの皆の優しさや気遣いがあってボクはウルトラフォウくんになれたんだぞ！ニートもどきのオマエと一緒にするな！）」

「……ぷっ……」

「そこぉ！笑わないでもらおうか女の私ぃ！」

よく見るとプーリンだけじゃなくアルトリアにモルガン、妖精騎士三名も肩を震わせている。オベロンがいなくて良かったな、マーリン。

「あ、あの……出来ればマーリンさんとも仲良く……」
「おおお!?何という優しいプリンセス、いや聖女が！アーシア・アルジェントさんだね、改めて私は――」
「「「「バカ！やめろォォォォォォ！」」」」
「え？」

何やら満場一致で顔色が真っ青になっているが、アーシアの今のポジションを知らないマーリンはかけられた言葉がどういう意味か分からない。
……が、それは一秒後すぐに理解した。せざるを得なかった。

「殺れ、マジンガーＺＥＲＯ」
『言われずとも分かっている』

そう、今のアーシアはレジェンドの巫女であるためレジェンド本人と、レジェンドの真の愛機であり同じくアーシアが心から尊敬の念を向けているマジンガーＺＥＲＯを同時に敵に回す愚行。キレた最高位光神及び原初にして終焉の魔神を相手にまず生き残ることは不可能。概念どうこうとかそういうレベルじゃない。
レジェンドキネシスでいつの間にか浮かされ、マジンガーＺＥＲＯ本体は三頭身サイズなのに周りに被害が出ないギリギリのサイズまで巨大化させたアイアンカッターをマーリンに向けて発射スタンバイ。

「いやいやいやいやサイズおかしくないかい!?どう見ても本体より大きすぎるんだが!?」
『安心しろ。発射してしまえば綺麗に真っ二つだ』
「安心出来る材料が微塵もないんだけど!!お願いだからこの拘束解いてくれないかな!?」
「アーシアに近付く悪い虫は徹底排除。これは既に決定事項だ」

ヤバいぞマーリンガチで死にそう。こっそり攻撃力アップかけてるアルトリアとか防御ダウンさせてるモルガンとかも問題だが。何してんだお前ら。

「レジェンド様も魔神様も駄目ですぅ！マーリンさんは別に悪い人じゃ……」

『チョロインならぬチョーローな奴など巫女の近くにいるだけで虫酸が走る！』

「ネットに過信してマギ☆マリなどと良い気になっているお前の姿はお笑いだったぜ」

「その台詞ボクにもダメージ来るんだけど！」

――つーかよぉ……魔術王とかより――

「『ん？』」

『偶には怪獣王のオレ様を注目しろやー!!』

「ぎゃあああああ!?」

最近あまり出番のないゴジラがブチ切れてダイナミックジャンプ＋尻尾攻撃でマーリンをぶっ飛ばしてしまった。

『ゴジラはああ言ってるけどさ、僕達の方が出番無いよね』

『まあ俺は昼寝し放題だからいいけどー』

グリーンモスラとゴモラはそんな光景を何やら悟りながら見ている。ゴモラの方はアーシアがよく構っているから良いのだが、グリーンモスラに関してはカナエが可愛いもの好きなおかげで割りを食ってしまっているというか……つい先日お仕置きを敢行したけれど。
ゴジラによってマーリンがぶっ飛ばされたため、怒りの矛先が無くなり急激に冷静になった一人と一機はとりあえず構えを解いて普段通りに戻る。

「命拾いしたな、あの野郎」
『次やったら光子力ビームだ。星に風穴が開こうが知ったことか』
「「「「スケールが物騒通り越して星の危機なんですが!?」」」」
「星の危機とあらば私の出番ですね！このアルトリア・アヴァロンの対粛清防御が輝く時！」
「いやマジンガーＺＥＲＯの光子力ビームはそんなん関係なくぶち抜くから」
「そんなの酷いです！横暴です！ならお詫びにレジェンドの手料理を所望します！」
「何で俺が詫びなければならないんだ。そっちのが横暴だろうが」

レジェンドと長らく共に旅をしたからか、アルトリアはすっかりレジェンド一家と同じ雰囲気を纏っている。もうアルトリア・キャスターとアルトリア・アヴァロンが混ざり合って『キャストリアヴァロン』とか言われても可笑しくないキャラになっている様にも見えるが、まあそれは良いか。
そんなこんなで呼ばれたサーヴァントらを紹介する舞台も整い、漸く歓迎会が始まるのであった。

――おまけ――

「なっ……!?あ、貴方は!!」
「まさか、既に現界していたとは……!」
「こんなに早く会うとはな、金ぴか!」
「揃いも揃って何だ貴様らは!俺は貴様らなぞ知らん!初対面だぞ!」
「「え……?名前は?」」
「俺はダルモア出身のガウェインだ!何処のどいつと勘違いしてるのか知らんが、いきなり武器を構えるとは礼儀知らずもいいところだな!」
（いや最初の頃のお前も似たようなもんだっただろ）
「あ……す、すみません!何せ声や風貌、その他も様々なところが知己の人物とそっくりで……はい?ガウェイン?」
「ふん、まあいい。次からは気を付けるんだな」
「……なあ、あんた。双子の兄弟とかいたりしねえか?」
「姉が一人いる。両親は既に無い」
「……すまない」
「いきなりしおらしくなるな。そもそもこの騎空団は訳ありが馬鹿見たく集まる珍妙な騎空団だ。俺と似たような連中や、もっと酷い奴だっている。その程度のことで一々目くじらを立てていてはキリがないんでな」

この時、アルトリア（セイバー）やエミヤ、クー・フーリンはこう思った。
――あ、これ確かに英雄王じゃないな――
だって今のガウェイン（お空出身）は比較的穏やかだもの。

特別編・サーヴァント歓迎会！その２～一人頑張っていた貴方達へ～

主役たるサーヴァント達を招き入れ、漸く開始されたサーヴァント歓迎会にてまずはロマニことソロモンやダ・ヴィンチちゃん、そしてマシュとフォウくんのことから説明される。案の定ソロモンの名を聞いたセラフォルー＆ソーナ姉妹が失神しかけたり、遊びに来ていたグレモリー家が土下座したりしたがロマニがあの性格なので即座にやめさせた。

元々カルデアは彼らの世界にて生まれたものだ。そこの初代所長とソロモンは聖杯戦争を勝ち抜き、詳細は省くがソロモンにも願いを叶える権利があると言われて彼はこう言ったそうだ。

『人間になりたい』

かくしてソロモンはロマニ・アーキマンとして人間の生を得ることが出来た……しかし、その際に千里眼によって『人理焼却される未来』を見てしまい、人間としての生を楽しむどころかそれを防ぐために１０年もの間、準備し続けていたという。

だが、ある日突然カルデアは大爆発を起こす。外からの攻撃で。それによって今まで準備してきたことは全て水泡に帰した。彼らの命も奪いながら。そしてその三人と一匹は薄れゆく意識の中で見たそうだ……金色の巨人を。

『お前達とその技術は我々の脅威となる。故にここで摘み取らせてもらった。悪く思うな、星見の天文台』

そう言って金色の空間に消える巨人を見ながら、彼らはその世界での生を終えた。人間になったはずのソロモン、そしてダ・ヴィンチちゃんは座に還り、マシュとフォウくんは飛ばされた惑星レジェンドにて保護され、ポケモンアイランドでの療養を終え蛇倉苑スタッフとしてウルトラ騎空団に加入したというわけだ。

☆

「――こんなところだよ。何故人間になったはずのボクが再び英霊の座に還されたのかは知らないけど、こうしてレオナルドやマシュ、フォウに再会出来たのは嬉しかった」
「おーいロマニー？マシュがソロモンインパクト受けて頭から煙出してるぞー？」
「えええええ!?」
「おいウチの看板娘に何してんだ」
「説明しただけなんだけど!?」

慌てふためくロマニだったが、程なくして復活し改めて残るダ・ヴィンチちゃん、マシュ、フォウの自己紹介に移る。と言ってもフォウはレジェンドの頭の上に乗っかって軽く鳴いた後にレジェンドから説明があっただけだが。レジェンド自身、彼の正体を知っているとはいえ別に追求したりしない。
かのレオナルド・ダ・ヴィンチが女性だったのは驚愕ばかりだった。というか分かりやすく言うとカリオストロ（カリおっさん）同様、外見女性・中身男性らしい。最近二人とも精神が女性寄りになりつつあるとか何とか。
そしてマシュ・キリエライトの話になってから、ロマニが焦ったように身体を心配していた。というのも彼女は一応デミ・サーヴァントと呼ばれる存在であると同時に、そうなることを運命付けられて作り出されたデザインベビーだったからだ。当然、それについて言及されるもマシュ自身が受け入れており、そして――

「身体の方は全く問題無く――むしろ好調なんです。レジェンド様が即座に気付いて治療してくれたと」
「はい!?」
「驚き半分、納得半分かな。何せ神より上の光神様とやらだ。それく

らい朝飯前ってところじゃない？」
「フォウ」
　相変わらずレジェンドのケアにより完治していた。まあ、惑星レジェンドで暮らしていたからそこに満ちる光気の影響で放置してもそのうち治っただろうとはレジェンドの弁。何にせよマシュの完治は喜ぶべきであり、同時にレジェンドのぶっ飛び具合を再認識するだけであった。
「本人が気にしてないのに赤の他人がぶり返すようなマネするなよ。さっきも言ったがマシュはウチの看板娘だ。知り合いだろうが何だろうが害する気ならこっちも容赦しないぜ」
「わ、分かってるってば！」
　ジャグラーに念を押され、怯むロマニ。サーヴァント相手に魔人態にならずとも対抗出来そうな、今のジャグラーと争う気など彼にはない。
「とにかく！ボク達は人理修復することなく命を落とした。もしかしたら、別の可能性でボク達が人理修復を完了させた世界や何らかの方法で未然に防げた世界もあるかもしれないけどそれはそれ。でもそんなことより、あの世界のボク達が今こうして再開出来たのはホントに奇跡としか言いようがないし、一番嬉しい事だ。ただ、今後知人と再会しても同一人物とは限らないから、たとえボク達が知っているカルデア関係者がいてもまずは初対面の体で話すのがいいと思う」
「私達を見つけた途端真っ先に突撃してきたロマニがそれを言うのかい？」
「うっ!?」
「まあ、そこはもう触れないでおいてやれ。湿っぽい話はとりあえず終了だ」

パンパンとレジェンドが手を叩いて場を収める。真似してるオーフィスを見てロマニもほっこりしたのか、それ以上ズルズルと延ばすこともなかった。

「お前達がどのような存在でどのような過去を持っていようが、俺達に呼び出されて俺達に共感の意を示し、共に歩んで行くのならばもはや俺や他のマスターにとってサーヴァントは道具にあらず『家族』。悩みや苦しみだけでなく喜びや楽しみも共有する存在だ。そこをしっかり理解するように」

「その理論でいくと、私もマイロードの家族でいいんだよね？」

「まあな」

やったやったと喜んでレジェンドの腕に抱きついてくるプーリン。服越しとはいえ、何がとは言わないが大きくて柔らかい感触が伝わってくるも、レジェンドの超抗力ペダニウムハートの理性はこの程度で揺らぐほどヤワではない。

こうして、改めてサーヴァント歓迎会は始まった。当然最初は自己紹介、先の前カルデア組のしたものは単なる説明であり自己紹介ではなかったからだ。

「えっと……デミ・サーヴァントのマシュ・キリエライトです。今は蛇倉苑、及びヒリュウ改の食堂で働いてます」

「蛇倉苑の看板娘で私の後輩、つまり宣伝兼ねて受付やってるのよ。で、こっちのもふもふして可愛いのが専属マスコットの――」

「フォーウ！」

「フォウさんです。ただマスコットというわけではなくて、ちゃんとお仕事もされてるんですよ」

マシュの言葉に「仕事？」と大半がハテナマークを飛ばすが、当の

フォウはというと新しい飼い主であるレジェンドのところへ行き、肩に乗ってはぺらりとある紙を見せる。
『フォウくんチェックシート』と書いてあるそれには、蛇倉苑の新作メニュー用にいくつもの評価項目が設定されており、全項目で彼の高評価が7割を超えねば新メニューにはならないという言わば最終審査役。それまでにも主要メンバーから合格をもらって初めてここまで到達出来るのであり、如何に蛇倉苑の新メニューが厳選されたものなのか窺い知ることとなった。

「大したもんだ。これ全部査定するのか」
「フォウ！」

褒めて！と胸を張るフォウの頭を優しく撫でてやるレジェンド。マーリンなら絶対しないであろう褒め方に御満悦なフォウと、日々の美味い食事は彼も含めた面々によって支えられていると再認識出来たレジェンド他ウルトラ騎空団。双方にとって良い事実を知れた。

「ちなみにアンタのリクエストしたスペシャル麻婆丼はフォウから万全のお墨付きを貰って完成・メニュー入りしたぞ」
「よーし店長、今日は俺の奢りでフォウにプリンアラモードパフェ頼む」
「キュー！フォウフォーウ！（やったー！あんな楽園（もどき）では味わえなかった満足感と達成感！お仕事楽しい！）」

続いて紹介されるのは、フォウにプリンアラモードパフェを持ってきたエミヤ。早速フォウはスプーン片手に頬張り出す。

「フォ～ウ……（幸せ～……）」
「器用だなこの子!?」
「今時このぐらい普通だ普通。で……」
「オーナー補佐で厨房担当のエミヤだ。宜しく頼む」

「イッセー、何やら彼に既視感を感じるのですが。騎士王だけに」

何処かで「ふはははは!!」と爆笑するＡＵＯがいるんだろうがそれはさておき。本作のセイバーアルトリアにあの夜の記憶はないから別霊基だ！本作ではたまにこういう英霊がいるからあしからず。

「ウチのナンバー2だ。個人的にあと一人、食材調達担当が欲しいな」
「というか、マシュちゃんとフォウくんはいいとして店長はいつ召喚したんですか？」
「企業秘密ってやつさ」
「確かに企業ですけども」
「この二人と一匹が蛇倉苑の新戦力、この調子で規模もメニューも増やしていくからよ」
「フォーウ！」

より美味い食事が期待され、可愛らしい鳴き声でほっこりしたところにまたもアレはやってくる。

「お待たせ！皆大好きマーリンお兄さ「マーリンシニサラセフォーウ!!」ドフォーウ!?」
「「「「バーニングメビウスピンキック!?」」」」

レジェンドから家族の温かさを貰ったのと同時に幾つか必殺技も貰ったらしいフォウの一撃が、置いてけぼりにされて今漸く追いついたマーリンに炸裂した。

「フォーウ！ツチニカエレフォーウ！ジゴクイケフォーウ！」
「あだだだだだ！コラ、やめろキャスパリーグ！私の爽やか系イケメンフェイスに爪立てて引っ掻くな！」
「フォウッ！」

ふん！と鼻を鳴らし、フォウはレジェンドの肩に乗っかりあっかんべーとマーリンに舌を出す。

「勝ち組になったから少しは穏やかになるかと思ったらそんなことはなかった！むしろキャスパリーグ、前より攻撃的になってないか!?」
「バカめ！そんなもの当たり前の幸せを手に入れて、お前のところにいた頃と比較した結果！お前からの扱いがあまりに不遇だったことの反動だろう!!」

レジェンドの指摘に「ふぐぅ!?」と言葉を詰まらせるマーリン。その横でプーリンがフォウに構おうとするもてしてしとはたき落とす感じで中々触らせてくれない。

（あのネカマーリンが原因で比較の獣へ戻らずに済んで良かった……あとプーリン、ボクはまだ認めてないぞ！）
「むぅ……攻撃されないだけマシなのかな」

ちなみにフォウが現在認めているのはマシュを除けばアーシアとアズだけである。ウルトラフォウくんの査定はレジェンドの相手を見定める時も厳しいのだ。ついでにこのレベルのてしてしは「これからしっかり頑張れ」的な意味合いもある。イシュタルが相手だった場合、彼女はフォウくんスパークダッシュの餌食になる。
――ぶっちゃけウルトラフォウくんはガチで戦うとウルトラ騎空団上位に位置する戦闘力を持つ。ハクといいパム治郎といい、この騎空団はマスコットがある意味一番規格外に見えるが気にしないでおこう。

「さて、話が脱線したが――」
「マーリンゲンキョウフォーウ」
「この子はフレンドリーにフォウくんとかフォウさんとか呼んであげてくれ、オスだからな。ついでにマーリンを嫌う理由はこれだ」

レジェンドが見せた映像――それはマーリンがフォウを「本当に美しいものを見ておいで」とアヴァロンから外へと出したこと……なのだが、言葉だけなら良く見えるも実際やったことはおもっくそ強制紐なしバンジー。本気で泣くフォウくんはこの頃まだ飛べなかったのだ！

「……ニャー……」
「……パム～……」
「そこの二匹が私を見る目、とんでもなく冷たいんだけど」
「マーリンさん、フォウさんを虐めてたんですか……？」

アーシアが泣きそうだ！レジェンドとマジンガーＺＥＲＯとフォウくんの青筋がヤバい。最後はマスコットがしていい顔じゃなくなってる。

「よし、デルタスターレジェンドになるわ俺」
「待て先輩!?それは確実に『マーリンが死んだ！』『この人でなし！』案件になるぞ！」
『そんな心配せずとも既にコイツはロクでなしだ』
「そしてレジェンド様も人でなく光神だし」
「マーリンアイキャンフライフォーウ！」
「空の世界でアイキャンフライして島から落ちるとまず助からなさそうなんですけど！」

三者三様容赦無し。頑張れマーリン負けるなマーリン！最高の信

頼を得るその日まで！

「フォウッ（それ絶対無理だね）」

「……アレ、おかしいな。快晴なのに曇ってきたぞ？」

割と本気で頑張れマーリン。プーリンは好感度上昇中なのだから。

「じゃあ男の私がヘタレてる間に自己紹介を済ませようか。私はマーリン、気軽にマーリンお姉さんと呼んでほしいな☆」

プーリンがキラリーン☆という効果音がしそうなポーズ（ウインク付き）で言うと、早速オーフィスから質問が飛んできた。

「レジェンド、さっき『プーリン』って言ってた。でもマーリンって言ってる。どうして？」

「それは私がそこの男の私より先輩だからさ！先輩ということでプロトタイプ、そこにマーリンをくっつけて――プロトマーリン、略してプーリンというわけだよ」

「なるほどー」

何故に先輩がプロトタイプに変換されるのかはさておき、さすがというか説明が分かりやすく説明される。伊達に花の魔術師と呼ばれているわけではないようだ。

……が、ここであることに反応してマーリン♂が復活。

「ふっ……墓穴を掘ったな女の私！」

「あ、復活した。何が？」

「君はこう言ったな、私より先輩だと」

「何か間違っていたかい？」

「間違ってはいないさ。だが間違っていないからこそ君は策に失敗している!!」

ババーン！とプーリンを指差して不敵に笑うマーリンだったが、その後に告げた理由で怒りを買う羽目になった。主に女性陣から。

「私より先輩＝年上、即ち君は自分から『自分はお婆さん』と告げたということだ!!」

「ッ!?」

まさかの反撃でショックを受けるプーリン。ちなみにレジェンドは気にしていない。そもそもここにいるサーガ以外全員の年齢を足しても到底及ばぬ年齢であるのがレジェンドだ。

しかしプーリンは別だ。ここにいる彼女は何処ぞの世界線と違い、純然たる乙女。つまりお婆さん呼びは相当なダメージを受けるということ。

「……う……」

「ん？」

「うわーん!!私だってそういうことは男の私に言わないようにしてたのに！」

「ちょっ!?ガチ泣き!?」

マイロードぉー！と本気で泣きながらレジェンドに抱きつくプーリン。確かに彼女は年齢的なことには一切触れていない。ツッコまれるのが分かっているし。

……ぶっちゃけレジェンドやサーガ以外にも、例えばオーフィスとか見た目にそぐわぬ年齢の者などウルトラ騎空団にはゴロゴロいるということを後々知ることになるが、それはとりあえず置いておく。

「最低ですねマーリン」

「ならば貴様も若作り色ボケ老人だろう」

辛辣な意見を飛ばしてくるのはアルトリア・キャスターとモルガン。さすがに今回ばかりはマーリンが悪い。

「いやあ私もここまで効果があるとは思っても……キャスパリーグ？」

「マーリンケスベシフォーウ！」

「ぎゃあああああ!?」

なんとフォウくん、Ｍ８７光線をぶっ放した。恐るべしウルトラけもの（決して彼をビーストなどと呼んではいけない）。

真っ黒になってぱったり倒れ痙攣してるマーリンに、てしてしと攻撃し様子を窺うフォウ。

返事がない。ただの屍のようだ。

「フォーウ！」※勝利のポーズ

「「「「いやさっきとんでもないの見たんですけど!?」」」」

「保護者もしくは飼い主が変わるだけでここまで変わるのかしら……」

一応フォウの（元）正体を知っているエレシュキガルは以前と今の違いに愕然としている。キラキラしてるのに強さまで滅茶苦茶レベルアップ。

「そのうちまた復活するだろうから、放っといて次行くぞー」

「フォウ！キューー！」

「はーい」

「そうです、そうしましょう我が夫」

（（（（酷ェ!!））））

ぐだぐだを（物理的に）終わらせた三人と一匹を信長は「え？儂こんな環境で生活するの？ウッソじゃろお主」と真っ青になって見てい

た。残念だがウルトラ騎空団では日常的に似たような光景を見る羽目になるわけだが。

「えーっと……この流れで自己紹介するのも……ロマニ・アーキマンです。ソロモンやってます」

「聞いたことあるぞ！魔術王ソロモン！嫁の数はおよそ１０００人の超絶ハーレムを作った男!!」

「「「何ィィィィ!?」」」」

　気不味そうに自己紹介したロマニにアザゼルが声と鼻息を荒らげて言うと、レジェンドや一誠らを除く独身彼女募集中メンバーによる大絶叫が起こる。

「だってソロモンだった頃は『はい』しか言えなかったんだよ！だから求婚されたら断れなかったんだ！それにボクには――」

「ほほう？」

「――やっぱ秘密！駄目だからね!?教えないからね!?」

「別に構わんぞ？次の機会にそいつを召喚してしまえばいいだけだ」

「えええー!?」

　レジェンドの指名召喚発言に驚くロマニと反応するデバガメ連中。元々これはレジェンドがある二人を招くために秘匿しておいた方法なのだが、こういう事情なら遠慮なく使う。ソロモンの語られているエピソードやロマニの話を聞いて確信したレジェンドは、次の召喚の際に実行する気満々である。

「ところで貴方に聞いておきたいことがあるんだ。何故貴方のもとにこの指輪が揃った状態で在ったのか」

「そんなもの、人理焼却とやらを終えて満足げな『何か』を『終わった世界』ごとマジンガーＺＥＲＯが跡形もなく消し飛ばした時に拾ってきたからだ」

「「「!?」」」

明確に驚愕の感情を表したのはロマニ、ダ・ヴィンチちゃん、マシュにフォウだけだったが、他の者達も似たような心境だった。

例によって詳細は省くが、魔術式を世界ごと消し飛ばすという離れ業を平然と成せるような存在がいることより、その存在の主がそれを当たり前のように言えることにも驚きを隠せない。

彼がもし元のカルデアにいたら――

三人はそう考えたが、フォウだけは違う。

(逆にカルデアにいたらレジェンド無双で英霊要らないよね、ってなっちゃいそうだもんなー。結果レジェンドばかりに負担掛けて倒れるか、下手したら見限られそうだし。むしろこっちで会えて良かったかも)

そう、頼り切りになりかねないほどのスペックなので、それが仇となることを懸念していた。まあ過ぎたことだし結局妄想の域を出ないため、そこで切り上げ。

意外にも別の空気に変えたのはレジェンド自身。さて、どんな風にと言うと……。

「何にせよ、るりふぃすさやぴーファンなお前に個人的に祝いの品を一つ進呈してやろうと思う」

「え……何か嫌な予感しかしないんだけど」

レジェンドが取り出したそれは、先日の映画祭にて上映されたレジェンド達の作品……それの初回生産限定盤。あまりの人気に惑星レジェンドでは予約された物以外にかなりの数を用意したにも関わらず半日もしないうちに完売となった一品だ。しかもルリア、オーフィス、沙耶の直筆サイン入り。

「!?!?!?」
「ロマニが壊れた！」
「えっと……このロクでなし！」
「フォーウ!?（それソロモン＝ロマニだからね、マシュ!?）」
「ふはははは！歓喜と驚愕、同時に襲われたか！何故なら三人の直筆サイン入りはそれしか全次元に存在しないオンリーワンアイテム！貴様専用よ！後で自室にて好きなだけ視聴するがいい！」

反応の良さに思わず尊大モード化するレジェンド。ロマニはファン垂涎の激レア品を手にしてガチ泣き。『泣き虫ソロモン』とか言われようと知ったことじゃない。

「うわあああああ!!もうボク月のカルデアとウルトラ騎空団とリアスちゃんのサーヴァントで掛け持ち就職する！仮にるりふぃすさやぴーがアイドル卒業してもこれだけは手放さないぞ!!ありがとう団長さん!!」
「それだけ喜ばれるならば贈呈して良かったというものよ。ふはは……ん、モルガンどうした？」
「私も欲しいです、我が夫」

多数の者から羨ましがられているロマニを尻目に、ダイレクトでモルガンが強請ってきた。後日レジェンドと沙耶の直筆サイン入りのものがモルガンとバーヴァン・シー、ついでにキャストリア宛に贈られ、前者は二人ともしばらく使い物にならなかったらしい。さやぴー大人気。

「いやあこの流れで自己紹介は難易度高くない？まあいいか、私はレオナルド・ダ・ヴィンチ！知っての通り万能な天才さ！気軽にダ・ヴィンチちゃんと呼んでくれたまえ！あ、私のマスターはそこの先代女王陛下ね」
「「「すげえ有名人がとんでもねえマスター引っ提げて来たんですが

!!」」」」
「え？え？レオナルド・ダ・ヴィンチって男性じゃ……」
「あれだろ、カリオストロと似たような感じの」
「「「「ああ、なるほど……」」」」

ダ・ヴィンチちゃんに関する疑問はレジェンドの一言であっさり片付いた。というかそんな疑問の答えになるような人物がいるウルトラ騎空団もどうかと思うが……。

「元のカルデアでは私が英霊召喚第三号だったんだけどね。ロマニと逆転した形になったかな？いや、マシュが一番最初かも」
「え……そういえばマシュはサーヴァントと融合したデミ・サーヴァントだって……」
「ああ、彼女と融合した英霊に関してはまだ伏せさせてもらうよ。ただ、今この場にいる英霊の誰かと関係がある人物だとは教えておこうか」

これ以上は駄目～とダ・ヴィンチちゃんは腕でバツマークを作る。気にはなるがある意味プライバシー問題になるのでここまでにしておく。

「では次は私が。アルトリア・ペンドラゴンです」
「彼女はアーサー王その人だよ」
「フォウ!?（復活早ッ!?）」
「はっはっは！そう簡単に私をノックアウト出来ると思うなよキャスパリーグ！伊達に冠位の資格を持ってるわけじゃないのさ！」
「グランドクソ野郎だもんな」
「キャスター！グランドキャスターだから!?」
「マーリンと同じキャスターなのは遺憾です。よって今から私はアルトリア・アヴァロンでいきます。マーリンがいるときは」
「相変わらず辛辣だな君達は!?何を隠そうアルトリアに剣術を教えた

の私なんだぞぅ！」
「で？」

殆どの連中は驚いているが、レジェンドとキャストリアは然程驚かない。特にレジェンドはあの英雄王やその無二の友を育て、鍛え上げた実績を持つ。他にもサーガを筆頭にケンやベリアル、それにレオやゼロ……キングメイカーなマーリンも凄いがレジェンドが育てた面々も宇宙に名を轟かす有名所ばかり。気後れする必要など微塵もないわけだ。

「それより召喚時にすぐ『お腹すいた』発言の方がインパクトあったんだけれど」
「……」
(((((あ、店長の持ってる丼が気になってる)))))
「食うか？」
「是非!!」

ジャグラーがセイバーアルトリアに渡したのは、何かを察した彼が予め用意しておいた爆盛牛丼。行儀がいいのか悪いのか、いただきますをしたら即座に食べ始めた。

「さて、セイバーアルトリアが飯をかっ食らってる間に、ある娘が自己紹介したあと小休止も兼ねて俺とその娘とそのマスターはちょっくら出掛けてくるぞ」
「え？何処へ？」
「その娘の自己紹介を聞けばすぐ分かる」

レジェンドの言葉に殆どはハテナマークを飛ばすも、一部は少し悩んで答えが出る。ちゃんと召喚されたときに他でもない本人が言っていたからだ。

「わ、私ね！冥界の女主人、エレシュキガルなのだわ！光神レジェンド様にはメソポタミアにいた頃から気にかけて貰ってて……あら？」

タイガが真面目に聞いてくれていたのはいいのだが、またもグレモリー家やセラフォルー、ソーナらが土下座している。エレシュキガルの治めている方を『本物』とするなら、彼らの方を『ダメな冥界、略してダメ界』と呼ぶものもいるとか何とか。

「何でこんな凄い方ばかりが……!?」

「エレシュキガル様すみませんマジですみません冥界ダメにしてすみません」

「魔王である私達の責任です申し訳ございませんでした」

「えええええ!?だって、私の冥界には私以外魂とガルラ霊しかいないし！多分違う冥界じゃないかしら!?」

サーゼクスとセラフォルーが本気で謝っているのを見て慌てふためくエレシュキガル。何せ冥界においては彼女が絶対の法であり、それこそ最低でもサーガ、スペリオルドラゴンクラスでなければ光神にすら影響を及ぼすほどのもの。

そんな彼女を怒らせた日には冥界で好き放題してた悪魔はひとたまりもない……のだが、彼女が収める冥界と彼らの住む冥界は違う。しかし一応エレシュキガルの名は知られていたようで、あちらのエレシュキガルと勘違いさせてしまったらしい。

それを差し引いてもかつてウルクにいたレジェンドを顔見知りレベルで知っているというだけでも凄いのだが。

「まあそこはいいとして、エレシュキガルが召喚されたことで彼女に付随するように彼女が収める冥界も召喚されるという、ぶっちぎりで顎が外れることが起きたわけだが……実際は特に影響はなく、エレシュキガルが一番偉くていつでも行ける別荘地が出来たものだと思ってくれればいい」

「嬉しいか怒るべきか悲しむべきか分からないのだわー!!」
「そこでエレシュキガルの冥界を大改革してくるから、自己紹介は一先ず置いといて先に親睦を深めていろ。ちゃちゃっと済ませてくる」
「そんな簡単に済むんですか!?」
「俺だからな」

ドきっぱり言い放つレジェンドに納得してしまうウルトラ騎空団全員。エレシュキガルはまだおろおろしているが、タイガが手を握り「大丈夫だから」と声を掛けると落ち着いた。結局ジータやプーリン、キャストリアまで同行することになったが……影響は大丈夫なのかと不安になるもあっさり問題無しと言われる。冥界がマイルドになったのかレジェンドがおかしいだけなのか。
ついでに一誠とセイバーアルトリア、タイタスとレオニダス、そしてフーマと小太郎も必然的に赴くことになる。

……で、時間にして僅か数十分足らず。レジェンドのおかげで向こうでは数日立っているのだが、それは色々帳尻を合わせるための御都合主義的なものなのでそこは触れないで頂きたい。
エレシュキガルの冥界はレジェンドが同行した面々の意見や要望を聞き、「イシュタルと違ってエルキドゥの墓を作ってくれたりした良い娘なので張り切っちゃうぞー」とノリノリで改築・改装・開拓しまくった結果――

○タイガ、エレシュキガルの希望により、プラズマスパークタワーの縮小版をエレシュキガルの宮殿の敷地内に設置。敢えて外に設置することで光をより遠くまで届けられるようにとエレシュキガルが願った。
○冷たい大地は温かな草原に、宮殿の近くには美しい湖、遠くには海を。冥界全部を変えるのではなく、元の冥界らしさも要所要所に残す形で大変革。さらに朝昼夜で空や気温も変化するように再設定。

四季は敢えて導入しないが、それがなくとも植物や作物が育つように。

○槍檻も位置を整理整頓。エレシュキガルの宮殿から程よい距離に纏めて設置。いい感じにプチプラズマスパークタワーの光が当たる。

○エレシュキガルの宮殿をグレードアップ。元の宮殿をレベル１とすると、改築後はレベル２５０。広さや暮らしやすさ、宮殿環境の自動維持の他諸々が異次元レベルの超発展。内装や生活用品にもそれは適用されている。タイガの部屋、ジータの部屋も当然のごとく用意され、極めつけはレジェンドが来訪時に使うのは部屋どころか区画。トドメに個人の私室のみならず『タイガとエレシュキガルの』部屋まで増設。

○セキュリティも当然強化。七つの門の試練は難易度大幅上昇。ガルラ霊はタイタス、レオニダス（幽霊苦手もこれにて克服）による『ＧＧビルドアップトレーニング』を受け全員揃ってパワーアップ。各々特殊能力を兼ね備え外見も変わり……ぶっちゃけ幽波紋（スタンド）化していた。他にもレジェンドが別世界から連れてきた魔獣を『冥神獣』として育成、七つの門の試練同様七体用意。一体一体がグガランナに匹敵する超戦力。フーマと小太郎によって罠も充実、プーリンやキャストリアのおかげで各種結界も万全。

○最後は人員増強。元の世界を離れても構わないという者達を選別し、冥界の住人として衣食住を提供。同時に役職を割り振りエレシュキガルの在不在関係なく冥界が機能するように。だからといってエレシュキガルが不要というわけではないことを念押しするが、そんなのはむしろ当然とガルラ霊や冥神獣共々既に納得していた。尚、彼らは一誠、セイバーアルトリア、ジータによって剣術や体術を標準以上で体得。彼らもまた冥界を護る番人なのだ。

○仕上げとばかりにポケモンアイランドよりギラティナを筆頭としたゴーストタイプ持ちのポケモンが出張。惑星レジェンドが有事の際は即座に戻れるよう転移ゲートも完備。

○ここまでやっても今後は更に拡張していく予定。

――以上のことをガチでやり遂げたらしい。時間的に数日じゃどうにもならない？そこはレジェンドが言った「俺だからな」で片が付く。納得して頂きたい。
レジェンド達と共に帰ってきたエレシュキガルは嬉し涙を流しながらタイガの腕に抱き着きつつ、速攻で作った冥界のパンフレットまで差し出してきた。

「凄すぎるのだわ！もう……何というか言葉が見つからないくらい！冥界が……冥界が……！」
「いや俺も傍で見てたけど、レジェンド様は当然としてタイガの奮闘ぶり凄すぎたぜ。他のメンバーに割り振った仕事場の殆どに顔出してて」
「つーかガルラ霊ってのが元の面影無くなってムキムキマッチョマンゴーストになってたの本気で腰抜かしたんだけど。なあ小太郎？」
「はい、主……恐るべしビルドアップトレーニング。あれは猛将さえ一撃で殺られる強さでしょう」
「ははは、よもや私も霊に感謝されるとは思いませんでしたが。やはり大事なのは肉！そして計算！ディスイズプラニウムスパルタ！！」
「ディスイズプラニウムスパルタァ！！やはりレオニダスのスパルタ式トレーニングにU―４０式ビルドアップ法を組み込んだのが功を奏したか！」
「霊に筋肉というのもアレだけど……あの冥界、不法侵入したら確実に生きて帰れないよね」
「オラオラと無駄無駄のラッシュバトル訓練もありましたね。あとはゴールドなレクイエムや王のクリムゾン的なのもいましたが」
「「「冥界で魂を死なせ続けそうなのがいるんですけど！？」」」

ハッキリ言おう。今の冥界（こっちのエレシュキガル統治）は英雄王やイシュタルが挑んだ時とは比べるのもおこがましいほど進化していると。

「よし、アザゼルよ。ここが根性の見せ所だ。逝って来い」
「逝けても帰って来れねーよこんな難易度ルナティック超えの場所!!」

ゼロガンダムに言われて即座にアザゼルは反論する。ぶっちゃけこんなん突入して進めるのはレジェンドとかサーガだけじゃないかと思えるくらいヤバイ。しかも『烈・冥界の護り』にて冥神獣や幽波紋ガルラ霊は更にパワーアップしているわけで。

「ちゃ、ちゃんとタイガのお父様やお祖父様、お祖母様をお迎えする準備も出来たし……」
「あ、アザゼルが絶望した」
「会ったばかりなのに他人のために進んで苦労を買って出るタイガと、自分の楽しみ優先のダメ総督の違いだな」
「チクショオオオオアアアア!!」

どんどんモテ男から遠ざかっていく（周りがモテまくっているから）アザゼルを見て、自業自得とかご愁傷様とか各々思っている。レジェンドだけはエレシュキガルを見ながら「あ、エレちーがタイガに落ちた」と考え、ある人物へ何やら送っていた。
まだまだ歓迎会は始まったばかりである。

――おまけ――

「父さん、母さん……」
「む？どうした、タロウ」

「タイガに……タイガに種族を超えた可愛らしい彼女が出来ました!!」
「あら……!それは喜ばしいことですね」
「ちょっと兄さん達呼んできます!!画像ありがとうございましたレジェンド!!」

タロウのウルフォンには恥ずかしがりながらタイガの腕に抱き着くエレシュキガルと、もう片方の腕に抱き着きつつ元気いっぱいの笑顔でピースするジータの画像が送られていた。
ついでに日本地獄でパシられてるイシュタルにも。

「何でアイツこんなに幸せそうなのよぉぉぉ!」

「良かったね、エレシュキガル。レジェンド、早く僕とギルを呼んでくれないかなぁ」

特別編・サーヴァントを呼ぼう！オカ研関係者＋α編
～真面目な奴ほどヤベー奴を呼ぶ～

先日、ロスヴァイセがブリュンヒルデを召喚したことに続き、デイビット・ゼム・ヴォイド――留学生組の中で唯一サーヴァントを召喚していなかった彼が漸くサーヴァントを召喚したのだが……そのサーヴァントにほぼ全員が度肝を抜かれた。

デイビットは過去の出来事から一日に記憶しておける時間がたった5分しかなかった。それをレジェンドが現時点でデイビットに掛かる負担を考慮して十二時間と大幅に引き上げたことで、彼も変わり始める決意をしたのである。それで心に余裕が生まれ、呼び出したサーヴァントというのが……。

「元アクシズ摂政にして初代ネオ・ジオンの指導者、ハマーン・カーンだ。どういうわけか知らんが、呼び出された以上は力になることを約束しよう。私の期待を裏切るなよ、マスター」

そう、宇宙世紀出身もしくは宇宙世紀を知るものならば知らない者はいないであろう女傑。シャア・アズナブルがいたなら真っ青になっているだろう凄腕のニュータイプパイロット。

ハマーン・カーン――正に天才が天才を呼び込んだのだ。

「うおおおおお!?凄え！ウルトラ凄え！サーヴァントとはいえ本物のハマーン・カーン!?」

「か……閣下?!いや、確かに閣下の生歴を考えればそうなってもおかしくはない。早逝されてしまったが、閣下の成した事は偉業と呼べるものばかりだ」

大の宇宙世紀フリークなゼットや、宇宙世紀出身かつネオ・ジオンと関わりが深いマリーダ（リアスに引っ張られて連れてこられた）は感嘆をもって彼女を迎え入れる。同じく、サイコミュも使えるＭＡ乗りとして頭角を現し始めた、彼女のマスターであるデイビットも好意的だ。

「よろしく頼む、ハマーン。キュベレイはマイフェイバリットＭＳだ」
「ほう、話が分かるマスターではないか。それにこの感覚……フッ、どうやら私は当たりを引いたらしい」

ゼットにくっついてくる感じでステラやガレスも会話に混ざり、そこら辺だけ別空間が形成されている。

「あ、そういや俺らシャア・アズナブルの部隊とやり合ったことが在るのでございますよ。超師匠がタイマンで撃退したりしました」
「フン、あちらこちらでせっせと女作りに励んで腑抜けたかシャアめ。確か１３か１４の娘にまで手を出したとか言っていたな」
「向こうからではなくシャア・アズナブルから手を出したのか。それにアクシズ落としも実行したそうだ。失敗したそうだが」
「……どうやら奴はつくづく私を怒らせることが好きなようだ。よかろう、機体の武装を破壊して丸裸になどせん。最初からコックピットを集中攻撃してくれる！」

かつての故郷を落とそうとした挙げ句失敗したとあってハマーン閣下プッツンモード。ついでに丸裸関係者が近くにいるんですが（丸裸＝フル・フロンタル＝袖付き＝マリーダの前・所属元）。

「閣下、フル・フロンタルが申し訳ありませんでした……」
「マリーダ・クルスと言ったか。案ずるな、寧ろ私はお前の境遇に同情を感じ得ない。その一端がグレミー・トトだというのだから尚更な。しかし、シャアの影武者のような強化人間とは……奴の経歴、いや性

癖をよく調べてから作るかどうかを決めればいいだろうに」

……赤い彗星、散々な言われようである。アムロがこの場にいなくて良かったな、シャア。

そんなわけで、デイビットが無事大物を召喚したことで留学生組は大盛り上がり。このビッグウェーブに乗るしかない！というお祭り的なノリでまたも召喚大会が開かれることになったのである。

☆

色々違う（レイシフトはレジェンド協力の下コフィン無しでやったり、カルデアスが不要なので無かったり）が、せっかくフィニス・カルデアにいるのだからとロマニとダ・ヴィンチちゃんが交互に召喚サークルを起動させることになった今回のサーヴァント召喚祭り。

前回やちょくちょく誰かしらが呼んでいることもあり、今回はギャラリーも大勢いる。

「懐かしいと思う反面、こんな大勢に見られながら発表会宜しく召喚を行うなんて考えてもみなかったなぁ……」

「けれども縁とかそんなの関係無しに呼んでたりするマスターもいるからね。ギャラリー大勢というのも、案外良策なのかもしれないよ？」

そう言いながらせっせと準備を進めるロマニとダ・ヴィンチちゃん。

今回はオカ研の顧問である二人――矢的猛とアザゼルを始め、鬼討組戦力増強も視野に入れるため杏寿郎としのぶ、さらにトライスクワッドに加えてゼットまで呼んだということで銀河遊撃隊隊長のウルトラマンゼロことレイトも対象。そこに最近爆死続きの勇治と、魔力的にまだ余裕のある沙耶、おまけに何故かスレッタまで召喚メンバーに入れられていた。

一応レジェンドも〆に行う予定だが……あの愉悦部名誉顧問、その時の気分次第でやるやらないを決めるからこの手の任意系イベントでは予定もクソもない。

「何でスレッタが!?」

「まあ、何となく予想はつくんだがよ……」

そう答えたのはクー・フーリン。あの夜の記憶はないはずだが、正に『何となく』そんな予感がするというか……。

「待たせたな皆の衆！ふはははは!!今回は玉座持ちが多く参加しているため実に壮大さを感じるだろうが……そんなことはどうでもいい!!見ている側もやっている側も心躍る召喚（ガチャ）の時間だ!!」

いや召喚（ガチャ）って……おたくもそれで呼ばれたんだろーがとか言ってはいけない。

しかし、本来ならばここはウルトラ騎空団の団長たるレジェンドが宣言すべきところ。直接的な関係者とはいえ、何故にギルガメッシュが場を取り仕切っているのだろうか？

ついでにエルキドゥや、フォウくんとピカチュウのマスコット組はいるのだが……レジェンドとキャストリア、プーリンの姿が見えない。

「究極英雄王よ、我が伴侶と他二名が見当たらぬが」

(((((ほ……他二名……)))))

玉座を用意して腰掛けている一名、スカサハ＝スカディも少しばか

り不満気な表情でギルガメッシュに問う。キャストリアとプーリンを他二名と言ったのはやはり最近いつもレジェンドと一緒にいる嫉妬からか。

そしてギルガメッシュだが、別にレジェンド以外の二人がどう言われようとも気にしない。これがアーシアやセイバーアルトリアなど一部の者であれば彼も反論しただろうが、生憎とキャストリアやプーリンはその一部に含まれないからだ。

ついでにスカディがそう表現したのもおそらくはレジェンドと一緒だろうことへの嫉妬から、つまり女神の可愛い仕返し的なもの。

「……師父だが、先刻倒れた」

「「「「!!」」」」

ギルガメッシュが普段の不敵な笑みを浮かべることなく、真剣な表情で告げた一言に戦慄が走った。アーシアやジャンヌなど顔面蒼白で今度はこっちが倒れそう。

「あの病気とは無縁で呪いなんか逆に呪ってきた奴へ何十倍か倍増させて呪詛返しする、あの『健康なめんな病魔共』なレジェンドが!?」

「『最大最強の敵!その名は不憫!!』な超師匠が!?」

「そこの青トラマン二名、貴様ら師父を何だと思っておるのだ!!」

レイトとゼット、よりによって関わりの深い二人から不在を理由に言いたい放題されるレジェンド。これにはギルガメッシュもぷんすこー。

「ゴホン!卯ノ花や御門に診せたところ単なる過労と言われたがな。しかし我は過労死の恐ろしさを身に沁みて知る究極英雄王。此度のイベントは責任者の代替が可能故に我が師父の代わりを引き受け、良

い機会だと休ませることにしたわけよ。プーリンとバカトリアはその看病だ」

冥界の常連は伊達ではない（昔はそれでこっちが苦労したのだわ！ｂｙ　エレちゃん）。

「こうしてはいられません。夫婦とは即ち相互扶助、我が夫が倒れたのであれば妻である私が看病せずして誰がそれを成すというのです」

「光神たる我が伴侶に癒しのルーンが効くかは分からぬが、やるかやらないかはまた別の問題。ここで見過ごすなど番としてありえぬ」

それはいいが――二人揃っていつの間に着替えたのか寝間着なのは何故だ。

「……よもや看病と称して添い寝する気ではあるまいな？」

「それが何か？」

「たわけ!!ただでさえ常日頃より理性との戦いを繰り広げたことが師父の過労原因の一つだというのに、弱っている今そんなことをすれば状態悪化は確実だと言わんでも分かるであろう!!」

さしものギルガメッシュもレジェンドが絡んでぶっ飛び思考になっている月王国先代女王と北欧統括女神を窘めるには怒鳴るしかなかった。

「しかし英雄王、あの団長殿が簡単に倒れるとも思えないのだが。少なくとも、己の愉悦とやらの為なら苦しい職務さえ平然とこなしていたと当方は記憶している」

「その通りだ、シグルド学園長。師父は己の職務ならどれほどの量であろうと瞬く間に処理する。それこそ書類の山や大海原だろうがな。そう、己の仕事ならば――」

そこまでギルガメッシュが言うと、シグルドは気付く。レジェンドは己の職務が原因で倒れたのではないと。

「もしや、団長殿が倒れたのは――」

「察したか、さすがよな。そう……他の光神共（サーガやスペドラ除く）が事あるごとにイベント優先で奴ら自身の職務を師父に押し付けた事が今回の事態の大元よ!!」

それを聞いた一部の者は「ああ……」と遠い目をする。特にサーガは目が死んでいた。ぶっちゃけそれでウルトラ騎空団が壊滅の危機に陥ったのだから忘れはしない……あ、ウルトラ騎空団どころか【エリア】レベルの危機だった。

「神も光神もまともな連中は合わせて数えた方が早いというからどうしようもないではないか！奴らめ、人を導くことに期待はしていないが自分の職務さえ師父に押し付けるなど不敬にして怠惰!!押し付けた連中を纏めてエアの餌食にしてやりたい憤怒に駆られるわ!!」

ギルガメッシュが怒るのも納得がいく。レジェンドはその押し付けられた仕事を全て捌き切った後、ド派手にぶっ倒れたのだ。よりによってギルガメッシュやエルキドゥ、プーリンやキャストリアの目の前で。

故に、レジェンドがどれだけの仕事を押し付けられたのか目の当たりにしているわけである。

「……しかし、ここで怒りに任せて職務押し付け光神共を制裁し、此度のイベントを急遽中止にするのは師父も望んでおらぬ。よってバカ共への制裁は師父が復帰してから考えるとし、予定通り召喚を行うことにしたというわけだ」

「団長さんの気持ちを汲んだんだね」

「まあ、そうなるな。師父もこのイベントを愉しむつもりで職務を片

付けていたのだ。せめて予定通りに実行し、記録映像の一つでも撮っておいて見せるのが我らに出来る最善であろう。疲労困憊の師父を無理矢理起こすのは筋違いというものよ」

何かキャストリアが「レジェンドに優しいのはいいけどこっちにも優しくしろギルガメエ」とか言ってそうな気がするがそれはそれ。ギルガメッシュの言葉通りレジェンドの意思を汲み、そのままサーヴァント召喚祭りは決行される。

☆

「さて、では早速召喚に移るぞ！ロマン、ダ・ヴィンチ！準備は出来ていような⁉」
「バッチリさ！」
「まあ、ぶっ飛んだ英霊が召喚されたらシステムもぶっ飛ぶかもしれないけどね！」
「「「怖いこと言うなよ!!」」」」

ダ・ヴィンチちゃんのテヘペロ付き注意事項（？）にツッコミつつ、今回最初の召喚を行う。挑むのはオカルト研究部顧問にして我らがウルトラ騎空団の良心、矢的猛。ギャラリーでは特にウーノやマリユー、そしてカドック（とアナスタシア）から声援が送られている。

リアス達？彼女らは「矢的先生なら絶対失敗しない」と不動の信頼があるため特に気にしていない。

「う～ん……僕はあまりそういった縁が無いから、他の人に譲ったほうがいいと思うんだけれど」
「そのような心配など不要。貴様の日々の行いを見ていれば座の方が適任を判断して送り込んでくるだろうよ」
「まあ、失敗してもあまりデメリットは無いようだし、とりあえずやってみるよ」

未知なことでもちゃんと考えた上で実行に移す矢的。魔術師的にそういった警戒は高ポイントだ、とカドックは語る。
召喚サークルにお馴染みの聖晶石を投げ入れ、サークルを起動。ギルガメッシュの言ったように、矢的が一番手なのも相まって誰もがサークルを凝視していた。
もう片方があまり期待出来ない中、オカ研の命運を分ける召喚にて呼び出したのは――。

「――どうやら私は、善なる者に呼び出されたようですね」
「「「「……え……？」」」」

それは、とある世界にて『黒き最後の神』と呼ばれた超統合神性。あまり言葉を発しない当初の姿ではなく、最初から『第三再臨』に相当し、元となった『彼』が本来持ちうる少しばかりの天然気味な性格が顔を出した存在。

「私はアルジュナだったもの……アルジュナ・オルタとお呼び下さい」
「「「「はあああああ!?」」」」

そう、矢的が呼び出したのは本来異聞帯もしくはロストベルトと呼ばれる世界――そのインドにおいて絶対たる存在として君臨していたアルジュナ・オルタ。ガチの神である。
まさかの存在をサーヴァントとして召喚したことにあるものは口にしていたものを盛大に吹き出し、あるものは腰を抜かし、あるものは失神。当のアルジュナ・オルタ（略してオルジュナ又はジュナオ）は矢的に「これから宜しくお願いします」と礼儀正しく頭を下げており、

矢的も同じように頭を下げていた。
何というか、良い意味で似た者同士だ。
「あば、あばばばば……！」
「ぺぺさんが壊れた!?」
「そりゃそうさ！アルジュナといえばマハーバーラタに登場する大英雄！それのオルタ……いやそんなレベルじゃないぞこの霊基の反応は!!」
「正直、この場で対抗出来るのはサーヴァントに限ったとしても我か、グランドクラスに相当する者ぐらいであろう。初手から凄まじいモノを呼び出したものよ。さすがは師父も認めたウルトラマン先生と言ったところか」
ギルガメッシュの言葉に驚く者が殆どだが、カドックは純粋に「凄すぎる」と尊敬の眼差しを向けている。なお、早速オルジュナは矢的から現代文化に関する知識を享受していた。
「成程……私は神として、元あったものの多くを失ったらしいのですが……改めて学び直すのも良いかもしれません」
「僕もまだまだ勉強中の身です。共に学び、共に成長していきましょう」
「はい。私のマスターが貴方でよかった、矢的猛……ウルトラマン８０」
神さえ即座に説き伏せた偉大なるウルトラ兄弟の一人、ウルトラマン８０。一誠やタイガもキラキラとした目でその光景を見つめていた。
「これは今回の召喚……全部大成功なんじゃないのか？幸先良いぞ！」

「ょぅし次は俺だな！」
「「「「……」」」」

アザゼルの登場で「あ、やっぱダメかも」的な空気になってしまった。ちなみに矢的とオルジュナはカドックとアナスタシアを皮切りに挨拶回り。その際、オルジュナがラーメンに興味を持ったらしく歓迎会で食べてみることになったそうな。

「期待はせぬが……構わん、回せ」
「うし、来いよ美女英霊！」
（（（（矢的先生は真面目に取り組んで凄い神霊呼んだのに……））））

こちらはオカ研メンバーの総意。そして、彼らのサーヴァントはこの光景をどう思っていたかというと。

「ヤベーな、アイツ来そうなんだけど」←猛犬
「……円卓に心当たり有り過ぎて……」←騎士王
「ボクもいるんだよね、身内に……」←魔術王
「えー、儂のいた世なんて探せばいくらでも出て来そうで困るんじゃが？」←うつけ
「うむ、任されたぞオルジュナ。数多の野菜、大自然の恵みを使った特製味噌タンメンがお前の味覚を刺激するだろう」←食堂の狐猫（しかもアザゼルどうでもよさげ）

他にもいるが大体こんな感じ。大物三人、呼ばれそうな英霊に心当たりあるというから凄いというか何というか。
ダ・ヴィンチちゃんが「団長さん成分というか団長さんフェロモンが足りない」とか言いながら、アザゼルに聖晶石を投げ込まれた召喚サークルを起動。
果たして、アザゼルの望む美女は来るのか――!?

「霊基反応、セイバー！」
「何ィ!?よもやあの堕天使総督が（普通なら）最優の――」

「フェルグス・マック・ロイ、参上した。さてマスター、早速だが……酒と女の準備だ」

「……」←銀魂風絶望顔のアザゼル
「ふはははははははは!!!」

大撃沈したアザゼルに対し、ギルガメッシュは自身の膝を叩きながら大爆笑。正に愉悦。

「む、何故にマスターはこうなって……おお！クー・フーリン！」
「何となく予想はしてたけどマジで来たな、フェルグス」

苦笑しながらも知己が招かれたことを嬉しく思うクー・フーリン。ところでお気付きだろう、フェルグスの見た目から、かの世界をレジェンドやベリアルと旅したジード……リクが彼をどう思うか。何より先の発言でそれがより顕著になったことも。

「ま……まさか……！」
「リク兄さん？」
「どうしたんだ、リク？」
「新たなローマを開眼したか？」

ギャスパー、バーン、そしてロムルス。驚きの表情でフェルグスを

見ているリクが、次に言ったのは……。

「ニビシティのジムリーダー、タケシ……！彼の祖先こそあのフェルグス・マック・ロイだったんだ!!」

……案外間違いではないと言い切れないのが何ともはや。フェルグスの声で『タケシのパラダイス』を想像してみよう。いつの間にか『フェルグス・パラダイス』になっているぐらいに違和感が無くなるはずだ。多分。

この後リクに件のタケシの写真を見せたところ、クー・フーリンは本気で衝撃を受け……他の者も開いた口が塞がらなかったという。

「綺麗なお姉さんに弱かったよ、彼」

「マジでフェルグスじゃねえか!!」

――気を取り直して、次の参加者。オルジュナというぶっちぎりの超当たりから、(アザゼル的に)爆死したという落差を見せつけられてプレッシャーを受けつつ召喚を行うのは杏寿郎。相変わらずパム治郎を肩に乗せ、重圧なぞ何のその。

「よし！それでは俺の番だな！」

「パム～」

「フォーウ」

「ピカー」

実に和む光景である。ただし、このマスコット組は下手なサーヴァントより余程優秀というか……ハク達も含めて適材適所ならグランドクラス並に超性能だったりするからウルトラ騎空団のマスコットは侮れない。

「カナエ殿が良き『さぁぅぁんと』と巡り会えたのだ！俺もそうあることを信じよう！」
「煉獄さんと相性良さげなのってやっぱり炎とか、剣とか？」
「後者はクラス・セイバーだろうけど……炎かぁ……」
「……スルトとか」

それを聞いたスカディを始めとする北欧組はぶんぶんと頭を振ってNGサイン。だが実の所、確かに杏寿郎と相性は良いだろう。本気で呼ばれなければいいが……。

「よし、頼むぞ！聖晶石！」
「サークル起動……な、何だあ!?」

突如、虹回転から更に凄まじい反応が出る召喚サークル。その場に猛烈な風が巻き起こり、とある声が木霊する。

「ほう……良い魂持った戦士がいるな」
「「「「!!」」」」
「おっと、郷に入っては郷に従え……だったか。せっかくのお呼ばれだ、行儀良くしないとな」

圧倒的な威圧感。先のオルジュナに比肩し、場を支配し得る恐るべき力の奔流。その正体は――。
「改めて自己紹介だ。俺は黒く、赤く、青く、白く……今なお生きる『死』そのもの。ヤヤウキ・テスカトリポカ！」
「「「「えええええ!?」」」」

よりによって全能神を呼び込んだ。アステカ神話において主要な

神であり、数多の概念を司る存在。ただし、呼び出された彼の外見は……金髪グラサンの、何というかヤーさんチックなものだった。

「おお……貴殿が俺の呼び掛けに応えてくれたのか！」

「まあな。さて、早速だがお前さんに聞いておきたいことがある。返答次第じゃ契約破棄だ」

「「「「!?」」」」

フー……と煙草をふかしてそう言ったテスカトリポカに殆どの者が驚愕の視線を向ける。

契約破棄、一度召喚されたサーヴァントがそれを実行する最も分かりやすい手段は即ちマスターを殺すこと。テスカトリポカはそれを行う、と平然と言ってきた。

ここで異を唱えることも出来ただろうが、相手が相手だけに太刀打ち出来そうなのはやはりギルガメッシュら僅か数名のみ。やはりレジェンド不在は痛い。

「うむ！では言ってくれ！」

「「「「はい!?」」」」

「ヒュウ♪良いねェ、肝が座ってる」

こっちもこっちで怖いもの知らずだった。この態度にテスカトリポカは気分を良くしたようで、雰囲気が多少は穏やかになる。

「何、そう難しい質問じゃない。俺を呼んだってことはお前に戦士としての資質があったってことだからな。俺が欲しいのは英雄じゃない、戦士だ。お前が戦いに身をおいているのは一目で分かる。で……もし、戦いが終わったとしたらお前はどうする？」

難しくないとテスカトリポカは言ったが、かなり難しい質問であった。しかも彼が納得しなければ杏寿郎は……。

「無論、次の戦いが起きた時の為に己を鍛える！」
「……ほう」
「戦いの終わりが終わりではない！いつ、また新たな脅威がやってくるとも限らないと、俺はこちら側に『弾かれ』て学んだ！ならば俺は俺の命尽きるまで、罪無き者達を守る剣として生きる!!」

ハッキリと、言い淀む事無く告げた杏寿郎。ポケットに片手を突っ込んだままのテスカトリポカ。そしてそれを緊張した面持ちで、しかし何かあれば動けるようにしているその他の面々。
それは、意外な形で破られた。

「クッ……ハハハハハ!!」
「「「「……!?」」」」
「命尽きるまで守る剣として、か！つまりお前は生きてる間は戦士で有り続けるってことだな!?」
「うむ！そうなるな！」
「良いぜ、最高だ！俺は古今東西なかなかお目にかかれない正真正銘生涯戦士な魂に出会えたってワケだ!!これだよ、こういう奴を待ってたんだよ!!」

何やらハイテンションで喜びを露にするテスカトリポカに杏寿郎とパム治郎、ギルガメッシュなど一部の者を除き唖然としていた。先程までの空気は何だったのかと。

「では俺は合格で良いのだろうか!?」
「合格どころか満点だ。そっちの肩に乗ってんのも含めてな。俺にはしっかり視えてるぜ」
「パム？」
「ま、何にせよ俺のこれからの生は波乱万丈大騒動で楽しいものになるって確定したことだし……宜しく頼むぜ、兄弟」

差し出されたテスカトリポカの手を、疑いなく握り返す杏寿郎にテスカトリポカは満足そうな笑顔で頷いた。

「で、今は召喚イベントか何かだろう。時間が出来たらどうする、マスター」

「うむ！ラッシュハンターズの皆とハンティングに行こうと思っている！」

「ほう！つまりは戦いと資源回収ってことだな！」

ノリノリで参加する気満々なテスカトリポカ。後にウルトラ騎空団の面々は知ることになる。彼は銃火器を好むが……その実、『グランドクソエイム』と呼ばれる程に射撃がド下手くそだということを。反対に接近戦がガチで強過ぎるということも。

「気を落とすなテスカトリポカ殿！俺の場合は引き金を引いたら何故か銃自体が爆発した!!」

「いや、それはそれでよく無事だったな……安心しな。お前さんが死んだら確実にミクトランパに招くからよ」

……何というか、(マイナスとマイナスが掛け合わさって)銃絡みでも仲良くなった二人であった。

「今回は立て続けに大物が来たなあ……おかげでシステムがいっぱいいっぱいだよ。ここらで一度休憩を挟んだ方がいいかもしれない」

「フェルグスで落ち着いたと思ったところにテスカトリポカだし。というか私はアルジュナのオルタが来た時点で『あ、これ私が言ったこと現実になるかも』って予想してたんだけどね！いざなってみると案外冷静でいられるものさ」

「えぇ……じゃあ、もし団長さんが『ダ・ヴィンチちゃんのことが好き

かもしれない』って言ったら冷静で――」
「うん、無理。あの手この手を使って本気で落としにいくから」
「もうすっかり乙女思考になってるよ……」

同僚に複雑な気持ちのロマニ。そういやカリオストロも似たような感じだったような……まあ、元・女性に迫られるよりは元・男性で現・女性（主に身体、精神は移行中）だからマシなのだろうが。ついでにダ・ヴィンチちゃんにせよカリオストロにせよ、今の外見のレベルが高過ぎて尚更困る。

そんな二人のやり取りはさておき、次はしのぶ。

後半組の勇治は何やら「11連……11連……」と虚ろな目で禍々しいオーラを出しているし、沙耶は余裕があったからなので本来ならばアルク一人いれば事足りる。レイトはどちらかと言うと立場的な関係で召喚することになったからと、三人中二人は気にしておらず残る一人は何か精神的にヤバい。人類悪呼ぶ前に人類悪に変容してしまわないか心配だ。

スレッタは……まあ、元々本人もオマケ扱いだと思っているし。勇治がいくつか激辛麻婆豆腐を引き当てれば満足するだろう。

「矢的先生と同じで別に私は……」
「姉の暴走を止めるのに一役買ってくれるやもしれんぞ？」
「やります」
「しのぶ!?英雄王様!?」

カナエを引き合いに出されては頷くしかないしのぶであった。なお、カナエの方はジャックに慰められている。……とりあえず、カナエは自分のカプセル怪獣のグリーンモスラがジャックの頭に止まっていることに気付くことから始めよう。

「そうですね……せめて、めんどくさくない人が来てくれますように」
（（（（何か切実な願望ー!!））））

主に実姉の所為。しかし、しのぶなら余程その通り面倒な性格でなければ割と上手くいくのでは？
――そう思っていた時期が他のマスターにもありました。

「全く……私を呼び出すなんてどんな物好きよ」
「「「「へ？」」」」

真っ黒な鎧に銀髪……そう、ある人物と真逆な色合い――それでいて、双子かと思わせるような殆ど同じ容姿。

「ん？霊基がルーラーじゃない……アヴェンジャー？ああ、成程。これと似たような性質のマスターに呼ばれたってわけね」
「アヴェンジャーって……つまり、復讐者？」
（ある意味殆どの鬼殺隊剣士に当て嵌まるような……）
（胡蝶姉妹の場合は……ああ、童磨とかいう奴も無惨並に嫌っていたか）
「まあ、そこは追々知っていきましょうか。改めて……私はジャンヌよ。『竜の魔女』ジャンヌ・ダルク・オルタとでも呼んでくれればいいわ」

結論・実は性格的にかなり面倒くさい娘です、このツンデレ反転聖女。
アーシアがあんぐりと口を開けて固まっており、そんなアーシアを心配してオーフィスがくいくいと袖口を引っ張っている。あまり効果は無いようだ……。

「ふぅん……貴女がマスターね」
「納得出来ませんか？」
「逆よ、逆。これなら私が呼ばれたのも頷けるって思っただけ」

アヴェンジャーとしての本能的なものか、日本地獄にて折檻されている何処ぞ鬼二名に抱いている感情がまさしく復讐者だとしのぶを評価するジャンヌ・ダルク・オルタ……略してジャンヌ・オルタ。
そんな彼女の肩に勢いよく手を置く人物が。

「ッ!?誰――」
「　姉　で　す　！　！　！　」
（どどん！）

最近暴走気味なジャンヌ。そう、通称『姉なるもの』『姉を名乗る不審者』な彼女である。
姉というかオリジナルが正しいのだが……彼女に妹（もしくは弟）判定されたが最後、彼女のお姉ちゃんムーブは止まらない。アーシアしかいなかった妹ポジションに新しい娘が加入（強制）するとあって実に素晴らしい笑顔。

「はあ!?何言ってんのよアンタ!?」
「私のオルタ＝私の姉妹＝私の妹です！」
「初対面でいきなり暴論ぶつけてきたんだけど!?アンタはただのオリジナルでしょうが!!」
「ただのオリジナルじゃありません！お姉ちゃんです！」
「ちょっと誰よコイツのマスターは!?すぐ引き取って、いや割とマジで!!」
「従姉弟はいても妹はマスターだけでしたから嬉しさウルトラダイナマイトですね！」

マスターまで妹扱いって……と考えて、ふと思い返してみる。従姉

妹って誰？

「あれ、従姉妹？」

「空の世界のジャンヌダルクであろうな。しかも最近光と闇に分裂したと言っていたが」

「なるほ……分裂⁉」

「一節だと空の世界のジャンヌは光と闇の他、村娘とダウナーモードの四人に分裂可能という情報もある」

「……ジャンヌ・ダルクって何だっけ……？」

お姉（以下略）。未だギャーギャー騒いでいる二人のジャンヌを見つつ、しのぶは軽く溜息を吐いた。まさか自分がフラグおっ立ててピンポイントで面倒な性格のサーヴァントを引いてしまうとは。

ただまあ、話が通じないわけではないようなのでそこはマシだったのかもしれない。

「さて、ここで一先ず休憩にするわけだが――」

『おーいギルー……』

「む、師父か。起きたようだな、調子はどうだ？」

『いやな、とりあえず作るもの作ったらまた怠くなった』

休憩を告げようとした時、まだ気怠そうなレジェンドがギルガメッシュに通信してきた。

それはいいのだが、彼に通信してきたことで案の定モルガンやスカディがぐいぐいギルガメッシュの腕のブレスレットに顔を寄せる始末。

「我が夫、辛くないですか？え、人肌が恋しい？でしたら私が――」

「身体が気怠い？ならばしっかり首の後ろを冷やさねばな。どれ、私が作りに――」

「ええい少しは我のことも考えよたわけ共！毎度毎度師父が絡むと途端に暴走しおって！」

ガーッ!!と怒るギルガメッシュだが、レジェンドの言っていた『作るもの作ったら』発言が気になった。体調が万全でないのにそれほどのものを作ったのだろうが、一体何を作ったのか？

「時に師父よ、何を作った？」

『ん？あー……

ア　ク　シ　ズだけど』

レジェンドの発言後、映し出された映像には惑星レジェンドのある星系に作られた小惑星アクシズ（しかも元のやつより何となくデカい気もする）。

「「「「何ィィィィ!?」」」」

「「「「何つーもん作ってんだアンタ!?」」」」

「あの短時間で本当に作り上げるとは……！」

ウルトラ騎空団の大半のメンバーが驚愕かツッコミを行うかで二分割される中、デイビッドは目をキラキラ輝かせ、ハマーンも感嘆の声を上げる。

しかも現在レジェンド達がいるのはアクシズ内部らしく、続けて映し出された映像でプーリンとキャストリアに加えてアポロンゼスト

（通称ゼスト）や最近惑星レジェンドからやってきた新メンバーの八雲（やくも）　燕（つばめ）が格納庫で何やらやっている様子が確認出来た。
なお、その会話音声も拾えた（別に疚しいことはしていない）のだが……。

『やはりガ・ゾウムのハイパー・ナックルバスターをニュートロンビームに換装してみよう』
『可変機だから戦闘中着脱可能な機体強化パック……う～ん……アクシズパックとかネオ・ジオンパック作って装備してみたりとか』
『よし、イタノ・サーカスは再現しなければ』
『じゃあニュートロンビーム用のバレルを新調してからガンポッドも――』

――何か高性能量産機が超性能試作機になりつつあった。ガ・ゾウムは一応ガザEと並んだガザシリーズの発展機なのだが、何やらウルトラ騎空団に参入した技術者兼パイロットの二人のおかげでとんでもないモノへと魔改造されそう。
何処の要塞にニュートロンビームを標準装備してメガ粒子砲やファンネルをミサイルと一緒に連射しまくる異常な戦闘力の量産型可変機がいるんだ。

『じゃ、後はこっちに作った俺の屋敷で休みながらそっちの様子を見るとするわ。誰呼べたー？』
「オカ研の決戦存在とニビジムのジムリーダーの祖先、それからグランドクソエイムと竜の魔女（ツンデレ）だ」
「「「「オルジュナ以外の表現ん！！」」」」
『え、何タケシの祖先呼んだの？誰だよそんなスゲー奴呼んだのは』

何故かレジェンドはフェルグスに食いついた。マジでこの最高位

光神、ツボが何処なのか予想出来ない。
　ついでにオルジュナの方はそうでもないが、テスカトリポカは「オイあんなんいるなんて聞いてねえぞ」とレジェンドを見て顔を青くしていた。全能神だけあってレジェンドの事を知っていたようだ。

『どーだギルガメ！こっちの一番乗りは私達だぞ！羨ましいかギルガメェ！』
「ぬううう！ここぞとばかりに煽るかバカトリア！少しはセイバーの清楚さを見習おうと思わんのか！」
「はい？」←カップラーメン啜ってる
『『……』』

　突発的に名前（クラス）を呼ばれ、のんびり食事をしていたセイバーアルトリアが振り向いた。カップラーメンを食べるその姿には清楚さどころか王らしさもへったくれもない。だってお腹空いてるんだもん。
　その所為でキャストリアもギルガメッシュも「コレどう反応しよう」みたいな空気になっている。
　それから、アクシズのリクエストはやはりデイビッドがハマーンを召喚してすぐレジェンドに頼んだという。ぶっ倒れたにも関わらず己の愉悦のためにすぐさま行動を起こしたのは凄いと思うが……規模がおかしい。
　休憩時間を利用して転移魔方陣を使い団員達で見に行ってみれば、しっかりモウサの部分まで再現されたマジモンのアクシズ。住宅街も出来ており、デイビッドとハマーンの屋敷もそこに建っていた。

「……素晴らしい。実際に入ったことが無いにも関わらずよくぞこれ程のモノを作り上げてくれたものだ」
「俺まで住んでよかったのか？」
「フ……貴様は俗物のような思考などせんだろう。それにマスターとサーヴァントは共にあると聞く。ならば同棲していても何らおかし

くないはずだ」
「確かに」
　基本素直なデイビッドはハマーンの言葉に疑うことなく頷いた。まだまだ歩み始めたばかりと言えるデイビッドだからこそ、ハマーンも手を引くように先達として教えているのだ。
　というわけで、後半組の前の休憩時間にそれぞれ今回召喚したサーヴァントがどんなことをして過ごしているか少しだけ覗いて締めといこう。

☆

――アルジュナ・オルタ――

「ほう、ラーメン博物館。ラーメンとはそれ程の種類があるものなのですね」
「ええ、そうよ。それに一言に醤油味とか味噌と言っても千差万別、店や場所毎に違うの」
「カドック君……アナスタシアさんはラーメンが好きなのかい？」
「ああ、大抵暖簾が見えたら入りたがるんだ……」
　あまりにアナスタシアが熱く語るので興味を持ったオルジュナに付き合い、後日ウーノやマリューも一緒にバビロニア島のラーメン博物館へと行くことにしたそうな。ムウ？ナンパに精を出してるところを三羽烏に連れられ褌軍団の一員にされたとか何とか。

――フェルグス・マック・ロイ――

「ほう、大人のホテル。良い施設があったものだ」
「そこに野郎二人で入ってるってどんな状況だよ……」
「なに、下見というやつだ。ここを参考に部屋をセッティングし、女を

招く！」
「……何やってんだ？俺……」
　精力絶倫なフェルグスに引っ張られ、もはや自問自答を繰り返すアザゼル。忘れがちだが、この大人のホテル……発案者は黒歌と夜一である。
――テスカトリポカ――
「ほう……良いブツだ。カネゴン・ア・キンドにシェロカルテだったか、商談といこう。コイツの在庫はまだ有るか？」
「お？お客さん、分かるガネ？これは逸品なのに気付かない方が多くて」
「さすがレジェンドさんの騎空団の方、目の付け所が違いますね～」
「やめろやめろ、そんなに褒めると衝動買いしちまうだろ。この商売上手め」
　何故かハンターズギルドのカネゴン・ア・キンドや、空の世界の万屋シェロカルテと仲良くなって瞬く間に顔馴染みに。因みに代金は自分で支払う時もあれば杏寿郎が立て替える場合もあるらしい。
――ジャンヌ・ダルク・オルタ――
「さあ、まずはこれです！」
「それ、アンタと同じじゃない！」
「嫌ですか？お姉ちゃんとお揃い」
「嫌に決まってるでしょ！それとアンタは私の姉じゃないっつーの！」
「オルタさん、こちらはどうでしょうか？」
「……へぇ、あっちの暴走聖女と違ってそのマスターの方はセンス悪くないわね」

アーシアから黒を基調とした服を渡され、少し機嫌が良くなったジャンヌ・オルタ。アーシアがホッとしてしのぶを見ると「お世話かけます」とお辞儀された。

……正直、今回はジャンヌが原因なので彼女らに非はないと思う。

前半戦からはっちゃけた面子が召喚された今回のイベント、果たして後半ではどんなサーヴァントが呼ばれるやら……？

――おまけ――

「今回の本編で私がいなかったのはこの時の為さ！さぁ、私のサーヴァントは誰かな!?」

「あのさぁ……どうして俺とマーリンがセットなわけ？メタい話ＦＧＯじゃ俺からはともかくマーリン側は俺を認識出来ないとかそういうの無かった？ま、本作じゃそんなのあったら色々成立しないから別に良いけどさ」

「そう！本作はそんなの関係なく突っ走るのさ！二人のアルトリアが互いを認識出来てるのだって断然アリ！アルトリアだけにね！英雄王が笑ってくれそうなメタ発言はさておき！いらっしゃい私のサーヴァント!!」

「サーヴァント、セイバー。真名を阿部高和だ。何処がセイバーだって？フッ……見りゃ分かるさ」

「!!!!」
「おや、マスターもそのツレもイイ男だな。ところでコイツを見てくれ。俺がセイバーたる証、どう思う？」
「う……うわあああああ!!」

マーリン＆オベロン（ただし後者は巻き添え）、真の絶望を知る。尚、阿部さんはこの後すぐに鬼灯様に回収され、日本地獄に送還された（一応彼も獄卒であるため）。

――更におまけ――

『ギルとエルキドゥへ
体調が優れず手紙かつ簡単な文面になってすまない。丁度今日がギルの誕生日だったことで、折角だから「英雄王無二の親友」にして「最高位光神が保護した命」ということでエルキドゥの誕生日も今日にした（勝手でこちらもすまない）。こんなものが誕生日プレゼントかと疑問や呆れはあるだろうが、今後の事も考えた誕生日プレゼントを用意した。受け取ってくれ。
改めて、誕生日おめでとう。
生まれてきてくれてありがとう。
ギルガメッシュ、エルキドゥへ。
――ウルトラマンレジェンド』

「ッ――」

ユニコーンガンダム3号機フェネクス・タイプGと、ガンダムサバーニャ・タイプE。
この日、シミュレーターにてレジェンドを除けば史上初となるアム

ロ・レイ（ＣＰＵ）撃破が記録された――。

――最後の最後に、おまけ――

「あ！エリィ！お母さん！」

パァッと笑顔になったスレッタがぶんぶんと手を振った方向には、スレッタを少し大きくしたような少女と、その少女が押す車椅子に乗せられた女性がいた。

少女の方はスレッタ程ではないにしろ同じように大きく手を降っている。

「二人共、いつこっちに来たの？」

「ちょっと前。スレッタが噂のサーヴァント召喚に選ばれたってレジェンド様から連絡があって、見に行きたいな～って言ったらお母さんが頼んでくれた！」

「私もまさか先代陛下とレジェンド様の連名で許可頂けるとは思わなかったわ……」

周りは「え？スレッタの家族？」「母ちゃん美魔女だなオイ」「双子？いや、あっちは色々少し大きい」等など話し出す。

「あ！どうも～妹がお世話になってます！姉のエリクト・マーキュリーです！今は訳合ってお母さんと一緒に惑星レジェンドで療養中！」

「プロスペラ・マーキュリーです。エリィ共々宜しく」

彼女らは当初色々あって復讐の為に活動していたのだが、モルガンから事情を聞いたレジェンドが少し前にサーガ、アムロ、マリーダに束の協力を得て一大作戦を決行。

Ｈｉ－νガンダムとバンシィ――フルサイコフレームの二機に加えてダブルオークアンタフルセイバーのクアンタムバーストによる死者の魂との対話を実現、二人の禍根を消すと共に意識（魂）のみだったエリクトの為に束が彼方此方からかき集めたクローン技術を涼子や卯ノ花の支援を受けつつ使い『スレッタの姉』らしい身体の素体を作成。レジェンドの時間操作及び各種保護を施した後にエリクトの魂を定着させ、見事大復活！

幼少期に身体を失ったエリクトは再び生身の身体で生きていけるようになったのである。

同時に、データストームによる影響で余命僅かとなっていたプロスペラだが……案の定「俺に不可能はない」とレジェンドがあっさり治療。どこぞの医神が本気で嫉妬しそうな事象を起こしているが、長年病んでいたこともありリハビリの必要が出てきた。

そこであるものが役立ったのだ。

「ほら、あそこ！何か追い詰められてる感じの人が月影勇治さん！お母さんに投与された正式な医療用ナノマシンを発明した人だよ！」

「「「「え!?」」」」

「彼が……」

「何で追い詰められてるの？」

それは聞くな、エリクト。しかもその理由には間接的にスレッタが関わっていると言えなくもないし。

とりあえず、他の月王国出身者はモルガンなど一部を除き破棄されたはずのナノマシンがプロスペラに投与されていた事に驚く。本当に大丈夫なのかと。その理由はモルガンから直々に説明される。

「実は私の方に提出されていたサンプルは無事だったのです。私自身は我が夫やヤプールのおかげで問題無くなっていたのでそのまま保管しておいたのですが、思いもよらぬところで役立ちました」

「お母様、アイツ聞いてなさそうだけど」

「麻婆連引きが余程効いてるのね……」

バーヴァン・シーと沙耶が言うように、度重なる激辛麻婆豆腐の召喚で色々キマっちゃってるらしい。

何にせよ、アスティカシアの惨劇の引き金となったナノマシン――僅かに残されていたそれは、正しく救うべき人物に使用され本来の役目を果たしていたということだ。

「あはは……ちゃんとした御礼はまた今度かな」

「ところでスレッタは何で炊飯ジャーを持っているのかしら……？」

「勿論！また出て来るだろう麻婆豆腐を食べるため!!」

どどーん！と効果音が聞こえそうなくらいハッキリ言ってのけるスレッタに苦笑せざるを得ない姉と母。

後日、正式に対面した勇治はプロスペラから丁寧に礼を言われ――。

「ミオリネさんがいるなら、うちのスレッタも一緒にどうかしら」

――という彼女の爆弾発言を聞いた光のコヤンスカヤやネロ・ブライドを筆頭とした勇治スキー軍団に問い詰められ、レジェンド達に愉悦を献上するハメとなる。

特別編・サーヴァントを呼ぼう！レジェンド関係者＋α編～召喚の二次被害による被害者が一番ヤバい～

「ふはははは!!皆の者、休憩にて多少なりとも英気は養ったな!?『はい』か『イエス』しか認めんがな！我は見ての通り絶好調よ！さあ、引き続き世界中がそれを待っているお楽しみの時間、即ち！召喚（ガチャ）の刻!!」

開始時に比べて明らかにご機嫌なギルガメッシュに？マークを浮かべる面々だったが……よく見るとエルキドゥやハマーン、デイビットも何やら嬉しそう。まあ、ハマーンはアクシズ関連で合点がいく。残る二人は……喜びのポイントが相方絡みなのか自分のことなのか判断に困るところ。

「駄目で元々とリクエストしておいたが……まさか本当にキュベレイまであったとは恐れ入る。デイビット、どうやら我らが団長は想像を軽く超えてくるらしい」

「ああ、俺もあの人のおかげで変わろうと思えた。それに俺の専用機になるというノイエ・ジール系の発展機……ハマーン自ら案を出してくれるとのことだが」

「実はシャア（あのバカ）の専用機としてノイエ・ジールⅡという機体が開発中だったのだがな、知っての通り奴とは袂を分かった為に開発が中断された。……というのを何処から仕入れたのか分からんが団長が知っていたらしく、態々それまで開発完了した状態でアクシズにあったのでな。それをベースにお前の機体へと仕上げようという考えだ」

これにはもはやハマーンさえ唖然とするばかりだった。ホント何なんだあの光神。

「可能な限り要望は聞く。あまり常識外れのことを強請ってくれるな

よ」
「無論だ。これを見てくれ、まず――」
　用意周到、デイビットは設計図から完成図までスタンバってました。そこまで乗りたかったのかＭＡ……。
　アムロ同様知らぬ人などいない、かの女帝ハマーン・カーン直々に関与した専用機とあって、同期の立香やキリシュタリアらは物凄く羨ましそうであった。
「いーなー……デイビットいーなー……」
「アクシズといえば可変機・ニュータイプ専用機・ＭＡといずれも有名な機体を開発した万能勢力としてその名を馳せた軍勢だ。加えて戦艦にも耳にしたことがあるものが名を連ねている……これは凄い機体になりそうだぞ……！」
　一応キリシュタリアは既にＲ―ＧＵＮパワードという専用機持ちなのだが……しかも推してきたのはかの大神ゼウス。というよりオリュンポスやアトランティスの連中が挙ってＲシリーズ系列の機体をクルーガー・インダストリーに注文しまくっているとか（カイニスからの情報）。
　最近だとオデュッセウスがカタログ片手にＲ―１かＡＲＴ―１かを悩んでいるらしい。どうなってんだ本作のオリュンポス＆アトランティス。
　ちなみにアデーレとマカリオスの姉弟、姉のアデーレはカタログにグランゾンが無くお揃いが出来そうにないと少し凹んでいたという。あんなんカタログに載せられてたらそれこそ大問題だろうけど（そもそもＲシリーズ関係が載ってる時点でどうかと思うが）。
「ふはは、専用機はいいぞ。何せ専用なのだからな。つまり！我!!専用ということよ！」
「……ちょっと待ってギルガメ」

「何だ、師父が召喚を見ながら休むと通信状態にしてるからこちらにやってきたバカトリア」
「詳しく説明するなギルガメェ！そういうとこだぞギルガメェ！……で、何で専用機についてそんな力説してるの」
「決まっていよう！先程我とエルキドゥが師父より専用機を賜ったからだ！ふはははははは！はははははは!!」

これに会場大騒然。まあ、レジェンドとギルガメッシュにエルキドゥの関係上いつかはやるだろうと思ってはいたが、予想以上に早かった。しかも自分好みの機体だったのか高笑いがいつもより長い。

「き……聞いてない！そんなの聞いてないぞギルガメェェェェェ!!」
「貴様は機動兵器訓練となると途端にサボり魔化するらしいからな！専用機など遥か高嶺の花であろうよ！ふはははははは!!まあお情けで師父が相乗りさせてくれるやも知れぬがな！ハァーッハハハハハ!!」
「ふぎぎぎ……！」

涙目なキャストリアだが、ギルガメッシュの言っていることは事実なので反論出来ない。杖を握り締めて歯軋りするしかないのである。しかも、エルキドゥが何やら映像を流し始める始末。
それはシミュレーターにて満身創痍ながらもギルガメッシュのフェネクス・タイプGとエルキドゥのサバーニャ・タイプEがアムロ（CPU）のνガンダムを撃破した瞬間の映像。

「……は……？」

モルガンですら固まってしまう程の衝撃映像。良くてファンネル全破壊の戦績だった面々は絶句。純粋に凄いと思ってるのはゼットを始めとした一部のパイロットや、アムロの実力を知らない者ぐらいである。

「バカな!?あの変態戦闘力のアムロ・レイを撃破しただと!?」
「正に死闘であったわ……全武装を破壊したと少しばかり安堵した瞬間に頭部を殴られて破壊されるなど誰が思おうか」
「回避運動だけでＧＮホルスタービット全部とＧＮライフルビットの大半を誘導破壊されたよ。何あの戦闘用千里眼持ってそうな機動」
「うむ。勝率三割とはいえ、あれに一対一かつアルトアイゼン・リーゼで真っ向勝負後に勝利をもぎ取る師父の凄まじさが改めて理解出来たというもの。我達はまだまだこれからよな」

……やはりＣＰＵでもアムロはアムロ、機体性能で圧倒的に勝る二機をトンデモ戦法で追い詰めたようだ。おそらくタイマンであれば撃破されていただろう。というか誰だ変態戦闘力とか言ったのは。

「そういうわけで我のテンションが高いうちに此度の召喚を済ませるぞ！やっている最中に調子が戻れば師父も１１連召喚すると言っていたからな！」
「１１連……１１連……！」
「貴様は最後だレイオニクス！思考がヤバいことになっているからな！」
「カルナァァァァァ!!」
「やかましい！授かりの英雄か貴様！それのオルタがそこにいるというのに！」
「……？」

オルジュナが矢的に買ってもらった『世界の社会（写真付き）』という教本を手に？マークを飛ばしている。何か呼ばれた気がしたが、明確に呼ばれていないのでまた本の方に集中。

「ほう、これが今の世界の様子……」
「あくまで国の一つで、他の国の文化もまた違いますよ。例えばイン

ドは……このページ」
「……中々感慨深いものがあります」

……結構大きいので横からカドックやアナスタシアも覗き込んでいたりする。食文化についても書いてあるため、アナスタシアはラーメン狙いで見ているだけにも思えるが。

「とにかく！愉悦は最後まで取っておいてやるべきことをやった後に味わうのが良いのだ。よって一番手は貴様だ麻婆娘！」
「え!?」

何と後半戦一番手はまさかのスレッタ。見学に来ていたグエルやシャディクは「おおっ!?」と声を上げた。なお、ミオリネは不安しか感じない。サーヴァントどころか自分で激辛麻婆豆腐を呼び出しそうな気がする。

「スレッタ、誰呼ぶんだろ？」
「機械に強い英霊か、単純にパイロットとして特別な英霊か……あとは、麻婆関連の……かしら」

プロスペラの推測に頷いてしまいそうな月王国の面々。だって今でも炊飯ジャーを手放さず抱えたままだし。

「えーと、確か……聖晶石を砕いてふりかけにして召喚サークルに――」
「違う違う違う！普通に召喚サークルに聖晶石を置くとか投げ込むとかでいいの！砕かなくていいから、そもそも何でふりかけ!?」

ロマニ渾身のツッコミ。ギルガメッシュやエルキドゥは「師父に比べてツッコミが甘いな」とか「レジェンドのキレッキレなツッコミが恋しい」とか呟いている。最近はボケに傾倒気味だが、ウルトラ騎空

団最強のツッコミストの座は未だ揺るがない。
いまいち釈然としないスレッタであったが、言われたとおりに聖晶石を投げ入れる。そこまでは良かったのだが……今までと異なる反応があった。

「こ……これは……クラス・アルターエゴ！」
「何ィ!?」

ギルガメッシュが驚くのも無理はない。別人格（アルターエゴ）……エクストラクラスの中でも珍しいそれだが、スレッタと何の関係が――そう思った時、それは姿を現した。

「アルターエゴ、グレゴリー・ラスプーチンだ。宜しく、諸君。そして愛すべき麻婆マスター」

何かどっかで見たことあるような胡散臭い神父が、ニヒルに笑……ったのは大多数相手に、スレッタにはこれ程はないと言う笑顔で言い放った。
そしてそれに対する村正、エミヤ、クー・フーリン、ギルガメッシュの表情がまたとないくらいに物凄く嫌そう。エレシュキガルも思いっきりゲンナリしてるし。

「村正ー？どしたの？」
「いや……アイツを見てたらこう……何か宝具展開したくなってよ」
「すまない店長、ちょっと包丁研いでいいだろうか、この場で」
「別にいいぜ。しーっかり研いどけよ」

村正を心配する立香はいいとして、何かジャグラーはエミヤを後押ししてる。

「悪ぃなマスター、ちょいと令呪使ってくんねぇか」
「クー・フーリンさん？」
「何故ここで貴様がアルターエゴで来るのだコトミネェェェェェ!!我は会ったこと無いがな！別の我が会っただけだがな!!何か物凄く嫌なメモリーがフォトンストリームが如く流れ駆け巡っておるのはどういう事だァァァ!?」
「イシュタルがいたら更にカオスになってた気がするのだわ……あの既視感バリバリの神父」

　エレシュキガルが言うように収集がつかなくなってたかもしれない。そんなことは気にせず、とてつもなくフレンドリーにスレッタと交流を始めている言m……ラスプーチン。

「ラスプーチンさん、もしや貴方も麻婆推進派ですか!?」
「勿論だとも。私は麻婆こそ全ての基本だと思っている。言ってみればこの召喚サークルも麻婆さ」
「やはり麻婆は最高なんですね！」

　何か無茶苦茶言ってるし……。スレッタ相手に限り、胡散臭い部分が無くなっているのはマスターだからだけではなく、麻婆も絡んでいるのだろう。ホント何でこんなん呼んでるんだスレッタ。

「時にマスター、君が炊飯ジャーを抱えてる理由が知りたいのだが……」
「はい！これから呼び出されるだろう激辛麻婆豆腐をご飯にかけて食べるためです！」
「……素晴らしき麻婆精神。やはり私のマスターは君しか考えられない。どこぞの世界線では異星の使徒とかになってそうな私だが、今ここにいる私はそう……麻婆の伝道師!!」
(((((何言ってんのこの人――!?)))))

麻婆の食べ過ぎで思考までバグったのか？そう思われてもおかしくないラスプーチン。エミヤやクー・フーリンなど顔が思いっきりひくついてる状態だし。まさか麻婆布教の為にサーヴァント化してきたのではなかろうな……。

「全く……師父にどう説明したものか……まあ良い、もしも我らを裏切る真似をすれば座に還ることさえ叶わず、座の本体すらも消滅させられると心得ておくがいい」

「安心したまえ、ギルガメッシュ。長年探し続けた真の同士が見つかったのだ。そんな愚行を犯す気はない」

「それが口先だけでないならよいのだがな……」

一先ず丸く収まる……かと思いきや、突如召喚サークルが回り出した。聖晶石や呼符は使っていないのにだ。

「え!?何で!?」

「……なるほど、どうやら＋1ボーナスタイミングだったようだな」

「「「何その特典的な召喚!?」」」

11連召喚とは別に、単発召喚を特定回数行うと決まったタイミングでもう一回分ボーナス召喚が行われるとかなんとか。たまたまスレッタがそのタイミングに当たったらしい。

「つまり麻婆豆腐が召喚されるということでしょうか!?」

「水よし、玉子スープよし。さあ、来るがいい……至高の麻婆豆腐!!」

「「「バカかこの二人ィィィ!?」」」

こんな時でも麻婆への執着を忘れないスレッタとラスプーチン。しかもラスプーチンの手にはちゃんとスレッタに分けてもらった、ほかほかの白米まで丼でスタンバってある。

……もうダメだこいつら。

「何マスターを毒しているんですかこのダニ神父」
「「「「……へ？」」」」
「む……」
「ルーラー、アムールです。マスターのサーヴァントは私が務めますので、やることやって育児放棄したダニ神父はとっとと座に還りやがれです」

今度は物凄くラスプーチンに辛辣な美少女が現れた。ちなみに彼女、本来はカレンという名であるが……一つだけ言っておく！中の人とカレンという名が同じだからといって紅蓮を操縦したりは出来な……どうなんだろう？

「これはこれは……まさかこうくるとは」
「聞こえませんでしたか？性格どころか耳まで悪くなったんですね。マスター、このダニ神父の言葉を真に受け――」
「……」↑麻婆豆腐じゃなくて落胆中のスレッたぬき
（たっ……たぬき――!?）

落ち込むスレッタを心から慰めるラスプーチンに、何か絶句してるアムール［カレン］。何かこの三人だけでコントが出来そうな気がしてきた。
一応、戦力としてなら二人とも間違いなく当たり枠ではあるのだが、戦力以外の繋がりも大事とするウルトラ騎空団でやっていけるのだろうか……。
兎にも角にもスレッタの英霊召喚は成功。知人のスレッタまで当たりを引いたということでいよいよ勇治の精神がヤバくなってきた。触媒として槍だとかマハーバーラタについて纏めた資料とかまで用

意し始めた上、本人自身がカルナのコスプレまでしようとしてコヤンスカヤと嫁ネロに必死で止められている始末。

「マスター、ステイ！ステイです！普段のクールな貴方は何処へ行ったんですか!?」

「落ち着けマスター！余とヴァージン・ロードを歩くのはマスターであってカルナではないのだぞ！」

……ちゃんと止めてるコヤンスカヤはいいとして、嫁ネロはさり気なく願望ダダ漏れである。今の勇治は聞いちゃいないが。

そんな勇治軍団は放っといて、ギルガメッシュが次に指名したのは沙耶。レイトが何を呼ぶかは未知数とはいえ、ぶっ飛びあーぱーのアルクを多少なりとも御せている沙耶ならば余程でない限りどんな英霊が来ても問題無いという希望的観測からだ。万が一、その余程の事が起きてもモルガンがどうにかするだろうし。

「えー……沙耶のサーヴァント私だけで十分だよー。アルクさんに任せて安心だよ？」

「建て前はよい。本心を述べよ」

「沙耶との時間減っちゃうじゃん！」

「貴様もそっちか！何となく予想は出来ていたがな！そんなものは己の手で掴み取れ！このあーぱーめが！」

同性からも大人気さやぴー。この場合、ファーストサーヴァントの可愛いワガママというか……アルクが有能なので一応それが許される。とはいえ女王という立場上、見の安全は第一に優先しなければならない事柄。それくらいアルクも分かっているのだが、頭と心は別問題というわけだ。

沙耶に説得され、しぶしぶ引き下がったアルクだったが……沙耶がゼットに頼み、スペシャルコラボ的な曲を作ってもらいそれに参加という形で落ち着いた。

「あーぱーではあるが奴もまたウルトラ騎空団の綺麗所代表の一角よな。よし……今代の月の女王よ、召喚（ガチャ）するがいい」

やっぱりその表現はどうかと……と思いつつも口に出さず沙耶は聖晶石を投げ入れる。何かロマニが新宿のアーチャーならぬ新宿のスイーパーの如きハードボイルドフェイスと化しているのは気の所為だ、多分。

「アルクは私の傍にいてもらうとして――」

「沙耶大好きー!!」

遊撃手みたいなのが欲しい、と続ける前に感激したアルクが沙耶へ抱き着いた。やっぱり頼られるのは嬉しいようだ。

果たして沙耶の希望は通るのか――!?

「……え？あれ？私、座で味噌煮込みうどん食べようとしてたんじゃなかったっけ？ここどこ？」

「むっ……ヴィイの瞼を上げるわ」

「待てアナスタシア！彼女がうどん発言しただけで敵認定するんじゃない！」

「すみません、マスター。うどんとラーメンは相容れないのでしょうか？」

「いや、単に一緒に食べるのはオススメしないとか、あとは嗜好の問題だと思いますよ。それぞれに良い所があるので」

（矢的教諭が彼のマスターでよかった……もし完全にラーメン派となっていたらここが悲惨な事態になっていたかもしれない……！）

呼び出されたのは二刀を有する和風美女。スタイル抜群でさっぱりした性格を感じさせる――うどん好き。

「貴女が呼びかけに応えてくれたのかしら？」

「――!!」

「……？」

（ヤバ……！クール系だけどちょっとした仕草が可愛い、所謂クーデレ系!?いや、何か私的には仕草が可愛いというより可愛い物好きっぽいオーラを感じるといいますか……）

――付け加えておこう。この召喚された女性、美少年美少女も大好きである。つまりある種のヤベーやつ。

（ていうかよく見たら周り美少年と美少女のオンパレードじゃない！あ、あの金髪のふわふわした――）

『貴様、我が巫女を卑猥な目で見たな？』

「ひゃぅいっ!?」

アーシアに興味を示した途端、マジンガーＺＥＲＯがブレストファイヤースタンバイして圧をかけてきた。女性は「あ、死んだ」と一瞬で悟ってしまったが、アーシアと沙耶のおかげでマジンガーＺＥＲＯの怒りが鎮火。レジェンドがいなく……いや通信で状況は把握してるだろうから、出会ったが最後かもしれない。

「はふぅ……ありがとうございました！いや何か本気で助かったっていうか……あ、自己紹介がまだだったよね。新免武蔵守藤原玄信（しんめんむさしのかみふじわらのはるのぶ）、長いから武蔵で」

「新麺・武蔵？その麺の種類はラーメンなの？うどんなの？」

「字が違くない!?私はそういう意味での新麺じゃ、間違った新免じゃなくてね!?」
「みやもとむさし、略してみやむー」
「そうそう、そんな感じで可愛いと……え、何この美少女！」

アナスタシアに変な勘違いされ、オーフィスから可愛らしいあだ名を貰ったりしているが、周りは騒然としている。特に日本出身の者は驚愕の視線で武蔵を凝視。当の武蔵はオーフィスを高い高いしつつ頬擦り。なお、何故彼女が宮本武蔵について知っていたかというと……何かの大河ドラマを見ているうちに覚えたらしい。

「宮本武蔵……！彼女が!?」
「ふむ……史実では男のはずだが、剪定事象による平行世界の存在の可能性もあるか。ふはは、師父が絡めば割とどんな事でも当てはまってしまうものよな」
「何はともあれ彼女が凄い英霊なのはボクも分かるぞ！二天一流の創始者で佐々木小次郎のライバル！」
「うむ！剣術を学ぶ者にとって一度は会ってみたい人物だぞ！よもやよもやだ！まさかこんな形で対面が叶うとは！」
（何か悪い意味で姉さんに似てるのよね……）

普通に考えれば彼女も当たり枠だが、何というか……しのぶも思っているように『残念美人』な感が否めない。何にせよ戦力としては申し分ないし、ギルガメッシュいわく英霊でも成長するのでステータスアップが必要ならレジェンドやゲンと模擬戦なり特訓なりさせればいいだろう。……そこ、この二人とやり合ったら座に還らされるとか言わない。

「じゃあ改めてよろしくね！……で、早速で申し訳ないんだけど……私、実は食事中というか食事直前だったのです。何か食べさせてくれると嬉しいな～なんて……」

「さっきジャグラー店長に月見うどん作ってもら――」
「うどん!?私の大好物なんだよね、うどん!!」
（……ああ、彼女が呼ばれたのってこういうわけだからなのね……）

沙耶の好きなものに、うさぎ以外ではうどんがあったりする。ついでに原作で彼女がメインとなる英霊剣豪七番勝負では、一応月も関係しているのでそこもポイントかもしれない。本作で行われることがあるかは疑問だが。

スレッタにせよ沙耶にせよ、一応当たり枠を引けたわけだが残るレイトと勇治は未知数。レジェンドは体調を考えると召喚するかどうかも分からない。

勇治のキマリ具合とそれに伴うギルガメッシュらの愉悦を考慮し、次に召喚を行うのは――。

「次はいよいよ貴様だ、モロボシ・レイト」
「俺か……カプセル怪獣じゃなくてサーヴァントを持つことになるなんざ想像もしなかったぜ」
「マスターになれるかどうかは貴様次第よ。仮に呼べても相性の問題や相手方の不況を買えば花道一転茨道へと変わるのだからな」
「分かってるよ。せめて話の出来る奴来てくれ……っと」

ぐだぐだせず聖晶石をサークルへ投げ入れ、思いの外スムーズに召喚まで進めるレイト。やはり若くとも曲者だらけのニュージェネレーションを束ねる隊長といったところか。

「霊基パターン……セイバー!?また!?」
「この調子では二人目の騎士王が来てしまうとも限らんな……我は何故か全て☆5礼装×11連だったりしたのだがな、ふはは」
「いやそれもそれで凄くない!?」
「黒聖杯とカレスコを同時に一発最大凸出来たのは正に我が無敵の黄金律の賜物よな。しかし最後に引いた礼装が『アレ』なのは如何なも

のか……」

その『アレ』とやらが気になるが、今はそれよりもレイトが呼び込んだ英霊の方が大事。ロマニは再び召喚サークルに視線を戻す。ダ・ヴィンチちゃんをチラッと見たら「団長さん団長さん」と何やら自作のアルバムをペラペラと捲りながら緩みまくっていた。……後で団長さんに注意喚起しておこう、ロマニはそう思ったという。

して、気になるレイトことウルトラマンゼロのサーヴァントは――!?

「余はコサラの王、ラーマ！召喚に応じ参上した！」

「「「「「おおおおお!?」」」」」

「ちょっ……!?マハーバーラタに続いてラーマーヤナの関係者っていうか主役が来たぞ!?ウルトラマンの方々凄くない!?」

今回のウルトラマンはインド枠に恵まれているというか、またも大英雄を呼び込んだ。これによりまた勇治の目が死んでしまう。だって彼が呼ぼうとしてるカルナもインド（しかもマハーバーラタ）関係だもの。

しかしながらウルトラマンの面々が呼ぶ英霊が凄い、というロマニの発言は的を得ている。今回だけで８０＝矢的がオルジュナ、そしてゼロ＝レイトがラーマ。

前回のトライスクワッドは冥界の女主人たる神霊エレシュキガルを始め、スパルタ王レオニダスに有名忍者の風魔小太郎と続き、ゼットも円卓の騎士の一人であるガレスを呼んだ。

前回と今回双方に参加しているディアナ＝沙耶などアルクェイド・ブリュンスタッドに加えて宮本武蔵。前者はアーキタイプ・アースなるヤベー奴だったりする。

極めつけは我らが最高位光神レジェンド。彼が呼んだのは最早言

うに及ばずウルトラ騎空団のサーヴァント筆頭・最強最古の英雄王ギルガメッシュ、その無二の親友にして神造兵器エルキドゥ、花の魔術師マーリン（プロトタイプ）＝プーリン。しかもギルガメッシュとエルキドゥが本来とは違うクラスの『ウルティメイト』『エルキドゥ』なのだから開いた口が塞がらない。

ついでにここから更にメンバーが増えそうだからマジで何なんだお前である。

閑話休題。

さて、周囲ではラーマがどういった英雄なのかを詳しい人物らが説明している。特にインド推しのペペロンチーノやそのサーヴァントで同じくインド出典の英雄であるアシュヴァッターマンは彼をよく知っていた。

オルジュナことアルジュナ・オルタはその凄まじい能力を得るのと引き換えに元々持っていた記憶の大半を失っている為、残念ながらあまり良く知らない。

そしてラーマと言えば忘れてはならぬ存在がいる。ラーヴァナ？違う、ラーマの妻シータだ。同時に、離別の呪いのことも。

「じゃあ、ラーマさんは……」

「うむ。この呪いがある限り余がシータと会うことは叶わん。ただせめて、その気配だけでも感じ取りたいと思うのはほんの少しばかりの我儘だ」

「……いいのかよ、それで」

「余のためにそう言ってくれているのは嬉しいのだがな、マスター。これは座の本体に刻まれたもの、仕方ないと済ます以外に他は無い」

アーシアやレイトの呟きに苦笑しながら応えるラーマだが、悔しさが滲み出ているのは誰の目にも明らかだ。せめて気配だけでも、と言ったが実際は映像越しにでもシータの姿を見たいだろうに呪いの所為でそれすらも許されない。

――頬杖をつきながら目を伏せていたギルガメッシュが呟いた。

「くだらんな」

いきなり出た侮蔑の言葉に誰もがギョッとする。普段のギルガメッシュが言っているようなものと違う、遊び心など無く本気で吐き捨てた。

さしものレイトもこれには食って掛かる。

「おい、いくらアンタでも今のは聞き流せねえ」

「ハッ、我とて其奴が本調子ならこうは言わなかったがな。今のラーマなどそこいらの有象無象の凡夫と変わらぬ。ただ単に腕の立つだけの存在などウルトラ騎空団にはそれこそ山のようにいるであろう。それこそ貴様もその一人だろうに」

ギルガメッシュの言葉に今度はレイトも黙らされた。愉悦で言っているのではなく、間違いなく王として今の彼は喋っている。

「叶わぬから『せめて』？　運命故に『仕方がない』？　随分と諦めの良い王になったものだな。シータを取り戻すためにあれやこれやと必死になった貴様は何処へ消えた？」

「ッ……それは……」

「民のために妻を追放し、善政を敷き国のために尽力し民から絶賛され牙をもがれたか。ならばその姿が全盛期なのも納得よな。だがその全盛期ですら貴様は心の奥底にある感情故にまともな刃を振るえぬ。迷いある貴様の首を斬り飛ばすことなど造作もない者がどれだけいると思っている？無論我もその一人よ」

普段ならここらで高笑いの一つもするギルガメッシュが、冷たく見下すだけで褒めもしなければ叱りもしない。

――彼は、待っているのだ。
ラーマが本心を曝け出すことを。

「――コサラの王、ラーマよ」
「……」
「貴様にとって、妻（シータ）とは『せめて』『仕方ない』で済ませられるような存在だったのか？」
「違うッ!!」
「「「「!?」」」」

ここにきてラーマが大声を出し、ギルガメッシュも遂に笑みを浮かべる。周りはラーマの声に驚いているが、エルキドゥは何やらコソコソと誰かと会話中のようだ。

「そう思わなくては心が押し潰されそうだった……そう思わなくては頭がおかしくなりそうだった……！」
「「「「……」」」」
「余は王だ。王である以上、信じてくれる民に情けない姿など見せるわけにはいかん。……だが」

――本当は、国や名声などよりシータが傍にいて欲しかった。
――信じていた彼女を、民と国のためにと追放せざるを得なかった。それでも、彼女は自分を許してくれた。
――それから終生後悔し続ける日々。全ては己がやったことだというのに。国の、民のためだと言い訳して。

「どれだけ称賛を浴びようと、どれだけ栄光を掴もうと僕は空っぽも同然だった。隣りにいる筈の、隣にいてほしい人物がいない……何より辛かった!!」

涙を流して自らの思いを吐露するラーマに誰もが声を掛けられな

い。同時に、今この召喚の場に刻一刻と近付く複数の足音に気付いているのもギルガメッシュやエルキドゥなど片手で数えて余る程度しかいない。

「では貴様の中で最も大事なものは今も変わらぬと。妻がいれば構わぬというのだな？」
「勿論だッ!!シータがいてくれるなら僕は名声も国も、力だっていらない!!」
「良くぞ言ったコサラの王よ！ならばくれてやる！貴様の望む、妻と生きる『これから』をな!!」
「「「「!?」」」」

それこそ素晴らしい笑顔でとんでもない事を言い放ったギルガメッシュにラーマを含む殆どの者が驚愕した。離別の呪いのことを知っていて何を――そう思った時。

ドガァァァァァン!!
「ぶごぉぉぉぉぉ!!」
「「「「!?!?!」」」」

何かが召喚ルームの扉をブチ破って飛んできた。いや、飛ばされてきた。
「わあああ!?何!?何が飛んで来たの!?」
「なっ……！奴は!!」
飛んできたものを見たラーマが驚きの声を上げる。何故ならそれは――。

「知っていよう、ラーマよ。それこそ貴様ら夫婦に離別の呪いを掛けた元凶……即ちバーリの妻たる猿だ」
「「「「はあ!?」」」」
「「「「え!?ヴァーリの妻!?」」」」
「ちげーよ！ヴァじゃなくてバだ！いくら何でもアイツが猿を嫁にする訳ねーだろ！……多分」

オイ、育ての親（アザゼル）。それはそれとして、何故そんな奴が飛んでくるのか……と思ったが、ちゃんと見直して見るとなんとバーリの妻とやらはそれはもう凄惨な姿であった。身体の彼方此方がありえない方向にへし曲げられ、陥没し……顔などあまりの酷さに見ないようにする者も出るくらいに。よくラーマやギルガメッシュはこれを判別出来たものだ。……が、後者に関してはすぐに理由が判明する。

バーリの妻が吹っ飛んできた方向、煙に包まれた向こう側からゆっくりと近付いてくる足音……その正体は――。

「まだだぞ……とっとと立てエテ公」

○攻撃力・防御力・機動力４００倍！
○弱体効果反射！
○強化効果解除反射！
○攻撃時相手の全ステータス大幅ダウン！
○攻撃時相手の強化効果全消去！
○攻撃時相手に恐怖・呪い・毒・凍結・自壊・光神罰のマイナスステータスを付与！
○上記全効果は解除・抵抗不可！

ブチギレジェンドだった。

「「「「ぎゃあああああ!?」」」」

「何かとんでもないステータスアップかかってるのだわー!?」

エレシュキガルの言う通り、何かもう『バーリの妻絶対殺すマン』になっているレジェンド。その後ろには苦笑したプーリンもついて来ている。

「やあ皆、見ての通りマイロードがご機嫌斜めでね。良い感じに眠れそうだったところに『彼女』が偶然召喚されてしまい、マイロードのお腹の上に勢いよく落ちてしまったんだ。で、彼女が呪いに掛かっているということで呪いを無理矢理実体化させてボコボコにした結果がアレなんだよ」

「「「「あの人、またとんでもないことやらかしてたー!!」」」」

呪いを強制的に実体化させてフルボッコにするという、呪術関係者が理不尽さに号泣しそうな事を平然と行うレジェンド。

今もフォウくん・ピカチュウ・ハク・パム治郎による『ウッウッウマウマー』な鳴き声ハーモニーをＢＧＭにリズミカルマウントボコしを行っている。可愛らしい鳴き声はいいとして殴る度に出ちゃいけない音やモノが出ているのはヤバい。

「……もういいか、連れて行け」

「レッドファイッ!!」

「「「「!?」」」」

「レッドヘル!!」

……何かレジェンドが指パッチンしたら赤い通り魔がやってきて、ヤバい状態になってたバーリの妻を日本地獄へと投げ落とした。自身もそれを追って日本地獄へと帰っていく。

この僅かな時間でとてつもないものを見た気がする。

「ふう……」

「……ハッ!?バーリの妻が呪いの形……まさか……!?」

「フォーウ!」

「ピカ!」

フォウくんとピカチュウが何か――いや、誰かに気付き物陰に隠れているその人物をくいくいと引っ張り出す。服を軽く噛んでその人物を引っ張るフォウくんと、頭も(物理的に)使って押し出すピカチュウは見ていて和む。

「あ……待って、そんなに押さないで引っ張らないで……」

「フォウフォウ、キュー!」

「ピカピッ、チュー!」

ウルトラ騎空団の誇る二匹によって姿を現したのは、ラーマによく似た雰囲気の美少女。フェルグスはほう、と顎に手を当てて笑うがマスターのアザゼルは「またかよ……」とレジェンドを血涙流し見ている……が、そもそもレジェンドは彼女を召喚したわけではない。

その姿を見たラーマは、震えながらも希望を手にしたかのように声を絞り出す。

「……シータ……!」

「ラーマ……?」

「「「「えええええ!?」」」」

まさかの夫婦再会に一気に場が騒然とした。レジェンドの不憫が起こした奇跡、というのはどうかと思うが……ぶっちゃけ今回はどちらかと言うとバーリの妻の方が不憫だった気がする。主にレジェンドに目をつけられたという点で。

（夢か!?いや、夢じゃない……あの王らしき人物は言った、『これから』と……シータが、本当にシータが目の前にいるんだ!!）
（本当にラーマなの……？でも、魔術師さんが言ってた……『こんなレベルの呪いなんてマイロードには無意味さ』って。じゃあ、本当の本当に……）

皆が見守る中、一歩一歩近付き互いの手を取りその存在が確かなものだと確信するラーマーヤナ夫妻。
立香とぺぺはもはや感涙一歩手前、キリシュタリアはこの間指を逝かせたイイねボタンを取り出し連打用意。

「シータッ!!」
「ラーマ……！ずっと、ずっと会いたかった……っ……！」
「僕もだ……！彼処で笑っている王が言ってくれたんだ、妻と生きるこれからをくれる……って！」

ラーマが涙を流しながらも笑顔を見せ、ギルガメッシュの方を向けば……玉座に座ったまま、未だ眠そうに目をぐしぐしと擦っているレジェンドをエルキドゥらと共に労っている彼の姿があった。無論、笑顔だ。

「しかし凄まじいバフだったものよ。これでイシュタルが相手だったらどうなるか想像して我の腹筋大激痛よ。ふはははは!!」
「すっごく……寝不足です」

「はいはーい。レジェンド、たまにはエルキドゥさん抱き枕とかどう？」

シータもまた、最初はレジェンドの正体を聞かされとんでもない人物に大変な無礼を行ってしまったと謝罪したが「悪いのはこのエテ公の呪い、というかエテ公そのものなのでお前は悪くない」と言われ……レジェンドはバーリの妻をボコりつつここまで連れてきてくれた。

「よう、折角感動の再会してるとこに口を挟んで悪いな」
「貴方は……？」
「余を呼んでくれたマスターだよ、シータ」

ラーマの召喚にはシータも含まれてしまう……今回の事故（被害者・レジェンド＆エテ公）はレイトがラーマを呼んだことで起きたもの。偶然とはいえ、彼もまた二人の再会に一役買ったことになる。

「レジェンドとギルガメッシュがさ、このままだとシータ……でよかったんだよな？」
「はい」
「そっちがはぐれ扱いになっちまう、って言うんだよ。だから誰かしらマスターになるのが色々安心らしくてな……で、俺がお前ら夫婦のマスターになるのが一番だって言われてさ」

ここまで言われれば嫌でも理解出来る。つまりシータもラーマと共にレイトのサーヴァントにならないかと言うこと。別々のマスターを得るよりもより夫婦の時間が取れるということでもある。これはかの最上位光神と究極英雄王からの温情だ。

「まあ、二人次第になるんだけどよ」

「いや……願ってもないことだ！ありがたく受けさせて欲しい！」
「はい、私からもお願いします。えっと……」
「なら改めて自己紹介するぜ！俺はモロボシ・レイト！その正体は、銀河遊撃隊隊長にしてニュージェネレーションのリーダー、ウルトラマンゼロ！たった今からお前達夫婦のマスターだ！宜しくな！」
「ああ！このラーマ、シータと共にマスターの手助けになることを誓おう！」
「ラーマと一緒に、これから宜しくお願いいたします」

英雄たるセブンの息子・ゼロのサーヴァントとして、正式にラーマとシータの夫妻が契約。立香は涙腺崩壊で済んでいるが、ぺぺは何かもう顔がヤバいことになっていた。そしてキリシュタリアは案の定イイねボタン連打からの突き指、アーシアによる治療までがセットで行われている。

「今日最大級の感動がごごにあっだよおおおおお！」
「ったく……ホラ、顔ふけ。涙と鼻水で酷ェ顔になってんぞ」
「もう私尊さでキャパオーバーっていうか色々オーバーしてね顔がヤバさでオーバーしてて何かもう尊さオーバーでこれ何ていうかもうね言葉に出来ないって言うのが正しいのよねェェェ!!」
「何言ってんのか分かんねェっつーの。聞いててイラついたぜ」
「いや何度もすまないアーシアさん！尊いものを見ると私の身体は心よろしく折れやすくなるらしい！」
「い、いえ！治って良かったです！」
「なあ、お前レジェンド様の巫女だろ。コイツたまには放っといてもいいんだぞ」
「カイニス、酷くないかい!?」

三者三様、各々のサーヴァントに呆れ返られる始末。しかし、そこかしこから聞こえる笑い声にラーマとシータも漸く涙を止め、笑えることに心から感謝する。

「あ、二人とも重ね重ね悪いんだけどよ。一応二人も銀河遊撃隊所属になるからこの書類書いてくれないか？書き方教えるから」
「うむ、分かったぞ。ウルトラ騎空団……とやらの方はよいのか？」
「おう。こっちはギルドっつーか義勇軍つーか……まあ、手間いらずだから。あ、記入するのはこっちの夫婦欄な」
「あ……ふふっ、お気遣いありがとうございます、マスター」

こちらもマスターとサーヴァントとして上手くやっていけそうで何より。

――そして、いよいよ（ある意味）メインイベントが始まる――。
次回！『月影爆死！』召喚スタンバイ！

「してたまるかぁぁぁぁ!!」

特別編・サーヴァントを呼ぼう！勇治11連編～爆死王は爆死じゃなくても結局ヤバい～

「さて、偶然にも師父がこちらへ来たのは予想外だったが良いタイミングだ。これよりレイオニクスによる11連召喚（とは名ばかりの愉悦ガチャ）を始める！」
「「いえーい！」」
「ちょっと待て何か含みあったろ絶対！あとレジェンド、アンタさっきまで眠そうにしてたのに何でそんな元気になってるんだ!?事もあろうにエルキドゥやプーリンまで一緒に騒いで！」
「そんなもん、お前のガチャ結果見て愉悦するために決まってんだろ」
「レジェンドと同じー」
「マイロードと一緒だよ」
「ふはははは！大人気ではないか麻婆爆死王！見るがいい、あの麻婆娘とコトミネ（を依代にした輩）もまた白米とレンゲ装備で待ち望んでいるぞ！」

取り繕うことなど一切せずにメソポタミア最強チーム＋1は愉悦と言い切った。こうなったら止められるのはアーシアくらいなものだが、当の彼女もレジェンドが元気になったことを喜んでいるためそれも不可能。フォウやピカチュウもレジェンドの肩と頭という定位置にスタンバって準備万端。
なお、スレッタやラスプーチンは上記の通りだが、かくいうエリクトやプロスペラは本当に麻婆豆腐が召喚されたりするのか気になっていたりする。当然といえば当然か。

「私は成功者になって見せる……！必ず！」
「成功したのはひかコン呼んだ時だけだろ」
「超音波アーツウェポンからの三連麻婆豆腐という大爆死は記憶に新しいぞ、ふはは」

「そこの光神に金ぴか王！余はハズレではないと言っておるだろう!?」

嫁ネロからの抗議をスルーし、上座に座布団を敷いて胡座をかき扇子片手に指示を出すレジェンド。王様ならぬ御殿様スタイルだ。

「よし、さっさと聖晶石を纏めて投げ込め勇治。俺達が愉悦する結果を期待するぞ」

「なってたまるかそんな事!!」

そう言って聖晶石を投げ込む勇治。なお、今回はレジェンドが参加したことでダ・ヴィンチちゃんがロマニから召喚サークルの起動権をぶん取り回転させている。

果たして爆死王の汚名返上なるか――!?

○激辛麻婆豆腐×８

「「ふふはははははは!!」」

「「ぷっ……ふふふっ……」」

「フォウ……（うわあ見事に麻婆ばっかし）」

「ぴかーちゅ……（もう呪われてるとしか）」

レジェンドとギルガメッシュは大爆笑、エルキドゥとプーリンも笑

いを堪える程の勇治の爆死っぷり。残り三回残し、それまでの全部が麻婆豆腐ということでフォウやピカチュウは若干心配している。
そして、出てきた激辛麻婆豆腐は一つだけアムールが食べ、もう一つは罰ゲームなのかジャンヌ・オルタが食べさせられていた。

「……たまに、本当にたまにならいいかもしれませんね」
「アウト！これアウトッ！必要以上に辛いんだけど!?」

正反対な反応の二人だが、では残りの麻婆豆腐は？
御安心頂きたい。スレッタとラスプーチンが三つずつ、幸せな表情で食っているのだから。

「ん～♪この辛さと後からくる絶品さが白米とベストマッチです！」
「辛さを越えた先にある旨味……やはり麻婆はこうでなくては」
「ハッ!?ラスプーチンさん、ここはひとつ……辛ネギを細かく切って加えたらどうでしょう!?」
「……！なるほど、麻婆らしさを壊さず更なる辛さを追求するとは……流石だよ、マスター。それにネギは白米にもよく合う。早速試すとしようではないか！」

ダメだこの二人。ただでさえ激辛なのに尚も魔改造しようとしている。そんな喜々として麻婆改良に勤しんでいるスレッタとラスプーチンとは裏腹に、勇治は沈んでいた。

「だ……大丈夫よ！まだ三回分残ってるから！」
「そうですわ、マスター！さすがに１１連……近年における各種ソーシャルゲームでは最低保証というものがあります。本来三つで一回の召喚が３０個で１１連なのですからこの召喚も最低保証が存在するハズ――」
「以前は今回と同じ三回、全部麻婆豆腐じゃなかったっけ」
「「ムジナさぁぁぁん!?」」

ミオリネとコヤンスカヤのフォローも虚しく、まさかのトドメをムジナに刺されるとは思わず勇治がドジャァッと倒れた。ギリギリで生きているようだが精神的にボロボロである。

……と9回目、ここで初めてサーヴァント反応が出た。

「霊基反応……アーチャーだ！」

「！」

「まさかアーチャーな慢心王たる我が来たりせぬだろうな……いや、ありえぬか。この【エリア】では我やエルキドゥは師父の呼びかけにしか応えぬ故、別の輩であろう」

「この際、格などどうでもいい！まともなサーヴァントであれば！サーヴァントであればァァァ!!」

「切羽詰まってんなアイツ」

ギルガメッシュやエルキドゥと一緒にピーナッツを食べながら眺めるレジェンド。ちゃんとフォウやピカチュウ向けに割って食べやすくしてあげているのも、この二匹がレジェンドへの好感度を上げる要因だ。器用に片手でパキパキ割っている。

「フォウフォウ」

「ん？アーモンドバニラパフェか。いいな、それ」

「うむ、ウルクデリバリーにて注文しておくか」

……やっぱりマーリンは彼らを見習ってフォウくんに優しくすべきでしょう。

そして、今回の勇治の初サーヴァントは一体誰が来るのか――!?

「有名な英雄かと思った？

残念！アラフィフでした!!」
「バリッ!!」
「アウチッ!?」

……老紳士というか、胡散臭いというか……そんな感じの人物が姿を現した瞬間、ホームズがお得意のバリツを炸裂させ自称アラフィフをふっ飛ばした。

「あたたた……ホンット変わらないネ！出会い頭にいきなり肉体言語とか君探偵じゃなくて格闘家の方が向いてるんじゃないかな!?」
「安心したまえ。私が遭遇時即バリツをやるのは君だけだよ」
「安心のあの字も感じないんだけど!?」

何やらお互い見知った顔らしい。ホームズの知り合い、ワトソンにしては年齢が離れ過ぎていそうだし、アイリーン・アドラーはそもそも性別が違う。ここでシャーロック・ホームズシリーズ大好き女子のマシュに加え、我夢と共にウルティメイ島及びバビロニア島の図書館によく出入りしているジークフリートが声を上げた。

「まさか……！ホームズさんの最大のライバルといえば……」
「俺も読んでいるから理解したぞ。『犯罪界のナポレオン』と呼ばれ、本人は勿論部下にも優れた人物を有する男――」
「ジェームズ・モリアーティ教授!!」
「あっれェェェ!?真名簡単にバレテーラァァァ!?ここはもっとこう……出し惜しみするところじゃないかナ!?いや知られてるのは嬉しいんだけどネー」

何とも掴み所のない、飄々とした人物だったモリアーティ。しかしながらレジェンドやギルガメッシュ、ハマーンらは彼が卓越した頭脳の持ち主であることを一目で看破していた。

（敵意は無い。そこは間違いないから良しとしよう。となるとやはり『悪は悪を知る』という事で参謀役にするのが妥当かもしれん）
（奴の頭脳はホームズにも匹敵する。あれも奴の一面なのだろうが、本気になればウルトラ騎空団の面々をも出し抜けるレベルの者よ）
（寝首をかく真似をしないと分かっている点ではシロッコやグレミーと違い信頼出来るか。逆に言えば敵に回すと限りなく厄介だということも確かだな）
（ンー……何かあの三人だけ圧が違うんだけど。特にあの黒髪長身の彼はどんな謀略しかけても物理的にも強行突破してきそうな気がする。敵対してる連中に呼ばれなくて良かったよ、いやホント）

勇治的にはどうか知らないが、ウルトラ騎空団的には大当たりなサーヴァントだ。
……で、あと2回残っている召喚……おそらくモリアーティが最低保証だったのかも知れず、勇治は気力が尽きる直前である。何故か麻婆豆腐のコスプレ（!?）をしだした彼を本気で止めるミオリネとコヤンスカヤ。

「お願い！正気に戻って勇治！」
「何故よりによって麻婆豆腐なんですか!?麻婆豆腐をまた呼ぶ気ですか!?」
「コレと似たようなの、昔いたよね。何だっけ……あ、ヤキソバンだ」
「ブフォウ!?」
「ビカァッ!?」

ムジナの一言で今度はフォウくんとピカチュウが腹筋崩壊。二匹

とも飲んでた飲み物を盛大に噴射した。鼻からも出した為、若干痛そう。

「もう私には麻婆しかない……麻婆豆腐しか出ないんだ……」

（その言い方ですと最初に呼ばれた私はともかく、嫁セイバーとかアラフィフ教授も麻婆豆腐カテゴリに含まれていると思うのですが……）

……そこ、麻婆セイバーとか四川のアーチャーなんて言ってはいけない。チャイナ服を着たネロとか普通にいそうだし。

そんな、勇治の絶望を。

――どうした、勇治。

「「「「!?」」」」

――オレの知るお前はどんな苦境であろうと、脚を踏ん張りそれに立ち向かう闘志を秘めた男だ。

希望へと変える声が。

「え!?何々、何なの!?」

「ま……まさか……!」

――もし、そんなお前でもどうにもならない状況があるのなら……ちっぽけではあるが、オレも助力させてもらおう。

「あああああ!!」

「サーガ君、何かユウキがおかしいんだけど」

「ユウキ←の中のユウキ→が反応してるのかもしれない」

「何それ？」

何故か勇治並に反応してるユウキを怪訝に思ったアカネがサーガに尋ねるも、これまた彼もわけのわからない事を言うだけ。どうでもいいが勇治とユウキ、名前が似ていたからなのかとアカネは一瞬考えたものの……性格やら何やら全然違うので「この案はボツ」と思い直した。

「霊基反応、ランサー！」
「馬鹿な!?マジで狙い撃ったのアイツ!?」
「あの爆死王、因果を捻じ曲げたとでも言うのか!?」
「マイロードも英雄王もだいぶ大袈裟じゃないかな」

「サーヴァント、ランサー……召喚に応え参上した。真名をカルナ、宜しく頼む」
「カルナァァァァァァ!!」
「「「「ええええ!?」」」」
「とりあえずユウキうるさい」
「あいたっ!?」

まさかの狙いサーヴァントであるカルナを召喚した勇治。もう爆死王とは呼ばせない……はともかく、一緒になって絶叫したユウキはアカネにハリセンで叩かれた。

「来た！来たぞマハーバーラタに登場するアルジュナと並ぶ有名な施しの英雄、カルナ！」
「すまないドクター！ペペが感動のあまり昇天しそうだ！」
「チッ……オラ何幸せそうな顔で逝こうとしてんだテメェ！腹立つからとっとと起きろコラァ！」
「あふん!?」

こっちはこっちでキリシュタリアいわく『素晴らしい寝顔で逝きかけていた』ペペをアシュヴァッターマンが叩き起こす。まあ、彼はインド推しなので仕方ない。

「エルっち、トモちゃん……あの人っべーわ……！」
「言わなくても分かるぜローアイン……！」
「何だあの細マッチョの理想形にして外も中もイケメン丸出しなナイスガイ……！」
「「勝てねえ……！」」

何か蛇倉苑の中心人物であるローアインらはガックリ両手両膝を着いて項垂れている。
そして当の本人は……。

「うう……ぐすっ……」
「それ程までに酷いことがあったのか。オレで何とかなるかは分からないが、話を聞かせてくれ」

感無量で涙している勇治（マスター）を慰めていた。本来のカルナは言葉足らずで誤解されやすいのだが……彼いわく「とある世界の自分のマスターから『カルナさんは一言少ないから云々』と言われたので、そこを直してみようと思う」ということでしっかり告げるようにした結果、こんな天然さを持ち合わせたイケメンカルナへと華麗に転身してしまったというわけだ。

「いや歓迎の度合いが私と違い過ぎない？」
「君と彼では積んだ善行の数が違うからね」
「言うじゃないかホームズ……！こちらも言わせてもらうと最近じゃ君に憧れているとある人物は行く先行く先事件（しかも殆どで殺人が起こる）に遭遇するというじゃないか。つまりそれは君同様に死神レベ「バリツ!!」アウチッ!?そういうところだヨ!!」

「はっはっは」

笑って誤魔化そうとしているホームズに噛みついていくモリアーティ。

しかし、忘れてはいないだろうか。

――まだあと一回、召喚が残っていることを。

「……ッ!?何だ!?」

「召喚サークル起動……まだ一回残ってたね！そういえば！」

「霊基反応……アルターエゴ!?また!?」

「だがこの反応は妙だ……！来るぞ！」

それは、塗り潰すように染まり――。

「殺生院キアラ、お呼ばれしました♪ソワカソワカ」

「あああああ!!」

「へぶっ!?」

「ニャー」「何するのじゃ!?」

最後の最後でヤベー奴を呼んだ。勇治はそれを見るなり異常な速度でハクとイーウィヤ、通称グランド猫の二匹を掴み豪速球が如く投げつけ、見事キアラの顔面にクリーンヒット。やられた側と投げられた二匹はたまったものではない。ハクの方はどうか判断に困るが。

「何という情熱的な歓迎……！私、昂ってまいりました」
「な……何かヤバくねーかこの姉ちゃん……」
「あれだね、カタリナの『ビィくぅぅぅん！』とヴィーラさんの『お姉様お姉様お姉様』とロゼッタを合わせてそのままにするとこうなる的な」
「ヤベー奴とヤベー奴をベースとなる人物に混ぜ合わせるとか何その禁忌」

よくよく考えたらウルトラ騎空団はヤベーやつの巣窟なのだがこの際置いておく。

「キアラシスベシフォウ……！」
「オイヤベーのこっちもだぞ！何かあのマスコットがスペースQの動きしだしてる！」
「キューってたまに鳴くもんな」
「そこじゃねーんだよ!!」
「参考までに聞いておこう。何故ここへ来た？」

フォウくんが本気でキアラの抹殺に動き始め、てんやわんやになっているウルトラ騎空団でさすがトップというか、レジェンドは冷静にキアラへと尋ねた。
……が、ぶっちゃけ聞くんじゃなかったとすぐ後悔することになる。

「ええ、はい。私、レイオニクスについて調べまして。かの遺伝子の大元のレイブラッド星人は全宇宙を支配していたとか」
「まあ、一つの世界じゃそんな時代もあったな」
「そこで興味を持ちレイオニクスに接触しようと思ったのは良いのですが、何分私その方面に縁が殆ど無く……縁があったのがレイオニクスの中でも頭一つ抜けて優れていたマスターだったので召喚が行わ

れていたことをこれ幸いにと割り込ませて頂きました。ソワカソワカ」
「ほう？」
「それで、肝心の理由ですが……先のレイブラッド星人が全宇宙を支配していたことに関係しまして。ああ、別に取って代わりたいとかそういうのではないので御安心下さいな」
「ここでそんなことを言えば師父に消し飛ばされることぐらい承知で参上したであろう。違うことなど想像に難くない」
「ええ、それは勿論。とどのつまり、レイブラッド星人は全宇宙を支配していた。そしてマスターはレイオニクスの中でもトップクラス。即ち……

マスターと『ファイナルッ！フユウウジョン!!（声の協力・獅子王凱）』してマスターの『約束された勝利の剣!!（声の協力・セイバーアルトリア）』から私のヘブンズホールの奥へと『ゲッタァァァ！ビィィィィィム!!（声の協力・流竜馬）』して頂けたら、きっと全宇宙クラスの気持ち良さが味わえるのではないかと」
「「「「何爆弾発言飛ばしてんだテメェェェェ!?」」」」
※良い子の教育に大変不適切な為、有志の方々の熱い叫びへ変換させて頂いております。凱さん、アルトリアさん、竜馬さん、ご協力ありがとうございました。

……何かもう、ダメだった。何がと言われれば色々ととか全部とか言っていいくらいキアラは色情魔であった。
「というわけで……ささ、マスター。ベッドへ参りましょう。御安心

下さい。相互扶助、ちゃんとお互いが最高に気持ち良くなれるようリードしますので」
「うわあああああ!?カルナ、助けてくれェェェ!!」
「……というわけだ。キアラ、嫌がる勇治を連れて行くことは許さない」
「そうだぞ！それにそういうのは結婚してからすべき……つまり！余なら結婚式からの初夜ということで許される！」
「「許してたまるか!!」」
「素晴らしい！マイボーイの女運は破滅に満ちている!!」
「君にもとばっちりがいくだろうがね、モリアーティ」
「喧しい！少しでもプラスに思わないとやっていけなさそうだから仕方ないんだヨ！」

何やら混沌としてきたのでここらで一つ、レジェンドかギルガメッシュあたりに一喝してもらおうと考える面々であったが――。

「「……愉悦！」」

相変わらず聖杯をグラス扱いして愉悦の祝杯をあげてる光神と王。それにプーリンやエルキドゥまで参加しているので収集がつかない。
……と思ったのだが、フューチャーピカチュウとクラッシャーフォウくんによるクロスパーフェクションで勇治諸共キアラを撃沈。とりあえず勇治軍団をまとめてウルトラ騎空団医療部に任せておく（押し付ける・放り投げるとも言う）。

「いやマジで何なんだあの二匹……」
「ポケモンにモードチェンジするのとかいるけど、ピカチュウは本来そういうの無いんだよね。やっぱりスペシャルだなぁ、レジェンドさんのピカチュウ」
「フォウさん、いつの間にフォームチェンジなんて習得していたんでしょうか……？」

「団長さんが育てると成長バグるような何かがあるんじゃないかなぁ…」

単に鍛え方がおかしいから成長の度合いや方向性もおかしくなるだけである。そういうレベルではないというのも事実だが。

さて、紆余曲折や想定外の召喚はあったがこれで今回の目的は一応完遂。あとはレジェンドが召喚するか否かなのだが……。

「ん～……召喚はする気なんだが、１１連ってのはなぁ……かといって単発というのもどうかって感じになってて」

「一先ず１１連分をやっておいて、マイロードが召喚権譲渡したくなったら交代とかはどうだい？そういうのが途中で可能なら、だけど」

「ふむ、力業だが俺なら出来なくはないな。それでいくか」

（（（（出来んのそんなこと!?））））

相変わらずブッ飛んだ事を平然と言い出すレジェンド（とプーリン）である。

そんなわけで、今回の真の締めくくりとしてレジェンドの１１連召喚（途中交代アリ）が実施されることになったのだった。

――穏便に済まないのはいつものことである。

次回！

「マスターさんみたいな人が堕落すべきっていうか堕落しないといけないんです！だって他の神のやらかしの所為で倒れるとかまるで私じゃないですか！私達はもっと愛されるべきなんですよ！シヴァもパールヴァティーもクソくらえですー!!」

愛玩系ビースト降臨!!

特別編・サーヴァントを呼ぼう！レジェンド＋α編～一番ヤベーのは意外な人物でした～

話数にして既に三話分消費している今回の英霊召喚、やはり締めくくりはレジェンドが行うことになった。

彼が行うのも、先の爆死王同様に１１連召喚。

――だが、その前に大変なことになってしまった。

☆

「あああああ!!」

「に……兄様ー!?自業自得だけど兄様ー!?」

『我らが巫女への暴言!!許すまじ!!』

ブチギレ状態のマジンガーＺＥＲＯ（通常マジンガーサイズ）に握り潰されそうなディオスクロイの片割れのカストロ。

妹のポルクスは（一応）心配しているものの、ぶっちゃけ殆ど自業自得と思っているからかそれを口にしていた。

事の発端だが、月王国（ルナ・ブリテン）のある世界の地球から、かのオリュンポスとアトランティスを統べる大神ゼウスが護衛を数名連れて英霊召喚の見学及び機体の注文書を自ら持ってきた。その際、礼儀正しくアーシアが挨拶しゼウスらも笑顔で返礼したまでは良かった。

……が、アヴェンジャーな素質もあるディオスクロイの片割れである人間嫌いな兄のカストロがいつもの調子でアーシアにも「死ね！」と言ってしまったからさあ大変。ゼウスやポルクスは当然、本気でレジェンドを（ガチ恋愛的な意味で）落とす気だったアフロディーテやデメテル、エウロペの護衛に任命されたアデーレ（かく言う彼女もレ

ジェンド目当て）とマカリオスの姉弟に加えて、自らＡＲＴ―１の注文書を手渡しに来たオデュッセウスさえも一瞬で真っ青になるが時既に遅し。
　光速を超える速さで本来の姿へと戻ったマジンガーＺＥＲＯは容赦無くカストロを捕獲。冒頭に至るというわけだ。

『貴様の人間嫌いは分からんでもない……が、我らの巫女へそこいらの凡俗に対するものと同じ態度を取り心を傷つけるなど殲滅に値する!!せめて潔く散るが良い!!』
「が……あが……!」

――正直、オリュンポス十二機神がフルスペック発揮しても今のマジンガーＺＥＲＯ相手では一分凌げれば褒められるレベルだ。ただでさえ勝てないのに。

（ゼウスです！誰かディオスクロイ・カストロを見張ってなかったの!?アレ絶対収まらないよ絶対オリュンポス終わっちゃうよコレ！）
（アフロディーテです！まず無理なのでは!?というかあの人間がレジェンド様の巫女とか普通に知らなかったのだし！）
（デメテルです。やはりレジェンド様のご機嫌を直していただき、止めてもらうのが一番かと。その為に私が犠牲になります。ペルセポネに弟か妹が出来てしまうかもですが構いませんね）
（エウロペです。デメテル様、本音が八割方ダダ漏れですし、アデーレが真体撃滅クラスの戦闘力を発揮しかねないのでそれはおやめ下さい）
（ディオスクロイ・ポルクスです！何から何まで兄様が申し訳ありません!!そして身体なら私が差し出します!!）

……オリュンポス組、本気でオリュンポス存続の危機のため知識総動員して思考中。つーかポルクスも我欲ダダ漏れであった。ノアや

キングの【エリア】の一つにある大西洋異聞帯の彼らは色々とヘイト集めがちな神なのだが、レジェンドのところの彼らは何というか……愉快な連中である。それでも一悶着あってゼウスらは一度レジェンドにコテンパンにされたわけだが。

「……」

（ホラァ！レジェンド様光り輝く玉座に座って頬杖ついたまま目ぇ伏せてんじゃん！口元笑ってないじゃん！もうアウトだったんだよアレアウトだったんだよどうしよう!!）

（落ち着いて下さい、我等が大神。かつてポセイドンがカイニスを手籠めにしようとしたところレジェンド様に端末の『ピー！』を無理矢理引き千切られた事件を思い出してみて下さい）

（アレは痛ましい事件だったな。でもいいんだ、ポセイドンだから）

（浮気する度にヘラ様から撃沈寸前まで叩きのめされた貴方がおっしゃいます!?）

――何かレジェンドとマジンガーＺＥＲＯの怒りを鎮める会議のはずが、何故か別の方向へシフトチェンジしているオリュンポス十二機神の一角。その間、アデーレとマカリオス、ポルクスは必死になってレジェンドに懇願中。

「……苦労しておるようだな、貴様ら」

「「ご迷惑おかけしてすみません究極英雄王！」」

アデーレとマカリオスはゼウス達に、ポルクスは兄に何かと苦労させられているようだ。特に前者姉弟。

で、彼らに関わり合いのあるキリシュタリアとカイニスは――。

「ぶっ……！くくくっ……！」

「カイニス、まさかその事件で君は……」

「あん？別に襲われたからこんな感じになってるワケじゃねえ。そも

そもレジェンド様に助けられてるし……いや、間接的には関係あるか。けど俺が笑い堪えてんのはポセイドン玉千切られ事件を思い出したからなんだよ……ぶふぅっ!!」

当時を思い出し我慢が限界を超えてしまい吹き出すカイニスと、玉千切られ事件という単語に股間を押さえ内股になるレジェンドら一部を除く男性陣。間接的にというのが股関節という意味でないことを祈ろう。ちなみにキリシュタリアやゼウスも大多数の男性陣に含まれている。

「……もういい、離してやれ」

『何だと？』

口を開いたレジェンドが告げたのは、カストロを解放していいというまさかの事態。マジンガーＺＥＲＯどころかカストロをも含めた全員が驚く。てっきり「もっと地獄を見せてやれ」などと言いそうなものだが……。

『どういう風の吹き回しだ、レジェンド』

「大した理由ではない。更正が絶望的なカストロをどうにかするより、アーシアのケアに注力すべきだと判断したまでだ。その方が有意義だし何よりアーシアから礼やご奉仕をしてもらえるかもれんからな!!」

『!!』

滅茶苦茶打算的な理由だった。

それに納得したマジンガーＺＥＲＯはカストロを簡単に投げ捨て（とは言うが凄まじい速さで投げ捨てたので、カストロは上半身が壁にめり込んで気絶した）マスコットサイズに戻り、ぐずっているアーシアをレジェンドやピカチュウ、フォウと共に慰めモードへチェンジ。

一方のオリュンポス組も肩の荷が下りてどっと力が抜けたらしく揃ってへたり込んだ。
なお、元凶のカストロは罰として召喚中は放置されることが決定。それを見たフェルグスが「尻もありだな」とか言い出した。カストロの明日はどっちだ。

☆

「気を取り直して11連召喚やるぞー」
「フォウフォウ（アーシアはボクとピカ先輩で癒やすよ）」
「ピッカピカピー（フォウくんのもふもふと僕のもちぷにのコンボならいけるはず）」

いつもの定位置からアーシアに抱きかかえられるようになっているピカチュウ&フォウくん。
そしてレジェンドを除きギルガメッシュやモルガン、スカディに加えてゼウスやアフロディーテ、デメテルにエウロペまで玉座を出したためそりゃもう壮大な光景に。これ召喚された方が逆にプレッシャー感じそうである。

「纏めて一気にくれてやる。サクサクいくぞ」

パチン！と指を鳴らすと相変わらず聖晶石が直接召喚サークルの上にドサドサ落ちてきた。ユーザー泣かせな光神だ。レジェンドの召喚とあってやる気マシマシなダ・ヴィンチちゃんが引き続きロマニからシステム全権をぶん取って起動。まあ元々ロマニは医療班なんだが。

「一応二人程目星はつけている。ついでに押し付ける奴もな」
「「「「押し付けんの!?」」」」
「まあ、それは何回か召喚してからだ。そら、回せ回せ」

さて今回最初の召喚は……？

「シャルロット・コルデー、一応アサシンです！あんまりお役に立てないとは思いますが……でも！頑張るのでどうか宜しくお願いします！」

「ぬあああああ！やっぱりかよ！何であの光神様にだけ美少女や美女が集まるんだよ!?」
「知るか。敢えて言うならお前のように欲望ダダ漏れではないからだろうな」
「最近じゃ邪竜すら可愛く思えるツッコミに進化してるなお前はよう!!」

案の定アザゼルが騒ぎ出し、ゼロガンダムにツッコまれた。確かにその通りなので何とも言えない。というより、男性陣の結構な数がシャルロットの胸に注目している。……一目で分かる、大きいと。

「……敵ですね」
「おい落ち着けってセイバー!?」
「儂、沖田にも負けてあの娘には着衣巨乳というとんでもオプションさえ見せつけられてるんじゃが……？」
「私だってあそこまで大きくないですよ！アレに対抗出来そうなの、最低でもノッブのマスターくらいないとダメじゃないですかね!?」

こっちもこっちで女性サーヴァントが騒ぎ出した。とりあえずノッブでは勝負にならないことを言っておく。

「なんか今物凄くディスられた気がするんじゃが!?団長は貧乳だろう

と気にしないよネ!?寧ろ育ててくれるはずじゃろ!?」
「私に聞かないで下さいよノッブ！」

初回からこんなんで大丈夫か今回の召喚……ちなみに当のシャルロット本人はアーシアと仲良くなってピカチュウを抱きかかえていた。

「何とか生き延びて到着したら羨ましいことになってるねサンダーマウス！」
「フォーウ……（おいグランドネカマ、ピカ先輩に何だその言い草は……）」

かのセイバーから逃げ切り、到着したマーリン（とオベロン）は到着早々欲望満載の発言をピカチュウにぶつけ、フォウくんのキャスパリーグブラスターで真っ黒焦げにされた。何故に学習しないのか……。

「よし、一回目は成功だ。アーシアに親しい友人が出来た」
『うむ。尊いものを見た』
「何も戦闘力だけが全てではないということよな」
「さて二回目、どうなるか」

戦闘力だけが全てではないというギルガメッシュの言葉通り、誰が来ても益があればそれでよし。そんな彼らの召喚に応えた次なる英霊は――？

「アサシン、望月千代女にござる。これより、お館様のお側に……」
「誰でもいい、ちょっとミゲル呼んで来て」
「え？」

キョトンとしているのはレジェンドから大きめの羽織を羽織らされた千代女本人。呼び出されて早々に優しくされてちょっぴり嬉しい＆困惑している彼女だが、夏に胸を刺激されてＨＯＴ　ＬＩＭＩＴなミゲルの方が気になるのも仕方ない。やたら良い声で歌う彼に更に刺激されグラハムや三日月もムキあし魅惑のなんちゃらと化した。

（こ……この場合どうしたら……!?ハッ!!）

周りが濃すぎでどうにかアピールせねばと思い立った千代女が辿り着いた考え、それは……。

「へーイ!!」

「「「「!?」」」」

イメージとはかけ離れたフランクさを出すことだった。違う、そうじゃない。

恥ずかしさのあまり、何処かに引っ込む……のではなくレジェンドに引っ付いて顔を隠す千代女だったがここでは悪手。嫉妬ビームの嵐を受けてとりあえずレジェンドの玉座の後ろへと引っ込んだ。

「可愛いし面白いので採用」

「金髪でなかったのが惜しいな……まあ良い、次にいくぞ師父よ」

セイバーに忍者コスでもさせてみるかと考えるギルガメッシュだが、その後ジョブチェンジで忍者があると聞き一層燃えだしたとか何とか。なお、レジェンドが忍者にジョブチェンジすると金髪かつ衣装も『四代目火影』と書かれた羽織付きな別物になるらしい。何処の波

風だお前。

「霊基反応、アサシン！」
「またか。今日はアサシン祭りか何かか？」
「アサシンだけど……何だこれ!?」
「ん？」

ロマニが叫んだ理由……即ち、異常事態。先刻フューチャーピカチュウとクラッシャーフォウくんにぶっ飛ばされて医務室送りにされたキアラに似た反応が検知された。
果たしてその正体は――!?

「愛の神、カーマです。言っておきますけど私に恋愛相談とかしないほうがいいですよ。だって私の愛はマスターさん！専!!用!!ですので」

……何かやけに愛の矛先を強調をするロリ女神が現れた。ラスプーチンの時程ではないものの、村正らが反応している。

「カーマ!?またインド関係者!?」
「けどカーマって確か男性神じゃ……」
「何ですか？女性じゃいけないとでも？」
「いや、そういうわけでは……」
「偶像崇拝（アイドル趣味）してるならそれぐらい許容してくださいよ全く」
「ぐはあっ!!」
「「「「ロマニー!?」」」」

カーマの一撃がロマニにクリティカルヒット！ついでに髪型がちょっとワカメっぽいということでシエテの尻にもカーマの弓が直撃。彼は吐血した。

「俺、中の人的にはオーナー補佐と扱い同じにしてほしいんだけど!?」
「え？すいません。ワカメな髪型を見るとどうも殺意が沸きまして」
「俺の髪型の何処らへんがワカメ!?」

そこらへん、とカーマに指差され本気で髪型を変えようか悩みだすシエテ。割とどうでもいい。

「しかし貴様、随分と師父に傾倒しておるではないか。おかげで月の先代女王を始め女神連中やら何やらが殺気立っているぞ」
「それはマスターさんが私と同じと言っても過言ではないからですよ」
「同じだと？」

カーマの言葉に眉を顰めるギルガメッシュだが、その瞬間カーマは堰を切ったようにまくし立てた。

「マスターさんみたいな人が堕落すべきっていうか堕落しないといけないんです！だって他の神のやらかしの所為で倒れるとかまるで私じゃないですか！私達はもっと愛されるべきなんですよ！シヴァもパールヴァティーもクソくらえですー!!ばーか!!」

本気でポロポロと涙を流しながらグワーッと言い切ったカーマに全員がぎょっとする。
神話においてカーマはシヴァの関心をパールヴァティーへと向けるさせるためにシヴァを矢で狙わされ、結果シヴァによって灰にされたと伝えられており……一応その後というか転生後の話はあるが、ど

うやらその件が酷く尾を引いているらしい。
　さすがに本気でわあわあ泣かれてしまっているのでレジェンドが抱きかかえてよしよしと慰めている。

「……だよなあ……苦行を他者に押し付けて自分達は楽をしようと考えて実行した結果、被害者なんざ知ったこっちゃねーだもんなあ……やべ、腹立ってきた」
「ですよねマスターさん！もう揃って堕落しちゃいましょう！シヴァだのパールヴァティーだの平の光神だのなんてすっぱり捨てて、二人でイチャイチャしながら行く末を見てましょう！あ、その間に子供とかデキちゃったり――」
「ソワカー!!」
「「「「ぎゃあああああ!?」」」」

　何やらレジェンドとカーマが意気投合しつつあるところに、何故かキアラが亀甲縛りにされた状態で飛んできて落ちた。何だこれ。
　他の勇治軍団もヘロヘロになりながらやってきており、勇治はカルナに肩を貸してもらっている。

「げ、淫乱ソワカ」
「ふふ……随分な物言いね、ぐーたら神」
「自分の格好理解してます？色ボケしすぎて自分を省みること出来なくなってません？あ、元からですか」
「心配していただかなくても、これはマスターから私への愛「んなわけあるか!!」……試練ということで」

　ロリ女神から侮蔑の表情で見下される亀甲縛りの魔性菩薩とかとんでもない絵面なのだが、ゲシゲシ蹴られてないだけマシと思ってもらいたい。
　構ってるとロクなことがないということで、キアラのことは彼女のマスターにぶん投げることにしたカーマ。そう、正解だ。

「お、フォウの提案のアーモンドバニラパフェが来たな。カーマ、食べるか？」
「食べます食べまーす！」

やはり食は世界を救う、とレジェンドは改めて思い次なる召喚を開始。カーマはアーシアとシャルロットに加えて千代女も混ざった『レジェンド直属女子会』（会長・プーリン）と共におやつを満喫。なおキャストリアは「パートナーだから直属とかそんなんじゃなくて隣にいるのが当然なのです！」ということで所属していない。

それはそれとして、次に呼ばれたのは――？

「私のような者まで呼ばれるとはな……しかし、呼ばれた以上その役目を果たさねばなるまい。では名乗らせてもらおう。サーヴァント、ライダー。アナベル・ガトー、推参した。生前の最終階級は少佐だ、宜しく頼む」
「「「「えええええ!?」」」」

もはや語るまい、ソロモンの悪夢。ここに来てまた宇宙世紀ビッグネームの一人が召喚された。これにはゼットは勿論、ＭＡ乗りのデイビッド、さらにガトーが命がけで逃した同胞を受け入れたアクシズの指導者ハマーンも驚きと歓喜を持って迎え入れた。

「超師匠スゲェ!!ソロモンの悪夢、アナベル・ガトー少佐!!立場的には反英雄なんだろうけどその生き様は正に漢!!」
「俺が乗るノイエ・ジールの初代を駆って多大な戦果を上げ、最期まで仲間の事を考え散っていった勇士……俺の目標の一人だ」
「随分と持ち上げられているようだが、私はそれ程立派な者ではないさ」

「そう謙遜するな、アナベル・ガトー。お前が命を賭して逃したデラーズ・フリートの兵は後に我がアクシズの重要な戦力となった。お前がやったことは決して無駄ではなかったのだ」
「アクシズの……もしや貴女がかのアクシズ摂政、才女ハマーン・カーン殿か!?」

やはりというか、同胞達の恩人ともいえるハマーンと対面し恐縮するガトー。「結局アクシズは紆余曲折の後に敗北してしまったがな」と自虐気味に言うハマーンだが、そこに後悔がないことにガトーはある意味安心する。自分が救った者達は少なくともその生を延ばす事が出来たのだと知れたから。
そこに、多少なりとも笑みを浮かべていたレジェンドが問う。

「デイビッド、魔力にはどれくらい余裕がある?」
「余程の魔力喰らいでなければあと二、三人は」
「よし……我がサーヴァント、アナベル・ガトー。これよりお前のマスターはデイビッドとする。マスター権の譲渡を行うぞ。召喚前ならこれも必要なかったんだが、一度召喚してしまった以上は手間だがやらねばならん」
「「「「!?」」」」
「マスター、宜しいのか?」
「構わん。どの道、今デイビッドやハマーンが拠点及び住居としているのは俺が新造した新しいアクシズだ。そこで生産する機体も殆どがジオン系列の機体になる予定だからな。その方面に馴染み深いお前がいてくれた方が何かと助かる。主に教導面で」

そう言われてみれば確かにその通りだ。共に戦った友軍はザクやドム、ドラッツェ等の機体であったし、自身も一年戦争時代は専用のゲルググを駆って戦場に出たものである。先程ハマーンに見せてもらった資料では、ザクの後継機ザクⅢやドムの後継機に該当するドライセン、他にもリゲルグなどが存在していた。しかも、デイビッドが

乗るのは自身が最後に乗ったノイエ・ジールの後継機ときた。
もはやジオン再興や連邦への報復などではなく自分が守るべきものの為、その力を自由に振るえるならこれ程良い条件はない。

「デイビッドも構わんな」
「むしろ願ってもいなかったことだ。謹んで受けよう」

それを聞き届け、レジェンドはガトーのマスターとしての権限をデイビッドへ移す。といってもレジェンドは基本的に令呪不要＋無制限使用可能というブッ飛んだ光神なので、結局指パッチン一つで終わってしまった。

「「「「めっちゃ早っ!?」」」」
「いやだって後支えてるじゃん」

厳粛なものと思われていたマスター権の譲渡があまりにも簡素過ぎて、ハマーンやガトーもつい笑みが溢れた。

「では、アナベル・ガトー大佐。これよりデイビッド並びにハマーンの下で新しい生を送るがいい」
「職務に励め、ではないのですか?それに……」
「バカ野郎、せっかく得た第二の人生を謳歌せんでどうする。それに階級に関してはアレだ、戦時中なら二階級特進扱いになるだろお前は確実に」
「……フッ、了解しました!レジェンド閣下!アナベル・ガトー、これよりマスター・デイビッド並びにハマーン・カーン閣下の下で過ごさせて頂きます!」

ビシッと敬礼をしてそう告げたガトーに感化され、ゼットや立香、キリシュタリアにデイビッドも同じく敬礼してしまう。ハマーンとはまた違うカリスマを持ったガトーの参入。彼は今後『ネオ・アクシ

ズ』の教導隊隊長としても活躍してくれるという。さり気なくレジェンドを閣下呼びしているが、後日彼に聞くと「デラーズ閣下やビッター少将と似た雰囲気と貫禄があった」からだとか。多分、レジェンドがとある世界の母港にて上級大将だからかもしれない。

「何々!?今日デイビッドフィーバー!?」
「俺ではなくジオンフィーバーだな」
「星の屑成就のために!ソロモンよ!私は帰ってきたァァァ!!」
「む、それは私が言った台詞だな。キリシュタリア君」

上官や部下からも慕われる漢はやはり馴染むのも早かった。ソロモンと聞いてロマニが反応しているが、彼は魔術王としてなら凄まじいものの機動兵器の操縦に関してはド素人である。ついでにロマニ本人はガンダム系に乗りたいと自己申告済み。果たして乗れるのは何時になるやら……。

「ここいらでまず二人、俺の代わりに英霊召喚してもらう。ガトーの時と違い最初からマスター権はその二人になるから楽だなコレ」
「ほう?てっきりもう少し回すものだと思ったが理由は何だ師父よ」
「ライダー枠でガトーが来てくれたけど、何かまたアサシンコンボしそうなんだよ」
「しかもまた女の子とか」

エルキドゥの呟きに何かアザゼルが両膝を着いて「あああああ!!」とか絶叫してるけど気にしない。そもそもそうなるとは決まってないわけで。

「で、代わりの人物だが……

マリユー!ウーノ!こっち来い!」

「「「「えっ!?」」」」

よもや予想外の人物が指名された。ウーノはまだしもマリューは完全にノーマークだったし、近くでムウが「え!?俺は!?」と騒いでフォウくんとピカチュウに『ナイナイ』動作で首と手を振られガックリ項垂れる。マスコットにそんなことされるって……。

「マリューさんが……何でだろ?」
「艦長だから……かと思いましたが、それだとバルトフェルド艦長達も含まれますし」
「あれじゃね?カドックとか矢的先生みたいな気苦労人枠」
「「「「あ、なるほど」」」」

あっさり納得出来てしまった。どんだけ気苦労抱えてんだ、と思ったがウルトラ騎空団はそれの溜まり場でしたねありがとうございました。ちなみに当の二人は矢的やカドックから「大丈夫」とか「頑張って」とエールを送られている。

「えーっと……まずは、私……から?」
「何で疑問形?」
「いえ、その……まさか私がやる側になるなんて想像もしなかったので」
「むしろお前さんみたいなタイプにこそカバーする人材が必要なんじゃないかと思うがな。既に聖晶石は投げ込んであるし後はそこに立っているだけだ。気を楽にしろ」

一応お祭り的行事とはいえ連合の頃からの制服を着ていてよかったとマリューは安堵する。そして言われた通りに立つと召喚が始まった。ガチで魔術とは最近まで全く縁の無かった人物に応える英霊は誰なのか。

遂に輝きが収まってそこにいたのは――。

「我は父ペーレウスと母テティスの子、アキレウス！召喚に応じ参上仕った！これから頼りにしてくれよ、マスター！」
「「「「うおおおお!?」」」」

ギリシャ神話の大英雄、まさかの召喚。確かにレジェンドが基点ではあるが、マリューに応えたのは間違いない。最近よく地球の歴史や神話などを深く学び始めた矢的も彼のことは知っている。

「マスターはあんたで間違いないんだよな？」
「え、ええ。魔術どころか魔力なんて殆ど無くて、団長さんや皆におんぶに抱っこなのだけれど……」
「ほう、ほほう……」

アキレウスはマリューを見て頷き、周囲を見渡すと口元に笑みを浮かべた。

「マスターを筆頭に良い女や立派な戦士だらけだな、ここは！気に入ったぜ！改めて宜しくな、マスター！」

思いっきり……ではなく、力を調整してポンとマリューの背中を叩いたアキレウス。どうやら彼のお気に召したようで、満面の笑顔だ。先程も外見だけでなくぱっと見だが中身もある程度把握したらしい。

（アレ、これ私達名乗らない方が良くない？ゼウスとか名乗ったら槍飛んでこない？）
（何でそんなに腰が引けてるんですか大神なのに）

（いやホラ、私あっちの方だとイーリオス側に味方したらしくて、それが原因で彼の友人戦死したとか何とか）

詳しくは叙事詩『イーリアス』を参照してほしい。なお、アキレウスは既にマリューと共に矢的やカドック、キラ達と交流中。気付いているのかどうかは不明だが、時折ゼウス達をチラ見するので多分気付いている。

「へえ……こいつがマスター達の船か。良い船だ」
「ありがとう。なし崩しに艦長になったのだけれど、私を支えてくれる皆には感謝しかないわ」
「じゃあ、俺も今日からこのアークエンジェルって船のクルーだな。侵入者撃退や護衛は任せとけよ」

……どうにかして潜入出来ても『駿足のアキレウス』と呼ばれた彼とその愛馬や戦車に追い回されるとか、アークエンジェルが更に不沈艦になってしまった。内部工作すら妨害されるのだから。

「意地でも外から物理的に撃沈するしか方法は無くなったようなものか」
「私の宝具『帰滅（マハー・プラヤ）を裁定せし廻剣』等の対界宝具でなければ撃沈不可能、ということでしょうか？」
「まあ、さすがにそれはやり過ぎだろうけど例えとしては間違ってないな」
「バランスの取れた武装にラミネート装甲、内部に入ればアキレウスによる追い回し……何これ地獄かしら」

尤も、追い回す前に仕留めてしまうだろうが。ついでにアキレウスの愛馬であるクサントス、バリオス、ペーダソスは空まで駆ける。ピカチュウといいフォウくんといい、何でウルトラ騎空団に属する動物はスペックがおかしいのか。

「良い感じじゃないの、ムウがどう思うかは知らんが」
「うむ。故に次のウーノも期待出来そうだな。何せあの曲者揃いの十天衆の創始者よ。下手すれば頭目よりも信頼出来る」
「俺そんなに信頼無いの!?」
「たわけ！出合い頭カーマに尻を射られた奴が何を言うか！」
「ぐはあっ!?団長ちゃん！英雄王止めてお願いだから!!」
「信頼はあるが威厳は無いな」

シエテ撃沈。不沈艦アークエンジェルの話題の中で沈んだ彼のことは……誰も気にしていなかった。哀れ十天衆頭目。
それではシクシクと泣きながら横たわるシエテを放置して召喚を開始する。いたたまれない気持ちになるウーノだったが、一先ずやるべきことをやってしまおうと気持ちを切り替えた。
実力・人格共に文句無しの十天衆創始者に応えた英霊は――？

「セイバー、円卓の騎士ランスロット。召喚に応じ――「にゃんこォォォオオ!!」――ぬあああああ!?」
「何かマシュが恐ろしい反応速度でハクを掴んで投げ飛ばちょい待ちちょい待ち何投げようとしてんの玉座ごと持ち上げて何を」
「キリエライト・アーツ最終秘伝！
真!!光神!!落爆殺!!」
「「ぎゃあああああ!?!」「ニャー」
ドガッシャアァァァン!!!

――湖の騎士っぽい名前が聞こえた途端、マシュが尋常ならざる動きでハクを投げつけたかと思えば、レジェンドを玉座ごと持ち上げるという荒業を披露しそれすらも召喚された（はずの）人物へとぶん投げるという、とんでもないハプニングを巻き起こした。これにはギルガメッシュ他の面々もポカン顔。当のマシュはゼェゼェと肩で息をしているが目立った怪我は無い。

「……ハッ!?ご、ごめんなさい！何故かセイバーでランスロットと聞いたら身体が自然に動いてしまって……」

「それよりレジェンドぉぉぉ!?生きてる!?大丈夫!?」

「ハクちゃあああん!?」

「そこは姉さんじゃなくてロスヴァイセさんが言うところでしょ！」

「へぶっ!?」

どうやら無意識のうちに発揮された力だったらしく、マシュはあちこちにしきりに頭を下げている。ついでに台詞をカナエに奪われたロスヴァイセはフウを抱えて滝涙。うん、いい加減泣いていい。

☆

レジェンドとハクは無事（しかもハクに至ってはあの状況で極薄の魔力障壁を展開するという離れ業を行っていた）だったが、前述の通りマシュが玉座ごとぶん投げた為にシステム・フェイトが半壊。その修復にはキアラを餌にマーリンを扱き使うことにし、修復完了までしばし休息を取ることにした。

尚、マシュの決死の活躍もあって最後の召喚を阻止出来たのは僥倖である。

というわけで、残り六連分（今回のラストはノーカン）は最速でも翌日……というわけで今日は月王国に一泊することが決定。

……え？１１連召喚の途中再開が可能なのかって？レジェンドだから問題無い。

「ほらマシュ、泣かないの」
「先輩……でも……」
「だったらお前なりにレジェンドとあの猫にサービスしてやれ。何ならトッピングの二つや三つ無料とかでもいいぜ。俺が許可する」
「店長……」

こっちはこっちで末っ子を慰める三兄妹っぽい。いや、マシュがサギリに関することで九重に対してジェラシー感じてるからもしかすると……。ジャグラーはマシュ・ジャッジで優良判定だったので文句無し。

「ところで、何であの召喚だけ妨害したの？」
「……何ていうか、騎士なのに女性関係で節操なくて、人妻好きで、リゾート地では確実にナンパに走りそうな人が呼ばれた気がしたんです」
「よくやったわマシュ。次は遠慮なく私も呼びなさい、クルーガー・インダストリー所属者共通護身術『ドギー・アーツ』免許皆伝の実力を見せてあげるわ」
「サギリのアレはヤバいぞ。ピンポイントで急所を連続打ちしてきたかと思えば腕抱え込んでへし折ってきたりするからな。その証拠にこないだのクエストでボス格のリザードマンを両肩の関節外した上に首の骨粉砕骨折させて倒したぞこいつ」
「的確かつ必殺……さすが先輩です！」

キラキラと目を輝かせるマシュとは反対に、それを聞いていた男性陣は思った……『ああ、これは相手がジャグラー店長じゃないと嫁の貰い手ねぇわ』と。そしてそれを異常な感の良さで察知したサギリにより、そう思った連中は後日マシュの目の前で『実践』としてジャグラーが言っていたことをやられたらしい。

「ギャアアアア!?姐さん御勘弁をおおおお!?」
「ジャグ以外に貰い手なくて結構。だけどそれとこれとは話が別だからねー」
「ギャア……ゴフッ!?ヤバ……マジで絞まっ……っ……!」
「……」
「どうされた、テスカトリポカ殿!」
「杏寿郎……ああ、いや……ちょいと因縁がある奴思い出してな。あのサギリってのが悪いわけじゃない、寧ろああいう戦士は大歓迎だ」
既に何人か落としたらしいサギリを見ながら、テスカトリポカは何処ぞのルチャ・リブレ好きの女神を思い出すのだった。

――おまけ――

「う～ん……いや嬉しいには嬉しいんだけど何かこう違うというか、どうも私の趣味とは合わない気がするというか……まあ、引き受けた以上はやるけどね」
「ソワカソワカ。でしたら共同戦線といきましょう。私とマスターの橋渡しをして頂けるのでしたらウルトラ騎空団内の女性何人かとの橋渡しを――」
「お互い頑張ろうじゃないか!」
※結局この会話を聞いていたピカチュウのグリッターピカチュウ化→グリタリングシールド特攻→ゼラデスビームによって二人ともお仕置きされ、システム・フェイトも修復完了まで更に時間がかかることになりましたとさ。なお、ピカチュウは怒られるどころか勇治やカルナから大層感謝された。

特別編・サーヴァントを呼ぼう！閑話～お休みだってヤバいのです～

なんやかんやでシステム・フェイト修復に結構時間がかかるということで、月王国に泊まりつつ休暇を取ることになったレジェンド一行。

正式に注文を受理されたオリュンポス組もそれに同行する形で月王国を漫遊することにしたらしい。

一応、カストロはレジェンドに救出されたが……何かビクついている。理由は言わずもがな、見逃しはしたが許してはいないマジンガーＺＥＲＯがアーシアの直ぐ側で殺気立ちながら睨みを効かせているからだ。

さらに――。

○ゼロガンダム→嵐暴『機神』ストームサン撃破、つまりある意味神殺しを成し遂げた聖竜騎士

○おおとりゲン＆狛治→『ゴッド』ガンダムとガンダム『ゴッド』マスターをそれぞれ乗りこなす、スペック人外

○レイト→ウルティメイトイージスが光神縁のチートアイテム、ついでに本人も時間の巻き戻しとか可能

○凱→恒星級の敵さえ光にした勇者王

○シモン→言わずもがな超天元突破な漢

○竜馬→ゲッターで星クラスのインベーダーをたたっ斬った漢

○サーガ→御存知レジェンドの後継者

○一誠→神滅具持ちで師匠がゲン、先輩にレイト

○タイガ→下手すりゃ祖父が星一つを簡単に消し飛ばすウルトラキーを持ち出してくる

○ダイゴ→オリュンポス十二機神も逃げ出しそうな奴を跡形もなく消滅

○アスカ→オリュンポス十二機神さえ同化しそうな暗黒惑星をソルジェント光線で木っ端微塵
○ガイ→星を喰らうマガタノオロチを討伐
○ゴジラ→もうコイツの細胞自体がクリロノミア相当でヤバい
○ハイパーゼットトン（レジェンド育成）→最低でもサーガクラスの実力が無いと抵抗不可
○オルジュナ→マハー・プララヤ
○ギルガメッシュ→エヌマ・エリシュ
○エルキドゥ→存在そのものが神性特攻
○エレシュキガル→今の彼女の冥界は魔境超え
——他多数。

そう、オリュンポス十二機神の総力を結集させてもそれを軽々と上回ってくる連中ばかりなのだ。ウルトラ騎空団は。マジで何なのこいつら。
——しかし、今問題は別にあった——

「……おい離せ、お前ら。いい加減あっちにも少しは顔出さないとヤバいんだよ（今回はヤバいのが俺じゃないけど）」
「だめー」
「オーフィスの言う通りです、我が夫。知っていますよ、その母港とやらは女性とおふ……オフ……おにゅ……オフニャとかいうのと饅頭ばかりだと」
「なんでオフニャを言うのにそんなもごもごしたのモルガン」
※オフニャが可愛かったからです。
「よし分かった。今度惑星レジェンドのにゃんこアイランドに連れてってやるから我慢しろ」

「何そのポケモンアイランドの姉妹島みたいなとこ」
「ハ、リサーチ不足よなバカトリア。そんなだからいつまで経ってもバカトリアのままなのだ」
「なんだとー！やんのかギルガメー！」

……と、このようにレジェンドがまた留守にするのだが行き先が女性だらけだという、かの『母港』だったから何かとレジェンドＬＯＶＥな女性陣が行かせまいとしているのだ。
しかし、レジェンドの言う通りあの母港にはたまに顔出さないと確実にやらかすヤベーやつが大勢いる。特に重桜の面々はそれが顕著で、例えるなら自称オサナナジミとかジャンヌより拗らせたお姉さんとか一航戦の姉の方とか……まあ、最後のは最近まともなのでいいか。あとはヤベーやつだけどメンタルが実はへなちょこなのも。

「ヤバいといえばあっちにも顔出さんと……ただなあ……あいつらは母港の面々と違って顔合わせた途端模擬戦模擬戦と喚くから嫌なんだよ」
「もしかしてそれはナノハ達ですか、お兄様」
「ビンゴ。だってあいつらどんな選択肢選ぼうが結局模擬戦させられるし、あまりに腹立ったから前回は全員に零距離スペシウム超光波ブチ込んで気絶してる間に逃げたわ」
「確か逃げる途中でユーリを拾っておったな、兄上」

ちなみにディアーチェはシュテルと共に事前に離脱計画を知らされており、レヴィは何かの拍子に口を滑らせそうだからと教えてもらえず、ユーリは基本的に寝るのが早いので教える時間が無かったとか。

「そういうわけだからあっちは行きたくない……アレ？別に光神の役割でもないし別にいいんじゃね？母港と違ってあそこじゃ役職があるわけでもなし」

「そーいえばお兄ちゃんやボク達って機動六課だと単なる協力者扱いだったもんね。ボクとシュテルんと王様はデバイス許可証あるけど」
「私の魄翼はデバイスじゃないですし、レジェンドのは……ロストロギア扱いされそうでした」
「されそう『でした』？」
「作った俺自身が使ってるだけなのに遺失（ロスト）もクソもあるか」
（（（（確かにそうだー!!））））

……ということで、母港の方に何人か連れて行くことにした。そしてそう時間を置かず帰って来た面々は、一部を除き轟沈している。モルガンでさえも。

「何なんだよアレさ～……バゲ子より大きいのがいるとか反則だよ～……」
「有り得ないにも程があります……一体何を食べたらあれだけの大きさを得られるのか……」
「……」←真っ白なアザゼル（瀕死）
「あれ、どうしたの？」
「圧倒的胸囲というものを見せつけられた女性陣と、レジェンドのモテっぷりを見せつけられたアザゼル」

後者は単に女性ばかりだっただけな気がするが。他にもギャスパーが例のアークロリコンに狙われそうになったり、テスカトリポカが明石と商談したり、重桜ヤベーやつ軍団に遭遇してレジェンドの言葉が真実だったと理解したり……。
まあ色々あって、現在はというと。

「いやホテルでいいよ。何なら野宿だって平然とやれる男だぞ俺は」
「そういうわけにはいきません。我が夫は月王国においてこれとない来賓です。ここは宮殿にて宿泊していただきます」

――やはり宿泊場所で揉めていた。しかし今回ばかりはモルガンが正論だ。そもそも今の月王国が成立したのはレジェンドの助力によるところが大きい。ましてやそんなＶＩＰをホテルならまだしも野宿させたとあれば月王国そのものの面子に関わる。それが分からないレジェンドではないが……。

ぶっちゃけ、貞操の問題である。

沙耶やバーヴァン・シーはまだいい。前者は勿論、後者も純情なためいきなり襲うような真似はしないだろう。一番注意すべきがモルガン。月王国の宮殿という彼女一家のマイホームで彼女が張り切らないわけがない。

「それに今回、新しく武蔵が加入しただろ。そっちとの交流も大事だし、男が女だらけの住居に邪魔するのも――」

「交流なら問題ありませんし、何なら後半はホームズも我が家に同居しています。それに我が夫」

「……何だ？」

「貴方はそもそも自宅の同居人の大半が女性だったでしょう？」

「全く以てその通りだったよ畜生!!」

これはぐうの音も出ない。うん、仕方ないね。結局、押し切られたがどうにか一線を越えることは阻止した。その過程でキャストリアとアデーレ（オリュンポス組の勝者）も同室になってしまったが、この二人なら多分大丈夫だ。

……等と考えていた時がありました。

――夕食後――

「あ、カーマ殿。罠カードを発動でござる」

「何でですかー!?さっきは発動しなかったのに！」
「発動は任意なので」
「うううー……」
「このパジャマ、胸元が少しキツくて……」
「ねえシャルロット、それ私に対する挑戦状？新魔術アルトリアバーストいっちゃう？」

案の定というか……同室になったキャストリアとアデーレ以外にも、新たに召喚された通称『アサシンガールズ』、トドメにプーリンも交じっててカオス化するレジェンド宿泊の客室。
ちなみに沙耶やバーヴァン・シーはちゃんと自室。もちろんアルクや武蔵は沙耶のお隣の部屋（モルガン仕込の陣地作成で増設）。スカディもワルキューレ共々ちゃんとＴＰＯを弁えていたので大人しく割り振られた客室にて過ごしている。

「分かってはいました……分かってはいましたがっ……！」
「そして巻き込まれるボクなのだわ」

寝間着のモルガンが同じく寝間着のハベトロットを抱き抱えてベッドに座り込んでいる。ハベトロットも彼女いわく巻き込まれたらしい。本来ならバビロニア島のハベにゃん工房で熟睡しようとしてたというのだからご愁傷様。

「君、アデーレって言ったっけ？よくあの女神達を下せたね」
「いえ、ただのジャンケン勝負でしたから」
（いやあオリュンポスの神々の会話が聞こえたんだけどね。この娘って条件次第で真体撃滅可能らしいし……）

清楚系正統派ヒロインなアデーレだが、エウロペいわく今の彼女は何らかの要素が組み合わさるとゼウス達の真体すらブチのめせるとか何とか。とりあえずヤンデレとかそういう重いのはないみたいな

ので一安心。

「あれ？フォウとピカチュウは？」

「アーシアの部屋だ。癒やしの延長らしい」

「……まあ、あんなことがあったんだもの。仕方ないよね」

アーシアと何気に共通点の多いキャストリアは納得する。まだ寝はしないが布団に入っておこうとレジェンドが毛布を捲ると……。

「我、見つかった」

……オーフィスがいた。うん、分かってた。

「えへへ……私も見つかっちゃいました」

ルリアまでいた。アマリはどうしたアマリは。

「にゃ」

「「「何コレ!?」」」

――『ネコ』がいた。猫ではない。『にゃんこ』の『ネコ』である。どうやらマシュとはぐれてしまい、知っているレジェンドの姿が見えたからこっちに来たらしい。心配のあまり涙目で走り回っていたマシュに返すと何度も御礼を言われ頭を下げられた。

連れて来たとはいっても可愛がりつつしっかりとお世話しているようなので、レジェンドはマシュに大量のネコカンを渡す。ネコの方も「にゃー」と嬉しそうに鳴いたので良しとしよう。

『タンクネコ』や『ネコノトリ』と一緒に部屋まで戻るマシュの後ろ姿を見ながら、キャストリアは呟く。

「……あのやけに縦長なネコと頭に羽根が生えたネコって何……？」

「タンクネコとネコノトリだ」
「タンクネコはともかくネコでトリってどういうこと!?」
「何驚いてんだ。ウシネコやキリンネコなんてのもいるんだぞ」
「お館様、ネコ忍者とかは……」
「いるぞ」

にゃんこアイランドって何なんだろう、と本気で思いつつ部屋に戻るキャストリア達。
……で、部屋に入ったら今度はモルガンがオフニャを抱きかかえていた。ハベトロットはその隣に座っている。

「おっふ」

――レジェンドが変な声を出してしまうが、それも仕方のないことだろう。いつの間に連れ込んだんだソレ。
一応アマリも来ていたとはいえ、彼女はルリアを探しに来たｏｒ呼ばれた末の結果なのだろうからこの際置いておく。

「……モルガン、それどうした?事と次第によっては……」
「し……次第によっては?」
「そのオフニャを強化型オフニャと入れ替える」
「!!」

今度はモルガンが涙目。他の面々は「強化型なだけなのに何で?」と首を傾げている。しかし事実を知ればモルガン同様の状態になるだろう。
今、モルガンが抱きかかえているのは軍帽だけ被った白ネコ(?)みたいな感じで確かに可愛らしい。
しかしこのオフニャ、強化型となると――

八頭身のムキムキマッチョになるのだ。
しかも顔はそのままで。どうしてそうなった。

モルガンさえ「可愛い」と言うオフニャ。それだけは断じて嫌だ。

「あの、明石というＫＡＮ―ＳＥＮにネコハコを譲ってもらいました」
「ってことはそれはネコハコから出てきた奴か」
「はい……」
「まあ、正直に言ったし盗ってきたわけでもないからモルガンは不問としよう。マシュみたくしっかり面倒見るように」
「無論です。……私『は』？」

小首を傾げるモルガンだが、キャストリアだけは気付いてしまう――あれは報連相を怠った部下を〆る時のレジェンドだと。
多目的ブレスレットの通信機能をオンにしてとある場所へとレジェンドは通信を送る。

『はいはい、こちら母港の何でも――』
「……明石」
『ふにゃっ!?し……指揮官……!』
「俺が言いたいことは分かってるだろうな」
『え……えー？何の「モルガンとネコハコ」……ごめんなさいにゃ』

先刻赴いた世界の母港、そこでショップ経営を行っている明石へ言葉少なに圧をかけるレジェンド。僅か二つの単語で白状させた。

『……というわけで、ダイヤ代わりにならないか研究するために聖晶

石を少し譲ってもらう条件で渡したにゃ』
「存外まともだったな（利益優先だろうが）。それならそれで最初から正直に言えばいいだろう。交易が広がるならば別に悪いことではないんだからな」

要は資金以外にダイヤを使っている母港において、ダイヤが無い場合は聖晶石で代用可能……つまり何らかの方法で母港にとってプラスにならないかという、至極真っ当な理由だったのだ。
ある意味今回のネコハコ譲渡はその先駆けとも言える行為でちゃんと報告すれば別段問題はなかったのである。

「モルガンも隠していたわけだから今回は見逃すが、そういうのはしっかりとこちらに伝えろ」

何だかんだ言いつつ、レジェンドも身内には甘いのかそれ以上は追求せずに終わらせた。
……どうせ不知火あたりに締め上げられるだろうし、その後のフォローはあちらの武蔵やら天城が何とかするだろう。武蔵は甘やかすかもしれないが。

☆

レジェンド達の方が一段落したということで、他の面子の様子を見ていこう。
先の夕食後というのはレジェンド達の、ということを念頭に入れて御覧頂きたい。

ネオ・アクシズではガトーが私服選びに頭を悩ませていた。というのも、生前では殆ど職業軍人ということで休暇といえばゆっくり過ごすくらいだったのだ。彼としては、ウルトラ騎空団に属し今後任務外

で外出する事が増えるだろうことも想定して選んでいるわけだが……。

「うぅむ……空の世界ではウルティメイト島やバビロニア島が現代風でも問題無いということが分かっている。しかし、それでも数着はファンタジー系の服を用意すべきではないだろうか……」

……真面目な性格ゆえ、真剣にその場・その世界観に合わせた服装を選ばねばと考えた結果がこうして悩みに直結してしまったのである。

後に彼は、デイビットから「タイガやゼットがそのまま歩いているぐらいだからあまり気にしなくていい」と言われて少々困惑しつつも納得した。

因みに服のセンスは中々良かったらしく、ジークフリートと共に買い出しに出た時……何故かWマダムキラーなる称号を得た上、『大根の貴公子』ジークフリートに対して『ほうれん草の武人』ガトーと呼ばれるようになってしまったという。

「これは喜ぶべきなのだろうか……いや、組織の役に立てるという意味ではそうなのかもしれないが」

「安心してくれ、ガトー殿。俺も最初はどうかと思ったが、悪い事ではないからじきに慣れる」

――この二人が一緒に買い出しに出た日は、大根とほうれん草の味噌汁が食卓に上がるのが定番となった。

月のうどん屋にて、三人の美女もしくは美少女がうどんを啜っていた。その外見もだが、一番目を引く理由は一人が現・月王国女王陛下だからである。

尚、そこの店長以下長年働いてる面々は気にしない。モルガンや

バーヴァン・シーも一緒に来ることがあるし。

「ん～♪ここの天ぷらうどん絶品！」

「あ、私今度それ食べよっと！」

「騒がしくてごめんなさい」

……一番冷静なのは流石だが、実は沙耶が一番大盛りを頼んでいたりする。付けたトッピングはアルクが最多だが。

「いやいやホントご馳走様でした！まさか月に来れて、そこでうどんが食べれるなんて全ッ然考えたことも無かったわ！」

「普通はそうよね。私は昔から彼処でお母様や姉様達と年越しそばならぬ年越しうどん食べてたけど」

「え？メリュ子とバーゲストは？」

「メリュジーヌは炬燵に入ったら殆ど出て来ないし、バーゲストは職務に熱心だったから予定が空いてなかったのよ。代わりにヤプールやウッドワスが一緒にいてくれたし」

アルクはあー……と納得したように頷く。特に「変温動物だから」と炬燵でダメドラゴン化してるメリュジーヌなど容易に想像出来てしまう。

……レジェンドがかつてノース・ヴァストにて猛吹雪の中、褌一丁で乾布摩擦してたと聞いたらどんな反応するのか。

「ところで、最後の最後で凄い事してたあの娘のことで気になったんだけどさ」

「マシュのことかしら？」

「そうそう。あの娘……珍妙な生き物連れてたけど、何アレ」

「もふもふしたリスみたいな？」

「ううん、縦に長くて小さな四本脚でちょこちょこと……」

「……え？」

――当然ながら、タンクネコを知らない沙耶が分かるわけがなかった。

同じく月の中華料理店にて……エリクトとプロスペラが苦笑し、アムールは唖然としている。
それもそのはず、この店で最辛とされる麻婆豆腐を平然と食すスレッタとラスプーチンがいるからだ。尚、周囲には勇治他顔馴染みが揃い、勇治の新サーヴァントもちゃんと一人残さず出席。

「味は文句無しです！ちょっと辛さが足りない気がしますが！」
「私達は本気で辛さに対抗する時は上着を脱ぐのでね」
「「「「ウソだろオイ!?」」」」

ちなみにチャレンジしたグエルとシャディクは一口食べただけで椅子から転げ落ちた。カルナは大粒の汗を流しつつ、何とか少しずつ食べている。

「ッ……！ッッッ!!」
「くっ……これでもオレはスーリヤの子、内側から太陽が如き熱さを受けようと倒れはしない……！」
「無理しなくていい、カルナ！そういうのはキアラに食べさせておけ！」
「……それはあの魔性菩薩が昂ってしまうのでは……？」

しっかり良く冷えた水を飲ませつつカルナを止めようとする勇治と、彼の出した案にある種の懸念を抱いてしまうコヤンスカヤ。

そして、近くでは……。

「野菜餃子を二人前、テイクアウトで」
「マスター、彼らは何か修行を行なっているのでしょうか？」
「う～ん……違うとは思うけど、何かに堪えながら食事しているのは間違いないかな」

矢的とオルジュナが持ち帰り用の餃子を購入しており、混沌としている勇治らのテーブルを見て若干困惑していた。このあと彼らはカドック及びアナスタシアと合流し、タマモキャットに約束の味噌野菜タンメンを作ってもらうことになっているため、適当な御土産も物色し早々に退散。

「何でここに君が参加してるのかネ、ホームズ!?君は先代陛下のサーヴァンアウチッ!!ちょ、辛ッ!?アラフィフにはキツイ辛さッ!?」
「はっはっは、残すとウッドワス氏に怒られるぞモリアーティ」
「む……？そうか！よし、マスター！こういう時こそ『あ～ん』や口移しならば良いのではないか？余が優し～くやってやるぞ！」
「「「!?」」」
「ソワカソワカ、では私が御手本を――」
「って脱ぐ必要ないでしょう!?ああ、もう！団長さんのところのカーマと交換してくれませんかこの常時色情菩薩!!というか貴女あの花の魔術師に差し出された上、しかも何か攻撃受けてやられてませんでした!?復活早過ぎません!?」

一応肉食系ではあるものの理知的かつ実は真面目枠でもあったコヤンスカヤがそうボヤくが、ほぼ１００％カーマは拒否するだろう。コヤンスカヤに同情はしてくれるだろうけど。
とりあえず、勇治の貞操はコヤンスカヤとカルナの頑張りにかかっているとだけ言っておこう。モリアーティも頼りにはなるが、日常的な部分だと確実にホームズがちょっかいかけてきて戦力にならない

ので割愛。

「済まないネ、マイボーイ。いやホントマジで……ホームズがああしてこなければ私も知恵の一つぐらい貸せるんだけど」
「気にするな。カルナは勿論、最近コヤンスカヤが比較的良識あると分かったから何とかなる」

何気にレジェンドとは別のベクトルで苦労人な勇治軍団良識派だった。……逆にコヤンスカヤが良識的な分、ムジナが暴走気味なことは言わないようにしよう。

テスカトリポカは戦慄していた。
――この世にこんなものがあっていいのか。
――トウモロコシの天ぷらというモノが!!

「誰だこんなものを考えついた天才は……!こいつは勝てる発想だ!!」
「おお!気に入ってくれたか、テスカトリポカ殿!」
「ああ……!これを気に入らないハズがない。この歯応え、この食感……和食ってのは大したもんだ!」

好物のトウモロコシを天ぷらにして食べるということを知ったテスカトリポカは大層御機嫌である。加えて冷めてもおつまみになるというから尚更だ。

「しかもメインはトウモロコシの混ぜご飯とくるとは……用意したのは誰だ?神への供物を熟知した相当な手練と見た」
「あそこで料理しているジャグラー殿だ!かの究極英雄王も認めた丼物王とのこと!お館様も一目置く凄腕店長だ、テスカトリポカ殿!」
「ほう……あの光神まで認めたとあれば俺も認めないわけにはいかな

いな。何よりこれを用意されて認めないなどまず有り得ん。何にせよ、出された物は残さず頂く」

行儀良くな、と締めて食事を再開するテスカトリポカと杏寿郎、そしてパム治郎。

冷静にそう言ってはいたが、箸を動かす速度が明らかに早かったのはその場にいた全員が目撃していたという。

別の所では、しのぶとジャンヌ・オルタがピンチになっていた。

――その理由とは。

「オルタ！お姉ちゃんと一緒に妹（アーシア）を慰めますよ！」

「たまにはお姉ちゃんを慰めてしのぶー！」

「これは一体どういう事なのよぉぉぉ!?」

しのぶを引っ張るカナエ（ジャック付き）と、ジャンヌ・オルタを引っ張るジャンヌ。それに対して踏ん張るしのぶとジャンヌ・オルタ……と彼女らの言う通り一体どういう事なのか。

「オルタ！アーシアは先のショックがまだ残っています！ここはお姉ちゃんが一肌脱ぐべきですよ！」

「知らないわよそんなの！大体アンタのマスターならアンタが面倒見りゃいいだけでしょうがぁぁぁ!!」

「ね、ほんの少しでいいから！昔のように『姉さん姉さん』って後ろ着いて来てたしのぶに戻って！」

「一体何時の話!?ハクちゃんの事ならロスヴァイセさんが心配して然るべきでしょ！一々その程度で変な退行起こさないで!!」

……何とまあ、姉属性（ただしジャンヌは自称）持ちの暴走である。妹やオルタの方が姉やオリジナルよりまともなのはこの際置いてお

くとして、さり気なくしのぶとジャンヌ・オルタがしっかり手を繋いで互いに引っ張り合い姉ーズに抵抗しているのは仲が良くなっている証拠……なのだが状況と光景で台無し。
しかも結局――。

「さあ行きますよオルタ！」
「ふざけんじゃないわよこの暴走聖女ー！助けてしのぶー!!」
「ジャックちゃんお手伝いありがとうね！」
「うん！おかあさんとお姉ちゃんと一緒！」
「ジャックちゃんはいいけど姉さんの馬鹿ー！行かないでオルタさーん!!」

抵抗むなしく双方連れて行かれてしまった。
後日、今度は二人を慰めるべくレジェンドが駆り出されたという。

ラーマとシータはガーディアンベースにおける自宅の要望をレイトから聞かれ、態々出向いてくれたベリアルにそれを伝えている。

「――ってことは、あんまり豪勢な家じゃなくていいんだな？」
「うむ。マスターには言ってあるが、余はこうしてシータと一緒にいれるだけで十分過ぎる程だ。それに加えて住居まで貰えるというのだから、これ以上の強欲は身を滅ぼすだけだろう」
「かの光神様の御弟子さんの中でも筆頭級、そしてマスターのご上司でもある貴方様が初対面でここまでしてくださったこと……心からの感謝を述べさせて下さい」
「……おい、ゼロ。この夫婦、俺らには眩しく見えねぇか？」
「だろ。もうデフォでシャイニングじゃねーかと思うぐらい今のこの二人、輝いてて欲が無くてよ」

かつてプラズマスパーク・エネルギーコアを求めた二人は遠い目を

していた。まあ、今の二人にはそれも思い出話だから良いのだが。
ちなみにベリアル、三人からレジェンドがキレてたことを説明されても「そりゃ師匠キレんだろ。そのエテ公が悪い」とあっさり言い放った為、ラーマとシータから尊敬の念を向けられている。隣でうんうん頷くレイト共々、地獄の修行を乗り越えてはいないのだ。

「設備とかは悪いがウチ準拠になっちまうが、そこは勘弁してくれよ」
「気にしないでほしい。シータと一緒に最新設備に慣れていくのも楽しみの一つと思えるからな！」
「他の遊撃隊のメンバーもちょくちょくこっちに顔出させる。紹介は任せるぜ、ゼロ」
「おう！」

帰って一仕事だ、と立ち上がってガーディアンベースへと繋がるゲートを開き去って行くベリアルを見送る三人。そこでもラーマとシータが揃ってお辞儀していたのを振り向かずとも分かっていたベリアルは、「ウィッシュ！」とハンドサインで返しつつ光の中へ消える。

「一応言っとくけど、あの人リクの親父だからな」
「それは早く言ってほしかったぞマスター!?」
「こ……これからはリク様にも粗相がないようにしないと……！」
「いやそんな緊張しなくてもいいから。タイガの親族よりよっぽど話しやすいし」

……そういうレイト＝ゼロも、本人や父親であるセブンは当然として祖父は勇士司令部のトップ。十分とんでもない立場である。

――アークエンジェルの一室――

「お、しっかりしたベッドあるんだな。助かったぜ」
「ごめんなさい。本当はもう少し広めの部屋を用意したいのだけれど……」
「気にすんなよ、マスター。俺にとっちゃ十分過ぎる。しっかりとした部屋があって、問題無く休めるんだからな。クサントス達は普段ウルティメイ島とバビロニア島……だったか？そこで好き放題走り回ってるって言ってたしよ」
「……いきなり馬が喋ったのは驚いたわ……」
「いや、すまん。割と本気で伝え忘れてた」

マリューに案内され、艦内の一室を専用の部屋として使えることになったアキレウス。彼の時代には無かったハイテク設備を興味津々に見つつ、礼を言って寛ぐ。
と、そこへムウが顔を出した。

「よう！二人共飯は食ってないよな？ちょっとした親睦会兼ねて、ジャグラー店長んトコに食いに行こうぜ」
「お、マスターの将来の旦那か。丁度いい、俺も今の飯がどんなもんか気になってててよ」
「だっ!?旦那って……」
「ほほう、アキレウス……お前さん、イケる口だな？」
「まあな。けど程々にしとけ、こんな良い女逃したら二度と捕まんねえぞ」
「分かってる、冗談だよ。飯の話は本当だけどな」

同じ兄貴分キャラというか、ムウとアキレウスが仲良くなるまで時間は掛からなかったらしい。

「やっぱライトニングストライカーだろ！」
「いやいや、ガンバレルストライカーも捨て難いぜ」
「マルチプルアサルトストライカーを改良した方が良くないかしら

？」

ついでにアキレウスがアークエンジェルやウルトラ騎空団に馴染むのも駿足よろしく早かったという。

――居酒屋――

「……ってわけでよぉ」

「女だけではなく、男もレベルが高いとは。大したものだな、ウルトラ騎空団」

「ポジティブだな、フェルグス……」

「なに、こういうものは障害が大きく多い程、成就した時の喜びもまたそれと同じということだ。そして――」

フェルグスは隣で自棄酒をしているアザゼルを一瞥し、猪口に入った酒を飲み干し――。

「こうして、愚痴を言い合える友も増えたからな」

ニッと笑うフェルグスは、伝承に伝わる通り『気前良く、嫉妬せず』を体現する英雄であった。

彼はいいのだ、彼は。しっかりと引き際が分かっているから、ナンパを断られたとしても友人としてなら問題無く付き合えるぐらいに落ち着くので。

問題は……。

「しかしアレだね、私達はそれぞれ良い感じにビジュアルも分けられていると思うんだよ」

このグランド花の魔術師クソ野郎である。悪い意味でめげないと言うか、プー

リンがまともな純情一途になっているのにこっちは変わってないのは何故なのか。
……むしろプーリンが良くなった分、こっちがよりダメになったのかもしれない。
それよりコイツなんでここにいんの？
「ちょい悪オヤジに渋マッチョ、そしてミステリアスな爽やかお兄さん。少なくとも誰かしらの心の琴線にかかるメンツじゃないか。何故これで誰にも女性が靡かないのか、私は不思議でならない」
ここにレジェンドやらモルガンやらがいれば「ミステリアスな爽やかお兄さん？寝言は寝て言え。そして二度と起きるな」とか毒を吐きそうなものだが。
何にせよロクでなしの考えることは分からないが、一つだけ確かなことがある。

――マーリンよ、システム・フェイトの修理はどうした（それは差し出されたキアラもだが）。

☆

一通り見てきたが、今回を締めくくるのは大所帯となってしまったレジェンドの宿泊部屋において、レジェンドの左右及び正面（一番の勝ち組位置）で誰が眠るかという争奪戦。レジェンドの意思は考慮しないものとする。
「おい、これとない来賓どうこう言ってたのに俺の意思ガン無視とか矛盾しまくりじゃねーのコレ」
「レジェンド様、御愁傷様だねー……」

さすさすと背中を擦ってくれているハベトロットだけが良識人な気がしてきた。彼女も巻き込まれただけで、争奪戦にも何故か強制参加させられている始末。
そんな激戦（ＵＮＯ）に勝利したのは……。

「いや、その……ただボクは普通にＵＮＯ楽しんでただけなんだけど……」

ハベにゃん、大勝利。ぶっちぎりの完勝。

「ハベトロットであれば問題ありません。私自身も右を取れたので良しとしましょう。ではハベトロットの代わりにオーフィス、こちらへ来なさい」
「おー」

右隣はモルガン。ついでにオーフィス。

「負けましたー!?」
「あううー……」
「……御二人だけでなく、アルトリア殿やルリア殿も顔に出過ぎだったでござる。プーリン殿が一番の強敵でござった」
「やー、私もポーカーフェイスには自信があったんだけどねぇ」

左隣、アサシンガールズの一人・千代女。先刻のデュエルモンスターズといい、カードゲーム強いなこの子。
何はともあれ、ドタバタ大波乱な今回の召喚は（数回分後日持ち越しではあるものの）幕を下ろした。ウルトラ騎空団の仕事に『特異点修復』が加わり、戦力拡充も急務となる中で大当たりが連続で来たのは僥倖というべきか。

とりあえず、今日の分の残り召喚でイシュタルだけは間違っても呼ぶまいと心に誓うレジェンドであった。日本地獄でパシられてるけど、彼女。

――おまけ――

――エレちゃん冥界――

「鬼灯様、イシュタルが申し訳ないのだわ……」
「いえ、お気になさらず。しかしエレシュキガル様のこの冥界は管理が行き届いている上に過ごしやすい。というかここで仕事したい。しかも――」
「スター・ガルラ・プラチナ、和洋問わずスイーツには自身がある。味わって頂きたい」
「ガルラ・ザ・ワールド。茶の温度は完璧だ。好みの温度があれば遠慮なく御希望を」
「――部下まで文句無しとか最高じゃないですか」

――その後、懲りもせず逃げたイシュタルが偶然エレちゃん冥界に迷い込んだものの、ゴールド・エクスペリエンス・ガルラレクイエムとキングガルラ・クリムゾンにフルボッコにされ、休暇を堪能した鬼灯にシバかれつつ連れ帰られた。

「何なのよあのガルラ霊!?神代でもいなかったわよ、あんなとんでもない連中は!!」
「基本自分のため（ガチ）なお前と基本誰かのため（主に死者の魂）に動くエレシュキガル様の差が浮き彫りになっただけだろうが」

「あ、鬼灯さん！これレジェンドから、大きめの低反発安眠枕です」
「これはどうもタイガさん。レジェンド様に宜しくお伝え下さい。あと、結婚式には是非呼んで下さいね。仕事光速超えて終わらせて駆けつけますので」

スター・ガルラ・プラチナとガルラ・ザ・ワールドに睨まれて縮こまっているイシュタルを尻目に、鬼灯からそう言われたタイガとエレシュキガルはいつの間にか周囲公認（しかも主にレジェンド＆タロウ関係者）の婚約状態になっていましたとさ。

そして、同じく迷い込んだグガランナがエレちゃん冥界の切り札たる『冥神獣』の一体……『コスモイーター』によって、完膚なきまでに叩き潰されたらしい。

特別編・サーヴァントを呼……ぶ前に今回は下準備しよう

戦艦アイデア発案会から幾日かが経った。

空の世界は年月は過ぎるがサザエさん時空的な力により歳は食わないが一部のメンバーだけ歳を微妙に重ねる場合があるというか……まあ兎にも角にも長編モノにおいて発揮されるご都合主義の集大成的なアレが作用しているので、本作にはありがたいということを改めてお伝えさせて頂こう。

先日採用された、

○ゼット案　ラー・アーガマ級一番艦『ラー・アーガマ』(ギルガメッシュ命名)

○エレシュキガル案『宇宙戦艦ウルトリアⅡ』

○ルリア案『巨竜戦艦バハムート』

この三隻は運用方法がそれぞれ異なる為、燕がキラやラクスを始めとした人物らの協力を受けつつほぼ独力で建造中(!?)な随伴艦一番艦『マクロス・クォーターＳＥＥＤ』が完成してから着手することになり、先にクルーや配属機体を選別し建造計画を立てておく結果となった。

ラー・アーガマはマクロス・クォーターＳＥＥＤと並び随伴艦の中核を担う予定であり、艦自体も大型であるため早めに建造開始する手筈に。

ウルトリアⅡはレジェンドからの初代ウルトリアの資料提供を元にギルガメッシュがテコ入れし、全体的な性能及び外見のアップグレードを行うので二番目に。

バハムートは約２００ｍ前後の小型～中型の高速遊撃艦を目指して徐々に進めていくためラー・アーガマと建造自体は同時期から開始し、ゆっくり進歩させていく方向に。これは艦の大きさが三隻(マクロス・クォーターＳＥＥＤ含めると四隻)中、最も小さいことを利点とした故である。

他にも良識派のアポロンゼストから幾つか案が上がっており、そちらは惑星レジェンドやネオ・アクシズを始めとした惑星レジェンド星系の護衛を主目的として開発を進めることになった。

☆

さて、そういうわけでスーパーアサシンメカニックな燕ちゃんの方を見てみよう。

エターナルの改造も含めて八割ほど完成させていた。どういう腕と速度してるんだこのお嬢。マクロス・クォーターＳＥＥＤの本艦やガンシップ等の四艦分は彼女が、新たに組み込むことになったエターナルのＯＳ等の各種設定はキラが担当。そりゃもう二人とも素晴らしい笑顔で作業中。差し入れ係のラクスと喋りつつ、食事しながら作業を進める二人はマジスペックおかしい。

「良かった～……エターナルをキラが担当してくれて。そのエターナルにクォーター他を合わせなきゃならないから、こっちだけでかなり手間掛かるんだよー。あ、ラクス麦茶ありがとー！」

「はい、どういたしまして。それでどんな感じですの？」

「うん、後はシミュレーターにリンクさせて強攻形態への変形や駆動状況を確認してから正式に追加クルーを選定ってところかな」

「変形？　戦艦が変形するんですの!?」

「うん、マクロスって名前が付いてる戦艦はほぼ例外無く変形するよ」

バトル７など名前にマクロスが含まれない艦はあるが、概ねマクロス級は変形すると思って間違いない。それに組み込まれたため、エターナルも変形する戦艦に仲間入りというわけだ。

「変形後のエターナルは背面ブースター二基の間隔を調整して、その間に収まる感じにしたよ。このおかげで主砲やミサイル、対空砲なんかはそのまま使えて背後からの攻撃に備えられる。それからミー

ティアユニットは移動して襟元に。そのままでも艦の武装として使えるし、フリーダムとジャスティスが出撃しても分離させられる仕様だから問題無し！」
「あとはこれが上手く動けば本当の完成だね」
「あ、それについて少し相談が……」
「どしたの？」
「いえ、ピンポイントバリアがやはり少なからずエネルギーを消耗する原因になってしまうとお聞きしまして、私なりに改良案を考えてみたのです」

ほほう、と燕もキラも期待の眼差しでラクスを見る。
果たしてその案とは――？

「実は、レジェンド様に直接お願いして分けてもらう予定だったのですが生憎お忙しいみたいで……代わりにギルガメッシュ様にお願いしたらレジェンド様に掛け合って下さり、無事承諾頂けましたの！

超合金ニューＺα!!」
「ラクス凄くない!?」
「さすがに今後バージョンアップする場合の追加分までは無理でしたが、量的に問題無いはずですわ」
「超合金ニューＺαってことはレジェンド様だけじゃなくて……あのマジンガーＺＥＲＯもよく納得させられたね……？」
「はい！　アーシアさんにあの方のボディクリーニングをしてもらえるようお願いしましたら快く引き受けて下さいましたの！　そうしたら『まあ、新しいマジンガーを作るわけでもないし別に構わんだろう』って仰って頂いて」

原初にして終焉の魔神・マジンガーＺＥＲＯ、アーシア絡みで懐柔されていた。恐るべしピンクの歌姫。

「装甲に色々と手を施すよりも、いっそ装甲を凄いものに変えたほうが手っ取り早いしハズレも無いのでは、という結論になりましたのでそのようにしてみましたわ」
「うん、シンプルだけど合理的だよね」
「しかもそれ余程じゃなきゃ破損しないし、これをあっさり溶解させられるのってそのマジンガーＺＥＲＯぐらいだし……いやネオ・グランゾンもアレ色々ぶっ飛んでるからやれるんだけど」

とどのつまり単純に滅茶苦茶硬い装甲なのである。コーティングだの何だのするのではなく、一気に自力を上げてしまおうという『ひたすら強化して殴れ』な脳筋戦法ならぬ脳筋防御。
まあ確かにラクスの言う通り、下手な技術を使って予期せぬ出来事に遭遇するよか堅実なわけで。
何にせよ、ラクスの協力によりクォーターＳＥＥＤは予定を遥かに上回る強度を得たのであった。

☆

――そしてそれからすぐ、立香や沙耶とそのサーヴァント達が特殊特異点より帰還。
しかし、沙耶はともかく普段なら立香は「ただいまー！」と笑顔で言ってくるはずなのにそれが無く、しかもマスターである沙耶と正反対で賑やかなアルクや武蔵すら傍から見ても沈んでいるのが分かる。
「お疲れ様、立香！　本当なら慰労会の一つもやりたいところだが、タイミングが合わず私達の方はこれからマナリア魔法学園まで行かないといけなくてね！　教えるにしても惑星轟とか簡単に『さあ、皆もレッツ惑星轟！』なんてやれるわけじゃないからどうしようかと――」
「……」

「――立香、どうしたんだい？」
「え？　あ！　キリシュタリア、お疲れ様ー」
「ああ、お疲れ様。珍しいな、君が心ここにあらずなんて」
「あー……んー……ちょっとね」

普段はゼウスら同様、中々に愉快なキリシュタリアだが立香の様子を見誤るような彼ではない。彼は自身の過去の事から周りの事には敏感なのだ。

「ふむ……私も言いたくなさそうなところを突っ込んで聞くのはマナー違反だと思うし、下手に聞いてアドバイスが出来ず君をまた悩ませる結果になったりするのも嫌だから無理には聞かないよ。ただ、今回は君『だけ』の問題ではなさそうだ」
「……！」
「しかし先程言ったように私達も時間が押している。そんなわけだから解決に関しては我らが王様と光神様にお願いするとしよう。『困った時はとりあえず任せておけばハズレ無し』と言われるような二人だからまず悪い結果にはならないさ。例えば村正がいきなりキャストオフするとかね！」
「やるわけねえだろうが！　つかそりゃお前さんだろ!?　儂ァあのＶＤＭキャストオフを忘れてねえぞ!!」
「ははははは！　ではまた再会した時にいつもの立香に戻っていることを願いつつ行ってきますだ！　折角シエテ団長代理のおかげでスペースペンドラゴンに乗れるんだから、定刻遅れでカイニスによるトライデント空中吊るしは御勘弁さ！」

猛スピードで手を振りながらジョブチェンジしつつ走り去るキリシュタリア。何とも器用な御仁である。
そんな彼の姿に少しだけ気が楽になったのか、立香は軽く息を吐いた。

「……ありがと、キリシュタリア」
「あのぐらいのテンションじゃなきゃ、お前さんを戻せなかったってことかい……ま、気にすんなとは言わねえが、アレはお前さんが悪いわけじゃねえ。そもそも世界としての根源が歪なんだよ」
「うん……納得出来ないけど、納得しないと次の一歩が踏み出せないよね」
「おう。それにこいつは儂の感だが、まだ終わっちゃいねえ。別のドス黒いモンがあのセフィーロには――」
『ピンポンパンポーン♪　毎度お馴染み『イシュタルくたばれ』なエルキドゥラジオ～♪』
「「はぁ!?」」

シリアスを一撃一瞬でブチ壊す緑の恐怖。ワイアール星人にも劣らぬインパクトある放送を行うはいつの間に放送室ジャックをしたのかエルキドゥ。
実はそれをガラス越しに見ているレジェンドとギルガメッシュが腹筋大崩壊しているが、それを知るのはその場にいる当事者三名のみ。

『これから約一時間後、レジェンドが前回の召喚時に残した六回分の召喚を行いまーす。それに伴い、立香・村正ペアと沙耶・アルクェイド・武蔵トリオは『魔法騎士』三人を元の世界から拉致してくるようにー♪』
「せめて言い方をオブラートに包んでエルキドゥさーん!!」
「しかし、どういうことだそりゃ……？」
『ちなみに拒否した場合、オーフィスによる無限殺しが男女関係無く炸裂しまーす』
「「おいィィィィ!?」」

最初の発言は言い方の問題や疑問が残る内容だったが、二言目は直訳すれば『黙って言うこと聞けやカンチョーブチ込むぞオラァ』とい

う身も蓋もない脅迫である。なお、エルキドゥの隣でオーフィスがソレの素振りをしているのも御愛嬌。見れないけど。

……というか。

「「セフィーロ行ったメンバーの５分の４は女性なんだけどオオオオオ!!」」

問題無い、やる側も女性だから。多分。

☆

――バビロニア島・首都ウルク――

「待ったか!? 待ったな!! 召喚の時間だ、ふはははは!!」

例の如くギルガメッシュのガチャ発言で始まる英霊召喚。極稀に麻婆豆腐を召喚する奴とかいるけど気にしない。気にしちゃいけない。

「さて、此度の召喚はまず触媒が無ければ話にならん。エルキドゥの放送を聞いていたなら分かるだろうが、先日帰ってきた二組を再度『あの世界の地球』へ向かわせた。もう間もなく戻るであろう、少しばかり待つがいい」

「ああ、予め言っておくが六枠中三枠は既に決まっている。一枠は予てから決めていた奴を、それから二枠は連中が帰ってきてから説明しつつ呼び出すことにしてあると言っておこう。だからもう少しだけ待っていろ」

割と真面目な開幕、相変わらずモルガンやスカディが玉座と共にスタンバイしていたりする――いやここ空の世界のウルクなんだけど――のはともかくとして放送した側はというと。

「お、セイバーアルトリア出た。ギル、何かとトレードしないか？」
「何ィ!?　ならば水着カーマはどうだ師父よ！」
「意義無し！　未開封品が良いよなやっぱし」
「ふはははは！　金箔押しは我が一番似合うとはいえ光り輝くセイバーのカードは良いものよ！　感謝するぞ師父！」

レジェンド達に召喚されたサーヴァントをイラストにしたカードウエハースを貪りながら、付属のプラスチックカードをトレードしていた。お前らマジで何やってんだ。

「いや惑星レジェンドの絵師に頼んでみたらこれまたエクセレントなイラストばかりで。かなりの種類とレアリティがあるから目当てのカード当てるの一苦労でなー」
「うむ、この時ほどイシュタルが呼ばれていなくて良かったと思った時は無いな。描かされる絵師が不憫でならぬところだったわ」
「あ、巫女服のセイバーアルトリア当たったよギルー」
「馬鹿な!?　セイバーの巫女服姿だと!?」

……一応もう一度言っておくがカードである。セイバーアルトリア本人は今も持ち込んだ蛇倉苑の弁当を平らげている真っ最中。
ついでにシークレットレアはサーヴァントじゃないが浮き輪装備のフォウくんとゴーグル＆サーフボード持ちのピカチュウ……夏仕様のマスコットによるツーショットカード。ハベトロットが引き当てていたりする。

「聞きました？　やっぱりあの二人を除けば私がマスターさんに相応しいということですよね！」
「いやいや、カードの元の持ち主は英雄王だろう？　それは早計というものさ」
「あ、そういえばマスターは最初に当てたのが私のカードだったって

……」
「え、どういうことですかそれ。ここはメインヒロインなスーパー武将景虎ちゃんの札を当てるのが普通ですよね。胸ですかそんなに胸が良いんですか私だってありますよ！」
「中の人効果ではござらんか？　そもそもお主がメインヒロインと決まってはござらぬが」
「それ、貴女が言う？　私は終身雇用契約を結んでるから、一歩リード。機動兵器操縦も頑張ってるし」

あんな台詞を聞けばレジェンドサーヴァンツも騒ぐわけで、ワイワイガヤガヤし始めたところで立香や沙耶達が帰ってきた。指示通り、三人の魔法騎士を連れて。

「ただいまー」
「敢えてときめき路線を狙ってるのが良いんだよコレは。何でもかんでもセクシー系にすれば良いってわけじゃないというところがミソなんだよ」
「まさしくその通りよ。キチッと巫女服を着こなしたセイバーが頬を赤らめて微笑む姿は実に可憐ではないか。同じ服をバカトリアが着てもこうはならぬよな」
「いきなり私を比較対象に出すなギルガメェ！　そういうとこだぞギルガメェェェ!!」
「……何この状況」

沙耶がそう零すのも無理はないというか……いや、後ろでウエハースをバリバリ食べて「あ、私当たったー！」と喜んでるアルクェイドを見てやれ。原因をしっかり手にしてるあーぱーを。

「一誠、僕を当ててよね！」
「何を言ってるのかしらこのポンコツドラゴンは。【エリア】違いや平行世界ならいざ知らず貴女達は月星人でしょ」

「だ……だってフォウとかピカチュウが入ってるって」
「それはマスコット枠かつシークレットだからなんだぜメリュジーヌ。レジェンド様がそう言ってたよー。ちなみに僕が持ってるコレのことね」
「何で僕じゃないのシークレット!?」
「……いや、そしたらバーゲストとかバーヴァン・シーだって入れなきゃだし、そうなってくるとモルガンとかアルトリアが入ってないとって話になって際限無く増えるからじゃない？」

ハベにゃん、まさに正論。マシュ的に言うと「にゃんこさんは沢山の種類がいるから一種類だけとかいけません！」ということである。

「ところで私はどっち名義で入ってます？　マスターとの運命的出会いを果たした景虎ちゃんか、馴染み深くてパワーアップ＆ドラマティックイベントが起こりそうな謙信ちゃんか」
「それを言ったら私も気になる。雑賀孫一か、蛍か」
「武蔵がフルネームで収録されてたら笑うよね」
「はーい、そこ！　なんか私の名前が聞こえたので詳細情報を求めます！」
「隣でバリバリやってるのがアルクェイド名義かアーキタイプ・アース名義かって感じだよ」
「!?」

プーリンに言われて沙耶と武蔵が急いで見てみれば、言われた通りウエハースをバリバリ食べてるアルクェイド。てか二人して今頃気付いたんかい。
しかし、そんなことより光を始め、海と風も絶句している。

「景虎で謙信って……まさか上杉謙信!?」
「雑賀孫一とも聞こえましたが……」

――だが、それはほんの始まりに過ぎなかった。

「儂、どんな衣装のカードあるかなー？　どんな衣装でも似合っちゃうから悩んじゃっただろうなー！　是非もないよネ！」
「え、ノッブ水着着たらどうなるか分かって言ってます？　ほら、目立つ大事な部分が実に貧相で」
「なんじゃと沖田ァ！　揺らせばいいってもんじゃないじゃろうが！　究極英雄王も言ってたモン！」
「あまりになくて貧乏侍ならぬ貧相侍・織田信長とか言われても仕方ないじゃないですか！」
「抜かすでないわ何でも『ゴフッ』な沖田総司め！　お主なんぞ結局吐血で締められて変わり映えせんくせに！」

ギャーギャー、もといぐだぐだし始めた第六天魔王・信長と新選組最強格・沖田。

「え……？　え……!?　沖田総司と織田信長!?　いや女なのは武蔵で慣れたからいいけど、この二人があたかも長年連れ添った相方よろしく喧嘩してるって何!?」
「ちょっと待って下さい。オルタに私服姿があって私の私服姿が収録されてないと聞いたんですが。お姉ちゃんを仲間外れとか許しませんよ！」
「だから誰がお姉ちゃんだっての！　誰よこんなんを聖女呼ばわりして聖女ジャンヌ・ダルクとか言い出したのは!?　よく分かんないシスコン拗らせた何かじゃない!!」
「こちらは聖処女のジャンヌ・ダルク……？　でももう片方の方も……」

例の如く姉を名乗る不審者なジャンヌとそれを否定するジャンヌ・オルタ。

「あら、キリシュタリアが留守なのは分かってたけど、カドックも帰ってないしデイビットも来てないのね」
「特殊特異点で一悶着あって帰れないんだとよ。で、あっちの三人は新造艦に絡んだ打ち合わせなんだと。ったく、たまたまいた俺をメッセンジャーにしやがって……イライラするぜ」
「あ、立香じゃない。丁度いいわ、今度訓練に付き合いなさい。項羽様と再会した時、胸を張っていられるよう私も自分磨きしておくから」
（我が主……立香殿と立ち会っても彼女の素の実力は軽く英霊級なので本気を出されたらマズいのでは……？）

※その後ぐっちゃんパイセンは、案の定レジェンドに師事して片翼の天使ばりに動きまくる剣豪立香にボコボコにされました。決め手は真祖なのを逆手に取ってバイオガの毒ダメージで延々と苦しめたこと……さすがにパイセン泣いちゃった。

「あの人……項羽と仰っていましたがもしや虞美人では……？」
「あっちの人は分からないけど、もしかして立香や村正さんと同じ感じ？」

アシュヴァッターマンは名前を呼ばれていなかったし、何か連想させる単語も言ってなかったから仕方ない。マスターとサーヴァントが何かは立香や沙耶から聞かされていたから知っていた為、ペペとアシュヴァッターマンやヒナコと蘭陵王の関係もそれと推測出来た海と風。

……ところで、肝心の光は？

「わー……沙耶さんの母上に姉上、美人さんだ！」
「お？　お前分かってんな。しかも赤がイメージカラー……センスあるじゃん。ふんふん……身長的に絶対高いヒールが似合うわね。仕込めば化けそう」
「淀みなく澄んだ心……この娘のようなものばかりであれば妖精國も

……いや、クソ虫がいる時点でダメですね」

嘘偽り無くモルガンとバーヴァン・シーを褒めていた。バーヴァン・シーはそんな光をプロデュースしようとし、モルガンは過去を思い返してはオベロンを下げつつさり気なく光の頭を撫でている。

「……そろそろ召喚を始めては？」

「「「「あっ」」」」

沙耶によって全員が気付かされ、立香や沙耶らは魔法騎士の三人と共にレジェンドやギルガメッシュの前に立つ。尚、光とモルガンは双方少し名残惜しそうだったが気にしない。

「さて、貴様らが立香や沙耶と協力関係にあった魔法騎士とやらか」

「そういう貴方は？」

「フッ……随分肝の据わった娘よ。よかろう、名乗ってやる。我は空の世界のウルク、引いてはこのバビロニア島を統べる人類最古にして最強の究極英雄王！　ギルガメッシュである!!　ふはははは!!」

「ギルガメッシュぅ!?　何かとんでもない大物が出てきたんだけどぉぉぉ!?」

「ふはははは！　実に良いリアクションだ青い娘！　大物過ぎてごめんなさいね！」

盛大に驚く海に気を良くしたギルガメッシュは高らかに笑う。ちなみにレジェンドは聞かれなかったのでエルキドゥとデッキ構築中。他の者に見られようが関係無い、彼らを気にしなかったのが悪い。

「あの……そちらのお二人は……？」

「我が師父と無二の友……って師父にエルキドゥ！　いくら気にされなかったとはいえガチャる時間にデッキ構築はやめんか!?」

「だってこのままだと何千文字か消費しそうだしさ～」

「折角新パック出たんだから開封して中身確認もしたいだろ。発売日だけ知っててカードリストは知らないよう気をつけるの大変だったんだぞ～」
「師父の方はまだしもメタいわエルキドゥ！」

二人揃ってぶーたれるレジェンドとエルキドゥ。レジェンドはともかくエルキドゥはしっかり紹介されれば驚かれただろうに……案の定、海と風は仰天している。

「やはりとは思いましたが……！　でもギルガメッシュ王に師父がいたという話は聞いたことがありま……海さん？」
「何あのサラッサラな長髪……ちょっと見ただけで分かるきめ細やかな肌……ま、負けた……」
「海ちゃん!?」

こっちはこっちでガクリと膝を付いた。ちなみにエルキドゥは風呂に入る場合、一人かレジェンド又はギルガメッシュとしか入らない。そもそも必要無いのではとか言わないように。

「改めてお聞きしますが、そちらの方は……」
「え？　風ちゃん会ってるでしょ？あと光ちゃんと海ちゃんも」
「「え？」」

立香の発言にポカンとする三人。しかし彼女らには全く記憶がない。その様子に立香の方が困惑するが、溜め息を吐いた沙耶が助け舟を出した。

「……ジョブチェンジ」
「「へ？」」
「……あ」
「長い銀髪で黒マント……黒コートでもいいけど、そんな人物がマテ

リアプレゼントクエストとか言って勝負を仕掛けてきた時があったでしょ？　あれが先生……あの人よ」
「「えええええ!?」」

今日一番驚愕したんじゃないかと思う程叫んだ三人。いや別人だろと思わずにはいられないが、レジェンドが忍者にジョブチェンジした時ほどではないと思う。

「いやそれは無いでしょ!?　全ッ然面影ないんですけど!?」
「え？　声とか」
「そこだけ!?」
「刀も使ってるよ。しかも長いやつ」
「凄く長かったよね！」
「違う光そうじゃないから!?」

なるほどあの三人の中で青いのがツッコミか、とレジェンドやギルガメッシュは心の中で納得した。
それはともかくとして、埒が明かないからとレジェンドは立香に刀を抜けと告げ、意図を察した立香が刀を抜けば即座に斬り合いが始まる。
立香と同じ動きだというのにその速度は比べるべくもなく速く、時折一振りしたかと思えば実は何十回も振られていたなど、かつて戦った時と同じ状況が再現された。

「え……ウソ……ホントに……？」
「先生はジョブチェンジすると見た目が全く別人になるジョブにしかなれないらしいのよ。ならなくても大して変わらないから、気分で変えるだけって言ってたわ」
「変装みたいなものなんですね……」
「だーもう団長強過ぎ！　少しは手加減して下さいっ!!」
「えー……これ以上の手加減ってやたら難易度上がるんだけど」

面倒くさそうに言った後、レジェンドは振るっていた正宗・神打を仕舞い――。

「ふん!!」

「ぎゃふん!?」

立香の背後に回ってジャーマン・スープレックスを叩き込んだ。派手な音がしたので結構容赦なくかましたらしい。

「いつまでもぐだぐだでは話が進まん。只でさえ信長・沖田・景虎とぐだぐだジェットストリームが揃っているというのに」

「団長ー！　ぐだぐだはノッブが――」

「水着でジェットパック装備してたお前が一番ジェットストリームしてるんだが」

「ぐはぁっ!?」

「うはははは！　ザマァないのう沖田！　ねえどんな気持ち？　ねえどんな気持ち？」

「ぐだぐだの大元はお前だろ」

「おぐふ!?」

精神的ダメージを与え次々と偉人を撃破していくレジェンドに戦慄する魔法騎士三人。彼女らを一方的に打ち負かせられる人物は誰がいたか考えると……。

「ああ、師父は貴様らが思い浮かべるであろう連中とは違うぞ。師父は神のさらに上に座する光神、それもその連中の最上位に君臨する存在よ。大方オーディンやら伊邪那岐やらを想像したのだろうが全くの筋違いというもの。神と光神は似て異なるものだぞ」

「光神……!?　そんな、そういった方々がいるとはどんな書物にも……」

「それが一般的に『賢い』と呼ばれる者達の限界よな。この世の全ての歴史が書物に記されたものだけだと思うか？　書物に記されし者が当時心の内に秘めた思いや隠しておきたい事柄を余すところ無く記したものでもあると？　あるわけがなかろう、我の宝物庫にも無いわそんなもの。仮にあったとして見る価値もないものや興味さえ持てぬ雑種共の内心を見て何が面白い」

レジェンドの事に驚いていた風をギルガメッシュは容赦なく黙らせる。その圧倒的な威圧感は先程までの愉快な彼とは違う、正に人類最古の王と呼ぶに相応しいものだった。

「歴史の真実などそれこそ表舞台と裏舞台双方を知り、双方に参加せねば分からぬだろう。師父も冒険に関して『やろうと思えば何でも知れる自分だが、やりたいとは思わない。知ってしまったら面白くも何とも無くなるだろう？』とよく言うが正しくその通り。見知らぬ土地を駆け、宝物を手にし、己の知らぬ知識を得て新たなる地へと旅立つ、それが冒険の醍醐味よ。心も歴史も何もかもが同じ、知らぬことを知るから意味があるのだ」

「知っていることを何度も繰り返したって『当に知っているわたわけ!!』とかギルは言いそうだもん」

「ふはははは！　一字一句違わず言いそうだぞ友よ！　まあ何にせよ、書物に書かれていることが全てと思うなということだ。貴様がその目で見たセフィーロの事、貴様の住む国、住む世界に記されておったのか？」

「……そうですね。百聞は一見に如かず、とも仰いますし。読んだ知識だけでなく、この目で見たことも大切にしようと思います」

ギルガメッシュの目を見て穏やかな、しかししっかりと己の感じたことを告げた風にギルガメッシュも満足気に頷く。

「うむ、それでよい。よくあるであろう。『タイムスリップして壁画に

描かれている人物と出会ったらイメージが粉砕された』的なサブカルチャーが。我も『アルスターの勇士と言われていたが蓋を開けてみれば「ランサーが死んだ！」「この人でなし！」の狗だった』と気付かされた時は宇宙猫になったものよ」
「おい金ぴか！　テメェ意味が分かってねえ嬢ちゃんに変なことを吹き込んでんじゃねぇ!!」
「ふはははは！　この頭脳明晰な娘がサブカルチャーを知らぬはずがなかろう！　その短角的な頭に少しばかり知識を分けてもらったらどうだ？」
「んだとコラァ!?　セイバーのマスターがセイバーに好かれてるからってちょっとしたことでセイバーセイバー喚くテメェに言われたかねぇよ!!」
「何ィ!?　貴様言ってはならん事を言ったな!?　師父、予定変更だ！　残る三枠のうち二枠はスカサハとメイヴを呼び出すぞ！　精々追い回されるがいい！」
「テメッ……！　やっていいことと悪いことがあんだろうが!?　それにあの二人のことだぞ！　確実にお前のマスターであるぴかぴかが狙われるぞ（勇士＆性的な意味で）!?」
「バカめ！　武の面でも夜の面でも師父が負けると思うのか？　武は元よりソッチの方も溜めに溜めたモノを発散するだけで連中は即座に堕ちるであろうな!!」

……何かレジェンド本人の知らないところで物凄い下世話な話題になっている。しかもレジェンドスキーな女性陣がモロに反応して……やはりここぞとばかりに不憫な主人公であった。

「つーかよ……何時になったら召喚を始めんだ？」
「ここまでぐだぐだになったら次話に持ち越しで今回は何も知らない魔法騎士三人にウルトラ騎空団の事や英霊召喚のあれこれ教えて終いにするぞ。もう一万文字軽く超えてるし」
「「「「すいませんレジェンド様メタ発言すぎます!!」」」」

村正の疑問に答えたレジェンドは何か虚無っていた。とりあえず魔法騎士の三人は彼の名がレジェンドだということと、とんでもない立場と実力者だということ……そして途轍もなく不憫であることを知った。最後のは知らなくても良かっただろうが……。

しかも説明はサーガやロマニに放り投げ、自身はランチタイムとか言って――。

「お待たせしました！　迅速丁寧美味しくにゃんこ！　蛇倉苑のお弁当お持ち致しました!!」

「にゃおー」

「「何アレ!?」」

蛇倉苑に出前頼む始末。そして例によって大狂乱のネコライオンに乗って弁当配達に来たマシュにビビる光達。というか何だそのキャッチフレーズ……改めキャットフレーズ。にゃんこ。

「何あの生き物!?　鳴き声的に猫……いや猫？　うん猫……でも首も足も長さおかしくない!?」

「それに鬣のような、いえ確かにあれもネコ科ではありますが……というより白目で表情も変わらないようなのですが!?」

海だけでなく、風も初めて見る謎のナマモノに大混乱。これがフォウやピカチュウならそこまで騒がなかっただろうが、生態系がまるで理解不能なにゃんこである。

ゲッターもビックリなトンデモ進化をするので予測不能でもあるのだ。

ちなみにウシネコ→ネコキリン→ネコライオンと進化する。生物から生物なのでそこ『だけ』は理解出来る。そこだけだが。

「この子、何て種類なの？」

「にゃんこさんです!!」
「ああ、にゃんこだな」
「うん、にゃんこだよね」
「うむ、にゃんこよな」
（（にゃんこって何ー!?））

ハッキリ言い切ったマシュに同意するメソポタミア最強チーム。二人に比べて相変わらず光は適応力が高かった。いや、単に動物好きなのかもしれない。犬飼ってるし。

「また……またダメだった!!　カガリ、俺に何が足りないんだ!?　俺がバルキリーに乗るためには、何が!?」
「だからバルキリーでキックするなよ」
「ガトー大佐やデイビットさんはパンチしてるぞ!?」
「いやキックじゃないし、元々そういうのを想定した機体だって」
「キラなんてスーパーシュベルトゲベールとかいうとんでもない武器が付いたパックあるんだぞ!?」
「それは燕に言え！　私はバルキリー云々以前に技術とか詳しくないんだから！」

「今度は何……？　痴話喧嘩、じゃないわよね」
「えぇと……バルキリーがどうとか」
「気にしなくていいよ。アレいつものことだから」

海と風のアスラン（とカガリ）を見る目にエルキドゥは軽く言っておいた。今日見た中では比較的マシな方だとは思う……アレでマシだというのはどうかとは思うけど。

「さて、召喚の準備も整った……が、ぐだぐだしたおかげで今や昼飯時

よ。メインディッシュが届いたところで昼食といこうではないか。召喚は食後の休憩が終わってから行うものとする！　あ、我のは黄金のカツ丼だ」
「俺は旨辛玉子丼、確保確保。エルキドゥはうな丼だったな」
「アスランも新作の『ゲキレツアタック！　激辛麻婆丼ファイナルカメンアタックフォームライドＳＰ』でいいよね」
「!?」

……なんか途轍もなくヤバ過ぎるものを勝手に選ばれたアスランは顔面蒼白。ついでにカガリも。
元凶のエルキドゥはニコニコ、同じものを食べているスレッタとラスプーチンはもはや歓喜の表情。
いや、それテイクアウト品なのにゴポゴポとマグマが煮え滾ってるような音してるんですけど……。

「ラスプーチンさん！　いよいよ私達も本気になる時が来ました！上着をキャストオフです!!」
「うむ、生半可な覚悟でこれの旨味は感じれまい。今こそ全てを解き放つ時!!」

バッと勢い良く上着を脱いで投げるスレッタとラスプーチン。スポブラと健康的な肌のスレッタ、神父なのにやたら鍛えられた肉体のラスプーチン……スレッタはもう少し恥じらいを持つべきではなかろうか。
……そこ、色気なんて無いとか言うな。
大量の汗をかきながらも実に美味しそうに食べる二人とは裏腹に、アスランは一口食べただけで他者に聞こえるほど凄まじい効果音を口の中で響かせて卒倒。ソレはもはや兵器だった。

「アスラーン!?」
「ああ……カガリ……青いツナギのいい男が見える……」

「ってそれ地獄のセイバーって奴だろ!?　今すぐ戻れアスラン!!　掘られるぞ!?」
（（地獄のセイバー!?　掘られる!?））

もう何が起きるか分からないウルトラ騎空団に若干恐怖を覚えた二人は、共にセフィーロを旅して救った二組のマスターとサーヴァントに助けを求めるべく見てみたのだが――。

「村正は何ネギ派ー？　やっぱり納豆には小ネギだと思うんだよね！」
「悪くねぇが納豆には長ネギだろ。あれの歯応えと白米が納豆を引き立てんだよ」
「えー、長ネギはお味噌汁が美味しいじゃん。程よく柔らかくなってさあ」
「そいつは同意だ。ただし長ネギに加えてワカメと豆腐を忘れちゃいけねえ」

……立香と村正は和食談義しながら昼食中。
そしてもう片方も……。

「な……何のこれしき……！」
「お母様、光神様の好物だからって無理して納豆食べなくても……」
「あれは慣れないとキツいぞ～。ボクも最初は苦手だったし」
「え!?　ハベにゃん食べれるの!?」
「うん！　卵醤油ダレをかけて食べると美味しいんだよ！」
「あ、分かる～！　辛子入れると更に美味いのよね～！」
「メリュジーヌとバーゲストは……？」
「あの二人は鼻がいいから匂いで倒されるらしいわ」
「も……申し訳ありません陛下……どうもこの匂いに慣れないといいますか……」
「僕最強だし！　実は全然平気だし！」

むしろこっちの方が納豆談義酷かった。ちなみに痩せ我慢してるメリュジーヌは……。

「ナラクエフォーウ!!」

「へぶう!?　……きゅう……」

フォウくんに見抜かれ顔面にパック納豆を叩きつけられて気絶した。なお、フォウくんとピカチュウは普通に食べる。

（何か可愛らしいまともな小動物が出てきたと思ったのにー!!）

（あの子は猫なのでしょうか？　それともにゃんこ？　それより……）

メリュジーヌを撃破した後、マイギター（鬼灯協力の下、イシュタルからぶん取った賠償金で再度購入）をチューニングし始めるフォウくん。しかもチューニングを終えたらそれを弾きながら「ＰＯＷＥＲ　ＴＯ　ＴＨＥ　ＤＲＥＡＭ」を歌い出す始末。

（えええええ!?　歌もギターも上手い!?）

しかもよく見たらサングラスを掛けたピカチュウがドラム、ハクがベースを演そ……ちょっと待て、ハク？

「ニャー」

（（本物の猫ォォォォォォ!?））

※忘れがちですがハクは猫の姿をしたロスヴァイセの使い魔の片割れです。

ピカチュウはまだしもハクは完全に予想外だったのか噴き出す者が続出した。マジでマスコットすら規格外過ぎだろウルトラ騎空団。

いくら異世界転移を経験したとはいえ、ウルトラ騎空団の尋常ではないぶっ飛び具合に海と風は圧倒されまくり。幸いにも光は割と順応出来ているが……。

この後の召喚でのさらなる衝撃に彼女らは耐えることが出来るのか!?

――おまけ――

「酷いじゃないか私を放っといて英霊召喚だなんて！　おっと君達が噂の魔法騎士だね！　私はミステリアスな花の――」
「そりゃー」
「ア゛　ッ　――　！　！」

マーリンの脳内に弾ける宇宙開闢の光。尻に巻き起こるビッグバン。周囲に響く轟爆音。
オーフィスの無限殺しがマーリンに炸裂したのである。
エルキドゥの放送にあった通り、もしあの五人が光達を連れてこれなかった場合マジでやる気でいたオーフィスだが、しっかり連れてきた為にその機会が無くなってしまった。
そこへマーリンがやってきて魔法騎士の三人に対しナンパするかのような自己紹介をし始めたので、オーフィスは『止めなければならない』という何か第六感的な使命感に駆られ……まあ、ぶっちゃけ結論から言うと『ブチ込んでも問題無い標的がカモネギの如くやってきたからやった』。彼女は後悔も反省もしていない。
この後、オーフィスはモルガンやダブルアルトリア、オベロンにも可愛がられ褒められて御満悦だった。

あと、マーリンはトドメにエルキドゥに腐ったネギ突っ込まれてた（用意したのはプーリン）。

――も一つ、おまけ――

「モルガン」
「我が夫、何か？」
「食後のデザートに俺の好物のバターケーキでも食わないか？　無論バーヴァン・シーや沙耶、ハベにゃん達も一緒に」
「!!」

モルガンのレジェンド好き好きレベルが５０に上がった。
※通常上限１０，最大上限（本来なら）１５。

特別編・サーヴァントを呼ぼう！～ストック召喚前半戦・こいつら愉悦したんだ！～

ぐだぐだ召喚準備を経て、漸く始まる英霊召喚。レジェンドは玉座ならぬ上座にて胡座をかき座っている状態だ。何でも『玉座キャラ多過ぎだから個性出してみた』らしい。

胡座の上には永年専属マスコット兼パートナーポケモンである彼のピカチュウ、そしてオーフィスにぶっ挿された何処ぞの夢魔の使い魔だった黒歴史などすっぱり捨て去ったウルトラけもの・フォウくんがおやつを食べながら座っているというファン垂涎の光景。

例を挙げるならカナエやモルガンがヤバい。

「さて、いよいよ召喚に入るわけだが……既に決まっている三人は後半に呼ぶことにする。楽しみは後にとっておくというヤツだ」

「フォウフォウ」

「ぴっかちゅ」

しかし、この愉悦部名誉顧問……こんなことを言っても前半をただで済ませる気がないのは笑みを見れば明らかだ。特にギルガメッシュやエルキドゥ、プーリンは何をするのかわくわくモード。

「では始めるぞ！　ストック最初の召喚！　一誠、お前がやれ」

「俺ぇ!?」

いきなり指名され素っ頓狂な声を上げた我らが赤龍帝・兵藤一誠（現在不憫覚醒中）。この判断には誰もが仰天、まさか初っ端から召喚権譲渡とは……。

「いやいやいやレジェンド様！　そんな、心の準備が……」

「バカかお前。毎晩マッパのリアスと同じベッドに寝てて今更何の準

備が必要だ!!」
「ちょおおおお!?」
「イッセー、話があります」
「ねえ……どういうこと……?」
「うわあああああ!?　セイバーもうエクスカリバースタンバってるし、メリュ子はいつもと違って表情ヤバいしでめっちゃ怖えんだけど!?」

レジェンドの大暴露（タイガ達はかなり前から知ってたし、古参の者も粗方知っていた）により比較的最近会った者達にとんでもないことが知られ修羅場勃発。

「ふはははは！　召喚前から修羅場とは、何を呼ぶかでどうなるか見ものよな！」
「何だかんだでアイツピュアだし、連中が思ってるような事にはなってないだろ。今後は知らんが。そういうわけだから、逝け一誠!!」
「逝けとか不安しかねーんスけど!?」

こうなりゃヤケだと聖晶石（ストック召喚、かつ召喚権移行のため必要コストとして一個だけ）を……ロマニに投げ付けた一誠。見事直撃し「ぶほぉ!?」と声を上げたロマニだが、聖晶石はそのまま召喚サークルに。
ダ・ヴィンチちゃん？　レジェンドの召喚じゃないのでやる気でないとモルガンの傍で駄弁ってます。
無事（？）サークルが起動し、呼び出されたのは――？

「貴方が私の安珍さまですね」
「は？」

セイバーアルトリアの訪ねるような台詞から、何か確定させられてるような台詞に変化した問い……もとい決めつけされた。
出てきたのは角を持った可愛らしい和風美少女……なのだが、前述の通り台詞が既にヤバい。

「私、清姫と申します。末永くお願いしますね、旦那様（ますたぁ）」
「おいィィィィィ!! 何かおかしい！ 文字とルビが合ってねぇぇぇぇ!!」
「まずはどうします？ 貴方の清姫とご飯にします？ 貴方の清姫とお風呂にします？ それとも貴方の清姫と子作りします？」
「ちょっと待って何かグイグイどころかトラックで何度も跳ね飛ばしてくるんだけど!? しかも最後はダイレクト過ぎんだろ!!」

普通なら喜ぶような相手だろうが、生憎と今の自身の状況やレジェンドという不憫の化身（失礼）を省みた一誠は目の前の美少女が途轍もなく地雷にしか見えない。
なお、安珍さま云々に関しては何を言ってもダメだと第六感がいっていたので諦めた。

「清姫……？」
「もしや清姫伝説の清姫でしょうか？ だとすればあの方の安珍発言も納得がいきます」
「風ちゃん、清姫伝説って？」

光と海にも分かるように清姫伝説を説明する風。彼女の解説は非常に分かりやすかったようで、近くの立香や留学組もふんふんと聴いていた。

「引っ括めて言いますと……愛が重いということですわ」
「「「「ありがとうございましたー！」」」」
「つまり君、龍＝ドラゴンなんだよね？ ドラゴンはもういいよって

いうか僕だけでいいからセイバーアルトリアも神器の中にいるマダオもイッセーから離れてよ」
「私は彼のサーヴァントです。メリュジーヌ、貴女はイッセーと何も関係ありませんし、マダオとやらは本体が神器なのですから意思ぐらい消えても問題ないのでは？」
『オイコラお前ら俺の存在完全否定か！　許さん！　許さんぞ!!』
「別に私は構いませんよ？　私と旦那様（ますたあ）の熱く激しい夜を見せつけて差し上げるだけですから」
「生憎だったわね。だとしたらまずは私をどうにかしてみせなさい。逆に貴女が私とイッセーの絆を見せつけられる羽目になるでしょうけど？」

当の本人を置き去りに、何かイッセー派女性陣（一頭だけ雄）でピンクな会話が飛び交う。そして忘れてはいけない……こんな会話をしていたら『奴』も当然突撃してくることを。

「ソワカ♡」
「「「「ぎゃあああああああ!?」」」」
「キアラシバクベシフォーウ!!」
「あふん!?」

そう、頭ソワカな御存知殺生院キアラ。
頬を染めて指シュッシュ、良い子はまだ理解しなくていい動作をしつつ突如現れた色ボケ菩薩。案の定フォウくんの流星キックを脳天に叩き込まれた。
「今度はどちら様!?」
「気にしないで。そろそろ監督官が来るだろうから」
「監督官!?」

次の瞬間、何かが飛んできてキアラが爆発した。

「えええええ!?　何!?　今度は何!?」

海がパニックを起こし、風はパクパクと口を動かすばかり。光は……キアラの行為の意味が分からなかったのか、指を自分でシュッシュッと動かしていた。でもやっぱり分からない……光、君は暫く純粋なままでいてほしい。

何かが飛んできた方向を見ると、そこにいたのはバズーカ構えたコヤンスカヤ、そして勇治一行(カルナ不在)。嫁ネロが勇治に引っ付いてご自慢のたゆんたゆんを押し付けながら「余もバルキリー欲しい」とおねだり中。

「イヤ豪快にいったネ、コヤンスカヤ君。アレ普通の英霊だったら致命傷じゃない?」

「あれにはこれぐらいで丁度良いんです」

「ンー……納得出来てしまうのがアレだナー。マイボーイはどう思う?」

「……むしろアレで止まってくれたらありがたかったんだがな……」

「「御尤も」」

溜め息を吐く三人であったが、新たに出てきたメンバーについてレジェンドが軽く説明する。

「あの中心にいるのがマスターのムーンブロリー、でそれに引っ付いてるのがネロ・クラウディウス(嫁スタイル)。それからバズーカ持ってるのが光のコヤンスカヤで、あっちのアラフィフがジェームズ・モリアーティだ」

「せめて名前ぐらいちゃんと紹介しろ!?　私は月影勇治だ!」

「ネロ・クラウディウスにジェームズ・モリアーティ!?」

「ちなみに出張中だがカルナもいるぞ」

「カルナ……もしやマハーバーラタの!?　あの方、それほどの大英雄

を……！」
「それからモルガンの傍にいるのがシャーロック・ホームズとネモ、そして……」
「正しく美の体現！　きっと団長さんも私（の身体）を気にいってるはず、レオナルド・ダ・ヴィンチことダ・ヴィンチちゃんさ！」

もはや海も風も度肝を抜かれっぱなし。マスターとサーヴァントについてはある程度分かったが、だからこそそんな英霊を複数人従えていることに驚きを隠せない。
ロマニは実は魔術王ソロモンだというし、レイトの隣には呪いが解呪されたラーマとシータ夫婦もいる。

「何なのこの世界中を敵に回しても一時間足らずで決着つけそうな豪華ラインナップ……」
「ゼウスです。そこのＳＲＸのメインカラーな少女、是非私の名前と姿を覚えていってね」
「――」

あ、海がいよいよ真っ白になった。そりゃいきなりギリシャ神話で最も有名な存在から声を掛けられてあっさりそんな事言われたらそうもなるわな。
ちなみにエウロペに始まり、アフロディーテやデメテルも紹介され……ディオスクロイ・カストロとポルクスを紹介する時に案の定カストロが反応しそうになったが、ポルクスのガチパワーによるボディブローで黙らされていた。無論、カストロ気絶。

（そういえば、沙耶さんのお母様はモルガンと……ですが団長さんを我が夫呼びしていましたし……こちらの世界とは一味も二味も違う世界なのだと思いましょう！）

いよいよ風まで吹っ切れてしまった。だがそれが正解だ。

「さて、早速一誠の修羅場メンバーに一人加入したところで……次、逝ってみよう！　大爆死レイオニクス！」
「喧嘩売ってんのか買うぞ不憫マスター!!」

今度はいきなり勇治を指名。もうこの時点でギルガメッシュは愉悦案件と確信した。ピカチュウとフォウくんはおやつを食べるのを我慢している……絶対に吹くから。

「上等だ見てろこの野郎！」
「一誠の二の舞になりそうだがな！　ソロマニ、サークル起動！」
「うう……痛い……そんなナチュラルにソロマニなんて言わないでほしいなあ……」

まだ痛みが残る中、勇治が投げ入れた聖晶石でストック召喚を起動した結果……。

「他所のおえらいさんと喧嘩ダメ絶対。あとそっちも室内でバズーカ禁止」
「ハイ、スンマセンした」
「……あ」
「「「いやコレどういう状況!?」」」

何か美少女が、雰囲気似ている青年に加えてまさかの護神隊重鎮の一人・沖田総悟に説教しているシーンが召喚された。

「「ふはははははははは!!」」
「「ぷっ……くくくっ……」」
「ブフォーウ!!」

「ぴかちゃーあ!!」

愉悦軍団大爆笑。何でこんな家庭の一コマを召喚してしまうのかこのレイオニクス。

「どうも、私は岸浪ハクノ。こっちが岸波白野、又の名を月光怪人フランシスコマン」
「違う月光怪人じゃないしフランシスコマンでもない！　フランシスコ・ザビエル！」
「私ハクノだから分かんない。そしてこちらの方はそっちの方が分かるんじゃないかと」
「聞いて驚け見て土下座しなせェ。俺ァ何を隠そう真選組副長の沖田――」
「アンタは一番隊隊長だろ！　勇治とやたら声が似てるのに腹立つレベルは全然上だな！」
「おう岸波ィ焼きそばパン買って来いよお前の十八番だろ」
「私はロールケーキ所望。高級なやつ」
「これでもあそこの新王だからな!?　そんな堂々とパシるなよ!!」

何か漫才じみたやりとりを始めたので、とりあえず強制送還しておくことにする。ロマニがリセマラ（やり直し）モードを起動させると、勇治に気付いたらしい白野とハクノがそれぞれ片手上げとピースをしてくれた。
しかも――。

「私達は誤召喚だけど、そんな貴方にプレゼント。私のお風呂タイムに乱入したダメ後輩を扱き使ってやって」
「何やってんのアイツ!?　まあいいか」
「いいのかよ。あのメスガキをイジる楽しかったんですがねィ。まあ、いざとなったらこっちにお邪魔しまさァ」
「ではではシーユーアゲイン。最後にこちらのネロがそちらの嫁ネロによろしくとのこと。じゃあアデュー」

……何か爆弾発言も残していった。何だ今のと大半のものが思う中、再度召喚サークルが起動する。
ダメ後輩を扱き使ってとかどういうことだと思っていたら――？

「うわあああああああん!! 先輩のバカァ!! 後輩のちょっとしたお茶目だったのにホントに送り出すなんてぇ!!」
「愛の鉄槌（カーマパンチ）!!」
「へぶし!!」

カーマの美少女モードに似た少女がガチ泣きで召喚された。ついでにイラッとしたのか、カーマが美少女モードで鉄拳をお見舞い。モロに入った。

「あ、すいません何か無性に腹が立ったので一発いっちゃいました」
「謝罪が軽くありませんか!? このＢＢちゃんを殴っておいてただで……ってええええ!? サクラファイブに隠されたメンバーが!?」
「何ですかサクラファイブって」
「あ……あれ？ 違う？ それに何か物凄く既視感ある存在が彼処に座ってるんですけど!?」
「ほう？ どうやらアーチャー慢心王な我と出会っているらしいな。だが我はクラス・ウルティメイトな究極英雄王。格が違うことぐらいは貴様でも当然理解出来よう」

その少女――ＢＢはギルガメッシュを見た瞬間あわあわと慌てだす。ここいらでグレートデビルなラスボス系後輩として何か威厳を、とか考えてたらそんなもん知るかと瞬殺しそうなヤベーやつが出てきたＢＢちゃん涙目。しかも最強の裏ボス（レジェンド）付き。

（何ですかクラス・ウルティメイトって!?　クラス名だけでもう難易度ヤバババハムートっぽいんですけど!?　てか彼処で胡座組んでるセイヴァーが霞むヤバさなアレ誰ですか!?）
「カーマ、アレ知り合いか？」
「いえ全く。あれじゃないですか？　依代的な」
「あー、なるほどなるほど……アレ上司絶対苦労してるよな」
「ですねー」
「初対面なのに思いっきりディスられてませんか私!?」
「私は初対面ではないがな……」
「え？」

先程の総悟と似たような声で後ろから話しかけられたかと思ってＢＢが背後を向くと……。

「貴様のようなメスガキは、粛正される運命なのだぁ……！」

ムーンブロリー（超月星人３）。

「――え――」

絶望に染まるＢＢ。
そう！　何を隠そうこのＢＢ、実は度々勇治のＰＣにハッキングを仕掛けていた悪い娘なのである！
幸い勇治は常に持ち歩いているマイＰＣのセキュリティ面においてしっかりしていた為、データをどうこうされることはなかったのだが……生粋の科学者気質な勇治はそれに大層御立腹！
そしてその元凶が反省のはの字もなく現れたために怒りが限界突破、ここに最強最悪の超月星人３ムーンブロリー（正式名称・月影勇治第三激情態）が誕生したのだった!!

「あ……あ……もうダメです……お終いですぅ……」

――しばらくお待ち下さい――

こうしてムーンブロリー3にズタボロにされたＢＢはキアラと同じくコヤンスカヤの教育を受けることになった。どうせ素直に聞く気は無いだろうけど……と勇治とコヤンスカヤ、モリアーティは頭を抱えている。

なお、ＢＢは現在麻婆主従に超極辛麻婆豆腐を食べさせられていた。まさかここでも言峰綺礼の顔を見るハメになるとは彼女も思ってもみなかっただろう。こころなしかムーンブロリー3にボコられるより死にそうな顔をしているが、麻婆の旨さ故にと思っておいてほしい。

「前半も残り一回。誰にするか……ん？」

「ちょっ……ちょっと待った！　こっちでは起動してないのにサークルが！」

「……このパターンは……」

「折角いい感じに愉悦していたというのに、師父の貴重な召喚回数を奪ってまでこちらに来る気だとはな」

レジェンドとギルガメッシュが忌々しげにサークルを睨みつける。

そしてそこから現れたのは――。

「今度こそやったわよー！　ちゃんとした召喚サークルっぽいし、見事――」

「御機嫌よう駄女神。変わらぬ脱走ご苦労さん」

「自ら進んで死地に赴くとは見上げた根性よな。ともあれ貴様が土足で我が空のウルクに踏み込むことは赦さぬ。この空のウルクの都市神は我が師父よ」
「だからどうしてぇ!?」

「ごめんなさい妹が迷惑を掛けて本当にごめんなさい」
「エレシュキガルは悪くないからね。悪いのは全部イシュタルだから」

懲りもせず日本地獄から逃げ出したイシュタルに、いよいよエレシュキガルが泣きながら土下座することに。エルキドゥがよしよしと慰め、タイガとジータはオロオロしつつもハンカチで涙を拭ってあげている。この人望ならぬ神望の差よ。

「よりによってレジェンド様にギルガメッシュ、おまけにエルキドゥまで勢揃いって何の冗談よ!? それに空のウルク!? ウルクなら私が都市神で――って今レジェンド様が都市神とか……」
「ハッ、そのままの意味よ。この空のウルク、貴様の入る余地は無い。とっとと日本地獄へ奉公に戻るのだな。それとも役立たずで貧相だと日本地獄すら置くのを嫌がったか? だとしたら済まなんだ、そこまで落ちぶれていたとは我もほんの少ししか予想してなかったのでな! ふはははは!!」
「な……何ですってこの性悪金ぴかー!!」
「おい」
「!!」

ギルガメッシュの煽りに激昂するイシュタルだったが、抑揚のない声でレジェンドに声を掛けられ……ビクッとして恐る恐るそちらを向いてみたところ――。

――顔面を鷲掴みにされたあと、極大ゴミ袋に入れられて日本地獄へ空間ぶち抜き返品された。

「ふふはははははは!! ナイスだ師父よ! さすが判断が早いな! しかしゴミ袋とはシンプルかつこれとない良き処理方法だ!! ふはははははは!!」
「そうそう、エビフ山にやらかした事を東方不敗に話したらな、今度イシュタルを徹底的に教育しに行くそうだ」
「終わったな駄女神!! 精々壮大に爆発するがよいわ!! ふはははは!!」

自然を愛する東方不敗マスターアジア、イシュタルのかつての行いは彼の逆鱗に触れたようで……後日、日本地獄には彼女の悲鳴が木霊することとなる。

「結局あの駄女神の所為で一回分無駄になってしまったが……ま、良しとするか」
「小休止後に今回の目玉召喚三連ということか。魔法騎士共よ、今のうちに色んな意味で衝撃に備えておくことだ。師父がやることは貴様らの度肝を抜くであろう、それでショック死なぞされてはたまらんからな」
「「「……?」」」

意味深な言葉と笑みを残し、ギルガメッシュはレジェンドと共に一時退出する。
かの王が告げたことの意味を理解し、それを目のあたりにするのは後半の召喚が始まってすぐだと言うことを、彼女らはまだ知らなかった。
とりあえず、マーリンの尻は未だ回復の目処が立たないことだけ

言っておこう。

――おまけ――

「いける!?　いけてる!?　クォーターにエターナルドッキングした状態で航行無問題!?」
「うん、大丈夫！　それに何度もシミュレートしたけど、トランスフォーメーションも問題なさそうだ！」
「一つだけ問題があるとすれば、バルトフェルド艦長以下エターナルのクルーの皆さんがガチガチに緊張してることでしょうか」
「えー……キラやラクスと違って最初から軍属だったのにメンタル弱いなあ。二人を見習ってほしいよホント」
「そうは言うがね！　君等と違って僕達はこのマクロス・クォーターＳＥＥＤとやらのことは改造されたエターナルのことも含めて全く知識に無いんだから仕方無いだろう!?」
「レジェンド様とか一回乗ってその最中に全部把握するよ？」
「彼を基準に考えるのはやめてほしいんだが!!」

完成したマクロス・クォーターＳＥＥＤのテスト航行にて、大はしゃぎな燕・キラ・ラクスの三人とは対照的にバルトフェルド達エターナルのクルーは肝が冷えっぱなしであったという。

特別編・サーヴァントを呼ぼう！～ストック召喚後半戦・涙の種、笑顔の花～

休憩を挟み、遂に行われるストック召喚の後半戦。

レジェンドが正式に召喚権を行使するそれは通常の英霊召喚とは一線を画す特別な召喚だ。何しろ狙った英霊を狙ったクラスで１００％召喚するというチートも甚だしい、正しく元祖三大チートラマンの面目躍如。

とはいえ、レジェンド自身は余程のことでもない限り基本的にランダム召喚を好んで行う。今回はその特別な事例ということになる。

「さて……いよいよ待ちに待った確定召喚だが、必要なものは揃っているな」

「え、必要なものなんて初めて聞きましたけど」

レジェンドの言葉にハテナマークを飛ばして首を傾げる立香だったが、体勢を楽にしつつ右手の人差し指を立ててレジェンドは説明する。

「なに、難しいものでもなければ足りないものでもない。何より既に『揃っている』、そう言っただろう」

「へ？」

「つまりは触媒ということよ。そして此度の触媒とはセフィーロに召喚、及び特殊特異点修復に送り込まれ旅した貴様ら自身。それも誰一人欠けておらぬ完全な布陣のな」

「「「「!!」」」」

ギルガメッシュの告げた答えにハッとする一同。ここで勘付いたのが沙耶だ。

「もしかしてこれから呼ぶのはセフィーロ絡みの……っ！　まさか!?」
「そう、そのまさかだ」
　驚く沙耶に対して笑みを浮かべつつ指をパチンと鳴らしたレジェンド。その合図を待ってましたとばかりにロマニから召喚サークル起動権をぶん取ったダ・ヴィンチちゃんがサークルを起動させる。
「いきなり虹回転!?　反応はキャスター！」
「ふむ……あちらを先に呼んだのか」
「ああ。あっちを先に呼んで魔法騎士の姿を確認した途端、万が一勝手に霊基変化起こされてアヴェンジャーになられると面倒だ」
「確かにそれが真理よな」
　この会話で村正・アルクェイド・武蔵もなんとなく推測出来た。セフィーロ絡みでアヴェンジャー……思い当たる節があるのは二人。そのうち一人はキャスターかバーサーカーで呼ばれそうな気がするし、だとすればもう一人……正しく復讐のため魔法騎士を討とうとした彼女に他ならない。
　そんな会話をしているうちに召喚されたのは――。
「キャスター、真名をザガート。召喚に応じ参上した」
「「ザガートッ!?」」
　真っ先に声を上げたのは魔法騎士の三人。さらに、まさか本当に呼ぶとは思わなかった立香と沙耶、加えて彼女らのサーヴァント達も絶句。
　そう、レジェンドがまず呼び出したのは光達がエメロード姫を取り戻すべく挑んだ相手、ザガートであった。神官（ソル）の称号を持ち、強力な

魔法を操り武器の扱いにも長ける桁違いの実力者。
光達がセフィーロに召喚された当初はエメロード姫を攫った悪の親玉かと思われたが……。

「……私を討った魔法騎士達か」
「な……何でザガートが!?」
「言っただろう、英霊召喚だと。まあ、立場的に反英雄扱いされるだろうが……少なくとも、ただ一人にとっては英雄と言って差し支えあるまい」
「「「「!!」」」」

片手は頬杖をつき、もう片方の手でフォウの腹をうりうりと軽く掻きながらそう言い放ったレジェンドに、ザガートを含むセフィーロに関わった者達は驚愕する。
レジェンドは最終決戦の場におらず、様子を見ている素振りも無かった。なのに何故『そのこと』を知っているのか。

「何故何云々はさておき、そのもう一人も呼ばねばならん。暫し静かにしていろよ? ここまできて『不手際は無いが不測の事態が起きて駄目になりました』なんざ御免だからな」

再びパチンと指を鳴らすと、ダ・ヴィンチちゃんは慌ててサークルを起動させる。
だが先程と違いレジェンドは召喚中にも指を鳴らした。するとセフィーロに関わった者達の足下が輝き出し、立香達はあまりに突然過ぎて慌てだす。

「うえええ!? 何何何!?」
「案ずるな、師父の特殊召喚術式『縁引き(えにしび)』よ」
「「「「縁引き?」」」」
「その名の通りその人物と縁深き英霊を呼び出す確率を引き上げるも

のでな、人数が多ければ多いほど確率は跳ね上がる。だが、それでは縁深き英霊が複数存在する場合、結局その中からランダムになってしまう。しかし師父のそれはその問題さえも解決済みよ！　縁引きにて師父自身が繋がることで、召喚したい英霊を己が知らずとも他の縁者らより姿形等を読み取り、己が記憶として確立し!!　その英霊と接点・縁が全く無い状態であろうと確実に招く事が出来るのだ!!　ふははははは!!」

「え……でも、ザガートは……!?」

「いやザガートは俺がジョブチェンジしてあっち行った時、魔法かアイテムか知らんがそれでこっち見てたんで俺も分かってただけなんだが」

これにザガートは驚いたが、そもそも彼のような者を見たことがあっただろうか……と思い返してある事に気付く。何時だったか、魔法騎士とイレギュラー達に規格外の戦闘力を持つ者が何やら戦いを挑んでいたことを。

つまりレジェンドが片翼（ジョブチェンジ）の天使して……。

(((((マテリア（あ）プレゼント（の）クエスト（時）か―!!)))))

見られてたなら教えろよ、と光を除き全員が思っていたが、それを見透かされたらしく――。

「あんなバレバレな覗き見に気付かんお前らが悪い」

一蹴された。ついでにさり気なくディスられてザガートも少し落ち込んでる。ドンマイ。

「また虹回転！　これは……ルーラー!?」

何かジャンヌが「来ますか、新しい妹！」とかはしゃいでジャンヌ・

オルタに頭を引っ叩かれているが、この際それは置いておこう。
数多の縁、それを紡ぎ招かれたのは――。

「サーヴァント、ルーラー……エメロードです。柱ですらなくなった私がお役に立てるか分かりませんが、精一杯務めを果たさせて頂きますので、どうかよろしくお願いいたします」
「「「エ……エメロード姫ぇぇぇぇぇぇぇぇ!?」」」
「「「「マジで呼んじゃったよあの人ー!!」」」」

予定通りレジェンドは、ルーラークラスでセフィーロのかつての柱・エメロードをピンポイント召喚。
あまりの出来事にセフィーロと関わりのある者はザガート以外大絶叫。ザガートすらも幾度となく目を擦り夢幻かと確認する程の衝撃であった。

「え……魔法騎士……えっ!? ザガート!? どうして、魔法騎士とザガートが一緒で……あ、サーヴァント……でも魔法騎士はサーヴァントじゃなくて……えっと、えっと……!」

案の定、光達とザガートを一度に見たエメロードは大混乱。ここで助けを求めたのはマスターたるレジェンドだが、そのレジェンドは……。

「どん○衛を食べないか」※ジョブ・片翼の天使（どんぎつねＳＰ）

「「ぶふぅぅぅっ!!」」
「「「「何じゃありゃあああああ!?」」」」

最近追加されたジョブ『レジェンどんぎつね』と並ぶ謎のジョブチェンジを行っていた。ギルガメッシュとエルキドゥは不意を突かれ腹筋大崩壊し、他の者は意味不明さに盛大なツッコミを入れる。
エルーン女性陣やモルガン、八坂とか九重なんかは写真撮りまくってるけど。

「まあ、それは後にするとして」

するの!?という一同の言葉を華麗にスルーして、どんぎ……レジェンドは続けた。

「もはや柱ではないと知っているという事は自分は既に討たれ、その身がサーヴァントとしての霊基であることを理解しているな？」
「……はい」
「続けるぞ。セフィーロの『柱』その役目と魔法騎士召喚の真実を知り、その上で回避不可能であったお前とザガートの死は魔法騎士だけでなく我がウルトラ騎空団の団員も悔恨を残すこととなってしまった。これはマズい、今後の戦いはさらに苛烈かつ多岐に渡るというの

に序盤でステータス封印を受けたようなものだと思った俺はそれを取り除くべく、お前達二人を召喚したわけだ」

レジェンドは真面目な事を言っているが、狐耳と狐尻尾がピコピコ動いている上に片手にどん○衛を持っているためイマイチ締まらない。

だがここでレジェンドは爆弾を投下した。

「だが、お前達も知らないセフィーロの真実がある」

「「「「え？」」」」

「何故あの世界が特殊特異点となっていたか、分かるか？」

そう言われてみれば、思い返しても多少魔物が多かったとか強かった程度でしかなかった気がする。

何処らへんが特異点なのか、結局分からずじまいのまま帰ってきてしまった。

「そもそも、あのセフィーロ……ザガートがエメロードを幽閉したからどうたらこうたらと言っていたが――」

「いやどうたらこうたらって……」

「――ぶっちゃけその程度でセフィーロはどうもせん。ただ魔物とかが出るだけならあの世界じゃ対抗策ぐらいあるだろ。武具各種や魔法、果ては魔神があるのがいい例だ」

「そう言われると確かにそうですわね。確かに全員が全員というわけではないでしょうが……」

風もレジェンドの言葉で納得する。現にザガートは攻撃してきた相手以外では光達のみに標的を限定していたし、そこいらの村人を根絶やしにするだとかそんな事をしたことはない。

あくまでエメロードが『柱』として生涯を全うすることを是とせず、彼女をその責務から解放するための個人的な善意であった。結果、世

界の性質から魔物が出たりとかしたものの、ザガート自身は悪とは言い切れない人物なのだ。

「で、ここからが本題だが……セフィーロは今、少しずつだが滅びへと向かっている」

「「「!?」」」

「な……何で!?」

「もしかして柱……エメロード姫が不在だから？」

「半分正解、半分外れだ」

レジェンドはそう告げるが、光や立香達はよく分からずエメロードやザガートすら見当もつかない。

「先の滅びの件だが、正しくはザガートを討った時にもう始まっていた」

「え……!?」

「そいつぁどういうことだ？」

「簡単な事だ、村正。よく考えてみろ、セフィーロという『世界』を『柱』一つで支えられると思っているのか？　俺達光神でも、まして神でさえない人間が」

「柱一つ……ザガートを討った時……もしかして！」

「そうだ。本来であればエメロードのみだった柱……だが『あのセフィーロ』では柱が最初から二つ、いや二人必要だったということさ」

それを聞いて愕然とする一同。

レジェンドの提示した内容から導き出された新たな真実、それはあのセフィーロが特殊特異点たる理由……ザガートもまた『柱』であり、エメロードとザガートが揃っていてこそ『柱』として機能するというものだった。

つまり仮にエメロードを無事救出しても、ザガートが倒されているためセフィーロの滅亡は始まりハッピーエンドとはなり得ない。

「しかも、だ。あのセフィーロの『柱』は代替わりする際に番となる者同士と定められている。これが何を意味するか……もう分かるな」
「エメロード姫とザガート、どちらかがいなくなったからといって代わりは出来ない……」
「その通りだ。おまけに代替わりが可能となるにはどちら『も』いなくならなくてはならず、その間はセフィーロの滅亡が加速度的に早まる。早急に次の『柱』を見つけられればいいが、それも資格の有無が絡むため簡単に済む話でもない」
「とどのつまり、あの世界は人柱抜きでは成り立たぬ歪な世界だったということよ。何処のたわけが何を考えてあんな不出来なシステムを組み込んだのか知らぬが、それでいてその人柱になるにも資格が要りようなどとは頭の悪さを疑うレベルだな」

レジェンドに続き、ギルガメッシュもセフィーロの在り方について吐き捨てるように告げた。何処かの世界でもちもちした白いナマモノが盛大なくしゃみをしてそうだが、それは自業自得というもの。

「さて、色々話し込んだが何故お前達二人を召喚したのかということをざっくばらんにもう一度説明してやろう。まず一つ、うちの団員が曇り続けて戦力ダウンするのは看過出来ん。二つ、お前達なりにセフィーロへ償いとケジメをつけてこい」
「私達なりに……」
「償いと、ケジメ……？」
「ザガート、エメロード。お前達の心境は分からなくもないが、お前達の行いがセフィーロに生きる無辜の民達を苦しめたのは紛れもない事実。それに対する償い無くして第二の生を謳歌するわけにもいくまい。他の【エリア】出身であれば無条件に赦したが、俺の【エリア】出身というならそこはしっかりせんとな」

レジェンドの言葉に二人は俯きつつも頷く。そこへギルガメッ

シュが不敵に笑いながら付け加えた。

「なに、セフィーロの崩壊・滅亡を阻止する算段はついておる。我の宝物庫と師父の秘宝殿から適当な物を見繕ってあるからそれを使えばどうとでもなるわ。ふはははは！」

「……！　それは本当ですか⁉」

「当然よ！　創造主が何処のナマモノか知らんが、そんな歪な世界しか創れぬ分際で踏ん反り返ってるなどイシュタルに我や師父の全財産を献上するぐらいの愚行というもの！　既に先程師父の召喚権を一回分強奪した挙げ句、無効にしていきおって！　よもやセフィーロを創ったのはイシュタルめではあるまいな⁉」

「いきなり掻っ攫う、話は聞かない、自分の都合最優先……あれれ～？　イシュタルと同じところ多過ぎない？　ギルの言ってること現実味を帯びてきたぞ～？」

ギルガメッシュは先のイシュタルの行いに再び腹を立てる、エルキドゥは現在矢的やカドック達がいる米花町で活躍中のバーローっぽく言い出す。

ついでに、並行世界にてセフィーロを創ったぷにぷにぷぅぷぅな白いやつが己のくしゃみの風圧で吹っ飛んだが誰も気にしなかった。

イシュタルは完全なとばっちりだが、メソポタミア最強チーム三人に彼女への好感度など当の昔にケイオスタイドへと蹴り落とし済。もしくは最初から無い。

「つまり我が何を言いたいかというとだな、貴様らだけに重責を押し付け、日々の安息を享受していたツケをセフィーロの民全員に支払わせてこいというわけだ」

「それ、どういう……」

「先程師父が言ったであろう。セフィーロを『柱』一人で支えられると思っているのか、と。それは二人でも同じことよ」

「……そうか！　セフィーロをセフィーロの皆で支えればいいんだ

!!」

ギルガメッシュが言ったことを理解した光は思わず叫んだ。

そう、レジェンドとギルガメッシュはセフィーロはセフィーロに生きる者達が支えるべきだと彼らは考えていた。無論、本当にどうしようもない時は他所者の手を借りるべきだろうが、自分達のことだというのにハナっから魔法騎士達やザガート、エメロードに押し付けるのは筋違いというもの。まして魔法騎士達はモロに被害者である。

「よくぞ言った赤の魔法騎士。その慧眼を認め……この空のウルクで新たに栽培し産まれた新果実『ウルクストロベリー』を一パックくれてやろう!!」

「わー！　ありがとうギルガメッシュ王！」

「「「「いいの!?」」」」

「ふはははは！　空のウルク、その大自然の恵みを受けたウルクストロベリーは癖になるほど美味である！　そのまま食べて良し、カットして良し、ジャムにして良しと万能な果実！　かくいう我も今朝いちごオ・レにして1リットル一気飲みよ！」

少しずつだが明るくなっていく場の雰囲気を察し、レジェンドは最後の後押しを行う。

「せっかくしがらみから解き放たれたんだ、きっちりやる事やって戻って来い。それからがお前達の新しい物語、その本当の始まりだ」

「はい……っ……！」

「仰せのままに」

突き放さず、ただし甘やかすだけでなく――かつてギルガメッシュを育てた時同様、レジェンドはしっかりと告げた。マスターからの魔力供給は大丈夫かと思うだろうが、レジェンドのサーヴァントは彼の光気の恩寵を巫女であるアーシア程でないとはいえ多く受けれるた

め問題は無い。
　そんな彼にエメロードは感極まって涙を流し、ザガートは片膝を付き頭を垂れた。

「フッ……そして案ずるなザガートにエメロードよ。貴様らだけを送り出すような我や師父ではない。立香、沙耶、そしてそのサーヴァントたる村正、アルクェイド、武蔵！　貴様らも同行し再度セフィーロへと舞い戻り、禍根残らぬようケリをつけてくるがよい!!」
「はいっ！　こういうのを待ってたんだよ！　ありがとう究極英雄王!!」
「ふはははは！　であろう、であろう！　ついでにあの世界の戦力をウルトラ騎空団に引き込んでくるとなお良い！　交換条件は我や師父に言えば確実だと言っても構わんぞ！」
「あの、ギルガメッシュ王！」

　ノリノリな雰囲気の中、光が思いっきり挙手して発言しようとする。

「む、何だ？　発言を許す。　言ってみよ」
「その……私達もセフィーロへ行ってこのことを解決したら……ウルトラ騎空団、とかいうのに入っちゃダメかな？」
「「光（さん）!?」」
「何を言い出すのかと思えば……」

　ギルガメッシュは玉座に深く腰掛け、頬杖をついた。やっぱりダメだよね、と光がしゅんとした猫耳が見えてしまうほどの落ち込み方をすると――。

「貴様らはまだ年端も行かぬ娘であろう！　我や師父が挨拶（というか圧掛け）に行ってやるから、しっかりと家族にごめんなさいねを言い許可を得ぬか！」

「っ!!　それじゃあ!」
「我は友の存在の大きさをよく知る究極英雄王。貴様の考えなどお見通しよ。エメロードと友になりたくば、共に艱難辛苦を乗り越えてくるがよい!　ついでに騎空団に来る際は知り合いをしこたま引き連れて『あのゴージャスかつウルティメイトな王が空のウルク、バビロニア島を統べるギルガメッシュだ』と紹介することを忘れるな!　ふはははは!!」

何だかんだ言いつつも面倒見が良い究極英雄王。なし崩し的に海と風まで参加することになっているが、まあそれはいい。問題は彼女らが大人びているとはいえ、まだ義務教育就学児であることなのだが……。

「あの、ギルガメッシュ王……私達はまだ義務教育が終わらない年齢なのですが……」
「そこは心配せずともよい。ウルトラ騎空団には教養溢れる面子がごまんといるからな。仮に向こうが納得しなければ貴様らの世界の法そのものを変えてくれるわ!　ふはははは!!」
(副音声で聞こえた気がする『圧掛け』とかってそういうこと!?)

しかもレジェンドにせよギルガメッシュにせよ、そういうことをマジでやれるから尚更タチ悪いというか、怖いもの知らずというか……。

二人共ちゃんとバックグラウンドを整えておき不備なく円満にいく為、さすがに余程のことでもない限りそんなことはしないだろうが。

「ここまで割と順調だけど、戦力は……」
「心配するな。あと三日もあれば予てより開発中だった村正の真武者頑駄無、立香の超機動大将軍、そしてアルクェイドのムーンガンダムと武蔵のレッドフレーム改アナザーが完成する」

「い……いっぺんに四機も!?」
「束さん頑張ったよ～……超機動大将軍だけはレジェくん任せだけど」
「そして!!　今し方連絡があったが貴様達の母艦となる戦艦も無事完成した!!　その記念すべき初任務としてその艦と乗員、所属機体とパイロットも同行する!!　ふはははは!!　正に万全、死角無しの布陣で送り出してやろう!!」

しがみついていくる束(とクロエ)の頭を撫でてやりながら、レジェンドからは立香の専用機について。
ギルガメッシュからは母艦についての説明が入る。初めてセフィーロに足をつけた時とは比べ物にならないほど充実した戦力だ。

「母艦……!?」
「我も見るのは初めてになるが、そろそろ着く頃らしい。いざという時に間に合わせるとは、やるではないか燕め。やはり随伴艦の一番艦を任せたことは正解だったな」
「それは、いいけれど……」
「どうした、月神沙耶。妙な含みを持たせおって」
「色々盛り上がる内容だったり、感動するような展開なのは望むところなんだけど……。

先生、片翼の天使(セフィロス)どんぎつねのままだから全部台無しよ」

――刹那、全員の腹筋が崩壊した。

「危うく笑い死ぬところであったわ……」
「しかも武蔵がどん○衛食べたがって、続いてダブルアルトリアも食べたがってと倍倍ゲームで増えていってどうしようかとおもったら」
「マイロードがセフィロスっぽく『クックックッ……』って笑いながらどん○衛をダースでコートから取り出して」
「丁寧に開けて一人一人ちゃんと手渡した挙げ句」
「給湯ポットでお湯入れてくれるという」
「絵にしてとんでもなくシュールなセフィロスどんぎつねを見たでございました。あと、何故かバックにメテおあげ」

ゼットの一言でまた爆笑の渦が巻き起こった。ホントこの師弟だけでもボケは十分過ぎる気がするのだが。
ちなみにレジェンドは漸く普段の彼に戻った。

「お、馬鹿騒ぎしていたら向こうもタイミング良く到着したらしい。ほれ」
「む？」

「はいそのままそのまま、船体は右側に４５度！　あ～もう！　御手本見せたげるからコントロール回して！　キラ、サポートお願い！　ラクスは外見て全体的な様子教えて！」
「分かった！」
「大体で構いませんの？」
「うん、大丈夫。この日のために戦艦の操舵も練習してきたからね。サポートとナビがあれば余裕余裕」

マクロス・クォーターＳＥＥＤのブリッジ、そこでは仲良し三人組

（両手に華、もしくは幸せトライアングラーともいう）な燕＆キラ＆ラクスによって船体コントロールの指導が行われている真っ最中でもあった。結局三人が直接やってたが。

「角度オッケー？　ジグラットとか施設との距離は？」
「大分余裕がありますわ。レーダーでも艦の下などに熱源反応ありませんし」
「このまま着陸して大丈夫だね……アスランが凄い顔してるくらいかな、問題は」
「じゃあラクス、アスランに適当なメッセージ送っておいてもらえる？　内容はお任せ、出来たら笑えるやつで」
「分かりましたわ！　ふんふふ～ん♪」

鼻歌を歌いつつ、カチカチとウルフォンを操作するラクス。そして送られたメッセージは……。

『アスランへ。　バルキリー適正検査の結果は変わらず不合格でした、また次回頑張りましょう』

――もうこの三人、メソポタミア最強チームと並んで愉悦部だろとしか思えなかった。

「「「「うおおおお!?」」」」
「うわあああああ!!」

大勢の団員が驚く中、約一名絶望に打ちひしがれる者がいたが……まあ、いいだろう。
いよいよお披露目となるマクロス・クォーターＳＥＥＤ。

本来の五隻合体からエターナルも含めた六隻合体にバージョンアップし、更に装甲材質はマジンガーＺＥＲＯより賜った超合金ニューＺαへと全換装。
それに伴いエターナルもエターナルＦへと大幅な改修が行われた。
艦の両舷部が少々、並びに羽状の部分がかなり大型化し、羽は折り畳み可能なウイングスラスターに。しかもフリーダムを踏襲したのか大型の白主翼五枚と、その間を埋めるように金色の補助翼四枚を両舷に装備。
加えて大型化した両舷上部にはレール砲を搭載し、主砲は三連装に増設。
他にも変形機構の搭載を考慮した結果、各部にブースターやスラスターを増設したため重量は増えたものの、それ以上に推力が大きく上昇。
仕上げとばかりにカラーリングはクォーター側に合わせつつ、フリーダムを意識してダークブルーを基調としたトリコロールカラーに変更。
もはや別物である。こんなんバルトフェルド以下エターナルのクルーが緊張しっぱなしでも無理はない。
無事ジグラットの近くに用意されたスペースに着陸すると、満面の笑顔で燕・キラ・ラクスが、物凄く疲れた表情でバルトフェルド達が降りてきた。

「レジェンド様ー！　ギルガメッシュ王ー！　私達、頑張っちゃいましたー!!」
「三人で完成させた力作ですわ！」
「ダイゴさん！　マキシマオーバードライブ、新しいエターナルに無事搭載出来ました！　ありがとうございます！」
「「「「おい最後とんでもない事しちゃってんだけど!?」」」」

追加、エターナルＦにマキシマオーバードライブが搭載されていた。これで宇宙空間だと下手したらＭＳより早く動く可能性が出て

きてしまった……それ即ち合体したマクロス・クォーターＳＥＥＤにも同じことが言える。
……ついでに主砲と連結させたらマキシマ砲が撃てることも確定してしまった。もしやマクロスキャノンも……何で誰も止めなかったんだこいつらを。

「こんなものが出来るなんて聞いてなかったんだがね……」
「お疲れ様です、バルトフェルド艦長……」
「だらしがないぞ貴様ら。これしきのこと、艦首に腕組み仁王立ちし高笑いするぐらい出来ずして何が艦長か」
「「「「そんなんおたくらだけだ!!」」」」

バルトフェルド以下エターナルクルー一同、ギルガメッシュに声を揃えて言い返したが、ギルガメッシュはふははと笑うだけ。

「しかし中々どうして見事なものではないか。当然、あの機能も付いていような？」
「もち！　しかもエターナルがバージョンアップしたから変形後はフリーダムみたいな感じになるんですよー!!　強い、早い、格好良い!!
これが私達のマクロス・クォーターＳＥＥＤでーす!!」

わーいと手を繋いで喜んでいる三人だが、造ったものは相当えげつない。

「凄いもん作ったが、艦長とかどう決めたんだ？」
「えっとー、こんな感じに」

○マクロス・クォーター／艦長・燕
○エターナルＦ／艦長・バルトフェルド　艦長補佐・ダコスタ
○マクロス・クォーターＳＥＥＤ／艦長・燕　副長兼艦長代理・ラクス　艦長補佐・バルトフェルド

○マクロス・クォーターＳＥＥＤ（燕出撃時）／艦長・ラクス　副長・バルトフェルド　艦長＆副長補佐・ダコスタ

「あれ？　何でマクロス・クォーターＳＥＥＤの時はラクスの名前があるのに、新しいエターナル単体だと無いの？」
「それはマクロス・クォーターＳＥＥＤの全容を完全に理解しているのが私と燕、キラしかいないからですわ。何でも『合体時に解禁・変化する機能と装備が多過ぎる』とのことでして」

悪ノリしまくって機能爆盛した結果、超性能と引き換えにマクロス・クォーターＳＥＥＤはこの三人の誰かしらが艦長にならないと本領発揮出来ないというデメリットを抱える事になってしまったのだが……まあ、ラクスは余程でない限り直接出撃しないからさして問題でも無い気がする。

「燕、あの機体は持ってきてくれたか？」
「ＶＦ―１Ｓですよね。今出しますから～ってアスランそこ邪魔！」
「ぐはあっ!?」

レジェンドにリクエストされた機体を運んでこようとしたら、それにアスランがへばり付いていたので燕は容赦無く襟元を掴んでぶん投げた。
空飛ぶアスラン、眺めるラクス、落下予想点を見てみるキラ、そして……キラが見た先には無限殺しをスタンバってるオーフィス。もうお分かりだろう。
アスラン落下のタイミングに合わせて放たれたオーフィスの無限殺しは、以前よりも強烈な威力になるのだ。
「トゥアッ――!?」

何か超天元突破ギガドリルブレイクが炸裂したような途轍もない

轟音が響きあたり、アスランは失神。最近いいトコないな、元ザフトレッド。

「……じゃあ、ここでいいですか？」

「いいぞ。すまんな、無理言って」

「いえいえー♪　夢の結晶が完成したので全然無問題です！」

「さて、最大の触媒は用意出来た。あとは『ＳＤＦ―１　マクロス』に所属した騎空団のメンバーを並べれば準備完了、召喚はこの場で行う」

「え？」

レジェンドがそう言うと、前に出てきたのは一誠とトライスクワッドにゼット、及びそのサーヴァント達。加えてレジェンドのサーヴァント達だ。

しかも一誠に至っては当時のパイロットスーツまで着用している。

「え？　え!?」

燕だけが事の重大さを理解した。バルキリーの種類や初代マクロスの識別番号、そしてそのパイロットスーツ……それらが全て当て嵌まり、レジェンドが呼ぶに相応しい人物。それはもはやバルキリーを知る人物であれば誰もが憧れたであろう男。

「もう何人か泣きそうになっているがまだ早いぞ。涙はちゃんとあいつが俺の呼びかけに応え、現界してからにしろ」

そう言ったレジェンドも穏やかな表情で、一時的な召喚サークルの中心であるＶＦ―１Ｓの横を見やり――パチン、と指を鳴らす。

予想通り虹回転が起こり、呼ばれたのは……。

「待たせたなお前ら！
サーヴァント・ライダー！

ロイ・フォッカー参戦だ!!」

「「「「フォッカー隊長ぉぉぉぉぉぉ!!」」」」
「おう！　元気そうだな！　待たせたとは言ったが、かくいう俺も待ってたぞ！　いつ呼ばれるんだと散々焦らされたが、こんなお膳立てされてたからじゃ仕方ねえか！」

豪快に笑うその男性……身長は２１６ｃｍ、体重は１１８ｋｇと空の世界の種族であるドラフにも匹敵する見事な体格を誇り、黒い服と金髪がよく似合う姿は紛れも無くレジェンドが呼びたかった親友。

「時間が掛かってすまんな。絶対に外したくない以上、念には念を入れて準備させてもらったんだ。それに……呼んだはいいが、乗る機体が無いじゃあライダーとして『ふざけんな！』になるだろう？」
「そりゃそうか！　ふはははは!!」
「相変わらず堂に入った高笑いよ。ならば師父も悲願を果たしたことで、我もせずにはおれまい！　ふはははは!!」
「やっぱりお前さんのそれを聞かにゃ始まらんな！　それでこそだ！」
「であろう、であろう！　やはり貴様は『大空のカリスマ』持ちであったか!!」

あのギルガメッシュと対等に渡り合っている、と大勢の者が驚く中

……一誠達はフォッカーを囲んで再会を喜んでいた。

「一誠、あのヒヨッコがよくあの激戦を生き抜いたな。それだけでも立派なモンだが……俺には分かるぞ。お前、かなりモテてるな!? よし、せっかくだから俺が口説き方ってやつを伝授してやる。ただし、一番が誰かってのはしっかり決めとけよ！」
「フォッカー隊長、褒めてくれたのは嬉しいけど今その話題はスゲーマズいんです!!」
「何だ？ もしや誰が一番かで相手方がドンパチやるってか!?」
「スゲーよ隊長！ ピンポイントなんですけど!!」

再会早々、一誠の修羅場問題を言い当てたフォッカー。案の定、リアス達が言い争っている始末。

「ゼット！ 輝を引っ張ってくれてありがとよ！ しかしまあ、あいつが早瀬中尉を選ぶとは俺もちょっとしか予想してなかったぞ！」
「ホントそれでございましたよ！ そこはミンメイちゃんじゃないかと思いましたけど、結果的に大団円だったんで良しとしましたであります！」
「だろ!? どういうわけか『何かの拍子に急接近』がまさかミンメイじゃなくて早瀬中尉だと誰が予想したか！」

更にゼットと、後輩だった輝の恋愛で盛り上がり。

「知ってるかギルガメッシュ！ マックスはマクロス級の艦長だとよ！ 大出世じゃねえか！」
「フッ……奴ならば納得というものよ。この我が好敵手と認めた天才なのだからな。そして我も間もなく艦長になるのだ、遅れは取らぬぞ！ ふはははは!!」
「で、お前さんは狙った嫁を手に入れたか!?」
「絶賛敗北中に決まっていよう！ そこだけが我がマックスに勝てぬ

ところよ!!　おのれおのれおのれぇぇぇぇ!!」

やはりここで『ギルガメッシュ相手に逆に愉悦した』という衝撃の展開を目撃し、フォッカーが只者ではないことを知らしめることとなった。特にクー・フーリンなど、よくギルガメッシュに弄られている面々はフォッカーを尊敬の眼差しで見ている。

「長かった……これで漸く『スカルリーダー』の称号がお前に返せるよ」

「何言ってんだ。あの戦争が終わった時の『スカルリーダー』はお前だろう、レジェンド。今更返すもクソもないだろうが。座から見て知ってるんだぞ！　立派に勲章名まで頂いてんだ、ぶつくさ言うな！」

「だったらお前だってエースの証として『ロイ・フォッカー勲章』とか出来てるだろ！　しかも俺より先に！　つーかエースがお前なら俺の名の勲章なんて誰が持ってんだ!?」

「そりゃ未だマックスだけだぞ。お前の名前自体が凄すぎる上に、その功績まで合体したらそんなもん授与される奴はすぐ想像つくだろう。あの『レジェンド勲章』はそういうもんだぞ」

『アスカ記念日』と出身世界で記念日が作られていたアスカを始め、ウルトラ戦士やガトーなどの元軍属はフォッカーから聞かされ、レジェンドの偉業を改めて実感する。

なお、当のマックスことマクシミリアン・ジーナスもバトル７の艦長就任と同時に授与された時は内心飛び上がって喜びそうだったという。あの天才マックスでさえそれだけの年月を経て漸く授与されたというのだから、そのハードルの高さが伺えるだろう。

そんなこんなで大詰めであったフォッカーの召喚は大賑わい。その偉業を知っていた燕は真っ先にサインを貰い、彼が乗るＶＦ―１Ｓを彼女が作ったと知ったフォッカーは驚きと共に称賛を燕に送る。

しかも中身が最新スペック……それこそ完成後に燕が再度改造したためＹＦ―２９に匹敵するものになっていたにも関わらず、試し乗

りの１０秒で瞬く間に乗りこなしたフォッカーを見てアスランは復活したのにすぐ絶望（自分が乗れると思っていた）。

「イィィヤッホォォォウ!!」

「す……凄い！　あのスペックのバルキリーに乗ってすぐ対応しきれるなんて！」

「バルキリーが開発され始めた頃、あの人じゃなきゃ性能を引き出せなかった機体があるくらいだし」

「確かにアスランでは太刀打ち出来ませんわね」

元婚約者の一言でアスランは轟沈した。元々大空を愛するフォッカーと、バルキリーを単体で見ていたアスランの差がこれである。

ちなみにフォッカーはかつてトップエースでもあった為、そこでもアスランは大敗。ネビュラ勲章を授与されても、勲章自体に名が冠されたフォッカーやレジェンドはその上にいるのだ。

「このＶＦ―１Ｓ、中身は別モンだが乗り心地は最高だ！　大したもんだなお前さんは！　ありがたく使わせてもらうぞ！」

「キラ、ラクス！　私、伝説のパイロットから太鼓判押されちゃった！　ヤバ……テンション上がりすぎて鼻血出てブッ倒れそう」

「はい燕、後ろ向いてね。首トントンするから」

「落ち着く為にお水ですわ。よく冷えてますからね」

（ほほう、あの坊主……輝がミンメイと早瀬中尉の両方を取ったような勝ち組か。中々やるもんだ）

キラ、知らず識らずのうちにフォッカーから認められる。他にもタイガがジータとエレシュキガルの二人と円満だと知ると『輝もこんな感じなら良かったんだが』と思わずにいられないフォッカーであった。

今更だが、レジェンド達が初代マクロスの部隊の一員……というか、中核を担っていたと知った面々は驚愕。しかも全員がリン・ミン

メイ直筆サイン入りのアルバム（初回生産限定盤）を所持していた。シリアルナンバー付きの超激レア品、かの世界ではもはや遺産レベルのモノである。

「此度の夜は宴である！　準備の為の面々は残り、他の者はそれまで自由時間だ！　夜に備えて英気を養うも良し、テンション維持して楽しむも良し！　己の気の向くまま過ごすが良いわ!!」

ギルガメッシュの号令に大歓声が巻き起こり、その日の夜に行われる宴への期待が高まっていく。

嬉しさのあまり流れた涙は、笑顔という大輪の花となりウルトラ騎空団を包み込むのであった。

――おまけ――

とある世界の船団にて。

「だからやめとけってアルト。今のお前じゃ奇跡が起きても勝てないっての」

「うるさい！　もう一度だ！」

「何だ、まだやってたのか。ミシェル、相手は誰だ？」

「ああ隊長、あろうことか『英雄王』ギルガメッシュですよ。無謀もいいとこだ。なんたってあのマクシミリアン・ジーナス閣下が唯一ライバルと公言してる人物ですし」

「あの方か。最初は歴史上の人物と同じ名だからどんなもんかと様子見しようとした俺もあっという間に叩き落されたからな。しかし……艦長に聞いたんだが、あのロイ・フォッカーの親友であり、その

後を継いだスカルリーダー……レジェンド閣下はギルガメッシュやマクシミリアン・ジーナス閣下すら霞む程の化け物だそうだ。シミュレーターに入れた場合、あまりの強さにやった側が自信もやる気を無くすだろうということでデータは入っていないらしい」
「ホントですか!?　そういえば『ウルトラ小隊』のメンバーは殆ど情報が開示されてませんし……」
「この兵藤一誠さん、俺らとほぼ同い年であの戦争を最前線で戦い生き抜いたとか十分化け物だと思いますけどね」
「くっそぉー!」
「とか言ってる間にアルト先輩、またやられたみたいです」
「ていうか何だこの『ふはははは!!』って声は!　気が散って仕方ないんだよ!」
「『英雄王』は戦場でもそうやって高笑いしながら敵機を蹂躙したそうだ。それで気が散るなどまだまだだな、アルト」

「あら、珍しいですね艦長。ブリッジで写真を見てるだなんて」
「いや……ちょっとばかり思い出に浸りたくなってな」
(イッセー……多少なりとも私と同じく年を取っているか?　それとも変わらず元気溌剌としているか?　もしまた会えたのなら私は胸を張って言おう。お前やレジェンド隊長と共に戦ったからこそ、私はここまでこれたのだと)

ある世界のマクロス・クォーターの艦長ジェフリー・ワイルダーの持つ写真には、若かりし頃の彼と――レジェンド達やグローバル艦長以下、第一次星間大戦を生き抜き終結させた……初代マクロスのクルー達が写っていた。

特別編・宴開始まで新入りを案内しよう！

夜の宴までは自由時間、ギルガメッシュがそう宣言してから立香は村正と共に光達魔法騎士三人と、レジェンドのサーヴァントとして新たにウルトラ騎空団入りしたザガートとエメロードを連れバビロニア島の案内に乗り出した。

宴の時間も考慮すると、ウルティメイ島の方は後日回しになってしまうのでそこは予め知らせておく。

沙耶達は何やらやることがあるらしく別行動のようだが、立場上仕方ないと納得。比較的自由に動いているとはいえ彼女は一国（というか一衛星）の女王なのだ。

「さて、まずは我の治める空のウルクを見て回るがよい。そしてこのウルクの民がどれだけ強いかをその目にしかと焼き付けよ」

まさかガイド役を買って出たギルガメッシュに案内され、ウルクの町へと出た光達の前に広がるは整備された町並みと活気溢れる人々。空の世界であるため、当然ヒューマン以外にドラフやエルーン、ハーヴィンも在住していた。皆種族の違いなど気にせず、等しく『ウルクの民』としての力強さに満ちている。

「あ、ギル達も来たんだね」

「む……待てエルキドゥ、それは何だ？」

「ほら、露天ウルクバーガーの新作だよ。コロッケバーガーシリーズって名前で、結構種類あるんだ。ちなみに僕が食べてるのはグラコロバーガーね」

サクサクと音立てながらグラコロバーガーを食べて「むふー」と満足気な表情のエルキドゥを見ていると、ギルガメッシュを含む全員が飯テロを受けた気分になった。

しかも……。

「イッセー、私はダイナミックバーガーを所望します」
「僕はハイパービッグバーガーね！」
「私は無難にエヴィバーガーを」
「何で俺が奢る事になってんだよ!?　しかもセイバーとメリュ子のやつ値段が馬鹿にならねえぞ！」
「飲み物買ってくるわね。イッセー、一緒に飲みましょう？」
「……部長の優しさが心に染みるっ……！」
「「!?」」

露天ウルクバーガーにはイッセーハーレム（不憫ともいう）も来ていた。清姫はまだ常識的なものだったが、セイバーアルトリアとメリュジーヌは名前からして大層なものを強請っているし、一誠の身（というか財布）を案じてくれたのはリアスのみ。

「しかし毎度の事ながら、セイバーにせよ頭ドラゴン娘にせよ……何処にあれだけの量が入るのやら」
「オーフィスに比べたらまだまだじゃない？　あの子、戦士の頂盛りを普通に完食するらしいし」
「セイバーの方はそれも同じように完食するやも知れんがな」

結局、立香と光が食べたそうにしてたので買ってあげたギルガメッシュ。何だかんだ言いつつ自分はカニコロバーガーを注文していた。
……王特権で大きくしてもらったのは内緒。

ウルクの人々は皆『全て王に頼り切りなど言語道断。王のみに負担をかけて何がウルクの民か』と、まるで数日後に向かうセフィーロの見本にすべき意志を示していた。その光景はエメロードやザガートにとって非常に輝いて見えていたことをギルガメッシュに伝えると、彼は上機嫌に頷く。

「であろう、であろう。エメロードよ、貴様は抱え込み過ぎた。歴代の『柱』全てがそうだったのかも知れんが……姫だからと別に踏ん反り返っていたわけではあるまいに、必要以上に背負いこむこともなかったのだ。そんなことは裁定者たる我や師父に任せておけばよい。それを考えればザガート、悪と呼ばれようがエメロードを枷から解き放たんとした貴様のその行動力は天晴よ。歪な世界に切っ掛けを与えた者として、我が勇者と認めてやろう。ふはは」

嫌味ではなく、ギルガメッシュはザガートを褒めている。それはかつて神から人を自立させた王として自身に重なる部分があったからなのだろう。

そんな時、エメロードが突然ブッ飛んだ事を口にした。

「あの、ギルお兄様」

「「「「ギルお兄様!?」」」」

「ひう!?」

まさかのギルガメッシュをお兄様呼び（しかも略称で）。これには立香と村正、魔法騎士一同もびっくり。

「あ、えっと……わ、私達にとって人としてもサーヴァントとしても先輩で……その、マスターはお父様みたいで……だから……」

「ふはははは！　それに我も貴様も金髪であったな！　よい！　許す！　今後もその呼び方で構わんぞ！　ついでに師父には貴様と同じゆるふわ金髪ロングヘアで体格や性格も近いユーリ・エーベルヴァインという直属の部下がいる。そいつとも仲良くするがいい」

「……！　はいっ！」

「あとはあれよ、そのユーリの近くにロリ神レクイエム撃ちそうな奴と長尾へべれけに似た声の青い奴とイシュタルに似た声の黒い奴がいるからそいつらとも仲良くしてやるがいい」

「「「「紹介が雑ゥ!!」」」」

どこぞの世界でユーリやエメロードと同じく金髪で外見不相応な年齢の合法のじゃロリがくしゃみで爆風を起こし、作ったばかりのMSがダメになって途方に暮れたりしたが知ったこっちゃない。

「ろりしんれくいえむ……？」
「ねえギル、束ボイスかイオボイスの方が分かりやすくない？」
「あ、それなら分かります！　でも長尾へべれけはなんとなく分かりますけど、イシュタルとは……もしかしてこちらの？」

そう言って先程教えてもらった空間ディスプレイを苦労しつつ表示させ、指さしたのは……。

イシュタル・ランゴバルド（ありふれ）。

「ふふはははははは!!」
「あはははははは!!」

ツボに入ったギルガメッシュとエルキドゥは片や笑いながら地面を何度も叩き、片や地面を何度もゴロゴロ笑い転げている。エメロードとザガートは困惑しているが、かの女神に対する彼らの感情を知る者達は納得してしまう。

「えっ……えっ……？」
「いや何、気にするなエメロード。貴様は悪くない」
「うん大丈夫だよ、笑いを提供してくれてありがとう。今度イシュタルが出てきたらいい感じに煽るネタが出来たね」
「全くよな。今世において変わらずあの邪神に幾度となく困らせられてる師父にも是非聞かせてやりたかったわ。爆笑確実であろう」

ひとしきり笑ったあと、さあ再度出発と思ったところでとんでもないものが一行の眼前を走っていった。
桃太郎一行のコスプレをしたようなにゃんこが、ガトリングガン付きのレーシングカーみたいな車に乗り『世界一』の旗を掲げているという珍妙なもの。しかもマシュ付き。
爆走兄弟ピーチジャスティス、つまり蛇倉苑のお弁当宅配である。

「「「「何だあれ!?」」」」
「我が知らぬ間に宅配にゃんこを増やしているとは、マシュと蛇倉苑もなかなかやるではないか」
「あれ以外にもあるの!? あ、そういえばさっきはライオンなのか何なのか分からないものだった気が……」
「……あの寝そべっている奴、偉そうだな」
「「ザガートは感想そこ!?」」

何かザガートの意外な一面を垣間見たが、にゃんこ……とそれを自在に使役してるマシュについて謎が深まった（ような気がする）。

そんな話をしつつ彼らが次に向かったのは建設中の『バビロニア乗艇港』。既に乗艇港としては十分機能するが、ここのコンセプト……即ち『食べて飲んで遊べる乗艇港』を満たすためギルガメッシュ主導のもと開発を進めているのだ。

マシュはここに蛇倉苑の弁当を配達していたのである。

「すっご……国際空港と同じか、下手したらそれより大きいわよここ」
「であろう？　我がウルクの民を筆頭にバビロニア島とウルティメイ島の総力を結集し建設している乗艇港よ。ウルトラ騎空団からもかなりの人数が建設に協力していてな、この様子なら完成もそう遠くなかろう」
「あ！　ギルガメッシュ王、良いところに！　実は問題は無いのですが、気になる部分がありまして――」
「まあ待て、盤面を見てやる。どれどれ……ふむ、これはだな――」
「じ……人類最古の王が最新設備を熟知してるって……」

慢心王ならこうはいかない、聞かれた事へ真摯に対応する究極英雄王。親切丁寧に説明し「日頃の職務、大義である。これからも励めよ」と労いの言葉で締める彼を見たら運命の夜の面々はどう思うだろうか。

「この乗艇港はいざという時の避難所になるようにも設計してある。故に悪天候で出発が遅れる、もしくは欠航となった時は即座に宿泊・休憩が可能な施設へ転送可能な設備も用意しているのだ。無論、ここでの宿泊や休憩も可能よ」
「すっごいなー！　みんなの事考えてるギルガメッシュ王かっこいいなー!!」
「ふはははは！　そうダイレクトに褒めるでないわこの褒め上手さんめ！」

キラキラお目々で純真、嘘言わない魔法騎士の光に称賛され上機嫌なギルガメッシュ。
しかし、確かにここが完成すれば空の世界で唯一無二の超万能乗艇港となるのは間違いない。現に、ここを建設中の空の世界の民もこの乗艇港を楽しみにしながら――否、既に楽しみながら造っている。

「このギルガメッシュ王発案のエレベーター凄えぞ！　なんせドラフ男性二十人乗っても問題ねえ！」
「やべえよ……俺、ウルティメイ島でコンビニの素晴らしさを知ってから何処の島でも探しちまうんだ。この乗艇港出来たらまずここのコンビニを制覇するんだ……」
「お前ちょっと休めマジで。休めっつったらホラ、三階の全種族対応カプセルホテルは特例でもう営業してんだろ。あそこ行けあそこ」
「あそこはあそこでやべーぞ。ウルトラ騎空団の人達に聞いたけど、普通のカプセルホテルよりバリバリ進化してんだと。せめて今日のノルマはやってけよ、あと少しなんだろ？　もうひと踏ん張りしようぜ」

いくつか営業している施設があり、もう話題になっている。先のマシュが勤めている蛇倉苑も当然の如く出店予定。人員の育成その他も済ませ、完成後にすぐに入れるよう準備も完了しているとのこと。さすがジャグラー店長。
そうしていると、ある四人組に出会う。

「お久しぶりです、ギルガメッシュ王」
「お！　本当に現場に来るんだな！」
「来るに決まっていよう。部下に任せきりで進捗状況の確認を怠る上司は使えぬ上司だ、たわけ」
「そりゃそうだ！　ワハハハハ！」

長身で襟元程の長さの銀髪美青年と、豪快に笑う金髪ショートで大柄な男性。そしてその後ろでは標準体型の黒人男性と、凛とした雰囲気の女性が乗艇港建設に参加していた。

「よもや貴様らも参加していたとはな」
「ええ。今度は母さんも連れてきますので」

「俺は婆ちゃんだ。あの御大将と出会ってから、俺も班長……いや『元』班長も世界が輝き出したって感じだからな！　あの人に恩返ししようにもどうすりゃいいか考えてたところにこの乗艇港の話だ。あの人には勿論、お前さんにも恩返しが出来るし……この乗艇港の内容を聞いたら俺らも楽しめる！　こんな話に乗らないはずないだろ！」
「ふはは、やはり貴様らもそう思うか。して、例の二人はリハビリを終えたのか？」
「先日、正式に退院許可が出てました。彼らも別の区画で参加しているはずですが……」
「まだこいつの口調に慣れないんだと。まあ、俺ら四人とあの二人は『それぞれ異なる世界線』から連れて来られたから仕方ないっちゃそれまでだがよ。俺としちゃこいつがタメ口で話してたって方が驚きなんだよな」

頭を掻きながらそう零す大柄な男性に、銀髪の男性は苦笑しつつ「やれやれ」といったポーズを取る。察するに銀髪の男性より大柄な男性の方が年上かつ先輩なのだろう。
ただ、立香達は銀髪の男性とあったことが無いのに既視感を感じた。

「……？　俺がどうかしましたか？」
「あ、いえ！　何処かで会ったかな～なんて」
「そうですか。俺も彼らも貴女達とは今日が初対面だと思います。基本的に惑星レジェンドにいますから」

そう丁寧に説明してくれた銀髪の男性に、立香達は凝視してすみませんと謝ると「気にしないで下さい」と返してくれた。
ギルガメッシュとエルキドゥが顔を見合わせて笑っていたのに気付いたのはその男性だけだったようだが。

四人組と別れ、乗艇港から移動したギルガメッシュらが向かったのはバビロニアガーデン。光達が学生ということもあり、やはりここは外せないだろうというわけだ。
そんな時、立香のウルフォンが鳴る。相手はキリシュタリア。

「あ、キリシュタリア！」
『やあ立香！　……よし、もう大丈夫そうだね』
「うん、心配してくれてありがと。今はやる気満々だから！」
『それなら尚の事安心だ。団長さんから連絡を貰ったけど、何とか夜の宴には間に合いそうでね。マナリアからの留学組と馳せ参じるよ！　そして私の新ジョブ・ライジングフォースの初お目見えとさせてもらおう！』
「え⁉　いよいよキリシュタリアもＥＸⅡジョブデビュー⁉　わー気になる気になる！」
『和風から一転、ロックになった私をお見せしよう！　宴ではアオイドスさんやフォウくんと『突撃ラブハート』をセッションするから期待しててくれ！』

出立前から立香らの様子を気にかけていたキリシュタリアは、声色から彼女がいつもの調子を取り戻していたと分かると自身が手に入れた新ジョブの件で話を弾ませた。しかもセッションとか言い出したので立香は本気で気になっている。

『キリシュタリアちゃん、誰と通信中だい？』
『シエテ団長代理！　元気を取り戻した立香さ。宴での盛り上げ予告ってところかな』
「ヤッホー、天星剣王な団長代理！」
『お、嬉しい二つ名で呼んでくれるね立香ちゃん。キリシュタリアちゃんから聞いてもう大丈夫らしいけど、あんまり溜め込んじゃ駄目だよ？　いざという時はシエテさんが駆けつけてちょっとばかり本

気出してあげるからね』
「はーい！　ちなみにシエテ団長代理、あんな凄いのに何か損してるとか言われない？」
『いやホントそうなのよね。う～ん……笑い方が悪いのかなぁ、俺……』

通信先で苦笑しつつ割と本気で悩んでるシエテの姿が簡単に思い浮かび、立香と村正は顔を見合わせて笑う。
宴を楽しみにしつつ通信を終えた立香だが、ここでふとした事に気付いた。

「そういえば団長は？　エルキドゥさんは途中から合流したけど」
「エルキドゥもほぼ偶然であったのだがな。師父は――」

☆

「おい、レジェンド……いいのか？　貴重なものなんだろう？」
「構わんさ。ザガートにも渡してある。折角の機会に言葉だけでは格好付かんだろうに」
「まあ、そりゃそうなんだが……」
「正式なもんを贈るまでの繋ぎだと思えばいい。デザインが決まったら俺に言えば素材見繕って加工してやる」
「そんなことまで出来るって、お前は逆に何が出来ないんだ全く」

宴の準備を早々に終え、ウルティメイ島の別荘で寛ぎながらレジェンドはフォッカーにある物を渡していた。何でも宴にて行うサプライズ召喚後必要だということだが、モノがモノだけにフォッカーは気付いてしまったので流石というべきか。

「しかし――」
「俺が確実に喚べるか不安、か？」

「いや、そこは心配無いだろう。俺や先の二人は狙って喚んだらしいからな」

そう続けてフォッカーが告げたのは……。

「こういうもんはまずお前の嫁さん達に渡すもんだろうが。ほら、あの銀髪で『我が夫』呼びしてた別嬪さんや紫基調の『我が伴侶』呼びしてた別嬪さんのことだ」
「いやそれ二人が勝手に言ってるだけだからな!?」

「何だそうなのか？　だが嫌じゃないだろう。それにお前のことだ。どんだけ数多の美女を落としまくってるかと思えばとんでもない大金星を撃墜しまくりじゃないか、おい！」

本格的な飲みは宴までお預け、ということでアルコール度数低めの酒を軽く一杯飲みながら上機嫌なフォッカー。いつかは言われるのではと覚悟してたモルガンとスカディが妻認識、まさか親友に言われることになろうなどレジェンドも……いや、フォッカーのこの手の事に関する察しの良さを侮っていた。
だってモルガンもスカディも、フォッカー召喚後……実はそれを一度、それもフォッカー達が少し離れている時にしか言っていない。どんだけ（限定）地獄耳なんだこのトップエース。

「ああ、それにあの金髪ツインテール（※キャストリア）や金髪ロング（※アーシア）の娘も俺のセンサーに引っ掛かる。寧ろ他とは一線を画してるな」
「おいちょっと待てロイ、お前のセンサーどんだけ敏感かつ精細な情報手に入れられるんだ」

キラーン☆と目を光らせつつニヤリと笑うフォッカーに、初めてレジェンドは戦慄した。かつて伊達と酔狂の騎空団とやらの団長だったというイングヴェイと初対面で意気投合した男は半端じゃない。

「いずれにせよ、式をあげる時は言ってくれ。仲人は俺達が引き受けるからな」

「やれやれ……ま、そうなった時は頼むさ」

この話題では常に先手を取られて敵わん、とレジェンドは軽く溜め息を吐きつつ苦笑する。この調子では宴に合わせて一時的に帰ってくる米花町メンバー、特にカドックあたりも誂われそうな予感がする。アナスタシアも一緒になって。

もう間もなく始まる歓迎会という名の宴――その場にて、新たに驚愕・涙・笑顔が溢れることを予想していたのはこの場の二人とギルガメッシュのみであった。

――おまけ――

「し……尻をやられたままでは終われない！　いざ、今度こそ私の英霊をこの１１連召喚で！」

懲りずに美女英霊を呼び出そうとするマーリン。

彼が決死の思いで呼び寄せたのは――!?

「にょ！」←ミルたん（プリズマ☆ミルたん）

「にょ！」↑ミルたん（元祖）
「にょ！」↑ミルたん（デ・ジ・ミルたん）
「にょ！」↑ミルたん（オールマイトコス）
「にょ！」↑ミルたん（クラウドちゃんコス）
「にょ！」↑ミルたん（巫女コス）
「にょ！」↑ミルたん（裸エプロンコス）

……＋激辛麻婆豆腐×４……

――その日、マーリンは燃え尽きた。
※ミルたんセブンは強制送還されました。

――もひとつおまけ――

「すみませーん！　シン君迎えに来ましたー！」
「迎えが来たようだ。今日はここまでにしよう」
「はぁっ……はぁっ……ありがとうございました、先生！」
「いや……俺に出来るせめてもの罪滅ぼしはこれぐらいしかない。『並行世界の俺』が引き起こした被害を思えば、御粗末にも程があるが」
「でもそれはあくまで『並行世界の』先生で、先生じゃない。いきなり押し掛けて無茶言ったのに、嫌な顔しないで俺に剣を教えてくれてるじゃないですか。その並行世界の先生がどんな英雄だったか知らないけど、俺は俺の目の前にいる先生の方が本当の『英雄』だって胸を張って言えますよ！」
「……！」
「じゃあ、先に宴の場に行ってますね！」

「お？　どうした？」
「いえ……工事現場だからか目に埃が……」
「……そっか。しっかり顔、洗っとけよ」

「シン君、もしかして専用ジョブのウェア？　凄く似合ってるよ！」
「へへ……ありがとうございます、グランさん！　これ、先生が少年時代に手に入れたものを団長さんが仕立て直してくれたやつだって」
「良いなあ、そういうの。新世代へ受け継がれたって感じで」

【シン・アスカが新ジョブ『ストリームブレーダー』＆専用ウェア『新世代（ニュージェネレーション）リーサルフォーム』＆専用武器『星護刀・弐式』を手に入れました】

特別編・宴、開幕～バカ騒ぎはウルトラ騎空団の華～

レジェンドがストック召喚を終えたその日の夜。
予め済ませていた『準備』によってウルティメイ島のレジェンド別荘とバビロニア島の首都ウルクのジグラットを繋ぎ、加えてウルク全土を挙げるという大規模な宴――即ち歓迎大宴会。
開始時刻にはなっていないが、待ち切れなかったのか予想以上に早くほぼ全員が集合。ほぼ、というのは米花町組がまだ帰って来ていないためだ。
何でも連続爆破事件に巻き込まれて『爆弾を遠くに持っていこうとして自転車を走らせていた、よく遭遇する探偵事務所の子を庇った散歩中のアキレウスが負傷して入院』やら『マリューがムウとオールナイト上映の映画を見るために待ち合わせた米花シティービルが爆破されて、これまたよく遭遇する探偵事務所の一人娘や他の客と一緒に閉じ込められた』やら聞いている側としては真っ青になる出来事に合っていたなら仕方ない。よく無事だったな、としか感想が出ないのも当然と言える。
マジで大丈夫か米花町組。
そういうわけでいざ宴開幕――となる直前に待ったをかけたレジェンド。ここで盛り下げんでも……と誰もが思った直後に彼はサプライズ召喚を実行したのだ。
そして呼び出したのは……。
まずセイバー、真名をイノーバ。
続いてキャスター、真名をクローディア・ラサール。
これにセフィーロ冒険組や初代マクロス関係者は又もや度肝を抜かれる事になった。片やエメロードからザガートへと贈られた、人型にもなれる精獣。片や初代マクロスの主任オペレーターにしてフォッカーの恋人。
つまりどちらもレジェンドが呼び出した三人に関わる人物（片方は精獣だけど）な上、クローディアの方はレジェンドを始めとするフォッカー以外のマクロス組と、イノーバの方はエメロードとザガー

ト以外のセフィーロ組と面識があったのである。
召喚したばかりのイノーバは案の定レジェンドをマスターと認めるかどうかはこれから、と告げたのだが……直後に生前の主であったザガートから途轍もないプレッシャーをかけられ、加えてエメロードの姿も確認した途端に萎縮。
レジェンドのチートラマンぶりを滾々と各所から説明され、真っ青になりつつ手の平返しで忠誠を誓った……のだが、レジェンドはマスター権のみ保有するということで、指示権はザガート及びエメロードへと譲渡。
これはイノーバが生前、エメロードからザガートへと贈った精獣であることに由来したレジェンドの計らいであった。
……が、本音は『あ、こいつエメロードかザガートの言う事しか聞かねーな。めんどいからもう二人に指示権押し付けちまおう』とレジェンドがイノーバを召喚してすぐ思い立ってしまったからである。
まあ、レジェンドも彼ら三人も満足行く結果となったので良しとしよう。
クローディアの方は比較的円満であったが、これまたレジェンドの計らい――こちらはフォッカーも絡んでいた――により、空の世界においても貴重な品である『久遠の指輪』をフォッカーがクローディアに渡してプロポーズ。宴の開始直前に呼ばれるだけでなくプロポーズまでされるとは予想だにしていなかったクローディアだが、ＮＯ返事などある訳がなく笑顔で承諾。
改めて『クローディア・フォッカー』と自己紹介をし直すとレジェンドの拍手を皮切りに宴の場は盛大な拍手と歓声に包まれる。
サプライズは失敗する可能性も高いと言われるが、レジェンドのそれは見事大成功。
かくして、新しいメンバーの歓迎会と再度セフィーロへと渡るメンバーへの激励会も兼ねた大宴会が幕を開けた。

☆

宴が始まってすぐにカドック達も一時帰還。やはりアキレウスの入院やマリューが巻き込まれたことを心配する声が多い。

「……ってわけでよ。恐ろしく頭と行動力がずば抜けたガキなんだが、少しは自分のことも考えろってんだ全く……」

「しかも犯人があの森谷帝二だとは……」

「森谷帝二……モリヤテイジ……モリアーティ？」

「ミゲル君、いくら名前が似てるからって私は関与してないからネ？　いやホントに」

ぶっちゃけモリアーティなら本気を出せばそれ以上の結果になるだろうがそれは置いておく。

「実際はラミアス艦長だけでなく、私やカドックも巻き込まれたのだけれど。あの子達を送る為に乗った電車で」

「ああ、あの時か」

「爆弾何処にあったんだっけ……確か線路の間だったと思う」

「それに気付いて警察に告げた矢的先生を、何かあの子が驚いて見てたわね」

「フォウ……（あいつか……）」

以前いきなりお手をさせようとしてきてフォウくんビンタをブチ込んだ少年を一発で思い浮かべ、今度やらかしたらキャスパンチをかまそうと誓う我らがウルトラけものであった。

「……というかキリシュタリア、アンタ変わり過ぎだろ！　いつもの褌姿はどうしたんだ!?」

「これこそ私の新ジョブ『ライジングフォース』さ！」

「パンクロッカーの間違いじゃないのか!?」

「ようしやろう、アオイドスさん！　フォウくん！　突撃ラブハートだ！」

「フォーウ！」
「任せろ、ワクセイドス。俺はこの日の為に全パートの練習を重ねてきた……さあ！　過激にＦｉｒｅ!!」
（（（（ワクセイドスー!?））））

アオイドス恒例の『バンドメンバーに色＋ドスな名前をつける』が発動。ただし、何故かキリシュタリアは惑星轟から取られたワクセイドスとかいう名前にされた。しかも本人は気にしていない。
なお、フォウくんはフォウくんらしい。何故かと問うもフォウくんだからとしか返ってこなかった。フォーウ。

「え？　新型？」
「うん。キラの反応速度が最近さらに上がってきてるから、そのうちメサイア側が対応出来なくなると思ってね。今までがカスタム機だったし、この際それを元に再設計し直して作っちゃおうと思って……もう作っちゃった」
「相変わらず早いね!?」
「燕驚異のメカニズム、ですわ！」
「えへ☆」

どうやら強化型メサイアではなくガチモンなキラ専用の新型バルキリーを燕が拵えたと知ったキラとラクスは、びっくりしつつも彼女ならと納得。一方アスランは友人が二機目のバルキリーを貰ったと聞いてそろそろ精神がヤバい。

「一応メサイアを参考にしてるって事で、名前は『ＶＦ―２５ＥＸ―Ｆメサイアフェーダー』にしたよ。勿論強化型メサイアで使えた専用パックは全種使用可能！　というか、最初からそれらの使用を前提としてるから前より使いやすくなってるんじゃないかな。そこらへんはキラに乗ってもらってから調整した方がいいかも」

「フェーダー……ドイツ語では羽。さしずめ救世主の翼、でしょうか。素敵な名前ですわ」

わいわい賑やかな女子二人に対し――。

「あ……あぁあ……」

「なあキラ、アスランが本気で死にそうなんだが」

「そこまでして無理にバルキリー乗る必要ないよね、アスラン。というか燕から度々『蹴り癖の所為でバルキリーに向いてない』って何度も言われてるじゃないか」

「確かバルキリーって脚が重要なんだよな。ガウォーク形態なんてそれが嫌という程見てて分かるし」

「ラスティの言う通りだよ。加速は勿論、ブレーキをかける時も脚部のメインスラスターを使うから」

何か横たわって涙を流すアスランを見つつ、飲み物片手に談笑するキラ、ミゲル、ラスティ。

「しかしまあ……何ていうかさ、キラってアスランより可変機の扱い上手くない？」

「!!!!」

「イージスの変形はあれ結構キワモノ路線だったけどさ、それを差し引いてもファイター・ガウォーク・バトロイドの三形態を使い熟して縦横無尽に飛び回るとか普通にアスラン以上じゃん」

もうやめてラスティ！　アスランのＨＰは０よ！

どうやらニコルもどうやって慰めようか困っており、ディアッカはおろかイザークすらドン引き状態の今のアスラン。

そんなときに救いの手が差し伸べられ――。

「いつまで凹んでんじゃおらー!!」

「ごふうっ!?」
「「「「アスラーン!?」」」」
「うわ、良いの入ったなー」
「ですわね。股間でないだけ有情ですわ」

――なかった。

苛ついた燕が思いっきり腹にストンピング。元クルーゼ隊の面々も流石に心配するが、本来心配するはずのキラ(友人)とラクス(元婚約者)はむしろ燕派。

「お……おごご……!」
「キラだってMSとバルキリー、それぞれ乗ってる時の戦法を使い分けてるのに……アカデミーとやらで首席だったらしいアンタがそれを何で出来ないの!?」
「燕、きっと最近のアスランは髪の生え際の事ばかり考えているからですわ。いっそツルツルにしてみれば逆に悩む必要も無くなり、柔軟な思考が可能になるのでは?」

……燕の意見は真っ当だが、ラクスのそれは悪意があるようにしか聞こえない。ちなみにキラは自分の髪を手鏡で確認し「うん、全然大丈夫」と一人頷いている。

「じゃあ新しい名前はツルリン・テカだね」
「やめろォォォォォ!!」
「だったらお前もウジウジをやめろデコ助野郎!!」
「がっファ!?」
「……いやアスランってマジ首席卒業なんだけど、そんな奴をぶん殴って数回バウンドさせながら何メートルもブッ飛ばす燕って何者……?」

ディアッカが頬を引き攣らせながら呟く。今メカニック昔アサシ

ンとかバルキリー大好きとかは分かるが、バーサーカー特性持ってても不思議じゃないパワーもあるとか何この子。

「せっかくキラの友人だし（これ以上しつこくされても鬱陶しいから）専用のバルキリーぐらい用意してあげようと思ってるけどさあ！お前がそんなんだから一向に先に進まないんだよ！　乗りたきゃ本気で自分を省みなさい!!」

「俺専用のバルキリー!?」

「燕、いつも夜遅くまで頑張ってましたわ。眠そうな目を擦りながら」

「だからアスランも真面目に頑張ってよ。じゃないとジャスティスに後ろから反応弾撃ち込むから」

「「「「物凄く物騒だー!!」」」」

燕の爆弾発言で復活したアスランだが、今度はキラからとんでもないプレッシャーをかけられる。ミサイルか、酷ければスーパーアグニがブチ込まれるかと思ったらそれ以上にヤバいものを持ち出してくるあたり本気で容赦無い。

なお、燕の本心に気付けたのはラクスだけ。

そしてアスラン専用のバルキリーはどんなものか気になったキラが燕に尋ねたところ、空間ディスプレイに映し出してくれた。

ＶＦ―２７　ルシファー。

ＶＦ―２５の姉妹機として開発されたそれは、元々サイボーグ兵士が乗る事を前提としているため優れた機動性を発揮出来る反面、他の機体より高Ｇによる負荷が重いのだ。

コーディネイターかつ軍属、それもエリートであるアスランでどうにか耐えられるだろうかという代物。他にも完全な思考操縦とそれを利用した遠隔操縦など、様々な機能を持った高性能機である。

ペットネームに関しては反応した者がいたものの然程気にされなかった。

「この機体さ、正直なところ操縦技術だけで最低でもキラくらいのレ

ベルは無いと真価を発揮出来ないんだよね。加えて耐Ｇ関係も高レベル要求してるから、レジェンド様かフォッカー隊長に使ってもらおうと作ったんだけど……」

当の二人はそれぞれ「俺の愛機だってお前が作ってくれた永久通用する決戦兵器レベルのバルキリーだろう」「俺はお前さんが作ってくれたこのＶＦ―１Ｓが気に入ってるんだ」と返し、使用している燕作のバルキリーを手放す気がまるで無いため仕方なくパイロット候補を諦めた。

それに尊敬する二人が自分の最高傑作たる二機を愛用してくれているのが嬉しいというのもある。

「そういえばあの二人、バルキリーに付いてる操縦補助ＡＩ……要らないって言って取り外したんだっけ」

「うん。それであの動きだからマジ別次元。勲章に名前が付いてるレベルのトップエースは格が違うね、やっぱし」

「……！　そうか！　ネビュラ勲章を授与したアスランより上だと証明するには、ロイ・フォッカー勲章かレジェンド勲章を授与されればいいんだな！」

（イザーク様……それは正直ネビュラ勲章より難易度が遥かに高いと思うのですが）

ちなみにロイ・フォッカー勲章……あのイサム・ダイソンで複数回授与されるというレベルなのでラクスの思っている通りである（ただし問題児なのでいずれも剥奪されているのだが……）。

レジェンド勲章に関しては以前説明されたように、あのマクシミリアン・ジーナスが長い年月を経て漸く授与される程だ。

ウルトラ戦士に例えるならロイ・フォッカー勲章がスターマーク、レジェンド勲章は宇宙の永遠の命『デルタスター』（現状レジェンドを除けばマンしか可能性がない）だと思ってもらえれば良い。

その後、イベント用に多目的シミュレーターが宴の場にあったこと

もあり、聞きつけたフォッカーによってその場で操縦試験が行われたのだが……。

「何だその飛び方は!!　そんなヘロヘロ飛んで叩き落されたいのか!!」
「い、いえ!　ただ……俺の専用バルキリーというのは姉妹機があるらしいので、そちらを使ってやったほう――」
「バカ野郎!!基本がなっちゃいないのに機体の種類もクソもあるか!!」
「すっ……すみません!!」

アスランは徹底してダメ出しされた。フォッカーの言っていることは至極真っ当なことであり、その映像を見ながら燕が腕組みしてうんうんと何度も頷いている。

そして……。

「ガウォークに頼り過ぎるな!　便利だから使いたがる気持ちは分からんでもないが、バルキリーのファイター・ガウォーク・バトロイドそれぞれの長所と短所を理解して使い熟せてこそエースパイロットとよばれるんだ!」
「くっ……!　そんなこと分かっている!」
「分かってないからこうして怒鳴られてるんだろうが!!」
「もっ……申し訳ありません……っ!」

あのイザークすら萎縮してしまうほどに強烈な指導が入る。レジェンドの親友なだけあり、かつて巨大戦を舐め切ったサーヴァント達をコテンパンに叩きのめした時を思い出している者達がチラホラ。

「俺達も最初はかなり怒られたよな。まあ、イキりまくってた頃に師匠に根性叩き直されてたから耐性あったけど」

「俺も何だかんだ言って訓練学校じゃ父さんに厳しく言われたし」
「未だウルトラ戦士としては三分の一人前と言われてる俺が通りますでございますよ」

上から一誠・タイガ・ゼット。フォッカーの訓練を受けた三人（ただしゼットは当初から合格点。さすが超高性能可変機を設計し乗りこなすエースパイロット）は懐かしく思いながらその光景を眺めている。

何にせよ、アスランは自分専用のバルキリー入手を目指し訓練に励むのであった。

ただ……。

「ほう！　やるもんだな！　今のは特に良い感じだ！」
「ありがとうございます！」

キラがフォッカーに文句無しと褒められていて、アスランは少し凹んでいた。

「ラクスー、そろそろ準備しよー」
「はーい」

続いて出力された多目的シミュレーターの映像は何やら列車と、それを追うヘリコプターが映し出される。

どうやら占拠された列車を止めてホームに到着させないようにするミッションのモードらしい。

「このミッションモード……誰か撮影か何かしてんのか？」
「我が主、さすがにミッションモードを使ってまで撮影は……いや、逆に現実味が増すからあり得るか……？」

フーマと小太郎がそんな話をしていると、ヘリコプターから誰かが姿を現した。

「え……シン（君）!?」

「お兄ちゃん!?」

グランやビィ達、彼らと同じテーブルで食事を楽しんでいたマユが驚きの声を上げる。シンとマユの両親も、声には出さないが驚いているようだ。

しかし基本的にシミュレーター内へ外部からの音は聞こえないようになっているため、一部例外を除き彼らの声はシンに届かない。

そして当のシンはというと、なんの迷いも無く列車へと高さ数メートル（推定5メートル程）の位置にあるヘリコプターから飛び降りた。

普通なら悲惨なことになりそうなものだが、シンは何事も無く平然と列車の屋根に着地。

「は……？」

「ちょい待ち、あの坊主まだ13歳とか言ってなかったか？」

「だよな？　あ、エリートなら若いうちからあれだけ動けるってことか！　どうだ、アスラン!?」

「……」←フォッカーのスパルタ試験でイザーク共々真っ白になり倒れ伏しているアスラン

「駄目だこりゃ。しばらく使い物になんねえな……あの旦那、どんだけしごいたんだ？」

そうしていると、シンに続き先刻乗艇港にいた四人も飛び降りて来る。

「おい、あの銀髪の……何か既視感があるぞ」

「カドックも？　でもあの人はさっき乗艇港で会った時には『初対面だ』って言ったんだよね。嘘とか付いてるように見えなかったし」

「うん、私も立香ちゃんと同じだ。あの人は嘘を言ってないと思う」
「……誰だ？」
「あっ！　ごめん、私は獅堂光！　立香ちゃんや村正さんにはセフィーロで――」
「大丈夫だ、大体理解した。僕はカドック・ゼムルプス、立香と同級生だと思ってくれればいい。メインジョブはマナダイバーを選択している」

よろしくとニコニコ挨拶する光にカドックは「ああ、立香と同じタイプか」と納得。こういうタイプは基本表裏が無いので魔術師としては付き合いやすい。
一番たちが悪いのは堕天司ベリアルのような連中。嘘か本当か分からない発言ばかりなので信用出来ないのだ。
それはそれとして、シミュレーター内での会話は外部にも聞こえる。

『シン、今回のミッションでは列車内に友軍はいない。これがどういうことかは説明しなくても分かるな？』
『つまり、ここにいる俺と先生達以外は全員敵……！』

銀髪の青年は頷き、刀を抜く。

『俺達全員でフォローする。お前は今まで訓練してきたことを存分に発揮することだけ考えればいい』

その言葉にシンは表情を引き締めて頷くと、前を向いて刀を抜き一気に最高速度で駆け出した。その後に四人も続く。

「いや速くね!?」
「年齢的に考えても将来有望株だな」

団員達からも中々の高評価なシンだが、さらなる衝撃はその後にあった。速度を殺さず車両を飛び移っていくシン達の前に、銃を構えた神羅兵が複数現れる。
だが、そんな状況であってもシンや他の四人は止まらない。
(退いても、怖気付いても駄目だ。俺が先頭を走ってるのに止まったり下がったりしたら先生達に迷惑を掛ける……なら!)
以前までの自分から驚いて足を止めていただろう状況で、シンは突き進むことを選択した。
そしてある人物から言われたことを思い出す。
――お前は俺と声が似てるし、ちょっとばかし性格も似てるからな。強そうな連中に会った時とか、絶望的な状況とか……まあ、何だ。そういうピンチの時に緊張を吹き飛ばす言葉を教えてやるよ。それはな――
『いらっしゃいませー!』
威勢良くそう叫ぶと、放たれた銃弾を自分に当たりそうなものだけ刀で弾き返しながら速度を維持して神羅兵へ突撃。薙ぎ倒しながらも進行速度は落とさず更に猛進する。
「待て待て待て何だあの13歳!? デタラメに強いぞアイツ!!」
「彼、一般家庭出身じゃなかったかしら!?」
「「一般家庭育ちの13歳!?」」
「成程……魔法騎士達の世界にいる13歳とは、これ程までに卓越した戦闘技術を持っているのか」
「違うから! 私達の世界と彼の世界も違うし、同じだとしても13

歳が皆あんな感じじゃないから！　っていうかザガート、貴方ホントはかなり天然なのね!?」

光・海・風の三人は本気で驚いた。ザガートが何か物凄い勘違いをして海にツッコまれているが……それはさておき彼女らも中学2年生であるが、光は剣道一家・海はお嬢様・風は姉も天才と家庭に特色があった。対してシンは自身と両親、妹のマユで四人家族……何処にでもいるごく普通の家庭の出身だ。

それがどうだろう。今シミュレーター内で彼が見せた動きはそれこそザフトレッドのアスラン達すら遥かに凌駕する一流の戦士――否『ソルジャー』のそれであった。

そしてシンの後ろに控えていた四人……特に銀髪の青年は桁外れの実力を見せている。刀一振りするうちに実は既に複数回振られていたというのは朝飯前、当然のように斬撃を飛ばし異常な速さで右へ左へと移動して神羅兵を斬るその姿は圧巻の一言。おまけに撃たれた銃弾を一度に複数真っ二つとかとんでもないことをサラリとやってのけた。

『さあ、次だ』

「……つってもあそこらへん、もう敵いなくね？」

「何あの『ファイガじゃないファイアだ』みたいなチートファイア。追ってきた兵士皆消し飛んでんじゃん」

「あんなん出来たの、レジェンド様以外にいたんだ……」

他の三人も、明らかに片手で持てそうにないバトルアックスを平然と振り回したり、相手の急所『だけ』を的確に狙ったり、銃を乱射していながら時折百発百中の狙撃をしていたりとヤバかった。特に最後は蛍が目を輝かせながら見ていたし。

「何かサラーサとその斧ばりの比率な人がいるんですが」

「それより全部『急所に当たった！』な奴がヤバいだろ」

「私もあれ、やりたい」
「「「「おいそこの美少女型フリーダム!!」」」」

雑賀孫一、本名・蛍――戦闘ではマジでフリーダムのハイマット・フルバーストよろしく銃身全展開一斉射撃をやらかす美少女である。
最近バルキリーにも乗ってみたいとか言い出した。原因は恐らくマスター（レジェンド）のＹＦ―２９Ｓの一斉射撃を見たからだろう。レジェンドガチ勢だもん、この娘。
一方、シミュレーター内では神羅兵がいよいよバズーカまで持ち出してきた。

「えええええ!?」
「シミュレーターだっつっても殺意高過ぎだろ!?　難易度はどうなってんだ難易度は！」
『おーっと！　奴さんエライもん出してきたぞ！　どうするよ、シン!?』
『速度を上げて、飛びます!!』
『よし、良い判断だ』
「「「「はいいいいい!?」」」」

大柄な男性の問いに対するシンの決断と、それを肯定した銀髪の青年。ついでに他の三人も納得しているということに団員の大半が唖然とする。
ミスれば高確率で即死レベルの選択、それを即座に決断したシンの表情は引き締まっている。
引き金が引かれ、バズーカが放たれると同時にシン達四人は飛んだ。
高く、長く――鉄骨の合間を身体を捻らせ、ゆっくりとバレルロールし、他の四人がより長く飛んでいる時にシンだけは身を縮めてクルリと空中回転しつつ――。

「チーム・クレシェント、Ｎｏ．５！
シン・アスカ、参上ッ!!」

――堂々の名乗りを上げ、列車の連結部に刀を突き立て破壊した。これにより、前部車両と後部車両は分断される。
シンは分断され失速していく後部車両から前部車両の屋根へと飛び移り、遠ざかる後部車両を見ず腰の後ろの鞘に『キンッ』と音を立てながら納刀した。

「……何あのイケメン１３歳」
「何でだろ……アスランが「この馬鹿野郎！」とか殴りかかっても、軽く受け止めて顔面ストレート叩き込みそう」
「あれはザフトレッド全員でかかって漸く勝負になるレベルか、生身だと……」
「何故かはよく分かりませんが、真っ先に狙われるのはアスランの気がしますわ」

基準にされた所為か、こき下ろされまくって散々なアスランである。ここのところ良いとこ無しなので仕方ないと言えば仕方ないが。
しかも、その後シンは他の四人と合流し列車停止後に飛び降りる時、飛び上がって側転のように回転し俗に言う『スタイリッシュ着地』を披露。他の四人もそれぞれ趣の異なる着地でホームに降り立つ。

「コーディネイターって皆あんななの……？」
「こりゃ連合が勝てるわけねーわ」
「んなわけあるか！　コーディネイター全員があんなわけないだろ！
というか出来る奴いんの!?」
「探せばいるんじゃ――」

なんて言ってたら、現れた敵増援全体に対してファイガやサンダガを使い始めたシン。

「「「「うん、いないな」」」」

「お兄ちゃん、カッコいい……！」

探すだけでいてたまるか、あんな当たり前に超人的身体能力と魔法を駆使するコーディネイター！

とりあえず、このままだとマユが禁断の恋に目覚めてしまいそうなので、シンは早急に彼女を見つける必要がありそうだ。

「んー……」

「どうした景虎」

「ああ、マスター。どっかで見た気がするんですよねぇ、銀髪の彼。見たというか似ているような……あ、あの銘酒『猛虎地獄送り』おかわり下さい」

「ほう、似ているか」

「しかし、景虎殿の飲んでいる酒の銘がとても気になるのでござるが」

「おや……では千代女殿も飲みます？」

「い、いえ……遠慮しておきまする」

そうですかー、と言ってレジェンドに寄りかかりながら猪口を傾ける景虎。

現在レジェンドは彼のために用意された座敷席におり、その左隣に景虎・右隣に千代女・膝の間に蛍に囲まれ他のレジェンドサーヴァンツもいる状態。

エメロードとザガート（とイノーバ）は改めて魔法騎士達と交流したいということで彼女らと同じ席、フォッカーは先刻レジェンドと談笑していたのでクローディア共々一誠ら他の初代マクロスクルーと同席に、ギルガメッシュとエルキドゥと別席なのは視認出来る愉悦範囲を拡げて念話しようという正に愉悦部思考だからであった。

ここでミッションクリア……ではなく、スペシャルゲストが大トリを務めるべくその姿を現す。
その人物は――。

「お前ら、捌かれたくなきゃ気合入れろよ」

無幻魔人ジャグラスジャグラー（魔人態）。

「「「「店ッ長オオオオオ!?」」」」

まさかのとんでもない人物にその場の大半が絶叫。ガイですら飲んでいたラムネを鼻から噴き出す始末。
レイトはコーラが気管に入るし、リクはラーメン啜っている最中にフリーズ、我夢と藤宮は顔を引き攣らせ、アスカはフライドポテトを食べようとしたまま冷や汗をかく。
サーガもサーガでユウキとアカネにくっつかれつつ、小猫と一緒にタマモキャットが作ってくれたオムライスを食べつつ無言で見ている。

『うおーい!?　店長が相手っていきなり難易度バグり過ぎだろ!!』
『俺に勝てたら蛇倉苑選抜メニュー、五食分無料券をくれてやるぜ？
しかもきっちり五人分、それぞれにな』
『よっしゃ！　勝つぞお前ら!!』
『いきなりやる気出しましたね!?』
『シン、この人はこういう人だ。割り切れ』

しかし、銀髪の青年が桁外れの実力者なため案外倒せずとも降参という形でジャグラーが勝ちを譲るくらいしてくれるのでは……と誰かが思ったのだが。

『アルトリア・ペンドラゴンです。ご飯の為に緊急参戦させていただきます』
『レジェンドだけのよm……剣、アルトリア・アヴァロンです。五食分なら仮に一人分でも私とレジェンド＋αで分けれるので乱入させてもらいます』

「何やってんだセイバァァァァァ!?」
「アルトリア、何してんのアレ」

ダブトリア突然乱入。しかも後者はとんでもないことを口走り掛けていた、というか殆ど言っていた。ついでに＋αは誰だ？

「ズルいズルいズルい！　僕最強なのに！」
「オマエが参加したら余計ややこしくなるだろ。しかもオマエ、立場的にお母様や沙耶に迷惑を掛ける事になりかねないんだからしなくて正解だっての」
「いいよねバーヴァン・シーはさ！　レジェンド様に着物やリボンなんか貰ったりエスコートされた経験があったり！　僕はまだ一誠にそんなことされたことないからどこかでラブドラポイント稼ぎたいんだよ！」
（ラブドラポイントって何だよ）

駄々をこねるメリュジーヌにげんなりするバーヴァン・シー。ちなみにラブドラポイントとは『ラブラブドラゴンポイント』が正式名称らしい。

『おいおい、最初の五人だけの予定だったんだがな……ま、いいか。その代わり、こっちも援軍を呼ばせてもらうぜ』

『『『『へ？』』』』

銀髪の青年以外のメンバーが間抜けな声を出す。

直後――。

『真打ち登場ッ――!!』

もはやこの騎空団に何人いるのやらなスズケンボイスが勢いよく飛んで現れた――。

『……』

ピンッ！

『いでっ!?』

ドッシャァァァアン!!

――と思ったら銀髪の青年がそこいらに転がっていた小石を親指で、これまた勢いよく飛ばした物がその者の額に直撃し……体勢を崩してド派手に落下した。

『よし』

『容赦ねーな班長!?』

『いえ、あまりに隙だらけだったもので。あと、班長の前に元を付けてください』

しれっと言い放った銀髪の青年だったが、乱入者は結構頑丈だった

らしくネックスプリングで起き上がる。

『セフィロス！　名乗りの最中に攻撃するのはマナー違反だろ!?』

『生憎ですがシミュレーターミッションとはいえ教え子の初陣でもあるので、ここまできて失敗とか勘弁なんですよ』

「「「「……え？」」」」

時が止まった。今銀髪の青年は何と呼ばれた？

――セフィロス？　あの団長の専用ジョブ・片翼の天使のモデルの？

――いやいや髪の長さとか雰囲気とか喋り方とか、何なら目の輝きとか違くね？

――そもそも良いやつじゃないとかチョコボ頭言ってなかった？

――普通に良い人じゃん彼。

――兎にも角にも――。

「「「「セフィロスぅぅぅ!?」」」」

『……あの方がバラすまで俺達の名前は言わないように、と教えられませんでしたか？』

『名前？　……あっ』

そう、あろうことか銀髪の青年は『星を救う物語』のキーマンとなるセフィロスだった。しかし、レジェンドのジョブで瓜二つの姿になる『片翼の天使』の見た目とは明らかに違う。前述の通り髪は襟元ぐらいまでの長さだし、喋り方は基本敬語だし、服装もソルジャーのそれと別物である。

そして、彼だけではない。

『ザックス、集中！』

『へ？』

『確か……俺とお前が出会ったという、お前の世界ではこう言ったこ

とが度々あったそうだな』
『お前とセフィロス――あの場所で戦ったセフィロスが、『俺』の生まれた世界ではない……お前達二人が事故死していない世界での話か』

ザックスと呼ばれた青年とは違う二つの声が続け様に聞こえると、新たに二人の男性がその場に現れる。
一人はザックスと似た服装に立派な体躯であり、クラウドが持っていたものと同じ大剣を背負っていた。
もう一人は目立つ赤いコートに長刀ならぬ長剣を手にした、正にビジュアル系のイケメンと言える端麗な容姿。
映像でその姿を確認した、るりふぃすさやぴーの三人は絶句。オーフィスに勧められ、ルリアと沙耶もＦＦⅦシリーズをやってみてどハマリしたのだが……そんな二人は出自が訳アリのため『クライシスコア』をプレイした結果、言わずもがなガチ泣きした。
無論本編をやったからもあるわけで、ネタバレしないように周囲に配慮していたところにこんな状況である。
あの『星を救う物語』の序盤を見た後にプレイしたので差異が明確に分かり、今後の上映が尚の事楽しみになったのだが予想外の出来事に語彙力消失。

「え？　あれ？　嘘、あれ、何で？」
「お母様、沙耶が壊れた!?」
「落ち着きなさい、バーヴァン・シー。沙耶もです、私達が分かりますね？」
「はう、はうはうバハムート……！」
「ルリア、何で驚いてるのか分からないけどここでバハムートは呼ばないの！」
「だいたいレジェンドとギルの所為」
「何故にお前は鋭いのだ」

沙耶を正気に戻そうとするバーヴァン・シーとモルガン、ルリアを

軽く叱るアマリはいいが……オーフィスはもはや経験から誰が何をしたのかあっさり見抜いた。
　つかそんなん出来そうなのこいつら除けばノアやキングぐらいしか考えられんだろーし。

『まさかアンジールとジェネシスも店長派ですか……』
『すまんな、セフィロス。ジェネシスと一緒にリハビリを終えて乗艇港建設に助力しているが、肉体労働故に腹が減りやすいんだ』
『丼物屋でありながらスイーツやドリンクも多種多様。カプセルホテルでの寝泊まり用のテイクアウトの強い味方だ。ついでに毎度配達してくるにゃんこを見るのも俺の最近の楽しみの一つさ。ちなみに俺の推しはかさじぞう』
「オイあいつさり気なく強キャラ推してるぞ」
「はい！　ジェネシスさんは『にゃんこ大戦争』のテストプレイも進んでやってくれてます！」
「「「「何それ初めて聞いたんだけど!?」」」」
『そうですか……すみませんが、俺はポケモン派なので。ちなみに推しはシロンことアローラロコンです』
『『『『何か対抗しだしてるー!?』』』』
『……アンジールは？』
『俺はゴジラ派だ』
『『『『普通に答えてくれた!?』』』』

　何やら訳の分からない戦いが繰り広げられている(？)中、アンジールによる推し発言を聞いたゴジラがハイパーテンション状態だが、それはさておき。

『確かに強敵が増えたけどよ、こっちの援軍も中々の強者だぜ？　特にアヴァロンって方はあの人のパートナーだって話だ』
『ふっふーん！』
『ギルガメッシュ王にバカトリアと呼ばれていると聞いてますが』

『バカトリアじゃないですレジェンドのパートナーのアルトリア・アヴァロンです唯一無二のバディです!!』
「ふはははは！　中々キレのあるツッコミをするではないか！　さすが真に英雄の道を歩んだ奴は一味違うということよな！」

大柄な男性に褒められて有頂天なキャストリアをセフィロスが瞬時にこき下ろし、ギルガメッシュが爆笑。
とはいえ戦力的にはまだシン達の方に分があるのも事実。セフィロスがアンジールとジェネシス、果てはザックスの三人を倒せずとも抑えきれそうなのが大きい。
しかしここで思いもよらぬ人物が――。

『ならば私がご助力致します！』
『えっ!?　この声、まさかエアリ――』

『お待たせしました！

お姉ちゃんです!!（どどーん!!）』
『いやどちら様ー!?』

緊急参戦、姉を名乗る不審者。
しかも何やら見慣れたチョコボ頭の襟首を掴んでいる。

『そして新しい弟も追加参戦です！』
『誰が新しい弟だ！』
『クラウド!?』
『……ただ宴会に参加しただけなのに、いきなりコイツに拉致られた』
『はい!?』

「何やってんのよあの暴走聖女は!?　アレが私のオリジナルとか本気で頭痛くなってきたんだけど……」
「だいじょぶ？　癒しの風いっとく？」
「いやこれは精神的な……え？」
「え？」

どっかで見た三編みの花売りがジャンヌ・オルタの顔を覗き込んでた。彼女の隣りにいたしのぶすらも汗を滝のように流している始末。

「もう、エアリスってば先に行かないでよ。ザックスはいつの間にか消えちゃうし、クラウドは何かエアリスと似た声の人に連れてかれるし……」
「……え？」
「……え？」

今度は何やらセイバーアルトリアが敵視しそうな胸部を持つ美女が、仲間らしき人物らを連れて――。

「って『星を救う物語』で団長達と行動してた連中じゃない!!」
「おや？　ティファ達も漸く御到着だね。この座敷席はマイロードや私達用だけど、好きな場所に座ってくれて構わないよ」
「あ、プーリン久しぶり！　クラウドとザックス知らない？」
「ザックスの方はシミュレーターに乱入……というか、ジャグラー店長に招集されていたらしくてね。先程セフィロスに小石弾を眉間に撃たれて派手な着地失敗を披露したよ。クラウドは見ての通り」
「ホント何やってるの!?」
「大丈夫さ。マイロードや究極英雄王だったら秘宝や財で首を飛ばすところだし」
「あ、うん。それはそうだね」

美女――ティファ・ロックハートはプーリンの発言にあっさり納得する。現にあの貨物船で遭遇した最初のジェノバには反射的に秘宝と財をぶっ放してしまい、特性やら何やらを見抜く前にあっさり倒してしまったからそう思われても仕方ない。
いきなりな彼女らの登場に周りは騒然とするが、前述のプーリンやギルガメッシュらはむしろ待っていたとばかりに手招き。バレットはしっかりマリンを肩に乗せているし、ケット・シーは完全自律型の最新型になったためリーブも同時出席。
……そう、他にも『星を救う物語』を彩った多くの者達が参加してきたのだ。

「やっと来たか貴様ら！　あのチョコボ頭とハリネズミ頭はシミュレーターに（片方は自称姉が強引にだが）参加中よ！　生ける英雄と英霊、そして未来の英雄候補の集まりし闘い……とくと見物しようではないか！　ふはははは!!」
『さあ！　見ていて下さいね、レジェンド様！　今こそ私達『チーム・お姉ちゃんと弟達』が奮起するときです!!』
『だから誰が弟……って……』
『『『『何だその旗!?』』』』

ジャンヌの代名詞たる旗には――。
【　姉　】
――とでかでかと書かれていた。
大半がドン引きだが、エメロードやナルメアなど一部の者は興味津々。

『いや姉って言ったって女はあんた一人だろ！　えーっと、俺に店長にクラウドに……アンジールとジェネシスとあんたで……あ、一人足りないか』
『そんな事ありません！　だって……クラウドちゃんがいるじゃない

ですか!!』
『おいちょっと待てエエエエ!!』
『そして最後の一人はこの御方！　チーム・姉と弟達において唯一のお父さん役にして七番目の戦士!!』
((((……あっ……))))

『ジャアアアアアッ!!』
たーらーたらーたーたったらー♪
ウ　ル　ト　ラ　セ　ブ　ン　！

「親父イイイイ!?」
「大大師匠ォォォォォ!?」
「セブンおじ様ぁぁぁぁぁ!?」
「先輩の親父さんんんんん!?」

上からゼロ、ゼット、セラフォルー、そして一誠。よりによってここで核爆弾どころか発射体制に入ったウルトラキーにも等しい劇物が投入されてきた。
ついでによく見るとウルトラセブンXである。

『おいいいいい!?』
『……俺達に活躍の場はあるのか？　無さそうならにゃんこ大戦争を

進めたいんだが』
『ジェネシスの言う事に反論出来ねえ……』
『にゃんこ大戦争だな』
『いやちげーよ!?　世界が違うにしても俺の知ってるアンジールよりノリ良すぎだろ!』
『さっさと済ませるぞ。俺は早くバエルのガンプラを作りたいんだ』
『待て待て待て！　クラウド、お前までそっちに行ったら俺はどうすりゃいいんだ!?』

……どうやら店長チーム、予想以上に愉快なメンバーらしい。

『私はクラウドを抑えます。最悪宝具解放でどうにかなるでしょう。何か声的に腹が立つので』
『では私はジャンヌを。だって今レジェンドの名を呼びましたよね？　パートナーの私がいるこの場で堂々と呼んで『見ていて下さい』とかアピールしてましたよね？　誰がレジェンドに相応しいか分からせてあげます』
『……先生、二人のアルトリアさんが怖いです』
『……とりあえず彼女らを刺激しないようにしよう』

私怨バリバリな彼女らの様子を見て、真面目にミッションをやっていた二人は互いに顔を見合わせ頷いた。
セフィロスとの打ち合わせでジャグラーは敢えてシンが相手をする事になっている。明らかに格上の相手だが、勝ち負けに関係無く彼との打ち合いでシンが得るものがあるはずとのこと。
彼らは良いのだ。先の未来を見据えてしっかり取り組む気でいるわけだから。
――問題は――。
『バエルにアルテマウェポン持たせてマントとか付けて、ＰＢＮで超究武神覇斬するんだ……！』

『改造ゲシュペンストに鎧付けてエクスカリバー持たせて、ＰＢＮで宝具解放するんです……！』

やけにバエルにご執心なチョコボ頭と、それに影響受けたのかゲシュペンストのプラモを改造したがる腹ペコ王を筆頭とした連中だ。

今ここに、己の尊厳と願いを賭けた闘いが幕を開ける……!!

……と、いいな……いいのか？

一応言っておくが、宴はまだ始まったばかりである。

――おまけ――

ウルトラ騎空団をもっとよく調べたアウラ。

○下手したらあのジェネシスの射撃すら吸収され、逆利用されかねないチートカウンター（※レジェンド）

○闇堕ちしたらジープで追い回してきそうな隊長（※セブン）

○闇堕ちさせようとしたら逆にトラウマ逆流させられそうな拳法家（※レオ）

○闇堕ちさせようとしたら同時にキレたヤベー奴らを相手にしなければならなくなる息子（※ゼロ）

○闇堕ちさせたら父親にアコードを全滅させられそうな息子（※ジード）

○闇堕ちさせたら父親にダイナマイトかまされそうな息子（※タイガ）

○そもそも闇堕ちとは無縁そうな上、もし闇堕ちさせたら全員首を刎ね飛ばされそうな敏腕プロデューサー（※ゼット）

――尚、項目最初の者はほぼ闇堕ち不可の上、手を出すとその子供ら（※ギルガメッシュ、エルキドゥ、サーガｅｔｓ……）や民による報復をされる可能性１００％也。

「……こんなの魔境ではないか……いざとなったら団長とやらをＮＴＲする気でおったのに……」

（のじゃロリは九重ちゃんやフォリアちゃん達で間に合ってます。ｂｙレジェンド）※フォリアちゃん→空の世界の王族＋体質（魔力が膨大すぎるとかそんなん）のおかげで成長が遅く、推定３０代（重要）

「は……母上！」

「どうしたのじゃ、オルフェ」

「緊急事態です！　ともかくこちらへ！」

「??」

簀巻き＋フル○ン状態にされたファウンデーションのエージェント達（『キラとラクスに手を出すなら徹底的に潰す』の手紙付き）。

「こ……これは……!?」

「母上の命で少し前に送り込んだばかりだったのですが……」

「しかも服は迷惑料代わりに押収すると……」

「というか何故二人が狙いだとバレた……？」

「ん……？　何やら他にも付いておるぞ。どうやら記録映像みたいじゃが……見てみるか」

※戦闘に長けたエージェント達を一方的にひん？き、容赦無く手足どころか首まで『素手で』へし折る燕の映像

「「「「……」」」」←全員真っ青

……この日、アウラやアコード達の心もへし折られた。

特別編・最大級イベント、光神感謝祭!!……の、予定を立てておこう

――それは、唐突な発言からだった。

「まだ少し先だが、今年も『光神感謝祭』の時期が迫ってきたな。早め早めに催し物の準備もしておかねば」

「そうだねぇ。あ！束さんやクーちゃん、バコさんにスーちゃんは合同で『最新鋭機先行体験シミュレーター』だよ！なにせあのＳＲＸの正式採用バージョン、ＳＲアルタード〝バンプレイオス〟も体験可能な予定だからね！」

「「「「!!」」」」

ガタタタッ！とド派手に音を立てて訪問していたオリュンポス組（殆どレジェンド目当ての女性陣）が立ち上がる。ゼウスなんて目を輝かせて息も荒い。

それもそのはず、何故かオリュンポスとアトランティスではＲシリーズの人気がやけに高いのだ。そして原因はゼウス自身がＳＲＸをとんでもなく気に入ったからとか何とか。

「バンプレイオスとな!?よもや体験したら先行予約とかも受け付けてもらえるのだろうか!?」

「スーちゃんに聞いたらその時の反応次第だってさ」

「イィィィヤッホゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥ!!」

（（（（このゼウス様すっごい愉快ー!?））））

やけにハイテンションなゼウスは早速惑星レジェンド全体の情報を公開しているサイトにアクセスし、事前リサーチを開始。そこには既にバンプレイオスの全身設定画が掲載されており、いくつか新機体も公開されていた。

「おおおお!?ＳＲＸらしさを残しつつ更に繊細かつ派手になっているぞ！良いじゃなぁい!!」
「Ｒ―ＧＵＮパワードとの合体攻撃シーケンスはあるのかい、ゼウス!?」
「あるともキリシュタリア！どうやら『エクスガンナー』と呼ばれる追加パーツとドッキングし、より一撃必殺砲がスムーズに使用可能らしい！」

盛り上がっているキリシュタリアとゼウスはさておき、そもそも『光神感謝祭』が何なのかという話題になってくる。

☆

光神感謝祭――簡単に言ってしまえば惑星規模の超ド級な祭りである。期間も一週間だが、規模が規模だけに全て見て回るのは到底不可能。それこそ影分身等の類を使わなければレジェンドでも無理。

この祭の目的は『惑星レジェンドを創り出し、そこに住まう者全てを庇護してくれ続けているウルトラマンレジェンドへの感謝と敬愛を形にする』というもの。即ち、光神感謝祭とは言うが実質『レジェンド感謝祭』と言っても過言ではない祭事。

実は惑星レジェンドのみならず、それに属するコロニー等でも行われるため正確には『惑星レジェンド圏内全域』がお祭り状態になるというわけだ。

余談だが、一説によるとこの光神感謝祭で動く金の総額は大規模星間連合の年間予算に匹敵するとかそれ以上とも言われている。

兎にも角にも、とんでもなくデカいお祭り……それが光神感謝祭なのだ。

☆

「――というわけで、俺も個人的に出し物をしてるわけだ。祝われる側なんじゃないかという疑問も在るだろうが、単純に俺がやりたいからやってるだけなんであまり深く考えないように」
「はいはいはーい！質問質問！」
「何だ？」
「団長は何やるんですか!?」

やたら元気に聞いてくる立香（現ジョブ・メカニック）。オーバーオールの下……少なくとも上の方は下着さえ着けてないのだろう、見事な双丘が揺れ男性陣の多くがガン見している。……が、村正が宝具ぶっ放して黙らせた。

「ふう……で、団長さんよ。マスターの言うようにアンタは何を出すんだい？」
「主催って意味なら、直接参加せずともいくつかのパビリオンの責任者でもあるし……ま、少なくとも五つ以上は出すことになるな」
「五つ!?それじゃレジェンド全然休めないじゃん！責任者ってことはあっちが休み時間になったらこっち行ってを繰り返して動き回るってことでしょ？レジェンドに感謝するはずがレジェンドが一番働いてるって本末転倒だよ！」

レジェンドまさかの大暴露にキャストリアが驚愕と抗議の声を上げる。彼女を皮切りにモルガンやオーフィスらもその意見に同調。というより、レジェンドＬＯＶＥガチ勢は皆そうだが。

「どう考えても働き過ぎです、我が夫。前々から言っていますが、本来ならば貴方は敬われ丁重に饗されるべき存在なのですよ」
「レジェンド、アザゼルと違って色々凄く偉い」
「おいコラオーフィス、何で毎回毎回俺が比較対象になってんだよ！」
「フォウ、キュー（一番分かりやすいダメ上司だし）」
「……何かこのネコっぽい奴にディスられた気がするんだが」

フォウくん、悪い例はアザゼルかマーリンに固定されている。前者はともかく後者はフォウ自身にそうされても仕方ない事をしでかしているから文句は言えないだろうが。
まあ、何にせよそういうお祭りは一緒に回りたいと思うのが乙女心なのである。……と、ここで珍しく今まで沈黙を守っていたお祭り大好き王ギルガメッシュが口を出した。

「落ち着かんか貴様ら。師父は何も全く時間が無いなどとは一言も言っておらぬであろう」
「ギルガメ!?」
「単発でそう呼ぶなバカトリア！」
「あの、ギルガメッシュ王……つまりそれはレジェンド様にも本当の意味で自由な時間があるということでしょうか？」
「その通りよ。ふむ……バカトリアと違って比較的アーシアに近い雰囲気を纏っているだけあるな、アデーレとやら」

何だとー！とポカポカ殴ろうとしてくるキャストリアを片手で抑え付け（しかもキャストリアの顔面を手で押さえてる）、アデーレを褒めるギルガメッシュ。ちなみにエルキドゥは近くのソファーで寝転がり惑星レジェンド産のソシャゲ中。何故かマシュもそこにいる。

「あ、何かこのカンガルーあまり怖くないや。ゴリラとアザラシの方が厄介だ」
「スピードアップにネコボン、そしてニャンピューターとおかめはちもく全開！レッツゴーです、私のにゃんこさん軍団！」

……ついでにマシュの周りには『何だアレ』的な生命体が何匹かネコろんでいる。表現間違いにあらず、『ネコ』ろんでいる。実は今エルキドゥとマシュがやっているソシャゲも光神祭で『にゃんこアイランド』が出店するものに関係したやつなのだが、今は置いておく。

「師父の話を聞いて何故我やエルキドゥがこうまで落ち着いているか……それ即ち師父の行動が己の愉悦に絡んでのことだということよ!!」
「えっと……それはさっきレジェンドさんから聞きましたけど」
「しっかり覚えているな、アズ！そう、理由は二つ！それもイコールで結び付けられる！それだけ出し物をしていて師父が己の時間をただ奪われるだけだと思うか？否！断じて否だ！」
「……つまり、我が伴侶たるレジェンドは出し物をするだけでなく、その出し物で自分も楽しむようなものを出すということか？」
「その通りよ！察しがいいではないか北欧を統べし女神！バカトリアは少し頭を使え！そんなだから田舎妖精などと呼ばれるのだたわけ！」
「誰が田舎妖精だー!!」

最終的にキャストリアを弄るギルガメッシュだったが、彼の告げた言葉に少なからず希望を見出したモルガン達。そしてそれを後押しするかのように我らが究極英雄王はあるものを取り出す。

「最終日に限り師父は自由に動けぬ！しかしそれは師父自らが望んだ二大イベントの主催であるが故だ！最終日にはそのイベントの一つが行われる！それこそが――」

どうやら告知用ポスターだったらしいそれを見た瞬間、女性陣だけでなく男性陣も目を見開いた。

「師父に続く決闘王（デュエルおう）を決めるデュエリスト最大の祭典！
『伝説決闘杯（レジェンド・デュエル・カップ）～戦場（バトルフィールド・プラネット）になりし惑星～』よ!!」

惑星レジェンドと数多のカードをバックに、レジェンドがカードを構えて不敵に笑う姿が印刷された告知用ポスター。『広大な惑星レジェンド全土が舞台、己の信じるカードと共に激戦を勝ち抜け！』の文字がイベントの壮大さを物語る。

「ちなみにこの告知用ポスターは非売品だぞ」

「「「「!?」」」」

……変なタイミングで自慢するギル様であった。だが効果は絶大でモルガンとスカディなど涙目。

「ギルは最終日と言ったが正確に言うとイベント自体は光神感謝祭初日から始まる。最終日は決勝トーナメントが行われるため、それがイベント最大の盛り上がりを見せるだろうことは容易に想像がつくからギルの言っていることは正しい」

「であろう?なにせ四日間のサバイバル予選を勝ち抜き、それを上回る本戦の二日間をも乗り越え、然る後に集結した真なる強豪デュエリスト共が激突する最終日！正しく光神感謝祭を締めくくるに相応しいというものよ！」

落ち着いて説明する主催者と、力説する究極英雄王。詳しいことはまた今度説明するとして、負けたからと言って終わりではない。本戦以降に出場出来ずとも参加してさえいれば楽しめるイベントだとレジェンドは自信を持って語った。

「ちなみに我とエルキドゥは既に応募済み、登録完了の通知も来ているぞ！ふはははは!!」

「マジすか!?超師匠、応募方法は!?」

「ほら、ネットのこの応募フォームからやれるぞ。他にも参加したい奴は今のうちに済ませておけ」

「うっしゃあ！俺はやる！転生炎獣（サラマングレイト）デッキの進化したパワーを見せて

やるぜ！」

ＺＥＸＡＬなゼットを始め、転生炎獣の一誠、銀河のミゲルにインフェルニティ師弟のダイゴとキラ、Ｄ―ＨＥＲＯのアスランやジャンクのラスティなどウルトラ騎空団屈指のデュエリスト達も次々と登録。

さらに――。

「ふっふーん♪じゃあ僕のつよつよドラゴンデッキ見せちゃおっかなー♪イッセーも出ることだし」

「そういやカードにもあったよな、融合モンスターでアルビオン」

「……ならば私も指を咥えて見ているわけにはいきません。この軍貫デッキの力をお見せしましょう」

「「「「セイバーも円卓も関係なくね!?」」」」

「美味しそうじゃないですか!!」

メリュジーヌはいいとして、何故か接点が食べ物関係という部分しかないテーマデッキを使用していたセイバーアルトリア。しかも結構強いらしい。何だこの寿司王……じゃなかった騎士王は。

「沙耶は参加しないのか？」

「ええ、私はバトスピ派だし……付け焼き刃な腕だと楽しむ以前の問題だもの」

バーヴァン・シーに尋ねられた沙耶はそう返す。ただし、その後バトスピイベントもあると聞いたときには竜馬や杏寿郎、リクやギャスパー共々即参加すると決めた。

そんなこんなで光神祭感謝並びにイベントの話を聞いたウルトラ騎空団＋αの反応を見ていってみよう。

☆

「ところで男女交際クラブとかはあるのかな？是非とも参加しなければと思うんだが」
「ほう、奇遇だな。俺もそれが気になっててよ」
「ふむ……やはりマスターは目の付け所が違う。そちらの魔術師もな」

上からマーリン、アザゼル、フェルグス。何かガッシリ肩を組んで意気投合している。駄目だこいつら早く何とかしないと。ついでにフェルグスはまだしもマーリンとアザゼルはいい加減各々の関係者から白い目で見られていることを自覚すべきだと思う。

「るりふぃすさやぴー特別ライブステージだって!?」
「これは私やバーヴァン・シーが行かずして誰が行くのというのです……！」
「えーっと……会場近くの食べ物屋……あった！うどん屋！」
「飛び入り参加あり？じゃあ私もー！」
「ルリアが参加する以上、必然的に私も同行することになるのよね……」

ロマニとモルガンを筆頭に、沙耶のサーヴァントたるアルクと武蔵は当然としてルリアの監督役のアマリに加え、ミツバに引っ張られてきたアズもるりふぃすさやぴーゲリラライブに関わることになった。
なお、ロマニことソロモンはリアスがモルガンに頼んで見ていてもらうことにしたらしい。

「見て下さいラスプーチンさん、アムールさん！東方大陸にて『多種多様麻婆食べ比べ』!!これは私達に対する挑戦状と見て間違いありません!!」

「ほほう……！かの激辛麻婆豆腐を改良しつつ日夜食べている我々への挑戦状とは……行くしかあるまいよ！」
（……この二人だけで食い尽くさなければいいんですけど……）
「東方大陸か……いつ出発する？俺も同行する」
「「三日月院」」
（何ですかソレ!?）

何かこっちもトリプルナンパ師に対抗するかのようにトリプル辛い物好き（前者三名に比べりゃ男女混合かつ健全っちゃ健全）によるスクラムが完成していた。とりあえずアムールが困惑しているが、他人に迷惑をかけなさそう（多分）なのでこっちは良しとしよう。

「マシュ、お前が参加するイベントの時間が決まったら早めに言えよ。その前後も含めてフリーにしといてやるから」
「ありがとうございます店長！店長も是非先輩やエミヤさんといらして下さいね、にゃんこアイランド！」
「イベント名『にゃんこ大戦争』……ああ、マシュやエルキドゥがやってるアレをＶＲでよりリアルに再現したやつね。ネコカベとかやられると吹っ飛んでくるのかしら……そこはどうなのタンクネコ？」
「にゃー」
「『時と場合によるにゃ』だそうです！」
（（（（何気にウチの看板娘凄くね？））））
「なお、蛇倉苑はにゃんこアイランドと提携しているから、蛇倉苑の手伝いににゃんこが来ることもある。皆仲良くしてやってくれ」
「それはいいスけど、エミヤさんの足元にいるそいつの名前って『ねこラーメン道』なんスよね？ウチ丼物屋じゃね？」
「ああ。彼らは私達への賄い担当だ。味は保証するぞ」
「オイオイオイ、エミヤさんお墨付きってこれ俺らモチベ最高維持確定的な？」
「つかラーメンだったらイッパツさんやリルルちゃん、何よりラーメ

ン大好き皇女なシアちゃんが黙っちゃいねーべ」

惑星レジェンド全域の要所要所に臨時店舗を出店する蛇倉苑。看板娘であるマシュはにゃんこアイランド主催のイベントガールも務めるらしく、『キモカワにゃんこが大活躍！にゃんこ大戦争!!』と描かれたポスターを手に素晴らしい笑顔。しかもエミヤからも新情報。このあと言われていた三人がラーメンを食べに来た。

なお、フォウはピカチュウと一緒にポケモンアイランドでのイベントのお手伝い。

「私はにゃんこアイランド、レヴィはポケモンアイランド、ディアーチェとユーリは蛇倉苑のイベントお手伝いですか。それぞれ綺麗にバラけましたね」

「シュテルの方は問題あるまい、我とユーリもな。レヴィ、貴様はマオ達に迷惑を掛けたりするなよ」

「何でボク限定なの王様?!」

「シュテルは元々猫に好かれやすい体質と面倒見が良いからだ。ユーリも言われたことを素直に実行出来る良い子だが、貴様は何かとトラブルを引き起こすだろう！」

「最近は起こしてないよ!?」

「この前、レジェンドが一人でお風呂入ってる時に乱入してきたって言ってましたよ?」

「は?」

「ユーリ!?」

ユーリら紫天一家は別れてイベントのお手伝いをするらしい。あと、お約束のようにレヴィがシュテルとディアーチェにお仕置きされて泣いた。自業自得なんだろうけど。

「俺達はアクアエデンにて海上都市であることをセールスポイントにした出し物をいくつか予定している。例えば、新鮮な魚介類を使用した寿司屋――」
「お魚とお寿司と聞きまして」
「小猫ちゃん早っ!?」
「サーガ君が絡んでるのもあるかもね」
「うむ、そういった内容であればキャットもまた店員客選ばずどちらもイケる。お魚咥えて味わいながら八面六臂の働きを見せるキャットにご期待あれ」
「お寿司ですか!?マスター、お寿司ですって！お値段はお手頃価格だと良いですね！ウニ！トロ！イクラ！」
「……師範に無理難題言われませんように……」
「マスタァァァァァ!?」
「駄目ですね。厳勝さんに色々と刷り込まれてます。狙ってやったんじゃないでしょうけど」
「ナイン……開口一番、絶望の底へ叩き込むのはやめようね。ゼロガンダムさんじゃないんだから」

サーガらは自分達の拠点で様々な出し物をやるらしい。サーガラバーズが盛り上がっている（一部盛り下がってる）。

「近未来的な大陸があったな。そこに行くぞ」
「まさかとは思いますが……元は耳があって黄色なのに耳をネズミ型ロボットに齧られて手術でテカテカになった上、泣き過ぎて声がガラガラになり色も青くなってしまった猫型ロボットとかいませんよね？」
「ちょいちょいコヤンスカヤ君、それあまり具体的すぎないかネ？もう『ド』で始まって『ん』で終わる存在しか思い浮かばないヨ」
「ドに始まり、んで終わる……ガトーが言っていたドライセンというやつか。まさか猫型ロボット、いや猫型ＭＳだったとは」

「待てカルナ!?それは違うと余でも分かるぞ!?」
「ソワカソワカ。折角だから多人数プレイ出来るホテルとか……」
「うん、良いアイデア」
「ムジナさん!?少しずつキアラさんに侵食され……あれ？実はそのまま？」

勇治軍団は流石にカオス。ピンポイントで言ってくるコヤンスカヤにツッコむモリアーティ、そこへカルナが天然爆発。そのドライセン、見た目はシュールだが何かチートな気がする。何かキアラにムジナが同調しているが……同じ肉食系だからか？
ミオリネが心配しているがするだけ無駄だと気付くのはもう少し先らしい。

「……で、貴様はいつまでそうしてる気だセイバー。綾香が行くのならば貴様もまた行かねばならんだろうに」
「ああ行くとも！でも彼が一緒なのは駄目だ！麻婆が！麻婆祭りが!!」
「綾香よ、どうやらセイバーは麻婆がご希望なようだ。あの麻婆娘と麻婆神父に送りつけておくがいい」
「ウワアアアアア!?」
「本当に大丈夫かな……」

アーサーが絶叫し、プロトギルがそれを冷めた目で見ながら綾香が心配する状況。ムーンブロリーの記憶は確実に彼の座に刻まれるだろう。
余談だが、かの次世代火野映司こと前上流、彼もペガサスAのクルー（というよりブリッジ業務を全てをほぼ一人でやってる）ということで強制参加。南無。
「ちょっ……!?俺もたまに食べ歩きとかしたかったのにー！」

「ほう、宇宙世紀メモリアルロードショーとは」
「私達が逝ってからどんなことがあったのか知るには良い機会だ。とりあえずバカい彗星の失敗でも見て笑うとするか」
「バ……バカい彗星っ……」
「待つんだ燕、笑ってはいけない」
「ゼストさんだって必至に笑い堪えてるじゃん……！」

ガトーは単純に興味があるようだが、ハマーンはシャアがアムロにボコられる映像を楽しみにしている。愉悦。しかも赤い彗星に捩って凄いことまで言い出し、ツボに入った八雲燕とアポロンゼストの腹筋にダメージを与えていた。これがネオ・アクシズ摂政か。
……ちなみに、技術班である燕とゼストは思い出し笑いを堪えながら作業した結果、試験的に作っていたＹＦ―１９　エクスカリバーが予定とは違う数世代先の性能を持ってしまった。

「……やっちゃった」
「ふむ……団員に似た声は？」
「いないから、カラーリング変えてガトーさん乗せよっか」

後に専用パックである『ソロモンパック』が（燕の暴走で）開発されてしまい、更に取り返しのつかない性能になったとか。

「ルルーシュ達も来るってさ」
「何かライ、あっさり受け入れたわね……」
「いや……マオも幸せに生きてるし、皇帝とかＶ．Ｖ．とかもうね……」
「まあ、それは確かに……シュナイゼル殿下なんて『是非ワンリキーをゲットしに行きたい。私はカイリキーと世界を狙う』とか言い出して、何が起きてるのかサッパリだったわ」

「それを見て正気を保てるモニカも凄いんだけど」
「あとは……あ、フォウくんはポケモンアイランドでのイベントスタッフだったかしら」
「……スザク、生きろよ……」
「必殺技出すわよね、フォウくん……まず確実に」

ライとモニカのカップルは、当日来るであろうギアス組……というか、スザクの安否を気にするのだった。何故って、そりゃあマーリンボイスだから。
「マーリンシスベシフォウ（スパイラルバレード練習中）」

「エレちゃん、タイガ、何処行こうか！あ、カードのイベントも考慮しようね！」
「ちょっと色々な建築関係見てみたいのだわ。冥界のグレードアップの参考にしたいし……」
「あとは、単純に変わったホテルとか良いよな。俺、光の国から出て色んな星の風景とか見るの楽しみだったし」
「分かるー！ザンクティンゼルにいた頃、本とかで夢膨らませてたなー！あ、それじゃエレちゃん冥界にホテルとか建ててみる？」
「……！それは考えてなかったのだわー!!」

ただベタベタするのではなく、見ていて微笑ましいタイガとエレシュキガルとジータ。なお、グランはイオにあちこち引っ張り回されるのが予想出来るので、ダイゴとＲＥＮＡ、キラとラクス（もしかしたらここにもう一人増えるかもしれない）に任せることにする。

「……というわけで、僕は惑星レジェンドでも昔の文化が残る大陸に行こうと思うんだ。光の国誕生以前からあるというし、現代との差異を調べたくてね」

「当然ながら私も同行します。今とは違う文化を学ぶ……とても興味深く感じましたので」
「その大陸、ラーメンはあるのかしら」
「何で第一声がラーメンの有無なんだ。矢的教諭やオルジュナは真面目な目的で行こうとしてるんだぞ」
「カドック！ラーメンの有無もこの上なく重要よ！私にとっては!!」
「いきなり力説するなよ!?」
「ま……まあ、食文化の調査もその一つと考えれば」
「ほらあ！」
「矢的教諭、無理にアナスタシアに合わせなくていいから」

ふんす！と息を荒げるアナスタシアにツッコむカドック。ここでも矢的とオルジュナはまともだった。いやホント男女交際クラブとか言ってるもう一人の顧問は何なのかと……。

「イッセー、泊まる部屋は一緒だよね？」
「へ？」
「あら、貴女はオカルト研究部でもウルトラ騎空団でもないでしょ？」
「そんなことは恋人同士なら些末な問題さ。それに僕、最強だから」
「何処ぞの無下限呪術使う人物のような台詞を言う割に敗北しまくりみたいだけど」
「そんなことないもん！レジェンド様は最強超えて伝説なだけで、英雄王は最強超えて究極なだけだもん！」
「……この間、おおとり師範に決闘申し込んだ時……初っ端から横っ面に剛拳一発くらって気絶したわよね」
「あんなのいるなんて聞いてないもんんんん!!リアスのバカ！おっぱい悪魔!!」
「おっ……!?ロリドラゴン略してロリゴンに言われたくないわよ！」
「じゃあオーフィスやスカーサハだってロリゴンじゃん！ティアマットは……どうでもいいや、アホだし」

「久々に呼ばれたと思ったらいきなりアホとかいい加減にしてくれますぅ!?メリュジーヌのおかげで『頭ドラゴン』が頭悪いとかイカれてるとかそんな意味になったんですけど!レジェンド様に誤解されたらどうしてくれるんですか!」
「僕悪くないもーん」
(なんつーか……俺、この揉め事の中心にいるのに蚊帳の外っての?めっちゃ空気じゃね?)

メリュジーヌ対リアス対ティアマットという謎の戦い(主にティアマット。前者二名は一誠絡み)に置いていかれる一誠。すかさず、というべきかセイバーアルトリアによって無事連れ出された……かと思いきや、今度はイリナやレイヴェルによって足止めされ、追ってきたメリュジーヌ&リアスも混ざって大惨事正妻戦争が開幕。かつてハーレムを目指していた彼は現在こう思った……『ハーレム狙ったらレジェンド様みたいに不憫になる』と。
別にそうとは限らないのだが……伝説級ハーレム状態なレジェンドが常々これまた伝説級不憫に合っているのでそう認識されてしまっている。ドンマイレジェンド。

「俺は初日から大忙しだな。他にも超次元超人チームトーナメントとかあるし」
「では、拙者らは仕事を終えたお館様を癒やす役目に従事するでござる」
「なるほどここぞという時で堕落してもらうわけですねわかりますそして私も一緒に堕落します」
「カーマさんが燃えています!?いえ、堕落しようとしてます……?」
「深く考えないことさ、シャルロット。マイロードを労って癒やしてご褒美を貰うのは私達だけの特権とでも覚えておけばいいよ」

何やらレジェンド直属女子会は特別見たいものが無いのか、レジェ

ンドに引っ付いていくことに決めた。レジェンドが呼び出した女性サーヴァント以外では、アーシアの他にもアデーレが参加していたりする。マカリオスは噂のにゃんこ大戦争が気になるらしく、にゃんこアイランドに行くらしい。

「それで貴様はどうする気だバカトリア」
「勿論レジェンドと一緒だけど？」
「え、君が霞まない？」
「それどーゆー意味!?あといい加減にバカトリアって言うなギルガメェ！」
「ふはははは！サポート能力はさておきあの面子相手では女子力において負け確としか言えぬ貴様は永遠のバカトリアよ！ハァーッハハハハハ!!」
「うぐぅぅぅ！金ピカユニコーンとホルスターでも撃つガンダムなんて手に入れて調子に乗ってられるのも今のうちだぞお！私だってやれば出来るんだ！」
（このアルトリアは真面目な場面だとやるけど日常的な部分で負けフラグ立てるタイプだね）
（バカトリアには言うな、エルキドゥ。その方が見ている分には飽きぬ）

この後、猛特訓を重ねたキャストリアはまさかの『化け物』と呼ばれる機体――ガンダム・キャリバーンのパイロットとして選定され活躍するのだが……ギルガメッシュの言っていた女子力部分において全く鍛えられていなかったことで結局バカトリア呼びは変わらなかった。
特訓に付き合わされたかの妖精王はこう語る。
「アルトリアに女子力なんて無茶もいいとこだ」

※コメント直後、宿願接ぐ希望の剣（ホープウィル・キャメロット）によるお仕置きボンバーが闇の

妖精王に炸裂しました。
「そういう所が女子力とかけ離れてるんだって分かれよ!!」
――さて、ここでレジェンドから最大級の爆弾が投下される。
「ところでお前達に言っておくことがある」
「「「「？」」」」
「開催はまだ少し先だと言っただろうが。
とっとと仕事しろコラァ!!」
「「「「ご、ごめんなさーい!!」」」」
レジェンドの怒号に蜘蛛の子を散らすよう各々の仕事ないしクエストへと戻るウルトラ騎空団＋α。この場で仕事が無かったのはレジェンドが召喚したサーヴァント達ぐらいだったらしい。
尚、ギルガメッシュはくっちゃべりながらも持ち込んだ仕事を平然とこなしていた。さすが最高位光神を師父に持つ究極英雄王。
「仕事が終わらねば師父にもしわ寄せが来て存分に愉しめぬ。少し考えれば分かるだろうに、たわけ共め」
「全くだ。ギル、また日本地獄でイシュタルが逃走しようとしたって鬼灯から連絡あったからちょっとウルティメイト・ギガバスターしてくるわ」

「僕はゼットの代わりに実況してくるよ。ギルが気持ちよく仕事進められるようにね」
「下手したら腹筋大崩壊で仕事にならぬかもしれんがな！期待しておるぞ！」

……アーシアから魔闘地獄での事を聞いていた女性陣は、とりあえずイシュタルに合掌。日本地獄なのでまあ大丈夫（何が？）だろうが……アレは女性に掛けていい技ではないと思うし受けたが最後、ウルツァイトハイパワー状態の悪魔将軍クラスでなければ確実に終わる。

そして……

後にまだ催し物を出店・開催する受付がされていると知ったモルガンが『特別妖精騎士杯（別名・モルガン祭スペシャル）』を登録していたことをレジェンドが知らされたのはしばらく後のことであった。

「ちなみにスポンサーはクルーガー・インダストリー（惑星レジェンドのトップ企業）です、我が夫（ドヤァ）」
「手回し良すぎじゃね？」

――おまけ（世界別・光神感謝祭反応）――

――神聖ブリタニア帝国――

「ポケモンバトル……体験会……！」
「シュナイゼルお兄様、凄く喜んでおられますわ！」
「あれか、カイリキーとかいう……」
「むう!?世界限定接続によるスペシャルサファリゾーンを感謝祭中全日開放、そこでルールに法りゲット出来たポケモンは正式に自分のポ

ケモンに出来るだとっ!?兄さん、マリアンヌ！これは我らも全力を出さねばなるまいっ!!」
「どうしたスザク、そんなにピカチュウの隣のやつが気になるのか？」
「いや、その……何かこの子には気に入られそうにないなー……なんて」
「あ、モフモフしてて可愛い！」
※ピカチュウの隣のやつ＝フォウくんです。一応言っておきますが彼はポケモンではありません。

――ミッドチルダ――

「……ねえ、私達ってレジェンドお兄ちゃんが迎えに来ないと行けないんだよね」
「うん、レジェンドお兄さんが来ないと場所が分からないし……」
「いや今頃になってそれかい!?大体なのはちゃんやフェイトちゃん、シグナムなんかが執拗に模擬戦なんて頼むからレジェンド兄ちゃんが私らを丸ごと敬遠したんやないか！」
「そ……それは……」
「これはヴィヴィオがバトルジャンキー化するのも時間の問題やな。早う何か対策考えんと……それはそれとしてまた王様達に差ぁ付けられるー！どないしよー！」
「ねえ、スバル？あんたのとこには……」
「来てない……あ、ギン姉には届いたって」
「「「「!?」」」」
※他にもすずかやアリサ、アリシアとプレシアらに、機動六課メンバーに口外しないことを条件に招待状や宿泊チケット等が届けられていた。

――母港――

「御主人様自身も催し物をされる……と。あちらへ到着次第、すぐに合流して支えなければまた無茶をされそうですね」
「超大規模デュエル大会……！このハーミーズ、これに出ずしていつ輝くのか！」
「『にゃんこ大戦争』!?あ……明石の立場が脅かされそうな出し物が……！」
「指揮官は大勢で伺うことに難色を示さぬだろうか……一足早く……夢の中でお詫び申す……」
「鉄血は計画艦も含めて皆行きたいと……流石に一度に全員は無理だし母港のこともあるから、ローテーションの予定は早めに立てておかないといけないわね」
「いつぞやみたく胸囲の格差社会とか見せつけたりしないように。特に重桜の樫野とか、最新装備手に入れたユニオンのヨークタウンとか、東煌の定安とか！」
「ま、色々あってもハニーなら大丈夫でしょ！その一週間フリーになるように、まずはお仕事お仕事！」
※ヤベーやつ軍団はパンフレットが届くなり発狂したので適当な部屋へまとめて一時隔離。

——尚、これらはほんの一部であり、その世界全体で見るともっとカオスであることを付け加えておく。

特別編・サーヴァントも操縦訓練！

ウルトラ騎空団において戦いとは生身での直接戦闘に限った話ではない。確かに戦いというのは情報戦や電子戦なども挙げられるがこの場合はそういった括りではなく単純に戦闘のことである。

――機動兵器を使用した戦闘、通称巨大戦。

一応艦隊戦もあるが、ウルトラ騎空団で主流となるのはＭＳやバルキリーなど機動力に優れた『リアル系』と、特殊人型機動兵器――特機、即ちスーパーロボットら攻防に優れた『スーパー系』、そしてレジェンドのネオ・グランゾンを始めとする双方の特性を総合的に備えた『ＯＧ系』……それら三種に分類される機体による戦闘だ。

先の三種類から更に枝分かれするが、大体はこの三種類だと思ってくれて構わない。

さて、前置きはここまでにして。

何故今回このような説明が入ったか。それは特別編カテゴリにおいて至極珍しい真っ当な理由。

「「「「機動兵器操縦訓練？」」」」

「うむ。このウルトラ騎空団にてサーヴァントで機動兵器の操縦を十二分に可能なのはハマーンとガトーを除けば我とエルキドゥぐらいのものよ。ではマスターが戦場にて機動兵器で戦っていた場合、あまり戦闘向きでないシャルロットやナイチンゲールは別としても他の連中はどうなる？」

「お休みじゃろ？」

「たわけ！　むしろうつけ！　そんなことをしていて貴様のマスターである姫島朱乃が撃墜されでもしたらどうする気だ!?　もしや貴様お決まりのぐだぐだミラクルで無事生還してくるなどと楽観視してるのではあるまいな!?」

信長のお気楽発言に怒鳴るギルガメッシュ。割と冗談で済まない

のだから彼が怒るのも納得だ。

「じゃあ生身で戦うとか」

「よし、では沖田総司よ。今すぐ宇宙空間に放り出してやるから適当に何か狩ってくるがよい」

「生身で宇宙とか無理ですよ!?」

「そこなうつけと同レベルよな、貴様は。貴様が先程言ったのはそういうことだたわけ!!」

今日のギルガメッシュ、真っ当な正論バリバリであった。セイバーアルトリアやクー・フーリン、エミヤ（彼は蛇倉苑のオーナー補佐なので一応免除されているのだが）らは「何があった!?」と実のところかなり困惑している。

余談だが、レジェンドは別として東方不敗とか宇宙空間でも息が出来るようになったものやハナっから宇宙空間で息が出来るものもいるので一概に無理とは言えない。

「見ての通り貴様らはこのウルトラ騎空団での機動兵器の重要さをまるで理解しておらぬ！　よって今日は我とエルキドゥ、そしてハマーンによる機動兵器の操縦講座を霊核まで徹底して叩き込んでくれる!!」

「「「「えええええ!?」」」」

「拒否は受けんぞ！　む、雑賀孫一か。貴様はやる気があるようだな」

「終身雇用契約で機兵の貸与や授与が書かれてたから。頑張れば貰えるって」

「うむ、嘘偽りはないぞ。たとえ我欲であろうとやる気があれば構わぬからな、ふはははは！」

ふんす！とやる気満々な蛍はいいが、問題はそれ以外の面々。自身が強いから別に良いんじゃないかとか、生身で機体を倒せれば文句はないだろうとかぶつくさ言うのが大半だった。

しかし甘い。ここでギルガメッシュはニヤリと笑いながら特大の爆弾を投下。

「では貴様らは、我や師父に直接戦闘でも負け、国作りならぬ島作りでも負け、そして機動兵器に関しては戦わずして大敗を喫するというわけだな」

「……ちょっと待てや金ぴか」

「何だ『負け犬』よ」

「あ？」

「正しく戦って敗北したなら健闘を讃えることも出来よう。しかし貴様は同じ土俵にさえ上がろうとせず背を向けて立ち去った！　故に貴様は負け犬、いや臆病者で十分よ！　フハハハハ!!　ハァーッハッハッハ!!」

「ふざけんなよテメエ！　上等だ！　マジで機動兵器ってやつで叩き潰してやらあ!!」

――乗ったな、馬鹿め。

煽りで言質を引き出し取るギルガメッシュはやはりレジェンドが可愛がっていただけのことはある。しかもエルキドゥも録音機器をさり気なく起動していた。

それからもギルガメッシュは次々と煽りまくって訓練に否定的だった面子を悉く参加させることに成功。

そこでやっとある人物の不在に気付く。

「……あれ？　ガトー殿がいませんね」

「ホントだ。何で？」

「こういう場合、あの三人より適任なんだけど」

そう、今回のような事態となった時に最も適任なネオ・アクシズ機動部隊筆頭教導官のガトーがこの場にいなかった。事実、彼が指導しているＭＳ部隊はメキメキと実力を上げており、一番この場に必要不

可欠な人物のはずだが……。

「奴は既にネオ・アクシズにて新設されるバルキリー部隊の指導に駆り出されている。師父やマスターであるデイビット、そしてキラ・ヤマトに八雲燕も含めてな」

やはり至極真っ当な理由。というか、指導する面々が腕前的に良い意味でヤバすぎオールスターズなのだが。

☆

――ネオ・アクシズ――

ギルガメッシュの言う通り、ネオ・アクシズのシミュレータールームではバルキリー部隊に志願した多くの有志達が開発者である燕からレクチャーを聞きつつ、シミュレーターにてそれぞれの専用機を使い実演しているレジェンドら残りの四人の訓練内容を真剣に見ていた。

レジェンドとキラ、デイビットとガトーのツーペアでミッションに取り組み、どちらも圧倒的速さでミッションを次々とクリアしていく光景はさすがウルトラ騎空団の誇るエースパイロット達である。

『キラ、連中は広範囲に分布している。大威力より手数の多さで手っ取り早く殲滅するぞ』

『はい！　ただ、目標は中心部にいるのである程度倒せたら増援を出さないうちに一気に畳み掛ける必要があります』

『大型艦はデイビットとガトーに任せる。一度一斉射撃を行ったら後はターゲットまで脇目も振らず一直線だ』

『了解です！』

ヘリオポリス崩壊時に同行していた為か、中々に良いコンビネーションを見せるレジェンドとキラ。有志に紛れて参加しているアス

ランが羨ましそうに見ているが燕は気にしないことにした。二人の活躍の方が大事とのこと。
泣くなアスラン、負けるなアスラン。
だって泣いても燕はバルキリー作ってくれないから（無慈悲）。
それはそれとしてデイビットとガトーもさすがマスターとサーヴァントと言える連携を披露。片方が遠距離支援しつつ、もう片方がピンポイントバリアパンチで敵艦を撃墜するという戦法を入れ替わりながら行っており、危なげなく当初の目的通り動いていた。

『マスター・デイビット、次のターゲットは？』
『ポイントD―３０の艦だ。団長やキラ・ヤマトが射程圏内に入るまでもう少し。あの二人が落とされるはずがないが、万全を期すに越したことはない』
『確かにそこなら閣下達より私達の方が早いな。芽は早めに摘んでおこう』

この二人に目をつけられたのがシミュレーターとはいえ運の尽き、敵艦は瞬く間に撃沈させられて指揮系統は混乱。そのスキにレジェンドとキラが目標を撃破してミッション完遂。

「えげつないなパーフェクトストフリパック。バルキリーが出して良い火力じゃないだろアレ」
「バルキリーでトランザムライザーソードもどきやったレジェンドさんも相当ですけど」
「ガトー、あのピンポイントバリア突撃は凄まじかった。俺も今度試してみよう」
「マスター・デイビットもまさかガンポッドごとピンポイントバリアで覆って大打撃とは恐れ入った。そうか……密着している武装ごとバリアで覆うのも有効な近接戦闘方法だな」

それぞれチーム、お互い健闘を称え合っていて微笑ましい。ちなみ

に敵にしたら地獄。スーパードラグーンとミサイルが縦横無尽に飛び回り、あり得ない出力の極太ビームで薙ぎ払われ、ピンポイントバリアでソニック・ブレイカーじみたことをやってきたと思えば、ピンポイントバリアパンチより重い一撃を叩き込まれる。こんなんアムロ以外で対処出来るのか？

「皆さんお疲れ様～」
「うん、ありがとう燕。で……アスランも懲りないね」
「何かレジェンド様とキラを特に見てたよ。理由は分かるけど」
「まずはシミュレーターで経験を積んで癖を掴むのが先決だと思うが」
「スラスターによる姿勢制御が可能なＭＳとバルキリーでは勝手が違うからな。同じ要領で動かそうとするとまず失敗するだろう」

デイビットとガトーの言うことは尤もであり、キラやここでの開発総責任者の燕もうんうんと頷いている。
……その失敗をせずに一発で乗りこなしてるこのレジェンド達五人はどうなんだと思うだろうがそれは『こいつらだから』で片付けてしまおう。

「ていうかむしろお前はＭＦだろ、合ってるの。お前の動かし方見ると高確率で接近戦に持ち込んで蹴りかましてるし」
「……バルキリーの推力の基本は脚なんだけど」

レジェンドと燕のピンポイントダイダロス・アタックでアスラン轟沈。特に燕のは「バルキリーの強みを潰す可能性がある戦法を何好き好んでやろうとしてんだコラァ」という意味も含まれている。忘れがちだが、燕はアサシンスキル持ちだと言うことを改めて言っておく。
結局『アスランはバルキリーの操縦に向かない』との結論に達した。当の本人はまだ諦めていないようだが、キラ曰く「ぶっちゃけ絶望的に噛み合わない」らしい。ついでにディアッカの方が上手いんじゃな

いかとも。

「じゃあレジェンドさんのアルトアイゼン・リーゼは？　あれバリバリの突撃仕様だけど」

「いや、バンカーが使い難くて……」

「それアルトの最も使う武装じゃん。クレイモアとかなら少しは分かるけど、それ使い難いとかダメダメだね」

……やはりキラと燕にトドメを刺されるアスランであった。というか、そもそもアルトアイゼン・リーゼ自体が相当ピーキーな機体なのだが、それは黙っていることにしよう。

☆

キラと燕は合流したラクスと一緒に食事をとるべくアスランを引き摺ってネオ・アクシズの外食店へ、デイビットとガトーは各々のバルキリーの新しいパック開発のためにアポロンゼストと意見交換すべく資料室へ向かい、レジェンドは久々に仕事もなく……かといって急を要するようなやることもないのでウルティメイ島の別荘にて惰眠をむさぼろうとしていたところ……。

「にゃー！」

「ん？　何のにゃんこ……じゃなくて景虎か」

見つけた！ということなのか、にゃー鳴きした景虎に見つかり強制連行。その途中、彼女が売っていた酒に目移りしたのでスパーン!!と盛大に頭を引っ叩き逆に脇に抱えてポジションチェンジ。

「痛いです、マスター！　ちょっとぐらい良いじゃないですか！」

「阿呆。お前、確かギル主催の操縦訓練に参加してるはずだろうが。何でこっちにいるんだ」

「え？　マスターを呼んでくるように言われてあちこち走り回ってました。いやー私、ここだと新参なので何処が何処なのかまだ把握してなくて」
（ああ……蛍はやる気があるからギルは景虎を寄越したんだな）

その通り。この景虎、ギルガメッシュの煽りを唯一飄々とかわしたのでメッセンジャーというかパシリ的なことをさせられているのだ。マスターのレジェンドにせよ、ギルガメッシュにせよ格上なのでそこは彼女も納得の上らしい。

「ときにマスター」
「何だ？」
「この体勢はどうにかなりません？　脇に抱えられてると荷物のようで、せめてこう……」
「猫だから首根っこ掴めと」
「にゃー!?」

流石に反論があるのか脇に抱えられたままジタバタし始めた景虎。ちょっと意地悪しすぎたか、と横抱き……つまりお姫様抱っこしてみたら大人しくなった。何だこのネコ軍神……にゃんこにいそうな呼び方だ。

「……ちょい待ち。ギル、も一回言ってくんね？」
「うむ。師父と選抜メンバー全員によるシミュレーターでの模擬戦をだな」
「オーケーオーケー、総リンチですかありがとうございました。エレちゃん冥界行くか？」
「いきなりなのだわ!?」
「待て待て待て待て!?　師父よ、これにはちゃんとした理由があるのだ！」

「よし、真っ当な理由でなければセイバーアルトリアにビンタさせるぞ」

エレシュキガルとセイバーアルトリア、とばっちり。しかしギルガメッシュには相当な効果があったようで真っ青になっている。言葉一つで究極英雄王を青くさせるレジェンドは間違いなくかの人物の師父であった。

「発破をかけて操縦訓練をするよう仕向けたまでは良かったのだが……予想以上に伸びが良く上達が早かったのでどうも調子に乗り出した面子がおったのでな。これは一度鼻っ柱をへし折って上には上がいることをその身に刻み込んでやらねばと思ったのだ」

「おお、しっかりした理由。だがそれならギルやエルキドゥ、最悪ハマーンが教育的指導をしてやれば良かったんじゃないか？」

「その疑問は尤もだが……連中には頂というものを一度思い知ってもらうのが一番だと考え、エルキドゥやハマーンも納得の上で師父を呼びにそのへべれけを走らせたということよ。アムロ・レイも選択肢に入れたものの、惑星レジェンドまで呼びに走らねばならぬからな」

「なーるほーどなー……で、波に乗ってるメンバーは？」

「セイバーを筆頭に狗、信長、沖田に超音波、それからキアラめにそこのへべれけだ」

お前もかよ、とレジェンドはジト目で景虎を見るが彼女は冷や汗を垂らしつつ視線を反らした。というか、景虎以外はオカ研メンバーと勇治のサーヴァントなんだが。

「納得といえば納得のメンバーだが……アキレウスやフェルグスはどうなんだ？」

「フェルグスは普段のように訓練していたが、アキレウスめはフラガを始めとする連中が近くにいるからその困難さを理解したのであろう。ライトニングストライクを乗りこなすと真剣に訓練をしておる

わ」
「えーと今あるのがストライクと組み上げ間近のストライクルージュ、んで新造ストライカーパック専用に開発された強化型ストライク……と。強化型ストライクに誰乗せるか悩んでたが、決まりだな。自動操縦装置と艦内への緊急転送装置付けてアイツを乗せるとしよう。アークエンジェルにダブルストライクも悪くないだろ」

ストライカーパックの差別化もあるし、とレジェンドが締め括った。彼やギルガメッシュは真摯に努力する者を正しく評価するのだ。

――そんなわけで、訓練中の者も含めて集合をかけ、各々のマスターも招集してレジェンドＶＳ七人の侍ならぬ七騎のサーヴァントによるシミュレーター模擬戦が開催された。
その前にレジェンドからアキレウスへ、強化型ストライクのパイロット任命が下される。ちょうどマリュー以外にムウも非番で付いてきていた為、奇しくも良いタイミングであったというべきか。

「よぉっしゃあああああ!!」
「おめでとう、アキレウス」
「あっちのストライク、こっち用とはストライカーパックが違うしな。サーヴァントのアキレウスの方が身体能力も高いし、機体スペックを考慮しても結構良い感じにハマったんじゃないか？」
「ああ！　有り難いことこの上ないぜ！　断然やる気出てきた！」
「うー……」

先にアキレウスが選ばれたことに蛍が若干むくれているが、レジェンドが専用機として提示したガンダムレオパルドデストロイが気に入ったのでオプション装備の選択を始め出した。一応ガンダムエアマスターバーストも選考には入っていたが、蛍自身が飛行形態を苦手だったことや主武装がバスターライフル二丁だけだったことなども

あって却下。

「さて、この総リンチと言って差し支えない模擬戦……他にも俺に制限はあるのか？」

「そうさな、ネオ・グランゾンとマジンガーＺＥＲＯは使用不可だ。アレを使われたら勝負どころではなくなるからな」

「一発で模擬戦終了だろうしね」

　エルキドゥが一言付け加えたが、全くもってその通り。最強武装でなくともブラックホールクラスターや光子力ビームであっさり片がついてしまう。下手すればワームスマッシャーやブレストファイヤーですら相手が何をするまでもなく撃破しかねない。

「まあ、そりゃそうだよなぁ……じゃあアレを使うか」

　そう言って選択したのは先程も使っていたバルキリー……即ち、ＹＦ―２９Ｓ　デュランダルカスタム（ウルティメイトパック装備）。アスランをしてデスマシンと呼ばれたそれである。

「さっきはＣＰＵ相手だったし、対人戦のテストには丁度良い」

「むっ……テスト扱いは心外です」

　景虎がそう言うも、実際はそれ程に差があるレベルなのだ。パイロットにしても機体性能にしても。

　……それを唯一、対戦相手で理解しているのはセイバーアルトリア。それどころか彼女のイメージカラーである青に顔色が染まっている。

（迂闊でした……！　団長がバルキリーに乗ってくる可能性は十分あったのに……）

「ん？　どうした、セイバーのアルトリア」

「クー・フーリン……私達は大きな間違いを選択したようです」
「は？」
「それは……いえ、やればすぐ分かります」

頭に？マークを飛ばすクー・フーリン他５名。ただ、よく見ると一誠とトライスクワッド及びそのサーヴァント、そしてゼットとガレスに景虎と蛍を除くプーリンらレジェンドサーヴァンツもセイバーアルトリア同様真っ青だ。ギルガメッシュとエルキドゥは笑っているが。

「……なあ、イッセー……」
「ああ……ヤベーよな。何がヤベーってレジェンド様が相手ってだけでもヤベーけどバルキリーだってのもヤベーし結論から言うと超ヤベー」
「ヤベーがゲシュタルト崩壊してんぞ、一誠」
「そういうレベルなんスよ、先輩」

一誠とタイガの様子から何かを察したレイトはこのことはさておきと、ラーマとシータにどんな機体を頼んだか聞いてみる。

「まあレジェンドがとんでもない技量の持ち主なのは言うまでもないとしてだ。二人は何にしたんだ？」
「はい、マスター。私とラーマさまは二人で一つの機体を動かそうと」
「正直、余もシータもこのことに関して一人では力不足なのは否めん。故にそういった方法をとることにしたのだ」
「良いんじゃねえか？　コ・パイにサブを担当してもらえりゃメインは戦闘に集中出来るし、相性抜群ならその方が効率も良いだろ」

ぶっちゃけ俺のダブルオーライザーも本来はオーライザー側に一人要るし、と続けたレイトに二人はホッとした。なお、機体はギルガメッシュの薦めでガルムレイドという特機にしたらしい。色的にも

二人とピッタリだったからとのこと。
そうこうしているうちに模擬戦が始まった。

☆

……で、結論から言うと模擬戦はサーヴァント側が問答無用の大惨敗という散々な結果となってしまった。

「……予想以上に完敗でした……」
「インチキ機動も大概にしろよ……」
「儂、真っ先に叩き落されたんじゃが？　開始５秒も経っとらんぞ！」
「私だって似たようなものですよノッブ！　というか自慢になりませんからね！」
「余なんて決め台詞の真っ最中にだったぞ！　くーやーしーいー！」
「ソワカソワカ」
「あの、少しは様子見とかしません普通？　初手全滅させるとかもうちょっと遊び心をですね」

そう、景虎の言うように開始直後一瞬で接敵、一斉射撃で模擬戦終了。時間にして約１０秒……戦いどころか的にされて終わっただけである。これではグチグチ言いたくなるのも当然なのだが……。

「バカ共が。相手が情けをかけなければこうなるなど、戦場にいたお前達なら分かることだろうが」
「「「「……」」」」

レジェンドは普段と違い、冷たく言い放った。確かにその通り。キアラはともかく、他の者は皆戦場を駆け抜けたことのある英霊……彼の言葉は戦場において至極当たり前の事。それ故にレジェンドはそう吐き捨てたのだ。

「機動兵器での戦闘、甘く考えた結果がこれだ。いくら生身での戦いに優れていてもそれがそのまま通用するとは限らん。気を引き締め直せ」

圧倒的を超え、絶対的な力の差を見せつけられたセイバーアルトリア達は黙って頷く他無かった。そしてその後、ギルガメッシュ・エルキドゥ・ハマーンを相手取ったレジェンドだがこれは時間切れで引き分け。設定した時間が短かったからそうなったものの……。

「あのままやっていれば我らの敗北であったな……よもや我のフェネクスを殴り飛ばして盾代わりにサバーニャの砲撃を防ぐなど誰が予想しようか。それはよい、対戦相手なのだからな。問題は我が飛ばされて来ているのに容赦無く砲撃するエルキドゥだ！　少しは躊躇せぬか友よ！」

「え、だって飛んでくるフェネクスの背後からとんでもない数のミサイルが迫ってたからさぁ。アレは撃ち落とさないとこっちが沈むと思って」

「むしろ我が沈むかと思ったわ！　Ｉフィールドが無ければ確実に墜ちておったぞ！」

まあエルキドゥの戦法は間違っていないが、少しは友軍に配慮しよう。

「ファンネルを落とす者は存在するが、よもや軌道を予測しミサイルで確実に撃墜するような輩がいるとは思わなんだ」

「アレおかしいよね。完全にミサイル直撃コースなんだもの。ギリギリ当たるとかじゃなくて本気で狙ってるやつだし」

「トップクラスのニュータイプの更に先を行く動きであったな……」

「そうは言うが、俺もお前達三人の相手は本気でヤバかったぞ。アルトなら確実に撃墜されていた。ファンネルとビットの超弾幕に紛れてアームド・アーマーＤＥが飛んでくるとか何処のルナティックだア

レ」

先の（逆）総リンチとは違い接戦だった為、しっかりレジェンドは三人を称賛。ギルガメッシュらとしてはこんだけ弾幕ラッシュでも無傷で時間切れまで戦闘したレジェンドがヤバいくらいに思っているのだが、アムロ・レイも同じもんだと考えたら気にならない。

一方、それを見ていた者達は予想を遥かに上回るギルガメッシュやエルキドゥの腕前に愕然としている。ハマーンが強いのは言うまでもなかったが、まさか二人がここまでとは思っていなかったのだ。

いや、ＣＰＵとはいえアムロを二人がかりでどうにか撃墜したのだから多少は思っててもいいんじゃない？

「して貴様ら、これで理解したであろう。神秘でなければどうたらこうたらなど二の次三の次よ。油断すれば即あの世行きの世界で貴様らのマスターもまた戦っているのだ」

「でもギルも割と慢心してるよねー」

「フッ、クラス・ウルティメイトな我はしっかり相手を見極めた上で慢心するかどうか決めている。極めているからな！　ふはははは!!」

先の結果を見せられれば黙らざるを得ない。レジェンドＶＳギルガメッシュ・エルキドゥ・ハマーンの模擬戦はそれだけの説得力があった。

その後、先の七騎のサーヴァントだけでなく参加したサーヴァント及びマスターも含めた模擬戦を何度か行ったのだが……。

「イッセー、貴方も剣を使うべきです！　ジェット・マグナムとか私のマスターとして邪道じゃないですか!?」

「いや俺の神器知ってるだろ!?　そのままそっくり言葉のカウンターするぞセイバー！」

「やっぱりエレシュキガルは中距離から遠距離を主軸に考えたほうが良いな。無理に接近する必要ないって」
「そうなのね……でも最低限は出来たほうがいいと思うのだけど」

「ソワカソワカ。やはり私はマスターの性欲発散のため、戦闘中もこうして艦長席の机の下に隠れて――」
「おい待てキアラ!?」
「真面目に訓練しようと思わないんですか貴女!?」
「オレは槍系の武装がある機体を使いたいんだが、何か候補は無いか？」
「私は複合系のやつだネ。主に射撃系の」
「おお!? 余向けのバルキリーがあるではないか！ しかも赤色の！」
「「ちょっと待ったぁぁぁぁぁぁぁ!?」」

「のうマスター。やっぱりアレかのう、乳揺れしないといかんということなのか？」
「いえ、別にそういうことでは……あ、でも人気には関係してくるかもしれませんわね」
「……儂、泣いていい？」

「沖田さん、最悪の知らせだ」
「え？」
「……師範による機動兵器訓練、沖田さんも強制参加らしい……」
「そ……それってアレですよね？ マスターがいつも死にそうになってるとかいう……やだー！ 土方さんなら喜々として参加しそうだけど私は嫌ですよ！ だって戦国時代出身とか確実に新選組の先輩＝超激ハード確定じゃないですかー！」

「おう、情けねえトコ見せて悪かったな、マスター」
「気にしないで下さい。僕もコテンパンにされましたので……生身

で、おおとり師範に」
「アレにか……ま、お互い頑張ろうや」

「クソッ！　オーバードライブモード中のバレルロールが上手く行かねえな！　何かコツとかあるか、ムウ？」
「本体が強化型なのも相まって、エールストライカーでのやり方が参考になるかは分からんが」
「こうなりゃやれる方法を片っ端から試す！　いっちょ頼むぜ！」

「……と、こんな感じだ。そっちも接近戦が得意なのは分かったけどよ、武器の有無はリーチに直結するから大型武器を多数持ってる相棒とガルムレイドじゃ勝手が違うこと頭に入れとけよな」
「まるで宝具を多数持ったサーヴァントを相手にしているような感覚だったぞ……！」
「ビット兵装、というものが無かっただけよかったのではないでしょうか……」

「景虎、お前最低ノルマ達成するまで禁酒令な」
「そんなご無体な!!」
「撃墜は仕方ないにしてもあんなザマ晒すやつがあるか！　どんなもんかとちょっとばかし期待したら全機まとめて３０秒持たんとか、超級にアホな結果で少しは恥ずかしいと思え！」
「……私達は真面目にやっててよかったね。向き不向きで言うなら不向きだったけど」
「そうは言っておられるが、プーリン殿は高水準な結果でござったな」
「うーん……でも私達って基本サブパイロット枠なんだよね」

「沙耶ー！　沙耶が前まで使ってたやつ使わせて！　ほら、ガンダムＸってやつ！」
「レッドフレームにもう一太刀……！　もう一太刀欲しいのです！
そうすれば二刀流になって少しはマシに……」

「アルクはディバイダーの有無を選んで。武蔵のはそれだと機体自体がバージョンアップしそうなのだけれど」

模擬戦後、改めて真面目に取り組む者、方針転換してみる者、キアラみたいな明後日の方向に頑張る者など様々な結果になった。

何にせよ、機動兵器に対する意識を変えるという当初の目的は達成出来た……ということでいいだろう。

――そして、後日――

「ば……バスターキャノンですっ！」

「お……お姉ちゃんはそんなもの教えていませんよーっ!?」

「何か彼女普通に強っ……！」

……アーシアのデュラクシールによって、ジャンヌとロマニを皮切りにボコボコにされたという。

『うむ、流石は我らが巫女よ』

「タオーステイルの使い方が上手い。あのバスターキャノンやメガスマッシャーを撃つ時のポジショニングも悪くない。あれだな、アーシアは機動兵器での戦いで一気に強くなるというか化けるタイプだ」

こうしてアーシアの意外な実力が発覚した他、ジャンヌも「お姉ちゃんとして、妹を守るために強くなければなりません！」と一層訓練に励むようになったとか……。

――おまけ――

「フォフォフォウキュキュー！」
「え、ちょっ……！　何であの小動物、ギター型のコントローラーかき鳴らしながらあんな動き出来んだよ!?」
「ついでに（一応）歌ってません!?」

先の七騎のサーヴァント＋αとフォウくんで模擬戦をした結果、フォウくんの駆るファイヤーバルキリーに掠り傷一つ付けられず、可愛らしいフォウくん熱唱（突撃ラブハート）を聴かされるだけになったという。
……このことに、参加したサーヴァントの他……アスランも本気で落ち込んでいた。
ついでにフォウくんのファイヤーバルキリー、チバソング的にサウンドブースターも装着可能レベルだったそうな。マジで何なんだウルトラ騎空団のマスコットは。

「超スペックのＶＦ――１Ｓも完成し、バルキリー部隊の設立も進んだ。いよいよ大詰めに入るぞ」
「……！　師父よ、それはつまり『あの男』を呼ぶということで相違ないな？」
「あいつにスカル大隊を託された時から決めていたことだ。そしてもう一つ……いつまでも俺がヒリュウ改やペガサスＡを行き来しているわけにもいくまい。ドライストレーガーはともかく、『あれ』は大きいとかそういうレベルではないし常時動かすには過ぎたものだろうからな。ルナティックボーダーもそもそも月王国の所有艦……なればこそ、正しく『俺達の専用艦』が必要となってくる。それも相当に

大きな艦が、な」
「何？　……もしや先程の『いよいよ大詰め』というのは召喚のみならず！」
「そうだ、ギル。『プロジェクトＯＧ―ＳＤＦ』の最終段階……正真正銘俺達の専用艦。全長５ｋｍ超の超時空要塞『マクロス・ウルク』の建造に取り掛かるぞ!!」
「ふはははははは!!」

特別編・戦艦を作ろう！→は？

各々に割り振られた職務をこなし、ウルトラ騎空団全体がある程度終わらせたその日……。

「師父よ。我らの専用艦たるマクロス・ウルクを開発するのは良いが……単艦にて一騎当千無敵無双なのも良し、しかしやはり随伴艦は必要であろう。それもかなり強力な艦がな」

「ふむ……確かにボスが強いのは当然として、その部下がザコだらけでは範囲攻撃で纏めて倒された後にリンチされる可能性もあるか」

「まあ我らを囲おうと逆に全滅させてしまうだろうが、概ね師父の言う通りよ。我らだけ強くとも意味とインパクトがない」

「一応、約一名俺に直談判してきたのがいるぞ。何でも『作るのお手伝いするんで自分用に一隻作らせて下さい』と言ってきた猛者がな」

「ふはははは！　何と豪胆な者がいたものよな！　尤も大体予想はつくが！　なればこそ、其奴に続かせねばなるまい！　即ち――」

☆

――戦艦アイデア発案会――

「「「「だから唐突に何言い出すんだあの二人イィィィィ!?」」」」

突如ギルガメッシュが「我が声を聞け！　（今いる）全団員、集合！」などとウルティメイ島とバビロニア島全域に放送したと思えば、リモートワーク出来そうな場に集ったウルトラ騎空団に告げられたのはまたぶっ飛んだ提案。

「つーか戦艦アイデア発案会って何だよ金ぴか」

「言葉のままよ、狗！　今我らはこの騎空団のフラグシップにして我や師父の完全専用艦を建造しているが、その随伴艦となる艦のアイデ

アを騎空団で総力をもって出し合うことが今回の目的よ！」
「完全専用艦⁉　そんなもの作ってたの⁉」
「建造は主に師父だがな！　規模的にも性能的にも！」

ドヤ顔で言い放ったギルガメッシュは、同時にとある視線を感じその方向を向くと……。

「……」

待ってましたと言わんばかりのキラキラお目々な八雲燕ちゃん（元・暗殺者）。
そんな彼女の期待に満ちた目を見、レジェンドとギルガメッシュは顔を見合わせてふと笑うと大々的に宣言する。

「これまでの功績――特にバルキリーの開発・改造は特に顕著であるとし、うち一隻はネオ・アクシズ所属の八雲燕に一任する！」
「いやぁったぁぁぁぁぁ⁉　ありがとうレジェンド様⁉　そして黄金の究極英雄王ギルガメッシュ万歳ッ⁉」
「ふはははは！　よせよせ、この場でそんな敬意を払われたら舞い上がってしまうであろう！　良い、師父の告げたように貴様の功績は絶大だ。資材や資金は我らが持ってやろう！　手伝いが必要ならばそちらも回してやる。ただしブリッジクルーを始めとする搭乗員だけは自分で集めよ」
「イエッサー究極英雄王！　何名かもう目星つけてるし、いざとなったらワンマンオペレーション出来るようにしちゃうから大丈夫！」

もはやノリノリ速度最大のジェットコースターに乗ってるテンションの燕。案の定キラやラクスに声がけしたのは予想通りとして、その会話の中で言われたことを聞いた団員はまたも目がぶっ飛んだ。
「それでさー、エターナルも合体接合にぶち込んじゃおうと思うんだ

けど」
「「「「ちょっと待てエェェ!?」」」」
「まあ！　それは面白そうですわね！」
「そうなるとミーティアも必然的に組み込まれるし、フリーダムかメサイアか好きな方を選んで出撃出来て、出撃後一時帰艦・乗り換え出撃もやれるから丁度良いと思うな」
「「「「キラとラクスまで!?」」」」

よりによってこの二人まで燕に同調してしまった。こうなるとバルトフェルドやダコスタには止められない。反対しようものなら逆に燕によって止められてしまう。息の根を。

「……ハッ!?　それはつまりジャスティスもそちらの所属になるということ……ということは正式に俺もバルキリーに――」
「アスランはジャスティス固定ね。資源は無限じゃないんだよ」
「うわあああああ!!」

まだ先日のシミュレーターでの行いは許されてなかったらしい。ネオ・アクシズ所属ということで、デイビットやガトー、ハマーンは転送装置によってサダラーン改との行き来が可能とのこと。つまり、デイビットとガトーはバルキリーでの出撃・乗り換え出撃も可能というわけだ。

「成程、戦況によって臨機応変な機種変更が可能なのはありがたい」
「私のＲＦゲルググやマスター・デイビットの新型ノイエ・ジールはバルキリーとは運用方法がまるで異なる。それを戦局に合わせ選べるのは大きなメリットだ」
「ふむ……では互いの艦にいくつかＭＳとバルキリーを分けて配備するようにしよう。当然サダラーン改にはＭＳがメインとなるわけだが」

早速ネオ・アクシズ重鎮三名はあーだこーだと会議を始めた。レジェンドやギルガメッシュとしてもネオ・アクシズ側は基本戦力が充実してるので、発案も済んでいる以上あちらだけで完結出来るならそれも良しとしている。

「さて、あちらはあちらで進めてもらうとしてだ」
「奴らに倣い、貴様らも存分に己が案を述べるがいい！　そして!!」
「ゼウスです。真体が艦船な私達はどうしよう」
「うぅむ……北欧では馴染み無いというか……」
「ルナティックボーダーという前例はあるのですが」
「いるのが当たり前のように馴染み過ぎだ貴様らはー!!」

言葉通り、オリュンポス組・北欧組・月王国組がさもウルトラ騎空団の一員が如くこの場にいることにギルガメッシュは派手なツッコミを入れた。
いや、元凶はおたくの師父なんだけどとは誰も言わない。言っても解決しないから。悪化するから。

「じゃあねぇ～こんな感じ！」

アルビオン（竜）型戦艦（案・メリュジーヌ）。

「自己主張しすぎだたわけ！」
「えー……だって僕最強だよ？」
「お前この前モルガンに尻百叩きされて泣いてたよな」
「モルガン先代陛下も例外の一人だもんん!!」

メリュジーヌ、またも最強の座が揺るがされた。最近メンタルがクソザコ化してきているのは気の所為だろうか。周りがスペック詐欺だらけだから仕方ないと言えば仕方ない。

「ではこういうのは如何でしょう」
「一見まと……いや待て！　これは……」

ルナティックボーダー二番艦（案・モルガン）。

「同型艦かと思いきや何だこのウエディング仕様とやらは⁉」
「我が夫との祝言をイメージしたのです。それが何か？」
「貴様、師父を公開処刑する気か⁉」

いきなり二連発でとんでもないモノが出されたことに、ギルガメッシュは早々頭を抱えることとなった。
先の燕の案は中々ぶっ飛んでいたものの、しっかり機能面や外見面でも問題はない。カラーリングにしてもどうにかするだろうし。

「イシュタルがこの場にいなくてよかったな。アイツの芸術センスは壊滅的だ」
「だよねー。アレの神殿とかもうね、破壊されるためにあるようなゲテモノ石像置いててさー」
「は……はいっ！」
「む、エレシュキガルか。邪神たる愚妹とは違うところを見せてみよ」

宇宙戦艦ウルトリアⅡ（案・エレシュキガル）。

「ほう、悪くはないな。しかしながら多少地味なのは否めんか」
「や……やっぱり駄目かしら？」
「いやいや、ウルトラマン絡みであることを考慮しても割とまともで助かった。三度目の正直というやつか」

エレシュキガルが出した案はジョーニアスに因んだ宇宙戦艦。しっかりウルトラマンにも配慮した案はタイガだけでなくジョーニアス推しのタイタスからも絶賛された。

……モルガンのアレは別の意味でレジェンドに絡んでいたけど。

「では俺の案だ」

「ちょっと待った！　フェルグス、まさか……」

愛しき私の鉄戦車（チャリオット・マイ・ラブ）・戦艦仕様（案・フェルグス）。

「やっぱしメイヴ絡んでんじゃねーか!!」

「当然だろう、クー・フーリン」

「ドヤ顔で言うなよ！　嫌なもん思い出しちまったぜ!!」

「狗の為に作ってやるもまた一興か……」

「やめろよ!?　マジでやめろよ!?　ソレを触媒にアイツが呼ばれたらどうすんだ!!」

クー・フーリンのあまりの様相にちょっと女王メイヴについて調べた祐斗からも中止を懇願され、敢え無く断念。これにクー・フーリンは「この恩は絶対忘れねえぜ、マスター」と泣きながら祐斗に誓ったという。

「ではこういうのはどうでございましょう！」

「ゼット……まともなもん出してくれよ……？」

ネエル・アーガマ＋ラー・カイラム級のミキシング戦艦（案・ウルトラマンゼット）。

「これよ!!　こういうのを待っていたのだ！　ふはははは！　さすが宇宙世紀フリークと名高いウルトラマンゼットよ！　我や師父と大冒険を共にしただけのことはあるな！」

「ハイパーメガ粒子砲はともかくとして、全体像としてはコレで完成してるんじゃないか？　随伴艦の二番艦はこれに決まりだ」

「あざっす！」とキチッと礼と共に頭を下げるゼットはやり遂げた感がある。名艦をミキシングした設計だけあってかなりの完成度になることが容易に分かり、ギルガメッシュも快く了承。

「エレちゃんのは三番艦候補に入れておこう。あれも中々に優秀な艦だ」

「うむ。我としてはゼットのがぶっちぎりではあったが、エレシュキガルも真面目に考えていたからな」

「周りにも配慮した結果、あの艦にしたみたいだし。自分優先なイシュタルとはエライ違いだよね」

先日の特殊特異点においてイシュタルのやらかしがレジェンドに不利益を齎したことに本人含めて三人とも揃って腹を立てているようで、いちいち当たりがキツい。まあ元々この三人はかの女神への好感度は０を突っ切ってマイナスだが。

「よぅし！　ここは一つ私もアイデアを出そうじゃないか！　出血大サービスだぞぅ！」

「いらん」

「ろくなものが出んだろう」

「ねぇセイバーアルトリア、コレ持って帰って」

「扱い酷すぎない!?　しかしそんなことを言えるのもこの瞬間までさ！　見たまえ、私の至極の一ぴ――」

はじまりのろくにんのふね（案・???）。

「……あれ？」

――地雷だった。誰の？

本来ならモルガンだろう、そうでなければ妖精國出身者。だが今回に限ってはそうではない。

あまりに予想外な人物が異常なまでにブチ切れたのだ。

「殺す！　絶対に殺す！　串刺しにしてズタズタにして野良の魔物に食わせてやる!!　六匹の汚物がぁぁあアアア!!!!」
「沙耶!?　落ち着きなさい！　もう良いのです！」
「大丈夫だから！　私もお母様も大丈夫だから！」
「メリュジーヌ、お前も陛下を止めるのを手伝え！」
「無理だよ！　だって昔、暴走状態の陛下にアルビオンモードで挑んで一方的に殴り殺される寸前だったんだよ!?」

まさかのさやぴー。
特殊特異点に行っていた彼女だが、向こうで仕上げた月王国の書類でモルガン達にも確認を取らなければならない物があった為、一時的に戻ってきたところピンポイントでこんなものを見せられてプッツンしてしまったというわけだ。
正直この状態のさやぴーならＯＲＴにもタイマンで圧勝したんじゃないかと思うキレっぷり。普段のクールビューティぶりが嘘のように大暴れする沙耶は、過去にトラウマを植え付けられたメリュジーヌが泣きながら止めるのを拒否して逃げようとしている程。

「そういや沙耶って素でゼロと同じくらいの実力はあるんだよなー」
「いやそれヤバいですよ!?　てか沙耶さんのキレ方が普通じゃないんですけど！」
「んー？　それはなー」
「えっとぉ……」

――レジェンドとキャストリア説明中――

「というわけなんだ」

「「「「何その外道ども」」」」
「そりゃ母親と姉大好きなさやぴーがブチ切れるのも納得だわな！」
「……」
「ほら！　アーシアなんて顔真っ青にして涙目じゃない！　『巫女を生きたままバラバラにした』なんて同じく巫女であるアーシアが本気で恐がるのも当然でしょ！」

……それを見たマジンガーＺＥＲＯもブチ切れた。

『よし、適当な並行世界から生きているはじまりのろくにんを呼び出して痛ぶった後に虐殺してやろう。無論、死んでも因果律を操作し蘇生、繰り返し使ってやる。我らの巫女を怯えさせるような塵芥どもには苦痛を与え続け、悲鳴を上げ続けることだけが贖罪の方法だ』

むしろ貴方の方がアーシアを怯えさせそうなんですが、と言ってはいけない。というかレジェンドもそれに加わりそうだったのをプーリンやシャルロットが止めた。ついでに混ざりそうだったカーマも千代女や蛍に制止されたものの……。

「いいじゃないですか。殺りましょう！」

景虎のストッパーがいなくなったのでフォウくんにドロップキックしてもらったら一発で沈んだ。強過ぎだろこのウルトラけもの。
その後、暴走さやぴーはレジェンドが連れてきたケルヌンノス（ぬいぐるみサイズ）のおかげで沈静化。そのケルヌンノスを見ていたバーヴァン・シーが羨ましそうにしていたので、沙耶は姉様と共有する感じで二人して愛でている。
かつて酷い事されたケルヌンノスは新しい巫女さんやその妹に大切にされ幸せ、その二人ももふもふふわふわな祭神を愛でつつ怒りも収まって幸せとハッピーエンド。
……はじまりのろくにんとマーリン以外は。

「安心していいぞ、モルガン。はじまりのろくにんだが実はお前達が月に移住してから、うちの日本地獄で悪だくみしてるところを鬼灯に見つかって現在は日本地獄の各地獄でリアルサンドバッグさせられている。いやー……あんな奴らでも役に立つんだな。ストレス解消にと日々獄卒達が殴り倒しているそうだ」
「我が夫、今度日本地獄にお邪魔しても……？」
「鬼灯には事の子細を伝えてあるから、アポ取ってからならいつでも来てくれて構わんそうだ」

なお、ウッドワスやキャストリアも参加希望。そう、はじまりのろくにんだけに彼らの地獄はそこから始まるのだ。
そしてもう一人……。

「……で、何故あんなアイデアを出した、マーリン……？　返答如何にせよ、ロンゴミニアドを撃ち込むことにしているが」
「どんな答えでもやられるの!?　いや、あの案は私が考えたものではなくてね！　ホント信じてほしいんだけど!!」
「白々しい言葉を並べてお得意の逃走か……！」
「嘘じゃないってば！　先代陛下とそっちのアルトリアなら妖精眼で分かるだろう!?　ホラ私の目を見て！」
「胡散臭さと薄汚れた欲望に満ちてるね」
「ちょおおおおお!?　そっちのアルトリア辛辣過ぎない!?　女の私への対応と比べて差が有り過ぎる！」

モルガンとキャストリア、双方から冷めた目で見られてるマーリン。ここで起死回生の一手、本来の案を出して名誉挽回を狙う。
超時空要塞アヴァロン（案・マーリン）。

「これが私の本当の案だよ！　ホント誰があれをすり替えたのか分からな――」

「却下だ、たわけ」
「そこで君がダメ出しするの!?」
「当然だ！　我らを除き艦に超時空要塞の名を冠して良いのはバルキリー開発の主任であり、師父の機体も制作した燕だけと決まっておるわ！」
「そんなルール聞いてないぞう!?」

ＴＨＥ・ギルールと呼ばれる理不尽な制約をいきなり聞かされ戸惑うマーリン。しかもそのアイデア、単にアヴァロンを宇宙でも息が可能なように結界を張っただけのようなデザインである。ぶっちゃけ要塞もクソもない。

「しかし現在に至るまでまともに戦艦のアイデア出してきたのはゼットとエレシュキガルだけか。あとウエディング仕様を除けばモルガン」
「僕は!?」
「あれ主砲相当のビーム以外にどうやって攻撃するんだ？　ついでに対空砲火は？」
「早く動けば問題無いよ！　僕最強だし！」
「だからお前じゃなくて戦艦だっつってんだろーがァァァ!!　ていうか今気付いたが、まさかお前自身が戦艦のフリして艦隊に混じるつもりだったんじゃないだろうな!?　それにもう一つ聞きたかったが仮に戦艦だとしてブリッジは何処だコレ!?」
「え、頭だけど」
「ペガサス級よか狙いやすい位置な上、そこしかないもんなまともに乗れそうなトコ!!　何より艦載機どころかブリッジクルー以外乗せる気無いだろ!!」

やっぱダメだこいつ、とレジェンドも額を押さえてぐったり。本気で考えただろうゼットや、ウルトラマン絡みの戦艦を調べたエレシュキガルの努力を見習ってくれと口に出して言いたい。

「レジェンド、我も考えた」
「あー……どれどれ……」

メカゴジラエンペラー（案・オーフィス）。

『随伴艦のがデカいじゃねーかァァァ!!』
「駄目？」
『何でこんなデカいメカオレ様作ろうとしてんだよ！』
「インパクトはこれ以上無いだろうがな！　作る労力半端ない上に俺しか作れないだろこんなん!!」

竜馬が「何かコレと似たもん見たことあんだよな……」と呟いた。どう見てもゲッターエンペラーのメカゴジラ版ですありがとうございました。
レジェンドとゴジラのダブルツッコミというレアなものを炸裂させつつ、案の定却下。作らせたらレジェンドの過労死待ったなしだもん。

「誰でもいい！　この空気を変えよ！」
「はいはーい」
「エルキドゥ!?　物凄く嫌な予感がするがこの際構ってはおれん！御開帳だ！」

イシュペラー（案・エルキドゥ）
※つまりイシュタルエンペラーです。

「ふふはははははは!!　はははははは!!　あーっはははは!!　はーっ……はーっ……ふははっ……あーっ……」

「ばふぅぅぅぅぅっ!!　ちょっ……エルキドゥおまっ……ぶふっ！
こんなん味方に大ダメぶはははは!!」
最高位光神と究極英雄王の腹筋大崩壊。特にギルガメッシュは若干痙攣してる始末。エルキドゥは満足気な表情だ。よく見るとエレシュキガルも笑いを堪えている。彼女も何だかんだイシュタルに迷惑をかけられた側だから。
「当然ボツだよねー？」
「戦艦としてはボツでもネタとしてはこの上ない素材だったわ！」
「そもそもあと二機はどうなるんだアレ」
「え？　勿論同じのがあと二つ、くっ付くんだよ？」
エルキドゥの言葉で再び二人は笑いの渦に飲み込まれた。実はこれ、エルキドゥなりに彼らのストレスを緩和しようという気遣いだったりする。ストレスが発散された代わりに腹筋にダメージが入ったが。
「あー笑った笑った……落ち着いたし仕切り直しといくか」
「秀逸なものが好ましいが、もはやこの際下手なものでなければ選り好みはせん。まともなアイデアであれば構わん、遠慮なく出してみよ」
「はいはいはーい！」
「よし、何か最近より可愛く見えてきたルリア」
「ホントですか!?　えへへ……」
「して蒼の少女よ、見せてみるがよい」
「はいっ！」
巨竜戦艦バハムート（案・ルリア）
「……同じドラゴンモチーフでもメリュジーヌのと違って結構まとも

だ」
「バハムートの水平飛行状態を基本形にしつつ、戦艦風にアレンジ……やるではないか。中々にインパクトもあり悪くないな」
「じゃあ候補入りだね」

レジェンドやギルガメッシュ専用のものがある飛空艇ラグナロクに似た形状のルリア発案戦艦・バハムート。ネーミングも悪くなく、小型艦か大型艦かで役割が変わってくるそれはメソポタミア最強チーム全員により候補入り。
メリュジーヌが「何で!?」と喚いているが気にしない。
「ふはは、ノッてきたぞ。よし、サクサクいこうではないか!」

☆

――所変わって米花町組――
ねこラーメン道も加わった8人と一匹は夕食の支度を終えて食事中。一応判明したのはこの特異点もサザエさん時空な世界だということで、年月のことはあまり気にしなくていいらしいことぐらいだ。
「そういやウチも怪奇事件絡みじゃ有名になったしよ、その縁で来た招待状の……森谷……なんだっけ?」
「帝二よ、森谷帝二。この世界で有名な建築家らしいわね。さすがにレジェンドさんやギルガメッシュさん程ではないけど」
「いやあの二人と比べたら駄目だろ。あの二人はやる事のスケールが違いすぎるからな。何で一日でデカい島作ってその上に施設まで建てられるんだよ」
一足先に食事を終え、メロンソーダを飲んでいたアキレウスは先日説明されたバビロニア島誕生秘話を思い出して冷や汗を垂らした。

「あー……脱線しちまったけど、その招待状には宛先が『ウルトラQ様一同』って書かれてて誰とも断定されてないしよ……誰が行くんだ？
誰も行かないってのはさすがにマズいだろ」
「一同、だから出来ればそれなりの人数で行った方がいいだろうし……かといって全員で行くわけにもいかないな。最低でも事務所に二人は残したい」

アキレウスやカドックの意見には全員賛成だ。特に事務所にはウルトラ騎空団からの補充・交代要員が来る場合もあるので、常日頃から誰かしら残るようにしている。ねこラーメン道以外で。

「一応所長扱いになってる矢的教諭とそのサーヴァントであるオルジュナは確定……矢的教諭宛で来なかったのか疑問は残るが」
「ならばオルジュナについてきたオレも行くのが筋というものだろう。護衛としても実力は問題無いと自負している」
「じゃあカルナさんも追加ね。となると……」
「僕とモニカが行きますよ。おそらくは毛利探偵も招待されてるだろうから、多分家族連れで来るだろうし」
「ああ……先日チーフが遭遇した子供を預かってるってところだね。色々あって目を付けられたらしいから運が悪いというか、不憫というか」

どっちがとは言わずとも分かってしまうのがウルトラ騎空団である。
そんな時、マリューの次元間通信機がコール音を響かせた。誰かと思えばムウから。すぐさま映像出力モードに切り替えると普段と変わらぬムウの姿が映し出される。

『よう！　元気そうで何よりだ、マリュー』
「ムウ、どうしたの？」
「通信も良いけどたまには休暇がてらこっちにも顔出せよ」

『休暇がてらな。そっちの状況を聞く限り、休暇で行ったは良いが事件に巻き込まれて休暇潰れましたーなんて無いと言い切れないのがまた怖いぜ』
「それマジでありえるからな。ここホント殺人事件多過ぎだっての、宇宙人関係含めて」

ムウ・ラ・フラガ――マリューと恋人同士であり、アキレウスとはもはや相棒。お互い面倒見が良い兄貴分ということで出会って間もないが気心が知れた仲だ。

「それで、何か急用があったんじゃないのか？」
『あー、いや……急用ってわけじゃないんだが、艦長やってるマリューの意見が聞きたくてな』
「私の？　艦長絡みで？」
『実はな、斯々然々……ってことなんだよ』
「マジで何考えてんのか分かんねえな……」

手っ取り早く言うと、今まで出た案をこちらのメンバーにも見てもらい意見を出してほしいということだった。言葉にしたのはアキレウスだが、矢的やカドックも額を押さえている。

「まず、安心出来そうだからゼットさんのを見てみたけどこれは凄いわね。宇宙での活動を基本に見据えたみたいだけど、武装やカタパルトまで文句無しよ」
「結構デカい艦になるみたいだな。ま、当然か」
「エレシュキガルの案は何処かで見た記憶があるわ」
「団長に見せてもらった記録の中にあったウルトリアという戦艦だろう」
「アルトリア？」
「言うと思ったよ！　凄く似てるからな！」

予想通りゼット発案の艦はかなり高評価だ。エレシュキガルのものも悪くはない。
……で、案の定というべきか。
「……このブリッジを狙って下さいと言わんばかりに目立たせているのは……」
『あの妖精騎士の嬢ちゃんのドラゴン形態を模したやつだとよ。しかも御本人考案ときた』
「あ、頭痛くなってきたわ……頭だけに」
「マスター、このウエディング仕様というのは？」
「つまり花嫁が乗ってます、的なものかな……？」
「ルナティックボーダーと書いてあるから月王国の誰かだろ……予想は付いたけど」

月王国関係者による発案艦はまだ良かった。いや少しはマシだという意味で。

「……何か俺の宝具に似た案が出てんだが……」
『あー……それな、フェルグスが出した案なんだが、何かクー・フーリンが必死になって却下してたんで一応形式上それも載せただけだ』
「アルスター絡みかよ、これ」
「ていうか誰だこのはじまりのなんちゃら出した奴！　僕も大まかに聞いただけだが、これ見せられた誰かブチ切れただろ絶対!?」
『それな……女王様が未だかつてないキレ方したよ』
「だろうな！」

フェルグスの方は無事終わったがやっぱり『はじまりのろくにんのふね』は大不評。そらそーだ。

「この超時空要塞アヴァロン……要塞と言うには火力や装甲が心許ない気がするんだが」

「いやカルナさんコレそういうレベルじゃないから」
「まともに戦闘出来るかさえ怪しいわね」
「ルリアさんの考えたバハムート、これは悪くないんじゃないかしら？」
「成程、あの飛空艇ラグナロクもモチーフの一つにしたのか」
「どちらかと言えば小型艦だけど、随伴艦にするならいいと思うわ」

マーリンのは不評だったがルリアのはそこそこ良い評価。戦闘力は少し不安かもしれないが、小型艦とすれば小回りの面で勝り他の艦と差別化も出来る。

……で、最大の問題艦二種類。

「デザインはともかくデカ過ぎだろ!?」
「作るとしたら確実にレジェンドさん任せよね……止めたほうがいいわ。絶対倒れるだろうし」
『だよなあ……メカ怪獣ベースってのは新しいからそこは評価出来るんだけどさ』
「最後の……これ……イシュペラーって……」
「絶対エルキドゥさんだよねコレ考えたの……」
「攻撃方法・体当たりのみって確実に囮になれとかそういう意味なんじゃない？」

エンペラー二種類……メカゴジラエンペラーは大きさ以外は悪くなかった。ただしイシュペラーそれはダメだ。いや、大きさ的に体当たりでも十分脅威なのだが。

エルキドゥのことだから『体当たりは一回限り、当たると爆発する』とか盛り込んできそうではある。ついでにこの質量が爆発を起こしたらそれこそとんでもないのだが、エルキドゥは多分そんなこと考えてない。きっと。

☆

結局、総合的な意見をまとめた結果、ゼット・エレシュキガル・ルリアの案が採用されることになった。まあ当然だと言えよう。デザインと性能面、双方で問題無かったのがその三種類だけだったし。

「ふむ、艦長等は完成してから決めるとしよう。兎にも角にもあれの建造を進めんとな。それと召喚……あまり先延ばしにするわけにもいかんか」

「一人は決まっているが残る5枠はどうするのだ、師父よ。全枠麻婆を召喚してアーサーに食わせる愉悦方法も無くはないが」

「いや、もし召喚したとあれば麻婆主従が食い尽くすだろうから現実的ではないな」

……何か真面目な表情でバカみたいな話をしているレジェンドとギルガメッシュ。最初はまともな内容だったのに麻婆の話題が出てから一気に脱線した気がする。

「いっそランダム召喚も有りなんだが、特殊特異点の修復に赴いている面々の意見も――あ」

「どうした師父――あ」

二人揃って一時停止した後、現在団員が行っている特殊特異点の片方にあった異常の原因を思い出した。

そう、レジェンドは『あの世界』に差し入れがてら顔出しした際、即座に異変を感知して原因を突き止めたのだ。『一人ではなく二人必要』ということを。

「知ったら確実に曇るな、あいつらは。何だかんだ言って最後は解決するだろうが、心に傷は残すだろう」

「フッ……ならばその傷にいきなり特効薬を塗り付けてやろうというわけか。さすが我が師父、これぞ愉悦というものよな」

これだけの言葉でレジェンドのしようとしていることを察したギルガメッシュは流石血の繋がりを超えた絆を持つ二人としか言い様が無い。

「よし、これはタイミングが命だ。まあ功績的に反英雄扱いになるだろうがそんなことは構わんな。クラスとしてはキャスターとルーラーか」

「キャスター側はセイバー枠でも呼べなくもなさそうだが……いや、武器的にランサーか？　ルーラー側は逆にアヴェンジャーで呼べるやも知れぬぞ」

「見た目的にはそっちのが釣り合い取れるんだろうけどなー。扱いがメンドくさい」

「ふはははは!!　結局はどのクラスで来ようが我らに御せぬ事は無いということよ!!」

「ってことで残り三枠か。このくらいならランダム召喚でも別にいいか。ま、何かあったらその時考えよう」

その気になればあらゆる有事を即座に解決してしまえる力を持つ最高位光神はあっさり言い切り、一先ず飯だとギルガメッシュや途中で合流したエルキドゥ、ついでに拾ったオーフィスらを引き連れてウルクの飯処へと足を進めた。

そう遠くない未来――その立場故に長く苦しんだ二人とその終わりを見届けた者達が、伝説の光神と黄金の王により共に歩むことになると知っているのは……今はまだ、その光神と王だけである。

――おまけ――

「マーリンの奴、これで少しは懲りただろ。さてと、たまには俺も寝て曜日――」
「案の定貴様かクソ虫。私達のみならず、特殊特異点にて粉骨砕身の覚悟と共に奮闘している我が娘をより精神的に追い詰めようなどと……そんなに寝たいなら永遠に眠らせてやろう」
「――って何でアンタがいるんだよ!? つーか沙耶あれ見たのか!? 俺はとりあえずマーリンにダメージが入れば良かっただけだしい！
沙耶には悪いと思うけどアンタにダメージ入ったのは不可抗力だよ、ふ・か・こ・う・りょ・く!!」
「良いでしょう……！ ガチガチに捕縛してオーフィスに無限殺しを撃ち込んでもらいます。精々無様な格好を晒すがいい!!」

――その日、月王国で謎の爆発が起こった……が、国民は「またか」と苦笑するだけだったという。なお、原因の二人はキャストリア（アヴァロンモード）に拳骨されてお説教された。

「何で俺が毎回こんな目に……」
「むしろ今回は貴方が元凶ですが」
「……私は悪くありません。ぷいっ」
「可愛く言っても駄目です」

特別編・彼女らの生まれた世界

ある日のエリアル・ベース。
それはルリアの一言から始まった。

「そういえば……皆さんの生まれた世界については少しずつ分かってきましたけど、皆さんの世界は行けないんですか？」

そう聞かれたのはその場に居て、かつリアス達オカルト研究部ないしその縁者と仲の良いマリーダ、ハリベル、しのぶ、そしてレジェンドと付き合いの長いＣ．Ｃ．と九極天の束の五人。

「私は元の世界で死んでしまったからな。アムロ隊長のように行方不明ならいざ知らず、明確に死亡している者が元の世界に顔を出してしまえば大騒ぎだ」

マリーダは確かに仕方ない。
彼女の言うことは的を得ている。

「私は『弾かれ者』だ。どのみち戻れないし、お前達がレジェンド様抜きで行こうものなら同じ運命を迎えることになるだろう」
「ハリベルさんと同じですね。加えてマリーダさん同様、私は元の世界で死亡しているので二重の意味で不可能です」

元々ノアの【エリア】出身の彼女らの場合も当然分かる。
そうなると残るはＣ．Ｃ．と束だが、彼女らも特殊……特に束は元の世界の大部分に嫌気がさしておりあまり関わりたいとも思っていない。

「私の場合は、まあ気になることも無くはないが無理に行く必要もないしな。責任と言われれば仕方ないとはいえ、ギアスによる問題はギアスを望んだ者自身の責任でもある。何処の誰が言ったのかは知らんが、『大いなる力には大いなる責任が伴う』というやつだ」
「「「「ギアス……？」」」」

C．C．の言葉の単語に反応したのはルリアやアマリ達以外に、そこにいたオカルト研究部のメンバーもだ。
何度か耳にしているが、突っ込んで聞いたことがなかったために今の今まで詳しく分からなかった。

「なんだ、あいつから聞いていなかったのか？少なくともマリーダあたりは知っていると思ったが」
「私も詳しく聞こうとは思わなかったからな。聞いたところでお前の場合、はぐらかすか話さないかしかしないだろう？」
「ギアスを欲しがるわけじゃなければ普通に答えるぞ？ぶっちゃけレジェンドと関わってどんなギアスだろうと問答無用で軽々と超える奴がいることを知って自分から言わなくなっただけだ」
「「「「いや、あの人は例外中の例外ではないですかね!?」」」」

絶対遵守には『絶対』にも関わらず容赦なく反抗し、時を止めたはずなのにむしろさらに高速で動き、極めつけは未来を先読みしたらその通りに動かないどころか未来の書き換えまでやりそうなチートトラマンをどうしろと。

「……で、話題は何だったか……そうだ、ギアスが何かというものだったな」

ごくり、と息を呑む一同。

「簡単に言うと王の力だ。以上、そこから先を知りたければピザを

持ってこい。無論、低クオリティのやつは拒否するぞ」
「「「「やっぱりか畜生!!」」」」

やはりC．C．はC．C．だった。
こうなったらレジェンドを引っ張って来て洗いざらい吐かせようかと思ったが逆に吐かされそう（食べたものを物理的に）なのでやめておく。
そもそもC．C．としても話して下手に欲しがる連中が出てきても困るのでそれで構わない。
そうなると残りは必然的に束になるのだが……

「ゴメンね～あそこでの事を思い出すと束さん、物凄～くイライラしちゃうからあんまし話したくないんだ」
「な……何かイヤな事があったんですか？」
「うん。レジェくんと出会えなかったら犯罪者まっしぐら。産廃共を八つ裂きにしてただろうね」
「「「「やっ!?八つ裂き!?」」」」
「話してもいいけど……話す時の精神安定剤としてレジェくんが隣にほしーなー」

束が合掌してゆらゆら揺れているのを見ると確かに嘘ではなさそう……というわけで――

「レジェンド！急ですまないが私達と」
「レジェンドさんはこれから私と買い物に行くので」
「そこを何とか！今回は譲ってくれよアズ！」
「そう言って前回も前々回も強制的に連れて行ったよね」

「レジェンド、今日はこれからアズさんとお出かけみたいです」
「ルリア、この様子だとミツバ艦長も来るかも」

「あら？アズとレジェンド様」
「ミツバか。珍しいな、この時間にここにいるのは」
「ええ、八坂副長にたまには休めと言われてしまいまして。それで、二人は何をしていたんですか？」

「……マズイわね。ミツバ艦長が知ったら」
「イッセー君やタイガ君達が大変な事になりますわ」
「今更だけどミツバ艦長、しのぶと声が似てるわよね」

「……というわけでな。どうやら俺はダシに使われようとしているらしい。やっと休みが取れてアズとの約束を果たせそうだったんだが」
「「「ヤバッ……」」」
「そうだったんですか……彼らは私からキツく行っておくので二人はそのままお出かけして下さい。あ、今度は私もお時間を頂けたら」
「すまんな。必ず埋め合わせはさせてもらう」

「……イッセー先輩達がミツバ艦長に捕まりました」
「代わりにレジェンド様とアズさんが解放されて――」

「「「ぎぃやあぁぁぁぁぁ!!」」」

レジェンドを確保しに行かせた一誠とトライスクワッドはミツバ

が呼び出したゲンによって修行に連れて行かれそのまま気絶させられてしまい、ミッション失敗。

「せめてもう一人……万全を期すならあと二人は同行させるべきだったわ」

「実力的にはカナエと……ハリベルさんかマリーダさんかしら。その二人が駄目ならしのぶさんで」

「待って朱乃、私がメンバー固定されてるのにツッコミたいのだけれど」

しかし、そうこうしているうちに束もC．C．もその場から姿を消していた。

C．C．はともかく束はレジェンドが来れないと知って早々に話を切り上げることにしたのだろう。

結局二人から詳しい話を聞けずじまいとなってしまうのだった。

☆

あの場を離れた束とC．C．は、珍しく二人で束の部屋で駄弁っていた。

「やー、あの場合助かったって言えばいいのかレジェくんアズちゃん私も連れてってと私も突撃するべきだったのか悩むね」

「仮に後者を取ればまたアズ（あいつ）の機嫌が悪くなるぞ。今のところあいつが自分から関わろうとしているのはレジェンドを除けばミツバとお前くらいとはいえ、度が過ぎればお前も選択肢から外れるかもな」

「それはちょっと勘弁してほしいかも」

にゃははーと笑う束だが、その後にC．C．が続けた言葉に沈黙する。

「……何にせよ、けじめは必要だろう」
「……けじめ、か。しーちゃんも何かありそうだけど」
「シャルルやマリアンヌのことは別に気にしていないさ。あいつらの子供がどうにかするだろ。私としてはマオやＶ．Ｖ．の方が気になってな」
「そっかー……行けるなら行きたい？」
「少しはな。が、行けないなら行けないでも別に困らんよ」

割と深刻な様子でもなく、ジュースを飲みながら答えるＣ．Ｃ．に対して束の方はまだ何か考えている様子だ。
そんな束にＣ．Ｃ．は以前聞いたあることを思い出す。

「……妹か」
「うん。あんま仲は良くなかった……っていうか大半は束さんが原因だけどね」
「ＩＳ……だったな。お前が宇宙進出を目指して開発したマルチフォーム・スーツとやらは」
「そ、女尊男卑の思考に凝り固まった女性権利団体のバカ共のおかげで軍事転用されちゃった、私の夢の残滓」

自身の発明をそう言い切れるのは、彼女がレジェンドと出会い既に宇宙へと活動拠点を移し、さらなる夢を目指しているからだ。

「もう私、スペースコロニーに別荘あるしねぇ。ＩＳに固執する必要もないし、ＭＳとかスーパーロボットなんかも作ってるから。私のアストラナガンとかレジェくんのネオ・グランゾンなんてあっちじゃどれだけの年月を経てから作れるようになるのかなー？」
「極めつけはレジェンドのマジンガーＺＥＲＯだな」
「レジェくん、よくあんな子作れたよね。下手な世界の全戦力を遊びレベルで蹴散らせそうな性能でしかもパワーアップするし。まあとどのつまり束さんが何を言いたいのかというとね、当初の予定とは全

く違う用途に使われだしたＩＳが原因で束さんは家族と離れ離れになってしまったわけなのだよ」

こうは言うものの、束としては実妹の箒は大事だが両親はそうでもないらしい。

両親よりも当時唯一の友人だった織斑千冬とその弟の一夏の方が親密だったぐらいである。

「で、その妹に会ってどうする？」

「んー……ちゃんと謝った後に最後のお別れ、かな。もう私もクーちゃんもレジェくんのものだし、あの世界で生きようと思わないから。でもその前にやっとかないといけないこともあるんだよね」

「それもＩＳ絡みか」

「そうかもしれないし、それはついでかもしれない。こっちは……レジェくんの力、正しくはネオ・グランゾンの力を借りるかも。何せ後続の憂いを絶つために完全壊滅させる気だから」

束のやっとかないといけないこととは亡国機業（ファントム・タスク）並びにそれに準ずる組織の完全壊滅。

そのために、判明しているだけでも６６５３５以上の目標を同時攻撃可能なレジェンドのネオ・グランゾンが必要なのだ。

逃げ場や連携を封じ、徹底的に壊滅させ、今後二度と妙な気を起こさせない程に圧倒的な力によるトラウマを植え付ける。

妹や友人家族が安心して暮らしていけるように地下組織含めてそういう存在を蹂躙した後、コアネットワークを介して全ＩＳに各種制限をかけ、しかる後に束自身のメッセージを世界に流して終了、そして永遠にサヨナラ。

「レジェくんに相当無理言っちゃうなあ」

「あいつなら断らんだろ。私利私欲なら拒否するだろうが、聞いた限りでは女尊男卑の風潮やＩＳとやらの優位性を瓦解させるようなも

のだしな。かなり過激だが、けじめとしての理由にはなっている」
「だといいんだけどさ。しーちゃんは？何か変えたいとかないの？」
「さっきも言ったが別にない。マオやＶ．Ｖ．に関しても可能ならばという話であって、特に後者はシャルルと密接な関係にある以上、私でなくても他の者が何らかの理由を付けてどうにかするだろうしな。せめてマオの方は何とかしてやりたいとは思うが」
「なーんだ、やっぱりあるじゃん」
「可能ならば、と言ったばかりだろ。そもそもマオが見つかってから動ける案件だ。しかもマオのギアスは心を読むギアス……しかも暴走して常時発動状態にある。余程上手くやらなければ正面からやり合っても勝ち目は無い。だからレジェンドの協力は必須だ。あいつにはあらゆるギアスどころか概念攻めしようと無効化するからな」
「そこレジェくんのチートも度が過ぎてるよねぇ……」

とどのつまり、二人が元の世界で今の己の願いを叶えるにはどのみちレジェンドの協力は必要不可欠なのである。
束はふー、と深く息を吐いて天井を仰ぐ。

「私の方はクーちゃんも絡んでくるし、レジェくんとアズちゃんが帰って来たらダメ元でお願いしてみるか～。しーちゃんも一緒にどう？」
「ナンパの手口みたいだな、その聞き方は」
「いやいや同じくレジェくんを好きな異性として見てる者同士の合同懐柔策だよ」
「……聞くだけ聞いてみるか。少人数なら行けるかもしれんぞ」
「決まり！ではでは上手くいくよう願掛けの意味を込めて美味しいピザをフィアちゃんに強請りに行こうではないか！」
「ほう、ピザで上手いと美味いをかけるとは良く言った。チーズを含め具材は盛ってもらうとしよう」
「そーしよそーしよ。タバスコかけ過ぎると良くないしソースをちょい辛にしてもらおー」

二人して上機嫌で部屋を出て食堂へと向かう。
その後、匂いを敏感に嗅ぎとったオーフィスとそれに連れられてスカーサハ、ついでにティアマットのドラゴン三娘まで加わりプチパーティーになってしまった。
後日、レジェンド及び少数を伴ってそれぞれの生まれた世界にて『けじめ』をつけて帰ってきたとき、彼女らの顔は霧が晴れたような清々しい笑顔だったという。

○おまけ

「わっははは―！しーちゃんが用事を済ませている間にＫＭＦの情報をたーんまりハッキングしちゃったよーん！こーれーでー……束さんってばＫＭＦだって作れるぞー！エナジーフィラー？サクラダイト？そんなモンはレジェくんとこで培った技術でどーにでもなるのさー!!」
「ブリタニアを始めあの世界の連中では到底及ばぬ頭脳を持つ天災兎に間違った贈り物をした気がする」

唯一のＣ．Ｃ．の誤算は大丈夫だろうと束とクロエに単独行動させたことだった。
※敵側が大丈夫じゃなくなった件。

特別編・ＩＳ～本当にさよなら、私達の故郷

とある世界のとある島――

「レジェくんごめんね、無理言っちゃって」
「気にするな。クロエを助けて以来、いずれはしなければならんだろうとは俺も思っていたことだ」
「申し訳ありません……」
「気にするなと言ったばかりだろう、クロエ。やれやれ……どちらに似たんだか」
「私もレジェくんも背負い込むからねー。二人分丸ごと受け継いじゃったんだよわははー！」

束とクロエはレジェンドに協力してもらい、やり残したけじめ、そして親しい者との最後の別れの挨拶をすべく自分達が生まれ育った世界へと赴いていた。
加えてここには同行者も来ている。

「ゼッくんやしーちゃんもありがとね、付き合ってくれて」
「なんのなんの、束博士には俺の相棒ＥＸ―Ｚガンダムの礼もありますし！というか超師匠と一体化してる以上、一定の距離を超えて離れられないのでございます」
「あー、そういえばそうだったねぇ。割とフリーダムだったから失念しがちだよねそれ」
「私の方にも付き合ってもらう気だからな。貸しは作っておくに越したことはないだろう？ましてや相手がお前ほどの人物なら尚更な」
「にゃははー、ごもっとも。その時はクーちゃん共々御一緒するよ」

そう、ゼットとＣ．Ｃ．だ。
全員が全員、専用機持ちの面子である。
もっとも、この世界において専用機持ちとは大抵ＩＳ関連に使われ

るが。

「既にこちらは補足が完了している。ついでに逃亡先に関してもロックオン済み、いつでも撃てるぞ」

「いやはや実際目にすると圧巻だね、このマルチロックオン。世界レベルでの超広域空間ぶち抜き爆撃。やられた方はたまったもんじゃないよ」

「連中のような奴らを叩き潰すのには慣れているのでな」

言わずもがな、禍の団潰しのことだ。

ただし、あれは生身での壊滅が殆どである。

「で、接触は林間学校？臨海学校だったっけ？」

「うん、どっちでもいいけどそうだよ。そこで箒ちゃんに専用機渡して、ついでにコアネットワークを介して全ＩＳにアンロック不可能な制限をかけて、全世界に私の口から通達」

「それが終わると同時に俺のネオ・グランゾンのワームスマッシャーによる亡国機業を始めとした組織の拠点を狙い撃ち。発射源を突き止めてくるだろうことも想定し、俺達５人で迎え撃つ……と。当初の予定とは順序が変わったな。やる事は変わらんが」

「……ぶっちゃけ過剰戦力過ぎませんかね、俺ら」

「それでいいのだよゼッくん。『お前らがどれだけの技術と人材を得ようと私達には太刀打ち出来ないんだよ』って世界に見せつける意味もあるからね。今の束さんやクーちゃんのレベル、それから私達と一緒にいるレジェくん達の凄さをまざまざと見せつけてからさよならグッバイ永久にー！っていくから。順序を変えたのもそのためなのさー」

ネオ・グランゾン、アストラナガン、ガリルナガン、ＥＸ―Ｚガンダムにコンパチブルガリバー。

最初の２機だけでもう既存どころか数世代先のＩＳでも如何なる

数だろうと瞬殺しそうな規格外の超戦力。
マジンガーＺＥＲＯがいないだけマシだろう。

「で、どうだった？久しぶりの妹との会話は」
「あははー、やっぱり事務的なものになっちゃった感が半端ないよ。ただもう一つ、やっぱりっていうか焦ってる感もあったね。ついでにまだ携帯繋がったんだ、って驚きも感じたかな」
「お前が行方をくらました本当の理由を知らなければそうもなるか」

束としては妹の箒はいつまでも可愛い妹だが、箒にしてみれば要人保護プログラムだかなんだかであちこち引っ張り回されて迷惑千万だったに違いない。
そしてそのプログラムの裏側に隠された目的を知らず、原因となったＩＳの開発者である束を恨んでいても仕方ないだろう。

「ま、決行は明日だよ。今日はゆっくりしよー」
「よし……レジェンド、ピザだ」
「何処でも変わんねーなオメーはよう!?」
「超師匠テンションがおかしくないですか？」
「逆にＣ．Ｃ．様はいつも通り過ぎるというか……」

かつての束を知る者がいたらおそらく目を疑うであろう光景が、そこにはあった。

☆

翌日、林間学校二日目でＩＳ学園の生徒達が集まった中、教師の一人である織斑千冬は一人だけ違う指示を出した。

「ああ……篠ノ之、お前はこっちだ」
「はい」

「そろそろ来るはず……ッ!?」

突如暗くなったかと思えば、飛来したのはいずれも数十ｍに及ぶ五体の機動兵器。

どれも異なる特徴が目を引く機体だが、明らかにＩＳとは違うそれに生徒達はおろか千冬さえ驚きを隠せない。

「何だ……これは……！」

「はろはろちーちゃんお久しぃ！今行くよ！とぉぅっ!!」

アストラナガンを着地させ、膝を折り曲げさせず直立のままコックピットを開けて空中何回転なのか分からないぐらい回転しまくってシュタッと着地する束。

「おい束、これは……!?」

「え、これ？アストラナガン、私の専用機だよ。レジェくんにもらったやつー」

「レジェ……？」

「後でちゃーんと紹介するから。いっくんも久しぶりだねぇ～背も伸びたね」

「お……お久しぶりです束さん」

「うんうん、挨拶は大事だよ。えらいえらい」

いい子いい子とニコニコしながら束はそこにいたただ一人の男性である少年――織斑一夏を撫でる。

「あの、織斑先生……彼女は」

「ああ……部外者は立ち入り禁止なのだろうが、ある意味最も部外者ではない人物だ。篠ノ之束、ＩＳの開発者と言えばわかるだろう？」

周りの生徒達が大声で驚くと、束は煩そうに顔を顰める。

「えええ!?篠ノ之博士って行方不明じゃ……」
「確かにそうだ。私の方に連絡があったのもつい先日……いつの日かを境に足取りが全く掴めなくなっていた」
「そりゃそーだよちーちゃん。私、この世界にいなかったんだから」
「この世界？束、お前何を」
『束、俺達はいつまでこのまま待機すればいいんだ？』
「「「「!?」」」」
「あ、ゴメンねー！いいよ、降りちゃって」

突然聞こえてきた声が男だということに加え、他の機体も有人機だということにも驚愕するＩＳ学園関係者一行。
レジェンドを始めとした面々が機体から降りて姿を現すと、やはりというかゼットやクロエに視線が集中する。

「超師匠、なんかすっごく見られてるんですが」
「そりゃお前一人だけウルトラマンの姿だもんよ」
「クロエの方は……ああ、あいつが原因だな」
「彼女は……」

そう言ってＣ．Ｃ．とクロエが見たのは眼帯をした小柄な銀髪の少女――ラウラ・ボーデヴィッヒ。

「束、彼らは……」
「私が今お世話になってる人とお友達。それと娘だよん。皆まとめて家族っていうのが正しいね」
「ッ……」

家族という言葉に反応したのはやはり束の実妹である箒。
彼女からしてみれば自分や両親からも離れた束が家族という言葉を口にするのは許せないのかもしれないが……。

「さてさて、まずは用事の一つをちゃっちゃと済まそう。皆さんお空をご覧あれ！」
「空？」

レジェンドらを除く全員が空を見上げると、一瞬キラリと空が光ったと思えば赤い物体が急降下してきた。
ドオオオン！と轟音を立てつつ地面に突き刺さったそれは、赤いＩＳ。

「第四世代ＩＳ『紅椿』！当初の設計に加えてレジェくんにも協力してもらったから箒ちゃんもちゃんとお礼言おうね」
「おい束、さっきから言っているレジェくんというのは……」
「あ、そうそう！あそこにいる男の人がレジェくんだよ。束さんのアストラナガンやクーちゃんのガリルナガン、あとしーちゃんのコンパチガリバーもだね。みーんなレジェくんの作った機体なのさ！」
「な……!?」
「これを、あの人が……!?」
「ぶっちゃけちゃうとレジェくん人間じゃないけどね。神様のさらに上、光神様だよ」

次々と分からない単語が飛び出す束の口から一通り説明される。
その間も爆速で紅椿の調整を行っているあたりさすがとしか言いようがない。

「つまり今のお前は彼のお付きというわけか？」
「まーそんなとこかな。レジェくーん！ここレジェくんが担当したとこだからちょっと箒ちゃんとのフィッティング手伝ってー！」
「はいはい。ゼット、あとは自分でやれるか？」
「ノープロブレムです超師匠！束博士とアムロ師匠直筆のこのＥＸ－Ｚ用ＯＳマニュアルがあれば！」

「予想通り分厚いなオイ」

意気揚々と答えるゼットに『まあ自分の興味がある事にはとことん向き合うコイツなら大丈夫だろ』と思い、そのまま束の近くに歩いていく。

「それでどこだ？」

「ここ、ここ。私は他の部分終わらせちゃうからお願いできる？」

「フィッティングのための参考データは？」

「ほいほいっと。念の為箒ちゃんのスリーサイズデータとかいる？」

「いらん」

束に対して「何でそんなものを！」と怒りそうな箒であったが、不要だと即答するレジェンドにも僅かな怒りを募らせることとなった。

だが、それは事実である。

「終わったぞ」

「「「「早っ!?」」」」

「余計な情報が無ければ必要な情報を必要な部分に参照して組み上げ調整するだけだ。余計な情報は逆に変な疑問を持って遅延の原因になる可能性もある。ならば無い方がいい」

バッサリ言い切ったレジェンドだが、そもそも作業が早過ぎることが驚きの原因と気付いていない。

「レジェくんならそれくらい楽勝だよね～っと、終わったよ箒ちゃん。とりあえず武装テスト……の前にレジェくんにお礼を言いましょう！今回を逃すともう機会なんてないだろうからね」

「え……？」

最後の一言がどうにも気にかかるが、箒はクロエの元に向かおうと

するレジェンドを呼び止めて礼を言う。

「あの……ありがとう、ございました。しかし、その……スリーサイズの件は」

「お前は好きでもない相手にスリーサイズを暴露したがる性癖でもあるのか？」

「!!」

「そういうものは好いた相手に教えてやれ。そうだな……あの少年にでも教えてやればいい」

「なぁっ!?」

「え、俺？」

「さすがレジェくん、他人の恋路のフォローが上手いねぇ。レジェくん自身はそれこそ束さん含めて数多の女の子のアプローチにも動じないゾル・オリハルコニウムハートなのに」

「毎回毎回俺のメンタルとかにわけのわからん名前つけられてんだけど納得がいかん」

にゃははーと笑う束の額をツンと突くレジェンドの姿は、まるでカップルである。

束の昔の性格を知る千冬や一夏、そして箒は目を見開いていた。

「もしかして束さんの彼氏か旦那さんなのか？」

「何っ!?そ、そうなんですか姉さん!?」

「んーん、まだ違うよ」

「「「「まだ!?」」」」

（何で束の方が先にそういう相手見つかるんだ……あのコミュ障だった束だぞ？どうしてこう、私はブリュンヒルデとしか見られないんだ。一生独身でいろとでもいうのか）

その場にいるのは色恋沙汰に敏感な女子高生、当然束の発言に食いつくが束としては血涙出しながら睨んでくる千冬にビビっている。

「ちーちゃんこわーい」
「あれは……そうだな。一誠がリアスやイリナ、レイヴェルとイチャついてるのを見かけたモテない連中を見る目に似ている」
「ぐはっ!!」
「千冬姉ー!?」

レジェンドの一言が千冬にクリティカルヒット。
彼女はモテるにはモテるのだが同性に限られている。
どうやら彼女の思っている通り、ブリュンヒルデ＝尻に敷かれるという図式が完成してしまい、男性から敬遠されてしまっているらしい。
そうなると彼女に勝てそうな男……少なくともこの場では、特例なゼットを除くと将来性に期待の一夏（ただし血縁）と既に理想的スペックなレジェンド（ただし脈無し）ぐらいか。

「じゃあ束……あとは悔いの無いようにな」
「うん。ありがと、レジェくん」

「で、武装テストさせつつ話させるように仕向けたのか。正直あの娘、素直に会話するとは思えんぞ」
「だろうな。話してて節々から束に対する複雑な感情が読み取れた。だがこれ以上は姉妹の問題、俺らが口出ししたところでどうにもなるまい」
「……意外だな、いつものお節介が炸裂するとばかり思っていたが」
「少しばかりもう片方にも気を配ってやらねばならんのでな。おいそこの眼帯銀髪」
「!?」

目線を向けるどころか後ろさえ向かずにラウラがこちらを見てい

る事に気付いていたレジェンドは、名前も分からなかったのでとりあえず特徴で呼ぶことにする。

「先程からウチのクロエをじっと見てどうかしたか？」

「う!?い、いや特に」

「何も無いならそこまで見る必要ないだろう。銀髪が珍しいと言う理由はあちこち髪の色がバラついているこの場では通じんぞ」

普段のラウラならば軍人として怯むことなどないのだが、相手はベテラン軍人すら霞むほど激戦を積み重ねてきた最高位光神のレジェンド。

かつて教官であった千冬と比べてなお放たれる圧の次元が違うのだ。

「それは、その……」

「大方お前とクロエの容姿が似ていることに何かを感じたんだろうがな。その越界（ヴォーダン・オージェ）の瞳も含めて」

「ッ!?何故それを……!?」

「さあな。ああ、腕ずくで聞き出そうとするのもやめておけ。ここにいる連中がＩＳを展開して襲ってきたとして、俺は別にこの機体を使わずともお前達を叩きのめす……違うな、蹂躙することなど造作も無い。能力・才覚・経験・練度……いずれも埋められん差があり過ぎる」

レジェンドの言葉に反論しようとするラウラだったが、突如向けられるプレッシャーがあまりに急激に膨れ上がったことで小さく悲鳴を上げて後退る。

「そう、強者を理解出来るのは戦場において生き残るために必要な事柄だ。あっちの娘じゃないが素直になって話しかけてみたらどうだ。やらずに諦める奴を手助けしてやるほど、俺は他のウルトラマンのように優しくはないぞ」

ウルトラマンが何なのかはさておき、ラウラはレジェンドに言われた通りクロエに話しかけに行った。

「超師匠」
「んー？どうしたゼット」
「俺ら暇過ぎませんかねコレ」
「まあな。爆撃準備は完了してるし、やることホントないもん」
「お前ら二人で実況でもしてみたらどうだ？案外ウケるかもしれんぞ？」
「今後来る予定のない世界でウケて何が楽しいんだ」

「……とまあ、こんな感じ。箒ちゃん、何か質問は？」
「大丈夫です。……この紅椿なら、やれる……！」
（あーあ……やっぱりこうなっちゃったかぁ……）

束は妹の様子に溜息を吐く。
今まで遅れていたであろう立場から急に専用機持ち、しかもまだ誰も手にしていない第四世代を手にして浮かれてしまっている。
故に、束は釘を刺しておく。

「……あのね、箒ちゃん。紅椿を手にして高揚してるのはわかるけど、あまり調子に乗っちゃ駄目。まだそれを完全に理解していない上、慣れてもいないんだから。今の状態で何かあって挫折して『もう自分はＩＳに乗らない』なんて事態になったら目も当てらんないよ？」
「心配しないで下さい。自分のことは自分が一番理解してますから」
「ふう……まあ、こうなるよね。じゃあさ、レジェくんに頼んで模擬戦してみようか。当然箒ちゃんはその紅椿、レジェくんは生身でね」
「なっ!?そんなことしたらあの人は……」

「ほらそれ。もう勝った気でいる。そもそも箒ちゃん、レジェくんの実力知らないでしょ？世の中にはね、ＩＳが無くても専用機なＩＳを複数まとめて一網打尽に出来る実力者がわんさかいるの。レジェくんはその代表格にして筆頭だよ」

束は箒が得た自信を悉く粉砕する。

やはりというか、一夏やごく一部の親しい人物を除き少なからず女尊男卑な思考になってしまっており、レジェンドの実力を信じようとしていない。

「……姉さんが言うほど凄まじいとは思えませんが」

「やっぱり証明するしかないかぁ。レジェくーん！」

「どーしたー？」

「ちょっち箒ちゃん相手に模擬戦おねがーい！はいスタート！」

周りの者は脈絡もなくいきなり!?と驚いており、箒も一瞬驚いたがすぐに加速準備に入る。

ガッ!!メキメキメキッ……

「あ……がああああッ!?」

「「「「!?」」」」

しかし準備に入った直後、箒は背後からレジェンドに頭を鷲掴みに

され、凄まじい力で締め付けられた。

「随分急だな、束」

「ごめんねー。やっぱり反応出来なかったみたい」

「あ……が……！」

「ほ、箒!?束さん！」

「ちょっといっくん静かにしててね……おいお前ら。さっきまでレジェくんのこと大したことないと思ってただろ」

「「「「!?」」」」

　束の雰囲気がガラリと変わったことに驚くが、それ以上に凄まじいプレッシャーを放っている事にその場にいたほぼ全ての生徒や教員が恐怖する。

「その女尊男卑思考が祟ってあんな結果だよ。ＩＳは元々宇宙進出と宇宙空間での作業の為に私が開発したもの、それを纏えるだけで優位に立てたと思ってんの？満足に扱えもしないくせにさ」

「が……」

「束、そろそろ俺の勝利かこっちの敗北か決めてくれ」

「あ、うん。ていうかそれどっちも結果同じだよね？」

「気持ちの問題だ気持ちの」

　レジェンドと話す時はいつもの束だ。

　解放された箒は紅椿が解除されて倒れ込み、一夏を始めとした親しい面々が駆け寄る。

「おい！大丈夫か箒!?」

「う……うぅ……」

　強く頭を締め付けられていたからかまだふらつき気味だが、どうにか無事なようだ。

「模擬戦でよかったね。もし実戦形式だったら間違いなく障害残ってたよ」
「束……今のはどういうことだ？いくら開発者とはいえあまりにも……」
「ちーちゃんさ、満足？こんな世界で」
「何？」
「私は嫌だね。女尊男卑の風潮を崩したくないがために他人の幸せも夢もみんな踏みにじっては奪っていくこんな世界。私にとっていらないよ」

束の目には怒りや怨恨が浮かんでいた。

「レジェくん、そろそろ実行に移すけど準備オッケー？」
「漸くか。そっちの準備は？」
「うん、完了完了。それじゃサクッとやってさっさと帰ろうか。グーちゃんの紅茶とクッキーが恋しい」
「おい束、何を……!?」
「待っててねちーちゃん、今の世界情勢……まるっとひっくり返してあげるから」

そう言うと束は箒に近付いて待機状態の紅椿、そして一夏の『白式』にプラグを差し込む。

「束さん!?」
「安心しなよ、いっくん。別にいっくんとか箒ちゃんをどうこうしようってわけじゃないからね。ただ私達の目的には『白騎士』のコアと、最新ＩＳの紅椿のコアが必要なんだよ」
「え、白騎士って……」
「白式に使われてるのは白騎士のコア。つまりここには最初のコアと最新のコア……始まりと終わりが揃ってるんだよね。これは狙って

なかったけどいっくんと箒ちゃんが同じクラスだったのは好都合」

　束は紅椿を箒にフィッティングしていた時とは比べ物にならない速度で空間ディスプレイを操作し、作業を進めていく。

　そしてレジェンドもネオ・グランゾンへと搭乗し飛翔する。

『束、来たるべき時に指示をくれ。それと同時に予め補足していた対象と、新たに確認した対象にまとめて発射する』

「りょーかーい。もうちょっと待っててね。うし完了！さーて、この世界でふんぞり返ってるバカ共はどう出るか……なっと！」

　ポン、と束が悪い笑顔でディスプレイのＥｎｔｅｒをタッチすると、手始めに白式と紅椿、そしてそれからコアネットワークを介し他のＩＳへと急速にあるプログラムが浸透させられていく。

「いえーい！やったよレジェくん！やっぱりあいつら高を括ってたねぇ、ファイヤーウォールもなーんにも進化してない。私がちょっかいかけてこないからって油断してたよ。本物のバカ団体と組織だな～」

「おい！束、お前何を！」

「何ってちーちゃん、本来の使い方を外れたＩＳを軌道修正しただけ。暴走どころかちゃんとルール守るようにしたんだから、感謝こそされても怒鳴られる筋合いはないよ」

「ルール、だと？」

「そう、ルール。具体的に言うとねー」

　束がＩＳ全機に盛り込んだプログラム。

　それはもしＩＳが今後競技以外で他者に武器を向けた場合――

「単に巫山戯ただけであったとしても、連帯責任として全ＩＳがコアを含めて自壊するように、ね♪」

「「「「なっ……!?」」」」

千冬を始め、その場の者がレジェンド一行を除き絶句した。

それは即ち文字通りＩＳでの行動に大幅な制限、そしてそれを破った場合は世界からＩＳそのものが消え去るという尋常ではないペナルティが課せられたということ。

「まあ、まだそれを知っているのはここにいる人達だけだし？束さんの最後の慈悲として今この瞬間各国の軍で使われたりしてるＩＳはそれらのみ即時停止及び分解で済ませてあげたよ。自分達しか知らないのに、他の奴らが何も知らぬままやらかして使用権を剥奪されるようなことは嫌だよね～。私は女性権利団体にそれと似たようなことをやられたよ。箒ちゃんや両親、当時は親しかっただけのいっくんまで……知らぬまま当人達も知らない状態で人質にされててさ」

「「「!?」」」

束が次々と明らかにする事実に千冬、一夏、そして箒は他の者達よりも驚きを隠せない。

「とりあえず自壊プログラムの件も含めてこれから世界にちゃんと説明するからね。それじゃ、ポチッとな」

その瞬間、世界中のあらゆる映像機器がジャックされ束がいるこの場所の映像が映される。

『はろはろ～世界中の皆さんおはこんにちばんわ～この世界で生まれてこの世界が凄まじく憎くなったけどケジメつけるために帰ってきた篠ノ之束さんだよ～』
「しっ……篠ノ之束だと!?」
「馬鹿な!?何故今になって姿を現した！」

『え～本日はだねぇ、おそらく今頃混乱してるだろう軍用ＩＳを始めとしたそういう意味で使われてるＩＳがどんどん分解されちゃってる事象について説明してあげよう！』
「まさか、もう知っているのか!?」
「世界中の映像機器がジャックされているそうです。知っていても不思議ではないかと……」

『それはズバリ！束さんの仕業なんだよね！にゃははー』
「「は!?」」

『実を言うとちょっと前、全てのＩＳに制限とそれを破った時のペナルティを課したんだよね。スポーツ競技で第三者及びＩＳ自身も適当であると認めた場合以外を除き、他のものに対して今後一切武器を向けた場合、連帯責任で全ＩＳ及びそのコアは自壊しまーす！』
「な……何だと!?」
「ふざけるな！そんな横暴が認められると思ってるのか！」

『まあ『開発者だからって何してんだー！』とか思うよねぇ。だったらそのままお前らに返してやるよ、その言葉。私の作ったＩＳに込めた願いを歪めて使って何してんの？それこそ他人の褌で相撲とってんじゃねーよ』
「な……なに……？」
「願いだと……？」

『これを見てる女性権利団体の関係者に聞こうかな。満足かな？自分達のために私の夢も生活も家族と友人関係も全部奪ってブチ壊してくれてさあ。おかげでたった今から私を闇から引き上げてくれた大切な人をこの世界で犯罪者にしちゃうことになったよ。本来ＩＳに込めた宇宙進出の夢はその人が別の形で叶えてくれたっていうのにさ』
「な、何を言って……」
「まさか、あの時のことを!?」

すると、束はある映像を流し始めた。

――はあ!?ＩＳの有用性証明のためにミサイル設備をハッキングして自作自演しろ!?ふざけんな、誰がそんな――
――これは世の中の女性の権利向上のためなのです。断れば貴女のご両親や妹さん、ご友人とその家族にもご迷惑をかけることになりますよ。その証拠に、ほら――
――ッ!?お前らアアアア!!――
――お互いにメリットがあるでしょう？貴女はＩＳが如何に有用か、そして私達は女性が如何に男より優れているかを証明出来るのですから――

当時の女性権利団体による束の身近な者を人質に取った脅迫による自作自演の要求。

まさに束が言った『全部奪ってブチ壊し』。
己の手を汚さず何かあれば束がミサイル基地のシステムをハッキングしたということで彼女に罪の全てを被せ、それでいてＩＳが女性にしか動かせない事を利用して女尊男卑の風潮を作る。
その結果が今のこの世界である。
当然、映像付きでそれを世界中に暴露された女性権利団体は真っ青だ。
しかも普段とは違う様子の束の映像だから信憑性もある。
『で、私が行方を晦ませば私の親族を要人保護プログラムとかいうので保護？はっ、そんなものは名ばかりで私の居場所が割れた時の人質にしやすくするための監視だろうに。政府もグルだとは思わなかったよ』
「そ……そんなことはない！」
「そうだ、これは純粋に……！」

『まあこの際そんなことはどうでもいいや。私はこの世界に見切りをつけたから。話は戻すけど、軍やそれに準ずる組織のＩＳだけ停止・分解したのは温情だよ。まだ知っているのはＩＳ学園の一部の教員と生徒だけだったしね。けど、これで分かっただろうからこれ以上の慈悲はないよ。何なら試してみる？付け加えると違反者が出たらその瞬間、全世界に公開されるようなプログラムも仕込んであるから、一瞬でその国とそのＩＳを使っていた人物は総叩きされるだろうねーあははっ』
「馬鹿な……そんなことが……！」
「すぐに解除を試みろ！何としても」

『ああそうそう、解除しようとしても無駄だから。私の認証に始まり、一文字一文字が１秒で変更更新されるパスワードを一万文字入力す

る必要がある上、仮に接続出来ても全設定を制限時間内に操作完了しないと逆探知でその端末のデータをぜーんぶ抹消しちゃうプログラムも仕込んであるからねぇ、それでもやりたいならどーぞ』
「そ……そんな……」
「あ……あああ……」

『おやおや？ＩＳ本体はともかくプログラムをどうにかしようとした連中はいたみたいだね。ざーんねんでしたー！それから全世界のＩＳ解析データ、たった今全部デリートしちゃったから。今あるものを大事に使うよーに！気持ち新たにルールを守って楽しくＩＳ！なぁんちゃって！それじゃあ、レジェくんだけのアイドル、束さんがお送りしましたー！じゃあねーこの世界のクソッタレ共！喧嘩売りたきゃご自由に！もうちょいこの世界にいるからね！返り討ちが関の山だけどさ！アデューー!!』

「……っはー！スッキリした♪お待たせレジェくん！さー派手にいっちゃおー！」
「ワームスマッシャー!!」

突然周囲に尋常でない数のワームホールが開き、ネオ・グランゾンは予めチャージしておいたエネルギー光球を解放、その全てにビームを発射する。
放たれたビームはワームホール内で威力を落とさぬまま更に分散し、総計６６５３５の目標を圧倒的火力によって全て壊滅させた。
『……ふむ、撃ち漏らしはないな。念の為予定の三倍撃ったのが良かったのかもしれん』
「わー約２０万発の高出力ビーム一斉発射とかレジェくんきっちく～」

「な……何だ今のは……!?」
「ふんふふ～ん♪束さんも確認……さっすがぁ！亡国機業の拠点から拠点にしようと目星付けてたトコまで完全壊滅！スポンサーらしきとこもしゅーりょー！そしてそしてぇ、それに味方する連中とか似たような組織もぜーんぶドッカーン！う～んスカッとした！ありがとーレジェくん!!」

束の出した言葉にまたも千冬は驚愕する。
しかし、一夏と箒は束が開示した事実に呆然としていた。

「え……？俺が人質……？」
「姉さんが脅迫に……？私達が原因で……」
「あー、箒ちゃんやいっくんが原因じゃないよー。あの腐れ組織のクソババア共が悪いから。気に病まないでね」

そう話す束はいつもの束だった。
一先ずやる事を終えて一安心、といったところか。

「さてさて、これで私やレジェくんはこの世界じゃ立派なテロリストかあ……ホントごめんねレジェくん」
『気にするなと何度も言っているだろう。もし光神に相応しくないと糾弾されたらそんな立場は他の連中にくれてやる。光神の立場とお前達のどちらかを選べと言うなら俺は迷わずお前達を選ぶ』
「レジェくんってさあ、予想外なとこでイケメンぶっ込んでくるよね。色々スッキリしたからアプローチの質も量もハイパー化するから覚悟してね？」

手の平を合わせ子首を傾げる束に苦笑するレジェンドだったが、直後にクロエから切羽詰まった通信が入る。

『レジェンド様！束様！』

「あや、どしたのクーちゃん」
『羽虫共でもやってきたか』
『表現がマジンガーＺＥＲＯ様のように……ではなく！確かにこちらに部隊は送り込まれてきていましたがそれが瞬く間に全滅させられたんです！』
「んん??それ、緊急事態なの？」
『よく分からんが面倒が無くなったんじゃないのか？』
『寧ろ面倒が激増です！全滅の理由がっ……』

「ほう……スフィアシステムを目覚めさせる因子を探していたら君達と出会うとはね」

「……へえ、お前がやったんだ」
『アサキム・ドーウィン……！』
『そしてシュロウガとやらか』

一度相対した経験があるクロエとＣ．Ｃ．に、それをリアルタイムで観ていた束はすぐに反応した。
以前、レジェンドやゼットがゴーデスとの決戦に赴いていた最中、

突如として襲来した黒い機体とその操者。
アサキム・ドーウィンとシュロウガがこの世界に来ていたのだ。

『あれがクロエちゃんを圧倒したってやつか！』
『見たところ機体コンセプトはサイバスターに似ていなくもないが』
「そちらのウルトラマン二人……片方は光神でもあるか。君達に加えてそこの女性とは初対面だったね。もっとも……お互い少なからず知っているようだが」
『まあな……それで何の用だ』
「先程言ったようにスフィアシステム絡みさ。だが収穫は無かったよ。ここで君達と争う気はない」
「信じられると思う？と言いたいところだけどゴミ掃除してくれたみたいだし、今回は見逃してあげるよ」
「感謝しよう、天災」

立て続けに起こる衝撃にパニックになるＩＳ学園の生徒や教員達であったが、千冬だけは冷静さを取り戻していた。
同時に思い知る……束と相対している存在が自分達の想像を超えたモノであることを。

「では一足先に僕は失礼するよ。ああ……光神、サイバスターとその操者たるヴァルキリーは元気かい？」
『ああ。使い魔共々な』
「それは良かった。僕が狩るまで力をつけ、誰にも狩られないように伝えておいてくれ」

そう言い残し、シュロウガは次元の扉を開いて恐るべき速度でそこへ突入、そして消えた。

『……会ってみて分かったが面倒な奴だな』
『スフィアシステムとやらが何か知らんが、ロスヴァイセを狙ってい

るのは確か……か。因子云々言っていたからあいつだけを狙っているというわけではなさそうだが』

レジェンドとC．C．は今後の事を考えるとまた頭を悩ますことになってしまった。

クロエやゼットは一先ずホッとしている。

生徒や教員を守りながらでは満足に戦えないからだ。

やることは全て終えた。

もうこの世界に思い残すことはない……いや、あるにはあるが残りは彼ら自身でどうにかすべきだろう。

束は満足したような表情で箒に近付くと、優しく抱きしめてポンポンと頭を軽く叩いた。

「……姉さん……」

「頑張れ、箒ちゃん。束さんが言ったこと守んなきゃ駄目だぞー？ＩＳでも恋でも油断大敵、石橋をゴルディオンハンマーで叩いて渡るくらいしなきゃ」

「おい束、アレは叩いたら光になるから渡る以前の問題だろうが。せめてハイパーハンマーにしとけ」

「あれもあれで危ないよー？トゲ付きの鉄球だし」

レジェンドがネオ・グランゾンから降りて束を迎えに来る。

僅かに震えてるのを見たレジェンドは、もう少しだけ時間をやろうと思い、織斑姉弟の元へとやってきた。

「……これからもお前達はその生まれから様々な困難に遭遇するだろう」

「……！まさか……」

「生まれ？何のことですか？」

「それはお前達が自ら知るべきだ。俺の口から語るべき事じゃない。ただ一つだけ言っておく」

一夏の頭を撫でつつレジェンドは父の、或いは兄のように優しく告げる。

「大切なものを守り、夢に向かって飛べ。束がＩＳに込めた願いは争うものにあらず、未来を夢見たもの。先程言われたように正しくＩＳを使えばそれは無限の未来への扉を開く鍵になる」

「無限の未来……」

「それからな、えらくモテているようだが不憫には注意するんだぞ。主に俺はモテなくても悲惨なぐらい不憫だがな!!というか不憫にモテてんじゃないのか俺!!」

『超師匠、台無しでございました』

突然キャラが壊れたかのように叫ぶレジェンドに、一夏は鳩が豆鉄砲食らったような表情になったが、自然とすぐに笑みが零れた。

「いや、俺も不憫ですよ。なんていうかパンダみたいに扱われてる感ハンパないし、何かというと些細な事で選択迫られては選ばなかった方から殺意ビンビンに叩きつけられるし」

「後半は同意だな。俺は不可抗力なのによく『ぷんすこー』と言いながらヘッドロックをかけてきたり、身動き取れなくされた後に片足に関節技かけられたり……」

「分かります！いや俺も似たようなことされましたし……なんだろ、貴方がお義兄さんだったら良かったのにって思えてきた」

「!!」

何故か意気投合してしまったレジェンドと一夏。

一夏の方はどちらかというとラッキースケベとか配慮不足なんかもあったりするが、その後のカウンター度合いが理不尽なのでまあい

いか。

「おーうちーちゃん、レジェくんは渡さんぞー？いっくん、お義兄さんが欲しいなら箒ちゃんとくっつくともれなくレジェくんがお義兄さんになるよ！」

「えっ？」

「ねっ!?ねねね姉さん!?」

「あっはっはー！これは冗談で終わらす気はないからね。ホントに頑張んなね、箒ちゃん。ライバルは多いし手強いぞー」

束が笑いながら指差した先では、一夏がセシリアや鈴音、ラウラにシャルロットに詰め寄られていた。

先程の束の言葉に反応した結果だろう。

何気にレジェンドに助けてほしいような視線を向けているし。

「……はい、もちろんです」

「よろしい。レジェくんもね、他人の恋路に敏感で後押しまでしてカップル成立させまくってるのに、自分が絡むと途端にいっくんと同じように鈍感になってさあ……」

「それは苦労しますね」

「でしょー。しかもなんか向こう意気投合しちゃってるしさ。手を組まれたら二倍厄介になりそうだし引き離しに行こっか！」

「ええ……！一夏！何を鼻の下伸ばしている！」

「ちょっ!?これのどこがそんな状況に見えるんだよ!?」

「レジェくーん帰ったらオーちゃんアーちゃん、それからルリぴっぴにアマにゃん、トドメにアズにゃんとみっつんを筆頭にぷんすこーの刑ね」

「オイ規模が尋常じゃないぞ!?」

「そうだぞ束！そんな事するくらいなら彼は置いていけ！私が貰う！」

「駄目だぞちーちゃん！大してレジェくんとも付き合いないくせに婚

期を逃すかもしれないとデキ婚に持ち込もうとしたら!!」
「ゴハァッ!?」
「千冬姉ー!?今日二回目!!」

何故かレジェンド一家と同じような事態になってしまうレジェンド一行と一夏達。
これに関してはレジェンドが不憫について話し出したことが原因かもしれない。
ひとしきり騒いだ後、再びそれぞれの愛機に乗り込んだレジェンド達は各々の機体を飛翔させ、一夏達はそれを黙って見守ってる。

『さて、今度こそ本当にお別れだ。もう俺達からこの世界に来る事は無いだろう』
『あ、ちーちゃんが絶望的な顔した』
『え?あの人この世界最強と聞いたんでございますが』
『別の方面のメンタルはそうでもなかったようだな』
『C・C・様、せめてオブラートに包んで下さい』
『お前ら俺の真面目な雰囲気返せ』

そんなやり取りを見て笑う一夏ら。
途中の険悪な空気はもはや微塵もない。

「あれを逃したら私はまた独身街道をひた走るハメになるかもしれんのだぞ!?」
「いや千冬姉必死過ぎない!?」
「煩い!お前は良いよなあ一夏ァ!ただ嫁をたくさん貰うだけなんだからなァァァ!!」
「ぎゃあああああ!?」
「「「「一夏（さん）ー!?」」」」

……確かに不憫という点ではレジェンドと一夏が意気投合しても

おかしくないのかも。

『箒ちゃーん!!』

「!!」

『しっかり旦那様連れて私を追っかけに来なねー!この世界には来ないけどそっちから来るのは大歓迎!こっちの宇宙にある私の別荘でたくさんお話出来る日たのしみにしてるからー!!』

「姉さん……!はい、必ず!!」

外見に似合わず、思いっきり手を振るアストラナガンへと笑顔で返す箒。

長い年月を経て、漸く姉妹の凝りは溶け切ったようだ。

天に浮かぶ魔法陣らしきものに吸い込まれるように消えて行く5機の機動兵器。

全てが魔法陣の向こう側へと消え、最後にその魔法陣も消えるとそこには雲一つない青空が広がっていた。

☆

ＩＳへの過剰とも言える制限は女尊男卑という風潮を覆すには十分過ぎる結果をもたらした。

女性しか扱えない反面、それを扱う者は文字通り国の命運を背負っているに等しい。

それこそ日々の生活態度さえ監視されそうな重責から誰もが逃れようとし、結果ＩＳが使えるから女性の方が優秀であるという考えは徐々に減衰していった。

同時にＩＳ学園では束がＩＳを開発した本来の目的が判明したため、各国の援助を受けつつ宇宙進出へとＩＳを使用することを決定。

別れ際に束からレジェンド達のこれまでの戦いの記録を渡されていた一夏達はその凄まじさにまたも驚愕。

宇宙どころか次元を股にかける壮大なものであったことで尚更宇

宙を目指す気になったという。
そして――

☆

――ヒリュウ改――

「ぷーんすこー」
「コラオーフィス！服を引っ張……いや剥ぎ取ろうとするな!!」
「服だけなら燃やしてもいいよね、レジェンドさん」
「アマリちゃァァァん!?発想が恐いんだけど!!」
「……じゃあ、先に私が脱いだらレジェンドさんも脱いでくれるとか？」
「アぁぁぁぁズにゃぁぁぁぁぁん!?ストップ!!ストップだ!!いいかお前ら、既成事実はアウト!!絶対駄目!!ＯＫ!?つか何でそっち狙うようになってんの!?」

相変わらずレジェンドの精神は擦り減らされていた。
束と千冬とのやり取りが原因でしかも千冬が拗らせた上に一夏の発言が引き金みたいなので、今回は濡れ衣でもいい気がするのだが。

「あの、束さん」
「ん？なーにルリぴっぴ」
「その人ってあの、その……」
「胸おっきいよ」
「ババムート!!」
「ぎゃあああああ!?おい束ェェェ!!」
「あっはははー!!」
「そんな束さんにはカタリナさんの作ったお菓子をプレゼントしますね。はい、どうぞ？」
「がごっファ!?」

「束さん!?ミツバさん!?」
「アズがおかしい事言い出したのは貴女が原因とクロエさんから聞きましたよ?」
「う……うぅ……クーちゃーん……」
「すみません束様……私もそれを食べさせられるところでした……」

奇しくも一夏ら同様、レジェンドとよく一緒にいる女性達がドタバタしている。
騒動の中心になっている二人がそれぞれ見たらまた親近感湧いて、それこそレジェンドが織斑姉弟と養子縁組しそうな気がするが、一夏は喜びそうでも千冬が断固として反対するだろう。
主に自分の婚期の問題で。
……レジェンドを手に入れるより自身のイメージを払拭した方が手っ取り早いと思うのだが。
同じ過去でも、違う世界、違う今、そして違う未来。
ただ、変わらないのは別れ際に結べた絆。

「……あとは私の方か。ゼット、またお前にも付き合わせてしまうが」
「別に問題ナッシングでございますよ。遊撃隊は様々な世界へ赴くわけですし。それよか超師匠がそろそろヤバくないですかね?」
「なに、アーシアがいるだろう?」
「それ瀕死と完治の地獄無限ループじゃね?」

どんな事になろうと、彼らは彼らで歩んでいく。
いつかまた、あの世界ではない何処かで再会出来ることを信じて。

「レジェくんクーちゃん助けてぇぇぇ……」
「それは俺の台詞だコンチクショー!!」
「あぅ……その、えっと……」
「超師匠!俺が助けにギャーッ!?」
「早々に助けられる側になったな」

ＩＳ特別編・完

特別編・スーパーロボット対戦ＵＬＴＲＡ・序章

ある日の午後――依頼も無く平和なその日。

「はーい！全員準備オッケい？オッケいだよねー！」

「「「「はーい!!」」」」

現在、ウルトラ騎空団の全艦に設置されている機動兵器訓練用シミュレーターは全てリンクされていた。

束の質問にほぼ全員がノリノリで返事を返し、シミュレーターが起動される。

「それじゃあ……『全ての相手チームをぶっ飛ばせ！チームサバイバルアタック！』スタートおぉぉ!!」

「ニャ」

カーン！とハク（報酬のカリカリに釣られた）の猫パンチでゴングが鳴らされ、一斉に動き出す参加者の機体。

☆

事の始まりはいつも通りルリア……ではなく、まさかの――

「そういえば、まだ専用機持っていない方々で競い合ったら誰が一番なんでしょうね？」

しのぶであった。

これに食い付いたのがシミュレーターをやり始めた面々であり、同時に未だ専用機を持っていない、もしくは開発の目処が立っていない者達である。

「はいはーい！私自身あるよ☆」
「しのぶー、私も最近成績良いわよー」

まずアピールしだしたのが初っ端から当たりを引いたセラフォルーと、一応シミュレーターに関われる時期はオカ研メンバーでアーシア以上、一番あったのにろくすっぽ練習してなかったカナエ。

「でもセラフォルーさんはともかく、姉さんは練習出来る時間はあったのにしてなかったからまだ私の方が上手いわよね」
「ふぐぅっ!?」
「カナエ、乙女が簡単に出していい声じゃないわよ」
「しのぶさんのヒュッケバインボクサー、スコアが実機無しメンバーでトップ5に入ってますし」

ガチで凄かった元蟲柱。
ちなみにカナエは同カテゴリで13位、そこ不吉とか言わない。
リアスより朱乃による実績暴露の方が今のカナエにはダメージが大きかったようだ。

「ぶっちゃけると最近まではゼットが1位だったよな。EX—Zガンダムのデータ届けられてからそれまで2位3位とデッドヒート状態だったのをぶっちぎりで突き放したのは正直ビビった」
「ゼットって機体によって強さが両極端なんだよ。あまり使い慣れていない機体だと最新鋭機でも弱いのに、逆に後年のスペック差があっても使い込んだガンダムとかだと異様によく動くから」

レイトの発言にミライが補足も兼ねて説明する。
実際にガンダムを使用した際のゼットの動きはたとえ真似出来たとしてもアムロかレジェンドぐらいだろう。
ちなみにゼットとトップを争っていたのは、なんとリクとソーナ。
ソーナは始めた時期が遅かったのは勿論だが、生徒会長という立場

上なかなか時間もとれず、さらにダイブハンガーで暮らしているわけでもないという不利な状況だったにも関わらず、落ち着いて戦況を見極めて攻め時を見誤らない的確な戦法でスコアを伸ばし、先日ガーリオンから連続でシミュレーター内の機体を乗り換えて益々好調。

リクはというと、色々な機体で色々な戦術を試しているうちに何故かガンダム試作３号機……とどのつまりＧＰ０３デンドロビウムが解禁され、それを愛機として猛威を奮っていた。

しかも宇宙どころか地上（常時飛行）にまで適応してしまったため、あの巨体がところ構わず暴れ回るというとんでもない事態をやらかしている。

「生徒会長は純粋にスゲーと思うけどさ、リクさんのアレは恐怖しかねーよ……」

「イッセー君の量産型ゲシュペンストＭｋ―Ⅱ改に容赦無く突撃して零距離メガビーム砲発射だもんね」

「木場……お前もあれやられりゃ分かる。ＰＴのコックピット丸々飲み込む砲口ぶっ刺されて叩き込まれるんだぜ……シミュレーターで良かったよマジで」

タイガも横でうんうん頷いている。

そんな彼も大型ビームサーベルで問答無用の一刀両断されたという。

そういや闇のベリアルの変貌したベリュドラとＧＰ０３デンドロビウムは構造的に似てるっちゃ似てるというか……やはり親子だ。

「うむ！では試しに総当たり線でもやってはどうだろうか！もしくは何名一組かに分かれて団体戦！普段とは違った訓練になるやもしれんぞ！」

パム治郎を構いながら言ったこの杏寿郎の一言が決め手となって束がノリノリで、しかも普段は参加しないような面子も出揃ったこと

で急遽大会じみたサバイバルが実現してしまい、冒頭のような事態と相成ったというわけであった。

☆

「さぁてそいじゃまルールのおさらい！今回は1チーム４機の団体戦！大事だからもう一度言うよ！1チーム４機の団体戦だよ！４人ではないということをよーく理解してね！」
「つまり４機の中に複座型がいたりするわけですね。あとは合体式の特機とか」
「そう！れっちゃんの言う通り1チーム４機６人とかになってもルール上は問題なし！それから1チームに1人は実機持ちが加入しているよ！その経験者と協力して相手チームを撃破するもよし、保険として控えてもらうのもよし！最終的にタイムアップまでチームの一人でも生存しているか、もしくはチームが複数生存している場合はテクニカルスコアの数値によって勝敗が決定！」

分かりやすく言えば参加した自分チーム以外を全て全滅、もしくは上手い操縦しながら生き残って点数勝負というのが今回のルールだ。
そして、今回の出場メンバーはこうだ。

○オカ研×遊撃
・ダブルオーザンライザー・ＳＳ／Ｇ（レイト）
・シナンジュ（リアス）
・エクサランス・ストライカー（一誠）
・ビルトビルガー・タイプＬ（タイガ）

「んん!?何か二人ほど機体めっちゃ変わってるにゃ！」
「イッセー先輩とタイガさんですね」
「赤色の機体ばっかだからダブルオーがよく目立つな」

○悪鬼滅殺
・グルンガスト参式（杏寿郎）
・ヒュッケバインボクサー（しのぶ）
・ヴァルシオーネR（カナエ）
・ガンダムハルート（小芭内＆蜜璃）

「……姉さん……」
「大丈夫だから！これちゃんとした機体だから！」
「うむ！やはり伊黒と甘露寺は二人一組が似合うな！高機動戦闘は頼むぞ！」
「はい！頑張ろうね、伊黒さん！」
「勿論だ。勝ちに行こう、甘露寺」
「さて、私は参加出来ぬが鬼討組の頭としてじっくり見物させてもらうぞ、お前達」

○レヴィア☆たんず！
・ファービュラリス（セラフォルー）
・ズィーガーリオン（ソーナ）
・ブレイヴ（指揮官用）（匙）
・ＥＸ―Ｚガンダム（ゼット）

「何でゼット混じってんの!?」
「しかも実機持ちなのに一番最後に記載されてるし」
「知らないうちに組み込まれてました」
「やべーぞこのチーム、スコア1位独占してた奴とトップ争ってた奴が揃ってる上にあの魔王の姉ちゃんも割と凄腕だろ」
「いやちょっとは匙にも触れてやれよ!!」

○ＴＨＥ・ＵＬＴＩＭＡＴＥ
・ダブルオークアンタフルセイバー（サーガ）
・ガンダム試作3号機（リク）

・ゴッドガンダム（ゲン）
・ガンダムバエル（ミライ）

「「「「ヤベーやつしかいないんですけどオオオオオ!!」」」」
「え!?ちょっ！シミュレーターってもバエルの阿頼耶識どうなってんの!?ミライさん大丈夫かアレ!?」
「誰だよゲンにゴッドガンダム薦めやがった奴は!?」
「サーガさんって、レジェンドさんやアムロさんとまではいかなくても腕前は上から数えた方が早かった気が」
「ゼットやソーナ生徒会長が出たからって何でそのチームに属してんのジード先輩……！」
「だってウルトラマンチームだし」

○アザゼルと愉快な仲間たち
・ガリルナガン（クロエ）
・R―GUNリヴァーレ（アザゼル）
・アースゲイン（フェザー）
・ヴァイローズ（ランドル）

「アース？ローズ？ソウルゲインでもヴァイサーガでもないの？」
「アースゲインは上半身、ヴァイローズは下半身を使った攻撃に特化した機体らしい。フェザーは拳、ランドルは脚……蹴りが得意だからな、うってつけの機体だ。ついでに元はスーパーアースゲインという一体の機体だったようだぞ」
「アザゼル先生は……まあ、うん」
「何だよハッキリ言えよ!?」
「「「「クロエ（ちゃん）にセクハラしたらガチで死にますよ」」」」
「いや、しねーから!?」
「つーかアザゼル以外適当に集めたよな、このチーム……クロエがいるから戦力的にはしっかりしてるんだろうけど」

○猫と不死鳥
・ソウルゲイン（黒歌）
・フェアリオン・タイプＳ（小猫）
・フェアリオン・タイプＧ（レイヴェル）
・ツヴァイザーゲイン（夜一）

「「「「癒やしとエロスですか」」」」
「機体の系統も良い感じで等分……って明らかにヤベーの混じってんじゃねーか!!」
「束ー!あの技の時録画お願いにゃー!!」
「おうさ!任せたまえー!!」

○特別チーム※実機持ちビギナー二組有
・ゼルガード（アマリ＆ルリア）
・デュラクシール（アーシア）
・サイバスター（ロスヴァイセ＆フウ）
・スーパーメカゴジラ（オーフィス＆ゴジラ＆グレイフィア＆スカーサハ＆ティアマット）

「「「「一番無害そうな娘が一番物騒なのに乗ってんですけど!?」」」」
「ゼルガードくらいか?まともなの……」
「サイバスター、中に猫が一匹足んねーぞ……ってそういやゴング鳴らしてた猫って彼女の猫じゃね?」
「逆にあのメカゴジラには乗り過ぎだろ!?ドラゴン三娘揃い踏みかよ!」
「そんぐらい必要なんだと。というかゴジラがメカゴジラに乗ってる状況にツッコめや」

○ウルトラ・フェードラッヘ
・グルンガスト零式（ジークフリート）
・グルンガスト（藤宮）

・グルンガスト2号機（我夢）
・グルンガスト弐式（ランスロット）

「「「「見事なグルンガスト一色!!」」」」
「零式があまりにイメージ通り過ぎる……」
「あれ、パーシヴァルとヴェインは？」
「今回は二人に譲ったんだって」
（（（（どちらにも当て嵌まるよな、この場合……））））
※ジークフリートとランスロット、もしくは我夢と藤宮の二人二組という意味で。

【ボスキャラ】※所謂おジャマキャラ
・マジンガーＺＥＲＯ（レジェンド）

「『ボスってレベルじゃねーだろォォォォォ!!』」
「一人だけど！一人だけなのに一番恐ろしい!!」
「カミナやシモン、三日月に竜馬、果ては凱とかアムロとかいても敗北必死な相手だぞ、先輩は」
「レジェンド単体だとな！それに加えてマジンガーＺＥＲＯとかゲームオーバー確実だろ!!」
「二人の性格考えるとアーシアちゃんには攻撃しないんじゃ……」
「んじゃこの聖女を盾に……ハッ!?」
「オイオイオイ死ぬわアイツ」
「次回、アザゼル死す！デュエルスタンバイ！」
「誰も助けようとしてくれないのかよ!?」
「「「「自業自得かつ助けようとしたらもれなく死ぬだろうが!!」」」」

以上の８チーム＋ボスによるサバイバルマッチ。
はたして勝利は誰の手に!?

「……優勝商品、俺のポケットマネーから出すことにされてんだけど。ＺＥＲＯ、俺ちょっと頭きたんで今回本気出すわ」

『奇遇だな。我も連中には灸を据えてやらねばならんと思っていたところだ。数名除いて』

今、最強の光神と最凶の魔神がブチ切れる。

特別編・スーパーロボット対戦ＵＬＴＲＡ・開幕

いよいよ始まったチームサバイバル（相変わらず一人、チームではなく単独ボス枠の者がいる）。

馬鹿騒ぎ大好きな面々が揃うウルトラ騎空団では全艦のレクリエーションルーム等のモニターにその様子が放映されており、どこが強いのかなど大いに盛り上がっていた。

「当然の如くレジェンド様不憫よねぇ。強制参加から優勝商品まで面倒見させられてしかもソロプレイ、あたしなら聞かされた時点でブチ切れてるわよ」

「あの方は沸点が相当高いが、一度本気でキレたらまず目的を果たすまで止まらないからな。例外はあるが」

「まあ、そういう意味でも今回はいいストレス解消になるんじゃないかしら？」

「解消の材料にされる側はたまったもんじゃないけどね。あ、お酒追加お願いねー！」

乱菊、ハリベル、涼子の三人が集まっているテーブルは兎にも角にもばいんばいんなのでそっちも注目されていたりする。

「どのチームも手練が混じって……いや特別チームはちっとばかしキツいか。実機持ちの連中は経験不足だし、アーシアは性格的に戦闘向きじゃねえ。希望があるとすりゃグレイフィアの姐さんが乗ってるスーパーメカゴジラだが……ドラゴン三娘がどんなレベルかが問題だな」

「オルガ、サーガ様のチームに見たことあるのが紛れ込んでない？」

「ミライの兄さんが乗ってるバエルだろ？マジで誰だあんなん薦めたのは」

オルガも三日月とフライドポテトを食べながら見ているが、案の定

バエルに反応してしまう。

「竜馬から見てどうよ？お前の興味ある奴どいつだ？」
「そうだな……実機持ちを除けば、あのソウルゲインに似たアースゲインってのとヴァイローズだな。ありゃ機体との相性が相当良いのが一目で分かるぜ」
「そういうアニキは誰が注目株だと思う？」
「他の奴らに比べて一回り小せえフェアリオンって2機だ。小せえからってバカに出来ねえのはラガンで分かってるからな！シモンはどいつがやらかしそうに見えんだ？」
「当然、一誠とタイガの新機体さ。どっちも接近して一撃必殺を叩き込むタイプ、どんな動きを見せてくれるか楽しみなんだ」
「メインカラーも俺らの機体と同じだからな。確かに気にはなる」

竜馬とカミナ、シモンはやはりコンビか、機体同士の相性を重視して見ている。
そして、パイロットを務めている女性陣の一角では――

「しのぶは当然として、最近はリアスも強いわよね。あとは勿論ソーナ……このあたりの激突は白熱しそう」
「ん～……アタシとしてはアーシアかなあ。機体が機体だけに吹っ切れたら相当強いと思うんだよね。難しいだろうけどさ」
「少ない複座型での参戦な蜜璃と小芭内のハルートは練度が絡むが強力だろう。二人の相性は抜群である以上、あとは機体をどれだけ扱えるかで戦力が大きく変わる」

ヨーコとラフタ、マリーダは堅実なところから意外なアーシアまで幅広く活躍の予想をしている。
そして今回未出場の朱乃やゼノヴィア、そして裕斗とギャスパーにタイタスとフーマ、顧問の矢的に加え、イリナとパム治郎（杏寿郎から預かった）も混ざったオカルト研究部のメンバーは、ダ・ガーンも

一緒に観戦出来るようにとわざわざ開始前に格納庫に彼を出してもらい、そこに色々持ち込んで共に観戦している。
　同じく未出場な千歳とナインにアズ、そもそも艦長なミツバも同席していた。

「なんかすみません……私達までご一緒に」
「気にしなくていいぞ如月さん。僕達は仲間……いや、チーフの言葉を借りるなら騎空団の家族じゃないか。この程度のことで遠慮は不要だぞ」
「矢的先生の言う通りですわ。約半分のメンバーが参加してしまって寂しくなってましたし」
「僕もリク兄さんや小猫ちゃんが参加してるし、煉獄さんやしのぶさんもあっちにいますから……」
「元は私が観戦出来るようにと願ってくれたんだ。こういう場合は君達ではなく私が例を言わねば。ありがとう、皆」
「８０先生も言ってたけど気にすんなって。それよか皆としては誰に注目してんだ？あ、オカ研メンバーはオカ研を除いた意見でな」

　ダ・ガーンの礼にいつもの調子で返し、当然のように聞いてくるフーマ。
　何人かは悩み、何人かは即答する。

「私は無論杏寿郎だ！あれから訓練も欠かしていないようだし、期待出来る！」
「僕もかなぁ……いや、グルンガスト零式のジークフリートさんもだね。あの二人がぶつかり合ったら白熱するんじゃないかな」
「ヴァイサーガ使いはいないのか……良かったような残念なような」
「アンジュルグもいないわね。剣と弓矢両方使えるのって中々いな……アレ？ゼットさんのゼットランスアローって似たようなものじゃ……」
「私はゼットだ。彼は伸びしろが凄まじいと聞いている。今回も土壇

場で急激に成長するかもしれない」
「僕としてはクロエだ。アザゼル先生や、この騎空団で出会ったフェザーとランドルの二人という変則的なチームのフォローは唯一機動兵器での戦闘経験がある彼女にしか出来ないだろう」
(((((やっぱりアザゼル先生頼られてなかったー……)))))

仕方ないといえば仕方ないのだが、正直矢的が代わりに出ていたらもっと団結力があるチームになったんじゃないかあのチーム。
熱血系猪突猛進なフェザーとそれをライバル視しているランドル、割と自由気ままなアザゼル……クロエの負担が半端ない。
ついでに説明しておくと矢的もシミュレーターでの訓練には参加しており、乗機はなんとガンダム試作４号機……即ちＧＰ０４ガーベラ。
ＧＰ０３をも凌ぐ超激レアな機体である。

「私は……う～ん……アマリちゃんとルリアちゃん。実際だと乗ったまま星晶獣を召喚したりしてるけど、今回はシミュレーターだからそれも出来ないしどうするのかなって」
「個人的な意見ですとスーパーメカゴジラの方々です。あの中ではグレイフィアさんしか冷静な判断が出来ないんじゃないかと。スカーサハさんも落ち着いてはいますが機動兵器に関しては素人で割とパニックになるかもしれません。だからグレイフィアさんがどう出るかであれの能力は決まると思ってます」
「私はおそらくゴッドガンダムに乗ってるおおとり師範が飛び抜けてると思いますね。アザゼル先生のチームの二人は戦法に特化してますけど、おおとり師範は格闘そのもののオールラウンダーですから。アズは？」
「レジェンドさんの一人勝ち。皆、わざとそれを言わないようにしてるのかなって思ったけど……」
「「「「うん、普通に考えたらそれしかない」」」」

アズが言った一言に納得してしまう全員。
他の面々が敢えて考えないようにしていたところに容赦なく言い切るアズも結構アレである。
そんなこんなであちこちで意見が飛び交いつつ、いよいよ本格的にチームサバイバルがスタートした。

☆

『さーてここからは束さんに加えてれっちゃんやみっくんも実況解説に参加してもらうよ！二人ともよろしくぅ！』
『ええ、特等席から失礼します』
『……ゼノヴィアは未出場か』

鬼師範・巌勝、早速継子がいないことに嘆息。
何処かから別の意味で嘆きの声が聴こえたが無視しておく。

『みっくんそれは次回に期待しよう！というわけで始まった今回のサバイバル！レジェくんはルール上、開始しばらくは喧嘩売ってきた相手をカウンターするぐらいしかしないから、生き残りたかったらヤブを突くようなマネはしない方が無難だよ！』
『襲いかかったが最期、チームを巻き込んで自滅する最悪の結果になりますし』

卯ノ花、オブラートに包まずスッパリ言い切ってしまった。
まあレジェンドとマジンガーＺＥＲＯが自由に動けたら開始早々全滅させられて終了、味気もクソも無いものになってしまうしちょうど良いだろう。
……レジェンドとマジンガーＺＥＲＯの怒りの熟成具合も含めて。
今回は地上が戦場であり、市街地や廃墟、森林や洞窟、さらには湖や砂漠に湿地帯など様々なフィールドが組み合わさった複合大規模バトルフィールド。

とりあえず見てみると、どのチームも動くには動き出してはいるのだが、相手の位置は分かっても何処にどのチームがいるのかは分からないようにしてあるため攻めあぐねている。
参加チームの中で強いのはやはり最強メンバーと言っては過言ではないサーガ率いるＴｈｅ・ＵＬＴＩＭＡＴＥを筆頭に、成績優秀なレヴィア☆たんず、機体・パイロット双方が並外れているクロエのいるアザゼルと愉快な仲間たちあたりか。
反対に厳しそうなのはやはり特別チーム、文字通りほぼ初心者で固められた、ゴジラ以外全員女性（フウも雌）なチーム。
一応参加人数は多いのだが、頼れるのはグレイフィアと次いでアマリかロスヴァイセ、あとは機動兵器の運用こそ素人だが激戦経験は随一のゴジラ。
しかし機体性能はいずれも相当なものであり、もしかしたらという希望もある。
そんな中、ある二つのチームが遂に激突。

『おおっと!?いよいよ戦闘に突入するチームが出てきたよ！戦闘開始は……オカ研×遊撃とレヴィア☆たんず！早くも学園組が激突ぅ!!』
『どうやら期待していたカードが上手く実現されたようですね』
『実機持ちはどちらもかなりの腕だ。どちらが先に流れを掴むかで後続のメンバーの士気にも関わってくる。個々の技量ではレヴィア☆たんず、対して連携ではオカ研×遊撃に分があると見えるな』

厳勝の言葉通り、最初に戦闘開始したのはレイトのダブルオーザンライザーとゼットのＥＸ―Ｚガンダムだった。

「すいませんけどＭＳ戦は勝たせてもらいますよ！ゼロ師匠！」
「言うじゃねえか！だがな、俺と相棒に勝とうなんざ２万年早いぜ！」

ＧＮソードⅢと高出力ビームサーベルがぶつかり合い、激しいス

パークを発生させる。
そしてお互い離れるように弾き飛ばし、ダブルオーザンライザーの射撃をバレルロールで回避しつつＥＸ―Ｚが凄まじい加速で再度接近し、再び鍔迫り合いに。
初戦から激しい攻防が展開され、早速歓声が沸き上がる。
やはり何かと話題になる二人の激突は待ってましたという者が殆どのようで、それぞれのファンがいる生徒会メンバーは彼らの戦いにハラハラしっぱなしだ。
更に、互いのチームの他三名も戦場に到着し、総当たり戦開始となった。

「グラハム教官直伝の戦法を見せてやるぜ、兵藤！」
「くそっ！空中の相手には分が悪いぜ！」
「イッセー！今援護に……」
「タイガ君の相手は私だよっ☆」
「レーティングゲームじゃないけど、勝負よ！ソーナ！」
「望むところです、リアス！」

全機空中戦可能なレヴィア☆たんずに対し、確実に空中戦可能な機体はダブルオーザンライザーとビルトビルガーのみのオカ研×遊撃……しかもビルトビルガーはその性能上、そのままの状態だと空中では機動力が落ちてしまう。
シナンジュの方はバーニアやスラスターの出力からある程度の空中戦は出来るものの、エクサランス・ストライカーはほぼ完全に陸戦用フレームのため総じて今戦闘中の相手チームとは相性が悪いのだ。
そして、その２チームがぶつかったことを皮切りに他のチームも次々と開戦の狼煙を上げ始める。

『続いてぇ……!?おおっと！まさかの組み合わせ、悪鬼滅殺と特別チームが会敵いいい!!』
『ふむ、経験や練度は鬼討組が勝っているが、隠された機体ポテンシャ

ルやまだ見ぬ能力を開花させる可能性もある特別チームもまた油断ならん相手、さてどうなるか……』
『強いて言うなら特別チーム、そのままでは押し切られてしまいます。どう切り抜けるかが重要になりますね』
『みっくんれっちゃんありがとー！互いに多人数搭乗機がいるチーム、勝敗はどっちに転ぶのかぁー!?』

ノリノリな束とは反対に、激突する両チームは緊張感漂う雰囲気であった。

「ロスヴァイセさん、悪いけど猫ちゃんいなくてもこっちのクロスソーサーは自由自在なのよ～」
「どうしてカリカリに釣られちゃったんですかハクぅぅぅ!!」
「いない猫に嘆いても仕方ないニャ！」
「ニャ」
「「……ニャ？」」

いつの間にかハクがフウ同様、サイバスターのコックピット風になったシミュレーターの定位置でロスヴァイセを見ていた。
ロスヴァイセ、フウ、ついでにカナエまで宇宙猫状態で混乱しているが、忘れていないだろうか。
そもそもハクとフウは使い魔であることを。
少なからず魔力持ちなのだから小規模ないし限定的な転移は使えたようで、驚くべきことにハクは既にいざという時に備えてサイバスターのコックピットに転移出来るよう専用の転移陣を設置済みだったのである。
当然、そこまで完璧に再現出来る光神陣営の最新シミュレーターならば、このようにハクが途中参加するのも可能だったのだ。
恐るべしのんびりノルウェージャン・フォレストキャット。
エリアル・ベースでは猫を師と崇めるダーントがその用意周到さに

感激している上、意外にも猫好きなアズも「私も欲しいな」と言い出していた。

「何で!?さっき猫パンチでカーンって……」

「姉さんとロスヴァイセさんより優秀かもしれませんね、その子」

「「ガーン!!」」

しのぶの一言がクリティカルヒットした二人。

そこに容赦などなくショックで固まっているサイバスターに狙いを定めてグラビトン・ライフルを発射したヒュッケバインボクサーだったが……

「ニャ」

ロスヴァイセの手を無理矢理動かしてサイバスターに回避行動をとらせるハク。

いやマジで有能過ぎないかこの猫。

「やりますね、ハク君」

「ニャ～」

『……サイバスターの操者ってろせちゃんじゃなかったっけ？』

束まで実況忘れて唖然とする始末。

卯ノ花も目を見開いているし、厳勝に至っては「磨けば光るかもしれん」と目をつけている。

「やるな、ハク！ならば俺も一人の好敵手としてお前と戦おう！」

「……って、サイバスターの操者は私です！」

――言っておきますがポゼッションはしませんよ――

「え……」

――いつまでも私に頼り過ぎは良くないですし。というかそもそ

もポゼッション、この最新シミュレーターでも出来そうにありません。仕方ないですね――

サイフィスからそんな発言を受けて再度固まるロスヴァイセと、それを狙うグルンガスト参式とヒュッケバインボクサーの射撃、そして先程より機敏にロスヴァイセの腕を動かし見事な回避機動を見せるハク。

もうこの猫だけでいいんじゃないかな。

「ニャニャ～」

「むう！予想以上に手強いな！」

「とりあえず、ロスヴァイセさんもそうですが姉さんより操縦出来そうなハクくんの活躍のおかげで姉さんが使いものにならなそうです」

ロスヴァイセ同様にショックは相当大きいらしく、未だ復帰出来ていないカナエを放置しつつグルンガスト参式とヒュッケバインボクサーはサイバスターを狙うが、二人はハクの隠されていた優秀さを見せ付けられて他のメンバーがいることを失念していた。

「アマリ！距離十分です！」

「わかったわルリア！ここからＩＧＥＮＥＳＴで！」

グルンガスト参式とヒュッケバインボクサーの側面に回り込んでいたゼルガードが魔法陣から炎を出して２機の足元を狙う。

「むっ!?アクアマリン少女とルリア少女か！」

「ハク君が予想外に凄かったのでそっちに集中し過ぎてましたね」

「煉獄さん、しのぶさん、ごめんなさいっ！」

「!?」

「め……メガスマッシャーですっ！」

今度は反対側から極太のビームが三本、２機に向かって放たれた。
アーシアの乗るデュラクシールからの砲撃だ。

「うおおおおっ!?」
「ま……まさかあのアーシアさんが普通に撃ってくるとはハク君同様に予想外でした……!」

間一髪回避した杏寿郎としのぶだったが、今度はなんとファンネルやビットと同系列の武器・タオーステイルをバンバン飛ばしてくるデュラクシール。
……アーシア強くね？

「よもやよもやだ！アルジェント少女にこれほどの技量があったとは!!」
「姉さんいつまでショック受けてるの!?このままじゃアーシアさんにも追い抜かれるわよ！」
「ハッ!?お姉さん組としてそれはマズい！って気になったけどしのぶ、ハク君平気なの？」
「シミュレーター越しだもの、問題無いわ。でも、一転して不利に……」

漸く正気に戻ったカナエだが、彼女も含めて既に3機はゼルガード、サイバスター、デュラクシールに包囲されている状態だ。

「……オーフィスさん達がいませんね」
「い……今グレイフィアさんにレクチャーされてます！」
「「今!?」」

ガチで初心者ばかりだったからかグレイフィアが必死でチュートリアルみたいなことをしているらしい。
頑張れグレイフィア、彼女らの命運は君にかかっている。

しかし、逆に悪鬼滅殺の方は最後の1機が特別チームに奇襲を仕掛けてきた。

「今度はこっちがごめんね！」

「悪いが全員ガラ空きだ……！」

「「「!!」」」

小芭内と蜜璃の乗るガンダムハルートはあろうことか最終決戦仕様のあの形態である。

超兵ではないが全集中・常中が使え、痣者でもある二人が抜群のフォーメーションを披露し、本家にも負けない高機動戦法でゼルガードらを翻弄。

「早過ぎてまともに当たらないっ……！」

「はわわわ～!?」

「お二人ともまだ訓練始めて間もないのに……！」

「ニャ、ニャ」

「うう……何ですかハク……」

しっかりしろ、と猫パンチを何度も打ち込んでくるハクに涙目で返事するロスヴァイセ。

そう、ポゼッションでなくてもこの状況を打破出来る術がサイバスターにはある。

果たしてロスヴァイセはそれに気付くのか。

☆

「「「「猫（ハク）すげぇ!?」」」」

観戦している面々の感想はまさにそれ一色。

能ある鷹は爪を隠す、というがハクのみならずアーシアが実はかな

り強かったことも驚きだ。
　これには見ていた団長代理・シエテも予想外。
「アーシアちゃん、凄かったのね……シエテお兄さん全く気付かなかったよ」
「団長お抱えの巫女よ、当然じゃない。それにしても団長お抱えの、か……いいな……」
「ソーン、旋律を聴かなくても分かるくらい本音が出てるわ」
「ニオもそうでしょ？こんなことなら私も出ればよかったな。でも、なんでだろ……あのアーシアちゃんが乗ってるの見ると私も割と乗れそうな感じが……」
　ソーンがデュラクシールに乗るとメカフェチと化しそうな気がするが気にしてはいけない。
「あたしも！あたし使うならあのゲッターってのがいいぞ！あの斧使いたい！」
「あれは三人乗りらしいからねぇ。目星つけてるのかい？サラーサ」
「え？そうなのか？」
　こんな感じでエリアル・ベースの食堂では十天衆の面々も勿論観戦していた。
　レジェンドガチ恋勢はレジェンドとマジンガーＺＥＲＯの活躍を心待ちにしているが、いざ動き始めたら活躍どころか蹂躙でしかないことを彼女らはまだ知らない。
「けど俺としてはあのダブルオーって２機、いいねえ……あの剣の剣拓取らせてくれないかなぁ」
「あれシエテが持つのか？」
「いやいやそのままは持たないよ!?っていうか持てないって、サラーサじゃあるまいし」

暗にサラーサなら持てると言っているシエテだが、確かにアルギュロスの一撃を受け止めたことのある彼女なら確かにそうである。

「……あれ？」
「ん？どうしたんだソーン？」
「何か、あの子達のチームの後ろが光って……！」

ソーンがそう言いかけた時、凄まじい閃光が特別チームと悪鬼滅殺の戦場へと撃ち込まれた。

「うお!?何だ何だ!?」
「単発じゃなくて照射タイプか……何処からだ？」
「私もシミュレーター使ってたら見えるけどモニターじゃちょっと……あっ！」
「誰か分かった？」
「ええ、多分私以外だと見える人はかなり限られるぐらい離れた位置から攻撃してた。あのビームの発射元は……」

ここで見ている者達も、何より戦闘中の両チームも戦慄する一言がソーンから告げられる。

「サーガが乗ってるダブルオークアンタフルセイバーって機体よ！」

参加チーム最強と目されるＴＨＥ・ＵＬＴＩＭＡＴＥ――そのリーダーたるサーガが、トランザムライザーソードで特別チームと悪鬼滅殺、両チームへと双方の射程外から先制攻撃を仕掛けてきたのだ。
最強クラスの光神率いるウルトラパイロット軍団相手にアマリ達はどうやって対抗するのか。

「案の定誰も来ないな。移動解禁と同時にブレストファイヤーいくか？」
『光子力ビームでも構わんぞ。それとも全方位（フルバースト）ファイヤーカタストロフィにするか？』
「……いや、それもいいがやっぱり直接ボコることにしよう」
『うむ、そうしよう』

……正直、全チーム協力してこの一人と一機をどうにかすべきだと思うのだが。

特別編・スーパーロボット対戦ＵＬＴＲＡ・激闘

悪鬼滅殺と特別チームに超遠距離からトランザムライザーソードによって先制したサーガの駆るダブルオークアンタフルセイバー。
当然回避されてしまったが、元々それは想定済みなのか焦ったりする様子は無い。

「予想通り外れたな。目標が戦艦クラスならともかく良くて特機クラスの大きさだと距離的に厳しかったか」
「え～っと……ひい、ふう、みい……あれ？７機しかいないんだけど。あと一機、スーパーメカゴジラは？」
「到着していなかったか、もしくは別働隊かだな。レオとメビウスは？」
「猫鳥チームとクロエちゃん達のところにゲンさんは突撃していったみたい。格闘系スーパーロボット多いからね、あの２チーム。ミライさんは……あ、煉獄さん達ののとこに突っ込んでる。ほら、あそこ」
「いざという時は量子ワープを使って駆けつけるか……ジード、グルンガストチームはどうしてる？」
「こっちに向かって来てるね。間もなく会敵するよ」
「総合的なパワーはこの機体やその試作３号機よりも上だろう。向こうを上回る機動性を軸に戦術を組み立てて迎え撃つ」

超闘士の二つ名を持つグルンガストシリーズ４機が迫ろうと動じないサーガとリク。
２対４という不利な状況になるだろうがそれさえ大した問題ではないようだ。

「牽制は任せた。俺とクアンタは接敵後、敵陣に飛び込んで撹乱する」
「オーライ。じゃ、マイクロミサイルスタンバイ……と。爆導索も準備しとこ」

☆

そして単騎突撃したミライは――

「はわわわ!?何かすごい速度でこっちに来ます！」
「はわわわ!?何か三日月さんのバルバトスに似てます！」
「ルリアちゃんとアーシアちゃんのはわわコンビ良いわね～」
「姉さんそんなこと言ってる場合じゃないわよ！煉獄さん、あの機体は……！」
「うむ！確かミライ殿が乗っているはずだ！」

当然の如く察知されていた。
だが、ブースターを吹かして高速で接近するガンダムバエルに迷いも何も感じない。

「距離１２００……１０００……７００……！速いっ!!」
「伊黒君に蜜璃ちゃん、弾幕！」
「言われずとも……ッ！」

ハルートが高速移動しつつ、ＧＮシザービットを始め遠距離から攻撃を仕掛けるが……

「ええーっ!?嘘嘘嘘!?全然当たらない！」
「「!?」」
「あの攻撃を全部回避してなお速度を落とさずに接近してくるの……!?」
「ニャニャ～」

主がまだ使い物にならないと感じたハクによりロスヴァイセの手を動かされ、サイバスターは後退する。
それと同時に遂にミライが駆るバエルが残る６機と接触した。

バエルは二振りのバエルソードを携え恐るべき速度でヴァルシオーネRに斬りかかる。
咄嗟にディバイン・アームを抜き防御するが、圧倒的な連撃を受け一回り小さいバエルに押されていく。
（攻撃速度が尋常じゃないし、乱撃に見えて一太刀一太刀が的確に打ち込まれてる……！操縦方法がトレースするタイプじゃなきゃ反応しきれなかった！）
初めて手合わせするミライの技量とバエルの性能にカナエも戦慄する。
「はわわ……！カナエさんが一方的に……」
「一体何なんだ、あの機体は……!?」
小芭内がそう零したとき――
「バエルだ！アグニカ・カイエルの魂！」
「「「「ミライさん（殿）!?」」」」
何かバエルを使ったせいか、どこかのファリドが乗り移ってんじゃないのかと思うような台詞を叫ぶミライに全員が焦る。
やっぱり阿頼耶識がマズかったんじゃないのか、ソレ……。
しかし、悪鬼滅殺チームが見たものはそれだけではなかった。
「んん……？煉獄さん、伊黒さん、甘露寺さん、あと姉さん」
「どうした胡蝶!?」
「いや、何となく何が言いたいのか分かるが……」
「やっぱりしのぶちゃんも？」
「お願いだから助けて皆ー!!」

ガチでバエルに追い詰められてるカナエはさておき、このメンバーに見えていたものは――

――俺は嫌われてない――

冨　岡　義　勇　！　！

(((((冨岡（君）（さん）ー!?)))))

あろうことかいつもの鬼殺隊の制服と羽織姿でコックピットに座りバエルを操る冨岡義勇（の幻影）である。

変な汗がだらだら流れてくる元鬼殺隊の柱達。

兎にも角にもヴァルシオーネRが攻撃を仕掛けてみたのだが……

――バエルを持つ俺に逆らうか――

やっぱりどこかのファリドさん（通称バエリストM）の台詞を喋る義勇（の幻影）が見える始末。

「何ですかあれ何で冨岡さんの幻影があんな明確に見えるんですか【エリア】っていうのが違うのに化けて出てるんですかそんなだから皆に嫌われるんですよ」

「しのぶちゃん落ち着いて深呼吸深呼吸！深呼吸して爆血……あれ？何か違うようなこれでもいいような」

「しっかりするんだ甘露寺！こういう時は蛇倉苑の数を数え……何故俺は店の数を数えようとしてるんだ……？」
「うむ！昨日おかわりした丼物の数は十杯だ！何を言い出してるのか俺も分からん!!」
「最近だと丼にすっぽり収まった『丼猫』なる癒やしのカテゴリが……ってきゃー!?」
「バエリュームブレード!!」

そんな機能無かったはずなのにどういうわけかバエルソードの刀身がビームに包まれてメビュームブレードよろしくヴァルシオーネRに炸裂し、ディバイン・アームが叩き折られ吹っ飛ばされる。
珍妙な光景のおかげで混乱しまくりのしのぶ達は反応するのが遅れてしまっていた。

「カ、カナエさん!?」
「ルリア、他のチームの心配してる場合じゃないわ！あの近接戦闘力はゼルガードじゃ対処出来ない！」
「多分、このデュラクシールでも持ちそうにないです……」
「ロスヴァイセさんのサイバスターは!?」
「ニャー」
「駄目ニャ、凹んでいるロスヴァイセの頭にハクが乗っかってバシバシ叩いてるけど、だばだば涙流してて使い物にならないニャ」
「うん知ってた！ちょっとでも期待した少し前の私を叩きたい！」
「はわわ……ア、アマリまで泣き出しちゃいました！」

ハクが優秀→ロスヴァイセが凹んで使えない→アマリも絶望するという、ハクのおかげで間接的にアマリにまでダメージが入ってしまい、変なところで戦力ダウン。
したがって、まともに戦えそうなのは基本前線型ではないアーシアのみ。
機体はボスキャラレベルなのだが。

……と、そこへ地響きを轟かせ、特別チーム最後の一機が姿を現した。
全身銀色の人工ダイヤモンドミラーコーティングを施され、その大きさは身長１２０メートル、体重は１５万トンを超えるまさに巨体。
対ゴジラ用に生み出された機動兵器メカゴジラと支援戦闘機ガルーダが合体し誕生した、あのゴジラを一度は戦闘不能にまで追い込んだ決戦兵器スーパーメカゴジラ。
満を持して堂々の参戦である。

「やっと動かせたー」
「最初から複数人搭乗を前提にしてあると面倒だな……」
「で、何でオーフィスがメインなんですか!?私とか、次点でスカーサハがメインじゃないと不公平ですよ！ただでさえ出番が少ないのに！特に私！」
「そこ、メタ発言は謹んで下さい！私を除けば彼女が最も適正があっただけのことです」
『つーかお前らオレ様をメカオレ様に乗せてることに疑問を感じろよ畜生。何だって昔第二の脳をぶっ壊されたり逆襲してボコったりしたコイツにオレ様が乗んなきゃならねーんだよ』

マスコット用座席に腕組みして座りつつ不機嫌なゴジラ以外はまあやる気である。
実を言うと一番このスーパーメカゴジラについて知ってるのはグレイフィアよりゴジラの方なのだが、彼基準で考えてしまうため参考にならなかったとか。

「とりあえずあの場を制しておるのはミライのようだな」
「何か別の存在が見える……気がする」
「きっとあれです！普段は何事も『興味ないね』とか言いながら大人のお店に入るときは『行くぜ！』とか気合入りまくりの人が乗り移ってるんですよ！」

『いや分からねーよ。何言ってんのお前』

それはオーフィスの大好きなＲＰＧの主人公。
例によって義勇と声が似ているのだが中の人が同じとか言ってはいけない。
最強チームの一人、ヒビノミライＶＳドラゴン三娘ｗｉｔｈグレイフィア＆ゴジラ……いよいよ開戦。
そして――

「ニャニャニャニャニャニャ」

ばしばしばしばしばしばし

「うう……やめてくださいハク……痛いです……」

涙目のロスヴァイセはハクから絶賛脳天猫叩きされ中。

☆

その頃、猫と不死鳥チームはアザゼルと愉快な仲間たちチームに遭遇、戦闘開始。
……なんか後者のチーム名めんどくせーな。

「オイ心の声漏れてんぞオオオオオ!?」
「仕方ないにゃ。人望うっすいのにそんなチーム名付けるから」
「あれがクロエであれば可愛く思えたのかもしれんのにのぅ」
「うるせーよダブル黒猫！虚空の彼方にぶっ飛ばしてやるからな！」
『ちょっとちょっとー！それ束さんの台詞ー！』

チーム名を貶されて怒りと悲しみがダブルで襲ってくるが、生憎と彼のチームにそれを理解してくれるチームメイトはいない。

「黒歌！このアースゲインとアンタのソウルゲインはよく似ているッ！つまり！拳で語り合えるってことだ！」
「いや、まあ……ソウルゲインの攻撃方法は拳と肘に限定されてるし」
「さあ！俺と拳で語り合おう!!」
「うあー……ゼットってば何でこんな熱血一辺倒なフェザーと仲いいにゃ……？」

げんなりする黒歌と相対してるのはゼットを良き友良きライバルと見ている拳士・フェザー。
声的にウルトラマンオタクでどこぞの電光超人に協力してそうな気もするがそんなことはない。

「おい！テメェ一人で俺らより機動兵器っての稼働時間が長いアイツに勝てると思ってんのか!?仮に勝てたとしてもレジェンドっていう規格外との戦いだって控えてんだよ！」
「ああ！分かってるさランドル！だからこそこの一戦を大事にしないといけないな！」
「全ッ然分かってねえ……！」

そう言って苛立つのは拳撃戦闘主体のフェザーに対して蹴撃、つまりキック技主体のランドル。
ひたすら熱血な猪突猛進傾向にあるフェザーと違い、彼は落ち着いて物事を考えられる。

（ゼットなら言えばしっかり理解してくれるってのにコイツは……！あのマジンガーＺＥＲＯってのはどう見てもヤバいだろうが！対策考えてどうにかなるレベルじゃないとは思うが、無いよりマシにはなるかもしれねぇ……いや、実際マシになるか？レジェンド、勝手にこんなのに巻き込まれてキレてんじゃねーか？）

ご名答である。
現在進行形でレジェンドはあるヤバいことを始めている。
まだあっちから攻めてこないだけで。

「チッ……こうなりゃやるだけやって俺一人でも対策立てるしかねぇか。待てよ？クロエの方は話通じるかもしれねぇな」

ここまでアザゼルへ相談する気配無し。
確かにクロエとアザゼルでは色々と差があるとはいえ（いつの間にか決まっていた）リーダーへの信頼が無さすぎな気もするが。
しかし、そこへ――

「ランドル様！避けて下さい!!」
「ん？」

「ダアアアアア!!」
ドオオオオオオン!!

「うおおおおお!?」
「あ……あの掛け声ってまさか……」
「一番会いたくない奴が攻めてきおったか……！」

間一髪回避したヴァイローズ、そして奇襲をかけてきた者の正体を知る黒歌と夜一は戦慄する。
砂煙が晴れるとそこには信じられない程のクレーターが出来ており、ギピィィィィインとツインアイを光らせるゴッドガンダムが存在していた。
そう、おおとりゲン（バグキャラ）の登場である。

「い゛、い゛、い゛、や゛、あ゛、あ゛、あ゛、あ゛、あ゛!!」
「最悪じゃあああああ!!」

黒歌が凄まじい声で泣き喚き、夜一すら絶叫する始末。
忘れられているかもしれないが、この二人はゲンに大敗した経験があるのだ。

「都合良く格闘戦型の機体が集まる所に出くわしたようだな。レイトがいないのは残念だが良しとするか」
「あ……あの方はイッセー様の……!」
「はい、お師匠さんのゲン師範、ウルトラマンレオです。レイヴェルさん達も参加したレーティングゲーム前の修行期間の最初の日にカナエ先輩含めた私達オカルト研究部を一方的に叩きのめした超人です。剣を真正面から鉄拳でへし折り、雷に撃たれたらそれを纏って突撃してきて、イッセー先輩のブーストかけた一撃をノーガードで顔面に受けても無傷かつカウンターで逆に一撃ノックアウト。さらにカナエ先輩の型をパンチ一発で突き破ったかと思えば色々慣性の法則を無視した動きまでやらかす意味不明な超戦力でした」
「「「何それおかしい!!」」」

レイヴェルどころか聞いていたランドルやアザゼル、クロエさえハモる事態に。
これを奇策の連続とはいえあっさり打ち破ったモロボシダンことセブンは一体何なのか……。

だが、やはりゼット並みに空気の読めない奴はいた。

「やっぱり来たか、おおとりゲン！ゼットがよく言っていたアンタとは一度やり合ってみたかった！俺と拳で語り合おう!!」

(((((マジでバカだー!!)))))

「真っ直ぐで淀みなき闘志だ。いいだろう、受けて立つぞフェザー君!!」

やべえ、フェザー死んだ、もといリタイア確定だと満場一致で確信してしまう。

ゴッドガンダムの倍以上の大きさのアースゲインだが、ぶっちゃけゲンが乗ってる時点でそんな差はハンデにならない。

というか的が小さいから逆にアースゲインの方が不利ですらある。

『おい束、こっちは準備出来たぞ』

『あらＣ．Ｃ．さん、何をされてたんです？』

『何でも束が観客をより引き込むためにだと。対応させるの一手間かかってな、あとでレジェンドにピザ作らせなければ割に合わん』

『そーゆーわけなのだよ、れっちゃん！しーちゃんご苦労さま！てことで、ミュージック出力ＧＯ！』

そう束が言うと、ゲンのゴッドガンダムとフェザーのアースゲインが戦闘開始する瞬間、シミュレーター内外に突然ＢＧＭが流れ始める。

今流れ出したのは『熱き魂』（スーパーロボット大戦６４より）。

「な、何にゃ!?」

「ゲームじゃ妙に盛り上がるバトル何かの時にかかりそうな曲だな……ハッ!?」

アザゼルがその意図に気付くが、もはや相手しか見ておらず雑音を

シャットアウトしているゲンとフェザーには聞こえていない。
そう、ぶっちゃけ大した意味などない、単に視聴者が盛り上がれるように束が用意しただけなのである。
もう一つ、小猫とレイヴェルの駆るフェアリオン……あれの真価を発揮した武装を臨場感たっぷりに味わうにはやはり音楽が必要。
どこの絶唱とか超時空要塞だとツッコミ入れるのは野暮だぞ！
それはともかく――

「うおおおお!!」
「イヤァァァァ!!」

アースゲインの拳とゴッドガンダムの蹴りがぶつかり合い、その衝撃で互いに後退る。
ゴッドガンダムに比べ、アースゲインはより後方へ下げられた。

「なるほど！アンタはランドルと同じで蹴りが得意なんだな！」
「ああ、バリエーションには自信がある。しかし一撃打ち込み合って戦意を喪失したり怯んだりしない相手は久しぶりだ。そのことに敬意を払い、俺も本気で相手させてもらおう!!」
「うおおおお!!燃えてきたぜぇぇぇぇぇ!!」

勇ましいＢＧＭをバックに、ＭＦとスーパーロボットのサイズ差を感じさせない凄まじい激闘が幕を開けた。

「虎閃掌ぉぉぉ!!」
「片手だけでシューティングビームか！やるな！」
（なんか片手で青龍麟ぶっ放したにゃ!?何あのソウルゲインのそっくり機!!）
「ならばエース兄さん直伝の技を見せてやろう！この機体の名を頂くのならば……ガンダムナイフ！ダァァァァ!!」
「拳さえ切り裂きそうな一撃か！なら俺は肘だ！竜王双撃ィィィ!!」

（何でソウルゲインが舞朱雀とか麒麟で使う肘の刃をエネルギーで発生させてるにゃ!?どーなってんのアレ!?）

ゴッドガンダムの手刀とアースゲインのビームエッジが何故か刃物同士をぶつけたような音を立てて激突し、初撃同様互いに吹っ飛ぶがすぐに体勢を立て直し次の技を仕掛けようとする。

なんかシミュレーターとはいえゲンとまともにやり合ってんですけどこの熱血漢。

もう黒歌は宇宙猫状態だ、確かに猫だが。

「……ひょっとしたら今総攻撃すりゃあれに勝てんじゃねえのか？」

「確かにランドル様がそう思われるのも無理はありませんが、白熱してるお二人を妨害したら激昂されて手に負えなくなる可能性が濃厚です」

「まあ、そりゃそうだな。あのバカもそうだし、ゲンの方も同じ脚技使いとしてはしっかり決着をつけさせてやりたい気持ちもある。手出しはしないでおいてやるとするか」

「はい、その方が無難かと。相手チームはそもそもゲン様の実力を直接体験されている方が殆どですし、もし私達がお二人を狙ったとして、お二人でなく私達を後ろから狙い撃ちしてくることも十分に考えられます」

「らしいな。じゃ、俺達は他の連中の相手を――」

クロエとランドルは猫と不死鳥チームにターゲットを絞ることを決めたのだが、よりによってあの男がやらかした。

「準備完了、よし……下がれ、フェザー！」

「「「!?」」」

「アキシオン・バスター発射!!」

アザゼルのR―GUNリヴァーレが戦闘中の2機目掛けて（正確に

はゴッドガンダムを狙ったのだろうが）最強武装のアキシオン・バスターをぶっ放した。
威力の高さは元より広範囲に及ぶそれは一歩間違えれば味方も巻き込むことになりかねない。
ゴーデス島へ突入したとき、未完成状態だったネオ・グランゾンの出力を周囲に気遣って常時調節しながら戦闘を行ったレジェンドとは違い、シミュレーターだからと遠慮なく出力上げてぶち込んだアザゼルの差がこれである。

「テメェ！なんてことしやがる!!」
「へ？いや、アイツの機体は操縦系統がトレースタイプだろ？今までのアイツの動きを見てりゃ俺が撃っても問題なく回避出来るのが分かるレベルだったぜ」
「普通ならそっちを言うけどな！今回はそういう意味じゃねえよ！」
「じゃあ何だ？正直放っておいても負けるのは目に見えてたんだ。ここはプライドなんざ捨てて勝ちにいくべきだろ？」
「……あの方々にそのような理論が通じるとでもおっしゃいますか？結果があの様子ですが」
「あの様子ってどん……」

クロエとランドルの二人がかりで責められつつも飄々としていたアザゼルだったが、煙が晴れたそこに立っていたのは金色のオーラを纏うアースゲインとハイパーモードで明鏡止水状態……即ち金色に輝くゴッドガンダム。
恋雪や慶蔵と一緒に観戦していた狛治が固まってしまうその光景は、間近で見ていたアザゼルなど真っ青通り越して真っ白になっていた。

「なあ……」
「知るか。テメェのケツくらいテメェで拭きやがれ」
「ランドル様、とりあえず離脱して猫と不死鳥チームへの対策を考え

ましょう。２対４では策なしに突撃しても余程の実力が無い限り返り討ちが関の山です」
「そうだな。アイツはどうせゲンと決着をつけるまでこっちに来ないだろうし」

既にアザゼルが頭数に入っていない。
フェザーに関してはゲンを乱入させずに食い止めていると思えばいいだろう、とランドルは思いクロエと共にその場を離脱。

「オイちょっ!?待っ……」
「アザゼル！俺達は正々堂々と己の拳で語り合っていたんだ!!」
「シミュレーターとはいえ久々に高揚していた気分をよくも台無しにしてくれたな……!!」
「待て待て待て！いいか？これは勝負であって訓練とか修行ってわけじゃなくてだな……」
「問答！」「無用！」
「「鉄拳制裁!!」」

「ぎゃあああああ!?」
ドゴォォォォォォン!!

R―GUNリヴァーレ大破。
アザゼル、リタイア。
原因・自業自得。

「よし！仕切り直しだ！今度こそ最後まで拳で語り合おう！」
「望むところだ！ガンダム……いや、騎空士ファイトォ！レディー……」

「「ゴオオオオオ!!」」

☆

「なーんかもちっといいトコの一つも見せてくんないかねー堕天使総督」

「束さん、気長に待ちましょう。……あら、巌勝さんどうされました？」

「いや……先程からレジェンド様とマジンガーＺＥＲＯの動きが妙というか……」

　実況の束もアザゼルの自爆まがいの撃墜に冷めているのか頬杖をついて見ており、卯ノ花がそれを諌めていると巌勝が何かに気付く。

　束と卯ノ花がそれを見たあと、束が血相を変えてシステムチェックすると……

「……やっぱーい……」

「束さん？」

「れっちゃん、みっくん……」

「どうした、束殿」

「……レジェくん、予想より怒ってるよ。外部から援軍引き込んだみたい。それもとびっきりヤバいやつ」

「「……は？」」

☆

「ふっふっふ……いつから俺のチームが俺とマジンガーＺＥＲＯしかいないと錯覚していた？」

『生憎我らは勝ちにいくと決めたら、それはもう本気で勝ちにいくからな。シミュレーターだろうが手加減などブレストファイヤーで焼き尽くしてしまったぞ』

不敵に笑う一人と一機だが、周りにはさらに3機、今までは存在していなかった機体がいる。

「参加しておいて何だけどよ、俺が途中参加していいのか？」
「気にするな。あとで俺が黙らせる」
「私以外に適任がいたと思うのだが……」
『原点にして頂点とはよく言うだろう』
「ＨＡＨＡＨＡ！まさか私が先行登場とは私自身も予想してなかったよ！いやマジで」
「「『確かに予想外だったぞ』」」

【ボスキャラ】改め――

【究極を超える戦士たち】
・マジンガーＺＥＲＯ（レジェンド）
・ガンダムＴＲ―６　サイコ・インレ（ベリアル）
・∀ガンダム（黒歴史）（ウルトラマン）
・ラハ・エクスティム（オールマイト）

……どーすんのコイツら。

特別編・皆で過去を振り返ろう！～プロローグからエクスカリバー編～

ある意味サザエさん時空とも呼べる現在の本作……しかしながらちゃんと一年が終わり、また新たな一年が始まる。
ガチャピンルーレット然り、福袋然り。
年末年始は忙しくも楽しみな行事である場合が少なくない。そういうわけで、ウルトラ騎空団にとって身内限定のあるイベントが催されることとなった。

☆

「各プロジェクターリンク完了、全機異常無し。視聴空間各所快適度良好。視聴団員ほぼ全員、準備完了とのことです」
「お疲れ様、グレイフィア。あとはこれから暫くのんびりしなさい。レジェンド命令だ」
「はい、お言葉に甘えさせて頂きます」
「そうそう、偶には食っちゃ寝したってバチは当たらんよ。さてと……」

レジェンドは床暖房でも炬燵でもない『暖房付ぬくぬく玉座』に座ったまま、ウルティメイ島の団員用宿泊施設やレジェンドの別荘、そしてウルトラ騎空団の各艦で今回のイベントを心待ちにしている面々に告げる。

「これより第一回『ウルトラ騎空団メモリアルストーリー上映会』を開始するぞ!!」

そう、レジェンドがハイＤ世界に再び降り立ってから現在に至るまでを、ＢＧＭや挿入歌を入れて特別編集した映像と共に振り返ろうというこの企画。
当初に比べてメンバーが爆増してる他、騎空団外にも関係者が多くなったため彼らが知らないであろう出来事を知ってもらうという理由もあるが、ぶっちゃけるといつも通り馬鹿騒ぎがしたいだけだったりする。
それがレジェンド一家クオリティ。

「ふふっ、今日の特等席獲得の勝者は私だね」
「うう～……」
「負けた。プーリンじゃんけん強い」
「千里眼とかは使ってないよ？」

本日のレジェンドの膝上権はプーリン。一誠の方は相変わらずメリュジーヌが独占し、隣はリアスとセイバーアルトリア。しかもアルトリアは給湯ポットと大量のカップラーメン、おまけに専用の炊飯器まで完全装備。

「いやどんだけ食う気だよ!?」
「リクに感謝しなければいけませんね。さすがカップラーメンマスターの異名を持つウルトラ戦士、博識でした」

アルトリアが視線を向けた方を見ると……

「カップラーメンとは、ローマである」

リクとギャスパーのみならず、神祖ロムルスまでもカップラーメンをスタンバっていた。リクとギャスパーは布教が実り、サムズアップを返している。しかもドヤ顔で。

(((((えええええ!?)))))
「新発売のウルトラヌードル・ピッツァ風味はチーズかポイントなんだよね。そしてチーズはローマ」
「うむ、うむ。チーズとはローマであり、それを調理したものは即ちローマなのだ」
「「つまり、このウルトラヌードルはローマなり」」

もはやリクもギャスパーもすっかりローマにミーム汚染されてしまっていた。そのうちバーンもそうなりそうで怖い。

「カップラーメンを布教したリクさんが凄いのか、それすらもローマとするロムルスさんが凄いのか分からないよ」
「気にすんなよマスター、俺にも分からねぇ。やっぱり王道はこのフライドチキンとコーラだろ」

クー・フーリンは祐斗と共にフライドチキンとコーラを用意。ちなみにこのフライドチキン……原材料は二人がジェントと共に狩ったバードンである。
他にも珍妙なものはあるが……それは追々紹介するとしよう。
いよいよ放映スタート。オープニングテーマは『時の中を走り抜けて』――ある理由からグラハムがテンションＭＡＸなのだが、敢えてそこはスルー。

【プロローグ：活動開始】

「懐かしいな……アーブギア＋グリッターゼペリオン光線」
「「「何してんだアンタ!?」」」
「この時のレジェンド様は光り輝いていましたわ」
「物理的に光りまくってるのう！是非もないよネ！」
「つーか生身の人間にレジェンドライバーは即死技だろ」

○オーフィス＆黒歌、卯ノ花ら一家入り

「そういやあの嬢ちゃん、師匠と名前似てんな。ウチの師匠はロクでもない女だったけどよ」
「スカサハ、でしたっけ。彼女はスカーサハで本来は真龍ディアドラだそうですが」
「おう。つーか貧乳がどーたら言ってたな……こりゃ師匠と会おうもんなら一悶着ありそうだわ」
「この時点ではまだカナエも常識人っぽかったのね」
「リアス!?この時点って！この時点って何!?」
「おかあさんはおかあさんだよ？」
「もうジャックちゃん天使！リアスの悪魔！」
「ええ、悪魔ですもの。……それが霞むほど周りが濃すぎるだけで」

○ウルトラ６兄弟やウルトラの父・母登場

「あれが俺の父さんで、あっちが爺ちゃんと婆ちゃん」
「御挨拶に伺わねば（使命感）」
「ジータは覚悟決まり過ぎなのだわ……多分私は目の前に来たら緊張でガチガチになりそうよ」
「あの人が『北斗のパン屋』のオーナーか！」
「私、タイミング悪くていつも売り切れなんだよね……ミオリネさんは普通に買えてるのに」
「原因は主にそこの小娘だがな」
「マジかウッドさん!?俺もガウマ隊の分買おうとした時に売り切れだったんだよ！」
「だって美味しいんですもん！美味しいんですもんんんん!!」
「この前、ボクの目の前で爆買してったのだわ」
「……ハベトロットの分は？」
「ちゃんと買えたから御心配なく！」

【第一章：堕天使編】

「この頃の俺、まだどうしようもないオープンスケベだったわ。マジで黒歴史！」
「そしてカナエが良識人であった頃でもあるわね。この少し後から色々壊れ始めるから」
「壊れてないもん！カナエさん成長はしても壊れてないもん！」
「今は手遅れね。姉さん強くなった代わりにポンコツになってるもの」
「しのぶ!?」

○アーシア奪還、そして８０登場！

「「矢的先生ェェェ!!」」
「やっぱり８０先生は空中戦だよな！」
「その所為でトリガーが初変身で倒したギコギラーのやられ方が哀愁漂いすぎだった」
「変身もぐだぐだだったっけ」
「え、ノッブが来る前からぐだぐだだったんですか？」
「聞き捨てならんぞ沖田ァ！儂＝ぐだぐだなんて方程式作るでないわ！」

○エピローグ・酷過ぎる寝相

「あ、あれって私が原因だったんですかぁ!?あうぅ……」
「不可抗力不可抗力」
「ていうかオーフィスのキャストオフがダイナミック過ぎるよ。後で僕もイッセー相手にやってみよ」
「はあ!?」
「どいつもこいつも寝相が悪過ぎる件について」
「一人寝ぼけてる範疇超えてんだけど」

「言うまでもなく黒歌姉様ですね」
「カナエじゃないにゃ!?」
「ツインキャットストライクとかやってんのお前だけだろ」

【第二章：フェニックス編】

「「「「別名レジェンド軍団魔境編」」」」
「あ、こいつがマスターの言ってたシックルって奴か。確かにヤベーな」
「サーヴァントでもこの能力には対抗出来るかどうか……」
「誰もライザーの方には触れないのね……」
「むしろそれをぶっ飛ばしたカナエさんの方がおかしいから」
「ねえ、これ過去を振り返るっていうか私メインの大暴露総集編的な展開になってない!?」
「姉様的にはどう？あれは」
「アウトアウト、全ッ然無し。アレが婚約者とかねーわ」
「先代陛下の御息女二名からライザーが聞いたら速攻ブチ切れそうな一言頂きました」

○レジェンドら三名、京都へ

「蛇倉苑のサクセスストーリーはここから始まった」
「初見で戦士の頂盛りを平然と平らげる旦那マジスゲェ」
「ガイはこうはいかなかったよなぁ？」
「くっそ、ここは言い返せないな」
「私と母上初登場なのじゃ！光神様無双を生拝見したぞ！」
「京都で無双とか新選組案件じゃないですかー！」
「あのカラス人間相手にお主が出来るかのう？どうかのう？」

○リク合流、ロスヴァイセ加入

「僕、登場！そしてオーフィスちゃんに拾われるロスヴァイセさん」
「あのとき拾われなければ私はここにいませんでした……」
「え、北欧神話のグングニルあれ二個目なの？マジでレジェンド様って何なの」
「ヴァルキリーって安月給なんだ……」
「オーディンのジジイがケチだっただけじゃね？」
「沙耶ー、今度女子旅行で京都行こう京都！」
「慰安旅行の為のリサーチみたいだし、全員で行けそうよ？アルク」
「女子限定で行きたいの！」

○オカ研修行開始（ＶＳゲン戦）

「ここで俺達は師匠のヤバさを身を以て実感する」
「神器も魔法も効かないとか何なのこの人!?」
「カナエさんすら手も足も出ないとかホントそれな」
「神秘殺しとかそういうのよりよっぽど怖いよ！」
「俺よりチーフの方が凄いぞ」
「「「それは相手が悪すぎます！」」」」

○キリエル人と天使もどき

「あ～……僕もやられたこれ」
「「キリエル人マジぶっ殺す」」
「キラとグランがキレた!?おまけにギャスパーまで！」
「そりゃお前ダイゴさん大好きコンビとリクさん大好き男の娘だぞ」
「何この店長の安心感」
「そら店長だからよ」

○ジードＶＳキリエロイドⅡ

「初見じゃ厳しいよね、しかもこの姿だもの」

「ダイゴさんのこの説得力よ……」
「さすが銀河遊撃隊の切り札、経験の重みが違うな」
「鬼灯さんクッソ強え!!」
「閻魔大王毎日しばき倒してる、レジェンド様の右腕だぞ？予想はつくだろ」
「この人々の勇気、まさしくローマの輝きである」
「ヤバイこの展開だとローマと賛同したくなる」

○シャイニングミスティック&ジャグラー

「「「「店ッ長ォォォォォ!!」」」」
「店長強くね!?タイマンで互角に持ち込んでるのに余裕あんだけど！」
「ここでも客足の心配とは……見上げた商売人根性だな、マスター」
「伊達に店持ってねえってことだ」
「来た！来ましたぁシャイニングミスティック！」
「シャイニングな俺の力を使ったチートフォームだな！」
「なお、片方のマン兄さんは通常形態でこれという」
「あの人がおかしいんだよ！スペック詐欺！」
「あ、これキリエロイド勝てねーわ。チートと店長二人同時にって無理ゲーすぎ」
「何この安全チャージと確定直撃」
「……先生、これサテライトシステムに使えない？」
「沙耶、お前……殲滅思考加速してないか？」

○話題になる無惨と東方不敗

「ジャックちゃん、鬼舞辻無惨に会ったら即解体！これ大事だからね？」
「うん、おかあさん」
「物騒だけど姉さんの案に頷いてしまう自分がいるわ」

「うむ！まさしく罪の塊だな！無惨はパム治郎を見習うべきだ！」
「パムパム～」
「……煉獄、あの鬼舞辻無惨がパム治郎みたいに鳴いていたらどう思う？」
「鳴く前に斬る！」
「煉獄さんダイナミックね⁉」
「ガチで星間連合の師団壊滅させたの老師⁉」
「まあ、これから放映されるだろう話でもすげーことやってるしな、あの人」
「よく生きてたな狛治……」
「頭蓋骨がヤバかったけどな……」

○ゼットのやらかし、ノアとキングとサーガ

「「「「バカだー!!」」」」
「ぐはあっ!!その台詞、俺の心にダイレクトアタックだぜ……」
「事実バカだろお前」
「ゼロ師匠の言葉が一番効きますよ！」
「大丈夫ですマスター！私も偶に槍忘れてました！」
「そうでしたね。槍がないからとそのまま敵に殴りかかって行ったのは今でも覚えてますよ。私も不可視の聖剣だったので、鍛錬中時々持ってるのか持ってないのか分からない時がありました」
「おいそこの円卓関係者主従!!」
「「「「つーか何してんのこの見たことないウルトラマン二人⁉」」」」
「ノアとキング何やってんだアイツらマジで」
「俺このままウルティメイトイージス使ってたらああなるんじゃないか不安になってきたんだけど」
「それ言ったらウルティメイトゼロ関係者全員ヤベーことになるぞ。ただあいつが変なだけだ、安心しろ」

○メビウス登場とコンパチガリバー

「おおっ！メビウス兄さんは通常時も防衛隊っぽい！」
「メビウス、最初の頃を思い出すがホントに立派に育ったよ」
「チーフにも結構怒られましたよね。静かに怒るところが逆に怖かったというか……」
「本気のレジェンドはいるだけで圧がヤベえからな。スペシウム光線の構えを取ったウルトラマン並に」
「あのマウンテンガリバーがこんなにカッコよく……！って外見と性能だけじゃなくガチで別モンじゃねーか!!同じとこってマイと同じく女性パイロットってだけじゃん!!」
「シャルルとマリアンヌ、それにＶ．Ｖ．に見せたらポカンとしたあと大爆笑だったな。全然ＫＭＦと違うんだもん」
「そういえばあのプリン伯爵が興奮気味に何かと聞いてきたな。ランスロットを巨大化でもさせる気なのか知らんが、パイロットとして意見が欲しいと」
「えっ、ランちゃん巨大化すんの!?」
「ヴェイン、それは俺じゃないからな？」
「メリュジーヌは普通に巨大化出来るし」
「じゃあメリュ子はロケットパンチ出来るようにならんと」
「無理だよそんなの！」

○オカ研、修行完了

「最初の頃を考えると先輩や師匠との関係が激変したの俺だよな」
「俺やゲンに反抗しまくりだったしよ。けどま、一皮剥けたら一番成長したってわけだ」
『神器無しである程度の奴は倒せるようになったからな。俺としてはあのバグトラマンに叩き起こされたのが衝撃的体験だったが』
「光神の護り家ってハンターズギルド、カルデアとか今のアスティカシアみたく宇宙人も沢山ですね！」
「なあ勇治、あのユミザムシャーって人とセッティング頼めない？」

「シャディクお前どれだけストライクゾーン広いんだ」
「負けちゃいらんねぇな、マスター。次はアクアペスター狩ろうぜ。油獣ってぐらいだし料理用の油とかの原料取れそうだしよ」
「スキューラも一緒なら油使ってその場で食べられますね」
「そいつぁいいな！調味料持って行かねーと」
「「「おいそこの二人!?」」」」
「ああ……最近口が寂しいと思ったら馬場寿司の寿司食ってないからか」
「寿司ってあのお寿司ですよね!?レジェンド、注文です！ハリーアップ！」
「無茶言うな」
「師や親から子へのプレゼントは良いものですね……とりあえず、バーヴァン・シーと沙耶に私とお揃いの衣装でもあげてみましょうか」
「そういや俺の場合、揃いの衣装って無……あ、ギルと同じで上半身裸になって『光神の無限秘宝』連射したことはあった」
「それ受けたの私だよマイロード」
「昔メソポタミアの邪神にもやったことあるぞ」
「メソポタミアに邪神なんていたっけ？……あ」
「我儘過ぎて身内ながら申し訳ないのだわ……」
「エレちーは良い子だから大丈夫大丈夫」

○レーティングゲームスタート！

「やはり猫は可愛くて強いのだナ。キャットもご主人の活躍で誇らしいのである」
「猫耳スタイルも一考の余地ありでございますな」
「るりふぃすさやぴーの猫耳衣装!?ボクは全力で支援するぞう！」
「私もポケットマネーで支援させて頂きます。ゼット殿、チケットの優先権は何卒」
「やべーよフォロワーに魔術王と月王国の先代女王とか何だこの豪華

面子。っていうかあの三人プロデュースしてたのゼットかよ!!」
「ダンススキルにプロデューススキル、その他諸々……アレだな、何処かの時空で『スマイルスマイル!』と言ってる後輩に教えてやれよ。周りを笑顔にする方法」
「マスターの詠唱が凄すぎなんじゃが。オサレか?オサレの伝道師なのか?」
「ノッブの場合『平伏せー!』とか『儂の一撃を食らうがよい!』ってだけですもんねー?マスターさんを見習ってオサレにしたらどうですー?しかもあっちは着物を着て色香マシマシで――」
「是非もないでしょー!!儂だってオサレだもん!ファッションだってオサレだもん!隊服しか着ないバカ沖田よりオサレだもんー!!いつかマスターみたくばいんばいんになってやるわー!!」
「隊服以外着ると土方さんが怖いんですぅー!着たくても着れないんですぅぅぅ!!」
「いつもぐだぐだしてんなコイツら」
「くっははは!やっぱこんなんじゃマスターの相手務まんねぇよなあ!プラズマ怪獣相手にやり合ってるウチのマスター相手にあの程度の相手ぶつけるとか指揮官としちゃ最低ランクだぜ」
「ご機嫌ですね、クー・フーリン」
「当然だろ?真正面から瞬殺、ケルトの戦士に迎えてもいいぐらいの度胸と腕前だ。こっから更に聖魔剣ってのにレベルアップするんだしな。つーかセイバー、さり気なく俺とマスターのフライドチキン持っていくんじゃねえよ」
「イッセーきたー!赤龍帝の鎧カッコイー!あ、でもマダオがカッコいいわけじゃないから勘違いしないでね」
『一言余計だノーパン剣豪!』
「赤き龍帝ですか。やはり私に相応しいマスターですね」
「これだけやっても師匠に勝てた例無いんだぜ……」
「「「何なのウルトラマンレオ」」」
「やるねぇリアスちゃん。回避の動きに余裕が見えるよ」
「え、アイツまさか自分が世界上位の実力者と錯覚してたの?」

「このあと、化け物（的戦闘力）へとレベルアップしたカナエに数発で斬り伏せられるわ」
「リアス！言葉が、言葉が足りないわ！何か！」
「安心して姉さん。姉さん、今は化け物じゃなくて変態になってるから」
「ガーン!!」
「日の呼吸!?ホントに日の呼吸！カナエさん凄い！」
「花の呼吸といえばこの花の魔術師たる私と相性抜群じゃないかと思うんだ。どう思うキャスパリーグ？」
「フォーウ（黙れラフレシアネカマ。プーリンの方が相性良さそうだよ）」
「ラフレシアを嘗めるなよキャスパリーグ！ねむりごなとしびれごなはポケモンゲットの頼れる味方だ！」
「マイロード、男の私は何を言ってるんだい？」
「とりあえず今度ピカチュウ連れてくるからそれまで我慢な」

○いよいよ登場、レオゼロ師弟

「ゼロの戦い方が正統派無双なのに師匠であるレオの戦い方がぶっ飛びすぎな件について」
「敵の腕すっ飛ばしてヌンチャクにするとか何なんですかコレ」
「武器要らずの全身凶器っておかしくない？」
「甘いなお前ら。何もかも『レオだから』でケリがつく」
「「「「弟子のこの説得力ある発言よ」」」」
「わんこヘッド！わんこヘッド！」
「犬か？あれ」

○トライスクワッド、バディゴー！

「!!」←小躍りジータ
「……」←ガン見エレちゃん

「タイガスキーな娘って外見レベルたけーよな」
「タイタス、今も昔もブレてない」
「フーマはもうちょいツッコミ力上げようか」
「勘弁してくれよ……もうボケが飽和状態で今更ツッコミが一人増えたところでどうにもなんねーよ」
「おいフーマ……俺の前でそれを言うか？」
「スンマセンでしたレジェンド!!」
「一番キレッキレなツッコミしてるもんなこの人……」

「よーしここで一旦休憩入れるぞー。下手すりゃ２万文字超えるからな今回」
「「「「超絶にメタい事情!!」」」」

相変わらず特別編だと自重しないレジェンド一家、そしてウルトラ騎空団。まだプロローグからライザーとのレーティングゲームまでだというのにやたら内容が濃くツッコミどころ満載であった。

「何で今回前後編とかにしないんだ？」
「いや今までだけでも相当色々あって長くなるからな。次回は三大種族会談からって聞いてるし、前後編で収まるの空の世界に行くまでだろ」
「盛り上がんの次のエクスカリバー編からだぞ。本格的に機動兵器出てくるし、漸くレジェンド達と俺らが合流するし」
「ふぇふふふぁりふぁー!?」
「口ん中にもの入れたまま喋んなって！」

マッハで反応するセイバーアルトリア。キャストリアの方は蛇倉苑の飯テロや馬場寿司の情報を食らって大ダメージだ。

「お寿司～……お寿司～……」

「マイロード、キャスターのアルトリア……うん、キャストリアが精神不安定になってるけど」
「正月だし手巻き寿司にするから我慢しなさい」

――そこへＣＭ代わりにサーガが神衛隊＋αで撮影し、大ヒットを飛ばした『ＦＦⅧ』がトレーラー集で流れ出し、殆どの者がガン見。
特に宇宙にあった飛空艇ラグナロクのコックピットにおけるスコール（サーガ）とリノア（ユウキ）のシーンを見た面々の反応は凄まじかった。

「我が夫、我が夫。私もアレやりたいです」
「マイロード、撮影はいいから二人っきりでやろう？」
「当然ヒロインは私ですよね！」
「――先輩はラグナ役で出ていたが」
「「「「レイン役は!?」」」」
「かなり悩んだが良い感じに当て嵌まる人物がいなくてな……一時的に大人モードになったシュテルが担当した」
「……ふっ（ドヤ顔）」
「なんで僕じゃ駄目だったのー!?」
「大方髪の色や覚えの悪さであろう。我やユーリは当然、貴様もその髪の色の上、台本の台詞を試しに読ませたら変なアドリブしか言わなかった貴様に兄上の相手は務まらん！」
「レヴィ、もっとお勉強しましょう！」

ディアーチェとユーリにそう言われたレヴィはぐうの音も出なかった。後で観た束が「束さんがやりたかったー！」と言ったものの、絶対アドリブでキスシーン入れてくるだろうと却下されたらしい。
セイバーアルトリアが持ち込んだカップラーメンとご飯の代わりとして、大量のお菓子や飲み物を補充してきてから放映再開。いよいよレジェンド一家とオカ研メンバーが合流するエクスカリバー編、だ。

【エクスカリバーもしくは聖剣編】

○早速不憫な目に遭うレジェンド

「「「「ご愁傷様です」」」」

「痛くなかったかい？マイロード」

「むしろ今のプーリンの優しさが痛い」

「中々ないよな、あんなピンポイント顔面直撃」

○アムロの実力の片鱗（シミュレーター）

「あの強さは明らかにおかしいでしょ!?」

「俺ら月王国機動部隊が挙って挑戦して惨敗だからな……」

「私やヤプール、クソ虫も敗けました」

「ええ!?先代陛下ら月王国最強チームまで!?」

「仕方ないだろ。俺でさえアルトだと勝率三割切るんだからな」

「……我が夫。勝率三割、というのはつまり――」

「そこそこ勝ったことあるぞ」

「「「「どうか御指導お願いします!!」」」」

「アルトだとって……つまりタイマンで!?」

「あ、ミオリネやスレッタらの目が死んだ」

「モルガン以下妖精國出身者も同様に」

「そりゃ自分達はチーム戦でさえ勝てないのに、一対一で戦って勝率三割（ネオ・グランゾンやマジンガーＺＥＲＯ使わず）だもんな」

○到着！先遣隊……とティアマット

「意外～！最初来たのってこのメンバーなんだ！」

「理由が納得出来るってのがなあ……」

「お母様とほぼ同じ名前なのに名前負けなのだわ」
「『ホントそれ』」
「レジェンド様はまだしもオーフィスとドライグに言われたくないんですけどぉぉぉ!!」
「でも良いよね、使い魔になるとき身体を重ねる風習」
「何言ってんのこの頭ドラゴン娘」
「しかもそのチキンドラゴンの虚言だったし」
「チキンドラゴンという種族不明化するパワーワードよ」

○ゴジラ、本来の姿で初登場！

『見ろ！オレ様の本気モードを！』
「わあああ！凄いですー！ババムートよりガッシリしてて！」
『だろ？だろ!?小細工無しで真っ向勝負、正面から相手をぶっ倒してきたオレ様の勇姿は次の話まで待ってろよ！』
「怪獣同士でバトルっていいよねー！」
「アカネがすっごいワクワクしてる」
「まあ、納得だけど」

○縁壱の弱点発覚

「何だっけ……『操縦桿を動かしたら仕掛けられた爆弾が爆発するかもしれない！』って切羽詰まった表情で言ったりしてたな」
「味方なのに警戒しすぎィ!!」
「そういやノアんトコの護神隊の一人が『桂、いっきま～す！』と宇宙に出た直後機体が爆発したりしたそうだから強ち警戒しすぎと言えんのがなんとも」
「あの人マジでどういう人直属の部下にしてんの!?」
「次の話で出るからな、とりあえず三人」

○シミュレーター、最初のバージョンアップ

「懐かしいぜ！最初のライザーソード！」
「一番乗りをレイトに取られたの思い出して凹むにゃ……」
「なるほど、これでも練習しなかったから姉さんより私の方が操縦上手いのね」
「しのぶやめて！私の心抉らないで！」

○ゲンＶＳ三日月（ゲンの圧勝）

「「「「おかしいだろその威力!!」」」」
「いや三日月の耐久力も大概だけどな！」
「恒星を人間のままワンパン衝撃波だけで消滅可能というレジェンドの異常性について」
「そりゃそんな人に鍛えられりゃゼロ隊長も強くて納得だ」
「クソ虫が負けた理由は単純明快ですね。ただ相手が悪すぎた」
「しかし三日月殿、いい肉ですな！」
「うむ！鍛え抜かれた身体だ！」

○オカ研と生徒会、初顔合わせ

「そうそう、最初こうだったこうだった」
「時々カナエさんが馬鹿発言する件」
「姉さん、後でクエスト周回するわよ。腑抜けたその頭に実戦を染み込み直させてあげる」
「待って待って待って!?私この映像が再生される度に地獄へと一歩一歩進んでる気がするんだけど！」
「クー・フーリンが人外扱いしたのは正しかったのですね」
「だから言ったろ。明らかに纏ってる空気がおかしいんだよ」

○皆の憧れ、矢的先生

「アザゼルとは違うね☆」
「マーリンとも違いますね」
「「異議あり！」」
「却下。お前らは日々の行いを反省しろ」
「フォウフォウ、キュー（そーだそーだグランドネカマ）」
「グランドネカマってどんなクラスだキャスパリィィィィグ!!」
「……っ……！」
「そこ！プルプルしながら光神様に引っ付いてるけど笑ってるの丸分かりだぞ女の私ィ!!」
「では指差し爆笑されたいと」
「キャスターなアルトリアも容赦ないね!?」

○レジェンド実家の大図書館

「旦那！また探検させてくれよ！」
「いいぞー」
「私も！私と沙耶も行くー！」
「いやデート感覚で行くとヤバそうじゃね？」
「いやあーぱー吸血鬼とさやぴーのコンビだけど本気出したら凄いから平気だろ」
「あーぱー!?」
「私のそれはただの愛称なんだけど」

○……球技大会……

「「「「変態だらけー!?」」」」
「いや、モテ男果てるべし！この理念には共感しかない！」
「レオスお前まだ言ってるのか」
「レジェンド様は？」
「確実に狙われるけどド派手に逆襲して再起不能にするだろうな」
「モロ出し一歩手前な服だもん……服？紐？」

「む、プリンセス攻め攻めだね。僕は対抗して晒布に法被姿で応援しよーっと」
「メリュジーヌ、剣豪ジョブ以来和服に嵌ってるからな……」
「「「「一誠強え!?そして酷え!!」」」」
「仕方ねーだろ!?ありゃボールスティック狙わなきゃ勝てねーよ!!」
「狙っても勝てるとは限らんぞ」

○ドッジボール

「アレ楽しかったなー！」
「……何かリアスちゃんの背後にシャア・アズナブルが見えたんでございますが」
「やっぱりか？ゼットにも見えたなら俺の見間違いじゃなさそうだな」
「おい、カナエが真カナエになりやがったぞ。そのうち真シャインスパークもやるかも知れねえ」
「やらないしやれませんから!?」
「それにしてもこのカナエ、ノリノリである」
「ギャアアアア!!」
「匙が……！匙のトラウマが再発しました！」
「というかアレでトラウマにならなきゃどんなメンタルしてんだっつー話なんだが」

○聖剣計画大暴露

「ちょっとその教会にエクスカリバーしてきます」
「私もそれを強化するためにアヴァロンしてきます」
「「「「落ち着けダブトリア!!」」」」
「……（色無しジャンヌ）」
「はわあぁぁぁ!?ジャンヌさんが！ジャンヌさんが全部真っ白に!!」
「聖剣関係者と聖女がまとめて絶望したな。まあ、そうなるか」

「これこの先の話、三人正気でいられるのかな」

○レオ＆ゼロ、人間態レジェンドにフルボッコ討伐される

「「「「ウッソだろお前」」」」
「何であのレオに人間態で勝てんの!?」
「究極極意のスペシウム超光波」
「ホントに撃ったのか……」
「カナエの言う通り、朝っぱらからあんなの見たら一発覚醒するわ」

○イリナ、ゼノヴィア登場

「「ガクガクブルブル」」
「あー、思い出したのね二人とも」
「ついでにダブトリアからの圧がヤバいことになってる」
「で、本家エクスカリバー持ちのセイバーアルトリアから見たあの贋作カリバーはどうだ？」
「……単純な剣としての力は強いようですが、それだけです。聖剣としては大した力を持っていません」
「だろうな。良かったな二人とも、今持ってなくて」
「「全くです……」」
「つーかアザゼルオメー部下の管理しっかりやれよ」
「レイナーレの時もそうだけど堕天使ってやらかしの被害尋常じゃないわよね」
「仕方ねーだろ!?あいつらフリーダム過ぎて行動把握出来ねーんだよ！シェムハザとかバラキエルはマシなんだが……」
「トップが一番フリーダムかもしれんからな」
「久々にキレのあるツッコミありがとよ邪竜騎士！」

○カナエダイナマイト

「「「「ゴモラキレたー!!」」」」
「そっちィィィィ!?」
「いやだってゴモラキレるって相当だぞ」
「そしてカナエよりヤベーやつ出て来た」
「この後の展開が読めてしまった。生きててよかったなお前ら」
「ホント生きててよかった！ゼノヴィアってば私にあの人の相手押し付けてからに！」
「ほう？つまり相手が強者と見て逃げ出したのか」
「し、師範!?けけけ決してそーいうわけじゃ……」
「士道不覚悟は切腹ですよマスター！」
「え？お主が言っちゃうの？マジで言ってんの？ウッソじゃろお主」
「どーゆー意味ですかノッブ!?」

○案の定フルボッコ

「アーシアの優しさはチートラマン級。お前らよく頭に叩き込んで甘えすぎないようにしろよ」
「「「「はーい！」」」」
「あぅ……」
「怪我人を即座に治療する術とそれを実行に移す判断力、そして決断力。どれも素晴らしいものです。誇ってください、シスターアーシア」
「ナイチンゲール先生……はい！元、シスターですけど」
「何じゃこのカナエから滲み出る藍染臭は」
「同じような台詞言われたのって、私んトコの隊長らしいのよね」
「じゃあゼノヴィアって瀕死になったの？」
「ぶん殴られて意識フェードアウト……よかったなマジで」
「技量の差も見極めず相手を煽るからだ馬鹿者」
「御尤もです……」

○危うしダイブハンガー（身内により）

「死ぬかと思った」
「両手両足に触れたらアウトとかヤバかったわよホント！」
「ヤバいですね♪」
「ナルメアのお姉ちゃん力が低下しました」
「何で!?」
「アーシアファインプレー過ぎる」
「フォーウ（おうマーリン彼女に手を出したきゃ、あのガチモードレジェンドを止めてみろよ。魔術も物理も効かない、元祖チートラマンの一人と真っ向からやり合えるんならね！）」
「くそう！自分は受け入れられてるという余裕からか、いやに自信満々だなキャスパリーグ！無茶振りもいいところだぞ、それは！」
「何せパンチやキックどころかデコピン一発にスパークレジェンド効果（当たった相手は消滅・つまり死ぬ）が付与されてるからな。だから俺も迂闊に動けなかった」
「サーガ様すらこう言ってしまうレベルのガチギレジェンド様って……」

○ジャック・シンドー＆アスカ・シン到着

「考えてみればジャックって名前沢山いるな」
「ジャックちゃんは私の娘だけです！」
「わたしのおかあさんはおかあさんだけ！」
「出会ってから然程経ってないのに何だこの絆レベル」
「え、アスカさんと俺……同姓同名なんですけど……」
「しかもｄ」
「おおっと分かってしまう人はいるかもだがダイナミックなネタバレはそこまでさ！」
「ダ・ヴィンチちゃんがある意味一番ネタバレしてる件について！」
「いやあモナ・リザになったはいいけど、最近思考が身体に引っ張られてるというか、団長さんを見てるとムラムラしてね。団長さんとの夜

を過ごす夢を見て悶々としてるから、その発散も兼ねて」
「モルガンこれマジですか」
「マジですが何か？」
「私達にとって大問題なんですけど！マスターなら何とかして下さいよ！」

○物乞い聖職者とペドロ

「……」
「ダブトリアが哀れんでる……そして」
「……」
「ジャ……ジャンヌさん、しっかり！」
「情けなさで声を出さずに泣いてるな」
「しかもサーガ達の姿を見た途端すり寄ってくるという図々しさ」
「のう沖田ァ、お主のマスター聖職者なの？騎士なの？乞食なのかのう？うん？」
「黙らっしゃいノッブゥ！腹が減っては戦はできないですよ！」
「サーガ様も慈悲深いなおい」

○唐突な『となりのペドロ』

「ぶほっ!?」↑飲み物吹き出すバゲ子
「不衛生ですね」↑いつものナイチンゲール
「第一印象は捨てろ。あれは泣ける映画だ」↑視聴者ミッチー
「「「「いや何処が!?」」」」

○時は進み、クレナイガイ満を持して登場

「出たよ美味しいところ持ってく風来坊」
「つーか散々な言われ方してるな、イリナの嬢ちゃん」
「……そうだった。このとき出たんだよなあの発禁天司」

「一度も会ってない人は注意してね」
「懐かしいなーフリード。アイツ今何やってんだろ」※パーツになってます
「コカビエル……駄目ね、強かったというかレジェンド様と悪魔将軍にフルボッコされてた記憶しか出てこないわ」
「それは仕方ないな、うん」
「タイガのお父さんに喧嘩売る？私らが黙ってないぞコルァ」
「コカビエルよかジータのがこえーよ」

○堕天司ベリアル、登★場

「「「「出たよ発禁天司ー!!」」」」
「対して厳勝さんカッケー！」
「何ですかコレー!?サーヴァントなら対処出来るとかそういうレベルじゃないんですけどー!?」
「さすが神衛隊白兵戦最強格……！」
「ミッチーの本領発揮出来る機会を奪って捨てた無惨マジ頭無惨」
「ミッチーはやめろと何度も言っているだろう！」

○大型の『鬼』カゼキリ出現

「やっぱりあの発禁天司かよォォォォォォ！」
「可愛くないわんこ。レッツ処分」
「ここで来るのか厳勝覚醒イベント！」
「おいおいあの金色の刀、金ぴかが欲しがりそうなモンじゃねーか」
「あ！マスター達合流！」
「ダ・ヴィンチちゃん、ドクターが……」
「オーフィスちゃんの活躍に感無量なんだろうね」
「鬼は特殊な武器か状況じゃなきゃダメージすら通らない。そう思っていた時が俺にもありました」
「思っきし攻撃通ってんだけど!?」

「マイロードだからね。……時に男の私、まさかこの状況まで覗き見してたとか言わないよね？」
「もちろん見てたさ！」
「……だったら助ければいいのに」
「マーリンクサレゲドウフォーウ！」
「いてもいなくても変わらんがな」

○ゼット、まさかの大健闘

「ゼットがジャンプ系主人公の最初期ムーブ見せてることに驚愕」
「失敗恐れず立ち向かう！ご立派です、マスター！」
「マイロードはサポート役……つまり私と一緒だね」
「それはつまり私とも一緒ということさ！」
「「は？」」
「あ、キャストリアとプーリンが殺意マシマシに」
「楽園に引き籠もってた所為で空気が読めなくなったのか、アイツ」
「やべーよミッチー何だあの技」
「可愛いのに強いとか無敵じゃないかオーフィスちゃん！」
「ロマニのテンションが限界突破しまくりじゃないか」
「……何で最後に飯テロぶち込んで来るんですかあああああ!!」
「お弁当を……お弁当を下さい……！」
「ダブトリアは別の意味でヤベーなこれ」

○駒王学園にて

「エクスカリパチモンで何しようとしてるんですか」
「そこはエクスカリパーでよくね？」
「ガイさん登場！これは勝ち確定だな」
「マスクドガリレイこんなドクズだったんだ……」
「芥子さんにフルボッコ呵責されたあの肥満野郎ですか」
「しのぶ、ツッコミがキレッキレ」

○オーブニカによる聖歌演奏

「――泣いていいですか」
「ジャンヌさんが幸せそうな笑顔で滝涙を!!」
「そりゃ最初の教会の話で大ダメージ受けてたからな」
「バカな！ヘタレ脳筋にカッコいい場面があるだと!?」
「いい加減泣くぞ私も!?」
「ほーらー！どうですかノッブ？どうですか？マスターも一点物の得物持ってるんですよ！オンリーワンは最強なんです！」
「お主のモンじゃなかろうが沖田ァ！」

○ネオ・ガンダムバルバトスルプスレクス出撃

「うわあ……敵不憫」
「ＭＳ乗ったばかりのペーペーが、ミカのバルバトスに敵うわけねえだろ」
「俺マジ助かった！ジンだけど無事生還した！」
「ミゲルガチ泣きやん……そらそうか」
「コレ絶対フェイズシフト意味無いよね。装甲の上からこう……ギュインギュインングチャグチャって」
「ギャアアア!?」
「笑顔で恐ろしいこと言うなキラァ!!」

○フリード討伐

「アレが神父とかあそこの教会腐ってますねもうエクスカリバーですエクスカリバー偽物のエクスカリバーごと消し飛ばします」
「落ち着けセイバー！そして一人で超特大サイズのポテチ（のりしお）食い尽くすな！」
「今の私ならぶっ飛ばせます！さあ、マスターも！」

「オイオーブニカ聖歌演奏聴いてからジャンヌはっちゃけてんだけど」
「俺悪くないかもしれないけどすいませんレジェンドさん」
「とりあえずアーシアまで物理道に落とすな」

○バルバトスに潰されるバルパー

「「「「ミカを胴上げだー!!」」」」
「オルガ、空飛ぶって不思議な感覚だね」
「サーヴァントが混じるとこう……混じんなくてもこうなるか、うちの騎空団」

○ベリアル、再・登・場！

「このあとあの台詞出るわよ！純真な子や小さい子の耳塞いで!!」
「ジャックちゃんは任せて！」
「プーリン、オーフィスシャットアウト」
「はいはい」
「ゼットォ！ステラの耳塞げ！」
「イエッサー!!」
「……？ゼット、どうしたの？」
「ステラちょっとだけ我慢な！」
「「「「（拝☆聴）……マジで何言ってんだコイツー!!」」」」
「カナエが妄想して鼻血だしたぞ！」
「まだまだですね。私は我が夫との夫婦生活を日々妄想していますが、そうなった（鼻血噴出）ことは一度もありません」
「先代女王とんでもないこと暴露してんですが!?」
「しかしあの変態強えな」
「コカビエルの奴、沸点低すぎだろ」
「お前が把握してなくてどうする」
「おい邪竜騎士のツッコミが早すぎんだけど」

○神の不在暴露

「「「「アーシアに驚くほどダメージ無くて草」」」」

「自信満々なコカビエルに笑うわこんなん」

「ジャンヌは平気なのかい？」

「だってお告げをくださったのは光神様の方ですから」

「まさかの真実!?」

「こりゃアーシアとジャンヌが揃って団長の布団に潜り込む日も遠くなさそうだ」

「この変態マジで外道」

「フォウフォウ（マーリンと同じヘラヘラ外道がいることに怒りを禁じえない）」

「待て待てキャスパリーグ、私はあそこまで露骨じゃないぞ!?」

「勇治から聞いてるぞ。女湯覗き未遂」

「死ね」

「くたばれ」

「推しは？」

「スタイルが良い子は最高だね！」

「うちの夢魔がすみません皆様方。マーリン、後でエクスカリバーの特訓に付き合いなさい」

「えっ……」

○御大将ミッチー、ターンXにて出陣

「「「「いや誰だアレ!!」」」」

「ヤベーやつが揃いも揃って救援にきたー！」

「お、漸くマイロードも本格的に活躍かい？特等席の私は大満足さ！」

「チートメンバーの中にいるゼットに安心感」

「誰だよレジェンドにタキシード仮面的なこと吹き込んだ奴は」

「何でピンチを助けに来たチートラマンが身内によってピンチになっ

てんの？」
「そうだよ揃いも揃って俺に圧かけてくるのやーめーろーやー!!」
「圧（物理）なオーフィスよ」
「サーガ様＆小猫ちゃんとの格差凄いね」
「先輩の方にそういう女性が集中してるからな……」
「レジェンドさんホントお疲れ様です」

○御大将厳勝無双

「駄目だこのテンション、クセになる」
「コカビエル言い負かされてる。実力も負けてたし何一つ勝ててないね」
「トップがこれだからな」
「邪竜騎士表出ろコノヤロー」
「堕天使が堕天使(元)にされたー！羽無いと単なるヤバイ人ですね！ノッブみたいに！」
「喧しいぞやるか沖田ァ！何でもかんでも斬ればオッケーな新選組のがヤバイ連中じゃろうが！」

○レジェンド＆ゼットのぐだぐだ変身

「これさァ……ほんとさァ……何で俺の人間態名にちょっとも触れてくんないの？もう俺の人間態名知ってる人このウルトラ騎空団にどんだけいんの？」
「マイロード、かなり深刻なんだけど」
「変身ポーズがどことなく流さんにやってもらいたい件」
「ごめん、そしたらタトバソングが流れそう」
「ウルトラメダルがオーメダルになっちゃう！」
「いやジョブチェンジで既にオーズ化してるから単にしっくりくるだけだ」
「この歌唱指導！ＧＧＧ所属として俺もやるしかないぜ！」

「うん、凱の気持ちは分かるけど明らかにエヴォリュダー云々差し引いても人間のやる方法じゃないからね？」
『レジェンドチーフの２万本マイク破壊も不可能レベルのおかしい目標です』
「グランのトリガー初変身よりぐだってたー」

○エクスカリバー編、最終決戦。

「オイここで『ウルトラマン８０』主題歌を挿入歌にするとか反則だろ。盛り上がるに決まってんだろーが！」
「三日月エゲツねえ！」
「撲殺兵器バルバトスくん」
「間違っていると言えないのがなんとも」
「ターンＸやべえ。というかホントに巌勝さん戦国時代出身か疑問に思うほど機械に強くない？」
「あの巨体で輝く８０先生の華麗なる技よ」
「闇夜で舞う光の巨人は、正しくローマ。あまねく人々に希望を与えるその姿こそ、あるべきローマなり」
「「「おおっ……ローマ……！」」」
「さすがマスター！素晴らしい筋肉ですな！鍛え抜かれた筋肉は鎧さえ凌ぐ防御力！」
「命がけで仲間を守る……！それですマスター！円卓の騎士の如き精神、御立派です！」
「そして颯爽登場しゼットのピンチを救う俺！フッ……夜風に靡くマントがイカしてるぜ」
「どことなく今の台詞に英雄王を感じたのですが」
「まあゼロも俺の弟子だからな……というか俺の弟子で性格的にクセが無いのってサーガとケンぐらいか？今はベリアルも割とまともか。沙耶は……何だ、敵には厳しいってとこだな」
「我が夫、それはつまりレオもクセがあると？」
「最初は努力して困難に打ち勝ってたのに今やバグキャラだし。ホン

ト何があったのお前」
「鍛え続けていたらこうなりました」
「修行って偉大ですね！」
「普通はこうはなりませんよ、ガレス」
「バルバトスの切り札ヤバ過ぎだろォォォォォ!!」
「え……エグい……！押さえつけてから万力で締め付けるようにしつつチェーンソー部分でギュイーンと!!」
「アレ、スカッとするよね」
「「「「お前だけだミカァ!!」」」」
「マジでミゲルよく生きてたな！」
「いやホント全機能解放されてるアイツじゃなくてよかったよ！あの形態相手にしてたらコックピットごとミンチになってた！」
「ニコルが言ってたフェイズシフト装甲が無意味って言葉の訳がようやく分かったよ……」
「「「アスラン今更？」」」
「仕方ないだろ!?三日月は俺じゃなくて何故かバスターやブリッツに向かっていくんだから！」
「イザークは一誠とタイガに喧嘩売りに行ったんだっけ」
「勝負と言え勝負と！」

○ヴァーリ悲惨

「「「「相手が悪かった」」」」
「……」
「あ、同じくアルビオンなメリュジーヌも似たようなことされて瞬殺でしたっけ。レジェンドに」
「僕だけじゃないもん！バーゲストとかオベロンもそうだったもん！アルトリアのバカー！胸のサイズ中途半端ー！」
「中途半端じゃないありません！美乳と言ってください！」
「何でどいつもこいつも口喧嘩で胸のサイズが締めに出てくるんだよ」

「気になるなら実際に見たほうが早いよ？さあ！君なら大丈夫だ！レッツトライ！」
「フォーウ！マーリンゲスケベフォーウ!!」
「あだだだだだ!!」
「フォウフォーウ!!（お前マジでいい加減にしろよ！レジェンドの印象悪くしようとしたってそうはいかないぞ！ボクが新ご主人の盾になる！）」
「ホント私に対する反応が真逆だな!?」
「キュー、フォウ！（途中から世話放棄して強制アイキャンフライさせたお前と、留守中はちゃんと世話してくれる場所に預けてくれて定期的に様子見に来ては遊んでくれたレジェンドを一緒だと思うなよ！）」

○また明らかになるレジェンドの逸話

「そんな凄いマイロードに呼ばれた私は幸せ者だね」
「「「「そういうレベルじゃねえ!?」」」」
「天変地異を居眠り撃退する時点で色々おかしいよね!?」
「魔術王がこうまで言うんだからレジェンドマジ変人」
「喧嘩売った相手が尽く宇宙から消えたってのが一番怖いんだけど」
「こう考えるとプーリンがサーヴァントで良かったかも……」

○勃発、レジェンドの嫁誰談義

「オイこれこの場がカオス化するやつだろーがァァァ!!あの時あの場所にいなかった面々が暴走するの目に見えてんだけど!!一誠はともかく勇治もアレ何ていうかトライアングラーどころかスクエアーになってんだからそっちも注目しろよォォォ!!」
「待てコラこの時はまだ私いなかったのに巻き込もうとするな！」
「黙らっしゃい！ツンデレ肉食系トドメにもふもふ系まで選り取り見取りな野郎がスルーできると思うなよ！」

「アンタは圧倒的にそれ以上だろうが！カテゴリ多すぎて分け切れんわ！」
「上等だやるかムーンブロリィィィィ!!」
「誰がムーンブロリーだベジットシルバァァァァァ!!」
「すいません何か『劇場版ドラゴンボール伝説～激突！異世界のベジットとブロリー!!』みたいのが始まったんですが?!」
「勇治がフルパワー限界突破、レジェンドは結構手加減して本気じゃないにしても凄くねーかアレ!!」
（そういえば本気でキレた先輩を見たのはあの時空だったな……）
（確かその時空の全１２宇宙の全戦力集結させても止められず、ノア様やキング様も含めた光神を集結させるまでになったとか……）
「あれかな、今のレジェンド様って敵が大袈裟に何か言ってる時『スキありィ!!』とか言いながら横っ面ぶん殴りそう」
「レオニダスとか？」
「何故に!?」
「ほーらー！オーフィスとスカーサハも言ってるじゃん！貧乳はステータスだよイッセー！」
「ふっ……甘いですねメリュジーヌ！私を見てから言ったらどうです？」
「ティアホマットはどうでもいいや」
「物凄く不満な呼び方されたんですけど！」
「しかも的を得ているし」

○サーガの過去

「「「「この人（レジェンド）がお父さん属性持ってる理由がよく分かりました」」」」
「これは褒められてるの？どうなのコレ」
「褒めてると思うぞ。普段が普段だけに疑うのは分かるが」
「レジェンド様の属性って、お師匠さんお兄さんお父さんお母さん……と天然ジゴロその他諸々？」

「この際天然ジゴロその他諸々はスルーするとして、お母さんってなんだおい」
「おかあさんはこっちだよ」
「もうジャックちゃんは一々可愛いんだから」
「ポンコツ母さん……漫画でありそうね」
「しのぶ!?」

○ドライグ、マダオ呼ばれ

「「マダオー」」
『やかましーわ!!ロリにあーぱーにノーパン!!』
「ドラゴン漏れなくクセ強過ぎだろ」
「セイバーアルトリアもクセあるしな」
「主に今後の食費とか」
「あくせく働け青セイバー。働いた分だけ飯が食えるし美味くもなる」
「本当ですか!?ならば早速クエストに行きましょう!」
「だから飯が絡むとお前暴走しすぎだろ!」

○ゼノヴィア、サーガの御使いに

「「ホントに五号だったんだ……」」
「まだ信じてなかったのか先輩方!?」
「だってねえ……アピールとか殆ど無いし?」
「こう言うとあれだけど、なんちゃって御使いにしか見えないなぁって」
「ぐはあっ!!」
「ぶっちゃけその通りだもんな」
「つーか何だよどんだけ気に入ってんだよ『となりのペドロ』」
「ペドロ、声マダオじゃん。ナイス配役」
『誰がペドロだ!!』

「メリュジーヌってイッセーとは仲良いけどドライグとは相性悪いよな」
「まあアルビオンだし……」

○一度、それぞれ別行動に

「待ってましたー！いよいよ束さんとクーちゃん登場の時ー！次回に持ち越しだけど」
「人参ロケットから上半身だけ出す竜馬を見れるのか……」
「何それシュールすぎる」

「さて、そろそろあいつらも到着するだろうし、続きは明日以降な。おそらくここに着いたら宴会まっしぐらだろうし」
「盛り上がってきたところでお預けってヒドイー！」
「まあまあ、楽しみが出来たと思えばいいじゃないか」

ただでさえ濃厚すぎるレジェンド達の遭遇した数々の出来事、それは幕間にあたる部分を経て三大種族会談編で更に鮮烈になっていく。
そこからは先日英霊召喚にて新たに呼び出した面々や、レジェンド達が召喚に成功したことを機に月王国へ留学していたマスター候補生らが行った英霊召喚で呼び出したサーヴァント及びそのマスターも共に鑑賞するため、レジェンドが召喚した『彼ら』が自ら招集しに行ったのだ。

「しかし……育ちが変わるだけでああも大きく変わるとは……」
「俺が知るアイツなら『何故我が雑種など迎えに行かねばならんのだ』とか言うだろうし」
「ええ、確実に。『アーチャーの我とは次元が違うのだ』と聞いた時は何のことかと思いましたが」

「「あの人、一体どんな育て方をした？」」

エミヤ、クー・フーリン、セイバーアルトリアは本気で首を傾げている。それもそのはず、その人物は――。

☆

「ごめんなさい～！遅くなりました!!」
「全く……女子の準備に手間がかかるのは知っているが、既に分かっているならば事前に済ませておけ！では行くぞ！我が師父が待つウルティメイ島へな！」
「あ、勝手に行動して空の底に落ちても笑って見てるから気を付けてね」
「そこは助けるんじゃないのか!?」
「ふはは、我が友にそんな意見は通じぬ。貴様らがすべきことは反論ではなく危機察知よ。それを見抜けぬから貴様は『ヘタレゼムルプス（ガッデムゼムルプス）』と相方から言われるのだ」
「アナスタシアー!?」
「事実だもの」

英雄王――否、究極英雄王とその友。そしてとある並行世界では『人類最後のマスター』となる少女と、彼女と敵対する『クリプター』たる者達（ただし一人足りない）及びそのサーヴァントが仲良く賑やかにウルティメイ島へと向かっていた。

特別編・皆で過去を振り返ろう！～次回に備えて～

一先ず鑑賞会を終えて宴会準備が進められる中、レジェンドはプーリンとアルトリア、そして頭にフォウを乗せて乗艇港にいた。そろそろ来るであろう、プーリンに続き召喚した『マイ・ベスト・サーヴァント達』を自ら出迎えるためだ。

「そういえば彼らは誰を連れてくるのかな？」
「カルデアの新しいマスター候補生、並びに月王国へ留学している魔術師だ。マスター候補生とは言っても既に英霊召喚は済ませてあると言っていたな」
「何か緊張してきたな～……良い人でありますように！」
「フォーウ（先輩一緒だって言うからついてきたけど、どうも嫌な予感がする）」

久しぶりにレジェンド直々のブラッシングを受けているフォウはいい感じに緩くなっている。そんな光景を微笑ましく見ていたその時、遂にあの声が木霊した！

「ふはははははは!!究！極!!英雄王ギルガメッシュ!!いよいよウルティメイ島に足を付けたぞ！やはりあれよな、クラス・ウルティメイトの我としては惑星レジェンドは勿論だがここに来なければならぬ。クラス・ウルティメイト、ウルティメイ島に立つ……ふふはははははは!!」
「いつもの三割増しぐらい機嫌いいね、ギル」
「当然よ！何故ならば迎えには――」
「待っていたぞ、ギルゥゥゥ!!」
「師父自ら来るというのだからな!!お前もいるのだ、遂に時も次元も超えてメソポタミア最強チームが復活した祝いも兼ねているとあればハイテンションにもなろう!!」

ふはははは！と上機嫌に笑うギルガメッシュと、姿を見るなり瞬間移動ばりの速度で駆け寄りエルキドゥを高い高いするレジェンド。三人共見事な心からの笑顔である。

「呼べてからすぐに準備とかで構ってやれなんだ、思いっきり馬鹿騒ぎするぞ!!」

「そういえば師父よ、前にあのアバズレめが召喚されようとしたそうだが」

「ギル、エルキドゥ……これを見ろ」

二人がレジェンドの持つ専用ウルフォンの画面を見せると――タイガに呼ばれたもののレジェンドによって日本地獄送りされるイシュタルがしっかり記録されていた。

「ふふはははははは!!何だこれは！強制送還どころか地獄へ強制転移か！欲を出してこちらに来ようとしなければこんな目に合わなかったであろうに！あのたわけめ!!ふはははは!!腹が痛い！これから宴会だというのに会場到着前に笑い死ぬ!!」

「今度イシュタルに会ったら僕もやろうかな。地獄を楽しみなって」

「しかもあの後ちゃんとエレちー来たし。いや姉妹でマトモさ全ッ然違うわホント」

「フォウ（だってねぇ……タカピーなんちゃってお嬢様もどきと、冥界で一人孤独でも頑張る女神じゃ違い過ぎるもんね）」

会場ではエレシュキガルが「へくちっ」と可愛らしいくしゃみをしているが、そんなことは露知らず彼らの会話は弾んでいく。

「そういやギルにエルキドゥ、お前達と一緒に来たのは何処だ？」

「うむ、さっさとそちらも紹介を済ませてしまうとするか。よし、藤丸

r「マーリン!?」ええい！我が話しているところに無理矢理入ってくるどこぞの魔術師ボイスのセイバーめ！貴様は少し節度というものを覚えよ！……マーリンだと？」
「ほら、私のことだよ究極英雄王。マイロードの召喚サーヴァント第一号、マーリン」
「ああ、そうであったな。貴様とあのグランドトラブルメーカーである奴は同じ名前なのだ、反応してしまうのを許せ」
「レディ・アヴァロンとかプロトマーリンとか色々呼び方あるし、俺はプーリンって呼んでるぞ」
「そっちのが何か可愛いね」
「やったよマイロード！究極英雄王の無二の友に認められた！」
「フォウフォウ、キュー（何か並行世界のプーリンはマジでグランドクソ野郎よりグランドクソ女郎してそうだけど、このプーリンってガチ乙女なんだよね）」

マーリン♂ボイスのセイバーのことなどマッハで忘れるレジェンド直接関係組。彼は泣いていい。

「私には何かないの究極英雄王!?」
「キャスターかアヴァロンかどちらかに絞れ。もはや貴様のテンションであればどちらの姿でも扱いは変わらぬだろうよ」
「辛辣ゥ！そういうとこだぞギルガメェ!!」
「合わせ単語に使うならまだしも名前を呼ぶときにその区切りを使うでないわバカトリアめ！」
「うわーん！レジェンドー！ギルガメにバカトリアって言われたァー！」
「何ィ!?おのれェェェ！師父を頼るなど卑怯にも程があろう！」

このままでは収まりが着かないだろう事態にマスター候補生＆留学生＆サーヴァントはどうすべきか悩んでいる……と、そこで動いたのが何処かの世界線ではヤベーやつより遥かにヤベーやつと化した

が本作だと（たぶん）ちゃんとしてるだろう我らがヒロイン藤丸立香ちゃんだ！

「あの～……」

「ぐぬぅぅぅぅ!!む、そうであったな。我とあろうものがつい爆熱してしまったわ」

（爆熱!?確かに右手が真っ赤に燃えている！）

「早いとこ紹介したほうがいいね。尺の問題もあるし」

「「「「尺!?」」」」

「ふはははは!!自重など座に置いてきた如き発言だぞ友よ！しかし事実であることに間違いはないな！前置きはここまでというか我らの空気に飲まれ、他の連中が置き去りにされそうだから話題変更するぞ師父！」

「はいよー。どんとこい」

（（（（軽っ!?））））

既に飲まれつつあることを気にせず、ギルガメッシュは連れてきた面々をざっと紹介する。

まず留学生組。藤丸立香を筆頭に、キリシュタリア・ヴォーダイム、デイビット・ゼム・ヴォイド、スカンジナビア・ペペロンチーノ、カドック・ゼムルプスにオフェリア・ファムルソローネ、芥ヒナコ。何か一人いない気がするのは気の所為だ。

次にマスター候補生、これは勇治の知り合いだという沙条綾香のみ。どうやら幼馴染みとのこと。これを聞いたレジェンドがギルガメッシュと一緒に愉悦案件だと顔を見合わせていた。

最後に彼らのサーヴァント。どこかで見たことのあるような風貌の千子村正、レジェンドを見るなり急いで頭を下げたカイニス、皇女のアナスタシア・ニコラエヴナ・ロマノヴァ、闘志全開のアシュヴァッターマン、粉砕玉砕大喝采とか言いそうなシグルド、締めに仮面付きの蘭陵王、以上が留学生組のサーヴァント。デイビットに限りまだ召喚していないのだが、『ゲームのキャラは英霊に含まれるのだろうか』

などと考えていて一向に決まらないらしい。
　そして、沙条綾香のサーヴァントはまさかのアーサー・ペンドラゴン……と、ついてきたギルガメッシュ。双方『プロトタイプ』なるカテゴリらしく、プーリンと似たようなものだという。

「オーケー、なんとなく覚えた」
「なんとなくなのかよ……」
「少なくとも貴様は割と覚えられやすい部類だろうよ。あの贋作者はどんな顔をするのやら。そらバカトリア、『そういうとこだぞ村正ァ！』と言ってやるがいい」
「そういうとこだぞギルガメェ！」
「我ではないわ！む、そういえば旧型の我もいたな」
「誰が旧型か！究極などと尊大極まりない二つ名を自称しおって！」
「究極なのだから極まって当然だたわけ！ふはははは！やはり旧型よな！さっさと頭の中をアップデートせよと言うのだ！」

　ギルガメッシュ（ＵＲ）とプロトギルの口論対決はどうやらクラス・ウルティメイトの方に分があるようだ。無駄にボキャブラリーがあるというか、最古に生きたとは思えないほど現代の横文字を使いこなしている。

「しかしまた個性的なメンツだこと。ま、これぐらいじゃないとウルトラ騎空団じゃ埋もれるからな。人間だけでもヒューマン、ドラフ、エルーン、ハーヴィン。さらに悪魔や天使、堕天使に妖怪。ウルトラマンは元より子丑寅卯辰巳午未申酉戌亥と――」
「「「「いや何なのその多種族文化!?」」」」
「実に楽しそうなところじゃないか！」
「よし、目指せ友達百人！」

　何かキリシュタリアと立香は期待に満ち溢れていた。なんともメンタル強い二人である。

ただ、レジェンドはある一人を見ながら思考を張り巡らせていた。

（しかし沙条綾香、ねえ……いつだったか何処かで沙条愛歌って奴が『王子様云々だからその力を頂戴』とか言ってきたのを返り討ちにして根源との接続を強制永久切断、全能を使用不可にしてやったっけ。あれの縁者じゃなかろうな）

どうやらレジェンドの力を奪おうとした不届きかつ不敬な輩がいたらしい。ちなみにその後、フォウのドフォーウシュートで更にお仕置きされたそうな。全能頼りだった少女はとんでもない挫折と絶望を経験し、ビースト反省室に引きこもり中だとか。後にソワカソワカもアブソリュートレジェンドを顔面に叩き込まれて放り込まれた。それを話したら何故か勇治に感謝されたが。

まあ、それはさておき。

案内された場所はご存知ウルティメイ島にあるレジェンドの別荘。他の施設に比べて圧倒的に大きく、圧倒的に輝きまくっている。顎が外れんばかりに驚愕している面々を余所に、エルキドゥが何かを思い出して袖の中をごそごそとすると一つのボールを取り出した。

「レジェンド。はい、これ」

「ん？」

「早く出してあげて。ほら、あの子この中あまり好きじゃないみたいだし」

「おお！態々惑星レジェンドまで行ってくれたのか！」

「我が興味を持ったから寄ったまでよ。まとめ役とやらは後継ぎしてあるらしいぞ。我には何を言っているか分からぬがな！ふはははは！」

多分訳したのはエルキドゥだろう。ギルガメッシュの発言で全てに納得したレジェンドはそのボールを受け取り、すぐさまそれを投げると中から光が飛び出たかと思えば一瞬で形を変え、黄色い毛並みと

つぶらな瞳の愛らしい生き物になる。

「ぴかちゅ！」

「フォー!?（ピカチュウ先輩!?ピカチュウ先輩じゃないですかー!?）」

そう、レジェンドのベストパートナーポケモンにしてフォウに各種技の仕上げを教授した先輩もしくは師匠とも言うべき存在、ピカチュウ。ウルトラ騎空団に合流するため、彼らと共にやってきたのだ。

「おーおー久しぶりだなー！毛並み、目の感じ、電気袋……よしよし、調子は良好。元気そうで何よりだぞー」

「ぴ～……」

「わあ！何その子可愛い！触っていいですか!?」

立香は即座に反応、レジェンドは「ピカチュウが嫌がらなければ」と条件付きで許可し、ピカチュウもそれに応えたので遠慮なく撫でる。

「おおぅすべすべ……！そしてもちぷになこの感触……！」

「ファー……（ボクのもふもふとは違う、触って初めて分かる感触はハートをガッチリキャッチ……！さすが先輩）」

満足した立香は御礼を言いつつピカチュウをレジェンドに返すと、ピカチュウは肩に乗りフォウはレジェンドの頭上に戻る。

「ピッカァ（ありがとね、フォウくん）」

「フォウ！（いえいえ！）」

仲が良さそうで何より。

「よし！ではいくぞ！メソポタミア最強チームの凱旋である！」

「ギルとエルキドゥには説明してあるが色々ぶっ飛んでるからな。気

を強く持てよ、魂抜けるかもしれん」

思いきり物騒なことを言われるが、そもそも眼前のレジェンドが（究極）英雄王・神造兵器・花の魔術師という大御所を従えている時点である程度予想出来ている。

だが、実際は予想の遥か上を行った。

……サーヴァントより、以前からいた団員が。

☆

――留学生の一人である芥ヒナコ。彼女の正体は虞美人という、英霊に近い精霊とでも言うような存在だ。

彼女は先のことから色々あって人間嫌い……なのは立香らのおかげで大分緩和したのだが、どうやら境遇によるプライドは高いままらしい。しかし、それもレジェンドの規格外（の一端にすぎない）を見せつけられて徐々に崩れつつある。

（いきなり英雄王が高笑いしながら迎えに来たのは度肝を抜かれたし、まさか他にもあんなの二人を連れてるとは思ってなかったけど、さすがに他のまでああだってことはないでしょ）

そして――

「ふはははは！愉しんでいるか皆の者！究極英雄王ギルガメッシュ！友と師父、魔術師に守護者と獣二匹を連れて凱旋よ！主役集結で更に盛り上がるがよいわ！ふはははは!!」

会場に到着するなり堂々と言い放つギルガメッシュを余所に、ヒナコだけでなく殆どの者は絶句する。理由は様々だが、やはりそうそうたる面々だった……こともそうだが一番はその光景である。

「そう！アルクちゃんもモルガン陛下も御上手でございますよ！ダ・ヴィンチちゃんはもう少し！」
「やったー！沙耶、プロデューサーに褒められた！」
「これでエキストラ出演は完璧ですね」
「私は頭脳労働派だから二人ほど簡単にはいかないよ」

るりふぃすさやぴーの新曲『すーぱー☆あふぇくしょん』の振り付けをゼットから学んでいるアルク、モルガン、ダ・ヴィンチちゃん。

「ソロモン式ドルオタ魔術の真髄！分身サイリウム乱れ振りを見せてやるぅ！」
「ならば私は魔王式魔力活用法！サイリウム限界突破発光を披露しようじゃないか！」

ソロモンの姿で分身しサイリウムを振るロマニと魔力を使ってまでサイリウムの輝きを増加させるサーゼクス。

「やはりこの騎空団には素晴らしい肉の持ち主が沢山おりますな！この褌というのも実に素晴らしい！」
「そうだろう！分かってくれて何よりだレオニダス殿！」

ジン、オイゲン、ソリッズの三羽烏に加え、カミナやキタン、更にはロージェノムにマスターのタイタスや杏寿郎と共に褌姿で腕組み仁王立ちしつつポージングするレオニダス。

「すみませんお代わりお願いします同じ量で!!」
「嘘だろオイ!?」
「うぅ……僕は一杯で限界だよぅ……」
『当たり前だあの腹ペコ王の腹がおかしいんだ張り合うな!!』

目を輝かせながら『カツ丼戦士の頂盛り』の二杯目に突入しようとしてるセイバーアルトリア、それに驚く一誠と一杯でダウンしたメリュジーヌ、ツッコミを入れるドライグ。

他にも各所で珍妙な光景が繰り広げられており、開いた口が塞がらないとは正にこのことと言わんばかりの立香達。キリシュタリアらも覚悟を決めていたとはいえ、あまりに予想外過ぎて何が何やら混乱している。

「ふはははは！相変わらずカオスではないか！よかろう！ならば今こそアレをやるしかあるまい！」

「……！ギル、まさかアレをやるのかい!?やっちゃうのかい!?」

「当然よ！この場で我らに視線を集めるにはアレが最適解だ！師父との夢のWバージョンは又の機会に取っておくがな！」

エルキドゥが驚きながらも笑い、レジェンドはWバージョンという発言で何をやるか想像出来てしまったので、アーシアやオーフィスなど一部の者に暫く目を塞ぐよう言って回る。

そして――

「おーし、準備オッケー。ギル、ド派手にいくがいい！」

「うむ！然らばこの場にいる者共よ！刮目してみるがいい!!

A（英）・U（雄）・O（王）――」

――ここで感の鋭い者は気が付いた。敵意や殺意などは皆無といえど、ギルガメッシュが何やらとんでもないことをやろうとしていると。

たが、もう遅い。

「――キャスト・オフ!!」

弾ける鎧（というか元々上半身裸だが）とハジけた究極英雄王。グリッターティガの輝きにも並ぶ、黄金に輝く股間の乖離剣。

「「「「ぎゃあああああ!?」」」」

まあ、当然こうなる。老若男女関係なく響く大絶叫のハーモニー。レジェンドとエルキドゥは二人してポテチを食いながら傍観。オフェリアとヒナコ、綾香は顔を真っ赤にして失神し、ペペロンチーノやカドックも混乱。

何故か立香は「ほほう」とガン見して村正に頭を引っ叩かれ、キリシュタリアとデイビットなど『ＷＤＭ（ヴォーダイム）キャストオフ』『ＳＶＤ（ゼム・ヴォイド）キャストオフ』を披露しなければなどと考えて脱ぎ始めていた。こいつらも結構大概である。

「ふはははは！・漸くこちらに気を向けたか！・しかしこの最高水準のダイヤにも勝る我が裸体を披露すればこうなるは必然よな！・ふはははは！・此度は無礼講、遠慮せずその眼に焼き付けるが良い！・存分に拝謁することを許す！・」

「なあエルキドゥ、ギルの股間の乖離剣昔より輝いてないか？・」

「あれだよ、クラス・ウルティメイトになったからあっちの輝きもバージョンアップしたんだと思うよ」

「「「「おいそこの二人組ィィィィィ!!」」」」

いつの間にかサングラスを掛けているレジェンドとエルキドゥに総ツッコミが入るが、最高位光神と別名ウルクのカミソリは気にするわけもなし。

「さすがは最強最古の英雄王……！・デイビット！・ここは現代に生まれし者達の代表として私達もやるしかない！・」

「「「「!?」」」」

「こちらはいつでもキャストオフ出来る。あとはタイミングだけだ」
「「「「??!!」」」」

何言ってんだお前らはというツッコミをする間もなく、キャストオフしようとした二人はカイニスとカドックの脳天蹴りによってどうにか食い止められた。

「ふぅ……や、やるじゃねえかテメェ……！」
「そちらもさすがの反応速度だよ……！これ以上は僕らの品性が――」
「だってカドックがキャストオフするんだもの。ほら、早くしなさい。ゼムルプスキャストオフを見せる時よ」
「脱ぐわけ無いだろ!!何を言ってるんだ君は!?」

二人を止めても今度はアナスタシアによってカドック自身が脱がされそうになるという珍事件も発生。しかし忘れていないだろうか。まだギルガメッシュはキャストオフの真っ最中だということを。

「いいから服着ろギルガメェ！そういうとこだぞギルガメェェェ!!」
「ふはは、そう言うなバカトリア。貴様とて師父がキャストオフしたならば瞬きもせず直視していたであろう？」
「へう!?」
「「「「!!」」」」

レジェンドのキャストオフ、という衝撃発言に反応するレジェンドラバーズの面々。だが今眼前にあるのはギルガメッシュのキャストオフだ。何という誘導行為。

「うわあ、結構な人数反応したね。レジェンド大丈夫？一緒に寝てあげようか？」
「気持ちはありがたいがそうすると後が怖いのよ、この場合。強制

キャストオフされかねないからな」
「フォーウ（そこどうですかピカ先輩）」
「ピッカ（うん、あの目は肉食獣の目だね。カウンターされそうだけど）」

そんな二人と二匹の予想を超え、ここで新たな衝撃を巻き起こすはプーリンことプロトマーリン。

「ならここは私が一肌脱ごうじゃないか」
「「「「……へ？」」」」
「「「「何ッ!?」」」」
「ほう？ならば見せてみよプーリンとやら！」
「望むところさ！見ててねマイロード！」

しっかりアピールは忘れないが、あたふたする女性陣とガン見し始める殆どの男性陣（＋立香）。

「それではお立ち会い！Ｐ（プロトマーリン）・Ｍ・Ｎ――」

止めようとする女性陣と、ガッツポーズな男性陣。

「――水着開放（キャスト・オフ）！」
「「「「え？」」」」

確かに予想外、健全なフリフリ多数の水着姿にチェンジして日傘を装備したプーリン。やはりＴＰＯやＣＥＲＯを守ったことは評価せねばなるまい。

「チクショオオオオアアアアアア!!」
「何でだよぉぉぉっ!!」
「ぬもんちゅがーッ!!」

「「「「最後の誰だよ!?」」」」

男性陣の落胆ぶりは見ていていたたまれない……事はなく。継続されているギルガメッシュのキャストオフをどうすべきかの方が大事なので放置された。

……結局、それから三十分ほどキャストオフし続けたギルガメッシュが満足したことでゴールデンタイムは無事終了。それに連なってプーリンのレジェンドへのアピールタイムも終わった。

ついでにエルキドゥいわく尺的にも立香達の紹介は次回に持ち越しとなったのは言うまでもない。

――おまけ――

ちなみにクリプター最後の一人、ベリル・ガットだが……彼はとある世界にいた。

そこで――

「さて、ベリルさん。準備は良いですか？」

「あ……ああ。宜しくな、Ｄｒ．ジャッカル……」

「クス……そんなに怯えなくても大丈夫ですよ。今回は味方同士ですから。何もしてこなければ私も何もしませんよ。何も……ね」

(何でこんな固有結界とか平然とスパスパ斬る、神霊クラスでも太刀打ち出来なさそうなヤベーやつが俺の相方なんだよォォォォォ!!絶対俺を消しに掛かってるだろ!!絶対そうだろ!!)

かつてレジェンドが初代奪還屋（ゲットバッカーズ）の一人として活躍した世界にて、最強（最凶）最悪の運び屋、赤屍蔵人とコンビを組まされ仕事の真っ最中。

『いつ斬られているかも分からない』『いつ死んでいてもおかしくない』状況に置かれたベリル・ガットは、悪い意味で医者に縁があるのだろう。

「しかし……レジェンドさんは何時になったらこちらに来訪されるのでしょうか。彼に勝つという目標は彼がいなければどうにもならないというのに」

一方的に蹂躙された呪術王（ブードゥーキング）にとっては喜ばしい事なのでしょうが、と続けた赤屍だが、ベリルからしてみればまた何かヤバい名前が出てきて早くも泣きそうである。

（コイツが目標にしてるレジェンドってどんな化け物だよ!?つーか何だその呪術王（ブードゥーキング）って!?明らかに最高位の英霊にいそうなんだけど!!）

かくして、今日もまたベリルは恐怖と共に仕事へと向かう。その世界、並みのサーヴァントではまともな戦いにならないような連中ばかりだと彼が気付くのは、もう少し後のことである。

特別編・ギルガメシュ叙事詩新伝～それは、星を救う物語～其一

その日、バビロニア島とウルティメイ島は大きな盛り上がりを見せていた。というのもメソポタミア最強チーム＋αが大冒険を繰り広げた世界（特殊特異点）での話を彼らの記憶と魂から映像化し上映するという新たな試みの記念すべき第一回目であるからだ（主導・レジェンド＆束、法術協力・プーリン＆ダンブルドア、道具提供協力並びに企画発案・ギルガメッシュ）。

メンバーは御存知、レジェンドとギルガメッシュを筆頭にエルキドゥとプーリン、そしてゼットとガレスである。ここに今後はレジェンドが追加召喚した英霊が加わってくることになり、更に大所帯化すること間違いなし。

第一回は『魔晄エネルギー』正しくは『ライフストリーム』が巡る星を舞台とした、オーフィスも行きたかったというあの世界での話。それ以前にもＺＥＲＯなジパングでの話もあるが、そちらは現在編集中。もう少しで完成するらしい。案の定、立香とキリシュタリアは速攻で予約した。そんなことしなくてもウルトラ騎空団所属なのだから問題なく観れるのに。

「こういうのはね、特典も重要なんだよ！」

「見てくれ皆！特典の『ジパング旅立ちのすゝめ』つまり物語序盤を軽く知れる先行ガイドブックだ！凄いぞこれは！なにせメンバー全員のインタビューが掲載されているからね！レア物確実だよ！」

ババーン！と見せつける二人だったが、それよりもモルガンその他が体裁気にせず予約しに行った事の方がどうかと思う。

☆

「師父に束よ、出来の方は……フッ、愚問だな」
「やっほーギルくん！いやー、ダンブー校長共々協力したことで一足先に観れたけどすんごい出来！ちゃんと高笑いとかバビッてるとことか格好良く編集したよ！」
「ウルク国民を中心に映像化希望の声も大きかったからな。あれだ、お前が黄金のラグナロクに乗って駆けつけるシーンとか編集した映像で見るとマジ盛り上がるから」
「であろう、であろう！……しかしあそこで我と師父がスノーボード代わりにされ、エルキドゥとゼットに乗られるとは誰が思うだろうか……」
「あの時はプーリンとガレスだけ平和だったよな……」

何故か遠い目をしている二人だが、束はそのシーンを思い出して笑いを堪えている。しかも相当良く滑ったらしく一気にゴール地点まで到着したとか何とか。
バビロニア島とウルティメイ島、さらには惑星レジェンドやネオ・アクシズ、そして月王国も同時上映されるとあってあちこちお祭り騒ぎなので、それを見た彼らのリアクションにも期待しよう。
カテゴリは『ギルガメシュ叙事詩新伝』シリーズ。そこはレジェンドじゃないのかと思うだろうが基本的にレジェンドは一歩引いて見守りつつ、時に大きな見せ場を一人で掻っ攫う活躍をする師匠系作中ダントツ最強キャラポジである。
よってガチでウルトラマンレジェンドとして活躍しない限りレジェンドの名前がタイトル名やカテゴリ名に入ることは稀なのだ。
いよいよ、上映開始。ネオ・アクシズでも生前における重圧などから解放されてカジュアルな私服になったハマーンやガトー、二人のマスターであるデイビッドを始め、ネオ・アクシズの機動兵器開発部に出向中の八雲燕やアポロンゼスト、そしてまさかのアムロやニール（最初の二人は驚いたものの本音で語り合い無事に和解。その際、アムロとハマーンはとりあえずシャアを共闘フルボッコすることにした。哀れシャア）も同席させてもらっている。

――では、各員の反応を交えつつ進めていくとしよう。

☆

――よりによって六人の内、レジェンドとギルガメッシュ、ゼットはセブンスヘブンの前に犬神家の一族状態で転移。もうこの時点で出落ちであった。

『何故に放ったらかしなのだ友よ！ああいや、お前はそうであったな。そういう性格だった』
『えぇ～助けようとしたよ？十秒くらい』
『……それからは？』
『プーリンやガレスとこの店で飲み物貰って飲んでた』

「スラム街っつっても街中であんな格好したのかよ……」
「喧しいわ狗！我らとて好きであんな格好になるわけがなかろう！」
「つーかお前さんはそのナリで終わりまでいったのか？」
「そうでございますよ？」
「……いや、中身の割にこんな外見の儂が言うのもアレだけどな。ちったあ周りと自分の身なりを見比べようや」

――伍番魔晄炉攻略に何故か組み込まれるレジェンド一行。やたらマテリアやらポーションやらを買い込み、指パッチンで大量の金を出して精算するギルガメッシュに唖然とするクラウド一行。
突入組にゼットとガレスが参加、残る四人は退路確保。最後はやっぱりエアバスターが出てきたが、ギルガメッシュにバビられて即撃破。

『ふはははは!!バカめ！そんなポンコツで我の前に立つなどバカの

極み！紀元前からやり直すがいい!!』
『オイ、あいつ神羅なんかよりよっぽど危険な気がするぜ……』
『え？あれ普通だけど。まあ、あんなんにエアは抜かんわな。名前の一部が入ってるっぽいけど、あのポンコツ』
『抜いたら間違いなくミッドガルどころかスラム街も跡形もなく消し飛ぶもんね』
『『はあ!?』『ええっ!?』

「そんなエヌマさえ防ぐ私の対粛正防御！」
「強化解除」
「へう!?」
『回数全てぶち抜く我の光子力ビーム』
「……（ちーん）」←キャストリア撃沈

――紆余曲折後にレジェンド、ギルガメッシュ、クラウドが落下。クラウドは花畑に落ちるがレジェンドとギルガメッシュはやっぱり犬神家状態。エアリスとの出会いはとても珍妙なものになった。いや他の面子ともだけど。加えてタークス・レノとも初邂逅。とりあえず財と秘宝を連射しておく。

『え、何今のすごい！』
『ってやられてる側はそんな余裕はねえんだぞ、と!!』
『ち、あのオイゲンボイス中々にしぶといぞ』
『とはいえ三羽烏より根性は無さそうだがな』

「うっわあ容赦ねえ……」
「英雄王ですし」
「僕最強だし」

「二人は俺の財布に容赦ねえよな!?早えよカップラーメン食うスピードが!・もう何個目だよ!?」
「何言ってるんですかイッセー!・まだ四個目です!」
「僕なんてまだ三個目だよ!」
「二人合わせたら七個じゃねえか!!半ダース超えてんだけど!!」

――何かデート一回でクラウドがエアリスを家まで送ることになったのだが……。

『じゃ、俺らはここで』
『え!?一緒に来てくれないの!?』
『たわけ。我や師父ともデート一回で済ます気か?』
『それもそっかぁ……じゃあ花束一つずつ!』
『『割に合わんわ!』』

「じゃあギルは何だったら承諾したんだい?」
「バターケーキの一つでもあれば考えたがな」
「予想以上に良心的イ!?」
「ふはははは!究極英雄王たる我は礼儀さえしっかりしておれば寛大なのだ!」
「……ちなみにマイロードは?」
「風呂入りたかった。二回も犬神家状態になったんだぞ俺とギルは」
「こっちも納得のいく理由だった……!」
「どうでもいいですが私やオルタと声が似ていますね、彼女。新しい妹ですか?」
「アンタは!いちいち人を妹扱いすんのやめなさいっての!!ていうかむしろあっちのが年上だったらどうする気よ!?」
「たとえ相手が年上でもお姉ちゃんです!」
「ダメだこの聖女もう手遅れだ」

「そこは何とかしないと、でしょ!?」

――エアリスを家まで送り届け、こっそり抜け出した三人。しかし結果としてエアリスが追いかけてきた上に、馬車に乗ったティファやプーリン、ガレスを発見し……なし崩しにウォールマーケットへ。そこでゼットやエルキドゥと合流し――。

『俺にはわかる。ここには女装に必要な何かがあるんだ。いくぜ!』

(((何言ってんだこいつ)))

「いやもうホントに何だったんだアレ」

「師父よ、我らが知る必要などない。アレは我らとは違う変な次元で生きているモノよ」

「変な次元って……あ!レジェンドやギルガメは女装とかしなかったの?」

「アルトリア、お前……俺の体格見て言ってるなら『それはギャグで言っているのか』としかツッコめんぞ」

――とりあえずドン・コルネオの館に潜入するのはエアリスの他、色々あって完成したクラウドちゃんとエルキドゥちゃん。レジェンド、ギルガメッシュ、ゼットは忍者顔負けのスキルで侵入。

「「「「……負けた……」」」」

「そもそもエルキドゥと張り合う時点で負け確定としか思えんのだが」

「全くよな。我と師父が認めた美の造形の極地、その一つだぞ?張り合えるとすればそこの吸血鬼の小僧あたりであろう」

「なるほど。ギャスパーならば納得のローマ」
「そういや以前ウィッグとかで完全に女装させてみた時、リクを横に並べたらカップルにしか見えんかった。確かに納得」

――案の定、選ばれたのはエルキドゥ。が、むしろドン・コルネオ（の立場）的に大ハズレ。エルキドゥに縛られクラウド達に脅され、挙げ句レジェンドによって公開去勢。

『アーッ!!』
『『『『慈悲のかけらもない!?』』』』
『こいつにそんなもんかけるくらいならご飯に麻婆豆腐かけるわ』

「全くですね！」
「うむ、奴には麻婆を食べる資格すらない」
「何でマスターとダニ神父が言い切ってるんですか」

――涙で顔をぐちゃぐちゃにしながらもクラウド達を下水道に落とすドン・コルネオ。しかしやっぱりレジェンド達は普通に飛んで最後のお仕置きとばかりに後ろの穴へ適当な尖ったものをぶっ刺しておいた。
あと、アプスは例によって瞬殺。

「……いや、同郷に尻の穴ぶっ刺された奴がいてよ。なんつーか……他人事には思えねぇなって」
「うむ、さすが『ランサーが死んだ！』『この人でなし！』の鉄板ネタを持つだけあるな、狗」
「うるせぇよ！持ちたくて持ってんじゃねぇっての!!」

「心配するな、最近マーリンもそうなった」
「英霊召喚した時のトラウマを掘り起こさないで欲しいな!?」

――下水道、列車墓場を抜け7番街スラムに到着した一行は、プレートを落として7番街ごとアバランチを殲滅しようとする神羅カンパニーと対峙。レノを一方的にボコるもタイムアウト、かつマリンを任せたエアリスが捕まってしまう。
ついでにツォンの声が何かサーゼクスとかシエテに似てたお陰で変な空気になった。

『あれだな、あの声してるとなんか腹に一物持ってそうな感じがする』
『過去の自分が気に食わなそうではあるな』
『オイそこの腕組み仁王立ち二名!とっとと離れるぞ!』
『……声云々で言ったら、レジェンドの方はセフィロスそっくりなんだがな……』

「……などとマーリンボイスなチョコボヘッドが言っております」
「あ、何かあの人似てると思ったらアーサーに似てたんだ!」
「……綾香よ、つまりこちらのセイバーはチョコボヘッドだということだな?」
「いや何でそうなるんだ!?」
「ふはははは!早速変えてみよアーサー!存外似合うかもしれんぞ?」
「勘弁してくれダブル英雄王!」

――エアリスの母にマリンを託し、一行はウォールマーケットからワイヤーを登りミッドガル・神羅カンパニー本社へ乗り込む。尚、レジェンド、ゼット、エルキドゥはそれぞれプーリン、ガレス、ギルガ

メッシュを連れて堂々と空を飛んでいた。

『お前ら最初っからそうすりゃ良かったじゃねえか!?』
『たわけ！こういうのは雰囲気が大事なのだ！』
『ティファだったら抱えて運んでもいだだだやめろプーリン頬引っ張るな』
『マイロードは私を堪能してればいいんだよ！』
『そりゃプーリン柔らかいし良い匂いするけどな』
『……今の状態で痴話喧嘩はやめてくれ』

「レジェンド何言ってんのー!!」
「だからやめろアルトリア選定の杖で叩くな痛いっての」
「我が夫、私はお姫様抱っこを所望します」
「では私もおぶって貰おうか、我が伴侶よ」
「じゃあ、私はお風呂で背中流しっこしたいです！」
「「「「ルリアー!?」」」」
「うむ、修羅場よな」

――非常階段からこっそり派なクラウド、ティファ、バレットに対してレジェンド一行は堂々と正面突破。クラウド達がヒーヒー言いながら必至で登っている時に、レジェンド達はエレベーターで悠々と合流階へ。ハッキング妨害もしてたので特に問題もなく、リフレッシュフロアでのんびりしながら待っていた。

『ちょ……何で……!?』
『ようやく来たな。俺らにとってあんなショボすぎるシステムなんざ妨害になどなるものか』
『だったら……最初っからそうしろよ……！ってかこれちょっと前も同じやりとりしたよな……!?』

『少しはダイエットになっただろう？ふはは』

「「「「うん、あれは腹立つわ」」」」
「えー？そうかなぁ」
「機械関係で神羅がマイロードを超えようなんて烏滸がましいにも程があると思わないかい？」
「乗り物ならマスターがいますし！」
「ウルトラテクニックを見せてやるぜ！」

――何やかんやで神羅カンパニーの宝条を尾行する一行は、途中で『ジェノバ』と呼ばれるサンプルが収められたカプセルを目にする。

『何だこの首無しのバケモンは？』
『動いてる……生きてる……』
『首を刎ねられても生きている生命体は、実際のところお前達が見聞きしている以上に多い。大方コイツは頭の方が本体だったんだろうさ。何処にあるかは分からんがな』
『フン、こんなものに手を出すようになった時点でもはや狂人よ。真っ当な精神など残っておらぬであろう。一見まともに見えたとしても外面だけでしかあるまい』
『レジェンドとギルガメッシュ、冷静ね……』
『けどまあ、英雄王の言うように狂人なのは納得かな。これを残しておいてもろくな事にならない、絶対にね』

「「「「ガタガタガタガタ」」」」
「何人かものっそいビビってるんですが!?」
「だって、ねえ……」
「このあと起きる出来事を考えるとな」

「そこいらのホラー・サスペンスものよりショッキングであろう。その手のものが苦手な輩は席を外すが良い」

――何かエアリスと赤いわんこ、もといレッドXⅢを交配させてどうたらというヤバいことを考えてた宝条の股間へと例の如くレジェンドの蹴りがクリティカルヒット。エアリスとレッドXⅢを救出しつつ、エレベーターから出てきた他のヤバそうなサンプルモンスターを出会いざまエルキドゥが串刺しに。どっちも容赦ねえ。

『何だ、その身体は!?』
『うわ、コイツ股間クリティカルしてんのに興味だけで復活してきた。股間両手で押さえて内股だけど』
『むしろお前の身体が何なんだでございますね』
『私はゼットの喋り方も何なんだろうと思うの』
『『『『今更!?』』』』

「ぶっちゃけエアリスに口調をツッコまれたのはこの時が初めてでございました」
「それまで何とも思わなかったの彼女!?」
「いやそれより見た目にまず何か思わないか!?」
「メンタルつえーなこの娘」
「何だかんだ言っててもあっちのメンバーも大概だったよね」

――結局タークスのルードによって捕縛された……のはクラウド達だけでレジェンド達は脅されても「え、だから?」精神で大暴れ。ガチでタークスも手に負えない案件だと認識したところでギルガメッシュが「偶には捕虜の気分を味わうのもよいか」と言いながら手錠抜きなら従ってやろうと、相変わらず上から目線で言い放ちルードらは

九死に一生を得た。ちなみにそれでも手錠しようとしたやつはレジェンド必殺の股間ガチクラッシュにより撃珍、もとい撃沈。

『ギルが手錠すんなっつったろーが』
『いや……まずは俺達を解放してほしかったんだが』
『たわけ。言ったばかりであろう、捕虜の気分を味わうと』
『……マジでお前らの感性が理解出来ねえ……』
（本当なら捕虜なんかにしたらウルク国民どころか惑星レジェンド圏内全域を敵に回すことになるんだけどね）

「これはバレットとプーリンが正しい」
「問題は惑星レジェンドの民って、こんな程度の捕縛じゃレジェくんを捕まえておくなんてムリムリ！って思ってるところかな」
「だろうな。レジェンドとか英雄王とか絶対堂々と牢屋から出て来るもんコレ」
「わんこは出てるのににゃんこは出ないんですか……？」
「出るぞ、ケット・シー。だいぶ先だけどな」

――クラウドとティファ、バレットとレッドⅩⅢ、レジェンドとプーリン、ギルガメッシュとエルキドゥ、ゼットとガレスに分けられて独房へ入れられる一行。なお、エアリスだけ個室状態。

『二人っきりだし、監視カメラもないね』
『神羅の連中のことだから隠しカメラは……ないな』
『防音魔術を張っておこうか。我慢出来なくなったら遠慮しなくていいからね、マイロード』
『バカを言うな。ムードもへったくれもないこんな場所でそんなことやれん』
（え……？つまり――）

「「「「うあああああ!!」」」」
「吊り橋効果!?ずるい、プーリンずるい!!」
「仕方ないとはいえ、このようなことは……!」
「待ってください。それはレジェンド様とギルガメッシュ様が御一緒だったら――」
「椿姫!それは無礼になります!それ以上その方面の発言はお止めなさい!」
「そうなったらただデッキ構築してるだけだよな、俺ら」
「うむ。狭過ぎてデュエルがほぼ不可能なのでな」
((((あっれぇー!?普通!?))))

――セトラについてエアリスがクラウドとティファに話しているのをレジェンドヒアリスにて盗み聞きするレジェンド。結構シリアスな展開に。

『約束の地……か』
『アヴァロンみたいなものかい?』
『さあな。俺もざっくばらんにしか分からん。オーフィスならもっとよく知っていただろうが』
『帰ったら怒られるかな?拗ねられるかな?』
『ぷんすこーはほぼ確定だろうな。何にせよ、実力行使・強行突破して抜け出すのはいつでも出来る。今は少しでも寝て体力を回復させておけ』

「あ、なんかシリアスになってきた」
「お前ら……全編ギャグパートで進むと思ってるのか」
「我らがおらねば間違いなく悲劇が起こった場面も多かったのだぞ」

「まーギャグとしか思えない場面も多かったのでございますが」
「レジェンドとギルをスノーボード代わりにしたとかね」
「「「何それ!?」」」
「見てのお楽しみー」

――レジェンドは『あるもの』で様子がおかしいことに気付く。

『ん……マイロード……?』
『プーリン、杖を持って壁際にいろ。どうも外の様子がおかしい……血の匂いだ。それもかなりの量のな』
『……!私達を助けに、ではなさそうだね。クラウド達目当てというのも違う』

――何故か開いていたドアから外に出ると、ちょうど同じような状態だったクラウドと鉢合わせするレジェンド。

『レジェンド、無事だったか!』
『お互いにな。その様子だとお前も何かを察したか』
『ああ。まず何故かドアが開いているのを確認したんだ。俺達を始末する為に開けたわけではなく、かといって助ける為とも思えない』
『そもそも武器を奪わず独房にぶち込むこと自体、穴だらけだとは思うがな。何にせよ、他の連中も開放するぞ……ああなる前にな』

――レジェンドが指差す先には、血の海に横たわる神羅兵……既に息絶えていた。

「……どう見る、モリアーティ」
「ふむ……まだ何とも言えないが、神羅カンパニー所属者を標的とした可能性が濃厚だネ。個人的に独房のロックを解除した理由が気に

掛かるんだけど……相手がどんな人物か、そもそも人なのか分からないから現時点では大まかな予想しか出来ない。ただまあ、偶然とは思えないというのが私の見解だヨ」
「モ……モリアーティが真面目に考察してお!?」
「いやネロ嬢その言い草は酷くない?」
「しかし流石だな。オレは何か妙な感じがするとしか思わなかったが、モリアーティは深く読み取っていた。もう少しオレも状況観察を行うべきかもしれない」
「カルナさんの優しさでモリアーティ教授が感動に打ち震えていますわね。ソワカソワカ。マスターも私の身体を味わって下されば」
「アレを見たあとで何故にそっちへ持っていくのかお前は!?」

――全員の無事を確認し、ある場所まで行くと『ソレ』はその姿を消していた。

『ねえ、ここにあったのって……』
『ジェノバだな。どうやら動き出したらしい』
『はあ!?』
『サンプル用エレベーターを使って上に向かったようだが……』
『目的の一つはここからの脱出だろう』
『目的の一つ……『は』?』
『まだ憶測の域を出んのでな。確実ではないが……この惨状の原因がジェノバだとして、ここからあの独房の前の通路まで来て見張りを殺害する理由が分からん。加えて独房内に捕まっている俺達を見逃す点もだ。勝てる勝てないはともかく、一部屋二人……エアリスに至っては一人だったのに誰も傷付けさえせず立ち去るのは何故か。疑問は山積みだが今はまず上を目指すぞ』

「うぅ……何か怖くなってきました……」

「ルリア、お化けとか駄目だもんね」
「つーかあのジェノバっての、マジであんなんで動けたのかよ……気味悪過ぎだろ」
「……そもそもあれの頭は何処に行ったんだ？」
「それはもう少し後でな」

――社長室に入ると、プレジデント神羅が刀に突き刺され死亡していた。物陰に隠れていたパルマーによって、殺害はセフィロスが行なったことだと判明する。

『守る？いいやつ？違う！セフィロスは――』
『――あの後、俺がニブルヘイムを離れてから何かあったみたいだな。ザンガンの奴が彼処にいたのも神羅兵がやたら多かったのもそれが原因か。ラディオル群島で見た頃とは大分雰囲気が変わっていたとは思ったが、そもそもあれはあいつが子供の頃だったな』
『『『『!?』』』』
『待て、師父よ。そのセフィロス本人と会ったことがあるのか!?』
『初めは俺が野暮用でラディオル群島にいた時。あいつが少年ソルジャーだった頃と、それからちょいとばかし俺が傭兵モドキをしている頃に神羅に雇われて同行したニブルヘイムの件の二回だけだが』
（ニブルヘイムのことはともかく、セフィロスが少年ソルジャーだった頃を詳しく知っている……？）
『それにマイロード、これと同じ刀を振るってなかったかい？』
『ちょっと待って！それってつまり、レジェンドがプレジデント神羅を――』
『いや、単に映画撮影する時に良い得物ないか考えていたらパッと思い付いたんで同じ物を作っただけ。名付けて正宗・真打……いや、正宗・神打だな』
『『『『ここまで真面目にきて急にシリアスぶっ壊すなよ!?』』』』
『お前らが聞いてきたんだろーが!!』

「レジェンド、我レジェンドとセフィロスが面識あったの初耳」
「ま、常人の観点で言えば昔からあいつはぶっ飛んでたからな、戦闘力。俺から見たら成長後もまだまだだったが」
「あんなアホみたいに刀身が長い刀、レジェンド以外に使えるの継国兄弟だけじゃなかったんだな」
「鬼神刀も刀身長いもんね、アレ」
「対鬼用の太刀全般が刀身長いけど、そうじゃなくても刀身が長いのってあの正宗と鬼神刀ぐらいじゃない？」

――ここで、パルマーが逃げた方向にヘリが到着すると、プレジデント神羅の息子・ルーファウス神羅が現れる。パルマーを追いかけたことで対面する一行。そしてクラウド達が名乗っていき……。

『最高位光神にしてウルトラ騎空団団長』
『空の世界のウルク、引いてはバビロニア島を統べし究極英雄王よ！ふはははは!!』
『その親友で空のウルクの最終兵器～♪』
『マイロードだけの花のお姉さんさ☆』
『銀河遊撃隊隊員でアイドルチーム・るりふぃすさやぴーのプロデューサーだ！』
『円卓の騎士、第７席です！』
『……妙な組み合わせだが、騎空団団長とやらからは円卓の騎士以外よく分からん単語が多いな』

「「「「ですよねー」」」」
「何だとコラ」
「我や師父に対する挑戦状か？良い、受け取ってやろう」

「オイ誰だこのルーファウスとかいうのに同意した奴らはァァァ!?ヤベーやつの頂点を敵に回す発言だってよく考えりゃ分かんだろォォォ!!」
「ラーマさま、マスターが凄まじいツッコミ?とかいうものを……!」
「う、うむ!団長殿はマスターの師の一人と聞いたが、よもや団長殿はこれ以上に凄まじいのかと思わせる迫力があるな……!」
「いやラーマ殿にシータ殿、驚くべき箇所はそこではなくレジェンド閣下を敵に回すというところだと思うのだが」

――『本当の星の危機』というクラウドの発言に加え、『セフィロスが相手ならば強い味方が多いに越したことはない』というレジェンドの発言でバレットやギルガメッシュらは二人を残し神羅ビルの脱出を敢行。クラウドとレジェンドを待つというティファ、プーリンと別れてエレベーターに乗るもヘリガンナーやハンドレッドガンナーに強襲される。

『距離があるからこっちはバレット以外が……』
『フン、我らには関係無いな』
『ウルトラ戦士は光線技が基本でありますぞ!』
『うん、全然戦力ダウンになってないね』

※ヘリガンナーには銃弾じゃなくて無数の剣や槍等が飛んできた上、ハンドレッドガンナーはゼスティウム光線によって即座に爆散。

「「「「容赦ねえええええ!!」」」」
「久々にゼットがウルトラマンとして活躍した瞬間じゃねーのコレ」
「最近は敏腕プロデューサーとかエースパイロットとしてばかり目立ってたからな……いやまあ、どちらも悪いことではないんだが」
「エレベーターごと消し飛ばなかっただけマシよね。結局レジェンド

様がいてもいなくても結末は変わらないからアレだけど」
「リアスちゃんも結構言うよね……」

――ルーファウス、そして護衛のダークネイションと戦うクラウドとレジェンド。しかしレジェンドは早々にダークネイションを始末し、ウルトラ上手に焼けました～！状態に。ルーファウスはショットガンやコインを華麗に使い、まさかのクラウド相手に善戦。途中スライトショットでレジェンドまで狙ってしまった為、静観していたレジェンドが再び始動。レジェンドの刀技『界滅』（大幅手加減）により一撃で瀕死にされ、ルーファウス神羅離脱。

『今のは……』
『かつてセフィロスを黙らせた技だ。大分手加減したことで技全体が様変わりしたようだが、本気で撃てば今頃このビルと周辺は木っ端微塵に吹き飛んでいた』
『何でそんなものを俺や皆が脱出する前に撃ったんだ!?』
『だぁから大分手加減したって言ってるだろこのチョコボ野郎』
『チョッ……!?』

「ふはははははは!!まさか既にチョコボ呼ばわりしておったとは!!さすが師父、抜かりないわ!!ふはははははは!!」
「あのルーファウスとかいう奴……チッ、認めたくないが銃の使い方は一流だな」
「ポカニキ、グランドクソエイムだし……マスターの煉獄さんは銃が爆発する謎仕様だもんね……」
「いやホント何で爆発すんのアレ」
「うむ！俺にもさっぱり分からん!!」
「……うん、それより何で無事なのかの方が分かんないよ」

――ルーファウスとダークネイションを退けたクラウドとレジェンドはティファ、プーリンと合流。一方、一足先に一階に到着したギルガメッシュらは、脱出しようにも入口の外を既に包囲されていた。

『やっぱり、貴方達だけで逃げて。私がいけば――』

『ハッ、自己犠牲は立派だが連中がそれで我らを見逃す保証などあるまい。ここは強行突破するのみよ』

『でも！』

『あの程度ならどれだけ束になっても関係ないね。おおとり師範のがよっぽど恐ろしい』

『レオ大師匠、相手の残りＨＰ１００％分の割合ダメージを直撃させてくるようなもんですし』

『メリュジーヌが一発でやられてましたもんね……』

『……よく分からないが、お前達の知り合いがおかしい事だけは理解した』

「……エルキドゥにさえ恐れられるレオって一体……」

「拳が凶器とはよく言ったもんだぜ」

「なお、レジェンドは変身したレオとゼロ相手に人間態のまま手加減しつつ勝利したとか」

「ああ……ダイブハンガーにいた頃ね」

「おかあさん、見たことあるの？」

「うん、寝ぼけ眼が一瞬で覚醒しちゃったわ」

――いざ強行突破、というところでティファとプーリンがギルガメッシュらに合流し誘導する。

展示されていた軽トラとスポーツカーに、それぞれティファ・エアリス・バレット・レッドⅩⅢ、ゼット・プーリン・ガレスが乗り込み

起動。
ギルガメッシュとエルキドゥはどうするのかと思うと、二人共専用のD・ホイールをブレスレットから取り出してライド。直後にハーディ＝デイトナに乗ったクラウドと、ウルティメイト光神号に乗ったレジェンドも合流。
『全員準備出来てるな！』
『無論よ！さぁて総員、夜のハイウェイをハイスピードチェイスと洒落込もうではないか！行くぞ!!』
一階ではなく数階上からガラスをぶち破り、バイクと軽トラ、スポーツカーと3台のD・ホイールが夜のハイウェイへ豪快に飛び降りた。
「「「「うおおおお!?」」」」
「何じゃアレは!?儂もやりたかった！」
「つーかゼット、スポーツカーも運転出来たってか運転上手えなオイ!!」
「アレが噂の『イニシャルZ（ズィー）』か……」
「しかもクラウドがバスターソードをスタンバってるのに、D・ホイールに乗ったまま振り向かず財と秘宝を連射しまくる光神と英雄王……」
「あれは追跡してきたのが失敗だったな」
――無双状態でハイウェイの建設途中部分まで突っ走ってきた一行だったが、最後の最後で神羅カンパニーはモーターボールなる変形ロボを差し向けてきた。それだけなら人数と実力者の多さで一行に分があったものの、レジェンドやギルガメッシュの暴れっぷりと規格外っぷりに警戒した神羅カンパニーは試作型超火力機動兵器バス

ターガンナーをも投入。
　二体の猛攻はレジェンド達だけならまだしもエアリスを守りつつ戦うクラウド達が追い詰められ、場所が場所だけに乖離剣エアを抜けないギルガメッシュの事も考えたレジェンドは遂に自身の生み出した召喚獣、特別な『守護獣（ガーディアン）』の中でも更に特別な『貴種守護獣（ガーディアンロード）』の最上位に座する『原初守護獣（オリジンロード）』オリジナル・ゼファーを召喚し、ドライビングモードへと変化させる。

『な……何だありゃ!?』
『召喚獣……？でも、あれはマテリアの力で呼ばれた召喚獣じゃない』
『クラウドは何か知らないの!?』
『分からない……そもそも俺の知っている召喚獣は攻撃を放つために召喚されるだけで、しかも召喚時は此方側へ被害が出ないよう基本的に別の場所へ移動させられるから、ああやって変形し共に戦うなんて不可能なはずだ。ニブルヘイムの時は見ていないから持っていなかったのか、それともただ呼ばなかっただけなのか……』
『何にせよ、我々の理解の範疇を超えていることだけは確かだな』

「あれ、映画のやつだ！もしかして他の人達も……」
「映画で呼べてた連中は皆呼べるぞ。そのためにわざわざ創造（つくっ）したからな」
「え……それじゃあガイさんは勿論、店長も？」
「巨大ロボどころかファンタジーやスチームパンクにさえ対応した全次元チェーン丼物屋万能店長って何それ」
「……勇治は、呼んでなかったよね」
「代わりに撮影で使ったのと同じ高速小型飛空艇を貰った」
「「「「記念品のスケール違い過ぎだろ!?」」」」

――圧倒的実力差を見せつけつつ、二体の兵器を完膚なきまでに叩

き潰したレジェンドとオリジナル・ゼファー。決着と同時に夜明けとなり、朝日の光が一行を照らす。
　クラウド達がそれぞれの目的で旅立ちを決意し、ふとレジェンド達のこれからが気になったのか尋ねてくる。

『あんた達はどうするんだ？』
『無論諸国漫遊よ！』
『え!?一緒に来てくれないの!?』
『……またか』
『たわけ！今度は流されんぞ！我や師父の同行を花束一つずつという安価で買えると思うな！』
『へ？エアリスちゃん、超師匠と究極英雄王を花束だけで懐柔したんでございますか？』
『うん！』
『『されとらんわ!!』』

「……彼女、凄くない？」
「さすが私の新たな妹ですね！」
「ああ……そうか、この強引さが似てるんだ。エアリスとジャンヌ」
「ジョブ『古代種の花売り』持ってたの誰だっけ？」
「ダ・ヴィンチちゃん」
「「「「!?」」」」
（確か綾香も持ってたんだが……黙っておくか）

――結局、エアリスに同調したゼットやガレス、更にはエルキドゥのゴリ押しもあって渋々同行することになったレジェンド一行。

『『『いえーい♪』』』
『ええい謀ったなエルキドゥ！ゼットやガレス、そしてそこな花売り

娘だけでそんな強請りが出来るはずがない！』
『えーそんなことないよー』
『思いっきり棒読みではないか！』
『……あれ？今私達さり気なくバカにされた？』
『かもしれないであります』
『ですねー』
『二人もちょっとは怒ってよ！』

そんな彼らを見ながら、クラウドの横で眺めていたレジェンドは呟く。

『ふ……番人気取りの馬鹿共は、もはやこの世界には現れんか』
『番人……？』
『気にするな、独り言だ。さて、心の整理は済んだなお前達』
『おうよ！』
『マイロードの隣が私の居場所さ』
『さらばミッドガル、だね』
『フン、どれだけ大きくともミッドガルは所詮一つの街。世界は貴様らが考えている以上に広大よ。精々呑まれぬよう気を引き締めることだ』
『さすが冥界下りした英雄王は違うね』
『伊達に師父から仕置きの鉄槌を食らっていたわけではないからな！ふはははは!!』
『ギル、それ褒められることじゃない気がするよ？』
『俺も伊達にレオ大師匠の鉄拳を直撃していたわけではないんだぜ！』
『さっきの話を聞いた後じゃ、よくお前生きてたなとしか言えねえぞ……』

――これからが本当の旅の始まり。星を巡り、星を救うための長き旅路。その果てに彼らが手にするものは。

『まずはカームを目指すわけだが、距離的には約一日……しかも連戦激戦で皆疲労しているから身体がしんどいだろう。途中一晩は野宿で過ごすぞ』
『の……野宿……』
『さすがに女性もそこそこいるし、無理してでもカームまで急いだほうがいいんじゃないか？』
『……ああ！超師匠、野宿とか言いながらアレを出すんでございますね！』
『そういうことだ。というかいい加減、俺もひとっ風呂浴びて布団で寝たい』
『……？だったら尚更カームに――』

「わかったー」
「はい！私も分かっちゃいました！」
「初めて見たときは顎が外れそうになったわ」
「あぁ思い出した！団長と私が初めて会ったときのアレかぁ！」
「いやホント助かったわ、そうでなきゃ吹雪の中立ち往生でそのまま御臨終だったかも」

――しばらく歩き、日が沈みかけてきた頃レジェンド一行の大半が体力の限界に。そこでレジェンドは認識阻害の結界を張りつつ、空の世界のノース・ヴァストにて取り出した事もある特製大型キャンピングカーとログハウスのセットを出して例の如くドッキング。テントより遥かに快適な宿泊施設の完成である。

『『『『えええええ!?』』』』
『よーし、ちょい早めだが本日は休息に入りまーす。でなわけでさっさと中には入れ。履き物は脱いで、レッドXⅢとゼットは軽く足を拭

け。ついでにキャンピングカーとログハウスは中に入ってからも行き来出来るようくっついてるからな』
『今日の我は機嫌が良い。ということで女共はさっさと風呂に入るが良い。一番風呂は譲ってやろう』
『じゃあ俺はリビングのＴＶでレジェンド超師匠とセブン大大師匠の活躍記録ＤＶＤを観させてもらうでございますよ。『緑の恐怖』とか結構なホラーだし』
『……それ、エルキドゥのことか？』
『へえ……面白い冗談だね、クラウド。ゼットー、ウォールマーケット到着から列車墓場までを編集した『誕生！クラウドちゃん～いくぜ！蜜蜂の館！～』を上映させてー』
『ちょっ!?ま、待てよ！』
『……クラウド、蜜蜂の館って何……？』
『ティファ!?いや、それは……エアリス！』
『『俺にはわかる。ここには女装に必要な何かがあるんだ』だったっけ？レジェンド』
『そうそうそんな感じ』
『二人共ー!!』

クラウドの悲痛な叫びが響きつつ、キャンピングカーとログハウスから日が暮れる空へと視点が変わりながら、『ミッドガル編』は終了となる――。

☆

「ここ、まだすごく最初の方」
「「「「えええええ!?」」」」

見終わった後、間髪入れず発言したオーフィスに驚きと注目が集まった。

「あんだけ濃密な内容なのにまだ最序盤!?」
「それってホントなの!?」
「ん。だってチョコボも出てないし、あの世界の召喚獣も出てない。何より飛空艇ハイウインドに全く触れられてない」

オーフィスの言う通り、あの世界で関わる様々な要素が殆ど登場しておらず、旅の目的も漠然としたもので謎の一つだって解決していない。ついでに言えば、オーフィスの知る物語と違ってレジェンド達が参加したことにより早速変化が起きている。

「レジェンド、我はバスターガンナーなんて知らない。あれは何？」
「あれだ、オデュッセウスブラスティアのダウンスケール＋ダウングレード的なもん」
「それならあの火力も納得」
「それで分かるの!?」

そもそもバスターガンナーはどの本来の物語にも登場していない。強さ的に恐らくは中盤～終盤に出てくるボスクラス……あの時点のクラウド達が対抗出来るレベルではないだろう。
最初は若干ぷんすこーしながら見ていたオーフィスも最後のそれで一気に興味が出たのか、後日観直したいとか言い出した。

「さて、次はいよいよミッドガルを出て広大な世界へと踏み出した俺達のさらなる活躍なわけだが――」
「次回の放送は追って告知する！今しばらく待つが良い!!」
「すいません団長ー！」
「どうした魔術師ならぬジョブ・アルケミストな藤丸立香」
「せめて次回の見所を一つお願いしまーす！」

立香の可愛らしいお願いに、レジェンドは少し考えるとある瞬間を記憶から呼び起こした。

「ふむ……コスタ・デル・ソルにおけるギルのキャストオフだな」
「「「「……え？」」」」
「ふはははははは!!」

――こっちも最後の最後で地球破壊爆弾並の衝撃が炸裂し、相変わらずギルガメッシュの高笑いが響き渡るのだった。

――おまけ――

「……ところでアルトリア」
「モルガン、何？」
「我が夫や究極英雄王がマテリアを持っているのは当然として、何故お前やルリアがマテリア（しかもアルテマやバハムート零式）を持っているのです？」
「エルキドゥから貰った！」
「はい！エルキドゥさんが『育ててないから自分で育ててね』ってくれました！」
「「エルキドゥゥゥゥゥウ!?」」
「えへ♪」

惑星レジェンドでの休暇中、キャストリアがアルテマぶっ放したり、ルリアがバハムート零式を呼べたのは例によってエルキドゥが原因でしたとさ。
その主な被害者であるレジェンド・プーリン・ギルガメッシュの叫びは今日も虚しく空を裂く。

特別編・プロモーションビデオを作ろう！撮影篇

空の世界にて、皆が依頼に出ている間にオカ研の顧問として矢的がリアスから受け取った各部員達のレポートに目を通していた時――。

「丁度良かった。矢的教諭、少しいいだろうか？」
「ん？カドック君とアナスタシアさんか」
「ちゃんと私も呼んでくれるのね。皇女ポイントプラス１０よ」
「一体何のポイントだそれは。というか普通に君より歳上だからな？少しは敬えよ……人格的にも見習うべき人物なんだぞ」

相変わらずのアナスタシアに溜め息を吐くカドック。この二人が矢的を訪ねてきたことからそれは始まった。

「――なるほど。君達が在籍しているところへの、現状報告を含めた自分達の成長具合のＰＲか」
「ああ。こちらの世界の魔術師として、やはりサーヴァント召喚は外せない。それを踏まえた上で僕達が留学時からどれだけ成長出来たかを示さなければならないから、助言を貰いたいんだ。畑違いなのは分かっているんだが、まともに相談出来そうなのが限られてて……」

カドックからの頼み事――それは時計塔へ提出する資料制作のアドバイスだった。単純なレポートだけなら問題は無い。既に書き終えている。

しかし、どうやら彼らの担当講師であるロード・エルメロイＩＩ世がさらなる成果を要求されたらしく、申し訳無さそうに言ってきたらしい。紙の資料ではなく、映像記録のようなものが欲しいとのこと。

ぶっちゃけ、頼んできたのが他の人物ならカドックもここまで本気にはならない。かのロード・エルメロイⅡ世が数少ないカドックの（心労）理解者でもあるからだ。

「ただ、バカ正直に記録映像を送り付けても偏見で思考が凝り固まった連中が多い時計塔を納得させられるとも思えない。何だかんだ屁理屈を言って否定してくるだろうからな」
「それはまた……結構難しいな」

そうなんだ、とカドックは溜め息を吐く。何せエルメロイのようなタイプが希少で、それ故に彼のところへ問題児が多く配属されたりするぐらいである。ちなみに彼の清涼剤は純真な弟子の存在だとか。

「キリシュタリアは惑星轟を本気で放とうとか言い出すし、ヒナコは我関せず、オフェリアはるりふぃすさやぴーと一緒にライブ……ペペとデイビッドは割と真剣に考えてくれているんだが、立香なんてマスターとサーヴァント総出で『ＷＡになっておどろう』をやろうなんて言い出すし」
「立香のはサーヴァントやマスターによってはかなりシュールな絵面になるわね」
「全くだよ……それはむしろ僕達留学生組よりオカルト研究部のサーヴァントの方がノリノリでやりそうだっていうのに。信長とか沖田とか」
「ああ、確かに……」

そしてぐだくだになるのが目に見えている。ジャックやジャンヌとかも参加するだろうし、結果ジャックを溺愛しているカナエとかも参加して……と芋づる式に増えていくだろう……が、それのどこが成長具合の証明になるのやら。

「そういえば確か、基本サーヴァントはマスター一人につき一体で間違いなかったかな？」
「その認識で間違いはない、矢的教諭」
「その理論でいくとチーフやモルガン先代女王陛下は相当な特例と言

えるわけか。チーフ率いるウルトラ騎空団に参加し、モルガン陛下の御息女である沙耶女王の治める月王国へ留学している、という事実を考えれば指導者側は文句無し……」

しかも、レジェンドに至ってはかの最強最古の英雄王ギルガメッシュにその無二の友たる神造兵器エルキドゥ、花の魔術師マーリン（♀）と正しく錚々たる面子。

モルガンの方も、レオナルド・ダ・ヴィンチに始まりシャーロック・ホームズやキャプテン・ネモ（&ネモシリーズ）と有名所。

ついでにギルガメッシュ（とエルキドゥ）が本来のクラスではなくエクストラクラス、更に最上級でグランドクラス以上ともあれば矢的の言うように指導者側はこれとない逸材。時計塔にも有無を言わさず納得させられる。

……納得しなければ、時計塔へ財と秘宝が全方位から雨霰と降り注ぐだけだから。

「あのメンバーを敵に回すという愚行は時計塔もやらかさないとは思うが……」

「それだけじゃないわ。沙耶の呼び出した彼女も最高ランクと呼んで差し支えない存在よ」

アルクェイド・ブリュンスタッド――アーキタイプ・アース。星の触角。星の代弁者。彼女は言うなればダ・ガーンやウルトラマンガイア、アグルらと同質の存在。星の最高傑作と呼んでも間違いではない彼女を呼んだ沙耶も規格外。

「まあ、月王国は留学先としては相当な倍率で、要因は先代陛下が神代の天才魔術師、かつ月王国に英霊召喚システム・フェイトがあるフィニス・カルデアが存在することなんだが……」

「他には何処があるんだい？」

「目ぼしいところだと、北欧やオリュンポスあたりかな。前者はスカ

サハ＝スカディが、後者はゼウスが治めている。尤も、後者はうちの団長にボコボコにされたらしいけど」
「チーフだしなぁ……」
「前者は当初から理解があったからまだマシだ。最近はモルガン先代陛下と水着やら料理やらで対決してるって聞いたんだが……」
「そこですぐに『団長の取り合い』と出てこないようではまだまだね、カドック」

アナスタシアがそう言うが、カドックは口に出すと面倒なことになりかねないので、そのまま黙っていただけである。

「う～ん……やはり僕達だけではどうも手詰まりみたいだね」
「しかし、ラミアス艦長はそういった方面に疎いし、ウーノもどちらかといえば武芸家か商人。他にまともな意見が出せそうなのは……」

真っ先にその二人が挙がるのはその信頼故か、同族意識（苦労人）からか。

☆

――バビロニア島・ウルク――

「それで、結局のところ俺達を頼ったわけか」
「うむ、慧眼よな」

やはりここで頼るのは我らがチートラマン、レジェンド。実際、レジェンドはやることこそ色々ぶっ飛んではいるものの真剣さや努力ぶりが見られる者を無下に扱ったりはしないのだ。ただしイシュタルは除く。

「カドック、発表会？」

「まあ、似たようなものだよ」

最近一緒にいられなかった反動か、オーフィスがレジェンドの膝の上でカドックに尋ねる。彼女の表現も強ち間違いではなく、彼らの送る資料は時計塔全体に公開されるためオーフィスの言った『発表会』もある意味的を得ているというわけだ。

「そもそもそやつらが何を持って成果と認めるかが不明瞭だな。どうせ少しでも気に入らねば失格だの不合格だのと言ってくることは容易に想像がつく」

「魔術師って、そういうところが個人個人で大きく異なるんだよ。例えるなら相手を直接攻撃して攻めたてる魔術と、直接攻撃はしないけど大きく戦局を左右出来る魔術、どちらを有益とするのかとかね」

ギルガメッシュが下らなそうに吐き捨てると、レジェンドに自分考案の施設をおねだりすべく隣りに座っていたプーリンも続ける。

「で、どうしようか。もういっそ、そのロード・エルメロイだっけ？その人や見込みのある人物だけこっちに異動させて時計塔そのものを木っ端微塵にしちゃう？」

「「「「それはやり過ぎィィィィィ!!」」」」

ウルクのカミソリは伊達ではなく、そして過激だった。ツッコミを入れたレジェンド達であったが、実はレジェンドとギルガメッシュ、プーリンに限り同意しそうになったのは黙っておく。

「よく考えたら見もせず破棄されたりすることだって全く無いとは言えないんだよな」

レジェンドの発言でカドックも気付かされる。エルメロイはそんなことしないだろうが、他の者がどうするかは未知数。悩めば悩むほ

ど問題ばかり出てきて建設的意見が出ない中、ギルガメッシュがニヤリと笑う。

「ならばここは逆転の発送でいくぞ」

「逆転の……？」

「見ようとさえしない可能性があるならそれを潰す。即ち――」

ギルガメッシュは堂々と言い放った。

「見たいと思わせれば良いだけよ！これより我らプロデュースによる、ウルトラ騎空団所属のマスター＆サーヴァントのプロモーションビデオ『Ｆａｔｅ／Ｕｌｔｉｍａｔｅ　Ｏｒｄｅｒ』の制作開始といこうではないか!!ふはははは――!!」

――かくして、ウルトラ騎空団総出（協力・月王国）というアホみたいなスケールでプロモーションビデオの制作が急遽決定したのである。

☆

「そういうわけで『るりふぃすさやぴー』の新曲をそのＰＶに使うことも同時決定した」

「物凄い急でございますな!?まあ、形としては一先ず完成しているし、ライブでなければ問題ないでありんすよ」

「新曲の用意からレコーディング、それを踏まえた上でレッスンのスケジュール管理……実に有能ではないか。あのアバズレ邪神も此奴に育成させれば……いや、アレは土台からして無理であったな……」

レッスン中のるりふぃすさやぴーとゼットの元へ、レジェンドやギルガメッシュが訪ねてきたと思えばいきなりこの事を開帳。しかしそこはレジェンドと一体化しているゼット、もう慣れたものであっさ

り対応。これにはギルガメッシュもニッコリ。

「アバズレ邪神……エレちーさんの妹というイシュタルの事でございますかね」

「うむ。理解が早くてよい。ちなみに……」

「究極英雄王の考え通りほぼ無理であります。ぶっちゃけ、素材は良くても中身がプライドと欲だけで大半形成されてるような性格なのでレッスンによる更正は不可能でございますよ」

ゼットからもダメ出し食らったイシュタル。何故ここまでゼットが言い切るかというと、かくいう振り付けなどは例え自分が悪く言われようともルリア、オーフィス、沙耶が可愛く思われればいい、とゼット自らやってみて試行錯誤の末に完成させているからだ。

ハッキリ言って、ことアイドル絡みではレジェンドさえ上回るのではないかと思うような本腰の入れよう。

「まあ、それは今回置いといて」

荷物を右から左に動かすジェスチャーをするゼットと、相変わらずそれを真似するオーフィス。ほっこりさせてくれたところで改めて本題に入る。

「それで、ライブでなければとはどういうことだ？」

「いやそんな深刻な問題でなくてですね。単にこの曲はＰＶとかそういうので流してもらうとか、そんな感じで作ったから振り付けとか満足出来てな――」

「「御誂え向きではないか!!」」

レジェンドとギルガメッシュがハモった。

「ＰＶ前提だと!?ウルトラマンゼット、貴様どれだけ優秀なのだ！ふ

ははははは!!まさにタイムリーというやつよな!良い!実に良いぞ!!」
「良くやった、ゼット。お前がプロデューサーナンバーワンだ」
「えー……っと、とりあえず3曲あるんで皆さんが聴いてみて『これだ!』的なやつで。ただ、どれもオススメなんで俺からは何とも言えんですたい」
「ここにきて更に複数曲存在とは……そして極めつけは『どれもオススメ』と言い放つその気概よ。余程曲とその三人に自信があると見える。貶めているわけではないぞ?その逆だ。我らのＰＶ、慢心にならぬ程度の自信を持って送り出さねば納得がいかんからな。期待に胸をふくらませつつ試聴といこうではないか!ふはははは!!」

ギルガメッシュがヘッドホンを装着し、それに倣ってレジェンドもヘッドホンを着けて試聴開始。目を閉じて微動だにしない二人に若干不安になる三人だが、ゼットは失敗したとは思っていない。途中、シグルドを連れたオフェリアが訪問してきたが、黙って聴き入る二人は気にもとめていなかった。

――そして――

「……」
「レジェンドー、ギルー、どうだったー?」
「どきどき……!」

オーフィスが尋ね、ルリアも緊張気味、沙耶だけいつもの調子に戻ったらしい。いつの間にかアルクがくっついているが、それはそれだ。

二人の裁定や如何に――?

「「満!!点!!」」

完璧レベルにであった。喜ぶルリアと、それに釣られるオーフィス。沙耶はホッと胸を撫で下ろす。

「ギルはどうよ？この三つだと『逆光』がＰＶ向けな気がしないでもないが、個人的に『躍動』を使いたい気持ちもある」

「落ち着いて見せるのなら『色彩』一択であろうが、我らの活躍や威光を全面に押し出すならばやはりその二択になるか」

「……そういやＰＶ向けといえば以前収録して未公開のやつがあったっけ」

「「即刻聴かせよ!!」」

――再度試聴中――

「ぬあああああ!!また推し曲が増えたぞ!!どうするマジで!!」

「こうなればマスターとサーヴァントで別々に一つずつ、シメに一つで合計三つ作ってしまうのはどうだ師父よ!?」

「この『この惑星で、ただ一つだけ』を含めて四つからか……！しかしそうなると残る一曲の分も作りたくなる！……ハッ!?マスコット枠か!!」

「その手があったか！いや、そこは突き詰めてマスコット＋マスターやサーヴァントではない団員でゆくぞ！そうすれば最後の締め括りは遠慮なく全力でやれるというもの！ふはははは!!良い！ノッてきた！早速この４曲用に撮影といくぞ！」

レジェンドとギルガメッシュのやる気に火を点けたるりふぃすさやぴーの新曲でＰＶのテーマソングは決定。ついでに未発表曲含めてオフェリアやシグルドも聴かせてもらっていた。あと、このことを聞いたロマニとモルガンがちょっとむくれたのは言うに及ばず。

☆

○マスター組　監督・レジェンド
曲『この惑星で、ただ一つだけ』

「いいかお前ら！確かに英霊は凄い人物だらけだろうがマスターがそれに劣っているという訳ではない！マスターの無様な姿はそのまま召喚されたサーヴァントも無様なものとなる！その逆もまた然り！」
「えーと、つまり……？」
「なるほど！それぞれサーヴァントに相応しいマスターだって見せつければいいわけなんですね、団長！」
「その通りだ藤丸立香！そう、オカルト研究部だけでなく、お前達留学組・月王国組も空の世界にて『ジョブチェンジ』を会得し、サーヴァントと共に前線で戦える能力を手に入れた！まあ、元々戦えた奴もいるけど」

レジェンドの招集で集まったマスター組。カドックの相談を受けて行われたそれによって、今回の目的及び方法が伝えられ、すぐさま撮影準備に入る。

「ジョブチェンジ……確かに僕達が成長したと証明出来る明確な方法の一つだ」

己の持つ反骨精神を良い意味で向上心へと繋げたカドックはまさかの最上級クラスのジョブ『マナダイバー』を会得。留学組の中では最も早い。

「えええええ!?カドック何それ!?私、村正と合わせる為に侍ジョブ極めてやっと剣豪になったばかりなんだよ!?」
「そっちはエクストラの方だからまず方向性が違うだろ」
「しかし凄いな！私はまだエクストラのクラス1だ！ジョブは、そう！カイニスに合わせてドラムマスター!!」

「「「「合ってねえええええ!!」」」」

ねじり鉢巻き、法被、そして褌でバチを握りしめたキリシュタリア。何処からともなくトライデントが飛んできたが、さて誰のものやら。

なお、もう一人の静かなる問だ……天才は？

「ナイスファイト」

「「「「いやどちら様!?」」」」

「俺だ」

デイビット・ゼム・ヴォイド、彼はまさかのレスラー。先日召喚したハマーン・カーンとはまるで合わせる気がないのかと思いきや……。

「ハマーンは基本指揮官タイプだ。ならばいざというときの護衛が必要だろう」

（サーヴァントの方が護衛すべきじゃねーの？）

一誠の考えは至極当然である。護られっぱなしはどうかと思う、なら納得しなくもないが。立香とカドックはしっかり考えてジョブチェンジしたあたり、あの世界の魔術師は最初から有能なほど変なのだろうか？

「そういえば先生はジョブチェンジ……いらなかったわね」

沙耶は以前バーヴァン・シーと共にジョブチェンジしたウォーロック。魔女らしく、と姉がリファインしてくれたヒール高めのブーツがよく似合う。ちなみにモルガンもレジェンド同様にそのまま。二人共スペックがおかしいのだ。

「ところで、アーシア？」

「はい？」
「何でジャンヌと同じ衣装なのかしら……？」

リアスがアーシアに尋ねたように、今の彼女の服装はジャンヌ（第三再臨）と同じ。彼女程ではないが胸も十分あるし。

「あの……何か『お姉ちゃんとお揃いにしましょう！金髪！聖女！ここまできたらやらねばなりません！』と仰られて、あれよあれよとこんな感じに」
「カナエの暴走と似た感じなのね」
「私の暴走って何!?」

姉化が進行しつつあるジャンヌに不安を覚えつつ、こういう場ではすぐ帰りたそうにする勇治の様子を見ると――。

「何でまたこの格好（ジョブ・ソルジャークラスｌｓｔ）させられてるんだ……」

――バスターソード背負わされていた。似合っているから何も言わないが、ぶっちゃけ基本的に科学者スタイルな彼とは正反対のジョブだということを忘れてはいけない。ちなみに実行犯はレジェンドとエルキドゥ。

この二人によって綾香もジョブ『花売りの古代種』にされたことで軽く一悶着あったのだが……よりによってあのメソポタミア最強チーム（＋花の魔術師♀）は愉悦しただけであった。

「木場はあのレーティングゲームの時と同じ衣装なんだな」
「クー・フーリンさんと肩を並べるならこの方が都合良いからね」
「へー……ゼノヴィアが沖田さんと同じ衣装……」
「そういうイリナは……ナース服じゃないのか」
「違うわよ!?デカい注射器で戦えとか言う気!?お注射天使じゃないん

だから……先生に騎士らしく見繕ってもらったのよ」

様々なジョブや衣装が目につく中、タイガやゼットらウルトラマンは変わらぬ姿で準備中。カドックが近くにいたトライスクワッドに声を掛けてみる。

「君達はそのままなんだな」

「俺達は存在自体がジョブみたいなものだし、これだけいると被りとかもあるから今回はジョブチェンジ見送りだって」

「多様性アピールとしては申し分なく思うのだが」

「俺らはデフォルトの見た目である程度分かるしな。あとは動きで魅せればいいってことだよ」

一通り準備を終えたところで、彼らの撮影が開始される。なお、後に至極まともな各々の機動兵器に乗っての撮影が待っていることを彼らはまだ知らない。

☆

○サーヴァント組　監督・ギルガメッシュ

曲『逆光』

「さて貴様らに言っておく。此度の撮影の出来、我らのみの評価にあらず貴様らのマスターの評価にも直結する。無様を晒せばそれは貴様らと縁を結んだマスターをも貶めることになるということを常に頭に入れておけ」

「いつものようにぐだぐだ出来んぞ、シャキッとせい沖田」

「そのままノッブに返しますよ。ノッブはどういうわけかぐだぐだ結界を張るのが得意ですからね」

「何じゃと沖田ァ！そういうお主こそ撮影中いざというときにゴフゥッ！とかやりそうなんじゃが！」

「不可抗力ですぅー！沖田さん大真面目なんですぅー!!」
「――とまぁ、こうなるとマスターもこんな感じなんだなと思われるから気をつけてね♪」

エルキドゥによって失敗例にされてしまった信長と沖田。微笑ましい光景ではあるのだが。

「それでどうするのですか？模擬戦では代わり映えしないといいますか……」
「フッ、良い質問だセイバー。その通り、模擬戦ではいつもとやっていることが変わらんし宝具も使用制限がかかりかなり地味になる。そこで我や狗が活躍しているプラズマ怪獣のハンティングよ！サイズによる迫力！相手が相手だけに我らも躊躇う必要なく力を振るえ、かつ見栄えも抜群！さらにガネーも稼げ戦利品も手に入るという充実した方法である！ふはははは――!!」
「なら狙うのは大物だろうな!?」
「然り！まずは以前も口にしたグランドキングからよ！ウルトラ６兄弟を同時に相手取った奴と同種との戦い、さぞ見応えのあるものになるであろう！」

クー・フーリンやギルガメッシュ、エルキドゥ（とタイガから聞いていたエレシュキガル）はグランドキングがどんな存在なのか分かっているが、他のサーヴァントは何となくでしか理解していない。ついでに言うとプラズマ怪獣の場合はそのグランドキング、果ては某邪神よりも上の奴がゴロゴロいたりするので注意。

「グッ!?グググ、グランドキング!?ギルガメッシュ、本当に大丈夫なの!?タイガから聞いた話だととんでもない怪獣よ!?」
「案ずるなエレシュキガル。アレより今貴様の冥界にいる冥神獣の方が強力だ。恐るるに足らず！」
「そ、それならちょっとは安心なのだわ……」

クー・フーリンは内心「冥界にアレより強い奴が普通にいんのかよ……」と驚いている。他は「それって安心なのか」とか「そこを治めてるエレシュキガルってどんだけ凄いんだ」という声がちらほら。

「えー……私も戦うのかい？もっとこう、私の強みである技術的なとこを見せるのは？ホームズやネモ船長だってそうだろ？」

「私はバリツがあるからね。いやバリツが通じる相手かどうかの問題はあるが」

「僕は折角だから戦艦が使えたらと思ってるんだけど」

「選り好みが常々出来るわけではないということよ！ネモの希望に関しては後半やることになっている！それを期待し暫し堪えるがよい！」

ギルガメッシュの言葉で何やらやる気が出たネモ。ホームズは仕方ないと思っているが、ダ・ヴィンチちゃんは「もう先代陛下と一緒に団長さんへ夜這いかけちゃおうかな」とかヤバい思考になりつつある。またレジェンドの安息が脅かされそうだ。そもそもあるのか疑問だが。

「テーマソングがるりふぃすさやぴーの新曲だとぅ!?だとすればボクがやらねば誰がやる！」

「ド……ドクターが何時になくやる気に満ちています！」

「私もやるぞー！というわけで皆の出番取っちゃっても恨まないでね！沙耶のためでもあるから！」

ドルオタとあーぱー吸血姫が揃ってやる気を出しているが、魔術王と真祖が本気になったらこの面子だとギルガメッシュやロムルスぐらいしかどうにか出来ない気がする。

「ところで皆、一つ問題が出来たんだ」

「どうしました、プーリン殿」
「頭脳と肉で解決可能な案件ですかな!?」

小太郎とレオニダスがプーリンに聞くと、彼女は溜め息を吐きながら――。

「男の私がサーヴァントじゃないのにここにいるんだけど」
「話の途中だが私さ!!」

「何している貴様ァァァァァ!!貴様はバカトリアがメガホン取っているチームだろうが!・さっさと持ち場へ戻れたわけ!!」
「いやだってあっち数が本当に多いんだ。みんな大好き花のお兄さんである私が埋もれてしまうのはよくないだろう?」
「いや別に」
「ローマである」
「どうでもいい」
「頭の病気ですか?・仕方ありません。ドクター卯ノ花とドクター御門を呼んで診察、場合によっては開頭手術の必要がありますね」
「辛辣過ぎない!?あとロムルスに関してはどういう意味合いなのか誰か教えてくれないかな!?」

突然現れたマーリンに関して殆どが無関心、又は厳しい目を向けている。救いの神なヤプールやアーシアも居らずマーリン♂大ピンチ。いつものことだけど。

「あ」

「え？」

エルキドゥが何かに気付いて声を出し、マーリンが反応すると――。

「ピッカァァァ!!（こんなとこで何してんのー!!）」※ムーンサルトキック（メタルピカチュウｖｅｒ）
「マーリンニゲルナフォーウ!!（この欲深クソ野郎ー!!）」※ウルトラフォウくんキック（メタルフォウくんｖｅｒ）

「ぐはあああああ!!」
「「「「ダブルメタル!?」」」」
「うむ、我がウルクに作られた施設のアイテムを有効活用した見事な連携技よな」
「よく生きてるよね男の私」

気絶・痙攣してるマーリンをフォウが仕方なく引き摺って戻っていき、ピカチュウが「ごめんなさい」と言うかのように鳴きながらペコペコ頭を下げている。当然、ピカチュウやフォウは悪くないのでエルキドゥに撫でられながら労られ、二匹分のフルーツミックスを貰い撤収。

「あれに育てられたセイバーの苦労が分かるというもの……同時に師父に育てられたあやつの優秀さもな」
「フォウくんの待遇や扱いとかね」
「うちの夢魔がすみませんでした」

腹ペコ王アルトリア、主にマーリンの所為で苦労人。

「ところで究極英雄王、後半にと言ったけれど……」

「今回の場合、後半とは二つの意味を持つ。一つは我らの行うサーヴァント編の終盤、貴様のルナティックボーダーとハマーンのサダラーン改にて敵の大艦隊を蹂躙するシーンのことだ」

ここで驚愕の声が上がる。無論、その中にはネモの声もあったのだが、当事者の一人であるハマーン（ネオ・ジオン衣装）は別段問題無さそうなのも意外であった。

「おいおいおい、いくら何でも厳しいんじゃねぇのかい？英雄王さんよ」

「竜殺しの当方がワイバーン軍団を蹂躙するのとは勝手が違うように思えるが」

「フ……そうだな、普通ならばそう思うだろう村正にシグルド。しかし、それを可能とする手段がある！そう！宝具だ!!」

「宝具だぁ？ネモの奴の宝具はそこまでの……」

「いや、ネモ船長の方じゃない。可能性があるなら彼女の宝具だ！僕達はまだ彼女の宝具について何も聞かされていない！」

アーサー（プロトタイプ）、通称プーサーが気付く。宇宙世紀の英雄もしくは反英雄たるハマーンの宝具は普通の英霊に察することなど、現界し宇宙世紀のことを学ばなければほぼ不可能。

「御名答だ。私の宝具『再起せよ（リターンズ・オブ・ネオ・ジオン）、栄光あるジオンの兵よ』はグリプス戦役から第一次ネオ・ジオン抗争終結まで、私が治めていたアクシズ並びにネオ・ジオンの戦艦を含む機動兵器……グレミー派のものも合わせて全種多数召喚する対軍宝具なのでな」

「「「「はあ!?」」」」

「ふはははは!!驚くのも当然よな!火力は勿論の事、スケールがもはや段違いなのだ!我も見てみたが一人だけの軍隊(ワンマンアーミー)とは正にこの事かと思ったものよ!まるで宇宙戦争であったわ!!」

そう、ハマーンの宝具は自身が参加した大きな戦争、その時のアクシズとネオ・ジオン戦力全部を引っくるめて宝具化したというべき超戦力。クィン・マンサやゲーマルク、サイコガンダムＭｋ―Ⅱなどの大火力の機体やグワダンにサダラーンといった巨大戦艦まで無人操作かつ無数に出現させられるのだ。これもハマーンがアクシズの摂政に始まり、ネオ・ジオンのトップとなり、そしてかのジュドー・アーシタとの一騎打ちまで生存していたことに由来する。

「私はお前達のように身体的な戦闘力や神秘に優れているというわけではない。故に宝具の面で多少なりとも光らねばならん」

「いや、ニュータイプとかサイコフィールドも儂らにとっては宇宙級神秘なんじゃが?意識だけでビーム撃つ小型兵器を山程操るって何なのお主」

「個人的にＭＳの操縦技術が最高クラス、しかも艦隊指揮も出来るってどっちかだけでもお釣りが来ると思うんだ」

ノッブやロマニ(今はソロモン状態)にべた褒めされ、ハマーンも悪い気はしない。シャアが言ったなら「何を今更」と鼻で笑うだろうが。

「そういうわけでそちらは私達で問題はあるまい。逆にそれ以外の場合、私はキュベレイ抜きでは話にならん」

「謙遜の必要などなかろう。真のカリスマはいるだけで空気が変わるものよ。ふはは」

レジェンド達に続き、ギルガメッシュらもいよいよ撮影に入るのだった。

「そういえば主は？」
「彼女ならマスター側に入れといたよ。ほら、彼女も一応留学生という立場だし、虞美人としてこっちにいるのを公表するのは色々と面倒になるだろうから」
「そうでしたか。お気遣い感謝いたします、エルキドゥ殿」

頭を下げる蘭陵王にいやいや、と穏やかに返答したエルキドゥだったが――。

――呪血尸解嘆歌（エターナル・ラメント）オオオ！
――何でこっちにいるのに虞美人モードなんだお前はァァァ!!
――パイセン、こっちマスター！マスターサイドだよ！
――何のためにジョブチェンジしたんだ芥ヒナコ!!

「「……」」

敢えて言おう。マスターとしての彼女はポンコツ又はあーぱーであったと。

「……主が団長殿に御迷惑をお掛けして申し訳ございません」
「君も大変だね」
「相変わらずカドックはツッコミが似合うわ」

再度先程と同じ動作でやり取りをする蘭陵王とエルキドゥに、さりげなく会話に混ざるアナスタシア。今回のことは、主人がダメな分サーヴァントがまともな例として後々語り継がれたとかなんとか。

☆

○ウルトラ騎空団組　監督・キャストリア
曲『色彩』

「さて、私達の場合はマスコットも含めて非常に数が多く、全員が出演するのはまず不可能です。よって、留学先である月王国組は当然として、ウルトラ騎空団の重役を預かる者やウルトラマンの方々、並びに彼らと一定以上の関わりの深さの人物を優先して出演させることにします」
「「「「えー!!」」」」

不満の声が上がるが、アルトリア（アヴァロンモード）の案はこれでもかなり譲歩したものである。何せ空の世界出身者だけで百人を軽く超えるウルトラ騎空団、そこへレジェンド一家や神衛隊（サーガ含む）に宇宙警備隊や銀河遊撃隊、三大勢力関係者その他も加えると膨大な数に及ぶ。

「……ミオリネさん……」
「どうしたのスレッ……」

スレッたぬき、再び。

「「「「……」」」」
「私がこの格好である理由は何なんですかー!?」
「バトルシーンも撮るからです」
「むしろ身体能力を考えると私よりウルトラ騎空団に属してる動物達の方が凄そうなんですが!!」

例として、棒術使う猫とか魔法使う猫とか光線を撃つウルトラけものとかその師匠で合体技を単独発動出来る電気鼠とか。確かにスレッタの言う通りだ。何だここ。

「せめて……せめてパイロットスーツにして下さい……！」
「ま……まあ、スレッタ以上の武闘派の方々も大勢いるし」
「ああ。そちらは私達に任せておきなさい、ミオリネ・レンブラン」

バーゲストが自信満々に答えるが、その視線の先にいたのは空の世界のガウェイン。出演で一足早く抜擢された彼は、シエテを始めジークフリートやウーノらと綿密な打ち合わせの真っ最中。

「騎士は騎士で纏めるにしても、最終的な人数によってはバラけた方が印象に残るかもしれん」
「だよねぇ。十天衆は全員揃ってた方がアピールポイントになりそうなんだけど」
「単独活躍のシーンは短く、しかしインパクトを重視して――」
「何も戦闘シーンに限定しなくても良さそうだね。曲名のように様々な分野を幅広くやってみるのもいいだろう」

あのシエテも真面目に打ち合わせに参加。団長代理という立場な以上、下手を打てばウルトラ騎空団全体の面子に関わるとあっては本気にならざるを得ない。十天衆の大半は常日頃からそうあってほしいと願っているわけだが、今は置いておく。

「で、私らは別にいいけどさ。アレどうすんだよ」
「アレ？」

アルトリアが小首を傾げると、バーヴァン・シーは溜め息を吐きながらある方向を指さした。
そこには――。

「やーだー……イッセーいないしやる気でないー……あとよろしくー

……」

一応、武装はしているもののうつ伏せになって動こうとしないメリュジーヌ。ぶっちゃけティアマットのチキンぶりとは別のベクトルでダメドラゴンである。なお、オーフィスはアマリやルリアといった面々が構っているのでちゃんとやる気十分。

「……あれで妖精騎士最強だから気が抜けるよな」

そこへズルズルとマーリンを引き摺りながらフォウとピカチュウが戻ってきた。ここまで引き摺られたのでマーリンは既にボロ雑巾のようだ。

「フォーウ……フォウフォーウ……（疲れたー……コイツ無駄に重ーい……）」

「ぴかーちゅ……（きっとこれ欲望の重さだよ……）」

一仕事終えた二匹はぐったりしている。しかもピカチュウの意見はある意味ドンピシャ。

だが、世の中はそんな彼らを待ってくれない。

マーリンとは別の女好きが、よりによって彼らの組にいるのだから。

「やっぱりよ、水着シーンは不可欠だと思わねぇか？」

「それ言ったらオメェ……入浴シーンだろ？」

何か声どころか性格も似てる、アザゼルとソリッズ。ついでにそれを肯定してる何名か。組織のＰＶに何を求めてるんだこの連中は。

「フォウ……」

「あー、あんなの気にしなくていいからね☆」

くたくたのフォウを労るセラフォルーだが、今回のＰＶはウルトラ騎空団全体並びにその関係者及び各所の風評に関わってくる。ピカチュウ共々、今のご主人様であるレジェンドに恥をかかせてはならないと再び奮起したフォウ。

「ピッカ！（フォウくん、今こそ僕達との修行で手に入れたあの力を試す時だ！）」

「フォウ！（ハイ！ピカ先輩！いくぞグランドスケベの同類共！）」

「え？」

ピカチュウがフォウに何らかの指示を出したのは分かるが、何を言ったかまでは……と考えていると何かを察したしのぶが脱兎の如くその場から逃走。責任感の強いしのぶのこと、何の考えもなく逃げ出すとは思えない。

そして次の瞬間――。

「キョダイマックスフォーウ！」

真・ウルトラけもの降臨。なんとフォウくんキョダイマックス化。もふもふ度３割増しで大きさ２０ｍ以上になったフォウがそこにいた。

「「「「えええええ!?」」」」

「う～ん……あいたたた……さすがにやりすぎじゃないかなキャスパリー――」

目覚めたマーリンの眼前には、巨山の如く聳え立つキョダイマック

スフォウくん。既にその前足は大きく振り上げられている。

「ドフォーウ!?」

「ドスケベシスベシフォーウ！」

「「ぎゃあああああ!!」」

ズズゥゥゥン!!と地響きを上げ、大地ごと叩き潰されるアザゼルとソリッズ、ついでにマーリン。とりあえず当面の平穏は保たれた。

――おい落ち着け沙耶！

――貴女の出番はこれからです、行ってはなりません……！

――離して、先生にお母様。あのふわもふは味わわなければならない使命があるの……！

……何か何処その女王が有り得ないパワーを発揮しているようだが気にしてはいけない。そして逃げたはずのしのぶは予想外の光景に逃走先で気絶したらしく、パム治郎が自身を強化してやっとこさ運んできた。マスコット達超有能。

フォウの活躍で（マスコットに負けたくないと）メリュジーヌもやる気を出して復活。一先ず撮影は開始された。顧問に関しては矢的がいるのでさしたる問題でもなかったという。というか最初からアザゼルを顧問枠では出さない予定だったとか。

☆

○全員集合編　監督・レジェンド一家

曲『躍動』

「いよいよラスト！豪華大盤振る舞いだ！」

「マスターとサーヴァント、さらに団員関係者総出で行われる撮影よ！精々我や師父に負けぬよう存在感を出すが良いわ！ふはははは

!!」
「ねえ、後であの特大フォウくんモフらせてくれないかな？バターケーキ作ってあげるから」
「フォーウ！」
「あれってピカチュウも出来るんだ……」
「というかこの子が教えたみたいですけどね、アレ」

待ってましたと言わんばかりの大盛り上がり。
タイタスとレオニダス、復活したソリッズも含めた三羽烏が中心となったウルトラ騎空団筋肉隊。
一誠にタイガ、セイバーアルトリア、グランやキラとダイゴらに代表される主役組。
ジャグラーとエミヤを筆頭にマシュら主要スタッフ集結の蛇倉苑。
そして剣豪ジョブの立香を見てテンションマックスになった村正を始めとした留学生とそのサーヴァント達。
未だにジョブを解除させてもらえない勇治に肉食獣宜しく飛び付いていく光のコヤンスカヤとムジナ、何とか止めようとしてる玉藻の前ジョブなミオリネと花売りジョブの綾香。
結局オーズジョブにされて素顔が映らない……のはともかく何故か単独で永遠なタカクジャクコンドルのコンボを発現させてる流。
レオスを中心に狙われているが知ったことかとイチャつきを見せつけまくっているライとモニカのカップル。
キョダイマックスフォウくんをモフれなくて意気消沈してる沙耶を慰める月王国組。何かやけに陽気な神様もいたらしい。一体何ルカンなんだ……。
後学のためにと休暇を利用し単独でクルーガー・インダストリーを訪問してるアポロンゼストや基本的に別行動してる九極天を除き、出演した全員が和気藹々とした撮影となった。

「あとはこれを俺らで総確認・総編集してまずは身内に公開。問題無ければ複製して時計塔へ叩きつけてやるとしようか。原本？そりゃ

作った俺らのものだろう」
「ふ……問題児呼ばわりされていた奴らが我らの一員として多大な成果を示している、良い皮肉となろう。柔軟性なくば真に成功者とはなれぬということを、凝り固まった思想ごと映像によって粉砕してくれる！」

ふはははは―！と変わらぬ高笑いを上げるギルガメッシュと早速最後の仕上げを始めるレジェンド。
「楽しみに待て、後日！」と強く言われ、他の者は期待しつつその日を待つのだった。

――余談だが、アザゼルもマーリンも出演出来たのは４作合計で各七秒程度だったという。人数的に仕方ないが、レジェンドやギルガメッシュは出演したマスターｏｒサーヴァント編だけでそれ以上だとは言うまでもない。
それから……ウルトラけものと電気鼠の出演時間もアザゼルとマーリンを上回ったそうだ。

特別編・それぞれの日常を見てみよう～第一回

ウルトラ騎空団――種族国籍どころか次元時代を超えて多種多様な存在が生息……もとい所属している、空の世界に流星の如く現れた騎空団である。

その実力たるや凄まじく、かつて空の世界最強と呼ばれた十天衆が所属し、十賢者とやらも所属。

中でも団長たるレジェンドは、喧嘩売ってきた『ナビス』とかいう組織の首魁にトラウマを幾つも植え付けて挙げ句廃人寸前にしたとか、マフィアを一晩で二桁壊滅させたとか、幽世の軍勢が攻めて来たら変な幻覚見せた上にそれを幽世の全存在に伝染させ当面の侵攻を止めたとか、いたずらにちょっかいかけてきた創生の神をワンパンでブッ飛ばしたとか……何かもう色々ヤバかった。

他にも、

○「イヤァ！」と正拳突き一発で星晶獣を粉砕する道着の男

○料理から巨大ロボの操縦までこなす超万能店長

○『にゃんこ』なる謎の生物を飼い慣らして時折超スペックを発揮するメカクレ眼鏡っ娘

○何かいきなりパワーが上がって友人らしき数名と突撃してくる赤い奴（銀髪ロリっ娘付き）

○髪がとんでもなく逆立ったと思えば即死確定の一撃をブチ込んでくる銀髪イケメン

○ただでさえヤベー強さで巨大ロボに乗ると性格が変わる侍

○涼しい顔して言葉で追い詰めてくる美女（美少女吸血姫と美女剣士付き）

○普段は理知的なのに怒ると体格も声も変わって高笑い上げながら敵をフルボッコにする（一応）科学者

○常識人だけどジョブが非常識なネクスト火野映司

○イカサマスペックな眼鏡っ娘技術者かと思ったらアサシン能力もあったメカニック

○イケメンなのに奇妙な仮面つけてる謎の諜報任務大得意な器用万能マン
○恋人が絡むとスペック壊れる元王族（恋人は元領地持ち騎士）

――に始まり、最近では――

○カップラーメンを食いまくり、拗ねるとエクスカリバーする騎士王
○スペックの大半をアイドルのために惜しげもなく使うドルオタ魔術王
○師父たる団長と組んで愉悦しまくり無双しまくりな究極英雄王
○トウモロコシの天ぷらを食べながら相手に死を与えるヤヤウキ
○自称お姉ちゃんな姉を名乗る不審者
○摩天楼を駆け巡ってそうなアラフィフ
○ソワカソワカ
○「パールヴァティーが呼ばれたらレンチメイス叩き込みますよ、ええ」
○聖杯うどん
○マーリンシスベシフォウ
○君は完璧で究極の「ぴかちゅ」
○「ハングリーであれ。バカであれ」にゃー

とまあ、こんな感じでヤベーやつらが増えた。というか現在進行系で増え続けている。
後半が何か適当？　気にするな。
兎にも角にも滅茶苦茶な連中の集まりだが、今日はそんな彼らの普段の生活を覗いてみよう。
……ノアと違って私は最近全く出番がなくて暇だからな。これでも私の【エリア】では『ジジーがいればドーにかなる』とか言われてチヤホヤされているのだが……。
では、気を取り直していくとしようか。

☆

――元宇宙船・現戦艦ペガサスＡ――

「……」

「あらあら……この猫縛り、中々良い趣味ですね」

「……」

「まあ、極上だとこんな風に……」

「キアラ、お前……何故ここにいるかは別にいい、諦めた。だがな、その極上と同じ状態一歩手前な体勢は何なんだ!?」

――ブリッジにて、艦長たる勇治は自身のサーヴァントの一人である殺生院キアラに思いきしツッコんだ。理由は発言の通り『猫縛り極上』と同じ状態一歩手前……即ち縛られて宙釣りになっているからである。

ついでにスタイルが良いため、縛り具合的に理性がヤバい……のは常人であって、レジェンドに続く鉄壁理性（ただし性的な方面であって、日常方面では割と怒りやすい）な勇治にはあまり効果がないようだ。

「ソワカソワカ。マスターも実はアブノーマルな方がやる気になって下さるのではないかと思いまして」

ぷるんぷるん揺れる見事なモノより、全身が宙釣りでぷらんぷらん揺れてる事そのものが気になっていると言ってはいけない。

「……あ、何か頭に血が登って意識が……」

「お前時折とてつもなく馬鹿になるな!?」

さすがに寝覚めが悪いのでキアラを助けてやると今度は熱っぽい

目で勇治を見始め、勇治は本能的に逃げようとするが思いっきり抱き着かれた。何だかんだ言っても柔らかいし何気にいい匂いもする。

「ああ……こうまで施しを受けるなんて……これは身体でお返しせねばなりませんね」

「ちょっと待て！何で二言目にはすぐ身体でどうこうしたがるんだお前は!?」

「いえいえ、誰にでもではなくてマスターだけですので。それではまず邪魔な衣類を」

「魔性菩薩天誅脚!!」

「ぶふうっ!?」

……寸でのところで光のコヤンスカヤによる妨害（という名の物理的制裁）がキアラに炸裂。見た感じは単なる勢いのついたドロップキックだったが。

「全く油断も隙もないですね貴女は！ウルトラ騎空団におけるマナーを叩き込んでる最中にいなくなったかと思えば案の定ですか！」

ちょっぴり肉食系女子なところはあるが、周りに影響されたのか勇治のサーヴァント女性陣三名の中で一番マトモなコヤンスカヤ。男性サーヴァント二名を含めてもマトモさは割と上位である。

○ネロ→時折暴走気味、ついでに超音波

○モリアーティ→ホームズがちょっかいかけてくるので日常では戦力外

○カルナ→まともだが時々天然（サンタとか）

○キアラ→言わずもがな最大の問題児

こんな面子なので仕方がない。そもそもウルトラ騎空団全体で見るとまともなサーヴァント自体少ない気がする。

同時期に召喚された、デイビットのサーヴァントであるハマーンやガトーはその数少ないマトモ枠だ。マスター含めて天然なところは

あるが、生前が生前だけに問題行動は殆ど無い。羨ましいというか流石というか。

「あらあら、マナーと言えば『据え膳食わぬは男の恥』という言葉もありますし」

「貴女の場合、媚薬入り満漢全席を無理強いするようなものでしょう!?」

こんなやり取りをしつつも、コヤンスカヤはキアラを縄で縛り直している。キアラがあまり抵抗しないからというのもあるが、流石と言うべき技量。いやこんなん褒められてもどうかと思うだろうが……。

「とりあえずマスターは一先ずお休みがてらお出掛け下さいませ。その間に何かしら対策していきますので」

「……何か、すまん」

「今度二人きりでお食事を。ああ、それ以上は望みませんし外食ですので御安心下さいな。偶には意中の殿方とのんびりした時間を過ごしたいだけですので」

キアラをきつく縛りながらそう言うコヤンスカヤはやはり常識的であった。初対面時はアレだったが、今や彼女は正しく敏腕秘書。そのぐらいのお願いなら叶えてあげてもいいだろう。

分かった、と頷いて勇治はブリッジを後にした。

「ところで貴女……縛られてるのに何で嬉しそうなんですの？」

「ソワカソワカ」

……対照的にキアラがアレなおかげで一層コヤンスカヤが輝いて見える。

☆

「む……勇治、仕事はいいのか」
「ああ。キアラの所為で今はろくに出来ないし、コヤンスカヤが押さえ込んでいるうちにと逃げさせてくれた」
「あれの相手、ご苦労様です。それではカルナさんにムーンブロリー艦長さん、御機嫌よう」
「カーマもそちらのマスター、団長にはあまり煮詰め過ぎるなと伝えてくれ」
「何で私はムーンブロリーで覚えられてるんだ……」

ブリッジを出た勇治はしばらく歩いた後、荷物を届けに来たカーマと話すカルナに遭遇。割と誰にでも辛口（特にインド関係）なカーマもカルナには雰囲気が柔らかくなる。多分レジェンドやカーマ同様、周りの所為で苦労したからだろう。尤も、カルナ自身はそう思っていないだろうが。

「ところでモリアーティとネロは？」
「モリアーティは相変わらずホームズに構われているし、ネロ・ブライドに関しては似たような格好をしたムジナと一緒にいたところを見たが」
「後者に不安しか感じないぞ!?」
「それから、ミオリネがスレッタ達によって麻婆専門店に連行されていた。これは流石に止めるべきかと思ったが、シャディク・ゼネリに『大丈夫だ、黙って見守ってやれ』と肩を叩かれながら言われたのでとりあえず勇治に報告だけしておこうと」
「シャディクゥゥゥウウ!?」

最後の最後で爆弾を落とされた勇治。いや、別にカルナは悪くないし素直にシャディクの言葉を信じた上で勇治に伝えたから寧ろ褒められるべきなのだが、今の彼はそれどころではない。
急ぎそこらへんで綾香探しをしていたアーサーを捕獲し、カルナと

共に麻婆専門店へと急行。ミオリネとトレードする形で彼女を救出した。

……哀れアーサー。

「勇治、カルナさん、ありがとう……！もう、しばらく麻婆豆腐は食べたくない……！」

「だろうな……それで構わん、当面麻婆から離れておけ」

「麻婆はともかく、豆腐はいいぞ。それに多少の辛味は適度に摂取すると良い刺激になり頭も冴えるから無理なく摂ることを勧める」

「二人の優しさが温かい……何であの二人（※アムールは除くため）はこういう考えが出来ないの……!?」

スレッタ＆ラスプーチンの麻婆狂っぷりに、本気でミオリネが泣いていた。因みに彼らはこの後、カルナがレシピを見ながら作った程良い辛さの麻婆茄子を頂いた。玉子スープや白米ともよく合ったそれは大層美味だったという。

「さすがに団長や店長ほど美味くはないと思うが」

「比べる相手が悪いぞ、カルナ。これは普通にいける」

「ええ。とても穏やかな気持ちで食事が出来るわ」

本日の勇治争奪戦勝者・カルナ＆ミオリネ（ただしミオリネは激辛麻婆豆腐に若干トラウマが出来た）。

「ラスプーチンさん！食べるラー油を加えるとかどうでしょう!?」

「うむ、辛さを追求しつつ食感も満足させられる……素晴らしい。早速投入しよう」

「待ってくれ！これ以上、これ以上はあああああ!!」

「麻婆は一食にして成らず！です!!」

「逃げたら一つ、進めば二つだぞ。アーサー王よ」

「マァァァボォォォォォォォ!?」

――とある専門店に、騎士王の悲鳴が響き渡る。そして――。

「何か……妹がゴメンね？」
「いえ、ありがとうございます御二方」
「しかし……スレッタ、いつからあんな麻婆っ子に……」

ちゃっかり逃げて、エリクトやプロスペラと食事しているアムールであった。

☆

――蛇倉苑・ウルティメイ島支店――

もはや空の世界でも知らぬ者はいなくなった『店長直々にスカウトし調理技術を叩き込み、完成された店員のみが勤められる最上級大衆食堂』な蛇倉苑。

今日、そこで特別ゲストがとある料理を振る舞っていた。そのゲストと料理とは……。

「んにゃあああああ!!」
「皆さん！これがねこラーメン道さんの十八番、『ロック湯切り』です!!」

……そう、マシュとの繋がりで蛇倉苑賄い班に参加中の一人もとい一匹（というか数がかなりいるため正確には『一種』）である『ねこラーメン道』である。言わずもがな料理はラーメンだ。ド派手な湯切りでありながら必要以上に周りに飛ばないようしっかりと計算されたそれは、ただ待つだけでなく見て楽しめるようにと修練の果てに会得し

た本格派職人の業。
　案の定そこにいたイッパツ、リルル、アナスタシア（と連れて来られたカドック）も歓声を上げている。
「いやあ見てて気持ちいいですねえ、あの湯切り！」
「リルルもアイドルパフォーマンスに力を入れたくなります！」
「カドック、ロックが好きならあれぐらいやれるようになりなさい。あれこそロックとラーメン（料理）が最強のフュージョンをした形よ」
「ルビと文字が逆だろう、それは!!」
　――しかも出来上がった完成品も見事なもので、ラーメンにこだわりのあるイッパツとアナスタシアも納得の逸品。
「麺のコシが違う……！しかもこのスープ、あの激しい湯切りはこのスープの味を薄めないためでもあったわけですね！」
「濃厚で、それでいてさっぱりしている……麺にもよく絡んで味が逃げたりしない。敢えてトッピングを少なくしてこの味を味わってほしいという気持ちも納得よ。アナスタシア式ランク五つ星」
　ちなみにアナスタシア式ランクは五つ星が最高なので、ねこラーメン道のラーメンは彼女的にドンピシャ。それから今回のラーメンのトッピングは鳴門、ネギ、メンマのみでチャーシューは入っておらず、出汁に鶏ガラを使っただけ。シンプルイズベストを地で行く正統派醤油ラーメン。正しく味で勝負ということだ。
「「ご馳走様でした!!」」
「「ご馳走様でした」」
「実に美味しかった！食べた後がこうスッキリした気分になるのは久しぶりですよホント！」
「はい！ライブ前にも後にも合いそうなラーメンでした！」
「ねこラーメン道さんいわく、『食後のデザートを食べても問題ないよ

うになってるにゃ』とのことです！」
「アフターケアも万全なのね。只者じゃないわ、あのネコ」
「ラーメン作るネコの時点で只者じゃないのは分かりきってるだろ……けどまあ、確かに味はリピートしたくなるものだったよ」

ラーメン好きな三人からも高評価。濃厚ながらもさっぱりしていて後味すっきり、ついでに調理しているねこラーメン道も面白可愛いと大評判だった。

「あ、店長は炒飯も作れるので良ければ今度御一緒にどうぞ！先輩が今食べてます！」
「ヤッホー♪」

……ちなみにサギリは両方大盛り。ただし、彼女はよく食べよく動くので納得といえば納得。ダブルアルトリア（特にキャストリア）は何であんなに食べても太らないのか、後で色々問い詰められたらしい。

☆

ネオ・アクシズの格納庫……そこでまさかの、というかやっぱり、というか問題が出来ていた。

「調子に乗ってレジェンド様用のデュランダルバルキリー（ウルティメイトパック装備）作っちゃった……」

そう、なんかセイバー＋キャスター＋アサシンのクラススキルを所持しているとかいないとか言われているぶっ飛びメカニックな眼鏡っ娘・八雲燕が一時のテンションに身を任せてとんでもないものを開発してしまったのである。まあ、ここではよくあることなんだけど。

「……ガトー大佐用のＲＦゲルググは？」
「それを作り終わったから、空いた時間でコツコツと」
「「「コツコツレベルじゃねーっす、お嬢」」」

　同じく技術班のアポロンゼスト、そしてネオ・アクシズメカニック部にツッコまれた。なお、燕は尊敬の念を込めてメカニック部から『お嬢』呼びされている。因みにアポロンゼストは『ゼッさん』。ゼットンじゃないよ。

「お嬢、聞きたくないんだけどこっちの青いのは……？」
「キラ用のメサイアバルキリー（フリーダムパック装備）。アスランのは面倒くさいから作ってないけど」
「「「やべーよお嬢、束博士みを感じるよ」」」

　好きなものだけ作るあたり、確かに間違ってはいない気がする。いやそのバルキリーはそもそも空いた時間に作った（ようなスペックではない）けれど。

「まだあるな。あの黒いのは……デイビッド用か？」
「うん。ＶＦ―２２Ｓ　シュトゥルムフォーゲルⅡ。他のと違ってバトロイド形態がちょっと特殊だから、パックとかまだ作れてないの」
「ふむ、では試しにバルキリー初のファンネル搭載機にでもしてみたらどうだ？特殊なのだろう？」
「あ！それいいか……も……」
「「「「……」」」」

「「「「ハマーン様ァ!?」」」」
「ん？」

いつの間にかしれっと会話に混ざっていたハマーン様。当の本人はどうしたと言わんばかりに『？』マークを飛ばしているが、燕はあわわ状態である。レジェンド同様上司であるわけで。

ついでに言うと、彼女は気付いていないがデイビットやガトーも一緒に来ていた。ＲＦゲルググの出来栄えに感心しつつ、改良出来そうな点を探していた。

因みに、ガトー専用ＲＦゲルググはかの世界にてオールズモビルの指揮官が使用したもののカラーチェンジ版。ガトー専用ということでダークブルーのカラーとパーソナルマークが付けられ、カラー以外の外見こそ同じものの性能は遥かに上。武装も狙撃可能な大型ビーム・ライフルとビーム・ナギナタが追加され、ガトーが一年戦争時に使用したゲルググにより近付いている。

「素晴らしい……やはりゲルググはこうでなくては」

「ああ、ビーム・ナギナタは良い武装だ。両刃のため使い熟すには高い練度が必要だが、習熟すればかなり強力な武器になる」

「その通りだ、マスター・デイビット。あれ一つで複数機と同時に斬り結ぶことも可能だからな。しかし……向こうで何やら揉めている、いや単に驚いているだけか？」

「そのようだ。俺やガトーがここに来ても然程驚かれないが、ハマーンが来ることは割と珍しいからかもしれない」

燕の心の内など知る由もなく、真面目で天然なところがある二人はうんうんと頷き合っていた。

「とりあえず、このハンマ・ハンマの基礎スペックを底上げすることから始めよう」

「「「「ウィーッス！」」」」

もう一人の技術班中心人物であるアポロンゼストは「これも贖罪

だ」と思いつつ、黙々とメカニック達を取り纏め仕事をこなし始める。ちょっとしたドタバタはあれど、ネオ・アクシズはかつてのアクシズとは比べ物にならない程、平和かつ穏やかであった。

「敵の男性ニュータイプに、アッチの幻覚を見せる特殊精神攻撃兵装とかどうでしょう？」
「面白いな。相手を限定すればより攻撃性能を高められるかもしれん」

……女子二名がヤバすぎる対ニュータイプ兵器（男性限定）を開発しようとしていること以外は。
とりあえず、赤い彗星が悪寒を感じたのは言うまでもない。

☆

――月王国王宮（ルナ・ブリテン）・執務室――
そこは正に戦場であった。

「……って仰々しいけど単にお仕事が多いだけなんだよね―！」
「アルク、誰に話してるの？」
「も……もう駄目……私、お昼に食べたうどんが鼻から出そうなのです」
「武蔵は何でそんな事になりそうなの……？」

女王である沙耶の政務は当然多く、手伝いに来た彼女のサーヴァントのアルクと武蔵はその量に早くも轟沈寸前。
だが、忘れてはいけない。
……彼女の師の一人たるレジェンドは沙耶の仕事量の数十倍をたった一人、かつ一日もかからず終わらせる変態である。そしてレジェンドに育てられたサーガやスペドラ、ギルガメッシュもそれに続

く。この面子、実際に過労死したり過労死寸前になったり過労でおかしくなったりしているため、それはそれでヤバいのだが。
で、その近くには――。

「むう……今日はどこもバラエティ系の特番しかやっていませんね。『魔術廻戦』や『龍滅の剣』もそれで延期とは」
「えーっと……『チートな能力貰って最強になったのでハーレム無双しちゃう俺』……うん、別のにしよう」

モルガンとダ・ヴィンチちゃんが駄弁っていた。何やってんですか先代女王陛下。

「「ここにいるならちょっとは手伝ってー!!」」

力の限り叫ぶアルクと武蔵だが、ダ・ヴィンチちゃんはともかくモルガンはその程度で動じない。基本的に外道な彼女の世界の妖精達を統べるには図太いメンタルが必要だったのだ。
というか、例によってホームズはモリアーティをおちょくりに行き、ネモは武蔵に狙われそうだったのを自身で気付き逃走。更にはよりによってレジェンドも新しく加わったアサシンガールズ＋αまで連れてギルガメッシュらと当然の如く特殊特異点修復（という名の愉悦大冒険）に行ってしまい、やることがないから暇潰しに来ただけなのだ。モルガンとダ・ヴィンチちゃんは。
え、さっきカーマが残ってた？あの後すぐに合流しましたとも。

「しかし、思った以上に量がありますね」
「マーリンのナンパに対する苦情なんかもあるから」
「本格的な去勢も視野に入れねばならないと」

いや、そこまでは……と思いつつも、かつてアルテミス要塞にて自身がぶっ飛ばした兵士達を思い出して考え直す沙耶。流石にあれを上回るドＭにはならないだろうが……確約は出来ない、普段が普段だから。

「何にせよ暇だなぁ。団長さんや究極英雄王がいればこう、面白いイベントとか思いついてくれるんだけど」
「万能の人ー！私達暇じゃない、暇じゃないよ!?」
「美少年と美少女と、あとうどんがあれば……！」
「前二つが悩みどころだね、それは。そういうと思ってライ君とモニカちゃんを連れてこようとしたんだけど逃げられちゃってさー、いやあの二人サーヴァントじゃないのに身体能力高過ぎない？」
「ウルトラ騎空団の面子だけを見ても今更よ、そんなこと」

なお、火野映司リターンズな流はペガサスＡのブリッジ業務をほぼ全て一人で（ヤケクソに）こなせるあたり、身体能力以外もアホみたいに凄まじい。

「それはそうとして……あとどれくらいで終わりそうですか、沙耶。バーヴァン・シーもハベトロットの工房に行ってしまい、暇で暇で仕方がないのです。見ての通り女王の座も沙耶に託しましたし」

ソファーに寝そべり足をパタパタさせるモルガンは、昔の彼女を知るものからすればマジで月王国先代女王どころか地上で妖精国を統治し威圧感バリバリだった頃が信じられないだろう。
ついでにモルガンの頭には先日貰ったネコハコから出てきたオフニャの『るぶり』が引っ付いて「にゃふ」と鳴いている。名前はルナ・ブリテンから取ったもので、決してかのルブリスからのものではない。

「このペースだと、多分夕暮れあたりかしら。本来なら終わっている

ところだけれど、一応王国全土で共有しておきたい事とかもまとめているし」
「さすが我が娘、よく気遣いが行き届いています。となるとまた一つ暇潰しの可能性が断たれてしまいました。さて、どうしたものか……」

そんな時、執務室へと一人のメイド……もとい、侍女が茶菓子を持って入ってきた。

「女王陛下、休憩用に紅茶とクッキーをお持ちしました」
「ありがとう、トキ。実はお母様とダ・ヴィンチも来たのだけれど……」
「御安心ください。こんなこともあろうかと御縁、にかけまして五人分用意して参りましたので」
「ほほう、かなりデキる侍女だね彼女。ていうか先代陛下であるマスターに声似てない？」
「母港で出会ったエンタープライズも似ていたのです、声と顔まで同じでなければ問題ではありません。それを言ったら貴女はどれだけ似ている人物がいると思っているのです？聖女にオルタ聖女、占い師にダークエンジェル、それに……ああ、花売りもそうでした」

沙耶の侍女の一人、飛鳥馬トキ。彼女も移住者の一人である。別名『沙耶の懐ガトリング砲』。懐刀じゃないのかと思われるが、そこは彼女の搭乗機に由来するらしい。生身でも侍女中最強でサーヴァントと殴り合えるというから、やっぱり師や養母に似て沙耶も連れている部下がおかしかった。
○レジェンド→九極天が基本ヤベーやつら
○モルガン→妖精騎士以外にヤプールとかいる
……一応、沙耶はまだマシなのかもしれない。特にレジェンドはゴジラやシン・ゴジラ、ハイパーゼットンなんかも所属しているわけで。

「時に飛鳥馬トキ、貴女に聞きたいことがあるのですが」
「何でしょうか、モルガン先代女王陛下」
（わー……どっちも同じ声で敬語だから見ていないとどっちが喋ってるか分かんないね）

これはアルクが正しいが、その後の展開に約1名を除きぶっ飛んだものを見ることになる。

「貴女は勝負下着とかを持っていますか？」
「おぉっとマスターいきなりだね!?」
「豪速球火の玉ストレートー!!」

ダ・ヴィンチちゃんとアルクはツッコミを入れるが――。

「はい、無論持っています。というか――

今も履いていますが」

ぺ　ろ　ー　ん　。

「「「「ぶふぅっ!?」」」」

なんと彼女、恥ずかしげもなくいきなりロングスカートを捲り勝負下着を見せてきた。とりあえず武蔵ちゃんは鼻息を荒らげず落ち着きなさい。

「ちょっと、もうちょっとよく見せて！同性のよしみで！」
「うわー……どうしよう沙耶、武蔵がスケベ総督化しちゃってるよ」
「安心して。割と元からだから」
「ソレもソレで問題じゃない!?」

全く以てアルクの言う通りなのだが、この武蔵は生まれてこの方この性格らしく沙耶の言う通りでもあるから何ともはや。

「と……とりあえず、あまり自分の安売りはしないように――」
「御心配なさらず。これでも護衛侍女筆頭、私が望まぬ輩には見せません。強引に見ようとするなら蜂の巣にするだけです」
「――って、お願いだからいきなり取り出したそのダブルガトリングガンはしまってくれないかな。というか何処から出したんだい？」
「乙女の秘密です」

キラーン☆という効果音が聞こえてきそうな返事を返すトキに、ダ・ヴィンチちゃんは「真面目な答え返ってこないやつだコレ」と早々に諦めた。
で、肝心のモルガンはというと……。

「……常時装着、考えたこともありませんでした。勝負下着というからには決戦装束のようなものだという先入観があったのですが、それは間違っていたようです」

こっちもこっちで何か変な方向へ本気を出しそうになっていた。てかモルガン、普段の衣装も中々際どい感じであることに気付いていないのか。
……結局、何だかんだやっているうちに暇潰し出来たモルガンとダ・ヴィンチちゃんは満足そうな表情で帰っていった。
んで、やっぱりアルクと武蔵の悲鳴が執務室から聞こえたという。
沙耶？彼女は仕事を黙々とこなしていたので別に気にしていないと

か。

☆

青い空と紺碧の海がどこまでも続く世界。大海原にぽつぽつと飛び石のように浮かぶ島々で人々は生活してい――。

「何かナレーションが流れているような気がするが我らはそれどころではないわ!!」

「でも原因はギルだよね。レジェンドは何か警戒してたのにギルがノリノリでディフレクターを手にとって高笑いしてたから」

「それを言われるとぐうの音も出んがな！しかしこのデンジャラスハプニングも冒険の醍醐味というものよ！ふはははは！鋼の冒険心とはよく言ったものだ！」

「で、ここからダンジョンを脱出するべく探索し、締めにボスキャラが出てくるまでがセットだぞ」

「揃いも揃って何でそんなに落ち着いてるのー!!」

――そう、ここは特殊特異点。レジェンドやギルガメッシュらが現在進行形で冒険中な世界である。

どうやらこの世界、ディフレクターと呼ばれる高密度エネルギー結晶が重宝されているらしく、世界各所にある遺跡その他で入手出来るとかスカるとか。しかも前述の通りこの世界は大半が海であり、遺跡も海のど真ん中にあったりするからまた面倒。

まあ、レジェンド一行は飛空艇やら何やらをしこたま持っているのでそこは大した問題でもない。

そしてその遺跡に潜って調査したり色々持ち帰ったりするのが『ディグアウター』という職業。割とこの世界ではポピュラーな職業とのこと。

つまり、レジェンド達もそれに則りディグアウターをやりながら特異点修復しようということになったわけだ（大体メソポタミア最強

チームの所為)。
「ふむ、ゼットやガレスの代わりにとバカトリアを連れてきてみたが……」
「粛正防御いらないね。普通に戦ってても楽勝だもの、ここのリーバード」
「むしろ俺らにバフかかったら、この遺跡がそのまま海の藻屑となりかねん」
「物凄くディスられてるー!?」

今回の特殊特異点参加メンバーは前回のメンバーに加えてアサシンガールズ、キャストリア、ピカチュウにフォウくん、更にはオーフィス・スカーサハ・ティアマットのドラゴン三娘、C・C・と最後にグレイフィア。
分かりやすく言うと、色々最初期と最新のメンバーといったところだ。
今、レジェンド達四人しかいないのは他のメンバー全員がナビゲーターに回っているからである。千代女あたりは如何なる理由があろうと同行するんじゃないかと思うだろうが……この遺跡到着時ちょうどおやつタイムだった為、オーフィスに(規格外の力で)止められた。これは仕方ない、相手が悪すぎる。

「しかも通信、途中で繋がんなくなっちゃってぇ……さっきからトラップとかリーバードとか沢山でぇ……もう、疲れて動けなくってぇ……」
「ぶつくさ言わず働けバカトリア。貴様が手にした杖は女子向けのDX玩具ではあるまい。光る!・鳴る!・これで君も予言の子!・DX選定の杖!・ふはははははー!!」
「やめろギルガメェ!・しかもマスコットっぽい声とテンションで言うなギルガメェェェ!!」

……こんな会話をしてる最中も、襲ってくるリーバード容赦無く粉砕し、遺跡を探索・調査するレジェンド一行。やはり伝説軍団は格が違った。

「それにしてもさ。この世界で言われてる『大いなる遺産』って何だろうね？」

「大海原だし、夢を集めてウィーアーすることじゃないか？」

「あまりに適当だな師父よ。ただまあ、この世界……特殊特異点というだけでなく世界としても少々歪だとは思うがな」

「歪って何が？」

「少しは自分で考えぬか。だから貴様はバカトリアなのだ」

「何だとー！」

がるるー！と怒るキャストリアに、軽く息を吐いてレジェンドが問う。

「アルトリア」

「うー!!……あ、レジェンド。どうかした？」

「この世界の人間は何処にいる？」

「……え？」

――何処にいるって、普通に生活してたよね。島々に、それこそ割と電化製品とか使って……。え？どういうこと？

レジェンドに言われたことの意味がまるで分からず、本気で混乱し始めたキャストリア。

「分からなければ今はそれでいい。いずれ否が応でも知ることになるからな」

後にこのレジェンドの言葉は『大いなる遺産』と関係があったことをキャストリア達は知ることになる。そのきっかけを掴む島――カ

トルオックス島に辿り着くのはもう少し後の事。
とりあえず、今は――。
「遂に現れたなこの遺跡のボスリーバード！というわけで行くがいいバカトリア！」
「ちょっと待てギルガメエエエ!!」
「落ち着けアルトリア。アヴァロンモードならいける。奴は図体はデカいがまだ『人間サイズから見ると大型』程度の大きさだ。構造もそう複雑ではなさそうだし、目立った特殊能力も持っていないだろう」
「ギルガメに比べて全然安心できるレジェンドのアドバイス！頑張るぞー!!」
「うわあ、すっごい変わり身の早さ」
――こうして再び、新しい家族と共に冒険出来る喜びを噛みしめつつ、目の前の困難に立ち向かうだけだ。

「よし、ここで我が稲妻斬りを叩き込んでやろう！仮セイバー、我に攻撃力アップのバフだ！」
「誰が仮セイバーですか！私はレジェンドだけの剣、アルトリア・アヴァロンです！何処かの世界のバーサーカーなアルポンド発行してるアヴァロンとはワケが違うんですよ！」
「レジェンド、彼女何を言ってるの？」
「多分別の【エリア】のアルトリアのことじゃないか？ほら、慢心バリバリなアーチャーギルとか、自分をシステム呼びするランサーエルキドゥとかいるトコの」
「あー、なるほど」

――おまけ――

「……なあ、キラ」
「駄目だよアスラン。これは燕が僕にくれたものだから」
「せめてシミュレーター登録して――」
「アスランによく似合いそうな機体がもう登録されてたよね。確かファイヤーバルキリー」
「あんなギターで操縦しつつ『歌う』だけの機体なんて俺に扱えるわけ無いだろ!?」
「え?アオイドスさんやレジェンドさんはノリノリで使いこなしてたよ」
「団長はまだしもアオイドスさんまで!?いや、確かにあの人はギターを弾き熟してるが……」
「あと、フォウくん」
「フォウフォー!!」（ギュゥイィィィン!!）
「!?」

過去最高に敗北を感じるアスランであった。

特別編・それぞれの日常を見てみよう～第二回

ウルトラ騎空団――どういう組織なのかはこの間ウルトラマンキングが説明したので割愛する。

今回は彼らウルトラ騎空団がどんな仕事をしているのかいくつかピックアップして見ていってみよう。

彼らの仕事は『クエスト』と呼ばれ、基本的に舞い込んできた依頼をこなすことで報酬を得るものである場合が殆どだ。

しかしながらメンバーが色々ととんでもないこともあり国家レベルは勿論、それこそ空域レベルの大事になる案件も結構取り扱っている為、他の騎空団と比べて団の稼ぎは桁違い。

加えて、ウルティメイ島及び属島であるバビロニア島全域の事を含めれば空の世界だけだとしても相当な仕事量になる。特にその二島では独特な職種が多数存在している為、掛け持ちしている者もいるのだ。

今回はそんな彼らの日々の仕事風景を追っていくことにする。

……ただなぁ、私もそろそろ特別編レギュラー枠にしてもらいたいというか……正月にレジェンド（とサーガ）にボコボコにされたのが新しい記憶なのを上書きした――あ、待てギンガビクトリー！　キングでさえここは最後まで言わせてもらえたぞ！　ちょっ……ヘルペス！　ヘルペスミー！

☆

――バビロニア島・首都ウルク――

「ギルガメッシュ王！　バビロニア島乗艇港の改築希望案が纏め終わりました！　お目通しお願いします！」

「うむ、ご苦労。ほほう……乗艇港内にショッピングモール開設か。思えば各島々の乗艇港に修理補修設備はあれど、それらのものを見か

けたことは無かったな。ふはははは！　実に良い目の付け所だ！
良かろう、採用する！　出店を希望している専門店を見繕い再度提出せよ！　我がウルクのみならずバビロニア島全土から選りすぐりの専門店を並べるのだ！　む、バビロニア島はウルティメイ島の属島であったな。ならばそちらと業務提携でいくぞ！　師父の許可は我が直々に取りに行く。出店希望の専門店は双方の島から出して構わん！　貴様らの案で他の島との乗艇港商戦に差をつけてやれ！」
「ありがとうございます！　直ちに手配を！」

本日もギルガメッシュは空のウルクにて職務をこなしている。何処ぞの光神共に見習わせたい、とは血よりも濃い親子の絆で結ばれた師父たるレジェンドの弁。

「さて許可を取ると言ったものの……許可自体はすぐに取れるだろうが師父は今、急遽発生した特殊特異点の修復に向かった団員共のサポートに行っているな。専門店のリスト完成まで少しばかり時間は掛かろう、我はどのような形に改築するか考えておくか。ふはは、かつてとは違う発展を遂げていくウルクをこうして特等席にて眺められるのは良い、実に良いぞ」

では早速、と改築大好きな彼は瞬く間に他の仕事を終え図面を起こしていく。趣味と実益を兼ねたそれは正しくウルク、引いてはバビロニア島が先進する新しい乗艇港の形。遊び心を満足させつつ、されど仕事を放り出すわけでもないギルガメッシュはこうして自身の愉悦と島民の希望を両立させていくのだった。

「配置はこちらが弁当関係でこちらが土産物……む、休憩スペースも必要だな。ではここをこうして……」
「すかー……」
「エルキドゥ、寝るならそこではなく寝室へ行け！　我も寝たことはあるがいくら物が良いとはいえ、身体がバキバキになるぞ！」

――杉の森関係以外では、基本的に駄弁るのが仕事のエルキドゥを軽く叱りながら。

☆

所変わって一誠とトライスクワッドにリアス、そして彼らのサーヴァント……に加えて何故かメリュジーヌ。彼らは依頼の一つであった荷物運びの護衛でウェールズ近辺に来ていた。彼らを先導するのはウェールズ出身にしてウェールズを治める氷皇アグロヴァルの実弟・パーシヴァル。

「ここを抜ければウェールズは目と鼻の先だ。だからこそ、こういう時は気を抜くなよ」

「戦闘は僕に任せてね。だって僕、月王国最つよ妖精騎士だから」

「パーシヴァルさんの言葉は素直に頷けるけど、メリュ子の方は後半の台詞が判断に困るわね」

「最つよかもしれないけど、周りはそれを軽く超えてる人ばかりだしさ。仕方ないよ」

「そこ聞こえてるよ！　ぷるるん部長にドルオタ魔術王！」

案の定騒ぎ出すリアス達に溜め息を吐くパーシヴァルの傍ら、一誠はハラハラしっぱなし。というのもそろそろセイバーアルトリアが腹を空かせるタイミングだからだ。なにせ今回は料理出来る、又は出来そうな面子が少ない。手っ取り早く説明すると、需要と供給が追いつかないというわけである。

レジェンドかジャグラーなら彼女どころか似たようなタイプが複数いてもどうにかしてしまうのだが、そんな神業級の腕と速さを持つ料理人などポンポン現れるわけがない。片方だけでも難しいのに。

ましてや依頼の真っ只中、料理してる時間も確保出来るかどうか……。

そしてそんな時に――。

「皆、あちこち盛り上がってるところすまない！　話の途中だがワイバーンだ！」

御存知の（迷？）台詞をロマニならぬソロモンが叫ぶ。ちなみに彼がソロモンモードなのはこんな感じで戦闘があるかもという懸念からだったのだが、ぶっちゃけ護衛クエストは基本的に戦闘ありきと付け加えておく。

さらに――。

「……お腹空きました」

「このタイミングでかよ!?」

ここに来て嫌なダブルブッキング、ワイバーンの群れ強襲とセイバーアルトリアの空腹が同時に訪れた。

フルスペックで戦えればそれこそメリュジーヌの本気モードとやり合えそうなセイバーアルトリアだが、今は何処ぞの空飛ぶパンヒローが『顔が濡れて力が出ない』のと同じ状態。

……てかロマニがソロモンモードならコイツのが強いと思うが。やる気さえ出れば。

「こういう時こそソロモン魔術の出番じゃねーの？」

「ゴメン、実はボクも朝食後のデザート食べそこねたからちょっと頭が上手く働かなくて……甘い物が恋しい」

「デザート一つで魔術使用の合否が決まんのかよォォォ!!」

まさかのアルトリア型だったソロマニ。しかもそのデザートは甘い物でなければならないという、より限定的な理由にフーマのツッコミが炸裂。

「期待の戦力が揃いも揃って使い物にならないとはな……！　だがやるべきことに変わりはない、俺が先陣を切る！　お前達は依頼人と積み荷を守ることを重点に行動し、可能ならば攻撃に転じろ！」
「お任せあれ！　この逆境こそ、スパルタの本領発揮というもの！」
「牽制と撹乱は俺と小太郎が引き受けた！」
「俺とエレシュキガルもやれる！　パーシヴァルの援護は俺が！」
「そのタイガの援護を私がするのだわ！」

何だかんだ言っても結束の強いウルトラ騎空団。パーシヴァルの号令で戦闘可能な者は即座に戦闘態勢に移行している。本来ならここで一誠も加わるわけだが……言い争い中のリアスとメリュジーヌ、それぞれ空腹と甘い物不足で使い物にならないセイバーアルトリアとソロモンのお守りをすることになった。コレよく考えたら一誠一番負担デカくね？

その後はパーシヴァル指揮の下、無事にワイバーンの群れを撃退しウェールズに到着。アグロヴァル直々に労われ城に一泊していくことになった。食事時に漸くセイバーアルトリアとソロモンが復活……したのはいいが、後日騎空団に戻った際にパーシヴァルやダ・ガーンからの報告で、件の人物らはレジェンドに叱られたという。しかもメリュジーヌはモルガンから尻百叩きのお仕置きをされ、本気で泣いたらしい。

「痛い痛い痛いいいい！　モルガン先代陛下、魔力込め過ぎいいい！　わぁぁぁん！」
「勝手について行っておきながらまるで役に立たないなど、妖精騎士として不甲斐無いにも程があります。パーシヴァル達に迷惑を掛けたこと、しっかり反省しなさい」

☆

ネオ・アクシズのシミュレータールーム――そこでは現在進行形で

修羅場が展開されていた。一応アキレウスもそこにいたが、彼は別に当事者ではない。むしろ彼はムウのアドバイスを聞きながら操縦訓練に精を出していたくらいなので、褒められるべき立場にある。

場所が場所だけに、問題は――。

「あのさあ、アスラン……私言ったよね？　バルキリーの推力の基本は脚だって」

「う……いや、その……」

「ピンポイントバリアで覆える機体ならまだしも、サンダーボルトでキック戦法やるとかどんだけ脚癖悪いの？　バルキリー舐めてんの？　態と落としたいの？　ねぇえ？」

燕があれ程言っていたにも関わらず、アスランにバルキリーをシミュレーターで使わせてみたところ例に漏れず「ハァ！トゥ！ヘァアッ！モウヤメルンダァ！」などと叫びながら近接戦闘後にキックをした結果、脚部がダメになって落とされたという情けない成績を出してしまった。

これに開発者たる燕がブチ切れて、小太刀片手にすわった目でジリジリとアスランに迫っているのだ。

加えて……。

「アスラン、シミュレーターのデータを調整したの僕なんだけど。変な弄くりはしてないのに可怪しいよね？」

キラも敵に回っていた。ちなみに本来は彼もアキレウスにアドバイスすべくこちらにいただけなのだが。

「あぁ……えっと……ほら！　やっぱりバルキリーにも接近された時の装備は必要だと思うぞ！」

「なあ、アスラン……こう言っちゃ何だけどよ」

突如口を挟んだアキレウスに燕やキラ、アスランは「え？」といった表情になるが、次に彼が発した台詞は全員に稲妻が走るものだった。

「装備云々以前にいつもお前から接近戦仕掛けてるだろ」

暫し沈黙の後、燕が有り得ない速さでアスランの後ろを取りヘッドロックを掛けた。

「結局お前が悪いってことじゃんかコノヤロー!!」
「ぐあああああ!?」
「……ムウ、あの嬢ちゃんコーディネイターか？」
「いや、そんな話聞いたことねえぞ……」

八雲燕、前職暗殺者。その気になれば素手で相手を制圧可能。エリート軍人だので止められれば苦労しません。ちょっと前に同じ整備班（マッチョ）を投げ飛ばしたばかりです。

「そんなにキックしたきゃネロスガンダムにでも乗って銀色の脚出してろ！　それともガンバスターならぬデコバスターにでも乗ってサテリコンビームを額から放つか!?　あぁん!?」
「ふぐぐぐぐぐ……」
「そういえば、関節技ならバルキリーの負担にならないのかな？」

キラがそんな事を疑問に思っているが燕はアスランを落としそう。アスランは燕の腕をタップしているものの、リミットゲージがリミットブレイク状態になっている燕にゃそんなこと関係無い。
ノアの護神隊のようなキレっぷりの燕をそろそろ止めないと割と本気でアスランがヤバい。度重なるバルキリー関連のやらかしでア

スランへのブレーキがぶっ壊れた燕を止めるのは至難の業。そしてこういうときに限ってレジェンドは留守。
もはや万事休すかと思われたが、最近『お仕置きケツバンカー』なる異名を得てしまったオーフィスによる無限殺しがアスランの尻に炸裂して気絶。死にはしなかったものの、アザゼルに続き二人目の犠牲者となってしまった。

「我に貫けぬものなしー」
「オイ大丈夫かアスラン。今尻からビッグバンでも起きたかのような凄え音出てたぞ……？」
「まさかと思うが……オーフィスが十天衆頭目のシエテを倒した攻撃ってあのカンチョーじゃねーよな……？」
「さすがにそれはないですよ。もしそうなら頭目の面子丸つぶれですって」
「キラはとりあえず、少しでいいから友達の心配しようぜ……」

よくよく考えたらウルトラ騎空団って子供の方にヤベーやつだらけじゃないのか、と思うムウとアキレウスであったとさ。
……なお、オーフィスはウルトラ騎空団でもトップクラスの年長者であることを忘れずに。

☆

――グランサイファー内・ラードゥガ――
仕事は何もクエストだけではなく、ウルトラ騎空団内でも存在する。その一つが、愛の伝道師・ファスティバの管理するこのラードゥガだ。
『虹』を意味するこの憩いの場は、夜食や酒を提供しつつお悩み相談室的なことを行っており、変な意味ではなくウルトラ騎空団屈指の愛に溢れるファスティバが親身になって相談に乗ってくれることもあって人気を博している。最近はペペも手伝うことが多くなり、ファ

スティバに感化された彼も相談役となっていた。

「……というわけでどうもキャスパリーグからの当たりがキツいんだ。何か方法はないだろうか？」

「そうねえ……フォウくん、よっぽど別れの時の事がトラウマだったんじゃないかしら。加えて団長さんに優しくされたのもあって余計にマーリンさんとの差を大きく感じちゃってるのね」

さすが愛の伝道師、ヤプール同様マーリンをこき下ろさず的確にポイントを突いていく。

「そういう場合、一気に距離を無くすのはまず無理よ。焦って縮めようとするとまた遠くなるの。信頼は行いと時間の積み重ね、じっくり少しずつ直していくのが何よりだと思うわ」

「やはりそれしかないか……いやしかし落ち着いて言われると納得してしまうね。さすが愛の伝道師だ」

その話術でマーリンをも唸らせたファスティバはウルトラ騎空団の中でも善人度が半端ない。ただし、悪い子にはやっぱり怒るので甘えすぎないように。

「のうファスティバ姐さん、儂の相談にも乗ってくれんかー……」

「あらノッブちゃん、何時になく沈んでるけどどうしたの？」

「いやな？　このウルトラ騎空団、マスターを含めてそりゃもうフェロモン隠す気無しの美女だらけじゃろ？　なんかもう儂って『是非も無し』くらいしかアピールポイントないんじゃない的な感じになってのぅ……」

「確かにこの騎空団は魅力的な女性が多いというのは同意するわ。でもノッブちゃんもその中の一人よ？　明るくて自信があって、グイグイ引っ張っていける。勿論失敗もあるけれどそれは愛嬌だし、そもそも失敗しない完璧な人なんていないんだから。だからノッブちゃん、

貴女が持ってる『貴女自身』を忘れず、大切にしてね」

――ちょっと間をおいて、ノッブ号泣。マジで相談に乗ってくれたファスティバに「何で光秀じゃなくてファスティバ姐さんが本能寺にいてくれなかったんじゃあああ!!」と抱き着いてしまう程。いわく、光秀とファスティバが入れ替わってたらガチ天下統一してたとか言い出す始末。しかもマーリンまで手伝う気満々だった。

恐るべし愛の伝道師パワー。

なお、朱乃・信長・ファスティバ・マーリンでクエストに出た際、前衛にファスティバ、中衛に信長、後衛に朱乃で援護にマーリンと完璧な布陣が完成。魔物が可哀想なぐらいスキのない猛攻だったという。

「うはははは！　気持ちいいぐらいにスムーズに済んだのう！　もう儂ら団長とか究極英雄王を除けば最強クラスのパーティじゃない？

是非もないよネ！」

「何かノッブが調子乗りまくりなんですけど。いやまあ調子に乗るのはいつものことですから、そこは別にいいんですが……」

☆

――ペガサスＡ――

勇治組（もしくは勇治軍団）は次回のプラチナスカイカップ……通称ＰＳＣに向けて走艇を開発中。パイロットにはカルナ……ではなく、第一候補にコヤンスカヤ、第二候補にモリアーティが上がっている。

というのもＰＳＣは基本的に妨害有りのため、カルナでは他のレーサーが何かしてきてもその性格から妨害を許容しつつ真っ向勝負しようとするかもしれないからだ。

それ自体は悪い事ではないし、むしろ称賛されるべきことなのだが……そういうレースならば、勇治的にやられたら仕返しの一つもしてやりたいというのが理由である。

「こっちから妨害を仕掛ける気はないが……やられたらやり返すか、やってきたら返り討ちにするぐらいはしても構わんだろう」
「ンー……いいヨいいヨ、マイボーイ。どっかの若いブラック仮面が言ってたからネ。撃っていいのは撃たれる覚悟のあるやつだけだって」
「ソワカソワカ、突っ込んでいいのは搾り取られる覚悟のある者だけと同じ法則ですわね」
「貴女、それギャンブルのことならまだしもアッチの意味で言ってるのでしたらシバきますよ」

スキあらば下ネタに走ろうとするキアラにコヤンスカヤが釘を刺す。ぶっちゃけ下ネタ無きキアラはキアラにあらずと思わないでもないが、だからといって四六時中そっち方面に持って行かれたら精神的にキツい。

「そういえば、カルナとネロはどうした？」
「言われてみればネロ嬢がいないのは割といつもの事だが……」
「カルナさんがいらっしゃらないのは珍しいですね」
「あら、カルナさんでしたら団長さんに付き添って特殊特異点に赴いた団員のサポートに行くと仰られていましたが？」
「何で貴女がそこまで知っているかはさておき、何故カルナさんが団長さんの付き添いに？」
「もしかして矢的教諭とオルジュナ絡みかもしれないネ。多分本来のアルジュナと違って少しばかりは親交を深められると思ったのかも分からんヨ」

モリアーティの意見に納得する勇治。カルナの生い立ちを考えればそれも頷けるし、彼はよく勇治のためにと行動してるのだから偶には彼の我儘で動いてもいいだろう。

「……で、何でキアラだけは知ってたんだ？」
「それはですね、カルナさんに『努力はしているが、オレはやはり口下手で言葉足らずなところがある。もし説明不足なことがあった場合も考えて、団長に確認しながら書いた言伝用の手紙を渡しておくから勇治に渡してくれ』と伝言と一緒にこれを渡されまして」
「「最初からそう言ってそれ渡せェェェ!!」」

勇治・モリアーティ・コヤンスカヤの一字一句違わぬ絶叫ツッコミがペガサスＡに響き渡り、久しぶりの惰眠をむさぼっていた流が何事かとジョブ・オーズ（タジャドルコンボ）で勇治達のところへ駆けつけてドタバタするのはご愛嬌である。
ちなみ嫁ネロだが――。

「何故余はファイヤーバルキリーとやらに乗ってはならぬのだ!?　歌仕様・赤・高性能など余の専用機同然ではないか！」

――とネオ・アクシズのシミュレータールームにやってきて騒いでいたので、大狂乱のネコライオンに乗ってお弁当配達に来たマシュに追加料金を払い、勇治のところへ連れて（持って）行ってもらったそうな。
※なお、ファイヤーバルキリーは既にフォウくん専用機になってます。彼は最近『ＤＹＮＡＭＩＴＥ　ＥＸＰＬＯＳＩＯＮ』を歌える（鳴ける）ようになりました。

☆

――特殊特異点『セフィーロ』――
今回の特殊特異点修復は二箇所同時進行の少数精鋭で行われている。その一つがこのセフィーロだ。正確にはセフィーロに加え、ファーレン、チゼータ、オートザムも含めた四つの国が存在しそれらを纏めて特殊特異点とされた。

この特殊特異点に派遣されたのは――。
「そこに至るは数多の研鑽……築きに築いた刀塚……八重垣作るは千子の刃……ちったぁ成仏していきな!!」
宝具『無元の剣製』が振るわれ、その一太刀で無数の魔物が消し飛んでいく。
「伊舎那！　大天象!!」
同じく宝具『六道五輪・倶利伽羅天象』の締め、伊舎那大天象により巨大な魔物が一刀両断される。
その光景を見た一人の少女はキラキラと目を輝かせ感動していた。
「うわぁ……！　村正さんも武蔵ちゃんも凄いなあ！　私もあんな大技出来るようになるかなぁ？」
「いやいや光、あんなの出来るようになったらそれこそ人間やめるようなもんだから。というかセフィーロ来てからこの世界の人間よりぶっ壊れたとんでもない連中と出会うなんて思わなかったわよ」
「いえ、あちらでお暇そうにしてる方のほうが凄いそうですよ。何でも『究極の一』だとか『真祖』だとかで」
「……で、それの主が月の女王様ですって？　一番私達に近そうなのは何か晒布巻いて着物着た極道っぽい人物ってどういうことよもおぉぉぉ!!」
そう、立香&村正の剣豪と刀工ペア。そして沙耶&アルク&武蔵のさやぴートリオである。男一人で気不味くないかと言われるだろうが、村正は別にそう感じない。
で、先程絶叫していた龍咲海と、純粋キラキラビームを放ってた獅堂光、それから割と落ち着いてる鳳凰寺風。この三人は東京タワー見学中にセフィーロに召喚されたらしい。

ちなみに三人揃って中学生……立香と沙耶の通信を受けたレジェンドは「そこは世界レベルで時空管理局並に人手不足なのか」と零した。尤もあっちは当たり前のように小学生まで戦力として数えてる時点で駄目組織だろうが。

「え、私って極道の妻とかそっちに見えるの？　そういえばガチでその道のユイシスさんと並んでも私の方がそっちの人に勘違いされてたかも……」

「そりゃあれだ、着物の着方がそう見えるんだよ。もしここに刺青でもしてりゃ尚更その筋の連中に見えちまうだろうな」

「えー！　だったら村正も似たような格好じゃん！」

「儂ァ別に晒布も巻いてねぇし、履き物なんかも極道モンには見えねえだろ」

異世界だろうが特殊特異点だろうが平常運転な立香と村正。まあ、キリシュタリアとかからしてアレだし。沙耶チーム……あの連中は例外だから。メソポタミア最強チームほどではないけど。

「でも三人揃って災難だったわね。ランダム召喚されたと思えばいきなりエメロード姫を救えでしょ？　見た感じ武道の経験はあるみたいだけど、こんなファンタジー地味た世界を冒険したことなんて――」

「あるわけないでしょ！」

「だよねー！　確かにあったらそれはそれで問題ある気がするけど」

「それを考えるとレジェンド様とか究極英雄王って信じられない規模の大冒険しすぎだよねー。行った世界全域を回ったかと思えば高天原とか地獄とか、果ては星の体内！　さっすがウルトラ騎空団の元締めは格が違ってたー！」

「私が行った世界の一つは別の意味で世紀末だったわ。何で資金調達がイコール銀行強盗なんて結論に達するのか未だに理解不可能だもの」

……なお、つい最近はモルガン他月王国の面々も引き連れて喋る剣を中心とした運命のＲＰＧな特殊特異点も修復した。天上都市をモルガンがロンゴミニアドで容赦無く叩き落としたり、バーヴァン・シーが「センスなぁい♪」と敵幹部をフルボッコにしたり、アイアムチャンピオンをバーゲストが瞬殺したり、一誠と一緒じゃなかったメリュジーヌが拗ねてバルキリーっぽい装備で蹂躙したり……駄目だ、沙耶の周囲も大概じゃん。

ついでに例の美少年剣士が当然の如く武蔵にロックオンされたのは言うまでもない。

「沙耶さんや立香ちゃん、たくさん冒険してるんだ！」

「そーだよー！　他にも色んな人が私達みたいに様々な世界に発生した特異点修復に動いてるんだよ！」

「……光、今の話聞いても全然驚かないのね……」

「例えると正にコミュニケーションの魔物、ですわ」

「海ちゃん風ちゃん！　沙耶さんの母様ってクレフより長生きで凄い魔術師なんだって！」

「会ってみたいなー！」と純粋に尊敬で目を輝かせている光は確かに大したものだろう。件のモルガンは王位を沙耶に譲渡してから色々とやらかしたりして結構アグレッシブな御方なのだが、それは彼女らの預かり知らぬことである。

「あれ？　沙耶さん達がいるなら私達が『魔法騎士』になる必要無くない？」

「何言ってんだ。儂達はあくまで異変を見つけて対処する為に来てるだけだぜ。お前さん達がここに呼ばれたってのはお前さん達じゃなきゃ駄目な理由があるんだろ。ちゃんと〆まで付き合ってやるから、仕方なくでも何でも引き受けた以上は最後までやりやがれ」

溜め息吐きながらもビシリと言い放った村正に海は何も言えない。彼女とてプライドもあれば仁義もあるのだ。

「村正さん、私も出会った記念に一つお願いしたいんだ！　駄目かな……？」

「別に構いやしねえよ。どっかしら場所借りて一振り打ってやらぁ」

「やったー!!」

「……光さん、もしそれを持ち帰ったとしたら相当な財産になることを理解してらっしゃるのでしょうか」

そんな村正が打った刀を、レジェンドや映像記録で見たセフィロスを真似た動きで振り回してる立香はもっととんでもない。そんな彼女のリミット技はレジェンドから教わった『八刀一閃』……他にも『一陣』『獄門』など何処かで聞いた技を次々と繰り出す立香は魔術師どころか下手なサーヴァントより強い。

そんなわけで過剰戦力な彼女らの冒険（特異点修復）は続く。

途中、専用ジョブ『片翼の天使』で見た目セフィロス化したレジェンドが「マテリアプレゼントクエストだ」などと言って立ち塞がるとか色々あったりするのだが、それはまたの機会にお話しよう。

「おうマスター、儂にはヘイストとかいうのが入ってるマテリアくれ。仕事が捗りそうだからよ」

「沙耶ー！　私はフレア使えるのがいい！」

「てゆーか何あの化け物?!　アレ絶対ザガートの比じゃないくらい強いわよね?!　え……アレで手加減どころじゃないレベルまで下げてるの……?　おかしすぎにも程があるんじゃない……？」

……プレゼンターとしてジョブチェンジしてきたレジェンドだったが、その見た目の所為で海がセフィロスを過大評価してしまうことになった。

※彼は心無い天使（達）でＨＰを１にはしてきますが、レジェンド

のように戦闘開始早々セーブデータ自体を消し飛ばしてくるようなマネはしません。

☆

そして、重要特殊特異点・米花町。

ここは定期的にメンバーを入れ替えて派遣しつつ、解決には長期を要すると見積もっておくことにした。

というのもここは戦力的にウルトラ騎空団において然程問題では無いのだが、事件……しかもその大半は一般人の誰かしらが犠牲になる殺人事件だという別の意味で魔境だからだ。ウルトラ騎空団に逸般人はいても一般人はいねーから大丈夫とか言ってはいけない。

そんなわけでレジェンドは勿論、コードのおかげで不死身なC・C・がよく行くことになるのだが、C・C・はレジェンドと一緒＋ピザ付きでないといかないのが困りもの。

しかも、特異点化してた影響で怪獣は出ないが宇宙人が出る始末。ガチでウルトラマン案件になっていた。ツルク星人とかあんなん警察だの公安だのでどうにか出来るレベルじゃない。

「で、団長がいつの間にかこの世界でも超富豪化してたのはいい。ギルガメッシュの黄金律を考えると納得だからな」

「……何で私達は『怪奇事件専門探偵事務所ウルトラQ』なんてやってるのかしら」

「この特異点の解決には探偵が一番だからだろ。特に宇宙人関係は警察とかじゃ無理案件ばかりだし、そもそも大抵は対決することになった場合、戦力不足で相手が一体だとしても全滅だって有り得るんだ」

「んにゃあああああ!!」

「そして僕が言いたいのはこれだ！　何でここにねこラーメン道がいるんだ!?」

「家でも美味しいラーメンが食べたいからよ」

「連れてきたのか!?　勝手に連れてきたのか君は!?」

カドックが疑問に思っていたのは自宅兼探偵事務所に何故ねこラーメン道がいるのかということだったが、アナスタシアの独断で連れて来られていたようである。ねこラーメン道自身は別に気にしてない……と思いたい。元気に湯切りしてるし。

「ハァ……まあまだ問題にはなってないからいいとして、あまり外を出歩かせるなよ。にゃんこはただでさえ普通の猫とは違うし目立つんだから、誰かに捕獲されたりしたら大事になるぞ」

「逆に団長が怒ってこの特異点をスパークレジェンドして全て解決！……にならないかしら」

「特異点どころかこの世界の地球自体消し飛ぶだろ！　そんな最悪な力任せの解決法なんてやらせてたまるか！」

カドックのツッコミは今日も絶好調です。他の今回のメンバーはマリューとアキレウス、矢的にオルジュナとカルナ（希望同行）、そしてライとモニカ。オルジュナがちょっと認識阻害使うだけで割と誤魔化せる面子で戦闘力もある。マリューが少し不安だが、一応軍人であるし基本彼女は技術方面の担当だ。

巨大戦は矢的こと８０というウルトラ兄弟の実力派がいるし、人間サイズでの戦闘もオルジュナを中心に……これ矢的オルジュナペアがいるだけでどうにかなりそうな気がしてきたぞ。

ライとモニカも双方サーヴァントとやり合える……というかライの方はルルーシュの頭脳とスザクの身体能力を併せ持ち、アムロの指導とレジェンドの光気まで受けた本作でもバグキャラの一角。新興事務所のウルトラＱにスキはなかった。

「ところで皆は？」

「情報収集を兼ねた地理の把握に行ったわ。米花町はあくまでも中心地、正確な特異点はこの世界全域という話だから」

「なるほど。確かに合理的かつ必要なことだな」

「それに、勝手に外には出ないだろうけどねこラーメン道を残していくわけにもいかないでしょう？」
「それはそうだが君が連れてきたんだろ……」

ふぅ……と溜め息を吐いたときに事務所のドアが開き、マリューとアキレウスに矢的・オルジュナ・カルナの光のマハーバーラタチームが帰宅。

「ただいま、カドック君にアナスタシアさん、それとねこラーメン道さん」
「にゃ！」
「安心しな。麺やスープどころかスパイスまで自作出来るように買い込んできたからよ！」
「噂に聞くカレーラーメンとやらを食べてみたくてな。言伝を頼んだとはいえ、我儘を強引に通した身として勇治の腹の一つでも満たせる食事を作ってやりたい。その為に見聞を広げさせてくれ」

何処にいてもカルナはカルナであった。あの魔性菩薩にこの一割でも献身があればと思わずにはいられない。

「ちなみに言伝は誰に……」
「偶然通り掛かったキアラだ」
「一気に不安が押し寄せてきたんだが!?　大丈夫なのかアイツで!?」

一応無事渡されて納得もしてもらえたのは僥倖だろう。それはそれとして、メンバーは状況を見て入れ替え・追加などを行ってくれると改めてレジェンドが告げに来たそうだ。自分で直接来るあたり、彼らだけに負担させるわけにはいかないという意志が伝わってくる。何故に他のモブ光神はこの姿勢を学ばないのか……。

「レジェンドさんはフォウくんを連れて散策していくと言ってたわ。

ピカチュウくんはアーシアさんと一緒だとも」
「まあ、フォウなら問題ないか……光線技撃たなければ」
「それ団長にも言えることだよな」
「むしろチーフは素の身体能力を必要以上に披露しないことを祈っておこう」
「「「「それだ！」」」」

さすがウルトラマン先生・矢的猛。かつて同じ防衛チームでもあったレジェンドについて懸念すべき点を一発で見抜いた。
それから、まだここに帰っていないライとモニカは――。

「へえ、蘭ちゃんのお父さんって探偵なんだ」
「はい！　ライさんとモニカさんは同棲されてるんですよね？」
「同棲いえば同棲だけど、事務所が自宅だから他の人も住んでるし……どうなのかしら」

重要人物の一人と会話を弾ませており――。

「子供が保護者の同伴も無しに夜中まで彷徨くなよ。この辺りは『人間採集』が行われているらしいからな」
「フォウフォーウ」
（何だこの人と猫みたいなペット……いや、猫にしては鳴き声が独特過ぎるし……新種か？　それより人間採集って）
「あのカラス野郎共め。何処の世界でもやる事とやり方は一緒とは……頭の出来はイシュタルと似たようなものか。面倒事しか起こさん点まで同じでなくてもよかろうに」
（イシュタル？　確かメソポタミア神話の女神にいたような……さすがに名前被りなだけだよな？）※本人ならぬ本神です。

――レジェンドはフォウくん共々、偶然にも身体は子供・頭脳は大

人な名探偵と邂逅していた。
そこまでなら良かったのだが……。

「ここまで世界が違えばさすがに地上でもバレないわよね！　これで私は自由！　やったー!!」
「ふざけろ駄女神テメー!!」
「って何でいるのぉぉぉ!?」
「うわあああああ!?」

……イシュタルがまたまた懲りずに日本地獄から脱走して、この米花町に出てきてしまったおかげで……その名探偵から謎の要注意人物としてレジェンドがマークされてしまった。ウルトラQの面々は問題なかったのだけが幸いだったが。
無論、イシュタルはフォウくんのギタークラッシュを脳天に受けて気絶したところをレジェンドが追ってきた鬼灯に引き渡した。壊れたフォウくんのギターの請求書も込みで。

「一十百千万十万……ご、５８０万んんん!?」
「本来ならダメージを与えるだけだったらしいが、お前の頭は中身が無い代わりにえらく頑丈だったようで見事にポッキリ折れてしまったそうだ。そういうわけで、しっかり働いて返せ駄女神。そもそも逃げなければお互いこんなことにはならなかったのに……ホントいい加減にしろよお前」

九極天の光気全開で金棒振りかざした鬼灯の姿を最後に、イシュタルは再び気を失ったとさ。

――おまけ――

「フォウ？」
「あ、可愛い！　猫かな……でも犬に見えなくもないし」
（あ、あの時の……！）
「おい蘭、そんなのホイホイ触るんじゃねえ。野良のやつだったらどんな病気持ってるか分かったもんじゃ……」
「マダオサケヒカエロフォウ」
「……は？」
（マダオ酒控えろフォウ……!?　酒控えろはともかくマダオって……つか喋んなかったか今!?）

……迷探偵の方は散歩していたウルトラけものに嫌われたのであった。ついでにこっちも名探偵にマークされた。

「……お手」
「フォウ!!」
「痛でっ!!」

も一つおまけに名探偵は試しにお手させようとしたが、苛ついたフォウくんにバチィィィンと凄まじい音立ててビンタされ吹っ飛んだ。是非も無し。

特別企画各種
特別企画・予告編・正月お祭りバージョン!!

「あけましておめでとう!!ふはははは!!新年早々この我から直々に挨拶を貰えることをありがたく思うがいい!!」
「「「「どちら様!?」」」」
「「英雄王!?」」
「ちょっと待て金ぴか!テメェ誰に呼ばれやがった!?」
「相変わらず血の気が多いな狗!決まっておろう!本編でも特別編でもない特別企画が故の特別仕様だ!!まあどのみち我の参戦は確定事項だがな!!ふはははは!!」
「何ィィィィ!?」

新年の初っ端から姿を現したのはかの有名な英雄王ギルガメッシュ。本編でも特別編でも召喚されていない彼が何故ここにいるのかは先程の発言の通り。
では特別企画とは何か?

「貴様らが特別企画とは何なのかと気になっているのはお見通しだ!これまた特別に我と、さらに大判振る舞いで特別にもう一人が解説してやろう!」
「そういえばレジェンド様が不在なのだけど……」
「案ずるな脱げ☆プリ!師父は諸事情でこの場におらぬだけよ!そも!もう一人は師父にあらず!!」
「上半身裸の貴方に言われたくないんだけど!?」
「ふはは!いずれ見せてやろう!英雄王と最上位光神による奇跡のWキャストオフをな!今から出番が増えることを願っていた方が身のためだぞ?たとえ原作がハイスクールD×Dだろうと、もう片方のメインがウルトラシリーズかつ主人公がこちらの出身たる元祖三大

チートラマンの一人である我が師父！そしてその師父と縁ある我が出た瞬間に『ウルトラシリーズとＦａｔｅシリーズのクロスオーバー』と思われかねない程に我が視線を独占してしまうのだからな！ふはははははは!!そして！もう一人のゲストは此奴よ!!」

「地上にあってファラオに不可能なし！万物万象我が手中にあり！ファラオの中のファラオ！ファラオ・オジマンディアス!!太陽王たる余が特別に降臨してやったぞ!!」

「「「「おんなじ空気纏ってる人出たー!?」」」」

もう一人は太陽王オジマンディアス――そこ、どこぞの御大将とか言わない。テンションまんまだけど。

「驚きで言葉のレパートリーが減ってしまったか！だが赦す！余の光輝をその身に受ければそれも仕方あるまい！しかしこれで驚いていてはこの後に待ち受ける特別企画、その内容に耐えきれぬのも事実！」

「特別企画の内容……？」

「そう、特別企画！何故余と黄金の、いや究極のがゲストであるか！その理由がそこにある!!」

同じテンションで似たような性格の二人が同時に呼ばれる理由とは何か？決して『キャラ被り無くそう第一回メインキャラ決定戦』とかではないので御安心頂きたい。

「貴様らこの話が投稿されるだろう時に行われているアンケートを知っているな？」
「えーと……見たいエピソード？」
「そう！キャメロット、バビロニア、怪獣総進撃、ウルトラQとその他から選ぶそれだ！当然バビロニアに入れたであろう？」
「余が活躍するキャメロットに入れよ！赦す！誰が何を言ってこようとキャメロットを選んだことを余が赦す！さてアピールは一旦停止し、本題に移ってやろう。今回の特別企画！それ即ち――」
「――このアンケート選択肢のうち！キャメロット、バビロニア、怪獣総進撃！その三つの本作版エピソードの一部を予告編として流してやろうという、正にスペシャルな企画というわけだ！ふはははは!!」
「「「えええええ!?」」」
「怪獣総進撃はゴジラシリーズのそれがメインであるからいざ知らず、キャメロットとバビロニアは我や太陽のめがおらねば務まるまい！まあバビロニアの方はキャスターの我だが、クラス・ウルティメイトの我の方が派手に見えるであろう？アーチャーの我だった場合、本作的に影が薄くなって出番がカットされそうであるがな！」

クラス・ウルティメイトとは本作における英雄王ギルガメッシュのサーヴァントクラスなのだが、詳しくはいずれ本編ないし特別編で触れるので今回は割愛。
「さて時間も押していることだ！興奮冷めやらぬうちに予告編といこうではないか！」

それは、ある世界で生まれた特異点――
そこで一つの戦いがあった。

太陽王の軍勢と、獅子王の軍勢。
『祝福』により圧倒的な力を振るう獅子王の軍勢の将に追い詰められ、突如現れた強大な力を持つ正体不明の存在――それが今、太陽王の軍勢を壊滅せんとしたとき――

「何だ、あれは――」

時空より現れし銀色の巨人。そして共に現れし『侍』達。
彼らによって太陽王の軍は息を吹き返し、冷戦状態へと突入する。
そして……彼らの元へ――

「はあ？原因不明の特異点？」
「空の世界から近いみたいなんですが」
「ちょっと待って!?何か召喚サークルが――」
「フハハハハハハ!!」

太陽王が訪れし時、新たなる冒険の幕が上がる――

「まずは聖都に向かうがよい！」
「聖都……獅子王――私の別の可能性が治める場所」

ウルトラ騎空団　ＶＳ　『円卓の騎士』

「私は哀しい――」
「獣に墜ちし騎士よ！このまま罪なき人々の命を奪わんとするならば、この煉獄の赫き炎刀がお前を骨まで焼き尽くす!!」
「嫌な音色……私が調律してあげる」

「そういうわけだから私らに付き合ってもらうぜ？トリスタンお・に・い・サ・マ？」

「まさか、ガレス――!?」

「私の知っているガウェイン兄様は、こんな非道を行う人物ではありません！」

「フン！その名でこの振る舞い……まるで昔の俺の生き写しだが、それ以上にこれが正しいことだと組織レベルでやっているからタチの悪さは数段上だな！」

「私も妖精騎士としてその名を冠した身。その蛮行はここで止めさせて頂く！」

「ふぅん……君が円卓のランスロット卿か。僕も『妖精騎士』ランスロット」

「俺は白竜騎士団団長ランスロット！これ以上民達に被害を出さないためにここで食い止めさせてもらう！」

「ランスロット、だと……!?」

「モードレッド……せめて、貴女は私が討ちます」

「な……!?」

「そういえば妖精騎士にモードレッドいませんね」

「父上が二人ぃ!?」

「失礼な！私はまだ未婚です！相手はいますけど！」

「マジで!?……じゃねーよ!!何で二人もいるんだよ!!」

「「別人ですが!!」」

数多の思惑が交錯し、それぞれの信念が激突する。

「これをやると大抵は二度とやりたくな……」

「我、楽しかった。またやりたい」
「私も私もー！」
「そこのロリ龍神とあーぱー吸血鬼イイイイ!!」
「私も、もう一度――誰でもない、自分の意志で！」
「じゃあ私がマスターになってあげるわ。ジャグにもエミヤがいるわけだし」
「先輩……」
「バカな……!?ここにきて聖槍とは別の――」
「ならばあれは俺が引き受ける」
「せ……先生……!?」
「イリナ、よく見ておけ。これが――雷龍剣の最終奥義だ!!」
「随分と暴れたようだな、アルトリア」
「お前は――」
「槍の傀儡同然となったお前など我が夫が出張るまでもない。私がその生に終止符をくれてやろう」

――神聖円卓領域キャメロット――

「裁きでも祝福でも好きなだけ持ってこい。その程度で俺を消せると――本気で思ってるならな」

歪んだ『聖』は光の神の怒りを知る――

「な……なんじゃこりゃあああああ!!」

「え、これ私達月王国組(ルナ・ブリテン)もメインですか!?」
「先生の切り札！先生の切り札!!」
「おい銀色の巨人と侍って確実にアイツらじゃねえか!!」
「フハハハハハ!!気になるであろう！神聖円卓領域キャメロットを選ぶとこれが現実になるのだ!!」
「我とアルク、飛ぶの？」
「沙耶ともアイキャンフライしたい！」
「勘弁して、アルク……」
「ほう、よもやSDガンダムにも焦点を向けるとはさすがよな太陽の！そういえば太陽騎士や太陽神が出たのも『黄金神話(ゴールドサーガ)』というシリーズであったか。ふはははは!!黄金は我でサーガはウルトラマンサーガと絡んでおるな！実に見事よ！では次、つまり我だ！」

人理焼却とは関係ない特異点。
しかし、そこで起きることは――

「……あれに比べれば三女神や――ともすればティアマトさえも些末なものよな」

賢王さえも覇気を失うほど、壮絶なものであった。

「この世界、この時代のウルクに……何があった？」
「本来あるべき場所に無く、地形を変えてまであるものが突如として出現したのだ」
「ある、もの……？」
「――ルルイエ」

三女神――イシュタル、ケツァル・コアトル、そして……エレシュ

キガル。

「何でこんなところにィィィィ!?」
「くたばれビッチ邪神がァァァ!!」
「そっちと私を一緒にしないでくだサーイ!」

「何で私がそっちにも――!?」
「こっちの冥界は光神様やタイガのおかげでほわほわ温かいのだわ」
「え……?」
「協力してくれたらこちらの冥界も……」

「あれが俺達の知るルルイエであれば、ティアマト云々では済まんぞ。あそこに眠っているのは３０００万年前に超古代文明を滅ぼした『大いなる闇』――」
「たとえそうだとしても、僕達は戦います」
「――ならばこちらも然るべき戦いに向けて準備しなければなるまい」

それは幼年期の終わり、そして……絶望の始まり。

「ウルトラ騎空団の各艦、並びに光気複合型魔力結界搭載地下シェルターへ全員避難せよ！誰一人欠けることは赦さぬ！ウルクは民がいれば甦るが、その民は失えば戻らぬのだ！」
「王！ここへも闇が迫っています！急ぎ退避を！」
「ええい！一難去ってまた一難どころか、またも生か滅びかの二択を選ばされるとはふざけているにも程があるわ!!」

世界を覆い尽くす闇――潰える光。

「そんな……ダイゴさんが……」
「……覚悟を決めねばなるまい」

――奇跡は、黄金の輝きと共に――

「ふはははは!!待たせたな団員達!そして過労死デッドラインをギリギリ超えず踏み止まりし賢王たる我よ!!」
「な……あれは……!」
「あの船の艦首で腕組み高笑いしてるのは……!」

「我が師父にしてウルトラ騎空団団長ウルトラマンレジェンドの導きのままに!全次元唯一のクラス・ウルティメイト!!即ち究極英雄王ギルガメッシュ!!我が故郷ウルクの危機に新たな財を携え堂々の降臨である!!ふはははは!!」
「クラス・ウルティメイトぉ!?」
「え?師父が……え?」

――絶対魔獣戦線バビロニア――

「よもや『自分達は負けるのか』などと思ってはおらぬだろうな!?たわけ!!我が師父が場を離れれば一瞬で腑抜けるようならウルトラ騎空団には不要!!」
「諦めなければ夢は叶う、だよ?」
「まさか、お前まで……!」

絶望の中で、輝けるものたちへ――

「ああああ!!」
「おいキラとグランがおかしいぞ!?」
「究極英雄王さん！これダイゴさんメインですよね!?ティガメイン枠入りますよね!?」
「これもう僕達がダイゴさんと一つになって強大な闇に立ち向かう的な展開ですよね?」
「ふふはははは!!さてどうであろう!?答えを知りたくば我が故郷ウルクを舞台とした絶対魔獣戦線バビロニアを選ぶがよい!!」
「あっちの私もきっと満足してくれるはず……！」
「個人的にあのアバズレを師父がコテンパンに叩きのめし蹂躙してくれる事の方が愉しみであるがな！ふはははは!!」
「インド神話にも劣らぬスケールで来たな究極の！そして貴様自身は最後の最後で援軍引き連れてくる……正しくいいとこ取りか！」
「ふはは、ヒーローは遅れてやってくるのが世の常というものよ！世の常というからには絶望的状況だろうと輝き続けねばな！そう、我が如く!!そして最後!!怪獣総進撃は師父直々に予告してもらおうではないか!!」
「ヤッホー」
「「「「一人だけめっちゃ軽い上に何やってんですか最高位光神様ー!?」」」」

とある世界にある怪獣ランドと呼ばれる島――
そこで起きた事件は世界を揺るがす。

「保護していた怪獣が逃げ出した?通信や向こうの設備は?」

「それが――」

「――おい、どういうことだ？あそこに休暇で行っていたゴジラやグリーンモスラ、ゴモラまで消息不明だと？」

「正確には自分の意志でここに残っていたこの子以外の、あの島に行ったカプセル怪獣全てが」

「じぇっとん」

「ロンドン、モスクワに怪獣ランドで保護していた怪獣が！それに……パリに……！」

「ゴモちゃん……!?」

事件の発端、怪獣ランドにて邂逅するは――

「お前達の言葉は信用ならんな」

『では、仕方ありません』

「結界や防御系の類を持っている奴は急いでガスマスク代わりに展開しろ！間違ってもこの黄色いガスを吸い込むな！ち……誰でも構わん！ここの職員を一人でもいいから確保しろ!!」

怪獣達を食い止めつつ、逆転の糸口を掴むためにその世界の月へと向かうウルトラ騎空団の精鋭達。

「つまり我よ！奴らが己の身の程を知らず馬鹿正直に曝した情報の真偽！我が率いるサーヴァント機動部隊が月へと赴き直々に確かめてくれるわ!!」

「行って来るよ、マイロード」
「偶にはボクも直接動かないとね」
「おっとロマニだけじゃ不安だから私も行こうじゃないか。機械関係はお手の物さ」
「ふん！読み通りなのはこちらも同じことよ！ロマン、ダ・ヴィンチ！真空中でも問題なく呼吸可能な装備や魔術は用意出来ていような!?」
「もちろん！」
「さあて、相手方の拠点に殴り込みと行こうか！」
「ふはははは!!思い上がったな、たわけ！たかが石ころに過ぎん雑種が上から目線で我らに喧嘩を売るのがどういうことか！その身でしかと味わうがいい!!」

今、怪獣達の逆襲が始まる！

『さすがに倒さず食い止めるのは骨が折れた』
『『ハイパーゼットン先輩ごめんなさい!!』』
『ギルガメッシュじゃねえ金ぴか野郎なんざ強化されたやつもブチのめしたことあるんだよ!!』
『『『『とりあえずオメーが一番ハイパーゼットン先輩に謝んなきゃいけねーだろゴジラァァァ!!』』』』

――怪獣総進撃――

「何だ、竜種が出てくるかと思えば手品を仕込んだガラクタではないか」
「その偽りの炎！余の輝きを以て諸共消し飛ばしてくれよう！ふふは

ははははは!!」
「日本地獄も貴様らはいらんとさ。よって跡形もなく消滅させてやる。精々自分達の仕出かしたことと挑んだ相手を見誤ったこと、どちらも悔いながら消し飛ぶがいい」

――王と光神、その逆鱗に触れるべからず。

『これマジでオレ様のシリーズじゃねーか！え、つまり何？ビオランテ戦以来のオレ様主役キタコレ』
「たわけ！貴様は殆ど敵サイドよ！むしろこれは我が主役だろう！ふはははは！やはり師父は我の使い処をわかっておるな！調子に乗った輩共を蹂躙する我に期待するがいい!!」
「貴様だけではないぞ究極の！真打ちたる余はラストで誰よりも輝くのだ！」
「あの、レジェンド様は……？」
「心配するな、アーシア。俺は司令官的ポジションだから結構重要な立ち回りをすることになる」
「これはボク達科学班が活躍する時だね！よぉし頑張るぞぅ！」
「いやあ私は先代陛下のサーヴァントだからね。キャメロットならいざ知らず他の場合でも出番があるとは思ってなかったよ」

一応一通り紹介が終わったわけだが、基本的にレジェンドを除きそれぞれメインになるメンバーは違うということだ。いや王二人は各々プラス怪獣総進撃で重要なポジションだけども。

「というわけだ。まあキャメロットとバビロニアも人理焼却関係無いし、順番変えて全部やるとかそういう展開になりかねんからな本作は」
「結論・どのみち作者が地獄見る」

「メタ発言やめろォ!!」
「それはともかく……」

「「「「これからも本作をよろしくお願いします!!」」」」
「……あ、第二回サーヴァント召喚、誰にやらせるか決めないと」

特別企画・バビロニア島大座談会～まだ未登場でも関係無い～

ウルティメイ島属島・バビロニア島。
その首都たるウルクの特設会議場にて彼らは集結した――。

「我が声を聞け!!これより本作本編及び特別編の今後の展開予想をしつつ、馬鹿騒ぎ（一応交流会）を行う!!」
「「「「メタい内容な上に括弧内を口にすべき案件ー!!」」」」

「ギル？でもどこか違う。醤油ラーメンと豚骨醤油ラーメンぐらい」
「分かりにくいんだけどソレ」
「いや、そのローマすごく分かる」
「うむ、醤油（ローマ）と豚骨醤油（ローマ）はそれぞれの道を歩みし味（ローマ）である」
「逆にリクとギャスパーとロムルスしか分からねえってのもヤベーだろ」

レイトのツッコミをスルーしつつ、オーフィスの疑問に答えるはキャストリアだ。

「そう、違うよオーフィス！あれはいつものギルガメじゃなくて、言うなればギルガメッシュ・キャスター！私と同じく……自分で言ってて腹立ってきた。ギルガメと同じキャスターとか。アヴァロンチェンジ！」

お転婆が前面に出てた『アルトリア・キャスター』から「もう私はレジェンドだけの剣なので。聖剣なので」と言い切るレジェンドＬｏ

ｖｅアピールしまくりな『アルトリア・アヴァロン』の姿になるキャストリア。

「そういうわけでレジェンドやいつもの究極英雄王らは何処に行きました？賢王ギルガメッシュ」

「ぬう……その姿では安易にバカトリアと呼べぬではないか……！妙に知恵者になりおって」

「そもそもそう呼ばないで下さい」

「師父は寝て曜日、極めた我とエルキドゥは師父が作ったＤ・ホイールに跨がりライディング・デュエル中。ついでに女マーリンは知らん」

「そういやゼットの奴もいねーな」

「彼はるりふぃすさやぴーの新曲の作詞作曲編曲振り付けを考えるため収録スタジオに篭りきりらしいぞう！」

「もうあいつマジで転職したほうが本当の意味で平和守れんじゃねーの？今時そこまで出来るプロデューサーとかいねえだろ」

「さすがです、ゼットプロデューサー……！」

「え、ちょっ……オフェリアが何か熱っぽい目ぇしてんだけど……え？」

「よくよく考えたら、ゼットも無自覚にモテるタイプじゃないか？ステラ然りアーニャ然り」

「ガレスは？」

「まだわんこ枠から抜け出せてないな」

ゼット、変なところでレジェンドの影響をモロに受けていた。いいのか悪いのかは別として。

「ところで今後の展開予想って？大体読めるんだけど」

「つまり私と我が夫の幸せ結婚生活を描いた未来編ですね」

「私とその伴侶たるレジェンドの夫婦二人でいく大冒険編というわけ

だな」
「は？」

「この話投稿時点で本編どころか特別編にすら出ていない貴女が何を言います？スカサハ＝スカディ」
「むしろそこそこ登場頻度が高いのになかなか進展しないそちらの方がどうかと思うぞ？モルガン」
「むうぅぅぅ!!」

月王国（ルナ・ブリテン）のある世界にて北欧を治める女王にして女神スカサハ＝スカディ。予想外の登場である。とりあえずここでドンパチするのはやめて頂きたい。この二人が本気でぶつかったら甚大な被害が出ること間違いなし。
「待ちたまえ二人とも！ここは私の顔に免じてお互いに引いてくれないか!?」

マーリン、勇気ある行動！

「ほう？それは貴様の顔の形が変わるほど叩きのめしていいということか、マーリン」
「えっ」
「美男子ではあるのだろうが……生憎と私の好みで言えばレジェンドなのでな」
「ちょっ」

――人々はいつか、マーリンという星を探すでしょう――
ｂｙ　アルトリア・アヴァロン

「よし、マーリンの犠牲（ただの自業自得による自爆）を無駄にするな。

本格的にサブタイトル通りにいくぞ！」
「何かいくぞが逝くぞに聞こえるのは過労死した賢王だからなのかな」
「ええいそんなところにツッコむなドルオタ王！」

○その1・キャメロット編

「どうですスカディ！早速私達月王国組が活躍する話ですよ。沙耶の姉である我が娘バーヴァン・シーを始めとした面々も八面六臂の活躍が見込まれる長編。勝ちましたね。しかも我が夫は殿です」
「他にもアルトリア二人とか空の世界の同名人物とか結構見せ場あるよな」
「以前の予告編だと、少なくとも沙耶とアルク、あとオーフィスはアイキャンフライするんだよな」
「……アレの被害者、まだ増えるの……？」
「アルクと似た感じってことでぐっちゃん辺りじゃね？」
「ちょっ!?勘弁して頂戴よ!?」
「えー？いいじゃない、やろうよアーラシュフライト」
「村正ー！私達もやりたいねー！」
「いや儂ァ別に。つうか爺が飛んで誰得なんだよ」
「唯一つ確定しているのは、ゼロ＆サーガボイスの騎士にやったことのケアが不十分な結果……マーリンの印象が更に悪くなるということだ」
「「「何を今更」」」

一度くらいならマーリンも泣いていいと思う。

「ところでホームズは？今先代陛下のサーヴァントじゃん」
「それよりも『パンパカパーン』と出されるスピンクス号……だっけ？ダ・ヴィンチちゃんのアレ。アレで特攻とかしなくてもどうにかできるメンツだらけでどうしよう」

「待て待て、このメンツでも心配することはあるだろう？そう……静謐のハサンとのハプニングのお相手だ！」
「「「「それだ!!」」」」

静謐のハサンとのハプニング――分かりやすく言えば健全なＴｏＬＯＶＥるである。詳しくはＦＧＯ第一部六章。

「毒に強いの、誰かいたっけ？」
「ブラカワニコンボな流」
「ジョブチェンジさせてまで毒を引き受けさせようとしないでくださいよ!?」
「もう勇治でいいじゃん」
「何で私なんだ!?」
「ふふ……何かありましたら私がどうにかしますのでご安心くださいな。ソワカソワカ」
「「「「……」」」」

――しばらくお待ちください――

「フォウー!?フォウフォウ、キューー!!（おいいいい!?誰だよ、コイツをビースト反省室から出したの!?）」
「ピッカァー!?（まさか元・全能少女まで出てきたりしないよねー!?）」

ちょっと確認したら代わりにブチ込まれてギャン泣きしてるカーマがいた。その隣にはうるさそうに耳を塞いでる愛歌。あ、綾香が目を逸らした。

（（どーゆーことオオオオオ!?））
「いえいえ、ここまでやるならビースト編をと思いまして。しかしながらビーストⅢ編は二人だとくどいのではないかと……そういうわけで私が赴いたわけなのです。ついでに彼女は元が男神だったり

カーマだったりマーラだったりでややこしいのであちらへ」
「お呼びじゃねーんだよォォォ!!!」
「おい勇治落ち着け！イーウィヤ投げようとするな！」
「その通りなのじゃレイオニクス！イーウィヤは至高の存在なのにどうして投擲武器が如く――」
「グランド猫の一角だろ役目を果たせ!!」
「イーウィヤはグランドクラスのサーヴァントじゃなくて六龍なのじゃ～!!」

※六龍、分かりやすく言うとグランドクラス並に凄い真龍。実はワムデュス共々イーウィヤは正月特別編にて登場経験あり。ついでにガレヲンの中の人はオーフィスだったりする。はねフォウくんのこと書いたらイーウィヤがリミ化（はねイーウィヤ）した。

「何だよグランド猫って……他のメンバーは？」
「間違いなく一匹はハクだろ。何あのフニャフニャしてんのに超有能な猫」
「ロスヴァイセが機動兵器初心者だった当初はロスヴァイセよりサイバスターの操縦が上手かった謎の猫」
「ある意味飼い主より目立ってる大物猫」
「おいやめろォォォ！ロスヴァイセ凹んでんぞォォォ!?」
「ついでにハクより目立ってないフウも凹んでるぞ！確かに相方があんだけ活躍してりゃなぁ……」
「他にも夜一とか黒歌とか小猫とか、うちの騎空団猫多過ぎだろ。ダーントの部屋なんて何匹いると思ってんだ」
「あら、性欲の権化を飼うより全然宜しいと思いますけど？ね、マスター」
「コヤンスカヤに激しく同意する。反省室でおとなしくソワカしてりゃよかったものを……!!」
「おいヤベーぞアレ。レジェンドも究極英雄王もその友達もいないのにどうやってムーンブロリー止めんだよ」

「そもそもあの愉悦部部長とその保護者(愉悦部名誉顧問)が止めると思ってんのかこの現状を」

　ちなみにエルキドゥは愉悦部核弾頭。プーリンは愉悦部外部協力者という立ち位置だったりする。エルキドゥェ……。

「もういい！見た目と声だけはいいキアラはほっとけ！ついでにラッキースケベはその時決まるだろ、多分！」
「まあ、ウチで毒にやられそうな奴少ないってのもあるけどな」
「しかしマシュが再び前線か……」
「それは覚悟の上なんですが、あの股関アロンダイトなマダオ騎士を父とは呼びたくないです。空の世界のランスロットさんと交換して下さい」
「いやマシュ、それだと白竜騎士団の方のイメージがダウンしちゃうからさ……」
「そこでジークフリートさんでしょう！『こんな股関騎士を団長にしておけない。よし、返り咲きだ！』と不貞を犯す直前にマダオ騎士を騎士団から追放して――」
「さり気なく過激なんだけどこの子」
「それよかマシュの発言で妖精騎士ランスロットなメリュジーヌが色々大ダメージ受けてるぞ」
「よし行け一誠」
「え!?」←メリュ子復活
「はえーよホセ」
「だからデュエルと絡みすぎだろ今回のネタ！しかもライディングデュエルしてる奴がいるときにそのネタかよ！」
「私としては先生の切り札が見れるから別にいいんだけど」
「アレかアレなのか割と冗談抜きで獅子王と円卓組が可哀想になるアレなんだな」
「「「何その意味深な発言!?」」」
「まず粛清騎士じゃ束になって掛かっても屍の山が……いや遺体残れ

ばマシというか」
「『たば』だよな『たばね』じゃないよな」
「当たり前だ。何だその天災地獄は」
「それ束さんディスられてるの!?褒められてるの!?」

○その2・バビロニア編

「うむ！我よな！」
「え？ダイゴさん＝ティガですよね」
「私でしょ！美の女神イシュ――」
「誰が舞い戻っていいと言ったこの駄女神め。全く……レジェンド様が久々に寝て曜日を満喫しているというのに。完全消滅したくなかったらとっととパシリに戻れ」
「いーやー!!私の見せ場なのよ!?絶対魔獣戦線バビロニアはー!!」

イシュタル、鬼灯に簀巻きにされて日本地獄へ再退場。

「それよりヤベー初代様ことキングハサン、あれバビロニア編終わったら呼ばれんだろ。誰だよマスター」
「妥当なあたりだと立香とか一誠、レジェンド……いや、レジェンドはねーな。絶対別のアサシン呼ぶぞあの人」
「誰を？」
「え～と……ポカニキ？とかふーやーちゃん？……って誰？」
「後者もアレだけどそのポカニキっての、バビロニア前に呼んだら確実に大乱闘起きるぞムーチョ女神にジャガ村と」
「ジャガ村の方は単なる自業自得だろ」
「次回、賢王（巻き添えで）死す！ウルク（葬儀）スタンバイ！」
「たわけ！巻き添えで死んでたまるか！何より後半無駄に語呂がいいのが尚更腹立たしい!!」
「しかもよりによって今究極な方がライディングデュエルしてる状況だしな」

しかも本日はノリでギルガメッシュがギルフォード・ザ・ライトニングを使っているという、正に狙ったかのような状況。エルキドゥはさすがにラーの翼神竜を使ってはいないが。

「冥界下り、誰が参加するのかしら？タイガや一誠は当然参加だろうし……」

「あのどっちの女神ショーでイシュタルがこき下ろされるハメになるやつか」

「賢王の過労死先か」

「黙らっしゃい！くどいぞ貴様ら！我＝過労死で結びつけるのはやめよ！」

「そう！バビロニア編の顔といえば私、花の魔術師マーリンお兄さんが本格的に活躍し！いざというときに颯爽登場する展開じゃないか！つまり賢王×マー……はっ!?」

「「「「……」」」」

ススス……とマーリンから距離を置く一同。ある意味間違いではないが表現がまずかった。ここでマーリンをプーリンの方、つまり♀マーリンと説明しようものならプーリンが泣く＝レジェンドが身勝手の極意しちゃうパターンだ。

「……今からでも遅くはない。本作におけるバビロニアではマーリンの代わりにソロモンが労力をかけよ！」

「えええーっ!?いや確かにサーヴァントだし現場に行けるよ!?でもそれで立場変わるっていうのは違くないかな!?ほら、ボクは今リアスちゃんのサーヴァントだから！」

「我の貞操の危機だぞ!?それに今の貴様なら指をクイッとするだけで大抵の魔術はどうにかなるだろうが！」

「いや賢王ギルガメッシュ、バビロニアでのボス格は魔術どうこうのレベルじゃないんだけど」

「惑星轟でどうにかならないだろうか？」
「多少なりとも抵抗にはなるだろうが、相手の規模だけに地球への被害の方が大きくなりそうだ」
「キリショボン、キリショボン……」
（少しはまともな会話になるかと思ったがそれで台無しになったぞキリシュタリア――！）
「私には向けない熱い視線を彼に向けるのねカドック……つまり貴方も花の魔術師と同類――」
「スキあらば僕を弄ろうとするな君は!?そして同類じゃないからな！アレと同類にされたら僕は本気でグランサイファーの甲板から空の底へリアルダイブするぞ！」
「「「「そこまで!?」」」」

比較的思考が常識人なカドックは結構胃薬のお世話になっている。ちなみにウルトラ騎空団における苦労人仲間は矢的猛＝８０（同時に尊敬してる）、ウーノ（基本温厚な御意見番）、マリュー（カドックも気を遣うレベル）。他にも月ではお世話になっているヤプール、天界にもバーサル騎士ゼフィランサスなど、割と彼の交友関係は広い。

「カドック君、貴方はまだ若いのだし面倒事は私達に任せてね？割と本気で」
「そうとも。というよりマリュー、君も少しは休んだ方がいい。こういうのは体力精神力ともにすり減るからね」
「ウーノさんも現役とはいえ御身体を大事にして下さい。いざというときに身体を張るのは我々教師の役目であり、ウルトラマンとしての使命でもあります」
「むしろ三人も一緒に休んでくれ……！正直貴方達を失う方が僕にとっての絶望だ」

――ぶっちゃけ、本作における良心は彼らである。大半がボケのみか、ツッコミでも然程勢いがなく、ボケとツッコミ兼用でボケ寄りな

人物ばかり。
　ギルガメッシュとエルキドゥが呼ばれ、プーリンやキャストリアとほぼ共に行動しフォウくんにピカチュウをマスコットとして追加装備したレジェンドもボケ率が急上昇してる始末なのだから。

「絶望といえば本作のバビロニアも予告の時点で絶望感バリバリだったんだが」
「絶対アレ普通な展開ないよな」
「よく考えたら……俺、二回死にかけてる」
「タイガ!?」
「一回目はモネラマザーとの戦いだったよね？」
「いや、違う。ゴーデスと真正面から光線の撃ち合いで負けて直撃したことでそうなった。フォトンアース獲得とダ・ガーン加入で復活したけど」
「「「さすがタロウの息子、ピンチとはいえ相手のスケールがいちいちデカすぎる」」」
「あれ、何でだろ？今父さんの息子って言われてもあんまり葛藤起きないや」
（タロウ兄さんがピンチになったのってムルロアとかバードンとかそこらへんだからなあ……特に前者はある意味邪神並みにとんでもない事態引き起こしてるし）

　ちなみにムルロア登場回は別段最終回だとかそういうわけではない。つまりそんなレベルの相手がいつもの調子で現れていたということである。結論から言うと下手すりゃ今より遥かにヤベー時代だった。

「……ＭＡＣは俺とチーフ以外、全滅だった（隊長は生きてたけど）」※しかもゲンの方はそれが目の前で行われた
「「「すいませんっしたー!!」」」

○その３・怪獣総進撃編

「これはプロローグ自体は完成してるから折を見て公開されるらしい。プロローグだけに割と軽めだが、おまけが最悪の存在を呼んだみたいだな。一瞬だけの没展開だったそうだが」
「分かりやすく言うと立香とアナスタシアがぶっ壊れた」
「えっ」
「え？」
「いやこの二人が壊れたって何!?」
「大体分かった。特に前者！」
「私ー!?」
「何やったんだよマスター。儂ァ何も聞いてねーぞ」
「何もしてないよ!?」
「いや、アナスタシアと一緒にやってたろ」

※詳しくは公開時に。普通に読み進めたら割と簡単に分かる内容。

「何にせよ、この話に関してはキャメロットやバビロニアよりは早く開始するようだし。まあ、様子見だな」

○そしてその４・本編

「アスランの見せ場がミゲルやラスティに取られそうな件について」
「キラ!?」
「だって技術力ぶっ飛びすぎのウルトラ騎空団で二人に専用機与えられたら確実にアスランは影薄くなるから。ダイゴさんやゼットさんも現状主役級なわけで」
「ボクはさやぴーの活躍が楽しみで仕方ないよ。後継機乗り換え回とか絶対盛り上がるよね！」
「ストフリ登場するけどキラのじゃない……んだけど、フリーダムにも当然の如くテコ入れされてパワーアップするらしい。そりゃそう

だな」
「あとストライクの方も。ライトニングストライカーとか出す気か？」

尚、ストフリにはライが、デスティニーにモニカが搭乗予定。∞ジャスは？そもそも出るのだろうか……。

「メンデルでの戦いの後、冷戦期間中に特別編でやってる話に入ったって感じで、そこからキャメロットやバビロニアやる予定だから……ＳＥＥＤ編終盤になると――」
「一気に団員（戦力）爆増してるってわけだ」
「……途中でクルーゼやベリアルにも新型が与えられるっぽい」
「「「予想はしてたけど最悪だなオイ!!」」」」
「ちなみにＳＥＥＤ編ラストも絶望が吹き荒れるそうだ」
「インベーダーとセレブロが絡んでる時点で分かりきってることだけどな！」
「あとアスランの親父がえらいことになるらしい」
「もう既になってるだろこれ！色々キメちゃってるってこれェェェ！」

ヤバいのは敵だけでなく、実を言うと原作のままの戦力であるならば味方にも結構いたりする。

「カガリ、原作と同じストライクルージュだと間違いなく何事もなかったかのように一行だけ登場してフェードアウトとかありえるぞ。どーすんだ」
「いやほら……そこはＩＷＳＰとか、オオトリ装備とかで何とか……」
「たわけ！極めた我や師父がいる時点でその程度のアレンジなど何の意味もないと理解せよ！ヤタノカガミで全身コーティングするぐらいせねば埋もれていくぞ！」
「だったら最初からアカツキ乗っていけ!!」

「つーか究極英雄王、フェネクスとか持ち出してきそうなんだけど」
「そっちはまだＭＳだからマシだろ。レジェンドは既に後半ネオ・グランゾンでの参戦が確定してんだぞ。ゼロじゃないのにブラックホールがガチで吹き荒れるんだぞ」
「マジンガーＺＥＲＯじゃないだけマシ、とならないか？」
「対象が対象だけに、んなもんどっちもどっちなレベルだわ」

最後に・特別編

「コレはもう考えるだけ無駄だ。映画編とかまだ途中だし、サーヴァント歓迎会や過去振り返り上映、さらなるサーヴァント召喚とかもあるからフリーダム過ぎるし」
「シリアスが息してないことが多いもんな、特別編」
「マシなシリアス回って何？」
「割とシリアス、なら束とクロエが出身世界と正式に別れる話じゃね？」
「実はバレンタインネタが一番本作中損害出たかもしれないという」
「マジンガーＺＥＲＯとダブルオークアンタフルセイバー、トドメにバルバドロだもんな……」
「あれを最後にハッピーエンドへと持ってったアーシアの功績は計り知れん」
「本作で一番やべーやつら（レジェンドとマジンガーＺＥＲＯ）を慈愛で癒やして納得させられるウルトラ騎空団の最終兵器だろあの子」
「よく考えてみろ。逆に言えばあの子に何かあれば手のつけられない破滅の権化が二ついっぺんに顕現するってことだぞ」
「あのさ……何かいなかったっけ？シスター好き好き変態悪魔」
「お姉様、誰の……あっ」
「ソーナ、誰が……あっ」
「オオォォォイ!?めっちゃ不安な態度なんですけど!?」

そこで一人、手を挙げたものがいる。

……たぬきだ。

「違いますよ!?スレッタです！・スレッタ・マーキュリーです！」
「私達『水星の魔女』組は本作だと『独自設定＋ガンダムＷ　ＦＴＤ＋その他』だからかなり原作と違うのよね。私もスノーホワイト乗ってるし」
「エアリアルは先代陛下の機体だし……エランさんだけじゃないかな、ちゃんとファラクト乗ってるの。アトラスガンダムもあるけど」
「グエルの機体なんてトールギスＦよ。それにチュチュやニカもいない……まだ出てないだけかも」
「そういやベネリットグループ、本作じゃ原作とは比べ物にならない程のクズっぷり見せてたな」

※例として沙耶どころかモルガンへの縁談申込み。これは本編ＳＥＥＤ編の『宇宙と月』を参照。

「まあ、テロリスト出てきたところでこの戦力相手じゃ『負けたな』『ああ。我らじゃ太刀打ち出来んよ』で爆散、第一話にして衝撃の最終回になるだけだろ」
「何そのソードマスターヤマト劣化バージョン」
「おい最近グラブルでヤマトジョブ実装された上に使用武器が剣と刀で笑えねーよその例え」

――そして――

「ふはははは！・和気藹々として何よりだ皆の衆！・」
「ただいま～」
「いや楽しかったな今回の特異点」
「殆ど特異点修復というより長めな冒険だったけどね、マイロード。ご都合主義は時として最強、時間軸無視でやれて帰ってこれてよかっ

たよ」
「まさか新曲完成と同時に引っ張り出されるとは思わなんだでございました」
「鍛錬後のお昼寝中に連れ出されてたとは思いませんでした！」

何故かライディングデュエルとか寝て曜日とか新曲作成中だったりした面々が和風ファンタジーな衣装でご登場。何か特異点で冒険とか言ってるんですが。

「極めた我！貴様、というか貴様らいつの間に出掛けていた⁉」
「いや何、特異点反応を感知したので少しばかり師父に時間を弄ってもらい、そこへ赴いて解決してきたまでのことよ」
「「「「はあ⁉」」」」
「ホントはフォウくんとかピカチュウは連れて行こうとしたんだけどね、愉しそうにしてるとこ悪いかなと思って」
「フォー⁉（えー⁉）」
「ぴっかぁー！（行きたかったー！）」
「ゴメンなー。しかしまぁ波乱万丈だったぞ。なにせ本来いるべき主要人物がいないという特異点でな、なんと主役ポジにギル、仲間枠にエルキドゥとプーリン、特別枠に俺とゼットとガレスという感じで旅をしたわけよ」
「我が叙事詩の新たな章を飾るに相応しき大冒険であったぞ！あの天外魔境ＺＥＲＯなジパングはな！」

○番外編・天外魔境ＺＥＲＯ編（レジェンド・ギルら六名）

「我としてはヴィマーナに続く新たな財、その名も『孔雀明王』の入手が一番であったな！『天の浮き舟』も悪くはないが、やはり舟らしさに欠ける」
「アレに玉座設置して結界張って赤い雨の降る孔雀国を高笑い響かせながら空を飛ぶ孔雀明王とか敵にとってトラウマだよね」

「面倒くさいからと『天地乖離す開闢の星』で血戦の塔をそのまま消し飛ばそうとしたのは良い思い出だな。空に浮かぶ孔雀明王から放たれるエヌマとか、中でスタンバってる敵が哀れだった」
「「「「マジでそれやったの!?」」」」
「仕方ないから正当な攻略法で突破したぞ」
「まあ、ギルとレジェンドが財や秘宝を乱れ撃ちし続けて雑魚散らし、僕らが赤丸をフルボッコにするだけだったよね」
「そうだよこいつら敵に回すというバカなことしでかした時点でそうなるの分かりきってたよ」
「砂ネズミとか可愛かったですよね！」

カナエや沙耶、大反応。

「定員オーバーだからって孔雀明王で砂漠の上を飛び回るとか」
「アレ本来は孔雀国限定らしいからな」
「我らにそんなルール縛りは無用ということよ！」
「あとは水で満ちた洞窟の中……というかほぼ常に水中を歩き回ったりしたでございますな」

水・海関係者大反応。

「あの体験は中々出来ないよね」
「調子に乗って歩くどころか面白可笑しく遊泳しながら進んだっけ。敵が出なくてやりたい放題してたな～」
「あとは次女を食べる長女な化けオバサンとか！」
「「「「!?」」」」
「最終的に合体して挑んできたよねアレ」
「師父のアブソリュートレジェンドでワンパンだったがな。普通に考えれば強敵だったのであろうが、相手が悪かったと言えよう」
「合体して強くなったはずなのにワンパンで倒すとかどんだけ……」
「つーかこのマンダラの笛って俺ら持ってて意味あるんですかね？」

「砕いて捨てろそんなもん。あの共食いオバハンが吹いた笛を間接キスしたいとでも思うのか」
「「「「アウトォォォォォ!!」」」」

※この後、マンダラの笛はすぐエルキドゥがにこやかに爆砕しました。ちなみに彼らがこれを吹いた場合、何処からともなく美形がやってきて女性になってから何処へともなく去っていくというわけの分からん演出が起こります。単なる演出なので特に意味はありません。

「犬神国では案の定ギルとレジェンドの黄金律が猛威を奮ったね」
「金も砂金も大量に換金しまくって、換金所の職員が総泣きしたら大虎町自体買い取るというとんでもないスケールで買収。犬神国を治めていた地獄の隊長・金銀の度肝を抜き、しかも敵の居城・黄金城をそのままぶん取るという前代未聞の事態を引き起こしたし」
「あんなマスコット力もないサイボーグ二足歩行な虎にあの城は勿体無い」
「うむ、そういうわけでアレは我達が頂いた。しかしゴールドシルバーなるポンコツは要らん。故に粉砕よ」
「「「「地獄の隊長って連中よりよっぽど酷い事してるんですがこの二人ー!!」」」」
「しかしマ・ジンの操縦は楽しかったでありますな!」
「マスター、物凄く輝いてました!」
「スーパーマネキングⅢとやらを一方的にフルボッコ。可変機乗りらしいアクロバティックな戦法で悉く相手の意表を突いてノーダメージクリアという偉業を達成してたもんな、お前」
「ますますもってお前ウルトラ戦士として以外の能力に磨きかかってんじゃねーか」

マ・ジンは埴輪っぽい巨大ロボ、同じくスーパーマネキングⅢは招き猫っぽい巨大ロボである。何で和風ファンタジーにそんなものが出てくるのかとツッコんではいけない。

「龍王国ではニニギと遂に戦ったけど、アグニの剣が使い物にならないって砕かれたら乖離剣抜いちゃったもんね、ギル」
「一撃必殺の武器取り出されてニニギの奴本気で焦りだしたのは笑ったわ」
「何かラスボスっぽいやつをワンパンしようとしてたんですけどこの究極英雄王」
「ハ、地獄の王であろうが元神だろうが知ったことか。我の前にそんな称号を持ち出して立ち塞がった時点で排斥すべき存在と断定されるのは自明の理というものであろう」
「そういやギルガメッシュ、基本神嫌いで王としてのプライドも高いから一番地雷踏みまくりの奴なんだよなソイツ……」
「レジェンド様とかサーガ様、スペリオルドラゴン様のような光神かつ人格者が例外なだけなのよね……」

逆にその三光神はギルガメッシュやエルキドゥの推しだったりする。

「そっから渋々引き下がって浮き舟の鏡を取りにゲンブ城まで行って、そこから闇の大穴の『暗黒の海』に向かい天の浮き舟で高天原へ昇ったんだよね」
「それでそれで!?あー私も行きたかったあ！」
「物凄く映像付きで見たいなその叙事詩を！」
「ふはははは！案ずるな立香にキリシュタリア！後で我ら完全監修の元、全編を映像付きでウルティメイ島・バビロニア島限定公開してくれる！」
「やったー!!」
「で、話を戻すと火の神アグニってば天の岩戸に引きこもってたんだよね。それでマイロードとギルガメッシュがブチ切れちゃって」
「「「「あー……」」」」

片や、【エリア】全てを統括する最高位光神。片や、神から人を独立させた英雄王（神嫌い）。そんな二人がアグニの振る舞いを見て穏便にというのが土台無理な話である。

「腹立つし面倒くさいからって天の岩戸ごとニニギに落としてやろうとか言い出してさ」

「「「それ規模の小さいアクシズ落としじゃねーかァァァァァ!!」」」

「神から独立し、ニニギも倒せる。完璧だろ」

「うむ。周辺に連中以外誰もいなかったからな。被害も少なく済むというのに何の問題がある？」

「さすがに俺達も止めたでございますよ！……後始末が大変なので」

「違うだろ！もっと根本的な部分から！」

「え？何処がですか？」

（あのガレスまで……余程苛立ってたんですね）

「仕方ないから高天原の村を襲ってる連中を三手に別れて蹂躙しに行ったんだ」

ギルガメッシュとエルキドゥ、レジェンドとプーリン、ゼットとガレスの３ペア。

「漏れなく襲ってた三体とも叩き潰したよ♪」

「ゼットとガレスのペアが一番安心――」

「ガエンとやらの頭と図体に風穴を開けてたなお前ら」

「「頑張りました」」

「――じゃなかったー!!主に敵が!!」

「エルキドゥに雁字搦めに捕縛されてギルにバビられるよかマシな気がするが」

「プーリンから魔術拘束を受け師父にサンドバッグとして殴られ続けるよりマシであろう」

「「「「どっちもどっちだよ!!（タチ悪い的な意味で）」」」」

「して、こともあろうにそこまでやってやったにも関わらず！我に試練を与えるなどとほざき『天のはざま』に放り込みおったのだ！あの引きこもり火の神はな！」
「尤も、見守れとか言っていたのを無視して俺ら五人合流して試練を軽く突破してやったが」
「おかげで入手した武器がコレよ！最後はニニギを封印するために手放さなければならぬかと思ったが、そこは師父のデタラメパワーでどうにかしてしまったのでそのままこうして我らが財として手にしたままというわけだ！ふはははははー!!」

○ギルガメッシュの剣
○プロトマーリンの玉
○エルキドゥの鏡
○レジェンドの刀
○ゼットの弓
○ガレスの槍
以上の六つの専用武器、彼らがかの特異点で得た財の中でも一際輝く逸品だ。

「我が手にした我のために生まれ変わりし我の名を冠した剣！即ちギルガメッシュの剣！正しく我が振るうに相応しき剣であろう！」
「いいなあ……自分達の名前が入った武器か」
「それだけではないぞ？かくいう我は奥義を会得し、巻物を手に入れ！ついでに各地の財宝も我が手中に収め帰還したということよ！ふはははは!!」
「奥義!?奥義とは何ですか英雄王!?」
「ジパング各地で仙人共と時に打ち合い、時に金を恵み！」
「「「「いや仙人に金を恵むってどんな状況!?」」」」
「そして最後には地獄の軍団を名乗る雑種共の中で唯一我が認めし男……闇の剣を振るいし己の信念のもと我らの前に立ち塞がりし剣士、シラヌイより託された奥義！即ち必殺剣の数々よ！火炎斬りに始ま

り、先のシラヌイより託された究極の必殺剣・竜神斬りまで計六種類の奥義を我は会得した！」
「ホント慢心無くなって、どんだけだれおまなんだよ金ぴか」
「サーヴァントは成長しない？たわけ！本作は独自設定が膨大すぎるのだからサーヴァントとて成長するのだ！」
「ハッ!?ならば私のこの体型も!?」
「いやそこはそのままの方が我としては好ましいのだが――」
「エクスカリバーしますよ英雄王!!」
「ウルティメイトカリバーンしますよギルガメ」
「サラリと便乗するでないわバカトリア！」

ここで、皆の先生ナイチンゲールからレジェンドやギルガメッシュへ一言。

「とりあえず帰って来たらうがい手洗いです、団長」
「おおう、ならついでにひとっ風呂浴びてくるわ」
「それがいいでしょう。英雄王らもそうして下さい。汚れも疲れも洗い流すのが一番ですよ」
「婦長に言われたら仕方ないよね。じゃあ皆、また後で」
「久々にハイテクシャワーいきますか！」
「向こうは温泉とかばかりだったから丁度恋しかったところです！」
「王専用の大浴場で久々にざぶーんといかせてもらうとするか！ふはははは！」

一通り馬鹿騒ぎしてレジェンド一行退場。彼らはこの後、大浴場で屋外の屋根付き大浴場にて寿司を頂きながら一杯やるという贅沢を堪能し、そのまま就寝。
なお当然の如くフォウやピカチュウも後を追い、何故か入浴時には男がレジェンド一人に対し、プーリン……はまあよしとしてオーフィスにアーシアにキャストリア、ルリアとアマリとアズ、更にモルガンやスカディ、極めつけはお姉ちゃんモードのジャンヌや恥ずかしげな

朱乃に対してタオルなど不要とばかりにすっぽんぽんで堂々としてるノッブまでもが混浴状態で入ってきたという。

「来てみて思ったが一体どれだけレベルアップしておるのだこのウルクは!?」
「ふはははは!これが究極英雄王たる我が治めし空のウルクよ!住民達は皆短期間でウルクの民として成長を遂げている!賢き我よ、過労死などしてシドゥリに迷惑をかけぬよう、精々この大浴場で疲れを取り、風呂上がりにはマッサージチェアに揺られながらコーヒー牛乳を頂くがよいわ!」
「アレヤバいよね。絶対寝ちゃうもん」
「うむ。間違いなく賢き我にとって『こうかはばつぐんだ!』になるであろう」

結局、座談会の最後はぐだぐだに終わるのであった。

「あ、次回の特別編ではプロモーションビデオ作るんで（予定）サーヴァント持ちのマスターは全員集合でございますよ」←制作プロデューサー・ゼット
「「「「はい!?」」」」

特別企画・どうなる!?　本作の『ＳＥＥＤ　ＦＲＥＥＤＯＭ』

――ウルトラ騎空団及び関係者で、別の【エリア】におけるキラ達の活躍を映像化した『劇場版　機動戦士ガンダムＳＥＥＤ　ＦＲＥＥＤＯＭ』……それを視聴した。

これは、それを観た彼らの感想である。

☆

「これはあれだな。

確かに自由（フリーダム）な映画だった!!」

「うむ、正にそれよな。我が出ても不思議ではない」

「実際に出てはいないけどね？　仮に出たとしても納得してしまうというか」

「私が過激でしたわ！」

「うん、色々とね」

「僕は不満でした」

「え？　だってキラ主役……」

「ダイゴさんもグラン君も出てないじゃないですか!!　ティガ＋トリガー＋フリーダムが揃ってガンダムＳＥＥＤなんですよ!?」

「いや違うから！　年代バラバラだし、そもそもウルトラマンとガンダムって作品カテゴリどころか特撮とアニメって垣根の違いもあるから！」

「何言ってるんです！　かつてアバレンジャーとアニメの釣りバカ日誌がコラボした実績があることを知らないんですか!?」

「懐かしいネタ持ってきたなオイ!!」
「ていうか三つって意味でならフリーダム・ジャスティス・デスティニーじゃねーの？」
「フリーダムは僕として、本作じゃデスティニーはモニカさんでストライクフリーダムがライさんだからその括りに入らないんですよ。というより、アスランも括りに入らないので」
「えっ」
「「「はい？」」」」
「レジェンドさんが基本ギルガメッシュさんとエルキドゥさん、ノアさんとキングさん、サーガさんとスペリオルドラゴンさんのパターンが主であるように、僕の場合はさっきのパターンと……」
「あ、キラ＋ラクス＋燕か。仲良いもんなー」
「はい！」
「俺は⁉」
「やだなぁアスラン。君にはこれからトライアングラー以上に修羅場が増えるんだから三つ括りに混ざらなくても大丈夫だよ」←素晴らしいキラキラスマイル
「ちょっと待ったぁ！」
「キャストリアさん⁉　もしや今の俺の扱いに疑問を――」
「本作の躍動トリオである私・レジェンド・オベロンの組み合わせを忘れてるよ、キラ！」
「あ、すみません！　中々三人揃ってるところが無かったので……」
「持ってなかったー!!」
「え、何アスランどうしたの？」
「気にするなバカトリア。こやつが走り出す理由なぞ下らなすぎて気にする価値もない」
「イザークと同じ声で言わないでくれ究極英雄王！」

○アスランといえば……。

「ねぇ、アスラン……」←種割れキラ

「少し話をしようか」←テイガ（ダイゴ）ダーク
「主に拳でな」←ウズミさん
「ちょおおおお!?」
「あのメンツに関わりあるの一人しかいないよな」
「キサカさんも入ってておかしくないぞ」
「まあ、アレだ」
「「逆に出れなかったあっちの俺らは正解だったかもってことで」」←ミゲル＆ラスティ
「だからこそ助けてくれ二人とも!?」
「大丈夫だよ、アスラン。『闇堕ちを治すにはとりあえず殴れ』だからね」
「そういや別の【エリア】のタイガも殴られて闇堕ちから元に戻ったとかなんとか」
「えっ」
「そ……そんなことしなくても、暴走を口付けで止めた戦国御伽草子とかいうのの劇場版もあったのだわ！　確か！」
「なるほど！　じゃあタイガに何かあったら私とエレちゃんのダブルキッスで！」
「だから俺の方に救いはないのか!?」
「あれはアスランが悪い」
「バズーカ撃たれないだけマシと思え」

○あの展開、本作で再現は？

「うん、絶対無理」
「レジェンド様きっぱり言い過ぎィ!!」
「そもそも現時点でウルトラ騎空団があの相手側に圧倒されるビジョンがまるで見えないというか」
「初戦で全滅させてしまい劇場放映時間の尺が約３０分程度に収まってしまうかもしれない」
「放映時間にまで影響すんの!?」

「やり口考えたら……ねぇ？」
「そもそも本作のコズミック・イラ、魔境すぎてあの相手メンバー生き残れるのか……？　年代的にあと四年だし、サザエさん時空的な感じでキラ達も本作じゃＳＥＥＤ時点でＳＥＥＤ　ＦＲＥＥＤＯＭ以上の戦闘力とメンタルと経験持ちだからあんな戦い方通用せんぞ」
「そこはホラ、ルシファーとかトレギアとかのテコ入れ……」
「あの『終末カモン！』な連中があれらに手を貸すとでも？」
「……ないな、うん。しかも本作ではクルーゼが終末グループ入り確定だし」
「多分エンペラ星人やアブソリューティアンも味方しないだろアレ。詰んだな」
「何より根本的な部分で……」
「「「「？」」」」
「本作ゼットのメインヒロインなステラとか、原作じゃ死んでるメンバーが生存確定してる時点で何かと辻褄が合わなくなるんだよ」
「「「「レジェンド様の言う通りでした――！」」」」
「つまり結論は？」

①『ＦＲＥＥＤＯＭ』はおろか『ＤＥＳＴＩＮＹ』にも行かず、独自路線『機動戦士ガンダムＳＥＥＤ　ＵＬＴＲＡ』（仮）ルート。

「まずロドニアのラボが原作より早く破棄（というか壊滅）されるからそこでも誤差出るし、予定ではアウルやスティングその他多数も救出されることになってる。同行するのは今のところステラだけだがな。よってあの二人が何かしら絡む場面もおかしくなるわけで」
「そういやシンの家族が死なないってことで、シンは無理してザフトに入る理由もない」
「何よりもう殆どバレてんじゃん、シンの本作での扱い！」
「なんせ元祖がいるからな。なあ、アスカ？」
「ハッ！　もしかして僕のモデルはダイゴさんで、シン君がアスカさんだとか!?」

「放送年的にそう思えなくないのがアレだよな……」

②劇場版新機体は登場を検討中。

「でもなー……アレらが出てきても束さんのアストラナガンやレジェくんのネオ・グランゾンなら瞬殺なんだよね。比較対象がおかしいだけな気もするけどさ」
「そもそもの話、さっきキラのことでも触れたが本作じゃＳＥＥＤ時点でストフリが完成してライが乗ってて、デスティニーにモニカが乗ってるから正直四年後どんなバケモンが自軍にいるか分かったもんじゃないし」
「何よりシンはＭＳに乗るのかとか、そこらへんも課題になるんだよねぇ」
「結局ウルトラ騎空団が絡むことで技術レベルが爆上がりして、本作ＳＥＥＤは現時点でも原作ＤＥＳＴＩＮＹどころかＦＲＥＥＤＯＭより進んでるんだよな」
「例えるならローエングリン砲台。アレを真正面から簡単に消し飛ばせる機体どころか人員、ウルトラ騎空団にどんだけいると思ってんだ」

③劇場版新キャラは現状登場の目処立たず。

「……あいつらの四年前を想像して書くとか無茶ぶりもいいトコだろ。二年前があって更にそこから遡るんだぞ？」
「あの束ボイスはレジェンド様に差し出せば美味しく頂かれてヒロイン化いけんじゃね？」
「ふざけんな断じてお断りだお前がどうにかしろスケベ総督」
「ノンブレスで言い切った!?　そんなに嫌なのか!?」
「親衛隊連中は敵味方どちらにするにせよ確実に埋もれるぞ。味方は勿論、敵でもあの発禁天司やＤＧ細胞のメダル作った奴、進化進化言ってる奴なんて具合にボスクラス以上はヤベーやつだらけなんだ

よ」
「もっと言うとキャメロット編で出てくるバスターゴリラや獅子王、バビロニア編全編通して出てくる敵とかＦＧＯ原作だけ見てもあいつらが対処出来るとは思えん。ついでにもう出てるだろ、アメノミハシラに」
「……うん、無理だわ」

【最終結論・ＳＥＥＤ時点でもうＦＲＥＥＤＯＭ（ブッ飛んでる）ということで不可能！】

「さらばフリーダム」
「さらばウルトラマンみたいな言い方すんなよ!?　運命自由ルートが無くなるだけでフリーダムが出なくなるわけじゃあるまいし！　それはそうとデュランダル議長はともかくジブリールとか気付いたら日本地獄にいそうなんだが」
「それより気になったんだけどさ」

○体育座りして待ってる桂小太郎とエリザベス。『ＳＥＥＤ　ＦＲＥＥＤＯＭの出演、ずっとスタンバってました』のプラカード。

「知るかァァァァァ!!」
「キラ、誰だアレ!?」
「アスランの闇だよ」
「何だって……!?」
「何信じてんだバカかお前！　いやアスランがバカなのはともかく何で【エリア】跨いでこっちでスタンバってんだよオメーは!?　こんなところでスタンバってててもオファーなんて来るわけ無いだろーが!!」
「そう言わないでくれサッキー竹田殿。待ちに待った収録の為に頑侍まで用意していたんだぞ！」

「マニアックな役で呼ぶなってか今時知ってる人いるのかＧジェネＺＥＲＯで森川さんがサッキー竹田のＣＶやってたこと!!　つーか頑侍まで持ち出したんかい!!　……ん？」

○『ＳＥＥＤ　ＦＲＥＥＤＯＭの出演、マルディクト用意してスタンバってました』のプラカードと共に体育座りしてるノア。

「ガンダムどころかＭＳですらないだろーがァァァ!!制作会社まで違うだろ何してんだお前バカかバカなのか知ってたけどバカだなお前超ド級のバカだよつーか第一にウルトラマンだろオメーはよう!!
そこのバカが【レジェンドエリア】いたのお前が原因か!!」
「待てアブドル！　本当は神化したヤルダバオトでスタンバっていようとしたのを我慢したんだぞ私は！」
「誰がアブドルだ！　オットーとか呼ばれてもアレだけどな！　ってかさっきから言ってるがそれＭＳじゃねーだろ修羅神だろしかも超級の！　そして散々仕事押し付けまくってる相手の名前をわざとなのか偶然なのか知らんが間違える奴がいるかこの無責任光神がァァァァァ!!」
「ぐはあああああ!!」

※桂・エリザベス・ノア強制送還。

「最後に本作のこれからの展開で気になる点をピックアップしておこうと思う」
「出血大サービスだな、師父よ」

○レイ・ザ・バレルが確実に絶望する。

「「「「えっ」」」」

「クルーゼ死亡で絶望は確実なのに何……あっ」

○特別編でイザークやニコルがウルトラ騎空団に参加しているのを確認出来る。

「これは結構分かりやすかったんじゃない？」

「これだとまあ、新機体云々も納得というか……完全に別機体に乗るかも」

○アスランにバルキリーは……。

「最重要事項だぞこれは!!」

「ヅラうるさい」

「ヅラじゃないザラだ！」

「そもそもガチガチの突撃接近戦仕様なバルキリーなんて無いでしょ」

「ジャスティスに変形機構でも付けとけ」

「それもうイモータルジャスティスじゃん！」

「こういうことになるから劇場版より技術進んでるってことなのね……」

○キラのフリーダムは強化されるのか？

「アンケートするけど正統派強化されるぞ」

「やった！」

「ストフリとは別路線でいくから、今のところファンネルとかドラグーンの装備予定は無いが」

「あ、別にそれは気にしないです」

「このキラの物分かりの良さに対してアスランのしつこさよ……」
「イザークなら分かるけど」
「どういう意味だ!?」

○他のＤＥＳＴＩＮＹのキャラは出るの？

「出るぞ。全員じゃないがな」
「少なくともシンルナは外せんということらしい」
「つまりメイリンも出ること確定。頑張れアスラン」
「これでレジェンド様や一誠、勇治と同じだぞ」

○レジェンド→言わずもがなハーレムと不憫は直結する。
○一誠→リアスとメリュ子の言い合いのとばっちりとセイバーアルトリアによるお仕置きエクスカリバー。目立つのはこの三人だがイリナとかレイヴェルとかもいるしまだ増える可能性大。レジェンドと同じルートになりつつある。
○勇治→然程不憫ではないが、殺生院キアラという三人の中でも特大の問題児を抱え毎日下ネタと戦うハメになっている。主にコヤンスカヤが防壁になっているが、彼女がいなければ今頃精神的にやられていた。
○アスラン（ＮＥＷ！）→レジェンドや一誠のような主人公補正＋αが無く、勇治のコヤンスカヤのような防波堤もいない上に彼のメインヒロインたるカガリが攻め攻めタイプなので、どのタイプのヒロインが増えても修羅場待った無し。

「「ようこそ此方側へ」」
「うわあああああ!!」
「男としては喜んでもいいと思うけど」
「ついでに修羅場のない勝ち組も載せておこうか」

○ゼット→本人が基本アホの子＋何事も一生懸命、ステラとガレス

がわんこ系、アーニャがちょっぴり嫉妬するけど大人しめ、オフェリアがお姉さん系と現状問題無い面子。今後のこともあるため絶対とは言い切れないが、ラッキースケベ等とは無縁で正統派ヒーローハーレムを構築した勝ち組のトップ。

○タイガ→ジータとエレシュキガルが仲良しで本作一番の安心トリオ。しかもウルトラの父と母、更にタロウも公認。正月特別編ではエレちゃん冥界でのんびり。

○キラ→原作に比べて本人が爆発的に成長し、ラクスと燕（後者はまだそれっぽい、というレベルだが）の両手に花を実現させた勝ち組。シミュレーターとはいえ燕の開発した専用バルキリーに乗り、ラクスの歌を受けることでパワーアップしてプロトデビルン・ゲペルニッチの本体を圧倒するという偉業を成し遂げた。

「こうしてみると本作じゃゼット以外のハーレム達成者ろくな目にあってないな。ライザー含めて」

「「「「そういえばあいつもそうだっけ」」」」

「まあ、カナエに数回斬られてぶっ飛ばされたぐらいしか今のところ印象に残ってないしなぁ……今後バーン絡みで盛り上がってくるだろうけど」

「ウルトラ騎空団はオーブ集結後、アークエンジェルがアラスカへ出航するタイミングで空の世界行き、いよいよ『どうして空は蒼いのか』だろ。新たなスズケンボイスが敵で出る上に新生暗黒四天王と最初の激突……オイ、資料見たけどＦＲＥＥＤＯＭの敵よりヤベーのしかいねーぞ本作の暗黒四天王」

「どうすんだコレ……まだカルミラや残り二体の闇の巨人に加えてトリガーダークも控えてんだぞ、空の世界だけで」

「……こっちのキラが闇堕ちするとトリガーダークになるとかそんなオチは無いよな？　トリガーダークの変身者アンケートとったし」

「今見返してみたんだけど、何気にアスランそこそこ票入ってたわ」

「アスラン、ちょっと面貸してよ」

「誰か助けてくれ！　キラがキラダーク化してるんだ!!」

「そりゃグランとも仲良いし、ティガダークもあったぐらいだから自分が闇堕ちする分には納得だろうけど、そこでアスランがトリガーダークになるかもとか言われたら種割れするわな」

「ということで本作独自のＳＥＥＤをよろしく！」
「アポロンゼストさん、強引なのは仕方ないとして何で『ヒーロー戦記もよろしく』的な挨拶で〆？」
「特別企画だからな。ぐだぐだは特別編の方へ持ち越しだ」

原作開始前
レジェンド、かの世界へと旅立つ

宇宙とは無数に存在する。平行世界や過去、未来なども含めれば数えるのが馬鹿らしくなるほどに。
実はこれらには更に明確な【エリア】が存在する。
これは一見すると平行世界と大して変わらない。
明確な違いは《たとえ何らかの理由によって平行世界への転移や、もしくは転生などが起こっても元々の出身【エリア】外へは決して行けない》というものである。
つまり転移や転生にもある種の超えられない壁があると考えてもらえばいい。
……そう、特別な存在たちを除いて。
彼らは『光の三超神』と呼ばれ、遙か太古より平行世界を含む全宇宙・全次元を護り続ける存在と伝えられており、その力は神から見ても想像を絶すると言われている。
そしてもう一つ、共通しているのは彼らがある同じ名を持っている事が挙げられる。
『ウルトラマン』という名を……

どの【エリア】にも属さない宇宙『ゴッドスペース』。
規模も小さく各種の星も少ないのはどこにも属さないからなのかは不明だが、その中の一つの星である『惑星ジェネシス』……通称『光神の星』と呼ばれる星。
そこは神々が住まう星とされているが、実際はある種の集合場所もしくは情報交換の場として使われており、どちらかと言うと純粋に一拠点として見方が正しい。

その惑星ジェネシスの中央部、光の結晶で出来た巨大建造物の一室……大会議室らしき場所にて、あるものがいた。
巨人と呼べる体躯にグレーを中心とした体色、胸の中央にある淡いエメラルドグリーンに輝く結晶など明らかに人間のそれとは違う外見を持った、神秘の体現とも呼べる存在。

「……また、この手の厄介事か」

その存在は書類に纏められた内容を確認すると、自身の他に誰もいない会議の場で一人呟いた。

「キングやノアの【エリア】ではこういった問題は殆ど発生しない。大抵は俺の管轄で起きる。一度本格的に指導し直した方が良いかもしれん」

はあ……と嘆息しながら書類を置くと同時に扉が開き、新たに二名が入室して来た。
一人は王冠のような頭部や髭を持ち、ウルトラマントと呼ばれる外套を翻した『ウルトラマンキング』。
一人は体全体が銀色に輝き、背中にノアイージスという伸縮自在の翼状器官を持つ『ウルトラマンノア』。
そして最後の一人、先程から書類片手に悩んでいたのが本作の主役『ウルトラマンレジェンド』。
この三人こそ光の三超神と呼ばれる存在である。

「相変わらず早いな、レジェンド」
「……あまり顔色が良くない。どうした？
銀色だぞ」
「キングはともかくノア、お前は全身銀色だろ」
「友人へのユーモアの効いたジョークというやつだ。あと、エナジー

コアの部分は赤いぞ」
「知っているぞノア、レジェンド。このあとノアはペンギンのような宇宙生物を「ノアは何時から攘夷志士になったんだ？」長髪の代わりにノアイージスで問題ないだろう」
「問題だらけだ。何コレ前半のシリアスがものの見事に吹っ飛んだんだけど。ノリが銀魂になってるぞ」
「ギャグ面ではこういうノリで行くそうだ。気にするな、声の方で似た人物が多数いるからな」
「ダイレクトに表現しないだけマシなレベルだが色々メタいんだよ！」
「メタい＝メタル＝鋼＝銀色、つまり主役は私ウルトラマンノアだという事か！」
「オイィィィ！マジでどうしちゃったのコイツ!?」

よくわからん方向へ暴走するノアに本気で危機感を覚えたレジェンドに、キングがさらなる爆弾を投下した。

「最近自分の【エリア】のトラブルが増加してそれの解決に右往左往していた為、自身の『神使』になった元デュナミスト達とイチャつけないと荒んだ結果だな」
「何その仕事に忙殺されてるバカップルの壊れ方じみた理由!?そもそもイチャつくような性格だったか？あいつ」
「うむ、ようやく吹っ切れたようだ。やはり一夫多妻制は結果として正解だったようだ」
「結果として威厳が吹っ飛んだの間違いだろーがァァ！」

マイペースなキングと自由すぎるノア。レジェンドも割と自由な方なのだが、友人の二人が絡むと貧乏クジ引きの苦労人へとジョブチェンジするのは常だ。

「何にせよ普段は離れて別任させているとは言え、私にも『秘書』はい

る……レジェンド、お前もいい加減『巫女』をとったらどうだ」
「キングの言うとおりだ。『神使』の件で暴走しがちな私が言うのもなんだが、一番そういう者が必要なのは他でもないお前だろう」
「……」

暴走の自覚はあったのか、というツッコミはさすがに飲み込んだレジェンドだったが『巫女』に関しては自分の考えを素直に口にした。

「何らかの形で繋がりが深い者を『秘書』や『神使』に出来るお前たちと違って、俺は基本スタンドアローンで行動している。繋がりがあっても共に闘った事がある程度がほとんどだ。何より……ウルトラ族を『秘書』にしているキングはいいがノアなら理解できるだろう。本来寿命が遥かに短い者を俺たちの『眷属』とも呼べる存在にする事の意味を」
「……それは」

レジェンドやノアの、巫女や神使もしくはそれに近いものになるというのはつまり同じ時を生きる事になるという事だ。
もちろん戦いの中で命を落とす事もあるが、キングを含む三人の場合はそういった時、まず三光神である彼ら自身が力を行使するため、お付きが被害を受ける事自体がごく稀である。
そうなると懸念すべき点というのはやはり『悠久の時を生きていくうちに積み重なる精神的苦痛』に他ならない。
例えば周りの家族や友人が老衰などによってこの世を去っていく中、老いも病も受けずに自分だけが生き続けたりしたことで精神に何らかの異常をきたしてしまう事などだ。

「俺はまだ巫女を迎えようとは思わん。もし迎えるとしたら、それはその者が、その者たちが永遠に俺と共に闘い続ける事になっても構わないと…心からそう決意してくれた時だけだ。憧れや一時の感情でなっても務まるようなものではないからな」

「……そうか」
「二人が俺の身を案じて言ってくれているのは理解も感謝もしている。が、こればかりは譲歩できるものではないんでな。すまん」
「謝ることでもなかろう。それはそれとして、色々脱線したりしたが私とノアを呼んだという事はまたお前が直接問題があった世界へ向かうというのだろう？」

さすがと言うべきか、キングが話の軌道修正をしてくれた。話し始めはノアと一緒に暴走気味だったが。

「ああ、その世界は過去に何度か行った事はあるが…相当昔のことでな。さすがにその頃のままではないだろうし何よりそこは冥界やら天界やら、悪魔だ天使だ堕天使だと色々あって……」
「問題には事欠かない、ということか」
「レジェンドの話し方からすると他にもその世界の事で何かと山積みのようだな。事情はわかった」
「とはいえ【エリア】を跨ぐ関係上手助け出来るのは私とキングのみだろう」
「いや十分だ、ノア。キングもすまんな。あとはこちら側の宇宙警備隊……それから銀河遊撃隊にも頼んでおくさ」
「銀河遊撃隊……そうか、そちら側でウルトラの父が新たに設立した、ベリアルを総司令官とする特殊部隊か」

銀河遊撃隊。それはレジェンドの【エリア】にのみ存在する、宇宙警備隊から派生した少数精鋭部隊である。
ゼロとの戦いを経て己の闇を払拭し、奇跡の生還を遂げて数々の事件を解決した事で再びウルトラ戦士として認められたウルトラ大戦争（ウルティメイトウォーズ）の英雄の一人であるウルトラマンベリアルを総司令官、ベリアルを光の道に戻し、今では歳の離れた戦友として共に活躍し光の国の『若き最強戦士』と称されるウルトラマンゼロが行動隊長の座に就いており、『ニュージェネレーション』と呼ばれる新世代のウ

ルトラ戦士たちを率いて【レジェンドエリア】の平和の為に尽力しているのだ。

「これに関しては羨ましいとしか言えんな、レジェンド。お前の弟子である、そちら側のベリアルが立派なウルトラ戦士としてまた光の国で活躍しているのは」
「こちら側のジードとも仲良く親子やってるぞ。同じ部隊でな」
「キングの方のベリアルはジード……息子の手で決着がついたんだったな」
「うむ。だからこそ、レジェンドのところで親子揃って活躍しているのを聞くと感慨深いものがあるのだ」
「そういう訳で出来る限りこちらの事はこちらで対処するが、万が一の時は」
「ああ、任せておけ。いざとなれば私とキングも直接そちらに向かうからな」

唯でさえレジェンド一人でも戦力としては過剰すぎもいいところで更にノアやキングまで来ようものならとんでもない事になりそうだが。主に敵が悲惨な目になるという意味で。

かくして光の三超神の一人、ウルトラマンレジェンドはとある世界へと向かう。
その世界において新たなる戦いだけでなく、レジェンドの巫女にして生涯の伴侶となる女性たちとの出会い、そして新たな弟子たちが出来るのは彼等自身もまだ分かる筈もなかった。

〈続く〉

レジェンド、かの世界にて活動開始！

レジェンドがかつてトラブルを解決したという世界に再臨してやった事を時系列関係なく紹介していこう。

まずは……

「言い訳があるなら言ってみろ」

人間体になってすぐアーブギア（自作）を装着してどっかの神社で母子を襲っていた連中を徹底的にしばき倒した。

ズタボロになった連中を積み上げ、それに腕を組んで右足乗せて凄んでいる姿はヒーローとか光の神様とかじゃなくて悪役じゃないのかコレ。

なまじ口の部分が空いているだけ更にワルっぽく見えても仕方ない。

……あと一人を除いて意識を刈り取られてる上、なんか色々曲がっちゃいけない方向に曲がってる。言い訳どころの問題じゃなかった。

「お……おのれ……その親子は禁忌を犯した母親とその子供だぞ……！」

「ふむ…禁忌ってあれか、リアル系の青いロボットが変形してスーパーロボットになる奴。彼女たちそんな物作れたのか。凄いな」

関心した眼差しで母子を見るレジェンド。それはどこの歪みあう双子のスフィア搭載ロボだ。確かにスフィアという敵はフロンティアスペースにいたけども。

「人間の身でありながら堕天使と交わり子を成すなど……！」

「レジェンドライバァァァァ!!」

「「「「ぎゃあああああ!!!」」」」

ドオオオオオン!!
「!!??」

何が気に入らなかったのか、レジェンドはその怪しい奴（仮）を抱えて飛び上がりそいつを逆さまにしたまま地面に叩き付けた。というか上半身がめり込んでいる上、なんか赤いものが滲んでいる。

ついでに、叩き付けた地点だが他の怪しい連中が積み上げられていたところである。もれなく全員に超ダメージ。

さすがに件の母子も驚いてるが、まあ当然だ。

「結婚なんて他人に迷惑かけてなければ自由だろうが。まさか『彼女が堕天使と結婚して子供が出来たから自分たちがモテなくなって婚期を逃した』とか言うんじゃないだろうな。宗教的な事ならもう一つ言っておく。

そもそもクリスマスだの正月だの色んな国の宗教行事が忙しなく行われてるこの国に種族違いの結婚に良いも悪いもないだろーがアアア!!」

ウルトラマンレジェンド、年齢＝独身歴。嫁さん欲しいという訳でもないが、他人であれば誰が誰と結ばれようが全く気にならない。ゆえに連中の言い分なぞ以ての外だ。

決して巫女をとらないことが関係しているわけではないと思う、たぶん。

その後、連中は二度と母子に危害が加えられないよう、レジェンドによって跡形もなく葬られた。だからといって

グリッター化してゼペリオン光線はやり過ぎではなかろうか。

ティガのテーマの一つに『愛』はあるが。ダイゴとレナには娘（と息子）も居たが。少なくともアーブギア装着して生身の状態で撃って

いい技ではない。
その後、父親らしき堕天使（バラキエルとか言うらしい）が帰って？きたので面倒くさい説明させられる前にさっさと退散した。
ウルトラマンスタイルで飛んで。「シュワッチ！」の掛け声も忘れない。のっけからトラブルに遭遇して頭のネジも飛んでないか。
これが姫島一家とレジェンドの、初めての邂逅である。

☆

とりあえず駒王に仮住居を建てつつ、それと平行して買い取った海域と山間部にダイブハンガーとウルトラ警備隊秘密基地を建造し拠点を確保中のレジェンド。
ダイブハンガーの方は正式な住居として使うため、真っ先に完成させたが、仮住居と秘密基地はまだ未完成で、簡易スターゲートだけ隠すように作られている。
ちなみに、仮住居建築には駒王在住の宇宙人たちが協力してくれている。皆がかつてレジェンドに助けられ、絆を育んだ頼れる者達だ。それは何故かと言うと筆頭が……

「まさか秘密基地の方は我々の住居兼拠点としても使っていいと仰ってくれるとは。本当にありがとうございます」
「気にするな。ギブアンドテイクだ、ジェント」

七星剣の一人、メフィラス星人ジェントなのだから。
ちなみに彼は設計担当。組み立てはラッシュハンターズその他協力者によって行われている。

「レジェンドの大将！見てくれよこの出来！」
「さすがに気前良すぎだろ。俺は構わねぇけどな」
「ここをこう……よし、これなら完璧だな」

マグママスター・マグナ
ガッツガンナー・ガルム
バルタンバトラー・バレル
今や七星剣をそれぞれが一振りずつ所有するラッシュハンターズが人間サイズで満足げに仕事をしている。いくら認識阻害使ってても宇宙人がそのままの姿で建築作業してたら一般人はぶっ倒れるか逃げ出すだろう。これ仮住居じゃなかったっけ。

「よし、今日はここまでにしておこう。秘密基地の居住区やそれに伴う施設は完成させておいたから、そっちで寝泊まり出来るぞ」
「マジかよ!?仕事速過ぎだろ大将！」

レジェンドの言葉に高めのテンションで喜ぶマグナ。これだけ働けば風呂の一つも入りたいであろう心境を察したレジェンドによってウルトラ警備隊秘密基地ｉｎ宇宙人居住区は既に完成していた。
また明日、と挨拶しながらスターゲートで秘密基地へ向かっていく宇宙人たち。そして最後に転移しようとしたジェントはレジェンドに耳打ちする。

「先程から貴方を見ている子がいますよ」
「わかっている。俺の方で聞いてみるさ」
「そうですか。まあ、貴方に喧嘩売っても返り討ちどころかこの世から消し飛ぶハメになりますし、妙な事はしないと思いますが」
「たまにいるがな、そういう連中も」
「バカなんですかその人達」

バッサリ言い捨てるジェントはきっと日本地獄の鬼神様と仲良く出来ること間違いない。では、と軽く会釈するとジェントもスターゲートでワープしていく。残ったのは……

「隠れているつもりか知らんが出て来たらどうだ」

レジェンドが一声かけると建築中の仮住居の裏から一人のゴスロリ服を着た少女が現れた。

「……光の超神？」

「正確には光の三超神の一人、が正しいな」

「我、オーフィス」

「俺はレジェンド、ウルトラマンレジェンドだ。よし帰れ」

名乗っただけでいきなり帰れとは見も蓋もない。

「我、まだ何も言ってない」

「グレートレッドを倒すのを手伝えとかそんなところだろう。確かお前は無限の龍神（ウロボロス・ドラゴン）だったはずだ、俺の記憶にあるままならな」

「ん、そう。我、静寂のある次元の狭間に帰りたい」

「いや普通に帰ればいいだろう」

「グレートレッドがいる。我だけでは倒せない」

（あいつそんなに強かったか？昔こっちに来たノアの奴がライトニングノア暴発させたとき直撃して死にかけてただろ）

ライトニングノア暴発によるグレートレッド抹殺未遂、また一つノア様伝説が加わった。何したら暴発するんだ。

「何はともあれ無限と夢幻、そのバランスが崩れると次元の狭間もその影響で静寂どころかこの世界と一緒に消滅する可能性もある。相対力バランスのリンクがあるからお互いが離れて別々の異世界とかに行っても、存在さえしてれば問題はないんだがな」

「ならグレートレッドをどこかへやってほしい」

「野良犬追っ払うみたいな言い方するな。お前の対存在だろうが。断固として断る」

レジェンドに拒否されるとオーフィスはさすがに俯く。ようやく

確実な相手が現れたと思ったら頭ごなしに帰れと言われ、真っ当な理由まで付けて断られたのだ。
「……我、そうなったら帰る場所がない」
「よっぽど嫌なのか、グレートレッド」
「嫌」

ここまでダイレクトに言われてるグレートレッドが少しだけ可哀相に思えてきたレジェンド。

「禍の団（カオス・ブリゲード）も約束したのに動いてくれない。光の超神にも断られた」
（禍の団（カオス・ブリゲード）って最近俺が殲滅してる連中じゃなかったっけか。目的は派閥ごとに分かれてるが元を辿ればテロ集団でしかない。大方この娘の力目当てか何かだろうな）
ノアに続きこっちもこっちで既にやらかしてた。ちなみに英雄派のメンバーが速攻喧嘩売ってきたので手酷く返り討ちにしたら全員トラウマを抱える事態になったのは記憶に新しい。ついでになんかの槍の中にあった聖書の神の意思とやらは力の逆流を受けて消し飛んだ。

「オーフィス、ならば俺と取引しようか」
「？」
「禍の団を抜けるなら、俺がお前の帰る場所になろう」
「レジェンドが、我の帰る場所」
「ああ。オーフィスも薄々気付いてるだろうが連中はお前の力、プラス影響力ぐらいしか見ていない。グレートレッドの件なんてハナっから叶える気はないだろうさ」
所詮は寄せ集めのテロ組織だしな、とレジェンドは零す。
「静寂もいいが、バカ騒ぎも悪くないぞ。それに俺はその役目ゆえに様々な宇宙や世界を股にかけている。『冒険』もなかなかに楽しいも

のだ」
「……冒険」
「辛い事が多いほど、楽しい事もより多くなるものだぞ。長生きしてても知らない事を知った時の喜びもな」
「わかった。禍の団抜けて、レジェンドの側にいる」

割とアッサリ納得したオーフィスだった。少し考えただけで答えが出て来るあたり元々思うところがあったのだろう。

ぐうぅぅぅ～

「レジェンド、我お腹すいた」
「ならば明日に備えて飯食って寝るか。ダイブハンガーへ戻るぞ」
「ダイブハンガー？」
「この世界での俺の家だぞ。大きいし、凄いところだ」
「楽しみ」

こうして、無限の龍神（ウロボロス・ドラゴン）オーフィスはウルトラマンレジェンドの最初の家族となった。

ダイブハンガーに到着してからは中をあちこち見て回ったり、はしゃいで走り回ったら頭から壁に突っ込んでレジェンドが早速補修するハメになったり、服がゴスロリ一着しかなかったので下着も含めて製作してあげたり、どうやったのかレジェンドの部屋のロックを解除してまでベッドに潜り込んだりと初日から大波乱。

「……オーフィス、お前の部屋は教えただろう」
「うん。でも我の帰る場所はレジェンドのところ」
「百歩譲って一緒に寝るのは良しとしよう。何故作りたてのパジャマを脱ごうとする」
「我、レジェンドと寝る時何も着ない」
「よく今まで襲われなかったなというか襲っても返り討ちだろうからそれはともかくえ？何も着ないのは俺と寝る時限定ってなんだソレ

俺は男でお前は女だそして着るときあんなに手こずってたのに何でキャストオフはそんなに速いんだお前はァァァ!!?」

渾身の叫びも虚しくレジェンドはオーフィスの抱き枕にされる。しかし漸く眠りについた二人の寝顔は、あれだけトラブルが起きまくったというのに幸せな笑顔であった。

〈続く〉

レジェンド、魔女と真龍とメイドを連れてくる

姫島一家を救ったグリッター仮面（仮）の日、そしてオーフィスが家族となった日から少し経ったある日、キングからあるウルトラサインが届いた。

―『お前の惑星』に住む者たちに此度の事を伝えたところ、そちらに行きたいという者が三人いた―

「レジェンド、お出かけ？我も行く」

「まあ、ある意味お出かけで間違いないが……別にいいか。他の世界で保護し、惑星レジェンドで暮らしている者たちの中でこっちに来たいというやつがいてな。了承するにしても断るにしても、俺が言って話を聞かなければ始まらない」

惑星レジェンド―いわゆるキングが一人で住んでいるキング星と同じ、レジェンド専用の惑星と呼べるものだ。

特徴としては地球と似ているが、レジェンド以外の住人は皆レジェンドが平行世界を含む他の世界や宇宙において何らかの理由があり保護した者たちである。

もちろん怪獣超獣宇宙人、妖怪や人外に果てはロボットまで平等な立場で豊か暮らす、ある種の理想郷。

「キングから三人、という事は聞いているが心当たりは……そういえば昔暴れている赤いのと白いのを制裁しに来た時、レイブラッドの奴が大軍勢で仕掛けてきたな。全滅させたけど」

「赤いのと白いの……ドライグとアルビオン？」

「あーそんな名前だったな確か。それで、悪魔天使堕天使が散り散りになったから一緒に連れて来てた『ウルトラ六兄弟』に各陣営を保護を頼んだんだ。で、その時にはぐれていた女性の悪魔？を一人だけ保護してな。治療も兼ねて惑星レジェンドに連れて行ったんだよ。そうだ、名前は確か……グレイフィアと言ったな」

かつて起きたトラブル。この世界の戦争中に現れた『二天龍』の激突。そしてこの世界でレイオニクスを生み出そうとした究極生命体レイブラッド星人による侵攻。
前者だけでも相当なのだが、後者はそれどころの話ではない。怪獣や超獣はたった一体でも三大勢力が総力を結集して挑まなければならないというのに、そんなものが何万という大軍勢で現れたのだ。
二天龍であるドライグとアルビオンも急遽停戦して立ち向かったが、この二頭の相手が悪かった。
ドライグは、倍加攻撃を行おうとしたが暴君怪獣タイラントによって捕獲され徹底的に痛めつけられた。
アルビオンは、宇宙恐竜ゼットンの火球を半減させようとしたが一兆度を半減させても五千億度にしかならず瀕死の大火傷を負わされた。
それぞれがかつてウルトラ兄弟をも撃ち倒した程の実力を持ち、怪獣たちの中でも有名な存在。勝てる可能性がなかった訳でもないが、様々な要素が必要であり絶望的だったのだ。
そこに現れたのがこの【エリア】のウルトラ六兄弟を引き連れたウルトラマンレジェンドであり、彼らの登場によって戦局は『決した』。ウルトラ六兄弟が三大勢力を保護し、退避させながら戦闘しつつ、レジェンドはレイブラッド軍団のおよそ九割にも及ぶ相手を瞬く間に殲滅し、首魁たるレイブラッド星人に重傷を与えて撃退。
これが後の世、現在三大勢力に『レイブラッド事変』と称される大事件の顛末である。
この戦いにおいてマンとエースが天使、ゾフィーとジャックが堕天使を、そしてセブンとタロウが悪魔を保護しそれぞれが少しの間だが各陣営と親交を深めた。
一つ例を挙げると現魔王の一人、サーゼクスはタロウと友人関係になり、前述のグレイフィア双子の妹ルミナシアとの間に出来た子供であるミリキャス、そして実の妹リアスに常々タロウから直接聞いた、彼の地球での活躍を話して聞かせるらしい。リアスがオカ研の部長

になった頃もである。

「この世界出身の彼女はいいとして、他の二人は誰だ？いまいち検討がつかん」

残る二名は誰なのか悩んでいるレジェンドの隣で、オーフィスはこの間の買い物で手に入れたリュックにせっせとお菓子を詰め込んでいる。かなりの大きいサイズの物なのだがパンパンになっておりどれだけ詰め込んだのやら。

「レジェンド。我、準備出来た」

「お菓子のな」

ドヤ顔のオーフィスに対して呆れ気味に言うとレジェンドだがこればかりは仕方ない。ドラゴンという種族だからか単純にオーフィスだからなのかは知らないが、彼女はよく食べるのだ。最もどれだけ食べても体型が変わらないのはレジェンドも一緒なのだが。

☆

次元を軽々と超え、惑星レジェンドへと里帰りしたレジェンドとオーフィス（は初訪問だが）。

初めてウルトラマンとしてのレジェンドの姿を見たオーフィスの目がキラキラしていたのは中々珍しかったので良しとしよう。

ゴッドスペースにあった惑星ジェネシス同様、レジェンドが住まう中央都市である『クリスタルシティ』は光の国と同じような建造物で占められており、その中でも一際巨大な建物がこの星でのレジェンドの住居である。

ウルトラマンとしての元々のサイズを基準に建てたので、人間サイズ用の飛行リフトや各部屋への転送装置も後付で建造されており違うサイズで暮らす上でもあまり不便はない。

「お帰りなさいませ、レジェンド様」
「わざわざ出迎えに来てくれたのか。すまんな、グレイフィア」
「本来ならキング様とノア様もいらっしゃるはずだったのですが、急用が入ってしまったと」
「キングはウルトラ長老の一人としての責務もあるからな。メッセージも直接通信ではなくウルトラサインだった。ノアの方はスペースビーストが偶発的に発生でもしたか？」
「いえ、その……ノアイージス、という部位の調子が悪かったらしく、無理矢理動かしたらぎっくり翼になったのでその治療の為にと」
「何だぎっくり翼って!?」

どんな時でも話題に事欠かないノア様であった。
グレイフィアもさすがに頭が痛いようで額を抑えながら溜息を吐いている。と、オーフィスがレジェンドの肩から飛び降りてグレイフィアの乗っている飛行リフトに乗っかってきた。

「我、オーフィス。はじめまして？」

あまり挨拶した事がなかったからか、レジェンドに教わったとおりに挨拶しながらこてん、と首を傾げる様子は大変可愛らしい。

「はい、初めましてオーフィス様。グレイフィア・ルキフグスと申します」
「よし、偉いぞオーフィス。ちゃんと挨拶出来るようになったな」
一応帰る前にオーフィスの素性を知らせていたが、割とすぐ納得出来たという。まあ、普段からとんでもない人物が訪れているし、この惑星は多種族文明とも言えるものだからおかしくはないかもしれない。

「おいレジェンド、帰ってきた気配があるのにいつまで経っても奥ま

で来ないからこっちまで来てみたが……」
「ふむ、そちらが吾の同胞とも言える龍神とやらか」

奥の方から更に二人の少女が現れた。
一人は緑色の長髪でスラリとしたスタイルが目を引く少女、もう一人はフード付きのどこかファンタジーな服を纏った銀髪の少女。後者の方はどうやらフードの下に猫や犬のような耳があるようだが。
「C（シー）・C（ッー）、スカーサハ、せめて挨拶ぐらいしたらどうだ。俺はともかくオーフィスとは初対面だろう」
「挨拶など食事しながらでも出来るだろう。私はお前が帰って来るというから……昨日の昼から何も食べずに待っていたんだぞ？
お前のピザを」
「ピザをかよこの野郎」

彼女もある意味オーフィスと同じだった。

「まあ食事しながらでも良いであろう。同胞はピザに興味津々らしいからな。それに吾も食べたくなった」
「レジェンド、我もピザというの食べてみたい」

グレイフィア以外の三人に押し切られ、仕方無くピザを焼く事にしたレジェンド。人間体になりながら「そういえば人間体での名前はまだ教えてなかったな」とか考えながら調理に取り掛かるのだった。

「出来たぞグレイフィア、トリプルピザ娘」
「何だその妙な呼び方は」
「むぅ……吾はピザばかり食べているわけではないぞ」
「はむはむ……んっぐ。我、おかわり」

「「早っ!?」」
呼び方に反論するC・C・とスカーサハ。その間にオーフィスはすでに一枚平らげていた。どうやら気に入ったらしくレジェンド、グレイフィア、スカーサハがハモる程の速さでぺろりと。
「ほう……中々いい食べっぷりだ」
「ん、レジェンドがこれチーズって教えてくれた。とっぴんぐ?野菜も美味しかった。だから我、チーズと野菜たくさんのピザを所望する」
「分かってるじゃないかオーフィスとやら。おいレジェンド、私の分も合わせて二枚追加だ」
「ちょっとは家主を労れお前ら。全く……」
仕方無くまた用意に行くレジェンドは苦労人でお父さんポジションに定着しつつある。その分ストレスが爆発した時が恐ろしいが。
「レジェンド様、私もお手伝いを」
「気持ちだけ受け取っておく、グレイフィア。それに女同士の方が話も弾むだろう。今後の事も含めてな」
「……!わかりました」
一礼して三人に元へ戻って行くグレイフィアを見送り、レジェンドは再びピザ作りに突入した。
「……任せたぞ、三人共」
レジェンドの言った話とは即ち「本当にあの世界へ同行するかどうか」という事だ。かのレイブラッド事変の折、レイブラッド軍団による犠牲者は二天龍を除けば、実は魔王たちとあの世界の神、そしてその周りにいた者たちくらいだ。グレイフィアは指示を受けて魔王の

護衛をしていた為、レイブラッドの攻撃に魔王共々巻き込まれたのだ。にも関わらず重傷を負っても生存出来ていたのは僥倖という他ない。
　ほぼ戦場の中心にいたグレイフィアは向こうでは戦死扱いされているだろう。ましてやあの時からだいぶ時が経っているのだ。もはや生きているとは思われていまい。

「だから今更帰ってもどうしようもない、と」
「……はい。私自身がこちらでの生活に慣れてしまいましたから」
「難儀よな。片や身内の死を悲しみ、片や生きている事を伝えられず悩み、どちらも苦しい事に変わりは無いか」
「……？」

　C．C．にグレイフィア、スカーサハは真剣に話しているがオーフィスは持って来たお菓子を頬張りながら首を傾げている。

「何故、悩む？」
「それは向こうに帰ったとしても……」
「そこに帰らなければならない？」
「え？」
「帰る場所、自分で決められる。我も少し前まで、次元の狭間に帰りたかった」
「「……」」
「でもレジェンドが言ってくれた。レジェンドが我の帰る場所になってくれるって。だからもう、我の帰る場所はレジェンドのところ。ずっと一緒」

　かつて、帰る場所の事で色々悩んだオーフィスだから言える。自分で決めたからここに居ると。まだ一ヶ月も経たないというのに既に二人の絆が出来つつある事に三人は驚きつつも納得した。

「ふっ……本当、その通りだよ」
「思い返してみれば吾らもそうであったな」

C．C．とスカーサハこと真龍ディアドラ。今ここで暮らしている二人もそれぞれの存在する平行世界の一つからここに保護された者だった。

片や『コード』研究の為に捕らわれていたところを偶然レジェンドに救出されたC．C．。元は間違えてその世界へ送られたタチの悪い『転生者』を再度冥府へ連れ戻すか、もしくはその場で地獄に問答無用で叩き落とす目的で来たのだが、彼女をレジェンドが救出した事で転生者側の思惑から思いっきり外れるから大丈夫、とその世界を任せている神から言われたのでそのまま連れて帰ってきた。ちなみに転生者に関してはハナっから地獄にブチ込む気でいたらしい。レジェンドは外道に容赦ないのである。

片や空の世界の一つ、アイルスト王国の守護を担っていたスカーサハこと真龍ディアドラ。彼女がいた平行世界ではアイルストが災厄に見舞われ、島民のみならず魔物や動物も全てを島外へ逃がし、力尽きて島共々『空の底』へ墜ちたはずだったが彼女のみが惑星レジェンドに偶発的に転移されてきた。

そんな事もありレジェンドに治療され真龍ゆえの驚異の回復力で傷を完治させたディアドラは、スカーサハと名を変えかつて自分が加護を授けていた王家の種族『エルーン』の姿を取り生活している。真龍モードにはいつでも戻れるらしい。

なお、エルーン種族は簡単に言うとケモミミ族（たまに尻尾がある者もいる）と思ってくれればいい。あとは体温調節が苦手なのか大半の人の服装は背中部分ががん開き状態である。

「あまりにお人好しかと思えば完全に敵とみなした途端容赦がまるで無くなる。一概に温厚とか優しいとは言えんが、少なくとも一緒にいて退屈はまず無いな」
「あやつが持って来る土産話はどれも興味深いものばかりでな。そろ

そろ吾も一緒に見て回ろうかと思ってたところだ」
「……そうですね。私も私の帰るべき場所は自分で決めましょう」
「我、グレイフィアの帰る場所知りたい。レジェンドと遊びに行く」
「オーフィス様、それに関しては不要ですよ。何故なら」

グレイフィアが言いかけた時にレジェンドがピザを焼き上げて戻って来た。ヤケクソ気味にかなり作ったらしく、結構な量と種類がテーブルに置かれた。

「レパートリーと量の合わせ技だ……食い切れるものならば食ってみろ……！」
「外見と声のせいで何処ぞの分の悪い賭けが嫌いじゃないパイロットにしか見えぬ台詞だな」
「私を見くびるなよ。以前ピザ屋巡りで全店全メニュー制覇したからな」
「我、満足。いただきます」

物凄い勢いで平らげていくC．C．とオーフィスを「もうどうでもいいや」と諦めの目で見るレジェンドは、自身の隣で微笑むグレイフィアに声をかける。

「答え、決まったか」
「はい。オーフィス様、先程の言葉の続きですが」
「んむ？」
「せめて少しは飲み込まぬか。ハムスターではなくドラゴンであろうに」
スカーサハの言葉に同意しつつ、グレイフィアが出した答え。
「今の私が帰る場所はオーフィス様と同じ、レジェンド様の隣ですから」
「む。宣戦布告？」

「一夫多妻というのがありますよ」
「ならいい。みんな一緒」
「今日はもうツッコまんぞ。さすがに疲れた」

こうして新たに三人が駒王町へと来る事になった。そして帰った後、訳ありはぐれ悪魔を保護し、幼いシスター見習いをウルトラマンとして救う事になる。

〈続く〉

レジェンド、黒猫を拾う

レジェンド一家は現在活動している世界へ戻って来た。隣町で美味いピザ屋があると聞いたのを思い出したオーフィスとそれに同調したC・C・に駄々をこねられた一行はそこで食事をしてから駒王町に戻る事にした。

そして食後、駒王町に戻って最初に目にしたものは、何で今まで気付かなかったのかと思うほど目立つ

自分（ウルトラマンレジェンド）の銅像だった。しかも街のど真ん中に。

腰に握り拳の、いわゆる『ウルトラマン立ち』のポーズで堂々と。

「……え？何コレ俺全く知らなかったんだけど」

「うん、レジェンド。細部まで再現度高い」

「お膝元らしいな。こういうのまであるのか」

「ふむ。レジェンドマント、とやらは着けてないのか」

「喜ばしい反面、この像に何かあれば罰当たりな……」

呆然の一名、関心してるの三名、懸念してるの一名。

台座には『遙か太古よりこの地を見守りし光神様』と像の名前が記されている。しかも像も台座も錆や傷なども無く綺麗な状態だ。

「よーし仮住居の方はどーなったかなー出来てるといいなーああ住所駒王になってるけど正式な住居は海の上にあるからあー」

「レジェンド、何か変になってる」

「まあ公衆の目に付くところに堂々と自分の像が立っているからな。私でも恥ずかしい」

「海の上にある住処だと……!?早く向かおうぞ！」

「あ、こちらレジェンド様のメイドのグレイフィアと申します。ジェント様ですか？実はレジェンド様がご自身の像を初めて目にしてか

ら気分が優れないようで……代わりに私が進歩状況の確認を。ええ、はい……」
冷静なグレイフィアのおかげで他のメンバーが混乱したりマイペースでいてもやるべき事は出来ている。事前にグレイフィアにレジェンドが説明していた事もあるが。

☆

漸く正気に戻ったレジェンドの案内で仮住居のある場所までのんびり歩いて行く一行。基本女性ばかりなので物要りだろうと買い物を済ませながら向かっている。
そんな中でやはり気になったのは……

「ダイブハンガーという海上海底にまで届いている巨大基地！中も凄いのか！」
「ん。我、はしゃぎ過ぎて壁に頭から突っ込んだ」
「……もはや何でも有りだな。それがここでの本来の住居とは」
「ちなみに職場的なところとして文字通り山の中を改造して秘密基地もあると」

この二つの場所の話題になる。

「一時ガソリンスタンドも考えたがな」
「何で？」
「ゼアスの手助けした時にいた防衛チーム、ガソリンスタンドが秘密基地だったんだよ。個人のロッカーに立ってコスチューム装着、ガソリンスタンドの看板から戦闘機が発進したり、スタンドが浮上して戦艦の発進口が現れたりとぶっちゃけ技術力はトップクラスだったな」
「どんなガソリンスタンドだそれは」

ちなみに技術力は凄いのだが戦果はあまり良くなかったりする。

スカイシャークに至っては相手への調査不足による自爆とも言える撃墜され方だったのだが。

「ついでに二代目の、ではあるが隊長がセブンだったな。名前は変えていたみたいだが」

「……はい？セブンというとあの大戦でタロウというウルトラマンと共に悪魔勢を保護した、あの？」

「ああ、その時は黙っていてほしいと言われたが。次にあった時は……確か牧場？だったぞ」

※ちなみにセブンが防衛チームＭｙｄｅの隊長をやっていたのは本作独自の設定です。実際は中の人が同じだけなのでご注意を。

そんな話をしていると草むらから黒猫が飛び出してきた。というより飛ばされてきた、の方が正しい。

レジェンドがあまり衝撃を与えないように抱えて状態を確認すると……

「……傷だらけだがそれ以上に衰弱している。脱水症状を起こしかけているな。確か水買ってただろう。自力で飲めるか分からんがとにかく……」

「その黒猫を渡して貰おうか、人間」

黒猫の飛んできた方向と同じ草むらから黒ずくめの連中が大勢、威圧しながら現れた。ぶっちゃけ、相手が相手だけにまるで効果は無い。

「変態、たくさん出た」

『誰が変態だ小娘ェ!!!』

「動物虐待に幼女恐喝、変態よりタチが悪いな」

「集団暴行とは見下げた奴らよの。下衆め」

「駆逐決定でよろしいですね」
「おいさっきオーフィスに小娘って言ったなお前ら

ちょっと成層圏まで顔貸しな」

それはセブンの息子の名（迷）言だ。
この時点で黒猫を襲っていた理由が判明する事なく、少々お怒りのレジェンドとその家族によってフルボッコにされた変態（仮）黒ずくめ団だが、『悪魔』という事だけ分かったので空間ブチ破って直接冥界に投げ帰した（物理）。
とりあえずその場で応急処置しつつ水をやったところどうにか飲んでくれたので、グレイフィアが抱きかかえながら仮住居まで連れて行く事にする。仮住居の方では既にジェントが待っており先程の出来事を話すと

「私たちも職場として使う秘密基地側のスターゲートは本邸とは別の離れを建築して、そこに移動させました。貴方達の真の家であるダイブハンガー側のスターゲートはそのままその住居の中にありますよ。プライベートも関わりますから。それ以外は概ね要望通りです、報告は以上。
では、早いところ秘密基地の方へ行きましょうか。医療設備だけでなく他の医者も居た方がいいでしょう」

と口早に現状を報告し終えたら秘密基地側の治療室に連絡してくれた。やはりデキるハンターリーダーである。
その後、秘密基地の治療室にて怪我の治療を行い、栄養失調を補う点滴はダイブハンガーへ移動してそちらで行う事にした。さすがに大荷物をずっと持ちながらは移動し辛いし、何より食品もある。というかレジェンドがいつの間にか全部持たされてた。

☆

ダイブハンガーへ移動……というか帰って来たレジェンド一家は荷物を各保管庫に仕舞った後、とりあえずオーフィスに三人を案内してもらう事にした。何かあってもグレイフィアがいるから大丈夫だろう。オーフィス自身もここの生活に慣れてきてるし。

一人別れたレジェンドはダイブハンガーの医療スペースに向かい、そこで黒猫に点滴を施し一休みする事にした。ここ最近衝撃的な事ばかり起こって精神的にキていたからだ。

「こっちのベッドで仮眠とるか……こいつも安心仕切ってるのか寝息立ててるし、近くにいれば寝てても気付けるしな。よっと……」

黒猫の寝ているところの隣のベッドで、せめて夢の中までノアがトンデモ行動しない事を祈りながら、レジェンドは軽く眠りについた。

☆

（ん……んん……？ここ、どこにゃ？）

レジェンド一家が助けた黒猫―ＳＳ級はぐれ悪魔である黒歌は追手から逃げるのも限界になりつつあり、手痛い一撃をくらい吹っ飛んだ辺りから記憶があやふやであった。ただ、よくわからないが自分でも安心感があったので吹っ飛んだ先の流れに身を任せたのだが……

「ちょっと成層圏まで顔貸しな」

最後に聞こえた台詞が果てしなく物騒だったのは覚えている。

（成層圏って確か宇宙に近かったような……もしかしてここ宇宙だったりするにゃ!?）

不安になった黒歌は急いで体を起こすが、周りには機械や薬品などが置かれており、自分は小動物用のベッドで点滴までされていたのを理解する。

（な、なんか見た事ない機械がいっぱい……あのクソ元主の所にもこんなの無かった）

「やめろ、セブン！それは駄目だァァァ!!」

「んにゃ!?」

いきなり大声がした方を向いてみると一人の男性―もちろんレジェンド―が何やら魘されている。

「ジープに飽き足らず恐竜戦車に跨ってレオを追い掛け回すな！今度こそトラウマどころじゃなくなるぞォォォ!!」

（恐竜戦車って何!?それに跨ってるセブンって悪魔から英雄とか呼ばれた巨人じゃ……というかどんな夢見てるにゃ!?）

現在、レジェンドの夢の中ではレオがおおとりゲンのまま腕組みしたセブンの跨った恐竜戦車にジープよろしく追い回されていた。しかし、夢の中と言えどレジェンドは失念している。

自分は弟子のケンやベリアルにはそれがお遊戯にしか見えない程鬼畜な修行を行っていた事を。

黒歌は戦々恐々としながらも自分を助けてくれたのが彼（一家）と理解したのだが、置かれている立場を考えてこっそり抜け出そうとした。……が。

「どこに行こうというのかのう、黒猫よ」

「!?」

「そもそもここは海の上ぞ。何よりお主はこのダイブハンガーとやらの構造をろくに知らぬであろう」

他の三人と一緒に行ったはずのスカーサハがそこにいた。これにはさすがに黒歌も警戒したのだが、平然と首根っこを掴まれてベッドに戻された。

「何、吾もその者も別に取って食おうなどとは考えぬ。それよりもその姿のままで良いのか？」

「!?……知っていたのね」

「伊達に真龍として長生きしておらぬ。一度は力尽きたがな」

「真龍……ドラゴン!?」

「この世界の出身ではないがな。ドラゴンならもう一人おるが、今頃食堂でピザを平らげてるだろうな。あれだけ食べて飽きもせずに……余程気に入ったようだ」

ピザを食べまくるドラゴンって何だと思いつつも妖怪としての姿に戻る黒歌。スカーサハは別段驚きもせず自分もフードを脱ぐ。現れた耳に一瞬驚くが気にしない事にした。

「自己紹介がまだであったな。吾はスカーサハ。真龍としての名はディアドラだが、こちらの姿の時はスカーサハと呼ぶがよい」

「私は黒歌にゃ。その……はぐれ、悪魔」

「だからオーフィス寝ぼけてハネジロー食べようとするんじゃありませんんん!!」

「「にゃあああああ（ぬおおおおお）!?」」

また今度の夢はどんな内容なのか思いっきり叫びながら起きたレジェンドは周りを見渡してスカーサハを見つけると、漸く今までのが夢だと安堵した。

「ふう……夢ではノアが普通で良かったと思えばセブンの暴走やオーフィスのフードファイト見る事になるとは。コレ疲れ増してんじゃ

ないのか？」
「お主……そろそろ本格的に休み取らねば壊れかねんぞ」
「私もそう思うにゃ。寝てたはずなのに疲れが顔に出てるし」
「だよな……いっちょ踏ん張って一気に問題解決して暫く皆で休暇にしようか。

ところでおたく誰よ黒猫ちゃん」
「いや猫って気付いてるにゃ!?しかも今更!?」
「こやつにお主の常識は通じぬぞ。諦めて正直に話してしまえ」
「んにゃぅ……」

仕方無く観念した黒歌は自身の事を話した。自分が妖怪の猫？である事、妹の安全の為に悪魔になった事、そして約束を違えた主に怒り殺めた事、それが原因ではぐれ悪魔として追われ続けた事。
それをレジェンドとスカーサハは一字一句逃さず聞いていた。

「妹は……白音だけは何とか逃がせた。追われてるのは私、だから白音は安全なところまで連れて行って、それから私が離れれば、あとは」
「自分がどうにか逃げ切るか（ズズズ…）返り討ちにしてやれば妹は標的にならずますます自分だけを狙うだろうと（ズルズル）。あ、ヤベ調味油入れ忘れてた」
「別の料理に使えるかもしれぬぞ。後で調味油使ったレシピの検索でもしてみるか」
「いや真面目に聞いてるにゃ!?」

カップラーメン（ジードのおすすめ）食いながら。
「安心しろちゃんと聞いてるから。要するに自分がここに居ると危険だから出ていきます、探さないで下さい的なアレだろ。生憎とこちとら日々ストレスという史上最強の敵と戦ってるんだ。今更面倒が一つや二つ増えようが変わらんよ」
「だけど！」

「手っ取り早く解決するのが悪魔じゃなくなればいい、ってのがあるな。そうなれば連中がどうこう言ってきたら『女妖怪の姉妹を攫って不埒な事をしようとした奴に対して正当防衛を行った』だけだと突っぱねられる」
「まあ、最悪武力行使で突破出来るからのう、吾らは」
「で、でもどうやって……悪魔の駒（イーヴィル・ピース）は一度使われたら……「確保オオオ!!」にゃああ!?」

スカーサハに左側、レジェンドに右側をいきなり半羽交い締め状態にされ、じたばたもがく黒歌。すると突然暖かさを感じる光がレジェンドの掌から黒歌の手を介して身体の隅々まで浸透していく。

「なに……これ」
「フューチャーフォースという技だ」

フューチャーフォース。レジェンドにとって息子とも呼べる二人のウルトラマンのひとり、コスモスがフューチャーモードとなった時に使用した技で、グローカービショップと戦っていたジャスティスを自身のエネルギーを分け与えて回復させた事がある。

「本来はエネルギーを分け与える技だが、少しアレンジしてみた。ぶっちゃけるとコズミューム光線の要素を取り入れた」
「こ……こず？何？」
「とどのつまり『悪いものだけ破壊する』ってやつだ。お前と一つになっていたその駒とやらを完全分解・性質変化・さらに元素還元を行って悪魔から妖怪に戻した上で穏便に体外へ排出させたのさ。確か悪魔は羽が出せるんだったな。やってみ？」
「うん……ん……？あれ？んんんん！」

何度やっても只々力んでるだけで羽が出る気配が全くない。

「え……嘘、本当に……？悪魔じゃなくなったの？」
「だな。これで悪魔として追跡される事は無くなった。さーて後はそのバカ主（故）の悪行でも暴いて現魔王らに黒歌のはぐれ認定解除も含めて叩きつけますかね。セブンやタロウが泣くぞ本当に」
「むしろそなたの行動で泣かされる気がしないでもないが」
「そういえばスカーサハって『お主』と『そなた』ってどうやって使い分けしてるんだ？」
「む？気分次第だ」

何気なく会話してた二人に対して黒歌は暫く呆然としていたが感極まってレジェンドに泣きながら抱きついてきた。

「ありがっ……ひっぐ……ありがと……！ホントに……ありがどうぅぅぅ!!」
「気にするな。簡単に解決する問題だっただけだ」
「簡単なのはお主だからだろうな……さて、これでそなたは自由ぞ。好きなところへ行き、好きに生きるがよい」
「ぐすっ……うん……不束者ですがよろしくお願いにゃん」
「は？」
「だって助けられた恩もそうだけど……顔良し！性格良し！何か凄い住処で財力よし！不思議な力も文句無し！」
「え、何この娘いきなり力説しだしたんだけど」
「私、ずっと夢だったにゃ。強い人の子供産むって」
「オイイイイ!?なんか別のベクトルでおかしくなってんだけど!?初対面相手に何言っちゃってんのこの娘！」

その初対面相手に何かと世話焼いたのは何処の誰だ。
と、そこにさらなるウルトラダイナマイトが炸裂した。

「……レジェンドは我の夫。それは我の権利」
「聞き捨てならんな猫娘。それとオーフィス」

「……お二人共、お行儀悪いですよ」

いつの間にか食堂に居たであろう三人がいた。オーフィスとC・C・は一人一つピザの乗った皿を持ってピザ食べながらだが。まともなのはグレイフィアぐらいか。

「……」

「おいどうした、スカーサハ？」

「そなたらに、ドラゴンファイトを申し込む!!」

「スカーサハまで壊れたァァァ!?」

某ファイターよろしく指を指して決めながら高らかに勝負を申し込んでいた。

今まで一人苦しんでいた黒歌は、こうして苦しみから解き放たれ新しい家族も得た。そして後に、妹とも無事和解できるのだが……

「え!?レジェンドってあの光神様!?だったらますます……「リアタルマァァァ!!!」にゃああ!?」

とりあえず今はこのドラゴンファイト（仮）を無事やり過ごす事を考えるべきだろう。

〈続く〉

レジェンド、幼いシスター（見習い）を救う

「どうしてにゃー!!」

「黒歌、うるさい」

ダイブハンガーのＧＵＴＳ隊スペース―いわゆるチームが集合してた場所―にて黒歌の叫びとそれをバッサリ両断するオーフィス。

「うるさいと言われようと叫びたくもなるにゃ！なんで、なんでオーフィスはレジェンドの部屋に簡単に忍びこめるにゃ!?私が仙術使っても駄目だったのに!!」

仙術を何に使ってるんだお前は。

「吾もディアドラパワーを使ったがビクともしなかったな」

この娘って真龍なのに何してんの。

「いっその事あいつが開発してる特殊装備でも撃ち込んでみるかと思ったな」

思考がテロリストじみてんですけどこの魔女。

「ん、我もわからない」

ぶっちゃけ本人もよくわかってなかった。で、行き着いた結論が……

「愛の差（ドヤァ」

「それこそ私だって負けてないにゃ！そもそもオーフィスだって寝るとき恐ろしい速さで寝間着脱ぐってレジェンドが言ってたのに！」

「ふっ……まだまだだな。こういうのは全部脱ぐより見えそうで見えない辺りが興奮するらしいぞ？あまり露骨ではない方が心の琴線に触れるという訳だ」
「ならば吾はいつも通りで問題あるまい。ほれ、このとおり背中は丸出しておるがちゃんと服として着ているであろう」
「「!!」」

いや、スカーサハの今の身体のベースになったのがエルーン族だからそういう服装なだけなんだが。確かに何処ぞの高貴な姉上はどうやって着ていたのかわからない装備だったけども。

「レジェンドとグレイフィア、どこ？」
「まさか二人きりでデート!?」

疑問に思ったオーフィスが素直に口に出し、黒歌が自身を基準に予想したのだが、予想は付き合いが長い二人によって覆された。

「あの二人ならウルトラ警備隊秘密基地に行ってるぞ。なんでもその中に設置した『ハンターズギルド』で手続きがあるとかで」
「レジェンドが立て続けに特許、とかいうものを山ほど取得して生活は問題ないとはいえ吾らが自堕落になるのもいかんと言ってな」

簡単に言うが三大勢力がまともに太刀打ち出来ない怪獣、それよりもさらに巨大なプラズマ怪獣が相手になるのだが、最近一家入りした黒歌も含めて皆が皆レジェンドの元で修行も行いながら生活しているため、複数同時相手でなければ連携を取る事で対処出来る。
ちなみにC・C・は不死身とはいえ身体能力が他のメンバーほどずば抜けているわけではないので、専用のロボットを使う事になるらしい。

「しばらくはあいつもハンティングに同行すると言うし然程欲を張ら

なければ問題ないだろ。命あってのなんとやらだ」
「お主がそれを言うか……？」

最もな意見だった。ピザ要求しまくるし、不死身だし。

☆

「それでは、こちらがグレイフィアさんを含めた彼女たちのハンターライセンスカードになります。データでも管理してますので、紛失の際はすぐご連絡下さい」

秘密基地内に創設されたハンターズギルドにて、メフィラス星人ジェントからレジェンド以外の一家分のライセンスカードを受け取ったレジェンドとグレイフィア。

「ジェント様、こちらのカードだけで買い物なども全て賄えるとレジェンド様が仰っていたのですが……」
「ええ、まだまだこちらのギルドとつながりのある店や施設限定になりますがね。それでもかなりの数がありますよ。こちらが現在使用可能な場所のリストです」
「ご丁寧な配慮にお礼申し上げます」

リストアップされた書類の収まったファイルを受け取ると深々と頭を下げながら礼を言うグレイフィア。
早速中を見てみたが、確かに相当な数だ。これでまだまだとはさすが宇宙は広い。

「『ハンターリーダー』はレジェンドさんで宜しいんですよね」
「ああ。ジェントや俺はＳＳＳ（最高）ランクだしすぐに通るだろう。ギルドガードのあいつも納得するはずだ」
「彼が簡単に許可するのは貴方ぐらいですよ」

グレイフィアはサラッと聞こえた内容から『ギルドガード』という組織が気になったが恐らく何らかの形でこのハンターズギルドを守護する組織、そして二人が言っているのはそれの責任者かそれに近い人物だろうと自分で納得した。実際それで間違いない。
彼女の予想を超えるのは、その者が七星剣のジェントをして「この宇宙で最も危険な男」と言われる人物だということだったのだが。

☆

一通り手続きを済ませて「やる事が出来たから少し帰りが遅くなる」とグレイフィアを先に帰らせるとレジェンドはジェントにある確認をした。

「それで、怪獣が出たのはどこの国だ？」
「ええ……ここです。自然に恵まれ孤児院や教会などもあるようですが、場所が場所だけに現れた怪獣の特性をよりよく受けているんです」
「ここは……確かにな。で、現れたのは何だ」
「バリケーンです」
「よりによってこんな場所であいつか……！」

台風怪獣バリケーン。文字通り台風を起こし、同時に台風で発生する強風を食糧とする怪獣だ。『空飛ぶクラゲ』と表現される風貌で、体を回転させる事で台風を発生させる自然の脅威を体現した存在。
ゆえに都心部など密集地帯だけでなく、近くに山や川がある場合でも被害は甚大なものとなる。

「被害箇所が目に見える部分だけでも相当だ。倒したらそこにも対処しなければならんからな。いよいよこの世界でまた本来の姿に戻る時が来たようだ」

「周りに被害がなければ変身なさらないと？」
「倒すだけならな。この姿のまま寝てても出来る」
「その場合は貴方の方が被害拡げそうですよ。まあそれはともかくお気をつけて。貴方に何かあれば彼女たちが黙ってないでしょうし」

わかってる、と軽く手を上げて応えるとレジェンドは凄まじい光を放って消えた。単純に移動しただけなのだが余程の実力でもない限りテレポートしたと思うだろう。

「なんというか……私は今回の出来事が彼にとって新たな運命の出会いをもたらしそうな気がしますね。今すぐなのか未来の話かはわかりませんが」

☆

ある国の孤児院と隣接された教会には多数の人々が避難してきており、必死の祈りを捧げていた。

「神様、どうか我々をお助け下さい……」
「天と地の怒りをお鎮め下さい……」

バリケーンの起こした台風は凄まじい大きさになっており、頑丈に造られた教会であってもあちこちから軋む音がした。そんな中、子供の一人がある事に気づいた。

「シスター！アーシアが居ないよ！」
「……!?アーシアが!?」

アーシア・アルジェントは孤児院でたった一匹飼っている犬を教会に避難させるため暴風雨の中、外に出ていた。
隣接しているとはいえちょうど裏側にあり、大人でも吹き飛ばされ

そうな程の強風が吹いている中を子供が出歩くのはそれだけで命がけだ。
幸い小屋が壊れかけていただけで犬の方は無事だったのだが、犬を抱えてなんとか教会まで戻ろうとした時、アーシアは見てしまった。
巨大な異形の化け物がこちらを、教会を狙っている事を。

「え……あ……」

抱きかかえた犬が怪物に向かって吠えるが、怪物―バリケーンは電撃を放ってきた。
当たりはしなかったがすぐ近くにあった地面に命中し、爆発を起こす。
この光景にアーシアは恐怖のあまり雨風を忘れて犬を抱いたままへたり込んでしまった。

「うっ……ひっく……神様、助けて……『光神様』……」

彼女は世界中にある御伽話―実際にあった事なのだが―の中でもある話が好きだった。
『かつてこの世界に天使や堕天使、悪魔でも勝てない邪悪な者が現れた。
未曾有の危機が訪れた時、光り輝く神が眷族を引き連れて舞い降り、天使も堕天使も悪魔も関係なく助け、戦った。
その光り輝く神と眷族によって邪悪な者たちは討ち倒され、また戦が起こる事危惧した神によってそれぞれの元へ眷族を遣わされたことで、争いを止み平和が戻ったという』
彼女はどんな種族であろうと関係なく助けた『光神様』とその眷族、つまりレジェンドとウルトラ六兄弟を何よりも尊敬していた。事実を知る三大勢力ならともかくほとんど人間には「ただの御伽話」としか思われていなかったが彼女は頑なに信じ、むしろ彼ら―特にレジェンドを信仰していたほどだ。それこそ聖書の神以上に。

そして、彼女は目にする。自分が会いたかった存在を。
凄まじい光と共に現れ、一瞬で台風と暗雲さえ吹き飛ばし青空を取り戻した『光り輝く神』―ウルトラマンレジェンドが教会を、自分たちを守るためにバリケーンの前に立つその勇姿を。

☆

バリケーンは、レジェンドの前に成すすべもなく倒された。バリケーンのあらゆる攻撃が通用せず、何故か台風も起きない。起こせない。逃げようとしてもレジェンドキネシス―ウルトラ念力で触れずに叩き落とされる。
最後はジャックがやった戦法『ウルトラプロペラ』の強化版ともいえる『ウルティメイトスクリュー』によって一瞬で宇宙まで吹き飛ばされ木っ端微塵になった。
その後、レジェンドはバリケーンの被害を受けた地域全てを修復すべく宇宙空間から地球に向けてリカバリーオーラを照射した。自然や人工物、生命に至るまで『特定の被害にあったもの』を元通りにする光線技だ。発射の度に特定被害の条件を意識する必要はあるが、限定する事で広範囲を一度にカバー出来る利点がある。
そして地上の、バリケーンと戦った場所にいた幼くも優しく、勇気ある見習いシスターの少女に己の加護を施した輝石を授けた。かつてコスモスが、春野ムサシに託したように。
『その優しさと勇気を忘れず、真っ直ぐに育って欲しい』
この言葉を受けたアーシアはますますレジェンドへと信仰と想いを募らせる事となった。数年後、目覚めた神器（セイクリッド・ギア）で悪魔を癒し、魔女と呼ばれる事になり追放される事になってもレジェンドの言葉を忘れず、自身の志を曲げる事はしなかった。
そして彼女は駒王町にやって来る。レジェンドにとってお膝元とされ、数々の宇宙人も暮らすその町で、彼女の願いは叶うだろう。その前に……

【伝説の光神様は実在した！】
【天災をもかき消す神秘の力！】
【まさに奇跡！怪獣の被害を全て癒す輝き!!】

「あそこでしか戦ってないのに何だこの報道はァァァ!!」
『当たり前（にゃ）（だ）（であろう）（です）』

仕方ないとはいえ力を行使したせいか自身の存在が世間にバレたレジェンドは頭を抱えていた。
……が、どうせいずれバレてたしもう覆らないと吹っ切れたレジェンドは考えるのをやめた。

「……究極生命体つながり？」
「いや違うからなオーフィス」

〈続く〉

レジェンド、新たな事態を知る

レジェンド一家全員がハンターライセンスカードを手にし、アーシア・アルジェント（＋犬＆教会その他）を救い、レジェンドやウルトラ族の実在が世間に広まった日から数日後……彼らの生活はあんま変わらなかった。

「オイイイイ!!ちょっと栄転するか期待しただろーが!!」

「仕方ないにゃ。ぶっちゃけ住んでみて思ったけど駒王って宇宙人だらけだから私も普通に受け入られてたわ」

「そうそう変身するような事態は起こらぬ上、その姿のまま事足りるであろうからな」

確かに変身するような事件は頻繁に起こるわけじゃないし人間体（このまま）でトンデモ事件もあっさり何とかしてしまうのがレジェンドだ。そもそも駒王自体という土地そのものが彼を信仰しているようなものだから、他はともかくこの地であまり騒がれたりはしていない。いや、ダイブハンガーは海にあるし秘密基地は山の中だけどさ。

「三大勢力には色々と衝撃が走っているみたいですが、逆にそれが抑止力となって悪魔や堕天使、天使の人間界における問題行動がほとんど無くなっています。といっても一時的なものでしょうが……」

「まあ、それは追々考えれば良いだろう。今の俺たちには解決しなければならない問題がある」

「何だ？言っておくが漸くシリアスから少しは離れられると思っている私の予想を裏切って『今から約２０００年後、地球は宇宙にとって有害な星となる』とかスケールの違うトラブルを出してくるんじゃないぞ」

「お前それ宇宙正義（ジャスティス）だろーが!!昔の!!」

何故かかつてのジャスティスの台詞を持ってくるＣ．Ｃ．にツッ

コミを入れるレジェンド。ちなみに彼のデビューもその時である。一応。

「デラシオンは関係ないから安心しろ。問題というのは……」
「我、知ってる。旅行先が決まらないってレジェンド唸ってた」
「「「そこ!?」」」

えらく平凡な理由だった。が、その後彼女らはそれなりに割と難しい問題だったと気付く。

「いくら悪魔でなくなったとはいえまだ黒歌のはぐれ認定が正式に解かれたわけじゃない。認識阻害してるとはいえ悪魔側にバレたらひと悶着あるだろう。グレイフィアに関しても当時を知る奴が見たら同じ事だ」
「「た、確かに……」」
「オーフィスも形式上だがカボス・プチトマトのトップにいたからな。組織の上の方は姿を見た事もあるだろうしな」
「レジェンド、我そんな組織にいない。我がいたのカカオ・プリンアラモード」
『どっちも違う！禍（カオス・ブリゲード）の団!!』

黒歌とグレイフィアに関しては納得の答えなのだが何故かオーフィスが属していた組織の名前は二人共食べ物に絡んでいた。

「団体様で喧嘩仕掛けてきて返り討ちにあった挙げ句トラウマ抱えて逃げ出した連中が中枢の一つ担ってるテロ屋なんざ覚えておく必要ないだろう。最初は覚えていたが後になって弁当に詰め込むおかずを考える方が難しいと気付いたんだ」
「そなたにとって世界レベルのテロリストは献立にも劣るというのか……」
「我も思った。レジェンドの言ってたガタノゾーアとかエンペラ星人

とかの方が問題」
『それは比べる対象が間違ってる』

ウルトラシリーズ屈指のラスボスであるこの二名と比較するのは確かにおかしい。一応この場にいる全員がちょくちょくウルトラマンの話を聞いているが、どちらもヤバさが桁違いである。目の前の男は今の姿のままやり合えるのだが。しかも二対一で。

なお、レジェンドとオーフィスの『どう足掻いても相手終了タッグ』によって既に禍の団はおよそ八割壊滅している。辛うじて旧魔王派と魔法使い派のそれぞれ一部が残ってる程度しかない。

「アレ？そう考えたらオーフィスの方は平気かこれ」
「ん、我の事は解決？やったー」

無表情だが両手を上げて喜ぶオーフィス。

「C．C．はまあ普通に考えたら死亡するような事態でもなければ不死身なの発覚しないだろうし、スカーサハは耳……と背中隠せばいいな。結論を発表する！」

立ち上がってレジェンドが出した答えは……

「バレたらその時はその時だ」
『結局そこに行き着くの!?』

適当だった。

☆

今日は別にこれといった厄介事は起きず仕事もない為、各々自由に過ごしていた。人それを、フラグと言う！とか太陽バックに腕組んで

立ってる男の姿が見えたが気にしない。予想通りだもの。
「で?今度はなんだ二人揃って。間違いなくロクな内容じゃないのは目に見えているがな」
　ヒロイン勢がのんびりしている中、レジェンドは一人惑星ジェネシスに訪れていた。もちろん集合場所はかの大会議室。ノアとキングも同席……というかこの二人から呼び出しを食らったのだが。
「まあそう焦るな。まずは私自慢の神使が！私の為に作っ「スパークレジェンド叩き込むぞコノヤロウ」仕方ない、これは又の機会にしよう」
「要らんわんな機会！こちとら惚気聞かされる為にわざわざ平穏を捨ててまで来たんじゃないんだよ！キング、説明！」
「ん？いやノアの能力が大半関わって大体６：４でノアの比率が多いから自分が説明するって言ってたので私は気にしなかった。整理するからちょっと待って」
「マジいい加減にしろよお前らァァァ!!大半てほとんど変わらんだろその比率なら！てか少しは気にしろよ俺ら三人集まってる時点で割と重大案件だって言わなくても理解出来るだろうが!?」
「いや、正直緊急ってわけでもないしレジェンドに丸投げしようかと」
「よーしそこ並べお前ら俺が直々に引導渡してやるから今のうちに後継者にウルトラサインで打診しとけ」
　さすがにレジェンドはキレた。というかこんなやりとり長年続けてよく耐えられたなとしか言いようがない。
　そんなレジェンドを一人の特徴的なウルトラマンが羽交い締めにしながら止めた。
「待ってくれレジェンド先輩！二人に苛立つ気持ちは俺にも理解出来

るが、仮にこの二人が居なくなったらむしろ先輩に負担が丸ごとのしかかって来る未来しか見えない！」

レジェンドの後輩であり、レジェンドが「自分の後継者にするなら彼しかいない」と太鼓判を押す程のウルトラ戦士ウルトラマンサーガ。普段は無口で不言実行を心がける優しい彼でさえ本気で止めるほど、レジェンドの怒りのボルテージは凄まじかったのだが、おかげで多少は落ち着いたのかサーガにレジェンドマントの上から背中を擦られつつノアとキングに問い質した。

「ちゃんと真面目に答えろ。何が起きた？」

「……二人に言っておく。今度先輩がキレれば、おそらく俺も止められない」

サーガも安心したのか普段の調子に戻った。

ちなみにゼロと妙に声が似てる気がするが、そのせいか劇場版限定である事も相まって某革新者なマイスターそっくりである。というかその世界で一緒に金属生命体の母星を救う手助けをした結果、彼の人間体が髪が銀髪である以外姿がその人物に瓜二つになったらしい。

機体に乗ってたから姿までは見えなかったが何やら力が働いて上手くベースになったようだ。

「うむ、実はな。先日、ノアが感知したある次元の歪みが【エリア】を超えて作用するらしい事が判明してな」

「同時にある特定の条件が揃った者が、その条件と似た特性がある世界へと飛ばされるという現象が確認されたのだ」

「……普通に結構な問題だろう。最初から話せば良かったろうに。飛ばされるだけなら俺たちでも対処出来るだろう、他に何かあるな？」

「やはり察しがいいな、レジェンド……飛ばされた者はその世界から弾かれる。原因は調査中だがな」

世界から弾かれる―つまり元の世界に戻れないという事。死者ならいざ知らず完全な事故による場合でもそれが起きるのは由々しき事態だ。緊急というわけではない、と二人は言っていたが実際はそれどころか非常事態として扱ってもおかしくはない。

「【エリア】を超えるというとお前たちの側からこちらに、その逆もまたあり得るという事か」

「そうだ。現に私の【エリア】からキングの方へ行った者がいる。仮に元の【エリア】へ戻れても元の世界へは帰れん。良くてその世界の平行世界へ行くしかない」

「ただ、一つだけ間違っている。どういう訳かレジェンド……お前の【エリア】へは出口しかない」

「……どういう事だ？」

「つまりノアの方にせよ私の方にせよ、そちらの者がこちらに来る事はない。そちらに行くだけなのだ」

真面目に話す前、冗談地味て言っていたのはおそらくこれが理由だろう。『入口』も『出口』もある以上、被害を受ける可能性はノアとキング側の【エリア】の方が圧倒的に高い。

「ますます不可解だな。わかった、こちらでも情報は集めてみる。被害に遭った者に関しては丁重に対応しよう」

「すまんな。お前と同じように、自分の【エリア】に生きる者は等しく宝なのだ。心遣いに感謝するぞ」

「サーガも、何かあれば頼むぞ。もし俺に万が一があった時、俺の【エリア】で頼れるのはお前しかいない」

「了解した、先輩」

サーガも頷き、特異な次元転移現象に関しては三超神が主軸となって調査をする事が決定した旨をそれぞれが己の【エリア】に存在する眷族とも呼べる者たちに打診した。

しかし彼らはまだ知らないが確実な事があった。
それは『ウルトラマンはその現象に巻き込まれない』というもの。
何故ウルトラマンだけなのか。その現象が自然に起きるものなのか、故意に起こされたものなのか。そしてレジェンドの【エリア】にはどうして『出口』側しか無いのか。

新たな事態は収束を見せる様子がないまま、いよいよ彼らの物語は真のスタートを切る。

〈続く〉

番外編―それぞれの陣営にて・後編

ウルトラ六兄弟がそれぞれにかつて親交を深めた陣営へ手紙やその他贈り物を準備出来たものの、よりにもよって宇宙磁気嵐が発生し……贈り物は無事だったがレジェンドお手製の転送装置に異常が発生し、先送りになってしまった。

ウルトラの父とベリアルにレジェンドへと連絡してもらった結果、多少時間はかかるが改良して強度を含む各性能アップ、さらに大型化するが送れる量を増やして各陣営へ一括転送出来るようにして再開発し、再度送って来てくれる事になった。

実はこの宇宙磁気嵐、どっかの宇宙征服を狙う宇宙人が原因だったらしく大層準備に手間暇かけて待ち望んでいたのをブチ壊されたタロウが激怒し、徹底的に壊滅させられた。

なおウルトラダイナマイトがウルトラマンＮｏ．６に相応しい、威力が通常の６倍にもなって炸裂したらしく主犯の宇宙人は研究所でもあった宇宙要塞ごと跡形も無く消滅したという。筆頭教官は伊達ではなかった。

その後レジェンドの方でもトラブルがあった為、約一年ちょっとかかったものの無事送る事が出来た。そんなこんなで手紙と贈り物が届いた、各陣営の様子を前回に引き続き覗いて見るとしよう。

☆

【天使勢力の場合】

交流者・マン＆エース

ミカエルは配下の天使から『突如天界宛に大きな荷物が届けられた』と聞いて確認しに行ってみた。怪しければそのまま処分すればいいな、と思っていたがどうも気になったのは……

「これは……この文字はどこかで見た事があるような……何だった

か」
「わからないんですか!?これはレジェンド様たちウルトラマンの方々が使われるウルトラサインですよ!!」
『!!??
!!』

いつの間にやら入って来たガブリエルが興奮気味に言い当てた。レジェンドの名前だけやたら強調してた気がするが。

「あの方の眷族とも言える方々が私たちを陥れようとするハズがありません！早く開けて下さい！」
「わ、わかりましたから落ち着いて下さいガブリエル」

そういえば彼女は光神様―レジェンドに助けられたのだったな、とミカエルは思い出した。あのレイブラッド事変以来、ガブリエルはレジェンドに恋い焦がれている。
あの時以来会えていなかったのだが、暫く前にある教会を救うべく姿を現したと聞いた時は仕事ほっぽり出してまで会いに行こうとしていた。
この時、ミカエルや他の天使に引き留められたおかげでガブリエルが着く前にレジェンドは再び行方を晦ました為、泣きながら本気でミカエルその他をボコったらしい。
恐る恐る開けてみるとそこにはちゃんと普通に読める字でミカエル宛てに書かれたマン直筆の手紙とエースが封入した『ガブリエル殿へ送る、レジェンドと我らの闘いの記録』なるものが再生用の機器とセットで入っていた。
「ああなるほど、これはマン殿とエース殿が「すみませんミカエル私今日は早上がりしますねお疲れ様でしたっ!!」……あれ？」

まさに電光石火、ちゃんと自分宛てのものだけ引き取って即座に部屋から退出して行ったガブリエル。今の彼女ならサーガアクセラ

レーションにも対応できるかもしれない。
とりあえずよくやったエース。君はミカエルにとっての救世主（エース）と言えるだろう。
彼女が職場に出て来たのはこの日から三日後。実に満足した顔だったが、ちゃんと仕事を終わらせお手製らしいディフォルメされたレジェンドのぬいぐるみを抱えていた。
しかも実は返信用の装置まで一緒に入っていたのを部屋にいた状態でどうやって知ったのか、お礼の手紙までしっかり書かれており「ちゃんとエース殿へ送ってくださいね」と満面の笑顔で釘を刺された。
こうして、しっかりマンが書いた手紙はミカエルへ、エースが用意した記録映像はガブリエルの手に渡った。
若干ガブリエルが暴走したような気もするが、まあ割と穏便に済んだだろう。後日、二人からの手紙が光の国に届いた時、マンはエースに大層奢ったらしい。マジでよくやったぞエース。アレがなければ手紙は読まれなかったかもしれない。

☆

【堕天使勢力の場合】
交流者・ゾフィー&ジャック

「うおーいシェムハザ！見ろよこれ！あいつらから手紙とか来たぞ！久っさびさだなオイ！」
「そうですね。いや懐かしい……今でも思い出しますよ。ジャックとは有意義な時間を過ごしました。ふざけた事しでかす上司をどうやって〆ればいいかとか」
「……ゑ？」
「いっそブツ自体、ブレスレットを変形させたウルトラランスで貫くかウルトラスパークで斬り落とすかして去勢してしまおうかとか」

堕天使総督アザゼルは副官のシェムハザの言葉に真っ青になっていた。ゾフィーも煩悩が云々言ってたもんな。シェムハザも相当だがそれに協力してウルトラブレスレット使おうとするジャックも割と鬼である。

「お……おいシェムハザ落ち着こうぜ。ホラ、あっちから今度時期が来たらがまたお邪魔するって書いてあるだろ。いつなのかはハッキリしてないけどそういうのはあいつらが来てからにしようぜ、な？つーわけで一緒に送られてきたアイテムを解析「する前に一発ぶん殴らせろアザゼルゥゥゥ!!」ってお前口調も態度も上司に対するソレじゃねーよ!?」

「やかましい！あんた彼らと別れてから問題起こしまくってその度に私がどれだけ火消しに回ったのかわかってんのかァァァ!!」

ゾフィーとジャックが居た頃は神器バカなところはあれど真面目になっていたのに、二人が光の国に戻った途端今みたいに元通りになってしまったらしい。しかも我慢していたリバウンドなのか色々やらかしていた。

「……ああそういえばゾフィー殿はかつてウルトラマジックレイというアイテムをエース殿というウルトラ兄弟に渡したそうです。なんでも湖を干上がらせる効果があると」

「なんだそれすげえ！っていうかお前何を……」

「効果が大きすぎるので、アザゼルの抑制専用にしたら調整が楽になりまして……これ、水分持ってる生命体に使ったらどうなりますかね……？」

「おいやめろ俺の抑制どころかマジで命取りに来てんだろ!!」

「大丈夫ですよ。水分無くてもそんだけ欲望あればそれでカバーできるでしょう」

「出来るかんな事!?」

その後なんとかシェムハザを宥め（それでも手痛い一発を脳天にくらい一度失神した）再度手紙を読み返すとアザゼルにとってとんでもない朗報とも言える事が書かれていた。

「嘘だろおい……ゾフィーの話していたやつが……『ヒカリ』がこっちに来たいだとォ!?イィイヤッホゥゥゥゥ!!」

「ヒカリと言えば『命の固形化』というとんでもない事を成し遂げた科学者でしたっけ。強制的に悪魔に転生させる『悪魔の駒（イーヴィル・ピース）』と違ってそのまま生き返らせる事が出来る部分が優れてますね」

「ああ、しかも命あるものなら種族を問わないらしい。悪魔の駒（イーヴィル・ピース）は元々持っていた力がデカ過ぎると持ってる『駒』の数が足りないと無理とか、あとは反応しない場合もあるとかでそもそも不安定なんだよ、あっちは」

命の固形化だけでなく、ヒカリの開発したアイテムは凄まじい効果を発揮している。こちらの【エリア】においてもビクトリーやジードに届けられたナイトティンバーやウルトラカプセルが良い例だ。

特にウルトラカプセルに関してはウルトラマンゼロを、ノアの力を使っているウルティメイトゼロよりも強いウルトラマンゼロビヨンドへと強化変身させたほどのものである。

マジでなんなのこの人の科学力。

「とにかく、だ。連中の力が借りれりゃ『命を落とさずに神器を抜く方法』の研究が一気に進むかもしれねえ。あいつらと約束したからな」

「全く……最初からそう真面目にやって下さいホントに」

「今更俺の性格が変えられると思ってんのか？いやスンマセン調子乗ってましただから俺用のマジックレイとかいうの閉まってくださいマジでお願いします」

結局グダグダではあったがなんとか手紙を返信転送出来たアザゼルだったが、その内容のダメな部分を見たゾフィーとジャックが本気

で対策を考え出したのは言うまでもない。

☆

【悪魔陣営の場合】

交流者・セブン＆タロウ

「父上母上ルミナシアミリキャスリーアたぁぁぁん!!（ガッ）へ？ばふぉあ!?」

ドゴシャアァッ!!

家族の名前を大声で呼びながら大きな荷物を両手で抱え物凄い勢いで走っていた魔王の一人、サーゼクス・ルシファー。蹴躓いてど派手にすっ転びながらも荷物だけでも上に掲げるようにして投げてしまわないよう絶妙なバランスで保持し続けているのはさすが。

そして彼に呼ばれて……というかダイナミック転倒の音で慌ててやった来たという方が正しいグレモリー家一同。

そこで目に入ったのは荷物をしっかり両手で持っているものの、転んでうつ伏せ状態のまま全く動かないサーゼクスだった。

妹のリアスが急いで駆け寄ると……

「お兄様!?」

「なんだいリーアたん!?」

普通に起き上がった。むしろ元気だった。

「サーゼクス、何やら大声で呼ばれた気がしたんだが、何かあったのか？」

「はい、父上。これをご覧下さい」

荷物の送り主の部分は例の如くウルトラサインで書かれていたのだが……

「これは……送り主はまさかタロウ殿か!?」
「そう！我が親友、ウルトラマンタロウからです！」

一発で解読した。
なんだこの親子。むしろこっちがタロウに感化された？もう訳がわからないよ。
そんな光景をリアス、ヴェネラナ、そして生まれたばかりのミリキャスを抱いたルミナシアがポカンと見ていた。

「お母様、ルミナシア。タロウっていつもお兄様が言ってた英雄『双角の闘神』の事？」
「ええ、そうよリアス」
「かつてレイブラッド事変と呼ばれる出来事において光り輝く神の眷族として共に現れ私達を救って下さった方々の一人です。当時はもう一人、ウルトラセブンという方と一緒に我々悪魔の守護を務めておられました」

ルミナシアの説明を聞いていると……

「サーゼクスちゃんルミナシアちゃんリアスちゃんお邪魔しまーす☆」
「グレモリー家の皆様、お邪魔いたします」

同じく現魔王の一人セラフォルー・レヴィアタンが妹のソーナを伴ってやってきた。同じような荷物を抱えて。

「やあセラフォルー。やはり来たのだね、君の元にも」
「うん☆セブンおじ様からの送り物だよっ」

よく見ると一度開けた後がある。さすがにこの親子ほど簡単にわ

かったりしなかったようだが、それにしてもやけにセラフォルーの機嫌がいい。

「その様子だともしやあの方に関するものが入っていたとか？」

「そうなんだよ！聞いて聞いてサーゼクスちゃん、えっとね……」

その場に荷物を置いてガサゴソと探して取り出したのは

「じゃーん☆レジェンド様とセブンおじ様が地球で活躍していた当時の記録を編集して特撮ぽくしたっていう特製ＤＶＤだよっ☆」

どこかの大天使同様レジェンドの名前を強調して、かつ誇らしげに見せてくるセラフォルー。ちなみにそのパッケージはセブンよりレジェンドが目立っている巻のものだ。

「裏話も含めて当初より話数が増えたらしく全５２話！まだ見てないからいっそサーゼクスちゃんやリアスちゃん達と徹夜で見ようかなって☆ソーたんも珍しく乗り気だからお泊まりセット持ってきたよ☆」

「いきなりで申し訳ありません……」

「いや、構わないよ。リーアたんとソーナちゃんは一緒で良いとして、セラフォルーは……」

「お兄様、セラフォルー様も一緒で構いません」

「良いのかい？」

「だってお母様はお父様と、ルミナシアはミリキャスやお兄様と一緒の部屋ですから」

「それはそうだった……二人もそれでいいかな？」

「うん☆」「はい」

と、寛大なグレモリー家にシトリー家がお世話になると決まったところで、いよいよ上映会となったのだが。

「やはりここは我が親友、タロウの活躍からだろう！子供も楽しく見れるようにと考えて編集してくれたらしいからね！きっとリーアたんやソーナちゃんも楽しめるハズさ！」
「待ってよサーゼクスちゃん！タロウさんは六兄弟の末っ子、やっぱりお兄さんのセブンおじ様の活躍からだよ☆怖くても大丈夫☆お姉ちゃんがついてるからね☆」

やっぱりというかどっちの映像記録を先に見るかという話になった。最終的にセブン側から見る事になったが、タロウの記録を見た時と含めてどんな感じだったのかと言うと。

○カプセル怪獣が登場した時
「えええ!?セブンおじ様使い魔いたの!?しかも三匹も！」
「私、あのアギラって子欲しいですね」
「今度セブンおじ様来たとき同じの使い魔に出来ないか聞いてみよ☆」
※似ているけどカプセル怪獣は使い魔じゃありません

○タロウの首がエンマーゴに切り飛ばされた時
『タロウ（さん）（殿）の首がすっ飛んだぁぁぁ!!?』
「いや、首だけ飛び回ったかと思ったら何事も無かったようにくっついて復活しましたよ!?」
「さすがタロウ！首をはねられただけでは痛くも痒くもないという事か！」
『違う絶対違う!!』

○ウルトラダイナマイトがカタン星人に炸裂した時
『自爆したあああああ!?』
「皆、よく見るんだ！タロウは再生したぞ！無傷だ！」
「お兄様、タロウさんって本当に何者ですか!?」

「お父上が宇宙警備隊大隊長、お母上が銀十字軍隊長という光の国のサラブレッドだよ」

○ウルトラベルを使用した時

「何ですかあの反則じみた鐘、正直神滅具（ロンギヌス）よりよっぽど凄まじいのですが」

「まさしくその通りだよルミナシア。あのウルトラベルとやらはかつて彼らの故郷に悪の軍団が攻め込んで来たときに開発され、急造にも関わらず一度鳴らしただけで相手を壊滅に追い込んだそうだ」

『おかしいとかそういうレベルじゃなかった!!』

○タイラントをタロウが圧倒している時

「いけぇぇぇ!!タロォォォウ!!」

「お兄様がかつてないほど熱狂してるんだけど……」

「あのタイラントという怪獣はかつての大戦にて二天龍の片割れを一方的に痛めつけた程の存在ですから。私も少なからず興奮しております」

「そうだよね～あの時はレジェンド様が瞬殺してたけど、サーゼクスちゃんにとっては親友のタロウさんがアレを倒すのは凄く喜ばしい事なんだよね」

○最後に、今のセブン・タロウ親子を見た時

「おお！彼がタイガか！いやあタロウにそっくりだ！彼もこちらに来るのか、楽しみだ！」

「タロウ殿は今は士官学校での筆頭教官か！マント姿が似合うじゃないか」

「彼がセブンおじ様の息子のゼロ君か～確かレジェンド様みたく強く、優しくなってほしいからレジェンド様の人間体の時の名前を貰ったんだって☆」

「タイガさんと歳が近いのに、銀河遊撃隊隊長……」

「相当凄腕なのね。なんでも直属の上司の名前がベリアルさん、て方

らしいわ」
『ベリアル!?』
「ああ。ただこちらのは家系名だし、あちらはちゃんと名前だからね。ちなみに大隊長殿の親友で、彼にもジードという息子がいるそうだ」
「もしかしてあの特徴的な青い目の……」
「みたいだね☆彼らを見習ってソーたんもリアスちゃんも努力あるのみだよ☆」
「「はい！」」

などなど、色々あったが最後は割と綺麗に纏まったようだ。やはりというか返信用の手紙を書く時はサーゼクスが思いっきり張り切っていた。セラフォルーも『是非レジェンド様へも届けて下さい☆』と恋する乙女パワーで自撮りの写真まで封入していたらしい。
後日、光の国にて転送されて来た手紙を受け取ったタロウは非常に満ち足りた表情で仕事をしていたという。
セブンの方は手紙はともかく一緒に送られてきた物を、開けずともなんとなく中身を理解したのでレジェンドに渡して良いのか少し悩んだものの、折角の好意だからとそのまま渡すことにした。
その結果、ちょっとだけヤキモチ焼いた一部の同居人たちに色々されたらしい。例を挙げるとオーフィスには軽くポカポカされたり、黒歌は本気で仙術使って部屋に入ろうとしてきたり、新しいメンバーは瞬閃だの斬魄刀開放だの帰刃（レスレクシオン）だの鬼道だの花の呼吸だの薬品だのと千差万別な方法で早速かまされたらしい。
オーフィス以外のは平然とあしらってたが。

〈番外編―幕引き〉

番外編―それぞれの陣営にて・前編

光の三超神によって次元特異転移現象はすぐさまそれぞれの【エリア】の全ての世界にいる三超神直属の眷族及び部下たちに伝えられた。

ノアやキング側は転移してしまう可能性がある為、直ちに調査に当たる事になったが、逆にレジェンド側は落ち着いて現状を維持し、転移してきた時を狙って調査する事になった。

これはレジェンド側で起こる事象は転移してくるだけに留まっている以上、下手に動いて混乱が大きくなるより転移してきた者に対して柔軟に対応し、その中から解決の糸口を探るためである。

かくしてレジェンド側は幸か不幸か今までと同じ感覚で生活を送る事になった。これぱっかりはこちらに住む者が懸念してどうにかなる問題ではない。もしあちら側から来たら……出来るならちゃんと迎え入れてあげよう、とレジェンド一家は決意した。

そんな中、ウルトラ族や悪魔、天使や堕天使陣営は現在どういう状況なのか。とりあえず順番に覗いて見るとしよう。

☆

〈ウルトラ族の場合〉

レジェンドの【エリア】においては、ウルトラ長老には含まれていないだけでキングの立場にはレジェンドがいる形になる。ノアの【エリア】の場合も同様であり、それぞれが各種アイテムをウルトラマンたちに渡す理由・渡し方も異なっている。

例を挙げるならレオは本来キングからウルトラマントを授かったが、レジェンド側ではレジェンドマントを元に機能を厳選し搭載した万能アイテムとして、レジェンドの手から『ウルトラマント』としてレオに授けられた。経緯こそ違えど性能自体は同じと思って構わない。

そんな訳で宇宙警備隊大隊長であるウルトラの父はレジェンドから打診を受け、宇宙警備隊とベリアル率いる銀河遊撃隊に召集をかけある決断を下した。

「……もしかしたらレジェンドや御家族が狙われるかもしれない。あの方はもちろんの事、御家族も相当な力を付けているとの報告だが万が一を想定しなければならん。よってベリアルら銀河遊撃隊の全面協力も受け、我ら宇宙警備隊は特別体制を取る事にした」

その内容は『双方の隊から数名ずつ、定期的に入れ替えつつレジェンド及びその家族の護衛』『現在レジェンドが居る世界がかつてウルトラ六兄弟も行き親交を深めた種族がいる為、地球や人間と並行して守る事』『駒王には宇宙人が多数住んでおり彼らとも連携を取って任務に当たる』この三つだ。

レジェンドには確認を取ったところすぐに了承された。

その際「こちらに行き来しやすいよう光の国の近くに専用のスターゲートを作っておく。世界と距離を跨ぐから大体数年かかるが、手紙やＤＶＤ（！）など小さな物は転送できる装置を送るので各陣営と過ごしたウルトラ六兄弟はそれぞれに手紙でも書いておきなさい」

と言われたと言うと、真っ先にタロウが書き出した。短期間でよっぽど濃い付き合いだったのか家族写真を引っ張り出したり過去の戦闘を記録した装置などをＤＶＤに焼き出したりと相当である。

「そういえばレジェンドからサーゼクスとルミナシアが結婚したらしいと情報があったな。あの二人なら今頃元気な子供がいるに違いない！よし、私もこの間タイガ、父さん、母さんと撮った写真を同封しよう。ベリアルさんの銀河遊撃隊に見事配属されたと一筆書いて……あっちにもベリアルという家系が居たんだった。ちゃんとそこは説明書きしておこう。あとは話だけでなく実際の映像を見てもらうため私の地球防衛時代の映像を分割して送らねば。それだけでは

駄目だな、ジオティクスさんとヴェネラナさんにもしっかり挨拶を書かねばならないな。これは家族を大切にするグレモリー家への大事なマナーだ」カリカリカリカリ……

『……』

「ああそうか、警備隊と遊撃隊からそれぞれ数名ずつという話だったか。父さん、ゾフィー兄さん、ベリアルさん、もしタイガを行かせる時は私に連絡を。どんなに仕事立て込んでようがウルトラダイナマイトやコスモミラクル光線使ってでもとっとと済ませて合流するので一緒に行かせて下さい」

ドン引きされてるぞ、タロウ。いやあのシスコン魔王（サーゼクス）は家族愛にも溢れてるし分からなくもないが。つかコスモミラクル光線はスーパータロウじゃなきゃ使えないんじゃ？と思ったが今の様子を見る限りマジで撃てそうな気がする。

「エース、我々も書こう。ただ……私たちは近況報告などの必要な事柄を書いた手紙と」

「ええ……彼女用にレジェンドと我々が地球で共に戦った記録映像を送りましょう、マン兄さん。でないとミカエルが彼女に悲惨な目に合いそうです。主に八つ当たりで」

なんだ八つ当たりって。レジェンドその子に何したの？

「さて、私はアザゼルに書いておくとしよう。少しは煩悩薄れていればいいのだが……ジャックはシェムハザにか」

「ええ、よく話しましたから。というか愚痴でしたね大半は。あとはブレスレットで上司を制裁出来そうなのはあるかとか」

そりゃ、総督があれなら副官は苦労するだろ。

「親父は何を書くんだ？」

「俺も息子であるお前の事でも書こうと思ってな。なにせ若手で大出世したんだ。別にいいだろう？」
「ちょ!?マジかよタンマ本当タンマ!!恥ずかしいだろ一度も会った事ない連中に!!」

親バカなところはあれど一番まともそうなセブンとゼロ。
銀河遊撃隊隊長という役職、実はゾフィー並に凄い地位にいる。

「……（サァー」
「兄さん？レオ兄さーん？」
「アストラ……俺は隊長（セブン兄さん）に今度は恐竜戦車で追いかけられるのか？
（ガクガクブルブル」
「レジェンドからの手紙に何書かれてたの!?」

黒歌を保護した時に見た夢の内容をそのまま書いた手紙がレオ宛にレジェンドから直送されていた。既に脳内でイメージが出来上がりトラウマになりかけている、主にレジェンドのせいで。

「なあ、ケンよ。レオに関してはレジェンド（師匠）が原因だとして……ウルトラ（あいつら）六兄弟は向こうでどう過ごしたらこうなるんだ？所々物騒な台詞聞こえたぞ」
「うーむ……お師匠からは誰がどの陣営に行ったくらいしか聞かされてないからな。実際どういう暮らしをしていたかもご存知ないそうだ」
「そういや何人か助けて無事なのは各陣営に転送、重傷だった奴を一人治療をする為に連れ帰ったって言ってたな。あと、また増えるらしいぜ……同居人が。まあマリーのように医療専門もいるが、大半は相当な実力者だとよ」
「お師匠は大丈夫だろうか……主に精神的に」
「心配いらねえ……と言いたいがなんせ同僚周りがアレだからな……」

ウルトラの父とベリアルはかつて鬼畜な修行を課された事を忘れて恩師(レジェンド)を心配した。
精神的疲労度に関してぶっちぎりトップを爆走し続けるノアを筆頭に、最近増えつつある家族にも一癖二癖ある者が多い。
悪の道から光へと舞い戻れたベリアルからしてみれば、考えたくはないがストレスのせいで闇堕ちするんじゃないかと不安なくらいに。

「時期が来たら俺は『ガーディアンベース』でその世界の地球近くに遊撃隊と待機するからよ。通信もらってすぐ動けるようしとくぜ」
「助かる……お前がこちらの道に戻って来てくれて、本当に良かったぞ」
「……こんな俺をお前らが揃って受け入れてくれたからだろ。それに今までマイナスだった分を取り返しただけだ。俺の本当のスタートはまだまだこれからよ」

ウルトラの父は、腕を組んで力強く言い切るベリアル(親友)を改めて頼もしく感じた。彼に任せていれば銀河遊撃隊は大丈夫だろう。後の心配は……

「「ぶっちゃけノアとキングがやらかさないかだな」」

正直、彼らどころかレジェンドにさえどうしようもない事だったりする。

ゼロ「後半へェェェ……続くぜ!!」
ジード「なんか何時もと違うんだけど!?」
オーブ「番外編だからさ」

旧校舎のディアボロス、駒王町のレジェンド一家
新たなレジェンド一家、駒王での日々

ウルトラ六兄弟がそれぞれ三大勢力の親交を深めた者達へ手紙や贈り物を転送、及びそれのお返しが送られてきてから早くも数年の時が流れた。

もちろん賑やかで一家内ラブコメは当然の事、家長の友人が巻き起こすボケとツッコミのウルトラハリケーンにもれなく全員巻き込まれる我らがレジェンド一家にも変化はあった。元の【エリア】から弾かれた者達が一気に六人も来た……つまりそれを保護したレジェンド一家がそのまま引き取ったのでさらに家族が増えたのだ。

☆

胡蝶カナエ。元は故人であり、ノアの【エリア】で元いた世界の転生の輪に入るはずだったのだが、例の現象にて生前の状態でこちらに流れ着いた。

元々生を終えていた為あまり気にしていないように振る舞っていたようだが、寂しさを察知したのかオーフィスがそのまま惑星レジェンドから連れてきて、それ以来本人も笑顔が増えたので自然と一家入りした。

さすがに当初はカルチャーショックの連続で色々大変だったが今ではぶっちゃけレジェンド一家で数少ない良心とまで言われている。転入という形で駒王学園に二年の頃に入学し、現在は三年生。

御門涼子。彼女は純粋に現象にて弾かれた『宇宙人』である。見た目はほとんど地球人と変わらず僅かに耳の先が尖っている程度だ。

元々適応力が高いからか、割とすぐに事態を受け止めいつもと変わらぬままだったらしい。スゲーなオイ。

保護してくれたレジェンド一家に興味を持っていたがそのうちレジェンドに対しては慕情へとシフトしたようで押し掛け気味にダイ

ブハンガーへ行き一家入りした。
現在はカナエの保護者を兼ねて、という名目で駒王学園にて保険医として勤務している。もれなく『駒王学園三大変質者』を筆頭に視線を集めまくっている。仕方ない。
四楓院夜一。ぶっちゃけ全て終わったので一人旅しようと足を踏み出した瞬間、かの現象に巻き込まれた不憫な人物だった。が、元来奔放な彼女はあっさり『まあいいか』とこちらに永住する事を決めたらしい。レジェンド一家に同行したのも退屈しなさそうという理由だった。
……はずなのだがいつの間にやら本格的に嫁入りする気になっていた為、一度黒歌と本気でやり合った結果いとも簡単に倒してしまったので、黒歌に変な対抗心が出来たのか事ある毎に衝突していた……少し前まで。
最近ではよく二人一緒に行動するほど仲が改善されたようでレジェンドや他の家族も安心していた。
そう、仙術と瞬閃の合わせ技を使ってまで二人してレジェンドの部屋に侵入しようとさえしなければ。
松本乱菊。彼女は自分の隊長の幼馴染みを自分の代わりに副隊長へと転任させ、自分はご意見番のような役どころへと下がる気でおり……無事それも叶って後は退任して割と気楽に生きようと、隊長の『日番谷冬獅郎』や次の副隊長に推した『雛森桃』と最後の『十番隊副隊長』としての任務を終えた時に次元特異転移現象が発生。危うく巻き込まれる寸前だった二人を庇う形で代わりに巻き込まれ、二人のこれからに激励を飛ばしてその世界から弾かれた。
元々明るく面倒見も良い彼女は「二人の祝言に参加出来ないのが心残りだわ～」と軽く流していたが、レジェンドが『こういう性格の者ほど精神的に辛いものだ』と誰かの側に置いた方がいいと判断したところ、前述の夜一や後述の二人もこちらに来た為、なし崩しで一緒にレジェンド一家入り。数年経った今は一夫多妻でも構わない、とレジェンドの嫁の一員になれるよう度々誘惑をしかけているが、アレには効果がほぼ無いのが残念のようだ。

ティア・ハリベル。前述の乱菊同様虚圏（ウエコムンド）にて彼女の従属官（フラシオン）である三人を庇うようにして転移現象に巻き込まれたと言う。

現象による被害者である事は元より過去の出来事もあってレジェンド一家を最初は信用していなかったが、レジェンドがノアの【エリア】にあるという彼女（ら）の世界に自ら赴き従属官であった三人に（最初はやはり攻撃されたが）彼女が『弾かれ』はしたものの無事である事を伝え、さらに彼女が居なくてもやっていけるよう修行をつけ、おまけと言わんばかりに虚圏を豊かな世界へと変えて帰って来たら涙ながらに感謝を述べられ、『今度こそ』とレジェンドに絶対の忠誠を誓った。ちなみにその三人の従属官、レジェンドを「ハリベル様以外で仕えたいお方」とまで言っていたらしい（↑ノア談）。

現在はダイブハンガー内でハーブの栽培を行っている。お茶会の時スカーサハが飲みたがったので始めたら意外にも奥深くハマったらしい。なお、こちら側に転移した際に虚（ホロウ）の孔が塞がっていたが、涼子曰く「新しく生きて行く為には丁度いいんじゃない？」との事で吹っ切れたそうな。

最後に、卯ノ花烈。本名は卯ノ花八千流（やちる）。かつては大罪人であり護廷十三隊十一番隊隊長にして初代剣八、そして故人となる直前までは四番隊隊長を務めた彼女は現十一番隊隊長の『更木剣八』へ自身の全てを伝授して逝った。が、カナエ同様その世界の転生の輪に入る前に現象にて『弾かれ』てしまった為、惑星レジェンドへとそのまま生前の姿で転移してきた。一応彼女もレジェンドと手合わせをしたのだが、彼女自身が飛び抜けた実力者だったからかレジェンドの真の実力を感じ取って投了する形で敗北を宣言。

以後は「他の追随を許さぬ力を持つがゆえに無理や無茶をし過ぎる」レジェンドを心配して、専属医として彼の側にいる事を選んだ。同時に『新しい世界で新しく生きるのだから』と結婚に関しても考え始めたらしく、まだこちら側に来て然程過ごしてないがどうやらお眼鏡にかなったのはレジェンドだけのようで、さり気なくアプローチ中なのだが結果は今だ実らず。まあ、アレが相手だし。

実はレジェンドとオーフィスを除いてレジェンド一家最強（最凶）

と言われてたりする。

☆

彼女らがダイブハンガーに来てからもう一つ。
かねてより開発していたＣ．Ｃ．の専用機がようやく完成したのだ。当初の機体となるはずだった『マウンテンガリバー５号改』は彼女が気に入らなかったらしく、レジェンドが見たとある機体を参考に大改造を行った。結果……

「バリっておるのう」
「これ、合体機能とかありそうよねぇ」
「二号ロボとじゃなくて一回り小さい戦闘機を背中にドッキングするような感じかしら」
「これ……私が最近やってるゲームで見た気がするにゃ」
「我、知ってる。レジェンドの眷族が他の者と一緒に乗り込んでた。小さくなってたけど」

ここまで出ればおわかり頂けるだろう。たぶん。

「改めて紹介しよう。Ｃ．Ｃ．の専用機

コンパチブルガリバーだ!!」

どこぞのバトルフォース・ロボと瓜二つだった。（カラーリング除く）

「何がどうしてこうなった!?私はてっきり特大サイズのＫＭＦが出来上がると思ってたぞ！」
「どこかの世界ではタイガがこの機体のベースになったものに乗り込

んでいると聞く」
「いや中の人が一緒なだけだろ！」

メタいぞC・C・。レジェンドも真面目な顔で何言ってんだ。

「心配するな。基本武装は似ているがちゃんと違いはある」
「基本武装と言うが見る限り『プラズマスピン・ナックル』とか『ガリバースラッガー』とか名前が違うだけにしか見えんぞ」
「まずは推力にネオマキシマドライブ、動力源にはプラズマスパーク・エンジンを採用！」
「おい待てなんでそんなもの動力にした!?」

人工太陽を動力源とかとんでもない事をやらかしていた。

「安心しろ。ただの永久機関な超高出力エンジンだ。本家とはグレードが違うからな」
「それでもとんでもないモノには変わらないだろう」
「さらに各種外付け武装を各部にマウント可能！完全版スペシウム砲も当然用意してある！」
「えっと、こういうのを今の世の中だと『ロマン』って言うんでしたっけ」
「カナエ、それは一部の連中にとってなだけで一般常識ではないぞ」
「それだけではなく単機でもメテオールを複数同時に使用可能！加えて現在開発中の支援戦闘機のみならず各種スーパーマシン、即ちガッツウイングやウルトラホークなどともドッキング出来る！」
「レジェンド様、すでに色々おかしいと思いますが。主にスペック的な意味で」
「グレイフィア、レジェンド様はいつもこう妙なテンションになるのか？」
「時々ですが。ただいつもこうではないですよ、ハリベル様」

次々と明らかになるコンパチブルガリバーの性能。なんかもうコレどっかの大戦でスタメン張れそうじゃね？

「そして装甲はインペライザーにも使われている自己修復機能持ち！しかも改良型だ！コクピット以外が木っ端微塵でもすぐ修復されるぞ！」

『いやそれおかしいから!?』

かつての敵の技術まで使っていた。もはやなんでもアリとしか言いようがない。これに支援戦闘機が合体てなんだソレ。

「だがこれで終わりではない。コンパチブルガリバーはまだまだ発展途上。可能性の塊なのだ」

「これ以上何を望むのかわかりませんが、ちゃんと休息は取ってください」

「安心してくれ烈……今寝ようとした所だ」

バターーーン!!!

『レジェンド（様）ー!!!??』

やはり限界だったらしく寝（気絶した）た。

ちゃっかり一緒に寝ようとしたオーフィスだったが、いつも通りキャストオフしようとしたところで卯ノ花に止められた。

「せめてレジェンド様を部屋に運んでからですよ」

「ん、わかった。我、それまで我慢する」

この後、やっぱり一悶着あったがまあいいとしよう。

☆

駒王町にはこの星の他の場所よりも遥かに多くの宇宙人が生活している。
それはかつてこの世界、レイブラッド事変以前にも訪れたレジェンドがこの地を豊かにし、その加護が消える事なくこの土地に有り続けるという事が理由の一つに挙げられる。実際以前に惑星レジェンドよりグレイフィアら三名を新たに連れて戻って来た時に見た銅像はこの地に住まう宇宙人達の作品だ。
とは言えそのままの姿で出歩くのは純粋に元々地球人とほとんど変わらぬ姿を持つ者に限られ、大抵はレジェンドやウルトラマン達のように地球人と同じ姿に擬態して人々の生活に溶け込む。
しかし、近年レジェンドが七星剣の一人であるメフィラス星人ジェントらの協力の元、完成させた施設ではそういった事を気にせずありのままで生活出来ている。
それがウルトラ警備隊秘密基地にしてこの星のハンターズギルド―通称『光神の護り家』だ。
ここにはレジェンドの仮住宅とは別に、更に転送ゲートが設置された。この護り家は宇宙人たちの住居も兼ねており、ジェントやラッシュハンターズを始め多くの宇宙人が生活しつつ『プラズマソウル』を宿したプラズマ怪獣をハンティングしながら生計を立てている。その為、ここから直接ハンティング地点へと転送及び送還を行えるようにと設置した事が切っ掛けだ。今日も彼らはハンティングに精を出し、ここへ戻って戦果を報告しつつ疲れを癒やす。

「ラッシュハンターズの皆さん、お疲れ様です」
「お前たちの活躍、しっかり見ていたぞ」
「おお!?無事かレジェンドの大将!」

この間、倒れたと聞いたレジェンドだったが丸一日爆睡したら完治したらしい。マジで何なんだこの回復力。
他の者は何かと部屋に突撃しようとしたので、オーフィスやスカー

サハ、カナエやハリベルなど比較的問題のないメンバーだけ卯ノ花が部屋に入れる事にしていた。さすがに不公平と不満が出たのでレジェンド自身が今度それぞれと一対一で過ごすから、と言ったらすぐに止んだ。その中に看病したメンバーがちゃっかり混じっていたが、彼女らにも正当な権利ではある。

ともあれそんな彼は専属医の卯ノ花と、膝に乗っているオーフィスと一緒に護り家へと顔を出していた。

そんな三人に早速気が付いたのはマグナだ。レジェンドが倒れたと聞いて真っ先に駆けつけようとしたが騒ぐのが目に見えたのでガルムとバレルに引き止められていたが。

「大将、もう動いて平気なのか？」

「ああ。心配かけたな」

「肉体的というより精神的な過労でしたね。短期間に色々ありましたし、元々溜め込みやすい方ですから」

「卯ノ花の姐さんとフィスっちもアリガトな！」

「我、フィスっち？」

「そう！オーフィスだからフィスっち！で、こっちが……バレルっちだ！」

「いやだから……ふぅ、まあいいか。私達も気になっていたが、顔を見れて何よりだ」

「お前らそんくらいにしとけ。今日がハードだったから明日は少し控えめに行くが、ハンティングするのは変わらねぇんだ。レジェンドにせよ俺らにせよしっかり休まにゃならんだろ」

チームを組んだ当初とは比べ物にならない一体感を醸し出すラッシュハンターズは、ジェントと並んでこの星のハンターズギルドの顔だ。

「我とレジェンドと烈、今度サンダービートスターをハンティングに行く」

「「サンダービートスタァァァ!?」」
「マジかよ！アレ今日俺らが倒したグランドキングより上の奴だろ!?」
「それをたった三人で……いや、お前たちなら逆に多ければ邪魔にしかならないか。だがしかし……」
「よし、そん時は俺らにも声掛けな。少なくとも足手まといにはならねぇからよ」
「元よりそのつもりでしたから。よろしくお願いしますね」

本来はジェント、ババルウ星人フガク、さらにノダチザムシャーという元祖七星剣の三人というとんでもないメンバーと赴く予定だったのだが、ジェントはハンターズギルドの集会に、フガクとノダチザムシャーは急遽別の依頼が入ったので、三人とも申し訳なさそうにキャンセルしたのだ。特にノダチザムシャーは基本単独でしかハンティングしない為、今回のケースはレジェンドが絡んでいたから参加したという奇跡的に組めたメンバーとも言えた。

割と早めに発覚したので、最初は三人で行く事も視野に入れたのだが他のハンターにも経験を積ませる意味で一緒に連れて行こうという事になったのだ。

しかし、レジェンド一家でも初見では中々に厳しい（この三人除く）相手にいきなり連れ出せないし、かといって他に対応可能なハンターは限られてくる。そこで白羽の矢が立ったのがラッシュハンターズ。普段は己の得意武器を使っているがいざとなればそれぞれ七星剣を使えるし、最近はレジェンドによる修行も手伝ってメキメキと実力も上げ、実績も更に重ねている。

卯ノ花が言う通りレジェンド側から頼む為に来ていたのだ。

「よっしゃあぁぁぁ！俺はハンターだからな！狙った獲物は逃さねぇ！サンダービートスターなら相手にとって不足なしだぜ！」
「体調や装備は万全を期す必要があるな。明日からはハンティングの日まで一層気を付けなければ」

「つーわけだ。俺らは早めに休むとするぜ。じゃあな大将方、そっちも無理すんじゃねえぞ」
「分かっている。そちらも今日はお疲れ様だ」

ラッシュハンターズは三者三様、違う反応をしながら居住区へと帰っていった。その様子を遠目から見ていたジェントは「仲が良くて何より」と頷いていたそうな。

こんな感じで、新しく来た家族は宇宙人達とも仲良く出来ている。この後、二人と共にダイブハンガーへと帰ったレジェンドの元に連絡が入り、彼は急遽出動する事になった。

グレート、そしてダイナと共に『邪悪生命体』がいるとされる、火星へと。

〈続く〉

学園での日常、火星での激闘

さて、レジェンドが火星へと出動する少し前に時間は遡る。レジェンド、オーフィス、卯ノ花烈が護り家にてラッシュハンターズの活躍をモニターで見学しつつ待っていた頃、他のレジェンド一家もそれぞれの日常を過ごしていた。

まず黒歌と夜一はダイブハンガーの日当たりの良い場所にて猫の姿でゴロゴロしていた。

「そういえば夜一ってその姿だと声が変わるのね」

「そういう仕様じゃ」

「仕様って何と思ったけど気にするのはやめるにゃ」

正直、今回一番平和だと言える二人（匹）だった。

続いて、ハリベルとスカーサハはおやつ作り。

普段はここにオーフィスやカナエなんかも一緒にやるのだが生憎二人とも留守だ。というかオーフィスは味見が殆どだが。

「私も破面（アランカル）として虚圏に居た頃は殆どこういう事をしなかったが……やって見ると奥深く、楽しいものだな」

「そうであろう。吾もそうだったからな。見るだけでなく、やって見てこそ分かるものがあるということよ」

とりあえず、来たるべき『バレンタイン』に備えてとチョコ作りの練習中らしい。黒歌あたりはチョコを塗った自分がプレゼント♪とかやりそうではあるが。

ここもまあ、平和だ。普通に日常風景である。

グレイフィアはC・C・と乱菊を伴ってショッピング……というか乱菊がC・C・をピザで釣ってグレイフィアを外に連れ出したらしい。なんでも「メイドであろうとするのは良いけど少しはオシャレにも気を使いなさい！」と言う事だが、グレイフィア自身はそういっ

た事に無頓着気味だったのでどうしていいか困惑しているようだ。
「まあ仕方ないわね。いきなり一人で選ばせてもメイド服と同じか似たやつ選びそうだもの」
「確かにな。少しは私達みたいにカジュアルなものを着てみてはどうだ？」
「いえ、今の私はレジェンド様に仕えるメイドですので、別にこのままでも……」
「惚れた男を落とすならもう少し攻めて行きなさい！一夫多妻オッケーとは言ってもちょっとは自分を特別に見てもらいたいと思うでしょ。にしてもさっきからジロジロと視線感じるわねー」
「ふ……美女が三人集まればこうもなるだろうな」

確かにその通りだがぶっちゃけ乱菊の胸元に視線が集まっている。グレイフィアとC・C・は布面積が多いから単純に美女云々で済むが、乱菊の場合半端なくデカい（ナニがとは言わない）ので胸元が大きく開いた服を着ていたらそりゃ視線を独り占め状態だ。
この後、例の如くチャラいナンパ野郎共が出たが案の定返り討ちにされトラウマも作られたらしく、ソイツらは女性恐怖症にまでなったという。

「ちゃんと男磨いて出直してきなさい青二才坊主」
「見た目で判断するからこうなるんだ、ガキめ」
「あまりこの町で悪さをせぬよう……あの方は勿論、ここに住まう方々も普通ではありませんので」

……上の二人は言葉攻めだけでも十分倒せそうである。
ナンパ野郎共はメンタル豆腐未満だったようだ。

☆

そして最後の二人、カナエと涼子は学生と保険医なので勿論駒王学園だ。『駒王学園三大お姉様』の一人としてリアス・グレモリーや姫島朱乃と並んで有名人なカナエと、『魔性の保険医』と男子の人気ぶっちぎり一位を獲得している涼子は基本的に二人一緒に登校しているのもあって非常に目立つ。

ただし男性教師でありながら、彼女らと同じように男子からも人気があり有名な、今年から赴任した教師がいる。それは……

「矢的先生ー！プリント集めて来ましたー！」

「おおー！助かったよ、ありがとう！」

矢的猛―そう、かつてウルトラマン先生と呼ばれ光の国に戻ってからは宇宙警備隊以外にもウルトラ学校の先生として数多くのウルトラ族に勉強を教えて来た人物。

『ウルトラマン８０（エイティ）』それが彼の正体である。

その教え子の中にはあのタロウの息子タイガも含まれ、大抵の相手にはタメ口のゼロでさえ「８０先生」と敬意を払った呼び方をする程の良き先生だ。

今回の異変にて対応する為、ある程度常駐可能なベテラン戦士が必要だったのだが、受け持ったウルトラ学校の生徒達が卒業する年であった８０が自ら立候補したのだ。

そして、たとえ事件が解決してもせめて今回受け持った生徒達はちゃんと卒業まで見送ってやりたいという８０の願いはレジェンドによって受け入れられ、現在は駒王の学園長（実は彼も宇宙人である）に貸してもらったアパートにて他の宇宙人と交流しつつ暮らしている。

※なお、本作に登場するウルトラマン達の人間体は若い頃のままである。ご都合主義万歳。

『駒王学園三大変質者』たる三人にも決して見下したり呆れたりせず

親身になって意見を聞いたり、辛い事はまず自ら実践してみせる熱血先生として有名になっており、科目は国語担当なのだが他の科目でもお呼びがかかる程の人気を博している。あの三人でさえ彼の授業は真面目に聞く為、他の教師達から一目置かれるのも納得だ。

「あ、ついでに矢的先生。あの三人また保健室行きです。剣道部から逃げてる時によりにもよって胡蝶先輩に遭遇したらしくて」
「ああー……彼女、笑顔のわりに手加減ないからなあ。相手に優しく言い聞かせるんだけど、それに至るまでの行動は結構厳しいから」

普段は優しいカナエも時にはバイオレンスらしい。南無。
変質者の相手などかつて鬼相手にやり合った『柱』の一人である彼女にはさして問題でもなかった。

「彼らなら御門先生の治療ですぐに元気になりそうだけど、僕も後で見に行ってみるよ」
「ホントご苦労様です矢的先生」
「好きでやってる事だからね。このくらいなんともないさ」

そう笑う矢的を見て『マジでエロ自粛しろよあの三人』とプリント持って来た生徒が思ったのは当然だった。
その後、そのうちの一人である兵藤一誠に彼女が出来たという事を本人から聞いた矢的は……

「良かったじゃないか！ちゃんと大切にするだぞ兵藤！」
「勿論すよ矢的先生！」

全く何も疑ってなかった。
いや、それはいいんだが相手見て少しは考えよう８０先生。
とはいえ実際、それを気にしている余裕は帰宅する彼と別れてから無くなったのかもしれない。

何故なら、火星に向かったレジェンドからあるウルトラサインが送られて来たからだ。

☆

レジェンドはほぼ一瞬に近い速度で地球から火星へと飛んで来た。そこまでは問題なかったが、火星の地表へと降下すると既に戦闘が繰り広げられていたのだ。

しかも相手はゴーデスだけではなくかつてダイナが戦った『スフィア』が多数おり、グレートがゴーデスと激突し、ダイナがスフィアを迎撃している状態である。

「すまん、遅くなった」

「レジェンド!?貴方程の方が自ら……いや、おかげで戦局はこちらに傾いた！」

「レジェンド（大先輩）がいれば一気に大逆転だ！本当の戦いはここからだぜ！」

伝説の戦士とも呼ばれたレジェンドの加勢によってグレートとダイナに再び闘志の炎が灯った。

「ダイナ、この雑魚（スフィア）を手早く一掃してグレートの援護に入るぞ」

「ラジャー!!」

「グレート、もう少しだけ保たせろ。すぐにそちらの援護に向かう」

「了解です、レジェンド！」

グレートはゴーデスへと猛攻をかけ、ダイナはミラクルタイプへとタイプチェンジを行いレジェンドのサポートの準備を済ませる。

「俺の技で広範囲に一斉攻撃可能なものがある」

「それを俺の技でさらに増幅すればいいんだな！」

「そういう事だ。まとめて一撃で決めるぞ……！」
「よっしゃあ！」

ダイナが自身とレジェンドの前に巨大な光の膜を作り出す。デスフェイサーに使った事のある『シャイニングジャッジ』に似ているが今回は増幅するものが違う。
膜の形成を確認し、レジェンドはその膜へ光を溜めた拳を突き出す。するとその膜に拳が当たった部分からスフィア達に向かって無数の光弾、それもガルネイトボンバーより大きさも威力も強大なものが凄まじい勢いで連射された。
スプラッシュデトネーション。
サーガの技であるサーガプラズマーと互角以上の威力と連射性能を誇るレジェンドの技の一つだ。それをダイナの『バーストシャインミラー』という増幅技によって強化する事で威力は爆発的に増し、その結果無数にいたスフィアは一瞬で駆逐された。

「見たか！俺の超ファインプレー！……あ」

自画自賛なダイナだったがサポートした相手がかつてのＧＵＴＳ隊の重鎮であり、後継チームであるスーパーＧＵＴＳでもお世話になった上司であり先輩でもあるレジェンドなのを思い出して気まずくなった。

「俺は別にお前の今の発言は肯定していいと思っている。如何せん俺の技は出力が高過ぎて増幅出来る奴が限られてくるんでな」
「あざっす大先輩！」
「よし、残るはゴーデスだけだ。個々のスペックでも俺達が上回っている、一気に押し切るぞ」
「ラジャー！グレート先輩、援護するぜ！」

二人がグレートの援護に入り、レジェンドがダイナとグレートを回

復、その後全体の防御にまわり二人が攻撃に専念する。レジェンドに攻撃がまるで効かないばかりかミラクルタイプのダイナの様々な鋭い攻撃やグレートの重い一撃を幾度もくらい、ついにゴーデスは地に伏した。

「ここまでだな、ゴーデス！」
「年貢の納め時だぜ！覚悟しろよ！」
（……おかしい。グレートやダイナが単独でならともかく二人が同時に来た事に加えて、俺まで到着したならば彼我戦力差は奴にとって絶望的。にも関わらずまるで逃走する素振りを見せなかった……何か勝算かそれに類した策でもあるのか？）

二人が勝利を確信する中、レジェンドは唯一ゴーデスの行動を訝しんでいた。ウルトラマンである彼らはあれに感染する事はない。しかもこの状況ならそれを拡散するのも防げる。ならば何故？

「ウルトラマンレジェンド……ウルトラマングレート……そして見知らぬウルトラマンよ……」
『!?』
（俺とグレートを知り、ダイナを知らなかっただと……？まさか奴は俺とグレートが倒した『あの宇宙』の記憶があるのか？）

突如言葉を発したゴーデスに驚く三人のウルトラマン。ただ、レジェンドは即座に考えを別の所に向けた。
別の宇宙にて倒したはずの個体がこの世界で甦ったのか、それとも記憶があるだけなのか。

「我はお前達には勝てない。だがお前達はもう少し周りを見るべきだ」
「今更何を……!?」

グレートが問い詰めようとした時、突如として火星の空にワームホールが開き、再びスフィアの大群と二体の怪獣が現れた。
宇宙戦闘獣コッヴ
宇宙戦闘獣コッヴⅡ
かつて根源的破滅招来体によって地球へと送り込まれた尖兵とも言える怪獣と、その同種の個体である。

「何だ、この怪獣は!?」
「俺も初めて見る奴だ！」
「こいつらは『根源的破滅招来体』が地球に送り込んだ事もある怪獣だ。何より先程のワームホールから出現する方法もな……！」
「!!」
「ウルトラマン達よ……今から我は『死ぬ』」
スフィアや怪獣達の出現に続いてゴーデスのした発言。ダイナは「何言ってんだこいつ」としか思わなかったが、その言葉の意味をレジェンドとグレートは理解し、即座に行動に移った。

「『ゴーデス細胞』の状態で離脱などさせるか！」
「細胞の一つも残さず消滅させてやる……！グレート！フィールドを張って奴を逃がすな！」
「了解……!?グアッ!!」
「グレート先輩！この野郎！デアァッ!!」

ゴーデスを逃がすまいとレジェンドの指示どおりエネルギーフィールドを展開して閉じ込めようとした隙を狙ってコッヴ達が攻撃を仕掛けてきた。追撃をしようとするコッヴⅡをダイナが横から妨害する。
レジェンドはゴーデス細胞へと姿を変えたゴーデスへ自身の得意技にして宇宙最強の究極技とされるスパークレジェンドを放つものの、スフィアの大群全てが犠牲になる形で妨害され、根源的破滅招来体が開けたとされるワームホールへと逃げ込まれてしまった。

「抜かった……！最初から二人を万が一に備えて下げつつスパークレジェンドで跡形も無く消し去るべきだった……！そうまでして地球に牙を向きたいか、根源的破滅招来体！ゴーデス！」

既に聞こえているか分からない二つの存在に叫ぶレジェンド。

一方グレート＆ダイナとコッヴ＆コッヴⅡの激突も大詰めを迎えていた。

「ハッ！ヌアアア……シュワッ!!」

「ヘアァッ!!」

ダイナのレボリウムウェーブがコッヴを消し飛ばし、グレートのバーニングプラズマがコッヴⅡを焼き尽くす。

漸く火星での戦いは終わりを告げた。

「すまん二人とも。俺の判断ミスだ」

「いえ、レジェンドの責任だけではありません。私達も勝利を目前にして油断していました」

「ああ。せめてあのワームホールが開く前にゴーデスを細胞の状態へ持って行けてたらそれを消滅させるだけで良かったかもしれないのに……」

「……俺の力を使って過去に飛んだところで今の状態が都合良く変えられるとも思えん。連中に出し抜かれて後手に回る事になったが対策が取れんわけでもない」

レジェンドの言葉を聞き、グレートとダイナも再度決意を新たに頷いた。

「奴らは手を組んだというより利害関係が一致したに過ぎんだろう。根源的破滅招来体に関しては大雑把ではあるが地球が無くなればい

いと思っていそうだからな。ゴーデスが地球をどうこうするというならそれに乗っかっているだけだろう」
「以前と同じなら奴の最終的な目的は『宇宙そのものと融合する』事でしょう」
「マジかよ……『グランスフィア』もそんな事言って……まさか！」
「お前の予想通りだ、ダイナ。下手をすればグランスフィアも存在している可能性がある」

暗黒惑星グランスフィア。ダイナがフロンティアスペースでの己の存在と引き換えに破壊したスフィアの親玉とも呼べる『生きた惑星』。ゴーデス、根源的破滅招来体に続いて恐るべき相手がいるかも知れない。

「グレート、至急光の国へ戻りこの事を報告してくれ。地球への赴任が遅れる事は俺から８０に伝えておく」
「分かりました」
「ダイナもベリアルやゼロ、他の遊撃隊員に報告を。奴らとて現状ここまでやられていればいきなり攻め込んでは来ないはずだ。その間に可能な限り戦力を整えて来たるべき決戦の日に備えるぞ」
「ラジャー!!」

グレートはＭ７８星雲光の国へ、ダイナは地球周辺に移動した銀河遊撃隊移動基地ガーディアンベースへ向かい、レジェンドもすぐさま地球の８０へ向けてウルトラサインを送った。

「この宇宙、この世界で何かが起こり始めたのは理解出来た。だが誰であろうと俺達を思い通りに出来ると思うなよ……！」

その頃、地球にはゴーデス細胞が到達し各地の空に不気味な緑色の光が蠢いていた。昼夜都市辺境問わず見えるそれは人々の目にも止まり言い表せぬ不安を煽る。

ゴーデスの出現を発端にいよいよこの世界と宇宙は動き始めた。

〈続く〉

一つの疑念、拘束具は変装を兼ねるべし

火星での激戦を終え、それぞれ光の国・ガーディアンベース・ダイブハンガーへと帰還したレジェンド達。
報告を受けたウルトラの父とベリアルは今後はより一層警戒する事を決めつつ、グレートとダイナには一先ず休息を取ってから地球・駒王町へと向かわせるようにした。
一方駒王町……というかとある海域に存在するレジェンド一家の我が家たるダイブハンガー。
レジェンドはグレイフィアから報告を受けていた。

「は？兵士（ポーン）の駒８個分使って悪魔に転生した奴がいる？珍しいな。大方神滅具（ロンギヌス）持ちだろうが」
「はい、名前は兵藤一誠。宿した神器は『赤龍帝の籠手（ブーステッド・ギア）』です」
「それってアレか。タイラントに叩きのめされた『マジでダメなオスドラゴン』略してマダオのドライグか」

間違いなく本人（龍）が聞いたら号泣しそうな言い草である。レジェンドはそのタイラントを瞬殺したので反論しようも無いのだが。
とはいえレジェンドにとって重要なのはそこではない。

「今までと同じ生活してていきなり発現する事はあるまい。何が切っ掛けだ？なんとなく予想はついたがな」
「……堕天使によって殺されたと。もっとも発見した夜一様も堕天使が飛んできた方角から推測しただけで確証はないと。霊圧が消えたから一度死んだのは間違いないそうです」
「そいつ霊力とかそれに似た力でもあったのか。というか夜一はなんでそいつと面識あったんだ？」
「いえ、直接の面識はないそうですが、カナエ様が何かと成敗していたらしくて。しょっちゅうその霊力の滓みたいなものが付いていたようでそこから読み取ったと」

「カナエ何してんの？って言うか夜一何ソレサイコメトリー的な事出来んの？いや俺も出来るけどさ」
「出来るんですかレジェンド様」

まあそれはさておき、気になる事が２つほどある。

「堕天使が犯人なのは分かったがそれは堕天使側の総意なのか？」
「……私の憶測にはなりますが、それは無いかと。聞いた話では堕天使総督のアザゼルは『命を取らず神器を抜き取る』研究をしているらしく、そう言った命令をするとは思えません」
「確かにな。それは後で首謀者なり総督のソイツなりに問い質せば一発で判明するだろう。もう一つ……兵藤一誠は誰の眷属だ？」
「……リアス。リアス・グレモリーの眷属になりました」

合点がいった。先程からこの質問が来るだろう事をグレイフィアは予想していたのだろう。グレモリーと言えば現魔王サーゼクス・ルシファーの家系である。そしてそのサーゼクスの妻がルミナシア・ルキフグス……グレイフィア双子の妹だ。
仮住居が駒王にあり、さらにレジェンドの立場上いずれ関わる事があるであろう彼がグレモリー眷属とは運命の巡り合わせが幸か不幸か。

「まあ、こうなってしまったものは仕方ない。遅かれ早かれ再びこの世界の三大勢力とは関わる事になる。となれば焦って行動する必要も無いだろう。安心しろ、グレイフィア。俺達が付いている」
「……はい」

少なくともレジェンド達がグレイフィアを突き放す事は無い。見捨てるなど以ての外だ。そう再認識したグレイフィアは少しばかり心が軽くなった。

「あ、レジェンド様。今晩はレジェンドが作ったマーボーカレーを食べたいとオーフィス様と夜一様が」
「おいマジか。ならさっさと下拵えしておかないと……俺がマーボーカレー作るとレイブラッド事変なみに食卓が戦場になるんだけど。その二人に限らず参戦するから大混戦だよホント。それからグレイフィア、新しい服いい感じじゃないか」
「え!?あ、ありがとうございます……」

さり気なく乱菊やC．C．と買い物した時に購入した服を着てみたが、あっさりレジェンドは気付いてくれた。
こういう些細な事もちゃんと気にかけてくれる事がグレイフィアには何より嬉しかったのだろう、この後の食卓がそれこそ少なくとも前話における火星での激戦みたいになる事はすっぽり頭から抜けていたらしい。
その日の晩ごはん後、殆どの者が卯ノ花にお説教を食らったという。レジェンドとグレイフィアは免除された。ただ普通にマーボーカレー作った本人とそれを手伝ったメイドさんだもの。

☆

翌日、カナエは駒王学園にて矢的に歴史の科目で質問しており、矢的は丁寧に答えていた。一応自分の生まれた世界ではなくとも元々生きていた場所が大正の日本だったので、こういう事は特にしっかりと知っておきたいのだ。

「……と、こんなところかな。僕があの世界で地球に来たのは１９８０年だったから、今と比べてもだいぶ違っていたよ」
「なるほど。あれからも世界では色々あったんですね。矢的先生、お時間取っていただきありがとうございました」
「いや、僕としても大正という時代の事が詳しく知れて勉強になったよ。日本で戦って来たから興味があったんだ。こちらこそありがと

う！」

無論、レジェンド一家であるカナエは彼が８０である事も知っている。生徒に勉強を教えるだけでなく、こうして自分にない知識は率先して調べる勤勉さも彼の高い評価に繋がるのだろう。ウルトラマン先生の二つ名は決して単なる印象付けだけではないのだ。

と、そこへ俯き気味な一誠が通りかかった。いつも他の二人と馬鹿をやって逃げ回っている時と違い、本気で落ち込んでいるのが分かる。カナエはともかく、矢的は数日前彼に彼女が出来たと聞いた。もしかして振られたか？とも思ったが、それにしても様子がおかしい。

「兵藤！どうした？いつものような元気がないじゃないか」

「矢的、先生……に胡蝶先輩」

「あらら……私ちょっと警戒されてる？まあ私がやってる事思い返せば仕方ないわね」

「いや、そういうわけじゃ……」

「……兵藤、本当に何があった？」

矢的は本気で彼の普段との違いを感じた。少なくとも普段の一誠ならカナエを見れば多少オーバーリアクションではあるがビビるはずなのだが、今の彼にはそれがない。

その後、一誠は矢的が予想もしない事を聞いてきた。

「あの……矢的先生、『天野夕麻』って娘の事を知ってますか？」

「天野夕麻？ああ、知ってるよ」

「！本当ですか!?」

「勿論、受け持ってる生徒の事だしね。ちゃんと出席簿にも……出席番号は確か三番……!?」

「矢的先生？どうしたんすか？」

矢的は目を疑った。昨日まであった彼女の名前が無い。それこそ

最初から存在しなかったかのように、消した跡が全く見当たらないほど綺麗さっぱり無くなっている。

「どういう事だ……彼女の名前が名簿から消えている」

「え!?」

「別に名簿を間違えてるわけじゃない。ちゃんと昨日までの印も残ってる。だと言うのに彼女の欄だけがすっぽり消え去っているんだ」

矢的が名簿を指差しながら一誠、それにカナエに見せると確かに天野夕麻の名前は無い。普通なら「そんな生徒は最初からいなかった」と他の生徒や教師から笑って流されるだろうが、矢的に限ってそれは無いと二人は確信出来る。

「これは明らかに異常な事だ。よく話してくれたな、兵藤。さっきまでの表情から察すると誰も『覚えてない』『知らない』と言ったんだろう」

「は……はい」

一誠は急に気が楽になった。自分の友人二人にまでそう言われ、最初から自分の思い込みだったのではないかと思いかけていた。しかし、自分が尊敬する教師は違った。

落ち着いて話を聞き、それこそ事件を目の当たりにした探偵か刑事かと思う程、真剣になってくれた。

さらに、もう一人。

「ねえ兵藤くん、矢的先生。その子、確か長い黒髪でスタイルも割といい子じゃない?」

「!」

カナエもまた、彼女を覚えていた。教師であった矢的のように頻繁に目にしたわけではないが、これは大きい。

「胡蝶先輩も覚えてるんですか!?」
「何度か見かけた程度なんだけどね。ただ……」
「どうかしたのか、胡蝶?」
「彼女、何か妙な感じがしたの。何がとは上手く言えないけど」
「!!」

その言葉を聞いた一誠はあの時の言葉を思い出す。
『死んでくれないかな?』
あれを本当に彼女が言ったのなら……

「とにかく……兵藤も胡蝶も、この件はあまり口外しない、出来る限り僕達だけの秘密にするんだ。覚えていないだけでも変だというのにこうして物からも最初から無かったようになるのはおかしすぎる。この件を知っていると分かれば何かしらの形で相手から接触がある筈だ。下手に騒ぎを大きくせず慎重にいこう。二人とも、これが僕の連絡先だ。何かあればすぐに連絡してくれ」

矢的は手早くメモに連絡先を書いて、一誠とカナエに手渡す。そして、一誠を安心させるように微笑みながら、しかし力強く言った。

「兵藤、たとえ君に何があっても僕は君の味方だ。心配な事があればいつでも相談してくれ」

正直、今まで生きてきてこんなに親身になってくれた先生が居ただろうかと、一誠は本気で泣きそうになりながら頭を下げて教室へ戻って行った。
カナエも何か勘付いたのか「それでは私も」と会釈して自分の教室へ。

「大丈夫だぞ兵藤。悪魔になっても、君は一人じゃない」

矢的猛―ウルトラマン８０は気付いていた。彼、兵藤一誠が悪魔として転生している事に。それでもなお、自分にとって代わりのいない大切な教え子である事に変わりはなかった。

☆

ある日の夜、レジェンドはとある廃工場へと来ていた。
妙な気配を感じ、ゴーデス細胞に関する何かがあるのかと思って来てみたがそこに居たのはぶっちゃけ期待ハズレだった。

「変わった匂いがするぞ？美味いのかな？不味いのかな？とりあえずいつも通り殺して食べてみようか」
「オイ何なのコイツここはゴーデス細胞に侵された奴がこう……虚ろな目でブツブツ言いながら怪獣になる展開じゃないの？ゲテモノ露出狂とかお呼びじゃないんだが」
「ふざけた事をぉぉぉぉぉ!!!!」

ゲテモノ露出狂もといはぐれ悪魔バイザー。レジェンドに襲いかかるが、離れているにも関わらずレジェンドが蝿を払うかの動作をすると凄まじい衝撃と共に吹き飛ばされる。
レジェンドキネシス―いわゆるウルトラ念力のレジェンド専用バージョンだが、威力は桁違いだ。まともに同じ超能力でやり合うには少なくともキングのレベルまで必要となる。昔、宇宙を見回っている最中に遭遇したエンペラ星人は段違いに強力な念動力を持っていたにも関わらず、この技だけで叩きのめされた。

「ガ……アッ……！」
「貴様が騒ぎ出してくれたお陰で誰かに気付かれたかもしれんのでな、身バレしないようにさせてもらおうか……！」
「貴様……！何……を!?」

レジェンドが何かを上に放り投げて叫んだ

受けてみよ正義の力！
正義装甲ジャスティステクター
装☆着!!

どっかの勉強部屋で力を取り戻そうとした少年が言わされた台詞のアレンジ（テクターの部分だけ）を気合い全開、マジで言った。
むしろマジで大丈夫かレジェンド。ストレスで頭パーになってないか。
そんな事はともかく、その言葉と共にレジェンドにはゼロが修行中に纏っていたテクターギアが装着され、防御力が高まるかわりに動きに大幅な制限がかかる。
が、この程度はレジェンドにとってさして問題ではないどころかむしろ人間体とはいえ本気で動けばテクターギアの方が駄目になりそうな勢いだ。
余談だが、人間体の彼の名前で今の状態を表すとまさに『テクターギア・零（ゼロ）』である。非常に紛らわしいが中身はゼロではなくレジェンドだ。

「よくもわからぬ半端な神器を纏ったところでエエエエエ!!」
「これは神器でも何でもない。単なる修行用プロテクターに過ぎん。もっとも俺には唯の拘束具でしかないがな」

正しくは拘束具としてもろくすっぽ機能してない変装道具でしかないのだが。主にレジェンドのスペックのせいで。
かつて装着した自作アーブギアなら多少はブーストがかかるが前述通り元々がおかしいので大したプラスにはならず、結局そっちも変装にしか使っていない。『勇者の鎧』とも伝わった凄さは何処へ……

「ダァッ!!」
「!!」

そうこう言っている間にレジェンドはバイザーの攻撃をアッサリジャンプで避けてある技の体勢に入った。

「イヤァァァ!!」

本来は技名に自分の名が入る、レジェンドキックというレオキックやウルトラゼロキックと同種の技。
テクターギアで正体を隠している為、強いて言うなら今はテクターギアキックだ。

「アギャァァァァァァ!!!」

ドガァァァァァン!!
赤熱化した右足がバイザーの頭部を直撃し、大爆発を起こす。ぶっちゃけ、派手にアクションしただけで大して威力は出してないのだが。
それなりに出したら今頃廃工場を中心にクレーターが出来て見晴らしが良くなっているところである。

「……ヤバイな調子に乗って派手な爆発させちゃったよどうしよう」
「何が起きているのか分からないけど、はぐれ悪魔バイザー、貴方を滅しに……あ、あら?」
「あ」

おそらくはバイザーをどうにかしに来たんだろうリアス・グレモリーとその眷属達が、たった今駆けつけてきた。
が、ロボ〇ップもどきのような格好をした長身の男が腕組みして顔だけそっちに向けて間抜けな声を出している姿は大変シュールな光

景だ。

「えっ……と、貴方がバイザーを倒したのかしら？」

「すまん。妙なゲテモノ露出狂は蹴り一発叩き込んだら大爆発したけどアレがそのバイザーとやらか？ぶっちゃけ婚期が遅れて見境なくなった奴にしか見えなかったが」

「いやそんなものを見てそういう結論に至る貴方が変なのよ!?」

「安心しろ。俺の知り合いの全身銀色はもっと訳のわからん答えに辿り着く」

「怖いもの見たさでその人？に会ってみたくなったわ」

「やめておけ。確実にストレスで胃に穴が開くぞ」

「ってそうじゃなくて！」

最早コントにしか見えなかった。

ちなみに全身銀色というのはご存知のあいつしかいない。

「貴方は一体何者なのかしら？」

「お隣さんだ」

「隣に家なんて立ってないでしょうが!?」

駄目だ、まともに会話出来そうにない。リアスはがっくり肩を落とした。折角新しく眷属になった一誠に他の眷属の力や駒の特性を説明しながら色々教えようとしたのだが、変なプロテクターを着けた何者かに倒されてて無駄足になり、おまけにその人物とも話が噛み合わない。

ただ、ある二人はそれぞれある事に気付いた。

（鎧かプロテクターみたいなのは違うけど……似ている。あの時、私と母様を助けてくれたあの人に）

（これは……黒歌姉様の匂い？なんであの人から……）

レジェンドが初日にいきなりやらかして助けた母子の子供の方・姫島朱乃と、ちょっと成層圏まで顔貸しな発言をした日に保護した黒歌の実の妹・塔城小猫。

「とりあえず立ち話もなんだ。
お疲れ様でした」
「ええお疲れ様……って違うでしょ!?え!?もういない!?何なのよ最初から最後まで!もぉー!」
「ぶ、部長!落ち着いて下さい!」
「今のって関係者なんですか!?いや関係……あれ?」

ロ○コップ野郎(レジェンド)に振り回されて地団駄踏むリアスと、それを必死に宥める木場。一誠はまだ混乱中で、朱乃と小猫はボーっとしている。
こうしてレジェンドとオカルト研究部の初邂逅はグダグダに終わった。と言ってもレジェンドの正体はバレていないのだが。しかし、彼の正体を知る者ならただ一つ言える事がある。

―ノアやキングだけじゃなくレジェンドも大概である―

ちなみにこの後、駒王町に『町外れの廃工場には時々ロ○コップが出現する』という変な噂が広まった。

〈続く〉

現在の光神達、超神とシスターの再会

レジェンドがオカ研メンバーと初邂逅を果たした頃、レジェンドより【エリア】を任されているサーガは惑星ジェネシスに居た。

かつての記憶を持ったゴーデスやスフィア、根源的破滅招来体の尖兵まで一度に出現したと報告があった為、それらが他の世界に影響を及ばせてないか調査しているからだ。

惑星ジェネシスはどの【エリア】にも属さぬゴッドスペースの中心部であるがゆえ、情報が万遍なく入ってくるのでこれ程適した場所はない。

「……他の世界には連中による被害はない。やはり先輩のいる世界に集中している。今は」

顎に手を当てつつサーガはある結論に至った。

「直接挑んで連中が先輩に勝てる可能性はたとえ他の勢力がさらに現れて手を組んだとしてもまず不可能。先輩が本気を出せばその瞬間片が付く。だとすればそもそも奴らの狙いは先輩ではない……まず先輩を中心に事態を考えていたところから見直さなければいけないか」

サーガはレジェンドが後継者と推す程の逸材である。最もサーガ自身はレジェンドと肩を並べて活動する事を望んでいるが。そんな彼は非常事態であろうと冷静な態度を崩さなかった。

「先輩達がいるあの世界……あそこ自体に何かがあるのか？根源的破滅招来体はともかくゴーデスとスフィアは目的が似通っている以上、普通に考えれば組んだところで衝突するのは目に見えている。だとすればそうせざるを得ない何かが存在すると考えるのが妥当だろうが……現状判明している事だけではあまり確証が持てない」

色々考えていたが事が大きいにも関わらず情報が少な過ぎるのだ。どうしたものかと再考した末、サーガは決意した。

「時間を見つけて一度、先輩のいる世界に行ってみるか。ここであれこれ考えるより現場で直接感じる方が良い筈だ。推測が外れれば振り出しに戻るが疑問の一つは無くなる。事件の大きさから見れば小さい事だろうが何事も一歩一歩が大切だ」

レジェンドのいる世界へと赴く事にしたサーガ。そしてもう一つの懸念は……

「やっぱりプレイ動画の配信だろう。縛りプレイで改造なし、この状態でクリアすればいける！」

「待てノア、まずは配信する上でアバター的な物を作らねば。やはり人外か亜人でいくか、それともイケメン系でいくか」

「……」

この状況でＶｔｕｂｅｒになろうとしている光神（バカ）共をこのまま放置して良いのかという事だった。

悲しいかな、サーガではレジェンドのようなキレのある鋭いツッコミは出来ない。貴重な真面目枠潰してまで出来ても困るが。

サーガは改めてレジェンドが二人を上手く御せていた事を実感した。同時に『この二人を相手にし続ければ精神がやられても仕方がない』という結論にも至る。

何を言っても無駄だろうから、せめて見た目と声が合わないゲテモノＶｔｕｂｅｒにならない事を祈った―

「よし！『双子のケモ耳美少女メイド』！これで行くぞ！」
「うむ！これなら良いだろう！」
「良いわけあるか!!!」

真っ先に希望を叩き潰され爆発したサーガによる渾身のサーガマキシマムが二人の顔面に炸裂した。

☆

そんな二人に振り回されサーガからの尊敬と同情を一身に受ける苦労人（レジェンド）はというと、たまには一人でのんびりして見るかと単独行動していたのだが。

「はわう!?」ドンッ
「何だ？」

後ろから何かにぶつかられた。というか倒れて来たという方が正しい。

「ご、ごめんなさい！躓いて、その……貴方に倒れ込む形になってしまって……」
「いや、気にするな。これでも日々鍛えているからな。そちらは大丈夫か？」

どうやらシスターのようだが躓いて転びそうなところを運良くレジェンドの背中に倒れ込む形で難を逃れたらしい。
大層申し訳なさそうにしているがわざとではないし、そもそもレジェンドを盾扱いしてくる同僚もいるしで別にどうも思わない。

「あ、はい。お陰様で……きゃ！」
「……ん？」

急に突風が吹き彼女のヴェールが飛ばされてしまった。普段ならレジェンドが顔は隠すのにそのスペックは隠そうとせず即座にあり得ない動きでキャッチして彼女に返すだろうが、シスターを見て固まっている。

ヴェールが飛ばされて束ねられていたブロンドヘアーが露になった彼女は控えめに言っても美少女だ。しかしレジェンドの目を引いたのはそこではない。その髪と顔を合わせて見た時、レジェンドは彼女にどこが既視感を感じた。

（この娘は……何処かで会ったか？似たような誰かを見た気がするが……こんな感じの血縁者がいそうな奴は誰かいたか？駄目だ思い出せん）
「あの、どうかされましたか？」
「すまない、個人的な問題だ。しかしこの辺りでは見かけん顔だな。旅行か何かか？パッと見この国の者ではないようだが」
「あ、いえ……実は私、この町の教会に赴任する事になったんですけど迷ってしまいまして。それに、その……私まだこの国の言葉があまり分からなくて、あの……」
「道も満足に聞けなかった、と」
「はい、そうなんです……」

しょぼんとするシスターだったが、この町はレジェンドのお膝元。分からない事など精々個人のプライベートぐらいだろう。やろうと思えばやれるけど。

ついでに何故言葉が通じるかと言えば純粋にレジェンドの覚えている言語数も天文学的な数になるから、で済む。伊達に【エリア】の頂点に立っている訳ではないのだ。

そんなレジェンドはここは一つ地元民として案内してあげようと思いつつも、今の会話の中である一つの事を思い出す。

「この町の教会、と言ったな」

「はい、先日この町の教会へ行くようにと言われまして。元々ここには来たかったんです。あの方が最初にご光臨なされた地、と知ったので」

(そもそもこの町の教会は既に廃墟となって機能していないはずだが……ん？光臨？)

教会について考えようとしたが、レジェンドはその後に続いた言葉が気になった。

「あの方？最初？」

「光神様です。世界中に伝わる、ある御伽話に出て来られるお方なんですよ」

その本人、目の前にいるんですけど。こないだ廃工場でギアコップ(仮)としてやらかしてましたけど。

さらにシスターは、他の者なら笑いかねないがレジェンドにとってはグリッター化したノアを見たような衝撃の事実を口にした。

「私、ずっと昔に光神様と会った事があるんです！忘れもしないあの凄い台風の日、巨大なクラゲさんから私達を助けてくれました。それだけじゃなくて、壊れかけた教会も、怪我を負った人も、皆あっという間に治してくださったんですよ」

キラキラした目でレジェンド(その本人)に話すシスターに、ようやく先程の既視感の正体が分かった。

(……ああ、あの時の少女か。立派になったものだ)

「それでその時、お言葉と一緒にこの輝石を下さったんです。色々辛い事もありましたけど……これを見ると不思議とまた頑張れるよう

になるんです。光神様がすぐ近くで見守ってくれてる感じがして」
「……そうか」

いつの頃かペンダントにした輝石を握り締め、顔を赤らめながら話すシスターにレジェンドは優しく微笑んだ。

（……コスモス。お前がムサシに輝石を渡し、時を経て再会した時の気持ちが今なら良く分かる）

ただしムサシの場合は友情だったが、彼女は明らかに恋愛のそれなのだが、周りは恋のダイレクトアタックかましてくる相手ばかりなのでレジェンドはそういう純情に気付いていない。さすがにこれはレジェンドが悪いとは言えない。良くも悪くもオーフィスを筆頭とするレジェンドラバーズ（命名・ノア＆キング）が強烈過ぎた。

「まあ、ここで会ったのもなにかの縁だ。場所さえ教えてくれれば俺が案内しよう」
「本当ですか!?ありがとうございます！えっと……地図は……ありました。こちらです」
「ふむ……（やはりあの廃墟の位置だな）……とりあえず行ってみるか？正直ガッカリするだろうが」
「え？」
「百聞は一見に敷かずと言う。自分の目で見た方が早いだろうな。ああ、今更だが自己紹介がまだだったな。俺は光神零（こうがみぜろ）という。姓は光の神と書いて『こうがみ』だ。『ぜろ』が名前の方だ。（ウルトラマンに）同じ名前がいるからややこしいんだが」
「私はアーシア・アルジェントです。姓ってファミリーネームの事ですよね。光神様と一緒で素敵です！」

めっちゃ本人です、と言い難い。
ともかくレジェンド自身もゴーデスに関する情報が手に入るかも

しれないので、一応気にはなっていたのだ。
二人は一緒にその教会だと言う廃墟に向かっていたが、その途中ある一人の老人が木陰で辛そうにしていた。
「ん？おい、家撮（けとる）どうした？」
「あたた……おや？レ……光神さんかい。いやね、ちょいと足踏み外してな。儂も鍛えてたんだが流石にこの歳になってくるとなぁ……」
家撮と呼ばれた老人、その名の通り正体は宇宙でも高齢の種族である『ケットル星人』である。御年なんと２０万歳を超えている……が、その目の前にいるのは歳が存在するのかさえ分からないウルトラマンである。少なくとも習得している言語数同様、天文学的な数値の歳なのはハッキリしているが。
ともあれレジェンドはアーシアがいるにも関わらずいつも通りフューチャーフォースで治療する。
「え……!?」
「いつもすまねえな光神さん。もしあそこを増築したりするなら呼んでくれ。いつまでも借りばっかじゃ申し訳たたねぇや」
「その時は頼む。ああ、ギルドにもたまには顔出してやってくれ」
「あいよ、それじゃまたな」
そういやサンダービートスターもそろそろ狩りに行くか、とレジェンドが思い出しているとアーシアが少々興奮気味に聞いてきた。
「ゼロさんも癒やしの力を使えるんですか!?」
「いや俺のは正確に言うと技……『も』？」
「はい。私も使えるんです。光神様縁の地で、同じ力が使えて光神様と一緒の字のファミリーネームを持ったゼロさんと出会えた事、きっと光神様のお導きですね！」
「……そういうものか？」

「はい、きっとです！」

妙に嬉しそうなアーシアである。レジェンドはいまいち理解出来ないが、同じように女性なら分かるのかもしれない。

そんな感じで談笑しつつ、目的の場所に到着した。

「本当にここで間違いないのか？」

「はい、ここで合ってます」

（単なる廃墟ではないな。拠点か何か、か……だが、この感じは……）

「ゼロさん、ここまでありがとうございました。あの、お時間があればお礼をしたいのですが……」

「いや、それには及ばん。こちらとしても気にはなっていたのでな。ついでに、あまり帰りが遅くても家族が心配して騒ぎかねん」

「そ、そうですか……」

再びしょぼんとするアーシア。どうやらこの短時間でレジェンドは相当気に入られたらしい。

「まあ、この町に住んでるんだ。その内また会えるだろうさ」

「……はい！それじゃ、私は挨拶がありますので」

「……そうだ、アーシア。ちょっといいか」

「？」

レジェンドが手をかざすとアーシアからは見えない様に輝石が一瞬強く輝いた。

（これでいい。彼女への『加護』は相当強力に出来た）

「ゼロさん？」

「急に呼び止めてすまないな。何、この言葉を改めて送ろうと思ったが、次に会えた時に取っておこう」

「よく分かりませんけど、またお会いしましょうね。絶対ですよ？」

「ああ、約束だ」

アーシアはレジェンドの姿が見えなくなるまで見送ってくれた。そんなレジェンドは彼女が近く、何らかの騒動に巻き込まれるだろう事を予測し以前渡した輝石に授けた加護を強化したのである。

「何もなければいいが……それは無理そうだな。彼女が人間である事を考えれば彼女の癒やしの力は神器（セイクリッド・ギア）だろう。とはいえ、俺が輝石に新たに施した加護は今までとは別次元のものだ。何処のどいつだか知らんが、彼女の神器を奪えるものなら奪ってみろ」

そしてこの予測は数日後、現実となる。

その時さらに起こる衝撃的な出来事は、かねてよりレジェンドが警戒していた事態であった。

〈続く〉

「なるほどＶｔｕｂｅｒになるならまずは形から入れ……つまりコスプレしてみろという事か」

「どうやら我々が思っていた以上に深いようだな、ノア」

「本気で駆逐するぞお前ら」

サーガマジギレ五秒前。

レジェンド一家、アーシア奪還作戦

「我、お腹いっぱい。満足」
「よくもまあこれだけの量を平らげられたものよな」
「あらスカーサハちゃん、夜一さんもそれくらい食べてるわよ？」
「涼子よ、オーフィスの体格であの量だぞ？吾も真龍ではあるがあそこまで食せぬ」
「それはその『元』器（うつわ）のベースがエルーンという種族だからじゃない？元々龍神のオーフィスちゃんとは人間体での勝手が違ってくるでしょう？スカーサハちゃんは本来真龍としての姿とその姿……器の方は中身こそ同じでも別々の体らしいし、基本的な所はその形態に準じるんじゃないかしら」
「むう……」

ダイブハンガーの食堂にて、オーフィスとスカーサハ、ぶっちゃけかなり久々に喋った御門涼子が食後の団欒をしていた。ちなみにレジェンドもいるのだがオーフィスのリクエストを受けまくって料理を作り続けた為ダウンしている。なお、オーフィスは定位置であるレジェンドの膝の上だ。

「オーフィス……お前なんで俺が料理当番の時だけやたらドカ食いするんだ。ここの二人含めて他の奴の時はちょっと多いくらいだろ……あ、C．C．の時はピザの大食いバトル始まるか」
「レジェンドのご飯が一番美味しい。次に美味しいのが烈のご飯」
「さいですか……」

ぐったりして追求する気も無いレジェンド。他の同居人は出かけているため、ここにいる四人しかいないというのでここぞとばかりに頼みまくったらしい。

スカーサハと涼子は普通の量だし、レジェンドはそもそも食べなくても問題は無い。ウルトラマンにとって基本食事を摂る取らないは

嗜好の問題である。
「良いじゃない。作る人にしてみたら美味しいって言われて悪い気分はしないでしょ？」
「量が常識的ならばな……今日のはもはやフードファイト番組だったろうが」
「ふふ……その割に表情は柔らかいわね」
「……一人が長すぎたからかもしれんな。家を持ってこうして一つの家族を作った事は未だかつてなかった」

その立場や自身の性質からノアやキングと違い今まで巫女も取らず常に一人で【エリア】の様々な世界へと赴き、戦い、そして救って来た。その結果、惑星レジェンドへと移住してきた者も多いが、明確に誰かが側にいるようになったのはオーフィスを受け入れてからだ。

「変わったと言えば……貴方が気に掛けてるシスターの子、何か変わった事とかあった？」
「いや、今のところはないな。二人で出掛ける事が増えたぐらいだ」
「!?」

気に掛けてるのはもちろんアーシアの事だ。一応一家の者には特徴を教えて、自分以外にも様子を見てもらっている。最近は歳も近いであろうカナエが仲良くなったらしい。

「この前はババリューの『馬場寿司』行った後に小物屋を覗いて髪留めを買ってやったな。俺が着けてやったらえらく嬉しそうだった。それに、やっぱりまだ箸の使い方は慣れてなかったっけ。ババリューがフォーク持ってきてくれて助かった……ん？」
「我、まだレジェンドと二人きりでデートしてない。今度我もする」
「吾もだぞ。というか二人きりは有れどデートは吾らの誰ともしておらぬのに、何故そのアーシアとかいう娘とはやっておるのだ」

涼子は割と大人の余裕なのか笑っているが、オーフィスとスカーサハは頬を膨らませて抗議している。
なお、ババリューとはかのオーブに化けた事もある馬場先輩ことバルウ星人ババリューの事である。あれから暫くして惑星レジェンドに付いていき、そこで必死で板前修行を重ね、そして駒王町の名物寿司屋『馬場寿司』の初代板長・馬場龍として生活中。レジェンド一家はもちろん常連さんだ。今も黒歌と夜一が行っている。

「仕方無いだろう。あの子はまだこちらの言葉に慣れていないし「「むう～……」」そもそもこの町の地理を満足に知らな「「むうう～！」」……分かった。今度全員分時間を作る」

勝った。オーフィスとスカーサハはお互いの両掌を合わせて喜んでいる。片方はあまり表情は変わらないが。
しかし、そんな穏やかな時間はある出来事で一気に吹き飛んだ。

「おやっ……レジェンド様！アーシアちゃんが……！」

焦っているからか声的にお館様と呼びそうになったのを言い直しつつカナエが息を切らせながら帰って来た。が、様子や表情から決してただ事ではない。

「落ち着け、アーシアがどうした？」
「アーシアちゃんが……堕天使らしき人物に連れて行かれました……！」

☆

カナエの報告を受けて、急遽レジェンド一家はダイブハンガー内にあるチームＧＵＴＳ作戦指令室へ集合していた。カナエに至っては

暗い表情をしたままだ。
「それでカナエ、アーシアが連れて行かれた時の状況は？」
「……はい」
今日カナエとアーシアが出掛けていた時、ちょうど兵藤一誠に出会ったらしく、三人で行動していたと言う。ぶっちゃけ元浜や松田のみならず他の者でも一誠へ嫉妬や羨望を向ける状況だがそれはこの際どうでもいい。
三人でハンバーガーを食べたりした後、少しだけカナエが離れた際に接触してきたようで、一誠を人質に取られた形で自らついて行ったとの事だった。
「すみません……私があの場から離れなければ……」
「別にカナエのせいでは無いな。カナエ並みの実力なら戦って負ける事はまず無いだろうが人質が絡めば別だ」
「というかカナエは優し過ぎるからまず説得に走りそうな気がするにゃ。で、あのアーシアってシスターもカナエと似たようなタイプだし人質取られた時点でもう詰みの状態よ」
「タイミングの問題じゃな。それはともかく連中の狙いはその娘の神器とやらじゃろう。少なくともあれは戦い向きの性格ではないからの、ともすれば自分達がそれを使おうとするハズじゃ」
夜一の予想は当たっている。アーシアをこの町に呼び寄せた理由もそれだろう。そんな中、乱菊は一つ気になった点をこの世界出身のグレイフィアに聞いてみた。
「あのさグレイフィア。神器っていうのは所持者にしてみれば言わば体の一部。下手したら核の部分でしょ。そんなもの抜かれたらどうなるの？大体予想はつくけどさ」
「乱菊様の予想通り……例外はあるかもしれませんが、ほぼ確実に死

に至ります」
「……やっぱりね」
「ゾフィー当ての手紙に書かれていたそうだが、堕天使側では『命を取らずに神器を抜く方法』を研究しているらしい。ヒカリを派遣メンバーに入れる、と書いたら大層喜んだそうだ。そんな状況で人質を取ってまでアーシアを連れて行くという事はそれがまだ確立されておらず、かといって実験でもなく連中の独断で取り出そうとしているというのが一番濃厚だな」

犠牲を無くすため研究にはヒカリが携わる事が光の国で決定しており、その旨はゾフィーから手紙を介してアザゼルへと伝わっている為、少なくとも彼らの指示ではない。そんな事をすればまず信用が一瞬で崩れるだろう。

「余程あの娘の神器とやらは貴重、もしくは有用だという事か。それで、お前はどうする？レジェンド。もう答えは出ているんだろ」
「ああ、C・C・の言う通り俺のすべき事は決まっている……あの時からずっと信じ続けている光神様（あの娘の神）が連れ出してやるさ。本当の『光』の元へ」

既にアーシアの今までの事は調べ終わっている。レジェンド自身が彼女を廃墟となっている教会まで案内した時から何かあると思って足取りを調査していたからだ。
その力で人々を癒やし聖女と呼ばれていた彼女は、ただ傷付いた悪魔を治しただけで魔女と呼ばれ教会を追い出され、堕天使に保護された。が、結局のところ堕天使側も彼女の持つ神器『聖母の微笑（トワイライト・ヒーリング）』が目的に過ぎなかった。残るは悪魔陣営しかない、普通ならば。
「本来信仰すべきこの世界の神はレイブラッド事変にて死んでいるが、彼女は元々『光神様』を信仰していたようだし丁度良い。というかその聖書の神の意思が宿った神滅具（ロンギヌス）持ちに喧嘩売られて返り討ち

にしたんだが、力を逆流させたら神滅具ごと消し飛んじゃったんだよな。神器持ちは生きてたけど。まさにグレイフィアの言った例外だった」
『何かサラッととんでもない事言わなかった!?』
「皆まだ理解しきってない。レジェンドに概念系で有利に立とうとしても無理で無駄」

ドヤ顔でふんす!と得意気になっているオーフィスはさておき、ぶっちゃけこの二人で『禍の団』壊滅をしてる最中に挑んで来た英雄派の連中の神器は尽くレジェンドが消し飛ばした。よく神器が無くなっても無事だったと思ったが全員が絶望しているところを更に追い込む形でオーフィスとタッグを組みフルボッコにしておいたのだ。
結果、英雄派のリーダー曹操を始め幹部達も自身の持つ神器を失った挙げ句多大なトラウマを抱え、それぞれひっそりと生きている。もう襲ったりしてこないだろう。というかレジェンドとオーフィスのみならず今度は一家全員から報復されかねないし。最悪サーガら他の光神やウルトラ族やそれに連なる宇宙人まで敵にまわす可能性まである馬鹿な事はやらかさない筈だ、多分。
話は反れたが、既にこの世界の神が居ないならアーシアが無理に教会に居る必要は無い。彼女の信仰している神はすぐ近くで暮らしているのだからダイブハンガーに来ればいい。それ以外にも駒王町の宇宙人勢力など、行けるところは数多い。

「アーシアの未来。それはあの娘自身が選び、進んで行くものだ。堕天使だろうが神だろうがそれを履き違えて思い通りにしようとするのは愚の骨頂。連中の好きにはさせん」
「決まりじゃな。で、誰が行く?お主は当然として全員で行くわけにはいかぬだろう。少数精鋭が無難かの」
「俺以外のメンバーだが……夜一、黒歌、ハリベルで行く。その理由は」
「あの、私も行かせて下さい」

理由を話そうとしたところカナエが自分も、と直訴してきた。仲良くなったのもあるだろうが、アーシアを妹のように大切にしていた事も理由かもしれない。自身は一度、元の世界で妹を残して逝ってしまったのだから。

「駄目だ……などとは言わん。アーシアもカナエの事を良く話していたからな」
「ありがとうございます、お館様！あ……」
「毎回思うけどそんなに声似てんの俺」
「かなりそっくりです、レジェンド様」
「マジでか。っと理由だったな」

そりゃ、イメージＣＶ同じ方に設定してますから。とカナエの要望も通ったところで先程言いかけたメンバー選出の理由を話す。

「まず夜一と黒歌だが単純に機動力に優れている上、単独での戦闘力も高い。加えて隠密能力も備えているから今回にはもってこいの人材だ。
ハリベルだが響転（ソニード）が使える為、探査神経（ペスキス）を無視した高速移動で二人の隠密機動力に追随出来る他、帰刃（レスレクシオン）時は広範囲に対応出来る。連中に多少腕利きがいようが元『十刃（エスパーダ）』の実力なら相手にならんからな。ましてや今は以前よりかなりパワーアップしてるわけで」

なおレジェンドは素でこの三人の高速移動より早く動け、テレポートやウルトラ念力を使った超光速移動も出来るバケモノである。人間体かつ抑えてる状態で。毎回の事だがマジで何なんだお前。

「それ以外のメンバーだが、Ｃ．Ｃ．と涼子は直接戦闘向きじゃないから当然だな。怪獣とかが相手ならＣ．Ｃ．はコンパチブルガリバーを操縦出来るから特効レベルの戦力と化すんだが」

「ここや秘密基地にあるスーパーメカの類を操縦出来るのはレジェンドを除けば私と涼子ぐらいだからな。加えて専用機持ちは私だけだ」
「こればっかりはしょうがないわね。彼女が力を使わなくていいようにいつでも治療出来る準備しておくわ」

もし堕天使がそれこそ怪獣サイズだったら尚更悲惨な目に会ってたかもしれない。レジェンドとガリバーのタッグによって。

「烈と乱菊はアーシアのケア的な意味でだな。彼女がどんな道を進むにせよ、仮住居の方へ一度連れて来るからな。烈は聞き上手だし、乱菊は何かと面倒見良いからな。頼む」
「私は涼子同様、治療も兼ねてですね」
「あの娘も割と溜め込みそうだし、任されました～」

万が一こちらが襲われても（殆んど卯ノ花が）殲滅しそうな気がする。

「で、最後にグレイフィア、オーフィス、スカーサハだが……晩飯当番だ」
『思いっきり家庭事情!?』

ぶっちゃけレジェンド一家では一番重要だったりする。家族多いし、大食いはいるし、好みは異なるし。

「確かに大事ですね」
「だろ、グレイフィア」
「レジェンドよ、当番は良しとして……夜に動くのでは無いのか？」

スカーサハの疑問は最もだ。バレないように奇襲するなら人目が少ない夜間の方が適している。

「カナエは確かアーシアだけでなく兵藤一誠というグレモリー眷属とも一緒で、人質に取られたのもそいつだ。８０からの報告だと少々素行に問題はあるが情に厚い真っ直ぐな奴らしい。おそらくはそいつが進言なりしてグレモリーとその眷属が動く可能性が高いんでな。こちらが早めに仕掛けねば連中と面識がない夜一やハリベルはまだしも、同級生であるカナエや妹がグレモリー眷属になっている黒歌と鉢合わせになるのはまずい。いずれ話さねばならんとしてもな」
「我もマダ……ドライグと顔見知り。会ったらバレる」
「今はマダオって言おうとしただろ」
「レジェンドが言ってたから。ドライグより呼びやすかった」
『うわぁ……』

哀れ赤い龍（ウェルシュ・ドラゴン）ドライグ。これからはマジでダメなオス龍（マダオ・ドラゴン）ドライグとレジェンド一家では呼び名が定着しそうである。二天龍の威厳など遙か彼方へと吹っ飛んでいた。

「何にせよ今回のアーシア奪還は時間との戦いだ。一応保険はかけてあるが常に最悪の事態は想定しなければならんからな。それにさっきも言ったがグレモリーらと本格的な対面はまだ早い。とはいえすぐにその機会が来そうな気もするがな」
「では準備が終わり次第すぐに出撃という事で宜しいのですね、レジェンド様」
「ああ。一気に仕留めるぞ、ハリベル」
「承知しました」

間もなくレジェンド一家によるアーシアの奪還作戦が開始される。それから少し遅れる形でリアス・グレモリーを始めとしたオカ研によるアーシア救出が計画された。そしてその果てにリアスや一誠達は知る。此度の堕天使に潜んでいた『邪悪』を。そして恩師の正体と、与えられた使命を。

〈続く〉

アーシア奪還開始、現れる邪悪の尖兵

準備を整えたレジェンド、黒歌、夜一、ハリベル、そしてカナエの五人は堕天使たちの拠点である廃墟となった教会の前にいた。黒歌と夜一は二人の基本的な服装、ハリベルは十刃時代の服をアレンジしたもの、カナエは鬼殺隊の『柱』に在席していた頃と同じ衣装を身に纏っている。なお、レジェンドの服装はというと……

「なんというか、それも見た事あるにゃ。それ着てると何故か乱菊がパートナーで斬魄刀じゃなくて長身銃持ってた方がしっくり来るような」

「使い難そうな武器を右腕に着けた重量級ロボに乗っていそうじゃな」

「分の悪い賭けは嫌いじゃないですかレジェンド様」

「で、でも凄く似合ってますよ！」

ＡＴＸチームの隊長だった（色違い）。

「黒歌の感想じゃないが何故かしっくり来るんでな。ついでに例えが分かりやすい方が読者もイメージしやすいだろ」

『前半はともかく後半のそれメタい!!』

正直戦い方から特別処理班の隊長の方が良かったんじゃないかと思わないでもないが、まあ良し。こんな時でもいつも通りなレジェンド一家である。

後で聞いた話だと今回の服がレジェンド人間体の正式な戦闘コスチュームになったらしい。よっぽど動きやすくて気に入ったのかソレ。

「さて……と、さっさと済ませようと思ったが連中も少しはマシなようだ。三人程此方に向かって来ている。偶然かもしれんがな。ハリベル、面倒だろうが頼めるか？」

「後でおかず一品リクエスト宜しいですか？」
「カワイイ要求だなオイ。それくらいならいつでも来いだ。ハリベルは度の過ぎた我が儘言わないし」
「ありがとうございます。では、そちらもご武運を」

そう言うと彼女は響転（ソニード）を使い近づいて来る堕天使らしき三人のところへと移動した。
ちなみに彼女がリクエストしたおかずは肉じゃがだった。ホント良心的な良い子である。満漢全席（レジェンド手作り）を強請って来る龍神とかもいるので尚更。

「よし……三人は先行してくれ」
「む？珍しいの。てっきりお主が真っ先に突撃して壊滅させると思っておったが」
「まあ、壊滅は当然だがな。アーシアに希望を、連中には絶望プラス驚愕をプレゼントしようと思う」
「絶対に連中にとってはロクな事にならなそうにゃ」
「あ、オーフィスとスカーサハ、涼子には言ったが今度一人一人相手に時間作るからな、気張れよー」

「行（ゆ）くぞ黒歌ァ！遅れるな!!」
「そのまま返すわよ夜一ィ!!」

「何アレ二人の霊圧卍解並みに跳ね上がってんだけどどーゆー事なの」
「あはは……それじゃ、私も行きます」
「ああ、気をつけてな。さっきからデカい爆音聞こえて来るんだけど何してんのあの二人。爆弾女キャラの登場は次の章だろ」

途端にやる気スイッチが入った二人によって教会の地下からド派手な爆発音が鳴り響いている。隠密のへったくれも無い大暴れバー

サーカー状態。
先程に続きメタ発言したレジェンドはカナエを見送ると自身もアーシア救出の下準備に入った。

☆

それから少しして一誠、木場、そして小猫の三人が到着した。リアスと朱乃は別働隊としてハリベルと相対する三人の堕天使を始末するべく動いている。

「……!!」
「なあ、何か様子がおかしくねぇか？」
「そうだね……誰かが僕達に先んじて突入しているみたいだ」

黒歌の匂いを感じ取った小猫は、訝しげんでいた一誠と木場を置いて駆け出した。

「オイ！小猫ちゃんどうしたんだよ!?」
「彼女があの様子なのはただ事じゃないね。急いで追いかけよう！」
（間違いない……ここに黒歌姉様が来てる！）

遠くから相変わらず聞こえる爆発音。どんだけ暴れてんだあの二人。そして三人の目に最初に入ったのは……

「あいつはこの間のクソ神父！……え？」
「あれってもしかして……！」
「胡蝶……先輩……？」

花の呼吸・第二幕
壱ノ型『景桜（かげざくら）』

巨大な刀の幻影が立ち並んだと思った瞬間、それらが全て霧散し桜の花びらとなって少年神父―フリード・セルゼンへと滝のように降り注いだ。

「あぎゃあああァァァ!!」

全身至るところから血を噴き出しながらフリードは倒れ伏した。その光景に一誠達は唖然としている。

「あまりに話にならないから仕方無くやっちゃったけど……」

花の呼吸・第二幕壱ノ型『景桜』―彼女がこちらで編み出した新たなる呼吸法、正確には花の呼吸の進化系で、景桜はその技の一つ。平たく言えば彼女版の『千本桜景厳』である。あくまで技であるため本家ほどバリエーションがあるわけではないが、一つの技として強力無比なのは違いない。

「早くしないと夜一さんと黒歌さんに『胡蝶先輩!!』え……」

カナエが声をした方向を向くと一誠達三人が駆け寄ってきた。元来優しい性格のカナエはフリードをギリギリまで説得しようとしたのだが、なにぶんあんな性格のフリードがそんなものに耳を貸すわけもなく、結果こういうハメになったのだが……説得に時間を掛け過ぎた。

「何で胡蝶先輩がここにいるんすか!?」

「今の技は何なんですか!?」

「やっぱり黒歌姉様もここにいるんですね!?」

(あああああ……やっちゃったー!レジェンド様ごめんなさい!あと理由は分からないけどついでに黒歌さんも)

少々テンパり気味なカナエは心の中でレジェンドと黒歌に謝った。黒歌はついでだったが。仕方無くある程度ぼかして教える事にした。ただし、いずれこうなる事は予想出来ていたのであえて大事な事は言わずに。

「えぇとね……私がお世話になってる人とアーシアちゃんは結構重要な関係で、その人のお手伝いしに来たのよ。今の技もその人からヒントを貰って自分で編み出したの。黒歌さんともそのお世話になってる人の家族として出会ったわ」

とりあえず、間違ってはいない。が、木場の疑問は割と解決したのだが新たに二つの疑問が浮上した。

「じゅっ……重要な関係!?」
「家族ってどういう事ですか!?」
「ああああごめんなさい！急がないと間に合わなくなるかもしれないからあああ!!」
『あっ!?』

ついにカナエは夜一達のもとへ脱兎の如く逃げ出した。
そこまでいけば、少なくとも子猫の疑問は黒歌に直接行くだろう。頑張れ黒歌。負けるな黒歌。とりあえず三人も急いでカナエを追いかける。
言うまでもなく、重傷のフリードは放置された。出血量的にヤバくね？

☆

その頃、ハリベルもまた三人の堕天使と戦闘中だった。それが戦闘と呼べるものかと言われればＮＯと答えるだろうが。そしてハリベルと堕天使の戦闘を物陰からリアスと朱乃も眺めている。ただしハ

リベルにはバレバレだ。

（グレモリーとその眷属……予想より早かったな）

ハリベルは変わらず腕組みしながら空中に立って堕天使を見下ろしている。

「何なんすか……この化け物は……！」

「いきなり現れたと思えば一瞬で我らの翼を全て斬り落とした……！」

「そして翼を斬り落とすと同時に叩き落とすなど……！」

（え……？全ての翼を斬り落とし、同時に叩き落とした？あれだけ離れた三人を、同時に……!?）

三人の堕天使―ミッテルト、カラワーナ、ドーナシークの言葉を聞いたリアスは戦慄した。三人は空中に立つハリベルを三角形状に囲むように地に伏している。それもそれぞれがハリベルとかなり離れており翼を斬り落とすとしたら余程の事では無い限り背後を取る必要がある。それを一瞬でやってのけ、さらに起き上がれない程のダメージを与えてた……一撃で。

彼女が絶句するのも無理はない。朱乃も冷や汗をかきながら注視している。

「私個人はお前達に恨みは無い。が、お前達は私達の主（あるじ）の怒りを買った」

「な……何の事っすか!?」

「『聖女』アーシア・アルジェントの中にある神器の抽出。いや、彼女は今『魔女』と呼ばれているのだったな」

『!!』

「お前達の正義を成す為に必要な犠牲が彼女だと言うなら、彼女が光を得る為に必要な犠牲がお前達だと言う事だ」

そう言いながらハリベルはゆっくり上昇し、右手に光を集めながら突き出す。

「墜ちた天使に光は不要だろうが……せめてもの手向けだ。受け取るが良い」

虚閃(セロ)—数ある同系統の技の中でも基本にして最弱威力の閃光を受け、三人の堕天使は巨大なクレーターを残して消滅した。

(何よあれ……!あんな威力なのに魔力をまるで感じないなんて……)

「いつまで何も無くなったところを見続けるつもりだ?」

「!?」

二人が振り向くとすぐ後ろにハリベルが移動していた。無論、響転を使ったのだが二人には瞬間移動したようにしか見えていないだろう。ちなみにハリベルはリアスにも朱乃にも殺気は放っていない。そもそも勝負にならないからだ。

「この間の変な鎧の男といい、貴女といい……最近妙な人間が多いわね」

(鎧……?大方レジェンド様がアーブギアかテクターギアというものを装着していたんだろう。というか私は人間ではないが……この場で余計な事を言う必要も無い)

ハリベルの予想通り、リアスの言う鎧の男はレジェンド扮したギアコップ(仮)である。そりゃあんなやり取りはそう簡単に忘れられないだろうが。加えて現段階で深く関わる必要が無い以上、不必要な言動は控えておいた方が無難と理解しているハリベルは早々に立ち去ろうとする。

「待ちなさい。あれ程の力を持ちながら一般人です、は通用しないわよ」
「翼やそれに準ずるものもなく空中に立ち、リアスの『滅びの魔力』に似た光を操るなんて聞いた事もありません。そして聞こえていた会話の中にあった『私達の主』……貴女は誰かの眷属悪魔ですか？」
「私が一般人でないとしても、そこまで喋っていいのか？」
「あれだけの事をして、しかも私達に気付いていた。今更ね」
「そうか」

仕方無い、と少し目を伏せてハリベルはカナエ同様ある程度ぼかして言う事にした。しかし、カナエよりもさらに圧倒的な実力を持つ彼女は臆する事無くあくまで『最低限の質問』に答えるだけ。

「眷属かと言われればそう思ってくれても構わない。だが悪魔ではなく天使や、まして堕天使でもない」
「三大勢力に属していない、眷属ですって？」
「私が今言えるのはこれくらいだ。時期が来ればあの方から直接お前達に語るだろう……どうやら向こうも目的は達したようだ。悪いが引き上げさせてもらう」
「なっ……待ちなさい！まだ話は……」

先程リアスと朱乃の背後を取った時のように響転でその場を離れるハリベル。慌てて追おうとするリアスを朱乃は引き止めて諭す。

「リアス、もう彼女は探知出来ないわ。何より実力差があり過ぎる。貴女も分かってるでしょう？」
「それは、そうだけど……」
「少なくとも今は敵じゃない、それだけでも十分助かる事よ。それに『まして堕天使でもない』と言ってしかもあの三人の堕天使がイッセー君の言う堕天使の仲間だと知っていたのなら……」

「彼女やその主とやらの目的は、イッセーの言ってたシスターアーシアと言う事になるわね」
「ええ、それも堕天使に対して『主の怒りを買った』と言っていた事、そして『彼女が光を得る為に』とも言っていた事を踏まえると少なくとも悪用しようという気はないと思うわ」
「そうね……何にせよイッセー達の方へ合流しましょう。さっきの彼女の言葉からしておそらくシスターアーシアは向こうに救出されたのだろうから」

そう言うと朱乃と共に廃墟の教会へと急ぐ事にした。そこに『邪悪』の尖兵との邂逅が待ち受けるとも知らずに……

☆

また少し時間を遡って教会側。夜一と黒歌はレジェンドが一人一人と時間を作ってくれる＝一日デートと認識したおかげかハイテンションかつ何処ぞの戦闘民族と勘違いされそうな程、堕天使レイナーレと配下の神父達相手に無双していた。

「ほれほれ、そんなに鈍い動きでは蹴球の球の如く蹴られて飛んで行くぞ？それ」
ゴバギィッ!!
「ぎゃあああ!!」

神父の一人が高く蹴り上げられ、ボールの如く回転しながら周りの神父を巻き込みつつステンドグラスに激突。上半身を壁にめり込ませながら気絶した。蹴られた時の音がヤバかった気がするがアーシアにした事を考えれば慈悲は無し。

「レジェンドがああいう格好してるんだしこういうのもアリよね。行っくにゃー!!」

ズドドドド!!
『がああああ!!??』

黒歌は黒歌でとんでもない数の気弾をエクソシスト達にぶっ放した。まるでリミット解除した青いスーパーロボットが超連射する技の如く、さらに分かりやすく言うならエネルギー発射型のガトリング砲だ。

そこからまだ煙に包まれたままの連中目掛けて突撃。煙の中でひたすらフルボッコにした音が聞こえたと思えば一人のエクソシストが吹っ飛ばされて来た。黒歌はそこへ怒涛の追い打ちをかけたかと思えば肘の所に仙術でエネルギー刃を形成し、それで斬り上げるように腕を振りきった。

そして着地、そのエクソシストが大爆発。

「コード黒猫にゃ!伊達にＥＸハードモードクリアしてないにゃ」

ソ○ルゲ○ンかお前は。ついでに先程のコード黒猫、ぶっちゃけそれの最強技そのままだったりする。コンパチブルガリバーやレジェンドの戦闘コスチュームの知識といい黒歌がやってるゲームは予想がつくだろう。敵にウルトラマンリスペクトする奴がいるし。

「な……何なのお前達は!?ようやく儀式の下準備が整ったというのに!!」

「ほほ～う、随分手間取ったようじゃのう。どうやらレジェンドの『加護』が予想以上に強力だったみたいじゃな」

「!?」

「まあ、今からじゃどれだけ急いでも間に合わないにゃ。ほら、また一段と加護が強力になったみたいだし」

「な……!どういう事なの!?ここまで来て……なんでこの子が神器以外にこんな物持ってたの!?」

ようやくアーシアを磔に出来たと思ったのにそこからさらにアーシアを強固な結界らしきフィールドが覆い尽くした。これでは触れるどころか近づく事もままならない。

「あんなもの……！最初に取り上げて置けばこんな事には……！」

「嫌……です……」

ここにきてアーシアが口を開いた。

「この輝石は……光神様がくれた大切なものです……絶対に渡せません……！」

「このっ……『魔女』となった小娘の分際で！」

「無様な雌烏が喚き散らすな」

ドガァァァァァン!!!

『!?』

「ガハァッ!?」

声が聞こえたと思えば天井が大爆発し、レイナーレが吹き飛ばされ、アーシアの拘束が解かれ何者かに抱き抱えられる。

「すまんなアーシア。本来は夜一達より先に突入出来る筈だったんだ

が、やはり地下の真上からでは場所が特定しづらくてな」
「え……？ゼロ……さん？」
「レジェンド酷いにゃー！この『護光の腕輪』が無かったら私達生き埋めだったにゃ！」
「全くじゃ。ちゃんと責任は取ってもらうぞ？とは言っても風呂場で裸の付き合いというだけじゃが」
「俺にとっては理性との決戦の場だ。お前ら自覚してんの？自分のスタイル自覚してんの？」
「目指せレジェンドとの既成事実!!」
「ついに欲望曝け出したな黒猫ツインズ!!お前ら後で俺と烈とグレイフィアで説教大会だコノヤロー!!そして空気読めよ今回は割とマジで！いつもの我が家のノリと変わらんだろコレ！」
「ゼロさ……え？レジェンドさんって……？」

ぎゃあぎゃあと騒ぎ出す三人と、レジェンドの本来の名に混乱するアーシア。とりあえずアーシアの疑問に答えるべく軽く咳払いをしてレジェンドはお姫様抱っこ中のアーシアに向き直る。

「その優しさと勇気を忘れず、真っ直ぐに育って欲しい」
「え……!?」
「まさか輝石（それ）をずっと持っていてくれただけじゃなく、自分の命が消えるかもしれない状況になってもその言葉を守ろうとするとは思わなかったぞ。万が一に備えて加護を強化しておいて良かった」
「今の言葉……私が光神様と出会った時に言われて……それに加護って……まさか……」
「ああ、教会（ここ）に案内した時の別れ際にな。場所が場所だからおかしいと思ったがやはりと言うべきか流石俺、見事に勘が冴え渡ったワァ!?」

レジェンドがエースの掛け声みたいな声を上げたのはアーシアがその体勢（お姫様抱っこ）のまま抱き着いてきたからだ。

「やっと……やっとお会い出来ました……」
「あの時は声に出せなかったが……立派になったな」
「グスッ……ありがとう……ございます……ヒック」
「あの姿が本来の姿なんだが、ここでは普段人間体(こっちで)で生活してるからな。分からなくても無理は無い。さて、積もる話もあるだろうし……あの『見た目は良いけどやってる事がゲス過ぎてヒロイン逃してる』系堕天使の始末はグレモリーとその眷属に任せるとしようか」

漸く一段落かと思いきや、カナエが猛ダッシュでやって来た。彼女がここまで焦るのは珍しい。

「ああ！アーシアちゃん無事だった⁉良かったぁ……」
「カ、カナエさんまで……グスッ……心配かけてごめんなさい……」
「良いのよ気にしないで。私が来たかっただけで……って和んでる場合じゃなくて！レジェンド様ごめんなさい！グレモリー眷属の子が来て遭遇しちゃいました！」

それを聞いた、アーシア以外の三人は先程の展開よりよっぽど驚いていた。

「ウッソだろお前早くね⁉こうしちゃいられん俺がブチ開けた天井からルーラするぞ！」
「素直に逃げると言えばいいじゃろ！そして儂はＭＯＴＨＥＲ派じゃ！」
「それはどうでも良くないですか⁉あと黒歌さんを姉様呼びしてる子がいたので頑張って下さい」
「アッサリ言ってるけどソレ一大事にゃカナエえええええ⁉」

ここまで来て最後の最後でいつものドタバタ、これがレジェンド一家である。そして一誠達が到着する前にどうにか……

「「「脱出完了ォォォ!!」」」

無事、バレる事なく脱出する事が出来た。アーシアは今までの緊張が解けた事と想い続けていたレジェンドに会えた安心感からか静かに寝息を立てている。それを聞いて他の四人も漸く安堵して、教会から離れた場所に腰を落ち着けた。

「ハリベルの方も三人を始末したようだ。てっきりグレモリー辺りに譲るかと思ったが」

「……アレを相手にしてまともに戦えるレベルだったのかのう、その三人は」

「絶対無理にゃ。そもそも帰刃さえしてなさそうだし」

「となると大して力も出さないまま瞬殺されたんでしょうね。私が戦ったあの少年神父みたいに」

「え、カナエってアレに構ってあげたの？ぶっちゃけ時間の無駄じゃなかったにゃ？」

「思いっきり無駄でした」

「じゃろうな。アレは頭の螺子が飛んでるというか元から付いてなかったと言うべきか、そんな奴じゃったからな」

「……」

「レジェンド様？」

「やはり奴に潜んでいたか」

「「「え？」」」

教会のある方角を見ると何かが光ったと思えばその光が巨大な別の何かを形作っていく。その中に一瞬緑色に光るものが見えた。

「間違いない、ゴーデス細胞……！」

「なんじゃと!?」

「一瞬だけ見えたけど、あの緑色のがそうにゃ？」

「ああ……細胞一つ一つがゴーデスの意思を持ち、触れたものを怪獣化させる能力を有し、人間や動物はもちろん……夢や怨念、神にさえ寄生・依代とし、ゴーデスの傀儡として意のままに操る。もっとも後者の方は顕現するための器、つまり物体や生物が必要だがな」
『ッ!!』

はっきり言って規格外だ。概念にさえ侵食するなど反則としか言いようがない。

「お前達は俺の影響もあって侵される事はないからそこは心配しなくていい。アーシア（この子）も同様だ」
「でもまだあそこには、あの子達が……！」
「ゴーデス細胞に寄生されていたのは『奴』だけだったようだな。ギリギリまで隠れていたか……ガリバーなら問題無く倒せるが今からC・C・に連絡を取っても間に合うかどうかわからん。俺が何とかするしかないか」

レジェンドが変身を決意しアーシアを夜一に預けようとした時、ハリベルが漸く合流。同時にレジェンドにとって朗報も入ってくる。

「申し訳ありません。グレモリーとその眷属と遭遇し少々話してしまいました」
「いや、こっちもタイミング悪くカナエが遭遇した。思ったより向こうの動きが早かったからそこは仕方が無いさ。良くやってくれた。後の問題は奴だけだ」
「あれの対処ですが……どうやら彼が間に合いました。『問題は無いと思いますが念の為見届けて下さい』との事です」
「そうか……！此方は良いタイミングだ。不測の事態に備えてこのままここで待機だ。俺はいつでも出れるようにしておく、お前達はいつでも退避出来るようにしておけ」

レジェンドが出した指示に頷く四人。そしてレジェンドは教会の上空に現れたこの世界最初の邪悪大怪獣にしてゴーデスの尖兵『火炎火龍ゲルカドン』を鋭い視線で射抜いた。

「これからの長い戦いの前哨戦だ。頼むぞ、矢的猛。いや……」

ウルトラ兄弟の一人、ウルトラマン８０（エイティ）!!

〈続く〉

生徒達を護るために、変身！ウルトラマン８０！

レジェンド一家が教会を離脱した後にその姿を現したゴーデスの尖兵『火炎火龍ゲルカドン』。
その出現した理由は少し前、レジェンド達四人がアーシアを救出し離脱した直後に遡る。
四人が離脱した直後、一誠、木場、小猫の三人は地下最深部に到達したが、そこで見たのは……
・見晴らしの良くなった夜空の見える天井
・ステンドグラスに突き刺さっている神父
・黒焦げになって斬られてるエクソシスト
・あちこちに山積みになってる上記の二種
・アーシアに施してたであろう儀式の残滓
・ついでにボロボロな堕天使のレイナーレ
だった。レジェンド達にとってはぶっちゃけ戦いでも何でもないレベルなのだが、この三人には色々衝撃だったようだ。

「なあ木場、今の教会ってさ、天井開いてんの普通なのか？雨とか雪の日どうすんだろ」
「イッセー君、どう見ても普通じゃないから。周り見れば原因は予想つくから」
「黒歌姉様……!?そんな……もういない……」

まだ混乱気味な一誠になんとか冷静な木場、小猫は黒歌がいない事に落胆している。そこへリアスと朱乃も合流したが、やっぱり驚く。

「皆、無事ね……って何これ!?貴方達でやったの!?」
「あらあら……天井がいい感じに開いて星空が綺麗ですわ」
「え!?いや俺達じゃないですよ！俺達もさっき到着したばかりで……」
「胡蝶先輩……が一人では無理ですね。あの人は刀持ってたし」

「少なくとも一人は黒歌姉様です。私が匂いを間違えるはずがありません」
「なっ……カナエが来てたの!?それに黒歌ってＳＳ級はぐれ悪魔じゃない！さっきの女性といい何がどうなってるのよ!?」
「部長、落ち着いて。とりあえずそれらは後にして今はすべき事をしましょう」

自身のクラスメイトである胡蝶カナエと黒歌が同時に来ていた事も伝えられ、先程のハリベルの件も関係して一誠同様混乱するリアスだが、朱乃によって諌められ一先ず冷静になった。

「そうね……朱乃の言うとおり、やるべき事を片付けましょうか。小猫、彼女を連れて来てくれるかしら」
「わかりました」

瓦礫に飛び乗りながら目的の人物の前までぴょんぴょん飛んで行く小猫。その人物を見つけるとガッ！と足を掴んで引きずってきた。あちこち瓦礫にぶつけながらだったので色々悲惨な目にあっている。ビジュアルならヒロイン並みだったのに……

「……うわぁ……」
「何て言うか……俺が言うのもなんだけど哀れに思えてきたぜ……」
「ま……まぁいいでしょ、意識はあるみたいだし」
「ぐ……うぅ……」

辛うじて意識を保っているレイナーレ。レジェンドに食らったのは一撃だけだが相当のダメージを受けた上で地面に叩きつけられたからか既に虫の息に近い。

「ごきげんよう、堕天使レイナーレ」
「……グレモリー一族の娘か……！あの連中にアーシアは……!?」

「……あの連中というのが誰なのかは大体予想がつくけど……シスターアーシアはいないわ。ともあれ、はじめまして。私はリアス・グレモリー、グレモリー家次期当主よ。短い間でしょうけど、お見知りおきを」

レイナーレが言ってるのは先程遭遇した『彼女』の仲間一派だろうと予想するリアス。当たりである。しかし、自身がここまでボロボロになっていようと強気なレイナーレ。

「生憎と周りの連中は使い物にならなさそうだけど、ここにいるのが全てではないわ。今回の事は上には秘密だけど私には同調し協力してくれている堕天使が」

「あの三人の事なら私の目の前で消し飛ばされたわ。悪魔でも天使でも堕天使でもない、人間らしき女性にね」

「な……!?」

「これがその証拠よ。もっとも斬り落とされていた翼から持って来たものだけど……同族の貴女ならわかるわよね？」

そう言うとリアスはハリベルが斬り落としていた翼から取ったであろう三枚の羽を取り出してヒラヒラさせる。

「そ、それが本当だとしてもここにいる者達以外にも腕利きの悪魔祓いが……」

「そう言えば魔法陣でジャンプ出来たのは入口までだったけど、ちょっと進んだら夥しい血痕が残ってたわね」

「血痕……!?あいつまだくたばってなかったのかよ！」

「え？イッセー、それはどういう事？」

イッセーが言った言葉が気になったリアスの質問に答えたのは木場と子猫だった。

「部長、その血痕はフリード・セルゼンという神父のものです。そして彼を倒したのは胡蝶先輩です」
「何ですって!?」
「彼女が……!?」
「はい。私も見ていましたが……急にたくさんの桜が現れたと思ったら、それが全部花弁になってその神父を切り裂きました」
「そうそう、小猫ちゃんの言うとおりで……なんか『花の呼吸第二幕』とか言ってました」

今日何度目だろうか、新しい驚きがリアスと朱乃を襲った。確かに彼女は有名人だがここまで強いのは予想外だ。何よりこれだけの実力がありながら、一般的ならともかく『こちら側』でつい最近まで全く無名だったのはおかしい。
とリアスは考えてたのだが、レジェンドがウルトラマンとして活動する以外、彼ら一家は基本ハンターとして別の星でプラズマ怪獣を狩っているか、もしくは普通に暮らしているので今回のように秘密裏に動くのは精々レジェンドとオーフィスがまだ各地にいる禍の団を壊滅させる時くらいなのだ。それも殆ど終わりつつあるため最近ではそれも少なくなっている。
ちなみにコンパチブルガリバーはまだ出動した事が無い。平和なのは良い事だが、シミュレーターで慣らしてるとはいえ出番の来ないC．C．は不満らしい。

「そ、そんな……」

流石に自分の味方が壊滅状態で絶望したのか、レイナーレは悲痛な表情になっている。

「とにかく、カナエの事は後回しね。そういうわけだから貴女に味方はもういないわ」

だが、そこへ何者かが走って来る音が聞こえた。すぐ近くまで来ている。

「誰……!?まだ仲間がいたというの!?」

オカ研メンバーが身構え、レイナーレが希望を見出して見た先から現れたのは……

「あの人から連絡があったのはここで間違いないハズだ。ゴーデス細胞を持った者は何処にいる……!?」

かつて別の世界の地球でＵＧＭの隊員だった頃の制服に身を包み、腰にライザーガンを備えダイナミックショットをその手に携えた矢的猛だった。

「「「「矢的先生!?」」」」

「兵藤!?木場、塔城……グレモリーに姫島まで！こんな時間にここで何を……!?そうか……」

「矢的先生こそ！何かコスプレっぽい格好で……サバゲーとか？」

「いや、コスプレではないんだが……そこにいるのは、天野で間違いないか？」

矢的が顔だけこちら側に向けているレイナーレを見た。オカ研メンバーもレイナーレを見るが、やはりというべきか笑っていた。

「矢的先生助けて！こいつらは悪魔よ！よって集って私を暴行したの！お願い、こいつらを捕まえて！」

「テメー……！この後に及んで……ッ!!」

見苦しく虚言を吐くレイナーレ。どんな生徒だろうと真っ正面からぶつかって行く熱血先生であり、そして優しく平等な矢的を利用し

ようとしたのだろう、彼を慕う一誠は本気でキレていた。同時に腕の神器（セイクリッド・ギア）の形が変化したが、矢的の声によって全員の意識は彼に向けられた。

「皆、彼女から離れるんだ！」

ダイナミックショットを構え叫ぶ矢的にオカ研メンバーは驚く。確かにこの状況、普通なら一誠達に非があるように見えるだろう。だが、矢的の言った言葉の真の意味はそうではない。

「矢的先生、そんな……俺達は……」

「違う兵藤！そういう意味じゃない！彼女はゴーデス細胞に寄生されている！自覚はないだろうが既にゴーデスの支配下にあるんだ！」

「ゴーデス……細胞？先生、何を……!?」

一誠は矢的が何を言っているのか分からなかったが、矢的の様子からただ事ではない事を理解してレイナーレの方向を向くと、レイナーレの中を緑の光が蠢いており、レイナーレ自身も何が何なのか混乱したまま怯えながら自分の手を見ていた。

「え……何よ……これ……」

『我らに気付くあの男は危険だ。殺せ。あの男を殺すのだ。その為の力と姿を与えてやろう』

「そんな……あ……ああ……」

聞いた事もない声がレイナーレにだけ聞こえて来たと思えば、緑の光はレイナーレの全身に回っていく。

「あああああアアアアアア!!!」

全身にその光が回ったレイナーレはさらに巨大な光になって遥か

上空へと上昇。そして光は全く別の形へと変化し、まるでムササビかモモンガとトカゲの合わさったような異形な巨大生物へと姿を変容させた。
邪悪大怪獣・火炎火龍ゲルカドンがこの世界で誕生した瞬間である。ただし、かつてと違い全身は黒い。おそらくは堕天使を依代として誕生したからだろう。
オカ研のメンバーは当然、部長のリアスでさえ直接見るのは初めてであるが矢的は違う。即座に状況を理解し、五人に対して叫んで指示を出した。
「皆、急いでここを出るんだ！詳しい話は後、今は僕に着いてきてくれ！」
一誠らがハッと正気に戻り、矢的の後ろに着きながらその場を離れる。ゲルカドンはほぼ本能で動いているらしく手当たり次第に目や口からビームや火炎放ち暴れ回っている。
矢的の先導の元、ちょうどレジェンド一家とは正反対の位置に逃げ延びた一誠達は息を整えながら矢的に尋ねる。
「よし、ここまで来れば一先ず安心だ。奴が本能で動く奴で助かった」
「あの……矢的先生って何者なんですか？その格好がコスプレじゃないって言うし、レイナーレの奴がゴーデス細胞に寄生されてるとかなんとか……」
「兵藤、レイナーレっていうのは天野の事か？」
「っ……はい。堕天使ってやつで、俺は……その……」
一誠が口籠っていると、リアスが助け舟を出した。
「ここからは私が話すわ、イッセー。矢的先生、信じられないかもしれないけど……彼はあのレイナーレに一度殺されているの」
「なんだって!?……そうか、だからあの時悪魔になっていたのか」

『!?』

リアスを始め一誠や他の三人も驚いた。既に矢的は一誠が転生悪魔である事に気付いていたとは思っても見なかったからだ。

「矢的先生……気付いていたんですか？俺が悪魔になった事に……」

「ああ、天野の事で相談に来た時にね」

「矢的先生、貴方は何故悪魔の事を知っているのですか？先程レイナーレがそう言ったからだとしても、普通なら例えとして言われたとしか思わないかと」

「そうだね、姫島。普通ならそうだろう。でも僕は兄さん達から聞いてるんだ。特にグレモリー、君の事はね」

「私の……？」

矢的の答えにリアスは疑問を感じた。そもそも、自分は勿論家族にも『矢的』という姓の知り合いはいない筈だ。しかし、矢的が次に発した言葉が彼女にとってこの日一番の衝撃となる。

「兄さん達には色々聞いたけど、『タロウ兄さん』が一番饒舌だったよ。友人のサーゼクスさんが妹や息子の事を自慢げに話しているビデオレターを何度も見返していたからね」

「!!ちょっと待って矢的先生！今タロウ『兄さん』って……!?」

「あの時君たちを助けた光の国最強戦力と言われる『ウルトラ六兄弟』の一人、ウルトラマンタロウ。あと悪魔と親交があったのはセブン兄さん……ウルトラセブンだったね。二人は僕の義理の兄と呼べる人物さ」

「嘘……！そんな事まで知って……義理の兄って矢的先生、貴方はまさか……」

「この世界には無い、地球から３００万光年離れたＭ７８星雲・光の国の宇宙警備隊に属するウルトラ兄弟の一人『ウルトラマン８０（エイティ）』それが僕の本当の名前であり正体だ。僕は君たちにとって宇宙人なんだ

よ」
『!!!』

彼らは愕然とした。リアスは矢的がかつて自分達の種族を救った英雄の同族、しかも義兄弟である事に。一誠達は矢的がこの世界の住人ではなく、しかも宇宙人である事に。

驚いている一誠達を余所に、矢的は変身アイテムであるブライトスティックを取り出す。

「僕はある使命を受けてこの世界の、この星の、この町にやって来た。その一つがある人物とその家族の護衛、そして彼らと共にこの星を守るため。今から僕はあの怪獣と戦う」
「戦うって……あんなのとどうやって！」
「心配するな、兵藤。僕らにとっては当たり前の事なんだ。今から見る事は秘密にしておいてくれ。僕も君達が悪魔である事は他言無用にしよう」
「……矢的先生、一つだけ聞かせてちょうだい。何故貴方は疑おうともせず私達を信じようとするの？悪魔なら嘘を言っている可能性だってあるはずよ」
「理由はいくつもある。けど今は全部言っている時間はないから一つだけ……君達が僕の生徒で、僕が君達の先生だからだ！」

リアスの「自分達が嘘を言っているかもしれない」その言葉に対して矢的は嘘偽りのない笑顔でハッキリと言い切った。そして笑顔のまま一誠の方を向いてもう一言。

「だからもう一度言うぞ、兵藤。それにグレモリー、姫島、木場、塔城。心配するな！君達は僕が守る！」

全員を笑顔で見た後、矢的は表情を引き締めゲルカドンへと向き直る。そしてブライトスティックを掲げ、自身の名を叫びながらボタン

を押した。

「８０（エイティ）!!」

ブライトスティックの先端が伸縮、強い光を放つとその光を浴びた矢的はウルトラマンとしての本来の姿へと変え、巨大化する。身長５０メートルにも達するその勇姿を見た一誠達は見上げながらも矢的が本物の宇宙人―ウルトラマンだと驚きつつも信じるしかなかった。

ウルトラマン８０―かつて別次元の地球を救った英雄の一人が、世界は違えど今再び地球を守る為に立ち上がった。

「シュワッ!!」

ゲルカドンは突如現れた８０を見つけるやいなや、目からビームを放って来た。しかし、数多の激戦をくぐり抜けて来た８０は以前よりも遥かにパワーアップしている。背後の足元にいる一誠達に被害を及ぼさない為に、避けずに腰に手を当て仁王立ち。ビームは８０の体に直撃したもののまるで効果は無く、威風堂々佇んでいる。

「ギャアアアオオオ!!」

「ムッ!?シュワッ！」

さらに上昇したゲルカドンを追い、８０は同じ様に空へと飛んだ。

「矢的先生、翼もないのに飛んだぜ!?」

「彼らは訓練が必要みたいだけど空を、宇宙を当たり前のように飛べるのよ！それこそ、ドラゴンよりも大きなあの巨体で……！」

それだけではない。８０がゲルカドンを追って飛んだのは逃さないようにするだけでなく、８０はゲルカドンに対して空中戦を挑む為だ。本来なら空中戦を得意とする相手に悪手でしかないが、８０の場

合は空中であろうとアクロバットな戦法が可能、むしろ得意と行っても良い程である。
夜の駒王町の上空にて８０とゲルカドンの激しい空中戦が展開される。疎らに散らばる明かりが点いていた家の住人は何の音かと外を、空を見た瞬間に驚く。光神様（レジェンド）の眷属かと思われる巨人と、異形の怪物が戦っているのだから。彼らは家族を起こし、友人や知り合いへと連絡しその光景はネットにもリアルタイムで流れ出している。かつてレジェンドがバリケーンを倒した時のように。
一方で一誠やリアス達も８０の戦い方に目が離せなかった。空中で飛行しながら高速でバク転するかのように回転して攻撃を回避し、急激に速度を上げて正面に回り込んだら両手から光弾でゲルカドンを射撃する。
さらにすれ違う直前に攻撃を受けないよう、瞬時に加速して間合いを離しながら急上昇し、宙返りしながら急降下しつつさらなる追撃を加えた。
ここまでハイスピードで見事な空中戦法は上級悪魔同士の戦いでも中々見る事が出来ないだろう。

「凄い……！」
「最初は互角かと思ったけど、堕天使であった怪獣に対して矢的先生はダメージらしいものは全く受けていない！」
「おそらくは練度や戦闘経験が圧倒的に違うのでしょう。明らかに怪獣側が押され始めています……！」

ダメージが蓄積しつつあるゲルカドンに対し、８０はゲルカドンの周りを旋回しながら『スパーク光線』で攻撃し始める。全方位から不規則に放たれる電撃を受けて悲鳴を上げるゲルカドンに、追撃のムーンサルトキックを叩き込み先程の廃教会近辺へと落下させた。
８０もそこへ着地するが、躊躇っているのか構えはするがジタバタともがいているゲルカドンを攻撃をしようとしない。

「矢的先生、なんで……!?」
「……それは貴方が一番分かっているはずよ、イッセー」
「部長!?」
「私もすぐ近くにいたから分かったわ。レイナーレが命乞いして矢的先生に助けを求めた時、貴方は怒ったでしょう？優しいのよ、あの人は」

つまり、レイナーレ……天野夕麻を本当に撃っていいのか躊躇っているのだ。短い間とはいえ彼女も生徒だった。しかし、彼女によって一誠が殺されたのも事実。それ故にゴーデス細胞を浄化して助けるか、そのまま撃つか踏ん切りが着かないでいる。

「決めるのは貴方よ、イッセー。矢的先生を後押ししてあげなさい。今は悪魔ではなく、一人の生徒として」
「部長……はい！」

一誠は駆け出した。出来る限り８０の、矢的の近くへと。

☆

「矢的先生ー!!」

８０は大声で自分を呼ぶ声がした方向へ視線を向けると、一誠が息を切らせながら立っており、もう一度叫んだ。

「これ以上、俺やアーシアみたいな奴が出ないように、そいつを……レイナーレを倒して下さい！矢的先生！」
（兵藤……今度は僕の方が助けられたな、心を）

ゲルカドン……レイナーレこと天野夕麻だった怪獣を撃っていいのか―８０のその心の葛藤は、かつてその事で悩み、思い詰めていた

一誠の言葉で無くす事が出来た。
一度殺された自分や、神器の為に命を奪われそうになったアーシアのようなものを出さない為に。彼は８０へそう願った。そして８０はその言葉に頷き、再び飛翔しようとするゲルカドンへ向き直る。

「シュワッ!!」

片手を垂直に、もう片手を水平に伸ばした８０は、そのまま腕をＬ字型に組んだ。すると凄まじい威力の光線がＬ字型に組んでいた右腕から発射された。
サクシウム光線―師であるウルトラマンレッドから伝授され、数多の強敵を撃ち破ってきた８０の必殺光線だ。
５０万度の光の奔流を受けたゲルカドンは瞬く間に爆散する。

「グッバイ……俺の初恋……」

８０は一誠のその言葉を聞き、空の彼方へと飛び去る。爆散したゲルカドンを見て、漸く一誠も自分の心にケリを着けることが出来たのだ。
こうして、一誠の死を発端とするレイナーレの事件は終息を迎えた。ゴーデスの脅威は始まったばかりとは言え、一誠が新たな友人を得た事やレジェンドとアーシアが再会し無事救出も出来た事など、決して悪い事ばかりではない。これから先、何が起こるかはまだ誰も分からないが、とりあえず今は全員無事である事を喜ぶのだった。

〈続く〉

「そういやフリードってホントに生きてんのかな」
「そうね……案外、出血多量でその辺りに倒れてるかもしれないわね」

「部長、それ笑えません」

レジェンド一家、新しい家族

レジェンドを始め五人は８０がゲルカドンに勝利する瞬間を見届け、漸くアーシアが真の自由を手に入れた事に安堵した。

「よくやってくれた、８０。今回地球に来れていたのはあいつだけだったが……そろそろ警備隊と遊撃隊から誰かしら来るはずだからな。ダイブハンガーの来客用スペース用意しとかないと」

「アーシアちゃんはどうするんですか？」

「とりあえず仮住居まで運んでゆっくり寝させてあげよう。正式に我が家の一員を希望するならダイブハンガーで部屋作らないといけないし、別の所に行くとしても問題起きないよう根回ししなければならん。どちらにせよ、後はアーシアが起きてからだ」

「私の予想！ほぼ１００パー前者になるにゃ。当たってたら添い寝希望！」

「儂の予想！ほぼ１００パー後者はないのぅ。当たってたら混浴希望！」

「お前ら悪魔より欲深くないか？」

黒歌と夜一、初対面時の互いの印象は何処へやら、息ピッタリである。しかもどちらも精神的にクる要望だ。

カナエは苦笑し、ハリベルは腕組みしたまま何かを思案している。

「相変わらず二人共元気ね……ハリベルさん？」

「……肉じゃがの肉の量はどれくらいだろうか」

「そこでそれですか!?」

ハリベルも何故か似たようなものだった。レジェンドにとっては平和な悩みではあるが。

「ともかく帰るぞ。カナエは明日も学校だろうし」

「以前は鬼殺隊として夜の活動が多かったのですが……ふぁ……こちらに来てから夜は普通に寝てたから少々眠気が……」
「こりゃ帰り道で眠りこけそうだな。久々にテレポートするから俺に掴まれ。そこの黒猫二人、どさくさに紛れてどこ掴もうとしてんだコノヤロー」
「どこって……ナニを」
「……ハリベル、カナエ……こいつら置いてっていいかな」

流石にそれは嫌なので、素直に謝って五人＋アーシアは仮住居入口までテレポートした。建てた場所が場所なのと、早めに片付けたとはいえ夜遅いので周りは驚く程静かだ。

「一応、誰かしら起きてるな。というかオーフィス以外は起きてそうな気がするが」
「C．C．は割と気まぐれだから分からないけど、烈や涼子はアーシアの件もあるし普通に起きてそうにゃ」
「スカーサハも寝てるか起きてるか五分五分じゃな。乱菊は晩酌してそうな気がするのう」
「んぅ……」
「グレイフィアも起きてるだろうな。カナエがかなり眠そうだ。ここからは私が運ぼう」

昼型に慣れて来たせいか、ここに来てカナエがダウンした。久々に花の呼吸・第二幕を使用したのも相まって眠気に勝てなかったらしい。何度かやったらすぐに慣れるだろうけど。
そんなカナエを肩へ俵抱きにするハリベル。幸せそうな表情で日輪刀を抱きしめながら俵抱きにされてるカナエは中々シュールな光景である。

「ただいまー……っと。ん？オーフィス？」
「ん……レジェンド達帰ってきた……」

レジェンドもアーシアを横抱きしているため黒歌と夜一にドアを開けてもらうと、開け気味のパジャマで目を擦っているオーフィスが出迎えてくれた。

「オーフィス、ずっと寝ないで待ってくれてたのか」

「寝ようと思ったけど、寝れなかった。やっぱり我、もうレジェンドが隣にいないと眠れない」

さり気なく超弩級発言である。彼女を良く知るドライグらが見たら「え、何コイツ何があったの？」と混乱するレベルの。

そんなオーフィスはおぼつかない足取りでレジェンドの後ろに回ると、レジェンドの背中をよじ登ってハリベルに担がれてるカナエのような体勢になり、そのまま眠ってしまった。

「……すぅー……」

「……やれやれ。また一層バランスに気をつけなければならんな」

「この娘も器用じゃな」

「仕方ない。このまま運ぶしかないか。とりあえずアーシアは洋間のベッドの方が良いだろう。皆も今日はお疲れ様だ」

「お疲れにゃ～、私も朝風呂する事にして今日はもう寝るわ」

「私もカナエを寝室まで運び次第眠る事にします」

「儂は適当に摘んでからにするかのぅ」

それぞれ思い思いに休息を取るべく仮住居の各部屋へ入っていく。レジェンドも起きていてくれた卯ノ花、涼子、グレイフィアに礼を言ってから眠ったオーフィスを肩に乗せたままアーシアを部屋に運んだ。そしてゆっくりベッドに下ろし布団を掛けてやり、ポンポンと安心させるように軽く布団を叩く。

「アーシア、今日はゆっくり休むと良い。これから先は誰にも強要さ

れず、自分の意思で未来を決められる。まずは今までの疲れを取り除いてからだ」
「ん……」
身を捩らせるアーシアに優しく微笑むとレジェンドは部屋を出ようとした。

……が、何かと苦労人であるレジェンドがシリアスの無い場面でそのまま無事である筈がなかった。

「行っちゃ嫌ですっ!!」
グイッ!!
「トワァァァァァ!?」
ガァァァン!!
「ダァァァァァァッ!!??」

タイミング悪くレジェンドが居なくなる夢でも見ていたのか、レジェンドが後ろを向いた直後にアーシアがジャケットの下の部分を思いっきり引っ張った。前々回同様エースの声で困惑した叫びを上げながらそのまま仰向けに倒れて行き、ベッドの側面に後頭部を強打。セブンの掛け声よろしく絶叫。ここまででもエライ目に遭ってるのだがそこは三超神最大の苦労人、それだけでは終わらない。
ちょうど引っ張られた瞬間、肩に引っ付いていたオーフィスが反動で宙を舞い、そのまま……

ズドン!!
「ヘァァァァァァァッ!!」

見事レジェンドの鳩尾に頭から落下。意識を刈り取った。しかもその衝撃で中途半端に覚醒したオーフィスは、気絶中のレジェンドを寝ていると勘違いして、いつもの如くパジャマを神速でキャストオフし再度引っ付いて眠った。

この展開から分かると思うが、アーシアが起きてからが修羅場である。南無。

☆

夜が明け、朝日が射し込む一室でアーシアは目を覚ました。ふかふかの布団の中で昨日の事を思い出しながら。

「ふぁ……そういえば、私……ゼロさんとカナエさんと他のお二人の方に連れられて……そのまま寝ちゃったんでしょうか……あれ？」

ベッドの横……というか隣下を見るとレジェンドが美少女（しかも何も着ていない）にくっつかれながら気絶していた。ぶっちゃけあの時から放ったらかしである。

「は……はわぁぁぁ!?ゼロさん!?それにこの子は!?ともかく誰か呼ばないと!!」

アーシアは飛び起きて部屋を飛び出ると、そこはさらなるカオスが展開されていた。

どうやってるのか、スルメを頬張ったままソファーで寝ている夜一。

その足元に一升瓶を抱えて眠る乱菊。

「ツインキャットストライク」とか寝惚けて部屋から飛び出しながらまた事切れたように眠り出す黒歌。

何故かテーブルの下に上半身だけ突っ込んだまま動かないスカー

サハ。
部屋に入った筈なのに、それぞれ肉の量が違う肉じゃがの絵を書いてる途中寝落ちしたであろうハリベル。
こっちはこっちで枕を幸せそうに抱えながら部屋から上半身だけ出して眠っているカナエ。
周りがこんな状態なのに平然と朝から特大ピザを食べているC.C.。
その隣で同じ様に周りを気に留めず週刊誌を読んでる涼子。
何がどうしてこうなったのか分からない状況である。
頼りになりそうなのは朝食の用意をしているであろう卯ノ花とグレイフィアのみ。

「あ、あの！光神様……ゼロさんのご家族の方ですか!?」
「おはようございます、アーシアさん。ええ、そうですよ」
「えっと、実は起きたらベッドの横にゼロさんが女の子をお腹に乗せたまま倒れてて、それで部屋から出てみたらこんな状態で……！」

にっこり笑って返事を返してくれた卯ノ花に安心したのか、アーシアは朝起きた時の事を話した。

（彼の不憫がまた発揮されたのでしょう。多分何かしら彼女が切っ掛けを作ったとは思いますが……にしても結局脱いだんですね、オーフィスは）

肩に引っ付いていた時は開け気味とはいえちゃんと着てたのに、と卯ノ花は溜息をついた。出会いから数年、未だにレジェンドと一緒に寝る時のオーフィスがパジャマを着たままである所を見た事が無い。

「大丈夫ですよ。いつもの事ですから。まあ、いつもは気絶ではないですが」
「ええっ!?」

「烈様の言う通り、日常茶飯事ですので。まずは目覚ましがてらホットミルクをお入れしましたのでお掛けになってお飲み下さい」
「あ、はい……」

グレイフィアに促されるまま、着席して出されたホットミルクを飲んだアーシアは自然と落ち着いた。

「温かくて美味しいです」
「ありがとうございます。お替りも如何ですか？」
「お願いしますっ」

ほんわかした空気になったところで、レジェンドがオーフィスにパジャマを着せながら部屋から出て来る。どうやら復活直後にオーフィスが何も着ていない事に気付いたので少々テンパったらしい。

「あのな……寝る前は着てたのに何で起きたらキャストオフしてるんだお前は」
「レジェンドが寝てたから。あと、家で寝てるから何も着なくてもいいと思った」
「気絶してたんだよ気絶。寝る時何も着なくていいのはせめて俺の部屋の中だけにしなさい。いやホントは駄目だけどっていうか何コレどーいうこと？ツッコめってか。俺にツッコめってのか」
「あら、おはようレジェンドさん。良く眠れたかしら」
「はいおはよう涼子。意識が飛ぶ程だったぞチクショー」
「さすがだな。意識が飛んでも死にはしないか」
「おいC．C．それ褒めてるのか皮肉なのかどっちだ。それに朝なのに何そのピザ。アレですか。バ〇アリンみたくお前の半分はピザで出来てんですか」
「違うな。八割だ」
「もうソレ生命体じゃなくて食品だろーが」
「ふっ……いつからピザが食品だと錯覚していた？」

「恐ろしい事言うなよお前は!?」

確かにピザという名の生命体をそのまま捕食していたとか考えたくない。そんなやり取りを見ていたアーシアは暫く唖然としていた。それもそのはず、レジェンドの正体が各地で伝わる御伽話の主役の光神様と知ってなお対等に会話している。

「え……あの……」

「ん?この状況が珍しいのか、シスターよ」

先程までテーブル下に上半身突っ込んだまま動かなかったスカーサハが頭を擦りながら出て来た。なんでもテーブル下に落とした物を拾って安堵し、すっかり油断して起き上がろうとした瞬間に頭を勢いよくぶつけて暫く悶絶してたらしい。

「はい……ゼロさんは光神様で、私達では本来お目にかかる事さえ許されないようなお方で……」

「それは単にあちこち忙しなく動き回っているからであろう。あの者は割と様々な場所に出没するぞ」

「おいそこォ!変な表現はやめろ!俺を幽霊とかその手の類と同類にするな!あながち間違っていないがな」

「そこは最後まで否定せぬか!?」

「いや幻影飛ばしてアレコレやったりしてたしな」

それくらいしないと【エリア】管理は出来ません。リアスがやってる領地云々や冥界だの天界だのというレベルなんて話にならない程とんでもなく色々のしかかって来るのだ。加えてあの二人の相手である。正直サーガは大丈夫だろうかとレジェンドは心配しつつ、他の珍妙な事態に陥ってる家族を起こしながら朝食に有り着いた。

☆

アーシアを交えた朝食を済ませ、仮住居のリビングにて勢ぞろいしたレジェンド一家＋アーシア。ちなみにカナエも居たかったのだが、学校がある為仕方なく涼子と共に駒王学園へと登校して行った。

「さて、腹も膨れた事だし「我、まだ満腹になってない」……後で馬場寿司連れてってやるから少し我慢しなさいオーフィス。で、改めてだ。アーシア、君はこれからどうしたい」

「え？」

「悪いとは思ったが少々調べてな。教会は追放され、堕天使には利用されそうだった。後は悪魔陣営くらいだが、正直言って安全とは言い難い。あそこも派閥が多過ぎて遅かれ早かれ争いには巻き込まれる」

よくよく考えてみれば基本アザゼルが総督の堕天使勢やミカエルを筆頭とする天使勢に比べて、レーティングゲームのせいで個々の派閥が増え過ぎている悪魔勢は辛うじて現魔王が束ねている状態だ。おまけに（大半はレジェンド＆オーフィスに潰されているが）旧魔王派なんかもいて寧ろ内輪もめの危険が大きい陣営である。

「私は……」

「で、だ。そんなライオンの檻にウサギを投げ込む真似はしたくないし、我が家……例えるなら『光神陣営』か、もしくは駒王を拠点とする『宇宙人連合』へ属する事を勧める」

この真なる二大勢力、三大勢力や各地の神話勢が同盟組んでも相手にしたくない連中である。前者はレジェンドやノア、キングにサーガを中枢とする最強最大の勢力であり、ウルトラ族やデラシオンといった個々の戦力が既に色々おかしいレベルで存在している。後者は様々な星に住まう者達が中心となった、前述の光神陣営と友好関係にある多種族多星系連合だ。種族の多様性はさる事ながら何せあの『七星剣』が全員属しておりそれに比肩し得る存在も確認されている。

ハッキリ言ってこれらを相手にするなど自殺行為もいいところだろう。故に三大勢力はおいそれと手が出せなくなる。
　というのはアーシアにとって二の次。彼女の答えは決まっていた。先程の勧めで後押し・確定したと言っていいだろう。

「私は……ゼロさんと、光神様と居たいです。ずっと前から信じ続けてて……漸く会えたんです。それからこうしてまた助けられて、自由にしてくれて……ご恩ばっかり貰ってます」
「んー？レジェンドは恩を売ろうと考えてないにゃ。割と自分のしたいように動くし、欲望に正直にゃ」
「お前が言うな欲望垂れ流しまくりのくせに」
「遊○王ＯＣＧ買う為に早朝から並んでいた事もあったしのぅ」
「やかましいぞ好きなシリーズが別ハードで移植されるからと俺を店頭販売の最前列で待機させ続けた奴が何を言うか」

　そんなレジェンドと黒歌と夜一の掛け合いを笑顔で見つめるアーシア。というか最高位たる光の三超神の一人をパシリ扱い出来る夜一が地味に凄い。

「私、昔からトロくてあまりお役に立てないかもしれませんが……こんな私の願いを聞き届けて下さるなら、どうか側に居させて下さい！」
「……一つ、条件がある」
「……はい」
「周りに何も知らない一般人とかだけならその『ゼロさん』で良いんだがな。今の状況みたいに身内だけとか、俺が誰なのか知ってる奴しか周りにいない時は俺の本来の名前である『レジェンド』で呼ぶように。以前も言ったがウルトラマンにもこの人間体の俺と同じ名前の奴がいてややこしいんだよ」
「え……それだけ……ですか？というか私、そう呼んでも良いんですか？」

「いや何されると思ったんだね君は。別にこちらとしてはハナっから受け入れる気だし、それ前提で話してたからな。そもそも慣れないんだよ、人間体の名前。長い事使ってるのに……姓が悪かったのか？今からでも『超（ウルトラ）』に変えとくかな」
『それは絶対に駄目（です）!!』

そうなるとウルトラゼロアイだのウルトラゼロキックだのウルトラゼロブレスレットだのと更に面倒くさい事になるのは目に見えている。最近ではマントも増えた。

「そういう訳だ。んじゃ、試しに呼んでみ」
「はぅっ!?え……ええと……レ、レジェンド……様」
「……様付けは結構な頻度でいるし気にしないが敢えて言おう。何この可愛い生き物」
『!!??』

その場に居たレジェンド以外全員が反応した。当のアーシアは顔を真っ赤にして俯いている。

「なーんーでーにゃー！私はそんな事言われたの一度もないにゃ！」
「儂とセットで『黒猫ツインズ』になっておるからな！」
「ちょっとこれまさかのダークホース？いやエピソード聞くとそうなってもおかしくないけどさ」
「おい乱菊、何だその『エビソース』と言うのは」
「お主は混乱しておるのか純粋にピザ絡みに考えておるのかどちらだ!?」
「レジェンド様、可愛い肉じゃがとはどんなものですか」
「寧ろ肉じゃがから離れて下さいハリベル様！」
「まあ、こうなるでしょうね」
「烈、凄い落ち着いてる。我、今日はレジェンドのお風呂に突撃する」
『それはもっと駄目!!』

C．C．とハリベルの意味不明発言がさらなる混乱を呼び、トドメにオーフィスが爆弾発言を投下。際限なくボケとツッコミで加速しながら突っ走るのが普段のレジェンド一家だ。しかしながら本気でやる時は間違いなく全【エリア】最強戦力と化す『絆』の体現たる一家。そんなレジェンド一家に今日、新しい家族が加わる。

「こんな騒がしい家庭だがな。これから宜しく、アーシア」
「はいっ！」

アーシア・アルジェント。この日は後にウルトラマンレジェンド最初の巫女としてその名を【エリア】全域に響き渡らせる少女が、本当の意味で幸せを掴み始めた記念日となった。

〈第一章・終幕〉

ゼット「次章こそご唱和下さい我の名を！
　ウルトラマン！ゼエエエット!!」
ゼロ「ちょっと待て俺の方が先だァァァ!!」
サーガ「次章、俺と先輩の胃痛がまた悪化する」

〈第二章へ続く〉

戦闘校舎のフェニックス、レジェンドｉｎ京都
アーシアのお引越し、遊撃隊での青い師弟

めでたくアーシアのレジェンド一家入りが決まったところでやらなければならない事がある。一つは涼子に任せてある為、返答待ちだがもう一つは早急にやらなければ今後の生活に支障が出て来るものだ。それは……

「と、いうわけで只今よりアーシアの我が家本宅へのお引越しを始めまーす」
『おー！』
「え？お引越し……ですか？ここがお家じゃないんですか？」

そういう疑問も当然だ。実際ちょっと広いが立派な建物で生活環境も整ってるここに住むわけではないと。

「ここでも十分住めるけどね。ハッキリ言ってここの比じゃないのよ、あたしらの本来の家って。まあレジェンド様が超速で完成させたらしいけど」
「ちゃんとお主の荷物はあのどさくさに紛れて持って来ておるからの。本人が居るわけだし火事場泥棒にはならんじゃろ」

アーシアは二重の意味で驚いている。これだけの生活空間以上に快適なのか、という事に加え更にあの乱戦に入る前か逃げる時なのかは知らないがよくもまあ自分の荷物を見抜いて持ち出したな、という事にだ。

「最初は戸惑うかもしれませんが、慣れると他で暮らしたくなくなると思いますよ」
「ん、我初めて入った時はしゃぎすぎて壁にめり込んだ」

「えええっ!?」

卯ノ花の言葉には純粋に期待が膨らんだが、オーフィスの言葉にはやっぱり驚く事になった。そりゃはしゃぎすぎて壁に頭から突っ込んだのは一家内でも彼女だけだ。しかも二回。

「向こうに帰ったらエビソースについて検索するか」

「可愛い肉じゃがとは見た目がなのか?サイズがだとしたらちょっと」

「お主ら前回のネタをいつまで引っ張るつもりだ!?」

「とにかく、どちらにせよ行って直接実感して下さいアーシア様。それとレジェンド様、実は先程『銀河遊撃隊』総司令官であるベリアル様と隊長であるゼロ様から連絡がありまして……これからアーシア様のお引越しがある事を伝えたら、それが終わって時間が出来たらで良いから連絡がほしいと。なんでも近々こちらに定期赴任する遊撃隊メンバーの事で相談したいと」

アーシアはグレイフィアの話の中で一瞬出たゼロの名前が、レジェンドの言っていた『一緒の名前でややこしくなる』という人物だと理解した。他のところも気になったが今の自分があまり首を突っ込むわけにはいかないと自制している。この空気読める良い子の感性をちょっとでいいからどこぞの二名に分けてやりたい。

「了解した。しかしメンバーで相談……?定期赴任するメンバーは警備隊・遊撃隊共にそれぞれ隊内もしくは互いでの相談で決める手筈にしてあると聞いたが……」

「それが……どうも新しく遊撃隊に配属、というよりも押し掛け入隊に近い形で入った方で……ゼロ様の弟子との事です。ゼロ様本人は認めてらっしゃらないようですが」

「……は?」

何それ初耳なんだけど、と少々間抜けな表情になったレジェンドだったが、何にせよ後で聞けばいい事だし今優先すべきはアーシアの引っ越しだ。

「どっちにせよ後で通信すれば何か分かるだろうしな。よし、アーシアの荷物は俺が持とう。全員簡易スターゲートへ移動！」

やや強引にだが話を進めたレジェンドはアーシアの荷物を抱えて先導する様に移動を開始。その際アーシアの右手を握り、左手はオーフィスが握っていた。

☆

さて、レジェンド一家によるアーシアお引越し作業中の合間に問題の銀河遊撃隊の方を少し時間を遡って覗いてみよう。

少々地球から離れつつも十分見える距離に移動済みの遊撃隊本部にして移動基地ガーディアンベースのブリーフィングルームにて、ある者はオロオロと、ある者は他者に相談し、ある者は筋トレしていた。

その渦中にある人物らとは……

「えええええ!?何で駄目なんですかゼロ師匠!?」

「だからお前を弟子と認めた覚えはねえ！あのな、お前はここに来たばっかで普段どんな任務やってるかもわかってねえだろ!?」

「だから地球への定期赴任は絶好のチャンスじゃないですか！俺、ゼットの絶好のチャンス！あ、今上手いこと言った俺！」

「上手くねえよ！お前護衛対象の事分かってねえだろ、いやマジで。いいか？いつもみたいにバカな事しでかして取り返しのつかないミスなんざやってみろ。お前だけならまだしも俺ら遊撃隊、下手すりゃ光の国全体巻き込む大惨事になるんだぞ!?」

「だったら尚の事、俺がしっかり活躍すればこの遊撃隊もそれを率いるゼロ師匠の評価も鯉のぼり!!」

「それを言うなら鰻上りだろ!!」

片や若くして大出世し、銀河遊撃隊の隊長としてその名を宇宙に轟かす『ウルトラマンゼロ』。片やゼロ曰く「半人前どころか三分の一人前」と言われる新入隊員で自称ゼロの弟子の『ウルトラマンゼット』。

この【エリア】のゼロはレオやアストラのみならず、ウルトラの父やベリアル同様レジェンド直々に修行を受けている。キングがいない分経緯は異なるが最初はやはりやさぐれ気味というか反発していた。そんな彼にも全力で向かい合い鍛え上げ、銀河遊撃隊隊長へと推薦してくれたレジェンドは今やゼロにとってレオ兄弟と同じく師匠であり、かけがえの無い存在だ。父・セブンが「あの方と同じように立派になってほしい」と願い、レジェンドの人間体から取って名付けられた自分の名は誇りでさえある。

そんな存在とその家族たる者達を実力も覚悟も半端なゼットに任せるわけにはいかない。覚悟の方は半端ではないかもしれないが実力がまるで追いついていないのだ。それを何度説明してもゼットは持ち前のポジティブシンキングでサラッと流してしまうためゼロは本気で頭を抱えていた。

「なあベリアル……どうすりゃコイツ納得するんだよ……俺もう説得無理に思えてきた……ジープに追い掛けられる方がマシかも」

「ゼロさん、気を確かに!」

「僕等も協力するから!変な気起こさないでゼロ!」

あのいつでも強気なゼロが両手で顔を覆ってへコんでいる姿は相当衝撃だったのか、オーブとジードが背中を擦りながら元気付けようとしている。ジープ発言は病みかけていると思っても間違い無い気がするが。

「父さん、何とかしてあげられないかな……」

「俺達も協力は惜しみません、ベリアルさん!」

「ありがとよオーブ。ジードの言う通りどうにかしてやりたいんだがな。どうやってあの撃ち出したら戻って来ないスラッガーみたいなアイツを納得させられんのか考えてるんだが……」

ブリーフィングルームでゼロの隣に座りながら、所謂ゲ〇ドウポーズのベリアルは悩んでいた。アレは生半可な事じゃまず無理だろう。現に今もわざわざ来てくれたレジェンドの息子とも呼べる二人が説得している。

「なあゼット。ここは私とムサシ、そしてジャスティスに任せて、君は君が師匠と慕うゼロの元で力と技を磨くんだ。そうすればきっと護衛任務を任される時が来る」

「コスモスの言う通りだ。ゼロは君に志半ばで倒れてほしくないから苦言に徹しているんだ。彼の思いを無駄にしてはいけないぞ」

「大丈夫です、コスモス先輩にジャスティス先輩！これでも俺ウルトラ頑丈なんで！それに実戦訓練の方がより危機感を持てる分、成長も見込めるかもしれないです！」

（（あ、これ私らじゃ無理案件だ））

やはり二人が撃沈した。続いてニュージェネレーションの指導役として遊撃隊に所属している、有名な光の化身『ウルトラマンティガ』が説得に乗り出した。彼が自ら出張った事にベリアルやゼロも希望を見出した。

（ベリアル、ティガならやってくれそうな気がするぜ！）

（ああ、ゼット自身が「ウルトラ仏」と評するアイツならいけるかもしれねえ……！）

「ゼット、よく聞いてほしい」

「ティガ先輩……」

「君が大丈夫だと思っても、地球で戦うとなるとそこに生きる者達にも気を遣わなければならないんだ。そして、目立てば目立つ程様々な

プレッシャーも襲い掛かってくる」
「……はい」
「必要以上に期待され、それに応えられなければ批難されたりもする。怪獣らと同じく驚異と見なされ攻撃を受けるかもしれない。そんな心が押し潰されそうな時が何度も来る、きっとね」

ティガの言葉には重みがあった。その場にいる全員が黙ってしまう程に。

「だから、まずはしっかり心を鍛えるんだ。どんな時でも己を見失わないように。そしてそれから力と技を。勿論僕も協力するよ。だから今は耐えて、一緒にここで修行を重ねよう」

これにはベリアルやゼロも含め大きな拍手が巻き起こる。やはり邪神を倒した英雄の説得は違う。これにはゼットもしっかり耳を傾けていたのだが……

「つまりティガ先輩も一緒に行けばいいという事ですね!!」
ドガッシャアアアアアン!!!

ダメだった。

「すいませんベリアル総司令……僕でも無理でした」
「いや仕方ねえよ!アレで無理だとは誰も思わねえだろ普通!寧ろ何であそこからこういう流れになるのか理解出来ねえよ俺も!だからヘコむなティガ!」
「マジでどうなってんだよアイツの頭ん中!?ティガで駄目なら俺らに手はねえ様なもんだぞ!ハッ!?」

ゼットの圧倒的ポジティブシンキング斜め思考はティガすら凌駕し、正直打つ手無しかと思われた時ゼロが何かに閃いた。

―いっそ大師匠(レジェンド)の案を借りよう―

そう考えたゼロはこう答えた。

「どちらにせよ俺達じゃ決められねえ。ここは警備隊や、護衛対象とも連絡取ってからになる」

「なる程！ではゼロ師匠、ベリアル総司令！その時が来たらご唱和下さい！我の名を！ウルトラマン！ゼェェェット!!」

実際はレジェンドの言ってたようにそれぞれ隊で決定出来るのだがそこはアホの子ゼット、ノリノリで納得して出て行った。彼の将来が心配である。

「……何とかこの場は納めたけど根本的な問題は解決してねえ」

「お前の魂胆は分かったぜ、ゼロ。確かにありゃ俺達じゃ無理だ。こうなったら最悪師匠からキツく言ってもらうしかねえな……！」

「レジェンドに迷惑かける分、次の定期赴任は俺が行くぜ。警備隊からは誰が来るって？」

「メビウスだそうだ。グレートの予定だったんだが他の定期赴任メンバー用にゴーデスについての講義を行なってもらうみたいでな、一先ず先んじて講義を受けたメビウスが来るってケンが連絡してきたぜ」

ゼロもメビウスならば、と納得する。そしてすぐさま地球のレジェンド一家に連絡を取ったところ、ちょうど信頼出来るグレイフィアが出てくれたので、事態を説明した。

「つーわけなんだよ……俺らじゃ歯が立たねえ。コスモスやジャス

ティス、ティガでさえ駄目だったんだ」
『まさに悪い意味でポジティブだと……』
「ああ、正直師匠から言ってもらっても効き目があるかどうか怪しいから、まずは知恵だけでも借りたくてな」
『畏まりました。お伝えします。ただ、新しく家族が増えましたのでその引っ越し作業もありますから……』
「いや、そっち片付いて一息ついてからでいいぜ。すぐに赴任するわけじゃないからな。あ、それから警備隊からはメビウスが来るって言うからよ、カレー用意してやると喜ぶぜ。ここだけの話、俺もちょっとそれ楽しみでさ」
『ふふっ……では、その時は私達一同腕によりをかけた一品をご用意します』
「よっしゃ！そうとなりゃ俺もしっかり準備しないとな！ベリアル、グレイフィア、先に失礼するぜ！」

ウルトラゼロマントを翻しながら走って出て行くゼロを二人は笑顔で見送った。

『隊長といえど、ああいった部分はまだまだ若者ですね』
「それでいいんだよ。若いうちにしっかり楽しめるとこは楽しんどかねえと、後々年食ってからじゃ立場上まともにそんな時間なんざなくなるからな」
『その事には同意いたします、ベリアル総司令官』
「俺から見りゃお前さんも全然若いんだよ。これから先も師匠と一緒なんだろうが……俺は師匠の正妻にはお前さんを推すぜ。頑張りな」

ベリアルからまさかの激励を受けて、顔を赤くしながらお辞儀しつつグレイフィアは通信を切った。

「世話になった分、結婚式は遊撃隊を挙げて盛大にやってやるからな。

覚悟しとけよ師匠一家」

ちょっと意地悪な、しかしかつてとは違い穏やかな笑みを浮かべながらベリアルも通信室を出た。その足音は心なしか軽かったと息子ジードは語る。

☆

そして時間は元の時刻、レジェンド一家の本宅ダイブハンガーへと舞台は戻る。やはりというかアーシアは驚きを隠せなかった。

「はわぁぁぁぁぁ!!こ、これがレジェンド様と皆さんのお家なんですか!?凄いです！外にお魚さん……ええ!?水の中!?」

「正確には海の中だ。名称はダイブハンガー。かつて俺が共に戦った者達の秘密基地だったものを再現してな。ちなみに専用のシークレットロードで地上とも繋がってるぞ」

「儂も最初は海の中の家なぞ夢物語かと思ったんじゃがな。まさかの事実と知って顎が外れたわ」

「ちなみに基地上層部は浮上してピラミッドっぽくなるにゃ。そこで表に出て昼寝は最高にゃん」

「最近は我もやってる。でも、中から海中見ながらお昼寝も負けてない」

アーシアがそれぞれの発言に目を輝かせながら聞いていると、さらに目を引くものがあった。

「わぁ……！レジェンド様、あれ飛行機ですよね！それに潜水艦みたいなのと……大きな船？って……はう!?な、何ですかあれ！凄く大きな人……ロボットってやつですかぁ!?」

「あっちがガッツウイング、こっちはドルファー２０２、あれはアートデッセイ号だ。他にも多数あるがアーシアが気になっているこいつ

が……」
「私の専用機、コンパチブルガリバーだ。あまりに超戦力なのでおいそれと出撃出来ないから、未だに出番が無いんだがな」

ホントに何故セブンガーとかじゃなくてこんなオーバーテクノロジーの集合体みたいなスーパーロボット作ったのか。なお、合体する支援戦闘機は順調に開発されている。これ以上強化されたら相手にとってたまったものではないが、妥協するレジェンドではない。寧ろもっとやる。

「ともあれ基地機能は勿論の事セキュリティシステムは大幅に強化してあるし、居住区以外にもプライベートルームや各種レクリエーション施設、その他諸々完備して収容可能人数は述べ３０００人にもなる。今日からアーシアの家だぞ」
「す、凄すぎて何が何だかまだ混乱してますけど……」
「最初は誰しもそうであるからな。吾も屋敷でなくこんなものを見せられたら倒れかけたぞ」
「私は破面の頃に住んでいた場所が場所だったからか、大きさにあまり驚きはなかったな。設備や戦力が充実し過ぎなのは驚いたが」
「早くアーシア様のお荷物をお部屋まで運びましょう。それぞれお気に入りの場所もあるでしょうし、そこの紹介はそれからにしては如何ですか？」

グレイフィアの言葉に賛成し、アーシアに割り振られた部屋に荷物を運ぶ。その部屋もトイレに洗面所、風呂場、簡易キッチンなどぶっちゃけホテルの一室並みに広かったのだが。レジェンドもアーシアの気になったところを案内しようと思ったのだが、涼子から連絡が入った隙にオーフィスやスカーサハ、黒歌に夜一らにアーシアが連れて行かれた為、やれやれといった表情で涼子からの通信連絡に出た。

『あら？もしかしてタイミング外したかしら』

「構わん。どの道あいつらが案内するだろうからな」
『私は良いけど、たぶんカナエちゃんは拗ねちゃうわよ？ちゃんとケアしてあげてね旦那様？』
「まだ結婚も何もしていないだろう」
『もう確定しているようなものじゃない。っと、このまま話してたら肝心な事言い忘れそうだから先に言うわね』

涼子から伝えられた事と言うのは……

『アーシアちゃんの駒王学園の入学許可、ちゃんと下りたわよ。後はあの子の気持ち次第ね。クラスは矢的先生が担任のクラス……カナエちゃんと一緒にいた兵藤君が在席してるわね』
「……いや大丈夫なのかそこは。確か三大変質者は一緒のクラスじゃなかったか、三人とも」
『ええ、揃ってるわよ三人とも』
「オイオイヤバイんじゃないのヤバいだろソレどんくらいヤバいかっていうと一クラス丸々ノアとキングで構成されてるくらいマジヤバい」
『それはヤバいどころじゃないわね。大丈夫よ。矢的先生の話なら少なくとも兵藤君はアーシアちゃんに手を出さないだろうし、万が一何かあっても貴方が渡した輝石がお守りになってるでしょう？』
「まあ、それはそうだが……」
『あの子が学生生活を楽しめる様に私達もバックアップする。約束は守るから心配しないで。何かあれば貴方に助けを求めるだろうけど』
「……分かった。アーシアには伝えておく」
『ええ、お願い。とはいえあの子が通いたくないと言えばそれまでなんだけどね』
「それはないと思うがな」

そう言うとレジェンドは通信を終えた。アーシアが学園に通うのは問題無いが、周りの悪影響を受けないか心配ではある。ましてやそ

の悪名高い三大変質者が勢ぞろいしてるクラスに、矢的が担任でいるとしても放り込んで平気なのか。

とにかくアーシアには一通りダイブハンガーを見て回り戻って来たら伝えるとして、レジェンドは遊撃隊へと通信を繋ぐのであった。

〈続く〉

レジェンドのお悩み相談室、アーシアの転入

「で、俺の力というか知恵の方を借りたいと」
『ああ……情けねえが師匠が呼んでくれたコスモスとジャスティス、加えて遂にティガまで投入したが全員撃沈した』
「オイ待てその三人でも無理だと？どういう神経してんだそいつ」
『度の超えたポジティブ野郎なんだよ……悪く言えばぶっちぎりの能天気だ』
「悪くも何も能天気一択だろ」

アーシアとのダイブハンガー探険はしばらくかかる（スカーサハ談）らしくレジェンドは先にベリアルとゼロに通信を送っていた。どことなく安心したような、もしくはやつれてるようにも見える。

「ノアやキングの悪ふざけ（注・本人達は真面目らしい）とはまた違って面倒だな」
『『ちょっと待てその二人日常的に悪ふざけしてんのか!?』』
「被害者はトップが俺、次点でサーガだ。基本的にそれ以外に被害は出ない」
『『何でこっちの【エリア】に集中してんだよ!?』』

ニ超神の悪ふざけの被害がお互いには行かずピンポイントでレジェンド＆サーガというこの【エリア】の統括主とその後輩というトップ２にのみ降り掛かるアホな事態に見事なツッコミをハモりながら入れる遊撃隊のトップ２。かつて激しい激戦を繰り広げたとは思えない程のコンビネーションだ。寧ろぶつかり合ったからか。ともあれ仲が良くて結構である。

「しかしあの二人と違って完全な善意だからな、方向性は間違っている気がするが……だとすると、だ……ふむ……二人とも、『ウルトラゼットライザー』は光の国から届いているか？確か二つ分、幾つかの

ウルトラメダルと一緒に送られる手筈になっていたが」
『いや、まだだ。火星での一件もあってそれの対策も平行して行なっているから調整が遅れてるとヒカリから連絡があった』
「そうか、ある意味今回は好都合だ。ゼロ、お前８０同様の常駐任務受けれるか」
『え!?いや、どうなんだろ……どうだ?ベリアル』
『なる程、そういう事か。お前にその気があるなら俺は了承するぜ。こうなりゃ荒療治でいくしかねぇって事だよ』
『荒療治……?まさか!』
「そのまさかだ。ゼット(そいつ)を今の戦場にぶち込んでやればいい。そこで踏ん張ればそのまま預かり、駄目なら遊撃隊か警備隊へ送還して修行の積み直しだ」

レジェンドの出した案、それはゼットを地球へと降ろし直接今起きているゴーデスの侵略を始めとした事案に対処させるという、当初の目的と正反対のものだった。ベリアルは何かしら勘付いているがゼロはまだ分かっていない。

『踏ん張るったって相手はグレート先輩でも苦戦したあのゴーデスだぞ!?今のあいつじゃ確実に奴を引きずり出す前にくたばるのは目に見えてる!』
「落ち着けゼロ。その為のウルトラゼットライザーとウルトラメダル、そしてお前の常駐赴任だ」
『へ?』
「まずはそいつの定期赴任だが、その二つが揃ってからだ。それまでは絶対に来させるな。ゼロの言った通りになるのは確実だからな。次にゼロの常駐赴任に関してだが以前からベリアルやケンと相談はしていた」
『黙っててすまねえな。だが、遊撃隊からも常駐赴任を出す案は以前から出てた。光の国から警備隊屈指の実力者であるウルトラ兄弟の一人が来ているのにこっちからは出さない訳にもいかねえだろ』

『まあ、そりゃな。でも何で俺なんだよ？確か今レジェンド達が住んでるのってティガが居た基地そっくりに作ったやつだろ。ティガの方が向いてるんじゃないのか？』
「それも考えたが、俺も何かと留守にしがちな上これからこちらでの戦いが激しくなる事を見据えると、俺が不在の間、そして今後赴任してくるウルトラ戦士達の先頭に立って引っ張れる人材でなければならない」

そこで白羽の矢が立ったのが若くして数々の激戦を乗り越えて隊長となったゼロだ。加えてレジェンドの直弟子の一人でもあり、遊撃隊でもニュージェネレーションは彼直属の部下に当たる。本人の自覚は無いだろうが指導力も高い。

「そういう意味でゼロが常駐赴任として地球に降りていれば、既に地球にいる８０と合わせて後続のフォローも問題無い。そのゼットに加えてもう一人誰かを一緒に定期赴任させれば何とかなるだろう。警備隊側も二人との事だからな」
『つまり遊撃隊（こっちち）と地球（あっちち）側の準備を整えてフォロー万全の状態であいつを降ろすわけさ』
『そういう訳か。そこまでしっかり決められてんなら俺は文句無いぜ』
「そしてもう一つ、お前が常駐赴任にもってこいなのは……」
『？』
「色気より食い気もしくは修行なお前ならウチの家族に手を出す心配が無いからだ」
『『私情丸出しじゃねえか!!』』

最後の理由は思いっきりレジェンドの個人的な事情だった。まあ、レジェンド以外は女性だし仕方ないね。

「とりあえず当面の所はこの案でいいな？最後に聞きたいんだが警備

隊側は誰を送るといっていた？俺は一人しか知らされていないが二人来るらしい」
『グレイフィアには伝えたんだけどよ、一人はメビウスだってよ。グレート先輩が諸事情で遅れるからって』
「ああメビウスか。もう一人は」
『もう一人ってあと一人は？』
「え？レオだけど」
『『!?』』

とんでもないビッグネームだった。

『嘘だろぉぉぉ!?師匠(レオ)!?え、ちょっと待って獅子の瞳いいい!!』
『おい、落ち着けゼロ！そりゃ俺も初耳だが気をしっかり持て!!』
「予定取消は期待するなよ。あいつダイブハンガー(俺の家)に訓練施設もあるって言ったら喜んで『毎日入り浸らせて頂きます！』とそりゃあもう綺麗なお辞儀で宣言されたからな」

ゼロもそうだがいずれ地球へ降りるゼットが不憫に思えてきた。間違いなく過酷なレオによる修行と下手すりゃあの世へ旅立つレジェンドによる強化特訓プランが待ち構えている。事実、ケンとベリアル、ゼロは本気で死を目前に感じたのは数え切れない。
レジェンド本人はそれより別次元にヤバい修行を軽々とこなしていたので文句の言いようがなかったのだが。

「とにかくゼロは早めに準備済ませて降りて来い。こっちは今からアーシアに学園生活を送るかどうか、送るならその上での注意事項なんかも教えなければならん」
『こうなりゃありったけのアイテム持って降りるしかねえな。ダイブハンガーってのの近くまで行った方がいいのか？それとも駒王の仮住居の方か？』
「ダイブハンガーの方だ。そっちは認識阻害や結界の他に色々仕掛け

てるんでな。見つかる心配も無い」
『わかった、んじゃ持つモン持ったらすぐ行く。ベリアル、こっちは任せたぜ』
『おう、行ってこい。ゼットの奴は俺らがしっかり監督してから送り出すからよ』
「じゃ、通信切るぞ」

その言葉と同時にレジェンドは通信を終えた時、タイミングよくダイブハンガー探険隊が戻って来た。というかオーフィスらに連れられてアーシアがＧＵＴＳ隊作戦指令室に来たという方が正しい。まさに特撮ものの基地そのままな場所を見回ったからか、アーシアは隅々まで目を輝かせながら見渡している。

「ここ、作戦指令室。レジェンドが腰掛けてるのが隊長席」
「アーシアお疲れ様、どうだった我が家探険は」
「はい！凄く楽しかったです！皆さんとも仲良くなれましたし」
「あの短時間でか？アーシアが良い子だから納得といえば納得か、確かに」

ニコニコと笑顔のアーシア。この娘はまず嘘は言っていない。ダイブハンガーに満足して家族の者と仲良く出来たのなら御の字だ。問題なのは……

「アーシア、レジェンドに察してちゃんは御法度にゃ。サラッと流されてそこで終了。攻める時は勢いに乗って一気に押し切るにゃ」
「よいかアーシアよ。まずはダイレクトに言葉攻めじゃ。そこから動揺した隙を狙って抱き着き、押し倒す！そしてそうなったらお楽しみタイムとしゃれこめ！無論儂らも参加するから安心せい！」
「お前ら純粋なアーシアに何教えてんだこの発情ツインズゥゥゥ!!」

強烈な一撃が黒歌と夜一の脳天に炸裂した。

☆

その日の夕方、カナエに加えて涼子も早めに帰宅し、食事も済ませ一部を除き大衆用プライベートルームの一室、即ちリビングに相当する部屋でレジェンド一家は寛いでいる。アーシアも寛いでいるところ、レジェンドと涼子から先程の駒王学園転入について話したところ行きたい、と元気良く答えた。この事に喜んだのが涼子同様引っ越しに立ち会えなかったカナエだ。

「……とまあ、注意事項はこんなところだな。理解できたか？」
「はい、大丈夫です」
「向こうで何か分からない事があったらカナエか涼子、あとは矢的猛に聞くといい。矢的も俺の関係者だから詳しく言っても問題ないぞ」
「矢的猛さんと言うのはアーシアちゃんの担任の先生よ。レジェンドさんとは旧知の仲……っていうより上司と部下？ちょっと説明が難しいわね」
「心配しないで。凄く良い先生よ。私のクラスの担任だったらな～なんて思った時もあるの。困った時も全力で相談に乗ってくれて、今や駒王学園人気教師トップ３に名を連ねる熱血先生なの」
「え？矢的の奴そこまで人気出てたの？ああそうそう……カナエ、そろそろグレモリー眷属らと本格的に接触していいぞ。徐々にこちらの事も明かしていく。矢的から連絡があったが、ゴーデスの事が知られた以上は勢力関係なく力を合わせて立ち向かう必要がある。敵は奴だけではないからな」
「はい。ここ数日はリアス達を避けてましたし……アーシアちゃんの転入と合わせて矢的先生にも相談してみます。あちらも何か考えがあるようで」

アーシアの転入のタイミングでカナエ、矢的も含めてリアス達オカルト研究部と接触し、現段階で開示可能な情報を話し協力を仰ぐと共

にこちら側も行動に差し障りない程度に手を貸す形にすれば、少なくとも敵にはならないだろう。なっても負ける事はまず無いが。

「じゃあ明日に備えて俺達は早めに休むぞ。と……その前に」

レジェンドのみならず卯ノ花やグレイフィアも部屋の入り口を見ると自動扉が開き、そこには……

「今日もいい湯だったにゃー！」

「まさに心の洗濯じゃな！」

襖だったらスパーン！と勢い良く開けてそうなテンションで黒歌と夜一が入ってきた。

バスタオル一枚で腰に手を当て堂々と。

いくら今いる男がレジェンドだけでも羞恥心がないのかオメーらは。

「「アーシア（さん）（様）はああならないように」」

「は、はい……」

ここはレジェンド一家。大黒柱含めて色々強烈かつ個性的な面々の一家である。かくしてアーシアは駒王学園へと通う事になった。

☆

そして、翌日―

「今日からこの学園に通う事になった、アーシア・アルジェントです。まだこちらに来て日が浅いのでご迷惑かけるかもしれませんが、これからよろしくお願いします！」

「そういう訳で今日から彼女もこのクラスの仲間だ！ちゃんと仲良く

するんだぞ！」

一誠はポカンと口を開けていた。矢的がいきなり転入生を紹介するとその転入生がまさかのアーシアだったとは。

あの後、個人的に話しに言った時は「近々、胡蝶と一緒にオカルト研究部に顔を出すから」とは言っていたがその前に凄いサプライズが舞い込んで来るとは思いもしていない。

「それじゃアルジェント、席は兵藤の隣だ。兵藤！彼女を知っていたみたいだし、困った時はちゃんと手助けしてやれよ！」

「え……あ……はい！」

「一緒に顔を出す」と言っていたしカナエから聞いたであろう矢的が自分とアーシアが少しでも緊張しないようにと細やかな配慮をしてくれた事を心の中で感謝した。たった一度、ほんの少しの間しか一緒に居なかったが、それでも友達になった。アーシアも同じだ。返事に満足した矢的も笑っている。

既にアーシアには心に決めた人がいる、というのはちょっと残念だったが、こうして異性の友達がいるだけでも十分だ。オカルト研究部にはリアス達もいるし。

但し、三人はともかく他の男子が反応しないわけなかった。特に松田と元浜が。

「「「「リアス先輩と登校してるだけでも万死に値するってのによオオオオ!!!!」」」」

「おい一誠エェェェェェ!!お前なんであんな可愛い子と知り合いだったんだァ!?」

「ちょおっ!?まだホームルーム中だぞ!?席につけ！」

『すいません矢的先生！今だけは見逃して下さい！兵藤一誠エェェェェェ!!!』

「ぎゃあああぁぁぁぁぁ!?」

「イ、イッセーさぁぁぁん!?」
「兵藤ぉぉぉ!?ちょ、御門先生に連絡だ!!保健室までの道を開けてくれ!!」

まさに一揆もかくやと言った状態（男子限定）になった教室で一誠がフルボッコにされている。女子はアーシアを連れて退避済み。そして矢的は必死に男子を止めようと奮闘中。たぶん自力で来れないだろう、と連絡を受けた涼子が直接教室まで赴いたのだがその結果……

「ちくしょおおお！今度は保健室のマドンナ御門先生に治療されるだと!?俺だってされたいのに！」
「最近お前美味しい思いをし過ぎだろ！ちったあその幸運分けやがれ下さい！」
「ふざけんなこっちは総リンチで色々折れそうだボケェ!!」
『いっそ折れちまえコノヤロー!!』

やっぱりこうなった。引き続き奮闘する矢的に、一誠や男子より矢的が酷い目に合わないか心配する女子、オロオロするアーシア、そして楽しそうにその光景を見ている涼子。少なくとも退屈な学園生活にはならなそうだ。

いよいよ宇宙警備隊、そして銀河遊撃隊のウルトラマン達も地球へとその足を運ぶ。数多の侵略者達からこの星を、この世界を守る為の力が集結し始めた。

そして時を同じくして、異変の手掛かりを探るべく一人の超神がこの世界へと降り立つ。
『神話』の名を持つ、『伝説』が認めた存在が。

〈続く〉

彼方より来たる戦士達、入部と顧問で協力者

アーシアが駒王学園に転入した日、時を同じくしてダイブハンガーのある海域へ二つの光が降り立った。
既にダイブハンガー側はピラミッド部分を海上へ浮上させており、受け入れ準備が出来ている事を示す。二つの光は入り口らしき場所から入ると、それぞれ人の形へと変化した。
一人は、精悍な顔つきと鍛え上げられた肉体を持った男性『おおとりゲン』。
もう一人は、整った顔立ちの真面目そうな青年『ヒビノミライ』。
即ち宇宙警備隊の最強戦力とされるウルトラ兄弟のメンバー、ウルトラマンレオとウルトラマンメビウスである。その二人をダイブハンガーにて出迎えたのは二人が世話になり、かつレオにとってはもう一人の師匠とも言えるレジェンド、その左右には卯ノ花とグレイフィアが、さらにレジェンドに手を握られながらオーフィスも一緒にいた。

「お久しぶりです、『チーフ』」
「レオ……いや、今の姿だとゲンか。しっかりと修行もこなしているようだな」
「はい。弟子が頑張っている以上、師である俺が腑抜けていては面目が立ちませんから」

オーフィスと繋いでいないもう片方の手でしっかり握手し、その力強さからレオの実力がますます上がっているのを満足気に笑うレジェンド。これはトレーニングルームに入り浸りそうなわけだ、と思いながらメビウスの方を向き直る。

「メビウス……いや、ミライ。初めて地球に来た時と比べて英雄の風格が出てきたじゃないか」
「いえ……まだまだレジェンド、コウガミチーフや兄さん達には遠く

及びません。この機会を大切にさらに研鑽を積むつもりです。またご指導よろしくお願いします！」

腰を９０度曲げてしっかりお辞儀するメビウス。相手への敬意を忘れない、まさに優等生の見本のようなウルトラ戦士だ。タロウも鼻が高いだろう。

「ああ、こちら側も紹介しておかないとな」
「では、私から……初めまして、私はレジェンド様専属の主治医をさせて頂いております、卯ノ花烈と申します。専属とはいえ医師ですから、何か負傷の際はお気軽にお声掛け下さい」
「その時はご迷惑をかけますがお願いします。しかし……なる程、チーフが『自分とオーフィスを除けば間違いなく最強』と仰られた理由がわかりました。医術の心得もあると分かった以上、敵でなくて安心したとしか言えません」
「さすがレジェンド様の弟子にして『彼』の師匠ですね。手合わせどころか刀を挿してさえいないのに相手の実力を見極めるとは……」

レオと卯ノ花、どちらも桁違いの実力者である。お互いがそれぞれの力量を見定め、称賛を送り合っている姿は正しく強者の佇まいだ。
卯ノ花は普段穏やかな優しい顔とは裏腹に、本気でやる気になったらヤバいどころではない。レジェンドの元でさらなる修行まで重ねたおかげで、三大勢力の全戦力とやりあっても勝利しそうな領域まで至っている。
レオもレオで、最近他の兄弟から『人間体が人間やめてます体になりつつある』と称され始めた武道家だ。この間、ゲンの姿でダイヤモンドの数倍の硬さの巨大鉱物を、ウルトラマンの姿で小惑星を、それぞれチョップ一発で真っ二つにしていた。ぶっちゃけ、ゲンの時の方が色々おかしい。
「私はグレイフィア・ルキフグスと申します。かの大戦にて命を救わ

れて以来、レジェンド様の専属のメイドとしてお側に置かせて頂いております」
「お話はベリアル総司令やゼロ隊長からよく聞いています。お二人曰く『グレイフィア一人いるだけで人生勝ち組』とされる程に優秀だと」
「あ、いえ……恐縮です」

初対面で純粋に褒められ、予想外の出来事に顔を少し赤くしながら頭を下げるグレイフィア。ちなみにその二人が彼女を応援しているのもメビウスは知っている。
そんな彼女は卯ノ花に次ぐ実力者で、全戦力とは行かずとも三大勢力のトップが集結した程度なら難なく蹂躙出来る実力まで昇華した。
メビウスも近年ではタロウから『教官として後進を育ててみないか』と勧められるほど目覚ましい成長を遂げている。しかもゾフィーにまで勧められた結果、此度の出来事が全て解決した時は真剣に考えてみるようだ。

「それで、最後にこの娘だがな」
「我、オーフィス。レジェンドの正妻」
『!?』（卯ノ花&グレイフィア）
『ぶふおぉっ!?』（レオ&メビウス）
「まだ早いまだ早いまだ結婚自体してない」
「でも、先制パンチが大事って本に書いてた」
「その本、誰から借りましたか？」
「黒歌と夜一、それから乱菊」
「何で一人増えてんだァァァ!!」

オーフィスの爆弾発言にすかさず訂正するレジェンドだったが、どうやらその知識をオーフィスに授けた本の持ち主は例の二人だけでなくもう一人増えていた。今日もレジェンドのツッコミは冴え渡っている。いや、ここまでのツッコミはない方が平和なわけだが。

「とにかく！これからよろしく頼むぞ二人共。そろそろゼロも……来たようだな」

青い光が先程の二人と同じ様に降りて来て人型へと変わっていく。二人とは打って変わって快活そうな少年だ。

「すまねえ！準備に手間取って……うお!?レオにメビウス!?もう着いてたのか！」

「たぶん遊撃隊に情報が行ったの、僕達が出発してからだと思うからそれが原因じゃないかな」

「ちゃんと準備に、なんだろうな？嘘だったら俺の拳がお前の脳天に炸裂する事になるぞ」

「いやホントだってレオ!?常駐赴任だから後続用の補助アイテムだとか機材とかブレスレットにありったけ詰め込んで来たんだよ！」

ほら！とブレスレット内のデータ化された物のリストを見ると確かに限界ギリギリまで詰め込んでいる。これは早めに整理しないといけないだろう。なお、先程はゼロ『隊長』と言っていたメビウスがくだけた口調なのはゼロ自身が「確かに隊長だがメビウスの方が年上で先輩、しかもあのエンペラ星人を倒した功績もあるから敬語とかいらない」と言ったからである。タメ口でも嫌な感じにならないのはゼロが気さくな性格である事も理由の一つだ。

「各種アイテムや機材、生活用品以外にも一部ゼロの趣味や娯楽的な物もあるが……まあ、常駐だといくら出掛けたり出来るとはいえ基本は籠りがちになりそうだからな。それくらいはいいだろ」

「やれやれ……ゼロ、チーフに感謝しておけ。それから修行は一日たりとも怠るなかれだ！」

「おう！それくらいわかってるぜ！っていうか、レオやメビウスって何でレジェンドの事をチーフって呼んでんだ？」

ここで漸くそこに話題が行った。先程からレオがチーフ、メビウスもコウガミチーフとレジェンドの事を呼んでいる。卯ノ花やグレイフィア、オーフィスも初めて聞く呼び方だ。

「俺がまだウルトラ兄弟に数えられていない、ＭＡＣの一隊員だった頃、隊長……セブン兄さんと一緒に鍛えてくれていた時の役職でな。科学研究班のリーダーを務めていたんだぞ、彼は」

「ＣＲＥＷＧＵＹＳの時も、世代を超えて防衛軍を支える伝説の人物として有名な人だったんだ。だから普段はチーフって呼んでるんだよ」

レジェンドは人間体でもまさに『伝説』そのものだったらしい。科学研究という事は、ヒカリと組んだらオーバーテクノロジーどころではない何かが生み出されてしまう可能性もあるんじゃないかと思ったが、レジェンド以外の全員が考えるのをやめた。可能性どころかほぼ確実だから。

「では御三方とも揃いましたし、お部屋の方へご案内します。荷物を整理したらまずはお食事を。特にレオ様とメビウス様は長旅でお疲れでしょうから、それからお休みなさるかここの施設を見て回るかお選びになられた方がよろしいかと」

「お気遣いありがとうございます、グレイフィアさん」

「そうだな。ご厚意に甘えさせて頂こう。ちなみに食事のメニューは？」

「ベリアル様よりメビウス様の好物である事と、ゼロ様も楽しみにされているとの事で昨日より仕込んで置きましたカレーです。レジェンド様にもご協力頂きました」

「我も味見した」

「オーフィスが気に入ったから予め別に用意しておいて正解だったな……危うく食い尽くされるところだった」

「「カレー!!」」

メニューを聞いたメビウスとゼロ、さらにレオまで顔を輝かせながら声を上げた。ゼロが楽しみにしていたのは元より、メビウスはかつて地球へ来て初めて食べた物がカレーである。大人から子供まで幅広く愛される食べ物は当然メビウスの大好物となり、『光の国のカレー軍曹』と二つ名まであったりする。何だそれ。

レオはレオで、かつて隊員時代にレジェンドが特訓に精が出るようにと良く作ってくれたのがカレーだ。特にカツカレーは今だ彼の好物のトップに君臨する品目である。

そんなわけでカレーに早くありつくべく、彼らの行動は早かった。案内された直後凄まじい速度で荷物整理を行い、各種機材をダイブハンガーの指令室にも設置。万全の状態にしたあと、卯ノ花に食堂へと案内されるとそこには多数のトッピングやサイドメニューも完備し、お替り自由なカレーとライスが用意されていた。しかもサイズが特大をも凌駕する極大サイズの鍋や炊飯器を使って。

「何いっ!?カツが取り放題だと!?」

「これがカレーってやつか!もう匂いで美味いの確定じゃねーかこれ!?」

「レオ兄さん、ゼロ……今から僕本気出しますから」

レオは豪勢さに歓喜し、ゼロは期待以上のものに心震わせ、メビウスに至ってはフェニックスブレイブでもないのにエンペラ星人と戦えそうな雰囲気になっている。恐るべしカレー軍曹。

その日の昼食はいつも以上に激戦であった。

それから数時間後、ダイブハンガーのトレーニングルームにレオが入り浸り始め、メビウスはそこで生活する上でのルールをグレイフィアからしっかり教えてもらい、ゼロはガリバーがC・C・専用機と聞いて操縦できない事に肩を落としたがシミュレーターは自由に使えると聞いた途端復活してプレイし始めスコアをめきめき伸ばしている。

「スペシウム砲……発射ァァァァァ!!!」

必殺技や必殺武器の使用時の叫びは気合い入りまくりだった。どうせ常駐赴任だし、いっそ愛弟子にも変身せずとも戦えるように専用機を作ってやろう、と二機目の開発に乗り出したレジェンドは絶対ヤバいものを作りそうな気がする。

だって設計図がネオ・グ〇ンゾンだもの。

スペシウム砲じゃなくて縮退砲だもの。

ディストリオン・ブレイクとか書いてあるし何作ろうとしてんのこの人。黒歌の影響受けてるだろ絶対。

「ふむ、名前どうするか……」

違う、そういう問題じゃない。

新しく個性的な三人がダイブハンガーへやって来たが、どうやら一家は相変わらず平常運行らしい。

☆

一方その頃の駒王学園。オカルト研究部の部室ではリアスを始めグレモリー眷属も口をあんぐり開けていた。

「今日からこの部の顧問になった矢的猛だ！宜しくな！」

「同じく今日からオカルト研究部に入る事になった胡蝶カナエです。三年生だし短い間だけど宜しくね？」

「えと、私も同じく入部する事になりました、アーシア・アルジェントです。これから宜しくお願いします」

「「「「えええええ!!??」」」」

顧問に矢的猛ことウルトラマン８０。

部員に胡蝶カナエとアーシア・アルジェント。
何だコレ新手のドッキリ？と本気で困惑していた。

「どうやら前の顧問の先生が異動するんでな。後任を誰にしようか迷ってたところを僕が引き受けたんだ。関係者だし、説明もしやすくなって丁度良いからね」
「私もアーシアちゃんもね、お世話になってる人からある程度の許可が出たの。『来たるべき戦いの為に少しでもこの世界の結束を強める必要がある』って」
「あと私は、『今まで楽しめなかった事を思いっきり楽しみなさい』って言われました」
「カナエだけなんか凄く重いわよ!?シスターアーシアの方は一気に内容優しくなったけど!!」
「部長！俺は矢的先生が顧問になってくれて良かったです！個人的に！」
「まあ、そこはそうね。今までは幽霊顧問みたいな感じだったし」
「あらあら、これから一段と賑やかになりそうですわね」
「胡蝶先輩、あの技について教えてもらってもいいですか？剣士として気になってしょうがなくて……」
「黒歌姉様の事、教えてくれますよね……？」
「木場君はともかく小猫ちゃんはちょっと落ち着きましょう？なんか雰囲気が怖いんだけど」
「気のせいです」
「こちらでも宜しくお願いします、イッセーさん」
「ああ、こっちこそ宜しく、アーシア！」

朱乃の言うとおり、すぐに賑やかになったオカルト研究部。その後は親睦を深める名目で質問となったのだが、時間も押してるので今日のところは一人という事になり、結果……

「俺は矢的先生が活躍していた時の話を聞きたいです！」

「私も興味があるわ。ウルトラ兄弟の人気といえば冥界では魔王様達から提供されたウルトラセブンとウルトラマンタロウの映像記録のコピーが番組として何度も再放送が流されているくらいだもの。ちなみに大人にはセブンが、子供にはタロウが人気よ。テーマの違いかしら」

一誠の熱意とリアスの言葉の説得力が後押しとなり矢的こと８０の話題となった。

なお、何度もタロウの記録を見ているリアスが一番印象に残ったところを挙げるのは『ウルトラ一般人』。竹槍やバレーボールで怪獣に挑み、タロウでさえ人間体でありえない身体能力を見せた。何これ上級悪魔より強そうな一般人って何よ!?と今だに理解出来そうにない。

一緒に見ていたルシファー眷属でさえ真っ青になっており、サーゼクスに至っては「さすがタロウ」と何故か感心していた。

それから矢的はかつて地球へ初めてやって来た時の事を話した。特に中学校の先生として赴任したものの、激化する戦いの為に退職せざるを得なかった事は彼にとって後々まで苦しむ事になったが、それでも数十年後にようやく解決出来た、というエピソードを聞いた一誠とアーシアは感動のあまり大泣きしていた。

カナエが「明日は私の事を話します」と同時に矢的からこの間の事件の中で明らかになったゴーデスの事も話すと言われ、今日は早めに解散する事となった。

リアス達はともかく、カナエやアーシアは人間である以上、普通の夜はしっかり休んでほしい。そんな願いもあったのだ。

「私の話はちょっと重いんだけど、あの子達大丈夫かしら……いや、転生悪魔とかいるし平気かも」

「カナエさんが鬼殺隊ってところにいた事とか、大正って時代の人間だった事とか……その、カナエさんも、戦いの中で一度亡くなってる事とか」

帰り道、一緒に帰宅しながらカナエの心配事にアーシアも内容を確

認しながら少し暗い表情になっている。家族になってから寝る前にカナエの過去を聞いており、その時も泣き出してしまい、レジェンドも気付かれて一緒に慰められたのだ。その際に妹を残して逝った為に黒歌や子猫の気持ちも分かる、とも聞いた。

「ふぅ……覚悟を決めましょう。仮に理解してもらえなくても、アーシアちゃんはこうして分かってくれてるから、私は大丈夫よ」

「カナエさん……はい！」

生まれた国や世界は違えど、二人はすっかり姉妹のようだ。仮住居へ到着し、家屋の中にある専用スターゲートでダイブハンガーへ帰宅したカナエとアーシアを出迎えたのは新しく赴任したメビウスことミライだ。

「あ、お帰りなさい。というか初めまして。僕は宇宙警備隊所属のウルトラマンメビウス、この姿の時の名前はヒビノミライです」

「初めましてミライさん。私はレジェンド様のお世話になっている胡蝶カナエと申します」

「わ、私はアーシア・アルジェントです。これから宜しくお願いします！」

「カナエちゃんとアーシアちゃんだね。よし、覚えた。二人は学校に行ってたんだね」

真面目で人懐っこい性格の彼はすぐに馴染めたらしく、グレイフィア特製のレジェンド一家好物ブックなるものを読んでいた。今回は防衛チーム所属というわけではないので少しでも役に立ちたいと言ったところ、グレイフィアが

「家族が多いので料理を手伝って頂けると助かります」

との事だったので、これを気に料理の勉強をしてみようと思い、レジェンド一家の好物を作ろうとアドバイス代わりにその本を貰ったらしい。

ちなみに好物が一番安上がりなのはレジェンドで、豆腐関係の料理を好物としている。とりあえず冷奴があれば丼特盛一杯はいけるらしい。あともやし。卵とじ炒めにすればやはり丼特盛一杯は軽く入る。基本的にステーキやら高級食材よりも一般的な食材を好むようだ。つまり庶民派である。

「あの、ミライさん」
「なんだい？アーシアちゃん」
「先程からトレーニングルームというところがある方向から、凄い音が聞こえるんですが……」
「ああ、それは……」
メビウスが答えようとした直後……

ドゴキャアァッ!!
「ごふうぅぅぅっ!!!」

すんごい音と声が聞こえた。
さすがに何事かと思って駆けつけるとそこには良く見知った顔が。

「黒歌ァァァ!?夜一ィィィ!?いかん、完全に意識が飛んでおるぞ！」
「ちょっとゼロさん……だっけ！あんたの師匠マジで何者!?あの二人あたしが言うのもなんだけどバグキャラ並みに強いのよ!?」
「いやレオ最近人間体がおかしい事になってるって親父が「俺との組手中にお喋りとは余裕だなゼロ!!」（ゴベキィッ!!）へぶしっ!!」
「ゼロさんまで逝ったァァァ!?」

大惨事だった。

どうやらレオと組手する事になった面々が悉く叩きのめされてるらしい。既に黒歌と夜一、さらについ先程ゼロも沈んだ。レオってこんな異常な戦闘力だっけ？

「えええ!?黒歌さんと夜一さんが同時に戦って負けるってどんな怪物……!?」
「はわわわ……!とにかく治療しないと!」
「レオ兄さん容赦なさ過ぎだなぁ……」

混乱するカナエと三人の治療に向かうアーシア、とりあえずレオを止めに入るメビウス。この後レジェンドの乱入によって一撃でレオが倒されるまで続いた。
ダイブハンガーでは珍事件こそあれ仲良く賑やかにやっている頃、オカルト研究部部長にしてグレモリー家次期当主のリアスはある事で思い悩んでいた。

「……フェニックス」

〈続く〉

登場人物紹介（レジェンド一家・光神編）

※第二章現時点に基準する

【レジェンド一家】

○ウルトラマンレジェンド（光神零（こうがみぜろ））

ご存知本作の主人公。光の三超神の一人。

人間体のベースはスパロボＯＧのキョウスケ・ナンブ。詳しくは設定を参照。

チートどころのスペックではない為、現時点では本気で活動するとあらゆる事態が簡単に終わってしまうので殆ど目立った活躍がない不憫な人。

例に漏れずハーレムを形成しているが、それ以上にノアやキングに振り回され過ぎて現状色恋どころじゃないのだが各人と少しずつ進展はしている模様。

不憫で苦労人で貧乏クジ引きと三重苦だが、それでも平和の為に頑張っている。

なお、人間体での名前は殆ど呼ばれない。

イメージＣＶは森川智之さん。

○オーフィス

本作のメインヒロインにして同居人第一号な無限の龍神（ウロボロス・ドラゴン）。

レジェンドのパートナー、天然、大食い、寝る時マッパ（レジェンド限定）などなど属性やネタてんこ盛りな一家のマスコットでもある。

もはや静寂やグレートレッドなんかどうでもよく、レジェンドや他の家族と一緒に賑やかに暮らしたり冒険したりする方が楽しいとの事。

実は既にグレートレッドを超えているのだが本人はそれさえどうでもいいらしい。

一家共通のハンター業以外はレジェンドと一緒に禍（カオス・ブリゲード）の団潰しを

やっている。ぶっちゃけ自分を放ったらかして利用した報復みたいなもの。
約十年程一緒に寝てたからか、レジェンドが一緒でないと眠くても寝れない事が発覚した。
ドラゴン同士スカーサハと仲が良い。

○スカーサハ
C・C・やグレイフィアと一緒に惑星レジェンドからやって来た真龍ディアドラの仮の姿。ケモ耳ロリ。
古風な言葉遣いをする、一家の数少ない良心。
しかしベースがエルーン族なので背中オープンの服は割とこの世界では攻めてる方かも。
現時点に至るまでたとえ騒動の渦中にいてもあまり被害という被害に合ってない幸運な人物でもある。これ、凄い事だから！
一応ボケた事もあるが基本的にツッコミ。第二章では出番が増えるかもしれない。
一番仲が良いのはオーフィスだが、他の者とも割と良好。

○C・C（シー・ツー）
契約を結んだ者に王の力（ギアス）を与える、『コード』を持った少女。前髪で隠れているが額に紋章がある。
スカーサハ、グレイフィア共々惑星レジェンドから駒王……というかダイブハンガーへやってきた。
不老不死で、致死ダメージを受けても再生復活出来るという反則じみた能力を持っており、しかも各種スーパーメカの操縦もお手の物という防衛チーム向きな彼女だが、実際は身体能力こそ高いものの直接戦闘には向いてない。
専用機としてスーパーロボット『コンパチブルガリバー』を所有しているが、この紹介に至るまで一度も出撃していない事が不満。
本人曰く『自分は八割ピザで出来てる』らしい。
主に乱菊や涼子とよく共に行動している。

○グレイフィア・ルキフグス
レジェンド一家において、レジェンドとオーフィスを除きナンバー2の座にいる美人メイドさん。
現時点では一家で唯一の悪魔である。
レイブラッド事変で重傷を負ったところをレジェンドに助けられ、惑星レジェンドにて暮らしていたがC．C．やスカーサハと一緒に久しぶりに帰って来た。
双子の妹ルミナシアとは髪の長さと三つ編みをしている部分が違う。
一家の家事一切を取り仕切る万能メイドにして実力も後述の卯ノ花に次ぐデタラメスペックの持ち主。
メビウスに渡した一家の好物と作り方を記した本は彼女直筆のもの。
良心枠だが最近はC．C．と乱菊に振り回され気味。

○黒歌
元ＳＳ級はぐれ悪魔の猫?。現在はレジェンドのフューチャーフォースを受け妖怪へ戻っている。
追手に追われレジェンド一家の仮住居近くにて助けられ、そのまま一家入りした。
事ある毎にレジェンドの部屋へ忍び込もうとするがセキュリティが厳し過ぎて今だに成功事例なし。ちなみにオーフィスは普通に入れてる。何故だ。
やっぱりレジェンドの子供だけじゃなく愛情もほしい。
ゲームが趣味になったようで、大のスパロボマニア。新たに修得した技も大体そこから来てる。
C．C．のガリバーを見て自分も黒いソウルゲインが欲しいらしい。いやそれヴァイローズじゃね?あっちは蹴りだけど。
当初は（一方的に）ライバル視していた夜一とはもはや二人で一セットと呼ばれる程、仲が良くなっている。

○胡蝶カナエ
元鬼殺隊の『柱』の一人、花柱。現在は駒王学園の三年生にして『駒王学園三大お姉様』の一人。
例の現象にて『弾かれた』人物の一人だが、本人は既に元の世界で故人だったからか然程気にしてない。
妹を残して逝った事に悔いがあるからか、アーシアや年下の女子に優しくお姉さん属性全開。
こちらに来てからというものルシファー眷属が一瞬で記憶の隅に追いやられるレベルの化け物達に鍛えられたからか、他の者共々おかしい成長率で強くなった。
本人曰く「直接戦うタイプでは一家で一番弱い」との事だが、上記のルシファー眷属すら複数相手にして圧倒的優位に立てる彼女が一番弱いって何だそれ。
レジェンドを時々『お館様』と呼んでしまう。主に声のせいで。
やっぱりというか一番仲が良いのはアーシア。涼子とも割とよく一緒にいる。

○御門涼子
色気出しまくりな美人保険医。まさかの宇宙人枠である。見た目は髪に隠れた耳が尖ってる程度だけど。
宇宙船の事故で『弾かれた』という下手すりゃ命が危ないところをレジェンドに救出され、駒王に来る前は惑星レジェンドにいた。
一応カナエの保護者、という名目で駒王学園にて保険医をしており、男子生徒からぶっちぎりトップの人気を博している学園のマドンナ。
宇宙人だからか彼女自身の性格だからかオーフィスやスカーサハといったドラゴンも当初から普通に接しており、アーシアの駒王学園転入にも協力したりと面倒見がいい。
現時点では出番少なめだが色々と重要な役割を果たしている為、割と印象が残る。アーシア転入の功績はデカいぞ。

大人の余裕もあってか基本的に一家全員と関係良好（元々一家全体がそうだが、彼女は特に）。

○四楓院夜一

元護廷十三隊二番隊隊長兼隠密機動総司令官。四大貴族の一つ『四楓院家』の生まれ。

これでロリだったらのじゃロリ確定で黒歌よりスカーサハと絡んでたかもしれない。理由はぐらぶるっ！を参照。

彼女の場合、大した理由でもなくマジで偶然例の現象に巻き込まれただけで命に別状もないという幸運なのか不幸なのかイマイチよく分からない事態だった。

レジェンドは本気で惚れた相手らしく、本来なら婿取りなのだが今の己の立場もあって嫁入りする事に決めた。まだそこまで進んでないけど。

レジェンドとオーフィスを除いた一家の上位二名が化け物通り越して破壊神並みにおかしいスペックだから話題にならないが、乱菊から見ても「黒歌と揃ってバグキャラ級に強い」レベルの実力者。かつての肩書は伊達ではない。

オーフィスとタメを張る大食いヒロイン。

当初はやたら敵視されてた黒歌とは『黒猫ツインズ』と称される程仲良く一緒にいる。

○松本乱菊

元護廷十三隊十番隊副隊長。元が付いてるのは本作において十番隊副隊長の座を雛森に譲渡したため。

現象に巻き込まれてもあまり悲観しなかったが、自身の隊長だった日番谷と雛森の祝言に参加出来ないのが心残り。

マジで最初からこの世界観に合いまくってんじゃねーかと言わんばかりに胸がデカい。間違いなく一誠は反応するだろう。

夜一と黒歌をバグキャラ扱いしたのも彼女だが、実際は彼女自身も大概である。卍解どころではないらしい。

ムードメーカーでありつつも周りに気を配れる、涼子とは違ったタイプの大人のお姉さんポジである。
唯一頭が上がらないのが上司でもあった卯ノ花くらいで、最近はグレイフィアをオシャレに目覚めさせようとC・C・や涼子と奮闘中。

○ティア・ハリベル
元破面・十刃の第三番。虚圏にて現象に巻き込まれた為に従属官を残して来てしまったが、レジェンドによって立派になった事を知って安堵した。
虚としての孔は塞がり無くなってしまったが、周囲のアドバイスもあって今は全く気にしていない。
一家の良心だが天然かつ服装に無頓着な部分があり、戦闘服が十刃時代のものをアレンジしたやつであるからか、下半球が見えていてかなり際どい。乱菊同様に一誠が反応するだろう事はすぐに理解できる筈だ。
肉じゃがに並々ならぬ執念じみたものがあったりと時折珍妙な行動に走るが基本的に日常の生活の中でなので、戦闘時は真面目。
ダイブハンガー内でハーブを栽培しつつ、それに比例して紅茶の腕前も上がっている。
カナエやスカーサハも時々手伝っているからか、彼女らと仲が良く一緒に料理や菓子作りしている時もある。

○卯ノ花烈
元護廷十三隊四番隊隊長。八千流の頃は十一番隊隊長だった。ついでにカナエ同様、元の世界では故人。
レジェンドの専属医にして彼とオーフィスを除くレジェンド一家最強にして最凶の座に君臨する才媛。
一家の他のメンバーは元よりグレイフィアにすら「次元が違う」と言われる程の実力を持つ。マジでレジェンド共々来る世界を間違えてるんじゃないか。
レジェンドやグレイフィア程ではないが家事万能、料理もオーフィ

ス曰く「レジェンドの次に美味しい」という腕前と日常生活すら完璧なまさに一家の最強戦力。
レジェンドの不在時は彼女が指揮を全権を任され、グレイフィアがその補佐に当たる程の信頼を寄せられている。
髪型や着物で分かりにくいが着痩せするタイプらしく、スタイルは相当良いとは一家女性陣（オーフィス除く）の談。
基本的に優しく温厚なので一家の全員から慕われており、オーフィスへの接し方は時折母親っぽく見える。

○アーシア・アルジェント
レジェンド一家に救出され、第一章ラストにて無事に一家入りを果たした聖女。
魔女？ピザ好きな彼女の事ですかそうですか。
本作では彼女が悪魔になっていないのでリアスの『僧侶』枠が一つ空いたまま。マジでどうしよう。
幼い頃レジェンドに助けられ、輝石を貰って以来ずっと想い続けて来た健気な娘。ちなみに輝石を装飾してペンダントにしたのは彼女自身の技術によるもの。何気に凄くね？
よく分からない聖書の神より、忙しなくあちこち飛び回って平和の為に頑張っているレジェンドを信仰していたので教会を追放されても「残念」くらいにしか思っていなかった。この事が後々良い意味で重要になってくる。
まさかというべきかオーフィス共々レジェンドの寝室に潜り込んでくるようになったが、彼女はさすがにキャストオフしない。……のだが、元々寝相が良くないのかよく服が開け気味になるのはある意味マッパよりクるものがある。
何かと面倒を見てくれるカナエや、潜り込み仲間なオーフィスを筆頭に、彼女持ち前の性格もあって一家全員に好かれている。
ほんの一文だけだが、レジェンドの最初の巫女になる事が判明している。

【光神】

○ウルトラマンノア

光の三超神の一人にして本作最大のネタ要員。

確かに本作全体でもレジェンドに次ぐチートぶっちぎりの能力を持ち、それを発揮するのだが……現在戦闘シーンがないので思いっきり使いどころを間違っている。

自身のお付きたる『神使』をひたすら自慢したがったり、キング共々Ｖｔｕｂｅｒになろうとしたりと一々行動がおかしい。いや、前半はまだ納得出来るんだが……。

真面目な時は真面目なのだが、たぶん読者の方々には暴走しまくっている時の方が印象に残っていると思われる。

そのおかげかレギュラー昇格アンケートには三位に大差を付けて二位まで踏ん張った。準レギュラーおめでとう！

イメージＣＶは増谷康紀さん。

○ウルトラマンキング

光の三超神の一人。自身の【エリア】の光の国にてウルトラ長老の一人も務める。

ノア共々突拍子のない行動を取るが持ち前なのがマイペースな事、何よりノアが最初にインパクトある行動をしてしまうので彼自身にはあまり焦点が行かない。

彼にもお付きがいるのだが、レジェンドらと違いウルトラ長老としての務めもあるからか『秘書』という役職名である。

ぶっちぎりボケのノアとキレッキレなツッコミのレジェンドに挟まれつつもマイペースで流している為かいまいち印象が薄い。頑張れキング爺ちゃん。

イメージＣＶは清川元夢さん。

○ウルトラマンサーガ（ソラン・セイエイ）

レジェンドの後輩にして後継者と認められた光神。

三光神の会議の場に唯一同席する事が許されるレベルの実力を持ち、本作でもレジェンドらに次ぐ最強格。
人間体ベースはガンダム００の主人公の刹那・Ｆ・セイエイであり、彼の本名とコードネームを合わせたものがサーガの人間体での名前になっている。何気に人間体名は初登場。
しかも本作の一文にて共に金属生命体ＥＬＳの母星救出を行った事が明かされた。
既に【エリア】内の管理を部分的に任される程の優秀さであり、天然な部分は有れど真面目で優しい。
レジェンドから後継者と認められているものの、本人は後継者というより肩を並べて共に歩みたい模様。
他の三人同様に彼にもお付きがおり、『御使い』と呼ばれている。
彼の人格か、それとも人間体での活躍への期待か、いずれにせよレギュラー昇格アンケートにて怒涛の追い上げを見せ見事レギュラーメンバーへと昇格した。ご期待下さい活躍を！
イメージＣＶはもちろん宮野真守さん。

レジェンド＆双龍京都へ、神話と不死鳥の来訪

「と、言う訳でタイトル通り京都へ行く事になりました。同行者はオーフィスとスカーサハだ」
「わー」
「オーフィスはレジェンドが居らぬと眠れぬからな。ゆえにオーフィスは自然とレジェンドとセットだとして、実質吾だけというのが正しいか」
『いやそもそもどういう流れでそうなった!?』

タイトルって何!?とか言う声も聞こえたが気にしない。レジェンドの言葉からオーフィスがパチパチと拍手し、スカーサハがうんうん頷いている。
それはさておき、何故そういう流れになったのかというと原作前のエピソードにて慰安旅行の話が出ていたのを覚えているだろうか。

「いや、慰安旅行のエピソードブチ込もうと思ってたけど本編へ早く突入したかったんですっ飛ばしたからな。ついでに今年も予定してるからその下見だよ下見」
「チーフ！本来前に来るはずの内容がついでになってるんですが!?」
「つーかレジェンド前半めっちゃメタい台詞なんだけど!?」
「常駐赴任のゼロも連れて行くし、頑張れば定期赴任延長してメビウスやレオも連れて行くからな」
「「お気を付けて行ってらっしゃいませ」」

メビウスどころかゼロまで綺麗なお辞儀して執事のような台詞を言い放った。純粋に文化に触れたいメビウス、ご当地グルメ的なものに期待しているゼロはまあいい。しかし……

「目指すは道場破り十連覇だ!!」
「やめて確実に京都の道場全滅するから!!」

道場どころか門下生全滅させかねないレオが問題だった。さすがに十の道場だけなら京都全土の道場が全滅はないだろうが、噂を聞きつけて挑んで来た輩を片っ端から再起不能にしかねない。
現に今も一つ４０キロの特製リストバンドを両手に装着しつつ、片手でそれぞれ５００キロのダンベルを平然と上げ下げしている。

「わぁー……レオさん凄いです！さすがレジェンド様のお弟子さんですね！」
「ありがとうアーシアちゃん。だがまだまだこれは序の口さ。俺はあの重力操作室で、３００倍重力に耐えながらこれをやるのが目標なんだ！チーフは平然と１２００倍重力に耐えながら５０万トンの重さの物をそれぞれ片手で支えてたそうだぞ！」
『またおかしい事実が聞こえたんですが!!?』

敢えて言おう、レジェンドとレオは同じドラゴンでもボールなのがいる世界の方が活躍出来そうな気がしてきた。
ついでに言っておくが光の国の重力は地球の１２０倍である。その中で普通に生活し、飛び回っているウルトラ族が如何に化け物じみた能力を持っているか理解出来るだろう。
しかし、レジェンドはもちろんレオもそのさらに先を行く。
既に人間体で１２０倍重力に耐えられる。
やっぱりおかしい。少なくともキングの【エリア】のレオはこんなにチートじゃない。
そしてそれを聞いてなお笑顔で拍手しているアーシアの器の大きさよ。純粋に感心しているのは良いのだが……

「準備出来たら出発するからな。オーフィスとスカーサハは収納ブレスレットに必要な物を入れて、すぐに取り出したいものはリュックで背負ったりするように。あと、リサーチしてほしい所がある者はリストアップしてくれよ。二人の準備が出来次第すぐに出るから早めに

な」
『はーい！』
今日も元気なレジェンド一家＋αだった。
☆
矢的が顧問に、カナエとアーシアが部員になった翌日、小猫は駒王学園へ少し早めに登校していた。
今日の部活ではカナエの話が聞ける。それに乗じて黒歌の事も聞けるかもしれない。そう上手くいかないだろうし話してくれないかもしれないが、聞いてみる価値はあるだろう。
「黒歌姉様……」
ドンッ！
「にゃ!?」
考え事をしながら俯きつつ歩いていた為、何かにぶつかり尻餅を着いてしまった。
見上げてみると変わった服装で、整った顔立ちの銀髪が特徴的な男性が手を差し伸べていた。
「……すまない。地図を見て立ち止まっていたら邪魔になる場所だったな。大丈夫か？」
「あ……はい。こちらこそすみません。考え事して下を向いていましたから……」
「そうか」
自然と差し伸べられた手を掴み、立ち上がらせてもらう小猫。失礼とは思ったが普通は見掛けない服装なのでまじまじと見てしまった。

「……？俺がどうかしたのか？」
「いえ、あの……あまり見ない服でしたので」
「チームの制服らしい。個人ごとに色は違うみたいだが、俺には詳しく分からないんだ」
「チームのなのに、ですか？」
「俺はそこに属しているわけではないからな」
「???」

チームの制服とやらを着た、しかしチームに属してはいないというのはさすがに理解出来ないのだが、男性がすまないが、と質問してきた。

「この場所はここからだとどうすれば行けるか、分かるか？」
「えっと……ここは私が来たこの道を真っ直ぐ行って、それから……」

小猫の説明に頷きながら、地図にメモしていく男性。一通り説明が終わると男性は地図を見ながら先程と同じように頷いている。

「ありがとう。分かりやすい説明だった」
「お役に立てて良かったです」
「服装からしてこれから学校か。引き留めてすまない」
「大丈夫です。早めに出てきましたので」

そうか、と立ち上がらせてくれた時と同じ様に返事をすると男性は軽く頭を下げ、地図を見ながら歩いて行く。
小猫は黙って見送ろうとしたのだが、何故か名前を聞かなければいけない気がして声を掛けた。

「あ……あの！」
「ん……？まだ何かあったのか？」
「私、塔城小猫って言います。まだ、名前言ってなかったので……」

ただぶつかって、立たせてもらって、道を教えただけ。なのに何で名前を知ってもらおうと思ったのか。服の事も聞いてしまって不快にさせてしまったかもしれないのに。
そんな小猫の思考を吹き飛ばすかのように男性は応えてくれた。
「先輩からは『相手に敵意が無く誠実であるならば、名を名乗られたら己も名を返せ』と教わった」
「……！」
「（しかし……名前か。無関係の者に俺の本来の名を言う訳にはいかない。俺自身も覚えやすく、不自然ではない名は……）……ソランだ。ソラン・セイエイ」
「ソラン、さんですか。やっぱり外国の方だったんですね」
「……ああ。言葉は分かるが、地理に関してはどうしようもない」
「それじゃあ……ソランさん、また……」
「また……？」

小猫は言いかけてハッとし、顔を真っ赤にしながら一礼して走り去った。しかも無意識に悪魔としての身体能力全開にして。
ソラン・セイエイ―ウルトラマンサーガは首を傾げながら再び地図を頼りに目的地である光神邸（仮住居）を目指した。

☆

「ここか。人払いや認識阻害などの結界や防御機構が多数設置されていて普通なら入るどころか気付く事さえ無いか。どうやらそれなりの力を持ち、なおかつ敵意や攻撃の意思が無い者に限られるようだな。さすが先輩、抜かり無い」
ソランことサーガはどうにか光神邸前に辿り着く事が出来ていた。途中で何度か（主に女性に）声を掛けられたが、殆ど道を聞くだけで

さっさと退散していたのであまり問題は起きていない。

（少し時間は経っているが……出掛けたりしていたら仕方が無いか）

まあ今回は調査ついでだから、とインターホンを押そうとしたところ、ガチャリとドアが開いてリュックを背負ったオーフィスとスカーサハが出て来た。

「……」
「……」
「……」

何だこの沈黙。そして沈黙を破ったのは……

「……よっ」
「!?」

まさかのオーフィスが軽く手を上げて返事した。
しかもやけにフレンドリーな挨拶だ。

「……よっ」
「!!??」

礼儀に乗っ取りサーガもそれで返す。
そうなると二人は残る一人を見つめる。
結局スカーサハも……

「うぅ……よ……よっ……」

二人はよし、と頷いているのだがその後ろからレジェンドが少し呆れ気味に出て来た。

「何をやってるんだお前ら」
「ん。レジェンド、お客さん」
「普通に挨拶すればよかったであろうに……！」
「……そこの少女に返された通りにしたまでだ」
「お主は馬鹿正直に返しすぎだ！」
「でもスカーサハも、ちゃんと返してくれた」
「〜〜!!」
「何で俺が叩かれてんのどこが悪いの俺」
「「……タイミング？」」
「お前ら波長合い過ぎじゃね？スカーサハもそろそろやめてくんない徐々に力強くなって痛いんだけど」

普段やらない返事をして恥ずかしがってポカポカするスカーサハは可愛い。平常運転なオーフィスと、それに合わせる形にしたサーガだが妙に気が合っている。恋愛感情と尊敬の念は違えど慕っているのは同じだからなのか。

そしてそろそろスカーサハのレジェンドを叩く音がポカポカからドゴンドゴンとおかしい音になって来てますが。

「んで、サーガ。今日はどうした？俺ら三人これから京都へ各種リサーチ兼ねて下見に行くんだけど」
「俺も調査ついでに先輩の顔を見ておこうかと思って、場所を把握するのも含めてここを探していたんだ」
「調査？……ああ、恐らくこの世界に何かあると踏んで考えるよりも直接行って調べようと」
「……察しが良いな、先輩。今回は何も見つからなかったが……やはり何かの予感がする。とりあえず戻って引き継ぎをしたら、いずれこちらに俺も来る予定だ。すまないがその時は……」
「安心しろ。ここは仮住居だ。向こうの本宅は部屋が有り余ってるからな」

ホッとした様に微笑み、頭を下げるサーガ。最初に言った京都云々はまあ息抜きだろうと解釈して、あまり突っ込んで聞かない事にした。そしてもう一つ、これは報告しなければならない。主に自分の精神的負担を共有してもらう為に。

「それから先輩……」

「ん？」

「ノアとキングがやらかしそうだったから思いっきりぶん殴っておいた」

「でかした!!」

サーガはガッツポーズを、レジェンドはそれに笑顔とサムズアップで返した。オーフィスはよく分かっていないままサムズアップし、スカーサハは「あの御仁達はまたしでかしたのか」と溜息を吐いている。

所謂『双子のケモ耳美少女メイドＶｔｕｂｅｒ事件』の事であった。食らわせたのがサーガマキシマムだった事は伏せておく。

その後、サーガは各種引き継ぎの為に一旦この世界を離れ、レジェンドはオーフィスやスカーサハと駅へ向かいつつ卯ノ花へ「今度サーガが事態究明の為にこちらに滞在する」と伝えておいた。まさかの【エリア】を統制するトップが二人とも揃う事に驚いていたものの、それだけの事態だと理解して承諾してくれた。

ちなみに卯ノ花曰く「お二人はあの方々と違いますから、必要な事とすぐに分かりました」と話していた。あの方々とは言わずもがなである。

「また家族増える？」

「ああ、まだちょっと先だけどな」

「少々天然なようだが、まともであったな」

オーフィスは楽しみに、スカーサハは安堵しつつレジェンドと共に

新幹線へと乗り込んだ。行った先で幾つもの出会いがある事を知らぬまま。

☆

時と場所は移り、駒王学園の放課後部活タイム。一誠とアーシアは途中、木場やカナエと合流して談笑しながら部室へと向かっていた。無論、そこに至るまでに一誠が追いかけられたのは言うまでもない。

「じゃあ、今日は矢的先生は……」
「はい。会議で遅れるかもしれないし、もし終了時刻間際まで行けないようなら解散して帰宅していいと」
「そっかー……仕方ないよな。あの日あんな事があったんじゃ危険喚起もしなきゃいけないだろうし」

例の如く、レイナーレが変容したゲルカドンと８０の激戦が映像として広まった事である。
レジェンドが時折様々な災害や怪獣による被害に対し出現し、修復や治療といった事を施していたのもあり眷属と思われている８０への印象は良い。
実際ゲルカドンの攻撃が市街地へと向かないよう誘導したり、放たれてしまった攻撃は先回りして弾いたりと可能な限り被害を出さないように戦っていた。あれだけ凄まじいアクロバットな空中戦を展開していたのにだ。
改めて８０の技量の高さを知る結果となった。

「やっぱりすげぇよな、矢的先生」
「うん。あの姿で周りに気を配りながら戦い、圧倒出来るなんて並大抵の事じゃない」
「ふふ……ちなみに話は変わるけど矢的先生、恋人がいるらしいわよ？しかも王女らしいわ」

「「えええ!?」」
「マジですか胡蝶先輩?いや、矢的先生ならいてもおかしくないし、それに全く腹も立たねぇし」
「自身は最大の栄誉称号とまで言われてるウルトラ兄弟の一員で人気教師、相手は王女……結婚まで行ったら話題を掻っ攫うね」
「わ、私もいつかあの方と……はうぅ……」

カナエの爆弾発言に一誠は驚くが納得し、木場は種族的な話題性について考え、アーシアはレジェンドとの未来を思い描いて赤面していた。カナエは朱乃よろしく「あらあら」と笑っている。
それから再度話題は変わり、先日から浮かない顔をしていたリアスの事になった。

「胡蝶先輩は聞いてないですか?」
「三大お姉様って言われてるけど、元々私はあの事件で関わり合うまでクラスメイトなだけだったわ。リアスや朱乃ともあまり接点がなかったもの」
「そうだったんですか?にしても部長のお悩みか。たぶんグレモリー家に関わることじゃないかな」
「そうねー。分からないなら直接聞いてみましょう。向こうが言いたくないならそれまでだけど」

カナエが綺麗に纏めると同時に旧校舎にある部室の前に到着した。しかしその時カナエは何かに気付き、木場もドアノブに手を掛けた瞬間動きを止める。

「……僕がここまで来て初めて気配に気づくなんて……」
「少なくともこの学園に在籍していない人物がいるみたいね。あの方お手製の収納ブレスレットを肌見放さず着けておいて良かったわ」

ゆっくりとドアを開けるとリアスと朱乃、小猫以外に銀髪のメイド

がいた。アーシアはよく似た人物が家族にいるので口を開きそうになるが……

（アーシアちゃん、気になるのは分かるけどそれはまだ言っちゃ駄目よ？）

（は、はいカナエさん）

カナエにやんわりと釘を刺されたが、そこでメイドの方がが口を開いた。

「人間が部員にいる、とは聞いていませんが」

「それは「人間がいてはいけない理由でもありますか？」カ……カナエ!?」

いつものカナエの纏っている空気ではなく、明らかに機嫌が悪い。いつの間に取り出したのやら日輪刀を握りしめている。抜刀していないだけマシだろうと思うが、彼女はそもそも抜刀術……つまり居合いも得意なので安心出来るわけではない。

「落ち着いて、カナエ。彼女は訳あってここにいるだけだから。だから刀から手を離して」

「……リアス、説明してもらえるわね？今の彼女の発言が何を意味するのか」

「も、もちろんよ」

今のカナエは本気でヤバイと感じたのかリアスは汗を滝のように流しながら頷いた。

「ともあれまずはご挨拶を。初めまして、私はルミナシア・ルキフグス。グレモリー家に仕える者です。以後お見知りおきを」

「（『ルキフグス』……やはりそうですか）……胡蝶カナエと申します」

「ア、アーシア・アルジェントです」

とりあえず挨拶は済ませるが、カナエは彼女の姓を聞いてグレイフィアの親族である事を確信した。

「矢的先生は？」

「ちょっと長めの会議になるから遅れるそうよ」

「そう……それなら仕方ないわ。矢的先生以外は全員揃ったわね。部活を始める前に話があるの」

「お嬢様、ここは私が――」

ルミナシアが何かを言おうとしたが、リアスは手で制止した。己が話すという意思表示だろう。

「実はね――」

その瞬間、室内に描かれた魔方陣から光が放たれ、グレモリー家のそれとは違う紋章へと変化していく。

それを見た木場はポツリと零す。

「……フェニックス」

その言葉が言い終わるタイミングで炎が巻き上がり、その中に男性らしきシルエットが浮かび上がる。そしてそのシルエットが腕を横に振るい炎を薙ぎ払うとやはり一人の男性が姿を現した。

金髪で胸元開けた赤いスーツの、ぶっちゃけチャラそうなイケメン。

彼の登場でカナエの機嫌が一段と悪くなったのに気付いたのが一番近くのアーシアだけだったのは良いのか悪いのか。

「ふぅ……人間界は久しぶりだ」

男は周りを見渡してリアスの姿を見つけると、ニヤつきながら近づいた。

「愛しのリアス。会いに来たぜ」

この言葉からリアスの関係者なのは分かったが、何かやけに馴れ馴れしくないか。そうカナエが感じているのに気付いていないのか男性はリアスの腕を掴みながら次の言葉を紡ぐ。

「さて、リアス。早速だが式の会場を見に行こう。日取りも決まっているんだ、何事も早い方がいい」

「……放して頂戴、ライザー」

式がどうこう言っているのを聞いてもしや、とカナエは推測するがリアスはライザーと呼ばれた男性の手を振り解きながら威嚇する。

レジェンドが彼の名を聞いたら『何コイツ人型の変身アイテムかなんかなの』とか言うだろうがそれはさておき。

「悪い意味で似てるわね……あの『鬼』と」

『!?』

珍しく殺気駄々漏れ状態のカナエ。彼女の言う鬼とは言わずもがな元の世界で彼女を殺害した鬼である。

「鬼とも仲良く出来る」と今でも信じている彼女だが、そんな彼女を騙したその鬼とその主は流石に対象外らしく、そんな連中と同じ空気を纏う目の前の男は不快極まりないようだ。

尋常ではない殺気にリアス達はおろかライザー、果てはルミナシアまで動揺しており、アーシアに至っては半泣きでカナエの服の裾を握っている。

「な……何だこの殺気は!?そもそも何故ここに人間がいるんだ、それも二人も!」
「カ、カナエ!さっきも言ったけど落ち着いて!?今からちゃんと説明するから!」

一誠もライザーに文句を言ってやろうとしたのだがカナエの殺気に呑まれてそれどころではなく、足が震えている。このままではと思い、ルミナシアが口を挟んだ。

「胡蝶様、この方はライザー・フェニックス様。純血の悪魔であり、古い家柄を持つフェニックス家の御三男であらせられます。そして……」
「リアスの許嫁か婚約者でしょう?あの馴れ馴れしい振る舞いからなんとなく理解出来ました」
「……!左様でございます」

一誠やアーシアからは驚きの声が上がるが、カナエも含めて誰も気にもしていない。
しかし、この時点ではカナエすら気付いていなかった。『彼』がカナエやアーシアへ近づいており……ギルドガードを束ねる『彼』にとって見過ごせない発言をライザーがしてしまう事を。

〈続く〉

漆黒の監視者の来訪、ライザーの受難

「いやー、リアスの『女王』が淹れてくれたお茶は美味しいものだな」
「痛み入りますわ」

前回から打って変わって和やかな雰囲気……

ではなかった。

相変わらずカナエは殺気を抑えず、何とか全員が平静に保とうと努力している状態だ。
ソファに座りながら、リアスらオカルト研究部メンバーやライザー、ルミナシアも冷や汗が流れている。
そんな中、なんとアーシアだけはいつも通りになっていた。どうやら家族が家族だけに慣れてしまったのと、レジェンドがくれた輝石のペンダントを見ていたら大丈夫に思えてきたらしい。

「ア、アーシアは平気なのか？今の部室の雰囲気……」
「はい、もう大丈夫です」
「アーシアちゃんは偉いわね～」

殺気丸出し状態でもアーシアには優しいカナエ。いや実際は一誠達にもちゃんと対応するのだが、如何せん彼女の殺気が収まらないため怖くて話しかけられないのだ。
ともかく、どうにかして話を切り出さなければならないと思っていたのだが……ここに来てリアスが口を開いた。

「……私は家を潰さないわ」
「おおっ！さすがリアス！　じゃあ早速俺と……」
「でも貴方とは結婚しないわ、ライザー。私は私が良いと思った者と結婚する。古い家柄の悪魔にだってそれくらいの権利はあるわ」

ハッキリと言い放ったリアスに、カナエは心の中で拍手を送った。クラスメイトとはいえ殆ど接点は無く、オカルト研究部へ入部して数日程度だが彼女にとってはもはや大事な友人だ。正直こんな男と添い遂げて欲しくはない。

しかし、その返答を聞いてライザーも黙ってはいなかった。

「……俺もな、リアス。フェニックス家の看板背負った悪魔なんだよ。この名前に泥をかけられるわけにもいかないんだ。こんな狭くてボロい人間界の建物なんかに来たくなかったしな」

前半はともかく、後半を聞いてカナエの怒りのボルテージがまた上がり出した。だったら最初から来るな、と。

「というか、俺は人間界があまり好きじゃない。この世界の炎と風は汚い。炎と風を司る悪魔としては、耐えがたいんだよッ！」

「黙りなさい」

『!?』

あまりの言い分についにカナエが本気でキレた。

「貴方の一族が何を司るかなどどうでもいい事です。いつから貴方達がこの世界を支配していると思っているんですか？噂の大戦ではかの軍勢はおろか、二天龍にすら一種族ではまるで手も足も出ずに壊滅寸前にまで追い込まれたというのに」

「なっ……何だと!!」

「ましてやこの駒王、貴方達が来る前より『あの方』のお膝元。先程の言葉、もしあの方に伝われればそれこそ光神様とその眷属の方々に見限られる事は間違いないでしょうね」

『!?』

アーシア以外その場にいた全員、特に純血悪魔であるリアス、ライザー、ルミナシアは驚愕した。大戦について知っているだけでなくこの町をお膝元とする存在がいる。それも、その人物が三大勢力のみならずこの世界の神話勢さえ跪くほどの存在『光神陣営』の者だと言い切る彼女は一体何なのか。
疑問は尽きないが、ライザーに対してカナエがトドメと言える一言を言い放った。

「それに私としてはどんな炎と風よりも―

貴方の方がよっぽど汚いんですが」
「っ!!貴様ァァァァ!!」
!?ライザー様、お止め下さ……」
「ふっ！」
ドゴッ!!!
これにはライザーも怒り心頭だったのだが飛び掛かろうとした瞬間、どうやったのか離れているにも関わらず顔面に日輪刀の柄を叩きつけられ、壁まで吹き飛ばされた。

「ぺグァ!?」
「動きが鈍い。体も脆い。おまけに頭も弱い。話になりません」

ボロクソに言い切るカナエ。今の生活で彼女の家族や共に生活している人物、ハンターとして秘密基地で生活している者達など、男性との関わりは多いがいずれもこんな上から目線の者達ではない。
レジェンドは恋慕の相手で、何かと面倒を見てくれた。家族の大黒柱として、そして光の三超神の一人としても激務ながら自分達との時間を大切にしてくれている。
８０は教師として自分に丁寧に色々な事を教えてくれた。あまりの文化の違いに戸惑っていた時も、一つ一つ自分も復習するかのよう

にレジェンドと一緒に勉強に付き合ってくれていた。
レオは初日こそ驚いたものの、とてつもない努力家だと知った。しかもそれを恥とも思わず、レジェンドに一撃で伸された時でも『己の修行不足』と特訓に精を出し始めた。彼のメニューを見せてもらったが自分ではとても真似できないものだ。
メビウスは礼儀正しい、人の良い人物だ。今朝の自分とアーシアの弁当を用意してくれたのもグレイフィアと彼だ。自分なりに出来る事をしようと模索して実践する真面目さがあった。
ゼロは若くして実力者達を束ねる隊長職の立場ながら、非常に気さくだった。偉ぶったところが無く、誰に対しても平等でありながら、ちゃんと敬意を払う事も忘れない。
彼女と親しくなったウルトラマンだけでもこういった人物ばかりなのだ。ハンターズギルドの面々……例えばジェントやラッシュハンターズもまたそれぞれ魅力を持った者達だが、ライザーからはそれをまるで感じない。
そんな彼らが生き、守ろうとしているこの世界を侮辱するような発言をしたライザーに対して彼女は一切の容赦をしない事にした。リアスの婚約者だろうと知った事か。
しかしそれに待ったをかけたのはルミナシアだった。

「胡蝶様、どうか刃をお納め下さい」
「先に私達の暮らす世界を侮辱したのはあちらですが」
「御無礼を働いた事は私も深く謝罪致します。私が仕えるサーゼクス様の名誉の為にもどうか、私にお任せ下さいませ」

深々と頭を下げたルミナシアの態度に、漸くカナエも日輪刀から手を離し殺気を少しだけ残しつつも抑える。

「……他意はないみたいですね」
「お心遣いに感謝致します。さて……」

ルミナシアはリアスと（吹っ飛んだ）ライザーを見据えながら二人にある事を伝えた。

「元々お嬢様が納得されていない婚約であったが故に、こうなる事は旦那様もサーゼクス様もフェニックス家の方々も承知でした。正直に申し上げますとこれが最後の話し合いの場だったのです。そしてそれが決裂した以上、残った最後の手段は……」

『レーティングゲーム』ってわけね……」

「左様でございます。万が一……と言うよりも交渉に関してはほぼ決裂する事が予想されておりましたので、その場合はレーティングゲームの合否によって決める、との事です」

「あ……あのぅ……レーティングゲームって何ですか？」

おずおずとアーシアが手を挙げて質問する。彼女はもちろん最近悪魔になったばかりの一誠や、レジェンド一家で唯一の悪魔であるグレイフィアからそういった話を聞いていないカナエも気になった（一応、黒歌も元はぐれ悪魔だが今は元通りの妖怪なのであまりぶり返したくなかった）。

まあ、なんとなく平和的でないのは分かるのだが。

「レーティングゲームと言うのは爵位持ちの悪魔による、互いの下僕達を戦わせて競い合う競技のようなものですわ。公式なものには成熟した悪魔しか参加資格はありませんが、純血悪魔同士による非公式なものにはまだ成熟していない悪魔でも参加可能なんです。大抵の場合、今回のような身内ないし御家同士の問題に関する事なのですが」

朱乃がある程度掻い摘んで話してくれた。必要な事だけ選んで話してくれたようなので、三人には分かり易かったようだ。

「いいわよ。レーティングゲームで決着を着けましょうか、ライザー」

「本気で言ってるのか？まあ、俺は別に構わないぜ。だが俺は既に何度もゲームを経験してるし勝ち星も圧倒的に多い。それでもやるのか、リアス？」
「やるわ。ライザー、貴方を消し飛ばしてあげる！」

互いに睨み合うリアスとライザーを再び制するようにルミナシアは声を上げた。

「それではお嬢様、ライザー様。お二人とも承諾するという事で宜しいですね？」
「ええ」
「ああ」
「畏まりました。では私、ルミナシア・ルキフグスが証人となって旦那様やサーゼクス様、フェニックス家の方々に報告致します」

漸く一段落かと思いきや、ライザーがカナエや一誠達を一瞥してリアスに聞いてきた。

「なあリアス。そこにいる人間二人を除いた面子が君の下僕なのか？」
「だとしたらどうだと言うの？」
「話にならないな。君の『女王』である『雷の巫女』ぐらいしか俺の可愛い下僕に対抗できそうにない。そっちの人間ならどうにかなったかもしれんが」
（……駄目ね。たぶん手遅れだわ、アレの頭。私の一撃を受けても『能力』で優位に立てると思い込んでいる。己の能力で優位に立てると断言して良いのは……レジェンド様を除くとノア様やキング様くらいかしら）

カナエは心中にて相変わらずライザーを酷評していた。正直言って、不死程度の輩はあの三人は歯牙にもかけないだろう。

レジェンドはスパークレジェンドで完全消滅。
ノアはディメンション・ノアの応用で別次元送り。
キングは念力で拘束し宇宙牢獄にブチ込む。
一人は己の得意技で一発、一人は己の能力を使った技で世界から除外、一人は自力で脱出不可能な状態にしてほぼ永久投獄とどうにでもできるのだ。あの三人は相手にしたらヤバイどころの問題ではない。
それに加えて、カナエらはまだ会っていないが正面切っての殴り合いでもサーガという彼らに次ぐ規格外の存在がいる。
そんな彼らを知り、ついでに今の自分の身内が化け物通り越して到達しちゃいけないところをぶっちぎりで突破し続けている連中ばかりのカナエには、能力云々で勝敗が決まるなど余程のものでない限り有り得ないと感じている。
そんな事を考えていたらライザーの周りには彼の下僕らしき女性達が勢揃いしていた。その数、計１５人……所謂ハーレム状態である。
自身の憧れを体現している奴が目の前にいる事で一誠は血の涙を流しながらガックリ両手両膝を着いていたのだが……やはりカナエがここで動いた。
頑張れ一誠。段々影が薄くなってきているぞ！

「兵藤君、そう落ち込まないで」
「胡蝶先輩……！でも……恥ずかしいし情けないかもしれないけど……俺はハーレムを……！」
「だったらもっと参考にするといい方がいるわよ。その方はあんな遊郭に通い詰めてそうな悪人面しないし、下僕は人間界出身ぽいって人間界嫌いとかこいつ絶対嘘付きでしょみたいな事もしないし」
笑顔で容赦無く毒を吐き続けるカナエ。さすが鬼を殺す毒を作り出した蟲柱な妹の実姉だけある。身体以上に心に効く。
一誠や木場、小猫にルミナシアはポカンとしており、アーシアはアワアワしている。さらに朱乃は「あらあら」といつもの優しい部分を

見せ、リアスに至ってはいいぞもっと言ってやれと言わんばかりの良い笑顔だ。
そしてトドメの一言。
「何よりあんな下衆な性格してないし」
この言葉でついにライザーも爆発した。ここまで良く保った方である。
「貴様ァァァ!!一度ならず二度も俺をコケにしやがって!!やれ、ミラ!!殺しても構わん!!」
「はい、ライザー様!」
……言ってしまった。ライザーは言ってしまったのだ。あの存在が近くまで来ているとは知らずにカナエを『殺しても』と。

「この娘を殺すと言ったか、貴様」
ジャキィン!!!
『!!??』
どこからともなく発せられた、ライザーによく似た声の一言が聞こ

えた方を向くと、黄金のローブを纏ったような黒く巨大な異形の存在がライザーの背後に立ち、手にした大鎌でその首を斬り落とさんとライザーの首筋に当てていた。その腕を引けば即座にライザーの首は地に落ちるだろう。

三大勢力でもなければ人間でも、神話勢でもない『何か』にその場にいる者は圧倒的な恐怖を感じていた。

カナエとアーシアを除いて。

「な……何だ貴様は!?何者かは知らんがこんな事をしてただで……」

（ザクッ!!）ひぎぃっ!?」

「ライザー様!?このっ！化け物め!!」

ライザーが異を唱えようとした瞬間、当てられているだけだった大鎌がほんの少し首に食い込んだ。それを見たライザーの眷属が総攻撃を仕掛けるも、まるで効いておらず逆に腕を奮っただけで全員が吹き飛ばされた。

「あぐっ!!」

「がはっ!!」

「有象無象の寄せ集め風情が。少し黙っていろ」

先程と同じく発せられた声はライザーとよく似ている。だが威圧感と雰囲気はまるで違う。リアス達はおろかルミナシアも口を開けない。

次元が違い過ぎる—かつての大戦にも参加していたルミナシアにさえそう感じさせる異形の存在は三度言葉を発した。

「胡蝶カナエ。この者はギルドの潤滑油とも呼べる存在。数々の喧騒を穏便に収め、ハンターズギルドが円満に機能するように尽力している。そして先日新たに加入申請に来たそこのアーシア・アルジェントもそうだ。顔出し程度にも関わらず、己が存在と全く異なる姿の者を

何の疑いも持たず治療し、ハンター……引いてはギルド全体の命を尊重する行為をとった」

どうやらカナエはもちろん、アーシアが加入したというハンターズギルドとやらの関係者なのであろうその異形は、先程の言葉からギルドという組織の為にカナエ、そしてアーシアを助けたと解釈して良いのだろう。

「故にその二人を失う事はギルド全体に大きな影響を及ぼす。保護者たるあの者の意思によるハンター業引退等の致し方無い状況、もしくはハンティングにおける不慮の事故ならばいざ知らず、人為的な殺害による喪失は認められん。それを行おうとした貴様は以後それが出来ぬよう我々『ギルドガード』が捕縛・管理させてもらう」

『なっ……!?』

言わば、警察による検挙のような事態に声を荒げたのはやはりライザーだ。

「ふざけるな！貴様に何の権限があって……」

「二度は言わん」

その瞬間、ライザーはその異形が取り出した一枚のカードに吸い込まれて行った。

「う……うわあああぁぁぁ……」

『ラ……ライザー様ぁぁぁ!!』

ライザーは異形の存在の手によって一枚のカードに封印された。そして異形はそのカードを一瞥して呟く。

「……やはり媒介はあった方が良い。発動に手間が掛からなくなる」

リアス達は唖然としながらもその言葉の意味を理解した。あった方が良い、というのは即ち無くてもあの能力は発動出来るという事。
しかしあんな能力は今まで誰も見た事がなく、レーティングゲームにしても当のライザーがあの状態では行う事さえ出来ない。そんな事を考えていると異形がリアスやカナエ達に向き直る。

「名乗るのが遅れたな。知っている者も居るだろうが、俺は『メフィラス星人シックル』。ギルドガードを束ねている」
「メフィラス……星人……!?」
「簡単に言うとシックルさんは宇宙人なのよ。シックルさん、お仕事ご苦労様です」
「ああ」

にこやかに挨拶するカナエに短くだがしっかり返事するシックル。そんな二人に驚くアーシア以外のオカルト研究部だが本当に驚いている部分はそこではない。

『う、宇宙人!?』
「宇宙人って、え!?矢的先生みたいに!?」
「ええ。メフィラス星人って種族で、とんでもなく頭が切れる知性に優れた種族なのよ。シックルさんはジェントさんと並んで実力もトップクラスだけど」
「ジェント……?その人もメフィラス星人なの?」

そしてカナエの次の一言がルミナシアをさらなる衝撃の渦へと叩き込む。

「そうよ。私達が所属しているハンターズギルドの中心人物。何より伝説の『七星剣』の古参の一人なの」
「し……七星剣ッ!?」

「ど……どうしたのルミナシア？いきなり大声を出して……」

明らかに動揺しているルミナシアにリアスは問うが、そこから返ってきたのは驚愕の事実だった。

というか今凄い事言わなかったか。目の前にいるシックルの実力がジェント……七星剣と並んでトップクラスと。

「七星剣とは、レイブラッド事変より前に起きた非常事態……この世界が崩壊するかもしれなかった程の事件を解決し、世界を救ったとされる伝説の七人の剣士と彼らが振るったとされる七振りの剣の事です。剣と剣士、どちらも七星剣と称される以外は未だ正体不明とされていて、もはやそれこそ御伽話ではないかと言われていたのですが……」

「その内の三振り、妖刀カナツキ、妖刀フニブシ、そして最強の七支刀たる妖刀ナナマスは次代へと受け継がれ、ラッシュハンターズの皆さんが所有しているわ」

『!!』

またもカナエが驚きの事実を口に出す。

「カナエ……貴女まさか七星剣達と知り合いなの!?」

「ええ、私は全員と。それにアーシアちゃんもジェントさんやラッシュハンターズの皆さんとは先日知り合いになったわ」

「な!?」

「本当なのかアーシア!?」

「は、はい……それと」

アーシアがおずおずと手を挙げ、そのまま隣を指差す。

「あの……ジェントさんもいらっしゃいました」

「いやあお取込み中にすいません。そこの彼が行くと言うので少々心

配になりまして」
『!?』
　シックルよりも更に巨体のメフィラス星人と思しき存在がアーシアの隣に立っていた。あまりに大きいので部室の天井とギリギリだ。
「それでシックル、彼女らに例の物はお渡ししましたか？」
「心配しなくても今から渡すところだ。余計な真似をした連中がいたからな」
　先程の一撃からまだ立ち直れていないライザーの眷属を一瞥し、ライザーを封印したカードを見せた後、シックルはカナエとアーシアを呼ぶ。
「胡蝶カナエ、アーシア・アルジェント。お前達に通達する。まずは胡蝶カナエ。本日付を以ってハンターランクをＡへと昇格する」
「!!本当ですか!?」
「続けてアーシア・アルジェント。手続きが完了したため正式にハンターに登録された。本来ならばＦランクからのスタートになるが先の通りギルドに所属する負傷ハンターを分け隔て無く治療し、ギルド全体の命を尊重、未来あるハンターの救命に尽力する意志を認め、Ｅランクからのスタートとなる」
「え……わ、私はただあの方が仰った通り、私がしたい事をしただけで……」
「それでいいんですよアーシアさん。何もハンターだからといってプラズマソウルを手に入れるだけがハンターではありません。共にハンティングを行う者達をサポートする事に徹し、皆が無事にハンティングを終えて帰還できるように尽力する。それも一つの立派な戦い方なんですよ」
　シックルによって告げられたハンターランク昇格にカナエは喜び、

アーシアは通常よりワンランク上の状態でスタートする事に若干緊張しているが、それをジェントが優しく諭す。その言葉たるやライザーと明らかに違い、紳士的でアーシアの優しい心を肯定する至極真っ当な意見だった。
　これもあってリアスや一誠らはシックルこそまだ恐怖の対象だが、ジェントは信用出来る人物と認識した。

「これがお前達の新しいハンターライセンスカードだ」
「ありがとうございます、シックルさん」
「わ、私もこれから私なりに頑張りますっ」
「改めておめでとうございます。長生きはするものですね。こうやって成長が楽しみなハンターがどんどん出て来てくれるとは」

　ハッハッハと口元を発光させながら朗らかに笑うジェントに漸く今までの殺伐とした空気が消えた。
　……と思ったのだが。

「あの、宜しいでしょうか……？」
『あ』

　すっかり忘れられそうなルミナシアが声を出した。

「はい、何でしょうか。ああ……顔を動かすだけですみません。なにぶんこんな体格でして、下手に動くと天井に穴を空けてしまいそうで。ついでに床が抜けなくて助かりました」
「はわわ……ジェントさん、大きいですもんね」
「お気になさらず。それでその……シックル様が手にされてる……ライザー様の事なのですが……」
「こいつがどうした」
「差し出がましい事とは存じます。不躾な発言や行動はなさらない様、ライザー様に私からも申し上げますので、どうかライザー様を開

放して頂けないでしょうか」

ジェントはふむ……と悩んでいるようだったが、シックルは即答する。

「お前が言ったところで聞くような奴とは思えん。その申し出は受けられん」

「……シックル、ここは彼女を信じてみませんか？」

「……どういうつもりだ、ジェント」

「まあ、聞いて下さい。ライザー……という彼が我々のギルド所属のハンターであるカナエさんに対して不適切な発言や行いをしたのは分かりました。ですが、それまでの経緯を私やシックルは知りません。まずはそれを教えて頂けますか？」

「は、はい。実は……」

ジェントの提案で話を聞いてくれる事になった二人に対し、ルミナシアはリアスの婚約の事やレーティングゲームの事を時系列にそって説明した。

シックルは腕組みしたまま沈黙を保っているが、ジェントは時折頷き、顎に手を当てたり考える素振りを見せながらルミナシアの話を聞いている。

「……以上が、大まかな事の全容になります」

「なるほど。つまり彼がレーティングゲームとやらに参加出来なければ、婚約破棄にせよ即結婚にせよ関係の精算も何も出来ず仕舞いだと」

「……くだらん。何かと思えば身内や家同士の厄介事を持ち込んだ結果、己のちっぽけなプライドで胡蝶カナエの逆鱗に触れる言葉を発し返り討ちに合っただけだろう」

「ですよね～。しかも言う事もやる事もこっちの神経逆撫でしてくるのでついこちらも殺る気になってしまって……そこは反省してます」

「過ぎてしまった事ですし、それはいいでしょう。折角ですから私達も観戦させてもらいましょうか、そのレーティングゲームとやらを。それで手打ちにしましょう」
『!?』

はっきり言って破格だった。自分達がそのレーティングゲームを観戦出来るようにするだけでライザーを開放すると言うのだ。しかしジェントは更に言葉を続ける。追加で頼みたい事があると。

「一通り見てみましたが、リアスさんの方は眷属の数も練度も不十分。そこで、十日間程準備期間を設ける事と……人間とはいえ正式な部員であるカナエさんとアーシアさんの参加許可を欲しいのです。彼女らは部外者ではないですし、ルールに則った上での戦いならばシックルも文句はないでしょう。それに準備期間はお互い平等にあります。特訓を重ね今より更に力を付けるなり、ゆっくり休養を取り体調を万全の状態に整えるなりするのは各自自由です」

ルミナシアは「確かに」と納得する。
リアスの下僕はまだ四人……正確にはここに居ない僧侶一人を含めた五人なのだが、兵士の駒は一誠に全て使ってしまってこれ以上増やせず、そもそも如何せんこの短期間で不足の人員を見つけるのは難しい。だから少なくとも正規の部員であるカナエとアーシアを参加させ、後は訓練するなり新しい下僕を見つけるなりすれば少なくともそれなりの形にはなるだろう。どちらを選ぶかは本人次第なわけだから。
それにしてもこのジェントというメフィラス星人、相当なやり手である。

「畏まりました。観戦に際してこちらからご用意する物は……」
「ああ、それは結構ですよ。こちらの設備でどうとでもなるのでしっかりと許可が頂きたかっただけですので」

「は、はあ……」
「では、約束通り彼を開放しましょう。シックル」
「……ふん」

シックルがライザーの封印されたカードを放り投げ、自身の持つ大鎌と共鳴させるとライザーと媒介にしていたカードに分離され、カードの方はシックルの手に舞い戻った。

「……はっ!?ここは……俺は確か……」
「お帰りなさいませ、ライザー様。カードになられている間にレーティングゲームに関して打ち合わせが済みましたので、シックル様とジェント様のご厚意により元に戻して頂けました」
「何だって?カード……思い出したぞ!あの……」
「ライザー様!この方々は本来我々ではお目にかかる事さえ出来なかったかもしれない方達です!これ以上御無礼を働くならば私も動かざるを得ません!」

声を荒げたルミナシアに尋常成らざる気迫を感じたライザーは大人しく引き下がった。その時に偶然アーシアの方を向いたらシックルよりも巨大なジェントがいたのを見て「ひいっ!?」と情けない悲鳴をあげていた。
当のジェントは「どうも」と片手を上げていただけなのに。

「では改めまして……レーティングゲームは本日より十日後に。開始時刻は追ってお知らせ致します」

ルミナシアがそう言うと、彼女やライザー、それにライザーの眷属達も魔方陣と共に消えて行った。というか眷属連中まだ復帰出来てなかったけど本番までに治るのか?

☆

「さて……私達も準備しましょうか。挨拶一つ返せない彼には徹底的に痛い目にあって頂きましょう」

ジェントが言った言葉にシックルとカナエ以外はギョッとした。え？何この人怖い事言い出したんだけど。

「ジェントさん、私が参加出来るようにして下さってありがとうございます！ふふっ……お姉さん、どう弄っちゃおうかしら」

「ハッハッハ、期待してますよ。遠慮なく宇宙の広さというものを教えてあげて下さい、カナエさん」

カナエの目が笑ってない。瞳孔開き気味だ。普段優しいタイプは怒らせたらヤバイというのは卯ノ花がいい例だ。

そしてジェントも煽るんじゃない。

「おい、ジェント」

「おや？どうかしましたかシックル」

カナエを除くオカルト研究部のメンバーはこの時ばかりは彼に希望を託した。先程の発言を諌めてくれると……

「何故俺も参加させなかった」

「そんな事を許したら食べれない挽肉やフライドチキンがすぐさま食卓に並んでしまうじゃないですか。食べれないのに早々テーブルへ出て来てもスペースの無駄遣いですよ。ああいうのは調理されてるのを見るのが醍醐味なんですから」

諌めるどころか自分も参加したかったらしい。

そしてジェントの例えが色々酷い。ライザー（&その眷属）を焼き鳥どころか食べれない料理扱いしている。

ジェントの隣に地獄の有名なあの補佐官が笑顔で立ってサムズアップしてるのが見えるんですが。

「と、ともかくライザーとのレーティングゲームは十日後！それまで個々の実力アップの為の強化合宿をするわよ！」

「ああ、それなら既に手配してありますのでご心配無く。カナエさん、彼にも連絡は取ってありますよ。なんでも『ダイブハンガーはまだ駄目だが、仮住居やその地下に作った［勉強部屋］は自由に使って良い』だそうです。このスマホ、便利ですねぇ」

「ちょっ!?準備早ェ!!」

「ていうかスマホなのにやけに大きくないですかそれ!?」

用意周到というか、専用のデカいスマホでレジェンドに連絡済みだった。スマホなのにデカいとは如何にと思ったがジェント自身のサイズがサイズなので仕方無い。

とはいえレジェンドの事はまだバラしていない。時期尚早だと本人から言われているからだ。ましてや一誠の神器にはオーフィスの既知であるドライグも宿っているわけで。

「詳しくはカナエさんとアーシアさんに聞いて下さいね。なにせ参加するのは彼女らや貴方達なのですから。しかしあの名家であろうに品性の欠片もない若僧も愚かですねぇ。私達は観戦させてくれと言いましたが……貴方達の手助けをしないなど言っていないというのに」

「あらあら……お顔の表情は読み難いですが、そこはかとなく悪そうなお顔をしてそうですわ」

「まあ、私達はよく『悪質宇宙人』などと呼ばれていましてね。あまり気持ちの良い二つ名では無いですが、あの焼き鳥の失敗作のような連中なら呼ばれたところでどうも思いませんから。ハッハッハ」

ジェントといいシックルといい、実力も頭脳もヤバイレベルで備

わっている二人がよもやどちらもリアス派（というか正確にはレジェンド派）だとは思うまい。
かくしてレジェンドとオーフィス、スカーサハが留守の間、オカルト研究部はジェントを筆頭にハンターズギルドも全面協力するという強化合宿を行う事になる。
そして、彼らがいくつもの転機を迎える事になるのも、もしかしたらジェントは見透かしていたのかもしれない。

〈続く〉

伝説・無限・真龍、京都リサーチぶらり旅

「漸く着いたな、京都」
「我、京都名産品楽しみ。じゅるり……」
「お主はぶれぬな……」

打倒（もとい蹂躙）ライザーとオカルト研究部＋αが意気込んだ前回から時間を遡る。
サーガと別れ、駒王から約二時間弱、テレポートも何も使わず新幹線でのんびりと京都まで来たレジェンド、オーフィス、スカーサハの三人。
今年の慰安旅行の為に、家族らのリサーチ希望を取ってそれらを調べるべく遠路遥々やって来たのだ。そこそこ滞在するので必要な物は収納用ブレスレットに入れてある為、彼らはリュックを背負うくらいで済んでいる。

「んじゃ、とりあえず各人のリサーチ希望を確認するぞ―」
「我は食べ物のリサーチが良い」
「まあ待てオーフィスよ。まだ確認だけ、選ぶのはそれからだぞ？」

レジェンドの言葉に対し、正直に自分の希望を述べるオーフィスと、それを諌めるスカーサハ。
どちらにせよリサーチしなければならない故、遅いか早いかくらいの問題なのだが。

「最初のリサーチ希望は……と」

○温泉の種類、並びにその効能（卯ノ花）

「まあ、温泉がある所と仮定した場合だが必要だよな。医療従事者だし、結構身体を動かすから凝りをほぐすとか」

「「あと、スタイル……」」

なんか自分達の胸を触りながらオーフィスとスカーサハが凹んでいる。レジェンドは基本的に人格大事派なので気にしない事を伝えたら「なら証拠に」とリサーチ期間中は二人と一緒に寝てほしいと言われたので承諾した。オーフィスはそもそもレジェンドの寝室で毎晩一緒だし、スカーサハはまともだろうし。

「ふむ、次は？」

○旅館ｏｒホテルのサービス内容（グレイフィア）

「これは重要だな。行ってみたらパンフレットと違いました、とかぶっつけ本番でなりたくないし」
「お替り自由って書いてあるのに違ったら詐欺」
「お主が見るのはそこか……いや、間違ってはおらぬが」
「さすがうちの二大良識人、中々有用な希望だ。この調子で他も……」

○京都のご当地ピザ（Ｃ．Ｃ．）

「だと思ったよチクショー!!」
「一気にグレードが下がったな……」
「これ大事。我も頑張って調べる」

しっかり活きてくるであろう卯ノ花やグレイフィアのリサーチ希望からのＣ．Ｃ．の予想通りの要望の落差にレジェンドが絶叫。スカーサハも呆れ気味だが、ピザ好き仲間のオーフィスはやる気満々だ。

○道場の位置と規模（おおとりゲン）

「オイィィィ!!あいつ諦めてないんだけど思いっきり道場破りする気全開なんですけど!!」
「そもそも吾らにも道場に赴けと言っておるのかこの希望は!?」
「……我達で道場破り?」
「「それは絶対やらんでいい!」」

ゲンことレオは有言実行しようとしていた。そのうち全国規模でやりかねないし、しかも制覇してしまいそうである。全力で止めよう、せめて道場破りは。

○美味しいお酒の置いてる店（乱菊）

「……らしいっちゃらしいな、これ」
「我はお酒よりジュースがいい」
「知り合いの土産にもなるから、まあ良かろう」

○美味い京都名物の店（モロボシ・レイト）

「我もこれ、調べたい」
「……この名前は聞いた事ないぞ?」
「ゼロだよ。親のセブンはモロボシ・ダン」
「「あっ」」

乱菊はどちらかと言えばC．C．寄りだったが、土産にも使えるという事で納得した。そしてレイトことゼロはまあ妥当な所だろう。京都ならではの料理を味わいたいのは旅行者としては当然とも言える。ついでにまさか本作でのゼロの人間体名がここで出るとは思わなかった。

○京都の伝統文化や歴史（ヒビノミライ）

「これは……つまりこういうのに触れられるところ、でよいのか？」
「そうだろうな。単純に書き忘れだろうが、希望自体はなかなか良いじゃないか」
「メビウスは色々勤勉」

○比○清十郎の居場所（カナエ）

「「カナエに何があった!?」」
「……御庭番衆は？」
「お主まで何を言い出すのだ!?」
「というかこれ俺らの宿泊先が襲撃されるフラグ立ちつつないか!?」

ミライことメビウスは良いのだが、カナエは普段の彼女からはありえない希望が出されていた。いや、ノアが仕事すれば何とかなるか？ならないかもしれないが。

○宇宙人がどれだけ暮らしているか（涼子）

「これは俺も調べるつもりだった。駒王とは違ってこっちは俺の膝元と言うわけでもないし、気になってな」
「あまりに擬態が上手いと我でも分からない」
「そこはレジェンドが分かるであろう。これは他のリサーチをしていれば自然と調べられるか」

○宿泊先の料理に和食はあるか（ハリベル）

「嗜好の問題だろうが……これもアレか？肉じゃが的なエピソードが関係してんのコレ」
「ハリベル、普通はあまり気にしない」
「間違いなくそれであろうな……」

涼子のはレジェンドも気になった事案だ。ハリベルは……別に変ではないのだが、どうもアーシア救出時の肉じゃがが妙に尾を引いているらしい。

○皆さんと楽しく過ごせるところ（アーシア）

「何この娘、凄い健気なんだけど。良い娘過ぎるんだけど。アレ？おかしいな……目からウルトラ水流が」
「我も目からウルトラシャワー出そう」
「いや、お主はドラ……まあ、良いか。簡単に見えて難しいが、調べがいありそうだ」

○宿泊先に混浴はあるか（黒歌・夜一の連名）

「だから落差ァァァ!!!」
「最後の最後でエライのが来たな……」
「でも混浴じゃないとレジェンドと入れない」
「部屋が一緒だけで我慢しなさい」

アーシアの希望にほっこり来たのにシメの黒歌＆夜一の希望で全部吹っ飛んだ。絶対風呂場で何かする気だろあの二人。レジェンド貞操の危機である。返り討ちにしそうではあるが。

「まともなの、変わったの、こんなものまで調べんの的なものと見事に別れたな……」
「我ご飯食べてからがいい。お腹空いた」
「ふむ。昼時であるからな。それが良いのではないか、レジェンド」
「そうするか。とりあえず目の前にある丼物屋に……は？」

オーフィスの希望にスカーサハも賛同し、レジェンドも同じく賛同して自身らがいる場所の眼前にある店の名前を見て、何かに気付い

た。いや、別に怪しくはないのだが。
そうこう考えているとオーフィスとスカーサハはさっさと中に入ってしまう。レジェンドも「決めるぜ、覚悟!!」とジードの台詞を言いながら突入した。その結果……

「何でアンタが来るんだよ……」

「そりゃこっちの台詞だ。お前がいるなんて

店名を見るまで分からんわジャグラー」

店主がジャグラスジャグラーだった。

「そもそも店名が『蛇倉苑』と書いてあるからまさかとは思ったが何でピンポイントで狙ったようにお前が出てくるんだよ」
「そのまんま返すぜレジェンドさんよ。どォして東の地に居る筈のアンタがこんな所にロリ娘二人も連れてうろついてんだよ」
「慰安旅行のリサーチだよ。この店絶対美味いぜマジ入らないと的なオーラ出しまくってただろ期待してんだよコノヤロー」
「上等だよ。胃袋掴んで常連にさせてやるから家族も連れてこいや規格外(チートラマン)」

仲良いなお前ら。

まあ、本作のジャグラーは悪態付くけど目に見えるツンデレ野郎である。こうなったのもつい最近ではあるのだが。

オーフィスとスカーサハは、こちらも仲良くメニューを見て注文した。

「我ネギ玉牛丼。てんこ盛りスペシャルつゆだくで」
「吾はうな重の普通盛りを頼むぞ、店主よ」
「はいよォ。で、アンタは何にするんだァ？」
「ふっ……決まってるだろう。
カツ丼『戦士の頂』盛りだ」
「!?」
「そう来ると思ってたぜ、アンタならよ……！」

スカーサハはともかくオーフィスの量も大概なのだがレジェンドと、その注文を受けたジャグラーも何故かお互い「待ってたぜ、この瞬間(とき)をよ！」と言わんばかりにニヤリと笑っている。
先に注文した二人はというとレジェンドが口にした「戦士の頂盛り」という謎の量が気になった。

「戦士の頂、盛り？」
「な、何だというのだ……レジェンドと店主の顔からして裏メニューのような感じがするが」

二人がそんな事を考えている間にジャグラーは見事な手際で二人の注文した品を完成させた。正直料理(こっちゃ)ならオーブを問題無く倒せそうな速度と完成度だ。

「つゆだくのネギ玉牛丼てんこ盛りスペシャルと普通盛りのうな重お待ちィ!!」
「ふわぁ……」
「これは……見ただけでただ出すのが早いのとはわけが違うと分かる出来だぞ」
「しっかり味わっててくれよ。さァて……いよいよアンタの分だ」

そう言うとジャグラーは凄まじい速さで下拵えを終わらせ、調理に入っていく。なんか魔人態になってそうな気がしないでもないが、少なくともダブっては見える。

「明らかに我達のと違う」
「一体どんなカツ丼が出来るのだ？」

それぞれ注文した丼物を食べながら見ていると、オーフィスすら驚く量が出来ていく。まさに山。

「待たせたなァ……！カツ丼戦士の頂盛り、完成だ」
「来たか……！」
「何、それ……」
「いやいやいやおかしいサイズだろう!?」

オーフィスが注文したてんこ盛りスペシャルも大の大人が漸く完食できるサイズなのだが、戦士の頂盛りはその比ではない。
全ての量がてんこ盛りスペシャルの五倍だ。
周りに他の客もいたし、従業員もソレの存在を知っていたとはいえマジで注文する奴がいるのかと思うようなモノだったらしく双方も口を開けてビビっている。

「へ……ヘビクラ店長、アレを頼むあの客は何者なんですか……!?」
「ん？まァ旧知の仲ってやつだ。よく見とけよお前ら。アイツはアレを完食するからな……！」
『はァ??!!?』

ヘビクラと言うのはジャグラーの人間体での名前らしい。もっとも、レジェンドが言っていたジャグラーという名の方が連中には渾名に聞こえているみたいであるが。

そしてレジェンドが行儀良くいただきます……と言った直後、持つ事さえ困難であろうソレを溢さぬ様にしつつ持ち上げ、恐るべき速度で口に掻き込んで行く。

『え゛え゛え゛え゛え゛!!!!』

「さすがだぜ……!また速くなってやがる」

「オイあの店長の知り合いらしき客半端じゃねーぞ!?」

「どうなってんだアレ!?」

実はレジェンド、普段の彼は食べる量が普通なのだが今回のような本気を出す場合、どっかの戦闘民族や美食屋が集結しないと太刀打ち出来ない量を食せるのだ。

あくまで『食せる』だけであり、食しなければならないわけではない事を付け加えておく。

しかもただ食べるだけでなく、やたら美味そうに、しかも笑顔で食べるから尋常では無い。

そんなこんなで瞬く間に戦士の頂盛りを完食したレジェンドは満面の笑顔で合掌した。

「御馳走様でした」

「お粗末さん。どォだ味は?」

「ヤバイわコレ。もう一杯イケそうな気がする」

『ウソォォォォォ!?』

さすが主人公。次元が違った。

いや違う部分が何か変だけど。

「レジェンド、我もそれ食べたい」

『はいぃぃぃ!?』

しかもオーフィスまで食べたいと言い出した。結局は今度来る時

に持ち越されたが、純粋に食べたいと思った事がジャグラーに気に入られたらしく「次はもっとスゲェ奴を用意してやる」と撫でられながら言われたので今回は我慢する事にした。

☆

「マジで気に入ったぞ。次は家族、それも大食いもいるから覚悟しとけ？あとゼロもいるから」
「アイツまでいるのかよ!?まァいいか……」
「ジャグラー店長、我今度来る時が楽しみ。絶対戦士の頂盛り食べる」
「期待してろ。次回は更にバージョンアップしてるからよォ……！」
「何か店長が燃えておるぞ!?」
「っと、ジャグラー。今回の最後に言っておく」
「あ？」

代金を支払い、オーフィスとスカーサハの手を握りながら、レジェンドはジャグラーに向かい笑顔で一言。

「料理してたお前は……文句無しに輝いていた。冗談ではなく、な」
「……うるせェよ。言った通り今度はお前の他の『家族』の胃袋も掴んでやるから覚悟しとけ」
「ああ、改めて御馳走様」
「「御馳走様でした」」
「おう」

そう言って丼物屋・蛇倉苑から退店する三人。その後ろ姿を尊敬の眼差しで見る従業員や他の客。
後日、京都の街は謎の子連れイケメンフードファイターの噂で持ち切りだったという。なにせ子供（オーフィス）の片方は屈託なしに自分も食べたいと言ったのだから。
こうして、腹も満たした三人は幸先良かったという事でとりあえず

本日の寝床となる旅館を探す事にした。
今日はその周辺をリサーチする事にしようと決めたのだが……まさか、初日から早速厄介事に巻き込まれる事になるというのは、なんとなく今までの経験から予感出来ていたレジェンドであった。

〈続く〉

妖怪母子救出、レジェンド一行ＶＳカラス人間（堕天使に非ず）

ジャグラーが経営する丼物屋を後にしたレジェンド一行は良さげな旅館を見つけ、本日の宿泊場所はそこに決めた。その後、周辺散策を行い現在は部屋に戻って寛いでいるところである。

そんな時にジェントから連絡があった。

「……それでそのフェニックス家のバカ息子とグレモリー家のおてんば娘がデュエルするハメになったと」

『レーティングゲーム、ですよ。まあ罠を張ったり魔法を使ったりダイレクトアタックも出来たりしますがね』

「そのフェニックスの弱点、我丸分かり」

『ほう、その心は？』

「股間にしつこくダイレクトアタック」

「『それはさすがにやめましょう！』」

「まあ、性別関わらずかなりキツイであろう」

実際、かなり有効そうではある。股間に集中砲火されそこを再生し続けるとか傍から見ても情けないし、プライドが無駄に高いライザーの精神が早めに逝くかもしれない。

「ジェントの見解から言ってグレモリーの娘は勝てそうか？俺はカナエなら相手がどれだけ持つかってレベルだと思っているが、正直練度や特性で大幅に不利にしか見えんぞ」

『ええ、まさしくその通り。このままではカナエさんが残ってもグレモリー嬢が倒されるか投了（リザイン）して終わりでしょうね。実力も精神もいまだ形成らず、といったところです。まず勝ち目は無い』

「アーシアはＣ．Ｃ．や涼子と同じく元々直接戦闘に向いてないから仕方無いんだがな。性格も神器の性質も。だが……投了？それだけ

嫌っている相手にそんなマネするとは思えんが」
「簡単ですよ。彼女の本質はもちろん生家からして、自分の眷属が痛めつけられるのは耐えられないでしょうから」

答えはリアスの性格にあった。今の彼女なら一誠を始め己の眷属が酷く傷つけられれば激昂して相手を滅するのではなく、降参して身を引く事で決着をつけるだろう。
それでは僅かに勝てる可能性があっても、その可能性を自ら潰してしまう事を意味する。『最後まで諦めず、不可能を可能にする』事を心情とするウルトラマンとしてそれは納得できない。

「そういうわけですからカナエさんとアーシアさんの参加以外に、十日間の準備期間を設けさせて頂きました。ぶっちゃけますと、あの様子ならカナエさん対策はしても他の方をあまり気にはしていないようですから、それを逆手に取って完膚なきまでに眷属ごと叩き潰してあげようと思いましてね」
「アレ?ジェントもしかしてご機嫌斜め?」
「ええ、まあ。こちらは簡単とはいえ挨拶をしたのに彼は怯えたと思えば私の事など居なかったように扱ってましたからねぇ。あれでは礼儀など今更期待しないので、お仕置きがてらグレモリー嬢達を鍛えてその目論見をプライド諸共木っ端微塵にしてやろうと考えたんですよ」

サラッと言い放ったジェント。彼は礼儀を重んじるタイプであり、親しい人物や軽くても挨拶してくる人物ー例を挙げるとゼローなどには好意的に接するが、その逆はＮＧである。
さすがライザー・フェニックス。不死鳥らしく勝手に自爆して燃え上がっていく。いや不死鳥は普通そんな事しませんけどね。アレが例外なだけです。
「だが、十日間の付け焼き刃でどうにかなるのか?連中の修行方法で

は精々１００が１１０になってれば御の字だろ。ん？……まさかそれで俺に連絡して来たのか」
「相変わらず鋭い。貴方の家族と、カナエさんの修行相手に貴方の『真の眷属』の力を借りたいのです。あと場所」
「場所はついでかい。まあ家族はいいとして、だ。カナエの修行相手となると……先に弾かれたあの一家の大黒柱だな」

そして、恐らくかつての世界でかの人物を知るものは一瞬で身を強張らせるだろう、レジェンドの『真の眷属』たる者の名を口にした。

「良いだろう。カナエの修行相手として伝説九極天（でんせつくごくてん）の一柱である『継国縁壱（つぎくによりいち）』を向かわせる」
「『!!』」
「……？我、伝説九極天も継国縁壱も知らない。誰？」
「オーフィスや、惑星レジェンドに居たスカーサハ、Ｃ．Ｃ．、そしてグレイフィア以外は知らなかったな。縁壱はカナエ達と同じ死して『弾かれた』魂がこちらにて復活した者だ。家族とは死別……殺されたらしいが、どうやら同タイミングで保護した女性がそうだったらしくてな。大層感謝されたよ。それ以来、惑星レジェンドで家族一緒に幸せに暮らしている。九極天にも自分から志願してくれたんだ」

なお、死して弾かれた魂は全盛期……縁壱の場合はかの若い頃の姿で復活し、以後はそのままの姿である。

「そして伝説九極天。これはオーフィスらが俺の家族、ウルトラマンが光神としての眷属であるなら、『レジェンド』としての眷属……言わば直属の親衛隊みたいなものだな。因みに他には日本地獄の閻魔大王の元へ派遣している『鬼灯』、俺の専属医で家族の烈がそれに当たる」
「所謂最強格の者よ。しかし……アレが修行相手だとして、カナエでも持つか分からぬぞ。烈ならば止められるだろうが、最悪鬼灯にも出

張ってもらわねばならぬ」
「あ、それは問題ないぞ。あいつ奥さんから「訓練ではやりすぎちゃ駄目」って常々言われてるからな」

かつて死別した筈の妻・うたと再会できた縁壱はすっかり家族煩悩な人物になったらしく、妻子の忠告はしっかり守るようだ。

「大体分かった。鍛えられたカナエがぶっ壊れ性能になる」
「『うん、あながち間違ってない』」

アレに直接修行をつけてもらって普通のままでいられるわけが無い。まず今の何倍から何十倍までパワーアップするだろう。そこまでが地獄だが。
良かったなライザー！相手はレジェンドでも縁壱でもない、（バグった）カナエになりそうだぞ！

『とんでもない方が援軍に駆け付けてくださるようですね……それで場所なのですが』
「ダイブハンガーはまだ早い。せめて俺達が戻って正式に正体を明かしてからになる。だが、仮住居の方なら問題ないぞ。地下には夜一から教わって作り上げた勉強部屋もあるしな。構想二分、制作三分」
「それでなんであんな空間が出来上がるのだ!?夜一の話だと元の世界で作った者は２０年程費やしたと言っておったぞ!?」
「スカーサハ、それがレジェンドパワー。ご都合主義」

身も蓋もない理由だった。仕方ないよ、レジェンドだもの。こうして時間、場所、そして人材は揃い対ライザー戦用強化合宿の下準備は整ったのである。

『因みに今、縁壱さんはどこに？』
「ああ、実は鬼灯から連絡があってな。なんでも『鬼舞辻無惨』とかい

う奴が弾かれてこっちの【エリア】の地獄に落ちたらしい。偶然その名前を聞いたそいつが発狂したんでもしやと思って俺を通じて聞いてみたら『そいつこちらの騒動の元凶なので私に殺らせて下さい』と言ってきたんだよ。んで、今は地獄で鬼灯と一緒にそいつを折檻中」
「九極天の二強に折檻とは……そやつ一体何をしたのだ」
「レジェンド、我も日本地獄行きたい。連れてって」
「今度な」
「うん」

☆

「もう嫌だぁぁぁぁぁ!!何で!!何で貴様がここに……」
「煩い黙れ腐れ外道次は大台の肉片一万個に変えてから消滅させてやる」
「縁壱さん、キリがいいところで一旦切り上げてこの世界の駒王という街へ行ってもらえませんか?レジェンド様直々の頼みだそうです」
「レジェンド様直々なら仕方無いですね、鬼灯殿。あの方には一生掛かっても返し切れない恩がありますし」
「どうやら修行相手をしてほしい人がいるようです。なんでも貴方と同じ世界出身で、鬼に殺され、ついでに今回の修行もその鬼に似た悪魔をしばき倒す為だそうです」
「ちょっとその人物を超人にして来ます」
「おや……さすがに早いですね。では彼の続きは私が引き受けますか。時間が許す限り」
「私は間違ってないと何度言えば（ゴォシャアァァァッ!!!）」
「縁壱さんも言っていましたが煩いんですよ。ウダウダ言い訳せず黙って裁かれろ。縁壱さんが居なくなった途端に調子付きやがって……」

かつての鬼の王は、地獄にてトラウマが順調に増えている。頑張れ！鬼ず……無惨様。

☆

ジェントだけでなく、家族らにも一通り連絡を終えたレジェンドは改めてのんびりしていた。カナエの修行相手について連絡した時、卯ノ花はあらあらと笑い、Ｃ．Ｃ．とグレイフィアは戦慄し、カナエ本人は石化していたという。縁壱がどれだけヤバイかは鬼滅の原作を読もう！因みにレジェンドの光気を受けた上、更に修行して強くなっているのは言うに及ばず。

「……妙な気配がする。チームＧＵＴＳにいた時、似たような事があったな」
「レジェンド、我達のお仕事？」
「相手は違うようだがな。いつもの禍（カオス・ブリゲード）の団じゃない」
「つまり宇宙人絡みか？怪獣ではないようだな」
「ああ。しかもこの感じ……同族が集団で行動しているな。後は黒歌と同じような気配……これは妖怪か」

何かを察知したレジェンドは戦闘コスチュームに着替え、オーフィスとスカーサハも動き易い服装になる。丁度食事も終えたし、後は寝るなり寛ぐなりするだけだったので、一仕事する分には問題ないだろう。

「襲われているのが妖怪にせよ宇宙人にせよ、黙って見過ごせるような質ではないのでな。行くか」
「うん」
「うむ」

そう言うと三人はありえない速度でレジェンドが存在を感知した方向へと移動した。

☆

森を抜け、何故こんな所にあるか分からない廃棄された大きめな工場。かつてはぐれ悪魔バイザーがいた所よりも大きなその場所で、ある妖怪の母子が真っ黒な体のに鳥のような頭部の異形の存在達に追い詰められていた。

何とか対抗しようとしたものの、動きが早過ぎて太刀打ち出来なかったのだ。

「九重……隙を見て逃げ、援軍を呼びに行け。わらわ達には分が悪過ぎる」

「母上!?しかし、それなら尚の事母上の方がお逃げ下さい！私より力が大きい母上の方が逃げられる確率が高いです！」

「逆だ、九重。そもそも力が弱くては足止めなぞ不可能。わらわに任せよ……して、そなたらは何者だ？何故わらわ達を狙う？」

「我々はレイビーク星人。遠く離れた母星より『奴隷』の確保にやって来た」

追い詰められていた妖怪—九尾の母子、八坂と九重は愕然とした。まさか噂に聞く『宇宙人』が、奴隷として自分達を確保にすると言い出したのだ。

「我々の星ではこの星の人間、即ち地球人によく似た種族を奴隷として徴用していた。しかし奴らは脆かった。ほんの少し酷使しただけで死ぬ」

「そこで我々は他の星に出向き、足りなくなった奴隷を確保する事にした。そこで目を着けたのがこの星の妖怪と呼ばれる種族だ」

「通常の人間と違い、多種多様な能力も持ち、体も頑丈だ。奴隷としてこれ程便利な種族はいない。既に多数の妖怪の確保を済ませている」

「何だと……!?」

八坂はレイビーク星人と名乗った宇宙人達の目的を聞いて身を震わせた。奴らは自分達以外をどうとも思っていない。奴隷がどれだけ命を落とす結果になろうとも、足りなくなったら他から持ってくればいいなどと物としか見ていないのだ。しかも、もう他の妖怪達も捕まっていると言う。

「くっ……」

「は、母上……」

「逃げようとしても無駄だ。援軍などいない。貴様たちの前だけでなく、後ろにいるのも我々だ」

「そして俺もいるの♪」

「我もいるの」

「吾もおるぞ」

『!!??』

ドガッシャアアアン!!!

ほぼ全てのレイビーク星人が三人の乱入によって吹き飛ばされた。殆どがレジェンドにやられたようだがみな一撃で絶命しているよう

で身動きどころか呼吸音すらしていない。相変わらずアホなスペックである。

「な……何だと!?我々の同胞が……たった一瞬で……!?」
「やっぱりカラス人間共か。あの時と同じ様に人間採集かと思ったが今回は妖怪採集とはな……だが貴様らは運が無かった。何故なら旅行先のリサーチに来た俺達がいたからだ」
「でも我、食べれないカラスのリサーチなんかしたくなかった」
「全くだよ。どうせならツインテールとか出てこいよ。アレ海老みたいな食感らしいぞ」
「それ、我食べたい」
「この状況でもホントお主らはぶれぬな!?」
「ふざけるなぁぁぁ!!」
「ふざけてるのは貴様らだカラス人間共」

グルメ界へ放り出してもそのまま食い尽くしそうなレジェンドとオーフィスの会話にツッコミするスカーサハ。確かにぶれないが、逆にそれでこそレジェンド一家である。どんな時でも自分達らしいというのはいい事だ。たぶん。

「お……お主らは……」
「我、レジェンドの正妻オーフィス」
「お主も吾もまだレジェンドと結婚しておらぬからな？吾は真龍ディアドラ。だがこの姿の時はスカーサハと呼ぶが良い」
「レジェンド……？」
「あそこでカラスを次々に木っ端微塵にしてるのがレジェンド。この世界では光神様って呼ばれてる最強存在」
「「光神様!?」」
「やはりそちらの名前では有名なのだな……」

光神様という名を聞いた途端、八坂と九重は驚いた。光神様と言え

ば世界中の御伽話にも登場する程の存在だ。それぞれの国によって内容に差異はあるが、いずれも数々の奇跡を起こす神秘の存在として描かれている。
　もう一つ、光神様は人型であるものの巨体であり、それこそ城の如き大きさと言われているが目の前で大暴れしている男性は見た目普通の人間だ。文句無しに格好良い分類ではあるが。

「あれはレジェンドの人間体。本当はもっと大きくて神秘的。あともっと格好良い」
「そこはかとなく個人的な主観が入っておらぬか？……ん？オーフィス？まさか、あの無限の龍神オーフィスか!?」
「ん、そう」
「何故そんな者が……いや、目の前におるのが光神様なら納得か」

　よくよく考えてみれば目の前の少女がオーフィスだったのも驚いたが、レジェンドの事程ではない。スカーサハの事も気になったのだが、今はこの状況を脱するのが先決。
　そう思っていた時が八坂にもありました。

「バーチカルギロチン!!」
「アギャァァァァ!!」

ボスらしきレイビーク星人が容赦無く真っ二つにされる様子を見せられるまでは。

「……終わった、ようだな……」
「相変わらずえげつないな……」
「ん、ギロチンショットじゃないだけマシ」
「アレより酷いのがあるのか!?」

　元はギロチン王子ことあのウルトラ戦士の技である。切断技にお

いて右に出る者はいないとまで噂されたかの戦士よりも明らかにヤバイ威力が出てそうなんですけど。
そんな中、あまり会話に入ってこなかった九重はというと……

「わあ……本物の光神様なのじゃ……」

純真爆発していた。今ので信じるって何か違わないか？
ともあれ、目をキラキラさせながらレジェンドを見る九重にそんな事を言える筈もなく、レジェンド一行はそのまま八坂と九重を連れ、捕まっていた妖怪達を解放する。
その後、救出された妖怪達と共に礼をしようとしたのだが……三人ともいつの間にかいなくなっていた。どうやら自分達が気付かぬ間に宿泊先へと戻って行ったらしい。

「のう、九重……弟か妹は欲しくないか？」
「うーん……私はそれより、旦那様に光神様が欲しいです！」
「!?」

よもや娘がライバルになるとは予想だにしていなかった八坂なのだった。
そんな事が自身の知らぬ間に起こっているレジェンドはというと、やはり旅館だろうと『レジェンドと寝る時は何も着ない』と公言したオーフィスにくっつかれ、畳で寝るのに慣れておらず寝相がおかしいスカーサハがうつ伏せで顔面に乗っかっていた。

レジェンド、ピンチである。主に呼吸が。

〈続く〉

強化合宿開始……前に、白黒和解とお師匠縁壱

ライザーとのレーティングゲームを受け、ついでに京都でレジェンド一行らが八坂・九重の九尾母娘を救出した次の日、早朝からカナエとアーシアはオカ研顧問の矢的と共にリアス達を待っていた。ただし、カナエはガタガタと震えているし、顔色も悪い。

「どうしようどうしようあの方が来られるって私生きてられるのかな皆の前で肉塊になったりしないかなちゃんと強くなれるのかなお願いしますレジェンド様私の命をお守り下さい本当にお願いします……」

「あ、あの……矢的先生、昨日からカナエさんがずっとこの調子で……あとグレイフィアさんとC．C．さんも固まってたんです。えっと、継国縁壱さんって方御存知ですか？」

「ああ……彼か……うん、胡蝶がこうなるのも納得だ。彼は彼女がいた『鬼殺隊』にとって始まりの剣士とも称される人物で、チーフ……レジェンド直属の眷属と言うべき伝説九極天の一人だからね。たぶんレジェンドの家族である君達でもやり合えるとしたらオーフィスちゃんを除いて唯一人、卯ノ花さんだけだ」

「え……えええ!?」

「胡蝶の修行相手に呼んだんだろうなぁ……彼は基本的に優しいから修行で命までは取らないだろうけど、そもそもスペックがおかしすぎるんだよ」

光の国の最強戦力たるウルトラ兄弟からもおかしいスペックと言われてる縁壱はマジで何なのか。必死でカナエを落ち着かせようと奮闘するアーシアと矢的の前に、残るオカルト研究部のメンバーが揃った。

「矢的先生、お待たせ……アーシア、カナエはどうしたの？」

「あ、部長さん……実はカナエさんの修行相手となるかもしれない方

の名前を聞いてからこのままなので……」
「あらあら……余程怖い人なのかしら」
「いや、この姿の僕を含めてこの場にいる全員で掛かっても蹂躙される人物だよ」
「「「「え？」」」」

オカルト研究部、硬直。そりゃそうだ。カナエや矢的まで加えても太刀打ち出来ない化け物って何だそれ。ライザーなんてどうでも良くなるレベルの相手と修行なんてカナエでも大丈夫なのだろうか。というかこの調子で案内とか出来るのか。

「とりあえず、アルジェントは胡蝶と手を繋いであげてくれ。出来ればもう一人」
「あの……私が」
「そうか。頼むぞ、塔城」

はい、と短く応えてカナエの手を握る小猫。やはりというか震えが尋常じゃない。逆の手を握っているアーシアも不安そうだ。

「場所は僕も知っているし入れるから案内は僕に任せてくれ」

尚、オカルト研究部の強化合宿に関しては矢的が学校に提出して問題なく受理された。学園長が関係者なのもそうだが、教師と生徒両方から信頼も厚い矢的が言う以上何か事情があるのを察してくれ、リアス達は公欠扱いにしてくれるそうだ。保険医の涼子からも後押しがあったとの事。

「矢的先生のおかげで心置きなく合宿を行えるわ。本当にありがとう」
「僕も話を聞く限り無関係とは言いたくないからね。これから向かうのは胡蝶やアルジェントが暮らしている所だよ。彼女らの家族にも

協力をお願いしてるんだ」
「胡蝶先輩の、家族……」

小猫はその言葉を聞いて、黒歌の事を思い出した。カナエの言葉が事実なら、間違いなくそこに黒歌はいる。ちゃんと聞かなければならない。自分の気持ちをそう確認した小猫は、入り口だという場所である事に気付いた。

「ここは……ソランさんが見せてくれた地図の、場所？」

その言葉に、まだ震えているカナエ以外のオカルト研究部メンバーと矢的が小猫の方を向いた。この場所には様々な力が不可視で設置されている。それを介さず入る事が出来るのは『ここに住む家族に認められた者だけ』だ。

「塔城、そのソランという人物はどんな人だった？」
「あ、はい……銀髪で、変わった服を着ていました。外国の人らしくて……言葉は分かっても地理は分からないとも。ちょっと無愛想でしたけど、悪い人じゃないと思います」
「いや小猫ちゃん、さすがに悪い人かはわからないんじゃねーか？」
「……少なくともイッセー先輩みたくスケベじゃありません」
「ちょおっ!?そこ関係なくね!?」

矢的はうーんと考えていたが、一誠は余計な事を言ってカウンターを食らっていた。確かにあの人物の性格はスケベではなく真面目かつ天然だ。

「僕も何人かそれっぽい心当たりは出て来たけど……塔城の言う事だ、間違ってないだろう。それにどちらにせよ今は合宿先に行かないとな！」

そう言うと矢的は先導して道を歩き出した。
目指すは、レジェンド一家の仮住居。

☆

道なりにしばらく歩くと、開けた場所に少し大きめの和洋折衷な三階建ての家屋が見えて来た。何か他にもありそうだが、気のせいだろう。彼らを出迎えたのはグレイフィアだった。

「皆様、ようこそお越し下さいました」
「ル……ルミナシア!?嘘……どうして!?」
「私はこちらに住まう御方のメイドを務めさせてもらっている、グレイフィア・ルキフグスと申します。ルミナシアは私の双子の妹です」
「!!」

リアスを始め驚いた一誠達だったが、そう言えばリアスはルミナシアに聞いた事があった。かのレイブラッド事変の折、行方不明になった双子の姉がいる事に。どれだけ手を尽くしても見つからず、もう既に死んだものとして扱われているとも。

「そうだったの……でも、何でその貴女がここに居るのかしら?」
「はい、それはここが私を助けて下さった方の所有物だからです。もっとも御本人は今遠出していてもうしばらく帰れませんが」
「そう……なのね。分かったわ、それ以上聞かないし、ルミナシアにも貴女の事は言わないでおくわ」
「ありがとうございます、リアスお嬢様」
「あ、『お嬢様』は要らないわ。だって貴女はここの持ち主に仕えているのであって、グレモリー家に仕えているわけではないもの。気軽に呼んで頂戴」
「畏まりました、リアス様」
「うーん……まあ、それでいいわ」

リアスの選択は正しい。なにせグレイフィアが仕えているのは無数の宇宙・次元・時間・世界の頂点に立つ光の三超神の一人なのだから。これがライザーなら「メイド如きが！」とか言い出して返り討ちに合いそうなものだが。

グレイフィアに促されるまま屋内に入ると……

「待って離して夜一！私まだ心のスタンバイ出来てないのに発進カタパルト乗せるような真似しないでぇぇぇ!!」

「逃げていてはレベルも上がらんし資金も強化パーツも手に入らんぞ！ここは懐かしのコマンド『説得』じゃ!!」

夜一がジタバタする黒歌を引きずって来ていた。しかも例えが黒歌の大好きなゲームである。

「……黒歌姉様」

「ふにゃあっ!?」

「おおぅ……ベストタイミングじゃな、グレイフィア」

「いえ、殆ど偶然ですが」

「来たばかりですまんのぅ。早速で悪いがこの娘っ子は連れて行くぞ」

夜一はそう言うや否や目に見えぬ動きで小猫を脇に抱きかかえ黒歌を先程同様引きずりつつ室内の一室へと消えていった。どうやら黒歌は抵抗するのをやめたようだ。

ポカンとするカナエ以外のオカルト研究部。カナエは覚悟を決めたのか震えだけはなくなっている。

「あれは彼女ら姉妹が解決しなければならない事だ。夜一殿はそれの手助けをしたに過ぎない」

『!?』

背後から突然声が聞こえたかと思えば振り向くと顔に痣のある、整った顔立ちの和服を着た男性が立っていた。穏やかであるが異常とも言える闘気を身に受けたカナエ以外のオカルト研究部はそれだけで腰を抜かしてしまった。

（な……何だよ、これ……！）
（嘘でしょ……！魔王様達でもこんな空気纏ってる方はいないわ……！何なのこの人間は……!?）
「なんとなくどう思っているか予測は付くが私は『元人間』が正しい。今はある御方の光気を授かった為『従属神』と呼ばれたりと、呼び名は様々だ」
「じ……従属神って……神!?」
「神というが基本的に人間だから気にせずとも良い。それに私……私達が仕える御方は単なる神とは違うから、悪魔を聖なる力で滅するとかいう神と混同しないように。別に悪魔の天敵と言うわけでもないからな。奴の生み出した鬼は無害かつ善良な者以外完全殲滅する気だが」
「「「「ひいっ!?」」」」

目が殺る気だった。

「縁壱様、一先ず話は皆で。というか……ここに来る前に何がありました？」
「……すまないグレイフィア殿。地獄でカス無惨を裁断してた時の感情が出てしまっていた。私もまだ未熟だ」
「縁壱様ルビと名前が逆になってます」

縁壱、無惨に対する感情駄々漏れであった。これは仕方無い。そこに反応したのはカナエだった。

「あの……今無惨って！地獄に鬼舞辻無惨がいるって事ですか!?」
「ああ、今頃鬼灯殿によってどこの地獄で挽肉になっているやら。いや、案外……芥子殿に叩き潰されているのもありだな」
芥子（からし）とは地獄で獄卒をしている兎である。
まさか兎にあの無惨がやられるなど普通なら考えられないというかまず無理だろう。だが日本地獄では当たり前の事だ。
無惨を「この狸いいい!!!」と言いながら一方的に虐殺する兎が何故か自然と目に浮かぶ。
と、ここでカナエも様子が変わった。

「無惨コロス無惨コロス無惨コロス……」
「「「「ひいいっ!?」」」」
「そうか、君がレジェンド様と鬼灯殿が言っていた子か。名乗るのが遅れてすまなかった。私は継国縁壱という。その子の修行相手を命ぜられた、伝説九極天の一人だ」
「胡蝶カナエと申します無惨コロス」
「カナエ、何か口調みたくなってるわよ!?」
「マジでどうしたんですか胡蝶先輩!?」

ヤバイ何かに憑かれたかのようなカナエを心配していると縁壱が衝撃的な事を告げた。

「彼女は言っていなかったようだが……彼女は無惨自身ではないが、無惨が生み出した『鬼』によって一度殺されているらしい」
『!?』
「カナエが……殺されている?」
「そんな……でも彼女は駒も何も使われていないわ！」
「『駒』が何を意味するのか私は知らぬが……私も私の妻と子も、そして彼女も元の【エリア】から弾かれた事で再び生を得た。そう考えて間違いないだろう」

エリア？弾かれた？とリアス達は疑問符が頭に浮かんだが、そこは縁壱が頭を横に振りながら応える。

「それ以上は時期が来れば我らが主が全て明かしてくれるだろう。今すべき事は上がって暫し待ってもらう事だ。彼女らもそう時間は掛かるまい。ああ、履き物は脱いでな」

そう伝えると縁壱は自身も草鞋を脱いで奥の部屋へと行ってしまった。その後、グレイフィアに急かされるようにして部屋へと入室する。そして最初に目に入ったのは……

（で……でけぇぇぇ!!!）

予想通り、一誠が目にした乱菊の胸だった。

（明らかに部長や朱乃さんよりデカいだろアレ!!しかも何だよこれ美女だらけじゃん!!何人か男もいるけど……あれ？そういえば御門先生、よく胡蝶先輩と一緒に登校してたけど……まさか!?）

何でこういう時だけ思考が早いのか。

一誠は乱菊の胸を見て悶々としながらリアスらと一緒に小猫らを待つ事にした。ちなみに当の乱菊は気にもしていない。「お酒今は駄目ですか？」「今は駄目です」と卯ノ花とのんびり会話している。まさしく剛の者。

☆

夜一に連れ込まれた一室にて、黒歌と小猫が向かい合って座っている。それをちょっと離れて二人と合わせ丁度三角形になるよう、夜一が見届ける為に胡座をかいていた。

俯いている黒歌と小猫。両者とも全く動かず、それに見兼ねた夜一が口を出した。

「ホレ二人とも、どちらかが口を開かねば一歩も先に進まんじゃろ。この際だから思いっきり吐き出さんか」

「簡単に言うにゃ……何から言えばいいのかまだ混乱してるのに」

「ま、そうじゃろうな。儂もかつてはお主と同じような立場じゃったし気持ちは分からんでもない。相手は妹ではなく部下なのじゃが」

「「えっ!?」」

黒歌は夜一から初めて聞く事実に、小猫は初対面の人物が自分達と似た境遇だった事に酷く驚いていた。

「ちと昔話になるがな、儂がとある場所で隊長職を務めておった頃の事じゃ」

そういうと自身の身の上を話し出した。四楓院家というある場所で四大貴族と呼ばれる家に生まれた事、自身の部下だった男がある事件に巻き込まれ、それを庇い自身も現世……人間界に逃げた事。

そしてその際……可愛がっていた部下を巻き込むまいと何も言わずにいたため長らく恨まれていた事と、本気でぶつかり合い、その部下が本当は自分も連れて行って欲しかったと思いを吐露し、漸く蟠りが解けた事も。

「……とまあ儂の話はこんなところじゃ。あの時、砕蜂に……部下に涙ながらに言われた言葉は今でも覚えておるわ」

―何故、私も連れて行って下さらなかったのですか―

「結局、巻き込みたくないと言うのは儂の我儘で、あ奴の事を考えていなかった。それに気付くのに、だいぶかかってしまっての……本当に」

二人は黙って聞いていた。彼女の一言一句聞き逃さぬように、真剣に。ここで、小猫が一つ質問をした。

「あの……ぶつかり合ったって」

「文字通りじゃよ。向こうは本気で殺しに来た」

「っ!?」

「まあ見ての通り儂が勝ったがの。とはいえ『二撃決殺』は当時儂でなければ確実に仕留めていたじゃろうな。強くなっておったわ」

かっかっかと笑う夜一だが、聞いている方は笑い事ではなかった。二撃決殺と言うからには二回で確実に命を奪う何かだろうが、彼女は当時そこまで恨まれていた事になる。そんな相手と本当に和解出来たのか不思議でならない。

「口に出さねばわからぬ思いもある。まだ溝が埋めやすい今の内にしっかり話して修復せい。拗らせると儂や砕蜂のように難しい事になるぞ」

そういうとゴロンと横になりながら後は自分らでどうにかせい、とばかりに懐から取り出した本を読み始めた。尚、その本はレジェンドに強請ってソフトやハードと同時に買ってもらった『エンディングまで、泣くんじゃない』なあのシリーズの二作目の攻略本である。よく見つけたなオイ。

「……その通りにゃ。ちゃんと話さないとね、ここまでされたら」

「……黒歌姉様」

「最後まで聞いてほしいにゃ、白音。それからは白音の判断に任せるにゃ」

黒歌は夜一のように自分の……自分達の身に起こった事を聞かせた。白音こと小猫に仙術を使わせない約束で自分が眷属悪魔になっ

た事から始まり、自分が仙術を使った事で主がその力に魅入られ約束を破り小猫に仙術を使わせ馴染ませようとした事、それを防ぐ為に主を殺しはぐれ悪魔になった事。
　そして狙われている自分から遠ざける事で、小猫を危険から遠ざける為わざとグレモリー家に見つかるよう置いてきた事、最後に……この家の主に助けられ、駒を『還元』する事で元の妖怪へと戻る事が出来て今はその庇護の元、様々な者達と種族や生まれの垣根を越えて家族として暮らしている事を。ついでに「成層圏まで顔貸しな」発言は黙っておいた。気を失う間際の台詞がアレなのは小猫にもキツいだろう。

「それから夜一や皆と出会って、こうやって暮らしてるにゃ。知ってるとは思うけど、アーシアの救出にも夜一やカナエ達と一緒に参加したし」
「じゃあ、やっぱりあの時も……」
「……うん。あの後現れた怪獣にゴーデスとかいうのが関係してるのも、ウルトラマンの事も知ってるにゃ」

　そこまで関係者だったのは予め予想出来ていた小猫は最後に質問をする事にした。これを聞ければ自分の問題の全てが終わる。

「黒歌姉様……」
「何？白音」
「姉様は仙術で暴走したわけじゃないんですよね？」
「うん。私は暴走なんてしてないにゃ」
「本当に、私を……捨てたわけじゃないんですよね？」
「私だって……白音と離れ離れは嫌だったにゃ……だって血を分けた、たった一人の妹だもん……」
「グスッ……ヒック……姉様ぁぁぁぁぁ!!!」
「ごめんね……我儘だったよね……！今まで良く頑張ったにゃ、白音……!!」

泣きながら抱き合う姉妹は漸くお互いが望む結末を迎えられた。そして唯一それを見ていた夜一はやれやれと苦笑しながらも温かく見守っていた。

（ふむ……儂と砕蜂のように殴り合いにならんで良かったわい。ま、今は気がすむまで泣いておくが良い。これから行う修行の前に、出すものは出し切ってすっきりさせておくんじゃぞ）

☆

暫し泣きながら抱き合っていた黒歌と小猫が漸く落ち着き、二人は夜一に向かって礼を言う。

「あの……夜一、さん。今回はありがとうございました」

「最初はちょっと乱暴だったけど……結果として最良の形になったにゃ。ありがとう夜一」

「礼は要らんぞ。あんまりもどかし過ぎていつまでもズルズル先延ばしにされては、あ奴ではないがストレスで壊れそうじゃからのー。儂の精神的負担を考慮しただけじゃ」

「夜一らしいにゃ」

先程までの雰囲気からレジェンド一家のいつもの緩く賑やかな雰囲気に戻った二人。今の内にと思ったのか、夜一は二人に今回の修行について先んじて教える事にした。

「さて、二人が漸く歩みを合わせられそうなので言っておくかの。今回の修行は短期間しかなく、加えてグレモリーの娘っ子の未来がかかっておる。故にこの僅かな期間で成長を明確な形にしなければならん」

「……はい」

「故に形振り構っていられる状況ではない。儂と黒歌がお主の修行を受け持つ事になっておるが、此度の修行は命がけのものとなろう。儂らと約一週間……殺し合い(命のやり取り)出来るか？それが出来るなら修行をつけてやろう」

夜一の言葉を黙って聞いている小猫。その言葉は嘘でも誇張してもいないだろう。横の黒歌を見ても辛そうに俯いている。折角和解出来たのにこんな事をしたくない、と言うのが見て取れる。だが、彼女の答えは決まっていた。

「やります」

「……即答とはのぅ。かつて修行に付き合った一護(あ奴)を思い出すわい。して仙術に関して、少しは見方を変えられたかの？」

「……正直、まだ仙術を使うのは怖いです」

「そうじゃろうな。誤解とはいえ今まで姉が暴走した原因だと思っていたそれをいきなり使えというのも酷ではあるが……」

「実際ちゃんと使えないと暴走するにゃ」

「うぉい!?何でそんな大事な事を今頃になって言うんじゃ!!」

「だってだって！白音はきっと使うとか言わないだろうし使おうとしても私が止めればいいと思ってたから……」

「けど、黒歌姉様が教えてくれればきっと大丈夫です」

「「……はい？」」

少しだけ笑って小猫が言い切った。それに目が点の状態となっていた二人だったが、黒歌がいち早く正気に戻り小猫に抱き着き撫で回す。

「分かったにゃー！お姉ちゃんが手取り足取り教えてあげるにゃー！ちゃんと万全に使える様にしてあげるからねー!!」

「わぷっ……姉様、止めて下さい……」

「あー……そっちは問題なさそうじゃな。とりあえず、後は修行状況

を見て最終目的地は決めるかのぅ。長く話し込んでしまったが、こちらはその気有りとして話すから、周りから何を言われても安心せい」
「あ、そういえば話し終わったらリビングに集合って言われてたにゃ。このまま行くにゃ、白音」
「え？ちょっ……夜一さん助け……」
「面白そうなんでそのままで良いわ。では行くぞー」
「にゃん♪」
（ああ……夜一さんって姉様と似てるんですね）

ある意味一緒に生活したら二倍疲れそうな自身の師となる人物を見ながら小猫は溜息をついた。その顔は今までよりも穏やかで嬉しそうではあったが。
かくして修行の準備は整った。後は彼女らが問い掛ける夜一同様の質問に、リアスらがどう応えるかのみ―。

〈続く〉

一方、日本地獄―

「いつまで化けてんださっさと正体を現せこのクソ狸ぃぃぃ!!オラァ!!」
「ギィやァァァァァァァ!!!!!」

縁壱の予想通り、地獄の兎こと芥子に化け狸と勘違いされ無惨は徹底的にシバかれていた。

挑む覚悟と望む答え、強化合宿本格始動

一部を除くレジェンド一家とその関係者、そして一誠達がリビングに集合して暫く待つと、満面の笑顔で小猫を抱きしめながら撫でている黒歌と、困り顔だが嫌がっていない小猫、最後にそれを楽しそうに眺めながら夜一が入ってきた。

「すまぬのぅ皆の者、少々話し込んでしまったわ。替わりにこの娘の『答え』は聞いておいぞ。えー……小猫？白音？どっちで呼べばいいんじゃ？」

「白音！白音にゃ夜一！」

「あの……私は小猫でも……」

「どっちかにせんか。もう面倒じゃから合体して『白猫』でいいじゃろ」

「なーんーでーにゃー!!よくないにゃ!!」

「わかった。ならばあえてここは『シロ』でどうじゃ？」

「夜一さん、私の使い魔が同じ名前です」

「仕方ないのぅ……すまんの、お主の姉を尊重して白音と呼ぶ事にしよう。とりあえず儂は、じゃがな」

「大丈夫です」

……何あれ思いっきり仲良くなってない？この短期間に何があったの？そんな事を考えているリアス達だったが……

「なあ夜一、ここはこう呼ぶべきだろ。青眼（ブルーアイズ）の白（ホワイト）「お前がそれを言いたいだけだろう!!」げふぅっ!?」

モロボシ・レイトことゼロがある意味どこぞの白いのの渾名に出来そうな名前を言いそうになると、ゲンがそのスペックを活かしたドギツいラリアットを叩き込み意識を刈り取った。いや、何でそれ知ってんのレオ兄さん。

「……一人気絶しましたがとりあえず、役者は揃いましたね」

レオラリアットを受けて気を失ったゼロを一瞥し、卯ノ花は全員を見渡した。やはりというか、そこでリアスが疑問を口にする。

「貴女達が何者かを知りたいけど、それより先に聞きたい事があるわ。何故ＳＳ級はぐれ悪魔である黒歌が平然と暮らしているのかしら」

その言葉に黒歌はビクッとした。原作前エピソードでレジェンドも話していたが、まだ黒歌のはぐれ悪魔認定は取り消されていない。リアスや他の者が、もし黒歌がここにいる事を冥界に報告すればたちまち狙われるだろう。

……普通なら。小猫もその事を心配していたがそれを払拭するかのように卯ノ花がにっこり笑って答えた。

「何の事です？はぐれ悪魔は私達の家族に存在しませんが」

「だから！そこの黒歌というはぐれ悪魔は……」

「おい」

更に反論しようとしたリアスを止めたのはＣ．Ｃ．だった。一家の中で黒歌との付き合いが長いのはここに居ない三人、それに彼女とグレイフィアだ。彼女の生い立ちや過去の出来事も詳しく聞いている。

「お前達、ここに合宿とやらをしに来たんだろう？そんなレベルなのにこいつとやり合って勝てると思ってるわけじゃないだろうな」

「……何ですって？」

リアスのプライドに響いたのか、Ｃ．Ｃ．を睨むが彼女はどこ吹く風だ。

「そのままの意味だよ。生憎と私もある理由で不老不死でな。フェニックスだかフライドチキンだかの真似事くらいは出来る。だが私は直接やり合うタイプではないし、何より面倒だ」
「さっきから何が言いたいのかしら？」
「まだわからんとはな……私一人まともに倒せなさそうな連中が、そこの黒猫ツインズの片割れに勝てる訳がないと言いたいのさ」

相変わらずというか相手を挑発する事においてレジェンド一家トップクラスの彼女の態度と言葉でリアスは沸騰寸前だったが、それを落ち着かせようとしたのは小猫だ。

「部長、待って下さい」
「小猫……いくら貴女の頼みでもこれに黙ってるわけにはいかないわ」
「あの人の言ってる事、本当です。それに……」

小猫は卯ノ花や、夜一に連れて行かれた為に先程は会っていない縁壱を見た。本能で分かる……あの二人を敵に回してはいけない。たとえ三大勢力が手を取り合っても片方一人すら倒せるかどうかという途方も無い実力を秘めているのが有り有りと見て取れる。だが、敢えてそれは言わない。

「それに……黒歌姉様は、もう悪魔じゃありません」
「⁇小猫ちゃん、一体どういう事なんだよ？」
「もう姉様の中に『悪魔の駒（イーヴィル・ピース）』はありません。元通り、妖怪なんです」
「な……嘘⁉そんな事が……」
「あの方なら造作もありません」

グレイフィアがリアスに対して言い切った。それに続くように縁壱が言葉を紡ぐ。

「妖怪と言う事は即ち彼女は冥界ではなく、日本神話や日本地獄の管理下にあるという事。実際はあの御方の管理下というのが正しいが……彼女に何かあれば裁くという意味でまず日本地獄が動くだろう。もしかすると『彼』直々にやって来るかもしれん」
「彼……どなたですか？」
「閻魔大王第一補佐官として出向している我ら伝説九極天の一人、鬼灯殿だ。実際の立場で言えば、閻魔大王様より上になるのだがな。妖怪に戻った彼女を勝手にどうこうしようとすれば、恐らくはあの御仁を相手にする事になる」

ぶっちゃけ、レジェンドらを除きあの鬼神とまともにやり合えるのは卯ノ花と縁壱、この二人ぐらいだろう。アレは精神的に追い込む術まで会得している為、同じ九極天でも対抗できるのが限られているのだ。

「彼、もし戦う事になれば一切合切容赦ありませんから。武器が私達のような特別なものでない、只の金棒なのに威力が明らかに異常なんですよ」
「材質云々より鬼灯殿自身の力が大きいだろうな、あれは。ちなみに私があの方から連絡を受けて日本地獄へ赴いた時、無惨を金棒で一撃必殺していたのも彼だ。奴も抵抗していたが相手が悪過ぎる。その時、鬼灯殿が無惨に言っていた言葉だがな」

『今更蘇って何をしたいんですか。例えるならダークドレアムを圧倒した勇者パーティ相手に成長していないムドーが喧嘩吹っ掛けて瞬殺されるような扱いにしかならないんですよ、再生怪人なんて。王だなんだと言っても余程でもない限り悪党なんて倒されたらそこから這い上がるなど夢のまた夢です。というわけでお前も例に漏れずそれだからさっさと全地獄巡りに逝け』

「無惨が……雑魚怪人扱い……ぷっ……ふふっ」

カナエが必死に笑いを堪えているが、やはり堪えきれてはいない。例えが分かりやすかったのかゲーマーな黒歌と夜一も笑っていた。おそらく起きていればゼロも爆笑しただろう。縁壱も意味を知ってから大層笑ったものだ。

「まあ、話は反れてしまったが君達では鬼灯殿と戦っても勝ち目はない、絶対に。それに彼女の身に起こった出来事や此度の行動の理由などはあの方が既に纏めてあり、後日正式に冥界の上層部へと提出される予定だ。君達が判断するのはそれからでも遅くはないだろう」

「……わかったわ。ただし……」

「安心して下さい。何かあれば私達が対処しますので」

「ふにゅっ!?」

卯ノ花の瞳孔が開いているのは『変なマネは絶対にしないように』という警告だと知っている黒歌は、顔を青くしながら凄まじい速度で首を何度も縦に振っていた。その時出した声はちょっと可愛かった気がする。

とはいえ、今の彼女はこの生活を二度と手放す気はないだろう。レジェンドや卯ノ花にとってもすっかり家族の一員となった黒歌を理不尽な理由で渡す気は毛頭無い。

「さて、紆余曲折はありましたが本題に入りましょう」

卯ノ花がポンと手を叩いて一拍置き、漸く本題に入る。レジェンドが居ない間は彼女が代理として一家を取り仕切る役目を帯びるのだ。グレイフィアは補佐に秀でている為、レジェンドが居ない場合でも基本的に補佐役である。

「私達が何者か、それは知りたいと思いますが今回は我慢して下さい。

話す時は可能な限り纏めて多くの者に、そう我らが主には伝えられていますので」
「話さない、という訳ではないのですね？」
「それはもちろんです。仮に話そうにも肝心の主がここに居ません」
「その人は今どこに……？」
「慰安旅行のリサーチをしに京都まで行ってます。電車で」
「「「「慰安旅行のリサーチ!?しかも凄そうな人なのに電車!!??」」」」

そりゃ、目の前の人物らがとんでもないのにその主と呼ばれる人物があまりに庶民的過ぎて口も開くわな。

「帰って来るまで少々時間が掛かりそうなので、少なくとも合宿中は無理ですね。こちらに全力を尽くせるという意味でならある意味助かってるのかもしれませんが」
「それは……そうね。今か今かと待ち続けて特訓が疎かになるのは本末転倒だもの。それじゃ、いつから始めるのかしら？私達の用意は出来てるわ」
「その前に、貴女達に尋ねたい事があります」

子猫を除くリアス達は怪訝な顔をした。ここまできて何を尋ねるというのか。ただ一人、小猫は分かっていた。先程、夜一が自分にした質問と同じ事を問うのだと。

「貴女達はこの合宿中、私達と殺し合い（命のやり取り）を出来ますか？修行をつけるかどうかはそれに対する満足な答えが得られてからです」

リアス達は絶句した。命のやり取り……つまり、死と隣り合わせの修行だという事。それに対する満足な答えがあって始めて修行に入れるのだという事にはさすがに黙っていられない。

「何だよそれ！確かに俺達はレーティングゲームに勝ちたい！けど命

のやり取りなんて……」
「甘ったれるな!!」
『!!』

オカルト研究部だけでなく、卯ノ花を除くレジェンド一家の者や、縁壱さえも驚かせたのはゲンだった。その大声に気絶していたレイトも目を冷ました。

「生半可な覚悟で生半可な修行を行ったところで力や技、そして心が鍛えられると思ったのか!!お前達はそんな考えで相手に勝てると思っているのか!!」
「そ……それは……」

ゲンの……レオの言葉には重みがあった。自分が未熟だった頃、セブンやレジェンドに鍛えられ常に死ぬ気で特訓し、困難を打ち破り勝利してきたからこそ説得力がある言葉だ。卯ノ花や縁壱はその姿にまさしく『我らが主たるレジェンドの弟子』だと感動した。

自分達ならともかく、ライザーは彼らにとって強敵だろう。ちょっとやそっとの修行で付いた申し訳程度の強さで対抗できるわけがない。

「俺の師匠の言うとおりだぜ。それに……見ろよ」

レイトが指差す方向には、しっかりと前を見据えて表情を引き締めたカナエとアーシア、そして小猫がいた。

「あの三人、もうやる気満々じゃねえか。あとな、お前男だろ。いつまでもへっぴり腰してんじゃねえよ」
「っ……!」

カナエ達を褒めるように言うのに対して、一誠には挑発気味なのか

呆れ気味なのか分からない態度で言い放つレイト。彼もまたウルトラマンとして、レオやレジェンドに鍛えられて成長した。当時は悪態をつきながらも、負けん気を発揮して必死に食らいついていた。そんな彼だからこそこれからの修行に及び腰になる一誠を情けなく感じていたのだ。これなら自分(ゼロ)の弟子を自称するゼットの方がまだ根性がある。

「言いたいように言いやがって……！上等だ！やってやるよ！」
「……今の言葉に嘘はねえな？」
「当たり前だ！その鼻っぱしらをへし折ってやるぜ！」
「へぇ……言うじゃねえか。経験の差ってのを教えてやるぜド素人！」

レイト……ゼロが上手く挑発して一誠を乗せた。それに触発されたのかリアスや朱乃、木場にアーシアも覚悟を見せる。

「これは私の受けたゲームだもの。下僕が意気込んでいるのに私が引き下がるわけにはいかないわ！」
「いつか『あの人』に会えた時、誇れる自分でいられるように……ここで臆してはそれも叶いませんわね」
「僕も部長達と同じ気持ちです」
「私もシックルさんに言ったばかりなんです。自分なり頑張るって。だからやりもせず諦めたくありません！」

卯ノ花は目を伏せ、静かに口を開いた。

「……分かりました。貴女方の覚悟を信じ、私達が修行の面倒を見ましょう」
「そうと決まればまずは小手調べじゃな。この家の地下に行くぞ」
「ああ、やっぱり『勉強部屋』使うにゃ？」
「うむ。元よりあ奴もそれの使用を前提としてここの立ち入りを許可

したんじゃろ」
「黒歌姉様、夜一さん、勉強部屋って何ですか？」
小猫の疑問は最もだ。一誠なんて「ここまで来て勉強会するのかよ!?」と不満げだが……
「まあ、付いてくるが良い。儂監修による特別な所じゃ」
「作ったのはあの人ですけどねー。さあ行くわよ若人達！」
「はいっ！喜んでお供しますっ！」
「……ドスケベ先輩」
「マジで大丈夫かよ、こいつ……」
乱菊の言葉に鼻の下を思いっきり伸ばしながら返事する一誠に軽蔑の眼差しを送る小猫に、さっきの威勢は何だったのかと呆れるレイト。

☆

言われるままに、ものすごく適当な場所の床の下に作られていた階段……と梯子（人数が多かった時の場合用）を使って降りていくレジェンド一家＋αとオカルト研究部。縁壱やゲンなんかはゆっくりなのが煩わしいのかさっさと飛び降りてしまい卯ノ花やレイト以外がビビっていたが。
「いやホント何なんにゃ、あの二人……」
「安心せい黒歌。ここに居らぬ三人の内二人はポーズを決めながら飛び降りたぞ」
「おい夜一……その二人って絶対伝説と無限だろあの二人だろ間違いなく」
「当然じゃろ」
「あの……呼び方変えてますけどその人達って」

「アーシアちゃん、気にしちゃ駄目よ。あの方は時々ストレス発散に珍妙な事をするから。あの娘はそれを真似しただけなんだろうけど」

だって片方はあの二人の主だったり師匠だったりする立場だし。カナエの予想通り、たぶんそれにくっついてるもう片方は真似したのだろう。まあ、立場上ストレスが溜まりやすいのも納得なのだが。どっかの同格二名が原因で。

ちなみにストレスが限界に達したレジェンドと鬼灯が揃うと周りが震撼する。

『あの二人マジで容赦ねぇ』

ある九極天は他の同僚と怯えながらそう語る。

そうこう言っているうちに漸く最深部に辿り着く。後に別に転移装置があった事に脱力したのだが。夜一曰く「雰囲気」との事。

なお、飛び降りた二人は他のメンバーを待っていたのか縁壱に手伝ってもらいながらゲンが上体起こしをやっていた。マジでお前ら何してんの。

「ダメだわあたし。あの二人とトレーニングしたら一時間持ちそうにないわ」

「兄さん最近トレーニングにますます精を出してますからね。でも乱菊さん、頑張ればなんとかいけるかも」

「いやミライ、アレはそんな簡単なもんじゃないでしょ。その内地上から気弾放って『デデーン!』ってなりそうよ。絶対「手加減ってなんだぁ?」とか言うわよ」

「どこのブ○リーだそれは。否定しないが」

そこは否定しろよC・C・。確かにあの二人はそっちに出演しても生きていけそうだけども。

最深部にあった扉をくぐるとそこには広大な青空と大地が広がっていた。

「「「「「えええええ!!??」」」」」

カナエ以外のアーシアを含むオカルト研究部のメンバーは大いに驚いた。こんな地下深くに青空空間とか何の冗談だ。それを解説するように夜一が叫ぶ。

「かっかっか！驚いておるようじゃな童（わっぱ）ども！ここがかつて儂（＋α）が修行した場所を模して作られた通称『勉強部屋』！場所が場所故に騒音出しても近隣住民に迷惑がかからんからとあ奴が一気に三分で製作した力作じゃ!!」

「「「「「さんぷん!?」」」」」

「ちなみに青空はペイントじゃ。所要時間三秒」

「何者なのよその人!?」

これが普通の反応である。やはりというかどこかの龍神ははしゃいで壁に頭から突っ込んだが。

「今日からそのレーティングゲームとやらの当日まではここがお主らの修行場じゃ。周りはあ奴が特殊なコーティングをしておいたらしいから思いっきり暴れても問題無い。さて、早速じゃが先程言った小手調べをさせてもらおうかの。アーシアは……参加せんでよい。修行タイプが違うのでな。カナエを含むオカルト研究部とやら全員と「俺が相手をする」……アレ？」

ある意味死刑宣告だった。本当なら夜一を始め師匠役全員がそれぞれ一対一でやるはずだったのだが、ゲンが一人で相手をすると言い出したのだ。

「おおとり師範！
再起不能だけは勘弁して下さいよ!?」

かつての夜一と黒歌、そしてレイト（ゼロ）の惨劇を知る乱菊は滝のように汗を流しながらゲンに叫ぶ。あの時と違ってレジェンドが不在なのだ。止められる人物が……あ、縁壱と卯ノ花がいた。但し逆を言えばその二人しか止められそうにないというわけで。

いよいよオカルト研究部のレーティングゲームへ向けた特訓が始まる。圧倒的実力を誇る師匠達を相手に彼らは無事特訓を終える事が出来るのか。ぶっちゃけ死人が出てもおかしくないこの状況で、最初にして最大級の難関たるゲンことレオ対オカルト研究部メンバーの模擬戦が幕を開ける。

〈続く〉

一方、レジェンド一行。

「グスッ……置いて……行かれました……」

「レジェンド、戦乙女（ヴァルキリー）拾った」

「何でだァァァァァ!!?」

オーフィスがデカい迷子を拾ってた。

ゲンの実力、ジーッとしててもドーにもならないお仕事問題

ゲンがアーシアを除くオカルト研究部を相手取る事になり、既に双方共に準備は完了している。リアスらはさすがに相手がかなりの実力者であるのは理解しているのか、最初から一気に仕掛ける気でいるようだ。

「あの人がこちらに仕掛けてくる前に一気にケリをつけるわ。皆、いいわね？」

「はい、部長！」

一誠が返事をし、朱乃や木場も頷くが小猫とカナエはあくまで防御の体勢を崩さない。

「どうしたの二人共？臆していたら勝てるものも勝てないわよ？」

「違うんです、部長。さっき黒歌姉様に言われたんです」

『いい？白音……あの化け物相手に希望的観測は絶対にダメ！アレは私と夜一が同時にかかっても簡単に返り討ちにしてくるような規格外なんだから！命が危ないと思ったら必ず降参する事！別に恥でも何でもない、特訓前の模擬戦が原因でその日以降の修行が出来なくなるより全然マシにゃ！』

「……って」

「小猫ちゃんの言う事は本当よ。私が見た時は倒された後だったけど、その後すぐにゼ……レイトくんも倒されたわ。有り得ない音させながら」

「え？何だよあいつもやられてんじゃん！偉そうなこと言ってた割に大した事な「兵藤君」い……」

小猫やカナエの話の中でレイトが倒された事を聞いた一誠は若干調子に乗るが、カナエの迫力を持った一言で押し黙る。確かにやられはしたが、あの時は乱菊の質問に答えていたからだ。真剣に一対一でやり合えば簡単には負けないだろう。なにせレオとレジェンドの直弟子なのだから。

……生身でもどうにかなるのかは別問題だが。

「その時油断して負けてしまったけれど、レイト君の実力はここにいる誰よりも上よ。私より……かどうかは分からないけど（少なくとも人間体のままだと、だけどね）」

「え……冗談、ですよね？」

「イッセー、カナエもそこまでよ。どんな相手だろうと全力で倒すわ。私達の力を見せつけるわよ！」

「「はい!!」」

（……胡蝶先輩、ダメです。聞く耳持ちません）

（これ、明らかに逆に見せつけられてさっきまでの自信が一気にへし折られるパターンよね。私達はまず『倒れないように』しましょうか）

全く話を聞いていないのが丸わかりなリアス達に対し、小猫とカナエは更に防御を固めた。臆病と言われようが、正直一度でもゲンの攻撃を受ければ自分達は耐えられないだろう。

黒歌はもちろん、話の中でもその実力を窺い知る事が出来た夜一をも同時に相手してねじ伏せたという、おおとりゲンの実力を小猫は疑ってなどいない。その実力を直接目にしたカナエもそうだ。

そんな彼女らの忠告を無視する形で仕掛けるリアス、朱乃、木場、そして一誠。

「ハァッ!!」

木場が神器・魔剣創造（ソード・バース）で生み出した剣をゲンへと振るう。普通なら

避けるだろうが今や人間体なのに人間をやめてしまっているゲンに常識など通用しない。

「ダァァァッ!!」

「なっ!?ガハァッ!!」

なんと拳で剣を砕き折り、そのまま勢いを殺す事なく木場の顔面に叩き込み気絶させたのだ。まさに一撃必殺。

「ウソだろ!?俺の神器みたいな手甲とかも着けてないのに拳で刃物を砕くって何なんだよ!!」

「イッセー君、離れて下さい！」

動揺する一誠だったが、朱乃の言葉を聞いて反射的に後ろへ飛ぶとゲンへ凄まじい雷が落とされた。あまりの威力に落ちた辺りは広範囲が煙に包まれている。

「うわぁ……あれじゃ助からないんじゃ……」

「……さすがにやり過ぎでしょうか？」

……だが、その考えが甘過ぎた事をすぐに知る。

「イヤァァァァ!!」

今度は煙の中から無傷どころか雷を纏ったゲンが飛び蹴りの体勢で、それも異常な速さで朱乃に向かって突撃してきた。あの一撃を逆利用する有り得なさに驚愕しつつ、ゲンのサンダーキック（仮）が腹部に直撃し朱乃は弧を描くように吹っ飛ばされ地面に激突する。

「そ、そん……きゃあぁぁぁぁぁっ!!」

「あ、朱乃さん!!」

「朱乃ッ!?」

その衝撃で朱乃も気絶。あまりの出来事に意識を朱乃に向けてしまった二人だが、それが命取りとなった。朱乃に飛び蹴りをかましたゲンはその反動を利用して体を捻りつつ宙返りし、リアスの脳天へ凄まじい威力の踵落としを叩き込む。

「セイヤァァァァァ!!!」
「えっ!?あぐぅぅぅっ!!!」
「ぶ……部長ぉぉぉっ!!」

そのまま地面へと派手に叩きつけられ、リアスは気を失った。ここで漸く一誠は小猫とカナエの言葉が誇張されたものでないと気付く。目の前の人物は普通じゃない。

ゆっくりと一誠へ歩いてくるゲン。対して一誠はガクガクと足を震わせて動けないでいる。

「どうした。さっき啖呵を切った時の威勢はどこへ行った。遠慮なくかかってこい」
「う……あ……」

一誠の目の前にゲンが立ち、腰を落として正拳突きの準備に入る。

「攻撃させてやる。全力で打ち込んで来い!!」
「う……うおおぉぉぉ!!」

ゲンの一喝に赤龍帝の籠手(ブーステッド・ギア)で出来る限り倍化させてゲンを殴りつけた。ゲンはそれを顔面で受ける。

「!・や……やった「ディヤァァァァァ!!!」うぐあぁぁぁぁぁぁっ!!」

モロに入ったというのに全く効いておらず、効いたと思い油断した

一誠は正拳突きを逆に思いっきり叩き込まれて壁まで吹っ飛び轟音を立てて激突、他の三人同様そのまま気を失った。
小猫とカナエは大体予想通りだと思ったが、別の意味で戦慄している。何故なら……

「……コハァァァ……」
「ひいいいいっ!?」

なんかゲンの目がギピィィィンと光って口から白い息を吐いている。
何アレ完璧にターゲット見つけた捕食者の反応なんですけど。主役を張ったウルトラマンがしていい表情じゃないんですが。

「小猫ちゃん、今までありがとう。お姉さん、逝ってくるね」
「こ、胡蝶先輩！落ち着いて下さい！」
「花の呼吸・第二幕……壱ノ型第二節！」
「……！いよいよ来るかカナエちゃん!!」

ここに来て初めてゲンが期待の声を上げた。他のメンバーとは既に格が違うと分かるが、カナエ自身はゲンに敵うなど思っていない。ならば今の自分が最も得意な技でどれだけゲン相手に通じるか試したかった。だから、この技に全力を注ぐ。相対するゲンも、カナエを指導する縁壱もそれに気付いている。本気さを感じ取ったゲンはそれを敢えて正面から受ける気で待ち構える。
「景桜（かげざくら）・桜刃螺旋（おうじんらせん）!!」

かつてフリードに浴びせた『景桜』の夥しい花弁がカナエと日輪刀を高速回転しながら覆い、巨大な花弁のドリルというような状態となりゲンへ超高速で突撃する。
鋭利な刃となった何千何万もの花弁が回転しながら襲いかかってくる様は普通なら腰を抜かして降参するだろう。

だがこの男……いや、漢は違った。

「ふんッ!!!」

ズガガガガガッ!!

『え……えええええ!!??!』

なんと僅かにだが圧されつつも左手（しかも素手）だけで受け止めている。いよいよ人間としてヤバイ。無論行っちゃいけないところまで行ってしまったという意味で。

「凄まじい技だが……僅かに綻びがある。そこだァァァ!!!」

こんな状況なのに冷静で、しかも次はカナエのその技を拳で斬り開きながら突撃。卯ノ花と縁壱以外は「アレもう宇宙拳法とかそんな次元じゃないじゃん」とか途方に暮れだした。そう思っても仕方ない。

カナエはもうどうにでもなれと思ってとりあえず踏ん張ってみる。耐えられないだろうけど。しかし、そこで意外な動きがあった。

「はあぁぁぁっ!!」

「!!」

小柄な体格ゆえにカナエの大技と合わせてギリギリまで見えなかったが、カナエの背後に隠れていた小猫が飛び出してきたのだ。お互いがかなりの加速状態にあるが、角度的に小猫には当たらずゲンにはかなり良い角度で入るだろう。

黒歌や夜一が思わずガッツポーズを取る。

……が、もはや人外（おおとりゲン）にはそんな奇襲さえも通じなかった。

回避不可能かと思われた体勢から、拳を急速に引っ込め体を縮こませながらきりもみ状に回転しつつさらに加速し、今度はゲンの方がギリギリ小猫とカナエの間のスペースを通り抜け反対側へ着地する。

そして急旋回・急発進・急加速の三段重ね移動を見せ背後から二人

に飛び回し蹴りを見舞い意識を刈り取った。

「レイト……ってかゼロ。マジで何なのあんたの師匠。ベース人間でしょ。死神でも滅却師（クインシー）でも破面（アランカル）でもないでしょ。色々おかしすぎるんだけど」

「あのな乱菊、今のレオって俺も知らないくらいバージョンアップしてんだよ。見た目変わってないから分からないけど明らかに中身別の何かとフュージョンアップしちゃってんだよ」

レジェンド関係者しか意識を保っていなくなったので、遠慮なく本名で呼ぶ乱菊とそれに応えるレイトことゼロ。

そして冗談抜きでどっかのインフレバトル漫画にでも放り込まれて来たんじゃないかと思われるゲンことレオ。傷一つ負わずカナエまで混じったオカルト研究部をそれぞれ一撃で戦闘不能にするという、ライザーお前コイツ相手じゃなくて良かったなと思わざるを得ない結果になった。

その後、アーシアが六人全員を治療したがとんでもないもの（人外無双（レオフィーバー））を見たショックとたて続けに六人治療したため今度はアーシアが疲労で倒れてしまった。

☆

結局七人全員気絶したオカルト研究部の事をそれぞれの指導役に任せて、特訓に参加しないメンバーは仮住居からダイブハンガーへと帰って来ていた。特訓組がいない間の各種組織との通信や怪奇現象へと対処は今いるメンバーで行わなければならない。

ダイブハンガー残留組はグレイフィアを筆頭に、ヒビノミライことメビウス、C・C・、それから今は駒王学園にいる涼子だ。本来なら矢的もこちら側の予定だったが、顧問である以上、彼が残らないわけには行かないということでこのメンバーとなった。向こうはいざとなればジェントとシックルを筆頭としたハンターズギルドやギルド

ガードが手助けしてくれるだろうし。

「やっぱり、僕らだけだと広く感じますね。実際そうなんですけど」

「普段はあいつらが騒がしいからな。ただ、それがないと寂しい気分になるのは自分でも末期症状だと思うよ」

「C．C．様、寂しく思うのは私も一緒です。なので末期症状ではなくそれが今の私達の普通なんですよ」

「ふっ……そうだな。さて、グレイフィア、ミライ……の方でいいか。とりあえずレジェンドにでも通信を入れてみるとしよう。あいつは何かと貧乏クジを引くからな。案外とんでもない事態に巻き込まれてるかもしれんぞ？」

「いや、笑えないですよC．C．さん……」

「割と有り得ますからね……」

意地悪げに言うC．C．に対してレジェンドの不憫さを知るミライとグレイフィアは肩を落とした。

☆

一先ず舞台は京都のレジェンド一行へ。

今日は早めに泊まる場所を確保し、チェックイン開始時間まで当面の問題を解決する事にした。

……そう、オーフィスが拾って来た迷子の戦乙女（ヴァルキリー）の事である。どうやら北欧神話の主神オーディンの護衛として一緒に来たのだが、どうもその護衛対象が気まぐれを発揮して自分だけさっさと帰ってしまったらしく、行きが一緒だった為に帰る手段がないという。まさかのレジェンド並に不憫……というか不遇だ。

「さて、どうしたものか……」

「レジェンドよ、お主確か転送道具か何か持っていなかったか？」

「アレはそもそも無機物専用だしサイズが合わんだろ。テレポーテー

ション使うのも有りなんだろうがいきなり行って警戒どころか攻撃食らいたくないしな」
「いや、お主は食らう前に全滅させるであろうに……」
「グスッ……やっぱり……帰っても何か言われるだけで……私……私……うううぅぅ……せっかく大仕事任せてもらえたのに……」

本気で泣き出しそうな銀髪美人な戦乙女。それをオーフィスがよしよしと慰めている珍妙な絵図だ。

「……思い出した。この世界のオーディン、俺に喧嘩売ってきて最初のグングニル自分で駄目にしたあのバカだわ」
「……は?」
「いやーすっかり忘れてた。最初のグングニルって桁違いの傑作だったんだけど、それ持って調子に乗ったあのバカが俺に勝てる気になって不意討ち仕掛けてきたんだが……案の定俺のレジェンドプロテクトを突破出来なくてグングニルのエネルギーが逆流、お陰でグングニルは修復不可なほど木っ端微塵に吹き飛んでバカも重症。俺を狙った事で約五万年程日本地獄へ叩き落とされたんだよ」
「レジェンド、最初のグングニルって何?」

色々爆弾発言が飛び出て来た。スカーサハと戦乙女は固まっているが、オーフィスはくいくいとレジェンドの服の裾を引っ張って尋ねる。

「今あいつが持ってるのはまたやらかしてなければ二本目のはずだ。俺が作ってやった一本目と違って性能は爆下がりしてるやつだな。あの性能のものがホイホイ作られてもバカやる奴が出た時の対処が面倒くさいし」
「いやいやいやいや!!ちょっと待って下さい!え?グングニル二本目?貴方が作った??オーディン様が地獄送り??もう何が何だかわかりませんー!!」

「戦乙女に分かるように我が言う。つまりオーディンは今より強いグングニル作ってくれたレジェンドに、それで不意討ちして自爆したバカ」
「さり気なく最後を強調しおったな。完全に同意だが」
「ああ、ちなみに刑期が五万年と短かったのはな……俺が斬鉄剣で奴の股のモノを斬り飛ばしたら何故か温情が出たらしい。なんでも俺の名前や姿にトラウマが出来たそうで御するのが楽になったからとか言ってたな」
「我もＦＦ好き。帰ったらリメイク前のⅦやりたい」
「いっそアーシアやカナエが夏休みに入ったらその世界へ冒険にでも行くか」
「絶対行く。レジェンドや皆と一緒に」
「「行けるの!?というかオーディン（様）絡みで斬鉄剣使ったの!?」」

一誠が聞いたら本気で失神しそうな事をやらかしてた。男性の皆様は自分がやられているところは出来る限り想像しないで頂きたい。
なおこの刑罰、地獄ではトラウマを植え付けるのに最適の一つとされ、たった今無惨が鬼灯にやられた。

「……もしやと思うがそのオーディンとやら、お主の姿を見かけて慌てて逃げ帰ったのではあるまいな……」
「本来の姿ならそれも考慮したがな。この姿はあいつに見せた事ないしそれは有り得んだろう。殺気の一つでも出してりゃバレるかもしれんが、昨日みたいな事も起こってないし」
「レジェンド、スカーサハ。結局この戦乙女、どうする？我飼いたい」
「ペット感覚ですか私っ!?」
「んー……」

腕組みして唸りながら戦乙女の方を見てみると、うっすらと涙を浮かばせながら上目遣いで申し訳なさそうに見つめてくる。打算的なものではなく本気でお願いしている感じだ。そうだな……と何かを

決めた時、ある声が聞こえて来た。
「零さーん!!」
「ん？この声、しかも俺をそっちの名前で呼ぶのは……」
全員で声がした方向を向いてみると、青いジャケットを来た青年が大きく手を振りながら笑顔で走って来た。
「ふぅ……父さんから今は京都の方にいるって聞いたから、こっちで合流しようと思って。見つかって良かった～」
「合流……ああ、ゼットのフォロー役はお前か、リク」
「レジェンド、誰？」
「ああ、零さん以外は初めてだよね。僕は朝倉リク、銀河遊撃隊の一人だよ」
「おお！という事はウルトラマンか！」
「ご明察、スカーサハ。こいつはウルトラマンジード。遊撃隊総司令官ベリアルの息子だ」
「よろしく！」
表裏の無い笑顔で言われ、レジェンド以外の三人は信じるに足る人物と割とあっさり受け入れた。
「ついでにカップラーメンにはかなりうるさいカップ麺マスターだ」
「!!」
「いや、零さんその紹介はちょっと……あれ？」
苦笑するリクが視線を動かしてみるとオーフィスがキラキラした目で見ていた。
「我、オーフィス。美味しいカップ麺知ってる？」
「え？あ、うん。さっきあそこで買ってきたのがあるんだ。『これだ

！』って直感が働いて」

ゴソゴソと手に持っていた袋からラーメンを出そうとしたが、ある事……というか人物に気付く。レジェンド以外は二人と聞いていた。オーフィスとスカーサハの事は事前に伝えられているので確認といった感じだったのだが、一人分からない女性がいる。

「零さん……あの、この娘達は分かるんだけど……この人、誰？」

「「「あ」」」

すっかり忘れてた。彼女の処遇を決めかねてたんだった。それをリクに伝えたところ、簡単に答えた。

「ねえ零さん、彼女を雇う事って出来ない？」

「んん？」

「だって彼女って戦乙女とかいう役職だったんでしょ。だったら、今起きている事態が後々悪化する事に備えて、少しでも戦力は多い方が良い。幸い、性格とかは問題ないみたいだし」

「まあ、それはそうなんだが……」

「お願いしますっ！ちゃんとお仕事しますから！あ、でもでもお給金は少し多い方がいいかなー……と」

「……ちなみにリク、遊撃隊での給料は？」

「僕は各種保険や税金その他諸々引かれて手取りで……えーと、地球の日本円に換算して月収約８００万」

「はっぴゃっ!?」

戦乙女は驚くが遊撃隊としては平均的なのだ。なお、一番高給取りはティガ。なんと月収３０００万だ。その分仕事も多いが彼は平和の為に働く事を苦に思わないので問題無い。隊長のゼロは年齢や経験からちょっと下がるがそれでも月収２５００万。遊撃隊半端ねェ。ベリアル？ティガを超えて通帳がおかしい事になっているので気に

しない。
「でも零さんの……レジェンドさんのところはもっと凄いよね、お給金」
「!!」
「九極天の一人は……月収手取り1億２０００万だったな」
「い……いちおくにせんまんんんん!?」

まるで誰かのフルパワーの戦闘力数値みたいな額が飛び出て来た。戦乙女なんかへたり込んでいる。ちなみにこれ、鬼灯の給料だったりする。

「まあそれは最高給取りクラスだし、うちで住み込みだと各種施設なんかも使い放題だし、それを考慮して……」

何故か懐から取り出した算盤を弾いているレジェンド。そうして導き出された金額はというと。

「諸々手数料込みで月約７０万だ。ついでに副業でハンター業もしてるからそっちは出来高。あ、リクもうちの手伝い仕事に入るから給料こっちからも出るからな」
「え、本当？」
「な……７０万……しかもそれ色々引かれた後の手取り……」

ちょっと嬉しそうなリクはともかく、戦乙女は呆然としている。実はちゃんとグレイフィアや卯ノ花にも給料は入っているのだ。ただ、家族だから殆どを家計に入れてるだけで。
ハンター業でのプラズマソウル破壊で稼いだ賞金は全額各々の小遣いになる。そうなると直接戦闘参加していないメンバーはというと、ちゃんと行動によって査定が入り、それが自動的に金額換算されて賞金になるのだ。

例えるならアーシアは救命行為だけで一回のハンティングで３０万は稼ぐ。

「どうする銀髪美人。俺達の立場上、度の超えた危険もあるが「やりますっ!!」即答かよ」

「それに吾らの家は快適だぞ。プールに大浴場、トレーニングルームやレクリエーションルーム、プライベートルームなどの各種施設が使い放題だ」

「広くて大きくて楽しい。あと、賑やか」

「ただトレーニングルームには気を付けろ。時々バグキャラが出現する」

無論、おおとりゲン＝レオの事である。それを一撃で倒したお前は何なんだ。というかここにきて漸く一番大切な事に気が付いた。

「そういえば名前聞いてなかったな。さすがにいつまでも銀髪美人じゃアレだろ」

「あ、別に悪くはなかったんですけど……申し遅れました、私は戦乙女のロスヴァイセと申します」

「俺は光神零……はあまり呼ばれんな。本名はレジェンド。ウルトラマンレジェンドだ。世間じゃ光神様とか呼ばれてる場合が多いな」

「こっ……光神様ぁ!?あああああの私何か無礼な真似とかしてないでしょうかどうでしょうかあのあのあの」

「また壊れた」

「オーフィスちゃん、混乱はしてるけど壊れてないからね」

「また騒がしくなるな、レジェンドよ」

「ふっ……バカ騒ぎはもう既に我が家の名物だ」

その後、Ｃ．Ｃ．が寄こしてきた通信で二人の事を説明するとリクことジードは少し驚かれるだけで納得したが、ロスヴァイセには「また正妻候補が増えた……」と少しむくれ気味だった。

通信を終えるとレジェンド一行はリクとロスヴァイセを加えてリサーチを再開する。ご当地カップラーメンに突撃するリクとオーフィスや、百均ばかりに行きたがるロスヴァイセに振り回されながらも、二日目は順調にリサーチ出来た。彼ら側は無事にリサーチを終えられるのか……

特訓組、ダイブハンガー残留組、そしてレジェンド一行ことリサーチ組。各々がそれぞれの思いを持って行動する中、いよいよゴーデスだけでなく、根源的破滅招来体もその魔の手を地球へと伸ばす。

しかし戦うのはウルトラマンだけではない。この時のために開発された鋼の巨神が、光の戦士達を救うべく遂に起動する。

〈続く〉

オカルト研究部、それぞれの修行へ

「レジェンドさん！これ、こっち限定のラーメンだって！レジェンドさん家族多いし多めに買って送っておこうよ！」
「我も見つけた。期間限定品だって言ってた。レジェンド、我のお昼ご飯これがいい」
「あの、レジェンド……様？これ百円なんですか？ここにあるの全部百円なんですか!?凄いです日本！」

ケースごとカップ麺を持って来るウルトラマンと龍神（オーフィス）、百円ショップに感激する戦乙女（ロスヴァイセ）。正体を知っている者が見たら口をあんぐり開けるだろう。慰安旅行用のリサーチのはずが何故かスーパーに来ているレジェンド一行だった。ちなみにリクも『やっぱり零さんだとうちの隊長と被っちゃうし、こっちの方が馴染んでるから』という理由でレジェンド呼びだ。つくづく人間体名で呼ばれなくなる光神様である。

「なあスカーサハ。俺ら何でここにいるの」
「カップ麺と百均を同時に見れる場所と言われて辿り着いたのがここであろう」

光神（レジェンド）どころか真龍（スカーサハ）ももはや保護者枠と化している。あの後スカーサハも紹介し、現在慰安旅行のリサーチ中だから一緒にやろう、という事になりリクはもちろんロスヴァイセにもお小遣いとしてかなりの額が渡された。その際、本気で（もちろん良い意味で）泣かれたのは言うまでもない。

折角だからとレジェンドが会計し、リクの選んだカップ麺は駒王の仮住居……は許可が要る為、本日泊まるホテルに運び込んでもらい、自分達の収納ブレスレットに仕舞う事にした。オーフィスの選んだ物も今日食べる分を取り出して同じようにする。

ロスヴァイセは色々とこれから必要だから、と生活用品をある程度

百均で揃えていた。そこは別に良いのだが。

「レジェンドさんとロスヴァイセさん、ああして見ると普通に恋人とか夫婦に見えるよね……ってあれ？」

リクの言った言葉に反応したオーフィスとスカーサハが「う～」とむくれていた。ただし見た目は可愛いがリクには見えている。黒い蛇のようなドラゴンと白い毛に覆われたようなドラゴンの幻影がそれぞれの後ろに出ているのを。

（父さん……父さんが言った言葉の意味がわかったよ）

リクは出発前に父・ベリアルに言われていた。

『師匠の周りにいる連中もブッ飛んでるから頭に入れとけよ。特に師匠の家族はな』

確かにそうだった。オーフィスなんか自分の最強形態と互角にやり合えるかもしれない。あんまり刺激しないでおこうと思うリクであった。

とりあえず、今のところ彼らは平和である。

☆

一方、平和どころか一寸先は闇状態な修行組。オカルト研究部はアーシアによる治療後、カナエと小猫（あと入れ替わりで気絶したアーシア）以外は目を覚まして早々落ち込んでいた。人間だと侮っていた相手にそれぞれたった一撃で叩きのめされたのだ。しかも神器はおろか武器や魔力すら持たない相手に。

「マジで何なんだよあの人……倒す以前にどうやったらダメージ入るんだよあんなの……」

「いくら神器で創ったものだからって素手……拳でへし折るなんて明

らかに普通じゃない」
「私の一撃もかなり力を込めたのに無傷どころか利用されましたわ」
「私なんて最初に指示を出したっきり何も出来ないままやられたわよ……」

そんな四人に対してカナエと小猫は慰めて……いるわけではなく既にそれぞれの師の元、修行を開始している。
小猫はまず黒歌の指導で仙術をしっかり使えるようになる事から始めている。夜一による本格的な白打（格闘術）の修行はそれからだ。最終的にはあの技の修得が目的となる。
カナエは縁壱に師事し、最終的な目標はあの『日の呼吸』を体得する事とした。その難易度は他者に比べて圧倒的に高いが、カナエ自身がやる気であり縁壱も今の彼女ならと僅かな可能性に賭ける事にしたのだ。もし会得する事が出来たなら、おそらくは対フェニックス用最強の切り札となるだろう。
そしてさらに驚く光景をリアス達は目にする。

「ドリャアアアアアア!!」
「ディヤアアアアアア!!」
ドオオオオオオン!!!

なんと自分達を一撃で倒したゲンと、一誠が軽く見ていたレイトが空中で蹴りをぶつけ合っていたのだ。
その反動で互いに後方に一回転しながら着地し、さらに再接近するとお互いへの激しい拳と蹴りの応酬が始まる。
しかも自分達の攻撃はノーガードだったのにレイトの攻撃はしっかり受け止めたり防御したりしていた。

「ちっくしょう！何で一発一発がこんなバカみたいな重さになってんだよ!?」
「為せば成る！３０倍努力しろ!!」

「いやそこは3倍じゃねぇのかよ!?て言っても3倍努力しただけじゃこうはならないよ……なっ!!」

ゲンが放った回し蹴りをバク宙で見事に躱しながらレイトは距離をおき再び構える。本気かつ全力で向かってくる成長した弟子(レイト)に、師匠(ゲン)もどことなく嬉しそうだ。

リアス達は全員で掛かっても出来なかった事をたった一人でやっているレイトを愕然とした表情で見ている。

「……嘘」

「胡蝶先輩の言ってた事……マジだったのかよ」

言葉をかろうじて発したのはリアスと一誠だが、木場と朱乃も口を開けたまま呆然としている。この『勉強部屋』へ来る前に、彼が一誠に向かって言った「経験の差ってのを教えてやるぜド素人!」の言葉はまさに彼ら全員に向けた言葉だった。圧倒的にレベルが違う。

当然だろう。彼はウルトラマンとして、磁気嵐の吹き荒れる星で、動きを阻害するテクターギアを装着した上でレオやアストラ、そしてレジェンドと何年にも渡る過酷な修行をこなし、遊撃隊隊長になってからも想像を遥かに超える任務を仲間達と解決してきた『若き最強戦士』。

リアス達とは修行の難度や積み重ねた量、さらに何より実戦経験が桁違いなのだ。それもレーティングゲームなどではない、それこそ宇宙を背負って戦った事もある。

さすがに彼らにそこまでは要求しないが、それだけの実力があるレイト……ゼロと張り合うなどおこがましいにも程がある。

ゲンとレイト、お互いが相手に対してどう攻めるかと考えながら一定の距離を保っていた時、視線を感じて二人が同じ方向を向くと目覚めたオカルト研究部のメンバーがこちらを見ていた。二人は構えを解いて彼らのところまで普通に歩いて行くが、オカルト研究部はビクッとするだけで動こうとしない。

「なんだよ、目を覚ましたなら声くらいかけろよな」
「あ、いや……修行中、みたいだったし……」
「あのなあ、今回の修行は俺じゃなくてお前らの為の修行だろうが。そんなところで遠慮してどうすんだよ」

言い訳する一誠に対して呆れたようにレイトが言う。実際カナエと小猫は早く目を覚まし、すぐに修行に取り掛かったというのに。

「どちらにせよ、目を覚ましたなら早速修行に入るぞ。時間は限られているんだからな」

ゲンの言葉に「もう少し休憩を」と言いそうになったオカルト研究部の四人だが、意見しようものならまた地獄模擬戦に突入しそうなので口を噤む。

丁度揃ったところでアーシアも目を覚まし、先に修行していた二人も師達と共に一旦集合した。

小猫は息が荒いもののただの修行疲れだろう、黒歌が背負いながらやって来たが、どうもカナエの方がおかしい。

「げほっ！ごほっ！ごほっ！はぁ……はぁ……」
「ちょっと！カナエは大丈夫なの!?」
「げほっ……大丈夫よ、リアス……修行方法が特殊なだけだから……ごほっ！」
「大丈夫には見えませんよ！おいあんた！胡蝶先輩に何したんだ！」

一誠はカナエを指導していたであろう縁壱に食ってかかるが、当の縁壱は涼しい顔だ。レイトに至っては「何言ってんだコイツ」と先程より呆れている。ゲンもそうだが、それよりも彼は縁壱の修行に必死に付いて行こうとするカナエに優しい声と表情で「諦めるな、頑張れ」とエールを送っていた。カナエにもそれはちゃんと伝わっており、

弱々しくも笑顔で頷く。
　そんな光景を微笑みながら見守りつつ、縁壱は厳しい目を向けてくる一誠やリアスを一瞥して言い放った。
「彼女が望んだ事だ。今まで使用していた呼吸法を一時的に封印し、新しい呼吸法を会得する。それも私にとっては当たり前に出来るが、普通なら最困難と言われている呼吸法『日の呼吸』を。その為にはまず肺を鍛える事から始めるのだが、彼女の場合は花の呼吸に特化していた為、それを日の呼吸も使えるようにするには相当の努力が必要となる。花の呼吸を第二幕まで進化させた事で出てしまった予想外の弊害だな」
「なるほど。つまりカナエちゃんが自分なりに強くなり、体がそう出来上がってしまったのが裏目に出てしまったのか。普段なら悪い事ではないが、今回はタイミングが悪すぎたな。時間的に間に合うかどうか。彼女はいけそうか？縁壱さん」
「ああ、ゲン殿。彼女の意思は堅い。極めるまでは行かずとも、約半分は型が出来る様にするつもりだ。無論、本気で危険だと思えば中断するが、彼女の意思を尊重したい」
　ゲンも縁壱もカナエの決意を無駄にする気は無い。元より命がけの修行だと言われているのだ。今更引き返す気は師である彼らも教え子同様に無かった。
「ふぅむ……あ奴らもかなり力を入れておる。儂らも負けておれんのぅ？黒歌に白音よ」
「当然にゃ！レーティングゲームで一番活躍するのは私の可愛い可愛い可愛い可愛い妹の白音にゃ！」
「可愛いって……言い過ぎです……姉様」
　ふぅふぅとまだ息は整っていないが、小猫もまだまだやる気だ。黒歌はここぞとばかりに小猫を推しまくっている。夜一から「変なとこ

ろでプレッシャーをかけるでない」と軽くチョップを貰っていた。
「夜一さん、彼女の最終目標は俺に見せた『あの技』だな？」
「左様じゃ。お主には効かなかった……というか当たらなかったがのう」
「あれは当たったら只では済まないからな、一目でわかった。だから当たる前に決着をつけたんだ」
「おお！聞いたか白音！こやつのお墨付きをもらったぞ！」

これにはオカルト研究部も絶句した。あのゲンが当たると只では済まない、と言う技を小猫に修得させようとしている。カナエに続き求める修行のレベルが違う。

「これで分かっただろ。あの二人はこの修行期間中に今より何倍も強くなろうとしてんだよ」
「「「っ……！」」」
「今からでも遅くねぇ。甘えを捨てて文字通り命がけで修行に挑むか、それとも尻尾巻いてとっとと帰るかこの場で選びな。時間は限られてんだ」

今だ温すぎる考えの四人を突き放すかのようにレイトは言う。だが、彼の言う通りライザーは付け焼き刃程度の戦力増強で勝てる相手ではない。とはいえ黙っていられなかったのが一誠だ。見た目自分と同年代らしきレイトにここまで言われてそのまま「はい分かりました」と言える訳がないようだ。一応、ウルトラマンの年齢としては地球人に換算すると同年代と言えるのだが……

「今の今まで聞いていれば好き勝手言いやがって！ちょっと腕が立つのは認めるけどな！お前はそこまで言える程の実力なのかよ!?」
「だから言ってんだよ」

あっさり吐き捨てられた。ますます一誠の怒りは上がっていき、二人を知るアーシアはおろおろしている。そんなアーシアを安心させるように、彼女の指導役の卯ノ花が提案した。

「では、今から二人で一騎討ちをしてもらいましょう。その方がお互い実力が分かって良いでしょうし」

「ああ！望むところですよ！散々バカにされたんだ、こいつは一発ぶん殴ってやる！」

「神器（それ）でかよ。そんなんだからお前は弱いままなんだよ」

「んだと!?」

「そこまで。審判は……そうですね。カナエさんが回復するまで時間がかかりそうですし……縁壱殿、お願い出来ますか？」

縁壱は問題無いと了承する。……がゲンと一緒にスクワットしながら言うのはシュールでしかない。お前ら体動かしてないとダメなのか。

「では……制限時間は無し、勝敗は相手が降参か戦闘続行不可能になるまで。よろしいか？」

「ああ、それでいいぜ！」

「……ったく、なんで俺はともかく縁壱に敬語使わないんだよ。師匠側の立場なのによ」

正直、一誠はレイトの眼中にない。自分の修行なら小猫と打ち合った方が良いだろうし、本気でやるならカナエの方が手応えありそうだ。ハッキリ言えば結果が分かりきって時間の無駄にしかならないのだ。

「それでは……始め！」

「行くぜ赤龍帝の籠手（ブーステッド・ギア）ァ!!」

Ｂｏｏｓｔ！

「やっぱりな。お前、結局それ頼みじゃねえか」
「うるせえ！食らいやがれスカシ野郎！」

一誠はレイトを左手で殴り飛ばそうとするが、レイトはそれに対して右手の拳で対抗した。

ドガァン!!!
「うぐあっ!!?」
「「イッセー（君）!?」」

神器による倍化させた一撃と拳で打ち合い、一方的にレイトが一誠を吹き飛ばした。ゲンはそのまま顔面で受け止めて平然としていたが、レイトは力の差を理解させる為に敢えて一誠と同じ動きをしたのだ。

「ハナっから神器に頼りきり。そんな他人任せと同じような戦い方で強くなれるわけねえだろうが！」

レイトはその言葉を皮切りに、一誠へ攻撃を仕掛ける。それも、腕に神器を着けていない右側へ。一誠は咄嗟に右腕で防御するが……

ゴキィッ!!!
「うあああぁぁぁっ!!」
「イッセーッ!!」

レイトの強烈な蹴りによる一撃は、一誠の防御した右腕を容赦無くへし折った。あまりの激痛に一誠が叫び、リアスは悲痛な声を上げる。

「武器を使うのは悪くねえ。俺も使うからな。だが頼りきるのはダメだ。いざ戦いとなった時に『武器が無かったから勝てませんでした』

は通用しないんだよ。お前自身が強くならないでどうすんだ！神器がいつだって使えると思ってんじゃねぇ!!」

今の一撃は赤龍帝の籠手でなら受け止められたかもしれない。だが何の装備もない右腕で防いだ途端これだ。優れた道具を持って天狗になった者が現実を突き付けられた瞬間とも言える。ゲンがレイトを援護するかの様に言い放つ。

「武器に頼れば隙が出来る。最後に頼れるのは己自身だ」

まさに至言。過酷な修行の元、己の体一つで困難を乗り越え続けて来た者だからこその言葉。ウルトラマントなどを使う時もあるが、決めるのはいつだって己自身の技だった。この世界に生きる者は神器に頼り過ぎる。実際、レジェンドによってやられた英雄派の者達も神器に頼り、それを消滅させられた途端に呆気なく壊滅させられたのだ。

「……勝敗は決した、と見ていいかな」

「ああ、悪かったな。茶番じみた真似を見せちまって。カナエもすまねぇ、師匠との大事な修行時間を取っちまった」

「ふぅ……ふぅ……そんな事ないわ。少しでも休めたし、今の言葉は私にも効いたもの」

「いや、カナエの場合はそもそも剣士だろ。精々どんな剣でも同じように、ってならわかるけど拳で『花の呼吸！』とかやり出したら本気でビビるぞ俺。勝てる気しなくなるっての」

先程までの威圧的は雰囲気とは真逆な、いつものレイトらしい明るい空気を纏った彼にカナエも笑う。その後、少し笑えない一言がゲンの口から聞こえて来た。

「……獅子の呼吸……」

「「??
!!」」
「冗談だ」
「「冗談になってないんですけどソレ!?」」
「……なるほど、獅子の呼吸か。語呂も良い」

ドヤ顔のゲンにカナエもレイトも敬語になってツッコんだ。この男ならマジで出来かねない。そして縁壱は本気でやらせようとするな。

「何はともあれ、彼の実力はわかったでしょう。アーシアさん、一誠さんの治療を」
「は……はいっ！」

アーシアに一誠の治療を任せ、卯ノ花は全員を見渡して頷くと今度こそ修行を受ける者とそれを指導する者を説明する。

「では、改めて説明させて頂きます。カナエさんと小猫さんは知っての通り縁壱殿と黒歌さん、夜一殿に。続いて木場さんは」
「私が務めさせて頂きますよ」

ぬっ……と現れたのは七星剣の一人にしてレーティングゲームの調整期間を設ける交渉をしてくれたメフィラス星人ジェント。いつの間にか入り込んでいたらしい。

「最初は乱菊さんが務める筈でしたが、彼の場合は刀ではなく剣ですからね」
「と言ってもジェントさんのソレ、剣というか大剣じゃないですかー」
「ハッハッハ。そう言わないで下さい乱菊さん。外部からの視点でアドバイスをお願いしますよ。直接打ち合うだけでは気付かないところもあるものです」

相変わらず物腰の柔らかい紳士だ。……修行中はそうもいかないだろうが、剣士としては七星剣から指導を受けるなど願ってもない事だろう。

「ジェントさん、乱菊さんも、どうぞよろしくお願いします！」
「はい。礼儀正しくて結構です。あのフェニックスの問題児もこの子を見習ってくれればいいんですがね」
「無理じゃないですか？それ。ま、とりあえずよろしくね」

どうやら相性はそう悪くなさそうだ。案外化けるかもしれない。

「それからアーシアさんと朱乃さん。二人は私が直接面倒を見ます」
「はいっ！卯ノ花先生！」
「はい、私も異論はありませんわ」
「二人とも素直でよろしいですね。安心して下さい。これでも九極天の一人です。片方を疎かにするような真似はしませんよ」

そして卯ノ花が残り二人……最も鍛えなければならない人物達の指導役を言う。

「一誠さん、分かるとは思いますが、貴方の指導にはゲン殿とレイトさんが担当します」
「へ？俺も？」
「はい。同年代がいた方が張り合いも出るでしょうし」
「はぁ……あんたに言われたら断れないだろ」

ありがとうございます、という卯ノ花に対して仕方無いと頭を掻きながらレイトは承諾する。一誠が言う事を聞かない場合もあるが、その時はその時だ。

「……はい」

当の一誠は先程の事が尾を引いてるのか覇気がない。マジで大丈夫かコイツ、と思いながらもレイトはゲンと修行メニューの打ち合わせを始める。

「そしてリアスさん、貴女の指導相手はグレイフィアさん……と言いたかったのですが、知っての通り彼女には別の事を担当してもらわなければならなかったので、彼女が立候補してくれました」

「彼女……誰、ですか？」

「私だ」

そう応えるのは、アーシア救出作戦の折に遭遇したハリベルだ。いつもの口元まで隠れた戦闘服を纏い、腕組みをしながらリアスの前に現れた。

「っ！貴女はこの間の……」

「ティア・ハリベル。お前の指導は私が務める」

「ちなみに矢的殿には顧問として各員の様子を随時見て回ってもらいます。後は外部との連絡係も兼ねて頂きますが……」

「僕は大丈夫ですよ。生徒が頑張っている以上、僕も体を張らないと！」

「助かります。外で問題が起こらないとも限りませんから。彼らがいてくれるとはいえ、不測の事態にも備えなければなりません」

一応、有事の際にはメビウスが対処する事になっている。それに今は京都にいるとはいえ、いざとなればレジェンドが直々に出張る事も出来るし、まだ京都組しか知らないがジードも合流しているのだ。さらにダイブハンガーには唯一アレを起動し、戦闘行動が可能なC・C・もいる。万全の体制を整えているが何事にも予想外は付き物だ。

こうして各々の指導役の元、オカルト研究部の強化合宿は正式に始まった。その頃のライザーとその眷属はいうと、シックルに負わされ

た傷を癒やすという名目でのんびりしつつ、カナエ『のみ』に対策していた。
だが、彼らは気付く筈もなかった。
その対策すら何の意味も持たない程、カナエが……否、オカルト研究部が光神一家（バケモノ）と協力者達によってレーティングゲーム当日にはとんでもない強化を果たしている事に。

〈続く〉

合宿初日の夜、京都に起こる怪異

修行期間中の組み合わせを発表し、それぞれと改めた顔合わせが終わってから、とりあえずその日は仮住居の方へ戻った。ジェントはハンター達の生活する秘密基地へと。

「本格的な修行は明日からだ。それに備えて各自、今日は休息を十分に取って英気を養うように。昨日から十日後、つまり今日を含めても九日しかないが、明日から六日間で修行を完成させ、七日目で最終調整。八日目は完全な休息日とし、決戦日である九日目を迎える事とする。俺も含め各々の師が急ピッチで行うからな。改めて覚悟を決めろ！以上だ！」

ゲンの気合いの入った一言でそれぞれ休む為の行動に入っていく。ゲンはそれを確認してから、宛行われた自室にてある作業に入る。

小猫は黒歌や夜一と一緒に風呂へと向かった。というか黒歌に連行された。くたくたになっていた小猫はご機嫌な黒歌に抱えられて風呂場へ消え、その後を追うように夜一も風呂場に入っていった。

縁壱は一度、妻・うたと我が子の居る惑星レジェンドへと帰った。明日から八日間こちらで修行をつける事を伝え、それから愛妻子パワー（仮）を充填する為らしい。

カナエは他の者が譲ってくれたので軽くひとっ風呂浴びた後、スポーツドリンクで水分補給してすぐに寝てしまった。布団に入って即座に寝息が聞こえたので、相当疲れていたのだろう。同時に誰よりも明日の修行に備えているとも言える。

乱菊はいつも通り軽く晩酌、卯ノ花はそれを飲み過ぎないように見張っている。直接的な修行に関与しないとしても、アドバイス係として携わる以上二日酔いなどさせるわけにはいかない。卯ノ花自身は既に指導方針は決めてある。

木場と朱乃も入浴後、すぐに布団に潜った。お互い、指導役が七星剣と伝説九極天という規格外の大物だ。生半可な特訓ではないだろ

うと、眠るまではイメージトレーニングしていた。
ハリベルは和食のレシピ本を見ていた。マイペースといえばマイペースだが、変に張り詰めるよりは自然体の方がいい。自室でペラペラと捲っては付箋を貼ったりと、ある意味修行よりも熱心だ。
レイト……ゼロは布団に入りながらも考え事をしていた。今のままだと、一誠は途中で挫折する可能性もある。正直言って自分にはその時どうすればいいのかわからない。引き止めるべきか、突き放すべきか。そして暫くして今考えてもどうしようもないと、大人しく眠る事にした。
リアスはレーティングゲームの戦力を考えようとしたものの、既に当初の予定より明らかな変化を見せつつあるカナエや小猫を目の当たりにして、今戦略を立てても強くなったこちら側がそれを自ら崩してしまうかもしれないと思い、自身も明日からの特訓に備える事にした。戦略を立てるのは七日目の最終調整が終わってからの方が良いと確信して。
一誠はやはり悩んでいた。神器を使ったにも関わらず、ゲンとレイトに二連敗した。それも圧倒的大敗とも言える形で。悪魔に転生したとはいえ、元々ただの人間だった自分が明日からの特訓に付いて行けるのか。不安ばかりが大きくなりそれに押し潰されそうな気がしつつも、一誠はとりあえず布団に潜り込んだ。
最後に、アーシアだが……

「……って言う事があったんです」
『なるほどな。個人的にはカナエがどれだけヤバくなるかが気になるが……黒歌が無事に妹と和解出来たのは一安心だな』
「はいっ」

京都のレジェンドと電話していた。その会話の中で妖怪母子を助けたのはともかく、ロスヴァイセが今度から一緒に暮らす事になるのはちょっとムッとしたものの、またデートの時間を確保する事で手打ちにされた。加えて……

『あれ？レジェンドさん電話してるの？もしかしてゼロと？』
『いや、先日俺の家族になった子だ。今日教えただろ、アーシア・アルジェントって娘だよ』
『ああ！レジェンドさんが言ってた凄く健気な良い子！』
「はわっ!?」

突然聞こえて来た男性の声と、その声の主によってレジェンドが自分を褒めていた事を聞いてしまい真っ赤になるアーシア。

『リク、今のでアーシア絶対真っ赤になってるぞ。どうすんだ会話続かないだろ』
『あれ!?僕のせい!?』
『ダイレクトに褒められるのが恥ずかしいんだよ、アーシアは』
『あ～なるほど。あ、レジェンドさんの携帯から失礼してるけど、僕は朝倉リク。ウルトラマンとしての名前はジード！よろしくね、アーシアちゃん』
「あ……はい！アーシア・アルジェントです！」

何気に修行組やダイブハンガー組で最初にリクことジード（とロスヴァイセ）がレジェンド一行に合流したのを知ったアーシアである。

『さて、俺としてはもう少し話していたいところなんだがな。リサーチついでに調べなければならん事が出来たのでアーシアには先に伝えておこう』
「……？何か、あったんですか？」
『ああ……どうやら俺達がスーパーに入っている間の話らしいんだが……「天使を見た」らしい。それも京都の街の住人が大勢見られるほど巨大な、それこそビル並の大きさだと』
「ええっ!?」
『うん、僕も聞いた。僕達はちょうど建物の中心かつ地下に居たから

それが現れた時に見る事出来なかったけど。たださ、天使ってそんなに大きかったかな……って』

ここに来て、妙な事が起こった。確かに以前、堕天使レイナーレがゴーデス細胞によってゲルカドンへと変容し巨大化した事はあったが、天使のままそんなに巨大、しかも今のご時世堂々と街のど真ん中に出現するものなのか？

「それは……おかしいです。天使様は私が教会にいた時に何度かお会いした事がありましたけど、そんな大々的に人前に姿を表す事は殆どありません」

『だよね。アーシアちゃんの事情はレジェンドさんから聞いてるし、辛い事を思い出させちゃって悪いけど…教会に所属してたアーシアちゃんから聞けて信憑性が増したよ。たぶん、『それ』は天使じゃない』

『ああ。かつて俺がＧＵＴＳに所属してた頃に起こったある事件と酷く似ているが、どちらにせよ調査してみない事にはなんとも言えんからな』

「そう、ですね……レジェンド様もリクさんも、どうかお気をつけて」

『分かってるさ。アーシアも修行、頑張ってな』

『今度は僕の方からも電話するから……ってしても大丈夫？レジェンドさん』

『おいリク、ニヤニヤしながら俺に聞くな』

そんなやり取りにリクの顔を見た事はないものの、その様子が目に浮かぶ様でアーシアはくすくす笑った。

『やれやれ……それじゃお休み、アーシア』

『またね、アーシアちゃん』

「はい、お休みなさい。レジェンド様、リクさん」

そういうと電話を切った。アーシアは二人やオーフィス達を心配しながらも、離れて一日しか経ってないとはいえレジェンドの声を聞いた事で安らかな気持ちで眠りに着けるのだった。

☆

レジェンドはアーシアとの電話を終え、まさかの男女合同の大部屋に宿泊する事になった部屋ではしゃいでいるリク以外のオーフィスら三人を呼んで話を始めた。ちなみに先日に続き和風旅館なので、皆それぞれ布団の上に各々リラックスしている。いや、オーフィスは胡座かいてるレジェンドの足に座ってきたが。やっぱりリクはニヤニヤしている。

「相変わらずモテモテだね、レジェンドさん」
「お前が言うか？光の国で功績が認められて表彰されて以来、やたらと地球人と似た姿の宇宙人の女性と縁があるくせに」
「へぇアッ!?」
「あ、やっぱり。そうなんじゃないかと思ってました」
「人当たりも良いし、危険とはいえ安定した職もある。色んな意味で狙われるな、確かに」
「でも、だからってレジェンドに走るのは駄目」
「ロスヴァイセさんとスカーサハちゃんはともかくオーフィスちゃんは何故そんな変な方向に解釈してるの!?」

まさかの斜め上の意見を言うオーフィスにツッコミを入れるリク。ゲン以外はツッコミ属性持ちなのか、今この世界の地球にいるウルトラマン達は。その筆頭が我らが主人公なのだが。

「まあ、冗談の言い合いはそこまでにしてだ。明日はリサーチもそれなりに、今日現れたという『天使』の聞き込みをするぞ。……と言っても、粗方予想はついているがな」

「さっきも言ってたけど、ＧＵＴＳ……だっけ？レジェンドさんがそこにいた時に似た事件があったって」
「ああ。それに関してはティガがよく知っている。俺とその場に居合わせているからな。その『天使』もどきは昼間しか見られんだろうが……俺の予想が当たっているなら、おそらく連中が表立って行動するのは日が暮れてからだ」
「天使が昼間っていうのは分かりますけど、どうしてその原因が行動するのが夜なんですか？まさか、その天使は悪魔の仕業……とかじゃないでしょうし」
「いや、ロスヴァイセの予想は概ね当たっている。喩えになるが連中は『悪魔』で差し支えない」
「「「え？」」」

レジェンドの発した言葉に四人が呆気にとられた声を出す。ロスヴァイセの予想したそのまさかだと。
しかし、喩えだとしてもレジェンドが悪魔と言う連中とは何者なのか。
そこでリクはティガがよく知っている、という点を加味して再考する。普通の怪獣ならともかく、こんな不可解な現象を起こしてくる奴らなど草々いる訳がない。しかも明らかに知能犯だ。
「レジェンドさん。これ、この世界の悪魔どころか怪獣の仕業じゃない。宇宙人か、それに準ずる奴の仕業だよね」
「その通りだ、リク。当たって欲しくはないが、十中八九今回の騒動の犯人は『キリエル人（びと）』だ」
「キリエル人……？悪魔なのに人とはどういう事だ？」
「……我は聞いた事がある」

そこで驚きの言葉がオーフィスから発せられた。彼女がキリエル人について知っている。それに驚く三人だが、レジェンドは納得していた。キリエル人がどういう存在なのか理解していれば、今回の事件

がこの世界に元々いたキリエル人によるものだとするとオーフィスが知っていても不思議ではない。

「アトランティスを作ってかつて人間を支配していた未知の存在。我も詳しくは知らない。スフィンクスやモアイ像、ナスカの地上絵っていうのを作ったとも聞いた。どんなものか見たのはこの間のテレビでだったけど」

「えええ!?」

リクやロスヴァイセはさすがに声を上げる。スフィンクス等は一緒にテレビにかじりつくように見ていたから理解出来るものの、アトランティスが何なのか分からないスカーサハには「夜遅いのだから静かにせぬか」と窘められた。もっとも二人はそれどころじゃないが。

「アトランティスって伝説の都と言われてるあの!?」

「ていうか他のも有名どころか知らない人が珍しいくらいのやつだって!!」

「あくまで奴らが言っていた事だから真相まではわからんがな。正確なのは奴らが太古の昔、少なくとも中世の頃には地球に侵入していたとされる精神生命体だという事だ。エーテル体と言う方がいいのかな」

オーフィスに続けるようにレジェンドが語る。アトランティス云々はともかくとしても、現在この地球に住んでいる宇宙人達よりもずっと前から存在している地球外生命体と言うのはやはり驚愕するしかない。

「あれ?でもレジェンドさん、『俺の年齢は５０の横に０が五十万個は付くくらい』って言ってたし、記憶で覚えてなくても調べたらそこは分かるんじゃ……」

【エリア】毎はもちろん『世界』毎に文明の生まれ方やそれを生み出

した存在、経緯なんかは違う。実際に連中がアトランティスなどを生み出した世界もあるんだろうが常々そこまで調べてられるほど俺は暇ではないんでな。確かに調べられるし判るが、それをしたところで今回の事件が解決する訳でもない。ましてや事実を世の中に発表しても奴等の信者でもない限り笑い飛ばされて終わりだ」

ぶっちゃけ、レジェンドにとっては連中がどれだけ大層な事をしてようが関係も興味も無い。ガタノゾーアが復活した時、尻尾を巻いて逃げ出した連中の戯れ言に構ってる暇は無いと思っている。いや、比べる相手が規格外なんだけど。

「それから一つだけ注意しておく事がある。これは確実とは言えん事だが……」

レジェンドは一泊おいて、自身の経験から推測したキリエル人の行動に関する事を言う。それはこのメンバーにとって、非常に重要な事であった。

「キリエル人に狙われているのは俺とリク、そしておそらくオーフィスもだ」

〈続く〉

現れる地獄の門、目指すぜ！天辺!!（前編）

レジェンドに告げられた注意すべき事……それは自身とリク、オーフィスが狙われているという内容だった。
しかし、レジェンドとリクことジードはウルトラマンという共通点が、レジェンドとオーフィスは共に暮らす家族という共通点があるが、リクとオーフィスの間には共通する部分が無い。
一応カップ麺好きというのはあるが、オーフィスは単に美味しい物が好きなだけだし、そもそもそれだけで狙われる筈が無い。

「あの……レジェンドさん、なんで僕達やオーフィスちゃんが狙われているの？とりあえず僕とレジェンドさんはともかく、オーフィスちゃんが狙われる理由が解らないんだけど」
「俺はさっき『ティガがよく知っている』と言ったのは覚えているな？」
「レジェンド、そのティガもウルトラマン？」
「ああ。正直あいつの方が奴らとの確執は大きいだろう。なにかと奴らはダイゴ……ティガに執着していたからな」
「解らぬ……そもそもそのティガとやらに執着している連中が何故にお主らやオーフィスを狙う？それ以前にティガというウルトラマンがこの世界に現れた事例はあるまいに」

確かにスカーサハの言葉は最もだ。ティガがこの世界に来たのは銀河遊撃隊の一員として来ている今回が初めてだ。ティガに恨みがあるというのもまず初対面どころかこの世界の歴史にさえ残った事が無いような状態ではまず有り得ない。
一瞬レジェンドはゴーデス同様、かつての記憶がある、又は連中の能力や特性から直接この世界へやって来た以前と同じ奴らそのものかとも思ったのだが……ゴーデスや根源的破滅招来体が存在・侵攻しているこの世界の地球を狙うような性格でもないと思い直した。
そして導き出した答えがかつてティガと共にキリエル人と相対し

た時の言葉や行動動機だ。

「連中が行動を起こす気になったのは、レイブラッド事変の時……ではなく、俺が幼少期のアーシアを助けるべくこの世界で再び変身したからだろう。この世界の地球に何時頃から侵入していたかは知らんが、きっかけはそれに間違いない筈だ」

「レジェンド様、レイブラッド事変って、三大勢力が激しくぶつかり合っていたところに今世界中で話題になってる怪獣っていうのを沢山引き連れた、レイブラッド星人とかいう宇宙人が現れて見境なく襲いかかったっていう、あの？」

「それで合ってるぞロスヴァイセ」

「それを解決したのが、レジェンド率いるウルトラ六兄弟。その六兄弟は光の国の最強戦力って聞いた」

「なんか色々とんでもない事を聞いたような……でも、なんでそのアーシアさんって方を助ける為に変身した時なんですか？レイブラッド事変の時の方がよっぽど有名そうなのに」

「単純にその事変が下敷きとなって俺達の戦いが御伽話になり世界中へ広まっていたからだな。そもそもその戦争は人間界で表沙汰になっていない。それに何より、御伽話の中でしか存在しないと思われてた者がいきなり派手に現れれば忽ち世界中が大騒ぎだ」

バリケーンの一件以来、レジェンドは時折起こる謎の天変地異や怪事件の際に変身して姿を現し、解決していった為、ウルトラマンの事自体は既に広まっていた。無論好意的にだ。さらにこの間のレイナーレの事件の際に変身して戦った８０の事も相まって、ウルトラマンが複数存在する事も世間では話題となっている。

「それで結局のところ、お主らが狙われている理由は何なのだ？」

「……簡単に言えば奴らは気に食わないのさ。俺達ウルトラマンがな」

「え……」

「奴らは自己顕示欲が強い。『自分達こそが愚かな人類を導く存在だ』とかほざく連中だからな。そんな連中からしてみれば自分たちより後にいきなり現れて凄まじい力を見せつけ、人々の関心を奪った俺達を心良く思わんのは当然だろう。ティガに対してもそうだった。当時ＧＵＴＳの隊長で俺の同僚だったイルマには『ウルトラマンではなく自分達を人類の守護者と認めろ』とか脅迫までしてたんだぞ、あいつら」

ぶっちゃけて言えば、嫉妬からくる逆恨みのようなものだ。近年怪獣などの被害が出始めてからそれを対処する為に動いていたのはレジェンドなので、そもそも守護者と評するにはまず同じ土俵にすら立てていない。怪獣出現以前にも様々な被害は出ていただろうにそれを未然に防ぐなりしていれば別だがそれもしていないのだ。

「つまり僕達がウルトラマンである事自体が狙われる理由ってわけか。あれ？じゃあオーフィスちゃんは？」

「オーフィスの場合は確証が無い為、はっきりそうだとは言えんが……連中がこの世界の出身だと仮定して『無限の龍神（ウロボロス・ドラゴン）』を知っていれば予想はつく。こっちもこっちで有名なのが連中にとって目障りと考えているだろう。加えてそれだけ名の知れた存在を倒したとなれば、三大勢力や各神話勢力にキリエルの存在を強くアピール出来るしな」

姿形はともかく、オーフィス自身の名前は有名だ。何かと自身らの存在を強調したいキリエル人にとっては格好の的だろう。ただ、レジェンドと特訓したりして今やグレートレッドを超えてしまっている彼女をキリエル人がそのまま戦って勝てるかは別問題だが。レジェンド相手でも同じく……というかこっちのがヤバイ。

「奴らが街中で仕掛けてくる事はまず無いだろうが警戒はしておいた方がいい。以前ティガは変身前に誘い込まれて痛めつけられた経験

があるからな」
「……レジェンドは？」
「返り討ち。泣くまで殴るのをやめなかった」
「「うっわぁ悲惨……」」

かつてレジェンドは何処ぞの波紋使いよろしくキリエル人を生身で叩きのめしたらしい、主に殴って。これにはリク、スカーサハ、ロスヴァイセはキリエル人に同情を禁じえなかった。挑んだ相手が悪過ぎる。

「さ、このままだといつまでも話が延びるからな。明日に備えて早く寝るぞ」
「はーい」
「そうだな」
「ですね」
「……ん……」

そろそろ寝落ちしそうなオーフィスを抱えつつ、全員が布団に入ったのを確認してからレジェンドは電気を消す。レジェンドがいないと寝れない、というオーフィスが引っ付いてきたのをその身に感じつつ彼も眠った。
しかし、レジェンドだけは気付いていた。

部屋の窓の外に、青白い人型の『キリエル人』がレジェンド達を見定める様に浮遊していたのを。

☆

一夜が明けた駒王町。修行組にとっては本格的に各々の修行が始まる合宿二日目である。朝食を取り終え、それぞれ動き易い服装に着替えて『勉強部屋』へ向かう。
いよいよゲンと縁壱もレジェンドやオーフィス同様飛び降りる時ポーズしだした。ちなみにレイトもやろうとしたがカナエに止められた。確かに真似するような事でもないのだが。
まずは各々がどういう指導・修行を行うかを説明する事になった。指導役やオカルト研究部側がどれだけのレベルかを全員が把握する事から始める、そういう意図があるらしい。
一番手は縁壱とカナエ。……なのだが。

『大きな……瓢箪？』
「そうだ。『日の呼吸』それを体得したい者が現れた時にと作っておいた物だ。まずはこれを破壊してもらう。それが出来れば後は一直線だ」

カナエは決意を込めた表情で頷いたのだが、他のオカルト研究部にとっては疑問しか浮かばない。

「でも、瓢箪を破壊するなんて簡単じゃないかしら」
「特別硬そうな訳でもなさそうですし」
「胡蝶先輩なら楽勝だと思うけど……」
「……何か勘違いしていないか？」

オカルト研究部の声に縁壱は静かに迫力を出し、その威圧感にリアス達は息を飲みながら押し黙る。実はこの修行、既にカナエが昨日から行っていたものであり、瓢箪は今朝縁壱が惑星レジェンドより持って来た特別な品物だ。
「これを壊すのは息でだ。文字通り瓢箪の中に吹き込んで、な」

「「「「!?」」」」

カナエがまず体得しなければならないのは『呼吸法』であり、型は二の次。呼吸が出来てこその型であり、それが出来なければ全く先には進めないのだ。最初にして最大の難関。まさにハナっから全力で挑まなければ本当の意味でスタートを切れない。カナエは昨日とは違う感じで思いきり瓢箪を吹くが……

「――――ッ!!」

瓢箪にはヒビ一つ入らない。続けざまに様々な吹き方をしてみるがビクともせず、カナエの方が限界に達してしまった。

「ッげほっ！げほっ！はぁ……はぁ……」

「まだまだ先は長そうだな」

そういうと縁壱は自分用の瓢箪を取り出した。元のサイズがデカイそれをどこに持っていたんだ。ともあれ、カナエのものよりさらに大きく、しかも硬そうだ。そんな瓢箪を縁壱は……

「――――」

バゴォォォォォン!!!

『!!』

いとも簡単に、文字通り木っ端微塵に『吹き』飛ばした。カナエが幾らやってもビクともしなかった物より明らかに強固な瓢箪を、朝飯前とも言わんばかりにあっさり成し遂げたのだ。

「日の呼吸・第三幕まで極めればこの程度の芸当は造作もない」

……今この御仁は『第三幕』とか言わなかった？

カナエは得意とする花の呼吸でさえ第二幕まで。日の呼吸はスタートラインにさえ立てていないのに、目の前の規格外は第三幕を極めている。もはや脱帽しか出来ない。

「縁壱さん、予備はあるか?俺も試してみたい」

『!?』

興味津々なゲンを驚きの目で見る面々。縁壱はよし来たとばかりに取り出した。だからどこから取り出したんだソレ。お互い笑顔で手渡し手渡され、早速試そうとする。

「いちいち悩むからいけない。為せば成る!ともかくやってみろ!――!!」

ビシィッ!

『なっ!?』

「やるな。さすがゲン殿」

一発でヒビが入った。もうヤダこの超人。

さすがにカナエも乾いた笑いしか出てこない。呼吸法には一日の長があると思っていたのだが、自分が出来なかった事を目の前の男はあっさり初見で成し遂げた。もし鬼殺隊にいたら間違いなく『柱』だろう、それも最強の。

「俺でもこれっぽっちか。確かに厳しいな」

「あ……あはは……私の努力って一体……」

「胡蝶先輩しっかり!!」

「おい何であんたがカナエの自信粉砕してんだよ!?そこは師匠の縁壱の役目だろ!!いや味方の自信を木っ端微塵に粉砕して良いわけじゃねえけどな!?」

がっくり項垂れるカナエを心配する小猫と、ゲンに抗議するレイ

ト。原因を作った本人達は平然としているが。
一先ずカナエを休息させる意味でも、次の小猫や黒歌、夜一の番となる。

「知っての通り、白音の修行は仙術の完全なコントロールと……」
「最終目標は『瞬閧(しゅんこう)』の修得じゃ」
「「「しゅんこう?」」」
「高濃度に圧縮した鬼道を両肩と背に纏い、それを炸裂させることで鬼道を己の手足へと纏う白打の最高峰戦闘技術じゃ」

ちょっぴりドヤ顔な夜一だが、オカルト研究部には慣れない単語がまた出てきた。

「ええと夜一……さん?鬼道とか、白打とか……また分からない単語が出てきたのだけれど……」
「む、そうか。そこから説明するのはちと面倒じゃな。手っ取り早く説明すると……そうじゃな。鬼道が魔法や術で、白打が格闘技みたいなもんじゃ」
「分かりやすいですがざっくばらんですね。大まかな説明はそれで合ってるのですが、鬼道は私達『死神』が使う魔法の類、というのが正しいでしょうか」
「「「死神!?」」」
「ああ、この世界の死神とは定義や役割が全く異なるのであしからず。その説明は追々させていただきます」

にっこり、そう笑う卯ノ花の笑顔には「これ以上今は話す気はない」という威圧も含まれていた。リアス達が黙ったのを確認してから続けて説明する。

「私達死神は戦闘技術を『斬拳走鬼(ざんけんそうき)』と称します。斬は剣術、拳は白打つまり格闘術、走は歩法、そして鬼が鬼道……夜一殿のいう『瞬閧』は

その内二つを組み合わせた奥義とも呼べるもの。少なくとも私の知る限りそれを使えたのは夜一殿と、かつてその部下で現在二番隊と隠密機動の長を継いだ砕蜂隊長の二名しか存在しません」
『二名!?』

最高峰の名に相応しく、今だ使用出来たのはたった二人だけ。卯ノ花が向こうで逝った後に増えたかもしれないが、それでもいきなり爆発的に増えたりはしないだろう。まさしくカナエの体得しようとしている『日の呼吸』同様、最高難度の大技だ。もし修得出来たなら小猫で漸く三人目という事になる。

「とはいえ最優先は仙術の方じゃ。瞬閃の会得には多少なりとも鬼道を学ばねばならんからの。その焼き鳥との決戦に間に合うかは微妙じゃな」
「……でも、やります」

皆が見ている前で小猫は凛と言い切った。黒歌なんか「あの白音がこんな立派に……!」と滝のような涙を流している。そして夜一はニッと笑いこう言った。

「そこまではっきり意志があるなら儂からはただ一つ……『エンディングまで、泣くんじゃない』じゃぞ」
「それ夜一が好きなゲームのシリーズのキャッチコピーにゃー!!なーんーでーにゃー!何でここでそれ言うにゃ!?」
「かっかっか!まさにここぞという雰囲気とタイミング!言ってみたい台詞だったんじゃ!内容的にもピッタリじゃろ?」
「ここは『守るべきもののため、我らは再び阿修羅の道をゆく!』とかの方が格好良いにゃ!」

顎に手を当てキラーンと目を光らせる夜一とそれに反論する黒歌。まあ、確かに修行は辛いが決戦が終わるまで泣くなという意味なら分

からなくもないが。というかどっちも推しゲーのキャッチコピー使ってるだけである。
　これから殺伐するであろう修行の前に見れる、一時の和みな言い争いだ。

「では次はアーシアさんと姫島さんですね。ちなみに私はどせいさん派でトロンベ派です」
『!!??!!』

　修行内容を話す前に爆弾を落とした卯ノ花だった。やはり彼女もレジェンド一家である。

「お二人にはそれぞれ回道、破道と縛道を修得していただきます」
「かい……？それ、鬼道ってのと関係あるんですか？」
「はい。回道は回復用の、破道は攻撃用の、そして縛道は補助用の鬼道と思っていただければ結構です。ここまで説明すれば理解出来ると思いますが、アーシアさんに回道を、そして姫島さんに破道と縛道を修得していただきます。神器や魔法以外の手段を持ってもらうのが一番の理由ですね」

　ここまでは大方予想通りだ。先に夜一による鬼道の説明が入った時点でこの二人には鬼道の修得が主となる事は予想がついていた。……その修得レベルがおかしい高さなのは気付かなかったが。

「アーシアさんには持続力の強化の為に、この勉強部屋で修行する全員の治療をして回ってもらいます。神器と回道を交互に使いながら、ですよ？」
「はっ……はいぃっ!!」
「そして姫島さん。貴女には破道と縛道、どちらも詠唱破棄で六十番台まで出来るようになってもらいます。威力は落ちますが即座に発動出来るメリットの方が大きいですし」

「ろくっ……!?……分かりましたわ」

やはり鬼畜レベルだった。特に朱乃の方。

たった今知ったばかりの鬼道をこの数日間で合計１２０種類以上、それも詠唱破棄で撃てるようにしろというほぼ無理ゲーな課題である。アーシアの方は幾分マシだが、彼女はまず体力を付けなければ話にならない。

「んで、木場だっけ。アンタの修行なんだけど」

「とりあえず私と打ち合っていただきましょう。そこから課題や問題点などを割り出し、修正していきます」

「はい、分かりました」

ジェントの説明がわかり易かったのか、木場の特訓内容の説明はあっさりしたものだった。しかし後にわかった事なのだが……ジェントと乱菊のダメ出しが凄まじ過ぎた。後悔は忘れた頃にやってくる、とはよく言ったものである。

そして残る二人、リアスと一誠。

「リアス・グレモリー。お前に覚えてもらうのは『滅びの魔力』とやらの本質の理解、及び応用だ」

「滅びの魔力の本質……？」

「そうだ。他の部員に話を聞く限りお前はその力を断片的にしか使えていない。つまり『純粋に攻撃力の高い魔法』そういう形でしか発動出来ていないという事だ。まずはその認識を改め、力の本質を理解する事でお前の持つ魔力本来の力を発揮させる。実質、応用の方はオマケと思ってもらって構わない。本質の理解だけで十分過ぎる成果となるからな、お前の力は」

ハリベルの告げた修行内容、それはリアスの持つ滅びの魔力を本来の形で発揮出来るようにする事。少々馬鹿にされた気がするが、リア

ス自身は興味もあり問題なく了承したのだが……彼女が生まれてから今まで変えていなかったものを変えるのは並大抵の事では無く、要求される努力も半端ではなかった。
そして、最後に一誠の修行内容だが、あまりにシンプルかつ最近まで一般人だった彼には難題過ぎるものだった。

「一誠。お前に出す課題はこれだ。この岩を砕いてもらう」

ゲンが指さしたのはかなり大きめの岩だ。レイトが軽く拳で叩いて確かめると、そこそこの固さがあるらしい。こんなの簡単だと昨夜の心配が稀有になった一誠は胸をなでおろし神器を出現させるが、そこでゲンが一誠の左腕を掴んだ。そして衝撃の一言を言い放つ。

「誰がそれを使って良いと言った」

『え……？』

これには師匠勢以外、一誠やリアスは意味が分からず、カナエや小猫はまさかと青い顔をしている。

「お前だけの力で砕くんだ。神器や道具の使用は許さん」

「「「なっ!?」」」

まさに青天の霹靂。先程説明した通り、ついこの間まで一般人であり、また戦車（ルーク）の駒の特性を持っているわけでもない一誠には無理だろう。少なくともこの短期間では。……今のままなら。

「そんな、無理ですよ！こんな岩を神器無しでなんて……」

「最初から無理だと思うから先入観が邪魔をして力が出せなくなるんだ。レイト、こっちの岩を砕いてみろ。方法はさっき言った通り己の力だけなら何をしても構わん」

「おう！」

ゲンの指示に漸く出番が来たとばかりに指を鳴らしながら、レイトが岩の前に立つ。一誠の課題の物より明らかに巨大だ。だが、やる気全開のレイトにそんな事は関係ない。

「俺のビッグバンは、もう止められないぜ!!」
ドゴォォォォォン!!!

突然レイトの拳が燃えたかと思えば、よくわからない台詞と共に鋭いチョップを一閃。巨大岩が粉々に吹き飛んだ。
ゲンの弟子だからある程度は砕けるだろうと予想はしていたのだが、まさか木っ端微塵になるとは思っていなかった一誠やリアス達は唖然とする。

「ま、こんなモンだな」
「上出来だ。分かったか？出来る出来ないじゃない、それ以前の問題だと理解しろ。やりもせず決めつけるな」

さすがに実践されてはぐうの音も出ない。一誠はすぐに取り掛かるものの、やはりほんの少しさえ砕ける様子がない。ゲンは一誠が修行を開始したのを確認し、その場をレイトに任せると先程から呼び出し音が鳴っていた通信機を取り出してオンにする。

「こちらおおとりゲン。何かあったのか？」
『兄さん、お疲れ様です。そちらのメンバーにも見てもらいたい映像がテレビ中継されてるんですが、そこって映りますか？』
「ちょっと待っていろ。卯ノ花さん、どうやら何かあったらしい。ここにテレビの映像か、ダイブハンガーの映像をこちらに受信したり出来るか？」
「はい、少し待って下さいね。確かあの方はこうして、と……」

卯ノ花が何も無い空間に電子ディスプレイを出現させた事に全員が驚くが、どうやらミライ達もそれを感知したらしくC．C．やグレイフィアと何やら作業しているようだ。

『向こうは用意出来そうみたいです。ここからはどうやるんですか？』

『任せろ。こんなものピザのトッピングを考えるより簡単だ。あの勉強部屋のディスプレイ波長と連動させてこちら側の映像を出力すればいい。ここをこうしてだな』

『例えが微妙ですが、さすがですC．C．様』

向こうではやはりC．C．が機器の事に関しては一番優れているようだ。コンパチブルガリバーの正規パイロットは伊達ではない。そうこうしているうちにディスプレイにある映像が映る。そこに映っていたものに全員驚愕するが、『それ』について聞いていたアーシアだけは比較的落ち着いていた。それでも多少なりとも驚きはあるのだが。

「嘘……！あれは……」

「て……天使？でけぇ……何だよあれ!?」

「……黒歌よ」

「分かってるにゃ夜一。何か違和感があるわね」

（あれが……レジェンド様やリクさんが言っていた……やっぱり、あれは……）

映像に映っていたもの……それはアーシアにレジェンドやリクが言っていた、半透明の『天使』と呼ばれる『何か』であった。

京都での激闘の幕開けは、刻一刻と迫っていた。

〈続く〉

現れる地獄の門、目指すぜ！天辺!!（後編）

『門を開けるのです！そして、天使の審判を受け入れるのです!!』

ダイブハンガーの指令室にて京都に現れたという『天使』に関する生中継を見ているミライ、C．C．、グレイフィア。何かが集まって半透明の天使らしきものを形成したと同時に、謎の男性が現れて宗教じみた事を言い出した。

「何だ？この胡散臭いペテン師みたいな奴は」

「天使とかそれっぽい事を言ってるし、あれもそう見えるけど……何か違う気がしますね」

「ミライ様の言う通りです。少なくともあれは天使ではありません。おそらくは、あれ自体が……」

☆

『天使』が現れる少し前の京都。一通り聞き込みを終えたレジェンド達は、ハンバーガーやフライドポテトを食べながら集めた情報を整理していた。ちなみにメニューはロスヴァイセにおねだりされた。理由はもちろん『お手頃価格』だから。

「まず、天使とやらの話をこちらから聞いた時の相手方の反応だが……一つはやたら饒舌に喋り出す、もう一つが何やら怯えた様子で天使について聞いてくる、この二つのうちどちらかのケースが殆どだったな」

「最初は僕達を『何だこいつら』みたいな目で見てたのに天使の事を聞いたら途端に目を輝かせてペラペラ喋り出したよね」

「何というか……まるでそれが引き金となったかのようであったな」

「……洗脳？」

「「へ？」」

なんの気無しにハンバーガーを頬張りながらオーフィスが言う。リク、スカーサハ、ロスヴァイセは間抜けな声を出したが、レジェンドは頷きながら言葉を続ける。

「おそらくはその『天使』とやらを目撃する事で何らかの催眠ないし洗脳状態に陥らせるんだろう。元々強い精神力か、何らかの加護があれば問題ないんだろうがな。後は……以前は確か直接見なければ影響はなかった筈だ。テレビだとかネット画像とか」

「あ、あの……私は大丈夫なんでしょうか？レジェンド様はもちろん、リクさんもウルトラマンだし、その子達もドラゴンだし、私だけ真人間で……」

「戦乙女だし大丈夫だろ。今は俺やオーフィスの近くにいるし影響も受けてるだろうし。もし不安なら俺の傍から離れるな。俺が必ず守ってやる」

「……はい」

（……サラッと天然ジゴロ台詞言ったよね、レジェンドさん）

（あ奴からしてみれば単なる庇護対象としか認識しておらぬだろうが、言われた者はたまったものではないしな。やれやれ……また増えるのか。もう頬を染めておるぞ）

（むうう～……）

スカーサハの言う通りレジェンドは基本的に自分の【エリア】の者達は庇護対象として考えている為、割とそういう台詞がポンポン飛び出るのだが、人間体でもイケメン枠に分類される顔で真剣に言われれば勘違いされてもおかしくない。普段が周りとの関係を円滑にする為の仮の性格だが、本来のレジェンドは寡黙で冷静沈着なのだ。

「……？あそこの空、様子が変」

「え？」

「……なるほど、相変わらず込んだ手口だ」

レジェンドらがいる場所からだいぶ離れてはいるものの、問題なく視認出来る距離に風のようなものが集まって行き、半透明の『天使』を形作る。その光景を京都の人々は何らかの形で納めようとカメラや携帯電話のシャッターを切っており、テレビ局のヘリやレポーターも多数押し掛けている。既に中継もされているようだ。

「あれでは身動きが取れんな……吾らは離れていて良かったかもしれん」

「……何か頭をこんこんする」

「オーフィスちゃん、頭をこんこんって何？」

「分からない。我の頭に何か当たってくる感じ」

「やはりな。洗脳効果のある幻覚の類のようだ。オーフィスは普通に耐性が高かったからそんな感じになってるんだろう。大丈夫か？」

「我、駄目っぽい。レジェンドのちゅーで治りそう」

「ぎゅーで我慢しなさい」

「うー」

オーフィスは不満げだったが、結局レジェンドに抱きしめられたら満足している。リクは苦笑いしているが、スカーサハとロスヴァイセはまさかオーフィスが大胆に攻めるとは思ってなかったらしく驚いていた。

そんな状況でまた捜査を再開しようとした矢先、ぽすんとレジェンドの腰に何かがぶつかって来た。というか抱き着いて来た。

「光神様！見つけたのじゃ！」

「ん？」

「レジェンドさん、美少女の知り合い多過ぎない？」

「おいリク!?なんかそっち方面に闇のベリアルの遺伝子強く出てないかお前!?」

「そんな事ないよ～？で、その子誰なの？」

「知らん」

ガーン！と涙目になる抱き着いて来た九尾の姫、九重。というか名前を知らないのだから誰と言われても答えようがない。配下の妖怪達の解放を手伝ったものの、その際も名前までは聞いていないのだ。しかし、そのままでは埒が明かないので説明も兼ねてわかる事だけ話した。

「こっちに来た初日の夜に助けた美女美少女親子の子供の方だ。助けてから配下とやらの解放にも協力したが、眠かったのでさっさと退散したから名前を聞いていない」

結局寝れなかったが、とその日の夜の事を思い出して額を押さえるレジェンドに、知らない理由を言われて「あっ」と思い出した九重。確かに名乗っていない。さらに美少女と言われて頬に両手を当ててもじもじしている。

「えへへ……私が美少女……」

「……結局こやつは何しに来たのだ」

「ハッ!?そうじゃ！光神様を見つけて連れてくるようにと母上に……」

「もうこちらから出向いたぞ、九重」

「母上！」

呆れたように姿を現した九重の母、八坂。レジェンド達を見渡すと一昨日には見なかった顔が二名ほど増えているが、丁寧に頭を下げて挨拶と礼を言った。

「先日は我ら母子、並びに配下が世話になりました。妾は京の妖怪を束ねる八坂と申します。こちらが娘の九重」

「おやこれはご丁寧に。知っているとは思うが俺はウルトラマンレ

ジェンド。人間体の名前は教えても大抵呼ばれなくなるからもういいや」
「そ、そうですか……」
実際、リクも登場して次の話では既にレジェンドさん呼びだった。もはや若干やさぐれかけている。少し罪悪感があったリクだが……
『ジード』
「!?」
突然誰かに呼ばれる声を聞いて辺りを見回すと、フード付きのローブを纏い、そのフードで顔を隠した女性らしき人物がまるでついて来いと言わんばかりに遠くで踵を返していた。リクは怪しいと思い、単独でそれを追跡するが途中で見失う。
「今の人は……っ!?」
殺気を感じて振り返ると同時に、宙にいた青白い人型の幽霊のようなもの—キリエル人数人から見えない打撃を食らうリク。そしてそのままトンネルへと追い詰められて行った。

☆

その頃、特訓組のゲンとレイト。
一誠の事を一時的に卯ノ花に任せ二人は『天使』の正体について話し合っている。
「キリエル人？」
「ああ、ティガが出身世界でレジェンドと一緒にやりあったらしいぜ。なんでも俺らウルトラマンより自分達が地球の守護者とか言ってたらしいけどよ、だったらこの世界の連中にしてもレイブラッドが侵略

しようとした時に駆け付けろっての。レジェンドや親父達だったんだろ？それ解決したの」
「ああ、チーフや兄さん達ウルトラ六兄弟が天使・堕天使・悪魔を守りながら撃退したそうだ。兄さん達はほぼ守り専門でチーフが九割方殲滅したらしいが」
「マジで何なんだよあの人型ウルトラベル」

その例えは間違っていない。かのエンペラ星人の大軍団を瞬く間に壊滅させたウルトラベルとやった事が変わらないからだ。人力で有ること以外は。

「一応ダイブハンガー側とディスプレイを常時接続して情報を逐一こちらにも流してもらえる様にしてはいるが、どうも場所は京都らしい」
「おいそれキリエル人終了決定じゃね？」

ゲンの言葉にレイトが素直な意見を述べた。よりによってレジェンドやオーフィスがいる場所でそんな事やれば絶対目をつけられるだろうに。スカーサハも精々二人がやり過ぎないようブレーキ係になる程度だ。止まるどころか減速もするかどうかさえ微妙だが。

「そういえば、お前はチーフ達が出発する前に何か渡していなかったか？」
「あー…あれの事かな。いや、作ったにはは作ったんだけどどうしても起動出来なくてさ。一応持ってけってベリアルに言われて持って来たけど、そもそも俺の力を『使う』やつだし、俺が持ってても仕方無いからレジェンドに渡しといたんだよ」

レイトは頭を掻きながら困ったように言うが理由はしっかりしている為、別にゲンが叱責する事はない。しかし、レイトのやった何気ないこの行動が、この後京都にて事件に立ち向かっているレジェンド

の、そしてジードの危機を救う事になるのは本人にも予想外の事である。

☆

「ぐあっ！」

見えない打撃を受け、トンネルの壁に叩きつけられるリク。彼の前にはフード付きのローブを纏った女性……キリエルの巫女と、その背後には宙に浮かぶ青白いエーテル体のキリエル人数体が存在していた。リクに打撃を放っていたのもこの者達である。リクは追い詰められているものの決して臆する事は無く、衰えぬ闘志で睨みつけている。

「随分舐められたものね。その姿のままでキリエルの神々に歯向かおうとするなんて……早く巨人になりな！」

リクの肩に足を叩きつけグリグリと踏み躙るキリエルの巫女に、睨みつけたままリクは言い放つ。

「この姿だからとか、そんなの関係ない……人間は、弱くない！」

「ぐッ!?」

踏み躙っていたその足を掴み、思い切り握り締めるとキリエルの巫女が苦悶の声を上げるが、リクはお構い無しに振り回す様に投げ飛ばす。エーテル体のキリエル人がリクを攻撃しようとするが……

「おいおい、何してるんだ？日が暮れてきたからここで派手にってか？らしくないねぇ『天使』さんよォ」

『!?』

「貴方は…！」

「こっちはウチで働く連中がおたくらのせいで何人かおかしくなって急遽時短営業になっちまったのによ。いい身分だなクソ野郎共」

リクの危機に現れたのは、ジャグラスジャグラーだった。

☆

レジェンドらは八坂・九重の母子を連れてリクの捜索に当たっていた。自分達が話している間にリクがいなくなった為だ。さすがにリクと言えど、現状で趣味嗜好を優先する人物では無い為、もしやと思い捜索に乗り出したのだ。

「ちっ……迂闊だった。この街に来た時から監視されていたと考えれば初日にやらかした俺らを警戒してリクを狙うのは当然だった……！」

「だとすれば、妾らにも責が……」

「そんなものあるか。俺らが自分の意思で勝手にやった事だ。もっとバレないようにやるべきだったか」

「お主のスペックでバレないのは無理であろう。いつぞやみたくギアでも使う気か？」

「ギアが勝手にばーん」

「「本人も周囲も怖いわソレ!!」」

やはり、こんな状況でもレジェンド一家はいつも通りだった。そんな時、日が暮れ周りが暗くなって来た事でかつてを思い出したレジェンドは、ティガがダイゴの姿で襲われた時同様にあまり使われていないトンネルを探す。そしてそれらしき場所を見つけて近づくと二人分の人影が見えた。

「……！リク！それに……ジャグラー!?」

「？ジャグラー店長も一緒？」

「よう保護者。ちゃんと見張っとけよ」
「レジェンドさん、ごめん。勝手に突っ走って……」

ジャグラーに肩を貸されながらリクが歩いて来た。キリエル人にやられたからか、所々傷が出来ている。

「やっぱり奴らにやられたのか、その傷」
「うん。でも、心配しないで。こんな傷より父さんや遊撃隊の皆との模擬戦の方が痛いし。ゼロなんてスラッガーどころかゼロツインソードとか、酷い時はウルティメイトイージスまで使ってくるし」
「ゼロの奴、今度俺と生身模擬戦な」
「罰ゲーム通り越して同情するぜ、アイツに」

ソードはともかくイージスはやり過ぎなゼロに、本人は知らぬまま死刑宣告に近い決定が成された。駒王にいるレイトはかつて無い悪寒を感じて身震いしたという。こっちでもジャグラーにまで同情されていた。

そんな時、すっかり日が暮れて夜になり明かりが付き出した街の上空に、雲を足場にするかのように巨大な門のような扉が出現した。

「……？母上、あれは何でしょうか」
「妾にも分からぬ。初めて見るが……」
「いよいよ仕掛けてきたか……！一先ず街の人々の洗脳を解かねばならんが……防衛チームが出来ていないこの世界ではＧＵＴＳでイルマがやった時のように通信を流してメッセージで心に訴えかけての解除は出来んか。だとすれば『ウルトラサークル』による意識の清浄化を図るしかない。しかしその間にアレが開ききる可能性も考慮しなければ……」
「あの門みたいなのは僕が抑えるから、レジェンドさん達は街の人をお願い。出来ればジャグラーさんや、八坂さんと九重ちゃんも協力して欲しいんだけど……」

控えめに言うリクだが、彼らも承諾してくれた。各々理由は別であったが。

「時短って言ったがな。朝少しだけやって昼から臨時休業みたいな状態だったんだよ。時間的に書き入れ時だったのに見事潰しやがってあいつら……マジで物理的にぶっ潰す」

「一昨日の恩を返すには丁度いい。娘もやる気なのでな」

「光神様の手伝いをして心象アップなのじゃ！」

「ジャグラーお前商売人の鑑だなオイ。八坂は素直にありがとう。九重はそういうの口に出さないように。可愛いけど」

「レジェンド様、その子さっきみたくなっちゃいますよ。会ったばかりなのは一緒なのに私はあんまり言われてないのに……」

「お主はそこでむくれるな。気持ちはわかるが」

ちょっぴりジェラシーなロスヴァイセをスカーサハが窘める。オーフィスはここのところレジェンド成分を充填し続けているからか文句はない。寧ろ色々あったから優越感がある。リクはそんな光景を笑顔で見ながら、決意を込めてジードライザーを構える。

「ジーッとしてても、ドーにもならねぇ!!」

そしてウルトラマンと闇のベリアルのウルトラカプセルを装填し、変身する。

「融合（ユーゴー）！」

『シェアッ！』

ウルトラマンの幻影が

「アイゴー！」

『ヌエアッ！』

闇のベリアルの幻影が

「ヒアウィーゴー！」

『フュージョンライズ！』

リクに流れ込む様に一つになる。

「決めるぜ！覚悟!!」

そしてウルトラマンとしての己の名を叫ぶ。

「ジィィィィド!!」

『ウルトラマン！ウルトラマンベリアル！』

『ウルトラマンジード！プリミティブ！』

その遺伝子を目覚めさせ……ウルトラマンジードが今、京都の街に姿を現した。

「あれが……リクさんの……！」

「本来の姿、ウルトラマンジード。メインの遺伝子が闇墜ちしてた頃のベリアルのだから、目つきが他のウルトラ戦士と大きく異なるが気にするな」

「リクさんの性格を知ってる私達は良いんですが、他から見たら……」

「悪魔に、見えなくもないな。本人も気にしていたが。そういうのも纏めて解消する為のものだ。『ウルトラサークル』はな」

門へと飛び立つジードを見送りつつ、レジェンドはウルトラサークルを発動する為の準備に入る。その際にスカーサハにあるものを渡

す。

「スカーサハ……おそらくはこの戦いの中でこれが逆転の一手になる。時が来たら、これをジードに」

「？これはあ奴が使ったものと同じものか？だが色が付いているだけであ奴の使ったのと違って絵柄が無いぞ」

「ああ、このままでは起動出来ない。だがきっと使えるようになる。俺はウルトラサークル発動の為にオーフィスと行動する。スカーサハはロスヴァイセと行動、ジャグラー、八坂、九重は指定の場所にこの文字を書いてくれ」

レジェンドは三人に書く文字―ウルトラサインをメモした紙を渡す。この街に長く住んでいる三人の方が地理に詳しく機動力もある。加えて三人は妖怪の配下や、宇宙人の従業員もおり協力体制も整えられる。

スカーサハとロスヴァイセはいつでもジードの援護が出来るように独立行動を、そしてレジェンドとオーフィスは準備が出来次第ウルトラサークルの発動が出来るように下準備しておく。

それと同時に囮となる為で、オーフィスはレジェンドの護衛役だ。レジェンド自体は人間体でも発動しているオーロラルパワーやレジェンドプロテクトで問題無いが、ウルトラサークル発動の妨害が無いとも思えない。前述の三人に比べ、中心となるため目立つのだ。

「キリエル人の企みはこの場で叩き潰す。頼むぞ、皆……！」

レジェンドの言葉を皮切りに、それぞれが役割を果たすべく動き出し、レジェンド自身もいつでも発動出来るように意識とエネルギーを集中する。共に残ったオーフィスも、それを見守りながらキリエル人の妨害に備えた。

☆

門へと辿り着いたジードは、雲が足場になったのもあってそこで踏ん張り僅かに開いていた門を閉めようと力を込めて押し戻す。少しずつ門が閉まっていくのを感じ、そのまま閉じようとしたところで、地上から視線を感じて振り向くと、先程のキリエルの巫女や、さらに大勢のキリエル人、そしてこの騒ぎを先導していた『預言者』が集いジードを見ていた。

「漸く姿を現したな、キリエルの神々に仇なす愚か者よ」

「裁きの炎によってその身を焼かれるが良い」

預言者、巫女、数十人ものキリエル人から見えない波動を何発も受け、ジードは堪らず地上へと落下する。

「ウアッ!!」

そしてそれを見た預言者達はジードに対抗すべく一体化する。

『ヌゥゥゥゥ……ハァッ!!!』

「!?」

青白い炎が立ち昇り、その中から一体の巨人が現れた。心臓部分に発光体を持ち、白い外骨格の鎧を纏ったような身体、そして相手を嘲笑うかのようなおぞましい顔をしたまさしく「魔人」と呼ぶにふさわしい存在。レイブラッドの襲来の教訓から、如何なる相手をも叩き潰せるように進化したキリエル人の新たな戦闘形態。

キリエロイドⅡ

己らこそ地球の守護者と自負する存在がジードを屠らんと顕現した。

☆

外見故の第一印象と違い、心優しく勇敢なジードに対して、その外見と同じくその中身も悪魔と呼ばれて然るべきキリエロイドⅡの戦いは当初、全くの互角だった。獣のように荒々しい戦い方のジード・プリミティブに対してキレのある鋭い攻撃を繰り出すキリエロイドは戦闘スタイルこそ正反対だが、お互い譲らずまさに一進一退の激闘。

その映像はダイブハンガーのモニターを通して勉強部屋の空間ディスプレイにも出力され、待機組・修行組の全員も目にしていた。己の大切な仲間であり、部下であり、そして弟分でもあるジードの戦いを両拳を握りながらレイトは見守っている。

新たなウルトラマンの外見に困惑する一誠たちだったが、唯一レイト達以外でその名を知るリアスが口を開いた。

「ウルトラマン、ジード……」
「部長、知ってるんですか？」
「ええ。とは言ってもほんの少しだけよ。確か、銀河遊撃隊総司令官ウルトラマンベリアルの息子で、所属もそこだという事ぐらいしか私も知らないわ」
「「「総司令官の息子!?」」」
「って事は凄いお坊っちゃんて事か!?」
「っ……」

レイトが反論しようとするが、まだ自分の正体をバラす訳にはいかないと歯を食いしばって堪える。ゲンはそんな弟子の姿に成長を実感しており、同じようにその姿を見ていた矢的が代わりに言った。

「違うよ。彼はお坊っちゃんなんかじゃない」
「矢的先生……」
「彼の姿を見れば分かるだろう。彼がどんな目を向けられて来たか。どんな風に思われて来たか。そして、それらを払拭する為にどれだけ

の苦労や努力を重ねて来たか」

一誠達はハッとした。その目つきや腕に付いているヒレのような器官などに加え、荒々しい戦い方。ジードの生まれた経緯はキングの【エリア】と違うものの、やはり外見は遺伝子の状態の関係上、闇のベリアルに似ている。はっきり言えば『悪魔』と思われても仕方無いかも知れない。

それにリアス達は知らないが、かつて光の国に反旗を翻した事もあるベリアルの息子ともなればどれだけ風当たりは強いか。

そんな中をジードは周りに支えられつつ逞しく、そして優しく育った。別の【エリア】では壮絶な激闘と結末を遂げた親子は、こちらでは共に支え合うたった二人の血の繋がった大切な親子であり、部下でもある。

父としての愛情と戦士としての厳しさをベリアルから、困難に立ち向かう勇気をゼロ達から教えられ、今や彼は遊撃隊所属・ニュージェネレーションの一角として、ロッソ、ブル、グリージョ兄妹やタイガらトライスクワッドを先輩として導く程に強く成長した。

辛い運命であっても、彼は真っ向からそれに立ち向かい、乗り越えて来た。ここにいるゲンやレイト、矢的、そしてダイブハンガーで同じく見守っているミライもそれを知っている。『総司令官の息子』と見ていいのは精々日常でのプライベート時くらいだ。戦いとなればジードは立派な一人の戦士。彼の戦いはリアス達オカルト研究部こそ見るべきなのだ。

「よく見ておくんだ。運命を乗り越え、そして変えてきた一人の若きウルトラマン、ジードの戦いを」

（リクさん……）

オカルト研究部で唯一人、ジード……リクを知るアーシアは、そこで共に戦っているであろうレジェンド達と同じように、彼の無事を願った。

☆

（このままじゃ埒が明かない……！こうなったら！）

ジードは互角に戦うキリエロイドを相手にするにはパワーかスピード、どちらかで上回るしかないと考える。ただ、相手の動きから本来はスピード寄りのタイプと予測し、パワー重視のカウンターで勝負に出る事にした。

ジードライザーでセブンとレオのカプセルをスキャンし、新たな姿になるジード。

ウルトラマンジード・ソリッドバーニング

パワフルかつメカニカルな外見になり、攻防共に大きくアップするフュージョンライズ形態だ。キリエロイドⅡの攻撃を正面から受け止め、ブースターで勢いを増したカウンターパンチを叩き込む。

「ダァァッ!!」

「ギリィッ!?」

予想外の威力に大きく吹き飛ばされるキリエロイドⅡ。レジェンドらと別行動中のロスヴァイセや九重は「やった」と喜んでいるが、レジェンドやジャグラーは険しい表情を崩さない。

何故なら立ち上がったキリエロイドⅡが赤い光を両手に発生させ、振り下ろしたかと思えば……

「な……!!」

キリエロイドⅡの外骨格らしき部分がさらに洗練された鎧のように変化し、さらに肘に突起状のカッターのようなものが出現した。ジードに対抗するかのようにタイプチェンジを行ったのだ。

「ギリィィィ……」

まるでジード・プリミティブのような野生的な構えを取るキリエロイドⅡ。そしてその直後、パワー重視型とは思えない速さで攻撃を繰り出して来た。

「ウグッ!!」

最初の数発は耐えるものの、予想以上の高速波状攻撃にジードは倒れ込んでしまう。とはいえ相手のスピードがさっきより下がったのは体感出来た。それに、まだ身体に鎧のようなものが無い部分もある。今度はコスモスとヒカリのカプセルを使い、青くシャープな姿へと更に姿を変えるジード。

ウルトラマンジード・アクロスマッシャー

速さを重視し、足りなくなった攻撃力はジードの専用武器ジードクローによって補う。何度か攻撃してあまり効果が無い事を確認したジードは一旦空中へ飛び、さらに観察しようとするがキリエロイドⅡはさらなる変化を遂げる。

先程と同じ動作で青い光を腕に纏い、それを振り下ろすと巨大な翼が生えたのだ。危険を察知して距離を離そうとするジードだったが……

「いかん……!奴はジードより速い!」

スカーサハの言葉通り、先に飛ぶジードを上回る速度で追いかけるキリエロイドⅡ。そして右手を付き出したまま一気に加速した時、京都の街の遥か上空が爆ぜた。

「どうなっ……!?」

八坂が夜空を注視すると、ジードがもがく様に落下し、そのまま地

上に叩きつけられる。キリエロイドⅡはそのまま門の所へと着地し、己の手で門を開けようとし出した。門が徐々に開けられ、闇が少しずつ地上へと降りていく。

「待ってろジード、他の三人から連絡があった。今、ウルトラサークルを発動して……」
「レジェンド、奴ら来た」
「くそ、このタイミングでか！」

狙ったかのようにキリエル人達がレジェンドとオーフィスを包囲する。仮に自分達がこの場を脱してもウルトラサークルは再度作り直しとなる。そうなったら自分達はともかくジードが保たない。
レジェンドの【エリア】のウルトラ戦士達は、レジェンドの設計したエネルギーブレスレットであるプラズマスパーク・ブレスのおかげで変身時の制限時間や変身維持の為のエネルギー消費は無くなっているが、あくまで変身に関係するものであってダメージや大技によるエネルギー消費までカバーする訳ではない。既にかなりのダメージを受けているジードがこのまま戦闘を続行するには別の外的要因が必要不可欠。
それを起こすのがレジェンドの言うウルトラサークルであり、逆転の一手を『目覚めさせる可能性』がある方法なのだが、このままではそれも出来なくなる。
そう思った時、ここにはいる筈の無い者の声が聞こえた。

「あれの名称に『地獄の門』とか誤解されかねない名前つけてる上に私達の主やその家族に手を出すとか何考えてるんですか貴方達は」
『!?』

刹那、とんでもない爆風と共に周囲のキリエル人が一人残らず消滅

……否、『地獄送り』にされた。

「え、何？」

「お前は……！」

レジェンドは驚きの、しかし希望となる存在が目の前に居た。自身の真なる眷属にして切り札たる九の存在。その内の一柱。

「サボっていた閻魔大王（ジジイ）シバいてたら遅くなりました。遅れた分は働いて取り戻しますのでご安心下さい、レジェンド様」

「今ので十分過ぎる働きだ、鬼灯!!」

万が一にと召集しておいた鬼灯が、まさにドンピシャのタイミングで駆け付けたのだ。その言葉と同時にレジェンドはウルトラサークルを発動し、京都中の人々の精神浄化に加え、彼らの精神の中にウルトラマンとしての自身の姿でメッセージを送る。

『この星に生きる者達よ。我が名はウルトラマンレジェンド。この星で光神と呼ばれている者だ』

これには聞いている人々が一人残らず驚いている。

『天使と名乗っている者達が君達に施していた洗脳はたった今、解除した。そしてもう一度、君達自身の意思で見てほしい』

人々だけでなく、八坂ら妖怪やジャグラーら宇宙人も黙って聞いている。

『今、一人のウルトラマンが天使と名乗っている侵略者との戦いで窮地に陥っている。外見で判断しないでくれ。彼は君達を、君達の生きるこの場所を守ろうと戦っている。彼はたとえ自分がどう思われよ

うとも必死で戦うだろう』

そのメッセージは、修行組や待機組にも届いていた。

『もし君達がこの街を守りたいと思うなら、大切な者を助けたいと願うなら、彼に力を……光を分けてほしい。この街を、この星を、この世界を救うのは、他ならぬ君達自身なのだ』

その言葉に一人、また一人とジードの倒れ込んでいる場所へと向かっていく。各々が『光』を持って。

『もう一度頼む。彼に……ウルトラマンジードに君達の光を分けてくれ！』

京都に生きる者全てにメッセージを送り終えたレジェンドはウルトラサークルを解除した。後は、信じるだけだ。この街に生きる者達を。

そして、それは現実となる。ジードの元へ、車や懐中電灯、果てはマッチ棒などを手にした多数の人々が押し寄せて声援を送り出したのだ。かつて、同じようにキリエロイドに追い詰められたティガが、人々から光を貰ったように。時を経て、今度はジードが人々から光を受け取っている。

「頑張れ、ウルトラマンジード！」

「俺達が付いてるぞ！」

「立ち上がってくれ、ジード！」

自然とジードコールが巻き起こり、その声は門を開けようとしているキリエロイドⅡにも聞こえて来た。ジードは人々の声に反応し、必死に立ち上がろうとしている。そうはさせまいと地上へと再び降り立ち、止めを刺そうするキリエロイドⅡの前に黒いオーラを纏った何

者かが立ち塞がった。

「邪魔するなよ。今最高にかっこいい所なんだからな」

キリエロイドⅡとは違い、本当に鎧を着込んだかのような外見と、『蛇心剣』という刀のような剣を持った『夢幻魔人ジャグラスジャグラー』がジードを守るべくキリエロイドⅡの前に現れた。ジャグラー魔人態とも言われる彼がウルトラマンの危機を救うべく現れた事で、彼の店である蛇倉苑に勤める宇宙人の従業員達は歓喜の声を上げる。

「店長……店長も戦ってくれるんだ！」

「いけえ！俺達のヒーロー！」

こちらではジャグラーコールが巻き起こった。クレナイガイことウルトラマンオーブが聞けば驚くのは間違いない。

「ったくアイツらは……明日からは営業再開だ！それと……俺が守るのは俺の店と従業員、それから客だ。この街はお前がしっかり守りな、ウルトラマンジード!!」

そう言うとジャグラーはジードを圧倒したキリエロイドⅡに向かっていき、その鍛え抜かれた身体と技、そして蛇心剣を使い互角に渡り合う。

そしてジードも、遂に再び立ち上がった。ジャグラーがキリエロイドⅡを食い止める為に戦い、初めて自分を見たはずの人々が姿を恐れず声援を、光を送ってくれているのに倒れている訳にはいかない。しっかりと大地を踏みしめ、立ち上がったジードにさらなる歓声が巻き起こる。

その光景を適当なマンションの屋上で見ていたスカーサハは満足げに頷き、ロスヴァイセは感動していた。

そしてその時、まさにこれを待っていたとばかりにスカーサハに渡

されていたウルトラカプセルが光り輝き、カプセルに無かった絵柄が浮かび上がる。
それは、シャイニングウルトラマンゼロ。
凄まじいパワーを感じたスカーサハは今こそこれをジードへ渡す時と思い、レジェンドの言葉通りジードへと投げ渡した。

「ジィィィィド！受け取れぇぇぇぇ!!」

その声を聞いたジードはとっさに手を伸ばすと、スカーサハが投げたウルトラカプセルがその手に納まった。

「これは、ゼロの……！それもこれは……これなら!!」

スカーサハとロスヴァイセの方を向いて頷き、ジードライザーでスキャンする。もう一つは勿論、ウルトラマンだ。

「融合（ユーゴー）！」
『シェアッ！』
「アイゴー！」
『セェェアッ！』

ウルトラマン、そしてシャイニングウルトラマンゼロの幻影が光となってジードに流れ込む。

「ヒアウィーゴー！」
『フュージョンライズ！』

「目指すぜ！天辺!!」

そして己の名を叫ぶ。今度は応援してくれる皆へも届くように、かつてない気合いを入れて。

「ジィィィド!!」

『ウルトラマン!シャイニングウルトラマンゼロ!』
『ウルトラマンジード!シャイニングミスティック!』

銀色のプロテクターにスラッガーが装着された両腕、金色のボディカラー、そして額にティガの如きクリスタル。人々の想いが覚醒させたウルトラカプセルの力を受け、ウルトラマンジード・シャイニングミスティックが誕生した。同時に、人々もさらなる姿を見せたジードへとますます歓喜の声を上げる。正気を取り戻したレポーターの実況も相まって、全世界へと生中継もされだした。

☆

無論、修行組や待機組にもその映像は送られている。レイト―ゼロに至っては誰よりも興奮していた。弟分のジードが再び立ち上がり、ゼロ(自分)の力と共に新たな姿で立ち向かう姿を見てそうならない訳がない。

そしてアーシアもレジェンドの言葉を聞き、祈りを捧げていた。

「よぉぉし!いけぇ、ジード!!」
(レジェンド様……貴方の言葉、確かに届きました。リクさん――ジードさん、頑張って下さい!)

彼らが見守るその映像には、ジードとジャグラーが並び立ち、キリエロイドⅡへと構えをとる姿が映っていた。

☆

「ジャグラーさん、待たせてごめん!」

「謝るくらいならとっととブチのめすぞ。こっちは明日も朝早いんだよ」

こんな時でも店での仕事の事を考えるジャグラーはレジェンドの言う通り商売人の鑑だろう。しかしながら、スタミナがまるで切れていないジャグラーはさすがである。

キリエロイドⅡはジャグラーを脅威とは見たものの、ジードをくたばりぞこないとしか認識していない。しかし次の瞬間、それは大きく覆された。

「ドオオオリャァ!!」
「ギッ!?」
「デリャァァァ!!」
「ギリィィッ!?」

アクロスマッシャー以上の早さで踏み込んで来たかと思えばソリッドバーニング以上の威力を持った打撃を叩き込まれたのだ。さらに腕のスラッガー部分で脇腹を大きく切り裂かれ、キリエロイドⅡは堪らず切られた部位を抑えながら片膝を着く。ジャグラーがそれを見逃さず思い切り顔面を蹴り上げ、蛇心剣で追い打ちをかけた。

「オオラァッ!!」
「ギリッ!?」

立て続けに重い攻撃を食らい続け、キリエロイドⅡは焦り始める。ジャグラーは勿論だがジードが異常に強くなっているのだ。まるで想いが形となったかのように。

ならばそれを断ってやろうと本性を現したというべきか、ジードやジャグラーへ声援を送る人々へと腕を向けた。

自分達に攻撃の手が向けられた事に人々は恐怖するが、それを許すジードではない。先程同様凄まじいスピードで回り込みキリエロイ

ドⅡの腕を蹴り上げる。そしてさらに……

「そっちには俺の店もあるだろうが!!」

「ギァァァッ!!?」

自分の店の心配をしたジャグラーに手痛い一撃を叩き込まれ、蛇心剣で翼まで斬り落とされた。

すかさずジードが両肩に担ぐようにして持ち上げ、開きかけていた空中の門へと投げ飛ばし、キリエロイドⅡの身体は門を閉じるように叩きつけられる。

しかし、往生際が悪いキリエロイドⅡはこれ幸いにと門を再度開けようとするが、そこで勝負を決めるべく遂にシャイニングミスティックとなったジードの驚くべき能力が発揮された。

「スペシウム!・スタードライヴ!!」

ジードが太陽のようなものを頭上へと放った瞬間、なんと時間が止まったのだ。その間にエネルギーをチャージし、腕を十字に組んで増幅されたスペシウム光線を放つ。

時間が再び動き出した時既に遅し、キリエロイドⅡの身体を光線が突き抜けており、さらに門に直撃し双方共に大爆発した。あまりに突然の事だった為か断末魔の叫びさえ上げる事が出来ずに逝ったようだ。

闇をもたらさんとしていた門とキリエロイドⅡが消滅し、人々や妖怪、宇宙人達も歓声を上げる。

ジャグラーはさっさと退散しようとするが、その間際に後ろを向いたままだが手をひらひらさせて「じゃあな」と一言。実にストイックだが、それが逆に良かったらしく所々で黄色い声が聴こえる。

対してジードは人々へ向けて「ありがとう」の思いを乗せ右手を大きく振った。同じように手を振り返してくれる者もいればサムズアップで返してくれる者もいる。

しっかりとそれを確認したジードは空へと飛び去った。

☆

「お疲れ、リク」
「ただいま、レジェンドさん、皆」
「よくやった。明日は号外でも出るのではないか？」
「だったら、お父さんに送ってあげたらどうですか？あ、でも生中継されてたし、案外見てるのかも」
「たぶん、駒王やダイブハンガーにいる皆も見てた」
「ちょっ!?録画されたりしてたらどうしよう!?」

漸く、長い一日が終わろうとしている。同時に京都での事件も終息を迎え、明日から残りの日はリサーチに八坂や九重、さらに休暇をもぎ取って来た鬼灯も付き合ってくれるらしい。
次に京都へ来れるのは暫く先になる為、心残りがないように精一杯楽しみながら調べようと気持ち新たにするレジェンド一家達であった。

〈続く〉

「あれ？そういえば鬼灯がここにいるって事はいつもの仕事はともかく無惨とやらは誰が捌……裁いてるんだ？」
「実は丁度一仕事終えた九極天のあの人が惑星レジェンドへ戻って来てたのでお願いしました。『根性叩き直してくれる』と喜んで引き受けて頂けましたよ」

「だからお前はアァホなのだぁぁぁ!!!」
「誰がアホぎゃあああああ!!!」

事件後翌日の京都組、新戦力ってどんな人達？

ジードとジャグラーがキリエロイドⅡを倒し、地獄の門と呼ばれる物を破壊した日から一夜明けた朝……オカルト研究部がライザーとのレーティングゲームを行う日まで六日となったが、事件後のレジェンド一家は直ぐ様いつも通りの賑やか家族となった。

八坂と九重に招かれ、彼女らの住処にレジェンド一家やリク、さらに鬼灯までお世話になる事になり、彼女らの頼みでライザー戦観戦まで寝泊まりさせてもらう事にした。リサーチを終えたらここに戻って来ればいい、という事で今日は一日のんびりさせてもらっている。皆昨日は頑張ったのだ。

そんな中でレジェンドは鬼灯から、最近よく話題になる『鬼舞辻無惨』の生前の行い、及び罪状なんかを書き記した報告書を受け取り拝見している。

「……鬼灯、これ全部？」

「はい、嘘偽りなく」

「鬼になった経緯以外最悪通り越して極悪だろコレ。何なのコイツ。縁壱がキレるのもわかるわ。マジで元凶コイツじゃん」

「ええ、私もそう思います。さらに「私は間違って無い」と全く反省無しです」

「……どうも無限って言葉好きみたいだし、もう地獄で無限サンドバッグで良いんじゃね？」

「こちらも当面はそれで行く気です。あの反省無しの言い訳聞いてると無性に殴りたくなるんですよ。とりあえず人を苛つかせる才能だけは認めましょうか」

「要らないよなそんな才能」

「要りませんよねそんな才能」

同僚に苦労しているという意味でますます意気投合していく最強主従。やはりお互い分かってくれる、とガッシリ握手していた。

片やそのチートスペック活かしてアホなことをしでかす同僚が、片やサボりまくる派遣先の上司や女遊びが激しい淫獣もとい神が、それぞれの頭痛の種になっている。

「あの、お二人とも大丈夫ですか？」

「ああ……心配かけてすまんな、ロスヴァイセ。今知り合いのバカ共をどうやったらまとめて駆逐出来るか考えててな」

「もう歳が歳だから矯正は不可能でしょうからね。いっその事全員纏めて隔離か蠱毒で良いんじゃないですか？」

「良いなそれ。サーガも苦労してそうだし試しにやってみるか」

なんとまあえげつない事考える主従である。いや、そうならざるを得ない環境だったのだろうけど。

「そういえばレジェンド様、先程『鬼舞辻無惨』という人物がどうとか……」

ふとロスヴァイセが聞いてきて、いつの間にやら八坂や九重を含めて全員集合していた。物騒な話をしてるし怖いモノ見たさなどもあるのだろう。レジェンドは鬼灯から受け取っていた報告書をロスヴァイセに手渡した。

「ん」

「あれ？良いんですか？」

「見られて困るのはソイツだけだし。いやソイツも困るかは分からんけど」

「そうですね。あんな奴ですから。アレのしでかした事に守秘義務など適用されない、というかしてはいけない。もっと多くの方々に知ってもらうべきです」

「は、はあ……」

レジェンドは当然だが、鬼灯も相当な立場にいるのは彼らの会話から分かるのだが、その彼らからこうまで言われる鬼舞辻無惨とは何なのか。早速ロスヴァイセは報告書に目を通す。さらに、他のメンバーも後ろや横から覗き込んだ。その結果色々とんでもない存在である事が理解出来た。

「何ですか、これは……！」
「罪の塊」
「随分碌でもないのがおったようだな……」
「妾でもこれほどの者は見た事はないぞ……」
「こ、これが本当に鬼なのか!?」
「実はですね、ソリッドバーニングの技に『ソーラーブースト』っていうのがあるんですよ。太陽の光が苦手らしいし直接それっぽいの照射したらどうなるんでしょうかね」
「「最後だけ物凄く物騒」」

お前らが言うな。

確かにリクは本気だ。セブンとレオのカプセルを手にスタンバってる時点でヤバイが親しみを込めて明るく話す彼が敬語かつ静かに喋っている辺りマジギレしている。

何とか宥めて事情を説明し、今も罰を与えている最中だと言うと少なからず皆ホッとしたようだ。

「しかし鬼灯殿、お主程の者でも（精神的に）手こずる亡者を罰する事が出来るのは限られるのだろう？そのお主がここにいるのに一体今は誰が？」
「私や、この無惨と関わりがある縁壱殿と同じレジェンド様の眷属たる伝説九極天の一柱ですよ」
「かつての名はシュウジ・クロス。今の名は
東方不敗マスターアジア」
『なんかとんでもなさそうな名前出てきた!!』

実際、とんでもない人物なのだ。詳しい経歴は省くが、『弾かれた』訳ではなく鬼灯と同じく元々レジェンドの【エリア】出身であり、死後再び魂が肉体を持った存在である。
しかし、そんな事がどうでも良くなる程の実力を持ち、生前は高齢かつ病に侵された身でありながら数々の有り得ない戦闘をこなした格闘家。
再び生を受けた事で病は完治しており、レジェンドの光気をその身に受けてさらに修行を重ね、レジェンド自身にも修行をつけてもらった事で他の九極天同様異常に強くなった。というかバグり具合が半端なかった。

「最近の戦績はある世界でＱ６３星雲の星間連合一個師団を戦艦・戦闘機含めて生身で壊滅。続く別世界のラムダ・ドライバとかいう機能を搭載した機動兵器を使うテロリストを先述と同じように片っ端から生身で撃破。止めがまた別世界の宇宙でアクシズとかいう小惑星を、俺が生まれ変わらせたマスターアジアの専用機『ネオマスターガンダム』を駆り跡形も無く消滅させた」
「星間連合一個師団壊滅!?」
「いや戦艦戦闘機を生身でって何ですか!?」
「機動兵器とはロボットであったな」
「我はネオマスターガンダムとかいうのが見たい。レジェンド、我も専用機ほしい」

正真正銘マジで化け物レベルだった。
九極天と聞いてスカーサハとオーフィスは納得したようだが、八坂・九重親子は今だに呆然としている。リクは星間連合の一個師団がどれだけ強大かを知っているが故に、ロスヴァイセも戦艦や戦闘機を生身で破壊し尽くせるというだけでも十分ヤバイと理解したのだが、レジェンドの言った事実がそれにさらなる拍車をかけた。

「ちなみに武器は素手か布だ」
『嘘おおおおお!!??』

そうなるよね。

なお、ネオマスターガンダムは武器というよりモビルファイター……ぶっちゃけ巨大な甲冑みたいなものの上、特殊な武装と言っても精々腕が伸びるディスタントクラッシャーくらいである。マスタークロスはビーム布だし。ウイングバインダーのマント状態は非戦闘形態なのでノーカウント。生身でもモビルファイターでも素手か布なのだ。ぶっ飛び過ぎとしか言いようが無い。

「その人……いや従属神らしいから元人？どっちにせよ存在そのものがこの世界で言う神器とか神滅具とかそんなんじゃないの!?」
「んー……神器って言うなら俺が生まれ変わらせた専用機ネオマスターの方じゃないか？」
「それ使って小惑星消滅させたとか言ってませんでした!?」
「なんでもアクシズを地球に落とそうとした阿呆がいたらしいので。あの人、自然を大切にする方ですから許せなかったようです」

やっぱり冗談でもなく事実だった。なんで伝説九極天って味方から見てもヤバイのしかいないの……。

オーフィスはそれを聞いてますます自分も専用機が欲しくなったらしく作って作ってとレジェンドの腕を引っ張りながら強請っている。彼女が乗るなら身長的にモビルファイターとか、ダイレクト・モーション・リンクが搭載されてる機体がいいんだろうが、そもそも彼女自身もオーバースペックなので機体なんぞ与えたら大惨事になるのは間違いない。主に敵が。

「……怪獣や侵略者とも本格的に戦っていかねばならんからな。帰ったら考えてやるからな」
「やったー」

「お主正気か!?」
「確かに過剰戦力でしょうが無いよりはあった方がいいですね」

レジェンドは作る気満々、鬼灯も普通に肯定してた。たぶんこの勢いだと黒歌の強請っているあの機体も出来上がりそうである。
何だかんだ言おうが正直なところ、この世界で怪獣や超獣、宇宙人を始めとした侵略者に対抗する手段が三大勢力や各神話勢を含めても圧倒的に足りないのだ。

「ああ、そういえば……レジェンド様、サーガ様が近々この世界へ滞在されるようになるのはご存知ですね？」
「勿論だ。俺達が向こうを出発する時に直接会ったからな。本人は真面目だし単にベースにした人間をそのまま再現した人間体だったんだろうが……組織の制服みたいなあの格好は目立ったんじゃないか？あれ」
「まあ、あの方は殆ど人間体になりませんし……今まで真面目に職務をこなし過ぎたからか少々世間ズレしているところがありますから。そこが愛嬌とも言えますけどね。話は逸れましたが……サーガ様ですが、この世界へ滞在する為に来られる際に、『神衛隊(しんえいたい)』の方々も連れてこられるようです」
「……！いよいよあいつも本格的に動き出したな」
「なんでも『先輩や九極天ばかりに苦労をかけてはいられない』との事です。さすがレジェンド様の御後輩ですよ。神衛隊の方も既に準備を始めていると」

今日はよく聞き慣れない言葉が出て来る日だ。
レジェンドと鬼灯の会話にあった『神衛隊』。サーガはレジェンド達三人が京都に来る前に調査がてらにと挨拶に来ていたし、リクもゼロやダイナ、コスモスから聞いている。さすがにロスヴァイセや八坂、九重は知らないだろうが……。
話を聞く限りではサーガと何やら関係があるらしい。

「レジェンドよ。サーガはあの者と分かるが、神衛隊とやらは吾も聞かぬ名だが？」
「ああ……神衛隊。読んで名の如く、光神であるサーガを護衛する直属の精鋭部隊だ。所謂、俺の伝説九極天に当たる連中だな」
「私達九極天が『個』かつ『生身』での戦闘を重点に置いているのと対照的に、彼らは『郡』かつ『機動兵器』での戦闘を重点に置いています。サーガ様が人間体にあまりならない理由の一つはここにあります」

いつの間にやら鬼灯が紙芝居風に図を描いていた。しかもデフォルメされているレジェンドとサーガがやけに可愛らしい。
コピーを欲しがる面々の為にこれまたレジェンドが何処から取り出したのかプリンタでコピーし始めている。何なのこの二人息合い過ぎだろ。
とにかく、サーガがあまり人間体にならないのは自身の護衛を務める部隊が機動兵器に趣を凝らしている為であり、大型兵器を主として使うなら自身も敢えてそのままの方が護衛しやすいだろうと考えての事だ。
最近それが神衛隊にも分かったのか、『どんな姿であろうと関係なく護る』と直談判を受け、人間体になる比率が上がったという。そのおかげで人間体での交流が増えてさらに結束が深まったそうな。

「今後はサーガや神衛隊とも連携を取って事態に当たる事になるからな。仲良くするんだぞ」
「心配せずとも大丈夫です。濃い人物ばかりですが皆良い人なので安心して下さい」
「あの、鬼灯さん……濃い人物って安心していいのかな」
「ええ。口で言うよりも実際会ってみた方が早いですが、まだ準備中らしいので楽しみに待っていて下さいね。ではレジェンド様、続いて地獄式運動会の種目と内容について打ち合わせしましょう」

「オーケイそいつを待っていた。この話題になると俺ら毎回テンション上がるよな」
『地獄式って何!?』

二人共恐ろしい程に笑顔である。地獄式運動会、実行委員兼実況の鬼灯とアドバイザー兼ゲストのレジェンドの主導によるそれはまさに『地獄』。レジェンドは勿論の事、九極天も出場すると独壇場となってしまうのですべからく障害物枠。何その攻略不可能でスルーも出来ない障害物。

「あ、今回は宇宙警備隊や銀河遊撃隊、三大勢力に神話勢も加えて盛大にやる予定だから」
「内容も凄い事になりますよ。期待していて下さい」

平和な（筈の）一日に、レジェンドと鬼灯による死の……もとい地獄の宣告（ほぼ確定）が降り掛かるのだった。

〈続く〉

ホントにウルトラやばい一大事、現在の光神達Ｐａｒｔ２

レジェンドと鬼灯による地獄式運動会の開催予定を聞き何が起きるんだと戦々恐々とした京都組だったが、とりあえず今はリサーチを優先し、五日目は無事に様々な情報を入手出来た。出来たのだが……リサーチから帰って来て早々とんでもない事態に遭遇した。それは……

「いや、何でお前がここにいるんだ？ゼット」

目の前にいるウルトラマンゼットだった。

ちなみに名前と姿、及び彼に関する大まかな事柄に関してはゼロとベリアルから資料を送られている。

和風屋敷なので礼儀正しく正座しているウルトラマンがいるのもシュールな光景だが、そもそも遊撃隊で訓練中の彼が何故ここにいるのか。

レジェンドがリクの方を向いても「自分もこれは聞いてない」と首を横に振っていた。

「実はジード先輩が既に地球でゼロ師匠同様スタンバイしてくれてるとの事だったので、思わず飛び出してしまって！」

「……これはあの二人を筆頭に苦労する訳だ」

「でしょ、レジェンドさん……」

全く悪びれていないゼットにどう言うべきか考えてるとゼットがさらに追い打ちをかける言葉を言い放った。

「それでですね。いきなり来て手前勝手で申し訳ないのですがどなたか体を貸して頂きたくございます」

『はい？』

レジェンドやリクのみならず、他の皆、オーフィスや鬼灯さえ聞き返してしまった。

「お前、まだ人間体になれないのか？」
「はい」
「……おい、プラズマスパーク・ブレスは」
「実は……」

即答するゼットに、レジェンドはまさかと最悪な展開を予想した。そしてそれはものの見事に的中する。

「こちらに来る事ばかり気にして着けてなくて

マジでウルトラやばいみたい」
ピコーンピコーンピコーン
「おいアホォォォォォ!?」

エネルギー維持の問題を解決するプラズマスパーク・ブレスを着け忘れカラータイマーが点滅しだしていた。

「何で今一番大事なもの着け忘れてんだお前は!?いやむしろ今までよく保ってたな!?」
「大丈夫！道中何も問題起きなかったしウルトラゼットライザーとウルトラメダルも無事です！」
「道中以前に問題起こしてお前が死にそうになってんだろーが!!」
「レジェンドさんどうしよう!?僕は元々ウルトラマンだし鬼灯さんはあくまで休暇で来ているだけ！それから他の子は女性だし！」
「落ち着けリク！ゼロは今修行を手伝っているようだし、ここはベリ

アルにすぐ連絡だ！こっちは何とかする！」
「う、うん！分かった！こちら遊撃隊所属ウルトラマンジード！あ、ガイさん!?父さんは!?緊急事態発生！すぐ呼んでほしいんだけど!!」
リクが遊撃隊本部である移動基地ガーディアンベースに連絡し、その間にレジェンドはゼットにある事をさせるべく向き直る。
「おいゼット、単刀直入に言う。俺と一時的に融合するぞ」
「え……」
『えええええええ!?』
これまたブッ飛んだ事を言い出した。まさかウルトラマンが人間体のウルトラマンに融合など前代未聞である。しかも相手は別次元に格上。同格でかつウルトラマン同士とかなら究極フォームになったりとか割と有るのだが。
さすがにゼットを含めて全員驚いている。
「つべこべ言わずさっさとしろ。このままじゃアホ晒しながら消えるぞお前」
「いや、でもジード先輩の言うとおり元々ウルトラマンな、しかも人間体の相手に出来るのかどうか」
「俺の方が合わせてやる。一時的にでも融合しておけば俺からのエネルギー供給でプラズマスパーク・ブレス無しでも戦闘以外は何とかなるだろ。早くやれ」
「う、うううう……俺もウルトラマンだ！行きます！レジェンド超（ウルトラ）師匠!!」
『何その呼び方!?』
レオを大師匠、セブンを大大師匠と呼び、その二人どころかウルトラの父やベリアルの師匠でもあるレジェンドはさらに呼び方がランクアップしていた。数々のウルトラマンの師匠という意味ならまあ、

間違っていない。
　ともかく、ゼットが意を決して光となり、レジェンドの中に入っていく。そして光がレジェンドの中に全て入りきった後にレジェンドの身体が一瞬発光すると、カラータイマーの点滅が止んだゼットがまた現れた。どうやら限定的な実体化なら問題ないようだ。

「無事に成功したらしいな」
「え!?あ、ホントだ!ウルトラ助かったー!」
「……が、これでオーフィスと一緒に寝れなくなったな。一緒に寝たらゼットもオーフィスのマッパ姿を見る事になる」
「我、ゼット叩き出す」

　オーフィスの目が本気だった。あまりの殺気にゼットも「ひいっ!?」とウルトラビビっていたが、スカーサハやロスヴァイセに止められ何とか鎮まったものの、今度は本気で悲しそうだった。そんなオーフィスを気遣い、レジェンドは代替案を出す。

「オーフィス。つまり脱がなければいいわけだから、代わりに寝る時、ぎゅーしながら寝よう。それならどうだ?」
「……ん、それなら我慢する」

　早速ぽすっと抱きついてきたので、レジェンドはよっこいせと胡座をかいてその上にオーフィスを乗せる。
　ぎゅーは寝るときな、と言うレジェンドの言葉に素直に頷くオーフィスを見て漸く落ち着いたスカーサハ達。
　鬼灯は「夫婦……もしくはお父さんと娘ですね」とか思っていたが口には出さない。と、丁度リクがベリアルと話し終わったらしい。

「レジェンドさん、父さんが代わってくれって」
「はいよ。ありがとうな、リク。おーいベリアル、代わったぞ」
『師匠か?すまねぇな、ちょっと目を離した隙に行きやがった。焦ら

なくてもちゃんと行かせるって言ったのによ』
「おまけにプラズマスパーク・ブレス忘れて俺と一時的に融合するハメになってるしな」
『おい何だソレ笑えねーよ!?』

さすがにそんな事態になってるとは露知らずベリアルも狼狽えるが、そこは歴戦の勇士にして総司令官。すぐに平静を取り戻した。

「とりあえず、ウルトラゼットライザーとウルトラメダルはちゃんと持ってるみたいだし、今は何とか凌ぐが早急にゼット用のブレスを送って欲しいんだが……」
『……』
「おい、ベリアル？」
『師匠……師匠が作ったプラズマスパーク・ブレスだがよ、個人個人に合わせてチューニングしたやつを渡してるだろ』
「ん？それがどうし……まさか……」
『よりによってあいつのブレスまだ調整中だったんだよ……ちなみに進歩率３０％』
「完成さえしてなかったのか!?」

嫌な予感ほど立て続けに当たるレジェンドである。本作メインキャラ最大の不憫の称号は伊達ではない。こうなるとさらに問題は出て来るようで。

『あとな、ジード。お前用のゼットライザー受け取ったか？』
「え？僕のもあったの？でも僕はジードライザーあるし……あれ？」
『万が一も考えてな、専用のウルトラメダルと一緒にゼットに持たせて行かそうとしたんだが』
「「待ってちょっと待って聞きたくない！」」
『まるごと忘れて行きやがった』
「「やっぱりかよオオオオオオ!!」」

レジェンドとリクは同時に絶叫した。
確かにジードライザーがあるし、切り札のギガファイナライザーもある。それに他のウルトラマンもいるとはいえ、予防線を張っておくに越した事はないのだがその元もなる物さえ持って来てなかった。壊れたとかじゃなくて。
「……もういいや、無い物ねだりしても仕方ない。プラズマスパーク・ブレスの調整用のデータはこっちで取って送る。俺が一体化してる以上、直に身体にあいつの力が伝わるから計測装置よりある意味確実だ」
「僕用のゼットライザーとメダルはいざという時の為にそっちに保管して置いてくれればいいよ。なんだったら次に定期赴任してくれるメンバーに預けてくれてもいいしさ」
『本当に悪いな、二人共……』
「ウルトラすいません」
「『ホントだよ!!』」

流石と言うか、切り替えが早いレジェンドとリク。
そしてまた正座して謝罪するゼットに見事な連携でツッコむレジェンドと総司令親子。
そんな光景を見ていた鬼灯は密かにレジェンドとリクへ同情した。
「ま、こうなったらブレスが出来て届くまでゼットと二人三脚で騙し騙しやるしかないな。よもや俺が他のウルトラ戦士と一体化するとは思いもよらなかったぞ、いやマジで」
「元々僕もゼットのフォローの為に来たわけだし」
「それよりゼロになんて言おう……」
『いっその事包み隠さず話しちまった方がいいかもな。とにかく、ブレスの方は師匠から送られるデータで急ピッチに進めるからそれまで辛抱してくれ。ジードも頑張れよ』

「了解した」
「うん。ありがとう、父さん」
『おう。それじゃあな』

そうして通信は切れた。なんかゼットが「俺には!?」とか言っているがそもそも問題の原因は君でございます。

「さて、ゼット」
「なんでござりましょうか」
『いやさっきから言葉遣い変なんだけど』
「マジで？やっぱり地球の言葉はウルトラ難しいぜ……」
「僕とレジェンドさんは普通に喋れるから。確かに日本語って地球でも難しい部類に入るらしいけど」
「まあいい。こうやって人間大のサイズで実体化していいのは関係者しかいない時、もしくは俺の家……ダイブハンガーとかそういう場所限定だからな」
「イエッサー！」

ビシッと敬礼して返事するゼット。しかし先程の話を聞く限り物凄く不安なのだが。

「……サーガにもとりあえず伝えとくか」

自分同様、頭を悩ませる事になるだろう後輩にも事前連絡しておく事にしたレジェンドだが、向こうは向こうで大変なのもなんとなく理解していた。

☆

サーガは溜息をついていた。たった今レジェンドから連絡があり、非常事態だった為に別のウルトラマンと一体化したのは……まあ、仕

方ない。そっちはいいのだ。問題は……

目の前でサングラスを掛けて棺桶ダンス（ＢＧＭ付き）やってるノアとキングだ。

マジで何してんの、この二人。出て来る度に何かしら芸でもしないといけない呪いにでもかかってるのか？

「うーむ……やはり二人だけだとバランスが悪いな」

「大丈夫だキング。あと二人、レジェンドとそこにいるサーガがいる」

「誰がやるか。俺も先輩も」

ホント惑星ジェネシス来るのやめようかな……と本気でサーガは考え始めた。そりゃ、マジなのか悪ふざけなのか分からないものを度々見せられればそうもなるか。

（神衛隊の準備もじきに終わる。俺の方の引き継ぎも万全だ。後は俺自身の準備か）

二人は放っといて思考を切り替えて今後の事を考えるサーガ。

……と、ここで再びノアとキングが口を開いた。

「ああ、サーガ。レジェンドに伝えておいてくれ。私の【エリア】から弾かれた者達を手厚く受け入れてくれて感謝する、と」

「こちらもだ。なにせ弾かれた者達と関わり合いのある者達から『自分達からの礼も伝えて欲しい』と言われてな」

「……分かった、伝えておく」

「今だにこの現象については捜査や研究があまり進んでないが……迅速に動いてくれるレジェンドの伝説九極天やサーガの神衛隊にも感

謝している。ありがとう」
「そう言ってくれるなら、彼らも喜ぶだろう。今度は直接言ってやってくれ」
「そうだな。直接が無理だったとしても……そうか、寄せ書きという手もあったか。弾かれた者の出身世界で関係者達から募ってみよう。完成したものをそちらに送るとしようか」
「それは……流石に気恥ずかしく感じると思うが」
「弾かれた者達は何かしら大きな影響力があった者が多い。そんな彼ら……彼女らを保護してくれた者達への感謝というのは私達が考えているより大きいのだ」
「そうか……そうだな」

至極真面目な発言だった。やはり二人も【エリア】を統括する偉大な光神だとサーガは実感する。そして思う。

せめてサングラス外せ、と。

〈続く〉

それぞれの修行進展、男と男の誓い

京都組のレジェンドゼット一体化事件(?)から少し遡り同日の朝、ライザーとのレーティングゲームを五日後に控えた修行組は合宿開始から四日目にして漸くそれぞれが成果を出し始めた。

まずカナエは例の瓢箪にヒビが大きく入るようになった。割れるまであともう少しだが、その後にやっと『日の呼吸』の型の会得へ突入出来る。しかし、彼女は自身の目に見えるように結果が出た事が嬉しいのかさらに修行に熱が入っている。いや、日の呼吸だからとかじゃなく。

そんな彼女を師である縁壱は穏やかな笑顔で頷きつつ見守っていた。

小猫は出力は別としても、自然と仙術を使えるようになり鬼道の方の習得へと突入した。それから……

「ふむ、ペースは予想以上で文句無し。となると性質を考えるなら破道の方を集中して覚えた方が良さそうじゃな。瞬閧で纏って使うのは主にそっちじゃからの。それとは別の攻撃手段としても使える、よいな?白音」

「はい、夜一姉様」

なんと小猫が夜一を姉様呼びするようになっていた。

「なーんーでーにゃー!なんで夜一までその呼び方になってるにゃ!?夜一、白音に何したにゃ!?」

「何もしとらんわ!いつの間にかそうなっておったし別に悪い意味でもないし良いじゃろう!?」

「良くないにゃ!白音に姉様呼びされて良いのは私だけ!」

「もし儂ら全員があやつと結婚して一夫多妻状態になったら自然と姉様呼びが増えるかもしれんじゃろ?予行練習と思って我慢せい」

「ふぐッ!?」

夜一がボソボソと黒歌を諭す様に言うと、黒歌はそうなったら確かに他の者も同じ立場になるんじゃないかと思い口を噤んだ。普通に名前呼びされるとは考えなかったのか。

小猫は猫耳と尻尾をピコピコさせながらキョトンとしていたが、夜一に気にするなとワシャワシャ撫でながら愛でられていた。黒歌は妄想がより進行しているのか頬に手を当て顔を真っ赤にしつつ、くねくねと悶えている。

これ以降大丈夫かこの三人。

木場は持ち前のスピードを維持しつつ、ある理由からパワーなどをそのスピードと同じレベルまで上げていく方向になっていた。木場の持ち味を捨てる事なく、それに合わせる感じで他の能力をレベルアップさせる事でバランスを取るようにしたのだ。スピードに関してはそれからでも遅くはない。

「だいぶ安定してきたわね。パッと見分かりにくいけど細マッチョって奴かしら。なんにせよ、ちょっとは力付いて、加えて踏ん張りも効くようになったでしょ？」

「はい、乱菊さん。なんか自然な感じで踏ん張れるようになりました。以前は小猫ちゃんとの訓練でも簡単に地面から足が離れたりもしたんですが……」

「それはおそらく貴方の体幹が足……というか下半身へ偏っていたからでしょう。所謂梃子の原理というやつです。その状態であれば強い力を上半身に受ければ予想以上に簡単に吹き飛びます。ですが、しっかりと体幹バランスを整えてあげればそういった部分も含めて大きく結果が変わってきますよ」

「スピードに関しては後で歩法でも瞬歩でも教えてあげるから、まずはジェントさんの言うとおりバランスを重視して鍛えなさい。後は……ぶっちゃけ創る剣の種類ね。今までより大きいやつとか重いやつとか、使える範囲が広まってるでしょうから色々試してみなさい」

「ふむ。いっそ剣をベースに修行法を構築するのもアリかもしれませ

ん。どうでしょう?まずは試しに創ってみては」
「そうですね……やってみます。ジェントさん、乱菊さん」

一つの問題の打開案として出したこれが、まさかの後々とんでもない騎士(ナイト)を作り出す事になるとはジェント以外予想もしていなかった。
アーシアは回道以外にも、いくつか限定的ではあるが縛道の修得が出来た。さらに事前に掛けておく事で『トリガー』を踏んだ際に自動発動する回復術も編み出した。所謂遅延呪文(ディレイ・スペル)のようなもので、いざという時の保険としては申し分ない。

「初めは体力増強の為でしたが思わぬ収穫ですね。やはりアーシアさんは無理に攻撃系統を修得させず、回復及び戦闘補助に専念させた方が色々開花するようです」
「そ、そうなんですか?私、体力がないし運動もあまり出来ないからどうしたら間に合うかとか、そういうのを考えてたら思いついたのを実践してみただけなんですけど……縛道とかは卯ノ花先生が朱乃さんに教えていたのを見様見真似で……」
「その発想が大事なんです。そしてそれをそうやって実践する事も。アーシアさんの特訓メニューはそのままで、もし閃いた事があれば何でも試す事を追加します。周りを、そして自分をよく見るようにして下さい。そこから新しい何かがきっと見つかる筈です」
「はい!」
「そして姫島さんの方ですが」

朱乃は破道・縛道双方とも詠唱破棄で三十番台までは出来るようになった。それ以降は難度が急に上がったので思うようにいってないのだが……詠唱ありの場合は破道に限り、六十番台まで到達している。現に……

「散在する獣の骨!
尖塔・紅晶・鋼鉄の車輪

動けば風
止まれば空
槍打つ音色が虚城に満ちる！
破道の六十三『雷吼炮』ッ!!」
ドパァン!!

六十番台の破道で眼前の巨岩を破壊した朱乃がいる。轟音を聞いて他の修行組も驚きながら見ていたが、朱乃自身は連日の修行による疲労から霊力回復が間に合っておらず、加えて慣れない術の為に消耗も大きく両手と両膝を着いて肩で息をしている状態だ。
そんな彼女を突き動かしているのは、ある人物への想い。
幼かった自分と唯の人間だった母を救ってくれた鎧を纏ったの人物。彼にまた出会ったとき、恥ずかしくない様に。あの時その人物（朱乃曰く『グリッターナイトさん』カタカナになるだけで一気にまともになった）が見せた黄金の光線にはまだまだ及ばないが、少しでも近付こうとこうして辛い修行にも耐えている。
実際、オカルト研究部だけで修行するより短期間で目に見えて実力がついているからこの修行は正解だっただろう。

「これなら……もう一つの案でいけるかもしれませんね」
「「え？」」

卯ノ花の言葉に朱乃と、近くで治療の為にスタンバイしていたアーシアが同時に振り向いた。

「当初は臨機応変に立ち回れるよう破道・縛道双方六十番台まで詠唱破棄で使用出来るように、そう鍛えてきましたが……姫島さんの修得速度や傾向、得意分野などを考慮するともう一つの修行案、敢えて詠唱破棄せずに破道及び縛道の高番台を選別して修得させる方法です。詠唱妨害の危険はありますが、破道のみに限定するならば九十番……『黒棺』までいけるかと」

「き、九十番……!?」

九十番台。完全詠唱の破道ならば想像を絶する威力を誇る鬼道の最高峰。決まれば相手が上級悪魔でも一撃必殺レベルの術と言える。事実、詠唱破棄で半分程度の威力しか出せなくても護廷隊十三隊隊長クラスですら一撃で戦闘不能に追い込める程だ。

「どうしますか？万能型か、それとも完全に出力重視か。どちらも一長一短。選ぶのは貴女です。既にどちらも三十番台までの詠唱破棄は出来てますから、どちらも残りの難度はそう変わりません」

「でしたら……選別する方をお願いします。私が相手にする事になるのはほぼ確実に相手の『女王』。隠し手があるかもしれない事を考えればこちらも相手の知らない切り札を持っておく方が勝率は上がりますし。妨害は……受けても意地で詠唱しますわ」

「承知しました。一先ず休憩を取って少しでも霊力の回復を。その状態では高位の鬼道を使えば保って二、三発しか撃てないでしょう。それでは修行にならないでしょうし」

「わかりました」

素直に卯ノ花の言葉に従い、水分補給しつつ休憩を取る事にした朱乃。

今日を除けば最終調整まであと三日。このペースで修行すると丸一日休養したとして、体調が本当に万全になるとは思えない。急激な成長で身体にかなりの負担がかかっている為、普通に戦ったらおそらくはここにいる全員途中でリタイアの可能性がほぼ確実だ。

だとすると少なくともリアス以外に一人、出来れば二人は温存しておきたいと朱乃は考えた。

一人は文句無しにカナエ。日の呼吸がどういうものかはまだ詳しく聞いてないものの、それとは別としても先日ライザーと対面した時点で最強なのが彼女であり、今の師も底知れぬ実力者である事を考慮すれば修行後も一番強くなっているだろう。切り札としての立ち位

置になる筈だ。
　あと一人は正直誰でも良い。リアスには王として討たれない様に立ち回ってくれれば良いので、後はカナエをサポート出来るのであれば誰でも構わない。最も彼女がサポートを必要とするかは別問題だが……
　朱乃がそんな事を考えている間、リアスの方もハリベルから特訓を受けて自身の持つ『滅びの魔力』の本質……即ち『特性や能力をも滅ぼせる』という点に気付き、それを使いこなす為の訓練に入っている。
　ただし、それを使ってもレジェンドのオーロラルパワーとレジェンドプロテクトはまるで突破出来ないというのは言わないでおく。ついでに突破出来ても多分効かない。全く。

「修行始めより大分マシになった。この調子なら最終調整完了までにかなり使いこなせるようになるだろう」
「それは貴方のお陰よ、ハリベルお姉様」
「……お姉様？」
「だってルミナシアはお兄様の妻で義姉なんだけど……同時にメイドで、どちらかと言えば家庭教師っぽくて。こうして踏み込んで教えてくれたりとかはなかったもの。それにルミナシアみたく厳しいか、お兄様やお父様みたく過保護かでこうやってちゃんと向き合って特訓をつけてくれたのはハリベルお姉様が初めてなのよ」
　ボロボロになっているものの笑顔でそう答えるリアスに、かつて従属官として自身に仕えてくれていた三人を思い出し、自然とハリベルも笑顔になった。
「リアス」
「……！何、お姉様？」
「もう少し成長出来たなら、私の刀剣開放『帰刃（レスレクシオン）』を見せてやろう。こちら側では私の家族以外に見せた事も使った事もないものだ」
「本当!?」

「ああ、私が仕えるお方に誓って約束しよう。最終調整までに是非使わせてほしいものだな」
「俄然やる気が出たわ。続き、始めましょ」

ハリベルが仕える人物というのは余程凄い人物なのだろうというのは簡単に予想が出来る。縁壱や卯ノ花が仕える人物と同じなのだから、少なくとも魔王以上は当然だろうと。そんな人物に誓ってという彼女の言葉と、何よりハリベルが自分の成長を認めてくれた証というのが心の琴線に触れたリアスは再び奮起し、特訓を再開した。

ただ一人、一誠だけはまるで進んでいなかった。毎日毎日がむしゃらに岩を殴って、蹴って、怪我して、アーシアに治療されて……それの繰り返しだった。
ゲンもレイトも、他のメンバーの師達とは違ってただ黙って見ているだけ、しかも時々ゲンはその場を離れる。そんな状況ではただただ不満ばかりが溜まっていく。
ゲンがどう思っているかは分からないが、レイトは薄々気付いていた。

（あいつ、ありゃそろそろキレるか……もしくは、折れるな……ん？）

レイトがゲンの方を向くと、ゲンの顔色が少々悪く見える。普段なら気のせいかと思うが長らく弟子として一緒に過ごしてきたレイトが見間違える筈がない。あのデタラメ超人が目に見えて調子を崩すというのは普通ではないだろう。

「おい、顔色悪いっていうか何かフラついてないか？大丈夫かよ」
「心配するな。単に徹夜しただけだ」
「……あんたがそういうなら突っ込んでは聞かねえけどよ」

釈然としないがレイトはゲンの意思を汲む事にする。
その直後、ゲンが動く。その先には岩を砕くという修行に挫折したのか、座り込む一誠がいた。そしてゲンは近くにあった石を一誠の眼前スレスレに投げる。

「師匠……！」
「その顔は何だ!?その目は何だ!?
その涙は何だ!?」

あまりの大声と迫力にその場にいた全員が今度はゲンと一誠の方を向く。

「一誠！俺は……！うっ……」
「……！おいっ！しっかりしろよ！」
「師匠！どうしたんですか!?」
「うるさい！」

不満があったとはいえ、心配になった一誠は駆け寄るがゲンはそれを払う様に突き飛ばす。

「なっ……！俺はあんたを心配して……」
「馬鹿野郎!!」

一誠に平手打ちを喰らわせるゲン。流石にこれにはリアス達も文句を言おうとするがそれぞれ師に止められる。その意味はそれからのゲンの言葉にあった。

「俺の事などどうでもいい！お前はなぜ俺の言われた事をやらん!?」
「俺には……俺には出来ない！こんな事……」
「お前がやらずに誰がやる!?お前の涙でライザー(奴)が倒せるか!?リアス(守るべき者)を守れるのか!?」

「……！」
「皆必死に特訓を重ねているのに……挫ける自分を恥ずかしいと思わないのか!!」

ゲンの一言一言が心に突き刺さる。そして、ゲンの言葉を後押しするかのように卯ノ花や縁壱らが言う。

「ゲン殿は常々私達に聞いていましたよ。私達から見て貴方はどうか？どんな所を伸ばして、どこを克服すれば良いのか。自分だけじゃなく他の者の意見も聞きたいと」
「そういえばここのところ寝ずに机に向かって何かを書いておったのう。ま、それのおかげで儂らも修行方針が決めやすかったんじゃがな」
「ここにいる修行対象全員の良い点や悪い点、個人的に鍛えるべき所を明記したものを私達にくれたのだ」

これにはカナエや小猫を含めオカルト研究部全員が驚愕した。ゲンは一誠だけでなく、直接指導こそしないものの部員全員を見ていたのだ。

その上で一誠の鍛えるべき所を他の指導役の者達から聞いてまわり、それを元にしたメニューを考え、岩破壊の修行を突破したらそちらを行おうとしていた。一誠が岩を砕いてくれると信じて。

そして、ゲンはもう一度諭す様に語る。

「一誠、今の言葉はな……俺が昔未熟だった頃、隊長……レイトの父親に言われたものだ」
「え……!?」
「あの時は滝を切れと言われてな。お前のように涙し、弱音も吐いた。自分には出来ないとな」
『!!』

レイトや卯ノ花、縁壱以外はまたも驚愕した。未熟だったとはいえ、まさかあのゲンが泣き言を言ったなどと誰もが信じられなかったからだ。

「だがな、あの言葉で俺はもう一度修行をやり直し、敵を撃ち破る事が出来たんだ」

「師匠……」

「わかるか、一誠。お前はかつての俺と同じだ。特訓に挫折し、それを叱咤された。ならば、次は？」

静かにゲンは、初めて一誠を励ます。

「お前は必ず修行を成功させられる。もう一度立ち上がり、前を見ろ。逃げず、突き進め。お前らしくな」

ゲン同様、一誠は初めて師の本心を知った。ゲンは決して自分を見放していた訳ではない。寧ろ、課題を乗り越えてくれる事を信じ待っていた。己を恥じると同時に師の思いに応えるべく心に闘志が灯る。

「やるんだ……！もう一度やるんだ!!」

（漸くその気になったな、あいつ……後は岩が砕けるのも時間の問題だな）

レイトは本当の特訓を始める事を見越してゲンを一旦休ませ、自分も一誠にアドバイスを開始した。

「まだ威力が弱いうちはあちこち殴る蹴るしても効果が分散して対して効かねえぞ。だからよ、岩をその焼き鳥の顔面に見立てて一点集中で連続で仕掛けてみろ。実戦ならともかく、これは修行で的が動かねえんだ。文字通り、相手の鼻っぱしらをへし折る気持ちで思いっきりやれ!!」

「押忍！レイト先輩！」
「先輩……師匠はまだ重いけど、それは悪くねえな。実際兄弟子の立場だし」

どうやらお互い一皮剥けたのか、雰囲気も柔らかく、それでいて熱くなっている。ゲンはそれを見ながら自身が考えたメニューをこなす一誠を夢だけでなく現実でも見れるようにと祈りつつ、近くの岩に寄りかかるように座って仮眠を取る事にした。

「喰らいやがれ焼き鳥野郎ォォォ!!」
「その調子だ！一気に叩き込めぇぇぇ!!」

……中々に物騒な台詞であったが、ゲンの場合「脳天から真っ二つだ」とか言いそうだったのでまあいいか。こうしてギスギスしていたゲンやレイトと一誠の関係も良い方へと変化した。この後、ほんの僅かではあったが岩を砕く事が出来た一誠はレイトと共に喜び、起きたゲンに伝えたところ笑顔で「良くやった」と褒めてくれ、いよいよ一誠もスタートこそ遅かったが本格的な特訓に入る。

かくして各々の絆の深まりにより、特訓の成果は凄まじいものになる。ライザーはというと眷属と共に対カナエ用の戦術を立てているものの、レーティングゲーム当日にそれがあっさりと粉砕されるとは全く予想もしていなかった。

〈続く〉

希望の光メビウス、吼えろ！コンパチガリバー

京都組は一波乱（どころじゃなかったが）あったものの無事解決し、修行組もそれぞれの師弟が打ち解け、順風満帆に進んでいた頃、ダイブハンガーにて有事に備え待機しているグレイフィア、Ｃ．Ｃ．、ミライは涼子からある事件の話を聞いていた。

「ワームホール？町のすぐ上空に？」

「ええ。もっとも出現するだけでちょっとしたら消えるらしいけどね。でも、逆にそれが不気味なのよ。既に何回もそういうのが目撃されているし」

彼女が聞いた話では突如として町の上空へワームホールが出現するものの、何を起こすのでもなく少ししたら消えるという。

グレイフィアもＣ．Ｃ．も怪訝な表情を浮かべるが、ただ一人ミライが何かを察したのか発言する。

「もしかしたら、偵察か……もしくは牽制かもしれません」

「偵察か牽制？そのワームホールが……ですか？」

「そもそも何だそんな真似する奴は」

「チーフ達が戦ったっていう根源的破滅招来体です。先日火星にもワームホールを使い怪獣を送り込んで来たと、グレート先輩からも報告がありました」

根源的破滅招来体。今だに詳しい正体は不明であり、唯一分かっているのは地球に対する明確な敵意がある、という事ぐらいだ。後は刺客を送り込む時はワームホールを使うのが多いという事か。こちらは別の場合もあるので確実ではない。

先日の火星の件でもその方法でコッヴとコッヴⅡを差し向けレジェンド、グレート、ダイナと交戦している。

「少なくとも警戒はしておいた方がいいわね」
「だったら、僕が現地へ向かいます。幸い駒王町の隣町ですし、それに……」
「それに？」
「なんと言うか……皆さんチーフの家族で、女性ばかりなので……男の僕がここに一人だと居心地がその……ここにいないチーフに悪いような気がして」

頬を掻きながら控えめに言うミライに三人はキョトンとした後にクスクス笑った。やはり彼は真面目なのだろう、レジェンドが安心してこちらを任せるのも分かる気がする。

「なんだ、あいつに遠慮してたのか。私もお前の人となりを見ていたが、人一倍下衆な事をするような奴ではないだろ。逆に見ていて心配になる」
「そうよね。真面目で素直な分、狡猾な悪い宇宙人に騙されそうだわ」
「……いや、その……実は以前、ザラブ星人に騙されて……」
「何にしてもミライ様は気に病む事はありませんよ。ただ、向かわれる場合はどうかお気をつけて」
「はい、行ってきます！」
「それから、何かあればすぐにご連絡を」
「Ｇ．Ｉ．Ｇ！」

グレイフィアの言葉にＣＲＥＷＧＵＹＳ時代の返事で返して現地へ向かうミライ。その顔はかつて別の世界の地球で戦っていた頃の様に引き締まっていた。

☆

無事現地入りしたミライは万が一何者かに監視されていても可能な限り姿が見えない様に屋外カフェのパラソル付きテーブル、かつ壁

を後ろ側にノートパソコンを開いていた。

「今のところは何も無し。ただ、ワームホールは決まって町の中心部に現れるって話だし……ここにいるよりそっち行った方がいいのかな。いや、でもいざという時に変身するとなるとそっちじゃ人目が……」

う～ん……とミライがノートパソコンの画面を見ながら考えていると、何やら画面にノイズのようなものが走る。どうやら電波が悪くなったらしい。

「あれ？おかしいな……こっちに来る前ヒカリにもチェックしてもらったし、普通の電波妨害とかは受け付けないからこんな事は……」

その時、突如として周りが騒ぎ出す。ミライも何事かとそちらを向いてみると、そこには例のワームホールがやはり情報通り町の中心部上空に現れていた。

「あれは……！」

町にいた人々もそれを見に来た観光客や単なる見物人なのか、カメラや携帯などでその光景を写真に収めている。だが、その日は今までと違った。

少ししたら消える筈のワームホールから怪獣が出現したのだ。予想外の出来事にそれに遭遇した、又は見ていた人々はパニックに陥り我先にと逃げ出す。

「ば……化け物だぁぁぁ!!」

「逃げろぉぉぉ!!」

「何あれ!?この前夜中に出たのと一緒!?」

突如として現れた怪獣――宇宙雷獣パズズが暴れ出し町を破壊し始める。先程電波が悪くなったのはこの怪獣が持つ能力のせいだったのだ。
ミライは地元の警察に協力する感じで避難を誘導する。
「落ち着いて下さい！パニックにならないでこっちへ!!押さないで!!」
人々の避難を誘導しつつ、ミライは怪獣の近くへ向かい人目につかない場所へやって来た。
既にダイブハンガーへは連絡済みだ。そちら側がどう対処するかはグレイフィアに任せるしかない。
しかし、彼女なら信頼出来ると確信し、ミライは左腕を怪獣へ見せるように構えると、その腕にメビウスブレスを出現させる。
そこから右手をメビウスブレスのクリスタルサークルへ添え、抜刀するような動作で回転させる。
そして輝きが灯ったメビウスブレスをかざすように左腕を掲げながら己の真の名を叫ぶ。
「メビウゥゥゥス!!」
∞のマークがミライの身体を包み、光と炎の中から自身の教官であったタロウのように右手を開いて突き出し本来のウルトラマンとしての姿で現れる。
「ハッ!!」
変身完了と同時にパズズの前に降り立つ。
世界の壁を超え、ウルトラマンメビウスが再び地球でその姿を現した瞬間であった。
メビウスの登場に町から離れた場所へ避難していた人々もある者

は家族で指を指しながら、ある者は先程のワームホール同様写真に収めながら歓声を上げて沸いている。

「おい！あれ姿は違うけどウルトラマンだろ！」
「私達を助けに来てくれたんだ！」
「頑張って！ウルトラマン！」

人々の恐怖に染まっていた心はメビウスによって希望へと変わり、パズズへと果敢に挑むメビウスへの声援を送り始めた。

☆

一方、修行組のいる勉強部屋でもジードの時と同様にメビウスの戦いが空間ディスプレイで映し出されていた。

「また新しいウルトラマン!?」
「部長、何か知りませんか？」
「え……えぇと、お兄様に見せてもらった映像で確かあんな感じのウルトラマンが……」
「メビウス」
『え？』

矢的の声に全員が彼の方を向く。この時ゲンとレイトはまだ正体を明かしていない以上メビウスの名を言えなかった為、テレパシーで矢的を絶賛していた。

（よく言ってくれた８０!!）
（さすが８０先生！空気の読めるウルトラマン、いやウルトラマン先生だぜ!!）
（まあ、まだレオ兄さんもゼロも正体を明かしてないからね。あくまで関係者としか言ってないし）

「矢的先生、彼はどんなウルトラマンなんですか？」

矢的を絶賛する二人のテレパシーに苦笑しながらも聞いてきた一誠の質問に答える。

「かつてルーキーとして別の世界の地球で戦ったウルトラマンさ。その時の活躍でウルトラ兄弟と認められて、確か今……そうだ、ゾフィー兄さんやタロウ兄さんから宇宙警備隊養成学校で教官をやらないかと言われてるんだったな」

ウルトラ六兄弟から教官職の勧誘、つまりそれだけの能力を持った優秀なウルトラマンだという事。

「それから、彼を指導したのはタロウ兄さんだ。兄さんも彼の能力を高く評価していたよ。特に優しさと純粋さをね」

「え!?あのタロウが!?」

リアスが驚きの声を上げる。タロウが直々に指導し、さらにタロウのみならず他のウルトラ兄弟からも認められる程の実力者、それがメビウスだった。

もはや彼はルーキーではない。立派な先輩ウルトラマンだ。現にオーブは「メビウスさん」、ゼットは「メビウス先輩」もしくは「メビウス兄さん」と呼んでいる。

ジードに続き現れた勇者（ウルトラマン）の戦いを、一誠やリアス達は決して見逃すまいと注視していた。

☆

メビウスはジードのように相手に合わせてタイプチェンジする事は出来ない。しかし、師であるタロウから教わった技術や、レオ同様戦いの中で生み出した必殺技の数々がある。加えてメビウスブレス

の万能性もあり、いざという時はタイプチェンジこそ無いがフォームチェンジは出来る。

『極められた基礎こそが最大の必殺技』

自身が最も尊敬する人物の一人であるチーフ（レジェンド）から教わった言葉だ。実際、レジェンドの後輩であるサーガの最強技と称されるサーガマキシマムはサーガエフェクトを収束した必殺拳、シンプルに光の鉄拳である。

しかしそれによってハイパーゼットンを打倒した事からまさにレジェンドの言葉通りだろう。

ウルトラ兄弟で言えば、やはりレオのレオキックがそうだ。一撃必殺と言えるあのキックは、メビウスが強化形態バーニングブレイブとなり炎を纏ってさらに回転しながら放つ『バーニングメビウスピンキック』という技と同レベルの威力を誇る。逆に言えばそこまでしなければレオの必殺キックの威力まで届かない。まさに『キック』という基礎を極めた者が出せる破壊力なのだ。

師であるタロウもアトミックパンチという技があり、ただのパンチにも関わらず二代目メフィラス星人の腹に風穴を開ける程の威力を持っていた。

ノアに至っては超新星爆発にさえ耐える相手を一発で地上から宇宙までブッ飛ばしたノアインフェルノという炎の鉄拳がある。ちなみにその炎の温度は一兆度、加えて重力波のおまけ付きだ。化け物どころではない。しかもその後地上から光線技で狙い撃ちして跡形もなく消し飛ばしたのだから、普段はアレでもさすがレジェンドと同格の光神である。

そんな連中と比べるのは酷だが、メビウスとて既に歴戦の勇士。パズズ相手に遅れを取ったりはしない。

パズズの放つ雷撃を掻い潜りつつ接近しながらメビウスブレスのクリスタルサークルのエネルギーを解放し、飛び込み前転でパズズの懐に潜り込み『ライトニングカウンター』を腹部に叩き込む。

自身の放つ雷撃とは違うプラズマ雷撃の拳をまともに腹に受けたパズズは大きく吹っ飛んで倒れ込んだ。

その隙にメビウスは再度メビウスブレスのエネルギーを解放、光刃メビュームブレードを形成する。
起き上がろうとするパズズへと一気に接近し、すれ違いざまにブレードを一閃。パズズの上半身と下半身がズレたかと思えば大爆発を起こす。
幾多の激戦をくぐり抜けたメビウスにとっては然程強敵ではなかったようだが、圧倒的な戦いだった事で人々からさらに歓声が沸き上がる。
しかしメビウス自身はどこか釈然としないものを感じていた。そこそこの強さはあったが、いくらなんでも簡単にやられすぎではないかと。
直後、メビウスは背後から何かの攻撃を受けた。

「グァッ!?」

予想外の不意打ちと大きい衝撃に倒れ込むメビウス。人々が悲鳴を上げる中、メビウスが起き上がりながら振り向くと、そこに居たのはまるで金属の鎧を着込んだ人間のような姿をした怪物—金属生命体アパテーが立っていた。
アパテーはすぐさまメビウスへ追撃を仕掛ける。パズズとの戦いで少なからずエネルギーを消耗し、さらに先程の不意打ちによってダメージを受けたメビウスは少しずつアパテーに圧されていった。

☆

「マズイわね……おそらくは最初の怪獣は彼にエネルギーを消費させる為の囮。本命が今戦っている単眼の怪物よ。さっきの背後からの攻撃を防ぐか避けるか出来たら変わってたかもしれないけど、相当手酷く効いてしまったみたいだわ」
『このままでは良くて相討ちだな。何か手を打ちたいところだが』
「しかしゲン様とレイト様は勉強部屋でリアス様達と一緒で正体がバ

レかねず、レジェンド様も京都です。頼みの綱といえば矢的様……あら？」

グレイフィアが周りを見回すと涼子しかおらず、涼子もグレイフィアしかいない事に今しがた気付いた。

そう、C．C．がいないのだ。声はしたのに。

まさかと思い二人が彼女当てに通信しようとすると、モニターにC．C．の姿が映される。どうやら何かのコックピットらしくシートに腰掛けて操縦桿を握っていた。

『やれやれ、漸く気付いたか。あいつから連絡があってすぐに私は『コイツ』に乗って出番待ち状態だったんだぞ。まあ、無いなら無いで良かったが些か暇過ぎてな』

「C．C．様!?もしや出撃なさるおつもりですか!?」

『元々こういう時の為のコイツだろう？レジェンドには既に通信で許可も取ってある。お前が許可したら出ても構わんとさ。ほら、さっさと出せ。グズグズしていると折角あいつ用に調整したものが無駄になる』

「そう……ですね。わかりました。機体や装備の状態は？」

『元より整備ばかりしすぎだったくらいだ。外付けでマウントしてあるやつも万全に決まっている』

グレイフィアはそれを聞き、涼子の方を向くと微笑みながら、指で○を作っている。発進用射出カタパルトも準備が完了しているようだ。後は、代理とはいえ指揮権を持った彼女の指示一つのみ。

「コンパチブルガリバー、発進！」

グレイフィアの掛け声と共に涼子が操作パネルのエンターキーを押す。

それが合図となり、ダイブハンガーに新しく増設されたコンパチブ

ルガリバー用のハンガーごとカタパルトが海上へと浮上する。基本的にガリバーはハンガーで待機状態の間にカタパルトに接続されており、常にすぐ射出発進出来るようになっている。
ガリバー自身はプラズマスパーク・エンジン自体が永久機関、かつ単独飛行が可能なので現場までいち早く駆けつけられればいい。このカタパルトはその為のものだ。帰りはそのまま帰還するなり逆転送するなりすればよし。
C・C・はペダルを踏み、ガリバーの脚に接続されたカタパルトを起動させて一気に加速し、そのままガリバーは青空へと勢いよく射出される。
各部のブースターを使いバランスを取るようにバレルロールしながら、鋼の巨人コンパチブルガリバーはメビウスとアパテーの元へ急行した。

☆

メビウスとアパテーの激闘はやはりアパテーが優勢へ傾いていた。パズズとの連戦や不意打ちに加えて、金属生命体という種族特有の形状変化を利用した攻撃が非常に厄介なのだ。今もアパテーが右腕を変化させた剣でメビウスに斬りかかり、それをメビュームブレードで受け止めている状態である。
こうしている間にもブレードを維持する為にエネルギーは減少していき、ついにカラータイマーが音を立てて赤く点滅しだした。プラズマスパーク・ブレスのお陰で三分という活動時間制限は克服されたが、それがなければ既に倒れていたかもしれない程に消耗しているのも事実。
やはり背後からの一撃が尾を引いている。
しかし、人々が心配そうに見守る中、空の彼方から何かが飛来する。メビウスは敵の援軍かと警戒するが、飛来したそれは回転しながらアパテーへとキックを叩き込み、メビウスから吹き飛ばすように突き放すとその重厚な外見とは裏腹に軽やかな動きで着地する。

空と同じように青を基調としたカラーリング、金色に輝くパーツの数々、マッシブなボディ、そして勇ましさを感じさせる顔。まさにアニメのスーパーロボットが現実に現れたかのような姿はメビウスの危機を救った事も相まって人々を再び沸かせるには申し分なかった。

「何だあれ!?」
「凄い！ロボットだ！強そうなロボット！」
「ヤバい、頭や肩のトンガリ具合がたまらん！」

そんな歓声もどこ吹く風でいつも通りのC．C．はメビウスへと特殊回線を使って呼びかける。

「おい、ミライ。いや……今はメビウスか。まだ戦闘は続けられるか？」
「C．C．さん!?戦闘自体はともかく、エネルギー不足で満足な戦法が……」
「だろうな。ならさっさと済ませるぞ。この機体の前に少し離れてカラータイマーとやらを向けるように立て」
「え……？一体何を」
「いいから早くしろ。そろそろ奴も復帰してくるぞ」

C．C．の言葉通りアパテーがフラフラしながら立とうとしているのが見え、すぐにメビウスは彼女の言う通りにする。C．C．はパネルを操作し『ＭＥＢＩＵＳ』の項目を選択、ガリバーは背部にマウントしていた新型スペシウム砲を肩に担ぐ様にして構え、メビウスのカラータイマーへと照準を向けた。人々はもちろん、メビウスも一瞬驚くがC．C．を信じて待つ。

そしてスペシウム砲の砲門から青いビームがカラータイマーへと照射されると、点滅がなくなって元の青色に戻り、さらに全身にも活力が沸き上がる。

「これは……!?」
「あいつが作ったスペシウム砲の新機能『スペシウムチャージャー』とかいうものらしい。身を持って知っただろうがウルトラマンへのエネルギー補給と治療を同時行うのだそうだ。現状では対象毎に設定を変えたりしなければならないなど欠点も多いから頻繁に使えんがな。ついでにぶっつけ本番だったが成功して何よりだ」
「最後の部分はちょっと怖かったんですが……ありがとうございます！これでまた万全の状態で戦える！」
「私にもやらせてもらおうか。実戦での試運転の相手には丁度良さそうだ」

漸く立ち上がったアパテーの前に立っていたのは、自身へと構える赤き光の巨人と青き鋼の巨人だった。

☆

京都では街角の巨大ディスプレイでメビウス＆ガリバーＶＳアパテーの様子が映し出されており、人々は足を止めてその映像に見入っている。
レジェンド達はリサーチがてら屋外カフェで食事しつつそれを見ていた。ちなみにレジェンドと鬼灯は平常運転だ。

「「「「おおおおお!!」」」」
「なんか凄いの来た。あ、ガリバーだった」
「何じゃ、あれは……今世の人間はあんなものさえ作れるのか!?」
「レジェンド様ですよね、アレ作ったの」
「おう。しかしやっぱり出撃したか。グレイフィアが止めても出撃しただろうな、あいつは。暇だ暇だと言っていたし」

リクやゼット、九重にスカーサハ、ロスヴァイセまでその映像を興奮気味に見ている。おそらくメビウスを知っている三人に関しては

関心はガリバーの方だろうが。八坂も然り、ただしアレ作ったのは貴女の近くにいる光神です。オーフィスは実際動いているガリバーが予想以上凄かったので、一瞬ガリバーだと分からなかったようだ。
レジェンドと鬼灯はドリンクを飲みながらフライドポテトを食べながら次は何処へ向かうか相談している。ホントお前ら仲良いな。そして、おまけにレジェンドが一言。

「サーガの『神衛隊』はああいうのだらけだぞ」

「「ウルトラ羨ましいいいい!!」」

リクとゼットが一緒になって叫んでいた。幸い今のゼットはエネルギー体なので一般人には見えも聞こえもしないが。

☆

メビウスの回復とコンパチブルガリバーの参戦により戦況は一気に逆転した。まず、アパテーの攻撃がガリバーには通用しない。正確にはガリバーの防御機構であるプラズマエネルギーフィールドを抜けないのだ。仮に抜けても装甲材質に使われている、素粒子段階で強化された超抗力ペダニウムを傷つけられるかすら分からないが。
アパテーの攻撃を無力化したと同時にメビウスがヒットアンドアウェイ戦法で攻撃しつつアパテーの背後を取る。アパテーは当然のようにメビウスの方へ向くが、それこそメビウスの狙いであった。
ガリバーの手の甲にあるクリスタルに光が灯り、身体を捻りながら腕が射出される。ガリバーのメイン武装の一つ、プラズマスピン・ナックルだ。
メビウスに仕掛けた時とは逆に今度はアパテーが背後から大打撃を喰らった。アパテーが再び倒れ込んだのを確認し、メビウスはガリバーの隣へと戻る。

「今のはかなり効いただろうな。あまり長引かせても何しでかすか分からん。次で一気に決めるぞ」
「はい！」

Ｃ．Ｃ．の言葉にメビウスは頷き、メビウスは己の得意技を放つべくメビウスブレスのクリスタルサークルを回転させ、両腕を大きく横へ開く。そしてゆっくりと両手を回しながら左手を前にして十字に組み、アパテーへと向けた。

「シュアッ!!」

数々の強敵を撃ち破ってきたメビウスの十八番、メビュームシュートだ。
コンパチブルガリバーの方も胸部のクリスタルへとプラズマエネルギーを集中させる。クリスタルの周囲が軽く広がるように展開され、同時にクリスタルが強く発光した。そして気合を入れるように両腕を頭上へと上げる。

「消えろ！」

頭上で交差した両腕を開く様に振り下ろしながら、コンパチブルガリバーの必殺光線ガリバー・バーストが発射された。
メビュームシュートとガリバー・バースト、二つの凄まじい威力を誇る光線を同じタイミングで直撃させられたアパテーはまるで象のような断末魔の叫び声を上げながら大爆発した。その光景の一部始終を見ていた人々は喜びの声を上げる。
アパテーは倒したが、メビウスは最後にやる事が残っている。レジェンドから教わったリカバリーオーラを放ち、パズズやアパテーとの戦いによって破壊された町を元通りに復元する。これにより人々の歓声は最高潮に達した。そしてメビウスにある声が聞こえてきた。

「ウルトラマーン！貴方はなんて名前なの!?」
「京都のジードみたいに名前あるんだろー!?」
「教えてくれー!!」

まさかメビウスは自分の名前を知りたがっていたとは予想しておらず、C．C．に後押しされる。

「初出撃で疲れたから私はさっさと帰るがな、お前はヒーローらしく最後に民衆の期待に応えてからにしろよ」

そう答えるや否やコンパチブルガリバーは背中のブースターを噴かして飛び立って行く。ある程度離れてからはプラズマエネルギーフィールドをステルス化させて姿を眩ませる。この機能、ステルスだけでなく防御機能の方もちゃんと残っている代わりに攻撃武装が全く使えなくなる欠点もある為、隠密よりもこうして帰還する時安全に戻るのに使うらしい。

メビウスはガリバーを見送った後、避難していた人々へ向き直り指で空中に、光の文字でこの国の人々が分かるようにと片仮名で『メビウス』と書き、それが自分の名前だと言うように胸に手を当てて頷いた。

「メビウス……ウルトラマンメビウス！」
「ありがとうメビウスー！」
「あのロボットにもよろしくねー！」

その言葉に再度頷き、メビウスも空の彼方へと飛び去っていく。京都でジードが戦った時のように人々はメビウスの姿が完全に見えなくなるまで手を振っていた。

根源的破滅招来体の尖兵はメビウスとガリバーによって撃ち砕かれ、同時に世界各国では各地に多発する怪奇現象に対処する為に様々

なチームが組織され出した。レジェンドはそれを見越して手続きを済ませていた為、今後は合法的にガリバーやスーパーマシンを出撃させられるようにもなったのだが……

「おいレジェンド。スペシウムチャージャー、一回使ったらスペシウム砲として使用不可能になったぞ。今の仕様じゃ一度撃つと暫く邪魔にしかならん」

『マジで?そのままだと戦闘毎にチャージャーか戦闘用か選ばなきゃならんのか。そこんとこ改良しなきゃならんな』

やっぱり別の問題も出てきたのだった。

〈続く〉

決戦前、最後の休息日

メビウスとコンパチブルガリバーの活躍でパズズとアパテーが撃破された日から数日後、ライザーとのレーティングゲームが翌日に迫った合宿最後の日の朝。

最終調整に関しては各々師弟ら全員無事に終え、最後に模擬戦を……となったのだが、後は当日のお楽しみとの事で早めに切り上げて回復に努めるようにした。

現在、オカルト研究部にはちょっと困った事が起きている。と言っても悪い事ではない。

「いやあ、木場さんまさに大化けしましたよ。師として満足な成長結果です。そうでしょう？乱菊さん」

「ですよねージェントさん。ぶっちゃけあのスタートからこうなるとは夢でも思わなかったわ。最低でも護廷隊副隊長クラスは倒せるレベルまで行ってるわよ」

「ほほう？乱菊、儂らの白音はもはや隊長レベルじゃぞ。戦車どころか戦艦じゃ、のう黒歌？」

「儂らというのはスルーするとして……その通りにゃ。量産型ゲシュペンストがグルンガスト参式になったような激変具合にゃ！」

「いやソレ変わり過ぎだろ。誇張しすぎじゃね？俺の弟弟子の一誠なんてアレもう覚醒しちゃってんだぜ？それこそ悪魔からスーパー悪魔になった的な」

「彼がスーパー悪魔ならその主たるリアスはハイパー悪魔だな。あの夜に私と初めて会った時とはまるで別人だぞ。レシピなしの素人料理が熟練のプロの逸品料理へと変貌した」

「やはり料理で例えますか。こちらのアーシアさんも姫島さんも立派になりました。本来ならもう少し時間をかけてじっくり教導したかったのですが、それでも十分花開きましたよ」

「その例えなら我が弟子胡蝶カナエがピッタリだな卯ノ花殿。まさか私にちゃんとした後継者が出来るとは思わなんだ。レーティング

ゲームとやらでは一番注目されるだろう」
「うむ、今日もご飯が美味い！」

それぞれの師が各々の弟子自慢をしているのだ。ゲンはいつも通りだったが。

「なんつーか……今日は師匠が普通に見えた」
「ん？どうした一誠。まだ体に響くか」
「あ、大丈夫です師匠」

この二人も当初とは比べ物にならない程に仲が改善された。並んでガツガツとご飯をかき込んでいる姿は年の離れた兄弟か、親子にも見える。

「師匠、おかわりどうします？」
「そうだな。もう一杯いくか。一誠、俺は味噌汁の方を入れてやろう。具の量はどうする？」
「多めでお願いします！」
「よし！そうこなくてはな！」

こんな仲の良さだ。他の師が弟子自慢中だが、正直この二人の方が普通に自慢出来そうである。

「あの二人、あの時から一気に変わったわね」
「あらあら……師弟というより、もう家族みたいですわ」
「イッセー先輩、なんか活き活きしてます」
「うん。小猫ちゃんの言うとおり、前より活力が溢れてる感じかな」
「一時はどうなるかと思ったけど、良いところに落ち着いたわね～。あ、いたたた……」
「はわわ……カナエさん、大丈夫ですか？」

アーシアの治療を受けたとはいえ、合宿後半飛び抜けてキツイ修行だったカナエはまだ痛みが残っているようだ。相手と修行内容がアレだから仕方ない。
ただ、彼女らにとって今日は丸一日休日だ。この機会に休むにせよ軽く動かすにせよ明日に備えてさえいれば何かを言われる事もない。
「う～ん……私は食後に軽く素振りしたらお風呂入ってから二度寝しようかしら。いざ明日になって『満足に動けません』とか嫌だし」
「私は王として作戦を……と思ったけど皆凄く成長しててその具合も結局『当日のお楽しみ』になっちゃったから戦略の立てようがないのよね。本番でリアルタイムに立てるしかないし、ほんと今日はどうしましょうか」
「矢的先生の計らいで公欠扱いにしてもらってる以上、安易に町中を出歩くわけにいかないですし」
「ギリギリまで特訓も良いけど胡蝶先輩の言うとおりの明日に響いても良くないからね……」
「あの、皆さん。でしたらハンターズギルドでハンティングの見学とか……」
アーシアが何の気無しに言った言葉にその場の全員がぐるんと一斉に首を向けた。いきなりだったので本気で驚いたアーシアは「はわぅっ!?」と悲鳴を上げる。そりゃ確かに怖いわな。
『それだ!!』
正直思い直してみればジェント以外のハンターズギルドに協力してもらってない。とはいえ決戦日は明日だし今から無理に特訓するのも……なんて考えて、見取り稽古の如くハンター達のハンティング映像を見て色々試行錯誤してみようという事になった。
「それでは私達ハンターの生活の場でありハンターズギルドでもある

『光神の護り家』へと御案内しましょう」
「あちらではジェント殿と同じ宇宙人の方々が数多く生活なさっています。くれぐれも失礼の無いように」
『はーい！』

少なからず楽しみなオカルト研究部一同。カナエは常連だし、アーシアも行った事があるのだが。
そんなこんなで一行は簡易スターゲートを利用し、ウルトラ警備隊秘密基地兼ハンターズギルドへと赴く。

☆

初めてそこを見る一誠やリアスは圧倒された。最初に転移した部分でも現代では考えられない機器の数々があったが、少し離れればまさに別世界。
右を向いても左を向いても宇宙人だらけ。微妙に怪獣らしきものもいる。

「ここが我々のハンターズギルドです。ここからさらに、各星系の星もしくは宇宙へと向かいハンティングを行うのですよ」
「すっげえ……！マジでＳＦ映画みたいだぜ！」
「私達は魔方陣で冥界から人間界がいいところなのに…、科学だけで宇宙のあちこちなんて……」

ジェントは周りの者に挨拶しつつ定位置に座る。ジェントの巨体を考慮してレジェンドが手配した特注のソファーな為、彼もリラックスしている。

「さあ、皆さんお掛け下さい。丁度今はラッシュハンターズの三人がハンティングしていますよ」
「え!?バレルさんガルムさんマグナさんが!?」

「アーシアちゃん早口になってるわね～。あ、その三人が次世代七星剣の三人よ」

その言葉に驚いた一誠達……特に元祖七星剣の直弟子の木場はすぐさまジェントの隣に陣取ってモニターを凝視した。無論、その三人にはそれぞれ得意武器があるので普段は七星剣を使わないが、それでも戦い方は勉強になるはずだ。

今ハンティングの対象になっているのはベムスター。なお、プラズマ怪獣は宇宙人ハンター達の巨大化した姿……大体４０～５０メートルの約四倍程もの大きさがある。元の大きさが大きい程その幅は顕著になる。

単純計算で基本的に１５０メートルを超える巨大怪獣と当たり前にやり合っているのだ。この説明を受けた一誠達は顎が外れていた。それよりさらに驚いたのは……

「私達はジェントさんやラッシュハンターズの皆さんなんかと違って巨大化出来ないからそのままよ？」

『え？』

「卯ノ花先生なんか当たり前の様にゼットンをソロ討伐してたわ」

『はいいぃぃ!?』

聞こえちゃいけない台詞が聞こえた気がする。かの二天龍の白い方を瞬く間に瀕死に追い込んだあの宇宙恐竜のプラズマ怪獣版をソロ討伐って何？……と思ったけど九極天なら仕方ない。その主たるレジェンドはプラズマキラーザウルスさえ人間体で簡単にソロ討伐する化け物である。

それはさておきカナエ達もハンティングは行っているのだ。当然巨大化とかは元がそういう大きさだったり能力を持っていたりしないと出来ないので、カナエ達は人間大のまま挑んでいる事になる。

「……改めて思うわ。ライザー、とんでもない人物に喧嘩売ったわね」

「まあ、アレはネロンガ相手に善戦出来ればマシレベルでしょうね。カナエさんはこの間、ハリベルさんやアーシアさんと組んでスーパーアースゴモラを討伐しましたから」
『アーシア（先輩）（さん）も!?』
「い、いえ！私は殆ど回復専門で……」
「アレ相手にして五体満足無事生き残っただけで十分だろ。ていうか無傷だったよな。あの時参加したサポート役ってほとんどが攻撃に耐え切れなくてすぐにダウンするか、下手すりゃ瀕死の重傷だったんだぜ？アーシアの奴、神器のおかげで回復速度が早いから片っ端から参加したハンター治しまくって総攻撃の切っ掛け作ったしな」

カナエ達のハンティングに、実はレイトもゼロの姿に戻ってハンティングに参加していたのだ。その時はゲンもレオとして一緒だったので、ラッシュハンターズのマグママスター・マグナがマグマ星人だというのも相まって一悶着あったのだが、ハンティング終了後にはお互いを称え合える良きライバルになっていた。

「ま、何にせよ俺達ハンターにとっちゃ当たり前ってこった」
『え？』

修行組でもジェントでもない声が聞こえそちらへ向くと、先程のハンティングを終えたラッシュハンターズが帰還していた。さっきの声はガッツガンナー・ガルムのものだ。

「おおー！卯ノ花の姐さん達だけじゃなくてレイトやゲンまで勢揃い……って何人かいねーな。特に大将とかフィスっちは？」
「お二人ならスカーサハ殿と一緒に京都ですよ、マグナ殿」
「マジかー。サンダービートスターのハンティングが迫って来て興奮しっぱなしでよ、決戦前に大将達と俺らで組んで景気づけに一発大物取りしようと思ってたんだけどな」

しゃーないか、と割と簡単に納得したマグナ。一誠達は彼や卯ノ花の会話の中に初めて聞く名前があったが、とりあえず今は気にしない事にした。ジェントに対し、バルタンバトラー・バレルが修行の事について聞いている。どうやらライザーとのレーティングゲームの事はこちらでも周知の事実らしい。

「では、修行に関しては一先ず完了したんだな？」

「ええ。完了と言うより一段落、ですがね」

「やはり期間が短過ぎたか」

「しかしあまり引き延ばすのも向こうが納得しないでしょうからねぇ。まあ十日間で大した成長など出来ないと高を括っているだろうし、対策しても精々カナエさんに対してくらいでしょう、あの性格なら。それを粉砕する程度の実力ならば十分過ぎるほどつきましたよ」

まさに現在進行形でその通りだった。ライザーやその眷属達がカナエ対策に躍起になっているようだが、よもや新しい戦い方(呼吸)が増えているなど毛ほども思うまい。技云々よりまず性質がガラリと変わるのだから、それも考慮しなければ対策など意味は無い。

と、そこへシックルも合流する。

「ジェント、明日用の観戦用モニターは準備出来ている。そちらはどうだ」

「ええ。連中を泣かすには十分過ぎる見事な成長ですよ、彼らは。いやあ宇宙の広さを知ったらどうなるんでしょうねぇ、フェニックスの問題児」

いつものようにハッハッハと笑うジェントに「ふん」と一言だけのシックルは対照的だ。

「奴がレーティングゲームとやらの結果に納得せず仕掛けてきたらど

うする気だ」
「もちろん私が出張りますよ、責任もありますし。ただし……度が過ぎれば処分も辞しませんがね」
『!!』

一瞬見せた圧倒的な迫力に卯ノ花や縁壱、ウルトラマン以外の面々は冷や汗を垂らす。

「……せめてライザーが往生際だけは良い事を願うわ。別にそうなってもどうも思わないけど」
『部長!?』

ハリベルとの修行でリアスも随分逞しくなったようである。

☆

昼食はハンターズギルドのお世話になった修行組。カナエとアーシア以外のオカルト研究部一同、変な物でないよな……と懸念したが、寧ろ地球の食べ物が普通に出て来て事が驚いた。

「ほら、駒王町で有名なお寿司屋さん『馬場寿司』ってあるでしょう？あそこの板長さんの馬場さんも宇宙人よ。ババルウ星人っていうの」
「あらあら……両親と何度もお邪魔したのに気付きませんでしたわ」
「仕方ありませんよ。宇宙でもババルウ星人という種族は擬態能力が非常に高い事で知られてますからね」
「それによ、大将のおかげで地球の美味いもんがメニューに入ってギルドの方が活気づいてんだぜ。バナナうめぇ」

マグナはゲンと共に食後のバナナを頬張っていた。ちなみに二人が食した昼食はやはりカツカレー。

「おう、そういやよ……あんたらこの坊主や嬢ちゃん達に渡すもんがあるんじゃなかったのか？」
「そうでした。さて、オカルト研究部の皆さん。いよいよ明日はレーティングゲーム当日。今日まで誰一人欠けずによく合宿を乗り越えました」

ジェントの言葉を黙って聞く修行組。

「辛い事に直面し、一度は心が折れた方もいるでしょう。しかし、そこから這い上がった貴方達はもはやあの時とは別人と言って良い成長を遂げました。よって、私達から弟子である皆さんにささやかながら贈り物を用意しました」

まさかの御褒美発言。一誠やリアスが周りを見渡してみるといつの間にやらそれぞれの師が手荷物を取り出していた。大部分は服なのだろうが、縁壱のように刀を持っている者もいる。

「んじゃ、まずはジェントさんとあたしから木場……いえ、裕斗にね」
「乱菊さんからは『あの剣』の持ち主に相応しい衣装、そして私からはこの腕輪です」
「衣装は分かりますが、腕輪には何が？」
「貴方の神器で魔剣を作る際の魔力消費を可能な限り抑えられる物ですよ。以前ハンティングの際に発見して、何かに使えないかと取っておいたのですが……意外な使い道が出来ましたね。これならシンプルで、普段から着けていても問題ないでしょうし」
「ジェント先生、乱菊先生……ありがとうございます！」
「なんかむず痒いわね、先生って」

『あの剣』……おそらく彼―裕斗が神器によって創り上げた剣なのだろうが、それの持ち主にとは随分その剣を評価しているらしい。腕輪も含め、実戦が待ち遠しそうにしている。

「私と夜一からはこれにゃ！」
「刑戦装束と言ってな、隠密機動にのみ渡される服を再現した物じゃ。色合いはお主に合わせて白を基調にしたからの。動きやすさは随一じゃろう」
「ありがとうございます、黒歌姉様、夜一姉様」
「ささ、あっちで試着……」
「お主が見たいだけじゃろうが。本番まで我慢せい」
「なーんーでーにゃー！アレ着た白音をいち早く写真に収めるのはお姉ちゃんとしての義務にゃ！」
「白音、気にするでない。こやつ少々昂ぶり気味での」
「あ、はい」

簡単に納得した小猫。後にあの技の為に考案された衣装と聞いて、黒歌が暴走してた理由がなんとなく分かったらしい。

「では、次は私だな。正確にはあの方からの贈り物を私経由で渡す形だが」
「え？」

縁壱がカナエに渡したのは一振りの刀―日輪刀によく似ていたそれは、柄の部分に文字が彫られている。

「かげ……ろう？」
「そう。その刀の名は『日輪刀・陽炎』。君の為にあの方が創り上げた唯一無二の専用日輪刀だ。時が来たら渡そうと思われていたようなのだがこの場にいられぬ故、先日私の元へ転送された。決戦前に君にこれを渡してほしいとな」
（……レジェンド様）

カナエは、たとえこの場にいなくとも自分達の事を考えてくれる主

にして想い人に、感謝を伝えるかのようにその刀を抱きしめた。
「縁壱先生、ありがとうございます。あの方へは戻って来たら直接御礼をしますね」
「ああ、その方が良いだろう」
「では、私はアーシアさんと姫島さん……いえ、朱乃さんと呼ばせて頂きますね。お二人にもそれぞれ特別な衣装です」

卯ノ花が取り出したのはアーシアと朱乃、各々別に用意した服だ。
「まず朱乃さん。貴方には羽織付きの死覇装（しはくしょう）、私と同じ服ですね。ただ、羽織の背中の何番隊かを標す隊紋の代わりに、グレモリーの紋章を標しました。今の貴女ならかつての隊長達に混ざってもおかしく無いですから」
「卯ノ花先生、羽織に恥じぬ戦いをこの場で誓いますわ」
「それからアーシアさんにはカナエさん同様、あの方からの贈り物です。貴女の決意を伝えたところ、もしその気持ちが変わらぬのなら、と渡してほしいと……あの方専属の『巫女』としての衣装です。今までその座が不在だったので、あの方自らのお手製との事ですよ」
「あ……！」

つまり、光神の巫女としての巫女装束である。まさかのレジェンドの手縫い。そういえばオーフィスの服もレジェンドのお手製であった。
卯ノ花より受け取った衣装をカナエ同様に抱きしめ、アーシアは目を潤ませながら卯ノ花へ告げた。
「私……卯ノ花先生に教わった事を活かして、あの方を支えていきますっ！」
「ええ。アーシアさん、朱乃さん、お二人の活躍に期待してますよ」
「「はいっ！」」

二人の力強い返事を聞いて満足そうな卯ノ花。残る二人、まずはリアスにハリベルが渡したのは女性用の破面衣装をアレンジしたもの。ハリベルが着ている物と織姫が着ていた物を巧く組み合わせた感じである。

「私が着ているのと同じ物ではさすがに露出が多いと言われてな。リアスならこれでも似合うと思ったからそれとは別にもう一着用意した」
「ありがとうハリベルお姉様。お姉様と同じやつはまさに『勝負服』って感じね」
「無論、色はお前に合うように紅を基調にした」

正直、それをリアスが着たら一誠が鼻血を出しかねない気がするのだが。水着とは別のベクトルで性癖に突き刺さるだろう。
そして最後は一誠だ。一誠にはゲン発案の、特殊繊維を織り込んだ空手着。しかし、ある一点が気になった一誠は二人に聞く。

「師匠、先輩。この文字は？」
「ああ、それはな……」
「お前の名前だよ、兵藤」
「矢的先生？」

それに答えたのは顧問として見守ってきた矢的だった。

「実は彼……レイトの発案なんだ。兵藤が僕や他のウルトラマンの活躍をよく見ているから、という理由でね。僕らの文字、ウルトラサインで兵藤の名前を道着に付けられないかと聞かれたんだ。それでその文字がウルトラサインで『イッセー』と読むんだよ」
「え……!?」

一誠が驚きの表情でレイトを見ると、彼は普段通り親指で鼻頭を擦る仕草をしつつ笑っている。当初は最悪と言っても過言ではなかった関係。その二人の仲もゲンの、レオの言葉で一誠が奮起し、レイト……ゼロがそれを後押しする事で改善された。

そんな彼が一誠への贈り物にと選んだものが『ウルトラマンとしての名前』だった。

一誠はまだ二人の正体は知らないが、一誠の名前のウルトラサインを教えてくれた矢的を含め、一誠は三人のウルトラマンから贈り物を貰ったのだ。

赤龍帝―その名が示すような燃える様に赤い生地に、銀色の己の名を示すウルトラサインが付けられた道着を。

「師匠……先輩……矢的先生……！」

「おいおい泣くのは早いだろ。聞いた限りそのフェニックスの野郎は俺も気に食わないしよ、思いっきり正面からぶっ飛ばしてこいよな！」

「僕は見ている事しか出来ないが、気持ちは一緒だぞ兵藤！」

「泣くな！お前は男の子！」

「それ第五話のタイトル!!」

レオ（自分）の原作第五話のタイトルを言ってレイトと矢的にツッコまれるゲンを見て、漸く一誠も笑顔になった。

「師匠、先輩……実戦では『アレ』やっていいですか？」

「ああ、アレか。良いんじゃね？どうせなら派手にやってやれよ。ソイツも納得してるしな」

「まさか短期間で代償も払わずに至るとは向こうも思うまい。度肝を抜くにはこれと無いものだ」

『……？』

どうやら三人しか知らないようだが、一誠にも切り札が出来ている

ようだ。師弟揃って悪い顔をしている。
その後、開始時刻になるまでは再び仮住居の方へ戻り、各々休息を取ってレーティングゲームに備えた。いよいよ決戦の時。リアスとライザー、己らの未来を賭けて二人の意地がぶつかり合う。
ただ、その戦いの中にかの邪悪が潜んでいるとは今は知る由もなかった。
〈続く〉

ゲーム開始、始動！新生オカルト研究部

レーティングゲーム当日の夜、オカルト研究部のメンバーは各々師より賜った衣装を纏い、旧校舎の部室にスタンバイしていた。ちなみにカナエの場合は専用の日輪刀だったのでいつもの鬼殺隊の制服（柱用の羽織付き）だ。

「朱乃のはカナエの服に似てるわね。羽織の下が和洋違いって感じかしら」

「そうねー私は『柱』だったから羽織あったし、卯ノ花先生は隊長だったから羽織があったみたいよ。そういう意味でも似てるかも」

「部長は落ち着いた感じですね。もう一着貰ってましたけど、そっちは？」

「あっちだとライザーが興奮しそうで……」

何せハリベルのやつの色違いだ。一誠には刺激が強いだろうし、あのライザーもやましい事を考えないとは言い切れない。

「あの……やっぱり背中スースーします」

「……黒歌がすぐに着せたかったのはこれが理由ね」

「あらあら……確かに動きやすそうではありますわ」

白音が着ている刑戦装束……傍から見ればドスケベ衣装と思われてもしょうがない。あの技の使用を前提とした装束の為、肩から先と背中の布地が無いのだ。

「似合ってるぜ小猫ちゃん！」

「……イッセー先輩、道着と同じで顔が真っ赤です。鼻血は出てませんけど」

キリッと決めながらサムズアップしているイッセー。しかしまさ

に『赤』龍帝。鼻血こそ出て無いが耐えているのか指先まで真っ赤である。良くぞここまで煩悩を抑えられるようになったものだ。

「イッセーもよく似合ってるわ。合宿で一番レベルアップ出来たのはイッセーとカナエの二強ね」

「ありがとうございます部長！今日はあいつらだけじゃなくて、部長達も驚かせるやつ引っさげてきましたから！」

「ふふ、期待してるわよイッセー」

ここまで自信有りげに言うのだ。あの二人も認めたそれは相当なものだろう。

「ていうか木場から強キャラ臭半端ないんだけど。お前何したらそんな風になるんだ？」

「最初はジェント先生や乱菊先生も驚いてたんだ。僕自身もこうなると思わなかったし……でも今はしっくり来るんだ」

「裕斗先輩、何か知り過ぎませんでした？強くなれる理由とか」

「無惨コロス」

『カナエ（先輩）（さん）!?』

何故かカナエが縁壱と初めて遭遇した時の状態になった。なお、レーティングゲームの前にカナエも含め、全員が名前で呼ばれる事になった。修行合宿で連帯感が生まれたからなのだろうか。

「アーシアの服はなんかこう……シスター服から一転して神秘的な感じになったよな」

「ホントにファンタジー物の巫女みたいだね」

「……いいなぁ、アーシアちゃん」

「えへへ……」

レジェンドお手製だという『光神の巫女』装束を着てご満悦なアー

シアと、それを羨むカナエ。いっそ自分のこの服もアレンジしてもらおうかと考えていると、ルミナシアが現れた。

「皆さん、準備はよろしいですか？開始十分前です」

「確か矢的先生のおかげでこれが終わったら一日お休みよね？あまり寝ないままだと学業に響くもの。……あ、そういえば私あの方に家庭教師してもらってそっちは大丈夫だった」

「カナエ、全然緊張してないわね……」

「リアスもでしょう？相手がフェニックスでなくて縁壱先生や卯ノ花先生だったらガチガチになってるわ」

『ごもっともです』

あんなのが揃って相手だとしたら終始汗が滝のように流れ出てるだろう。一人でも勝ち目が無いのに二人以上になったらどう考えても絶望しかない。

そんな彼女らの思いは露知らず、ルミナシアは何故ここまで落ち着いているのか不思議だった。少なくともリアスにとってライザーは格上のはず。この十日間の間に何があったというのか。

「開始時刻になりましたら、ここの魔方陣から戦闘フィールドへ転送されます。転送先は戦闘用に構築された使い捨ての空間ですので、思う存分にどうぞ」

（レジェンド様のスパークレジェンド一発で簡単に消し飛びそうね）

あの技を実際目にしたカナエは思う。アレには無限だろうが夢幻だろうが果ては概念や因果律も無視して消滅させる、滅びの魔力の究極完成型とも言える技だ。にも関わらずその上があると言うのだから笑うしかない。

そしてさらにカナエは思う。

（あれ？もしかしてノア様がライトニングノア誤射しても消し飛ばな

いかしら）

かつてその誤射で夢幻（グレートレッド）が瀕死になりました。

改めて思い返せば技一つでも規格外過ぎる。カナエがそんな事を考えている間にもルミナシアの説明は続く。

「なお、今回のレーティングゲームはグレモリー家とフェニックス家、両家の皆様も別の場所からの中継でフィールドの様子をご覧になられます」

「七星剣のジェントさんとギルドガードのシックルさんを筆頭とするハンターズギルドの皆さんもというのを忘れずに」

ちゃんと聞いていたカナエによる補足が入る。実を言うと、修行組の師達はジェント達と一緒に、ダイブハンガー待機組は指令室のモニターで、レジェンド達は八坂と九重の屋敷でそれぞれ観戦している。オカルト研究部以外の者はまさかこれ程の人数に見られてるとは思うまい。

「それから、此度の一戦は魔王ルシファー様も拝見されます。お忘れなきように」

「……やはりお兄様も見ているのね」

「あ、やっぱりそういう関係だったのね」

「「「「え？」」」」

カナエの言葉にアーシア以外のオカルト研究部とルミナシアが一斉にカナエの方を向く。カナエは「予想通りね～」と大して気にするでもなく、アーシアは何やら悩んでいる。

「カ……カナエは知ってたの？私のお兄様がその……」

「確証はなかったけど。だってあの遊郭入り浸ってそうなの、女性に困ってなさそうだし……爵位持ち程度でただの婚約者なら『代わりは

いるんだぞ』とかも言うでしょうし、アレ。だとすると残ってるので一番有力なのがリアスの家系が優秀とか、特別な力があるとかそんな理由でしょ？後は最悪……身体目当て」
「ええ、まあ……そのとおりなんだけど」
「ぶっちゃけ家系云々より結局個人次第よ。どれだけ優秀な力でも磨く努力を怠ったりしたら自然と廃れるんだから。それに結婚に純血同士がどうこうよりお互いを尊重し支え合えるのが一番なのに。純血と言えど相手があの性悪七面鳥じゃ結ばれたりしてもロクな事にならないって普通は気付くでしょう？」
「カナエと友人になれてよかったわ」

何やらリアスとカナエの友情が更に深まったらしい。ガシッと両手で握手する二人はかつてないほど笑顔だった。

「やっぱりそうよね！裕福でも嫌々な結婚するよりは苦しくても好きな人と結婚したいわよね！ゼロからのスタートでも構わないわ！」
「その意気よリアス！身分とか種族とか関係なく心からお互いを大切に思えればあらゆる困難を乗り越えられるはず！」
「目指せ愛のある結婚ッ!!」

決戦前に二人揃って何か妙なテンションになっている。とりあえず魔王がリアスの兄とかそういうのはどうでも良くなったらしい。

「あのぅ……どうして悪魔の皆さんがそういう体系になったとかは説明しなくても良いんでしょうか？」
「大丈夫よアーシアちゃん。レイブラッド事変で正規の魔王の皆さんが亡くなって、いないとマズいし仕方ないから能力の優れてる面子で代わりを務めましょう的な事になったのは理解してるわ。別の小説とかでも度々説明されてるし」
『カナエ（さん）（先輩）最後メタい!!』

この状況でもこんな事を言えるあたり、やはり彼女もレジェンド一家であった。あの家族は加速しまくるボケとツッコミが日常茶飯事だ。

性格的にアーシアはともかく、カナエを含め他のレジェンド一家にとって悪魔の種族事情とかはどうでもいい。ゴーデスや根源的破滅招来体、そしてそれら以外にも存在するであろう脅威の方がよっぽど問題だ。悪魔であるグレイフィアでさえそう感じている。

「そろそろ開始時刻です。皆さん、魔方陣の方へ。なお、転送後はゲーム終了まで再度魔方陣で転移する事が出来なくなります。お気をつけて」

ルミナシアの案内で魔方陣へと移動すると紋様が別の物へと変化し、ルミナシア曰く戦闘フィールドへと転送される。

☆

リアスらオカルト研究部が転移してきたのは旧校舎の部室……を模した場所。どうやら駒王学園そのものを戦闘フィールドとして疑似空間に構築したようだ。

（……何かしら。アーシアちゃんを救出しに行った時のような感覚。堕天使のそれではないし……嫌な予感がするわね）

何か違和感を感じたカナエだが、今は漸く始まるレーティングゲームに集中する。そしてルミナシアによるアナウンスが流れた。

『皆様、この度グレモリー家・フェニックス家のレーティングゲームの審判役を担うことになりました、グレモリー家の使用人ルミナシア・ルキフグスでございます。我が主、サーゼクス・ルシファーの名の元、ご両家の戦いを見守らせて頂きます。どうぞ宜しくお願い致します』

その後続けてされた説明によると、オカルト研究部側は旧校舎のこの部室、ライザー側は新校舎の生徒会室が『本陣』となり、兵士（ポーン）のプロモーションを行う場合は本陣周辺まで赴く必要があるとの事。

（正直、今の戦力を考えるとプロモーションとやらを行われても十分対処出来るわね。問題は十分に戦闘出来る『時間』。リアス達も分かっているとは思うけど……やはり短期間で爆発的に成長出来た代わりに、その反動でまだ体力回復が完全じゃない。文字通り万全ならいざ知らず、今の状態では時間をかければ不利になる）

当然というべきか、修行密度と成長速度に対して休息の度合いが圧倒的に少なく、最初からハイペースで戦うとおそらく終盤……下手したらそこまで持たないかもしれない。

フェニックスお得意の不死能力を駆使して持久戦となったらいくら成長したオカ研メンバーでも厳しいだろう。

これに対処する策は二つ。一つは一気に畳み掛ける速攻戦術。今のオカ研メンバーならば可能だが、そう簡単にいくとも思えない。最初から総出でライザーの元へ向かってもこちら側の本陣まで接近し、女王へプロモーションした兵士との挟み撃ちに合う可能性もある。

となれば残るはもう一つ。少数精鋭で可能な限り敵の数を減らし『切り札』を温存してライザーとの直接対決を狙う方法だ。自分達が行うならこちらだろう。個々の戦力が充実した今のオカ研メンバーだからこそ可能な戦法。

カナエがそんな事を考えていると朱乃から全員へイヤホンマイク型の通信機が配布された。

「戦場ではこれを使って味方同士のやり取りをするわ。大切に扱って頂戴」

「アーシアちゃん、縛道の一つに広域連絡術あったわよね。それは使える？」

「えと、七十七番の『天挺空羅』ですよね。なんとかそれなら使えます。詠唱必要ですけど……」
「十分よ。いざとなったらそれでね。通信機器が使えない事態が起こったらでいいから」
「はい！」

笑顔で「よろしい！」とカナエがアーシアに頷くと同時にルミナシアから校内放送で宣言される。

『開始のお時間となりました。なお、このゲームの制限時間は人間界の夜明けまで。それではゲームスタートです』

レーティングゲーム開始後にまず行うのは作戦会議……なのだが、今のオカルト研究部なら大抵の事は対処出来てしまうが故に作戦というより方針の確認である。

「さてと、本来なら地図を確認しながら会議……と言いたいんだけど、ざっと見る限り皆相当レベルアップ出来ている以上、それを見ないまま作戦を立てると返って各々の戦略を狭める事になるわね。かといってここで披露してもらっても万が一監視されていないとも限らないし……」
「監視は大丈夫よ。いるとしたら観客ぐらいね」
「観客……あ、そういう事ね。どちらにしても私達の作戦……いえ、方針はただ一つ。『カナエに可能な限り休息を取らせてライザーとの直接戦闘まで持ち込む』これに尽きるわ」
「……あれ？」

どうやら自身の知らぬ間に行動方針は決定していたらしく、カナエ以外は皆頷いている。リアスはカナエに向き直って言う。

「ごめんなさい。いざという時に貴女に任せ切るような作戦で。本来

ならゲームを受けた私自ら決着をつけるべきなのに……」
「え？私はただ既にそういう方針だって知らなかったから唖然としてただけで最初から性悪七面鳥は私が引導を渡す気だったんだけど」
「「「「あれ？」」」」

さっきと反応が真逆になった。リアスは結局カナエ任せな事に良心の呵責なんかもあったのだが。

「リアスが気にする事じゃないわ。というか私も喧嘩ふっかけたし、そのつもりで修行してたんだし」
「そう……私一人で勝手に気負っていたのね。だったらこの場合は『ありがとう』よね」

いつも通りなカナエに安堵したのもあったのだろう、リアスは穏やかな笑顔になり、改めて作戦を説明する。

「それじゃ、改めて作戦会議しましょう。最終的な目標は他から邪魔が入らないようにしてカナエとライザーの一騎討ちまで持ち込む事。その為なら、いざとなれば私も前線に出るわ」
「でも、あくまで予想外の事態が起きた場合。それまでは基本的に部長はアーシアさん、カナエと共にここに待機ですわ。アーシアさんとカナエは駒の特性がありませんし、カナエは先の通り最後の切り札、そしてアーシアさんは元々後方支援型ですから」
「つまり序盤から中盤にかけては俺と木場、それから小猫ちゃんが軸になるってわけですね」
「ええ。厳しいとは思うけど頼んだわよ、三人とも」

一誠、裕斗、小猫の三人は頷く。そこに迷いはない。

「おそらく相手の女王も早い段階で仕掛けてくると思います。そちらは私が引き受けますわ」

「お願いね、朱乃」
「……なんかもどかしいわね。皆がさあ頑張ろうって時に私だけ休むの」
「大丈夫よ。その分最後には大働きしてもらうから」

最後の最後で全員分の期待がのしかかってくるからある意味カナエが一番大変とも言えるのだが。

「本陣周辺には森があるわ。それから重要なのはこの旧校舎に近い体育館。最初は森にトラップを仕掛けて体育館を制圧しようと考えたのだけれど」
「では森には僕が。進入されてもトラップ無しで制圧できますし、そのままそちらから進軍します」
「裕斗、一人でいけるの？」
「はい。というか今の僕は得物が得物なので、単独行動の方が味方を巻き込まずに済むんです。あ、別に二人が力不足とかではなくて、イッセー君も小猫ちゃんも前衛型、それも格闘主体の接近戦に特化してるのであの大きさだとどうしても僕の方が位置調整する事になって全力が出せないんですよ」
「てことは木場の創った新しい剣ってかなりデカいんだな。もし俺や小猫ちゃんが銃とか弓とか持ってたら大丈夫だったのか？」
「うん、ある程度離れた位置から攻撃出来るのならその方法をとってくれれば大丈夫なんだ。僕以外に一人なら割と間合いを考えられるけど、二人以上でしかも屋内となると満足に動けそうにないし、イッセー君と小猫ちゃんの方がバランス良く攻撃力と機動力が確保出来ると思う」

どうやら裕斗の得物が大きい為、動きが制限される場所で多人数行動がしにくいらしく、森の方から裕斗、体育館からイッセーと小猫が進軍する事になった。朱乃はどちらかに現れるであろうライザーの女王の相手をする為にスタンバイする。

「それからね、カナエ。貴女には最後以外、序盤に一仕事だけお願いしたいの」
「ん？何、リアス」

リアスはカナエに作戦を伝え、カナエはふんふんと頷き了承する。カナエが了承した事で他のメンバーにもその内容を伝えると若干驚かれはしたものの、すぐに納得してくれた。そしてリアスによる号令が発せられる。

「さて、準備は良いかしら？私の可愛い下僕達にカナエ、アーシア。ここまで来たらもう引き返せないし、そのつもりもない。相手はフェニックス家でも有望視されている才児ライザー・フェニックス。さあ、消し飛ばしてあげましょう！」
「「「はい！」」」
「皆さん、頑張って下さい！」
「それじゃ……私も頼まれた一仕事の準備するわね、リアス」
「ええ、たぶん向こうは貴女に対して対策を取ってるだろうから……」
「気をつけて、でしょ？その為にこのお仕事は派手にやりましょう♪」

他のメンバーが駆け出した後に、新しくなった日輪刀を抱えてるんるんと出て行くカナエにリアスは思った。
巻き込まれたライザーの眷属はご愁傷様、と。

☆

イッセーと小猫は既に体育館へと到達していた。小猫はかなり早く到着していたし、イッセーも息切れ一つしていない。どちらも修行の賜物だ。
「こういうのは基本裏口に回って……が定石なんだけどさ。正直さっ

きから監視されてるよな」
「はい。そのくせ仕掛けてきません。黒歌姉様や夜一姉様なら即座に攻撃してきます」
「師匠や先輩なら体育館を中からぶっ壊しながら仕掛けてくるぜ、きっと。どうせ監視されてるなら遠慮なんかいらないよな！」
「同感です……！」

イッセーと小猫は体育館の扉の前に立ち、扉を思いきり蹴り『飛ばした』。

「オラァァァァ!!」「はっ!!」

ドガッシャァァァァン!!!

『っ!!??!!』

まさか正面から来るどころか扉を飛ばして先制攻撃してくるとは思わず、中で待ち構えていたライザーの兵士（ポーン）三名と戦車（ルーク）一名は飛んで来た扉を間一髪回避した。

「やっぱり気付かれてたな。全員こっちに正面向いてたし」
「っ……やってくれるじゃない！」
「……カナエ先輩に仕掛けようとしてシックルさんに妨害されて他の眷属と一緒に吹き飛ばされた人」

小猫曰く吹っ飛ばされた人―ミラはあまりに具体的すぎる説明にプルプルと震えていた。つまり小猫にとってはもはやその他大勢レベルでしかない、そう言われたようなものだ。

「もう怒ったわ！泣いて謝っても許さないし二人揃って覚悟しなさい！」

「上等！小猫ちゃん、こっちの三人は引き受けた！そっちのチャイナ服は頼む！」
「……了解です。もし負けたらゲン師範にお仕置きしてもらいます」
「そりゃ勘弁だぜ！」

軽口を叩く一誠は三対一という不利な状況でも笑ったままだ。ほんの十日前には考えられなかっただろう。立ち向かえても必死の表情だったはず。

「何を根拠にそんな自信満々なのか知らないけど、とっとと倒してそちらの王を取らせてもらうわ！」
「やってみろよ」

まるで自身を指導したレイトのように不敵に笑いながら短く言い放つと、双子がチェーンソーを起動させながら突っ込んで来た。

「「解体しまーす♪」」

普通に考えれば恐怖しかないのだが、後半になって一気に力をつけた一誠は冷静だった。

（先輩や師匠に教わった。武器に頼りすぎるなと。だけど、武器を使うなとは言ってない。だったら！）

一誠は扉を蹴り飛ばした時に散乱したであろう物の中から、モップを手に取り双子の足元に勢いよく投げつけた。

「そらよっ！」
「「え？わ…わわわっ!?」」

バランスを崩して転ぶ双子。文字通り倒しただけなので再起不能

になったわけではないが、それでいい。一先ず狙いはミラという棍を使う少女だ。
　そのミラは棍を振り回しながら飛び掛かってくるが……
「はあああっ！」
「よっしゃあ狙い通りぃ!!」
「!?」
　一誠はいとも簡単に右手でそれを掴んで脇に抱え込み固定する。そして棍ごと引っ張り、ミラの顔面に裏拳を叩き込み、腹を蹴飛ばす。
「ディヤァァァ!!」
「がふうっ!?」
　師匠であるゲンの如き掛け声と共に繰り出された強烈な一撃を腹に受け、ミラは堪らず棍を離しながら吹き飛ばされる。またも再起不能ではない。しかし一誠の真の狙いはミラの持つこの棍だったのだ。チェーンソーに対抗する為に使う気だが、それもほんの一瞬でいい。
「ちょっと借りてくぜ！すぐに返すからな！」
「さっきはよくも！」
「今度こそ解体するんだから！」
　双子が再び並走しながらチェーンソーを正面に向けつつ床に着けながら向かって来る。一誠にとっては絶好のタイミングだ。元よりチェーンソーの破壊など考えてはいない。
　一誠は棍を突き出して先端がギリギリ双子の持つチェーンソーの間に棍が入るようにする。図にすると丁度『川』という字の真ん中が棍だ。そして思い切り左右のチェーンソーの軸の部分に打ち付けた。
「うおらァァァ!!」

ガァン!!ガァン!!

「ふぇ!?あ、うわわっ!!」

まさかの戦法に二回目のバランス崩れを起こす。その隙を見逃さず一誠は棍を棒高跳びの要領で使い双子の頭上へと跳躍する。そして師であるゲンから伝授された技を繰り出した。かつて、レッドギラスとブラックギラスを屠ったあの技を。

「喰らいやがれ!師匠直伝!!
きりもみキィィィック!!!」

ドガァ!!バゴォン!!

「うぎぃっ!!」「あぐぅぅ!!」

レオがギラス兄弟に放った時のような首を刎ねたりは出来ないが、それでも凄まじい威力なのは変わりなく双子はそのまま床に叩きつけられ、意識を失うと光の粒子になって消えた。

『ライザー様の兵士(ポーン)二名、再起不能(リタイア)』

「ッしゃあ!」

伝授された技を決められた事に喜びつつも再び構えて臨戦態勢を取る一誠に対し、ミラは唖然としていた。今のは明らかに戦い慣れた動きだ。十日前に見た時は素人丸出しで悪魔になりたてだったはずの目の前の男は、この短期間で紛れも無い『戦士』へと成長を遂げている。

ハッとして頭を振るい、自身の得物を取り返すべく一誠へと向かって行く。

「このっ……！私の武器を返しなさい!!」
「いいぜ、ほらよ」
「えっ!?」

ポイッと弧を描くように棍はミラの手元へと投げられた。チェーンソーを使う双子を倒したから不要になったと油断してるのか知らないが、これを手にしたらすぐに反撃してやる。そう思いながらしっかりと棍を掴む。

……が、油断していたのは彼女の方だった。

「イヤァァァァ!!」
ゴベキィッ!!!
「ぶげっ!!??」

丁度棍を返すように投げるのと同時に、一誠はミラの手元へと棍が戻るタイミングを測って駆け出しており、彼女が棍を手にしたと同時に顎を思いっきり蹴り上げたのだ。ミラは当然勢いよく後ろへ倒れ込み後頭部を強打し、失神。先の双子同様に光の粒子になって消える。

『ライザー様の兵士一名、再起不能』
「よぉし三人倒したぜ！」

気付いているだろうが、一誠はまだ神器を展開さえしていない。神器無しでも既にこれだけの戦闘が行える程、一誠は大きく成長してい

た。

☆

一方、小猫はチャイナ服の『戦車』を一人で相手にしている。相手はかなり息切れしているが、小猫は全く無傷かつ普段通り。両手を見ながら握ったり開いたりして、軽く「よし」と頷くと改めて向き直る。

「慣らしは十分。お手伝いありがとうございました」

「慣らし……ですって？」

「姉様達に言われました。『実戦では気分が高揚したりして修行と勝手が違うから、まず戦場ではいつも通りに出来るようになれ』と。漸くいつも通りの感覚が掴めたので」

小猫は静かに構えると同時に仙術を発動。ぴょこんと猫耳と尻尾が出て来る。

「次で決めさせてもらいます」

「……！けど、一対一なら！」

「それで有利なの、私です」

小猫は相手が動き出す前に、夜一から習った歩法『瞬歩』で相手の懐へ一瞬で飛び込む。そして単純かつ重い一撃――正拳突きをライザーの『戦車』の腹にブチ込んだ。

「えい」

ドゴォウッ!!!

「ごぶうっ!!」

バガァァァン!!!

可愛らしい掛け声と裏腹に凶悪な威力の鉄拳をモロに喰らった『戦車』は体育館の壁をブチ抜きながらド派手に外へ吹っ飛び、そのまま地面に叩きつけられると先の三人同様に消えていった。

『ライザー様の戦車一名、再起不能』

「……夜一姉様じゃなくて良かったと思って下さい。あの人だったら文字通りお腹に穴が出来てました」

「え、夜一さんてそんな事出来たのか？」

「昔、面倒を見た人が身の程知らずな無茶しでかしたらしくて、それを止める為に傷口に思いっきり手刀で眠剤を体内に直接叩き込んだそうです。ブッスリと」

「何それスゲー怖いんだけど」

「私も最終調整でやられました」

「おいィィィ!?聞きたくない事が聞こえちゃったよ!!」

どうやら小猫も無理やらかしてたようで、最後の最後で強制的に休ませられたらしい。休ませ方がバイオレンス極まりないが。

ともあれ、初戦は一誠と小猫のタッグの圧勝。その後、この体育館にある事をすべく二人は準備する。

そして同じ頃、森の方では……

「ひっ……いやあぁぁぁ!!」

一人の兵士がその場から仲間の元へ逃げ出した。一人では太刀打ちすら出来ないと踏んで、援軍を呼ぶ為に。しかし、それこそが彼の狙い。

「なるほど、あっちか……」

ゆっくりと歩を進めるのは、とんでもない得物を手にしたリアスの『騎士（ナイト）』木場裕斗だった。

〈続く〉

戦慄するライザー眷属、圧倒する騎士と女王

遂に開戦したオカルト研究部ＶＳライザー眷属。初戦は一誠が兵士三名、小猫が戦車一名を圧倒的な実力差を見せつけて撃破。その様子は各観戦者も見ており、特にグレモリー家とフェニックス家の者は驚きを隠せない。

では別の場所から観戦してるレジェンド一家や修行組、待機組の反応を見てみよう。

☆

―修行組＆ハンターズギルド―

「おぉぉぉし！見たかあの一誠の動き！最初の頃だったらビビってるだろうチェーンソーにも落ち着いて対処、相手の武器を奪ってからの三連撃破!!」

「そうだ、神器でなくとも武器は探せばいくらでもある。何をどう使うかという発想こそが大事だ」

テンション高めなレイトと満足げに頷いているゲン。早速己らの指導した一誠が大活躍したのもあり二人も嬉しそうだ。

「確か彼は転生して間も無かったんでしたね。しかも神滅具持ちとはいえ元はごく普通の一般人……そんな彼が先手を取って複数撃破とは、あの問題児の面目を潰すにはとても良い展開ですよ」

ジェントも顎に手を当ててうんうんと頷いている。確かに勝ち星の多さを誇っていた上級悪魔たるライザーが、ほんの少し前までさして特別でもなかった下級悪魔になりたての一誠に眷属を瞬く間に三名も薙ぎ倒されるなど本来ならあり得ないだろう。ましてや遭遇した時はぶっちぎりで最弱だったはず。

「白音は控えめに動いておったの。慣らし優先にしたようだし、それが妥当じゃな。最後の一撃はド派手に叩き込んだが」
「にしても相変わらず別の意味で攻めまくりですよねーあの服。雛森があれ着て隊長に迫ったらどういう反応するのかしら」
「あの格好で『えい』とか可愛らしい声出したらその時点でもう最高。ノックアウトにゃ。抱き枕決定。レジェンド帰ってきたら一緒に住ませて貰うよう頼むにゃ」
「そこなのか黒歌殿。いや待て確かにうたがあの格好でそんな事言ったら私も冷静でいられる余裕が……」

対して小猫は慣らしだったのもあって派手に動いたのは最後の一撃だけだったが、夜一以外は小猫の衣装のマッチ具合に目が行っていた。黒歌はシスコン、縁壱は嫁バカを発動していたが。
ともあれ、他のハンターの面々もつい先日顔を合わせた人物が活躍したのを目にしてチームへのスカウトも考え出している。カナエとアーシア以外のオカルト研究部がギルド入りするのも近いかもしれない。

―京都にいるレジェンド一家―

「今の！きりもみキック!!レオ大師匠の技ナンデナンデ!?」
「落ち着けゼット。伝授されただけだろ」
「ウルトラ羨ましいいいい!!」
「二回目だなソレ」

こちらではゼットが一誠のきりもみキックを見て羨ましがっていた。なにせ自身が師と慕うゼロの、さらに師であるレオの技を伝授されているのだ。つまり彼はゼロの弟弟子。ポジション的にもゼットの羨むポイントである。

「私個人としてはあの少女推しですね。優秀な獄卒になりそうです」
「容赦なかったもんね、最後」
鬼灯は小猫が気に入ったらしい。主に冷静かつ容赦なく叩き潰せるあたりを。リクも納得していた。
「股間にどかーん」
「「ダジャレ狙いなのか本気なのか分かんないけどやめてソレ!!」」
「亡者には有りですね。今度やってみましょう」

オーフィスの一言にレジェンド、リク、そしてゼットは声を揃えてツッコんだ。彼女の力でそこへ叩き込まれたら男として終了確定だろう。たぶんレジェンドは無傷だろうけど。
鬼灯は鬼灯でその案を採用しようとしていた。地獄の亡者達、哀れである。

―そしてダイブハンガー待機組―

何故か機嫌が良かったC．C．が作ったピザを食べながら四人は観戦している。ただしグレイフィア、涼子、そしてミライは一つのピザを分け合っているがC．C．は自分用に三枚焼いていた。
「ほぉ……存外良い動きをするじゃないか」
「ええ。判断力もあるし、思い切りもいい」
「確か兵藤君がゲンさんとレイト君、塔城さんが黒歌さんと夜一さんだったかしら?指導したの」
「はい、そう伺っております」

こちらは割とあっさりしたものである。人数の比率が多い修行組や、アクの強い面々が揃っている京都組に比べ、人数も少なくまともな人物が集まっているからだろう。好物が絡むとおかしくなるのが二名程いるが。

☆

さて、再度レーティングゲームの真っ只中のオカルト研究部の方はというと、ライザーの眷属を倒した体育館で一誠と小猫が何やらやっている。

「こんなもんか？」

「そうですね。カナエ先輩に連絡します」

何かの準備が終わったらしく、カナエへと通信を繋げた。

一方、ライザーの女王『ユーベルーナ』は一誠と小猫のいる体育館を上空より見下ろしていた。

「フフ……悪いけど会話が筒抜けよ。配置していたのは何も眷属だけじゃないの」

どうやら体育館には盗聴用の小型の魔方陣を仕掛けていたらしく、二人の会話はユーベルーナによって聞かれていた。

「カナエとは確かあの時の人間の事ね。大方その人間と合流するか、あそこで挟み撃ちにしようと考えているんでしょうけど、建物自体を吹き飛ばしたらどうなるのかしら？」

意地悪げな笑みを浮かべて体育館ごと一誠と小猫を爆破しようと魔方陣を展開するユーベルーナ。

むしろそう思わせる事が二人の作戦だと分からずに。

「さあ、まずは二人……!?」

ユーベルーナは体育館を爆破しようとするが違和感と悪寒を感じ、そちらに目を向けると体育館を挟んで反対側の木々を中心に巨大な桜が何十本も立っている。

「なっ……!?」

いきなり現れた不可思議な桜に絶句するユーベルーナ。さらに聞いた事のある声が聞こえてきた。あの日、自分達の主ライザーに喧嘩をふっかけたあの人間の。

「花の呼吸・第二幕、壱ノ型第二節……景桜―」

「!!」

「桜刃螺旋!!」

ズオオオオオオオ!!!

その言葉と同時に桜全てが花弁へと変わり、ある一点を中心にドリル状へなっていく。勿論、中心になっているのはカナエ、花弁の支点になっているのは日輪刀・陽炎の切っ先。かつてゲンに放った時より格段に巨大かつ凄まじい回転速度のその技で、カナエは体育館とユーベルーナへ突撃する。

「うっ……ぐうぅぅぅ!!」

ユーベルーナはカナエの技の外周部だった為、爆破を中断して防御する事でどうにかダメージを抑えたが、体育館の方は木っ端微塵になった。

「あらら?やっぱりこっちに仕掛けて来たのね。リアスの読み通り」

「何ですって……!?」

「リアスが言ってたわよ。『おそらくライザーの女王は単独行動している裕斗より重要拠点である体育館の方へ来るだろう』って」

この言葉にユーベルーナは驚く。よもや戦闘前からそこまで読まれているとは思わなかったのだろう。しかし、彼女は余裕を崩さなかった。何故なら―

「そこまで分かっていて何故あの二人を囮……いえ犠牲にしたのかしら？結局私はこうして無事に―「ついでに、このお喋りも作戦の一つよ、ほら」……え？」

笑顔でカナエが指差した先には新校舎へと駆け出していた一誠と小猫の姿があった。二人が軽く振り向きながらサムズアップしたのに対し、カナエもにこにことサムズアップで返す。

「なっ……なんで!?今体育館ごと……！」

「だって私は貴女に当てたのと同じく、外周部が体育館の床スレスレになるように技を放ったのよ？床下に避難していたあの子達に当たるわけないじゃない」

つまり、あの会話はカナエの技から避難する為のスペースを作り終えたという意味であり、罠でも何でもなく寧ろ回避するという意味ではその逆だったのだ。

「……！まさか、あの会話は……！」

「そう、筒抜けだったのは承知の上。会話をダシに貴女を誘き寄せ、尚且つ戦法を確定させる為よ。あとは知っての通り目くらましとして体育館を破壊、ついでにお喋りして時間稼ぎ。あの子達にこの場を無事突破させる為の作戦だったの。むしろ、貴女が痛手を受けた方がおまけ♪」

「こっ……この小娘が……！」

またも笑顔で言い放つカナエにユーベルーナは沸騰寸前。今から一誠と小猫を狙い撃ちする事も可能だがそんな事をすれば背後からカナエに討たれるだろう。……が、カナエの行動はユーベルーナのさらに斜め上を行った。

「一先ずお仕事終わったので失礼しまーす♪」

タッタッタッ……

「はあ!?」

なんとにこにこ笑顔のまま刀を抱えてユーベルーナに背後を晒しながら本陣たる旧校舎へと駆け出した……つまり逃げた。あまりに拍子抜けな行動にさすがのユーベルーナも素っ頓狂な声が出てしまったが、これ幸いにと後ろ姿のカナエへと攻撃しようとする。しかし、それは叶わない。

「破道の四、白雷」

「ぐっ!?」

文字通り白い雷が一閃、ユーベルーナに直撃した。威力は然程でもなかったが、何故か魔力防御が働かない。

「あらあら……さすがカナエ、体育館が見事に木っ端微塵になってますわね。さて、貴女の相手は私がしますわ。ライザーの女王『爆弾女王(ボム・クイーン)』ユーベルーナさん？」

「その呼び方はセンスがなくて好きではないわ。『雷の巫女』……さっきのは何かしら？少なからず反応するはずの魔力障壁がまるで機能しなかったわ」

「説明するよりご自分でもう一度受けた方が早いですわ。もしくはこれを教えてくれた先生に直接伺うか……後者は叶うか分かりませんが」

「上等じゃない……!!」

カナエ同様にっこり笑う朱乃にユーベルーナは怒りを覚えた。随分と余裕があるようだが、彼女には切り札がある。それを使えば逆転など造作もない……そう思っていた。

後にそれは甘い考えだったと後悔することになる。

☆

一誠と小猫は新校舎へ向けて走っていた。カナエが作ってくれた隙と、朱乃がユーベルーナを引き受けてくれた事で障害物は存在しない。

「よし、このまま一気に……!っと、何だ!?」

「……どうやらライザー眷属が集合してるみたいです。何かに焦っているというか、怯えている感じがします」

何やら兵士（ポーン）の一人が何かから命からがら逃げて来たらしく、その報告をしているようだ。それを観察していると一誠と小猫に気付いた彼女らは臨戦態勢を取る。

「あれはグレモリー眷属の……!」

「なんで!?ユーベルーナさんは……」

「カナエさんからダメージ貰って朱乃さんとやりあってるぜ！」

「そこ、通ります。邪魔するなら吹っ飛ばしますよ」

これだけの戦力差だというのに二人はまるで怖気づく様子は無い。むしろ全滅させる気だ。

「さっきの奴といい……グレモリー眷属は一体何なの……!?」

「さっきの奴……？」

一誠が怪訝に思う。小猫は一緒だしカナエは部室まで退却。さらにリアスやアーシアもそこにいるし朱乃はユーベルーナと交戦中だ。となると残るは一人しかいない。

「ああ、イッセー君と小猫ちゃんも来てたんだね。大活躍だったみたいだし、僕も負けてられないな」

『!!』

「おう、木場!そっちも無事……へ？」

「裕斗先輩……何ですか、それ……」

ライザー眷属は驚き(一人は顔を青くし)、一誠と小猫は木場が持っている剣を見て唖然とする。

それは剣と言うにはあまりに大き過ぎた。

大きく分厚く重く大雑把過ぎた。

正にそれは鉄塊だった。

「いやぁ逃げた先に全員集合してくれてて助かったよ。これで……」

やはりと言うかにこにこと普段と変わりない笑顔を浮かべていた裕斗は次の瞬間、鬼気迫る表情へと変わる。

「手間なく一網打尽に出来る」

ドオォォォォォン!!!

一言口にしたと思えば一瞬でライザー眷属達の集まっていた場所

へ踏み込んで手にした鉄塊を恐ろしい速度で振り下ろした。咄嗟に避けられたとはいえ、地面を思い切り吹き飛ばされて散り散りになり、裕斗の所には騎士二人と僧侶一人、小猫の所に僧侶と戦車一人ずつと兵士二人、そして一誠の所には兵士が三人に分断された。

とは言っても小猫の所にいる僧侶からは戦意を感じない。おそらくただ数合わせなのか、それともやる気がないのか。

「うーん……また分かれちゃったか。イッセー君、小猫ちゃん、そっちは任せてもいいかい？」

「ああ、こっちは問題ないけどさ……」

「裕斗先輩、凄い顔になってます」

なんかもう裕斗の顔が騎士（ナイト）じゃなくて狂戦士（ベルセルク）だった。ジェントが言ってた通りマジで大化けしている。何があったのホントに。

「くっ……だがいかに戦車相手であろうと素早い剣技があれば……！」

「あの、そこの……たぶん騎士の人」

「なんだ？この状況で敵と会話など……」

「裕斗先輩は『戦車』じゃなくて『騎士』です」

『……は？』

間の抜けた声をその場にいたライザー眷属達は揃って上げてしまう。そして裕斗を見ると鬼の形相で再び鉄塊を両手で振り下ろそうとしていた。

『う……嘘だあああああ!?』

信じられない、コイツの武器とかこの表情とか絶対戦車だろ!?と思い絶叫するライザー眷属全員。

思い切り振り下ろされたその鉄塊のような大剣を受け止めようと

ライザーの『騎士』の一人が同じく大剣を構えるが、いとも簡単にその剣諸共斬り伏せられた。

「が……はっ……」

「シーリスッ!!」

シーリスと呼ばれた騎士の持つ剣も大剣の部類であったが、裕斗の剣は彼女のそれの倍の刀身の太さや重さ、そして並外れた強度を誇る。そんな剣に速度と両手持ちの腕力が組み合わされば彼女の持つ剣が一方的に叩き折られるのは明らかだった。

そのまま気絶し、シーリスは光の粒子になって消える。

『ライザー様の騎士一名、再起不能！』

「あと二人。さっさと終わらせようか」

左半身の黒い外套（マント）を翻し右手に鉄塊の如き大剣を携えて再び残った眷属…『騎士』カーラマインと『僧侶』美南風に向き直る。

「くっ……」

「ああそうだ。まだ名乗ってなかったね。リアス・グレモリー様の眷属『騎士』木場裕斗。それから……これは新しい僕の魔剣『騎士殺し（ナイトスレイヤー）』。本当は『剣破壊の大剣（ソードブレイカー）』って名前にしようか迷ったんだけどね」

騎士殺し―自身も騎士なのに如何なものかとも思ったが、先程のシーリスのように相手を剣ごと斬り伏せるのを見せられたら納得してしまう。

（悔しいが分かる……圧倒的な力の差が……！）

「ちゃんと名乗った事だし……遠慮なく行くよ」

「……ああ。例え勝てずとも、こちらにも意地が……!?」

その瞬間、カーラマインと美南風は宙を待っていた。

「……え？」

「先生ならこのまま新校舎……いや、この空間ごと真っ二つにするんだろうけどね。僕にはまだ無理だから」

ゴシャアッ!!!

『ライザー様の騎士一名、僧侶一名、再起不能』

一瞬で宙へと吹き飛ばし、さらに無防備な二人を追撃し容赦無く叩き落として意識を刈り取った裕斗。あまりの実力差と無慈悲に他のライザー眷属は恐怖するしかなかった。

☆

朱乃とユーベルーナの戦いは例の如く朱乃が優勢だ。カナエの景桜・桜刃螺旋でダメージを負い、さらに朱乃が先制した白雷も受けている。加えて卯ノ花から教わった瞬歩によってユーベルーナの爆破攻撃を回避し続けているのだ。

「このっ……！ちょこまかと！」

「あらあら……攻撃に精細さがなくなってきてますわ」

一見余裕そうな朱乃だが、内心ではやはりある事が気になっている。一気に決める事が出来ないのはそれが原因だ。

（ほぼ確実に彼女は『持っている』。それを使われていないままこちらが大技を放てば先に力尽きるのは確実。その為に私は最初以外は魔力しか使っていない）

「……こうなったら仕方ないわね」

何かを使うのを待っている朱乃。……と、その時ユーベルーナが自分に液体を浴びるように掛けた。すると見る見るカナエから受けた傷を始め負傷した部分が治っていき、体力や魔力も全快になる。

「ふう……それじゃ、仕切り直しといきましょうか？」

「……やはり持っていましたわね、『フェニックスの涙』」

「その様子だと分かっていたみたいね。でも残念、分かっていたとしても対処出来なければ無意味よ」

フェニックスの涙とは、如何なる傷も治し体力なども全て全回復させるアイテムだ。レーティングゲームでは強力過ぎる為、一戦につき二つまでという制約があるのだが、非公式戦である今回でそれが適用されるのかは分からない。

「対処出来ない？いいえ、対処はこれからですわ」

「今さら負け惜しみを……」

「縛道の六十一、六杖光牢（りくじょうこうろう）」

ガシィッ!!

「!?」

朱乃が一言発すると、六つの光の帯がユーベルーナに突き刺さり動きを封じた。

「結局、四十番台以降の縛道で詠唱破棄が出来たのはこれだけでした」

「な……まだ余力があったというの!?」

「ええ。とは言ってもこれを撃つなら精々一発分、それもギリギリですが」

朱乃が狙っていたのはユーベルーナがフェニックスの涙を使った瞬間だ。使う瞬間ではなく使った後。使う瞬間に放った場合、下手すれば鬼道の発動に気付かれて使用を中断される場合もある。そうなれば万が一耐えられた場合、逆転される可能性が高い。

付け加えておくと、六杖光牢の詠唱破棄にしてもまだ完璧ではない。実際は余分に霊力を使って無理矢理短縮しているだけ。それでも即座に発動出来るのは大したものだが。

「もしフェニックスの涙を持たせるなら一つは女王で確定。もう一つは王自らが持つか、もしくは保険として別の眷属に持たすか」

「それで私がフェニックスの涙を使うのを待っていたわけね……！けどこれを解除出来れば！」

「その前に仕留めます。たとえ私が戦えなくなろうとも」

「!?」

朱乃は本気だった。自分の役目は『女王を討ち取る事』。王であるリアスと決戦の切り札たるカナエを守り、このレーティングゲームに勝利する為に。その為にこの破道を撃てるようにしてきたのだ。そして今こそがそれを放つ時。

「滲み出す混濁の紋章
不遜なる狂気の器
湧き上がり・否定し・痺れ・瞬き・眠りを妨げる
爬行する鉄の王女　絶えず自壊する泥の人形
結合せよ　反発せよ
地に満ち己の無力を知れ
破道の九十『黒棺（くろひつぎ）』!!!」

ギゴオォッ!!!

旧校舎のリアス達や、新校舎にいるライザー、さらに戦闘中の一誠

達にも見える程、巨大な漆黒の『箱』にユーベルーナが周囲ごと呑み込まれる。

「何なのこれは……!!あ……あああ、あ、あ、ぁぁぁ!!」

狂った重力場がユーベルーナを圧し潰す。フェニックスの涙によって全快した体は、一瞬にして使う前よりも悲惨な状態となる。全身から出血し、骨が砕け、肉が潰れ切る寸前、ユーベルーナは光となって消えた。

『ライザー様の女王、再起不能』

遂にライザーにとって無情とも言えるアナウンスが流れる。フェニックスの涙を使ったにも関わらず、ユーベルーナは朱乃が放った『黒棺』によって敗北した。

多大な霊力消費によって満身創痍だった朱乃は倒れ込むが、いつの間にやら再び駆け付けたカナエに抱き留められる。

「お疲れ様、朱乃」

「ええ……後は任せるわ、カナエ」

「任されました」

あらあらうふふと笑い合う二人は、支え合いながら本陣である部室へと退却する。

ただライザーにとっての凶事はまだ終わらない。

一誠と小猫が修行の成果を見せる時が来た。

〈続く〉

手にしたもの、受け継いだもの

ライザー・フェニックスは愕然としていた。己の眷属が既に『兵士』三名、『戦車』一名、『僧侶』一名、『騎士』は両名、さらに『女王』まで倒されており、残る戦力は自身を除いて『兵士』五名と『戦車』一名のみ。最後の『僧侶』は個人的な理由にはなるが戦闘には向いていないし、させる気も無い。自分から突っ込んで行く性格でも無いだろう。

対してリアス側はあの日、部室で出会った中で最弱だった兵士一人すら倒されておらず、寧ろ最前線で戦っている。立て続けに兵士、戦車、僧侶、騎士が倒され、極めつけはこの『本陣』からも見えた黒い箱のような結界とも言えるものが出現したと思えば、ユーベルーナが撃破されたアナウンスだ。

(何故だ……何故ユーベルーナまでやられた!?フェニックスの涙まで持っていた筈なのに、それでも誰一人倒せなかっただと!?くそ、リアスめ……この十日間で何があった!?何をした!?)

苛立ちと困惑が入り混じった状態で、ライザーは次の策を考えるものの、何をやっても突破されるイメージしか浮かんでこない。

しかしある事にライザーは気付く。そもそもこれはレーティングゲームであって相手を全滅させなければならないわけではない。ならば『王』たるリアスを仕留めさえすればいい。過程がどうあれ最終的に勝てば良いのだ。

今のリアスはそんなに甘くないのだが、そう考えているライザーに対して「それは早計だ」と言ってくれる者はその場に誰もいない。

☆

―ハンターズギルド―

「……卯ノ花隊ち「もう隊長ではありませんよ?」先生、あの姫島朱乃……でしたっけ。あの子もう隊長クラスの鬼道の使い手なんですけど。完全詠唱必要とはいえ藍染並の威力出てるんですけど」
「頑張りましたよ、あの子」
「十日間頑張ったくらいで使えるもんだったかのう、九十番台は」

元護廷十三隊出身の死神である三人は朱乃の放った黒棺を見て各々の感想を口にしている。卯ノ花はいつも通りだが、乱菊と夜一は冷や汗を垂らしていた。

「……ジェント殿、彼の戦闘体系は速度重視型だったと思うのだが、随分と派手な方向転換をしたのだな」
「ええ。というより、バランスを取った後にいくつか新しい剣を創ってもらいましてね。それからその中で一番合った剣に合わせて育成したら見事にああなりまして」
「いやいくらなんでも変わり過ぎだろ!?百歩譲って戦闘スタイルの変更はともかく何だよあの表情は!?」
「だって鍛えていく過程でああなっちゃったんだもーん」
「軽いな乱菊さん」
「あんたもちょっとは動揺しろよ!?」

縁壱からの質問にちゃんと答えるジェントに対して乱菊はレイトの疑問を普段のノリで返していた。やはりゲンは平常運転である。今日のツッコミ役ウルトラ戦士はウルトラマンゼロことモロボシ・レイトだ。間違いなく。

「木場……せめて日常生活ではあんな表情しないといいんだけどな。今までのイメージから変わり過ぎると学生生活にも支障が出るかもしれないし。主に印象面で」
「いやまあ、８０先生の懸念は分かるけどな。つーか良かったよ、８０先生はまともだった……!」

ウルトラマン８０ことオカルト研究部顧問の矢的猛は今ここにいるメンバーで数少ない良心だった。確かに印象変わったせいで悪い意味で有名になったりしたら学生生活でストレスを感じる出来事が増えるかもしれない。矢的としてはそれを心配しているのだ。レイトが心配しているのは別の方だが。

「では、あのお二人の修行の成果もそろそろ拝見させて頂きましょう。さてさてどれだけ面白い事になるんでしょうかね、向こうの眷属は」
「お前さん、時々ドＳだな……」
「メフィラス星人ですので」
「おい、メフィラス全体がそう思われる言い方はやめろ」
「貴方はＳ（シックル）だし良いじゃないですか」

ガルムの言葉にサラッと返したジェントにシックルは反論したのだが、ジェントはそれにも平然と返す。内容はアレだったが。シックルはやれやれと言った感じで会話を切り上げた。正直、ジェント相手に口勝負で勝てる気がしない。
ならばせめて期待させてもらおう。
黒歌の妹とやらと、漸く目覚めた赤龍帝に。

☆

裕斗によって完膚なきまでに叩き潰された三人を見た上、さらに『女王』撃破のアナウンスまで流れた事で残りのライザー眷属（うち『僧侶』一名除く）はいよいよもって焦り始めた。朱乃の調子はどうか不明だが、目の間の三人は五体満足余裕有り、リアスは当然無事で残る二人の人間……特に最注意対象であるカナエも健在。
はっきり言って分は圧倒的にライザー（こちら）が悪い。
にも関わらず、この状況で空気の読めないというか、何故余裕綽々なのか分からない発言をする者がいた。

「確かに相当なパワーアップをしたようですが、それで勝ったつもりなのかしら？」

お前マジで何言ってんの？

ぶっちゃけ、それがその場にいるライザー眷属兵士五名戦車一名の意見だった。たとえその対象が主ライザーの実の妹である『レイヴェル・フェニックス』であっても。

「私達フェニックスの特性は『不死』。いくら攻撃されても再生し続ければそちらが消耗するだけなのは明確ですわ」

「私『達』？」

「この方はライザー様の妹君であるレイヴェル・フェニックス様だ」

「そうですか。どうでもいいです」

一誠の疑問に戦車の『イザベラ』が答えるが、小猫は別に気にならなかった。加えて言うなら……

「そうだよね。フェニックスは不死……

だったら心（なか）が壊れるまでサンドバッグにし放題って事じゃないか」

『ひいいっ!?』

自身と同じ『騎士』二名＋『僧侶』一名を血祭りに上げた裕斗が笑顔でそう告げた。傍から見たら爽やか笑顔でもつい先程起きた光景

を見たからには正しく『悪魔の微笑』にしか見えない。
それでも相変わらず自信を失わないレイヴェルは言い放つ。
「仮にそうだとしてもお兄様がそう簡単に心を折られるとでも？」
「……そもそもそれは仮定の話、もし『不死』が無効化されたらどうなのかな？」
「え？」

……今、この男はなんと言った？

「な、何を言ってますの？私達フェニックスの特性が無効化などと……」
「先生に聞いたんだ。部長の持つ『滅びの魔力』その真の特性を。それを使って『不死』を『滅ぼす』とどうなるのかな？」
「……!!」

まさか、そんな事があるわけがない。
そう自身に言い聞かせつつもレイヴェルは戦慄した。もしそうなら一刻も早く兄の元へ駆けつけなければならない。
しかし、それはリアス側も同じ。

「まだ何も行動を起こしてないとはいえ、追い詰められると何しでかすか分からないし……イッセー君、小猫ちゃん、早目に済ませた方が良さそうだよ」
「だな。こうなりゃ出し惜しみ無しで行くぜ！」
「いずれにせよ『王』を撃つのはあの人ですから、時間稼ぎするにしても何にしてもここは切り抜ける必要があります」

既に一誠と小猫は本気になっている。裕斗はどうやら手を出す気はないらしい。これは好都合。

「その自信がどこから来てるのか分かりませんが、自尊心が仇となる事を教えて差し上げますわ。やってしまいなさい」
『ハッ！』

……と返事はしたものの、嫌な予感しかしない。更に言うなら戦わないのはいいとしても、だったら指示とかもしないでくれと思いつつも従う彼女らは何でライザーなんかに下ったのか分からない忠誠心持ちである。

「イッセー先輩、こっちは引き受けるのでそっちの三人をお願いします。負けたらゲン師範とレイトさんとジェントさんと縁壱さん、最後に卯ノ花先生からお仕置きです」
「なんかやべー人選増えてんだけど!?」

何だそのオーバーキル超えたエクストリームオーバーキルなメンバー。現在明らかになってる九極天の鬼灯とマスターアジアや、その主にして我らが主人公たるレジェンドがいないだけマシかもしれない。

一誠は絶対にお仕置きは勘弁だと改めて思いつつ目の前の『兵士』三人を見る。裕斗によって案内役扱いされた一名も混じっていた。

「こちらは三人、そちらは一人。しかも今度は周りにこれといった物もない場所……これで優位に立てると？」
「メイドさんっぽい二人とファンタジーの踊り子が一人……どっちの服も部長が着たらめっちゃ映えるよな」

煩悩の矛先がリアス限定っぽくなったとはいえ一誠はやはり一誠だった。いや、リアスが嫌がっていないからいいのかそれは。

「それはそれとして、別に三対一が不利なんてクソ程も思わねーな。師匠とやり合った時なんて六対一でもボロ負けだった。カナエさん

まで味方にいてだぜ？」

小猫側にいるのも含め、ライザー眷属全員がこの言葉に絶句した。ライザーを圧倒（と言っても一撃だけだったが）したカナエも含めた、アーシアを除くオカルト研究部を一方的に打ち負かしたその師匠とやらはどんな化け物だ。

「ぶっちゃけ今から見せるやつ使っても倒せなかったしな。しかも全力じゃなかったらしいし……マジでどんだけ強いんだよあの人」

『俺を無理矢理叩き起こしたからな。マジで物理的に』

一瞬どこから声が聞こえたのか全員が周りを見渡すと、一誠がいつの間にやら『赤龍帝の籠手』を展開していた。

『おい起きろ、と思いっきりブン殴られた時は神器のまま粉々になって死ぬのかと思ったぞ』

「それでいて俺にダメージなかったもんな。スゲーよあの技術、俺も出来るようになりてぇ」

「イッセー先輩、それ……」

「ああ、こいつな。俺の神器に宿ってる『ドライグ』だ。というか神器になったってのが正しいか」

『よろしくな猫娘と狂戦士』

「猫娘……」

「狂戦士って僕かな？」

あははと笑う裕斗にぶすっとした小猫だが、それ以上に向こうは驚愕している。何故ならあの『二天龍』の片割れが既に目覚めていたからだ。

「師匠が俺の神器見て気付いてたらしくて、最終調整の時にさっきドライグが言ったようにブン殴って起こしたみたいなんだよ」

「……やっぱりゲン師範は規格外」
「まあ、師範だし」
「『ですよねー』」

納得してしまった三人と一頭。ていうか仲良くなるの早いなお前ら。

『そろそろ行くか、相棒。今回は何でいく？』
「体育館でハッキリしたけど、攻撃力は問題なし。防御も当たらなければいいし、となると残りは……」
『速さだな。ただし、まだ至ったばかり且つ全快ではない以上、タイムリミットは余裕を持って三分。その時間が経ったら俺が強制解除するからな』
「オッケーだ！三分経つ前にケリつけりゃ済む話だからな！」
「っ……舐めるのも大概に……!?」

「禁手化（バランス・ブレイク）ッ!!」

「「!?」」

その瞬間、一誠から光が爆ぜた。
そして光が収まった時、その場に立っていたのは正に人型の龍とも呼べる姿――『赤龍帝の鎧（ブースデッド・ギア・スケイルメイル）』を纏った一誠だった。

☆

「あれが、イッセー先輩が手に入れた力……」

小猫は小さく呟いた。

確かに凄まじいが、その根幹にあったのはゲンやレイトとの修行だ。二人との修行があったからこそ一誠はああして己の中にあった力を目覚めさせられた。
ならば自分も修行の末に二人から『受け継いだ』力を見せる時。
自分にはリアスや朱乃のように膨大な魔力があるわけじゃなければ、一誠や裕斗やアーシアのように神器があるわけでもない。カナエのように日輪刀や特別な呼吸法が使えるなんて以ての外。

「……私は先輩達みたいな魔力や神器は持ってません」

あるのは、姉(黒歌)から教わった仙術と義姉(夜一)から教わった白打と鬼道、そして―

「でも、姉様達から受け継いだこの奥義が―」

小猫が一誠同様に爆ぜると、光が小猫の両肩と背中……刑戦装束の開けている部分へと収束される。小猫の衣装が開けているのは、性質上この技を発動すれば服の両肩と背中の布が弾け飛ぶ為だったのだ。
仙術と白打最高峰の技術を組み合わせた小猫独自の奥義。

「瞬閧(しゅんこう)・白猫仙式(はくびょうせんしき)があります!!」

☆

―再びハンターズギルド―
殆どの者がポカンとしている中、ゲンとレイト、黒歌と夜一は得意気だ。いや、ゲンは色々言われていたのだが気にしていないのかどうなのか。

「にゃははは―!!どうかしら皆の衆!私の可愛い可愛い可愛い白音の本気は?」
「あの『瞬閧・白猫仙式』は仙術を使える事が前提じゃ。合わせるのに苦労しておったからのう」
「仙術使用を前提とした瞬閧の構築……もしくは瞬閧に適するように仙術を練り上げたのか……どちらにせよ並大抵の努力ではないでしょう」
「卯ノ花分かってるにゃー!そう、白音も最初は全く出来なくて落ち込んでたけど、最終調整で見事に完成したのよ!」
「あ奴の瞬閧や仙術自体まだまだ粗があるが、基礎はしっかり出来ておる。焦らずこれから精度を上げていけばいいじゃろ」

落ち着いている夜一に対して黒歌は終始ハイテンションだ。溺愛してる妹が注目されて嬉しいのだろう。

そしてもう片方も……

「あのきりもみキックが修行の成果だと思ったか!?残念!まだ先があったんだよ!!」
「あいつの神器を見た時に感じたものが二回目でハッキリしたんでな。宿主が頑張っているのに何時まで寝ている気だと焼きを入れてやった」
「いやソレおかしくないですか?おおとり師範どんだけ感が冴え渡ってんですか。何で神器だけにダメージ与えられるんですか」
「年の功だ」
「いやさすがに納得できませんよ!?」

得意気なレイトとゲンにツッコミを入れる乱菊。殆どゲンへのツッコミだが。

「良いですねえ、禁手化と瞬閧・白猫仙式。見て下さい相手の眷属を。真っ青な顔してますよ」

「まさかあの裕斗という若者だけでは無かったのが余程予想外だったみたいだな」
「良いじゃねーかバレルっち！ナメくさってた連中が度肝を抜かれるのは見ていて気分がいいぜ！」

ジェントとマグナは絶賛し、バレルは冷静に分析している。やっぱりジェントはドSだろう。ちなみにマグナは逆境を覆す展開が好きなだけである。

☆

一方、何故か空間ディスプレイを出現させられるようになっていたカナエとアーシアによってオカ研部室でもその様子はしっかり観戦されていた。

「あらあら～凄い事になってるわね」
「はい！お二人共凄いです！」
「鬼道と白打、それに仙術の複合技法……そんな事が可能なんですね」
「イッセー、貴方この短期間にそこまで……！」

それぞれ感心しているが、リアスはプラス感動までしている。確かについ先日まで一般人だった彼がここまで急成長するなど誰もが思わないだろう。

如何に彼と、指導した二人の相性が良かったか。初日から数日はどうしようもなかったのだが、逆にそれがバネとなったのかもしれない。

自分とハリベルのように、ちゃんと向き合ってくれる師に出会えたのが一番の収穫と言える。

そんなリアスへとライザーからメッセージが届くのはそれから間もない事だった。

☆

一誠と三人の『兵士』……シュリヤー、マリオン、ビュレントの戦闘は禁手化した一誠の圧倒的優勢に進んでいる。本来ならば一誠の『赤龍帝の籠手』で倍化出来るのはのは文字通り攻撃に関してのみなのだが、ゲンやレイトとの修行で神器そのものも独自の進化を遂げたらしく、禁手化する事で攻撃・防御・速度のいずれかに特化する事が可能となった。無論その過程で倍化させた力の譲渡を行う『赤龍帝からの贈り物（ブースト・ギア・ギフト）』も使用可能になっている。

……これに全力を出さず（レオの姿にならず）勝ったゲンは何なのだろうか。

「うおおおお!!」

ガッ!!ゴッ!!バキィ!!

「うっ!!」「あぐっ!!」「がはっ!!」

元々特訓によって増していた攻撃力は十分に、恐ろしい程のスピードが乗っている。攻撃だけでなく防御や速度の倍化にしても十秒毎だ。つまり時間をかければそれだけ高速で動けるという事。既に一誠の姿は三人には見えていない。

「ドライグ！残り何分だ!?」

『残り約一分だ。あの娘らも大分粘ったがな、そろそろ決めてやれ』

「おう！」

その返事を皮切りに一誠の動きが更に加速する。もはや防御さえ間に合わない。まずはレオ直伝のきりもみキックでマリオンとビュレントを先の双子……イルとネルのように倒し、残ったシュリヤーにはゲンとレイトではない別の師によって伝授された技を使用した。

その技こそ―

「こいつは矢的先生直伝だ！
　ムーンサルトキィィィック!!」

ズガァァァッ!!

「がふうっ!!」

　矢的猛……ウルトラマン８０が得意とする、黄金に輝くキックが直撃したシュリヤーは大きく吹っ飛んで地面に叩きつけられ、他の二人諸共光になって消えた。

『ライザー様の兵士三名、再起不能』

　そのアナウンスと同時に一誠の禁手化が解除され、片膝を着く。いよいよ限界が近いようだ。しかし、彼一人で兵士を六名も撃ち倒している。正面からのぶつかり合いでだ。
　かつての彼なら洋服破壊とか考えてただろうが、良き師と出会い良い方向へと成長している為、ちゃんと『戦闘で』倒した。これは誇って良いだろう。

　一方、小猫の方も負ける要素が無かった。瞬発力が持ち味の猫又双子リィとニィでさえ、『瞬神』と呼ばれた瞬歩の達人たる夜一に鍛えられた小猫について行けず、手足に鬼道を炸裂させた一撃を何度も叩き込まれてフラフラかつボロボロである。

「くっ……この!!」

　イザベラは小猫の尻尾を掴もうとするが、それは悪手だった。

「瞬閧・白猫仙式は何も手足だけじゃありません」

小猫は尻尾に鬼道を炸裂させ、尻尾でイザベラを腕だけでなく体全体を地面に叩きつけた。

「うぐっ!!」

この瞬閧・白猫仙式の真価は『纏った鬼道ごと仙術で強化する』事にある。つまり見た目以上に強力なのだ。実際に調整を手伝った夜一が本来の瞬閧より強力な事を身を持って体感しているから事実に違いない。もっとも、夜一にしてみれば、今はまだまだ練度の低い小猫の瞬閧を実戦レベルまで引き上げている程度と思っているが。

「……慢心はしません。一気に片付けます」

今の小猫は仙術と鬼道を同時に使用している状態であり、消耗速度も早まっている。だからこそ確実に仕留める必要があるのだ。

まずはリィとニィの腹へと鬼道を炸裂させた拳を叩き込む。

「ふっ！」

「がはっ!!」「ごほっ!!」

二人はそのまま吹っ飛んで―行く前に小猫が回り込んで襟元を掴み、思いっきりその場で回転して遠心力を付ける。

「にゃあああぁぁぁ！気持ち悪いぃぃぃ!!」

「目が回って吐く吐く吐くぅぅぅ!!」

腹に重い一撃を喰らった状態でぐるぐると回されている二人は口からデビューしそうになっている。このままだとバターになるとい

うかバターを出しかねない。
その状態から漸く地面から立ち上がったイザベラへと二人を投げつけた。遠心力が加わって猛スピードで迫ってきた二人をイザベラが避けられるはずもなく―

「「へぶっ!!!」」

トリプルごっつんこ。

「「うっ……うっぷ……」」
「わあああ!?待て待て今吐くな!!」

既にリィとニィは限界だった。そして無情にもトドメを差すべく小猫は飛び上がっていた。足に特大級の鬼道を炸裂させながら。

「ちょっ!待っ……」
「吐くなら向こうでどうぞ」

ドガァァァァン!!!

小猫が最後に見た三人の姿は、何故か小さな虹が見えたそうな。

『ライザー様の兵士二名、戦車一名、再起不能!』

小猫は瞬閧・白猫仙式を解除して周りを見る。あの僧侶には逃げられたらしい。とは言え目的は果たした。後は―

『皆さん聞こえますか!?部長さんが一騎打ちを申し込まれて、今新校舎の屋上で戦ってますっ!!』

突如アーシアからメッセージが伝わって来た。どうやらライザー

はリアスに直接挑んで来たようだ。

いよいよゲームはクライマックスを迎える。それは即ち、カナエとライザーの正面激突を意味していた。

〈続く〉

番外編―ある者、ある家族の現在（前編）

これは、黒歌がレジェンド一家入りして間もない頃の話である。

惑星レジェンド。光の三超神の一柱たるレジェンドが創り出した自身の名を冠する巨大な惑星。

地球の約６０倍程の大きさと、地球同様に四季が存在する。

そんな惑星レジェンドの中でも有名なのは、中央大陸に存在しレジェンド自身が住まう『光神殿』がある中枢巨大都市『クリスタルシティ』、惑星上はその丁度裏側に位置し後輩のサーガが住まう海上未来都市『アクアエデン』の二大都市。

なお、別荘としてそれぞれレジェンドが浮遊大陸、サーガが海底都市にも居を構えている。

各々の眷属とも言える『伝説九極天』や『神衛隊』の居住地があるのも基本は各光神の本拠地か別荘地のどちらかだ。

最高峰の技術や広大な天然自然に加え、何より様々な理由で多種多様な種族や存在が互いの文化を尊重し『一つの家族』として一致団結して手を取り合い生きている事が最たる特徴である。

そしてレジェンドは今、鬼灯と共にある者の家に向かっている。オーフィスらはまだダイブハンガーに慣れていない黒歌の案内役をしてもらう為に残ってもらったので今回はレジェンドのみの帰還になる。それもかなり特殊な理由だ。

「すみませんレジェンド様。なにぶん私が独断で決めるわけにもいかない事態だったので。もう片方は東方不敗さんが手伝って下さるとの事ですから、こちらを頼ませて頂きました」

「気にするな、寧ろちゃんと言ってくれて助かる。まあ、こんな事が起きれば縁壱が驚くのも無理はない……マジでこうして鬼灯みたく報連相しっかりしろよアイツら。

毎回毎回事後承諾多すぎなんだよ……！」

「心中お察しします……私が居ないからってサボってたら脳天カチ割るぞ閻魔大王。レジェンド様はこうして態々ここまで戻って来てくれるのに……！」

同僚と派遣先の上司への愚痴のタイミングが一緒である。さすが主従関係なく仲のいい二人。

そんな事を考えながら目的の家―縁壱の家に着いた。九極天だけあって巨大な屋敷であり、使用人も多い。

「あら、レジェンド様に鬼灯様！さすがお時間にズレもなくピッタリですね！」

「久しぶりだな、うた。お前が直接出迎えてくれるとは」

「うたさん御無沙汰しています。縁壱さんは既に？」

「はい、お二人をお待ちしています。何というか空気が重くて……あ、不穏とか悪いとかじゃなくて、あの人も困惑してるというか」

「だろうな……ん？」

二人を出迎えてくれた継国縁壱の妻『うた』と話しているとまるで縁壱を小さくしたような子供が赤子をあやしながら小走りでやって来た。

「レジェンド様、鬼灯様、お久しぶりでございます！」

「お～うたと同じく久しぶりだな。大きくなったな縁次。かなでは……お昼寝か」

「お久しぶりです、縁次さん。元気な挨拶でよろしい。かなでさんもすくすくと育ってるようで、もうすっかりお兄さんですね」

「はい！」

駆け寄って来たのはうた同様、かつての世界では鬼に殺され産まれる事なく世を去った縁壱とうたの子供、継国縁次と妹のかなで。

レジェンドが保護した時にはまだ妊婦のままだったので産まれて

おらず、縁壱がかの現象によって『弾かれた』事でこちらに来て再会した後に産まれたのが縁次だ。縁壱は無事出産にも立ち会う事が出来、号泣しながら喜んだという。
その後、生活面を含め様々な面倒を見てくれたレジェンドに恩義を感じた縁壱は九極天入りしたので、実は彼は九極天の中では比較的新顔なのである。

「父上に御用事ですか？」
「ああ、そうだぞ。アレ？この場合は縁壱に用事で良いのか？」
「良いんじゃないですか？縁壱さんと血の繋がった兄弟ですし」

首を傾げる縁次と、すやすやと眠っているかなで。とりあえずうたがレジェンドと鬼灯を案内している間はついて来た。縁次レジェンドの戦いや鬼灯による地獄講座なんかを聞いて目を輝かせている。いや、後者はなんか違くね？
そして部屋の前に着くと軽く会釈してうたと縁次、かなでは離れて行った。込み入った話になるだろうからと。心遣いの出来る嫁と子供達である。

「遅くなってすまんな。入るぞ、縁壱」
「失礼します、縁壱さん」
「……レジェンド様、鬼灯殿」

部屋の中に入ると縁壱と、間を空けるようにしてもう一人……縁壱によく似た男が俯きながら正座していた。

継国巌勝（みちかつ）

かつて黒死牟（こくしぼう）と呼ばれる鬼だった者。正確には『鬼になった』者。
何より縁壱の実の兄だった。
どうやら縁壱同様に死した後に弾かれて【エリア】を超えたらしい

のだが、転移してきた場所がよりによって継国家の前でしかも人間の頃の姿に戻っていた為、どうすればいいか分からずに立ち竦んでいた所を偶々通りかかった鬼灯に保護されて、一時は鬼灯の家にいたのだが……

「それで、そいつが弾かれて来た奴か」
「ええ。保護当初は私の家に連れ帰ったんですが、事情が事情なのでそのままにし続けるのもなんですし。土壇場で逃げたりせずちゃんと継国家に訪問したのは少し驚きましたが」
「そこ考慮してなかったんかい。まあ、結果良ければというやつだな、良しとするか。それで、縁壱に似ているから予想はつくが」
「継国巌勝……私の実兄です。向こうで最期に出会い刃を交えた時は……鬼でした」
「……」

三人の会話に俯いたまま黙っている巌勝。
すると鬼灯がレジェンドに一束の書類を差し出した。

「レジェンド様、浄瑠璃鏡から得られた彼の過去……向こう側での生を纏めたものです」
「助かる。縁壱やそいつの様子を見るに自分からは話し辛いだろうしな」

物凄い勢いでペラペラと捲りながらも全て頭に入れているレジェンド。鬼灯としてはこのスペックの一割でも閻魔大王に欲しいと思っている。どれだけ仕事が捗るやら。
ふむ、と書類を見終えて一息入れるとそれを鬼灯に返して巌勝を見る。

「弟である縁壱への劣等感や嫉妬心などを抱えつつ、修行に励んで痣を発現させるもそれが原因で寿命が短くなる事に耐えられず鬼に

なったと。色々省いたが大体この辺りが動機か」
「……ああ」

漸く、ここにきて巌勝が口を開いた。短くだが。

「鬼となった跡の罪状とかなんだがな。ぶっちゃけどうでもいい」
「!?」

この言葉に巌勝どころか縁壱も驚きの表情を向ける。二人が何かを言う前にと鬼灯が理由を話す。

「本来なら鬼としての巌勝さんを裁くのはあちらの【エリア】がする事です。鬼のまま此方に来たのなら考えますが、人間に戻っているようですし、参考にするとすれば人間の頃の記録です」
「鬼灯の言う通りだ。鬼でも人間でもこちらに来ようが扱いが変わらないとしたらそいつは―」
「仕事を増やしまくりそうなこの鬼舞辻無惨とかいうバカ野郎一択」

レジェンドと鬼灯がハモる。どうやら巌勝の過去に出てきた分だけでも相当やらかしているらしい。鬼灯なんか特別に無惨の事を纏めた部分の書類を手の甲でベシベシと叩いて額に青筋まで浮かんでいた。

「こちとら最近変わった現象が起こってるせいで色々立て込んでんのに何だコイツのしでかした事は。ホントこっちの【エリア】にいなくて良かったわマジで。間違いなく地獄行きで、しかもこれの罰にほぼ確実に一人、手練を付きっ切りで付けなきゃならないレベルって明らかに効率悪化が目に見えてるだろ。なあ、鬼灯?」
「レジェンド様の言う通りですよ。巌勝さんの過去を纏める筈なのにやたら無惨という鬼は出てくるんですよね。なんでお前が出て来る

んだと。もうこれ鬼になってからの巌勝さんの罪はイコール無惨の罪でいいんじゃないかって思いましたよ本当に。ったく何が『私は決して間違えない』だパワハラ上司め」

あまりの饒舌っぷりに縁壱と巌勝は若干引き気味だ。

割と普通に暮らしてるようでいても超弩級の忙しさを誇る二人は如何に効率良く仕事を片付けられるか日々思案しながら職務をこなしているのだが、その努力を（主に拘束される的な意味で）木っ端微塵にされそうな奴には怒りを露わにする。

巌勝一人でこれだから、本人の過去なんぞ確認したらそれだけで何日消化させられるやら。罪状書かれた書類がどれだけ分厚くなるか考えたくもない鬼灯と、幾ら読むのが早くても確認する気すら失せるだろうと思うレジェンド。

「まあキチガイ無惨はこの際置いといてだな」

（キチガイ無惨!?））

「お前はどうしたい、継国巌勝」

「……!?」

目の前の男はなんと言った?どうしたい、だと?

巌勝は困惑していた。自分が鬼だったと、過去に何をしたかも知って尚、何故そんな事を聞いてくる。

「私としても精々所属組織を裏切ったりとかその際当時の組織の首を持って行ったとかは戦国時代ではよくある事だし、ぶっちゃけ別の【エリア】の人間が過去にしでかした事はこっちで問題起こしてない限り裁いたりしたくないんですよ。浄瑠璃鏡以外にも手続きとか色々面倒くさいんで」

「本当にぶっちゃけましたね鬼灯殿!?」

「事実ですし」

実際面倒なのだ。レジェンドを介してノアやキングに連絡を取り、そこから更にそれぞれ地獄……この場合出身地からして日本地獄に確認取ったりと手間が半端ない上、レジェンド曰く「この二人に緊急時以外関わると確実にどうでもいい面倒事も追加される」との事。【エリア】統括で奔走している最高位の光神と九極天随一の忙しさを誇る鬼神は、そんな手間のかかる事は出来る限りしたくないのである。

「まあ少なからず罰は受けてもらうけどな。ふーむ……縁壱の道場の師範代として後進の育成に尽力する事、これでいいか」
「ですね。ちゃんと自分の事も包み隠さず話す事、これも追加しましょう」
「結構いい感じに収まったな。で、改めて聞くがお前はどうしたい」
「……何故、そこまで私に慈悲をかける？私は……」

厳勝がそう言いかけた時……

「終わった事でいつまでもウダウダ悩んでんじゃねえ!!」

スパーン!!

両手で思いっきり襖を開けた男……いや、漢がいた。青い髪、真っ赤なマントに特徴的なグラサン。腰に刀を差し、模様のような入れ墨

が入っている鍛え抜かれた上半身裸で腕組みして仁王立ちしている初見にして絶大なインパクトを誇るこの漢。

「ようカミナ、相変わらずだな。って事はサーガも到着したか」

「おぉう、レジェンドの旦那！それに鬼灯さんよ！そっちも元気そうだな！」

「ええ、それなりに。そちらも変わらず賑やかで」

「いつでも俺らしさを失わねえ！それがカミナ様だぜ！」

グラサンに指を当てキュピーンと光らせながら笑うカミナ。新たな人物の登場に巌勝はさらに困惑した。

ウルトラマンサーガ直属の護衛部隊にしてレジェンドの伝説九極天と対を成す【レジェンドエリア】最強部隊『神衛隊』の第一分隊『紅蓮』団長。それがカミナである。

シモンが団長を務める第二分隊『螺巌』とは二つで一つの団であり、合わせて『超次元グレン団』とも称される。

巌勝に対して更にカミナは言い放つ。

「おうおうおうおう！ここを開ける前に聞こえたがよ、こっちの天辺にいる旦那とその右腕が別にいいって言ってんだ！グダグダウジウジしてないで気持ち切り替えて前に進んだらどうだ!?」

「そう簡単に進めるものか……私は……」

「おいお前、名前は？」

「……継国巌勝だ」

「つーことは巌勝ってのが名前か。んじゃ、巌勝……」

名前を確認すると、深呼吸してカミナはある行動に出た。

「歯ァ食いしばれぇぇぇ!!!」

バキィィィィッ!!!

「ぐはあああっ!!」

「兄上!?カミナ殿!?」

思いっきりカミナが巌勝の左頬をぶん殴った。さすがにこれには縁壱も驚きを隠せない。続けざまにカミナは叫ぶ。

「ちったあ頭が冷えたかこのバカ野郎！裏切っただの鬼だっただの関係なくお前の弟のコイツが歩み寄ろうってんのに屁理屈並べて逃げてんじゃねえよ!!」

「逃げるだと……！何も知らぬ貴様に何が……！」

「知るか!!そもそも俺はお前の事を名前しか知らねえ!!」

「!!」

「俺が名前しか知らねえ奴が、過去に何をしてようが俺には知ったこっちゃねえし関係ねえ！見ねえ聞かねえ問い詰めねえ！大事なのは現在(いま)と未来(これから)だろうが!!」

目茶苦茶だが、何か心に響くものがある。そう巌勝だけでなく縁壱も感じた時、レジェンドと鬼灯もカミナの援護に入った。

「縁壱さんはかつて忌み子と言われていたそうですね。そしてそんな中、巌勝さんは縁壱さんを気にかけてあげていた、思いやりのある子供だった」

「!!」

「お？」

「それだけでなく、縁壱に対して嫉妬や劣等感はあれど鬼になる前に自ら縁壱に危害を加えたりはしなかったようだな。縁壱をこき下ろ

すような真似はせず、逆に己に発破をかける材料として修行に精を出した。よくある陥れたりとかはなく、ただひたすら己を高める事で対抗しようとした。ここら辺は個人的に好印象だ」

「おお?」

レジェンドと鬼灯の言葉にカミナは表情を緩めた。つまり卑怯な手段を取らず、己の実力のみで才ある弟の縁壱に勝とうと必死に努力を重ねていたのだ。しかし、当時痣が発言したは良いものの結果寿命が短くなり、修行を続けても縁壱を超える前に死んでしまう事に絶望した為、無惨の誘惑に負けて鬼となった。もし痣が発言しても短命にならなければ鬼にはならなかったかもしれない。

「何にせよ、このままでは埒が明かんな。質問先を変えるか。厳勝ではなく、縁壱。お前はどうしたい」

「私は……」

突然の質問に驚く事もなく、落ち着いて縁壱は答える。自身の希望を。

「私は、出来るならもう一度兄上と共に在りたいと思います」

「縁壱……!?」

「兄上……確かに向こう側での私達は道を違えました。しかし、それをこちら側に来てまで引きずる必要はありません」

縁壱はカミナに殴られて吹っ飛んだ厳勝の傍に寄り、目線を合わせるように屈む。

「私は忘れていません。兄上が幼少期、自分の事を顧みず私を大切にしてくれた事を。そして、兄上は私になりたかったそうですが……その必要はありません」

「何……?」

「兄上が私になったら、私は誰を兄上と呼べば良いのですか？」

この言葉に巌勝は目を見開いた。縁壱は既に自分に怒りも恨みも感じてはいない。

「こちら側で私は『家庭』を持ち、たくさんの『家族』を得ました。しかし―」

かつてと変わらぬ、穏やかな笑顔で縁壱は巌勝へと告げる。

「私の兄は継国巌勝……兄上唯一人です」

その言葉に巌勝はずっと堪えていたものが溢れた。嗚咽を漏らし、涙を流しながらも縁壱に言えなかった事を伝える。

「済まなかった……！私が、私の意志が弱かったばかりに……！」

「私が兄上を追い詰めてしまったというのもあります。兄上だけのせいではありません」

「だが！」

「もう良いだろう。折角和解出来たのに変に堂々巡りしてまた拗れたら全部水の泡だ」

レジェンドが巌勝の頑固さに苦笑しながらも強制的に切り上げた。漸くわだかまりが無くなったのに態々ぶり返させる必要もない。

二人が静かになったのを見計らったかのようなタイミングで、新たに一人やって来た。

「カミナ、声が門の外まで聞こえてこの家の者が驚いていたぞ」

「よう、サーガの大将！そりゃあ思いっきし叫んだからな！」

現れたのはレジェンドの後輩にして同じく最高位の光神であるサーガ。カミナにとっては直属の上司に当たる。

「やっと来たか。お前が遅れるとは珍しいな」

「……先輩の九極天の一人『篠ノ之束(しののたばね)』に捕まった。主に先輩をどうやったら落とせるかと。落とすとは撃墜か、撃破する事なのか？先輩をそうするのは無理だと思うが」

「「すいませんでした」」

平身低頭(DOGEZA)

自分の眷属とも言える直属の部下、及び同僚のやらかしにレジェンドと鬼灯が揃って綺麗な土下座を見せた。よく見ると縁壱もやってるし、その光景を厳勝は汗を垂らしハテナマークを飛ばしながら見ている。

先程までの雰囲気が台無しだ。この際、サーガの天然質問はスルーしておく。

「この度は俺の部下が迷惑をお掛けしました」

「同僚の無礼を謹んで謝罪させていただきます」

「いや、先輩も鬼灯もそこまでしなくても……」

突然の出来事にサーガはあたふたするが、事態を別の意味で重く見た二人はその対処に乗り出す事にした。

「……レジェンド様、これ以上被害が拡大する前に彼女の元に行って自ら抑止力となった方がよろしいかと。サーガ様もいらっしゃった事ですし、厳勝さんへは私から説明しますので」

「すまん、鬼灯。とりあえず束も引っ張って来る事になりそうだが……『娘』も含めてな」
「そういえばレジェンド様、束さんに言われたのか彼女から『御父様』と呼ばれてましたね。すぐに呼び方元通りでしたが」
「まあ、あの子は助けてからずっとこっちで暮らしてたし……東方不敗が持ち帰った、宇宙世紀だっけ？そこのスペースコロニーの情報を元に創造した俺製のスペースコロニーを気に入ってすぐそこに別荘建てたくらい束と同じ宇宙好きだ。束を初めて宇宙へ連れて行った俺を単純に尊敬してるってとこだろ」
「それだけではないと思いますが、今その事はいいでしょう。頼みましたよ、レジェンド様」
「ああ。サーガ、カミナ、一旦俺は席を外す。後は任せるぞ。そして……厳勝ゥ!!」
「はいっ!?」

またいきなり声をかけられた厳勝はビクッとしつつ敬語になって返事をした。

「サーガやカミナの厚意を無駄にするなよ！今度こそ幸せになりやがれコノヤロー!!」
「おぉい!?最後口調変わってんぞ旦那ァ!?」

カミナのツッコミを背に、束を目指し爆走していくレジェンド。
彼をよく知る鬼灯やサーガはいつも通りだと頷いているが、こういう姿のレジェンドをあまり見ない縁壱や会ったばかりの厳勝はポカンとしており、カミナは先述の通り若干混乱している。

「束さんに関してはこれで解決として、後は厳勝さんです。まあ、私やレジェンド様の要件は先程申し上げた罰というか贖罪の件なのでもう済んでますし、本題はこちらのサーガ様とカミナさんがお話しします。私は立会人という事で、縁壱さんは厳勝さんの身内という立場で

お話しをお聞き下さい」
「……？どういう事です、鬼灯殿」
「御心配なさらずとも悪い話ではないですよ。寧ろ逆です」

改めて五人は座り直す。カミナはどっかり胡座をかいたが、サーガは鬼灯らと同様に正座。レジェンドといいやけに和文化に通じている光神達である。

「では自己紹介からさせてもらう。俺はウルトラマンサーガ。この【レジェンドエリア】の光神の一人だ。先程までいた先輩……ウルトラマンレジェンドの後輩という立場にあたる」
「そういや自己紹介まだだったな。すっかり忘れてたぜ。つーわけで！サーガの大将直属の最強無敵の大軍団！『神衛隊』第一分隊『紅蓮』及び超次元グレン団の不撓不屈の鬼リーダー!!カミナ様とは俺の事だ!!」
「彼の言った鬼というはそちらの意味とは違うのでご安心下さい。ちなみに私は鬼神ですので」

次々と出て来る情報について行けない厳勝に、縁壱が助け舟を出す。

「兄上、我々の世界の鬼とこちらの鬼は違うのです。こちらでは鬼は地獄で働く獄卒が主だそうで、鬼灯殿はそれを束ねる立場におられるのです」
「派遣先ですけどね。実際はレジェンド様直属ですし」

厳勝は思った……束ねる？派遣先？働く？こちらの鬼は種族なのかそれとも職業なのか？いや、獄卒が職業か。

「……給金は出てるのか？」
「そこですか兄上!?」

「ありますよ」
「あんたも律儀に答えんのかよ!?」

気のせいか既に巌勝が馴染んできているように見える。

「それから……こちらがサーガ様と、その護衛を務めるカミナ殿。サーガ様は自称完全生命体の無惨と違って本物の神様です」
「無惨様の表現に棘があるのはいいとして、本物の神?」

それはいいのか……と思っているサーガ。
巌勝の疑問に対して縁壱は細かく説明しており、巌勝は頷きつつ聞いている。一通り説明し終わったようで、二人は再度サーガとカミナの方へ向き直った。

「ここがどういう所かは大まかに理解出来たが……」
「それで構わない。さらに踏み込んだ詳細は徐々に教えていく事になる」
「……教えていく?」
「そっから先は俺が話してやる!」

カミナはサーガから会話を引き継ぐと、いきなり爆弾発言をぶちかました。

「まどろっこしいのは苦手だから単刀直入に言うぜ。おい巌勝、お前神衛隊(ウチ)で働く気はねえか?」
「「……は?」」
「だーかーらー!仕事面でお前の面倒を見てやるってんだよ!神衛隊、それも超次元グレン団!しかもだぞ!?俺の『紅蓮』の方でだ!どうだ!?」

ドヤ顔で言い放つカミナに巌勝や縁壱は困惑する。確かに現状か

ら栄転ともいえる、サーガ直属の部隊への分隊長自らの勧誘。おそらくは目の前にいるサーガや、先程出て行ったレジェンドも関与しているだろう。

「魅力的な提案ではあるが……私は縁壱がやっているという道場で師範代をしろと……」

「掛け持ちでいいだろ。普段は道場の師範代、しかぁし！その正体は【エリア】に轟く超次元グレン団の一員である！とかイカしてんじゃねえか!!」

「レジェンド様からは厳勝さん本人が承諾するならカミナさんやサーガ様の要望を優先しても構わないと事伝を預かってますので、そちらの返答次第です」

「本来ならお前は弟の縁壱と同じく先輩の九極天へ属するのが最良かもしれない。しかし、九極の座は埋まっている上、全く同じ道では事前に鬼灯より渡された資料から察するにかつてのような劣等感などに苛まれる可能性もある」

サーガの意見はもっともだ。特に後半に関してはもしそうなれば折角和解出来たものがまた崩れ落ちるという事も十分に有り得る。

「だからよ、弟の縁壱は旦那を護る！兄貴のお前は俺達と一緒に大将を護る！旦那んトコは個人個人で動いてるがよ、俺らは一つのデカい『家族』で動いてる！……まあ家族っていやぁこの星に住んでる連中皆がそうなんだけどな。ともかく！旦那んトコと大将のトコじゃやる事もやり方も違うって事だ！同じなのは護るって部分だけだぜ！」

「護る、部分だけ……」

「歩み方は違えど、道が交わる事があっても決してぶつかり合う事は無い。それこそ、離れていても心を共にする事が出来る。隣にいなくても何処かで、同じ志を持って戦っている」

そう……その通りだ。自分は縁壱ではない。争うわけではないの

なら、同じ道を歩かねばならぬわけでもない。
そして何より今度は、別々の道を歩めど悲しい別れになるわけではないのだ。
既に巌勝の心は決まっている。それを見透すかのように縁壱は後押しする。

「兄上」
「……縁壱」
「兄上の思う通りになさって下さい。今度こそ、たとえ離れても心と目指す場所は一つです」
「ああ、そうだな……カミナ殿」

今までと売って変わり、カミナに向けた巌勝の表情は穏やかなものになっていた。もう迷いはない。

「先程の言葉、偽りはないか」
「当たり前だ！取り消せなんて言う訳ねえだろ！」
「そうか……というわけだ縁壱。普段は道場で師範代をさせてもらえるらしい」
「「……へ？」」

そう縁壱に告げた巌勝は、カミナに倣ってドヤ顔をしている。鬼灯も「確かに掛け持ちと言ってましたね」と納得し、サーガもふっと笑った。これにはカミナも大笑いし、縁壱も釣られて笑ってしまう。
「ははは!!何だよそっちかよ！変に身構えちまっただろ！いいぜいいぜ、やりたい事は我慢しねえ！ウチの団員らしいじゃねえか、なあ！」

笑いつつもバシバシと巌勝の背中を叩きながら了承するカミナ。それを振り払ったりせず受け入れながら、巌勝は縁壱に告げる。

「すまんな縁壱。どうやら鬼だった頃の欲深さが変なところで出たようだ」
「そんな欲なら大歓迎ですよ、兄上。となると住まいはどうすればいいか……」
「こんな事もあろうかと、レジェンド様と私で考えた一軒家をカタログ化してきました。いずれも転移用スターゲート付きなので神衛隊としての任務を始め急な用事にも即座に対応可能。まずは手に取って見て下さい」
「「準備良すぎ!!??」」
「……この家、良いな」

仕事の出来る男、鬼灯。事前に用意していた自作カタログを取り出してセールスマンのような台詞を言いながら勧め始める。カミナと継国兄弟はツッコむが、サーガは早速中身を見始めていた。

「……出来れば、この街を可能な限り見渡せる場所がいい。遺骨は無くとも、墓の一つくらいは作ってやらねばな」
「兄上、それは……」
「誓いの為だ。私に関わり命を落とした全ての者への。墓一つで纏めるのは正直どうかと思うが」
「でしたら丁度良い場所が一ヶ所だけ空いてますよ。街から少し離れた高台ですが、周りに自然も多く、何よりこのクリスタルシティが一望出来ます。土地の広さも問題ありません」
「では、そこで頼む。縁壱と再び歩む事になったこの世界の、この街を……母上らが見えるよう墓は大きく建てねばな」

そう言って遠くを見る巌勝に、縁壱も亡き母の事を思い出した。

「だったらよ、デカい墓だけじゃねえ。お前もデカい事をしてお袋さんにお前が見えるようにすりゃあいい！」
「カミナ殿……」

カミナは立ち上がって天を指差しながら続ける。

「兄弟揃ってデカい事成し遂げて、【エリア】を跨いでようがそんなモン関係なくお前らが見えるくらい、お前ら自身が輝きゃいいんだよ！天に輝く星のようにな!!」

―本当に、この男は―

一々心に響く言葉を発してくれる。巌勝は素直にそう思った。無惨の誘惑とは違う、正に『漢のカリスマ』とも言うべき堂々かつ豪胆な言動はリーダーと呼ぶに相応しい。

「……そうだな。そうなる為に一つだけ、気にかかっている事があるのだが……」

「あ、寿命なら気にしなくても大丈夫ですよ。この星に保護された時点で少なからずレジェンド様やサーガ様の光気を浴びてますので、最低でも数十万年は生きられますから」

「……はあ!?」

「痣者で寿命が減っても人間の時同様に何十年でしょう。またぶっちゃけますが私ら九極天や神衛隊の皆さんは不老で不死……かもしくは超寿ですし。長寿でなく超寿です。ここ重要ですからよく憶えておいて下さいね」

巌勝の懸念……短命云々もあっさり解決した。これにはさすがの巌勝も笑うしかない。

そんな巌勝の肩を組みながら、カミナは表裏のない真っ直ぐな笑顔を向ける。

「つーわけだ！これから長い長い……あれ、俺らの場合は永いの方が良いのか？ともかくそんな付き合いになるんだ！よろしく頼むぜ、兄弟!!」

「兄弟……？」
「縁壱みたいに血の繋がりじゃねえ。ソウルの兄弟！魂のブラザーってヤツだ!!」
「つまり義兄弟という事だな」
「そうそうそれ！よっし！あとはオルガの奴もちゃんと説得出来てりゃ良いけどな！」

また聞いた事の無い名前が出て来たが、おそらくは神衛隊絡みの人物だろう。カミナが巌勝を迎え入れたように、その人物も誰かを迎え入れる気だと巌勝が推測すると、縁壱が口を開く。

「では兄上、カミナ殿、鬼灯殿、そしてサーガ様、道場の方へ。もう交渉が終わったか、それともまだその最中かは分かりませんが」
「ん？縁壱、お前の道場にいるのか」
「ええ。何でも護る為の拳で人を殺めた罪滅ぼしとして、拳を封印して私の剣術道場で師範代を務めてくれています。殺めたのも剣術道場の者達だったようで……」
「その者の名は？」
「はい、名は狛治（はくじ）。かつては—」

—猗窩座（あかざ）と名乗っていたそうです—

〈後編へ続く〉

番外編―ある者、ある家族の現在（後編）

継国兄弟と鬼灯、そしてサーガとカミナの交渉が無事に終了し、もう一人……狛治という継国剣術道場で師範代を務めているという男の元へ五人が行こうとしている時と同時刻。

レジェンドはサーガに続いて捕まっていた神衛隊の分隊……というよりチームの一つである『ゲッターチーム』のリーダー格である『流竜馬』を解放し、その右腕には束がくっつき、左手はレジェンドが束の出身世界で共に救出し束の養女となった『クロエ・クロニクル』の右手が握られていた。

「いや、助かったぜレジェンド様。なにせここに着くなりとんでもない速さで後ろに回り込まれて首根っこ掴まれてどうしようもなかったからな」

「すまんな、竜馬。というか束、お前なんで俺が絡むとただでさえ反則じみた能力なのにさらにスペック上がるんだ？」

「ふふん！それが愛の力だよレジェくん！」

「束様はレジェンド様が関係すると最大で二十倍程能力が上昇するみたいなんです」

「何その状態。デメリット無い界王拳？」

一応束自身は細胞レベルでオーバースペックかつレジェンドの光気を浴びた事でさらに反則級になったのだが、それでも同じようにサーガの光気を浴びた竜馬の背後を取って捕縛するなど簡単な事ではない。

「まあいいか。竜馬は神衛隊の新メンバーの顔を見に来たんだろうが、束とクロエはどうしたんだ？ちょっと前にスペースコロニーの別荘へ気分転換に行ったばかりだっただろ」

「レジェくんが帰ってくるから！ってのもあるけど、神衛隊の新メンバー用の機体の意見でも聞こうと思ってクーちゃんと一緒に一旦

戻ってきたんだよー。そんで意見貰ったらレジェくんがまたあっちに行くタイミングで私とクーちゃんもコロニーの別荘行って、宇宙眺めてのんびりしながらアイデア練ろうかなと」
「おそらくは私と束様も新しい方の機体開発に携わる事になるでしょうから、先手を打って準備しておこうと考えたんです」
「なるほどな。ちなみに俺の機体に関しては？」
「アレはレジェくんいないとまともに調整出来ないかな。動力からしてレジェくんの作ったオーバー？ロスト？どっちでもいいや、そういうテクノロジーだし」

神衛隊は基本的に戦艦や機動兵器、もしくはそれに準じたものを運用しての活動が主軸となる。そのメンバーとなる以上、搭乗する機体の開発は必要不可欠。メカニックや戦艦のクルーなどならば専門知識や技術でどうにかなるが、機動兵器の方となるとそうはいかない。
量産機ならいざ知らず、専用機となれば色々と大変なのだ。既存の量産機のカスタム機でも十分苦労するのだが、ワンオフの機体ともなればその比ではなく、大抵が試作機レベルの技術を盛り込んだ物になるのが常である。
ましてやレジェンドの専用機であるなら尚更だ。彼やサーガの機体はフラッグシップになる為、一切の妥協は許されないし、そもそもする気など束には元からサラサラない。

「いずれにしろ、一度俺も顔を出して本格的に調整した方がいいな。元々束やクロエが来るまで動力源を完成させてから基礎設計だけしてそのままだったし」
「機体自体はレジェくんの基礎設計のほぼそのまま。ただ、動力源がとんでもない超性能過ぎてそれを熟知してるレジェくん抜きだと各種設定の数値にムラが出まくりなんだよねぇ。一番の問題は異常過ぎる出力。アレあのままリミッターも無しに武器使ったらサーベル一振りで恒星クラスも木っ端微塵だよ」
「おい束、あんたなんてモン作ってんだ!?」

「りょーくん、私じゃないよ！レジェくんの基礎設計通りに作ってレジェくんの作った動力源積んだだけだもん！多少のアレンジはしたけどほぼそのままだってば！寧ろ弄ったのは真ゲッターロボの方だよ！」
「そっちの方が何してんだ!?」
「まず出力上げて安定させて、装甲強度の見直し、武器の追加、合体時の変形の高速化とか色々頑張ったよ！」

突然の爆弾発言にレジェンドと竜馬は揃ってツッコミを入れたが、フタを開けてみればなんの事はない普通にパワーアップしてるだけだった。これは一安心。

「なんだよ驚かせんな。良い事だらけじゃねぇか」
「ホントはさ、あっちみたくキロメートルサイズに大きくしたかったんだけど」
「おいやめろマジでそれはやめろ」
「そういや真ゲッタードラゴンを見たらアイツどういう反応するんだろうな」
「アイツとはどなたですか？」
「新しい家族。スカーサハに続いてドラゴン絡みのな……ってそろそろ着くぞ。どちらの交渉も終わってればいいんだがな、カミナの方は問題なさそうだったが」

レジェンドの言葉を聞いて視線を前に向けると、縁壱が師範を務める継国剣術道場が見えてきた。屋敷はちょうどその道場の裏側にある。

「こぉの大馬鹿者がああああ!!」

「はう!?」「ふぇ!?」「うおお!?」
「……こっちでも一悶着ありそうだな」

道場から離れていても聞こえた怒声に驚く束、クロエ、竜馬に、やれやれといった表情で溜息を吐くレジェンド。今度は一体どうしたのかと思いつつ、レジェンドは戦々恐々としている三人を連れ道場へと向かって行った。

☆

何故その怒声が聞こえたのかと言うと時間を少し遡り、カミナとサーガが到着して厳勝らと話し始めたのと同時刻の事だ。

今日も今日とて継国剣術道場では無数の門下生が修行を積んでいる。伝説九極天が開いている道場だけあって規模は大きく、同時に修行の密度も高く、優秀な剣士を多数輩出しており鬼灯の派遣先である日本地獄などに獄卒として就職する者も多い。

師範代でも相当な実力者達であり、ぶっちゃけ現代の戦闘機や戦車に対して刀が一振りあれば余裕で対抗しうる連中ばかりだったりする。

そんな中でも頭一つ抜けているのが『狛治』という男。

「踏み込みが甘い！臆せば相手に呑まれるぞ！」
『はい！』
「お前は一撃が浅い！読んで名の如く一撃で倒す気で打ち込め！」
『わかりました狛治師範代！』

妥協無しに一人一人と打ち合い指導していく狛治。しかし、時折別の何かを考えるかのように動かない時もあり、その様子を門下生達も心配している。

「狛治師範代、どうかしたんですか？最近考え込む事が増えてるみた

いですけど」
「……気にするな。個人的な事だ」

そう言われて日に日にそれが増していっているのが目に見えて分かるのに気にするなは無理というもの。さすがに今日は突っ込んで聞いてみようと門下生や他の師範代が結束していた時、予想外の客が訪れた。

「ふぅむ……相変わらずこの道場は凄まじい熱気よ。これならばこの道場出身の剣士が各地で活躍するのも頷けるというもの」
「あんたはその熱気受けて平然としてるどころか、それを今にも丸ごと呑み込みそうな闘気放ってるんだが」
「フフフ……逆に言えばそれだけ儂も高ぶっておると言う事だ、オルガよ」
『!?』

何時の間にか道場の入口に二人の男が立っていた。
一人はコートを着た、銀髪で色黒の肌の男。大人のような少年と言うべきか、それとも少年らしさを持った大人と言うべきか。
もう一人が普通ではない。腰布を巻いた、カンフーの使い手のような服を着用し、口髭を蓄えた三つ編みの老人。しかし服の上からでも分かるほど鍛え上げられた肉体はそれだけで只者ではない事を理解させる。

「おい、あの人ってまさか……」
「あの服、あの闘気……間違いない……!」
「レジェンド様直属の『伝説九極天』の一人、『拳神』東方不敗マスターアジア老師!!」
「星間連合艦隊一個師団を生身で壊滅させた、あの!?」
「俺は海の上や空までも縦横無尽に駆け抜けたと聞いたぞ!?」

口々に東方不敗の噂を挙げていく道場の門下生達。実際マジなので本気で笑えないレベルの戦闘力だ。まさしく『武器は己自身也』と身体さえ動けば全身凶器な化け物である。

「ていうか老師さっきオルガって言わなかったか!?」

「この星、それも老師と繋がりがあるオルガって名前の男と言えば神衛隊のメンバーしか居ないだろ!」

「じゃああっちはあのサーガ様直属の『神衛隊』第三分隊『鉄華団』団長オルガ・イツカかよ!?」

「なんでそんなビッグネームが二人揃って来るんだ!?」

神衛隊第三分隊『鉄華団』―M（モビルスーツ）Sという機動兵器を主軸とした部隊であり、機動兵器部隊はさらに小隊分けされている事が特徴。そして各小隊の隊長機は『ガンダム・フレーム』と呼ばれる特別なフレームを使った専用機を割り当てられている事で有名だ。

中でも第一小隊隊長兼戦闘隊長である三日月・オーガスの駆る『ネオ・ガンダムバルバトスルプスレクス』は圧倒的で、その活躍を見たこの道場の門下生も小隊へ入隊志願する程の人気を誇る。

「すまんな皆の者。今日用事があるのはそこの狛治という師範代でな」

「……俺に？」

「作用。正確には儂ではなくこっちのオルガがな。儂は立ち合い人としてが本分だ」

「立ち合いっていうか思いっきり口出しそうな気がするが……まあいいか、そういう訳だ」

ゴホンと軽く咳払いし、オルガは自己紹介から始める。

「とりあえず初めましてだな、俺はオルガ・イツカってんだ。サーガの大将直属の護衛部隊『神衛隊』の第三分隊『鉄華団』の団長をやって

る。ちなみに神衛隊の頭文字は親じゃなくて神って字だ。一文字変えるだけで意味が変わるから漢字ってスゲーよな」
「継国剣術道場師範代の狛治だ。本日はどういった要件で訪問された？」
「ああ、まずは先に目的の方を話した方がいいな。俺達……でいいのか？ここを訪問したのはお前を神衛隊……というより鉄華団に勧誘する為だ」

この言葉で周りが一気に騒ぎ出す。当の本人である狛治も驚くが、すぐに冷静さを取り戻しオルガに質問する。

「身に余る光栄な事だが、何故俺を？これだけの広さの星なら探せば俺より優秀な奴はいくらでもいるのでは？」
「まあ、それも含めて理由を聞いてくれ。聞いての通り俺達神衛隊は光神の中でもレジェンドの旦那に次ぐサーガの大将直属の部隊だ。当然危険度も相当なモンだし、生半可な実力の奴を入れる訳にはいかない」

これはオルガだけでなくサーガ自身の意志でもある。犠牲を出す要因を可能な限り排除し、神衛隊全員が生き残る為に実力査定は厳しく行っている。もっとも、査定されるのは実力のみではないのだが。

「お前がこの道場で師範代筆頭と言われる実力があるのは調べたが、それだけじゃ納得しないだろうからな。俺が注目したのはお前の指導力だ。調査を突き詰めると、ここ最近【エリア】各地で活躍してる剣士の多くはこの道場、それもお前が重点的に育てた連中だった」

東方不敗がここに現れてすぐに言った言葉、それに付け足す感じで理由を述べる。

「正直鉄華団（ウチ）は指揮が出来るのも俺を含めて限られる上、ましてや指

導なんて出来る奴はさらに少ない。うちの連中にも生身である程度戦えるようになってもらわなきゃ困るしどうしたもんかと考えた結果、お前が候補筆頭に挙がったんだ。ま、機動兵器に関しては逆にこっちが教える立場になるけどな」
「だが、俺が教えられるのは剣術くらいで……」
「本当に教えられるのはそれだけか？」

その言葉に狛治は目を見開く。

「さっき調査を突き詰めたって言っただろ。お前、本当は剣士じゃなくて『拳士』じゃないのか？」
「ッ!?」

狛治は一気に動揺した。自身の事は師範である縁壱にしか伝えていないし、彼が安易に話すとも思えない。話すとしたら、それこそ重要な関わり合いを持つ人物くらいだろう。実際、縁壱がそれを話したのはレジェンドや鬼灯、加えて前回の巌勝、サーガ、カミナの五人のみだ。
だというのに何処からそんな情報を手に入れたのか。東方不敗だけでなく、オルガもやはり只者ではない。

「お前が出た試合での動きを見て違和感があってな。この東方不敗老師にも見てもらって確信したんだよ。足さばきや間合いの取り方、力の込め方なんかが微妙に剣士のそれと違う。老師もそこを一目で見抜いたんだ」

なんで一目で分かるんだよ、しかも記録映像で……とボヤくオルガだが狛治にしてみれば観察眼がずば抜けているのは双方変わらない。

「……そうだ。俺は拳士だ。拳士だった……」
「だったって事は何かしらあって辞めたんだろ、拳法。突っ込んで聞

くのは悪いと思うが、理由によっちゃ無理強い出来ないし教えてくれねぇか？」
「……俺の家は貧乏だった」

そこから狛治が話した彼の過去は想像以上に過酷なものだった。病弱な父親は自分に薬を買う為に狛治がスリをしては捕まってを繰り返す事に負い目を感じ自ら命を絶った。そして、その後送られた場所で良き出会いがあり、己に拳士としての生き方を教えてくれた師の一人娘と結ばれるも、祝言を挙げる事を父親に報告する意味で墓参りに行き、帰った時には隣の剣術道場の跡取り息子と門下生の私怨によって師と妻となるはずだった少女は毒殺された。
それに対する報復として狛治はその剣術道場の跡取り息子を含む門下生６７名を己が拳によって惨殺したのだ。

『……』

あまりに壮絶な過去に門下生はおろかオルガさえ黙ってしまっていた。東方不敗だけは腕を組んだまま表情を崩さない。

「そして……俺は鬼になった。いや、されたと言う方が正しいのか。百年以上も意味のない殺戮を繰り返し、漸く討たれたと思えば、地獄ではなく見た事もない景色の場所……そしてこの道場の主である縁壱師範に俺は拾われた」
「……それで恩義を感じてか、はたまた己の贖罪の為か……どちらにせよ、ここで師範代を引き受けたわけだ」
「そうだ……俺に拳を振るう資格は等に無い。ならばせめてもの償いとして少しでも多く正しき心を持った剣士を世に送り出そうとこうして道場に置いてもらってるんだ」
「そんな話を聞かされちゃ引き抜きなんざ出来ないだろ……仕方ねぇ、ここは大人しく「待て、オルガよ」老師？」

ここに来て東方不敗が動いた。今まで前にいたオルガを下がらせ、交替するように狛治の前に立つ。

「狛治と言ったな。改めて名乗ろう。儂はレジェンド様直属の伝説九極天が一人、東方不敗マスターアジア。此度は立ち合い人としてこの場に参じた訳だがお主に聞きたい事がある」

「……何でしょうか」

「お主はいつまでここで燻っているつもりだ？」

「燻って……？一体何を……」

「いい加減に屁理屈を並べて辛い表情のまま剣を振るうのはやめろと言っておるのだ。お主が考えているよりも周りの者達はお主の心情を理解しておる。先程の話を聞いた時からな」

ハッとして周りを見渡すと同僚や門下生が皆心配そうな顔で狛治を見ている。

「狛治師範代……ずっと苦しかったんじゃないですか？」

「……!?」

「今の話を聞いたら師範代の家族を殺したのも剣術道場の連中だろ!?俺達じゃないっつっても剣術道場ってのは同じだし、気に病まないのは変じゃないッスか!!」

「もう十分だろ、狛治……もう自分を許してもいいんじゃないか」

「お……俺は……」

同僚や門下生が自分を思って言ってくれてる事は分かるものの、狛治はそれに躊躇する。

「やはり……駄目だ。俺は師範にも、恋雪（こゆき）さんにも顔向け出来ない。たとえ、『弾かれた』事で二度と会えなくても―」

「こぉの大馬鹿者がああああ!!」

……と、東方不敗が怒声を発した。レジェンドらが聞いたのはこれである。あまりの声量と迫力に思わず怯んでしまう狛治や道場の者達。オルガは「やべぇ、老師キレてやがる」と真っ青になっていた。

「そうやっていつまでも他人を理由にして前に踏み出そうとせん事が間違っておるのだ!!誰もいない後ろしか見ようとせん今の貴様には、拳のみならず剣さえも振るう資格など無いわ!!」

「何だと……!?」

「貴様の師は貴様に後悔させる為に拳法を教えたのか?貴様の想い人は貴様を束縛する為に添い遂げようとしたのか?違うであろう!!」

さらに迫力を増して言葉を続ける東方不敗。

「貴様自身がそれに気付けんようではその者たちも浮かばれん。その者らの為に儂が直接喝を入れてくれる!構えぃ!!」

「!?」

東方不敗はそう言うと彼の代名詞とも言える独特のポーズで戦闘態勢を取る。対する狛治は突然の事で混乱するが、何とか気を取り直し、竹刀を構える……が、それは東方不敗から離れているにも関わらず一瞬にして粉々になった。

『!!』

「縁壱には後ほど弁償するとしよう。さて、これで手持ちの武器は無くなったな。どうする?狛治よ」

なんと粉々にしたのは東方不敗だった。目に見えぬ程、高速かつ繊細な一撃。それによって狛治の竹刀を粉砕したのだ。

（何だ今のは……!?この男、明らかに鬼であった頃の俺を上回っている!!確か縁壱師範も伝説九極天……こんな奴が師範とこの男以外に七人もいるというのか!?）

狛治は戦慄した。鬼であった頃も敵と相対した時はこれ程の恐怖を感じた事はない。

「ほぅれどうした?さっさと構えんか。振るえずとも拳を握るくらいは出来よう。それとも貴様が師から『受け継いだ』のは相手が格上か格下か判断する術だけか?勝てなければ尻尾を巻いて逃げろとでも教えたのか?ん?」

「……!!うおおおお!!」

自身の師……慶蔵を侮辱されたと感じた狛治は怒りのあまり東方不敗へと驚くべき速さで向かって行った。素手で。

それに東方不敗は内心「漸くか」とほくそ笑んで狛治を迎え撃つ。凄まじい拳と蹴りの応酬が繰り広げられるが、余裕の東方不敗に対して狛治は大分息が上がっている。東方不敗は受け止めるか避けるかしているが、狛治には東方不敗の一撃が急所に叩き込まれ続けているのだ。それでも倒れず攻撃しているのはさすがとしか言えない。

「ふむ、中々どうして粘るではないか。だがこれで終いにしてやろう!!」

「っ!?」

「ダァァァクネス!!フィンガァァァ!!!」

「ぐあああぁぁぁぁぁ!!!」

東方不敗の右手が凄まじくスパークしながら紫色に輝いたと思えば、その右手で狛治の頭を掴み握り潰さんと力を込めた。尋常ではない苦しみ方にオルガを含めて門下生らも止めに入る。

「おい老師！それ以上はヤバイって!!本気で死んじまうぞ!!」
「安心するが良い！精々頭蓋にヒビが入るくらいに抑えておるわ!!」
「全然大丈夫じゃねえだろ!?」

一見コントに見える会話だが、実際はそんな楽観視出来る状態ではない。その時……

「狛治さん!!」

まだ幼さが残る女性の声がその場全員に聞こえ、東方不敗は技を止めて手を離し、狛治は驚きながらまさかと思いその声のした方向を向く。

そこには死んだはずの狛治の想い人の恋雪と、その父で狛治の師である慶蔵が他数名の人物と立っていた。

「……え？恋雪……さん？師範？」
「狛治さん！大丈夫!?」
「待ってろ、念の為持ってきてた治療薬がある。少し染みるが我慢しろ、狛治」
「どうして……なんで……？」

今だ混乱するしている狛治や、その狛治を治療している恋雪と慶蔵を一瞥した後、東方不敗は二人と一緒にいた他数名を見る。

「レジェンド様、てっきり縁壱らとこちらに来られるかと思いましたがな」
「束がサーガをとっ捕まえたりしてたから俺が確保しに行ったんだよ。あと主人公なのに他数名って扱いヒドくね？」
「オォイ地の文にツッコむなよ旦那ァ!!」

相変わらずメタ発言をかますレジェンドにキレのあるツッコミを炸裂させるオルガ。間違いなく彼は本作ではツッコミ属性だ。

「だってサーくん全然教えてくれないんだもん！」
「いや、サーガ様に聞いてもレジェンド様の落とし方なんか分からねえだろ。そもそもあの人そういう事に疎いんだぜ？」
「お、竜馬も来たのか。その調子だと旦那が来るまで束の姐さんに捕まってただろ。お疲れさん」
「ご名答だぜ、オルガ……絶対サーガ様逃げる時サーガアクセラレーション使っただろこれ」

ぶーたれる束と、そんな束を諫める竜馬に、その竜馬を労うオルガ。ちなみにサーガが捕まってる間にカミナは一足早く継国家に向かっていた。護衛なのに。

「東方不敗様、お久しぶりです」
「うむ、クロエ。お主も元気そうで何より」
「しかし……派手にやったな。まるで全力なんて出してないとはいえ、ダークネスフィンガーまでやるか？普通……下手すりゃ狛治の頭パーンだぞ？」
「それはありませんぞ。オルガにも言いましたが、頭蓋にヒビが入る程度しか力を込めていませんのでな」
「いや十分ヤバイだろソレ」

レジェンドの言葉にクロエも頷いている。頭蓋にヒビ、しかし相手

があの狛治。彼にそのレベルの被害と言うから威力はお察しである。おまけに『しか』ってなんだ『しか』って。

「それで老師。あの二人は誰なんだ？狛治の奴、相当驚いてるようだが」

「んん？なに、奴の想い人と恩師よ」

「はあ!?」

「いや、縁壱の話から鬼云々絡む連中の出身はノアの【エリア】らしかったんで、俺がノアに事情を話したらあの二人はギリギリ転生の環に入る直前だったんでな。普通なら【エリア】超えは俺達光神以外は出来ないんだが、特別にノアとキングが協力してくれて、ノアの【エリア】に戻れない代わりにこっちに連れて来れたんだよ。色々と骨は折れたがな」

「……旦那、代償は？」

「百時間耐久ノアの神使自慢とキングへの全身マッサージ」

「「前者が凄まじく苦痛!!」」

げっそりした顔で言うレジェンドに本気で同情した東方不敗ら六名。この時点ではアーシアが巫女になっていないレジェンドには彼らが言った通り苦痛でしかない。

それを聞いていた狛治ら三人もレジェンド達の傍によってきた。

「あの……」

「んー？」

「レジェンド様が、二人を連れて来てくれたんですか？」

「ああ」

「すいません、こんな事を聞くのも不躾だとは思うんですが……親父は……」

「既に転生の環に入っていたみたいでな。少し話せただけだった」

「……そうですか」

恋雪や慶蔵に支えられながら立っていた狛治は俯きながらも少しだけ笑っていた。そんな彼にレジェンドから思いもよらぬ言葉が返ってきた。

「ついでにお前への事伝と渡し物を頼まれた。つかあの短時間かつ転生の環の中でよくこんなもん作れたな。凄いぞお前の父親」

「え……？」

『誰がなんと言おうが、お前が俺の息子で良かった。俺に向けてくれた優しさを、今度はお前の大切な人達に向けてくれ。カミさんと幸せにな』だとさ。で、これがその父親からの餞別だ。なんでも紋付袴だそうだ。祝言に使ってくれとな」

父親からの最後の贈り物はレジェンドの手から狛治へと受け渡された。両手の上に乗せられた着物から感じるのは、父親の優しさと愛情。狛治は恋雪や慶蔵との再会に続いて聞かされた事実に涙した。

「……親父……！」

そんな狛治に寄り添う恋雪。その姿が羨ましかったのか束がレジェンドに引っ付いてきた。さり気なくクロエも。

「さて、こちらは一先ず丸く収まったとしてだ。東方不敗、まだ聞きたい事があるんだろう？」

「うむ。もう少しお時間を頂きますぞ、レジェンド様」

「あいよー」

軽く返事をしてレジェンドは道場の壁際に束やクロエと腰を降ろした。竜馬はオルガと並んで立ち、腕組みしながら成り行きを見守っている。

「狛治よ。先程の動きは見事だった。儂から見ればまだまだだが、何

より倒れんという気迫があった」
「老師……」
「お主も気付いていよう。受け継ぐというのは、何も技術のみにあらず。師の志も含まれるのだ」

　狛治への呼び方が「貴様」から戻っている事で、東方不敗の怒りが既に無い事が現れている。

「確かに剣術を自ら修得し、教導し教え子を世に輩出するのも贖罪として立派。しかし、顔向け出来ないと拳を封印し廃れさせるのは、お主の師である慶蔵の『護る為の拳』という教えを廃れさせるのと同意義よ。確かにお主はその拳にて人を殺めたやもしれぬが、聞けばお主が殺めたという連中は卑怯な手段を取ってそこの二人の命を奪ったというではないか。人を殺めた事を忘れぬのは良いが、そやつらの事でいつまでも気に病む必要はない」
「お心遣いは感謝しますが……」
「大罪人と言うなら儂の方が正にそれよ。儂はかつて地球を思うが故、人類など滅びてしまえなどと考えておったからな。そして、ある物を用いてそれを実行しようともした」

「「!?」」

　狛治、恋雪、慶蔵は絶句した。特に狛治は無惨の事を知るが故に、目の前の人物がその無惨と同等かそれ以上の事をしようとしたというのを信じられなかった。

「だが、そんな儂を正してくれたのは弟子のドモンだった。人類もまた自然の一部……正にその通りであったわ。あやつは最後の最後で儂を超えた。そして……儂が元の世界でドモンと共に最期に見たのは、鮮やかな夕日だったな……」

感慨深く語る東方不敗に、恋雪や門下生達は涙を流しており、東方不敗もまた一度命を落として助けられた者だと知る。

「それから儂はこうしてレジェンド様に魂を助けられ、再び生を受けた。今では各次元、様々な惑星の自然を蘇らせる事を仕事としておる」

「前にしゅー爺の再生させた惑星に行ったんだけど凄いよねー！荒野しか無かった場所が芝生全開花満開！あれ絶対ピクニックしたら最高だよ！」

「フフ……ちゃんとゴミは持ち帰るのだぞ、東よ」

「はーい！」

なんとも和やかな会話である。そんな光景を見て、狛治も口を開く。

「俺も……」

「んん？」

「俺も……出来るだろうか。老師のように……踏み外した道を、もう一度正しく歩めるだろうか」

「それを決め、成し遂げられるかはお主次第よ。そうであろう？オルガ」

突然話を振られて驚くオルガだったが、竜馬が肘で「ほら、ちゃんと言ってこい」と意地悪気な笑みを浮かべながら突いてきたので意味を理解した。

「なあ狛治。お前は貧乏って言ったが、俺達も似たようなモンだった」

「何……？」

「『ヒューマンデブリ』。宇宙に漂うゴミのように掃いて捨てる程存在するもの。俺達はそう扱われた。しかも、ヒューマンデブリにされるのは孤児や身元不明の子供が殆どだ」

またも驚きの事実が告げられた。ギリギリ人として見られている状態。狛治がオルガ達の世界にいれば間違いなくヒューマンデブリにされていただろう。

「元の世界での鉄華団を立ち上げた理由の一つでもある。もっとも、俺も志半ばでくたばっちまったがな。ぶっちゃけ九極天や神衛隊ってのはそういう連中が多いのさ」

「おいオルガ、俺は別にくたばっちゃいねえぞ」

「束さんやクーちゃんもだよ！」

「多いって言ったが皆とは言ってねえだろ。まあ、そんな訳だ。だからよ……」

オルガが狛治に右手を差し出し、力強く笑いながら言う。

「もしもお前が変わりたいってんなら……来いよ、鉄華団に。嫁さんとお師匠さんも一緒にな！」

その言葉に目を見開き、恋雪と慶蔵を見ると、二人も笑顔で頷いている。自分達は狛治と共にある、言葉にせずともそう思っているのが分かった狛治はオルガに向き直り……

「……よろしく、頼む……団長！」

目を見てハッキリと言い、差し出された手を握り返した。

竜馬と東方不敗はニッと笑い、レジェンドはやれやれと苦笑している。

「よっしゃあ！こっちこそよろしくな狛治一家！」

「とは言ってもいきなり道場を抜けるとなるとさすがに迷惑が……」

「心配にゃあ及ばねえ!!」

その声がした方を向くと、バーン!という効果音が鳴りそうな程堂々と仁王立ちしていたカミナが居た。ついでに縁壱と鬼灯、サーガ、そして……

「まさか……黒死牟か?」

「久しいな、猗窩座。いや、今は狛治だったな」

鬼として共に無惨の元で戦っていた黒死牟……巌勝もいた。

「お前が抜けた穴は神衛隊第一分隊『紅蓮』の鬼リーダー、カミナ様の左腕!この継国巌勝が務める!!名前で分かるだろうが、この道場の主である縁壱の血縁!しかも兄貴だ!!」

「巌勝、いつの間に左腕になったんだ?」

「いや、それこそいつの間にかそうなってまして……」

レジェンドに聞かれた縁壱は苦笑しながら答えた。巌勝も満更では無さそうだし、まあいいか。

「カミナの方も無事に加入してもらえたみたいだな。ってか縁壱さんの兄貴って何とんでもない奴連れてきてんだよ」

「ヘッ!お前も大概だろオルガ!家族丸々引き入れやがって!」

軽口叩きつつ笑いながら拳を突き合わせる二大団長。お互い望む人物を引き入れられたので機嫌が良いようだ。

「私はまだこの道場の詳細を知らないからな。引き継ぎはしっかりやらせてもらうぞ、狛治」

「ああ、後の事は頼む。それから……師範、皆……本当に世話になった」
「こちらこそ助かった。この場にいないうたの分も礼を言わせてほしい」
「……あ」
「どしたのレジェくん」

漸く全員が和やかな雰囲気になったと思ったらレジェンドが何かを思い出した。

「どうせノアの神使自慢を百時間延々と聞かされるんだ……だったら少しぐらい良い思いしてもいいだろ」
「すいません今変な言葉が聞こえましたが」

狛治一家を再会させる為にレジェンドの受けた代償を初めて聞いた縁壱と鬼灯は真っ青になっている。いや、縁壱は愛妻うたや我が子の自慢で対抗出来そうなんだけど。

「厳勝と狛治一家の入隊？入団？どっちでもいいか、それを記念して、狛治と恋雪の祝言を盛大に開くぞコノヤロー!!」
「えええ!?」

あまりに突然なレジェンドの発言に当事者になる二人が真っ赤になり慶蔵は既にやる気、カミナやオルガも団員達に連絡を取り始めた。

「おうシモン！新しく紅蓮の方に入った奴の紹介も兼ねて鉄華団の方に入った奴らの祝言？つまり結婚式やるんだよ！つーわけでクリスタルシティに超次元グレン団集合!!お前の嫁さんもちゃんと連れて来いよな!!」
「あ、ミカに兄貴か。実は記念や歓迎会の意味も含めて新しく鉄華団

に入る奴らの結婚式をやるんだが団員をクリスタルシティに集められるか。……そうか、そいつは良かった。俺達はこっちで準備するからそっちは任せた」

その後、あれやこれやと準備は進み、巌勝と狛治一家の神衛隊入隊記念を兼ねた狛治と恋雪の祝言は盛大に行われた。

こちらに来て無事再会出来たシモンとニアの結婚式に参加出来なかったロージェノムがせめてニアのドレス姿を見たいと言い出したり、東方不敗とレジェンドが演武したり、三日月がバルバトスを使って一芸披露しようとして昭弘とシノに止められたりと色々あったが、祝言は終始賑やかで今までの暗い過去を吹き飛ばす程の盛り上がりだった。

こうして巌勝は神衛隊第一分隊『紅蓮』及び超次元グレン団に、狛治一家は鉄華団に所属する事となった。

そして月日は流れ、現在かの世界ではリアスとライザーのレーティングゲームが行われている頃の惑星レジェンド。

レジェンドらがいる世界の地球へとサーガと共に向かう事が決まった神衛隊の面々は準備を殆ど終えていた。

縁壱がカナエの修行を引き受け師範不在である為、巌勝だけは道場の方にいるが、神衛隊は別の世界に出向している『第四分隊』以降を除き、アクアエデンに集合している。

「サーガの大将から通達があったぜ。人数が人数だから準備もあるし現地で一度打ち合わせするそうだ。俺ら鉄華団からは俺とミカ、超次元グレン団からは巌勝とヨーコが行く事になった」

「んん？なんでオルガは行くのにカミナのアニキは行かないんだ？」

「ああ、そいつはなシノ……大将曰く『先輩の家はウルトラマンを除き女性ばかりでデリケートだ。いつも通り勢いでどうにかする訳には

いかない』って事だ。カミナが口を開く前にヨーコが黙らせてた」
「「「「ヨーコ姐さんつえー……」」」」

鉄華団の面々は超次元グレン団所属女性の筆頭たるヨーコの強さ（と発言力）を改めて実感した。

「オルガ、ヨーコ姐さんは分かったけど厳勝さんと俺はなんで？」
「ミカは単純に俺の護衛だな。一応狛治も考えたが、行くなら単身赴任より家族一緒がいいだろ。それから厳勝は腕っぷしは文句無し、頭も切れる『紅蓮』の参謀格……『螺巌』参謀格のヨーコと対になるポジションだからだ。ヨーコの推薦で、カミナも厳勝ならと納得したそうだぜ」
「そっか、わかった」

ミカは理解が早くて助かる、そうオルガは思った。同時にそれを聞いていた狛治や恋雪はオルガが気を遣ってくれた事に感謝し頭を下げてたが『俺とミカがいない間は頼むぜ』と言われ快く了承する。もはや二人と慶蔵にとってはこの鉄華団員全員が大切な家族だ。ひいては神衛隊やサーガ、そしてレジェンドを始めこの星に生きる者達が。

「ゲッターチームが入っていないが、何かあったのか？」
「いや、特に込み入った理由じゃねえよ昭弘。真ゲッターの新武装や強化後のスペックをシミュレーターで確認してから竜馬が先行するってよ。真ゲッター自体は強化後の調整にまだ時間がかかるし、真ドラゴンに至っちゃあのデカさだしな。隼人や弁慶、號達ドラゴンチームも調整にかかりっきりになるそうだ」
「なるほどな、納得した。となると竜馬が乗るのはブラックゲッターか」

ゲッターチームが不在だった理由も明らかになった。確かに束が

弄った真ゲッターロボが半端ないのは丸わかりなので、実機でなくシミュレーターでも良いから確認しなければエラい事になりかねない。合体事故なんてまっぴら御免だ。

「それとよ、束姐さんからも連絡があったぜ、狛治。いよいよお前と厳勝の機体が完成するらしい」
「！本当か、団長!?」
「ああ。俺ら鉄華団の新しい旗艦と一緒に運び込まれる予定だが、その前に一度調整に来てほしいってよ。場所は宇宙にあるスペースコロニー『ドラガイト』。せっかくだ、嫁さんと慶蔵師範も連れて観光がてら行って来い」
「良いのか？何から何まで面倒を見てもらって……」
「こんなの面倒のうちには入らねぇよ。レジェンドの旦那んとこ行ったら中々そういう機会なくなるだろうし、今のうちに堪能しときな」
「オルガさん、ありがとうございます」
「良いって。狛治にしっかり甘えて親父さんに孝行して来いよ、恋雪」

その言葉に狛治と恋雪は真っ赤になり、シノを筆頭に冷やかされるが、昭弘や顔出しに来てたラフタには一つでも多く思い出を作ってくるように後押しされた。

いよいよサーガと神衛隊も動く。
かの世界にて【レジェンドエリア】最強戦力が徐々に集結しだす事に今回の事件が途方も無く巨大なものであるという事を、全員が薄々感じていた。

〈続く〉

日輪は時を超えて、ライザーとの決戦と決着

時間はほんの少しだけ前に遡る。

ライザーの眷属らと決着がつく少し前、ライザーから『このゲームの最後は王同士の戦いで決着をつけよう』と魔力による伝達があり、リアスは敢えてそれを受けた。もちろんライザーの策略である事は分かっているが、一誠を始めとした自分の眷属が勇敢に戦い勝利した。ならば、次は自分の番だ。

しかし、おそらくライザーは持久戦に持ち込もうとするだろう。そうなればいくら修行したとはいえ、体力が万全の状態ではない今のリアスでは完全に滅しきる事は困難だ。

だからこそリアスは決闘を受けた。自分の体力ギリギリまで粘り、カナエに後を託す為に。それが思いを理解し、手助けしてくれた友へリアスが出来る事だ。

「カナエはアーシアや朱乃と一緒に焦らず来て頂戴。大丈夫、勝てはしなくても負けたりはしないわ」

「わかったわ。ただ、無理はしちゃ駄目よ」

「ええ。それじゃ、一足早くライザーとぶつかってるわね」

そう言うとリアスは決戦の場、屋上へと魔方陣から転移した。同時に他の三人へ朱乃が連絡しようとするが……

「……？おかしいですわね。ノイズばかり聞こえますわ。壊れる程のダメージや衝撃は与えていないのに」

「私のもです。仮に朱乃さんのがダメになってても相手の女王との戦いで使えなくなった、という理由がつけられますけど……戦闘さえしてない私のまでそうなるのは変です」

「……アーシアちゃん、朱乃……覚悟しておいて。もしかしたらこのレーティングゲーム……ううん、ゲームが終わった後に一波乱あるかもしれないわ」

「「え？」」

何かを察したカナエは二人へ警戒を促した。直接現場に居なかった為、詳しくは知らないが根源的破滅招来体がパズズを送り込んで来た時はそのパズズ自身の能力で電波に異常が出た。今の状況はそれに似ている。もしかしたら何かが現れる前兆かもしれないのだ。

「何にせよ、とにかく今は三人に連絡取って新校舎の屋上に向かいましょ。アーシアちゃん、こういう時こそアレよ！」

人差し指を立てながらにっこり笑うカナエに少し緊張感が和らいだのかアーシアも笑顔で頷き、ある鬼道を発動する。

「黒白の羅！
二十二の橋梁　六十六の冠帯
足跡・遠雷・先鋒・回地
夜伏・雲海・蒼い隊列
太円に満ちて天を挺れ
縛道の七十七！天挺空羅!!」

天挺空羅（てんていくうら）。情報伝達用の鬼道で、所謂ＬＩＮＥみたいなものだが、電波などが不要かつ対象が霊圧かそれに準ずるものを持っていれば問題無く情報伝達が可能な縛道である。

アーシアはこの鬼道や一部の縛道を回道と共に修得していた。もっとも戦闘以外の補助に使用するものが大半なので、直接戦闘向けではないが。

「皆さん聞こえますか!?部長さんが一騎打ちを申し込まれて、今新校舎の屋上で戦ってますっ!!」

天挺空羅によって正しく一誠、裕斗、小猫へとアーシアのメッセー

ジが伝えられる。

「私とカナエさん、朱乃さんもこれから向かいます！皆さんもそのままそちらへ向かって下さい！」

しっかりと言葉を伝え、アーシアは天挺空羅を解除する。やはり少々疲れたらしく、ふぅふぅと肩で息をしていた。

「お疲れ様、アーシアちゃん。問題無く発動出来てたわ」

「あ……ありがとうございますっ」

「では私達も向かいましょう。いよいよ大詰めですわ」

朱乃の言葉に二人も頷き、三人は部室を後にする。目指すは決戦の場、新校舎屋上。

☆

一方、校庭にてライザーの全眷属（そもそもレイヴェルをカウントしていない）を倒した三人はアーシアからのメッセージを聴き、屋上を見た。そこでは遠目でもリアスとライザーの姿が見え、そこはかとなくライザーが険しい表情をしている。

「おそらくは部長が滅びの魔力の本質を理解した事でライザーが攻めあぐねてるんだと思う。下手をすれば不死特性が『滅ぼされて』魔力が直撃しようものなら本気で命に関わるだろうしね」

「……でも、部長も私達と同じで万全じゃありません。きっと向こうもそれに気付いて持久戦に持ち込んで来ると思います」

裕斗と小猫が話している間、一誠は考えていた。今の自分は体力的にもほぼ限界だ。行ってもまともな戦力にはならないだろう。ならば、自分のすべき事は……自分のやりたい事は。

「なあ、二人とも……俺の我が儘、聞いてくれるか？」
「どうしたんだい、イッセー君」
「……変な事だったら怒りますよ」

そういう小猫だったが、一誠の目は真剣だ。

「木場、その剣に禁手化した俺と小猫ちゃんを乗せた状態で振れるか？屋上へ向けてだ」
「それは……大丈夫だけど」
「なら、頼む。そしたら俺が先に跳び上がるから、小猫ちゃんは俺の足を、えっと……瞬閃の状態で思いっきり殴り飛ばしてくれ。後は自力でライザーまで軌道修正するから」
「私はもう少し大丈夫ですけど、イッセー先輩の体力が持たないと思います」

ごもっともな意見だった。正直禁手化してすぐに解除されてしまうかもしれない。だが、どうしてもライザーは一発ぶん殴ってやりたい。だからこそ一誠は踏ん張る事にしたのだ。

「意地でも保たせるさ。師匠や先輩から言われたんだ。『根性は文句無しだ』って。だから……これがこのゲームで俺の最後の一撃だ。絶対にあの野郎にブチ込んでやる!!」
「……分かりました。今の言葉、守ってください」
「ああ！」
「これじゃあ僕も反対出来ないな……なら、全力を出し切るよ。このゲームに決着をつけるのはカナエ先輩だと思うから、ここで出し惜しみする必要はないからね」

小猫と裕斗の協力も得た事で、一誠は準備に入る。

『止めても無駄なんだな、相棒』
「悪いなドライグ。こればっかりはどうしてもやっておきたい事なんだよ」
『仕方ない。一発だけだ。だがどのみち解除後はしばらくまともに動けなくなるのを覚悟しておけよ』
「サンキュー」

元より承知の上だ。『攻撃』の倍化に特化させた一撃。それを叩き込めればいい。先程言った通り、ただ自分の我が儘を押し通す為に。
「禁手（バランス・ブレイク）化!!」

再び『赤龍帝の鎧』状態になるが、全身を激痛が襲う。骨が軋み、筋肉が悲鳴を上げているがそれを持ち前の根性で耐え、既に準備を終えた裕斗の『騎士殺し』に飛び乗る。

「二人とも、用意はいいかい……!?」
「いつでも行けるぜ！」
「お願いします、裕斗先輩」

一誠と小猫の言葉を合図に裕斗は二人が乗った自身の大剣を屋上へと向けて思い切り振り抜いた。

「行けえええええ!!!」

最初に一誠が屋上へと向けて跳び上がり、瞬閃・白猫仙式を発動した小猫がそれを追う形で跳び上がる。一誠が攻撃倍化特化状態で禁手化したのもあり、元々機動力で圧倒的に勝る小猫が追いつくのは容易。そして当初の予定通り、当てやすいようにと揃えられていた一誠の両足を、小猫は思い切り殴り飛ばした。

「イッセー先輩、行きます……よっ!!」

ドガァン!という音と共にさらなる痛みが来るが、ここまで来たのだから泣き言は言わない。言っていられない。本気でライザーを殴り飛ばすため、一誠は拳を握り締める。

☆

リアスとライザーの戦いは裕斗の予想通り、ライザーがリアスの持つ滅びの魔力を警戒して一歩踏み込めない状態だった。まさかリアスもここまで短期間で強くなっているなど思いもよらなかったのだ。今まで過保護気味に甘やかされてきたと聞いていたのに。

「ハァ……ハァ……くそっ!!」

「どうしたのライザー?まさか私はあまり変わっていないだろうとでも思ってたのかしら」

「いい気になるなよ、リアス……!まだまだこれからだァ!!」

ライザーは凄まじい熱量の炎を発生させ、リアスへと放つが炎へと滅びの魔力を放出し跡形も無く掻き消す。

「まただ……!リアス!一体何処でその技術を身に着けた!?たった十日間で辿り着くようなレベルではないハズだ!!」

「元々私の家系が持っていた魔力の認識を『改めた』だけなのだけれど、つい最近まで認識していたものを改めるのは容易じゃなかったわ。だって産まれてからずっとそう思って生きていたから。それを手助けしてくれたのが、私を鍛えてくれたお姉様よ」

「お……お姉様だと?まさか、ルミナシアか!?」

「ハズレ。教えられるとしたらお姉様は悪魔ではないし、人間や三大勢力でもないという事ね。それから……お姉様達の実力は魔王様達よりも上よ。しかもそのさらに上もいるらしいわ」

「な……そんなバカな話があってたまるか!!」

ライザーにとって信じがたい話ばかりだった。そして、それを見ているグレモリー家とフェニックス家にも。お姉様達の、そういうからには複数いる事になるが、ウルトラマンならいざ知らずそんな存在など聞いた事もない。一番可能性が有るのは『真なる赤龍神帝(アポカリュプス・ドラゴン)』か『無限の龍神(ウロボロス・ドラゴン)』かと思ったが彼らが力を貸すとも考え難い。

……後者はモロにその関係者だったりするのだが。

「実際見てみないと納得出来ないのは私も同じだったわ。それどころか、会ったら会ったで下手したら三大勢力が総力を挙げてもたった一人倒せるか分からないのが少なくとも九人いるって言うし……想像以上に宇宙は広いわよ、ライザー」

「!?」

「何より結果が答えよ。貴方も聞いたでしょう?さっきのアナウンスで貴方の眷属がほぼ全滅したのを」

理解したくない現実がライザーを襲う。僧侶撃破のアナウンスは一人分……レイヴェルはライザー同様フェニックスの特性たる不死を有するし、戦おうとしないだろうからやられていないだろう。しかし逆に考えるならレイヴェル以外は皆倒されたと言う事。

「だが……眷属がやられようと王を、リアスを倒せれば俺の勝ちだ!!」

(……焦ってはいるけど踏み込んで来ない。体力が万全じゃないのもあるけど……まだ練度が足りてない。『不死』特性を滅ぼせている時間が短すぎる。こればっかりは仕方ないけれど……結局カナエ頼みになってしまうわね)

滅びの魔力の本質を理解したとはいえ、さすがに完璧に使いこなすには圧倒的に時間が足りなかった。故に体力的にも精神的にも消耗している。このままではジリ貧だろうし、下手すればカナエの到着前

に自分が倒れてゲームエンドだ。しかし、そんな彼女の心配を吹き飛ばす者がやって来た。というか飛んで来た。

「焼き鳥野郎オオオ!!」

「!?」

「俺のビッグバンはぁ!!もう止められないぜぇぇぇ!!」

ゴバギィィィッ!!!

「がああああぁぁぁぁぁ!!」

一誠はレイトが岩を粉々にした時に言った迷言を同じように叫びつつ、出来る限り『攻撃』の倍化をした拳をライザーの頬へブチ込む。ライザーは想定外の乱入者の一撃をモロに喰らい、思い切り吹っ飛ばされた。

「へへ……やったぜ……あの焼き鳥野郎にキツイのかませた……」

満足気に呟くと一誠の禁手化が解除され、力無く落下する。身体の限界はとっくに超えていたのだ。意識を失わないだけでも大したものと言える。

「イッセー!!」

慌ててリアスは一誠の元へ飛び、抱きかかえながら屋上に降りた。身体は熱いもののまるで力が入っていないのか、一誠はぐったりしている。

「すいません部長……俺はこれ以上戦えそうにないです……こうして意識を保ってるのも精一杯で……」

「謝らないで、イッセー。貴方は良くやってくれたわ。一人で約半分

もの相手眷属を倒したのよ。後の事は心配せずに、今はゆっくり休んで頂戴」

リアスは優しく抱きしめながら、無理を押してまで駆けつけてくれた一誠を労った。ゲンから貰った道着も含めて目立った外傷は無いものの、身体の内側はボロボロかもしれない。アーシアが到着したら診てもらおうとリアスが考えていたら、ライザーが怒りで表情を歪めながら舞い戻って来る。

「下級悪魔の分際でこの俺を殴り飛ばすとは……燃え尽きる覚悟は出来てるんだろうなァ!?」

「ライザー……!」

満身創痍の一誠を庇うようにするリアスだが、その時ライザーに向かって一誠が口を開いた。

「下級だからなんだよ……人間だからなんだよ……てめえは部長の事を何だと思ってんだよ……!」

「何……!?」

「そりゃあ俺は下級だよ……しかも師匠や先輩に出会わなかったら、禁手化どころかまともにてめえの眷属と戦えたかも分からねえ半端な奴だ。だから貴族だとか血筋がどうとかなんて話で蚊帳の外にされたって仕方ないさ……けどな……!」

一誠は怒りを隠す事をせず、ライザーを睨みつけながら己の気持ちをぶつける。

「部長は真剣に悩んで……色々考えてるのに……てめえはヘラヘラ笑って見下して……! 部長の事を単に貴族の娘で婚約者としか見ないで、部長の事をまるで考えてないだろうが! どんだけ部長やてめえの家が立派でもな! 部長だって貴族以前に一人の女の子なんだよ!!」

「貴様……口を慎め！下級悪魔が誰に口を利いている!!」
「うるせえ!!下級とかなんだとか関係ねえ！たとえ周りが敵ばかりになったとしても……てめえに部長は渡さねえ!!」
「イッセー……」

ある意味下手なプロポーズなのかもしれないが、リアスには今の一誠が誰よりも輝いて見えた。戦う力は残っていなくても、決して闘志を失ってはいない。何より、自分を『一人の女の子』として見ていてくれた。

「一丁前にほざいているがなぁ！そのザマで何が出来る!?リアスも目には見えんが疲労はあるだろう、二人纏めて再起不能に「させると思うのかしら？」して……!?」

ライザーだけでなくリアスと一誠も声のした方を向くと、そこにはカナエやアーシア、朱乃、裕斗、小猫まで勢揃いしていた。

「貴様はあの時の……!?」
「お久しぶりですね、性悪七面鳥さん」
「誰が七面鳥だ!?俺はライザー・フェニックスだ!!」

カナエの呼び方にライザーは激昂するが、リアスや一誠を始めとしたアーシア以外のメンバーはあまりにナチュラルにカナエが言い切ったので笑いを堪えている。

「ごめんなさいね、リアス。貴女の言葉に甘えてたらゆっくり来すぎちゃったみたい」
「大丈夫よ。ハリベルお姉様の特訓と……イッセーが、来てくれたから」
「あらあら？もしかしてお邪魔だった？」

笑顔で会話する二人はいつもの雰囲気だ。どことなくカナエは嬉しそうだが。

「カナエ、来てくれて早々申し訳無いのだけれど……」
「言ったでしょう？リアス。元よりそのつもりで来たんだから、イッセー君や皆と休んでて。今まで休んでた分、今度は私が働かないと。アーシアちゃんは皆をお願いね」
「はい！部長さん、イッセーさん、疲労回復までは出来ないですけど……」
「サンキューな、アーシア……カナエさん、あの焼き鳥野郎のブチのめし……お願いします」
「ええ。イッセー君、せめて寝るのは私が勝つのを見届けてからにしてね。そしたらリアスの膝でも胸でも好きな所を枕にしなさいな」
「ちょ……ちょっとカナエ!?」

さすがにカナエの発言に真っ赤になるリアスだったが、しっかり一誠を抱きしめているあたりそれも満更ではなさそうだ。アーシアも二人を引き離したりせず纏めて回道と神器で治療している。
そんな二人を見て、自分もレジェンドが帰って来たらオーフィスと同じくらい甘えてみようと思いつつカナエはライザーへ向き直った。

「さて～……それじゃ、始めましょうか。っとその前に……そこに隠れてる子から『フェニックスの涙』とかいうのを使ってもらったらどうかしら？『全力を出せなかったから敗けた、だから無効だ』なんて、言われたくないもの」
『!?』

カナエが視線を向けた方向を全員が見ると、物陰からレイヴェルが出て来た。レイヴェルは隠れているのに気付かれた事よりもフェニックスの涙を自分が持っているのがバレた事に驚いている。

「何故隠れていた事に気付いていたかはこの際どうでもいいですわ。もし私がこのままフェニックスの涙をお兄様に使えば本当に勝ち目は無くなりますわよ。それを覚悟の上で？」
「……なら私も言っておいてあげるわね。お兄さんの悲惨な姿を見たくなければフェニックスの涙を使って早く降参してこの場を去りなさい。これは虚勢でもなんでもないわ。本当に見たくないものを見る事になるわよ」

先程までの笑顔が一変、鬼殺隊の『柱』として戦っていた時の引き締まった表情と張り詰めた空気を纏ったカナエにレイヴェルは背筋を凍らせた。フェニックス家としてのプライドなどどうでも良くなるくらいその場から逃げたくなったが、そんなレイヴェルにライザーは叫ぶ。

「レイヴェル！俺にフェニックスの涙を渡して下がっていろ!!」
「お……お兄様……」
「本来ならお前を守ってやりたいがこの人間は徹底的にやらねば気が済まんのでな……お前の為に加減してやる事も出来そうにない」
「は……はい！」

レイヴェルはなんとか気力を振り絞り、小走りにライザーへ近付きフェニックスの涙を渡すとカナエをチラチラと見ながらその場を離れる。どうやら警告通り、見逃してくれるらしい。
ライザーはフェニックスの涙が入った小瓶の蓋を開け、それを自分に振りかける。ユーベルーナの時同様に体力が戻っていく。傷に関してはリアスの魔力による特性消滅の効果が切れたからか既に完治していた。
「おい人間、最終勧告だ。見た目は良いようだし俺の下僕になる気があるなら見逃してやらんでも……」
「生憎だけど私は別の方に仕えてるの。ううん、仕えてるなんて言っ

たらあの方は怒るかも……そもそも私は貴方を叩きのめしに来たのであって、話をしに来たわけじゃないわよ？性悪七面鳥さん？」
「……一々癪に触る人間だな貴様ァ!!」

ライザーから凄まじい炎が噴き上がるが、カナエはどこ吹く風で深呼吸すると腰に差した新しい日輪刀……想い人より送られた、自分の為だけに創られた『日輪刀・陽炎』の柄を握り、一気に引き抜く。
それを見た一誠、小猫、朱乃は驚く。その理由は日輪刀の刀身にあった。

「刃が、赤い……!?」
「え？カナエのあの刀の刃、最初からあの色ではないの？」
「はい。カナエ先輩が体育館を吹き飛ばした時は黒い刃でした」
「その時点で普通の刀とは違うよね」

それだけではない。カナエの身体にも変化があった。

「ちょっと！カナエの顔に……」
「縁壱さんと似たような模様が……」
「あれは痣だそうですわ。確かに模様のように見えますが……」
「痣？朱乃、何か知ってるの？」

静かに頷く朱乃。縁壱と同じ伝説九極天の一柱である卯ノ花から聞いていたのだ。もっとも全てではないが。

「『心拍数が二百を超える』そして『体温が三十九度以上になる』という一定の条件を満たす事で発現するものらしいですわ。あの痣が発現すると身体能力が飛躍的に上昇し、ダメージも通常では考えられない速度で回復するそうです。卯ノ花先生は肉体が極限状態に達した事を示すパラメータ的なものではないかと仰ってました」
「な……!?」

ちなみに縁壱はこれが常時発動状態だ。というか、この痣を発現した上でさらに修練を重ねる事で漸く到達出来る『透き通る世界』を含めて生まれた時から会得していたというからマジで化け物である。しかし、そんな縁壱が全力で掛かってもレジェンドにはまるで太刀打ち出来なかったという。おまけに全然本気では無かったと（そもそも人間体だった）。

和解後、巌勝にそれを話す縁壱は当時を思い出して凹んでいた。自分を超える者が出るのはいいのだが、超えるというかハナっから勝てる訳が無かったというか……完膚なきまでに敗北するとはさすがに思ってなかったようだ。

巌勝も試しにレジェンドに挑んで見たところ例の如く瞬殺され、縁壱と慰め合った。

ついでに忘れないで頂きたい。

色々やらかしているあのノアとキングもレジェンドと同格だという事を。

閑話休題。

「……よし、赫刀（かくとう）はちゃんと使えるわね。痣は確認出来ないけど……この感じからして発現出来てるみたいだし」

「貴様……それは一体何だ!?武器だけでなく不可思議な模様まで……！」

「あ、ちゃんと発現してるのね、痣。鏡とかないと分からないわね～……後で写真撮って見せてもらおうっと」

どうやら発現した感覚が曖昧らしく、ライザーの言葉で確信したカナエ。テンション自体は変わらないようで、いつもの彼女らしい発言である。

そんなカナエの脳裏には縁壱からの教えが過る。

『いいかカナエ殿。剣術の性質上ずっと力んでいる訳にはいかない。故に赫刀は相手を斬る直前、つまり刃が触れる瞬間に発動する事で最大限の効果を引き出す事が出来る。何故なら強く握り続けるよりも瞬間的に強く握り締めたほうが一瞬であっても込められる力が強いからだ。同時に前者よりも腕にかかる負担も少なくなり、結果として継戦能力も高くなる』

赫刀―赫灼の刃とも呼ばれるそれはいくつかの発動方法があるが、原理は日輪刀に強い衝撃と高熱を刃に伝える事によって発動出来るという極めてシンプルなもの。

分かりやすい発動方法としては万力の握力……つまり火事場の馬鹿力で日輪刀の柄を強く握り、そこから衝撃と身体の熱を刃に伝える事。

しかし発動は極めて困難であり、当たり前のように発動している縁壱がむしろおかしいのである。実際、カナエに教えた戦法も本来なら縁壱以外不可能だった方法だ。

だが、カナエはそれを修得出来た。これは偏にこの【エリア】に来てからずっとレジェンドの傍に居続けた事にその答えがある。

知っての通りレジェンドやサーガ直属になる、もしくは惑星レジェンドに招かれた時点でその者は光気を浴び、身体能力を始めとした各種能力の向上や、不老超寿ないし不死の命を得られる。最も恩恵を受けられるのは直属化する事だが、そうでなくとも光神の光気がもたらす恩恵は想像を遥かに超えて絶大なものだ。

カナエは長らくレジェンドの家族として生活し、惑星レジェンドに住んでいた時期もありその身に受けた光気の質や量は九極天に次いでいると言っていいだろう。

「皆に休ませてもらっていたとはいえ、私もこの調子だと長時間は維持出来なさそうね……悪いけど容赦無く行かせてもらいます。御覚悟を」

「覚悟するのは貴様の……!?」

カナエの言葉にライザーが返した一瞬の間にカナエの姿は消えていた。正しくはライザーの背後へと『跳んでいた』。
まだカナエは霊子を足場にする術を体得しておらず他の空を飛ぶ術も使えないが、アーシア救出時にレジェンドが教会に空けた天井へ跳躍して脱出するなど跳躍力は十二分に持ち得ている。
即ち今回も跳躍してライザーの背後に回り込んだのだ。それこそ視認出来ない程の速度で。
そしてそのまま斬りかかる。

日の呼吸
拾ノ型　火車!!

「がああああ!!」

ライザーの背中から鮮血が噴き出す。同じ炎ならばフェニックスである自分の方が有利なハズなのにと思いながらライザーは受けた傷を再生しようとするものの……

「な……バカな!?何故再生出来ない!!くそ!!」

ライザーは痛みを堪えながら、先制攻撃を成功させて再び屋上へ着地したカナエへ反撃するため空中から突撃する。

「まぐれ当たりの攻撃を一度当てた程度で調子に乗るなよ!!」

だが、それもカナエは予測済みだった。会得した『日の呼吸』唯一の突き技にして対空迎撃用の型で対抗する。

日の呼吸
伍ノ型　陽華突!!

陽炎を纏った超高速の刺突がライザーを襲う。
ライザーは危険を察知しギリギリで軌道を変えるものの、カナエの放った一撃が速過ぎた為躱しきれず、右腕が肩から斬り落とされた。
「ぐあぁぁぁぁ!!」
背中を斬りつけられていた事に加えて右腕を斬り落とされた事で、ライザーはさすがに痛みを堪えきれず屋上へと落下する。
「ぐ……う……何故だ……何故再生出来ない……!?」
「それはこの赫刀の特性よ。攻撃力の増大以外に、再生能力を阻害して大きな苦痛を与える特性があるの。本来は鬼限定だけれど、縁壱先生が言った通り今の私なら万物に通用するみたいね」
「な……何だと!?再生阻害!?」
ライザーは愕然とした。再生阻害—それは即ちフェニックス最大の特性に対して天敵とも呼べるものだ。炎と風を司る悪魔でもあるのだが、その二つは『柱』にも存在したし、炎に至ってはそれのさらなる上位に位置する『日』の呼吸を使うカナエから見ればライザーの力任せな技などお遊戯にすぎない。
この本来鬼に対する特効であった特性が万物に通用するものになったのも光気の影響である。
「……すげえ……!」
「たった二回の攻撃でライザーを地に落とした……!」
「……先程言った『痣』について唯一致命的な欠点があります」
『え？』
カナエの成長ぶりに驚きを隠せない一誠達だったが、朱乃はカナエの発現させた『痣』に関してある事を卯ノ花から聞かされていた。

「あの痣を発現させた者は……」

２５歳までにその命を終える。

『!?』

この言葉に全員が唖然とした。もしそうならカナエは後数年の寿命しか無くなっている事になる。

痣の発現による身体能力や回復力の上昇は『寿命の前借り』であり痣者が２５歳までしか生きられないと言われていたのはそれが理由である（縁壱は例外というか、かつての世界では普通にその三倍以上生きていた）。

だが、惑星レジェンドで保護された者たちはその理に当て嵌まらない……というか、その理から外れる。

理由は寿命の前借りが『純粋な人間として』のものであり、従属神となった九極天を始め『光神の加護』を受けた者達は少なからず光神の眷属とも言える存在である為、前述の純粋な人間としての寿命分（約百年）を消化すれば、後は代わりに体力消耗などが発生するもののデメリット無しで使用可能らしい。そもそも前述の通り光気を浴びると少なくとも超寿になるので百年程度では痛くも痒くも無いし。

まさに光気万能説。

「クク……そうか、そういう事か」

ライザーは笑うが彼は、というかオカルト研究部（アーシア含む）も光気の事は聞いていないのでまだカナエの寿命が後数年だと思い込んでいる。

（あ、マズい。たぶんコレ皆勘違いしてるわね。いや、普通なら勘違いじゃないんだけど……アーシアちゃんなら知って……あれ？アーシ

アちゃん光気の事知ってたっけ？惑星レジェンドにもまだ行った事無かったわよね……）

周りを見渡してあちゃーと言った表情になるカナエ。周りには知られて困った、という風に見えるが当の本人はちゃんと説明しておくべきだったと思いつつ、まあ後で説明すればいいや、この空気を壊すのも何だしせめて決着までは黙っておこうと考えた。

「このまま戦えば貴様の命が尽きるかも知れんというわけだ！良いのか？その若さで死ぬんだぞ!?只でさえ短過ぎる人間の寿命を削ってまで「それが何か？」……は？」

「元よりこの力が『寿命の前借り』によって得られているのは承知の上。今更そんな事で揺さぶりをかけようなど無駄な事よ」

「なっ……貴様分かっていてその力を振るっているのか!?何故だ!?何故己の命を縮めてまでリアスに肩入れする!!」

「友達だから。強いて言えばそれが今の理由ね」

『!!』

これに驚いたのはライザーだけでなくリアスもだ。寿命を犠牲にしてまで友達だからという理由で助けるなど正気なのかと。

「最初は貴方から何処その鬼と同じモノを感じて気に入らなかったからだったわ。でもね、この十日間の合宿で……何というか連帯感的なものが生まれたのよ。そして、このゲームが始まる直前に意気投合しちゃったのが決定打かなぁ。正直に『ああ、この子は応援しなきゃ』って思ったの」

「カナエ……」

「私は見送られる……見送られた側だった」

思い出すのは、かつての世界に残した妹達の事。心優しいあの子達は志半ばで命を落とした自分の事できっと悲しんだだろう。おそら

くは『柱』を目指したか、或いはなったのか。もはや自分に知る術は無い。
　こちらに来て何の因果か再び生を得る事が出来た。予期せぬ力のお陰で寿命も途方も無く延びた。なら、今度は自分が見送ろう。新しく出来た友人を。

「リアスが幸せな未来へと進むのを笑顔で見送ってあげる事。それが今の、私が貴方と戦う理由。貴方を倒してリアスの自由を勝ち取る。まずはそこから始めないとね♪」

　寿命を代償に多大な力を得る『痣』を発現させたまま、人差し指を立てつついつもの笑顔でリアスを見るカナエに、リアスは静かに涙する。
　少し前まではただのクラスメイト。ちょっと深く知り合ったのはつい最近。そして、部員を経て正しく友人と言えるようになったのは今日だ。そんな彼女がそこまで自分の事を思ってくれていた事に感激すると同時に、彼女には死んでほしくない、そう心から願った。

「さて、結構長話してそろそろ私も疲れて来た事だし、一気に決めましょうか」
「理解出来ん……！理解出来ん!!そんな下らない理由でぇぇぇ!!」

　ライザーはカナエが己に刃を向ける理由に納得できないのか、がむしゃらに魔力弾を放つがカナエには通用しない。

日の呼吸
拾壱ノ型　幻日虹

　カナエの姿が陽炎のように揺らめいて消えると、直後にライザーの背後へ現れた。

「あ……ああ……」

もはや抵抗出来る気力も、逃げる術も無くなった。今のライザーに出来る事と言えば……

「ま……待て！分かっているのか!?この婚約は悪魔の未来の為に必要な事なんだぞ!!お前のような何も知らない人間が「ええ知らないわ、『悪魔の未来』なんて」どっ!?」

「必要なのは悪魔の未来なんて大きいものじゃない。リアスの家や貴方の家が何と言おうが、今必要なのはリアスが己の足で未来へ進む権利よ。定められた事じゃなく、自分の意思で歩む事に意味があるの。貴方も貴方達の家も……」

カナエは両手で日輪刀を握り締めて、この戦いに終止符を打つ為に構えた。そして―

「頭冷やして反省しなさい!!」

日の呼吸

玖ノ型　輝輝恩光!!

「あがっ!!あ……ぐ……」

本来のカナエの呼吸法である『花の呼吸』の型の一つに類似した日の呼吸の型を受け、ライザーは深々と斬り裂かれた。このままでは赫刀の再生阻害を受けているライザーは間違いなく死に至ると判断したルミナシアは、すぐにライザーを回収しアナウンスを告げる。同時に王が倒れた事でレイヴェルも再起不能扱いとなった。

「ラ……ライザー・フェニックス様、再起不能!!よってこのレーティングゲームはリアス・グレモリー様の勝利となります!!」

今、漸く長い戦いに幕が下りた。

下りる、はずだった。

〈続く〉

弟子達を救え、レオとゼロ変身の時！

ライザーとの戦いはリアスらオカルト研究部の勝利……それも圧勝という形で決着した。

カナエは日輪刀を鞘に納め、ふぅ……と息を吐く。落ち着いてはいるが、体力は限界に近い。

「カナエ！」

リアスが一誠に肩を貸しながら歩いてくる。他の者達も一緒だ。

「リア「身体は!?何ともない!?息苦しかったり目眩がしたり!!」……落ち着いて、別に何処もおかしくないから」

「……本当に？」

「本当に。五体満足……ではないわね、体力的に。傷とかは問題無いわ。そもそも当たってさえいないし」

「でも、寿命が……」

「あ、それなんだけどね。ほら私一度死んでるでしょ？それからどうしてかこうやって生き返ってた場所で色々あって寿命自体がすっごく延びてるの。だから大丈夫」

「「「「「え？」」」」」

目が点になるカナエ以外のオカ研一同。

「えへ♪」

「も……も～!!私の涙を返してよ!!本当に心配したのよ!?」

「カナエ先輩の今の笑顔にちょっとだけイラッとしました」

「うん、小猫ちゃんと同じような台詞を妹にも言われた事あるわ」

詳しく聞くのは後にして、とりあえず今はゲームに勝利し、全員が無事だった事を喜ぼう。

そう思ったのも束の間、カナエはある事に気付く。

「……ねえ、私達……勝ったのよね」

「……？そうよ、貴方がライザーを倒して私達が勝ったの。ちゃんとアナウンス流れたでしょ？」

「ええ……それは聞いたわ。間違いなく」

そこでカナエは言い淀んだが、意を決して口にする。

「なんで……私達まだここにいるの？」

『……え？』

「決着がついたのに、どうして私達は戻れないの？」

全員がハッとした。何故自分達はライザー達と違い転送されないのか。まだ敵がいるというのか？

「ルミナシア！どういう事!?」

リアスが宙に……見ているであろう、審判役のルミナシアに問い掛ける。そうすると予期せぬ答えが返ってきた。

『お嬢様!!その空間が何者かによってこちらの制御下を離れました!!』

「なんですって!?転送は!?」

『何度か試していますがまるで反応しません！幸いそちらの様子は確認出来ますが……！』

切羽詰まっているのがこちらにも伝わる程、向こうも焦っているようだ。確かに異常事態だが、カナエはレーティングゲームの前に感じた悪寒を思い出す。そう、アーシア救出の時と同じ感じの……

「まさか……ゴーデス？」
「ゴーデスって……あのレイナーレが変異した時の？」
「正確にはゴーデス細胞ね。でも、怪獣化させる事は出来ても空間掌握が出来るなんて聞いてないし……何か、他の……」

その時、そこへ『何か』が多数送り込まれて来た。
点状の目を複数持った鋼色の巨大な人型のロボット。
ゴブニュ・ギガ。
本来ならば小型のゴブニュが集合して誕生するはずのそれが、多数現れたのだ。動きこそ遅いが力が強く、そして硬い。消耗したオカルト研究部では一体だけだとしても厳しい相手である。
何より、現段階でまともに相手に出来るとしたらプラズマ怪獣とやり合えるカナエぐらいだろう。そのカナエも今は万全ではなく、逃げるので精一杯だ。不幸中の幸いは相手の動きが遅い事だが、この閉鎖された空間内ではじきに追い詰められる。

「……あの方が作ったデータベースとかいうのに登録されてたわ。ゴブニュ・ギガという巨大な自律兵器みたい」
「少なくとも味方じゃないって事ですよね……くそ、俺の身体が動けばちょっとは戦力になるのに……！」
「戦力になるとしても数が多過ぎますわ。とにかく今は姿を晦ましましょう。機械である以上、相手がセンサーの類を使ってきたらお手上げですが」
朱乃の言葉に全員が頷き、お互いに手を貸しながらその場から離れる。
だが、敵はゴブニュだけではない。
空に、その様子を伺うような緑の光が蠢いていた。

☆

その様子はハンターズギルド内やダイブハンガー、そして京都で観戦していたレジェンド達も確認していた。

ハンターズギルド内では突然の事に混乱が巻き起こるが、修行組師匠達やジェント、シックルは落ち着いている。

「オイオイ何だありゃ!?新手のプラズマ怪獣か!?いや、プラズマソウル付いてねえし……」

「明確な理由は分かりませんが、一つだけハッキリしているのは彼らが危機に瀕しているという事です」

卯ノ花の言葉に縁壱も頷く。

「あの空間への突破口さえ開ければ私達も突入して奴らを一掃出来るが……」

「……いよいよ俺達の出番だな、ゼロ」

「おう！一誠(あいつ)が頑張ったんだ。兄弟子と師匠の俺達がここは一肌脱いでやるとしようぜ、レオ!!」

ウルトラマンとしての名で呼び合い、立ち上がるゲンとレイト。遂に彼らに自分達の正体を告げる時が来たのだ。

「ああいう閉鎖空間への突入は何度も経験がある。俺達に任せてくれ」

「あんた達は俺達が無事帰って来たら、『おかえり』の一言でも掛けてくれよな！」

「分かりました。ゲン殿、レイト殿……どうかお気をつけて」

「レオ兄さん、ゼロ。僕は何かあった時の為にいつでも出られるように外部で待機しておきます。生徒達を、お願いします」

卯ノ花と矢的の言葉に二人は頷くと、ダイブハンガーへやって来た時のように光となってレーティングゲームの舞台となった空間へと転移していく。

☆

京都組の方はゼットが騒いでいた。

「ああーっ！アレゴブニュ！ギガ！ティガ大先輩が戦ったヤツ！」
「分かってるからそんなバシバシ叩くな。というか俺もやり合ったから言わんでもいい。観戦中からどれだけ興奮してるんだお前は」
「アイエエ!?」

ゼットに対してあくまでも冷静なレジェンド。この手のアクシデントなど数えるのが馬鹿らしくなるくらい経験してきた。ここでジタバタしても仕方が無い。

「空間に突入出来るとしても場所が駒王だ。距離があり過ぎる。俺だけならともかく今はお前も一緒となると長距離転移突入は些か不安が残る。ダイブハンガーにいるメビウスが何らかの事情で仮住居もしくは駒王の何処かにいるならメビウスも短時間で突入出来るだろうが、ここは修行を見たレオとゼロに任せた方が無難だ。多少駒王から離れていてもこっちやダイブハンガーよりは遥かに近い」
「それは分かりますけど!!レジェンド超師匠、このままじゃ俺……本編放送中にこの小説内で一回でも活躍出来るか不安なんですよ!!」
「そっちかよォォォ!!真面目に応えた俺が馬鹿みたいだろーが!!」
「大丈夫。本編放送後が本番。ネタの引き出しが増える」
「なるほど！」
「何がなるほどだ！オーフィスも変な事言わない！さっきからメタ発言ばっかだな!?」
「今更ですね」

「鬼灯の言う通りだよチクショー!!」

こんな非常事態でも彼らはいつも通りだった。

☆

一方ダイブハンガー待機組も割と冷静だった。というのもレオとゼロが突入してすぐに卯ノ花が連絡した為で、ミライが空間が閉鎖された原因究明に取り掛かっているからだ。

「空間閉鎖というのはウルトラマンにとってそう珍しい事ではないんです。僕ら自身も被害が広まらないようにフィールド展開する時もあるくらいですから。問題は誰がどうやって、何の理由で空間を閉鎖したかです」

「狙いがどうも分からんな。あいつが作ったデータベースにはあの木偶人形はマキシマオーバードライブとやらの破壊を目的とした物だとあったがな、そんなものあそこに隠されでもしてるのか?」

C．C．の疑問はもっともだ。ゴブニュは元々マキシマオーバードライブという機関を破壊する為に機械島から送り込まれたロボット。その発展系であるネオマキシマドライブを使っているコンパチブルガリバーがあるこのダイブハンガーを狙うなら分かるが、何故ここではなくオカルト研究部のいるあの空間を狙ったのか。

「中身が変わっているのか、別の何かに操られているとか……有力なのはそのどちらかね。それか、一番考えたくないのは関係者というだけで狙われている場合。その理由だとすれば狙われているのはカナエちゃんとアーシアちゃん。他の子はとばっちりを食った形になるわ。そうなったら二人の性格上気に病むだろうし、最悪溝が出来てしまうもの」

「……大丈夫です。いや、大丈夫というのは間違ってるかもしれませ

んけど……たぶん、二番目の理由です」

涼子が出したいくつかの意見の内、最悪な展開は免れそうであるが、だとしたら誰が。……もしかしたら空間を操る中で最も有名で狡猾な存在かもしれない。ミライは新たなる脅威の可能性を感じる。自身も相対した事のある存在の。

（……ヤプール）

☆

空間を閉鎖され閉じ込められているオカルト研究部は、なんとか今の今まで逃げられているものの体力的に限界が近い。おまけに相手が巨大かつ複数であるというプレッシャーも相まって精神的にもキツくなってきた。

「このままじゃジリ貧です。対抗策が無いまま逃げ回っても相手の方が数が多いし何より巨大。こっちの攻撃がまともに通じるとも思えません」

「小猫ちゃんの言う通りだね……こんな切羽詰まった状況じゃとてもじゃないけど打開策を練ってる時間もないし」

小猫と裕斗の言っている事は事実だ。正直このままでは全滅も時間の問題だろう。だが、この状況でも諦めない者がいた。

「でもよ、こっちの状況が外にも伝わってる……っていうか見えてるんだろ？だったら向こうだって黙って見てないはずだぜ。ここで諦めてやられるのを待ってたらあっちが何か考えてても無駄になっちまう。黙ってやられるくらいなら足掻こうぜ、往生際悪くさ！」

「そうね。あの方も言ってたの。『どんな状況であっても諦めず、勝利を信じ戦う事。信じる心、その心の強さが不可能を可能にする』って

ね」
「きっとここで諦めたら未来なんて掴めません。私、あの方に助けられて、皆さんと出会えて……やっと前に進めたんです。だから、ここでそれを終わらせたくありません！」

一誠、カナエ、アーシアだ。
まだ一誠はあの二人の正体を知らないが、直接ウルトラマンと関わって彼らが歩んだ過酷な戦いを知った。カナエに至っては無惨ら鬼と戦っていた経験もある。この間見たジードやメビウスもまた、最後まで諦めなかったからこそ起死回生の手段を手に出来たのだ。そして、自分達を信じて送り出してくれた矢的こと８０や師匠達にも誓った。勝って帰ると。その誓いを違えるわけにはいかない。
その時、突如二つの光がオカルト研究部の前に姿を現した。ゲンとレイトだ。

「よう！よくここまで保たせたなお前ら！特に一誠！そんな身体でも諦めなかったのは大したもんだ！」
「先輩!?師匠!?なんで……もう突破口開けたんですか!?」
「いや、突入したのは俺達だけだ。後は有事の際に備えて残ってもらっている。……よく、頑張ったな」

何故ここに来られたのか、そんな事はどうでもいい。どうしてか二人が来た時、言葉に出来ない安心感があった。その答えをカナエとアーシアは知っている。

「おおとり師範、レイト君……行くのね、戦いに」
「ああ。連中は俺達の方が専門だ。キツいだろうがもう少しだけ頑張れるか、カナエちゃん」
「勿論！皆で力を合わせれば逃げ回るくらいどうにでもなるわ」
「よぅし！それが聞けて安心したぜ！」

カナエの言葉に全員が頷く。そしてゲンとレイトは一誠を見る。
「一誠、そして皆……後は俺と『ゼロ』が引き受ける」
「俺と『レオ』に掛かりゃあんな連中ひと捻りだ！って言っても油断せず全力でぶっ潰すけどな！」
「!!」

やはり、リアスだけがハッとした。レオとゼロ……あのセブン縁の者だと。もしや彼らがと思ったそれは今、現実のものとなる。
ゲンは両手をクロスさせるように構え、レイトは懐から鋼のアイマスクのような『ウルトラゼロアイ』を取り出す。
そしてゲンは正拳突きのように拳を突き出して、ウルトラマンとしての……真の名を叫び、レイトは気合いの入った掛け声と共に目元にウルトラゼロアイを当てて起動させる。

「レオオオオ!!」
「シュアッ!!」

レオリング―獅子の瞳とも呼ばれるそれが輝いた時、ゲンは炎の中で本来の姿となって巨大化する。
同様にレイトも目元のウルトラゼロアイを中心に光り輝き徐々に本来の姿に戻りながら巨大化した。
片や銀色のウルトラマントを羽織り、片や青色のウルトラゼロマントを羽織った、雰囲気からして他のウルトラマンとは一線を画したウルトラ戦士達。
ウルトラマンレオとウルトラマンゼロ、最強師弟の一角としてその名を宇宙に轟かす二人が、オカルト研究部絶体絶命の危機に駆けつけた。

☆

グレモリー家とフェニックス家は騒然とした。冥界のテレビ番組で放送されているのはセブンとタロウのみであり、作中では他のウルトラ六兄弟やウルトラの父、母が登場していた程度だ。

だが、リアスの生家であるグレモリー家や、それと繋がりがあったフェニックス家など一部の家系は違う。セブンの弟子であるレオや、その弟子でありセブンの息子であるゼロの事は少なからず知っていた。

特にゼロは人間に換算してリアスらとほぼ同年代ながら銀河遊撃隊隊長という光の国でも重要なポジションにつく程の手練。当然その師匠たるレオも相当なものだろう。

「サーゼクスよ、彼らは……！」

「ええ、父上……間違いなく彼らはタロウが贈ってくれた映像記録に映っていた二人です。あのマント姿を見間違えるはずがありません」

タロウ達の纏うブラザーズマントと違うとすればウルトラの父のファザーズマントや、レジェンドが纏うレジェンドマントなど専用の物になる。

レオとゼロはその数少ない専用マント持ちだ。レオのウルトラマントは元々レジェンドを介してキングから授けられた物だが、この【エリア】にキングはいない為、実質専用と言っていい。

「我らでも手出しが出来ない以上、ここは彼らに頼る他ありません。下手に動いて彼らの足を引っ張らぬよう、信じて待ちましょう」

「うむ……そうだな。信じよう、光の戦士達を」

大切な愛娘にして妹と、共に戦ってくれた仲間達の無事を託し、リアスの兄サーゼクスと父ジオティクスは決して目を離すまいとモニターに目を向け直した。

☆

本来の姿に戻ったレオとゼロはそれぞれマントをブレスレットに変化、或いは収納し、互いに顔を見合わせて頷くとゴブニュ達へと突撃していく。

「ダアァァァ!!」

レオはゴブニュの一体へ勢いをつけたパンチを打ち込む。すると、吹っ飛ぶどころかゴブニュの鋼の身体を軽々と貫通し、そのまま機能を停止させた。続けざまに手を引き抜き動かなくなったゴブニュを迫りくるゴブニュ達へと投げつける。

その鈍重な動きでは回避する事など出来ず、投げつけられた仲間に激突しゴブニュ達は倒れてしまう。その隙を見逃さず、レオはエネルギー光球を作り出して投げつけ、なす術なくそれに直撃したゴブニュ達は纏めて木っ端微塵になった。

「……!ダァッ!」

背後から仕掛けてきたゴブニュの攻撃をバク宙で回避し、逆に背後を取ったレオが腕を素早く動かすと、なんとゴブニュの両腕がすっ飛んだ。それだけでなく素手で斬り落とした両腕の、さらに二の腕部分と手首を斬り落としコンパクトな腕部分だけにすると、念力で鎖を出現させて繋ぎ武器とする。

レオヌンチャク。かつてケットル星人と戦った時には煙突を繋げて作ったが、今度は大きさも強度も格段に上なゴブニュの腕で作ったヌンチャクだ。武器としては申し分ない。そのヌンチャクを凄まじい速度、かつ器用に操りながらゴブニュを吹き飛ばして行くレオ。

まさか鋼の相手の両腕を素手で斬り落として、おまけに武器にしてしまうという規格外な戦法をいとも簡単にやれてしまうレオに、リア

ス達は開いた口が塞がらない。

「……ゲン師範、ウルトラマンになったらもっと反則じみてます」

「最初の一撃なんて文字通り一撃だったからね……」

小猫と裕斗の言葉に全員が同意した。

特に武器に頼れば隙が出来るとは言っていたが、まさか武器を現地調達して即座に組み上げるなど予想できるわけがなかった。無ければ作ればいいとかそういう問題ではない。

そうこう言っている間にレオはヌンチャクをゴブニュ達に向かって放り投げ、空高く飛び上がり飛行するポーズのまま超高速で回転すると、群がったゴブニュ達へそのまま突撃し、貫通しながら瞬く間に残さず撃破した。

ボディブーメラン。別名必殺・風車とも呼ばれるその技は、かつてケンドロスとの戦いの際に新体操をヒントに編み出した大技だ。

武器を即席で作るどころか己自身が武器のように突撃する技まで使うレオにもはやリアス達は脱帽するしかなかった。

「イヤァ!!」

爆発するゴブニュの大群を背にポーズを決めるレオ。彼の受け持ったゴブニュはものの数分も保たず全滅した。

「……あの人が武器らしきものを何一つ持たない理由が分かったわ。あの人は身体を動かせれば、それだけでも武器なのよ」

「「納得です」」

リアスの言葉に朱乃と小猫、裕斗が賛同する。カナエとアーシアは初日からその規格外っぷりを目にしてたので「あんな事も出来るんだ」と感心してたぐらいなのだが。ちなみに一誠はただただそれを見ていた。

師匠のレオの活躍に目が行きがちだがゼロも負けてはいない。敵

陣真っ只中へ飛び込み、素早くヒットアンドアウェイを繰り返しゴブニュ達を一箇所に集めていく。

「シュワッ！」

それなりの数が集まったところで得意技の一つ、エメリウムスラッシュを放ちゴブニュ達のバランスを崩して倒れさせる。そして片手を引き、片手を横へビシッと伸ばし、そこから一気にL字型に組んで光線を発射した。

「デヤッ!!」

ワイドゼロショット。父親であるセブン譲りの必殺技だ。その圧倒的な熱量を受けたゴブニュ達は耐え切れず爆散していく。

さらにゼロは片膝を着く形で頭部の突起に手を添える。そしてそのまま手を横へ勢いよく開くように振るうと、ゼロの頭部の突起が分離してブーメランのように不規則な軌道を描きながらゴブニュ達を斬り裂いていく。

「あれはセブンのものと同じ……！」

「やっぱり親子なのね～」

リアスやカナエの言う通り、セブンのアイスラッガーと同種の宇宙ブーメラン、ゼロスラッガーだ。ゼロはセブンほどウルトラ念力を使いこなせるわけではないが、代わりに二本である事、さらに万能性を持っている事でその差を埋めている。

ゼロは戻って来たゼロスラッガーを両手に構え、残っているゴブニュ達へ突撃する。

「オラァァァ!!」

その姿がブレるほどの高速移動を行いながら手にしたゼロスラッガーでゴブニュを次々と薙ぎ倒していく。
最後のゴブニュを倒し、ゼロスラッガーを構えながらポーズを決めるゼロの背後には、先程のレオと同じ爆炎が上がっていた。
そう、たった二人のウルトラ戦士によってゴブニュの大軍勢は瞬く間に壊滅したのだ。

「すげえ……！師匠も、先輩も……！」

先程まで一言も発さずただ戦いを見ていた一誠は感嘆の声を上げた。あれが、自分を鍛えてくれた師と兄弟子の実力。ゴブニュ・ギガは当時のティガも苦戦した相手であり、ウルトラマンだからという理由で簡単に倒せる程甘い相手ではない。それにも関わらず、いとも容易く打ち倒す二人がどれだけの猛者なのかは言われずとも理解出来る。

(そうだ……思い出した。俺は昔、光の巨人に……ウルトラマンになりたかったんだ)

レオとゼロの勇姿を見た一誠は、幼い頃の記憶を思い出す。それはテレビに映ったレジェンドが巨大な津波を片手で押し戻す光景。絶体絶命の危機を難なく退ける光り輝く存在。突然現れては天変地異さえ物ともせず人々を救うレジェンドに一誠は憧れていた。
だが、いつからだったか。自分はそんな風にはなれないと思い始めたのは。そしていつの間にか諦めてしまった。
しかしかつての夢が、師と兄弟子(レオとゼロ)によって呼び覚まされた。憧れていた存在の眷属とも呼べる者達に師事し、認められた事も引き金となっているかもしれない。

(悪魔になった俺が……ウルトラマンになる事は出来ないかもしれない。けど……)

一誠にはかつての夢に繋がる新たな夢が出来た。
（けど、せめて……師匠や先輩、矢的先生のように……あのウルトラマンのように誰かを護れるヒーローになりたい）

そんな時だった。すぐ近くに何かが落ちる音がしたのは。

「何の音……？」
「……？何かの動物……の死骸みたいです」
「これは……タスマニアデビル？絶滅危惧種のはずですわ」
「なんでこんなところにそんなものが……？」
「待って！おかしいわ……だって何もないところから私達の近くへ狙ったかのように落ちて来たのよ？」
「カナエさん、狙ったかのようにって……まるで見ていたような「ええ、見ていたわ」……え？」
「いきなり空に小さな穴がぽっかり空いたかと思ったら、それが落ちて来たの」

カナエの言葉を聞いて全員が青ざめながらそれを再び見ると、その死骸に緑色の光が蠢いているのが見えた。
その光景に見覚えがあるリアス達や、レジェンドから話を聞いているカナエとアーシアも一瞬で事態を理解する。

「皆離れて！ゴーデス細胞に感染してる!!」

このカナエの一声でタスマニアデビルの死骸から全員が距離を取った直後、それを中心に巨大な竜巻が発生する。
その異様な光景にレオとゼロも反応するが、同時に彼らの元へも刺客が現れる。空間を割るように。

「なっ……コイツは！」
「エース兄さんが戦った超獣……バキシムだ！」

まるで一誠達の元へ行かせまいとするように一角超獣バキシムが出現したのだ。そして、向こうの竜巻も収束するとそこに居たのは『頭でっかちの怪物』と表現するしかない異様な怪物……この怪物こそ新たなるゴーデスの尖兵、風魔神デガンジャだった。
デガンジャは足元のオカルト研究部を一瞥すると、再び竜巻へと姿を変え彼らに迫る。

「イッセー！皆！……くっ！」

レオがいち早く救援に向かおうとするが、バキシムの攻撃によって妨害される。

「こんの野郎……！邪魔すんじゃねえ！」

今度はゼロがバキシムへ攻撃を仕掛けようとするが、ゼロが近づく前にバキシムは両手から火炎放射を行い二人を攻撃する。レオもゼロもバキシム単体ならば対処は容易、デガンジャと挟み撃ちであっても何とかなるだろう。
しかし今回は別だ。ライザー戦を終えたばかりの上、ゴブニュに追い回された為に、体力的に限界なオカルト研究部がデガンジャのすぐ近くにいる。こういう時こそ冷静でいなければならないが、人数が多く戦闘に不向きなアーシアやもはや満足に動く事さえ出来ない一誠もいるのだ。そんな彼らを守らなければという思いが焦りを生んでしまい、判断力が鈍ってしまう。
そこへ、さらなる凶事が襲い掛かる。バキシムに続き、新たなる超獣……ミサイル超獣ベロクロンまで現れたのだ。

「ベロクロン……！よりにもよってこのミサイル野郎かよ！」

「こいつを放置すれば下手すると一誠達にも被害が……！ゼロ！こいつは俺が片付ける！お前は一刻も早くバキシムを倒して一誠達の元へ向かえ！」
「分かった！頼む……もう少しだけ踏ん張ってくれ、一誠！オラァァァ!!」

ゼロはバキシムの攻撃を受けながらもお構い無しに突撃する。弟弟子が仲間と共に耐えてくれる事を願いながら。
しかし、その希望は打ち砕かれる。

竜巻と化したデガンジャから逃げるリアス達だったが、殆どの者が限界を迎えており、辛うじてカナエが刀を振るえるくらいだ。そしてそこへ絶望的な事態が起こる。
逃げる最中に瓦礫だらけの場所を通過したのだが、デガンジャが通った事で竜巻によって打ち上げられた瓦礫が落下して来たのだ。それによって不規則に道が塞がれてしまった。

「そんな……！これじゃルートを探している間に追いつかれる！」
「下がって、裕斗君……私が、道を作る……！」

痣を発現させるが、限界に来ていたカナエはフラついてしまう。リアス達は声を掛けようとするがその前にカナエは動く。

日の呼吸
陸ノ型　日暈の龍（にちうんのりゅう）　頭舞い（かぶりまい）

龍を描くように駆け巡りながらカナエが刀を振るい、瓦礫は除去されたものの今度は一誠同様、カナエが倒れ込んでしまう。

「う……」

「カナエさん！」「カナエ先輩！」

裕斗と小猫が何とか二人がかりでカナエを起こし、支えながら逃げようとするが、一誠と彼を支えながら逃げていたリアスの頭上へと瓦礫が迫って来ていた。

「このままじゃ……せめて、イッセーだけでも……「部長」イッセー？」

「もし俺が生きてたら、膝枕お願いします」

「え……何を「皆アアア!!!」!?」

一誠が自分とリアスの先にいた他のオカルト研究部のメンバーに力の限り叫ぶ。そして今日、何度目か分からない限界を超えて大地を踏みしめ、リアスの両腕を掴み思いきり彼らへと投げ飛ばす。

「部長を！頼んだぜぇぇぇ!!」

その言葉が発せられた直後、投げられたリアスは朱乃とアーシアに受け止められ、一誠はいくつもの瓦礫の下敷きになってしまう。

「イッセェェェェ!!!」

リアスの悲痛な叫びにレオとゼロも目の前の相手を無視して彼らの方を向く。

「まさか、あいつ……自分を犠牲にして……！」

「……許さんぞ貴様ら!!」

自分達の教え子が、自らの命を犠牲にリアスを助けた事を知ったレオとゼロは、二体の超獣とデガンジャへ怒りを爆発させる。

先程の攻防が嘘のように一方的にベロクロンとバキシムを追い詰めていく二人だったが、デガンジャの方はさらにリアス達を追撃しよ

うとする。

「イッセー……そんな、イッセー……」

「リアス！立って！ここで立ち止まったら彼の想いが無駄になるのよ！」

朱乃がリアスを引っ張りながら叱咤するものの、リアスはへたり込んで大粒の涙を流し続けている。

アーシアも泣き、小猫と裕斗も涙を堪えていた。

そんな中、過度の疲労で視界がぼやけ気味だったカナエだけはそれを目撃していた。

瓦礫が一誠へと降り注ぐ直前、三つの光が一誠の中に入り込んで薄い膜を作るのを。

そして、一誠が下敷きになった瓦礫の上を竜巻状態のデガンジャが通過しようとした瞬間、それは起こった。

「バディィィィ！ゴォォォォッ!!」

『ウルトラマンタイガ！』

光が、爆ぜた。

〈続く〉

赤龍帝＆トライスクワッド、バディゴー!!

竜巻と化したデガンジャによって打ち上げられた瓦礫が一誠へと降り注ぐ直前、超スピードで飛来した三つの光が一誠へと入り込み、その身体を光の膜で覆った。現実世界で意識を失った一誠は不思議な空間で目を覚ます。

「ここは……部長や、皆もいない……そっか、今度こそ俺は死んだのか……でも、部長を護れたなら」

いいや、と納得し再び目を閉じようとした時、どこからともなく声が聞こえてくる。

―おい、しっかりしろよ！まだ死んでないって！―
―女性を泣かせたままなのは感心しないな―
―ここは地獄じゃないっての！ほら、起きろ！―
「……え？」

もう一度目を開け直し上半身を起こすと三人のウルトラマンが立っていた。いずれも見た事のない者だ。

「ウルトラマン？何で三人？」
「やっぱりウルトラマンってのには驚かないんだな。もしかして俺ら三人って俺らが考えてるより有名とか？」
「いや、ウルトラマン三人という点に疑問がある事からそれは考え難い。仮に有名になっているのだとしたら、それぞれ特徴のある私達三人を誰一人分からないという事は無い筈だ。例としては私のこの筋肉！」

青いウルトラマンが軽めの口調で言い、鍛え抜かれた体躯の赤いウルトラマンは冷静に分析したかと思えばマッスルポーズを決めてい

る。確かに一度見たら忘れられないインパクトのあるウルトラマンだ。色んな意味で。
その二人の間に立っていた銀色の、角を持ったウルトラマンが一歩前に出る。
「お前、本当に危なかったんだぞ。俺達が間に合って良かったよ」
「へ？あ、ありがとう……って本当に俺生きてんの？確かに一度死んでるけどさ」
「ウソォ!?」
「なるほど、『悪魔の駒』とやらの効力か。悪魔に転生する代わりに死者の蘇生にも使えるらしいな。色々制限や条件もあると聞いているが」
銀と青のウルトラマンは驚いていたが、赤いウルトラマンは冷静かつ中々に博識なようだ。見た目で判断してはいけないという事か。
「ま……まあ、とにかく！まだお前は死んでないんだ。体力の方もある程度は回復してるだろ？」
「え？あ……そういえばさっきに比べて全然楽だ」
「だが、状況は依然として悪いままだ。たとえ君がそのまま戻っても好転しないだろう。ある程度回復したとして戦えるのは君だけであり、他の六人まで守り抜けるとは到底思えない」
「でもここでこのままじゃもっと駄目だろ！あんた達は戦わない気なのか!?」
一誠が冷静な赤いウルトラマンに食って掛かるが、青いウルトラマンがやれやれといった仕草で肩をすくめながら一誠に告げる。
「はー……あのなぁ、戦いたくても戦えないんだよ。俺もこいつも旦那も、お前を瓦礫から守って、おまけに体力まで回復させたんだぜ？しかもエネルギー大量に使って空間ブチ抜いて、しかもお前の中にい

るドラゴンのパワーがデカいせいで余計にエネルギー使って回復させる事になったんだからな」
『悪かったなパワーのデカい二天龍で』

ドライグがぶすくれた声で返事をした。どうやら一誠が意識を取り戻したタイミングで彼も目覚めたようだ。

「もしかして俺とドライグのせい……っていうかドライグの事知ってるのか!?」
「知ってるも何も、そいつをボコボコにしたっていうタイラントをタイマンで圧勝したのコイツの親父さんだぞ」

青いウルトラマンが横にいた銀色のウルトラマンを「コイツのコイツの」と指差す。

『何だとぉぉぉぉぉ!?どうやってだ!?あの炎は吐くし両手は鎌と鉄球、しかも鎖を発射してくるし足や尻尾を含めて馬鹿力！かと思えばこっちの炎は吸収するし、ついでに耳まで良かったあの化け物をどうやって倒したんだ!!』
「うわっ!?ちょっと落ち着けよ！倒したのは俺じゃなくて父さんだって言っただろ！このインナースペースはやたら響くんだから大声で怒鳴るなって！」
『インナースペース？』
「ああ、インナースペースって言うのはな……」

銀色のウルトラマンが説明すると、インナースペースというのは手っ取り早く言えば『謎空間』らしい。何だそりゃ。ただ時間とか次元が歪んでいるからか、現実世界での1秒がインナースペース内の1分になるという。
ちなみに実際の意味では精神世界や大気圏の内側を指す。
―俺の説明セリフ取られたぁぁぁ!!―

「……何だ？今の……」
「さあ？」

銀色のウルトラマンと青いウルトラマンが顔を見合わせて首を傾げる。アホしでかして本作の主人公に一体化するハメになったアンタらの同族です。

「そのタイラント云々は後にして……少しでも保たせれば師匠や先輩が駆けつけてくれるだろうし、そのくらいなら……」
「その師匠と先輩って？」
「ええっと……聞こえた名前は、確か師匠がウルトラマンレオで先輩がウルトラマンゼロ……で間違いないよな、ドライグ」
『ああ、それで間違いない』

一誠がそれを言うと何故か三人は変なポーズで仰け反っていた。

「え……え……あのレオさんに……」
「ゼロ隊長……？」
「……どうやら私達は説教されるのが確定したようだ」

忘れがちだが、彼らはこの【エリア】において宇宙警備隊ではなく銀河遊撃隊所属である。即ちゼロの部下に当たるのだが、ゼットのフォロー役として派遣されているのはジード。隊長であるゼロは今回、地球に常駐赴任している為、誰かを派遣する場合はガーディアンベースにいるベリアルと連絡を取り合ってからレジェンド一家を始めとした面々へと報告し、受け入れてもらう手筈になっているのだが……ゼロはそういった連絡はベリアルから受けていない。
無論、レジェンドにもそういう連絡は無いし、ジードことリクが京都にてレジェンドらに普通に合流したのは誰がフォロー役として来るか分からずとも事前にそういう打ち合わせをしており、誰が来ても

確認出来るようにしていたからである。
事実、ベリアルはゼットが独断専行して挙句にレジェンドと一体化していたのは知らなかったが、リクが先に合流していたのは知っていた。だからこそリク用のゼットライザーもゼットに持たせようとしたのだが、後はご覧の有り様である。
つまり、ゼットだけでなく彼ら三人まで勝手に地球へ来た事になる。レジェンドに続きゼロまで胃薬が必要になりそうな案件だ。というかあの空間に突入した時に二人がいる事には気付けそうなものであるが……それはこの際さておき今は成すべき事がある。

「……ゴホン！あの二人がいるとしても、彼らが駆けつけるまで君が他の者を守り抜ける確率は絶望的だろう。普通なら『やってみなければ分からない』でいいだろうが今回は駄目だ。回復したとはいえ君もまだ万全ではないし、彼女らも限界だ。私達もエネルギーを大量に消耗し単独で実体化する事が出来ない」

赤いウルトラマンが言う事はもっともだ。自分だけが戦っても相手が相手である為、おそらくすぐに体力切れを起こして今度こそお陀仏だろう。しかも、なんとか助けたリアスや、カナエらも道連れにする形で……

「……このまま黙ってここで待てってのかよ」
「そうではない。このままでは現状を打破する事は出来ないが、それはあくまで君や私達単独だった場合だ」
「え？それって……」

三人のウルトラマンが右腕を見せるように構えると、彼らの腕に装着されている手甲のようなものからそれぞれ光の球が出て来て、一誠の右手に集まると彼らと同じものが一誠の右手に装着された。

「な……何だこれ!?」

「タイガスパークっていうんだ」
「俺はフーマスパークが良かったんだけどな」
「私はマッスルスパー「「それは色々アウトォ!!」」既に色々混ざってるこの世界観では別にいいだろう!?」

ぶっちゃけ彼の言う通りなのだがここでギャーギャー言っても進まないので割愛するとしよう。結局「混乱するから」という理由でタイガスパークで通す事にした。

「それでだな、そのタイガスパークにこれをリードするんだ」
「私達のも渡しておくが、今回はタイガに花を持たせるとしよう。次回からは是非私達のも使ってくれ」
「ま、しょうがないか。年上らしくこの場は譲ってやるよ。ほら、これ俺のやつ」
「これ……キーホルダーか？」

いつの間にか腰に専用のホルダーが装着されており、銀色のウルトラマンに手渡されたもの以外はそこにストックされる。

「地球ではそう呼ぶんだってな。それはともかく……それをリードする事で、俺はお前の身体を借りて実体化し、戦う事が出来るんだ。光の勇者、ウルトラマンタイガとして」
「ウルトラマンタイガ……」
「そう、それが俺の名前だ。自己紹介が遅れて悪かったな」

銀色のウルトラマン―タイガは改めて自身の名を一誠へ告げる。それに続くように赤いウルトラマンと青いウルトラマンも自己紹介する。

「申し遅れて済まない。私はウルトラマンタイタス。出身はＵ―４０だ」

「俺はウルトラマンフーマ。Ｏ―５０の生まれだ。よろしくな」
「え……えーと兵藤一誠、駒王学園二年生の……元人間で現在は悪魔だ」
『もう知ってるだろうがドライグ、ドラゴンだ。今は神器だけどな』

お互いに自己紹介を終え、今度こそ今の状況を覆す方法を伝える。

「俺達はこのままじゃ戦えない。でも、お前が力を貸してくれればこの状況を変えられる」
「って事は俺の意識はどうなるんだ？」
「心配は要らない。分かりやすく言うなら、普段はお前の中にある俺の心と身体がそのまま入れ替わる、そんな感じだ」
「やってみないと分かんないよな、実際……」

不安はあったが、ここで悩んでいても状況が好転する事は無い。一誠はカナエが教わったと言っていた言葉を思い出す。『信じる心。その心の強さが不可能を可能にする』それは正しくウルトラマンの事だ。

一誠は覚悟を決める。自分が守りたいと思ったものの為に、なりたいと願ったものの為に。

「なあ三人とも、これからは俺の事『イッセー』って呼んでくれよ」
「「「！」」」
「もう弱気になんかならねえ。勝ちに行こうぜ！」
「……ああ！これからは俺はお前で、お前は俺だ！」
「おいおい、二人で盛り上がんなよ」
「『達』という大切な言葉が抜けているぞ。特にタイガ。我らトライスクワッドの一員として、そこは軽んじてはいけない」
「わ、悪かったよ」
『やれやれ、まさか相棒の中に追加で三人もいっぺんに入ってくるとはな。待てよ？普段はキーホルダーの方にいるのか？まあ、いずれに

せよ長い付き合いになるだろうし、そんな事はどうでもいいか』

一誠もドライグも彼らとは何故か仲良く出来そうな気がしてきた。あの特訓をくぐり抜け、同じ屋根の下様々な種族の人物と生活したから分かる。彼らウルトラマンもまた一つの命なのだ。

「気を取り直して、まずはどうすればいいんだ？」

「レバー……ここの部分な。ここをスライドさせるんだ」

タイガが自分のタイガスパークを左手で「こんな感じに」と説明してくれたので、一誠もそれに倣ってスライドさせる。

『カモン！』

「うおっ!?何だ何だ!?」

「それが待機状態だ。この状態で、この部分にタイガキーホルダーを当てる。それで変身出来るぞ」

「よし、じゃあカッコよく……光の勇者！タイガ！」

「あ、いいなソレ。俺に変身する時もやってくれよ、イッセー。風の覇者、フーマって」

「私の場合は力の賢者で頼む。もしくは迸るウルトラマッスル！でもいいぞ」

「「『前者でお願いします』」」

「むう……」

ドライグまで含めて他のメンバー全員に名乗り方の発案を却下されタイタスは残念そうにしていた。何というか、マッスルに並々ならぬ情熱があるようだ。

「改めて行くぜ！光の勇者！タイガ！」

「叫べイッセー！バディゴー!!」

「バディイイ！ゴオオオッ!!」

『ウルトラマンタイガ！』

☆

それは、突然の事だった。
一誠が下敷きになったはずの瓦礫がある場所から一誠の声が聞こえたかと思えば光が溢れ出し竜巻と化していたデガンジャを吹き飛ばして元の怪獣の姿へと戻す。
そしてその光の中から現れたのは……

「シュワッ!!」

巨大化したウルトラマンタイガだった。
オカルト研究部はさらなるウルトラマンの登場に驚くが、中でも一際驚いていたのはリアス、そしてグレモリー家の者達だ。何せサーゼクスが親友と誇るタロウの息子タイガが、娘、そして妹であるリアスと仲間の窮地に駆けつけたのだから。

「あれって……タイガ!?どうして……もしかしてイッセーが……!?」
「いえ、だとしたら最初にあのロボットが出て来た時に変身出来たはず。彼がウルトラマンだったとは思えませんわ」
「……一つだけ、可能性があるわ……」

この声に全員はその方向を見ると、息も絶え絶えなカナエがタイガを見ている。

「カナエ……！大丈夫なの!?あと、可能性って……」
「今はちょっと動けそうにないけどね……可能性って言うのは、一体化の事よ」
「一体化……？」
「ウルトラマン達は人間の姿になる事が可能だけれど、生きている人

間のみならず瀕死の、或いは命を落とした人間とも一体化して、命を共有出来るらしいの。ウルトラ六兄弟の何人かもそういう方法を取った事があるって言ってたわ」

この方法を取ったのはマン、ジャック、エースだ。経緯が特殊なのでタロウに関しては判断が難しいところだが、基本的にこちらに含まれるだろう。

タイガもおそらくは瀕死ないし命を落とした一誠と一体化する形を取ったと考えれば辻褄が合う。

どちらにしても一誠がタイガと関係あるのは確実だろうが、今はただ彼の戦いを見守るしかなかった。

「ゼロ！あれを！」

「なっ……タイガ!?何でここに！俺は何も聞いてないぜ!?」

「だが、理由はどうあれ絶好のタイミングだったのは確かだ。俺達の成すべき事は変わらん！」

「おう！コイツらをさっさと片付けないとな！」

オカルト研究部はタイガに任せて、当初の予定通りレオとゼロはベロクロンとバキシムを相手取る。しかし、先程に比べて心配事が減った事で余裕が出来てきたのか、動きのキレが良くなっていく。

二人と二匹の決着も近い。

一誠はタイタスやフーマと共にタイガの中から、タイガの目線で世界を見ていた。

『これが……ウルトラマンから……タイガから見たこの世界……！』

「分かるだろ、イッセー。今からお前は俺と一緒に戦うんだ。他の誰かじゃない、俺達とお前だけが出来る事なんだ！」

自身の中にいる一誠へと向けたタイガの言葉が聞こえたのか、リアスらオカルト研究部やレオ、そしてゼロも彼の方を向く。
一誠は死んでいない。彼の意思は明確に存在し、今タイガと共に迫り来るデガンジャと戦おうとしている。
それを確信したのも束の間、デガンジャが唸り声を上げながらゆっくり起き上がる。
そして、タイガはデガンジャへ向けて走り出した。

「うおおおおっ!!」

デガンジャの特徴的で巨大な頭部を掴み、膝蹴りを叩き込むと腹部にパンチを打ち込む。
その衝撃に後ずさるデガンジャだったが、タイガはすかさず回し蹴りを放ち追撃する。

「ハァッ!!」
「グルォッ!?」

さらに吹き飛ばしたデガンジャへと駆け寄り、その巨体を両手で持ち上げ叩きつけるように投げ飛ばすタイガ。

「デヤアッ!!」
「グオオォォ!!」

連撃の後に投げ飛ばされ、さしものデガンジャも苦痛の声を上げた。その光景に、漸く本当の意味でリアスらに笑顔が戻る。そう……タイガ、そして彼の中にいて共に戦っている一誠は正しく彼女らにとって『ヒーロー』だ。

☆

グレモリー家でもサーゼクスが立ち上がり拳を握り締めて観戦している。親友の息子が妹とその仲間を助けるべく、奮戦しているのだ。これに感動を覚えない筈が無い。

（タロウ……妹の危機に、君の息子が駆けつけてくれた。あの時私達の危機に君達が駆けつけてくれたように）

タイガの戦い方はまだ粗があり未熟と言えるだろう。しかし、己を上回る巨体を持ったデガンジャへ臆す事なく果敢に立ち向かう勇気はかつて見たタロウの姿そのものだ。

ちなみにタイガが現れた瞬間から、サーゼクスはこの映像を録画している。いずれまた訪れる親友に、その息子の勇姿を伝える為に。

「頑張れ、タイガ！」

遂にサーゼクスは声を出して、タイガの応援を始めた。

☆

一誠がタイガの中で共に戦っているのを知ったレオとゼロはさらなる奮起を見せる。弟子、そして後輩の前で先達として情けない姿は見せられない。

まずそれを実践したのはレオだ。ベロクロンはレオへと無数のミサイルを撃ち出すものの、なんとレオはそのミサイルを破壊したり受け止めたりせず凄まじい速度で弾き返し、別のミサイルに当てて全てを相互爆発させたのだ。

これを見たオカルト研究部は驚愕する。高速で迫り来る無数のミサイルを、ピンポイントで別のミサイルへ向けて爆発させる事なく弾き返すなど正に神業。

「ダアアッ!!」

然る後にレオは高く跳躍する。レオの最も得意とし、数多の強敵を撃ち破ってきたあの技を放つ為に。

「イヤァッ!!」

ベロクロンの頭部へ必殺の『レオキック』が炸裂した。

「グゲェェェッ!!」

その頭部からは大量の火花が噴き出し、ゆっくり仰向けに倒れながら地面に触れた瞬間、ベロクロンは大爆発する。

シンプルな、しかし比類なき一撃の前にベロクロンは敗れ去った。

レオの完全勝利である。

ゼロもまた、バキシムを圧倒していた。レオがベロクロンを、タイガがデガンジャを相手にしてくれた為バキシムに専念する事が出来るようになったからである。

そうなった以上、スペックで勝り、しかも闘志が燃える今のゼロをバキシムが倒せるわけがない。

「ドリャアァァァ!!」

レオのように高く跳躍すると、師より伝授された『ウルトラゼロキック』を放つ。バキシムは宇宙怪獣とイモムシの合成超獣だったのもあってダメージは軽減されたものの、凄まじい衝撃にバキシムは倒れ込む。苦し紛れにその角をミサイルとして発射するものの、ゼロには撃ち落とされる。

「トドメだ!!」

ゼロはゼロスラッガーを再び射出すると両手に掴み、それをカラータイマーの両脇へと装着し、ビシッと手を添える。そして拳を握った状態で両手をクロスさせ、一気に左右へと開く。

「ジュワッ!!」

カラータイマーに装着されたゼロスラッガーから、ワイドゼロショットをも上回る凄まじい光線が発射された。離れていても分かる程の光にオカルト研究部の目は釘付けになる。

これこそゼロの代名詞たる必殺技の一つ『ゼロツインシュート』だ。

それはなんとか起き上がったバキシムへと容赦無く直撃する。

「オラァァァァァ!!」

「グギャァァァァ!!」

ゼロの気合一閃、ゼロツインシュートはそのままバキシムを飲み込み、大爆発させた。その爆発をバックに勇ましく佇むゼロは、正に銀河遊撃隊隊長としての威厳に満ちていた。

ゼロが怪獣を上回る超獣をも圧倒する者だと証明した瞬間である。

残るは、タイガが相対してるデガンジャのみ。

☆

タイガとデガンジャの戦いも佳境を迎えていた。タイガに先制を奪われたデガンジャだったが、持ち前の怪力でタイガに対抗したのだ。

「グウゥゥゥ!!」

「うっ……ぐ……」

腕同士の組み合いになれば、単純な力で勝るデガンジャに軍配が上

がる。デガンジャはさっきのお返しとばかりにタイガをそのまま投げた。

「ぐあっ!!」

投げられ、地面にうつ伏せに叩きつけられるタイガ。倒れて追撃されるわけにはいかないとすぐさま立ち上がるが、タイガをさらなる攻撃が襲った。

「うあっ!?」

デガンジャが両手から『雷電光』を放ちタイガを狙い撃ちにしたのだ。

まさか竜巻になるだけでなく遠距離攻撃まで出来るとは予想外だったのか、タイガは光弾で反撃するがデガンジャの方が初速も連射速度も早い。

「くそっ……!」

『なんか手は……!ドライグ!タイガが俺と一体化してんなら、俺の神器をそのままタイガに使わせる事は出来ないのか!?』

『こんな前例は無かったが……出来なくもないな。むしろサイズ的にはかつての俺に近くて丁度良い。だが体力消費や神器の進化段階は使う方に基準する。つまり、禁手化はおろか赤龍帝からの贈り物(ブーステッド・ギア・ギフト)も今のタイガには使えんぞ』

『タイガのパワーなら単純な倍化だけでも十分だ!聞いたな、タイガ!』

「あ……ああ!でもどうやって神器っていうのを出すんだ!?」

『簡単だ!お前は俺、俺はお前だろ!ただ強く念じれば良いんだ!』

一誠の言葉を聞いたタイガは、言われるまま神器の出現を強く念じると、タイガスパークのある右手とは逆に左手に巨大化した

赤龍帝の籠手（ブーステッド・ギア）が出現した。オカルト研究部はまさかタイガが一誠の神器を装備するとは思ってなかったのか驚いていたが、何より驚いたのはタイガ自身だ。

「これが……イッセーの力……!!」

『今は俺達の力、だぜ!!使い方は簡単！十秒毎に力は倍になっていくから、必要な時に解放するんだ！その分体力も持ってかれるから使いどころに気をつけろよ！』

『分かった！』

タイガは拳を握り締め、デガンジャの雷電光をくぐり抜けながら懐へと飛び込む。

『Ｂｏｏｓｔ！』

「シュワッ!!」

「ゴアァッ!?」

いきなり威力を増した一撃を喰らい、大きく吹き飛ばされるデガンジャ。タイガはその威力に驚きつつも、今しかないとある技を放つべく態勢を整え、再度神器へ力を溜める。

「ハァァァッ……」

『Ｂｏｏｓｔ！Ｂｏｏｓｔ！Ｂｏｏｓｔ！』

しっかりと自身と神器に力を溜めつつ、父であるタロウと似た構えを取る。その体格からバランスが取り難い為、デガンジャが漸く立ち上がるがその時にはタイガは既に準備を終えていた。

そして父譲りの必殺光線が今、タイガから放たれる。

「ストリウム！ブラスタァァァ!!」

タイガスパークを向けるようにして右手を軸に左手を乗せ発射する直前に溜めた力を解放。
言うなれば『ブーステッド・ストリウムブラスター』と言うべき光線が凄まじい勢いで発射された。
デガンジャは雷電光で応戦するが赤龍帝の籠手で増幅されたストリウムブラスターの前にはまるで通用せず、そのまま直撃する。

「ガアアアアア!!」

しばらく放射された後、デガンジャはベロクロンやバキシム同様に大爆発する。その爆発が収まった時にはデガンジャはおろか竜巻も無かった。
そう、タイガの地球での初陣は、タイガの勝利に終わったのである。

「タイガが……イッセーが勝ったわ!!」
「「「「や……やったあああ!!」」」」

リアスの言葉に、普段は静かな小猫や穏やかな朱乃も喜びの声を上げた。満身創痍のカナエも声を上げられなくとも笑顔だ。

「……ふぅ」
「良くやったな、タイガ」
「ヒヤヒヤさせやがって。ま、お前は立派に初陣を勝利で飾ったんだし、良しとするか」
「あっ！レオさん……ゼロ隊長……あの……」

褒められはしたものの、自分達のした事に負い目があるのか縮こまるタイガだったが、ゼロはポンポンと肩を叩きながら笑いつつ言う。
「後で理由は聞くけどよ、お前らは遊撃隊訓練を一通り終えてるし何より俺の弟弟子を助けてくれたんだし、やる事は間違ってないから

な。別に頭ごなしに怒ったりペナルティつけたりしないから安心しろって」
「あ……はい」
この言葉に少し肩の荷が下りたタイガ。中にいるタイタスやフーマも一安心しており、一誠も苦笑していた。
そこにレオが声を掛ける。
「後は、この空間から脱出するだけだ。あそこを見ろ」
レオが指差す場所を見ると、空に僅かな綻びが見える。
「タイガ、お前は彼女らを手に乗せるんだ。どうやら彼女らと我々しか残っていないみたいだからな。絶対に落とすなよ」
「はい！」
タイガはリアス達に近づき、片膝を着いて手を差し出す。
「今からここを脱出する。後で俺達の事も話すから、俺の手に乗ってくれ」
「分かったわ。六人いるけど、大丈夫？」
「大丈夫。スピードは落ちるけど、両手が塞がっても空は飛べるからな」
その言葉にリアスは頷き、動けないカナエを支えながらタイガの手に乗るリアス達。それを確認して立ち上がりレオとゼロの方を向くと、今度はレオとゼロが頷いた。
「よし、全員揃ったな。あの綻びを広げ、一気に脱出する！ゼロ！ダブルフラッシャーだ!!」
「おう!!」

「ハァァァ……デヤッ!!」

ゼロが片膝を着きながら前に、レオはそのすぐ後ろに立ち両手にエネルギーを貯めながら頭上から外側へ下ろすように左右に開く。

そしてゼロが頭上に垂直に掌を合わせ、それに重ねるようにレオが水平に掌を合わせると、レオとゼロ、二人分のエネルギーが集束された光線が発射される。

『レオゼロダブルフラッシャー』。

レオが弟のアストラと放つウルトラダブルフラッシャーと同種の技だ。

光線の見た目自体はそう飛び抜けて巨大なものではないが、威力はまるで違う。

二人が放った合体光線が空にある空間の綻びへと直撃すると、そこから光が差し込んで来た。

「今だ!ゼロ、タイガ!行くぞ!!」

「おう!」「はい!」

三人は勢い良く空を飛び、その光差す場所へと飛び込む。三人が飛び込んで少しすると再び空間の空は元の様相へと戻った。

ライザーとのレーティングゲームは、たった今本当の終わりを迎えたのだった。

〈続く〉

誰もいなくなった……いなかった筈の先程の空間に一人の男がいた。

「あらら……せっかく面白いモノを拾ったのに全部壊されちゃったよ。こりゃファーさん怒るだろうな……いや、案外興味無いって不問にされるかな？」

その男はゴブニュの破片を眺めながら溜息をついた。

「けどま、それ以上に面白いものを見れたし、収穫もあったから結果としては上々かな。ギアさんにも良い情報持って帰れそうだし」

タイガを思い出しながら男は笑う。

「この世界の『特異点』。それに神を遥かに超える『光神』……この世界も退屈とは無縁な面白い場所だ。さて、物語はまだまだ始まったばかり。愉しんでいこうじゃないか」

怪しげな笑みを崩さぬまま、男は姿を消す。

ゲーム終わって、魔王様来訪

オカルト研究部、レオ、ゼロ、そしてタイガらトライスクワッドが空間を脱出し、そのままレジェンド一家の仮住居へ向かうと卯ノ花やジェントらが笑顔で「おかえり」「お疲れ様」と労いながら出迎えてくれた。

タイガは一誠に戻り、矢的の計らいで一日休みにしてもらったオカルト研究部は一眠りしてから各種説明を聞く事にし、一旦の解散となる。なにせまだまだ夜中と言っていい時間だ。

アーシアと卯ノ花に治療され、それぞれひとっ風呂浴びた後は殆ど布団に入った直後爆睡。余程今までの疲れが溜まっていたのだろう。

そして、アストラル体（もしくはエネルギー体）となったタイガ、タイタス、フーマにゼロは詰問する事にした。

「さてと……それじゃ、何であそこにいたのか話してくれよ。お前らの事だし別にバカみたいな理由じゃないだろ。さっき言った通り怒ったりしないから」

「はい……一度、自分の目で確認したかったんです。俺達がいずれ赴任する事になる場所を……父さん達が活躍した、この世界を」

「まあ、確認は確かに大事だよな。それに親父が活躍した場所ってところも理解出来るぜ、俺には」

ゼロとしても自分の師や父が活躍した場所であったこの世界の地球には興味があったし、ベリアルから常駐赴任を頼まれた時も内心喜んだ。故にタイガの気持ちは良く分かる。

「それで、ベリアル総司令に頼んだら『近くで見てみるくらいなら許可する』って言ってくれたんです」

「なるほどな。んで、お前ら二人はその付き添い、と」

「「仰る通りです」」

「でもよ、それならこの……そうだ、駒王だ。この駒王町を遥か上空か

ら見るだけで済んだだろ。あそこに来る理由にはならないんじゃねえか？」

ゼロの意見は正しい。そもそもあの使い捨て空間がどこの空間に用意されていたかは知らないが、パッと見分かるような場所にはない筈だ。リアス達も魔方陣を使って移動したわけだし、レオとゼロはそんな彼女らのエネルギーを追っただけ。

レオとゼロがその空間に既にいる事を知らなかった三人が彼らのエネルギーを追って、というのは無理がある。

「実は……帰ろうとした時、空の一部が歪んだんです。まるでここに入れと、この先に行けと言っているみたいに」

「歪んだ……？」

「そして、危険を承知で俺達三人は飛び込んだ。そしたら、イッセーが瓦礫に押し潰されるところだったんです」

「……あの時か。それでお前らは一誠をある程度回復させたものの、あのドライグってのが一誠の中にいた事で回復に膨大なエネルギーを必要になってそんな感じのエネルギー切れ寸前にまでなったワケだ」

「「すいません……」」

「謝んなよ。お陰であいつを始め皆助かった。幸いちゃんとプラズマスパーク・ブレスはちゃんと着けてるみたいだし……変身しての活動に関しては問題ないみたいだからな。あ、お前らのブレスはそのタイガスパークに一体化してんのか。俺のウルティメイトブレスレット同様に」

これだと便利だよなーとゼロはブレスレットを出現させて眺めている。そんなゼロにタイガはおずおずと口を開く。

「あ、あの……」

「ん？ああ、もういいぜ。地球での初陣は疲れただろ。こうなっち

まったら仕方ないし、ベリアルには俺から言っとく。まあ……タイガ、お前はタロウが暴走しないよう願っとけ」
「あー……」

タイガの父、タロウ。サーゼクスがシスコンにして親馬鹿であるように、彼もまた息子の前では威厳を保とうとするが実際はサーゼクスに並ぶ親馬鹿である。詳しくは原作前のエピソードを参照してほしい。

「一誠のやつはまだ学生だしよ、お前らに自由に変身したり出来る立場じゃねえ。だけどな、俺やレオなんかと違って、お前らはすぐ近くであいつの力になってやれる」
「ゼロ隊長……」
「だから一誠の……いや、オカ研のやつらの事、頼んだぜ」
「「はい！」」
「あ！あと俺の事は普通に呼んで、っつーか喋っていいぞ。タイタスは年上だし、フーマは殆ど同い年。タイガに至っちゃいとこ？はとこ？どっちだっけ……まあ、そういう関係だろ。ぶっちゃけるとな、今だになんかむず痒いんだよ。隊長呼びされるのってさ」

トライスクワッドの三人は顔を見合わせて笑った。

「それじゃ、遠慮なく……」
「おう、そうしろそうしろ。んじゃー俺らもちょっと寝ようぜ。お前らの分も用意したぜ。そのサイズだと敷き布団も掛け布団も代用品になっちまうけどなっ……と」

ゼロが用意したその大きめな籠の中にはタオルなどが布団代わりに敷かれたりしており、肌触りは悪くない。今のタイガ達はアストラル体なので別に汚れていない為、使用後の洗濯も楽だ。

「なんか、ごめん。面倒かけて」
「気にすんなって。タイガ、お前布団で寝るの初めてだろ。光の国じゃ睡眠カプセルに入るだけだしな。二人を見てみろよ」
「え？」

タイガがゼロに言われた方向を見てみると、タオルの上でぽすぽすと跳ねるフーマや早速布団タオルに入って上体起こししているタイタスがいた。
こんな感じでレジェンド一家が使っているのはアストラル体対応かつ認識阻害効果付きだ。

「うおー！すっげーフカフカしてらぁ！」
「うむ、リラックスしながら筋トレが出来る！素晴らしいものだ！フッ！フッ！」
「馴染むの早っ!?」
「見習えとは言わないけど、これからの生活考えたら慣れといた方がいいぜ。一誠も合宿終わったら自分ちに帰るんだし、お前らもそっちに行く事になるだろうから、そのタオル布団は餞別だ」

ここ、合宿に来てるんだ……と思いながらタイガも潜り込む。予想外に気持ち良かったのか、タイタスやフーマと違ってデガンジャとの戦いの疲れが出たのかすぐに寝息を立て始めた。

「む？フーマ、我々も寝るとしよう。今日頑張ったタイガの睡眠を妨げてはいけない」
「あいよ、旦那。あー……しかしこれヤバいな。寝過ぎそう」
「たまにはいいんじゃねえの？じゃ、明かり消すぞ」
「「おやすみ、ゼロ」」
「おう、おやすみ」

アーシアやカナエが見たら「可愛い」と言いそうな、タオル布団に

包まったタイガ達を見て小さく笑いながら、ゼロも眠りについた。

☆

それから夜が明け、遅めの朝食の時間。

カナエを除くオカルト研究部や師匠組、トライスクワッドも起きてきた。

本来なら一誠も起きれない程消耗していたのだが、タイガらがエネルギーを注いでくれたおかげで普通に生活するには問題ないレベルにまで回復していた。カナエはそうもいかなかったが、ライザー撃破の功労者でもある為、ゆっくり寝かせてあげようという意見に纏まった。

それは良いのだが……

「……カナエって寝相悪いの？」

リアスが汗を垂らしながら呟く。その視線の先にはレジェンド抱き枕を抱いて幸せそうな顔で眠る寝間着のカナエが空いたドアから上半身だけ通路に出ていた。

アーシア救出の翌日、気絶したレジェンドと全裸で眠るオーフィスを見てパニクったアーシアが部屋の外に飛び出た時に見た光景と同じ状態である。

「カナエさん、前もああなってました」

「そうなのか？アーシア」

「はい、私を助けてくれた翌日の朝……その、色々あって。黒歌さんとか夜一さんとかも凄い事に……」

「にゃあああ!?アーシア、言っちゃ駄目にゃ！私のイメージが！白音に変なイメージ抱かれちゃう！」

ちなみにあの時、黒歌はツインキャットストライクとか言いながら

部屋から飛び出してはまた眠り出していた。寝惚けていたにしても珍妙である。

「安心せい。お主のイメージなぞシスコンかスパロボ好きぐらいしか抱かんわ」

「夜一だってＭＯＴＨＥＲ好きなイメージしか抱かれたなかったらどうするにゃ!?」

「間違ってないから説明する手間が省けるのぅ」

「なーんーでーにゃー!!隊長だったとか、凄い貴族の当主だったとかのイメージは!?」

「そんなもん尸魂界（ソウル・ソサエティ）離れた時に捨てた……ってあああ!!ジェフが逝ったアァァ!!」

相変わらず騒がしい黒猫ツインズである。黒歌と夜一は別の意味で絶叫していた。黒歌は自身のイメージで、夜一の方はＭＯＴＨＥＲ２プレイ中でキャラのＨＰが無くなったらしい。おい夜一。

余談だが、レジェンド一家は皆レトロゲームが好きだったりする。あくまで総合的にであって割と現代のもやるが。

「実は私も討鬼伝というのを家族や兄上、狛治一家と一緒に始めてな。兄上が凄まじく頼りになるんだ。狛治も手甲使うとかなり強い」

「「「「全く予想外なんですが!?」」」」

まさかの縁壱のゲームプレイ発言。兄弟家族ら総出でやっていた。まあ討『鬼』伝だし、そのうちカナエも始めそうだ。なお、その面々で最強なのはうたと恋雪という嫁二強だったりする。

「さて、ゲームに関しては今度やりながらじっくり話すとしてだ」

「やっぱりやるんですか」

「明日からの勉学もある。休息の時間もいるだろうし、全部とは言わないが聞きたい事があれば答えよう。無論、私達の独断では答えかね

るものもあるので、それは承知してもらいたい」

縁壱から予想外の申し出に驚くリアス達。気になった事は幾つもあるが、この合宿の間にそれぞれ師から聞いた事などを情報交換すればいい。あまり一度に聞いても混乱するだろうし、徐々に聞いていこうとオカルト研究部では既に話し合っていた。

となると気になるのはやはりカナエに関する事だ。本人はまだまだ夢の中、そのカナエと修行したのは目の前の縁壱しかいない。しかしプライベートに関わるような事はさすがに本人以外から聞くわけにはいかない。

そうなると一番聞きたかった事はあるモノについてだ。

「あの……『鬼』について聞いても？」

「鬼か……確かに気になっているだろう。カナエ殿が発動させた赫刀もそれに対抗する手段なのだからな」

縁壱はグレイフィアが運んでくれたお茶を啜り一息入れるとゆっくり話しだした。

「世界毎に解釈や実態は異なるが、我々が元いた世界では鬼舞辻無惨の血を浴びた、もしくは注がれた者が鬼になった。無惨以前に他の鬼がいたかは定かではないが」

「鬼舞辻無惨……カナエも言ってたけど」

「鬼の始祖と呼ばれた者だ。己を完全な存在と信じて疑わず、他者を見下し自身が産み出した他の鬼さえどうとも思わず自分の道具としか見ていない。例外と言えば上弦と呼ばれた鬼の中でも極めて優れた者達くらいだったそうだ。下弦という者達もいたが、その殆どは粛清という名の……実際は単に『気に入らない』というだけで無惨によって殺されたらしい」

「なっ……!?」

「ふざけた野郎だ……！」

下弦の壱・魘夢だけがその場にいて唯一無惨に気に入られたらしい。らしいというのも縁壱が既にその世界で故人となってからの話で、全て元鬼であった兄・巌勝や狛治からの又聞きなので、詳しくはその二人から聞くか、もしくは今も日本地獄で罰を与えられている無惨本人に聞くのが手っ取り早い。後者は無理っぽいけど。

「とりあえずバカ(無惨)については置いておくとして」

「すいません名前とルビが逆……あれ？逆にしても結局バカ……え？」

「裕斗、スルーしなさい。カナエが聞けばまた壊れモード発症するわよ。縁壱先生も腹立てる程の存在とだけ覚えておきなさい」

リアスの意見が正しい。下手にツッコめば縁壱まで「無惨コロス」モードになって収集がつかない事になりかねない。

「話を戻そう。鬼に共通して言える事は高い再生能力を持つ事、血鬼術という鬼独自の術を持つ事、そして……人間を喰らう事だ。人間を喰らえば喰らう程、鬼はその力を増す」

『!?』

再生や独自の術を使うのはいい、しかし問題は最後だ。人間を喰らうと言うのは大問題どころではない。例外もいるにはいるが、まさに例外と言える程の数……片手で数え切れる程度しかいない。分かりやすい例外が竈門禰豆子である。彼女の場合、人間を喰うのではなく睡眠によって回復するように体質が変化していた。

「基本的に鬼は不死身であり、殺すには弱点である日の光を浴びせて灰化させるか、もしくは頸(くび)を斬り飛ばす方法しかない。無惨は頸を斬り飛ばしても死ななかったが……ああ、こちらに来てあの方の見せた『細胞一つさえ残さず完全消滅させる』というのも追加されたな」

言わずもがな、レジェンドの代名詞と言える得意技『スパークレジェンド』を見た結果である。この技の規格外ぶりはともかくとして、超威力の技で完全に消し飛ばす方法もある、という事だ。
例えるならノアの『ノアインフェルノ』。一兆度＋重力波がプラスされた鉄拳が直撃したら無惨だろうがなんだろうが一瞬で蒸発するだろう。
ちなみにレジェンドは模擬戦にてこれにマイナス一兆度＋超次元波動の鉄拳『アブソリュートレジェンド』にて対抗した。マジで化け物通り越して何なのこいつら。
割と二人とも本気だった為、結果としてその時は宇宙一つが跡形も無く消し飛ぶビッグバンが起きてしまったという。幸い生命の存在しない宇宙だったから良かったものの……。
さすがにキングも怒り、二人に説教したのだが反省して縮こまるレジェンドに対してノアは久々に本気でやれて清々しい雰囲気だったそうな。
閑話休題。
いずれにせよ鬼がとんでもない存在だと分かった。
他にも聞きたい事が出て来たが、それは今後でも良いとして……もう一つ気になるのがカナエは無惨の産み出した鬼に一度殺されたと言うが、カナエ程の実力者を殺害したというのはどんな鬼なのか。

「縁壱先生、カナエ先輩は鬼に殺されたって言ってましたけど、どんな鬼なのか分かりますか？」
「ふむ。確か上弦の弐、兄上がそう言っていたな。何でも女性を好んで喰っていたと……」
「つまり女の敵ですね」
「カナエがライザーに苛つくのも当然よね」
「あらあら……私もどうやら苛立ちが」

アーシアとカナエを除くオカ研女性陣の頭に青筋が浮き出ている。

そりゃそうだろう。タイガやフーマなんかその雰囲気に呑まれて震えている。

「まさにあるまじき蛮行。もし遭遇したらたとえ他の者が許しても私のウルトラマッスルが許さんぞ！」

タイタスは平常運転だ。ただしその紳士的（？）な発言はリアス達にとって高ポイントだった。……のだが。

「「「「……誰？」」」」

「「あ」」

よく考えれば一誠やゼロ達ウルトラ戦士を除いてタイガ以外は初対面である。鬼の話題にばかり気を向けていたが、一旦鬼に関しては打ち切ってタイガらトライスクワッドの話題になった。というかこっちのが重要じゃね？

「ええと……初めまして？俺はウルトラマンタイガだ」

「お初にお目にかかる。私はウルトラマンタイタス。ウルトラの星Ｕ―４０出身のウルトラ戦士だ」

「俺はウルトラマンフーマ。Ｏ―５０の生まれだ」

それぞれ自己紹介していくトライスクワッドだったが、彼女らの第一印象は……

「小さくて可愛いです！」

「なんか半透明ね。エネルギー体か何か？」

「普通の人達には見えないんでしょうか」

「あらあら……まるで妖精ですわね」

今の見た目ばっかで生まれとかどうでも良かったらしい。ちょっと

は気にしてあげて。
「……わっしょい」
『!?』
　縁壱の一言に全員が何事かと振り向く。煉獄家の初代とも知り合いだった彼にとって、タイタスの性格や声が似ていた為自然と口癖を思い出して言ってしまったようだ。
　そんな感じでワイワイと賑やかにやっていたら縁壱が何かに気付く。
「……む」
「縁壱先生、どうしたんですか？」
「結界が反応した。どうやら許可を得てない者が無理矢理敷地内に入ろうとしたらしい。少し様子を見て来よう」
　縁壱はソファーから立ち上がりレジェンドより賜った『日輪刀・日ノ神』を腰に差し部屋から出て行く。
「……ちょっと私も行ってくるわ。どうも嫌な予感がするというか……」
「なら皆で行きましょう、リアス。カナエは……無理に起こさなくてもいいでしょう」
「皆って事はイッセーも一緒か。なら必然的に俺達も一緒だな」
　嫌な予感、とは言うがぶっちゃけリアスしか感じていない。つまりまた身内が何かしでかしている可能性がある。もし、それが縁壱の逆鱗に触れでもしたらグレモリー家どころか下手すれば冥界が終わりかねない。彼の実力はそういうレベルだ。
　何かあっても止められるよう、カナエ以外のオカルト研究部とトライスクワッドが縁壱の後を追う事にした。

☆

魔王の一人にしてリアスの兄であるサーゼクス・ルシファーは戦慄していた。目の前に立つ超越者などモブキャラの一人にしか見えなくなる程の圧倒的な闘気を発する存在に。ついでにほんの五分程前までの自分を殴りたくなった。

「もう一度聞こうか。何をしようとしていた？」
「いや、その……これにはちょっと理由が……」
「何をしようとしていたか聞いている」
「ハイッ!!結界みたいなのを壊そうとしましたっ!!」

青筋浮かべて日の呼吸の発動準備に入りながら凄まじい眼力で睨みつけてくる縁壱に対して、サーゼクスは涙目になりながら直立しつつ返事した。

……もっとも一世界の超越者程度に破壊出来るような結界ではないのだが。

「何の目的で」
「そ、それはですね、妹の所へ直接魔方陣でジャンプする事が出来なかったので、魔方陣で近づけるところまで近づきそこから徒歩で向かおうとしたところ、この結界らしきものに激突しまして……」
「結界があるという事は近づけさせぬ為だという事ぐらい理解出来るだろう。そもそもここまでやっている他者の家の敷地内へ何の連絡も無く侵入しようとするとはどういう精神構造しているんだ貴様は」
「いや、その……（どうする!?明らかにこの雰囲気はまずい……）」
「何がまずい。言ってみろ」
「ひいっ!?」

縁壱さん、その台詞は正しく無惨です。

まさか思考まで読まれた事にサーゼクスは驚き、ああ……これまでかと今までの出来事が走馬灯のように駆け巡り始めた時、救いの手が差し伸べられた。

「お兄様!?何故ここに!?」

「リ……リーアたぁぁぁん!!!」

魔王の威厳なぞ眼前の化け物(縁壱)から逃げられるくらいなら幾らでも捨てよう。

泣きついてくる兄と、なんかキレかかってるのか既にキレてるのか判断に困る状態の縁壱を見て、リアスはというと……

「お兄様!!一体何したの!?縁壱先生があんなに怒るなんて相当よ!?」

「えええええ!?」

縁壱の側に回った。そりゃ三大勢力を単騎で全滅させられるような人物を敵に回したくないだろう。

とりあえずリアスの血縁という事なので彼女と共に再度サーゼクスが頭を下げる事で一旦縁壱は沈静化した。

「リアス殿に感謝しろ不法侵入者」

「はい……」

「もう!部室なら我慢出来たけどお世話になってるところに迷惑をかけるなんて!」

「本当にすまない……」

縁壱からの第一印象は最悪、さらに最愛の妹からの評価まで下がってしまい小さくなっているサーゼクス。

魔王がこんなんでいいのかとオカルト研究部は思いつつあるが、そんなサーゼクスを連れて仮住居へ戻り、屋内のリビングに入るとカナエが起きていた。寝間着のままだが。

「あら、皆おはよう……って時間でもないわね」
「ピキュ」
「がお」
「じぇっとん」

な　ん　か　い　る。

「ピキュキュ？」
「がう？」
「じぇぇっとん……」

な　ん　だ　こ　れ。

「え……えーっと……カナエ？」
「なぁに？リアス。あ、アーシアちゃん。ゴモちゃんにご飯あげたからね。モスちゃんとゼッくんと一緒にちょっと遅めの朝ご飯♪」
「はわっ！そうでした！ごめんなさいゴモちゃん、今日は皆でご飯の日でしたね」
「がお！」

かつての大戦で目撃したサーゼクスは真っ青になり、話を聞いていたリアスも血の気が引き、アーシアを除くオカルト研究部の面々は上記の通りなんだこれ状態。
トライスクワッドの三人は近くにあった物を見てそれらが何かを気付く。

「もしかして……カプセル怪獣？」
『え!?』
「らしいぜ。親父のと違ってあの人のやつは怪獣達がある程度自由に出入り出来るみたいでさ。自分から出て来るとこんな感じで、小さく

なっちまうんだってよ」

タイガの一言に驚くリアス達に、牛乳を入れた容器を手に入ってきたレイトが補足した。レイトの言う通り、今いる三匹はマジでＳＤ、ぬいぐるみサイズである。

「皆に紹介しておくわね。私のカプセル怪獣のモスラ。通称モスちゃん♪ちなみにこんな綺麗なのにモチーフは蛾みたいなのよね」

「ピキュ！」

心外だよね！とでも言うような返事で返すモスラ。彼は所謂『新モスラ（もしくはモスラ・レオ）』と呼ばれる緑を基調としたカラーのモスラだ。親モスラは惑星レジェンドの守護獣の一体として人々と共に生活している。

「わ、私のカプセル怪獣？のゴモちゃん……えっと古代怪獣ゴモラです。正しくはゴモラザウルスっていうらしいんですけど」

「がう」

「あ、ゴモちゃんはそのままご飯食べてて良いですよ」

アーシアの言葉を受けて再びサンドイッチを頬張りだすゴモラ。サイズがサイズな為、食べ切れるか不安に思えるが無問題。皆割と食べるのである。

そして最後が問題の……

「じぇっとん」

明らかに普通よりヤバそうな奴である。

可愛らしい鳴き声だがサーゼクスとリアスは青い顔をしたまま滝のような汗を流し続けていた。

「そ、それでその子は……」
「卯ノ花先生のカプセル怪獣、ハイパーゼットン（イマーゴ）です」
ヤバいどころじゃなかった。
宇宙恐竜ハイパーゼットン（イマーゴ）。別名『滅亡の邪神』。
戦闘力で言えば、（本作では通常は制限状態とはいえ）ウルトラマンサーガに匹敵するとんでもない存在である。なんでそんなのをカプセル怪獣に出来るんだこの一家。
かの大戦にて白いのをフルボッコにしたのは普通のゼットン。目の前にいるレイトから牛乳を貰って飲んでいるちっこいのはハイパーが頭につくゼットン。
この瞬間、サーゼクスは悟った。ここに住んでいる者達に喧嘩売ってはいけないと。
ただちょっと話をしに来ただけなのに、想像を絶する出来事に次々と遭遇するハメになったサーゼクスは暫し途方に暮れていた。
（私は……無事にここから帰れるだろうか）
「渡りたいなら渡らせてやるぞ、三途の川」
「結構です!!」
〈続く〉

カプセル怪獣と使い魔、レジェンド一行は駒王へ

前回、カプセル怪獣にビビりまくっていたサーゼクスとリアス、なんだこれ状態のアーシアとカナエ以外のオカルト研究部だったが。

「改めて触れ合って見ると大人しいのね、このゼットンは」
「この子はモスちゃんやゴモちゃん達のまとめ役なの。お手伝いも良くやってくれるし、嫌がる事さえしなければ無害どころか一人に一匹欲しいくらいよ？」
「じぇっとん」
「あらあら……念力も上手ですのね」

カナエの分だけでなく全員分の飲み物を入れたコップが置かれたトレーを念力で器用に運んで来たゼッくんことハイパーゼットン。リアスも最初こそ警戒していたが真面目かつ愛らしいこの姿を見てすっかり気を許したようだ。サーゼクスは真っ青なままだが。
なお、サーゼクスの自己紹介はなんとか済ませた。ついでにこんな感じなんで噛みまくりだった。

「ねえ、このゼットンとそのモスラとゴモラ？以外にもカプセル怪獣っているの？セブンは確かウインダムにミクラス、アギラっていう三匹がいたんだけど」
「いるわよ。あの方と一緒に京都に行っている子が、確かそれぞれ『ゴジラ』と『壬龍（ミズノエノリュウ）』というカプセル怪獣を連れているし、後は御門先生とC・C・さんも連れていたはず」
「皆が連れているわけじゃないの？」
「ううん。皆……あの方以外は少なくとも一匹ずつは連れているわ。ただ、基本的にカプセルの中が非常に快適で普段は出たがらない子が殆どなの。だから私が見た事あるのはさっき言った子達くらいね。御門先生達の連れている子は分からないけど」

彼女らが所有するカプセル怪獣は、全てがかつてレジェンドの所有していた怪獣達だ。共に平和の為に尽力し、惑星レジェンドにて暮らしていたが、レジェンドが旅立つと聞き急遽全員再集結し、再びカプセル怪獣として着いてきた。それを彼女らに託したわけである。

新たに判明した二匹と、加えてその片方に関係する一匹について説明しておこう。

ゴジラはオーフィスが所持しており、種類は『ＶＳデストロイア』まで主役を張った平成ゴジラだ。怪獣王の二つ名が示す通りプライドが高く、売られた喧嘩は買う主義。レジェンド、オーフィスと共に禍の団（カオス・ブリゲード）殲滅に尽力し、『黒き巨獣』の異名まで付けられた。互角にやり合えるのはハイパーゼットンくらいという、レジェンド一家カプセル怪獣軍団の戦闘隊長である。

壬龍はスカーサハが有している。こちらは基本的に穏やかなのだが、念動力のレベルは下手すればウルトラセブンさえ上回る程のものに加え、その他の戦闘能力も高い。伊達や酔狂で守護神などと呼ばれていたわけではないのだ。惑星レジェンドではサーガが住まうアクアエデンに居を構えており、神衛隊の面々も時折見かけていた。

そしてレジェンドの右腕とされる鬼灯も連れている。カプセル怪獣最強とも呼ばれるその存在こそオーフィスの連れているゴジラと同じ名を持つ『シン・ゴジラ（第四形態）』だ。

あまりにも攻撃性と凶暴性が高く、レジェンド以外には決して懐かなかった為に長らく彼が側に置いていたが、九極天で唯一鬼灯が御する事に成功したので彼に託す事にした。それ以来、性格なども割と丸くなってきたらしい。

鬼灯曰く、やはりレジェンドが一番懐かれているようで日本地獄にレジェンドが来た時は仲良く亡者に罰を与えてるとの事。……そろそろどっかの鬼の始祖もそれを喰らわされる事だろう。

「いいなぁ……普段はこうやって可愛くていざとなったら凄く頼りになるカプセル怪獣……」

「いや、さっきも言ったけど親父が使ってるようなやつは勝手に出て

これないからこうはならねぇよ。あの人特製のカプセル使わないと駄目だって」

レイトの言葉にがっくりするリアス、朱乃、小猫。裕斗は苦笑しているが、一誠はある結論に達した。

「今のタイガ達って、ある意味カプセル怪獣か？カプセルないだけで」
「「えええ!?」」
「いや違うだろ！カプセル怪獣と俺達は！俺達はキーホルダーに……あれ？って事は俺達キーホルダーウルトラマン？」
「それじゃカプセル怪獣の亜種扱いされるだろ！それ言ったらエクスデバイザーに宿ったエックス先輩とかどうなるんだよ!?」
「……デバイスウルトラマンか」
「何それちょっとカッコいい」
「おい待てお前ら！デバイスって装置とか機械って意味だぞ!?サイバー繋がりはともかく機械って言ったらサロメ星人が作った親父達のパチモンと同種になっちまうぞ！」
「「コノデバイスガキニイッタ。エクシードエーックス！」」
「お前らエックスにぶん殴られて来い」

悪ふざけしたトライスクワッドはレイトに叱られていた。実際のエックスは気の良い兄ちゃんである。後輩にも優しいのだ。

ところで何故サーゼクスが来たのかという事だが。

「そろそろ良いだろうか？私がここに来た理由なんだが」
「三行以内で話せ」
「いや無理無理！無理ですって!?ねえ、私さっきからこの御方からの扱い悪いんですけど!?」
「お兄様の自業自得よ」

縁壱には厳しい視線を向けられリアスからも冷たくされたサーゼ

クスだったが、なんとか平静を取り戻す。

「まずは礼を言わせてほしい。妹の婚約を白紙「既に三行だ。帰れ」すいません本当に反省してるんで喋らせて下さい!!」

超万能過ぎる縁壱。プレビュー画面を確認したかのような正確さだ!……いやマジでどうやってんのこの人。

とりあえずリアスが再度頼んだ事でそれを聞き入れた縁壱によって漸くサーゼクスはまともに話せるようになった。

「ごほん!改めて……妹の婚約を白紙にしてくれた事に礼を言わせてほしい」

「嫌なら最初からしなければいいじゃないですか。お家問題云々以前に原因は貴方達でしょう?」

バッサリ言い切ったカナエ。リアスと縁壱もうんうんと腕を組んで頷いている。もはやサーゼクスは涙目だ。漸く本編でまともに関われたと思ったらこれなのだが、そもそも出番はあっても戦闘時の変身は本編入って序盤に一回あったきりの主人公(レジェンド)がいる以上そんな理屈は通用しない。本作において不憫とは寧ろ彼の為にあるような言葉である。

「……まあ、確かにそうなのだが。さすがに種としての存続も関わると言われたら立場上無視出来なくてね。君達二人の言葉で改めて気付かされたよ。あちらも『ライザーには良い薬だった』と婚約破棄を認めてくれた」

「まあ、認めなかったらあの方に頼んで殴り込みしてるところでしたし」

「継子(※つまり弟子)が行くのに私が行かぬわけにもいかないだろう。兄上にも声をかけて総力戦と洒落込むか」

『いや本気で勘弁して下さい!!』

カナエとアーシア以外が縁壱の言葉に本気で待ったをかけた。縁壱の兄である巌勝が動くという事は下手すれば神衛隊規模で動くかもしれない。それ以前にこの継国兄弟だけで三大勢力なぞ簡単に殲滅出来てしまう。

「そ、それでだね。その礼として君達を使い魔の森に招待しようかと」
「私とアーシアちゃんにはモスちゃんとゴモちゃんがいるので」
「ピキュ」「がお」
「俺も使い魔じゃないけどタイガ達がいるし」
「「(ふんす!)」」←ドヤイスクワッド
「そもそも私達には既にいるし」

まさにフルカウンター。もうやめてサーゼクスのライフはゼロよ!

「俺?」

ただのネタだ気にするな。ちなみに前話にいた黒歌や夜一は他のメンバーと共にハンター業でプラズマ怪獣を狩りに、グレイフィアは軽く顔出ししてそろそろ帰って来るであろうレジェンド達をいつでも出迎えられるようダイブハンガーへ帰還している為、ここにはいない。

現在仮住居にいるのはオカルト研究部(トライスクワッド含む)、カプセル怪獣三匹、縁壱、レイト(ゼロ)、そして客人(と思われているか怪しい)サーゼクスだ。

「いや、カプセル怪獣はともかく君の方は……」
「まあ、タイガ達といつまでも一緒とは限らないけど、どのみち今のレベルで使い魔とかゲット出来るとも限らないし。明日からはまた学校だからゆっくりしたいんで」

「そうよね～。というわけでお気持ちだけで結構です」

がっくりしているサーゼクスに縁壱が近付く。トドメの一撃でも言い放つかと思いきや、手にした分厚い書類をサーゼクスに手渡した。

「……これは？」

「悪魔側でＳＳ級のはぐれ悪魔認定を受けている黒歌という女性を知っているな？」

「ああ、勿論だ。それが何か？」

縁壱の切り出しにサーゼクス、それに小猫が反応した。

「彼女がはぐれ悪魔となった理由の真相、及び彼女の元主の所業に加え、彼女の現状などを事細かにあの方が記した物だ。これには彼女のはぐれ認定の解除嘆願書も含まれている」

「！」

小猫は夜一から聞いていた。黒歌を保護した人物が彼女のはぐれ認定解除の為に色々調べており、近々それを冥界の上層部に提出するという事を。

縁壱は折角冥界のトップに君臨する魔王の一角が来たのだからと、万が一にとレジェンドから預かった書類をこの場で直接手渡す事にしたのだ。

かつての世界での生前、鬼によって生まれる前の子供諸共妻であるうたを失った縁壱には家族がいなくなる悲しみを深く理解している。小猫へ笑顔を向ける縁壱に対し、小猫は感謝の涙を浮かべながら頭を下げた。

「なるほど……しかしこの量だ。今すぐに、という訳にはいかないが」

「元より承知だ。そちらには悪いが万が一に備えてそれは複製したも

の、現物はこちらが保管してある。熟読して内容を理解した後、しっかり公表してもらう事を望む。体裁を気にして握り潰すような真似はしないように」
「分かった。隅々まで目を通して然るべき判断をしよう。少なくとも悪いようにはならないだろうからね」
「あ……ありがとうございます！」

お礼を言う小猫に漸く周りの雰囲気も和やかになった。縁壱のサーゼクスへの印象も多少はマシになったようだ。
もし黒歌のはぐれ認定が解除されないとしたらレジェンドの事だ、あらゆる悪魔のしでかした所業を全勢力にバラ撒きかねないのだが（グレイフィアは除く）。

「私も今日の夕刻にはここを発つ。妻や子達も待っているし、兄上や皆に道場を任せきりなのでな」
「そういえば、縁壱先生のお兄さんって鬼に詳しいみたいですけど……」
「兄上はかつて鬼……それも上弦の壱という立場にいたからだ」
『!?』

まさか実兄が鬼になっていた事もそうだが、上弦……それも壱と言えば鬼舞辻無惨に次ぐ最強格の鬼。まあ、縁壱の兄だと言われれば納得がいく。以前まで師範代だった狛治は上弦の参。こっちも相当である。

「もう一人鬼だった者はいるが……もはや彼らは鬼ではない。本当の彼らを見てやってほしい」
「仲良く、出来てるんですよね？」
「ああ。兄上とは紆余曲折あったものの……漸く、歩みを共に出来た」

鬼とも仲良く出来る—そう考えていたカナエにとっては『元』であ

ろうと鬼と和解出来たというのは聞きていても嬉しいものだ。縁壱の笑顔がそれは間違いではない事を証明している。

「それでは私も冥界に戻るとしよう。使い魔の件は気が向いたら考えてみてくれ」

「……あ」

「どうかしたのかい？」

「いえ、たぶん気のせいなのでご心配なく。それより小猫ちゃんのお姉さんの件、どうかよろしくお願いします」

「それは勿論だよ」

そんな会話をしたカナエとサーゼクスだが、カナエの心中は穏やかではなかった。

何故ならちょっと冥界の様子を見に行くというグレイフィアに同行し、レジェンドと一緒に行った場所がどうも使い魔の森だったらしく、そこに居を構えていた『天魔の業龍（カオス・カルマ・ドラゴン）』ティアマットに襲われたレジェンドが完膚なきまでにフルボッコにしてしまった事を思い出したからだ。

結果、ティアマットがレジェンドの使い魔になるとか言い出したが「人間化と現世の常識を身につけてから出直して来い。そしたら考えんでもないぞ」と突き放した。あれから何も音沙汰無しなので諦めたのだろう……と思いたい。

その考えは甘かったと、後日後悔する事になる。

☆

ところ変わって京都。いよいよレジェンドらが駒王へと帰る時が来た。鬼灯はすっかりリフレッシュ出来たようで、一足先に赴任先の日本地獄へと戻って行った。まだ新幹線の時間までだいぶ余裕があるとはいえ、早めに行動しようとしていたのだが……

「うぅ……ぐすっ……光神しゃまぁ」
「ああもう、今生の別れでもないんだ。ほら、泣くな九重」

別れを惜しんだ九重にレジェンドが引っ付かれたままだった。オーフィスも対抗して引っ付いている。スカーサハとロスヴァイセもそうしたかったがなんとか我慢。リクに至っては駅弁の品定めをしていた。さすがベリアルの息子、鋼のメンタルだ。

「九重、光神様はお忙しいのだ。あまり無理を言うでない」
「母上ぇ……」

八坂としては九重と同じく別れを惜しみたいのだが、妖怪の長としての矜持もあるため我慢せざるを得ない。そんな二人を見かねてか、レジェンドはあるものを二人に手渡した。

「九重、八坂。餞別だ」
「これは……」
「光神様が着けてるのと似ているのじゃ！」
「多目的ブレスレットだ。色んな物を収納したり、通信も出来る。電波を使うわけじゃなくてこれと同種の物を持っている者限定だから、通信制限なども殆どない」

故意の通信妨害などは受ける可能性があるが、電波の通ってない場所でも通信可能な万能ぶりだ。

「また今度来るからな。指切りするか？」
「勿論なのじゃ！母上も！」
「わ……妾もか？仕方ないの……」

レジェンドの右手とは九重が、左手とは八坂がやる事に。

「「指切りげんまん、嘘付いたら針千本のーます！」」

漸く九重も笑顔になったところで、ジャグラーが姿を現した。手には何やら大きめの袋をぶら下げている。

「よぉ。そろそろ出発か？」
「ああ、お前にも世話になったな」
「だったら今度来た時も売り上げに貢献しな。ほらよ」
「「蛇倉苑の丼物弁当!!」」

すっかり蛇倉苑の料理が気に入っていたレジェンド、オーフィス、スカーサハの三人が匂いだけで即座に反応した。しかも大盛り。掴んだ客を離すまいとするジャグラーの商売人根性が見えた気がする。何せ弁当箱には店名や住所、電話番号まで入っていたし。

「ちゃんとジードとそっちの戦乙女（ヴァルキリー）の分も入ってるからな。んで、こっちはそこの母娘の分だ」
「ジャグラーさん、あの時は助かりました！」
「わ、私のも……ありがとうございます！」
「感謝なのじゃ！」
「今度は直接店に顔出しさせてもらうからの」

どうやらこの前のキリエロイドとの戦いで京都に住む宇宙人達から人気が爆上がりしたらしく、さらに味も良いので口コミでどんどん店の評判も上がっている中なんとか時間を作って出て来たという。

「こっちはこっちで何とかするからアンタらはそっちでしっかりやれよ。じゃ、俺は帰るからな。店員に任せっきりじゃ店長なんて名乗れないんでね」
「体には気を付けろよ」
「ジャグラー店長、我は必ず戦士の頂盛り食べに行く」

「おう。バージョンアップしとくから覚悟決めとけ」

あの時と同じく手をヒラヒラさせながら店に戻るジャグラーを見送り、レジェンドらも改めて八坂と九重に別れを告げ駒王へと出発する。

「さてと、新幹線が出る前に席に着くぞ。それからゼット。一時的に体貸してやるからお前も蛇倉苑の弁当食いな」
「えええ!?いいんですかレジェンド超師匠!!あ、でもそしたら超師匠の分……」
「よく見ろ。一個余分に入ってる。つまりそういう事だ」
「あ……ジャグラー店長あざーっす!!」

ゼットは窓から外に向かって見事なお辞儀を披露。その光景をリク達は苦笑しながら眺める。さり気ない気遣いが出来る男、ジャグラスジャグラー店長だった。本人曰く『なんとなくもう一個必要な気がした』との事らしいが、これは店が繁盛するハズだ。

「後は帰り道、何もない事を祈るだけだ。ゼット、変わるから早く俺の中に戻りな」
「イエッサーでふもっふ!」
「「「何だそれ!?」」」

また変なところから知識を吸収したゼットであった。ふもっふ。

☆

『タイガが地球へ行ったあああああ!?』
「いや、最初は遠目から見学するだけだったようなんだが、何かトラブルを察知したらしくてな」
『もしやタイガの身に何かが!?』

「ゼロの話じゃエネルギー切れ寸前まで行ったからグレモリーの娘の眷属と一体化したとさ。トライスクワッドの連中全員でだとよ」
『(チーン……)』
「タロウウウウ!?」

ベリアルの台詞を聞いてタロウは真っ白になっていた。ブラザーズマントまで真っ白だ。タロウ自身、ベリアルが悪いわけではないし、地球にいる80やゼロ、先に行ったレオやメビウスに責任が無いのも理解している。
で、やはりというかタロウの親馬鹿が発動した。

『父さん!今すぐ私に地球赴任の許可を下さい!』
『いや、ゴーデスの件もあるし次はグレートに……』
『そのゴーデスの魔の手がタイガに迫ってるんですよ!?ここは父として先達として私が……』
『タロウ、他の教官達が呼んでるぞ』
『あとヒカリもなんか用事があるからお前を連れてきてくれと』
『ゾフィー兄さん!?ジャック兄さんも!!ああ、待って下さい!!地球には私がぁぁぁ……』

ジタバタするタロウを必至に抑えながら引きずって行くゾフィーとジャックに、すまないありがとうと心の中で感謝するベリアルとウルトラの父。
その後、グレートへ直接頼みに行ったタロウだが、そこではマンとセブンとエースに拘束されながら退散するハメになったらしい。
こうして、リアスの婚約騒動を始めとする様々な事件は幕を閉じた。
しかし、徐々に増えていく問題は留まる事を知らず、そして始まったばかりに過ぎない。
だが、同時に遂に彼らも動き出す。レジェンドの後輩たる光神ウルトラマンサーガと、彼の有する【レジェンドエリア】最強部隊・神衛

隊が。

〈第三章へ続く〉

月光校庭のエクスカリバー、光神サーガと神衛隊
レジェンド一行の帰還、先遣隊の旅立ち

サーゼクスは冥界へ、縁壱は惑星レジェンドへと戻り、アーシアとカナエ以外のオカ研メンバーも久しぶりに自分達の家に帰る事になった。
一誠はもちろん、一誠の家に同居しているリアスや、一誠と一体化しているタイガらトライスクワッドは一誠の家に。朱乃と裕斗は自分達の家に。そして小猫は……

「いーやーにゃー！白音ー！行っちゃ嫌にゃー！お姉ちゃんと一緒にゃー！」
「黒歌姉様、我儘言わないで下さい」
「そうじゃぞ黒歌。あまり駄々こねて我儘故に嫌われては折角の和解が水の泡になるじゃろう」

小猫も自分の家に帰るというのを嫌がった黒歌に引き留められていた。夜一と小猫に諌められているがにゃーにゃーと涙目で小猫にしがみついている黒歌には聞こえているのかどうかさえ分からない。

「どうしたもんかのぅ。そろそろあ奴らも帰ってくるだろうし……」
「そうにゃ！未来の旦那様に許可貰って白音も一緒に済ませてもらうにゃ！」
「ミライさんってそっちの人だったんですか？」
「違うわ！なんでそういうところは姉妹そっくりなんじゃ!?黒歌が自分の旦那になる予定にしてるやつの事じゃ！」

トリプル猫娘の一角、四楓院夜一。ツッコミもいけるらしい。そしてミライことメビウスは己の知らぬところで風評被害（未遂）にあっていた。

「何にせよ、すぐには決められんじゃろう。今日のところは帰してやれ黒歌」
「えぐえぐ……」
「……また遊びに来ますから」

泣きながらも頷いて小猫を離す黒歌。小猫は夜一に頭を下げ、黒歌を軽く撫でて仮住居を後にした。これではどちらが姉か分かったものではない。

「やれやれ……今生の別れでもあるまいに。この台詞前回誰かが言ったような」
「うう……綺麗な夕焼けに対して私の心は雨模様にゃ」
「まったく、お主が自分で言ったようにレジェンドに聞いてみればいいじゃろう」

二人しかいなくなったのでレジェンドの名を普通に話す夜一。そして小猫が帰り黒歌も落ち着いた頃、見知った顔ぶれが姿を見せた。

「仮住居だが我が家に帰って……」
「レジェンドさんの家に居候しに……」
「「キターッ!!」」「きたー」

某ロケット仮面よろしく、握り拳の両手で空を突き上げながら叫ぶレジェンドとジードことリク。それに真似してるオーフィス。スカーサハは苦笑しながら見ており、ロスヴァイセは周りを見渡している。

というかリク、居候て……間違いではないが。

「おおぅ帰って来たか。向こうでも色々あったようじゃの」
「ああ、只今戻った。ダイブハンガーで詳しく話すがこっちがウルト

ラマンジードで人間体の名が朝倉リク。こっちが戦乙女のロスヴァイセだ」
「初めまして！」
「ど、どうぞよろしくお願いします」

リクの鋼メンタルはここでも健在だった。ロスヴァイセはさすがに緊張しているというのに。というかこの後に修羅場を経験するのはレジェンドなのだが。

「ふむ、お主がジードか。京都ではレジェンドらが世話になったの。で、そっちが迷子になった戦乙女とやらか」
「そんな事伝わってたんですか!?」
「C．C．がボヤいておったからのぅ。ま、儂らは気にせんから安心せい」

自らの醜態（というかは微妙なところだが）を知られていて「ああ」と顔を両手で覆いながら真っ赤になるロスヴァイセ。オーフィスは出会った（拾った）時同様によしよしと背伸びしながらロスヴァイセの頭を撫でている。

「こっちは良いとしてだ。なんで黒歌は俺の裾掴んでキラキラとした目で見ているんだ」
「レジェンド、小柄で可愛くてちょっぴりクーデレな妹は欲しくない？」
「いきなり何なのお前」

レジェンドは何の事かさっぱり分かっていない。ここで黙っていたスカーサハが助け舟を出した。

「つまりそなたの妹に関係する事であろう」
「そう！それにゃ！今なら私と結婚すると可愛い可愛い義妹が付いて

「そこでそういう話に持っていくでないわ！」……結婚はとりあえず置いておくとしても、白音の事で間違いないにゃ」
「大方一緒に住まわせてほしいとかそんなんだろ。別に構わんぞ」
「「「早っ!?」」」
「本当!?」

予想外の即答に夜一、スカーサハ、リク、ロスヴァイセはツッコミを入れた。黒歌は喜びの声を上げる。

「ただ、もう少し先になるぞ。近々サーガが神衛隊の先遣隊を連れて一足先に現地入り……つまりうちに来る。俺もアーシアを正式に巫女として迎えるに当たってアーシアを惑星レジェンドに連れて行く必要がある。それから俺の専用機の具合も見に行かねばならんのでな。お前の妹を住まわせるのはその後、俺が戻って来てからになるぞ」
「……どれくらいにゃ？」
「長くても一ヶ月はかからんだろうな。アーシアの巫女の件は日帰りで済むし、時間がかかるとしたら俺の機体の方だ。いざとなったらダイブハンガーへ持ち込んで最終調整を行う事になる」

レジェンドが一人の人間として戦う為の機体。あれからずっと束とクロエが調整を続けているが、動力源が特殊過ぎる為に結局レジェンドがいる間しか開発や調整が進まなかったので今まで掛かってしまっているのだ。一応、機体自体や武装は完成しているのだが。

「レジェンド、ロボット乗るの？」
「ああ。ウルトラマンとしての俺は力も影響力も強大過ぎる以上、安易に変身出来ん。加えて今はゼットへの変身が優先されるからな」
「……ゼット？」
「そうか、そいつの事も紹介してなかったな。実は……」

そういえばやけに静かだと思えば賑やかなゼットが喋っていない。
などと考えた瞬間……

「ご唱和下さい我の名を！

ウルトラマンゼェェェット!!」
「ぬおぉぉぉ!?」
「にゃあぁぁぁ!?」

今まで溜めモードにでも入っていたのかと思う程の声量で腕を大きく広げながらゼットがレジェンドと夜一＆黒歌の間に現れた。
……が、レジェンドの耳元でいきなりデカい声を出した事でレジェンドがゼットの脳天にお仕置きチョップを炸裂させる。

「レジェンダリーストライク!!」

バガァウ!!!

「ごふっ!?」

明らかに普通のチョップで出る音ではない。
ついでに技がどっかで聞いた事がある名前だ。エレメンタルなヒーローが使ってたような。

「耳元で叫ぶんじゃありません」
「だっていつまでたっても超師匠、俺の事紹介してくれないじゃないですか！だったら自分から自己紹介するしかないでしょ！」
「まあ、そこは悪かった。だが……だからと言っていきなりあんな登場の仕方だとご唱和云々の前に下手すりゃ相手が気絶するぞ」
「ウルトラすいません」
「気に入ってんのかソレ」

やっぱり見事なお辞儀である。体育会系ウルトラマンはみんなこうなのか。それはそれとして彼がゼットだという事と、訳あってレジェンドと一体化している事は一足先に二人に説明した。
この後、正式にダイブハンガーで説明する事になるが……とりあえずゼロに怒られるだろう事は確定済みだ。

「まあ、何にせよダイブハンガーへ帰ろうか。アーシアにもちゃんと教えないといけないし、三人も紹介しないといけないからな」
「……レジェンド、ちょっと待つにゃ。さっき『専用機』とか言わなかった？しかもその後でオーフィスがロボットって言ってそれを肯定してた」
「ん？ああ、言ったぞ」
「狡いにゃー！私も専用機欲しい！玄武剛弾！舞朱雀!!コード麒麟ー!!!」
「やかましい。ちゃんと作ってやるから喚くな」
「我も我も」
「儂も儂も」

黒歌に便乗してオーフィスと夜一まで強請りだした。まあ、予想は出来てたので考えてはいるという事をだけ伝えておいた。

「僕も僕も」
「俺も俺も」
「ブルータス、お前らもか」

……リクと、果てはゼットまで言い出したのだが。思い出してみればゼロからも強請られていた。やはり巨大ロボはロマンの塊らしい。C．C．が羨ましがられるわけである。
強請らなかったのはスカーサハ（常識枠）とロスヴァイセ（出撃費用や維持費が云々）だけだったようだ。

☆

―翌日の惑星レジェンド―

レジェンドの本拠地であるクリスタルシティからちょっと離れた、クリスタルシティが一望出来る郊外の高台。そこに建てられた和風屋敷とそれに隣り合うように建てられた大きなクリスタルの墓。

縁壱の兄であり神衛隊第一分隊『紅蓮』の一員となった継国巌勝の家と、彼の願いで建ててもらった彼に連なる者達の墓だ。母や妻、子供、そして子孫……さらには自分が人・鬼だった頃問わず屠った者達の為の。

「母上、皆……行ってくる」

その墓標に手を合わせながら、準備を終えた巌勝はサーガを始めヨーコ、オルガ、三日月を待っていた。彼らが巌勝や縁壱の母らに挨拶をしたいと申し出てくれ、巌勝の屋敷を合流地点にしてくれたのだ。

そこへ、彼らに先んじて到着した者達がいた。

「兄上」

「縁壱か。いや、縁壱一家と言うのが正しいな」

実弟の縁壱や妻のうた、あの日から立派に成長した息子の縁次と娘のかなで。巌勝が留守の間は専属のホームキーパーだけでなく彼らが屋敷や墓の管理をしてくれるとの事。

「私がいない間はここを頼む」

「無論です。私の代わりに道場を纏めて下さった恩もありますから」

「いや、私としても良い鍛錬になった。神衛隊に入ったばかりの頃は機動兵器の操縦訓練で手一杯だったからな。鈍りが一気に取れて勘

を取り戻せたぞ」

笑いながら言う巌勝にかつての鬼だった頃の面影は等に無い。縁壱が慕った幼少期の優しい兄だった。

「お義兄さん、気を付けてくださいね」

「俺も父上や叔父上のように、立派な剣士になります！長男として！」

「私だって長女だもん！妹だけど……」

義妹には心配されたが、甥と姪には心配いらないとでも言うように力強く後押しされた。

巌勝は少し前に顔出しで道場に来た狛治一家をもてなした時に狛治と話したのだが、縁壱の子供達はどことなくある兄妹にそっくりだそうだ。

竈門炭治郎、禰豆子という兄妹に。

兄は長男でありヒノカミ神楽―日の呼吸を使い、妹は鬼になりながらも人を喰わずに逆に人を助けた。

縁次やかなでがその生まれ変わりにしてはズレがあるのではと思ったが、そもそも『弾かれ』れば時間のズレ自体が起きるのはそう珍しくない。現に時代や次元を超えて、こうして縁壱と和解出来た。

彼らが向こうで生を終え、転生の輪に入る前に弾かれてこちらで転生したとすれば納得がいく。

だが、そんな事はどうでもいい。

巌勝にとって、守るべきものが増えただけだ。

これから先、レジェンドやサーガ、そして自分達と共に並び立つであろう若き可能性という大切なものが。

「うたも縁壱を頼むぞ。縁次、かなで。鍛錬を怠るな。積み重ねた努力はいつしか明確な形となってお前達を助ける」

「はい！」「うん！」

「良い返事だ。父や母を支えてやれ」

二人の頭を撫でる巌勝と、それを笑顔で見守る縁壱夫妻。そうこうしているうちにサーガ達も到着した。

「遅くなってすまない。まさか準備がここまで手間のかかるものだとは……」

「だから言ったじゃない、サーガ様。老若男女関係なくこれからの事を考えたら要り物が沢山あるんだから、少しずつチェックして用意していかなきゃって」

「まあ仕方ないだろ、ヨーコ。大将の方も引き継ぎだの何だので時間取り難かったんだからよ」

「オルガ、それはそうだけどサーガ様が人間体でいる事が多くなったのは比較的最近の話よ？こういうのは最初の内に習慣付けておかないと後々響くんだから」

「確かにヨーコ姐さんは早かったよね」

「あっさり言うなよミカ……早いっつーか楽しみにしてたような気がしないでもないけどな……」

「何か言ったかしらオルガ君？」

「何でもないです！」

ヨーコの笑顔の威圧にオルガは背筋を伸ばして返事した。あのカミナを黙らせられる彼女はまさに超次元グレン団女性陣最強である。

「巌勝は……うん、バッチリみたいね。師範代しながらなのにちゃんと用意出来てるじゃない」

「向こうの生前でも遠征経験はあった。機動兵器の訓練先でも仕込まれたからな」

「訓練先っていうと……」

「私が受領予定だった専用機はＭＳ（モビルスーツ）の類でな。第四分隊の方々に世話になった」

神衛隊第四分隊はＭＳやＭＡ（モビルアーマー）、果ては艦隊運用のプロフェッショナルが勢揃いしている部隊だ。専用機の開発方針が決まってから巌勝は暫くの間そちらでみっちり訓練していた。

「ちなみに担当教官は誰だったの？」
「アムロ・レイ大佐殿だ」
「マジかよ!?あの『白い流星』直々に操縦技術教わったのか!!」

これには縁壱さえ驚いた。第四分隊ＭＳ隊隊長アムロ・レイ大佐。東方不敗が最近（と言っても年数としては結構前になるのだが）解決したかの第二次ネオ・ジオン抗争にて「ただ戦争の道具にされるのはもう御免だ」というアムロを東方不敗が勧誘し、サーガと面談後に第四分隊ＭＳ部隊隊長に就任した。大佐という階級はその時に与えられたものだ。

普段は機械技師として生活しており、有事の際に第四分隊として出動する。本人は本当に必要な時だけ戦うというこの生活が大層気に入っているようで、狛治夫妻が物要りな時は手伝ったりと日常生活も充実しているらしい。

巌勝の家の電化製品もアムロのお勧め品が殆どだ。

そのアムロの戦績は想像を絶する。乗りたてだった１５の時でさえ数多の死線を超え続け、神衛隊に入ってからはいざという時の切り札であるため殆ど講義や巌勝が受けたようなマンツーマンの訓練が主流なのだが、一度戦場に立てばまさに一騎当千。あの三日月ですらシミュレーターにも関わらず一度たりとも勝てた事がない化け物だ。

当然巌勝もコテンパンにされたがレジェンドと生身でやり合った時よりは酷くはなかった事と、努力する事に関してはレジェンドや鬼灯に認められる程の熱心さを持つ巌勝は死にものぐるいで特訓を重ね、あのアムロのＨｉ－νガンダムのフィン・ファンネルを全て撃ち落とすまでに至った。……シミュレーターで、だが。

しかもその後に殴り合い宇宙で撃破された。

「あのファンネルとやらを撃ち落としたまでは良かったがまさか武器をかなぐり捨てて素手で殴りに来るとは思わなかった。おかげでモニターは死ぬしジェネレーターも異常が出るしで結局敗けた。まあ、自分の明確な成長が実感出来たのはこの上ない収穫だったぞ」
「厳勝さんもそこまで行ったんだ。シミュレーターでだけど、俺も撃ち落とし終わった直後にハイパー・メガ・バズーカ・ランチャーの零距離射撃喰らって沈んだ」
「……よくそれで戦意萎えなかったわね、二人共」
「むしろ燃えた」
「つーかそれ、シミュレーターのＣＰＵ設定なんだろ？それでそんだけ強いって何なんだあの人……」

精神的に燃えて、（シミュレーター上で）機体も燃えた。
神衛隊に所属してからのアムロのＭＳ戦績は未だ無敗。レジェンドとサーガの機体が完成すればどうか分からないが、おそらくそれでも良い勝負になるだろう。
そして、そのデータを元にアムロの全面協力を得て束がつい最近完成させ、狛治に先駆けて厳勝に渡したのだ。駒王への出発に間に合うように。

「んで、出来上がったお前の機体はどんなやつだ？」
「神衛隊初のターンタイプ『ターンＸ』。一度シミュレーターで動かしてみたが、癖はあるものの私に合っているようだ。それから……」
『それから？』
「ターンＸに乗ると何故かハイテンションになる」
『ホントに何故!?』

一応自分でも見てみたが確かにそうなっていたし、その自覚もあった。何故だ。どこぞの御大将の魂でも宿ってるのか。
「それはそれとして、私がアムロ殿の元で訓練していた際の乗機アス

トレイレッドフレーム……その武装の一つに日輪刀ではないが刀があってな。東殿がそのままターンXの武装として用意してくれた。おかげで培った戦法も使えるというもの……どうした縁壱、縁次」
「いいなー……」

まさかの日の呼吸親子が揃って羨ましがっていた。剣士としては愛機で刀が振るえるなど願ってもない事だろう。

「そういえば縁壱さんって」
「……MS適正が壊滅的だった」

沈んだ表情の縁壱。生身では最強クラスの彼もどうやら完璧ではなかったらしく、もし操縦するなら動きをトレースするような機体しか無理だろうと言われたのだ。
つまり時を経て意外な形だが、限定的であるものの厳勝は遂に縁壱を超えたのである。

「単にお前の反応速度に機体がついていけないのかもしれん。そう落ち込むな縁壱」
「思い切り動かしたら操縦桿がもげました」
『おい!?』

反応速度もそうだが力加減も学ぶべきだった。
そんな会話も程々に切り上げて継国兄弟の母らの墓への黙祷も済まし、いよいよ出発の時が来た。サーガとオルガ以外は愛機も収納ブレスレットに格納されている事を確認し、準備が出来た事をお互いに知らせ合う。

「四人共、準備は完了したようだな」
「ええ」
「問題ありません」

「俺もだ」
「こっちも大丈夫」
「よし、これより先輩のいる駒王町へ次元転移する」

サーガの最後の確認にもそれぞれ短く完了の返事を返し、それを確認したサーガが全員を光で包む。
縁壱一家に見送られながら、サーガと神衛隊の先遣隊四人は駒王へと跳んだ。

☆

一方、銀河遊撃隊移動基地ガーディアンベースにも光の国からグレートが到着。総司令官であるベリアルや、同様に追加赴任するダイナとの打ち合わせを済ませていた。

「……という訳で遅くなって申し訳ありません」
「いや、それじゃ仕方ねえだろ。ゴーデスの危険性はこの世界の火星での戦いも含めて三度も経験してるお前や、師匠が一番分かってるからな。ていうかタロウはお前にも直談判しに行ったのか……」
「はい。目の前でウルトラマンさん、セブンさん、エースさんに抱えられて連れて行かれました」
「悪い、俺想像してちょっと笑っちまった」
「気にすんなダイナ。俺は頭が痛くなった」

なんかサーゼクスと親交を深めて以来、タロウの親馬鹿ぶりに拍車がかかっている気がする。ウルトラの父やセブン（と自分）がまともだからまだマシなのかもしれないとベリアルは溜息を吐きつつ、今後の予定を話す。
「既に地球にはうちからゼロとジード、それからトライスクワッドの三人に加えてゼットが行ってる。ゼロとジード以外はほぼアクシデ

ントだけどな」
「タイガ達はともかくゼットはなぁ……アレ確信犯だし」
「仕方ないだろう、この際。そして我々宇宙警備隊からはレオさんに８０先生、そしてメビウス。そこに私とダイナが加わるわけか」
「お前達二人はゴーデスとの戦いが終わるまでっていう一時的なもんだがな。あとこれは師匠からの情報だが……ダイナも知ってるだろ、師匠の後輩の光神ウルトラマンサーガが直属の部隊を率いて本格的にこっちに来るそうだ」
「ちょっ!?マジかよ総司令！」
「マジだぜ。一先ず先遣隊の数名を連れて現地入りするそうだ。いくら顕現するのに協力したからってあんま尊大な態度は取るなよ。アレは師匠と同じくぶっちぎりの規格外だ」

確かにその通りだ。ダイナとゼロ、さらにはコスモスまで共闘したにも関わらず傷一つ付けられなかったハイパーゼットン（イマーゴ）を、人間の助力があったとはいえ単独で、しかもほぼ無傷と言っていい状態で倒したのだから。

「ついでにそのサーガが倒したのと別の個体のハイパーゼットンを師匠んちの家族がカプセル怪獣にしてるぞ」
「ホントなんなのあの一家!!」

そうツッコミたくもなるだろう。しかもそれと互角に戦える怪獣王もいるときた。これ以上は過剰戦力じゃね？
……だが、あながちそうとも言えない。これから先も未知の敵が現れるかもしれないし、別の世界の危機にも立ち向かう必要が出てくるかもしれない。

果たして今度は何が起きるのか。特異次元転移現象の調査も進まぬまま、物語は少しずつ進んでいく。

〈続く〉

先遣隊到着、ついでにもう一匹……？

サーガ及びオルガら先遣隊が惑星レジェンドを出発する前日、即ちレジェンド達が黒歌や夜一と共にダイブハンガーへと無事帰還してからの事。

「お前マジで何やってんだ!!」
「すっ……すいませんゼロ師匠!!」

案の定ゼットはレイトから雷を落とされた。あまりの声量にアーシアはビクッとしてレジェンドにしがみつくし、黒歌なんか「鼓膜がー！」と騒ぎ出すし、黒歌よりさらに耳が良かったスカーサハなどぱったり倒れて一瞬意識が飛んだ。マジで大丈夫か。

「ゼロ、怒るのは当然だし気持ちも分かるが落ち着け。俺自身帰った直後に我が身でなくとも怒鳴られるのは堪える」
「あ、悪い。だけどな……警備隊の方は済ませても遊撃隊の訓練すっ飛ばしてこっちに来た挙げ句、プラズマスパーク・ブレス着けて来ないでレジェンドと一体化するハメになった上、ジード用のゼットライザーまで忘れてんだぞ？」
「それに関しては俺やベリアル、ついでにジードからも説教しておいた。ブレスについてはデータをこちらで取りつつ随時ガーディアンベースに送って完成させてもらう手筈になっている。ゼットライザーの方はジードが万が一に備えてベースにて保管か、ゼット用のブレスが出来次第、一緒に持って来るかと言う事で本人と相談の上、決定したからそちらも問題無い」

京都にてベリアルと通信にてやり取りを行った結果をレイトに報告するレジェンドだが、実はそうなると逆にゼットライザーの方はともかく、ブレスが完成してからが問題だったりする。何故なら……

「ゼット……お前、人間体になれんのか？」
「ウルトラ無理ですゼロ師匠」
「「予想通りだよこの野郎」」

という訳だからだ。元々分かりきった事だったとレジェンドとレイトは途方に暮れた。レジェンドと一体化（ただし一部の場所では単独で実体化可能）してる間にそれが出来る様に仕込まねばならない。……ここで一瞬レイトはゼットがレジェンドと一体化したままの方が面倒なくなるんじゃないかと思ったのだが。

「レイト、気持ちは分からんでもないが俺らとしても不便だし、何よりオーフィスが我慢出来なくなって暴走しかねんぞ」
「だよな……あれ？今ゼットの奴、実体化出来てるよな。ダイブハンガーとか仮住居限定ならイケんじゃね？」
「……あ」

確かにそうだった。ゼットに聞いてみても身体やエネルギーに支障はないとの事で、レジェンドが外出する際は問答無用で一体化ないし随伴する事以外、ダイブハンガーでの実体化に問題無さそうなのでそうする事にした。その方がお互い……というか色んなところでストレスが無さそうだ。一部で増えそうな気もするが。

「すまん、ゼロ。かなり助かった。オーフィスなんかゼットを俺から叩き出すとまで言ってたんでな。割とマジで」
「それ下手すりゃあんたをボコる発言に聞こえんだけど」
「我、レジェンドにそんな事しない」
「ゼットにはする気だったのか……」

こうしてゼットの命は守られた。……が、今度はレジェンドの命が危なくなった。

「それではレジェンド様。こちらの方についてご説明頂けますね？」
「わ、私ですか？」
「遂に来たか……」

当のロスヴァイセや理由を知るオーフィスやスカーサハ、ダイブハンガー待機組を除き、残りの……所謂修行組の面々の纏うオーラが怖い。気付いてからというものアーシアでさえ頬を膨らませて引っ付いている。
とりあえず事情なんかを説明すると納得してくれたが、今度はまさかの……

「リクさんも安易にそんな事は口に出さぬよう」
「あれぇぇぇ!?何で僕も責められてるの!?」
「諦めろリク。雇う案を出したのはお前だ」

彼女をレジェンドが雇えないかと言ったリクにまで飛び火した。まあ、仕方ない。がっくりしたリクだったが、これ以上はレジェンド共々責められなかったので良しとしよう。
続けてレジェンドはアーシアを今度惑星レジェンドへ連れて行く事と、明日にもサーガが先遣隊を連れてこちらへ来る事も伝えた。

「アーシア、惑星レジェンドでの巫女任命の儀はそう堅苦しくも難しくもない。ただ俺の住まう場所で光気のシャワーを浴びるだけだ。渡した巫女装束を着た状態でな」
「わ、分かりましたぁ……」
「安心したか？」
「はい……ちょっと不安だったので……大勢の人の前に出たりとかするのはまだ慣れなくて」
「最初はそんなものだ。場数を踏めばそのうち慣れてくる。焦ってやろうとしなくていい。そもそも今回はやる事も割と地味だからな。参加するのも俺とアーシアだけだし」

レジェンドの巫女という立場は、即ちレジェンド直属の九極天らと同等、もしくはさらに上の扱いになる。孤児院出身の彼女からしてみればプレッシャーは相当なものだろう。だが今回は儀式というより禊に近い形なので気分も楽になったようだ。大衆の面前に立ったりするわけでもない。

「とりあえず、行くのは今度の学園休みの日だな。簡単に済むし日帰りも余裕、軽く観光する時間も出来るだろう」
「はい！楽しみです！」
「おそらくはアーシアをこちらに帰してから、俺はまた惑星レジェンドへとんぼ返りする事になる。先にそれも言っておく」
「どうしてですか？チーフ」
「俺の専用機を調整する為だ。機体や武装の開発と組み上げは完了しているが、如何せん俺の作った動力源が特殊過ぎてな。下手に弄って大惨事になるのもいかんと言う訳で、俺がいない間は開発も調整も満足に出来なくて今の今まで掛かっている。正直今回の滞在でも調整が間に合うか分からん」

レジェンドの愛機となる機体は表面上完成しているものの、動力と各部及び武装の出力調整が困難であり、今回はそれを解決すべくあちらに滞在する事になる。
とはいえ状況が状況の為、あまりそちらに長居する事も出来ない。最悪ダイブハンガーへと持ち込んで調整する事も視野に入れなければならないだろう。

「……なあ、レジェンド。それって戦闘機とかじゃなくてロボだよな？」
「ああ。カテゴリとしてはＭＳに分類されるだろうが、出力が出力だから実質分類などあっても無いようなものだ」
「うおああああ!!俺のも！俺のも頼むよ師匠!!『トランザム!!』とか『ラ

イザァァァ!!ソォォォド!!』って叫ばせてくれよ!!」
「サーガが言った方が様になるよなソレ」

普段の名前呼びから師匠呼びになってるレイト。レジェンドとしては髪の色以外まさにその本人まんまな人間体のサーガが言った方がそっくりだと思っている。厳密には違うが。
理由はレイトが言っていた台詞、実はサーガが何故か持ち帰って来た映画『ソレスタルビーイング』で得た知識だったからである。なんでアレ参考にしたの。

「どのみち束やクロエの協力もいるだろうし、案外こっちに来たがるかもしれん。あまり過度なものは叶えられんが、とりあえず機体がほしい奴はどんなのが良いか希望を纏めておけ。束の気分次第で実現する可能性があるぞ」
「……確実な方法は？」
「ない」
「例外とすればレジェンド様を彼女に差し出すという方法がありますが」
『それは絶対に駄目!!』
「ええ、さすがに私もそれは納得出来ません。やるなら一夫多妻制を利用します」
「烈、お前の意見全く笑えないんだけど」

後者は（レジェンドの意見は）ともかく、前者はぶっちゃけレジェンドと束がゴールインしてしまえば束の気分が最高に良くなって何でも作ってくれそうだというものだが、やはりそれは駄目らしい。
ゼロ、ジード、ゼットの三人組は割と乗り気だったのは黙っておく。明るみに出れば確実に悲惨な目に合うだろう。一家女性陣、特にレジェンド一家最凶を敵に回して勝てる気が全くしない。たぶん変身前にお陀仏だ。

「それでチーフ、先遣隊とやらは誰が？サーガはわかりますが他の者について詳細が明らかになっていないんですが」
「そういえば脱線しまくってゲンの言う通りそっちを説明してなかったな。サーガ以外に来るのは四人。うち一人は縁壱の兄だ」
「それって元上弦の壱って鬼だった……」
「ああ。だがそれは過去の、しかも別の【エリア】での話。今は神衛隊第一分隊の参謀長を務めている。おそらく神衛隊中、生身での戦闘力は最強だろう。正直九極天にいてもおかしくないレベルだな。操縦技術もあいつのお墨付きだ」
「あいつ？」
「第四分隊ＭＳ部隊隊長アムロ・レイ」

Ｃ．Ｃ．はピザを加えたまま固まり、スカーサハはソファーからずり落ち、グレイフィアはまさかと思う程盛大にすっ転んで、さらには卯ノ花まで茶を噴き出した。
トドメにレジェンドはグレイフィアがすっ転んだ時に飛んだポッドが顔面に直撃。さすが本作最強の不憫。

「何コレ何で俺あいつの名前言っただけでこんな目に合うの」
「も、申し訳ありませんレジェンド様!!」
「いや、別に良いんだけどさ。慣れたよ、慣れたくないし慣れるのもおかしいだろうけど」
「レジェンド様、おはぎどうですか」
「貰う」
「なんかもう達観しちゃってますよねー。仕方ない気もするけど」

レジェンドはハリベルから勧められたおはぎを頬張りつつどこか遠い目をしている。乱菊もこれには同情した。
グレイフィアは主に無礼を働いてしまったと涙目でレジェンドの顔に濡れタオルを当てているが、彼女がわざとやる訳がないのでレジェンドはよしよしと撫でながら気にしてないと慰める。

「そのアフロ・レイって誰なんですか超師匠」
「お前はネタで誰かがやるだろうと思った名前間違いをナチュラルにするなよ」
「ウルトラすいません」
「二話連続かよオイ。お気に入りか？お気に入りなのか？」

ゴホンと咳払いして、レジェンドはアムロの事を説明する。神衛隊入隊から現在に至るまでシミュレーターＣＰＵでさえ無敗、戦場に出ればその時点で勝敗が決定してしまう程の実力を持つ『白い流星』。
さらに卯ノ花が付け加えて「どんな一般的な武装でも彼が使うと必殺武器になる」と説明するとさすがに殆どが真っ青になっていた。

「私もシミュレーターでガリバーを使って対戦したがな、一分と保たなかった」
「いや、アレってレジェンドが作ったやつだろ!?それ使って一分保たないってどんだけだよ！」
「それだけのレベルだと言うわけだよ。なんならシミュレーターでやってみろ。あまりの実力差に軽く絶望しそうになるぞ」

Ｃ．Ｃ．はやれやれと肩をすくめるが、レイト他数名はシミュレーターのある格納庫まで突っ走って行った。

「……どれくらいで戻ってくると思う？」
「あの中ではレイトが多少は保つだろうな。次点で黒歌あたりか。教え子や鉄華団のトップエースでさえファンネルを落とすのが限界だったんだ。にわか仕込でどうにかなるもんじゃ……もう帰って来たな」
「早過ぎだろ」

レジェンドとＣ．Ｃ．がそんな会話をしていたら先程出て行った

ばかりのレイト達が思いっきり暗くなって戻って来た。

「何なんだよアレ……マジで何なんだよ……」

「開始後すぐに蜂の巣にされたにゃ……」

「何であんな超機動でピンポイント射撃キメてくるんじゃ……」

「僕は真正面からビームサーベルで斬られたよ……」

「俺はなんかすんごいビーム砲で蒸発した……ウルトラショック……」

レイト、黒歌、夜一、リク、最後にゼットまで白い流星の洗礼を受けたようだ。これで如何に『フィン・ファンネルだけでも全機落とした』という厳勝と三日月がどれだけ凄く、アムロがその遥か先にいるというのが分かるだろう。

「まあ、なんだ。サーガ以外は、そのアムロの直弟子で第一分隊紅蓮の参謀長、第三分隊鉄華団の団長とトップエース、それに第二分隊羅厳の参謀長が来る。これからは家族として仲良くしてやってくれ」

『はーい』

今だどんよりしている五人はそのままに、長旅での疲れを癒やすべくレジェンドは一足先に寝る事にした。無論、オーフィスやアーシアも着いていく。そして今日はおまけで……

「……眠れん」

カナエまでくっついて来た。オーフィスを身体の上に、右側にアーシア、左側にカナエが陣取って眠っており、寝返り一つ出来ない状況である。しかしこれで尚、全く動揺せず冷静さを保っているレジェンドはまさに理性の面でも規格外だった。

「横になる前に顔にタオルでも被っておくべきだったか」

……なんか焦るどころか一周回って本来の性格になってる気がする。レジェンドにとってこの状況は戦闘と同じなのか。そんな感じで結局寝付いたのはそれから二時間後だったそうな。

☆

「「行ってきまーす!!」」
「それじゃ、私も行ってくるわ。今日は早く帰れそうだから」
「ああ、気をつけろよ。主にやらしい視線を送り付けて来る連中に」

元気よく久しぶりの駒王学園へ登校していくカナエとアーシア、平常運転な涼子。レジェンドの心配は三人が変態共から迷惑を被るハメにならないかという事だが、何かあればだいぶ回復したカナエがぶっ飛ばすだろう。

ダイブハンガーから仮住居へと転移し、そこから三人でお喋りしつつ登校する。

三人が仮住居の敷地から離れて少しした後、敷地入口が大きく光りそれが徐々に収まるとサーガやオルガ達が現れた。

「到着だ。と言ってもまだ仮住居とやらの敷地入口だが」
「ふむ、自然が多い。鍛錬にはもってこいの場所だ」
「町からはちょっとだけ離れてるのね。ホントにちょっとだけなんだけど人払いの結界とかも完備してるみたいだし」
「旦那の事だしな。そこらへんは抜かりなしってわけだ。町も割と大きくて活気がありそうだ。退屈はしなくて済みそうだぜ」
「サーガ様、皆も早く行こう。俺、朝ご飯食べてないんだ。バルバトスで搬入作業手伝ってたから」

各々の感想を述べ、空腹の三日月の事も案じてすぐに仮住居へ向かう。雑談しながら道なりに進むと仮住居が見えて来て、そこで見たも

のは……

「……む？」

ファンタジーっぽい格好をした何かを引き摺っているハリベルだった。

「初っ端から変な光景見せられたァァァ!?」

「ちょっとこれどういう状況!?」

オルガとヨーコはよもや事件現場っぽい何かに遭遇するとは思わず派手にツッコんだ。厳勝は家屋を眺めているし、三日月は空腹の為そんなものを気にしてはいない。

そんな中、やはりサーガは格が違った。

「落ち着け二人共。今先輩にテレパシーを送ったところもうすぐ来るそうだ。あと三日月の事も伝えたらおにぎりを間に合わせ程度だが用意してくれたらしい」

「さすがサーガ様（大将）仕事が早い!!」

「ホント？サーガ様ありがとう」

「そしてそこの者、それは何だ？」

「不法侵入者だ」

「なるほど」

厳勝とハリベルは何やら短い言葉ながら通じたようだ。オルガとヨーコは「いや、それだけで分かるか!?」と思っているが。そんな時、レジェンドが到着した。

「おーう、サーガに先遣隊諸君いらっしゃい。三日月、ちとこれで昼まで間に合わせときな。昼は豪華だから」

「うん、ありがとうレジェンド様。これだけあれば十分。昼が楽しみ

だ」
「で、ハリベル……それ何だ？」
「不法侵入者です。この日本でこの格好はないと思いますが」
「いや日本じゃなくても普通ないだろ、んな格好現代社会では」

そりゃ町から少し離れてるとはいえ白昼堂々ファンタジーな格好してる奴は殆どいないだろう。普通に考えて。

「うう……何で私ばっかり……」
「ん……？」

レジェンドはよく見てみるとその人物が何かに似ている気がするので、自身の記憶を思い返してみるのだが心当たりがいまいち曖昧だ。そんな時、オーフィスがやってきた。

「レジェンド、どうしたの？」
「ん？いやな、コレが何か似ているというかどこかで見たというか……どうも思い出せなくてな」

レジェンドがハリベルの掴んでいる人物を指差す。いくらなんでもコレ呼ばわりはさすがに酷だと思うのだが……その人物を見たオーフィスはあっけらかんと言い切った。

「あ、ティアマット」
「は？」
「うう……はっ!?オーフィス!?それに……！」

その人物に視線を向けられ、レジェンドは思い出した。思い出してしまった。その人物は……

「風の王国ローラントオオオオオ!!」

『何それ!?』

そう、どこぞの伝説三作目に登場する王国の王女そのまんまなのだ。その人物―ティアマットがよりによってそんな姿でここにやって来るとは……グラブルでは似た名前のティアマトという星晶獣が風属性。

だから本章が聖剣編&そっちが風属性なのに加えて、元ネタのなった人物のクラスチェンジ先にドラゴンなんちゃらがあった事が組み合わさってそうなったのかは不明だが、とにもかくにもまさか町中をそんなアマゾネスな格好で歩いて来たわけではあるまいな……

「レジェンド様！私やりました！人間化出来ましたよ！これで使い魔にしてくれますよね!?」

「お前がティアマットなのと何でそんな姿なのかはこの際置いといて、俺と初邂逅した時の尊大な口調はどうした」

「あんなものただのポーズですよ！だって他の龍王からも『そんな口調じゃ龍王としての尊厳に関わる。もっと威厳を出した喋り方にしろ』とか煩く言われたから仕方なく！それはもう仕方なく言ってたんです!!」

「レジェンド、ティアマットは元々うるさい」

オーフィスからの一撃！こうかはばつぐんだ！

「うううー！オーフィスだってよく喋るようになってるじゃないですか！ちょっと前まで静寂どうの言ってたくせに！」

「我、レベルアップした。レジェンドや皆と賑やかな方が楽しい」

「そんなの駄目です！アイデンティティがなくなっちゃいますよ!?」

「……ぷいっ」

ぎゃあぎゃあ騒ぐティアマットに対してオーフィスはそっぽを向いた。しかもさり気なく（故意に？）レジェンドの服の裾を掴むもの

だからティアマットは更にヒートアップする。まあ、自分はハリベルに引き摺られてるわけで。

「あああ!?もう、いい加減離してくださいよ！敵じゃないって分かりましたよね!?」

「敵ではないが不法侵入者に違いないな」

「どっかの魔王と一緒にしないで下さい！結界を破壊しようとなんてしてません！」

違う、そこじゃない。冥界でサーゼクスがド派手なくしゃみをしてそうな気がするが、それはいいとして。

「……俺達はどう反応すればいいんだ」

「あそこの二人？二匹？ああもう、どっちでもいいけど落ち着かせないと話にならないわよ！」

「そうは言ってもな……アレ片方が喚いてるだけだろ」

「……ドラゴンは翼や尻尾に高い栄養価があると聞く」

『!?』

おにぎりを頬張っている三日月はともかく、巌勝が呟いた台詞に全員が反応した。そして全員の視線を集めた巌勝が次に言った言葉が……

「出汁に使えないだろうか」

「いやあああああ!?食べられる！私食べられるの!?はっ!?もしかしたらオーフィスの方かも!?」

「やだ。そうなったら我、全力で抵抗する」

「食べられたくなかったら仲良くしろ」

「はい」「うん」

「サーガ様、黙らせました」

「……助かる」

「よく二人がドラゴンだってわかったわね、巌勝」
「元鬼だからな。人外は感覚で理解出来る。喜ぶべきかは微妙なところだが」

ティアマットはともかくオーフィスは巌勝相手でも優位に立てそうなんだが、なんとかなったようだ。黙らせ方に若干本気で調理しようとしてた気がしないでもない。

「結局どうするの？俺はなんでもいいけど」

三日月がおにぎりを食べ終えてダイブハンガーへ出発したがっている。確かに向こうでも部屋の整理とか色々やるべき事はあるし、いつまでもグダグダやっていられない。

「常識に関しては教育し直すとして、まあ約束したし……仕方ないか」
「いいんですか!?では早速……」
「おいやめろ何いきなり脱ぎだそうとしてるんだお前は」
「レジェンド様、知らないんですか？私達ドラゴンは使い魔になる時、身体を重ねるという風習が……」

あ、コイツ嘘言ってるなと感じたレジェンドはオーフィスを見ると、オーフィスは首を横に振ってその風習を否定した。

「ドラゴンにそんな風習ない」
「……ちっ」
「おいコイツ今舌打ちしたんだけど」

だがティアマットはすぐ後に知る事になる。ここでそんな事無理にやらなくてよかったと。そもそも何故オーフィスがここにいるかというと、今回はレジェンドにくっついて来たわけではなく、追いかけて来たわけでもない。

「そういえばオーフィス、日向ぼっこするとか言ってたのになんでこっちに来たんだ？」
「ん、ここならゴジラが一緒でも認識阻害かかってて大丈夫だからこっちにした」
「「「「……ゴジラ？」」」」

オーフィスがくるりと後ろを向くと……

『グゥウウウ……』

ウルトラマンよりデカい凄そうなのがいた。

「いやあああああ!?」
『うるせえなメストカゲ』
「メッ……!?それ私の事ですか!?これでも私、五大龍王の一角なんですよ!!」
『そうに決まってんだろ。オーフィスならいざ知らず、お前如きがオレ様を驚かそうとするなんざ１００万年早いんだよ。どうしてもってんならハイパーゼットンぐらい強くなってから来い』

そのデカくて凄そうなのが怪獣王と呼ばれるゴジラである。なんとかティアマットは言い返そうとするがプレッシャーが半端ないおかげで涙目になるだけだ。
そもそもハイパーゼットン自体、二天龍の片割れをあっさり瀕死にしたゼットンより遥かに強大な存在。そんな奴とタイマン張れるゴジラに喧嘩売ったら即座にフルボッコ確定だろう。おまけにゴジラも売られた喧嘩は普通に買うから「やっぱ今のナシ！」は通じない。
ちなみにゴジラとティアマットの会話、レジェンドやサーガ、オーフィスなんかは普通に聞こえるが、ハリベルや先遣隊のメンバーにはティアマットの声に対してゴジラが鳴いているようにしか聞こえな

い。

「おー、そっちの姿は久しぶりだな」

『海の中なら何度かなったが町中じゃそうそう元の姿に戻れないからな。たまにはいいだろ』

「それもそうだな。んじゃ、一足先に俺はサーガ達をダイブハンガーへ連れて行くぞ」

「我とゴジラは日向ぼっこしてお弁当食べてから帰る。烈が作ってくれた」

「何かあったらすぐに言えよ」

『オレ様もいるんだ。妙な奴が仕掛けてきたらブッ潰してやるぜ』

無限の龍神と怪獣王のタッグ（普段はそこに三超神の一人も混じる）に仕掛けたらまず負ける事ぐらい分かりそうなもんだが、どこぞのテロ組織みたいにやってくる連中もたま～にいたりする。一応、仮住居敷地内だから結界もあるんだけど。

こうしてサーガと先遣隊、ついでにティアマットはダイブハンガーへと招かれた。サーガや先遣隊のメンバーは快く歓迎されたのだが、ティアマットに関しては事情を知るハリベルや、原因だったグレイフィアが申し訳なさそうにしてるのを除き、昨夜に続いてレジェンドがまた尋問される結果になった。

漸くまともに出番が増えだした矢先、こんな目にあってばかりの現状をレジェンドは……

「ぴえん」

一人嘆いていた。

〈続く〉

久々の学園登校、神衛隊は早速お仕事？

カナエやアーシアが駒王学園へ登校する時刻とほぼ同じ時刻、一誠とリアスも学園へと向かっていた。当然トライスクワッドの三人も一緒だ。アストラル体でふよふよと一誠の周りに浮いている。基本的に一誠達以外には見えない為、学園に着いたらほとんど自由行動の予定である。

「へー、じゃあこないだの場所はそこをそのまんまコピーしたってわけか。中には入ってなかったし楽しみだな、地球人の学校」
「タイガ達は学校とか行ってなかったのか？」
「私とフーマは少しばかり訳有でな。学校というより独学や家庭教師に近い」
「俺や旦那、生まれはともかく育った環境が環境だからなあ……タイガが一番詳しいんじゃないか？」

タイガは宇宙警備隊の訓練学校を優秀な卒業し、警備隊で正規の訓練を受けた後、銀河遊撃隊へと配属になった。更に言うなら、幼少期はウルトラ学校に通い８０に勉強を教わった事もある。

「学校か……なんていうか、必至に訓練ばかりしてて学生とかそれっぽい事をした事ないな」
「宇宙警備隊の訓練ってそんなに大変なの？」
「ああ、座学もあるけどやっぱり戦闘訓練が一番大変だったな。父さんも教官職だからそこは公私混同せず接するし、容赦もなかったしさ」
「そういや俺は聞いた事ないけど、タイガの父さんってなんか凄いんだろ？」
「イッセー、彼のお父様は彼らだけでなく、私達悪魔にとって英雄なの。前にも話した事あるでしょ？ウルトラマンタロウよ」

確かに聞いた事があるが、タロウと聞いて一誠が思い出したのは英雄云々よりも別のところにあった。

「ああ、ウルトラ一般人の！」

「そこで覚えてたの!?でも納得してしまう自分になんとも言えないわ……」

「「納得するのか!?」」

そりゃ、タロウの人間時の姿である東光太郎がその筆頭に挙げられる、普通死にます的な行動を当たり前にこなす連中なんて一度見聞きしたら忘れられないだろうな。

……一誠やリアスが世話になった師匠達はもっとおかしいが。

「タイガの父さんが英雄だとしてもさ、『英雄の息子』じゃなくてタイガはタイガとして見ないと。俺だって赤龍帝って呼ばれ続けたらあんま良い顔しないぜ？赤龍帝ってドライグや過去のこの神器持ちも指すんだろ。結局一緒くたに見られてるって事だし」

「イッセー……」

リアスやタイタス、フーマは感心していた。あの合宿を経て、一誠は身も心も格段に成長した。まあ、スケベなところは残っているが、対象が限定された（範囲どころか特定の人物）のでそこも大きなポイントだ。

「なんにせよ、タイガも家族が大きいからって気負わないでさ、『自分は自分だ！』って胸を貼ればいいんだよ」

「そうか……そうだよな。父さんも爺ちゃんも婆ちゃんも、俺とは違うんだ。経験の積み方もそうなんだよな」

「そうそう。俺だって普通の家に生まれて普通の生活してたのに、今はこんな生活になってるし」

「ありがとうイッセー。ちょっと楽になった」

「おう！」

そんな二人のやりとり微笑ましく見守りながら学園に到着すると、カナエやアーシア、涼子に加えて別方向から朱乃や裕斗、小猫も合流した。矢的は相変わらず早めに登校していたらしい。

「皆おはよー！」
「おはようございます！」
「おはよう、その子達がこの間合流したウルトラマン達ね」
「「おはようございます」」
「先輩達、御門先生、おはようございます」

全員が挨拶し合うが、その中で一番元気なのはカナエだ。やけにツヤツヤしている。昨日もまだまだ本調子ではなく、一昨日は完全にダウンしていた彼女がたった一晩で何があったのか。

「カナエ、もの凄く調子良さそうだけど、何があったの？」
「アーシアちゃんと同じ事したの♪」
「はうぅ……」

顔を赤らめるアーシアだが、カナエの言葉と相まって変な誤解を生みそうである。

「タイガ、フーマ。地球ではこういうのを『てえてえ』というらしい。郷に入っては郷に従え、だ」
「「てえてえ」」
『何処でその情報を仕入れたの!?』

訂正、既に約一名の中では誤解が生まれていた。しかしホントに何処でタイタスはそんな情報を入手したのやら。最終的に誤解は解けたが、タイタスに即座に同調していたタイガとフーマも中々……さす

がトライスクワッド。

「初めまして三人のウルトラマンさん。私は御門涼子。カナエちゃんとアーシアちゃんの同居人で、この学園の保険医をしているわ。こう見えても宇宙人よ」

ほら、と耳元の髪を上げるとちょっと尖った耳が見える。

「俺はタイガ、ウルトラマンタイガ」
「俺はフーマ、よろしくな」
「私はタイタス。以後、よろしく頼む」
「ええ、覚えたわ。それにしてもタイタスは良い身体してるわね」

まさかのタイタス推しにその場にいたメンバーに衝撃が走った。涼子としては保険医としての観点からなのだが。タイタスもそれをなんとなく理解出来たが、筋肉を褒められた事に変わりはなく気分も上々。

「私の筋肉の良さが分かるとは、鮮明なお嬢さんだ。その慧眼なら保険医として引く手数多だろう事が見て取れる」
「ふふ、お褒めに預かり光栄だわ」

マッスルポーズを決めるタイタスとそれを見ながら微笑む涼子。美女と野獣ならぬ美女とマッチョ。しかし、そこにまさかの人物が参戦してきた。

「今のイッセーも脱いだら凄いわよ。昨日のお風呂上がりの姿を見たら惚れ惚れするくらい逞しくなってたわ」
『!?』

ここでリアスが参戦するとは。風呂上がりのイッセーをガン見し

ていたらしい。彼にとってはご褒美なのだろうけど。
ちなみにタイガらも一緒に入っていた。帰り際にレイトから追加で貰った桶にお湯を入れてそれに浸かっていたのだ。ガーディアンベースにいる、一番風呂好きの先輩が無性に温泉に浸かりたくなったのはそれを察知したからかもしれない。

「まあ、近々それを披露する行事もある事だし、その時を楽しみにして頂戴」
「……アーシアちゃん。あの方もね、脱ぐと凄いわよ。もうそれこそ今にも身勝手の極意を発動しそうな……あ、実際使った事あったわ」
ぼふん！と音が出そうなくらい、一気に先程よりも赤くなったアーシア。それよりカナエの発言が問題だ。本気で出る作品間違えてんじゃないのかあの不憫（主人公）。

☆

「へっきし！」
「先輩、風邪か？」
「いや……何処かで噂話でもされてるんだろ。良いか悪いかまでは知らんがな」
ダイブハンガーでは脱いだら凄いと言われてる本人がズバリ答えを当てていた。そんなレジェンドは本日到着したばかりのサーガ、そして先遣隊の一人である巌勝と共に機動兵器用シミュレーターの改造を行っている。
「先輩、巌勝。やっぱり無理そうか？」
「そうだな……とりあえず拡張ユニットを付けてデータ容量をだいぶ増やしたが、仮想敵のデータとＣＰＵにリソース割いてるから増やせる自機の種類には限界があるんだよ。そもそもこれはガリバー用の

シミュレーターだし、新規登録の予定なんて暫くない筈だったから敵の方に種類多めに設定してたんだ。どんな相手にも対応出来るようにする為にな」
「ましてや本来は特機用のシミュレーターにＭＳやその他のシミュレーター機能も付け加えるとなるとＯＳ段階から大幅に改修・変更する必要があります。これだけの規模になると、むしろシミュレーター自体丸ごと交換した方が良いのではないかと」

レジェンドは当然として、アムロに仕込まれた厳勝も機械に精通している。戦国時代生まれなのに現代用語を問題無くポンポンと使えてるあたり、もうすっかり馴染んでいると言えるだろう。

「やはり、最新のシミュレーターを手配した方が良いか」
「これから来る神衛隊メンバーの事を考えたらそれがいいな。ついでに言うと、これって完全にレバーやペダルで操縦する形式のやつだから、動きをトレースするシステムでのシミュレートは出来ないんだよ。だからＭ（モビルファイター）Ｆとか、黒歌の言うソウルゲインとやらのような機体を登録しても正直特訓にはならん」
「……それだと縁壱も無理ですね」
「あいつなんでか操縦席座るとやたら緊張するんだよな。アレ車乗ったら絶対前屈みになるタイプだわ」
「かも知れない運転の度が過ぎるタイプか」
「何処のキャプテンだソレ」

その狛治によく似た声のキャプテン、ＭＳでは緊張しなかった代わりに出撃直後爆発したけどな。さすがに神衛隊の面々はそんな事にならない……と思いたい。

「何にせよ、拡張ユニット付けまくってたら場所取るし非効率的だし、向こうで束やクロエにも相談してみるか。どのみち最新シミュレーター来るまでは騙し騙しやるしかないだろうな」

とりあえず一段落……というより出来る事ももう無いので三人は片付けをした後、リフレッシュルームへと移動し休息を取る。そこへ惑星レジェンドに残っている鉄華団に通信を入れてきたオルガと三日月もやってきた。

「よう、お疲れさん」
「ああ、そちらはどうだ？」
「一先ず無事に現地入り出来た事は伝えたぜ。詳しい打ち合わせはこれから追々とってのもな」
「ヨーコの姿が見えぬようだが」
「ヨーコ姐さんは乱菊さんやＣ．Ｃ．とグレイフィアさんのイメチェン計画っていうのに付き合ってる」
「馴染むの早いなオイ」

それを言うと厳勝もそうなのだが……なお、三日月がＣ．Ｃ．のみ呼び捨てなのは本人がそう望んだからしい。どうも違和感があるようだが、アーシアもさん付けで呼んでいるし結局個人差があるのだろう。

「そういや三日月、新生阿頼耶識の調子はどうだ？変わってからだいぶ経つが、異常とか不具合はあるか？」
「全然。むしろ仰向けに寝れて凄く調子が良い」

新生阿頼耶識システム。彼らの世界ではピアスと呼ばれるものを施術によって埋め込む必要があるのだが、失敗確率も高く、ヒューマンデブリにされた子供達がそれをされる場合が殆どだった。無論例外はあるが。
そこで、サーガが彼らに施された阿頼耶識用のピアスを彼らの身体に『還元』する事で、言わばニュータイプのような特殊能力化する事にしたのが新生阿頼耶識システムだ。

これによってピアス特有の突起状のものが消え、仰向けに眠れるようになっただけでなく、バルバトスで三日月が行ったリミッター解除による弊害も消えた。後者の方は戦場で発生するエネルギーを吸収・蓄積し、それが一定量溜まると任意のタイミングで発動出来るようにされている。加えて最大三回分までのエネルギーをストックしておく事が可能だ。

ただメリットばかりではなく、デメリットとして乗れる機体が限定化されてしまった。正確には乗れる事は乗れるのだが、阿頼耶識搭載機の場合は戦艦なら戦艦、ガンダム・フレームならガンダム・フレームなどカテゴリが大きく狭められたのだ。加えて、三日月ならバルバトス、昭弘ならグシオンリベイクなど、『機体との絆』が生まれている場合はさらに限定され、『その機体専用の阿頼耶識』として変換されてしまい、実質乗り換え不可能な事態になった。

まあ、彼らに関しては別に相棒から乗り換える気もないのだが。

一応、阿頼耶識システムに非対応ならば乗る事は可能。しかし経験を除けばその機体に関してほぼゼロからのスタートになってしまうので、結局のところ今までの愛機をそのまま使ったり、新生阿頼耶識に対応した機体間で乗り換えるのがセオリーとなっている。

「自由な格好で眠れるのは良いよな……」

「オルガ、レジェンド様が遠い目をしてるけど」

「察してやれ、ミカ」

「……？わかった」

頭に？マークを浮かべつつ、とりあえずオルガの言葉に頷いておく三日月。昨晩三人の美少女にトリプルサンドされ身動きを取れず、大して眠れなかったレジェンドの実情を三日月は知る由もないが、まあぐっすり眠れるのは良い事だと結論付けた。

「ちなみに聞いておきたいんだが……第四分隊で厳勝の使ったシミュレーターはどんなやつだ？」

「型式番号はＮＸ―０４ＳＳ。細部設定はもちろんの事、新規機体の追加なども容易に行える代物でした」
「最新型かつ最高品質のＳＳモデルか。教導も兼ねてる部隊はやはり違うな」

そんな感じに身内での会話に花を咲かせていたところにゲンとレイトがやって来る。

「チーフ、ここにいたんですか」
「お、サーガと……えーっと……」
「神衛隊だ」
「ああ！神衛隊のメンバーも一緒だったんだな」
「……私達はまだ名前を覚えられていないのだろうか」
「まあ……大将以外に四人もいるわけだし」
「来てまだ時間経ってないし」

巌勝はともかく、他の三人は覚えやすそうなものだが。これで他のメンバーまでドカッと来たらどうなるのやら。

「それでどうした？緊急事態でも発生したのか」
「いや、そういう訳じゃねぇんだけどさ」
「実は俺達は代表として来たんですが……この間面倒を見たオカルト研究部の事で相談があって」
「ふむ」

簡単に言えば、もし彼らが下宿ないしそれに準ずる形で住み込みを頼んで来た場合、ダイブハンガーへの受け入れを許可してもらえないかという事だった。
ゲンやレイトとしても、せっかく出て来た向上心をへし折る真似はしたくない。とはいえ自分達も滞在する為に世話になってる以上、自分達の独断で決めるわけにはいかないとレジェンドに判断を仰ぎに

来たわけだ。

「卯ノ花さんや他の皆には既に許可は貰っているので、後はチーフから最終判断をしてもらうだけなんです」

「頼む！そりゃ、あいつらがしないって言うならそこまでだけど……タイガ達もいるし、今後の生活の事も考えると言ってこないとも限らないし……」

「別にいいぞ」

『判断早っ!?』

「昨日の時点で黒歌から妹の件で強請られたしな。時期的にもそろそろ頃合いだろう。ただ、黒歌にも言ってあるが正式な受け入れは昨日俺が言った、俺の専用機の調整が一段落してからになるという事だけは頭に入れておけ」

この言葉にゲンとレイトは顔を見合わせて笑い、しっかりとレジェンドに頭を下げた。

……おまけにレイトにはサーガから予想外の言葉も返ってきた。

「ゼロ」

「へ？な……なんか俺やらかしたか？」

「厳勝に頼んで、シミュレーターに俺の人間体のベースとなった人物の記憶にある機体をいくつか新規設定してもらった。興味があるならそれを使ってみるといい。新機体の中でその人物が使っていたのは……確かダブルオーライザーとダブルオークアンタだ」

「あ　ん　た　が　神　か」

「え……？いや、確かにそうだが」

なんかレイトがサーガを崇めていた。早速と言わんばかりにシミュレーターを起動させてダブルオーライザーを選択し、ノリノリで操るレイト。

「ツインドライヴ、出力全開!!
ライザァァァ!!ソォォォド!!」

シミュレーター内で敵機が超巨大なビームサーベルによって次々と爆散していく。憧れの台詞が言えたのに感極まったのか、クリアしてシミュレーターから出て来たレイトは本気で嬉し涙を流していた。

「やべぇ……何この感動……マジでありがとうございましたサーガ様に神衛隊の方々、そして師匠……!」
「よ……喜んでもらえて何よりだ」
「……ゼロに作ってやる機体はダブルオーザンライザー・セブンソード／Gだな。サーガの記憶にデータだけあっただろ。アレにするか」
「確かにゼロなら両手を上げて喜びそうではあるな。基礎スペックをクアンタ準拠にして開発を進めよう」

もはや相手に対して敬称で呼んでるレイト。ウルティメイトゼロソードでは味わえない感動を得た彼にとって、今は他の言葉など耳に入っていない。

後日、誕生日プレゼントとしてレジェンドとサーガから連名でそれが贈られる事になるのだが、その時のレイトを見た者達はこう語る。
『あの時のゼロなら人間体でベリュドラとやり合えたかもしれない』
こうして、レジェンド一家よりも先にレイトことゼロへの機体が決定してしまった。この事を知った黒歌からのおねだりが加速するのだが、それは割愛するとしよう。分かりきったことだったし。

☆

「というわけで今日の活動は一風変わって、オカルト研究部のイメージキャラクターを決めるわ！」
「何がどういうわけなのかサッパリ分からないわよリアス」

いつも通りのドタバタを経て放課後の部活動。今回は矢的も顧問として顔を出しているが、彼も理由は説明されていない。

「なあグレモリー、僕も聞かされていないんだが、もしかして事前に打ち合わせとかしていたのか？」

「いいえ、今朝イッセーと話しただけよ」

『え？』

「いや、まあ……皆で考えるもんだし、無理難題をやらせるわけじゃないからいいかな～って……」

知ってたなら一言くらい言ってくれ、と思いつつも全員リアスの話に耳を傾ける。

「知っての通りオカルト研究部はアーシアやカナエ、矢的先生を除いて悪魔家業がその活動だったりするのだけれど、最近ではレイナーレの時やレーティングゲームの時のような事態も起きかねない」

空間を閉鎖され、ゴブニュや超獣、果てはゴーデスの尖兵……それらが現れた事だ。それ以外にも世界中では様々な怪奇現象が増加しつつある。世界各地で防衛チームが組織されだしたのもそれが原因である。

「よって、私達オカルト研究部も独自に調査研究していく事に決めたのよ。皆には事後承諾で悪いとは思ったのだけれど」

「むしろ、その方が名前に相応しい活動じゃないかしら」

「あの時みたいな不可解な事が世界中で……」

割と好意的に受け止められた新たな活動。その中でも一際声を上げたのはもちろん一誠やトライスクワッドだ。

「俺は賛成しますよ部長！なあタイガ、タイタス、フーマ！」

「ああ！こういう時こそ俺達がやらないと！」
「私の筋肉が人々の役に立つ時が来たようだな」
「そういうのは俺達の専門だぜ！」

四人ともやる気満々だ。それに同調するかのように矢的も頷く。

「僕はマイナスエネルギーも関わっているんじゃないかと考えている。かつて、それが原因で怪獣が現れた事もあった。僕がＵＧＭに所属していた頃だ。特に多種多様な種族が生きるこの世界では、マイナスエネルギーもそれだけ多くの形を持っているんじゃないかと。そういった原因を調べる事はきっと世界にとっても有意義な事だと思う」

やはりウルトラ兄弟の経験からくる言葉には説得力がある。

「満場一致で異議はないみたいですわね」
「僕も異論はありません」
「私もです」
「私とアーシアちゃんは元々その気だし」
「はい！」

どうやら皆の意見は同じようだ。これにより、本日からオカルト研究部の活動に世界各地の怪奇現象の情報収集が加わった……のは良いのだが。

「そういうわけだから、今度こそオカルト研究部のイメージキャラクターを決めるわよ！」
「結局最初に戻るのね……」
「悪魔家業ならともかく、怪奇現象調査には色んなところからの協力が要るわ。内外部問わずその協力を得る為にオカルト研究部のイメージアップは必要不可欠、即ちそれを解決する為の一つがイメージ

キャラクター！」
「イメージキャラクター一つでそんなに変わるかなぁ……」
「まあご当地キャラとかで有名になったところはありますけど」

確かにイメージキャラクターによって多少なりとも変化はあるだろうが、下手したら悪魔関係がバレたりするんじゃないかと言う問題はこの際一旦目を瞑ろう。そんなわけでリアスが考えるイメージキャラクターとは……

「私は我がオカルト研究部のイメージキャラクターにタイガを推すわ！」
「俺ぇ!?」

まさかの指名にタイガは素っ頓狂な声を上げた。いきなりイメージキャラクターだとか言われたらそうもなるだろう。

「最初は矢的先生の本来の姿である８０を推そうと思ったのだけれど」
「え、僕？」
「既にテレビやネット上で広まってるし、このウルトラマンに影響を受けました、ってしか思われなさそうなのよ。確かに間違いではないのだけれど」
『ああ～……』
「それで、あの閉鎖空間でしかまだこの世界で目撃されてないであろうタイガがベストだと思ったの。世界に先んじて『新たなウルトラマンを目撃！』って感じで。それなら私達が本気だと言う事を強くアピール出来るでしょ？まあ、個人的な嗜好もあるのだけれど……客寄せパンダみたいでタイガには申し訳ないとは思うわ」
「いや、俺は良いんだけどさ。それならレオさんやゼロでも良くないか？」
「いいえ、このオカルト研究部と直接関係があるのが大事なの。貴方

達ならともかく、私達にとってはあくまで彼らは協力者であって、いつでも手伝ってもらえるわけじゃないわ。イメージキャラクターであると同時に、少なからず交流がある事を示唆出来ないと。そこが彼らと違う貴方達の強み。だって私からすれば、イッセーと一緒の貴方達は立派なこのオカルト研究部の一員なのよ」

これにはトライスクワッドはおろか一誠も感動していた。一誠なんか『もう俺は一生部長のものです！』と言わんばかりの視線だ。そこまでは良かった。そこまでは……

「だとすれば私がイメージキャラクターでも問題はない筈だ。この肉体ならばポスタービジュアルにも映えると自負する！」
「タイタスがメインだとそれボディビルダー部にしか見えないだろ。やっぱりここは俺が……」
「タイガだって色合い的に派手だろ。怪奇現象ってのは人知れず起こったりするだろ？俺みたいにこう、落ち着いてクールさが際立つような……」
「大々的にアピールするのに落ち着いていては意味がない。ここは思い切って見た者の印象に残すようにすべきだ」
「そうだよな。だからこそ俺が……」
「いやいやオカルト研究部である事も念頭に入れるとしたら俺の方……」

なんかトライスクワッド内で揉めだした。確かに三人の意見はそれぞれ最もな部分もあるのだが。さらには……

「私もフーマさんと一緒で、オカルト研究部なのにあまり派手なのはどうかと思います」
「あらあら、しかしタイタスさんの言う通りアピールすると言う意味も兼ねている事だし、私は派手でも良いとおもいますわ。ほら、裕斗君もイッセー君も鍛えられている事ですし」

「でもやっぱりそれだとボディビルダー部みたいになりかねませんよね。女性の方が部員として多く在籍してるのに。僕としてはタイガ君が一番良いと思いますけど」
「……なんか混沌としてきたわね」
「はわわ……」

こっちもこっちで意見が出始めた。このままだと泥沼化しそうな雰囲気だ。矢的は「多数決で決めるのはなあ……」と頭を悩ませているし。

案の定やいのやいの騒いだものの、結局は一誠の「トライスクワッド全員をメインにした方が団結力もアピール出来るんじゃないか」という意見を採用する事になった。

「なあ、ポスターに映るんならやっぱこういうポーズかな」
「特別な指示がない限りカメラ目線を忘れるな。自分を相手の記憶に刻み付けるように……こうだ！」
「いや旦那のソレいつも通りだろ」

早速三人はポスタービジュアルの話で持ちきりになっていた。さすがに仲直りも早いようだ。

かくして、イメージキャラクター談議は無事に終了。その後、今度の休みに一誠の家でこれからの活動に関してオカ研会議をする予定を立てたのだが、アーシアは特別な用事がある為出席出来ないので、カナエのみ一家からは出席する事になった。

そこで見たある物が、新たな事件の切っ掛けとなるとは今ここにいる誰もが気付く筈もなかった。

〈続く〉

ダイブハンガーでの一時、生徒会との顔合わせ

帰路につき他のメンバーと別れ、仮住居からダイブハンガーへと帰って来たアーシアとカナエを出迎えたのは、先遣隊としてやって来た巌勝だった。

「寺子屋から帰宅して来たのか。日々の勉学、ご苦労……いや、ここはお帰りと言うべきだったな」

「「寺子屋!?あ、初めましてとただいま（です）」」

よもや学園を寺子屋呼びする人物に遭遇するとは思わなかった為、さすがに驚くもののすぐに挨拶を返す二人だったが、やはり外見に目が行く。

「縁壱先生と似てる……」

「双子の兄弟だからな。痣が違うだろう?」

自身の痣模様を指しながら巌勝が言うとカナエはハッとした。彼が縁壱の兄にして、かつて上弦の壱という立場にいた鬼であったと。

「あの……」

「分かっている。お前が鬼殺隊の『柱』であった事は。私を恨むのも当然だろう。私はその憎しみや恨みつらみから逃げる気は無い」

「いえ、別に恨んでませんけど」

「……は?」

間の抜けた声を出す巌勝だが、そもそもカナエは自身を殺した上弦の弐と鬼舞辻無惨以外は別に恨んでいないし、縁壱からも『今の彼らを見てほしい』とも頼まれている。

何より鬼とも仲良く出来るを心情としていた彼女としてはちゃんと歩み寄って来る相手を突き放す気は毛頭ないのだ。

「縁壱先生から聞いてますから。私は胡蝶カナエ、こちらはアーシア・アルジェントちゃんです。どうぞこれからよろしくお願いしますね」
「カナエさんからご紹介頂きました、アーシア・アルジェントです！」
「継国巌勝（みちかつ）だ。現在の所属は神衛隊第一分隊『紅蓮』の……参謀長だ。いつの間にかなっていた」
「「あはは……」」

いつの間にか、という部分に乾いた笑いしか出なかった。隊長とかではない為、功績を上げているうちに自然と……ではなくおそらく文字通り勝手に決められていたのだろう。本人は然程気にしていないみたいなので、まあいいか。

「夕食まで時間がある。着替えるなり風呂に入るなりしてくると良い。私以外にもサーガ様を含めて四人来ているから、良かったら見かけた時声をかけてやってくれ」
「わかりました。巌勝さん、また後で」
「失礼します」
「ああ」

二人は巌勝に軽く頭を下げながらその場を後にする。

「縁壱先生の言った通り、鬼『だった』なのね。仲良くなれそうな気がしてきたわ」
「はい！優しい感じがしました！」

カナエは心配が杞憂になり、アーシアも良い印象を持った。そして着替えたりする前に帰って来た挨拶を、とリフレッシュルームへと向かった二人が見たのは……

「なーんーでーにゃー!!」

もはや本作では恒例となった黒歌の抗議の叫びであった。ちなみに側ではレイトが満足げな表情でドリンクを飲んでおり、レジェンドとサーガは何やら打ち合わせをしている。ヨーコも帰って来ており、黒歌の様子に溜息をついていた。

「えーっと黒歌、だったかしら？そんなに癇癪起こさないの。たかがシミュレーターの新規設定機体を一番最初に使っただけでしょ？」
「だってだって！レジェンドから新機体が使えるようになったって聞いて飛んでったのに、今までよりスコアが伸びたレイトの名前がランキングにどーん！って載ってたにゃ!!」

ランキングは一番最初に載りたかったのに！と涙目でプンスカしている黒歌だが、どうやら仕様上仕方ないとはいえ自分が使いたい機体が登録されてなかったのも原因の一つらしい。

「ただいま帰りましたー」
「ん？おーアーシアとカナエ、お帰り。久々の学園はどうだった？」
「少しの間行ってなかっただけで凄く新鮮な気がしました」
「オカルト研究部はいつもと変わらなかったかな？賑やかでしたよー、タイガ君達もいて」

二人の話を聞いているレジェンドに対して、一緒に打ち合わせしてたサーガは二人が着ている制服を見ている。それに気付いたレジェンドが軽く声をかけた。

「サーガ、あまり女性の制服をガン見するなよ？」
「す、すまない。別に変な気持ちで見ていたわけではなくて、ただ……俺が初めてこの世界に来た時、仮住居の場所が分からないところを親切に教えてくれた娘が同じ制服だったと思い出していたんだ」

これを聞いてカナエとアーシアも思い出した。仮住居の場所を聞いてきた、変わった制服を着た人物がいた事を。その時は確かソランと名乗っていたと聞いたが。

「すいません、もしかして……ソランさん、ですか？」

「……？ああ、偽名ではそう名乗ったな」

「偽名って事は……今レジェンド様が『サーガ』って」

「ウルトラマンサーガ。レジェンド先輩にとっては後輩だ。これからよろしく頼む」

まさか小猫が出会っていたのがレジェンドが良く『出来た後輩』と褒めていた光神だったとは思わず、カナエとアーシアは驚いた。この事実を知ったら彼女も驚くだろう。

最も驚くのは彼らがあまりに日常生活を謳歌しまくってる事だろうが。

「おう、二人共お帰り。早く風呂入って着替えてきな。んで、飯の後にシミュレーター行ってみ。充実してるから、うん」

「いやホント何があったのレイト君」

「満足そうなだけじゃなくて、幸せそうです」

黒歌と違い思いっきり笑顔で、なんかもうマジでキラメク未来を手にしちゃった的なオーラを出しまくっている。先刻シミュレーターにてダブルオーライザーでライザーソードを放った時の感動が今だに続いているのだろうか。

「全くもう……あ！貴女達が学園に通ってるって娘達ね。私は神衛隊第二分隊『羅巌』の参謀長をやってるヨーコ・リットナーよ。長い付き合いになりそうだし、仲良くしましょ」

「あ……はい！私はアーシア・アルジェントです」

「胡蝶カナエです。巌勝さんにはさっき会いましたけど、後のお二人

は……」
「厳勝には会ったんだ。それならその二人はオルガと三日月ね。三日月はゲンって人にトレーニングルームまで連れて行かれてたわ。オルガはミライって人にここの機器の使い方教わってるハズだけど……二人共どうしたの？あれ？レジェンド様も固まってるし……え？」

ヨーコの話を聞いてサーガとヨーコ以外は固まっていた。レイトや黒歌さえだ。もうお分かりだろう。

「ここにいる総員！今すぐトレーニングルームへ向かえ！もしゲンが三日月と模擬戦やってたらすぐに止めろ!!」
「ど……どうしたんだ、先輩？」
「サーガ！あんたが聞いてるかは知らねぇが割とマジでヤバい！ゲンの相手が厳勝だったならまだしも三日月の奴じゃ鍛えてるとはいえ無事でいられる可能性が極端に低い!!」
「え!?ちょっとどういう事!?説明し……」

バゴシャアアアアアン!!!
「うあああああ!!」

『!!』
「「三日月イイイイイ!?」」

明らかに普通じゃない音と三日月の悲鳴を聞いてレジェンドとレイトを筆頭にトレーニングルームへ爆走する一同。そこには案の定、『人間体が人間やめてます体になっている』と言われているゲンにやられた三日月がうつ伏せでぐったりしており、その頭には超が付くほどドデカいたんこぶを拵えていた。しかしまあ、よくそれで済んだ

な。さすが神衛隊。

「えええええ!?」

「なっ……!?」

「やっぱりこうなったか……アーシア、頼めるか?」

「は……はいぃっ!」

即座に三日月に駆け寄り、神器と回道を併用して治療するアーシア。元々鍛えていたからか、それともゲンが加減したのかは知らないが三日月はすぐに目を覚ました。

「う……ん?俺、どうしてたんだっけ」

「三日月、どこか身体に不調は感じないか?」

「あれ、サーガ様……ああ、そういえばゲンさんの一撃を頭に食らったんだった」

「すまない三日月君。中々タフだったからな、つい本気になってしまった」

「あのなあ……素手でダイヤを真っ二つにするあんたの一撃食らって無事に済むわけねえだろ」

ヨーコは顔色が真っ青になった。素手でダイヤモンドを真っ二つって何?しかし、ゲンもそれに反論する。

「そうは言うがな、チーフは防御せずに平然としてたし、俺はダイヤ程度かもしれんがチーフに至っては人の姿でも本気を出せば恒星の一つや二つ、離れていようがパンチの衝撃波一発で消し飛ばせるんだぞ!」

「だから毎回言うけど比べる対象が間違ってんだよ!そもそも何その超威力!?恒星ってそれ太陽とかそういうもんだろ!?」

「その程度ならサーガも出せるぞ」

「「ウソォ!?っていうか『その程度』!?」」

レジェンドの一言にレイトとヨーコは声を揃えてツッコんだ。やっぱり先輩が先輩なら後輩も後輩だった。

「でも、やっぱり凄かったな。バルバトスが阿頼耶識のリミッター解除して襲い掛かってきたみたいだった」

『具体的過ぎて恐ろしいんですが!!』

ゲンに対して物凄く物騒な例えを言う三日月。それはつまり、今のゲンは人間体でありながら少なくともハシュマルを倒した時のバルバトスルプス並の戦闘力があるらしい。何そのガンダム・フレーム人間。あんたウルトラマンだろ。

「俺、レンチメイスくらいの一撃だったら倒れない自信あったのに」

続けて三日月の爆弾発言。レンチメイスと言えばバルバトス（第六形態）の主兵装のアレである。あんなもん生身で受けるだけでも即死だろうにそれくらいなら大丈夫、と言っている三日月も割とおかしかった。

騒ぎを聞き駆けつけたオルガとミライも合流し、涼子を除いた全員に自己紹介を終えたサーガと神衛隊の先遣隊四名。アーシアとカナエが入浴を済ませた頃には涼子も帰宅しており、レジェンド側とサーガ側全員揃っての夕食となる。

ダイブハンガーでの食事は食堂かリフレッシュルームで行われ、基本的には普通の食卓だが人数が多くなるとバイキング形式になる。今回もそうだ。

「なるほどな、イメージキャラクターか。うちには実態知られたらイメージが爆散するような奴が多いからな。レジェンド然りオーフィス然り」

「我とレジェンドは別に困らない。困るとしたらティアマットの方。

威厳が別次元に消える」
「それって喋り方の事ですか!?」
「やっぱり来たのね、ティアマット……」

学園で決まったオカ研のイメージキャラクターの話を聞いたC・C・の発言にオーフィスが返答するが、相変わらずティアマットはいじられており、カナエは彼女がレジェンドとの約束通り人間化まで修得してやって来た事に頭を抱えている。常識の方は怪しいが。ついでにティアマットがアーシアとカナエ、涼子に自己紹介したのはこの時だ。おまけにカナエはレジェンドとグレイフィアに同行したので一応知っていた。

「なんていうか……やっぱすげぇな、ここの飯」
「ふぉるはもふぉははりしなふぉ」
「三日月、せめて口の中の物を飲み込んでから喋れ」
「いや、厳勝……貴方は納豆にネギ入れすぎじゃない?」
「納豆丼継国スペシャルだ」

一方、神衛隊側は食事に夢中らしい。
オルガは昼食に続き夕食も豪勢な事に驚きつつも喜び、三日月はハムスターよろしく口の中にパンパンに頬張っている。そんな三日月を軽く窘める厳勝だが、その手にはヨーコが指摘したように山盛り……というか丼の大盛りご飯とほぼ同量のネギがかけられた納豆丼を持っていた。継国スペシャルというように、縁壱一家もよくやる食べ方だ……うたとかなでもやるのか、ソレ。

「……それで、シノはニールに狙撃について相当扱かれた様だ。機体での構え方から間合いの取り方など色々……もっともビット兵器を使ったビームの跳弾技術までは無理だったそうだが」
「あれは着弾時のビットの角度調整、及び強度を考慮しての出力を始め各種誤差修正、さらに大気圏内ではビーム減衰率なんかも関わって

くるからな。宇宙地上問わず完璧に使用出来るのはあいつくらいだろ」

レジェンドとサーガは少し輪を離れて二人で話をしている。ニールというのはアムロと同じく神衛隊第四分隊に所属する超一流のスナイパー、ニール・ディランディの事だ。かつてソレスタルビーイングという組織にいた為、サーガが人間体をとった時、その姿に大層驚いたのは記憶に新しい。

元の世界にて戦死した彼の魂は惑星レジェンドへと招かれ、そこで再び生を受け第四分隊へと所属する事になった。アムロ同様、普段は射撃競技の訓練所で講師をしているが、ＭＳ操縦の教官を務める事もあり、鉄華団でのＭＳ操縦の教導官であるノルバ・シノも彼の教え子にあたる。

「それからゼロに渡すダブルオーザンライザーだがな、てっきりサーガが乗るもんだと思ってたらしくて束が完成させたぞ。無論基礎スペックは……あれクアンタとかは第五世代だっけ？まあいいか。それ準拠になってるから、後は細かい調整だけですぐに使えると。代わりにサーガの機体がまだ手付かずみたいだが……」

「俺のは後でも構わない。いざとなれば変身出来る。今ゼットと一体化している事で本来の姿に変身出来ない先輩の方が必要だろう」

「……そういえばゼットライザーの使い方、まだ教えてもらってなかったな。あいつの事だし、取説とか持ってきてないだろうし」

その通りである。一応ちゃんと頭には入っているようだが、おそらく変身する時レクチャーされるハメになるんだろうとレジェンドは考えていた。

……てか生身で戦った方が早くね？

☆

翌日の放課後。偶然にも同じ日に日直だったアーシアとカナエはいつもより遅れて部室へと向かっていた。それぞれ一誠やリアスのクラスメイトなので説明はしてあるしそこは問題なかったのだが、部室の扉を開けてみればリアス達以外にも部員ではないだろう男女がいる。男は一人だけだが。

「アーシアちゃん、そろそろお姉さん頭痛くなってきたわ」

「はわっ!?だ、大丈夫ですかカナエさん！」

カナエは周りが人外ばかりだったので即座に気付いた。彼女らは悪魔だと。ぶっちゃけここは文字通り悪魔の巣窟じゃないのかと思い始めている。人間の方が実は少ないんじゃないのか？

「あれ？人間がここにいるって聞いてませんよ、会長」

「彼女らは最近入部したばかりで、私が知ったのもつい最近です。人間だからと失礼な真似はいけませんよ、サジ」

「……ソーナ、諌めてくれて助かったわ。カナエは人間を侮辱されると本気で斬り掛かってくるから。痣まで発現されたら私達が壁代わりになっても止められないわよ」

「リアス、私を条件付きの辻斬りみたく言わないでほしいんだけど……」

忘れがちだが、ライザーの発言に反論し、さらに火に油を注ぐ発言をした上、ライザーに先制攻撃を叩き込んだのはカナエである。しかもその後シックルによってカード化されるという制裁（すぐに解かれたが）を受けたライザーは、レーティングゲームにおいても万全でないカナエの斬撃を数発受けてリタイアした。

そんなカナエに喧嘩を吹っ掛けようものなら、どれくらいの実力があるか知らないが男子側の悪魔には万に一つも勝ち目は無い。それどころか下手に手を出せば最終兵器軍団（レジェンド一家）から報復されかねない。

おまけに最強（サーゼクス）の魔王がガチでビビる程の戦闘力を持つ縁壱を始め

としたぶっちぎりの規格外まで控えている。
「ところでリアス、彼女らは？会長って聞いたけど何処の？ＰＴＡ？」
「保護者会じゃないわよ!?生徒会よ生徒会！」
「あ、なるほど」

普通なら学園生として知ってそうなものだが。
リアスの話を聞くと、つまり今日はお互いの眷属のお披露目を兼ねた顔合わせらしい。

「矢的先生が来てないけど、時間も押してるし始めましょうか。私の新しい下僕、兵藤一誠よ。駒は『兵士』。イッセー、挨拶なさい」
「二年の兵藤一誠、部長の『兵士』やってます！どうぞよろしくお願いします！」

元気な一誠の挨拶に満足げなリアスと、ちょっと前は問題児だった彼の成長を実感するカナエ。なにせ問題を起こした一誠を含む三人をよく保健室送りにしたのも彼女だ。

「元気が良くていいですね。では、こちらも。私の新しい眷属の匙元士郎です。兵藤君とは同じ学年ですから、仲良くしてあげて下さい」
「おー！同じ学年で同じ『兵士』か！よろしくな！」
「こっちは、最近こそ問題を起こしてないけど変態三人組の一人と一緒なんてひどくプライドが傷ついてるんだけどな！」
「何だと!?」
「サジ！」

生徒会側の兵士である匙のついた悪態に一誠も怒り、生徒会長―支取蒼那ことソーナ・シトリーも諌めるが、それよりもさらに怒りの声を上げた者達がいた。

「お前！挨拶もしないでいきなり喧嘩腰とはどういうつもりだ!!」
「紳士としてのマナーが欠けている！まず挨拶には挨拶で返すのが当然だろう!!」
「お前だってさっきからこっちの女子ばっかみて人の事言えないだろうが!!」
「「「「!!??」」」」

生徒会メンバー全員が突如声のした方向を見ると、アストラル体で人形サイズなタイガ達トライスクワッドがテーブルの上に立っていた。

「な……何だよお前ら!?」
「「お前に名乗る名は無い!!」」
「息ピッタリね～トライスクワッドのみんな」

匙の問いかけをバッサリ切り落とすトライスクワッド。どこの天空宙心拳の使い手だお前ら。

カナエは相変わらずのほほんと朱乃が出してくれたお茶を飲んでいるが、唯一ソーナだけは別の意味で驚愕している。

「ウルトラマン……タイガ!?」
「ウルトラマン!?タイガって……会長知ってるんですか？」
「はい。私達悪魔にとって英雄と呼ばれるウルトラ六兄弟の一人、ウルトラマンタロウの息子さんです」

匙を始め生徒会メンバーは驚いた。なんでそんな人物がこの場に、それも珍妙な格好でいるのか。

「そ、そんな重要な人物がなんでこんな所に……」
「……ソーナ、貴女達は私とライザーのレーティングゲームが終わった後、何があったか聞いてる？」

「いえ……ただ、レーティングゲームはリアス達の完勝だったとは聞いてますが」
「ええ、それは間違いないわ。問題なのはその後よ」

リアスは意を決してその後の出来事を話した。空間が閉鎖された後、ゴブニュの大群に襲われ、デガンジャやバキシム、ベロクロンまで出現した事。その中で一誠が自分を助ける為に瓦礫の下敷きになってしまった事。そして、ここにいるタイガ達トライスクワッドが一体化する事で一誠のみならず自分達が助かった事も。

「そんな事が……」
「それだけじゃないわ。タイガ達の直前にもね、一誠の修行をつけてくれた師匠と先輩も駆けつけてくれたの」
「兵藤君の師匠と先輩？」
「正確には兄弟子ね。彼らはそれぞれ、ウルトラマンレオとウルトラマンゼロだった」

ソーナはさすがに腰を抜かした。まさかリアスの新しい眷属はあの二人に鍛えられ、三人ものウルトラマンと共にある存在だという事に。無論、赤龍帝である事も承知の上でだ。

「だ、大丈夫ですか会長!?なんかまた別の名前が出てきましたけど……」
「その彼らもウルトラ六兄弟縁の者です。ゼロは私達シトリー家とも縁のあるウルトラセブンの息子さん、そしてレオはその師匠であり、セブンの弟子でもあります」

開いた口が塞がらないとはこの事か。匙は驚きの表情のまま、一誠やタイガ達を見るが……

「あの、一ついいですか」

ソーナをしっかりと見つめ、今度は一誠が口を開く。

「なんでしょうか？」

「タイガや先輩を『英雄の息子』って見るのだけはやめてください」

『!!』

「俺もあの後、先輩やタイガの話を聞いたけど……先輩は最初セブンさんが父親だって知らなかったって言うし、タイガも親父さんや爺さんが立派過ぎてプレッシャーばかり受けてたんです。そんな中、必死に努力して、戦ってきたのに英雄の息子としか思われてないのは俺も我慢出来ません。先輩は師匠と同じ恩人だし、タイガやタイタス、フーマは俺にとって相棒ですから」

一誠の偽りざる本心だった。一誠の場合は両親は普通で、今の自分が普通じゃない。ゼロやタイガはどちらも親が大物過ぎる。タイガの祖父であるウルトラの父に至っては宇宙警備隊大隊長という、例えで言うなら大統領のような役職に着いているのだ。

同時に一誠はジードの事も思い出していた。銀河遊撃隊総司令官ベリアルの息子だが、その特異な外見故の苦労など様々な困難があった事を。

だからこそ、彼らの努力から目を背けてはならない。英雄の息子ではなく、一人のウルトラマンとして戦っているのだ。

「ソーナ、改めて紹介するわね」

「リアス？」

「ほら、三人共ここに並んで」

リアスが笑顔で自分のテーブルの前を指差しながらタイガ達に言い、タイガ達は頷きながらそこに移動し、生徒会に向き直る。

「まず、知っての通り彼がウルトラマンタイガ」

「俺はウルトラマンタイガ！よろしく！」
「こっちの立派な体躯がウルトラマンタイタス」
「ウルトラマンタイタスだ。挨拶が遅れて申し訳無い」
「最後に青いスマートなウルトラマンフーマ」
「ウルトラマンフーマってんだ。素早さには自信あるぜ」
「彼ら三人でトライスクワッド。私達オカルト研究部の新しい部員で、大切な仲間よ」

このリアスの言葉に応えるように、タイガらはポーズを決める。現在作成中のオカ研ポスターのビジュアルにも使う事にしているポーズだ。

「これ、ポジションによってポーズ変えた方がいいよな。例えば旦那がセンターだったら大胸筋見えるようなポーズとかさ」
「なるほど、一理あるな。右側に立つなら敢えて体の左側を突き出すようにしたりか」
「じゃあ少なくとも三パターンくらいポスター作れるんじゃないか？」
「良いわね、それ。ターゲット層ごとに変えてアプローチ出来るわ。割と子供に人気出そうなのがタイガで、男性はタイタス、女性にはフーマが人気出そうなのよね」
「あ、部長。男女人気は分かんないですよ。ほら、フーマは性格的に男性の友人が多く出来そうなタイプだし、タイタスは紳士的だから割と女性に人気とか出るかも。タイガが子供に人気出そうなのは同意です」

もはや一誠がバカにされた事などさっさと忘れようと言わんばかりの盛り上がりだ。この短期間ですっかり仲良くなり、本当にオカルト研究部の一員としてここにいる。

「……そうですね。英雄の息子だとかは関係ない。彼らは彼らです」

自分の姉も四大魔王の一人だが、自分は自分だ。そう、彼らも自分と同じなのだ。

「盛り上がっているところ申し訳ないのですが、こちらの話を聞いて頂いてもよろしいですか？」

「「あ、スイマセン」」

「ごめんなさい、ソーナ。ちょっとインスピレーションが湧き出して」

「いいえ、大丈夫です。こちらも改めてちゃんと挨拶しなければなりませんから。いいですね、サジ？」

「あ、はい会長」

今度ばかりはちゃんとしなければ主の名誉に傷がつくし迷惑もかかると考えた匙はしっかりと挨拶する。

「生徒会所属、二年の匙元士郎だ。駒は『兵士』、それも四本分だ！」

「あれ？なあリアス、イッセーって駒八本分使ったって言ってたよな」

「……へ？」

「ええ、そうよ。まさか一度に全ての『兵士』を消費するとは思わなかったけれど……期待より遥かに凄い『兵士』になってくれたわ」

哀れ匙。先程バカにしていた一誠が二大ウルトラ戦士を師と兄弟子に持つだけでなく自分の倍も駒を消費する程の相手と分かってガックリ項垂れた。生徒会メンバーは彼を慰めているが、この後彼どころか生徒会全員が驚愕する事実と直面する事になる。少し先の事なので今回は割愛するとしよう。

「それから匙、重ね重ね言いますが胡蝶さんには失礼な真似をしないように。彼女はフェニックス家の三男を数撃叩き込むだけで瀕死の重症に追い込んだ、それも自身は無傷でという凄まじいまでの実力者

です。悪魔になって日の浅い貴方どころか私達全員でかかっても勝てるかどうかという相手なのですから、それを肝に銘じておきなさい」
「ええっ!?あれってリアス先輩か姫島先輩がやったんじゃないんですか!?」
「そういえば、作戦ですぐに撤退してましたけど相手の『女王』にもダメージ与えてました」
「あの時はカナエも万全じゃなかったし。もし万全だったら、たぶん単独突撃して全滅させてたわ」

否定出来ない。おそらく襲い掛かってくる眷属を叩きのめしつつライザーへ突撃して討ち取ってきただろう。こういうタイプはキレるとヤバいのだ。卯ノ花然り鬼灯然り。

「まあ、それはそれとして」
「あのねリアス。私が人間兵器みたいな扱いされてるのをサラッと流さないでほしいんだけど」
「大丈夫です、カナエ先輩。ゲン師範もそんな扱いです」
「小猫ちゃん、それ喜んでいいのか分からないわ」

アレと同列に並べていいのはウルトラマンを除けば九極天の面々くらいな気もするが。
間違ってもレジェンドやサーガと並べてはいけない。彼らと並べるのはネタ要員(ノーア)とマイペース(キング)ぐらいだ。

「来週はいよいよ球技大会よ。この間のレーティングゲームに備えてパワーアップしたオカルト研究部を披露する絶好の場だけれど、そちらの練習具合はどうかしら?」
「御心配なく、こちらも大会に備えて準備は進めていますので。簡単には負けないで下さいね、リアス」
「ええ、ソーナもね」

お互いを鼓舞しているのか、それとも何か含んでいるのかは分からないが二人共笑いながら妙な空気を醸し出している……と、その時また扉が開かれた。

「ん？オカルト研究部以外に誰かいるのか？」

「矢的先生！」

オカルト研究部顧問を務める矢的が職員会議を終えて漸くやって来たようだ。

「え!?今度は矢的先生!?なんで!?」

匙を筆頭にやはりというか生徒会がざわつくが、ソーナだけはなんとなく予想がついている。

「リアス、もしかして矢的先生も……」

「ええ。私達オカルト研究部の顧問で、何を隠そう今話題のウルトラマン８０その人よ。ほら、駒王で夜中に怪獣が出た時、それを倒したウルトラマン。栄誉あるウルトラ兄弟の一人でもあるわ」

「なあ兵藤、そこまで僕って話題になってたのか？」

「あれから日にち経ってますけど、ネットとかテレビでまだまだ取り上げられてますよ。なんか最近設立されてる各国の防衛チームで、先生の空中戦を参考にする動きがあるとか」

「８０先生、飛行に関して教えるの凄く上手かったんだ。俺も良くアドバイスもらって……あ、俺達がイッセーといるの、８０先生にまだ教えてなかった」

「いや大丈夫。レオ兄さんやゼロから聞いてるから。というか、戦ってるの見ていたし」

生徒会メンバーは脱帽するしかなかった。オカルト研究部、ウルト

ラマンやその関係者だらけじゃないか。ついでにアーシアとカナエに至っては光神たるレジェンドの関係者である。この場でバレたらオカ研メンバー含めて卒倒しそうなものだ。そんな中、匙が興奮した様子で色紙を差し出してきた。

「スイマセン矢的先生！いや、８０先生！サインいいですか!?弟達がウルトラマンとしての先生のファンなんです！」
「え？それは構わないが……バレないかな」
「適当に誤魔化しとくんで！お願いします！」
「う～ん……分かった！生徒の頼みだ。ウルトラサインなら問題ないかな」

匙に差し出された色紙にサラサラと自分の名前をウルトラサインで書く矢的。『匙君の兄弟達へ』と同じようにウルトラサインで書き締め、匙に渡すとまるで仏でも見るような目で礼を言われた。

「ありがとうございます！ジードとかメビウスとか、他にもいるけど先生が一番良いみたいで！絶対喜びます！」
「なんか照れくさいな」

この後、彼からの直筆サイン色紙が匙家の家宝と化したらしく、ついでに他の悪魔からも羨ましがられる結果になったという。
そんな出来事があったが、ソーナ達生徒会は書類整理が残っていると言う事で、球技大会での対決を楽しみにしていると言って退出した。
アーシアの惑星レジェンドへの初訪問と、兵藤家での打ち合わせ、そして新たな事件の幕開けはすぐ近くまで迫っている。

〈続く〉

アーシアｉｎ惑星レジェンド、休日の兵藤家にて

オカルト研究部と生徒会の顔合わせの日から数日後、その世界において休日のその日にレジェンドとアーシア、加えてオーフィス、さらにレジェンドと一体化してるゼットは惑星レジェンドに訪れていた。

正式にアーシアを巫女として迎え入れるの儀式を行う為……なのだが、これは早々に済んでしまった。というのも元々大衆の面前出て行うようなものではなく、数日前にレジェンドが言った通り『天光の間』と呼ばれる場所にて本来の姿に戻ったレジェンドから、光神の巫女服に着たまま直接光気を浴びるだけという簡単なものだったからである。

なお、現在ゼットと一体化している以上、レジェンドは本拠地となるこの惑星レジェンドの住居でしか本来の姿には戻れない。

そんな彼らだが、てっきり観光するものかと思いきやレジェンドの住居の書斎……というか何処その図書館島よろしく、本当に室内かと疑問に思うような場所にて読書をしていた。

レジェンド以外の三人が読んでいるのは大きめの小説のようでその様子は三者三様、アーシアは涙ぐんでおり、オーフィスからは何故か涎を啜る音が聞こえ、ゼットは時折『おお……』という声を上げている。

当のレジェンドはというと、人間体に戻りつつ我が家の書斎（などと呼ぶレベルではない）を久々に点検していた。マジで小さいとはいえ滝の裏側に本なんてどうやって保管してるんだ。そこまでの方法然り保存状態然り。

「……本当に俺、何でこんな所に本を保管してるんだ？」

本人も分かっていなかった。

あんまりにも広すぎてかつて九極天や神衛隊総出で観光がてら探検しようという事になった時も途中で断念するハメになったくらいである。おまけにかなり地下まであるわ、最下層は地下なのに日が差

して食べ物が自生してる上に快適空間だったり、挙げ句怪獣が当たり前のように生活したり……って普通じゃねーよ特に最後ォ!!

まさしく図書館島だった。あそこにドラゴンはいても怪獣はいなかったけど。普通はどっちもいるわけ無いんですが。

レジェンドが点検してる最中にどうやら訪問者が来たらしいのでちょっと出てくる、と言った時も三人は読書に熱中しており、本を見たまま返事を返した。

「ふぁい……グスッ」

「じゅるり……」

「お気を付けて超師匠!」

何故かゼットが一番まともという珍事態に。

アーシアは良いとしてもオーフィスは擬音で返事しないの!マジで何読んでんのこの娘。

☆

その頃、レジェンド宅の扉の前では三人の男――一人は老人――が立っていた。

「やっぱり居ないんじゃないか?久しぶりの帰郷だろうし、案外町中にいるかもしれないぜ?」

「ふむ……確かにのう。儂らも観光がてら町中を探して見るか?」

「そういえば貴方は校長職で、九極天であってもこちらにいる事は少ないんでしたね」

そうしてみよう、と三人が頷きあった時タイミングよくレジェンドが扉を開けた。

「遅れてすまんな。どちらさんがどんな用件で……お?」

「ご無沙汰しております、レジェンド様」
「悪いなレジェンド様、ちょっと顔出しに来たぜ」
「今日を逃すとまた暫く戻ってこなさそうなので」
「アルバス、それにニールとアムロか。わざわざ来てくれたとはな。ま、とりあえず入ってくれ」

訪問者である三人とは神衛隊第四分隊のアムロとニール、そしてレジェンドの眷属である九極天の一人にして、その中でも一、二を争う実力者である九極天最強の魔法使いのアルバス・ダンブルドアだった。

ちなみに彼の本名は『アルバス・パーシバル・ウルフリック・ブライアン・ダンブルドア』。長いのでアルバス・ダンブルドアで覚えられる事が殆どである。というか本名を知っている者がこの惑星レジェンドでもどれだけいるのやら。

ダンブルドアに関しての詳細は非常に長くなるため省略させてもらうが、ヴォルデモートに関わる全てが終わった後、魂がこちらに流れ着いて再び生を受け、九極天の一人になった事はほぼ全ての九極天と同様だ。束のように生きて九極天入りしたのは稀である。

九極天入り後にダンブルドアは転生の環に入っていた亡き家族とレジェンドの手によって一時的に対面し、謝罪と和解を経て漸く心残りだった全てを片付ける事が出来た。

レジェンドの光気を浴びる事によって九極天の一人になってから、元々最強の魔法使いの一人に数えられる程の実力者であった彼の力はもはや神クラスにまで昇華されており、惑星レジェンドにおいては『魔導神』という二つ名で呼ばれている。しかし、それに驕り高ぶるような事は無く従来通り穏やかな人格者として尊敬を集める、何かとクセの強い九極天の中でも良識者だ。

現在は惑星レジェンドにおいて九極天の本居があるクリスタルシティに本居こそあれ、浮遊大陸エイディオンの首都『ホグワーツ』にてホグワーツ魔法魔術学校の校長を務めている為、そちらにいる事が多い。

首都の名は当時選考中だった最中、ダンブルドアが『後進の為に、ここにかつて自分が校長を務めた学校と同じ名前の魔法学校を設立したい』と願い出た事で、彼の功績に最大限の敬意を払うと共にその名を頂いたという逸話がある。ついでに設立資金はレジェンドがポンと出した。

だいぶ説明が長くなったが、レジェンド宅に入った三人はレジェンドに連れられ先程の書斎に案内されている最中だ。

「儀式を終わらせていざ町にと思ったんだが、揃ってあの書斎に興味を持たれてな。三人が読書中に俺は彼処の点検中だったんだよ」
「ほう、あの書斎の。前に彼処を探検した時は儂も中々童心に帰ったものです」
「俺には書斎というより魔境にしか見えなかったんだが……」
「隊長もか？俺もあれは書斎と言わないだろとしか思わなかったぜ。校長や老師、束は喜々として探検してたけどよ」
「カミナやシモンなんかもノリノリだったぞ」

ダンブルドアは出身故という理由が分かるが、東方不敗や束は冒険意欲が刺激されたからのようだ。カミナやシモンら超次元グレン団の面々も。

「アーシア、オーフィス、ゼット。珍しい客が来たから一度こっち見てみ」
「軽いなレジェンド様!?」
「まあ確かに珍しい客ではあるのう。殆どホグワーツの方におるから自宅はハウスキープの魔法をかけて戸締まりしっぱなしで基本的におらんからな」
「ああ、それで暫く帰らずともあの状態で家を維持出来てたのか。流石ですね、ダンブルドア校長」
「ダンブルドア校長っ!?」

アムロの言葉を聞いて、涙目のままアーシアが本をそのままに声を上げた。それに驚いたのか他の二人も本をそのままに顔を向ける。

「おう。どうしたのかな巫女様？」
「あの、あのあの……本当にダンブルドアさんなんですか？」
「うむ。如何にも儂がアルバス・ダンブルドアじゃが……巫女様には何処かで会った事があるかの？」
「いえ……それより巫女様って」
「なに、その服はレジェンド様が自分の巫女ができるとしたらと大切にしていたものじゃからな。それを纏っておるという事は貴女が巫女様だという事で間違いはなかろう」

顎髭を撫でながら笑うダンブルドア。一瞬でアーシアをレジェンドの巫女と見抜き、且つ信用した。

「一目見て分かった。レジェンド様が最初に巫女様として選んだのが貴女で良かったと。この方はなにかと御自分のみで背負われてしまうのでな。是非、御力になって頂きたい」
「あ……はい！」
「ダンブルドア校長の言う通りだ。邪念が無く、純粋な心を感じる。良い巫女を迎えましたね」
「見た目良し、性格良し、素養良し。文句の付け所無しだな」
「最初の一つ目が本音ダダ漏れだぞ、ニール」

レジェンドに指摘され、こりゃ失礼と軽く謝るニールだが、元々嫌な気は全くしない。三人から褒められ嬉し恥ずかしのアーシアだが、思い出したように先程まで読んでいた小説を手に取ると作者の名前を指差す。オーフィスとゼットがそれを見ると……
『かつてホグワーツで過ごした日々』
―アルバス・ダンブルドア著―
ダンブルドアが著者であるものだと分かり、揃って本とダンブルド

アを何度も見返した。しかもシリーズ物らしく、アーシアは既に五巻目に突入している。

「これで……ダンブルドアさんが凄く長い間苦しんで、最期は……グスッ」

「これこれ、泣くでない巫女様。確かに儂は元の世界で様々な経験を経てその本に書かれている最期を迎えた。じゃが今は後悔しておらぬよ。レジェンド様の導きで家族とは和解出来た。似たような境遇や思いを持った者とも出会えた。そして何よりも……この世界のこの場所で、新しい家族達が出来た。心から何でも言い合える家族が。だから儂を哀れむ必要は無い。正しく、今の儂は恵まれておるからの」

笑顔で言い切るダンブルドアに、漸くアーシアも普通に笑える様になった。そして一段落したら次はオーフィスが口を開く。

「レジェンド、今そっちのをニールって言った」

「おいおい……初対面でそっち扱いかよ俺。ニール・ディランディってのは俺の名前で間違いないけどな」

「この本、作者が『ロックオン・ストラトス』ってなってる。でも、それはコードネームで本名がニール・ディランディって作中で書いてあった」

『世界の変革を願って』

―ロックオン・ストラトス著―

まさかの二連続。ダンブルドアとニールが出版した小説を読んでいた。しかし忘れてはいけない。オーフィスは涎を啜りながら読んでいた事を。

「……それ、日常パートはほのぼのしているが基本シリアスかつ深いテーマがあっただろ」

「確かに。ニールがソレスタルビーイングという組織に入った訳、傭兵アリー・アル・サーシェスとの因縁や自身の壮絶な最後。儂も持っておるがかなりハードな内容じゃった。中々考えさせられるから、今もよく読んでおるよ」
「そいつは光栄だな。で、何か言いたそうだなレジェンド様」
「いや、これの何処に涎が出る描写があったんだ？手に汗握る展開はあってもそんなところなかったろ」
「「涎!?」」
「ロックオンが刹那って人物に牛乳奢ってた。牛乳飲みたくなった」
「「「そこ!?それだけで!?」」」

ちょっとした描写なのに心の琴線に触れたらしい。世の中分からんもんである。これにはレジェンドら四人もハモってしまった。

「って事はまさか……アムロ・レイ？」
「ああ、俺はアムロ・レイで合ってるが」

ゼットはふるふると震える指でアムロを指しながら尋ねると、アムロもそれに頷く。それを確認するや否やゼットも読んでいた本を指差してアーシアとオーフィスに見せる。
『宇宙（そら）の記憶～一年戦争編』
―アムロ・レイ著―
やはりというかアムロが出版した小説だ。宇宙というがもちろん地上での戦いも描かれている。さらにゼットは小説に書かれている、ある人物の名を指差した。

「これ！この『ランバ・ラル』って人物がカッコ良すぎでございますですよ!!」
「言葉遣いに違和感があるが……あの人は俺が心から勝ちたいと初めて思った人だったよ。結局、再戦の機会は無いままだったけどな」
「『自分の力で勝ったのではない。ＭＳの性能のおかげだと言う事を

忘れるな』だったよな、確か。普通の奴じゃ単なる負け惜しみにしか聞こえないがこのランバ・ラルってのが言うと不思議と説得力があるんだよな」

ニールもゼットの言葉に同意する。ザクよりも遥かに強力とはいえ、性能で劣るグフでアムロの乗るガンダムと痛み分けにまで持っていったというのはランバ・ラルがそれだけ優れていた証。まさしくその台詞の通りと言えよう。

「……そういや、アムロ・レイ?これの作者以外にも何処かで……」
「お前がゼロや黒歌達と一緒にシミュレーターのＣＰＵに設定して瞬殺された相手だよ」
「ップァオウ!?」
「「「「聞いた事無い叫び!?」」」」

訳のわからん叫び声を上げて仰け反ったゼットにオーフィスを除く全員が困惑した。直前のレジェンドの思い出させ方もちと過激な気がしないでもない。
どうにか落ち着いて話を聞いてみたら、ゼットはあれからも何度も挑戦しているが今だにまともな戦闘にさえなっていないという。しかしそれでもへこたれないのは立派だ。

「というわけで、俺にとって目標の一人だというわけであっちゃうのです！」
「まあ、嬉しい事は間違いないが……言葉遣いがどうも気になるな」
「俺らウルトラマンと話す時は普通に話せるんだがな」

ここは惑星レジェンドなので、地球の言葉というより地球に縁ある言葉が難しいのかもしれない。
アレ?タイガとか普通に喋ってたよな。悪魔とかレジェンドの関係者だから問題なかったのか……なんて事を考えてたらレジェンド

はオーフィスにくいくいと裾を引っ張られた。

「レジェンド、そろそろお昼。我お腹空いた」

「そういえばそうだな。それじゃ、親睦会兼ねて外食にでも行きますか」

「ん？ゼット……だっけ。お前さん飯はどうすんだ？」

「あ、それはでございますね……」

「俺が自分の分をさっさと済ませてゼットに代わるんだよ。とはいえそれも時々だ。ゼット自身は他にもやりたい事が山程あるらしいし、元々ウルトラマンにとって食事という行為は単に嗜好レベルでしかないからな」

「というわけにありまして」

「なるほどねぇ。便利なのか判断に困るところだな」

まあ、無理矢理代わろうとしないあたり、ゼットはそこらへんの常識はしっかりしていた。体育会系だからそこはちゃんと自制が効くのかもしれない。

そんなこんなで七人は親睦会を兼ねた外食の為、クリスタルシティ有数のレストランまで赴くのだった。

☆

所変わって駒王町の一誠宅。アーシアを除き集合したオカルト研究部は球技大会や今後の活動について打ち合わせをしている……はずだったが、何故か今はアルバムを見ていた。

「これが小さい頃のイッセーなのよ」

「あらあら……海で裸に」

「母さんストォォォップ!!それ以上はやめてぇぇぇぇぇ!!」

タイガ達も含め（一誠の両親には見えてない）まじまじと見られる

事に羞恥を感じている一誠の叫びを聞こえてない事につつ、カナエ以外はアルバムを凝視している。特にリアス。

「小さいイッセー小さいイッセー小さいイッセー……うふふふふ……」

「……旦那、なんかリアスがヤバい」

「想い人の昔の姿に感じるものがあるのだろう」

「別のもの感じておかしくなってるんだけど」

タイガの言う通り、リアスの息が荒い気がするんだが。

そんな輪に入らず（生温かく）見守っているカナエだが、その胸中にあるのは妹達との思い出だ。

（もし……しのぶ達もこっちにいたのなら、一緒にレジェンド様やアーシアちゃん達と海で遊んだり出来たのかしら。ダイブハンガーは基本海の中にあるけど）

叶わない願いと分かっているが、傍に今の家族がいないとどうしてもかつての家族の事を考えてしまう。そんなカナエを気遣ったのか、小猫が話しかけてきた。

「カナエ先輩」

「なぁに？小猫ちゃん」

「カナエ先輩が印象に残ってる思い出とか、ありますか？」

「印象に残ってる思い出……んー……」

最近は割と印象に残っているものばかりだ。それは別として考えるとやはりこちらの【エリア】へ来たばかりの頃だろうか。あの頃はカルチャーショックで見聞きする事の殆どがよく分からなかった。

「そうねー……今まで生きてきたところから全てがガラリと変わった

事かしら。最初は大変だったわ。文化自体がまるで違うもの」

大正時代の日本からいきなり超文明な惑星レジェンドへと弾かれ、そして今の生活だ。季節の移り変わりならぬ文明の移り変わりである。日本も大きく様変わりしているし。

「でも一番印象に残ったっていったらあの時かしら」

「あの時？」

何かを思い出したカナエに小猫が聞き返す。さり気なく他のメンバーも聞き耳を立てている。

「扉を開けたらあの方が同僚の方にキン肉バスター炸裂させてた時よ」

『いやそれ本当にどんな状況!?』

「ちなみにかけられてた方はすぐに復活したわ」

「マジですかカナエさん!?」

「よく無事だったわねその人!?」

「いつもの事だもの」

皆さんお察しと思うがキン肉バスターしてたのはレジェンド、されてたのはノアである。派手に炸裂したにも関わらず手を離して床に倒れたかと思った直後に復活した。さすが三超神。なお、キン肉バスターをかけた理由はノアの話がいつもの神使自慢から夜の生活の内容にシフトした為だったりする。ついでにカナエがその場に近づいてくるのが分かった事もその一つ。

「……って木場ぁ!?一人で黙々とアルバム捲んなよ!?」

「まあまあ、別に変な事をするわけじゃないから……ん？」

アルバムを捲っていた裕斗がいきなり鋭い目つきになって一枚の

写真を見る。その表情は以前ライザー眷属と戦った時よりも険しい。
「イッセー君、これに見覚えは？」
「へ？この写真？いや、あまりにガキの頃過ぎてイマイチ覚えてなくて……」
「写真自体じゃなくて―」
裕斗はその写真に写っていた一つの剣を指差し―
「これは聖剣だよ」
冷たい雰囲気のまま、一言だけ発した。
☆
レジェンドらは食事を終えた後、クリスタルシティの書店を訪ねてアーシア、オーフィス、ゼットが欲しがっていた本を購入し、それぞれがダンブルドア、ニール、そしてアムロのサインをその本に書いてもらっていた。
「超師匠、ホントにいいんですか!?」
「ああ。この星に来た時、しかも俺の自宅でしか読めないのは下手すりゃストレスになりかねないからな。続きを読みたくても読めない辛さは俺もよく分かる」
「ありがとうございます、レジェンド様！ダンブルドア先生も！」
「いやいや、そこまで喜んで貰えたら作者冥利に尽きるというもの。今度はホグワーツの方へ是非、訪れて頂きたい」
「はい！」
つまり、先程レジェンドの書斎で読んでいた小説だ。アーシアやゼットはもちろん、オーフィスもちゃんと戦闘部分の描写とかが気に

入っていたらしい。
「レジェンド、我の機体にはＧＮスナイパーライフル付けて」
「……お前、銃での射撃あまり得意じゃなかっただろ」
「ＧＮフルシールドを付けてもらうのも忘れるなよ？」
「うん」
「そこォ！さり気なく要望増やすように仕向けるんじゃない！」
　原因はニール自身だった。まあ、確かに狙撃用の専用ガンコントローラーなんて搭載してる機体は極僅かだろうし。オーフィスの場合、狙撃よりも大出力型の方が性に合ってる気がする。
「やれやれ……そろそろ時間だが、最後に行かなきゃならんところがあるからな」
「では、俺達は一足先に失礼します」
「案外早く再会するかもしれないけどな。じきにそっちに行く超次元グレン団や鉄華団の連中によろしく言っといてくれよ」
「レジェンド様、巫女様方もお気を付けて。御武運を祈っております
ぞ」
　アムロ、ニール、ダンブルドアと別れレジェンドはアーシアらと共に、ある巨大な神殿に向かう。
「あの、何処へ行くんですか？」
「烈が伝説九極天の一人なのは知っているな？」
「知ってる。さっきのダンブルドアもそう」
「ああ。だがな……烈は正確に言うと二代目だ」
「「え？」」
「ここにはその先代がいる。この星を護る守護獣として」
　レジェンドの言葉の意味が分からなかった。だが神殿の奥の開け

た場所に出た瞬間、三人は驚く。そこにいたのは……

「モスラ……？」
「でも、カナエさんのモスちゃんと違って翅の色とか違います。あと、雰囲気が……」
『その通りですよ、巫女様』
「はわぁっ!?」
「安心しろ、アーシア。ただテレパシーで交信してくれてるだけだ」

突如として頭の中に聞こえた声に驚くアーシアだったが、レジェンドから目の前のモスラからテレパシーによる交信だと聞かされて落ち着いた。

『お久しぶりです、レジェンド様。良い巫女様を迎えられたようで私も一安心です』
「皆してそう言うな。お前の子供も立派にやってるぞ」
「子供？それってもしかして……」
『はい。カナエさんが連れている子は私の子供です。体色からグリーンモスラと呼ばれていますね』

言われてみれば目の前のモスラ―親モスラの方が体や翅が大きい。

「あの、レジェンド様が言っていた先代九極天って」
「目の前のモスラの事だ」
『はい、私の事ですね』

レジェンドの言う先代の九極天はまさかの怪獣だった。とはいえ卯ノ花に似て穏やかで、アーシア自身も光気を浴びた為、親モスラが光気を浴びた存在である事も分かる。
話を聞くと、どうやら九極天である以上はあちこちの異世界へと行かねばならないが、同時に惑星レジェンドも護らねばならない。自分

は怪獣故に行動が制限されがちだし自分が残るのは構わないが、かといってモスラレベルの戦闘力がないとどうしようもない場合もある。
どうすべきかと九極天一同で考えていたところ、卯ノ花が弾かれてこちらに来た為、彼女が九極天を継ぐ事を引き受けてくれたので親モスラはそのまま惑星レジェンドに残り守護を担う事になったという。
番外編にて、まだ卯ノ花がこちらに来ていないにも関わらずサーガが「九極の座は全て埋まっている」と言っていたのは親モスラがその座に着いていたからである。

「先代の九極天はウルトラ凄かった……！」
『と言っても二代目にあたるのは彼女だけで、基本的に九極天は入れ替えが殆どありません』
「まあ、それは置いといてだ。テレパシー使ってまで俺を呼んだという事はそれ相応の理由があるんだろう？」
『はい。それから、もう一名聞いてもらいたい者がいます』

そう言って親モスラはオーフィスを見る。

「我？」
『いえ、貴女はちゃんと聞いて下さってますので。正しくは貴女が連れているカプセル怪獣です』

親モスラの言葉を聞いてオーフィスの持つカプセルからゴジラが自分で出て来た。やっぱり勝手に出て来たので愛らしいちびゴジラ状態だ。

『おう、久しぶりだな。まさかオレ様とお前が家族扱いされる事になるなんざ思いもよらなかったが、思ったよりも悪くないな』
『ええ。ついでに貴方がそんなに可愛らしくなるとも思いませんでした』
『やかましい!!』

プンスカ怒るゴジラだが、オーフィスに抱えられてジタバタしてるだけで全く恐くない。アーシアなんて撫でようとしている。……結局撫でられた。

「さて、必要な面子は揃ったわけだが……」
『オレ様にまで聞かせるって事は大方オレ様に関わる事なんだろうがよ』
『ええ、その通り……ゴジラ、貴方の細胞を使って何かを企んでいる者がいます。今、レジェンド様達が活動している世界に』
「「「『!?』」」」

親モスラから告げられた事―それはゴジラ細胞を使い、何かを企んでいる何者かがいるという事だった。ゴジラ達は驚いているが、レジェンドはある程度は予想していたらしく腕を組んだまま目を伏せている。

『かつて貴方が戦った者達との再戦も懸念されます。十分に気を付け、警戒を怠らないで下さい』
『オレ様の細胞で再戦……なるほど、あいつらか』
『それから巫女様』
「は、はいっ!?」
『正式にレジェンド様の巫女となった事で、様々な加護や封印を解く事が可能となり、またカプセル怪獣達の新たな力を目覚めさせる事が出来るようになります』

これにはアーシアも今日一番驚いた。まさしく巫女となったアーシアだけが出来る事。レジェンド達だけでなく、カプセル怪獣達にとっても朗報と言える。

『って事はオレ様にも新たな力が手に入るって事か?』

『ええ。しかしそれには特定の条件ないし状況が必要となるでしょう。私が分かるのは一つ……ニライカナイ』

かつて、地球に栄えたという古代文明ニライカナイ。そこに関係があるようだが現時点では何も分からない。

「何にせよ、希望と脅威が一度にやって来たわけだ。モスラ、情報提供に感謝する。後はこちらで何とかするさ」

『レジェンド様はあまり一人で抱え込まぬよう。巫女様、この方の単独行動が目に余るようなら遠慮なく実力行使して頂いて構いません』

「ええっ!?」

「お前ちょっと見ない間にバイオレンスな考えになってないか!?」

『御自分の行動を振り返って見て下さい』

バッサリ切り捨てられた。親モスラとしてはちゃんと家族を頼れ、という事なのだが。とにかく、今はこれから起きるであろう事態に備えておくという形で締められた。

この後、アーシアをダイブハンガーへ送り届けたらとんぼ返りして、今度はスペースコロニー・ドラガイトまで行かねばならない。

そこにはレジェンドが人間として、本格的に戦う為の機体が待っている。

新たに判明した脅威、そしてそれに対抗出来る可能性を持った希望の光。そして裕斗の過去の因縁。事態は再び動き出そうとしていた。

〈続く〉

登場人物紹介（伝説九極天・神衛隊編）

※現時点での登場人物になります。

【伝説九極天】

○卯ノ花烈

最初に登場した九極天。詳細は第二章の登場人物紹介（レジェンド一家・光神編）を参照。

登場時は九極天と判明していなかったが、鬼灯や縁壱の登場と同時期に発覚した。

加えて、親モスラの後任である事も前話にて判明。

○鬼灯

レジェンドの右腕とも称される鬼神にして九極天随一の働き者。九極天の中でも古参の人物。

日本地獄に出向して閻魔大王第一補佐官の立場にいるが、ぶっちゃけ彼が日本地獄の管理者と言っても過言ではない。本来の立場では彼が地獄で最上位。

戦闘力は言わずもがな、書類仕事にも非凡なる才を発揮しているが、そのせいでただ手伝いに来ただけなのに当の閻魔大王がサボるという悪循環に陥っている。

地獄式運動会の実行委員長兼実況（特別ゲスト兼解説にレジェンド）。この運動会は二人のストレスの蓄積具合によって内容が決定している。

最近では弾かれてこっちの地獄に落ちて来た鬼舞辻無惨に手を焼きつつも、罰という名目でストレス解消に利用している。

悩みとしては超高給取りなのに休みも使い道もない事。

カプセル怪獣にシン・ゴジラ（第四形態）が存在しており、現状彼かレジェンドしか従えられない。

○継国縁壱
鬼殺隊にとって始まりの剣士と称される人物であり、カナエがぶっ飛びスペックになった原因。
九極天としては卯ノ花に次いで新顔であり、彼女を除けば一番後に着任した。
こちらに来て妻・うたと再会し、息子・縁次の誕生に立ち会えただけでなく娘・かなでももうけている。
嫁馬鹿にして親馬鹿。兄上も大好き。
作中にて日の呼吸を第三幕まで会得している事が明らかになっている。
実兄の巌勝とは無事に和解済み。
普段は惑星レジェンドにて継国剣術道場の師範を務めている。この道場、日の呼吸と月の呼吸を除く、他の系統の呼吸法を使い手で占められており、巌勝以外の師範代も柱クラスという化け物揃いの道場である。
第二章終盤にガチでサーゼクスにトラウマを植え付けた張本人でもあり、戦わずして戦意喪失させた。

○東方不敗マスターアジア
元キング・オブ・ハートにして第十二回ガンダムファイト優勝者であり、流派東方不敗の開祖。
本名シュウジ・クロス。と言っても偶にそれに捩ったあだ名で呼ぶ者がいる程度（例・束）。
作中でも様々な伝説を打ち立てて九極天の称号に恥じぬ活躍をしており、アムロを勧誘し、狛治を決心させたのも彼である。
九極天では数少ない機動兵器持ちであり、愛機ネオマスターガンダムを用いて死の星となった惑星を幾つも再生している。
一応クリスタルシティに本宅はあるものの、前述の通り様々な惑星を再生させる為に飛び回っており、ダンブルドア同様殆ど自宅に戻る事が無い。
搭乗機はネオマスターガンダム。外見上の変化は無いが、ＤＧ細胞

が新生アルティメット細胞になっており、惑星の再生にはこれを使用している。

○篠ノ之束

自他共に認める天才にして天災な科学者。

本作では所謂『白い束』である。コミュ障でもなく、割と社交的だが気分屋なところは変わらず。

養女に『アドヴァンスド』のクロエ・クロニクルがいる。

宇宙を筆頭にロマン溢れる場所が大好き。

レジェンドやサーガ、果ては神衛隊に至るまで機動兵器の開発を一手に引き受ける九極天無敵のブレイン。

彼女曰く「スーパーコンピュータなんかより束さんとレジェくんの方が凄い！」らしく彼女のラボのコンピュータを占拠しようとした電子生命体を、相手のアウェーにも関わらず手動で対抗し瞬時に消滅させた経験がある。

惑星レジェンドの周囲にあるスペースコロニー群の一つ『ドラガイト』に別荘を持っている。

自分はレジェンドだけのアイドルと豪語しており、クロエ共々嫁に貰ってもらおうと日々奮闘中。

○アルバス・ダンブルドア

鬼灯と並んで古株である、九極天最強クラスの魔法使い。

ほぼあらゆる魔法を網羅しており、レジェンド曰く普通の魔法使いが彼に挑むのはそこらへんのチンピラがシン・ゴジラ（第四形態）に挑むくらい無謀との事。

作中で説明があった通り、浮遊大陸エイディオンの首都にて惑星レジェンドにおけるホグワーツ魔法魔術学校を設立し、校長を務めている。

元の世界での様々な重責から解放されたからか、レジェンド宅の書斎探検に東方不敗や束、超次元グレン団共々はしゃぐなど、お茶目な面も見せるようになった。

彼がかつての世界を離れるまでを描いた自伝小説は惑星レジェンド屈指のベストセラー作品であり、アーシアもそれのファンである。

【先代の九極天】

○親モスラ

クリスタルシティの神殿に住まう、九極天唯一の怪獣。現在はその座を卯ノ花に譲り、惑星レジェンド最強の守護獣として各次元の宇宙を観測しつつ暮らしている。

カナエのカプセル怪獣であるモスちゃんことグリーンモスラの親。

穏やか且つ博識であり、レジェンドらに新たな敵の存在や新たな希望・カプセル怪獣達の覚醒などを教えた。

怪獣でありながらテレパシーで会話したりと芸達者。

知っての通りゴジラとは旧知の仲。

【神衛隊】

―第一分隊『紅蓮』―

○カミナ

御存知、グレン団創設者にして紅蓮の団長。

超次元グレン団としてはシモンと共にダブル団長を務める不撓不屈の鬼リーダー。

そのインパクトある外見と妙に他者の心に響く台詞をナチュラルかつダイナミックに言う漢。

厳勝を出会って間もなくブン殴るというとんでもない事をやらかすが、その際の台詞がきっかけとなりサーガらの後押しもあって継国兄弟は和解、厳勝を紅蓮へと引き込みそのまま己の左腕にした上、いつの間にか参謀長にしていた。

かつての世界で死亡してからこちらに招かれ、暫く時が経っているので成長しており、髪や背も伸びて身体もさらに逞しくなるが性格は変わらず。良い意味でそのまま大人になった感じである。

搭乗機はグレン。神衛隊に超銀河グレン団が組み込まれる際にギ

ミーとダリーからコアドリル共々本来の所持者へと返され、束の手で単純にスペックのみを強化された。
このグレンはシモンのラガンとの合体でグレンラガンという超次元グレン団のフラグシップ・ガンメンとなる。

○継国巌勝
縁壱の実兄であり、かつて鬼舞辻無惨の配下たる最強の鬼、十二鬼月上弦の壱・黒死牟であった者。
当初は様々な感情が入り乱れており己を見失いつつあったが、少し話しただけのカミナに殴り飛ばされ説教されただけでなく、その直前のレジェンドや鬼灯の言葉やカミナと共に来たサーガ、そして縁壱の言葉で漸く向き合う事が出来るようになり、縁壱と和解。
その後、カミナの勧誘により『縁壱の道場の師範代と並行して』という条件で紅蓮へと加入。この時点でカミナに左腕認定されているが、ダイブハンガーへ来た時には何故か参謀長にまでされていた。
クリスタルシティ郊外の高台に大きな和風屋敷を構え、隣り合うようにクリスタルの墓が建っている。これに関しては作中を参照。
ヨーコの推薦により、サーガらと先遣隊メンバーとして一足先に駒王へとやって来ている。
神衛隊加入にあたり機動兵器の適性検査を受けた際ＭＳの適性が高かった為、第四分隊のアムロ・レイ大佐の元で各種技術を学んだ。その際に暫く宇宙にいた事と指導したアムロの影響を受けてニュータイプとして覚醒しつつある。
搭乗機はターンＸ。神衛隊初のターンタイプＭＳにして超次元グレン団初のＭＳ。原典と違い背部のウェポンプラットフォーム『キャラパス』には訓練時代に使用した機体・アストレイレッドフレームの装備であるガーベラストレートが鞘と共に装備されているのが特徴。
ついでにどういうわけか搭乗すると何故かハイテンションになる。この状態は最近『巌勝・御大将モード』と言われるようになった。

―第二分隊『羅巌』―

○ヨーコ・リットナー
『羅巌』の参謀長を務める超一流スナイパーの美女。スタイルも文句無しで教養もある。
前話までに唯一羅巌側で台詞があった人物。
サーガや巌勝、オルガや三日月と共に先遣隊として駒王へとやって来た。教師をしていた経験からか世話焼きな部分があり、サーガや巌勝の異世界渡航準備の確認をしている。
基本的に良識枠の為、ツッコミ役になっているがそのせいかまだ出番は少ない。登場したばかりだもの、仕方ないね。
搭乗機はヨーコMタンク。ターンXやバルバトスと違い、まだ作中でも機体名どころかカテゴリ（ガンメン）名さえ呼ばれていない。きっとこれから活躍する機会があるよ！

―第三分隊『鉄華団』―
○オルガ・イツカ
鉄華団の団長を務める少年。というのもカミナと違い鉄華団の面々は外見上殆ど変化していない為である（僅かながら成長しているのだが）。
クリスタルシティにて東方不敗と合流後、縁壱の道場にて狛治を勧誘、一時は断られたが東方不敗が恋雪や慶蔵を連れて来た事もあって三人纏めて鉄華団へと引き入れた。
一見話しかけにくい外見だが、気さく且つ気配り上手でカリスマもある良き兄貴分。
良識枠だがツッコミもキレがある。あのレジェンドにも容赦なくツッコんだ辺りは本作で割と重要なポイント。周りがボケだらけなんだもの。
先遣隊としてサーガらと駒王にあるレジェンド一家の仮住居へ来た時もツッコミ役として早速活躍していた。
搭乗艦はイサリビ……だったが、今後の戦いを見越してより戦闘力を持った艦が必要だという事で、いずれ新造艦を受領する予定。

○三日月・オーガス
鉄華団のトップエースであり、ネオ・ガンダムバルバトスルプスレクスのパイロット。
オルガとの付き合いは長く、お互いが言わんとしている事もすぐに理解出来る。
サーガらと共に駒王へとやって来た先遣隊メンバーの一人。
天然な性格ではあるが、何も考えていない訳ではなく自己主張もちゃんとしている。
サーガによる新生阿頼耶識システムのおかげで仰向けに寝れるようになったからか、活力に溢れている。
それが理由かは不明だが、ゲンの本気の一撃を脳天へまともに受けたにも関わらずデカいたんこぶ一つで済んだ上、アーシアによる治療ですぐ目を覚ました。本人曰くレンチメイス程度の一撃なら耐えられるようだが、普通はそんな事出来ません。
搭乗機はネオ・ガンダムバルバトスルプスレクス。長い。
新生阿頼耶識システムに対応したネオ・ガンダム・フレームの一機であり、鉄華団のフラグシップ・ＭＳ。システムの都合上、完全に三日月の専用機である。

○昭弘・アルトランド
鉄華団のエースの一人。三日月と同じネオ・ガンダム・フレームのＭＳのパイロットを務めている。
後述のシノ共々短く登場しただけだが、先遣隊にゲッターチームが不在な理由を聞いたり、狛治夫妻をラフタと共に後押ししたりと変わらぬ堅実さが垣間見える。
搭乗機はネオ・ガンダムグシオンリベイクフルシティ。やっぱり長い。

○ノルバ・シノ
鉄華団のエースの一人で、同団で教導官も務める。
ネオ・ガンダム・フレームのＭＳに搭乗するが、元の世界でもガン

ダム・フレームの機体に乗ったのは前述の二人に比べると遅めであった為か、新生阿頼耶識を使わずともある程度乗ればどんな機体でも十分に動かす事が可能。
第四分隊所属のニールから徹底的に狙撃のイロハを叩き込まれた。
いつまでも新婚レベルで初々しい狛治夫妻をからかってはいるが、細かい部分でフォローしたりするなど教導職にいる事は伊達ではないというのを証明している。
搭乗機はネオ・ガンダムフラウロス【流星号】。当然の如く流星号と名付けて呼んでいる。

○狛治
厳勝同様、かつて無惨配下の十二鬼月上弦の参・猗窩座だった者。
弾かれてこちら側に来た当初は贖罪の為に継国剣術道場で師範代を務めていたが、東方不敗と拳を交え恋雪や慶蔵らと再会、そして一度は断ったものの再度オルガの勧誘もあり二人と一緒に鉄華団へ入団した。
その際、厳勝も含め神衛隊入隊記念と称してレジェンド主催による恋雪との祝言を挙げた。
それからは鉄華団の一員として、専用機が無い間は白兵戦での活躍を重ね、妻・恋雪は料理班、義父・慶蔵は武術指南役としてそれぞれも鉄華団に貢献している。
一応ＭＳの適性もあったが、実際に実力を感じた東方不敗の勧めもあり、専用機はＭＦを開発される事になり先日遂に完成。現在はスペースコロニー・ドラガイトにて妻や義父と観光しつつ、最終調整を行っている。
搭乗機はガンダムゴッドマスター。ガンダムトライエイジにて初登場したトライエイジオリジナルの機体である。無論、開発協力に東方不敗が関わっているのは言うまでもない。

―第四分隊（現時点では名称不明）―
○アムロ・レイ

言わずと知れた『連邦の白い流星』。かつての世界で東方不敗がアクシズを消滅させた際に勧誘され、こちら側に来てからは神衛隊第四分隊のＭＳ部隊隊長を務めている。階級は大佐。
彼の来歴からその心情を汲み取ったサーガによって、普段はアクアエデンにて主に家電製品エンジニア兼アドバイザーを行う機械技師として生活している。
その他、厳選された人物（作中では厳勝のみ明らかになっている）のマンツーマンによる機動兵器の各種教導を行う事もある。
やはりと言うかハロを考案して販売したところ、以前より大幅にバリエーションを増やしたからかバカ売れ状態になった。
彼自身は当然の事、シミュレーターにおける彼のＣＰＵパターンでも鬼畜性能であり、同隊やレジェンドらを除けばフィン・ファンネルを全機落とした厳勝と三日月が最高戦績。レジェンド一家の面々も容赦無く叩き落とされた。
搭乗機はＨｉ―νガンダム（フルサイコフレーム）。
ユニコーンガンダムのような『変身』こそしないが、各部が展開する『アウェイキング（覚醒）モード』への変形機構を有する。シミュレーターにはまだ未搭載の為、実装されたら（ある意味）味方さえ絶望する機体。

○ニール・ディランディ
第四分隊ＭＳ部隊に所属するパイロットであり、先代の『ロックオン・ストラトス』。ノルバ・シノに狙撃技術を叩き込んだ教官でもある。
同隊の兄貴分としてアムロからの信頼も厚く、戦闘において彼が後方に控えているか否かでパワーバランスが逆転するとまで言われる程。一応、少佐階級を与えられているものの、あまり気にしていない。
普段は射撃競技訓練校で講師を行い、アムロや隊の他の者同様に機動兵器に関する教官として活躍する事も。
かつてのハロはそのまま元の世界にいる為、アムロに新しいハロを作ってもらった。当然、出撃時は一緒に機体に搭乗する。

搭乗機はガンダムデュナメスリスタート。形状としてはガンダムデュナメスとその二世代先の後継機であるガンダムサバーニャを組み合わせたような感じの機体。
リスタートはＲｅｓｔａｒｔ、つまり再出発を意味し、神衛隊の一員としてもう一度歩むという決意を込め、彼自身によって命名された。

―特別部隊・ゲッターチーム―

○流竜馬
ゲッターチームの中心人物であり、ブラックゲッター及び真ゲッター1のメインパイロットを務める。
リーダーと言うと隼人と口論になる為、中心人物と言われるようになった。弁慶は特に何も言わないが。
たとえゲッターが使えずとも生身で戦いに赴く度胸と腕を持っており、作中で束に捕まっていたのはレジェンド絡みで束が二十倍程パワーアップしていたから。
先遣隊にこそ同行していなかったものの、他のゲッターチームやドラゴンチームに先駆けて合流する事が明らかになっている。
ただでさえ危険かつ困難な高速飛行しながらの合体を「眠っててても出来る」と言う程の優れた操縦技術を持つ。
搭乗機はブラックゲッター、真ゲッター1。参戦時から暫くはブラックゲッターでの戦闘となる。

※上記のメンバー以外にも『羅巌』にシモン、ニア、ロージェノムが、『鉄華団』にはラフタ、オルガの台詞の中だけだが名瀬・タービンがいる事が確定済。名瀬やラフタがいる事からタービンズも鉄華団として組み込まれていると思われる。ゲッターチームも隼人と弁慶、ドラゴンチームには號達三人がいる事も明言されている。

今回記載してないキャラに関しては今後正式に登場してから纏めて載せます。

球技大会、荒ぶるオカルト研究部

アーシアを巫女として迎えたレジェンドは、親モスラとの対面した後に彼女をダイブハンガーへと送り届け、自身はオーフィス（やはりと言うかついて来たがった）とゼットを伴ってスペースコロニー・ドラガイトへ訪れていた。
かねてより開発中であるレジェンドの専用機の調整を行う為だ。

機体用ドックの一室にてメタリックグレーの機体が一機だけ佇んでいる。ここはこの機体の為に用意された専用ドックであり、これがレジェンドの専用機となるＭＳ。
名を『ウルティメイトオリジン』という。
今まで様々な試行錯誤を行い続け、つい最近漸く形になったのだ。もっともそこからが今回の課題なのだが。

「おおー……！」

オーフィスとゼットは興味津々、目を輝かせながらウルティメイトオリジンを見ている。
その二人とは少し離れて、レジェンドは束と打ち合わせしている。クロエは最近お菓子作りにハマったらしく、せっせと皆に出すスイーツを作っていた。

「でね、無理に出力を抑えるより余剰出力を別の形で利用出来ないかな～とか考えたら、それ使って装甲表面とか機体周辺にバリア張っちゃえばいいじゃん！ってなったんだよ！」
「確かにそっちの方が無難ではあるか。無駄も無くなるし最低出力値を高めに設定出来るしな」
「だよねだよね！みっくんのターンＸもＩＦＢＤで動いてるから駆動系とバリアが複合機能なわけだし」

そんな話をしていると、とてとてとオーフィスが近寄って来て束の裾を引っ張った。
「ん？どしたのオーちゃん？」
「我が本で見たＭＳは色がついてた。レジェンドのは灰色とか緑しかない。どうして？」
「もしかして、あれはプロトタイプとか!?」
オーフィスの疑問はもっともだし、ゼットの意見も普通なら割と有りそうなものだが。
「あれはね、ディアクティブモードって言うの。分かりやすく言うと待機状態。電源が入ってないって思ってくれればいいよ。起動すると色が変わるから」
「我、見たい」
「俺も見たいであります！」
ぴょんぴょんと跳ねるオーフィスとゼットにレジェンドは溜息を吐き、束はよし来たと言わんばかりにレジェンドの方を向く。
「レジェくん！ここは束さんとレジェくんが器の大きさを見せてあげようじゃないか！レッツテストだよ！」
「お前仲良くなるの早過ぎだろ……やれやれ、『ＵＤＣドライヴ』の出力調整は簡単じゃないんだぞ」
「ほらほら早く！束さんやクーちゃんと同じ未来のお嫁さんと、将来有望なお弟子さんのお願いを叶えてあげよー！」
「おい、さり気なく嫁発言するな。ついでにゼットは俺の直弟子じゃない」
束に背中を押されつつ、レジェンドは己のこれから愛機となるＭＳ

へと乗り込んだ。

☆

それから数日後の駒王学園。
いよいよ球技大会本番とあってあちこちで凄まじい熱気が放たれている。我らがオカルト研究部もやる気に満ちているのだが……

「……」

ただ一人、裕斗だけは心ここにあらずといった感じでボーッとしていた。練習時もこんな感じだったのだ。

「やっぱりあの日見た写真が気になってるみたいね」
「あの、カナエさん。私がいない時に何かあったんですか？」
「私もよく分からないの。聖剣がどうとか聞いただけだし……本人が話そうとしない以上、無闇やたらと突っ込んで聞くわけにもいかないわ。今は球技大会に集中しましょ……!?」

何かを見たカナエは咄嗟にアーシアの目を両手で塞いだ。

「はわっ!?カナエさん、いきなりどうしたんですか？」
「アーシアちゃんは見ちゃダメ。というか出番まで別のところに行きましょうね。イッセー君がどうにかしてくれるらしいから」

カナエの視線の先には一誠が「すいません」と両手を合わせて謝っていた。それに対してカナエは「大丈夫、よろしくね」と笑顔で頷き返し、アーシアを連れてそそくさとその場を退散する。

「さて……松田、元浜……親友だからこそ敢えて忠告させてもらうぜ」
「フッ……イッセー、その言葉を今の俺達が聞くと思っているのか？」

「あのお前がいなかった約十日間、漸く出て来たと思えばリアス先輩や姫島先輩のみならず、胡蝶先輩からも親しげに呼ばれている裏切り者め！」
「それは否定しないけどカナエさんには片想い中の人がいるらしいぜ。なんでもアーシアと同じ人だってさ。勿論俺じゃねーぞ」
「カナエさん!?名前呼びだとぉ!?」

一誠的には結構重要な事を言ったと思っているのだが、目の前の二人は聞いちゃいない。そして一誠と共にいるトライスクワッドも……

「おいイッセー、何だアレ……！何なんだよアレ!?」
「つーか正体分かってても分かりたくないだろあんなの!!」
「もしやアレが噂の闇堕ちというやつなのか!?」

物凄く動揺していた。タイガとフーマはこれ以上ないくらい混乱してるし、タイタスは自分の得た知識からそれらしきものを探し出している。確かに墜ちるところまで墜ちている気がしないでもない。

「そもそもなお前ら……」

遂に一誠が糾弾する。

「後ろの奴らも含めてなんて格好してんだ!?」

そう、松田と元浜を始め彼らが率いる集団はありえない格好で球技大会に参加していた。
網タイツを履き、男子でありながらスリングショット（紐水着）を着用し、頭……というか顔には女性用のパンツを被ったその姿はまさしく変態。なんか目も釣り目になって瞳が消えてる。何だコレ。そんな連中が集団で現れたら誰だって恐怖するだろうさ。

というかよくそんな格好許可されたな。

「堕ちたなイッセー。この姿の素晴らしさが分からんとは！」
「どこが素晴らしいんだよ!?お前らは墜ちるどころかマントル突き抜けてさらに堕ち続けてんだろーが!!」
「墜ちる？違うな、俺達は昇華したのだ！」
「昇華というか昇天してくれと思っちまったよマジで」

なんで俺今までこいつらとつるんでたんだろ……と一誠は本気で落ち込んでいた。ゲンやレイトらとの関わりや修行を経てまともな感性になった一誠には親友と思っていた二人（だけではないが）の奇行を直視出来ない。

「何を言ったところで今のお前では理解出来ないだろう」
「したくもねーよ、んなアグレッシブ変態スタイル!!」
「我らが目的はただ一つ！モテ男果てるべし！」
「「「「果てるべし!!」」」」

ぶっちゃけただの嫉妬だった。嫉妬も極めれば変態になるのか？いやダメじゃねーかソレ。

「……ちょっとだけアイツらの気持ちがわかっちまったよ……」
「おいフーマ!?何言ってんだ!!」
「お前まで邪道に墜ちる気か!?」
「いや、イッセーの周りって美女か美少女しかいねーじゃん。そこだけは同意かなって」
「「……ああー……」」

確かにそこは納得した。その通りである。
加えて言うならレジェンドもそうなのだが。

「ていうか午前中はクラス対抗じゃねーか!!クラスバラバラでチーム組めるわけないだろ!?」
「今は黙して死を待てイッセー。アレを見ろ！」

どっかの闇人格を彷彿とさせる台詞を吐きながら松田は用意されたボードを指差す。そこに書かれていたのは……

兵藤一誠他　ＶＳ　エロマスクチーム

とだけ書かれていた。つまりクラス対抗どころか目の前の変態共ＶＳ一誠他男子と言う事らしい。

「我々やそちらのチームにいる男子の入れ替えは自由だ。だがイッセー、お前には常に出続けてもらう！」
「はあ!?」
「言っただろう、モテ男果てるべしと！即ちモテ男たるお前には果てるまで戦場に立ち続けてもらうというわけだ！」

無茶苦茶な理論である。さすがにこれには抗議したいところだが今の変態共には何を言っても聞かなそうだ。

「ちょっと、いくらなんでも……」
『あーあー、リアス聞こえる？』
「……？カナエ？」
『あ、ハリベルさんから貰ったブレスレット、ちゃんと着けてくれてるのね。ならばよし！それ、こんな風に通信とか、中に色んなもの収納したり出来るから有効活用してね』

なんとまあ重要な事を妙なタイミングで言う娘である。ありがたいが今はそれどころじゃ……とリアスが言おうとした時、先手を打ってカナエがさらなる爆弾を落としてきた。もっとも、一誠にとってはこの上ないくらい御褒美なものだが。

『リアス、この状況で変態達を止められるとしたらただ一つ、完膚なきまでに叩き潰す事だけよ。それもイッセー君が。無理ではないわ。あの修行を乗り越えた根性とその成果、そしてこんな事もあろうかと乱菊さんがブレスレットに仕込んでおいたあの衣装を着込んだリアスの応援があれば!!』
「ちょっと待って特に後半っ!?」
『善は急げよ!・走りなさいリアス!・更衣室へ!!』
「ああもう!・メロスみたいに言わないで頂戴!!」

有無を言わさぬ迫力のカナエ（ただし通信）に急かされて更衣室へ向かったリアスは、カナエの言う通りに念じてブレスレットから仕込んでおいたという衣装を取り出すが……

「こ……これって……いえ、まともと言えばまともなんでしょうけど、サイズが……」

最初は納得したリアスだが、その服のサイズを見たら冷や汗が垂れてきた。しかし四の五の言ってはいられない。これもイッセーの為、と思い切って着る事にした。
リアスが着替え終え、再び出て来た時には既に男子種目（と言っていいのかもはや微妙だが）であるサッカーが始まっており……

「フォオオオオオオ!!」
「くそっ!・何であんなガチ変態コス着た途端にありえねーパワーアップしてんだよ!?」

ここは小説で良かったと言わせて頂きたい。
ガチ変態コスを着た松田と元浜のツートップ……通称ダブルエロマスクが魅惑の双丘ならぬ卑猥な双球を揺らしながら見事な連携を見せている。見せなくていいものの方が目立ってるけど。
それに対抗出来ているのは唯一、一誠だけだった。

元変態だからとかじゃなくて、真っ当な理由……つまりどういう訳か身体能力が異様に増しているエロマスク軍団に追随しているのがゲンとレイトの特訓を受けた彼だけなのだ。裕斗に関しては最初から変わらずだし。

「……ホントにどうなってるのよ……」

「……部長の方も気になります」

「あらあら、随分と気合が入ってますわね」

「え!?あ……これはカナエ曰く乱菊さんが……そんな事よりっ!!頑張ってイッセー!!」

リアスの応援が聞こえた一誠は声がした方向を向くとそこにはリアスが……

「!!!!!!」

チアリーダーのコスチュームに着替えたリアスがボンボンを持ちつつ一誠の応援をしていた。しかもサイズが小さめな為に色んなものがギリギリだ。

これにより一誠の気力が「Ｂｏｏｓｔ！」した。別のものもそうなった気がしないでもないが。

想い人が自分の為にあんな衣装を着て応援してくれている、と昂ぶった一誠は強かった。

「愚かなりイッセー！羞恥を捨てて遥かな高みに立った我々に挑もうなど―」

「うるせぇぇぇ!!部長の為にも俺は勝ァつ!!」

「な……なんだとぉ!?」

松田と元浜からボールを奪うと単独で爆進し師や兄弟子と共に鍛えた足でシュートを叩き込むと、キーパー(のボール)ごとゴールネッ

トを突き破り、ボールは壁にめり込んだ。

「「「「……」」」」

オカルト研究部以外は唖然としている。

確かに納得出来るがとりあえず股間を押さえて涙を流しながら気絶しているキーパーの心配をしてあげよう。男として再起不能になるかもしれないし。

結局、その後はリアスの応援も相まって一誠が無双モードに突入したためエロマスク軍団は全ての勝負に敗北。

短期出張から帰って来た矢的が回収していった。

「出張から帰って来てすぐにあんな事させてすいません矢的先生……！」

「いや、別に兵藤は悪くないからな？まあ、あのキーパーをやってた奴には同情するが」

どうやらあのキーパー、男としては終わらなかったがプライドは木っ端微塵、跡形も無く吹き飛んだようだ。

ついでにエロマスク軍団は午後の競技には出られないようだが、最初から人数に入れられてなかったらしくいなくても別に困らないとの事。哀れ、変態共。

☆

駒王学園でそんな白熱した（？）戦いが繰り広げられている頃、ダイブハンガーでも似たような出来事が起こっていた。

「ちょっ……三日月待っ……！」

「落ちろってば……！」

「にゃあああぁぁ!?」

「……あっさり撃墜されたのう」

ドラガイトから戻って来たレジェンドが最新型のシミュレーターを数機持ち帰って来た事で対戦訓練が可能となったので、それを使ってトーナメント戦を行っているのだ。

先程、三日月のバルバトスに黒歌の選択機体であるリ・ガズィが撃墜された。連日の作業でレジェンドが徐々に疲労してきたので休息を取らせており、まだトレースタイプのシミュレーター機能をインストール出来ておらず黒歌希望のソウルゲインはまだ選択出来ない。

「フフハハハ!!我が世の春が来たァァァ!!」

「厳勝さん性格が……ってうわあああ!?」

リクの選択機体であるスーパーガンダムがターンXのガーベラストレートによって真っ二つにされ、撃墜。

御大将モードの厳勝に衝撃を受けつつ敗退してしまった。

「バルバトス、何あれ……尻尾まで使うなんて狡いにゃ!!」

「そっちだってBWS飛ばしてきたじゃん」

「まさか鞘が『開く』タイプなんて想像出来なかったよ……てっきり飾りか何かだと」

「まあ、ターンXの手の形状から普通はそう思うだろうが……如何なる相手でも用心するに越した事はないと言う事だ」

「そもそもさっきのアレ何!?」

御大将モード。原理は今だに不明である。

ついでに効果もハイテンションになる以外不明。ホント何なんだアレ。

「……ん」

ぽすっぽすっ…

「オーフィス……俺の腹の上に座りながら跳ねるんじゃない」
「我もやりたい」
「行ってくればいいだろう」
「レジェンドと一緒じゃなきゃ嫌」

シミュレーターでワイワイやっているのを遠目に、レジェンドは横になってぐったりしながら、オーフィスに抗議した。オーフィスも構ってほしくてレジェンドに馬乗り状態だ。
以前鬼灯が言った通り、まるで親子の風景である。
学園で起こっている死闘に比べたらほのぼのとしたもんである。

☆

そして午後、球技大会の目玉とも言えるメインイベントである部活対抗ドッジボールが始まる。
注目株はやはりと言うべきオカルト研究部だ。
一誠は午前中の各試合にて（半分不本意だが）大活躍し、それ以外にも三大お姉様全員が在席し、学園のマスコットや王子、最近では癒し系の天然美少女なアーシアまで加わった。
ついでに言うと女子の部でも修行にて直接戦闘におけるパワーアップを果たした小猫とカナエが猛威を奮った事も関係している。
特にデフォルトで一誠無双モードに匹敵するカナエはヤバすぎた。

「イッセー君、午前中はありがとう。おかげでアーシアちゃんにアレ見せなくて済んだわ」
「いえ、俺の方こそカナエさんのおかげで部長の良い物を見せて頂きました！」
「イッセーだけならともかく、他の皆に見られるのは恥ずかしかったのよ!?」

……というが、後半ノリノリだったのは口に出さないでおく。

「ゴホン！それは済んだ事として……第一回戦の相手が決まったわよ」
「どこですか？柔道部？剣道部？」
「ふふ……違うわ。相手はソーナのところ、つまり生徒会よ！」

トーナメント表を見せながら告げるリアスは、さらに爆弾を投下する。

「カナエ！私が責任を持ちます！花の呼吸と日の呼吸、使用しても構わないわ！」
「え、いいの？縁壱先生も九極天参加のドッジボールで使ったらしいから私もやりたかったのよね～」

何やってんのあの人。というか縁壱に限らず東方不敗は石破天驚球とかで対抗したりドッジボールではなく超次元ドッジボール状態だった。

「そして、人数さえ途中で増えなければ問題はないわ。これがどういう意味か分かるわね？タイガ、タイタス、フーマ」
「「え？」」
「イッセーの同意の元ならば貴方達がイッセーの身体を借りて参加する事も許可します！」
「「えええええ!?」」

これはさすがにビックリだ。自分達が参加していいのは嬉しいが、一誠は了承してくれるのか。

「俺は別にいいぜ。午前中に部長の為に頑張れたし……三人もやってみたいだろ、こういうのさ」
「ありがとうイッセー！」

「君の鍛え上げられた肉体ならば私の筋肉とも相性は良い筈だ！全力を尽くそう！」
「へへっ！変身はまだだけど、思いっきりやってやるぜ！」
「決まりね！イッセー、タイガをベースに撹乱やボールの誘導はフーマ、確保と撃破にはタイタスで行くわよ！」
「「おお!!」」

トライスクワッドもノリノリである。かくして、部活対抗ドッジボールという名のウルトラビッグファイトが始まった。

「行くわよリアス！」
「ええ！よくってよソーナ！」

互いのリーダーの掛け声で試合がスタートする。先行のボールは生徒会が手にしたようだ。

『タイガ、落ち着いていけよ。相手は複数だけど、お前の動体視力なら対処出来るぜ！』
『無理だと思ったら無茶な時でも俺に替われよ！なんとかするからな！あと旦那はあまり女性に攻撃したくないだろうし、あのサジっての奴の相手は頼んだ！』
『引き受けよう！彼には紳士たる者のマナーをその身体に教え込まなければなるまい！』

現在、タイガが表に出ている。残りの二人はいつでも替われるようスタンバイし、一誠は今回サポート専門だ。
ちなみにこの後、サジは割と悲惨な目に遭うことになる。

「中々リーダー同士のラリーが続くな……!?（フーマ！敵の動きが変わった！狙いは多分アーシアだ！眼鏡の女性にボールが行ったら来

るぞ！スタンバイだ！）」
『よし来たぁ！』

タイガの読み通り、ソーナがリアスのボールを回避するとその眼鏡の女性―真羅椿姫がキャッチし、ノーマークだったアーシアへと投擲される。

「すいませんが、頂きます……！」
「ッ！アーシア!!」
「心配ご無用ってね!!」

タイガから機動力に優れるフーマに交替し、アーシアへ向かったボールを簡単にキャッチすると、再びタイガへ交替する。

「それっ!!」
「きゃ!?」

取れるか取れないかギリギリの力でタイガが投げたボールは、取ろうとした生徒会の一人の女子の力では取れずにアウトになる。

「よし、まず一人！」
「良くやったわタイガ！」
「タイガって……まさか!?」
「ふっ……ソーナ、戦いとは二手三手先を読んで行うものなのよ。直接のプレイ人数が増えてるわけではないからルール違反にはならないわ！」

なんかリアスの背後に仮面を着けて赤いＭＳに乗って三倍早く動きそうな人が見える。いや、どっちも赤いけど。

さらにボールはよりによってカナエの手に渡った。

直後、カナエの両目がキュピーン！と光ったと思いきや、いきなり今度はゴオォォォ!!という音が聞こえてくる。

「「「「!?」」」」

「日の呼『球』……！」

なんか違う。大きく投球ポーズを取りながら明らかに当たったらヤバそうな物を投げようとしている。

「胡蝶さん、ちょっと待……！」

「ストナァァァサァァァンシャイン!!」

思いっきり違ってた。確かに日で球だけど。

それは参戦だいぶ先の真ゲッター1の必殺技である。オカルト研究部が今回の事を忘れた頃に放つだろうけど。

ちなみに何故彼女が知っているのかと言えば、レジェンドがサーガの持ってきた神衛隊活躍記録を見せてくれたからだ。

なんとか生徒会メンバーは回避するものの、着弾した地面が大きく吹き飛んだ。

「な……な……」

「「「「何今のぉぉぉ!?」」」」

「むぅ、外しちゃった」

「いや当てたらマズいやつだろ!!」

ソーナを始めとした生徒会メンバーや観客の驚きはもちろん、タイガにもツッコまれた。確かにアレは当たれば死ぬ。たぶん。

ここでいち早く我に返った匙がボールを手にし、一誠（今はタイガ）に狙いを定める。

「くらえっ！兵藤!!」

「来たか！（タイタス！）」
『遂に私の出番のようだな！』

　匙の投げたボールは椿姫のそれより速く、威力もあったがタイタスにはまるで無力。その場から動かず片手で掴み取る。

「は!?」
「匙元士郎……君の相手は私が務めさせてもらおう」
「私!?おまっ……兵藤じゃないのか!?」
「今の私は兵藤タイタス！私のマッスルボールを受け止めてみるがいい!!」

　身体は一誠だが、迫力のあまり何故かタイタスのように筋肉が膨れ上がっているように見える。匙はさすがに警戒するものの、それで止められたら苦労はしない。

「マッスルボォォォルッ!!」

　小細工無し、正しく豪速球というべきボールが投げられた。匙はただ速くて重いだけならなんとか対処出来る！そう思っていた。
　……しかし、現実は非情である。
　タイタスが投げる時、手首に捻りを入れた為にボールに微妙なカーブが掛かり、結果。

ゴッ!!!!チ～ン……

　お察しの通りである。タイタスのマッスルボールは匙に受け止められる事なく男の象徴を直撃した。
　その時の匙の表情は涙鼻水涎を垂れ流し状態でのたうち回る事なく一発で失神。タイタスの中でこれを見た一誠、タイガ、フーマさえ股間を押さえて内股になってしまう程である。無論観客もだ。矢的

でさえ青い顔をしている。

「む、意外に情けないな。一撃だけで気絶とは」

『『いやそうなって当然だろアレは!!』』

とりあえず匙は保健室へ即座に運ばれ涼子に見てもらったものの、「砕かれたのはプライドだけ」らしい。どう見てもタイタスのマッスルボールに加えて涼子にアレを見られた事が原因ですありがとうございました。

これで勢いづいたオカルト研究部はそのまま生徒会チームを撃破し、快進撃を止める事なく優勝した。

……が、ルール上問題がなかったとはいえ、やり過ぎだとソーナからオカ研全員（トライスクワッド含む）お説教を食らう羽目にもなったという。

「私は真っ当な勝負をしたぞ!?」

「真っ当ですが力を入れ過ぎです！」

「私も真っ当だったわよ？」

「むしろ貴女が一番危険だったんですが!?」

色々あったが結果的に一番被害を被ったのは匙だった。

え？エロマスク軍団？アレは自業自得だ。

〈続く〉

特別編―緊急招集!?グラブル×鬼滅コラボ

「今回進行役を務めるレジェンドだ」
「同じくサーガ、もしくはソラン・セイエイだ」
「我、オーフィス」
「吾はスカーサハ」
「そして俺、ウルトラマンゼット！」
「それからオカルト研究部一同（トライスクワッド含む）」
『ちょっと端折りすぎ!!』
「仕方ないだろ紹介だけで何行使うと思ってるんだ」
「特別編、しかも緊急招集で本編とも番外編とも関係ない、今後の正規の特別編とも違うものだからメタ発言し放題だな、先輩」
「ソランさん、なんか活き活きしてます」
「俺の活躍はまだ先だから、こういう場で少しでも喋っておきたい」
「ていうか、アーシアやカナエさんと違って俺達本編でまだレジェンド様やオーフィスとかと会ってないんですけど」
「特別編だからよし。そもそも今回の話題では『光神陣営とオカルト研究部が邂逅済、かつ神衛隊の紅蓮・羅厳・鉄華団がほぼ集合済』という三大勢力会談終了後、即ち主要メンバーは大体揃ってオリジナル展開に進む辺りという体で進めていくからな。しかしアレだ、会話文だけだと誰が喋ってるのか分かりづらいなコレ」
「まあ、緊急特番みたいなものですしサクサクいきましょ？レジェンド様」
「カナエの言う通りのさっさと本題済ませて作者を本編執筆に戻すぞ。いい加減俺も戦闘で活躍したい」
「我は早く専用機乗りたい」
「俺は……早く変身してもらいたいです！もう放送中変身は諦めたけど!!」
「いつも通りポジティブに行けポジティブに。案外オリジナルフォームとか貰えるかもしれんぞ」

☆

「それでは単刀直入に言う。もう知っているだろうが、グラブルと鬼滅がリアルコラボする事になった。スカーサハがいるのはその為だ」
「というか現状で吾しか出ておらぬからな」
「……え？」
「ん？事実であろう。しかも聖剣編では初回しか出番がない」
「先輩、何だこの一誠がタイガに変身して活躍した回のラストに出て来た奴は」
「グラブルやってると割とすぐ分かる奴だ。インパクトデカイし何よりオルガと同じ声だぞ。まあ、そいつは後々絡んでくるから置いといてだな。グラブルとのクロスを元々やっている本作としては、アンケートもやったんだし……そろそろグラブルのシナリオイベントでもやろうと言う事になったわけだ」
「あの、レジェンド様。グランブルーファンタジーを知らない人とかやってない人もいると思いますけど……」
「アーシアの質問は最もだ。故に検索すれば割とすぐ出てくるやつを四つピックアップした」
「無論『レジェンドが行く！ハイスクールD×D』が主軸である以上、メインは先輩や俺達、そしてお前達だ。つまり俺達がそのイベントの主演だと思えばいい。話の大筋はそのままで行く予定だが、当然オリジナル展開はある」
「ちなみにだがな、グラブルは基本サザエさん時空な上にメインシナリオと月末シナリオイベントはぶっちゃけ殆ど関係ない感じで進んで行くからな。パラレルワールド的なもんだと考えとけ」
「それから、吾から一つ注意点がある。本作におけるグランブルーファンタジーに於いては吾がいた世界、即ちアルスター島は空の底へ墜ち、既に存在しない設定である事を忘れぬように。まあ分かりやすく言えばヘルエスやセルエル、ノイシュなどはこの姿の吾を知らぬし然程親交もない、という事であるな」
「まー細かい事はその都度説明するとして早速いくぞ。イベント名

と、そのシナリオでの俺ら以外の主要人物、ついでにあらすじなんかも載っけてくからな」

【どうして空は蒼いのか】（三部作）
○主要キャラ・ほぼ全員
　経験を積むという理由も兼ねて、レジェンド達やオカルト研究部は『空の世界』へと行く事になった。
　その世界では島が空に浮いているのが当たり前なのだが、その島が浮力を失うという『厄災』が起きている事を知る。
　同時に商人達が対策会議をしている場を『ヴァーチャーズ』というものを従えた『天司』と名乗る謎の男に襲撃されるが、一足先に家族と訪れていた縁壱によってその男こそ逃すものの無事にその場を収めた。
　しかしヴァーチャーズによる被害は世界各地に広がっており、レジェンド一行は調査をしつつその掃討にあたる。
　その中で出会う『蒼の少女』や、四大天司との邂逅、謎の男の正体、そしてその世界で舞い戻らんとする『皇帝』。
　空の世界で新たなる仲間たちと共に、彼らは大いなる脅威に立ち向かう。

「「「「何これ劇場版!?」」」」
「劇場版グランブルーファンタジーとか言われているからな」
「え、これルリアちゃんとか出るの？」
「ビィは分からんけどな。問題はヒロインになるかどうかだが、そこは後でいいだろ」
「この『皇帝』というのは今回で出るんですか？」
「三部作の一作目だからまだ出ないぞ、朱乃」
「なんつーか、その時点でヤベーやつ確定してるよな」
「ベリアル総司令官も味方な本作で皇帝といえば」

「あいつしかいないよな……」
「「原作組だけだったら詰んでたよな」」
「アレが降臨しただけで島落ちるの確定するだろうし、そこも含めてオリジナル展開の予定だ。んで、次」

【薫風、白波を蹴立てる】
○主要キャラ・狛治、縁壱、ヴィラル、カミナ、巌勝、シモン、ロージェノム、三日月、昭弘
　休暇と称して空の世界の島の一つ『アウギュステ』にやって来たレジェンド一行。
　そこで出会ったカツタクリという漁師に食事を提供してもらった狛治夫妻は恩を返す為、年老いたカツタクリの漁を手伝う事にする。とはいえ料理が得意な恋雪と違って基本武芸ばかりだった狛治は漁などした事がなく、どうしたものかと悩んでいた時、レジェンドやサーガが協力を申し出る。
　彼らの協力を得て狛治が挑むのは死人が生き返るほど美味と言われるアウギュステ伝説の魚『カツウォヌス』。
　狛治に同調し、自らの妻子にも食べさせてやりたいという『紅蓮』副団長のヴィラル、縁壱、さらにそれの手助けを申し出たカミナを筆頭とする心強い援軍も迎え、熱き漢達の戦いが今、始まる―

「つまり熱き漢のイベントだ」
「「「「ですよね!!」」」」
「主要メンバー肉体派ばっかりだもの!!」
「超師匠、老師とか出ないんですか?」
「考え中だ。やっぱりオリジナル展開はあるから、そこはいけるんじゃないか?」
「これだけ盛り上がるなら、心を燃やすあの人とか……」
「リハビリがてら、みたいな理由付けて出す予定らしいぞ」

「古戦場にいたよな、その名字のカツウォヌス」
「次は……あ、これ女性陣ピンチ」
「「「「!?」」」」

【舞い歌う五花】
○主要メンバー・レヴィアたん（セラフォルー）ニア、ヨーコ
　空の世界へやって来たレジェンド一行は観光も程々にある依頼を受ける。
　ショチトル島という島にて行われる巫女達の巡業においてその巫女達の護衛をしてほしいというものだ。
　ショチトル島には１４歳になると巫女として選別され、１６歳になると卒業という風習があり、その巫女の一人であるディアンサは今回が最後の巡業となる事も知らされた。
　その巡業における活動がアイドル活動に似ていると聞いたセラフォルーや、同じく巫女としての立場にいるアーシアなども率先して協力するが、ある出来事から巫女達は上手くいかなくなってしまい―

「この話の終了後、ディアンサが正式に先輩のヒロイン入りする可能性が濃厚となる」
「サーガ様私達本当にピンチですそれ!!」
「それは吾にも、というか吾が一番割を食う事になるぞ！同じグラブル出身とはいえ向こうは何故かやたらヒロイン力が高くて有名なのだ!!」
「それだけだと思うか？」
「「……え？」」
「候補にはハリエも入っている」
「「はわあああああ!!!」」
「カナエとスカーサハまでアーシアっぽい叫びになってるんだけど」
「それよりなんでレヴィアタン様だけ『レヴィアたん』とか書かれてる

のよ!?」
「本来ならこの場にいるはずだったのに今回の時点で本編においてまだ同居まで行ってないから駄目だと言ったら拗ねられて『これだけは譲れない!』と言われた。ついでに一誠にもヒロインが増えるかもしれないぞ?こっちはどうなるか分からないが」
「えええ!?」
「リアスの動揺はともかく、今回時点で既に同居してるのにここにいないグレイフィアや黒歌、ロスヴァイセの事を考えてやれよ……」
「あの……レジェンドが一声かけてあげれば収まるんじゃ」
「せめてこれが終わったらな、タイガ。次がラストだ」

【Ｒｉｇｈｔ　Ｂｅｈｉｎｄ　Ｙｏｕ】
○主要メンバー・ほぼ全員（機体持ち出番多し）
　空の世界にてレジェンドと面識のあるゼタとバザラガは『組織』のある任務に着いていたが、追い詰めた『敵』の一人がアリアネンサという武器を開放した瞬間、その武器は機械の怪物へと開放した者を取り込み牙を向く。
　その時バザラガの体に異変が起こり、彼の持つ大鎌グロウノスもアリアネンサ同様に機械の怪物へと変貌し飛び去っていく。
　それから数週間後、レジェンド一行が空の世界へ来ている事を知ったゼタはベアトリクスの発案で彼らに協力を願い出る。
　その裏で『敵』による新たな侵略の火種が育っている事、そしてあの異次元人達もまたその世界へと魔の手を伸ばし始めている事を彼らは間もなく知る事になる―

「おいこれシリーズ化したらあのなんちゃらシンドロームとか言うのもやんのか!?」
「だろうな」
「え、あれ最後の最後でとんでもない鬱展開にならなかったっけ」

「言うなよ木場ァ!!思い出しちまっただろ!!」
「そろそろ時期的にも続編がスタンバイしてる頃だからな。あそこからどうするのか」
「ともかく、これが今の候補だってわけだったりしますのですよ！」

☆

「あのぅ……」
「どうしたアーシア。質問なら受け付けるぞ」
「鬼滅コラボストーリーをそのままやるとかは？」
「それも考えたがすぐに辞めた。何故ならそうすると本作の設定である『【エリア】を超えられるのは基本的に光神のみ、それも最高位クラス限定』というのを真っ向からぶち破る事になるからな」
「弾かれた者以外で【エリア】移動したのは恋雪・慶蔵父娘のみ、しかも元の【エリア】には帰れないという大きなデメリット付きでだ。グラブルは先輩のエリア、鬼滅は確かノアのエリアだから、設定の根幹を覆すような事だけは避けなければならない」
「それじゃ、他のコラボストーリーとかは？」
「ぶっちゃけ作者にとっては先の『Ｒｉｇｈｔ　Ｂｅｈｉｎｄ　Ｙｏｕ』が最初のイベントだからそれ以前のやつはサイドストーリー行きしてるのしか知らないし、そもそもクロスしてる作品とコラボしてる作品とさらにコラボとかもうコラボがゲシュタルト崩壊するだろ」
「やれるとしてもギアスコラボのやつかプリキュアコラボのやつだろう。大半が『アレは幻だったのだろうか』的な終わり方するグラブルコラボでしっかり記憶があるのはその二種類以外では作者がプレイしたものだとペルソナ５かプリコネぐらいだ」
「ただし俺達は基本的に空の世界はシナリオイベントぐらいしか行かないから、ルルーシュ達があっちの世界で生きていく事を決めても手助け出来なくて、詰みそうになったら『ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアが命じる！俺達を元の世界へ連れて行け！』とか俺にギアスは意味無いのに掛けようとした挙げ句なんやかんやでＢＡＤＥＮＤとか割

と洒落にならなくなりそうだし」
「となるとプリキュアコラボぐらいか。そうなると、キュアファイヤー役はれ……」
「「「「それ以上言わないで!!」」」」
「旦那はキュアマッスルか……」
「アリだな！」
「「ねーよ!!」」
「で、アンケートとって一番人気があったのから書くのか？」
「そうらしい。加えて言うならそろそろ本作におけるグレモリー眷属の僧侶、騎士、それから戦車の代役も決めねばならない」
「そうだったわ……ホントどうしよう」
「吾の案としてはどうせコラボするなら空の世界から連れてきてしまえば良いと思うのだが」
「そっちも徐々に考えていく必要があるな。とりあえず俺はアズレンとガンモバやってくるわ」
『最後に思いっきりグラブルも鬼滅も関係なくなった!!』

「……アズレン？ガンモバ？何だそれは」
「「あんたはそこか!!」」

教会の行った禁忌、巫女がもたらす希望

球技大会が終わり帰宅してきたアーシアとカナエだが、アーシアの方はどことなく落ち込んでいた。

大会で活躍出来なかったとかそういう理由ではなく、大会後のソーナの説教が終わった後のオカ研緊急招集時の出来事が原因である。

裕斗が今回の球技大会で非協力的であった事をリアスは叱ったのだ。一誠やカナエらはもちろん、タイガやタイタス、フーマも優勝まで尽力したというのに彼一人だけが殆ど参加しない、それどころか終始ボーッとしていた為、邪魔になった事さえあった。

にも関わらず叱られてなお裕斗は態度を崩さず、そのまま帰ろうとしたのだが、それを一誠が止めて理由を聞き出した。そこで出て来た言葉が―

『僕は復讐の為に生きている。聖剣エクスカリバー……それを破壊するのが僕の戦うたった一つの意味さ』

……というわけで、全くもってアーシアが悪いわけではないのだが、心優しい彼女は本来仲の良いオカルト研究部が崩れる事を心配しているというわけだ。カナエはそれを必至に慰めている状態である。

「聖剣か。他の世界では大抵持つ事が出来る人物が限られていたり、もしくは持つ事が出来ても真価を発揮するのに特別な条件付きだったりするのが殆どだが……」

「後者の場合は通常の剣として機能するのであれば問題ない場合もある。今回のケースならおそらく前者だ。当初先輩はこっちで現地調査している余裕も無かっただろうから知らないかもしれないが、この世界の教会側である計画が進められていた」

「……何？教会側だと？」

怪訝に思ったレジェンドが聞き返すとサーガはゆっくりと頷き、周

り―特にアーシア、そしてオルガと三日月を見ながら説明を始める。
「聖剣計画……この世界においては本来ならば天然の才覚によってのみ有する聖剣の使用資格を後天的に付与し、聖剣の使用を可能とする者を人為的に作り出す、人体実験を踏まえた非人道的計画だ」
サーガによって語られたそれは想像を絶するものだった。この時点でアーシアは驚きの表情を見せていたが、サーガはさらに衝撃的な事実を告げる。
「教会によって行われたそれの犠牲となった者は数知れず……というよりも適応出来なかった者は外部に教会のやっていた事をバラされないようにする為か、はたまた単に失敗した事に納得がいかないのかは知らないが全員『処分』されたらしい」
「そんな……！」
処分―即ち殺されたという事。
アーシアは涙を目に溜めながらレジェンドにしがみついた。同時にオルガや三日月は自身らの出身世界の『ヒューマンデブリ』と似たような扱いに怒りを露わにしている。
「ふざけやがって……！俺達の世界のヒューマンデブリみたいに使い捨て上等だってのか！何が聖職者だ!!」
「サーガ様、そいつらは何処にいる？俺が潰してくる」
「落ち着け二人共。お前達の過去からすればその怒りは当然だと思うが、既に計画は過去のものとされ当時の責任者も行方知れず。連中としても隠したいものだったんだろう、俺もこの立場でなければここまで掴めなかった」
「ますます気に入らねえ……！自分達がやり出したくせにいざ駄目だと分かったら臭いものには蓋をしたってわけかよ!!」

オルガはまだ怒りが収まらない。というよりさらに高ぶっているように見える。三日月も黙っているが握り締めた拳からミシミシと音がするあたりオルガと同じだろう。

「とにかく、この話は一旦ここまで……とはいかないだろうが、現状俺達が出来る事は少ない。ゴーデスや根源的破滅招来体という目先の脅威に対しても対策を考えなければならない以上、そちらだけに注力する事は出来ないぞ」

「わかってるよ、大将。だが元凶を見つけたら……」

「構わない。俺としても奴らの所業は許し難いからな。その時の対処に関してはお前達の鉄華団に一任する」

「悪いな大将、恩に切るぜ。だとよミカ。見つけたら容赦無くブッ潰せ。遠慮なんざいらないからな」

「分かった、オルガ。サーガ様もありがとう」

漸く空気が穏やかになってきたが、アーシアはレジェンドにしがみついたままだ。理由は分かるがちょっとジェラシーを感じたオーフィスはレジェンドの膝上に乗ってくる。

いつもの事だしな、とレジェンドは気にしていないが周りのレジェンド大好き女性陣はオーフィスやアーシアを羨ましそうに見て……あ、ロスヴァイセがレジェンドの隣の空いている方に移動した。

「……どうした？」

「え!?いえ、その……なんとなく」

「……？そうか」

レジェンドはよっぽどでない限り庇護対象から女性扱いまでレベルアップしないので、正直殆ど意味がなかったりするのだが、それは言わないでおく。

はいそこ、そんなだから保護者扱いされて結婚までいかないとか言わない。メインヒロインとの絡みだって親子にしか思われないんだ

ぞ！

それはさておき、話題はアーシアやオーフィス、ゼットが惑星レジェンドへ訪れた時の事に転換した。

その後レジェンドがとんぼ返りしてしまったので詳しい事は後でと言う事になったのだが、然程時間が掛からず戻って来たら最新型のシミュレーターまで持って帰って来た為、レイトや黒歌を筆頭にそれの設置や調整を急かされてしまい終わったらダウンしたのだ。

ちなみにその時に協力してくれたのは巌勝とミライ、グレイフィアの三名のみ。各種設定は巌勝が中心になって行い、設置から動作確認まで基本的なものはレジェンドが行った。

サーガはレジェンドが忙しそうだったので一人で仕事を引き受け、C・C・はピザを食っていた。涼子は学園。

サーガと涼子はいいとして少しは手伝えC・C・。

「レジェンド～早くモーションントレース機能をインストールしてほしいにゃ」

「だったら巌勝やミライ、グレイフィアを見習え。特に巌勝なんか……ほれ」

レジェンドが指差した先には、戦国時代生まれでありながら機械に強くなったものの、今回は作業が多過ぎて頭オーバーヒートした巌勝がぐったりしつつヨーコに介抱されていた。

ぷしゅ～と煙が出ている頭にヨーコがよって冷えピタを貼っており、両腕はソファーからだらんと下っている。

「シミュレーターの動作確認後のテストプレイを兼ねたあのトーナメント戦後にもみっちり作業したおかげで完全にオーバーヒートしてるんだぞ」

「「「「ごめんなさいミッチー」」」」

「……その渾名はやめてくれ……」

本気でグロッキー状態な巌勝はツッコミにも覇気がない。

「巌勝、今日はもう休んどけ。明日は別に遅くまで寝てていいからしっかり疲れをとれよ」

「承知しました……それからヨーコ、助かった……」

「いや、私も連れ出されてて手伝えなかったし」

「……ちょっとあたし罪悪感出てきたわ。部屋まで送るわよ、巌勝」

「すまん、乱菊殿……」

「ヨーコを連れ出したのあたしだし……ってホント力抜けまくりじゃない。来たばかりなのに働き詰めだったし、レジェンド様の言う通り明日くらい思いっきり寝坊してきなさい」

乱菊に肩を貸されて部屋まで運ばれた巌勝は一足先に就寝する事になった。さすがにあれを見せられては乱菊ではないが罪悪感に駆られるのは当然だろう。

「……あの、レジェンド様」

「何だ、グレイフィア」

「巌勝様が心配されるのは良い事なのですが……」

「僕らも頑張りましたよね、チーフ……」

「ミライ、グレイフィア……巌勝が回復したら四人で馬場寿司行って食いまくるぞ」

「「意義ありません」」

束やクロエ、アムロでもいれば違ったのだが、この四人だけだとやはりキツかった。理由は何かと追加注文が多かったからである。使用可能機体や難易度、シチュエーション、操縦方法エトセトラエトセトラ……

「それで、レジェンド様の専用機というのはどうなったのですか？（パキッ）」

「お前は平和だなハリベル」
「そうですか？」

聞いてきた事は割と重要な事なのだが、この状況で平然と煎餅食べているハリベルはやはり剛の者。

「一応目処は付いた。束もクロエを伴って近々こっちに来ると言っていたしな。到着して生活基盤が整い次第、宇宙へ上がり最終調整をやる事になる」
「超師匠の専用機、ウルトラ凄かったんでございますよ！一気に色がバァーっと変わって！」
「うん、レジェンドっぽい色だった」
「何だそのレジェンドっぽい色というのは」
「だから、レジェンドっぽい色」
「……意味がわからんな」

ゼットの説明はともかく、Ｃ．Ｃ．としてもオーフィスの言うレジェンドっぽい色というのが彼の好きな色なのか、彼のイメージカラーなのかハッキリと分からない。

「どのみち使う時に分かるだろうからそんな難しく考えるなよ、Ｃ．Ｃ．」
「まさかと思うがドギツい真っピンクじゃないだろうな」
「どこのライブカラーなＭＳかフロンティアなＫＭＦだ!?しかも後者だったらお前が乗ってそうな気がするんだが！」
「私はガリバー以外に乗る気はないぞ」

そもそもレジェンド一家にそんな色の機体を乗りたがるのがいるのだろうか。とはいえ彼女自身もガリバーに愛着があるようだ。初出撃で見事勝利を飾り、それ以前もずっとシミュレーターで訓練してきたのだから当然だろう。

「ああそうそう、束からの伝言を伝えておく。『レジェくんの機体が問題なくなったら皆の機体開発に取り掛かってあげるからね！束さんの創作意欲を煽るようなやつよろしくぅ！』だとさ」
「ソウルゲインー!!」
「ダブルオーライザァァァ!!」

やはりというべきか黒歌とレイトが騒ぎ出した。もっともレイトに関しては機体が決まっている上、実は既に持って来てあるのだ。だが、その前にレイトには軽く絶望してもらう事になる。

「おい、ゼロ。喜ぶのは早いぞ」
「へ？」
「お前、リク……ジードとの特訓でウルティメイトイージスを使ったそうだな」

この瞬間、レイトは硬直した。さり気なくリクを見るとリクは静かに目を反らす。

「あれだけゼロツインソードまでにしろと言っておいたのに……何にせよ漸く時間が取れたからな。どうせ後は寝るか夜ふかしくらいだろう。今から俺と生身で模擬戦だ。喜べ、神の御業を見せてやる」
「死ぬ!!絶対死ぬってソレ!!ウルトラマンの姿でも耐えられそうにないんだけど!?究極極意のスペシウムとか撃たれそうなんだけど!!」
「安心しろ。伝説の一閃で勘弁してやる」
「無理無理無理無理イィィィィ!!」
「どこの吸血鬼だお前は」
「レジェンド様はどこのヒーローズですか。実際に出来る上にヒーローという意味では間違ってはいませんが」

ＷＲＹＹＹＹＹ!!なレイト（ただし逃げ腰）とオラわくわくすっ

ぞ!!なレジェンドによる模擬戦は強制的に行われる事となり、案の定お仕置きという事でこっぴどくやられるのだが、分かりきった事だったので割愛するとしよう。

「ぴえん」

「もう一つ喜べゼロ、模擬戦を乗り越えたら明日は楽しみにしてろ。これは純粋にお前にとって良い話だ」

がっくりしているレイトに聞こえてるか分からないが、サーガの方は何か察したらしく、レジェンドに手招きされて近づくと案の定例のものの事である。

「サーガ、明日ゼロに渡すから同席してくれ。連名だしな」

「という事はあれも持って帰って来たのか？」

「束もお前専用機だとばかり思っていたから細かい調整はこれからだがな。今まであいつがシミュレーターで見せた挙動やクセなんかを反映させてＯＳを再構築する必要があるし、しばらく出撃出来ないにしてもなるべく早い方がいいだろ」

「確かにそうだな。了解した」

「それから、後はアーシアとカプセル怪獣の事だ」

「はわっ!?」

突然名前を呼ばれて驚くアーシアだったが、カプセル怪獣と言われて親モスラに伝えられた言葉を思い出した。

「あ……もしかしてゴモちゃん達に新しい力が目覚めるとかいう件ですか？」

『え？』

「そう、アーシアが正式に俺の巫女となった事で受ける加護の力が飛躍的に高まり、同時にその力を行使する事で世界各地にある各種封印を解除する事も可能になった。加えて先程アーシアが言ったように、

アーシアの力に呼応してカプセル怪獣達が新たな段階へ進む事が出来るようになるらしい。俺は今まで巫女を迎えた事が無かったから、そんな事はモスラに言われるまで全く気付かなかったがな」
「え?・モスちゃんそんな事言ったの?」
「キュウー!」

違う僕言ってない!とばかりに何度も素早く首を横振りする新モスラ改めグリーンモスラ。女性陣はその様子を見て可愛いと思ったが、じゃあレジェンドの言うモスラが誰なのかという事になった。

「モスちゃんの……えーっと……お母さん、の方でいいんでしょうか?」
「雄雌関わらず単為生殖出来るから判別に困るが、あのモスラはそれが正しいな」
「あの方でしたか。お元気でしたか?」
「ああ、若干説教じみた事を言われたよ。俺の事は武力行使して止めても構わないとかなんとか」
「専属医の立場から言わせて頂きますと、あの方の言っている事の方が的を得ていますね。レジェンド様はいざとなったら言っても聞く耳持ちませんから拘束具やら縛道やらを使う必要がありますし」
「そうだよ烈はあいつの後任だったよ畜生」

レジェンドと鬼灯のように元々波長が合っているのか、それとも親モスラに影響されたのかはともかく、一人と一匹は同意見のようだ。それもそのはず、レジェンド程の立場となれば御身御自愛するのが普通なのだが、レジェンドはむしろ危険に自ら特攻していくのが当たり前である。
そりゃ眷属たる九極天は止めるのが普通だろうが、縁壱にせよ東方不敗にせよ、果ては束にせよ一緒になって突撃しに行くのだ。
結果として卯ノ花やダンブルドアが鬼道や魔法を使ってまで止めるという事態になっていた。

「まあ、あれだ。アーシアは俺達にとって家族であるだけでなく、今後かなり重要な役割を持つ事になるという事だ。とは言っても変に気を遣ったり腫れ物に触るようには扱わないように。命の価値とは特別かどうかで決まるものではないからな」

レジェンドのこの言葉に全員が頷き、それを見ていたアーシアは感激していた。

確かに最高位光神の巫女という特別な立場だがいつも通り変わらず彼女を彼女として見てもらえるのはやはり嬉しいだろう。

「あと最後に俺からは一つ。明日にはゴーデスとの戦いを経験したグレートとダイナが合流する。こっちの布陣は強固なものとなるが、油断はしないように」

「グレート先輩もダイナさんも来るんですね、チーフ」

「グレートか……彼はかつてオーストラリアで大自然の中、数多の怪獣と戦ったと聞いている。カンガルーがどれ程の実力者か聞きたかったところだ」

「「「何故にカンガルー!?」」」

「そういやあいつらってかなり蹴りが強力らしいからな」

なんかズレているゲンだが、レジェンドは他の者と違いこれにツッコミは入れていない。

何故って？レジェンドも南極までペンギンとやり合いに行ったりしていたからである。いやホント何してんのこの人。何をペンギンとやり合ったのマジで。

「……俺からも最後に一つ。これはおそらく新たな火種になるだろうから警戒しておいてほしい」

サーガの険しい表情からかなり真面目な話だと理解した一行は一

言一句逃さず聞こうと真剣になった。

「最初の話題だったその聖剣エクスカリバーだが、現在は教会が有しているらしい。しかし、それが何者かによって強奪されたようだ」

「「「「え？」」」」

―新たな火種。間違いなくそれであった。

サーガからもたらされたその情報はその場の全員を驚かすには十分過ぎる程の衝撃を与えていた。

ただ一人、レジェンドを除いて。

（……いつの間に今度の所有者が『教会』になったんだ？この世界における湖の貴婦人からそんな連絡を受けていない。何なんだそのエクスカリバーは）

〈続く〉

聖剣使い来たる、そして彼女はキレる

翌日、アーシアとカナエはいつも通り登校し、いつも通り部室へと向かっていた。

サーガから聞かされたエクスカリバー強奪事件に関しては裕斗が復讐の為に戦っている事を思い出した以上、下手に口に出さないようにすると決めたのだが、今までの経験から二人としては「たぶん別のところから漏れるんだろうなぁ」と予想している。

「それにしても今朝は起きてすぐにあの光景見たら一発で目が覚めたわね～」

「はい、私も驚いて変な声出ちゃいました」

「あれは仕方ないわアーシアちゃん」

彼女らが見た光景というのは、レジェンドがレイトと生身で模擬戦をした結果というか……レイトではなくゼロを脇に抱え、何故かレオまで肩に担いでいたレジェンドだった。

結局朝まで徹夜でやったらしいのだが、さすがに生身だとキツいだろうとレジェンドが慈悲をかけてくれたのだ。

無論レイトは変身一択だったが、それでまともに対抗出来るような相手ではない。こういう理由からゲンも変身して二対一、かつレジェンドは未変身（変身するとなるとゼットに変身してしまいぶっちゃけパワーダウン）という普通に考えれば圧倒的不利としか言いようがない状況だったが……

「瞬殺とはいかなくても秒殺だったらしいわね……」

カナエの言う通りレジェンドの完勝。あまりにあっさり終わりすぎてお仕置きにならないと踏んだレジェンドによって「ある程度の時間は耐える」という、相手が相手だけに無理難題としか言いようがない条件まで出来てしまい、それが満たせぬまま模擬戦を続けた結果夜

が明けてしまったのだ。
完全に意識が飛んでいるレオとゼロに対してレジェンドはけろりとしており、悠々と二人をそれぞれの自室に放り込んで朝食を食べていた。
仕事ではなく自分のやりたい事をする時は疲れ知らずである。
補足しておくとそれから割と時間を経てずにレオはゲンの姿で朝食に起きてきた。レオ師匠マジ超人。

「レイトさんと……巌勝さんも大丈夫でしょうか？」
「二人ともしっかり鍛えてるからゆっくり休めば大丈夫よ。さ、私達は私達で頑張りましょ♪」
「はいっ！」

血が繋がっていなくてもすっかり姉妹のようだと言われている二人は部室のドアを開けるとそこには先日の生徒会に続き部員ではないだろう人物が二名、リアスと向き合って座っていた。

「あら、二人共お疲れ様」
「……リアス、お客様の前で言うのはアレなんだけど……やっぱり厄介事？」
「……私もそうとしか思えないわ。察しがいいわね、カナエ」
「昨日注意しておくように言われたばかりなのよ」

服装や首に下げた十字架から教会関係者だと分かったカナエは心の中で悶絶していた。
（絶対にこれエクスカリバーとかいう聖剣絡みよね。いくら予想してたとはいえ向こうから問題が堂々とやってくる事ないでしょ!?）
つい先程アーシアと一緒に裕斗を刺激するような発言は控えようと誓ったばかりなのに……きっとマッハの速度で無駄になるのだろ

う。現に裕斗の表情と纏っている空気がヤバい。
とりあえず事情を聞く事にした二人だが、裕斗が爆発しない事を祈るのみ……だったのだが、この少し後に裕斗ではなくカナエが先に爆発するなど誰が予想出来ようか。

「先日カトリック教会本部及びプロテスタント側、正教会側に保管・管理されていた聖剣エクスカリバーが奪われました」
「(やっぱり……ん?)カトリック本部にプロテスタントに正教会?なんで三ケ所に?」
「エクスカリバーそのものは現存していないわ」
「???」

アーシアは小首を傾げて?マークを飛ばしている。カナエはそれを見て「可愛いは正義!」などと考えていた。
一誠も訳がわからないよ!みたいな顔をしており、タイガやタイタス、フーマも腕を組みながら悩んでいる。タイタスに至ってはそのままだと思い浮かばないから、とスクワットを始め出す始末。

「ごめんなさいね。私の下僕に悪魔になりたての子がいるのと、その友達や私のクラスメイトもいるから説明込見で話を進めてもいいかしら?あとタイタスはソレやりながらでいいからちゃんと聞いて頂戴」

栗毛のツインテールの少女が頷く……のだがもう一人、青髪に緑のメッシュが入った少女と顔を見合わせて二人が同時に聞いてきた。

「タイタス?」
「あら?見えてないの?今まさにそこでスクワットしてるのがタイタスなんだけど」
「え?」

リアスはテーブルの端を指差すが、何故か二人には見えていない。一般人には見えないようにアストラル体になっているが、教会関係者なら見えていてもおかしくないはずなのだ。

「……何もいないようだが」

「おかしいわね……カナエ、タイタス以外にもタイガとフーマもいるわよね？」

「いるわよ～タイガ君は気付いてもらおうと色々ポーズ取ってるし、フーマ君はゴロゴロしだしたわ」

「だって俺ら気付かれる気配さえしないし。まだそこの二人一般人の範囲を抜け出せてないんじゃねーの？」

「ああ、なるほど……」

フーマの説明に納得してしまったリアスとカナエ。アーシアは小猫や朱乃と一緒にグリーンモスラやゴモラにおやつをあげ始めた。レジェンドからカプセル怪獣を連れての登校が許可されたので今日から一緒に登校している。普段はやっぱりカプセルの中なのだが。

やっぱり教会関係者の二人はガン見していた。

『僕達見られてるね、ゴモラ』

『別にいいんじゃないの～？何かあれば返り討ちにすればいいし』

ゴモラはフーマに並んでゴロンと横になると目を擦りながら寝息を立て始める。アーシアらはそれを微笑ましく見守っていた。

「いいな～……ってそれはともかく！イッセー君、エクスカリバーは大昔の戦争で折れているの」

「折れてる？……悪の宇宙人の手に渡ったのを師匠が戦って折ったとか」

「イッセー、エクスカリバーが折れたのがどの戦争かは分からないけど、少なくともあの大戦に師範はいなかったわよ。まあ、確かにあの

人なら事もなげにへし折るでしょうけど」

一誠の意見は割とありそうな展開だし、リアスは遠い目になって言い切った。あの初戦の衝撃は忘れられない。

「エクスカリバーを簡単に折るとかあり得ない言葉が聞こえたが……それは置いておくとして、今のエクスカリバーはこんな姿さ」

青髪の少女が取り出したそれは厳重に布で包まれており、それを解いていくと一本の長剣が姿を現す。

「大昔の戦争で折れたエクスカリバー。折れた刃片を拾い集め、錬金術で新たな姿となったのさ。その時、八つ作られたうちの一つがこれだ」

（んんん？）

カナエは興味津々に……というわけではなく、なんで敵には扱えぬであろう強力無比な聖剣を八つにまで分ける必要があったのか疑問に思った。

しかし憶測は立っている。大方先程聞いた三つの派閥がやれどこが保管するだなんだと一悶着あったのだろう。

結果として盗まれているのだから数を増やすなら保管場所もその三派閥だけにせず、せめて八ケ所別々にしろと思うのだが。

青髪の持っている方が『破壊の聖剣（エクスカリバー・デストラクション）』、栗毛の持っている方が『擬態の聖剣（エクスカリバー・ミミック）』と言うらしい。

それぞれカトリックとプロテスタントが保有しているとの事だが、それよりも一つ一つ特殊な力があることの方が問題だ。主に戦力面……聖剣の割に力不足過ぎて。

（いや、別にそれ普通よね。卯ノ花先生達『死神』の斬魄刀なんて名前どころか始解や卍解で形状が変化するのは当たり前、能力にしたって

激変するのも多いっていうし。縁壱先生が持ってる『日輪刀・日ノ神』とかもかなり特殊らしいし）
（ハリベルお姉様の『帰刃（レスレクシオン）』の方が特殊な力に見えるわ。あれは破面（アランカル）特有と聞いてるもの）
（なんつーか、聖剣より先輩のゼロスラッガーってやつの方がスゲーと思うんだけど。あれ念力で動かせるし手に持って短剣っぽく使えるし、胸に装着して光線発射出来るし）

カナエ、リアス、一誠は対象こそ別とはいえ目の前の聖剣より余程とんでもないものを見続けたせいか大して驚きはない。さらに言うならゼロのゼロスラッガーはゼロツインソードにもなるし、果てはノアから貰ったウルトラ族でも最上級のチートアイテム『ウルティメイトイージス』まで持っている。
ウルティメイトイージス＞＞＞＞＞絶対超えられない壁＞＞＞＞＞エクスカリバー（オリジナル）＞＞＞＞＞超えられない壁＞＞＞＞＞劣化エクスカリバー
ざっとこんな感じである。一惑星にある聖剣の一つ（しかも劣化版）が最高位光神の力の一部を有する『真の神器』とも呼べるウルティメイトイージスに敵う訳がない。
おまけに言うと、アーシアの物となった『輝煌なる祈り（オラシオン・グリッター）』の方が圧倒的性能だったりする。レジェンドお手製の最上級巫女装束は伊達ではないのだ。

「イリナ、わざわざ能力を喋る必要はないだろう？」
「あらゼノヴィア。いくら悪魔だとしても信頼関係を築かなければこの場では仕方がないでしょう。それに能力を知られたからといってこの悪魔の方々に遅れを取るなんてことはないわ」
「……言っておくけどそこの二人は人間よ。片方はそれも怪しいけど」
「リアス、なんでそこで私を見るの」

ある意味正しい。オカ研最強の人物は悪魔であるリアスではなければ赤龍帝たる一誠でもなくカナエだからだ。痣者だったり日輪刀を平然と赫刀にしたり出来るが（段々外れてきているとはいえ）人間である。

彼女の師が魔王さえ萎縮する程の化け物だから彼女が人間かどうか怪しいと思われても仕方ないのかもしれない。

それに聖剣といえど当たらなければどうという事はない！の精神で挑めば今のオカ研メンバーなら負けそうにないと思うのだが。

非戦闘員であるアーシアもサポートや防御に徹すれば勝てはせずとも負けはしない。

聖剣を持っている、というだけではもはやアドバンテージにはなりえないだろう。

二人がそれぞれの名前を呼び合っているのを聞き『あ、そういえば二人の名前知らなかった』と今になって思い出したアーシアとカナエ。割とどうでもいいと思ってるんじゃなかろうか。

「なんでそんな聖剣が極東の国の地方都市にあるのか……は大体予想つくわね。奪った元凶がこの町にいるとか、そういう理由でしょう？」

「察しがいいな。その通り、一本は行方不明だが残り七本のエクスカリバーのうち四本が奪われている。カトリック、プロテスタントから一本ずつ、正教会陣営から二本」

（半分以上奪われてるじゃない。どれだけ管理がおざなりだったのかしら）

彼女らが残っているエクスカリバーのうち二本を持ってやってきたという事は教会側が保有しているのは残り一本。一本は行方不明、四本は強奪……よくもまあこんな状況で偉そうに出来たもんである。

カナエは溜息を吐きながら話を聞いていた。

「それで、エクスカリバーを奪ったのは誰なの？」

「『神の子を見張る者』だよ」
（また知らない名前出てきたー!!）

最近こんなんばっかりだ、とカナエが思っていたらスクワットしながらタイタスが聞いてくれた。

「リアス、フッ！そのグリゴリというのは、フッ！どういう組織なのか、フッ！教えてくれないか？フッ！」
「ええ。分かりやすく簡単に言うと堕天使の組織よ。あと……自分で言っておいてごめんなさい。せめて質問する時だけはスクワットやめてもらえないかしら」
「ふむ、なるほど。いや丁度区切りもいいし筋肉にも休息は必要だ。そうしよう」

タイタスは納得してくれた……のはいいが、タイガもフーマも暇そうにしている。確かに彼らが質問しても目の前の二人には聞こえないのだから気になった事はリアスを始めオカルト研究部側に聞くしかないのだが、正直思いっきり蚊帳の外なので今はあまりやる事がないのだ。

「それにエクスカリバーを奪った連中は把握している。グリゴリ幹部のコカビエルだ。それにもう一人」
「…古の戦いから生き残る堕天使の幹部。聖書にも記された者の名前が出るとはね。そのもう一人は？」
「……分からないの」

片やかなりの大物、それとつるんでいるもう片方は分からないとイリナが答える。おそらくゼノヴィアもそうだろう。

「分かっているのは自ら堕天使と名乗ったという事だけだ。ただ、堕天使というには翼が……悪魔のようだったらしい」

「悪魔のような翼の堕天使？聞いた事ないわね。翼の枚数とかは聞いてるの？」
「三対六枚だったと聞いている」
「強さの判断に困るわね……まあ、それなりには強いという事は分かったわ」

現時点ではその堕天使に関する情報が少な過ぎる為、これ以上ここで詮索しても無意味だと思ったリアスは漸くここに来て彼女らがここに来た目的を聞く。
とどのつまり「この問題は自分達が解決するから一切手を出すな」というものだった。
教会の失態だというのは分かるがそれでこちら側にそんな事を言うのは筋違いじゃないか、とリアスやカナエは思う。ましてカナエから見ればこの駒王はレジェンドが治める宇宙人達との共存の地。これがレジェンドに知られれば下手すれば全教会陣営と堕天使勢力は光神陣営を敵に回す事になる。そうなればその二つは瞬く間に壊滅だろう。
しかも二人は聖剣を堕天使に利用されるくらいなら自らが犠牲になってでも聖剣を消滅させる覚悟だと言う。
立派と言えば立派なのだろうがカナエとしては馬鹿馬鹿しいとしか思えない。苦渋を飲んででも協力を仰いだ方が成功率・生存率も上がるというのに何を言っているのかと。
ぶっちゃけ、この町で問題を起こす時点でレジェンドや七星剣が黙っている筈がないのに。
まあ、そうなればレジェンド達も即座に気付くだろうし、いざとなったら自分から協力を頼もうとカナエが自己完結したところでイリナとゼノヴィアも退室するようだ。
……が、その際にアーシアに絡んだのがいけなかった。
「……先程からもしやと思っていたが……『魔女』アーシア・アルジェントか？まさかこの地で出会う事になろうとは」

カナエがピクリと動いた。同時にリアスを始めオカルト研究部はヤバいと脳内で警鐘を鳴らす。

「貴方が一時期噂になってた元聖女さん？　悪魔や堕天使をも癒す力を持ってるらしいわね。追放されどこかに流れていたと思っていたけど、まさか当たり前のように悪魔と一緒にいるなんて思わなかったわ」

「……？」

当のアーシアはキョトンとしている。魔女がどうとかよりも悪魔と一緒だといけないのかと考えていた。悪魔どころか神より上の立場にいる光神と共に生活しているし、良い意味で図太い神経を手に入れたようだ。

「大丈夫よ。ここで見たことは上には伝えないから安心して。けど、聖女アーシアを知る者に、今の貴方の状態を話したら、ショックを受けるでしょうね」

「……あの」

「しかし悪魔と一緒か。堕ちるとこまで墜ちたものだ。まだ神を信じているのか」

「ゼノヴィア。悪魔と共にあろうとする彼女が我が主を信じるわけないでしょう」

「いいや、その子から信仰の香りがする。そういうのに私は敏感でね」

あまりの物言いにカナエは既に日輪刀を取り出して握り締めている。なんか鞘の中で刀身が赤くなってそうである。

「おいバカやめろ！彼女をこれ以上怒らせるな!!」

「確実に死ぬって！旦那も止めてくれよ!!」

「アーシアへの暴言、万死に値する!!」

「「いやだから止めてくれっての!!」」

彼らの声が聞こえないと言う事も忘れ、トライスクワッドも止めようとしだした（一名除く）。

その声も虚しく、遂に決定的な一言が言われてしまう。

「そうなの？」

「私、あの方への信仰を捨てた事はありません。そして、これからもずっと」

「なら今すぐ私たちに斬られるといい。罪深くとも、我らの神なら、救いの手を差し伸べて下さるはずだ」

「いい加減にしなさい」

「「!?」」

アーシアの言う神とは言わずもがなレジェンドの事である。それをゼノヴィアは自分達の信仰する神と勘違いしたのか、とんでもない事を言ったのだがそれが拙かった。

レジェンド一家は普段こそ家族内でバカ騒ぎするのだが、同時に家族愛に溢れている。それに血の繋がり、種族の違い、果ては生まれた世界や次元、【エリア】の異なったものであろうとだ。

特に過去の出来事からカナエはアーシアをそれこそ妹のように可愛がっているし、その逆も然り。元の世界にいたのなら間違いなく蝶屋敷に住んでいただろうレベルである。

そんなアーシアを侮辱されてカナエが黙っている筈がない。

「先程から黙って聞いていましたが貴女は彼女が魔女だと言いましたね」

「そ、そうだよ。少なくとも今の彼女に魔女と呼ばれる資格はあると思うが」

「彼女が伸ばした手、掴んだのは誰ですか？貴女方が信仰する主？それともその従者？まず貴女達ではないでしょう。彼女が助けてほし

いとどれだけ願っても手を払ったのは貴女方だというのに随分な言い様じゃないですか、ええ？」

敬語はともかく最後がなんかおかしい。間違いなくブチ切れている。その証拠に若干抜いていた日輪刀は既に赫刀と化していた。

「それに彼女、貴女が考えているより凄い立場にいるんですよ。先日、ある場所に招かれて正式に『光神の巫女』になりましたので」

『なっ!?』

これにはオカルト研究部も一緒になって驚いた。

カナエはいつも通りの笑顔で「ねー♪」とアーシアに言うと、アーシアも笑顔で頷く。

「光神様の巫女!?バカな、彼女は魔女だぞ!?我らの主よりさらに上にいるという光神様に軽々しく会える立場じゃない!!」

「だから凄い立場って言ったでしょう？彼女、助けられた日からずっとあの方の事を忘れた日はなかったみたいだし、当然の処遇だと思いますけどね。そもそもあの方は彼女の慈悲を尊重こそすれ、悪魔を治した事を咎めたりなんかしませんでしたが？」

今だ認められないゼノヴィアに対してカナエは言い放つ。

「それから、私だけが怒っていると思わない方がいいですよ」

「何を……」

ギシャアアアァァオン!!

『!?』

耳を劈くような鳴き声がした方を向くと、少し前まで寝ていたゴモ

ラが起きており、憤怒の表情でイリナとゼノヴィアを睨んでいた。今のはゴモラが本気で怒りＳＤサイズにも関わらず本来の鳴き声で抗議の意を示したのだ。

「な、何だ今のは!?」
「あの子から聞こえたわよ!?」
「ご主人を侮辱されて怒っているの。私としても敬語を使うのが嫌になってきたわ。それから、もう一人……」
「「え？」」

二人には分からないであろう。
しかし、オカルト研究部であれば知らない筈がない。
何故ならばライザーとのレーティングゲームはジェントと『彼』のお陰で無事に行われたのだから。

「そんな紛い物を振り翳してアーシア・アルジェントを斬るだと？それは我々ギルドガード、引いてはギルド全体への宣戦布告とみなす。異論は認めん」

「「!?」」
「「「「シックルさん!?」」」」
「「メフィラス星人!?」」

いつの間に来たのか、七星剣と同格とされるギルドガードを束ねる『漆黒の監視者』メフィラス星人シックルが大鎌メフィラスデスサイズを担いでイリナとゼノヴィアを見下ろしていた。

「シックルさん、今日もお仕事お疲れ様です」
「ああ。今日はお前達以外のオカルト研究部とやらの面々のハンター

登録が完了したのでライセンスを渡しに来た」
「え!?早っ!!」
「元々ジェントや卯ノ花烈から打診はされていた。予め提出されていた申請書との相違確認のみだった為にこれだけの時間で済んだ訳だ」
突如として現れた異形の存在に怯えているイリナとゼノヴィアの間を堂々と通り抜け、部長であるリアスにまとめて手渡す。
「胡蝶カナエ、アーシア・アルジェント以外のハンターライセンス……リアス・グレモリー、姫島朱乃、塔城小猫、木場裕斗、兵藤一誠、そしてウルトラマンタイガ、タイタス、フーマ……以上で間違いないな?」
「え、ええ。わざわざありがとう、シックルさん」
「なあ、俺達のもあるのか!?」
「リアス・グレモリーより申請があった。それに沿ったまでだ」
どうやら急遽リアスが三人分の申請書も提出していたらしく、しっかりトライスクワッド分のハンターライセンスも発行されていた。ただ、基本的にアストラル体である彼らでは直接持てないので現時点ではリアスが管理する事になる。
「さて、一先ずの要件は済んだ。次はお前達だ」
シックルが改めて向き直るとイリナとゼノヴィアはビクッとする。それもそのはず、明らかに人間とは思えない容姿の者が突然現れ、しかも敵意剥き出しなどと笑える冗談ではない。
「アーシア・アルジェントへ危害を加える事は即ちギルドに対して不利益となる行為。よって俺の権限によりこの場で処断する」
「い、いきなり何だ貴様は!?権限も何もそんな事認められる訳が……」
「少なくともこの町においてお前達教会とやらの権限はギルドガード

より下だ。住民達の自主性を尊重しつつこの駒王を治めている『奴』ならばいざ知らず、問題を持ち込んだお前達がどうこう言う権利は無い」
「そ、それは……」

さすがに問題を持ち込んだと言われればぐうの音も出ない。元凶はコカビエルら堕天使とはいえ、元はと言えば教会側の失態だからだ。

「……部長、シックルさんを止められますか？」
「無茶言わないで小猫。あの七星剣と同格のシックルさん相手にこのメンバー総出でどれだけ保つと思う？」
「……たぶんカナエ先輩が最後まで残る、くらいしか思い浮かびません」
「同感よ。だから私達では無理ね」

最後まで残るとは思ったが止められるとは思えない。それほどの実力者なのだ。

ついでに悪魔ではない為、聖剣で有利に立とうなど無意味。あの大鎌はジェントの持つ七星剣の一振り『妖刀・破軍』の星さえ容易に真っ二つにする光の刃さえ受け止めた事がある。本人の技量なのかそれとも大鎌自体が特別なのかは不明だが、どちらにしてもヤバ過ぎる相手に変わりはない。

このままでは任務を果たさずして、というか標的と相対する事なく命を散らせてしまうと考えていたイリナとゼノヴィアだったが、そこにアーシアが救いの手を差し伸べる。

「あ……あのぅ……シックルさん」
「何だ」
「その……お二人を許してあげられませんか？」
「!!」

まさか自身があれだけの事を言われたというのに二人を助けようとするとは……シックルもある程度予想していたとはいえ、実際にされると僅かばかり動揺する。

「……駄目だ。この手の輩は一度許せばつけ上がる。次にやらかした時は取り返しのつかない事態になるとも考えられる以上、不穏因子は早期に取り除く必要がある」

「で……でも「だが」……え？」

「他ならぬ被害者であるお前の言葉である以上、多少は融通するとしよう」

「あ……ありがとうございますっ！」

まさかシックルが慈悲をかける事があるとは思わなかった。これもアーシアの人徳のお陰だろう。

だが、そう思うのは早かった。

「お前達二人に対して、俺と胡蝶カナエによるタッグマッチ。制裁としてその身に俺達の実力を刻み込み、己が無力さを知る事を解放条件とする」

ギルドガードの長と伝説九極天の一人の弟子。

その二人を同時に相手にするハメになったイリナとゼノヴィアを、オカルト研究部は揃って同情した。

「……無力さを知る前に無に還りそうじゃね？」

「……あの二人、生きてられるのかな」

「骨は残るといいのだが」

「「怖い事言うなよ!?」」

タイタスの間違った心配にツッコむタイガとフーマ。

当のカナエ本人はというと、見事な笑顔で日輪刀を握り締めている。やる気満々だ。

裕斗が混ざろうとしていたものの、シックルの雰囲気に呑まれてしまい結局見学するだけになってしまった。

そしてリアスは考えていた。

―せめて、死人が出ませんように―

何故ならタッグマッチどころか一方的なデスマッチにしかならないだろうから。

〈続く〉

激突と蹂躙、そして宇宙の危機？

今、オカルト研究部の目の前では正直勝負になぞならないであろう戦いが行われようとしていた。

片や、ヴァチカンからやって来た聖剣使い二名。

片や、ギルドガードの長と日の呼吸の継承者。

何も知らないこの世界の悪魔を始めとする勢力が見たなら聖剣使い側の圧勝だと思うだろう。

だが実際は違う。むしろ逆だ。素の実力も経験も比べ物にならない程にシックルとカナエは格上なのである。

そうとは知らないイリナとゼノヴィアはお互い自分の預かった聖剣を抜き、準備万端のようだ。

「こちらはいつでも構わないぞ。何なら私一人で二人共相手をしようか？」

(((((バカだー!!)))))

アーシア以外のその場にいたオカルト研究部の総意であった。普通逆だと言いたいが聖剣という特別な武具をもっているからかやけに自信満々だ。先程までビビっていたのは何なのか。

対するシックルとカナエの返答は……

「ではそうするか」

「お夕飯に間に合わなくなるのは勘弁ですし、殺っちゃいましょう」

「待ってぇぇぇ!?殺るの字が違う気がする……アレ？この場合は合ってるのかしら？」

「部長しっかり！つーかお二方もマジでやろうとしないでくれよ!?」

さすがにこれにはリアスと一誠を始めオカ研メンバーも止めに入る。相手が二人に対してこちらが一人でもオーバーキルなのにその逆はマズすぎる。

「そう騒がなくとも、悪魔ではないからと言って遅れをとる私では……」
「その考えは改めた方がいいと思います。シックルさんはもちろんカナエ先輩も容赦する気なさそうです」
「は？」

小猫の言葉に怪訝な顔をしてゼノヴィアがカナエの方に向き直ると―

「ムッコロ（※無惨コロスの略）」
「ああなってます」
「「ぎゃあああああ!?」」
「はわあああっ!?カ、カナエさんが御乱心！」

いつぞやの無惨コロスモードになっていた。この状態のカナエは一切の手心を廃しガチでぶつかって来るらしい。これを見た裕斗以外のオカ研メンバーは悲鳴を上げた。
あ、これ二人終わった。
聖剣エクスカリバー編……

完ッ!!!

「「じゃねーよ!!!」」

思わず地の文にツッコむ一誠、タイガ、フーマ。
確かに早過ぎた。主にネタになるのはこれからだ！的な意味で。

「そちらの女性の様子がおかしいが大丈夫なのか？」

「……ねえ、ゼノヴィア。今からでもやめにしない？私が相手する方、絶対普通じゃないんだけど。替わってくれない？」
「いや、あちらの相手は私がする。私が斬り伏せなければ意味がない」
イリナはシックルの危険さに気がついたのか、ゼノヴィアに相手交換を願い出たが敢え無く却下され、滝のように涙を流していた。
「ゼノヴィアのバカァァァ!!」
「おい、気は済んだか」
「ひいいいい!?」
目の前には大鎌を大きく振りかぶるシックル。咄嗟にイリナは手にした擬態の聖剣（エクスカリバー・ミミック）で防御するも異常なまでの威力に大きく吹き飛ばされて壁に物凄い勢いで激突、エクスカリバーを手放して蹲ってしまった。
「がっ……げほっ……ごほっ……」
「イリナ!?」
今の一撃だけでも相当なダメージだ。正しく『防御の上から戦闘不能にされた』ようで、イリナの戦闘継続は難しいだろう。シックルはもう済んだとばかりに後ろを向いて下がろうとするが、それをゼノヴィアが静止する。
「待て、化け物……！私が残っているぞ！」
「……遊びにもならん。俺と刃を交えたくばまず胡蝶カナエに勝ってみる事だ」
無理だろうがな、と付け加えてシックルは近くの壁に寄りかかる。
「だが、その前にその娘の治療でもしたらどうだ。先程叩きつけた際

に何本か骨が折れた音が聞こえた。そのままにしておけば最悪後遺症が残るかもしれんぞ」
「!!」

ゼノヴィアはその言葉を聞いて再度イリナを見るとかなり顔色が悪い。最悪というのはまさか折れた骨が何処かに刺さってしまっている事ではないだろうか。

「だが、この場で治療出来る可能性を持つのは三人のウルトラマンは別として考えると、回復型の神器に加え回道とやらを習得しているアーシア・アルジェントのみ。お前達はどうする？」

ゼノヴィアにとっては凄まじく嫌な二択だった。
神の名の元に処断しようとしていた、魔女と呼ばれる元聖女の力を借りるか、それとも信仰を貫いて友を犠牲にするか。もっとも後者は死ぬとは限らないが、それでも何かしら影響は出てくるだろう。

（どうする……!?私としてはイリナを助けたいが、かといって魔女の力を借りるとなると私達の信仰が……）

そうこう考えていると、先にアーシアが動いた。

「……！おい!?」
「これは私がやりたくてやるんです！貴女達が何と言おうとやります！絶対に絶対です!!」

アーシアの予想外の気迫にゼノヴィアは気圧され、イリナの治療を開始したアーシアをただ見守るしかなかった。

「……う？あれ……痛くない」
「ふん……。アーシア・アルジェントに感謝するんだな。俺はお前が

あのまま息絶えようとどうでもよかった」
「え……あ……」
　自身がアーシアに治療された事に気付いたイリナはバツが悪そうにしている。彼女らの信仰とやらを考慮すればそれも仕方ないのだが。
「あ……その……ありがとう」
「はいっ」
　とりあえずこちら側は何とか穏便に済んだようだ。
　そうなると残りの問題はもう二人の方である。
　アーシアの力を借りてしまったとはいえ、イリナが無事だったのは良しとしよう。
　改めて自分の相手となるカナエを見据える。
「辞世の句を読むくらいはさせてあげるわよムッコロ」
「私の名前がムッコロに聞こえるからその語尾はやめろっ!!」
　今だ怒り冷めやらぬカナエは思いっきりキャラ崩壊していた。間違っても頭さえ無事なら再生できる異星人ではないので注意しよう。
「イリナは遅れをとったようだが私はそうはいかない。貴様を斬り伏せ、続けざまにあの化け物を断罪してくれる！」
「……ふっ」
「!?」
「あまり強い台詞を吐かないで。弱く見えるわよ」
　卯ノ花や乱菊、夜一にハリベルなんかが聞いたら即座にツッコむであろう台詞を発したカナエ。
　いやまあ既に黒棺ぶっ放してる雷の巫女とかいるんですけどね。

「ならば私の言葉が嘘偽りでない事をその体に刻み込んでやろう!!」

聖剣を構え、突撃するゼノヴィアを見てタイガが呟いた。

「あのさ……ああいう台詞って『負けフラグ』って言うんだよな」

「何を今更」

寸分違わぬタイミングでタイタスとフーマが応える。

現に馬鹿正直に突っ込んだゼノヴィアはカナエの超人的速度な居合いで吹っ飛ばされた。

「くっ……!」

「こう……二本指で軽く受け止めて、逆にこっちがスパーッと斬れると格好良く強い事示せるんだけど……やっぱりそうはうまくいかないか」

先程の台詞に続きどっかの主人公と初めて相対した時の隊長がやったような事をやろうとしていたらしい。

ソレ、見ている方が青ざめそうなんですが。

「舐めるなっ!」

ゼノヴィアは破壊の聖剣（エクスカリバー・デストラクション）を地面に突き刺しその力を開放すると、地面が大きく吹き飛んだ。その名の通りの能力だし、目くらましでも狙ったのだろうが、カナエには関係ない。

「型、使うまでもないわね」

そう呟いたカナエは痣を発現させて恐ろしい速度でまだ砂煙の中にいるであろうゼノヴィア目掛けて突撃する。

ゼノヴィアは砂煙に紛れて位置を変え奇襲しようと考えていたのだが、まさか移動する前にカナエが猛スピードで砂煙を突破してきた為に策は不発となった。
カナエの斬撃を辛うじて聖剣で防御出来たゼノヴィアであったが、凄まじい連撃を叩き込まれ、防御が薄くなったところを吹き飛ばされる。

「うぐっ!!」
「まだまだ行きまーす」
「!?」

そこからは同じ光景が暫く続いた。
ゼノヴィアが吹っ飛ばされ、カナエが追い打ちをかけ、またゼノヴィアが吹っ飛ばされる。この間、一度もカナエは花の呼吸や日の呼吸を使ってはいない。
まさにボールと、それで遊ぶ子供のようだった。
ガチではあったが一応手加減はしてくれたらしい。確かに途中からムッコロ言わなくなったし。

「う……ぐあ……」
「もう十分ね。それじゃ、お休みなさい」

ガン!!!

日輪刀を鞘に納めたかと思った直後、それでゼノヴィアの脳天を背後から思いっきりブン殴った。
散々痛めつけられていたゼノヴィアはなすすべもなくパッタリ倒れ込んで気絶。
シックル&カナエの完勝である。

「う……嘘……!?」

「嘘でも何でもない、これが実力差だ。お前達が何をしに来たかは知らんし聞こうとも思わんが、この町で揉め事を起こす気ならば今以上の目にあう事ぐらいは覚悟しておくんだな」
「カナエ、痣は発現させたのに呼吸法や型は使わなかったのね」
「さすがにそこまでやったら明確な弱い者イジメになっちゃうもの」
「いや、アレは十分弱い者イジメだったように見えたんだけど」
「あんなのは只のＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩ☆よ？」
「……カナエ先輩、今の台詞ちょっとムカつきました」
「小猫ちゃん最近黒くなってない？」
「元からです」
「……え？」

イリナはシックルの言葉に続いたリアス達の会話に耳を疑った。あれだけ一方的だったにも関わらずまだまだ実力を隠していたと。
愕然としながらイリナは気絶したゼノヴィアに肩を貸しつつその場を去る事にする。その際にある言葉を一誠に残して。

「イッセー君、気をつけてね……『白い龍』は既に目覚めているわよ」
「……？おう」

一誠は何の事かピンとこなかったが、ドライグは理解した。と同時に……

『じぇっとん』

あの時の奴が霞む程の化け物を使役している一家を思い出して「アレに比べたら白いのも大した事ないんじゃね？」と考えていた。自分もタイラントにフルボッコにされていたというのに。

☆

「という事が学園でありまして」

アーシアと共に帰宅後、カナエが事の顛末を家族達に伝えた。実はあの後、裕斗がリアスの元を離れると言い出したのだ。聖剣に対する恨みを魔剣に込めないといけないと。

それに関してはやはり彼個人がどうにかして踏ん切りをつけないといけないだろう。

だが、それはそれとして今の問題はそれではない。

その問題とは……

「総員!!何としても先輩を止めろ!!今回は何をしても構わない!!」

「止めろって言われてもなんかレジェンド様、銀髪で銀色の瞳になった途端に全く攻撃が通用しなくなったっていうか避けまくってんですけど!?元々通用しなかったけどね!!」

「あれじゃ厳勝の月の呼吸でも掠るかどうかってレベルじゃない！というか当たってもダメージ通るのアレは!?」

アーシアに暴言を吐かれたと聞いたレジェンドがブチ切れてしまい、両腕両足にスパークレジェンドのエネルギー（当たると相手は死ぬ）を纏ってカチコミを仕掛けようとしている事である。

下手すれば止めようとした自分が消し飛びかねない状況でなんとかサーガが後ろから羽交い締めにしているが、そんなものはお構いなしにサーガを引き摺りながらズンズンと突き進んで行く。

おまけにわりかし有名なあの極意まで完全な形で発動してしまっている為、乱菊やヨーコの攻撃が悉く回避されるのだ。そこまでしなくても通常形態でその程度は出来そうなもんだが。

「離せサーガ」
「断るっ!!確かにかつて１２の宇宙がある世界で先輩が今のようになった時、その世界の宇宙全ての破壊神や天使、さらに大神官その他全戦力を結集し、俺がそこに合流しても時間稼ぎ程度にしかならず、結局ノアやキングまで駆り出す事になった事があったが……!!」

え、何その終末の訪れみたいな状況!!とその場の全員の思考が一致した。ちなみにその時ブチ切れた理由は気まぐれで宇宙を消滅させたその世界の頂点にいる神のせいである。その神はレジェンドの怒りを直に受けてショック死しかけていたという。

「今ここで先輩を止めなければこの宇宙が終わる！異常事態を解決する為この地に来たというのに、先輩自身が異常事態の根源になっては元も子もない!!」
「問題ないぞ。消えるのはそいつだけだ。そいつ以外は無事だから。きっと」
「最後が不安しかない!!何よりそんな超密度エネルギーを纏って説得力があるものか!!」

とんでもなく物騒な台詞を吐くレジェンドに反論するサーガ。そりゃそうである。纏っているエネルギーがヤバ過ぎる以上『きっと』などという曖昧な答えでは安心なぞ出来るわけがない。
しかし、ここでもアーシアが活躍した。

「レジェンド様、私は平気です。別に何とも思わなかったし……カナエさんとシックルさんが怒ってくれましたから」
「……だが……」
「ね？」
「……今回はアーシアに免じて引き下がるとするか」

レジェンド、陥落。さすがに一心に自分を想い続けてくれる巫女に

はやはり甘かった。緊張感が一気に抜けたサーガもレジェンドを離して力尽きた。

「……まさに宇宙の存亡をかけた戦いだった」

「いや、さすがにそれは大袈裟……でもないのう。さっきの事を聞く限り超戦力を結集しても止められんようじゃし」

「父さんがレジェンドさんだけは本気で怒らせるな、って言ってた理由が漸く分かったよ」

誇張しすぎかと思えるサーガの表現だったが、夜一とリクは納得してしまう。元々レジェンドは沸点が相当高く、キレるにしてもここまでのようにマジで危険なレベルにはそうそうならない。

おそらく自分にとって初めて出来た巫女だからなのかもしれないが、何にせよこれからアーシアに何かあればレジェンドが今日みたいな状態になる可能性が高い。

彼女には悪いがレジェンドのブレーキ役になってもらおう、と満場一致で可決した。

後日それを伝えてもアーシアは嫌がるどころかむしろ喜んでいたので、結果的には良かったという事になる。

……と、ここである事に気付いた。

「あの、レジェンド様」

「ん？どうしたアーシア」

良かった、いつものレジェンド様だ、とアーシアは安堵しつつ疑問に思った事を口にする。

「えっと……確か今日、グレートさんとダイナさんが合流するって聞いてましたけど、まだ到着されてないんですか？」

「あの二人か。アスカ……ダイナの方は大浴場だと思ったが。それからジャック……グレートは格納庫の方でターンXとバルバトス、ガリ

バーを見学してるはずだ。ガリバーに関してはアスカも首を傾げながら見ていたな」

当然だろう、なにせ元々マウンテンガリバー五号はアスカの夢の産物である。しかしながら当時偶然にもレジェンドがアスカの夢にリンクしてしまったのもあって、今回実際に運用出来るレベルで開発してみようと作った結果、何故かあんなバリバリなバトルフォース・ロボになってしまった訳である。

ちなみに夢の産物の方の開発者はＧＵＴＳ時代にレジェンドの同僚でもあったホリィ・マサミ。パイロットはコックピットの問題からミドリカワ・マイが務めていた。

そんな話をしていたら話題の二人が話し合いながらやってきた。

「だから俺ホントびっくりしてさ、俺が見た夢だとガリバーってこう……丸っこい部分が多かったの覚えてるんだよ。で、チーフが作ったのはあんな感じのもうマジで『スーパーロボッ！』だったんだもんな！」

「この姿だと僕もジャックの影響を受けてかああいうのには興味が沸いてくるんだ。ガリバーはもちろん他の二機も中々捨てがたい。どちらも特徴的なフォルムだから」

「あ～分かる。片方はライフルとかバズーカ、刀まで後ろに背負ってるし、もう片方は爪や尻尾まで付いて機械の怪獣にも見えるしさ。でもこういうのも良いんじゃないかって思えてくるんだよなぁ」

やはりというか話題は機動兵器の事だ。どうやら二人共あの三機は等しく気に入ったらしい。

「アスカ、ジャック」

「お、チーフ！その子達が学校行ってたんですか！で、なんでサーガはへばってんだ？」

「先程まで宇宙の危機を食い止めていた」

「は？」

あながち間違いではない。だがレジェンドがブチ切れている間に風呂や格納庫にいた二人は何が起こっていたか知る由もないし、詳しく説明する気もない。ほじくり返してレジェンドの怒りが再燃してほしくないし。

「まあいいや、俺はアスカ・シン！ウルトラマンダイナだ！俺にとってチーフはウルトラマンとしてはもちろん、防衛チームとしても大先輩なんだよ」

ＧＵＴＳがスーパーＧＵＴＳの前身である事から、れっきとした先輩後輩なのである。ちなみにスーパーＧＵＴＳ時代のレジェンドの役職はチームのアドバイザーだ。本来なら重役に抜擢されるはずだったがレジェンドが自身の本来の役目を考慮して辞退している。

「僕はジャック・シンドー、ウルトラマングレート。正確に言うとジャック本人ではなく、僕が地球で同化していた彼をモデルにこの姿をとっているんだ。この姿だと喋り方も彼みたいになってしまうんだけど」

ジャック・シンドーとグレートは一体化していた時、明確な双方の意識が存在しており、変身以外の実体化は出来ずとも普通に会話が出来ていた。

ついでにジャック・シンドー自身は通称新マン・帰マン・帰りマンとも呼ばれるウルトラ六兄弟のジャックとは別に関係ないのであしからず。

「とりあえずもうすぐ夕飯だからアーシアとカナエの紹介はその時にな」

「「はい」」

「ラジャー！」
「分かりました」

今だぐったりしているサーガ（大体レジェンドのせい）に肩を貸しつつ食事の場であるリフレッシュルームへと向かうレジェンド一行。自己紹介は食事の時と言ったもののアスカの親しみやすさやジャックの真面目さもあって自然と済ませてしまっていた。
その話の最中にアスカがふと思い出したようにレジェンドに聞いてくる。

「そういえばチーフ、あいつってもうこっちに来てます？元々あちこち自由に行ったり来たりしてるけどベリアル総司令に休暇貰ったから、って降りたはずなんですけど」
「んん？そんな話初耳だが。誰だ？その休暇貰ったって奴」

「ほら、あいつですよ。クレナイガイ……ウルトラマンオーブ」

〈続く〉

尽きる路銀、手を差し伸べたのは光神

イリナとゼノヴィアが一方的にフルボッコにされた翌日、サーガは巌勝と三日月を伴って駒王町の散策に出ていた。
『これからここで暮らしていくんだから地理くらい知っておいても損はないだろ』
というレジェンドが、お小遣いという名のぶっちゃけ大物指名手配犯の賞金レベルな大金と共に送り出してくれたからだ。これは別に間違っておらず、禍の団潰しやってる最中に襲いかかってきた奴が偶々そうだったから再起不能にして警察に引き渡したのである。その時の賞金をそのまま渡したというわけだ。

「オルガも来れば良かったのに」
「仕方あるまい。鉄華団のリーダーである以上、正式に合流する日が決まったからには連絡が必要だ」
「巌勝さんも紅蓮の参謀長でしょ？」
「確かにそうだが、紅蓮と羅巌は纏めて超次元グレン団としても活動している。どちらか片方が連絡すれば問題なく、ヨーコは先日町へ行っていたから今回は任せてほしいと言っていたのでな」
「そっか、納得した」

巌勝は昨日の昼過ぎに漸く回復した。肉体的な事ならともかく、シミュレーター関係は頭脳の方を要求されたのでダウン時間が長かったらしい。
その後、昼飯時だったので宣言通りレジェンド、グレイフィア、ミライと共に馬場寿司へ外食しに行ってからそこがお気に入りになった。

「二人共、先に食事する場所を決めた方が良いと思うのだが、何か案はあるか？」
「俺は種類豊富なところがいいかな」

「私は……いや、馬場寿司は昨日行ったし、洋食を扱っているところへ行ってみたいのですが」
「そうなるとファミリーレストランだな。出来ればチェーン店の方が割とメニューも多いし……ん？」

巌勝と三日月の希望を聞きながらサーガが何処が良いかさらに絞り込みを掛けていると、ふとした光景が目に入った。正直、多少なりとも戦闘らしい戦闘を見せたばかりだというのに、先日の関係者が見たら何だこれはとツッコみそうな絵面だった。

「迷える子羊にお恵みを～」
「どうか天の父に代わって哀れな私たちにお慈悲をォォォォ！」
「「……」」

前述のフルボッコにされた聖剣使い、イリナとゼノヴィアが物乞いしていた。しかもイリナの腕には布で包まれた、絵画らしきものがある。おそらくその信仰心ゆえに詐欺にでもあったのだろう。
巌勝はその包まれた絵画を『透き通る世界』によって見通し、描かれている人物を見てピンときたのか支給されている特製スマホ『ウルフォン』で何かを検索している。

「サーガ様、なんかいる」
「ああ、ここは助けるべきなのだろうが、逆に助けたら後々厄介な事になりそうな気がする。主に日常的な部分で。いや、しかし見過ごすわけにも……」

変なところに感が冴え渡っているサーガであった。とはいえ真面目な彼は良心の呵責に苦しんでいる。しかし、本来ならばここいらで意見してくる巌勝が妙に静かだ。何かを調べているようだが……
「ごめんサーガ様。なんかあっちのツインテールと目が合った」

「何ッ!?」

まさか自分ではなく三日月!?と思ったのも束の間、瞬間移動でもしたのかと思う速度でサーガの目の前に二人がいた。三日月も目を見開いているし。巌勝は漸く見つかったのか、イリナが持っていた絵画とウルフォンを見比べて頷いている。

「申し訳ない。見ず知らずの方にこんな事を言うのもなんなのだが、よければ食事を恵んで頂けないだろうか」

「私からもお願いしますぅぅぅ!!どうかお恵みを!!」

サーガは思った。もう逃げ道塞がれている……と。ここが惑星レジェンドで、且つ一人であればサーガアクセラレーションで逃げる事も出来たのだろうが地球だし三日月と巌勝もいるしでもはや選択肢は一つしかない。

「俺はちゃんと俺達も食事出来るなら別にいいけど。勝手に奪ったら潰すから」

「ひいっ!?」

なんか一瞬三日月の目が赤くなった気がする。彼は食事に関しては煩いのだ。味とかそういうのよりも、しっかり食べられるかという事に。彼らの境遇を考えれば納得がいくのだが。

「三日月……すまない、俺の付き人が。ここで会ったのも何かの縁だ。俺達が行こうとしているファミリーレストランでいいのなら」

「異議なし!!」

「巌勝も構わないか?」

「洋食が頂けるのであれば。丁度そこがランチタイムになったようで」

巌勝が指差した先にはこの世界でも割と有名なファミレスがタイミング良くランチタイムサービスを開始したようだった。

「定食注文のお客様、ご飯のおかわり自由……」

この瞬間、三日月は戦闘（食事）モードに突入した。サーガと巌勝の腕を引っ張り即座に入ろうとする。

「何してるのそこの二人。俺達はここにするから、食事したかったらついてきなよ」

「半ば強引な気もするが……俺達三人の希望にも沿えている。ここでいいか？」

「先程申し上げた通り異議ありませんっ!!」

「ああ、まともな食事を恵んでくれるだけでもありがたいのにこちらの嗜好まで押しつけられない」

「決まりのようだな」

少々決め方が三日月の希望重視だった気がしないでもないが、五人は腹を満たすべくファミレスへと入っていった。

席に案内されたサーガ達はとりあえず先に注文する事にする。と言っても奢る以上はある程度の節度は守ってもらわなければならない。

「さて、一応食事を奢る事に合意はしたが金額に関しては制限させてもらう。俺達があまり甘やかし過ぎてそれが当たり前になってしまったら困るのはお前達だからな。それだけは未然に防ぐ」

イリナとゼノヴィアが固まった。確かに奢られる立場上、あまり文句は言えないが……まさか一品、それも安いのだけと言われたらどう

しようと冷や汗を垂らしていたらサーガから返ってきたのは予想を超えた一言だった。

「一人につき一万円までだ。それ以上は認められない」

「いちまんっ!?」

何だそれ、実質食べ放題レベルじゃないかと思っていたがさらにとんでもない発言が飛び出してくる。

「お前達、どうも余所者のようだが路銀が尽きたらしいな。という事は宿泊する場所の確保等はまだなのか？」

「あ、ああ……生憎まだだ。よりによってこいつが全額その胡散臭い絵画に注ぎ込んでしまって……」

「胡散臭くなんてないわよ！これには神聖な御方が書かれているのよ！展覧会の方もそう言ってたし！」

「……ちなみに書かれている者の名前は？」

「えっと……ペテロ、様？」

なんで疑問系なんだ。しかも本人が分からないものを他の者が分かるわけ……と思った直後、巌勝がここに来て動いた。ウルフォンの画面を凄まじい速さでスライド＆タップしまくっている。

「巌勝、何か知っているのか？」

「サーガ様……少々不躾ですが『透き通る世界』を使用してその絵画を見通してみました。曰く付きのものならば彼女らのみならず我々にも害を及ぼす可能性もありますので」

「どうだったの、巌勝さん」

「案ずるな三日月。曰く付きではない。描かれていたのは……これだ」

巌勝が他の四人にウルフォンの画面を見せると、サーガらはその画

面を凝視する。

☆

デンデデーン！

「お願いペドロ！力を貸して！五時頃、妹が迷子になって……あの子一人で泣いているわ……！お願いペドロ！」
「お前、警察に電話とかしたかお前!?」
「お願いペドロ！」
「ウチ今電話止められてっからな！」
「お願いペドロ……」
「でもお前らアレだな、困った時だけペドロペドロって調子いいよね。こないださ、ウチピンポンダッシュしてったろ！オジサン知ってんだかんな全部！オイ！」
「黙れペドロ!!」
「コラ！なんてこと言うんだ!!」

―この夏、感動の超大作―
となりのペドロ

☆

厳勝が見せたそれは、迷子の妹を探す少女がペドロという警察帽被ってグラサンをかけたチョビ髭の肥満警官(？)、しかもブリーフ一丁という先日のエロマスク共に負けない格好をした変態に助けを求める映画のワンシーンらしき動画だった。
警察に電話しろと言ってるがお前は何なんだとか、そもそもピンポンダッシュとか言うが呼び鈴なぞ見当たらんとかツッコミどころだらけだが。
いきなり衝撃的な動画を見せられて三日月とゼノヴィア、見せた本

人である巌勝は笑いを堪えていた。イリナは真っ青になっているし、サーガに至っては真顔で何かを考えている。

「ちょっ……巌勝さっ……何コレ……ッ」

「ペテロではなく……くふっ……ペ、ペドロ……ぶふっ！」

「そうだ、それに……くっ……書かれているのはこいつ……ペドロだ……っ」

「そ……そんなあああああ!!」

「……結局この少女とペドロ、どちらが悪人なんだ？」

サーガ、マジで……いやむしろ何マジに考えてんだ。

ぶっちゃけ悪ガキと変態のコントでしかない気がするんだが。というかイリナは初見で何故ただの変態だと気付かないんだ。信仰云々差し引いても、どう見ても神聖さなど微塵もないオッサンでしかないだろうに。

「続きが気になる。巌勝、これは今上映しているのか？しているのなら観に行きたい」

「「「えええええ!?」」」

どうやらサーガが変な興味を持ってしまった。しかも相変わらず真顔だ。これは探すしかないのか……と思った直後。

「……！巌勝、三日月！」

「「え？」」

サーガが嬉々として指差した、ガラスの向こう側には……

―となりのペドロ　絶賛上映中!!―

思いっきりやっていた。

「よし、食後はあそこに行くぞ」

「正気ですかサーガ様!?いや、笑える作品だと思えば割と楽しめそうな……」
「うん。サーガ様に感化されたのか俺も観たくなってきた。早く料理注文しよう」
（えぇー……）

どうやら三人はとなりのペドロを観に行く気満々らしい。
イリナは今だ騙された事にグスグス泣いているし、ゼノヴィア自身は反応に困っている。

「もーいいわよぉぉぉ!!ヤケ食いしてやるぅぅぅ!!」
「お、おいイリナ。ちゃんと一万円以内で……」
「分かってるわよ!このペドロォォォ!!」
「その言い方は昨日のムッコロに続けて私の名前がペドロに聞こえるからやめろぉぉぉ!!」

レジェンド一家がいなくてもカオスであった。
※あまりファミレス内で騒ぐのはやめましょう。

「ご馳走さまでした!!」
「俺もこれが最後でいいや」（※現在五杯目）
「テイクアウト出来るのは……あるな。ヨーコ達に土産として買って帰るか」
「全員満足してくれたようで何よりだ」

サーガは映画が気になるらしくウズウズしているが、そういえば……とゼノヴィアが気になった事を聞いてくる。

「話が脱線したり色々あったから忘れかけていたが、宿泊場所がどうとか……」

「あうぅ～……思い出させないでよゼノヴィア～」

満腹で夢心地だったイリナは一気に現実に引き戻された気がした……が、サーガのとんでもない発言が漸く飛び出る事になった。

「……宿泊用の資金だ。ぼったくりや変なオプションを付けなければ一人十万もあれば足りるだろう。帰るまでの食費なんかも含まれているから無駄遣いはするな」

「「……ふぇっ!?」」

サーガは合計二十万という大金をポンと二人に手渡して伝票を手に取り、三日月と巌勝を伴って退店しようとする。

二人にはサーガの後ろに後光が見えた。いや実際光神なんですけどね。

「信仰心が高いのは大いに結構。だがそれを利用しようとする輩がいる事を肝に銘じておけ」

ではな、と精算して店を出たサーガは意外な人物に出会う。

「……ソランさん？」

「よっ……縁壱先生!?え、帰ったんじゃ……」

「え、何？二人の知り合いか？」

小猫と一誠、匙である。どうやら先の二人に用があったらしく、たった今このファミレスにいるのを見つけて入ろうとしたところを鉢合わせしたというわけだ。

「あの時の言葉通り……また会ったな、小猫」

「……！覚えてて、くれたんですか……」

「記憶力には自信がある」

サーガはともかく、なんか小猫の纏う空気がいつもと違う。ついでにこれをどういうわけか感知したダイブハンガーにいる黒歌は小猫の元に突撃しようとして卯ノ花に気絶させられた。

「じゃあ、あんたが縁壱先生の兄で、その……元上弦の壱の……」
「そうだ。継国巌勝という。縁壱とは双子だが、痣が違うからな」
「いや、すいません。初見でしかもパッと見だと分かんないッス……」
「まあ、そうだろうな」

アレ、この人マジで元鬼?普通に話せる人なんですけど……と一誠は思っていたが、いつも通り一緒にいたトライスクワッドは本気で焦っていた。理由は当然……

((ウッ……ウルトラマンサーガ!?))
(ウソだろお前!?なんでこんなＶＩＰなウルトラマンがここにいるんだよ!?)
(知るかよ!どどどどうしよう、ちゃんと挨拶した方が……いやでも実績も実力もまだまだな俺達って相手にされるかな……)
(我らウルトラマンにとって出会う事自体喜ぶべき事だと言われる程の御仁の一人!是非私の筋肉を拝見して頂き……)
((おい待てやめろォォォ!!))

己の筋肉をサーガにアピールせんとするタイタスを必死に止めるタイガとフーマ。本来ならタイタスが二人のブレーキ役にならなければいけない気がするのだが……。

「早くしないと映画始まるよ、サーガ様、巌勝さん。あとあんた達も早く声掛けないと出て行っちゃうよ、あの二人」
「あ、ああ!おい兵藤!話し込んでないでさっさと行くぞ!!」
「お、おう!んじゃ、巌勝さん!俺達はこれで!小猫ちゃんもほら!」

「あ……はい。ソランさん、それでは」
「ああ」

―願い、届くといいな―

「……え？」

一瞬聞こえたサーガの声に小猫が振り向くが、既に三人は衆人に紛れてしまい見失ってしまった。映画がどうとか言ってたし映画を上映しているところを探せば会えるかもしれないが、今は別の事を優先しなければ。

……もっともその映画がとなりのペドロだとは思わないだろうが。

この後、彼らに加えて裕斗を含めた聖剣破壊同好会が発足した。

「……厳勝」
「承知しています。代わりにこれをヨーコ達へお届け願えますか？」
「了解した」
「俺も出れるようにしておいた方がいい？」
「頼む、三日月」
「分かった。バルバトス、準備しておく」

何かを察知した三人は秘密裏に行動を開始した。

ついでに映画はまた今度、もしくは映像ソフト化したらという事になったらしい。

☆

―とある廃墟―

「やれやれ……この翼の外見だけで判断されるんだよなぁ……ちゃーんと名乗ったのに」

一人の黒い衣服を纏った男が瓦礫に腰掛けながらボヤいていた。

「ホント、コッチでもアッチでも一番働いてるの俺だよ。もう少し福利厚生しっかりしてくれてもいいと思うんだけどさ、君らはどう思う？」

男の声に返事はない。

「答えられない、当然だよな。しかしその状態で無視されるというのも悪くない。こうやって続けていけば新しい世界が見えそうだ」

よっこいせ、と男は瓦礫から立ち上がる。

「さて、そろそろコカビエルも動く頃かな。それともお相手が先手を取るか……どっちにしても俺も動くとしようか」

男は六枚三対の……蝙蝠のような、悪魔の如き翼を広げ、飛び立つ前に後ろを向いて笑いながら言う。

「では名も知らぬ堕天使の諸君、サヨウナラ」

その言葉と共に猛スピードで廃墟を飛び去っていく。男が声を掛けたその場には—

夥しい数の堕天使の死体が積み重ねっており、やがて光になって消えた。

〈続く〉

月の侍と風来坊、『鬼』と『鬼』

サーガ達三人の駒王散策から数日後……

あの日、巌勝はしばらく帰って来ず、三日月はバルバトスの整備手伝いに付きっきり。おまけにサーガはレジェンドに何やら相談しているという、出先で何かがあったとしか思えない行動を取った。

その後、数名が交代で仮住居に寝泊まりして有事の際に対処出来る体制を整えている。

「ホント何があったのかしらね～？」

「巌勝さんも帰って来るのかなり遅かったですし、それから毎日のように出掛けてます」

「大方サーガが言っていたあのエクスカリバーとやらの痕跡でも見つけたんじゃないのか？もっともエクスカリバーと言うには劣化度合が相当らしいがな」

C．C．が何気なく言った一言にカナエとアーシアは驚きの表情で彼女の方を向く。

「どういう事ですか？C．C．さん」

「……お前達、実は生き別れの姉妹じゃないのかと思うくらい息がピッタリだな」

ふぅ……とC．C．は一拍置いてから説明する。

「サーガのやつがエクスカリバーの話をした日、レジェンドがいやに怪訝な顔をしているのを見たから問い詰めてみてそこで発覚したんだがな。エクスカリバーは湖の貴婦人とやらの手元に保管してあるらしい」

「ふえっ!?」

「でも、私そのエクスカリバーの持ち主と斬り合いしましたよ？」

「キュウ（一方的だったよね、斬り合い違うよね）」

レジェンドに聞いたというＣ．Ｃ．から発せられた言葉は驚きを重ねるには十分だった。グリーンモスラの意見はさておき、カナエの疑問は最もだ。

カナエも続けてエクスカリバーが数本ある事などあの日の出来事を、あの時その場にいなかったＣ．Ｃ．に説明したのだが……

「……やはりな。あいつの推理が正しかったようだ」

「レジェンド様の推理ですか？」

「ああ。あいつの推理というのはこうだ」

大昔の戦争で折れたというエクスカリバーは、かつてオリジナルのエクスカリバーから欠けた部分を使い生み出された『最初の』劣化エクスカリバー。そこからさらに細かくしてカナエ達がその目で見た第二劣化品が完成した。各々の能力は劣化した部分を補う為に後天的に付与されたものではないか、という事らしい。

現にオリジナルは先程の通り湖の貴婦人に返還され欠けた部分の修復も当の昔に済んでいるという。

「そもそもアレは剣だけでは本領発揮出来ず、鞘があってこそその真価を発揮するらしいからな。おまけに強度も桁外れだから折れるとしても光神クラスの一撃でも貫わない限りあり得ない。だとすれば折られたものはダミーか劣化品としか考えられないだろ」

「その割にはそこそこ威力はあったような……」

「劣化品や紛い物ではあっても完全な偽物、というわけでもないからな。元となったものがオリジナルの欠片から出来たやつだし。まあ、残りカスレベルの力は残ってたんじゃないか？」

思いっきりボロクソに言われて、聖剣（笑）としかＣ．Ｃ．には思われていない今回のエクスカリバー。

カナエからも「そこそこの威力」程度にしか捉えられていなかった。周りがアレだし仕方ない。

「いずれにしてもあいつらが直々に動く気でいるからな。割と早く片が付くだろうさ」

「え……それって」

「以前レジェンドが言ったろ？そろそろ頃合いだと。おそらくそう遠くないうちにお前達の所属しているオカルト研究部とやらにあいつ自ら接触しに行くはずだ」

アーシアとカナエはその言葉を聞いて驚愕した。C．C．はさして気にするでもなく、トドメの一言を告げる。

「お前達も覚悟しておけ。これからは今まで以上に怪事件と関わっていく事になる。悪魔だ天使だ堕天使だなどと種族争いしている暇などなくなるからな」

なにせ本来なら最高位光神が直属の眷属を伴って自ら動く事自体ごく稀であり、さらに【エリア】ツートップが拠点を除き、同じ世界に滞在する事も普通ならあり得ない。

つまり今回はそれだけの事態だという事だ。依然として調査は進展しておらず、解決の目処もつかない。

「ま、私はやる事が変わらないから別に気を張る必要もない。だからこの話はここで終わりだ。後はあいつから直接聞け、自白剤使おうが色仕掛けしようが私は構わん……いや、後者なら私も呼べ」

「いろっ!?」

アーシアは当然だがカナエまで真っ赤になって動揺した。しかも自分も混ぜろ発言付き。

……実のところ、妄想逞しい二人は色々すっ飛ばしてイメージして

しまったらしく……

「……はうっ（ぶしゅっ）」

「はわあああああ!?カナエさんが!!」

「小説でよかったな、絵面を見られなくて」

カナエがほわほわしながら鼻血を噴出。物凄く幸せそうである。余談だがアーシアももう少しで危なかったらしい。

メタ発言はともかく確かにC．C．の言う通りだ。

それから間もなく、仮住居のインターホンが鳴らされカナエが「どちら様かしら?」と玄関まで行く。

許可のない者は入れない結界が張られている以上、正式に許可されてる者のはずだが、一応日輪刀もスタンバイしている。

「は～い!どなたで……」

カナエがドアを開けるとそこには帽子を被った男性がボロボロのイリナを横抱きしながら立っていた。

「うぇあああああ!?」

「おいどうした?ノアの奴でも立ってたか」

「いやそれはそれで大変だけれども今回は違うから!なんかケーキ作りに失敗したような状態の娘を抱き抱えた男の人が!!」

「よく分かった。大変なのはお前の頭の方だな」

「それも違うううう!!」

とにかくパニック起こしてるカナエでは話にならないと玄関まで出てきたC．C．と何故かフライパンで武装しているアーシア。

「はわっ!?イリナさん!?酷い怪我です!!」

「ケーキ作りどころか母親を錬成しようとして上手くいかなかった結

果こうなりました的な感じじゃないか」
「それ鋼の錬金術師!!」
怪我してるけど両手両足付いてるからね。機械鎧(オートメイル)じゃないからね。
「漸く話せそうだな。急で悪いんだが彼女の治療を頼みたい。レジェンドさんの眷属と見込んで」
「え……!?」
「なんでレジェンド様の……あら?」
男性と話していると突然カナエのウルフォンから『三羽烏漢唄』が流れた。
「リアスから着信?タイミング悪いなぁ」
「何だ今の歌!?」
「私の趣味よ。もしもしリアス?悪いんだけどちょっと立て込んでて……」
『無理を承知で単刀直入に言うわ!今から駒王学園まで至急来て頂戴!かなりマズい事になってるの!!』
「え?マズいのはこっちもよ。こないだの聖剣使いの片割れをボロボロの状態で連れてきた男の人が『彼女を治療してくれ』って言ってるの。理由も聞いてないのに」
『えええ!?あーもう!あの子達、仲間思いなのはいいけどなんでこんな勝手な事を!!』
「……そっちも大分切羽詰まった状況みたいね。分かったわ、とりあえずこの場はアーシアちゃんに「それには及びませんよ」……卯ノ花先生!?」
こっちだけでなくリアスの方も何やら非常事態だと理解したカナエはアーシアに治療を任せ、単独で向かおうと考えた時、奥の部屋から卯ノ花がやってきた。

「彼女は私が看ておきましょう。カナエさんはアーシアさんと共に学園へと向かって下さい」
「「お願いします！」」
「なら俺もついて行こうか。乗りかかった船というか……聖剣が絡んでいるとなると、見過ごすわけにもいかないんでね」
「もしかして、貴方は教会関係者……じゃないですね。そもそも許可を貰ってなければここまで来れないはずですし」

何よりあの方の名前を知っていた。カナエがそう考えるとそれを肯定するように男性が告げる。

「ああ、俺は『聖剣』には関係あるが教会なんかとは無関係だ。さ、早く案内してくれ。取り返しの付かない事になる前に」
「分かりました」
「あ……あの！せめてお名前だけでも教えて下さい！なんて呼べばいいか分からないと、不便ですし……」

アーシアの言葉に対し、男性は小さく笑い帽子を被り直してこう答えた。

「クレナイガイ。風来坊さ」

☆

彼がイリナを運んで来た理由だが、話は少し前に遡る。聖剣破壊同

好会を結成した一誠、小猫、裕斗、匙、イリナ、ゼノヴィア、そしてトライスクワッドの三人は元凶がかつてアーシアを捕らえていたレイナーレ達の潜伏していた廃教会だと突き止め、そこに突入した。
ただし、万が一に備えて小猫と匙はリアスらへ連絡に行かせている。
そして最初に出会ったのは……

「ん～？どっかで見た事あるようなないような？ま、ここでスパッと行っちゃうから関係ないか」
「お前っ……あのイカれ神父！」
「フリード・セルゼン……！」

本作登場時、カナエに花の呼吸第二幕で瞬殺されたフリードだった。パッと見る限り顔や腕などに夥しい傷痕が残っている。余程深々と斬られていたらしい。

「あれあれ？俺ってば有名人？嬉しいね～と思ったけどクソ悪魔やアバズレに覚えてもらっても嬉しかねーっての！何よりあの花ビラ女がいねーじゃん！折角このエクスカリバーで今度はこっちがズタズタのバラバラにしてやろうと思ったのによ!!」
「それは……！」

フリードは奪われたエクスカリバーを四本全て所持していた。この場で倒せば一気に奪還出来るだろう、またとない好機……先程の発言、レジェンド一家が聞いたら悲惨などという生温い言葉では済まなそうな気がするが。

「すげーっしょ？これぜーんぶ俺っちが持ってんの。うちのボスってば超太っ腹！」
「……しかしいくら聖剣を使えたとして、全部同時には使えまい！」
「確かに……ならこっちにも十分に勝機はあるって事「イッセー！皆

避けろっ!!」タイガ?……ッ!?」

タイガの焦るような声と共に急激な悪寒が背筋をよぎり、思わずその場から後ろへと飛ぶといきなり床が爆発した。正確には何かが投げつけられたようだ。

「何をそんな所でウダウダやっている」

その声に全員が上を向くと黒いローブを纏った堕天使がいた。その翼の数は、十。

「今の攻撃はアイツか!」
「気をつけろイッセー……!あの野郎、相当な手練だぞ!」
「フン……何かと思えばたかが下級悪魔と申し訳程度の聖剣使い二体ずつか。いや……実体化していないだけで楽しめそうなのは三体いるな。もっとも結局は実体化していなければ無力だろうが」
「貴様が今回の事件の元凶か!」
「だったらどうする?直接戦えんその体でいくら叫ぼうがどうにもならんだろう」
「ぬうぅぅぅ!!」

堕天使の言葉にタイタスは口惜しく唸った。一誠はタイタスを宥めつつ裕斗に尋ねる。

「なあ……まさか、アイツが……」
「ああ……堕ちた天使の幹部……『神の子を見張る者』の一人、コカビエル。聖書に記された堕天使だよ…!」
「やっぱりか……!」

裕斗の言葉にタイガはプレッシャーに納得がいった。父・タロウがレジェンドや他のウルトラ六兄弟と共に参戦したレイブラッド事変、そこに目の前の堕天使もいたのだ。するとコカビエルはタイガを見てどうやら勘付いたらしい。

「ん……？お前は……そうか！奴の縁者か！いいぞ、お前をエサにすれば奴も来るかもしれん！あの双角の闘神がな!!」

「双角の……？まさか、父さんの事か!!」

「なるほど、奴の息子か！ますます良いエサだ！奴の息子だと言うなら奴だけでなく、その友人という魔王（サーゼクス）も釣れるかもしれん！まさか極上の獲物が自分から寄ってくるとは!!」

こいつは何を言ってるんだ。タイガを始めタイタスやフーマ、一誠も疑問に思っている。まるでタイガを人質にタロウやサーゼクスと戦うのが目的のような。

「だがまずはやるべき事をやってからだ。フリード、例の場所へ向かえ。バルパーは既にそちらにいるはずだ」

「合点承知！」

「バルパー……!?待てっ!!」

裕斗がフリードを追おうとするが、コカビエルの放った光の槍に阻まれ逃してしまう。

「これでいい……さて、奴の息子と一番繋がりがあるのは……貴様か、小僧」

「タイガをどうする気だ!?」

「今しがた言ったばかりだろう？奴らを釣るエサになってもらうのさ」

「ふざけんな！ここでテメーをブッ飛ばしてそんな事出来なくしてやるぜ！ドライグ、やるぞ!!」

『短期決戦で一気に決めろ、いくら相棒でもまだ奴の本気とやり合うには早すぎる。油断している隙に畳みかけろ！』
「おう！禁手（バランス）……!?」

一誠が禁手化しようとした時、妨害するかのように今度は『赤い剣』が飛んできた。

「うわっ!?」
「イッセー君!?今のは……!!」

飛んできた方向へ視線を向けると、コカビエルの近くにはもう一人の悪魔のような翼を持った『堕天使』らしき人物が現れていた。

「なっ……悪魔!?悪魔と堕天使が手を組んでいたのか!?」
「いや、違う……！アイツから悪魔の気配は感じない！」
「ご名答。そこの少年の言う通り、俺は悪魔じゃない」
「……何しに来た、新入り」
「おいおい、助けに来たのにいきなり喧嘩腰はないだろ？」

困ったように笑いながら新たに現れた堕天使らしき男はコカビエルに抗議するが、意識がその男へ向いている事を好機と思ったのかイリナはコカビエルへと飛びかかる。

「はあぁぁぁっ!!」
「……ッ！よせっ！イリナ!!」
「フンッ!!」
「そんッ……きゃあああぁぁ!!」
「イリナッ!!」

しかしそれは容易く弾かれ、無防備になった身体に光の槍を叩き込まれて教会の外へと吹き飛ばされるイリナ。

「あんな事しちゃって勿体無い。堕天使らしく、あの子の純潔でも奪った方がスマートじゃないか？」
「生憎貴様のような性癖は持ち合わせていないんでな。それより助けに来たとはどういう意味だ？俺は貴様の助けなど必要ない」
「おっとこいつは手厳しい。確かに今いる面子ならアンタにそんなものは要らないだろうさ。けどな……今から来る奴は別格なんてモンじゃない。アンタが目的を達成したいなら早めに逃走ルートを確保しておくのを薦めるぜ？」
「今から来る奴、だと……？」

男からの忠告とも言えるそれに怪訝に思ったコカビエルだったが、それが嘘ではなく事実だとすぐ気付く事になる。

月の呼吸　拾肆ノ型
兇変・天満繊月（きょうへん・てんまんせんげつ）

「!!!」

突如、恐ろしい程の無数の斬撃がコカビエルと男目掛けて飛んでくる。男はギリギリ回避出来たものの、コカビエルは何発か受けてしまう。
その凄まじさに一誠、裕斗、ゼノヴィア、さらにトライスクワッドさえ言葉を失った。
「ぐぅっ……！何だ、今のは!?」

「……辛うじて避けたようだな。鬼ではなくなった今、出来るかどうか不安ではあったが、血鬼術の代わりにあの方より授かった光気で代用して放ってみたところ問題なく……いや、むしろ強化されたらしい」
「「「!?」」」

先程の斬撃を放った者……それは聖剣破壊同好会が発足した日に初めて会った人物、継国巌勝であった。
先日この場所を突き止めて以来、常に堕天使の行動を監視していたのだ。動き出すだろうその時を狙って一網打尽にする為に。フリードとバルパーはいないが連中の規模は大きくない為、頭を潰してしまえば後はどうとでもなる。

「「み……巌勝さん!?」」
「ペドロの人!!」
「「「「ペドロって何!?」」」」
「……言われてみれば自己紹介していなかったな」

ゼノヴィアからの呼ばれ方に今更ながら彼女らには自己紹介していなかった事を思い出した巌勝。ペドロの人と言われて、『となりのペドロ』の動画再生中のウルフォンを印籠の如く見せながら勇ましく佇む自分を想像した巌勝は我ながら笑いそうになった。
緊張感漂う雰囲気だがペドロのインパクトが半端ないせいである。

「この際、細かい話は後でするとしよう。お前達は聖剣の方を追うがいい。何やら良からぬ事を企んでいそうな雰囲気だ。アレらは私が引き受ける」
「でも、一人じゃいくらなんでも無理です！コカビエルは当然として、向こうの悪魔みたいな堕天使の実力は未知数なんだ！」
「お前はそれをやろうとしたと、縁壱の継子から聞いている。私がやって何の問題がある」

「そ、それは……」

厳勝に単独行動を取ろうとした事を指摘された裕斗は口籠る。さらに厳勝は続けて言い放つ。

「今のお前達にとって最優先すべきなのは聖剣だ。事態は一刻を争うやもしれぬ。行け!!」

「皆、彼の言う通りだ。あの神父や聖剣計画の元凶とやらをこのまま逃すわけにはいかない!」

「タイタス、けど!」

「イッセー、詳しく説明している暇はないが、彼はとてつもない実力者だ。なにせ私達ではお目にかかる事さえ滅多にないあの人の付き人であるようだからな」

これに一誠は驚愕したが、改めて思い直してみると確かにそうかもしれない。縁壱の実兄であり、先程の発言からカナエらとも面識はあるだろう。何よりイリナが失敗した奇襲をより遠くから成功させた。

「……分かりました。ここはお願いします!」

「奴らの行き先は駒王学園だ、急げ!それからもう一つ……外に吹き飛ばされていたあの少女だが、突入前に合流したもう一人に託し、仮住居まで運んでもらっている。今日は幸いアーシアや卯ノ花殿が待機していた筈だ、安心するがいい。ただその少女の持っていた聖剣が見つからなかったが……」

「イリナの事か!一度ならず二度までも……恩に切る!イリナのエクスカリバーに関してはおそらくフリードが持って行った可能性が高い、それはこちらで何とかする!」

撤退していく三人（＋三人）をコカビエルが狙おうとするも厳勝の放った衝撃波を伴う斬撃に阻まれる。

「チィッ……！確かに大口を叩くだけの事はあるようだな」
「……温い。かつて私を討った柱達の方が余程手強かった。どうやら貴様は単純に戦闘狂なだけ、鍛錬など碌にしていなかったと見える」

厳勝の推測は正しい。コカビエルは常に戦争において最前線で戦う事で己を高めてきた。逆に言えばそれ以外では精々鈍らぬようにする程度、厳勝のように縁壱やアムロという凄まじき目標を目指して己を鍛え続けていたわけではない。
故に小手先だけの技術は通じず、単純な力勝負でも厳勝が圧倒的に上回っている。

「……行けよ。彼の相手は俺が引き受ける」
「寝言をほざくな。俺を傷付ける程の相手を貴様のような六枚羽程度が……！」
「六枚羽程度、ねぇ……じゃあアンタのその羽を全部毟ったら……アンタはどんな声を聞かせてくれるのかな？」

その瞬間、コカビエルは背筋が凍るのを感じた。
何だこいつは。本当に『堕天使』なのか？

「ただの冗談だろ。本気にするなよ」

もはや冗談か本気かなどどうでもいい。一刻も早くこいつらから離れねば。
コカビエルは翼を広げ、そこから離脱しようとするがそれを黙って見過ごす厳勝ではない。先程と同じように殺傷力のある月のエフェクトを伴った斬撃を放つが、堕天使らしき男の放つ赤い剣によって防がれる。
しかし、圧倒的な斬撃量の全ては防ぎきれず……

「ぐあぁぁぁっ!!」

いくつかの斬撃はコカビエルへ直撃し、その身体を傷付けただけでなく翼を二枚斬り落とした。しかし、そんな事はお構いなしにコカビエルは飛び去っていく。

斬られた翼は落ちて来たところを男に確保された。

「いやホント恐ろしいね、その斬撃は」

「……どういうつもりだ」

「何がだい？あれを助けた理由なら」

「助けただと？恍けるな。貴様は最初から奴を助ける気などなかっただろう。傍から見れば私の斬撃を防ぎきれず数撃もらったように見えるだろうが私の目は誤魔化せん」

厳勝の言葉に男は笑みを浮かべたまま黙っている。

「貴様の発生させるその赤い剣……大した強度だ。それを上手く使えば一人程度なら私の斬撃からも問題なく防げるはず。にも関わらず奴に放った斬撃に対して防御の意思を見せながらも後少しで止められる、というところでそれは途端に動かなくなった。私は斬撃にそのような効果を付随してはおらず、同時に貴様も然程消耗していない以上、残る原因は貴様が自分の意思で止めたという事に他ならない」

「……恐ろしいのは斬撃だけじゃなかったみたいだな。大した観察眼だよ。あの状況でそこまで見抜くとは」

やれやれ、と先程同様困ったように笑いながら男は言葉を紡いだ。即ち、コカビエルを厳勝の攻撃から助ける気など毛頭なかったという事。

「……何故、あのような行動をとった」

「理由はコレだよ。コレが欲しくてね。無理矢理奪うよりこうした方がスマートだろ？言い訳も十分に立つからな」

男が見せてきたのは先程巌勝の斬撃で斬り落とされた二枚のコカビエルの翼。
同じ堕天使ならば何故そんなものが必要なのか。その悪魔のような翼を変質化させる気なのか。

「ああ、予め伝えておくが俺が俺に使うわけじゃない。研究の為に欲しがってる人達がいてね。俺は只のお使いってやつだよ」
「何……？それはどういう」
「悪いが話はここまでだ。さて、ちょっとしたサプライズゲストでも呼んでみようか。もっとも、一度呼んだらこの世界と『繋がり』が出来てしまうかもしれないが、まあそれも含めて楽しんでくれ」

男は小さな『核』のようなものを地面へと落とす。すると空間が歪み、瘴気を伴ったワームホールのようなものが現れた。その光景に巌勝は見覚えがある。

「これは……馬鹿な、そんな事が……！」
「さあて……どんな『鬼』が出て来るかな？」

男の言葉が終わった瞬間、そのワームホールのようなものから勢いよく何かが飛び出して来た。巌勝は間一髪回避するが、飛び出して来たものの正体を見て愕然とする。
獅子のような姿に、鋭い牙や爪、長い尾。それだけならば何かの動物だと思うだろうが、問題はその大きさ。比較的恵まれた体躯の巌勝数人分もの巨体なのだから。

「カゼキリ……!?」
「信じられないって顔してるけど、それはソイツに限った事じゃない。俺達がゲームの登場人物だったり、本の中だけの架空の存在だったりする場合だってある。世界や宇宙っていうのは無数に存在するのさ。

一つだけ教えてあげようか、そいつらは元々こっちの【エリア】出身……弾かれて来たわけじゃない」
「!!」
【エリア】の事も、弾かれるという現象の事も知っている。その事に厳勝は驚くもカゼキリが攻撃を仕掛けてきた為、それについて考える余裕が消えた。
「では、サヨウナラ月の侍。生き延びる事が出来たならまた会おう」
「待て……!ちっ……」
男はその場から離脱するが、厳勝はそれより眼前の『鬼』を対処すべく構え直した。
―カゼキリ―
以前縁壱が話していたゲーム『討鬼伝』シリーズに登場する、大型の『鬼』である。厳勝達の出身世界の鬼とは根本的に違い、人間ではなく人間の魂を喰らう。さらに、人体に有害な瘴気を発生させ、さらに自身のいる場所を中心にその地を『異界化』させる能力さえ有する。
大型の鬼は基本的に『表層』と呼ばれる、言わば外殻とも言えるものを纏っており、それを破壊して『マガツヒ』状態になってから漸くダメージが与えられる上、時間が経てばまた表層を纏う。加えて己が危機に瀕した時、力を暴走させて『タマハミ』状態となり形態や戦闘方法が変化する。
これ以外に相手の戦力を弱体化させる手段として『部位破壊』を行い、腕や脚など破壊した部位によってはさらに『鬼祓い』をする必要もある。そのままにしておけば鬼がそれを自分の元に引き寄せ部位再生してしまうからだ。もっともタマハミ時に失った部位を再生・変質化するものもいるのだが……。
何より厄介なのが……
(カゼキリのような『鬼』を討つには『鬼から作られた武器』以外には

不可能……レジェンド様やサーガ様ならいざ知らず、私のこの刀で討てるのか……？今だ目覚める気配すらないこの刀で……）

そう、あの世界において鬼を討つ事が出来るのは、同じく鬼の素材から作られた武器のみなのである。

実力そのもので言えば厳勝が負ける事はない、むしろ複数同時に来ても難無く討てる程だ。しかしそれは攻撃が通用する場合であり、通じなければただ体力を消耗していくだけの無駄な戦いに過ぎなくなる。

「ガァァァァ!!」

「ふんっ!!」

ガキン!!という刃と爪がぶつかる音がすると、厳勝は続けざまに斬撃を放つもののダメージはおろか表層を削れている気配さえ無い。

（浅い……!?いや、やはり効いていないのが正しい。ではどうする？レジェンドやサーガ様に連絡……駄目だ。あの方々は不測の事態に備えている。ここは私が独力でどうにかせねば……だが……）

このままでは目の前にいるカゼキリ一体にさえ対処出来ない。己の不甲斐なさを悔いる厳勝。ここは任せろと言っておきながら堕天使二人を逃し、あまつさえ呼び出された鬼一体さえ倒すどころか傷さえ付けられない。

（結局私は生き恥だけを晒すのか。ならばいっその事ここで……）

辛うじてカゼキリを吹き飛ばし、目を瞬くとそこは真っ暗な空間

だった。

「何だ？カゼキリは何処へ行った？そもそもここは……」

「貴様は……何故生きている……？」

「!?」

聞き覚えのある声を聞いて後ろを向くと、そこにいたのは……

「な……」

「鬼から人間に戻り……新たな力を得て天狗になっていたか……その結果がその様だ……」

紛れもなく黒死牟（かつての自分）だった。

「素直に死んでおくべきだった……貴様が調子に乗った事で異界より鬼が呼ばれ……この世界に新たな不穏因子が現れた」

「それは……」

「どれだけ力を得、それを他者の為に振るおうと……私（お前）の行き着く先は同じ……他者の命を奪うだけの生……だがここで命を捨てればそれも無くなる」

黒死牟（じぶん）の言う事は至極的を得ていた。そもそも剣は凶器、剣術は殺人術と言われるように、刀……それも真剣を手にしていれば自ずと理解してくる。刀で何かを守る為には、刀を振るい何かを討たねばならない。それの繰り返しだ。

しかし己の命を捨てればその苦しみから解放される。

だが厳勝は思う。自分は本当にそれでいいのか？

差し伸べてくれた手を掴み、漸く縁壱と共に歩むと決意し今まで努力を積んで来たものを、楽になりたいが為に捨てていいのかと。多くの罪を重ねた自分を許し、家族として迎えてくれたレジェンドやサーガ、超次元グレン団の者達の期待を……また、自分の我が儘で裏切る

のかと。
そう、答えは当に決まっている。
「たとえそうだとしても、手にした刃を捨てる気など毛頭無い」
「愚かな……遅かれ早かれ……私(お前)はまた墜ちる……いくら生にしがみつこうと逃れ得ぬ結末だ」
「それは全てを捨てた結果だ。その結果が黒死牟(その姿)だというのは認めよう。家族も家も、人間としての誇りさえ捨てた私が行き着いたのが鬼としての私だ」
「……」
「しかし、今は違う。私が今度過ちを犯そうとすれば、縁壱やサーガ様、レジェンド様、グレン団の皆……家族が力づくでも止めるだろう」
「他者頼みである事に変わりはない……無惨様に頼り鬼として生きていく事を決めた時とそう違いはない」
「いや、違う」
黒死牟(じぶん)の言葉に厳勝は強い意志を持ち、反論する。
「私は母上や妻、子供達に誓ったのだ。たとえ贖罪の為の戦いがどれだけ続こうと、どれだけ恨み辛みを向けられようと刀を手放す事なく戦い続けると。だからこそ、まず私は黒死牟(私自身)から逃げてはいけない」
「……何?」
「たとえ口で何と言おうとも、心の底ではまだ燻りがあったのだろうな。だからこうして黒死牟(私)が私の前に立っている。私は今ここで、黒死牟(私)を超えなければならない。そうでなければいつまでもこうして苛まれ続けるだろう」
「無駄な事を……不可能だ。いくら光気を浴びようと……人の身に戻った以上それは叶わぬ……だがそれに納得出来ぬというなら身を持って知れ……!」
お互い刀を抜いて構える。音も何もない漆黒の空間。ただ、ホ

オオオオという互いの呼吸音が聞こえるだけ。

刹那、互いが踏み込み刀を振るい、すれ違った。

「何故……そこまで強くなれた……？」

「理解したからだ。私が縁壱と同じである必要はないのだと。私は私らしく強くなれば良い。たとえ歩み方は違えども、私達は共に歩み、同じ場所へ行く。心は、常に共にある」

「漸くしがらみを捨てたか……見事だ……私よ」

黒死牟の刀が、巌勝の刀によって折られていた。

巌勝はこの瞬間、本当の意味で鬼であった頃の自分を超えた。それを祝福するかのように黒死牟は光となって消えていく。その間際に巌勝へ最後の言葉を残す。

「これが本当の最後だ……忘れるな……その背中を押しているのは今の家族だけではないという事を……」

黒死牟が消えるのを見届け、ふと気配を感じて後ろをふりむと、そこには巌勝が鬼狩りになる為に捨てて行った妻や子達、そして自身の子孫であり刃を交えた霞柱・時透無一郎が佇んでいた。

しかし、皆表情は穏やかであり、恨みの念など微塵も感じさせない。特に無一郎は自分を憎んでいても無理はないというのに。

「お前達……」
『頑張って、あなた』
『父上なら大丈夫です！』
『お父様は最高の侍だもん！』
『もし逃げたりしたら今度こそ許さないよ、おじさん』

彼らから送られたのは、各々の言葉による激励だった。どれだけ詫びても足らぬ事をしたというのに、それを責めずに後押ししてくれる彼らに、巌勝は静かに涙する。魂だったとしても、存在する【エリア】が違う彼らがどうして自分とこうやって対面出来ているかは分からない。ただの自分の理想かもしれないと思ったが、先程言われたばかりだ。『背中を押しているのは今の家族だけではない』―それが、この答えであると。

だからこそもう二度と、道を違える事はしない。その決意を込めて―

「ああ……約束だ。私は……」

あの『鬼』を討つ。

その言葉を紡いだ時、暗闇は光へと変わっていく。そして、意識が遠くなっていく最中、ある声が聞こえた。

《新タナ主、見ツケタリ》

巌勝が再び意識を取り戻すと、初めに見たのは吹き飛ばしたカゼキ

リが身体を起こそうともがいている姿だった。あれから時間は殆ど経っていないのだろうが、随分長い事あそこにいた気がする。
さっきまでの事は決して幻ではない。その証拠に心が軽い。今まで突っ掛かっていたものが全て取れたように。
そんな事を考えていたらカゼキリは勢いよく飛び起きた。同時に巌勝はカゼキリを見据え、手にした刀を強く握り締める。

「異界の鬼よ。先程までの私と思うな。たとえこの刃が通じずとも私は決して引き下がりはしない」

唸り声を上げ、今にも飛びかからんとするカゼキリに対し、巌勝は怯む事なく言葉を紡ぐ。

「どんな苦しく辛い状況であろうと、最後まで勝利を諦めず立ち向かい、戦い抜く。信じる心、その心の強さが……不可能を可能にするのだ！」

かつてマン、セブン、ジャック、エースからメビウスが教わった言葉。グレイフィアと共にミライと親交を深めた時に教わった、心に響いた言葉だ。

「来るがいい！何度襲いかかって来ようとも、貴様が戦意を失うまで吹き飛ばし続けてくれる！」
「グゥアァァァァ!!」
「おおおおお!!」

巌勝の刀とカゼキリの爪が再びぶつかり合い、一層激しい音を立てた時、巌勝の持つ刀の刀身が眩い光を発した。それを至近距離で浴びたカゼキリは巌勝ではなく刀そのものによって吹き飛ばされる。

「何だ……これは……!?」

光の中で刀身は、より長く、より強固になり、刃は黄金に輝き、峰には日輪を模したような装飾が追加された。巌勝は手にしたそれが、外見のみならず凄まじい力を持っている事を感じ取る。
カゼキリが再度飛び起きようとしたその時……

「俺達空から参上ォォォ!!」
「さんじょー」
「ウルトラ参上!!」
「!!」

まさかのレジェンドがオーフィスをお姫様抱っこしつつゼットを首にしがみつかせながら開きっぱなしの天井（そもそもアーシア救出時にレジェンドがぶっ壊した）から突入してきた。丁度巌勝とカゼキリの間に割り込むように勢いよく着地した為、多大な砂煙が舞い上がりカゼキリはまたもや吹っ飛ばされた。

「うおおお!?なんか巌勝さんウルトラスゲー武器持ってる！何だアレ!?」
「レジェンド、あれが言ってたやつ？」
「ああ。巌勝……漸く、所有者が正式に替わったようだな」
「正式に……？これは神衛隊所属となった祝にとサーガ様から賜った物ですが……」
「そいつの名前は『鬼神刀』。俺がある世界で手に入れた、悪鬼羅刹を討ち滅ぼす伝説の刀だ。リガウ島……だっけな？そこで手に入れた錆び付いた刀を打ち直し、さらに使い込んで馴染ませ、さらに各種研

磨材で打ち直し、それを繰り返し……それが極限まで行われた時、ある鬼が刀から現れた」
「鬼が刀から……!?」
「ああ。その鬼の名は『刀鬼』。鬼神刀は、極限まで鍛えられた古刀を以て刀鬼を打倒し、その魂を古刀に再び吸収する事で完成した、鬼そのものが武器となったと言っても過言ではない代物だ。鬼の魂を吸収して悪鬼羅刹を屠る刀となる……皮肉といえば皮肉だが、それがその刀を目指した刀匠の夢だったんだろうさ」

レジェンドはこの刀を使いその世界で戦い抜いた後、悪用する者が現れぬよう惑星レジェンドの自宅に保管していたのだが、縁壱が弾かれて来た際、試しに抜かせてみたところ鬼神刀に変化する前の古刀になっていた。以後は何度やっても鬼神刀になる事はなく、サーガに預けておいたのだ。その後、巌勝がこちら側にやって来た際に微弱ながら反応した事でレジェンドはサーガに鬼神刀を正式に譲渡し、それから巌勝の手に渡ったのである。

「そんな事が……それ程の代物だったとは」
「伝説の刀とかウルトラ格好良いんですが!!」
「間違いなく神滅具並みの希少品」
「そういうわけでお前は俺に継ぐ二代目の所有者というわけだ。三代目が出て来るか分からんけどな。いざとなったら俺も使えるし……まあ、あんまり気を張り詰めなさんな」

各々の感想を述べつつ、レジェンドだけは軽く言う。
そうこうしているうちにカゼキリは体勢を立て直し終えている。幾度となく吹っ飛ばされて些か機嫌が悪そうだ。

「そういや、アレなんでいるの?どっかから呼び出されたの?厄介なもの呼んでくれたな全く……」
「グゥアァァァァ!!」

「やかましい」

バゴォッ!!!

レジェンドはカゼキリの方を向かず鼻っ柱に裏拳を一発叩き込んだ。それを受けたカゼキリはダイナミックに回転しながら後方へとブッ飛んで行き、勢いよく壁に激突、弾け飛ぶように表層が剥がれた。

これには厳勝も唖然としていた。レジェンドは戦闘コスチュームにこそ着替えていたが、その衣装は精々ずば抜けて丈夫である以外に特筆すべきところは無い。つまり本来鬼から作られた武器以外では痛手さえ与えられない筈の鬼に対し、自力のみで表層を木っ端微塵にしたのである。

さすが規格外。理不尽だ。

「おわっ!?なんか毒々しい色になった!!」

「表層が剥がれてマガツヒ状態になったのだ。しかし、心なしか少々ダメージがあるような……」

「まあ、人間その気になれば何でも出来るというやつだな」

その言葉にオーフィス、ゼット、厳勝が一斉にレジェンドの方を向く。

「レジェンド、人間体でも人間の強さじゃない」

「その姿、ウルトラマンからみても人間やめてます体ですよね超師匠」

「そもそもどんな姿であれ光神スペックでは能力的に人間と呼べないかと」

「お前ら鬼じゃなくて俺を精神的に討伐する気かこの野郎」

盛大に人間じゃない発言されてレジェンドはダメージを受けた。たぶん味方になってくれそうなのはアーシアとサーガくらいだと思う。ノアやキングはスルーしそうだし。

「ともかく、後はお前達でやってみろ。俺は後衛に下がり完全援護に回ってやる」
「え!?俺もですか超師匠!?」
「そうだ。ウルトラフュージョンは使えんが、俺が傍にいればある程度戦闘は可能だろう。経験を積む意味でも良い機会だ。共闘相手がオーフィスと巌勝ならば問題あるまい」
「しかしレジェンド様……あの鬼には」
「鬼の素材から作られた武器でなければ傷すら付けられない、か。そこは心配要らん。俺が同伴しているなら俺の光気を共闘している者の武器や身体に纏わせれば、一時的に攻撃が通用するようになる。巌勝の鬼神刀のように単体でダメージを食らわせられるのが一番なんだがな」

今回の場合、ゼットとオーフィスがその対象となる。とはいえ、瘴気の関係で活動限界の問題もある。

「活動限界は基本的に約一時間だったな……長引けば奴がここを異界化する可能性もあるし、瘴気の浄化も必要だ。短期決戦で行くぞ、準備はいいか三人とも」
「問題なく」
「準備よーし」
「ウルトラ万端です！」
「さっきも言ったが俺は後衛からの援護に回る。前衛の指揮は巌勝に任せるぞ」
「承知しました。では……」

巌勝は一拍置いて号令を掛ける。

「あの鬼を討つ！私に続けぇ!!」
「おおー!!」「おー」

厳勝の号令にそれぞれいつものテンションで返事をし、突撃していく三人。そこから一歩下がってレジェンドが追う。神衛隊、ウルトラマン、そして龍神と光神による初の合同作戦……『カゼキリの討伐』が開始された。

マガツヒ状態であればあらゆる部位への攻撃が鬼へのダメージとなる。表層に覆われている時のように部位を破壊し、鬼祓いをするという手順を踏まずとも良いのだ。

「まずはその厄介な前脚をもらおうか!!」

月の呼吸　捌ノ型
月龍輪尾（げつりゅうりんび）

完全に迷いを捨て、過去を超え、レジェンドより受け継いだ鬼神刀を振るう厳勝の剣技は堕天使に放った時よりも冴え渡り、カゼキリの両前脚を容易く斬り飛ばした。

「おおー」
「やっぱりウルトラ凄いぜ、神衛隊最強の剣士！」
「レジェンド様！鬼祓いは可能ですか!?」
「問題無い！お前達はそのままカゼキリとやらに集中しろ！」
「御意！」

レジェンドは鬼祓いの効力をフルムーンレクトに込め、斬り飛ばされた二つの前脚に放つと、光の粒子に変化してレジェンドの手元に収まった。これは戦闘後、素材へと変化する事が分かっている。鬼祓いを行った事でカゼキリの両前脚は霊体に近い半透明のままだ。これにより両前脚の攻撃能力も一気に下がり攻めやすくなる。

カゼキリは前脚がまともに使えなくなったと知るや突進攻撃に切り替えようとするが、突如尻尾に違和感を覚える。

「うぅおおあぁぁぁぁ!!!」

「グゥアァァァァ!?」

なんといつの間にやら背後に回り込んでいたゼットが、綱引きのようにカゼキリの尾を引っ張り突進しようとしていたところを思い切り引き倒したのだ。予想外のファインプレーである。

「二人とも、今のうちに総攻撃ぃぃぃ!!」

「ゼット、実は凄い？」

「良い働きだゼット殿！畳み掛けるぞ!!」

オーフィスはカゼキリの顔面を強く蹴り飛ばし、巌勝は前脚に続けて後脚も斬り飛ばす。それを確認したゼットはカゼキリの尻尾を掴んだまま肩に担ぎ後ろを向き……

「チェェストォォォ!!!」

今度は背負い投げの要領で尻尾を離さぬまま思い切り弧を描くように叩きつけた。ゼットが予想外の大活躍だ。それもそのはず、彼はダイブハンガーへ来て以来、特訓を欠かした事はなかった。己が未熟である事を理解している彼は少しでも力を付けようと、普段のノリからは分からないが努力を重ねており、今漸く芽が出始めたのだ。

「まだまだ荒削りだが、確実に成長している。今後はこういう形であいつにも戦わせた方が伸びていくだろうな」

レジェンドはゼットの成長を嬉しく思う。その行動に手を焼かされているものの、別にゼットを嫌っているわけでも苦手なわけでもな

い。むしろ新しい光として成長する事を楽しみにしている。いつか彼にとっての先輩や師と同様に、彼が後輩達を導くようになる事を信じ、見守っているのだ。
　そんな時、カゼキリが変化を見せる。

「グガアァァァ!!」
「うわっ!?」
「なんか空まで変になった」
「タマハミだ！力を暴走させた事で瘴気の影響が空にも出る！だがこれは同時に奴が生命の危機に瀕している証でもある！ここが正念場だ！体勢を立て直せ！」

　タマハミ状態となったカゼキリの頭には左右対称に巨大な刃の如き横角が生えている。巌勝の言葉通りならいよいよ最終局面に突入したという事だ。

「グゥオオオォォォ!!」
「うぇっ!?おわあああああ!!」
「ゼット殿!!」

　カゼキリはその場で高速回転し、短時間ながら竜巻を発生させてゼットを天高く打ち上げてしまう。しかし、ド根性体育会系なゼットはそのままでは終わらない。
　落下しながらもゼットは両手を自分の頭部に沿え、一気に振り下ろす。

「ゼエエエットスラッガァァァ!!」

　アイスラッガーやゼロスラッガーのように直接飛ばすわけではないが、光波として飛んでいったそれは今まさに攻撃しようとしていたカゼキリの尻尾を両断する。

「ゴァァァ!?」
「いでッ!!」
「ゼット、大丈夫？」

技の為に姿勢制御が疎かになっていたゼットは着地に盛大に失敗していた。だが、それ以上に功績は大きい。あの尾はタマハミ時にさらに厄介な攻撃方法を持つのでそれがなくなったのは大きなアドバンテージだ。既に尾は巌勝が斬り飛ばした両後脚共々、レジェンドが鬼祓いを完了させている。ゼットもすぐに立ち上がった。

「残る厄介な部位はあの横角のみ！」
「んじゃ、ここはこのレジェンドお兄さんが一肌脱ぎますかね」
「グガァァァァァ!!」

怒りをぶつけるかのようにその横角を利用し、回転しながら飛び掛かってくるカゼキリ。しかしレジェンドは殆ど動こうとせず、右手だけを前方へ差し出すとカゼキリが宙で動きを止めた。頭だけがもがくように少しだけ動いているが他はまるで動かせない。普段ならウルトラエアキャッチという物体停止光線でも使ったかと思うだろうがそうではない。

レジェンドキネシスという、以前も使ったレジェンド版ウルトラ念力だ。大抵の場合これだけで決まってしまう為、他の技をお目にかかる事が中々出来なかったりするのだがそれはさておき。

「オーフィスとゼットはそれぞれあの横角を破壊し、巌勝は」
「それを確認次第……奴を討ち取ります！」
「ん、分かった。我も新技やる」
「じゃあ俺もやっちゃったりしますですよ！」

誰一人異論はない。今、カゼキリに対して最後の攻撃が三人から放

たれる。
ゼットは両手を水平にしてゼスティウムエネルギーを解放し、Zを描くように手刀を切り十字に腕を組む。
「ゼスティウム光線!!」
ゼットの必殺光線、ゼスティウム光線。
それと同時にオーフィスはレジェンドがスパークレジェンドを放つようなポーズを取った後、腕を?に組んでいつもと変わらぬテンションで言う。
「オーフィスびーむ」
可愛らしい名前だがその威力はぶっちゃけ究極フォームのウルトラ戦士の必殺光線に近いというチート技。
二つの必殺光線はそれぞれカゼキリの横角を破壊し、丸腰となったカゼキリの目に映ったのは圧倒的な気迫を放つ巌勝だった。
ホオオオオ!!
月の呼吸の呼吸音が一層強くなる。いよいよ、巌勝の本気の一端が見せられる。
月の呼吸第二幕　漆ノ型
双裂(そうれつ)・月扇牙崩(げっせんがほう)
巌勝の技が放たれる直前、レジェンドは己の技を解除しており、カゼキリは身体が自由になった事で回避し、逃走しようとするもそれは叶わなかった。
巌勝の使う月の呼吸。長射程・高威力・広範囲と三拍子揃った呼吸法であり、おそらく単体で超えられる呼吸は日の呼吸……それも縁壱が使い手である場合くらいのものというレベルの凄まじさだ。その第二幕ともなれば想像を絶する威力なのは当然である。

地面を無数の巨大な斬撃が月輪を帯びて迫って来ているのを見たカゼキリは逃げようとしたが、なんと空中に天井があるかのように、空中を斬るのではなく『走る』斬撃が地上同様に無数に迫って来ていた。もはや、回避も防御も出来ない。陸と空、双方からまるで鋭利な牙に挟まれるように全身に斬撃を受けたカゼキリは、光を発しつつ断末魔の声を上げながら息絶えた。すかさずレジェンドはカゼキリ本体を鬼祓いする。

遂に、この世界に初めて現れた『鬼』—カゼキリを討伐する事が出来たのだ。

「鬼討ち……完了……！」
「いよっしゃあああああ!!」
「我達、大勝利」
「三人ともお疲れ様だな。よし、ちと休憩していくか」
「いえ……まだコカビエルとやら達が残って……」
「そっちは一先ず三日月やあいつに任せとけ。サーガもじきにそっちへ合流する。少しは休め。折角グレイフィアやミライが弁当作ってくれたんだぞ、四人分」

そう言ってレジェンドが取り出したのは少し大きめの四つ分の弁当箱。一つだけ少しばかり大きいのがある。

「この大きいの、巌勝のぶん」
「む……？いや、オーフィス殿は良く食べるだろう。私はこれでも長男なのでな、多少は我慢しなくては」
「我はもう『お弁当が欲しい』って我が儘言った。だから今度は我が我慢する。だからこれは巌勝のぶん」
「受け取ってやれ。ゼットもオーフィスも毎日張り込んでたお前に弁当持って行くんだと聞かなくてな。グレイフィアとミライも乗り気だったから作ってきたんだよ」

それを聞いた巌勝は溜息をつきながらも穏やかな表情で受け取る。それだけ多くの者から気を遣ってもらったのなら無下にするわけにはいかない。

「ならばありがたく頂こう。二人も協力したのだろう？」
「俺も頑張りまくったのですよ！……盛り付け」
「我も頑張った。味見」
「オーフィス、お前それ誇るような事か？」

漸く、いつものレジェンド一家が戻ってきた。ゼットは割と頑張ったのかもしれない。見栄えというのも割と重要だったりするのだから。オーフィスは……うん、いつもと同じだった。

「ゼット、俺の身体使っていいぞ。今日のお前は良くやった。俺の分は後で食えばいいし、頑張った御褒美みたいなものだと思え」
「ありがとうございます超師匠！では失礼してっと……」

ゼットが一体化してるレジェンドの身体に戻り、意識が表に出てきたところで三人はいつの間に出していたのか、レジェンドが敷いておいたビニールシートの上に座る。

「「頂きます」」

それぞれの弁当箱を開けると中身はそれぞれ違うものの、豪華である事に違いはなかった。そこでと巌勝が提案する。

「少しずつ、交換しようか。二人の視線がそれぞれ別の者の弁当に注がれているみたいだからな」
「いいの？」
「ああ」
「巌勝さんウルトラ優しい長男だ……！まるでゾフィー隊長みたいな

器の大きさだぜ！」
「弁当一つでそこまで言われるのは些か困惑するが、喜んでくれているのは分かった」

ワイワイガヤガヤと互いのおかずを交換しながら弁当を食す三人をゼットの中から（身体はレジェンドのものだが）温かく見守りつつ、レジェンドは瘴気の浄化を完了させた。聖剣事件はまだ終わらず、この後も取り逃がしたコカビエルらとの決戦が控えているが、今は種族や世界、【エリア】をも超えて生まれた絆を育む時間を大事にしてやりたい。これから先の戦いはそれが必要となってくるからだ。

賑やかに束の間の休息を楽しむ彼らを、月は穏やかに照らしていた。

〈続く〉

「三日月、オルガ。先輩から連絡があった。聖剣計画の元凶は駒王学園で何かをしようとしているらしい」
「わざわざ伝えてくれてありがとな、大将。ミカ、準備出来てるか」
「大丈夫。俺もバルバトスも、いつでもいける」
「なら……」

「元凶は、俺が潰すよ」

力と思いを重ねて、猛激せし鋼の悪魔（バルバトス）

厳勝を中心とした混成チームによってカゼキリが討伐された頃、駒王学園にはリアスと朱乃、小猫に加えてソーナ率いる生徒会メンバーが集結していた。

生徒会メンバーは学園に結界を張り、被害が可能な限り抑えられるようにしているものの、相手が相手でありオカルト研究部側も当初より劇的にパワーアップしている事を考えるとどうしても不安が残る。

「カナエには連絡ついたわ。アーシアとこっちに向かってくれるみたい。聖剣使いの一人が仮住居に運ばれて来たそうよ」

「仮住居……？」

「ソーナ、その話は今度ゆっくりと。欲を言えば卯ノ花先生にも来てほしかったけど怪我人を放っておくわけにいかないもの、仕方ないわね」

「部長、矢的先生は……」

「呼んだけど、間に合うか分からないわ。全く、優秀だからって矢的先生ばかり出張に行かせすぎよ！」

カナエやアーシア以外にも矢的にも連絡したところ、明日帰るはずだったところを繰り上げて今戻っている最中らしい。なまじ彼が優秀過ぎた為に緊急事態に対処しきれない状況を作ってしまっていた。

そこへいつもの鬼殺隊の服に身を包んだカナエと、『輝煌なる祈り』を着込んだアーシア、さらに風来坊ことクレナイガイが到着する。

「カナエ、アーシア！……と、どちら様？」

「クレナイガイさん。風来坊だそうよ」

「飛び入り参加で悪いが、よろしくな」

ウルトラマンは別としても現時点でオカ研最強戦力のカナエと、回復や支援に特化したアーシアが間に合ってくれたのはありがたい。

……が、正直素性も分からぬ一般人をこれから向かう戦場へと連れて行くわけにはいかない。

「貴方が聖剣使いの一人を仮住居へ送り届けたっていう人ね。それには感謝してるけど、ここから先は……」

「一般人が立ち入っていい話でも場所でもない、そんなところだな。安心してくれ、俺はここにいる誰よりも戦闘経験が多い。おまけに聖剣って事なら関係者と呼んで差し支えないぜ」

「ッ!?まさか……貴方も聖剣計画の……」

「いや、それとは無関係。なにせ関係があるのは聖剣って部分だ。聖剣計画なんてこっちに来て初めて聞いたからな。なんとなくロクでもないってのは予想がつく」

どうやら無関係なのは事実らしい。しかし気になるのは誰よりも戦闘経験が多い、という部分だ。本来なら鬼殺隊の頃も含めてカナエが一番多いはずだが、彼はどう見ても精々喧嘩とかいざこざに巻き込まれた事を言ってるようにしか見えない……しかし、だとしたら聖剣云々言うのも妙な話である。

「とにかく、状況が状況だし戦力は一人でも多い方がいいだろ。他に援軍は?魔王の妹さんが二人も揃ってるんだ、どっちかの魔王くらいは期待していいよな?」

「「「「!!」」」」

思わずリアスとソーナはカナエとアーシアを見たが、二人は首を横に振り彼女らの事は話していない事を伝える。

本当に何者なのだ、この風来坊。話してもいないのに悪魔、それも魔王の妹だと一目で見抜くなど。

「あ、貴方いったい……」

「リアス、そこまでですわ。先程私から連絡しました。後一時間程で

サーゼクス様率いる部隊が到着する手筈になっています」
「朱乃⁉」
「もうこれは私達だけで手に負える問題ではありません。貴女は私達の王なのですよ？いつものようにプライドがどうのと言っている場合ではないわ」
「……そうね。朱乃の言う通りだわ」
「正直、私もリアスのように卯ノ花先生や縁壱先生がいてくれたらとは思います。ですが、いつでもあのお二人を頼れるわけではありません。カナエやアーシアさんと違い基本的にあの方々は部外者です、安易に巻き込む事は得策ではないかと」

いや、あの二人の主は思いっきり自分から突っ込んでいってるんですが。しかも一人であっさり解決してしまう為、普段は何故か出番が……ゲフンゲフン。
理由はどうあれ、幾ら頼りになろうがこの件に関しては三大勢力の問題だろう。三大勢力ではない彼らを頼るのはお門違いと確かに言えるが……

「……駄目だ、一時間では間に合わない」
「「え？」」

ガイが重要な事を呟き、リアスと朱乃、ソーナは一斉に彼の方を向く。ガイは顎に手を当てて何やら思考しているようだ。

「間に合わないってどういう事？」
「……エネルギーの流れからの推測になるが、タイムリミットはおそらく残り約３０分弱。それを過ぎればアウトだ」
『⁉』

その言葉にオカルト研究部と生徒会全員が戦慄した。こうしている時間さえ惜しい事態だという事を再認識する。

「急いだ方がいい。予想外な事が起きる可能性だってある。それに……」
「そ、それに……？」

リアスが恐る恐る聞いてくるが、これに対してガイはニッと笑いながら安心させるように言う。

「あの人直属の部隊『神衛隊』が既に動いている。もしかするとタイミングよく間に合ってくれるかもしれない」
「しんえいたい……？」
「まさか……！C．C．さんが言っていたように巌勝さんがここ最近出掛けていたのも……！」
「巌勝さんっていうのは羽織と和服を着込んだ侍みたいな人かい？あの人ならあの子を俺に任せて廃れた教会に突入して行ったぜ。しかもそれからすぐに三日月みたいな斬撃が地下から地上へ向けて飛び出てきたな」

間違いなく巌勝だ。しかも月の呼吸まで使っている。という事はガイの言葉に偽りは無い事の証明になる。

「誰？その巌勝って……」
「以前話した縁壱先生のお兄さん……元上弦の壱、即ち鬼舞辻無惨に次ぐ実力を持っていた最強の鬼だった方よ。私も一度手合わせしたけど……まるで歯が立たなかったわ。しかも彼は全然本気ではなかったし」

日の呼吸を会得し、痣まで発現させたカナエでも歯が立たないという巌勝の実力を聞いて驚愕するガイとアーシア以外の者達。その中でただ一人、小猫だけは別の事を考えていた。

（巌勝さんってソランさんと一緒にいた……？その巌勝さんがその神衛隊の一員だとしたら、もう一人一緒にいた三日月さんって人ももしかすると……じゃあ、ソランさんは……？確か三日月さんはソランさんをサーガ様って……）

小猫はあの日以来、ある人物の事をよく考えるようになっていた。一見無愛想だが、話してみると無愛想というより感情表現が下手というか、どことなく自分に似ている気がする。でもさり気ない気遣いや真面目な部分から印象は悪くない。しかもあの時、最後に見た笑顔が――

「～～～!!」
「ど、どうしたの小猫ちゃん!?」
「な……なんでもありませんムッコロ先輩」
「違うぅぅぅ!!やっぱりなんか変よ!?」

真っ赤になってブンブン頭を振っていた小猫を心配したカナエだったが、今だ混乱しているのか、カナエのあの発現にインパクトがあったからか変な呼び方をしてしまっている。頑張れカナエ、ゼノヴィアも似たような目にあったし、巌勝もペドロの人呼ばわりされたぞ。

「そちらの事情は分からないけど、ともかく強力な援軍が来てくれるかもしれないのは理解したわ。イッセーと裕斗、タイガ達がいないのは痛いけどここは私達が頑張らないといけないわね。ライザーの時と違い今度は死線よ……けど、こちらも体調はほぼ万全。生きてまたこの学園に通うわよ、皆！」

力強く頷くオカ研メンバー。ガイもそれを見て笑みが溢れる。

（この逆境にも気持ち負けしていない。レジェンドさんの言っていた

ように彼女らがこの世界での『防衛チーム』ってやつだな）

リアスの号令で、学園へと突入していくカナエ達。ガイもまたそれに続いていく。

☆

月が照らす校庭に、普段はあるはずのない巨大な魔方陣があり、その中には五本のエクスカリバーが浮かんでいる。

「バルパー、エクスカリバーの統合にはあとどれくらい掛かる？」
「術式は安定している。五分もかからんよ、コカビエル」
「そうか、では頼むぞ。俺はその間に余興でも楽しませてもらう」

廃教会より命からがら脱出してきたコカビエルは既にバルパーらと合流していた。斬られた箇所からの流血も止まっているが、コカビエルはあの二人を忌々しく思う。片や超絶的な戦闘力で、片や底知れぬ何かで、自身に恐怖を植え付けたあの二人を。

（戦争を望んでいるこの俺が戦う事を自然と拒否するような奴らだと……!?何なんだ奴らは……!!）

今思い出しても背筋が凍る。光の槍さえも容易に斬り裂き迫り来る月の斬撃。同じ堕天使のはずでありながらまるで次元が違う威圧感。なんとしてもあの場は切り抜けねばならなかった。事実、あそこにそのままいればレジェンドやオーフィスとも正面切って戦うハメになり、まず死んでいただろう。

そこにリアスやガイ達がやって来る。リアス達はその光景に息を飲むが、ガイに関しては何やら似たような経験があるのか、険しい表情でそれを見ていた。

「何をしているのかしら?・バルパー・ガリレイ」
「おやおや、紅蓮の滅殺姫リアス・グレモリー殿。今まさにエクスカリバーが一つになるのだよ。本来なら四本を統合するはずだったのだが、予定外に一本追加で手に入れる事が出来たのでね。五本のエクスカリバーを統合する事が出来そうだ」
(……何か既視感があると思ったが、そうだ。マガタノオロチが誕生する直前に似ている。あれは場所が東京タワーだったな)

原理としては違うが、雰囲気としてはその通りだろう。ガイがそんな事を考えていると上空のコカビエルがこちらを吟味するように見ていた。

「あれが……コカビエル!」
「ほう……未熟な連中が徒党を組んで来るかと思ったが……どういうわけか知らんが予想より楽しめそうな感じがするな。特にそこの剣士の娘と唯一の男」
「カナエだけじゃなくて彼まで!?」
「ふん、やはりまだ小物の域は出ていないか。そこの男、飄々としているが相当な実力を隠し持っている。しかも天才という言葉で片付けられないようなものをな。どうやら余程戦いを経験してきたようだ」
「無ければ無い方が良いんだがな、そんなのは」

コカビエルは興味深くガイを見ているが、ガイはそれに対して短く吐き捨てる。

「まあいい。それよりも折角この学園を狙ったのだ、魔王の妹の通うこの学園をな。サーゼクスは来るのか?それともセラフォルーか?」
「その二人の代わりに私達が―」

その瞬間、コカビエルから光の槍が放たれるが、リアスは咄嗟に滅びの魔力を発動し間一髪相殺する事に成功する。もっともだいぶ魔

力を持っていかれたが。

「ふむ。つまらんと思っていたが、楽しめそうな予感から確信に変わった。簡単に終わってくれるなよ。まずは……そうだな、地獄から連れてきた俺のペットと遊んでもらおうか」

「それはコイツの事か？」

「……何？」

ガイの声が聞こえた方向を向くと、そこには一方的にやられたであろうケルベロスが虫の息で横たわっていた。しかもガイは傷一つ付くどころか息さえ切らしていない。

『!?』

「悪いな、そっちが話し込んでる時に妙な気配を感じたんで先にやらせてもらったぜ。レジェンドさんから生身での戦闘をレクチャーされてて助かった。おかげで苦もなく倒せたよ。俺を驚かせたいならケルベロスじゃなくてヘルベロスを連れてきな」

ケルベロスを単独で戦闘不能にしたガイの手には、見慣れぬ短剣が握られていた。

「貴様……！まさか短剣（それ）でケルベロスを倒したというのか!?」

「だったらどうした？」

「クックック……ハァーッハッハッハ!!これはいい！余興程度にはなればと思ったが、奴に続いて思わぬ獲物がかかったな!!」

戦闘狂の血が騒ぐのか、ガイを見るコカビエルの目はさらに好奇に満ちている。対するガイの目は冷ややかだ。

すると突如新たな気配を感じたガイがそちらへ視線を向けると……

「グルオアアアアア!!」
「はわっ!?」
「二体目がいたのか!!」

どうやらその通りらしく、背後からもう一体のケルベロスがアーシアらに襲いかかってきた。……のだが。

日の呼吸　参ノ型
烈日紅鏡（れつじつこうきょう）

「ガ……!?」
「ふぅ……モスちゃんやゴモちゃんと違って可愛げがないわね」

カナエの日の呼吸の剣技によっていとも簡単に真っ二つにされた。これが巌勝なら微塵切りに、縁壱なら木っ端微塵にされていたところである。

「へえ……大したもんだ」
「まだまだですよ。縁壱先生ならいちいち相手を見なくてもその場から動かず斬れますので」
「……悪い、その人と比べちゃいけない気がするんだが」
「同感よ。お兄様が戦う前から本気で恐怖した縁壱先生を引き合いに出すのはやめなさい、カナエ」
「……おい、待て。あのサーゼクスが戦わずして恐怖しただと……?」

リアスの発言にコカビエルが反応した。おかしな事を聞いたからだ。サーゼクスが恐怖した?何に?

「運が良かったわね、コカビエル。縁壱先生は先日一仕事終えて、この町を離れたばかりよ」
「ちっ……」

戦闘狂であるコカビエルが縁壱と戦いたいと思わないのは巌勝の血縁と本能的に察知しているからだろうか？そう思ってコカビエルを改めて見ると……

「……？翼が八枚……？」
「それは何かおかしい事なのか？」
「え、ええ。確かコカビエルの翼は十枚だったはずよ」
「あの剣士だ!!」

突然コカビエルが激昂し大声で叫びリアス達は驚くが、ガイは平然としている。心当たりがあるからだ。

「それ、巌勝って人にやられたんだろ。俺が最初に見た斬撃のそれか、その後にやり合った結果かは分からないけどな」
「そうだ……！あの妙な剣技を使う剣士のおかげでこのザマだ！次にあった時は奴を殺す！何があろうとな！」

これを聞いてカナエは思った。絶対無理だと。
しかもこの台詞、縁壱に聞かれようものならサーゼクスの時以上に圧をかけられた挙句細切れにされるだろう。だって兄上大好きだもんあの人。
そうこう言っているうちに、廃教会へ行っていた一誠、裕斗、ゼノヴィアとトライスクワッドが合流した。

「部長！」
「イッセー！裕斗も！無事だったのね！」
「はい！お仕置きは後で受けるんで、今はエクスカリバーを……あれ、タイガ達どうしたんだ？」
「うえ!?い、いや……なんでも」
「そうか？まあいいや」

タイガやタイタス、フーマが動揺しているのは先日のサーガに続いて……

（（なんであの人までいるんだよォォォ!!））
（最近やたら著名人に会うな）
（言ってる場合か!?だって……ほらァァァ!!こっち向いて嫌な笑顔向けてるし！絶対イジられるの目に見えてるしぃぃぃ!!）
（スンマセーン！俺正真正銘アンタの後輩なんですが！イジるならこっちの二人に……）
（フーマァァァ!?おまっ……俺達を売る気か!?一蓮托生だ!!）
（こうなったらロッソブルグリージョの三兄妹を盾にするしかない！）
（おい旦那ァァァ!?アンタ賢者だろ!?兄貴二人はともかくグリージョはヒドくねーか!?）
（むしろ彼女ならば彼もイジらないかもしれん！）
（いやそれ以前にあの二人を犠牲にしてる時点で駄目だろ!!ともかくとかそういう問題じゃないからな!?）

彼らがアタフタする理由は意地悪そうな笑みを浮かべてるガイである。絶対ちょっかいかけそうな雰囲気だ。無論、そこまで悪い事するわけではなくスキンシップの一環に近いのだが。

「元気そうだな、トライスクワッド？」
「「ぎゃあああああ!?」」

ニヤニヤと笑いながらガイはレジェンドからプレゼントされたらしいウルフォンを取り出した。

「とりあえずタイガのその姿を写真にしてタロウさんに送っとくか。タイトルは『不思議の国のタイガ』で」

「うわあああ!?待ってくださいよ先輩!!」
「え、先輩!?」

タイガの叫びに一誠はもちろん他のオカ研メンバーも驚いていた。タイガにとって先輩だとしたら、ガイの正体は即ち……と、その時。

「―完成だ」

一同が声のした方向を向くと、それまで校庭で光を放ち続けていたエクスカリバーの輝きが一層高まり、五本の聖剣が重なるように一つになっていき、一瞬更に強く光を放った後その場には青白いオーラを纏う一本の剣があった。

「エクスカリバーが一本になった光で下の術式も完成した。あと二十分もしないうちにこの町は崩壊するだろう。解除するにはコカビエルを倒すしかない。もっともそれが出来れば、の話だがね」
「出来ればじゃない!やるんだよ!」
「バルパーとか言ったな。お前、とんでもなくヤバい連中に目をつけられてるぜ」
「ほう?」

ガイの言葉に対し、相変わらず見下すような態度を崩さないバルパーだったが、カナエやアーシアは思い出す。自分達もその行いは許せないが、自分達とは比べ物にならない程の憎悪をバルパーに抱く者がいる事を。下手すれば裕斗のそれより遥かに凄まじいそれはすぐ近くにまで来ている。

「そんな事はどうでもいい。フリード、陣のエクスカリバーを使え。最後の余興だ。五本の力を得たエクスカリバーで戦ってみせろ」
「はいよーボス。丁度お誂え向きに花ビラ女もいることですし?ここは神父らしく誓い守ってズタバラにしちゃいましょーかねぇ!」

コカビエルに呼ばれて現れたフリードが統合されたエクスカリバーを手に取り、一誠達……特に因縁のあるカナエに対して切っ先を向ける。

「……最早ああなった以上、エクスカリバーの核だけでも持ち帰れればいい。あの剣はここで破壊した方が得策だ」

ゼノヴィアが決意したように言う。倒されてここにはいないイリナもそれには同意していた。何かあれば最悪核だけでも無事ならば構わないと。彼女の意見にその場の者達が頷くと同時に、裕斗がバルパーを睨みながら一歩前に出る。

「バルパー・ガリレイ。僕はお前が引き起こした『聖剣計画』の生き残り……否、その怨霊だ」

「ほう、あの時のか。こんな極東の地で巡り会うとは。どんな運命なのやら……しかし君達の尊い犠牲によって、あの計画は成功したんだよ」

「何だと？　お前は僕達を失敗作として処分したじゃないか」

裕斗の言葉にカナエやアーシアはサーガの言葉を思い出す。『適応出来なかった者は全員処分された』―しかも計画に関しては既に廃棄されている。つまり計画は失敗に終わったはずだ。継続されているとも思えない。

「聖剣を使うのに必要な因子がある事に気付いた私は、その因子の数値で適正を調べた。被験者の少年少女、ほぼ全員に因子はあるものの、どれもこれもエクスカリバーを扱える数値に満たなかったのだ。そこで私は一つの結論に至った。ならば『因子だけを抽出し、集めることはできないか？』とな」

「つまり塵も積もれば山となる、の理論でその集めた因子を一つにし

て能力の優秀な被験体に投与し、人工的に聖剣に適応した人材を作ろうとしたってわけか……腐ってるな、お前」

バルパーの言葉に続けるようにしてガイが語る。最後の言葉から分かるようにガイも相当頭に来ているようだ。そのガイの言葉を気にも止めず、バルパーは懐から光輝く玉を取り出す。

「何とでも言うがいい。そしてこれはその時の物だ。三つほどフリードに使ったがね。これは最後の一つだ」

「 俺以外の奴らは途中で因子に体がついていけなくなって、死んじまったけどな！ うーん、そう考えると俺様はスペシャルだねぇ」

「バルパー……貴様ッ!!」

「オルガさんが言ってたわ……自分達がいたところでは『ヒューマンデブリ』宇宙に漂うゴミのように履いて捨てるほどあるもの……そういう扱いを受けた子供達がいるって……」

「んー？ゴミはゴミでもリサイクル出来たんだからマシでしょーよ。使えない奴が持ってたって宝の持ち腐れだし？」

裕斗はもちろん、カナエも最早爆発寸前だった。意思に関係なく痣は発現し、握られていた日輪刀は既に赫刀と化している。バルパーはそんなものお構いなしに嘲笑う。

「まぁ直にこいつを量産することが出来る。これは餞別だ、お前にくれてやろう。最もたった一つの因子の結晶ではどうにもならんがね」

手にしていた最後の一個を裕斗に向かって投げ捨てるように放った。足元にやってきたそれを、彼は屈んで手にする。ガイは自然と裕斗の傍に近寄っていく。

「……皆……」

「……」

涙を流す裕斗をガイは黙って傍らで見守っている。そして涙の一滴が因子の結晶に落ちた時、その結晶から眩い光が迸り、裕斗とガイを囲むようにその光が一つ、また一つと人の形になっていく。徐々にそれははっきりとした少年少女の姿になり、裕斗とガイの前に現れた。

「これは……一体何が起こっているんだ？」
「これが君が築いてきた『絆』だ」
「え？」
「君は復讐を誓ってなお、死んでいった彼らの事を想い続けた。それが、今それを介して形になったんだ。君に……『託す』為に」

穏やかにガイが裕斗に諭す。それを聞いた裕斗は人の形を取った霊魂達に自分の胸のうちを語る。

「……ずっと、ずっと考えてきたんだ。僕より夢を……意思を持っていた君達ではなく……僕一人が生きてていいのかって……」

思いを吐露する裕斗を、穏やかな顔で見つめ続ける少年少女達。彼らの思いを代弁するかのようにガイは裕斗に再び告げる。

「生きていいのかじゃない。生きるべきなんだ。彼らを忘れない為に。彼らが本当の意味で生き続ける為に」
「生き続ける、為に……」
「君が生き続ける限り、彼らの想いは消えない。これから先もずっと」

その言葉を告げると、ガイは懐からハーモニカを取り出し、ある曲を吹き始める。その音色に合わせるかのように霊魂達はリズミカルな口調で唇を動かす。すると今度はアーシアがそれを読み取った。

「聖歌……」

ガイの吹くハーモニカの音色に合わせ歌う少年少女の霊魂達。涙を流して同じように口ずさむ裕斗。いつのまにか彼らを包むように光が強くなり、やがてそれは校庭を眩く照らし出す。

『僕らは、一人ではダメだった』
『私たちは聖剣を扱える因子が足りなかった。けど』
『皆が集まれば、きっと大丈夫』
『諦めなければ、勇者が力を貸してくれる』

はっきりとした声が聞こえた中のキーワード『勇者』―それに裕斗は何かを思い出した。かつて同志達と全く同じ夢を見た時の事。強大な異形の怪物に剣を携えた光の巨人が立ち向かう光景。皆その姿に、憧れた。自分達もあの巨人のようになりたい。あの巨人がきっと『勇者』なのだろう。懐かしい気持ちになる裕斗の中に霊魂達は一つずつ吸い込まれていく。

『聖剣を受け入れるんだ』
『怖くなんてない』
『たとえ神がいなくても』
『僕達の心はいつだって』

「―ひとつだ」

厳勝に続き迷いを振り切った騎士が、そこにはいた。

「僕は剣になる。部長、仲間たちの剣となる！　今こそ僕の想いに応えてくれ！『魔剣創造』!!」

魔剣創造によって作り出されようとする剣に変化があった。先程の裕斗のように魂が今度は剣へと同化していく。
それは『聖』と『魔』が一つになる証。

『至った……あの『騎士』は至ったんだ』
「ドライグ……？」
「至ったって……まさか、裕斗は」
『神器は所有者の想いを糧に変化と進化をしながら強くなってゆく。だが、それとは別の領域がある。所有者の想いが、願いが、この世界に漂う流れに逆らうほどの劇的な転じ方をしたとき、神器は至る。そう、それこそが』

ドライグは一誠とタイガに答える。一誠は既に手にしていた、その力の名を。

『禁手だ』

裕斗の手に握られていた『騎士殺し』。外見こそかつてと同じそれは二つの力の結晶とも言えるもの。
禁手『双覇の聖魔剣（ソードオブビトレイヤー）』によって生み出された新たなる大剣だった。

「見せてもらったぜ、君達の絆」
「ありがとうございます……えっと」
「クレナイガイ。風来坊だ」

そうは思えない、と苦笑しながらも納得する。彼が自分を、自分達を後押ししてくれたのは紛れもない事実。さらに、そんな彼らを見てゼノヴィアも奮起した。

「先輩……でいいのかな？さすがだ。私も負けないように力を解放するとしよう……ペトロ、バシレイオス、ディオニュシウス、そして聖

母マリアよ。我が声に耳を傾けてくれ。この刃に宿りしセイントの御名において、我は解放する。デュランダル!!」

ゼノヴィアが呪文らしきものを唱えると、目の前に空間の歪みが発生しゼノヴィアはそこに手を突っ込みそこからエクスカリバーとは違う一本の聖剣を取り出した。それを見たバルパーとコカビエルは同時に驚愕の表情になる。

「デュランダルだと!?」
「貴様、エクスカリバーの使い手ではなかったのか!?」
「残念。私は元々聖剣デュランダルの使い手だ。エクスカリバーの使い手も兼任していたに過ぎない」
「バカな！　私の研究ではデュランダルを扱える領域まで達してはいないぞ!?」
「それはそうだろう。ヴァチカンでも人工的なデュランダル使いは造れていない」
「では何故だ!?」
「簡単だ。人工的ではなく天然物、天賦の才ってやつさ」
「そういうことだ、イリナを助けてくれた風来坊さん」

デュランダルはかなり有名な聖剣であるが、ガイはともかくカナエはどれ程のものかあまり理解していない。とりあえず「エクスカリバーより凄い剣」程度の認識だ。というのもジェントらが所有する七星剣がぶっ飛び過ぎて余程のものでない限りさして気にも止めなくなっているだけなのだが。

「君は良いのかな？」
「ええ。私の呼吸法は実戦になってからが本番ですので」
「じゃ、次は俺だな」

カナエの元々の呼吸法である花の呼吸にせよ、後天的に体得出来た

日の呼吸にせよ、いずれも型というのは基本的に戦闘になってこそ使われる。後者に限り『ヒノカミ神楽』として神楽舞扱いにする事も可能ではあるが。

ガイはカナエの言葉を聞くや否や手にした短剣に手を添えると、短剣が光輝きリングの部分が小さくなって刀身が長くなった。形状としては長剣と言った方が正しい。

「短剣が別の形に……！」

「これでも本来の形じゃなくてね。取り回しがいいからさっきの短剣形態と平行して普段は使ってるんだ」

「本来の形じゃない!?まだ別の形態があるのか！」

「ああ。その形態でこそ、この剣は真価を発揮する。この勇者の聖剣オーブカリバーはな」

『ゆ、勇者の聖剣オーブカリバー!?』

ここにきてガイの持つそれの名前が明らかになり、トライスクワッドを除きバルパーやコカビエルさえも驚愕する。エクスカリバーでもデュランダルでもなく、全く聞いた事のない聖剣だったのだ。

「オーブカリバー!?何だそのエクスカリバーの紛い物のような名の聖剣は!!」

「紛い物はそれの事だろ。コイツはれっきとした聖剣だ。剣だけじゃ真価を発揮出来なくて、エレメントを四つ分手に入れるのも苦労したんだぜ」

「エレメント……？」

「このオーブカリバーには火・水・土・風のエレメントが込められているが、何も最初から込められてたわけじゃない。広い宇宙を巡り巡って漸く集めたんだ。しかも、それから使いこなすのにかなり時間が掛かったしな」

次々と明らかになる事実に愕然とする。宇宙を巡り聖剣の為のエ

レメントとやらを集め、それを使いこなす為に修行を重ねたガイ。そしてタイガが口走った先輩という単語。そして極めつけがフーマの話だ。

「……俺の生まれ、惑星Ｏ－５０のある場所にはある剣があった。辿り着くだけでも困難なその場所に一本の剣が。必死の思いでそこに辿り着いてもそれに選ばれる者は長らく現れなかった」

『……』

フーマは感慨深く続ける。

「でもある時、そこに辿り着き……その聖剣に選ばれ力を授かった者が現れた。その者はウルトラマンとなり、聖剣を手に数々の星を巡り、後に魔王獣と呼ばれる厄災を打ち倒し、英雄と呼ばれるようになった」

これを聞いた裕斗は目を見開いた。もしや、同志達と共に見た夢に現れた光の巨人と異形の怪物はそれなのではないかと。

「勇者の聖剣オーブカリバーに選ばれたその者の名はクレナイガイ、又の名を……」

ウルトラマンオーブ

『ウ、ウルトラマンオーブ!?』

「風来坊じゃなかったの!?」

「これでも遊撃隊に所属してるんだぜ？総司令からは『ちゃんと仕事さえしてくれるなら自由にしてていい』って許可貰ってるから気ままにあちこち行ってるだけさ」

まさかの正体に驚きを隠せないリアス達だったが、あまりの逆転展開にフリードが苛立ち始めた。

「ふッざけんなよォォォ!!なんでここまできてワケの分かんねー聖剣を風来坊だがプータローだがが持ってんだよ!!いらねーんだよそんなクソ展開はァァァ!!」

「だからプータローじゃなくて就職してるっての。割と自由な職種だし、先輩方や総司令も良い人だしな。お前も真っ当に生きろよ」

「ウゼーんだよこのぽっと出野郎!!そぉーだ、お前をエクスカリバーでぶった斬ってその聖剣も俺様のモンにしちゃおー!」

「お断りだ。聖剣が何たるか、その本質を知らないお前にコイツは渡せない」

ガイとフリードが舌戦を繰り広げる中、バルパーは再び笑みを浮かべる。

「クッ……ククク……」

「何が可笑しい？気でも触れたかバルパー」

「やはり保険は掛けていて正解だったな。私が不測の事態に対して何も対策を取っていないとでも思ったのか？」

「何……!?」

「……！皆下がれ！」

ガイの指示に自然と身体が動きその場を離れると、空から多数の機動兵器が勢いよく降りてきた。まるでスタンバイしていたかのように。

「何だ、これは……!?」

「これ……ＭＳ（モビルスーツ）……！」

未知の存在に驚くゼノヴィアに対し、カナエはそれの正体を知っている。シミュレーターで何度か見た事のある機体ばかりだ。

「ほう？これを知っているのか。何故……かはどうでもいいな。実はある者から提供されてね。使い心地を知りたいそうなので私達に協力してくれているはぐれ神父や堕天使達に乗ってもらっているのだよ。思いの外扱いやすいようだぞ？」

「くそっ……ここに来てこんな邪魔が……！」

はぐれ神父や堕天使が乗っているＭＳはかの宇宙世紀世界におけるグリプス戦役以降の機体―マラサイやハイザック、バーザム。さらにはバウやガザＤ、ジェガンやネモなど軍を問わない混成機部隊だ。殆ど量産機とはいえ如何せん数が多い。タイムリミットが迫る中、まさに万事休すである。

何とかしてコカビエルを倒すか、もしくは魔方陣そのものを術式ごとどうにかするしかないのだが……

「誤算なのはお前達だったな。精々足掻いてみるといい。どれだけ抵抗しようが結局は無駄になるだろうがな」

「だったら、魔方陣（それ）を最初に潰すから」

その言葉と共に、何かが降ってきた。

ズドオオオオオン!!!

一瞬の事だった。
何かを突き刺す姿勢で空から降ってきたそれは、そのまま校庭に勢いよく異様に巨大な鉄塊を突き刺す。轟音と振動を発生させながら、魔方陣はひび割れるように砕け散った。

「バ……バカな!?この町を壊滅させる程の威力を持った魔方陣を力任せに破壊するな……ど……」

バルパーは信じられない表情で破壊された魔方陣を見、その破壊した存在を睨みつけようとして言葉を失った。
四本の角状のアンテナに、鋭利な爪を持った長い腕や脚。背部には折り畳まれた巨大な何かを背負い、尻尾のような物も見える。そして一際目を引くのがあり得ないほど巨大な鈍器を手にしていた。そしてその緑の双貌がバルパーを射抜く。

「ひいっ!?」

バルパーは無意識にそれに恐怖を覚えた。明らかに自分に対して圧倒的な憎悪を放つ目の前の存在がこの上ない程恐ろしいものだと、直感的に身体が歯向かう事を拒否している。逃げなければ、と思うが恐怖のあまり身体が動かない。
そこでカナエの一言によってさらなる衝撃が投下される。

「バルバトス……!!」
「バッ……バルバトスですって!?」
「そんな筈はない!あのバルバトス家は既に滅び去ったはずだ!まさ

か機械の身体になって存続していたとでも言うのか!?」

この世界では冥界においてバルバトス家は滅亡しているらしい。が、そんな事は『彼』の知った事ではない。

「カナエ、アーシア。二人とも無事？」

「三日月さん!!」

「三日月さんって……やっぱりあのソランさんと一緒にいた……！」

小猫の予想通り、三日月は関係者だった。もっともこの場でそれ以上に食いついてきたのは別の者だが。

「カナエ！今これをバルバトスって言ったわよね!?どういう事なの!?」

「リアス、これは貴女達の知ってるバルバトスではないの。ある世界で厄災戦という戦があり、その最中に開発されたガンダム・フレームと呼ばれる特別な機体の内の一機。正確にはそれを一から作り直したものらしいけど」

「厄……災戦？」

「目の前にいるＭＳと同種のものであり、同時に異なるものでもある。それがこのネオ・ガンダムバルバトスルプスレクスだと言っていたわ。彼ら『鉄華団』の使うガンダム・フレームは皆ネオ・カテゴリに属しているとかなんとか……う～ん……厳勝さんとかグレイフィアさんとかミライさんの方が詳しいかも。特に厳勝さんはまだ一機しかないターンタイプってカテゴリのＭＳに乗ってる同じ神衛隊所属の方だし」

「情報が多過ぎて混乱してきたわ……とりあえず、敵ではないのよね？」

「ええ、もちろん。敵どころかこの上ない頼もしい味方よ。なにせ鉄華団のトップエースだもの」

カナエは嬉しそうな声でバルバトスを見上げながら告げた。ガイの言葉通り、バルパーやコカビエルにとってはとんでもない相手が最悪のタイミングで、リアス達にとっては危機一髪のタイミングで凄まじい援軍が到着したという事だ。

「ねえ、大剣の人」
「僕の事……で、いいのかな？」
「うん。さっきの会話、風来坊さんのウルフォンを通じてバルバトスの中で聴いてた。全部」

バルバトスの中で、というからには一体化していると思われがちだが（あながち間違いでもない）ＭＳである以上、通信を傍受したかそれに準ずる方法で聴いていたのだろう。

「アンタがバルパー（そいつ）に怨みがあるのもわかった。けど、アイツは俺にやらせてほしい」
「理由を聞いてもいいかな？」
「……ヒューマンデブリ」
『!!』

たった一言で全てを理解した。彼は、三日月はヒューマンデブリと深い関わりがある。カナエの話が事実なら彼がバルパーを仕留めたくなる理由は明確。

「アイツを俺に任せてくれるなら、アンタが超えるべき聖剣までの道は俺が作る」

つまりフリードは裕斗に任せるから、バルパーは自分に任せろと言う事。少し前の裕斗なら反発したかもしれないが、今は違う。ガイが裕斗の方を優しく叩き、笑みを浮かべながら頷く。

「もう一つだけ、条件がある」
「何？」
「やるなら、完璧にお願いしたい。頼めるかな」
「分かってる。アイツはここで終わらせる。何があっても」

その言葉には確かな決意が込められてた。彼なら、信頼出来る。裕斗は了承した。

「頼んだよ、三日月さん……でいいんだよね？」
「うん。あと……」

良い剣だな、それ。
三日月は裕斗が新たに生み出した剣を短く、しかしハッキリと褒めた。言葉は少ないが、逆に彼の気持ちがストレートに伝わった裕斗は自然と顔が綻ぶ。剣が褒められたという事は同志達も褒められたという事だから。

「俺は神衛隊（ここ）で大切なものを沢山貰った。大切なものが沢山出来た。今も、志を同じくする仲間が出来た。全部、俺の宝物だ。だから」

三日月はバルバトスをガイや裕斗の方を向けて、片膝をついて鉄塊を持っていない腕を握り拳にさせてゆっくりと突き出す。

「宝物（みんな）は俺が護るよ」

穏やかで、しかし力強い言葉。
三日月がバルバトスを介してやろうとした事に気付いたガイ、裕斗、カナエ、ゼノヴィアはそれぞれ笑顔になり、突き出されたバルバトスの拳に自分達の拳を合わせる。

戦士達の、約束。生まれた絆。

「た、確かに驚きはしたが……所詮は機械人形一機。機械である以上、動きにある程度の制限はあるだろう。ましてやそのお仲間とやらを護りながらどれだけ戦えるかな？」

暫く視線が外されたからか、再び強気になるバルパーだったがそれが間違いである事に気付くはずもない。ネオ・ガンダム・フレームには新生阿頼耶識システムがある。

「まずは皆があの聖剣持ちのところに行くまでの道をつくる。行くぞ、バルバトス」

今、鋼の悪魔（バルバトス）が始動する。

まずは一撃。そう、たった一撃だけ。

一撃だけで、少し離れていたガザＤはズズン……と音を立てて墜ちた。下半身と片腕だけが。

『……え？』

バルパーやコカビエルを含めた全員が惚ける中、もう一箇所にいた機体……ハイザックが倒れていた。その機体のコックピット部分に、ひしゃげたガザＤの上半身をめり込ませて、中から……中身が潰れた結果であろう血を垂れ流しながら。

「思ってたより脆かったな」

そうではない。バルバトスの一撃が異常なまでに重く、速かったのだ。手にした鉄塊―可変式超大型メイスの一撃は容易く二機のＭＳ

を叩き潰した。

「う……うわあああ!!」

「ひ、怯むな！敵は一機、しかも見た感じ近接戦闘重視だ！近づかなければ」

ゴ　シ　ャ　ッ

指示を出していたバウが、恐ろしい速度で接近したバルバトスによってパイロット諸共鉄屑と化す。やはりと言うか、潰されたコックピット部分からは血が流れている。

「うるさいな」

短く呟く三日月。だが、それ故に恐ろしさがあった。ガザDをハイザックごと屠った時も、たった今バウを潰した時も、相手を叩き潰す事にまるで抵抗がない。

少なからず命を奪う事に躊躇するだろうと考えていたバルパーの目論見は一瞬で瓦解した。殺される—バルパーの脳裏には最早それしか浮かんで来なかった。

「遠距離から集中砲火だ！奴に接近を許……」

声が途中で途切れた事に危機感を感じつつ見てみると、バーザムのコックピットにメイスが形を変えて突き刺さっていた。可変式と頭に付いているように、バルバトスのメインウェポンである今の超大型メイスは三形態に変形させる事が出来る。基本となるメイス形態、パワーこそ下がるがリーチに優れ取り回しやすいソードメイス形態、そして逆にリーチは短いものの圧倒的な威力を誇るレンチメイス形態。バーザムにはソードメイス形態にしてそれを投擲したのだ。

「しめたぞ！今の奴は丸腰だ！」
「畳み掛けろ！反撃させるな！」

それぞれ機体に乗った神父や堕天使がこれ幸いにと攻撃を仕掛ける。しかし、それが甘い考えだとすぐに知る。

「くらえ！化け……」

ズ　シ　ャ　ン　！　！

突然ジェガンが縦に真っ二つになった。当然中のパイロットもだ。何が起こったのか周りの者は気付いていない。そのまま続けて一機、また一機と斬り裂かれる。

「何だこれは……!?何なんだこれは!?」
「……!!あれは!!」

誰かが気付いた。バルバトスの背後から何かが伸びており、それが次々と味方機を斬り裂いているのだと。

「尻尾……!?」

だが、反応が遅かった。三日月の駆るバルバトスが目の前まで接近し―

「ひっ!!やめ……」

グシャアァッ!!

ネオ・レクスネイルで胴を貫き、コックピットを握り潰す。もはやバルパーやコカビエルのみならず、リアスや朱乃さえ口元に手を当て

て青ざめている。悪魔よりも悪魔らしい凄惨な戦い方だ。元々そういう戦い方とはいえ、今の三日月には遠慮がない。それだけ凄まじい怒りがあるという事。そして、さらに堕天使達は絶望を知る。

「何でだ!?ビームがまるで効いていない！確かに当たっているのに!!」

「それだけじゃない……実弾武器でほんの少し傷付けられたと思ったのにすぐに修復される！何なんだあれは!?」

そもそもナノラミネートアーマーによってビーム兵器は余程のものでない限り無効になる。シミュレーターにてアムロのＣＰＵが超出力のハイパー・メガ・バズーカ・ランチャーを至近距離……ほぼ零距離で発射したのもそれが原因である。特別な粒子ビームか、前述の武装のような超出力のものでない限り、ビーム兵器ではまともに傷一つ付けられないのだ。

加えて、これは開発した束によってつい最近施されたものなのだが、厳勝の機体であるターンＸと同じナノスキンをバルバトスに試験的に導入しやがったのである。なんつーモンをこの化け物に搭載したんだよあの天災。当初からナノスキン装甲であったターンＸ程ではないが、これによってバルバトスはさらなる防御力と自己修復機能まで持ってしまった。

故に外見からは判断出来ない程にビーム・実弾問わず耐性があるのだ。

そして、三日月とバルバトスは想像を更に超えてきた。

新たにマラサイをパイロットごと葬ったバルバトスを狙い、ネモが背後から撃とうとするがその瞬間、叩き潰された。

「何だと!?一体何……が……」

あるパイロットが見たものは、先程味方を斬り裂きまくっていたテイルブレード……その先端になんと投擲されたはずの可変式超大型

メイスが連結されており、尻尾で振るっているのだ。束が新たに開発した圧倒的強度を誇るワイヤーは、あの大きさのメイスさえ余裕で振り回す事が可能な凄まじい強度としなやかさを兼ね備えており、以前にも増して三日月の変幻自在な戦い方を可能とした。

「数はかなり減った……今だ、皆……！」
「ああ、いくぜ三人とも！」
「はい！」
「了解だッ！」

三日月からの指示を受け、ガイの号令を皮切りにカナエ、裕斗、ゼノヴィアもフリードへと突撃する。今だ残っている機体が邪魔しようとするもその度にバルバトスによって撃破され、数を減らす事になっていく。

「あーもうコイツら結局壁にもならね……!?」

フリードがボヤいた直後、ガイとカナエが一気に斬り込んできた。ウルトラマンであるガイと全集中・常中を使えるカナエは裕斗とゼノヴィアよりも身体能力が高く、先行してフリードへ攻撃を仕掛けたのだ。

「最初の自殺志願者はプータロー君と花ビラ女かよ！二名様地獄へご案なぶへっ!?」
「隙丸だしとは随分余裕だな？ゲス神父」

フリードがエクスカリバーを構えようとした直前、ガイの飛び膝蹴りがフリードの顔面に炸裂する。

「テメエ！意味不明な聖剣ぶん回して調子こいてんじゃねえですよ!!」

フリードは統合されたエクスカリバーの一つ『天閃の聖剣（エクスカリバー・ラピッドリィ）』とイリナから奪った『擬態の聖剣（エクスカリバー・ミミック）』の能力を組み合わせ、無数の斬撃を放つ。しかし、ここでカナエの切り札が発動した。

呼吸重ね　花日
光陽桜嵐（こうようおうらん）!!

カナエの放った新たなる技によりフリードの放った斬撃は逆に全て斬り裂かれ、そのままフリードへとダメージを与える。

本来、全集中の呼吸における型を放つ際の水や風などは単なるエフェクトに過ぎないのだが、それらを極め且つ第二幕以降へ昇華させる事でそのエフェクトは正しく型……即ち技の一部となる。例外は厳勝の使う月の呼吸で、あれは第二幕以前にも鬼の頃は血鬼術と、そして現在は光気との兼ね合いによる『闘技』として三日月状のエフェクトにも斬撃効果がある。

カナエの場合は花の呼吸を第二幕まで昇華させていた為、後天的に体得した日の呼吸にもそれが適用されている。

つまり、先程の技は日の呼吸の持つ凄まじい威力と、花の呼吸第二幕の特徴である無数の花弁状斬撃を組み合わせた複合奥義というわけだ。

「会う度に傷が物凄い量増えていくわね、貴方」
「誰のせいだこのクソ○ッチがァァァ!!」

激昂したフリードは最早エクスカリバーの能力より直接斬り込もうとするものの、ガイとカナエが下がる事で今度は裕斗とゼノヴィアが斬りかかる。

「あれが噂の呼吸法とやらか、全く私はとんでもない人物に喧嘩を売っていたのだと実感するよ！」

「その師匠である縁壱先生はカナエさんでさえ太刀打ち出来ないデタラメスペックだしね！」

軽口を叩きながらも二人はフリードへ、聖剣へと猛進する。フリードはどうにか防御しようとエクスカリバーの能力を発動させたのだが……

「デュランダルの一閃、受けてみよ！覇ァッ!!」

大きく振りかぶって放たれた一撃によってエクスカリバーは一気にひび割れていき、最後には根元まで粉砕。

「所詮は一度折れた聖剣、こんなものか。これでは勝負にならん。後は任せたぞ、先輩、呼吸法の剣士、風来坊！」

ゼノヴィアの振るう暴君・デュランダルの前には、劣化したエクスカリバーなど相手では無かった。まさかエクスカリバーがこうも簡単に、と焦るフリードに対し、裕斗は慈悲などかける必要はないとばかりに連撃を叩き込んでいく。

そして、その裕斗を後押しすべくガイとカナエは裕斗が一時的に後退したタイミングで左右から再度突撃する。

「命を軽んじる貴方には……！」

「明日の光を見る資格は無いッ!!」

フリードの右眼をカナエの日輪刀が、左眼をガイのオーブカリバーが同時に貫いた。

「あッぎゃあァァァァァ!!俺っちの……眼っ……両眼ッ……!!」

あまりの激痛に両眼を抑えながらのたうち回るフリードだが、この男が今までやってきた事を考えれば情も失せる。君が決めろ、とガイ

が裕斗に目配せすると裕斗は力強く頷き、ジェントに師事しライザー眷属と相対した時の、あの鬼気迫る表情になる。

「おおおおおォォォ!!!」

―見ていてくれたかい？　僕らの力は、エクスカリバーを越えたよ―

まさに鬼神の咆哮と気迫。しかし、裕斗の心の中は同志達を思い穏やかである。

そして、聖と魔、二つの力を宿した『騎士殺し』はフリードを一撃で斬り伏せた。

遂に裕斗は、己の悲願を達成する事が出来たのだ。

同時に三日月とバルバトスもまた、最後の一機を粉砕し堕天使・はぐれ神父の駆るＭＳ軍団は壊滅。絶対優勢かと思われていた戦局はガイや三日月らの参戦によって逆転された。

「せ、聖魔剣だと……？　あり得ない……反発しあう二つの要素がまじり合うなどあり得ないのだ……」

「生憎そう珍しくはないぜ。俺も闇と光、両方の力を併せ持つ『サンダーブレスター』って形態にフュージョンアップした事あるしな。自分の物差しだけで物事を捉えるなよ」

呆然としているバルパーにガイは言い放つが、バルパーには聞こえていないのかもしれない。すると突然バルパーは何かに勘付いたように笑い出した。

「フ……フフ……そうかわかったぞ！聖と魔、それらを司る存在のバランスが大きく崩れているとするならば説明はつく！　つまり「黙れよ」ひい!?」

バルパーはこの瞬間思い出した。自分はバルバトス（この悪魔）に狙われてい

る事を。今、自分を叩き潰さんと両手で超大型メイスを振りかぶっている存在を。

「ま……待ってくれ！今私は重大な事に気がついたのだ！それを……」

「アンタの事情なんて知らない。アンタが子供達を処分したようにアンタも―」

「あ……あ……」

「潰れろよ」

三日月は、バルバトスは何の躊躇もなく、可変式超大型メイス（手にした鈍器）を振り降ろす。

グ シ ャ ア ァ ッ !!!

夥しい鮮血を撒き散らしながら……バルパーは今、肉塊と化した。

〈続く〉

明かされる真実、ターンX起動

バルパー・ガリレイは原型留めぬ屍となり、フリード・セルゼンもエクスカリバーと両眼を失い虫の息。

残るはコカビエルのみ。

三日月の駆る桁外れの戦闘力を持ったバルバトスや、随一の戦闘経験を持つガイ、二つの呼吸法を扱うカナエを始め凄まじい戦力差にさしものコカビエルも苦い表情をしている。とりわけ、変身という切り札を残しているガイと未だ底知れぬ力を秘めているバルバトスは極めて厄介だ。

(あの聞かぬ名の聖剣を持つ男はこちらが隙さえ見せなければ打つ手はある。問題はあの機械人形だ)

コカビエルは視線をバルバトスへと向ける。相手を屠る事に一切の躊躇いが無く、超絶無比の攻撃力と予想外の防御力、加えて異常な速度で反応する機動性。トドメがあまりに特異な武装の数々。この場で最も危険なのは間違いなくこの機体とパイロットだ。

「さて、後はお前だけだな」

「ふん、バルパーにせよフリードにせよ最終的にはいなくても別に構わん。元々は一人でも成功する予定だったのだからな」

「……そういう割には厳勝さんに翼、斬り落とされてるじゃん」

三日月の言葉にコカビエルは青筋を浮かべる。直接見たわけではなくとも、三日月にはコカビエルの翼が少ない理由が厳勝である事を確信している。まだ訓練中だった厳勝が駆るアストレイレッドフレームの刀捌きを見ており、生身ならばそれを遥かに上回る事ぐらい目に見えて明らかだからだ。

「しかも魔方陣は三日月さんのバルバトスが木っ端☆微塵にしちゃっ

たものね」

カナエがさらに追撃。☆マークがさらにコカビエルの苛立ちを加速させる。相変わらず挑発のポイントが絶妙だ。

だが、事実として町は壊滅させられないだろう。魔法関係も力づく（しかも鈍器）で爆砕するバルバトスはやはり規格外の一角。

「確かに貴様は強いだろう。だがこれだけの実力者を前にいつまでもその余裕が通じると思うな！」

デュランダルの切っ先をコカビエルへ向けてゼノヴィアが咆える。その通りだ。かつてのリアス達であれば遊びながらでも勝てたであろうが、今やそれぞれが尊敬出来る師の下で飛躍的な成長を遂げた。正直勝てるかどうか危うい。どうする？と思考を張り巡らそうとするが……

「おいおい……折角ファーさんとギアさんがくれた物をこんなに早く壊したのか？子供じゃあるまいし、少しは大事に扱ってほしかったぜ」

『『!?』』

「しかも全部ときたもんだ……ま～た俺が大目玉くらうじゃないか。ギアさんは優しいけどファーさんは厳しいんだぜ？勘弁してくれよ、新しい扉開いちゃうだろ」

愚痴らしき軽口を叩きながら突如として現れたのは、廃教会で厳勝を足止めすべく残った堕天使の男だった。

「なっ……悪魔のような、六枚羽……!!」
「アイツが噂の堕天使です、部長！」
「お、ちゃんと合流出来たのか。中々運が良いな」
「てめえ！巌勝さんはどうした!!」
「ああ、あの反則じみた強さの侍か」

堕天使の男は笑みを崩さぬまま懐から林檎を取り出して一口齧り、悩むように目を伏せる。

「う～ん……教えても良いんだけど、そうだな……」

一拍置いてふむ、と何か納得したように頷いたと思えばとんでもない事をリアスや朱乃、カナエらを見回して言い出した。

「教える替わりに、俺と姦淫しないか？」

「「「「はァ!?」」」」

女性陣は真っ赤になり、男性陣は「何言ってんのコイツ」的な表情になった。一誠はリアスにそんな事を言う堕天使にキレかかってるし、コカビエルすら呆気にとられている。

「さ、どうだい？」
「いきなり何を言い出すのよ!?」
「そうだ！テメエに部長の初めては渡さねぇ!!」
「そのと……アレ!?一誠なんか違……え？違わない？え？」
「落ち着けタイガ！お前にはまだ早い！」
「そういうお前にもまだ早いぞフーマ！」

さり気なく一誠の発言に同意しそうになったタイガは思い直してみるが今だに混乱している。ウルトラ族の年齢が基本的に数千～数万歳なので忘れがちだが、地球人換算するとタイガはまだ十五歳前後なのだ。つまり色々ピュアである。

「私やアーシアちゃんの初めてはあの方にあげるって決めて（ぶしゅっ!!）」
「はわあああ!?カナエさん、また鼻血が!!」

妄想逞しい割に耐性が無いカナエである。結婚してから大丈夫なのこの子。アーシア、この場で初めて回復するのが鼻血の治療とは如何なるものか。そして……

「姦淫って何？」
『別に知らなくていいから!!』

タイガと同等に三日月は分かっていなかった。いや、知らなくても問題は無いというか、三日月はそのままでいてほしい。割と切実に。

「貴様……いい加減にしろ！いつまで巫山戯れば気が済むのだ!!」
「……やれやれ、コッチは結構マジだったんだけどな。ま、いいか。それじゃ、君達が気にしているあの月の侍だが……」

肩を竦めた男が告げた言葉は衝撃的なものだった。

「『鬼』に魂でも喰われているんじゃないかな」
「……え？」

小さく言葉を発したのはカナエだった。鬼に魂を喰われる？そもそも、鬼？色々な事が頭を駆け巡る。

「これからの事も踏まえてちょっと変わった『鬼』を呼び出してね。その鬼達には鬼から採れた素材で作られた武器でしかダメージさえ与えられないみたいでさ、例外はもちろんあるだろうが……如何にチートじみた戦闘力が有ろうと攻撃が効かなければ勝利はあり得ないだろう？」
「そ……そんな……」
「……」

アーシアは仲良くなったばかりの厳勝が最悪の事態になってしまった事を想像してしまい、泣きそうになっている。ガイは堕天使の男を睨みつけたまま険しい表情を崩さない。そこで、一誠がいつの間にか禁手化しており堕天使の男に突撃した。

「この野郎ォォォォォ!!!」
「ッ!!駄目だ、よせっ!!」
「うおおおお!!」
「なるほど、怖気付かないのは良い」

既に数回倍化を行った拳が堕天使の男に繰り出される。傍から見ても当たればただでは済まないだろう。これには男も回避行動に移る。

……そう誰もが思っていたが……

バスンッ!!

『!?』

「ただ、喧嘩するなら相手は選ぼうぜ？特異点」

ベキャアァァァッ!!

「ぐあああああっ!!」

『イッセー（君）（さん）（先輩）!!』

禁手を発動した一撃を平然と掌で受け止め、逆に一誠の纏った赤龍帝の鎧を腹に拳一発叩き込んだだけで完全粉砕してしまった。常識外れの一撃を貰った一誠はダメージのあまりそのまま身動きを取れぬまま落下するが、間一髪ガイと裕斗に助けられる。

「う……ぐ……くそ……！」

「喋らず安静にしてろ。今ハッキリした。あの堕天使はコカビエルなんかよりよっぽど強い……！」

ガイのこの言葉にコカビエルは火がついた。確かに底知れぬ何かはあるが、六枚羽程度の新入りにこれ以上大きな顔はさせられない。

「新入りィ!!これ以上貴様は手を出すな!!コイツらは俺の獲物だ!!」

「手を出すな、って言われても俺は降り掛かる火の粉を払っただけだろ。それにアンタ一人でそこのデカいの含めて相手出来るのか？」
「くっ……そっちは貴様がどうにかしろ！」
「ハァ……こんなんばっかりだな。ホント損な役回りだよ。ま、どうせまともにやり合う気はないし、君はこいつらとでも遊んでてくれ」

面倒な相手を押し付けてくるコカビエルに呆れながら、堕天使の男はバルバトスの方を向くとパチンと指を鳴らす。
すると、魔方陣が出現しその魔方陣から奇怪な存在が無数に現れた。堕天使らしき黒い翼、真っ白な身体に鉄の仮面で顔を隠した赤子のようなもの。その手には弓矢や剣など武器を手にしている。

「な……何よあれ!?」
「泣き声……いや、あれは掛け声なのか!?」
「不気味にも程がありますわ……！」

リアスらはおろかガイ達ウルトラマンも驚きを隠せない。堕天使の様ではあるがその風貌はまるでモンスターだ。

「エグリゴリって言ってね。所謂雑兵みたいなもんだ。というわけで君は暫くこいつらの相手をしててくれ。なに、強さ自体は大した事ないから」
「オギャアオギャア！」
「こいつら、うっとおしい……！」

バルバトスに群がるエグリゴリという存在達。しかし男の言葉通り大して戦闘力が高いわけでもなく、バルバトスが攻撃されても痛くも痒くもなく文字通り『相手をする』だけとしか役割を持たされていないように感じる。数が数なので羽虫の如く飛び回っているそれは三日月の言う通りうっとおしい……もしくはウザったい。

（何だあれは……!?アザゼルの新しく作った何かか？いや、いくら奴でもあんなモノ作るとは思えん……奴は本当に何者だ……!?）

コカビエルすら知らぬそれはバルバトスの相手をしており叩き潰され、砕かれ、踏み潰されている。本来なら多少は戦力になるのだろうが相手が悪過ぎた。とはいえコカビエルがリアス達に集中出来るようになったのも事実。これ幸いにと目の前の獲物―最も期待していたガイやカナエに向かっていく。

「だが奴が何だろうと構わん！さあ、相手をしてもらおうか！」
「やっぱりこっち優先か！」
「ちょっとだけ潰し合いに期待しちゃいましたけど！」

光の槍を投げつけながら突撃してくるコカビエル。ガイとカナエは飛び上がり回避するが、着弾した場所が爆発し砂埃でコカビエルの姿が見えなくなる。探すよりも防御を固めた方が得策だと考えた二人は奇襲してくるであろうコカビエルを迎撃する為に構えた。そして推測通りコカビエルはガイへと仕掛けてくる。

「まずは貴様だガイとやらァ!!」
「返り討ちに合う事を考えてなかったのかお前ッ!!」

コカビエルの光の剣をオーブカリバーで受け止め、同時に放ってきた回し蹴りにも回し蹴りで対抗する。拳に対しても速度が出てくる前に掴むか受け止めるかしてダメージを極力抑えるような戦法を取るガイにコカビエルはさらに戦意高揚していた。

「ほう！やはり如何様にも対処してくるか！」
「ふっ……奇襲がお前だけの特権とでも思ったか？」
「何ッ!?」

今だ収まらぬ砂埃の中で激しい攻防を繰り広げるガイとコカビエルだったが、ガイの言葉の真意に気付くと同時に、砂埃を突っ切ってカナエが景桜・桜刃螺旋で突撃してきた。ガイを突き飛ばす事でその攻撃を間一髪逃れたものの手足に細かな傷が付く。

「ちいっ！俺が作り出した状況を逆利用したか！中々強かな小娘だ！」

「浅かった……！ガイさん大丈夫!?巻き込まれてない!!」

「ああ、なんとかな！奴へのダメージは浅かったかも知れないが、突き飛ばされたお陰で俺は無傷だ！そこは奴に感謝してやるか！」

体勢を立て直すガイとカナエに再度仕掛けようとした直後、背後から気配を感じて振り向くと裕斗とゼノヴィアが同時に斬り込んでくる。

「おおおおお!!」

「はあぁぁぁ!!」

「ぐっ!!貴様らァ!!」

紙一重で直撃は避けたものの、右肩と左足に少々深めの切り傷が出来たコカビエルは怒りを露わにし、裕斗とゼノヴィアをそれぞれ無傷なもう片方の手足で一撃ずつ叩き込んで吹き飛ばす。

「うぐっ!!」

「がはっ!!先の二人が健闘したからと続いたが……たった一発でこれか……！」

ゼノヴィアがそう零すが、あれはガイとカナエだから可能だったとしか言えない。この場の味方側において生身で最も戦闘力の高い二人だから対抗出来ているのだ。ついでに言うと彼女はデュランダルがあるからどうにかなっているのであり、それがなければこの場では

支援特化のアーシアの次くらいの実力だろう。三日月は三日月でＭＳサイズのレンチメイス食らっても倒れないと言うし。

「くそっ……まだ身体の痛みが取れねぇ……！」

「無理しないでイッセー！いくら貴方が強くなっててもむざむざやられに行くだけよ！」

「部長……」

リアスを始め、朱乃や子猫、アーシアらは一誠の護衛に回っている。想像以上に先程の一撃が効いたのかまだ満足に身体を動かせない一誠は放っておくと真っ先に狙われかねない。アーシアが防御結界を展開出来るようになったといっても限界がある。自分のせいで、と己の不甲斐なさを悔いている一誠をリアスは優しく諭す。

「イッセー、この戦いではね……最終的に皆生き残る事が目標なの。だから誰一人欠けては駄目。戦えなくてもいい、ちゃんと生きてる事が大事なのよ。身体を無理に動かして我武者羅に突っ込んで足手まといになればそれも叶わないわ。現に私があの中に飛び込んでもまともに戦えない。接近戦がメインだもの、ハッキリ言って今の私ではお荷物よ」

よく見るとリアスも手が震えている事に一誠は気付く。きっと本当なら目の前で戦っているカナエや裕斗らの援護に向かいたいのだろうが、彼女はどちらかといえば中距離～遠距離から大出力の魔法を放つタイプだ。下手に突っ込めば返り討ちに合う事を理解しているのだろう。朱乃も似たようなタイプだし、アーシアはそもそも直接戦闘自体向いていない。この面子では唯一小猫ぐらいだが彼女が参戦した場合、今度はこちらが危険になる。

せめてあと一人、強力な援軍でも来てくれたらと思った時コカビエルが空中へと一旦離脱する。

「随分と手こずってるな。手助けが必要かい？」
「煩い！そんなものは要らん！しかし、仕えるべき主を亡くしてまで、お前達神の信者と悪魔はよく戦う」
「……どういう事？」

リアスらはもちろん、カナエとアーシアも一瞬意味が分からなかった。自身らが仕えている（という表現が正しいかは別として）主、即ちレジェンドは普通に存命だ。神よりもさらに上に座する光神である事も虚偽ではなく事実。では何の事かと思ったが、二人は以前レジェンドからある事を教えられていたのを思い出した。

「フハハッ……フハハハハハ！そうだ、そうだったな！お前達下々までその真実は！　真相は語られていなかったな！　ならついでに教えてやろう!!」

コカビエルは高笑いしながら衝撃の事実を口にする。

「先の三つ巴戦争で四大魔王だけじゃなく、神も死んだのさ。正しくは戦争の最中に現れたレイブラッドの軍勢が原因だがな」
「「「「!!」」」」

かのレイブラッド事変にて聖書の神は既に死んでいた。ガイやカナエ、アーシアやトライスクワッドを除く面々の顔が驚愕に染まる。それを見て笑みを溢しつつコカビエルは続ける。

「知らなくて当然だ。神が死んだなどと誰に言える？　人間は神がいなくては心の均衡と定めた法も機能しない不完全な者の集まりだぞ？　我ら堕天使、悪魔さえも下々にそれらを教えるわけにはいかなかった。どこからそんな事実が漏れるかわからなかったからな。あの光神やその眷属を除けば三大勢力でもトップと一部の者達以外はこの真実を知らない。バルパーは先程気付いたようだがな」

神に仕えるもの・関わるもの全てを否定し、無意味とする程の重大な真実。

「戦後残されたのは神を失った天使、四大魔王と上級悪魔の殆どを失った悪魔、幹部以外の殆どがいなくなった堕天使……最早疲弊どころの騒ぎではない。人間に頼らねば種の存続すら不可能なところまで堕落したのだ。特に天使と堕天使は人間と交わらねば種を残すことなど出来ない。堕天使は天使が堕ちれば増やせるが、純粋な天使は神を失った今では増えることすら不可能。悪魔も純血種が希少だしな」

呆然とするリアス達、構えつつも黙って聞いているガイやカナエ達、エグリゴリとの戦いに集中し話どころではない三日月、そして今だ静観している謎の堕天使。

「光神に頼み込めばそれも解決出来ただろうが、肝心の光神の居場所自体掴めず、仮に会えたところでそもそも協力してもらえるかどうかさえ分からんという不確定要素だらけでまともな解決策には程遠い」

「まあ、あの方が子孫繁栄に簡単に協力するかと言われれば多分断ると思うけど」

「ほう?まるで光神を知っているかのような口ぶりだな。しかしそちらの娘、神の信者の割にまるで動揺していないように見える。動揺さえ忘れる程ショックが大きかったのか?クク……」

カナエとアーシアを見ながらコカビエルはそういうが、その予想は大ハズレである。アーシアは元々レジェンドを信仰しており、聖書の神の死も、そしてその神が今まで行ってきた所業の数々もレジェンドから聞いており動揺するはずもなかった。ただ、聖書の神の意思が込められていた『黄昏の聖槍』が神の意思ごと完全消滅した(させた)事を聞かされた時だけは驚いていたが。

「そう、神の守護や愛がなくて当然。神は既に死んだのだからな。ミカエルはよくやっていると思うぞ？　神の代わりをして天使と人間をまとめているのだからな。まぁどのみち、神が使っていた『システム』さえ機能していれば、神への祈りも祝福も悪霊祓いもある程度は動作する。ただ神がいた頃に比べて切られる信徒の数が増えたがね。そこの聖魔剣を創りだせるのも神と魔王のバランスが崩れているからさ。本来であれば交わることなど有り得ない。両極のパワーバランスを司る神と魔王がいなくなれば、特異現象など何処でも起きる」
「バルパーとかいう奴にも言ったが、そいつはお前らの勝手な価値観だ」
「何だと？」

ガイがコカビエルの言った言葉の最後の部分に反論する。

「聖と魔、光と闇、交わる事が本来なら有り得ない……そういう理論こそ有り得ないのさ。たとえ相反する二つの力であろうとも、強い心があればそれらを結び、正しく使う事が出来る。要は自分次第ってわけだ。お前には絶対に理解出来そうにないけどな」

自分のサンダーブレスター、そして何より自分が所属している遊撃隊の総司令官―ベリアルが良い例だ。彼の中には今もかつて光の国に反旗を翻した『闇のベリアル』がいるが、今では口の悪い兄弟のような関係になっており、しっかりと共存している。そして二人の力を融合させた強化フォームさえ会得したのだ。それを見事使いこなし、宇宙の存亡を賭けたある任務を成功させた事で彼は本当の意味で歩むべき光の道へ『二人で』戻る事が出来たのである。英雄という、親友であるウルトラの父と同じ肩書と共に。
そんな経歴を持つ彼をガイは尊敬している。だから言ったのだ、光と闇が同時に在ってもおかしくはないと。

「……ウソだ……ウソだ」

ガイがコカビエルへ反論していた間、ゼノヴィアは地に手足をつけ項垂れていた。デュランダルをショックのあまり手放しているところを見ても相当な衝撃を受けている事が見て取れる。イリナがこの場にいなくて良かったと思わざるを得ない。

「そんなパワーバランスが崩れた結果起きうる出来事など実際のところどうでもいい。正直、大規模な戦争は故意にでも起こさなければ再び起こらない。それだけ三大勢力は先の戦争とレイブラッドの襲撃で痛い目を見たのだ。互いに争う大元となる神と魔王が死んだだけで、戦争を続けるなど無意味だと判断しやがった。アザゼルもアザゼルだ！　先の戦争で大半の部下を亡くし、光神の眷属と親交が出来ただけで『二度目の戦争はない』と言う始末！……アザゼルがもうやらんと言うのなら、俺が戦争をおっ始めてやる。これを機に！貴様らの首を手土産に！俺だけでもあの続きをしてやるのだ！我ら堕天使こそが最強たる存在であると、サーゼクスにもミカエルにも見せつけてやる！無論、あの光神やその眷属共にもな!!」

高らかに宣言したコカビエルだったが、そこで今まで静観していた堕天使の男が何かを考えていたようなポーズから思い出したように言い出した。

「ああ、そうだ。俺からもちょっといいかい？」
「まさか貴様まで戦争反対などと言う気ではないだろうな？」
「いいや、そうじゃないさ。そっちの黒髪ポニーテールの娘の事で思い出した事があってね」
「……私ですか？」

堕天使の男が気にしていたのは朱乃の事だった。彼女が堕天使バラキエルの娘である事はコカビエルも知っている。そこを突こうと

しているなら浅はかだ、とコカビエルは考えていたが……

「年齢からして娘さんだと思うけど、母親は元気かな？」

「ええ、今も一緒に暮らしていますが……まさか母様を!?」

「そんな事しないさ。あの一件以来あそこは妙に厳重な結界が張られていてね。君達やバラキエルという人物では到底作り得ない複雑難解な術式で組まれていた。それを誰がやったのか気になってたんだよ」

「……え？結界？そんなものは……」

朱乃は見に覚えがなく、母である朱璃もそんな結界は張っていない。ならバラキエルかと思ったが先程の言葉からそうでもないと思い直す。だが朱乃はそれ以上に気になった部分があった。

「あの一件……？」

「そうそう、もう一つ言っておかないといけなかった」

そして、男は相変わらず笑みを浮かべながら本人達かある人物しか知らない事を言い放つ。犯人達は全て金色の光線で葬られたはずのあの事件の事を。

「無事母親と一緒に助かってオメデトウ」

「――ッ!!」

今何と言った？無事一緒に助かって？

「……まさか、あれは……！」

「おっと勘違いしないでくれよ？俺はあくまで君達を探していたあの連中に君達の居場所を教えただけだ。別に俺が唆したわけでもなければ、指示したわけでもない。洗脳とかそういったマネをしたわけでもないから俺を恨むのは筋違いだ」

確かにその通りだ。男はただ朱乃達の居場所を教えただけで他意はなかったかもしれない。だが朱乃は考え直した。目の前の男は自分が堕天使と人間のハーフである事を知っていたのだと。だとすれば少なからず狙って教えたという事。

「でも、貴方は私が……」
「ああ、知っていたとも」
「お前ええええ!!」
「朱乃さん!?駄目だ、俺の二の舞に……」

堕天使の男が軽く言い放ったそれに朱乃は冷静さが頭から吹っ飛び、一誠の言葉も聞かず男に突っ込んで行った。この男がいなければ自分が、母が危険な目に合わずに済んだ。『彼』が間に合わなければ、下手すると二人とも死んでいたかもしれない。だと言うのに目の前の堕天使は笑みを浮かべながらいとも簡単に言い放った。許せる訳が無い。一矢報いてやる、そう思った。

だが、現実は非情なものだった。

「アナゲンネーシス」

男が笑みを崩さず短い言葉と共に放たれた無数の光は朱乃に直撃するだけでなく地上にいたリアスやガイ達にも向けられていた。

「きゃあああぁぁぁぁぁっ!!」
「朱乃（さん）（先輩）ッ!!!」

明らかに一誠の受けた一撃より強力なものを食らい、朱乃は力無く落下する。空から降り注ぐ光を掻い潜り、カナエがなんとか朱乃を受け止めるが、上空に目を向けると今度はコカビエルが光の槍で狙いを定めていた。

「余計な事を……！」

「だから降り掛かる火の粉を払っただけだっての。ま、今回はちょっとばかり周りにやらかした自覚はあるけどな」

アナゲンネーシスと呼ばれた攻撃からまだ体勢を立て直す事が出来ず、三日月も方もだいぶ減らしたとはいえエグリゴリとの戦闘中。刺し違える覚悟で隙を作るしかないと考えていたカナエだったが……

「頭（こうべ）を垂れて跪け！名も知らぬ堕天使にコカビエルとやらァ!!」

凄まじい気迫の込もった声が響き渡る。

「我らが神々の御光来であるッ!!」

その言葉が発せられた方向に全員が顔を向けると、そこには巨大なシルエットが月をバックに佇んでいた。腕や背部のそれにより左右非対称である事が特徴的なそれを見た三日月は小さく笑う。

「漸く来た。やっぱり敗けるわけなかったんだ」

そしてそのシルエットからさらに四つの人影が飛び降りる。うち一人はその中の一人の首に抱きついたが。地上に降り立ったそれを見た全員、しかも朱乃と小猫は目を見開き、カナエとアーシアは笑顔になり、ガイは驚きながらも笑みを浮かべ、ドライグやトライスクワッドは驚きの余り失神しかけていた。

「準備はいいな？やるぞ、サーガ！」

「了解だ、先輩！」

降り立ったのはアーブギアを身に纏ったレジェンドと、サーガ。さらにレジェンドの首に抱きついているオーフィスと、三人のちょっと後ろにゼット。

レジェンドとサーガはそれぞれ右と左の拳にエネルギーを集中させる。それも、異常な速度でチャージされた。何者かハッキリと分からぬものの危険だと頭の中で警鐘が鳴ったコカビエルが光の槍を投げるが……

「ダブル!!」

「スペシウム!!」

「超!光!!波ァァァ!!!」

ズゴオオオオオ!!!

二人が同じタイミングで拳を突き出しながらチャージしたエネルギーを一気に解放すると、有り得ない程強大な……ぶっちゃけコロニーレーザー並の極太エネルギー波が放たれた。予想など出来ようもない馬鹿馬鹿しい程の威力のそれは光の槍など歯牙にもかけぬように一瞬で飲み込む。間一髪難を逃れた男に対し、コカビエルはやはり回避しきれず翼こそ無事だが右腕と右足が光に飲まれ消し飛んだ。

「があァァァァッ!?」

「おいおい殺す気か?ていうか何だよあの馬鹿げた威力。反則だろ」

さしものコカビエルも激痛に悲鳴を上げ、男も笑みを崩さないが冷や汗を大量に流している。それを引き起こした張本人らはと言うと……

「先輩……あそこから飛び降りるのは分かるし、合体技も分かる。だがアーブギア(それ)を纏う必要はあったのか?」

「どうやら地球では月夜の晩に美少女戦士を助ける場合、タキシードを着て仮面を着ける風習があるらしい。生憎と俺にタキシードは似合わんし、厳勝と合流した時も持っていなかったから仕方なくこれにした」

「そんな風習があるのか!?」

「我も知らなかった」

「ウルトラ初耳です超師匠」

何だその奇跡のロマンスなアムロボイス仮面情報は。断っておくが無論そんな風習があるわけ無い。ついでにこれをレジェンドに吹聴したC・C・や乱菊は後日グレイフィアや卯ノ花にこっぴどく叱られた。信じる方も信じる方だが。

「レジェ「グリッターナイトさん!!」……え?」

安心したカナエやアーシアがレジェンドに駆け寄ろうとするより早く、朱乃が笑顔でレジェンドに駆け寄っていた。彼女のそれは間違いなく恋い焦がれる少女のそれだ。

「おいサーガ、グリッターナイトって誰だ?」
「おそらく先輩だろう。その見た目、アーブギアが原因だな」
「そういえばヒカリの奴もハンターナイトツルギとか名乗ってた時があったな。あいつそれ言う度に黒歴史だーって悶えてたけど」

しかし、レジェンドはこの少女にあった事なんてあったか?と思っていたらそういえば以前はぐれ悪魔とやり合った時いたような……と思い出したが、あの時はテクターギアだったしこういう表情する理由でもないんじゃね?といまいちピンと来ない。そこで朱乃が笑顔のまま、漸くレジェンドが思い出すきっかけを言い出してくれた。

「あの、だいぶ前の事で覚えてらっしゃるか分かりませんが……神社で母娘を助けて下さったのを覚えてますか?その時、突然金色に光り輝いて……」
「神社で母娘を助けて金色に?……あ」

レジェンドはやっと思い出した。この世界へ再びやって来たあの日、変質者(仮)にグリッターゼペリオン光線を生身で発射した事を。しかもウルトラマンらしく飛び去った事まで。

「そういや昔それっぽい現場で、父親らしき堕天使が帰ってきたから質問攻めされる前にとっとと退散した気がする」
「はい！その時、母と共に助けて頂いた娘の朱乃です！やっと……やっとお会い出来た……」

感極まって涙を流し始めた朱乃。レジェンドは一先ず落ち着かせようとするが、強烈な悪寒を感じてそちらを向くとアーシアは涙目で頬を膨らませており、カナエに至っては痣こそ出てないが笑顔で赫刀を構えている。

「むう～……」
「さてレジェンド様？私、朱乃とレジェンド様が知り合いだったなんて聞いてませんよ？」
「オイィィィ!?アーシアは可愛いけどカナエはソレ武器作った本人に向けちゃ駄目だからね！しかもホント知り合いレベルっていうか時間にして一時間も一緒にいなかったし！というかまともに会話したのたった今が初めてだ!!だからそのゴオオオオとかいう呼吸音やめろォォォ!!」

日の呼吸をレジェンドに叩き込む気満々のカナエ。正直コカビエルとの戦いの時より強そうな気がする。オーフィスはオーフィスでアーシア同様頬を膨らませながら抱きついている首に回した腕に力を込めていた。

「う～……」
「ちょ……おまっ、締まってる！締まってるから！柔らかくて良い匂いとかそういうの感じる間もなく気道が狭まってきてるから!!オイ！赤くなるのは良いけどせめて腕の力緩めろ!!アレ!?京都で似たような状況になってなかったっけ!?そうだよ旅館で畳に慣れなかったスカーサハがうつ伏せで俺の顔面に乗っかってきたあの時だよ!!つ

まり俺ピンチ!?味方のピンチを助けに来て味方にピンチにされるとか笑えな……ごふッ……」
「うわあああああ!?超師匠しっかり！オーフィスちゃん、超師匠の首リリースリリースウウウ!!」

格好良く登場したのが全部ウルトラ水流によって流れていった。ゼットによってなんとか救出され、息を整えるレジェンド。その際アーブギアを解除して素顔になったところ、朱乃が「あらあらまぁまぁ」と更に頬を赤く染めながら悶えていた。そして、もう一人。

「……ソランさん」
「小猫か。見たところ怪我は無さそうだな」
「……はい。あの……」
「詳しく説明してやりたいのは山々だが、一先ずこの場を切り抜けてからだ」
「約束、ですよ」
「ああ」

短い言葉だったが、二人には十分だった。やはりダイブハンガーで黒歌が何かを察知して小猫の元に向かおうとしていたが急加速した直後、すれ違うタイミングで急加速したゲンのラリアットを受けて気絶した。ゲンのガチラリアット受けて大丈夫なのか黒歌。

一方の三日月とバルバトスの方もかつてない心強い援軍を迎え、エグリゴリ殲滅に気合が入る。

「巌勝さん、それで初めての実戦、やれそう？」
「受領以来訓練は欠かしていない。任せろ！」

巌勝の駆る、神衛隊初のターンタイプＭＳ・ターンＸが月を背にツ

インアイを光らせる。残っていたエグリゴリはターンXへと向かって行くが、ターンXは背中のウェポンプラットフォーム『キャラパス』から専用のビームライフルを取り出し、横薙に一閃。一瞬で迫り来るエグリゴリを殲滅してしまった。たった一発で。

「フン！この程度で月の侍である私に挑むとは片腹痛い！」
「やっぱりああいうのにはビームの方が強いな。俺も今度東姐さんに何か作ってもらおう」

バルバトスの周囲に残っていたエグリゴリも最後の一体が叩き潰され、再びコカビエルと堕天使の男のみになる。後者はまだまだ余力はありそうだが、コカビエルは右腕右足を失い、かつそれまでのダメージもあって戦闘続行出来る時間も少ないだろう。

「あれは……ペドロの人か？」
「「「「ペドロの人!?」」」」
「「だからペドロの人って何!?」」

おいたわしや兄上。厳勝はゼノヴィアにペドロの人と認識されてしまったままの為、理由を知らないリアス達や既に一度そう呼んだのを聞いている一誠や裕斗は盛大にツッコんだ。

「その映画に関してはそこの堕天使二人をどうにかしてから見に行くとしようか。もっとも片方はすぐに済みそうだがな」
「貴様はっ……！新入り！始末したのではなかったのか!?」
「生憎とあの場に居たんじゃ俺も魂喰われたかも知れないんでね。『鬼』に任せてさっさと退散したんだが……まさか無事生還するどころか、とんでもないモノを持ち出して来た上にとんでもない連中連れて来るなんて流石に規格外過ぎやしないか？」
「笑止千万!!生還どころか鬼討ちしてやったぞ、あのカゼキリはなァ!!レジェンド様が完成させ、サーガ様より賜りし鬼神刀と！オーフィ

ス殿とゼット殿、そしてレジェンド様の助力もあった以上、私が敗ける道理など皆無!!」
「……そもそもおたくそんな性格だっけ?」

堕天使の男もまさか呼び出した鬼を討伐するとは思いもよらなかったが、先刻会った時と明らかに性格が違い過ぎる。それは一誠や裕斗、小猫はもちろん、シミュレーター搭乗時の巌勝を見ていないカナエやアーシアも同意見だった。

「な……なぁ、巌勝さん性格違くねーか?ファミレスとか、あの廃教会で会った時は冷静で縁壱先生と似てたのに今はこう……勢いあり過ぎっていうか……」
「え?どういう事なの?」
「私も分からないわ、リアス」
「……ありゃ御大将モード入ってるな」
『御大将モード!?』

レジェンドが零した一言に全員が食い付いてきた。三日月は知っているようで、レジェンドの言葉を補足する。

「巌勝さん、ターンXに乗ると何でかハイテンションになるんだ。しかもそれ以外何もなくて、本当にテンションが上がるだけみたい。それでその言動や巌勝さんの生まれから付いた名前が御大将モード」
「そ、そうなんだ……」

ちなみに他のMSや機体では起こらない。マジでどうなってんのアレは。
そしてコカビエルは忌々しげにターンXを睨みつける。その手に光の槍を作り出しながら。
「貴様さえいなければ……!貴様さえいなければ俺が翼を失う事もな

く！今もこうして余計な邪魔が入る事も！腕や足を失う事も無かったのだ!!」
「戦場でなァ!!お前がいなければと相手に八つ当たりする時というのはなァァ!!己の未熟さを棚上げしている甘ったれな青二才が言う台詞なんだよ!!」

兄上、ノリノリである。しかしその意見は的を得ていると納得してしまう。自身の力不足を相手のせいにしたところで能力が上がるわけでもない。常に格上を超えんと死にものぐるいで努力を重ね続ける巌勝が言えば、それは正しく迫力を増す。

「黙れぇ!!そのガラクタ共々果てるがいい!!」

コカビエルは巌勝の言葉に激昂しつつ、光の槍をターンXに放つが、それはターンXに届く前に消し飛んでしまう。そう、光……即ち『ビームと認識された』からだ。

「な……んだと……!?」
「フハハハハ!!その程度でこのターンXのIフィールドを抜けると思ったか!?浅はかなりコカビエル!!」

本来、MSのジェネレーター出力は高くても３０００～４０００ｋＷ前後と言われている。それ以上の出力を有する機体となると巨大MSや大型MAクラスになる。代表的な機体ではサイコガンダムが３３，６００ｋＷ。４０ｍの巨体にビーム兵器を多数搭載し、Ｉフィールドまで持っている故にその凄まじさなのだ。
しかしターンXはその比ではない。約２０ｍとサイコガンダムの半分のサイズにも関わらず、その出力はなんと６８，０００ｋＷ（±５０００～５００，０００＋）。
Ｗ換算で推定値とはいえ倍どころか十倍以上にもなる化け物通り越して異常な出力である。Ｉフィールドの出力もこれに基準する為、

よっぽどでなければビームでは装甲表面に到達さえ出来ないのだ。ついでにサイコガンダムより出力が高いビグ・ザムは３５，０００ｋＷ×４で１４０，０００ｋＷ。これを見てもらえればターンＸがどれだけ馬鹿げた出力を有しているか御理解頂けるだろう。

「……こりゃ、そろそろ引き上げた方が良さそうだ」

堕天使の男は諦めたように呟いた。しかし、ココビエルは納得していない。

「巫山戯るな！俺は引かん！尻尾を巻いて逃げたければ貴様一人で逃げるんだな！」

「戦略的撤退、そう言ってほしいね」

やれやれ、とココビエルに呆れる堕天使の男。

だが……ここで衝撃的な事が起こる。

「しかしまあ、このままじゃそれも一苦労だしアンタが消し飛ばされる可能性も無きにしもあらずだ」

「フン、だから仕方なく手を貸すとでも言う気か？そんなもの「しないってそんな事」……ならば何だ？」

「アンタが死ぬ前に―

その翼を全て貰っておこうと思ってね」

男の生み出した赤い四本の光の剣が、コカビエルの背に残っていた八枚の翼を全て斬り落とした。

〈続く〉

勇者との約束、ご唱和ください我の名を！

全員の、時が止まった。

堕天使の男がコカビエルの翼を全て斬り落とし、その手中へと収めたのだ。残っていた八枚全てを失ったコカビエルは背中の激痛を感じながら地上へ……肉塊と化したバルパーの近くへと落下した。

苦悶と驚愕にその表情を歪めつつコカビエルは堕天使の男を見る。

「貴様……何を……!?」

「何ってさっき説明したばかりだろ？アンタが死んで消滅する前にこれが欲しかったんだよ。どのみちアンタの敗北は免れないだろうし、このままじゃ逃げ切れるかも怪しいからな。ま、九つ分も残ってれば一つ使っても大目に見てくれる……といいんだけど」

「九つ分……貴様、まさか……!!」

「ああ、推測通りあの侍に斬り落とされたアンタの翼は俺が頂いたよ。お陰で今も斬り落とし易い部分が運良く残っていたのはありがたかった。面倒が少なくて済むからな」

男が懐に手を入れて再び取り出すと、そこには縮小化されて小さな球体に封じ込められているコカビエルの翼があった。

「いやしかし、やはり他の堕天使とは一味違うねぇ。他の連中は大して力なんてなかったし」

「な……同胞を手に掛けたのか!!」

「何言ってるんだ、正当防衛だよ正当防衛。向こうは俺を殺す気で仕掛けてきたんだから。結局全然楽しめなかったけど……いや、憂いながら屍に語りかけるプレイが出来たな。そこは良かったか」

笑みを崩さぬまま、さらに男は衝撃的な事実を告げる。

「それに、そもそも俺は堕天使じゃない」

『!?』

堕天使じゃない―言っている意味が分からなかった。コカビエルすらもだ。だが、この後の言葉でそれはハッキリする。

「何をそんなに驚いているんだよ。俺は一度だって『自分は堕天使だ』なんて一言も言ってないぜ？だから同胞殺しでも何でもない。さっきから度々言ってる『降り掛かる火の粉を払っただけ』ってわけさ」

「じゃ……じゃあ何なのよ貴方は!?堕天使じゃなければ悪魔でもない！天使であるはずもない！一体何だというの!?」

リアスが動揺しながら問い詰める。他の者も殆どがそうだ。混乱したまま答えを待っている……一部の者を除いて。

「ん？俺は『ダテンシ』だよ」

「ふざけないで！さっき自分で堕天使じゃないって……」

「この世界の言葉……特に漢字ってのは中々深いね。一文字変えるだけで印象がガラリと変わるんだから」

「え？」

男は光を使い、指先で宙に『堕天使』と文字を書く。

「こっちではこう書くんだったな。天の使い……ネーミングとしては悪くない。だが俺達を表すにはこっちではこう書くらしい」

堕天使の『使』の部分を消し、別の漢字を書き込み満足げに頷く。

「天を司ると書いて『天司（てんし）』。これが俺達……原初の星晶獣（せいしょうじゅう）のカテゴリ名さ」

「天使じゃなくて天司!?原初の星晶獣って……!?」

「星晶獣に関しては色々長くなるからパスだ。『空の世界』出身か、もしくはそれに準ずる奴がいるならそいつから聞いてくれ」

空の世界―確か真龍ディアドラ……スカーサハがその世界の出身だったはず。後で聞いてみるか、とレジェンドが考えていると、男は付け足すように言う。

「そうそう、色々あって自己紹介がまだだったな。俺はベリアル。堕天司ベリアルだ。以後ヨロシク」

『ベリアル!?』

ここにきてまたも衝撃が巻き起こる。ベリアルと言う名はこの世界では悪魔の名門一族、ウルトラマンでは銀河遊撃隊総司令官を務めている人物の名である。前者はともかく後者とは似ても似つかない性格だ。

光のベリアルは面倒見が良く、若いウルトラ戦士にとっては年の離れた兄貴分と呼べるような性格。闇のベリアルは当初こそ自己中で好戦的だったが今は口の悪いツンデレみたいになっている。

目の前の堕天司とやらは非常に狡猾な部分が大きい。闇のベリアルでさえ、己の実力を示すため堂々と正面からウルトラ戦士の精鋭に挑んで蹴散らしたというのに。

「さて、自己紹介も済んだ事だし……やる事やってさっさとお暇させ

てもらうとするか」
「ま……待て……！」
「コカビエル。アンタは言ったな、六枚羽程度と。出身世界の違う俺からしてみれば、この世界の十枚羽は精々俺達の世界じゃ『四枚羽寄りの五枚羽』程度でしかないんだよ。俺達六枚羽から見れば圧倒的に格下だ。そもそも、天の使いが天を司るものに敵わないのは普通の事だろ？」
「な……!?」
「ついでに、だ。六枚羽の最高位である四大天司と天使長の間にも大きく差がある。能力的に言うと俺は天使長と同格と思ってくれていい」

これを聞いてコカビエルは唖然とし、レジェンドやサーガ、神衛隊の二人を除いた全員も驚愕する。コカビエルですら歯牙にもかけないレベルの実力者……下手すれば堕天使総督のアザゼルでさえまるで敵わないような者と対峙していたのだと。

「もう一つ言っておこうか。これは愉しませてくれたサービスだ。俺の直属の上司……俺達を生み出してくれた創造主たる『星の民』なんだがな。最近漸く以前と同じくらいの力が自力で出せるようになったんだよ」

それから、と一拍置く感じで含みを持たせた後、リアスらにさらなる絶望を叩きつけた。

「その人の翼の数は十二枚だ」

「十二枚……ですって……!?」

先のベリアルの話が事実なら、こちらの世界でいうとつまり二十四枚相当。アザゼルでさえ目の前の堕天司とまともにやり合えるかというレベルなのに次元が違い過ぎる。そんな規格外がバックに存在する勢力が一体今までどこにいたのか。

「お前、外者(そとものだな」

『!?』

思考は止めずとも今まで黙っていたレジェンドが口を開いた。外者―つまりその世界出身ではない者……それも【エリア】に関しても知る者を差す言葉として光神たるレジェンド達は使っている。目に前の堕天司はそれだと言う。

「フフ……ご名答。さすが最高位の光神様だ」

「「「「えっ!?」」」」

レジェンドが光神だと言われ、それを知らなかったリアス達が本日何度目か分からぬ驚きに見舞われた。というかさり気なく前回カナエとかゼットとか厳勝とか名前呼んでたんだけど。アーシアはカナエと一緒に呼んだ時、朱乃の声でかき消されたのでノーカウント。

「ま、今日のところはここまでにしよう。試したい物もあるし、それに……」

コカビエルだけでなく、肉塊と化したバルパーも指差しながらベリ

アルは笑みを崩さず最悪な事を告げた。

「噂のゴーデス細胞とやらに感染してるぜ？そこの二人」

『!!』

　コカビエルと、肉塊になっていたバルパーへ目を向けると緑色の光が蠢いていた。レイナーレや、ライザーとのレーティングゲーム後に出現した小動物の死骸に見えたものと同じ。しかし、今回はそこに堕天司ベリアルより手心が加えられる。

「こうまで都合が良いと後々怖くなってくるんだけどな。ここで臆したらどうにもならない……っと」

　何やら黒い、ビー玉より少し大きい球体を二つ取り出し、苦しんでいるコカビエルと屍となっているバルパーの間に軽く投げ落とす。するとその瞬間、その球体を中心にゴーデス細胞に侵されたコカビエルとバルパーの死体が黒い光を放ちながら融合していく。

「おォ……！ゴガァ……ああアァァァ……!!」

「ひっ……!?」

「な……何が起きてるっていうの……!?」

　あまりに悍ましい光景に、アーシアはレジェンドに、リアスも一誠に抱きつきながら怯えている。他の者も似たような感じだ。ベキベキと骨が変形し、ブチブチと筋肉が変質する音を響かせながら融合したそれは徐々に巨体と化していく。

「あの姿は……!!」

「ちっ……よりによって厄介なものに……！」

ガイはリアス達とは別の意味で驚き、レジェンドは舌打ちしつつそれの危険性に警戒する。コカビエルとバルパーだったものが融合したその存在は……

「グゥオオオン!!」
「マガパンドン……!!」
「マガクリスタルは別物になっているし体色も黒だが、この気温の上昇は間違いなく奴だ……!サーガ!!」
「分かっている!!」

なんと魔王獣の一体、マガパンドンと同種の別個体。かつてと同じく周囲の気温の上昇を危惧したレジェンドはサーガに指示を出し、理由をすぐさま理解したサーガは特殊エネルギーフィールドを駒王町全体に張り巡らせ、マガパンドンの熱気から保護する。

「え、何?どうしたの!?」
「奴はそこにいるだけで都市一つ分の気温を上昇させる程の高温を発する!まだ夏でないとはいえ、一発で熱中症になりかねない!」
「あのマガパンドンはゴーデス細胞によって生まれた亜種に当たるんだろうが、片や能力が高い堕天使、片や悪知恵働く司教。その二つが混ざり合った、面倒な事この上ないヤツだ」

ガイは焦っているが、レジェンドは冷静さを失ってはいない。何故なら問題はまだ残っているからだ。

「おいおい、いきなり当たりか?じゃあこっちはどうかな?」

マガパンドンの出現に気を良くしたのか、ベリアルは手に入れていたコカビエルの翼を一枚だけ球体から解放し、同じように黒い球体と一緒に放り投げる。

黒い球体とコカビエルの翼は融合し、先程同様変質していく。これにガイは更に顔色を悪くした。そして、悪い予想は見事的中する。

「ギィアァァァァァ!!」

「今度はマガバッサー……魔王獣が一度に二体も!!」

「どうも嫌な予感ばかりが的中するとはな……!」

堕天使の翼を元にしているからか、ゲルカドン同様に体色は黒い。しかし明らかに姿形はマガバッサーに間違いない。魔王獣という超獣よりもさらに危険な敵が二体同時に出現する事態になり、リアス達も不安を隠せない。

「さっきから言ってる魔王獣って何なの!?明らかに普通じゃない感じしかしないわ!」

「通常の怪獣よりも格上とされ、世界を滅ぼすとまで言われた怪獣達だ」

『!!』

ガイの短い説明だけで一発で分かるほど、ヤバ過ぎる存在だった。そこにレジェンドが目の前に現れた二体に対して補足する。

「かつてはゼロがマガパンドンを、メビウスがマガバッサーを封印した」

「せ……先輩が!?」「ゼロ師匠が!?」

ミライことメビウスはもちろんの事、一誠とゼットにとって尊敬する人物が単独でそんなとんでもない怪獣を封印した事に、不謹慎ではあるが興奮してしまった。遊撃隊隊長という肩書も納得の戦果である。なにせ父親であるセブンは、当時激戦の疲労が蓄積し満足に身体を動かせない状況にも関わらず初代パンドンを撃破したのだから。

「クッ……ハハハハハ!!なんてこった!皮肉?それともイレギュラー?まさか堕天使から魔王な獣が二体も出来るなんて大当たりかよ!ヤバい!達する達する!!」
「貴様……!」
「おっと怖い怖い。そう怒るなデュランダル使いのお嬢ちゃん。マジでこっちも予想外だ。頭に『嬉しい』が付くけどな。それじゃ、今度こそサヨウナラ。ガラじゃないが君達がまた生き残れる事を願っておくよ。まだまだ愉しみたいんでね」

相変わらずイカれた台詞を吐いて、最後は意味深な事を言い残し退散した堕天司を憎々しく思いながらもゼノヴィアを始め、その場にいる面々は今置かれている状況を解決するのが先だと思い直した。

「いずれにせよ魔王獣……奴らはこの場で討たねばならない。ここで逃がせば被害は恐るべき速度で甚大なものになる」

サーガは落ち着きつつも強い決意を込める。いざとなれば自分がやらねばならない。だが、ここでガイが前に出た。

「レジェンドさん、サーガさん。俺が行きます。俺が行かなくちゃいけない」
「……ガイさん」

レジェンドとサーガが見守る中、裕斗がガイに近づくとガイはゆっくりと裕斗へ振り向き、小さく笑う。

「君達が見せてくれた絆の礼も、しなくちゃいけないしな」

大丈夫だ―そう思わせてくれる笑顔に、裕斗は己の願いを伝える。これは、同志達にとっても総意の言葉。

「僕達は信じてます。勇者の勝利を……！」
「ああ。約束だ。君がさっきの戦いの前に誓った言葉……『仲間達の剣になる』―それも忘れないでくれよ」
「はい！」
「良い返事だ」

ガイは頷くとオーブカリバーを一旦自身のカードに戻し、変身アイテムであるオーブリングを取り出す。

「それは……」
「俺も初心忘れず、気合を入れる為に久々に手順を踏み直そうと思ってな」

そう告げるとガイは表情を引き締め、カードとリングを構え……叫ぶ。

「己を信じる勇気……それが力になる。これが本当の俺だ！」

オーブリングに己のウルトラフュージョンカードをリードする。リードされた事でリングの部分が輝く。

『覚醒せよ、オーブオリジン！』

この音声にカナエだけは『冨岡君!?』と反応していたが、それはさておき。
リードされたカードは再び短剣状のオーブカリバーとなる。

「オーブカリバー!!」

ガイの手に納まったオーブカリバーをオーブリングで再度リードし、カリバーサークルを回転させると今まで無かった火・水・土・風

の紋章が点灯する。

「あれが……あの聖剣、オーブカリバーに込められたエレメント！」

ゼノヴィアも本当の意味で理解した。あれはこの星の物とは違う、別の星の聖剣だと。

そしてガイは準備は出来たとばかりにオーブカリバーのトリガーを押す。すると不思議なメロディーが流れ、エレメントの紋章が順に点滅していき、再度全てが点った時、眩い光がガイを包む。

「ハァッ!!」

その眩い光から現れたウルトラマンの右手には、本来の形である大剣形態となったオーブカリバーが握られており、天高く掲げられたそれは正しく勇者の証であった。

「あ……あの姿は……！やっぱり!!」

リアス達が裕斗を見ると、その顔は笑顔のまま一筋の涙が流れていた。

ガイが変身したウルトラマンはオーブカリバーを宙に円描くように片手で大きく回し、再び両手で握り構える。

「俺の名はオーブ！ウルトラマンオーブ!!」

高らかに己の名を叫ぶオーブの姿は、勇者の名に恥じぬ堂々としたものであった。

「そうだったんだ……皆、勇者はすぐ傍にいた……ついさっきも、僕達と共に戦ってくれていたんだ!!」

完全に思い出した。昔、裕斗が同志達と見た夢に現れた光の巨人。それは紛れもなくオーブだった。オーブカリバーを手に、魔王獣と戦うその姿を夢として彼らは見ていたのだ。夢に見た憧れの存在が自分を後押ししてくれ、そして今、自分達の為に戦おうとしている。

そして、立ち上がるのは彼だけではない。

「オーブに加え、ターンXとバルバトス……相手が相手だけにもう少しほしいところだな。町への被害を抑える事も含めると」

「なら俺達も行こう、イッセー！」

「おう！」

「それでも足りん。お前達が魔王獣を相手にするには圧倒的に経験値が不足している」

レジェンドは一誠やタイガが意気込んでいるところに冷静な意見を言う。確かにタイガにせよ一誠にせよ、果てはトライスクワッド三人とも経験が足りなさ過ぎるのだ。特にマガパンドンはオーブが一度は捨て身の戦法を使った程の強敵、意気込みだけでどうにかなるような甘い相手ではない。

「でも！こうしていたって何にも……」

「騒ぐな喚くな慌てるな。何もお前達に戦うなとは言っていない。戦力が足りんと言っただけだ」
「そんな事言ったって、援軍とかどこにいるんですか!?探しに行っている時間なんて……」
「ここにいるだろうが」

レジェンドが親指で指したのは、ゼット。

「……え?……俺ぇ??!!」
「この場でお前以外に誰がいる」
「いやその……サーガ大先輩とか」
「サーガはフィールド維持及び切り札」
「レジェンド超師匠自らとか」
「分離してお前をほっぽり出していいならな」

逃げ道は塞がれた。確かに周りへの影響を考える必要はあるし、ゼットが分離すればレジェンドが変身して一瞬で片付ける事は余裕で出来るだろう。しかし同時にブレスを着けていないゼットでは分離した場合、エネルギー確保の面で大きな問題を抱える事になり、どのみち命の危険に晒されるのは変わらない。

「あ……あの、レジェンド?流石に初戦が魔王獣とか無理があるんじゃないかと……」
「タイガ、ゼロの初戦の相手は聞いてるな?アイツに比べればよっぽどマシだ」
「う……」

ゼットを庇おうとするタイガだったが、レジェンドによってそれも無理となった。何故ならゼットの尊敬するゼロの初戦の相手はよりによって闇のベリアルと彼が操る大怪獣軍団、トドメにベリュドラと半端じゃない戦力相手に立ち向かったのだ。協力があったとはいえ、

大怪獣軍団は殆ど彼一人で撃ち倒していたし。

「この先これ以上の強敵なんざ飽きる程出てくるぞ。慣れるなら早い方が良い。それからもう一つ……あと一人、そろそろ到着する頃だ」

『え？』

そう……学園の、生徒達の危機にあの男が黙っているわけがない。あの時はレオやゼロが救援に向かい自身は有事の際の備えとなったが、いつでも出撃出来るようにしていた。リアスから連絡を受けて急ぎ学園へと向かっていた彼が、絶体絶命の危機に遂に到着したのだ。

「８０（エイティ）!!」

良く知る声が響き、オーブに続いて眩い光が辺りを照らしたかと思えばオーブの隣にもう一人、光の巨人が降り立った。オーブ自身も予期せぬ援軍に驚く。

「貴方はまさか……ウルトラ兄弟の一人、８０さん!?」

「オーブか、間に合って良かった。あの翼を持った魔王獣は僕に任せてくれ！」

「ありがとうございます！頼みました！」

心強い大先輩の登場にオーブの闘志が高まり、自分の相手となるマ

ガパンドンへと向き直りオーブカリバーを再度構える。８０といえば空中戦のプロフェッショナルと名高いウルトラ戦士だ。マガバッサーにとって天敵とも呼べる相手である。
　それを見てゼットは思う。自分が彼らの隣に立っていいのかと。しかし、同時に彼らと肩を並べて戦いたいとも。

「ゼット、別に半人前……三分の一人前である事が悪いわけではない。ゼロだけでなく、ケン……あのウルトラの父やベリアルでさえ半人前どころかヒヨッコだった頃もある。大切なのは、相手が格上だという恐怖を乗り越え、不屈の闘志を持って立ち向かう事だ」
「レジェンド超師匠……」
「さっきの廃教会での戦いを思い出せ。あの時、お前は厳勝やオーフィスと共にカゼキリに立ち向かい、見事二人をフォローしていた。一人ではない、お前には共に戦ってくれる仲間がいる。そしてお前は逆境の中でこそ、その真価が発揮出来るタイプだ。この状況、お前の強みを活かせる良い場だろう。共に戦い、そして共に成長しろ。信じ合える仲間と、家族と一緒にな」

　ゼットを諭すレジェンドの表情は、まるで子を見守る父親のようであった。彼にとって子供と呼べるのは直接力を分け与えたコスモスとジャスティスだろうが、一体化している今はゼットもまた我が子のようなものだ。レジェンドの言葉、８０の参戦、そしてその場にいるサーガやオカ研メンバーの期待……特に夜中、ゼットが一人で特訓していた事を知っているオーフィスやアーシア、カナエは彼の成長を信じている。
　ゼットは今、初戦が魔王獣であるという恐怖を乗り越え、己を奮い立たせた。今こそ一人のウルトラ戦士として立ち上がる時だ。ゼットはレジェンドへ自身が持って来たウルトラゼットライザーを渡し、自身もゼットライザーの中へ光となって入っていく。

『……レジェンド超師匠、俺は行きます！身体と力、貸してください

！』
「よく言った。巨大化時のエネルギーに関しては気にするな。俺が全部受け持ってやる、これを使っての変身方法は!?」
『まず、そのウルトラゼットライザーのトリガーを押します。で、現れたゲートへＧＯ！』

数多の変身アイテムを見てきたレジェンドはゼットの言葉通り、迷いなくライザーのトリガーを押し、現れた四角いゲートへと突入し、インナースペースへと移動する。すると新たにレジェンドの手には一枚のカードが現れた。人間体のレジェンドの姿とゼットの横顔が描かれている。それはいい。しかし……

『そのウルトラアクセスカードをゼットライザーにセット……あれ？超師匠どうしました？』
「いや……まさかな、うん。よし……」

レジェンドはある一縷の望みを賭けてライザー中央のスリットへカードをセットした。

『ＬＥＧＥＮＤ，Ａｃｃｅｓｓ　Ｇｒａｎｔｅｄ！』
「やっぱりかよォォォ!!
いよいよ機械、それも光の国製のやつにまで俺の人間体の名前呼ばれなくなってんですけど!!何コレ人間体の名前設定する必要あった!?『光神零（こうがみぜろ）』って名前さァ、名字だけでも数えられる程度しか呼ばれてないんだけど！最後に呼ばれたのって何時だっけ？レオとメビウスがダイブハンガー来た時メビウスに「コウガミチーフ」って呼ばれたっきりじゃなかったっけ？いやもうそれくらいしか記憶にないわマジで大概にしろよ畜生!!」
『おおお落ち着いてください超師匠ぉぉぉ!?』

人間体名が呼ばれなくなっていく事にフラストレーションが溜まり続けていたレジェンドはいよいよもって爆発してしまった。暫くインナースペース内で暴れまくって漸く落ち着いたのだが、マジでここで良かったとしか言い様がない暴走状態だった。
気を取り直してレジェンドが腰に目を向けるとケースらしきものがベルトと共に装着されている。

「これはアレか、タカトラバッタでコンボするやつ」
『スイマセン超師匠それじゃ作品自体カテゴリが別な上に形態の名前がタトバエッジとかタジャドルスマッシャーとかそんなんになっちゃうんですが!?』
「割と良くね?それはさておき……今使えるのはセブン、レオ、そしてシメがゼロ……セブン一門ってところか。アストラェ……」

まあ、アストラ入れたらセブンかゼロがハブられる事になるんだが……主にレオ絡みのせいで。

『何はともあれそのウルトラメダルをスリットにセットプリーズ!』
「さっきからルーなんちゃらみたいな言葉遣いだなオイ」

レジェンドはゼットの喋り方に軽くツッコミつつ、ゼットライザーへメダルを装填する。しかもいちいち動作がスーパー戦隊っぽい。
『彼』の影響だろう。

『なんか超師匠めっちゃ慣れてません?っとお次はメダルをスキャンであります!』
「……これあっちのメダル入れたら本気でどうなるか試したくなってきたぞ」

そんな事したらゼットの名前が変わります。
レジェンドはメダルを収めたプレートを一気にスライドさせる。

ぶっちゃけ「変身！」とか言いそうになったのはご愛嬌だ。

『ＺＥＲＯ！ＳＥＶＥＮ！ＬＥＯ！』
「ゼセレコンボ？語呂悪いな」
『だからコンボ違いますって!?』

スキャンした事で光が集まり、今度は人間大サイズではない、本来の大きさのゼットがレジェンドの後ろに顕現する。

『よし！色々あったけど次で締め！俺の……』
「ふ……みなまで言うなゼット。名前を叫ぶんだろう？どれだけウルトラ戦士の変身を見てきたと思っている」
『おおっ！さすが超師匠！では景気良く……』

「レジェェェンド!!……あ」

『超師匠ぉぉぉ!?違う！間違ってます！そこは俺の！俺の名前で!!』
「すまん、素で間違った。なにせ変身アイテム使っての変身は相当久々だからなー。ていうか何も起こらんぞ。どっか壊れてないかコレ」
『トリガー！そこのトリガー最後に押すんです！そう、そこそこ！』
「なんだ早く言えよそれ。まあ俺の名前でゼットに変身しても締まらないから良かったんじゃないのか？ミスって」

結果として良かったのか悪かったのか分からないまま、とりあえず仕切り直しするレジェンドとゼット。

『では気合を入れ直してお願い申し上げるのですよ！ハイ！３００万リットルの息を吸って、光の国まで届く声で!!』

「何ガガガの歌唱指導付きカラオケより無茶ぶり言ってんだお前はァァァ!!ウルトラフュージョンじゃなくてファイナルフュージョンする気か!?」
『あ、レジェンド超師匠が中身なんで剛腕爆砕して天罰降臨する方で』
「マジでＦＩＮＡＬかよォォォ!!ウルトラマンゼットジェネシックマイソロジーとかいきなり究極フォームみたいなもん出てきたら洒落にならんわ!!ったく……このままグダグダではいつまでも変身出来ん！気を引き締め直すぞ!!こうなったら二万本のマイクぶっ壊す声量で叫んでやる!!」
『合点承知!!』

今までグダグダし過ぎていた分を取り返すべく、レジェンドとゼットはお互い真剣な雰囲気になる。ついでにレジェンドのやろうとしている事の元ネタは、本作における彼の中の人のやった有名な『伝説』である。

『それでは、ご唱和ください！我の名を!!』
「ウルトラマン!!」

「『ゼェェェェェット!!!!』」

何故か現実世界の彼方此方でマイクがぶっ壊れるという珍事件が起きたのも知らず、二人が叫びレジェンドがゼットライザーのトリガーを押すとゼロ、セブン、レオの幻影が現れる。
『ハァッ！』『デュワッ！』『イヤァッ！』
その幻影は飛び交いながらやがて青と赤の光となって混ざり合って一つの大きな光となり、その中から新たな姿となったゼットがインナースペースから現実世界へと現れる。

『ＵＬＴＲＡＭＡＮ―Ｚ！ＡＬＰＨＡ―ＥＤＧＥ!!』
「デェアッ!!」

８０に続き、まさかのゼットがウルトラフュージョンを果たしてオーブの隣へと降り立った。

「なっ!?ゼット、お前……！」
「大丈夫です、オーブ先輩！レジェンド超師匠の身体とエネルギーをお借りしてます！俺も正直戦力になるか分からないけど踏ん張りますぞ！」
「この状況なら一人でも多い方が助かる！頼むぞ！」
「イエッサー８０先生！」

一応総司令官であるウルトラマンベリアルからゼットが地球に行った事は聞かされていたが、まさかウルトラフュージョンして戦列に加わると思っていなかったオーブは驚くもののすぐに納得し、８０は二体の魔王獣相手に戦力はいくらあっても無駄にならないと思い素直にゼットの参戦を喜ぶ。二人の不安を払拭するようにゼットもハッキリと返事を返した。

「ゼットの姿、ジードみたいに結構変わってる。なんで？」
「えっと……サーガ様、ゼットさんはレジェンド様と一体化すると姿が変わるんでしょうか？」
「正確にはゼットライザーで発動させたウルトラメダルの力で、だな。おそらく先輩が発動させたんだろう。見たところゼロとセブン、レオのメダルだな」
「え〟!?それ割とチート性能なんじゃ……」

オーフィスやアーシアの疑問にサーガが答える。ついでに言うと

一誠の意見ももっともなのだが……三分の一人前と言われているゼットのカバーをするにはそれだけ必要だという事だ。最近では徐々に実力を付けてきてはいるものの、まだまだな部分が多い。おまけに全能力が使えるわけでもないので、然程チートでもないのである。

「ゼットも魔王獣と戦う気になった……イッセー！」
「分かってるぜ、タイガ！」
『カモン！』

一誠はタイガスパークを出現させ、待機状態にした後にタイガのキーホルダーを取ろうとするが、そこに待ったがかかる。

「待つんだ、タイガ、イッセー」
「なっ……ここまできて何だよタイタス！」
「そうだぜ！矢的先生も駆けつけてくれたし、ここで俺達も参戦しないと……」
「そういう事ではない。今回は私が行くと言いたかったのだ」

二人に待ったをかけた理由、それはタイタスが魔王獣達と戦うというからであった。

「まあ、確かに今回は旦那が適任だろうな。俺は次回以降に持ち越しだ。てなわけで俺らは旦那のサポートだ」
「フーマ!?なんでだよ！」
「考えてみろよ。あのマガバッサーとかいうのは空中戦のプロ、８０先生やサーガ直属の部隊の二人が対処するだろ？となると俺らは必然的にオーブ先輩やゼットと一緒にマガパンドンの相手をする事になる。あいつ、見たところ早さより攻撃力と防御力重視っぽいし、俺やタイガじゃキツい。アレに対抗するには旦那のパワーやタフさが必要だ。それに俺らより経験もあるし、イッセーの神器と旦那の相性

も良い感じだろうし」
「言われてみればそう、だよな……」

フーマ、しっかりとポイントを押さえて説明しているが、実際は変身出来なくてちょっぴり不満である。タイガはタイガでデガンジャとタイマンしたのに。

「……分かった。タイタス、頼んだ！」
「ああ。頼まれた以上、勝利を約束しよう！イッセー！」
「こっちも覚悟決めたぜ！」

一誠はタイガのキーホルダーではなくタイタスのキーホルダーを手にする。

「力の賢者！タイタス!!」
『うおおおおっ！ふんっ！』

タイタスも既にやる気に満ちている。

「バディィィィゴォォッ!!」
『ウルトラマンタイタス！』

タイガとはまた違った光の波動の中から、その鍛え抜かれたボディを見せつけるようにタイタスが巨大化して現れる。

『ムンッ!!』

オーブ、８０、ゼットに続いてタイタスもまた、魔王獣と戦うべく降り立った。のは良いのだが……

「ふんっ！」
「え？ちょっ……」
「おおっ！」
「……何やってんの？」
「ぬぅん！」
「ほう……見事に鍛え上げられた肉体だ！戦力として期待出来るのは間違いなさそうだなタイタスとやら!!」

何故かポージングを決めているタイタス。ゼットや三日月も困惑している中、御大将モードな厳勝は絶賛している。魔王獣は警戒して攻撃して来ないが、助かったというべきか隙を見逃しているというべきか……。

「こうやってポージングする事で私の筋肉をより高める事が出来るのだ」
「『マジでっ!?』」

一誠とゼットがハモった。実はポージングに意味があったらしい。どういう原理で高まるかはよく分かんないけど。

これだけの戦力が集結し、サーガがシトリー眷属が張ったものとは次元が違い過ぎる防御フィールドを展開した事でさらなる異常事態だと理解したソーナ達生徒会も合流する。

「リアス！一体何が……え、ええっ!?」
「なんか見た事ないウルトラマンが二人も……それに矢的先生！……と……」

ソーナはあまりの光景に驚きを隠せず、匙はオーブとゼットに驚く

も８０の姿に喜んだと思えばタイタスを見て青い顔をして股間を押さえ内股になった。すっかりトラウマと化している。他の生徒会メンバーに至っては絶句していた。

それを見た巌勝が満足げに宣言した。

「ウルトラ戦士四人に私と三日月、相手に魔王獣二体！そしてそれを見守る観客……役者は全て出揃った!!さあ、此度の事件の締めくくり……

決戦と洒落込もうではないかァァァ!!」

「「「「おお!!」」」」

今、ウルトラ四戦士＆神衛隊二機と二大魔王獣による決戦の火蓋が切って落とされた。

〈続く〉

絆、次元も時間も超えて

ウルトラ戦士四人にターンXとバルバトスを加えた連合軍と、二体の魔王獣による決戦が始まろうとする頃、紫藤イリナはレジェンド一家の仮住居の一室にあるベッドで目を覚ました。

「う……あれ？ここは……病院じゃないわよね」

誰かが治療してくれたのであろう、傷は塞がっているものの痛みが残る身体を気力で動かし部屋から出ると、すぐ目の前にリビングが見えた。そこにあるソファーに二人の女性が座り、テレビにある映像を映して見ていた。

「ふむ、どうやら今回の件も大詰めらしいな。ゼットと言ったか？あいつが巨大化してあそこにいるという事はレジェンドが変身したのか。てっきり生身のまま自分でどうにかしてしまうかと思ったが」

「現状、あの方が自ら動く場合というのは限られるでしょう。おそらく彼に実戦経験を積ませる意味で変身したのではないかと。相手が格上であればあるほど、一瞬一瞬のやり取りが重要になり、そこから多くの事が学べるハズです」

「……学ぶ前にくたばらんといいがな」

「そこはレジェンド様がなんとかしますよ」

会話していたのは無論、C．C．と卯ノ花だ。

こっそりイリナがその映像を覗こうとすると、二人して平然と声を掛けてきた。

「おい、忍者の真似事なんてしないで普通に見れば良いだろ」

「うひゃぁい!?」

「目が覚めたようで何より。彼女の言う通り堂々としてくれて構いませんよ。私達が今見ているのは、貴女も関わり合いのある事件の最終

局面ですからね」
「え!?あ……あれ？私の、その……荷物とかは？」

すると気怠そうにＣ．Ｃ．はイリナに顔を向けて答える。ちなみにその時、彼女の顔を見たイリナはその顔立ちを見て（イッセー君の好みのタイプっぽいな）とか思っていた。Ｃ．Ｃ．本人の想いはレジェンドに向けられているのだが。

「お前を運んで来た奴も、その時のお前も今お前が身に着けているものしか運んで来てないぞ。大方聖剣の一本でも持ってたんだろうが、そんなものはあの風来坊とやらも持って来ていない。吹っ飛ばされたかなんかしたか知らんがその時に手元を離れたところを奪われたとかなんかしたんだろ」
「そ……そんな……！」
「それに関しては問題ありませんよ。そちらは後で詳しく説明しますが、今はこちらを御覧になってはどうですか？」

にこやかにイリナを誘う卯ノ花。イリナがその映像を見るとそこには巷でひっきりなしに話題になっているウルトラマンという巨人が四人、さらに巨大ロボットが二機。それに相対するように二体の怪獣が映っている。

「え……！あれって噂のウルトラマンってやつじゃ!?それに何あのロボット！しかも何かヤバそうな怪獣らしきものも出てるし……」
「これリアルタイムで展開されてる状況だぞ」
「はひぇっ!?」

さっき変な声が出たばかりだというのにまた出してしまった。確かにＣ．Ｃ．の発言にはそれだけの威力があったし、仕方がない事である。

「軽く説明しておきましょうか。三日月さんから情報が先程まで逐次送信されて来てましたので」
「三日月さんって……あの日、私とゼノヴィアにご飯奢ってくれたあの人達の一人……」
「ああ、そういえばあいつそんな事言ってたな。あとペドロがどうたらこうたら」

これを聞いてイリナは若干凹む。仕方ない、金欠の原因は主に彼女なのだし。

「話を戻しますよ。三日月さんからの情報によると奪われたエクスカリバーは統合された後、聖剣デュランダルにより核を残し破壊。使用者フリード・セルゼンは両目を貫かれ、さらに身体を大きく斬られ戦闘不能。バルパー・ガリレイは三日月さんの駆る機体によって文字通り叩き潰されたそうです」
「なるほど、そいつはミンチか潰れたトマトになったわけか」
「ミッ……!?」

想像してしまい、青い顔で口元を抑えるイリナ。近くで見たら間違いなくトラウマになるだろう。さらに卯ノ花は続ける。

「その後、コカビエル及びもう一人の堕天使と交戦。その戦闘中にレジェンド様、サーガ様、オーフィスにゼットさん、そして厳勝さんが乱入する形で合流。その後、コカビエルはもう一人の堕天使……あら？字が変わってますね。まあいいでしょう。そのもう一人に翼を全て刈り取られ、バルパーの死骸諸共その人物が投げ落とした何かにより融合・変容しあのようになったようです。あちらの双頭の方ですね。もう一体はそのコカビエルの翼の一つが変容したものらしいですよ」

イリナは開いた口が塞がらなかった。自分が倒れていた間に目ま

ぐるしく事態が二転三転している。バルパーは死に、コカビエルも翼を全て失くしてバルパー共々怪獣化。フリードはおそらく瀕死で、もう一人の堕天使は裏切った。最後に関しては元々単に利害一致とかそんな感じだっただけで裏切るのとは違う気もするが。

「それから最後に一つ。あの筋肉系ウルトラマンのタイタスは兵藤一誠が変身しているぞ」

「ふぇいっ!?」

「お前は何かと変な声出しすぎだ」

もはやこの場で全ての情報を整理するのは無理そうだ。Ｃ．Ｃ．の言う通り、衝撃的な事が多過ぎて変な声ばかり出てしまっているので、大人しく状況を見守る事にする。

「ところでこれ、テレビでやってるんですか？」

「そんな訳ないだろう？ある物を持った連中の周囲の現状を出力してるだけだ。どのチャンネルでもやってないぞ」

うん、もう理解出来ない。とりあえずこの家に住むメンバーが色々非常識スペックなんだとだけは分かる。イリナはそこにいる二人が以前自分達をフルボッコにした片割れであるカナエの関係者であり、おまけに卯ノ花に至ってはカナエすら霞む実力者だとは、今だ露知らずの状態であった。

☆

そして激戦の場、駒王学園。

二体の魔王獣に対抗すべく、既に二手に分かれて戦闘が開始している。

マガパンドンへはオーブ、タイタス、ゼットが。

マガバッサーへは８０、ターンＸ、バルバトスが。

見ているだけしか出来ない歯痒さを感じつつも、リアスらは目を離さず見守っている。
そんな中、アーシアとカナエは……
「あの、カナエさん。カプセル怪獣のゴモちゃんやモスちゃんならレジェンド様達の手助け出来るんじゃないでしょうか？」
「アーシアちゃんのアイデアは私も考えたの。でも……見て、アーシアちゃん」
何故か深刻な顔でカプセルの中を映してみると……
『……きゅー……きゅー……』
『……がぅ……んぐぅ……』
「二匹とも既にぐっすり夢の中よ」
「あぅ……起こすの躊躇しちゃいます……」
頼みの綱のゴモラとグリーンモスラは暫く呼ばれぬままカプセルの中にいたのでお休みモードになってしまい、二匹を可愛がっている二人は仕方無しに断念した。
「……ゴジラ、行ってくる？」
『別にいいがこんな狭い戦場じゃ周りの連中も巻き添えくらうだろうな。そうしたらオレ様はもちろん、呼び出したお前もレジェンドに怒られて、最悪嫌われるぞ』
「嫌。絶対嫌。それだけは嫌」
ゴジラを呼び出そうとしてたオーフィスも、ゴジラ自身が自分の戦闘力を危惧してオーフィスを諭し、レジェンド一番家族が二番な彼女は簡単に呼び出しを止めた。

オーブ、タイタス、そしてゼットの戦っているマガパンドンはかつてオーブに一度は捨て身の戦法を取らせた程の強敵だ。今相手にしているのは亜種とはいえ、頭脳や素の力は元となった存在に起因し、本来のマガパンドンよりも強化されているだろう。
だがオーブとてそれは同じ事、当時とは違い本来の姿とオーブカリバーを取り戻し、さらに味方にはタイタスとゼットもいる。
そして何より、レジェンドから異常現象の事を知らされて以来、あの日からウルトラ戦士達はさらなる特訓を重ね続けていた。故に彼らは皆以前より大きく戦闘力を増しているのだ。

「俺が先行して隙を作るんで、お二人はそこへウルトラ凄い一撃を頼んますです！」
「よし！ならば二番手は私が引き受ける！」
「最後は俺だな。オーブカリバーなら一撃でもかなり効くはずだ。二人とも、行くぞ!!」
「「おお!!」」

オーブの号令で三人がマガパンドンへと突撃する。この中ではアルファエッジとなったゼットが一番素早さに優れている。使用したウルトラメダルの力の他に、少なからず人間体のレジェンドの能力もプラスされているからだ。

「デヤァァァァ!!」

勢いを付けた飛び蹴りがマガパンドンへと炸裂する。
ある程度予測出来ていたからか、その場でなんとか踏み留まりマガパンドンは目の前のゼットに反撃を試みるが、反撃される前にゼットは連続パンチからのハイキックでマガパンドンを後退させる。多少は効いているが、目に見えるダメージにはなっていない。

『ゼット、そろそろタイミングだ。相手の意表を突いてタイタスと交替！』
「ラジャー!!」

レジェンドの指示を受け、攻撃しようとしていたマガパンドンの胸の部分にドロップキックをかまし倒れなかった事を良しと考え、そのまま足場代わりに蹴飛ばしつつ大きく後方へバク宙する。

「ゼットさん、新体操の選手みたいに軽やかです！」
「元々体育系な上、ゲンさんやレイトくんだけじゃなくてセブンさんも武闘派って聞いてるから、メダルっていうののやつで一番相性が良いのね」

レジェンドが一体化している事と相まってアーシアが嬉しそうに言う。カナエも冷静に分析しているもののどことなくアーシア同様嬉しそうだ。朱乃も言葉こそ発していないが笑顔でゼット（正確には一体化してるレジェンド）を目で追っている。
そしてそのバク宙で後退するゼットの真下をすれ違いながら、今度はタイタスが拳を構えマガパンドンに迫る。

「次は私だ！覚悟しろ魔王獣!!」

少しでも距離があれば違ったがタイタス接近のギリギリまでゼットが粘り、しかも普通に後退するのではなく最後まで隙を作ってからのアクロバット交替だった事でマガパンドンの防御や反撃が遅れてしまう。

「賢者の拳は全てを砕く！」

強く握りしめられた右拳から繰り出される剛拳がマガパンドンの腹部に突き刺さった瞬間、マガパンドンは大きく吹き飛びダウンして

しまった。ワイズマンフィスト―タイタスにとっては鍛え抜かれた身体から繰り出される一撃一撃全てが必殺技のような威力だ。スピードこそトライスクワッドで最も遅いがそれを補ってあまりあるパワーと防御力を誇る。

「なんというパワーだ……！一発でマガパンドンという怪獣からダウンを奪った！」

「さすが日頃から筋トレしてるだけあるわ！」

「……まだ神器使ってません」

ゼノヴィアやリアスがタイタスへ驚きと称賛を向けるが、小猫の言う通りタイガがデガンジャ戦のラストにて一誠の神器たる『赤龍帝の籠手』を使用した事を考えるとさらに威力を増す可能性も秘めている。恐るべしウルトラマッスル。

「「ガ……ァァァァ!!」」

「ふんっ!!」

マガパンドンは起き上がりながら火炎弾を吐き出しタイタスへと命中させるものの、当のタイタスは堂々と己の肉体を強調するように大胸筋で弾いて見せる。

「「「「はい!?」」」」

確かに驚くだろう。魔王獣クラスの攻撃を、全力でないとはいえノーガードで直撃して無傷。小猫は「そういえばイッセー先輩は禁手化で攻防速どれか選んで倍化出来た」と思い出していた。フーマが言っていたように、タイタスが一番神器と相性が良いように思える。弱点をフォローするか、長所を伸ばすかすぐに判断しやすい。

「「グルオオオオオ!!」」

「それを待っていた！」

火炎弾が効かなかったタイタスへ直接攻撃すべくマガパンドンが突進して来るが、タイタスは横へ飛び側転で回避する。その後ろに控えていたオーブが絶妙なタイミングでオーブカリバーを振り抜き、マガパンドンを深々と斬り裂いた。

「「グガァァァ!?」」

「お前の元になった奴同様、こっちはチーム戦だって事を理解してないみたいだな！まだ終わりじゃないぜ！」

オーブはオーブカリバーのカリバーサークルを回して土の紋章の所で止める。さらにトリガーを引き、大地に突き立てる。

「オーブグランドカリバー!!」

地を這いながら円を描くように二つの光線がマガパンドンを襲う。近距離であった為に防御も取れず直撃したマガパンドンは再度倒れ込んだ。

「あれが……聖剣オーブカリバーの真の力……！エレメントを使った必殺剣なんだ！」

「グランド……土という事は少なくともあと三種類はあるのか、あれだけの威力を持つ技が……！」

彼にとって憧れだったヒーローの技を見た裕斗は興奮気味に叫び、ゼノヴィアはまるで『破壊の聖剣』の如き技がまだ数多の剣技の一つに過ぎない事に驚愕する。ただでさえタイタスの一撃より重いオーブカリバーの一太刀に加え、エレメントを使用したその技はマガパンドンに多大なる痛手を与えた。

これが銀河という広大な舞台で激戦を繰り広げ、打ち勝ってきたウ

ルトラマンオーブの実力。
実力や経験の差異はあれど、三人のウルトラマンは即席にも関わらず見事な連携でマガパンドンを圧倒していた。

☆

三人のウルトラマンがマガパンドン相手に優位に立っている頃、８０及び二機の神衛隊所属のＭＳとマガバッサーの戦いはやはり空中戦へと移行していた。
夜の駒王上空を飛ぶマガバッサーを先行して８０が追い、その周囲を厳勝の駆るターンＸがフォローの為に飛翔する。少しバルバトスが追う形になっているがこれは仕方がない。
バルバトスはネオ・ガンダム・フレームとして再開発された際に装備された、大型のバックパックの折り畳み式の可変ウイングを展開して飛行しているが、宇宙ならともかく本来地上型のバルバトスが空を飛ぶという経験が三日月自身に少ない為である。新生阿頼耶識システムの関係上、翼を動かすイメージで操縦は出来るがテイルブレードと違ってまだ感覚がいまいち掴めないらしい。
加えてメイン武装である可変式超大型メイスの重量の関係もある。元々身軽な８０や、ＩＦＢＤという特殊動力であり全地形万能型のターンＸに比べると、どうしても遅れが出てしまう。

「ごめん二人とも、俺ちょっと遅れる」
「気にするな三日月！バルバトスの長所は陸戦における機動力の高さのみならず、絶大な攻撃力にある！私達の攻撃で隙の出来た奴に、その鉄塊で強烈な一撃を与えてやれ!!」
「ああ、彼の言う通り牽制は僕達が受け持とう。狙うなら頭か胴だ！」
「分かった……！」

８０の約半分程の大きさしかない二機のＭＳだが、サーガから事前に貰っている情報に間違いがなければどちらも戦力としてこの上な

い強力なメンバーだ。事実、極めて出力が高く自分の速度に平然と付いてくるターンＸや、町を破壊する程の魔方陣を一撃で物理的に粉砕したバルバトスは文句無しの性能だ。さらに、三日月はＭＳ戦歴が長く、対する巌勝は生身での戦歴が長い。形は違えど様々な形で現状に対応出来るベテランである。

「マガバッサーが方向転換してきたか……！」
「まずはこちらが先制を取って場を掌握する事から始めるとするか！準備は宜しいか８０殿⁉」
「もちろんだ、巌勝さん……で間違いないかな？」
「間違いなし！では行くぞ、マガバッサーとやら！」

町の上空である以上、確実に当てねば他所に被害が出る可能性のあるバズーカではなくビームライフルをキャラパスから取り出すターンＸ。８０はマガバッサーに対して正面から突っ込んでいく。
マガバッサーは身体を傾けてその翼を使い刺突するように突進して来るが、８０の放ったウルトラダブルアローを回避すべく体勢を戻したところへターンＸのビームライフルより放たれた閃光が迫る。これをその場でホバリングする事でギリギリで回避したマガバッサーだったが、突如頭部を凄まじい衝撃が襲った。
８０とターンＸがマガバッサーを引き付けている間に、進路を変更したバルバトスが背後へと回るように大きく迂回しつつ接近していたのだ。

「まだだ……！もう一撃！」

先程とは逆方向から、まるで往復ビンタのように再度メイスを振り抜きマガバッサーの頭部を強打する。メイス自体が巨大かつ頑強であり、バルバトスの出力もあってこれによる急所狙いは抜群の効果だ。

「ギィッ……！ギアァァァッ!!」
「……！くっ……！」

マガバッサーが苦し紛れに翼から放った突風でバルバトスは吹き飛ばされるが、ターンXが後ろから受け止めさらにそれを８０が二機をまとめて受け止めた。

「三日月さん、大丈夫か!?」
「うん、お陰様で。ごめん、二発しか叩き込めなかった」
「いや、十分！頭部にあれだけの打撃を受けた奴は、おそらく脳にも多大なダメージが入っているはずだ！今のうちに再度隙を作り、そこへ一気に必殺の一撃を叩き込めば勝負は決まる!!」
「ああ、その証拠に今のマガバッサーは飛行が安定していない。君が作ってくれたこの好機、奴が調子を取り戻す前にケリをつけよう！」

謝る三日月を逆に称賛で返す８０と巌勝。攻撃や回避機動を両立していた両名に対し、攻撃のみに集中していた三日月とバルバトスだからこそ出せた威力だ。
ならばもう一度、今度は生まれ変わったバルバトスが誇る最大の武器を持ってマガバッサーを粉砕する。三日月はそう決意し、二人に提案した。

「８０さん、巌勝さん。面倒をかけるけど、もう一回チャンスがほしい。あいつを地上に落とせる？」
「僕一人では時間がかかるかもしれなかったが、巌勝さんが一緒ならばそう問題もなく出来るはずだ。何か策が？」
「……バルバトスの切り札の一つを使う。それならあいつを確実に潰せる」
「なるほど、アレか……良かろう！ならば我らはその道を切り開くのみ！」

厳勝の言葉と三日月の決意に理解を示した８０は頷き、今だダメージが尾を引いているマガバッサーへと向き直る。
「すぐに地上に叩き落とす！三日月は準備に入れ！」
「君を信じるぞ！奴の翼は僕らが封じる！」
「分かった……！」
光の国の精鋭と、神衛隊別分隊の同僚……二人からの信頼を受け、三日月とバルバトスは地上へと向かう。いよいよ決着の時が迫って来た。

☆

地上でのウルトラ戦士三人とマガパンドンの戦いも大詰めを迎えている。オーブグランドカリバーを受けた後、続けてオーブウォーターカリバーを喰らい、さらにゼットの怒涛のラッシュとタイタスから重い一撃を幾度と受けたマガパンドンは、遂に奥の手を出してきた。
光の槍などを使用する堕天使を素材としたからか、なんと炎ではなくレーザービームを口から発射してきたのだ。突然の事に驚いたとはいえ、オーブはなんとかオーブカリバーを盾代わりにして防いだものの、ゼットとタイタスはまともに受けてしまう。
「ぐあぁぁぁっ!?」
「ぬおぉぉっ!?」
タイタスは鍛え上げられた肉体の為、強い衝撃を受けた感じで済んだがゼットはそうもいかなかった。元々未熟な事に加えてアルファエッジは高水準のバランス型とはいえ基本はスピード重視の形態であり、パワー型の相手の一撃は予想以上にダメージを喰らうのだ。
初めてのウルトラフュージョンである事、さらに休憩したとはいえ

カゼキリとの戦いの後という事もあり先程の攻撃―マガレーザーの直撃を受けたゼットのカラータイマーが点滅を始める。

「っ！あれは……！」

「ゼットさんの胸のところが光ってます……何か知らせてるような……」

「……ゼットのエネルギーが危険域に入った事を示しているんだ」

『!?』

サーガの一言でリアスとソーナ、オーフィス以外は驚愕した。リアスとソーナは二人の家族の元に送られて来た記録映像から、オーフィスはレジェンドから直接その事を聞いている。説明もされていない為、知らずとも仕方がない。てっきり相手が強敵だと知らせるものかと思っていたが、実際は残りのエネルギー量を知らせる命の危険信号だったのだ。

「待ってください！確かゼットさんはレジェンド様と一体化してました……ゼットさんが危険だと言う事はつまり……」

「アーシアの予想通り、先輩も危険だという事になる」

「……っ!?」

「それって……タイガやタイタス、フーマの場合でも……」

「三人と一体化しているあの少年の場合も同様だ」

アーシアとリアスはこの事実に青褪めた。リアスの知るタロウやセブンはどちらも一体化ではなく本人だった為、変身時に危険な目に合えば人間体でもその影響が出るのは納得だったが、今は違う。今戦っている方が命を落としたら、もしかしたら一体化しているもう片方も命を落とす可能性がある。

だが、そんな二人を始めとした面々の不安を取り除くかのように言葉をかけたのはカナエ、オーフィス、そしてサーガであった。

「アーシアちゃん、リアス、そんな顔しないの。彼らが必死で戦っているのに見ているだけの私達が不安になってもどうする事も出来ないわ。タイタスさんの方はオーブさん同様まだ余裕あるみたいだし」
「で……でもそれじゃあゼットっていうウルトラマンの方は……」
「レジェンド言ってた。ゼットは逆境でこそ真価を発揮出来る。我と巌勝とゼット、それからレジェンドでさっき鬼と戦った時もそうだった」
「え……？」
「マガパンドン……奴は今の攻撃で少なくともゼットだけでも戦闘不能にすべきだった。この状況、ゼットがその可能性を見せつける絶好の場となる」

ゼットの可能性、それはゼロも認めた秘めたるポテンシャルの高さ。普段は空回りしているが、特定の条件下でそれが一気に爆発するのだ。逆境はその条件の一つ。
そして、ゼットが動いた。

「……レジェンド超師匠、ウルトラすいません。身体も力も借りといてアレですがウルトラ無茶します」
『ふっ……ノアやキングのおふざけではなく、若い次世代の芽が育つ為なら無茶ぐらい許容範囲だ。妥協するな、やるなら全力で行け……！』
「オーライ!!」

レジェンドからゴーサインが出たゼットはマガパンドンへ向けて走り出す。

「なっ……待て！ゼット!!」
「その状態ではヤラレに行くようなものだ！下がりなさい!!」
「俺が繋ぎます!!」

オーブとタイタスは止めようとするが、直後ゼットの気迫が込められた一言でハッとする。

「俺がお二人の必殺の一撃まで奴を引きつける！今の俺じゃ奴にトドメを刺すような攻撃力は出せない。だから、俺がやるべき事は先輩方が確実に奴を倒せるよう、必殺技の発動まで場を繋ぐ事だ！お頼みございましょうお二方!!」

最後の最後でゼット語が炸裂し台無しになりかけたが、オーブとタイタスは良い感じに緊張感が抜け、ゼットの思いを汲んだ。

「分かった！お前が作ってくれたこの瞬間、無駄にしないぜ!!」

「実力はまだ未熟かもしれない。だがその闘志と覚悟、紛れも無くウルトラ戦士のものだ！イッセー！今度は私達も力を振り絞るぞ!!」

『おうよ！やってやろうぜ、タイタス!!ドライグ、準備出来てんな!?』

『ああ、相棒より肉体的に完成している分、倍化回数は上回るかもしれんぞ』

限界が近づく中、先程よりも熱い闘志を持ってマガパンドンへ向かって行く後輩の背中に触発され、オーブとタイタス、そして一誠とドライグも奮起する。そしてタイタスの左腕にはタイガの時同様『赤龍帝の籠手』が装着された。

「凄まじい力を感じるぞ……！ウルトラマッスルならぬドラゴンマッスルだな！」

『まあ、普通に褒め言葉で受け取っておく』

悪く言われているわけではないし、タイタスは純粋に褒めているので彼らしい言葉だとドライグは納得する。

同時にオーブもオーブカリバーの力を解放し、自身の最大の必殺技の発動準備に入る。

それを妨害しようと再びマガレーザーを放とうとするまかだったが、それに合わせてゼットがあるものを作り出した。三本に増えたゼットスラッガーの二本から発生させた光波の刃を稲妻状のエネルギーで連結させヌンチャク状にし、それを高速回転させて盾のようにしたのだ。

アルファチェインブレード―アルファエッジの特徴的な技の一つである。

「デヤアァァァ!!」

かつて闇のベリアルがゾフィーのＭ８７光線をギガバトルナイザーを回転させて弾いたように、マガレーザーを弾きながら突進するゼット。マガパンドンもあまりの気迫に少し後退するが、その隙を見逃さずゼットは空高くジャンプし、レオやゼロと同じタイプのキック技であるアルファバーンキックを叩き込んだ。

「「ゴアァァァ!?」」

「うぐっ……」

マガパンドンは予想外の威力に後ろへと倒れ込むが、さすがにここでゼットに限界がきたらしく膝をついてしまう。

「もう十分だ！無理せず下がれ、ゼット！」

「俺に構わず……今がウルトラチャンスです……！」

ゼットはそういうものの、今撃てば間違い無くゼットは巻き込まれる。しかも今のゼットはまともに動けない。このままでは……と思った矢先、マガパンドンが起き上がってゼットを狙う。オーブもタイタスも既に必殺技を放つ準備を終えており、ゼットの言葉通り彼ごと撃つしかないと覚悟を決めた。

しかし、この土壇場で思いもよらぬ援軍が駆けつけた。

―踏ん張れ！相手から目を離すな！―

この声は、とゼットがハッとなると、夜空の月をバックにマントを靡かせながらあるシルエットが。

「俺の弟子を語るなら、根性見せやがれ!!ドリャアアアアア!!」

ゼットが師匠と慕うゼロが、ここにきて最後の援軍として救援に馳せ参じた。ウルトラゼロマントを纏ったまま、得意技のウルトラゼロキックでマガパンドンを再度ダウンさせ、ゼットに肩を貸しながらオーブとタイタスの背後へと下がる。

「ゼ……ゼロ師匠!?」

「初めてにしちゃ上出来だ。今回は褒めてやるぜ、ゼット」

「ゼロさん！相変わらず良いタイミングで駆けつけてくれる！」

「彼らがマガパンドンから離れた！今こそ決着の時だ！」

颯爽と現れゼットを救出したゼロに感謝しつつ、オーブとタイタスは勝負を決めるべく必殺技を放つ。

オーブはオーブカリバーのカリバーサークルを回し全てのエレメントを解き放ち、オーブカリバーを大きく頭上で回転させてエネルギーを集約、さらに己の持つ光と闇の力も混ぜ合わせる。

対するタイタスも右手ではなく、神器を装着した左手でエネルギー光球を生成する。打ち出す為の力を神器に頼るとし、エネルギー生成に全力を注ぐ。

「オーブスプリーム……」

『Ｂｏｏｓｔ！Ｂｏｏｓｔ!!Ｂｏｏｓｔ!!!』
『ブーステ「マッスルプラニウム……」えっ』

オーブとタイタス（一誠は言おうとした技名がキャンセルされた）の溜めに溜めたエネルギーが今、マガパンドンへと放たれる。

「カリバー!!!」「バスター!!!」

オーブカリバーから放たれた六属性のエネルギーの奔流と、神器によって倍化されたパンチで打ち出された特大エネルギー光球が寸分違わぬタイミングでマガパンドンに直撃する。

「ゴオオオオアァァ……!!」

二つの超エネルギーを同時に受け、断末魔と言えるであろう叫びを上げながらマガパンドンは消滅した。

「復活……とかしませんよね？」
「ああ。どうやら完全に消滅したようだな」

小猫の不安を消すようにサーガが答えると、リアス達は歓声を上げた。しかしまだ戦いは終わっていない。

「っていうか矢的先生は!?あのロボットだって戻って来てないぞ!?」

マガパンドンとの戦いがあまりの激戦だったので気にする余裕が無かったとはいえ、匙の言った通りまだ８０や巌勝、三日月は戦っているのだ。彼らを放置して喜んでいた事を恥じる一同だったが、突如天空よりバルバトスが勢いよく地上へ落下してきて、大地を震わせつ

つ着地した。

「三日月さんっ!!」

「そっちは片付いたんだ。やっぱ、やるじゃん」

「こちらはたった今ケリがついた!そっちは!?」

「これから。８０さんと、巌勝さんのターンＸがあの鳥モドキをここに叩き落とす。そこを俺が潰す」

カナエとオーブの言葉に返答しつつ、三日月はバルバトスの中から今も空中戦を繰り広げているであろう二人を信じ、最後の一撃を叩き込む準備に入る。

バルバトスの切り札―それは背中にあった。

☆

三日月からマガパンドンは倒されたという情報がコックピットに入電し、巌勝はそれを８０へと伝える。

「８０殿!どうやら地上はカタが付いたらしい!我々も仕上げといこうではないか!!」

「よし!ならば手筈通りに!!」

先程までマガバッサーを砲撃していたのか、ターンＸの左手にはバズーカが握られている。それをキャラパスには戻さず、ターンＸは真正面からまだ少しフラついて飛んでいるマガバッサーを迎え撃ち、８０はさらに高く飛翔していく。

この様子はサーガによって空中に映像投影され、戦いを終えたオーブ達を含む現在駒王学園にいる面々も見守っている。

「さてマガバッサー!いよいよ貴様も年貢の納め時!!潔く我らに討たれるがいい!!」

ターンＸがマガバッサーの頭部へとバズーカを連射する。未だマガバッサーが回復していないのはこの頭部への砲撃が原因であった。８０の姿が見えなくなったのもあり、マガバッサーはターンＸを標的に定め、突撃していく。しかしそれは狙いの一つ。ターンＸは尚もバズーカで狙い撃つがマガバッサーは回避……したところで翼に強烈な熱を感じた。バズーカではなくビームが翼を掠っていたのだ。

８０は依然姿が見えず、ターンＸは片手しか手持ち武器は使えないはず。今までの戦いからそう判断していたマガバッサーであったが、いざターンＸの方を向いてみると右手から三連ビーム砲を放っているではないか。

三連装ビーム投射システムと呼ばれるそれは携行武装ではない、ターンＸの固定武装の一つであり、右手は使えないのではなく使わなかっただけ。

「今まで全力でやり合っていたなどと思っていたのか!?魔王獣と呼ばれながら随分と頭が弱いようだな!!」

「ギュアァァァ!!」

厳勝の挑発にまんまと乗せられたマガバッサーはターンＸに再度突撃しようとするが、今度は後方上空から８０がムーンサルトキックを仕掛けてきた。こちらもギリギリ回避するが、それこそが８０の作戦。マガバッサーはその時の８０の体勢に警戒すべきだったのだ。何故なら―

「シュワッ!!」

「ギィアアア!?」

ムーンサルトキックの体勢のまま、向きだけを変えつつぐるりと突撃体勢のマガバッサーの下方へ円を描くように滑り込みながら、得意技のサクシウム光線を翼の付け根に放ったのである。まるでムーン

サルトキックをドリフト走行が如く移動技として使う『ムーンサクシウム戦法』と名付けられたそれは、空中戦を得意とし、計算された戦いこそが最大の武器である８０だからこその奇策だろう。
　これによりマガバッサーは片方の翼が吹き飛んだ。しかしながらなんとか飛行しているのはさすが魔王獣といったところか。だが下方からの攻撃に続き、さらに上方より予想外の攻撃がマガバッサーを襲う。

ザシュッ!!
「ガアァァァ!?」
「見事な技を披露した８０殿に見惚れるのは結構だがなぁ！こちらも忘れないでもらおうか!!」

　ターンＸがマガバッサーの背に張り付きながらガーベラストレートで翼の付け根を突き刺していた。しかも腱らしき部分を的確に捉えている。マガバッサーは苦し紛れに振り落とそうとするが、今までのダメージが蓄積されており満足に動けない。
　そして遂に、ターンＸのメイン武装とも言うべき右腕が隠されていた力を発揮する時がきた。ビームしか発射していなかったそれは、花開くように展開され五本指が如き様相となり凄まじいエネルギーがスパークし始める。

「貴様の生体反応のデータを取りつつ、神の国への引導を渡してやる！」

　マガバッサーは危険だと理解し、どうにかして逃げようとするも叶わず、ターンＸの必殺の一撃が放たれた。

「シャイニングフィンガーとはこういうものだ!!」

　スパークしているエネルギーをマガバッサーの翼の付け根に叩き

込むように右手を押し付けると、マガバッサーは激痛のあまりの暴れるがターンXは一切離れようとせず、遂には付け根から大爆発を起こしてもう片方の翼も丸々吹き飛んでしまった。
　既に８０によって片方の翼を吹き飛ばされていたマガバッサーは残りの片翼も失い、地上へと真っ逆さまに落ちて行く。ターンXはマガバッサーから離れてガーベラストレートをキャラパスの鞘へと仕舞い、シャイニングフィンガー…正式名称・溶断破砕マニピュレーターを閉じつつトドメを三日月とバルバトスに託す。

「下拵えは済ませた……三日月、そしてバルバトスよ！サーガ様の元で戦い続けてきた歴戦の勇士が、逃げてばかりの堕天使の翼から出来た獣などと違う事を見せてやれ!!」
「チーフやサーガが信頼する君の、君達の実力を改めて僕も信じよう！この戦いに幕を引くんだ、三日月・オーガス!!」

☆

　８０とターンXによってマガバッサーが両翼を失った事は地上の駒王にいる面々にも投影された映像で確認された。

「うおおおお!!矢的先生スゲェェェ!!」
「まさかキック技をスケートのように使って空中を滑り込む動きをするとは……！」

　匙やソーナは８０の戦法に感嘆の声を挙げる。

「おいゼット、お前ターンXのあの武器知ってたか？」
「いえ、メビウス兄さんのライトニングカウンター的なあの武器はウルトラ知りませんでした」
「ライトニングカウンターどころか一誠の神器でブーストしまくったレオの鉄拳じゃね？」

「ウルトラ納得ですゼロ師匠」

シミュレーターをやりまくっていた二人は初めて見るターンXの溶断破砕マニピュレーターをとんでもないものに例えていた。本気で洒落にならない威力だと一発で理解出来る例えだ。

そんなマガパンドン討伐組の会話を尻目に三日月はマガバッサーにトドメを刺すべく、バルバトス最強の攻撃力を持つ武器の準備に入る。

「皆、ちょっと離れてて」

「三日月さん、何かあったんですか？」

「今から鳥モドキを潰す。その為の武器を出す」

「え？武器を出すって、何か召喚するとか……」

「悪魔の名を持つとはいえ、機動兵器でそれは無いのではないか？」

アーシアやリアス、タイタスが疑問に思いながらも全員でその場から少し離れると、それを確認した三日月はバルバトスで手にしたメイスを両手で持ち、振るうように背中に近づける。すると、バルバトスのバックパックが分離・変形してメイスを覆うように連結していく。

「ちょっ……！何だそれ!?」

「何って、束姐さんが作ってくれた凄い武器」

「僕の『騎士殺し』が可愛く見えるほど物騒な得物なんだけど」

バルバトスのバックパック―それは本当はバックパックではなく所謂追加武装である。

正式名称『Ｖａｒｉａｂｌｅ　Ａｒｍｅｄ　Ｅｘｐａｎｓｉｏｎ　Ｕｎｉｔ』通称ＶＡＥユニットと呼ばれるそれはバルバトス本来のバックパックを覆い隠すように装備されており、かつその形態で様々な機能を発揮出来る為、勘違いされやすいのだ。

ＶＡＥユニットと連結させた可変式超弩級メイスを構えるバルバ

トス。可変式超大型メイスでも十分凄まじいインパクトがあったが、超弩級と化したメイスはその比ではない。
８０とターンＸによって両翼を失ったマガバッサーが天空より落下し、大地を大きく揺らしながら地上に叩きつけられた。同時に、バルバトスは空高く跳躍する。そんな中、三日月は先程聞こえたゼットの言葉を思い出していた。
―俺が繋ぎます!!―
彼は自分が未熟であると理解ながらも、決死の覚悟でマガパンドンへと向かって行き、ゼロに助けられながらではあるが見事その役目を果たしオーブとタイタスの必殺技へと繋いだ。

（皆は未熟って言うけど、俺はそうは思わない。ゼットさんはやった。やり遂げた。だから―）

次は自分の番だ。自分は８０と巌勝の二人に繋いでもらった。ここまでしてもらって失敗したら、二人どころか殆ど一人で役目を果たしたゼットに顔向け出来ない。

「やるぞ、バルバトス。必ず出来る……俺達なら……！」

”当然だ”―そう三日月の言葉に応えるようにバルバトスのツインアイが輝くと、空中で一回転しながら超弩級メイスをレンチメイス形態へ変形させつつそれを地面に突き刺すような体勢で急降下する。超弩級レンチメイス自体の重量に加えてバルバトス本来のバックパックに備え付けられたフレキシブルブースターによる加速は、うつ伏せ状態から起き上がろうとするマガバッサーを少しも立ち上がらせる事無く容易に押し潰す。

「ギィアアアアア!!」
「今度こそ捕まえたぞ、鳥モドキ……！」

超弩級レンチメイスに身体を挟み込まれ、同時に備え付けのチェーンソーにより削られていく。
当然かつてよりもその威力は大幅に上昇しており、魔王獣たるマガバッサーの肉体からはメキメキと万力に潰されるが如き音と、火花を散らせながらガリガリと削られる音が二重奏を奏で、そのあまりに壮絶な光景にウルトラ戦士すら圧倒されている。

「ガア……ァァァ……」
「これで終わり……だッ!!」

もはや苦しみの声さえ出せなくなっていたマガバッサーの胴体を断ち切り潰すべく、新型エイハブ・リアクターが唸りを上げバルバトスの出力が上昇する。そしてその身体をレンチメイスが挟み潰した瞬間、大爆発が起こりバルバトスを飲み込んだ。

『!!』

それを見た者達は衝撃を受け、アーシアは最悪な結果を思い浮かべ涙を溜め、ゼロやゼット、カナエら仲の良い”家族”は焦りを隠せなかったが、サーガの穏やかな一言がその不安を吹き飛ばす。

「心配ない。三日月とバルバトスは……決して止まらない」

その言葉に応えるように、その爆風を超弩級メイスで払いながらバルバトスが無傷の姿を見せた。獣が咆哮するような動作で、自分達の勝ちだと示しながら。
その姿が確認出来た全員は心から喜びの声を上げる。
長く激しい月下の死闘は、ウルトラ戦士・神衛隊連合軍の勝利という形で、今漸く終わりを告げた。

〈続く〉

面談、それぞれの成すべき事

激戦から数日後、オカルト研究部はレジェンド一家の仮住居に勢揃いしていた。正式にレジェンド及びサーガと面談する為である。

あの後、赤龍帝と対を成す白龍皇が現れたものの、コカビエルの死に様を知って落胆しつつ一誠に宣戦布告じみた事を言った直後、さっさと帰りたくてご立腹なレジェンドの、適当な力で放ったデコピン一発で鎧を粉々にされながらブッ飛ばされるというその他大勢的なデビューを飾り(幸いレジェンド以外に素顔は見られなかった)、裕斗は尻叩き千回というペナルティを受けるだけで無事?元通りグレモリー眷属に収まった。

「なあドライグ。アレ確かお前の宿敵ってヤツだろ?」

『まあ、そうだな』

「……こういうのもなんだけどさ、大丈夫かな?あいつ」

『分からん。ただ一つ言えるのは、アレはデコピンで出る音じゃなかったという事だけだ』

「……俺があの堕天司ヤローにやられた時よりとんでもない威力だったよな、あれで」

「当然だって。あの人、ゼロどころかレオさんやセブンさんの師匠でもあるんだぞ。ゼロに聞いたらこの間徹夜でレオさん共々ボコボコにされて気絶したって。しかも二人は変身した状態なのにレジェンドは人間体のままで」

『はい!?』

「U―40でもその名の如く伝説の存在として崇められているくらいだ。しかし服の上からでも分かる見事なウルトラマッスルだ!人間体でさえあれ程とは……!」

「そういやO―50の戦士の頂まで鼻歌歌いながら余所見しつつ平然と頂上まで登ったらしいぜ。おかしすぎだろ何なんだあの人。しかも襲ってくる怪獣や宇宙人、さらに天変地異を居眠りしながら撃退とかしたってよ」

『何それどんな変人!?』

アーシアとカナエ、矢的が苦笑している以外全員の意見であった。ぶっちゃけまともなエピソードはタイタスのものだけってどういう事だ。しかもフーマのが一番おかしい。

「ま、まあレイブラッド事変の筆頭解決者だしそれくらい……」
「あと別の宇宙だと、この星が簡単に消し飛ぶような光線をさも当然かのように吸収・増幅して押し戻した挙げ句それを撃ってきた惑星リセット兵器を一発で消し飛ばしたとか」
「レイブラッド並の究極生命体がその姿を見ただけで逃げ出したとか」
「喧嘩売った相手が尽く宇宙から消えたとか」
「「名前の通り伝説だらけで」」

どれもこれもヤバい事だらけである。ちなみにコスモスとジャスティスが一体化する事で一時的にその力を行使した時も含まれているが、実際はこれより凄まじい事をやりまくっている。

「待たせたな、お前達」

そんな話をしていたらレジェンドとサーガがリビングへ入って来た。レジェンドは両脇にオーフィスとスカーサハを抱きかかえて。

『いや何で!?』
「我、最後の場面で殆ど出番無かった」
「吾の方が出番無かったぞ。そもそもここ最近まともに喋ってない気がする」
「ロスヴァイセや涼子、ティアマットも似たようなもんだろ」

要は出番欲しさにくっついて来たらしい。件の二人は片や控えめ、

片やマイペースな為、外面上然程気にしてはいないみたいだが本音はどうやら……とにもかくにも必要なメンバーは揃ったという事だ。

ソファーに座ったレジェンドとサーガ、スカーサハ。オーフィスは定位置であるレジェンドの膝の上だ。

「さて、まずは何が聞きたい……と普通なら言うだろうがぶっちゃけ『最初から全部』とか言われるのが目に見えてるし、そんな事したらいつ終わるかマジで分からんくらい途方もない話になるから要点だけ掻い摘んでヨロシク」

『軽っ!?』

「レジェンド様、本来の性格ならクールで寡黙だけど、普段はいつもこんな感じよ？元のままだと周りの息が詰まるからって」

確かに最高位の光神が気を張りつめているような喋り方や雰囲気を醸し出せば余程の者でない限り萎縮してしまうかもしれない。そういう配慮からなのだが、本来の性格をあまり知らない面々から見たら今の方が素に思っても仕方ないだろう。

「しかしアレだ、俺とサーガもやる事あるし、お前達も明日からの学園生活だってあるだろ。今日のところは一人につき一つな。ハイ、被らないように作戦ターイム」

「や……やっぱり軽い……！」

「あの、私は被りそうにないので先に質問しても宜しいでしょうか？」

そう挙手と共に言ってきたのは朱乃だ。この瞬間、先日の出来事を思い出し妙な悪寒を感じた。

「まあ、被らない自信があるなら別に構わんが」

―ああ、コレ絶対に俺がどえらい目に合うパターンだわ―

レジェンドはこの時点で既に己の身に降りかかるであろう修羅場の予感を察知していた。だって朱乃の顔、耳まで真っ赤だもの。そして、その予感が現実のものとなる。

「レジェンド様はまだ独身ですか？」

「独身で悪かったなこの野郎」

レジェンドの機嫌が一瞬で最悪になった。なんで初っ端の質問が独身かどうかなんだよ、結婚してる奴がそんなに偉いのか？ええ？とか険しい顔で考えている。

これを見てアーシアとカナエは本気で焦りだした。あの日、イリナ&ゼノヴィアと刃を交えたあの日のレジェンドみたいになったらどうしよう。……が、ここでオーフィスが口を挟む。

「レジェンド、独身じゃない。レジェンドと我はラブラブ夫婦」

「勝手に捏造するなそこォ!!結婚どころか婚約者、恋人ですらないだろ、まだ!!ぶっちゃけ俺、お父さんとかお母さん扱いされるんだけど!!前者はともかく後者の意味がまるで分からないんだけどォォォ!!どっちにしろ保護者だろチクショォォォ!!」

「そうだぞオーフィス、吾もその発言には抗議「スカーサハも一緒にイチャイチャしていい」……まあ、それなら……」

「おいィィィ!?何あっさり懐柔されてるんだお前は!!というか抗議ってお前自分の願望叩きつけたかっただけじゃないのかソレ!!俺の意見ガン無視ですかァァァ!?」

今日もレジェンドの切れ味鋭いツッコミは健在である。正直ウルトラマンとして活躍するより生身でボケとツッコミを両立しつつ時折真剣モードで戦ったり指示出したりした方が良いんじゃないのか。

「では私はどうでしょうか？」

「「「「ゑ？・」」」」

レジェンド、オーフィス、スカーサハ、カナエ、そしてアーシアの時が止まった。さり気なくサーガやオカ研メンバーも。

「駄目ですか？」

「いやいやいやいや駄目じゃないけどさ。普通ならこうカモン！とかタイガスパークっぽく言うんだろうけど俺は光神たるウルトラマンなわけだよ。つまりだね、俺とゴールインするって事は下手すれば今の家族と離れ離れになるという事が確定するのでございますぜ」

「あの、レジェンド……言葉遣いがゼットみたくなってます」

さすがにパニックになってるレジェンドだったが、肝心な部分はしっかり伝えている。朱乃と両親の仲が良いからこそレジェンドは簡単に言うなと釘を刺したわけだ。

「立場上留守にする事も多いが、俺はすぐにここを立つことはない。しっかり考えて、それでも付いてくると言うなら俺はそれを突き放したりはしないからな。結婚云々はまた別だが、そういう自分の将来に関わる事はちゃんと両親と話しておけ。嘘偽り無く、正直にな」

「はい」

意外というか、あっさり朱乃は引き下がる。というのも別に拒絶されたわけじゃなく、自分を思いやっての言葉だと理解出来たからだ。それに、この後の事も既に決めてあるし、両親にも伝えたところ文句なしに賛同された。

「ふう……どうやら一問目は無事終了か。オーフィスとスカーサハは俺の手を自分達の胸に持っていくな。何がしたいんだお前ら」

「レジェンドに『ひんにゅー』の良さを教えるってスカーサハと相談した」

「お主はきっと知らず知らずの内にあの胸にやられておるのだ！その目を覚まさせるには多少強引かも知れぬがこうするしかない！」
「お前らが目を覚ませ。んな事言ったら乱菊とかどうなるんだ。そもそも寝る時毎日素っ裸になるオーフィスと寝相の悪さで寝間着が開けるアーシアの二人に挟まれながら寝てる俺がそんなものでやられるか」

アーシアは真っ赤になっただけだが、オーフィスは思い返して「我が一番リードしてる」と得意気になり、スカーサハとカナエには『また』一緒に寝る事を約束させられた。レジェンドは無事に寝れるのだろうか。精神的にはもちろん物理的に。慣れない状況だとスカーサハが寝ながら顔面にのしかかってくるし。繰り返し息ピンチになりそうである。

「……そろそろ私達もいいですか？」
「おう。頼むから現状を軌道修正してくれ」

レジェンドの切実な願いにリアスは苦笑する。

「まず、私から……疑っているわけではないのですが、貴方が本当にかの光神様だという事を示して頂きたいんです」
「え!?ちょ、リアス!?」

タイガがさすがにそれは、と止めようとするがレジェンドはそれを制する。

「まあ、それは最もだな。自慢じゃないがここまでネームバリューがあると成り済ましとか色々出て来てこっちも困るんだよホントに。んで、それを示すのは……そうだな。確か技術解析して普及したりしてなければ光の国と冥界の間で贈り物出来る装置はグレモリー家とシトリー家にしかないはずだが」

「!!」
「あとこれはグレモリー家に聞いてもしょうがないというか分からないと思うが、なんかセブンが俺のグッズがあったら是非送ってほしいとか言われたらしいんだけど、何か知らないか？」
「い、いえ……」

そういえばレヴィアタン様が光神様の熱烈なファンだった、とリアスは思い出しながら装置の事でレジェンドが本人であるとほぼ確認出来た。

「つかぬ事お聞きしますが、装置に関しては何処でその事を……」
「作った本人だし。宇宙磁気嵐のせいで故障して、性能アップも兼ねて当初より一年先延ばしになったけどな。ついでにその磁気嵐は何処ぞの宇宙人が原因だったから準備に気合を入れまくってたタロウがブチ切れて、スーパーウルトラダイナマイトでそいつの拠点ごと跡形も無く吹き飛ばしたそうだ。威力は当社比六倍」
「な、納得しました」
「父さんそんな事してたの!?」
「やべぇ……タイガの父さんに喧嘩売るような真似絶対しないようにしとこ」

製作者本人なら分かって当然だ。タイガは初耳だったようで父のやった事に驚いていたが、一誠は見たことないタイガの父・タロウが本気で出鱈目な実力者だという事が垣間見えたので深く心に誓った。
次に挙手したのは小猫。

「あの、ソランさん……あ」
「いや、名乗った以上それでも構わない」
「オイちょっと待て。サーガ、お前ちゃんと人間体の名前でも呼ばれてんの？俺は名字さえロクに呼ばれないのになんでだコノヤロー」
「落ち着いてくれ先輩。愚痴は後で聞くから、このままでは先に進ま

ない」

やはりと言うかなんというか、当然反応するレジェンド。人間体での名前というのは各種防衛チームに所属していた時はしっかり呼ばれていたので思い入れがあるようだ。ウルトラアクセスカードにも文句つけてたし。

「えっと、ソランさんも光神様らしいですけど、そちらのレジェンドさんとの関係は先輩と後輩でいいんですよね？」

「ああ。正確には最高位たる先輩の側近的な立場……上司と部下が正しいのだろうが……深く言えばそれだけではないな」

「何か事情が？」

「俺は正しく、先輩に育てられた」

これはアーシアやカナエも知らなかった事だ。知っているのは三超神や当時のサーガを知る者に限られる上、そもそもこうして聞かれなくては自分から話す事もないのであまり知れ渡っていないのである。レジェンドは鮮明に覚えているようだが、もう途方も無く昔の話なのでサーガ自身は印象深い思い出以外あまり覚えていない。

「光神は生まれ方が生物のそれとは違う上、俺は他のウルトラマンと外見もかなり異なる。その為に周囲では俺を引き取ろうという者がおらず、そんな俺を引き取って育ててくれたのが先輩だ。一度は父さんと呼ぼうと思ったが『自分は独身だし、光神たる立場上、将来的には上司部下の関係になる』という事で兄さん呼びも断念し、先輩呼びに落ち着いたというわけだ」

「あの、その……ごめんなさい……」

小猫だけでなく、トライスクワッドも含め皆申し訳なさそうな顔をしている。知らなかったとはいえ安易に踏み込んではいけない領域に平然と足を踏み入れていた。しかしサーガとレジェンドは別段気

にしていない。

「俺が自分から話した事だ。そちらが気に病む必要はないし、今の俺には多くの家族がいる」

「考えてみたらゾフィーとかマンとかもアレ普通に所属的に上下関係あるけど普通に兄さん呼びしてた、とか思ったけど相当長年続き過ぎて今更兄さん呼びに変える事もないだろって事で現在に至るわけで」

サーガは神衛隊や自身の御使いを思い浮かべながら話し、相変わらずレジェンドは軽かった。そもそも当のサーガが気にしていないのに当事者の片割れであるレジェンドが変に突っ込んで言う事でもない。本人が心から今が幸せと言えるならそれでいい、という親心でもある。

「……我がレジェンドと結婚したら我がサーガのお母さん？」

「オーフィスの事は先輩呼び出来ないからそうなるな」

「だからさり気なく言質取ろうとするんじゃありませんんんん!!

サーガも平然と答えんでよろしい!!」

やっぱりオチがあった。他数人も何やら考えていたが、カナエは「私はお姉ちゃん呼びが良いなー」とか言っている。ブレないな姉属性。

残る二人のうち、一誠が手を挙げた。

「えっ……と、光神様自身に関係するんじゃないけどいいですか？」

「変な質問じゃなきゃ答えるぞ」

それじゃ、と一誠が指差しながら聞いてきたのはオーフィスの事だった。

あまりに周りが凄まじい人物なのに加え、普通かつ自然に居すぎて反応が遅れたが彼女も相当有名である。

「……我？」
「ああ、そうか。『無限の龍神（ウロボロス・ドラゴン）』のオーフィスで間違いないぞ」
「だってさ、ドライグ」
『……やはりそうだったか。先日は忙しなかったから確認が遅れたが、久しいなオーフィス』
「ん、久しい。マダオ」
『ああ、そう……オイ何だそのマダオってのは』
「まるでダメなオスドラゴン、略してマダオ」

どうだ、と言わんばかりに胸を張るオーフィスだか当然ドライグは反論する。

『誰がマダオだ!!』
「タイラントって怪獣にボロ負け、瀕死のところにトドメを刺されて神器化、当たり外れを繰り返して今だにアルビオンと決着が着いてない、あとティアマットから借りたアイテムをまだ返してない。だからマダオ」
『ふぐっ!!』

完膚なきまでに言い負かされた。二番目と三番目は仕方ないにしても最初と最後は自己責任だ。特に最後。

「たぶんティアマットは文句言いに来る。覚悟してた方がいい」
『そ、それは悪いと思っているがアイツは今冥界だぞ？あの巨体ではそうそう出て来ないだろ』
「……我は不本意だけど今ティアマット、レジェンドの使い魔やってる。一緒に暮らしてる」
「『はい？』」

信じられない事を聞いた気がするのだが。追求しようとしたとこ

ろ、ドタドタと何かが近づいて来る音が聞こえ、リビングのドアを勢いよく開けた。

「きっと旦那様が私を呼んだ！レジェンド様！貴方の使い魔、未来の正妻！天魔の業龍ティアマット、愛する貴方の為に馳せ参じへぶっ!!」

「ティアマットうるさい」

何を察知したのかティアマットがやって来たがオーフィスのドロップキックを顔面に受けて倒れ込む。ついでにドライグは真っ青状態。まさかここまで早く遭遇するとは思ってなかった。

「ティアマット!?彼女が!?」

「どう見てもファンタジー物に出てくる格好……いや、悪魔がいるわけだしファンタジーでも別に良いんだけどさ」

「ていうか大丈夫なのか？アレ結構派手に入ったぜ」

「さすがに顔までは鍛えられないな。良くて額までだ」

「違う違う心配するところはそこじゃない」

リアスは普通に驚くがタイガは服装を、フーマはオーフィスから受けた攻撃のダメージを気にしていた。タイタスだけは鍛えてあるかないかを重視していたが。

「相変わらず私の扱いだけ雑じゃないですかオーフィス!?そんな事してたらレジェンド様に嫌われますよ！ライバルが減るなら私は一向に構いませんけど！」

「……レジェンドはそれくらいじゃ嫌わない」

ぎゅ、と服を掴むオーフィスはどことなく不安そうだが、レジェンドが溜息を吐きつつ頭をポンポンとしてやるとそれも払拭されたようだ。

「オーフィスはすぐにティアマットに攻撃しない。ティアマットは何処その巫女狐みたいな言い方で登場するな」
「……ん、分かった」
「これ即席で考えたんですけどね……ん？」
『ビクッ!?』

ティアマットが一誠の方を向いた事でドライグはビビった。神器は出てないし大丈夫だ、大丈夫……と考えていたがそれは甘かったとすぐに知る。

「あ～！ドライグ！ここしばらく姿を見ないと思ったら!!そんなマダオの体現みたいな形になってたんですね!!」
『オイお前まで俺をマダオ呼ばわりか!?ていうか喋り方……』
「まあ貴方がどうなろうとどうでもいいです。いい加減借りパク状態の私の貸したあれ返して下さいよ！あれすっごくレアなんですよ!?」

これに対してドライグはあーうーと口籠り、仕方無しに事実を述べる事にした。

『……すまん、神器化されて以来行方知れずだ』
「……は？」

ティアマットの表情が凍る。どうやらレイブラッド事変が元で神器化してから自分も見かけていないらしい。だったら早く返しとけと言いたいが。

「どぉぉぉしてくれるんですかぁぁぁ!!あれがどんなに貴重で、珍しくて、大切で……私の……私の……貴様の魂で弁償しろマダオォォォ!!」
「『ぎゃあああああ!!!』」

哀れ一誠。ドライグのせいで一緒にティアマットからネックホールドかまされるハメになるとは。しかもティアマットの口調まで変化してるし。

とりあえず見つけ次第、死力を尽くして回収し即時返還するという事で話はついたが、代わりにこの場で一誠が力尽きた。合掌。

「死んでないけど……死にそう……」

「「ドンマイイッセー……」」

『すまん、相棒……』

トライスクワッドからは同情され、ドライグからは本気で謝罪される一誠。これで残るは裕斗のみ。なお、カナエとアーシアはレジェンド一家のため除外。トライスクワッドも大体の事情はゼロや８０から聞いている為、今回は遠慮している。そして矢的は頻繁に連絡を取り合っているしその必要が無い。

「それじゃあ、最後は僕が。あの日から彼女らの姿が丸っきり見えなくなったんですが、デュランダルを使っていた彼女はやはり教会から……」

「それに関しては本人から聞いた方が早いな。そろそろ戻って来ると思うが」

「「「「……へ？」」」」

戻って来るとはどういう事かと思ったら、何故かリビングに『空色デイズ』が流れ出した。どうやら着うたらしい。

「え？何この曲……」

「私のウルフォンのものだ」

『!?』

そこには巌勝とガイ、そして巌勝に俵抱きされてる気絶したゼノヴィアがいた。

『いやソレ何でそうなってるの!?』

「さっきまで勉強部屋ってとこで俺と巌勝さんで彼女に修行つけてたんだよ。俺とは暫く持ったが巌勝さんが相手になった途端、マッハで終了してこんな風になってさ」

「おかげで私の鍛練はおろか準備運動にさえならなかった。これは継国式特殊鍛練法で殺るしかない」

「ちょっとおおお!?字が違う！マジで殺す気ですか!?」

正直継国兄弟しか出来なさそうなこの鍛練法、実は継国道場で一般化されてたりする。そしてこれによって大幅なパワーアップを果たした全集中・常中を会得している門下生が日本地獄など諸々の場所に就職しているのだ。マジパネェ。

などとやっている間にゼノヴィアが目を覚ました。

「うう……私の手足や上下半身、首は繋がっているだろうか……」

「なんか凄く怖い事聞こえたんだけど!?」

意識を取り戻したゼノヴィアを先に座らせ、続けて巌勝とガイも着席する。さり気なくレジェンドから巌勝に茶が、ガイにはラムネが差し出され、巌勝は軽く頭を下げ、ガイは嬉しそうに笑顔で礼をした。ゼノヴィアはぐったりしていて今はいらないらしい。

「ガイさんはそれが好きなんですね」

「ああ。風呂に上がりの一本が特に格別でね。やっぱりこの星で最高の贅沢は一番風呂だな」

クレナイガイことウルトラマンオーブ、風呂とラムネをこなよく愛する遊撃隊員である。それはさておき。

「では先程の疑問の答えだが、彼女……ゼノヴィア・クァルタは俺の『御使い』になった」
「「「「はい？」」」」
「手っ取り早く言うとな、俺で言うとアーシアみたいなもんだ」
「私ですか？……あ、そういえば」

レジェンドに巫女たる自分がいるように、ノアには神使、キングには秘書というお付きがいるという事を教えてもらっていたのを思い出したアーシアは、サーガのお付きは御使いという事も同時に思い出す。巫女は現状アーシアのみなので分かりやすい例えだ。

「「「「いや何でそうなった⁉」」」」
「……もう分かってるとは思うが、主の死を知ってからというものあからさまに態度が変わって、終いには追放されてね。イリナは最後まで庇ってくれたが、つい先日私の分のエクスカリバーと統合されていた物の核……計六本分のエクスカリバーを持って帰ったよ」
「そんな……」
「それで正直、もうどうでも良くなっていっその事悪魔にでもなってしまおうかと思っていたところ、『となりのペドロ』を観終わったサーガ様や巌勝師範らとばったり会ったんだ」

マジでとなりのペドロを観に行ったようだ。ちなみに最初はギャグ映画と思っていた巌勝だったが、観終わった後はサーガ、三日月同様目尻を抑えて感動していたらしい。マジで内容が気になる。

「それからまた食事を奢ってもらいつつ全て包み隠さず話したところ御使いとして仕える気はないか、と聞かれすぐさま了承したわけさ」
「いやちょっとは悩めよ⁉」
「主は死に、歩むべき道を見失っていた私を拾ってくれたのはかの有名な光神のご後輩。主より上に居られる方のお付きになるなど願っ

てもない事だ。悩む必要はなかったな」
「うむ。即答だったな」

　厳勝は今やゼノヴィアを弟子として鍛えている。デュランダルに振り回されがちなので、それを制御出来るようになってからが呼吸法習得に入る予定だ。修行どころか瞬殺されてそれ以前の問題ではあるが。

「そうだ、まだ君に謝っていなかったな。アーシア・アルジェント、すまなかった。主が死んでいるならそもそも愛も何も無いのは当然だが、レジェンド様を信仰していたのなら初めて会った時の態度も納得がいく。私の早とちりで不快な気分にさせてしまった」
「い、いえ！信心深いのは良い事だと思いますし、本当に気にしてませんでしたから！」
「あまりぶり返す事でもないし、これからは同じく光神様に仕える者として仲良くしてくれると嬉しい。少しではあるがこちらでは君の方が先輩だし、宜しく頼むよ」
「はいっ！あ、先輩後輩ってレジェンド様とサーガ様みたいです」
「言われてみればその通りだな」

　どうやらわだかまりもすっかり無くなって良い感じだ。先日サーガ達が連れ帰って全て聞いた時はレジェンドがジャーマン・スープレックスをかけたけど。マジギレしなかっただけ助かったと思いたい。

「さてと……今日のところはここまでだ。お前達もこれからの事を話し合う必要があるだろうし、早く帰って意見をまとめておけ。それぞれ連絡を取る相手がいるだろ」
「えっ……」
「あの、最後にその娘の事を……」

小猫からスカーサハの事を尋ねられた。確かに紹介していなかった、出番欲しさに付いてきただけで。

「スカーサハ、本名は真龍ディアドラ。空の世界出身だ」
「長い付き合いになろう、宜しく頼むぞ悪魔の子らよ」
「「「「空の世界?!」」」」
「ま、そうなるわな」

空の世界—あの堕天司ベリアルが言っていた星晶獣について知っている可能性のある人物。ぶっちゃけ真龍とかはどうでもいいらしく、スカーサハはちょっと不満げだ。

「な、なあ……空の世界出身ならあの堕天司っていう……」
「生憎だがな、スカーサハは空の世界出身だが、そいつに関しては知らんそうだ。後で映像記録から検証したんだが、その魂の出身地を示す『出身世界座標』が微妙にズレている」
「おそらくは平行世界……吾がアルスター島と運命を共にして『空の底』に落ちたのではなく、しっかりと今も存在している空の世界から来たのであろうな。吾がいた空の世界にもそやつと同じ者がいるはずだ」

振り出しに、とまではいかないがそれに近い状態に戻ってしまった。そして出た結論と言うのが……

「一度空の世界に行って色々調べた方が早いであろう。幸い吾がいる事で吾のいた空の世界への転移は容易いだろうからな」
「まあ、あいつのいた空の世界へ転移して向こうのスカーサハとうちのスカーサハが出会ってさあ大変、なんて笑えんし。ついでにあいつの出身世界座標、記録映像だし仕方ないとはいえ下六桁ブレまくりで分からないんだよ。只でさえ座標って最低でも２０桁分の数値で構成されてるってのにそんなん解析してられるか面倒くさい」

最低って事はもっと多くの桁で構成されるのもあるという事だが、よくそんな数を覚えてられるな。さすがとしか言いようがない。てか最後本音出てるんですけど。

「ま、そういうわけで俺は一度空の世界に行ってみるさ」
「俺も一度アクアエデンに戻る。どうやら弾かれた者が神衛隊附属病院に運び込まれたらしい。運ばれたのがそこである以上、俺が見舞うのは当然だろう」
「てなわけで本日は解散！あとはお前達の話が各々まとまってからだ」

レジェンドの締めの言葉で面談は幕を閉じる。リアス達の帰り際に、後日からゼノヴィアも学園に通う事が伝えられ、同時にオカルト研究部に入部する事も合わせて告げられた。
既にゲンやレイト、黒歌らはレジェンドからある許可を貰っている。向こう側に関してはジェントとシックルに一任しているし、後はオカルト研究部の意思のみ。

光神達とオカルト研究部の道が漸く交わり始めると同時に、新たなる目標へ向けて各々の準備も始まった。

〈幕間へ続く〉

幕間

オカルト研究部の新たなる出発

レジェンド達との面談を終えて帰宅する間、一誠はある事を考えていた。ゲンやレイトと修行して、ライザーとのレーティングゲーム以降も自主練は欠かしていない。

しかし、堕天司ベリアルには怒りで冷静さを欠いていたとはいえ禁手化していたにも関わらず一撃で、しかも相手はまるで本気を出していないのに戦闘不能にされてしまった。

今のままでは絶対に勝てない。仮に成長出来たとしても、向こうもこちらと遭遇していない間にさらなる力を手にしている可能性もある。

「このままじゃ……駄目だ」

「イッセー？」

「結局俺は師匠や先輩が言ってたように、神器頼みの強さしかない。この間の事でハッキリした」

「でもよ、アレはあいつが想像以上に強かっただけだろ。イッセーはほんの数ヶ月前まで一般人だったんだし、そんな急に強くなれるわけないっての」

「むしろ、この短期間でそこまで成長しているのが信じられないくらいだ。それは努力の賜物と誇っていい。だが、それ以上となると時間が必要だ。急ぎ足で進めばいざという時に足元の小石に躓いて、下手をすれば取り返しのつかない事にもなりかねない。千里の道も一歩から、焦って駆け出すよりしっかり踏みしめながら進むべきだぞ、イッセー」

フーマの言う通り、自分は最近まで普通の高校二年生だった。そしてタイタスの言葉も正論だ。無理をしても、いつでもアーシアや卯ノ花に治療してもらえる……そう思ったら大間違いである。

オカ研に所属しているアーシアはともかく、卯ノ花はレジェンド直属の人物であり専属医。彼に何かあればそちらを優先するのは当然だ。

「あの魔王獣って奴との戦いだって、俺はタイタスに身体と神器を貸し与えただけで他は何も出来ちゃいない。ドライグの言う白いのって言う奴の事もあるし、俺自身がレベルアップしないと駄目なんだ」

「それを言ったら俺だってそうだ。タイタスのように筋力に優れてるわけじゃなければ、フーマのように早さに自信があるわけでもない。バランスが取れてるって言えば聞こえは良いけど、ゼロみたいに器用万能じゃなくて……俺は器用貧乏だ」

「タイガ……」

「俺達は、もっと強くならないといけない」

一誠もタイガも思いは同じ。あの戦いは前哨戦か、もしかしたらそれですらないかもしれない。この先激化するであろう戦いに備えてさらに力を付ける必要がある。

「イッセー達もそう思ってたのね」

今まで黙っていたリアスが一誠やトライスクワッドに声を掛けた。

「丁度私もそう考えてたの。それに、どういう事か分からないけど、あの男はイッセーを『特異点』って言ってたわ。確証はないけど、これからもイッセーは狙われるはず。最悪、その為だけにイッセーのお父様やお母様に危害が加えられる可能性だってある」

「ちょっ……リアス」

「いいんだ、タイガ。部長の言ってる事は事実だし」

「ごめんなさい、イッセーが悪いわけではないの。だから、表面上は下宿、実際は修行を兼ねた保護という名目でお姉様達を頼ろうと思ってるの。幸い、ついさっき連絡を取ったら既にレジェンド様からの許可

は得ているって。あの方、恐ろしく理解が早いみたい」

実際は事前に黒歌やレイト、ゲンから要望があったからなのだが、レジェンドとしてもタイガらが一誠と一体化している以上近くにいた方が何かと都合が良いという理由もある。

「じゃあ、もしかしたら師匠達も……」

「ええ。きっと賛同してくれるわ。そうなったら、あとはイッセーのご両親にもおおとり師範や矢的先生、お姉様と一緒に相談しないと。今までお世話になったのに黙って出て行くなんて不義理にも程があるもの」

「そうですよね……よし！俺、師匠と先輩に連絡取ってみます！」

暗い気持ちを吹き飛ばした一誠を満足げに見つつ、さり気なく手を繋ぐリアス。タイガらはそれを微笑ましく見ながら自身らも決意を新たにする。

その後、連絡がつきゲンが矢的、ハリベルと共に後日一誠の家に伺うという事で話がついた。その時の会話で、こういう事態になった時は受け入れてほしいとレイトがレジェンドに頼んでいた事を聞いた一誠は、心から兄弟子に感謝した。

各々の帰路に立っていた朱乃、小猫、そして裕斗も似たような事を考えており、それぞれ相談相手に連絡し準備を進めていた。

☆

【小猫の場合】

「さあさあ白音、お引っ越しにゃお引っ越しにゃ～♪」

「お～い！仕舞えたもんからダイブハンガーに転送するからこの装置の上に置いてけよ～！」

翌日、日曜日だった事もあり小猫はすぐさまダイブハンガーへと引っ越しする為、黒歌や夜一はもちろん、アスカやジャックも手伝いに来ていた。ダイブハンガーにはレイトを筆頭にミライや乱菊やアーシア、それにゼノヴィアと涼子に加え、もう少し滞在すると言っていたガイが残っている。
レジェンド一行は空の世界へ、サーガ組とカナエは惑星レジェンドへそれぞれ行っており、他に卯ノ花（とハイパーゼットン）が姫島神社へ、ゲンとハリベルは矢的と共に一誠宅へ行っていた。裕斗に関してはちょっと特殊なので後程説明するとしよう。

「小猫ちゃん、これは纏め終わってるかい？」
「はい、大丈夫です。ありがとうございますジャックさん」

元々すっきり整頓されていた部屋なので、引っ越しにはあまり時間が掛からず粗方転送し終えてからは身に着けられるものだけ持って部屋を引き払い、黒歌と夜一に手を引かれながら仮住居に向かっていた。

「彼処から行くんですか？」
「うむ。転送装置が二種類あっての。一つはお主も行った事のあるハンターズギルドへの、そしてもう一つが儂らの住むダイブハンガーへのものじゃ。どちらも仮住居やハンターズギルドと同じく資格無しでは入れんからのう」
「白音の部屋は私と夜一のお向かいさんにゃ！」

黒歌は小猫と漸く一緒に暮らせるとあってハイテンションだ。正直、小猫が落ち着いているのもあって、黒歌がデカい妹にしか見えない。
ここで小猫が気になった事に聞いてきた。

「あの、アスカ……さん？」

「お、なんだい小猫ちゃん」
「えっと……ソランさんは？」
「ソラン？ああ、サーガの事か。今朝朝一で惑星レジェンドに向かったぜ。なんでも神衛隊のダイブハンガー着任手続きとか、あと機動兵器の教導官として二人程……えーっと……そうだ、第四分隊だ！そこから出向してくるからその迎えも兼ねて、だってさ」
「ま、まさか噂のアムロ・レイとか……!?」

小猫の質問に答えたアスカの台詞から戦々恐々としている黒歌だが、そもそも彼はそんな手当たり次第襲い掛かる人物では無いというのに。
アスカは黒歌の質問にいいや、と首を振って答える。
「なんかアムロって人じゃないみたいだぜ。詳しくは聞いてないから分かんないけど」
「……カナエ先輩はどうして？」

そう、一番の疑問はこれだ。レジェンド一行について行くならともかく今回は何故カナエがサーガ達に同行したのか。これに答えたのはジャック。
「どうやら弾かれた者というのが彼女と関わり合いのある人物かも知れないからしい。二人いるとの事だが、どちらも知っているみたいだった……というか、片方は聞いていた僕やアスカでも驚いたくらいさ」
「片方……ですか？」
「確か名前は……胡蝶しのぶ」
「……え？」

その片方はカナエの、血の繋がった妹だった。
小猫は動揺しながらも、仮住居への道を歩く。

【朱乃の場合】

バラキエルは戦慄していた。目の前で穏やかな顔をした規格外の、隠された真の実力を感じ取って。

だがしかし、実際は別のものが原因である。

「じぇっとん」

テーブルの上、規格外たる卯ノ花の前で可愛らしく正座している滅亡の邪神。

かの事変にてゼットンの実力を見ていたバラキエルはそれに酷似した小さな生物が目の前で正座してこっちを見ている事に冷や汗流しまくり状態だ。

(待て待て待て!!何だアレは!?何でこんなところにいる、しかも小さくなって!!しかもこっち向いてるし、あの火球を発射する気か!?マズい、マズいぞ……この距離では防御も回避も出来ん、最悪朱璃と朱乃だけでも逃さねば……!!)

「お待たせしてすみません、お茶の用意をしていたら遅くなってしまって」

「いえ、訪問させて頂いたのは私達の方ですし、お気になさらず」

「じぇっとん」

バラキエルがあれこれ考えてる間に、朱乃の母である朱璃がお茶と牛乳を運んで来た。しかし異形の生物を見て殆ど動じてないあたり、さすが朱乃の母親である。見た目は姉か、双子でも十分通用するが。

「貴方は牛乳で良いのよね?」

「じぇっとん」

小さめのコップに入れられた牛乳を前に置かれると、ハイパーゼットンは正座したまま身体を朱璃に向けてしっかりとお辞儀する。若干土下座っぽいが、そこいらの連中よりよっぽど礼儀正しい。

「あらあら、可愛らしいのにちゃんとしてらっしゃるのね。卯ノ花さんがお育てに？」

「いえ、ここまで育てたのは私が仕えている方です。今はこうして愛らしい姿ですが、本来の姿は雄々しく凄まじいものですよ」

（いやこんなの育てたの誰だ!?しかも凄まじいどころじゃないだろ絶対に!!）

汗が滝のように流れ出ているバラキエルの考えは最もだ。このハイパーゼットン、物凄く小さな幼体の頃よりレジェンドが甲斐甲斐しく大切に育てた結果……サーガがやり合った、バット星人と一体化した個体よりも遥かに強く知能も高い反則超えの個体になったのだ。

このハイパーゼットンに加え、圧倒的攻撃力とタフさを誇るゴジラと、恐るべき進化を遂げていくシン・ゴジラの三体を従えていたレジェンドがどれ程の存在か推して知るべしといったところか。

「それで、本日お伺いされたご用件は？」

「はい、朱乃さんの希望による私達光神陣営への下宿のお願いに参りました」

「!!」

まさかの光神陣営からの使者とは思わず驚愕するものの、下宿と聞いて気になった。

「卯ノ花さん、下宿……というのは」

「ご息女である朱乃さんはこの数ヶ月で幾度となく怪獣に遭遇しており、そのいずれもがある細胞に侵されたものであった事がまず理由の一つです」

「その細胞というのは？」
「ゴーデス細胞……細胞でありながら明確な意思を持ち、侵された者を怪獣へと変貌させゴーデスの手先とする恐るべきものであり、最近では堕天使コカビエルもそうなりました」
「何だと!?ではコカビエルが死んだというのも……」
「事実です。ただ、怪獣になる際に別の堕天使……いえ、堕天司というものが何か手心を加えたようですが」

朱璃はもちろんだが、バラキエルはさらに戦慄した。コカビエルの死はグリゴリ内でも大きな衝撃があったが、かの白龍皇が見ただけで信憑性としては五分五分だったのだ。しかし、その死が事実であり理由がハッキリしたとあれば話は別だ。その堕天司なる人物も気にかかるところではあるが……

「お二人が懸念されているであろう事も分かります。こちらとしても、朱乃さんが狙われる可能性があるかも知れないからこそ保護と修行を兼ねた今回の提案であり、朱乃さん自身がお願いしてきた事なのです」
「え……？」
「朱乃から、だと？」

卯ノ花の隣で今まで黙っていた朱乃が頷きながら答えた。

「これから先、今起こっているような事が起こらないとは限りません。だから私は、今より強くなります。あの方を、少しでもお傍で支えるために」
「あの方？」
「はい！あの日、お母様と私を助けて下さった方です！この町で信仰されている光神様だったんです！」

真剣な表情から一変、朱乃が嬉しそうに話し出した。それを朱璃は

微笑ましく見ているが、バラキエルは動揺しまくりである。

「ま……待て、朱乃。私にもなんとなく予想はつくが、相手はあの光神様だぞ？普段なら見る事さえ叶わぬまさに雲上通り越して幻のお方だ。いくらなんでも……」

「こちらをご覧ください」

「「？」」

バラキエルと朱璃、ついでに朱乃も卯ノ花が差し出した紙を見る。そこには別の意味で衝撃的な事が記されていた。

○惑星レジェンドの発展・維持に貢献した者
○惑星レジェンドの歴史に名を残した者
○失う事は惑星レジェンドにおいて重大な損失であると認められた者
○全ての配偶者に対して平等に愛情を注げる者
○全ての配偶者及び家族を養える財産や環境を持つ者
○人格的にも問題が無いと判断された者
○本籍を惑星レジェンドに置き、そこに生きる全ての者達と限りない時を生きて行く決意がある者

上記全ての項目を満たした者は惑星レジェンドにおいて一夫多妻権の行使を容認する。

惑星レジェンド及び【レジェンドエリア】総括
最高位光神ウルトラマンレジェンド

レジェンド直筆サイン付きの一夫多妻制を容認する証書であった（但しコピー。原本はレジェンドの自宅にて厳重保管）。

「卯ノ花先生、これは……！」

「あの方自身、全ての項目を文句無しのレベルで満たしています。さらに言うなら私は『あの方の一夫多妻』容認派ですし。現世ではよく言うでしょう？」

にっこり笑って卯ノ花は、レジェンドがいたら即座にツッコミを入れるだろうとんでもない事を言い放つ。

「想い人、共有すれば問題ない……と」

「赤信号みんなで渡れば怖くない、というノリかっ!?」

レジェンドの代わりに黒一点のバラキエルがツッコんだ。しかしキレが足りない。レジェンドの場合はこうである。

『問題大アリだァァァ!!みんなって何!?どんだけシンパ作ってんの!?共有とか人じゃなくてモノ扱いされてるだろーが!!』

少なくともこれくらいは言うだろう。

しかしそんな事はどうでもいいとばかりに朱乃が卯ノ花へ尊敬の眼差しを向けている。朱璃は全力で娘を応援しようとしている。ハイパーゼットンはヘソ天で寝ている。あまり話に加われなくてやる事がなかった為、こんな事になっていた。

かくして、朱乃も卯ノ花と朱璃、漸くお仕事が出来たハイパーゼットンに手伝ってもらいながら下宿の準備を終えてダイブハンガーへ向かうのだった。

【裕斗の場合】

裕斗は他のメンバーより一足早く引っ越しを終えていた。但しダイブハンガーにではなく……

「おう裕斗、これはこっちで良いんだな！」

「あの荷物はあっちにまとめといたからな。荷解きは自分でやりな」
「ここでの生活は私達が先輩だ。分からない事は遠慮なく聞いてくれ」
「ありがとうございます、マグナさん、ガルムさん、バレルさん」

そう、裕斗が引っ越したのはウルトラ警備隊秘密基地兼ハンターズギルドの方である。その理由は裕斗の身の上に、ある変化があったからだ。

「皆さん、一通り引っ越し作業は済んだみたいですね」
「おう！これから引っ越しソバでも食うか!?」
「丁度昼飯時だ、さっさと行って席取るぞ」
「私達はほぼ固定席だし、問題は……そうか、今日から一人増えるからな」

ジェントが様子を見に来ると、ラッシュハンターズの三人は食堂で席を取るべく先行していった。ジェントは「元気ですねぇ」と笑いながら、バレルが言った最後の一言に満足している。

「では私達も向かいましょう、裕斗」
「うん、『父さん』」

父さん。そう、父さんである。
裕斗はエクスカリバーの一件が片付いて以来、ある目標が出来た。強くなるだけではなく、明確な目標を持つ事でそれに向けて努力する気力が湧いてきたのだ。
憧れのウルトラマンオーブといつか並び立てるように、自分はラッシュハンターズと同じ次代の『七星剣』を目指す。そう決意した時、ジェントがそれに気付いて声をかけてくれた。裕斗さえ良ければ自分の養子にならないか、と。
—少しずつ、次代へと移り変わって行く—

ジェントはラッシュハンターズに続き、裕斗を自身の後継者として育てる事を決めたのだ。もちろん、正式に七星剣を継がせたとしても、自分が引退する事はもう考えていない。将来が楽しみなハンターが増えてきた今、自分も『息子』と共にハンティングへと赴く。それがジェントの新しい楽しみだ。

メフィラス星と地球、宇宙人と悪魔の垣根を超えて師弟であった二人は、正しく親子となった。

「父さんは何にするんだい？」
「ふ～む……日替わりは何でした？」
「今日は焼魚定食だったよ」
「マグナ達は蕎麦……とも限りませんが、良いですねぇ和食。それにしましょうか」
「それじゃあ僕も同じ物に」

出自や外見はまるで違えど時に穏やかに、時に荒々しく……その二人の姿は紛れもなく、父と息子であった。

その日の昼食は裕斗の歓迎会の意味も込めて、大層賑やかなものになったという。

【一誠・リアス・トライスクワッドの場合】

一誠の自宅にはゲン・矢的・ハリベルが出向いていた。

リビングで一誠やリアス、そして一誠の両親と向かい合っている。

一通りの話は済ませ、後は一誠の両親の返答を待つのみ。

「父さん、母さん……」
「……イッセー」

しばらく腕を組んで目を伏せていた一誠の父は口を開く。

「最近のお前は今までより活き活きとしていた。合宿から帰って来た日は思わず別人かと思ったくらいにな。この人達の話をリアスさんと話しているお前は、本当に尊敬出来る人を見つけた目だったよ」
「父さん……！」
「行ってきなさい、イッセー。矢的先生、おおとり師範、そしてハリベルさん。息子をどうか宜しくお願いします」
「私からもお願いします」
「母さんも……二人ともありがとう!!」

ゲンと矢的、ハリベルは顔を見合わせて笑う。

「はい。ご両親の大切な息子さん、お預かりします」
「彼は芯がしっかりしています。きっと、会うたびに成長しているというのが実感出来るようになるはずです」

一誠の両親も自分達の息子を変えてくれた恩師達が、息子を認めてくれているのを嬉しく思う。

「リアスさんも、短い間だったが娘が出来たみたいで楽しかったわ」
「私もです、イッセーのお母様」
「待てリアス。その言い方では言葉不足だ。なにせ将来義理の母親になるかも知れない方だぞ」
「ハリベルお姉様!?」

リアスだけでなく一誠まで真っ赤になってしまった。トライスクワッドはというとリビングの扉の隙間から団子三兄弟みたいに覗き込んでいる。

「上手くいったみたいだな」
「……どうやらイッセーは両親に恵まれたようだな、良い事だ」
「だな、旦那」

タイタスとフーマ、彼らの両親は訳有であり、既に故人だ。タイガは別の意味で訳有だが。
そんな中、話題はゲンと矢的が持っていった。
「俺は墓参りも出来ないからな。ご両親、大切にしろよ一誠」
「師匠？そういえば師匠の両親って……」
「……もういない。特に父は、俺を庇って命を落とした。俺の目の前でな」
『!!』
矢的を除く全員が目を見開いた。
「あ……う……すいません師匠！無神経に、その……」
「無神経も何も知らなかったんだから気にするな。それに双子の弟とも無事再会出来たしな。今では血が繋がっていなくとも兄弟がたくさんだ」
「そうですね、兄さん」
まだ全ては話していないが、ゲン―レオが壮絶な過去を背負っているのは一瞬で理解出来た。そしてそれはレオだけではない。
「僕はちゃんと墓参りしないと」
「そうだな、お前は教え子の事とか話題に事欠かないだろう？」
「え……もしかして、矢的先生も……」
「ああ。僕が幼い頃……両親は揃って、怪獣に殺されたんだ。天涯孤独となった僕を、僕の師匠である人が引き取ってくれて、その人に育てられたんだよ」
もはや言葉が出ない。レオも８０も、一誠やリアスとは違い両親を早くに失っていた。同時に、愛情深く育てられた自分達がどれだけ恵

まれているかも再認識した。そういえばアーシアも孤児だし、あとで聞いた話だとカナエとその妹も早くに両親を鬼に殺されたという。

「矢的先生、おおとり師範……辛い事を思い出させてしまって……」

一誠の両親も申し訳無さそうにしているが、二人は笑って返す。

「兵藤のお父さん、お母さん。一日でも多く、長生きして下さい。お孫さん、曾孫さんだって抱けるかもしれないんです」

「親の分まで俺達が生き、後世へ生き様を教え、繋ぐ。そうする事で亡くなった者達の思いも途切れる事なく、共に未来へと進んでいける。だから、俺達は大丈夫です」

一誠とリアス、一誠の両親、そしてハリベルやトライスクワッドもゲンと矢的の大きさを感じた。過酷な運命を歩みながらも、失敗はあっても決して道を踏み外す事なく今日まで生きてきた重みが、二人にはある。

―この人達に任せれば、イッセーは大丈夫―

両親は改めて確信し、一誠を託した。

話を終えると既に準備を済ませていた二人の荷物を三人で手分けして持つ……というかゲンが「これも修行だ！」とリアスのプライバシー的な物以外は一人で背負ってしまった。一誠もそれに習い、リアスをおぶっていく事にする。

一誠とゲンは笑い合い、リアスは恥ずかしくも嬉しそうに、矢的とハリベルはそれを微笑ましく見守りつつ、一誠の両親に見送られてダイブハンガーへと向かう。

それぞれの目標に向けて。

この日、オカルト研究部は新しく出発する。

〈続く〉

それ行け！空の世界先行調査隊

聖剣騒動時に相対した堕天司ベリアル。
彼の言った『星晶獣』についてスカーサハに聞いたところ、『空の世界』で直接調べた方が良いという意見が出たのでメンバーを選出して向かう事にした。
時間操作移動を行う為にレジェンドはもちろん、一体化しているゼット、それに空の世界出身のスカーサハは当然参加だ。
元の世界で命を落とした彼女は行けるのか？と疑問に思ったが、レジェンド曰く真龍ディアドラとして落命したのであってスカーサハとしては問題ないとの事。
残りのメンバーはというと、やはりというか小競り合いが勃発。
そしてその結果参加する事になったのは前述の三名以外にロスヴァイセ、リクの京都合流組にＣ．Ｃ．とグレイフィアのスカーサハと付き合いが長い二人、そしてオーフィスとティアマットというドラゴン繋がりの二名。合計九名が出向く事となった。
簡単に言うとスカーサハと仲が良い面々だ。ついでにオーフィスはレジェンドと何日も離れていたら何しでかすか分からないから、というのもある。
現地にて別働隊と合流する手筈になっている事を聞き、どんな人物なのかレジェンドに聞いたところ頭脳派メンバーとだけ教えられた。

「よし、全員揃ったな。今から空の世界へ行くわけだが戻って来るのはこっちにして二日後、但し向こうではそこそこの日数滞在する事になる。時間の流れに関しては俺が同行してるからそこは心配いらん。ある程度調べたら現地合流班に任せて俺達は撤収するからな。分かったか？」
「「「「はーい！」」」」
「何だろうコレ。俺は引率の先生か？」

準備を終えて集合したメンバーの中で一際目を引くのはキャンプ用品まで完全武装したゼットといつぞやと同様お菓子をしこたま詰め込んだリュックを背負ったオーフィス。どっちもレジェンドと物凄く身近にいる二人である。いや、ゼットの方はある意味正しいのだが、今回はそこまでは不要というかその方面の準備は済んでいるというか……

「ところであの、ゼットさん大丈夫ですか？この間の怪我とか……」
「心配御無用、ロスヴァイセさん！超師匠が休みをくれたのでもはや全快でございますよ！」
「病み上がりだし無理は……まあいいか。というわけで空の世界調査班、出動！」
「「「「おー！」」」」
「……マジで大丈夫かな、このメンバーで……」
「レジェンド様、私も全力でフォローに回りますので」
「倒れない程度に気張るんだな」

頭を抱えるレジェンドを気遣うグレイフィアと、ささやかな慰め程度なC．C．だった。ロスヴァイセ？一緒になって和気藹々してます。

☆

一抹の不安を抱えながらも空の世界へと次元転移を行ったレジェンド一行。最初の島に選んだのはポートブリーズと呼ばれる、星晶獣ティアマトの加護によって穏やかな風が吹く島だ。それはいい。問題は……

「ポートブリーズ！ティアマトの加護！つまり私の加護ですよー！」
星晶獣（ティアマト）との微妙な名前の違いに気付いてない天魔（ティアマット）の業龍のアホの

子っぷりである。町中でやろうものなら絶対冷たい目で見られるのは予想に難くない。というか彼女にそんな加護与える力なんてあったか？

そんなティアマットは放っておいて合流するメンバーを探すと、遠くからレジェンドを呼ぶ声が聞こえてきた。

「光神チーフ～!!」

「むっ!?今俺の人間体での名字の発音で呼ぶ声が聞こえたぞ!!」

「お主それだけで反応するのか……」

「いやいや俺も『ゼェェェット!!』とか呼ばれたら反応してしまうのですよ！」

「それって怒られたりした時じゃ……」

相変わらず人間体名に関してはやたら反応するレジェンドに苦笑するスカーサハと、レジェンドに同意するゼットの意見にロスヴァイセがツッコむ。

それはそれとして現地合流班というのは……

「我夢、藤宮。お疲れ」

「お久しぶりです、チーフ。けど驚きましたよ、この世界」

「魔物に襲われたからな。普通に撃退したが」

「あれ？お前らって頭脳派じゃなかったっけ……？」

かつてレジェンドも創設に携わり、後見人となった『アルケミースターズ』に所属する若き天才、高山我夢と藤宮博也。即ちウルトラマンガイアとウルトラマンアグルだ。

此度の空の世界調査にこの二人が揃って立候補してくれたのは非常にありがたい。特に我夢は『ガリバー旅行記』を子供の頃に好きだった為、楽しみにしていたくらいである。

「ガイア先輩にアグル先輩！どうもお久しぶりでありんす！」

「いや、うん。久しぶりはいいんだけど言葉遣い変じゃないか？」
「ええマジ？お空の言葉はウルトラ難しいぜ」
「この世界は別に関係ないだろ」

我夢と藤宮にもやっぱりツッコまれた。
何はともあれ二人と合流出来た事でレジェンド達は優秀な頭脳を、我夢と藤宮は無敵の護衛を得たことになる。

「いざ！空の世界調査（探検）に！」
「しゅっぱーつ」
「あ！待って二人とも！そっちは……」

ゼットとオーフィスが元気よく（？）出発したのを我夢が止めるも時既に遅し。

「「え？」」

二人は何歩か歩いていたが、気付けば足下には

空が広がっていた。

「あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝ぁ〝……」
「わー……」

ゼットとオーフィスが空へとダイビング。

「「ゼットオオオオオ!?」」
「「オーフィスゥゥゥ!?」」
「皆様レジェンド様の心配もして下さいっ!!」

「レジェンド様、なんか引っ張られるようにして声を挙げる間もなく落ちて行きましたぁ!!」
「「「「あ」」」」

ゼットとオーフィスばかりに気を取られていたが、ゼットと一体化している為にダイブハンガーなど特定の場所以外では一定の距離しか離れる事の出来ないレジェンドも落ちたゼットに引っ張られるように空へと落ちていた。
ぶっちゃけグレイフィアとロスヴァイセ以外気付いてなかったというから本作最強の不憫が相変わらず絶妙なタイミングで発動している。

「ちょっ!?どうするの!?レジェンドさんもあの二人も落ちちゃった……ってそもそもなんで空に落ちるの!?」
「私も分かりませんよ!?こういう時こそドラゴンのお二人の出番じゃないですか!」
「吾は真龍としてこの世界で落命しておる以上、この世界ではディアドラとしての姿を取る事が出来ぬのだ!」
「私はぶっちゃけ怖いです!!」
「「「「何の為の使い魔だ!!」」」」

スカーサハの理由はレジェンドも言っていたので納得だがティアマットのそれは単にビビりである。お前さっきまでのノリノリ感全開モードは何処行ったの?
本気でヤバいんじゃないかと思い始めた時、レジェンドとゼットが空を飛んで戻って来た。オーフィスも例によってレジェンドが脇に抱えている。

「超師匠ォォォ!!今のはヤバかった!!今までで一番ヤバかったでござるでしょう!!」
「確かにヤバかったよ!!つーか俺、お前と一体化してるんだからこう

なる事予想しとくべきだったわ!!ナチュラルにいつも実体化してたからこんな時は連動してこういう目に合うのすっかり頭から抜けてたぞ!!」
「我、お姫様だっこがいい」
「この状況で随分と余裕だなコノヤロー」

なんと言うか、いつも通りの三人だった。レジェンドとゼットはいきなり落ちた（レジェンドは巻き添えだが）事にテンパっていたものの、すぐに飛べる事を思い出してオーフィスを引っ掴み上がってきたのである。

「三人とも大丈夫!?」
「我、お股ひゅんとした」
「突然の事に一瞬全身の力が抜けた」
「カラータイマーが鳴ってすぐに止まりそうになりました」
「「「最後笑えないんだけど!?」」」」

ショック死寸前だったらしい。単なる例えなのかマジなのか知らんが。

「しっかしウルトラ不思議なところですね、ここ。落ちながら見渡しましたが島が浮かんでるのが当たり前で、地面が見当たらないでございますよ」
「……地面に正しいかは分からぬが、空の底は『赤き地平』と呼ばれておるようだ」
「「「「『赤き地平』？」」」」
「赤茶けた大地が何処までも続く場所らしいが、そもそもそこへ行って戻って来た者もおらぬからな。故に真実かどうかは定かではない」

スカーサハの告げた事実は、今後大きな意味を持つ事になる。この時はそうでもなかったのだが。

「そうなると移動はどうする？私達は短期間と言ってもそこの二人はしばらく残ると聞いているが生活物資の問題もあるだろう」

Ｃ．Ｃ．が我夢と藤宮を見ながら聞いてきたが、二人は揃ってブレスレットから大きな袋を取り出した。

「「二人でもう１０００万ルピ稼いでる」」

「「「「馴染むの早っ!?」」」」

さすが多種多様の国籍の人種が集まるアルケミースターズ所属だけあって空の世界にすっかり順応してた。ちなみにルピはこの世界の通貨だ。なんでこの二人短期間でこんなに稼げんの？

「まあ生活物資は問題なさそうだとして、だ。移動にしても俺があるものを持って来てある。人数的にスペースペンドラゴンじゃなくて良かったぞ」

あれの定員は六名だからな、と言うとレジェンドは先程自身らが落ちた場所へと近づいて行く。

「あわわ……！レジェンド様、また落ちちゃいますよ！落ちたら私助けに行けませんからやめて下さい！」

「普段調子良いくせになんでこういう時だけチキンハート化するんだお前はァァァ!!」

マジで使い魔にするの早まったかな……と軽く後悔しつつレジェンドはブレスレットから『あるもの』を取り出す。取り出すと言うより出現させると言った方が正しいそれは、我夢と藤宮には馴染み深いものであった。

「「エリアル・ベース!?」」
「ストレス発散の為に適当に開発してたらこうなりました」
『いやそれおかしいから!?』

さすが天災兎こと篠ノ之束を眷属に持つ男。何をどうやったら適当でこんなもん出来るんだ。

「スカーサハから移動には基本空路しかないと聞いていたんでな。結果としては良かったから良いんじゃね？」
「何故か釈然としないな……」
「ま、まあいいじゃないか藤宮。これなら僕らも勝手知ったるってやつだし」
「ちなみに全体的な性能は約３０％程割増だ。防御やセキュリティに限り５００％アップしてるけど」
『なんでそこだけ特化してんの!?』

藤宮が目を逸らす。かく言う彼もかつてはエリアル・ベースを撃沈しかけた事があるから。

兎にも角にも安全面は万全を期して作られたので、余程の事が無い限り大丈夫らしい。レジェンド達が駒王に撤収した後も我夢と藤宮の活動拠点となる為、各種設備もグレードアップしている。

「この世界だと『騎空艇（きくうてい）』という飛行船を所有しているかどうかで行動範囲がかなり変わってくるみたいだからな。中型のものは２００～３００ｍらしいから、６００ｍに及ぶエリアル・ベースは大型かつ外見も目立つので備えあれば憂いなし、というわけだ。それじゃ、全員乗り込め……と言いたいところだが町で情報収集はやったのか？」
「一応ですが。とりあえず、他の場所もいくつか回ってから整理しようと思ってるんです」
「この空域……ファータ・グランデ空域と言うらしいが、大きい島だとこのポートブリーズ群島以外にバルツ公国とアウギュステ列島、それ

からルーマシー群島辺りまでが妥当だな。城砦都市アルビオン以降は今無理に行く必要も無い」

我夢と藤宮が言うには、そのアルビオン以降は『エルステ帝国』とやらの影響が強くなり行動が制限されやすくなるらしい。あまり良い噂を聞かないので、下手に藪を突いて問題を起こしたくないのが理由だ。

「OK、そこまで調べがついてればこれからの行動指針が決めやすくなる。ん……？ザンクティンゼル？」
「レジェンド、どうし……」
「へ？超師匠に続いてオーフィスちゃんまで一体何事……」

レジェンド、オーフィス、ゼットは二人から渡された地図を見て今いるポートブリーズより前に位置しているザンクティンゼルという島の部分を凝視している。

「レジェンドさん、それに二人も……何かあったの？」
「……いや、気にはなったが……」
「我も分からない。でも……」
「何かこう……ウルトラ運命的な……」
「「「「???」」」」

リクの質問にも漠然とした答えしか返ってこないので、一先ずそこは置いておく事にする。
一行はエリアル・ベースに搭乗し、ポートブリーズ群島を後にして他の島へ向かう事にした。

「オーフィス、分かるか」
「ん、ポートブリーズの空の上。雲の先にティアマトがいる。こっちのティアマットと違う。ただ、ちょっと不安定な感じがする」

レジェンドとオーフィスだけは、星晶獣ティアマトの存在を認識して。

☆

それから数日間かけて件の島々を回った一行。

途中、やはりと言うかトラブルに巻き込まれる事も何度かあったが誰一人欠けるような事は無く、概ね予定通りである。

「よーし全員集合。今まで回った島でそれぞれが集めた情報を整理するぞ……」

レジェンドの指示で集まった先行調査隊のメンバーだが……

めっちゃ増えていた。

「オイなんで調査隊のメンバーごっそり増えてんの？しかもこの世界の現地民じゃん誰だよ勧誘してきた奴。おまけになんで俺ら騎空団になってんだおかしいだろ『ウルトラ騎空団』とか適当につけた奴名乗り出ろコルァ」

レジェンドは本気で頭痛を覚えた。ポートブリーズはすぐに立った為、バルツ、アウギュステ、ルーマシーのたった三島かつ数日でやたら増えた事になる。

しかも騎空団の団長はいつの間にかレジェンドに決められており、本人は事後承諾させられるハメに。不憫。

「我、知ってる。大体はレジェンドとゼットとリクと我夢のお人好し

が原因。あと、団名は藤宮がボソッと言ったのが殆どの団員に採用された」

原因、ウルトラマン連中だった。

「ウルトラ納得いかないでござんす。俺達はいつも通りの事をしてきただけなのに！」

「そうだそうだーなんでこっち来てまでメンタルすり減らす真似しなきゃならないんだ」

「いや、うん。レジェンドさんとゼットが主な原因だよね。レジェンドさんの天然ジゴロっぷりに加えてゼットが率先して人助けしてたよね。まあ確かに良い事してるんだけど」

「え、壊れた機械修理したのマズかったかな。僕は別に変な事してないぞ」

「我夢、お前サービスで余計な機能付けただろ。それのおかげで『うちも』『こっちも』がやたら増えたんだからな」

各々ぶつくさ言っている。藤宮はまあ、許されてもいいのだろうが。採用したの団員達だし。

しかしまあ、随分と濃いメンツが集まったもんだとレジェンドは思う。

なにせ（レジェンド達を除いて）全空最強と言われる『十天衆（じゅってんしゅう）』が入れ代わり立ち代わり勝負を仕掛けてきたのをもれなく全員返り討ちにした結果、よりにもよって十人皆加入してきたのだ。

「そろそろ俺ら一旦帰るし、しばらく戻って来れないから騎空団なんざやってるヒマないぞ？」

「「「「えええええっ!?」」」」

「いやそもそも団員の募集自体してないんだが」

「どうしても続けるって言うなら我夢と藤宮以外に団長代理立てるしかないな。でなけりゃ無理だ」

ザワつく団員らだが、これは当然の事だ。そもそも我夢と藤宮は研究専門だし、元よりレジェンドは騎空団を作る気などなかった。しかしこれだけ人数が集まってしまったのならば強制解散するよりは、と仕方なく譲歩した案が団長代理である。

「レジェンドちゃんレジェンドちゃん、なんで我夢くんと藤宮くんじゃ駄目なの？」

レジェンドをちゃん付けで呼ぶのはナルメアというドラフの女性剣士だ。ドラフという種族は角を持ち、男性は大柄で筋肉質、そして女性は小柄でありながら『ある部分』が大きいのが特徴である。ついでに言うと後者は６歳でも明らかに大きいというから色々ヤバい。

「この二人とリク、それからゼットは銀河遊撃隊所属でもあるんでな。ゼットはもちろんリクも俺のところに出向しているから良いとはいえ、我夢と藤宮は本人達の希望を上司が受けてくれたからこっちに来られたんだ。有事の際にはどうしても本職を優先する必要がある」

「それならば納得がいく。俺やゼタも『組織』に属している以上、命令がくればそちらを優先せざるを得ない」

「まあ、今回はあたしもバザラガと同意見だわ……とは言うけどここの居心地良すぎて離れたくないのよね」

『組織』のメンバーでもある黒い鎧と仮面を被ったドラフの男バザラガと、ツインテールで赤い鎧を来たヒューマンの女性ゼタはレジェンドの言葉に納得したようだ。ゼタの方は思いっきり本音が出ているが。

ちなみにヒューマン種族というのは、能力的には別として外見はごく普通の人間である。先のドラフに加えて、スカーサハの身体のベースとなっているケモミミ付きの人種エルーンと、成人しても身長が１００センチあれば大きい方だという外見で年齢が判断出来ないハー

ヴィンという種族を合わせて、この空の世界では四大種族と呼ばれている。
　これ以外にもヴァンパイアなど四大種族に当てはまらない種族も少なからず存在するが、今回は割愛しておく。
「で、結局立候補でも推薦でもいいから代理する奴いないのか？俺としてはどちらでも良いんだが」
　騎空団が存続しようが解散しようが。そう言おうとした時、そこはかとなく立候補的な事を言ってくる者がいた。
「中々出てこないよね～こういう責任重大なポジションに立候補する人は。ここは一つ、シエテお兄さんが引き受けてあげようかな」
　先に挙げた空の世界最強集団・十天衆の頭目であるシエテ。親しみやすい人柄ではあるが、その表情故に胡散臭く思われがちな上、ぶっちゃけ他のメンバーから扱いがぞんざいだったりする。ついでにサーゼクスと声が非常に似ているが、決して中の人が同じだとかそういうわけではない……と思う。たぶん。
「……こんな代理で大丈夫か？」
「「「「大丈夫。問題しかない」」」」
「ちょっ!?ひどくなーい!?」
「よりにもよって他の十天衆の殆どから言われたな。その時点で何が大丈夫なのか知らんがまともに出来るのか？そのにやけ面」
「いや、あのさC．C．ちゃん？ニオと似た声で辛辣な事を言わないでほしいんだけど……」
　最強集団を取りまとめる頭目なのにこんな扱いである。レジェンド程ではないが彼も不憫だ。とはいえ彼以外に立候補や推薦が無いというのも事実。

「まあ、一応頭目だし任せてみるか。とりあえずこのエリアル・ベースを落としたり奪われたりするなよ」
「一応って!?団長ちゃん、そこは俺を信用してよ」
「俺を試すという名目で喧嘩ふっかけて来た挙げ句、オーフィスの腹パン一発でダウンするような奴だからな」

シエテは凹んだ。そもそもレジェンドと戦う前にオーフィスと戦ったのだが彼女にあっさりK．O．されてしまい、レジェンドは知らないがその後グレイフィアにもシバかれた。他の十天衆も似たようなものだったが。

「シエテのフォローは私達がするから心配しないでくれ、団長」
「頼むぞフリーザ……あ、すまん。クウラだったな」
「いや私はウーノだよ!?誰かは分からないが『ー』と『ウ』っていう真ん中の部分の一文字ずつしか合っていないんだが!!」

この何処ぞの悪の帝王一族と声しか似てない真っ当な人物は十天衆の創始者であるウーノ。ハーヴィンだが髭のおかげかちゃんとした年長者と分かる。ちなみに彼はあくまで創始者であって頭目、即ちリーダーはシエテなので注意しよう。間違えると彼がまた凹む。

「とにかくだ。団長代理はシエテに任せる。ま、悪いようにはしないだろうし」
「ねえ団長、次はいつ頃来れそう？」
「向こうで学園に通ってる連中が夏休み入ってからだな。今回来たメンバーよりも一気に数が増えるぞ」
「嫌な音、しないといいな……でも万が一そういう音がしたら私、団長から離れないから」
『!?』

次回の滞在日を聞いてきたのは魔導弓のプロフェッショナルであるソーンと、琴の演奏で様々な現象を起こせるニオ。二人も十天衆、かつレジェンド狙い……しかもニオはガチ勢だ。

「背が小さくて」（※ハーヴィンだからです）
「……胸も小さい」（※ハーヴィンだからです）
「しかも成人してる……即ちライバル……！」（※偶然です）
「レジェンド超師匠、スカーサハちゃんとオーフィスちゃんからゼロ師匠以上の闘志を感じるでございますが」
「気にするな。というか二人のライバル視してる部分を満たす連中がこの世界でどれだけいると思ってるんだ。少なくとも成人ハーヴィン丸々当てはまるぞ」

その通りである。どうやら二人にとってはこの世界、ライバルだらけの激戦区のようだ。スカーサハは出身世界だというのに。

（……オーフィスちゃんはレジェンドさんと毎晩一緒に寝てる事を言ったら修羅場になるよね……あ、駄目だコレ言ったら僕も絶対問い詰められる）

かつてロスヴァイセを勧誘した事を卯ノ花に責められたリクは言葉を飲み込んだ。しっかり学習していたようで何より。

「……一段落したところで、チーフ達が帰る前に一ついいか？」
「どうした藤宮……真面目な話だな」
「ああ。こっちに来て今まで調べてきた事の中でエルステ帝国があちこちで面倒を起こしているのは話したと思うが、ちょっとした噂を耳にした。星晶獣関連でな」
「何？」
「とは言ったがまだ事実かどうかはハッキリしない。帝国兵を捕まえて尋問したわけでもないからな。だが、どうやら連中は『蒼の少女』と

呼ばれる研究体を調べてるらしい。それが星晶獣に対する備えか何かになるともな」

藤宮の齎した情報は相当重要なものだった。その『蒼の少女』とやらが人物なのか、はたまたそういう名前のアイテムか何かなのかは不明だが、非常にレジェンド達にとって有益な情報だ。もしかしたらかの堕天司に対する手段足り得るかもしれない。

「詳しい事は分からんが、この短期間にも関わらず俺達にプラスになる情報が最後の最後で入手出来たのは僥倖としか言えんな。だが帝国の本拠地と言われるアガスティアに乗り込むとしたら次回だ。それまでは引き続き情報収集を優先して頼む」

「分かってる」

「さて、と……そろそろ俺達は帰るぞ。シエテ、我夢、藤宮。後の事は任せた」

「了解！ちゃんと戻って来てよ団長ちゃん、じゃないとただでさえ圧がヤバいのに俺本気で胃に穴が空いちゃうから」

甘いぞシエテ。たった二人の同僚兼友人に振り回され続けているんだぞ、レジェンドは。主に全身銀色のぎっくり翼経験もある奴が原因で。

「僕は今度『叡智の殿堂』というところに行ってみます。この世界だと最大級の図書館みたいなものだって話だし……禁書扱いになってるかも知れませんけど」

「そうなってたら仕方ないだろうな」

レジェンドには『透き通る世界』よりヤバい『レジェンドクリア』なる透視能力があるので最悪これを使って見そうな気がしないでもない。そこ、かつての一誠だったらそれを覗きに使うとか言わないように。

「いずれにしても次回はちょっと長めの滞在になる予定だ。おそらくうちに同居する事になるであろう連中を鍛える意味でも丁度いいだろ、この世界は」
「……それって、ドライグ達？」
「ああ」

それを聞いたオーフィスはバザラガを見る。

「どうした、オーフィス」
「我、マダオよりバザラガの方がいい」
「マダオ？オーフィスちゃん何それ？」
「まるでダメなオスドラゴン略してマダオ」

これを聞いてゼタは大爆笑した。
哀れドライグ、己の知らぬ間にお空の世界でマダオと呼ばれ広がっていく。
何だかんだ可愛がられているオーフィスを見てレジェンドは周りを再度見渡すと、そう遠くない内に戻って来るというのに別れを惜しんでいる団員と調査隊メンバーの姿が。
そして以外に、とも思われるのは――――

「ゼットお兄ちゃん、ヤイア良い子で待ってるからね！」
「よし、俺との約束だぞ！」
「うん！」

ゼットが子供らに大人気だった事だ。元々の性格もあってか子供達と意気投合しやすく、地球人の年齢で言えば１４、５歳のゼットは多くの団員と仲良くなっていた。

（……騎空団、ゼットの成長に良い方向へ作用するかもしれんな）

レジェンドは穏やかに微笑む。願わくばこの騎空団の仲間達が家族として彼を支えてくれるよう―かつて自分達と共に戦ってくれた防衛チームの面々を思い出しながら。

☆

レジェンド一行がダイブハンガーへと帰還してからのエリアル・ベースで、団長代理となったシエテは我夢と藤宮にある質問をする。

「我夢ちゃん、博也ちゃん、ちょっといいかい？」
「何ですか？」
「博也ちゃんはやめろ」
「団長ちゃんと戦う事、結局出来てないんだけど……彼ってどれくらい強いのかな？」

我夢と藤宮は顔を見合わせてあっさり答えた。

「「星一つ簡単に破壊出来るエネルギーを平然と吸収・増幅してそのまま相手に撃ち返すレベル」」
「……え？」
「ちなみにそれで最低ラインまで能力落として制限してる状態だからな」
「概念系も無効なんで挑むなら気をつけて。本気で怒らせると残る同格二名も駆けつけてくれないと止まらないから」

ガチギレモードのレジェンドはノアとキング、さらにサーガを始め光神フルコースで漸く止められるのだ。ついでに沸点が相当高い為、今までに片手で数えて指が余る程度しかそういう事態にはなっていない。

最近巫女に迎えたアーシアが抑止力になってくれるとしても、そう

そうこんな事態はあってほしくないし。
これを聞いてシエテはレジェンドに挑戦するのをやめた。
「……残る二人っていうのは？」
「「基本的にチーフのストレスの元凶」」
レジェンドのみならず、こっちの【エリア】のウルトラ戦士からもそう思われているノアとキングであった。
かくして空の世界との繋がりも出来た。
そして、レジェンドはそう遠くないうちにこの世界で出会う事になる。
自分と共に歩む新たな家族――『蒼の少女』と。
〈続く〉

柱と宇宙帝王（笑）と「グラハムスペシャル！」

レジェンド一行は空の世界へ、オカルト研究部はダイブハンガーへの引っ越しや下宿の準備、そしてサーガと神衛隊、カナエは惑星レジェンドの海上都市アクアエデンへと赴いていた。

「ここが、サーガ様の……」
「ああ。俺と神衛隊の本居がある場所だ。クリスタルシティ程ではないが、かなりの大都市で各施設も充実している。これから向かうのは神衛隊直下の附属病院だ」
「そういや巌勝は縁壱師範に一言連絡入れなくていいのか？あそこの師範代やってて唯一本居があっちにあるからその管理も任せてるんだろ？」
「一度連絡入れたら義妹が出てな。今日本地獄で無惨様をしばき回してるらしい」
「いや、貴方の元上司でしょ？随分と淡白ね」
「確かに恩義はあるが、今の私はサーガ様の部下であり縁壱とも確執は消えた。刃を向ける気はないが、かと言って庇う気も無いというわけだ」
「まあ私は気にしないけど。ちなみに狛治は？」
「機会があれば思いっきりぶん殴ると言っていたな。今の狛治の一撃を受けて無惨様が無事でいられるとも思えん」
「狛治とも久しぶりだ。もうドラガイトから帰って来てるかな」

なにせ修行相手があの東方不敗だ。おまけに守るべき者（嫁や家族）がしっかり傍にいる為、パワーアップ具合が半端ではない。
狛治も狛治で日本地獄まで態々殴りに行く気はないが、目の前に現れたら容赦無く叩き込む気満々との事。
ふとした事でヨーコはカナエに聞いてみる。

「……ところでカナエ、なんでソワソワしてるの？」

「え、いやその……会ったらなんて言おうかとか、色々考えちゃって……」
「いざ会ってみると何も言えなくなるものだ。私と縁壱がそうだった。もっとも私の場合は道を違えていたし、そちらとは状況が違うが」

巌勝と縁壱の話が出たように、今回サーガや神衛隊に混じってカナエがいるのは病院に入院しているという人物の一人がカナエの妹の可能性がある『らしい』からだ。
念の為、出身世界座標を確認したところカナエと同じ世界の出身……つまり『弾かれ者』である。

「まあ同姓同名って線もあるし……」
「入院している二名だが、どちらも鬼⊠隊の『柱』と言っていたそうだ」
「大将、言った傍からフラグ立てまくんなよ!?」
「……？すまない」

サーガに悪気は無い。
勝手知ったるなんとやら、病院に着き受付で部屋を聞いたサーガらは二手に分かれる事になった。
ヨーコとカナエはカナエの妹の方へ、サーガら男性陣はもう一人の方へ。
それぞれ同姓の方がいいだろうという理由からだ。

☆

病室のネームプレートを見るとやはりというか『胡蝶しのぶ』と書かれたものが掛けられている。まだ心の整理がついていないカナエを気遣いヨーコが先に入る事にした。普通に考えれば初対面なのにアポ無し且つ一人では怪しいと思われるが、ここはそもそも神衛隊附属病院。つまりサーガという最上級格光神直下の部隊に所属してい

るヨーコなら訪問してもおかしくはない。

「私が一先ず話をするから、頃合いを見て貴女も入ってきてね」
「分かりました。いつでも逃げられるようにしておきます」
「なんでそうなるの!?」

ちゃんと入ってきなさい!と念を押されヨーコは病室のドアをノックして「どうぞ」の返事を確認し、入って行く。
ベッドには上半身を起こして窓から外を眺めていたであろう女性—カナエの妹のしのぶがいた。首から下は包帯がほぼ全身に巻かれている。

(確か……サーガ様の話だと二人とも負傷が魂にまで届いててまだ完治してないのよね。九極天の卯ノ花先生やダンブルドア校長ならすぐ治せそうなんだけど)

件の卯ノ花はレジェンドの専属医で、ダンブルドアは文字通り校長職である為、簡単に都合をつけられる立場ではない。アーシアという線もあるにはあるのだが、レジェンドの巫女である上に今は学生だ。ある意味前述の二人より難しい。

「ごめんなさいね、初対面なのにいきなり押しかける真似して」
「いえ、この医院……で良いのでしょうか。ここの関係者の方ですよね?」
「まあ、神衛隊(うち)の附属病院だから関係者といえば関係者ね。っと、まずは自己紹介がマナーか。私はヨーコ・リットナー、神衛隊第二分隊・羅厳の参謀長やってるわ。よろしくね」
「入口の名札でお分かりかと思いますが、胡蝶しのぶと申します」
「あともう一人来てるんだけど……ていうかそっちの子の方が本題なのよ」
「もう一人……?」

ヨーコはちょっと待っててね、と退出するとさり気なく逃げようとしていたカナエの襟元をむんずと掴んで引き摺って来た。

「ヨーコさんの鬼ぃぃぃ!!」
「廊下に立たせるよりマシでしょ!?」
「この状況なら廊下に立たされた方がマシです!!」
「四の五の言わず面と向かって話しなさい！」
「……え……？」

目の前でヨーコとぎゃあぎゃあ騒いでるカナエを見て呆然とするしのぶ。それはそうだろう。姉であるカナエとは両親同様死別したはずだ。そして自分も上弦の弐・童磨との戦いで……

「姉さん……？」
「はわあああっ!?」
「なんでそこでアーシアみたく驚くのよ」
「だって……」
「とにかく、後は姉妹の問題で間違いなさそうね。二人でしっかり話す事。どんな結果にせよ、後腐れないように全部吐き出し合いなさい。私は外に出てるからね」

ヨーコはさっさと外に出てしまい、二人きりになった途端どことなく気まずくなってしまうカナエとしのぶ。
お互い何を話そうか迷っているが、このままでは埒が明かないとカナエが先に口を開いた。

「しのぶ、久しぶり……でいいのかしら？」
「……やっぱり、姉さんなのね」
「ええ、そうよ。たぶん年月にズレがあると思うのだけれど……しのぶは何歳になったの？」

「１８よ」
「……え」
「……え？」

カナエは固まった。しのぶは困惑した。
理由は無論年月のズレの件であるが、カナエは向こう側での享年１７であるが、こちらに来て二年以上経っており実は２０歳を超えている。駒王学園への入学もその享年を参照した学年だったのだが、確かにリアスらから見ても『お姉さん』なのだ。

「良かった！ちゃんと私はしのぶより年上なのね！もしかしたらしのぶの方がお姉さんになっちゃってたのかと思ったわ！」
「そこなの!?そこが重要だったの!?」

そういえば元からこんな性格だったとか、以前よりパワーアップしてないかとか思ったがとりあえず一突きかましておいた。カナエにダメージは入ったが完治していないしのぶ自身にもダメージが返ってきたのはご愛嬌。

「痛いわしのぶ」
「私も痛いわよ姉さん」

やはり姉妹である。
それから二人はお互いの今に至るまでの事を話し合った。もちろん『弾かれた』事も含めてだ。

「……そう。ならやっぱり私は元の世界では死んだのね」
「……」
「姉さん？」
「童磨コロス」
「!?」

無惨コロスモード……通称ムッコロモードに続く新たな形態が誕生してしまった。そりゃあ自分だけでなく妹まで手にかけたとあればキレるだろう。
どうにかカナエを鎮めたしのぶは軌道修正する事にする。
「姉さんは今、幸せ？」
「ええ。おやかっ……レジェンド様もアーシアちゃんもモスちゃんも、皆良い人ばかりだもの。あ、モスちゃんは人じゃなくて怪獣ね」
「（おやか……？）怪獣？」
「この子がモスちゃんよ。モスちゃん、しのぶにご挨拶しましょうね～」
「キュウッ！」
一番前の片足を挙げて返事するグリーンモスラはいつの間にかカナエの肩に出て来ていた。犬や猫といった動物が苦手なしのぶは一瞬ピシリと固まったが、どうも毛があっても虫ベースな彼は平気らしく徐々に落ち着いていく。
……黒歌や小猫、スカーサハのケモミミとか大丈夫なんだろうか彼女。
「ちなみにモスちゃんは蛾の怪獣よ」
「……あ、看護婦さん。いえ、私ではなく姉がおかしくなってしまって。可能なら診察を……」
「なんで!?」「キュ!?」
ナースコールするしのぶに焦るカナエとモスラ。主にモスラの見た目の華やかさが原因なのだが。
どうにか説明してしのぶを納得させ、再び先の話題に戻す。
「それで、いきなり幸せかなんてどうしたの？」

「……ここで生き延びても、私は鬼を殺す為に服用し続けた藤の花の毒で長くは生きれない」
「え……」
「研究と同時に長年藤の花を服用する事で私自身を毒そのものにしたの。だから……」
「キュウッ」

そこまで聞いたモスラがいきなりカナエの肩からしのぶの頭の上に移動した。二人は突然の事に驚き一体何なのかと心配になったが、さらなる驚愕はここからだ。

「クワーッ！」

モスラが咆哮すると、しのぶの身体から粒子が溢れ出したかと思えばモスラの翅に吸収されていく。藤の花の持つ毒素をモスラが己の鱗粉へと変換しているのだ。
元々モスラ達は成虫へと変容する際、繭の中でその翅に鱗粉が生成されるのだが、それには限りがあり鱗粉を無くなる事はモスラの命が失われる事と直結する。攻撃や防御に使える万能性を持つ鱗粉は正しくモスラの生命線なのだ。しかも普通なら補給不可。
レジェンドの先代眷属である親モスラやその息子のグリーンモスラは自己生成出来る上、命との直結が無くなった為使い過ぎても死にはしないが、ストックしておく事に越した事はない。グリーンモスラは各種毒素を変換する事で外部からの補給が可能なので、浄化と補給が同時に出来る一石二鳥の能力である。

「凄いわモスちゃん！こんな事出来たのね！」
「（ふんす！）」

分かりにくいがドヤ顔のモスラとそれを褒めるカナエ。しかし一方のしのぶは浮かない顔だ。

カナエから聞いた話ではこちらには元の世界のような鬼は存在しないという事だが、万が一現れたら今の自分には対抗手段がない。日輪刀はおろか毒を調合する為の素材さえ無い。

「今の自分には戦う術がない、そんな顔ね」

「……うん」

「しのぶが柱って聞いた時は驚いたし、どういう方法でそこまで上り詰めたかもなんとなく予想出来たわ。でもねしのぶ、相手を討つだけが戦いじゃないのよ」

「でもっ……「私は差別することなく傷を癒やす事で正当に評価された子を知ってるわ」……えっ？」

無論これはアーシアの事だ。シックルが言っていたように彼女はハンター達の傷の治療や各種バックアップを行う事で直接戦わずともハンターの生存率を上げ、ギルドに貢献していると認められた為に普通より高いランクでスタートを切れた。そしてジェント曰くハンター全員が生きて帰って来る事、これこそが未来を作っていく大事な事なのである。

「だからね、刃を持って前線に出なくてもいいの。それよりも後ろで支えてくれる人達がどれだけ重要で大切か。ただずっと待って『おかえりなさい』って声をかけてくれるだけでどれだけ救われるか。だって私も見ているしかない戦いをこっちに来て、何度も見たから」

レジェンドは元より、８０にジードやメビウス、レオやゼロ、そしてトライスクワッドの三人にゼット。ウルトラマンの戦いはどれも壮絶なものだった。最近の二体の魔王獣との死闘など複数のウルトラマンだけでなく二機のＭＳまで同時に戦列に加わっていたのだし。

その時自分も今のしのぶと同じ、無力感を味わった。

「でもレジェンド様は言ったわ。『自分は一人ではない、そう実感でき

る時が何よりも尊い時間だ』……私も柱だった頃、任務から帰った時にしのぶ達が出迎えてくれた時がまさにそうだった。だから、あの時と同じようにしのぶには私が帰って来る場所でいてほしいの。もちろん、一緒に肩を並べてっていうのも理想の一つではあるけど」
「姉さん……」
「今まで頑張って、鬼と戦う事ばかりだったでしょ？だからしのぶにとってどんな事が幸せかなんて、先に逝って苦労をかけた私が言える事でも、まして決める事でもないわ。だからこれからゆっくり探していきましょ、ねっ？」
「……変わらないわね、そういうところは」
「私でも変わりたいと思わないわ、ここは」

漸く、笑い合えるようになった二人。

「寿命に関しても問題なし！しのぶが助けられたのがこの惑星レジェンドでよかったわ。この星に満ちる光気のおかげで寿命は途方もなく伸びて身体機能も上昇！お肌もすべすべでツヤツヤに！」
「姉さんなんでそんな煽り文句みたいに言ってるの」
「結論！ずっと可愛いのは超正義!!」
「そこは変わってて欲しかったわ」

昔みたいなやり取りをし終わって一息入れた時にヨーコが再び入って来た。

「どうやらちゃんと和解出来たみたいね。まあ、元々喧嘩別れとかしたわけじゃないみたいだし、しっかり話せばこうなるとは思ってたけどね」
「ヨーコさん、お世話かけました」
「あはは、ホント姉妹ね二人とも。私は一人っ子だったから貴女達がちょっぴり羨ましいかも。それはさておいて、病院の表に隣接してるカフェに行きましょうか。そこにサーガ様達やもう一人も集まって

るから」

ヨーコの言葉を受け、カナエとしのぶも向かう事にした。なお、まだリハビリ中のしのぶはカナエに支えられながらである。

☆

一方、ぶっちゃけファミレスでもいいようなメニュー数を誇るカフェの屋外にて……

「うまい！」

既にそこにいるサーガらと―

「うまい!!」

まるで炎の如き髪の元鬼☒隊の炎柱―

「うまい!!!」

煉獄杏寿郎が食事をしていた。

まだ若干包帯は残っているが、ほぼ完治しており本人が望むなら退院も可能との事でサーガが話をすべく食事がてら連れ出していたのである。

尚、事の顛末は料理が来るまでに話し終えており、杏寿郎はあっさり受け入れた。ここら辺に彼の度量の大きさを感じる。

「いずれも初めて食す料理だが！よもやよもやこれ程の美味だとは！」

「ここは病院だけでなくアクアエデン全体からも人気があってな、気に入ってもらえたなら何よりだ」

「いやしかし申し訳ない！ここでの生活資金が無いというのに治療費からこうした食費まで全て面倒をかけてしまっている！俺としては何か恩返しがしたいが、生憎と武芸でしかそういった事が思いつかない！」
「その事で先の事も踏まえて相談……というか提案がある」
「なんと!?俺に出来る事であれば遠慮なく言って頂きたい！」
「それは……ん？」

すまない、とサーガがブレスレットの通信機能へ誰かからの通信が入る。初めて見る物を杏寿郎も凝視した。

「俺だ。どうした？」
『ご用事の最中だと思いますが失礼します。実はバド星人なる者達の円盤郡が侵略行為を行うべく本星に侵入しました。侵入前に再三の警告を行ったのですが「自分達は宇宙の帝王だ」などと聞き耳を持たず。最高位光神たるレジェンド様が統治され、レジェンド様とサーガ様がお住まいになられるこの地にての蛮行、最早慈悲をかける必要もなし！撃墜の許可を頂きたい！』

杏寿郎は通信から聞こえた声に揺るぎない忠誠心を感じた。同時に安易に刃を振るうわけではないという心意気もあるとも。しかしまあ宇宙の帝王とは大きく出た理由である。

「……お前程の奴からの再三に渡る警告を無視どころかどうしようもない理由で反論して強行侵入か。侵入地点周辺は何がある？」
『よりにもよってアクアエデンです。神衛隊及び本島管制室へは既に連絡済み、後はサーガ様の判断一つです』
「分かった。このアクアエデン、並びに惑星レジェンドに生きる全ての命を優先する為、侵略行為を行うべく侵入したバド星人円盤群撃墜を許可する。尚、他意なく投降の意を示した者に関しては捕縛のみに限定だ」

『了解しました！神衛隊第四分隊副隊長グラハム・エーカー大佐、並びにマリーダ・クルス少佐、円盤群を撃墜・駆逐に入ります!!』

ハッキリした返事をした後、交戦に入るのだろう、通信は切れた。サーガはやれやれと溜息を吐きながら杏寿郎に説明する。

「先輩が治めていても時たまこういう連中はやって来る。俺達がいない間は九極天や神衛隊の判断に任せているんだが、今回は俺が居た為、態々聞いてきたようだ。俺がどう答えるか分かった上でな」

「それだけ貴殿を信頼していると言う事か！しかし今の御仁、並々ならぬ忠誠心を感じた！一体何者なのだろうか!?」

「ああ、俺直属の護衛部隊『神衛隊』の第四分隊……主に機動兵器運用における教導並びに有事の際の出動を行う部隊の副隊長、グラハム・エーカーだ。あの口振りから察するにマリーダも一緒だな。噂をすれば……」

サーガが見上げた方向へ杏寿郎も目を向けると、その円盤群らしき物体に超高速で接近していく青と白、二機の鳥のような機体が目に入った。

☆

サーガとの通信を終えたコックピット内部ではグラハムが今度は随伴機に通信を入れる。

「マリーダ、ペーネロペーの調子はどうか？」

「概ね良好です。問題らしきものも発生していません。もっとも篠ノ之博士が開発中にそれらを発見してそのままにするとも思えませんが」

「確かに。彼女ならば一分のミスも残す気は無い、完璧な仕上がりにするだろうな。発展の可能性は残すだろうが」

「ただ、個人的にはバンシィ・ペルフェクティビリティの方がまだ扱いやすく感じます。慣れの問題とは思うのですが……フライト・フォームへの変形がバンシィの『変身』とは違い違和感があって」
「フッ……可変機に乗る者、最初は皆そのようなものだ。訓練を重ね、どちらも扱えるようになっておくと良い。その二機は他でもない君の専用機なのだから」
「しかし、隊長や私が元いた世界の未来の技術と機体をグレードアップして作り上げるとは驚きました」
「同じような事を私の機体にも言えるが、彼女はそういった方面で我々とは常識が違うようだからな。草しか生えんとは正にこの事か。そろそろ接敵する、準備は良いか？数多の命が暮らすこの星を、奴らの好きにはさせてはならない！」
「ハッ！私達に新しい光をくれた、あの方達の生きる場所を決して奪わせはしない!!」

グラハムの機体―ガンダムアメイジングエクシアＧＦとマリーダの駆るペーネロペーは飛行形態のまま円盤群へ突っ込んで行く。

「なっ!?奴らもう追いついてきたのか！」
「怯むな！技術力は我々の方が上だ！振り切れ！」

その認識は明らかな間違いであった。そもそも束の頭脳と渡り合えるのはレジェンドくらいなものである。
宇宙帝王（笑）の技術力などミジンコ程度にしか思っていない彼女はバド星人の円盤群をスペースコロニー・ドラガイト内の別荘で感知した後、既に惑星レジェンド全域に伝達済み。惑星レジェンド大気圏外では逃げ出した場合に備えて東方不敗が駆るマスターガンダム改までスタンバっている布陣。バド星人に逃げ場無し。

「マリーダ！初撃は任せる！挟み撃ちにするぞ！」
「了解！」

ある程度接近したペーネロペーはフライト・フォームからＭＳ形態へ変形し、そのツインアイを光らせる。
これを見た地上の杏寿郎は「なんと!?」と驚いていた。
同時にペーネロペーが武器を構えていた事に、味方を撃つ気かと懸念してもいたが、それは違う。
ペーネロペーがビームライフルを構えると同時にアメイジングエクシアＧＦは急加速を行い、円盤群の中を突っ切っていく。そのタイミングでビームライフルを発射する事でバド星人達はそちらに意識が集中し円盤群を離散させるが、それが二人の狙い。
「バンシィにはない、クシャトリヤのファンネルと似て異なる武器を受けて落ちろ！ファンネルミサイル！」
ペーネロペーのファンネルミサイルラックから発射されたそれは、サイコミュ機能によって意思があるかのような不規則な動きをしながら一発も外れる事なく、そして迎撃さえも回避しながらバド星人の円盤群に直撃、撃墜していく。
「な、なんだあのミサイルは!?」
「こちらの偏光型レーザーさえ当たり前のように回潜ってくる！こんな武器は記録にないぞ!?」
「そちらばかり気にかけていないでもらおう！」
「!!」
バド星人がその声に反応すると、そこには急減速を行うと同時に変形するアメイジングエクシアＧＦの姿があった。
「人呼んで、グラハムスペシャル！」
そう、アメイジングエクシアＧＦのＧＦとは『グラハム・フラッグ』

の略であり、この機体はエクシア系統には無かった変形機構を有する。ちなみにグラハムは機体に並々ならぬ愛情を持っており『グラハム・ガンダム二世』と呼んでいる。
変形から再度急加速して円盤群へと迫り、手にしたアメイジングＧＮソード改とアメイジングＧＮタチの二刀流で次々と撃墜していくエクシアＧＦ。……長いので以後アメイジングの部分は基本省略させて頂く。
最早残り一機となった円盤に乗っていたバド星人は逃げる事も忘れ恐怖に染まっていた。

「な……何なんだ貴様は!?」
「敢えて言おう！グラハム・エーカーであると!!」

高らかに名乗ったグラハムのエクシアＧＦはＧＮソード改とＧＮタチを目の前で？を描くように構え、一気に突撃し振り抜く。

「切り捨て、御めぇぇぇん!!」

双刀の一閃を受け、最後の円盤も爆散する。
侵入から十数分、バド星人の円盤群はたった二機の機動兵器によって残らず撃墜され、惑星レジェンドの地に足を着けることなく全滅した。

☆

バド星人の円盤群を撃墜後、カフェ近くへと着陸するエクシアＧＦとペーネロペー。二機並ぶとペーネロペーが一回り大きいのが良く分かる。杏寿郎はこの巨体でよくあれほどの動きが出来ると感心していた。
そしてグラハムとマリーダがそれぞれのコックピットから降りてくると、サーガより先に杏寿郎が駆け寄って行く。

「む？君は？」
「お初にお目にかかる！俺は煉獄杏寿郎！ここの病院で保護された者だ！」
「ここの？なるほど、君が先日の報告にあった二名のうちの一人か。しかし名乗られた以上、私も名乗らねば不作法というもの。私は神衛隊第四分隊副隊長グラハム・エーカー大佐だ。以後宜しく頼む」

グラハムに差し出された右手を快く握り返す杏寿郎。

「洋名では姓が後ろ側だと教わった！つまりグラハム殿が名前の方というわけだな！しかし見事な太刀筋だった！あの『もびるすーつ』とやらは専用のものになればなるほど扱いが難しいと聞く！それであの動きとは恐れ入った！」
「お褒めに預かり恐悦至極だ。又聞きになるが君も相当な剣士のようだな。私としても生身での戦闘訓練もしたい故、機会があれば手合わせ願いたい」
「うむ！こちらこそその時は全力でやらせて頂こう！それが礼儀というものだ！」
「その時、その機会というものだが、割と早く与えられそうだ」
「！」

会って早々親交を深めている両名にサーガが声をかける。そこにはサーガだけでなく、巌勝やオルガ、三日月。さらに合流したヨーコとカナエ、そしてしのぶも居る。

「煉獄君!?」「煉獄さん!?」
「胡蝶か!?そしてそちらはもしや胡蝶の姉上！よもやこの地で二人に再び会う事になろうとは思いもよらなかったな！猗窩座も鬼ではなく人として生きているようだし、不可思議な事の連続だが悪くないな！」

驚く胡蝶姉妹をよそに、杏寿郎は既に猗窩座こと狛治を許しているらしい。というか自身の命を奪った事は別に恨んでいなかった。己が弱かったと言い切った上、巌勝の事も同様にかつて鬼であろうと憎んだりしていない。

ただし無惨テメーはダメだ。

一応、しのぶもそれについては聞いているものの半信半疑だった。彼女の境遇を考えれば当然なのだが……

「む？」

三日月やオルガとクレープ頬張ってる巌勝（元上弦の壱）を見てどうでもよくなった。

あの騒動の中よく呑気に食べていられるなと思いつつ、ヨーコやカナエの話通りだと納得する。

「巌勝か、久しぶりだな。アムロ大佐との訓練を見学しに行って以来か？」

「ご無沙汰しております、グラハム大佐殿」

頭を下げつつ、ナチュラルに余分に買っていたクレープを差し出す巌勝と同じくナチュラルにそれを受け取るグラハムとマリーダ。特にマリーダの動きは早かった。ついでに杏寿郎とサーガにはオルガが、ヨーコたち三人には三日月が渡している。

「姉さん、何なのこの空気」

「いふものふぉとよしのむ」

「せめて飲み込んでからにして」

駄目だ姉は元々この空気の人間だったと、しのぶは簡単に考えるのをやめてクレープを頬張る。美味しい。

「それでサーガ様、機会が早く与えられそうというのは？」
「簡潔に言ってしまえば彼を神衛隊へ迎え入れたい。どの隊かはまだ決めていないが、入隊する以上機動兵器の訓練は必須だろう。タイミングよくグラハムが来てくれた事で教官役も見つかった」
「なんと!?」
「この二人、波長合いすぎじゃない？」
「うん、俺もそう思ったよ。ヨーコ姐さん」

ただ気になるのは、そうなった場合しのぶはどうするのかという事だ。カナエがレジェンドの許にいるとなるとサーガが独断で彼女の身内を神衛隊へは入れられない。
しかし、サーガは既に答えを用意している。

「それから、胡蝶しのぶに関しては先輩でも俺でもなく姉であるカナエの許にいればいい」
「！」

確かにこれならば別にカナエがレジェンド側に属していても、しのぶ自身は『カナエに属している』。神衛隊に属するわけでもレジェンドの眷属として属するわけでもないので何かあれば独断で動ける。カナエはあまり命令する性格でもないし。その上で身の振り方を考えればいい。

「……ありがとうございます」
「見たところ思慮深い性格だろう。今自分の置かれた状況にすぐ納得してどうするか選べというのは酷だ。ゆっくり考えて選ぶといい。先輩でもそう言うはずだ」

サーガの配慮に感謝しつつ、カナエもしのぶもお互い一緒にいられる事に喜ぶ。レジェンドの説得に関しては彼の事だからあっさり受

け入れるだろう。

「それを踏まえてこれからの事だが、俺とヨーコ、巌勝、オルガ、それから三日月は正式にダイブハンガーへ出向する第一から第三分隊までのメンバーの手続きをする為、あちらの世界に戻るのに少し遅れる」

「え？あの、私学園に……」

「心配しなくてもいい。そこは……」

「束さん参上!!」

「……彼女が送ってくれるそうだ」

いつの間に来たのやら、束がクロエを伴ってやはりクレープを食べつつ現れた。

「やーレジェくんの専用機を渡そうと思ったのにまた問題が出てきちゃってさ。せっかくだからもう予定前倒しで私とクーちゃんもレジェくんのとこ行っちゃおう！という事にしたわけなんだよ～。あ、カナちゃんしのちゃんだけじゃなくてグラくんとマーちゃん、それからきょーくんと、あと……」

「俺も一緒だぜ」

そう答えたのは束が乗ってきたであろうニンジン型の船から上半身だけ出してニヤリと笑っている流竜馬。実にシュールである。

「な、なんかたくさん初対面の方が……」

「さぁさぁ早く準備して出発だよ！」

「そういえば煉獄……勝手に話を進めてしまったが神衛隊の入隊は……」

「願ってもない事だ！しかも話から察するにグラハム殿が師範とは文句どころか感謝しかない！元の世界で命を失った俺がこうして再び人を護れるのはなんたる僥倖か！これからは神衛隊の一員として、己

の責務を全うする所存！」
「……こっちもこっちで心配しなくていいみたいだな」

厳勝や狛治と違い割とあっさり入隊してくれた。彼自身後ろめたい事は殆どない快男児だったし。

「一応先輩に事前に話は通してあるが、他の者に話が行き渡ってない可能性もあるから念の為これを渡しておく」

束とグラハムへそれぞれ手紙が渡される。束へはレジェンドからの、グラハムへはサーガからのメッセージを書き記した物だ。ついでに言っておくが束の手にしたそれは別にレジェンドからのラブレターとかそんなのではない。グラハムが渡された物同様、ダイブハンガー在住者に渡すための物である。

「細かい話や詳しい話は後にして今は準備準備！タイムイズマネー！時は金なり早く早く！」
「ちなみに先輩は何人かと『空の世界』へ行っている。空の世界には数日間滞在するようだが、帰って来るまで二日ほどだそうだ」
「皆忘れ物が無いように落ち着いてじっくり準備してね」
「「「「「おい落差ァ!!」」」」」
「私学園行かなきゃいけないのにー!!」
「え？姉さん学校通ってるの？」
「フッ……相変わらずカオスだな」
「流竜馬、今の君の姿勢がある意味一番そうだと言わせて頂こう」

一波乱の後、賑やかに……別の意味で騒動になるのは惑星レジェンド在住者の特徴なのかもしれない。
その後、杏寿郎はともかく、しのぶの退院に関して少々揉めたが、カナエが退院先に卯ノ花がいる事を伝えたら一発で許可され、準備を終えていた束とクロエ、グラハムとマリーダ、そして竜馬と共にかの世

界のダイブハンガーへと出発して行った。
　別れていたそれぞれの道は再び一つとなり、各情勢も新たな動きを見せる事となる。

〈続く〉

停止教室のヴァンパイア、集結せし勇士たち
新しい家族、新しい生活

オカルト研究部の面々を伴い、ゲンや卯ノ花らがダイブハンガーへ帰って来て一番先に見かけたのは、既に在住しているレイトやミライ、アーシアらではなく……

「ヤッホーれっちゃん！カナちゃんしのちゃんだけじゃなく束さんとクーちゃん、グラくんマーちゃんりょーくんにきょーくんも一緒に来ちゃったよん！」

彼らよりほんの少しだけ早く戻って来たカナエや、それを連れて来た束達であった。

一旦仮住居に集合後に休憩してからダイブハンガーへ来たのでどうやらその間に到着したようだ。

「あら、いらっしゃい束さん。随分予定が早まっただけじゃなくて他の方も大勢いらっしゃるようで……何名かはご紹介頂いても？」

「おっけー！あ、その前にちょっと手伝って。しのちゃんまだ完治してないから。なんでも元の世界で全身の骨粉々にされちゃったんだってさ」

『ぜっ!?』

さすがにこんな反応にもなるだろう。

その場のほぼ全員が驚いているが、ハイパーゼットンがどこからか車椅子を持って来た。

「じぇっとん」

「おー！さすがゼッちゃん気の効き方がすごいぞ！さ、しのちゃん座って座って」

「ありがとうございます。あの、この子は？」
「れっちゃんのカプセル怪獣だよ。カナちゃんのモスちゃんもそうだから仲良くしてあげてね」

ぺこりとお辞儀するハイパーゼットンはやはり礼儀正しい。カプセル怪獣のまとめ役というのは伊達ではないのだ。
そんな時、小猫がしのぶに声をかけてきた。

「あ、あの……！」
「何でしょうか？」
「もしかして、カナエ先輩の妹さん……ですか？」
「はい。自己紹介が遅れましたね。胡蝶しのぶ、蟲柱です。でした、の方が正しいかもしれませんが」

元の世界でその命を終えた自分はもう鬼☒隊ではない。つまり柱という肩書も過去のものだ、姉と同じく。

「時に姉さん、なんで学校に？年齢的にまさか留年なんてオチはないわよね？」
「違うわしのぶ！私は享年１７歳だったから『高校は基本１６歳からだから外見年齢とかそういう意味でも高校一年からならイケるかな？』って思ったらレジェンド様がそう手続きしてくれただけでちゃんと一年毎に進級して今高等部三年よ！」
「え!?カナエって１８じゃないの!?」
「どうやら姉さんはこちらに来て数年経っているらしくて既に２０歳超えてるそうですよ。光気……とかいうもののおかげで見た目とか殆ど変わらないので分かりにくいですが」

光気万能説再び。何だこの若さを保とうとする者が男女関係なく求めそうなウルトラパワー。

「あの、しのぶさん」
「はい、ええと……」
「お互い、姉に苦労しますね。あ……私は塔城小猫っていいます」
「あら？貴女にもお姉さんが「白音ぇぇぇ！お姉ちゃんのどこに苦労するにゃー!?」……名前の事はともかくそのようですね」

ベクトルは違えど何かと騒ぐ姉を持つ者同士、早速仲良くなっている。
しのぶに続いて気になるのは炎の如き髪を持った男性―煉獄杏寿郎だ。しかし彼を見たタイタスが何を感じ取ったのかアストラル体のまま一歩前に出てポージングを始めた。

「むん！」
「「「「へ？」」」」

周りはポカンとしたが杏寿郎も通じるものがあったのか同じように構えを取った。

「ふんっ！」
「「「「はい!?」」」」

まさかの反応に驚く一同を尻目に、同調した彼らは次々とポーズを決めていき、最後は清々しく笑っていた。

「いや初対面だというのに申し訳なかった！何故か他人のような気がしなくてな！実に充実した時間だった！」
「それはこちらも同じ事！本来ならばここで握手といきたいがそちらの現在の都合上それが叶わぬのが残念で仕方ない！申し遅れたが俺は煉獄杏寿郎！鬼⊠隊では炎柱を務めていた！宜しく頼む！」
「ほう！燃え上がるその肉体が如く良い名だ！私はウルトラマンタイタス！君達で言うならタイタスが名前だ！」

「なるほど！その鍛え上げられた肉体のような強靭さを感じさせる名前だな！」

こっちもこっちで波長合いまくりである。どちらも体育会系というか、決して中の人が同じだからとかではない。

「そちらのお二人はもしや……」

卯ノ花が声をかけるとグラハムとマリーダは神衛隊以前より軍属だったので、足を揃え背筋を伸ばし、右手で敬礼をする。あまりに堂に入っていた為、リアスらも一瞬驚く。

「神衛隊第四分隊副隊長グラハム・エーカー大佐！本日より本世界のダイブハンガーへ着任しました！」

「同じくマリーダ・クルス少佐。グラハム副隊長同様、本世界のダイブハンガーへ着任しました」

ここで驚いたのは黒歌と夜一だ。二人ともシミュレーターで第四分隊隊長を務めるアムロのＣＰＵデータとやりあって瞬殺された経験……というか記録更新中。

「やはり第四分隊の方でしたか。レジェンド様とサーガ様から伺っています。グラハム副隊長は可変機及び近接戦の、マリーダさんは大型機運用のプロフェッショナルと」

「お褒めに預かり光栄です。九極天の才媛たる卯ノ花先生にそう言って頂けると箔がつくというもの」

「私はアムロ隊長やグラハム副隊長らのような方々と同列に並べられる程の腕前は……」

「何を言うマリーダ少佐。君は私が教えた空戦技術を短時間でマスターし、あのペーネロペーでやってみせた。あのような大型ＭＳの操縦経験は私にも隊長にもない。私が乗ったところで的になるしかな

いだろう。ペーネロペー等は君が乗ってこそ輝くのだ。そこはしっかりと誇りたまえ」
「ええ。こちらも大型機は特機のコンパチブルガリバー一機のみでしたので、その機体のパイロットが戻って来たら是非訓練相手をお願いします。彼女としても高機動の大型機が相手なら怪獣との戦闘にも役立つ技術を学べるでしょうし」
「卯ノ花先生、グラハム副隊長……了解しました」

周りがとんでもない為に自己評価が低くなりがちだが、彼女も相当な腕前だ。ちなみにアムロ、グラハム、ニールの三人の中で機体が大型になった経験があるのはニールのみ、しかも一度きり……デュナメスにＧＮアームズをドッキングさせた時だけであり、もう大分前の出来事である。しかも得意の狙撃が使えず火力でのゴリ押し戦法となってしまうので、おそらく同じ土俵に上がればそちらの経験豊富なマリーダに軍配が上がるだろう。

「えっと……その、なんと言ったらいいか……」
「フン、悪魔より悪魔っぽいとでも言うか？あながち間違っちゃいねえな」

自己紹介が残っているのは束とクロエ、そしてこの男……流竜馬。ずば抜けた能力に加えて面倒見が良く、リーダーシップもあるのだが……人によっては凶悪な人相に見えてしまうのが玉に瑕。

「俺は神衛隊特別部隊・ゲッターチームの流竜馬だ。ゲッター１系列のメインパイロットをやってる。今は単独でブラックゲッターに乗ってるがな」
「チームって事は……他のメンバーは？」
「本来の機体、真ゲッターロボと真ゲッタードラゴンの整備と調整に掛かりっきりだ。パワーアップしたのは良いがまた一からやり直すハメになるとは思わなかったぜ。真ドラゴンはともかく真ゲッター

はそこまで延びる予定じゃなかったんだが」
「だってりょーくん無茶な機動しまくるじゃん！はーくんもだけど！べっくんだけだよ理解してくれてたの！」
「俺らゲッターチームがヘロヘロ動けるかよ。超音速合体（マッハオープン・フォーメーション）なんてアレが霞むような大技だぜ？」
「前から思ってたけどさ、私もオーバースペックだけどりょーくんも大概だよね。っていうかゲッターチーム全体が」
「こう言っちゃなんだが、まともな神経でゲッターチームが務まるわけねえだろ」

簡単に言っている竜馬と束だが、後日その訓練の様子を見たオカ研メンバーは本気で腰を抜かす事になる。何故って、あんな『合体という名の戦闘準備さえ命がけ』みたいなものを見せられて平然としていられる神経はまだ彼女らには備わっていない。

『おい、何だその真ゲッタードラゴンっていうのは。俺は聞いた事ないぞ』
「いや、ロボットじゃないのか？ゲッターチームとか、真ゲッターロボって言ってたし」

やはりドラゴンという単語にドライグが反応する。一誠の言う通りなのだが、ドライグ達のように漢字とルビで称するなら真進化機龍（真ゲッタードラゴン）だろうか。

「で、さっきから賑やかなのが、まさか……」
「そーう！この私が伝説九極天の一人にして数多の機動兵器の母！クーちゃんのマミー！篠ノ之束さんだよ！将来はレジェくんのお嫁さんになって今以上の大家族に「束さん？」れっちゃんこわーい」
「クロエ・クロニクルと申します。束様共々宜しくお願いします」
「ほら、養女であるクロエさんの方がまともに見えてしまいますよ」
「いいもん！クーちゃんは真面目キャラで私はこーゆー性格だもん

！」

はぁ……と溜息を吐いた卯ノ花だが、ここでまたも騒ぐのが黒歌。予想はつくだろうが……

「ソウルゲインー!!」

「「「「は？」」」」

「え、何この子。クーちゃん、束さん何言ってるか理解出来なんだけど翻訳出来る？」

「おそらく何らかの理由で魂が荒ぶってきたのかと」

「なるほどー。つまりアレだね！マタタビキメちゃった発情猫―「違うにゃー!!」あ、普通に喋った」

さっき小猫がしのぶとの会話中に普通に喋っていたはずだが束の記憶には最初から入ってなかったらしい。

「レジェンドから聞いてないにゃ!?」

「んー？んー……ああ！ちょっと前にレジェくんから送られて来た機体リクエスト企画書で、やけに気合い入れてデザインや設定考えてあった機体がそんな名前だったよ！で、それがどしたのー？」

「もしかして既に完成……！」

黒歌は一縷の望みをかけて聞いてみるが返ってきた答えは彼女らの予想を遥かに上回るものだった。

「一機も手ぇつけてないよ」

「なーんーでーにゃー!!」

滝のような涙を流すも束はどこ吹く風で言葉を続ける。

「いやさぁ、束さんの開発最優先はレジェくんの機体だよ？九極天だし。レジェくんが『自分の機体はゆっくり完璧に仕上げるから後回しでもいい』って言うなら別だけど。そういうわけだからレジェくんからお返事出るまで待ってね～」

「レジェンド早く帰って来てぇぇぇ!!」

姉様煩いです、と小猫にトドメを刺されてシクシク泣く黒歌は気分転換にと夜一の手で引きずられながらシミュレーターへ向かっていくが、その時思いもよらぬ台詞が返ってきた。

「あ、そーだ。部屋確認して荷物置いたら皆シミュレーターのとこに集合ね。新型機はお預けだけどシミュレーターの各種機能を大幅にアップグレードするから。モーションントレースタイプの機体も設定出来るようになるし、登録機体数やシチュエーション、モードなんかも爆発的に増やすからその説明も兼ねてるので欠席しないように！レジェくんとか今いないメンバーにはちゃんと教えてあげようね！」

……即座に黒歌が復活し、夜一と小猫を引っ掴んでダイブハンガーの居住スペースへと喜びの（奇）声を挙げつつ爆走し消えて行った。

「「「「……」」」」

「……凄えな。いろんな意味で」

「クセがあるという意味では我々も負けていなさそうだが」

（……私も、なのだろうか……？）

安心しろマリーダ。君はこの場において数少ないまともな部類だ。少し前のクレープの件も別に珍しくもないし。

「とにかく、皆さんをそれぞれ割り振られている自室までご案内しますので他の事はその後に」

「卯ノ花先生、私達の自室までもう用意してくれていたの!?」

「こうなる事を予測していたレジェンド様の指示でしたので」

マジで恐ろしく手回しの早いレジェンド。実際はそれくらいじゃないとノアやキングの行動力には太刀打ち出来ないから自然とそうなってしまっただけ。

余談だが、一誠とリアスが同室なのに朱乃は個室なのが少々不満げだった。レジェンドと同室がよかったみたいだが、就寝時に彼と眠っているオーフィスやアーシアにも自室はある。

単に寝る時だけやって来る……別に夜這いではない。勘違いしないように。

☆

そしてリアスらがダイブハンガーへ下宿ないし引越して来てから二日後、レジェンド達が空の世界から帰還してきた。やはりというか帰還時の転移場所は格納庫だ一番広いし。

「勝手知ったる我が家が一番だな。本当の我が家は惑星レジェンドの方だけど」

「厳勝様もサーガ様と共に惑星レジェンドへ一時帰還されてますし、私とレジェンド様は空の世界へ……ミライ様は大丈夫でしょうか……機械関係の過労で倒れていないといいのですが」

「さすがに二日で倒れたり……いやレジェンドさんも含めて四人で一

日でグロッキー状態だったよね、ごめん」

正直、残った中で一番負担が大きいのはおそらくミライだろう。機械に強く家事万能、生身でもある程度戦闘可能でウルトラマンに変身出来て、おまけに基本はダイブハンガー常駐だ。必然的に頼られる場面が多い。

「レジェンド、烈は頼られないの？」
「あいつが頼られるのは家事よりも治療関係だな」
「というか、あれに頼むのは何かと恐れ多いとか思ってるのが多いだろ」
「確かに……立場が立場故、安易に手を借りるのは失礼だと無意識の内に敬遠してしまうであろうな」

話してみるとそう気にする事でもないと分かるのは九極天も神衛隊も一緒なのだが……と、何かが音を立てて近づいて来るのが聞こえる。走っているのだろうがスリッパなどでパタパタとではなくドドドドドと猛牛が走って来るような音だ。何だコレ。

「ウルトラ嫌な予感するんですが」
「ゼットさんに同じく」
「レジェンド様！盾になってください！」
「お前使い魔の自覚あるのかコノヤロー」

ゼットとロスヴァイセの発言を聞いたティアマットは即座にレジェンドを盾にしようとする。確かにノアやキングも彼を盾扱いしたりするが、マジで使い魔の契約破棄してやろうかと本気で思い始めているレジェンド。

頑張れティアマット、今からでも名誉挽回しなければ本当に放り出されるぞ。

「レジェンドー!!」
「レジェくーん!!」

声をした方向を向いた瞬間、後から来たはずの束が猛スピードで抱きついてきた。突進とも言う。
先に声を出していた黒歌はというと束の身体能力に唖然としていた。まあ科学者と言われていた彼女が仙術使いを単純な早さで圧倒的に上回っているのを見たらそうなるわな。

「あ～この感触この匂い正しくレジェくんだよ束さんレジェくん成分不足だったからしばらくこのままでいさせてね～うあ～天国～」

早口でまくし立てながら、抱きついたままスリスリと頬擦りする束に対する判断に困りつつ一旦放置し、遅れてやってきた黒歌の話を聞く事にする。
束の大きくて柔らかいものが当たっているが、レジェンドはまるで動じない。キングジョーの装甲を遥かに凌駕する鉄壁ぶりの理性だ。男としておかしいわけではない。

「束はそのままにしておくとしてどうした黒歌。マタタビキメすぎて変な方向にシフトしたか？」
「違うにゃー!!なんで発想が束と同じにゃ!?」
「レジェンド様～その人放置しないで下さいよぅ」

さすが主とその従者。考え方もツッコまれ方も似通っている。なんかティアマットが言ってるが被害に合ってる？のは自分だけだし、率先して自分を盾にしたチキンハート・ドラゴンも束同様放置しておく。

「レジェンドの専用機、後回しでもいいよね？」
「欲望が丸分かりな発言だなお前」

いち早く自分の機体を作ってもらう為にいよいよ直談判し始めた黒歌。にしても主従揃ってる時に後回し発言は厚顔無恥というか図々しいというか……

「時に束」
「ん？何かなレジェくん」
「ウルティメイト、どんな問題が出た？」
「えっとねー……口で説明すると長くなるし、かといって省略するとまるで分かんなくなるしで、結局プリントアウトしちゃった。はいこれ」

渡されたのは……ぶっちゃけ某アルティマニア並に分厚い書類。超大作ＲＰＧの徹底攻略本サイズ。

(((((分厚いわー!!)))))
「ちなみに聞いておくが調整、俺一人で出来そうか？」
「ちょっと難しいかも。出来なくはないと思うけど」
「……新機体を一から作るのとどっちが楽で早い？」
「断然新型作る方かな。ウルティメイトはレジェくんとどうしても二人三脚で調整重ねてかなきゃいけないし、必然的に時間掛かるんだよね」

レジェンドは頭を抱えた。漸く完成に漕ぎ着けたかと思ったらこれだ。どうしたものかと考えたが、ここまでやって放棄する気も無い。となれば……

「……仕方あるまい。先に機体を欲しがってる奴の希望通りにしてやってくれ。ウルティメイトの調整は地道にやっていくぞ。臨時の機体は使えそうな試作機ないし最悪量産機でも構わん。今後はゼットに変身する事も増えるだろうし……変形機構が未完成な可変機で、

変形しようとして空中分解したりしなければな」

このウルトラマン、どっかのラプターに乗せたら本当にそうなりそうである。しかも無傷で生還しそう。

「りょーかーい！良かったね～くろにゃんレジェくんのお許し出たよ」

「レジェンドー！束ー！ありがとにゃー!!」

くろにゃんはいいのか、と思いつつレジェンドは愛機となる機体に発見された問題の多さに溜息を吐く。

（……まさかこれ束のアイデアを盛り込んだ結果発生したものじゃあるまいな）

正直、それが原因のも混じってる。結構な数で。

それはそれとして、引越及び下宿で来た面々や束と一緒に来たメンバーはどんな感じなのだろうか。

「束、他の面子はどうだ？まだ二日だが、お前の目から見て上手くやれてるか？」

「ここでは新参な私から見ても仲良く出来てるよー。例えばねー……」

グラハムと杏寿郎はゲンやレイト、一誠にタイタスと共に今朝もトレーニングルームで早朝からルームランナーを全力で走っていた。ちなみにゼノヴィアも参加していたがあまりにハードすぎて途中で脱落している。

しのぶは卯ノ花やアーシアから治療を受けつつ、正式に卯ノ花に弟子入りした。医療に長け、剣術も初代剣八の称号を持っていたレベルの彼女はしのぶにとって正に理想の完成形。元上弦の壱である巌勝

のあの様子を見て以来、『元』鬼でも現在は人格者であれば憎しみは殆ど無くなっている。良い傾向だ。
マリーダとクロエはハリベルやリアスとハーブの栽培やお菓子作りに精を出している。マリーダはよく分かっていないが、他の三人は想い人に食べて貰うべく試行錯誤を繰り返しているようだ。
竜馬はというと、なんとジェントや裕斗らに混じってプラズマ怪獣のハンティングに出掛けていた。しかも既にネロンガやアントラーくらいなら単独で討伐出来るというからマジで普通じゃない。ラッシュハンターズから「何なんだお前」的な台詞を言われたが本人は大した事をしているとは思ってないという。

「……ってな具合だよ」
「概ね良好みたいだな。ん？そういえば俺達空の世界行きのメンバーの中で、まだリクとロスヴァイセを連中に紹介してなかったっけ」
「言われてみれば僕はオカルト研究部とかいうところのメンバー、カナエちゃんとアーシアちゃん、あとタイガ達三人くらいしか知らないや」
「私も同じです。スカーサハさんは……確かこの間の面談の時にオーフィスさん共々抱えられてましたね」
「ならアレだ、俺達が得た情報の開示も兼ねて夕食時に紹介するか。人数増えたし俺も厨房入るぞ」
「私もお手伝いします、レジェンド様。巌勝様がいらっしゃらないですし、メイドとしての本分を忘れてはなりませんので」
「俺もヘルプに入りますですよ！……料理出来ないから盛り付けとか配膳しか出来ないけど」
「我、味見係（ふんす！）」
「そこはゼットを見習って配膳しろよ」

人数が一気に増え、ますます賑やかで騒がしくなっていくレジェンド一家。
彼らはまだ、近々駒王学園で行われる重大なイベントを知らない。

そして秘匿されていたグレモリー眷属の『僧侶』と、その人物が憧れる者の邂逅も少しずつ迫って来ていた。

〈続く〉

奴、襲来

空の世界へと探索に出ていたレジェンド一行が帰って来たその日の夕食は非常に豪勢なものになった。
厨房の最強戦力たるレジェンドとそれに次ぐ調理技術を持ったグレイフィアが復帰し、体育会系らしく体力の余りあるゼットが配膳に駆け回った事がそれに大きく貢献している。
食事が始まった現在は、頑張ったご褒美としてゼットが先にレジェンドの身体を使って食事しており、その隣でオーフィスも食事中だ。

「やっぱり働いた後のご飯はウルトラ格別だぜ！」
「ん、全面同意。んぐんぐ……」
『お前は宣言通り味見してただけだろ』

ちなみに二人は山盛りのチャーハンを食べている。レジェンドが作った物だがどうやらゼットはこれが好物になったようである。
そんな笑顔で食事しているゼットをトライスクワッドの三人はじっと見ていた。

「……すっげー美味そう」
「そういえば我々もゼット同様にこのダイブハンガーでは限定的に実体化出来るが、地球人のような食事は出来ないな」
「いや、タイタスのその姿って確か『ウルトラヒューマノイド形態』って言うんだろ。人間の姿になれば出来るんじゃないのか？」
「いや、実体化出来てもイッセーと一体化しているから出来ないようだ。正直言うと長い事この姿だから戻るのが億劫だというのもある」
「「おい」」

久しぶりにタイタスにツッコんだタイガとフーマ。
それはともかく、人間体になれるレオやゼロ達はもちろん、レジェンドの身体を借りて食事を摂れるゼットが三人はやはり羨ましい。

特にタイガは他の二人と違い最初からウルトラ族だったのに加え、兄弟子であるメビウスからカレーの事を聞いていた為、食事というものがどういうものか非常に興味があった。

（こんな事ならちゃんと人間体になれるようにしておくんだった）

まあ、タイタスの言う通りなれたとしてもイッセーと一体化している以上は人間体へはなれないのだが。

早く一人前になりたいと訓練漬けだったせいか、そういった事を後回しにしていたタイガは少し落ち込んでいた。

「はぁ……」

「お前どんだけ食いたかったんだよ」

「確かに私も杏寿郎の言っていたご飯は興味あるが……」

タイタスが目を向けた方向にはリクエストした彼の好物である、さつまいもの味噌汁を食べつつ「うまい！」を連呼する杏寿郎がいる。

そんな三人に声をかけたのは彼らの相棒（バディ）である一誠。

「……なあ、三人とも。あの人がやってるみたいに、俺の身体使って飯食ってみるか？」

「「!!」」

「さすがに三人分の飯だと俺の身体もキツいし、今回はお試しで次からローテーションとかそんな感じでさ。あ！部長が個人的に俺に用意してくれたものとかはダメだからな!?」

「「いいですとも！」」

見事な三倍ゴルベーザなハモり具合。

三人はそれぞれ、タイガがカレー、タイタスがさつまいもの味噌汁、フーマは各種天ぷらを頂く事にしたらしく良い感じに主菜と副菜と汁物が分かれている。

「これがメビウスの言ってたカレーかあ！今回は少なめだけど今度の時にたくさん食べよう！俺はもう少し辛めでもイケるかな？」

タイガがカレーの魔力にやられた。

「うまい！うまい!!うまい!!!」

タイタスも杏寿郎同様にうまいを連呼し。

「やっべぇこれ余程変なモン揚げない限り何でもイケるだろこれ！」

フーマは次回は天丼にして食おうと考え始めた。

三者三様喜んでくれたようで一誠も身体を貸したかいがあったというもの。

その様子を微笑みながら見守っていたリアスだが、ふとした事を思い出し漸く食べ終えて一息ついているゼットのところへやってきた。

「あぁ～至福でございました超師匠。チャーハンばかり食べて野菜を殆ど口にしなかったのは失敗でありんす」

『次は野菜たっぷりチャーハン作ってやるよ。炒められたキャベツの旨さはヤベーぞアレ』

「マジですか超師匠。やっぱり野菜パワーすげ「あの……」ん？なんでございましょう？」

レジェンドの身体でゼットの言葉遣いはやはり違和感がいつも以上に大きいというか……この際それは置いといてリアスは深々と頭を下げた。

「私達の事を受け入れて頂きありがとうございます」

「え!?俺なんかやらかしてた!?」

『たぶん俺に対してか。ゼット、もう変わって大丈夫だな』
「あ、ハイ。えっとリアスちゃん？超師匠とチェンジするんで」

よっ！とウルトラマンの姿のゼットがレジェンドから出て来る感じで実体化し、食器を下げに行く。それを笑いながら見送り、再度改めてレジェンドの方へ向き直る。

「あー、礼はさっき聞いたから二度もいらんぞ。こちらとしてはタイガ達の保護もしたかったし、お前達の面倒を見たあいつらとしてもお前達の保護をしたかった。つまり俺と家族の考えが一致した結果だな」
「それでもです。私達が言い出す前に既に部屋などの準備はしていたと聞きました」
「元々黒歌やレイトからも頼まれていたんでな。別に俺の第六感が働いたとかそういうわけじゃない」

レジェンドの本質はクーデレタイプかもしれないと邪推しつつ、リアスは本題に入る事にする。

「それで……実はレジェンド様にお願いがありまして」
「ちょっと待て」
「はい？」
「敬称はともかく口調は普段通りで構わん。いくら俺がここの大黒柱といえど、これから一緒に暮らしていく上でコロコロ変えるのも面倒だろ」
「で、でも……」
「何を言っても敬語が抜けない奴もいるが、それはそれだ。相手への敬意を忘れなければ名前呼びでも構わんのはウルトラ族の特徴でもある。タイガだって俺を名前呼びだったろうが」

正確にはレジェンドはウルトラマンであれど光の国出身ではなく、

プラズマスパークの発したディファレーター光線の影響でウルトラマンになった訳でもないのでウルトラ族と呼ぶのは間違いなのだが、確かにタイガはレジェンドを名前呼びしつつも多大な尊敬の念を向けている。
さらに言うなら黒歌や夜一なども平然と名前呼び、しかもタメ口だ。パシって怒られた人物もいる。
結局、リアスは折れた。そっちの方が楽であるし。

「……わかったわ。私もこっちの方が肩の力を抜いて話せるし。本当にいいの？レジェンド様」
「おーそれでいい、それでいい。ちゃんと言葉からも敬意は伝わってる。大丈夫だ、安心しろ」
「ありがとう。それで、言いかけてたお願いというのなんだけど……」

もうまともな食べ物残ってないな……と懐からカロリーメイト（フルーツ味）を取り出して食べ始めながらリアスの言葉を待つレジェンド。

「駒王学園で悪魔、天使、堕天使のトップ会談が行われることになったので」

ずもっ
レジェンドはカロリーメイトを変な所に突っ込んでしまう。

「出来たらその……レジェンド様も出てもらえないかと」
「ごっふ……」
「!?」

口元を抑えて辛そうにしているレジェンドを見たリアスは心配になったが、レジェンドは大丈夫だと手で制した。
軽く咳き込んだが落ち着いたレジェンドはふぅと息を吐く。

「ホントに大丈夫…？もしかしてあまりに急な事で驚いたとか」
「ああ、確かに急だったな」
「やっぱり……無理にじゃなくていいの。カナエからもレジェンド様は忙しいって聞いてるし、むしろお兄様も見習ってほしいくらい「違う、そっちじゃない」……へ？」

間抜けな声を出したリアスだったが、レジェンドとしては会談への出席は時と場合によるとはいえ可能なら出席するつもりだ。故にそれは問題ではない。
レジェンドが見た方向をリアスも向くと、そこにはサーガのような銀髪で、ストレートな長髪の美形が食事しており、その周りには三人、どこかの制服らしきものを着用した者達が同じように食事をしている。

「……？あんな人達いたかしら？」
「いや、ついさっきまではいなかった。さっきまではな……！」

レジェンドが急にその男へ向かって走り出し、跳躍する。
あまりに突然の出来事に頭の処理が追いついていかないリアスだが、黒歌は何かに気づいてレジェンドに叫ぶ。

「レジェンドー!!修羅が！修羅が紛れ込んでるにゃー!?」

修羅というがそれは修羅場と言う意味ではなく、今回は純粋に種族を指す言葉なのだが、それどころではない。

「何故お前がここにいる……！」
「む？」

食事を終え、爪楊枝でしーしーやってる美形がその声に反応した時

は既に遅し。空中一回転したレジェンドのキックが眼前に迫っていた。

「いい加減真面目に仕事しろ……！

こんのバカノアがァァァ!!」

ゴスッ!!

「ぶほっ!?」

「「ノア様ァァァ!?」」

当然の如く顔面に直撃するが、その場でよろめいただけで普通に持ち堪えている。

「相変わらず手厳しいな、レジェンド。だがそう肩肘を張ったままでは疲れて仕方あるまい。お前は少し休む事を覚えるべきだぞ」

「確かにモスラや卯ノ花からもよく言われるがな。お前はむしろちょっと肩肘張れよこの阿呆」

何事もなかったかのように会話する二人を見て大半の者はレジェンドの知り合いとは分かった。

……が、残りの者は頭を抱えたり真っ青になったりしている。その理由は言わずもがな……

「だから言ったじゃないですか！ちゃんとアポ取って堂々と訪問した方が良いって！」
「いや、近藤さんアンタには言われたくないだろ。いつの間にか天井裏だの床下だのに入り込んでブッ飛ばされるのが日常茶飯事じゃねーか」
「そうは言うがな、トシ！お妙さんに安心して生活してもらうには常に身の回りの安全を確保しなければならん！いつ何処に彼女を狙う魔の手が迫るか分からんのだぞ!?」
「むしろアンタが常に魔の手を伸ばしてはボコボコにされてるだろーが。ったく少しはフォローするこっちに身にもなってくれよ」
「何言ってんですか土方さん。ギンガビクトリーさんと会食中にいつもの犬のエサ作り出してノア様の顔に泥塗るマネしたアンタも大概ですよ。腹切って詫びてくだせェ土方コノヤロー俺が副長になる為に」
「最後本音が駄々漏れなんだよ総悟ォォォ!!」

先の美形に負けず劣らずインパクトのある三人だが、彼らが言う「ノア様」がその美形の名前だと分かる。

「え？それ修羅のアルティス・タールじゃないにゃ？」
「なんでィその『アルマゲドン土方』ってのは。まるでタール漬けの土方さんを最終戦争の真っ只中に放り込む失敗確実な作戦ネームじゃねーか」
「最初の二文字しか合ってない上にさらっとタール漬けとか失敗確実とか俺をディスってんじゃねーよ!!ヒッポリト星人かテメーは!!」
「落ち着け十四郎。このままでは話が進まん。総悟もだ、後で好きなだけ弄って構わんから」
「へい、わかりやした」
「オイ総悟、お前後半の部分聞いて納得しただろ!!ノア様も後半の部分いらねーだろ!!」
「すいませんノア様俺にはなんかないですか」

「うむ、ストーカーかゴリラか片方で行こう。さすがにダブルパンチは妙でも厳しいだろうしな」
「いやそれどっち選んでも地獄なんですが」
「その前にその選択肢にツッコめよ!!」

周りをほったらかしで騒ぐ四人。
レジェンドが青筋を順調に増やしつつあり、さすがに軌道修正しないとマズいと思ったリアスが彼に聞く。

「あの！レジェンド様、誰なのその人達。貴方の知り合いみたいだけど……」
「ああ、とりあえずこいつはな……

光の三超神の一人、ウルトラマンノアだ」

騒いでる四人以外、時が凍った。
え？三超神？
つまりレジェンド様の同格？最高位の光神？
あのキン肉バスターかけられてた方？
姉さん何それどういう状況だったの？
一通り疑問が駆け巡った後、レジェンドやオーフィスなどの一部を除いて全員が揃いも揃って大声で驚いた。

「ちょちょちょちょっと待って!?え、ウソなんで!?」
「それじゃあ、あのノア……様っていう人の周りの三人は!?」
「あいつの直属の部隊『護神隊』の一角だな。早い話がサーガの神衛隊みたいなモンだ」
「待て、レジェンド。今の我が精鋭部隊にはもう一つの名がある。そちらの方も覚えておいてもらおう」

気がつけば言い合いをしていたノアがレジェンドに向いており、何やら自信ありげな表情をしている。レジェンドとしてはノアがこの表情をしている時は大抵期待出来ないものなのだが……

「そう身構えるな。悪役のような名前でなければ、やたら長い名前でも下ネタに走った名前でもない」
「最後の例えがおかしいんだけど」
「その名は!!」

あまりに堂々とするので周りの者達は聞き入っているが、ぶっちゃけレジェンドは「あ、これロクなもんじゃない」と瞬時に理解する。付き合いの長さは伊達じゃない。

「ノア☆魂だ」

「ＮＯ！頭ァァァ!!!」
「ぶふぉおっ!!」

レジェンドのドロップキックが再びノアの顔面に炸裂した。これ

にはオーフィスらもポカンとしている。

「マジで頭ん中どうなってんだお前はァァァ!!そもそも間の☆が果てしなくウザさを醸し出して笑うどころか苛つくわ!!普通に護神隊でいいだろ!!」

「レジェンド!お前も知っているはずだ!普通というのが一番難しいのだと!!」

「ハナっから普通にする気の無いやつが言うなバカヤロー」

この瞬間、レジェンドとノア、そして護神隊と呼ばれる部隊に属しているだろう三人以外は思った。

―ああ、これ二人が疲れるわけだ―

初めてノアと邂逅し、レジェンドとサーガの心労を理解した一同。しかし忘れてはいけない。キングというもう一人原因がいるのだという事を。

「そもそも何の為に不法侵入やってんのお前」

「その前に彼らを紹介させてもらうとしよう。三人とも、自己紹介だ」

「お初にお目にかかる!俺はノア様直属の護神隊・真選組局長の近藤勲!好きなものはお妙さ「ハイ次行ってみよー」ちょっ!?お願いだから言わせてくんない!?」

「我慢してくだせェ近藤さん、ぶっちゃけ止まらなくなるのが目に見えてるんで。んじゃ次は俺が。俺ァ真選組副長「いつまでそのネタ引っ張る気だテメェェェ!!」……ちっ、一番隊隊長の沖田総悟でさァ。で、そこの前髪▽でヒゲの無い無個性が土方コノヤローでィ」

「誰が無個性▽だ!勝手な紹介してんじゃねェ!!ったく……俺は真選組副長の土方十四郎だ。ノア様の直属だからそう頻繁に会う事はないだろうが宜しく頼む」

「新撰組!?あの!?」

当然といえば当然の事であるが日本でも有名なあの組織を思い浮

かべた一誠。しかしそれはすぐさま土方に訂正される。

「お前が何を思ってるか大体想像はつくから言っとくがお前の知ってる『新撰組』じゃねェ。真に選ぶと書いて真選組だ。向こうは一番隊『組』長だがこっちだと『隊』長ってところも違うな」

「あとはパトカー使ったりバズーカ使ったりもしやすねィ」

「「「「いやバズーカって何!?」」」」

「こちとら元は武装警察でさァ。ん?どうしたんでィそこの二人」

沖田が声をかけたのはしのぶと杏寿郎だ。

やはりというか声が知り合いに似ているからなのだが。

「あ、いえ……伊黒さんに声が似ていたもので……」

「うむ!雰囲気は違うがな!」

「そうですかィ。まあ俺は伊黒じゃなくて腹黒なんで」

(隠さず言うんですね、そこは……)

別名ドS王子。ちなみに土方はマヨ、近藤はゴリラもしくはストーカーという渾名がついている。

というか近藤のコレさっきの選択肢じゃん。

「それで我々がここに来た理由だがな……」

「おう」

「お忍びで次元旅行だ」

レジェンドのハイパーライトニングカウンターがノアの右頬を殴り飛ばした。

「ごっファ!?」

「お前マジで大概にしろよコルァ何がお忍びだ人んちの食卓に不法侵入してタダ飯カッ食らいに来たんですかバカですかバカでしたね忍

ぶどころか色々丸出しにして何寝言こいてんだコノヤローノアイージス引きちぎるぞあァん？」

ノンブレスで上記の台詞を言いつつ青筋浮かべながら首をコキコキ鳴らしだしたレジェンドに本気でビビる一同。
しかしノアは謝らない。

「ふっ……只のジョークだ。本来の目的は別にある」
「次変な事言ったら以前言ったようにスパークレジェンド叩き込むからな」
「私が此度この【エリア】、この世界、そしてこの場所に来たのはそこにいる『弾かれ者』達に関係してだ」

これにはレジェンドを含めて驚いた。本気でまともな内容が返ってきた……！とかもあるが。

「まさか戻る方法でも見つかったのか？」
「いや、それは実質的にほぼ不可能だろう。まして中には死して弾かれた者もいる以上、仮に元の【エリア】に戻れても元の世界へは戻れん。これに関しては望み薄、期待しない方がいいだろうな」

やっぱりか、とレジェンドは目を伏せるが当の本人達も納得がいく答えだったので然程ショックでもないようだ。

「だとすると皆目見当がつかん。そういう答えが出たのなら原因が分かったわけでもないだろうに」
「その通りだ。まるで進展もないが今のところ現象の方は少なくなっている。被害が一時的にでも縮小化しているのは僥倖とも言えるが、根本的な解決にはなっていない以上安心とは言えん。とはいえ都合が良いのは確かでな。弾かれた者達にビデオレターでも作ってもらい、それぞれの元の世界にいる親しい者達に届けてやろうと思ってこ

こまで赴いたわけだ。幸い私の【エリア】出身のようだからな」
『え……えええええ!?』

本気でまともな事だった。しのぶや杏寿郎、卯ノ花らにとってみればまさかの申し出だ。
そしてレジェンドは本気で唖然としている。え?何コイツ悪い物でも食ったの?いやさっきまで食ってたのウチの夕食だし、なんて考えていた。

「送るにせよ送らないにせよ、私も時間が押し迫っているのでな。送るのなら明日の昼までに用意しておいてもらいたい」
「……ん?まさかお前泊まっていく気か!?」
「うむ。特別待遇しろとかは言わんが部屋と寝る場所は用意してくれると助かる」
「普通に部屋貸してくれでいいだろ……まあ理由もしっかりしてるし申し出もありがたいものだしな。グレイフィア、案内してやってくれ。ここの片付けはやっておく」
「かしこまりました。それではノア様、真選組の皆様、お部屋の方へご案内させて頂きます」

グレイフィアに礼を言い、ついて行こうとするノア達をレジェンドが呼び止める。

「今回は礼を言う。気遣いの程、大いに助かった」
「ふっ……それはこちらの台詞だ。我が【エリア】から弾かれし者達を手厚く受け入れてくれている事への感謝と思ってくれれば良い。これはサーガにも直接お前に言えと言われたのでな。キングからもそのうち言われるかもしれんぞ」
「……そうか。ついでにこっちの日本地獄で罰を受けている鬼舞辻無惨だが」

この名前が出た瞬間、しのぶと杏寿郎がピクリとしたのだが、その後の言葉は予想外だった。

「とりあえず今のまま地獄でサンドバッグしててていいか？」

（（!?））

「ああ、思う存分やってくれ」

（（!!??））

「すいやせん、俺もちょっと参加して来ていいですかィ？今までふんぞり返ってた奴の無様な姿に追い打ちをかけた時の表情が滑稽で笑えるんでさァ」

（（（（ドSだァァァ!!!!））））

哀れ無惨。しかし慈悲は無い。

しかも沖田の申し出をレジェンドとノアまで了承した。部屋に案内された後、マジで実行しに行くらしい。

「しかしレジェンド、お主何だかんだ言ってもあやつの事を信頼しておったようだな」

「まあな。本気で真面目になったらあいつ程頼れる奴が他にはいない」

その言葉を聞いてスカーサハだけでなく、その場にいた者がレジェンドとノアの間には揺るがぬ信頼関係が築かれている事を確信する。少し前のやり取りも一種のスキンシップのようなものなのだろう。おそらくキングという者とも同様に。

「さてと、リアスの言う会談に関しては日にちが定まった上で近くなってから考えるとしてだ。ほら、せっかくのノアの厚意だぞ？光神特製ビデオレター作ってやるから用意してきな」

「はーい！ほらしのぶ！カナヲやアオイに送りましょ！私達はこっちで元気にやってるって伝えないと！」

「姉さんそんな引っ張らないで。私まだ完治してな……痛たっ……」
「そういや隊長と雛森、ちゃんと一緒になったのかしら？あの二人雰囲気作ってそれに流さないと進展しなさそうなのよねー。あたし以外に推進してる奴いたっけ？」
「案外予想外の人物が手助けして下さってるかもしれませんよ？朽木隊長とか」
「いやあの人がそんな事したら周囲が天変地異どころじゃなくなると思うんですけど」
「白哉坊なら『ルキアに相応しいかこの私が見定めてくれる』とか言いそうではあるがな」

どうやらノアのおかげで心配事の一つは減った。弾かれた者達は大なり小なり元の世界の事が気になっていたようだし、最初はグダグダだったが結果的に良い方向へ向かった。後日、それは無事に届けられたのだが……
それとは別に、新たな事態が起きようとしていた。

〈続く〉

―余談―

「オラ頭無惨、焼きそばパン買って来いよ。あとジャンプもな、もちろんお前の金で」
「ふざけるな！いきなり出て来て何をドオォォォン!!ぎゃあああああ!!」
「何口答えしてやがんでィ、さっさと行けや。ああ、テメーが迷惑かけてる鬼灯の旦那や縁壱師範のも忘れんじゃねーぞ」

本気で日本地獄まで行った沖田によって、無惨はバズーカで粛清さ

れながらパシらされた。
　この様子は鬼灯によって撮影され、ノア及びレジェンドにプレゼントされた後、それを見たカナエを始めとした鬼殺隊出身者の大爆笑を誘ったという。めでたしめでたし。

薔薇堕とす悪意の霧

翌日の昼、ノアは作成されたビデオレターを受け取り、真選組と共に自分の【エリア】へと帰って行った。

帰り際まで騒がしく思ったが、いざいなくなってみると妙に静かに感じるのはやはり楽しかったからなのだろう。

そして、数日後のオカ研部室にて……

「冗談じゃないわ！」

リアスの怒声が響き渡る。カナエとアーシアは何も聞いていない為、何がどうしたのか分からないが、一誠とトライスクワッドの三人はすぐに気がついた。なにせそれを知る切っ掛けは自分らだったのだから。

「確かに悪魔、天使、堕天使の三すくみのトップ会談がこの町で執り行われるとはいえ、突然堕天使の総督が私の縄張りに侵入していたなんて！」

「リアス…そこはレジェンド様の、じゃないの？」

「あ」

「でも、レジェンド様は被害を出さなければそういうのは気にしないと思います」

しまったという顔をしたリアスだがアーシアがフォローを入れる。実際問題が起きなければレジェンドは割と寛容なのだ。

「そ、それはともかく！私のイッセーにまで手を出そうとするなんて万死に値するわ。アザゼルは神器に強い興味を示すと聞くし、堕天使勢が親交を深めたのもあの数々のアイテムを他のウルトラ兄弟に授けたというゾフィーと、武器の扱いには一日の長があるとされるウルトラマンジャック。きっと私のイッセーが『赤龍帝の籠手』を持って

いたり、タイガ達と一体化してるから接触してきたのね。心配ないわ、イッセー。私が絶対に貴方を守ってあげる」

ちょっと前だと不安だったが、今のリアスなら確かに相手がアザゼルであろうと油断していれば少なからず痛手を与えられる実力がある。

それを聞いてカナエ、アーシア、朱乃、それに小猫は溜息を吐く。これは別にリアスに対してではない。

「私もそういう台詞言いたいけど、レジェンド様一人で簡単になんとかしちゃうし」

「むしろ守られてしまいますし……」

「いっそ『私を守ってくれますか？』で攻めてみましょうか……でも、もし断られたらどうしましょう……」

（ソランさんはどうなんでしょうか……）

恋する乙女故の悩みである。レジェンドにせよサーガにせよ、彼らを守るとなるとハードルが永遠に飛び越えられないんじゃないかと思う程上がるのは仕方ない。

「でも、納得と言えば納得だよな。一応この世界でもレイブラッド事変以降、しかも比較的最近になって時々怪獣は出てたみたいだけどそれはレジェンドが解決してただろ？でもこの前の魔王獣にせよ、えっと……なんとかゲームの時の奴にせよ、この町で立て続けに怪獣が出現した場所にいながら生還してるとなったら目をつけられてもおかしくないか」

「もしやと思うがこの星の人間だけでなく、三大種族も怪獣達に対抗する術が無いのかもしれないな」

「って事は俺達やイッセーを対抗手段として欲してるってわけか？本人の意思も聞かずそりゃ横暴だろ」

実を言うと対抗するだけの戦力を持つ者もいるにはいるのだが、数が殆どいないのは元より一定の強さまでしか対処出来ないのだ。また、技術的な面でも束を筆頭に充実している光神陣営にはまるで及ばない。

戦力として欲しがっているとしても理解は出来る。

「あ、あの……部長……」

「どうしたの、イッセー？不安なのは分かるわ。でも大丈夫よ」

「い、いえ……実は……」

なんとか声を出す一誠。その理由は不安からではない。

「最っ高に良い気分なんですけど……そろそろ……息が……」

「え？」

なんとなく予想出来たと思うが、リアスが一誠の頭を思いっきり自分の胸に押し付けながら抱きしめているおかげで酸欠になりつつあった。幸せこの上ない状況かもしれないが、このままでは堕天司が言ったのとは別の意味で達する。もしくは逝く。

「ご、ごめんなさいイッセー!!」

「いや、息苦しくなっただけでむしろ最高のご褒美でした！」

……目の前でイチャつかれ、カナエと朱乃はレジェンドの寝床に突撃する事を心に誓った。普通に一緒に寝るだけだがレジェンド相手だとそれも一苦労であるが。

ちなみにアーシアはご存知の通り、基本的に毎晩オーフィス共々一緒に寝ている。小猫は比較的常識ある行動をとり（そもそも今はサーガが留守）、喋ってないからいる事を忘れがちだが先日入学・入部したゼノヴィアはまだサーガをそういう対象……というか恋愛がどういうものか理解している真っ最中。

（皆青春してるなぁ……僕は僕らしく青春しよう。なんと言っても今度の休日はノダチザムシャーさんとフガクさんと一緒にハンティングが出来る日だ）

裕斗は裕斗で七星剣であるノダチザムシャー、ババルウ星人フガクという超大物二人とプラズマメタルキングジョーを狩りに行くのを楽しみにしている。ジェントと養子縁組してから彼らを始めとした実力者と交流が出来たのは凄まじい収穫だ。

「でも何で今になってその総督とやらが接触して来たんだ？正直ウルトラマンならコカビエル……ってか魔王獣とやり合う前にも結構大衆面前で現れてるだろ。イッセーが珍しい神器持ちだってのは分かるけど、俺達と一体化してるからって会いに来る理由が分からねー」

「――アザゼルは昔からそういう男だよ」

いきなり声がしたかと思えば、そちらを向いてみるといつの間にやらある人物が立っていた。

そう、かつてレジェンド一家の仮住居に結界を破壊してまで入ろうとして継国縁壱を怒らせた身の程知らずな……

「あ、不法侵入者さん」

「いやサーゼクス・サーゼクス・ルシファーだよ!?お願いだからその呼び方はやめてくれないかな!?」

カナエがさらっと言った呼び名に反論するのはリアスの実兄にして魔王であるサーゼクス・ルシファー。

突然の彼の登場にリアスとその眷属はドタバタしながら跪き、トライスクワッドはその様子を見てとりあえずしっかり並んで立つ。

ただしカナエやアーシア、ゼノヴィアは所属がまるで違うのでそのままだ。カプセル怪獣を愛でるので忙しい。

「コカビエルのような残酷な性格はしてないよ。代わりに悪戯好きではあるがね。ああ……今回の訪問はプライベートだ、そう畏まらずに楽にしてくれたまえ」
「いつもと同じ格好で来てプライベートだから楽にしろと言われても無理だと思いますが」
「あ、相変わらず君は手厳しいね……」

またもカナエが言うがそれはそうだろう。いつもの魔王衣装に身を包んだまま訪問されたらそうもなる。
今更だがレジェンドの場合は最近はよくそのまま戦闘などになる為、今までのいつもの衣装は式典などのイベント事に着るようにし、普段はアーシア救出戦時に着用した色違いのＡＴＸジャケット……もとい、戦闘コスチュームを着ている。普段着でも遜色がないデザインで助かった。

「しかし……いいね、そのポスター。なるほど、この部活の勧誘や怪奇現象の解決請負を兼ねてるのか……個人的にはここにさらにタロウを加えてほしいんだが。あ、個人的にだから私用の一枚だけでいいよ」
「ぶ、部長さん！ポスターのご注文入りましたぁ！」
「分かったわアーシア！ってなんでそうなるのお兄様!?」
「あ、私とアーシアちゃんはレジェンド様でね♪それからマント付きで」
「これは販売品の原本じゃないわよ!?そもそも私はレジェンド様のウルトラマンとしての姿はうろ覚えなんだから！」

トライスクワッドを前面に出したオカ研のアピールポスターは大層人気があるらしい。後日、冥界で実家に嬉々として拡大したポスターを貼るサーゼクスをルミナシアが目撃したという。

「そうじゃなくて！どうしてお兄様がここに!?」
「何言ってるんだい、リアス。授業参観が近いのだろう？私も参加しようと思ってね。妹が友人と共に勉学に励む姿を是非とも見たいんだ」

そう言ってサーゼクスが取り出したのは今日配られたばかりの授業参観のお知らせプリントだ。
よって、その場の全員が持っているのだが……

「えっとサーゼクス……さん？それイッセーも貰ってたけど今日の話だよな？なんで貴方が持ってるんだ？」
「ああ、タイガ君。実はだね……」
「私がソーナ様に申し上げまして、追加で直接頂戴しました。お嬢様の事ですからこちらには連絡しないだろうと思いましたので」

サーゼクスの背後からルミナシアが姿を現す。
そして、すっかり忘れていたが彼らに口止めする事を忘れていた。

「「「え、グレイフィアさん？」」」
「!?」

ゼノヴィアとトライスクワッドが同時にグレイフィアの名を口にした時、サーゼクスとルミナシアには衝撃が走った。他のオカ研メンバーはしまったと言う顔をしていたが。カナエとアーシアはもちろん、リアスからそれ以外のメンバーにもグレイフィアの事はまだ言わないように言っていたのだが。
かつてサーゼクスが仮住居を訪問した時はお茶の用意だけ済ませてハンターズギルドとダイブハンガーを行き来していた為に会っていなかったし。

「すまない、君達……どこでその名を？」

「へっ？いや、レジェンドのところでメイドしてたけど……」
「……そうか、ありがとう。彼女はどうしてる？幸せそうだったかい？」
「ああ。周りの影響もあるだろうが、私から見ても心からの笑顔が多かった。この額のアストロスポットと胸のスターシンボルにかけて保証しよう！」
「なら、よかった。生きていたなら今後会う機会があるかもしれないし、彼女が幸せならばそれもまた喜ばしい事だ」
「あー……なんか俺らマズい事言ったのか？」
「むう、そうらしい。私もサーガ様からそういった事は何も聞いていなかったしな」

どうやら問題なくこの件は収束したようだ。教える機会があったトライスクワッドはともかく、ゼノヴィアは直属の主たるサーガがグレイフィアの事を黙秘しておくと言うのを知らなかったので仕方ないのだが。
しかし、レジェンドのところにいるというのを年齢的にタイガ達が知っているのはともかく、ゼノヴィアが知っている事に違和感を抱かなかったのだろうか。
しかし、こちらが終わると別の問題にシフトしたようで……

「まさか、ルミナシアね!?お兄様に授業参観の事を伝えたのは！」
「はい。学園からの報告はグレモリー眷属のスケジュールを管理している私に届きます。同時に私はサーゼクス様の『女王』でもある為、主に報告させて頂きました」
（……そこまで管理されてたら息とか詰まらないかしら）

ルミナシアの言葉からそう考えたカナエだが、思い直してみればレジェンドやサーガが大分寛容というか、大半はあの二人だけで仕事が片付いてしまうから部下に苦労が回って来ないのかもしれない。鬼灯も早くレジェンドの下に戻りたいとよく愚痴を零しているし。

「その報告を受けた私は、如何に魔王職が激務であろうと休暇をとってでも妹の授業参観に参加したかったのだよ。安心しなさい、ちゃんと父上もお越しになられる」
「そうではありません！　お兄様は魔王なのですよ？　仕事をほっぽり出してくるなんて！　魔王が一悪魔を特別視されてはいけません！」
「いやいや、これは仕事でもあるんだよリアス。三すくみの会談をこの学園で行うのは知っているだろう？会場の下見に来たんだよ。こういう事はちゃんと連絡を取り合ってくれるようになったのに何故授業参観の事は知らせようとしてくれなかったのか……」
（あ、そういえばサーゼクスさんって父さんと同じタイプだっけ……）

タロウは親バカ、サーゼクスはさらにそこにシスコンが追加される。よってこんな感じなのだ。

「ふむ、サーゼクス殿。この学園でやる事に意味はあるのか？ここでなくとももっと相応しい場所はあると思うが」
「ああ。この学園はどうやら何かと縁があるようだ。我が妹のリアス、伝説の赤龍帝、聖魔剣使いにデュランダル使い、魔王セラフォルー・レヴィアタンの妹が所属し、コカビエルと白龍皇が襲来して来た。おまけに二度……最初はここを模した空間だったが、怪獣が多数出現しており、それに呼応するかのようにウルトラマンも現れた。これは偶然では片付けられない事象だ。様々な力が入り混じり、うねりとなっているのだろう。そのうねりを加速させているのは兵藤一誠君、君だと思うのだが」
「え!?俺ですか!?」
転生悪魔であり、赤龍帝であり、そしてタイガ達をその身に宿す存在。堕天司ベリアルも彼を『特異点』と呼んだ。そう思うのは当然だろう。
しかしここでまたカナエが異を唱える。

「この学園ではなく、この世界自体がそのうねりの中心だと、私達の主は考えていますが」
「この世界、自体が……？」
「そもそもこの世界、レジェンド様やウルトラ六兄弟が訪れはしていても、元はウルトラマンが存在しない世界でした。何が切っ掛けかは分かりませんが、この世界そのものが今起きている事象の原点ではないかと、そうお考えでした」
「それはどういう……」
「私から話せるのはここまで……というかこれくらいしか知りませんので。後はあの方から直接お聞きした方がよろしいかと」

カナエはそこまで言って、再びモスラに構い始めた。
アーシアの方はゴモラが寝始めてしまったので無理に起こさないように見守っている。よく寝る怪獣である。
ゼノヴィアはというと、とりあえずサーゼクスに挨拶しておく事にした。

「貴方が魔王か。初めまして、ゼノヴィアという者だ。元ヴァチカンの聖剣使い、今は光神サーガ様の御使いをやらせて頂いている」
「……え」

今なんて言ったのこの子。サーゼクスはそんな間抜けな顔をしていたが、ルミナシアも目を見開いている。

「こちらのアーシア・アルジェントから見ると後輩にあたる立場だ。彼女はレジェンド様の巫女だからな」
「!?」
「ひうっ!?」

いきなりぐりんっ！と顔を向けられたアーシアは流石に驚いた。

全く同じタイミングでサーゼクスとルミナシアが顔を向けてくるなど、これが悪魔なら「何したのコイツ」で済むのだが。

「ちなみに余計な情報かもしれないが、私の今の師は神衛隊所属の継国巌勝殿だ」

「ちょっと待ってくれない!?今なんか体が拒絶反応するような名前が……」

「巌勝殿か？レジェンド様の直属の部下とされる継国縁壱殿という人物の実兄と聞いたが」

「ぎゃあああああ!!??」

サーゼクスは突然顔を青くして叫び声をあげた。前の事がトラウマになっているらしい。いや、アンタ最後は普通に会話してただろうに。

「む、何やら様子がおかしいぞ。何があったんだ？」

「以前、お兄様はレジェンド様の仮住居の周辺に張ってある結界を破壊してまで入ろうとしてたのよ。それを感知した縁壱先生に威圧されながら問い詰められてたわ」

ついでにその時リアスはサーゼクスを自業自得と見捨てている。さもありなん。

どうにか落ち着いて咳払いするサーゼクス。なお、ゴモラが忌々しいものを見る目で睨んでいる。良い感じで夢を見ていたところをあの叫び声で起こされたからだ。

何かとレジェンド関係者の怒りを買うような真似をする御仁である。

「さて、これ以上ここで難しい話をしていたら際限無くなってしまうしここまでにしよう。我々悪魔はともかく人間の子もいるしあまり遅くなるといけない」

とか言いつつ既に夜十時だ。元鬼殺隊であるカナエの場合、鬼狩りは基本的に夜に行われていた為、遅い時間でも問題ない事を漸く身体が思い出してきたらしい。
アーシアとゼノヴィアもそれぞれレジェンドとサーガの光気のおかげである程度までなら夜更かし状態でも体調に影響が無くなっている。

「とはいえこの時間にこの辺りで空いている宿泊施設はあるだろうか……」
「……なんでそこで私達を見るのかしら、お兄様」
「いや、出来たら泊めてくれないかな～と……」
「イッセーの家に居たのはついこの間までよ。今はレジェンド様のところにイッセーや皆共々下宿させてもらってるわ」
「「え、」」

サーゼクスとルミナシアが固まった。つまり泊めてくれというのは光神たるレジェンドに頼まなければならない。この時点で二人は詰んでいる。レジェンドの連絡先なんて知るわけが無い。妹やその眷属が厄介になってるのもそうだが、さすがに魔王として図々しすぎるのは如何なものかと思っていたが……

「……もしもしレジェンド様ですか？私、カナエです。すみません二名程無計画に現世に出て来て泊まる場所に困っている悪魔がいるのですが……」
『何だそのバカ共は。まさかそれが魔王です、とかだったら神経疑うぞ』
「そのまさかです」
『……本気でこの世界の冥界の明日が不安だな』

カナエはスマホでレジェンドと連絡を取る。

そこから聴こえてきた会話にサーゼクスは小さくなっている。
だが、リアスは庇わない。
『まあいい。ダイブハンガーは駄目だが仮住居の方は使っても構わんぞ』
「ありがとうございます。ちなみに何でダイブハンガーは駄目なんです？」
『全員で徹ガン（徹夜でガンダム鑑賞会）中だ。ゼットが一年戦争について知りたいと言うから、態々惑星レジェンドから取り寄せた記録映像を観ていたら我が家の全員が集まってしまってな。来てももてなせんのは当然だが邪魔されたくもないからだ。お、いよいよ来たな大気圏突入』
「え!?何ですかそれ私も観たい！仮住居でいいですよね!?ハイ決定！解散！モスちゃんゴモちゃんカプセルの中でのんびりしちゃって良いから戻ろうね？準備完了！皆、早く帰らないと徹ガン終わっちゃう！」

徹ガンって何!?という声を無視してアーシアとゼノヴィアの手を引いて爆速で部室を後にするカナエ。全集中・常中の使い方を間違っている気がする。ついでにレジェンドからのダイブハンガー宿泊の断り文句も一般家庭のそれだ。もっとも、規模は段違いだが。

「え、えっと……」
「とりあえずは了承してくれた、という事でいいのかな……？」
「おそらくは……」
「仮住居ならいいという事ですし、早くしましょう」

いまいち釈然としないが、泊めてもらう以上文句は言えない。仮住居とはいえ十分過ぎるところだ。小猫の言葉を皮切りに全員が仮住居へ向かい、そこで下準備をしていたカナエらと合流。サーゼクスとルミナシアを客間に案内して注意事項その他を伝えた後、すぐさまダ

イブハンガーへと帰って行った。

「私もダイブハンガーとやらがよかったなあ……」

「我が儘言わないで下さい、サーゼクス様。ここもこれだけ立派だというのに」

「だって海に秘密基地なんてロマンじゃないか！」

海どころか山にも秘密基地持ってます、レジェンド。惑星レジェンドにある本居の書斎は魔境です。

駄々をこねるサーゼクスをハリセンで一撃K．O．しつつ、ルミナシアは寝所に入った。

☆

とある研究所の一室。遺伝子工学の権威と呼ばれる科学者・黒上博士はテロにより失った愛娘・絵里の細胞を薔薇に組み込んで保存していた。

しかし、ここ最近の地震の多発……おそらくは怪獣の出現によるものだが、その影響でケージが破損し薔薇は枯死の危機に瀕している。

「このままでは、薔薇が……絵里が……」

黒上博士は焦っていたが、解決策が見出せない。予てより生み出そうと考えていた『永遠の命を持つ植物』。しかし、それを実現するには足りないものがあった。それは……

「随分と酷い事をするものだ」

黒上博士がその声の聞こえた方向を向くと、そこには白半分・黒半

分という特徴的な服を着た青年が立っていた。
「だ……誰だ!?」
青年はその言葉に答えず、破損したケージに入れられている薔薇に近づきながら言う。
「この薔薇は素晴らしい。育てていた者がどれだけ大切にしていたのか分かる。まるでその者の心のように、優しく……そして美しい」
「それは……娘が、絵里が育てていたものだ。絵里は……」
「テロに巻き込まれて命を落とした」
「!!」
何故、それを知っている。この男は何者だ。
そう思う黒上博士だが、その青年の言葉はゆっくりと彼の心を捕らえていく。
「言っただろう?酷い事をするものだと。心無いテロリスト達のつまらない欲望によって、崇高な精神を持った一人の女性がこの世を去ってしまった。地震のせいとはいえ、その連中がテロなど起こさなければそもそも君の娘が命を落とす事はなかった」
「……そうだ。奴らがそんな事をしなければ、今も絵里は平和に暮らしていられる筈だったのだ」
「その通り。そして今も、その娘の忘れ形見は枯死の危機に瀕している。しかし……私はそれを救う手立てを持って来た」
「な…何だって!?」
そう言うと青年は懐から小さなケースを取り出す。
ケースを開けると中にはさらに特殊な容器に収められた『何か』があった。

「これはある生物から採取された特殊な細胞だ。名前は『G細胞』……不死身の生命力を持つと言われているものだ」
「不死身の生命力!?」
「そう、不死身の生命力を持った細胞だ。これをその薔薇の細胞と融合させれば、仮に不死身でなくとも君が生きている間は枯死する事も無くなる。さすがに君が亡くなってしまえば薔薇も寂しがって後を追ってしまうかもしれないが」

青年の持つそれは今の黒上博士にとって喉から手が出る程欲しいものだった。嘘か本当かなどどうでもいい。可能性があるなら全て試してみたい。
そして、さらに青年は驚きの言葉を紡いだ。

「私はこれを君にプレゼントしに来たんだよ」
「な……!?」
「考えてみたまえ。君はこれを手にしても決して悪用したりしないはずだ。ただ、薔薇の……娘の延命に使うだけ。誰にも迷惑はかけない。誰にも酷い事はしない。そう、誰かの命を奪うわけじゃない……」
「あ……ああ……」

まるで洗脳するかのような優しく、甘い囁き。青年が手にしたケースの中の細胞と相まって、黒上博士は次第に『堕ちていく』。

「もしそうなっても……悪いのは全て、君から大切な娘を奪ったテロリスト達。そうだろう?君は全く悪くない」
「ああ……そうだ、その通りだ……私と絵里は悪くない……」

手を伸ばしてきた黒上博士に、ニヤリと笑いながらケースごと手渡す青年。それを受け取って抱えながら黒上博士は青年に問う。

「ありがとう……この礼は必ず……」
「そんなものは不要だ。私はテロリストを心底憎んでいてね……連中が後悔するようにしたいだけなのだよ」

その言葉の真意を、黒上博士は知る由もない。

「では、ごきげんよう。君が無事にその薔薇と一生を終えられるよう願って、失礼させて頂く」

まるでマジシャンのような礼をして青年はフッと消えてしまった。黒上博士もこれに驚くが、今はこの細胞を使って薔薇を枯死から救う方が先決だ。

「待ってろ、絵里……父さんが助けてやるからな」

青年に感謝しつつ、黒上博士は薔薇の細胞にG細胞を融合させていくと、薔薇は見る見るその美しい姿を取り戻していく。無事に薔薇が枯死の危機を脱すると、黒上博士は涙を流しながら喜んだ。

しかし、その事がこれから起こる事態の幕開けでもあった。それを知るのはただ一人……G細胞を黒上博士に渡したあの青年しかいない。

「エゲツないねぇ、ギアさん。おっと……その姿の時はサキさんの方がいいかい？」
「どちらでも構わないさ、ベリアル。それにえげつないとは心外だな。私は夢を叶えてあげただけだよ。そう……夢を、ね」
「ッハハハ……マジでファーさん並のイカれ具合、やっぱり最高だぜギアさん。アンタとファーさんが組んでから愉しい事ばかりだよ」
「それは良かった。だが……これはまだまだ始まりに過ぎない。ここからさ、何転もして面白くなっていくのは」

「マジかよ……ここで焦らしプレイとはどんだけ俺の性癖を突いてくんだよ、ギアさん」

堕天司ベリアルと共に笑う青年は空を見上げながら呟く。

「さあ、これから起こる事に動くのは誰かな？光神が直々に動くのか、それともウルトラ兄弟達が動くか……いずれにしても楽しみだ。個人的にはタイガに来てほしいな。そう思わないか？」

我が友よ……

〈続く〉

ほのぼの日和とプール開き（前編）

前回、サーゼクスを仮住居に案内してから、裕斗を除くカナエ達がダイブハンガーへ帰って来て見たものは……

「「「「……」」」」

「フンフフフーンフフフーン♪」

笑顔で鼻歌を歌いつつ見た事無いＭＳを磨いているレイトだった。しかも動きがやけに機敏だ。

「レイト君……？」

「ん？お！カナエや一誠達じゃねえか！おかえり！」

「あ、はいただいま……先輩、どうしたんスかそれ……？」

「よくぞ聞いてくれたぜ!!」

いきなり声を張り上げたレイトに全員が驚く。

ただ、カナエとアーシアはどこかで見覚えがあったのを思い出して口にする。

「「ダブルオー……？」」

そういえば、シミュレーターの訓練内容を外部モニターで出力出来るようになってから皆でよく観戦したりしてたが、その中でレイトはよくダブルオーライザーを使って一際奮戦していた。

レジェンドやサーガ、機動兵器の操縦が本職である神衛隊の面々を除けばダイブハンガーではＣ．Ｃ．に次いで実力があるだろう。短期間でよくぞここまで成長したものである。さすが「戦う度に強くなる、まるでサイヤ人」と称されたウルトラマンゼロ。

「惜しいな二人とも！確かにダブルオーライザーだがちょっと足りな

いぜ！」
「ちょっと……あれ？」
「ダブルオーライザーにあんなの付いてましたっけ……？」

脚部には増加装甲らしきものも付いているし、何より複数種の大型実体剣が両肩や背部にマウントされている。
そもそもオーライザーのサイドバインダーがダブルオーガンダムの両肩に装着されてない上、オーライザーの形自体が何か違う。

「フフン！こいつの名前はダブルオーザンライザー・セブンソード／G！まさに究極のダブルオーガンダム！もちろん俺の専用機だ！」
「「「「えええええ!?」」」」

オカ研本日一番の驚き。
これは先刻、かのエクスカリバー事件でドタバタしていてすっかり渡すのを忘れたままだったのを思い出したレジェンドが、サーガと連絡を取り合って彼が帰って来る前にレイトに渡す事の了解を取り付けた為だ。
元々連名で渡すというだけだったので、サーガは別段問題がなく結果無事にレイトの手に渡ったというわけである。
「遅れたが誕生日おめでとう」とこれを渡されたレイトことゼロは嬉し泣きしまくったらしい。誕生日に巨大ロボとかどこの大戦の主人公だと思わなくもないが、本人が喜んでるんだからまあいいか。

「俺はこれからコイツに乗ってシミュレーターモードやるからまた後でな！あ、徹ガンやってるレジェンド達ならリフレッシュルームの巨大モニターで観てるからそっち行った方がいいぜ！」
「え、あ、うん。ありがとうレイト君」

言うやいなやコックピットへと入るレイト。
ちなみに貰った直後、すぐに外部のシミュレーターと通信対戦モー

ドで模擬戦を行った結果、初搭乗にも関わらずC．C．以外の黒歌、夜一、リク、ゼットを四対一で勝利している。ゼロ師匠スゲェ。
なおC．C．にはトランザムが切れたところにガリバートルネードをブチ込まれて撃破されてしまったが、さすがに一時的とはいえ弱体化した直後、間髪入れずに特機の必殺攻撃は回避も防御も無理だし耐えきれなかった。これは仕方ない。

「……背中の戦闘機、乗せてもらえないかな……」
「タイガ、気持ちはわかるけどよ……」
「私の肉体を活かすならモビルトレースシステムとやらだな！」
「旦那まで何言ってんだ!?」

どうやらトライスクワッドの面々は同じウルトラマンであるゼロが専用機たるロボットを貰ったのが羨ましいようだ。ゼットもシミュレーターをよく使ってるし。

「さ、早くレジェンド様達にもただいま言って着替えましょ！」
「カナエ、全集中・常中を変なところでフル活用するわよね……」
「事は一刻を争うわ！正しい使い方よ！」

絶対違う。

「……でも、戦争って言ってましたし、私達も見るべきだと思います。他人事ではなくなるかもしれませんし」
「「「……」」」

小猫の一言はカナエ以外のオカルト研究部メンバーの心に深く刺さった。今ここにいるメンバーで戦争に近い事を経験しているのはトライスクワッドを含めても、鬼との生存競争のような状況だったカナエや、ヘラー軍団との戦いを経験しているタイタスくらいだろう。
その中でカナエは元の世界で命を落とし、タイタスは友人にして義

理の兄弟であるマティアを失った。
故に戦争の悲惨さをもう一度再認識しておく必要があるだろう。
三大勢力や光神陣営に属し、これから起こりうる事態の数々と向き合っていく為には。

「あ、ところでタイタスさんって王女様に片思いされてるんですって？」
「な!?何処でそんな情報を!?」

シリアスを吹き飛ばす為なのか、それとも天然なのか分からないがカナエがまさかの核弾頭を落とした。
タイタスはそんな事を言われると思ってなかったので周りを見渡すとタイガとフーマは目を反らし、他人の恋路に興味津々なお年頃のリアスら女子メンバー、ついでに現在恋愛真っ只中の一誠も食いついてきた。

「「何ですって!?」」
「マジかよタイタス！」
「はわわ……！」
「詳しく聞かせてください」
「実は私も興味があるんだ」

おい、さっきまで一年戦争の映像記録を見るべき云々は何処いった。カナエだけはすたこらサッサと行ってしまったが。
結局見に行ったのはカナエだけで、他はタイタスが鈍感主人公属性持ちと分かる過去話を無理矢理聞き出していた。例の如くアーシアとゼノヴィア以外の女性陣から鈍感なところを怒られるタイタス。

「……恋愛って、大変なんだな」
「独り身でも楽しけりゃいいんじゃね？」

タイガとフーマは自分達が原因とは分かっているもののあの中に突っ込んでいく勇気はない。そもそもフーマは浮ついた話自体ないし、タイガは下手したら祖父母の馴れ初めを聞かれそうな気もする。という事でこの場はこの間活躍したタイタスに任せよう、と傍観を決め込んだ。

「おい二人とも！助け……」
「「頑張って下さいタイタス先輩」」
「呼び方が違わないか!?」

……裕斗がいないだけマシ……いや、彼は彼なりに青春してるからあまり恋バナには興味を示さない気がする。
頑張れタイタス負けるなタイタス。そして自覚しろタイタス。君は勝ち組なのだと。

☆

翌日の早朝、サーガが厳勝ともう一人を連れてダイブハンガーへと帰還した。本来ならレジェンドが出迎えるのだろうが、リフレッシュルームにて徹ガンした結果オーフィスが抱きついたまま眠りから覚めないので身動きが取れず、しのぶがカナエを起こし手を引っ張って洗面所に連れて行く時に遭遇。
なお、恋バナしてたオカルト研究部メンバーはリフレッシュルームには行かずそのまま部屋に戻った。アーシアと朱乃はレジェンドの部屋に行ったものの本人がいない為、入る事が出来ず寝る直前に徹ガン中と思い出してがっくりしたらしい。

「あ、サーガ様……でしたね。その節はお世話になりました。ほら、姉さん寝ぼけてないで」
「うぅ～……サーガ様、しのぶが最近胸の大きさを気にしスパァン!!いった～い!!」

綺麗な音を立ててカナエの後頭部をしのぶがひっぱたいた。しのぶは笑顔である。

「姉さん、おはようございますは？」
「お、おはようございます……」
「誰が胸を何ですって？」
「しのぶ、別にしのぶはスタイル良いでしょう？胸の大きさも十分だし、何より乱菊さん相手に勝負したら駄目よ！あの人モデル顔負けのスタイルなんだから！」
「乱菊さんはその最たる人物だけど、そういう人ばかりでしょここは。C・C・さんは凄く細いのに出るとこ出てるし、スカーサハさんは背中ガン開き。涼子さんとか黒歌さんは思いっきり胸元開いたりはだけたり」

どいつもこいつもですよ、と青筋浮かべつつ笑顔で拳を素振りしているしのぶにカナエは恐怖した。なんだかんだ気にしていたらしく、ぶっちゃけカナエも対象だったりする。頑張れ姉さん。

「どうやら身体は順調に回復してるようだな。煉獄の方は？」
「もうすっかり完治して、たぶん今もゲンさんやグラハムさんと訓練所で走ってますよ」

ビンゴである。彼の教官となったグラハム共々ゲンの修行に嬉々として参加しており、勘を取り戻すべく日夜己を鍛える毎日だ。

「んん？あ、巌勝さんおかえりなさい。ゼノヴィアちゃんが早く修行つけてほしそうにしてましたよ。ただ、この間ルームランナーバトルで真っ先に脱落してたけど」
「むう、そうか。こんな事もあろうかと、修行用にテクターギアを持って来た。修行時にこれを着けさせて地力を上げるとするか」

なんでそんなもの持ってんの兄上。サーガも自分の御使いが色々キツい目に合おうとしているのを『敢えて厳しく接し、彼女を奮い立たせようとしている』と変な方向に納得してしまっている。こうなったら残る希望はただ一人。

「厳勝さん簡単に女の子にそんなの着けないの！サーガ様も納得しないで！」
「……？」
「二人揃って『なんで？』みたいな顔しながら小首傾げないで!?」
「あの～……リアス声の貴女はどちら様？」
「あ」

もうお分かりだろう。結局駄目だった最後の一人。

「ゴメン！自己紹介まだだったよね。アタシはラフタ・フランクランド！鉄華団所属……でいいのかな。タービンズも合併したわけだし」
「どうもご丁寧に。胡蝶カナエです」
「妹の胡蝶しのぶです。先程は見苦しいところをお見せしました。姉が」
「私!?」

発端は貴女です。

「あ……はは……まあ、仲良さそうで。これからよろしくね、他の鉄華団の皆も準備出来次第こっち来る手筈整ったから」
「そういえば三日月さんやオルガさんは？」
「ん～……オルガはなんかいよいよ新造艦が完成したからその調整と進宙式済ませてから来るって。三日月達もそれに乗ってこっち来るって言ってたよ」
「進宙式……？戦艦は進水式では？」

「あ、しのぶは知らなかったっけ？アタシ達神衛隊って基本的に宇宙レベルの活動だからまずは宇宙空間に船を出すんだよね。宇宙だから、進宙式」
「ああ、なるほど……え？」

胡蝶しのぶ・１８歳。そもそも生まれた年と場所考えて宇宙未経験です。ぶっちゃけウルトラマンを除くレジェンド一家の大半がそうだった。

「ラフタ、彼女らは宇宙に出た事が無い。私はアムロ教官殿に特訓してもらっている間は殆ど宇宙だったが」
「よく無事に訓練終えたよね、厳勝さん。精神的にキツくてリタイアしなかっただけでも凄いのに優良修了証貰って帰ってきたってカミナのアニキ自慢してたもん」
「実戦ならば死んだ回数三桁を優に超えるがな」
「……それ、アタシだと四桁いきそう。自慢どころか恥にしかならないけど」

相手が悪いから仕方ない。

「あれ？ヨーコさんもいない……」
「我々の方はダイグレンの艦長が丁度子持ちでな。艦がおいそれと動かせぬ故に全員というわけにもいかず、私やカミナ、シモンを除いてこちらに来るメンバーを選定して鉄華団の艦に同乗してくるそうだ。少なくとも戦闘で主要なメンバーはほぼ来るだろうが」

さすがに娘のアンナがまだ幼いのに長期間家を留守にするわけにもいかない為、ダヤッカが動けない＝ダイグレンの艦長が不在。急遽代理をと思ったがタイミングよくオルガが新造艦を受領するのでそれに便乗したという事だ。
ついでにアークグレンも艦長はダヤッカだし、超銀河ダイグレンに

至っては真ゲッタードラゴンが霞むデカさでしかも整備中だ。というかそもそも地上に降りれない。

「結論から言えば神衛隊第一から第三分隊の主力がほぼ集結する形になる」

「確か、ワンマンオペレーション可能なんだっけ、今度の艦。なんかどっかのゲームから東博士がそのまんまの形で作って仕上げを任せたらしいけど……ってそうだ！」

ラフタが何かに気付いて両手をパンと叩く。

「アタシ用の新型の方針が決まったからって先に来るように言われてたんだった！ねぇ二人とも、東博士どこにいるか分かる？」

「今朝までリフレッシュルームで徹ガンしてました」

「徹ガン!?」

どうやらマイナーな表現だったようだ。ラフタも分かってない。

一連の報告も含めてレジェンドに帰ってきた事を伝える為、リフレッシュルームが何処にあるか分からないラフタはサーガと巌勝に案内してもらう事になった。

その後の朝食時、ラフタの紹介と報告を済ませた後にレジェンドとサーガはリアスらオカルト研究部からある頼み事をされる。その頼み事とは……

「「プール開きで監督役？」」

「ええ。本来なら顧問である矢的先生が出てくれる筈だったんだけど……」

「あ～８０先生、光の国への現状報告とかで昨日からこっちに缶詰状態でございましたね」

ゼットの言う通り、矢的は光の国のゾフィー並びにウルトラの父へと報告する為の報告書の作成と、それを下にした通信会議を行う為、ダイブハンガーへ泊まり込みしているのだ。というかゼット、よく缶詰状態なんて言葉覚えてたな。

「ちょっと待て。だとしても俺かサーガの片方で済むだろ。何で二人一緒なんだ」
「実はその日は休日で、裕斗はその日のハンティングに大物が同行してくれるとかで元々予定が入ってたの」
「(そういやノダチとフガクがそんな事言ってたな……)ここ最近激動の日々だったし、少しは付き合ってやるか」
「俺の方も後は神衛隊の判断一つだから特に予定は無い」
(まあ、実際はそれだけじゃないんだけどね。たまには部員や眷属の為に一肌脱がないと)

さり気なくアーシアらに配慮してあげているリアスであった。と、もう一つ伝えておかなければならない事がある。授業参観の事だ。

「そういえば、二人は授業参観の来られるの?」
「オイ何だそれ初耳だぞ」
「俺も聞いてないな」

そういう二人の返事にリアスは改めて思い出した。結局タイタスの恋バナで盛り上がってしまい、それから皆各々の部屋に行って寝てしまった為に昨日はレジェンドらにプリントを渡せずじまいだったのだ。サーガは元々今日帰って来たからどの道渡せないのだが。
しかし、そこで登場するのがしっかり者の胡蝶しのぶ。何かの予感がしてカナエを問い詰めてぶんどって来たらしい。やけに強くないか蟲柱。姉さんは涙目だ。

「はい、お二人ともこれですよー」
「うぅ……しのぶ、いつの間にこんなドメスティックバイオレンス覚えたの……」
「ただお知らせをレジェンド様とサーガ様に渡しただけよ？姉さんこそ、そんな言葉何処で覚えたの」

そんな二人のやり取りを尻目に目を通していくレジェンドとサーガ。

「これ、全学年同時か？」
「ええ、それがどうし……あっ！」

リアスはレジェンドの質問の意味を理解した。少なくともレジェンドはアーシアとカナエ、両名の関係者だ。どちらかにしか行けないだろう。
分身なんて使って下手に目立ちたくもない。
サーガの場合はゼノヴィアで確定である。小猫は？と思われるだろうがそちらは黒歌と夜一が行くらしい。

「レジェンド様、姉さんの方は私や卯ノ花先生が行きますので、アーシアさんの方へ伺って下さい」
「……え、」
「大丈夫か？年齢的に言えばしのぶも高校に通っていると思われるかもしれんが」
「まあ、飛び級とか海外へ留学とか言い訳の方は何とかなりますから。卯ノ花先生が仰っていた事ですけど」

だから心配しないで下さい、というしのぶを信用し何かあればすぐに連絡するように伝える。むしろ今心配しなければならないのは口から魂が出かけているカナエの方じゃないだろうか。

「ゼノヴィア」
「サーガ様、授業参観に来て頂けるとの事でしたが」
「ああ、先輩共々行かせてもらう。それから口調は普段通りで構わない」
「いや、しかし……うむ、主の申し出を断る方がこの場合は無礼だな。分かったよ、サーガ様」
「それでいい。それからもう一つ、厳勝も弟子の様子を見たいからと参加する気だぞ」

ゼノヴィアが固まった。そして汗が滝のように流れ出す。サーガは平気なのに厳勝だとこうなるのはやはり修行開始初日が関係しているのだろう。

「朱乃さんはやはりご両親が？」
「ええ、特に父がその気で」
「……姉様が騒がないか心配です。夜一姉様は飄々としてるから問題なさそうなんですけど」
「そういやさ、裕斗はどうなんだろ？ジェントさんとかまさかあのまま来ないよな……？」
「いやタイガ……幾ら何でもそれはないだろ。ジェントさんだぜ？」
「時にタイガ、お前は授業参観とかなかったのか？」
「いやぁ……訓練学校の時はタイミングよく父さんの科目で爺ちゃんと婆ちゃんが来てくれたし、子供の頃のウルトラ学校での時は家族総出で来ちゃったから逆に恥ずかしくてさ。プレッシャーかかるだろ」
「「「「すっごく分かる」」」」

これもセレブ家系の弊害か。一発で注目されてしまっていたタイガ。というかタイミングよくタロウの科目だったと言うが、まさか圧力とか掛けて変更させたのではあるまいな。

「あ、イッセーはやっぱり朱乃と同じでご両親が？」

「いえ、その日はどっちも仕事らしくて……」

少々沈み気味の一誠だったが、実は彼の両親の方が沈んでいた。せっかくの息子の成長具合を楽しみにしていたのに。そこで声をかけるのはやはりこの男、いや漢。

「よし、では俺が行こう。幸いにもアーシアちゃんとゼノヴィアちゃんも同じクラスのようだし」

「師匠!?」

「……昔、俺がまだＭＡＣの隊員だった頃、父親を亡くした少年の父親役を買って出たはいいが、結局隊員としての職務を優先せざるを得なくてな。一誠のご両親にも頼むと言われた以上、二人が駄目なら俺が代わりに出るのが筋だろう。ご両親並に立派と言えるものでもないが、いないよりはマシだと思うぞ」

「マシどころかスッゲー嬉しいッス師匠！師匠の事紹介したかったんですよ！」

……インパクトデカ過ぎである。さすがにレイトは参加するとは言わないが。実のところ、一誠はよく「師匠のおかげで自分は変われた」と言っており、実際驚く程まともになったのでそうなった原因であるゲンを一目見てみたいという者達が多かったのだ。

「さて！プール開きの監督役も二人が引き受けてくれたし、今度の休日まで気合い入れていくわよ！」

「その前にカナエ先輩とゼノヴィア先輩が変な事になってます」

「……ドンマイよ、二人とも」

カナエは今だ魂が口から出ており、ゼノヴィアは汗をダラダラ流しながら無言で朝食を食べている。

前者は妹に、後者は師範に観られるのがキツいようだ。一誠は逆に喜んでいたし、これは二人ともメンタル面も修行の必要があるよう

だ。
今日も一日、レジェンド一家のバカ騒ぎが始まる。

☆

その翌日の夜、黒上博士の研究所では相変わらず黒上博士が遺伝子の研究を続けていた。違いがあるとすれば枯死しかけていた薔薇が元気な姿を取り戻しており、博士自身の心も穏やかだった事だろうか。

「もうこんな時間か……研究しているとどうも時間にルーズになりがちだな。区切りもいいし、今日のところはここまでにするか……」

黒上博士はレポートを纏めてファイリングし、棚に仕舞う。そして研究室を出る前に薔薇に話しかける。

「それじゃあおやすみ、絵里。また明日な」

父親の顔になってそう言うと黒上博士は研究室から退出して自室へと向かい、ベッドで眠りにつく。
そしてしばらく経った跡……

「……周囲には」
「誰もいない。元々一人暮らしだそうだ」
「護衛の類もいないようだな。丁度いい」

研究所……それも研究室の窓から見える場所に迷彩服を着込んだ人物が三名程隠れていた。

「Ｄｒ．黒上の研究していた『抗核エネルギーバクテリア』。これは世界情勢の根幹を揺るがす重要な物だ。これが成功したならば核を持

たぬ日本が核保有国に対して絶大な優位に立つ事を意味する。我々はこれに関する情報をなんとしても持ち帰らねばならない」

抗核エネルギーバクテリア――核物質を吸収・無効化するという驚くべき生物兵器である。性質を聞いただけでもその効果の凄まじさは理解出来るだろう。

この三人は諸外国からのエージェントであり、黒上博士の持つその研究資料を盗み出す為に潜入しようとしている。

「よし、突入だ。速やかに資料を確保し、脱出する。あまり時間に余裕はない。ここが湖畔とはいえイレギュラーな事態が発生する危険は十分にあるからな」

リーダーらしき男が指示を出すと他の二人も頷き、三人は研究室の窓ガラスを割って侵入。部屋が離れていた為、黒上博士はハッキリと分からなかったが何か音がした事に気付き、その原因を探ろうとベッドから起き上がる。

「何の音だ……？」

一方の研究室では三人が手荒に研究資料を探していた。しかし、一向に見つかる気配は無い。

「クソッどういう事だ!?Ｄｒ．黒上はＡＮＥＢの研究をしていたんじゃなかったのか!?」

「もっとよく探せ！必ず何処かにある筈だ！」

研究室に無いのは当然だった。黒上博士は万が一狙われるような事があった場合に備え、抗核バクテリアの研究資料は常に自身で持ち歩き、側に置いていたのだから。

もしや研究室以外の場所に？

そう考えた三人のエージェントはやむを得んと研究所内の探索を行おうとした時、それは起こった。

「グォアァァァッ!?」
「!?」

信じられない光景がリーダーと部下の目の前で起きていた。
あのG細胞を組み込んだ薔薇が触手の伸ばし、エージェントの一人の首をあり得ない程の力で締め付けているのだ。外そうともがくが尚も強く締め付けられ、首からベキリという音が聞こえた瞬間、そのエージェントは絶命した。

「な、何だこの薔薇は!?」
「違う!薔薇じゃない、別の何かっ……ガッ!?」

リーダーともう一人の部下もその首に触手が巻き付いた。やはり信じられない程の力を発揮しメキメキと音を立てて締め付ける。

「オッ……ゴォ……」
「わ……わレわ……レ……は……」

先程と同様にゴキリ、ボキィッという鈍い音と共に二人もまた首をへし折られ死亡した。

そして薔薇は研究室の壁をその触手で破壊し、そのまま触手を利用して研究所から飛び出し、湖へと失踪する。
壁を破壊された音で只事ではない事を理解した黒上博士が研究室に到着した時に見たものは、割られた窓ガラスや散らかされた室内と遺体となった三人のエージェント、そして消え去った薔薇と破壊された壁であった。

「何だこいつらは……!?絵里……!?そんな、どういう事だ!?」

あまりの状況に頭の整理が追いつかない黒上博士だが、ただ一つ確かな事実を理解した。
ここを荒らしたのがこの三人であり、そして彼らを殺したのは薔薇(絵里)だという事を。

「……まさか……」

信じられないといった表情の黒上博士。
そして研究所から少し離れた場所では……

「なるほど、予想より意識の侵食が早かったようだ。さて……どうなるかな?人の心が宿っていたモノを、君達はどう対処するのか……じっくり楽しむとしようか」

G細胞を渡した青年が、不敵に嘲笑っていた。

〈続く〉

ほのぼの日和とプール開き（後編）

プール開き。オカルト研究部によって清掃後に行われる筈だったそれはたった一人の人物によって狂わされた。その理由は……

「なんでもう掃除終わってるの……？」

リアスが辛うじて声を出す。そう……参加するメンバーが駒王学園に到着し、清掃する為の準備を行っている間にレジェンドが既に終わらせてしまっていたからだ。

どっかで見たような銀髪になる極意をフル活用して、だ。

カナエもそうだがレジェンド一家は何かととんでもない技の使い方というのが間違っている。確かに清掃する上で危険はあるのだろうがそんなものを使うレベルではない筈だ。

「……正直、ダイブハンガーの室内プールの方が種類も大きさも圧倒的に上だな」

「やろうと思えばいつでも海水浴出来る秘密基地と一緒にしないで頂戴」

ごもっともである。

何はともあれプールを使用出来る時間が大幅に増えたのは喜ぶべき事なので、男女問わず改めて水着に着替える為に更衣室へ向かう。レジェンドを除いて。

「青春してるな、あいつら……」

「まあ、ずっと楽しみにしていたようですし～」

ふう、と溜息を吐いてプールサイドに腰を下ろしてスポーツドリンクを口にするレジェンド。ゼットもその隣で大の字になっている。

時期的に夏の為、燦々と太陽の光が降り注ぐが彼らウルトラマンに

とっては恰好のエネルギーと化す。

「そういや超師匠はいつもと変わりませんね、服」
「別にただ監督役なだけだしな。暑くないのかと聞かれようと太陽表面で戦闘した事もあるから別に何ともないし」
「なんか今、新しい超師匠の武勇伝聞いた気がするんですが」

ゼットとそんなやり取りをしている間に男性陣が着替えを終えて戻って来た。

「あれ？レジェンド様着替えないんすか？」
「俺はただの監督役、保護者枠だ保護者枠。掃除を一人で片付けたんだから後はゆっくりさせろ」
「ゼット、お前すっげー寛いでんな……」
「太陽エネルギー万歳でございますよ」
「俺はゼットの言う事も分かるけど。地球人にとっては暑いんだよな、今日みたいな日は」
「だがこの晴天！筋トレにはもってこいとは思わないか!?」
「「勘弁して下さい」」

こんな日も絶好調のタイタスはポージングしており、タイガとフーマもゼット同様大の字状態だ。アストラル体の為、大きさがゼットとは変わってしまうのでゼットに寄りかかる感じになっている。

「おい、サーガはどうした？」
「俺ならここにいるが」

その声がした方向を振り向くと、そこには着替え終わったサーガが立っていた。完全装備で。

「「「「……」」」」

「何か問題あるか？」
「いや、問題はないが……」

自分の恰好を確認し直しているサーガだが、確かに問題はない。むしろどんな問題が起きても対処出来るだろう。
ライフジャケットを装着して浮き輪や酸素ボンベも用意し、あまつさえその他の応急処置用の救急セットまで完備した彼に死角はない。安全面には、の話だが。

「……学園のプールでそんな重装備の必要あるか……？」
「先輩、事が起きてからでは遅い事もある。一瞬の油断が命取りになる可能性がある以上、こういった安全面に関しては万全を期す必要がある」
「いや、まあ……それは確かにそうなんだろうが……」

なんで休息がてら来たのに神経張り詰めるような事してんのコイツ。レジェンドは正直過剰な装備だと思ったが、言っている事はその通りなので放って置く事にする。悪い事ではないし。
そうしていると漸く女性陣の着替えが終わったらしく、ワイワイガヤガヤと談笑しながらやってきた。

「皆お待たせ……ってレジェンド様、着替えてないじゃない。っていうかお願いだからせめて他人から見て涼しそうな格好して頂戴。なんでそんないつものジャケット姿で汗一つかかないのよ……」
「レジェンドお兄さんは疲れたのでお休みでーす。そもそもこの程度で音を上げてたらタクラマカン砂漠で丸一日戦闘訓練なんか出来んぞ」
「そこは普通に砂漠でいいでしょ。何故にタクラマカン砂漠？」

やはりというかリアスにツッコまれた。それはそれとしてまずやらねばならないのは想い人へのアピールである。この日の為に乱菊

に付き合ってもらいながら選んだ水着を一誠に余す所無く見てもらおうと、早速リアスは行動する。

「まあ、レジェンド様なりの考えがあるんでしょうけど……それよりイッセー、どうかしらこの水着。自分でも結構攻めてると思うのよね」

「文句無しどころかこれで文句をつける奴がいたらブッ飛ばしてるくらい似合ってます部長!!」

「ありがとうイッセー、貴方に見てもらおうと気合入れた甲斐があったわ」

リアスは定番と言えば定番だろう黒のマイクロビキニを着てセクシーポーズを取っている。心なしか一誠の一部がテントになっているが詳しくは触れずスルーしておこう。

「……ソランさん、念の入り方が凄いですね」

「万が一という事は常に起こりうるものだからな。用心するに越した事は無い」

小猫のシンプルな白スク水とライフジャケット付重装備のサーガでは実に対照的である。

そして一番問題なのは当然……

「レジェンド、いつもとおんなじ」

「別にいいだろ。こちとら頭と身体を常日頃から酷使してるから少しは休ませてくれ」

「そうですよね、普段はあちらこちらに走り回ってますし……今日くらい休んでも」

「待ってしのぶ。ここで一気に押してスタートが遅れた分を取り返さないと他の皆に追いつけないわ。その為に水着のみならず『泳ぎを教えてもらう』という理由も引っさげてきたじゃない！」

「私は単純に教えてもらおうと思っていただけよ、姉さん」
「はうぅ……私も泳ぎ方を教わりたかったですけど、レジェンド様お疲れみたいですし……」
「あらあら、仕方ありませんわね。でしたらプールサイドでも親睦を深められる方法で……」

レジェンドが行くというのでついてきたオーフィスを筆頭に、カナエが引っ張ってきたしのぶや、アーシアに朱乃といった美少女に囲まれているのに全く普段と変わらないレジェンド。いや囲まれるのが日常茶飯事となっているし、あの超抗力ペダニウムな鉄壁理性を持つレジェンドを誘惑すること自体ほぼ不可能だが。

「グゥ……」

そしてゴジラはツチノコになっていた。

「おうどうしたゴジラ。やっぱりプールじゃなくて海が良かったか」
『それはそうだがよ……何か妙な感覚がするんだよ。呼ばれてるっていうのか共鳴してるっていうのか分かんねぇけどな。あ〜モヤモヤするぜ……』

何か気になる事があるのか、出てきたはいいものの結局何なのか分からず、こうしてツチノコ(っぽい)状態でダベる事にしたようだ。ついでに今日、モスラとゴモラはダイブハンガーでお留守番。モスラは泳ぐ術がないし、ゴモラは寝る気満々だったからである。代わりに別の一体を連れて来ている。

「そういやあと二名出て来てないな」
「ゼノヴィアさんはまだ着替えてる最中ですよー」
「どうやらこういった経験が無かったみたいで」
(ならしのぶが早かったのは何でだ?)

おそらくカナエの影響だろう。しのぶの学習能力が高いというのも理由の一つかもしれない。そしてもう一人。小猫についてきた彼女が一番心配だったのだが……

「お待たせにゃん、だ・ん・な・さ・ま♪」

『!!??』

呼び方もそうだが、やっぱりとんでもない水着だった。いや違う。

貝殻で大事なところを隠しているだけだった。

「ブフォアッ!!」

「イッセー!?」

さすがに刺激が強過ぎた。盛大に鼻血を噴射してぶっ倒れる一誠。

「わっ!?何するんだよタイタス！」

「何だ!?どんなもん着て来たんだよ小猫の姉ちゃんは!?」

「私にさえ刺激が強いんだ！お前達にはまだ早過ぎる！」

「んな事言ったらゼットはどうなんだよ!?」

「すかー……」

「ゼットなら既に昼寝モードだから問題無い！」

「「一番肝が据わってないかオイ!?」」

必死にタイガとフーマに見せまいとするタイタスと、それとは反対に太陽のおかげでエネルギー補給しながら爆睡しているゼット。体育会系＋アホの子キャラは変なところで強かった。

こうなったら本作のツッコミ主力レジェンドも黙ってはいない。

「それの何処が水着だァァァ!!アレか？マーメイドになったつもりか？ぴちぴちピッチなメロディーでハートフルソング歌って海の悪魔を浄化する気ですかオメーは!!」

「懐かしい単語聞こえたけど違うにゃー!?」

「あんま激しく動くな！ポロリ狙ってんの!?じゃじゃ丸とピッコロはどうしたァァァ!!」

『意味違うそれポンキッキーズゥゥゥ!!』

サーガや他のメンバーでは出来ないだろうハイテンションツッコミ。これに並ぶツッコミが出来るのはノアの護神隊にいるあの寺門通親衛隊隊長しかいない。どっかのオサレ漫画も主人公がツッコミだったな。

「とにかくちゃんと水着と呼べるものに着替え直せェェェ!!ここには思春期真っ只中の少年少女や純真な連中が殆どなのを理解しろォォォ!!」

「レジェンドが着替えるなら私も着替え直すにゃ」

「!?」

黒歌は一枚上手だった。貝殻がではない。

まさかの手段にカナエや朱乃はガッツポーズしている。よくやった黒歌。格好は痴女そのものだけど。

仕方なく着替えに行くレジェンドだったが、黒歌や他の者達もこの時は分からなかった。

レジェンドのそれは水着と言われれば納得はするかもしれないというものであり、なんでソレをチョイスしたのか理解出来ないものだという事を。
……杏寿郎やグラハム、カミナだったら理解してしまうかもしれないが。

☆

一方、ダイブハンガー。相変わらずリフレッシュルームにて多くの住人が屯っている。
そんな中、束は先日先延ばしにしたラフタの専用機について説明しており、周囲にも何人か集まっていた。

「と、いうわけでグシオンとのコンビネーションを重視するならＺガンダムが一番良いと思うんだよね。らっちゃん達がいた世界じゃないからビームが効果無いケースはそう多くないだろうし、あっちはサブアーム持ちの重装甲近接重視。援護するなら高機動型で射撃戦に長けた機体がいいと束さんは思うんだ」
「う～ん……悩むなぁ。こっちのＺＺっていうのは？一応射撃重視だけど重装甲で近接戦闘もこなせそうだけど。変形も出来るみたいだし」
「ん～確かにそう見えるけどね、あっくんが聞いた話だと燃費が悪いんだってさ。大出力ジェネレーターを積んだのは良いけど、武器まで大出力にしちゃったから結局強くはなったけど戦闘可能時間が限られちゃうんだよね。ミサイルとかバルカンあってもオマケみたいなもんだし」
「束殿、このＥｘ―Ｓガンダムはどうだ？変形可能、大出力で高機動。しかも飛び抜けてエネルギーを使うような武装もなく主兵装のビーム・スマートガンは長射程武器だ」
「束さんとしては推したいんだけど、それマン・マシーン・インターフェイスが搭載されてて相性考えないといけないんだよね。しかも

かなり特殊なやつで作るのめんどくさいの。作ったは良いけど適応出来なかったーとか嫌でしょ」

ラフタの専用機は昭弘のネオ・ガンダムグシオンリベイクフルシティとのコンビネーションを考慮して宇宙世紀の機体を選考している。上記の機体はＺガンダムを除いてアムロも見た事がない為、レジェンドに頼んで世界情報から解析したものだ。

「あ、これは？デルタプラスっていうの、年代的にマリーダさんの世代のやつ」
「悪くはないけどパンチ力に欠けるねー」
「……公式の記録は抹消されているようだが」
「「ん？」」

厳勝が提案したのはとんでもないＭＳ……いや、ＭＡだった。

「このＧＰ―０３デンドロビウムというのはどうだ？」
「良いねそれ！年代的に見落としてたよ！」
「いやいやいやそれ今までの案で一番駄目なやつ!!モロ単機突撃狙ってるような機体じゃん!!コンビネーション何処行ったの!?」

コンビネーションもへったくれも無い機体を推薦する兄上と天災。どちらも弟、妹持ちである。Ｅｘ―Ｓの案といい思考が似通っている部分があるようだ。

「もーさ、色々考えるのめんどいからこのサザビーやナイチンゲールってのでいいじゃん。あっくんのライバルっていうロリコンが乗ってたやつ」
「アタシはニュータイプでもイノベイターでもないしロリコンどころかショタコンでもないっ!!」
「サザビー達に罪は無い。元凶はそのロリコンだ」

「確かに第二次ネオ・ジオン抗争とアクシズ落としの元凶はそうだけどさ!?」

最早漫才である。そしてシャア・アズナブル……全く世界観の違う世界出身者からロリコン呼ばわりされるとは気の毒である。

近くにいた乱菊や夜一なんか爆笑しているし。ロスヴァイセは今まで挙げられた機体の製作費（元の世界換算）を見て青くなってガタガタ震えていた。

「み、見たことのない金額ばっかり……」

「ろせちゃん百均のが好きだもんね。あんま見ない方がいいよ」

「でででで、でもでも！これにさらに維持費とか整備費用とか掛かるんですよね!?」

「うん」

「……はうっ……」

ロスヴァイセが気絶した。かく言う彼女も今は結構な給料をレジェンドから貰っているのだが、それでも気を失う額だったらしい。

「ロスヴァイセー?……ダメだこりゃ、意識飛んじゃってるわ。あたしちょっと卯ノ花先生のとこ連れてくわね。なんていうか巌勝の時以来救護班みたいな役回りになってんだけど」

「時に乱菊、倒れたのがレジェンドだったらどうする?」

「んなもん決まってるわよ。自分の部屋に連れてくわ」

「いっそ清々しいのう……」

ドヤ顔で言い切る乱菊に少しばかり感心してしまう夜一であった。そして、そういえば今日は涼子もいたな、と思いつつ今だ目の前で行われている漫才じみたやりとりを見物する事にする。

「よし、それじゃあ逆転の発想でいこう！ＭＳじゃなくて特機で考え

よう！」
「アミダ殿、アジー殿と組んで女性ゲッターチームというのは？」
「面白えじゃねえか。俺が直々に指導してやるぜ」
「いやあああああ!?絶対指導じゃなくて死導になる！ゲッターの恐ろしさを教えられて死へ導かれるぅぅぅ!!」
「いや、一度死んでんだろお前」

……ラフタ、専用機完成まで前途多難である。

☆

それは青天の霹靂であった。
誰が予想出来ただろうか。誰が考えたであろうか。黒歌は確かにちゃんとした水着に着替えた。レジェンドも着替える事を条件に。仕方なくレジェンドは着替える事にした。そして着替えた。

真っ赤な太陽ならぬ赤褌に。

『……』
「着替えたぞ。これで文句は無いな」
「い、いや、その……」

正直予想の斜め上を行った。衝撃的だとしてもブーメランパンツ

とかそこらへんか、もしくは着替えるフリして逃走するかと予想していたのたが全然ハズレだった。
ただ一言、全員が思った事。

((やけに似合い過ぎてて反応に困るんですけど!!))

首元で纏めた後ろ髪と赤褌が夏風によって同じ方向に靡く中、腕組みしながらキリッとした表情で仁王立ちしているレジェンドは鍛え抜かれた肉体と、美しい系ではなく格好良い系のイケメンである事も相まって絵になっている。
空の世界のエリアル・ベースから「ソイヤ!!」の声が、そしてカナエのお気に入り着うたの『三羽烏漢唄』がＢＧＭで流れていそうな気がするくらいだ。

「どうした。プールを堪能しないと時間など早々に過ぎ去っていくぞ」
「そ、そうね!というわけだからプール開きよ、皆!!」
『お……おー!!』

動揺している他のメンバーに対して、レジェンドは全くそんな様子が無い。先程の小猫と同じく、重装備のサーガに対して赤フン一丁のレジェンドは非常に対照的である。

漸く正式にプール開きという事で、サーガは小猫に頼まれ泳ぎを教えている。水中戦を経験している以上に本居がアクアエデンという海上都市である事もあり、そちらの方面に知識や技術が豊富だ。加えて今回はライフジャケット他も装備しているとあって小猫が安心して特訓出来るというのも理由の一つ。

「ぷはっ!」

「小猫、一旦休憩する。コツは掴めただろうから後は経験と慣れだ。ここまで上達出来れば他は自然と身に付いてくる」
「分かりました。ソランさんって水泳得意だったんですね」
「得意というより必要だから自然と覚えていったという方が正しい。あとは俺の本居の場所が場所だから、という理由もあるな。なんせ海上都市だ」
「海上都市……」

小猫としてはサーガの本居があるという海上都市が気になって仕方ない様子。
そして、赤フン総大将なレジェンドはアーシアとしのぶに泳ぎを教えている最中だ。もっともしのぶはあっさりモノにしたのだが。なお、オーフィスはダイブハンガーで暮らし始めた年から屋内プールで泳いでいた為、すいすい泳いでいる。黒歌とカナエは競争中。

「あっちの二人は元気だな」
「お二人とも凄い速いです」
「姉さんったら……そういえばゼノヴィアさん遅いですね」
「こりゃ保護者のサーガを見に行かせた方がいいな」

ちょうどいいか、と休憩中のサーガと小猫を呼び二人にゼノヴィアの様子を見に行かせるレジェンド。
育ての親として彼なりの気の利かせ方でもあるそれを見たしのぶは微笑んだ。

「さり気なくあの二人を後押ししたんですね」
「サーガ(あいつ)も俺と同じ、小猫を庇護対象としかまだ考えていないだろうが向こうは多少なりとも意識してるだろうし、こういう場面でアドバンテージ得といた方がいいだろ。育ての親目線から見た感じだがな、サーガはかなりモテるぞ。俺と違って」
「……最後以外は同意します」

「最後以外ってなんだオイ。俺は全くモテてないってか？恋愛なんて影も形もありゃしないってのかコノヤロー」
「私は恋愛なんてしてる余裕がありませんでしたから、あまり偉そうには言えな……」
「すればいいだろ、恋愛。今からでもな」
「……え？」

アーシアとしのぶをプールサイドに上がらせて、自身はプールの表面に胡座をかく。なんでそんな超人技ホイホイ出すんだこの人。
それはさておき、先程はかなり真面目な声色だった。

「確かに今はこの【エリア】レベルで異常事態が多発しているが、しのぶ自身は今や柱という要職から外れ、さらに言うなら鬼殺隊でもない。重責を背負っていた昔と違って大いに自由な筈だ。卯ノ花やアーシア、そしてモスラによって身体の方も殆ど回復している。年頃の乙女らしく恋愛したって構わんだろう」
「……でも、そういう状況でないのも事実です」
「今こんな事してる時点で状況もへったくれもあるか。他の連中を見てみろ。気を抜きまくってる上、先日来たノアなんか護神隊まで連れてダイブハンガーに入り込んだ挙げ句人んちの食卓に紛れ込んでたろうが」

確かにアレを見て正体を聞いた時は顎が外れそうになったものだ。他の【エリア】を統括する最高位光神があっさりやってくるとはさすがに予想外だった。本来なら連絡すべき同位のレジェンドさえ驚いていたし。

「自分の視野を必要以上に狭めるな。でもけどだってをいつまでも続けたところで前に進むどころか下手すれば逆走しかねん。いっそ自分がしたい事を思い切りやってみろ。あまりに第三者から見て他者に迷惑かけるのを当たり前だというような所業じゃなければ、フォ

ローの一つや二つ俺がしてやる」
「私が、したい事……」
「望む望まぬは別として、いくつもの奇跡が重なって拾えた命だ。元の世界で頑張ってきた分、自分にご褒美あげると思って己なりに今生を謳歌すればいい。少なくとも俺達は誰も責めんし、何か言ってきたら俺が盾になってやろう」

プロポーズと言えなくもない言葉をよくもまあスラスラと並べられるものだ、と思いつつもしのぶは心が軽くなるのを感じる。残してきたカナヲ達は気にかかるが、レジェンドやノアの話から鬼舞辻無惨はこちらの日本地獄で折檻中で彼女らも無事との事。これから彼女らはそれぞれの道を歩むのだし、自分も踏み出してみよう。
そう考えたしのぶは早速レジェンドにお願いしてみる。

「ならレジェンド様、そのお言葉……忘れないで下さいね」
「ああ、安心しろ」

姉が、皆が彼を好いている理由が少し分かった気がする。まだまだ彼については知らない事ばかりだし、近くで見ながら少しずつ知っていこう。しのぶがそう決意した時、爆音と共にゼットが吹っ飛んできた。

「ぶほっ!!」
「「ゼット（さん）!?」」

突如吹っ飛んできたゼットに驚く二人だが、今までシリアス気味だった雰囲気のせいか口を挟めなかったアーシアがすぐに治療する。

「あ、これ効く」
「そんな事より何がどうなってそうなったんですか？」
「実はですね、リアスちゃんと朱乃ちゃんが『一誠君と超師匠どっちが

可愛くて格好良いか』で白熱しまくりましてその結果がこんな大爆発でございます、しのぶちゃん」
「「いやどんな結果!?」」

レジェンドとアーシアもしのぶと一緒になってツッコんだ。ゼットが吹っ飛んできた方向を見ると魔力弾が飛び交っている。いくら他に人がいないとはいえ白昼堂々あんなド派手なバトルしていいのか。

「訂正なさい朱乃！可愛くてしかも強いのは私のイッセーよ!!」
「お断りするわリアス！可愛いのはともかく強くて格好良いのはレジェンド様に決まってます!!」
「……うわぁ」
「え、何コレ元を辿れば俺と一誠が元凶なの？だとしたらもう一人の元凶は何処に……」

よく見るとゼット同様巻き込まれたのか、プールサイドでタイガらに看病されている。……ついでに黒歌とカナエはプールに入ったまま対処中。サーガや小猫、ゼノヴィアは今も戻って来ない。オーフィスはプールから上がりてくてくとレジェンドの元に来た。ゴジラはツチノコのまま。あと一体のカプセル怪獣は行方不明。

「レジェンド、何か大混乱になってる」
「もうこれプール開き云々どころじゃないな」

せっかく少しは寛げると思ったのに、と嘆息しつつレジェンドが止めに入ろうとした時、やっとサーガと小猫がゼノヴィアを連れて出てきた。小猫はどこかホッとしたような顔をしているし、何があったかサーガに聞いてみると。

「更衣室でゼノヴィアに子作りしようと言われた」

その瞬間、レジェンドは集中が切れてプール表面に腕組み仁王立ちしてたからかそのままプールにドボン。アーシアとしのぶは即座に真っ赤になり、カナエは「きゃー！」と頬に両手を当てて赤くなるものの何故か嬉しそう。黒歌は「まさか意外な攻め方を！」と驚いていたし、オーフィスに至っては……

「我もレジェンドとしたい」
「アウトォォォ!!オーフィス！そんな事ここで言っちゃいけません！そういうのは夫婦になってから!!」
「……？だったら我とレジェンド、問題ない」
「とにかくこの話は終了！おしまい！オーケイ!?」
「超師匠、コヅクリってなんですか？」
「ゼットはそのままでいてくれ。ちゃんと年齢相応に勉強する事になるから、急がんでいいから」
「ラジャっす」

今日はゼットのアホの子属性に救われてばかりな気がする。

「レジェンド様、ソランさんと一緒に行かせてくれてありがとうございました」
「女子更衣室なのに男一人はマズいと思ったからだったんだが、結果としては良かったのか」

おそらくサーガ単体で行かせていたら修羅場が出来上がっていたに違いない。もう一箇所でドンパチやられてるところだった。

「んじゃ、そろそろ止めますかね」

そう言うとレジェンドは再びプール表面に仁王立ちし、オーロラルパワーを発動。するとリアスと朱乃の魔力弾全てがレジェンドに吸

収されていく。さすがにこれに驚いて二人は魔力弾を撃つのをやめレジェンドの方へ向くと、レジェンドはふっと笑ってオーロラルパワーの特性の一つによって吸収した魔力弾を質・量共に千倍に増幅、大空にぶっ放した。唖然とするサーガやオーフィス、ゴジラ以外の面々にレジェンドは言い放つ。

「身内で命がけの大喧嘩……ダメ、絶対」

『すいませんでした』

何故かリアスと朱乃以外、レジェンドと上記の三人以外も平身低頭霸状態。（DOGEZA）

ぶっちゃけレジェンドもそういうレベルの特訓課したりしてるからどうかと思うのだが、それはスルーしておく。

プール開きの楽しさよりも、レジェンドの規格外ぶりを再認識する日になってしまったオカルト研究部＋αであった。

そしてその後、彼らは帰ろうとした時に出会う事になる。今までどこに行っていたのか分からなかったカプセル怪獣と、それに本気でビビっている白龍皇に。

〈続く〉

余談だが、大空にぶっ放された魔力弾はというと。

「見えたぞ、地球だ！今こそ惑星レジェンドを支配下に置けなかった雪辱を、この星を支配する事で晴らす時！」

「直接星へ侵入すると前回の部隊の時のように全滅させられる事があるかもしれん！それを踏まえて今回は惑星の衛星軌道上から――」

「報告！ち、地上からあり得ない程の強大なエネルギーが!!」
「な、なんだと!?」

『オゥアァァァ!?』

……地球侵略を企むバド星人達の円盤群を一瞬で消滅させていったという。その後、魔力弾も完全消滅した為、被害は実質その円盤群（と一誠とゼット）だけだった。
どっとはらい。

白龍皇、そして……

プール開きを終え、帰宅準備を行う面々の中で一足先に準備を済ませた一誠は水飲み場に向かっていた。
男が彼を除けばレジェンドとサーガ（ゴジラともう一体もそうだが）のみなので、海パンだけだった一誠は帰宅準備も早かったのだ。レジェンドは褌故に多少時間を要し、サーガはそもそも重装備。女性陣は言わずもがな。

「なんつーか、今日息抜き出来たの最初だけの気がすんだけど」
『リアス・グレモリーとその女王の喧嘩のとばっちりを受けてたからな』
「ゼットも受けてたけど平然としてたな、アイツ」
「鍛えている証拠だ！感心感心！」
「鍛えてどうにかなるレベルかな……普通に直撃してたけど」

夕方になって少し涼しくなってきたとはいえ、夏本番まであと僅かだ。授業参観の後は期末テストなんかもあるが、ダイブハンガーへ下宿してからは全員で勉強したりしているし、レジェンドや束を筆頭にデタラメな頭脳の持ち主から色々教わっている為、そちらも問題ない。

「あれ？そういやレジェンド様がさ、夏休み入ったらここじゃない別世界巡り修行旅やるって言ってなかったっけ？」
「ああ、言ってたな。時間移動はお手の物だから、いっそ年単位分くらいやるかとか。俺達ウルトラマンとか一誠やリアスみたいな悪魔、それに光気を浴びたメンツだから各種年齢問題も大丈夫だって」
「……あのよ、ロスヴァイセってまだガチ人間じゃなかったか？」
「レジェンドと過ごす時間も増えているし、平気なんじゃないか？杏寿郎やしのぶも似たようなものだろう」
「「なるほどー」」

まだそれほど一緒の時を過ごしていないのに仲が良過ぎる一誠とトライスクワッド。互いが歩み寄っているからこそこれだけの信頼関係が生まれているのだろう。

「そうそう！ゼットに聞いたんだけどさ、空の世界にはガイア先輩やアグル先輩が行ってるんだって。向こうじゃレジェンドを団長にした『ウルトラ騎空団』とか作って活動してるとか」

「島が浮いてるのが当たり前なんだろ？想像つかねえな～いや、空を飛び回る俺達が言うのもなんだけどよ」

「しかもその世界では種族レベルで屈強な肉体を持つ者達が存在し、ウルトラ騎空団にも多数いるという話だ。杏寿郎とも話したが、今から楽しみで仕方ない！」

「あ、部長もそんな感じだったな。本来なら冥界の次期当主として領地がどうのって言ってたんだけど、たぶん今度の会談でレジェンド様がとんでもないもん持ち込むらしいからそれどころじゃなくなるだろうって。部長だけは知らされたみたいなんだけど、レーティングゲームに関わる重大な事みたいだぜ」

そんな話で盛り上がる四人だが、水飲み場に着きふと前を見ると見慣れぬ少年と、よく見知った存在が対峙……というより少年側が一方的にやたら警戒しているようだ。

「なあ、あれって……」

『白いのの宿主だな。まあ、奴があれを見たら恐怖してああなってもおかしくないか』

少年と相対しているのは、今日連れてきたのにプールでめっきり姿を見なかったカプセル怪獣・ハイパーゼットンだった。

話は少しだけ、一誠達もまだ着替えている頃に遡る。
近々行われる三大勢力の会談。その開催場所となった駒王学園へと白龍皇―ヴァーリは足を運んだ。
この町にアザゼルの付き添いとして来ている以外にもう一つ目的があったからだ。無論、赤龍帝絡みである。

(あの時、あの場にいたウルトラマンの一人が『赤龍帝の籠手』を身に着けていた。最初からウルトラマンに神器が宿ったとも思えないし、可能性があるとしたら神器持ちにウルトラマンが一体化したという事だ)
『どうした?随分と考え込んでいるようだな』
「まあね。なにせ赤龍帝にしてウルトラマンだ。興味が沸かないほうがおかしいだろう?」
『確かにアレを見た時は驚いたが……それ以上に』
「……やめてくれ。さすがに思い出したくない」

デコピン一発で禁手化しているにも関わらずブッ飛ばされた。鎧もそれだけで粉々にされたし。
とはいえそれは『白い龍(バニシング・ドラゴン)』アルビオンも同じ気持ちだ。

「何者かは知らないが相当な実力者だ。おそらくはアザゼルでは太刀打ち出来ないだろう。かといって俺も今の状態ではどうする事も出来ないが」
(……正直、今より爆発的に成長したとしてもヴァーリの勝つビジョンがまるで見えん相手だったがな)

アルビオンの言葉は最もである。
何せレジェンドやサーガは日常的に……いや、常にトレーニング状態にあり、実はこうしている間にも成長し続けているのだ。逆に言うと常日頃からそんな状態の為、いざそれなりの力を出そうとして解放すると、以前よりもパワーアップし過ぎてて自分でも初見制御が難し

いという事態に陥ってしまっているのだが……
　それはそれとして、どうやって赤龍帝と接触しようかと考えていたヴァーリだが、横から変わった声が聞こえてきた。

「じぇっとん」

『!!!???』

　一瞬にしてアルビオンが圧倒的恐怖に襲われ、トラウマも呼び起こされた。忘れるはずもなく、出来る事なら二度と聞きたくなかった声によって。

『あ……あ……あ……』
「ん？おい、どうしたアルビオン」
『ヴァーリ！すぐにここから離れろ!!』
「何言ってるんだ。せっかく赤龍帝に会いにここまで『離れろと言ったんだ!!死にたいのかお前は!!』ほ、本当にどうしたんだ？」
『奴が……！能力を使ったにも関わらず、たった一撃……それも半分の力だけで俺を瀕死に追い込んだ奴が近くにいる!!』
「何……!?」

　アルビオンの尋常ならざる怯え具合から、それは間違いない事を察したヴァーリだったが、戦闘狂気質が刺激され逃げるどころか一目見てみたい欲に駆られていた。

「ならば一度目にしておかないとな。いずれリベンジしなければならない相手だ」
『バカかお前!?バカだろ!!俺は忠告したし、力も貸さんぞ!!下手に仕

掛けて神器のまま完全に消滅させられたくない!!』
「なっ……!」

あまりのアルビオンの言い分にさすがのヴァーリも言い返そうとするが、声の主は間近に迫っていた。

「じぇっとん」
『ぎぃぃぃやあああああ!?』

ヴァーリが後ろを振り向くと、そこにいたのはいつものちっこいサイズのハイパーゼットン。
拍子抜けしたヴァーリに気にする事なく、ちょこちょこと近くの水飲み場の蛇口をひねり、出した水で手に持っていたタオルを濡らしている。器用である。

『奴だ……!姿形は違うが俺を殺しかけた奴と同種の存在だ!!』
「……あの黒くて小さいのが？見た目は変わっているとはいえ、とてもそうは思えないが」
『俺がやり合った時は６０ｍはあった！きっと擬態しているに違いない！』

当たらずとも遠からず。擬態ではないが、かといって任意でこうなっているわけでもない。ある意味任意かもしれないが。
で、ここに一誠やトライスクワッドが到着したわけである。向けられている視線を感じてハッとしたヴァーリ（とアルビオン）は慌てて平静を粧う。

「やあ、良い学校だな」
「ああ、うん……」
「「……」」

一部始終ではないとはいえ、先程のやりとりを見てしまったので冷めた返事しか出来ない一誠となんとも言えない表情のタイガラトライスクワッド。

「じぇっとん」

「あ、ハイパーゼットン。お前どこ行ってたんだ？プールじゃ見かけなかったけど」

「じぇ」

ハイパーゼットンが腕を指した方向には少し大きめのバケツが置いてあり、その中に水……というか気温のおかげでぬるま湯が入っている。

どうやら置いてあったバケツに自分で水を入れて水風呂していたようだ。カプセル怪獣のサイズなら丁度良い大きさだったらしい。

「お前ってホント頭働くよな～」

「？」

頭をポンポンされて何の事か分からず首を傾げるハイパーゼットン。可愛い。

ただし、約二名はそうではないようで……

（ハイパーゼットンって言ったか今!?ハイパー!?あの時の奴と形が違うと思ったら進化系か何かなのか!?）

アルビオンは新たな事実に狼狽えまくり。

（なるほど、相手が強者だろうと物怖じしないという事か。中々面白いな、赤龍帝）

ヴァーリは微妙に勘違いしている。一誠がハイパーゼットンを恐

れないのは危害を加えない限り攻撃してくる気がなく、何よりレジェンド一家の一員だからである。
　もし喧嘩売ろうものならレジェンドらに確実に消される。というか返り討ちにされる、間違いなく。

「んで、白龍皇がこの学園に何の用だよ」
「……！気付いていたのか」
「いや、ハイパーゼットンに対してやたら警戒してたところを見たドライグが言ったんだけど」

　この世界でゼットン系統にビビるとしたら、レイブラッド事変でその力を直に見ていた古参の連中か、もしくはそれに関わる人物くらいである。古参にしては若過ぎるし、驚き具合が半端ない事から直接被害を被った『白い龍』の関係者だとドライグは理解したらしい。まあ、白い龍の直接の関係者と言えば宿主たる白龍皇か、宿敵の『赤い龍』ドライグしかいないんだが。
　そうか……と一呼吸置いて、ヴァーリは自己紹介する。

「改めて、初めまして。俺は白龍皇のヴァーリだ。早速で悪いが赤龍帝、君はこの世界で何番目に強いと思う？」
「そうだなー……百万位以内に近いと良いけど、宇宙警備隊より強い連中も居るし、良くて一千万位前後……も自己評価高過ぎだよなー」
「……は？」

　ヴァーリは間抜けな声を出した。彼が少し高めの順位を言ったら訂正しようと思ったが想像以上に低過ぎる。

「自己評価が高い？何処がだ、既に禁手化しているらしいし、神器に今までに無い新たな能力を目覚めさせたという君が何故そこまで自分を低く見積もる？」
「はあ？何言ってんだよ。お前宇宙がどんだけ広くて高レベルどころ

か超レベルな連中だらけだと思ってんだ？千位だの一万位だのじゃ、その方が認識甘過ぎだろ」

逆に言い返されてしまい、ヴァーリは口を噤む。

「あ、タイガの親父さんは上位にいるよな、絶対」
「つーかウルトラ六兄弟はもれなく上位陣だろ」
「婆ちゃんは戦闘向きじゃないにしても、爺ちゃんや総司令は最強クラスだよな」
「待て！最強と言えばＵ―４０最強の戦士、ウルトラマンジョーニアスを忘れてはいけない！」
『ウルトラ兄弟が認めた継国縁壱とかいうバケモンもいるだろ。その兄も大概だ。レジェンドにせよサーガにせよ光神が連れてる奴が揃いも揃っておかしいんだよ』
「じぇっとん」
「「「『そういやお前もその一角か』」」」

ヴァーリを放置して談笑を始めてしまう一誠達。
アルビオンは宿敵のドライグが平然とハイパーゼットンと話せている事に驚きを隠せない。

『おいドライグ！何でお前はそんなに普通に喋ってるんだ!?』
『何で荒ぶってるんだアルビオン。一緒に暮らしてりゃこうなるだろ』
『はあ!?』

さらにとんでもない事を聞いた。今なんつったこの赤いの？一緒に暮らしてる？

「やけに親しそうにしていると思ったらそういう事か。まあいい。君の言う事が事実なら魔王たるサーゼクスさえトップ１０どころか

トップ１００も難しいだろう」
「……縁壱先生にビビりまくってたあの人が？」
「……え？」

先程と同じく間抜けな声を出してしまった。また聞いた事のない名前が出てきたが、名前を聞く限り日本人という事しか分からない。

「この国にそんな実力者が……」
「いや、ここじゃなくて……」
「イッセー、何やってるの？私達も準備出来たわよ」

その声に振り向くとリアス達が帰宅準備を終えて勢揃いしている。どうやらこれまでのやりとりの最中に合流したようだ。

「あ、すいません部長。なんか絡まれちゃって……あれ？レジェンド様とサーガ様は？あとゼットさんも」
「え？さっきまで一緒にいたのに……」

どうやら一誠以外の男二人とゼットが消えたらしい。ゼットに関してはレジェンドと一体化してる都合上だろうが。
これ幸いにとヴァーリが再び会話の主導権を握ろうと話題を振る。

「まあ、ともかく……上位がどれだけひしめき合っていても一位は決まっている。そう、不動の一位が」
『それ、レジェンド（様）確定』
「……」

尽くヴァーリの自信を叩き潰してくるオカ研一同＋αであった。彼としては無限（オーフィス）と夢幻（グレートレッド）と言いたかったのだが、実際はオーフィスはレジェンドに特訓をつけてもらい既にグレートレッド以上の強さの上、その前の時点でグレートレッドはノアの誤射一発で死にかけてい

る。ハナっからヴァーリの考えは間違っていたのだ。そもそも世界程度の物差しで宇宙や次元レベルの相手を測れる訳などない。

「……今日は、視察ついでに来ただけだから……」

「なんか、あからさまに落ち込んでんな」

「言った事全てに反論して黙らせていたからな」

「でもなんでだろ……同情する気が起きない」

トライスクワッドによる追撃。もうやめて！ヴァーリのＨＰは０よ！

「もしやる気なら私達は構わないぞ」

ここでゼノヴィアがデュランダルを取り出して構えているが、震えこそないものの冷や汗が垂れている。

「やめた方がいい。君達では俺に敵わない。いや……そこの黒髪の女性剣士や妖怪なら分からないな。あとは……」

「偉そうにほざいているが禁手化しておきながら俺にデコピン一発でブッ飛ばされたのは何処の誰だ？」

その声に振り向いたヴァーリの表情がエ〇ル顔と化した。

「うわあああ〝あ〝あ〝!!!」

「やかましい」
「先輩、ハイパーゼットン見つけたぞ」
「お？やっと見つかった。何してたんだお前」
「じぇっとん」
「な～る、バケツで水風呂か」
「今ので分かるのか!?」

帰宅準備を終えて姿を消していたレジェンドとサーガがヴァーリの背後から現れた。どうやらこの二人もハイパーゼットンを探していたらしい。遅れる形でゼットも到着。

「超師匠、こっちにはいな……あ！いた！」
「じぇっとん」
「よし、全員揃ったし帰るか。聞いて驚け、今日はすき焼きだァァァ!!」
「マジっすか!?やっべ早く帰って手伝わねーと！」
「なあイッセー、すき焼きって何だ？」
「俺知ってるでございます！野菜や肉がグツグツ煮込まれた鍋から好きな物を取って食べる料理！」
「何それ美味そう!!」
「今夜はスーパーすき焼き大戦が巻き起こるな！」
「せめて……最後くらい言わせてもらえないだろうか……」
「「「「ん？」」」」

精神的にやられまくっているヴァーリがプルプル震えながら声をかけてきた。精神的にだけでなく、レジェンドの頭にハイパーゼットンがしがみついているという状況もヴァーリとアルビオンのトラウマにダブルパンチかましている。

「早くしろ」
「ゴホン！リアス・グレモリー……『二天龍』と称されたドラゴン。『赤

い龍』と『白い龍』。過去、関わった者はろくな生き方をしていない。あなたはどうなるんだろうな？」
「どうもこうもないわ。世界の現状からしてもうとんでもない事になってるじゃない。今更よ」
「どうせ過去の連中がロクデナシばかりだったんじゃないか？」
「先輩、事実だろうがさすがに言い過ぎな気がするぞ」
「いえ、サーガ大先輩も事実とか言っちゃった時点で酷いと思います」

……今日のヴァーリ、精神にトドメを刺された。最初から最後まで反論されっぱなしで撃沈。肩を落としながらトボトボと帰って行った。

「何しに来たのアイツ」
「我、分かんない」

レジェンドとオーフィスは冷めていた。というかアルビオン、オーフィスに気付いていたのかいないのか。
今度こそ帰るか、と校門を全員で出た途端に通信が入ってきた。

『チーフ！サーガや皆も揃ってますか!?』
「おうどうしたミライ。すき焼きの具が足りないなら買い足してくぞ」
『いえ、そっちは超が付く程たくさんありますので心配ありません。ってそれじゃなくて！』

通信してきたミライと軽くコントじみたやりとりをしたレジェンドだが、ミライの様子から只事ではないと感じとり真面目な表情になる。

「……そこは帰り道に寄れそうな場所か」

『ッ！はい、学園からは遠いかもしれませんが、仮住居からは比較的近い場所……小津盧湖です！』
「小津盧湖……確かに近いといえば近いな。割と大きな湖だったはずだが……その湖畔に屋敷兼研究所が建ってなかったか？」
『はい、この世界において遺伝子工学の権威である黒上博士の研究所があります。ひっそりと暮らしているようで近隣の住民くらいしか知らなかったそうですが』

遺伝子工学という事でレジェンドは何かを思い出した。同時に、今もカプセルの外に出てオーフィスに抱えられているゴジラも何かに気付いたように表情を引き締める。

「ミライ、改めて聞く。何があった」
『実は、たった今……小津盧湖に巨大な薔薇ようなものが現れたんです』
「巨大な薔薇って……何か突然変異的な？そんな驚く事なのかしら」
「リアスさん、湖畔に咲くならまだしも……湖に、というだけでもおかしいと思いますよ。ミライさん、その薔薇はどんな様子なんですか？」

リアスの疑問に自分の考えを述べつつ、レジェンドの通信モードのブレスレットを横から覗き込みながらしのぶがミライに尋ねる。結構密着しているので、普段ならカナエらが多少なりとも騒ぐだろうが彼女も真剣な表情である為それもない。
『しのぶちゃんが気になるのは最もだと思う。その薔薇は花が顔だとして、蔦が身体みたいになってるんだ。塔みたいって言った方が正しいかな』
「「「「!?」」」」

これだけでもかなり不可思議だがその直後のミライの言葉にさら

に驚愕する事になる。

『それ以上に問題なのが大きさ。全長１００ｍはある。しのぶちゃんにも分かる単位だと……大体３３０尺くらい』
「「「「ひゃっ……１００ｍ!?」」」」
「３３０尺……!?下手すれば城よりも大きいですよ!?」

最早偶然などと言えるものではない。急いで調査すべきだと判断したレジェンドらにゴジラが声をかけた。

『おい、レジェンド、オーフィス』
「どうした、ゴジラ」
「何かゴジラ、ピリピリしてる」
『向こうに着いたらオレ様を出せ』
「！」
『あっちのモスラが言ってただろ。オレ様の細胞がどうこう。朝から感じてたモノはたぶんそれだ』

おそらくゴジラはその薔薇に己の細胞と同質の細胞が使われていると踏んだのだろう。そもそもこの世界で元の大きさになった事は『禍の団』を潰す時くらいで、しかも無傷だった。細胞を採取された経験などなく、そんなマネをする奴をレジェンドが見過ごす筈も無い。だとすれば平行世界から持ち込んだとしか考えられない。

「何にせよ現場に行かなくては詳しい事が何も分からんし始まらん。ミライ、他の連中にも通達していつでも対処出来るように準備しておけ。ここにいるメンバーは速やかに小津盧湖へ向かうぞ」
「「「『はい！』」」」
（オレ様が直接やり合った経験はないが……記憶はある。継承でもされてんのかどうかは知らんが、そんな事はこの際どうでもいい。間違いなくそこにいるのは奴だ）

レジェンドの号令にはっきりと返事をする一同。
そんな中、ゴジラは自身の記憶の中のある怪獣を思い出していた。巨大な薔薇、己の細胞、そして湖。そこから導き出された答えはさらなる災厄の幕開けにすぎない。

（奴だとした場合……もしかしたら奴を完全に倒してもあの野郎が宇宙で生まれる可能性だってあるって事か。上等だ……もしかしたらってのは奴らだけじゃねぇ。話が本当ならアーシアがオレ様にさらなる覚醒ってのをもたらすらしいしな。来るなら来やがれ、相手をしてやるぜ！）

この非常事態にあっても、ゴジラは変わらなかった。逃げる気など無い。真っ向から叩き潰す、怪獣王の矜持というものを見せてやると決意する。

――同時刻、小津盧湖――
既に自衛隊が出動し、見物の為に湖畔に来た人々を離れさせながら『それ』を見る。湖の中央には……

『――――』

巨大な薔薇が佇んでいた。

〈続く〉

湖に咲く薔薇

小津盧湖――駒王町の隣町にある、森の中に存在する大きな湖。今、その中央に巨大かつ異形な薔薇が佇んでいた。まるで何かを待つように。

見物人がひしめき合っていて自衛隊まで出動している辺りから離れた別の地点で、レジェンド達は既にそこに到着していた人物と合流する。

「む!?レジェンド様やサーガ様達か！無事に到着出来て何よりだ！」
「煉獄さん？もしかして一人ですか？」
「うむ！なんでもグラハム教官殿は『いのべいたー』とかいうものらしくてな！もしかするとあれの思考も感じ取れるのではないかとの事でマリーダ殿や竜馬殿と機動兵器にて出撃準備している！じきに到着するはずだ！」
「機動兵器でって……大丈夫なのかな。こんな人目がたくさんあって、しかもあっちには自衛隊らしき人もいますよ？」
「心配要らないぞ兵藤少年！どうやら手続きか何かをレジェンド様が終えていたらしく合法的に機動兵器を出撃させられるようだ！何かは分からん！」
「そ……そうスか……」

現場班として杏寿郎が到着しており、神衛隊所属の三名が各々の機体で出撃するとの事。

ちなみに杏寿郎の言う何かとは「希望の光メビウス、吼えろ！コンパチガリバー」の話の最後ら辺を参照。

「しかし煉獄の兄ちゃん、よく一人で来れたなここ……」
「いや！一人ではないぞフーマ殿！ここに案内役がいる！」
「……へ？」

煉獄の羽織の下から現れたのは……

「パムパム～」

「え」

羽の生えた、モフモフな生物。それを見たしのぶがピシリと固まった。彼女は全身に毛の生えた動物（犬猫など）が苦手なのである。怪獣なら問題ないようだが、明らかに「これが標準サイズです」な目の前のそれは動物っぽい。

「紹介しよう！先日サーガ様より賜った俺の相棒！羽斗パム治郎だ!!」

「パムー！」

「ハネジロォォォォォ!?」

「煉獄さん、名前が物凄く炭治郎君っぽいんですけど!?」

レジェンドの絶叫が木霊し、しのぶがツッコミを入れる。ちなみにカナエは炭治郎を知らないので頭に「？」が浮かんでいた。

「サーガ、お前んとこにハネジローなんていたのか!?」

「アクアエデンで拾った」

あっけらかんと言い放つサーガに頭を抱えるレジェンド。まあ、眼前のムーキット（※ハネジローの正式名称）が誰かのペットだと届け出も出てないし、おそらくはこの【エリア】のフロンティアスペースから迷い込んだのだろう。あっちでは殆ど死滅しているというし、これから無事に保護するなら良しという事で納得する事にした。

「アスカ殿も驚いていたな！どうやら別個体とかいうものらしい！なんであってもパム治郎はパム治郎だがな！」

「パム～」

よしよしと撫でられているハネジロー、もといパム治郎は気持ち良さそうだ。オーフィスやしのぶ以外の女性陣は羨ましそうに見ている。というか正しくマスコットなのは初めてではなかろうか。

「前置きはさておき！あれが件の薔薇だ！」

「……あれがそうか」

湖の中央にそびえ立つ、蔦の上に薔薇が咲いたようなそれが一行の目の前に存在していた。

「何だよ、あれ……」

『少なくとも俺は見た事がないな』

「ドライグが見たこと無いって言うとやっぱり別世界から来たやつか？」

「別世界っていうのは強ち間違いじゃないぜ、特異点」

『!!!』

突如頭上から声が聞こえたかと思えばそこには先日相対したばかりの、堕天司ベリアルが木の上で寝転んでいた。

「お前っ……あの時の!!」
「落ち着けって。そうイキリ立つなよ特異点。今回は俺は何もしていない。マジでな～んにもしてないんだ」
「信用出来るわけないでしょう！一体何が目的なの!?」
「だからイキリ立つなって。ん？もしかして特異点にイかせてもらってないのか？赤髪のプリンセス」

ベリアルの言葉にリアスはボフンと赤くなる。ついでに一誠も。

「レジェンド、あれ何言ってるの？」
「俺も意味がウルトラ分かりません超師匠」
「オーフィスとゼットにはまだ早い」

教育上悪影響な奴だな、とベリアルを睨むと彼はやれやれと言った表情で語る。

「やってないものはやってないのさ。今回はギアさんがある科学者にプレゼントを渡しただけ。それを使ったのはその科学者の判断だし、あれが出てきた原因もそいつだ。どうだ？マジで俺の出番無いだろ」
「この前も言ってよな……ギアさんって誰だよ！」
「質問が多いな……が、それを言うのは俺じゃない。そうだな……一つだけなら教えてあげようか。俺としては特異点に興味があるんだが、ギアさんの興味は君だよ……ウルトラマンタイガ」
「……！俺、だって……？」
「今のところは、だけどな。これから先どうなるかはまだまだ分からないさ。じゃあな、今日はここでサヨウナラ。君達があれにどう対応するかゆっくりと見物させてもらうよ」

そう言うとベリアルは翼を広げさっさと退散してしまう。追いかけたいが速度が速く、加えて今はこっちの方が優先だ。構っている暇は無い。

「サーガ、グラハム達の到着までどれくらいだ。あまり時間が掛かるとゴジラの我慢が効かなくなるぞ」
「もうすぐ……いや、たった今だ」

空を見上げると丁度日が暮れると同時にエクシアＧＦ、ペーネロペーが飛行形態で、さらにブラックゲッターも到着する。見物人は初めて見るロボットに興味津々で写真を撮ったりしているが、パイロットの三人はそれどころではない。

「おいグラハム、そのイノベイターとしての能力とやらでどうにか出来るのか？」
「直接は無理だが、あの薔薇が脳量子波かそれに似たものを持っているとしたら考えている事くらいは分かるかもしれん」
「では我々はその間、エクシアＧＦの護衛を」
「頼めるか、二人とも」
「相手が相手だけになんとか出来なくても仕方ないけどよ、現状打破の突破口ぐらいは掴みな！」

エクシアＧＦの前にブラックゲッターと変形したペーネロペーが壁になるように立ち、エクシアＧＦはある程度距離をとり上空からの交信を試みる。

（感覚を研ぎ澄ませ。ＥＬＳと対話を行った私ならば少年と同じ事が可能なハズだ。なんとかあの薔薇の意識を見つけ出して繋がねば……）

グラハムはイノベイターとなった自身の脳量子波を駆使し、薔薇の意識を見つけ、自分の意識をそこに繋げようとする。

（……さんを……て……）
（……！見つけたぞ！）

グラハムは薔薇の深層意識を見つけ、微かな糸を手繰り寄せるようにして自身の意識と繋ぐ。

（君はこの薔薇の心か!?もう一度応えてくれ！）
（お父さ……を助け……）
（……!?君の父親だと!?）
（私……もうす……黒……染ま……）
（ッ!!しっかりしろ！心を強く持て!!）
「グラハムッ!!」

薔薇の意識との交信が途切れると同時に竜馬の声にハッとすると、まるでハエトリグサのような触手がエクシアＧＦに襲いかかってきた。

「くっ！」

エクシアＧＦはギリギリ回避、同時にＧＮタチでその触手を斬り捨てる。

「その様子じゃ大した成果は得られなかったみたいだな」
「いや……少なくとも収穫はあった！」
「何!?」
「私もまだ推測の粋を出ないのだが……『父親を助けてほしい』というのはほぼ確定だろう」
「父親？あれは植物ではないと？束博士もあれは植物か、少なくともそれに準ずるものに間違いないと」
「詳しい事は分からず仕舞いだ。ただ……意識の方は何かに侵食されてしまったかもしれん。最後は一番途切れ途切れだった」

「それじゃどっちみち話し合いで和解なんざ無理だって事だな！だったら元がどうあれやるしかねぇ！行くぜブラックゲッター!!」

グラハムから一通り聞いた竜馬はブラックゲッターを動かし目の前の薔薇に対して攻撃を仕掛ける。

「ゲッタァァァトマホォォォク!!」

迫りくる触手を切り裂きながら接近すると、ミサイルマシンガンを取り出し、薔薇に向かって連射。

「オラァァァ!!」

『――――!!』

「うおっ!?ちっ！なかなかタフじゃねえか！」

対する薔薇の方も次々と触手を出して応戦する。予想外の強敵に、ブラックゲッターを援護すべくエクシアＧＦとペーネロペーは戦列に加わり、戦いは激しくなっていく。

「オーフィス、ゴジラ、準備はいいか？」

「大丈夫」

『漸くか。これ以上待たせたらダイブハンガーの飯食い尽くして報復してやるところだったぜ』

「それ絶対やだ」

レジェンドらはゴジラをカプセルに戻して呼び出す準備をしており、それも済んでいた。ゴジラの報復手段が一部の者にとんでもなく刺さる鬼畜報復というかなんというか、少なくともオーフィスには最大級の効果がありそうである。

「しかし！実際あれは何なのだろうか!?サーガ様が受けたグラハム教官殿の話によれば父親を助けてほしいとの事だが！よもや元は人間だったとでも!?」
「う……嘘だろ!?あれが!?」
「……あり得ない話ではない。人間が怪獣化するというのは珍しい事ではあるが前例が無いわけではない」
「そんな……！」

だが、とサーガは続ける。

「もしそうなら少なからず人間の気配がするはずだ。俺達光神はそういったものの感知能力に優れているが、あの薔薇からはそれを感じない。つまりあれは元から植物の類だったという見解で間違いないだろう」
「じゃあ一体……」
「今ここでどうこう言っても調べている時間はない。まずは目の前の奴を何とかしなければな。オーフィス！」
「ん。ゴジラ、いってらっしゃい」

オーフィスはそう言うと手にしたカプセルを薔薇のいる方向へ投げる。するとカプセルは光となって円を描き、何かを召喚するかのように幾重もの円を構築しその中から雄叫びを上げながら漆黒の巨獣が姿を現す。

「グゥアアアァァァオン!!!」

いよいよ怪獣王ゴジラ、出陣である。

初めて見る、レジェンド一家のカプセル怪獣の真の姿。その頂点に

立つ一体にして王の称号を持つゴジラを見た者達は戦慄する。
「な……何だよあれ……!?」
「あれが先輩が誇る最強のカプセル怪獣の一体、ゴジラの真の姿だ。別名怪獣王」
「か、怪獣王!?」
「つうか大きさ俺らの倍はあるぞ!!」
「素晴らしく鍛え抜かれた肉体だな！そう思わないか杏寿郎!!」
「うむ！見事な大胸筋に逞しく太い脚！王らしき威厳もある！タイタスの言う通りだ!!」
「「そこじゃねえぇぇぇ!!!」」

何故か注目点がゴジラの肉体になってしまっているタイタスと杏寿郎にツッコむ一誠、タイガ、フーマ。
続けてレジェンドが行った簡単な説明に本気で度肝を抜かれる事になる。

「あいつ、基本的なエネルギー源は核エネルギーだからな」
『はあ!?』
「ちょ……ちょっと待って!!核ってあれよね？原子力潜水艦とかに使われてる……」
「そうだな。平たく言えば使い方を間違った瞬間に甚大な被害が起きるヤバすぎるエネルギーだ」
「ゴジラ、海底火山の噴火に飲み込まれてそのままマントルの中を突き進んだ事もあるって言ってた」

何それ水中でもマグマの中でも平然としてるってどんな化け物。そんな考えを一同揃って思い浮かべていた。
なお、必殺技の一つであるウラニウムハイパー熱線はなんと１００万度。ゾフィーのＭ８７光線が８７万度なのでその凄まじさが良く分かる。あのウルトラの父のファザーショットよりも上なのだ。そ

れ以上にゴジラの能力で驚くのは再生能力を含めたそのタフさ。おまけに身体能力も相当だ。

「俺とオーフィスとあいつで禍の団壊滅させに各地を転々としたからな～いや懐かしい」

「ゴジラ、嬉々として暴れてた」

（（（（うっわぁ悲惨……））））

ちなみにゴジラに喧嘩売った魔法使いやはぐれ悪魔などは、ダンブルドア級ではない魔法だのなんだのが効くはずもなく放射火炎で一瞬にして消え去った。他、踏み潰しや尻尾の叩きつけなどぶっちゃけ見ていて可哀想になるレベルだったらしい。

そんな破壊神が今、小津盧湖の中央に座す薔薇に対して進撃を始める。それを見守るレジェンド一行だったが、直後に背後から声をかけられた。

「今のは……君達は何者なんだ……？」

『!?』

その人物こそ、目の前の薔薇を生み出した張本人である黒上博士であった。

「あの……貴方は？」

「私はこの湖の湖畔に住んでいる黒上源十郎という者だ」

「黒上……もしかして遺伝子工学の権威の!?」

「そう呼ばれた事もあったな……結局、娘一人助けられなかったどうしようもない馬鹿者だがね」

「助けられなかったって……」

「今もこうして、娘が……絵里がああなってしまったのを見ている事しか出来ない。愚か者で、駄目な父親だよ」

『!?』

この言葉にレジェンドら一部を除き、その場にいた者は驚愕する。今、黒上博士はあの薔薇を娘と言った。

「待って下さい！じゃああれは博士の娘さんに間違いないと……」

「正確には違う。娘の育てていた薔薇に、死んだ娘の細胞を組み込んだのだ」

「……それだけでああはならんな。他に何を組み込んだ？」

『!?』

ただ一人、薔薇に進撃するゴジラを見ながらレジェンドが問う。顔を向けはしないが、答えろと言う有無を言わさぬプレッシャーを全員が感じている。

「ある青年から貰った『G細胞』というものを組み込んだ……このところ度重なる地震の影響でケージが破損し、枯死する危機にあった薔薇（絵里）を救うにはその細胞が持つ不死身の生命力に賭けるしかなかった」

「G細胞……？G……」

「姉さん？まさかこの状況で『爺細胞』とか考えてないわよね？もしくは自……」

「違うわよしのぶ!?頭文字がGで不死身ってそれゴジくんの細胞じゃないの？もしかして」

『!!』

「なるほどな、合点がいった。あいつが今朝から何かに呼ばれている感じがすると言っていたのはあの薔薇に組み込まれたG細胞が原因だろう。共鳴現象とでもいうか、お互いがお互いを引き寄せ合うのが普通だろうがなにぶんあれでは奴は彼処から動けまい。だから敢えてゴジラをこちらに来させるよう細胞を介して共鳴させたんだろうな」

カナエのみならず、ここに来る前のゴジラ自身の推測が当たってい

たのだ。ただ、レジェンドには解せない事があった。

（だが……状況は奴にとって圧倒的に不利だ。単純な戦闘力は元よりゴジラの放射熱線、植物である奴には致命傷な技のはず。Ｇ細胞を宿しているなら少なからずゴジラ自身の情報も学習している可能性が高い。にも関わらず自ら呼び寄せた……勝算があるのか、それとも……）

この時の事が後々大きな事態になるとは、他の者はおろかレジェンドも気付かなかった。そして遂にゴジラとその薔薇は小津盧湖にて対峙。その時、黒上博士はある名前を口にする。

「……ビオランテ」

『え？』

「北欧神話に登場する植物の精霊の名前だ。私は絵里の細胞を組み込んだ薔薇をそう名付けた。私自身は絵里と呼んでいるが」

「ビオランテ……それが、あの薔薇の名前……」

リアスの呟きを聞きながら、一行はゴジラや神衛隊とビオランテの戦いをただ見守るしかなかった。

湖へと突入したゴジラをビオランテの触手が襲う。触手はその牙でゴジラの両腕に噛み付くがまるで効いておらずそのままビオランテ本体へと前進し続ける。

『――――!!』

「グゥウゥ……」

１００ｍ級の怪獣同士の激突はそれだけで見る者を圧倒する。見物人や自衛隊も新たな怪獣の出現に息を飲むが、ゴジラは意に介さぬ

というか、神衛隊とコミュニケーションを取りながら戦っているようにも見え、見ている者達もゴジラの方は敵ではないのでは？と思い始めていた。実際、コミュニケーションを取っているのは当たりである。

『おい、フラッグ野郎』
（……それは私でいいのか？）
『ここにいる三人で現状お前しかオレ様の声を聞けねえだろ。奴はオレ様がぶちのめす。お前らはオレ様と協力関係にあるって事を周りの人間共にアピールしとけ。そうすりゃ後々この世界でオレ様達が戦闘に出やすくなる』
（ふむ、なるほど。ではどうすればいい？）
『オレ様が適当に鳴くからお前はそれに対してその機体で頷きながらおんなじように適当な動作をしろ。それでオレ様も頷いて行動すりゃコミュニケーションが取れてると思うだろ。オレ様の言葉が通じる奴は少ないが、こっちはお前らの言葉くらい通じるからな』

何気にしっかり考えているゴジラ。とはいっても後々自分が行動しやすくする為だったりするのだが。

（了解した。他にあれについて気をつける事はあるか？）
『見ての通り奴は植物だ。オレ様の熱線やお前らの機体のビームなんかは奴にとって相性最悪だろうさ。だがな……』
（何か気になることでも？）
『……いや、これはそうなった時でいいか。ともかく手筈通りに……っつーかもうやってるから別に打ち合わせする必要がなかったな』

実は今までのグラハムの脳量子波によるゴジラとの会話、しっかり咆哮したりエクシアＧＦを動かしながらだった為、ゴジラが味方の怪獣としっかり自衛隊や見物人には伝わったらしい。

（ところで一つ尋ねたいのだが）
『あん？』
（……その両腕は痛みを感じないのか？）

言われてみれば先程からずっとビオランテの触手に両腕を噛まれ続けている。

『さっきからむず痒いと思ったらこれのせいか』

ゴジラは別に気にも留めてなかった。

『ふん!!』

それどころか、腕を思い切り振る事で両腕に噛み付いていた触手を強引に引き千切った。振るだけでだ。
噛み千切るか掴んで千切るかと思ったが普通に動いただけで引き千切ったゴジラに、レジェンド一家で彼の実力を知らぬ者達は青褪めた。

「……ウソだろあれ、なんてパワーだよ……」
「……そういえば、ゼッちゃんてゴジくんと同レベルの戦闘力なのよね」
「じぇ」
（（（（アレと同レベルってどんだけー……））））

片や核エネルギーを力の源泉とする不死身の怪獣王、片や光神に準ずるレベルの宇宙恐竜。このレジェンドの有する三大怪獣、残る一体も相当ヤバいのだろうと想像するのは容易である。
そんな会話をしている間にゴジラとビオランテの距離はもう殆ど無い。尻尾を振り回せば普通に直撃する距離だ。

『――――！』
「グルゥ!?」

そこから一歩動いた瞬間、ゴジラの両腕のみならず両脚、それに胴にも蔦や触手が巻き付く。

「野郎！ゴジラ相手に触手だけじゃ無理と踏んで全力で締め付けに来やがったか！」
「しかもあの距離では私達の機体の攻撃による被害がゴジラに出てしまう可能性が……」
「竜馬、マリーダ。それの心配は無いようだ」
「どういう事ですか？副隊長」
「……どうやら彼はこれを狙っていたらしい」
「「……は？」」

グラハムの言葉の意味が分からず二体の方を向いてみると、ゴジラの背鰭が発光し出している。これは即ちゴジラの十八番を放つサイン。

『オレ様を封じて締め付けるつもりだろうがな……おかげでブレずに済んで助かったぜ。ありがたいこった』
『――――!?』
『そもそもてめえはハナっから動けねえ。ならオレ様の動きを止めたところでオレ様の射程内なら意味がねえんだよ!!』

背鰭の発光が強くなり、ゴジラの口に青白い光が集束されていく。
『こうして身体がガッチリ固定されたって事は、あの緑のスナイパー野郎のように狙い撃ち出来るって事だからな……

吹き飛べ花ビラ野郎!!!』

ゴオオオオオオオオ!!!

『――!!!』

ゴジラの代名詞とも言える必殺の放射熱線がビオランテに直撃する。元が植物である為、定石通り効果は絶大であり凄まじい勢いで燃え上がっていく。

「へっ、相変わらず凄え威力だな。こっちも行くぜ！」

竜馬はブラックゲッターをゴジラの斜め上空に移動させ、ゲッターロボ共通の必殺武器を放つ。

「ゲッタァァァ!!ビィィィィム!!」

ブラックゲッターの腹部からゲッター線を集束したエネルギーが発射され、ゴジラの放射熱線同様にビオランテに炸裂する。グラハムのエクシアＧＦは接近戦重視、マリーダのペーネロペーはファンネルミサイルが特殊な実弾武器である為、それぞれライフル武器での援護を行う。

「ペルフェクティビリティのアームド・アーマーならもっと効果的だったのだが……！」

「場合が場合だ、仕方あるまい！総員、このまま押し切るぞ！」

グラハムの指示の下、三機と一体はビオランテへの集中砲火を続ける。そして駄目押しにゴジラがビオランテの薔薇……おそらくは顔に相当する部分に放射熱線を直撃させた。

『――――!!』

各部への集中砲火に加え、最も効果のあった放射熱線を薔薇の部分や胴である蔦の部分へ受けて、遂にビオランテは爆散する。そして……

「金色の、粒子……？」
「あらあら……」
「神秘的な光景ですね……」

爆散したビオランテは金色の粒子となって空へと消えていった。それを見届けたゴジラはオーフィスに自分を戻すよう念じ、オーフィスもそれを受けてゴジラをカプセルに戻すと再び自分から出てきた為ちびゴジラの状態になる。

『……』
「……」
「レジェンド、ゴジラ、どうしたの？」
「超師匠、ウルトラ釈然としてなさそうですね」
「……いや、何でもない」

グラハムらが撤収して行くのを眺めつつ、レジェンドは俯いたままの黒上博士の方を向く。

「お前達は先にダイブハンガーへ帰っていろ。明日からまた学園だろ。俺はやる事が出来た。もしかしたら家族が一人増えるかもしれ

ん」
「レジェンド様？」
「杏寿郎、しのぶ、二人は学園もないだろうし、面倒だと思うが少し付き合ってくれ」
「御意！レジェンド様の雰囲気からやらねばならぬ事とお見受けした！サーガ様の御先達たるレジェンド様の頼みとあらば無視するわけにはいくまい！サーガ様、宜しいだろうか!?」
「構わない。俺は皆を送る方に回る」
「パムパム～」
「うむ！もちろんパム治郎も俺と一緒だ！相棒なのだから仲間外れにする気はないぞ！」
「パム～！」

一応事件の方に一段落ついたからか、安心してその光景を眺められるようになった一行。カナエは例の如く「可愛いは正義！」とウルフォンのカメラでその光景を撮っている。煉獄さん推しには垂涎の一品だろう。

「私の方も問題ありません」
「我も行く」
「あら？オーフィスさんも？」
「……帰っても、レジェンドがいないと我、眠れない」
「そこまで遅くはならないと思うがな……ついでに聞くがゴジラとハイパーゼットンは？」
「じぇっとん」
『どっちでもいい。オレ様は寝る』

とりあえず、同行するようだ。ゴジラは出てきて早々またカプセルに戻ってしまったが。ゼットはレジェンドと一体化しているので問答無用で同行決定。
サーガの先導によってダイブハンガーへと帰るオカルト研究部と

黒歌を見送り、レジェンドは黒上博士に声を掛けた。

「黒上博士、こちらも可能な限りの事を話そう。そちらに今回起こった出来事について詳しく聞きたい」

「そうだね……つかぬ事を聞くが、聞き終えたら私をどうするつもりか、この場で聞かせてほしい」

「心配せずとも警察だのなんだのに引き渡す気はないさ。俺の方も事情持ちなものでな。場合によってはウチで保護するというぐらいか」

「保護？」

「……おそらくはお前が研究していた抗核エネルギーバクテリア、それについて探る為の刺客が送られて来てもおかしくは無い。別に俺はそんなもの余程の事態でもなければ欲しくも何ともないんだが、各国の軍事政権が絡んだ連中は黙っていないだろう。もし成果が得られないと分かれば最悪お前を殺害して研究を中断せざるを得ないように仕向ける可能性もある」

これを聞いたその場に残っている者達は驚く。しかし確かにそうだと組織に属していた経験のある杏寿郎やしのぶは納得する。自分達に利がないのなら、万が一にも相手にとって利になる可能性があるものを潰すなりしておくのが戦略の基本だ。

「何故君が抗核エネルギーバクテリアについて知っていたかはこの際置いておくとして、確かにその通りだ……ここではなんだ、場所を移そう。私の研究所で話そうか。こっちだ、周囲に気を配ってついて来てほしい」

「分かった。行くぞ」

レジェンドらは黒上博士の後に続いてその場を後にした。

彼らも移動し誰も居なくなったその場に、黒上博士にG細胞を提供

した青年と堕天司ベリアルが現れる。

「いいのかい、サキさん。やられちまったみたいだけど」

「フッ……元よりあれで倒せるなど思ってもいないさ。これはあくまで第一段階。第二段階は……そうだな、確かこの世界の三大勢力とやらが会談を行うと言っていただろう？その時にしよう。不要なギャラリーではなく、ある意味この世界の重鎮とも呼べる者達が集うその場に……少しばかり刺激をプレゼントしてあげようじゃないか」

「お、イイね。そう遠くない日とはいえ、またも焦らしプレイとはサキさんも中々のサディズムの持ち主だな。しっかしやられる事まで計算づくだとは……ファーさんが一目置くわけだ」

「私としても彼との合同研究は今の楽しみの一つでね。そうそう、渡すのはだいぶ後にはなるが君へのプレゼントも製作中だ。その為には、君達が居た所ではない『空の世界』のあるものが必要不可欠なのだが……」

「オーケー、サキさん。その時が来たら俺らもちょっとばかしそっちに顔出しするか。にしてもプレゼントねぇ……サンタクロースなんかよりサキさんの方がよっぽど太っ腹だぜ」

二人は笑いながら暗闇へと姿を消していく。

この言葉の意味、その一つは三すくみの会談が行われる日、明らかになる。

〈続く〉

次回予告

レジェンド達が新たな問題と直面している頃、空の世界では我夢と藤宮が仲間達と調査を進めながら旅をしていた。

そんな中、調査を行う旅の途中で出会った凄腕の騎士ジークフリートと、単独で調査を行っていた我夢はある事件を解決すべく共闘する。

しかし事件を解決したのも束の間、恐るべき侵略者が現れ彼らのいる国『フェードラッヘ』は混乱と危機に陥ってしまう。

彼らを救うべく、今、異界より来たりし赤き巨人が空の世界で顕現する。

『ＳＩＤＥ　ＧＡＩＡ　救国の忠騎士と赤き大地の巨人』

「おごれる人間共よ。もうお前達の世界は終わりだ。我々植物人間がお前達にとって変わるのだ」

ＳＩＤＥ　ＧＡＩＡ　救国の忠騎士と赤き大地の巨人

ゴジラと神衛隊によるビオランテとの戦いに決着がついたのと同じ頃、『空の世界』でウルトラ騎空団の一員として活動中の我夢や藤宮もまた様々な事件を解決していた。

先日、ある島で調査を行っていた我夢は漆黒の鎧を纏ったジークフリートという騎士に出会う。我夢の世界にて有名な人物と同じ名を持つ彼は元はとある国の騎士団長であったが、先代国王殺害という冤罪を被せられて国を追われ、秘密裏に行動しているという。

彼を罪人に仕立て上げた人物は国の重要な役職におり、その立場を隠れ蓑にして裏では悪事を働いているらしく、ジークフリートはそれを表沙汰にする為のある情報を手に入れていた。

王都フェードラッヘ――星晶獣シルフの加護によって繁栄したその国では不老長寿の霊薬『アルマ』が存在していた。しかし、そのアルマを精製する際に猛毒『カルマ』が発生する事を突き止めたジークフリートは、同時に自身を陥れた執政官イザベラがその事を隠し辺境の村にそのカルマを流して処分していた事を知る。

義憤に駆られた我夢はジークフリートへの協力を決意する。そして我夢の協力により、事態は大きく好転する事になる。

かつてレジェンドに同行したある世界にて同じような症状を見た事のある我夢は、レジェンドが帰還する前に彼から手渡された卯ノ花直筆の医療薬学の本と自身の知識と経験から、カルマには及ばずとも万能薬を踏んである種の薬草を加えていけば、アルマには及ばずとも万能薬として機能する事を発見。この世界の薬草について知識があったジークフリートからありふれた薬草である事を知った我夢はジークフリートと共にすぐさまカルマの万能薬化に着手し、村を救う。

とはいえこのままでは根本的な解決にはならないと踏んだ二人は、村の長老や村人達を味方につけ、イザベラの罪を暴く作戦に出た。

我夢は王都フェードラッヘの白竜騎士団に協力者として参加し、義

に厚い団長のランスロットやその幼馴染で同じく白竜騎士団に属するヴェインと共にジークフリートを追い捕縛しようとするフリをして件の村へと誘い込みカルマの事、そしてイザベラの所業を教える。
証拠を見せられ動揺するランスロットとヴェイン。さらに味方のはずの白竜騎士団の団員が二人を襲撃した事によって我夢とジークフリートの話は真実味を増していき、直接イザベラに問い正すべく四人は王都フェードラッヘへと向かう。
そしてカール国王と共に謁見の間にいたイザベラに糾弾すると案の定しらを切るが、後に続くように現れた長老や村人の証言によってイザベラはその本性を表わにし星晶獣シルフをけしかける。
白竜騎士団の前身である黒竜騎士団団長だったジークフリートや、協力者である我夢の援護もありシルフは鎮められ静かに眠りにつき、イザベラは捕縛・投獄される事となった。
かくして事件は解決、ジークフリートに被せられた冤罪も解け、協力してくれた我夢の恩義に報いるべくジークフリートはウルトラ騎空団へ加入する。
今回は、その直後……彼らがフェードラッヘを出立する前に起こった出来事である。

☆

その日、我夢はあてがわれた客室にてジークフリートやランスロット、ヴェインにウルフォンを使って見せていた。小さい機器にも関わらず様々な機能が明らかになる度に三人は感嘆の声を上げる。
ちなみに事件の協力者には他にソフィアという、ゼエン教の僧侶の女性もいたのだが巡礼の途中という事で名残惜しくも別れる事となった為、この場にはいない。
実は後で再会する事になるのだが……

「うおー!すっげーなこれ!どうなってんだ!?」
「計算機にもなるのか!経費の計算が捗りそうな機能じゃないか!」

「確か、通信も出来るんだったな。同じようなものを持っている者に限るようだが、情報伝達がスムーズかつ迅速に行えるのは大きな利点だ」
「まあ、ジークフリートさんが言っているように通信・通話が本来の使い方なんですけど、最近は色々な機能も付いてて……あ、こんな事も出来るんですよ」

三人で並んで下さい、という我夢の言葉に促され並んだ三人をウルフォンのカメラ機能で撮影し、三人に見せてみる。

「「おおお!?」」
「これは驚いたな。模写とは違う……さっきの俺達の姿や姿勢にブレがない」
「これは写真っていうもので、これを撮るために使ったのはカメラ機能です。ジークフリートさんも使ってみますか?まずはこの画面でこのアイコンをタップ……軽く触れるんです。それから……」

我夢の説明を聞きながら、今度はジークフリートがランスロットとヴェインを撮ってみる。

「あ、良い感じに撮れてますよ。なんかホントに仲良いって分かるなぁ」
「お!良いじゃんこれ!ランちゃんも見てみろって!」
「どれどれ……ははっ、本当だ。なんか子供の頃を思い出すな」

実はこの二人、幼馴染である。ランスロットの方が2歳年上だが、あまりそうは見えない。

「気に入ったのあれば、今度来た時に写真プリントアウトしたの持ってきますけど」
「「プリントアウト?」」

「早い話がこの映像を紙にそのまま移せるんです。ある程度大きさなんかも調整出来ますから、白竜騎士団の勧誘ポスターとかにもどうですか？」
「ほう……まさに黒竜騎士団の頃にも欲しかった機能だな。どうだランスロット、せっかくだし次回来たとき用に一枚撮ってもらったらいいんじゃないか？」

すっかりウルフォンの多機能性に夢中な三人。ジークフリートのみならずヴェインにも勧められ、ランスロットは新規入団募集用ポスターに使うべく一枚撮ってもらった。この時の写真は予告通りポスターとなり、暫く後にこれを見た女性達からのポスター注文が殺到するハメになったらしい。
そんな時、ジークフリートは思い出したようにランスロットとヴェインに尋ねた。

「そういえばお前達、今日は他国からの学者が滞在する初日じゃなかったか？確か陛下への挨拶の場に白竜騎士団も同席する事になっていたと思うが」
「へ……？ああっ！ランちゃん、時間は!?」
「えっと……よし、まだ余裕はある！すぐに準備して謁見の間に急ぐぞ！騎士たるもの時間は遵守すべし、ジークフリートさん、我夢、俺達はこれで！」
「もし出立前に時間があったらまた色々教えてくれよ、我夢！ジークフリートさん、ランちゃん共々失礼しますっ！」
「ああ、焦って行動して下手を踏まないようにな」
「二人とも気をつけて！」

急ぎ足で出て行く二人を見送った我夢とジークフリート。そしてすぐにジークフリートは我夢に提案する。
「我夢、どうせなら陛下への出立前の挨拶も前倒しで行っておこうか。

急な案件が出来てその日に挨拶出来なくなるかもしれんし……俺達も謁見の間に行くとしよう。二人と違って焦る必要はないがな」
「そうですね……あ、ジークフリートさん。これ」

我夢が収納用ブレスレットから取り出したのは、ジークフリートの鎧と同じ色のブレスレットとウルフォン。

「これは……」
「うちの騎空団では連絡や緊急時の対応を円滑にする為に団員皆が持ってるんです。僕や藤宮みたいな単独行動をする時もあるメンバーは、旅先で入団希望者がいた時にすぐ渡せるよう、予備もいくつか持ち合わせてて……丁度ジークフリートさんにピッタリの色のを持ってて良かった」
「良いのか？先程の機能からかなり高価な物のようだが」
「大丈夫です。なんかチーフがべらぼうに創り出した上、無駄に在庫もあるらしいので……文字通り『創った』から心配なのは値段よりもチーフの体調かなぁ……何でしたら代金替わりにチーフ達が来た時、美味しい外食店でも教えて上げてください。少なくとも一人、よく食べる娘がいますから」

言わずもがな、オーフィスである。団員の何名かとフードファイトした挙げ句、レッドラックという男性ドラフの僧侶兼フードファイターと互角だった。
……ここに近々おおとりゲン率いるダイブハンガー武闘派組が加わってスーパーフードファイターウルトラが発足しそうな気がする。全空最強のフードファイター軍団……十天衆とは別の意味で全空の脅威だ。
それはさておき、ウルフォンに興味はあったし、ブレスレットは鎧の上からでも装着出来てカムフラージュが出来る。何より新たに出来た友人の厚意である以上、ここで拒否するのは騎士として如何なものか。

「分かった。俺も騎空団の一員となった以上、受け取るのが筋というものだな。有り難く使わせてもらおう」
「ええ、そうしてくれると助かります。出した手前、引っ込め辛くて……あ、言い忘れてましたけど、これかなり丈夫なので戦闘時の衝撃にも耐えられますから。この間は盾代わりしてる人がいて藤宮に怒られてたっけ。なんでチーフこんな頑丈に創ったんだろ……」
「通信機器が盾代わりか……想像でも珍妙な光景しか浮かばんな」

二人して思い浮かべたのは剣や槍と共にウルフォンを構えて突撃する白竜騎士団である。変な意味でインパクト大、なんだその販促CMみたいな連中は。

「おっと、つい話し込んでしまったな。少し急ぐか」

ジークフリートの言葉に我夢は頷き、ランスロットとヴェイン同様二人は急ぎ足で謁見の間に向かった。

☆

謁見の間。白竜騎士団及びジークフリートや客人扱いの我夢の立ち会いの下、フェードラッヘの王であるカール国王に挨拶に来たのは他の島から来たという学者のシャーカーンという人物であった。
彼は植物学者だった亡き父の跡を継ぎ、同じく植物学者になるべく島々を回っているという。自身はまだまだ駆け出しであり、勉強の為に自然が多く残るフェードラッヘに暫し滞在したいとの事で、カール国王もそれを了承。滞在中は我夢と同じく客人扱いとして城のゲストルームに宿泊してもらう事になった。
そして現在、シャーカーンはヴェインにゲストルームへ案内されていた。

「シャーカーンさん、ここがゲストルームです。何かあれば遠慮なく俺……あ、いえ私達に言ってください！」
「ありがとうございます。ところで、この城は何製ですか？」
「へ？ええっと……普通にレンガとか……石とかだと思います」
「しかし所々特殊な鉱物が使われている」
「は？」

不可解な言葉を呟いた後、呆けたヴェインを放っておいてさっさと部屋に入って行くシャーカーン。ヴェインは釈然としないまま、その場を立ち去る事にする。

それからランスロットと合流したヴェインは、再び我夢の部屋に訪れた。そこにはジークフリートもおり、二人は何やら難しい顔で何かを話し合っていたようだが、ランスロットとヴェインに気付くと少し安心したような表情になる。

「あ、お二人共ご苦労様です」
「あ……ああ。我夢も客人だというのにわざわざ謁見の間まで来てくれてありがとう」
「えっと……二人は何を話してたんだ？なんかこう、雰囲気が重かったっていうか……」
「……あのシャーカーンという学者の事だ。どうも腑に落ちなくてな」

ランスロットとヴェインは驚いた様に目を合わせる。何故ならヴェインは先程までそれをランスロットに伝えていたからだ。ランスロット自身もどことなくそう感じてはいたが、騎士団長という立場上それを顔に出さないようにしていた。

「天然の自然を観察するというならば、ここよりも自然が豊富な場所

はいくらでもある。特にルーマシー群島などは格好の場だろう。だがそんな素振りは全くなかった。もしかするとフェードラッヘ特有の植物が群生しているかもしれんが、そもそも駆け出しだというのにそこまで調べているとは思えん。だとすれば、別の何かが目的でここに来た可能性が高い」
「ジークフリートさんの言う通りです。僕は植物の専門ではありませんが、彼の目は学者のそれに見えませんでした。まるで獲物を狙うかのような、そんな感じがしました」
「ジークフリートさんや科学者の我夢が言うと、なんか真実味が一気に増すよな」
「実は俺とヴェインも同じ事を思っていたんです。少なくとも俺やヴェインが黒竜騎士団に入団した頃から植物学者がこの国に着目した事はなかった。最近になって新種が発見されたという報告もないし、どうも違和感があって……それに、ヴェインが変な質問をされたんです」
「「変な質問？」」

我夢とジークフリートは怪訝な顔をし、ヴェインは先刻質問された内容、そしてその後の呟きも二人に伝えた。
さらに訝しげな表情になる二人。

「僕はこの城の事を詳しくは知りませんが、やはりおかしい。もしそうだとしても、安易にそんな事を聞いて外部に漏れでもしたら悪用される可能性だってある」
「我夢の言う通り、そうであるならば機密事項になるはずだ。いくら学者といえど、他国の機密事項に突っ込んだ質問をするだろうか？こんな事を言うと責められるかもしれんが、彼には細心の注意を払った方がいいだろう……悪い意味でな」

責められるかも、とジークフリートは言うがこの場の全員がその気持ちである。但しこれはあくまでこの場にいる四人だけの秘密とし

て扱い、他の人物……特にシャーカーン自身に気付かれぬように調査する事になった。

☆

その夜、ジークフリートは我夢から渡されたウルフォンの使い方ガイドを読んでいた。実はレジェンドが施した術式によってウルフォンの画面やこの使い方ガイドは、その人物の最も馴染み深い言語に自動変換される仕様だ。故にジークフリートも問題無く読めて使用出来ている。

「ふむ……昼間の写真というものは複数種保存しておけるのか。これはかなり有用性があるな……通話以外にもこれの持ち主同士で文面も送れると。声を発しなくても必要事項を伝えられるとは……便利な分、悪用されたら厄介だな。己を律して使用と保管をしなければ……」

そこまで考え、今日はこれくらいにしようと寝床に入ろうとしたジークフリートだったが、何やら不穏な空気を察知して武器を手にゆっくりと部屋から出る。すると……

「……何？」

どういうことか、灯り……松明の火が全て消えている。少なくとも彼の部屋周辺は。風が吹き抜けているわけでもないのにこの状況はどういうことか気になったジークフリートは、近くを巡回に来て混乱している衛兵達に問うことにした。

「すまない。これは一体どういうことか、分かる者はいるか？」

「ジ、ジークフリート元団長！それが、我々にもさっぱり……」

「風が吹き抜けるにしても場所的に無理です。しかも、今日は比較的

穏やかな風の為、いきなり強風が吹く事も有り得ません」
「そうか。お前達も混乱しているところを問い詰めて悪かった。十分に注意しろ。何かが潜んでいるやもしれん」

そう言うと、ジークフリートはある場所へ向かう。シャーカーンの部屋……ではなく、我夢の部屋だ。部屋の前に行くと、ジークフリートは先程覚えた通話方法でわざわざ我夢に電話する。今、このフェードラッヘでウルフォンを持っており、かつ使用出来るのはこの二人だけだ。念には念を入れ自分だと証明する為である。

『はい、我夢です』
「我夢、夜分遅くにすまない。俺だ、ジークフリートだ。話があって今部屋の前に来ているんだが、訳あってこうして電話している。開けてもらえるか」
『……何かあったんですね。分かりました、ちょっと待ってて下さい』

そこで通話を切ると、部屋から我夢が寝間着で出てきた。

「すいません、こんな格好で」
「いや、俺がこんな時間に訪ねたからだろう。謝るのはこちらの方だ」
「とにかく、一旦中へ」

ジークフリートを招き入れると、我夢は周囲を確認してある事に気付き、ドアを閉めて鍵を掛けた。

「我夢も気付いたようだな」
「はい。松明の灯りが全て消えています。いや、消されているという方が正しい」
「……やはりな」

もしかすると城中の個室以外の灯りが消されている可能性がある。

ジークフリートは腕組みしつつ考える。闇に紛れて行動する何かなのかもしれない。そこでジークフリートは最近フェードラッヘの街中で見たあるものを思い出し、我夢に聞く。

「……我夢、実はこの間フェードラッヘでは見た事のない植物を見かけた。本当につい最近……カルマを発見した少し後だ。生憎とその時は気にする程の余裕もなくてな、サンプルも何も無いんだが……」
「どんな形かだけでも覚えてますか?絵か何かにしてもらえれば、検討をつける事が出来るかもしれません」
「分かった。大分特徴的だったから鮮明に思い出せる」

ジークフリートは我夢から渡された紙にその植物の詳しい特徴の説明を追記しつつ絵にしていく。我夢は完成した絵を、いつの間にかブレスレットから出していたスキャナーと連動させた、レジェンドお手製の図鑑がインプットされているノートパソコンにスキャナーから取り込んだ情報を入力し検索する。するとある植物がそれに該当した。

「「ケロニア……」」

二人は揃ってその名を口にする。そして読み進めていくと様々な事が明らかになった。

「移動能力を持ち、動物の血液を啜る……」
「まるで魔物だな。しかも見た目は珍しいといえどただの植物……こんな危険なものが何故フェードラッヘに……」
「分かりません……チーフがいれば詳しく聞けたかもしれません。チーフはかつてこのケロニアが何かの事件の発端になったのを解決した事があったそうですから」
「無い物ねだりしても仕方ない。とにかく、何かが起ころうとしているのは確かだ。もしかするとこのケロニアとやらが関わっているか

もしれん。くれぐれも気をつけてくれ」
「はい、ジークフリートさんも。また何かあれば僕のウルフォンに連絡を」
「ああ、随時連絡を取り合っていこう」

そう言うと、ジークフリートは周りを警戒しつつ部屋に戻る。我夢もまた、今までの経験から良くない事が起きるのを薄々と感じ取っていた。

一方、ヴェインはランスロットに頼まれシャーカーンに案内したゲストルームの調査をしていた。ゆっくり部屋に入り中を見渡すと、何かの機械が置いてある。

「何だこりゃ？確か我夢の話じゃ機械ってのは電気が通ってないと駄目なもんが多いって言ってたよな……これ、どっから電気供給してんだ？」

ヴェインがその機械を調べようとすると、背後のクローゼットがゆっくりと開く。悪寒を感じ、さらに気配を察知して後ろを振り向くと……

目の前に緑色の怪人がいた。

「うわあああああ!?」

異形か突然目の前に現れた事でヴェインはさすがに驚き、その怪人が目から発した光線を受けて倒れてしまう。

彼の叫び声に駆けつけた衛兵、そしてランスロットが見たのは倒れているヴェインだけであった。

「ヴェイン!?しっかりしろ!俺が分かるか!?」

「う……うう……ランちゃん……」

「目立った外傷は無いが……すぐに医務室に連れて行ってやるからな!」

「怪人……緑の怪人が、衣装棚から……」

「何……!?」

ランスロットは双剣を構え、二人の衛兵に左右から一気にクローゼットを開かせるが、そこには何もいなかった。

(誰もいないな……いや、ヴェインは軽い冗談は言うが決して嘘は言わない真っ直ぐな男だ。おそらくは俺達が駆けつける前に逃げたと考えるのが妥当だが……いないならば今はヴェインを医務室へ連れて行く方が先決か。後で今ここにいないシャーカーン殿に何をしていたか聴く必要があるな)

ランスロットは双剣を収め、ヴェインに肩を貸しつつ医務室へ向かう。

☆

数時間後、ランスロットはジークフリートを伴ってシャーカーンに事件当時何処で何をしていたか尋ねる為、現場検証も兼ねて再び部屋

を訪れていた。ランスロットが廊下にシャーカーンを連れ出し、その隙にジークフリートは部屋の中を捜索する。

（謎の機械もそうだが、問題は怪人が現れたというこの衣装棚の中だな）

ジークフリートは意を決してクローゼットを開けるが、やはり何もいない。

（完全に姿を晦ましたか……ん？）

ジークフリートが見つけたのは空の世界でも時折見かけるスーツケース。この世界ではあまり一般的ではないが一応それなりに普及しているものだが、ジークフリートはそのスーツケースに対して直感的なものが働いた。

（一見するとただのスーツケースのようだが……悪いが調べさせてもらうぞ）

スーツケースを慎重に開けるジークフリート。その中にあった物は……

「何だ、これは……!?」

服などではなく、不気味に蠢く緑の物体であった。

「いよいよもって怪しさが増してきたな、シャーカーン……一先ずこれを我夢のところに持って行くか。研究分野は畑違いらしいが、俺よりもこの状況の突破口を見い出せる可能性が高い」

そのままそれを採取してスーツケースをクローゼットに戻してそ

の場を立ち去るジークフリート。しかし百戦錬磨の彼でさえ気付いていなかった。
尋問を終えたシャーカーンが、彼の後をゆっくりついていく事を。

☆

ジークフリートは我夢に先程採取した物体の調査を依頼し、調査結果をすぐに聞くべく彼から離れずにいた。どうも嫌な空気を感じているからでもある。

「ジークフリートさん」
「何か分かったか？」
「はい、これは……ケロニアの幼生態です……！」
「幼生態……!?」
「それだけじゃありません。幼生態とはいえ少なからず知能を持ち、さらに人間の血液反応も僅かながらに検知されました」
「……！確かケロニアは動物の血液を啜るという……まさか、野生動物だけでなく人間さえ対象なのか!?」
「もう既にケロニアはこの世界で高等な文明を持っている筈です。でなければスーツケースに隠して幼生態を持ち込むなど考えたりしない……普通ならバレる可能性が高くて危険ですから。しかし、そうする事が問題なく出来る自信があるという事……つまり、人間さえというわけじゃなく、人間こそが進化した彼らにとって格好の栄養源なんです……！」

我夢の言葉にジークフリートは戦慄する。だとしたらこれを持ち込んだシャーカーンは……二人が最悪の事態を想定した時、ガチャリとドアが開き、シャーカーンが侵入して来た。

「……シャーカーン殿、少々不躾ではないでしょうか？ノックも何も無しにいきなり入室とは……」

そう言いながらもジークフリートは兜を装着し、自身の背負った大剣に手を掛けている。異様な雰囲気を感じ取り、既に戦闘態勢だ。我夢もノートパソコンなどをブレスレットに収納し、ジェクターガンを構えていつでも迎撃出来るよう警戒を緩めない。

「やはりお前達二人は最優先で排除すべき人間のようだ」

「!!」

シャーカーンはそう言葉を発するや否や、その姿を全く別の存在へと変える。

「緑色の怪人……!ヴェインさんが言っていたのはお前だな!」

「とうとう本性を表したか、シャーカーン!」

「シャーカーンではない。我々はケロニア。これ以上嗅ぎ回られる前にお前達には退場してもらおう」

シャーカーンもといケロニアは、ヴェインに放ったように二人に向けて怪光線を発射するが、ヴェインの時と違って二人は既に戦闘態勢を取っており、かつ片方は白竜騎士団団長であるランスロットが師事したジークフリートだ。

怪光線は回避され、我夢の銃撃を受けダメージはなかったものの隙が出来たケロニアはジークフリートの接近を許してしまう。

「退場するのは貴様の方だ!」

真龍ファフニールをも討ち倒した剣撃がケロニアに放たれるも、ケロニアは寸でのところで避けそのまま逃走する。

「逃さん!追うぞ、我夢!」

「はい!」

ジークフリートは一足早くケロニアを追い、我夢はそれをウルフォンの端末リンクＧＰＳで確認しながら追いかけようとすると、騒ぎが聞こえたのだろう、ランスロットと衛兵が駆けつけてくる。

「どうした我夢!?今何か凄い音が……」

「ランスロットさん！カール国王に伝えて下さい！シャーカーンがヴェインさんを襲った緑色の怪人、ケロニアだったんです！僕の部屋でジークフリートさんとあるものを調べていた時、奴が入って来て……その姿を表し僕達に襲いかかってきたのを反撃したら逃走しました！今ジークフリートさんが先行して追跡しています！」

「何だって!?」

「人間の血液が何よりも奴らにとって美味いものと知ったケロニアは人間征服の野望を持ったんです！急いで下さい！もしかするとウルトラマンの力を使う事になるかもしれない！」

「人間征服……！ウルトラマンとは一体……いや、今はどうでもいい！分かった、すぐに伝えて俺達も追う！」

「お願いします！」

我夢の切羽詰まった様子から真実だと確信したランスロットはこの事をカール国王へと伝える為に謁見の間へと急ぎ、我夢も再度ジークフリートとケロニアの追跡を再開する。願わくば、彼らが間に合ってくれる事を信じて。

☆

ジークフリートとケロニアは王都フェードラッヘから出た草原地帯へと戦場を移していた。如何に人知を超えた怪人であろうと、簡単に遅れをとるジークフリートではない。

「ここなら先程の室内と違って俺の武器も存分に振るう事が出来る。

おまけに障害物の類も無い……大人しく降伏しろ。次は外さんぞ……！」

雑兵どころか歴戦の将さえ身を竦ませるだろう闘気を発しながらケロニアに言うジークフリート。しかしケロニアは表情一つ崩そうとしない。そこに我夢も駆けつけてくる。

「ジークフリートさん！ランスロットさんと会う事が出来たので状況を伝えました！カール国王に報告次第、こちらに来てくれるそうです！」

「よし……！ならばやはり、残るはこいつだけだな」

「ハッハッハッハ……やはり人間はその血以外で我々に大きく劣っている」

「何だって……!?」

「往生際が悪いな。追い詰められているのは貴様だぞ。仮に仲間がいたとして、こちら側もじきに増援が到着するという事を今知ったばかりだろう？」

ジークフリートはそういうものの、相手は驚くべき知能と文明を手に入れた怪奇植物だ。何を仕掛けてくるか予想もつかない。

そう、ケロニアは突如巨大化したのだ。

「「!?」」

我夢とジークフリートは驚愕する。そして、巨大化したケロニアの姿は王都フェードラッヘの住民達も目撃し、恐怖と混乱に陥った。

「な、何だあれは!?」

「化け物だ！とてつもなくデカイ化け物だ!!」
「まさかここを狙っているのか!?」

無論、住民だけでなくカール国王や、ランスロットを始めとした白竜騎士団も巨大化したケロニアの姿を目にしている。

「あれが、シャーカーン殿だというのか……!?」
「陛下、最初からシャーカーンという人物は存在しなかったのです。あのケロニアという化け物は人間になりすまし、フェードラッヘに侵入していたんです！ジークフリートさんや我夢が追跡していましたが、まさか……」
「……信じるのだ。あの二人は簡単には倒されまい。ランスロット、白竜騎士団を率いて可能な限り住民を城に避難させるのだ」
「はっ！」

その時、ケロニア自身から王都フェードラッヘを含む周囲へと目的が語られる。

「おごれる人間共よ。もうお前達の世界は終わりだ。我々植物人間がお前達にとって変わるのだ。瘴流域の向こうから、我々の仲間が。我々はついに高度の文明を持つようになった。お前達人間共を滅ぼして植物人間の王国を打ち立てるのだ」

この言葉にフェードラッヘ中が愕然とした。瘴流域とは空域そのものを分断する、その名の通り瘴気に満ちた空間だ。瘴気と共に強烈な嵐が常時吹き荒れ、さらに瘴気の影響で強力になった魔物も存在する。本来なら空図の欠片を集めるか、もしくは特殊な力によってのみ通る事が可能な場所なのである。
そこをケロニアの仲間達は通ってやってくるという。

「バカな……！奴らは既に当たり前のように瘴流域さえ超えられるの

か!?」

ランスロットの叫ぶと、その通りだと言わんばかりに遥か遠くの空から何かがやって来た。

植物人間の開発した円盤群（エアシップコンビナート）である。いよいよ本格的に人間侵略を開始したのだ。知名度もあるフェードラッヘはその足掛かりにするべく最初に狙われたというわけだった。

巨大化したケロニアの攻撃から退避するように間合いをとる我夢とジークフリート。人間大の大きさの時は麻痺させる程度であった怪光線―アイ・スパークは威力が格段に上がっており、ダメージを覚悟でなどと言えるレベルではなかった。同時に二人は徐々に近付いてくる円盤群を目にし、焦り始める。

「くそっ……このままではフェードラッヘが……！しかし相手は空の上、目の前のケロニアにも対処方法が……」

仮に騎空艇があったとしても、瘴流域さえ超える科学力を持った植物人間の円盤に対抗できるかは不安が残るが、それ以前に戦う事さえ出来ず、ただ一方的にやられるしかない状況だ。どうする事も出来ない。

……そんな時だった。

「……ジークフリートさん、これを。もしかしたら役に立つかもしれません」

我夢が自身の武器であるジェクターガンをジークフリートに渡してきたのだ。だが、それを受け取れば我夢は丸腰になってしまう。

「使い方はこちらに……」

「待て、我夢。何をする気か分からないが、まさか死ぬ気か……!?」
「違います。僕は死ぬつもりなんてありません。チーフに怒られますから」
「ならば何故……!」
「僕が、ケロニアや円盤と戦います」

ジークフリートに衝撃が走る。今、目の前の青年は『自分が戦う』そう言ったのだ。あの未知なる怪物達に、武器も持たずに挑もうとしている。

「何を言い出すんだ。たった今俺に武器を託したばかりだろう!」
「はい。ウルトラマンの姿になったらどのみち使えませんから」
「ウルトラマンの、姿……!?」
「僕には光があります。根源的破滅招来体から地球を守る為に、地球自身が生み出した光が」

我夢は決意を込めた表情で変身アイテムであるエスプレンダーを取り出した。ジークフリートは一見武器には見えないそれのクリスタル部分に赤い光が宿っているのを確認する。

「それは……」
「もしかしたら、チーフはこうなる事を知っていて僕達に調査を任せたのかもしれません。ただ調査の為だけじゃない……今、次元を超えて【エリア】全体に危機が迫っている以上、奴らみたいな侵略者がこの世界にも現れる可能性は十分にあった。その抑止力として僕達を呼んだんだと思います」

ジークフリートを見つめる我夢の目は真剣だ。冗談などではなく、彼は重大な使命を帯びてこの世界にいるのだと納得させられる。

「ケロニアは僕に任せて、ジークフリートさんは王都の方へ行って下

さい！避難させるにしても人手が足りないのは明白です！」

そう言うと我夢はケロニアを見据え、ある名前を叫びながらエスプレンダーを掲げる。『地球』を意味する、ウルトラマンの名を。

「ガイアァァァァァ!!!」

それは、その場にいたジークフリートだけでなくフェードラッヘに住む人々、そしてケロニアでさえも青天の霹靂であった。突然巨大な赤い光が空に現れ、その光は徐々に形を変えていき、最終的には巨人へと姿を変えたのだ。

「ダァァァァッ!!」

フェードラッヘの地に両足で力強く着地する巨人。赤と銀の体色に黒いプロテクター、青く輝くライフゲージ。

砂埃を巻き上げ、大地を震わせながら出現した巨人に、その地にいた者達は各々様々な感情を抱く。

ウルトラマンガイア。

かつてもう一人の青き巨人、そして宇宙伝説に燦然と輝く神と共に地球を救いし赤き巨人が今、フェードラッヘの危機にその雄姿を現し

た。

「ジュアッ!!」

ガイアはどっしりと腰を落とし、右手はチョップの形に、左手は握り拳でボクシングの如き構えで顔の近くへ。

ガイアの基本的な構えとも言うべき体勢をとった事で、ケロニアはガイアを敵として認識する。

遂にガイアとケロニアの死闘が幕を開けた。

「ケェェェェッ!!」

ケロニアがガイアに向けて駆け出し、同時にガイアもケロニアに向けて駆け出した。ケロニアは組み付く気だったが、接触直前でガイアが右肩を突き出してショルダータックルしてきた為、その衝撃でバランスを崩す。

「ダァッ!!」

ガイアはその隙を逃さず、ケロニアの腹部にキックを叩き込み仰向けに倒させる。対するケロニアはすぐに起き上がり、再び組み付こうとしてくるが、ガイアの左ジャブを受け怯んだところに右腕で肘打ち、裏拳を続けざまに浴びせられた上、左腕を抱え込まれ身体ごとすくい上げる様に再び仰向けに倒される。

最後のすくい上げはガイアも一緒に倒れ込んだがガイア自身そうなる事が分かっていた為、さり気なく受け身を取っておりダメージは無い。

「強い……!」

フェードラッヘに無事帰還出来たジークフリートはガイアの戦い方を見てそう零した。我夢の時はどちらかと言えば後方支援が得意分野だったのだが、ガイアの時は一変、身体ごとぶつかって行く豪快なパワーファイターだ。しかも我夢自身の知力がずば抜けているのも相まって搦め手も上手い。

そこへランスロットが駆けつけてくる。

「ジークフリートさん！無事だったんですね！」

「ああ、なんとかな。だが無事と言うにはまだ早い。ケロニアはもちろん、奴の仲間が乗っているあの奇妙な形の騎空艇の大群をどうにかせねば……」

「はい……そうだ！ジークフリートさん、我夢は!?」

「……戦っている。俺をここに向かわせて、ただ一人でな」

「一人？戦って……まさか!?」

「お前の思っている通りだ、ランスロット。今ケロニアとぶつかり合っているあの巨人、あれが我夢だ」

その言葉にランスロットはケロニアと戦っているガイアを凝視する。彼は「ウルトラマンの力を使う事になるかもしれない」そう言っていた。つまりあの姿がそうなのだろう。

「彼は『ウルトラマンの姿になったら』確かにそう言った。そしてその後に『ガイア』とも叫んだ。言うなればあの姿はガイアウルトラマン……いや、ウルトラマンを種族と仮定するならウルトラマンガイアの方が良いか」

「ウルトラマン、ガイア……」

「む……!?ガイアが何かをする気だぞ！」

フェードラッヘにてジークフリートがランスロットと合流出来たのを遠目で確認したガイアは、ケロニアとの勝負を付けるべく必殺技

の構えを取る。

「ジュアッ！ハァァァァ……」

左腕に右腕を伸ばして合わせ、半円を描くように動かしていく。そして最後は左手を握り拳のまま二の腕に乗せるようにしてＬ字型にした瞬間、真紅の光線が発射される！

「デァァァァァァッ!!」

クァンタムストリーム――ガイアの必殺技の一つでもあると同時に、数ある技の中でも多く使われた技の一つでもある。破滅魔虫ドビシの殲滅もこの技で成し遂げた。赤き光の奔流は寸分狂いなくケロニアに直撃する。

「やったか!?」

「今のは間違いなく直撃……何っ!?」

ランスロットが驚いたのも当然だ。何故ならば……

「ケェェェェッ!!」

「ジャァッ!?」

クァンタムストリームがケロニアにまるで効いていないのだ。倒すまではいかずとも確実にダメージは入るだろうと思っていたガイアも、これには流石に動揺してしまい隙が出来てしまう。それを見逃さずケロニアはアイ・スパークをガイアに放つ。

「ウァッ!!」

ケロニアの攻撃をまともに受けてしまい、ガイアは仰向けに倒れ込

んでしまう。遂に円盤群はガイアとケロニアの頭上を通過し、フェードラッヘに迫る。
これに気を取られ、円盤群の方を向きながら起き上がってしまったガイアは背後からのケロニアに組み付かれ、両腕でL字を組むように首をホールドされてしまった。

「グアッ……！」

なんとか外そうとするが、植物だというのに恐るべき力を発揮しており振り解く事が出来ない。戦闘開始時からケロニアが組み付こうとしていたのはこれが理由だった。ケロニアは怪光線アイ・スパークだけでなく、見かけによらない相当な怪力を持っており、それが強大な武器になる。

（くそっ……このままじゃフェードラッヘが……！）

ガイアは焦る。そしてそれはジークフリートやランスロットも同じ。

☆

迫りくる円盤群。相手が空中にいる為に空を飛ぶ事が出来ないジークフリートやランスロットには対抗以前に手出しする事すら不可能であった。

「このままただやられるのを待つしかないのか……！」

ガイアならばなんとか出来るかもしれない。ランスロットはそう思ったもののそうするにはあのケロニアをどうにかしなければならない。しかし自分達ではケロニアにも対抗出来ない……堂々巡りである。

そんな中、ジークフリートは考えていた。本当にこのまま黙ってやられていいのかと。

（ガイアが……フェードラッへの民ではない我夢がああして命を賭してまで戦っているというのに、俺は言われるがまま逃げ帰って来た……何が忠騎士だ。フェードラッへの為に戦ってくれている我夢を見捨てるような騎士など、忠騎士どころか騎士ですらない……！）

ジークフリートは我夢が変身する間際に託されたジェクターガンを握り締めて決意した。

「ランスロット……俺がケロニアを引き付けてガイアにあの物体の相手を頼む。お前は民のために可能な限り街の被害を抑えろ。人命第一ではあるが、この街もその人々の暮らす大切な場所だ」

「ジークフリートさん!? 一人では無理です！」

「ガイアは、我夢はああして一人で戦っている。対抗出来るからどうだとか、無理だ無茶だという問題ではない」

「……！」

「このフェードラッへは俺達の国だ。俺達がやらないでどうする。俺達ここに生きる者達がやらずにどうする！」

まるで自分に言い聞かせるようにジークフリートは声を荒げる。そして、その声に呼応するかのように一機の騎空艇……いや、戦闘機が二人の前に飛来した。

それはＸＩＧファイターＥＸ。当時我夢が専用機として使っていたものをレジェンドが様々な技術を追加で盛り込んで再開発した戦闘機だ。無論、我夢の手によって彼も搭載済み。

この島に来た時、人目につきにくい場所にカムフラージュを施して保管しており、定期的に我夢から入っていた連絡が途絶えた事で緊急事態と独自に判断し、飛行してきたのである。

「何だ!?いきなり飛んできたぞ!?しかも操縦席らしき場所には誰もいない……まさか、これもケロニアの……」
「いや、どうやら違うらしい」

そう答えるジークフリートのウルフォンのディスプレイには、『ＰＡＬ』と表示され同時に『乗ッテクダサイ、ジークフリートサン』と文字が映し出されている。

（そうか、これが我夢の言っていたファイターＥＸとやらか。人工知能とかいう物を搭載してあるから自律行動が出来る、とも言っていたな……）

飛行出来る手段を得たのは大きい。しかし、ケロニアに対抗するにはまだ足りない。そう思ったジークフリートはふとある事に気づく。

（いや待て……城内廊下の松明が全て消えていたのはあの夜、奴が来てからだ。最初は闇に紛れて行動する為かと思ったが、今こうして太陽の下で活動している以上、奴が日の光で弱体化したり、闇の中で力を増すというわけではないはずだ。だとしたら……そうか、分かったぞ……！）

ジークフリートは我夢から渡されたジェクターガンの使い方にザッと目を通し、装填済みのカートリッジを確認した後よし、と頷く。

（やはり我夢も気付いていたな。その上で準備したこれを俺に託してくれた。全く……どこまでも気が回るやつだ）

何かに確信したジークフリートはＰＡＬに質問する。

「ＰＡＬ、と言うのか。この小型騎空艇にロープはあるか？出来れば任意のタイミングで切り離しが出来るやつならば一番いいが……」

『束博士ニ作製サレタ特殊ワイヤーガアリマス。指示ヲモラエレバコチラデ切リ離シ可能デス』
「文句なしだ……！それを出してくれ。俺がそのワイヤーに掴まる。あとは奴の頭上……いや、出来るだけ近くまで行って、俺の指示したタイミングで切り離してくれればいい」
「分カリマシタ」

短く応えた後、ファイターから足掛け部分の付いたワイヤーが射出された。ジークフリートはそれに片足を掛けつつ左手で掴み、ジェクターガンをしまい愛用の大剣を右手に持つ。準備完了した事を確認したＰＡＬ……ファイターＥＸは少しずつ離陸する。

「ジークフリートさん！」
「ランスロット！白竜騎士団団長として、何より騎士として、お前が成すべき事を成せ！」

そしてファイターＥＸはジークフリートをぶら下げつつ円盤群を迂回するようにしながらケロニアへと向かっていく。ガイアを援護する為に。

「騎士として……俺は……」
「俺達も行こうぜ、ランちゃん！」
「ヴェイン……!?もう大丈夫なのか!?」

突然声をかけてきたのはケロニアにやられたヴェインであった。それだけではない。白竜騎士団が集結している。

「ちょっとばかし麻痺ってたけど、もうピンピンしてるぜ！少しだけしか聞こえなかったけどさ、あの銀色の……我夢なんだろ？」
「……ああ」
「こうなったらさ、もう自分の思うように行動するしかないんじゃね

えかな。ランちゃんだってあの騎空艇もどきをなんとかするには我夢の力が必要だって思ってるんだろ。だったら俺達も我夢を助けに行けばいいんだよ。俺達があの緑色の化け物を抑えて、我夢に騎空艇もどきを任せる！出来るなら俺達だけであの怪物を倒したいけどさ、どうにもならないかもしれない。でもよ、ギリギリまで頑張ってみようぜ！」

病み上がりだというのに闘志爆発しているヴェインの活力は他の団員にも伝染しているようで、ところどころから賛同する声が聞こえる。

（そうだ……皆がこの国と、ここに生きる者たちの為に戦おうとしているのに、団長の俺が燻ぶっているわけにいかないじゃないか！）

ジークフリートに言われた成すべき事。彼から団長の座を引き継いだランスロットがやらなければならないのは国と民を守る事。どちらかを、などとは出来ない。どちらも守るのだ。

「よし、奴らの攻撃に備えて防御や消火の為の人員を残し、他の団員はケロニア討伐に向かうぞ！あの巨人……ガイアならば奴らの艇を打倒出来るはずだ！その為にケロニアを俺達で引き付ける！」

「「「「オォォォォ!!!!」」」」

団員達が剣や槍、各々の武器を掲げランスロットの指示に応える。そんな中、ヴェインは自信満々にあるものを持ってきた。

「へへ……こいつを皆で持っていこうぜ、ランちゃん！」

「ヴェイン、それは……」

☆

ケロニアは勝利を確信していた。巨人さえ封じてしまえばフェードラッへ側になす術はない。確かにそうだった。しかし、ケロニアの予想は思いもよらぬ形で覆される。
キィィィィィン……
「……？」

ケロニアはガイアを拘束しつつ音の近付いてくる方向を向く。そこには機体からワイヤーをぶら下げ、それに捕まるジークフリートと共に高速で接近するファイターＥＸの姿が。
「ケェッ!?」
「ジュワッ……!?」

まさかの一人と一機の襲撃にケロニアだけでなく、双方を知るガイアさえ驚く。ファイターＥＸは速度を落とさぬまま、ケロニアの近くまで来ていた。それを撃ち落とそうとアイ・スパークを放とうとするケロニアだったが、ジークフリートはその瞬間を狙っていたのだ。
「今だ！ＰＡＬ、ワイヤーを切り離せ！」
「了解シマシタ」

アイ・スパークが放たれる直前、ファイターＥＸに繋がれていたワイヤーが切り離され、ケロニアの攻撃は両者に当たる事はなかった。だがジークフリートは落下しながらも切り離されたワイヤーを思い切り投げてケロニアの腕に巻きつかせ、空中ブランコの要領でぐるりと回転しつつケロニアの肩に飛び移ろうとする。そして……
「シュヴァルツ・ファング!!」

全力で大剣をケロニアの右肩に叩き込んだ。大剣の刀身がケロニ

アの肩に食い込むが、ダメージは殆ど無い。所詮は人間の力、そう思ったのも束の間。ジークフリートは片手で大剣を離さぬようにガッシリ掴みつつ、懐からジェクターガンを取り出し、刀身が食い込んでいる所に銃口を押し込む。

「我夢が残しておいてくれたとっておきだ……！存分に味わえ化け物!!」

ドオオオオオン!!

ジークフリートはジェクターガンのトリガーを引くと、食い込んだ部分に爆発が起こった！

「ケェェェェッ!?」

爆発、即ち火薬が炸裂してケロニアの体に火が着いたのだ。我夢がジークフリートへ渡したジェクターガンに装填されていたのは、熱戦弾よりも射程距離は短いが爆発による威力や点火力の高い我夢お手製の新型カートリッジ・ハイパーナパーム弾だ。威力が高すぎる為、屋内や仲間が近くにいる時は使いどころを選ぶモノなのだが。

そう、ケロニアの弱点は炎である。

それにいち早く気付いていた我夢は万が一に備えてケロニアを追跡している時にカートリッジを換装しておいたのだ。肩に火が着いたケロニアは堪らずガイアを離してしまう。その間もジークフリートは押し込んだ部分からケロニア体内へジェクターガンを撃ち続けている。

そして撃ちながらもガイアへと叫ぶ。

「我夢！こいつは俺が抑える！お前はあの騎空艇モドキの相手を!!行ってくれ、俺達の国を……フェードラッヘを頼む!!」

ケロニアの拘束から逃れたガイアはジークフリートの願いを、今フェードラッヘからこちらへと向かって来るある集団を見た上で聞き入れる。

「デアッ！」

頷いた上で力強く返事を返す。そしてフェードラッヘに攻撃を仕掛けんとする円盤群を撃破すべく、文字通り飛び立った。

まさかあの巨体で翼や装備も無しに飛ぶとは思わなかったジークフリートとケロニア。前者はおお、と感嘆の声を挙げ後者は焦りを見せる。向かって来ていた集団も驚いていたが、先頭にいた二人に『こちらは任せろ』と決意を込めた表情を見せられ、ジークフリートにしたように二人へも頷く。彼らを信じ、自分は目の前の円盤群を掃討する。

ガイアが決意を新たにした時、それを援護するようにＰＡＬが動かすファイターＥＸがガイアに追随してくる。

そして今、さらなる援軍が到着しようとしていた。

「ケェェェェッ!!」

「ぐうっ!!」

ガイアを見送ったジークフリートは、右肩に大剣を突き刺しつつジェクターガンによる攻撃を続けていたものの、同時にケロニアの左手で攻撃を受けていた。

不幸中の幸いというべきか、既に発火している右肩から左手まで引火しないように、ケロニアは叩き潰すのではなく叩いて落とそうとしているところだろうか。

しかし、そうであってもその巨体から繰り出される攻撃を受けて無事でいられるはずがない。ジークフリートのレベルで特注の鎧を纏っているからこそ堪えられているだけであり、常人や多少鍛えられ

ただけの者ならば当に絶命していた筈だ。
「まだだ……！我夢があれらを壊滅させるまで、俺は決して貴様から離れんぞ!!」
既に幾度となくケロニアからの攻撃をその身に受けているジークフリートは、騎士としての誇りと祖国への忠義、そして我夢（友）との約束を糧に耐え続けていた。
しかし、それも限界を迎えようとしたその時、聞き覚えのある声が戦場へ木霊する。
「白竜騎士団、総員突撃せよ!!」
『ウオオオオオ!!』
「!!」
被害の抑制に必要な人員を王都に残し、ランスロットが白竜騎士団を率いてケロニアとの戦いに駆け付けたのだ。ガイアが見たのは彼らだったのである。
ケロニアは最初、有象無象の連中にしか思っていなかったが、ランスロット以外の騎士達が手にしていた物を見て動揺した。
松明。
弱点である火をほぼ全ての団員が武器と共にその手に持って突撃してきている。
特にランスロットの傍にいるヴェインに至っては、自身の武器であるハルバードは後ろに背負って両脇に大量の松明を纏めて抱えており、まさに炎の弾丸状態。大火傷を負うかも、既に負っているかもしれないというのに大量の汗を流しつつも一本も落とそうとしない。
彼らから感じる気迫にいよいよケロニアも恐怖し始めた。
なんとかして防がねばと思った直後、再びジークフリートによる零距離射撃が右肩を襲う。

「やらせんぞ……！我夢も、あいつらも、フェードラッへも！人間の意地と底力、その身で味わえ!!」

ジークフリートが作った一瞬の隙を突いて、ケロニアへと辿り着いたランスロットが斬撃で傷を作り、ヴェインがそこに松明の束を抱えたまま身体ごとぶつかっていく。

「行け、ヴェイン!!」
「うおらあぁぁぁぁぁ!!」

ドォォン！と音を立てながらぶつかると同時にケロニアの片足から火の手が上がり、ランスロットとヴェインは即座に離れる。これにはさすがのケロニアも苦しみ始めた。なんとか超能力で火が回るのを抑えているもののジークフリートや白竜騎士団に回す余力がなくなっている。

「よし！効いているぞ!!」
「どんなもんだ！しっかり借りは返したぜ怪人野郎!!」

効果があった事に喜ぶランスロットと、少しばかり火傷を負いつつも無事な姿のヴェイン。この松明作戦はヴェインの発案であった。

これに勢いづく白竜騎士団はケロニアの下へと辿り着いた者から次々と松明を投げつけて火力を強めていく。

その時、ケロニアの頭上を一機の騎空艇……いや、大きめの戦闘機が通り過ぎ、その戦闘機から二つの人影が飛び降りた。

一つは大地へ大きな音を立てて着地し、もう一つはケロニアの左肩へ。そしてすかさず攻撃を叩き込んだ。

「アルベスの槍よ！我らが信条、示し、貫くための牙となれ！」
「大鎌グロウノス！星の獣の血を啜り、その魂を刃となせ！」

二つの影――ゼタとバザラガは己の武器の力を開放する。
バザラガのグロウノスによる一撃はケロニアの足に大きく傷を付け、その傷口から炎が入り込んだ事でさらに燃え上がっていく。
そして今回、最も効果的なのがゼタの持つアルベスの槍だ。彼女がケロニアの左肩にアルベスの槍を突き刺して開放した事で、一発で右肩や足元よりも大きく燃え上がる。
アルベスの槍は炎を発する事が可能であり、ケロニアにとって天敵にも等しい武器であった。

「あぁっつ!?自分でやっておいて何だけど燃えすぎでしょ!!」
「やはり俺がそちらを担当すべきだったか」
「あのね！あたしはあんた程頑丈じゃないの！あの高さからこいつの上に飛び降りたのだってやっとなんだから！」
「それだけの元気があるなら、別に落ちても死にはせん」
「なんですってぇ!?ちょっとは心配ぐらいしたらどうなのよ！」
「信頼してやっているんだ。責められる言われはない」

片や苦しむケロニアの上で、片や燃え盛るケロニアの足元で言い合いを始める二人。呆気にとられるケロニア以外の面々だったが、ジークフリートはすぐさま尋ねた。

「二人は我夢の……ガイアの仲間なのか？」
「ガイアって確か我夢のもう一つの名前よね？熱っ！そうよ、同じ騎空団に属してあっつ!?あぁもう！暴れんじゃないっての!!」
「ケェェェェッ!!!」

超能力で火の回りを抑えると同時にジークフリートとゼタを振り落とそうとするケロニア。

「そこの鎧の人！もう少しだけ頑張って！そろそろ我夢やあたし達の仲間があの騎空艇モドキを全滅させて戻ってくるから！」

「心配せずとも最初からそのつもりだ！我夢は必ずやり遂げて戻ってくる！」
「オッケー！あたしも踏ん張んないとね！」

ゼタの言葉に再びジークフリートに闘志が宿る。我夢は事前に仲間達に連絡を取り、迎えついでに救援を要請していたのである。
いよいよ、戦いは最終局面だ。

☆

我夢とファイターＥＸは植物人間の円盤群を順調に撃墜していた。ケロニアに通用しなかったクァンタムストリームも、円盤群には問題なく効いている為、攻撃方法を選ばずとも撃破する事を考えるだけでいいのである。とはいえ数が多い。あまり時間を掛けていたらジークフリートらが倒されてしまうかもしれない。

（確実に減っては来ているけど……せめてあと少しだけ手数があれば……！）

ガイアとアグル、この二人のウルトラマンは地球が生み出した存在故に三分という変身時間の制限が無い為、プラズマスパーク・ブレスのエネルギーサポートはガイアがフォームチェンジする最強形態維持の補助を除けば、基本的に二人のブレスの機能は必殺技を使う為のエネルギーサポートに集中しており、大技を連続して使用可能なように調整されている。
しかし、王都フェードラッヘ上空である事と円盤群が分散している事も相まって、今回は大技よりも効率重視の技……即ち広範囲に放てる技の方が効果的。
ガイアは連射出来る技を持ってはいても広範囲と攻撃能力の双方を兼ね備えた技に乏しいのだ。
こういう時は流石に光線技のエキスパートであるエースやコスモ

スが羨ましい。そう考えていると、先程ゼタとバザラガが飛び降りた戦闘機……いや、正しくは宇宙輸送艦がガイアと並ぶように飛行してきた。

青く輝くその機体、そしてそのパイロットは……

「はっはー！我夢ちゃん、いやガイアちゃん！ウルトラ騎空団団長代理にして十天衆頭目！天星剣王シエテが、団長ちゃんの残してくれたこのスペースペンドラゴンで仲間達と共に助けに駆け付けたぞー!!」

「ジュワッ!?」

なんとレジェンドから団長代理を任されたシエテ自らスペースペンドラゴンを操縦して救援にやって来たのである。

この島までエリアル・ベースで送ってもらったのかと思ったら、まさか宇宙輸送艦を持ち出してくるなど考えてもいなかったのでさしものガイアも別の意味で驚いた。

このスペースペンドラゴン、乗員が一人でも問題なく機体の全性能をフル活用出来るように開発された、本来はレジェンド専用の艦。正式名称はグレートペンドラゴンであり、スペックもスペースペンドラゴンの五倍以上という超高性能艦なのだが、それはあくまでレジェンドが個人で運用する場合に限る。高スペック過ぎて彼以外か同乗していると全力が発揮出来ない為だ。

万が一の有事の際、迅速に現場へ急行する必要がある時は使え、とレジェンドが性能にリミッターを掛けて置いていったそれを使い、ゼタとバザラガの二人を乗せてきたわけである。

「あの緑の化け物にはゼタとバザラガが対応してる！他の十天衆のメンバーや団員も来たがってたけどね！彼らには博也ちゃんと一緒にアウギュステに向かってもらったよ！」

アウギュステ――そこには『海』があり、そこでも怪奇現象が起こっているとの事で藤宮らにはエリアル・ベースごとそちらに向かっても

らったらしい。とはいえ、性能にリミッターが掛かっていてもレジェンドの手によって開発されたペンドラゴンは十分過ぎる戦力だ。

「さてと、ガイアちゃん！君はあの緑の化け物との最後も締めくくらなきゃならないだろ？ここはシエテお兄さんに任せておきなさい！」

シエテはスペースペンドラゴンをガイアの前に出し、ある武装を起動する準備に入る。

その強力さ故に機体のリミッターを掛けるだけでなく、艦長のＩＤカードによる承認が必要な最強武装。本来ならばレジェンド自身の光気に反応してアンロックするが、彼以外が艦長を務める場合はレジェンドがその都度作る艦長ＩＤカードを承認用のスロットに装填する事でアンロックされる。

シエテはレジェンドに作ってもらったＩＤカードをスロットに装填し、その武装をアンロックし砲身を展開する。コクピットには専用のトリガーがせり上がりシエテはそれを握り照準を定めた。

スペースペンドラゴン―いや、グレートペンドラゴンの最強武装、その名は……

「スペリオルランチャー、発射ぁ!!」

全長４０ｍの艦からは予想出来ない程の極太のビームが放射され、前方の円盤群が回避する間もなくビームに飲み込まれ爆発する。凄まじい威力だが、レジェンド単独搭乗時に発揮される威力はこの比ではない。

これに動揺したのか他の円盤の動きが緩慢になり、残り僅かだった円盤はガイアとファイターＥＸによって撃破された。

残るはケロニアだけだ。

☆

「……む？」

バザラガは自分のウルフォンへと届いたメッセージを確認する。そこには『円盤群全撃破』と簡潔ながらも重要な事が書かれていた。

「何かあったのか!?」

「……ああ。我夢やうちの団長代理が騎空艇モドキを全滅させたようだ」

「ホ、ホントか!?」

ランスロットとヴェインがフェードラッヘの方を向くと、大勢いた円盤群が一機残らず消えていた。そういえば先程轟音が聞こえたが。

「団長が置いていった小型の騎空艇の最強装備を使ったようだ。アレは大型戦艦の主砲とさえ比べ物にならん威力らしいからな、騎空艇モドキでは耐えられまい」

とんでもない事を聞いた気がする。小型騎空艇サイズで大型艦の主砲より遥か上の威力って何それ。ランスロットとヴェインは真っ青な表情をしているが、それを気にせず今もケロニアの肩で抵抗しているジークフリートとゼタを見る。そして、何かを察して叫んだ。

「二人とも、そこから飛び降りろ!!」

「はあ!?」

「よく分からんが考えているヒマはなさそうだな！飛ぶぞ！」

「ええ!?ちょっ……あーもうどうにでもなれっての！」

二人が飛び降りる覚悟を決めた時、バザラガがそう叫んだ理由が分かった。

「ダァァァァッ!!」

ガイアが両手を突き出し回転しながらケロニアに突っ込んできたからである。咄嗟の事でケロニアは防御など出来るはずもなく、顔面に思い切り直撃し倒れ込む。

ジークフリートとゼタは体当たり後にすぐ体勢を整えたガイアの両手で受け止められ、静かに地面へと降ろされた。

「い、今のはさすがにヤバいと思ったわ……」

「同感だ……今回ばかりは俺も体力が限界で無事に着地出来る気がしなかった」

ガイアの掌から降りた二人は漸く安堵の息を吐く。二人が無事である事を確認したガイアはケロニアとの決着をつけるべく向き直る。

ジークフリート、ランスロットやヴェインら白竜騎士団、そしてゼタとバザラガによってケロニアはかなり消耗していた。さらにケロニアは仲間の円盤群まで壊滅した事に愕然とする。

何故だ。何処で計画が狂った。

そうだ、あの巨人……そしてそれに変身した人間のせいだ。

そう思ったケロニアはなりふり構わずガイアに襲いかかってきたが、あれだけ戦った後だというのに逆にパワーの増したダブルパンチを叩き込まれ、続けざまに飛び蹴りを食らい再度倒れ込んだ。

もはや、事態はケロニアの理解の範疇を超えていた。

人間は脆弱であり、文明も自分達の方が上。フェードラッヘ侵略を皮切りに全空を支配する気でいたケロニアこそ、おごっていたのである。

たとえ一人一人が小さくとも、いくつも集まれば強大な力になる。それに誇りや覚悟が組み合わされば尚の事だ。

ガイアはある事を試すべく、右腕を軽く振るうとアグルブレードを発生させる。まさかそんな事まで出来ると思わずその場にいた者達は驚きを隠せない。
そんなギャラリーを気にせず、ガイアはケロニアへとアグルブレードを『突き刺した』。

「ケェアァァァァ!?」
「ダァッ!!」

アグルブレードを引き抜きケロニアを蹴り飛ばすガイア。これで推測したある事は事実だと確信した。

（思った通り、奴に効かないのは光線だ！）

光線が効かない……しかし今のアグルブレードのよう光そのものが効かないわけでないのなら、ガイアにケロニアを撃つ手立てはあるのだ。そう、ガイアの代名詞とも言えるあの技が。

「デアッ！ダァァァァ……」

ケロニアとの戦いに終止符を打つべく、ガイアは両腕を大きく開く。一瞬赤い光が輝くと、ガイアはさらに頭部に握り拳のまま両手を当ててエネルギーを集中させながら身を縮こませる。
キラリと頭部が光ったかと思うと、なんとガイアの頭頂部から光の鞭のようなものが発生した。

「うおっ!?何だありゃ!?」
「遠目から見ていたが光線では奴に通じないぞ!?」
「へ!?何それ、あの化け物そんな特性持ってんの!?」
「……いや、あれは光線とは違う……！」
「「「え？」」」

バザラガの言葉にヴェイン、ランスロット、ゼタは声を揃えてバザラガの方を向くと、ジークフリートも同じように答える。

「よく見ろ。光線ならば光が流れるように見えるはずだ。だが、あれは高密度で圧縮されているのかそうは見えん。あれは先程の剣と同じ……いや、遥かに強力な光の刃だ!!」

フォトンエッジ――ガイアの得意技にして彼を象徴する必殺技だ。そして仲間達の声援を受けつつ、ガイアは頭頂に構築した光の刃を撓らせながら立ち上がり、腕を背後にピンと伸ばしつつ気合と共に頭部をケロニアへと突き出す！

『いけぇぇぇぇ!!』

「ジャァァァァァッ!!!」

突き出された頭部に連動し、フォトンエッジは真っ直ぐケロニアへと伸び、直撃する。直撃したフォトンエッジはケロニアの身体を切り刻み、そして……

「ゲェァァァァァ!!」

断末魔の叫びと共に、ケロニアは爆散した。

その瞬間、その場にいた者達のみならずフェードラッヘの城に避難していた国民や、カール国王さえも大歓声を上げる。ガイアやジークフリート、白竜騎士団、人工知能であるＰＡＬ、そしてウルトラ騎空団、多くの者達が団結して手に入れた勝利だ。

しかし、まだガイアにはやるべき事が残っていた。

「ジュワッ!!」

「我夢？」

ジークフリートはもちろん、他の者達も再びフェードラッヘに向かって飛んだガイアをどうしたのかと思いつつ追いかける。
ガイアは王都フェードラッヘを見渡せる位置に空中静止し、被害にあった街を見た後に頷くとライフゲージに両手を添え、ゆっくりと左右へ開くとフェードラッヘに穏やかな光が降り注ぐ。
レジェンドから教わったリカバリーオーラだ。彼ほど使いこなせるわけではないが、多少大きくても街一つくらいなら十分に修復出来る。
見る見る街が元通りになっていくのをその目で見た者達はガイアから神の如き後光が見えた。完全にフェードラッヘが修復されると同時にガイアのライフゲージが音を立てて点滅しだした。慣れない大技を使った事で余計にエネルギーを消費したからである。
心配そうに見守るジークフリート達であったが『大丈夫』と頷きゆっくり地面に降り立つガイア。夕日をバックに雄々しく立つその姿は、赤いボディと合わさって非常に芸術的であった。
この日、この瞬間を忘れまいと、ジークフリートは我夢に教わったウルフォンのカメラ機能でその姿を撮る。
ガイアは赤く光り輝き、光が徐々に小さくなるとその中から我夢が歩いて来た。無事やるべき事をやり遂げた者がする、笑顔で。

「皆さん、ありがとうございました。それから、お疲れ様でした……僕達の勝利です！」

英雄から出た勝利の二文字に再び沸き上がる白竜騎士団と、城から街へと帰ってきた国民達。

「やっと終わった～……あの化け物がやたら燃えるせいで汗かきまくり。早くお風呂入りたいわ」
「生憎だがな、エリアル・ベースはアウギュステだ」
「知ってるわよそんな事。スペースペンドラゴンにも付いてるんだし

そっちでも十分」
「いや、でしたら城の大浴場を使って頂きたい」
突然ゼタもバザラガも聞いたことの無い声を耳にし、その声をした方へ顔を向けるとカール国王が護衛と共に一行の前にやってきた。
「「陛下！」」
ジークフリートやランスロット、ヴェインら白竜騎士団はすぐに跪こうとするがカール国王に制される。
「我らがフェードラッへの為に命をかけて奮闘してくれた客人らを礼の一つもせぬまま帰しては、王として、国としても恥ずべき事。今日の疲れと傷を癒やしていただく為、是非城の方へ泊まってもらいたいのだが」
「え!?いいの!?あ、いいんですか!?」
「どのみち我夢も疲労困憊でこれ以上無理に動けば倒れるやもしれん。せっかくの申し出だ、ありがたく受けさせてもらうとしよう」
ゼタとバザラガは俄然乗り気であった。スペースペンドラゴンを収納ブレスレットに仕舞ったシエテもやってきて我夢からそれを聞くと……
「いいんじゃない？頑張った御褒美って事でさ」
「……なんか胡散臭く感じるんだけど」
「シエテ、お前はその表情で損をしているな」
「……我夢ちゃん、俺……泣いていい？」
ゼタとバザラガによってちゃんと功労者の一人でもあるシエテは落ち込み、我夢やジークフリートから慰められる結果となった。頑張れ頭目。

「我夢殿。イザベラの件に続き、此度の事件解決の恩、どれだけ頭を下げて礼をしても足りぬ。国民だけでなく街をも救って頂いたというのに満足のいく礼を用意出来ず申し訳無い」
「あ、いえ……僕は僕がやらなければならない事をしただけなので……ですから、お礼なんてその言葉だけで十分すぎます」
「では陛下、今日だけでなく、もう一日宿泊してもらってはどうでしょう。今はなんともなくても、翌日一気に疲労が来るという事もあります」
「おお、それがいい。ジークフリートの言うとおり、出立は二日後に延ばしては如何だろうか。無理にとは言わぬが……」

我夢達は軽く相談し、自分達は良いのだが向こうはどうだろうと連絡をその場で連絡してみる事にした。ウルフォンの機能を見せるのに良い機会だ。

「……ってわけなんだよ博也ちゃん」
『博也ちゃんはやめろって言ってるだろ。公園のベンチに座ってる青いツナギの男に差し出すぞお前』
「藤宮、それだとシエテさんが戻れなくなるぞ。色んな意味で」
「何それ怖いんだけど!?」
『何にせよこっちは心配するな。騎空団のほぼ全戦力が集中しているからな。傷を癒やして疲れも取って、万全の状態で帰って来い』
「分かった。ありがとう、藤宮」
『ああ、じゃあな』

そう言って通話を切ると、普通に周りがざわついていた。どうやらここまで優れた通信機器がこちらにはまだ存在しないのかもしれない。

「お待たせしてすいません、カール国王。少しの間、お世話になりま

す」
「いやいや、こんな事しか出来ぬが、実家だと思って寛いでほしい」
申し出を了承した後で、我夢は思い出したように進言する。
「あ、それから後でいいんですが、少しばかり倒したケロニアの破片が残っていると思うので回収をお願いしたいんです」
「ふむ、確かにそのまま放置しては同じ事が起きる可能性があるな」
「それだけではなく、見ての通りケロニアは乾燥させると良く燃えるんです。燃料や薪代わり効果的かと」
……大丈夫なのだろうか、そんな事して。しかしこの疑問はさして問題もなく、後日何故かケロニアの破片が競りに出されるという珍事が起きたそうだ。
その夜、祝勝会も兼ねた晩餐会が城にて催され、やはりというかウルトラマン、引いては彼が属する銀河遊撃隊の話題で持ちきりだった。
「へ～……じゃあそのレジェンドってウルトラマンが我夢達の騎空団の団長なのか。あれ？銀河遊撃隊の方は？」
「そっちはウルトラマンベリアルっていうチーフの直弟子の一人が務めてるんです。彼の息子のジードも遊撃隊に所属していて、騎空団の皆もあった事があるんですよ」
「あ～あの子ね。レジェンドもリク……ジードもウルトラマンの姿はまだあたし達も見た事ないんだけどさ」
「だが、話を聞く限り親の七光りで務まる仕事ではあるまい。相当鍛えられたと見える」
「まあ、チーフはベリアル総司令達を人間体にして強力な怪獣達の巣窟に放り込んだそうですし」
「「「「何それ怖すぎる!!」」」」

ちなみにウルトラの父ことケンや、ゾフィーの父親もそれをやられた。最近ではゼロも経験させられた。ゼロ曰く「ウルトラマンのやる修行じゃねえ」。目の前で人間体のまま余裕で名だたる強敵怪獣をまとめて瞬殺しまくるレジェンドを見てそう零したそうだ。

「しかし、なんで吸血植物のケロニアが高度な文明を持ったんだ？最初は移動能力を持っているくらいだったんだろう？」

ランスロットの疑問は最もなのだが……

「それはまだ全く分かりません。人間から吸血している内に知能に目覚めたのか、それとも別の何かがあったのか……でも、今回のような事が今後起きないとは限りません。むしろ、これからも起きると予想した方がいいと思います」

我夢の言葉になんとも言えない表情になるランスロット達。重い空気を吹き飛ばすように、シエテが話題を変える。

「ま、何にしてもさ。今は目の前の問題を解決していくしかないって事だよ。しっかし博也ちゃんの方はアウギュステかぁ……今頃さっさと事件解決して一足早くバカンスしてたりして」

「シエテって水着にブーメランパンツとか選びそうよね」

「以前見た時、チーフの水着は赤褌だったけど」

「ええ!?」

「……意外と似合うかもしれん」

似合い過ぎて反応に困っていた少年少女がいました。

何はともあれシエテによる話題反らしは成功し、その後は賑やかかつ楽しい話題で晩餐会は終わり、激動の一日は漸く終わりを告げる。

しかし、我夢達が暫しの安息を手に入れたのと入れ替わるように、アウギュステでも一波乱起きようとしているのは、こちらにいる彼ら

には分かるはずもない事であった。

〈続く〉

一喜一憂の授業参観

ビオランテの出現と撃破から数日後。
今日は（一部の者が）待ちに待った授業参観日である。
あの日、レジェンドや杏寿郎らは黒上博士をダイブハンガーへと連れ帰ってきた。自分達の正体を告げ、理由を説明したところ驚くほど簡単に受け入れた。
欲望に負けた自分の心の弱さが娘を怪獣にしてしまった、と心底悔いていたので暫くは卯ノ花やしのぶによるカウンセリングを受ける事になり、可能な限りの荷物をその場にいた全員の収納ブレスレットに格納してその時運び出したのだが、それが正しい選択だったと後日知る事になる。
事件の翌日、博士の研究所兼住居だったその建物は何者かによって放火されたのだ。レジェンドの推測としては、研究成果を手に入れられなかった諸外国の別のエージェントらによる仕業か、もしくは堕天司ベリアルが言っていた人物による仕業かもしれないとの事。
正直、後者の線は薄く、前者の可能性がほぼ確定的らしい。手に入らないなら始末してしまえ、などと危険思考過ぎるが、逆にそうしてもらった方が世間の目が欺けてここにいる博士の安全を盤石なものにしやすいとレジェンドは放置する事にしたのだった。
そして現在。卯ノ花やしのぶはもちろん、博士の境遇に理解を示した多くの者達が話し相手となり、少しずつ博士は前に進み出している。後は最後のひと押し、何かあればいいのだが、こういうのは焦ると逆効果になってしまう場合が多いので一先ず成り行きに任せる事にした。いざとなった時フォローに入ればいいのだから。
そんなこんなで朝食を終え、迎えに来た裕斗を加えたオカルト研究部の面々は登校していった。
今ダイブハンガーでは授業参観に行くレジェンドやサーガらがその準備……というか服装に悩んでいる。
「俺は別にいつものと同じでも構わんと思うんだがな。そう問題があ

るような服ではないし、逆に着飾り過ぎても駄目だろ」
「そうなのか……ではソレスタルビーイングの制服は駄目なのか？」
「駄目以前に注目浴びまくりでゼノヴィアも俺らも変なプレッシャーかかるわ。前に駒王の散策に行った服あるだろ、あれで行けあれで」
「私は和服でも良いような気がしますが」
「んー……珍しいが悪くはないな。痣に関しての認識阻害とか鬼神刀はブレスレットに収納しておくとかそこらへんはしっかりやっておけ」
「俺は近年兄さん達が人間体をとった時に着るものと同じ物です」※サーガ客演時のレジェンド５服
「お、良いんじゃないか？なんとなく大物感漂うし」

男性陣はレジェンドが主体となって選んでいる。巌勝やゲンはともかくサーガは一発で目を引く服装で行こうとしていた。いや、実際はレジェンドも結構目立つ……というかこの四人が揃って歩いていたら普通に注目の的だと思う。

「あまり着飾らず、かつ姉さんが恥をかかないように……思った以上に難しいですね。今までこういう経験はありませんでしたし」
「しのぶ、あんたは別に装飾品着けまくるような性格じゃないし、自分の好きなように着れば良いのよ。レジェンド様の言うプレッシャー云々はあんたが参加する事を知った時点でカナエは受けてんだから」
「そうですか？それはそうと乱菊さんは誰のところへ？」
「裕斗よ裕斗。今朝迎えに来たでしょ？私十日ばかしあの子に修行つけた事があってね、その縁よ。なんかジェントさんも来るって言ってたけど、まさかそのまま来て姿が見えないようにするだけ、とかじゃないわよね……」

女性陣参加者の二人、しのぶと乱菊は乱菊の姉御肌な部分のおかげで割と円満に進んでいる。ついでにジェントまで参加するらしい。裕斗と養子縁組してるから父親で間違いはないのだが……

「レジェンドから認識阻害はちゃんとしろ、って言われてるから服装は割と自由ね！」
「あまり過激なもん選ぶと白音から冷めた目で見られるどころか『姉妹と見られたくないのでしばらく話しかけないで下さい』とか言われかねんぞ。程々にしとけ」
「夜一、もしもの話でもそんな事言わないで!?それに過激な服はレジェンド相手に攻める時以外はあまり着ないにゃ」
「ならいいんじゃがな。ま、カジュアルなもので構わんじゃろ。別に水着着るわけでもあるまいし」

小猫の方は黒歌の暴走のストッパーとして夜一がいたからかこちらも順調である。しかし、過激な服はそうそう着ないというが普段の着物姿はどうなのか。

「でも意外にゃ。いつもレジェンドにくっついてるオーフィスが今回は行かないなんて」
「どうやらクロエに菓子作りを習うらしいからのう。スカーサハ共々レジェンドの胃袋を掴みにかかるようじゃな」
「……オーフィスがつまみ食いしまくる光景が目に浮かぶんだけど」
「否定出来ませんね……」

一抹の心配を残しつつ、参加組は準備を進めるのだった。

☆

数時間後、駒王学園。
授業参観の時間が近付くに連れて、生徒達の保護者らもまばらだが見え始める。

「そろそろか……ウルトラ学校でも同じ事はやったが、こういうのは

教師の方も緊張するな」
「あら、やっぱり生徒教師双方から人気の矢的先生も緊張するのね」
「もちろんしますよ御門先生。そちらももしかしたら父兄の方々がアクシデントに見舞われて保健室に来られるんじゃないかとか、そういう心配があるんじゃないですか？」
「そうね……行き来する人が多くなるとやっぱりそういう懸念はどうしても出てきてしまうもの」

職員室での矢的と涼子の会話、やはり授業参観に関して各々不安な事は教師にもあるようだ。とはいえ、一般的な事ならともかく、怪獣出現などの緊急事態には迅速に対応出来るだろう。なにせレジェンドを筆頭に多数の実力派ウルトラマンが勢揃いする授業参観になる。余程の馬鹿でもない限り、今日ここに攻め入るような真似はしない。
シックルに似た声で「いや、馬鹿は来る！」などと言えるようなレベルではなく、ウルトラマンに紛れて七星剣の一人や神衛隊における生身最強格も訪れる。

「よくよく考えたら天変地異さえどうにでも出来る面子が揃ってるのよね」
「僕以外にチーフ、サーガ、レオ兄さん、さらにトライスクワッドの三人にゼット……ダイブハンガーにはゼロを筆頭にグレート、ダイナ、メビウスにジード。結構な戦力が集まってますから」
「おまけにレジェンドさん直属の九極天やサーガさん直属の神衛隊……ウルトラマンに加えてこれだけの実力者が集結しているんだもの。今日私達がやる事は無事に授業参観を終える事ね」

矢的は頷き、涼子は「お互い何もなく無事に帰宅出来るよう頑張りましょ」と軽くウインクして保健室に戻る。
涼子が出ていった後、矢的はよしと自分の頬を軽く叩いて気合を入れ直し担当する教室へ向かう。
ちなみに本日の担当科目は社会、そして担当クラスは三年のリアス

やカナエのいるクラスだったりする。
　ついでに、ガイことオーブの名がなかったのは先日からジャグラーのやっている丼物屋を訪れる為、京都へ旅立ったから。まさに風来坊。

☆

　二年生……一誠やアーシア、そして転入してきたゼノヴィアのいる教室。三人はクラスメイトの桐生を含めて雑談している。内容はやはり本日の授業参観の事だ。

「そういえば三人のとこは誰が来るの？」
「私はお世話になっている方が来てくれるんです。今からドキドキしてて……」
「私もそうだが……片方は私の師である方が来られる」
「ゼノヴィアさんのお師匠さん？っていうか何か凄く震えてない？」
「ヘマをしたら今度こそ地獄を味わうかもしれない……！」

　ガタガタと恐怖とプレッシャーに震えるゼノヴィアだが、さすがに主・サーガの御使いである彼女にそこまではしない……と思う。たぶん。

「兵藤のとこはやっぱり両親？それとも親戚とか？」
「いや、父さんも母さんも仕事で来れなくてさ。師匠が来てくれるんだよ」

　この言葉にクラス中が一気に反応した。

「兵藤の師匠!?」

「あのドスケベ三羽烏の一人をあそこまで更生した生ける伝説な!?」
「ていうか兵藤の奴、嬉しそうに言ってなかった!?」
「実は師匠って美女とか!?」
「胸はデカいのか!?」

四番目はともかく最後のは誰だ。いや、聞くまでもなく松田と元浜だった。そんなダイレクト質問出来るのはコイツらだけだろう。

「いや、師匠は男だぜ」
「嘘をつけえ!!」
「嘘じゃねえよ。ダイヤモンドより硬い鉱物を平然とチョップで真っ二つに出来る超人だから」
『いやそっちの方が嘘だろ!?』

マジである。試しに一誠もそれを『赤龍帝の籠手』で倍化したチョップをしたところ、真っ二つどころか逆に神器と骨にヒビが入り一誠とドライグは一人と一匹同時に悲鳴を上げた。神器はレジェンドに修復、一誠はアーシアに治療され、改めてゲンの実力を目にする事となったのだ。

なお、レジェンドは真っ二つではなく文字通り粉々にしてしまった。

「……あの人ってウルトラマンにならなくてもあれなんだよな」
「だが、確かに必要な事なのかもしれん。地球にいる以上、もしかしたら町中で変身せずにやり合う事があるかも分からないからな」
「なんか父さんが地球にいた時も強化改造されたベムスターの両目をナイフで潰した塾講師の地球人がいたんだってさ。父さん、その時は興奮気味に話してたなあ」
「おいそれホントに地球人か!?」

タイガの話に出て来た人物、塾講師・海野八郎。

タロウが出会ったウルトラ逸般人の中でも最強の人物である。やった事は特訓、結局不発で終わったダイナマイト以外に使った物はロープとナイフ。たったこれだけで改造ベムスターを追い詰めた。
おそらく今のゲンと組んだらジャンボキングさえ倒してしまいそうだ。
……と、そんな話をしていたら校門の方を向いた女子達から「キャー!」という黄色い声が聞こえる。しかも、一誠達のクラス以外からも聞こえてきた。
松田と元浜もその声の原因を突き止めるべく見てみたら……

「「グハッ!!」」

吐血して倒れ込んだ。鼻血ではないので、おそらく男だろう。もしかして、と思って三人＋桐生が窓から覗いてみると。

「「「あっ」」」

予想通りレジェンド、サーガ、ゲンに厳勝が勢揃いして到着したようだ。

「おい何だあのイケメン軍団は!?」
「さっきの反応!イッセー!お前何か知っているな!?」
「知ってるも何もあの和服に似たのを着てる短髪の人が俺の師匠だよ」
『えええええ!?』
「それからあっちの着物を着た侍が私の師で、その隣の銀髪の方が私のお世話になっている方だ」
「それと、あのジャケットを着ている背の高い方が私のお世話になっている方ですっ」

アーシアの頬を染めた笑顔で周りの男子が撃沈した。

「か……勝てねえ……あの中の誰にも勝てる気がしねえ……！」
「背が高くて男から見てもカッコイイ系……しかもおそらく財力もある……」
「クァルタさんの方もそうだろ……何だよあの銀髪にクールそうなイケメンというモテキャラ因子詰め込んだような存在は」
「師匠ってあれガチの侍だったのかよ……」
「村山と片瀬のやつ、兵藤の師匠見てからおかしくないか？なんつーかこう、恋する乙女的な……」
（そういや師匠、うちの生徒が強引なナンパされてるのを助けたとか言ってたっけ……もしかしてこの二人か？）

こんな感じで賑わっているのは、別にここだけではなかった。

☆

3年のリアスとカナエの在席するクラス。
駒王学園三大お姉様のうち二名はその異名とは裏腹に二人揃って机に突っ伏していた。

「リアス……いよいよね」
「ええ……決戦ね、羞恥心との……！」

リアスには兄と父が、カナエには妹がそれぞれ見に来るとあって変な意味でプレッシャーがかかっている。
正しくカナエの場合はしのぶからの「無様な格好晒したら許しませんよー」という圧なのだが、リアスの場合は明らかにシスコン＆親バカが原因だ。

「そういえばカナエ、来れるはずだった卯ノ花先生は博士の事もあって欠席でしょ？代わりの人は来るの？」

「ん～……なんか二人ほど代理で来るって言ってたわね……」
「二人……？」
「ええ」

この時、ぐったりしながら会話していた二人は周りが騒いでる事に気付いていなかった。その二人がしのぶと共に来校しており、一人はリアスが慕う人物、もう一人はリアスと声がよく似た人物だという事に。

☆

こちらは祐斗の在席するクラス。
正確にはそのクラスの前の廊下だが、そのクラスの女生徒達に一人の男性と一人の女性が声をかけた。

「すいません、ちょっとお尋ねしたいのですが」
「！は、はい！何でしょうか!?」
「木場祐斗……という生徒が在席しているクラスはここで間違いないでしょうか？」
「木場くんの……はい、ここです！」
「ありがとうございます。急に呼び止めて申し訳ありません。助かりました」
「もう少しで授業開始でしょ？悪かったわね、ありがと」
「い、いえ！それでは！」

急ぎ女生徒らはその教室に入って行く。

「おや、ここの生徒でしたか」
「祐斗は人気者だし～とか思ってたらまさかの同じクラスの娘だったとはね。ていうかジェントさんあまりに予想通りの人間体でビックリなんですけど」

「ハッハッハ……息子に恥はかかせられませんので」

そう、乱菊と人間に擬態したメフィラス星人ジェントとである。乱菊はそのスタイルの良さから注目の的だったが、一方のジェントはハットにスーツとステッキ、オールバックの銀髪にダンディな口髭という紳士然とした人間体であった為に女生徒のみならずマダムらをも虜にしていた。元々の喋り方や態度なども組み合わさってガチ紳士にしか見えない。

「きっ……ききき、木場くん！知り合いにすっごい紳士なおじさまとか、ブロンドヘアの反則的スタイルのお姉様とかいない!?」
「紳士的なおじさまとブロンドヘアのお姉様……？」

祐斗は先程の女生徒達に聞かれ、少し考えると割と簡単に思い当たった。

「たぶん父さんと乱菊先生だと思う。二人とも僕の剣の先生だから、父さんが乱菊先生も連れてきたんじゃないかな」
「木場くんのお父様!?通りで気品に溢れるおじさまだと思った！」
「うちの親も見習ってほしいくらい一挙一動が堂に入ってたわ……」
「先生もマジ美人さん……ていうか何あの胸!?」
「アタシでも太刀打ち出来ないのにアンタじゃ無理よねー」
「そこ、うっさい！」

祐斗の関係者と分かった途端にこの盛り上がり。苦笑しつつも祐斗は廊下で授業参観の開始時刻を待っている二人に感謝を向けた。もう自分は一人ではないと実感しながら。

☆

小猫の方もやはりというか、黒歌がハッスルしまくりで夜一がそれを諌める感じであった。開始時刻前に待っているのはいいとして、チラリと見ただけで満面の笑顔でブンブンと手を振るのだ。美人がそんな反応をすれば注目されるのは当然である。

「あの美人さん、塔城さんのご家族？」
「姉と、義理の姉です」
『えええええっ!?』
（黒歌姉様、目立ち過ぎです……）

小猫のそんな心中はいざ知らず、相変わらず黒歌はニコニコしている。長い間離れ離れになっていたのだから、こういうイベントは楽しみでしょうがない、というのは分からなくもないのだが。

「ん～！やっぱり新鮮にゃ！家で見るのと学校で見るのじゃまた違うわね！」
「あんまり派手に動くとお主を良く思わぬ連中が嗅ぎつけてくるやもしれんぞ。もう少し落ち着け」
「分かってるわよ。ここで面倒を起こす気はないにゃ」
「ならば良し。今日は儂もあまり口煩く言う気はないのでな。そういえば……堕天使とやらが普通の人間と寄り添い歩いておったが」
「あ、やっぱり分かったにゃ？たぶん朱乃の両親だと思うにゃ。あの子のとこは両親が来るって言ってたし」

なるほどのう、と納得する夜一。確かにそんな事を言っていた気がする。特に父親のバラキエルが気合入ってるとか。

「ところで黒歌」
「どうしたにゃ？」
「ここの学園は授業参観にコスプレで来ても構わんのか？」

「……は？コスプレ？」

夜一の予想外の質問に目をぱちくりさせる黒歌。その質問の理由は授業参観後に判明する事になる。

予鈴が鳴り、各々の教室に担当教師と共に父兄が入室していく。

いよいよ、運命の（？）授業参観開始だ。

〈続く〉

［おまけ］

――その頃、白龍皇ヴァーリは逃げていた。

迫りくる圧倒的な存在に。勝てない、逃げろと全身の細胞が促してくる。禁手化してまで逃げ続け、ある公園に到着したところで息を整える。そんなところで……

「どうした？随分変わった格好をしているな」

「!?」

「安心しろ。俺は別に気にしない」

逃げる事ばかりで周りに集中していなかった為、一般人らしき青いツナギのいい男が公園のベンチからヴァーリに声をかける。

「ところでこいつを見てくれ。これをどう思う？」

「!?!?!?」

まさかその男、ズボンのチャックを下ろしてネオアームストロングサイクロンジェットアームストロング砲を丸出しにしたのである。

しかもそのままゆっくりとヴァーリに向かって歩いて来たため、ヴァーリは即座に離れようと後退するがドン、という音と共に何かにぶつかる。そこには……

「レッドファイッ!!」
「ようやく見つけたぞ悪人め!!」

彼を追ってきた、表現は同じでも二天龍より明らかに段違いなヤバさの赤いのと白いのが揃って肩を掴んでいた。
そして前にはいつの間に近づいたのか謎のツナギ男が立っている。

「さ、イこうぜ白龍皇」
「レッドナーイフ!!」
「悪いやつにはお仕置きだ!!」

もはや、ヴァーリとアルビオンに逃げ場なし。
そして彼らの悲鳴が木霊する。

『んあああああ!!!』

「……はっ!?……夢か……!」

汗を大量に流しながら目を覚ましたヴァーリ。
しかしいつの間にかウルトラ水流を習得出来ていたのは喜ばしい事かもしれない。
ただし、発射口は下からだったようだが。

続・授業参観と魔王少女と……魔法少女？

各々の教室にて授業参観が開始された。
ある者は家族に自分の学校生活を見てもらうべく真剣に取り組み、ある者は家族からのプレッシャーで緊張し、そしてある者は家族の行いで羞恥に陥る。
では、そんな彼らの様子を見ていってみよう。

☆

―三年・リアス＆カナエの場合―
彼女らの授業参観時の科目は社会。そして担当教師は矢的である。これは彼女らにとって僥倖だった。

「皆、今日は皆のご家族の方々がいらっしゃっているが、無理に気を張り詰める必要はない。いつものように気を楽にして、僕と一緒に学んでいる時のように賑やかにやろう。緊張し過ぎると覚えたくても頭に入ってこなくなるからな」

にこやかに声をかける矢的はいつも通りだ。彼も緊張してはいるだろうが、それを生徒に伝染させずにリラックスさせようとする彼らしい優しさが見える。
どことなく空気が柔らかくなったのは、さすがウルトラ学校でも地球行きが決まった時に生徒達から引き止められた程の人気を誇る８０先生だ。駒王学園教師陣でトップクラスの支持を得ているのも肯ける。

「よし！今日は前回に引き続きオーストラリアの話だな。先生の後輩もオーストラリアで活躍していたんだ。感慨深いものがあるな」
「矢的先生！その人は何をしていたんですか？」
「科学者さ。しかも様々な天体に関わる仕事をしていてね。今は別の

ところにいるけれど」

生徒のみならず保護者からも感嘆の声が上がった。実はこれ、グレートがとっている人間体のジャック・シンドーの事である。

彼は惑星調査員であり科学者でもあった為、一体化していた間にグレートにも同じような趣味が出来てしまったので今はダイブハンガーで様々な惑星の勉強をしている。

（これはジャックさんの事ね。正確にはグレートさんが元にしたっていう地球人の方でしょうけど）

（今のこの世界では異星人も珍しくはないし……結構必要な事なのよね）

リアスとカナエは矢的の言う人物に心当たりがあったため然程驚かなかった。なにせ部員扱いのタイガの父親は訓練学校の筆頭教官という重要な役職、祖父母に至っては宇宙警備隊の大隊長と銀十字軍の隊長だ。

トンデモ役職についている人物などで慣れっこである。

……で、トンデモ役職に就いているリアスの実兄サーゼクスや実父ジオティクスはというと……

「お、リーアたん良い表情」

「うむ、こっちからも撮れたぞサーゼクス。これは後程の選別が難しくなるな」

「全部残しておきたいというのが本音ですがね、父上」

超高級デジカメや繊細カメラなどを使ってリアスを激写しまくっている。周りも苦笑い気味だが、矢的はさすがに表情には出さない。さすがプロ教師。

（（そういえば卯ノ花先生の代理は……？））

チラリと後ろを見てみると、しのぶの隣にいたのはハリベル、そしてなんとラフタ。
少々驚く二人だが、ハリベルは小さく笑って右手を軽く上げ、ラフタは口パクで「リラックス」と言ってくれた。正直、横の魔王とその父親は対応を見習ってほしいくらいである。
（（あの二人が最後の癒やし……！））
片やシスコンと親バカのおかげで恥ずかしく、片や無言の圧力をかけてくる妹……矢的の授業とはいえ背後が気になってしょうがなかったのだが、なんとなく二人のおかげでこっちの方も幾分か安心したらしく、落ち着いて授業に集中する事が出来た。

☆

―三年・朱乃の場合―
彼女の在席するクラスは比較的穏やかに授業が進められていた。気になると言っても朱乃の母である朱璃が非常に若々しく、朱乃と姉妹でも通るレベルだというくらいだ。
そんな彼女とその隣で緊張のあまりガチガチになっている父親のバラキエルには揃いのペンダントが首からぶら下がっている。これはレジェンドの捜査によって朱璃が未だに虚蝉機関とかいう連中から狙われている事が判明した為、護身用として姫島親子に卯ノ花を介して渡されたものである。
このおかげで警戒する必要はあれど問題なく外を堂々と出歩けるようになった。万が一の時は夫婦親子共々ダイブハンガーにて保護する事も視野に入っている。
（あの日、救われただけでなく……あれを渡されてから両親も笑顔が増えた。あの方にはどれだけ感謝してもしきれませんわ）

母から詳しい事情を聞いてから毎日気が気でなかったが、レジェンドの手回しによってみるみる改善していった事に朱乃は多大な恩義を感じている。それは朱璃とバラキエルも同様だ。

（もうじき夏休み……その間にあの方と関係が深められるといいのですが）

朱乃は来たるべき夏休みにレジェンドとの関係を一歩先へ進ませる決意をするのだった。

ちなみに、やはりというかレジェンドにも虚蝉機関、加えて五大宗家からちょっかいがかけられたが……あろう事かレジェンドの元へ鬼灯や縁壱、さらに東方不敗まで一時的に集合していた時に仕掛けてしまった。

結果として前者は縁壱と東方不敗、さらには卯ノ花『八千流（やちる）』の手により組織レベルでほぼ壊滅。

後者は罰としてレジェンドと鬼灯による一日亡者体験ツアーを強制執行され、無惨共々日本地獄の恐ろしさを身を持って実感した事で大人しくなっている。

……無惨は今もなお反省の意思が欠片さえ見られないのでシン・ゴジラのレーザー熱線で消し飛んだが。

☆

―一年・小猫の場合―

黒歌あたりが過剰な反応をするかと思いきや、意外にも静かにしていた。夜一がさり気なく抑えているのかもしれないが、面倒を起こす気はない、と言うのは本当だったらしい。

（……ホントはソランさんにも来てほしかったです）

小猫はそう思っていたが、ゼノヴィアに関しては仕方がない。彼女は家族がいないようだし、同時にサーガの御使いという立場にある。グレモリー眷属である自分とは仕えている主の立場も違うのだ。
おまけに言うともしサーガが来れたとして、黒歌や夜一とサーガが夫婦に見られるのはなんとなくイヤだった。
しかし、その二人はもれなくレジェンド派。

（白音がなんか悩んでるにゃ！いよいよお姉ちゃんの出番……！）
（やめんか馬鹿者。はぁ……さっきからずっとこの調子じゃな）

マジでこっちは夜一が抑えていた。一応派手に動く気は無いのだがコッソリとならいくらでも動く気満々だったのである。といっても彼女の悩みはこの場では叶わないものなのだという事を黒歌は理解していない。

（ま、姉妹同士想い人が違うからの。サーガが儂らの隣にいたら嫌なんじゃろ）
（あーそういう事。白音も恋をするお年頃なのね）
（……気になったんじゃが、レジェンドは持っている一夫多妻の資格……サーガは持っておるのかのぅ？）
（さぁ？持ってるんじゃない？）

幕間にて判明した、惑星レジェンドにおける一夫多妻の権利を行使できる七つの条件。しっかりとサーガも全項目達成している為、無問題である。
朱乃に続き、小猫の方も穏やかに授業は進んでいく。

☆

―二年・裕斗の場合―
彼のクラスにおいて、彼の勉強態度やジェント及び乱菊の見学状況

などに何ら問題はない。特に裕斗の真剣な姿勢やジェントの立ち振る舞いは立派なものだ。
では何処に問題がというと……

「えー……それではここのー……」
「「「「……」」」」

チラチラと乱菊の方を見ている男性教師ならびに男子生徒。

「「「「……ほうっ……」」」」

ジェントを見ては惚けた表情になる母親ないしそれに準ずる保護者が原因である。女生徒は裕斗の父親であるジェントの前で恥をかくわけにはいかない、と裕斗同様真剣な表情だ。

(あー……なんかすっごい見られてるわ。つーか視線どこに向いてるか丸わかりなんだけど)
(見られてますねぇ……まあ手出ししてくる気はなさそうですし、裕斗の真剣な姿にこちらも集中せねば不作法というもの。ちゃんと見守らなくてはいけませんね)
(父さんと乱菊先生見られてるなー……うん、二人とも立派な人だから仕方ないよね)

三人の思考がシンクロした。若干裕斗はズレていたが、純粋に二人を尊敬している彼は本気でそう思っている。
仮に周囲がやましい気持ちで見ていたとしてもこの二人なら余裕で対処するだろう。乱菊は町で襲いかかってきた暴漢を裏拳一撃で沈めたらしいし。

(ここで僕がヘマをすれば二人に恥をかかせてしまう。しっかりと授業に集中しないと)

ジェントと同じような思考の彼はもはや下手な血の繋がった親子より親子らしい。
余談だが、実はこの光景はハンターズギルドにも中継されている。ジェントの養子となった裕斗はラッシュハンターズにとっても弟分。さらに同じく七星剣のノダチザムシャー、ババルウ星人フガク、ナックル星人ブランケまでも見守っていた。
正直、裕斗はアーシアの次に手を出したら報復が半端ないかもしれない。

☆

―二年・一誠&アーシア&ゼノヴィアの場合―
そして最後が彼らのクラスとなるが、彼らのクラスがある意味一番混沌としていた。
アーシアやゼノヴィアを狙っていた男子生徒達は格差に轟沈（しかも強引に手を出そうとすればまさしく天罰が下る）するし、一誠を更生させたゲンを見た女生徒のうち村山と片瀬以外にもどうやら彼に救われた者がチラホラいたようで、その精悍な顔つきと鍛え上げられた肉体に見惚れていた。
喧嘩を売った連中は先ずジープに向かっていけ。話はそれからだ、ただし向かってくるジープ限定。甘ったれるな！
当然こんな面々なので保護者の方々の視線も向きまくり。

「はーい、それじゃあ授業を始めますよー」

しかし、一誠達の授業を担当する英語教師はツワモノだった。この状況でも動じないというか、ある意味レジェンド一家に通ずるハチャメチャっぷりがあるというか。

「じゃあ配布するものあるから、全員一つずつ取ってってねー」

(((((……『一つ』ずつ？)))))

突如配られたのは粘土板と紙粘土1ブロック。何だコレ。誰もがそう思った時、英語教師はぶっ飛んだ事を言い出した。

「いいですかー、いま渡した紙粘土で好きなものを作ってみて下さい。人でも動物でも家でもいい。自分が今脳に思い描いたありのままの表現を形作って下さい。そういう英会話もある」

(((((えええええ!?)))))

「なあタイタス、今までの星でそんな会話方法あったか？」

「いや……記憶にないな」

「二人ともマジで考えんなよ……普通に考えたらあるわけないだろ」

あまりに唐突かつ適当、もしくは無茶を通して道理を蹴っ飛ばすという超次元グレン団のような理由に生徒のみならず保護者やトライスクワッドも混乱していた。

なお、ビジュアル系四人組はというと。

「……先輩、この世界の英会話というのは進歩しているんだな」

「サーガ、英会話とはこういうものじゃありません」

「ゲン殿、私も神衛隊入隊後に多言語を習得したのだが……こんな英語は初めてだ。これが普通なのか？」

「厳勝さん、逆だ。これがおかしいんだ」

どうやらレジェンド側とサーガ側で認識のズレがあったらしい。レジェンドは勿論だがゲンもＭＡＣに所属していた過去からちゃんと英語は学習済みだ。普通ならこんな英語はないと断言出来る……芸術家とか、そういうのには理解されそうではあるが。

「地球の学校の授業というのはウルトラ珍妙なものでございますね」

(いやゲンも言っただろ。これがおかしいんであって普通はこういう事するのは図工とかそういう科目だ)

レジェンドの中にいるゼットもあまりに予想外の事にまた変な認識をするところだった。オーフィスまでいたらこれまた厄介な事になっていただろう。
生徒達は制作に入っているがまだ釈然としていない。当然といえば当然だ。
さて、我らがオカ研所属の三人は……

（マジでどーすっかな……）

まず一誠。タイガらも一緒になって考えており、心の言葉でも会話出来るメリットを改めて実感する。

「もうレオさんとかゼロでいいんじゃねーの？ホラ、せっかく見に来てくれてんだし」
「しかしフーマ、彼らはまだ表立ってこの世界では変身していない。あの時は隔絶された閉鎖空間であったし、ここで作るのは些か拙い気がするぞ」
（だよなあ……）
「いっそリアスを作るとか？」
『どこぞのシスコンや親バカが欲しがりそうだが』
（さすがにダブルオーザンライザーはあれ作れねーな。細かすぎて無理だ）
「……ハイパーゼットンとか」
『ノゥ!!』

最後はドライグが拒否った。アルビオンほどではないにしろ苦手意識があるらしい。
だが、無意識のうちに一誠の手は動いていた。
その結果、驚きのものが完成するのはこの時点でまだ気づくはずもない。

（うぅ……ウルトラマンの姿のレジェンド様を作りたいけど変に出来上がったら失礼だし……でもだったら何を作れば……）

次にアーシア。彼女やゼノヴィアはタイガらのような相談も出来ないので完全に独力で作らねばならない。

最初はレジェンドを作ろうと思ったようだが不出来な場合の申し訳無さと恥ずかしさで断念した。

……と、そこである生き物を思い立った。本来の姿は別としてもいつもの姿なら、と考えた彼女は早速作りにかかる。

（この子なら大丈夫ですっ！）

うって変わって笑顔になり作り始めたアーシアを見ながら、レジェンドは穏やかな顔で頷いていた。

（うぅむ……どうしたものか）

そして最後がゼノヴィア。彼女自身、まだウルトラマンとしてのサーガの姿は一度も見ていないし、かといってアーシアが作るものは有していない。デュランダルでも作ろうかと思ったが紙粘土の大きさから小さくすれば余剰分が多くなり、逆に大きくすれば足りなくなる。

ついでにいうと先程のタイタスの言葉通り、大衆面前で姿を現していないウルトラマン達を制作するわけにもいかない、とまさに八方塞がりに近い。

（……待てよ？ウルトラマンや怪獣なんかはともかく、アレは作っても問題ないのでは……？）

アレとは即ち、あの夜にウルトラマンや怪獣以外に現れたアレであ

る。

（どちらも複雑だが、こうなったらやるしかない！）

すぐさま制作に取り掛かるゼノヴィアだが、レジェンドは別としても一つ案がある。サーガブレスとかタイガスパークでも良かったんじゃないかと。

その結果、出来上がったのは三人とも見事な完成度だった。先程とは逆に見ていくと、まずゼノヴィア。

「これ、ロボット？」

「左右非対称で変わった形してるな」

「どうやって右手の部分こんな細かいのにバランスとれてんだ!?」

彼女が作ったのは師である巌勝が駆るターンXである。バルバトスと迷ったが、先日の戦いの後にゆっくり見る暇がなく、一足早く帰還した巌勝のターンXを作る事にしたというわけだ。これならオリジナルのロボットとでも言えばどうとでもなる。

続いて、アーシアの作品は……

「アルジェントさんのやつ可愛い！」

「恐竜？それとも今噂の怪獣？」

「でもこんなの感じならどっちでもいいや！」

アーシアが作ったのは彼女のカプセル怪獣であるゴモラ。それも自分から出てきた時のSDサイズの姿だ。

レジェンド以外にも身近な存在として、すぐ近くで彼女を護るカプセル怪獣であり家族でもあるゴモラを作る事にしたのだ。結果、主に女子に大好評。

そして、最後は一誠だが……度肝を抜かれた。

「お、おいこれ！最近のオカルト研究部のポスターになってるウルトラマンじゃないか!?」
「ホントだ！しかも三人全員分！」
「しかもポスターじゃ分からない部分がしっかり作られてるぞ!?」
「三人の前で祈るようなポーズしてるのこれリアス先輩じゃない!?」
「アレか！お姫様を護る三人の騎士的な！」
「ていうかこの短時間でどうやって彩色までしたんだ!?この数ヶ月で兵藤進化しすぎじゃね!?」

どうやったのか不明だが明らかに渡された1ブロックの紙粘土より質量が多くなっているだろう、トライスクワッド＆リアスのバストアップフィギュアのような作品が完成していた。
これには保護者方も近くに行って見てしまう出来である。

「イッセーの隠れた特技が判明したな……！」
（いや、俺だってビックリだよ！なんか知らず知らずの間に作ってたよ！）
「だがこれは傑作だ！見ろ！この私の上腕二頭筋の再現率を！」
「俺、センターだ……！」
『ホント、色はいつの間にどうやって塗ったんだ相棒』

一誠本人はあの時から無意識継続で完成させたらしい。トライスクワッドの三人も満足だ。マジで色はどうやったんだ一体。
ちなみにこの彼らの作品はオカ研の部室に展示されるようになったらしい。その前は三作品とも制作者が望んでいないのにオークションで競り始められるという珍事件（レジェンドらは未参加）が起きたのだが、無事それぞれの手元に戻ってきた。

☆

授業終了と同時に保護者勢は退出し、それぞれ学園を見学してい

た。一応レジェンドらはサーゼクスやジオティクスと鉢合わせしないよう、しのぶやハリベル、ラフタから随時連絡を受けていたのだが……

「……何だあの人だかりは」

「チーフ、何故か口々に魔法少女のコスプレがどうとか聞こえるんですが」

「厳勝、『透き通る世界』で何か視えるか？」

「いえ……不特定多数の見物人のお陰でそこまで視えません。自然な障害物なら見透せたのでしょうが……」

どうやら学園内で魔法少女なコスプレをしている人物がいるらしい。なんでまたこんなところで、と思っていたが同時に下手な訳の分からん問題に巻き込まれる前にその場を離れようとした瞬間、聞こえてはならない声が聞こえた。

リリカルマジカル、頑張ります！

――レジェンドが固まった。

「「……」」

他の三人も何かに気づいたようだ。

恐る恐るその声の発信源を見に行くと、外れてほしかった予想がモロに的中していた。

「これが私の全力全開！スターライトブレイカー！」

「プラズマザンバー！ブレイカー！」

「二人できっちり……！」

「半分こ!!」

片や、黒髪なので金色ではない金色の閃光のコスプレ魔法少女……いや魔王少女。
そしてもう一人が白い悪魔どころかスペック的に白い超越者を超えた天災兎、篠ノ之束がリリカルな魔法少女のコスプレ姿でそこにいた。

（束エェェェェ!!）
（（何してるんだァァァ!?））

ノリノリでポーズを決める二人にレジェンド達は白目で口をあんぐり開けている……いわゆる銀魂顔状態になってしまっている。
こうしているわけにはいかない、とレジェンドは即座に意識を取り戻したのと同じタイミングで束がレジェンドに気づいた。

「あ！レジェくん見つヒュゴゥ!!」

その一瞬でレジェンドと束の姿が消える。
相方役だったもう一人はキョロキョロと周りを見渡す。

「あ、あれ？束ちゃーん？」

彼女に限らず、見物人も周りを探し始めると今度は別の人物がやってきた。生徒会の匙である。

「さぁさぁ解散解散！公開授業の日に騒ぎ起こすな！あんたもそんな格好で来ないで、参観の人ならそれらしい格好をして来て下さいよ……ってかそんな服着た事ありましたっけ？」
「今日出来たお友達に貰ったんだよ☆」

こんなん渡す友達ってどんなだよ、と先程の光景を見ていない匙は溜息を吐く。

そこへリアス達オカルト研究部や、サーゼクスにジオティクス、さらには別方向からしのぶ、ハリベル、ラフタまで集まってしまい、最後にはソーナまで合流……なんかソーナは絶望したような顔をしていた。

黒歌と夜一、ジェントと乱菊、そして姫島夫婦は先に帰ったようで一安心……でいいのか？この場合。

「!!???」

「ど、どうしたサーゼクス!?」

（ああ……巌勝さんね……）

早速サーゼクスが縁壱の双子の兄である巌勝を見て世界の終わりのような表情と雰囲気になっている。

この参観日、最後に一波乱ありそうである。

〈続く〉

突発的保護者面談とグレモリー眷属の『僧侶』

旧校舎の一室。

そこで一人の生徒がパソコンで動画を見ていた。

『スペシウム！スタードライヴ!!』

以前ジードが京都にてキリエロイドⅡと戦った際の動画である。シャイニングミスティックとなったジードが必殺技でキリエロイドⅡを撃つ瞬間を見ながら、その生徒は一人呟く。

「はぁぁぁ……やっぱり格好良いなぁ、ウルトラマンジード……」

動画が終わると繰り返し最初から同じ動画を閲覧している。余程お気に入りらしい。

「僕も……ジードみたいに時間を止める力をコントロール出来たらなぁ……」

憧れと羨望の眼差しで、モニターに釘付けになる生徒はグレモリー眷属の『僧侶』ギャスパー・ヴラディである。

☆

一方、こちらではある意味修羅場である。

「なっ……ななななんでここにぃ!?」

「……？継子の学ぶ姿を見に来ただけだが」

「つぐこぉ!?や……やっぱりいいいい!!」

「サーゼクスちゃん!?ど、どうしたの!?」

「落ち着けサーゼクス！さっきから何だというのだ!?」

錯乱するサーゼクスの様子にオカ研メンバー以外は焦っていた。超越者でもあるこの魔王がここまで取り乱すのはどういう事だと思われたが……

「縁壱先生にトラウマを植え付けられたみたいよ」

「なるほど、縁壱相手ならば仕方ない」

『仕方ないの!?』

リアスの一言に巌勝があっさり納得してしまった。現在は無いが長年双子の弟に劣等感を抱いていた実兄だけあって説得力がありすぎる。

というか、無惨の血によって鬼化した者は細胞レベルで恐怖が刷り込まれてるから確かに仕方ない。

「……え?縁壱?」

「まさかと思うが私と縁壱を間違えていたらしいな。よく見ろ、痣が違うだろう。認識阻害をかけているから一般人には見えぬだろうが、悪魔なら視認出来るはずだ」

「いや、巌勝さん……以前も言ったけど親しくないとパッと見じゃ分かんないですって……」

「そうか……ならば明確な違いとして呼吸の一つでも見せてやった方が……」

「待ってええええ!?巌勝さんそれ確実にお兄様屠られる!あれは回避どうこうのレベルじゃなくて放つか放たせないかの問題なのよ!?」

ギュピーンと両目を光らせて鬼神刀を取り出し抜刀しようとする巌勝を、リアスを筆頭としたオカルト研究部が総出で止めている。

本気の兄上がガチでヤバいのはダイブハンガー組にとって周知の事実。この場で正面からやり合って勝てるとしたら生身のウルトラマンを含めてサーガくらいなものだ。他の者は不意打ちしても勝て

るか怪しい。

「ところでそちらの方は……？」

「衣装姿がスタイルも相まって凶悪だな」

「いや、ハリベルさんの戦闘装束も胸の部分がだいぶ攻めまくりじゃ……」

「「リーアたんっ!?」」

しのぶ、ハリベル、そしてラフタの会話にまたも反応するサーゼクス、加えてジオティクス。中の人が同じだからといっても過剰すぎやしないか……？

「そこの君！ちょっとコスプレをしてみる気はないかな!?」

「はあ!?」

「お兄様！いい加減にしなさい！」

「ぐはあっ!?」

いきなり初対面の相手にコスプレさせようとするサーゼクスにリアスのハリセンが炸裂した。

「ああ……二人のリーアたんに囲まれる夢が……」

「しのぶ、私が許可するわ。このシスコン兄に効く毒を叩き込んで頂戴」

（えぇー……）

リアスの言葉に本気でいいのか悩むしのぶだが、確かにドン引きするようなシスコンぶりである事は間違いない。

というかそもそも彼女は今再びコスプレ衣装でポーズを決め始めている女性の素性が気にかかっている。

ついでに……

（この学園という場で……どいつもこいつもですよ）

ナイスバディなスタイルで、しかも学園という学び舎で保護者格がそんな事を、という事でしのぶは青筋を浮かべつつ右拳を素振りしている。

しのぶのこの動作は怒っている時にやるものだと理解しているカナエやアーシアなどは怯え気味だ。特にカナエは今回別に怒られるような事は何一つしていないというのに、条件反射でビビっていた。

「な、なんかそこの子がちょっと怖いな☆」

こんな時でも個性を崩すまいとする姿勢は立派だが、さすがに時と場合は考えて頂きたい。

「今日のここはそういう格好する場所じゃないですよー」

「彼女の言う通りです！というかなんでここにいるんですか!?厄介な事になるから教えないでいたのに……」

「酷いよソーナちゃん！お姉ちゃんショックのあまり天界に攻め込んじゃいそうだったんだぞ☆」

「「「「お姉ちゃん……？」」」」

天界に攻め込む発言はスルーするとして、その前の言葉がにわかに信じられないものだった。

「はーい☆ソーナちゃんのお姉ちゃんのセラフォルー・レヴィアタンです☆気軽にレヴィアたんって呼んでね☆」

『えええええ!?』

ソーナと性格が正反対な彼女がまさかの姉だとは思わず、それを知らなかった者達の殆どが驚いた。

「……束と気が合いそうなわけだ」
「あ！そうそう、その束ちゃんが何処に行ったか知らない？なんか急にパッと消えちゃって……」
「チーフが確保したのは分かるがどこに行ったかまでは……」
「まさかラフタ、彼女が行くと言いだしたからついてきたのか？」
「いやいや巌勝さんこれ全くの偶然だから！っていうかあの人の思考回路をアタシには予測不可能だよ!?」

天災の考えてる事は一般人には分かりません。

「つーかさ、絶対レジェンド目当てだよな」
「そうなのか？」
「いや、タイガはまだしも旦那は王女様に片思いされてたんだから、せめて自分が気づくのはともかく他人の片思いくらい見抜いてくれよ……」

純朴なタイガと鈍感なタイタスに挟まれた次男的立場のフーマはがっくりしているが、ここでセラフォルーが食いついた。そう、レジェンドという単語に。

「ねえ、そこの半透明のヒト！今レジェンドって言わなかった!?」
「えええ!?なんでそんなに反応早いんだよ!?」

急接近したセラフォルーにフーマはたじろぐ。なにせアストラル体の彼らは基本的に一誠の肩に乗れる程度の大きさしかない。

「セラフォルー……セラフォルー……」
「む？どうしたタイガ」
「そうか思い出した！生徒会長さんの姓が確かシトリーなのに姉って事は魔王の一人、セブンさんがお世話になったっていうシトリー家の長女のセラフォルーさんか！」

『えええええ!?』

この人も魔王だったの!?という反応が辺りを占めた。ソーナはソーナで額に手を当てて俯いている。

「さすがタロウさんの息子さんのタイガ君、ちゃんと覚えてくれたんだね☆」

「いや、レジェンド絡みかつレイブラッド事変の関係者って言ったらグレイフィアさん以外だとセラフォルーさんか、ガブリエルさんって人ぐらいだし」

「……ちょっと詳しく聞きたいな☆」

「うわあああ!?なんか空気が変わったんだけど!?」

ガブリエルの名前が出たら笑顔のままプレッシャーをかけてきたが、何故かは推して知るべし。

あ☆と何かに気づいたように一誠を見て、セラフォルーはサーゼクスに聞く。

「ねぇねぇサーゼクスちゃん、タイガ君がいるってことはこの子が？」

「あ、ああ……『赤い龍（ウェルシュ・ドラゴン）』をその身に宿す赤龍帝、兵藤一誠君だよ」

「そっか☆よろしくね☆」

「え、あ……はい」

セラフォルーは未だビビりが解けないサーゼクスからその情報を聞き、一誠に挨拶した。別に他意はない。

「でねでね☆そのレジェンド様がどうしたの☆」

ガブリエル発言はどうでも良くなったのか、フーマが出したレジェンドの名前に再度食いついてくる。

「先輩なら束を捕獲して一足早く帰宅したようだ。今連絡があった」
「サーガ様、誰から？」
「リクからだ。他にもレイトやミライ、アスカにジャックらとカップラーメンを吟味している時に急に帰還してきたらしい」
「「「ウルトラマンの方々が勢揃いして何やってんの!?」」」

人間体があったからまだしもウルトラマンのままだったらシュールな事この上ない光景だっただろう。リクがカップラーメン好きなのはダイブハンガーでは誰でも知っている。

「「さっきジャックって聞こえたんですが!?」」
「お前たちの知っているジャックではない。彼のウルトラマンとしての名はグレートだ」
「普通に格好良い名だと思うのだが……そういえば、貴方は？」

平然としているサーゼクスだが、次の瞬間ジオティクスやセラフォルー共々言葉を失うほどの衝撃を受ける事となる。

「俺はウルトラマンサーガ。ウルトラマンレジェンドの後輩にあたる光神だ。この姿ではソラン・セイエイと名乗っている」
「「……え」」

時が止まった。そして時は動き出す。

「「えええええっ!?」」
「……騒がしいな」
「ソランさん、あまり動じていませんね」
「ああ。驚かれるのは慣れている。先輩が有名すぎるからその直接的な関係者だと分かると大抵こんな反応だ」

小猫の言葉に理由を言いつつ同意するサーガは、しかし……と一拍

置きつつサーゼクスやセラフォルーを見る。

「随分と奔放なものだな、この世界の魔王は」

「歴代の魔王様達が例に漏れず真面目であった為、周りの者が緊張しすぎるのを解す……というのが当初の理由だったみたいですが、今やそんな理由など遥か彼方へ飛んで行って、冗談抜きにフリーダムになってしまったんです。代わりに家族が真面目になったというか、家族が真面目だからフリーダムになったと言えばいいのか……ハァ……」

ソーナが説明してくれたが、彼女は気が重そうだ。というのも原因は姉にあるのだろう。

早い話レジェンドのように周りに気を遣っていたのだが、彼とは違って悪魔らしく欲望の方が前面に出たというのが正しいか。

「確かにフリーダムすぎ……っ!!」

「……サーガ様、如何されました？」

「……いたぞ。知り合いに最高位でありながらとんでもなくフリーダムでマイペースなのが二人……」

「え？それって誰……！まさか……」

リアスの言葉にサーガは静かに頷く。

自身はその場にいなかったが、いつの間にやらダイブハンガーへ侵入し、夕食を食べていたノアがその二人の内一人だと。あれはぶっちぎりでフリーダムだ。

「あの二人はそれ以外に例えられない。そのおかげで俺や先輩がどれだけ苦労したか……！」

「「「心中お察しします……」」」

サーガが帰還した日の昼に自身の管轄【エリア】へと戻ったが、僅

か短時間でレジェンドがよく愚痴っていた理由が理解出来てしまった。凄まじくキャラの強い御仁である。

「……って話し込んでしまったけれど、そろそろ休み時間が終わるわね。皆、それぞれの教室に戻りましょ」

「私も戻ります。お姉様はちゃんと帰って下さいね！」

「えぇぇぇ!?そんなぁ！待ってよソーたぁぁぁん!!」

「もうその呼び方は止めて下さいって言ってるじゃないですか！」

足早に戻るソーナを追いかけてセラフォルーも行ってしまった。……レジェンドの事はいいのだろうかと思ったが、とりあえず余計な事は口にしないようにしておく。

自分達も帰ろうとサーガ達が歩を進めようとした時、サーゼクスから呼び止められた。

「最後に一つだけお聞きしてもよろしいでしょうか？」

「……何だ？」

「今度ここで天使、悪魔、堕天使の会談が行われる事は……」

「知っている。俺達にも出てほしいと直談判でもする気か？」

「それは……」

「心配せずとも出席する予定だ。但し準備に時間がかかるだろうから、俺と先輩は遅れる事を先に伝えておく。それまでの繋ぎ、及び三すくみ会談の傍聴役として俺達の直属の部下を先に向かわせる。これに関して文句を聞く気はない」

有無を言わさぬ静かな迫力を纏いながらサーガはサーゼクスに告げる。サーゼクスやジオティクスはその威圧感に息を呑むが、一応出席してもらえるという事には胸をなでおろした。

「つかぬ事をお尋ねしますが……」

「誰を送るかはこの場で言う気はない」

サーガはそう言うと巌勝らと早々に立ち去っていく。どうやらあまり機嫌がよろしくないらしい。
というのも、彼が調べたある事が原因だ。サーガは別段悪魔嫌いというわけではないが、おそらくは次の会談でも追求する事になるだろうかなり重要な出来事である為、理由はその時に明らかになる。
この時はまだ、その事についてこの場にいた中ではサーガ以外の者が知る由もなかった。

☆

その日の夕食後――
レジェンドはリアスからある相談を受けていた。

「何？『僧侶』の封印の解放？」
「ええ。その子の神器の力が強すぎて私の力では扱いきれなかったのだけれど、コカビエル戦での功績もあって封印を解く事が許されたの。とは言っても今でも精々私達が神器の影響を受けなくなる程度で根本的な解決にはほど遠くて……」
「それで俺になんとかしてほしいと。そりゃ無理だ」
「ええっ!?」
「考えても見ろ。俺がそいつの力をどうにかするとしたら徹底的にシゴキまくって地力を上げるか、神器そのものをどうにかするしかないぞ」
「そ、それは分かっていたわ。だからそのどちらかでいいから」
「やめとけリアス。その人に修行つけさせたら並大抵の奴はすぐに潰れて使い物にならなくなるぜ」

レジェンドをどうにか説得しようとしているリアスを止めたのはレイト。レジェンドの直弟子でもある彼からしてみれば余程修行好きか、体力や根性が相当な者しかついてこれないというのは身を持っ

て知っている。

「確かに師匠(レジェンド)がその気になればどうにでもなるだろうさ。俺達じゃ絶対不可能な力使って穏便に能力強化しつつコントロール出来るようになったりとかな。けどよ、お前らがその神器の影響を受けなくなっただけでそいつ自身が変わってなきゃ何も変わらねえよ。まずお前らだけでそいつを変えようとしなきゃレジェンドだって手を貸すわけないだろ」

レイトの言葉はまさにその通りだった。レジェンドは基本的にバックアップをする事で当事者自らに解決させようとする場合が殆どで、自身が直接表立って動くのは文字通り努力した当事者達が自分達で本当にどうにもならなくなった時だ。

かく言うレイト……いやゼロの場合も、レジェンドが修行をつけ始めたのはレオとアストラによってある程度基礎が固まってきてからである。

つまりレジェンドもノアやキング同様、例外を除き最後まで諦めない者にこそ力を貸すわけであり、ハナっから自分頼みの者にやすやすと肩入れするほど甘くはない。

「つーかよ、そもそもそいつの事知ってんのってリアスと朱乃、小猫に裕斗くらいだろ。一誠にアーシア、カナエにゼノヴィア、それにタイガ達なんか初めて聞いただろうし、下手すりゃ８０だって知らない可能性あるぞ？今のオカ研メンバーの半数が会った事ないのに扱いきれないとか早とちりすぎじゃねえか？」

「……そう、よね……私ともあろう者が弱気になりすぎてたわ」

「気にすんな。そんだけ神器の力が凄いって事だろ。ま、いざとなったらレジェンドだけじゃなくて俺も手を貸してやるからよ、まずお前らで説得なりなんなりやってみろ」

「ええ。その時は改めてお願いするわ。いきなり無理言ってごめんなさい、レジェンド様、レイト」

いつもの柔らかな笑みになったリアスを見て二人は顔を見合わせて笑う。……と、ついでにとリアスは別のお願いをする。

「あと、その件とは違うのだけれど……レイト、ウルトラマンの時の貴方とゼットの写真を取らせてもらってもいい？」

「へ？いや別にいいけどよ、何に使う気だ？」

すると、予想だにしなかった答えが返ってきた。

「実は……帰る時ソーナに会って言われたのよ。あの日、魔王獣と必死に戦っているゼットや、その危機に颯爽と現れた貴方を見て、彼女の眷属達が何名かファンになっちゃったらしいの」

レジェンドが椅子からずり落ち、レイトが飲んでいたコーラを口だけでなく鼻からも噴き出した。

「あだっ」

「ごっふ……やべぇ……！鼻からコーラってこんなに効くのかよ……！」

「ふ、二人とも大丈夫？」

若干パニック気味の二人をリアスが心配していると、ゼットがリフレッシュルームに入ってくる。

「いやー束博士の搭載したシミュレーター最新機能ヒストリーモード！まさか俺自身がアムロ師匠の代わりに一年戦争を追体験出来るとは感無量でございました！あれ？御三方どうされました？」

「……お前、なんつーベストタイミングで戻ってくんだよ……」

「???」

ゼットが戻ってきた事で、無事変身したゼロ（ウルトラゼロマント装備）とゼットのツーショット写真が確保出来たリアスからソーナに写真データが転送され、後日生徒会にいる彼らのファンに再度転送。彼女らの携帯の待受画像となったという。

☆

翌日、オカ研の面々は旧校舎の『開かずの間』へと訪れていた。昨日言っていたグレモリー眷属の『僧侶（ビショップ）』に会うためである。

「それで、その子がここにいるの？」
「ええ。今はこうして封印されているけど、この封印は深夜には必ず解けるようになっているの。でも本人が頑なに出ようとしないのよ」
「……それさ、単に太陽の光が苦手とかじゃないのか？日の呼吸っていうのを使うカナエと会ったら逆効果なんじゃ……」
「……タイガ君。日の呼吸の拾参ノ型、試しに受けてみる？」
「ゴメンナサイ」

綺麗な土下座を披露したタイガ。何故か見る機会が多かったせいか自然と修得してしまったらしい。いいのか悪いのか……

「ともかく、開けるわよ」
「さて……鬼が出るか蛇が出るか……」
「鬼が出たらお姉さんに任せなさい♪」
「蛇が出たら私の筋肉で圧倒しよう！」
（（（（相手に同情しかない……））））

カナエとタイタスは殺る気満々だ。いや、ただ会いに来ただけなのになんで戦闘態勢なのか。そしてカナエ、鬼とも仲良く出来るという信念は何処行った？
そして扉を開けた瞬間……

「イィィィィヤァァァァァァ!?」

大絶叫。最初に言っておくが、かまぼこ隊の一人ではない。というか扉を開けただけでこれである。

「……アーシアちゃん、ゴモちゃんカプセルの中にいて良かったわね。今の叫び聞いたら間違いなく不機嫌になるわ」
「はいぃ……モスちゃんの方は？」
「モスバーガーは同族が経営してるのか悩んでるわ」
『何だそれ!?』
「ひぃぃぃぃ!?ごめんなさいぃきなり大声出してゴメンナサイィィィ!!」

訳のわからない理由で悩むモスラへのツッコミにネガティブな返事をしてしまうその人物こそ、今回冒頭に出てきたギャスパー・ヴラディである。

「ああいや、そっちに言ったわけじゃなくて」
「うぅむ……事情はどうあれ淑女を怯えさせてしまったのは紳士として……」
「言い忘れてたけどこの子、男の子よ」
「「異議ありィ!!」」

トライスクワッドがすかさず反論した。変なところでウルトラスペックを発揮しているあたり、段々とレジェンド一家に染まっていってる気がする。

「どう見ても女だろ!?制服にせよ見た目にせよ！」

「女装趣味があるのよ」
「いやなんで!?」
「だって女の子の服の方が可愛いですし……」
「うむ！それは君の容姿と相まって説得力があるな！確かにその通りだ!!」
「「『おい年長者ァ!?!』」」

最後の最後で寝返った（？）タイタスにタイガとフーマのみならず一誠とドライグまでツッコんだ。そこで納得させられてどうする。
そんなコントじみたやりとりを余所に朱乃が優しく諭すように言う。

「もう封印は解けたのですよ？ずっとここに籠もっていないで、私達と一緒に外に出ましょう？」
「嫌だぁぁぁぁぁ!!外に出たくない!!僕はここがいいんですぅ!!他の人に会いたくないぃぃぃ!!」
「あぅ……凄い勢いで拒否されてますぅ……」
「これは煉獄さんでも連れてくるべきだったか」
「やめなさいゼノヴィアちゃん。煉獄君がいたら是が非でも強制的に外に連れ出しかねないわ」

事実である。というか若干ゼノヴィアと杏寿郎は思考が似通っているところがあるのでギャスパーが悲惨な事になりそうだ。

「これ、かなりの難敵だよなぁ……」
「どうしたものか……ん？」

タイタスはふと周りを見るとパソコンがあるのを目にする。

「ほう、君はこれが得意なんだな」
「は、はいぃ……それなら直接誰かと顔を合わせたりしないし……」

「この子は私達の中で一番の稼ぎ頭なの。もっとも、今は私達もプラズマ怪獣のハンティングでそれなりに稼いでるけど……」
「この子と同じように相手と直接は会いたくないという方々もいるという事ですわ。そういった方々相手に契約を取っているのが彼なのです」

なるほど、と一誠やトライスクワッドらギャスパーと初対面の者達は納得した。

「っと、紹介がまだだったわね。ギャスパー・ヴラディ。私の『僧侶』で吸血鬼と人間のハーフよ。元、だけどね」
「そういや転生すると悪魔になるんだよな。周りがあまりにぶっ飛び過ぎてて頭からすっぽ抜けてたわ」
「光神、龍神、真龍にウルトラマン、死神に破面……だっけ？さらに魔女やイノベイター、元強化人間なニュータイプって人種、しまいには怪獣や宇宙人までいるからなあ……」

他にもアドヴァンスドであるクロエやヴァルキリーのロスヴァイセ、惑星レジェンドにはダンブルドアを筆頭とする魔法使いや獣人も存在する。
こうして羅列すると、とんでもないメンツがダイブハンガーに勢揃いしている。

「まあ、最近はリモートで……あれ？これって……」
「どうしたタイガ？」
「なあ、これってジード先輩じゃないか？」
「あっ!!」

ギャスパーはあたふたし始めると、驚くべき早さでパソコンのモニターを身体で隠す。

「べ、別にいいじゃないですかぁ!!」
「もしかしてジード先輩のファンなのか？」
「う……うぅ……そうです。僕は今世間で噂になっているウルトラマンの中でジードが一番好きなんです。だって……あれ？」

ここでギャスパーは気がついた。目の前にいるアストラル体の三人……この人達って……

「もしかして、ウルトラマン……？」
「「すっごい今更だな!?」」

ハッキリ言おう。馴染みまくっていてウルトラマンと認識するのに時間がかかったのである。驚異のメカニズムならぬ驚異の適応力、もしくは順応性のトライスクワッド。

「でもさ、コレ使えないか？」
「なるほど、そういう事か」
「となると残りは向こうの返事だけだな」
『???』

トライスクワッドが何かを閃いたらしく、何やら三人で話し込んでいた。そしてギャスパーを含むオカ研メンバーが不思議そうに見ている中、彼らを代表してタイガがギャスパーにある事を聞いてきた。

「なあ、ギャスパー」
「な……なんですかぁ……？」

「ジード先輩に会いたくないか？」

〈続く〉

一歩ずつ、前へ

タイガの予想外の提案に、ギャスパーだけでなくトライスクワッド以外のオカ研メンバー全員が固まった。

「ジードに……ウルトラマンジードに会える……？」
「ああ、少し前から一緒に暮らしてるし……俺達が働いてる組織の先輩だし」
「ちょっ!?ちょちょちょちょっと待てってタイガ!?こんな事を勝手に決めていいのかよ!?だってリクさんの都合もあるだろ!?」
「いや、それはそうなんだけどさ……昨日聞いた話だとカップラーメン吟味したりシミュレーターで訓練したり買い出し班として働いたりでそこそこ暇だって話だったから……」
「「「「まともなのが二番目だけだったんですが!?」」」」
『いや最後も生活していく上では必要だろ……』

一応有事の際に備えて待機しつつ定期報告したりもしているのだが、今の生活では基本的に何か起きなければ訓練くらいしかする事が無いのである。確かにウルトラマンとして動かなければいけないような問題事は無い方がいいのだが。

「本当にジードに会えるんですか……？」
「まあ、あの人の予定に合わせる感じになるけど」
「ぼ……僕、会いたいですぅ!!」
「ただし！条件がある」

ここで漸くタイタスとフーマも参加してきた。

「最初はジードをここまで俺達が連れてくる。あ、リアスは生徒会長さんへ説明ヨロシク」
「そこは私なのね……ううん、私の眷属の事だもの。分かったわ、ソー

ナには私から言っておくわね」
「そして！ここからが重要だ。第2ステップでは同伴者がいても構わないが外で会う事！これが条件だ！」
「えええええ!?」

タイタスの発言にギャスパーは驚愕し、タイガとフーマ以外のオカ研メンバーはまたもフリーズ。
それはそうだろう、ゼノヴィアの煉獄さん連れてこよう発言ほどではないにせよ荒療治もいいところだ。

「嫌ですぅぅぅぅ!!大勢の人がいるところに出るなんてぇぇぇ!!で、でもでもジードに会いたいし……でもでも外になんて……あうあうあう……」
「「さあどうする!?」」
「……初めてタイガ達が鬼畜に見えたぜ……」
「ある種の拷問ね、これ」

とはいえ、先程の様子から多少は強引にでもやらなければ彼は動かないだろう。会いたいという願いか、外に出たくないという願いか、どちらも自分の望む事なので本気でギャスパーの心は揺れている。
しかし、タイタスの案の中に一つの希望が残されている事に気づいた。

「外で会う時……誰かについてきてもらってもいいんですよね……？」
「勿論だ。最初から一人で行かせようとは考えていないから安心するといい」
「……じゃ……じゃあ、小猫ちゃんが一緒なら……」
「……なんで小猫？」
「えっと、同学年ですし……付き合いも長いし……」
「私は大丈夫です。ギャー君の為にひと肌脱ぎます」

小猫自身は別に構わなかったらしく、外での交流時には彼女同伴で……というところまでは良かったのだが、そんな彼女からトライスクワッドに別の意味で難題が課される事になった。

「代わりといっては何ですが……その……タイガさん達はソランさんも誘って下さい」

「「ｗｈａｔ!?」」

『お前ら発音良すぎだろ』

ドライグのツッコミもなんのその、タイガらは動揺しまくっている。ぶっちゃけ、下手したらギャスパーを連れ出すより大変かもしれない人物だ。

（おいどうすんだよ!?小猫べらぼうにハードル上げてきやがったぞ!!）

（そんなこと言ったってやるしかないだろ!うまく誘えて参加させられればそれでよし、結果は神のみぞ知るだ!）

（いやサーガ自身が神の上に立ってんじゃねーか！）

（これからは私が天に立つ）

（（おいそこ何言ってんだ!?））

当然の如くボケ始めるタイタスにツッコミを入れたタイガとフーマは仕方ない、と承諾した。しかし……ジオティクスが言うと卯ノ花やハリベルといった人物からリンチされそうな気がしないでもない台詞だったな、タイタス。

その後、結局ギャスパーはゼノヴィアによってグラウンドを走らされたり、一誠以外がアザゼルと初邂逅したり、その際カナエに対してセクハラしかけたアザゼルが会談前に頸を斬り飛ばされそうになったり色々あったが、概ね平和に終わった。

「最後全然平和じゃねえだろ!?マジであの娘、本気で俺の首を斬り落としにきてたんだぞ!?」

縁壱や巌勝じゃないだけマシです。

☆

翌日、オカ研メンバーはリクをカップラーメン（醤油味）で釣る事であっさり協力を承諾させ、彼を伴ってギャスパーのいる部屋の前に来ていた。

「それにしても言われた翌日すぐ、だもんなあ……さすがに驚いたよ、僕」

「いや……俺達はリクさんがカップラーメンだけでこうも簡単に協力してくれる事の方が驚きなんスけど……」

「イッセー、気をつけろよ……ジード先輩のカップラーメン判定はかなりシビアだぞ」

「やっすい適当なモン渡したら問答無用でレッキングバーストかコークスクリュージャミングが飛んでくるからな」

「この世界の地球に来る前、ふざけて青酢ラーメンなるものを渡したロッソとブルが逆鱗に触れてしまい、それは悲惨な事態になったんだぞ」

「「「「何その劇物!?」」」」

……この事件の時、二人はルーブになってまで対抗したもののブチ切れてプリミティブのまま究極形態並のパワーを発揮していたジードに成すすべもなく撃破された。その後、ロイヤルメガマスター汁という物を飲まされて二度倒されたらしい。

この事件以降『美味いおふざけ気味な物はいいが、悪い意味で馬鹿げたカップラーメンをジードに渡すのは禁止』とベリアルとゼロによって銀河遊撃隊要項に付け加えられた。

「俺が昔っから食ってるカップラーメンあるんだけどさ、それは絶対に美味いって。シンプルだけど逆に飾り気なしに味で勝負って感じがしてさ」
「ホントに？それじゃ期待しようかな」

なんとか空気を穏やかにしつつ扉を開ける一行。

「失礼しま～「ひゃあああああ!?」……もしかして僕、歓迎されてない……？」
「ちっ、違うのよリクさん！あの子はちょっと色々あって……」
「はい。というか誰であってもこういう反応されますわ」
「え？それって大丈夫なの？」
「それを治す為の第一歩としてジード先輩を呼んだんだよ！」
「いや、全く話が読めないんだけど」

そもそも自分がどうして呼ばれたのかはざっくばらんとしか聞いていない。カウンセリングが必要なら卯ノ花やしのぶがいるし、何だったらレジェンドだって出来る。
じゃあ何で？と思っていたがその疑問はすぐ解決する事になった。

「あああの！もしかして……ウルトラマンジードさんですか……？」
「一誠君やアーシアちゃんも言ってたし隠す必要もないよね。うん、僕は朝倉リク。君が知っているウルトラマンジードだよ」
「わああ……！ぼ……僕、貴方のファンなんです！あの京都での戦い、すっごく格好良くて……」
「ありがとう、あの戦い知ってたんだね。あれ？もしかして誰かが録画とかしてたのかな？そういえば取材用のヘリコプターとか来てたし」

京都では既に知らない者はいないほど有名だと、彼はまだ知る由もない。なにせ向こう側で仲が良いのは八坂・九重母娘とジャグラーくらいなものだし、彼らから情報が逐一入ってくるわけでもないからだ。

ふと見るとパソコンの画面にはやはり先日同様、ジードの動画が流れていた。

「この戦いがここに来て初めての戦いだったんだよなぁ……レジェンドさんやオーフィスちゃん、スカーサハちゃんにロスヴァイセさん、それに八坂さんや九重ちゃんにジャグラーさんも手伝ってくれたんだよね。僕一人じゃ勝てそうになかったな、あいつには。あ、土壇場で鬼灯さんにも助けられたんだっけ。僕じゃなくてレジェンドさんとオーフィスちゃんが」

「え？ロスヴァイセさんってその頃から一緒にいたんですか？」

「オーフィスちゃんが拾ってきたらしいよ」

「「「何故に!?」」」

「迷子だったみたい」

さらっと言うリクだったが、他の者達はなんで迷子なのか気になった……のだがあまり深く考えないようにした。

「あれ……？何人か聞いた事無い名前が出てきたわね」

「たぶん八坂さんや九重ちゃんの事じゃないかな？えーっと……確か九尾の狐の妖怪だったっけ」

「「「九尾の狐!?」」」

相変わらずウルトラ戦士の交友関係はとんでもない範囲である。ちなみにリクはそれ以上は言わなかった。

言えば確実にカナエやアーシアあたりから追求されそうだからだ。

「あと二人……ジャグラーと鬼灯って……ん？ジャグラー？」

「ほら、ガイさん……オーブのライバルだよ」
「なっ!?彼のライバル!?」
「この動画で僕を助けてくれたこの人だよ。普段は丼物屋『蛇倉苑』の店長だから、オーフィスちゃんとかはジャグラー店長って呼んでるけど」
「「「「そっちの方が驚きなんですが!?」」」」

ついでに言うと、ガイが京都に行った目的は無論、彼の店である。レジェンドが食したというカツ丼・戦士の頂盛りに挑戦すべく腹を空かせていったという。

「新幹線に乗る前にさ、ジャグラーさんがお弁当持たせてくれたんだ。あれ美味しかったなあ……」
「「……じゅるり……」」

タイガとフーマ、ゼノヴィアが涎を垂らした。リクの表情から明らかに絶品だというのが見て取れたからである。

「ねえリクさん、最後の鬼灯さんって?」
「レジェンドさん直属の九極天の一人で、レジェンドさんの右腕って呼ばれてるほど凄い人だよ。人っていうか鬼神か。今は日本地獄に出向して閻魔大王第一補佐官やってるってさ」

九極天と聞いて他のメンバーは驚くが、リクは別の事を懸念していた。

(地獄式運動会って何なんだろ……嫌な予感しかしないんだけど)

事実です。実行委員長に鬼灯、開催協力にレジェンドが携わった時点でもう恐怖しかない。

「えっと……日本地獄ってことは……」
「「「「鬼舞辻無惨!!」」」」
「なんか東方不敗って人が代わりに罰してくれてたから休暇も兼ねて来てくれたんだって。その人……人でいいのかな、これって……聞いた話だと宇宙艦隊を生身で壊滅させたとか、よく分からない装備を搭載した機体を一撃で容易く粉砕したとか伝説じみた戦績があったな」
「リクさん、ちょっと感覚麻痺してない？その人、明らかにおかしいとしか思えないんだけど」
「まあ、その人も九極天らしいから」
『ああ、なるほど納得……』

揃いも揃ってチートスペックだらけ……というかそれしか存在しないレジェンド直属の伝説九極天。
ついでにその中で最も良識があるのはダンブルドアか、もしくは先代九極天の親モスラだろう。

「あ、あの……」
「ん？何かな？えっと……そういえば僕は名乗ったけど君の名前聞いてなかったね」
「は……はい！ギャスパー・ヴラディです！えと……ジードさん……リクさんに聞きたい事があって……」
「たぶん今回の事はそれが理由だよね。何が聞きたいのかな？」

リクは嫌な顔をせずギャスパーに尋ねる。その表情を見て、ギャスパーは決心してずっと聞きたかった事を質問した。

「ど……どうやったら時間停止を自由に使いこなせるようになりますか!?」
「え？時間停止？時間停止……ああ！シャイニングミスティックのあれか！」

ギャスパーの質問にリクは一瞬何の事かと悩んだが、思い当たる事がたった一つだけあった為、割とすぐ思い出した。同時にギャスパーは自分の神器について説明する。
停止世界の邪眼（フォービトゥン・バロール・ビュー）。
所謂時間停止系に属する神器だ。この手のものは神器に限らず強大な力であるが故、所有者の能力が規定値に達していないと制御が上手くいかないのが大半である。
ギャスパーも例に漏れず制御が上手くいかなかった為、それが原因で封印されていた。
途方に暮れていた彼が偶然目にした動画、ジードがシャイニングミスティックにフュージョンライズして最後に決めた、時間停止を絡めた必殺のスペシウムスタードライヴ。
自分と同じ能力でありながらその範囲は巨体に比例して大きく、しかしながら停止解除までの時間さえ把握し、強敵キリエロイドⅡ相手に見事勝利を収めたジードはギャスパーにとって憧れであり、目標なのである。

「なるほど……でもそういう事なら僕よりゼロやレジェンドさんの方が詳しく教えてくれるかもしれないな」
「え？」

ギャスパーは勿論だが、トライスクワッド以外のオカ研メンバーも怪訝な表情になった。レジェンドはともかく、何故ゼロが出てくるのかと。その理由はすぐ明らかになる。
リクは懐から小さなカプセルを取り出した。

「これ、ウルトラカプセルって言ってね。僕はこれの力で戦ってるんだ。ギャスパー君が気になってる力を使った時に使用したのは、このウルトラマンのカプセルと……これ」

そう言って見せたのはシャイニングゼロのカプセルだ。ギャス

パーは興味深く見ているが、一誠の方も驚いている。

「え……!?リクさん、先輩の姿が違いますよ!?」

「うん。それは『輝きのゼロ』って呼ばれてるゼロの強化フォーム、シャイニングウルトラマンゼロだよ。単純に強くなるだけじゃなくて、時間操作能力もあるんだ」

『じっ……時間操作!?』

スケールが違い過ぎた。ギャスパーは時間停止に限られていたが、ゼロの場合は時間『操作』。ジードももしかしたら出来る可能性はあるものの、まだ明確にはなっていない。レジェンドは時間操作だけでなく時間移動さえ当然の如く行っているが、あれはそもそも規格外どころではないので除外しておく。

「ちなみにゼロも神器持ってるよ。攻撃力と防御力が大幅に上がって次元移動出来るようになるやつ」

「……俺そんな人に喧嘩売ってたのかよ……」

一誠はリクの話を聞いてボコボコにされなかった事に感謝すると同時に、若くして銀河遊撃隊の隊長という重役を任せられるゼロの凄まじさを改めて実感する。

「そういうわけで、僕が時間停止の力を使えたのはゼロのおかげなんだよね。あと、マンさんもウルトラエアキャッチっていう敵を空中で停止させる技持ってたし」

超強化形態であるシャイニングゼロとさえ素で並ぶマン兄さんはやはり格が違う。武器も強化フォームも無いのにこの扱い。ちなみに八つ裂き光輪ことウルトラスラッシュ限定ではあるが、８０はウルトラマンの弟子にあたる。

「あうぅ……そんなぁ……」
「ギ……ギャスパー、元気出せって」
「こうなったらゼロを呼び出すか？」
「いっそマンさんにお願いするとか……」
「んなもんホイホイ呼び出せんのレジェンドとかほんの一握りだろ」

さすがにレジェンドだっていたずらにマン兄さんを呼んだりはしない。ゼロがリブットを簡単に呼んだりするのとはワケが違うのだ（ボイスドラマ参照）。

「でもさ、ギャスパー君なら問題ないと思う」
『……え？』

突然のリクの言葉に彼以外が一斉に首を向けた。

「だから、ギャスパー君ならちゃんと神器を上手く使えるようになるって。僕が保証する」
「……リクさん、慰めは嬉しいのだけれど……」
「ガイさんから聞いたよ。この世界の神器がどういうものかって。強化や進化は所有者次第。特に心の在り方は強く作用するらしいし」
「……だったら、尚更駄目です……僕の心が弱いから周りに迷惑をかけて……」
「それだよ」

リクの言葉に再度首を傾げるオカ研一同。

「ギャスパー君は優しいから。だから大丈夫」
「えっと……リクさん、なんで優しいと大丈夫なんですか？」
「それはね、アーシアちゃん。レジェンドさんが以前ある人に対してこう言った事があるんだ。『こいつは心の強い男だ。そうでなくては優しくいられない』って。だから、他人を思いやる事が出来るギャス

パー君の優しい心が弱いなんて事は絶対に無い。あとは切っ掛けだけだよ」

リクが笑顔で励ますとギャスパーは涙ぐんでいる。悲しみの涙ではない事を理解したリクは、ついでにとリアス達に言う。

「それとさ、リアスちゃん達……ギャスパー君の事、神器が強力過ぎるとか、引き籠もりとか、稼ぎ頭とかそういう部分しか見てなかったでしょ。十分過ぎる程の材料があったんだからギャスパー君がどういう気持ちでいたのか、ちょっとぐらい考えないと。彼がこうして引き籠もってるのは優しいからっていう事だって、今改めて分かったんじゃない？」

「……返す言葉もないわ」

リアスを始めオカ研メンバーは俯いている。どうしても神器が強力な事や、それのせいで引き籠もりになっている事ばかりに目を向けてしまい、ギャスパーの本質的な部分を見ていなかったのだ。

逆にリクはすぐそこに気がついた。

「これからはしっかり見てあげてね。強過ぎる力を持っているとデリケートになっちゃうって事、よくあるから」

「……ジード先輩すげーな……」

「レジェンドや大隊長が肩入れするのも納得だ」

「総司令官の息子ってだけじゃないっていうか……その立場だからこそ周りをよく見てるっていうか……」

「まあ、僕自身生まれが特殊だし」

タイガ達がリクに感心していると、やはりというか気になる事が出てきた。生まれが特殊、という部分だ。

総司令官の息子というだけならそうは表現しないはず。

「あの……差し支えなければ、生まれが特殊……という部分をお聞きしても宜しいですか？」

朱乃が代表してリクに尋ねる。彼女も人間と堕天使のハーフという特殊な生まれだ。当然気になるだろう。

しかし、その答えはさらに衝撃的なものであった。

「……正確に言うと僕はウルトラマンじゃない。ウルトラマンの模造品……人工ウルトラマンとして生み出されたんだ」

『!?』

トライスクワッドは事前に本人から聞いていたが、他の者にとっては頭を金槌で殴られたような衝撃が襲った。

「僕が生み出されたのはさっき見せたウルトラカプセルが作られた後でね。あれの情報を得た宇宙人が、それを利用する為の器っていうか……道具にする為に造られたらしいんだ。そいつらはゼロが軒並み倒しちゃったから詳しい理由は分からないし、僕も別に知りたいと思わないから別にいいんだけど」

「そんな……道具だなんて……」

リクは普通に告げているが、オカ研メンバー……特に人一倍優しいアーシアや、彼に憧れているギャスパーは泣きそうだ。それ程までに彼が背負っているものは大きかった。

「それで、助けられた僕が預けられたのが父さんのところなんだ。父さんの遺伝子が使われて、僕が生み出されたから。突っ込んで言うと闇の方の父さんね」

「闇の方……？」

「今の父さんは分かりやすく言うと二重人格で、お互いがお互いを認識してて、合わせて一人の人物なんだよ。光と闇で見た目も全然違う

んだ。光の方の父さんは普通にシルバー族で、闇の方の父さんは……えーっと……ブラック族？まあそんな感じ」
「あの……リクさん、めっちゃ重い話題なんスけど……大丈夫ですか？」
「え？何が？」
『えっ？』

なんとリク本人は別段気にする様子もなく、いつも通りだ。本気で気にしていないみたいである。

「僕もさ、ギャスパー君みたいにこの力で誰かを傷付けてしまったら……とか考えた事もあった。でも、そんな時に父さんが言ってくれたんだ。『だったら俺相手に使ってみろ。どんだけ上手くいかなくて俺をブッ飛ばそうが、俺は何度だって立ち上がってやる。お前がその恐怖心の方をブッ飛ばせるまで何度でもな』って。その時、この人の気持ちを無駄にしちゃ駄目だって……何より自分の力から逃げたら駄目だって思ったんだ」
「自分の力から、逃げない……」
「うん。だからさ、父さんが僕の背中を押してくれたように、今度は僕がギャスパー君の背中を押してあげようと思う。これから一緒に頑張っていこう！」

この言葉に感極まって、ギャスパーはリクに抱き着いて泣き出してしまう。そんなギャスパーを優しく撫でながら頷くリクは紛れもなくお兄さんだ。
しかもアーシアも釣られて泣き出し、トライスクワッドまで貰い泣き。

「良かったですぅ……！」
「やっべーよこれ旦那の過去話聞いたとき並にクるわ……！」
「ベリアル総司令……貴方の御子息は立派なウルトラマンだ！」

「そういえば、ベリアル総司令も俺達が遊撃隊に配属された時、そんな感じで言ってくれたよな……！」

キング側の【エリア】ではクライシスインパクトなんぞ引き起こしたベリアルとはエライ違いである、遊撃隊総司令官。親バカでもなく、厳しいといってもセブン（ジープ突撃）やレオ（テクターギア着けさせてフルボッコ）、レジェンド（生身で強力怪獣群に挑ませる）ような理不尽な特訓はしない。……正直、タロウやサーゼクスは見習うべきだと思う。

「はいぃ……僕、頑張りますぅ！」
「よし！じゃあ今日は僕達遊撃隊がどんな戦いをしてきたのか記録映像を見せながら話そう！」
「え!?あの、私達もいいかしら……？」
「へ？だってギャスパー君と親交や理解を深める為でもあるんだし、リアスちゃん達もいなきゃ駄目でしょ」
「いやあのジード先輩……？何なんだ、その『ウルトラマン物語（ストーリー）』って……」

何故かリクが手にしていたのはウルトラ六兄弟メインの話の記録映像。遊撃隊の話は何処行った。

「レジェンドさん曰く、タロウさんの成長の物語」
「よし皆！ちゃんと最後まで見よう！」
「何かタイガがいきなり正座して画面から目を離さなくなった!?」
「親父さんの事になると相変わらず判断早いなお前!?」
「ちょっと!?遊撃隊の事じゃなかったの!?私も興味深いけど！」
「部長も興味深いんですね」
「ハハ……まあ、有名どころが勢揃い……あ、父さんと同族が出てるんだ。何か父さんと違って強そうに見えないな」
「ジェント殿は素晴らしくマッシブだからな！」

先程までの重い話から一転、いつものオカルト研究部に戻った。ギャスパーも交え、様々なツッコミを入れつつも上映会（？）は楽しく行われ、今後の特訓への良い点火剤にもなったので、結果は上々。

「父さん、昔はヤンチャで……俺みたいな時もあったんだ……」
「やっぱ矢的先生スゲー！」
「しかしウルトラマン……なんと見事な大胸筋だ！」
「そこなの!?私は何でも出来るタロウさんのお父様が凄すぎだと思ったのだけれど」
「つーかその大隊長倒したヒッポリト星人ヤバすぎだろ」

そんなこんなで、リクをギャスパーと会わせた事は間違いなく成功だったと言えるだろう。
少しずつ迫ってくる三すくみの会談、それまでにギャスパーはどれだけ成長出来るのか。
ただ一つ言えるのは……

「あのぅ……リク兄さんって呼んでもいいですか？」
「ん？いいよ。僕が兄さんかぁ……周りが年上ばかりだったから凄く新鮮だな」

この二人に確かな絆が生まれたという事である。

〈続く〉

次回予告
三すくみの会談が迫る中、空の世界では金属生命体がアウギュステに現れる。

それを撃退したウルトラ騎空団であったが、金属生命体は思いもよらぬ姿へとその身を変化させる。
時を同じくしてアウギュステの海に半龍半魚の怪物が確認された。
変化した金属生命体に町が、怪物に海が脅威に晒される中、赤き巨人と対を成す青き巨人がアウギュステの海を割り姿を現す。

次回『ＳＩＤＥ　ＡＧＵＬ　大海戦！巨人対巨人』

……そして……

「今は静観していろ」
「やはり狙うならば……月でも星の世界でもなく、空の世界か」

空の世界で、大いなる二つの絶望が少しずつ動き始める――

ＳＩＤＥ　ＡＧＵＬ　大海戦！巨人対巨人

空の世界――

我夢＝ガイアがジークフリートや白竜騎士団、ゼタやバザラガにシエテらとフェードラッヘで起きた事件を解決した頃、時を同じくして残りのウルトラ騎空団メンバーはアウギュステに居た。

別にバカンスというわけではなく、最近謎の飛行物体がよく目撃されるという情報を仕入れ、それの調査を行う為である。

総指揮を取るのはやはりアルケミースターズの一員でもある藤宮博也。その補佐には十天衆創始者のウーノが抜擢され、他の者は聞き込みやエリアル・ベースの警護に当たっている。

「……空飛ぶ四本槍？」

「はい～。目撃者の話だと、何でも銀色の巨大な槍が四本、このアウギュステの海に飛んでいくのを見たそうです～」

藤宮とウーノは現在、アウギュステに商談に来ていた万屋を営むハーヴィンの女性・シェロカルテに話を聞いている。

彼女にはレジェンド一家に先んじて我夢と共に空の世界へ来て以来、藤宮にとっては顔馴染みの相手であり、同時にウーノとも十天衆の中で特に親しい。

「そういう姿の星晶獣……とも考えられなくはないが」

「ウーノでも分からないのか」

「すまない。そもそも星晶獣自体、我々にとって未だ未知の存在である部分が多くてね。どれほどの種類がいるのかさえ定かではないから、今の見解ももしかしたらという可能性でしかない」

「四本……槍……空を飛ぶ……っ！」

「藤宮、どうかしたのかい？」

顎に手を当てて考える素振りを見せていた藤宮だが、何かを思い出

したような反応をしたのでウーノは藤宮に問う。

「ああ。一つだけ思い当たる節がある。思い出したくもないし、当たっていてほしくもないがな」

「もしや……君の言っていた根源的破滅招来体に関係しているのか？」

「例の槍が俺の予想している奴と同じなら関連性はある。連中が根源的破滅招来体に送り込まれている確証はないが、おそらくその可能性が高い」

「なら、一刻も早く調査した方がよさそうだ。シェロカルテ、その目撃情報はどの方向に？」

「え～とですね～……って言ってるそばから出ました～！もしかしてあれじゃないでしょうか～！」

「!?」

シェロカルテが指差した方向を向くと、そこには目撃情報に違わぬ形の四本の槍がアウギュステの海へ飛んでいくのが見えた。

藤宮はそれを見て自身の予想が当たった事を確信する。

「間違いない……！奴は金属生命体だ！」

「「金属生命体!?」」

「俺と我夢、チーフもやり合った事がある。ウーノ、どうやら本格的にこの世界も無関係ではなくなってきたぞ」

藤宮は金属生命体が飛び去って行った方向を睨みつつ、根源的破滅招来体がこの世界にも関わりだした事を告げる。

なお、シェロカルテには事前に説明していた為、こうしてこの場でも包み隠さずに言う事が出来た。

「何にせよ追って撃破するぞ。あの方向には確か……」

「ソーンとサラーサがいたはずだ。すぐ彼女らに連絡して、迎撃態勢

を取ろう。あわよくば彼女らだけで仕留められればいいんだが……」
「それに関しては奴の特性上、あまり期待しない方がいい。近くにいる団員に集合をかけて、一気に畳み掛ける！」

ウーノは藤宮の言葉に頷くと、藤宮と共にウルフォンで周囲の団員に呼びかけながら金属生命体の飛んで行った方向……ベネーラビーチへと急行する。

☆

多くのリゾート地があるアウギュステでも特に有名なベネーラビーチ。そこに向かって飛んでいた金属生命体を、ウルトラマン並と言っても過言ではない視力を持つ十天衆のソーンが捕捉した。

「あれね。連絡にあった金属生命体って。確かに珍妙な形だわ」
「んー……？あ！あたしにも見えた！でもなーあんま強そうに見えないぞ？グレイフィアの方が強そうだ！」
「まあ、彼女は団長お付きのメイドだし……っていうかそこはゼットとかじゃないの？」
「ゼットはウルトラマンだから別枠だ！あと、レジェンドとリク、我夢と藤宮も！それよりソーン、そろそろ近づいてきたぞ？倒さなくていいのか？」
「そうね。手早く片付けるとしましょうか」

同じ十天衆のサラーサと会話も程々に、金属生命体を討つべく魔導弓を構えるソーン。同様にサラーサは斧を構えた。
……そこ、別の世界にいる世界チャンピオンの娘とか、身体は子供・頭脳は大人な名探偵と声が似ているから素手とかキック力増強シューズで戦えとか言わない。

「悪いけど、最初から本気で行くわ。アストラルハウザー！」

ソーンの魔力で精製された無数の矢が魔導弓から放たれ、四本の槍の形で飛んで来た金属生命体に一つ残らず直撃し大爆発する。

「あー！・ソーンズルいぞ！・あたし空飛べないんだからちょっとは叩き落とすぐらいにしてくれよ！」

容赦なく奥義をぶっ放したソーンに対して、戦いたくてしょうがなかったサラーサは猛抗議。

「……サラーサ、心配しなくても大丈夫みたいよ。喜ばしくない事だけど」

「へ？・何でだ？」

真剣なソーンとは裏腹に間抜けな声を出したサラーサだったが、直後にそれは訪れた。

爆発の煙の中から何かが現れたのだ。四本の槍ではなく、鋼鉄の鎧を着込んだ騎士か戦士のような外見、最近では駒王の隣町でメビウスが交戦した金属生命体に酷似している。

それもそのはず、同じ金属生命体にカテゴライズされる存在なのだから。

金属生命体アルギュロス。

かの存在はソーンとサラーサを敵と見定め両手を向ける。魔導弓による遠距離広範囲殲滅を得意とするソーンは一先ず浮遊術で間合いを取ろうとするが、サラーサは相手が何だろうとお構いなしに突撃していく。

「よっしゃ！・あたしもやるぞー！」

「ちょっと、サラーサ!?」

「グラウンド・ゼロ!!」

ソーンの静止に耳を貸さず得意技の一つをアルギュロスにぶっ放すサラーサ。
怪力乱神な彼女の一撃は凄まじく、巨大な爆風と衝撃波がアルギュロスに直撃する。よもやドラフの少女とはいえ想像を遥かに超えた攻撃をしてくるとは思いもよらずアルギュロスはよろめく。
「おおっ!?なんか普通に耐えた！お前凄いな～！」
「感心してる場合じゃないわ！早くそこから離れ……!?」
何故か喜ぶサラーサを諌めて一時後退を促すソーンだったが、悪寒を感じてアルギュロスを見るとアルギュロスの両手が大砲に変化していた。そして驚くソーンや未だ喜んでいるサラーサへ向けて連射する。
「くっ!!」
「へ？うわっ!?」
二人は回避するが、アルギュロスは休む間もなく右手を剣に変え、より遠くへ後退したソーンを一瞥しつつサラーサへとその右手を振り下ろす。
「サラーサっ!!」
ガキィィィン!!!
「んっ……ぐっ……お……重いぃぃぃ……」
腰まで砂浜に埋まりつつも斧でギリギリ受け止めて、なんとか耐えているサラーサ。ぶっちゃけこの時点で色々とんでもない。
急いでソーンはサラーサを救出しようと魔導弓を向けるが、それよりも早くまたもアルギュロスにとって予想外の事態が巻き起こる。

「蓮天紅我正拳突きいいい!!」
ドゴオオオオオン!!!

突如アルギュロスが吹っ飛ばされたのだ。
拳で。
大きくではないものの、サラーサが危機を脱するには十分過ぎる一撃だ。
そのままアルギュロスを吹っ飛ばした声の主はサラーサの両手を片手で掴んで砂浜から引っこ抜く。

「間に合ったようで何よりだ」
「おおー!ガンダゴウザのじーさん!」
「如何にも!儂が古今無双流が開祖!ガンダゴウザであぁぁるッ!!」

ウルトラ騎空団のメンバーの一人、古今無双流開祖である空の世界において伝説の格闘家・ガンダゴウザ。
御年72歳にして老いて尚盛んどころではない筋肉隆々の肉体を持つドラフの老人である。
隕石を拳で破壊するとかその巨体で魚並みの速さで泳ぐとか色々逸話（なんてレベルじゃない）を持つ御仁で、あろう事かレジェンド……ではなくゼットを弟子にしようとした。まあ、結局弟子にはならないが修行に付き合うという事で落ち着いている。
なんとなく東方不敗と仲良くなりそうだが、それはさておき彼以外にも騎空団メンバーが何人かが後から駆けつけてきた。

「あかん、出遅れた～!せっかく活躍して団長にアピールする作戦パーになってもうた～!」
「ユ、ユエルちゃん……さすがにあれをウチらだけでどうにかするん

は無理やと思うよ？それに、団長はん今は居らへんし……」

ユエルとソシエの幼馴染な女性エルーンコンビ。元気な方がユエルで、ちょっと控えめなのがソシエ。この二人、とある王家出身らしく、エルーンでも珍しい尻尾持ちだ。しかも、もふもふ。……しのぶは大丈夫なのだろうか、割と本気で。

「しかし……これは骨が折れそうだな。いや、金属生命体というからには雷は予想外の効果が出るかも分からんか」

レヴィオン騎士団の団長でもある、雷迅卿の二つ名を持つヒューマンの男性・アルベール。別に鏡を使った攻撃が得意だったりするわけではないし、鏡の中で体育座りしてたりもしない。

渾名はビリビリおじさん、略してビリおじだ！

「俺はおじさんと呼ばれる歳じゃない!!」

アルベール、現在２５歳。全然お兄さんの部類だ。ついでに説明するとこの場にいる者達の年齢だが、ソーンは２２歳、ユエルとソシエは１９歳、サラーサは拾われた為不明、そしてガンダゴウザは７２歳。……おまけでレジェンドは（最低でも）桁が５０万個歳。５０万歳ではない。兆とか京とかでも全然桁が足りない。

……そりゃ、誰とくっついてもロリコン扱いされるんだから色々吹っ切れるわな。

最後にサーガの年齢は桁が３０万個。こっちも大概だが、レジェンドはサーガが生まれてから育ててきたので正確な年齢は分かるらしい。こんな年齢じゃ覚えてても大して意味が無さそうな気もするけど。

「む？奴が起き上がる……いや、海に逃げる気か!?」

「なんで金属なのに海に逃げるん？錆付くだけやん。てか沈んで浮い

て来んかったりして」
「でも、ウチらの常識と違うかもしれへんし……油断出来へんよ」
（確かに彼女らの言う通りだ。いくらこちらに戦力が集まりつつあると言っても逃げに転ずるのが早すぎる。奴があの姿をとったのはソーンの魔導弓が直撃してからだったはず）

怪訝な表情をする周りの中で唯一、アルベールはアルギュロスを深く観察していた。
アルギュロスは最初のように四本にはならなかったが、巨大な一本槍に姿を変えて海と飛び込み、海中へと消える。

「……ホンマに逃げよった」
「ど……どないしよう……？」
「簡単だろ、海を真っ二つにして一緒にあいつも真っ二つだ！」
「もう……何言ってるの。あれがまた仕掛けてくるかもしれないし、避難とか注意喚起するのが先よ。手分けして……」
「待たれよ！何やら海の方に動きが見えおる」
「「「え？」」」

女性陣が一斉に海の方を向くと、海が波打ったかと思えば巨大な水柱が立った。

「おっ！やっぱりやる気だったんだな！」
「待て、あれは……！」

ドオオオン！と砂埃を舞い上がらせて砂浜に着地した、水柱の中より現れたものは先程の金属生命体アルギュロスではなかった。
青い体色が目を引く、ゼットによく似た存在。

『ウルトラマン!?』
（確かにゼットに似ている。しかし何だ、この違和感は……）

アルベール以外は純粋に驚いているが、訝しげな表情の彼と違い他の者達は逆に安堵している。一部はガッカリしていたが。

「なんや、逃げ込んだ先にあのウルトラマンがいて返り討ちにされたんやな、きっと」

「本当にそれならええんやけど……」

「むう……儂は一撃しか打ち込めなんだ……」

「あたしもー！不完全燃焼ってやつだー！」

「あら？藤宮とウーノ、ようやく来たのね。実はたった今「今すぐそいつから離れろ!!」……え？」

藤宮の叫びにソーンや、アルベール以外の仲間達もどうしたと思った瞬間、光弾が彼らのいる場所へと放たれた。

「「きゃあああっ!?」」

「「うわあっ!?」」

「ぬおっ!?」

「くっ!?」

辛うじて六人は回避するが、何発もの光弾が彼ら……ではなく、近くの船着き場に停泊していた多くの漁船へと直撃し、激しく燃え上がる。

「うわあっ！俺達の船が！」

「早く消火しろ！どんどん燃え移るぞ！」

漁師達がてんやわんや状態に陥り、藤宮やウーノ、ソーン達騎空団のメンバーもそちらに向かおうとする。

追撃に警戒していた彼らだが、その気配は全く無く怪訝に思った全員がそのウルトラマンを見るが、その場の全員が注目した瞬間、藤宮

以外が驚愕した。

「フッハッハッハ……」

なんとウルトラマンが口元を歪めて笑ったのだ。

ウルトラマンはそういった事はほぼ無いに等しく、彼らの知るゼットも感情の変化は声色や動作などで分かるが表情は変化しなかった。

他の者が驚愕する中、藤宮は忌々しいものを見る目で睨みつけるが、そのウルトラマンらしきものは再び海中へと消えてしまう。

「な、何やアイツ！ウルトラマンやからって安心させてこれかいな！」

「違う……！」

「ふ、藤宮はん？どないしたん？」

「奴はウルトラマンじゃない……！」

藤宮はそう短く答えると再び船着き場へと向かい、漁師達に混じって消火活動を行いだす。それを見て他の者達も急いでそれに倣って消火を手伝うが、殆どの船が使い物にならなくなってしまった。

僅かに船は残っているが、それも片手で数えて足りてしまう程度だ。

「そんな……これからが忙しくなるって時に……」

「あの巨人のせいだ！あんな奴がいなければ……！」

「きっと直前に現れた化け物もあの巨人の手先だったんだ！」

「……」

次々と怒りや恨みを口にする漁師達の言葉を聞き、藤宮は俯いて唇を噛みつつ拳を強く握りしめる。いつもと違う彼のその様子を仲間達は心配そうに見守っていた。

☆

空の世界の宇宙。
地球に相当する空の世界と、それと共にある『月』。その二つの星を宇宙空間で見つめる一つの存在。
「なるほど……既に何者かが先手を打って干渉し始めているのか。だがそれはこちらとしても都合がいい。我々もそれに便乗させてもらうとしよう」
空の世界を見てそう呟くと、その存在は月の方を向く。
「数多の世界において、月は古来より神秘的な場所と見られていると同時に、魔力の象徴として扱われる事も多い……そして、それは事実だ」
その存在が月に手を翳すと、月が淡く発光する。
ここで『月の民』が異常を感知するも、まるで理由は判明せずそれを起こした存在を突き止める事さえ出来ない。
「あの世界には精霊が当たり前のように存在する。目視出来るものかは分からないが、その精霊が月の『魔力』の影響を受ければどうなるか……もっとも、月に住まう者達は自分達の住処としてる場所に秘められていた力を知らなかったようだがな」
愚か者を見るように、その存在は徐々に光が収まり元のような静寂に戻っていく月を見ながらそう言うと、一瞬でその場から消えた。
☆
その日の夜、藤宮らは一旦エリアル・ベースへと戻り今後の対策を考える事にしたが、こういった事態に一番遭遇した経験がある藤宮は

すぐに自室へと戻ってしまい、結局まともな意見が出ずにお開きとなった。
　ウーノが何か思い悩んでいると、同じ十天衆のニオが声をかけてくる。

「どうしたの、ウーノ。雰囲気もそうだけど、いつもの旋律が乱れてる」
「ああ、ニオ……何でもない、というのは君には通用しないか。ちょっと藤宮の事でね」
「私も気になってた。ここへ彼が帰ってきた時、彼の旋律が酷く不安定だったから」
「そうか……やはりあのウルトラマン……に似た存在が原因だろうね」

　ニオはそれを聞いて、昼間ウーノ達が遭遇したという金属生命体、及びウルトラマンに酷似している存在を思い出した。藤宮はあれと遭遇してから今の状態になったようなものだ。

「私の方からそれとなく聞いてみるよ。彼とはよく話すからね。ニオ達はあまり彼に突っ込んで聞かないようにしてほしい」
「うん、分かった」

　短く頷くと、ニオも自室へと戻る。その際「団長、早く帰って来ないかな」と呟いたのをウーノは聞き漏らさなかった。

（彼が元の世界に戻って暫くだが、相変わらず愛されているな。彼なら藤宮の悩みを解決出来たかもしれない……が、いない者を頼ったところで事態は好転しない。今日はもう遅いし藤宮も休んでいる。無理に起こしてもまともな会話が出来るとも思えないし、明日改めて話すとしようか）

そう結論を出すと、ウーノも自室へと戻った。
しかし彼らがエリアル・ベースで夜を明かしている間に、ベネーラビーチの船着き場ではさらなる被害が齎されていた。

翌日、あのウルトラマン似の存在への対抗策を練るべく再びベネーラビーチを訪れた一行だったが、何やら船着き場から騒ぎが聞こえてくる。
何事かと思いそちらに行ってみると、そこには昨日残っていた僅かな船は見るも無残な姿になっており、数名が大きな声で訴えていた。
「確かに見たんだ！海の中にいた何かが、触手みたいなものを幾つも伸ばして船を壊したんだ！」
「ああ、間違いない！俺も見た！昨日の奴とは違う怪物だ！またあの巨人が何か差し向けてきたに違いない！」
どうやら金属生命体とは別の怪物によって残りの船が破壊されてしまったようなのだが、漁師達はそれすらも先日のウルトラマン似の巨人の手引きによるものだと言い出し、藤宮はそれを聞くと昨日と同じ表情になる。
「ね、ねえ藤宮？昨日から何か変よ？大丈夫？」
「……別に、どうもしていない」
ソーンが藤宮を心配するが、ぶっきらぼうに言うと一人で別方向へ行ってしまう。
「あ！藤宮、ちょっと！」
「ここは私に任せてくれないか。ソーンは皆と情報収集を頼む。細かい事でも構わない、そこから何か糸口が掴めるかもしれない」
「ウーノ……ええ、分かったわ。彼の事、宜しくね」

「期待に応えられるかは分からないが、全力を尽くそう」

ソーンはウーノの返事を聞き、昨日と同じメンバーを連れて情報収集にあたる事にする。ただ、ガンダゴウザとかサラーサはまともにそれが出来るか不安だったが。

それを見送ったウーノは急いで藤宮を追う。おそらくだが彼はある方法を取るはずだ、と予想していた場所へ急ぐ。

☆

藤宮はエリアル・ベースの格納庫から一つボートを持ち出そうとしていた。潜水艇の類の方が良かったが、自動操縦装置が付いているか確認する時間も惜しく、一度壊れると修理に時間が掛かる為、ボートの方にしたのだ。

「万が一と我夢が追加で作っていった予備のジェクターガン、それから……雨具。こっちはなんで用意したんだろうな、俺は……まあいい。奴が出て来ないならこっちからおびき出してやる」

そう、怪物の方はともかく、ウルトラマンに似た姿の方はこの世界でのウルトラマンの信用を失わせるべく現れたと考えた藤宮は自ら囮となっておびき出し、自身の手で決着をつけようと思い立ったのである。

「ヒカリという奴が言っていたな……疑惑を晴らすには、まずは相手を戦いの場に引きずり出す事から始める必要があると。あのアグルもどき、二度も俺を怒らせた事を後悔させてやるぜ……!」

「……やはり、アレは君がウルトラマンになった時の姿を模したものだったのか」

「!?」

準備を終え、戦いの場に向かおうとする藤宮はそれ以外の事に注意散漫になっておりウーノが近くに来ていた事に気付かなかった。

「ウーノ……」

「すまない。本当ならこういった形ではなく、ちゃんと落ち着いた場で聞きたかったのだが、君があまりにも切羽詰まった様子だったのでね」

「……いや、俺が勝手に喋っただけだ」

「藤宮、まさか君は一人で戦うつもりかい？だとしたら無謀すぎる」

「……俺はかつてアイツと全く同じ奴と戦った事がある。俺が倒さなければ、俺は……アグルは一生誤解されたままだ。そして、それはこの世界でウルトラマンがその存在を認められない事にも繋がる。これは俺だけの問題じゃない」

この言葉にウーノは何も言えなくなった。仮にその偽物を自分達が倒しても、藤宮の言う通りウルトラマンそのものが認められないとなれば、再びレジェンドやゼットらが来た時……特にまだ人間体になれないゼットへ風当たりが凄まじい事になる。アストラル体とはいえタイガ達トライスクワッドに関してもそうだ。

そうならない為に、彼はたった一人で死地へと向かおうとしていた。

「そうか……」

「止めるのは構わないが、そうなったら力づくでも行かせてもらうぞ」

「そこまで考えているのに止めはしないさ」

「……以外だな。単純な強さならウルトラマンになっていない俺とあんたではあんたの方が比べるべくもなく強いだろうに」

「君がただのプライドだけで動こうとしていたならそうしていた。だが、君はここにいない者達の事もしっかり考えている。ならば止める方が間違っているだろう」

ウーノが引き下がった事に若干驚きつつも、藤宮は感謝しつつ三度ベネーラビーチへと向かおうとするが、ある事に気付く。

「ウーノ」
「なんだい？心配しなくても他の皆は私が説得するよ」
「それはありがたいが、俺が今聞きたいのはその事じゃない」
「？」
「いくら何でも……天気が変わり過ぎだ」

外を見ると、雷が鳴り大雨が降り強風が吹いていた。

「なっ……!?さっきまでは雲一つ無い快晴だったというのにこれは……！」
「この島にそういう星晶獣がいるという話は？」
「いや……水や海に関する星晶獣ならともかく、天候にこれ程まで関与するとなるとティアマトくらいの力が必要だ……そのティアマトは確かポートブリーズに加護を与えているはず。この島まで影響を及ぼすまでは到らないだろう」
「……あのアグルもどきにこんな力はない。あるとすれば……」
「新たに現れたという怪物か……！」

ウーノのその言葉に頷いた藤宮は、彼と共にベネーラビーチへと急行する。

☆

突然大荒れとなった天気にソーンらは急遽シェロカルテの有する海の家へ避難していた。正直、強風のおかげで完全には雨風を防げないが、屋根があるだけで大違いなので文句は無い。

「あ～もう何なん!?山の天気は変わりやすい言うけどここは海やんか

！」
「この天候では何か合っても天雷剣を全力で振るえないな……雨水のせいで身体が濡れているから全員に感電しかねない」
「おかしいですね～。アウギュステではこの時期多少荒れる事はあってもここまで酷くなる事はないはずなんだすが～。しかもこんな急に～」

長らく商売をしてる彼女からしてもこの島でこんな荒天は今までで初めてのようだ。さすがにこれは異常だと全員が感じた瞬間、それは現れた。

「沖に何か見えおるな……」
「あたしにも見えた！なんかドラゴンっぽいけどドラゴンじゃないような、あとウネウネしたのもあるぞ」
「う、うちはあんまり見えへんのやけど……ソーンはんは見えはるやない？」
「……何、あれ……!?」

ガンダゴウザやサラーサという視力がおかしい面々に囲まれたソシエがおどおどしつつソーンに聞くと、彼女が見たのは正に異形の怪物。

「ギシャアァァァッ!!」

雷鳴轟く嵐の海に姿を現したのは龍……海龍の上半身と巨大な魚の尾のような下半身を持った化け物。
謎の存在が月の魔力をこの空の世界の海にいる精霊に注ぎ込んで作り上げた魔獣。
海神ムーバ。
星晶獣や金属生命体とは全く違う怪物の出現に騎空団のメンバーのみならず、一緒に避難していた漁師達も戦慄した。

「あ……あいつだ！昨日見た化け物は！」
「俺達の船を壊したのはアイツか！」
「どうするんだ！あんなのに勝てるわけがない！ましてこの嵐の海で！」

漁師達はさすがに怖気づいてしまっている。無理もない、漁師だからこそ嵐の海の恐ろしさを知っており、しかもそこで暴れているのは規格外の化け物だ。
さらに……
「ぬう……この悪天候でさえなければあの怪物に拳の一つも叩き込めたものを……」
「ソーンはんの魔導弓でも厳しいん……？」
「狙えなくはないけど……時折雷で空が強く光るから目が……」

騎空団のメンバーも一撃必殺型のガンダゴウザは飛び道具を持たず、頼みの綱のソーンも超視力の魔眼が雷光に対して逆に裏目に出てしまい満足に攻撃が出来ない。
サラーサに至っては威力は十分だが射程距離的に難しく、そこから下手に威力を上げれば周りの方が被害を受ける可能性が大きい。
本気で手詰まり状態のところへ雨具を着たウーノが駆けつけてきた。
「皆、揃っているね」
「ウーノ！藤宮は？」

その問い掛けにウーノは船着き場を見る。その場にいたメンバーもそちらを向くと、なんと藤宮が既に持ち出したボートに乗ってムーバへと向かって行くのが見えた。

「なっ!?何をしているんだ!!無茶にも程があるぞ!!」
「えー!藤宮だけ戦いに行くのか!?ズルいぞ!」
「そうじゃないやろ!なんであんな命捨てるようなマネするんや!」
「ウーノ、なんで止めなかったの!?」
「……彼が望んだ事だ。あの巨人を倒す為に」

ウーノ以外が絶句した。巨人を倒すとは言うが今日はまだその姿を現していない上に出てきたのは未知の怪物。
この嵐の海でまともな対抗手段を持っていない藤宮では自殺行為でしかない。

「彼はこう言っていた。『おそらく奴は俺が絶体絶命の時を狙って現れる』とね。しかも狙うのは彼ではなく我々だろうとも」
「え……?よう分からんのやけど……なんで藤宮はんが危険な時にトドメをささへんの?」
「絶体絶命の時ならば自分が手を下さずともその命が消える、奴ならそう考えるだろう……そうも言っていたよ。しかもお誂え向きにあの怪物まで出てきている。条件としては願ってもない好機だ」

見たところ、サラーサが言っていたウネウネとはムーバの触手。藤宮はそれで自分を海中に引き込むだろう事を予想していた。そして引きずり込まれたタイミングで巨人……アグルもどき改めニセアグルは姿を現すはずだ。

「それは……藤宮を犠牲にするという事か!?」
「いや、違う」
「ならばどうする?儂らだけで昨日の奴も含めて二体、倒しきれるとは思えぬぞ。無論、やる気ではあるが」
「考えてみたまえ。何故彼があの巨人に執着しているのか。何故あんな無謀な方法をとったのか」
「……なんでだ?」

「分からないか、サラーサ。彼は我夢と同じであり、我々から見て絶体絶命の状況に陥っても、それを脱する方法を有しているという事だ」

これを聞いてようやく合点が言った。先日サラーサ自身が言ったのだ。『ウルトラマンだから別枠だ』と。

今まで変身した姿を見たことがなく、今回もすぐに変身しなかった上に藤宮の様子がおかしかった事も相まってすっかり頭から抜けていた。

「彼の話を聞いたが、あの巨人は藤宮が変身したウルトラマンを模した存在らしい。名前はアグルというそうだ」

「アグル……」

「なるほどなぁ。ならアイツは藤宮の偽モンやし、ニセアグルやな！」

「あれをそのままにしておけばウルトラマン全体が悪者扱いされかねないと、彼が彼自身で決着をつけようとしている。我々に出来るのは偽物が出てきた時、藤宮がウルトラマンになるまで偽物を食い止める事。問題は奴が藤宮の思惑を外れ、彼が命を落としてから現れないかという事だ。ウルトラマンとなった藤宮が偽物を倒して、被害を出したのがウルトラマンではないと証明しなければならないのだから」

「……そこは、賭けるしかないわね。藤宮の考えが当たる事に」

そう言っている間にも藤宮はボートでムーバの近くへと進んでいく。手にしたジェクターガンで銃撃しつつ注意を自身へと向けさせている。

ついにムーバが海中から触手を伸ばして藤宮を捕らえ、自分が海中へと潜る時に一緒に引きずり込んだ。

……藤宮はしっかりと右手は動かせるよう、右手を防御しながら。

「藤宮はん……！」

「彼を信じよう。あとは……！」

「出てこい昨日のデカいやつー!!」

サラーサが斧を構えて叫ぶ。こんな状況だというのにいつもと変わらぬ調子なのが少し羨ましい。
そんなサラーサを見つつ、ウーノも槍を構える。年の離れた、世界を超えて出来た友人を気にかけながら。
（藤宮……もう少しだけ頑張ってくれ。私の勘がもうすぐ奴が現れる事を告げている。あと少しの辛抱だ……！）

☆

海中に引きずり込まれた藤宮は、遊撃隊での訓練やレジェンドによる修行のおかげで少しだけ余裕があった。
とはいえ、そう長くは持たない。そう思った時、横を向くとある程度距離はあったが、ニセアグルが海中におり捕らえられた藤宮を見て先日同様に口元を歪めて嘲笑う。
（やっぱりいたな……アグルもどき！）
藤宮のその姿を確認したニセアグルは即座に海中から飛び出す。
そう、藤宮の狙い通りに。
もはや海中で耐える必要は無い。藤宮はこの状況を打破すべく、右手の拳を握り、右手首をムーバへ見せるように手前に構えた。
その瞬間、藤宮の右手首に装着されていたアグレイターが回転展開され、青いエネルギー波を放出する。
今こそ、逆境を覆す時。

☆

藤宮が海中へ引きずり込まれて間もなく、入れ替わるようにニセアグルが海中から飛び出してきた。

「来たか……！」
「偽モンやって認識変えると納得出来たわ！よくよく見れば同じウルトラマンのゼットと違って目の色とか怪しさ満点やないか！」
「んん？くんくん……あの偽物からなんか変なニオイするぞ？どっかで嗅いだ事あるような……」
「うちもよく聴くと変な音が聴こえるんや……ガコンガコンって……」
『え？』
「まさか……！」

アルベールが何かに気付くと同時に、海中から強い光が発せられ、その光はムーバを海上へ吹き飛ばしながら雷雲を貫き再びアウギュステへと太陽の光が差し込んでくる。
目が良すぎるソーンは突然の事に目を覆うが、他の者達は光が放たれた場所を見た。
青く、穏やかで巨大な光が海中で輝いている。

「あれは……」
「いよいよ、本物の登場だ……！」

その青い光をウーノ達だけでなく、漁師達や、さらには吹き飛ばされたムーバ、攻撃しようとしていたニセアグルまでも見入っている。
光の放つ輝きはアウギュステの町へも届き、何事かと住民や観光客も次々と窓を開けたり外へ出たりしだした。
そしてさらに驚くべき事が起こる。

「おい、あれ！」
「あれって……」
「リヴァイアサンだ！この島に加護を齎す星晶獣だ！」

その光の輝きに呼応するかのようにアウギュステ列島に加護を与えている星晶獣リヴァイアサンまでも顕現したのだ。
光は輝きを維持したまま少しずつ人の形をとっていく。それと同時に最大級の驚愕が巻き起こった。
なんと海が光を中心に割れていくのである。
まるでその光から生まれいずるものを祝福するかのように、アウギュステの海は真っ二つに割れた。そして、光は完全に人の形を形成し――

「ディアァッ!!!」

ライフゲージを力強く輝かせ、青き海の巨人ウルトラマンアグルがその姿を現した。
アグルは跳躍し、ニセアグルと向かい合うように砂埃を上げて着地する。ニセアグルはまさかあの状況を脱して本物のアグルが出てくると思わなかったのか動揺しているのが見て取れた。
そんなニセアグルに対してアグルは逆手で手招きする。

――かかってこい――

正しく挑発であるその行為を目にしたニセアグルはアグルに向かって突進するが、真正面から受け止められただけでなく顎を打ち上げられた。

「ディアッ!!」
「ヴオッ!?」

その結果足が大地から離れたのをアグルは見逃さず、さらに蹴り上げ、自身も跳躍し追撃を加える。

「ハアァァァ!!ディアァッ!!」
「オ゛アッ!!」

連続キックで打ち上げられ続け、最後の強烈な一撃で海へと蹴り飛ばされたニセアグルはそのまま海へと落下。アグルもそれを追い、戦いの舞台はアウギュステの海へと移る。
そんな時、サラーサとソシエは揃ってある事を思い出した。

「あー!思い出したぞ!偽物のニオイ、あの時のデカい奴と同じニオイだ!」
「なんと!?」
「うちもや……!ほんの少ししか聴いとらんかったから思い出すのに時間かかったけど……昨日、偽物が出る前に出てきた銀色の怪物からも聴こえた音や……!」
「ホンマかソシエ!?つまり、あの偽モンは昨日の銀色の奴が化けてるっちゅうことやな!」
「確かに……言われてみれば目の色以外に身体の模様や色合いにも違いがあるな」

そう、ニセアグル――金属生命体アルギュロスが擬態したアグルはかつてのアグルの姿であり、藤宮が変身した真のアグルはV2と呼ばれる姿だ。
何故アグルの姿を知っていたかはともかく、どうやら以前戦った奴から情報が更新されていないらしい。同個体かは判別出来ないが、今のアグルはさらにパワーアップし、加えて経験もかなり蓄積されている。
同じ土俵へ上がれば決して負けはしない。
しかし、ここでやはり横槍が入った。

「ギシャアアァァァ!!」

「オアッ!?」

吹き飛ばされていたムーバが接近し、同時にアグルの首と左腕を両手の触手で絡めとったのだ。

これ幸いにとニセアグルはアグルを攻撃しようと体勢を整え、アグルスラッシュを発射しようとしたが、アグルがムーバに捕縛されたのと同様にニセアグルも意外なところから攻撃された。

「オ゛ォッ!?」

強烈な水流がニセアグルに直撃する。アグルも一体誰が、と思ったもののすぐに正体は判明した。

リヴァイアサンである。アウギュステの島々に加護を与える星晶獣が世界は違えど同胞ともいえる海の巨人たるアグルに味方し、ニセアグルの攻撃を妨害したのだ。

即ちこの戦いはアグル&リヴァイアサンとニセアグル=アルギュロス&ムーバの二対二のタッグマッチ。

それを見た人々は歓喜の声を上げる。

船を破壊したものが巨人—アグルの偽物であったと判明すると同時に、先の登場—いや、あまりの神々しさに降臨と称すべきか—の仕方のおかげで神秘的な存在と思われているアグルがアウギュステの守り神と言われるリヴァイアサンと共闘した事でアグルが味方だと認識し、二つの大いなる存在が手を組んで自分達やアウギュステを守ろうと戦っている事に感動を隠せなかったのだ。

アグルこと藤宮は元々身の潔白を証明する為だったのだが、ここでそれを言うのは無粋だろう。

「ふじ……アグル、気張りぃー!」

「ズールーいー!あたしも戦いたいー!」

「ユエルはいいとして、サラーサ……お前、どれだけ戦いに飢えてるんだ」

「だってあんな奴と戦えるなんて滅多にないぞ！」
「うむ、気持ちはわからんでもないが、今は漢の決意というもの見守るがよい。なぁに、藤宮殿や我夢殿もいるこの騎空団に属しておればまた機会はあるであろう！ぬぅわははは!!」
「ええっと……それ、喜んでええん？」
「……この二人はそうなんじゃないかしら」

先程までの緊迫感が思いっきり薄れているが、それだけアグルとリヴァイアサンが希望を届けてくれたからだろう。
ウーノもようやく笑顔になり、アグルの戦いを見守る事にする。
（たくさんの思いを受けた君は負けない。そうだろう？藤宮……いや、ウルトラマンアグル）

アグルだけでなく、リヴァイアサンにもアウギュステに生きる人々の声援は届いていた。

「ギシャアアアアア!!」
「ギュオオオオオッ!!」

星晶獣リヴァイアサンと海神ムーバは互いが特異な体型である事もあり、その身体を活かした激戦を繰り広げている。
ムーバの額の水鏡から発せられる緑色の光線を回避しつつその身体で巻き付き、至近距離から強烈な水流でダメージを与えるリヴァイアサン。対するムーバも自身の触手をリヴァイアサンに絡み付かせて締め付ける。
一進一退の攻防を繰り返しつつもリヴァイアサンは自身の攻撃ではムーバやニセアグルに決定打を与えられない事に気付いていた。
やはりこの二体を打ち倒すにはアグルの力が必要だとも。

「オォア！」
「ハァッ!!」

一方、アグルとニセアグルの激闘は元々のスペックの違いからアグルが優勢だった。
身体の半分が海に浸かりながらもパンチとキックの応酬が続くが、やはり経験の差は明確に現れておりニセアグルの攻撃を捌きながらアグルの攻撃が一撃、また一撃と決まっていく。
さらにここでニセアグルの動きが鈍ってきた。
特別とはいえ海水に長時間浸かり続けたからか、それともアグルの攻撃によるダメージが蓄積したからか、その両方かは不明だが、元は金属生命体……即ち金属の腐食が始まっていたのである。

「ギュオオッ!!」
「……！」

リヴァイアサンの咆哮にアグルは何かに感づいたのか頷き、右手にアグルセイバーを出現させてリヴァイアサンを拘束していた触手を切断する。
拘束から脱出出来たリヴァイアサンは上空へと舞い上がりムーバとニセアグルへと水流をぶつけて油断させ、そのスキにアグルはニセアグルを持ち上げる。

「ダアァァァッ……！」
「オォッ!?」
「ハァァッ!!」

そしてそのまま藻掻いているムーバへと放り投げ、二体まとめて一時的に海中へと沈む。
しかし、アグルとリヴァイアサンはこれで終わりにはしない。アウギュステに不安の種を残さぬよう完全に倒す。

「ディアァッ！」

アグルもリヴァイアサン同様に空中へと舞い上がり、リヴァイアサンの前に静止し必殺技の構えを取る。

「ヌン！ハアァァァッ……！」

ライフゲージに手を添え、そのまま左右に開きエネルギーを集中。右手を空に掲げた後、円を描くように両手を動かし内部で光が渦巻く光球を発生させる。

フォトンスクリュー。

アグルの得意技リキデイターの上位技と言えるがその威力はリキデイターの比ではない。

だが、アグルはフォトンスクリューを発射する様子を見せない。どうしたのだとその戦いを見守っていた者達が不安になったのも束の間、ここでリヴァイアサンが動いた。

「ギュオオオオッ!!」

アウギュステの海から幾つも水柱が立ち上がり、それぞれが渦巻くようにしてアグルのフォトンスクリューへと集まっていく。

「もしかしてあれって……！」

「ああ、アグルとリヴァイアサンの合体技！」

アグルが形成していたフォトンスクリューの光球はリヴァイアサンが起こした渦巻状の海水を光エネルギーへ変換吸収し、最初の何倍にも巨大化している。

体勢を立て直したニセアグルとムーバがそれを見た瞬間、逃走しようとするもここまできてそれを見逃すアグルではない。

リヴァイアサンの協力によって完成した技を一気呵成に解き放つアグル。

「ディアァァァァッ!!!」

巨大化した光球を放つのではなく、その光球から膨大な量の光が放射された。

ウルトラマンと星晶獣の合体技・フォトンフォール。

アグルが海の巨人であった事、リヴァイアサンが海を司る星晶獣であった事、そしてその一人と一体の相性が良く、かつアウギュステの『海があった』事――いくつもの要素が積み重なり実現した大技だ。

圧倒的な光が完全に二体を飲み込むと、光の中で大爆発が起こる。

断末魔の叫びが外界に届く事無く、ニセアグルとムーバは消滅した。

その瞬間、人々から大歓声が湧き上がる。

「あの巨人とリヴァイアサンが勝ったぞ!」

「バカ野郎!巨人なんて失礼な呼び方すんな!あれは伝説の海神(うみがみ)様だ!!」

実はアウギュステにはある伝説があった。

『アウギュステに未曾有の危機が訪れし時、遠き異界の海より遣わされし神が救いの手を差し伸べるだろう』

奇しくも今回の騒動は正にその通りだが、アグルがそうだというのかは定かではない。だがアグルの勇姿はその伝説に相応しいものだったという人々の認識は間違いではなかった。

去る前にアグルはリヴァイアサンの何かを訴える眼差しを見て理解し、船の残骸が残っていた船着き場全域にリカバリーオーラを放射する。

その輝きによって残骸と化していた漁船が次々と元の姿を取り戻し、漁師やその家族は驚愕の声を上げた。

「お、おい……俺達の船が！」
「ああ！元通りになったぞ！これで漁に出られる！」
「本物だ……本物の海神様だ！」

喜びの表情を見せる漁師達に、ガッツポーズをしつつ頷くアグルに両手を振ったり頭を下げたり、中には土下座までする漁師もいた。
それを見届け、アグルは飛び去り、リヴァイアサンも姿を消す。
金属生命体の出現を発端とする一連の騒動はようやく幕を閉じたのである。

☆

翌日、一通り買い出しを済ませた藤宮達はエリアル・ベースで寛いでいた。連絡によれば今日、我夢達が戻ってくるという話だ。

「どうやら向こうでも一悶着あったらしい。ついでに新メンバーを一人連れてくるようだ」
「それはいいが……ある程度実力が伴わないとキツいぞ？戦闘でなければ別だが」
「そこは心配ない。加入者名は元黒竜騎士団団長、ジークフリート」
「ぶっ!?」
「うわっ!?いきなりどないしたん!?」

アルベールが珈琲を吹き出し、ユエルは自分の珈琲を即座に抱えて退避。
レヴィオン騎士団団長であるアルベールがジークフリートの勇名を知らぬはずがなく、まさか彼が加入するなど予想だにしていなかった。
「よりによって竜殺しの英雄を引っ張ってくるとは……」

「なんでも我夢に返しきれないほどの恩義があるとか」
「またなのね……」
「団長はんを筆頭にゼットはんもリクはんも我夢はんも、よく人助けしよるし……」
「それに加えて団長は天然ジゴロのケがあるしな～まだまだ増えるで、きっと」

本人達の預かり知らぬところで言われまくっているレジェンド達のウルトラマン。
そんな中、何食わぬ顔でいた藤宮だが……

「ただいま～！シエテ団長代理と愉快な仲間達のご帰還だよ～！」
「「「……」」」
「い、いや冗談だよ冗談……」

帰って来たシエテは、その言い方のおかげで一緒に帰って来た我夢、ゼタ、バザラガ、そして新たに加入したジークフリートからジト目で見られるハメになった。
というかあちらでのＭＶＰは我夢だし、ジークフリートはもちろんゼタやバザラガもケロニア討伐の立役者なのだが。

「藤宮、話はさっきガンダゴウザさんとサラーサちゃんに聞いたよ。お疲れ様」
「ああ。そっちもそっちで大変だったみたいだな」
「まさか瘴流域を超えてくる技術と知能を持った、会話する吸血植物が相手になるなんて思いもよらなかったよ」
「な、なんか凄いのと戦ったんやね……」
「こっちは藤宮とリヴァイアサンが海上で敵さんとやり合ったから、ウチらなーんもする事なかったわ」
「……ソーンは援護くらい出来そうなものだが」
「日差しが眩しすぎてね。初戦は太陽だけ雲に隠れてたからなんとか

なったけど、二回目は雷とか、太陽がしっかり出てて……私、戦いだとアウギュステとは相性が悪いみたい」

若干落ち込み気味のソーンを見たゼタはバザラガに軽く肘打ちをかます。バザラガには効いていないが。

「あ、そうそう……さっきアウギュステの町で貰ったんだけどさ」

何やら我夢が少しばかり意地悪な笑みを浮かべた。

なまじ頭脳が並外れているせいか、我夢のこういった表情の時は皆警戒している。

「アウギュステ新聞号外！ほら藤宮……賞賛の言葉や記事と一緒にアグルがこんなにデカデカと……」

「なっ!?おい我夢、それを渡せ！」

「良いじゃないか。悪い事したわけじゃないんだし」

「そんなものをエリアル・ベースのあちこちにコピーして貼られたりなんかされたら嫌だろうが！」

「心配しなくても我夢の方は既に俺が確保してある」

「!?」

我夢にからかわれる藤宮だったが、まさかのジークフリートがフェードラッヘ版でガイアの事を書かれた号外を持ってきていた。

「そうか……あんたがジークフリートか。悪い事は言わない、それを寄越せ」

「ジークフリートさん、藤宮に渡さずにこっちにお願いします」

「すまないな、我夢。それから藤宮だったか。こればっかりは俺も譲れん」

じりじりと寄っていく二人から、じりじりと下がり後ろを向いてエ

リアル・ベースを逃走するジークフリート。それを追う我夢と、我夢を追う藤宮。

「どうやら、藤宮も完全に調子が戻ったみたいだね」
「しかし、彼がジークフリートか……早速この団に馴染んでいるな」
「ま、ここにはビリおじとかニヤケ頭目とかクセの強いのぎょーさんおるしな」
「おい、誰がビリおじだ!?」
「ユエルちゃん、ニヤケ頭目ってもしかして俺の事？」
「なんや名前言ってないのに自覚してるやん」

いたずらっ娘な笑みを浮かべてユエルは三人に続いて退散する。さすがに散々ビリおじ呼ばわりされて頭に血が上ったのかアルベールがユエルを追いかけて、置いてかれたソシエも少しオロオロしたあとユエルを追いかけに行く。

「やはりここは賑やかでなくてはね」
「組織からしばらく待機って言われてるし、あたしものんびりしちゃおっと」
「腹を出して寝るなよ、ゼタ」
「あんたはあたしの母親か！その台詞まんま返すわよ！」
「この体は特別製だ。普通に生活していれば体調不良になどならん」

もうすぐレジェンド一家もこちらに来て一層騒がしくなるだろう。ユエルが言った通りまだまだ団員も増えるかもしれない。
ウーノは様々な種族だけでなく、世界や生まれという垣根を超えて一つの『家族』を形成しているこの騎空団の発展を願い、ニヤケ頭目と呼ばれて凹んでいるシエテを慰める事にする。

〈続く〉

宇宙空間のどこか――そこで五つの影が会話している。影の一つは他の四つよりも高い場所に座しており、格上である事が見て取れた。

「やはりウルトラ戦士がこの世界にも現れたようだな」
「たかが二人、我が力を持って早々に駆逐してやろう」
「強きものが弱きものを滅ぼして支配するのは宇宙の真理……」
「して……どうされますか、陛下」

陛下と呼ばれた存在は暫しの沈黙の後、口を開く。

「今は静観していろ」
「「「は……？」」」
「あのウルトラ戦士共は所詮先遣隊……あれらを倒したところで後続が来るのみ。大した理など無い」

絶大な能力を示したガイアとアグルにさえ興味を持たないかのような口ぶりに四つの影は困惑する。

「もう暫く時を待ち……しかる後にインペライザーを送り込め。そしてその結果次第では貴様達が出向く事を許してやろう」
「「「承知致しました」」」
（レイバトス……メンシュハイト……サンドロス……そしてスーパーヒッポリト星人。果たしてこの新たな四天王はどこまでやれるのか、見極めるのに良い機会だ）

恐るべき能力を持った者達を配下に従えたそれは、かつてとは比べ

物にならない強大な闇を纏う。
（戯れで滅びるならばそれまでの存在……この世界の者達と手を組んで何処までやれるか……精々楽しませるがよい）
それは、光への復讐の始まり――

そして宇宙のもう一箇所、空の世界と月が見える場所――カムフラージュによって隠されていた、『月の民』の衛星基地はある存在によって壊滅しようとしていた。

「所詮はこんなものか……いや、この『機神』とやらは使い方によっては役立つやもしれんな」
［き……貴様は一体……!?］
［何故、ここが……!?］
「お前達は自分達が優れた技術を有していると思っているのだろうが……お前達よりも上の技術を持つものはいくらでもいる。そう、例えば……ウルトラ族」

月の民の衛星基地を壊滅させた張本人は、月の民を嘲笑うかのように告げる。

「お前達の技術の結晶たるこの機神……我々が有効に使わせてもらうとしよう。お前達では宝の持ち腐れだ」
［こ、後悔するぞ……！ここがどういう場所か知って攻めてきたのだろうな……！］
［もしここが壊滅したと分かれば、機（セントラル・アクシズ）関も黙ってはいない……

！」
「……巨大機神ディアスポラ」
［［な、何故それの事を!?］］
「いずれそれも我らの手中に収める事にしよう。さて、お別れだ」
バチバチと凄まじいエネルギーがその存在の両手に集束し――
「アブソリュートデストラクション!!」
［［せ……機関！黄金の巨人に……］］
その言葉を最期に、衛星基地は完全に壊滅。そしてこの世界から跡形も無く消し飛んだ。
「あの忌々しいウルトラマンレジェンドのおかげで時間移動に大幅な制限がかかっている。使えるものは何でも使わせてもらわなければな……次元移動が出来るのはせめてもの救いか。では、もう一つ……」
その存在が虚空へと手を翳し、何度か発光させる。
「これで良い……随分と遥か遠くまで飛ばされていたようだな。どれくらいの時をかけて戻ってくるかは分からないが……月の民とやらは、自分達の住処に『魔王』が帰還してきたらどういう反応をするかな？同じ名の星晶獣を星の民が作ったそうだが……そちらとは危険度が段違いだ」
そう言うとその存在は月を一瞥した後、空の世界を見る。

「やはり狙うならば……月でも星の世界でもなく、空の世界か」

小さく呟き、機神(戦利品)を収納してその存在は黄金の輝きと共に消えていく。

二つの陰謀が、今少しずつ胎動を始めた。

開幕、三大勢力会談

ギャスパーがリクのおかげで一歩ずつ踏み出し始めて数日が経った。

最初は外に出るのもビビりまくっていたギャスパーだったが、この数日で誰か見知った者と一緒であれば問題無く外出出来るまでになり、同時に少しずつ神器の制御も可能になってきている。

特に、有言実行しているリクの協力は彼の成長を大いに後押しした。

そして、リクやオカルト研究部がギャスパーの特訓に付き合っている頃のダイブハンガーでは、レジェンドや巌勝がある問題に直面していた。しかし、正しくは彼らではなく……

「……で、新しい日輪刀か、もしくはそれに準ずる刀が欲しいと」

「はい、無理を承知でお願いします。姉さんや、姉さんの師範を務めた方の日輪刀もレジェンド様がお作りになられたと」

「あー……陽炎と日ノ神の事か」

「カナエと縁壱の日輪刀か。前者は赫刀の条件緩和など日の呼吸の補助能力を備えたもの、後者は日の呼吸及びその使用者の力を余す所無く振るう事が可能となる代物だったはずだ」

「なんと!?それ程のものを作れるとは!さすがお館様と言う他ないな!」

「……おい、ちょっと待て」

この場にいるのはレジェンドと巌勝の他にしのぶと杏寿郎なのだが、何故か杏寿郎はレジェンドを『お館様』呼びに変わっている。しのぶもキョトンとしていた。

「煉獄さん、レジェンド様の呼び方変わってません?」

「俺はそのお館様って人物と声が似ていただけだろ。なのに何で俺をそう呼ぶんだ」

「うむ！それはレジェンド様がお館様と同じように皆に好かれ！そして皆を支援するだけでなく！心の支えにもなっている事に敬意を込めてそう呼ばせて頂く事にした！事後承諾で申し訳無い！」
「いやまあ、それは構わんが……だが新しい日輪刀なあ……俺の刀の打ち方は少々特殊でな。時間はともかく素材が何より重要になってくる」
「素材……ですか？」

しのぶの言葉に頷き、レジェンドは続ける。

「基本となる素材に加えて打った後にそれをさらに鍛える二段構えの作成方法なんだよ。日輪刀ならば確か玉鋼と言ったか、それと似たような素材が必要だ。しかもハイグレードなものを作るとなると相応の物や個数が要る。正直、カナエのを打ってから枯渇気味で、まずそこからどうにかしなければならん」

そもそも道具ならともかく、レジェンドが他者の武具を作るのは稀であり、いざ作るとなると一切の妥協をしないので一つ作るにも要求される素材が半端ないのである。

「ちなみに時間のかかり方も変わっていて、良い素材だったり個数が多ければ多いほど、制作時間は短縮出来る。どのみち素材の最低必要個数は存在するからその収集からだな」

その話を聞くと煉獄は表情を変えずに悩み、しのぶは若干暗い表情になった。
レジェンドとしても何とかしてやりたいのはやまやまだが、元が無ければどうしようもないのも事実。
そんな時、夜逃げでもする気かと思わんばかりの風呂敷を背負いながらゼットがやってきた。

「超師匠ーお話し中失礼しちゃうでございます」
「おい何だその荷物」
「いや～何やかんや色々あって忘れてたんですけど、空の世界で色々貰ったんですよ。でも俺パッと見しても使い道が分からないし、そもそも俺が持ってても使えなさそうなんで超師匠に全部渡してしまおうと思い立ったわけでございますよ」
「あのな……俺を不要品の処分場所にす……!?」

レジェンドはゼットが床に置いて広げた風呂敷の中身を見て絶句した。金の延べ棒のような鋼や、それを黒くしたようなもの、ブロック状の黒い結晶や乳白色に輝く結晶などなど……

「ちょ、ゼット！お前これどうした!?」
「どっ……どどどどうしたんですか超師匠!?」
「どうしたも何もお前これ……ヒヒイロカネにダマスカス鋼、ダマスカス骸晶に金剛晶だぞ!?特にヒヒイロカネと金剛晶は激レア素材だ！それが何でこんな風呂敷いっぱいにあるんだよ!?」
「え、そんなウルトラ凄いもんだったんですかこれ。なんかあっちで色々手伝ったりしたらポンポンと当たり前のように貰ったんですが。でもさっき言った通り使い道分からないしお礼言ってとりあえず貰ってきましたけど予想外に同じものばかりで本格的に置き場所に困ってまして……超師匠、全部がダメなら少しでいいから受け取ってくれません？」

拝み倒しのポーズをするゼットだったが、本来ならばここは逆にゼットが拝まれる立場にある。

「しのぶ！杏寿郎！ゼットのおかげでスゲー日輪刀作れるぞォォォ!!」
「本当ですか!?ありがとうございますゼットさん！」
「……へ？」

「これには感謝しかない！本当にありがたい！俺は、君が大好きだ！」
「え？何がどうなってんの？」
「難しく考えるなゼット殿。この二人にとって最上級の贈り物になったという事だ」

ゼットは厳勝に笑顔で肩を叩かれるが、話に途中参加だった彼は何が何だかさっぱり分かっていない。
ただ、しのぶと杏寿郎がこの上ない程に喜んでいる事だけは理解したらしい。結局小首を傾げたまま、何一つ理解出来ずにいたゼットであった。

「試しに言ってみよう……ご唱和ください我の名をー」
「ウルトラマンゼーット!!」
「ホント何があったんだ？しのぶちゃんと杏寿郎」

胡蝶しのぶと煉獄杏寿郎、現在スーパーハイテンション。

☆

そしてさらに数日後……
いよいよ会談当日。ギャスパーは神器の件もあり部室で留守番という結果になったが、別段気にしていない。何せその理由というのも……

「えー……っと……」
「あっ、部長。僕は大丈夫ですぅ……あ！リク兄さん引けました！XXレア！」
「え、ウソ!?やったじゃんギャスパー君！しかもこれギャスパー君のデッキにシナジーあるよ！」
「やはり俺のデッキは赤だな！」
「パム～」

「俺も色で言うなら赤なんだが……見た目的には白か青なんだよな。さてどっちにするか……つーか白は隼人の色じゃねえか。いっそ赤白黄でいくか？」
「私は緑と紫と白と青……黄は似合わないし、赤は……」
「私はイメージとして紫ですが……胡蝶、である事を考えると緑ですねー」

一緒に留守番をしてくれるというリク、杏寿郎＆パム治郎、竜馬、マリーダ、そしてしのぶとバトスピのカードパック開封及びデッキ構築をしているからだ。
しかも全員楽しそうである。
……ついでにマリーダはかつて自分が所属していた袖付きの元締めが、仮面だけ身に着けて全裸（唯一の救いで股間は袖付きのエンブレムで隠れていた）でバトスピのカードを手に不敵に笑うイメージが脳内再生されていた。それじゃ紛う事なく変態だ。

「この短期間でギャスパーも随分成長したし、同席してもいいんじゃないかと思ったのだけれど……」
「あれは引き離しちゃ駄目ね。それにサーゼ……不法侵入者さんもまだいい顔しなさそうだし」
「カナエ、そこは言い直さなくて……いえ、別にいいわね。言い直しても」

何だかんだ言って根は深かった。信頼を取り戻す為、頑張れサーゼクス！それいけサーゼクス！
日常で下手やらかしてドツボに嵌りそうな気がしないでもないが。
ともあれリク達にギャスパーを任せ、会談の場へと向かうオカルト研究部一行。本来ならば矢的も出席するはずだったのだが、数日前から出張の名目で光の国へ一時帰還している。
「そういえば、レジェンド様とサーガ様は少し遅れるみたいな事を聞

いたけど、傍聴役は誰が来るの？」
「レジェンド様側は卯ノ花先生と……護衛が一人。サーガ様の方は確かグラハムさんで、護衛が厳勝師範ね」
「あれ、卯ノ花先生の護衛って誰なんですか？」
「う～ん……同じ九極天だって聞いてるけど、その時にならないと分からないわ。私も九極天全員と面識あるわけじゃないし」
「なんか……とんでもない人が来そうな気がする」
「タイガもか？実は俺もなんかこう……背筋ビシッとしなきゃいけなさそうな気がするんだよ……会談とか立場とか関係なく」
「私の筋肉が告げている……相手は只者ではない筋肉だと！」
「「『筋肉扱いかよ!!』」」

一誠とドライグ、そしてトライスクワッド……相変わらずこちらも賑やかであり、少しだけ緊張が解れた。

「さあ、行くわよ皆」
「私とアーシアちゃんは卯ノ花先生と同じレジェンド様側へ、ゼノヴィアちゃんはグラハムさんや厳勝師範と同じサーガ様側へ、始まる前に移動するわね。あと、お願いだから拗ねないで小猫ちゃん」
「……別に拗ねていません」

どうやら小猫もサーガ側が良かったらしい。
リアスは苦笑しつつも会談の間の扉を開け、入室した。

☆

悪魔、天使、堕天使のトップやその護衛、付き人が出揃い会談が始まろうとした時、光神側の出席者が到着した。

「お待たせして申し訳ありません。この度レジェンド様が到着されるまでの間、この会談を傍聴させて頂きます伝説九極天が一人、卯ノ花

烈と申します。以後よしなに」
「同じくその護衛を仕る伝説九極天が一人、東方不敗マスターアジア。此度の会談、儂は一切の発言権を烈に託すのでな、個人的な質問であれば会談後にして頂こう」

卯ノ花と共に会談の場に現れたのは、あろう事か東方不敗。先の発言には『この場で儂に余計な事は聞くな』という有無を言わさぬ迫力を感じた。
彼や卯ノ花を見てその場で初めて対面するアザゼル、ミカエル、サーゼクス、セラフォルーは身を強張らせる。

（何だあの爺さんは……!?一緒にいるだけで息が詰まる！あんな奴、一体今まで何処にいやがったんだ!?）
（……おい、アルビオン）
（ガタガタガタガタガタガタ）

そう、この場に卯ノ花がいる以上……もう一体護衛がいるのだ。

「じぇっとん」

（（（（何でいるのアレ!?））））

戦争時、ゼットンを見ていた四人は本気で戦慄している。特にアザゼルなんかはヴァーリから聞いた時には「ンなバカな事あるか」と大笑いしたのだが、真実だった事で腰が抜けそうになっていた。

「ああ、この子の事はお気になさらずに。危害を加える心配が無ければ大人しい子ですから。逆に何かしら仕掛けてくるのであれば、その時は……」

卯ノ花が瞳孔開き気味になると四人は高速で首を縦に振った。当のハイパーゼットンは前述の通り大人しく卯ノ花の腕に抱えられている。

そして、もう片方……

「同じく今回傍聴役として出席させて頂く、レジェンド様のご後輩であるサーガ様直属の神衛隊所属・第四分隊副隊長のグラハム・エーカー大佐だ。あくまでも傍聴役であり、発言に関しては例外を除きレジェンド様及びサーガ様がご到着されるまで控える事をご理解願いたい」

「同じくその護衛を仕る神衛隊所属・第一分隊参謀長の継国巌勝。主要な要件は御三方が告げている以上、私から特に言う事はない。強いて言うなら一つだけ……外に多数の護衛を配置されているようだが、あまり過信し過ぎない事を勧める」

「「「!?」」」

傍聴役のグラハムはともかく、巌勝の言葉に驚きを隠せない三大勢力トップの四人。今回の会談の為によりすぐった面子を集めたが、今この場でそれを否定されたようなものだからだ。

反論しようかと思ったが巌勝の纏っている空気は先の東方不敗と同質、しかもいつでも戦闘態勢に移行出来る。

(さすが戦国時代に生きた者よ。既にこの会談が無事に終わらぬ事を見抜いておるわ。それに引き換え目の前の三大勢力のトップとやらは儂らより長生きしておるというのに見通しが甘過ぎる)

(妨害・介入する対象が重要であればあるほど、攻め入る方も相応の者が出張ってくる。産屋敷邸襲撃の際、無惨様が自ら出向いた時のように大将格がこの場に乗り込んでくる事も十二分に考えられるというのに……いや、既にこの場に入り込んでいるな)

護衛役の東方不敗と厳勝は表にいる三大勢力の護衛がほぼ使い物にならない事を見抜いている。ただ長生きしている程度で、常に修行を続けている光神陣営の者と同じように扱う事自体間違っているが。

（しかし最も警戒すべきなのは堕天使でも悪魔でも、まして天使でもない。あの堕天司という奴が属する勢力だ。そして……）

『鬼』。

現状、光神達を除きレジェンドやサーガが傍にいなければ自身の持つ鬼神刀しか傷一つ付けられない異形の脅威。

堕天司ベリアルの言葉が真実ならば世界が繋がりを持った事でいつ現れてもおかしくない状況だ。

（出来る事なら奴らだけでも現れない事を祈るばかりだが……そうは上手く事が運んでくれそうにないのも薄々感じる。最悪の事態は想定しておくべきだな）

正直、鬼と戦えるとしても外の護衛が役立つとも思えない。ただでさえ己らが優れた存在と自意識過剰な連中が多い三大勢力の者では敵わぬ敵と相対した時、恐慌状態に陥り戦力どころか邪魔にしかならないだろうというのは予想に容易い。

厳勝がそう考えている中、もう一人思考を張り巡らしている人物がいる。グラハムだ。

イノベイターである彼は脳量子波によって相手の思考を読み取る事が可能。普段は容易に使わぬようオフ状態にしているが、この場においてはその能力を使わぬ手はない。

会談が重要なものである以上、それを失敗させる事は許されないのを彼は誰より理解している。

（レジェンド様やサーガ様が仰っていたように、今後は種族生まれなどの垣根を超えて結束しなければ迫りくる様々な脅威に対抗する事

は出来ない。既に幾度かこの世界でも怪獣や侵略者による事件が起きている事を踏まえればそれは理解出来ているはずだ。何者かの横槍さえなければ、少なくともこの四人は手を取り合う事に抵抗はないだろう）

少なくとも――この言葉が意味するもの、グラハムだけでなく卯ノ花や東方不敗、そして厳勝は分かっている。

いくつもの不安を抱えたまま、遂に会談は始まった。

☆

「さて……ここにいる者達は最重要禁則事項である神の不在について認知している。それを前提に話を進めよう」

（そうは言うが……）

（正直聖書の神、よりによって身体を失い意思だけになっても神器に宿ってレジェンド様の身体を乗っ取ろうとした挙げ句勝手に自滅したといいますし、自業自得なのですが。かの者の所業を知れば尊敬など微塵にも無くなる程下劣な事しでかしてましたからね）

（来歴を閲覧した鬼灯殿が、日本地獄に落ちてきた聖書の神を容赦無く最下層に叩き込んだそうだからな）

（ちなみに今はギャラクシーレスキューフォースに出向しているクルーガー夫妻がジャッジメントタイムしたら、レジェンド様やサーガ様、以下光神の方々から満場一致でデリート許可が最速で出たようです）

（……納得の処遇だ）

サーゼクスの言葉に対して卯ノ花とグラハムはアイコンタクトだけでこれほどの会話を瞬時にこなしている。グラハムの脳量子波読み取りもあってスムーズだ。

時にクルーガー夫妻というのは伝説九極天の一人であるドギー・クルーガーと、惑星レジェンドに移住してから籍を入れて結婚式を挙げ

たスワン・クルーガー（旧姓・白鳥）の事である。
　出身世界での一連の騒動後、かつての部下達が立派に成長したのを見届けたドギーはスワン共々宇宙警察を退職し、元々鬼灯から勧誘されていたのもあり予定していた惑星レジェンドへ移住、正式にドギーが伝説九極天入りした。
　ついでにやはりというか光気の影響で夫婦揃って若返り（ドギーは毛並みのもふもふ度ＵＰ！）全盛期の肉体になった上、ドギーに至っては縁壱とガチとやり合える化け物もとい化け犬になっている。
　この夫妻のエピソードに関してはまた今度にするとしよう。

「この間はうちのコカビエルが迷惑をかけて悪かったな。つってもアイツは化け物にされてもう死んじまったけどよ」
「私も驚きました。なんでもバルパー・ガリレイ共々怪獣化したという話でしたが」
「それに関しては当事者である彼らの方が詳しいだろう。リアス、すまないがもう一度その時の事を話してもらえないだろうか？」
「分かりました。それを話すに至って、彼らを紹介しようと思います。タイガ、タイタス、フーマ」

　いきなりだったので少々驚いたが、呼ばれた三人はテーブルの上に乗っかり横一列に並ぶ。
　セラフォルーは参観日に会ってはいるがまともに会話しておらず、アザゼルとミカエルは三人を凝視している。
　……その視線に気付きポージングを忘れないタイタス。

「旦那、平常運行すぎだろ」
「私イコールマッスルという第一印象を持ってもらわねばならないからな」
「いや、第一印象っていうか二つ名は力の賢者だろ？賢者を強調しろって」

気を取り直してタイガ達が自己紹介すると、やはりというか彼らが話題の中心になってしまった。
このままではまずいとグラハムが思った時、卯ノ花が口を開く。
「彼らの事は後でレジェンド様らがご到着されてからの方が宜しいでしょう。少なくとも今はコカビエルの件の方が重要ではないですか？」
口調は穏やかだし表情もそうだ、しかしそこから掛かってくる圧力は全くの正反対。これ以上脱線させるな、という事なのだろう。
四人全員が冷や汗を垂らすがサーゼクスはリアスから事前に「卯ノ花先生を怒らせてはいけない」と聞いていた為、即座に行動を起こす。
「いや、すまない。私は彼らと話した事もあったし、事前に他の者にも通達しておくべきだった」
「御心配せずともレジェンド様やサーガ様は会談が一通り終われば光の国の事などを詳しくお話しするとの事です。そう焦って聞かずとも大丈夫ですよ」
サーゼクスの謝罪に対し卯ノ花が圧を潜めてにっこり言うと、その内容に三大勢力トップのみならずリアス達にも驚きと同時に期待が高まる。
ならば、今自分達がやるべき事を済ませようとアザゼルが動いた。
「さてと、この会談を開いた目的を済まさなきゃならねえな。和平を結ぼうぜ。お前らもそのつもりで来たんだろ」
☆
再びオカ研部室。
すっかり杏寿郎やしのぶらとも打ち解けたギャスパーは彼らの話

を聞かせてもらっていた。

「ってわけでよ、今じゃ俺達の力になってる真ドラゴンは元は俺達の倒すべき敵だったんだ」

「聞いているだけでも凄まじいな！進化し続ける超巨大ゲッターロボとは！」

「でも凄いですね。戦闘用に改造しただけの初代ゲッターロボで、当初から戦闘用として作られた次世代ゲッターロボを倒し続けられたなんて」

「そこは俺達の操縦技術と経験はＡＩ任せの奴らなんかにゃ負けねえって事だ。多少の機体性能の差なんざ腕っぷしがありゃいくらでも覆せるんだよ」

しのぶの称賛に竜馬はニヤリと笑いながら右腕でガッツポーズしつつ左手で右の二の腕をバシッと叩く。

これは如何なる戦いにも言える事だ。現に神衛隊第四分隊隊長のアムロがシャアと初めて戦った時、シャアは性能差で劣るザクⅡでガンダムを圧倒した。

そして、我らがウルトラ六兄弟の次兄・ウルトラマンも、武器や道具がなくとも戦ってきた実力者。戦場において、やはり最後に物を言うのは鍛え抜かれた己自身の力と技。

レジェンドやティガなどの大物も正にそれだ。あの極意が技である事を踏まえるとレジェンドはマン同様にタイプチェンジさえせずにあの規格外っぷりを発揮している。

いつの世も才能だけで激戦をくぐり抜けられるほど甘くはない。活動規模が途方もない範囲のウルトラマン達であるなら尚更だ。

そんな中、部室のドアがノックされた。

万が一に備えて竜馬が開けると、そこには……

「どうも、お久しぶりです竜馬さん」

レジェンドの右腕にして、日本地獄の真の支配者がいた。
その姿を見て杏寿郎としのぶは臨戦態勢を取るが竜馬だけでなくマリーダや、さらにリクまでも二人を静止する。

「待ちな二人とも。この人はお前らの言う鬼じゃねえ。何せあのレジェンド様の右腕と称される伝説九極天の一人だ」
「うん、別に人間を食べたりしないし大丈夫だよ。外道な亡者には容赦無いけど」
「地獄に落ちてきて罰を受けてるなんてロクでもない事しでかした証ですから。容赦する必要ありませんよ。しかし予想していたとはいえ鬼と知ると敵意が半端ないですね。私は鬼神ですけど。……それもこれもあの鬼舞辻無惨が元凶ですか。他の【エリア】にまで面倒持ち込みやがってクソったれが」

最後の本音が思いっきり怒りを孕んでいたようでしのぶだけでなく杏寿郎も冷や汗を流している。
どうやら敵でないというのは事実らしく、二人も警戒心を解いた。
それと同時にひょこっと鬼灯の背後からレジェンドとサーガが顔を出した。

「お、ちゃんと誤解解けたみたいだな」
「鬼灯には厳勝や狛治の件で世話になっているから、何かあれば申し訳無いと思っていたところだ」
「まあ元凶の所業を考えると仕方ないと思いますが。申し遅れました、私は伝説九極天が一人、鬼灯と申します。現在は日本地獄に出向して閻魔大王第一補佐官を務めています。以後宜しく」
「あ……ご丁寧にどうも。胡蝶しのぶです」
「俺は煉獄杏寿郎だ！此度はいきなり敵意を向けて申し訳無い！」
「ギャスパー・ヴラディですぅ」

三人が自己紹介を終えると、リクが聞いてくる。

「でもどうして鬼灯さんが？レジェンドさんもサーガさんも何も言ってなかったし」

「ああ、実はですね。ちょっと前に地獄に落ちてきた悪魔からある情報を聞き出しまして、それを調べていたら種族レベルで出るわ出るわ不祥事の数々。これはさすがに看過出来ないと思って、ちょうど悪魔天使堕天使が会談をするという今日この場で突き付けてやろうと思ったんですよ」

「まー今日来てる奴らは問題ないだろうけどな。正直、悪魔の上層部の殆どは腐りきってる。最悪俺らが直接関与する必要があるレベルでな」

「……俺が授業参観日に不機嫌だったのはその内容も絡んでいる」

レジェンド、サーガ、鬼灯は心底軽蔑したような表情であり、相当酷い事が簡単に予想出来てしまう。

「ともかく、俺らはこれから会談の場に向かうが……気をつけろよ、お前達」

「空気が妙だ。何者かは分からないが仕掛けてくるぞ」

「いざとなったらここを出て私達に合流して下さい。時間停止系の神器だろうが私達には問題ありませんので」

そういうと三人は現在も会談が進んでいる場所へと向かっていく。

いよいよ現代で、レジェンドが三大勢力のトップ達と対面する時が迫ってきた。

〈続く〉

思い出が紡ぐ、怒りの理由

和平協定が無事結ばれ、一誠が他に聞きたい事はないかと尋ねられた時、卯ノ花とグラハムが遂に口を開く。

「皆さん、すみませんが一度静粛に」

「光神の方々のご到着だ」

『!!』

驚きと共に全員が扉の方を向き、タイミングを見計らったかのように扉が開く。

レジェンドを中心に右に鬼灯、左にサーガが控えており、彼らの姿が見えると卯ノ花やグラハムは起立して軽く頭を下げる。

慌ててサーゼクスらも立ち上がるが、それをレジェンドは制し用意されている席に赴き着席し、サーガもそれに続く。

鬼灯が来る事は聞いていなかったが、そこは気が利くカプセル怪獣ハイパーゼットンが端に折り畳んであった椅子を見つけて用意した。

「じぇっとん」

「ありがとうございます、ハイパーゼットンさん。この働きっぷりは閻魔大王に見習わせたいところですよ。私がこっちに来てサボってないといいのですが」

やれやれと溜め息を吐く鬼灯に苦笑しつつ、到着した三人も形式的とはいえ自己紹介をしておく。

「ウルトラ六兄弟から送られた記録映像等でこの姿を見た事のある者がいると思うが、俺がこの【エリア】を統括している光神、ウルトラマンレジェンドだ。レイブラッド事変の場にいた者はそちらの姿の俺を見知っているだろうが」

アザゼルやミカエル、サーゼクスはその別次元レベルの凄まじい戦闘力を目にしているので緊張しっぱなしだが、セラフォルーやガブリエルは頬を赤らめながら熱っぽい視線を向けている。

「同じく、光神ウルトラマンサーガ。レジェンド先輩から部分的に【エリア】の管理を任されている立場にある」

初めて聞く名に戸惑いはあるものの納得するトップ達。それよりイリナが真っ青な顔をしていた。だって食事を奢ってもらった挙げ句、宿代まで面倒を見てもらった相手がかの光神の後輩だったんだもの。

「ああ、最初に伝えておきますが私は光神ではなく鬼神。レジェンド様に仕える伝説九極天の一人で、現在日本地獄で（物凄く不本意ですが）閻魔大王第一補佐官を務めている鬼灯と申します。訳あって急遽参加させて頂く事になりましたので、先にお詫びしておきます」

「い、いえ……お気になさらず」

ミカエルは鬼灯の纏っている空気がただならぬものであった為、少々引き気味であった。それはアザゼルらも同様である。

「さて、こちらが遅れてしまった事で余計な事を喋ってズルズルと引きずる訳にもいかないので早速だが本題に入ろうか。まずは此度の和平の件、英断だったと素直に称賛を述べさせてもらおう」

三人の中で最初に口を開いたレジェンドは、三大勢力間で和平が結ばれた事に関してはちゃんと評価している。実はこの事はリアルタイムでレジェンドへと筒抜けだったのだ。レジェンドヒアリスのおかげである。

「「あ……ありがとうございます」」

「ありがとうございますっ！」

男は三名に対して元気なセラフォルー。想い人からの言葉でテンションが上がっている。ミカエルが仕切っており直接的なトップでないガブリエルはそれを面白くなさそうに見ていた。

しかし、上げるだけで済むほどレジェンドらが手にした情報は簡単なものではない。

「だがそれはあくまで三大勢力間での事。お前達が本当の意味で真摯な態度を取らねばならないのは別にいる事を忘れてはいないだろうな」

「「「……え？」」」

レジェンドの雰囲気が変わる。

「も、もしや我々は知らず知らずの間に何かご無礼を……？」

ミカエルがおずおずと尋ねるが、レジェンドは腕組みして目を伏せたまま何も言わない。彼の様子を察してサーガや鬼灯も黙っている。

（おい！よく分からねえが怒ってんじゃねえのか!?）

（私にだって分かりません。一体いつご機嫌を損ねるような事をしてしまったのか検討もつきませんよ）

（もしや私があの方の仮住居なる場所に張った結界を破壊しようとした事を根に持っておられるのだろうか……？）

（サーゼクスちゃん☆……何しでかしてんだよお前）

（（ひいっ!!））

セラフォルーがかつてサーゼクスの犯した所業にキレかけている。口調が変わっているのがその証拠だ。

正直、トップの男衆が情けなさ過ぎるのだが……レジェンドは先程

の体勢から微動だにしない。
リアスやタイガ達、さらにレジェンドの中で大人しくしているゼットも不安になってきた時、レジェンドは再び口を開いた。
「まだ分からないのか」
「は、はい……申し訳ありません」
「なるほど、お前達にとって……いて当たり前だという認識程度しかないのが理解出来た」
「いえ！あなた方がいて当たり前などとそんな！」
「……訂正する。どうやら取るに足らないちっぽけな存在だとでも思っているようだな」
アザゼルやミカエルは何とか事を収めようとするが、どうも会話が噛み合わない。サーゼクスやセラフォルーも困惑していたが、次の瞬間気付かされる。
「何故俺ばかりを見ている。お前達が真摯な態度で臨まなければならないのは俺達光神ではない。人間達だという事を少しも考えた事は無かったのか」
『!!』
この言葉にはトップ達だけでなくリアスらも愕然とした。少し考えれば辿り着く結果。
ここ最近の出来事しても、レイナーレの件で一誠は命を落として転生悪魔となり、教会に追放されたアーシアもレジェンド一家に救出されなければ同じだっただろう。
コカビエルの件も教会側のバルパーやフリードが協力者として関与し、何よりはぐれ悪魔によって人間が犠牲になる事も多い。
三大勢力によって被害を被るのは基本的に人間ばかりなのだ。
「固まっているところに追い打ちをかけるようだが、この際ハッキリ

させておこうと思ってな。……鬼灯」
「はい。それでは一つ一つ開示させて頂きます。まずここ最近で堕天使側がやった事ですが、現状落命する事がほぼ確定しているにも関わらず神器の取り出しを強行、町レベルでの広域破壊未遂の二点に加え、市井への流出はガイさんやカナエさんによって未然に防がれましたが地獄からケルベロスを無断召喚、それから堕天使総督によるレジェンド様のご家族へのセクハラ未遂等、大小合わせると結構な数になりますね」
「おいアザゼル！今聞いた中で名指しであったのはどういう事だ!?」
「お前も似たようなもんだろサーゼクス！結界破壊未遂しでかしてたじゃねーか！こっちだって未遂だ未遂！」

ギャーギャー騒ぎ出した二人と、まるでゴミを見るような目をアザゼルに向ける女性陣。

ドオオオオオン!!

喧嘩している二人の間のど真ん中に鬼灯の投げた金棒が轟音を立てて思いっきり突き刺さった。

「黙れ。話が進まん」
「「も、申し訳ありませんでした……」」

青ざめながら小さくなるアザゼルとサーゼクス。実際は彼ら以外も多数青ざめている。レジェンドの右腕は伊達ではない。

「続いて天使及び教会側。ただ悪魔の治療を行っただけでシスターの教会追放、人格を考慮せず能力だけ重視して選定した結果起きた性格破綻神父による粛清という名の惨殺行為、極めつけは非人道的な聖剣計画。他にもありますが惨殺と聖剣計画があまりに酷過ぎて他が霞んでますね。これは『知らなかった』では済みませんよ。あ、サーガ

様や神衛隊の方々に食事を強請ったというのもありますが、まあこれはいいでしょう」

最後の最後で投下された一言にゼノヴィアとイリナは真っ赤になって俯いた。ゼノヴィアは師である厳勝から肩をポンと叩かれて慰められている。結果として見ればサーガらと『となりのペドロ』を見られたから良しという事らしい。

「そして最後に悪魔側。これはあまりに多いのでいくつか抜粋させて頂きます。まずは恐喝・脅迫による悪魔の駒での強制転生行為。しかもこれ、眷属にする為に偶然を装った故意の殺人なんかもありますね。次に人間界の土地を勝手に領地扱いし、管理不行き届き。これも彼方此方で起こってます。しかも大抵問題が起きると解決するのはそこに住んでる妖怪だったり神話勢の方々だったりしますし。レジェンド様がこの世界に来てからはレジェンド様直々に解決なさっている事も多く、目立った被害は抑えられてますけど。若手のリアスさんは最近頑張っているのでその調子でお願いします」

「は、はい……」

二番目の事はリアスも覚えがあり小さくなっているが、彼女は反省して報告や解決の為のアドバイスをもらったりするようになったので鬼灯からフォローが入る。一昔前の彼女ならボロクソに言われていただろう。

「それから人間界そのものの侮辱。フェニックス家の嫡男がやらかしてますね、これ。悪魔の貴族なら何言っても許されるとでも思ってるんですかね。ましてやこの日本で言った以上、日本神話の方々も黙ってませんよ。宥めるのに苦労しました」

「返す言葉もありません……」

政略結婚の片棒を担いでいたサーゼクスはまた小さくなった。ど

こまで縮むんだ。

「何よりはぐれ悪魔の横行。ちょっとはぐれ認定の見直しを考えた方がいいんじゃないですか？現にはぐれ悪魔の一人は主の契約違反のせいでそうならざるを得なかったみたいですね。しかも最初に言った脅迫による眷属化も絡んでいる。事情も調査せずになんでもかんでもはぐれ認定した結果がこれですよ」

　これはもちろん黒歌の事だと分かった小猫は鬼灯に頭を下げる。チラリと小猫を見てさり気なくピースを返してくれた鬼灯は真っ当な者には優しいのだと感じた。

「そしてトドメがこれ……レーティングゲームでしたっけ。これは中堅以降、殆ど八百長ですね。しかも上層部ないし上位陣の大半がやってます。力欲しさに無理矢理眷属にしたと思ったら挙げ句は主の意思一つで行動の自由さえ奪いますか。これなら弱くても互いに助け合ってる下級悪魔の方々の方がよっぽど立派です」

「ま……待ってくれ！そんな話は初めて聞いた！」

「そりゃそうでしょうね。こんな事世間に知られたら大問題ですし。上の殆どがそんな事してるんですから事実のひた隠しなんて楽なもんでしょう。真面目にやってるあなた方が稀有な存在なんですよ」

　サーゼクスやセラフォルーは勿論、リアスやソーナ達……特にソーナはレーティングゲーム関係である目標を持っており、それが無意味になるような事実を突きつけられて愕然としている。

　そして、ここにきてサーガが重い口を開いた。

「……俺はウルトラマンとして初めて顕現した時、絶望的な状況でも決して諦めずに立ち上がった者達の力と身体を借りた」

　ゼロ、ダイナ、コスモス、そしてその時一体化していたタイガ・ノ

ゾムと春野ムサシ。

「例え自分達が対抗できなくとも、必死で力になろうとしてくれた者達もいた」

フューチャーアースにて僅かに生き残っていたチームU。

「そして今……どれだけ過酷な戦いであっても、俺をフォローしてくれる家族がいる」

超次元グレン団や鉄華団を始めとする神衛隊の者達。

「その者達のような……『諦めない心』さえ奪うのか、お前達は!!」

積もり積もったサーガの怒りが遂に爆発した。

ウルトラマン……特に光神達が尊重するのはサーガの言った諦めない心。それは幾度となく奇跡を呼び込み、逆境を覆す原動力であった。

しかし、望まずとも眷属にされれば主の命令には従わねばならず、反目すればいとも簡単にはぐれ認定。

諦めず頑張れば届くだろう刃も、主の命令一つで敗北を強要される。

「悪魔のみならず天使も堕天使も……お前ら、人間を家畜かペットとでも思ってるんじゃないか?それも生殺与奪を自分達が握ってると勘違いしている最悪な思考で」

レジェンドは額に青筋を浮かべ眼力を強めて言い放つ。これだけでもどれだけ彼が苛立っているか理解に難くない。

後ろで控えていたカナエやアーシアは、レジェンドがここまで怒る理由を知っている。
科学特捜隊の一員として防衛チームに所属して以来、ウルトラ戦士が人間として所属した防衛チーム全てに在席した経験のあるレジェンドは、人間との繋がりを大切にしていた。
例えば、タロウと共に戦った防衛チームＺＡＴでは、隊長から「今日はカツ丼を食べて来たのか、験担ぎしっかりしてるな！出撃任せた！」と朝食のメニューで出撃メンバー入りされたりした。
８０が属したＵＧＭでは、８０とユリアンが光の国へ、レジェンドは惑星レジェンドへ帰還する時、チーム全員に見送られ「ずっといてほしかった」と別れを惜しまれた。
コスモスや、ジャスティスも関わり合いがあるチームＥＹＥＳでは怪獣用の餌を作ったりもした。
語り出せば切がないほど、一つ一つがレジェンドにとって大切な思い出だ。
怪獣や宇宙人という未知な存在が相手でも、自分達に出来る事を模索し全力で取り組む人間は、決してウルトラマンにも負けない者達だとレジェンドは思っている。
勿論、悪人などもいるのは当然だが、それをひっくるめてもその評価だ。
そんな人間をぞんざいに扱う悪魔や天使、堕天使を黙って見過ごせるレジェンド達ではない。
惑星レジェンドで生きる、光神の加護を受けた者達にも無論人間は存在する、というか最多数だ。
「各々の勢力の問題における対策案は持ってきているが、今この場で人間……引いては妖怪など、人間界に生きる者達全てに対する認識と扱いの見直し、及びそれの種族内への即時通達を確約出来ないと言うのならば、我々光神陣営は三大勢力に対する一切の支援を断ち切らせてもらう」

この言葉に光神陣営を除く全ての者達が驚く。
それは即ち、ウルトラマン達との関係も途切れる可能性を示しているからだ。
少なくとも光の国のウルトラマン達も元は人間と同じ姿だった以上、それを蔑ろにするのは同時にウルトラマン達を蔑ろにするのと同義。人間にしてきた事……つまり鬼灯が羅列した事をウルトラマン達がされないとも言い切れない。
そんな事を許しはしないと、レジェンドもサーガも決意している。
「……分かりました。ルミナシア、冥界にいる父上やアジュカ、ファルビウムに至急連絡を取って先の事を伝えてくれ」
「畏まりました、直ちに」

ルミナシアが動こうとすると何時の間にやら目の前に移動していた鬼灯に驚くが、鬼灯は何やらリストを手渡してきた。

「あの、これは……？」
「写しですいませんが、悪質な事を行っている者達の名簿とその内容です。燃やされたりしたらご連絡頂ければ何度でもお渡ししますので、徹底的にやって下さい」
「お前達は実力で魔王に選ばれたようだが政治に関してはあまり得意と言えんようだな。おそらく発言力もそう強くはあるまい。もし誤魔化しをされた場合や無理矢理会話を切り上げられるような場合でも、こちらに連絡を寄越せば腕利きの奴をそちらに派遣しよう」

鬼灯に続くレジェンドの言葉に頭を下げるサーゼクスとセラフォルー。実際、老害連中が幅を利かせているので魔王と言えど悪魔の中では黙らせられてしまう場合が多いのだ。
ちなみにこのレジェンドが言う腕利きとはかのダンブルドア。長生きかつ経験豊富な彼が出張ると大半は白日の下にあらゆる所業を暴露され、社会的に抹殺される。しかもその後は決まって彼を襲撃す

るのだが、逆に絶対的な差を見せつけられ返り討ちに合う。
年配悪魔が老害なら、ダンブルドアはまさしくご老公である。

「ああ、シェムハザか。すまねえがちょっと頼まれてくれ」
「ウリエル、他の天使達にも伝えて下さい。早急に」

悪魔と違い、実質ワンマン状態だった天使と堕天使勢はその場で即決出来た。これを見届けたレジェンドやサーガは一息つく。
さすがに年月が年月だけあり、事態が急転したりはしないだろうが希望の芽は出てきた。

「しかし、レーティングゲームの不正……少し目を通しただけでこれ程とは……内部情勢の整理や不正を行った者の摘発と処分、そしてゲームそのものの根本的な見直し……それら全てが済むまでレーティングゲームは一旦休止した方が良さそうだ」

サーゼクスの言葉に反対する者はこの場にはいない。セラフォルーは勿論の事、リアスやソーナも納得している。

「ああ、それと聖書の神について説明しておいた方がいいですね」
『え？』
「奴は俺に喧嘩を売ってきた連中の一人が持っていた神滅具……『黄昏の神槍（トゥルー・ロンギヌス）』と言ったか。それに意思を移していたらしくてな。攻撃が命中、というか俺が素手で掴んだ時に身体を乗っ取って、その槍を所持者から奪って殺そうとしたんだが……」

これにミカエルやガブリエルは先程のアザゼル達のように真っ青な顔をしている。よりによって自分達の主が光神にとんでもない無礼を働いていた事実を聞いて卒倒しそうだった。

「まあ、あんなへっぽこに乗っ取られるような俺じゃない。そのまま

槍を伝って逆に超エネルギーを流したらそいつの意思どころか槍ごと消えたぞ」
『はあああああ!?』
「ちょっ……ちょっと待って下さい！それって神滅具が一つ……」
「さっきも言ったが消えた」
「まさか、所有者も……」
「いや、生きてる。放心していたが喧嘩吹っ掛けてきたのは向こうだから随伴の連中含めて死なない程度にボコった。と言っても片手で数えられる程度しか殴ってないのに死にかけてたがな。やっぱり神器に頼りきってるような奴はダメだな。オカ研を見ろオカ研を。皆地力からしっかり底上げしてるぞ」

あまりの規格外っぷりに開いた口が塞がらない。神滅具の消滅や、神器所有者の命を奪わず神器の抹消などやってる事がおかし過ぎである。

最初は神滅具消滅に嘆いたアザゼルだがその後の台詞でそれも吹き飛んだ。そういえば全集中の呼吸とかいうのを使う女性がいた事を思い出したからである。

「確かに、神器頼みなのは戦略の幅を自ら狭めてるのと同意義か……」
「あ、そうだ。アザゼルお前玉出せ去勢してやるから」
「スイマセン二度としないんで勘弁して下さい!!」

首と右手をコキコキ鳴らしながら告げるレジェンドに本気で土下座したアザゼル。

「そもそもセクハラ自体するなバカ野郎。今度やったら地獄で阿部高和に掘らせるぞ」
「……え？」

声を上げたのはヴァーリだった。あの悪夢は単なる予兆だったよ

うだ。
「彼、日本地獄で獄卒やってますよ」
「「アッ――!!」」
ヴァーリとアザゼルは揃って尻を押さえている。
二人の判断からレジェンドの言う人物がアッチの方と知った男性陣は戦慄した。
「それと、もう一つ。聖書の神がやっていた所業の中でも最悪なものを教えておこうと思いまして」
「最悪な、所業……？」
「天使の『リサイクル』ですよ」
「「「!?」」」
これには天使達だけでなくアザゼルも目を見開く。
レジェンドと鬼灯は気にせず話を続ける。
「当初、奴がいれば天使の数は増やせるわけだったので、余程優秀でなければ奴は死んだ天使を気にかける事などしなかった。が、ある日奴はこう考えた。『弱い天使でも一つに纏めたら優れた天使になるのではないか』と。そこで奴は死んで光の粒子になった天使を一箇所に集め、混ぜ合わせ、新たな天使を作り出すようになった」
「結局、それらは例の戦争に投入されて皆レイブラッドの軍勢に全滅させられたようですけどね。それはそれとして、このやり方……何かに似ているとは思いませんか？」
この言葉でハッとなったのは裕斗だ。
「聖剣計画……！」
「ご名答。知ってか知らずか分からんがバルパーのやっていた事は聖

書の神もやらかしていたわけだ。もっともこれは奴の所業のほんの一端に過ぎん。全てを開示したら信仰なぞ一瞬で消え去って暴動が起きるぞ。今話した事は当面の間、この場にいる者達だけの秘匿情報とする。いいな？」

愕然としながらも全員が了承の意を示す。

ミカエルやガブリエルはまだ顔色が悪いが、いつまでも隠したままにしておく方が返って様々な場面で悪影響を及ぼす可能性がある。

マイナスな情報ばかりだと精神的にキツくなってくるだろう事を考えたレジェンドは、いよいよこの場にいる殆どの者が知りたいであろう情報を話す事にした。

「さてと、暗い話・黒い話ばかりでは息も詰まるだろう。お前達が長年知りたがっていたＭ７８星雲・光の国の話をしてやるとしよう」

そう、ウルトラの星の事を。

〈続く〉

これがウルトラの国だ！

レジェンドの言葉にサーガやゼット、トライスクワッドを除く面々……鬼灯以外の九極天や神衛隊も息を呑む。

Ｍ７８星雲にあるウルトラの星……光の国とも呼ばれるそれは悪魔や天使、堕天使も辿り着けた事の無い、ある世界の地球から３００万光年離れた宇宙にある。

ウルトラ戦士以外で訪れた事のある者は、この場において鬼灯のみ。必然的に興味が沸く。

「口で言うより直接見た方が早いし理解もしやすいだろう」

そういうと、レジェンドの両眼が強く光り一瞬で景色が変わる。

『なっ!?』

「慌てるな。立体再現映像だ」

「……先輩、目を光らせてこの映像を見せたのが原因じゃないのか？」

「この方法が一番手っ取り早いし」

「まあ、ビジュアル面はともかく発動が一瞬ですからね」

他の者達はキョロキョロと周りを見渡しているが、光神二人と鬼灯は平常運転である。

ゴホンと咳払いすると、レジェンドは再び話し始める。

「いきなり光の国がどんなところかを説明する前に、まずはウルトラ族誕生から語らねばなるまい」

「ウルトラ族誕生の……！」

誰かがそう言った時、また風景が一変する。

「これは……」

「え？人間……？」
「でも周りの建物は見たことないわ。どういう事？」
「光の国に住まうウルトラ族は元々地球人と同じ姿のヒューマノイドタイプの知的生命体だった。しかしある時、恒星……即ち太陽系と同じような太陽の大爆発によって環境が激変する」

次にレジェンドが見せたのは闇と氷に包まれた光の国だった。外を歩いていた男性がフラフラとよろめき、倒れる光景が目につく。立体映像とはいえ見てて気持ちのいいものではない。

「この絶対的な危機を打開すべく、俺はウルトラ長老達にあるものの作り方を教えた。そう、プラズマスパークだ」

他の【エリア】と違い、こちらではプラズマスパークはレジェンドによって齎されたのである。
そして場面はプラズマスパークタワーへと移る。
そこではある二人の技師がプラズマスパークの点検をしていたが、事故が起きそこから発せられるディファレーター光線を浴びてしまった。
その瞬間……

「っ!?人間が、ウルトラマンの姿に!?」
「そうだ。元々は事故によって今のウルトラ族は偶発的に誕生した。このディファレーター光線を浴びた事でウルトラ族は強靭な肉体や様々な持つ事となり、ウルトラ長老達が自分達を含む国民全てにこの光線を浴びせてみよう、という方針を打ち出した結果、今のウルトラ族として確立されたわけだ」
「レジェンド様はこの事を予測されておられたのですか？」
「いや全く。ディファレーター光線は人体に悪影響を及ぼす事は無い事ぐらいは確認していたが、こんな事まで予測不可能だ。ついでにプラズマスパークの作り方を教えたのが俺だから基本がこういう姿に

なった、とか言われたりもするが……そんなもの事実無根の単なる偶然だろう。おそらく多分きっと」
『物凄く推測でしかないですよね!?』
「だってもう何十万年も気にしてないし別にいいだろ。気にしたところでどうにもならんし、訓練次第で元の人間体にもなれるし」

真面目な話から徐々に間の抜けた話になりつつある。
気を取り直して続いてようやくウルトラの星と光の国そのものの話になる。

「ウルトラの歴史についても話してやりたいのはやまやまだが大分長くなるので今回はパスだ。聞きたいなら後日直接聞きに来るか、それが難しいなら後で希望の資料を送ってやる」
「私は直接お聞きしに伺いますっ☆」
「私もですっ！」
（魔王やセラフが長話を直接聞きに来て大丈夫なのか？）

この意味は後程知る事となる。

「まずはウルトラの星の簡単な説明からな。大きさはこの地球の６０倍、重力は１２０倍程だ。大きさは惑星レジェンドとほぼ同じだな。あっちの方が少しばかり大きいかどうかのレベルだ」
「重力１２０倍!?」
「星の大きさ以上にそちらの方が驚きなんですが!!」
「ふぅむ……修行にはうってつけではないか」
「老師の言う通り。そこなら呼吸法の鍛錬も捗ろう」

東方不敗と巌勝は感心している。ちなみにこの二人、重力１２０倍なら普通に動ける。前者は生身で宇宙空間を飛翔するし。

「続けるぞ。先の説明通り太陽を失った影響で海がなく、ウルトラ族

を除く元々いた生物は絶滅していて、自生している植物も宇宙ゴケが生えている程度だ。それに都市部はともかく郊外は荒野で、惑星の周回軌道にも狂いが生じた為、ウルトラキーによって制御している。ついでに暦はあるが季節もない」
「な、なんか聞く限りすっごい悪環境なんですけど……」
「まあ、ここらへんはマイナス部分だからな。ここからが本番だ」

風景が再び変わると、彼らは光の国都市部上空にいた。
先程とは打って変わり眩い光に包まれた近未来的な光景が目に入る。
ウルトラ族が編隊を組んで当たり前のように空を飛ぶだけでなく、空を飛ぶ巨大な送迎バスも見える。

「すっげえ……!!」
「俺達の技術がガキのお遊びに見えるぜ……どんだけ発展してんだよ」
「懐かしいな……小さくて上手く飛べなかった頃、あのバスでウルトラ学校に通ったっけ」

一誠やアザゼルは驚きを口に出し、タイガは空中バスを感慨深く見つめている。他の者達も驚きを隠せない。

「では先程タイガが口にしたウルトラ学校から説明するか。まずウルトラ学校とは二種類に別れている。一つは宇宙警備隊の養成学校。もう一つは一般学校だ。前者はゾフィーやタロウが教官を務め、後者は８０が教官を務めているのが有名だな。養成学校には俺も時々講師として招かれる」
「あれ？タイガ達が属してる銀河遊撃隊の養成学校は？」
「比較的近年設立された銀河遊撃隊は、宇宙警備隊に配属される過程で成績優秀者から特定数を選定し、宇宙警備隊大隊長であるウルトラの父及び隊長のゾフィーの推薦を受けて、遊撃隊総司令官ベリアルと

隊長のゼロの承認を得た上で本人に打診し、その希望によって配属が決定するのが普通だ。他にもベリアルやゼロの方が推薦、もしくは直接スカウトする場合もある。別に職務内容的に断ってもペナルティはないし、そもそも説明した通り遊撃隊に入るのはかなり厳しい。まあ、例外はいるが……」

例外とは言わずもがな、押しかけ入隊したゼットである。タイガやタイタス、フーマはしっかり正規の手順で入隊している。

それからジードはベリアルではなく、活躍を認めたゼロとウルトラの父の両名による推薦で配属された。

このように警備隊・遊撃隊双方から推薦される場合もある。

「で、一般の学校でも飛行訓練なんかはするが、養成学校の方ではさらに踏み込んだ訓練を行う。詳しく知りたい者も多いだろうから今日はそこの説明をするぞ」

次に変わったのは宇宙警備隊の養成学校の光景だ。

施設の一つであるウルトラコロセウムにて無数のウルトラ族の訓練生がそれぞれリフト上で組手をしたり、光線技の練習をしている。

そしてその中を歩く、マントを身に纏った一際目立つウルトラマンがいた。それは当然……

「タロウ！」

「父さん……！」

「あいつは今やこの養成学校で筆頭教官を務めているからな。訓練生時代もゾフィーが校長を務めていた時に首席卒業したぐらいだ」

「ゾフィーの奴ここで校長までやってたのかよ！」

「首席卒業とは恐れ入った……！さすがタロウだ！」

それぞれの推しの輝かしい来歴を聞いてアザゼルとサーゼクスのテンションも上がっている。

「さて、この養成学校で学ぶ事の種類だが……まずは基本となる学科、つまり先の飛行訓練や光線技を始めとする基礎的な戦闘訓練が主となる学科だな。他には怪獣生態学、宇宙気象学、宇宙古代文学史、ロボット工学、宇宙地理、変身学、それから暑さ寒さや孤独に耐える実技試験なんかもある。近年では次元学や宇宙民族学なども追加されているぞ」

……何人かは頭がパンクしそうになっている。

この場にいる者は何かと優秀な者が多いのだが、それでも追いつけないようだ。恐るべしウルトラ族。

「それから、３００の都市に１８０億人ものウルトラ族がいる光の国だが、宇宙警備隊に所属しているのは特別部隊も含めてわずか１００万人ほどだ。銀河遊撃隊に至ってはさらに少なく、現状１００人にも満たない」

『!?』

つまり、それだけ高い能力が求められる程、宇宙警備隊や銀河遊撃隊の門は狭いのだ。銀河遊撃隊の方は設立してあまり時間が経っていないとはいえ、そこに属するのはウルトラの父と同じくウルトラ大戦争（ウルティメイトウォーズ）を最前線で生き抜いたベリアル、若き最強戦士ゼロを筆頭に、テイガやダイナを始めとするベテラン達や新世代ヒーローズ（ニュージェネレーション）ら才能と将来性を兼ね備えた者達である。当然といえば当然だ。

「あ、あの……もし養成学校を卒業しても警備隊に入れなかったりしたらどうなるんですか？」

アーシアがおずおずと聞くと、レジェンドは安心させるように穏やかな声色で教える。

「心配しなくても、宇宙警備隊が有名なだけで働き口は他にも沢山あるさ。例として挙げるなら宇宙科学技術局、光の国の技術的発展を支える重要な機関だ。ちなみにここの長官はジャックの父親だ。実を言うと一度ヒカリの奴に変わったんだが、紆余曲折あった末に宇宙警備隊に転属になったんでその穴を埋めるべく復帰したというわけだな」
「何ぃぃぃ!?」

滝のような汗を流すアザゼル。ジャックと意気投合していたシェムハザが聞いたらどんな反応を示すやら……アザゼルのお仕置きアイテムをジャック経由で作成依頼するかもしれない。

「それと、さっき言った宇宙警備隊の特別部隊、宇宙保安庁はマンの父親が、勇士司令部はセブンの父親……つまりゼロの祖父が長官を務めている」
「つまりマン殿はウルトラ六兄弟という立場以外にも強大な後ろ盾があると……」
「せ、先輩ってマジで武闘派一族の出身なんだな……」
「それからマンもセブンも本職は別だ。マンは宇宙大学教授、セブンは恒点観測員」
「大学の教授は分かりますが……恒点観測員？」
「まあ、ざっくばらんに言うと宇宙の地図を作る仕事といったところだな。詳しく説明すると一気に細かくなるからそう覚えてくれればいい」

朱乃の質問にそう答えながらレジェンドは「そういえばアイツ最近恒点観測員の仕事してないな」と思っていた。急に宇宙警備隊に転属したから仕方ない。

「それ以外に文明監視員とかもある。宇宙警備隊の養成学校を卒業出来る能力があるなら、無理に宇宙警備隊に入隊しなくても優秀な人材

として欲しいところはいくらでもあるというわけだ」

光の国の事をあまり知らなかった面々はなるほど、と納得するがここで小猫が手を挙げる。

「質問してもいいですか？」

「何だ？」

「タイタスさんはＵ４０、フーマさんはＯ―５０の出身って聞いてます。光の国出身でなくても宇宙警備隊には入れるんですか？」

「いい質問だ。無論、光の国出身でなくても警備隊の者のスカウト等で外部からの入隊もある。他にも警備隊の者が新しく組織し、その活躍が認められた場合、宇宙警備隊の組織として数えられるようになったりもするぞ」

レジェンドの答えに小猫は「ありがとうございます」と丁寧に礼を言いながら頭を下げる。レジェンドはそれを穏やかな表情で右手を軽く上げて応えたが、サーガの方は『この礼儀正しい少女に苛酷な運命を辿らせた、黒歌の元主厳罰すべし。慈悲は無い』と考えていた。是非もなし。

「さてと……そろそろ皆が気にしだしている銀河遊撃隊に話そうと思うが、その前にＵ４０とＯ―５０について説明しておいた方が良さそうだな」

そう言うとレジェンドはタイタスとフーマを見た。フーマはともかく、タイタスに関しては先程からウズウズしていたのが視界に入っていたので、その意を汲んでやろうと思ったのである。

「あー……いや、Ｏ―５０はホラ、オーブ先輩とかいるし、そっちに聞いてくれよ。正直あっちの方が詳しいだろうしさ。あとロッソとかブルとかも一応そうだし、態々俺が話さないといけないって程でもな

いし……そもそもあそこって防衛組織ないからさ」

タイタスと違い、生まれた星を誇り思っているわけでもないし、その出自が訳有なのもあってフーマは一歩引いている。というかさり気なく少しだけ情報も出たし、レジェンドはフーマの気持ちも汲んでやった。

「と、言うわけでフーマがこの場を譲ってくれたのでタイタスはしっかり礼を言うように」

「ああ！フーマ、お前が託してくれた時間は私がＵ４０についてしっかり話す事で報いさせてもらう！」

「お、おう（スンマセン、レジェンド）」

（気にするな。タイタスもＵ４０について語っても自分の事は語る気ないだろうからな）

その通りである。タイタスが話したいのはＵ４０そのものの事に加え、彼が尊敬する戦士の事だ。

テーブルを伝ってレジェンドの前まで行くと、タイタスはレジェンドへの礼のポージングを決めつつ向き直る。

「さて、ここからＵ４０については、偉大な伝説の戦士の協力を借りつつ私が説明させて頂こう！」

タイタスの言葉を皮切りに景色が変わる。光の国とはまた違った風景が皆の視界に広がった。

「おお……！」

感嘆の声を上げたのは東方不敗だ。自然を愛する彼にとって天然の緑豊かなＵ４０は理想の形の一つ。

「ウルトラの星Ｕ４０はご覧の通り緑豊かな惑星だ！とはいえもちろん、この星で言うなら近代的な都市も存在する。だが自然環境の事も考え、そういった都市部は地下にあるのが特徴だ！」
「そこまで配慮されておるとは……！」
「元々はこの地球でいうところの古代の国のような建物のみが地上に建てられていたが、近年では天然自然に影響が出ない範囲で都市部にあるような建築物も多少だが建てられている！」

　そんなＵ４０の景色の中、そこに住まう者達「ウルトラ人」が彼方此方に見える。地球人と変わらぬ姿に、古代ギリシャ人などのような服装をしていたのを確認したリアス達は驚いた。

「え……!?ここの人達も地球人と同じなの!?」
「ああ。しかしＵ４０の者達は皆『ウルトラヒューマノイド』であり変身する事が出来る！だが変身は出来ても『ウルトラ戦士』として巨大化変身出来る者は限られているのだ」
「もしかして宇宙警備隊みたいな組織があって、そこに属している人達だけとか？」
「いや、宇宙警備隊に相当する『戦士団』はあるが、それに属しているから巨大化変身出来るわけではない。巨大化変身にはこのビームフラッシャーが必要だ」

　タイタスは自分の額の★の部分を指差しながら説明する。余談だが、タイタスに限り出自が特殊である為ビームフラッシャーが無くとも巨大化変身は可能だ。エネルギー効率はかなり変わってくるが。

「ビームフラッシャーにはウルトラ戦士の変身を補助し、巨大化たらしめる作用があり、それを持つのは私を含めて９人しかいない。昔は８人で、私が９人目だ」
「９人!?」
「じゃあタイタスさんはＵ４０でも凄い人達の一人なんですね」

「なんの、私など彼らに比べればまだまだ若輩の未熟者だ。私の先達である８人の勇者達は、皆素晴らしい戦士だぞ！」

胸を張って力説するタイタスは、先程と同じようにレジェンドをチラチラと見る。そう、彼が心から尊敬するあの戦士を紹介したくて仕方ないのだ。

苦笑しつつも、確かに彼の事は教えておいても損はないだろうと事前にタイタスには伝えていたある状況を立体記録映像で再現する。

次の瞬間、なんとＵ４０の地上にバット星人がゼットン、そしてＥＸゼットンを連れて襲来してきた。この事件は先日ベリアルから聞かされたレジェンドが、態々Ｕ４０へ出向いて直接現場で聞いてきたものだ。

『ひいっ!?』

「な……アレは……！」

「あの時二天龍の片割れを一発で殺しかけた奴か！」

「いや、それよりゴツいのがいやがる……！」

アルビオンにとって悪夢が目の前に存在している。記録映像とはいえ大きさや迫力はそのままだ。

「実は私達がこの星へ到着したのと同じ頃、私の故郷Ｕ４０をバット星人がこのゼットンとＥＸゼットンを引き連れ飛来したそうだ。間の悪い事に、私を含め他のウルトラ戦士の大半が他の次元、他の星へと任務へ出て不在の時の事だった」

「ウルトラ戦士不在って……まさか……タイタスの故郷はもう「だが!!」ッ!?」

リアスが悲しそうな顔をしたが、それはタイタスの一声で驚きに変わる。そのタイタスの力の入れようから只事ではないのを理解した。

「全てのウルトラ戦士が出払っていたわけではなかった！ただ一人、Ｕ４０には有事の際に備えて、ウルトラ戦士が残っていたのだ！そう、Ｕ４０最強の戦士!!」

タイタスが興奮気味になっていき、おそらくテンション最高潮になったと同時に、映像の中のバット星人と二体のゼットンの前に一人の戦士が天空より轟音を立てて立ちはだかった。

タイタスと同じく額にビームフラッシャー、そして胸にはスターシンボルを有するウルトラ戦士。

「ウルトラマンジョーニアスが!!」

『ショワッ!!』

映像ではあるが尊敬するジョーニアスが現れた事でテンションが限界突破したタイタスは、ジョーニアスと同じポーズを取っている。

そのまま記録映像のジョーニアスはバット星人と二体のゼットンとの戦いに突入し、３対１だというのにハンデをものともせず圧倒。タイタスに近いだろう威力の攻撃をタイガ以上の早さで繰り出し、鍛え抜かれた肉体でゼットンの攻撃を受け止め、或いは捌き、強力なカウンターを叩き込む。

「マジかよ……！」

「タイタスの大先輩ってこんなに強いのか！」

アザゼルやイッセーの反応を見てタイタスは満足げである。ドライグやアルビオンは神器の中で呆然としていた。当然だろう、かつて一撃で二天龍の片割れを瀕死に追い込んだゼットンとその強化態を同時に相手にして圧倒するなど並のウルトラ戦士では不可能。

しかも、実はジョーニアスも何度かゼットン達の火球を身体で受けたり弾いたりしているが、全く無傷同然。

『なんで俺は一発で死にかけたのに、あいつは何発も食らって平気で戦ってるんだ!?』
『タイタスの大先輩らしいしな』

アルビオンは納得出来なそうに喚くが、トライスクワッドと宿主を同じくするドライグは逆に納得出来てしまった。そもそもマガパンドンの火球をタイタスが大胸筋だけで防いでたし、彼の尊敬するジョーニアスならばこの程度造作もないのだろう。

「そして！彼の得意とする技こそ、Ｕ４０において知らぬ者はいない必殺技！プラニウム光線だ!!」
『トォッ!!』

ＥＸゼットンを投げ飛ばしてゼットンとバット星人を下敷きにし、そこへ必殺のプラニウム光線を炸裂させ纏めて撃破するジョーニアス。

鮮やかすぎる戦いっぷりに一同は呆然としている。

「やっぱり凄いよな、ジョーニアス。俺もＵ４０に留学した時、色々お世話になったけど、あの人が戦ってきた怪獣ってかなり大きいんだよ」
「それから、地球に来た時点での当時の年齢はＵ４０換算で２万８０００歳……つまりゾフィーよりも年上の紛れもないベテラン戦士だ。それから余計な事かもしれんが妹がいる。で、変身前と変身後がそれぞれこの姿」

レジェンドによってジョーニアスの妹のアミアの人間時と変身時の姿が映し出される。端的に言って美少女だ。

「ウッソだろオイ!?」
「妹さんすっげえ可愛いじゃん！」

「ちなみに彼女はジョーニアスの妹という事もあって一般人には様付けで呼ばれているぞ！」
「……ジョーニアスの妹、って事はそれなりの年齢なんだよな。年の差兄妹かもしれないけど、もしかしたらタイタスより年上の可能性もあるってことか」
「「「「!!!!」」」」

レジェンドやサーガらなど一部の者を除いてタイガの呟きに衝撃が走る。言われてみればそうだ。年の差と言っても、もしかしたらマイナス１万歳の１万８０００歳かもしれなかったりするのかも。しかも当時とはいえ、その年齢ならほぼセブンと同い年……

「あまり女性の年齢を詮索してはいけませんよ」
「「「「ハイ卯ノ花先生！」」」」

なんか卯ノ花が黒かった。タイガやフーマもビシッと敬礼して返事している。

ここまで話して満足したのか、タイタスは「もしもっと知りたいなら後で個人的にお答えしよう！」と言うとレジェンドに頭を下げつつイッセーの元へ戻った。

「よし……それじゃ、お待ちかねの銀河遊撃隊についての説明といこうか」

ここでようやくゼットがレジェンドの中から実体化して登場。三大勢力トップを始めとする何名かはいきなりの登場とその方法に驚くが、先日の出来事でファンになっていたシトリー眷属の数名は黄色い声を上げる。

「銀河遊撃隊についてはレジェンド超師匠に加えて、トライスクワッドの先輩方、そして俺、ウルトラマンゼットも一緒に解説するぜ！」

（テンション上がって普通に喋れてるな。まあ、それが崩れても親しみやすくなるだけで別に問題ないだろ）
「お、俺達も？」
「俺達の所属部隊だしな。ちゃんとやらねーと、俺らどころかベリアル総司令やゼロ隊長のメンツにも関わるぜ」
「うむ！それに結成にはレジェンドや大隊長殿も携わっている以上、この方々の顔を潰すようなマネは出来ない！それに私は先程Ｕ４０の紹介で協力させてしまったばかりだからな！」

銀河遊撃隊について彼らによる説明が始まる。
それと同時に、この会談に迫る魔の手も刻一刻と迫りつつあった。

〈続く〉

銀河遊撃隊結成秘話―ベリアル、英雄へ

会談が行われている頃のダイブハンガー。
既に夢の中にいる者もいれば、暇を持て余している者もいる。束もそんな後者の一人だ。

「あー……どうしよ、きょーくんの機体。本人に希望聞きたいけど会談行っちゃったしなー。セラちゃんとかはまともなのになー……ホントにさ、レジェくんだけじゃなくて束さんも激おこだよ。クソ老害悪魔共には」

束、ご機嫌斜め。言わずもがな原因は会談の焦点の一つになっている悪魔陣営の政治情勢である。
天使や堕天使もやらかしているが、友人になったセラフォルーが苦労しているらしかったのでイラついている。
人気のないリフレッシュルームで暇潰し&ストレス解消に世の中の不祥事起こしている連中の所業を足がつかないように大暴露中。なんつー事をやってんのこの天災。
というか、セラフォルーも普段は大概な気もするが。

「あの、束様」
「クーちゃんどしたのー?あ、もしかして束さん他の皆をあだ名で呼んでるからいつか被りが出るかもって心配してくれてる?大丈夫だよー、その時はその時だし、その人が分かるように呼べばいいんだから。それにホラ、レジェくんとかは絶対間違えないからヘーキヘーキ」
「そうなのですか?いえ、そちらではなくて」
「え?違うの?」
「はい。オーフィス様を見かけませんでしたか?」
「オーちゃん?こっちには来てないよ。夜食作ってくれてるグーちゃんのとこじゃない?」

どうやらオーフィスがいつの間にかいなくなっていたらしい。少なくとも家出ではないだろうが。
そんな時、レイトが欠伸しながらやってくる。

「ふあ～……お、束にクロエじゃねーか。寝てなかったのか？」
「れーくんも寝てないよね。ダブルオーザンライザーのシミュレーターモードに籠りっぱなしだったでしょ」
「おう！俺の相棒になったんだからな、俺がちゃんと使いこなしてやらなきゃ悪いだろ。ついさっき、あの……なんつったっけな……リボ払い？」
「リボンズ・アルマークね」
「そうそいつ！ようやく撃墜出来たんだよ。難易度高めに設定したらフィン・ファンネルもどきのファングとかいうのバンバン使ってきてさあ」
「サーくんの人間体ベースになった人物の記憶を元に再現したからねー、無駄にしぶとかったみたいだよ」

自分が作った機体を『相棒』と呼んでくれているレイトのおかげで束は気分が良くなったのか話が弾む。
クロエもさり気なく手作りケーキを三人分持ってきて話に加わった。

「あ、そーだ。二人ともさ、きょーくんに機体用意するならどんな風にする？どんどん意見ちょーだい！」
「きょーくんって杏寿郎か。やっぱり剣か刀は必須だよな。あとぶっちゃけライフル系は要らないだろあいつ」
「敵の攻撃に対して回避型か防御型かはともかく、攻撃力はかなり特化させた方が良いかと。あの方はほぼ確実に突撃しそうですから」
「ふむふむ、なるほどなるほど。いいねー、こんな感じでどんどんいこー！」

気分がノッてきた束らは杏寿郎用の機体案についての話題に花を咲かせ、すっかりオーフィスがいない事を忘れていた。
そのオーフィスは現在、会談が行われている駒王学園へ向かっているのを彼らはまだ知らない。

☆

銀河遊撃隊。タイガ達トライスクワッドやゼットのみならず、知り合ったウルトラマン達の多くが在籍している比較的最近新設された部隊。
再び立体映像の場面が変わると、透明なドームに包まれた巨大な都市のようなものが宇宙空間に存在していた。

「宇宙に……都市？」
「これは俺達銀河遊撃隊の移動基地『ガーディアンベース』！各種施設は勿論の事、ウルトラマンの姿・人間の姿問わず生活出来るように作られているんだぜ！」

ゼットの説明を聞いてこれが基地と分かるとトップ陣は驚愕する。移動基地どころか移動都市レベルのそれを活動拠点にする組織など三大勢力には存在しない。神話勢力を探し尽くしてもあるかどうか。

「さて、何故これ程の基地を有しているかは銀河遊撃隊が何たるかを説明しなければならんな。銀河遊撃隊とは、頻発化する次元を超えた異常事態に対処すべく近年設立されたばかりの部隊であり、光の国に属しているが宇宙警備隊とは別の組織だ。連携はしているが、宇宙保安庁や勇士司令部などと違い宇宙警備隊の特別部隊というわけではない」

全員が集中して聞いているのを確認し、レジェンドは説明を続け

る。

「宇宙警備隊に大隊長としてウルトラの父が存在しているように、銀河遊撃隊にも総司令官としてウルトラマンベリアルがいる。そして宇宙警備隊隊長のゾフィーに相当する、遊撃隊の隊長はウルトラマンゼロが務めている」

場面はベリアルとゼロが、大勢のウルトラ戦士に見守られつつ活躍を表彰され、レジェンドによって銀河遊撃隊の総司令官と隊長に任命された時の記録映像だ。ここでシトリー眷属におけるゼットファンと双璧を成すゼロのファンが黄色い声を上げる。

ベリアルはウルトラの父に、ゼロはレオに専用のマントを羽織らせて貰い、同じようにウルトラの母とセブンからトロフィーが送られている。

「ベリアルはとある大事件……光の国そのものが消える可能性があった歴史改変をほぼ独力で阻止し、ゼロは若手の戦士でありながら数多の難事件を解決した事を評価、予てより予定していた組織を纏める立場に推薦され、本人達もそれを了承した事で表彰及び新設部隊の発表を行った。これはその時の記録映像だ」

光の国でまだまだ若いとされるにも関わらず難事件を数多く解決したゼロも凄まじいが、それ以上に光の国そのものが消える可能性があったという出来事、そしてそれを防いだベリアルの活躍がどれだけ偉業かは誰もが理解した。

特に三大勢力トップ陣は種族を背負っているだけあり、自分達も彼のように命をかけて目の前の問題に立ち向かわなければならないと再認識する。

「ほぼ独力、というのはな。実はゼロと、当時まだ未熟だったジードが救援に向かったんだ。あいつと、歴史改変の元凶との戦いに」

「先輩やリクさんも!?」
「レジェンド様は行かなかったんですか!?」
「歴史改変とはやろうと思っても簡単に出来るものではない。たとえ過去を変えたとしても、新しく分岐した未来が生まれるだけだ。現在と過去の時間座標を結ばなければな」

時間座標――即ち『もしも』ではない、その世界が現在(いま)に至るまでの歴史。ズレが生じないよう、糸で結ぶようにその世界の過ごしてきた時間を固定しなければ歴史改変は出来ない。
だがその大事件の元凶はそれが出来、しかも外部からの干渉を遮断までしていた。

「俺はそいつと同じように、かつ別の形で時間座標を結び、ベリアルが帰還するまで維持し続ける必要があった。しかし、相手はいくら歴戦の勇士であるベリアルであっても苦戦を強いられる程の難敵。しかも俺が開いているタイムゲートを通るにもある程度のエネルギーが必要。ベリアルは最悪、自身を犠牲にしてでも道連れにする気で戦っていた」

場面が切り替わると、複製されたボロボロのギガバトルナイザーを持ち、あちこち傷ついて肩で息をしているベリアルが片膝を着いていた。
目の前の元凶……超時空魔神エタルガーの亜種、もしくは進化体とも言うべき存在、エタルカオスはほぼ無傷だというのにだ。

「なんだ、あれは……」

戦闘狂である筈のヴァーリさえ、立体映像だというのに圧倒的恐怖を感じガクリと両膝を着いてしまう。
三大勢力の者達は当然として、九極天や神衛隊も息を呑む程の相手に対し、ベリアルはたった一人で挑んだのだ。その背に、数え切れな

い程の命と歴史、未来を背負って。

「ゼロとジードが駆けつけた時、ベリアルは満身創痍の状態だったが、あいつは二人の援護を断った。『もし勝ったとしても、下手すりゃ三人全員帰れなくなる』……先程言った通り、ベリアルはエタルカオスを道連れにする気で、ゼロとジードだけでも帰還させる気だった。だが、それに反目したのはジードだ。『父さんも一緒じゃないと嫌だ』とな」

ちょうど光景はその場面だったが、なんと声が聞こえてきた。

『我儘言うんじゃねえ！この状況で三人皆無事にってのは無理だって、お前でも分かるだろうが！』
『我儘言って何がいけないんだ！父さんだって我儘をよく言うじゃないか！そんな父さんの息子だから僕だって我儘言うんだよ！』

「これって……！」
「ベリアルさんと、リクの……」

『最後の最後まで我儘聞かせんじゃねえよ……いいかジード、お前は俺みたいなバカな事すんじゃねえぞ。後悔から力欲しさに法を犯し、ここまでやらなきゃ信頼を回復出来なくなるような事をしでかす奴には育つなよ。ま、ゼロやケンの奴、それに師匠がいりゃ道の踏み外しはねえだろうがな』
『父さん!!』
『やめろジード！まだ半人前のお前じゃ一発でやられるぞ！ベリアルの援護は俺が！』
『ゼロ、ジードを連れてさっさと帰還しな。安心しろ、この偉そうな奴

は俺が必ずブチのめすからよ』

ゼットはもちろん、同じく偉大な父を持つ息子の立場にあるタイガは目を離せない。なおも渋るジードを抑えているだけで、ゼロも帰還しようとしていない。

倒されても何度でも立ち上がり、遂にギガバトルナイザーも破壊されてしまうが、エタルカオスへと立ち向かうのをやめないベリアル。既に身体は限界だった。

見ているリアス達も一方的な戦いに目を伏せ始める者がちらほら出てきたが……

「目を反らすでないわ馬鹿者共が!!」

「「「「!!」」」」

東方不敗の一喝でハッとする。

「レジェンド様が言うたであろう。総司令官だと。ならばこの戦いの果てに勝利を掴んだのはこの漢ぞ。しかと最後までその目に焼き付けよ」

確かにそうだ。この絶望的な状況をどうやって覆したのか。それはリアスらが目を伏せている間に明らかになっていた。

ジードとゼロが何か言った時、ベリアルの身体から半透明の黒いウルトラマンが現れたのだ。そう、闇のベリアルである。

「な、なんだよあのウルトラマンは!?」

「もう一人のベリアル……通称、闇のベリアルだ」

「闇のって……」

「今はあいつらを見てろ。諦めない心、それが起こす奇跡をお前達はこれから目の当たりにする事になる」

そう言うとレジェンドは黙ってしまう。
タイガ達も話には聞いていたが、どういう出来事だったか詳細はゼロやジードは勿論、ベリアル自身も話してくれなかった。それが今、明らかになる。

『フン、無様な姿晒しやがって。それでも俺と同一人物か？あ？』
『なんだと……？あの野郎の相手をしてから言いやがれ！奴をくたばらせるには相打ち覚悟でやるしかねえだろうが！』
『それじゃあテメェだけじゃなくて俺も困るんだよ。テメェが死んだらテメェの別人格である俺もくたばるハメになる。こんな何もない殺風景な所で死んでたまるか』
『2対1でやり合うとでも言う気か？人格が別でも、お前が言った通り俺とお前は同一人物なんだから無理に決まってんだろ。メンタルどうこうで倒せる相手じゃねえんだよ。覚悟を決めろ……！』
『確かにな……だが俺がいつ2対1でなんて言った？そもそも俺達は一人だ。意味が分かるだろ』
『あぁ？この期に及んで何を……っ！お前、まさか……』
『漸く気が付いたか。俺とテメェの力を完璧に一つにするんだよ。俺は闇、テメェは光……まともに考えたら混ぜ合わせるなんざ不可能だ。だがそれは一つの頭で考えたらの話、俺達は人格……つまり頭が二つ、力も二つ、ついでにある意味身体も二つ。闇と光をそれぞれ別人格が制御すりゃ出来る可能性はあるだろ』

オカルト研究部の面々や三大勢力トップ陣は闇のベリアルの言葉に驚く。何せバルパーが気付き、コカビエルが言った聖魔のバランスが崩れたからこそ出来ると言った事を、逆に光と闇のバランスを取る事で実現しようとしているのだ。その難易度は高いなどと言えるレベルではない。

ましてや、光と闇の力の質や量が高ければ高いほどその困難さは劇的に上がる。

『そもそも出来なきゃ全員くたばって終わりだ。やって成功すれば良し、やらずに死ぬか、やって失敗して死ぬか。だったらやった方が良いだろうが。どんな時でも諦めず、不可能を可能にするのがウルトラマンだろう？ええ？』

『……ったく、お前もウルトラマンだろうが』

『テメェの別人格だからウルトラマンなだけだ。それにいい加減俺の中のレイブラッドのバカが煩ぇんでな、ついでにテメェの光で消してもらおうって算段もある。そうすりゃ、頭ん中でギャーギャー喚かれてイライラする心配も無くなるしな』

レイブラッドと言う単語に三大勢力陣はさらに驚愕するも、彼らの行動に目が離せなくなっている。

『いいか、チャンスは一度きりだ。こっちの体力的にも奴の能力的にも二回目は無理、ミスったらあのガキ共諸共殺られると思え』

『分かってる。お前も我を通して変なマネするんじゃねえぞ』

『はっ！だったら俺に飲まれないように死ぬ気で踏ん張ればいい話だろうが！』

『ごもっともな意見をありがとよ兄弟!!』

『同一人物だって言ってんだろ！誰が兄弟だァ!!』

『『うぅぅうおおオオォォォォオ!!!』』

光と闇、双方のベリアルから凄まじい銀と黒の輝きが放出され、そ

の輝きをさらにスパークさせつつ飛び上がりジグザグに交差しながら遥か天空で激突する。
その瞬間強烈な光と闇の混ぜ合わさった輝きが空に広がり、記録映像内のゼロとジードにエタルカオス、さらにそれを見ていた者達全員が目を覆う。
そしてやがてその光の中から一人の戦士が空中で一回転しながら地上へと砂埃を巻き上げつつ降り立った。
銀と赤に黒を加えた体色に、金と黒で彩られたプロテクター、そして額と両肩のプロテクターに輝く虹色のクリスタル。
破壊された筈のギガバトルナイザーは真の形……レジェンドが愛弟子の為に新たに作り出した専用の神器『ギガバトルリライザー』となってその手に握られている。

「これが、ゼロ師匠が言っていたベリアル総司令の切り札……!!」
「まさか……本当に成し遂げたのか!?光と闇の共存、合一を!?」
「そうだ。お互いを受け入れる事で無自覚ながらも支え合う関係へと昇華した、ベリアルの超戦闘形態……その名も」

『二人のベリアルが力を合わせ、光と闇を併せ持ち、その果てに生まれた混沌をも超えた姿……俺が名付けるならカオティックオーバーってところだな!!』

かつてぶつかり合い、そして今や年の離れた戦友となったゼロによって命名されたベリアルの新形態。
ウルトラマンベリアル・カオティックオーバー。
光と闇の力だけでなく、一つの体に二つの心を有したベリアルだからこそ成し得た、新たな領域に到達せしウルトラ戦士が誕生した瞬間であった。

それから目の前で展開されたベリアル・カオティックオーバーとエタルカオスの激戦は凄まじいの一言だった。
一方的に痛めつけられていた先程までと違い、新たな力を得たベリアルはエタルカオスを圧倒。
何よりレジェンド以外、サーガさえも驚かせたのはカオティックオーバーの特殊能力。闇の力を吸収・変換し光の力にする事が出来るのである。
まさに闇に対して特効能力と言えるそれは、闇のベリアルがいたからこそ発現した奇跡。
無論、吸収出来る攻撃に限度はあるのだろうがベリアル自身が並外れた能力の持ち主でありカオティックオーバー自体が強化形態である為、あまり気に留めるレベルではないだろう。
エタルカオスの攻撃を吸収し続け、際限無くその力を高めていくベリアルにいよいよエタルカオスは恐怖を感じ逃げ出そうとするが、一瞬のスキを突かれて凄まじい一撃をモロに食らう。

「ベリアル総司令の実力……想像を遥かに超える戦闘力だ！」
「凄いなんてものじゃありませんわ。ある意味、イッセー君の『赤龍帝の籠手』の性質を遥かに凌駕しているとも言えますね。倍化には時間が必要ですが、あちらは属性限定とはいえ吸収直後から力を増しています」
「ただでさえ強い総司令がさらに強くなってんのに、そこからまだ上がんのかよ……！」

そして遂に決着の時は訪れた。
圧倒的な力でエタルカオスを追い詰めたベリアルは、新たな必殺技を発動する。
ギガバトルリライザーをスペシウム・リダブライザーに似た形に変化させ、自身は掌を開いた状態で両腕を胸の前に交差させた後にゆっくりと左右に開き、開ききった瞬間に強く両手を握りしめる。
すると右腕からスパークを伴った凄まじい青い光が、左腕からは同

じくスパークを伴った黒い光が放出された。それに反応したギガバトルリライザーは強く輝く。

『『ボルティウム……デスマッシャァァァァ!!!!』』

デスシウム光線とは別にベリアルが編み出した必殺技・ボルティウム光線とデスシウム光線の強化融合技。
それがボルティウム・デスマッシャーだ。
光線速度・貫通力に優れるボルティウム光線と、火力・破壊力に優れるデスシウム光線の長所をそのまま合わせ持ったベリアル・カオティックオーバーの代表的な必殺技である。
そしてそれだけではない。その光線を変形したギガバトルリライザーが増幅させ、さらに超威力に跳ね上げた。
さしものエタルカオスもそれを受け切る事など不可能であり、直撃するどころか身体の大部分を貫通する。
己の敗北を信じられぬままエタルカオスは爆散し、ベリアルは長き戦いの末に勝利を収めた。

「ベリアル総司令が、勝った……!」
「さすが大隊長と並ぶ光の国最強戦力だ!ウルトラ凄過ぎだぜ!」

サーガとしては光の国どころか光神クラスの実力だと思っている。少なくともウルトラ戦力の中でも最上級だろう。
特に吸収変換能力はチート能力だ。
そして場面は変わり、ゼロとジードに支えられながらボロボロになったベリアルがレジェンドと共に光の国へ帰還し、大喝采を浴びながら凱旋しているところへと移る。
誰よりも先に駆け寄ってきたのはウルトラの父とウルトラの母、さらに銀十字軍が医療用カプセルを運びつつ多数急ぎ足でやってくる。

『『ベリアル!!』』
『よぉ……ケン、マリー……勝ってきたぜ……』
『ああ！分かるとも！だから今はそれ以上喋るな！』
『急いで！彼の身体は当に限界を超えています！すぐに治療へ入ります！』
『『『『はい!!』』』』

ウルトラの父とゼロによって医療用カプセルに入れられ、ジードに手を握られつつ搬送されるベリアル。
それを見送ったレジェンドとウルトラの父は、ゼロもジードに付き添って行ったため二人だけになる。

『ベリアル……』
『ケン、信じろ。妻（マリー）の腕と、親友（ベリアル）のタフさを』
『お師匠……そうですね。二人の凄さは私もよく知っている。私が誰よりも信じなくては』
『ああ。それと……今回の事で確信した。やはりあの部隊の設立は必要だとな』
『はい。常に臨機応変に対応し、次元や時間を超えて幅広く活動出来る部隊……』
『銀河遊撃隊。そしてその総司令官として俺はベリアルを任命するつもりだ。治療が終わって一段落したら直接言うとしよう』
『そうですか……！いよいよ彼が』
『これだけの重要任務を見事達成したんだ。もはや誰も文句は言うまい』

共にマントを靡かせつつ語り合うレジェンドとウルトラ父の声色はどことなく嬉しそうである。
それから場面はベリアルの病室へと移り変わった。暫く時が経った後なのか、ベリアルの方もほぼ回復しておりベッドに腰掛けている。

『ったく、もう十分過ぎる程休んだってのにまだ退院許可が出ねえんだよ。ロクに訓練も出来ねえし、そもそも身体を動かせねえ。唯一の救いはゼロやジードが任務先の事を土産話として持ってきてくれるぐらいだぜ』
『あいつら、あの時のお前を見てから奮起してるらしいぞ。この間はジードがルガノーガーを打倒したそうだ』
『私も報告を受けたよ。ゼロに至ってはマガオロチの単独討伐を成し得たそうだ。同行した新入隊員を守りながらにも関わらずな』
『相変わらずゼロはやる事がぶっ飛んでんな。ジードも俺が動けない間にかなり成長してるようだしよ』

ガイから魔王獣よりもさらに強い大魔王獣・マガオロチの話を聞いていたオカルト研究部は新たなゼロの武勇伝に大層驚いた。最早今日何度目か分からない。

「先輩ってあの魔王獣とかいうのより強い奴を、他人を守りながら一人で倒したのか!?」
「彼の隊長職任命も納得よね……」
「うおぉぉぉ!さっすがゼロ師匠!」

そういやゼットやタイガはこの事を知らなかったな、と思いつつレジェンドは懐かしくかつての自分達を映した記録映像を見ている。

『んで、忙しい二人が揃いも揃ってどうした？まさかあれからまたすぐ面倒事でも起こったんじゃねえだろうな』
『いや、小さな事件はちょくちょく起こっているものの概ね宇宙は平和だ。だが事件というものはいつ起きるか分からんものでな、今日はその面倒事に対処する為の方法についての話をしにきた』
『面倒事の対処ったって例外でなきゃやる事は今までと変わらねえだろ？』
『それはそうなんだがな。単刀直入に言うぞ。ベリアル、お前に今度新設する宇宙警備隊の兄弟組織、銀河遊撃隊の総司令官を務めてもらいたい』
『……は？』
『今回のような大事件が起きた時、宇宙警備隊では私やゾフィーを始めとする責任者の判断を仰がねばならず、結果後手に回ってしまったり手遅れな状況になってしまったりする場合もある。そうならない為に、独自の権限を持った部隊を設立する案が前々から出ていたのだ。そして、今回の出来事でその必要性を改めて実感した』
『既に各所への設立申請手続きは済んでおり、後はその活動拠点やメンバーのみ。先に説明した通り、その部隊は独自権限を持つが故、任務の危険度も高く、必要となる最低個人戦力値はかなり高くなっている。それらを纏めるには今回の事件で多大な功績を収め、さらにウルトラ大戦争でも最前線でエンペラ星人とやり合い生還した文句なしのベテランであるお前の力が必要だ』
『事情は分かったがよ、だったら警備隊の特別部隊扱いにして独自権限とやらをくれてやればいいだけだろ？』
『当初はそれも考えていたが、そうなると結局は警備隊になっていざという時に縛りが出てしまう事や、〝宇宙警備隊とは別の視点で物事を捉える〟という試みも出来なくなるという点を踏まえてこういった形を取る事にしたんだ』

記録映像のこの会話を聞いて、リアスはウルトラマン達が三大勢力に比べ、どれだけ綿密に連絡を取り合い、先の先まで考えているかを理解した。
無論、それでも連絡が行き届かないところはあるだろうが、なんとかしてそれが起こらぬように対策をしたり、或いは別の形で対処出来るようにと、こうして様々な案を出している。
（これは私達の危機管理意識が甘いと言われても反論出来ないわ。彼らは町どころか全宇宙、もしかしたらそれ以上というスケールで常に物事を考え、しかも小さい事も蔑ろにしない。ちゃんと見習わないといけないわね）
何もこれは悪魔に限った事ではなく、三大勢力共通の今後の改善点である。

『……そこまで考えてて、こんな事言われたら断るわけにゃいかねぇな。あの戦争の生き残り、それも最前線で戦ってっつったら俺やケン、あとは……マリーくらいしかいねぇし』
『マリーは殆ど偶然あの場に居合わせただけの気もするが……』
『その要職に就くのは良いとして、一つだけ条件がある』
『『？』』
『もう何度か説明したが、あの〝時の果て〟の戦いで俺は新しい力を手にしたわけだが、その力の性質が性質だから暴走の危険が無いとも限らねぇ。総司令官って立場になった俺が暴走してまたやらかそうものなら、それこそせっかく立ち上げた新設部隊が一瞬でパァになる。だから万が一そうなった時、俺を止められる奴が必要だ』
『ベリアル、それは……』
『つまりだ、宇宙警備隊には大隊長のケンに加えて隊長としてゾフィーがいるように、その銀河遊撃隊とやらには総司令官の俺の他に隊長として……ゼロを任命するのが条件だ』

「三大勢力のトップの皆さんは彼と同じように自分の客観視が出来るようになって下さい。あなた方がやらかすとそれこそ部隊どころか種族全体の問題になるんですよ」
「「「仰る通りです……」」」

ベリアルの言動に感銘した鬼灯によって四人は釘を刺される。特にアザゼル。カナエ相手に限らずセクハラは厳禁です。レジェンド一家に目を付けられた以上、またそんな事しようものなら地獄の番犬が直々にデリートしに来るぞ。

『ならば問題は無いな。既にゼロには打診して承諾を得ている。逆に総司令官は絶対ベリアルにしろ、とあっちはあっちで要望まで出してきたぞ』
『……あいつ俺自身より俺の事理解してんじゃねぇのか？まあいいか。で？部隊新設の説明とかはいつやるんだ？』
『お前の退院後、表彰と同時に行う予定だ。メンバーの方も俺とゼロである程度集め終わっている。部隊として始動するには十分過ぎる程にな。これが第一期……創設期メンバーのリストだ』
『どんなもんだ？……オイ師匠。パッと見ただけでとんでもない面子引き連れて来すぎだろ。特にあんたの直接関係者のコスモスとジャスティスなんてデラシオンの連中がよく納得したな!?』
『和平蕎麦一杯で落ちたぞ』
『『陥落早過ぎだろ宇宙正義!!』』
『どうやら地球文明の素晴らしさを理解したようだ』
『その文明の一部分をピンポイントでだけどな。美味いのは合ってるがよ』

タイガ、タイタス、フーマ、そしてゼットもこれにうんうんと頷いている。多分メビウスとかも納得するだろう。
ジャスティスも飴玉の魅力にやられているし。
ここに来てやっと重い空気が和やかになった。
そして冒頭の表彰式の場面に戻り、レジェンドの演説によって新設される部隊、銀河遊撃隊について説明され、その要職に就くベリアルとゼロ、さらに第一期参加メンバーが呼ばれる。
ベリアルとゼロに加え、まずはゼアス、ティガ、ダイナ、ガイア、アグル、ナイス、コスモス、ジャスティスから成るベテラン組。
続いてゼロが直属の上官も務める新世代ヒーローズ『ニュージェネレーション』にはギンガ、ビクトリー、エックス、オーブ、そして当時は最後にジードが選出された。
この時はまだロッソ、ブル、グリージョもおらず、トライスクワッドやゼットはまだ訓練生だった。

「今、レジェンド様からメンバーの来歴を見せてもらっているのだが……全員凄すぎる戦績だ」

ティガが倒した相手には超古代文明を滅ぼした邪神、ダイナが倒した相手には巨大にも程がある暗黒惑星など、特にベテラン勢はスケールが大きすぎる。
伊達や酔狂で集められたわけではない、本格的な少数精鋭の遊撃部隊だとメンバーを見ただけで分かるレベルだ。
勿論ゼロ直属の面々も負けてはいない。
ギンガはタロウに、ビクトリーはヒカリに目を掛けられ、エックスはグリーザだけでなくザイゴーグという闇魔獣を討った実績を持ち、オーブは魔王獣の元締めたる超大魔王獣を倒し、ジードは【エリア】を超えてキングにも認められた。
そう、銀河遊撃隊は正しく宇宙警備隊に並ぶドリームチームと言える組織なのである。
ベリアルの短い演説後、ゼロが気合いの入った意気込みを語り終え

た所で再びガーディアンベースの映像へ戻った。

「こうして銀河遊撃隊は結成された。宇宙警備隊とは違い、起きた事件にその時その場で臨機応変に対応し、大事件が発生した場合でも宇宙警備隊の判断を待たず、隊内での決定によって作戦実行が可能。さらに少数精鋭故に電撃作戦も容易な独立組織、それが銀河遊撃隊だ。宇宙警備隊以上に時空・次元レベルの活動に積極的なところも特徴だな」

「あの、さっきのメンバーの中にタイガやタイタス、フーマ、あとゼットがいませんでしたけど……」

「会話を聞いていたから分かると思うが、今のは創設時のメンバーで、その四人はさらに三人追加された後に入隊したメンバーだな。現状、一番最後の入隊員はゼットだ」

「「「「三人？」」」」

「ロッソ先輩、ブル先輩、グリージョ先輩の三人だぜ！しかも三人は兄妹なんだ！」

「ち……ちなみにだな、グリージョちゃんはＯ―５０のウルトラマンにとってア……アイドルなんだよ」

「どうしたんだよフーマ。顔が赤いし、風邪でも引いたのか？」

「タイガ、少しは察してやれ」

レジェンドを始め、理解出来ている者達の中でタイタスの過去を知るレジェンドやオカ研は思う。『お前もな』と。王女の想いに気付かなかったタイタスも察するべきだろう。

「ところで、遊撃隊の皆さんは外見もかなり特徴的なんですね。光の国の皆さんにはあまり無かったプロテクターとか、そういうのを着けてる人が多いです。それにゼアスさんって方やナイスさんみたいに、光の国の方と似ているけどかなり違う方もいますし」

……正直、小猫が一番真面目に質問している。

これに答えたのは同じく真面目（＆天然）枠のサーガ。マジでお前ら結婚して末永く爆発しろ。

「先輩の話によると、遊撃隊に所属しているウルトラマンの中で光の国出身だと明確なのはベリアルとゼロ、それにタイガくらいだな。後は基本的に生まれやウルトラマンになった経緯が特殊だったり、他星の出身の者が殆どだ。こういったメンバー構成のテストケースとしても、今後を見据えた試みの一つらしい」

「あの、ゼットさんは光の国出身じゃないんですか？」

「へ？ああ……いや……ホラ、ちょっとばかりミステリアスなとこがあってもいいんじゃないかな～って……」

結局はぐらかされた。しかしシトリー眷属ゼットファン組はそういうところも魅力的に見えるらしい。

「それから、ガーディアンベースの内部について。居住区以外にも各種施設や特殊設備も充実していて、自給自足の生活が可能なんだ。当然セキュリティもかなり堅牢だし、任務なんかで長期間留守にする時とかも特殊なハウスキーピングシステムで自分達の居住区はしっかり維持されるからそこも問題ない」

養成学校では優等生だったタイガが説明する。

聞けば聞くほど光の国の技術が羨ましく感じてきた三大勢力トップ陣。しかし、これだけ便利なのはここまでしなければ日々の任務をこなし続けられないくらいハードなのだと気付いているのだろうか？

やっと穏やかになりつつあった会談であるが、厳勝の予想通り波乱の幕開けがすぐそこまで迫りつつあるのも、レジェンドやサーガ、そして彼らの眷属たる者達も薄々勘付いている。

会談の場を狙っているのは禍（カオス・ブリゲード）の団か、それとも……

〈続く〉

襲撃、事態急転

一方、オカルト研究部の部室では夜食にとリクが持ってきたカップラーメンを全員が食べていた。
体重を気にする乙女二人も、おそらくこの先起こるであろう出来事に備えて栄養補給という事で納得している。

「香ばしいけど匂いはキツくなくて、喉越しも良くさっぱりしている……リク兄さん、これ美味しいですぅ！」
「でしょ！後味もすっきりしてしつこくないところもポイントなんだ！」
「うまい！うまい！うまい!!」
「パム、パム、パム～」
「確かに……リクさんがこの加工食品には煩いと聞いてはいましたが、納得の味ですね」
「生麺タイプだから待ち時間が5分いるが、それも仕方ねえな。旨さでチャラに出来るぜ」
「……今度、隊の皆に非常食として提案してみよう」

さすがカップラーメンにおいてこだわりを持つリクのお気に入りの一品、パム治郎も器用に箸を使いこなして啜っている。
全員がスープまで飲み干して一息つくと、一緒に持ってきた飲み物を選んで飲みつつ会談の話題になった。

「そういえば、会談の方は順調でしょうか？」
「胡蝶が気になるのも当然だな！特にこちらに問題が無くてもあちらで何か起こっていても不思議ではない！」
「グラハム副隊長を始め、戦力としては向こうの方が充実し過ぎているが、逆に相手方もそれを予想して対策をしてくる場合も考えられる」

元鬼殺隊の柱と元袖付き所属の腕利きパイロットである三人の意見は最もだ。唯一違うとすれば、生半可な対策など無意味どころかプライドさえ木っ端微塵にしかねないメンツ（光神陣営）ばかりいる事だろうか。

そんな中、竜馬がすっくと立ち上がる。

「竜馬さん？」

「どうかしたんですかぁ？」

「……まあな」

ギャスパーは気付いてないが、リクは分かっている。竜馬が戦闘態勢に移行している事に。周りを見るとやはりしのぶや杏寿郎、マリーダもそうだ。

そこへ慌ただしくフードを被った人物が駆け込んできた。

「突然失礼します！皆さんご無事ですか!?」

「ええ、今のところなんともないですよ～」

「良かった！実はテロリスト共の襲撃がありまして、皆さんを避難も兼ねて会談の場にお連れするようにと光神様が！」

「なんと!?やはり悶着あったな！」

まさかの事態にざわめくリク達だったが、しのぶとマリーダ、そして竜馬は冷静だった。特に竜馬がだ。

「なるほどな、事情は分かった。場所はどこだ？」

「はい！ご案内するのでついて来て下さい！」

フードの人物と共に部室を出たリク達だったが、出た直後に竜馬が全員に待ったをかける。

「おい、一つ聞きたい事がある」

「……？何でしょう？」
「避難に関しては光神様が言ったんだな？」
「はい、事前にそう伝えてあるとの事ですが」
「ああ、そうだ。確かに伝えられてるぜ」

その瞬間、竜馬は恐るべき早さでフードの人物の胸元を掴んで壁に叩きつけ、口の中にいつの間にか取り出した大型マシンガンの銃口を押し付けた。

「ただし、俺達にそう伝えたのは光神様じゃなくて鬼神様だ。しかもあの人達は余程じゃない限り、俺達の自主性に任せてくれるんでな……何より今回のような場合、警戒して寄越すとしても同じ光神陣営の奴しか寄越さねえんだよ!!」

ゴリ、と銃口をさらに押し込む竜馬。
最初にこの人物が入って来た時、ハナっから気付いていたのである。
気付かれた事に驚きつつも、何とか抵抗しようと右手に魔力を集めるフードの人物だったが、竜馬がその右手も左足で壁に踏み抑えた。

「ングゥ!?」
「ようやく尻尾出しやがったな、ええ？このテロリスト野郎!!」
「ええっ!?テロリスト!?」

唯一警戒もせず、気付いてなかったギャスパーが叫ぶ。

「ギャスパー、ちょっとばかし衝撃的なモン見るハメになるぜ。嫌なら目ェ瞑ってな」

竜馬の言葉に慌てて目を瞑るギャスパー。それを確認した竜馬は右手を踏み抑えていた左足を離し、そのままフードの人物の腹に思い

切り叩き込む。

「ゴボォ!!」

「杏寿郎！窓開けろ!!」

「承知した!!」

現代における窓の開け方もすっかり熟知した杏寿郎がすかさず窓を開けると、そこから悪魔らしき者達が入ってこようとした……が、その者達へ向けて竜馬が拘束していたフードの人物が投げつけられ、纏めて押し出される。

「お前ら纏めて蜂の巣にしてやるぜ！オラァァァ!!」

竜馬の手にした大型マシンガンが先程のフードの人物を含めて三人、残り二人の悪魔諸共撃ち抜いていく。

文字通り蜂の巣になったフードの人物の背中から黒い翼……堕天使の翼が見えた。

堕天使と悪魔の連合軍、つまり連中はレジェンドとオーフィスとゴジラによってほぼ壊滅状態にある『禍の団』だと理解する。

その堕天使と悪魔が光になって消えた、即ち死んだのを確認した竜馬は戦闘態勢を崩さず残り五人に指示を出す。

「お前ら！切っ掛けはアレだが非常事態に変わりはねえ！このまま会談の場に向かうぞ！」

「竜馬さん……場所、分かります？」

「心配すんな、しのぶ。ちゃんと頭に入ってる。連中が校舎自体歪めたりしてなきゃ問題ねえ」

そんなマネが出来るのは極僅かだし、先程のような本当に雑兵レベルの連中に出来るとは考え難い。

しかし、何かに気付いたマリーダが叫んだ。

「っ!?リク、ギャスパー!」
「「え?」」

気が付けば二人に背後から堕天使が飛びかかってきていた。最後尾にいた為に狙われやすかった事を失念していたのだ。
咄嗟にリクがギャスパーの前に出るが、彼でも光の槍を受ければ無事では済まないだろう。
そして、その事を恐れたギャスパーは無意識のうちに自身の神器を発動していた。

「……あれ?何にも来ない……?」
「どうやら、ここら一帯……結構な範囲の時が止まっているようですね」
「だが俺達は勿論、戦闘力の低いパム治郎も問題無く動けている!即ち、ヴラディ少年が神器とやらを制御出来ている事に他ならない!」

しのぶと杏寿郎の言う通り、無意識とはいえしっかりとギャスパーは己の神器を制御して味方以外の時を止めているのである。
この中で言ったら一番戦闘力が無いパム治郎が普通に動いているのがその証拠、彼が動けなくなっていればただ他の者がギャスパーより強いだけ、と済まされていた。

「やったよギャスパー君!実戦で問題無く発動出来たんだ!」
「え……あ……僕、ホントに?」
「はい、良く出来ました」

笑顔でパチパチと拍手しているしのぶと、うんうんと頷く杏寿郎とパム治郎。マリーダも微笑んでいるし、竜馬もニヤリと笑っている。
「よぅし、これでこっちの戦力は万全だって分かったな。改めて会談

の場に向かうぜ！前衛は俺、両サイドをしのぶとマリーダ、殿は杏寿郎で中央にリクとギャスパーだ！杏寿郎、前の方は安心して後ろに意識を集中しときな！」
「ああ！先陣は任せたぞ、竜馬殿！パム治郎も俺から離れるな！」
「パムパム！」

陣形を組み直し、竜馬の号令と共に駆け出す六人。
神器制御が可能になったとはいえギャスパーには無理をさせられない為、神器の発動はいざという時まで控えさせておく。
当然だが時が止まっていなければ敵は襲い掛かってくる。しかし彼らが刃を向けているのは光神陣営の実力者達だ。
数に物を言わせて攻めてきたが……

「オラァ！道を開けろ雑魚テロリスト共!!」
「私と仲良くする気があるなら退いてくださいね～」
「既に元が付いているが、強化人間の強化というのは何もサイコミュ能力だけに限った事ではない！」
「数に頼って鍛錬不足のようだな！まずは素振り千回から始めてみろ！」

戦闘班四人が強過ぎた。
ちなみに、マリーダはクローンという出自における生まれながらのデメリットなどを治療する際に、強化人間としての利点も失った。しかし、そのおかげか今は純粋なニュータイプだ。失った強化人間としての身体能力なども訓練の末、天然の能力として取り戻している。
先程止められていた堕天使も追いかけてきたが、呆気なく杏寿郎にねじ伏せられた。グラハムやタイタス、さらにゲンらと日々トレーニングを欠かさない彼に立ち向かうには鍛錬が足りなかったようだ。
偶然にも突破出来た一人の悪魔がリクとギャスパーに迫るも……

「ふっ！」

「ゴフッ!?」
リクに片腕を掴まれて裏拳を叩き込まれ、肘打ちかまされた直後に背負い投げされたと思ったら空中へ放り投げられ、トドメに回し蹴りを食らって前方へ吹っ飛び気絶させられた。
雑魚相手にオーバーキルなのは父や隊長やってる先輩譲りかもしれない。

「2万年早いぜ！ってね」
「リク兄さん強いですぅ！」
「やるじゃねえか。今の動きは場数踏まなきゃ出来ない動きだぜ」

ギャスパーと竜馬にも褒められ、リクも照れくさそうに笑っている。既に彼らに襲い掛かっていた拉致部隊はほぼ壊滅。というか女性二名が一番苛烈だった。
ボコボコにした挙げ句窓から勢いよく捨てまくるマリーダと、突き刺しまくった上で適当な刃物で張り付けにしてるしのぶ。
捕まったら何をされるか分からないという危機感があったのはいいが、やりすぎ感が半端ない。

「しのぶ、あとどれくらいだ？」
「もう片手で数える程度しかいませんね」

顔が変形してぐったりしている悪魔の胸ぐらを掴みつつ尋ねるマリーダに、新たに一人張り付けにしたしのぶが答える。
あ、マリーダがまた一人ぶん投げた。

「……リク兄さん、部長もそうでしたけど今の女性って強いんですね」
「……そうだねギャスパー君。卯ノ花さんとか束さんとか、僕の周りにもぶっちぎりで強い女性ばかりなんだよ」
「いや、あの二人もアレだぞ。レジェンド様に手を出そうモンなら目の前の二人よりやべえ」

「うむ！二人共好調なようだな！良きかな良きかな！」
「パムパム」

そしてこの場で最強メンタルな杏寿郎とパム治郎。
え？パム治郎なんでこんなにメンタル強いの？
かくして、ギャスパー拉致部隊は拉致するどころか誰一人傷付ける事が出来ずにズタボロにされて全滅した。

☆

「外がやけに騒がしいな。男の声で悲鳴が聞こえ続けている」

ウルトラ戦士の間でも地獄耳で有名なレジェンドヒアリスのおかげで外の事情をなんとなく理解したレジェンドが呟いた。

「まさか……！」
「心配するな、リアス。この声はそもそもギャスパーではないし、護衛の声でもない」
「でも、それじゃあ誰が……」
「むしろその護衛連中にボコられてる奴らじゃねえの……？」

フーマの感が冴え渡る。実際その通りだった。
そしてタイガも思い出す。しのぶが卯ノ花に弟子入りしてた事を。

「ふむ、少し見てくるか。巌勝、この場を頼むぞ」
「承知した、老師」
「待て待てお前が行ったら今以上の惨劇になるから」

満を持して出向こうとした東方不敗をレジェンドが止めた。ぶっちゃけ拳一発で悪魔や堕天使が四散して血の海になりかねない。良くて全身骨折だろう。

そうこうしているうちに扉が勢いよく蹴り開けられ、竜馬を始めとする六人が到着。

「会談中に悪いな。緊急事態だったから無作法な登場になっちまった」

「竜馬、何があった？」

「ああ、禍の団っぽい連中に襲撃されたぜ。片っ端からブチのめしたからこっちに出た被害といえばコイツの弾代くらいだがな」

コンコンと大型マシンガンを軽く拳で叩きつつニヤリと笑う竜馬はいつも通りだ。

しかし、三大勢力陣やアーシア、ゼノヴィアは真っ青だ。よりによって光神本人のみならず光神陣営所属の者にも自ら手を出した以上、もはや本格的に禍の団は潰されるだろう。

「ああ、それから……」

報告を受けたレジェンドが軽く息を吐くと……

ジ　ャ　キ　ン　！　！

『!?』

「ッ!?」

「動くな堕天使の付き人。今動けば我が月の呼吸によって貴様は細切れになる」

ヴァーリの首に巌勝が鬼神刀を当てた。巌勝単体を見ても別次元の実力者と別次元の刀が揃っている今、ヴァーリに勝ち目は無い。

「いきなり何を……」
「所詮生家に恵まれ良き玩具を与えられて喜んでいる童にすぎんな。血筋など成長する上での指針にしかならん。黙っていれば時が来るまで暴かれんとでも思ったか？貴様がレジェンド様に瞬殺された日から今日に至るまで貴様の素性は調査済みだ。禍の団所属『ヴァーリ・ルシファー』」
「「「「!?」」」」

厳勝の言った事に衝撃を受ける三大勢力。現在の魔王はルシファー、レヴィアタンといっても称号的な意味が強い。つまり魔王以外がその姓を持つとしたら、旧魔王の血族に他ならない。
そして当のヴァーリ自身は厳勝がそれを知っていただけでなく禍の団に属しているのを知っていたのに驚きつつ、童……即ち子供呼ばわりされた事に腹を立てている。

「俺が、子供だと……？」
「ああ。私から見れば特に内面がな。ただ我儘で自分の好きな事しかしない、年端も行かぬ童同然だ。貴様の過去がどうあれテロリスト集団である禍の団に属しているとあらば見過ごすわけにはいかぬ」
「っ……」

表ではギャスパーが拉致出来なかったからか、禍の団の堕天使や悪魔、魔法使いが護衛の者達と戦闘していた。

「まーだあんなに残ってたのか。だから複合企業（コングロマリット）みたいな敵組織イヤなんだよ。大なり小なりに、下手したら個人間で繋がりがあるだけで広範囲に分布してて壊滅に手間取るんだよな」
「然らば少し運動してくるとしよう。レジェンド様、宜しいかな？」
「まあ、護衛側は劣勢みたいだしいいぞ。味方には被害出さないようにな。……出来るだけ」
「ご安心なされよ。校舎や校庭はともかくそちらへ被害は行きますま

い」

あ、これ校舎全壊か校庭がクレーターだらけになるやつだ、とレジェンドは一発でその結論に達した。

「それからヴァーリと言ったな。巌勝の言う通り血筋など所詮は将来を決める為の指針の一つに過ぎぬ。現に儂の一番弟子は科学者の家系であったが、ある格闘競技で優勝を果たす程の実力を身につけたのだからな。神器と血筋、どちらも優れた物を持っているから自分は優位などと考えるのはただの愚考というものよ」

東方不敗はそう言うと未だ戦闘中の校庭のド真ん中に向かって飛び、勢いよく落下・着地する。

その様子を見たレジェンドと卯ノ花、鬼灯はその場の全員に告げた。

「よく見ておけ。俺が格別の信を置く比類無き実力者達、伝説九極天の実力というものを」

「あの方は九極天随一の武闘家。その四肢こそが最大にして最強の武器です」

「何はともあれ直接見た方が早いでしょうね。武器は使ったとしてもあの腰に巻いてある、布槍術を行う為の布くらいです。ちなみにあれは燃えにくく破れにくい以外、別に気の伝導率を上げたりとかそういう機能は無いのであしからず」

つまり、ほぼ丸腰に近い状態だという事だ。

サーゼクスらはさすがに心配するも、すぐにそれは杞憂に終わる事となる。

☆

突如現れた東方不敗に敵だけでなく味方も困惑するが、東方不敗は別の事に困惑していた。

（ふぅむ……困った。ここ最近大物といえばレジェンド様との演武を除き狛治くらいしかやり合っておらん。アクシズとか言う小惑星はただの的、無惨は罰という名のサンドバッグでしかなかったからな。どの程度手加減すれば良いのか皆目見当がつかぬわ。どうしたものか……）

ぶっちゃけどれもこれも例外過ぎるのである。

レジェンドは元より、狛治は手加減されていたとはいえ東方不敗からの急所への攻撃を何発も受けてなお向かってきたし、アクシズはサイズが桁違い、ついでに無惨は亡者なので死んでもすぐに復活。

まともに参考になるのは狛治との組手ぐらいだが、ハッキリ言って目の前の連中とは雲泥の差であり彼相手の手加減と同じで耐えられると思えない。

どうするかと思案していたら攻撃を仕掛けられた。

「何者か知らんがたかが老人一人だ！多少腕に覚えがあろうと我らの敵ではない！やれ！」

魔法使い、悪魔、堕天使からの魔力弾や光の槍が一斉に東方不敗へと向けて発射されるが……

「喝ァァァッ!!!」

気合いだけで全て消し飛んだ。

「「「「はあああ!?」」」」

今度は逆に敵どころか味方まで顎が外れた。これはサーゼクスら

も同様だ。
防ぐ以前にまず届かずにかき消されるなど誰が予想出来ようか。しかも気合いだけで。
「な……な……！」
「普通なら考えているヒマなどない、という状況だろうが……儂としては考えるのも面倒になった、というところか」
顎が外れている周囲の者達に対してうーむと顎に手を当てて考えていた東方不敗はある結論に達した。
「事後処理はレジェンド様らに任せるとしよう」
レジェンドが「え、俺？」と呆けた瞬間、東方不敗の前にいた禍の団の構成員が全員宙を舞った。
中には上半身や下半身が丸ごと吹き飛んでいる者もいたが。
『え？』
レジェンドやサーガ、そして彼らの眷属を除きアーシアやゼノヴィア、果てはタイガやゼットらもその目を疑った。
一瞬で決着がついてしまった。
「むう、やはり手加減の仕方も学び直さねば。首の骨や背骨をへし折る程度で済ますつもりが上下半身を粉砕してしまうとは……」
いや、首はともかく背骨折ろうとして下半身が吹き飛ぶのだろうか？位置的に……

そう考えていたら上空に魔方陣が展開され、さらに増援が！……来るはずもなく、逆に東方不敗がそこから突入し……

「未熟！未熟!!未熟千万!!!だからお前達はアァホなのだァァァ!!!」
『ぎゃあああああ!!!』

東方不敗の怒声と禍の団構成員の断末魔、そして聞こえてはいけない音が魔方陣の向こう側から響いてくる。
どんな惨劇が行われているかは推して知るべし。

☆

「あ、別に心配する事なかったな」
「レジェンド様、先程東方不敗殿が彼らの上下半身を吹き飛ばしましたが」
「そこは私が即地獄送りしておきましたのでご安心を。遺体とかはもうありませんし、あの光景を見てしまった部分は各人脳内抹消出来るでしょう」

周囲の者が唖然としたり真っ青になったりしている中、この三人は気にするでもなくいつも通り。
鬼灯の脳内抹消発言を実行出来る者が果たしてこの中でどれだけいるのだろうか……

「マジで何なんだよあの爺さんは……!?」
「魔法使いはまだしも身体能力の優れている悪魔や堕天使が一瞬で……しかもあれだけの数を……！」
「そういえば東方不敗さんだっけ？あの人、星間連合の一個師団を生身で壊滅させたって聞いたんだけど」

「「「すいませんジード先輩今物凄い事言いませんでした!?」」」

三大勢力陣はピンとこないであろう星間連合。
トライスクワッドやゼットは普通に知っている為それがどれだけ強大な勢力か理解に難くない。

「星間連合って何かな☆」
「一つの惑星の中において、それぞれに主権を維持した二つ以上の主権国家による連合を国家連合というように、それの惑星版だと思ってくれればいい」
「その星間連合の規模により数は異なってくるものの、そもそも星間連合クラスの一個師団ともなれば最低でも数百万から数千万規模の大艦隊が普通だ」
「最低数百まっ……!?」
「いやあのっ!?大艦隊って事は戦艦とかも……」
「主戦力だぞ戦艦」

それを生身で壊滅。もはや強いとかそういうものを超えて物理法則とか色々無視してるんじゃないのか?
ついでに後でその戦場が宇宙空間、即ち真空中だと知った何人かは遂に失神したという。
そして未だ混乱の渦中にある会議室の隅に先程とは別の魔方陣が出現し、その中から露出度高めな女性が現れた。

「御機嫌よう。現魔王サーゼクス殿、セラフォルー殿」
(……先輩、俺の認識が間違っているのか分からないから教えてくれ。純血悪魔は皆何かしら見せつけないといけない性癖でもあるのか?)
(俺にも分からん。少なくとも今現れた奴は余程見せつけたいらしい。おそらく位が上である程そういう傾向にあるのかもしれん)

光神二名は変なところを真面目に考察している。

その後ろではしのぶが青筋浮かべつつ拳の素振りをしているし、卯ノ花までジト目になっていた。
鬼灯は「罪状・公然猥褻物陳列罪」とか記入しているし、グラハムは拳銃（東謹製）のロックを無言で外しており、巌勝に至っては下衆を見るような目で見た後、ヴァーリに目を向けて……
「……アレとつるむとは貴様も同類か。『実は履いてません』などと言うのではあるまいな」
「それだけは断固として否定する!!」
思いっきり侮蔑の言葉を投げかけていた。さすがに反論するヴァーリだったが、巌勝の発言が聞こえたのか彼方此方から哀れみや蔑みの視線が向けられる。
アーシアなんて涙眼でレジェンドに引っ付いているくらいだ。組んだ相手が悪かったと言わざるを得ない。
ヴァーリよりもアルビオンの方が本気で泣きそうだった。

「誰だテメエは」
「下等な人間が私に無礼な口をきくのは許せませんが、特別に教えてあげましょう。光栄に思いなさい」
竜馬の額にも青筋が浮かび、大型マシンガンどころか最新超兵器ゲッタービームマシンガン（人間用サイズ）まで取り出した。ちなみにこれ、プラズマ怪獣をブッ倒したガチ武装である。
「私はカテレア・レヴィアタン。真の魔王の血族にして、腐敗しきった世界を滅ぼし新たな世界を取り仕切る者です」
「ギャスパー君、ああいうのを電波系って言うんだよ」
「リク兄さん、僕初めて見ました。関わっちゃいけないっていう雰囲気丸出しですね」
「誰が電波系ですかっ!!」

リクとギャスパーに頭のイタイ人認定されたカテレアは激昂するが、彼女はいい加減気付くべきだろう。
自分の周りには化け物しかいない事に。
唯一戦力になりそうなヴァーリも厳勝に抑えられつつ痛々しいものを見る視線に晒され役に立ちそうに無い事にも。

そして、ゴジラを抱えたオーフィスと……
『狡知』と『狂おしいほどの好奇心』が迫っている事は、今はまだ誰も気付いていなかった。

〈続く〉

Paradise Lost

――スペースコロニー・ドラガイト――

いよいよ鉄華団の新造艦の進宙式が行われようとしている。進宙式後はそのままダイブハンガーへと向かう為、サーガと合流する超次元グレン団の選出メンバーも同乗しており彼らの機体も搬入済だ。

さらに、進宙式に立ち会うべくギャラクシーレスキューフォースに出向しているクルーガー夫妻も一時的に帰還しており、ダンブルドアやアムロ、ニールらも出席していた。

「ほう、これが噂の新型か。何というか……鉄華団よりも超次元グレン団向きな気がしないでもないが」

「まあな。けどよ、ドギーの旦那。コイツは俺らにとってもピッタリな艦だぜ？『絶対に折れない、止まらない』ってのを体現してると思わねえか？」

「ふ……確かにな」

「束がある程度作り上げていた物をクルーガー主任があの人と共に引き継いで完成させたんでしたね」

「そうよ～。束ってばいきなり『スーちゃんあとお願いね！設計図と完成予想図送っといたから！』って連絡してくるから思わず変な声出ちゃったし、あの人にも無理言っちゃったし。リブット君やソラちゃん、イザナ女王にも心配されちゃった」

「その割には楽しそうだな、ミセス・スワン」

「これだけ大きなもの作ったの久しぶりだしね～」

鉄華団の新造艦の開発は、篠ノ之束、スワン・クルーガー、そしてもう一人の人物によって進められ、今日の完成へとこぎ着けたのである。

光神陣営の中でも最上級の科学技術・メカニック知識を持つ者達によって造られたそれは、これからの戦いに必要なものだ。

「儂らはそうそう己の職場を離れられんのでな、頼むぞ。オルガ君、いや……鉄華団、そして超次元グレン団の皆」
『おうよ！俺達に任せときゃ万事解決だぜ！』
『カミナ、ダンブルドア校長にそんなタメ口きかないの！全く、レジェンド様もそうだけどちっとも諌めないから』
『お前だって大将相手に、タメ口だろ！それにな、変にですます口調になったら壁が出来ちまうだろうが！俺達ゃ家族、ファミリー、運命共同体だぜ！硬い事は無しにしよーや！』
「今日も変わらず賑やかじゃな」
「いいんじゃないか？下手にガチガチに緊張したり、今生の別れみたく泣かれるよか全然良いぜ。あいつら……いや、俺達らしくてよ」

ニールの言う通り今生の別れでもないのだし、顔見知りの集まったせっかくの進宙式、幸先良くなるのを願って明るく送り出そうという全員一致の意見だった。

「んじゃ、そろそろ俺も艦に行くか。ドギーの旦那、スワンの姐さん、ダンブルドア校長、アムロ隊長にニール教官、色々助かった。また合流したら美味い飯食いながらお互い思い出話に花咲かせようぜ」
「ああ、サーガ様やレジェンド様によろしくな」
「束に次はこっちに協力するよう伝えといてね」
「お前達の武運長久を祈っている。あまり無茶をし過ぎるなよ」
「時が来れば俺達も共に戦う事になるだろう。頑張れよ」
「儂は近いうちにレジェンド様からお呼びが掛かりそうじゃがな」

ダンブルドアの言葉に苦笑するも、オルガは大きく手を振りながら艦へと向かい、彼の姿が艦内へと消えてからドギー達もコロニーのドックから管制室へと移動する。
彼らの新しい門出を見守る為に。

☆

三大勢力会談の場に現れた旧魔王派のカテレア・レヴィアタン。圧倒的不利な状況にも関わらず、不遜な態度を変えない彼女に三大勢力側はともかく、光神陣営（アーシアやゼノヴィア除く）はこう考えていた。

――コイツ、頭大丈夫か……？――

それもそのはず先程から現在進行形で続いている、東方不敗による蹂躙を見たのかどうかは知らないが、それと同格なのが少なくとも二名はこの場にいるというのにあの態度。

それに、ヴァーリは今のままでは戦力にならない。多分カテレアと（衣装の件で）同類に見られたくないから見捨てるかもしれないし。

「カテレア……テロの首謀者は君か？」

「ええ、その通りよサーゼクス。ただ……かなり予定とは食い違っているけれど」

「もうやめてカテレアちゃん！どうしてこんな事を……」

「下賤な小娘め……！私からレヴィアタンの名を奪っておきながらよくもぬけぬけと……！」

カテレアはギリッと歯軋りしながらセラフォルーを忌々しそうに睨みつけるが、レジェンドは頬杖つきながら気怠そうに欠伸している。

鬼灯は鬼灯で（東方不敗が今もなお殲滅モードな為）どんどん増えていく地獄行きの魂に頭を悩ませているし、卯ノ花は斬魄刀を笑顔で構えていた。

「しかし……ヴァーリ、一体いつまでそうしているつもりですか？たかが人間一人、貴方なら何の苦もなく始末出来るでしょう？」

（ダメだコイツ力量を把握出来てないな）

（巌勝さんを普通の人間と思ってる時点で人選ミスですね。誰ですか彼女送り込んだのは。まさか立候補？）
（旧魔王というから私も少しは楽しめるかと思ったのに……期待外れです）

ズタボロに思われているなど気付くはずもないであろうカテレアは誰も追求していないのに今回の作戦を喋り始める。

「ヴァーリからの情報提供、及び下準備を完了させ、ハーフヴァンパイアの神器の力を発動させてからテロを実行する手筈だったのですが……いつまで経っても神器が発動せず、仕方ないからと出向いてみればヴァーリは拘束され実行部隊はほぼ壊滅……まさかこうなるとは思ってませんでした」
（（見通し甘過ぎー……））

レジェンド側の三名はどんどんやる気が削がれていく。

「ですが、私達も策が無いわけではありません。何故ならこちらにはあのオーフィスがついているのですから」
「「「「……え？」」」」
「フフ……どうやら知らなかったようですね。噂の光神様でもこの事は予想外だったでしょう？」

間抜けな顔したレジェンドを始めとする光神陣営を見て気分を良くするカテレアだったが、そうではない。

（コイツまだオーフィスが禍の団にいると思ってるのか？どれだけ放っておいたのか分かるというか……帰ったら思いっきり甘えさせてやるとしよう）
（オーフィスちゃん、漢字覚え始めてから『バカの団』とか呼んでたって超師匠言ってたっけ）

（あの……何だ……ねーちゃん大丈夫か？）
（フーマ、無理してねーちゃん呼びしなくていい）
（やっぱり電波系だったんだ。現実を認識出来ないんだね）

最後のリクが一番酷かった。可愛い弟分に手を出されそうだったのが余程腹立たしいようだ。

「まさか、無限の龍神（ウロボロス・ドラゴン）が絡んでいるだと……!?」
「ええ。貴方達に勝ち目はありませんよ。光神様ならどうか、というところでしょうが」

前者は合ってる。後者は大間違い。鍛えたのはレジェンドです。

「え、オーフィスっていつもレジェンド様にくっついてるあの娘だよな？」
『ああ。俺が言うんだ、間違いない』
「『……は？』」

ナイス空気読まない発言な一誠とドライグ。先程とは正反対にカテレア、ヴァーリ、そしてアルビオンが間抜けな声を出した。というかヴァーリとアルビオンはプールでの出来事の時にガチで気付いてなかったらしい。

「我呼んだ？」

一時の静寂。
いつの間にかゴジラを抱っこしつつ、レジェンドを見上げるオーフィスがいた。そんなオーフィスを見る一同。
いつも通りの定位置……つまりレジェンドの膝の上にゴジラを抱きかかえたまま座るオーフィス。

『えええええ!?』
「何でお前ここにいるんだ？留守番してろって言っただろ」
「なんかゴジラが連れてけって。あと、我レジェンドがいないと眠れない」
『オレ様のゴジセンサーがビンビン警鐘鳴らしてんだよ』
「オイ何だゴジセンサーって」

いつもの調子で会話する二人と一匹を唖然とした表情で見ている三大勢力トップ陣やカテレア、ヴァーリ＆アルビオン。

「オーフィス!?何故貴女がそこにいるんですか!?」
「……？レジェンド」
「何だ？」

「あれ、誰？我知らない」

直後、カテレアの背後に雷が落ちた。
リアスらは必死で笑いを堪えている。更に言うがヴァーリとアルビオンは視界にすら入ってない。

「な……な……!?」

「オーフィスちゃん、分からないでございますか？」
「うん。あんなの知らない」

あんなの呼ばわりで大半の腹筋が崩壊し、辺り一面大爆笑だ。
長らく放置しすぎに加え、レジェンドやその一家との日々がかつて無く濃厚、しかも楽しすぎたのでオーフィスはカテレアをすっかり忘れているもよう。

「ぶはーっはっはっは！腹痛ぇー！」
「真の魔王と名乗りながら組織のトップに覚えられてないとは……ぶふっ」
「この堕天使と天使風情に笑われるなど……！オーフィス！この私を、カテレア・レヴィアタンを忘れたと言うの!?」
「……あ」

ここにきて漸く思い出したようだ。しかし、オーフィスはカテレアを指差しつつ最近覚えた言葉を使ってみる。

「放置親」
「ほうっ!?」
「「「ぶふぅっ!!」」」

親ないし子、もしくはそれに似た立場の者は揃って噴き出した。ある意味間違ってない。

「オーフィス！貴女の目的はどうしたのです!?グレートレッドを倒し、静寂を手にする目的は!!」
「我、もう静寂要らない」
「は!?」
「静寂もいい。でも、それよりレジェンド達と一緒がいい。一緒にご飯食べて、お散歩して、お昼寝して、遊んで……冒険とかもしたい。そ

れにもう我の方がグレートレッドより強い。だからそんな目的もうとっくに捨てた」

オーフィスは淀みなく言い切り、レジェンドに撫でられて満足そうである。未だパクパクと口を開いて衝撃が抜けきっていないカテレアに追撃をかける。

「我、ずっと言ってきたのに『魔王が』『研究の為』とか言って放って置かれてた。レジェンド達はお仕事忙しくても構ってくれるし、色んな事教えてくれた」

「条件は禍の団を抜ける事だったんだが、後からは俺と一緒に禍の団潰しに協力してくれてたからな」

『!?』

どうやら、これも三大勢力や禍の団側は知らなかったらしく酷く動揺する。なにせトップと思っていたオーフィスが光神と一緒になって禍の団潰ししてるなど誰が予想出来ようか。

「そ、そんな馬鹿な事が……」

「お仕事終わった後の現地ご飯美味しかった」

「アレは醍醐味だよな～」

『やっぱ定期的にマグロ食いたくなるよな』

周りが騒然としている中、レジェンド一家最強チームはのほほんとしていた。

しかし、それの雰囲気さえある者によって破壊される。

「漸く役者が勢揃いしたか。結局揃わなかったら何もせず帰るハメになるところだったよ」
『!!』

声のした方向を向くと、開いた窓に腰掛けて顔だけ向けてくる堕天司ベリアルがいつもの表情でそこにいた。

「やあこんばんは特異点に光神サマ。それからハジメマシテ三大勢力のトップの方々。それと白龍皇とオマケさんも」
「オマケ……ですって……!?」
「オマケだろう？真の魔王を名乗る者がそんなモノに頼っちゃダメじゃないか。光神サマの膝の上でお行儀良くしてる彼女に返したらどうだい？」

カテレアは戦慄する。この男はオーフィスの『蛇』の事を知っている。
初めて出会う相手だというのに瞬時に心を見透かされたような感覚に陥り、恐怖が生まれると同時に汗が流れてきた。

「おっと自己紹介がまだだったか。こいつは失礼……俺は堕天司ベリアル。コッチの世界とは堕天使の使と司で違うからそこヨロシク」
「父さんと同じ名前……！」
「君はジード……だったか。同じ名前って事は親父さんもこんなイイ男だって事だろ？」
「父さんがイイ男なのは認めるけど、お前の事はそう思えないね」
「ハハッ、初対面なのに随分嫌われたモンだ」

いつもの調子で笑うベリアルに対してリクは更に苛立つ。少なくともリク―ジードにとっての父ベリアルは厳しさと優しさを併せ持ち、気さくで年の離れた者からも気軽に話しかけられているような人物だ。闇の方も何だかんだ言って手助けしてくれるツンデレなチョイ悪親父という感じである。

「ま、兎にも角にも俺も今日は仕事でね。今日の目的は君だ、白龍皇」
「俺、だと？」
「そう。とはいえそのままじゃ落ち着いてオハナシ出来ないだろう。さて、月の侍」
「……貴様と話す舌など持たん」
「そう言うなよ。聞くだけでいいさ。この間、俺が言った事を覚えているかい？あの廃教会での方な」

厳勝は思い返してみる。あの日……そう、レジェンド、オーフィス、ゼットと共に大型の『鬼』カゼキリを討伐した日の事を。
廃教会での会話の中で気になった点と言えば……

「世界が繋がりを持った……」
「その通り。よく思い出したな。で、ここにこれだけ生まれも育ちも違う世界の者が集まったんだから……」

その時だった。
校庭の隅にあの時の―カゼキリが出現した時と同じように空間が歪み、そこからカゼキリを大きく上回る５ｍを超える巨体が現れた。
逞しい四肢や肉体、首元には数珠らしきものもあり、長大な尾を持ち、その頭部には牙や角を持った、御伽話のそれに近い大型の『鬼』―ゴウエンマ。
鬼の前線指揮官とも称されるそれはカゼキリを遥かに上回る戦闘力を有する危険な存在だ。

「こうなるわけだ」
「鬼ッ……！しかもゴウエンマだと!?」
「あれが、私達の世界とも、この世界の鬼とも異なる鬼……!?」
「何という迫力だ！まるで上弦の月が巨大化したような圧倒的威圧感！」
「あんなのとレジェンド様やゼットさん、オーフィスちゃんは戦ったのね……！」

巌勝は元より鬼☒隊の『柱』だった三人は自分達の知る鬼と違う、全く別の鬼に戦慄している。
そして、それはリアス達三大勢力の者や、カテレアも同じだった。

「おい！何かヤバそうな奴出てきたぞ!?」
「怪獣……にしては小さいな、一体どんな奴なんだ!?」
「むうう……あの肉体、敵ながら見事と言わざるを得ない！」
「「だーかーらあああ!!」」

相変わらず筋肉に目が行きがちなタイタスにツッコむタイガとフーマ。確かに凄い筋肉だし、一撃一撃が危険かもしれないと言われれば説得力があるのだが。
ここで、巌勝はヴァーリを突き飛ばし、窓から校庭へと飛び降り脇目も振らずゴウエンマへと突撃する。

（あの状況では白龍皇とやらは他の者に任せるしかない。ゴウエンマ……いや、『鬼』にレジェンド様抜きで痛手を与えられるのは現状私のみだ。それに攻撃が通じる今ならば一対一でも問題はない！）

レジェンドやオーフィス、ベリアルを除く者達は巌勝の行動に驚くも、そんなのはお構いなしにベリアルが会話を再開する。

「これで拘束は外れたな。改めてお話しようか白龍皇。まず言ってお

かないといけない事がある」
「……何だ？」
「君は弱い」
「ッ!!」
「そうだろう？如何に魔王の血筋であろうと、所詮は強い神滅具を振りかざしてイキッているだけの坊やさ。現に魔王獣との戦いで活躍していたのはウルトラマンや光神陣営の連中だ。『永遠に戦えればいい』なんて考えてる割に勝てない相手には向かっていかない。さっきだってそうさ。動こうと思えば動けたはずなのに黙って固まったまま。結局君は戦いじゃなくて弱い者イジメがしたいだけだろ？」
「……黙れ……」
「今もそう、鬼が出た瞬間に飛び出したのはあの月の侍だ。君は突き飛ばされて起き上がりはしたもののこうやって震えているだけ……君は弱い臆病者さ」
「黙れっ!!」

遂にヴァーリの堪忍袋の緒が切れた。怒りに顔を歪め、ベリアルに対して尋常ならざる殺気を叩きつけている。
が、当のベリアルはどこ吹く風、まるで意に介していない。それどころか計画通りともとれる表情をしていた。

「俺が弱いだと!?臆病者だと!?いきなり現れてそんな事を言っておきながらただで済むと思うなよ!!」
「じゃあ証明してもらおうか。来いよ臆病者の坊や」
「貴様ァァァァァ!!」

優雅に空へと舞い上がったベリアルに対し、禁手化して会議場を衝撃で破壊しつつベリアルを追うヴァーリ。
もはやいつもの冷静さは微塵もない。

「完全に奴のペースだな」

「……白龍皇、確実に敗ける」
『少なくともあのヘラヘラ野郎はレジェンドと相対してもヘラヘラしたままだったからな。度胸も場数も違うんだろうよ』

レジェンド一家最強格三名は逆に冷静だった。
しかし何故ベリアルはヴァーリを怒らせるような真似をしたのだろうか？
ただ倒すだけなら冷静さを失わせる必要は無かったはず。そこにはある者の恐るべき意図が隠されていた。

☆

結界の天井ギリギリの位置で激闘を繰り広げるヴァーリとベリアルだが、禁手化しているにも関わらずヴァーリは劣勢であった。どういうわけか相手の攻撃その他を半減させる事が出来ないのだ。

「ホラどうした？威勢の良さがあっという間に消えちまったぜ」
「ハァ……ハァ……！どうなっている、アルビオン！」
『知るか！能力自体は問題なく発動している……奴が対象に含まれていない！』
「含まれていない、だと……？」
「さっき言ったばかりだろ？その神器に頼り過ぎなんだよ。この世界の連中はさ」

凄まじい速さで飛ばされてくる赤い剣をなんとか回避するヴァーリだったが、ベリアルの翼から放たれた無数の閃光を何発も浴びてしまう。

「ぐあああああ！！」
『ヴァーリ！くそ……何か仕掛けが……！』

ベリアルの仕掛けとやらを探ろうとするアルビオンだったが、一瞬のスキを突かれヴァーリをベリアルが捕獲し……

「別に周りからエネルギーを吸収しなくても、俺がプレゼントしてやるよ。ホラ」

ドン！とヴァーリの鎧に掌を付け、自身の持つあるエネルギーをヴァーリに注ぎ込むと、途端にヴァーリは苦しみだす。

「がああぁぁぁっ!?」

『おい、どうしたヴァーリ!?』

「がっ！ごほっ！ぐ……う……げほっ！」

「そんなに密閉したら駄目だな。そら」

バキィィィィン!!!

一誠の時同様、一撃で簡単にヴァーリの鎧を木っ端微塵にするベリアル。その瞬間、ヴァーリの全身からドス黒い血のような闇が一気に噴き出した。

「がはっ……」

『ヴァーリ！馬鹿な……コイツがこんなにアッサリと……一体何を注ぎ込んだ!?』

「ヒ・ミ・ツ。さて、まずはこっちを仕上げないとな。よっと」

軽い調子でヴァーリを地上の校舎へと蹴落とすベリアル。アルビオンの悲鳴を聞きつつ、屋上から一階まで突き抜けて行くヴァーリを見ながら通信を入れる。

「こんなもんでいいかい？ギアさん」

『この上ない完璧な仕上がりだ。流石だよベリアル』

「いやいや、アレもまだまだ子供って事さ。しっかしギアさんもえげつない方法取るねぇ」
『フフフ……徹底的に侮辱され、その上で完膚なきまでに叩き潰された彼は力を欲するだろう。そう……己の無力さを嫌というほど思い知らされた彼は、なりふり構わずに……ね』

通信に映っていたその者の姿は、差異はあれどウルトラマンであった。

☆

落下してきたヴァーリによって校舎が破壊され(元々彼が飛び出た時にある程度破壊されていた為、これがトドメになった)、光神陣営側と分断された三大勢力側はヴァーリの元へ急ぐ。
そして発見したヴァーリは既にボロボロであり、まともに戦える様子は無い。

「ヴァーリ、しっかりしろ!」
「アザゼル!彼は……」
「分かってる、テロの実行犯だ。けどよ、せめて命くらい救ってもバチは当たらねぇだろ。これでもコイツを今日まで育てた責任ってモンがある」

サーゼクスに諌められるも、アザゼルとしては息子同然に育てたヴァーリをそのままに出来なかった。
後から到着したリアス達も黙って見守っている。
しかし……

『彼は我々が頂くよ』
「「「「!?」」」」

その場の全員が吹き飛ばされた。
何者かがやってきたのかと思えば誰の姿もなく、あったのは宙に浮かぶノイズだらけの空間ディスプレイ。

「な……何だ!?今のは!?」
「分かりません！魔力などの反応も無かった……」
「あるとすればあの変なテレビだね☆」
「こんな時まで☆付けた喋り方すんな！ったく、何だってんだホントによ！」

三大勢力トップ陣は各々の反応を示すが、やはり視線は不自然な空間ディスプレイに絞られる。
そして、そのディスプレイに映った者を見て驚愕する。

『御機嫌よう、三大勢力の諸君。悪いが君達はしばらくそこで見ていてくれたまえ』
「「「「なっ!?」」」」
「「「「ウ、ウルトラマン!?」」」」

見た目こそ本来のウルトラ族と違うものの、輪郭を始めその姿は紛れも無くウルトラマンだったからだ。
「何で和平結んだのにウルトラマンが俺達を攻撃するんだよ!?」

「違う……！タイガ達やレジェンド様はこんな事しないわ！」
「部長の言う通りだ！アイツはタイガ達とは何か違う！」

アザゼルの疑問にリアスと一誠が叫ぶ。
だが、そんな事を気にせずそのウルトラマンはディスプレイの中からヴァーリに語りかける。

『白龍皇ヴァーリ・ルシファー、初めまして。私はトレギア……君の願いを叶えにやってきた』
「ね……がい……？」
『そう、君は力が欲しいだろう？遥か高みに昇る為の力が』
「力……」
『君は不幸だ……本来ならば君こそがウルトラマン達に選ばれるべきだと思わないか？その身に真なる魔王の血が流れ、さらに二天龍を宿した神器まで持っているのに、ウルトラマンが選んだのは特別な生まれでも才能に恵まれた訳でもない、ただ君の対となる神器を手にしただけの転生悪魔だ』

そのウルトラマン――トレギアの言葉が次々とヴァーリの心に入り込んでくる。

『見返したいと思わないか？君を選ばなかったウルトラマン達を。君を見ようとしなかった赤龍帝達を。……君を不幸のドン底に突き落とした、君と同じ血を持つあの男を』
「俺……は……」
「ヴァーリ！やめろ！それ以上聞くんじゃねえ！」

アザゼルの言葉も虚しく、ヴァーリはそれを口にする。

「欲しい……力が……何にも勝る力が……！」
『ならばこの手を取るといい。君が望むものが、私達のところにある』

「……ああ……」
『アースガルズの神々など所詮は光神に挑んで返り討ちにあった者が率いる烏合の衆……私達はもっと大きなものを相手にしようじゃないか』

ニヤリと笑っているかのような声で言った瞬間、なんとディスプレイからゆっくりと手が出てきた。
その手をヴァーリが掴むとヴァーリはその場から姿を消す。

「ヴァーリ!!」
「い、一体……何が起こったの……!?」
「突然いなくなりやがった……!」
『安心したまえ。彼はこちら側にいるさ……さて、今度は彼ばかり得した形になってしまったな。君達にも私達からのプレゼントを贈ろうと思う』

トレギアは空間ディスプレイからそんな事を口にするが、それに対してアザゼルが噛み付いた。

「ふざけんな!そんなものよりヴァーリを返しやがれ!」
『おやおや、彼を理解出来なかった君が何を言う?そうだ、君達に一つ……為になる事を教えてあげよう』

激昂するアザゼルを嘲笑うように言い捨てた後、その場にいた三大勢力の者達にトレギアは一言だけ語る。

『君達の言う〝絆〟は簡単に壊れる』

その直後、周囲の空間が歪み、東方不敗が未だ無双している魔方陣

を残し駒王学園や校庭ごと転移させられる。
無論、その場に生き残っていた三大勢力の護衛や、光神陣営、そして鬼も含めて。
『さあ、舞踏会の会場へご案内だ。舞踏会のみならず様々な出来事を楽しんでくれ』
〈続く〉

迫りくる異形達

トレギアによって駒王学園や校庭ごと転移させられたそこは、辺り一面森、そして山……うっすらと霧がかかっているが周囲にはやはり森しかない。
かなり遠くには海か、もしくは巨大な湖がある。

「こ……こは……？」
「部長！大丈夫ですか!?」
「イッセー……？皆は？」
「なんとか無事みたいですけど……巌勝さんやあの鬼も飛ばされたみたいで今も戦ってます。あっちも救援にいかないと……！」

一誠の言葉からどうやら純粋に転移させられただけと認識したリアスは、どうにか起き上がって周りを見渡すとそこにレジェンドがゼットと共にオーフィス（ゴジラ抱え済み）をお姫様抱っこしつつ合流。

「我、レジェンドのお姫様。きゅんきゅん」
「何でこの状況でいつものノリなんだお前」
「ま、まあ！凹んでたりパニクるより良いんじゃないですか超師匠！」
『ゴジセンサーは今もレッドアラートガンガンだぜ』

お前が一番何言ってんだと言わんばかりのセリフを吐くゴジラ。
レイト＝ゼロの影響を受けてきてる気がする。
一誠やリアスにとって頼りになる面子と真っ先に合流出来たのは僥倖だろう。

「あの、他の皆は？」
「おそらく転移時にこの壊れた校舎内にバラバラに飛ばされたんだろう。校庭の巌勝や鬼、護衛連中の方は影響がなかったようだし、多分

校内限定だろうな。理由は分からん」
「あ、そういやタイガ先輩達は？」
「え？俺と一体化してるわけだしアストラル体で近くにいるはずだけど……」
「タイガが犬神家の一族になってる」
「「「え？」」」

オーフィスが指差した所を見ると、上半身が瓦礫に突っ込んでいるタイガとそれを必至に引き抜こうとしてるタイタスとフーマがいた。
アストラル体なので小さいが、そのせいで逆に隙間に入りやすかったらしい。
しかもタイタスがタイガの腰の辺りをガッチリ抱え込んで力んでいるからか、なんか変な音を立てている。

「ぬおおおー！」
「旦那！もうちょいソフトに！ソフトに！タイガの腰がミシミシと音立ててる！」
「に……二重の意味で……助け……」
「うおおお!?タイガァァァ!?」
「救世主キター！イッセー、これどかしてくれ！じゃないと、タイガが、タイガの腰が逝く!!」

フーマやタイガ本人の懇願もあってすぐさまタイガを救出する一誠。なんとか助け出したタイガは腰を押さえている。

「ありがとうイッセー、それに二人も……けどこれ、腰にヒビ入ってないよな……？」
「安心しろタイガ、そこは手加減した！」
「いや思いっきり力入れてたよな!?腰をミシミシ言わせてたよな!?」
「何を言う、本気なら既に折れている！」
「「自信満々に言うなよ!?」」

オーフィスだけでなく一誠とトライスクワッドも揃うといつも通りだった。
そこへ追加で合流したのはカナエとしのぶの胡蝶姉妹。
「良かった！レジェンド様達も無事だったのね！」
「スイマセン今一人腰が逝きかけてました」
「……レジェンド様ですか？」
「しのぶ、本気で心配してくれるのは嬉しいが俺じゃないから。年齢的にいうと文句無しに俺だけどぎっくり腰とかじゃないから。カナエも慈愛の表情で腰擦ってくれなくていいから」
「我も違う」
「ごめんなさい俺です」

タイガが申し訳なさそうに手を挙げる。何故に？と思ったがそこはしのぶがなんとなく理解した。
だってフーマが疲労を隠さず、タイタスは胸を張っているし。大方タイガがどうにかなってタイタスがはりきったのだろうと考えていた。その通りである。
そんなやりとりをしていると、続々と集まってくる光神陣営や三大勢力の面々。
東方不敗が元の場所の魔方陣の向こう側にいる事や、巌勝がゴウエンマと戦闘中である以外はヴァーリがトレギアの元へ行ってしまったぐらいでほぼ全員が揃った。

「……というわけなのです」
「そうか……あの子が」

サーゼクスから一連の流れを聞いて目を伏せるレジェンド。彼の言う『あの子』がヴァーリでなくトレギアの方だという事を彼と付き

合いの長いサーガや鬼灯は理解していた。

「レジェンド様、あの者に心当たりが？」

「……かつて科学技術局に所属していた、ヒカリの部下でありタロウの友人でもあった子だ。俺が光の国に訪れるとよく色々聞いてきていたよ。好奇心の強い子だった。宇宙警備隊には戦闘力足らずという事で入隊出来なかったみたいだが」

「タロウ（父さん）の……!?」

「そのタイガスパーク……いや、アストラルエネルギー転換装置はトレギアの発明品だ。あのヒカリが感心する程の作品でな。トレギアは当時それが完成したらタロウにプレゼントするとも言っていたそうだ。結果としてその息子やその関係者が使っているのは数奇というかなんというか」

「これが、あいつの……」

一誠を始めトライスクワッドはタイガスパークを見る。一誠とタイガ達の絆の始まりは、絆は簡単に壊れると言った存在の手によって作られたという事実。

衝撃といえば衝撃だが、だからといってこのアイテムそのものに嫌悪感は無い。

「ある時を境に光の国から失踪したと聞いたが……まさかこんな事になるとはな。タロウも血眼になって探し回ったが、結局発見出来ず……俺ももっと気にかけてやるべきだった」

「い、いえ……レジェンド様を責めるわけでは……」

「なんとか光の国側に戻してやりたいが、今聞いた限りではかなり難しそうだ。だからと言って諦める気は毛頭ないがな。ともあれ、今後の事はあとでじっくり考えるとして、今はこの状況をどうにかしなければ」

「ゴウエンマという鬼も、いくら厳勝といっても鬼の特性上一人では厳しいはずだ。まずはそちらに急いで救援を」

レジェンドとサーガが指示を出す。こちら側に転移させられてから目立った被害がない三大勢力の護衛はともかく、部位破壊が出来て痛手を与えられるものの鬼払いがまだ不可能な厳勝一人では危険……むしろ厳勝だからこそ、なんとか一人で持ち堪えていられると考えた方がいい。

「サーガ、お前鬼祓いの法とか使えるか？」

「……すまない。俺は俺の光気が及ぶ範囲内の者に、鬼へのダメージを与えられるようにする事ぐらいしか出来ない」

「出来るだけマシだ。アレは実際戦えば分かるがゲーム内のそれとは違う。鬼祓い云々よりもまず先に倒せる可能性を増やすのが先決だ。とりあえず今回も俺がこの間と同じく……」

『おーい光神様や三大勢力の皆さん聞こえてるかい？』

「「「「!!」」」」

突如、堕天司ベリアルの声が周囲に響き渡る。

『ん～……やっぱこっちには聞こえないか。まあいい。多分ギアさんからプレゼントがどうこうって聞いてると思うけど、まさかのまさか、プレゼンターはこの俺さ。と言ってもギアさんと”ファーさん”が作ってくれたものをそっちに贈るだけの簡単なお仕事なんだけどな』

「あんの野郎……！この状況で聞くと尚更腹立つぜ！」

「けど……ギアさんっていうのはそのトレギアだとして、ファーさんって誰？」

一誠が憤慨するが、カナエは別のところが気になった。相手を馬鹿

にするような言い方をするベリアルがさん付けするような者だとすると相当な存在だろう。
　そこで思い出したのがベリアルが話していた彼らの創造主たる存在、星の民。

「原初の星晶獣である天司を作り出した創造主……」
「な!?あれより上がいるのか!?」
『ついでに言っておくと返品は受け付けてないから、そこんトコヨロシク。もし処分するならそっちで勝手にしろ、とファーさんは言ってたぜ。ま、受け取ったら煮るなり焼くなり君達の好きにすると良い。では、グッドラック&グッドバイ』
「最後まで苛立たせる方でしたね」
「受け取ったらって、何もないですよ?」

　しのぶが青筋浮かべて拳を素振りしつつ、アーシアは周りをキョロキョロしながら疑問を口にする。
　だが、ここ最近プラズマ怪獣という巨大型の怪獣とやり合い続けていた裕斗が何かに気がついた。

「……ッ!?あそこから何かが出てくる!」
『!!』

　裕斗の言葉に全員が反応した瞬間、遠くの森からそれは現れた。怪獣ではなく、ある意味もっと厄介で危険なモノが。
　それを知るサーガ、グラハム、そしてマリーダは戦慄する。

「バカな、あれは……!」
「まさかっ……!」

「ハシュマル……だと……!?」

厄災戦の発端となったＭＡ（モビルアーマー）の一機。
かつて三日月が激戦の末、右足の感覚を犠牲に勝利を手にした恐るべき存在がこの世界で再び活動を開始した。

「今度は何だ!?機械の鳥かワイバーンみたいな奴が出やがったぞ!?」
「アレはそんな生易しいものではない！」
「サ、サーガ様？いきなり声を荒らげられてどうされました？」

ゼノヴィアがサーガに聞くと、深呼吸して自身を落ち着かせながら説明する。

「アレはハシュマル……三日月達の出身世界で厄災戦と呼ばれる大きな戦争があり、その発端となったものであるＭＡの内の一機だ。当初は機械化思想による戦争の無人化・効率化を目的とした「敵を倒す」という至極単純なコンセプトの元開発されたものだった。だが、自律型故に進み過ぎた機械化思想の結果、コンセプトが開発当初設定されたものから「人を殺す」へと変換され、忠実に暴虐の限りを尽くす殺戮兵器へと変貌したという」

この説明を受けて殆どの者が一瞬でその恐ろしさを理解した。あくまでコンセプトに沿って自律行動を行い、機械であるが故に『殺す』事に良心の呵責や罪悪感といった感情を一切持たない最悪の兵器。
しかも当初のコンセプトが敵を倒す事である為、その性能が凄まじ

い事も想像に難くない。

「そ、それヤバすぎだろ！何とかして止めないと！」

「待って下さい。あの機体の目的が『人を殺す』というのならば我々天使や堕天使、悪魔は狙われないのでは？」

そういえば……と三大勢力陣が思った瞬間、それを発言したミカエルの胸ぐらを竜馬が憤怒の表情と共に掴んで引き寄せた。

「てめえ……！今の言葉、人間なら狙われてもいいって事か!?ああ!?」

「い、いえ！決してそういう意味で言ったわけでは！」

「こっちにゃそう聞こえんだよ！この場にいる人間で無事なのは光神陣営に属してる連中しかいねえからな！」

正確に言うとこの場にいる光神陣営で、正式に光神の眷属となっていない人間はカナエ、しのぶの胡蝶姉妹くらいだろう。何番隊かは別として杏寿郎は神衛隊に所属しているし、アーシアとゼノヴィアはそれぞれ巫女と御使いという立場だ。

というか光気を浴びている上、光神とそれなりに密接な関係なので、普通の人間とは言い難いのだが。

「竜馬、よせ。お前の怒りは最もだし俺も腹立たしいが今は奴をどうにかするのが先だ。厳勝の方も早急に向かわねばならない」

「ちっ!!」

ミカエルを突き飛ばすように離した竜馬だが、怒りの方はまだ収まっておらず、イリナやガブリエルに起こされているミカエルを睨むとすぐさま収納用ブレスレットからブラックゲッターを出現させる。

続くようにグラハムとマリーダもエクシアＧＦとペーネロペーを出現させ、三人は即座に乗り込む。

「確か三日月らの話では彼らの世界でエイハブ・ウェーブに反応して再起動したようだが、先程の様子を見る限りあの個体はそれに限定されているわけではなさそうだ。ならば私達がＭＳを起動させても問題は無いはず、動力も異なるし現に既に向こうは起動しているからな。私とマリーダで牽制を行う、竜馬はスキを見て一撃で決めろ！」
「了解！」
「任せな！」

三人が乗機を起動させ、戦闘行動へ移行しようとした時それは起こった。
ハシュマルが、護衛役であった天使・堕天使・悪魔に対して頭部ビーム砲を発射し消し飛ばしたのである。

『なっ!?』
「どういう事だ!?あいつの活動目的は『人を殺す』って事じゃないのか!?」
「おそらくそれは変わっていないだろう」

レジェンドが呟いた事に全員が振り向き、ソーナが不安げに問う。

「レジェンド様、その……意味が分からないのですが……」
「簡単だ。単に奴にとっては天使や堕天使、悪魔も『人と変わらない』と判断しただけ。この場にいる者はあの鬼を除いて殲滅対象だろうさ。ウルトラマンを含めてな」
「そ……そんな……！」
「よく考えれば分かる事だ。あの堕天司が贈りつけてきたプレゼントだぞ？聞いた話では三日月が破壊したらしいし、別個体だとしてこの状況で人間だけを襲うようなシステムのままでは極僅かしか対象にならん。おそらくは奴が言っていたファーさんとやらが何らかの改造・改修を行って試験的に今回投入してきたんだろう。でなければ『処分はこっちでしろ』なんて言う筈がないからな」

とどのつまり、放っておいても見逃してくれるような事はなくなったというわけだ。

「ともかくハシュマルはあの三人に任せるぞ。サーゼクス、セラフォルー、ミカエル、そしてアザゼルは自分が属する陣営の者達を救援、その後そいつらと離脱しろ。それからカナエ」

「はいっ！」

「厳しいとは思うが厳勝の援護に向かってくれ。俺が打ったその陽炎なら鬼神刀ほどではないにしろ鬼にダメージが入るはずだ。何名か連れて行っても構わない」

「御意！」

カナエがレジェンドの指示を承諾すると、杏寿郎としのぶも駆け寄ってきた。

「すまない！カナエ殿、お館様！俺もそちらに向かわせてもらいたい！かつて鬼であった厳勝殿が命を賭して刀を振るっているというのに、鬼狩りである自分がこの場で黙っている事は出来ない！」

「私もお願いします。痛手は与えられずとも素早さには自信があるので陽動くらいは出来るかと」

自身らが戦っていたのと全く別物であろうとも、鬼である以上放っておけないのだろう。

少し考え込むような動作を取った後、レジェンドは二人にも指示を出す。

「……いいだろう。ただし、二人では鬼への対抗手段が無い以上、陽動及び援護に限定だ。それから無理だと思ったらすぐに厳勝、カナエ共々引き返せ。最悪俺が何とかする、分かったな？」

「「御意！」」

「あと、パム治郎は残れ。一緒に行ったら杏寿郎もお前が怪我しないかと気が気じゃないだろう」
「パム～……」

気落ちしながらも自分では戦力にならないと分かっているからか、おとなしくアーシアのところに飛んでいく。

「心配するなパム治郎！もう俺は死にはしない！」
「パムちゃんごめんね、お姉さん達頑張ってくるから泣かないで待っててね！」
「一番姉さんが泣きそうなんだけど……」

そう言うと三人はレジェンド、そしてサーガに一礼してゴウエンマと激突している厳勝の元へと走る。
残る自分達は何とかしてこの場所から脱出する方法を……と考え始めた時に新たな事態が巻き起こった。
遠くの山の一角が崩れ、中からゴブニュ（ギガ）が複数現れたのだ。

「おい、あれ！ライザーとのレーティングゲームの後に出てきたやつじゃねーか!?」
「確か、ゴブニュっていう……ティガ先輩が戦ったやつだろ！」
「この状況で、しかもあれ程現れるとは……」
「ここは俺達が！」

そこにオーフィスが待ったをかけた。一体何だと思って彼女の方を向くと、いつの間にか抱えていたゴジラがカプセルの中に戻っている。
あれだけ来たがっていたのにカプセルの中に戻ったという事はつまり……
「ゴジラ、自分が出るって言ってる」

「え!?」
「あのガラクタじゃゴジラの相手にならない。でも、何か来るからそれに対する準備運動しとくって」
「何かって……」
「まだ出てくるのか!?」
「我、分からない」

ふるふると首を横に振るオーフィスだったが、ゴジラが急かすので一先ず呼び出す事にする。
手にしたカプセルを天高く放り投げると、某携帯モンスターよろしくゴジラが本来の姿で出現し、咆哮を上げた。
その姿と咆哮を見た三大勢力は驚き、中には腰を抜かす者もいた。

「おい、何だあれは!?」
「さっきから現れてる奴らの中で一番ヤバそうだぞ!?」
「少し前の声といい、人間界はこんな事が当たり前に起こるのか!?」

有象無象の連中に好き勝手言われてゴジラ、ご立腹。

『チッ、この世界で普段日常的に問題起こしまくってる連中がグチグチ言うんじゃねえ。あのテロリストバカ団の構成員だってお前ら三大勢力が大半だろうが』

哀れ禍の団。祀り上げて放っておいたオーフィスには離反・逆襲され、レジェンドからは問答無用で壊滅させられ、ゴジラに至っては名前さえ適当に付けられてしまった。
そんなゴジラは鬱憤を晴らすかのように放射熱線で自身の半分ちょっとの大きさ（ゴジラ１００ｍ、ゴブニュ（ギガ）６０ｍ）のゴブニュ達を容赦無く爆散させていく。

「やっぱスゲーな、あれ……」

「シンプルにデカくて強いからな……」
「うむ！筋肉は全てを解決する、を地で行っている！」
「いや、あの場合筋肉関係なくね？」

トライスクワッドはそんなやり取りをしていたが、ゼットが倒されていくゴブニュの奥に何かを見つけた。

「んん？超師匠、超師匠」
「どうした、ゼット」
「ゴブニュの奥に何かいませんかね？モノアイっぽい目……でいいのかな？ゴブニュとおんなじようなのが見えるんでございますが」
「……何だと？」

次々と倒れ伏すゴブニュ（ギガ）の後ろから、それまでのゴブニュとは違う形のゴブニュが出現した。
巨大機械人形（メカロイド）・ゴブニュ（オグマ）。
かつてティガやレジェンドが戦った、機械島の番人。それがここに現れたのである。
ギガを超える防御力、そして怪力は８００万馬力にも達する恐るべき相手だ。

「何で機械島の番人である奴がこんな地上に存在するのかはともかく、奴は無駄に硬いし力も強い。とはいえここはホームグラウンドである機械島ではなく、奴自身も素のスピードは遅いからな。攻撃力さえ十分なら早さだけで圧倒出来る。逆に攻撃力が足りてないと防御力を活かしてカウンターかまされるから気をつけろ」
「って事は……」
「ああ、俺達の出番……!?」

素早く動けるとしても限度があるゴジラに対し、この場にいて、かつ巨大な相手に対抗出来て早さ重視なのはフーマか、ゼットのアル

ファエッジ。
　反則級の超高速テレポーテーションが使えるハイパーゼットンという規格外もいるが、そんな彼は卯ノ花やアーシアらの護衛にまわっている。

「よっしゃ！イッセーここは俺「行くぞイッセー！」ぅおい!?」
「おうよ！どっかで見てるあの野郎に見せてやろうぜ、俺達の力！」
『カモン！』
「光の勇者！タイガ!!」
『はあああああっ！でやっ!!』
「タンマタンマちょっとタンマ！」

　図らずもタイガが急かす感じになり、一誠もそれに乗るようにタイガキーホルダーをリードする。
　ようやく最初から変身して見せ場がありそうだったフーマはそれを止めようとするも……

「バディィィィゴォォォォッ!!」
『ウルトラマンタイガ！』
「シュアッ!!」
『うあああああ!!』

　結局タイガに変身する事になった。そんなタイガの中でフーマは両膝をついて号泣している。そりゃそうだもんな、もうすぐ９０話だもの、変身したかったよな……

『メタい事言うなよ地の文！俺だって最初から最後まで活躍したかったんだよぉぉぉ!!』
「あ、いや……なんかゴメン」
『俺も悪ぃ……つい反応してノリノリで変身しちまった』
『フーマ、元気を出せ。私は今回最初から選択肢に入っていなかった

ぞ！』
『いやお前は前回やたら活躍しただろ。大胸筋バリアーするわ神器使った技名にまでマッスル入れるわ』

フーマに謝罪するタイガと一誠に変な慰め方をしてドライグにツッコまれるタイタス。
しかし彼らは気付いているのだろうか。
主役にも関わらず第一章の序盤以来ウルトラマンとしての姿に変身して戦闘した事がなく、おまけにゼットと一体化した事で惑星レジェンドの自宅でしか己の元の姿に変身する事さえ出来なくなった主人公（レジェンド）の事を。

「……」
「ち……超師匠？えっと、俺達も行きたいな～なんて……」
「……そうだな。お前が大活躍すればイコール俺が活躍してるみたいなもんだよな」

あ、ヤバい。これゼットの身体を無理矢理にでも動かして活躍させる気だ。
アーシアが抱えているパム治郎に何かを託し、早くゼットライザーに入れと言わんばかりの眼力でゼットを見るレジェンド。
その圧倒的威圧感を感じ取ったのかゼットは素早く敬礼してレジェンドの持つゼットライザーに光となって入る。

「では皆、俺とゼットも行ってくる」
「いってらっしゃい」
「お、お気をつけて！絶対帰って来てくださいね！」

真っ先に声を掛けたオーフィスとアーシアに微笑みながら右手を上げて応えつつ、トリガーを押して展開されたインナースペースへと突入するレジェンド。

『ＬＥＧＥＮＤ，Ａｃｃｅｓｓ　Ｇｒａｎｔｅｄ！』
「２回目にしてもう慣れたよ。どうせ機械にさえ呼ばれないんだし俺の人間体の名前、コス妹紅とかジャス太郎でも別にいいんじゃないのコレ」
『インナースペースでウルトラアクセスカードをセット早々やさぐれないで下さい超師匠！しかも前半なんかシューティングゲームでヒロインとして出てきそうな名前なんですが!?』

しかもさり気なく自分の力を分け与えたコスモスとジャスティスに捩っているし。
２回目にしてもう慣れた、と言っているようにサクサクとウルトラメダルをゼットライザーにセットしてスキャンする。

『ＺＥＲＯ！ＳＥＶＥＮ！ＬＥＯ！』
『さっすが超師匠！もうバッチリ覚えたんでございますね！』
「昔は良かったよな……取り出して掲げてスイッチ一つで変身したり、何も使わずに変身したり……今はやたらめったら複雑になってるからな……」

かく言うレジェンドもこのタイプだ。専用の変身アイテムはスティックタイプだし、そもそもアイテムを使わずとも変身出来る（というかぶっちゃけると前者は他のウルトラ戦士に合わせただけだったりする）。
ついでに、段々ややこしくなるあまりセブンは使い方をあまり覚えておらず、エースに至っては「鈍器として使った方が強くないか？」と言い出す始末。後者の意見が取り入れられてゼットライザーに武器としての機能が付けられたのかは定かではない。
ちなみに、ゾフィーはむしろしょっちゅう何かのアイテムを届け、マンは元々頭脳明晰、ジャックはウルトラブレスレットを使い始めた

のは彼な上に父親が科学技術局長官、タロウは二種のブレスレットをバリバリ使いウルトラベルまで他の兄弟と一緒に使用し、おまけに父がウルトラアレイという万能アイテムを筆頭にウルトラフェザーやウルトラクラウン、果ては聖剣ウルティメイトブレードを振るいウルトラキーまでぶっ放すような存在である。

……一番まともなマンが一番アイテムを使わないのはどういう事だ。

何はともあれ準備は整った。

あとはいつものご唱和である。

『よっし！それではご唱和ください我の名を！』

「アルファ！エエエッジ!!」

『あれぇぇぇ!?』

まさかフォーム名でご唱和されるとは予想外だったゼットは困惑の声を上げた。混乱してるゼットを気にも止めず、レジェンドは容赦無くトリガーを押してゼットライザーを起動。セブン、レオ、ゼロの幻影が飛び交い、光となって一点に渦巻くように集約する。

『ＵＬＴＲＡＭＡＮ―Ｚ！ＡＬＰＨＡ―ＥＤＧＥ!!』

「ともかくシュアッ!!」

前回に引き続き、インナースペース内の出来事を知っていたらコントにしか見えない変身をする二人だったが、兎にも角にも無事に変身を終えウルトラマンゼット・アルファエッジがタイガに続いて姿を現した。

そして最後は彼だ。既に装填ナックルにカプセルを起動し装填しており、あとは変身するのみ。

「リク兄さん！頑張ってくださいぃ！」

「ありがとうギャスパー君！行ってきます！」

何故だろう、本人達はノーマルだというのにベストカップルっぽく見えてしまうのは。

「ジーッとしてても、ドーにもならねぇ!!」

己の代名詞とも言えるいつもの台詞を叫び、リクはライザーを起動する。

「融合（ユーゴー）！」
『シェアッ！』
「アイゴー！」
『ヌエアッ！』
「ヒアウィーゴー！」
『フュージョンライズ！』

ウルトラ六兄弟の一人であるウルトラマンと、父であるベリアルのもう一つの人格たる闇のベリアルの力が混ざり合い、一つになっていく。

「決めるぜ！覚悟!!」

そしてウルトラマンとしての己の名を叫ぶ。

「ジィィィィド!!」
『ウルトラマン！ウルトラマンベリアル！ウルトラマンジード！プリミティブ！』
「ジェアッ！」

タイガとゼットの先輩、ウルトラマンジード・プリミティブも降り立ち、三人のウルトラマンが揃い踏みする。

……さすが、先輩である。先の二人と違いさしたる問題もなく変身を終えた。いや、後輩に混じって父の師である超大先輩がいるけど。

「壮観ですね」

「ええ。レジェンド様が彼らとは別にいらっしゃれば尚の事そうだったのでしょう」

鬼灯と卯ノ花は感慨深くそれを見ているが、卯ノ花に抱きかかえられているハイパーゼットンは何かを警戒するかのようにあちこちをキョロキョロしている。

「……!じぇっとん!」

「あら?どうしました?」

何かを察知したハイパーゼットンは、片手で抱きかかえている卯ノ花の手をペチペチと叩き、もう片手である方向を差す。

その場にいた者達全員がそちらを向くと、離れた場所に金色の粒子が降り注いでいた。

それに見覚えのあるオカ研メンバーは驚く。

「あれって……」

「ビオランテ、という巨大植物をゴジラさんが倒した時にああなりませんでしたか?」

「あの時は倒された後に粒子になって昇りながら消えました。今度は逆に降り注いでます」

「……という事はまさかっ!?」

裕斗が最悪の出来事を予想した時、それは現実のものとなった。

大きな地震が起こったと同時に、金色の粒子が降り注いだ場所の地中からビオランテの触手と同じものが離れていくつも現れる。

そして、空けるように触手が現れなかった中心部の地中から、あま

りに巨大なモノが鎌首をもたげるように姿を現す。
鰐のような大顎にビッシリと敷き詰められた鋭利な牙、その口の横にも猪のように牙が上下左右3本ずつ計6本生えており、腹部にはまるでコアのような赤い発光体を有する、まるで獣と植物が融合したような、この場において最も異形な生命体。

「ギュアオオオオオ!!!」

ビオランテ・植獣形態。
かつてゴジラと相対した時よりも巨大な、１５０ｍにも及ぶ新たな姿でウルトラマンやゴジラ達の前に進化した姿でビオランテが再び立ち塞がった。
その恐るべき姿を目にした、ハシュマルの攻撃から逃れた三大勢力の者達は絶対的脅威を目の当たりにして恐怖に支配される。

「次から次へ……何なんだ人間界は!?」
「勝てる訳がない……あんなものに勝てる訳がない……」
「死ぬんだ！俺達は皆あいつらに殺されるんだ！」

絶望的な状況のあまり座り込み、声を荒げて涙ながらに叫ぶ者まで出てきてしまう。
サーゼクスやセラフォルー、ミカエルにアザゼルも何とかして収めようとするも、レイブラッド事変では目にする事もなかった、ドラゴンさえ霞む巨体を持つビオランテを見た事で不安を隠せない。
ゴジラのおよそ1．5倍、そしてウルトラマン達のおよそ3倍にも及ぶ巨大な存在はハシュマルやゴブニュ（オグマ）、鬼などの異形がひしめくこの戦場にあって一際異彩を放ち、別格の威圧感を漂わせている。
今、かつてない激闘の幕が上がろうとしていた。

☆

一方、進宙式の最中だった新造艦のブリッジでオルガはラフタからの次元間通信を受けていた。

「マジかよ……！」

『こっちはそこの様子を見る事は出来ても外部からの干渉が遮断されてるみたいで……！』

「なるほど、別世界にいる俺達なら次元転移で直接そこへ突入出来る可能性があるってワケか。逆にそれ以外じゃ今のところ手立ては無いって事だな」

そんな折、ブリッジへと艦内通信が入る。入電場所は格納庫からだ。

『話は聞いたぞ。向こうに着き次第、すぐに戦闘に入るんだな？』

「ああ、すまねえおやっさん。初っ端から迷惑をかけちまう事になりそうだ」

『心配するな。直接戦うのがお前達の仕事なら、俺達メカニックはその為に機体を万全の状態にするのが仕事であり戦いだ。パイロット達にはすぐに出られるよう準備させとけ！超次元グレン団と鉄華団の機体、全部まとめて十分で終わらせる！』

その人物はそういうと通信を切った。

『オ、オルガ……今の人って……！』

「ああ……出たぜ、あの人の鉄板ゼリフが！」

十分――あの人物がよく使う言葉であり、そして確実に仕事を完了させる時間でもある。

ラフタも気付いたのか、驚愕から笑顔になっていき、オルガも自身に気合いを入れた。

「よぉぉし！全乗組員に告ぐ！進宙式は終わりだ！これより本艦は大将とレジェンドの旦那、及び光神陣営の救援に向かう！着いたら即座に戦闘突入する可能性を考慮し、パイロット各員は出撃準備しとけ！ただし！あの人率いるメカニック班の邪魔はすんじゃねえぞ!!」

オルガの指示を受けた三日月を始めとする鉄華団のＭＳパイロット達はすぐさま出撃準備に移る。

団長であり艦長でもあるオルガも艦長席に座って新生阿頼耶識システムを接続し、戦闘配備態勢に入った。

いよいよ、あらゆる垣根を超え、勇士達が集結する。

〈続く〉

集結せし勇士たち

遂に各所で決戦の火蓋が切られた。
既に大型の鬼・ゴウエンマと戦闘中の巌勝と、その援護に向かう胡蝶姉妹と杏寿郎。
ハシュマルを相手取るエクシアＧＦ、ペーネロペー、ブラックゲッター。
ゴブニュ（オグマ）に加え恐るべき進化を果たして再臨したビオランテと対峙するジード、タイガ、ゼット、そしてゴジラ。
いずれも熾烈極まりない戦いになるのは容易に予想が出来る。
オカルト研究部や生徒会は先に避難していたサーゼクスらとどうにか合流するも、リアスらオカルト研究部の表情は暗かった。同じ部の仲間であるカナエや一誠、タイガ達トライスクワッドだけが戦いに赴き、自分達はこうして避難するしかない事に歯痒さを感じているのだ。
いざという時は自分達を残して何としてでも脱出しろ、とレジェンドの指示を受けた卯ノ花や鬼灯、そしてサーガもそこにいる。

「リアス……！無事でよかった」
「お兄様……」

俯いたまま、リアスは呟く。

「私は、いつまで甘えていればいいの？」
「え？」
「イッセーやタイガ、タイタス、フーマ……そしてカナエ。あの子達が命がけの戦いをしているというのに、私はこうして帰りを待つだけ……仲間達の手助けをするでもなく、ただただ時間を浪費してるだけで何の役にも立ててない。何が滅⊠姫よ、彼らの方がよっぽど立派じゃない……！」

リアスはその目に涙を滲ませ、己の無力さに苛立ちと悔しさを隠せない。ハリベルに修行をつけてもらい、実力は格段に上がったがまだ足りない。

そして、これはオカルト研究部全員が感じている事だ。サーガの御使いに選ばれ、師である巌勝が死闘の真っ只中にいるのに自身は他の者と共に避難している事を恥じているゼノヴィアや、巫女だからこそ傍で支えなければならないのにと考えているアーシアは特にそう思っていた。

「聖剣を持っていようと宝の持ち腐れ……そう言われても当然の失態だ。ゼットは3分の1人前と言われているそうだが……私はもっと下、5分の1人前程度しかないな」

「ゼノヴィア……」

少し会わなかっただけだというのに、自意識が大きく変化している友人に戸惑いつつも、イリナはゼノヴィアが心配でならなかった。

「私も……パムちゃんを預かっている以上、我侭言っちゃいけないのは分かってます。私自身の実力がまだまだだっていうのも……でも、でも……」

リアス同様に涙を堪えているアーシアの裾をオーフィスがくいくいと引っ張る。

「オーフィスちゃん？」

「我、巌勝のお手伝いに行ってくる」

『!?』

☆

ゴウエンマと巌勝の戦いは、かつて戦ったカゼキリとは比べ物にな

らないほど激しいものになっていた。
素早さこそカゼキリには及ばないが、攻撃力や防御力は格段にゴウエンマの方が上であり、巨体に見合わぬ身軽さ、さらに尾での強撃さえ放ってくる。

「ち……！鬼の目が使えぬ以上、透き通る世界で代用出来ないかと試してみたが無理だったか」

鬼の目――見えない鬼を可視化したり、部位破壊出来る部位やしやすくなっている部位を色で判別出来る能力で、『モノノフ』ならば基本体得しているのだが、巌勝は違う為、別の技で代用を試みたがやはりそちらには対応していなかった。

（私の記憶通りなら破壊出来る部位は角、数珠、両腕両足、そして尾……だが、鬼祓いが出来ぬ今では両腕と両足を破壊するのは逆に愚策。表層破壊してマガツヒ状態に持ち込み、月の呼吸の型で一気に畳み掛けるしかあるまい）

ゴウエンマを始め、一部の鬼は破壊した部位を鬼祓いせず放置した場合、再生されるだけでなく再生時に強化されてしまうのだ。最も部位破壊しやすい両腕両足がそれの対象なゴウエンマはそういった意味でもかなり厄介な鬼である。
そうしているとカナエ、しのぶ、杏寿郎が到着した。

「巌勝さん！レジェンド様から援護するにと言われてきました！お手伝いします！」
「何!?しかし……」
「姉さんの日輪刀はレジェンド様製だからある程度は効くそうです。私達は囮くらいにしかなりませんが」
「伊達にグラハム教官殿やタイタスと共に日々鍛え続けているわけではない！引き付ける程度はやってみせよう！」

あの方も随分思い切った事を、と思いつつ厳勝は救援を感謝しつつ、これから取る戦法を伝える。

「これから奴の表層を破壊しマガツヒ状態にする。全身の体色が変わって紫色になったらそこから一気に生命力を削り奴を討つ。ここで気をつけるのは奴の手足は極力狙わぬ事だ。鬼祓いが出来ぬ現状では一時的に破壊出来ても強化再生される危険がある。ついでに鬼祓いしてもタマハミ状態になれば結局強化再生される以上、時間との勝負だ」

「え～っと……鬼祓いっていうのが誰も出来ないから、そのマガツヒ状態にしてからタマハミ状態になる前に、手足切らずにアレを倒す、って事でいいんですよね？」

「簡単に言うとそうなる。私が知る鬼祓い可能な人物は現状レジェンド様のみだ」

あの時もレジェンドが破壊した部位を鬼祓いしてくれたから円滑に討伐が進んだ。特に今回は強化再生という厄介な特性がある為、レジェンド不在の今回では頻繁に破壊出来ない。鬼祓い可能な者が他にいれば別だが……

「相分かった！しかし戦闘にせよその他支援にせよ、常に後ろから支えてくれるとはさすがお館様と言わざるを得ない！あの方の存在の大きさを再認識した！」

「正直、あの方に出来ない事は何なのかと時々気になりますね」

「……ナンパは無理だそうだ」

（まあ、天然ジゴロみたいだし……）

「うむ！つまり硬派という事だな！」

とどのつまり、レジェンドはウルトラ勝ち組である。だって選び放題どころか全員選んでもヨシ！なんだもの。

それはともかく、作戦通りまずはしのぶと杏寿郎が先行して隙を作る。

「果たして攻撃が本当に通じないのかどうか、試してみるか！炎の呼吸・壱ノ型！不知火!!」

その剛腕を振り下ろしてくるゴウエンマの脇をすり抜けつつ袈裟斬りに斬撃を胴に放つ。

深くはないが確実に当たったにも関わらず効いている様子は無い。情報通り特定の武器を使わなければダメージが入らず、加えて急拵えで用意した刀ではやはり日輪刀のような威力が出ないという事もあるかもしれない。

ゼットと一体化しているレジェンドやサーガがいる事で二人の光気の影響によって多少なりともダメージは与えられているのだろうが、その二人とも距離が離れており効果が薄い上、そもそも表層なので効いていたとしても効果が分かりにくいというのもある。

「なるほど！どうやら今の俺達には撹乱に回るしか戦力にならないようだ！」

「煉獄さんの威力で通じないなら私では話になりませんね。直接攻撃するのは姉さんと巌勝さんに任せて、撹乱と防御に専念しましょう」

防御は自信ありませんが。そう続けたしのぶは即座に持ち前のスピードでゴウエンマの撹乱に専念する。

相手が大きく、ある程度動作も分かりやすいのでしのぶとしては回避がやりやすい。

反対に杏寿郎は回避しつつ、刀や炎の呼吸の型を使用しつつ防御もこなしている。

（直撃しているわけではないが一撃一撃が重い！これが別次元の鬼か！実力で敵わぬならいざ知らず！特性故に攻撃が通じないとは！）

（……斬れずとも、この鬼に有用な毒を調合出来たなら）

別の場所でリアスが感じている歯痒さを、同じように二人は感じていた。

「カナエよ、日の呼吸……今現在どれほど使える？」

「一応型は一通り……ただ、最後の型はまだ夜明けまで舞えませんが」

「今回はそんな長時間戦わぬ……というより活動限界の兼ね合いもあってそこまで時間は掛けられぬ。花の呼吸と違い第二幕には到達していない、で良いのだな？」

「はい。その分、その二つの呼吸重ねで補ってます」

「結構。私が先程からやり合ってある程度表層は壊れかけてる筈だ。日の呼吸が壱から弐、捌から玖といったように順番通りの型から型に繋がるのは十三ノ型を会得したなら理解しているだろう。己の得意な型で頭部、もしくは胴に攻撃して表層破壊してくれ。後は私が月の呼吸の第二幕で一気に討ち取る。余裕があれば援護を頼む」

「わかりました。……行きます！」

カナエの合図で一気にゴウエンマに駆け出す二人。

幸いしのぶと杏寿郎が左右に別れて撹乱しているので全面はガラ空きだ。

「攻撃を避けるのは前腕部、つまり二の腕から肩にかけては当ててもいい！出し惜しみせずに行け！」

「はい！」

カナエが一気に加速する。

ゴウエンマはそれを目にして右腕を叩きつけようとしてくるが、その攻撃を見越してカナエは跳躍。

「日の呼吸・玖ノ型！輝輝恩光!!」

迫る剛腕の前腕部をすれ違うように越えたあたりでカナエは日の呼吸の型を解禁する。
今まで特訓時も型を使っていなかった為、しのぶは本当に姉が日の呼吸を使うのか半信半疑だったが、花の呼吸の型と似て異なる型を使った事で確信に至った。
カナエはゴウエンマの二の腕や頭部へ若干のダメージを与えつつゴウエンマの頭上を孤を描くように越え、そしてそのまま次の型に繋げた。

「日の呼吸・拾ノ型！火車!!」

ライザーに先制を取って大きくダメージを与えた型を繰り出し、ゴウエンマに斬撃を浴びせた。

「ゴォアアアァァァ!?」
「何かが弾けて体色が変わった……!?」
「そうか！これがマガツヒとやらか！」

苦し紛れに尾をカナエに叩きつけようとするが、さらなる型を発動してカナエはそれを回避する。

「日の呼吸・拾壱ノ型！幻日虹ッ!!」

回避専用の型であるそれは難なくゴウエンマの尾撃を避け、しのぶの近くに着地する。

「姉さん、本当に別の呼吸習得してたのね」
「まさかしのぶ、まだ信じてくれてなかったの!?」
「だって姉さん、私を『まだリハビリ中だから』って型の一つも見せてくれなかったでしょ」

ガーン！とショックな顔をしているカナエだがこれはしのぶが正しい。カナエが花の呼吸の使用者と知っているし、そもそも日の呼吸をまさか後天的に使用出来るようになっているなど証拠が無ければさすがに信じられないだろう。
そんな彼女らはさておき、表層破壊が出来た事を確認した巌勝は月の呼吸を放とうとする。

「（縁壱は良き継子に出会えたようだな。この戦いが終わったらゼノヴィアをより鍛えてやらねばなるまい）……仕留めさせてもらうぞゴウエンマ！月の呼吸第二幕！捌ノ……!?」

ゴウエンマを討とうとした瞬間、横に巨大な瘴気の穴が現れ、その中から巨大な刀身が出現すると同時に巌勝へ振り下ろされる。巌勝は咄嗟に鬼神刀で防御するも大きく吹き飛ばされた。

「ぐうっ!?」
「巌勝殿！」
「心配無用だ！ただ吹き飛ばされただけだ！だが……」

巌勝を吹き飛ばした張本人が瘴気の穴よりその姿を現す。
四本の腕を有し、うち二本には巨大な剣、そして棍棒を持ち、蛇に似た身体を持った上位の大型の鬼――ヤトノヌシ。
瘴気の巣と呼ばれる危険地帯を作り出す、とてつもなく危険な鬼である。

「この状況でコイツが……!!」

巌勝はここにきて焦りを覚える。放置すれば濃密な瘴気を振り撒く鬼が出てきた以上、先にこちらを討たねば瘴気によって活動限界を大幅に削られ全滅する恐れも出てきたからだ。

さらに凶事は続く。

「……ッ!?姉さん!!」

「……!?くっ！」

今度は上空から炎が吹きつけられ、カナエはしのぶの叫びによって間一髪逃れる事が出来た。

二人が上空を見ると、今度は空に瘴気の穴が出現したと思えばそこから四つの翼を持つ鳥のような大型の鬼――ヒノマガトリが現れる。

「嘘……！三体目!?」

「そんな……こっちは姉さんと巌勝さんしか対抗出来ないのに！」

ここにきてさらに二体、しかも一体は危険度が高いヤトノヌシ。しかも巌勝、胡蝶姉妹、そして杏寿郎の三方へ分断されてしまった。

☆

「くそっ！ちょこまかしやがって！」

ブラックゲッターのコックピットで竜馬がハシュマルに悪態をつく。元々サイズや、特機とＭＡの仕様の関係上どうしても機動力で劣り、また射程に関しても相手の方が上。必殺のゲッタービームやゲッタースパイクブレードを叩き込むにもある程度接近する必要があるが、そこに持ち込む前に逃げられてしまい、遠距離から一方的に攻撃される。

「ち……！ナノラミネートアーマーのおかげでダメージが入らない！明確に効果があるのはファンネルミサイルだけだが、弾数が……！」

マリーダの駆るペーネロペーでは相性が悪過ぎた。主兵装である

ビームサーベルやビームライフルを内蔵したバックラーではビーム耐性が高過ぎるナノラミネートアーマーを貫くだけの威力が出せず、明確なダメージが入るのはファンネルミサイルのみ。しかし、既に何発か発射したが全て撃墜されており弾数も残り僅か。

「厄災戦の一端たるＭＡ……これほどまでとは！」

唯一まともに対抗しているのは機動力・格闘戦に長け空中戦も可能、そしてＧＮソードやＧＮタチという実体剣のおかげで物理攻撃にも優れるグラハムのエクシアＧＦだけであった。

とはいえ、ハシュマルは高速で飛び回りながら三者を攻撃するのでグラハムだけが対抗出来ても有利にはならない。

「せめてあと一機……欲を言えば二機、対抗出来る機体がいれば……！」

よりによって改造されたハシュマルは飛行形態にならずとも空中戦が可能であり、強敵さに拍車がかかっていた。

エクシアＧＦが機動力を活かして接近戦を挑めば即座に飛行形態になって距離を取り、ペーネロペーがファンネルミサイルを放てば迎撃後に接近してビームサーベル・ライフルの射程範囲へ距離を維持、そしてブラックゲッターが接近しようとするとビーム砲を発射して近づけさせない。

無人機とは思えない、まるで熟練パイロットの乗ったような動きを見せるハシュマル。

そして、三機にさらなる障害が立ちはだかった。

「……！おい、レーダーに反応複数！こいつは……！」

「そうか……！奴が三日月達の世界のＭＡであるならこいつらがいてもおかしくはないッ！」

ＭＡの小型随伴機プルーマが、三機の周囲に多数出現したのである。おそらくはハシュマルとの戦闘中に、同じように起動して地中から現れたのだろう。
ハシュマルに気を向けすぎた為、接近に気付けなかったのは失態だ。

「ハシュマルを撃破するには奴の制御中枢ユニット……あの頭部の下に設置されているもの破壊すればいい。それでプルーマを含むこの場の全機が機能停止する。しかし……！」
「ただでさえ厄介な奴なのにこんなちっこい奴らに囲まれた状態じゃ、まずアイツに辿り着けさえしねえ！」
「加えて、あのナノラミネートアーマーも抜かなくてはならない……！」

倒す方法は分かっていても、それが現状では至難極まりない事であるのを三人は理解している。
ハシュマルだけでなく、小型にも関わらず並のＭＳよりも高い出力と機動性を誇るプルーマも手強く、しかも複数だ。
戦況は徐々にハシュマル・プルーマ側へと傾きつつあった。

☆

ジード、タイガ、ゼットの三人はゴジラと共にゴブニュ（オグマ）、そしてビオランテと激突している。
ただしビオランテとゴブニュは協力関係にあるのではないらしく、触手をゴブニュにも向けていた。

「グオォォォウウ!!」
「――!!」
「ふっ！」
「くっ！」

「おわっ!?」

無数の触手が三人のウルトラマンやゴブニュを襲う。
ジード、タイガ、そしてゼットはなんとか回避しているが、ゴブニュは頑強な防御力を盾にその攻撃を物ともせず前進してくる。
そんな中、やはりゴジラにも触手は向かったが……

『いくらこんなもん寄越そうがオレ様に効くと思うなよ！ふん!!』

いくつかの触手を纏めて掴み、力任せに引っ張ると触手はブチィッ!!という音を立てて引きちぎられた。
これに反応したビオランテはいよいよ標的をゴジラに定める。同じG細胞を持つもの同士、因縁の対決。

「ゴジラの方に気を向けた……！」
「よし！今のうちに……うわっ!?」

ビオランテに攻撃しようとしたジードとタイガだったが、ゴブニュからの電撃で妨害されてしまう。

「やっぱりこいつから先にどうにかしないと！」
「俺が足止めします！」
「ゼット!?いくらスピード重視のお前でも一人じゃ無理だ！あいつの防御力を見ただろ！せめて二人で……」
「それじゃあのビオランテって奴を相手にする方にウルトラ負担がかかります！心配しないで下さいタイガ先輩！あの触手からの攻撃が無いなら、電撃に注意しつつヒットアンドアウェイで相手に捕まらなきゃ耐えられます！」

確かにゼットの言う事も最もだ。あのビオランテという怪獣は明らかに普通ではなく、ゴジラだから何ともないだろうが触手一つ取っ

てもウルトラマン達と同等以上の巨大さである。
それに、レジェンドが言った通り動きはそう早くない。油断さえしなければスピード重視のアルファエッジならば耐え忍ぶ事は可能だろう。
簡単にいかないのは承知の上だが、一刻も早くビオランテとの戦いに決着をつけてゼットの救援に入る方がいいのかもしれない。
そう考えたジードは尚も渋るタイガを説得し、ゴジラの援護へと向かう事にする。

「ゼット！無理はしちゃ駄目だぞ！」
「すぐに片付けて戻ってくるからな！」
「了解ですジード先輩、タイガ先輩！さ～て行きますか超師匠！」
『自分で言ったから分かっていると思うがあくまで奴の足止めだ。功を焦って奴を討とうと考えるなよ。この形態では攻撃力不足だ』

万が一に備えてレジェンドが再度忠告する。功を焦る事はなくても緊急事態が起こって焦る気がしないでもないが、そこは自分がフォローしてやるしかないと考えた。
しかし、その緊急事態はゼットとレジェンド側ではなく、ビオランテと戦う側に起こる事になる。

ゴジラの援護をすべく駆けつけたジードとタイガだが、ゴジラＶＳビオランテの死闘は両者以外踏み込む隙が無いほど壮絶なものだった。
ビオランテは触手のみならず、放射樹液という強酸性の樹液をゴジラの熱線のように吐き出してゴジラを攻撃しており、ゴジラの皮膚からはそれを浴びたのかあちこちから煙が出ている。
さらにゴジラも迫りくるビオランテの触手をあるいは引きちぎり、あるいは放射熱線で吹き飛ばしながら尚も前進し距離を詰めていた。

「あの中に飛び込んだら巻き添えくらいそうだな……ゴジラ、本気で戦ってる時は周りにほとんど気を配らなくなるってレジェンドさん言ってたし」
「つまり、ゴジラの邪魔にならないようポジショニングしつつ遠距離から攻撃する必要があるのか……！」

薔薇の姿―花獣形態のビオランテとの戦いでゴジラはまるで本気を出していなかったが、今は違う。
何発か放射熱線を浴びせたが耐えて攻撃を仕掛けてくるビオランテは間違いなく強敵だ。
ジードとタイガは出し惜しみせず自身らの得意技であるレッキングバーストとストリウムブラスターでビオランテを攻撃する事を決め、エネルギーを溜める。

「あの巨体相手に別々の所を狙っても効果は薄い！タイミングを合わせて、一点集中砲火だ！」
「はい！」
「レッキング……！」
「ストリウム……！」

たが、二人が光線を放とうとした時、凄まじい速さで二人に攻撃が仕掛けられた。
「ぐあっ!?」
「うああっ!!」
発射を中断させられ、弾かれるように吹き飛ばされるジードとタイ

ガ。
一体何が、と身を起こすとその原因が目の前に存在していた。
「見つけたぞ、ウルトラマンジード……！」
「お前は……!?」
「私はスラン星人。我が同胞を討ったウルトラマンマックスを始末する為、奴と親しい関係にある貴様には奴を誘い出す餌になってもらう！」

突如現れたスラン星人はそう言うと、高速宇宙人の異名の通り、高速で移動しつつジードを集中的に攻撃し始める。
かつてルガノーガーを打ち倒した時、ジードはマックスやゼノンと共闘しており、文明監視員にならないかと勧誘されていた。結果としてはご覧の通り銀河遊撃隊に入隊したわけだが、二人はジードを快く祝福し今でも親交がある。
マックスに恨みを持つスラン星人はその関係を利用してジードを捕獲し、彼を餌にマックスを誘い出してジード諸共一網打尽にしようと画策したのだ。

「うっ！ぐあっ！」
「ジード先輩！」
「邪魔をするな！貴様に用はない！」
「がっ！うぐっ！」

スラン星人はジードを攻撃しつつも突如分身し、タイガにも攻撃を浴びせだした。
攻撃を受け続け、徐々にダメージが蓄積していくジードとタイガ。
ゼットはゴブニュ相手に時間稼ぎしか出来ず、ジードとタイガはスラン星人の不意打ちで消耗しつつあり、そしてゴジラもビオランテを相手にするだけで精一杯。
鬼、ＭＡ、そして怪獣と宇宙人。

それぞれの相手に対して光神陣営は劣勢へと追い込まれていた。

☆

ラフタからリアルタイム通信で状況を聞きつつ、鉄華団と超次元グレン団を乗せた新造艦は『光気共鳴転移システム』を使用し、現在は専用の転移空間を通りサーガらのいる場所へ向かっている。

「つまり大将や旦那は不利ってわけか。にしてもどこのどいつだ……あのＭＡ持ち出してきやがった野郎は……！」

『そっちは後でサーガ様やレジェンド様に聞いた方がいいかも。こっちは異常が出たから見てみたらそういう事態だったし……ちなみに察知したのは束博士ね』

「あの人のぶっ飛び具合にゃもう慣れっこだぜ……って事はだ、マジで即戦闘になるからすぐ出せるようにしといた方がいいか。……カミナ、シモン！そっちはどうだ!?」

『っしゃあ！こっちはいつでもいいぜ！甲板で仁王立ちする準備は万全だ！』

「って何の準備してんだよお前は!?」

『何の？決まってんだろ！名乗りだよ名乗り！せっかくの俺達のその世界でのデビュー戦、ここで一発バシィッとキメるのが定石ってモンだろ！』

『アニキの言う通り、第一印象をしっかり植え付けとかなきゃな。敵をビビらせ、味方を奮い立たせる！それが俺達神衛隊だ！』

最初のカミナの発言にはこっちがビビらされたが……とオルガは思ったが、シモンの言う事も一理ある。

あまり頼られすぎてもいけないが「この人達がいれば大丈夫」という安心感は少なくとも味方にとってプラスに働くだろう。

「まあ……こういう連中だってのは長い付き合いから分かってたけど

よ……まさか鉄華団の新造艦でやるなんざ予想出来ねぇよ普通。おやっさん！行けそうか!?」
『いつでも大丈夫だ！パイロットは一部生身で戦闘する連中を除いて全員乗り込んでる！その一部の奴らは厳勝達の援護に行くそうだ！』
「一部……狛治はなんかやたら張り切ってたし確定として……他、誰だ？」
『ヴィラルとジェノちゃんだ』
「……あのオッサンをちゃん付けで呼べんのは大将や旦那、老師達を除いたらおやっさんだけだぜ……」

オルガは苦笑しつつ、おやっさんなる人物が出した名の者を思い浮かべた。東方不敗と似たベクトルでおかしい人物である。
とはいえ厳勝クラスの応援に行くとなればそれぐらいの実力は必要だろうが。
話しているうちに転移空間の出口が見え始めた。
オルガはラフタにまた後でな、と言って通信を切り、艦全体へと号令をかける。

「いいかお前ら！いよいよコイツの初陣と俺達神衛隊のあの世界での本格的な活動開始を示す一戦だ！ここでヘマやらかしたら大将の顔に泥を塗る事になる！気合い入れろよ!!」
『『オォォォォ!!』』
「全艦、第一種戦闘配備！機動部隊は発進準備、到着と同時に発進だ！非戦闘員は戦闘区画に近付くな！」

オルガは次々と指示を出し、乗艦している神衛隊員はもうじき訪れる世界での初戦闘の準備を進める。
出口はもうすぐだ。

☆

一方、レジェンド達の方では事態が更に悪化していた。
突如何かがハシュマルとドッキングしたかと思えば、倒されたゴブニュ（ギガ）達を資源・素材としてプルーマを驚くべき速さで生産し始めたのだ。
しかも、それに比例してかゴブニュまで追加で出現するという悪夢のような状況。ゴブニュを倒してもプルーマとなって数を増やし襲い掛かってくる、地獄のマラソンのようであった。

「くそったれ……！キリがないどころかこのままじゃ物量で押し切られるぞ！」
「ファンネルミサイル、弾数ゼロ……！」
（いかん……ブラックゲッターもペーネロペーも既に限界だ。二人が本来の乗機であればこの戦況を覆せたかもしれないが……）

さらに、スラン星人の猛攻を受けているジードとタイガ、そしてゴブニュ（オグマ）の防御力の前に体力が限界に達しつつあるゼットのカラータイマーが点滅し音を出し始めた。

「早すぎて捉えきれない！」
『タイガ！俺に代われ！俺ならあいつにも対処出来る！』
「そんな事言っても……！代わらせてくれないんだ！」

フュージョンライズ形態を独力で変えなければならないジードは勿論、タイガもスピード型のフーマにバトンタッチしたくても攻撃が激しくその隙がない。

「ゼェ……ハァ……ウ、超師匠……コイツ硬過ぎにも程がないですかね……!?」
『どうやらハシュマル同様、何らかの改良がされているようだな。不幸中の幸いというべきか自己修復機能はないみたいだが、これ以上となるとやはりパワーが必要になってくる』

「な……何というか、さすがですね超師匠……この状況で冷静なんて……」
『こんな修羅場、数えるのが馬鹿らしくなるほど経験したからな（……とはいえ、このままでは拙いのも事実。あいつが間に合ってくれればいいが）』

ゼットは息も絶え絶えだが、身体を貸しているレジェンドは疲労無しどころか取り乱したり焦ったりさえしていない。偏に彼の経験の賜物だろう。
しかし、彼自身が力を振るえぬ現状ではそれだけで状況を好転させる事は出来ない。

☆

「……かなりまずいですね」
「ええ。神衛隊の御三方もですが、ゼットさんやレジェンド様らもかなり危険です。巌勝さん達に至っては巌勝さんとカナエさん以外まともに攻撃が通じない状況で分断されました」
「ッ!?それって……！」
「巌勝さん、カナエさんとしのぶさん、そして杏寿郎さんで分かれました。一番危ないのは杏寿郎さんです。単独な上にダメージを与える手段がありません」
「パムッ!?」
「そんなっ！」

鬼灯の言葉にパム治郎とギャスパーが声を上げる。
パム治郎は元より、短いながらもリクらと共に親交を深め彼の人となりを知るギャスパーも心配しているのだ。
相手が相手だけに自分達ではどうする事も出来ない――そう思っていたリアス達だったが、何かに気が付いたパム治郎がアーシアの腕から離れて飛んでいく。

「パムパムー！」
「あっ!?パムちゃん、駄目ですっ！」
（さすがに黙って待っている事は出来な……いや待て、先輩が戦いに赴く前、何かをあいつに託さなかったか？まさか……！）

サーガもある事に気が付く。もしかしたらパム治郎が彼らを救い、逆転する切り札になるかもしれないと。
そうしている間に、彼女らも覚悟を決めた。

「……皆、私のワガママに付き合わせて申し訳ないのだけれど……」
「今更ですわ。あの方やカナエが命がけで戦っているんですもの」
「ここで黙って待ってたら、黒歌姉様や夜一姉様に怒られます」
「ガイさんと約束しました。皆の剣になるって。だから、僕はここで引けません」
「私もまだまだ足手まといかもしれませんが、カナエさんや杏寿郎さんにパムちゃんを託されたのに、ただ見送るなんて嫌です！」
「私とて厳勝師範に鍛えられている身、剣にはなれずとも盾くらいにはなるだろう」
「僕も半人前……それより下かもしれませんけど、リク兄さんだって必死なんです。だから僕も出来る限り頑張りますっ！」
「皆……ありがとう」

リアスは感謝の言葉を述べ、自分達も戦いの場に赴く事にする。怪獣や宇宙人、ＭＡには対抗出来ないだろうが、鬼相手ならせめて防御や囮、援護くらいは出来る筈だ。

「サーガ様、卯ノ花先生、鬼灯さん……お叱りは後で「叱る気などない」サーガ様？」
「本来であれば、主が戦っている以上私達が行かねばなりません。しかし、ここにいる者達の安全も確保せねばならない」

「こちらの事はご心配なく。火の粉が降りかかってきたら跡形もなく消し飛ばしますので」

かなり物騒な事を言っているが、鬼灯がリアスらを少しでも安心させようとしてくれている事ぐらいは理解出来る。

「俺の家族達を……頼む」

「「「「はい！」」」」

短いが、サーガの心からの言葉を受けたオカルト研究部の面々はパム治郎を追い、巌勝らが戦っている場所へと向かう。サーゼクスらが止めようとするが、サーガや鬼灯に睨まれ身を竦ませる。

「シスコンもいい加減にして下さい。貴方が彼女を心配するのは分かりますが、ここで友人や想い人を見捨てて逃げたりしたら彼女自身が自分で自分を壊しますよ。過保護も度を過ぎればただの毒です。おとなしくこれ以上自分の種族を危険に晒さぬように守りに徹して下さい」

「信じる事、信じ続ける事。それが本当の強さだ。彼女らは信じている……この戦いに勝てる事を。そして……」

サーガが微笑みながら夜の空を見上げる。

「逆転の切り札……その一つが今、到着した……！」

その言葉に三大勢力の面々も夜空を見上げると、突如凄まじいスパークが巻き起こり上空に巨大な光の渦が発生した。

何事かと騒がしくなるが、その光の渦の中からあるものが現れる。

黒を基調としたカラーリング、５００ｍを超える大きさ、そして何

より目を引くのがそれの先端に装備されている超大型回転衝角……即ちドリル。
そう、それこそが――

☆

「んにゃあああああ!?」

ダイブハンガーのブリーフィングルームには緊急事態という事でそこで生活しているほぼ全ての面々が集まっていた。
無論レジェンド達の現在の様子を映し出しているのだが、突然現れたそれを見た黒歌が大声で驚いた。

「いきなり何じゃ!?」
「突然大声を出すからチキンハート・ドラゴンなんて涙目で端で身を縮こませてるぞ」
「チキンハートじゃなくて天魔の業龍ですよぅ!」
「今はそんな事どうでも良いわ!して黒歌、何故に叫んだりした?」

C．C．がティアマットを指差しながらいつもの調子で言うと彼女はそれに反論する。二つ名のわりにビビりまくりだからそう言われても仕方ない。
夜一にバッサリ言い捨てられ、再度黒歌に尋ねると……

「あれは……あれは……!」
「あれは?」
「ふっふ～ん!くろにゃんには分かるよね～?」

束が自信満々に言うと、黒歌はまた大声でそれの名称を叫んだ。

「あれはスペースノア級参番艦……

クロガネにゃー!!」

いよいよ勇士、集結。

〈続く〉

小さな勇者

鉄華団の新たなる艦。
スペースノア級万能戦闘母艦の参番艦、クロガネ。
『鉄』や『黒鉄』とも書く、艦首モジュールに対艦対岩盤エクスカリバードリル衝角――通称・超大型回転衝角を装備した「決して止まらない」を体現したかの様なそれは、黒歌が好んでプレイするゲームに登場する戦艦である。
それが、まさか実際に開発され運用されているなど露にも思わなかった黒歌は未だ興奮気味だった。

「なんで!?なんでアレがあるにゃ!?」
「いやー私とスーちゃんともう一人で造ってたんだー。最後はスーちゃんに任せちゃったけど完璧な仕上がりだね！さっすがドーくんのお嫁さん！元ＳＰＤのメカニック担当！」
「戦艦……維持費……」
「もー、ろせちゃんすぐにそっち方面に思考持ってっちゃ駄目だぞー」

レジェンド一家の一員となってから日が浅いロスヴァイセはまたも莫大な金額になる事に青褪めている。
財力的に全然問題はないのだが、まあ危機感を持つのは悪い事じゃないとグレイフィアも黙っていた。
しかし、そんな彼女らも気付いていなかった。
もう一人、英雄がそこに向かっている事を。

☆

まさかの大型戦艦の登場に三大勢力は慌てふためいていたが、サーガは先程までの緊迫した表情から一変、穏やかな表情になっている。
「あれが噂の新造艦ですか。鉄華団より超次元グレン団が使いそうな

外見ですね」
「名前はクロガネだそうだ。由来を聞いてみれば納得すると思うが」
「ああ、なるほど。どちらでも名前に『鉄』の字が入りますから合点がいきました」
「サーガ様、あれ一体何なんですか☆」
「ブレませんね貴女は」

セラフォルーは一周回っていつものノリになっていた。切り替えの早い魔王である。とはいえ気になるのは最もだ。

「あれは俺直属の護衛部隊の分隊が運用する戦艦だ。つまりは味方、それもこの状況を打破出来る力を持っている」
「よぉぉぉう大将！無事で何よりだぜ！」

全員がその声のした方へ顔を向けると、なんとクロガネの艦首……即ちドリルの部分に腕組みして仁王立ちする男、いや漢の姿が。言わずもがなカミナである。
真っ赤なマントをはためかせ不敵に笑うカミナを見た三大勢力の面々はさらに混乱した。

「あ、あんな所で何してるんだあの人間は!?」
「バカにも程があるぞ！何考えてるんだ！」
「我々でも敵わないのに人間が太刀打ち出来るはずがない！」
「今の最後の言葉！言いやがったのはどこのどいつだァ!?」

最後の言葉が聞こえたカミナは声を張り上げて反論を叩きつけた。

「出来ねえ勝てねえ敵わねえ!?やってもねえのに決めつける奴が未来を掴めるわけがねえ!!
どんなに分厚い絶望の壁でも！それをブチ抜いて突き進む!!

それが俺達、超次元グレン団!!それが俺達、神衛隊だァァァ!!」

カミナは彼の決めポーズ、つまり人差し指を立てて左手を天へ突き出しながら堂々と言い放つ。

決して良い状況とは言えないのになんと気力に満ち溢れた漢なのだろうか。

彼の言葉を皮切りに、オルガは指示を出す。

「機動部隊、出撃しろ！まずはＭＡから潰すぞ！それから例の三人は!?」

『団長、このまま巌勝達のある程度近くへ向かってくれ！そうしてくれれば直接飛び降りる！』

「狛治、お前老師とかカミナの影響受けてないか!?まあいい、分かった！他の二人もそれでいいな!?」

『異論はない。狛治同様ロージェノム様と俺も飛び降りる。……妻と娘は頼むぞ、オルガ』

『ワシとヴィラルが巌勝の元へ行く。狛治はあの男を手助けするらしいからな』

「ＯＫお二人さん。ったく狛治といいヴィラルといい、嫁子持ち普通に家族揃って来るんだもんな……おまけに邪魔したりせず聞き分けが良いときた。んな幸せ家族見せられんのは独り身にゃ色々堪えるぜ」

やれやれという感じながらもオルガは笑っている。惑星レジェンドに生きるものは皆等しく家族である――その考えがしっかり心の奥底まで浸透しているからだ。

「さてと……あのＭＡにはスクラップになってもらうとするか！」

気を引き締め、オルガはモニターに映るハシュマルとプルーマをしっかり見据える。

さあ、ここからだ。

☆

クロガネの出現はパム治郎を除きリアス達も驚愕する。パム治郎はそんな事より杏寿郎の元へ一心不乱に飛んでいたから仕方ない。

「ちょっと！何なのあれ!?」
「戦艦もそうですけど、あのドリルに乗ってポーズ決めてる人が何考えてるかわかりません」
「う～ん……あの特徴、どこかで聞いたような……」
「え？ゼノヴィアさん知ってるんですか？」

さり気なく辛辣な事を言う小猫に、カミナの事をどこかで聞いた記憶があるゼノヴィア。
アーシアがそこを聞いてきたが悩むばかりで思い出せない。
……正直、師である巌勝が聞いたらサーガの御使いだろうと雷が落とされるだろう。ダジャレではなくマジで。
なにせ巌勝が属している神衛隊第一分隊・紅蓮の団長だ。

「あらあら、あれは……確かバルバトス？」
「はい、間違いなく。僕達に手を貸してくれた三日月さんの機体です。いや、それだけじゃない……！」
「なんか三日月さんのバルバトスと似た感じのがたくさん……はわあ!?大きな顔に手足が付いてるのが出てきましたぁ!!」
「何が何だか分からなくなってきたけど、とりあえず味方よね!?」

リアス達が目撃したのは三日月のネオ・バルバトスルプスレクスを筆頭に、昭弘が駆るネオ・グシオンリベイクフルシティやシノのネオ・フラウロスらネオカテゴリのガンダム・フレームに、鉄華団団員が駆る機体群、さらにキタンが駆るガンメン・キングキタンＲＸやヨーコ

のヨーコＭタンク、極めつけは先程のカミナのグレンとシモンのラガンまで出撃する光景だった。
今回、ニアのソルバーニアは出ていない。ヴィラルの妻子であるツーマとシアタ、狛治の嫁の恋雪や義父の慶蔵と留守番だ。
「あっちは大丈夫そうね……私達は当初の予定通りカナエ達の方に向かうわよ！」
リアスの号令で再度走り始めるオカルト研究部。
同時に爆音が聞こえてくる。それは果たして鬼と戦う巌勝達か、ハシュマル＆プルーマと戦う神衛隊か。

☆

杏寿郎はゴウエンマと圧倒的に不利な戦いを強いられていた。攻撃がほぼ通用しないのは当然として、その状況での単独戦闘。相手のワンサイドゲームにも程がある。
（距離的に胡蝶やカナエ殿、巌勝殿と合流出来ない程離れているわけではない！しかし奴がそうやすやすとそれを許してくれるとも思えん！）
既に表層は再構築されてしまい、この状態でダメージを与えるには部位破壊可能、かつ鬼祓いが出来る箇所でそこが一時的でも部位破壊されている場合に限られる。だが杏寿郎単独ではそもそもいずれも不可能。
加えて、ゴウエンマの四肢は部位破壊後に鬼祓いしなければ強化再生されてしまう。
だが、こんな状況でも杏寿郎は諦めていない。
「お館様より教わった言葉がある！『信じる心、その心の強さが不可能

を可能にする』！なんと素晴らしい言葉だろうか！故に俺も信じて刃を振るおう！勝利の糸口は必ずあると！」
「ゴアアアアアア!!」

両腕をガッチリ組んで、飛びかかりながらハンマーのように振り下ろすゴウエンマ。そしてそれを回避しつつ反撃する杏寿郎。

（せめて少しでも攻撃が効いている事を確信出来ればそこから戦術が組み立てられるのだが！何か方法はないものか！）

チラリと横を見ると多少離れた所でヒノマガトリと戦闘中のカナエ・しのぶが見える。相手がほとんど空中にいる為思うように攻撃が出来ないようだ。

対空や空中戦に有用な型があるといってもそればかりでは戦法に限りがあるのも事実。

もう片方の巌勝は唯一ヤトノヌシと渡り合えている。

表層を破壊し、ダメージを与えているが巌勝の表情にはどこか焦りがあった。

ヤトノヌシの特性を考えれば納得なのだが、それをこの場で知るのは彼のみなので杏寿郎としては『何かある』としか読み解く事が出来ない。

三者三様、やはり危機的状況に直面している。

「パム～」
「「「!?」」」

緊迫した戦場に似合わぬ愛らしい声がし、咄嗟にそちらを向けばアーシアに預けたパム治郎がパタパタと空を飛びながら降下しつつ、杏寿郎の元へ来ようとしていた。
そう、位置的に多少離れているとはいえ、パム治郎から見て空中のヒノマガトリが左に、地上のゴウエンマが右にいる中を突っ切りながら。
当然ヒノマガトリとゴウエンマはパム治郎にも狙いを定める。

「パム治郎！来るなっ!!」
「パムちゃん駄目っ!!」

杏寿郎とカナエは同じタイミングで叫ぶも虚しく、ヒノマガトリとゴウエンマは同時に火炎と火球を吐き出す。
パム治郎の速度では回避は叶わず、間違いなく直撃する。

「パム治郎ぉぉぉぉぉ!!」

「おおおおおおっ!!」

……かと思われたが、突如パム治郎より後方かつ高空から誰かが弾丸の如き速さで飛来し、パム治郎を抱え込みながら杏寿郎と胡蝶姉妹の丁度中間の位置に落下した。
ヒノマガトリの火炎とゴウエンマの火球は空中で激突して相殺され、件の人物はドォォォン!!と少しばかり地面を破壊する程の衝撃で叩きつけられながらもパム治郎に被害が無いようにしっかり抱えながら転がっている。

「うっ……ぐ……」
「パム～パム～」
「俺は大丈夫だ……怪我はないな？」
「パムパム」

肩口から少々出血しているものの、平然としているその人物から心配されるとパム治郎も大丈夫と頷く。
ようやく笑顔になったその人物を見て安心すると、そこに集まるように杏寿郎、カナエ、しのぶが集まってきた。

「パム治郎!!」
「パムちゃん!!」
「パムパム～」

杏寿郎の所へ飛んでいき、自分は無事だとアピールすると二人は安堵する。カナエなど本気で泣きそうだった。
それはそうだろう、全く別種とはいえ両親と同じように鬼に家族が殺される寸前だったのだ。

「あの、貴方は……？」

パム治郎の無事を喜ぶ二人を尻目にしのぶはパム治郎を助けて軽く負傷した人物に尋ねる。あんな高所からあのスピードで地面に激

突したのにこの程度の怪我で済んでいるのは普通なら有り得ないが、かくいう彼女も先程東方不敗というトンデモ超人（ガンダムファイター）を見たばかり。

「む！そうだ！俺の相棒を助けてくれてありがとう！おかげで……!?」

「どうしたの煉獄君？」

パム治郎を抱き上げながら恩人たる人物を見た杏寿郎は何かに気付く。

パム治郎を助けた人物とは狛治、即ち元上弦の参・猗窩座。自身の命を奪った鬼だった者だからだ。

「……杏寿郎」

「え？煉獄君の知り合い？」

「……俺は元上弦の参・猗窩座……だった者だ」

「!!」

二人は杏寿郎が固まった理由を察した。

まさか自分の命を奪った者が自分の大切な者を助けてくれるなど思ってもいなかったのだろう。

一応サーガから狛治の過去を聞いている二人は彼に然程悪感情は無い、寧ろ同情してしまった程だ。

どっかの弐はムッコロだが。

しかし、杏寿郎自身も恨んでいないとは言っていたがいざ対面してみるともしかすると、という可能性もある。

そう思ったが……

「杏寿郎、俺はお前が望むなら討たれ「俺は煉獄杏寿郎！君の名は!?」……は？」

「すまないが俺は君の名前を知らない！故に何と呼べばいいか分から

ない！だから教えてくれ！礼儀として先に名乗らせて頂いた！」
「俺は……狛治。十二鬼月上弦の参、猗窩座……だった」
「そうか狛治か！パム治郎が世話になった！本当にありがとう！」

いつもと同じ表情で礼を言ってくる杏寿郎に困惑する狛治。
カナエとしのぶもそうだったが、杏寿郎の性格を考えて勝手に納得したカナエは杏寿郎の君の名は発言で脳内に『前前前世』が流れてレジェンドとの脳内ラブストーリーを展開。しのぶからスパァン！と脳天に鋭い一撃を貰っていた。気のせいだろうか、この【エリア】に来てから大分彼女はっちゃけてない？

「痛いわしのぶ」
「次は突くわよ姉さん」
「ゴメンナサイ」

注・ここは戦場である。
それはともかく、困惑した狛治が口を開く前に杏寿郎は追撃（？）する。

「君は猗窩座だったかもしれないが！今の君に鬼らしさは微塵も無い！己が身を犠牲にして小さくも大きな命を助けたのは猗窩座ではなく狛治、君だ！初対面だが俺はすでに君のことが大好きだ！」
「……！」

猗窩座だった頃に相対した時とは真逆の事を言われ、狛治は言葉を振り絞る。

「杏寿郎……あの時は、すまなかった……！」
「ん!?あの時とはいつだ!?俺は謝られる事はされていないぞ！」
「全くお前は……ならこう言わせてくれ。ありがとう、杏寿郎」
「うむ！こちらも何故言われるのか分からんが、ありがとうを言い合

えるのは良い事だ！心が温かくなるな！」

やっと言えた。そして、形は少々変わっていたがこうして分かり合えた。

しかしそれを邪魔する者がいる。

「ゴアアアアアア！」

「クアアアア！」

「そういえば依然として状況は変わっていないな！さてどうしよう!?」

「あまり困っているように見えませんよ？」

「なに、ここにはこうして四人と一匹いる！三人寄れば文殊の知恵！そこに更に増えればきっと何か方法が見つかる筈だ！」

「さすがポジティブね～。でも、確かになんとなくだけどここから悪くなるのはなさそうな気もするし、後はどうにか覆す事を考えましょ」

「そもそも、炭……パム治郎は危険な場所と知って何故ここに来たんだ？」

自身も関わったからかパム治郎の名前を間違えそうになりつつも狛治が尋ねる。物分りが良いパム治郎がアーシアの手から離れてまでこちらに来るというのは一時の感情ではない事ぐらい杏寿郎らには容易に察せた。

その答えを知る前にヒノマガトリとゴウエンマから攻撃を受けそうになるが、その二体に魔力弾が直撃し攻撃を中断させる。

「三人とも無事!?それとパム太郎は!?」

「おお！グレモリー少女か！見ての通り俺達は無事だ！それとパム太郎ではなくパム治郎だ！」

「……長生きするハムスターとかレジェンド様に紹介してもらおうかしら」

「……」

へけっ。

忘れがちだがしのぶは全身に毛の生えた動物が苦手である。パム治郎の事も、つい最近少しずつ平気になり始めたばかりだ。

何はともあれ杏寿郎らとオカルト研究部は一人として欠けることなく合流出来た。

「それでパム治郎はどうして煉獄さんの所に行こうとしてたの？」

「パム～……ボク、オ手伝イシタカッタ」

『!?』

なんとパム治郎が喋った。

パムパム鳴く姿が愛らしくてそちらばかりに気を向けがちだが、そもそもムーキットは小学二年生程度の頭脳は有している為、これぐらいなら十分喋れるのである。

「パム治郎、俺を手伝う為にこの戦場に勇気を振り絞ってやってきたのか！立派だぞ！しかし……」

「キョウジュロート、シノブニ、レジェンドカラ贈リ物」

「！」

「パ～ム～……」

右手で杏寿郎からプレゼントされた首輪をコンコンと叩くと、そこから炎のような輝きの光とライトパープルの光が現れそれぞれ杏寿郎としのぶの持つ刀と一体化する。

すると二人の刀が発光し徐々にその形を変えていく。

杏寿郎のものは刀身がより長く、峰と刃を合わせるとまるで炎のような色へ。

しのぶのものは長さは変わらないが峰がライトパープル、刃はエメラルドグリーンになり、柄の形状がかつての日輪刀のものを更に洗練

したような形へ。
鍔も勿論、それぞれ炎と蝶を象ったものへ。
これこそゼットによる素材提供とレジェンドの尽力で完成した二人の専用日輪刀である。

「おお……！」
「普通の刀が、日輪刀に……」
『あーあー聞こえるか杏寿郎、しのぶ』
「お館様⁉」「レジェンド様⁉」

二人の手にした新たな日輪刀から何故かレジェンドの声が聞こえてくる。まさか通信機能が、と思ったが違う。

『これを聞いているということは即ちパム治郎が無事お前達の持つ依代に日輪刀の閃光結晶が宿ったということだな。とりあえずはおめでとう。それはお前達だけの日輪刀だ』
「依代？閃光結晶？」
『時間がないだろうから手っ取り早く説明する。ゼットの提供してくれた激レア素材の数々のおかげで閃光結晶を作成する事はすぐに済んだ。だがここから刀そのものを打ち出すにはやはり時間が足りない。そこでお前達にとりあえずと渡しておいた刀を依代に使う事にした』
「先程まで俺達が振るっていた刀だな！」
『直接閃光結晶から刀を打ち出すよりも早く形として完成する分、本当の意味で完成させるにはその刀を使い続け完全に閃光結晶を依代に馴染ませる必要がある。簡単に言ってしまえば後はお前達がそれを振るって戦い続ければ自ずと刀が強くなるということだ。以上、説明終わり』
「終わるのがあまりに急過ぎないかしら⁉」

相変わらずマイペースというか、なんというか……しかし、自分達

の手で愛刀を完成させるという事には少なからず浪漫がある。
『追伸、これは予め録音しておいた使い捨て音声です。再生が終わったら自動で消去されるので、着メロ入れたい時は俺に直接連絡するように』
「「「「最後の最後でどうでもいい情報きたー!?着メロって何!?」」」」

なんだ日輪刀に着メロって。
だが、杏寿郎としのぶにとって待ちに待った自分だけの新しい日輪刀。レジェンドの追伸の最後が本気なのか冗談なのかは分からないが、それも好意的に取れる。
二人は今もゴブニュと必死に戦っているゼット、そして彼と一体化しているレジェンドを見た。
体力を消耗して動きが遅くなってしまい、ゴブニュの一撃を受けて倒れ込みながらも起き上がり、何度も戦いを挑んでいる。

「ゼットさん、レジェンド様……ありがとうございます」
「彼らは今も決死の戦いを繰り広げている!あの二人のおかげでこの日輪刀を得た俺達が、ここでのんびりしているわけにはいかない!」

新たな刃を手にした二人だったが、驚きはそれだけではなかった。

「パーム、パーム……変若水〜」

何やらパム治郎が両腕をクルクル回してピーンと伸ばすと緑色の輝きが一瞬だけ発生し、なんとその場にいた者の負傷や消耗した体力などが完全回復したのである。
遠くで戦闘中のゼットらウルトラマンやゴジラ、神衛隊の面々やその機体らも多少効果を受けられたようで、困惑しつつも動きが良くなっていた。

「これは……まさか本当に変若水か!?」
「「「「おちみず?」」」」
「現実では霊薬の一つとされていて、今のあれはあの鬼達が出るゲームで使える能力みたいなものだ。ゲーム内では基本的に一回の任務で2回限りだが体力・気力・状態異常どころか戦闘不能さえ完全回復する超回復能力だった」

狛治の説明で先程パム治郎がやった事がどれだけ凄まじいか理解出来た。つまり現在の状況は、仲間と合流し装備を新調した上、完璧な状態で仕切り直しというわけだ。しかも相手は消耗している状態で。

「パム治郎!凄いぞ!」
「デモ、今日ハアト一回ダケシカ使エナイ……パム〜」
「十分十分!完全回復だもの、後はあの鬼らを退治するだけよ。無理にパムちゃんに使わせたりしないわ」
「となると後は巌勝さんの方ですね」
「そちらは問題なさそうだ」
「「「「え?」」」」

狛治が言った一言に全員が振り向くと、巌勝の方へ狛治が目を向ける。それに倣い他の者もそちらへ視線を移せば……

「はァァァァァ!!」

普通の人間に比べ腕が若干大きく、鋭い牙を持った男――『紅蓮』の副団長を務める獣人のヴィラルが二刀流でヤトノヌシの四本腕のうち剣と棍棒を持った二本を無数の突きによって封じ。

「ヌゥオオオオオ!!」

浅黒く筋肉隆々の身体にスキンヘッド、髭と胸毛がトレードマークな元・螺旋王のロージェノムが生身（素手）でヤトノヌシの残り二本の腕と互角に力比べしており。

そして……

「ちぇすとー」

いつの間にやら巌勝側と合流していたオーフィスがいつもの調子でドゴォォン!!という一際大きな音を立てながらヤトノヌシの顔面にドロップキックをかましていた。

「「「「なんかとんでもない人達がいるんですけどォォォォォ!?」」」」

「『紅蓮』の副団長と、そいつの元主にして『羅巌』の後見人だ。あの小さいのは分からんが……」

「オーフィス、いつの間に……!?」

「紅蓮……ってあぁーっ！そうか師範の！おまけに思い出したぞ！さっきのグラサンマントはそこの団長だ！」

「あ、あの……ゼノヴィアさん、団長さんをその言い方だと巌勝さんが……」

「どうしたアーシ……あ……」

アーシアが少々引き気味に指を差し、ゼノヴィアもその方向を向くと……遠くから顔だけこちらに向けて目をキュピーンと光らせている巌勝が。但しバックにはゴゴゴゴゴ……という効果音。

――ゼノヴィア・クァルタ……後で継国式地獄特訓零式だ――

口に出さずとも分かってしまったゼノヴィアは真っ白になった。そういえば、以前見た写真でカミナが巌勝とヴィラルと肩を組みなが

ら満面の笑みで写っているものがあったような。カミナだけでなく二人も笑顔だったし……。

「ドンマイよゼノヴィア」
「鬼灯さんの折檻よりマシよ、多分」
「カナエ先輩、比べる相手が間違ってます」

鬼灯の折檻→亡者はさらに死ぬ。確定で。
がっくり肩を落としつつ、ゼノヴィアはもう一つの問題を提示する。これを早々に解決しなければこの状況は打破出来ない。

「……そうだ……師範の刀か、その日輪刀以外でダメージが与えられない件は……どうする……？」
「彼女、本気で絶望してますね。この状況じゃなくてこの後の事に」
「仕方ありませんわ裕斗君。カナエでさえ太刀打ち出来ない巌勝さんによる凄そうな特訓ですもの」

あらあらうふふな朱乃の返答に裕斗が苦笑していると、再びパム治郎が腕をクルクル回して思いっきりバンザイする。

「パ～……ムー!!」
((可愛いー!))

いや、そうではなく。今度はかなり広域に結界らしきものが展開された。同時にヒノマガトリとゴウエンマが仕掛けてくる。
咄嗟に裕斗と小猫が飛び出してそれぞれがゴウエンマの右足、そしてヒノマガトリの右翼の一枚に斬撃と打撃を叩き込む。
すると、それぞれの部位が吹き飛んだ。
そう、部位破壊が出来たのである。それだけでなく、吹き飛んで地面へと突き刺さった部位が即座に鬼祓いされた。

「「「「なっ!?」」」」
「パ～ム～」
「まさかお前は……『癒』の変若水のみならず『壊』の断祓まで使えるのか!?……いや、それだけでなく厳勝の刀や日輪刀以外の武器や打撃でも鬼に攻撃が通じた……!」

どこぞのクールに去るお節介焼きよろしく見事な解説役になりそうな狛治。

「パム～……レジェンド、ボク『ミタマノ全スタイル使エル』ッテイッテタ」
「なっ……何!?じゃあ『タマフリ』もか!?」
「パムパム」

狛治の質問に頷くパム治郎。「マダマダ使エル回数少ナイ」とちょっと凹み気味ではあったが、そうだとしてもそれがこちらにどれだけのアドバンテージをもたらすのかを狛治は知っている。

「さっきからミタマとかスタイルとかタマフリとかよく分からないんだけど……」
「簡単に言えばミタマは英雄の魂、スタイルはその名の通りミタマの特性のカテゴリ、タマフリはそのカテゴリ内で共通の能力……お前達が使う魔法のようなものと思えばいい。先程の変若水は『癒』のミタマ、断祓は『壊』のミタマのスタイルで使えるタマフリだ。全スタイル共通の治癒を含め、各スタイルそれぞれ四種類のタマフリがある」

スタイルは全１１種類、そのうち一種類が固定としても合計３４ものタマフリをパム治郎は単独で使用可能だという破格の特性を持っている事になる。
ここにさらに各スタイルのニギタマフリ・アラタマフリの二種類も追加するとその数は５０を超える。

「戦闘中のスタイルは基本的にそのミタマに準ずる一種類のみ。つまり使えるタマフリは四種類だけだ。だがこのパム治郎は事実上あらゆるタマフリが使用出来る、鬼討ちのサポーターとして間違いなく頂点に君臨するだろう存在だ。回数制限があるそうだが、そもそもタマフリは種類毎に一回の戦闘中に発動出来る回数に限りがある。多分パム治郎のそれも同じ、基本の回数よりまだ少ない程度だろう。現に変若水はあと一回使えるらしいからな」

狛治、解説御苦労。

結論から言うとパム治郎は、タマフリによるいくつかの攻撃手段があるとはいえ、自身にほぼ鬼討ちの能力が無い代わりに超万能支援能力を持ったまさにダークホースだったというわけだ。しかも……

「ついでに言うと先程剣士と猫娘の攻撃が効いていた。即ちパム治郎が展開したこの結界内なら鬼に攻撃が通じるという事に他ならない」

「……それって私達より凄くないかしら」

リアスの呟きに同意せざるを得ないカナエ以外のオカルト研究部。この騒動が解決したら修行内容を見直そうと考えた。どうせ夏休みは異世界まで修行に出るし、丁度良い。

何はともあれ、杏寿郎が抱き上げながら褒めているパム治郎のおかげで遂に逆転勝利のビジョンが明確になった。

攻撃が通じる。

鬼祓いが出来る。

杏寿郎としのぶの手に日輪刀が届いた。

心強い援軍が到着した。

そして何より皆の心が一つになった。

恐れるものは何もない。目的はただ一つ。

「皆、俺達全員で『鬼』を討つぞ!!」
『おおー!!』「パムー!!」

反撃、開始!!

〈続く〉

烈火

ほんの少しだけ遡り、オルガが機動部隊へ出撃命令を出した頃。格納庫ではおやっさんなる人物の指揮の下、既に全ての機体整備が完了しており、パイロット達も搭乗済みですぐ発艦出来るようにもなっていた。

そこに名乗りを上げたカミナも到着し、グレンへと乗り込む。

「ッしゃあ！グレンの調子も万全だな！さすがだぜおやっさん！」
「後はお前達の仕事だ！この世界での初陣、しっかり決めてこい！」
「あたぼうよ！行くぜダチ公共！」

オルガに続いてカミナの号令で次々と発艦していくＭＳとガンメン。

殿であるカミナの乗ったグレンが左手の人差し指と中指を伸ばして敬礼に似たポーズをメカニック陣にし、勢いよくカタパルトで射出されていく。

「よし……」
「あれ？おやっさんどこ行くんスか？」
「これでも元パイロットだ」

メカニック達の視線を一身に集め、その人物は帽子の鍔をクイッと上げつつ、不敵に微笑んだ。

「戦場（そら）へ帰るのさ」

艦長であるオルガの元へは基本的に個人のプライバシー関係を除いた艦内全ての情報が集約される事になっている。艦長席に座り、新生阿頼耶識システムを起動させてからになるが……当然、格納庫の機

体の準備状況などもそれに含まれる。
オルガはカミナのグレンがクロガネから発艦した事で一部を除いて全機が格納庫から発進した事を確認したのだが。
「ん？まだ出てない機体が……は？こんなんコイツに積んでたか？」
艦長席で見たモニターにはこう文字が並んでいた。
Ｔａｋｅ　ｏｆｆ　ｓｔａｎｄｉｎｇ　ｂｙ　”ＳＴＡＲ　ＦＡＬＣＯＮ”

☆

杏寿郎の号令と共に反撃に転ずる勇士たち。
パム治郎も杏寿郎の背中にくっついて、やる気全開だ。

「よし、一緒に戦うぞ！パム治郎！」
「パム！」
「しのぶ、さっきと同じく私達はあっちの鳥型の方を！」
「ええ！煉獄さん、ゴウエンマとやらの方はお願いします！」
「承知した！こちらは任せろ！」
「なら俺は杏寿郎の方に助太刀しよう。そのつもりで来たからな」
「恩に切るぞ、狛治！」
「なら私と裕斗、ゼノヴィアは煉獄さん側を、朱乃と小猫、ギャスパーはカナエとしのぶ側の援護に！アーシアは少し離れた場所で待機して負傷した者が出たら治療を！」
『はい!!』

仕切り直しの意味も込めて、杏寿郎はゴウエンマと、カナエとしのぶはヒノマガトリと相対する。
そしてそれぞれを援護すべく狛治とオカルト研究部も分散した。

ヒノマガトリは四枚のうち右翼の一枚を部位破壊され、鬼祓いされたことでそこが濃い青色で半透明になっていた。他の部位の破壊を狙いつつ、ダメージを与えるべくそこを集中攻撃する四人。
ギャスパーは吸血鬼としての己の能力で先程小猫の攻撃で右翼を失った時に落下したヒノマガトリを拘束している。

「みっ……皆さん……今のうちに！僕の能力でも長時間は無理みたいですぅ！」

負傷したというのに驚くべき力で影による拘束を振り解こうと暴れるヒノマガトリ。魔力なり血液なり吸えれば良いのだが、生憎と鬼であるヒノマガトリに魔力は無く、血液の代わりに瘴気を内包しているため、吸ってしまえば逆効果だ。

「カナエ先輩、もう一つの右翼……落とします」
「下手に左落としたら逆にバランス良くなっちゃうかもしれないものね。ただ、鬼祓いっていうので浄化しても、あの通り能力制限はかかってるけど部位としてはそれなりに機能するみたいだし」
「でも少なくともこちらに有利になる事には変わりありませんわ。いっそ全部もいでしまいましょうか」
「あと、両足も破壊出来るみたいですよ。やるなら完全破壊狙いましょうね」

朱乃としのぶがドS化してる。朱乃は元より敵に対してこうなるが、しのぶも新しい日輪刀を試したくて仕方ないらしい。
カナエや小猫だけでなくギャスパーも怯えているので自重しましょう。

（私は力が弱かったから、元の世界では鬼の頸を斬れなかった。でも

この日輪刀なら……出来る気がする。何故かは分からない、直感的なものだけど）

左翼を朱乃が攻撃しているスキにヒノマガトリの足元まで素早く接近し、試しに刀を『振るう』しのぶ。

一瞬日輪刀が発光したかと思ったら急に力が流れ込む感覚を感じたしのぶはそのままヒノマガトリの左足へと振り抜くと、左足が斬り飛ばされてヒノマガトリは地に倒れ伏した。同時に斬られた左足は浄化される。

「斬れた……！姉さん、斬れた！私にも！」

「うん、しっかり見てたわ。ちゃんと片足を斬り飛ばせてた！」

思わず笑顔で伝えてくるしのぶに、カナエも笑顔になる。妹がずっとその事で悩んでいた事を知っているカナエは、自分のものと同じくレジェンドが日輪刀に付与した能力のおかげだろうと予想していた。

それは正解だ。

カナエの日輪刀は日と花、二種類の呼吸を使うためその負担や、赫刀発現条件を緩くする『緩和』。

縁壱のものは彼自身が剣士として一つの到達点に達しているので、彼が日の呼吸と己の実力を余すところ無く存分に引き出すための『領域掌握』。これはレジェンド自身が最高傑作と称する日輪刀能力だ。

そして、しのぶの持つ日輪刀の能力は力を始め、彼女の足りない部分を刀自身が補う『補助』。この能力によって不足していた力を補ったため、ヒノマガトリの左足が斬れたのだ。

ではもう一人、今日新たな日輪刀を手にした者の方は……

「はあああああっ！」

「死にさらせえぇぇぇ!!」

「裕斗はともかくゼノヴィア八つ当たりになってない!?」

ゴウエンマに対してこの後起こる地獄特訓を想像し、泣きながらデュランダルを振るうゼノヴィア。援護するリアスのツッコミはごもっともだが、どことなく全体的にパワーアップしてる感じがしなくもない。恐怖がある意味吹っ切れかけているからか。

「俺達もやるぞ！パム治郎！狛治！」
「パム～！」
「どうやら先程展開した結界は断祓も同時に内部全土へと浸透させているらしい」
「して、つまりどういうことだ⁉」
「遠慮なく部位破壊出来るということだ！」
「なるほど！分かりやすい解説感謝する！」
「パム～」

狛治の説明に杏寿郎が納得していると、二人に攻撃力を増加させる『渾身』、攻撃速度を早める『科戸ノ風』、さらに移動速度を早める『韋駄天』のタマフリを発動するパム治郎。本当に有能である。

「む⁉身体が軽くなって力が増した気配がするぞ！」
「攻と迅のタマフリだ。近接型の俺達にもってこいだな」
「よしパム治郎！しっかり掴まっていろ！」
「パム！」
「一気に踏み込むぞ！」
「承知した！」

返事した直後、凄まじい速さで二人はゴウエンマの懐に飛び込み、各々の型や技を放つ。

「炎の呼吸・弐ノ型！昇り炎天⁉」
「空円脚⁉」

杏寿郎は斬撃で、狛治は蹴撃でそれぞれゴウエンマの右腕と左腕を部位破壊し、パム治郎の断祓の効果で即座に浄化され素材と化した。

「よし、効いているぞ！このまま押し切る！」

狛治の言葉に頷き、リアスのサポートを受けつつ総攻撃を仕掛ける杏寿郎達。

こちらも決着の時は近い。

まさかパム治郎がこちらにとって切り札と呼べる存在になるなど露にも思わなかった巌勝らだが、これ幸いにとヤトノヌシを追い詰めている。

「フフフ……まさかあの者が逆転の鍵となるとは。かつてシモンに破れた時の事を思い出すわ」

「そういえばそんな話を聞いたな。私も同じ、予想だにしないところから状況をひっくり返す手段が出てくるものだ」

「もっとも……俺達も今や超次元グレン団の一員である以上、ひっくり返す存在になる必要があるわけだがな」

「我、眠くなってきた。早くあれ倒してレジェンドにくっついて寝たい」

「フハハハハ！なんと肝の座った娘よ！」

瞼をごしごしとこするオーフィスにロージェノムは豪快に笑って頭を撫でた。

少々乱暴だが悪い気はしない。かつて螺旋王だった頃には考えられない光景だが、それはロージェノムヘッドの記憶も融合して復活したからだろう。かなり丸くなって親バカと化してしまった。後者は良いのか悪いのか……。

「おい巌勝。レジェンド様は小さい娘が好みなのか」
「別にそういう事はないと思うが。現に巫女であるアーシアはそれなりの年頃だ」
「……父や兄のような感覚か？」
「わからん。私はレジェンド様のような人物を『人たらし』『天然ジゴロ』と呼ぶと教わった」
「巌勝、それを絶対あの方に言うなよ。というか誰だお前にそんなことを教えたのは」
「束殿だ」
「何してるんだあの天災」

☆

「へっきし！」
「束博士、風邪？そんな胸元開いた服着てるから……」
「らっちゃんに言われたくないもん！」
「束様、ホットココアお持ちしました」
「クーちゃんありがとー！きっとあれだね、レジェくんがゼッくんの中で束さんの噂でもしてるんだよ！」

レジェンド絡みではあるが、巌勝ら三名だとは天災の頭に思い浮かんでいなかった。そりゃもう全然。

☆

窮地に追い込まれたヒノマガトリ、ゴウエンマ、ヤトノヌシは遂にタマハミ状態へと移行した。
ヒノマガトリは二足歩行となって立ち上がり、四枚の翼のうち下翼だった二枚がまるで鞭のような長い腕になる。
ゴウエンマは浄化されたはずの両腕や片足が、残っていたもう片足

を含めて強化再生され、ヒノマガトリとは違い四足歩行になった。
ヤトノヌシはほとんど変わらず、全身を地面に倒して蛇のように地を這い回るように動く。おそらく攻撃方法に変化はあるのだろうが他の二体に比べて見た目で大きな変化はない。
レジェンドとゼットを除けば、このタマハミ状態は鬼の生命力が少なくなっているという事だと知っているのは巌勝とオーフィス、加えて狛治のみ。
他の者は鬼達だけでなく空が突如変色し、行動が変化した事に戸惑っている。

「な……何なの!?急に、空が……」
「こっちはなんか二本足で立ち上がって翼が腕みたくなりましたぁ!?」
「これが噂のタマハミとやらか……!」
「全員狼狽えるな!奴らは力を暴走させタマハミ状態となった。故に攻撃方法が変化し、より強力な一撃を放ったり今までとは全く異なる動きをするかもしれんが、これは奴らの生命力に限界が近付いている証でもある!もう一息だ!」
「あれ、マガツヒと同じ。全身どこからでもダメージ入る」
「ここまでくれば余計な考えは要らん!一気に畳み掛けるだけだ!」

リアスらの動揺を吹き飛ばすように巌勝が檄を飛ばし、オーフィスや狛治もそれに賛同して後押しする。

「つまり文字通り力と力のぶつかり合い!そういう事だな!」
「ああ、パム治郎のおかげでダメージを与える事はおろか鬼祓いによる浄化も出来る今、タマハミにまで持ち込めたならここからはゴリ押しでいける!」
「愛らしくもなく、食べれもせず、仕事も出来そうにない、飛ばない鳥モドキの鬼はただのアホウドリよ」
「……姉さん、『紅の豚』っていうのを見てなかった?」

「いかんな、豚丼が食べたくなってきた。今日ばかりは焼き鳥丼を食う気になれん」
「ロージェノム様、そういえばサーガ様経由でレジェンド様からの情報によると、この世界には『蛇倉苑』なる丼物屋があり絶品だと」
「ほう？だとしたら全品制覇しに行かねばならんな」
螺旋王（ロージェノム）ＶＳ蛇倉苑店長（ジャグラスジャグラー）の丼食い激突もそう遠くないうちに実現しそうだ。
　ちなみにガイはジャグラーの出したカツ丼戦士の頂盛りの前に敗れ、残った分はテイクアウトさせられたらしい。その時のジャグラーは積年の願いが成就したような晴れやかな笑顔だったという。無論、今度はガイがリベンジに燃えているとのこと。
　……とりあえず、今あちらは平和である。

「ま……まあ、何はともあれ頑張る理由が出来たのはいい事よね！それじゃあ、あの鬼とやらとの戦いにケリつけるわよ！」
『はい！』『応ッ！』「パム～！」

　大分脱線していたが、キリが良くなったところで半ば強引にリアスが〆、どうにか軌道修正出来た。
　飯テロに片足突っ込んだ状態だったし。

　先程と同じ編成で、同じ相手へと決戦を挑む元鬼殺隊の柱、神衛隊、そしてオカルト研究部。
　ギャスパーが影を使ってヒノマガトリの足を止めるも、ヒノマガトリは腕のようになった双翼をなんとゴムのように伸ばして攻撃してきた。
「っ!?」
「何なのあの鳥!?ゴム!?鞭!?触手!?」

「鬼でしょ姉さん」
「ゴムにしてはしっかり雷撃も効いてましたし」

口から火炎を吐いていた鳥型から、二足歩行で翼二枚が鞭っぽくなったと思えばゴムのように伸びる……鬼舞辻無惨が生み出した鬼よりも相当奇怪である。

「けど強化再生……だったかしら?それがない分、破壊しておいたからか攻撃力は見た目程高くないみたいね」
「だったら狛治さんの言う通り、力づくのゴリ押しです」
「ギャスパー君、もう少しだけ頑張って下さい。無事に終わったらダイブハンガー……でしたっけ。私達が住んでいるところの、リクさんの部屋の隣か向かいの部屋にお引越し出来るかレジェンド様に聞いてあげますから」
「!!がっ……頑張りますううう!!」

しのぶの言葉にギャスパーがやる気を出した。多分レジェンドならOKを出すと思うが、ジードにせよサーガにせよウルトラマン勢は何かと事後承諾されがちな気がする。

「あらあら……では私もあの方と一緒のお部屋に「それは駄目です」残念ですわ」

朱乃の意見は却下された。というか承認したら間違いなく血戦が起きる。レジェンドも巻き込んで。
オーフィスやアーシアも寝る時だけだというのに……それはそれで問題ではあるのだが。

四足歩行になったことで攻撃しやすくなったものの、ゴウエンマは機動力を増しており攻撃速度も早まっている。

両腕が前足になったのはいいが、強化再生によって頑強になっており今度は容易に破壊することは出来ない。

「杏寿郎！出来る限り奴の横か背後に回れ！前足になった腕に炎を纏わせて地面に叩きつけ、そこを中心に爆発を引き起こしたりしてくるぞ！常に一定の距離は即座に離れられるようにしろ！」

「承知した！ならばその場合、脅威となるのはあの巨大な尾だな！」

「裕斗、ゼノヴィア！聞いたわね、極力前面からの戦闘は避けるのよ！」

「はい！」

「目標を視界に入れてスラッシュ……目標を視界に入れてスラッシュ……」

「いい加減ゼノヴィアは諦めて正気に戻りなさい！というか私や狛治さんが言った事聞いてた!?」

もうここで人生終わってもいい的な思考になっていたゼノヴィアは何故かどこぞの決戦兵器の初号機のパイロットに似た台詞を言い出す始末。

忘れられているとは思うが継国式地獄特訓零式……地獄と零式が付かないメニューは継国剣術道場で一般的に行われている。

頑張れゼノヴィア、全集中の呼吸を会得するためには避けられない道なのだ。

ゴウエンマは咆哮すると猛スピードで突撃してくるが、リアスは翼で空へ逃げ他の四人と一匹は左右へと分散し、背後に回り込む。

「俺と杏寿郎にそれぞれ一人ずつ付いてツーマンセルで仕掛けるぞ！タイミングを間違えるな！」

「グレモリー少女はそのまま空中から援護を！注意を俺達へ向けさせないように頼む！」

「ええ！任せて頂戴！」

武器が大剣である裕斗は機動力で勝る狛治と組み、杏寿郎＆パム治郎は得物の大きさがほぼ同等のゼノヴィアと組む。
ぶっちゃけゼノヴィアの精神状態が（ほとんど自業自得だが）心配だったのだが、気にしている時間もないので成り行きに任せる事にした。

「多少でも効けば御の字！」

リアスが四人に当たらないように調節しつつ、魔力弾をゴウエンマの頭部へと連射する。魔力弾は全弾ゴウエンマに命中し派手に煙を上げるが、角が破壊されていたものの然程ダメージは無くリアスへと視線は向けられていた。
しかし、それが狙い。

「今よ皆！」
「「おおおおおおっ!!」」
「「はあァァァァァ!!」」

同タイミングで仕掛けた杏寿郎とゼノヴィア、そして狛治が一撃を叩き込んで即座に離脱したところに間髪入れずもう一撃を打ち込んだ裕斗。
これにより、ゴウエンマの後ろ足は左右ほぼ同時に破壊され、一時的にゴウエンマは身動きが取れなくなった。

「よし！今のうちに……!?」

悪寒を感じた杏寿郎は側にいたゼノヴィアの首根っこを引っ掴んで即座に離脱、狛治と裕斗もすぐに退避する。
直後、ゴウエンマが上半身を持ち上げたと思った直後、両拳を握ってハンマーのように地面に叩きつけるとその部分を中心に広範囲爆発が巻き起こった。

「ちっ！やはり後ろ足ではなく腕兼前足を破壊すべきだったか！」
「皆、大丈夫!?」
「問題ない！だがアレは確かに厄介だ！」

そういう杏寿郎だが、そこに焦りはない。信頼出来る仲間達が隣にいるのだから。
確実に勝利へと向かっているのを感じつつ、対策を考える。

上半身を地面に着け、蛇のような状態になったヤトノヌシだが、さすがに相手が悪かった。
ゴウエンマ同様四本のうち二本の腕でロージェノムを叩き潰す気で振り下ろしたが、平然と受け止められてしまう。
「なるほど……確かにパワーは上がっているようだな。だが対処が出来んわけではない！」

ロージェノムが受け止めている二本以外の、剣と棍棒を持った腕で攻撃しようとしたヤトノヌシだが、ヴィラルが天高く飛び上がりその二本の腕へと狙いを定めた。
「ロージェノム様に気を取られすぎたな蛇モドキ！その腕、貰ったァァァ!!」

錐揉み状に回転しつつ、武器を持ったヤトノヌシの二本の腕を勢いよく斬り落とすヴィラル。
本体から斬り落とされた腕は武器ごと地に落ちると断祓の効果で即座に浄化される。同時に斬られた部位から半透明の腕が現れるがそこに武器はなく、攻撃力が大幅に削られた事を示していた。

「ふん、そのままではバランスが悪かろう……ぬぅあああああ!!」

今度はロージェノムが恐るべき膂力で受け止めていた腕を引きちぎる。これにより、ヤトノヌシは四本の腕全てを失った。まだ尾が残っている……そう考えたヤトノヌシだったが、その尾に何か違和感を覚えた。

かつてカゼキリにゼットがしていたように、オーフィスがヤトノヌシの下半身ともいうべき巨大な尾を両手で掴んでいる。

「とりゃー」

可愛らしく抑揚の無い声だが、やってる事はえげつない。尾を掴んだまま思い切りヤトノヌシを背負い投げの容量で叩きつけたのである。

叩きつけられたあたりから千切れるように、ヤトノヌシの腰から上が吹っ飛んでいく。

ロージェノムはその光景を愉快だと言わんばかりに大笑い。

腕同様、尾は浄化され本体に半透明で形成されるが、ヤトノヌシはそれ以上の抵抗が出来なかった。

何故ならば、丸腰になるそのタイミングを厳勝が狙っていたからだ。

既に多大な光気を練り込み、型を放つ準備を済ませていた厳勝はヤトノヌシを討つべくそれを繰り出す。

「これで終幕だ……!月下に果てよ、ヤトノヌシ!!」

月の呼吸第二幕　捌ノ型
夜天（やてん）・嵐月落葉（らんげつらくよう）

嵐で舞う落ち葉が如く、無数の斬撃が月輪を伴ってヤトノヌシを斬り刻む。

無念、とでも言うかのような咆哮を上げ、天を仰ぎつつ力尽きるヤトノヌシ。地に倒れ伏すと同時にその亡骸は浄化され武具の為の素材となる。

ヤトノヌシとの戦いは、勝機を一気にモノにした超次元グレン団三名とオーフィスの連合軍の勝利という形で幕を閉じた。

残るはゴウエンマとヒノマガトリ。

しかし、元鬼殺隊の三名とオカルト研究部、そして狛治とパム治郎はその二体の鬼を倒すためにある決断を迫られる事になる。

〈続く〉

炎（ほむら）

ウルトラ戦士とゴジラを除いて、各戦線では状況が変わり始めていた。神衛隊の増援が功を奏したというべきか。

ハシュマルに産み出された大量のプルーマも、鉄華団のＭＳ部隊と超次元グレン団のガンメンによって急激に減らされている。

三日月の駆るバルバトスを始め、昭弘のグシオンリベイクやシノのフラウロスが獅子奮迅の活躍を見せ、団員らもそれに応えるべく奮起する。

現在の鉄華団の機体はネオ・ガンダム・フレーム系統以外では多岐に及ぶ。

今回出撃しているのはアムロやマリーダら宇宙世紀由来の機体であるジェスタ、ジェスタ・キャノン、そしてグスタフ・カールのカスタム機が主軸の編成。

ナノラミネートアーマーを考慮し、レールガンを始め実弾武器をメインに装備しているため問題なく攻撃は通じる。あとはパイロットの腕次第、というわけだ。

「第二、第三小隊は俺と流星号に続けぇ！」

「第一小隊！俺のバックアップは頼んだぞ！」

戦闘隊長でありトップエースの三日月とバルバトスはハシュマルとの戦いに赴いているので、代理は必然的に昭弘とシノになる。

もし狛治がいたとしても彼の機体は格闘戦特化のＭＦ。スタンドアローンでの戦闘が前提であるため小隊指揮には向いていない。

正直、相手がＭＡなのでＭＦの高い物理攻撃力は是非とも戦力に加わってほしかったが、状況が状況のため仕方ない。

代わりに大きな戦力になっているのが基本物理攻撃が主軸のガンメンだ。

特機、即ちスーパーロボットに属する機体群であるため機動力こそＭＳに劣るもののパワーは一級品。おまけに装甲も分厚く並の攻撃

にはビクともしない。特に、キングキタンＲＸはまさに鉄壁だ。

「おらおらぁ！プルーマだかプルーンだか知らねえが、可愛い姪っ子達に武勇伝持って帰らなきゃならないんでな！おとなしくブチのめされやがれ！」

「そういやキタン、お前の妹とダヤッカんトコ二人目出来たんだってな！めでてぇじゃねぇか！」

「おうよ！こりゃ俺もこっちで気張んなきゃならねえって思ってな！ワリィが今回はちっとばかし出番を食わしてもらうぜ、カミナ！」

「ヘッ、こっちも俺の左腕の参謀長が生身でタマ張ってんだ。団長の俺がグレン（コイツ）のシートでケツ磨いてるだけでいられるわけねぇだろ！いっちょ競争といくか!?」

「上等だ！手ぇ抜くなよ鬼リーダー！」

「当然だろ！行くぜ突撃隊長！」

「「オラァァァァ!!」」

片やランスを、片やグラサンカッターを手に突撃していく二機。特異な外見なのにＭＳも真っ青のアクロバティックな動きをするキングキタンとグレンにその場の者のみならず遠くから見ているサーゼクスら三大勢力の連中も唖然としている。

「アニキもキタンも張り切ってるな。俺も負けてられねぇ！」

「……いや、シモン……アンタもアンタで何してんのよ」

冷や汗垂らしながら聞くヨーコが見たモニターには、プルーマの一体のコントロールを奪って合体してるラガンの姿が……。

「ドリルが付いてたからな！コイツらに本当のドリルの使い方ってのを見せてやろうと思ったんだ！」

「ああ、そう……」

シモンは生粋のドリル男児である。しかもちゃんと実績があるからヨーコも何も言えない。現に奪ったプルーマのドリルで他のプルーマを平然とブチ抜いているし。

こちらの戦場にも、変化が起ころうとしていた。

☆

一方鬼との戦いでは激戦の末、巌勝らは無事に鬼の一体であるヤトノヌシを討伐する事が出来た。

しかし、ゴウエンマやヒノマガトリとの戦いはそうもいかない。鬼としての格は先程のヤトノヌシの方が上だが、巌勝やオーフィスら自体が規格外の戦闘力を持っていた事に加えて件の二体は戦闘スタイルが大幅に変化している。

さらに言うなら鬼殺隊であったカナエやしのぶや杏寿郎、神衛隊の一員である狛治はまだしも、オカルト研究部全体が死線を超えるような戦いをした経験が圧倒的に不足していた。

いくら修行をつけたのが百戦錬磨の達人であってもこれ以上激的にステータスアップするにはやはり修羅場の数を踏むしかない。

（ち……杏寿郎とパム治郎はともかく他の三人の出来る事が限られている……もう少し技の引き出しでもあれば変わってくるんだろうが……）

やはりというか狛治がそこに気付いた。

型の数は限られるが最大の奥義たる玖ノ型を除けばどんな体勢からでも型を放てる杏寿郎、膨大な数のタマフリを使用でき万全の援護を可能にするパム治郎という万能戦力に対してリアス、裕斗、ゼノヴィアはまだ未熟。

ヒノマガトリを相手にしている方も、カナエとしのぶ……特に縁壱の継子であるカナエは狛治と同等にやり合える実力があるが、漸く前に進み始めたギャスパーは元より小猫と朱乃も秘めたるポテンシャ

ルは高いがそれはまだ開花してしない。
実力者勢はそれらを守りつつ鬼を撃破しなければならない。そしてもう一つ、この場において忘れてはいけない重要な人物がいる。
アーシアだ。
レジェンドの巫女である彼女の身に何かあればおそらくレジェンド自身が黙っていない。それこそ、周りを気にせず暴走に近い状態になりかねないだろう。
事前にその情報を仕入れていた狛治はアーシアに気を配りつつ戦闘している。
彼女自身は可能な限り戦闘の邪魔にならないようにとゴウエンマとヒノマガトリの死角に、かつ離れて見守っていた。ハッキリ言って身の程知らずの三大勢力の護衛らよりよっぽど優秀だ。自身の力量を理解して行動している。

（うむ！あの位置なら攻撃出来るとしたら俺達が相対している鬼だけ、しかも十分間合いをとっている！）

狛治が気にしている方向を見た杏寿郎は即座に理由を察した。柱の位にあっただけあり状況把握能力がずば抜けている。
しかし、ここで予想を超える攻撃をゴウエンマが繰り出してきた。
タマハミ状態になる前は火球を吐いてきたゴウエンマだが、火炎を吐き出してきたのである。しかも、ヒノマガトリよりも勢いが激しい。

「えっ!?」
「迂闊だった……！タマハミ状態では奴は長射程の火炎を吐き出すのを忘れていた！」
「パム～！」
「パム治郎！何か策があるのか!?」
「パムパム！」

空にいるリアス以外の三人に自分と杏寿郎の後ろに回るよう指差すパム治郎と、何をするか分かった狛治は裕斗とゼノヴィアを連れてそちらに移動する。

「パー……ムー!!」

『防』のタマフリの一つ、天岩戸を発動させるパム治郎。一定時間敵からの攻撃を完全に無効化するそれで自身と杏寿郎を結界のように包む事で、無敵の防御壁として機能させたのである。

「おお!こんな事まで出来るのか!」

「よし、奴は首を左から右へと移動させ、薙ぎ払うように火炎を吐き出している!この隊列のまま火炎をやり過ごし……!?」

ここで狛治がある事に気付いて戦慄した。

ゴウエンマの吐き出している火炎は長射程。しかも薙ぎ払うように……そう、先程杏寿郎は位置的に十分だと思っていたが、予想以上に火炎の射程が長く、離れていたアーシアにも届いてしまうのだ。

それに加え離れていたが為に救出に間に合いそうもなく、しかもよりによって現在進行形でゴウエンマの火炎が自身らを通過している最中。

「まずい!アーシア!」

「ダメだ!彼女のところへ行こうにも今動いたらこの炎で誰かが代わりの犠牲になるどころか救出にも間に合わない!」

ゼノヴィアが叫ぶも、裕斗によって制される。自分達が動いても火炎の餌食になり、杏寿郎とパム治郎が動いたとしても防御壁が無くなって同じようになってしまう。そして、一緒に動くとしても杏寿郎の移動速度に合わせられるのは狛治くらい……正に万事休す。

「ひっ……！」

運動能力がそう高くないアーシアは小さく悲鳴を上げて目を瞑る。杏寿郎らだけでなくカナエらも叫ぶが、その瞬間アーシアの着ていた『輝煌（オラシオン・グリッター）なる祈り』が光り輝く。

装束に秘められた力の一つである、巫女を守る為の絶対防御機能が発動したのだ。

この機能、なんとあのグリッターティガの『グリタリングシールド』に匹敵する強度を誇り、攻撃だけでなく巫女への悪意ある行動そのものをシャットアウトする凄まじいものである。

「あ……」

アーシアの先程までの恐怖は想い人の力に包まれた感覚によって払拭された。ほとんどの者はアーシアが無事だった事に純粋に喜んでいるが、約2名ほどプラス羨ましがっており、しのぶから青筋を浮かべつつも笑顔の一撃で頭をひっぱたかれている。誰かはお察しだが姉以外へも叩けるあたり、強くなったな……。

誰にも火炎の効果がなかった事に腹立てたのか、再度火炎吐き出そうとするゴウエンマだったが、直後にそれは起こった。

いや、ゴウエンマだけでなくヒノマガトリにもそれは起きていた。

二体とも、何者かに抑えつけられているかのようにもがき始めたのである。

「何!?一体どうしたの!?」

「もしかして吐ける火炎には両者とも限度があったとか？」

「いえ……でしたらあちらの鳥型の鬼が火炎を吐いたのはタマハミ状態になる前が最後ですし、それ以降はこの瞬間まで吐く兆候さえ見せませんでした」

「となると本当に何が……」

朱乃の仮説にしのぶはそうではないだろうと理由を述べて説明するが、小猫の言う通りそうなるとますます分からなくなってくる。

「……食あたり、とか」

ボソリと呟いたカナエの方を全員が向く。いや、確かに魂を喰らう種類の鬼ではあるが……。

「姉さん、今日何発目か分からないけどいっとく？」

「待ってしのぶ!?こうなったら考えうる限りの予想を並べた方が！」

「だとしても食あたりなんてあるはずが「どうやらそうでもないらしい」……は？」

狛治が発した言葉に間抜けな表情になるしのぶ。というか杏寿郎以外の面々は皆そんな顔だった。

だが、それは再びもがき苦しむ二体を見た瞬間、驚愕に変わる。

ゴウエンマを半透明の宇宙人らしき二人が。

そして、同じくヒノマガトリを半透明の――パム治郎と同じムーキットが複数、必死で抑えつけるように組み付いていたからだ。

「パムー!!」

『!!』

それを見たパム治郎が大声を出した事に全員が驚く。慌ててパム治郎を見ると、パム治郎はポロポロと涙を零している。

「どうしたパム治郎!?まさか同胞を見て……いや、違う!!」

杏寿郎の優れた観察眼はここでも発揮された。

これはパム治郎をよく見ていた彼だからこそ分かった事なのだが、ヒノマガトリに組み付いているムーキットは六匹……そのうち二匹が他の四匹より大きい。パム治郎は丁度その二匹と四匹の中間くらいの大きさだ。

「パパ……ママ……」

『ッ!!』

パム治郎の口から聞こえた発言でさらなる衝撃が走る。

「パム治郎のご両親……!?まさか、ではあの四匹はパム治郎の弟や妹なのか!?」

涙を零しながら何度も頷くパム治郎。そしてもう一つ……

「アッチ……ボクタチノゴ主人ダッタファビラス星人……」

「そんな……!」

ゴウエンマを抑えつけているのはパム治郎一家を飼っていたファビラス星人の夫婦であった。

実はレジェンドの【エリア】においてムーキットはあまり減少していない。それは惑星衝突よるファビラス星喪失の際、ある勇者の一家の犠牲により十分な時間が稼げた為、資源を始めとする必要な物全てを持ち出せた事にある。

当然、共生関係にあったムーキットの避難も済んだところでその一家は力尽き、ファビラス星は失われた。

その一家こそ、眼前で二体の鬼を抑えている夫婦とムーキットの家族。

惑星の衝突を食い止めている最中、衝撃で吹き飛ばされたパム治郎は突如発生したブラックホールに呑まれ、次元を超えてアクアエデンへと落ちたのだ。
ファビラス星人の夫婦やパム治郎の家族が命を落としたのはその後であり、肉体を失い魂だけになった彼らは魂のまま次元を超え、その最中この場にいるゴウエンマとヒノマガトリに喰われた。
つまり、パム治郎は家族や主が死んでいる事さえ今の今まで知らなかったのである。薄々勘付いていたとはいえ、直面した事で抑えていた感情が爆発してしまったのだろう。

（よもや！よもやだ！魂を喰らうとは聞いていたが、パム治郎の主と両親、家族の魂まで喰らっていたとは！しかもそれらが同時に目の前にいる！偶然とは思えん！）

パム治郎に引き寄せられたのか、それとも本当に偶然なのか。そう考えていると、頭の中に声が聞こえてくる。

『我々が抑えている間に！こいつらを討つんだ！』
『私達もこのモノ達の中からではそう長く持ちません……早く！』
『『『パムパム～！』』』

ファビラス星人の夫妻とパム治郎の家族が語りかけてきたのだ。どうやら意識を分散させて内側から抑え込んでいるようで、見えている半透明の身体は若干外から抑える為の力の幻影らしい。
だが誰もが迷っている。『彼』を除いて。
眼前の鬼を討つことは魂だけとはいえ、漸く再会出来たパム治郎の家族らを再び引き離すという事。それも、今度は永遠にと言っても間違いではない。
もしかしたら奇跡的な事が起こって何らかの形で会えるかもしれ

ないがその可能性はほぼゼロだ。
パム治郎自身も両親や弟妹、かつての主人らを見て涙を流しながら嫌だ嫌だと首を振っていた。
何か方法は、必至に考えるも思い浮かばず、刻一刻と拘束から鬼が解き放たれる時間が迫る。
そこに、その声は響いた。

「心を燃やせ！歩みを止めるな！」
『!!』

それを発したのは杏寿郎。
日輪刀を両手で強く握り、両足で大地を踏みしめ、気を練り始めている。

「煉獄さん!?」
「ここで奴らを討たねば同じような事がいつまでも繰り返される！想像したくもないが！この中の誰かの魂が喰われ、力を増した奴らが喰った者の肉親と相対する事がないとも言えんのだ！」
「「「「っ!!」」」」
「パム治郎！今から俺がすることはお前に癒えぬ傷を残すことだ！恨んでくれても構わない！憎んでくれても構わない！それでも俺は俺の責務を全うする!!お前達がこれからも生きていく為に!!」

例え憎悪を向けられようとも、今生きている者達のために――信念のもと、杏寿郎は日輪刀をさらに強く握り締めると、刃が赤く変色する。赫刀だ。

「煉獄さんの刀が、カナエの時みたく……」
「痣が発現しなくてもなるのね、赫刀……」

「パム……」

パム治郎は流れる涙を拭う事はせず、目を瞑る。
思い浮かんでくるのはかつての主人や両親、弟妹との事だ。
長男として生まれ、両親や主人夫妻に喜ばれたことを教えてもらった事。弟妹が生まれるのを主人や父と心配そうに見守った事。お兄ちゃんだから、と必至に弟妹の世話を焼いた事。家族皆で他の星に旅行した事。
そして、ファビラスの民やムーキットの同胞の為に家族全員で命を賭して尽力した事。
いずれも忘れられない大切な思い出。
それを胸に、パム治郎は決意する。あの時から今に至るまで苦しんでいる家族を、その苦しみから断ち切るのだと。

「……パム!!」
「……そうか！お前も俺と同じ気持ちかパム治郎！ならばやるぞ！俺達の手で！彼らを長い悪夢から断ち切る!!」

杏寿郎の言葉に、涙を流しながらも強い眼差しでゴウエンマを睨みつつ頷くパム治郎。
同時に先程の『渾身』『科戸ノ風』『韋駄天』に加えて、攻めの型である炎の呼吸の力を最大限に引き出すタマフリを発動する。

「パムー!!」

その瞬間、杏寿郎の身体から赤い闘気が溢れ出す。
『攻』のタマフリの最高峰『軍神招来』だ。しかも、それだけではなくさらにアラタマフリ『破軍星光』まで発動し、もはや今の杏寿郎の攻撃力は通常の斬撃さえも全てが一撃必殺級に上昇している。
この状態で玖ノ型を放てば、確実にゴウエンマを葬れるだろう。
だが、一人と一匹はさらにその先へ進む。

杏寿郎の顔に炎のような『痣』が発現したのだ。
加えて、複数のタマフリの効果が重なり、一時的に全集中の呼吸・第二幕へと昇華したのである。
そしてそれは杏寿郎の新たな日輪刀が真価を発揮する事に繋がった。
一時的にとはいえ第二幕へと至ったことで、エフェクトであった炎は現実のものとなり実際に敵を焼き尽くす高熱を発する。
それは杏寿郎と背に乗っているパム治郎を中心に、喩えるなら炎の竜巻とでもいうような状態で発生している。
かなり説明が遅れてしまったが、杏寿郎の日輪刀に秘められた能力は『増幅』。パム治郎のタマフリによって能力を底上げされ痣や赫刀を発現させ、第二幕に至った杏寿郎の呼吸を日輪刀がさらに増幅することで想像を絶する『炎(ほむら)』を生み出したのだ。

(ライザーの発していた炎とは威力も根本も違う……彼の炎は欲望の塊だったけど……煉獄さんのものは力強さと安心感がある)

杏寿郎とパム治郎が生み出した炎を見ながらリアスは思う。後日カナエが言っていたが、ライザーの炎は「風と炎を司る割に汚い炎だった」とのこと。おそらく見た目ではなく込められた想いのことだろう。
だからこそ、本当の意味で数多の未来を背負った杏寿郎らが纏っている炎は眩しく輝いて見える。
そして、それに感化されたのか、カナエもヒノマガトリへと歩を進めた。
同時に未だ迷いがあったしのぶへ凛とした雰囲気を纏って諭す。

「立ちなさい元蟲柱・胡蝶しのぶ。立って相手を見据え、刀を握り、呼吸を整えなさい」
「……姉さん」

しのぶの目の前にいたのは、普段のふわふわした姉ではなく、かつて鬼殺隊最高位の剣士である柱の一人として戦場を駆けていた姉・胡蝶カナエの姿。
そんな姉の姿を見て、しのぶも日輪刀を握り締めてカナエと並ぶ。
「あれを逃したりすれば私達だけでなく、彼らもこの先苦しみ続ける事になる。今日、ここで……あの鬼を討ち、彼らを解放します。いいわね？しのぶ」
「……ええ。あの子と家族を引き離すのは、辛いけど」
目の前で鬼によって両親を奪われた彼女らだからそう思うのだ。しかし、同時に鬼に喰われていつまでも苦しみ続けるのを黙って見過ごす事も出来ない。
何より、パム治郎も決意して杏寿郎と共にゴウエンマを討とうとしている。その思いを汲まなければ。
「カナエ、しのぶ……」
「リアスさん、私達は大丈夫です。あのクソ野郎に比べれば俄然楽ですよ」
「だからリアス達は万が一私達が仕留めそこねた時、お願いするわ。私達よりもあの鬼を討つ事を考えて。頼んだわよ」
カナエとしのぶはそれぞれの呼吸法独特の呼吸音を発しながら精神統一し、日輪刀を構える。
全集中の呼吸・第二幕へと到達していたカナエの呼吸によって、日の輝きを放つ数多の花弁が戦場に舞う。
そして、どちらが合図するでもなく、左右対称になるように駆け出す。
パム治郎の両親や弟妹の魂に抑えられながらもヒノマガトリは火球を放つ。
しかしカナエとしのぶは先程同様、同じタイミングで同じ速度で加

速し回避する。
続けて鞭のような両腕を二人に伸ばして迎撃するが、これも同じタイミング、同じ腕力で日輪刀を振るいそれを弾く。
ここでカナエとしのぶはある事に気が付いた。
修行を重ねたとはいえ、カナエとしのぶの腕力や速さがここまで全く同じになる事はあり得ない。互いに意思疎通出来ているにしても動作には多少なりとも誤差が生じるはず。そう、普通ならば。
そんな時、感覚を研ぎ澄ました二人は何かの力が流れ込んでくるのを感じる。同時に、何かに背中を押され、そして支えられている感覚も。
不意に後ろを見ようとした二人の目にあったのは、仄かな輝きを放つ半透明のウルトラマン。
しのぶにとっては初めて見る者。そして、カナエにとっては少しだけ見た事のある、想い人の真の姿。

ウルトラマンレジェンド。

まるで一人がもう一人に置いて行かれないよう、押し出すかのように二人の背に手を添えて浮いている。
カナエが咄嗟に「レジェンド様」と口にするも、そのレジェンドは顔を向ける事も応える事もしない。
幻覚なのか、分身なのか。はたまたそれ以外なのか。全く分からないが、確かな事が一つだけある。
何らかの形で彼が力を貸してくれているということ。
そしてそれは同時にある変化をしのぶにも齎した。
しのぶの首に蝶の形の痣が発現し、日輪刀の刀身が赤く—赫刀へと変化したのである。
全ての全集中の呼吸は、日の呼吸の派生。日の輝きは花の生命を育み、花は蝶を始め蟲の生命を育む。
花の呼吸の使い手であったカナエが、特殊な修行を経て日の呼吸を使えるようになった事で紡がれた奇跡。

カナエは勿論、しのぶ自身も驚くがそれは一瞬。二人は顔を見合わせて微笑み合うと、気を引き締めヒノマガトリへと一気に加速する。

同じく痣と赫刀を発現させていた杏寿郎、そしてパム治郎の方にもある奇跡が起きていた。

レジェンドの幻影が胡蝶姉妹へ力を貸しているように、彼らにも全く見た事のないウルトラマンがその背を支えるように立っていたのである。

そして、それは杏寿郎やパム治郎だけでなく、ゼノヴィア、そして小猫にも薄っすらと見えていた。

「あれは……!?」

「何!?どうしたの!?」

「部長達には見えないんですか……？何か、結晶の集合体みたいな姿のウルトラマン？が……」

「……サーガ様だ」

「「!?」」

「サーガ様が何らかの形で杏寿郎達を手助けしているんだ。きっとな」

（……あれが、ソランさんの本当の姿）

全体的な輪郭ぐらいしか明確には分からないが、極めて神秘的な姿のウルトラマンであることは間違いない。

初めて見るその姿を目と記憶に焼き付けつつ、今は杏寿郎とパム治郎、そしてカナエとしのぶの勝利を信じる。

その時、杏寿郎も動いた。

（よくは分からないが、このゼット殿に似た御仁の姿が見えてから力がさらに湧き出てくる！この機を逃すわけにはいかん！）

杏寿郎は赫刀と化した日輪刀を握り締め、最大限に練った気をゴウエンマに叩き込むべく、パム治郎をその背に乗せ、今もなお激しく自身らの周囲を渦巻く炎と共に一気に踏み込む。
それに対し、ファビラス星人夫妻の魂に抑えられながらもゴウエンマはヒノマガトリ同様に火炎を吐き出すが、さらに驚くべき事象が起きた。
ゴウエンマの吐いた火炎が杏寿郎らの纏う炎の渦に吸収され、さらに激しさを増していくのだ。
杏寿郎の闘気とパム治郎の勇気、その二つの合気がゴウエンマを上回ったからこそ成し得た、未来へと歩む力。

遂には恐怖からカナエとしのぶ、そして杏寿郎とパム治郎から逃れようともがくヒノマガトリとゴウエンマだが、パム治郎の家族やファビラス夫妻の魂はますます拘束を強める。
もはや逃れる術は無い。

「「私達の絆は!!」」

カナエとしのぶの美しくも鋭い刃が。

「俺達の絆は!!」

パム治郎の思いも乗せた杏寿郎の力強い刃が。

『何者にも負けはしない!!』

今、輝く炎となって鬼を討つ。

日・花・蟲　呼吸三ツ積
双舞（そうぶ）・胡蝶陽花閃（こちょうようかせん）!!

カナエとしのぶが交差しながらヒノマガトリを斬りつける。二人の動きと振るわれた刃の軌跡が合わさり、それは炎の蝶を象っていた。

炎の呼吸　玖ノ型
奥義　煉獄!!

自身の姓と同じ名を持つ炎の呼吸最強の型は、パム治郎の数多の援護を受けて強化された上でゴウエンマに直撃すると、凄まじい爆炎の柱を立ち登らせる。
断末魔の叫びを上げ、ヤトノヌシ同様天を仰ぎつつ絶命するヒノマガトリとゴウエンマ。
炎を操る巨躯の鬼を、それをさらに上回る炎の太刀が討ち倒したのだ。

「やっ……た……の？」
「みたい、ですわね」

不安げなリアスに対して朱乃が応える。
それが事実だというように二体の亡骸は浄化され、素材となった。

「間違いない、鬼を討てたようだ」
『やったあああああ!!』

狛治の言葉で漸く本当に勝利を確信したオカルト研究部は喜びの声を上げる。
そこに巌勝らも合流すると、巌勝は両目をキュピーンと光らせつつゼノヴィアの肩を掴む。
その瞬間、ゼノヴィアの表情は期末テストが終了した解放感から補習が確定した時のような落胆と絶望感に満ち溢れていた。

「し……師範……」
「……継国式地獄特訓零式、お前が今回然程活躍出来なかった部分も含めて指導してやる。覚悟しておけ」
「……」チーン
「ゼノヴィアさぁぁぁん!?」

厳勝の宣告にゼノヴィアが灰になりアーシアの叫びが木霊する。ゴウエンマを暫し一人で食い止め、ヤトノヌシを屠った厳勝には反論出来なかった。既に指導（死導）入ってる。

「待って下さい、あの二体が討たれたってことは……」
「あ……!あれを見てくださいぃ!」

裕斗がある事を思い出し、ギャスパーが指差した方を向くとヒノマガトリとゴウエンマに喰われていた魂が解放され、天へと消えていく光景であった。

「鬼に喰われていた魂が……」
「あ……煉獄さん、カナエ先輩、しのぶさん」

少し離れた所に三人は天を仰ぎつつ佇んでいる。
全員が近くに寄ると、パム治郎が涙を流しながらその光景を見ていた。
そう、本当に別れの時である。

「パム〜……」
「パム治郎……」
「パムちゃん……」

涙の止まらぬパム治郎を見守るしかない一同。

そこに、ファビラス夫妻とパム治郎の家族の声が聞こえた。

『頑張ったな。立派だったぞ』

『あなたは私達の分まで生きて、幸せになってね』

『『パムパム～』』

『その子を、よろしくお願いします』

『ありがとう、この星の勇者たち。そして、さようなら――』

その言葉を最後に、彼らの魂も天へと還っていく。

「パムー!!」

大きな声を上げたパム治郎だが、追いかけたりはしない。ただ、大きく手を振っている。

もう自分は大丈夫だよ――そう示すかのように。

「……煉獄杏寿郎、胡蝶カナエ、胡蝶しのぶ。今から私がする動作を倣って行え。此度の鬼討ちをした者はやらねばならぬ事だろう」

巌勝が前に出て、腰から鬼神刀を鞘ごと抜いて縦向きで前に差し出し、逆手で少しだけ抜くとキンと音を立てつつ再び納刀する。

「それは……？」

「金打（きんちょう）と言ってな。江戸時代に武士が約束を守ることを示す際に刀の刃と鍔を打ち合わせた事が由来の、所謂堅い約束をすることだ。私の生まれは戦国時代だが……鬼であった頃、幾度か目にしたことがある。あの時はどうも思わなかったが……」

そう言って目を瞑る巌勝。それを見た杏寿郎、カナエ、しのぶもそれに続く。

それぞれ日輪刀を使い、各々の誓いを胸に金打を行う。

死して尚、生きている者達を守ろうとした勇者達に最大限の敬意を込めて。
その姿に、本当に最後に、ファビラス夫妻やパム治郎の家族が笑いかけてくれた。
気付けばパム治郎だけでなく、その場にいたほとんどの者は涙を流している。

かけがえのない大切な存在へ。
「さよなら」と「ありがとう」を込めて――

見送る、最後の笑顔。

〈続く〉

星の隼、黒き獅子

「……どうやら、巌勝達が全ての鬼を討伐したようだ」
「！サーガ様、リアス達は!?」
「心配せずとも欠員一人出ていない。鬼を討ち取ったのは巌勝、杏寿郎、そしてカナエとしのぶだな。中心になったのも彼らに加えて狛治ら神衛隊だ。リアス達も可能な限りのバックアップをしていた」

サーガが告げた事実に安堵と驚愕に染まるサーゼクスを始めとする三大勢力陣。サーゼクスらトップ陣はともかく、巌勝ら見た目が人間である者達が鬼を討ったのを信じられないらしい。
先んじて東方不敗があれだけ無双したというのに。

「信じられないとでも思っているのか知らないが、これが彼らの実力だ。先輩の九極天と同じく、俺が比類なき信頼を寄せる直属の護衛部隊『神衛隊』の力……これから立て続けに見る事になるぞ。しっかりその目に焼きつけろ」

これからこの場にいる天使と悪魔、そして堕天使は知る事になる。自分達が人間より上だと傲っていたことがどれだけ愚かだったのかを。
光神と共に生きる人々がどれだけの可能性を秘めているのかを。

☆

巌勝ら神衛隊白兵戦組がリアスらと共に、現れた鬼を全て討伐した頃、機動部隊の戦場の方にも変化が訪れていた。

「何かおかしくないか？」

プルーマをほぼ掃討し終わり、ゴブニュ軍団と超次元グレン団が戦

闘している最中にシモンがある事に気付いたのだ。

「あん？何がだシモン」

「コイツら、最初は山だか地面だかから出てきたんだろ？確かその次もそうだ。もしかしたら……」

「……なるほどな。ようし！シモン！そういうことならお前しか適任者はいねえ！こっちは任せとけ！」

「ああ！この仕掛けを暴いてくるぜ、アニキ！」

そういうとシモンは合体していたプルーマをゴブニュに投げつけるように分離し、ラガンの額からドリルを出して地中へ突き進んで行く。カミナは勿論、付き合いの長いヨーコとキタンも理解した。

彼を信じ、迫りくるゴブニュ軍団にたった三機で立ち向かう。その三人の表情に絶望などなく、それどころか自信さえ満ち溢れている。

「っしゃあ！どんどん来やがれガラクタ野郎共！このカミナ様が相手になってやらぁ！」

「おぉっと！敵陣先行突撃は俺の役目だろ！」

「全く、二人揃って……厳勝があっちにいる以上、一人で援護するしかない私の事も考えなさいよ」

総じて突撃思考の多い超次元グレン団。ヨーコはそうぼやくが割と御大将モードの厳勝もそんな感じである。

シモンがやってくれる事を信じ、三人は愛機と共に再び激戦へと見を投じていく。

プルーマの数が少なくなったのを確認したハシュマルはゴブニュの残骸から再度生産しようとするも、増援が来たことで闘志を燃やし反撃に転じたエクシアＧＦやブラックゲッター、さらにエクシアＧＦ同様にハシュマルへの効果的な戦術が取れるバルバトスが参戦して

きた為にゴブニュの残骸まで辿り着けない。
唯一ナノラミネートアーマーに効果のあるファンネルミサイルの残弾が無いペーネロペーはグシオンリベイクやフラウロスと共に残りのプルーマ掃討に向かっている。
「通常のミサイルポッドの一つでも積んでおけば良かったか……」
「仕方ねえぜマリーダ姐さん、確か一通り完成はしたが改良の余地アリなんだろ？そいつ」
「ああ、束博士の話ではな。だからよくこの状態でここまで持ち堪え……!?」
マリーダが何かを感じてそちらを向くとハシュマルが大出力ビーム砲をある方向へ向けていた。グラハムや竜馬、三日月はハシュマルに集中しているため気付いていない。
その狙いが、サーガ達や三大勢力が避難した場所だということに。
マリーダはペーネロペーをフライトフォームへと変形させ、最大限に加速しそちらへ向かう。
「マリーダ姐さん、どうした!?」
「三日月達に伝えろ！ハシュマルの狙いはサーガ様達のいる場所だ！一番数が多く狙いやすい場所へ砲撃しようとしている！」
『!!』
この場で最も人口が密集しているのは乗員が多いクロガネか、サーガ達もいる三大勢力が避難した場所だ。
前者は強固なエネルギーフィールドや装甲を持ち戦闘力の高い戦艦で、ハシュマルから距離もある。

故に先程大多数を葬った三大勢力に属する者が多い後者を狙ったのだ。

（間に合え……ッ！）

ハシュマルの行動に気付いたのはサーガらもだ。正確には彼以外に鬼灯と卯ノ花が、だが。

「マズイですね。あのＭＡ、此方を狙っています」

『!?』

「なっ！・マジか!?」

「今から防御結界を張りますが、現在の集束率からして作成時間と強度的に保つかどうか……私達はともかく三大勢力の方々が無事でいられる保障はありません」

最早ハシュマルのビーム砲は発射直前。鬼灯と卯ノ花が結界を展開しつつサーガの光気で補強するが、あの威力で直撃すれば少なからず即席の結界では貫通する可能性が大きい。しかも、三大勢力陣は慌てふためいてそこから逃げようとする者も出始める始末。

下手にそこから動けば結界の外に出てしまい問答無用で蒸発させられると分かりそうなものだが、先の惨状を見せられている護衛達はそれすら失念している。

「ミカエル様、ガブリエル様！・駄目です皆パニックになってて……！」

「こちらもです！・皆さん落ち着いて、少しでも被害を抑える為に結界を……」

イリナや、ソーナとその眷属である生徒会メンバーも何とかその場を収めようとするが規模が規模なのでどうにもならない。

グラハムらもようやくサーガらが狙われているのに気付いたのか

止めようとするも間に合わず、遂にハシュマルからビーム砲が放たれた。凄まじい熱量を持った極太のビームがサーガ達や三大勢力の避難していた場所に迫り、そして……

間に横入りに乱入したペーネロペーに直撃した。

「マリーダッ!!!」

サーガの叫びが響き、その光景を見ていた彼女を知る人物の顔色が一気に悪くなる。

しかし、不幸中の幸いにペーネロペーが損傷したのはフライトユニット部分であり、本体であるオデュッセウスガンダムは無傷だったようで、一矢報いるべくそのフライトユニットをハシュマルに向けてパージする。

フライトユニットがハシュマルに直撃するのとオデュッセウスガンダムが地面に落下するのはほぼ同時であり轟音が辺り一面に響き渡った。

「ぐっ……フライトユニットの装甲の厚さに助けられたが……あとで束博士に謝らなければ」

正直、あそこでパージしなければユニットが爆発してそれに巻き込まれる可能性もあったのだが、それはそれとマリーダは思考を切り替

えた。
ちなみに束が彼女を怒る事はない。むしろパニックを起こして右往左往してた三大勢力への印象が悪くなっている。しっかり防御すれば被害はちゃんと抑えられたのに、それをしなかったからマリーダが庇う形になったのだと。
なんとか機体の体勢を立て直すもフライトユニットを失った事で飛行は不可能になり、機動力もかなり落ちた。
一応ビームサーベルやビームライフルは使えるが、ハシュマル相手にはほとんど無力だ。
しかも先程のユニットパージにより、ハシュマルはマリーダを最優先排除対象と見なしたらしく、再び大出力ビーム砲を彼女に向けている。
このオデュッセウスまで失うわけにはいかないと、せめてその場から離脱しようとした瞬間、ハシュマルにドッキングしていた外付けのプルーマ生産ユニットが爆発四散した。

「何だ!?いきなり野郎の合体パーツが吹っ飛んだぞ!!」
「竜馬、三日月、君達ではないのか!?」
「俺でも竜馬さんでもないよ。誰だろ、あれ」

三日月の言葉に二人も機体のメインカメラを向けると、そこを飛んでいたのはハシュマルの二倍以上の大きさの、銀色の巨大戦闘機。
それだけの大きさでありながらハシュマルのスピードに対応しきっていた。
「あれは……!」

グラハムはある人物に見せてもらったことがある設計図を思い出した。その設計図に記されていた機体そのものなのだ。まだ試作段階で、片方しか着手出来ていないと言っていたその機体の名は……

「スターファルコン……完成していたのか!!」
「こいつは試作機だから単体戦闘しか出来ないけどな」
「「「!!」」」

その戦闘機、スターファルコンから聞こえた声は三人……特に第四分隊に属するグラハムがよく知る人物。
第四分隊のチーフメカニックであり、今回レジェンドやサーガらに協力すべく自ら志願してくれた伝説のパイロット。

「イナバ主任!!」

イナバ・コジローその人であった。

「「「「おやっさん!?」」」」

竜馬や三日月のみならず、昭弘やシノら鉄華団メンバーやカミナ、キタン、ヨーコまで驚く。

「オイオイオイ!?イカした登場してくれんじゃねえか!おやっさんよぉ!!」
「つーかデケえ!何だありゃ!?」
「そういえばおやっさんって……昔は『グランド・フォース』っていう凄腕ばかり集まったチームの一員だったって聞いたけど、本当だったの!?」

グランド・フォース――かつてレジェンド直属の、九極天とは別にあった特殊部隊。各方面のエキスパートによって構成された凄腕集団である。
サーガが神衛隊を持つ事になってから部隊解散、及び全員がそちら

に移籍し、現在は当時のほとんどの者が前線を退き後進の育成に回ったり、退役してのんびり暮らしたりしているが、ただ一人イナバ・コジローだけは神衛隊に残りメカニックとして現場を支えている。
　そんな彼についた二つ名が『神衛隊のお父さん』。おやっさん呼びはここから来ているのだ。無論、彼の人柄が関係しているのも言わずもがなだが。

「三日月！このスターファルコンを足場代わりにして戦え！踏ん張りが効かない空中戦闘はバルバトスの真価を殺すも同然だ。コイツなら奴の機動性に対抗出来る！」
「こんな凄いのあるなら最初から出してくれればよかったのに」
「間に合ったんだからいいじゃねぇか」

　笑いながら言うコジローに三日月も笑い、バルバトスの可変ウイングを折り畳んでスターファルコンの上に着地させる。やはり地に足が着いていると落ち着く、と三日月は感じた。

「それとマリーダ、大丈夫か？」
『はい、何とか。すいませんイナバチーフ……フライトユニットを失ってしまいました』
「気にするな。束には俺からも言ってやるし、あいつも怒らんだろう。それにサーガ様達を命がけで守ったんだ。お前を侮辱するような奴は俺達が許さん。胸を張れ！」
『……はい……！』

　こちらで出来たもう一人の『父親』の温かい言葉がマリーダの心に染み渡る。
　そして、コジローはさらなる切り札を持って来ていた。

「マリーダ、あの艦へ……クロガネへ行け！そこでお前の相棒が待っている」

『……!!』
「そいつはユニットのない状態でも短時間の飛行なら可能なはずだ。お前の相棒も各種アームドアーマーの調整は今のお前に合わせる必要があるからまだ完了していないが、代わりに別の装備を施してある。ここは俺達に任せて早く行ってやれ」
『了解……!』

オデュッセウスガンダムがクロガネに向かったのを確認すると、再び戦闘態勢に入るコジロー。

「ねえ、おやっさん。マリーダ姐さんの相棒ってもしかして」
「ああ、お前の思っている通りだ」
「なら……それまで俺達が頑張らなきゃ」
「よし、行くぞ!!」

コジローは操縦桿を力強く握り、三日月と共にハシュマルに立ち向かう。マリーダが相棒と共に舞い戻る事を信じて。

☆

一方、ラガンのドリルで地中を掘り進んでいたシモンはあるものを発見する。

「……!やっぱりそうか!見つけたぜ!!」

ニヤリと笑い、それに向けて直進するシモンのラガン。

「ラガン!!インパクトォオオ!!」

ラガンのドリルが深々とそれに突き刺さり、コントロールを奪おうとするも……

「うおおっ!?」

シモンの螺旋力を受けているにも関わらず、突如そこからそれは地上へと浮上していく。途中で自然とドリルが外れてしまい、シモンは仕方なくラガン単独で地上へ上がる事にした。

☆

マリーダの乗ったオデュッセウスガンダムは無事にクロガネの格納庫へと着艦した。

事前に情報は入っていたが実際近くで見ると予想以上の大きさである事にメカニック達は驚くも、すぐにハンガーへと誘導する。

同時にマリーダがコックピットから出て来るが、自身の体調を気にすることなくメカニックの一人に尋ねた。

「イナバチーフが言っていたものは?」

「……!はい、こっちです!」

彼女の言葉や雰囲気からしてコジローが直接伝えたのだろう。彼の意志を汲み取ったメカニックはマリーダをそれが保管されているハンガーへと案内する。

そこは厳重にロックされ、とある認証が必要とされる程に封鎖されていた。機体の詳細を知れば納得がいく。

惑星レジェンドにて新しく建造されたあの機体はマリーダのみが起動・操縦出来るようになっているため、万が一にも奪取されないようにとこれだけのセキュリティ対策がされているのだ。

そして、その認証方法とは「彼女のニュータイプ波長」。即ち彼女自身でなければ発せない特殊な波長によるもの。これを発案したのはかのアムロ・レイである。

紛れもなくマリーダ本人が到着した事を認証したハンガーは轟音

を響かせつつ封鎖していた扉を開く。
そこにあったもの――かつての自分にとっては忌まわしい過去を呼び起こすもの。今は家族を守るための相棒にして、彼らと同じ家族。
漆黒のボディと金色に輝くアンテナ。
かつての世界で幾度と相まみえ、共闘した機体の2号機であり……そして図らずも自分の最期の相手となった機体。それを元にこちら側で建造した、マリーダの真の愛機。

ＲＸ―０　ユニコーンガンダム2号機〝バンシィ〟

それがかつてバナージが最終決戦において出撃する際に換装していたフルアーマー――アーマーと言うより武器のてんこ盛りであるからアームズ、の方が正しいのかもしれない―装備で佇んでいた。
すぐさまコックピットに直行したマリーダは、パイロットシートに専用のパイロットスーツと一通の手紙が用意されていたのを発見する。
それは彼女へと宛てられた、今もアクアエデンで訓練を重ねている教え子達からの激励の手紙。
瞼が熱くなるのを感じつつ、マリーダは急ぎ着替え直す。
同時に、戦場では地中から巨大な機械の島というべき物体が浮上しているのが見えた。
おそらくはアレが原因の一端だろう、そう考えたマリーダはオルガへと通信を入れる。

「オルガ、聞こえるか」
『おう、マリーダさんか。何を言いたいのか何となく予想はつくぜ』
「そうか……なら、あちらはお前達鉄華団に任せた。ＭＡは私がやる」
『ああ、任された。……しかし、今のあんたがそいつに乗るとどことなく安心感があるな。頼むぜ、マリーダ教官』

一見茶化しに聞こえる発言だが、オルガがマリーダを信頼してくれているのは明らかだ。マリーダは小さく微笑むと再度気を引き締め直し、発進カタパルトへバンシィを接続する。

「マリーダ・クルス！バンシィ、出る!!」

今、夜空を黒獅子（バンシィ）が飛ぶ。

☆

戦場では突如地中から出現した巨大な物体で騒然としていた。それの正体を唯一見抜けたのはレジェンド。

『間違いない……形は微妙に違うが機械島だ！なるほど、ゴブニュの大量出現や増援はコイツが地下に潜伏していたからか！』

「ちょっ……機械島ってアレですか!?超師匠とティガ先輩が戦った事のあるあの!?」

『戦ったといっても目の前の奴絡みだがな。とはいえ、また一つ戦況に光明が見えた。鬼の方も巌勝や杏寿郎達が決着をつけたようだし』

「おお！やってくれたでございますか！」

（あとはあいつが間に合ってくれるかどうか……）

ゼットが彼らの勝利を喜び、活力を少なからず取り戻すと同時にレジェンドは再度ある人物の到着を願う。

その人物の到着こそ、ウルトラマン達の起死回生と逆転の糸口になる事を確信しながら。

☆

「……てワケだ。悪い、やり損ねた」

「気にすんなシモン！あのデカブツを地上に引きずり出しただけでも十分だ！」

機械島浮上の経緯をカミナらに話すシモンだったが、別段責められず逆に労われた。

元々機械島自体の攻撃能力はそう高くない。しかし、機械島はそれを見越してか別の手段で彼らに対抗しようとする。

「……!?おい、あの野郎何かする気だぞ!?」

「何かァ!?」

「見る限り広範囲の光線……！でも私達が狙いじゃない！」

ヨーコの言う通り、機械島から放射された光線は超次元グレン団の面々や鉄華団、ウルトラマンらではなくゴブニュの残骸。

「あれか！所謂回収ビーム！」

「いや、違うみたいだぜアニキ！」

その光線を浴びせられたゴブニュの残骸は一箇所に集まっていき、歪な音を立てながら何かを構築していく。

光線が収まるとそこにあったのは一つの巨大な身体に複数の頭、腕、脚。少なくとも四本脚である事だけは分かるが頭と腕は無造作にくっつけただけらしく、あちらこちらに生えていた。

言うなればゴブニュ（キメラ）とでも言うべきだろうか。

あまりにも奇怪な見た目のそれは外見とは裏腹に絶大な戦闘力を有しているのを超次元グレン団の面々は積み重ねてきた経験から察する。

「ヘッ、つまりは俺らにとってコイツがボスってワケだな！上等だぜ！シモン、あっちが合体ならこっちもやってやろうじゃねえか！」

「ああ！ごちゃ混ぜ合体じゃねえ、魂の合体ってやつをな!!……ん？」

シモンが何かを感じてクロガネの方を向くと、カタパルトから新たに機体が発艦したのが見えた。

「あれは……！」

「アームドなんちゃらは付いてねえが、あっちもいよいよ大詰めみたいだな！あれが出てくるなんてよ！」

☆

「遂に来たか……黒獅子が！」

「しかもあの武装、あのＭＡ相手にうってつけのモンをしこたま積んできやがったか！」

グラハムと竜馬もマリーダが戦線復帰、それもＭＡを本気でブッ壊すような重装備をしてきた事に笑みが溢れる。

それは三日月達や、機体を用意したコジローも同じだ。

「おやっさん何あれ。凄いじゃん」

「だろ？マリーダの言っていたもんを再現したんだが、気に入ったらバルバトス用にアレンジしたのを作ってやる」

「え、ホント？じゃあ予約するね」

プラモ感覚で言う二人にツッコむべきなのだろうか。とりあえず束はノリノリで協力するかもしれない。

「うおっ!?何だ何だあのゴッツイの！」

「俺のグシオンやシノのフラウロス「流星号！」……流星号よりも明らかに重装備だな……ペルフェクティビリティとはまた違った強化プランか」

興奮気味のシノと対象的に落ち着いている昭弘。
グシオンリベイクにせよフラウロスにせよ、装備の都合上これ以上重装備にしたらコイツらが見た目ＭＡ化しそうである。

☆

そして、新たな機体と新たな脅威の出現に相も変わらず三大勢力はテンパりまくっている。
少しは落ち着いてほしいものだが……

「……」
「……鬼灯さん、サーガ様が」
「良い意味で盛り上がるなら歓迎なんですがね。こうただ喧しいだけのは本当にイライラしますよ」
「貴方もですか」

あまりの煩わしさにサーガと鬼灯がキレかけていた。
それも仕方ない、と卯ノ花は溜息を吐く。こう何度もパニック起こされてはたまったものではない。
何でこんな連中を護衛に集めたんだと本気で思っていた。

この戦場における神衛隊の戦いも、いよいよ最終局面を迎える。

〈続く〉

俺たちを誰だと思っていやがるッ!!

ダイブハンガーでは相変わらず束が騒がしかった。

マリーダの撃墜（未遂）に始まり、コジローの参戦には「バコさんだー!!」とクロエを抱きしめながらクルクル回ったり、フルアーマーバンシィを見てからはラフタの専用機をいっそフルアーマータイプにしてしまおうと考える始末。ちなみにクロエはバンシィ大好きっ子。

そして一周回って辿り着いた答えが―

「あの三大ポンコツ共マジでいい加減にしろよ」

三大勢力の役立たず具合にブチ切れる事だった。

マリーダに攻撃された時、落ち着いて回避より協力して防御に回ろうとしたのはサーガや鬼灯、卯ノ花。

連中はパニックでドタバタしていただけである。

あの場にいた三大勢力も総力を上げて防御に尽力さえすればマリーダが焦って飛び出し、盾になる必要もなかったはず。

新しい友人であるセラフォルーの主な仕事は外交と聞いていた束は彼女に怒りは感じていない。

加えて、先程の映像を見る限り結界強化に協力する事を呼びかけていたガブリエルや、落ち着かせようとしていたイリナ、そしてソーナ率いる生徒会にもだ。

未熟ながらも巌勝らの援護に向かったオカルト研究部は言わずもがな。

例の如く彼女からヘイトを集めているのは男衆三人。彼女自身、女尊男☒な世界（図らずも束の作ったＩＳが原因だったが）出身であるが束は別にそんな事を考えてはいない。

……が、それを差し引いてもサーゼクス、ミカエル、アザゼルの対処が温すぎる。護衛に集めた連中の実力やメンタルも脆弱だ。人間より優れていると謳っていたのは何だったのか。

「レジェくんとかサーくんとかと比べるのはダメだけどさー、ハッキリ言ってダメ過ぎ。レジェくん達はほーくんとかれっちゃんとか、しゅー爺とかまでしっかり連れて行ってるのに……」
「そういえば、グレイフィア様」
「何でしょう？クロエ様」
「同じく悪魔の出身とお聞きしていますが、映像の中で悪魔側トップの眷属はいらっしゃいますか？」
「……サーゼクス様の『女王』であるルミナシアくらいですね。私が見る限りでは」

レイトが来る事も見越してか自身を含めて五人分の夜食を持ってきたグレイフィアが見ても、自分の妹ぐらいしかそれらしい人物を確認出来ない。それにミカエルはガブリエルを連れているからまだしも、アザゼルもあと一人……シェムハザなりバラキエルなり連れてくればいいものを、とグレイフィアは思っていた。ついでに、ガブリエルもレジェンドが来なければ来なかっただろう。
自身が強いからか知らないが、やはり考えが浅すぎる。
おまけに現在しっかり戦場に立っているのは若手であるリアスらだ。偉ぶるならしっかりしろ年長者。

「ちなみにれーくん、同じく責任ある立場としてどう思う？」
「正直、最近のリアス達の方がよっぽどしっかりしてんじゃね？あいつギャスパー……だっけ？そいつの護衛、リク達に頭下げて頼み込んでたろ。最初は成長してきたから会談にも出してやろうとか考えてたみたいだけどよ、そいつもいきなり初対面大多数のいるところに放り込まれたくないだろうしってさ」
「だよねー。あーゆー子ばっかりなら束さんもこんなイライラしないのに」

銀河遊撃隊隊長からもダメ出し。実際、ギャスパー狙いの禍の団は

竜馬によってすぐに看破されている。リアスがギャスパーのことを考え、万が一にと念を入れた事が功を奏した結果だ。
結論から言えば三大勢力のトップ陣は個々の戦闘力はともかく、指導者としては穴だらけというのが束達の見解であった。

☆

鬼との戦闘を終えたリアス達はサーゼクスらとは別の場所で他の戦いを見守っている。
ペーネロペーにビームが直撃した時はアーシアやリアスら割と一緒にいる者のみならず、ギャスパーを始め杏寿郎やパム治郎、しのぶさえ本気で焦った。
無事にオデュッセウスガンダムが姿を現した時、何名かは安心のあまりへたり込んでしまったくらいだ。
その後、クロガネに戻って少ししたらバンシィが出撃したことでまさかと思っていると巌勝が口を開く。

「どうやらマリーダ殿が愛機で再出撃したようだな」
「愛機？あのペーネロペーというのではないの？」
「アレはあくまで彼女がテストパイロットをしていただけにすぎぬ。本来の機体はあのバンシィともう一機だ。一応後者も私がアムロ教官殿の下で訓練中に何度か見たことがある」

もう一機――クシャトリヤというＭＳはバインダーを含めると結構な大きさの上、操縦系統が複雑過ぎて彼女しか操縦出来ないのである。加えて多数のファンネルを搭載しているためニュータイプないし強化人間が乗らないと真価を発揮出来ないということもあり、正規パイロットのマリーダか、次点でアムロがどうにかというレベルでパイロットを選ぶ機体だ。
巌勝は彼女の駆るクシャトリヤに訓練生時代の模擬戦で、全方位ファンネル集中砲火をくらい大敗した経験もある。ファンネルの機

数がヤバすぎた。

「それだけではないな。あちらを見ろ」

『？』

「どうやら我らが団長ともう一人……」

「シモンがアレをやるようだな」

「よく見ておくがいい。今から起こる事を、毛穴の奥まで焼きつけろ！」

厳勝、ロージェノム、そしてヴィラルが自信満々に語るそれは、彼ら以外……サーガらと共にいる三大勢力の面々はもちろん、ジードらウルトラマンさえも驚かせることになる。

☆

複数のゴブニュ（ギガ）の残骸を寄せ集めて混ぜ合わせ、合体というより融合に近い形で生み出されたゴブニュ（キメラ）。

それに対抗すべく、カミナとシモンはある方法に出る。

「大将達を自分の命張って守ったマリーダが、根性見せて今度は愛機でリベンジに出てんだ。ここで燃えなきゃ紅蓮の文字を背負ってる意味がねえ！」

「ああ、やろうぜアニキ！目の前にいる中身に何もないガラクタの寄せ集めに、俺達の魂を叩きつけてやる！」

「「合体だァ!!」」

二人が口を揃えてそう言うなり、ラガンが天高く……グレンをも優に超えるほどに飛び上がり、手足を畳んで胴体（というか顔）の下部

に自身と同じサイズのドリルを出現させる。

「行くぜアニキィィィ!!」

「来ぉいシモォォォォン!!」

そのままラガンは勢いよくグレンの頭部に突き刺さる。

その際、カミナはコックピットの天井を軽く突き破ってきたドリルを頭をずらして回避。

ラガンのドリルを通じてシモンの膨大な螺旋力がグレンに伝わり、グレンはその形を変えていく。

腕が、脚が、弾けるように太く伸身し、背部にはどうやって格納されていたか分からない巨大なウイングが展開され、最後にはラガンの頭に三日月を象ったような飾りが特徴の兜が装着される。

「次元も生死も飛び超えて!再び並ぶ熱き魂!!」

「鋼の螺旋に闘志を重ね!森羅万象ブチ破る!!」

闘　魂　合　体!!

グ　レ　ン　ラ　ガ　ン!!

「「俺たちを!誰だと思っていやがるッ!!」」

バックに炎とサーガの横顔シルエットが追加された超次元グレン団のマークを周囲に幻視させながら、同団のフラグシップガンメン・グレンラガンが二人の啖呵と共にこの世界で爆誕した。

☆

「なにあれえええええ!?」

真っ先に叫んだのはセラフォルー。語尾の☆さえ忘れるほど衝撃的だったようだ。なにせ普通の合体ではない。

一見すると手足が付いたデカイ顔に小さい顔がブッ刺さっただけだったのが、まさか合体先の手足が肥大化して伸びるとか、ウイングや兜が出てくるとか誰が予想出来ようか。

「どうなってんだ!?格納されていたとしてもサイズ的にありえねぇだろ!?」

「もしやあれは巨大な神器なのか!?」

「神器ではない。巨大合体ガンメン・グレンラガン。超次元グレン団の象徴とも言える機体だ。その可能性は正しく無限大」

アザゼルやサーゼクスの疑問に対し、短いサーガの言葉だけで説明が事足りてしまうような機体。

そしてその理由をこの戦場にいる者達はまざまざと見せつけられる事になる。

☆

合体を果たしたグレンラガンはゴブニュ（キメラ）に接近し、ゴブニュの複腕のうち二本と力比べの態勢に入る。

当初は多数が融合したゴブニュ側が優勢かと予想されたが、それは即座に否定された。

組み合ったグレンラガンがゴブニュを押し返し、グレンラガンは頭を引いて額にドリルを出現させると、頭突きの容量でそれをゴブニュの頭部の一つに突き立てる。

「硬いだけのお前と違って、このグレンラガンはこういうドリルも出せるんだよ!!」

ガリガリと削られていくゴブニュの頭部。それから逃れられようと組み合っていた腕を離した瞬間……

「ごちゃ混ぜが強いと思うなパァァァンチ!!」

カミナが訳のわからない技名を叫びながらゴブニュにグレンラガンの鉄拳をブチ込むと、ゴブニュはド派手に土煙を巻き上げながら吹っ飛んでいく。

さらにグレンラガンは助走をつけてジャンプし、態勢を立て直そうとしているゴブニュに対し……

「俺とシモンで∞パワーキィィィック!!」

またも適当に名付けたのだろうカミナ命名のドロップキックがゴブニュに直撃し地面にめり込ませた。

グレンラガンは全くダメージを受けておらず、想像を遥かに超えた圧倒的な戦闘力を見る者全ての眼に叩きつけている。

そして、それはもう片方にも言えることだった。

フルアーマーバンシィの参戦により、ハシュマルとの激突の戦況は神衛隊側に傾いていた。

元々ハシュマル相手にペーネロペーでは相性が悪く、本来の機体でないがために全力を出せなかったマリーダは愛機であるバンシィに乗り換えたことでその実力を存分に発揮出来ている。

「イナバチーフや竜馬、三日月達を始めとする鉄華団はあの戦艦の援護へ！奴は私とグラハム副隊長で仕留める！」

「分かった、しっかり決めてこい！」

「あれ、完璧にブチ壊しちゃってよ」

「今回はカミナとシモンにゃ援護いらなさそうだからな！了解だぜ！」

各々が各所へ援護に向かってたのを確認した後、マリーダはグラハムに通信を入れる。

「申し訳ありません、グラハム副隊長。無理矢理私に付き合わせてしまって」

「いや、あの巨大な物体を破壊するのは骨が折れるだろう。少しでも戦力をそちらに回すのは悪くない選択だ。それに……応援に応えるのも我々の役目だと思わないか？」

グラハムの言葉に？マークを飛ばすマリーダだったが、その理由はバンシィのメインカメラに映ったあるもので理解した。

「マリーダ姉様頑張ってー！」

「心を燃やせ、マリーダ殿！貴殿ならやれる！」

「ちゃんと無事に帰らないと駄目ですよー！」

「まだまだお話聞きたいですぅー！」

一緒にハーブを作り始めてからハリベル同様に姉様呼びされ始めたリアスを筆頭に、杏寿郎、しのぶ、ギャスパー……それにパム治郎も思いっきり手を振りバンシィへと声援を送っている。

先程コックピットに置かれていた手紙といい今日は何かと涙腺にダメージがくる日だ、とマリーダは思いながら笑顔になり、操縦桿を握り締めた。

この機体は人々の想いを形に出来るサイコマシーンだ。彼らの想いも乗せて戦おう。

その決意と共にマリーダは叫ぶ。

「バンシィィィ!!」

Ｎ　Ｔ　―　Ｄ

主の想いに応えたバンシィは、今その真の姿へと『変身』する。

☆

グレンラガンの合体に続き、バンシィもまた三大勢力らが驚く変化を見せる。

突如バンシィが光輝いたかと思えば、各部が展開・伸身し淡い緑色に輝くフレームが現れる。

それは両腕や背面に装備したシールドも同様であり、ほぼ全身がそうなった後の締めくくりというべきか、頭部はさらに凄まじく変形する。

フェイスカバーをした一角獣の様相から、それらが展開され本来の顔が現れると共にブレードアンテナが二つに割れ、正しく『ガンダム』の顔となった。

これが『ＮＴ―Ｄシステム』を発動させた、バンシィの本来あるべき姿。

『デストロイモード』

この姿へと『変身』を果たしたバンシィの出力はもはや測定不能。さらに、この機体は通常サイコフレームの色は金色だが、人々の想いが蓄積される事でフレームが緑色に変化する『覚醒』にまで到達している。

ハシュマルはとんでもない機体とパイロットを相手にする事に

なったのだ。

「黒いＭＳの姿が……」

「全くと言って良いほど別物になりましたわ……！」

「あれがバンシィ本来の姿だそうだ。私が見た時は武装がかなり違ったが」

　厳勝の見た形態がペルフェクティビリティであり、その形態のバンシィは最早アムロクラスの実力でなければ撃墜不可能なレベルの鬼畜性能。模擬戦で戦ったグラハムも何とか戦闘不能にするのが精一杯で撃墜まではいかなかった。

「何はともあれ、ここからがあちらのグレンラガン同様……バンシィの本領発揮だ。パイロットを目指すならよく見ておくがいい。神衛隊の教導部隊とされる第四分隊に属する彼女とその愛機の、真の実力を」

　かつて彼らの隊長から指導を受けた厳勝の言葉に、リアスは息を呑んで注目する。

☆

　デストロイモードとなったバンシィの機動力は桁外れだった。本来は積載重量の関係から宙間戦闘を前提としたフルアーマーだが、デストロイモード時の出力と大型ブースターのお陰でハシュマルに追随している。

　バンシィは両腕のシールドに装備されたダブルビームガトリングガンをハシュマルの制御ユニット目掛けて連射する。元々ナノラミネートアーマーによるビーム耐性があるハシュマルだが、制御ユニットに何かあればいけないと自律回路が判断を下したのか回避を優先

した。
……しかし、そうさせる事がマリーダの狙い。
「こうも狙い通りの方向へ回避行動を行ってくれるとな！グラハム副隊長！」
「さすが先程とは動きのキレが違うな！いい位置だ！」
『――!?』

グラハムのエクシアＧＦがハシュマルの両翼にＧＮソードとＧＮタチによる斬撃を放ち損傷させる。片方は浅いものの、逆にそれがバランスを崩させる切っ掛けとなり、そこからバンシィの猛攻が始まった。

「この機を逃しはしない！」

ビームガトリングガンを連射しながらハシュマルの背後上空へと回り込み、背部にマウントされたハイパー・バズーカを二丁構え、同じく背部にマウントされているグレネードランチャーと同時に連射。それらは全弾外れることなくハシュマルの上部に直撃し、連続で爆発を起こす。しかし、それで終わりではない。
バンシィは撃ち終わった武装をパージして身軽になりつつ、脚部に装備されたハンド・グレネードでさらにハシュマルに爆撃しつつ、再びハシュマルの前方に回ると大型ブースターを切り離してぶつけ、それが直撃するタイミングでバルカンをよる射撃をブースターに撃ち込む。
当然ブースターはハシュマルに激突すると同時に撃ち込まれたバルカンによって大爆発を引き起こす。
まさに出し惜しみなし、フルバースト。
そこにトドメと言わんばかりにエクシアＧＦが突撃し、爆炎の中から現れたボロボロのハシュマルの制御ユニットにＧＮタチを突き刺した。

「よし、これで……ッ!?」

停止するかと思われたハシュマルが、停止せずに最後の足掻きと言わんばかりに大出力ビーム砲をバンシィへ向けて発射した。

だが、バンシィは避けることなくパージした両腕と背部のシールドをサイコミュによってファンネルのように操り、三つを花のように結集・回転させて完全に防ぎ切る。Ｉフィールドを発生させる事の出来るユニコーン系統のシールドだからこそ出来た芸当だ。

「あああああっ!!」

結集させたシールドを再び分離させつつ、分離した瞬間バンシィがハシュマルに殴りかかる。前腕部のビーム・トンファーを使用せずハシュマル相手に激しい肉弾戦を展開するバンシィ。

既に制御ユニットを損壊させられ、最後のビームさえ防がれたハシュマルは残っていたテイルブレードを振るおうとするもエクシアＧＦにそれすらも斬り落とされた。

そして、バンシィの両手刀がハシュマルに叩き込まれ、そのまま両腕をスライドさせるように動かすと、ハシュマルの機体が深々と抉れる。

それが決定打となり、機体の彼方此方から火花が飛び始め、バンシィとエクシアＧＦが同じタイミングでハシュマルを蹴り飛ばすと、遂にハシュマルは天空で爆散した。

「ターゲット、撃破を確認……!」

「ああ、我々の勝利だ!」

☆

ハシュマルの撃墜。

それを見ていたサーガや神衛隊、九極天ら以外の者達はエクシアＧＦは勿論バンシィの一連の戦闘を見て開いた口が塞がらない状態だった。

「どうなってんだ……あの盾は神器か何かか？にしちゃデカ過ぎるが……」

「何でもかんでも神器扱いするのはやめろ」

神器マニアなアザゼルは不可思議な動きをしたシールドを神器かと推測するも、サーガの苛立ちの混じった声でビクッとする。

「あれは彼女が培ってきたものだ。この世界のシステムの一部などと一括にする事は彼女のこれまでを否定するのと同義。今後は気をつけてもらおう」

「す……すいません……」

先程庇われた負い目もあってかすぐに大人しくなるアザゼル。他の者も同様である。

「どうやらあちらだけでなく、他の所も決着がつきそうですよ」

鬼灯の言葉と視線の先では、グレンラガンがゴブニュを相手に一方的な戦いを繰り広げていた。

☆

グレンラガンが捕獲されたと思ったのも束の間、グレンラガンは驚きの方法でそれを脱する。

「こんなんで俺達を捕まえたつもりかよ！」

「アニキの言う通り、手足頭が封じられようが！」

「「俺達にはドリルがあるッ!!」」

二人の咆哮と共にグレンラガンが緑色に輝き出し、全身から小さなドリルが出現する。

「フルドリライズ!!」

シモンの声を皮切りに全身のドリルが全方位に急速に伸びる。無論拘束していたゴブニュもそれを受ける事になり……

『!?!?!?!?』

ゴブニュの全身彼方此方をドリルが貫通した。当然、貫通した場所から爆発が起き、グレンラガンはゴブニュの拘束から容易に脱出してしまう。

とはいえ、ゴブニュはまだ倒れない。

「へっ、なかなか根性あるじゃねえか。敵じゃなきゃ勧誘してるトコだったぜ……しかぁし！敵だろうが何だろうがそのガチンコな戦いぶりには敬意を払うのがこの俺、カミナ様よ！シモン！全力全開でアイツをぶちのめす！」

「俺も同じ気持ちだぜ、アニキ！グレンラガン相手にここまで粘ったアイツには、俺達の魂の必殺技でトドメをさしてやるのが礼儀ってモンだ！」

カミナとシモンが言うグレンラガンの魂の必殺技。それはかつてカミナが瀕死の重傷を負いながらも最後に編み出し、シモンへと受け継がれた必殺技。この技があったからシモンは天元突破を果たしたといっても過言ではない。

「必殺ッ！」

グレンラガンはゴブニュから距離を取ると、グレンのグラサン部分を外し、ブーメランのように思い切り投げつける。それは途中で上下で二つに分離し、ゴブニュを空へと弾きながら切り刻みつつ、先程とは逆にゴブニュの腕と脚を突き刺し拘束する。

「ギガァ！」

そしてフルドリライズで全身に出現させたドリルを、天に掲げた右腕に集束させる事でグレンラガンの何倍にもなる超巨大ドリルへと変換する。

「ドリルゥゥ!!」

それをゴブニュに向けて構え、左手を添えつつ回転させ……

「ブレイクゥゥゥ!!!」

グレンラガン自体を螺旋力によるブースター代わりにして空で拘束されているゴブニュへと突撃する。無防備なゴブニュは上記を逸した超巨大ドリルに身体の殆どを粉砕され、グレンラガンが再び地上へ着地しドリルを解除した瞬間、大爆発を起こす。

ハシュマルに続き、ゴブニュ（キメラ）もまた倒されたのだった。

☆

サーガの言う『可能性は無限大』を目の当たりにした三大勢力はバンシィとエクシアＧＦ、そして鬼討伐の件も相まって少しずつ見方を変える者達も出てきたのだが……

「あいつらの方がよっぽど化け物じゃないか」

……言ってはいけないことを言った奴がいた。しかもそれに同調する者まで出始める。
これがギャグっぽいツッコミならばサーガも天然で返せただろうが、本気で言っている声色に遂にサーガは本気でブチ切れた。

「今、化け物と言った奴……出て来い」

これには鬼灯と卯ノ花も拙いと顔を青ざめた。鬼灯が青ざめるのはそれこそレジェンドが本気でブチ切れるくらいしかないのだが、それに匹敵するヤバさだというのが簡単に予想出来る。

「出て来い」

短く言うサーガの怒気が臨界点を有に超えている事を誰もが感じ取っており、一人として動ける者がいない。
するとサーガの方が動き……

「元凶はお前か」
「ひっ!?」

一瞬で化け物発言をした悪魔の前に移動して胸倉を掴み持ち上げた。その表情は静かながらも青筋を幾つも浮かべ、普段の彼からは想像も出来ない程の怒りを湛えているのが分かる。

「それからお前とお前がこいつに同調した」
「「っ!?」」

それぞれ天使と堕天使が一名ずつサーガに睨みつけられながら指

摘された。悪魔の胸倉を掴んでいる手には今なお力が込められ続けている。

「サーガ様！部下の非礼はお詫び「黙れ」っ!!」

サーゼクスが宥めようとするも今のサーガには逆効果であり、火に油を注ぐ結果になってしまう。当然だろう、言った当の本人は怯えて涙を浮かべるばかりで謝罪らしい謝罪もない。

「貴様の謝罪に何の価値がある？言った直後に窘める事をせず今になって詫びようとする貴様の謝罪に。命がけで俺達を守ってくれたマリーダや目の前の脅威に敢然と立ち向かい勝利を届けてくれたカミナ達、そして貴様らが尻込みしている中で例え攻撃が通じずとも役に立とうと、鬼と戦う巌勝らの援護に向かったリアス達を侮辱する発言……万死に値する!!」

レジェンド同様、サーガは神衛隊らを始め家族に惜しみない愛情を注ぐことで有名である。それこそ二人は眷属などだけでなく、惑星レジェンドに生きる全てがその対象だ。

中でも各々自身に関わりのある神衛隊の者を侮辱されるのは最も逆鱗に触れる行為と言える。

本気で死を覚悟した三名だったが、それを鎮めたのはカミナだった。

『おうおうおう！どうした大将!?えらくご機嫌斜めじゃねえか！』

「こいつがお前達を侮辱する発言をした。俺はそれが許せない」

『嬉しいねえ！俺達を思ってキレてくれたのか！けどよ、ほっとけほっとけそんな三下以下の弱虫の寝言なんざ！』

「「「「!?」」」」

『俺達のために怒ってくれたのはマジで嬉しいぜ！だがそれで大将が

くだらねえ奴の血でその手を汚す必要はねえ！なんせそんなこと言う奴に生身でも負ける気はしねえからな！一生吠えてろ真・負け犬野郎！で終いだ！』

大声で自信満々に言うカミナは堂々とグレンラガンで腕組み仁王立ちしつつ、続けてサーガを宥める。

『だからよ、大将。まだ戦ってる奴らの応援をしてやってくれや。バカ数名にキレるより、そっちの方が俺らはやる気が出るしあんたも気が楽になると思うぜ。それからまた言ってやれよ。お前らはこんな事が出来るのか!?ってな！』

「……そうだな。言われた中の一人であるお前が言うんだ。俺はお前の……いや、お前達の意思を尊重したい」

『それでこそ、俺が大将と認めた肉弾戦ガチファイターの光神ウルトラマンサーガだ！見ろよ、オルガ達があのデカブツに引導を渡す気だぜ！』

グレンラガンの視線の先には、機械島へ突撃せんとするクロガネと、それを援護すべくスターファルコンやそれに乗ったバルバトス、ブラックゲッター、そして地上の鉄華団がいた。

☆

鬼、ハシュマルに続きゴブニュ（キメラ）も撃破され残る神衛隊が担当する敵は機械島のみとなった。

それを撃沈すべく鉄華団の新たなる艦クロガネがバルバトスとスターファルコン、ブラックゲッターを随伴させ地上のグシオンやフラウロスらの援護を受けつつ爆進する。

「やっぱりやってくれたか、ならシメは俺達でやるぞ！このクロガネ

の初陣に相応しい獲物だ！」
「「「「応っ!!」」」」
「これより艦前方へ一斉射撃！その後、艦首超大型回転衝角を使用する！」
「了解！各機へ通達！本艦はこれより、艦首超大型回転衝角を使用する！本艦の軸線上から退避すると同時に援護されたし！艦内の全乗組員は衝撃に備えられたし！」

オルガの指示を受け、団員の一人が機動部隊に通達する。
それを受けたスターファルコンに乗っているコジローは三日月と竜馬に通信を送る。

「三日月！スターファルコンの背部にデカいランチャーがあるだろ？そいつを使え！元々バルバトス用に積んできたヤツだ」
「これのこと？確かにデカいね、これ」
「大出力雷撃砲サンダーボルト・ランチャー。内部電源だと精々一戦2発が関の山だが、今はケーブルでスターファルコンに連結させてる。相手が機械なら実弾より効果的な筈だ」

バンシィが出れない場合でもとコジローが積んできた新装備が思いもよらぬ形で役に立つ時がきた。

「竜馬、お前の機体用の新装備がサンダーボルト・ランチャーの反対側に接続されてる。そいつを使え！」
「こいつか、おやっさん！」
「ああ、ゲッターレーザーキャノンと言ってな、そのエネルギーパイプをブラックゲッターの背部と接続させるんだ。ゲッター炉心からエネルギーを直接供給する事でゲッタービームに匹敵するレーザーを発射出来る！長射程武器はお前も欲しがってただろうからな」
「ありがてえ！狙撃じゃなくて俺に合わせて高出力にするあたりがさ

すがおやっさんだ！」
「ふっ……褒めても後日マグロぐらいしか出ねぇぞ」
「「マグロ!!」」

三日月と竜馬が俄然やる気を出した。何としてもこの一戦、勝利しなければ。
そんな事を考えていると、地上の昭弘やシノの方も準備が整ったようだ。

『狙撃用のロングレンジキャノン、準備ＯＫだ！』
『こっちも全砲塔、問題ナシ！いつでもいけるぜ！』
「ようし……仕上げだ！行くぞ！」
「わかった……！」
「おう！たっぷりくらいやがれデカブツ野郎!!」

地上からの援護射撃に加え、三日月と竜馬もそれぞれの新装備を構え、クロガネを援護すべく砲撃を開始。
彼らの助けを得て、クロガネは進む。

「艦首超大型回転衝角、始動！」
「了解！超大型回転衝角、始動！」

機動部隊による援護射撃を受けながら、遂にクロガネ最大の武装がオルガの指示によって始動する。
始動しただけではあるが、５００メートル超級の戦艦のドリルは正に圧巻の一言。

「全砲門、発射準備よし！」
「砲撃開始！」
「了解！全砲門、砲撃開始！」

主砲である連装衝撃砲を始め、副砲、対空機関砲、さらにホーミングミサイルや魚雷などが機械島に向けて一斉発射される。
機械島も電撃で応戦するが、東設計・スワン＆コジロー開発によるクロガネの装備を迎撃しきれる訳がない。

「全速前進！
クロガネ、突撃ぃぃぃ!!」

砲撃を続けたまま、クロガネが機械島へと加速する。
その巨体故に殆ど動けない機械島は見事に的となり、電撃はエネルギーフィールドで防がれ頼みの綱のゴブニュはオグマを除いて壊滅、そのオグマもゼットと戦闘中であり、ハシュマルは撃墜されプルーマも全滅。
最早打つ手は残されていなかった。
ドガァァン!!と轟音を立てて５００メートル超級のクロガネが直径３キロの機械島に激突し、そのドリルで内部を掘り進むが如く粉砕しながら突き進んで行く。
そしてクロガネが激突した場所と反対の方向から機械島を突き抜けて来ると、機械島はその彼方此方を爆発させつつやがて大爆発を起こし跡形もなく吹き飛んだ。

「俺の尊敬する第四分隊の艦長の戦法が参考になったな……あの人の名前が戦法名に入ってるらしいし、言うなればこれは『鉄華戦法』ってトコか」

他の団員同様に厳しくも温かく指導してくれた第四分隊の艦長を思い出し、オルガは先の戦法に自分達の団の名を入れる。
いつかまた共に戦うだろう第四分隊との共闘を思い浮かべつつ、オルガは全機に自ら通達する。

「目標、撃沈完了だ!!」

クロガネの勝利。初陣でそれを飾った戦いは、同時に神衛隊が相手取った全ての敵から勝利を手にした事を示していた。勿論、誰一人欠員は出ていない。

残るはウルトラマン達とゴジラの戦いのみ。
そして、来たる英雄が彼らに新たな力を齎す。

〈続く〉

父の背中

ハシュマル、ゴブニュ（キメラ）、そして機械島が立て続けに撃破された映像はダイブハンガーにも映っていた。
追加人数分の夜食を作るために席を外したグレイフィアとそれを手伝いに行ったミライを除く他の者達はその光景に沸き立っている。

「やっぱりスーパーロボットはロマンだよなあ！俺の相棒もトランザムライザーソードとかフルソードコンビネーションとかあるし必殺技があるなしで変わってくるだろ！」
「マリーダさん凄いよね……あんな重装備初めて見たけど、地球の重力下であれだけの重量を高機動しながら運用出来るんだもん。機体の性能云々だけでどうにか出来るものじゃないよ、アレ」
「スーちゃんバコさんさっすがぁ！束さんの予想以上の見事な完成度！やっぱり『戦艦だから常に後ろでスタンバってます』なんてセオリーはぶっ壊してナンボだよねぇ！ドリル万歳！」

レイトやラフタ、束が特にノリノリである。まあ、それぞれの嗜好や立場を考えたら納得なのだが。

「どう？らっちゃんの専用機フルアーマーいっちゃう？いっちゃう？」
「ん～……あのバンシィの活躍見せられたら悩んじゃうな……」
「フルアーマーってよ、本来は重装甲重装備が普通だけどあの黒いやつは重装備型かつデッドウェイトになったもんは外せるタイプみたいだし、それと同じやつはどうだ？」
「不要になった武装を切り離していくタイプかあ……」
「悪くないよね。フルアーマー装備全部使い切ってからがらっちゃんの本領発揮！みたいな」
「すぐに決めなくても案の一つに入れてても良いんじゃねえか？そうすりゃ割とベース機は軽量でも良いんだし」

レイトと束のアドバイスを聞き「考えてみる」と答えたラフタに頷きつつ、再びモニターに視線を戻す二人だったが、レイトのブレスに何かメッセージが届き、それを確認すると……

「……うそーん」

レイトは目が点になるほど呆然としていた。

☆

神衛隊はいずれも激戦を制し、残るはゴブニュ（オグマ）とスラン星人、そして最大の強敵ビオランテ。

しかし、多少は持ち直したとはいえこちら側の状況は好転しておらず、刻一刻と限界が近付きつつある。

パム治郎が全回復させるために使用した『変若水』も彼らの身体が大きく、加えて距離も離れていた為、少ししか効果がなかったのだ。

「超師匠……！そろそろウルトラやばそうなんですが……！俺よりもジード先輩やタイガ先輩が……！」

『落ち着いて見ればスラン星人の動きが直線的なものばかりだから対処出来ると思ったが……如何せん一発目を予想外に食らった事が尾を引いてるな。そのせいか奴の早さに対して先入観が捨て切れんようだ』

ゼットもゼットでゴブニュのタフさに息も絶え絶えだが、直接的な攻撃は受けていない分マシだろう。

ゴジラの方も元来のタフさと再生能力のおかげで何とか互角だ。この中ではまだ一番余裕がある。

しかし、ジードとタイガはそうではない。
スラン星人の連続波状攻撃を受け続けており、ジードはプリミティブで使用しているカプセルの種類に加え、父親から肉弾戦の重要性を叩き込まれていたため耐えられているものの、タイガは元々バランス型。
これがフーマならスラン星人の早さに対処出来た可能性もあり、タイタスなら耐えられたかもしれない。

「せめて、アイツの電撃に後ろから狙い撃ちされないようになれば二人を援護出来るのに！」

接近戦だけならスピード型のアルファエッジに有利なのだが、頭部から電撃を発射してくるためジードとタイガを援護するべく余所見、しかもゴブニュに後ろを向けようものならそこを電撃で攻撃される可能性が高い。
おまけにゴジラの方は相手が相手であるため援護してる余裕など初めから無い。

（……ゼットの今の体力では俺が教えた技は厳しい……何か打開策は……）

そこまで考えて、レジェンドはある事に気付いた。

『彼』が遂に到着したことを。

ズバォォオオオン!!!

「――」
「ウオア!?!?!?」
「ゴォォアアアアア!!」
「「「!?」」」

突然遥か上空から極大の稲妻がジード、タイガ、ゼット、そしてゴジラからそれぞれの相手を遠ざけるように降り注ぎ、ビオランテはどうにか耐えていたがゴブニュとスラン星人は大ダメージを受けつつ吹っ飛んで倒れ込む。

「何だ、今の!?」
「あれは……!」

スラン星人の猛攻から解放されたタイガは突然の事に混乱しているが、ジードはそれに見覚えがあった。
まさか、と上空を見た彼の目に天より舞い降りる姿が映る。
それは三大勢力のみならず、鬼灯や卯ノ花、神衛隊……そしてサーガさえも驚く存在であった。

外部からの干渉を不可能とするよう閉鎖していた結界を容易にブチ破り、一回転しつつ天空より舞い降りた巨大な影。
その偉業を讃えられ、赤き総司令官（ジェネラルマント）の証を身に纏い、専用アイテムであるギガバトルリライザーを携えし英雄。

「よう、ウチの息子と部下が世話になったな」

光の国が誇る英雄の一人にして銀河遊撃隊総司令官。そしてジードの父親。
ウルトラマンベリアルが彼らの危機に自らこの世界の地球へと降り立ったのだ。

☆

サーゼクスら三大勢力トップ陣はあまりの出来事に言葉を失っていた。護衛役らは何やら凄いウルトラマン程度にしか見えていないだろうが彼らは違う。
銀河遊撃隊結成の切っ掛けとなった死闘をレジェンドから見せられた彼らは、ベリアルが駆けつけたことに驚きのあまり開いた口がそのままになっていた。

「う……うっそぉ……」

辛うじて喋ったセラフォルーもグレンラガン登場時以上の衝撃でテンションが変わりまくっている。
よりによって本日一番の規格外とも言うべき存在が援軍として現れたのだ。そうもなるだろう。
アザゼル、ミカエル、サーゼクスの三名は未だ固まったまま。少しはセラフォルーのメンタルを見習ったらどうだろうか。

「ギャスパー君！あの人ね、リクさんの……ジードのお父さんよ！」
「えええええ!?リク兄さんのお父さんんん!?」
「なんと!?リク殿の父上が助太刀に!?」
「言われてみれば姉さんの言う通り雰囲気が似てるかも」

鬼討伐メンバーの方もベリアルの増援に興奮気味である。リクを兄と慕うギャスパーだけでなく、共にギャスパーの護衛を務めた杏寿郎としのぶも興味津々だ。
同時にリアス達の心にも希望の光が灯る。グラハムらに神衛隊の皆が駆けつけ、一気に逆転へと導いたように。
彼の存在がタイガ達の勝利への道を切り開いてくれると信じて。

☆

「と……父さん！」
「「ベリアル総司令!?」」
「おう、随分消耗してるな、お前ら。こっちに着く少し前に見てたが……ムーキット、だったか？あいつが回復系の技か何か使ってただろ。あっちがまだやれそうならかけてもらって来い。そのままじゃ途中でリタイアするハメになるぜ。ついでだ、お前もやってもらえ」
『オレ様は余裕だっつの。そもそもお前、アレの相手出来んのか？』
「ハッ！倒すんじゃなくて時間稼ぎなら大した事ねぇ。それに今日の主役はお前らだろうが。まずは傷を癒やしてこい！そうしたら……ジード、タイガ、ゼット。お前らに渡すもんがある。早く行け！」
「「……っ！ハイ!!」」

ベリアルの言う渡すものが何なのかは分からないが、少なくとも悪い物ではないだろう。
オカルト研究部らがいる場所へ向かって行く三人と一匹を見送り、ベリアルは自身を標的としたであろうビオランテや、起き上がるゴブニュとスラン星人へと視線を移した。
「さて……お前らの方は少しばかり俺に付き合ってもらおうか。最近は部下任せでろくすっぽ動いてなかったからな……錆落とし、手伝えよ」
「遊撃隊総司令ウルトラマンベリアル……！貴様を倒せばマックスも

出て来ざるを得まい！」

マントを脱ぎ捨てるベリアルに対し、スラン星人は起き上がると即座にベリアルへ高速移動からの攻撃を仕掛ける。しかし……

「フン!!」

「ゴバァッ!?」

ズドン！と凄まじい音と共にスラン星人は再度吹っ飛ばされて倒れ込んだ。ベリアルがスラン星人の攻撃に合わせ、完璧な形でカウンターを叩き込んだのだ。

自身が高速で動いており、それに対してベストタイミングでブチ込まれたカウンターの一撃も凄まじい早さであり、高速で仕掛けたが故にスラン星人は予想よりも大きいダメージを受けてしまったのである。

カウンター後のベリアルを背後からゴブニュが羽交い締めにするも、ベリアルはピクリとも動かない。

「オラどうしたポンコツ。もっと力入れろよ」

「――!!」

「仕方ねぇな……力技ってのはな、こうやるんだよ!!」

ベリアルはギガバトルリライザーを地面に突き刺して両手を自由に使えるようにし、羽交い締めにしているゴブニュの腕を掴み逆に固定しつつゴブニュごと飛び上がったかと思えば、ぐるりと空中で一回転し背中に組み付いているゴブニュを下敷きにするような体勢で落下。

「ストロング・バックスタンピート――!!」

重力が加わったベリアルの身体全体で挟み込まれるように全身を

地面に叩きつけられるゴブニュ。
ベリアルの体重は6万t。筋肉質のためウルトラ戦士の中でも重い部類に入り、さらに重力が加わった全身による全身へのプレス攻撃は頑強なゴブニュにも大打撃だ。
起き上がったベリアルはそのまま片手でゴブニュの足を掴んで軽々と遠くに放り投げる。9万t近いゴブニュ（オグマ）をいとも簡単に投げ飛ばすベリアルの剛力に誰もが唖然としていた。

「フン、やはりポンコツか……ん？」

何かに気付いたベリアルはそちらに視線を向ける。向けた先にいるのはビオランテ。なんとビオランテがゆっくりと前進してきている。触手を器用に使い、根を張った巨体でありながら走ろうとしていたのだ。
だが、歴戦の勇士たるベリアルの判断はさらに早かった。即座に地面に突き刺していたギガバトルリライザーを引き抜き両手で一文字に構えつつ凄まじい速度で突進し、そのままビオランテに真っ向から激突。
ビオランテが加速する前にその巨体を押し留めたのだ。
これには見ていた者達のみならずビオランテ自身も驚愕する。

「さすがにちっとばかし驚きはしたが……てめぇみたいなタイプは余程例外が過ぎない限り初速はトロい上、加速するまでに時間がかかるのが当たり前だ。その前に止めちまえば問題ねえんだよ！」

そう言い放つベリアルだが、身長は約3倍・体重約4倍はあろうかと思われる巨体のビオランテの、加速こそしていないとはいえその前進を止める事自体が困難である。
それをやすやすと実行出来るあたり、さすがは銀河遊撃隊総司令官としか言いようがない。
ビオランテはならばと言わんばかりに放射樹液を吐きかけようと

するも……

「動きが大仰なんだよデカブツ!!」

押し留めた体勢のままギガバトルリライザーの向きを変え、ビオランテの顔へと砲撃部を向けると続けて発砲。

ビオランテの巨体を制止しつつ、放射樹液の発射前に顎を無理矢理閉じさせるという離れ業を披露する。

「ガァァァァァァ!?」

「最初に言っただろ……錆落としを手伝えってなァ!」

そしてそのままギガバトルリライザーを力任せにビオランテに叩きつけ、さらにキックを炸裂させ僅かにビオランテを後退させた。

（早く戻って来いよ、お前ら。俺がぶっ倒したらお前らの為にならねぇだろ）

ジードらの回復と戦線復帰を信じて、ベリアルは1対3という傍から見たら不利な状況でも怯みはしない。

そこにあったのは、総司令官としてだけでなく――次代を担う者達を力強く支える一人の父親としての背中だった。

☆

「べ……ベリアル総司令ウルトラ強え!」

「そういえば、闇の方相手だけど父さんが手も足も出なかったって……!」

『タイガの父さんでさえ全く敵わなかったのかよ!?リクさんの父さん!』

「ゼロが最初勝った時も油断したところを一気に押し切ったらしいし

……」
『逆に言うと油断しないガチンコバトルじゃ負ける可能性があるってことかよ……』
『私としては先程のプレス技をご教授願いたいところだ！』
『お前は変わらないよな、そこ』
『どうでもいいからさっさとパム治郎のところへ行けお前らァ!!』
「「『『『『スイマセンでしたぁ!!』』』』」」
『早くしないと野郎にアイツがぶちのめされそうだからな』

ベリアルの活躍に、足を止めて興奮気味に見ていた三人＋タイガの中の三人と一匹はレジェンドに怒られ再びパム治郎のいる鬼討伐メンバーの元へ集結する。ゴジラはいち早く辿り着いていた。
幸いにも神衛隊機動部隊がサーガらの護衛に回ってくれたおかげでそちらの心配はしなくてよさそうだ。

「……で、集まったけどどうするんだ？」
「パムパム～」
「大丈夫？パムちゃん……色々あったばかりだし、無理しなくていいのよ？」

タイガの疑問にパム治郎が手を挙げて意を示すが、カナエは先程の別れを思い出してパム治郎を気遣う。
周りのリアス達も心配そうな表情だ。無理もない、かつての家族全員との二度目の別れを経験したばかりのパム治郎に、今はこれ以上苦労をかけたくない。
しかし、パム治郎はやる気だ。

「今日、アト一回ダケ。ダカラボク、ガンバル」
「立派だぞ、パム治郎！皆！ここはパム治郎の好きにさせてやりたい！どうか見守ってやっていてくれ！」

パム治郎にとって今の主である杏寿郎からも頼みこまれ、折れるしかなかった鬼討伐メンバー一同。

「仕方ないわ。今、この場で回復系の術技が使えるのはその子かアーシアくらいだもの。しかも当の本人がやる気だし」

「はい……あ、でもカナエさんの言う通り無理は駄目ですよ！それっぽく見えたら私が代わりますっ！」

「そっちもかなり無茶に聞こえますよー」

しのぶのツッコミに「はわっ!?」と動揺するアーシアだが、やれるのがこの二名だけだし、としのぶも納得する事にした。

「三人トゴジラ、近クニヨッテー」

「これぐらいかな？二人ともあんまり近すぎると何かあったら杏寿郎君とパム治郎に被害が……」

「ええっ!?じゃあえーっと……このぐらいでございますか？」

「っていうかゴジラデカイって！俺達の倍ぐらいあるから場所も取ってるし……」

『ああん!?そんなもんオレ様が知るか！』

ギャーギャー（しかもゴジラは正にそう鳴いてる）騒ぐ三人と一匹に再びレジェンドが、今度は静かに怒る。

『……お前ら、ちゃんとしないと今度の晩飯メンマ一切れだけな』

「「準備良しです！」」

『『一応こっちもＯＫです！』』

『鬼より鬼かテメェ!?』

『メンマじゃなくてわかめ一枚に変えてやろうか？』

『分かった。黙る』

（（（（レジェンド様強っ!?））））

一家の胃袋を掴んでいる、グレイフィアと並ぶ厨房の最強戦力は伊達ではない。ゴジラさえ直接手を出さず黙らせた。
杏寿郎とパム治郎を囲んで四角形になるように立ち、パム治郎のタマフリを待つ三人と一匹。
それを確認するとパム治郎はタマフリ『変若水』を発動させる。

「パ～……ムー！」
（尊いっ……！）
「姉さん何悶えてるの」

可愛いは正義、を掲げるカナエにはパム治郎の一挙一動がどストライクらしい。しのぶにジト目で見られてるのも気にせず悶えている。
それはともかくとして、ジード、タイガ、そしてゼットがほぼ全回復する。

「すっごく楽になった……！」
「こっちもだ！これならまた戦える！」
『俺に代われ俺に代われ俺に代われ俺に代われ』
『タイガ、フーマが何か呪詛みたいなの唱えてんぞ!?』
『これは素直に変わってやった方がいいだろうな』
「よっしゃー！リベンジでございますよ！」
『おい、まだ問題が残ってるぞ』
「「『『『へ？』』』」」
『オレ様だァァァァァ!!!』

気付かないレジェンド以外の面子にゴジラが怒りの咆哮を上げた。
彼だけあんまし回復出来てない。単純にゴジラの能力値が想定外に高過ぎたので、本日分のタマフリ発動が限界に近かったパム治郎がその効果を存分に発揮出来なかったのである。

『それなりには回復してるが……全然足りねぇ』
「パム～……」

頼みの綱のパム治郎は目を回してダウンしてしまい、杏寿郎に抱きかかえられながらぐったりしている。これは仕方ない。
と、言うわけでやっとお仕事が出来た事に少しばかり喜びつつ、アーシアへバトンタッチ。

「ゴジラ、アーシアがやってくれるから尻尾下ろして」
『尻尾からやんのか？別にいいけどよ』
「安心して下さいね、ゴジくん！私が頑張りますっ！」

屈託なくにこにこ笑うアーシアは純粋に嬉しそうだ。とりあえずゴジラは、元の姿でもゴジくん呼びされた事で笑いを堪えている三人のウルトラマンに後でドロップキックかますことを心に誓った。
早速アーシアが神器と回道を駆使し、ゴジラを癒やしていく。

『あ゛～……効く～……』
『なんかオッサンみたくなってるぞ』
『黙ってろマダオ』
『ヒデェ！俺だってな、倍加出来れば強い……』
『それが通じないでタイラントにボッコボコにされたの誰だ？あ？』

あ、ドライグがいじけた。
それはそれとしてゴジラもようやく回復が完了し、今度はアーシアがダウン。サイズがサイズだしこれまた仕方ない。

「はぅぅ～……」
「頑張った！アーシアちゃんは頑張ったわ！」
「姉さん、さっきも含めて今日一番活き活きしてるわね」

アーシアを妹のように、それはもう可愛がりまくりなカナエがまたも甲斐甲斐しく世話している。
と、そこへバルバトスをクロガネの甲板に降ろしたスターファルコンが飛来してきた。

「あら？何でしょう？」
「ん？おやっさんから通信……？」

狛治がブレスレットを操作し、スターファルコン内のコジローが映し出される。

『おう、狛治お疲れ』
「おやっさん、その格好……まさかあれに乗ってるのか!?」
『まあな、それより三人のウルトラマンへスターファルコン側にカラータイマーを向けて並んで立てと伝えてくれ。駄目押ししておく』
「駄目押し……？とりあえずわかった」

釈然としなかったが、狛治はコジローに言われた通りジード達に並んで立つように伝え、ジード達も言われた通りにする。
三人が並び立ったのを確認したコジローは、かつてコンパチガリバーがメビウスのエネルギーを完全回復させたスペシウムチャージャーの改良版とも言うべき光線を三つに分けてカラータイマーへと照射。その光は体力や負傷とは違い、完全とまでいかなかったエネルギーの方を完全に回復させた。
これにより、三人は正に全快状態へと戻ったのである。

「「お……おおおおお!?」」
『チャージャーの改良版、もう完成させてたのか……』

元祖スペシウムチャージャー開発者のレジェンドも舌を巻く。後にコジローが「元がしっかりしていたから改良版・改善はそれ程難し

くなかった」と言っており、決してレジェンドの作った物の完成度が低いわけではない。
それだけでなく、コジローはチャージャーの出力や性質を変化させ、ゴジラの背鰭へも照射する。
すると、ゴジラの背鰭が赤く発光し始めた。

『こいつは……ハッ！やるじゃねーかマグロのオヤジ！』
「鳴き声から何言ってるか大体分かるぞ、せめてマグロじゃなくて機械関係で言えっての」

ギャオギャオと嬉しそうに叫ぶゴジラへ、ニヤリと笑いながらも軽い文句を言いながら旋回しつつ、スターファルコンは再び神衛隊の一員として護衛に回るべく離脱する。
その際、激励の一言も忘れずに。

「必ず勝てよ、新世代（ニュージェネレーション）!!怪獣王!!」
「「ハイ!!」」
『当然だ！お前らは祝杯の用意でもしてな！』

こちらからは見えなかったが、なんとなくコジローがコックピットでサムズアップしているような気がした。

三人と一匹は今もビオランテらを食い止めているベリアルへ向き直ると、それに気付いたベリアルもジードらの方を向く。
「ようし……エネルギーも体調も万全みたいだな。まずはタイガ！コイツを受け取れ！」

三体を同時に吹っ飛ばし（ビオランテのみ後退させ）距離を取りながら、ベリアルがブレスレットから何かをタイガに向けて放つ。それ

はタイガの中の一誠、そしてリアスらにも届けられた。

『これって……タイガ達に変身する時のやつと同じ……！』

「分かるだろ？ウルトラタイガアクセサリー、それもニュージェネレーションの連中の力が込められたやつだ。ようやく一通り完成したんでな。ついでにそれ以外のやつのアクセサリーはグレモリーの娘っ子のところに送ったケースにいくつか入れてある。お前らが部員とか何とかってゼロが言ってたからな、その部員達に御守り代わりに持たせとけ」

リアスはベリアルの言葉を聞いて今渡された物――ウルトラサインの書かれた銀色のケースをすぐさま開けて確認すると、中にはティガを始めとした遊撃隊メンバーや、光の国で活躍しているヒカリらのものなど何名分か入っており、スペースも多く空いている。

どうやら後々完成したものから転送されてくるとのこと。

「あ……ありがとうございます、総司令！」

「ちゃんと仲良く分けろよ。それからゼット！お前にはこれだ！」

続けて渡されたのはゼット。

受け取ったのは現在、ゼットと入れ替わる形でゼットの中にいるレジェンド。その手には新しく『ウルトラマン』『エース』『タロウ』のウルトラメダルが。

『遂に完成したか……！第二の形態用メダル！』

「ある意味ゼットの性格に一番適した形態らしいんでな、おそらく師匠もそれを見越した特訓を課してるだろうし……大事に使え」

「了解であります総司令官殿！」

「イマイチ口調に慣れねぇな……まあいい。そして……ジード！待たせたな、ほらよ！このカプセル、エネルギーの再充填が終わったぜ！」

最後に渡されたジードの手には、『ウルトラマンゼロ』と『ウルトラの父』のウルトラカプセルが。

「これ……この世界のこの星に来る前の戦闘で異常な消耗させられて、しばらく使えなかった……！」

「安心しな、ジード。ゼロの分は元々ガーディアンベース内にエネルギーストックがあったし、ケンの分は光の国に一旦戻したらケンの奴が直々にチャージしてくれたみたいだぜ？俺からも礼は言っといたが、後でお前からも言いな」

「うん！ありがとう、父さん！」

これなら、あの形態になれる――!!

ジードの声色は隠し切れない喜びが込められていた。

父が、助けに来てくれただけでなく新しい力も持ってきてくれた。

神衛隊の父と呼ばれるコジローが、再び戦う力をくれた。

偉大な英雄達の手助けは、これからの次代を作っていく若き戦士達の心と体をさらに上のステージへと押し上げる。

いよいよこちらも反撃開始、大詰めだ。

〈続く〉

新世代（ニュージェネレーション）ウルトラビッグファイト

銀河遊撃隊総司令官ベリアルによって、新たなる力を齎されたジード、トライスクワッド、そしてゼット。
この激戦に終止符を打ち、勝利を手にする為に早速それらを使う事にする。

最も早く動いたのはタイガ。正確にはトライスクワッドであり、託されたウルトラタイガアクセサリーがフォームチェンジするためのものではなく基本的に必殺技用である事、そして……

『アイアムスピードファイター！タイガ、ポジションチェンジ！ハリーアップ！ハリーハリー！』
『タイガァァァ！マジでフーマがヤバい事になってるから早く代わってやってくれよ！フーマって割と和風でもいける名前なのにもう英語しか言ってねーし！』

色々フーマが限界だったからだ。

「わ、わかった！わかったから！フーマ、代わるから準備！あー……あーゆーれでぃ!?」
『出来てるよ……タイガ、どーした？お前』
「『『『いきなり普通に戻るなよ!?むしろそのセリフはさっきまでのお前に言いたいわ!!』』』」

どっかの天才物理学者とベルトのやり取りをしたかと思えばフーマがいつもの調子に戻った事でドライグ含めて総ツッコミ。
直後、タイガの姿が即座にフーマへと変化する。

三大勢力らでそれを見ていた者達はいきなりタイガがフーマになった事に驚きを隠せない。
フォームチェンジにしては大幅に変わり過ぎだし、別の場所にいる者との入れ代わりだとしても転移用魔方陣もなしに突然、かつ瞬時に変わったからだ。
なお、リアスらに関しては「交代するの、ウルトラマンの姿でもこんなに早かったんだ」としか思っていない。球技大会における生徒会とのドッジボールでも一誠の身体で瞬く間に切り替わっていたし、食事の際も結構な頻度で交代しながら食事していたから見慣れたもんである。

「ジード先輩、ゼット！先に行くぜ！あのスラン星人は俺がぶっ飛ばす！」

そう言うとフーマは残像を残す程の早さで、またベリアルに攻撃しようとしていたスラン星人とベリアルの間を遮るように、かつすれ違いざまにスラン星人へと攻撃を仕掛ける。

「ぐおおお!?っく……！何だ貴様は!?」
「俺の名はフーマ！銀河の風と共に参上！」

名乗りを上げ、ポーズを決めるフーマ。新しいウルトラマンか、と思えば視線を移すとジードとゼットがおりタイガがいない。ともすればタイガと関わりがあるのは一目瞭然。

「何が銀河の風だ！貴様ではなくジードかベリアルを……」
「ハッ！先輩と総司令まで辿り着きたきゃ俺に勝ってからにしろよ！つっても早さなら俺もお前に負ける気はしねぇけどな！」
「ほざけ若僧が！」
「来やがれ三下ァ！」

フーマとスラン星人による高速戦闘が幕を開けた。
お互いスピードタイプだがパム治郎やコジローのおかげで全快したフーマに対し、スラン星人はベリアルから奇襲のベリアルジェノサンダーやカウンターキックなどで体力を大幅に削られている。加えて、フーマは先程ベリアルから新しいウルトラタイガアクセサリーを受け取ったばかり。
確実に戦況はフーマへと傾いている。

フーマへと続くように、ジードはゴジラと共にベリアルの救援及びビオランテとのリベンジへと向かう事にする。
そう、父が持ってきてくれたウルトラの父とゼロのカプセルを使ったあの姿になって。

『自信有りげだな。いいぜ、ちょっとぐらい待っててやる。さっさと済ませろよ』
「ああ！ゴジラ、ありがとう！」

ゴジラも待ってくれている。きっとベリアルもジードが戻ってくるのを今か今かと待ちわびているんじゃないだろうか、とほんの少し期待しつつジードはこの戦いを締めくくるに相応しい姿にならんとする。

「融合（ユーゴー）！」
『セェアッ！』

自分を助け出してくれた恩人にして部隊での上司であり、そして兄貴分でもある、ウルトラマンゼロ。

「アイゴー！」

『ダァッ！』

父の親友にして後輩の祖父でもある偉大な英雄、ウルトラの父ことウルトラマンケン。

「ヒアウィーゴー！」
『フュージョンライズ！』
「守るぜ！希望!!」

ウルトラ戦士の中でも屈指の実力者たる二人の力が、今ジードの中へと流れ込み一つになっていく。

「ジィィィド！」
『ウルトラマンゼロ！ウルトラの父！
ウルトラマンジード！マグニフィセント！』
「ゼェェェアッ!!」

新たなるジードの姿を、光神陣営をも含めたその場にいた者達は例外なく息を飲んで見つめていた。
特にウルトラの父を知るサーゼクスやセラフォルー、ソーナはフーマの時以上に目を見開いている。
鎧を着込んだ騎士のようなボディ、そして雄々しく生えた二本のウルトラホーンはタイガどころかタロウのそれよりも巨大。
ロボットらしさがあるソリッドバーニングとはまた違った、前述通り正しく重装騎士と言わんばかりに見る者を圧倒するフュージョンライズ形態。
ウルトラマンジード・マグニフィセントが、家族と共にビオランテとの死闘を制すべく遂に戦場にその雄姿を現した。

「あれがリクさんの、新しい姿……！」

「か……格好良くて強そうですぅぅぅ!!」

ゼロをよく知り、ウルトラの父のことも聞いているリアスはマグニフィセントがどれだけ凄まじいか予想出来てしまい、ギャスパーは目をキラキラさせながら敬愛するジードの新形態に感激している。

彼らの視線を一身に受けつつ、ジード・マグニフィセントはゆっくりと歩を進め、大きくバク宙でビオランテから距離をとったベリアルの前に立ち、ウルトラアレイ型の光を発生・高速回転させる『アレイジングジードバリア』によって、ビオランテがベリアルへと放った放射樹液を完全に防御した。

「ごめん、父さん。ちょっと遅くなった」

「気にすんな。しっかりあの野郎向けの役者は揃ったわけだしな」

『言っとくが今のオレ様はウルトラデンジャラスだぜ』

「お前の素なのか、それともゼットの影響受けてんのか、わかんねぇなソレ」

確かにゼットの口癖は『ウルトラ〇〇』だし、ゴジラが口にしたそれは偶然なのか狙ったのか分からない。

とはいえ、ゴジラの背鰭が赤く発光しているところを見ると誇張ではなくマジのようだ。おそらくこの戦いのフィニッシャーは彼になるだろう。

そうだとしても自分達もショボい戦いをする気は毛頭なく、ベリアルは新たにブレスレットからあるものを取り出してジードに投げ渡す。

「ジード、コイツを使え」

「……っと……これって……ギガバトルナイザー!?」

「師匠が俺のリライザーの試作品として作り直したレプリカだとさ。かく言うリライザー（コイツ）も元はレプリカに偽装してたワケだが……それはそれとして、そいつは俺のリライザー同様、バトルナイザーの怪獣

使役機能はオミットされて純粋な武器でしかねぇ。出力も馬鹿みたいな威力が出るわけでもないし、気兼ねなく使うにはもってこいだろ。特にその姿にはうってつけじゃねぇか？」
「うん、確かにピッタリだ。何から何までありがとう」
「気にすんなって言ったばかりだろ。さて、準備は済んだな？このデカブツは俺らで片付けるぞ！」
「了解っ！」
『殿はオレ様だァ!!』

ゴジラの咆哮を皮切りに、それぞれギガバトルナイザーとギガバトルリライザーを構えたジードとベリアルが先制でビオランテに突撃していく。
ゴジラもまた、必殺の一撃を放つためにチャージしながら地面を揺らしビオランテへと進撃する。
その光景は正しく決戦と呼ぶに相応しいものだ。

残るはゼットとレジェンド。
ここまでジードやタイガら先輩が盛り上げてくれた勢いを殺すわけにはいかないと、ゼットも意気込む。
それを感じたインナースペース内のレジェンドも今回は至極真面目だ。

「さて、ゼット。新しいウルトラフュージョンによるフォームチェンジを行う前に言っておくことがある」
『何ですか、超師匠？』
「この三人のメダルによって生まれるお前の新しい形態は、あの日から今日に至るまで俺との特訓で積み重ねた、他のウルトラ戦士にはない戦い方でこそ真価を発揮すると言っても過言ではない」
『あの日からの……』
「いいな、ゼット……俺はこのウルトラフュージョン後、余程の事態に

ならない限りセコンドに回る。いざとなったら口は出すだろうが、基本的に戦いはお前自身で切り抜けろ。まあ今までと何ら変わらん、という事だな。今日まで俺が教えた事を思い出せ。そして、見事勝利を掴んで見せろ！」
『っ……ハイ!!』

少々プレッシャーにはなったが、これからの戦い……この程度のプレッシャーは何度でも経験するだろう。
レジェンドに教え込まれた技術を上手く活かせるかどうか……それは実戦でやってみなければ分からない。だが、戦いに怯えるのは自分らしくもないとゼットは自分を奮い立たせた。

『超師匠！今こそ、真っ赤に燃える勇気の力を手に入れる時です!!』
「よし！」

レジェンドは左手にゼットライザーを、そして右手の指の間に挟んでいた三枚のウルトラメダルを掌に纏めるように握りしめると、順番にセットしていく。

「まずはウルトラマン！俺ら光神を除けば初めて地球を訪れたウルトラ戦士。まず知らぬ者はいない」
『文武両道のマン兄さん、俺達ウルトラ戦士皆の憧れです！』
「続いてエース！ウルトラ戦士はほとんどが切断技を有しているが、この男を置いて切断技ナンバーワンを語るなど正しく言語道断」
『俺、エース兄さんには特にお世話になりました！』
「そして今回のトリであるタロウ！ウルトラ六兄弟最強にしてタイガの父、訓練校の筆頭教官など最早説明不要、上に行くつもりならばこの男を超える気で行け」
『メビウス兄さんもタロウ教官の教え子なのは有名でございます！』

今までのコントじみた変身は何だったのかと思える程、短くも真面

目な解説をする二人。惜しむらくはこのインナースペースに彼らしかいない事か。

『ＵＬＴＲＡＭＡＮ！ＡＣＥ！ＴＡＲＯ！』

メダルをスキャンし、本来のサイズのゼットがインナースペース内、レジェンドの後ろに出現する。

「ご唱和ください、我の名を！ウルトラマンゼェェット！」

言ってる事はいつもと変わらないが、雰囲気は今まで以上に真剣だ。そして、それに応えるべくレジェンドも彼の名を唱和する。

「ウルトラマン！ゼェェット!!」

『ヘェァッ！』『トワァッ！』『タァァッ！』

アルファエッジの時と同様に、ウルトラマン、エース、タロウの幻影が飛び交い一点に集中する。

『ＵＬＴＲＡＭＡＮ―Ｚ！ＢＥＴＡ―ＳＭＡＳＨ!!』

「ジュゥアッ!!」

現実世界で光に包まれたゼットが起き上がろうとするゴブニュへ向けて高く飛び上がり、その光が収まりフォームチェンジを終えたゼットが姿を現し――

「ウルトラマァァン！ゼェェット！ベータスマァァァッシュ!!」

なんと自らの名とフォーム名を現実世界でも堂々と名乗りつつ、

やっとこさ起き上がったゴブニュへとタロウの得意技たるスワローキックを叩き込んだ。

「――!?!?」

当然ゴブニュが反応出来るわけもなくスワローキックを頭部へブチ込まれたゴブニュは再度吹き飛び倒れる。

そして、ようやくその場の者達はゼットの新形態を目撃し、フーマ、ジードと続きこの日一番の驚きを彼らが襲う。

アルファエッジのスマートさとは真逆で、比較的少な目のプロテクターに赤をメインにしたボディカラー。

しかしそれ以上に目を引くのはまるで覆面レスラーのような頭部に、筋肉隆々のその肉体。腹筋に至ってはもはやシックスパックと化しており、ウルトラマッスルの体現とも言える様相であった。

これこそ、ウルトラマンゼットのパワー重視戦闘形態・ベータスマッシュである。

☆

『いやいやいや変わり過ぎだろ!?』

『ゼットさんてアレあんな変わんの!?体型から違うじゃん!!』

『もうアイツのゼットライザーって神器でもいいんじゃないかな』

『見事なマッスルボディだ!むうう……今のゼットと並び立てないのが口惜しい!フーマ!すまないが……』

「いや代わんねーからな!!今日は俺!絶対俺!!」

ゼットのあまりの変わり様にタイガと一誠はパニクり、ドライグはゼットライザーを神器認識（今はレジェンドが使っているため、ある意味合ってる）し始め、タイタスは大興奮。しかも代わってもらおうとしてフーマに却下された。

「ウルトラメダルってあんなに変わるんだ……！」
「知ってるか、ジード」
「何、父さん？」
「ケンと闇の俺のカプセルを使えばお前もあれと同等以上の筋肉付くぞ」
「うっそぉ!?今度やってみよう！」

ジードはベリアルから教わった新しいフュージョンライズ形態を別の戦いで試そうとしている。というか何故ジードさえ未確認だったフュージョンライズを彼が知っていたのか後日聞いたところ、「俺もケンも筋肉質だからな」と分かりやすい答えが返ってきたそうな。

サーガや三大勢力の避難場所では――

「大丈夫ですか？」
「はっ……はい……！」
「ゼット様……筋肉が逆にセクシー……！」

生徒会のメンバーでゼットファンな者達が鼻血を出していた。とりあえず卯ノ花がティッシュを渡している。ちなみにゼットとレジェンドが一体化しているのを思い出したセラフォルーも……

「……えぶっ……」
「セラフォルー!?」
「お姉様!?」

顔を真っ赤にして鼻血を出した。ウルトラマンは基本服を着ない→ゼットもあんな感じで着ていない→レジェンド（人間ｖｅｒ）も今は着ていない!?と妄想が発展していったらしい。ちなみにガブリエ

ルもそんな感じでミカエルやイリナに心配された。
※ちゃんと着ています。ご安心下さい。

「ほう！良いではないか新形態！」
「フ……カミナも気に入りそうな姿だな」

そして、鬼討伐メンバー。ベータスマッシュをロージェノムが特に気に入ったらしい。どっちもムキムキである。ヴィラルの言う通り、グレンラガンのコックピットではカミナが絶賛ハイテンション中。

「オーフィスー、ベータスマッシューー」
「汚れちゃうから真似しちゃ駄目ですよー」
「うー」

スワローキックを真似しようとしたオーフィスはしのぶに取り押さえられた。横を見るとカナエが「いいなー」と指を咥えて見ていたので差し出したら笑顔で受け取っていく。

「おおお!!あの逞しい体つきに炎の如き体色！あれがゼット殿の新たな力か!!」
「見るからに肉弾戦特化……！俺も自然と滾ってきたぞ！」

杏寿郎と狛治も興奮気味だ。杏寿郎はゼットと親しく、狛治は格闘主体の戦闘方法故に納得がいく。
それから、オカ研メンバーも十分話題にしているが、ただ一人……小猫だけはある事を考えている。

（確かにパワー型ならあのロボットに対抗出来るかもしれませんが……今までスピードタイプしかなかったゼットさんがいきなり方針転換して十分に動けるでしょうか……）

そして、その懸念は当たる事となる。

☆

ゴブニュを蹴り飛ばしたゼットは、どっしりと構えてからゴブニュへと駆け出していく。

「デェェアッ！」

また起き上がったゴブニュに今度は剛腕による強烈な一撃が叩き込まれ数歩後退するも、今度は踏み留まりパンチでカウンターを返してきた。

「グッ!?」

「――!!」

ゴブニュの一撃はゼットの胸に打ち込まれ、続けてキックを仕掛けてくる。何とか回避しようとするゼットだったが……

（思うように動けねえ……！くそっ！）

仕方なく腕をクロスさせ、間一髪直撃は防げたものの少なからずダメージはくらってしまう。

アルファエッジならば十分回避が出来るはずだったが、ベータスマッシュになった事で筋肉質となった――つまり体重が増加したため、アルファエッジで出来た動きが一気に狭まってしまったのだ。

オーブのフュージョンアップや、ジードのフュージョンライズも体重変化はあるが彼らの場合は経験が積まれているのでそういった事態にも対応出来る。

ゼットの場合、単純に圧倒的な経験不足が足を引っ張ってしまって

いるというわけだ。
これぱかりは一朝一夕でどうにかなる問題ではない。
（これなら……ゼロ師匠からテクターギア借りて装着しながら特訓しときゃよかったぜ……！）

パワー型のベータスマッシュの初戦相手がゴブニュ（オグマ）だったのも厳しい理由の一つだろう。
強固なボディと強烈なパワーを持つ、ベータスマッシュと同質の特性を有しティガをも苦戦させた相手。慣れない新形態で相手にするには荷が重いかもしれない。
なお、ゼットの基本形態（オリジナル）の体重は３万３千ｔ、アルファエッジは３万５千ｔ、そして今回のベータスマッシュは４万２千ｔ。身長が変わらず基本形態から９千ｔ、アルファエッジから７千ｔもいきなり増加したらさすがにこうもなるだろう。
基本形態を例にとって分かりやすく言えば、体重５０ｋｇの人がいきなり約１５ｋｇ増えて６５ｋｇになるようなものである。

「こうなったらこのパワーと防御力を信じて得意な間合いに持ち込む……いや、飛び込んでやる！」

一先ずは吹っ切れたのか、ゼットは腕をクロスさせたままゴブニュへと突っ込んでいく。ゴブニュは電撃で応戦するが、防御力が上がった上にクロスガードしているため電撃の効果が薄く、ゼットの接近を許してしまう。
「肉を斬らせて骨を断つ戦法！デリャアアアアアア!!」
「!!」
ゼットは両腕でクロスガードしたまま、ゴブニュに正面からタックルし、怯んだゴブニュの頭部に左足で回し蹴りを叩き込む。

……が……

グ　ニ　ャ　リ

「なっ!?」

『え!?』

なんと機械であり関節らしきものも無かったゴブニュ（オグマ）の頭部が、まるで首があるかのように靭やかに曲がりゼットの蹴りを難なく回避したのである。

勢いをつけていたゼットは空振った事でよろめきながら図らずもゴブニュへ背中を向けてしまい……

「――!!!」

「ウグァァァッ!!」

至近距離で電撃を背中に受け、派手にうつ伏せに倒れ込んでしまう。杏寿郎やしのぶを始めとするゼットと仲の良い者達もこれには動揺する。

さらにゴブニュは、何とか起き上がろうとするゼットに対し、馬乗りになりながら仰向けにするとその剛力でゼットの首を絞めだした。

「グッ……ァ……!!」

「――!!」

ギリギリと締め付けられ、苦悶の声を上げるゼット。

どうにかゴブニュの手を外そうとするも、力が凄まじい事に加え、首を絞められているためゼットは力が入らない。

いよいよ周りからも悲鳴の混じった声が聞こえ始める。

「ゼットさん!」

「いかん！あれでは俺達が呼吸法を封じられるのと同じ、まともに力が出せない状態だ！いくら力を増した形態であろうと、それを振るえなければどうにも出来ん！どうにかしてゼット殿が本来の力を引き出せねばあのまま死を迎えかねないぞ！」
「そんな……！ゼットさん、レジェンド様……！」

しのぶ、杏寿郎、そしてアーシアが特に悲痛な顔でゼットとゴブニュの戦いを見ている。
そんな中、かつて共に戦ったオーフィスと巌勝はある可能性に賭けていた。

（何故かゼットはピンチの時、いきなり強くなる）
（この状況を打破するにはそれを信じるしかない。ゼット殿には我々の知らない力が眠っているはずだ）

ゼットはいよいよ意識が遠のき始めていた。目の前がチカチカ点滅しているような気がする。

（くそっ……大口叩いてこれかよ……結局俺はゼロ師匠の言う通り、半人前どころか3分の1人前……それ、以下じゃねえか……）

ただ、ゴブニュの腕を掴んで外そうとする姿勢は変わらない。まだ諦めてはいないが、力だけが抜けていく。

（このままじゃ……身体を貸してくれているレジェンド超師匠まで巻き込んじまうってのに……意識が……）

意識を失う兆候なのか、ゼットの――ゼットだけの目の前が強烈な光に覆われ、ゼットは遂に意識を手放した。

「……はっ!?ここは……ゴブニュは!?超師匠、ここはなんでございますか!?……超師匠?」

ゼットは突然、インナースペースではない真っ白な空間で目を覚ました。当然の如く混乱し、レジェンドに尋ねるも自身と一体化しているはずの彼からの返答はない。

それどころか、彼が自身の中にいる気配さえ無い。

「え……どういう事だよ……身体はベータスマッシュのままだし、でも超師匠はいなくて……何なんだよ、これ」

あまりに不可思議すぎる事態にゼットはますます混乱する。

そんなゼットの前で、さらに強烈な光が発生した。

「うわあっ!?な、何だ!?」

『お前の底力はそんなものじゃないだろう？我らが友、レジェンド……光り輝く超人『レジェンドマン』の弟子、ウルトラマンゼットよ！』

ゼットの目の前には、逆光でシルエットしか分からないがいずれもベータスマッシュとなったゼットから見ても圧倒されるほど鍛え抜かれた肉体を持った者達が何十人も立っていた。

「あ……貴方達は!?」

〈続く〉

ＵＬＴＲＡ　ＭＵＳＣＬＥ

――それは、一誠が転生悪魔になる暫く前……夜のバラエティ番組が生放送されている最中に起こった出来事である。

偶然か、それとも狙ったのか知らないが凶悪犯罪者集団が生放送中に乱入し、出演者及び会場の観客を人質に日本政府へ自分達の身の保障と身代金を要求してきたのである。

相手はいずれもかなりの手練であり、人質の数も相当なため政府側は要求を飲まざるを得なかった。

しかし、ある一人の人物の登場によって状況は覆される。

「俺は謎の鉄騎超人『ブラスターブレード』！悪逆非道を行う外道共、俺が成敗してくれる！トウッ！」

何やら全身を白と赤の鎧と仮面で着込んだ人物が異常な早さで犯罪者達を薙ぎ倒していったのだ。無論、人質には一切傷つけさせておらず、珍妙な存在ではあったがまさしく超人であった。

そして、最後に残ったその集団のボスである者に対して技を放ったのである。

「食らうがいい！４８の殺人技の一つ――」

それによってボスは致命的な大ダメージを受けて失神、他のメンバーも一人残らず気絶させられているため全員確保、大捕物となった。

ブラスターブレードと名乗った人物はその後、その場の全員が見ている前で背中を向けて霧のように消えていき、完全にいなくなってしまいお茶の間を騒然とさせた。

こうして、『彼ら』の活躍を記した漫画や伝記がないこの世界において、生中継された状態でボスに放たれた『あの技』だけはあまりのインパクトの凄まじさに全世界へ瞬く間に広まり認知され、真似をする

者も出てきたが未だ完璧に放てた者はいないという。

ちなみに、それをテレビで見ていた某一家は盛大にお茶やおやつを吹き出したらしい。例の如く、『彼』によるものだったからだ。

☆

ゼットは困惑していた。

突如現れた数十人ものシルエット。異形なものもいるとはいえ、その殆どがシルエットであっても屈強な肉体だと一目で分かるほど鍛え上げられている。

正直、タイタスがこの場にいたら発狂間違いなしだ。

「あ……貴方達は!?」

『フッ……『ナイスガイな謎の王子』とでも呼んでもらおう』

「いや、シルエットなんで顔とか肌の色とかウルトラ分かんないです」

『な……なに〜〜!?』

シルエットの一人がだいぶ大袈裟なリアクションで返してきた。しかし、別に大袈裟ではなかったらしく……

『ハハハハハ!ミーから見ても今のお前は真っ黒だぜ!鏡見てみな!』

『何を〜!そういうお前だって真っ黒じゃないか!』

『コーホー……』

『そうだ、二人ともよせ。今はそんな争いをしている場合ではないだろう』

『『いや■■■■■■は普段も真っ黒だからいいかもしれないけどな!』』

『■■■、私達は生涯マスクを着け続けなければならない以上、素顔は見せられんから結局見た目はマスクで判断されてしまうぞ』

『兄さんそれは言わないお約束ですよ～!!』

自分そっちのけで騒ぎ出したシルエットを呆然と見ているゼット。それに気付いたのか、全員がハッとした後に咳払いして再び荘厳な雰囲気になる。

『ゴホン!さて、ゼット……お前自身も薄々勘付いているはずだ。お前がある状況下に置かれると決まって凄まじいパワーを発揮する事を』

シルエットの言葉にゼットは思い当たる節があった。

最初は鬼・カゼキリをレジェンド・オーフィス・厳勝と討伐した時。そして二回目が同日、魔王獣マガパンドンの亜種と戦った時だ。

その2戦で共通していた事とは――

「……ピンチになった時？」

『そうだ。我々の中にも似たような力を持つ者がいる』

私とかな!と親指で自分を指しながら言うシルエット。

また脱線しそうになったが、すぐに気を取り直し説明を続ける。

『これは『火事場のクソ力』と呼ばれており、その成長に限界は存在しないのだ』

「成長に限界のない力……!まさか、その火事場のクソ力が俺の中に!?」

『いや、ないけど』

「ないの!?じゃあなんでそんな事言ったんだよ!!」

『すまん、言い方が悪かった!そもそも火事場のクソ力はある種族にのみ使えるものでな、お前にあるのはこれと同種・同質の力だと言いたかったんだ』

「そ……そうだったのか……でも、俺ゴブニュとの戦いだとピンチに

なっても全然発動出来なかったけど」

確かにピンチになった時に発動するならアルファエッジの時にも発動するはずだ。それがベータスマッシュでも危機に陥っている時にさえ発動しないのは何故なのか？

『もう一度よく思い出せ。その力が引き出せた時、本当にピンチだっただけか？』

「ピンチだけ……？」

そこまで言われてようやくゼットはある事に気付く。

「俺、一緒に戦った人達がいて……その人達のために」

『そう、自分だけでなく誰かの為に力を振るう時。その時にこそお前の中に眠る無限の成長性を持った力は発現するのだ。強いて言うならば、発動条件は即ち『友情』!!』

「友情……！」

『そう、友情パワーが強ければ強い程、お前の中にある力はより強くなっていく。我が友・レジェンドから教えてもらったある言葉をお前に伝えよう！』

シルエットから伝えられた言葉、それは……

――優しさを失わないでくれ

――弱い者をいたわり、互いに助け合い

――どこの国の人達とも友達になろうとする気持ちを失わないでくれ

――例えその気持ちが何百回裏切られようと

ウルトラ六兄弟の中でゼットの最も敬愛する人物、エースの言葉。地球を去るまで共にヤプールと戦い続けたレジェンドは、その言葉をシルエットの人物らにも伝えていた。
そして、ゼットも思い出した。レジェンドとの特訓の事と、それを支えてくれていた者達を。

☆

これは杏寿郎やしのぶの新しい日輪刀製作の目処が立った次の日のこと。

「ぐあああああっ!!」
「これが『タワーブリッジ』だ、ゼット！今は手加減しているが、本気でやれば身体が上下半身に裂ける程の威力が出せる!!」

ダイブハンガー内のトレーニングルームでゼットは人間体のレジェンドにタワーブリッジと呼ばれる技を掛けられ、その身で威力と恐ろしさを実感していた。
それからレジェンドはゼットを解放すると、ある事を言い出す。

「よし、タワーブリッジを俺にやってみろ」
「えええええ!?」
「お前はタワーブリッジをその身で受け、その威力も恐ろしさも知った。次は実践だ。戦いにおいて役立つのは手取り足取り丁寧に教わった技ではなく、一から十まで己の身体で真に理解した技だということを覚えておけ」

釈然としないゼットだったが、とりあえずレジェンドにタワーブリッジをかけてみるが……

「う……ぐぐ……まっ……曲がらない……っ」

「どうした！半端な力では逆に力任せに脱出されるぞ！こんな風にな!!」
「うわあっ!?」

無理矢理身体を折り畳んでレジェンドは軽々とゼットのタワーブリッジから逃れてしまった。

「これが『実践』だ。自分が掛けられた時と掛けた時、それぞれのケースを体験する事で修得までの問題点を炙り出し、そこをさらに改善していけば完成度の高い技に仕上げた上で会得出来る……というわけだ」
「いや、でも……超師匠大丈夫なんですか？なんか会談に向けて色々やってるし、杏寿郎としのぶちゃんの刀も手ぇつけないとだし……特訓に付き合ってくれるのはウルトラ感謝ですけど超師匠の身体が保たないんじゃ……」
「俺の身体の心配など二の次だ。今はお前自身が実力をつけることを」
「あのぅ……」ん？」

至極もっともなゼットの意見をバッサリ言い捨てたレジェンドだが、そんな彼もおずおずと声をかけてきた主には言葉を中断せざるを得ない。

「アーシア、見ていたのか」
「はわっ!?ご、ごめんなさい！盗み見とかする気は全然なくて、その……！」
「いや、盗み見も何も隠してないからな。それよりどうした？明日も学校だろう」
「実は、その……何というか、いつもレジェンド様と一緒に寝ているからいないと寝付けなくて……オーフィスちゃんは抱き枕があれば多少寝れるようになってますけど」

アーシアはレジェンドとの幼少期の出会いから今回の再会までの期間が長く、想いが培われてしまった弊害というかなんというか……逆にオーフィスは代替可能な何かがあればある程度は我慢が効くようになったらしい。成長しているようで何よりである。

「あと、ゼットさんの悲鳴が思いの他響いてきたというか……」
「ウルトラすいません」
「すまん、元凶は俺だ」

これには師弟揃って謝罪した。防音対策も考えねばならないようだ。

「それで、お二人ともこんな夜中に特訓されてたんですか？」
「昼間は何かと忙しくて時間が取れんのでな。こうでもしなければ見てやる事も出来ん」
「俺の事は後回しでもって言ったんだけど、超師匠は『お前が使い物にならんと結局は俺が困る』って無理して特訓に付き合ってくれてるのでございます。今教わってる技術も一人だと限界があるし」
「そうだったんですか……」

アーシアは少し考えてから「よし」と握り拳で頷く。

「レジェンド様！ゼットさ……」
「これがスピニング・トゥ・ホールド!!」
「ぎゃあああああ!!」
「はわあああ!?」

何かを決意したアーシアが二人に声を掛けた時、目の前ではある意味惨劇が繰り広げられていた。

「完成版マッスルスパークやアロガントスパークじゃないだけマシと

思え!!いいか!スピニング・トゥ・ホールドはここからさらにこうやって……」
「あいだだだだ!!ギブ!超師匠ギブアップ!!ていうかその二つ超師匠の十八番と同じ単語入ってて桁違いにウルトラヤバそうなんですけど!?比べるのが間違ってそうがあいだぁぁぁぁ!?」
「……食らってみるか?」
「ウルトラ勘弁してくださ……いだだだァァァァァ!!」

本気でゼットの右足が危険な状態になってきたのでアーシアが止めに入り、かつ目が点になる提案をする。

「私もお手伝いしますっ!」
「え?」

グ　キ　リ

「いぎゃあぁぁぁ――!!」
「ゼットさぁぁぁん!?」
「あ、スマン」

完璧にイッてしまったゼットの右足を即座に治療するアーシア。このように不測の事態があった場合でもアーシアなら治療出来るし、アーシア自身の特訓にもなるから、と押し切られてしまい、結局三人で特訓する事になったのだ。
……初日は。
その翌日にはさらに……

「お館様!ゼット殿!僭越ながら俺も協力に……」
「お医者さんも二人いた方が……」
「フライング・ブレーンバスター!!」
「ごぶにゅうっ!!」

「「ゼット殿（さん）――!!??」」

杏寿郎としのぶもアドバイザー&ドクターとして参加し、加えて……

「ゼット殿、筋肉の動きから比重が右に偏っているぞ。レジェンド様の話では出来る限り均等になるようバランスを保つ必要があるそうだ」

「こ……こんな感じなら……！」

「あ」

「判断が遅い!!」

「うわあああ!?」

「マッスルリベンジャー!!」

「あああああ!!がっ！は……」

「ゼット殿ー!?」

「レジェンド、やりすぎだと思う」

厳勝とオーフィスまで参戦したせいかレジェンドの特訓は激しさを増した。ちなみに僅か数日間だというのにゼットが生死の境を彷徨った回数は3桁に届くかという程だったらしい。

しかし、杏寿郎の励ましや厳勝の的確なアドバイス、文句の一つ言わず治療してくれたアーシアとしのぶに、応援してくれたオーフィス。

そして……

「あれ？こんなトコにスポーツドリンクと湿布とか包帯……」

「他にも冷感タオルとか入ってますね。あ、手紙入りみたいですよー」

「誰からだろ？えーっと……」

【無茶しすぎて身体壊すんじゃねぇぞ。ドリンクはレジェンドの身体借りて飲めよ。　通りすがりのマイスターより】

「……どこかの隊長さんですね」
「……ゼロ師匠……！」

素直ではないもののゼットの身を案じつつ静かに見守ってくれていたゼロ。
最後に、激務の合間の休息を削ってまで特訓に付き合ってくれているレジェンド。
日輪刀の件が決まった日から会談当日まで数日間しかなかったが、このメンバーでの特訓は確実にゼットの実力を大きく伸ばしていた。
――それだけではない。
その短い期間の間に、彼は多くの絆を育んだのだ。

☆

「……そうだ。俺がこの場に立っていられるのは、俺を支えてくれる皆がいたからだ。半人前どころか3分の1人前と言われた俺を」
『そうだ。そしてそれはお前が他者を尊重し、誰かの助けになろうとする心を忘れなかったからでもある。それもただ甘やかすだけではなく、互いに高め合う気持ちも持ったままな』
「互いに高め合う気持ち……」
『兄さんの言うそれはまさしく『真・友情パワー』！自立し、本当に必要な時にこそ助け合うその心が常に高みへと導くのだ！』

ゼットはシルエットの言葉を聞いて感銘を受けると共に、「あ、この二人は兄弟なんだ」と何故か親近感が湧いていた。

『今親近感湧いていただろう？まさにその通りさ、私はお前に似ているんだ』
「え？」
『私は子供の頃色々あってな、成長してからもダメ超人ダメ超人と言

われ続けたものさ』

シルエットは感慨深くゼットに語る。

『だが、ダメ超人と呼ばれたからこそ分かったものがある。得たものもある。その一つがお前の師を始めとするたくさんの大切な友だ』

「そしてそれが力の源になって……」

『そう。だからゼット、決して友情を忘れるな。先の言葉のように、どれだけ裏切られようとも』

「はい！」

力強く答えるゼットにシルエットは頷き、他のシルエットとも頷き合って再びゼットを見る。

『ならば最後だ。我ら『超人』がレジェンドと共に戦った記憶、そして我らが技の『知識』をお前に伝授しよう！』

「!?」

『レジェンドは気付いているだろうが、おそらくお前は技を繰り出すための何かの『ピース』が欠けている事がなんとなく理解出来ているだろう。それが『知識』！レジェンドは既にお前の身体に技を教え込んでいるだろう、そしてこの『知識』を持って頭と身体、言うなれば天と地が揃い完璧な技となるのだ！』

『無論、高度な技はそこからさらに鍛練を重ね技を磨く必要がある。それは分かるな？』

「もちろんです！これからも粉骨砕身、精進します!!」

『ならば良し！これが我らの記憶と知識じゃーい！』

何故かハイテンションになったシルエットの言葉に、他のシルエット達が光になってゼットの中に吸い込まれていく。同時に吸い込まれた直後から、ゼットの脳裏にはシルエットが鮮明になり、レジェンドと共に、或いは向かい合ってリングで死闘を繰り広げる光景が浮か

び上がってきた。

「こ……これが、超師匠達の……！」

『どうだゼットよ。『知識』があれば今まで見た技、掛けられた技でも新鮮に移るだろう？』

「はい！こんな複雑な技を即座に……あれは⁉」

『む？おおっ！私にも分かるぞ、兄さんの『ナパームストレッチ』をレジェンドが繰り出し、その上に私が『キン肉バスター』で乗っかるようにした私達の合体技（ツープラトン）⁉』

――行くぞ、■■■■■⁉

――これが私達の友情パワー⁉

――『『マッスルダイナマイト』』⁉

「すげぇ……！ウルトラすげぇ⁉」

『懐かしいな……またこうしてタッグマッチをやりたいものだ。では、私が最後だがその前に……』

他のシルエットは全てゼットの中に吸収され、最後に残ったシルエットである人物が、どうやらマスクであった部分をめくり……

『フェイスフラーッシュ⁉』

シルエットの顔部分から眩い光がゼットに浴びせらせると、ゴブニュから受け、この空間にも持ち越されていたダメージが瞬く間に回復する。

まるでパム治郎とコジローから受けた回復をさらにもう一度受けたような気分になったゼットは驚愕した。

「こ、これは⁉」

『私からの餞別だ。さて、お別れだ……ゼット。我らの友を支えて

やってくれ。頼んだぞ』
「はい！……ありがとうございました、大先輩！」
『大先輩……いいじゃないか～！よし、ゼット！本当の最後にお前が自信の持てる言葉を教えよう！決め台詞に使っていいぞ！』
「マジですか!?お願いします！」
『うむ！それはな――』

シルエットがそれを伝え、ゼットの中に消えて行くとその瞬間、ゼットの意識は光に飲み込まれていった。

☆

現実世界、ゼットは意識を取り戻すとゴブニュの腕を掴みながら抵抗している最中……つまり、あの時と同じ状態のままだった。
しかし、先の事が夢でない事を理解する声が聞こえてくる。

「何でしょう……さっき一瞬、ゼットさんが光って……」

アーシアのその言葉でゼットはあの世界で起きた事を瞬時に思い出し、同時に気合を込めて身体全体を思い切り捻るようにしてゴブニュの拘束から脱出した。
それに周りから驚きの声が上がる。

「おお!?ゼット殿が見事拘束から逃れたぞ！」

「あの状態から抜け出せる体力が残っていたのか!?」

（そうだ……あれは夢じゃない、あの人達が俺に力を貸してくれたんだ！）

『おい、ゼット。お前、大丈夫なのか？』

「大丈夫です、超師匠！俺、やっと分かりました！超師匠が教えてくれたこと！」

『何？』

そして、立ち上がってゴブニュに向き直り、シルエットから教えられた自分を奮い立たせる言葉を発した。

「へのつっぱりはいらんですよ！」

『!!』

他の者は何を言っているのか分からなかったが、レジェンドはすぐに理解した。『彼』の言葉だと。

「言葉の意味はわからないけど、とにかくすごい自信ね……！」

リアスのそんな台詞もレジェンドには懐かしく感じる。そんな物

思いに耽っていたレジェンドを現実に引き戻したのは体勢を立て直したゼットの動き。

「ダァァァァ!!」

「――!!」

バカの一つ覚えか、と言わんばかりにゴブニュに突撃したかと思えば放たれた電撃をスライディングで回避し、ゴブニュの股下に足が入り込んだ瞬間、両腕をつき身体を持ち上げ、両足でゴブニュの頭を挟みバク転の要領で全身の体重をかけうつ伏せに倒れ込ませた。

突然動きにキレが増したゼットに感嘆の声が上がるが、ゼットはそこから即座に行動を起こす。

ゴブニュが起き上がる前に無理矢理仰向けにするとゴブニュの片足を取り、自身の足を絡ませるように差し込み捻り上げた。

「スピニング・トゥ・ホールドォォォ!!」

「――!?!?!?」

例え痛覚が無くともフレーム関係や内部機器に明らかな異常を与える技を繰り出されゴブニュは苦しみだす。

(ここから回転を加える!)

ゼットは差し込んだ足を軸に回転を加え、ゴブニュにさらなるダメージを与えていく。

「あれ、レジェンド様がゼットさんにかけていた技ですっ!」

「うむ!どれ程の威力なのか試しに俺もかけてもらったがかなり効いた!脱出は出来ても残る痛みがかなり厳しい!踏ん張りがきかなくなるからな!」

「あれ、人体には相当堪えますよ。私は試しに姉さんにかけてみました」
『!?』
最初に見たアーシアや、実体験を話す杏寿郎に続いてとんでもない爆弾発言をするしのぶ。カナエはその記憶がフラッシュバックして涙目で片足を押さえていた。
基本はテコの要領なので力の弱いしのぶでもちゃんと極められたらしい。

しかし、この技は回転の瞬間に手を離す必要があるのでそのタイミングで脱出される可能性がある。
当然ゴブニュもそれを狙い、先程ゼットがやったように身体全体を捻るようにして脱出した。

「――!!」
「ウアッ!?やっぱり機械相手には効果薄かったか!?」
『いや、効いている!その証拠に奴はフラついているだろう、足元を見ろ』

レジェンドの言う通り技を片足を集中してかけられたため、ゴブニュはバランスが取れておらず明らかなスキが出来ている。何とか平常通りに動こうとするが内部フレームに相当負荷がかかっていたようだ。
ゼットは身体を捻りながらジャンプしてゴブニュの背後にのしかかるようにしつつ両足を内側から引っ掛け、腕をチキンウイングで絞り上げる。
「リバース・パロスペシャルだぁ――!!」
「――!!!!」

先程の脚部に加えて今度は肩を始めとする腕部への多大な負荷がゴブニュを襲う。
ベータスマッシュがパワータイプなのも相まってメキメキと音を立てており、何とか外そうとゴブニュはもがく。
満足に動けていなかった先程までに比べ、次々と関節技（サブミッション）を決めていくゼットに周囲も沸き立ってきた。

『ゼットの奴、いきなり動きが格段に良くなったぞ!?一体何があったんだ!?』
『わかんねぇ!けどアレ絶対やられたらキツいのばっかだろ!?』
『最初のやつはフーマに特に効きそうだよな』
『よし、帰ったら早速試してみよう!』
「いや俺で試そうとすんなよ!?」

スラン星人との高速戦闘をこなしつつツッコミを入れるフーマ。確かに高速移動する相手にスピニング・トゥ・ホールドは相当効くだろうが。

「向こうは大丈夫そうだね」
「ああ、どういうわけか一皮剥けたってやつだ。聞いた事はあったが俺はやった事無い技ばかり繰り出してやがる。ゼットの奴、師匠から他のウルトラ戦士とは別の路線で育てられてんな」
『お前ら模擬戦でアレやられる事想定しといた方がいいんじゃねーか？』

さすが、ベテラン二名とそのうち一人に鍛えられたウルトラマン。こちらはゼットの動きに安心し、ゴブニュを任せきる事に決めた。これでやっと目の前の強敵に集中出来る。

「おっしゃあああ！いいぜいいぜ！赤いマッチョラマン!!」
「マッチョラマンって何よ!?」
「マッチョなウルトラマンの略だよ！それよりもあのピンチからの逆転劇！燃えるじゃねえか!!」
（その呼び名、タイタスってウルトラマンに言った方が喜ばれそうだけど）

やはりというか、赤くてガチバトルを仕掛けるゼット・ベータスマッシュはカミナの好みに刺さるようだ。
ヨーコはヨーコで新しい呼び名について色々考えている。
そしてそうこうしている間に、新たな動きがあった。

何とかゼットを振り解いたゴブニュだが、既に片足と両腕に相当なダメージが蓄積しておりフラフラどころか起きては倒れを繰り返している。

（まだだ！あと二つ!!）

何かを狙っているゼットはバランスを崩し倒れたゴブニュを仰向けの状態で持ち上げ高くジャンプする。

『この技は！』
「ウオリャアアアアアア!!」

特訓の最中に見た事のあるアーシアらもその技を知っている。ある人物のフィニッシュホールドとして有名なそれは、ゼット自身もレジェンドから伝授されたシンプルながらも強力なものだ。
正式名称『アルゼンチン・バックブリーカー』、そしてそのある人物

は己の故国にある橋の名をその技の名とした。
それこそが……
「超師匠直伝！タワーブリッジィィィ!!」
ガキィィィィッ!!!
落下によるGを加え、『人間マフラー』とも呼ばれるようにゴブニュはゼットに担がれながら弓なりに反らされる。
凄まじい轟音と共にベキベキと言う音がゴブニュから聞こえた事からもその威力は推して知るべし。
「――!!――!!」
「オオオオオオッ!!」
さらに力を込めていくゼットの気迫は見る者を圧倒する。彼が3分の1人前と評価されている理由を知っている者達はともかく、それを知らない者達はこう思うだろう。
――あれのどこが3分の1人前だ――
現に三大勢力の護衛達は、自分達があれを受けて無事でいられるはずがないと認識し青い顔をしていた。
ついでにその近くで観戦していた鬼灯が……
「ああ、私です。すいませんが地獄にリングを作りたいので場所を選定しておいて下さい。とりあえず記念すべき第一戦はレジェンド様と……誰かによるタッグ戦で。相手は無惨と……コカビエルかバルパーあたりでいいですね」
……相手が地獄でさらなる地獄を見る悪夢を味わうとしか言いようがない事をしようとしていた。
間違いなくレジェンドは手加減などしない相手だソレ。

それはそれとして、しぶとくゴブニュは脱するがもはやまともな抵抗が出来ないレベルになりつつあった。

「――……――！……」

「……ウルトラタフだな、お前。さすがティガ先輩が苦戦しただけの事はあるぜ」

ゼットはゴブニュに称賛を送る。敵であっても人質をとったりとか、ギャラリーを狙うような事をせず、ただ自分と真っ向勝負するゴブニュには悪感情など沸かない。

「お前がどんな命令を受けてるのか、何でそれを守ろうとしているのか俺には分からない。けど！俺にも負けられない理由がある！究極的には宇宙の平和のためだけど、今ここに立っているのはそれだけじゃない！」

ゼットが力説し、全身に力を込めると異変が起きる。

大きく変わるわけではない、ある一点にそれはあった。

「俺に力を貸してくれている偉大な兄さん達！俺に特訓をつけてくれた上に身体を貸してくれているレジェンド超師匠！そして！未熟にも程がある俺を支えてくれる仲間達の思いを背負って俺はここにいる！その皆に勝利を届けるためにも、俺は負けられないんだあああ!!」

ゼットの叫びに呼応するように、ゼットの額に彼の名を示すウルトラサインが出現したのだ。

『これは……！』

「『火事場のクソ力』、それと同質のものらしいです超師匠！」
『何だと!?お前、どこでそれを!?』
「ナイスガイな謎の王子と名乗る大先輩に教えてもらいました！」
『ナイスガイな……まさか』

ゼットの変化は元よりその口から出てきた『火事場のクソ力』という単語にその場の者達は首を傾げているが、レジェンドはその後のゼットの言った人物に心当たりがあった。

（そうか……今ゼットは俺の身体を使っている。あちらでの最終決戦の時、皆から分けてもらった超人パワーが俺の身体に消えずに残っており、それが何らかの形でゼットを導いてくれたんだな。ありがとう……スグル、皆。おかげでゼットは、俺を除くウルトラ戦士最初の『正義超人』として目覚めたぞ！）

レジェンドの脳裏に『間違いなくヒーローだ』と断言出来る、慈悲深く不屈の闘志を持った友情に厚い一人の超人が浮かんだ。
それに続くように共に戦った仲間や激突したライバル達も。

『……ゼット』
「超師匠？」
『俺はある世界を離れる時、完璧超人始祖（パーフェクト・オリジン）と呼ばれる者達から超人としての名『完璧・特式（パーフェクト・スペシャル）レジェンドマン』という名を貰った』
「その名前……！あの大先輩も超師匠の事をそう言ってました！」
『やはりな……ならば俺も彼らに名を貰ったように、お前のその力に名前を授けようと思う』

ゼットは彼らから既に何かを授かったのだろう。ならば、自分も光神やウルトラマンとしてではなく、彼らと同じ『超人』の一人として彼に贈り物をしよう。

『劣勢を覆し、勝利を手にする力。お前のその力の名は今、この瞬間から『逆境のウルトラパワー』と呼ぶが良い！』
「おおっ！何かウルトラいい感じ！」

どうやら気に入ってくれたようで一安心。
そうとなれば後はゴブニュを倒すのみ。いくら逆境のウルトラパワーが完全に発現したとして、持続時間はまだそう長くないだろう。
ゼットもそれを本能的に理解したのか即座にゴブニュに向けて走り出して飛びかかり……

「イグニッションラリアット――!!」

勢いをつけたラリアットをゴブニュへと叩き込んだ。
それを受けたゴブニュは地面へと倒され、受けた部位は僅かながらヒビが入っている。

「今だ!!」

倒れたゴブニュの頭部を背負い投げに似た体勢で抱え、タワーブリッジの時よりもさらに高く飛び上がる。
ゴブニュは今までのゼットの技から行動を予測し、かつてない技を仕掛けてくるだろうと考え、ゼットのキックを回避したように頭部の一部を首の如くしなやかにして脱出しようとする。
……だが。

「それを待ってたぜェェェ!!」

ゴブニュのそれは悪手であり、ゼットはむしろそれを狙っていたの

だ。
首部を曲げた事でゼットはゴブニュの身体を頭上へ逆さに抱え上げ、そのままゴブニュの首部を肩口に乗せると同時にゴブニュの両足を股裂きにしてクラッチする。

「遂に出すか……あの技を！」
「よもや！あれはお館様がゼット殿にかけた事があるだけでなく、当面の最終課題としていた技では!?」
「確か４８の殺人技の一つという……！」

――食らうがいい！４８の殺人技の一つ――
――キン肉バスターッ!!――

かつての事件でブラスターブレードなる人物が放った大技、それが今ゼットの放とうとしている技『キン肉バスター』だ。
その事件を知っているリアス達もまさかという表情で見ている。
少なくとも簡単に放てるようなモノではない。
だが、彼らは気付いていない。
ゼットが繰り出そうとしているのがただのキン肉バスターではないことに。

『ゼット、キン肉バスターには最も目立つ弱点がある。それは首のフックが甘い事だ。そこを見抜かれて脱出される事もある。だからこそ、俺と共に特訓の末体得したあの技術を使う時だ！』
「はい！超師匠！ヌゥアァァァァァ!!」

ゼットが力を込めると動かしていたゴブニュの首部が全くと言っていいほど動かなくなる。何かにくっつけられたかのように。
そう、これはウルトラ念力の応用だ。

ウルトラ念力は普通の超能力よりも遥かに強力であり様々な事が可能。そして総合的な超能力ならばキングに軍配が上がるが、こと念力に限っては『レジェンドキネシス』という固有名詞を持つウルトラ念力を使えるレジェンドが一歩先を行く。

そのウルトラ念力使用者の最高峰に座するレジェンドからゼットはある指導を受けた。

あまりウルトラ念力の得意でないゼットが効果的にウルトラ念力を使うには状況・条件を限定すべし、という事である。

そこでゼットが思案した結果、辿り着いたのが今回の『強力な接着力』だ。それも、実はほんのちょっと前……復活時にその答えに至ったばかり。

これは今後もこういった戦い方をしていく上で、技を外されないようガッチリ固定する事に限定してアレンジされた、まさしくレスリング専用のウルトラ念力。

条件は『自分と相手が密着している時のみ発動可能』。相手を吸引するわけでも何かを発射するわけでもなく、ただ自分の身体の一部にやたら強力な接着剤が塗られているようなもののため、例のレスリングでもルール的に問題はない。

これによってバスターの決まる安定性は大幅に上昇した。

「準備完了!!行くぜゴブニュ!これからお前にかけるのは俺だけじゃ完成しなかった大技だ!!」

ゼットの額のウルトラサインが輝きを増す。

アーシアが傷を癒やしてくれなければ特訓は続かなかった。

杏寿郎がスパーリング相手をしてくれなければ技に磨きはかからなかった。

しのぶがアーシアと一緒に的確な処置をしてくれなければ特訓中に誰かが手遅れになっていた。

巌勝が細部をアドバイスしてくれなければ見落としがちなところがいくつもあった。

オーフィスが時々檄を入れてくれなければ気持ちが折れていた。
レイト――ゼロの不器用な優しさがさらなる活力をくれた。
そして、レジェンドがいなければ自分はこんな戦い方など思いつきもしなかった。
大先輩達がいなければ自分の中に眠る力にも、技の知識がない事にも気付けなかった。
何より今、自分を信じて応援してくれている者達がいなければ、こうして再び立ち上がる事が出来なかった。
――だから。

「この必殺技（フィニッシュホールド）は、俺の特訓に付き合ってくれた皆で作り上げて完成させた技だ！そして！この技による勝利を！俺を支えてくれた皆に捧げるぜぇぇぇぇ!!」

そのゼットの叫びを聞いた者達は、不可思議なものを見た。
大技を繰り出さんとするゼットに、ウルトラセブンのアイスラッガーに似たトサカを持った半透明の筋肉隆々な人物の姿が重なり、それに続くようにかの鉄騎超人ブラスターブレードの姿、そしてウルトラマンレジェンドの姿が重なった瞬間、ゼットの身体が一瞬強く輝く。
今、その技（キン肉バスター）は世代と次元を超えて継承された。

「ウオオオォォォ!!」

本来のバスターよりも早く、加速しながら落下していくゼット。これがもう一つの違い、ウルトラ戦士の持つ飛行能力の逆利用。つまり反重力ならぬ加重力を発生させてより落下時の威力を増加させダメージを与えるための技術。
先の念力固定で安定性を、そしてこの加重力落下で威力を増した、

ゼットの改良版キン肉バスター。

『叫べ、ゼット!!お前の必殺技(フィニッシュホールド)の名を!!』

「ゼスティウム!!
バスタァァァァァ!!!」

ドガァァァァァァン!!!

ゼットは尻餅をつく体勢で大地に激突し、ゴブニュはその衝撃によって首折り・股裂き・背骨折りを同時に食らう。

機械であるため痛覚が存在しなかったゴブニュだったが、ゼットにスピニング・トゥ・ホールドから始まる一連の技を各所に極められていたゴブニュの身体は既にフレームレベルで限界に達しており、直前のイグニッションラリアットで崩壊寸前であった。

そして極めつけのこのゼスティウムバスターが起爆剤代わりとなり、火花を出しながら全身にヒビが入り点滅していた頭部のランプが消え無抵抗になる。

そんなゴブニュを拘束していたウルトラ念力と両足を解放すると、ゆっくりとゼットの後方へ倒れていき……

轟音と共に大爆発した。

ゴブニュの爆発に飲み込まれたゼットに対して悲鳴を上げる声が聞こえたが、それもすぐに収まる。

その爆発が沈静化していくと同時にその中からゆっくりとゼットが立ち上がり、その無事な姿を見せた。

そして静かに……しかし堂々と右手を握り拳のまま天へと掲げ……

「ジュウアァァァッ!!」

高らかに勝利の雄叫びを上げた。
これを皮切りに遂に各所から大歓声が上がる。
ウルトラマンゼットは、ベリアルの援護やウルトラメダルの力を借りつつも単独で強敵・ゴブニュ（オグマ）を撃破したのだ。

（皆のおかげで俺は真の初勝利を手に出来た……超師匠、ゼロ師匠、皆……そして大先輩の方々、本当にありがとうございました!!）

自分の為に尽力してくれた者達に心の中で多大な感謝を述べるゼット。
そんな彼を、レジェンドと共に戦った『超人』の先達が笑顔で見守ってくれているような気がした。

○ウルトラマンゼット・ベータスマッシュ
VS
巨大機械人形（メカロイド）ゴブニュ（オグマ）●
（ゼスティウムバスター）

〈続く〉

踊り狂う暴風

ベータスマッシュへのウルトラフュージョンを遂げたゼットの新技ゼスティウムバスターによってゴブニュが撃破された。

これは大きな士気の上昇を齎す。

周囲の想像を超える逆転劇はウルトラ戦士の可能性を示すには十二分とも言える結果を叩き出したからである。

とはいえ、両手を上げて喜びを露わにしているのは光神陣営やオカ研、サーゼクスらトップ陣や生徒会などであり、やはりというか三大勢力の護衛ら（ぶっちゃけ雑兵かそれ以下）には恐怖の方が大きいようだ。

（やれやれ……ゼットさんはその性格上、非道を行うような連中にしか怒りは沸かないようですし、貴方達がやらかしたりしなければ別に問題ないんですがね。少なからずこれから先、問題を起こす自覚があるという点ではそれが無い者よりマシ、というくらいでしょう）

鬼灯は『今後の要注意リスト』にその護衛達を登録しておく。ついで［実力・下の下］と備考を添えて。

同時に、ある事情があってレジェンド相手の通信を指名してきた『総帥』に早速一仕事頼む事を検討する事にした。

……ちなみにコレ、本人が名乗ったＨＮらしい。あちらの世界での最後の仕事として配下や後進のために自らの技術を分かりやすく『超ｔｕｂｅ』で配信しているとの事。

特訓等は厳しいがどれも配下の為を思ってだと分かり、かつ当人がカリスマに溢れているので、正式に全権を配下に譲り自身は一線を退くと公言した時は驚かれたり涙ながらに今までの礼を述べられたりしたようだ。

――正直、向こうの大魔王サタンは彼を見習うべきだと思う――

あちらの閻魔が「もうコイツ本気でシバき倒してくれ」と頭を下げてまで日本地獄に送ってきた、あちら側のサタンを思い浮かべながら

鬼灯は溜息をついた。

（どこでも『サタン』って名前の方は面倒起こすんですねぇ。この世界の然り、あちらの世界然り、地獄然り、あの方の出張していたスダ・ドアカ然り……最後のはある意味被害者ですが。というかあの方の分体の片割れでしたっけ）

レジェンドがサーガ同様可愛がり、何度言っても「父上」呼びを直さなくて結局レジェンドの方が折れてしまったサーガと同等クラスの光神を思い浮かべつつ、残るベリアル、ジード、フーマ、そしてゴジラの方を見る。

長き死闘も決着の刻がいよいよ迫ってきた。

☆

激戦を制したゼットだったが、初めて完全発動した逆境のウルトラパワーを始め大技の連続は身体に来たらしく、片膝を着いてしまう。

カラータイマーが点滅を始め、周囲から小さく悲鳴が上がるがあくまで戦闘継続が難しいだけであり、あとは自分が出る幕は無い。

自分を押してくれた者達のように、自分が彼らを後押しする番だ。

『よくやった、ゼット。残りの奴らはあいつらの仕事だ。お前は休みながらあいつらの戦いを見、そして学べ』

「はい、超師匠……！ベリアル総司令！ジード先輩！フーマ先輩！そしてゴジラ！そいつらとの決着、頼みました!!」

自分が戦えずとも出来る事はある。ゼットはあるシルエットの人物に言われた、相手を尊重し本当に必要な時に支え合う『真・友情パワー』を思い出し、エールを送るのみに留める。

今の彼らに自分の援護は必要ない。彼らならば各々の戦いに勝利出来ると信じて、ゼットはレジェンドと共にそれを見守る事にした。

（ウルトラファイトです、皆さん！）

☆

「フン……何だあの半端者は。たった一体倒しただけでもうへばっているとは」

フーマと戦っているスラン星人は見事な戦いをしたゼットを鼻で笑い蔑んだ。それを聞いたフーマ……いや、彼だけでなく一誠やトライスクワッド、さらにドライグも怒りを覚える。

「おい、今なんつった……！」

「半端者を半端者と言って何が悪い？あれしきの相手に苦戦し、やっと倒せたと思えば限界らしい。あれでジードと同じ遊撃隊とはな」

この言葉に対し、たとえ聞こえずとも一誠達はフーマの中から文句を言わずにはいられなかった。

『んだとヒョロヒョロ野郎！お前なんてカサカサ動き回ってるだけで、しかも最初は不意打ちだったじゃねーか！』

『私も滾るほどの立派なファイトを見せてくれたゼットをここまで侮辱するなど、先輩として私のウルトラマッスルが許せんと言っている！』

『確かにまだウルトラフュージョンの力を借りているけど、あいつはしっかり一人で戦い抜いたんだ！』

『今戦っているフーマとお前同様に、同じ土俵で正面からぶつかって勝利をもぎ取ったんだがな。というかお前があのゴブニュとか言う奴相手に勝てるとは思えんぞ』

一誠、タイタス、タイガが立て続けに抗議し、ドライグの言葉に3

人とフーマはうんうんと頷く。一誠達の声はスラン星人に聞こえていないため、フーマの一人頷きは少々絵柄的に珍妙だが、この際それは置いておこう。

「そもそもお前じゃ今のゼットには勝てねぇよ。もちろん俺にもな。ジード先輩やベリアル総司令なんて以ての外ってやつだ。特にベリアル総司令には簡単に一撃もらってぶっ飛ばされてたし」

「黙れ！いい加減その減らず口にも飽きてきたところだ……さっさとケリをつけてやろう！」

「そのセリフ、まんま返してやるよ！来いやオラァ！」

言葉遣いがいつもよりさらに乱暴になっている感じのフーマだが、それだけ後輩をバカにされて頭にきているというわけだ。

ゼットは限界に近く、戦闘続行こそ厳しいが自分達を信じて見守ってくれている。

（あいつは旦那はもちろん殆ど年齢が変わらない俺や、年下のタイガにも先輩って言ってくれるし、ちっとばかし失言はあるが空気も読める。根性は間違いなく一人前のあいつなら援護くらいやれるだろうに今もこうして俺らに任せてくれてる。ならそれに応えてやるのが先輩ってモンだろ！）

後輩（ゼット）の信頼に応えるべく、フーマは目の前のスラン星人を見据え、ある戦法を取る。

（コイツ、さっき戦い始めて気付いたけど……確かに速い。速いんだが……）

「この速度の戦い中に考え事とは余裕だな若造！」

「ああ、余裕だよタコ」

「何!?」

フーマの馬鹿にした言い方で頭に血が上ったスラン星人だが、直後に軽く体が浮いたかと思えば目の前に地面が映った。

「ガハッ!!」

「テメーの動きは直線的過ぎるんだよ。俺がお前の動きと同じ速さでしゃがんで足払いしただけでこのザマだ。体重の軽い俺だからともかく、パワー型の旦那や今のゼットにやられりゃ速度との兼ね合いで骨がポッキリいってたかもな」

そう、やった事は簡単。フーマがその場で屈み、スラン星人を軽く足払いしたのである。それだけ。

「ぐっ……だが、一度やったくらいで……!?」

スラン星人はフーマに振り返りながら起き上がろうとするが、目の前にはフーマが自身に跨るように背を向けて立っていた。

これ幸いにと先刻同様に不意打ちしようとするスラン星人だったがある事に気が付く。

フーマが、スラン星人の足を自分の足を絡ませながら掴んでいることに。

「貴様、何を……!」

「見様見真似でマトモに極まらねーだろうけどよ、俺に効きそうな技ならテメエにも効くってことだよなあ!!」

フーマが狙っていた技、それはゼットがゴブニュに極めた技。

「くらいやがれ!スピニング・トゥ・ホールドもどきぃ!!」

ガッシイイイイッ!!!

「ぎゃあああああぁぁぁ!!」

高速移動を得意とするスラン星人にとって足へと関節技(サブミッション)は正に致命傷を受けるに等しい技だ。

バランスは取れなくなるし、持ち前の長所が潰されるという事態に陥り、一瞬で窮地に立たされる。

この叫び声がそれを物語っていると分かるだろう。

「確かこう!そんでもってこうだ!」

「がぁぁぁぁ!!やめっ……ぐぎゃぁぁぁ!!」

『……ゼットと違って適当にやってるからか雑に見えて逆にさらに痛そうだな……』

『違うぞフーマ!あの技は回転をかけるんだ!』

『え!?タイタス、ゼットさんのあの技の原理分かったのか!?』

『筋肉(マッスル)で理解した!』

『『何だそれ!?』』

『まあ、効いてるんだから別にいいけどな』

一誠とタイガはタイタスの理解方法に疑問が浮かんだが、ドライグはもはや諦める事にした。

そんな彼も一応基本はテコの原理っぽい事だけは理解出来たので、パワー型でなくともやり方さえ分かればスピード型であっても使える技だと認識する。

(スピードタイプのフーマでさえこの威力……これをゼットに伝授したレジェンドが本気で使えばどうなるか、考えたくもないな)

生涯足が使い物にならなくなる可能性が濃厚。そこまで考えてドライグは止めた。

――オーフィスが真似しませんように――
本気で切実な願いである。しかし無意味だ。そして手遅れだ。先日早速犠牲者が出ている。
それはともかく、しっかり修得したゼットであってもゴブニュに外された以上、付け焼き刃の技術しかないフーマも外される事は予想に難くない。

「ぐぬぅ!!」
「うおっ!?やっぱり外されたか……でも結構キテるみたいだな、ダメージ」
「お……おのれ……!」

フーマが滅茶苦茶にかけたせいか、外せはしたものの立つことさえままならないスラン星人。
かけられた方の足は膝をついたままでプルプルと震えながら構えている。

「へっ、偉そうな事言ってた割に情けねえ姿だな!けど俺は容赦しないぜ!」

フーマはそう言うと空中に飛び上がり、今度はそこで身体を静止させつつ高速移動しながら攻撃を仕掛けた。

「行くぜ!光波手裏剣!」

いよいよフーマも自身の必殺技を使い始める。その中でも得意技がこの光波手裏剣だ。
エネルギーで構築されているとはいえ形状や撃ち方は正しく忍者の手裏剣そのもの。
空中を縦横無尽に高速移動しつつ的確にスラン星人を放って放たれるそれは少しずつダメージを蓄積させていく。

「ぐっ……おおお!?」
「ホラホラどうした!?散々若造若造言ってたくせにその若造より戦闘技術も戦術の幅も無いんじゃねえか!?」
「調子に……乗るなあっ！」

スラン星人は苦し紛れに光弾を放つもそれはフーマの身体をすり抜ける。

「!?」
「言ったばっかだろ、技術がねえって。実体のない高速移動による残像の『分身』に実体がある『影分身』を紛れ込ませてんだよ。今お前が攻撃したのは分身の方だ。影分身に当たればその影分身ぐらいは消えたかもな」
「そんな、馬鹿な……」

速度も技術も、フーマがスラン星人を完全に上回っている。足もまともに動かせず、万に一つの勝機も消えた。

「これでお前の勝ちは無くなったって分かんだろ。おとなしく母星に帰るなら後ろから撃つようなマネはしねぇよ」
「情けをかけるつもりか……！そんな事をされるくらいならば討ち死にの方がマシだ！」
「いや討ち死にって……はぁ……今時そんなバカなプライドなんざ流行らねーっつーの」

スラン星人の言い草に溜息を吐いて肩をすくめるフーマ。もうほっといて良いんじゃねーかと思い始めたところでスラン星人は新たな行動を起こす。

「……そうか、何も貴様を直接狙わずとも当てる方法はあったな」

「あん？」
「貴様の性格は大方理解出来た……一見不良じみているがその実、情に厚いタイプだ。そしてそういうタイプは……」

スラン星人が再び光弾を発射しようとする。しかし、そのまま狙おうとフーマには当たらないし、何かに反射させたりするわけでもなさそうだ。そもそも、フーマを狙っているにしては微妙に照準がズレている。

（あいつの光弾の威力じゃ硝子とかに反射させたりは無理だろうし、それ以前に普通の硝子に反射させられるような威力じゃ当たってもダメージなんてたかが知れてる。じゃあ何が……）

フーマは少し考えてある事に気付く。

（もしかして、俺が今立っている位置は……ッ!?）

後ろを向くと、少し離れた場所……フーマからほんの少しだけズレた、スラン星人の光弾の軸線上にリアス達の姿が。

「そういう事かよクソ野郎!!」
「やっと察しがついたか。だから貴様は若造なのだ！」

容赦なくスラン星人の光弾がリアス達へと連射された。
フーマは高速移動しながら何発かは弾くものの、弾速がそこそこ早かったのもあり弾き切るのは不可能と悟り己の身体をリアス達の盾として立ち塞がった。

「グッ！ウアアアッ!!」
「フハハハ！私の足を封じたつもりが貴様は足手まといどものおかげで身動きさえまともに取れなくなったようだな！」

――昂揚しているスラン星人は気付かなかった。
先程自分が言った『情に厚い』というフーマにとって地雷を自ら踏んでしまった事に。

『フーマ（さん）（君）!!』

身を呈してリアス達を庇いスラン星人の光弾を何発も受けて片膝を着いたフーマを心配するオカルト研究部ら。
卑劣な手段でフーマを討とうとするスラン星人に杏寿郎らも怒りを顕にする。

「先程ゼット殿に倒されたゴブニュとやらは、命令を受けた機械だったかもしれないが倒すべき相手のみをその目に映し全力でぶつかっていった！死力を尽くした姿は敵ながら天晴というべきものだった！あの者にはそういう気概さえ無いというのか!?」
「パムー！パムー！」
「マックスさんでしたっけ?その方へ復讐するためとはいえ姑息な手段が好きなんですね、あの人」
「戦略としては正しいが、人道的ではないな。地球人の人道を宇宙人全体に当てはめるのも違う気はするが」

ボロクソに言われているスラン星人だが仕方ない。
ゼットとゴブニュの真っ向勝負を見せられてからのこの戦法は悪印象しか残さないだろう。
ゴブニュは首部を曲げたりはしたがトリッキーな戦術、で済むレベルであり初見殺し程度だった。
対するスラン星人のそれは人質を取るに等しい行為であり、まんま悪の組織なんかが使う戦法である。

「なんか、フーマ変」
『……え？』

オーフィスがボソッと言った一言で全員がフーマを見ると、痛みを堪えているかと思われたフーマが身動き一つせず怒りのオーラを放っている。

『……本来ならばこの台詞、もう暫く後の気がするが……スラン星人、お前は選択を間違えた』
『ど……どうしたんだよドライグ？』
『……イッセー』
『……これは終わったな』
『へ……？タイガ、タイタスまで何なんだ？』
『『フーマがキレた』』
『え』

その瞬間、スラン星人が錐揉み回転しながら吹っ飛んだ。

――何が起きた？何をされた？――

吹っ飛ばされたスラン星人はあまりに急な出来事に理解が追いついていかなかった。
しかし思考を始めた次の瞬間、視界が暗転しさらなる激痛に見舞われる。
「ゴガァッ!?」
「取り消せよ、足手まといって言ったこと」

正体はフーマの膝。仰向けに吹っ飛んでいる最中のスラン星人に

対し、ニーストンプをブチ込んだのである。
しかも、普段に比べやけに静かというか落ち着いている。
底知れぬプレッシャーにスラン星人は恐怖するも、それを悟られまいと虚勢を張った。

「な……何を言う……！ただ的になるだけの連中など足手まとい〝い〟っ!?」
「取り消せっつったのに何繰り返してんだテメェ」

ギリギリとスラン星人の首を右手だけで締めるフーマは、普段からは考えられない程の力を発揮している。
さらに、いつの間にか左手にはタイガやタイタスも使えた『赤龍帝の籠手』が発現されていた。

『Ｂｏｏｓｔ！』
「もう一度言うぞ、取り消せよ」

バギッ!!

「ごげっ!!」
「卑怯な手しか使えないようなヤツの分際で」
『Ｂｏｏｓｔ！Ｂｏｏｓｔ！Ｂｏｏｓｔ！』

ゴッ！ベキッ!!ドゴッ!!!

「お……おぐっ……」
『Ｂｏｏｓｔ！Ｂｏｏｓｔ！Ｂｏｏｓｔ！Ｂｏｏｓｔ！』
「鬼って奴らとの戦いで自分達に出来る事を精一杯やったアイツらを……テメェの物差しで足手まとい呼ばわりしてんじゃねえぞオラァァァ!!!」

バガァァァン!!!

フーマの強烈を超えて激烈な一撃でスラン星人は頭部を拉げさせ、さらに衝撃で地面を大きく陥没させた。

それを見て一誠はもちろん、一部を除いた他の者も唖然としている。

ハッキリ言ってパワー型でもそう出せるレベルの威力ではない。それをスピード型のフーマが簡単に叩き出したのは異常とも言える事態だ。

『……フーマには恩人にして恩師と呼べる人物がいたそうだ』

『え？』

『ウルトラマンとして覚醒出来たのもその人物のおかげだと言っていた。それまでフーマは両親を失い一人だったと聞いている』

『ああ……その人物は、とある事情から共に星間連盟の砲撃を受けた瀕死のフーマを救うために傷ついた身体でＯ―５０の戦士の頂の頂上へと登り、フーマの才覚や人柄の良さをアピールしたみたいだけど、『オーブの光』はそれに応えなかったって』

『そして再度二人を狙った星間連盟の砲撃に飲み込まれたフーマとその人物のうち、フーマはウルトラマンとして覚醒したものの……その人物の姿はどこにも無かったそうだ』

『そ……それって……！』

『その人物は未だ見つかっていない。フーマは一人じゃなくなった後、また一人になった。私とタイガに出会うまでな。故にフーマは出来た友人に対して深い親愛の情を持つ。そして今の自分はその人物を失った時の、無力だった存在ではないのだと示し、何があろうと守ろうとする。その人物が、命を賭してフーマを守り抜いたように』

タイタスが語ったフーマの過去の一端は壮絶なものだった。タイガには家族がいるし、タイタスも仲間がいるが、フーマは殆ど孤独な

人生を歩んでいたのである。
つまり、先のリアス達を狙った光弾が過去に自分達を狙って放たれた砲撃と重なって見え、フーマはスラン星人に対してブチ切れたのである。

「テメェみたいな奴を生かしておく気はねぇぞ。あん時、俺とゲルグを狙いやがった星間連盟の連中みたいな考えの腐れ外道なんざに慈悲なんざかけてやるか!!」

ゲルグ――それが彼にとってかけがえのなかった人物の名なのだろう。
ついでにその星間連盟、あろう事か他所の星の視察に来ていたレジェンドまで砲撃して爆殺しようとした事で『自分達の目的の為に周囲の被害も省みない外道共』とレジェンドの逆鱗に触れ、スパークレジェンドではなく物理的に粛清された。つまり拳一つで壊滅させられたのである。
……よくよく考えるとその星間連盟、やってた事が三大勢力や禍の団と似ている気がするが……。

ボロボロでまともに動くどころか顔面を徹底的に殴られて言葉さえろくに発せないスラン星人に対し、フーマはベリアルから届けられた新たなウルトラタイガアクセサリーを使用するべく一誠に告げた。

「イッセー!あの野郎は絶対に許さねえ!見逃してやったとしても同じ手でリアス達を狙うかもしれないからな!」
『部長達を!?そんな事させるわけにはいかねぇ!』
「へへっ!やっぱり俺達気が合うな!そこでベリアル総司令が届けてくれたアレを使う!」
『アレってさっきのか!どうすりゃいいんだ!?』
『ええっと確か……そうだ!イッセー、まず俺達に変身する時と同じ

ようにタイガスパークを待機状態に！』
『こうか！』
『カモン！』
フーマの提案を聞き、タイガの説明通りタイガスパークを待機状態にするイッセー。
「あの野郎に本気で吠え面かかせてやる！イッセー！左手首を前に見せつけるようにしつつ……『マックス』って頭の中で念じるんだ！」
『『……え？』』
『わかった！マックスだな！』
一誠はともかくタイガとタイタスは目が点になった。
――ちょっと待った、ここはニュージェネレーションの先輩達のじゃないの!?――
――いやそれ以前にマックス先輩のあるの!?――
そんな事を思っている二人だったが、インナースペース内で一誠が気合いを入れポーズを取ると、左手首にかの文明監視員の一人にして最強最速の二つ名を持つウルトラ戦士、ウルトラマンマックスの頭部と胸部を組み合わせたような小さなブレスレットが装着された。
『『えええええ!?』』
『うおお!?何か出た！つーか二人とも何で驚いてんだ？』
『いやだって俺とタイタスが受け取ったのはニュージェネレーション所属の先輩達のだけだぞ!?』
『私だってあるならジョーニアスやエレク、ロトらＵ４０のやつが欲しかったんだ！』
「あ、一足先にリアス達に届いた直後にくすねといた」
『『『『うおぉぉぉい!?』』』』

あまりの爆弾発言に一誠とドライグまでツッコミを入れた。リアスの方も急いでケースを開いてよく見ると、まだ完成していない物の部分は纏まって空いていたが完成していた物の中でマックスの部分のアクセサリーだけが無い。

恐るべき技術、いつの間にどうやって取り出したんだフーマ。

「ま、別に良いだろそんな事。さっさとあの野郎に終止符を打ってやろうぜ！」

『そ……そうだな！で、次は!?』

『えっ!?俺!?ちょ、ちょっと待ってくれ！えっと……』

どこからともなく『タイガスパーク取扱説明書』を取り出してページを捲るタイガ。

なかなかシュールな光景だが……それ、書いたのはタロウなのか、それともトレギアなのだろうか……。

『わかったぞ！ブレスレットが上になるように左腕を前に出して、それに右手で触れるんだ！』

『よし！左腕をこうして……ブレスレットに右手で触れる！』

『マックスレット！コネクトオン！』

インナースペース内の雰囲気が変化したのと同様に、現実世界でもある変化がフーマに起きる。

「あれは……！文明監視員の中で『最強最速』と呼び名も高いマックスさん！」

「最強最速!?何か凄い肩書出て来たわね!?」

ブチ切れフーマを見て、例え限界でも自分がリアス達を守らなくて

はという決意を固め、何とか盾にはなろうと近くに来ていたゼット（とレジェンド）が、フーマに重なるように一瞬現れた幻影のウルトラマンの説明をする。

「いや、マックスさん自身は文明監視員の仕事に誇りと愛着があって移籍とか考えてないみたいですが、ゾフィー隊長とかは是非宇宙警備隊にと何度か勧誘してたぐらい凄いお人なんですよ！何でも空を埋め尽くすほどの影分身をしたり、一番有名な武勇伝と言えばやはり超巨大化！その大きさといったら最大でなんと９００ｍというウルトラビッグサイズになった超弩級ウルトラマンなんでございます!!」

『９００ｍ!?』

ゼットも興奮気味に話すが、ほんの少しだけとはいえマックスの凄まじさを聞かされ驚愕するオカ研＋α。特に超巨大化は余程でない限り大型戦艦をも凌駕するサイズだ。ちなみに最大パワーでなくても十分なパワーがあれば３００ｍくらいに超巨大化出来る。これでも半端なくデカい。

「そんな方の力を借りたフーマ先輩の必殺技、やはりマックスさんの最強最速を体現したものに間違いないはず！」

自信満々なゼットの言葉に希望を抱きつつ、リアスらもフーマの勝利を祈りつつ見守る。

「き……さまっ……！マックスの……」

「お前のリクエストに応えて、マックスさんの力を借りた一発をお前に叩き込んでやるよ！覚悟しな！」

フーマの右腕に八つ裂き光輪に似た光の輪が発生し、スパークしながら見る見る巨大になっていく。

ゼットやオカルト研究部らも「おおおお……!?」と少しずつ見上げるように首を曲げながら声に出して驚いていた。
ベースは極星光波手裏剣というフーマの十八番だが、マックスの力を借りた事で構えているだけで地面が大きく削れる程に巨大化し、さらに回転速度も早まっている。

「ひっ……!」
「往生しやがれ！

極大光波手裏剣!!!」
ズギャアアアアアッ!!!
「ぎゃあああああ!!」

フーマがマックスの力を借りて放った、１５０ｍにも及ぶ『極大光波手裏剣』は地面さえ大きく削りながら身動きの取れなかったスラン星人を中央から真っ二つ、いや……両腕、そして両足の半分を残して完全にかつ瞬時に削りきってしまった。
この時点でスラン星人は絶命しており、身体の本体が無くなった事で両腕は地に落ち、半分程残っていた両足も自然と倒れ四肢も爆発。
フーマの完全勝利である。

「へっ！所詮外道戦法しか使えねえ奴なんざそんなモンって事だよ！」
『なあ……今のって切ったのか？抉ったのか？削ったのか？早くてえげつなくて分かんねえよ……』
『相棒、考えたら負けだ』
『他のやつってどんなの届いてるのかな』

『ベータスマッシュレットは無いのか？是非とも『タイタスバスター』がやりたいのだが』

思い思いの発言をする一誠＆トライスクワッド＆ドライグ。タイタスのそれはプラニウムバスターだと技名が被るから仕方ない。というかタイタスなら特訓次第で普通に出来るようになりそうだが。

漸くフーマの怒りも収まり、色々衝撃的なものを見せられて暫く言葉を失っていたリアスらもフーマが勝利した事を理解して喜びの声を上げた。

残るは最大最強の敵、ビオランテのみ。

それと戦うジード、ベリアル、そしてゴジラの勝利を信じフーマもゼット同様にリアスらの護衛へ回る。

長き夜の死闘に、遂に終止符が打たれようとしていた。

〈続く〉

星を空に……

ゼットに続き、フーマもまた手にした新たなる力で勝利を掴み取った。

神衛隊の増援に始まり、各所で逆転劇を展開して強敵を打ち倒してきた今回の戦いも残すところはビオランテのみ。

しかし、レジェンドの誇る最強カプセル怪獣の一角であるゴジラの細胞を有するビオランテは他の相手とは比べ物にならない強敵だ。

だが同時にそれを相手取るのも銀河遊撃隊総司令官でありウルトラ戦士最強クラスの実力者ベリアルとその息子のジード、そしてビオランテが有するG細胞の大元の怪獣王ゴジラ。

ジードがマグニフィセントへのフュージョンライズを果たした事でより戦力は充実。

光神陣営や三大勢力が息を呑んで見守る此度の戦いを締めくくる最終決戦はまさにビッグファイトの名に恥じない凄まじいものであった。

ベリアルが先行し、ジード・マグニフィセントがそれに続き、ゴジラが殿を務める。

ゴジラは元よりマグニフィセントにフュージョンライズしたジードも普段より体重が増加しているため、体重こそ重いが筋肉質なだけで基本形態なベリアルが一番機動力が高く攻撃力も申し分ないからだ。

「ヌゥエリャア!!」

ベリアルは錐揉み回転しながらジャンプし、ビオランテの頭頂をも超え真上に到達すると棒高跳びに似た体勢になってリライザーによる射撃をビオランテの頭部へ浴びせた。

パワー型の戦士でありながらアクロバティックな戦法を披露する

ベリアルに周囲から感嘆の声が上がる。

「デェァァッ!!」

それに追撃するようにジードはビオランテの胴にギガバトルナイザーを横薙ぎに叩き込み、その勢いを利用しナイザーを軸にして飛び回し蹴りをビオランテの横っ面にお見舞いする。

触手による攻撃はそのまま倒れ込む事で回避し、ネックスプリングで起きつつ同時に触手をナイザーによる射撃と打撃で突き放す。

さすがパワー型のベリアルの息子だけあり、攻撃・防御特化の形態での戦い方に引き出しが多い。ゼロのカプセルの効果も相まってより高いレベルにあるのだろう。

「グゥァァァオォン!!」

そしてゴジラ。スピードは殆ど捨ててズバ抜けた攻撃力と異常なまでの体力で攻め込む。

アーシアに回復してもらい、コジローによる『何か』のチャージを受けてから背鰭が赤く発光しており、放射熱線を吐かずに進撃している。

しかし前述の通り攻撃力と体力の凄まじさが単純にそのまま武器であるゴジラは迫りくる触手を、文字通り千切っては投げ千切っては投げを繰り返し確実にビオランテとの距離を詰めていく。

ほぼ零距離に持ち込んだ場合、植物系相手に絶大な威力を誇る放射熱線を使えるゴジラはビオランテにとってベリアルやジードより危険な相手だ。

そして何より、G細胞を持つもの同士引き寄せ合っているからかベリアルやジードに比べ、ビオランテのゴジラへの攻撃が苛烈である。

「分かっちゃいたが俺達よりもアイツに対しての敵意が段違いだな。最強は一人でいいって感じか？」

「かもね。ゴジラ、二つ名が怪獣王だし……王は二人も要らない的な？もしくは……それとは全く別の何かがあるのか」
「いずれにせよここで考えたって埒が明かねえ。分かってるのはコイツを放置してたら危険だって事ぐらいだ。話が通じねえ相手に押し問答してもこっちが知りたい事の答えなんざ返ってこねぇしな」

ベリアルの言う通り今のビオランテはあの時と違い凶暴性が明確に現出し、闘争本能で動いているようなものだ。意思疎通はほぼ無理と言って間違いないだろう。

『フン！混ぜ合わせてオリジナル感出そうが結局はオレ様の劣化コピーだろうが！とっととブチのめして終わりだ！』
「オイこれどっちが悪役か分かったもんじゃねーぞ」
「劣化コピーって言うけどサイズとか重量感はあっちの方が圧倒的だよね……」

ベリアルとジードのツッコミは最もである。
思考がどっかの爆破小僧と似通い過ぎだがとりあえずそれは置いておこう。
ビオランテは巨大であるものの、移動は出来るが小回りが効かないという弱点がある。
それをカバーするために触手があるが、ゴジラには問答無用で引き千切られ、ベリアルとジードにも対応されている。
やはり3対1、加えて誰もが実力者というのが大きい。
このまま押し切る事が出来れば――そう思った時、突如ビオランテの腹部が発光し……

「ギシャアァァァァ!!」
「ウオッ!?」
「ウアッ!?」
「ガアァァァッ!?」

なんとビオランテは放射樹液ではなく放射光線を発射してきた。
予想外にも程がある上、威力も相当なものでベリアルは咄嗟に回避出来たがジードは足元を狙われバランスを崩し、ゴジラに至っては正面から直撃し倒れ込んでしまう。

「ちっ！そういや俺と師匠とジードで行った世界で『ソーラービーム』とかいう技があったな！ソレと同じ原理か！今は夜だけどよ！」
「寧ろあれは『はかいこうせん』レベルだよ！しかも極大サイズの！第二射までに時間がかかるのも一緒みたいだけど！」
『んな事どうでもいいんだよ！クッソ痛ぇなこの野郎!!』

あの巨大戦艦の主砲に匹敵する光線を直撃しておきながら痛いで済むゴジラはさすがのタフネスぶりというべきか。
ジードの言う通り、先の光線は元々ビオランテとは然程技や能力として相性が良くないのか、再チャージに時間を要するようだ。

「ソーラービーム？はかいこうせん？」
「とどのつまり『アレ』の光子力ビームみたいなものか！」
「しかしロージェノム様、あれと比較するのはさすがに厳しいかと」
「……？我、分からない。あれの光子力ビームって何？」

そのうち分かる、とロージェノムとヴィラルに言われ渋々引き下がったオーフィスだが、正直知らないままの方がよかったと思う事になる。

「強いて言うなら光合成を利用したものか？いやしかしあのウルトラマンの言うように昼間ならいざ知らず今は夜……もしや体内にそういった器官が存在しているのか!?」
「狛治さん、そこまで真面目に考えないで下さい」

「俺もある一つの可能性を考えてみた！そう！きっとあの怪獣も全集中の呼吸を会得したに違いない！」
「なるほど！」
「そうか、そういう可能性もあるか……！」
「煉獄さんの意見も無いとは言い切れませんけど、呼吸法で口から光線出せるようになるなら鬼☒隊の隊士皆が光線吐きながら日輪刀振るってますよ」

何だそのバケモノ組織。鬼よりよっぽど恐ろしい。
しのぶは光線ではなく溜息を吐きながら杏寿郎と、それに同調して納得の表情のカナエと厳勝に頭を抱えた。

「下手に考えると頭パンクしそうなんで、もう『ウルトラ不思議な事が起こった！』でいいんじゃないですか」
「ゼットさんの意見が一番分かりやすくて納得出来ますね。議論は後回しです」

ゼットのアホの子属性がまたも役に立った。今日のゼットは色々と輝いている。

「にしてもあのデカブツ、樹液と光線を交互に出せるとしたら厄介だぜ。ゴジラは痛いで済んでるけどさすがに何発も食らったらヤバいだろ」
「確かにそうよね。だとすれば何とかして発射を妨害するか、それとも早期決着を狙うかしかないわ」

フーマの意見にリアスも同意する。
ちなみにギリギリで避けてカウンターという案も考えたが……

「ゴジラ、あんまり避けること考えない」

付き合いの長いオーフィスの一声でたち消えた。
そもそもギリギリで、という点でベリアルはまだしもマグニフィセントのジードがやれるかどうか厳しい。
「でもゼットさんとフーマさんは私達の護衛をして下さってますし、神衛隊の方々も三大勢力陣を護衛して下さってますわ。最も……先程から本来の護衛の方々が右往左往するばかりで役に立ってないみたいですが」
「何でこんな時にお兄様は眷属をルミナシア以外に連れて来ないのよ……！」
「でも、生徒会の皆さんやガブリエルさんとか、そういう方達は何とかしようとしてます」

呆れ気味に言う朱乃は勿論、リアスもダイブハンガーにいる束と同じ意見だった。
かつての自分の考えが色々甘かった事を知って、ちゃんと先達たる光神陣営の者の意見を聞きながら学び、成長しているからこそである。
トップがトップだからか、ガブリエルもそうだがソーナを始めとする生徒会の面々など中間管理職扱いの者達にシワ寄せが行っており不憫に思えた。
「……父さんとシックルさんに脅してもらうのはどうかな？」
「「裕斗（君）（先輩）それはやめて（下さい）」」

七星剣の中心人物とそれの同格のギルドガードの長による脅迫とかさらに三大勢力の連中が使い物にならなくなりそうだ。主に恐怖で。
「結局、今はリクさん達に任せるしかないのね……ちょっと悔しいわね」

「我、ずっと気になってる」
「何かしら、オーフィス？」
「放置親は？」

放置親――オーフィス命名によるカテレアの事だ。
一瞬何の事か分からなかったが、即座に思い出して全員軽く吹いた。

「もうオーフィスの中では放置親で認識されてるのね」
「けれど確かに見かけてません」
「一応警戒は怠るな。私から見て大した事はないが、ああいう輩は姑息な事に頭が回る」
「……そんな簡単に大した事ないと言えるのはこの場で師範くらいでは……」

ゼノヴィアの抗議も何のその、厳勝は再びジード達へと視線を戻す。
彼らは既に思考を切り替え、再びビオランテを打倒すべく立ち向かっていた。

先程の様子からベリアルはある結論を導き出していた。

（奴が光線を吐き出したのは奴の腹が光ってからだ。つまり仕掛けがあるとしたら、あの核みたいなのがある腹ってわけか。おまけに再発射には時間がかかるときた。ならあそこに強烈な一撃をぶち込めばチャージ遮断は可能じゃねえのか？）

大抵特異な怪獣というのは特異な器官を体内に有する事が多い。ビオランテもきっとそのクチなのだろう。
ただでさえ見た目とは裏腹に触手使って走ろうとしたりするなど

予想外過ぎる行動が多いのだ。

（どのみちトドメはアイツの役目だ。俺とジードの役割はあの野郎を可能な限り弱らせる事、ジードならともかく俺は必要以上に出しゃばらなくていいだろ）

そうと決まれば取る戦法も決まった。

ベリアルはジードとゴジラに声をかける。

「よう、お前らコンディションは維持できてるか？」

「まあ、なんとかね」

『くっそ……まだちっとばかしビリビリしてやがるが問題ねえ。それどころかおかげであの野郎に対してアレを全力でブチ込めそうなテンションになってるぜ』

ゴジラの言うアレとはおそらく彼の切り札だろう。

聞いた話ではゴジラは放射熱線を吐くとき背鰭が青く発光するそうだが、今は赤く発光しさらにその状態になってからは一度もまだ吐いていない。

きっとこの闘いの決着をつける一撃になるだろうというのは容易に想像出来る。

「なら十分だ。俺が立てた作戦の説明をするぞ。まずは俺とジードが奴に接近して奴の腹を攻撃し光線を吐くのを妨害しつつ、ある程度ダメージを与えたら離れて逆に光線を奴の腹にブチ込む。この時、俺とジードは奴の斜め前……文字で表すなら『Λ』になるように位置取る」

つまりは

●ビオランテ

○ジード　　○ベリアル

○ゴジラ

だいたいこんな感じである。

ジードとベリアルは逆でも構わない。

「当然奴の真ん前が空く事になるから、俺達の光線が命中した後にそこをゴジラが直進して奴をお前の射程圏に収めてから、お得意のアレとやらを叩き込んでやりゃあいい。タイミングとしては俺とジードの光線が直撃してからすぐにお前が奴の眼前に到達出来る感じが望ましいが、そこはお前に任せる」

「最後が一番シビアだね」

『上等だ。樹液の方を吐いてくる可能性はあるがあのくらいならオレ様に効きゃしねえ。そっちは心配すんな』

どうやら当たった時に煙は出ていたがさして効果は無かったらしい。

だとすれば尚更注意すべきはあの光線だ。

「メンツと作戦内容的に『チャンスは一回』ってワケじゃねぇが、こちとら体力とかエネルギーが無限にあるワケでもねぇからな。一発で成功させてケリつけるぞ」

「了解ッ！」

『ハナっからそのつもりだ。ヘマこくなよお前ら！』

「「そのセリフ、まんま返す!!」」

言うやいなや、ベリアルとジードはビオランテへと駆け出す。

対するビオランテもさらに触手を増やして応戦するが機動力はそれほどでなくとも動作自体はそう遅くないジード・マグニフィセントはナイザーを器用に振り回しつつ、パンチやキックによるカウンターを的確に触手へ打ち込んで払いながら接近。

ベリアルの方は迫りくる複数の触手の隙間を縫うように身体を捻りながら小さくジャンプで回避しつつ、リライザーによる射撃で触手

を吹き飛ばしながら肉迫する。

「「デリャアアア!!」」

「グオォォォ!!」

ビオランテまで接近した二人はそれぞれの武器を腹部へと叩きつけた後、キックを叩き込みながら離れ、さらに先程キックした場所へと武器を構えて射撃する。

いずれも寸分違わぬタイミングで左右対称同時に行われており、まさに『コンビネーションとはこういうものだ』と理想の手本と呼ぶに相応しい動きだった。

しかも作戦では「光線を吐くのを妨害」としか指定していない。つまり以心伝心というか、互いが互いのする事を自然と理解し合えていたからこそ成し得た連携戦法だったのである。

「やっぱり腹部への攻撃はさっきの光線を遅延させるのに有効だったみたいだ……！父さん！」

「よぉし、次の一撃で俺らは〆だ！最後はゴジラに任せるぞ！出し惜しみ無し、残りエネルギー全部ブチ込む気でブッ放せ!!」

二人はそれぞれ両手の拳を打ち付けてエネルギーを解放する。すると解放されたエネルギーが二人の両拳からスパークし、握り拳のまま両腕を左右へと開くに連れてスパークがより激しくなっていく。

ベリアルは青の、そしてジード・マグニフィセントは緑のスパークを拳のみならず両腕から発生させながら、互いに顔を見合わせて頷くと先にジードが動いた。

「ビッグバスタウェイ!!」

左右に開いた両腕を一回転させながらL字型に組むと、時折虹色のスパークを発しつつエメラルドグリーンに輝く凄まじい光の奔流が

ジードの右腕から放たれる。
そしてジードがビッグバスタウェイを放つ直前にベリアルも同じような動作を行っていた。
ただし、発射体勢はＬ字型ではなく、十字に組んだ所謂スペシウム光線に代表される体勢。

「ボルティウム光線!!」

自身の得意技の一つである『デスシウム光線』を闇のベリアルへ完全に譲渡し、光のベリアルがウルトラの父やゼロの協力を得て編み出し、ジードに名付けられた新たな必殺技。
ベリアルがジードよりも少し遅くに発射したのはボルティウム光線の光線速度と貫通力がビッグバスタウェイに比べて圧倒的に上だからだ。
７７万度に及ぶビッグバスタウェイに対し７０万度と威力自体は一歩劣るものの、電気の力で弾丸を高速射出する『電磁銃（レールガン）』と同じ原理で、ベリアルが得意とする電撃技を組み合わせ放たれるそれは相手の回避を許さぬ超速と、その速度が生み出す一点集中の貫通力によっていかなる防御も『木っ端微塵』ではなく文字通り『ブチ貫く』光線なのである。
その超速故に、着弾タイミングを合わせるのは至難の業でありベリアルの技量をもって漸く合わせる事が出来るレベル。
この為、ベリアルはジードのビッグバスタウェイの光線速度を計算した上で加える電気エネルギーを調整し、同時着弾タイミングを瞬時に導き出してボルティウム光線を放ったというわけだ。
上記の理由から同時発射の際、合わせるのは基本的にベリアルの役目である。
一度、ティガがかなりの速度を誇るスカイタイプのランバルト光弾で合わせようとしたが、ベリアルとティガが同時に発射したにも関わらずボルティウム光線にだけ貫かれて相手が爆散。
これだけでどれほどの光線速度か理解出来るだろう。

閑話休題。

ジード・マグニフィセントのビッグバスタウェイとベリアルのボルティウム光線がほぼ同じタイミングでビオランテの腹部に着弾する。

ビッグバスタウェイによって腹部を守る蔦のようなものは木っ端微塵にされ、その瞬間無防備になった腹部をベリアルのボルティウム光線が凄まじい勢いで貫通し、そこから樹液らしきものが噴き出すと同時にビオランテと触手は緑の体液を吐血の如く吐き出した。

「よし、効いた！効果は抜群だ！」

「なるほどな……樹液を何かの方法で腹の中で光線に変換してたってわけだ。何にせよ俺達はやるべき事はやった、後はしっかり締めな！ゴジラ！」

『上出来だぜ爆裂親子！トドメはオレ様に任せとけェ!!』

何だ爆裂親子って、とベリアルとジードは揃って思っていたが、当初の予定通り二人の光線が直撃した時点でビオランテのすぐ近くまで来ていたゴジラは、二つの光線が収束すると即座にビオランテに組み付く。

どうやら腹部はビオランテにとっても重要な器官だったようで相当弱っていた。

「グ……ウゥゥゥゥゥ……！」

『あの威力で腹をブチ抜かれておきながら生きてるどころか抵抗しようとする時点で大したモンだがな、そもそもオレ様を相手にしたのが間違いだったってことだ!!』

背鰭の赤い発光がさらに輝きを増し、ゴジラの口から放たれようとした時、ビオランテは最後の足掻きと言わんばかりの行動をとった。

その巨大な口でゴジラを丸呑みするが如く頭部に噛み付いたのだ。

上下に生えた無数の牙が深々とゴジラの皮膚に突き刺さり、それを見ていた者達から悲鳴が上がる。
だが、ここまで来てその程度の負傷で音をあげるゴジラではない。
『さっきまで暴れてたポンコツ野郎といい、テメエといい……今日はタフな野郎がわんさか出てきやがったな』

まるで噛み付かれた事など気にも留めていないかのように、牙が更に皮膚に食い込むのもお構い無しに口を開いていくゴジラ。
勝利に執着するタイプで目立つのは三つ。
一つは、どれだけ犠牲を払っても構わないと考える、時と場合によっては必要となるかもしれないタイプ。
そして、ゴジラが属するのは最後の一つ。どれだけ傷付こうと構わないタイプ。もちろん傷付く対象は自分だ。
今、ゴジラを動かす原動力となっているのはシンプルかつ単純な理由だ。

『オレ様はテメエをブチのめすためにここにいるってのに、ここで引き下がったらテメエをそこまでボコボコにしたアイツらより下って事になるだろうが！伊達に王の称号を背負ってるワケじゃねえんだよ!!』

ジードが言ったように、己が怪獣王たる存在だからだ。
加えて明言してはいないものの、ゴジラの本来の主であるレジェンドや現在の主であるオーフィスの顔に泥を塗るような事をしたくないというのも理由の一つ。
……ついでに、鬼灯が見ている前で醜態を晒せば日本地獄にいるシンな同族に笑われるかもしれない。
いずれもゴジラ自身のプライドが関係しているが、同時にどれも納

得がいく理由である。
そして、遂に背鰭の発光が最大に達し、今まで溜め続けたエネルギーを一気に吐き出す。

『くたばりやがれ！オレ様もどきの植物野郎!!』

ゴオオオオオオオオッ!!!

ゴジラの切り札、ウラニウムハイパー熱線。
かつてはファイヤーラドンのエネルギーを吸収して放ったそれは熱量１００万度に達する超威力の放射熱線。
コジローのスターファルコンからウルトラマン達に続いてゴジラへと放たれた光線はウラニウムエネルギーだったのだ。
ゾフィーのＭ８７光線をも超え、ジードの究極形態ウルティメイトファイナルの必殺技の一つであるレッキングノバに匹敵する威力を誇るそれはビオランテを口腔内から後頭部へと貫通、そしてそのまま背中まで吹き飛ばす。

「グギィァァァァァァ!!」

ゴジラの活躍を見たオーフィスは自分の事のように胸を張っている。……そこ、ぺったんことか言わない。

「えっへん」
「いや、なんで貴女が偉そうなの？オーフィス」
「ゴジラ、我とレジェンドのカプセル怪獣」
「ああ……うん、確かにそうなんだけど……」

つまり自分達のカプセル怪獣はあんなに凄いんだぞ、と自慢したいらしい。
その気持ちはリアスにもよく分かる。一誠を始め自分の眷属は自慢の家族な訳で。
『口の中に頭に突っ込んで中から吹き飛ばすとかえげつないな……』
『だが、内側からの攻撃というのはかなり有効だ。お前達もよく覚えておいた方がいい』
『そういえば、グレート先輩が確かそれやって以前ゴーデスを倒したとか』
『『グレート先輩（ジャックさん）スゲェ!?』』
『そりゃレイトの奴も先輩と呼ぶよな』

かつて強化復活を果たしたゴーデスを体内から脱出粉砕したグレートはやはり歴戦の勇士だった。
一誠とトライスクワッド、さらにドライグも感心する。
さすがレイトことゼロが敬称を付ける数少ない御仁。
一説にはメビウスブレスやナイトブレスのブレード機能はグレートの技を参考に付けられたという噂まであるくらいだ。

「けど、あのビオランテとかいう奴……まだ！」
『……いや、決着だ。それも意外な形でな』
『え？』

ゼットの言葉に対してレジェンドが答えると、その場の全員がどういう事かと首を傾げる。
……それは再びビオランテを見た時、明らかになった。

「……やったか？」
「たぶん。そうでなくても、もう抵抗とか出来ないと思う」

『ちっ……歯形付いてんじゃねーか。アーシアにまた治してもらうか』
「今度は小さくなってる時にやってもらいなよ？アーシアちゃん倒れたらレジェンドさんがオーバードライブしそうだから」
『確かに洒落になんねーなソレ』

勝利を確信した二人と一匹は、虫の息のビオランテを放置して談笑する。
様子を見る限りもはやビオランテに戦闘行為は不可能だろう。そう思った時、彼らのみならずその場にいた者全員に声が聞こえてきた。

――ありがとう、ビオランテを止めてくれて――
『!?』

突如聞こえてきた見知らぬ声に困惑する一同。
……いや、この声を聞いた事のある者がたった一人だけいた。
そう、グラハムだ。

「まさか……！君は黒上博士の娘の！」
――そう、黒上源十郎の娘。黒上絵里――

これにはレジェンド以外、驚きを隠せない。
グラハムとしても先日はくぐもって聞こえていた声がハッキリと聞こえ、同時に苦しんでいる様子も無い事を不思議に感じている。
「あの時に比べて随分落ち着いているが……」
――もう、苦しくないから。時間もないけれど――

時間もない――こうして会話出来る時間、即ち命の灯火も残り僅かということだろう。

――心配しないで。元々私はもうこの世にいなかった。こうして少しの時間だけ会話出来ているのが奇跡なくらいだから――

「そんな……そうだ！超師匠なら……」

『今の状態の彼女を救ったとしてビオランテのままだ。それに彼女はそれを望んでいない。消えゆく命を生かす事、それをその者自身が必ずしも願っているとは限らない』

レジェンドの言葉に誰もが俯いている。

救済とは、イコール生存に結び付くわけではない。その逆もまた然り。

何らかの理由で自責の念に駆られたりしている場合、たとえその者が悪くなくとも無理矢理助ける事でさらに負の感情を抱く可能性が出てきたりすることもある。

「……正しい戦争なんてない。でも、正しさが人を救うとは限らない」

『！』

マリーダが呟いた言葉、それはビオランテ――絵里、そしてマリーダ自身が戦争の犠牲者だったからこその言葉。

マリーダは戦争の最中に兵器として作り出され、絵里はテロの巻き添えになって命を落とした。

正しければ兵器として命を作り出していいのか？

正しければテロで命を奪っても許されるのか？

それはかつて戦争を経験した三大勢力の者達に深く突き刺さるものだったが、絵里は続ける。

――今の言葉の答えは貴方達がこれから見つけていかなければならないもの。だから、私が伝えたい事は別のこと――

「別の……？」

――気をつけて。貴方達と敵対する者達は皆、底知れぬ闇を有して

る――

絵里の言葉に一同は身をこわばらせる。

闇の力ではなく、闇。それが一体何を意味するのか。

――本当ならもう少し色々教えたり、出来る事なら力になりたかったけど……時間が来たから――

「あ……！」

――最期に、行かなきゃいけないところがあるから……これで、お別れ。ありがとう、光の戦士たち、怪獣王……そして、さようなら――

その言葉を告げ、ビオランテは再び金色の粒子となって空へと上っていく。還っていくという方が正しいのかもしれない。

そして、彼女が行かなければならないところ。それは――

☆

ビオランテ――絵里の言葉を聞いた黒上博士は急いでダイブハンガーの海上に出ている部分から外のデッキへと出ていた。

その後をミライやグレイフィアなど一部の者も追ってきており、彼らが見たのは空へと上っていったはずの金色の粒子のうち、僅かな光が黒上博士のところへとやってきていた光景だった。

「……絵里……」

――お父さん、ありがとう。私のお父さんでいてくれて――

黒上博士は金色の粒子を掬うように両手の上に乗せている。

――こんなものしか遺していけないけれど、ずっと私の好きなお父さんでいてね――

「ああ……ああ……！そうだな、お前は……そういう子だった……どんなに苦しくても誰かのために頑張れるこだった……お前は、いつまでも私の自慢の娘だ……！」

絵里が遺していくもの――金色の粒子をポケットに入れてあった特殊なカプセルへと入れ、大事に握り締める黒上博士。

――私の分も生きないと駄目だからね。さようなら、お父さん――

その言葉を最期に絵里の声は聞こえなくなる。

「勿論だとも……まだ私はそちらに行けないが、お母さんと仲良くするんだぞ、絵里」

そう言った黒上博士は涙を流していたものの、笑顔。

同時に、黒上博士だけでなくミライやグレイフィアも見上げた夜空は……絵里が笑顔で「頑張って」と言ってくれているような、満天の星空だった。

パム治郎と黒上博士。

一人と一匹は、亡き大切な家族の笑顔を見送り、未来へと踏み出す。

長く激しい夜は、ようやく終わりを告げた。

〈続く〉

激戦の果てに

戦いは終わった。
崩壊気味だった駒王学園を含め、転移させられた者達はビオランテが金色の粒子となって空へと上っていった後、元の場所へと再転移させられ、最初に目にした光景が……
「む?・おお!・ようやく戻ってこられたか」
「ご……ごげ……」

東方不敗によって何か猿っぽい人物があまりに悲惨な状態と化している姿だった。
どれくらいかというと、手足は四肢全て曲がっちゃいけない方向へ複雑に折られ、武器は粉々にされ、トドメに顔が原形を留めないくらいボコボコにされている。

「「「「ぎゃあああああ?!」」」」
「東方不敗、何だソレ」
「闘仙勝仏、西遊記に出てくる孫悟空の末裔とか何とか。儂を侮っていたようで戦闘に突入してから数秒でこの有様です」
「そうでしたか。では私が責任持ってこれの製造元に突っ返して来ますので」
「そうか?・では頼むとしよう、鬼灯殿」

東方不敗から差し出されたそれを頷きながら受け取る鬼灯。受け取り方がそれの頭部にアイアンクローしながらだという点には触れないでおこう。
こうして現代の闘仙勝仏・美猴はヴァーリの所在を聞けぬまま精神的・物理的両面で東方不敗に色々へし折られ、強制送還先で先代の闘仙勝仏に地獄の再教育を受けるハメになった。
事前の情報収集不足が招いた結果である。

……にしても戦闘突入して数秒、という事はレジェンド達が戻ってくる直前の話のようだ。

「して、レジェンド様。そちらでは何が？」

「ああ、実はな――」

☆

現在、学園の校舎が急ピッチで修復されている。

ここにきてようやく三大勢力陣が役に立った、というところだが……正直役に立つのが遅過ぎる。

神衛隊勢はサーガを先に帰す事も兼ねて案内がてらダイブハンガーへと向かわせた。

竜馬や三日月などを除けばこの世界で初めての戦闘ということで気合いを入れ過ぎた者達が多く、疲れているだろうし……特にマリーダに関してはフライトユニット分離時にオデュッセウスガンダムが派手に地面に激突したため、束が検査すると通信してきたからだ。過保護である。

光神陣営サーガ組でこの場に残っているのはゼノヴィアと杏寿郎、あとパム治郎くらいだ。

ベリアルもレジェンド達が空の世界を始め異世界修行へと出る前にまた一度顔を出すと言ってガーディアンベースへと帰還していった。

帰り際にジード、トライスクワッド、そしてゼットへ「今日は良くやったな」と一言だけ褒め言葉を告げて行ったあたり、どこぞのシスコンや親バカとは違う。

そして、レジェンド一家は……

「おい、俺達ももう帰るぞ。ゼットは俺の中でグースカ寝てるし、俺は見ての通りオーフィスとアーシアをおぶって頭に（ちび）ゴジラ乗せ

てるんだ。こんな状態で会談なんぞに参加出来るか」

元々お眠寸前だったオーフィスや、それぞれ治療疲れと戦い疲れのアーシアとゴジラ。

慣れない相手と戦ったカナエやしのぶも目を擦っているし、パム治郎も杏寿郎に抱えられて夢の中だ。

ついでにゼノヴィアもフラフラしてるが、杏寿郎は……いつも通り。表情からは眠いのかどうか分からない。

そもそも悪魔ではないカナエらが毎日のように深夜ぶっ続けで起きている事など不可能に近いのだからしょうがないだろう。

天使や堕天使？今回騒動序盤に護衛がちょっとだけ戦った程度なんですが。

「そ……そうですね。ですが会談の傍聴だけでも……」

「いや、要人だけ招いて後日再開催する。と言ってもこちらから話すのは各陣営への現状打開案くらいだがな。結果はその時でいい。もし俺が何らかの理由で不在の場合はサーガに俺の言伝を記したものを託しておく」

ではな、と退散しようとするレジェンド一家。

一応リアス達は残っているが彼女らも早く帰りたそうである。鬼との戦いに尽力したのだから当然だ。

ぶっちゃけ、護衛連中よりよっぽど働いてたし。

それを汲んでくれたのがソーナを始めとする生徒会の面々だった。

「リアス、皆さんも先に帰宅して下さい。後の事は私達が引き受けます。会談の結果も明日以降、そちらの部室へ私が出向いてお伝えしますので」

「え、でも……」

「正直、今回は光神陣営の方々だけでなくリアス達にもおんぶに抱っこの状態でした。コカビエルの件に続き命がけで戦場へ自ら赴いた

貴女達と比べるべくもありませんが、これくらいの事はさせて下さい」

ソーナの言葉には打算も何もない。純粋な厚意からだ。

（なかなかどうして、出来た娘じゃないか。この娘のような者ばかりなら俺らも苦労しないんだが……）

レジェンドはソーナに感心すると同時にうら若き乙女にそんな事を言わせて何も考えていないだろう大人達を見ては溜息を吐く。

「わかったわ、ソーナ。今回は甘えさせてもらうわね」

「ええ。そうして頂戴、リアス」

「ありがとうございます、生徒会長！」

「お気になさらず。兵藤君はトライスクワッドの皆さんと一緒に最前線で戦っていましたし、ゆっくり休んで下さい」

柔らかく微笑むソーナを見てトライスクワッドはある事を考えていた。

「何でだろ、彼女の後ろにコスモス先輩が見えるんだけど」

「フーマもか？何ていうか、慈愛の心を感じるっていうか」

「だが、彼女の心遣いはありがたい。素直に礼を言って我々は退散するとしよう」

「「ゴチになります!!……あれ？」」

「いやそれ違うわよ!?」

「地球の言葉はウルトラ難しいな」

「タイタスさん、地球でも普段はゴチという言葉は使いませんわ」

「ていうかゼットさんみたいな事言ってますね」

あれだけの戦いを経験したばかりだというのに、もう普段通り。レ

ジェンド一家と過ごすうちにメンタル面でも強くなったのかもしれない。

「レジェンドさん、ギャスパー君の部屋は僕の隣でもいいかな？ちょうど空いてたはずだけど」

「構わんぞ。新しく到着した神衛隊は増設した棟（エリア）使ってもらうよう通達してあるから問題ない」

「気が付くと更に大きくなってるよね、ダイブハンガー」

「ＧＵＴＳ隊の頃より断然デカくなったからなぁ」

レジェンドとリクは既にギャスパーのお引越しが決定事項となっているからかそれに関する打ち合わせ。

ちなみに件のギャスパーは、アーシアやオーフィスがレジェンドにおぶられて寝息を立てているように、リクに背負われて夢の中。どことなく幸せそうな寝顔である。

ついでにレジェンドが早く帰りたいのは、彼におぶられて寝ている二人がいつ服を脱ぎだすか気が気じゃないというのも理由だ。

単にアーシアは寝相が良くないだけだが……。

「それじゃ一通り話も纏まったところで、あとは日を改めて「待ちなさいッッッ!!」……ん？」

言葉を遮られたレジェンドは眉間に皺を寄せるが、その声のした方を向くとオーフィスいわく「放置親」カテレア・レヴィアタンがボロボロの状態で睨みつけていた。

どうやら『おまけで』強制転移に巻き込まれた挙げ句戦闘にも巻き込まれていたらしい。

まあ、この場に残っていたとしても東方不敗からフルボッコにされるのは目に見えているし、どっちにせよ結果は変わらなかったのだろうが。

「……誰だっけアイツ」
「「「「放置親」」」」
「ミス・電波」
「放置親ではないし、誰だ最後を言った奴は!?」

リクである。ギャスパーが起きていたら一緒に言ったかもしれない。
レジェンドに至っては最早記憶からすっぽり抜けたらしい。それだけどうでもよかったということか。

「お前達をこのまま返すわけにはいきません……!」
「いや駄目だろ。カナエ達は明日も学校あるんだよ。お前のような『職業・テロリスト、真の職業・無職』とは訳が違うんだよ訳が」
「誰が無職ですか!!」
「え?アンタでしょ」

レジェンドに抗議するカテレアに対して、ド直球に答えるリクは笑顔が黒かった。
そんな彼は若くして高給取りな遊撃隊員。立派な社会人であり、テロリストなんぞとは違うのだ。

「このっ……!」
「だって過去の威光に今も縋って前を向こうとせず、テロリストに身を落としたんでしょ?どんなに言葉で取り繕ったって結局は『自分が一番じゃないとヤダー!』って駄々こねてる子供と一緒だよ。規模が規模だけに質の悪さは段違いだけどさ」

まさしくクリティカルヒット。
父や恩人であるゼロの助けになるべく日々鍛え続けて光の国の民から信頼を得たリクと、ただ旧魔王の血筋というだけでふんぞり返っているカテレアの差がここで出た。

信頼というのは血筋云々で得られるほど甘くない。
今は輝かしい立場にいるタロウでさえ、訓練中だった頃は大隊長であり実の父でもあるケンから、
――ところが今のお前は何だ！訓練中に余計な事を考えて訓練にまるで身が入っていないではないか！――
――そんなことだから、私はお前を一人前のウルトラ戦士として認められんのだ！――
と厳しい言葉を突き付けられた。
そこで奮起し、訓練への姿勢や訓練方法を見直すなどして自己を顧みたからこそ、父母が特訓に協力し周りからも正しく評価され、遂には超ウルトラ戦士とまで呼ばれるようになった。
それにタロウは、早く一人前と認められたかったがカテレアのようにいい歳して血筋どうこうで偉ぶった事はない。
そのタロウの息子のタイガも逆に血筋はプレッシャーとなってるくらいだ。
リクにバッサリ言い切られて真っ赤になっているカテレアだが、タイガらは勿論リアスらや、果てはアザゼルさえうんうんと頷いている。

「リク、だったか。そいつの言う通りだぜ、カテレア。聖書の神もあの頃の魔王ももういない。いつまでも拗らせてないでちったあ進んだらどうだ？」
「黙りなさいアザゼル！私は魔王レヴィアタンの「見苦しいですね」は!?」

アザゼルとカテレア、二人の会話に割り込んだのは今まで静観していた卯ノ花だった。

「時は移ろい、人は流れる。人、とは言いましたがこれは悪魔や天使などにも言える事です。栄光というものはただ縋りつくだけではやがて廃れて行きます。ならばこそ、芽吹いた新たな希望を大事にすべき

ではないですか？血筋でなくとも力を付ければ名乗ることが出来る――その姓が称号として昇華されたのなら寧ろ喜び、誇るべき事と考えませんか？魔王という立ち位置に固執せずとも、その姓を由緒正しく持っているという事だけでも十分だと私は思いますが」

自身がかつての世界で、最強たる『剣八』の称号を正しく次代へと受け継がせて逝ったように――。

しかし、カテレアは納得しない。

「それでは駄目なのです！悪魔は真の魔王の血筋を受け継ぐ我々によって統括されてこそ、繁栄が齎されるのだ！」

そう言ってカテレアが取り出したのは、堕天司ベリアルが指摘していたもの……オーフィスの『蛇』。

カテレアがそれを飲み込むと周囲に凄まじい衝撃波が巻き起こる。

「そう、これが悪魔を導く真の魔王の力!!」

（オイあれ……アムロに似た声のイノベイドとか言う奴が、これまた似たような事言った気がするんだけど）

レジェンドが言っているのはリボンズ・アルマークのことである。記録映像で見た時の「これが人類を導くガンダムだ」だった気がする、とレジェンドが考えていると卯ノ花の雰囲気が変わった。

「レジェンド様、どうやら彼女は引き返せないところまで行ってしまったようです。色んな意味で」

「だろうな、ありゃ矯正不可能だろ」

「そうですね。

始末しても宜しいですか？」

「お前の判断に任せる。ただ、東方不敗がその力を見せつけても、神衛隊が人の可能性を示しても、種族を超えて絆を結ぶウルトラ戦士達の活躍を見てもあいつはほんの少しさえ変わろうとしなかった。ここまでやってあの様子ならこれ以上は時間の無駄だ。俺もアレの再教育は御免被る」

「ありがとうございます。では」

軽くレジェンドに会釈して、卯ノ花が自身の斬魄刀『肉雫⊠（みなづき）』に手をかける。

カテレアは卯ノ花が構えて斬りかかってくる前に一気に間合いを詰めて殺そうと考えた。

しかし、その考えは間違いだった。

いや、そもそも戦おうとした時点で勝敗は決していたと言うのが正しい。

何故なら――

「鈍（のろ）いですね」

カテレアが動こうとした時には既に隣に卯ノ花がいて。

「倒れる事さえも」

刀に貫かれたようにカテレアの胸から花火が如く大量の血が噴き出した。

――何だ。
――何をされた。
――いつ、刀を抜いて……
――いつ、納刀した……？

カテレアは何が起きたのか理解出来ぬまま、大きな音を立ててうつ伏せに倒れ込んだ。

「あ、……ッ……！がはっ……！」
「朽木隊長の使う『閃花』という技です。回転をかけた特殊な瞬歩で相手の背後を取り、突きで鎖結と魄睡を破壊するというものですが……さすがですね。今回は心臓を貫いたのにまだ息がある」
『!!』

始末する――先程の言葉が嘘でなかったことにレジェンド一家以外の者は戦慄した。
怒らせると恐いのは分かっていたが、今の卯ノ花が纏う空気はそれどころではない。
最初から殺す気だった。

あの優しい卯ノ花先生が、とリアス達は驚いていたが……彼女の素性を知れば納得してしまうだろう。

「これでも医療関係者ですので、手遅れな患部はさっさと切除しておきたいのですよ。折角三大勢力の方々も和平へとこぎ着けて漸く世界が前へと進もうとしているのを邪魔されたくありませんから」

「が……ぐっ……こんな……バカな……！」

「破道の九十、黒棺」

詠唱破棄の鬼道九十番台。

かつてライザーとのレーティングゲームにて朱乃が完全詠唱で放った黒棺を詠唱破棄、しかも朱乃以上の威力で平然と放った卯ノ花。

既に限界だったにも関わらず容赦のない一撃を受けたカテレアは全身から血を噴き出しながら絶命した。

（これが卯ノ花先生の実力……！しかも全然本気じゃない！）

彼女に師事した朱乃はただ教えを受けたあの時と違い、その実力の一端を身近で感じ息を呑んだ。

ただ、同時に卯ノ花の優しさも偽りでない事も確認出来た。何故なら……

「この子が起きていなくてよかった。心優しいこの子のことです。起きて今の光景を目にしていたらきっと心を痛めたでしょう」

いつもの慈愛に満ちた表情で、レジェンドにおぶられて眠るアーシアの髪を撫でている卯ノ花は普段の彼女だ。

色々あって鬱憤も溜まっていたのかもしれない。主に三大勢力のせいで。

カテレアも悪魔だし。

☆

その後、あまりに凄惨な光景を目撃した事ですっかり目が冴えてしまったレジェンド一家は早々に帰宅、一家の大黒柱レジェンドは殆ど面々がダイブハンガーまで持ちそうにないと考えたので仮住居に泊まる事にした。

「まあ、あっちはグレイフィアやミライを筆頭に何とかしてくれるだろ」

「ええ、彼女達なら心配無用でしょう。寧ろ今のレジェンド様の状態の方が心配です」

相変わらず眠っているアーシアとオーフィスをおぶり、頭にゴジラを乗せ、加えてカナエとしのぶがうつらうつらしながらそれぞれ右と左の袖を掴んでいる。

確かに細心の注意が必要だ。

「ふあ……俺も眠ぃ。今日は早く寝よーぜ」

「フーマ、今日は大活躍だったもんな」

「ゼットもレジェンドの中で既に爆睡しているようだ」

「……朝起きたら隣に姉様が居そうな気がします」

「さすがにそれは……いえ、無いとは言えませんわね」

「うむ！休息は取れる時に取らねばな！というわけでお館様、皆、俺は一足先に言われた寝所へ失礼する！」

杏寿郎はそう言うとぐっすり寝ているパム治郎を抱えつつ即座に部屋へと消えていく。

リアスがちょっと覗いてみるとペット用のベッドにしっかりパム治郎を寝かせており、当人はというと……目と口を開けながら寝ていた。

（えええええ――!?）

寝ようとしてるだけなのかと思ったがちゃんと寝息も聞こえている。

早業というか、早すぎて珍妙な事になっているというか……とにかく、まあいいだろうと自己完結してリアスは杏寿郎とパム治郎の寝所のドアを閉めた。

その後、他のメンバー同様にイッセーと相部屋である寝所に入りその光景を再び思い返して小さく笑いながら独りごちる。

「……あまり早すぎるのも問題ね」

「どうしたんですか？部長」

「大丈夫よ、イッセー。さ、私達も寝ましょ。明日……っていうかもう零時過ぎてるから今日ね。早起きして朝風呂入りたいし」

「あ、そっか。リアスは寝る時何も着ないんだっけ……ちょっと待った！俺達布団入るから！」

少々フラフラしてるフーマと相変わらずスクワットしてるタイタスを押しながら、彼ら用に用意されていた籠布団に潜り込むタイガ。純情かつ硬派で宜しい。

「じ、じゃあ！おやすみ！イッセー、リアス！」

「お……やす……Ｚｚｚ……」

「では二人も良い夢を！グッナイ！」

「タイタス元気すぎねーか？」

「ええ。おやすみ、タイガ、フーマ、タイタス」

今日は色々あったし、明日からもドタバタ騒ぎな日常だろう。

そして夏休みに入れば時間の流れが違う異世界へ赴いて、修行を兼ねた旅――つまり冒険が待っている。

近い未来への期待を胸に、リアスは一誠の隣で眠りにつく。
まだ刺激に慣れず悶々とした一誠が眠りにつくまで時間がかかったのはご愛嬌。

翌日、卯ノ花に頼まれた小猫がレジェンドらを起こしに行った時の光景はある意味一番混沌としていた。
ゴジラがツチノコ状態でレジェンドの顔面に、オーフィスが全裸でレジェンドの腹の上に、アーシアが服装半分開け気味でレジェンドの右側に、しのぶは普通にレジェンドの左腕に抱きついており、αのカナエは布団の中から上半身だけ『猫は液体』状態で出ていた。

「……レジェンド様、ピンチです」

こっちもこっちで相変わらず、戦闘以外でエライ目に合う最高位の光神であった。

〈幕間・其ノ二へ続く〉

――日本地獄――

多くの亡者が呵責を受けているその地にある者がやって来た。

「ここが日本地獄か。話に聞くとザ・マンとは違い、暴走はしないが仕事もしないらしいな」

その者は岩壁の上から腕組みしつつ、マントを靡かせながら日本地

獄を見渡している。
　ついでにここの閻魔大王、仕事をしないのではなくただのサボり癖があるだけなのだが、この者にとっては大した差ではない。
　確実にシバかれるのは決定事項だ。

「さて……この地に来て最初の仕事は確か……神の立場に在りながら己が欲望の赴くままに配下たる純朴な天使らを利用しようとしたとして阿鼻地獄へ落とされた『聖書の神』とやらをサンドバッグに、近々行うタッグマッチの調整をする事だったか。フッ……レジェンドめ、恐ろしく気が回るところは相変わらずのようだ」

　表情は分からないが、声色からして嬉しそうであるのは間違いない。
　その人物は２２０ｃｍの巨体をゆっくりと目的地へ進めていく。

「タッグマッチの対戦相手だという鬼舞辻無惨やコカビエルという連中など我が眼中に無し。その後に控える相手こそ私が本当に闘いたい相手だ」

　かの光神のおかげで『完璧のマスク』無くともあの世界には超人パワーが満ち、正義・悪魔・そして完璧……全ての超人達が手を取り合い未来へと歩み始めた。
　ならば自身が最後にあの世界の配下達へしてやれる事は、かの好敵手との闘いを見せる事。
　それこそが彼らのさらなる成長の糧となると信じている。
　来たるべきタッグマッチに備えて、その人物はサンドバッグ（聖書の神）相手に己の技を磨くのだった。

幕間・其ノ二
後日会談、ダイブハンガーにて

会談の日から数日後。
改めてダイブハンガーへと招かれたアザゼル、ミカエル、ガブリエル、サーゼクス、セラフォルーにルミナシア。
さらに生徒会のメンバーに加え、天使側にイリナ、堕天使側はヴァーリの離反に伴いシェムハザが参加。
招待された全員がまさかの秘密基地な住居に驚き、アザゼルやサーゼクスは興奮のあまり会談そっちのけで探検しようとしてシェムハザとルミナシアによって物理的にお仕置き＆説教をくらうハメになった。
そもそもレジェンド一家とサーガ組のプライバシーもあるのだしその対応は当然だ。
リフレッシュルームへと案内され、会談というより自由会食のような形をとって行われ、真っ先に気になった事をアザゼルが質問した。
その内容とは「あからさまにガブリエルがレジェンドへ向けて好意を向けているが、堕天しないのは何故なのか？」というもの。
それに対するレジェンドの回答は「そもそも光神自体が聖書の神より上の立場に座しており、その最高位にいる自分へは『システム』そのものが機能しない」ということらしい。
それを踏まえて天使、悪魔、堕天使が解決しようとしているいくつかの問題への打開策を提示した。

まず、天使側。
一番の問題はやはりというかシステムに関してだ。
これはシステムそのものの見直しと、光神の一人が聖書の神に代わり対象の『神』としてシステムの運用の中心となることになった。
システム見直しの例を挙げるとすれば『神器所有者の選定』が最たるものだ。

そもそも不特定多数の『人間』へランダムで神器を宿させる事自体が間違っており、その結果が英雄派のような危険思想を持った人間へ神滅具が渡ってしまうようなことになっていたのである。
神器を宿らせるのは現在生存している保有者を除き、今後は光神やその眷属、セラフらにより厳選された教会内外問わず『人格的に問題ないと判断された者』へと後天的に宿らせるようにし、強大な力を安易に振るわれないようにする事にした。
他にも堕天の基準緩和や、バルパーやフリードなどの件を踏まえ神父や司教らを始めとする聖職者選定の厳格化などが決定。
なお、システムの運用を行う光神にはレジェンドやサーガからも信頼の厚い、元スダ・ドアカ十二柱神の一柱たる人物、及びその護衛には初代シャッフル騎士団が選ばれておりそちらも合意している。

続いて悪魔側。
こちらはまず冥界の政治に携わっている上級悪魔のうち、人間達への意識を見直す気の無い『老害』悪魔をどうにかする事から始める。
ここでレジェンドが提示した人物が、彼の眷属たる九極天の一人であるダンブルドア。
穏やかではあるがその実力は九極天の中でも最強クラスであり、彼に連絡したところ快く承諾してくれた。
とはいえ昔の思考が凝り固まったまま年月を重ねたその老害悪魔が潔く納得する可能性はほぼ無いと見て間違いないと考えたダンブルドアは、既に対策を用意している。
――そして、一仕事終えた『アレ』が帰還してくるとレジェンドから聞かされたダンブルドアは驚愕し、最後の手段としてそれの力を借りる事を決めた。
おそらく、十中八九その最後の手段とされるモノが動く事になるだろう。
レーティングゲームに関してもサーゼクスが会談の場で言った通り、当面の開催は無期限中止となった。
内容が内容なのでまだ公には開示されていない為、ダンブルドアが

交渉の道具に使うらしい。
連中の事だから逆ギレしそうではあるが、そうなったとしてもかの存在による粛清がより確実なものになるだけだ。
そしてレジェンド一家的に重要な、黒歌のはぐれ認定の解除。
これは予想以上に簡単に済んだ。
元々その元主の評判が悪かったのか、それとも証拠が十分だからか、はたまたその両方かはともかく黒歌は晴れて自由の身となった。
逃げ回っていた間に出した被害もあるにはあるのだが、事もあろうに黒歌が黒猫モードの時に仮住居敷地内に偶然逃げ込んだ時、追手の悪魔がレジェンド一家に無礼な口を利きつつ不法侵入した事を不問にする事で手打ちにした。
しかもレジェンドのみならず当時一緒にいたオーフィスを始めC・C・にスカーサハ、さらにグレイフィアに対しても威圧をかけるという、本気で光神陣営を敵に回すような事をしでかしていた事実まで聞かされ、サーゼクスより先にルミナシアがショックでブッ倒れた。
そりゃ、折角生きていた双子の姉が自分達の勢力にそんな事をされていると知ったらそうもなるわな。
やらねばならない事が最も多い勢力の為、とりあえずはこの三つ（うち黒歌の件は完全に解決済み）が当面の問題だ。

最後に堕天使側。
これは思いの外全体的に早く済んだ。
というのも、堕天して枷が外れたからか独断で活動しがちな部下達の管理徹底と、アザゼル自身の問題行動の（物理的）抑制などは他の勢力よりも割と解決しやすい問題であった事がまず一つ。
そして命を落とさせずに神器の取り出しを行う方法については、ウルトラマンヒカリが直接堕天使の元へ訪れて協力するという話になり、アザゼルやシェムハザが歓喜しサーゼクスやミカエルが羨ましがっていた。
科学技術局によく出入りしているとはいえ、ヒカリの現在の所属は宇宙警備隊であるため割と自由に動けるのだ。

彼自身がウルトラ兄弟の一人として数えられているのも大きい。

一通り打開策や方針を提示した後、天使側と悪魔側からある頼み事が光神陣営、正確にはレジェンドに告げられた。

しばらく悩んだレジェンドだったが当事者となった2名＋1名の期待を込めた視線に根負けして承諾。

レジェンドは最後に、数日後日本地獄にて新設される『魔闘地獄』という地獄の責任者が決まったのでお披露目会を兼ねたスペシャルタッグマッチが日本地獄にて開催される事を伝えた。

対戦相手が鬼舞辻無惨とコカビエルなのはともかくとして、レジェンドが参加し、しかも未だ明らかにされていないタッグパートナーがレジェンドと旧知の仲であり相当な凄腕とあっては注目されない筈がない。

そしてその人物が魔闘地獄の責任者になると事前に広まっている為、その姿を直接見ようと日本地獄にて販売されたチケットは販売開始僅か一時間足らずで完売。

当日生中継されるとの事だが、鬼灯いわく同時に間近で見た時の迫力はテレビの比ではないらしい。

しかもゲスト招待客や解説にもとんでもない人物を呼んでいると。

「って事はもう無いの!?」

「と……当日販売とかは!?」

「残念ながら無いですね。というか、無理矢理有給入れてたり現部署クビ覚悟で観戦に来る獄卒も相当な数なので空きはまず出ないでしょう」

鬼灯の言葉を聞いてガックリ膝を着くセラフォルーとガブリエル。

生粋のレジェンド大好きっ娘な彼女らにとっては彼がゼットに変身せず活躍するところを生で見れないのはキツいようだ。

一応、冥界や天界、ダイブハンガーにハンターズギルド、さらには惑星レジェンドなどで生中継による観戦が可能なのだが……。

「なんとかなりませんかっ!?」

「なりますよ」

『なるの!?』

切羽詰まって涙目で懇願するセラフォルーとガブリエルにあっけらかんと言い放つ鬼灯にレジェンドを除き総出でツッコんだ。

「レジェンド様のタッグパートナーを務める方いわく『次代を担う若き『悪魔』にこそ見てもらいたい』とのことで、ちょうどレジェンド様が若手悪魔のリアスさんらと関わり合いがある事を伝えたら参加者特権で押さえていた分をくれたんですよ。是非とも、と。元々レジェンド様も参加者兼ＶＩＰ枠でそこそこ確保出来てましたが」

つまり、オカルト研究部＋α程度なら確保出来ていたが、かの人物がさらに席を追加で確保してくれたとわけだ。

元々はその人物も招待したい者がいたそうだが、鬼灯の厚意によってゲスト枠で全員分確保出来たため必要が無くなったからである。

「と、いうわけで生徒会の皆さんも良ければいかがですか?あの日、リアスさん達以外で年若いというのに頑張って動いてくれましたし。お礼と言うわけではありませんが、彼の言う通り次代に期待を込めて、ということで」

「わかりました。折角のその方と鬼灯補佐官のご厚意ですし、ご招待を受けさせて頂きます」

ぺこりと綺麗にお辞儀するソーナに倣い、匙や椿姫ら生徒会のメンバーも頭を下げる。

セラフォルーやガブリエルはレジェンドに頭を下げていた。

レジェンドが件の人物と懇意にしていなければこの話も無かっただろうから。

「にしても、誰かは当日までのお楽しみとして……超師匠のタッグを務めるその人ってどんな御仁ですか？俺的にウルトラＶＩＰな感がビンビンしてるんですが」

ゼットの疑問はその場のほぼ全員が気になっている事だ。

しいて言うならゼットの予想は大当たり。

「一つだけ教えておく。そいつは己の師であった元『神』を真っ向勝負で打ち倒した桁外れの実力者だ」

『!!』

レジェンドから告げられた事実はまさに衝撃的だった。

光神をしてそこまで言わしめる、神をも下す程の人物とは誰なのか。

「当日、会えばわかる。その場にいるだけで敵味方共に気が引き締まるような奴だからな」

……気が引き締まるのはレジェンドとか一部くらいで、大抵の者は敵味方問わず恐れそうな人物なのだが。

「ああ、ちなみにその方が特訓相手に使……協力してもらってるのは聖書の神ですよ」

「「「えええええ!?」」」

「寧ろ兄ちゃん今『使ってる』って言いそうにならなかったか？」

鬼灯の爆弾発言にミカエル、ガブリエル、イリナ、そしてゼノヴィアがハモりながら驚き、フーマはしれっと鬼灯が聖書の神を物扱いし

てた事をツッコむ。

「どうやらもう死なないという点以外は役に立たないようで、『世界が違うとはいえ、こんな軟弱者がザ・マンと同じ神と呼ばれる存在だと？非力すぎるわ』とボロ雑巾を見てましたね」

「ボロ雑巾を見るような目で、じゃなくてもうボロ雑巾そのものですか!?」

「あんな外道ポンコツがアイツのスパーリング相手を務まるわけないわな。良くて精々サンドバッグが妥当だろ」

イリナのさらなるツッコミも何のその、聖書の神に悪感情しかない鬼灯とレジェンドはボロクソに吐き捨てている。

「ええ。途中から本当にそうなりました。アレ、泣き喚いてましたけどやらかした事考慮すると『いいぞもっとやれ』だったんで鍛えたい方がいらっしゃるならどうぞ使って下さいと言ったところ、自身の特訓ついでに彼女を鍛え始めました」

「誰だ？まさか妲己じゃあるまいな……強くなったからといっても乱暴には振り解きたくないぞ」

「さすがに違いますよ、レジェンド様」

日本地獄に訪問時、事あるごとに夫婦（めおと）になろうとガチでアプローチしてくる傾国の美女と呼ばれた大妖怪を思い浮かべ溜息を吐くレジェンド。

組み敷く特訓ならともかく、そもそも彼女がそんな事をするわけがないので鬼灯からも違うと返事が出た。

……最も、レジェンドにとってはその後の台詞が衝撃的だったのだが。

「芥子さんです」

「オイあいつマジでなんて奴を鍛えてんだ」

その光景の方がさすがに……アレ？余裕で目に浮かぶんだけど何だコレ。

ちなみに彼女のサンドバッグはどこぞの淫獣。

先日彼が技をかけられている姿を見て、ついテンションが上がった鬼灯が本気で芥子にエールを送ったのはご愛嬌。

「えーっと……芥子、さん……って？」

「如飛虫堕処の核弾頭」

「大叫喚地獄の決戦兵器」

見た目は愛らしい真っ白なニホンノウサギ。

その実態は日本地獄の動物獄卒トップクラスの腕を持つ実力者。

鬼灯とレジェンドは揃って芥子を異名で表現した。

正直、かの人物によって彼女が鍛えられたら本気で動物獄卒の頂点に立ちかねない。

（そういや芥子の好きな男性のタイプって鬼灯を兎にしたような奴だっけ……アレ？あいつも割と当てはまってるんだけど）

芥子を鍛えている人物を思い浮かべ、冷や汗を垂らすレジェンド。

まさか予想外のカップルが出来たりしないだろうなという懸念を一先ず脳内から消し去り、自身もタッグマッチに備えて調整に入ることにした。

☆

レジェンドがタッグマッチに備えるため、会談終了と同時にそこから離れてすぐ、翌日が日曜日ということもありここ泊まっていかない

かとサーゼクスやアザゼルが言い出した。
いやお前らが言うなよ。
「なあ、リアス……セクハラ総督もだけど、お前の兄ちゃんアホなのか？」
「言わないでフーマ……」
両手で顔を隠しているが多分、泣いている。情けなさで。
「サーゼクス様！ここは基地のようですが光神様の御自宅でもあるんです！それを家長の許可無しに勝手に宿泊宣言など何巫山戯た事を言ってるんですか!!ああ、もう……妻としてメイドとして眷属として恥ずかしい……！」
「ちょっ……ルミナシア？」
「おいコルァ、アザゼルアンタ何馬鹿な事を言ってるんです？寝言は寝て言えよタコ」
「おぉいシェムハザキャラ変わり過ぎじゃね!?あと、俺お前の上司……」
「上司って？自分の尻拭いをさせて他者に迷惑かけて組織全体のイメージダウンを率先して行う腐れ外道をそう言うんですかね？」
「いやあのスンマセンしたマジでスンマセンしたどうかお怒りを鎮めて下さい!!」
サーゼクスとアザゼルが同じタイミングで土下座。
グレイフィアは妹の苦労が目に見えて分かってしまったらしい。
そんな時、レジェンドと共に出ていったゼットが何やらファイルらしきもの（の中身）を読みつつ戻ってくる。
「えぇっと……サイコ・ガンダムＭｋ―Ⅱは初代と違ってサイコミュ式有線ビーム・ソードやリフレクタービットを内蔵し戦術に幅が出ているため注意すべし……マジかよウルトラキツくね!?サイコ・ガンダ

ムはまだビグ・ザムに腕が付いて砲門が増えたって感じだったのにこれって詰み？いやいやアムロ師匠リスペクトな俺にとってはこの程度で音を上げてられないぜ！実弾武器なハイパー・ハンマーやハイパー・バズーカで頭部に集中攻撃すれば……アレ？皆さんどうしたでございますか？また修羅場？」
「いや、さっきまでのお前もある意味その要因……まあいいか。実はな……」

ちょうど食事を終えたレイトが事情をゼットに説明すると思いもよらぬ形で返答された。

「それなら超師匠から伝言賜ってますけど」
『へ？』
「『部屋以外で行動する時は住人の誰かが同行すること、あと技術とか物とかを盗んだり勝手に持ち出したりとかしないこと。これを守れるなら宿泊可』だそうです」
「本当かい!?ありがとうゼット君！」
「サーゼクス様！許可を下さったのはレジェンド様です！全く……ゼット様、わざわざ言伝頂きありがとうございました」
「へ？いやいや頭下げられるような事じゃないでございますよ！単に俺はメッセンジャーゼーット！になっただけですし」

ルミナシアに頭を下げられながら礼を言われ、アタフタしつつもいつもの調子で謙虚なゼット。
だというのにこちらは……

「技術とか……ちっとばかしでもダメか？」
「アザゼル!!」
「いや、だってよ……」
「あ、超師匠から『おそらくアザゼルが「ちょっとくらいならいいじゃん」的な事言い出すだろうから、もしその時止めてもやめなければ去

勢しろ』とも言われました」
「スンマセンっしたー!!」

アザゼル、D☆O☆G☆E☆Z☆A。
恐るべしレジェンド、行動予測は簡単だとしてもペナルティにいきなり去勢を提示するあたりアザゼルの女性関係に対する信頼は最底辺だ。
間違いなくアザゼルの『男』を潰す気でいる。

「もうヤダこの上司……」
「心中お察しします。私も派遣先の上司があまりにサボり癖が酷いもので」
「……鬼灯殿、今度その方とコイツを監禁して飲みに行きましょう」
「喜んで。思いっきり愚痴を言い合って発散しましょう」

上司に苦労する者同士、絆が芽生えてしまった。
とりあえず、こんな魔王と総督みたいにはならないように気をつけようと思うミカエルだったが、そんな彼も先の事件での発言のせいでレジェンドではなくサーガからの信頼は最底辺だと言っておく。

宿泊が決まり、ふとした事に気付いたガブリエルがゼットに訪ねてみることにした。

「そういえばゼットさん、先程サイコなんとかがどうとか仰ってましたけど……？」
「ああ、機動兵器シミュレーターの事でございますね」
「「「「機動兵器シミュレーター？」」」」

新しい単語が出てきて興味津々な三大勢力トップ陣。
特にアザゼルは技術関係と予想して目が輝きまくっている。

「ま、手っ取り早く説明すんならロボットの操縦訓練用の機械ってやつだな」
「ちょっ!?それマジか!?」

レイトがサラッと言うとやはりアザゼルが反応する。
声に出したのはアザゼルだけだがサーゼクスを始め他の者も彼の方を向いていた。

「まあな。俺がここに来た頃からあったけどよ、どんどんバージョンアップ重ねて今や歴史の疑似体験だけでなく、シミュレーター内とはいえ『その戦いの中に自分がいたら』っていう……えーっと……そうだ!ＩＦストーリー的な、文字通り『自分だけの物語』を紡げるんだ」

分かりやすくいうなら、レイトの場合『もしレイトがガンダムエクシアの同型機に乗ってソレスタルビーイングに所属し、プトレマイオスにいたら』みたいな感じの、その人物だけのＩＦストーリーの主役になれるというものだ。
レジェンドと束の共同作業によってシミュレーターに搭載されたこれがとんでもなく大反響であり、ミライやリクらも訓練しながら楽しんでいる。
先述の通り、レイトことゼロは己のシミュレーターＩＦストーリーの中で見事リボンズ・アルマークを打ち倒し、いよいよ次からはＥＬＳ襲来という、あの世界における最大の出来事を体験することになる。
ここまで聞かされて最早アザゼルやサーゼクスが我慢出来るはずもなく、セラフォルーや、まだ未プレイだったオカルト研究部らも一瞬で目の色を変えた。

「ええっ!?ってことはゼット君も……」
「もち!俺はＵ．Ｃ．で体験中でございますよ!題して『ＲＸ―７８

―２　ガンダムが時代を超えて活躍したら』！俺は次回、遂にゼダンの門でティターンズやアクシズと三つ巴の決戦なんです！」

シミュレーター上とはいえ、ガンダムでジ・Ｏやキュベレイに挑もうとするゼットは命知らずを通り越して尊敬出来るレベルだ。

寧ろそこまでよくその機体で戦い抜けたというべきか。

「そっちは凄いよね、ゼット。ちょっと前の記録だと、ノイエ・ジール……だっけ。それに接近戦仕掛けて見事撃墜したし」

「リク兄さん、そのノイエ・ジールって何ですか？」

「この間のゴブニュより大きいロボットだよ。確か７０ｍ以上だったかな。それから、ガンダム……ゼットの使った機体は大体２０ｍくらい」

ギャスパーだけでなく、レイトや神衛隊の一部などを除き驚愕の声が上がる。

……アレが倒せるならサイコＭｋ―Ⅱも難無く倒せそうな気がしないでもないが。

「も……もしよければ私にもやらせてくれないだろうか!?」

「俺もだ！」

「いや、そこで何で俺らに聞くんだよ。あれの使用許可出してるのレジェンドと束だし。つーか実際はそっちの機能はやる気促進用で、本来は操縦技術向上用の特訓マシーンだぜ？」

ダイブハンガーの現住人も忘れがちだが、シミュレーターに関してはレジェンドだけでなく束の許可も必要。

基本的に一部の機体（コンパチガリバーとか）を除き、機動兵器関連の責任者は束である。

「あ、そうか。先輩って専用機あったんだよな。ダブルオーザンライ

ザーだったっけ」
「おう。シミュレーターじゃ特殊な条件で出撃機体が限定されてなきゃいつも相棒を使ってる。実戦となると変わってくるかもしれないけどよ、俺の場合はシミュレーターと相棒をリンクさせて相棒のコックピットで本格的にやってるからな」
「ほ……ホントに本格的だった……！」

レイトのこういった姿勢がレジェンドや束には立派に映るのだ。
大抵はシミュレーター内で機体選択→そのまま訓練開始なので、実際の機体と操縦系統が異なる場合もある。
さすがにまだモーフィングで各機体のコックピット内部まで完璧に、とはいかずどうしても違いが出てしまう。
そこでレイトは二人に相談し、ダイブハンガーなどシミュレーターがある場所ではインターネット接続の要領でデータリンクさせ、愛機のコックピットでそのシミュレーターの機能を使用出来るようにしたというわけだ。

「逆に簡単に動かせるはずの機体でも相棒の操縦系統がそのまま使われるから、量産機の訓練には向いてないのが欠点と言えば欠点か」
「……それに、レジェンド様はともかく束様がシミュレーターの使用許可を出すとも思えないのですが」
「姉さん？それはどういう事？」

レイトに続けるようにグレイフィアが呟き、それを聞いていたルミナシアが聞き返す。
なお、この二人は先刻和解済。事情が事情だけに黒歌と小猫ほど気まずくもなかったようで割とあっさりしたものだった。
そして、グレイフィアがそれに答える前に――

「あの戦いでとんでもない醜態晒しておきながらよくもまあそんな図々しい事が言えるもんだねえ。自分達を助けてくれた相手に礼も謝罪もしないで自分の興味しか優先出来ないんだ」

明らかな侮蔑の念を込めた言葉がその場に響き渡った。
全員がそちらを向くとクロエを傍らに控えさせた束が冷たい視線をサーゼクスやアザゼルへ向けている。

「やあやあ三大勢力トップの皆さん。私が君達を助けた機体の設計開発を行った天才の篠ノ之束さんだよ。レジェくん直属の九極天の一人でもあるからそこんとこよろしく。あ、セラちゃんこんばんわー☆」

他のトップ陣には侮蔑の視線を崩さないのに対し、セラフォルーにはニコニコ笑顔で挨拶する束。

「こんばんわー束ちゃん☆それで、あの時私達を守ってくれた白い機体の娘は誰かな☆」
「はいはーい。マーちゃんこっち来てー」

束が笑顔で手招きすると湿布を貼られたマリーダがやってくる。

「何でしょうか、束博士」
「大丈夫だよ、別に悪い事じゃないから。セラちゃん、この娘がペーネロペーに乗ってた娘だよー」

「あああああっ!!」

何に反応したのかセラフォルーのみならずガブリエルまで叫び声を上げてマリーダに瞬時に駆け寄った。

軍人の性か、身構えるマリーダだったが二人はというと涙をポロポロ零しながら謝り出す。

「ごめんねごめんね痛かったよねこんなたくさん湿布付けて凄く痛かったよね?」

「同じ女性だからわかりますこんな柔肌に傷付けて平気なわけないですよね申し訳ありません私達の監督不行届で!!」

「え……? いや、訓練を重ねているのでそれほど痛みは……あと、この傷は前からあったもので近々治して下さると……」

「おおうセラちゃんもそっちの人も女の子だもんねぇ。やっぱりわかってくれるんだね!」

「もちろん!!」

確かセラフォルーはガブリエルをライバル視していたはずでは……? と思いながら、ガッチリ握手している三人を混乱しつつ眺めるマリーダをクロエが裾を軽く引っ張りながら言う。

「マリーダ姉様、束様達は同じ女性としてマリーダ姉様の身を案じてくれているのです」

「そ、そうなのか? 何やら別のものが同調しているような感じがするのだが……」

意気投合している三人は放っておいて、イリナ、そしてソーナら生徒会のメンバーもマリーダに近づき揃って頭を下げる。

「あの時は私達のためにありがとうございました。そして申し訳ありません。こちらの統制が乱れたばかりに貴女を負傷させてしまって

……」
「本当にごめんなさい」
「いや、あれは私の判断ミスだ。最初からフライトユニットだけをパージすれば良かったのだが、気の焦りからそれを思い出すのが遅れてしまい、結果があのザマ……私もまだまだ未熟というわけだ」
「いえ、こちらこそ」
「そんな、こちらこそ」
「いやいや気にせず……」

まるでコントの如きやり取りをしているうちに可笑しくなって三人同時に吹き出した。
いつの間にかそれを見ていた束らもやっと笑顔になる。

「お姉様、マリーダさんを見習って少しは日々の仕事も真面目になさって下さい」
「ソーたんなんでぇぇぇ!?ここはちょっぴりお姉ちゃんに甘えたりとかそういうシーンじゃないの!?」
「あれだよね、マーちゃんは天然っていうかそれは来歴上仕方ないんだけどさ、もっとフランクにいこー!」
「フランク?フランスの間違いでは……?」
「駄目だセラちゃんガブちゃん!マーちゃんここでも真面目すぎてノリを軽く出来ない!」
「うーん……彼女はそのままでも良い気がしますけど……軽いノリの彼女……」

――ヤッホー☆私、マリーダだよ!――

「「うん、今のままがいい」」
「即決!?」
「何故だろう、この姉達に慰められているような感覚は」

ここにかのニュータイプ達がいたら、彼女を慰めるプルやプルツーが見えたかもしれない。
束がやってきた時の雰囲気が漸く無くなりかけた時、やはり空気の読めない奴らはいた。

「そ、そうか……君が我々を助けてくれたのか」
「いや、すまねぇ。色々立て込んでて忘れてたぜ」
「ええ、ちゃんと礼をしなければとは思ってたんですが」

「よく言うよ。セラちゃんと違って私が言うまで忘れてたくせに。ガブちゃんやその子達が謝るまで自分から動かなかったくせに」

束の絶対零度の視線が三人を射抜く。
ちなみにシェムハザは除外。あの時あの場にいなかったし。

「「い……いや、その……」」
「クーちゃん、セラちゃんや皆をシミュレーターまで案内してあげてー。あ、れーくんとゼッくんはチュートリアル的な事教えてあげてね」
「かしこまりました、束様」
「よぅし！俺が相棒必殺のトランザムライザーソードを見せてやるぜ！」
「俺もゼロ師匠同様、こっちに関してはほんのちょっぴり先輩なところをお見せするでございますよ！」

いつも通りのクロエとノリノリなレイトにゼット。
彼らに連れられ、セラフォルーやオカルト研究部、生徒会の面々はシミュレーターまで向かう。

「ちょっ……リーアたん!?」
「おい、俺らも……!」
「お前らは暫く私の説教だよ。この三馬鹿トリプルトップ。そっちのグーちゃんに似たメイドさんとか初対面な堕天使さんは好きに過ごしてていーよ？これらに無理に付き合わなくておっけー」
「いえ、（二重の意味で）主人の不始末ですので」
「この問題総督、目を離すと何しでかすかわかったもんじゃないので」

付き人にさえボロクソに言われて本気で泣きそうなサーゼクスとアザゼル。
……ミカエル、ガブリエルやイリナも行ってしまい、ぼっちである。ある意味二人より悲しい。

「「俺（私）もシミュレーターやりたいぃぃぃ!!」」
「煩いなぁ。ちょっと黙りなよ」
「ふ……ふふ……どうせ私はぼっちですよ……」
「見ればわかるから一々言わないでいいよ」

容赦なく言い捨てる天才・篠ノ之束。
サーゼクスら三人にとって彼女は正しくもう一つの呼び名、『天災』にしか見えなかった。

自業自得だが。

〈続く〉

やってみよう！シミュレーター［入門編］

サーゼクス、ミカエル、アザゼルが束に説教されている間にオカルト研究部や生徒会、そしてセラフォルーに加えてガブリエルも連れて、レイトやゼットらは機動兵器用のシミュレーターがある部屋にやってきた。

機動兵器の格納庫と隣接しているので、当然パイロットを始め機動兵器に携わる者達が集まっている。

「食事の後なのに随分盛り上がってるみたいね」

「パイロットは体力勝負って格言があるみたいだからな。満腹になったら休むより適度に身体動かしたいんじゃねぇか？」

「竜馬さんとか、その筆頭みたいな方ですものね」

「にしても結構有るんだな、シミュレーター。えーっと全部で八機か」

「一応対戦モードとかもあるんですけど、やっぱり先の『ドラマティックＩＦストーリーモード』が人気なんでございます。主軸となるのは当然の如く戦闘なんですが、戦績やシミュレーター内のミッション中での行動による、架空年表の自動作成もこのモードの醍醐味の一つでありますよ！」

「「「「架空年表？」」」」

「手っ取り早く見せた方が早いかな。ここをこうしてこう……出た！」

「えーっとなになに……？」

――Ｕ．Ｃ．００７９．１２．２３

連邦軍による宇宙要塞ソロモンの攻略戦が展開される。

ウルトラマンゼットの所属する第１３独立部隊のホワイトベースもこれに参加。

アムロ・レイとウルトラマンゼット両名の駆る２機のガンダムの活躍や連邦軍の新兵器ソーラ・システムによってジオン公国軍とソロモンは大打撃を受け、ジオン公国軍のドズル・ザビ中将はソロモンの破

棄を決定し、重ＭＡビグ・ザムにて出撃。
この戦いによって連邦軍のティアンム総督とホワイトベース隊のスレッガー・ロウ中尉、並びにドズル・ザビ中将が戦死。
ビグ・ザムはアムロの、その随伴機とされた『ソロモンの白狼』シン・マツナガの搭乗した高機動型ザクⅡはゼットのガンダムによってそれぞれ撃破。
尚、後者は戦死の確認がされていないためＭＩＡ認定である――

「え!?ゼットお前戦争参加してたの!?」
「いや違いますってフーマ先輩！シミュレーターでの戦績を加味した架空年表ですよ！」
「お前、ビグ・ザムの猛攻を避けながらあの白狼を撃墜したのかよ……しかもガンダムで」

表示された年表に何気にレイトも驚いていた。
ビグ・ザムの拡散メガ粒子砲やミサイルがいつ飛んでくるとも知れない中で有名なエースパイロットの搭乗機を撃破するというのは簡単ではない。

「ともかくこんな感じで、ミッション……所謂ステージをクリアするとシミュレーション内容に応じて戦績が年表化されるんだよ。でだな……もう一つこのシミュレーターのスゲェところってのが、ある一定の高難易度の状態でクリアすると……」

レイトが不敵に笑みを浮かべながら自分の架空年表を呼び出し、その中の一つを選択し、何やら操作する。
すると、その時のシミュレーション映像が設置されたモニターの一つに映された。
ただし、コックピット視点ではなく、アニメ風に。
視点が目まぐるしく変化し、カットインや各種バンクも再現、さらに舌戦も展開されている。

「「「「えええええ!?」」」」
「どうだ?高難度でＩＦストーリーモードをクリアしたご褒美みたいなモンだけどな、まさに自分が主役のアニメみたいなムービーを自動作成してくれるんだぜ!」
「うおおお!マジで先輩がパイロットスーツっぽいの着て敵と言い合いしながら戦ってんじゃん!」
「なあイッセー、これ俺達も出来るのかな!?こんな感じでカッコよく映るかな!?」

これには一誠とタイガを筆頭に場が大盛り上がり。
どれだけ高難度かは分からないが、クリアということは少なくとも映像上で自分がやられるようなものにはならない。
しかも相当な迫力があり、まさしくご褒美に相応しい代物である。
ちなみにレジェンドや束の許可を得たレイトことゼロは、既にこの記録映像を『機動戦士ガンダム００―ＩＦ　ＳＩＤＥ―ＵＬＴＲＡＺＥＲＯ』と総集編っぽく編集してウルトラの星にいるセブンの元へ転送済み。
ついでにゼットも一年戦争はクリア済みなので同じく『機動戦士ガンダム特別篇～白い流星と共に』というタイトルで光の国にいるエース、さらに神衛隊第四分隊のアムロ本人へ転送してある。
こんな感じで編集も可能なので、皆挙って高難度に挑み、結果として操縦技術も培えてご褒美もあるということで大反響となったのだ。

「とはいえだ。お前らはまだまだこれについては初心者、高難度なんて狙ってもまずクリアどころか善戦さえ出来ないだろうな。焦らず、まずは練習して自分自身のクセを掴め」
『自分自身?』
「ああ。知っての通り機体にもクセなんかはあるが、そっちはある程度選べるし二の次でいいんだよ。問題は自分がどういう操縦傾向にあるかってことだ。逆に、自分がどういうタイプか分かれば機体だっ

てどれがいいか自然と感じ取れるんだぜ」

さすが遊撃隊隊長にしてウルトラ戦士初のガンダムマイスター。
割と冗談抜きでイノベイターに覚醒するかもしれない。
愛機はツインドライヴシステム使ってるし。

「……そういえばクロエちゃんはやってないの？」
「たまに束様に言われてやるくらいですが……私はこの機体を使用しています」

そう言ってクロエが操作して画面に映し出したのは……

「にゃあああああ!?」
『うわあああああ!?』

いつの間にか来ていた黒歌が叫び、その場にいた者―三日月や昭弘、ラフタ、厳勝なども一斉に振り向き、近くにいたレイトやリアスらは本気で驚いた。

「黒歌ぁ！いきなり現れてデカい声を耳元で出すんじゃねぇよ！」
「仕方ないでしょ！こんなの見たら誰だって驚くわよ！」
「……姉様、私達は初心者なのでどの機体がどんなものかは三日月さん達のガンダム・フレームとかしか分かりません」

小猫のド正論が黒歌に直撃。
そういえばそうだった……と思い黒歌が説明しようとした時、先にクロエ自身が説明した。

「機体名称『ラピエサージュ』。名前はフランス語にするとパッチワー

ク……『継ぎ接ぎ』という意味です。機種はアサルトドラグーンという種類で、武装はスプリット・ミサイルＨ、アイアンクロー、マグナム・ビーク、５連チェーンガンにＯ．Ｏ．ランチャー、それらの武装を全使用するマニューバのＵ．Ｕ．Ｎが存在します」
「ゴッツイ機体だなぁ……色々積んでそうだし機動性とかどうなんだ？」
「原型機がアシュセイヴァーというものらしいですが、その機体に搭載されていたとされる誘導兵器の類を廃し、代わりに大型のスラスターに変えられ特殊な飛行装置を搭載したので十二分にカバー出来ているようです。外見からも分かる重装甲によって重量は原型機のおよそ二倍にもなり、改造機というよりもはや新型と言っても過言ではない機体となっています」
「わ、私が全く言えないにゃ……」
「あと、本来ならばゲイム・システムというマン・マシーン・インターフェイスが搭載されていたようですが、束様いわく私には不要なもの、ということでオミットされました」

その証拠と言わんばかりに提示された戦績は、なんと神衛隊第四分隊にいてもおかしくないレベルの好成績。
さすが大型ＭＳのプロフェッショナルであるマリーダを姉のように慕うだけの事はある。

「……まじ？」
「黒歌が真っ白になって本気で小猫の姉らしく見えるな」
「いやでもこれは凄いでございますよ。超師匠も褒めてくれたりしたんじゃないですか？」
「はい、それは……その」

普段見られない、頬を染めてもじもじするクロエを見たカナエが「尊い！」と言おうとした瞬間。

ドガアアアアッ!!!
『!?』

あまりの音にその音がしたモニターを見ると、ある一機のパーソナルトルーパーという種類の機体が敵機を片手で掴み、もう片手で殴り倒している場面だった。
正確には機体がさらにパワードスーツを装着したような形状で、掴んだり先程の拳撃を叩き込んだりしたのはそのパワードスーツ部分らしい。

「なんとマッシブな機体だ！あのフォルム、親近感を感じる！」
「あれ、ヒュッケバインボクサー!?」
「戦法的には小猫ちゃんと似てますわね」
「確かに戦い方は近いかもしれません」

しかし、あれはシミュレーターで誰が使っているのかという話になった時、思いもよらぬ人物の声が聞こえてきた。

『あら？もうおしまいですか？もしもーし、大丈夫ですかー？』
「「「「!?」」」」

まさかの胡蝶しのぶであった。

「えええええ!?」
「ウッソだろオイ!?全ッ然イメージ合わねーんだけど!!」
「しかも聞いてる事とやってる事正反対だよ！完膚なきまでに叩き潰してたよ!!」

「さすがしのぶちゃん！踏み込みの速さがダンチだ！」

レイトやタイガはオカルト研究部（特にカナエ）や生徒会の面々共々本気で驚いていたが、何故かゼットだけはしのぶの操縦技術を絶賛している。

しのぶ自身がシミュレーターに集中しているため、加えてシミュレーター自体も余程緊急事態でなければ外部からの音を完全に遮断するほど防音設備が備わっているため彼らのツッコミはしのぶに聞こえておらず、彼女の駆るヒュッケバインボクサーは次々と敵機を撃破していく。

「……やけに強くね？」

「ふむ、まるでストレス発散しているようだな」

「『それだ!!』」

フーマの疑問にタイタスが予想を答えると同時に一誠、タイガ、そしてドライグが納得した。

そんな彼らの話など知った事かと言わんばかりにしのぶは敵の隊長機へラストアタックを仕掛ける。

『それではそろそろ終わりにしましょうか。カタパルト・キック、ガイスト・ナックル双方準備よし……行きますよ』

ヒュッケバインボクサーのＡＭ部分の腕部・脚部が淡い緑色に発光し、背部のブースターを吹かせ隊長機であるヴァルシオン改へと一気に突撃。

ガイスト・ナックルを数発叩き込んだあと、カタパルト・キックで吹き飛ばしつつ、さらにブースターの出力を上げ吹っ飛んだヴァルシオン改の背後に回ると再びガイスト・ナックルで天高く殴り飛ばし、ヒュッケバインボクサーも空へ飛び上がる。

『武装外骨格、パージ』

コアとなっているヒュッケバインＭｋ―Ⅲからアーマード・モジュールであるＡＭボクサーが分離・変形し、重力波エネルギーによって巨大刀身を構築するＧ（グラビティ）・ソード形態へとなる。

さらにそのＧ・ソードにヒュッケバインＭｋ―Ⅲが乗り、空中を縦横無尽に駆け巡る様はまさにサーファーのようだ。

『蟲の呼吸・蝶の舞『戯れ』……あ、違いました。Ｇソード・ダイバーですね』

バルカン砲でヴァルシオン改を足止めしたりとフェイントを混ぜ込みつつ、超高度からＧソードに乗ってヴァルシオン改に突撃、激突直前にヒュッケバインＭｋ―Ⅲは一足早く離脱し、自由落下の最中にヴァルシオン改を貫通破壊したＧソードと再度ドッキングし、再びヒュッケバインボクサーの形態に戻る。

隊長機であるヴァルシオン改の大爆発をバックに『ミッションクリア』の文字が表示され、満足げな表情のしのぶがシミュレーターから出てきた。

「あら？姉さんにゼットさん、それに皆さんもお揃いで」

「お疲れ様でございます、しのぶちゃん！見事な圧倒ぶりだったぜ！」

「いえいえ、機体性能に助けられましたので。それを言ったら機体が年代的に旧世代なのに現役戦闘をこなしているゼットさんの方が凄いですよー」

（（（（何でアレ見せられても平然と話せるの!?））））

熱血系アホの子ゼット、怖いもの知らずである。

「しのぶ、あんまり溜め込みすぎちゃ駄目よ？」

「姉さんがそれ言う？というか最近では姉さんも原因の一つなんだけ

ど」
「なんで!?」
（可愛いもの好きはいいけど少しは自重してほしいわね……）

ふぅ、と溜め息を吐いた後でしのぶはレイトからシミュレータールームにいた訳を聞かれたところ、やはり『手軽かつスッキリ出来るストレス解消法』と答えた。

「自分の身体では出来ない事が出来るっていいですね」

そう言ってにっこり笑ったしのぶに殆どの者の顔色が悪くなった。
そりゃ敵機が身動き出来ないよう拘束した状態でガイスト・ナックルを容赦なくブチ込むようなことしてたら誰しも真っ青になるだろう。

ちなみに彼らは目にしていなかったが、彼らがシミュレータールームに到着する前は敵機を岩盤に叩きつけた挙げ句、カタパルト・キックを炸裂させていた。
オーバーキルばかりしている気がする。

「ま、まあなんだ！善は急げっつーか、何事も経験っつーか、とにかくやってみろ！ちょうど他のシミュレーターも空いたことだし！」
「わ、わかったぜ先輩！んじゃあ最初は誰がやる？俺とタイガはやる気だけど」
「俺やゼロ師匠は今回教える役なんで皆さんがどうぞ」
「……私、やります」
「せっかく案内して頂いたのですし、私も体験してみようと思います」
「会長がやるなら是非俺も！」
「ソーナちゃんがやるなら私も☆」

次々と名乗り出ていく初回体験者。
一誠とタイガ、小猫、ソーナ、さらに匙とセラフォルー。

加えて巌勝によって半ば強制的にゼノヴィアが参加させられ、ついでに巻き添えでイリナもやらされる事になった。

「……ゼノヴィア、何か弱みでも握られてるの？」

「むしろ弱いからやらざるを得ないと師範に言われた……」

相手はカナエを鍛えた継国縁壱の兄、巌勝である。

スパルタ教育はお手の物だ。

全員がシミュレーターに入って起動させると、まずは個人情報の入力画面になった。

なお、シミュレーター同士はリンクしていれば通信可能、さらに今回はチュートリアル・モードなので外部からも声が聞こえるようになっている。

『最初は名前とか初期設定からだな。ゲームなんかでよくあるだろ、あーゆーのだよ』

「えーっと名前とか誕生日はいいとして……リアル系？スーパー系？何だこれ？」

『手っ取り早く言うとガンダムとか機動性に優れるタイプか、ゲッターみたいな攻撃力防御力に特化したタイプかみたいな感じでございます。スーパー系はよくスーパーロボットって言われるからそっちの方が分かるかな』

「ああ！グレンラガンみたいなタイプか！」

当然こっちだろ！と一誠とタイガはスーパー系を選択。そこからさらに細分化され、希望機種の選択画面が表示された。

「あ、また選択肢だ」

「えー……特機、パーソナルトルーパー……もっと分かりにくくなっ

たぞ」
『特機ってのが普通のスーパーロボット、スーパー系を選んでパーソナルトルーパーを選択すると、そっち寄りの能力を持ったパーソナルトルーパーが選べる初期機体に入るんだよ。時たま最初からそこそこ強い機体が選べるようになる場合もあるからな、ぶっちゃけソシャゲのガチャみたいなモンだ。リセマラ出来ねーけど』
「「最後すっごい分かりやすい説明!!」」

一誠はともかく何故タイガがソシャゲとかガチャとか知っているかは置いといて、その説明はどうなのか。
何はともあれ初期設定を済ませると、初期搭乗機選択画面へと移行する。

『皆様のご入力された情報を元に三機、初期搭乗機として表示されている筈です。その中から気に入った機体を選んで、その機体画像をタッチして下さい。一度選択すると、条件を満たして選択可能機体が増えない限り変更出来ませんのでご注意を』

クロエのガイダンスに従って機体を選択するシミュレーター使用メンバー。

「んー……俺は当たり機体っぽいのはないな。分かりやすい初心者向けの量産型ゲシュペンストＭｋ―Ⅱ使うか。タイガは？」
「なんか『アルトアイゼン』ってのがあるけど……コレめっちゃタイタス向けっぽい。やっぱり俺も無難に量産型ゲシュペンストＭｋ―Ⅱってのから始めようかな。他の皆は？」
「何か猫っぽい『修羅神』とかいう種類の機体が出ました。でも機動力の代わりに攻撃力低いので私も量産型ゲシュペンストＭｋ―Ⅱにします」
「私は……このガーリオン？という機体にします。格段優れている、というわけではありませんが単独飛行可能で必要なものは一通り

揃ってますから」
「「それ、当たりでは……？」」
　当たり機体ではなく、カスタムでもない通常のガーリオンだが初期機体では良機体に間違いない。
「なあ、会長のガーリオンとかいうのに似てなくもない『オーバーフラッグ』っての出てきたんだけど」
『フラッグだと!?ならば迷うことはない！それを選びたまえ！フラッグは素晴らしいぞ!!』
「うわあああ!?どちら様!?あ、確か会談に来てたような……」
　フラッグと聞いてこの男が現れぬ訳がない。
　グラハム・エーカーここにあり。
　巌勝でも察知出来なかったらしく本気で目を見開いている。
『安心したまえ！フラッグファイターとなるなら私が最後の最後まで面倒を見よう！』
『グラハム大佐殿、いつの間に……？』
『なに、オーバーフラッグという単語がこのシミュレータールームから聞こえたので馳せ参じたというわけだ』
『……リミッター解除したバルバトスより早くない？』
『いや、三日月も『レンチメイスくらいなら耐えられる』とか言ってたって聞いたんだけど』
『やはりガンダム乗りは化け物ばかりか』
『我々も負けていられんな』
『昭弘のグシオンもガンダム・フレームじゃん！それに巌勝さんのターンXもアレガンダムカテゴリに含まれない!?』
『アレはターンタイプ……いや待て、私が訓練中使っていたアストレイレッドフレームはガンダムではないのか？』

何かシミュレータールーム……というかシミュレーター外が混沌としてきた。
結局、グラハムに言われるがままに匙はオーバーフラッグを選択。
そしてセラフォルーは……
「『ファービュラリス』っていうのが出たよ☆」
「「「『『うおおおぉぉいちょっと待てええええ!?』』』」」
当たりどころか特賞枠である。なんでそんなもん選択出来るんだ。
しかもイメージ合いすぎてどうにもならない。
「あ！何か天使っぽいのあった！『アンジュルグ』！」
「こっちは剣を持ったやつだ！『ヴァイサーガ』っていうのか、サーガ様の名前も入ってるし色もどことなく私に合ってる！」
「……」
イリナとゼノヴィアも割ととんでもないものを選択可能だった。
いや、それより小猫が怖い。
『なんつーか、後半の三名がどえらい機体引き当ててんな』
『でも代わりに性能や武器に制限かかってるでございますね』
「「「え!?」」」
『まあ、そんな機体なら最初からフル性能だと訓練にならねぇし、別にいいだろ』
世の中そんな万事が万事うまく行く訳がなかった、という事だ。
『それから、愛機持ちはその機体データをインストールすればシミュレーターで使えるようになるから、もし貰えたらやってみな』
そういうレイトだったが、既に登録機体数が半端じゃないのでぶっ

ちゃけ余程の最新鋭機とか例外的な機体でなければ単なるアンロックでしかないのは言わないでおく。
　さて、そんなこんなで（練度の問題で）ＩＦストーリーモードはまだお預けな八人はノーマルモードでの訓練となる。
　レイトやゼット、グラハムらの指導もあって一通りの動作が出来るようになった彼らは、増援相手に自分達だけで戦ってみることにした。

「タイガ！アイツ固いから連携でいくぞ！」
「ああ！タイミングを合わせるぞ、イッセー！」
「「ダブルジェット・マグナム!!」」

　ハバクク相手に前後挟み撃ちにする量産型ゲシュペンストＭｋ－Ⅱイッセー機とタイガ機。
　それでもハバククは倒れなかったが小猫機が駄目押しの一撃を上空から降下して叩き込み、無事に撃破。

「悪い！小猫ちゃん助かった！」
「気にしないで下さい」
「な……なあ、何かあったのか？ちょっと雰囲気が……」
「何もないので心配いりません」
（タイガ！やっぱり機嫌悪くねーか小猫ちゃん!?）
（イッセーもそう思うよな!?最後のジェット・マグナム無理やり押し込んでたし！）

　ゲシュペンスト組、小猫が不機嫌で動揺しまくり。
　理由は推して知るべし。

「オーバーフラッグって変形出来るのに出撃時に形態決めて戦闘中そのまんまなのかよ!?それを戦闘中変形したあのグラハムって人マジ

でなんなの!?」

乙女座でセンチメンタリズムに運命を感じざるを得ない阿修羅すら凌駕するＥＬＳ対話イノベイターです（長い）。

「エネルギー・フィールドを全面に集中……！ソニック・ブレイカー！」

匙がテンパってる間に着々とスコアを伸ばしていくソーナ。さすが生徒会長。

そして、その姉は……

「ソーナちゃんも頑張ってるし、お姉ちゃんもはりきっちゃうぞ☆良い結果出せたらレジェンド様に褒められて……そのあとは……きゃー☆」

煩悩全開だが機体高性能＋本人が予想より操縦上手い＋相性抜群なためスコアがトップを独走中。

……その影響か見学してるガブリエルまで似たような事を考えだした。オイ。

「ナイフみたいなの飛ばしたり鉤爪使ったり、やっと剣を使えたと思えば衝撃波飛ばすだけだったり制限キツいぞ!?普通に剣を使わせてくれぇ!!」

「剣とか弓矢使えるし、ビームも出せたけど技っぽいの出せないー！あっちのジェット・マグナムとかみたいなの使いたいいいい!!」

当たり機体を選んだゼノヴィアとイリナは予想以上に制限がある事を嘆いていた。

同じく当たり機体のファービュラリスを選択したセラフォルーはバンバン撃墜しているのにえらい違いである。

確かに風刃閃とかミラージュ・サインとかだけでも使えれば二人のテンションも上がるのだろうが……。

最初の８名が初のシミュレーター体験を終えた結果、やはりセラフォルーが断トツでトップ、続いて堅実に良機体を扱ったソーナ、何故か怒りのスーパーモード状態の小猫の三人が目立った戦績を残した。

「まあ、最初だし感覚掴めりゃいいんじゃねーか？」
「あの三人は別格でございましたね。特にセラフォルーさん」
「ありゃプラス要素が積み重なった結果だろ。逆に当たり機体使えたのにロクに戦果が上がんなかったあの二人は……」

「ゼノヴィア・クァルタ……私の訓練機よりも高性能な機体を選択出来ていながら、訓練時代の私の初回シミュレーター使用時よりスコアが低いとはどういうことだ……数値にして約３分の１!!」
「し……師範……」
「明日からは剣術修行に並行して操縦訓練も行う！異議は認めん!!」
「そんなあああああ!!」

あまりの戦績にゼノヴィアは厳勝に怒られ。

「天使イコール強いとは言えないのだと改めて実感しました……」
「ガ……ガブリエル様……？」

何故かガブリエルは落ち込んでいた。
イリナの戦績が低かっただけなのにどうして天使全体レベルと考えるのだろうか。
多分使った機体のせいだけど。

「あんな感じだしよ」
「厳勝さんの怒りはまあ理解出来るんですが、ガブリエルさんの落ち込みようはよく分からないであります」
「そりゃ俺だってわかんねーっての。んじゃ、次の奴らスタンバイするぞー」

……もしかしたら機体のみならずミカエルがほぼワンマンで天界を回してたからというのも加わってるかもしれない。
もう気にしたら負けだ。
後が滞るからとレイトとゼット、クロエは次のメンバーを誘導する。
そんな感じでシミュレーター体験は進み、レイト（ゼロ）とゼットのファンな生徒会メンバーが興奮しっぱなしだったり、後方支援型な機体が出るよう祈ってたアーシアに何故かデュラクシール（一応修理・補給装置付き）が当てがわれたり、ＭＦ選べる事を知ったタイタスが「ビビっときた！」と選べたボルトガンダムで無双したり、フーマが選んだガンダムシュピーゲル使ったら生身でゲルマン忍法習得してしまったり。
色々あったが（一部を除き）皆楽しめたようだ。

そしてそれから数日後のタッグマッチ当日、レジェンドはオーフィスや一部の者を連れ惑星レジェンドのクリスタルシティに来ていた。
開始時間まではかなり余裕があるので今のうちに、ということである人物らに会うためだ。

『蛇』と『恋』との出会いと再会は、双方にどんな影響を齎すのか。

〈続く〉

（おまけ）

「あれ？そういやこの桁が倍以上のおかし過ぎるスコアは……？」
「それはレジェンド様ですね」
『えええええええ!?』
「それはさすがにないんじゃないかしら!?だって相当なスコアの２位の倍以上なのよ!?数値じゃなくて桁がよ桁が!!」
「束様と私だけで見ていましたが、あの機体であればこれくらいは平気で出せるかと」
「何使ったにゃ!?」
「レジェンド様の専用機です、としか。未完成のウルティメイトオリジンではないですが」
「……巨大な真っ黒いハロとか……？」
「いえ、違います。黒い部分ありますが」

蛇と恋と獄卒兎

いよいよ日本地獄タッグマッチ当日――
別の意味でオカルト研究部は絶句していた。

「今日からこのオカルト研究部の顧問になったアザゼル先生だ。よろしくな、お前ら」

リアスを筆頭に部員が総じてガックリ膝を落とした。
特に一誠やタイガが目に見えて絶望し、カナエは目のハイライトが消えて目の呼吸まで発動している。

「なんで……？矢的先生は……？」
「また８０先生に色々教えてもらえると思ったのに……」
「ふふ……うふふふふふ……」
「一誠にタイガはそこまで落ち込まないで！カナエは日輪刀を抜くのやめなさい!?気持ちは分かるけど！すっごく分かるけどっ!!」
「分かんのかよ!!俺どんだけ嫌われてんだ!?」
「好き嫌い云々の前に信頼の問題ですわ。明確に嫌ってるのはカナエくらいですし」

朱乃の言葉によるダイレクトアタック。
セクハラ未遂受けりゃ当然である。
そもそも正統派熱血教師な矢的こと８０とアザゼルではオカ研からの信頼度が天と地程の差。
幾度となくピンチに駆けつけてくれた矢的に対して、レイナーレやコカビエルの件でも自ら動かなかったアザゼル……こう書くと明確に分かるというものだ。

「話は戻すけど、部長として断・固!!拒否するわ!そもそもイッセーの言う通り矢的先生はどうしたの!?私の知る限り職務を理由無く放棄する人じゃないわ。無理矢理彼を外して顧問になったのならこっちにも考えがあるわよ……!」
「待て待てマジで待て!?ホントに聞いてたより強くなってんな!?てかそこの娘は本気で止めてくれ今度こそ俺の頸落ちるから!!」
「あ、父さんいきなりごめん。なんか堕天使の親玉がオカルト研究部の侵略に乗り出したみたいで……手が空いてるならシックルさんに伝えて」
『おやおや……随分と大それたことを。分かりました。動ける七星剣も連れて行きましょう』
「いやそんな事微塵も考えてないから!?お願いしますから話聞いて下さい!!」

さすがに七星剣＋シックルはヤバすぎた。
にっこり笑ってウルフォンをスピーカーモードにする裕斗は順調にジェントの影響を受けているようだ。
下手な事は言わせまいと徹底して対策。
そこまでするかよ……と思いつつも漸くまともに話せる状態になったアザゼルは安堵する。

「やれやれ……最初からこんなんじゃこれから先不安しかねえよ。まずだな、お前達が最も疑問に思ってる矢的だが別に顧問を変わったわけじゃねえ。分かりやすく言うならダブル顧問ってやつだ」
『は?』
「あいつは教師以前にウルトラ兄弟の一人で、光の国からも信頼の厚いウルトラマンだろ?おまけにここの校長からその優秀さ故に日帰りの場合もあるが出張も多い。で、あんまり顧問不在が多くても困りものだってことでタイミングよくサーゼクスの奴からお前らの面倒を見てやってくれと頼まれた俺がお前らの強化がてら就任したわけ

だ」

アザゼルの理由は確かに的を得ている。

学園側が原因とはいえ顧問の不在が多いのはマズい……が、後半は別だ。

「いや俺、師匠とか先輩とかいるし、神器はそもそも俺自身の地力が上がんないとだし」

「姉様達がいます」

「父さんやラッシュハンターズを始め七星剣の方々や乱菊先生もいますから」

「卯ノ花先生に色々教わっておりますので」

「リク兄さんやこの間知り合った方々がいますう」

「師範より鬼畜修行でも困るが、かといって難度を下げたら強くなれないし……」

「私はレジェンド様とか卯ノ花先生に教わってますし……」

「そもそも貴方、縁壱先生に勝てるんですか？」

「俺ら三人、先輩方に特訓してもらってるし」

「だよな、そもそも戦い方違うしよ」

「仮に特訓として、例えば『イッセーの魔力を使えるようになれ』と言われても無理だ。身体の作り自体が違うのだからな。神器は私達も予期しなかった例外というものだ」

『そういうわけでこの神器がその例外な以上、お前の今までの知識が役立つかどうか微妙だし』

「無論私もハリベルお姉様や、最近だとマリーダ姉様にも師事しているから問題ないわ。というか、貴方……束博士に説教されて結局シミュレーターしに来なかったわね」

アザゼル撃☆沈。

正確にはリアスらが退室した後に束に連れられてやって来たのだが……

あろう事かタッグマッチの調整を終えたレジェンドにＶＳモードでサーゼクスやミカエル諸共ボコボコにされた。
ちなみに三人はレジェンドの意向によって、束が一時的に機体の選択制限を解除しかなりの強機体が選べた。
アザゼルはＲ―ＧＵＮリヴァーレ、ミカエルはグレイターキン、サーゼクスに至ってはネオ・ジオングまで使ったにも関わらず、シミュレーションによる性能テストを兼ねてレジェンドの駆るネオ・グランゾンの縮退砲一発で全滅。
あまりに理不尽過ぎてしばし放心状態だったのは記憶に新しい。

「行ったんだけどよ……別にいいか、思い出したくねえ」
「戦場突入と同時に撃墜されました？」
（似たようなモンだよ畜生!!）

相変わらずハートブレイクしてくるカナエに心の中で涙しつつ、何とか言葉を繋げようとしたところに件の矢的が到着。

「お、皆揃ってるな。アザゼル先生もいるしちょうどいいか」
「「「「矢的（８０）先生!!」」」」

この反応の違いである。

「……俺、泣いていい？」
「いきなりどうしたんですかアザゼル先生!?えーっと……急な話の上、皆に話さずいきなり決めてしまってすまない。おそらくアザゼル先生からもう聞いてるとは思うが、僕自身が多忙なため顧問不在になりがちになってしまうのを防ぐ手段として、もう一人顧問を就任させ、せめて片方だけでも付き添い出来るようにしたんだ」
「理由は納得出来るんですが、せめて人選だけはどうにかならなかったのかと……」
「……重ね重ねすまない。校長とサーゼクスさんとアザゼル先生自身

にゴリ押しされてしまった」
『やっぱりか!!』

オカ研の殆どがアザゼルに説教を始める中、リアスは密かにサーゼクスへと連絡している。

『リアス、どうしたんだい？』
「（異世界修行もあるし）しばらく帰らないので事前に申し上げておきます魔王ルシファー様」
『え〝!?ちょっ……リアス!?今魔王ルシ「では御機嫌よう」リーアたぁぁぁぁん!!』ブツッ

着拒して終了。
サーゼクスは絶大なるダメージを精神に負ってしばし使い物にならなかったという。
そしてアーシアは……

（レジェンド様のタッグマッチまでお時間はありますけど……早め早めの行動を心掛けた方が良いですよね）

やっぱりレジェンドの事だった。
しかも時間前行動の遵守。良い娘である。
そんなアーシアの気持ちを察してリアスは手をパンと叩き指示をする。

「さ!その話は後にして、今日はいよいよレジェンド様のタッグマッチの日。仮住居まで鬼灯さんが迎えに来てくれるから迷惑にならないよう、ソーナ達と合流して早く向かいましょ」
「「「「はーい！」」」」
「あの……俺の分は？」
「生中継されるから別にいいんじゃねーの？」

フーマの一言でアザゼルは再度沈んだ。

☆

時は少しだけ遡り、昼前の惑星レジェンド。
中央都市クリスタルシティにある病院内の飲食店にて、レジェンドが二人の人物と面会していた。
レジェンドと対面している二人は、片やレジェンドを疑惑の念を抱きつつ睨み、片やレジェンドとその人物を見てオロオロしている。
当のレジェンドはというと別段困った様子もなく、軽く息を吐いただけ。

「やはり信じられんか」
「当然だ。見知らぬ土地、見知らぬ文化、鬼ではないが特異な外見……確かに信憑性はあるがそれだけで信用出来るわけがない。大規模な幻術の可能性もある」

その人物の言う事は一理あるが、そもそもレジェンドがそうするメリットは無い。
もし明確な敵と相対した場合、ぶっちゃけ避難させるより結界張ったり一瞬で相手を倒す方が確実だからだ。
そして、それが出来るだけの実力もある。

「い……伊黒さん……」
「大丈夫だ、甘露寺。俺が必ず守る」

何故かキュンキュンしだしたもう一人と先程の人物……鬼殺隊の蛇柱・伊黒小芭内と恋柱・甘露寺蜜璃が何やらいい雰囲気になり始めたので、再び意識がこちらに向くまでいよいよ今日行われるタッグマッチについて思考を張り巡らせる。

（おそらくアイツはギリギリまで調整してるんだろうな。そっちは良いとして……問題のあの二人、せっかく調整期間作ってやったのに脱走ばかりでろくすっぽ鍛えてないと聞く。やる前から勝負を捨ててるようなもんだぞ？）

レジェンドはタッグパートナーを称賛しつつ、対戦相手の所業に溜め息を吐いた。

「やれやれ……こりゃ手荒にいくしかないな、鬼舞辻無惨にせよコカビエルにせよ」

「鬼舞辻無惨!?」

いきなり二人が反応した。

鬼であった巌勝や狛治はともかく、杏寿郎やカナエ、しのぶは無惨との最終決戦前に死亡したが二人は無惨を討ってから死亡したためその最後を知っている。

だというのにレジェンドが無惨を生きているように言ったため血相を変えて問い詰めだした。

「おい！今何て言った!?鬼舞辻無惨だと!?有り得ん！奴は俺達が討ったはずだ!!」

「ああ。アイツが今いるの日本地獄だけど」

「え？」

「いやな、新設された地獄とその責任者のお披露目会も兼ねてタッグマッチを日本地獄でやるんだけど、その相手なんだよ。しかもさァ、ノアの奴の管轄からこっちに『弾かれて』来たわけだけど……こっちでも地獄で問題ばっか起こすわ杏寿郎とかカナエとかしのぶの死因となった上弦とかも元を辿ればアイツだろ。反省なんて微塵も無いしタッグマッチに備えた調整期間設けても脱走することばかり考えて、鍛えるとかしないし……ヘボい試合になったらどうしてくれんだ

よ全く。まぁ所詮アレらはウォーミングアップにしか考えてないがな。俺もアイツも」

額に青筋浮かべながら怒濤の勢いで喋るレジェンドに若干引き気味の二人だったが、聞き逃せない名前が続けざまに呼ばれてまたも驚く。

「杏寿郎、カナエ、しのぶ……まさか煉獄に胡蝶とその姉か!?」
「ええっ!?そんな……嘘!?」
「あ、やっぱり知り合いか。カナエは今学園だし、合流は夕方の日本地獄になるが……他の二人は知人じゃないかと思ったから連れて来てるぞ。会ってみるか?」

まさかの事態、まさかの申し出に困惑する二人。
小芭内は今一歩信用まで踏み切れないが、蜜璃は違った。

「伊黒さん……もし本当なら私、会いたい!」
「甘露寺!?」
「それに私、この人は信じても大丈夫だと思うの!お館様に声凄く似てるし!」
「言われると思ったぞチクショー」
「「言われる!?」」
「杏寿郎なんか俺をお館様呼びだぞ。カナエにもそう呼ばれた事あるし……しのぶくらいか?最初から普通に呼んでくれたの」

蜜璃に言われたからというのもあるが、次々と明らかになる関係や事実に小芭内もレジェンドへの警戒が薄れていく。
そして、もう一つ決定的な事が起きる。
三人が話し込んでいる最中に、この後の合流地点にいるはずのオーフィスがやってきた。

「レジェンドー」
「ん？オーフィス、あっちで待ってろと言っただろ」
「我、ちゃんと待ってた。しのぶに頼まれて呼びに来ただけ。もうすぐ予約した時間だからって」
「あー、食べ放題バイキングな。ダイブハンガー以外でバイキングは中々行ってなかったし」
『肉ー!!』
「!?」

いきなりゴジラが食事時という事で勝手に出て来て驚く小芭内と蜜璃。

「ゴジラ、めっ」
『いいだろ別に。飯時前にスタンバって何が悪いんだよ』
「まあ、盗み食いしてるわけでもないしな」
「可愛いー!!」
「ん？」「……？」『あん？』

蜜璃の言葉に三者三様の返事で反応する二人と一匹。

「ねえねえあなたお名前は？私は甘露寺蜜璃！よろしくね！」
「我、オーフィス。これゴジラ」
『これって何だ。ちゃんと怪獣王って言えよ』
「オーフィスちゃんにゴジラちゃんね！」

先日のゴジくん呼びに加えてちゃん付けされ、顔が引きつっているゴジラ。
しかもどちらの呼び方をした方も天然というか、悪気がないのがまた困る。
あったら尚の事駄目だけど。

「……」
『んだテメェやんのかコラァ』
「上等だ表に出ろ」
「何で理解出来てんだお前ら」

ゴジラ自身は可愛いと言われて不満だったが、蜜璃の気を引いた事で小芭内の嫉妬の視線を向けられて一触即発の空気……になったのだがレジェンドのツッコミで強制終了。
レジェンドやオーフィス以外から見たらギャオギャオ鳴いてただけのゴジラと意思疎通出来た小芭内は何気に凄かった。
伊黒さん凄い！という蜜璃の視線で気を良くした小芭内は一先ずレジェンドが合流地点という場所に付いていく事にする。
そこで目にしたものは……

「というわけでエース兄さんは光線技のみならず剣も使えるところが真の切断技のエキスパートと呼ばれる理由なのでございますよ!!」
「なんと!?光線や素手だけでなく武器も使いこなすとは！さすがゼット殿が力説するだけの事はある！彼らが我々で例えると柱というわけか！」
「そういえばミライさんやゲンさん、それに矢的先生もそうでしたね」
「ウルトラ兄弟の中でも『ウルトラ六兄弟』は別格と聞く。特に二番目たるマン殿はレジェンド様同様に武器や形態変化を行わずに戦い抜いた程の実力者だそうだ」
「だがウルトラマンＮｏ．６と呼ばれる、タイガ殿の父親のタロウ殿も凄まじい。相手が余程強力でなければ苦戦さえしないそうだ」
「六兄弟のどの人物にも言えるのは格闘戦・光線技共に死角なしというところか……」

記録映像を見ながらウルトラ戦士の話題で盛り上がっている元鬼殺隊＆元上弦の鬼＆始まりの剣士。

非常に楽しそうにしているからか、一人呼びに行かされたオーフィスが不機嫌になりながらレジェンドに抱きついている。

「……ぷんすこー」

「そうむくれるな。このあと食い放題なんだから」

『そーいや時間的に地獄でもメシ出るのか？』

「出るぞ」

よっしゃー！と喜ぶゴジラを見つつ、先程の二人を見るとやはりというか驚きの表情のまま固まっていた。

小芭内はそのまま立ち尽くしていたが、蜜璃はフラフラしながら近付いて行く。

最初にそれに気付いたゼットがこちらを向き手を大きく振り、杏寿郎やしのぶ達もその反応でレジェンドらに気付いた。

「ん？何かあの子フラフラしてるけど大丈夫かな……杏寿郎、しのぶちゃん、もしかして知り合いでございますか？」

「うむ！俺の元継子で現在は同じく柱である甘露寺だ！む？おお！お館様の近くには伊黒もいるではないか！」

「二人、ってそういう事だったんですね。あと正確に言うと柱と言っても、もう元が付きますよ。向こうでは死んでますし」

「いや、しのぶちゃん表現がウルトラダイレクト過ぎるぜ……」

いつものテンションと変わらない彼らだが、蜜璃の方は違う。

おぼつかない足取りで杏寿郎としのぶの近くまで来ると、消え入りそうな声で二人の名を呼ぶ。

「……煉獄さん……？」

「うむ！久しいな甘露寺！」

「しのぶちゃん……？」

「はい、元蟲柱な胡蝶しのぶですよー」

「いやだからこの場で元付けなくてよくね？」
「そこはきっちりしませんと」

そんなやりとりも二人が生きて目の前にいるのだと確信するのには十分だった。
蜜璃の目に涙が溜まり、声も涙声になっていく。

「煉獄ざん……！」
「む？どうした甘露寺!?」
「じのぶぢゃん……！」
「あらあら？甘露寺さん、声がおかしいですよ？具合が悪いんですか？見てあげますからねー」
「うわあああああん!!!」

遂に感極まって二人の羽織を掴みへたり込んで大泣きし始めてしまった蜜璃。
そんな彼女に小芭内を含め殆どの者があたふたしている中、レジェンドは静かに目を閉じて腕組みしつつ、僅かに微笑みながら自身は動かず小芭内へと声をかけた。

「行ってやれ」
「!!」
「惚れた女を宥めてやるのも男の役目というものだ」
「……！」

それを聞いた小芭内は無意識にレジェンドへと頭を下げ、蜜璃へと駆け寄り自身も屈んで彼女の背中を優しく擦る。
見ずとも分かると言わんばかりにレジェンドは目を閉じて腕組みしたまま動かない。

「レジェンド」

「どうした、オーフィス」
「我が泣いたら、レジェンドはああしてくれる？」
「……おそらくな」
「えーんえーん」
「嘘泣きは含まれんぞ」
「ぷんすこー」
「さっきも思ったが『ぷんすか』じゃないんだな」

ポカポカと叩くオーフィスの駄々を甘んじて受け入れながら、蜜璃の気が済むまでレジェンドはそのまま時を流した。

「ご……ごめんなさい！二人に会えたのが夢みたいで、つい……」
「気にするな！俺も甘露寺らには別れの言葉さえ伝えずに逝ってしまったからな！」
「パム～」
「わあああ！この子も可愛い！ふわふわしてる！」
「俺の相棒の羽斗パム治郎だ！」
（（凄くどこかで聞いた事ある名前ー!?））

漸く泣き止んだ蜜璃は小芭内と共にパム治郎の名に心中驚いている。

パム太郎と呼ばれた事もあったけど。へけっ。

「にしてもやっぱり時間軸のズレとかあるんですねー。それはそうと……伊黒さん、パム治郎君に嫉妬しちゃ駄目ですよ」
「……」

蜜璃が好きすぎる男、小芭内。
そしてここでもアホの子ゼットは空気が読めなかった。
「ところでお二人は恋人かご夫婦でございますか？」
「!?」
「いや、あまりに仲睦まじいというかお似合いというか、そんな感じだったんで」
真っ赤になる蜜璃、そしてゼットへの好感度が爆上がり状態な小芭内。
放置されつつある継国兄弟と狛治、ついでにレジェンドとオーフィスとゴジラ。
「俺、主人公なのに地の文でついで扱いされたんだけど。いよいよ本気で泣くぞこの野郎」
「「メタいですレジェンド様」」
「よしよし」
『さっきの台詞と立場逆転してんじゃねーか』
彼らを放ったらかし気味だったのに気付いた元鬼殺隊の柱勢とゼット。
急いで駆け寄り勢いよく頭を下げる蜜璃。
「お館様ごめんなさい！放置して話し込んでしまって！」
「オイ待てお館様呼びになってんぞ」
「え？駄目ですか？」
「駄目っていうかそっちも黙っちゃってるし、マズいんじゃないのか？」
レジェンドが指差した方向には目を閉じたまま蜜璃の傍に立つ小芭内が。

幼少期の出来事から他人を信用しにくい彼はいくら蜜璃がレジェンドを信じられても……と思ったのだが。

「すぐに全部は信用出来ないが……敵ではないという事は信用出来る」

「……！」

「十分だ。あまりポンポン信じられても逆に心配になるからな。何にせよ、とりあえず飯時……食事しながら詳しい話を詰めていこうか」

「ごはんー」

『肉食わせろー！』

こうして少しだけ距離が縮まった彼らは共に食事しながら今後の事を話し合う気だったのだが……。

「おいふぃー♪」

「我、たくさんおかわりする。むぐむぐ」

『この時ばかりはこのサイズに感謝だな。肉のサイズがデカいぜー!!』

最初は引かれると懸念してた大食いの蜜璃だが、小さいのに下手すれば彼女より食べるオーフィスを見たことや、ともすればそのオーフィスよりも遥かに食べるかもしれないレジェンドやゴジラなんかの話を聞いてすぐに笑顔になった。

さらに、こちらも……

「小芭内、彼女に似合うとっておきの言葉がある」

「!!」

「『いっぱい食べる君が好き』。言ってこい」

「御意……！」

蜜璃が好きそうなスイーツを持って駆け寄り、恥ずかしがりながらレジェンドに教わった言葉を口にしてまたもいい雰囲気になる二人。
当初は疑念が強かった小芭内だったが、蜜璃との関係を後押ししてくれるレジェンドへ急速に信頼を寄せていき、食事が終わった頃には……

「私達、出来るならお館様のところで働きたいです！」
「どうか、ご許可を。お館様」
「あっれェェェェェ!?」

こうなってた。短時間で激変しすぎ。
これがご都合主義というものか……と考えていたレジェンドだったが、ちょうどこの間の学園での事件である事を考えていたため二人にはそちらに属してもらおうと思い了承。
継国兄弟や狛治の事を教えると、やはりと言うか最初は巌勝と狛治を疑ったものの特盛りクレープを縁壱と一緒に頬張る巌勝や、恋雪と慶蔵への土産を本気で選ぶ狛治を見て割と簡単に納得。
レジェンドへの疑念が信頼へと変わった直後だったからついでにそっちのハードルも下がったのかもしれない。
そんな彼ら、レジェンドのタッグマッチを観戦すべく日本地獄へ向かうわけだが身内に、とレジェンドが参加者特権で渡されたチケットは五枚。
巌勝は縁壱一家と久々の自宅で、狛治はダイブハンガーへ戻って妻や義父、鉄華団を始めとした同居メンバーらとリフレッシュルームの特大モニターで観戦するらしく、オーフィス、杏寿郎、しのぶに加えて小芭内と蜜璃が行く事になった。
ちなみにゴジラやパム治郎はペット枠。
……ついでにゼットはなんと実況枠である。
鬼灯も実況＆解説枠……絶対カオス確定だ。
ゲスト解説枠も未だ謎に包まれているし。

「よっしゃー！テンション上げてくぜ！」
「伊黒さんも甘露寺さんも期待してていいと思いますよ。この間、こちらのゼットさんが凄い技を出したんですが、それを教えたのレジェンド様ですし」
「え!?こっちのお館様まさかの武闘派!?」

……無惨の地獄のカウントダウンが始まった。
既に落ちてるけど。

☆

タッグマッチ開催時間が迫る日本地獄。
日本のかの国立競技場並の広さで新設された『魔闘地獄』の象徴たる巨大リングを囲む観客席には多くの見物客が既に陣取っている。
その中にはオカルト研究部や生徒会、セラフォルーやガブリエルに加えてリクやレイトの姿もあった。
唯一気になるのは観客席の一角……正確には3区画ものスペースが『特別招待席』になっている事だ。

「あそこら辺、なんであんなに場所取ってるんだろ……？」
「団体客なのかな？特別招待って」

そんな中、あるアナウンスが流れる。

『皆様、この度は新設の『魔闘地獄』責任者お披露目を兼ねたスペシャルタッグマッチにご来場頂き誠にありがとうございます。開催までまだ少々お時間がございますが、早めにご来場して下さった事に感謝を込めて、エキシビジョンマッチを設けさせて頂きました』
「「「「エキシビジョンマッチ!?」」」」
『つきましてはどちらも参加者に関わり合いのある二名を選出しました。ぶっちゃけすぐに決着がつきそうですがスカッとストレス発散

して頂ければと思います』
(((((アナウンスこれ声変えてるけど鬼灯(さん)(様)だよね!?)))))

もはやアナウンス内容から丸分かりである。

『では選手入場です!まずは青コーナー!聖剣計画とかやってる事がまさに外道!マスク・ド・ガリレイ!!まあ、あのだらしない体型はバルパー・ガリレイって一発で分かりますよね。もうバルパーでいいですね、アレ』
「だらしないとはなんだー!!」

覆面とショートパンツにブーツを装着したその人物はかのバルパー・ガリレイ。
裕斗とゼノヴィアはその姿に怒りが燃えるどころか肩を震わせて笑いを堪えている。

「ほっ……鬼灯さん紹介から飛ばしすぎッ……!ぶふっ!」
「あの衣装が……恐ろしく似合わない……!ぶはっ!」

堪えているがやはり少しオーバーした。
仕方ないよね。

『そして赤コーナー!愛らしさと実力は日本地獄トップクラス!この魔闘地獄の責任者となる人物に鍛えられ更にパワーアップしてやってきた核弾頭!芥子!!最近芥子さん毛艶良いんですよ。間違いなく相手死にますね』
「よろしくなのでーすよ」
「「「「う、兎いいいいい!?」」」」
『知らない方の為に説明しておきますと、芥子さんは昔話で有名なかちかち山に登場する兎です』

ちなみに割と知名度があり、実際は子供向けの絵本のような内容ではなく色々凄惨なのである。
それはさておき、芥子ＶＳマスク・ド・ガリレイ――オカ研らのように何も知らない者達なら覆面バルパーに分があると思うだろうがそうではない。

『さて、あまり長々と紹介を引っ張るより見て頂く方が早いでしょう。それではエキシビジョンマッチ、レディー……ファイッ!!』
「確かに私は頭脳派だが運動が出来ぬわけでは」
『ちなみにこのバルパー・ガリレイ、割と穏やかな顔をしてますがとんでもない狸ジジィです』

――刹那、芥子の目が鋭く真っ赤に染まる――

「タヌキ……タヌキ……!こんのタヌキぃぃぃぃ!!」

尋常ならざる速さでバルパーの背後に回り込み、前足で首にガッチリ締め付けるようにクラッチし――
「ダブルアーム・スープレェェェェェックス!!」
ドゴオオオォォォォン!!!
「ギャアアアアアア!!!」
『えええええ!?』
体格差を遥かに覆す大技がいきなり炸裂！
『おーっと芥子さん、バルパーへ凄まじい先制攻撃を仕掛けたー!!早

速派手に鼻血を噴き出して歯が何本か宙を舞う!!』
「潰す!タヌキ潰すうううう!!」
「ごブォおおお!?」

ミス　ミス　ミス

『続けてスピン・ダブルアームがバルパーを襲う!!先の技に続き、あの愛らしい姿からは想像も出来ない腕力が発揮されバルパーが段々垂直になっていくー!!』

地獄の者達は芥子の成長具合に、そしてオカ研や生徒会、リクらは異常な強さの兎に口をあんぐりと開けたまま汗を滝のように流している。

そして芥子はバルパーを空高く放り投げると、自身はそれよりも更に高く舞い上がり、両後ろ足の踵をバルパーの喉にめり込ませつつ顎に足の裏を押し付けたまま落下。

それを見ていた全員が思う。

――あ、絶対死んだコレ――

既にバルパーは死んでるけども。

「獄兎双脚落としー!!!」

ドベギィィィィッ!!!

「ギョバァァァァッ!!!」

『早くも決まったー!!バルパー、喉笛を潰され顎も粉砕し頭蓋骨全体に大ダメージ!!さらに首の骨も逝ったー!!目鼻口に耳からも血を噴

き出してくたばりました!!芥子さんお見事！大ッ勝利です!!』

身体はともかく頭部がそれはもう悲惨な事態になってしまったバルパー。

生々しい事を平然と口にしつつ亡者に対して容赦ない実況、鬼灯も絶好調である。

「オイこえーよあの兎めちゃくちゃ強いんだけど!?」

「鬼灯さんばりに容赦なかったな、あの芥子って兎……！」

「いやあ驚いたけどすっごいスカッとしたよ」

「木場がすげえ良い笑顔でキラキラした空気振りまいてる……！」

「まあ、裕斗の過去を考えると当然よね」

「……お姉様、人間だけでなく未だ日本地獄を軽視してる悪魔達に認識を改めるよう促した方が」

「そ……そうだねソーナちゃん☆」

多分、まだ全力じゃなさそうな気がする。

彼女を鍛え上げた人物というのは一体どれほどの存在なのか……。

期待と不安が大きくなりつつ、タッグマッチの時間が迫る。

〈続く〉

余談だが、バルパーはその後に芥子によって血の池までぶん投げられた。

最後の最後まで見せ場なし。

再会!・最高の友と最強のライバルの巻

ちょうど芥子がバルパーを潰した時。
レジェンドは5人を連れて会場の選手控室前に転移。
更に運良く放送室からの実況を終え、会場の特設実況席へと向かうところの鬼灯に遭遇した。
当然といえば当然だが、小芭内と蜜璃にはその風貌から警戒されたものの、レジェンドだけでなく杏寿郎やしのぶがこちら側での鬼や鬼神について分かりやすく簡潔に説明した事で無事に誤解が解けた。
さらに鬼舞辻無惨を容赦無く折檻しているという事で逆に好感度が上がったらしい。

「というわけで、ゼット共々彼らを客席に案内してほしいんだが……」
「ああ、そのくらいでしたらお安い御用です。レジェンド様は準備の方を」
「今回の開催といい迷惑をかける。この礼は地獄式運動会を盛り上げる事で返そう。あ、これ企画書の一部な」

失礼、とレジェンドから企画書を受け取りサラッと目を通した鬼灯はある一点を見て吹き出しそうになった。
借り物障害物走の借り物の欄にとんでもない名前があったからだ。
〔鬼舞辻無惨→借り物〕
レジェンドと鬼灯は互いに目を合わせ、無言でサムズアップし合う。

「間違いなくハズレ枠ですよね、これ」
「引けば最後、縁壱を始め参加者観客問わず多数の人物に狙われるからな」
「そこにシン・ゴジラさんも混ざるでしょうし、たった一種目だけで凄い盛り上がりになりそうです」
「ちなみに鬼灯の案は?」

「私のはこういうのですね」
「……ヤバいな。遠足が楽しみで眠れない子供達の心境が理解出来る。中身が攻めて追いかけて来るとか何だこのホラーとコメディ混ざった種目。凄い気になってしょうがない」
(((何それ!?)))

借り物障害物走にせよ後半の種目にせよ、カオスなものになるのは避けられないだろう。
地獄式運動会という一抹どころか数え切れない不安を抱えた行事はさておき、彼らは各々の準備に入るべくまずはその場でレジェンドと別れ、その後は観客席近くで鬼灯&ゼットと別れる形になった。

「煉獄君〜しのぶ〜オーフィスちゃん〜こっちこっち〜!」
「姉さんのテンションが徐々に上がってきてるわね」
「伊黒さん、もしかしてあの人が?」
「ああ、胡蝶の姉だ。確か名前はカナエ、花の呼吸の使い手だったはず」
「そうなの!?カナヲちゃんと同じね!」
「しかもこちらに来て日の呼吸まで後天的に体得したそうだ!なんでも特殊な瓢箪を割れるようにする事でその道が開けるらしい!」

杏寿郎の説明を聞き、小芭内も蜜璃も驚く。
適性が無ければ使えないと思われていた各属性の全集中の呼吸だが、その壁を打ち破ったというのは相当凄い事だ。
「ちなみにそれ編み出したの、さっき兄弟でクレープ頬張ってた兄弟の弟さんの方らしいですよ。鬼舞辻無惨の天敵で始まりの剣士だと」
((えええ!?))

こっちも驚きである。というか継国兄弟マイペースすぎ。

「珍しく時間ギリギリねー。あら？そっちの二人……あー伊黒君!?久しぶりねー！その子は彼女？」
「!!あ、ああ……その……」
「初めまして！甘露寺蜜璃です！えと……元？恋柱で、煉獄さんの元継子で、伊黒さんとは、その……」

もじもじしだした蜜璃に対してカナエのとった行動はというといつも通り。

「初々しいし可愛いー!!」
「姉さん自重。スピニング・トゥ・ホールドー」
「いたぁぁぁぁ?しのぶやめて私が悪かったからいきなり初対面で変な事言ってごめんなさいぃぃぃ!!」

笑顔で凶悪な技を決めるしのぶは順調に成長しているようだ。
そして相変わらずそれをよしよしと慰めるオーフィスというのも既に様式美になりつつある。

「恋柱……？もしかして煉獄さん達の同僚ですか？」
「そうですよー。あと、甘露寺さんは可愛らしい上に力持ちなので特に小猫さんとは仲良く出来るんじゃないでしょうか」
「あらあら……ところで、恋柱ということは恋の話とかは？」
「勿論大歓迎！」

蜜璃は早速オカ研女子と仲良くなっている。
かくいう小芭内も……

「あ……あの！僕、ギャスパー・ヴラディって言います！」
「……伊黒小芭内だ、好きに呼べ……？お前、男か？」
「は、はいぃ！」

「すげぇなアンタ！ギャスパーを一発で男って分かったのか！」
「声や雰囲気などは女のそれと殆ど変わらないが、なんとなく理解した。初見では分からなくても仕方ないだろう」
「だろ!?やっぱり最初は分かんないよな！」
（ゼットに似たこの青い奴、どことなく宇随に似てるな。それにやけに筋肉が自己主張してる赤と黒の奴は……何故だろう、煉獄と悲鳴嶼さんを混ぜ合わせた感じがする）

前者はともかく、後者は声と筋肉が原因である。
結局筋肉じゃねーか！
そんな事を考えつつ席に着くと、特設実況席に座った鬼灯とゼットがアナウンスする。

『あー、あー、それでは皆さんお待ちかね！『新地獄・魔闘地獄開設及び責任者就任記念スペシャルタッグマッチ』いよいよ開催時刻が迫って参りました！先程の芥子さんによるバルパーの蹂躙は程よく皆さんの気分をスカッとさせてくれたでしょう』
（（（（いやむしろ恐ろしかったんですが!?））））
「ねえねえ小猫ちゃん？」
「何ですか？蜜璃さん」
「芥子さんって誰なの？」
「異常に強い白兎さんです」
「……え？」

あそこにいますよ、と小猫が指差した先に居たのはひくひくと鼻を動かす愛らしい白兎。
蜜璃だけでなくしのぶらも目が点になっている。

「姉さん、何があったの？」
「えっとね、非人道的な変態があの子からゼットさん並の技を受けて飛んで逝ったのよ」

「……つまり、どういう事だ」
「うむ！よく分からんという事だけは分かったな！」
「わかったー」
『いや結局分かってねーだろお前ら』

もはやツッコミ役が板につきつつあるゴジラ。
そんな彼らは露知らず鬼灯は言葉を進めていく。

『しかし！今回の主役となるお二人はさらなる大技の数々を用意しており、見た目も挑戦者の二人とは違って良い意味で私達を沸かせてくれる事は間違いありません！』
「確か、相手は鬼舞辻無惨とコカビエルだったかしら。思いっきり下げまくってるわね。別に構わないけど」
「そうよリアス、コカビエルはどうでもいいけど無惨は下げてもへこたれないからこれぐらいしないと」
「胡蝶の姉の言う通り、奴の頭に反省などという言葉は入っていない。というか入れようとしても入らない」

小芭内の言葉にリアスらはえぇー……とげんなりしているが事実だから仕方ない。
そこで鬼灯がゼットに振る。

『ではそろそろ双方に入場して頂きましょう。今回は私、鬼灯が実況兼解説を務めると共に複数の実況、解説を行ってくれる方々をお招きしております。せっかくですので今、私の隣にいらっしゃるウルトラマンゼットさんにご紹介して頂くことにしましょうか。それではゼットさん、宜しくお願いします』
『わかりました鬼灯さん！えーっと、先程のご紹介に預かりました、銀河遊撃隊所属のウルトラマンゼットです！本日は鬼灯さんと一緒に実況を担当させて頂くのでどうぞ宜しくお願いします！それでは行くでございますよ！』

(((((口調オオオオオ!?最後の最後で口調崩れたアアアアア!!)))))

だが、やはりゼットはこの口調ではないとと思うのがレジェンド一家や光神陣営である。

そして遂に観客の腹筋にダメージを与えるゼット式紹介が炸裂した。

『では早速青コーナー!『起こすぜ!戦争!』とかジード先輩がキレそうな事やらかしたり『俺は戦い尽くすだけだぁ』とか言ってた割に厳勝さんから逃げ出したりしてどうしようもなかった生前はなんと堕天使の幹部!いやマジこんなん幹部って中間管理職の方々の精神衛生上良くないですよねホント。マガパンドンの亜種の片割れになった堕天使の名はコケコッコォォォ!!……ん?あ、間違ったコカビエル!!』

「「「「ぶふぅっ!!!」」」」

『ゼットさんいきなり飛ばしてくるとは中々ですね。3歩歩けば忘れる鶏頭という意味ならこれとない見事な表現です』

「何が見事だぁぁぁ!!」

あまりの力の入れ具合に直接相対したリアスらは本気で吹き出した。

確かにあの時はゼットのウルトラフュージョン形態でのデビュー戦だったから気合いが入っているのは分かるが。

「ぶっ……くくくっ……」

「お……おいフーマそんなに……ぷっ」

「確かにチキンではあるようだからな!」

「「「「ぶはっ!!!」」」」

「ぷっ……タイタスさん上手すぎ……!」

「これはゼットさんによる無惨の紹介が楽しみになってきましたね」

ＭＳの操縦技術といい、意外なところでゼットの特技が発見されていく。
タイタスのツッコミのキレといい、カナエとしのぶを始め杏寿郎や小芭内に蜜璃、果ては巌勝や妻子と共にＴＶで見てる縁壱さえ今か今かと期待を込めてゼットの無惨紹介を待ち望んでいる。
そしてその時が遂に来た。

『そしてそのタッグパートナー！座右の銘は『私は決して間違えない』間違えてなかったら地獄に落ちないよな。間違えだらけの人生ならぬ鬼生は頭の弱さがまさに世紀末だったから成し得た奇跡！菊突き無惨!!……あ、ヤベ。いくら十二鬼月の男性比率が多かったからって……』
「なんと!?無惨は衆道だったのか!!」
「「「ぶっ!!!」」」

煉獄の一言がトドメになって元鬼殺隊一同が思いっきり吹き出す。

「そこの鬼狩り!!誰が衆道だ!!」
『なるほど、つまりアレですか。縁壱さんから逃げ回っていたのは、斬るんじゃなくて普段自分が突いてる方だからたまには突いてほしいと。地獄でも性癖は全開ですか。そりゃ縁壱さんだってお前に存在してほしくないわけですよ』
「違うわ!!何故そんな方向に推測する!?」

反省まるで無しという事でただでさえ良くなかった無惨のイメージが超光速で降下していく。
ＴＶを見ている縁壱はテーブルに突っ伏して笑いに堪えており、巌勝は「まさか私も（そっちの意味で）狙われていたのか」と青い顔をしていた。
『えー、ゼットさんにご紹介頂きました青コーナーのネタ……もとい

チャレンジャータッグですが』
(((((ネタ!?)))))

確かにネタの宝庫だったが。

『この連中よりもやはり皆さんは主役のお二人をお待ちでしょう！それではゼットさん、引き続きお願いします！』
『了解でございます鬼灯さん！』

既にスタンバっていたネタ組と違い、赤コーナーの二人は姿を見せていない。
だからこそ期待が高まるというもの。

『それでは赤コーナー！名は体を表すという言葉はこの御仁の為にあるのではなかろうか!?小さな事から全宇宙レベルの極大な事まで己の起こす奇跡で解決！いやマジウルトラ半端ないんで気になったら是非お調べください、ご功績！
光り輝く伝説の戦士！
ウルトラマンレジェンドォォ!!
ちなみにリングコスチュームの時はブラスターブレードと名乗った事もあるそうでございます』

ゼットによる紹介が終わると同時にゲートから何者かが走って来る音が会場に響き、その者はゲートを一歩抜けた瞬間、身体を捻りながら数十メートルもジャンプして両足を揃えた腕組みポーズで赤コーナーポストへと着地。
しかもコーナーポストに着けているのは右足の踵のみという状態にも関わらず絶妙なバランスを維持し微動だにしない。
リングコスチュームを纏ったレジェンドである。
先のまるで似合ってない衣装のバルパーや、なんの変哲もない服装のコカビエル＆無惨と違い全身に鎧を装着したようなヒーローチッ

クな姿と威風堂々かつアクロバティックな登場に観客のテンションは急上昇。

「うおおおお!!カッケェェェ!!」
「へっ、当然だろ。なんたって俺どころかレオや親父の師匠でもあるんだからな！」
「これアレか!?俺のスピードと旦那の筋肉を兼ね備えてタイガ並みにバランス整ってる感じか!?」
「コスチュームもそれなりに重量はあるだろうにそれを感じさせない見事な動き！私も改めて鍛え直さねば！」
「わあああ！お館様凄い凄い！宇随さんが見たら喜びそう！」
「甘露寺の言う通り、宇随はこういうのが好きそうだ」
「しかしなんという平衡感覚！あの場所であの状態、普通ならば仮にバランスが取れても多少は振らつくだろうがお館様はそれもない！一体どれほどの鍛錬を積んだのだろうか!?」
「ガブちゃん写真写真！今取らないとあのベストショット取れなくなるよきっと！」
「セラさんちょっと待って下さい！はい、準備おっけーです！」
「ゴジラ、今度あれやって」
『無茶言うなや俺の体型考えろ』

オカ研や光神陣営だけでもこの差である。
さらに……

「ねーねー今のあれ桃太郎は出来るかなー？」
「無理だろ。まずあんなにジャンプ出来ねーよ」
「仮に出来ても今のレジェンド様みたいに長時間あの体勢とか不可能だろうな。というか空中で体勢崩して頭から落下、結果試合どころじゃなくなるんじゃないか？」
「「あー」」

そんな事を言っているのはシロ、柿助、ルリオ。
かの桃太郎のお供だった犬、猿、雉の三匹である。
ちなみに彼らの取った席はオカ研のすぐ近く……なのでシロの桃太郎発言を聞いてリアスらはガン見しているし、カナエや蜜璃には狙われている。主にシロが。

「……おい、めっちゃ見られてるぞ俺ら」
「たぶんシロが言ったアレが原因じゃねーの？」
「「可愛いー！もふもふー!!」」
「くすぐったいよー」
「「簡単に捕獲されんなよ!?」」

あっさりカナエに捕まり蜜璃と共に撫で回されるシロ。
当の本人……本犬？も嫌がってないというのも問題かもしれないが。
外野も騒いでいる中でただ二人、アーシアとオーフィスは何故か浮かない顔でレジェンドを見ていた。
それはレジェンドが対戦相手である無惨とコカビエルではなく、未だ誰一人いない特別招待客用の観客席を見つめたままだからである。

「もしかして……あそこ、レジェンド様が誰かご招待されたんでしょうか？」
「……あ」

アーシアが小さく言うと、オーフィスが何かを感知した。

『では続きまして――』

ゼットは知らないだろうし、と鬼灯が引き継いでレジェンドのタッグパートナーの紹介に入ろうとした時、突如として特別招待客用の観客席周辺が光り輝く。

あまりの眩しさに目を覆う者もいるし、無惨なんか太陽の光と勘違いして転げまわるしで若干混乱があったが、その中でレジェンドだけはその仮面の奥で目を見開いていた。
何故ならばその光の中から無数の人影……それも限りなく人間に近いものからギリギリ人型レベルの亜人、むしろ手足４本あるだけマシな異形までが大挙して押し寄せたからだ。
あまりの光景にあちこちから動揺の声が上がったが、ある一声でそれも一気に止む。

「まっ……間に合ったかー!?」

『あっ……あの声、あの姿はーッ!!』

実況席のゼットがいきなり立ち上がり、感激したような声を上げた。
同時に先程までコーナーポストに腕組みし直立不動だったレジェンドがその人物の元へと飛ぶ。

「スグル！いや、キン肉マン!!」
「おお！レジェンド！懐かしいのう、そのコスチューム!!遅れて悪かったー!!」

友との再会に涙しながら抱き着いてくるキン肉マンことキン肉スグルを抱き止めつつ、レジェンド他の者とも再会の挨拶を交わす。

「テリー、ロビン、ウォーズマン、皆……やはり来てくれたか！」
「当たり前だろ？というかぶっちゃけると服装で迷ってな。礼服にするかコスチュームにするかでさ。で、キン肉マンがやたら悩んでよ」
「まあ、皆自分の伴侶も連れて行くわけだからそこは構わないのだが

な。かくいう私もアリサに薦められてこのコスチュームなわけだが」
「俺は最初からいつも通りだ」
「「「少しも悩まなかったのか!?」」」

勝手知ったる何とやら、というか。
どれだけ離れていてもすぐにいつもの雰囲気に持って行けるあたり、絆の深さが推して知れる。
無論、彼らだけでなくかつて相対した者達にもレジェンドは気兼ねなく声をかけた。

「あいつが関係すればお前達も来てくれると思っていたぞ、バッファローマン、サンシャイン。他の悪魔超人も勢揃いとは恐れ入った」
「ま、俺は正義超人との橋渡しも兼ねているしな。何より……」
「あの御方の願い……我らのみならず次代を担う悪魔超人らへのメッセージともあれば行かぬはずがないだろう」

正義・悪魔・完璧の三竦みであったかつてなら皮肉の一つもあったのだろうが、彼らかの世界の超人達は既にそういった垣根を超えている。
つまり3区画空いていた観客席が正義、悪魔と埋まれば残るはただ一つ。
……なのだが、些か珍妙であった。

超人閻魔ことザ・マンがジャスティスマンとネメシスに牢屋付き玉座ごと台車に乗せられて現れたからである。

『いや何で!!??』
「うむ。ゴールドマンとの約束なのでな。レジェンドマンからの招待に加え、特別にゴールドマンからも許可を貰って一時的に超人墓場か

ら出れるとはいっても出来うる限り誠意は持たねば」
「私は単に修行の為だ」
「俺はそれに加えて閻魔様の為というのもある」
「敢えて言おう。他の始祖や完璧超人らも普通に来た中でこの登場はかつてないインパクト、完璧だ」
「「だろう？」」
『いやツッコめよそこの三人!!』

レジェンドやその三人のやり取りに対するツッコミ、こちらも以前ならばキン肉マンを始め一部の者からぐらいしかしなかっただろう。
それがこうして一斉にされるくらいにまで打ち解けており、正直この世界の三大勢力よりよっぽど円満な関係だ。
そんな時、キン肉マン、そしてその兄であるキン肉マンソルジャーことキン肉アタルはゼットが彼らの方を向いて大きく礼をする姿を見た。
最初は何故かと思ったが一瞬間を置いて彼らの頭の中に先日のゼットが体験した事が流れ込んで来る。

（なるほど、彼がレジェンドの目に止まった若きウルトラマンというやつか。まだ未熟と一目で分かるが……同時にスグルのような可能性も感じる。出来るなら少しでも時間が許す限り私自ら指導してやりたいが……レジェンドに頼んでみるか）
（良い弟子が出来たみたいじゃのう！彼だけではない、あっちに見える三人のウルトラマンや人間の姿の者もかなりのものだ！ともあれ礼にはちゃんと返してやらなくては！）

ゼットに対しキン肉マンは屈託のない笑顔で大きく手を振り、同じくアタルは人差し指と中指で敬礼のようなハンドサインを送った。

（うおおおお!!返してくれた!!大先輩御兄弟が俺に返事を返してくれたー!!）

喜びに震えるゼットだが、次の瞬間聞こえた声で即座に身が引き締まる。

「どうやら役者は揃ったようだな」
『『『『!!!!』』』』

リングだけでなく、会場全体が見渡せる岩壁の上からその声は発せられた。
全員がそちらを向くと、ゼット同様に身が引き締まる者、強張らせる者、恐怖を感じる者……そして、その姿を見て歓喜に打ち震える者など見た者全員様々な反応を示す。
白銀の仮面と鎧に身を包み、金髪とマントを靡かせ腕組みしながら突き出た岩に片足を乗せて会場を見下ろす圧倒的な存在感を放つ存在。
初代悪魔超人軍総帥にして悪魔超人そのものの開祖。
その者を紹介すべく鬼灯が声を張り上げた。

『今!遂にレジェンド様のタッグパートナーにしてこの魔闘地獄の責任者がその姿を現しました!!ご覧下さい、あの屈強なボディ!溢れ出るカリスマ!!数多の実力者が集結しているこの場においてなお威風堂々とした立ち振る舞い!!
Ｋｉｎｇ　ｏｆ　Ｄｅｖｉｌ!

魔闘地獄の主!!悪魔将軍!!
いやもう将軍どころかこの方が魔王の方が絶対納得ですよ。同郷の大魔王サタンとはエライ違いですってマジで』
「「「「あ……悪魔将軍!?」」」」
「「「「ウオオオオー!!将軍様ー!!」」」」

悪魔将軍の登場に悪魔超人達の将軍様コールが会場全体に響き渡る。
その声に応えるように悪魔将軍は岩壁から高くジャンプし回転しながらリングへと轟音を立てつつ見事に着地。
間近で見てその実力を肌で感じたレイトが口を開く。

「あいつ、強えぞ……!ゲンでも生身じゃ太刀打ち出来ねえレベルだ」
「し……師匠より強いのかよ、先輩!?」
「おおとり師範以上ってだけで私はもう目眩がするわ……」
「そのおおとり師範とは何者だ?」
「カナエ先輩を含む私達を六人同時に相手にして無傷で完封した人(つぽい何か)です。しかもウルトラマンにならずに」

今思い出してもありえない強さだった。
小猫は小芭内の質問に答えつつ、目の前の存在がそれすら霞むレベルにいると言われて戦慄している。

「フッ……まだ離れてそれ程時は過ぎていないというのに随分懐かしく感じるものだ。実際に懐かしい顔ぶれもいるわけだが」
「お師匠様〜!」
『お師匠様!?』

先刻バルパーを一方的に瞬殺した芥子が悪魔将軍の肩に乗っかってきた。
アワアワする悪魔超人らを尻目に芥子は喜々として悪魔将軍に話

し掛ける。

「見ててくれましたか、お師匠様？私も頑張ったので～すよ」

「うむ。見事なスピン・ダブルアームからの必殺技（フェイバリット）だったぞ。今後はその技を磨き、さらなる高みへと至らせるのだ」

「あいあいさーお師匠様！」

ビシッと敬礼する芥子を見て先程到着したばかりの超人達は同じ事を考えていた。

（（（（スピン・ダブルアームから必殺技放つ兎って何なんだ!?））））

もはや最強の動物獄卒待ったなし。

キング・トーンとかいう規格外な豚もいたがそんなの芥子に比べりゃまだ可愛いものである。

「ゴールドマンよ、この場で直接観戦させてくれる事に礼を言わせてくれ」

「フン、私はレジェンドの顔を立ててやったに過ぎん。とはいえ貴様が他の始祖（オリジン）や完璧超人を連れて来た事はこちらが感謝せねばな」

「それこそ不要だ。彼らもまた今日という日を楽しみにしていたのだからな」

ザ・マンと悪魔将軍。

かつて確執から激突した師弟だが、全てに決着をつけた後に様々な事が起きて更に時を経たからか、悪魔将軍がまだ多少壁がある言い方だったとはいえだいぶ関係は軟化している。

「それにしても……私が引退しても我が悪魔超人軍の精鋭達は力をつけ続けているようだな。私としても鼻が高いというもの。だからこそ今日の試合はお前達に見せておきたかった」

サンシャインを筆頭にかつての配下、そして新たに加入した新顔の悪魔超人達を感慨深く見渡しながら悪魔将軍は決意を新たにする。

「さて、先程も言ったが役者は揃った。あとはゴングを待つだけだ」

悪魔将軍はマントを脱ぎ捨て、無惨とコカビエルを見た。

……せめて中身が凝縮されているならマシだったが、と思いつつレジェンドの方へ視線を移す。

「私が先にやらせてもらうぞ、レジェンド。お前なら乱入タイミングを見誤るような真似はしないだろうからな」

「ああ、それから魔闘地獄の責任者という立場である事を忘れるなよ」

「言われるまでもない」

そう言うと悪魔将軍は再び対戦相手の二人を見る。

――さっさと決めろ。結果は同じだ――

そんな言葉が聞こえそうな気がしてコカビエルが先にリングへと上がった。

「おい！」

「貴様にはあの光神をくれてやろう。この悪魔は私が消し飛ばしてやる!!」

さすがに今回は無惨が哀れに感じなくもない。

……が、やはりコカビエル、タイタスいわくチキンである。

レジェンドには勝てないと相対した時に確信してしまったからか無惨に押し付け、しかも悪魔だから光の槍が致命傷になると考えていた。

コカビエルは知らない。

悪魔将軍は己の師である神にすら勝った存在だという事を。

そして何より――

この世界における常識が通用しない相手だという事を。

『それでは皆さん長らくお待たせ致しました！』

『『双神魔超越（ダブル・オーバーズ）』ＶＳ『ＴＨＥ☆ダメ上司』!!』

『『レディイイ！ファイッ!!』』

激闘！奇跡の超人タッグ!!の巻

遂に試合開始のゴングが鳴った。
『まず軽くルールを説明しますと、基本的に何でもあり。ただし再生には限度があり、加えて再生の度に痛みが増していきます。ついでに痛覚除去なんかも不可能です。それでも再生したいならご自由に』
「なっ!?何だと!?」

鬼灯のルール説明に無惨が顔色を悪くする。
そりゃ鬼の特性……それも無惨のそれは桁外れだというのに制限されればそうもなろう。

『それから参加者は私達の実況席や観客席には何があっても攻撃が通りませんのであしからず。人質とか出来ませんから馬鹿な事考えないように。あと、結界もあるので行動範囲も制限されます。これは逃げられないようにと悪魔将軍さん直々の注文です。良いですねコレ、ここまで来て敵前逃亡とかカッコ悪いですし』
「ふざけるな！事前にあった連絡では血を浴びせても鬼に出来ないともあったぞ!?どう見ても我々が不利だろうが!!」
『その為にちゃんと調整期間設けたんですよ。それを活かせなかったお前らが悪い。あと、そもそもレジェンド様や悪魔将軍さんがお前の血を浴びた程度で鬼になるとでも？』

鬼灯にボロクソに言われて「ぐぬぅー！」と地団駄踏んでいる無惨を見て、元鬼殺隊の者達は鬼灯への好感度が上がっていく。

『それからたった今、解説席に来賓が到着しました。テリーマンさん、ジャスティスマンさん、宜しくお願いします』
『なんとなく予想出来てたけどな！』
『完璧な人選だ。さすがレジェンドマンの右腕と呼ばれるだけの事はある』

片や解説役として他の追随を許さぬレベルのアイドル超人に、片や何億年も修行を積み特殊能力よりも鍛えた力と技で勝負する骨太系完璧超人始祖。

ちゃんとレジェンドを超人名で呼んでいるあたり、やはり完璧・特式（パーフェクト・スペシャル）の称号は始祖（オリジン）の総意で授けられたのだろう。

『さて、お二人から見て挑戦者はどうでございますか？』

『そうだな……一見見た目はそこそこ鍛えてるように見えるが中身はそこまでではない。観客席に見えるあの赤と黒の体色がメインのウルトラマンの方が余程真面目に鍛えられている。あれは大したものだ』

『タイタス先輩でございますね！テリーマンさんはどうですか？！』

『特殊な身体構造は悪魔超人に近いが、レジェンドや悪魔将軍から見たら別に気にするレベルでもないな。正直、あの複数の触手や翼は逆に不利になる可能性だってある』

やはり激闘系の超人である二人の解説は鋭い。

飛行能力のあるコカビエルや触手による手数の多さが武器の無惨がハンデを背負っているという指摘は悪魔将軍がすぐに証明する事になる。

「フン！将軍だか何だか知らんが翼の無い悪魔など嬲り殺しにしてくれるわ！」

「随分と大きく出たものだ。翼の有無程度で強さが決まるなどと本気で思っているならば、馬鹿を通り越してその頭に何が入っているのか逆に心配するぞ」

「ほざけっ!!」

コカビエルはお約束と言わんばかりに、地獄落ちした時に再生した

五対十枚の黒い翼で空へと飛ぶ。
観客からはそんなコカビエルにブーイングが飛ぶもコカビエルどころか悪魔将軍さえ気にも止めない。
(何だあの余裕は!?まあいい、特大の光の槍をお見舞いしたあとじっくりと痛めつけてやる!)

腕を天に掲げ光の槍を作り出すコカビエル。
その大きさはかつてリアスらと戦った時と比ではなく、彼女らも目を見開く。
しかし、その光の槍の完成した瞬間に、一瞬だけ……本当に一瞬だけ目を悪魔将軍から離し出来上がった光の槍を確認してほくそ笑んだが、再び地上に目を向けるとそこに悪魔将軍の姿は既に存在しない。
「なっ!?何処だ!リングからそう離れてはいないはず!周囲に擬態したか透明化したか!ならばリングごと吹き飛ばせば……」

「下ばかり見ているからこうなるのだ、馬鹿め」
ガシィィィッ!!!

「「「『『!!』』」」」

『これはーっ！いつの間にかコカビエルよりも高く飛び上がっていた悪魔将軍がなんとコカビエルの背後に回り十枚の翼全てを無理矢理脇に抱え込んだ!!まさに一瞬の出来事だーっ!!』

ゼットの実況通り、目を離した一瞬のスキを突いて悪魔将軍はコカビエルの背後を取れる位置に移動し、凄まじい速さでジャンプしてのしかかるようにしつつ翼全てを脇に挟み込んでいた。

「き、貴様いつの間に!?」

「どうやら貴様らは翼の数である程度強弱が決まるそうだが……逆に私にとっては多ければ多いほど掴める面積が増えてむしろ楽になる。貴様よりも雀を狙う方が難しいわ」

コカビエルは悪魔将軍を振り落とそうとするも全ての翼の自由が奪われ思い通りに動かず、それだけでなくメキメキと翼から音が聞こえてくる。

「……やはりな。貴様に一つ忠告してやろう」

悪魔将軍は両腕にさらなる力を込めていく。

何をされるか気付いたコカビエルは顔を青ざめさせた。

この位置ではまともに光の槍で悪魔将軍を狙えず、確実に当てるためには自身ごと突き刺すしかないがコカビエルにそこまでの覚悟はない。

大きく作り過ぎたことが仇となって『こんなものに貫かれたくない』という恐怖が出来てしまっていた。アホである。

「や……やめっ……！」

「鍛える時は隅から隅まで満遍なく鍛えるものだーっ!!」

ブチチチチィィィッ!!!

「いぎゃあああぁぁぁッ!!」

悪魔将軍がコカビエルの翼を全て、付け根から強引に引き千切った。

正しくは引っこ抜いたという表現がピッタリだ。

あまりに凄惨すぎる光景に翼を持つ者はガタガタと震えだし、そうでない者も背筋が凍る程の恐怖に見舞われる。

翼を失った事は同時に飛行能力を失った事になりコカビエルは地上に真っ逆さま……とならず――

「ジェネラルニードロップ!!」

ガゴォォッ!!

「ゴハァァッ!!」

『あーっとコカビエル、翼をもぎ取られた場所に悪魔将軍の強烈な膝が炸裂ーッ!!落下の衝撃も加わってまさに大打撃!!』

自然落下ではなく悪魔将軍の膝をくらって強制的に叩き落とされた。

両脇に抱えられた翼を無惨のいるリング外に投げ捨てコカビエルを見下ろす悪魔将軍。

「ぐ……ぐおぉ……っ」

「翼を失い一撃もらったくらいでこれとはな。だがここは魔闘『地獄』。呵責も兼ねたこの試合はまだ終わらんぞ」

悪魔将軍の無慈悲な言葉が、コカビエルの耳に入ってきた。

☆

呵責の発言は嘘ではなかった。

ヨロヨロ立ち上がるコカビエルに対して容赦ないハイキックを見舞い、吹っ飛んでロープで跳ね返ってきたところに強烈なラリアットを直撃。

しかも一発一発がまるでトラックが激突したかのような轟音を立ててておりその威力が容易に想像出来る。

さらに倒れたコカビエルに合わせるように体をグルリと反転させて仰向けになりながらコカビエルの腹にエルボードロップを叩き込む。

オカルト研究部はコカビエルの強さを直接やり合って理解していたが、悪魔将軍は武器や神器、魔力の類さえも使用せずに圧倒している。

「う……嘘……あのコカビエルが神器も武器も……何も使っていない相手に一方的に……」

「圧倒的なパワーに見た目以上のスピード、さらに判断も早い。それにまだ見せてない引き出しもあるはずです」

「その少女の言う通り、悪魔将軍はまだ本気を出してはいない」

「「「「!!」」」」

リアスの驚きとソーナの冷静な見解にキン肉マンが答えた。

見ているだけでも相当だが、実際戦った彼はその強さを身を持って知っている。

なにせ未だ恐怖するくらいなのだ。

「我々超人は超人強度、つまり明確なパワー数値があるが、重要なのはそこだけではない。悪魔将軍を語る上で外せないのはやはり『超人硬

度』！その肉体を硬くする事は元より柔らかくする事さえ可能なのだ!!」
「アレが柔らかくなんのか!?」
「まさしく柔軟性と強固さを兼ね備えた筋肉!!私が理想とする形の一つを体現している!!」
「「『中身はともかく外のは鎧だろ!!』」」

相変わらずタイタスへのツッコミに息ピッタリな一誠、タイガ、フーマにドライグ。
しかしキン肉マンが言った事はかなりの衝撃だ。
下手すれば打撃技も関節技も通用しないという反則じみた戦闘力である。

「それに悪魔将軍には恐るべき必殺技（フェイバリット）もある。そして今回はタッグマッチ……今もあそこで有事に備えてレジェンドが待機している」
「攻防速だけでなく援護においても死角なし……余程油断したり慈悲でもかけない限り、レジェンドと悪魔将軍に敗北はないだろう」

ロビンマスクとウォーズマンも冷静に分析している。
それぞれ超人博士とコンピュータの二つ名を持ち師弟関係でもある二人の意見は正しい。
まずタッグマッチに向ける意識からして違うのだ。
理由は、たった今動いた無惨が語る事になる。

☆

悪魔将軍が何かに気付き動きを止める。
いつの間にかリングに乱入していた無惨が触手で悪魔将軍を拘束していたからだ。

「……ほう、仲間意識など微塵も無いと思ったが」

「仕方なくに決まっているだろう……！この試合とやらに勝てば地獄から出られるのだからな！」
『!?』

無惨とコカビエル（ついでにバルパー）がタッグマッチを承諾した理由はこれである。
まあ、承諾しなかった場合でも強制出場させる気だったが。

「なるほど、それが貴様の動機か」
「他に何がある？富や名誉など私には不要。私が不滅である事こそが私にとっては重要なのだ。竈門炭治郎に託した思いも無駄になった。やはり私自身が不滅でなければならいと改めて痛感した！貴様らにはその踏み台となってもらう！」
「待て、鬼舞辻無惨！竈門少年に思いを託しただと!?何を言っている!!」
「そういえば私の最期に貴様らのうちそこの二人以外はいなかったな。私はかつて滅びる直前に死して間もない竈門炭治郎に私の血を全て注ぎ込み鬼にしたのだ」
『!!』

これを聞いて杏寿郎としのぶ、そして小芭内と蜜璃は愕然とした。
カナエは最初誰か分からず頭から「？」を飛ばしたものの彼らの反応から彼らの旧知の人物と推測。
なお、ダイブハンガーにいた狛治も激しく動揺し、妻の恋雪やオルガ、三日月らに心配される程だった。

「結局生きていた連中に加え、精神世界でも邪魔されて人間に戻ってしまったがな。妹共々最後の最後まで忌々しい兄妹だった。結局私の障害になるだけで少しも役に立たなかった……十二鬼月もだ」
「貴様っ……どこまで……！」

言葉を発したのは小芭内だったが、杏寿郎やしのぶも持って来た日輪刀に怒りの表情で手をかけており、今にも飛び出しかねないところをタイタスとカナエが必死に止めている。
もし小芭内も刀を持っていたら斬りかかっていただろう。

「姉さん離して。やっぱりあいつは私達が……！」
「タイタス！君が親友として俺を止めてくれているのは重々承知だ！しかし！やはり奴だけは野放しに出来ん!!」
「二人とも落ち着いて！気持ちは私も分かるけど!!」
「今無惨と相対しているのはあの二人だ!!お前達が下手に手出しすればそれこそレジェンドの――」

そう言いかけた時、ウルトラマンであるレイトやリク、タイガらトライスクワッド、そしてゼットは凄まじい念を感じ取った。
急にピタリと動きを止めた彼らを怪訝に思い、杏寿郎らも落ち着いていく。

「な……なあ、タイガ。どうしたんだよ？」
「……フーマさん、震えてますか？」
「タイタス、何かあったのか!?」
「リク兄さん、大丈夫ですか……？」
「レイトくーん、もしもーし？」
『ウルトラマンゼットだったか？緊急事態でも起きたのか？』
『緊急事態といえば緊急事態でございます』

唯一、テリーマンの質問に返答したゼットが何やら意味深な発言をする。

「……鬼灯」
『そちらはご安心下さい。どうやらその竈門炭治郎という少年が妹さん同様に鬼から人間に戻った後、偶然にもスペースビーストが鬼殺隊

の生き残りを襲ったそうですがこれまた偶然巡回中だったノア様が消滅させ、別に巻き込んだわけではないですが詫びとして生き残った彼らの欠損部位の再生や痣発現のデメリットである寿命の短縮などを元通りにして多少交流したそうです。やはりというかこちらとあちらでは時間の流れにズレやムラなんかあるみたいですね』

「そうか。すまんな、まだ試合中なのに実況中断させるようなマネして」

『いえいえ、今のレジェンド様の状態を考えればこちらの方が最善ですので』

鬼灯の語った事から察すると、炭治郎だけでなくその妹――禰豆子も人間に戻れたらしく、しのぶらは漸く元の状態に戻り全員がホッとするが、ウルトラマン達の表情は晴れない。

意を決してカナエがレイトに聞いてみると、聞きたくない結果になってしまっていた。

「レイト君、さっきからどうしたの？」

「……さっきの鬼灯の言葉聞いてたろ」

「鬼灯さんの？ええ、聞いてたけど……」

「無惨って野郎、レジェンドの地雷踏みやがった。冗談抜きでヤベエ事になるぞ」

『……え？』

次の瞬間、悪魔将軍を拘束していた触手が跡形も無く吹き飛び――

「ウルトラヘッドクラッシャー!!」

ドゴオオオオッ!!

「ごべぇぇぇっ!?」

いつの間にか無惨を逆さまに抱え込んでいたレジェンドがマットに凄まじい勢いで頭から叩きつけた。

遊撃隊の切り札、ウルトラマンティガがパワータイプで使用する技を生身で繰り出したのである。

その威力はかの有名なシルバゴンさえ一撃で身動き取れなくなるくらい深々と地面に突き刺さった程だ。

そんなものをレジェンドが使えばどうなるか……。

案の定、マットにも関わらずブチ落とされた無惨の頭からは夥しく出血している。

「ぐっ……ぎ……ぎざま……」

「フン、激突時に舌でも噛んだか?だが甘ったれるなよ。貴様が起こしてきた事への呵責はこんなものでは済まさん……!」

レジェンドはキレていた。

それは勿論自分が原因で辛い運命を背負った炭治郎・禰豆子兄妹は元より、かつて巌勝や狛治もいた十二鬼月さえ役立たず呼ばわりしたからだ。

何より、杏寿郎や胡蝶姉妹は上弦との戦いで命を落としたが、小芭内と蜜璃の直接的な死因もほぼ無惨である。

究極の自己中心的思考な無惨には何を言っても無駄と完全に理解

したレジェンドは、同時にこちらも完全に実力行使に出る事にした。

「悪魔将軍、ある程度やったら締めに入るぞ」

「いいだろう。程よく身体も温まってきたところだ。最後にウォーミングアップ相手となってもらうとしよう」

リングの両サイドにボロボロの無惨とコカビエル。

リングの中央には背中合わせで無傷のレジェンドと悪魔将軍。

この光景はキン肉マン達超人の間で永く語り継がれる奇跡のタッグが生まれた瞬間であった。

二人はまずレジェンドが無惨に、悪魔将軍がコカビエルへ向けて駆け出し、それぞれヘッドロックをかけたまま再び互いに向けて走り出す。

『おーっとこれはぁぁぁ!?かのウルトラ六兄弟のゾフィー隊長とエース兄さんがアリブンタとギロン人を倒した時の光景に酷似しているーっ!!』

『レジェンド様と悪魔将軍さん、無惨とコカビエルの頭を激突させたーっ！剛力で締め付けられたまま加速をつけてぶつかり合ったからか揃って仰向けに倒れました!!』

『コカビエルの方はまだしも無惨は既にレジェンドマンの一撃で頭部を負傷している。あれはかなり効いたはずだ』

『ダメージ量から考えて、おそらく無惨の方は後回しになってコカビエルが先にやられる可能性が高いな。いや……案外合体技（ツープラトン）が炸裂するかもしれないぞ』

テリーマンの合体技（ツープラトン）の声に周りは一気に沸き立つ。

まだ確定したわけではないし、むしろこちらは炸裂しない可能性の方が高い。

だが、やはりこれだけの実力者二人の合体技となれば期待するなと

いう方が無理というものだ。
現にレイトや一誠、タイガに加え、キン肉マンらはそれを出してくれる事を願っている。
ついでというか、杏寿郎やしのぶらは聞き覚えの無い単語に「？」マークを飛ばしていた。

「姉さん、『つぅぷらとん』って何なの？」
「（あ、今のしのぶ可愛い!!）えっとね、簡単に言えば連携攻撃、合体攻撃よ。ほら、私としのぶがこの間の事件で鳥っぽい鬼にやったやつみたいなの」
「なるほど！つまり俺とパム治郎で放った強化型煉獄みたいなものだな！それをお館様とあの御仁がやるとなれば凄まじいものになるぞ!!」

頭が冷えた（かは定かではないが）杏寿郎は、大相撲観戦が趣味なのもあり似た部分がある超人レスリングが気に入ったらしい。
友人のゼットがそれに足を踏み入れているのも影響しているようだ。
外野が徐々に盛り上がりつつある中、リングでも動きがあった。

「悪魔将軍、どうやら観客（ギャラリー）は合体技（ツープラトン）を所望らしいな。俺はともかく、お前のフィニッシュは無論……アレだろう？」
「当然だ。合わせる技の選択はお前に任せる」
「なら下準備に入るとするか！」

まずは、とやはり予想通りコカビエルへと向かうレジェンド。
まさかレジェンドの方が向かってくるとは思わずコカビエルは焦るものの、レジェンドからしてみればその一瞬でも隙があれば技をかけるには十分。
気が付けばレジェンドはコカビエルを抱え込んでロープを利用し

て跳躍し、サマーソルトのように身体を反らせつつコカビエルの頭を脇に抱え直しながら垂直にさせていく。

『こっ……この技はレジェンド超師匠の得意技！フライング・ブレーンバスターのムーブだァー!!』

『それだけではありません！反対側から同じ様に悪魔将軍さんもロープを利用して跳躍！そして身体を反転させて仰向けになりつつコカビエルの腕と胴を抱え込んだ!!』

『これでコカビエルは上半身を完全に封じられた！あの状態では特異な体型をしてない奴に脱出する術はない！』

『まさか、早速出るのか!?』

観客へのサービスだと言わんばかりの動きに席を立って応援するものまで出てくる程の盛り上がり。

それに応えるべく、彼らは最初の合体技名を叫ぶ。

「「アッパーボディ・ブレイクダウン!!!」」

ゴベギャアアアアア!!!

「ぎゃあああああ!!」

レジェンドの加重力を付与したフライング・ブレーンバスターに加え、悪魔将軍の新技リバース・デモンズベアハッグを組み合わせる事で文字通り首を含めた上半身全てを粉砕する落下系激突技のツープラトン。

生命力だけはあった事に加えて二人がまだ本気でなかった為、辛うじて息はあるが既にコカビエルは瀕死である。

『遂に出たぁぁぁッ!!レジェンド超師匠と悪魔将軍のツープラトン！アッパーボディ・ブレイクダウンがコカビエルに炸裂ーッ!!』

ワァァァァァ!!

『なるほど、ゴールドマン……悪魔将軍が腕や胴、レジェンドマンが首や顔面と力の込める場所を分担し、各々の部位への威力を増加させ……』

『加えてレジェンドが得意とする加重力戦法を組み合わせる事で更に威力を高めたわけか。しかも今の体勢、失敗した場合下手をすればレジェンドにダメージが入ってしまう危険もあった……あいつらはそれを承知で技に挑み、見事成功させたってことだ。相変わらずとんでもない奴らだぜ』

ジャスティスマンとテリーマンの解説もあり、レジェンドと悪魔将軍の評価は更にうなぎ上りに上がっていく。

しかし、これはまだ序章に過ぎない。

合体技（ツープラトン）の手応えを感じた二人はいよいよ勝負を決めるべく動き出した。

それを見たキン肉マンが冷や汗を垂らしながら呟く。

「今までの試合の流れから察するに悪魔将軍の方はコカビエルを狙う……そして既にコカビエルは満身創痍。とすれば次に悪魔将軍が放つ技は最早アレしかない！」

「アレ!?何なんですか、それ!?」

蜜璃の質問にキン肉マンはリングから目を離さず答える。

「悪魔将軍はメインディッシュと呼ばれる連携技がある。その名も『地獄の九所封じ』!!」

「地獄の……」
「九所封じ!?」

背中や首など、文字通り九所へ多大なダメージを与える連携技であると同時に、それぞれが単体でも凄まじい威力を誇る悪魔将軍の得意技である。

「だが、先程のレジェンドとのツープラトンによってコカビエルが無事なのは精々両足くらいだ。そして同時に体力もほぼ限界……おそらくは真のラスト・ワンであるあの技で勝負を決めるつもりだろう」
「それが、さっき言っていたアレって技ですか?」
「アレと言う技名ではないが、その通りだ」

ただ、仕掛けたのはレジェンドだけだった。
悪魔将軍はもはや殆ど抵抗出来ないコカビエルをダブルアームでクラッチするのみ。
つまり、コカビエルに続いて無惨にも同様に技を一撃決めるようなのだが、どうやら悪魔将軍がまずは、とレジェンドにも見せ場を作ってくれたらしい。
多少の痛みを堪えつつ、せめて視覚だけでもまともにと顔を再生した無惨だが次の瞬間……

「セイヤァァァ!!」

ガツゥゥゥゥン!!

強い衝撃と共に空中へと打ち上げられる。

「ぐはっ!?な……何が……!?」
「セイヤッ!セイヤァッ!!」

ガツーン!ガツーン!!

その正体はレジェンドがヘッドバットで無惨を繰り返し打ち上げていたからであった。

しかも空中を蹴って飛び上がり続けており、まさしく空を駆け上がるが如きムーブを見せている。

「「「「あっ……あのセットアップは!!」」」」

そう叫んだのはキン肉マンに加え、観戦に来ていた同じキン肉星出身の者達……特にキン肉マンスーパー・フェニックスやキン肉マンビッグボディが大きく反応した。

「間違いない……あれはオレが得意とするキン肉族三大奥義の一つ!」

「そうだ、オレ達でさえマスター出来なかった最高難度のあの奥義も含め、レジェンドは全てを完璧にマスターしてたんだ!」

「それだけではない」

フェニックスやビッグボディだけでなくオカ研や生徒会メンバーらもその声を発した方を向けばネメシス（本名・キン肉サダハル）が腕組みしながら冷や汗を流している。

「レジェンドはキン肉族でないにも関わらず三大奥義を完璧にマスターしただけに留まらず、その原型ともなった『完璧・弐式奥義（パーフェクト・セカンド）』すらも完璧に体得している。伊達や酔狂で『完璧・特式（パーフェクト・スペシャル）』の称号を閻魔様や悪魔将軍から賜ったわけではないのだ」

天才と称されたネメシスすら技の反動で絶大なダメージを負う程

の『殺意の塊』。
それが完璧（パーフェクト・セカンド）・弐式と呼ばれたシルバーマンの奥義である。
……ちなみにそのシルバーマン、あの世界が完璧のマスク無しで超人パワーが満たされるようになった為、普通に観戦しに来ている。
「それからオレの隣にいるのがその弐式本人だ」
「どうも、ゴールドマン……悪魔将軍の弟のシルバーマンです」

ネメシスのすぐ横で。

「「「「えええええ!?」」」」

リアスらは本気で驚いているが、フェニックスなんかは「何でこんな寛いでんだこの人」な表情で見ている。
だって普通にドリンク飲んでるし。

「まあ、私の事は気にしないで下さい。それよりも彼がその技を出しますよ」

何か釈然としなかったが、レジェンドが技を出すと言われて反応したのがオーフィスとアーシアを筆頭とするレジェンド第一主義勢。
さらに無惨がボコられる事を望む元鬼殺隊メンバー。
……あとここにはいない、TVから絶対に目を離さない巌勝を含む継国一家と狛治一家を含む鉄華団である。

空中へ打ち上げられた無惨は再生したばかりの頭部にヘッドバットを繰り返し打ち込まれ、再び苦悶の声を上げている。

「おのれっ……！調子に……」
「貴様への呵責はまだ終わらん……！」

レジェンドが無惨を股裂きの体勢にしたまま両足を自身の両足で、そして無惨の両腕を背中側に回してクラッチする。

『あ、あの技はまさかーっ!!』

『む、知っているのか。ウルトラマンゼット』

『一度お仕置きで喰らいました』

「「「『お仕置き?!』』」」

ゼットへのお仕置き、詳しくは少し前のエピソード『ＵＬＴＲＡＭＵＳＣＬＥ』を御参照頂きたい。

「鬼舞辻無惨！俺は鬼殺隊の者など貴様の関係者は数える程度しか知らん！だからこそ、かつての世界で貴様を討つ前に命を散らしたカナエやしのぶ、杏寿郎！討ち取ったにも関わらずその後の貴様の蛮行をこの場で聴かされた小芭内に蜜璃！貴様が逃げ回ったおかげで討てぬまま老衰により元の世を去った縁壱！そして先の貴様の言葉で存在を否定されたも同然の巌勝や狛治！何より貴様が原因となった全ての者の悔恨を込めて、この技を貴様にくれてやる!!」

ゴオオオオオ

「ぐ……は、離せっ……！」

力無くもがく無惨だが、レジェンドによるクラッチが想像を遥かに超えて強力なのに加えて、再生の度に増加する痛みに躊躇して背中の触手の再生に踏み切れず、さらに身体の各部から牙を出して噛み付かせるも逆に牙が粉々になりダメージを受けてしまう。

ただでさえ頭部にダメージを受けている以上、それによる痛みが邪魔をして力を込められずどう足掻いてもレジェンドプロテクトを突破出来ない。

……力を込めた程度で突破出来る代物でもないのだが。

今、放たれるはキン肉族三大奥義の一つ――

「マッスルリベンジャー!!」

ガゴォォォッ!!!

「ゲボォォォォッ!!」

加重力を付与され落下速度が飛躍的に増したレジェンドのマッスルリベンジャーによって、無惨はコーナーポストに頭部を激しく激突させられ、夥しい鮮血が辺りに飛び散った。

正直、よく無惨の頭が弾け飛ばなかったというか、見事レジェンドが絶妙な手加減を加えたというか。

『レジェンド超師匠のマッスルリベンジャー炸裂ゥゥゥ!!無惨の頭がヤバい事態になったー!!いや、頭ん中は元からヤバい奴でしたけど』

『調整期間を棒に振る時点でその言葉の後半は察せるがな。しかしあの技に限らず急な加重力を加えてコーナーポストに頭部を直撃させる類の技は恐ろしく危険な威力になる』

『ああ、技自体もそうだが落下系の激突技はレジェンドの使う加重力との相性が良すぎるんだ。しかもそれが自身の飛行能力の逆利用だから最高速度が尋常じゃないし、何より相手ではなく自分に付与するものだから反則でもない。更に言うなら付与するタイミングも絶妙。天才とかそんな言葉じゃ表せない、まさに経験の賜物だろうな』

ゼットの多少毒の入った実況に続いてジャスティスマンとテリー

マンの解説が入り、観客全員が納得する。
なお、無惨の惨状を見ていた無惨関係者の皆さんは大層熱狂していた。
縁壱などは即座にレジェンド著による超人レスリング関係の本を注文し出す始末。
しかし、これで終わりではない。
むしろここまでがこれから二人の放つ合体技（ツープラトン）の下準備だったのだ。

「レジェンド、そちらも下拵えは済ませたようだな」
「ああ、次でフィニッシュにするぞ」
「元より……そのつもりだ!!」

先程からずっとダブルアームでクラッチしていただけの悪魔将軍だが、いよいよこのタッグマッチに決着をつけるべく再度動き出す。

「スピン・ダブルアーム!!」

ミス　ミス　ミス

『これは先程のエキシビジョンマッチで芥子さんが見せたスピン・ダブルアーム!!しかしさすが師匠！回転速度もパワーも桁違い！なんとダブルアームの回転で竜巻が発生したァー!!』

その場の大気を震撼させ、竜巻が起こる程の威力を見せつける悪魔将軍。
そしてレジェンドも先程のマッスルリベンジャーの状態からスプリングの要領で無惨ごと飛び跳ね、悪魔将軍がスピン・ダブルアームで巻き起こした竜巻へ飛び込み更に上空へと舞い上がって行く。
その際にレジェンドは体勢を変えていくが、観客の目はスピン・ダブルアームの状態からコカビエルを上空へと投げ飛ばした悪魔将軍へと向いている。

「私にとって試合の締めくくりは」

そのコカビエルを追いかけるように悪魔将軍も飛び上がり、左脚でコカビエルの首をキックのような体勢で捉えるとさらに体勢を変えた。

例えるならば、左脚がまるでギロチンの刃のようにコカビエルの首に当てられている。

「これでなくてはな」

「やはり悪魔将軍の決め手はあの技か！」

「待て！その悪魔将軍の上に何か落ちてくるぞ!?」

「……お館様!?」

「それに、あの体勢は……！」

なんと既に必殺技（フェイバリット）の体勢へと入っていた悪魔将軍に肩車するような形でレジェンドがある技の体勢で落下してきたのだ。

その体勢とは、キン肉バスターの体勢である。

「レジェンドキネシス・ウルトリンク!!」

レジェンドがそう叫ぶとレジェンドと悪魔将軍の身体が一瞬輝き

――

「ダイヤモンドパワー!!」

悪魔将軍がダイヤモンドパワーを発動。

すると悪魔将軍だけでなくレジェンドにも伝染し二人がダイヤモ

ンドボディとなる。
その光景に地獄の観客どころか超人達さえ驚いているがまだ先があった。
同じく一瞬輝くと同時に悪魔将軍の脚とコカビエルの首がピッタリくっついた。
そう、レジェンドキネシスによる接着力が悪魔将軍の必殺技をより強固に、かつ安定させたのである。

ゴオオオオオ

「このタッグマッチの終幕だ！貴様ら二人はこの技で屠ってやろう！」
「その身に刻み、再び永き罰の刻を過ごすがいい！」
「――っ――!!」

もはや言葉も満足に発せない程、呵責と称して叩きのめされていた二人すら自分達の身をこれから何が襲うのか容易に想像出来てしまう。
だがそれを打開する術も、それに耐えうる術もない。
そして――

「「双極の処刑台!!!!」」
ガァゴオオオオオン!!!

――亡者にも関わらず、受けた二人は言葉を発することなく息絶えた。

『『決まったァァァァ!!』』

ウオオオオオオオオオオ!!

鬼灯とゼットがハモりながら言うと、観客からは大歓声が上がる。

そして、ここでやらねばいつやると言わんばかりにジャスティスマンとテリーマンが先の合体技（ツープラトン）を解説する。

『悪魔将軍の地獄の断頭台、そしてレジェンドのキン肉バスター……単体でも一撃必殺を誇る二大技が、正義と悪魔という垣根を超え奇跡の合体技として完成した瞬間だ。完璧と言わざるを得ない』

『レジェンドが悪魔将軍と接触してから、地獄の断頭台がより安定し、レジェンドもダイヤモンドパワーの影響を受けてダイヤモンドボディと化した……その状態でキン肉バスターを受けた無惨は元々のキン肉バスターの威力に加えて頭がダイヤモンドの刃でズタズタになってるし、レジェンド得意の加重力をさらに二人分増して地獄の断頭台を受けたコカビエルの首の骨は粉砕骨折、まさに処刑そのものだぜ』

テリーマンの言う通り、無惨もコカビエルも動かない。

……というのにレジェンドと悪魔将軍は二人の足を持ち――

「無惨は今頭掴んだら潰れそうだし」

「このコカビエルとかいう奴は頭を掴んで投げようとすれば千切れかねんのでな」

『『……え？』』

「「ふん!!」」

芥子がバルパーにしたように思いっきり血の池のある方角へぶん投げた。

しばらくして「ボチャン」という音が2回分聞こえたのでナイスショットだったようだ。

「「『『投げたァァァァァ!?』』」」

「……さて、やるべき事はやった。次は私の希望を通させてもらうぞ」

悪魔将軍の言葉に、レジェンドや鬼灯といったほんの一部の関係者以外は皆首を傾げている。

だが次の瞬間、最大級の衝撃がその場の者達、そして生中継を見ていた者達を直撃した。

「私の希望はただ一つ。

レジェンドと私がこの場で試合を行う事だ」

死闘！真のスペシャルマッチ!!の巻

現在、会場は３０分のインターバル。
あの後、レジェンドは悪魔将軍の望み――即ちレジェンドとの試合を快く、むしろそれを待っていたと言わんばかりに承諾。
周囲から驚きの声が上がる中、鬼灯によりそれが認められインターバルを挟んで行われる事になったのだ。
本来ならばもう少しインターバルを長く取る予定だったのだが、対戦する二人がこの時間でいいと譲らなかった。
殆どの観客は招待客である超人達も含め歴史的一戦を見逃すまいと下準備を済ませている。
ちなみにゼットは先日の自身やジード、フーマらの戦いの映像記録を投影してもらいつつ、解説の二人に加えキン肉アタルやロビンマスクらにもアドバイスを貰っている最長だ。

「ふむ。ウルトラ六兄弟の力を借りているとはいえ良い動きをする。特に全身に満遍なく技をかけていくのは悪魔将軍の九所封じに通ずるものがあるな」
「おまけにゼスティウムバスター……キン肉バスターのバリエーションとも言えるそれはしっかりレジェンド得意の戦法を組み込んでいる。なにせレジェンドの場合、接着力を付与せずとも加重力だけで即座に超威力で技が決まるから殆どそっちしか使わないんだ」
「超師匠、制限状態なのに大気圏内でマッハ３５で飛べるらしくて」
「「「何その速度おかしい」」」

分かりやすく説明すると、だいたい
マッハ３５　＝　時速４３，２１８ｋｍ、秒速１２，００５ｍ
――結論から言って化け物である。
ついでに言っておくと、走行速度がマッハ１２、水中速度と潜地速度がマッハ９だ。いずれも制限状態で。
……時間停止とかその手の能力を使用しなくても１秒で４ｋｍ以

上走れると言えばその凄まじさが分かるだろう。
マジで何なんだお前。
レジェンドのスペックのおかしさを再認識した超人達だった。

☆

一方、控室で準備しているというレジェンドの様子を見に行くため、オカ研に生徒会、柱組、さらにはリクやレイトにセラフォルーやガブリエル……早い話がダイブハンガー組＋αに加え、キン肉マンも同行している。

「「「「……」」」」
「な……何だ!?私が何かしたか～!?」
「「「「やっぱ筋肉スゲェ……!!」」」」

レイト、一誠、匙、タイガ、そしてフーマが感嘆の声を上げる。
タイタスに至っては尊敬の眼差しを向けているし。

「あんたもそうだけど超人って連中の殆どがすっげえ身体してるよな……!」
「バッファローマンさんだっけ?あの人とかヤバいくらいマッチョだよね」
「ザ・マンって人も凄かったわね」

やはりというか超人の話題で持ちきりだ。
レジェンドの友人ということもあり、アーシアや朱乃はキン肉マンを質問攻め状態。

「では、レジェンド様はあまりご自分から活躍されなかったのですか?」
「ああ。レジェンドは昔から私達ばかりに花を持たせて自分は縁の下

の力持ち的な存在でな。自らリングに立つ事は少なかった。だがいざリングに立てば如何なる強敵相手でも負けなしの無敵超人！だからこそだったんだろう、自分が出てしまえば他の超人の活躍の場を奪ってしまうと考え、いつも一歩引いて見守ってくれていたんだ」
「最強のお助けキャラ？」
「まさにそんなところじゃのう！それにリングに立たずとも私達のスパーや特訓には常に付き合ってくれてな、セコンドとしても有能で器用万能とはあいつの為にあるような言葉だと何度思ったか」

キン肉マンも笑顔で次々と話してくれた。
アーシアやセラフォルー、ガブリエルらは目を輝かせて聞いており――

『あの悪魔将軍に勝ったあ!?』
「その悪魔将軍も今より弱いし、皆に助けられながらやっとの思いでだが。ぶっちゃけ出来るなら二度と戦いたくないぞ、あいつは」
「いや、普通に凄いのだけど……」
「さすがレジェンド様のご友人というか……」

キン肉マンの立場を聞いては――

『申し訳ありませんでした大王様』
「気にしなくていいぞ！というか光神相手にタメ口な私達はどうなるんだ」
「……言われてみればそうですね」

……などなど、試合までの時間が少しずつ迫ってきたところで控室に到着。
少しだけ様子を見たら客席に戻ろうと話し、僅かに扉を開けてそこから覗くと――

「……」

ゴスッ！　ゴスッ！　ゴスッ！

レジェンドはリングコスチュームを脱ぎ、何やらバルバトスのツインメイスに似た物で己の身体を叩いていた。
主に上半身を重点的に、全身をくまなく。

（あれは……）
（レジェンドが自分に気合を入れているのだ）
（（（（ふわぁ……））））

誰もが何をしているのかと思ったが、その疑問はすぐにキン肉マンが解決してくれた。
アーシアを筆頭にセラフォルーやガブリエルらは頬を上気させながら見惚れているし、レイトは自身の師の一人であるレジェンドが本気になった時の雰囲気を肌で感じている。

（やべぇな……別に敵じゃねえし俺達が後ろ取ってる側なのに、仕掛けたら間違いなく瞬殺されそうだ）
（レジェンドさん、あの身長とあの体格で体重が８０キロ直前って詐欺だよね。見た目含めて理想的過ぎるんだけど）
（リクさんそこなの!?）
（え!?お館様そんな理想体型なの!?）
（……私は蜜璃さんのスタイルが羨ましいです）
（あぁ……小猫さん、黒歌さんがあれですし……世の中不公平ですよねー）
（はい。ズルいです）
（……しのぶに小猫ちゃん、どうして私達を見るの）
（なんで姉属性ばっかり大きいんでしょうねー）
（（（（!!））））

カナエ、リアス、朱乃にセラフォルーはしのぶの発言と視線でどこを見られているか理解した。
しのぶもスタイルは良い方だが、さらに上がいるし……ガブリエルは特盛だし。
ついでにオーフィスは……

（ぷんすこー）

やはり嫉妬していた。
スカーサハと一緒に『ひんぬー同盟』とか作ってるくらいだし。

（あ……あのぅ……そろそろ試合のお時間が……）

自分のある部位を触りつつ、控えめに言うアーシア。
心配しなくても彼女は結構恵まれた体型だと思う。

（あの様子なら心配ないな。よし、早く戻るぞ）
（（（（はーい！））））

キン肉マンに先導され、会場の観客席へ戻って行く一行。

☆

おまけにダイブハンガーでは数人が悪寒に身体を震わせていた。

「な……何か白音の怨念らしきものを感じたにゃ！」
「そりゃアンタ、姉がそんな痴女じみた格好してりゃあの子もそう思うでしょ」
「乱菊がそれ言うにゃ!?」
「性格的な部分も関係してるんじゃない？」

「そんな格好で保険医してるお前も大概だがな」
「そーゆーしーちゃんもさ、たゆんたゆんなのにキュッと引き締まってるよねー」
「……」
「どうしたスカーサハ。霊圧が上がっているぞ」
「待たんかハリベル、それ以上そやつを刺激するな。戦闘装束が色々危険じゃろお主のは」
「夜一様がおっしゃいますか。瞬閧時に装束がどういう事になるか知らぬ存ぜぬは聞きませんよ」
「確か両肩と背中が弾け飛ぶんですよね！勿体無いじゃないですかっ!!」
「「「「そこ!?」」」」
「あの、皆様。もうじきおと……レジェンド様の御試合のお時間です」

お父様と言いかけてしまい、すぐさま言い直すクロエの言葉で慌てて大型モニターに向き直るレジェンド大好き女性陣。

「……クーちゃん」
「何でしょうか、束様」
「レジェくんには頑張ってもらおうね」
「はい。ですが私してはレジェンド様がご無事「頑張れレジェくん目指せ母娘丼！私もクーちゃんも食べごろだよっ!!」……え？」

クロエは自分の耳を疑ったが束は束だった。

☆

会場では今か今かと観客が待ちわびている。
そこへ遂に鬼灯とゼットによるアナウンスが流れ始めた。

『皆様、長らくお待たせしました。いよいよレジェンド様と悪魔将軍

さんの試合開始時刻です』
『先程のファイトから最早紹介は不要でしょう！お二人同時にご入場頂き、定位置に着かれ次第ゴングを鳴らさせて頂いちゃいますよ!!それではお二方、決戦の場へどうぞ!!』

ゼットの言葉が終わると同時に双方の入場口からリングコスチュームを着直したレジェンドと悪魔将軍がゆっくり、しかし力強く姿を現した。
しかし、先程までザ☆ダメ上司相手に完勝した時と雰囲気が二人してまるで違う。
一般の観客にすら見える程の闘気を身に纏い、圧倒的な迫力を放っている。

「……」

黙してリングに上がり、定位置に着くと二人の闘気はさらに膨れ上がる。

『こ、これは……双方共に何という気迫でしょうか……！瞬きした瞬間に状況が一変してもおかしくない雰囲気でございます……！』
『しかも手当たり次第闘気を振り撒いているわけではない。相手のみに……いや、相手の闘気のみにぶつけている』
『こりゃかつてない死闘の予感がするぜ……おそらく見ている全員が忘れられない試合になるだろうな』

レジェンドの友人であるテリーマンだけでなく、悪魔将軍の同門であったジャスティスマンさえ冷や汗が垂れていた。
ゼットも言わずもがな、いつも通りなのは鬼灯だけである。

『レジェンド様も悪魔将軍さんも準備は宜しいようですね。それでは

レディー……

ファイッ!!!』

カーン!

ガッシィィィィッ!!!

「「「『『『!!』』』」」」

ゴングがなるやいなや、一瞬で間合いを詰め力比べの体勢で組み合うレジェンドと悪魔将軍。

その動きは先のタッグマッチの時よりも遥かに鋭く、洗練されている。

悪魔将軍がタッグマッチ終盤で言った「ウォーミングアップ」……まさに真実であった事が証明された瞬間だ。

「ぐぅぅぅ……!」

「ぬぅぅぅ……!」

メキメキメキ……

『開始早々、両者目にも止まらぬ動きからの力比べだーっ!!』

『単純な攻撃力や防御力ならば体格で勝る悪魔将軍に分があるだろう。身長はともかくとして体重ではレジェンドマンの倍以上あるからな』

『代わりに早さと技量ではレジェンドが上か。悪魔将軍も凄まじいが、機動力は元より多種多様の相手や状況での経験差が桁違いだ』

単純に体格差は攻撃防御、そして速度に影響しやすい。

まして二人クラスの実力者ならばそれは十分に理解しているはず。
残る問題は体力くらいだが、この二人の場合ダメージによる疲労が無ければ延々と闘い続けそうなので割愛する。

「……やはり、単純な力のみの攻めではお前の上を行くことは出来んようだな」
「フッ……俺の早さに対応してよく言う」
「ならば……!?」

突然レジェンドが力を抜いた事で悪魔将軍はバランスを崩す。
レジェンドは倒れ込んでくる悪魔将軍の懐から背後へと回り込み、両足で悪魔将軍の両足を踏み押さえながら悪魔将軍の首に両手を回してガッチリ組み、背負投のような体勢で自身の肩へ悪魔将軍の首の後ろ側を叩きつけた。

「ダブルアーム・ネックブリーカー!!」

ガキィィィッ!!

「ぐうっ!!」

足を踏み押さえられ、『く』の字型に曲げられつつ首にダメージを受ける悪魔将軍。
先のレジェンドの動きは一瞬で行われたのだ。

『先制はレジェンド超師匠だー!!あの組み合った体勢から瞬時に関節技(サブミッション)へと移行、まさに光速!!』
『出たぜ、レジェンドの閃光戦技(ライトニング・アーツ)!!レジェンドは技を仕掛けてから決める、いや極めるまでの時間が異常なまでに早い!徐々に威力が上がるタイプの関節技だろうと一瞬で最大限の威力が出るレベルで炸裂させる、常識外れの技量を持っているんだ!!』

『レジェンドマンが相手の場合、こちらが油断せずとも相手に反撃の時間が与えられた瞬間、即座に逆転決着させられる可能性があるというわけか』

テリーマンの解説を聞き、ジャスティスマンも再び冷や汗を垂らすが観客はそれどころではない。

逆転するだけでなく、攻撃＝勝利が確定するかもしれないというとんでもない事実を目の前で実践されているからだ。

しかし、相手は完璧（パーフェクト）・零式（ゼロ）たる師のザ・マンを真っ向から打ち破った悪魔将軍。

それで屈する筈がない。

「ぬおおおお!!」

「うおお!?」

なんとその体勢のまま、レジェンドごと飛び上がった。

その瞬間両足が自由になった事で、悪魔将軍は前に足を投げ出し、悪魔将軍の首を両手と肩でクラッチしているレジェンドと背中合わせになる形になりつつ、逆にさらにレジェンドの両手が外れないように自身の両腕を首元でクロスさせた。

「!!」

「中々効く先制を仕掛けてくれた礼だ。今度はこちらの技を受けてもらおう」

『こっ……この技はまさかーッ!?』

「ストロング・バックスタンピート!!」

ドガァァァァァッ!!

「がは!!」

『これは凄まじい!!不利な体勢から強引に飛び上がったかと思えばレジェンド様の掛けた技の一部を利用して悪魔将軍さんの反撃プレス攻撃!!』

「あれってゴブニュ相手に父さんが使った技だ!!」

「マジかよ……!しかもレジェンドはゴブニュと違ってうつ伏せでやられた!ありゃ相当キツイぜ!!」

先日の事件の際にベリアルが見せた技を、まさかレジェンドではなく悪魔将軍が披露した事にリクとレイト、そしてゼットは真っ先に驚く。

当然、一瞬遅れはしたが先日ベリアルの戦いを見ていた者達は騒然としていた。

しかし、それ以上に観客が感じたのは無惨とコカビエルが相手だった時とは違い、双方ともまだ力比べと技を一回ずつ使っただけだというのに見せた技量が明らかに違うということだ。

まるで、これが真の超人レスリングだと言わんばかりの動き。

その動きに観客らは期待が高まっていく。

同時にリングの二人もそれに応えるかのように激しい技の応酬が始まった。

悪魔将軍は前面を叩きつけられたレジェンドの方を向き、続けてダブルアーム・ソルトを叩きこもうとレジェンドを抱え込んだ瞬間、いつの間にか悪魔将軍の方がレジェンドに背後から羽交い締めのような状態にされており――

「ドラゴンスープレーックス!!」

ゴガァァァァァ!!

『またもレジェンド超師匠、瞬く間に悪魔将軍の背後を取り技を炸裂ーッ!!』
『先程、悪魔将軍が攻・防、レジェンドマンが速・技と言ったが……よくよく考えればあの二人のレベルでは関係ないものだったな』
『ああ……正直あの二人が闘ったらもう根比べになるのは目に見えてた。こうなりゃ解説しつつ結果を見届けるだけだ』

解説二人も予想を放棄し、ただ純粋に一超人として観戦しつつ解説する事にした。
同時に悪魔将軍がレジェンドを振り解くような動きでバク転しつつ、空中へ投げ出され落下してくるレジェンドにショルダータックルを叩き込んだ。

「ふんッ!!」
「ぐおっ!?」

そのまま吹っ飛びコーナーポストに激突するレジェンド。
とはいえコーナーポストへの激突より悪魔将軍の速度と重量によるタックルの方が威力は大きい。
だがレジェンドは何事もなかったかのように体勢を立て直す。
そして、二人は衝撃の言葉を口にした。

「小手調べはこんなところで十分か」
「その割に私の首への攻撃が多かったがな」
「お前はさっきのも含めて俺の腰にダメージ集中させてたろ。俺の歳を考えろ俺の歳を」
「生涯現役を掲げて実行している奴にそんな配慮は無用だろう?」

『小手調べ！なんと先程までの闘いはまだ小手調べとの事ですってマジですか!?』
「ふむ。どうやらあの鬼舞辻無惨やコカビエルではウォーミングアップが完了しなかったようだな。それとも先程のインターバルで少々冷めた身体をまた温め直したか……いずれにせよ、ここからが真の頂上決戦であろう」

ザ・マンは冷静に分析しており、ネメシスやシルバーマンらは頷くがリアスやソーナを始めとしたオカ研＆生徒会メンバーは唖然としたままだ。
しかしレジェンドも悪魔将軍も周囲の驚きなどどこ吹く風で己らのさらなる力を発現させる。

「レジェンドよ、私とザ・マンの闘いをよもや忘れてはいないだろうな」
「あれを忘れろと言われたら全力で拒否するさ」
「ならば私が見せるものも分かっているはずだ」

ボワァァァ……

『こ……これは!?悪魔将軍の身体が輝き始めたぞー!?』
『まさか……！ザ・マン以外が相手でも発動可能になったというのか!?』
「おお……！」
「これは……悪魔将軍はあの力を発動させる気なのかー!?」

悪魔将軍のかつての闘いを直接見た事のある者や聞いたことのある者は驚愕している。
当のザ・マンでさえ驚きと喜びが入り混じった表情で、玉座から僅かに立ち上がっている程だ。

「キン肉マン殿！あの御仁は一体何をするというのだ!?」
「先程のタッグマッチの最後に悪魔将軍が見せたダイヤモンドパワーというのがあったじゃろう？」
「はい、レジェンド様にも伝染してましたけど」
「あれは硬度１０……硬度０のスネーク・ボディと対になる硬さと言えば、もう分かるな」
「最低と対……つまり、最高硬度……！」

小芭内の言葉にキン肉マンは頷く。
ここで即座に気付いたのがレイトだ。

「おい、冗談だろ……」
「先輩、どうしたんだ？」
「分かんねぇのかよ……悪魔将軍にはその最高硬度１０のダイヤモンドパワーより上があるって事なんだよ！」
「「「「!!」」」」

先程まで通常の状態でレジェンドとやり合っていたというのに、タッグマッチ最終盤で見せたダイヤモンドパワーの更に上が存在する――無惨とコカビエル相手では一方的過ぎて凄まじさが分かりにくかったが、レジェンドと互角に渡り合っている悪魔将軍を見ればそれがどれだけ恐ろしいか容易に想像がつく。

「そうだ。ダイヤモンドパワーを超える力、それこそ……」
「違うな」
「「「『『『!?』』』」」」

誰もが確信していた悪魔将軍の力、それを否定したのはなんと悪魔将軍自身だった。
レジェンドだけは少し驚くも納得がいく様子。

「確かにあの力はダイヤモンドパワーを超える。だがザ・マンに並ぶ相手ならばいざ知らず、かの光神レジェンドに挑むにはあのロンズデーライトパワーであっても力不足!!私から見ても強大過ぎるその壁を乗り越えるには限界を幾つも超えねばならない。そしてレジェンドとのタッグマッチが決着を迎えた時、超える為に足りなかったものが理解出来た。そして、その結果辿り着いたこの力こそが!!」

さらなる輝きを全身から放ちながら力説する悪魔将軍。

レジェンドを最大の好敵手と認め、この場を借りて決着をつけるべくギリギリまで調整を行い土壇場で会得したロンズデーライトパワーをも超えた、まさしく超人硬度の極致。

「硬度１０＃（ダブルシャープ）＃!!ウルツァイトハイパワーだ!!!」

悪魔将軍の全身が黄金に輝き、身体の表面には宝石の如き角張りが出来、さらに全身のいたる所から黄金の闘気が炎のように溢れ出ている。

地球上で最も硬いとされる『ウルツァイト窒化ホウ素』の名を冠した悪魔将軍の切り札。

それがこのウルツァイトハイパワー。

『なっ……何だあの姿はぁぁぁ!?なんと悪魔将軍が黄金の身体になって闘気を身に纏ったー!!いやマジでウルトラスゲー!!何あれグリッター悪魔将軍!?』

『明鏡止水の境地に至ってハイパーモードを習得したという事なのでしょうか!?もうぶっちゃけ九極天レベルですよね悪魔将軍さん。これは無惨やコカビエルごときが勝てるわけないですよ』

『ロンズデーライトパワーさえ超えるだと……!?』

『なんて奴だ……!』

実況と解説も（一人を除き）混乱する程、予想外の進化を遂げていた悪魔将軍。
それを見た観客もかつてないくらいの興奮を隠す事が出来ず、大歓声を上げる。

「さて……こちらの準備は整った。次はお前だ、レジェンド」
「随分とまあ、期待値のハードルを上げてくれたな……まあ良い。お前がそれ程の力を向けてくれるのならばそれに応えるのが筋というもの」

レジェンドはそう言葉を発すると、小さな光の粒子がレジェンドの周りに出現し、レジェンドへ次々と吸収されていく。
今度は何だと観客や実況、解説らが目を凝らした瞬間、レジェンドから凄まじい光が溢れる。
悪魔将軍以外が眩しさから目を覆い、それが収まった時に見たもの、それは――

「オーロラルレジェンドプロテクション・出力１２００％…!!」

悪魔将軍と違い、全身が彼得意のスパークレジェンドの光が如く淡いエメラルドグリーンに発光し、凄まじいスパークを発しているレジェンドの姿であった。

『今度はレジェンド超師匠が対抗して変わったぁぁぁ!?ていうか出力１２００％!?十二倍!?』
『あれは私も初めて見ますね』
『『の割に落ち着いてるなあんた!?』』

驚くゼットと対照的にいつもの調子な鬼灯へはさすがにジャスティスマンとテリーマンもツッコんでしまう。
無論、観客勢もゼット側だ。
加えて、レジェンドが言った形態名から元が何なのか理解したレイトやリクは顔を引きつらせる程驚いている。

「ねえ、ゼロ……これなんて無理ゲー？」
「だよなあ……何でよりによってあのチート防御の二つを混ぜ合わせてから出力爆上げしてんだよ……」
「え……もしかしてレジェンドプロテクトに加えてあの有名なオーロラルパワーまで混ざってるのか……？」
「……出力まで上がってんだよな？マジで攻撃通んのアレ」
「あれならばシャイニングマッスルでも良い気がするぞ!!」
「「「「そっちは平常運転かい」」」」

レジェンドとゼットを除くその場のウルトラ戦士総出でタイタスにツッコんだ。
なんと言うか、レジェンドは自分絡みだと他者にボケとツッコミを誘発させる効果でも持ってるのだろうか。

「待たせたな」
「いや……この場に相応しい姿だ」

ゴング前に立った定位置へと互いに足を運び、再び向き合うレジェンドと悪魔将軍。
そして遂に第2ラウンドが幕を開けた。
まず動いたのは悪魔将軍。
肩の円盤がグググ…と動いた事に観客は驚く。

「ジェネラルディスコス！」
『悪魔将軍の肩の円盤が肘に移動したー!?アレ動くの!?』

「まずはお前のその力がどれほどのものか試させてもらおう！」

その状態でレジェンドに突撃する悪魔将軍に対して、敢えて迎え撃つ為に構えるレジェンド。

そして、先程までとは比べ物にならない威力の一撃が叩き込まれる。

「ウルツァイトクローズライーーン!!」

ドゴォォォッ!!

「グウッ!!」

『悪魔将軍さんのとんでもない一撃がレジェンド様に直撃ーッ!!』

トラックどころか高層ビルが一発で破壊されるような轟音に、アーシアや小猫はビクッと身体を震わせ、他の超人達も冷や汗を垂らす。

「かつてストロング・ザ・武道としてゴールドマンと相対した時に受けたロンズデーライトパワーの一撃よりも遥かに重い打撃音……！あれがウルツァイトハイパワー！」

「しかし閻魔様の時と違い、レジェンドはダメージこそ受けたがコスチュームにヒビさえ入っていない！」

ザ・マンに続いたネメシスの言葉通り、レジェンドはダメージを受けてよろめくが即座に体勢を立て直し、悪魔将軍の右腕を両腕で抱え込む。

「第2ラウンドの手痛い先制攻撃をありがとう。こちらからもお返しを受け取ってもらおうか！」

「！」

「おおおおおおっ!!」

そのままレジェンドは悪魔将軍の右腕を両腕による抱え込みから両手持ちに変え、武器のように縦横無尽に振り回し始めた。
ただし、目にも止まらぬ速さに加えて、レジェンド自身も前屈みになったり身体を反らせたりと体勢を微妙に変えながら。

「ぬうおおおお!?」
『レジェンド超師匠の、スピン・ダブルアームとは違った技が悪魔将軍を襲う!!』
「ありゃダイナのストロングタイプの技じゃねえか!!」

レイトの言う通り、今レジェンドが仕掛けているのはダイナがストロングタイプで使う技の一つ。
いや、その進化形――

「バルカンスウィング・ハリケーーン!!」

ドガァァァッ!!

「グァァ!!」
『レジェンド様の超高速ぶん回しから、さらに速度を上げた地面への叩きつけ!!硬度的に最後叩きつけよりも三半規管へのダメージがあるだろうぶん回しの方が効いたのではないでしょうか!?』
『確かに……!スピン・ダブルアームとは違い相手だけを振り回し、自分それとは別の様々な動きを加える事で外傷より肉体内部への影響が大きくなる』
『あの速度で強弱緩急かけられたら下手すりゃそれだけで意識が飛ぶ可能性もある。次から次へと見知らぬ技が出て来やがるぜ……!』

しかしすぐさま悪魔将軍も立ち上がり、レジェンドへと突進して抱え込みからの空中への放り投げを仕掛けた。

「「「『『『!!』』』」」」

リアスらや普通の観客は驚くだけだが、悪魔将軍を知る者達はその戦法から遂に悪魔将軍が本気で仕掛けたことを理解する。

そして、キン肉マンが呟いた。

「いよいよ始まるぞ……死のカウントダウン……地獄の九所封じが!!」

壮絶！見せたかったもの！の巻

「地獄の九所封じ……！」
「悪魔将軍のメインディッシュとかいう技か！」

悪魔将軍の『地獄の九所封じ』――
一誠とレイトは宇宙拳法の達人であるレオに鍛えられたからか、技の雰囲気だけでどれくらい危険かはなんとなく理解出来るが、悪魔将軍のそれはそんな事をせずとも目に見えて分かる程の雰囲気を纏っている。
それを体現するかのように悪魔将軍は空中へと放り投げたレジェンドよりもさらに高く飛び、レジェンドを仰向けにしつつ後頭部と片脚を掴みながら胴体に片膝立ちになり――

「地獄の九所封じその一
大雪山落としーー!!」

グワガァァァン!!!

レジェンドをリングに叩きつけた。
ウルツァイトハイパワーによって超人硬度のみならず身体能力も大幅に増した悪魔将軍の大雪山落としは、リングどころか会場全体を揺るがす程凄まじい威力と化していた。

『なっ……なんという威力!!悪魔将軍の大雪山落としがレジェンド超師匠にモロ入ったぁぁぁ!!いやマジで大丈夫なんですかアレ!?』
『……地獄の九所封じはそれぞれが必殺級の威力を誇る連携技だ。我ら始祖の中でも鉄壁を誇るアビスマンでさえ、その四とその五で戦闘不能となったらしい』

『キン肉マンでさえあの連続技に未だ恐怖が残ってるくらいだからな。しかも今回は今までとは比べ物にならない程パワーアップしている！これはさすがに……!?』

観客同様、ゼットの驚きを隠せない実況にジャスティスマンとテリーマンが解説するが、テリーマンが解説中に何かに気づく。

それは悪魔将軍が次の九所封じへと既に移行している光景だった。

『おおっと悪魔将軍さん追撃の手を緩めない！倒れて動かないレジェンド様を抱え込んだあの体勢はーっ!!』

「地獄の九所封じその二と三！」

悪魔将軍の得意とするスピン・ダブルアームからダブルアーム・スープレックスへと繋げる九所封じ――

「スピン・ダブルアームソル――」

「俺が黙って耐え続けると思ったかぁー!!」

メキメキメキメキィィィッ!!

「「「『『『!?』』』」」」

グオオオオオ!!

なんと突如レジェンドが凄まじい力……しかも二の腕だけで抵抗、

無理矢理引っ張るようにするとスープレックスを決めようとしていた悪魔将軍の両足がリングから離れ、逆立ちのようになっていく。

「ゲェーーッ!!あ、悪魔将軍がスピン・ダブルアームソルトを決めきる前にーっ!?」

「違う!それだけではない!!」

超人の誰かが叫ぶとレジェンドの体勢からロビンマスクが瞬時にある事に気付く。

テリーマンもよく使用し、レジェンドにとってもバリエーション豊富なあの技を仕掛けようとしている事に。

「アッパーアーム・ブレーンバスターッ!!」

ガァゴォォォン!!!

『レジェンド超師匠、なんと悪魔将軍の両腕の拘束を逆に利用!二の腕のみを使ったブレーンバスターを決めたーっ!!』

『両腕を破壊する技を逆に己の得意技の為に利用するとは……!』

『そうか!レジェンドは大雪山落としを受ける直前からスピン・ダブルアームソルトのスープレックス時までわざと脱力状態だったんだ!そこから一気にパワーが跳ね上がれば当然相手は混乱する!しかもレジェンドのパワーの急上昇ぶりは火事場のクソ力に負けない程だ!不意打ちでやられれば簡単に対処出来るものじゃない!』

テリーマンの詳しい解説によって周囲もレジェンドの意図を理解した。

大雪山落としを仕掛けられた時からレジェンドは悪魔将軍への反撃のタイミングを見計らっていたのである。

タイミングがズレればスピン・ダブルアームソルトはレジェンドに決まりさらなるダメージを受けていただろう。

「ゴールドマンの動きに合わせて脱力状態から火事場のクソ力顔負けのパワー急上昇と自身側への強引きによる二の腕のみを使ったブレーンバスター……いくらゴールドマンの戦法を知っていたと言っても相応のパワーとタイミング、そして何より失敗の可能性も踏まえた上でそれを実行するだけの覚悟と度胸が必要だ。私が言おう。今の技はそれら全て完璧だ」

ザ・マンさえ感嘆の声を上げる程、レジェンドの一撃は華麗かつ豪快であった。

さらにレジェンドはすかさず悪魔将軍をタワーブリッジの体勢で抱え上げ、その場でスピン・ダブルアーム同様に高速回転する。

「デェイァァァァ!!」

『今度はレジェンド様が悪魔将軍さんを担ぎ上げて回転!!同じように竜巻が巻き起こる!!ここからどうするのか!』

鬼灯の実況から間髪入れず、レジェンドは次の技を繰り出す。

「リバース・ウルトラハリケーン!!」

かつてジャックが二代目ゼットンとの決戦で決め手となったウルトラハリケーン。

現在自身が回転しているのとは逆方向でそれを放ち悪魔将軍を上空へと放り投げた。

回転方向の違う二種類の竜巻に飲み込まれて身動き取れない悪魔将軍に対し、回転など関係ないとばかりにその中を突き進むレジェンド。

だが、ここで悪魔将軍が両腕からブレードを出す。

事前に鬼灯のアナウンスで「超人レスリングでは正しく身体の一部であれば剣や刃などであってもルールで認められる。ただし凶器として外部から持ち込むのは禁止」と伝えられていた為、驚きはするが理解出来た観客達。
ここで反応したのはキン肉マンとロビンマスクだ。

「まさか！あのウルツァイトハイパワーの状態でアレをやる気じゃ!?」
「マズいぞ！下手をすればレジェンドでさえ切り裂かれかねない！」
「「「「!?」」」」

ロビンマスクの言葉で青ざめるアーシア達。
そんなギャラリーの声は二人に届かず、遂に悪魔将軍がソレを放つ。

「地獄のメリー・ゴーラウンド・アクセル!!」

ギュオオオォォォ!!!

『悪魔将軍、ブレードを構えて身を縮ませ超高速縦回転!!まさに超人八つ裂き光輪だーっ!!』
『ロンズデーライトパワーを上回る今の姿であの技、しかも今までとは加速度が段違いだ!!冗談抜きでレジェンドでも危険だぞ!!』
『いや、それだけではないぞ……！』

テリーマンに続くように、ジャスティスマンが何かに気付く。
同時に竜巻の中を突き進むレジェンドもそれに気付いた。
バシュッバシュッと自らの纏ったオーロラルレジェンドプロテクションに何かがぶつかって弾かれる感覚。

その正体は――

（鎌鼬か……！）

悪魔将軍の新技によって発生した鎌鼬が飛んできていたのである。

それもかなりの速度かつ広範囲に。

強いて言うなら厳勝の使う月の呼吸に次ぐレベルだが、リング（及びその上空）という限定された空間で飛び交うそれは脅威というほかない。

レジェンドだから問題ないようなものだが、逆にレジェンドは地獄のメリー・ゴーラウンド・アクセルへの警戒を深める。

鎌鼬が発生する程の速度と鋭さ、そして悪魔将軍の新たな力・ウルツァイトハイパワーを持ったその技に対抗する術はただ一つ。

『おおっとレジェンド様、一歩も引かずむしろグングンと悪魔将軍さんに迫る!!』

「「「「!?」」」」

観客は騒然とする。

傍から見ても自殺行為にしか見えないレジェンドの行動だが、今まで黙ってみていたキン肉アタルはレジェンドの意図を察した。

（そうか、確かに自らが起こした強烈な竜巻の中では進むか引くかしか選択肢はない。あの様子では無理矢理竜巻側面から脱出する気も無いだろう。引いたとしても結局リングに戻るだけで退路が塞がるだけな以上、狙うならば文字通り突撃するしか方法はない！）

その危険極まりない技を攻略する為には引く事など言語道断、死中に活を見出さなければならないとアタルも理解する。

レジェンドと悪魔将軍が近づくにつれて、遂にレジェンドのコスチュームにほんの少しずつだが切り傷がつき始めた。

観客から驚きや小さな悲鳴も上がる中、遂に空中で二人が激突――

ガッシイィィィィッ!!

「「『『『!?』』』」」

「ぬ……ぐっ……!」

「うっ……おおお……!」

『『とっ……止めたぁぁぁぁぁ!!』』

ワアアアアアア!!

激突する直前に悪魔将軍の回転速度が上がったのは驚いたが、レジェンドはタイミングを読み、それをも上回る速度で悪魔将軍の両手首を掴んで身体ごとぶつかり、地獄のメリー・ゴーラウンド・アクセルを停止させたのだ。

『恐怖に身を竦ませていてはまず不可能な攻略法!・レジェンド超師匠、悪魔将軍の技を真っ向から止めました!!』

『一歩間違えれば両方の肩から先、いや肩から下が丸ごと切り落とされる危険を承知で懐に飛び込み、受け止めるとはな……!』

『レジェンドの実力を疑ったワケじゃないが、悪魔将軍の今の実力を

見たら最悪の結果も想定しちまったくらいだぜ……！』

テリーマンの言葉は当然とも言える。

実のところ、レジェンド自身も受け止める直前に悪魔将軍が急加速回転したのは予想外だったし、その急加速を見極められたのも相対しているレジェンドのみだ。

「ブレードではなく腕の方を止めるとは……！」

「俺のコスチュームを見てわかるだろう。最悪防御を貫通してくる可能性があったんでな……！」

止めたとは言っても、まだ悪魔将軍の方が優勢だ。

手を離せばブレードに切り裂かれかねない状態で、レジェンドが下側のまま落下している。

しかし、ここでレジェンドは悪魔将軍にとって因縁とも呼べる技の進化形を繰り出した。

瞬く間に体勢を変え、加重力によって威力を増したその技とは即ち

――

「レジェンドライバァァァ!!!」

ドオガァァァン!!!

「グハァァッ!!」

『レジェンド様の必殺技（フェイバリットホールド）の一つ、レジェンドライバーが炸裂ーっ!!』

「あれはっ……！」

朱乃が頬を赤く染めつつ目を輝かせ、技を決めたレジェンドを見つめる。

「ちょっと朱乃、どうしたの？」

「今のあの技……あの日、お母様とまだ幼かった私をレジェンド様が助けてくださった時にも使われた技なの」

メタい話だと、１００話以上前の話である。

「キン肉ドライバーの状態からキャンバスに激突する瞬間に加重力と股裂きを加えたレジェンドライバー……タイミングを誤れば威力が激減するそれをあの一瞬で完璧に繰り出すとは」

「そ……そんなに難易度の高い技なんですか？」

「うむ。体勢的にはそうでもないように見えるが、先程も言ったように加重力と股裂きのタイミングがシビアだ。それにたった今放ったものは自身が不利な体勢にあったにも関わらず瞬時に技の体勢へと逆転した上でそれを成功させた。あの技は落下から激突までの時間が短ければ短い程難易度が上がるのだ」

タイガの質問に丁寧に説明するザ・マン。

かくいうこのレジェンドライバー、かつて新種のカオスヘッダーで強化されたカオスグランドキングをも一撃で屠った事もある技なのだ。

そういえば、とタイガは昔タロウが一心に何かの技の練習をしていたのを思い出す。

（よく考えてみたら、あの時父さんが練習していた技に似ているかも）

ちなみにタロウ、その後レジェンドから直々に指導されてしっかり習得している。

だが、さすがに威力まで同じとはいかなかった。

技量もさることながら、そもそも加重力の付与はそれぞれの飛行速度に準拠するため、たとえマッハ２０の飛行速度を持つタロウでもその倍近い飛行速度のレジェンドほど加重力は出せなかったためである。

「大技には放つ上で覚悟しなければならない事が２つある」
「「『『『!!』』』」」

突如、落ち着いた悪魔将軍の声が聞こえリングを見てみるとレジェンドライバーを受けた悪魔将軍がいつの間にかレジェンドをホールドしつつ抱えて立ち上がっていた。

『なっ……なんと悪魔将軍、レジェンド超師匠のレジェンドライバーを受けてなお、こともなげに立ち上がったー!!』
「一つは大技であればあるほどその反動も比例して上がっていくこと。そしてもう一つは――」
「……っ!!」
「その大技が完全に決まった時が最も油断しやすいことだ」

そう言うと悪魔将軍はレジェンドの身体をホールドして持ち上げていた状態から即座に右手でレジェンドの両足首を、そして左手でレジェンドの両膝を掴み――

「地獄の九所封じその四と五！
ダブルニークラッシャーー!!」
ガゴォォォッ!!!

「がッ……!!」

『悪魔将軍さんの逆襲!!地獄の九所封じは終わっていなかった!ダブルニークラッシャーがレジェンド様の両膝に炸裂ー!!』
『あ……あのキン肉ドライバーのさらに上をいくレジェンドライバーをまともに受けてまだ動けるのか!?』
『それにあのウルツァイトハイパワー状態でのダブルニークラッシャー、威力は想像に難くない。レジェンドマンにとっても先の技を決めてもここまで動けるのは予想外だったのだろう』

恐るべき硬度となった膝でレジェンドの両膝を破壊すべく放った悪魔将軍のダブルニークラッシャー。
あまりに凄惨な音を立てて炸裂したそれにアーシアや蜜璃が短い悲鳴を上げ、フーマは自身の両膝を押さえて震え上がる。

「よもや、よもやだ……!あのお館様があれほどやられるとは……!」
「レジェンドだけではない、悪魔将軍も我々が知っている頃より遥かに進化している。先のダブルニークラッシャーもおそらくロンズデーライトパワーまでであればレジェンドには通じなかった筈だ。あのウルツァイトハイパワー……超人硬度だけでなく各種能力をも引き上げているのか……!」

杏寿郎でさえ声がいつもの調子でなくなる程の衝撃を受けており、アタルはそれでもなお冷静に努めている。
レイトや一誠は不安ながらも一瞬でも見逃すまいとリングから目を離さず拳を握り締め、歯を食いしばりつつ見ていた。
そして、悪魔将軍はさらに追撃を叩き込む。

「地獄の九所封じその六!
カブト割り!!」

グシャァァァッ!!!

『ゲェーー!?レ、レジェンド超師匠の頭がキャンバスに埋まってしまったァー!!』

『シュールな見た目だが、正直笑い話では済まないぞ!この後に来るのは……!』

『無防備になった腹部への九所封じ!!』

騒然とする実況席や観客らだが、ほんの数名は何か違和感を覚えていた。

(おかしい……確かにレジェンドは両膝にダブルニークラッシャーを受けた。しかし本当に両膝を破壊されたのか?)

(キン肉マンも同じ状況になった事があったとは聞いたが……そもそも両腕は破壊されていない以上、レジェンドの実力であれば何らかの抵抗は出来た筈だ)

天才と称されたキン肉マンスーパー・フェニックスとネメシスの2名である。

そして二人はある結論に達した。

最初の九所封じの時、レジェンドがどうしていたのかと。

(まさか……)

(また『脱力状態』になっているのか!?)

二人の推測の結果はすぐに明らかになった。

悪魔将軍が次の九所封じを叩き込むべくジャンプし、逆さまになってレジェンドの腹部へと迫る。

『無防備なレジェンド様の腹部に悪魔将軍さんが頭突きでプレスする

ように落下していく!!万事休すか!?』
「地獄の九所封じその七！
ストマック――」

その瞬間、レジェンドがネックスプリングの要領で頭をキャンバスから脱出しつつ、その体勢のまま凄まじい速度で空中の悪魔将軍の背後に接触。
九所封じその七のストマック・クラッシュを浴びせるために逆さま状態だった悪魔将軍の首を両足をクロスさせて締め上げ、さらに両腕を捻り上げながら脇で、そして足を曲げさせながら両足首を同じく捻り上げつつ握り潰す程の力を込めて両手でクラッチを固める。
それらを一瞬の動作で完成させ、加重力による高速落下を加えたそれこそレジェンドオリジナルの必殺技（フェイバリット・ホールド）――

「ウルティメイト・ギガバスター!!」
ドオゴオオオオオッ!!!
「ゴハァァァッ!!」

『こっ……今度はレジェンド超師匠のリベンジーッ!!』
『い……今のはミーも初めて見る技だぜ!!』
『しかもキャンバスへ激突する直前、レジェンドはさらに全身の力を込めて悪魔将軍をくの字型に曲げていた。両腕、両足首、首に加えて背骨……それら全てを粉砕しかねない大技だ。しかも曲げられた事

で悪魔将軍は顔面からキャンバスへ激突し、同時に背後から打撃を受けたような衝撃で腹部にもダメージが入っている……!!』

ゼットは勿論、テリーマンやジャスティスマンさえも驚愕させる新技に、観客達は盛り上がり超人達も解説二人と同じ反応を示す。

「伊黒さん伊黒さん！今の凄かった！お館様凄かった!!」

「ああ、甘露寺の言う通りだ。危機的状況からの脱出、そして逆転……それらを一瞬で行っていた」

「つーか解説の話を聞くとアレ相当ヤバい技じゃねーか……！」

「そうだ。今のウルティメイト・ギガバスター……ゴールドマンの九所封じを一度に叩き込んだようなものなのだ。両腕、両足、背中、首、顔、そして腹……超人圧搾機という似た技があるが、あちらは事前の九所封じがあって真価を発揮する技であるのに対し、レジェンドマンの技は一撃で全ての部位を粉砕する、文字通りの破壊技（バスター）というわけだ」

ザ・マンの詳しい解説にリアス達は感心するが、ザ・マンは彼女らに言っていない事がある。

本来は『両腕を捻り上げた状態で脇でクラッチする』『その状態で足を曲げさせながら両足首を捻り上げつつクラッチする』を同時に行うというのは物理的にほぼ不可能。

出来たとしても、『両足首を捻り上げながら足を曲げさせ、脇で両腕をクラッチする』という、両腕を捻り上げる動作が出来ないのだ。

アシュラマンのような複腕ならば可能だが、標準的な二本脚二本腕の体型ではどうやってもどちらかを選択するしかない。

……はずだった。

それを可能としたのは偏にレジェンドが異常じみた速さで技を極める術に長けているからだ。

おそらくはレジェンド以外にウルティメイト・ギガバスターを標準体型で使える者がいるとしたら、現時点ではサーガくらいだろう。

最も彼は格闘戦に優れているもののレスリング系の技はあまり得意でないようだが。
間違いなくレジェンドの必殺技（フェイバリット）は決まった。
しかし、悪魔将軍はフラフラしつつ片膝立ちではあるが立ち上がる。
これには観客だけでなくザ・マンらも驚く。
『立ち上がったー!!悪魔将軍さん、レジェンド様の大技を受けてなお立ち上がった!!なんというタフガイ!!』
『既に悪魔将軍の全身には多大なダメージが蓄積されているはずだ。だというのに闘志は少しも衰えちゃいない！』
『偉そうにしていただけのどこぞのゴミ屑（※キン肉マン側の大魔王サタン）とは違うな』
最後にジャスティスマンがかの存在に悪態をついたが、実際凄まじい事に変わりはない。
「……レジェンドよ」
「……何だ？」
「良いものだな、こういうファイトは」
「「『『!!』』」」
「私は……いや、私達はかつて元から完璧超人故に感情を持たなかった。正しくは持っていないと思い込んでいた。周囲すらそう認識してしまうようなレベルでな」
悪魔将軍は続ける。
「だが、お前が我らの世界を去る時……ある言葉とともに我らの枷を外し、我らにも感情がある事を分からせて行った。『喜怒哀楽、いずれか一つでも理解出来たならば残りも自ずと理解出来る。そして仲間がいればより早く、より深く』……そう言ったな」

「ああ、確かに言った」
「奇しくも私はすぐにその意味が理解出来た。そして改めて思ったのだ。これから次代を担う超人達に私は何が遺せるのかと。その結果、辿り着いた答えがこのファイトだ」

レジェンドだけでなく、観客もまた黙って悪魔将軍の話に耳を傾けている。

「私がこの答えに辿り着いた時、既に悪魔超人軍は私が手を貸さずとも自らの意志で他の超人らと次代へ向けて歩み始めていた。ならばもはや私の直接指導は不要。そして今、悪魔超人軍だけでなく……正義超人や完璧超人も分かるはずだ。この闘いを通して私が……私とレジェンドがこれからの時代を作っていく者達に伝えたいものが!!」

力強く言い放つ悪魔将軍に同意したのはやはり『スーパーヒーロー』だった。

「そうか……二人はまさに『心技体』を改めて私達に伝えようとしていたんだ！」
「「「「心技体？」」」」
「これは私の主観ではあるがな、『どんな相手でも負けないための『体』を作れ』『あらゆる相手を打ち破るために『技』を磨け』そして……『いかなる困難にも挫けぬ『心』を持て』。どれもこれも二人が今やっている事じゃないか!!」

こじつけかもしれないが、確かに理に適っている。
ただ言葉にするだけでは単なる心持ち程度にしか思わないそれも、今の二人の闘いを見れば認識は変わる。

「前置きの捉え方は各々によって異なるだろうが、レジェンドマンとゴールドマンが伝えたいものはキン肉マンが言った心技体の事で間

違いないだろう。それは我らだけでなく、この世界の者達にも通ずることだ」

そう、特に心は重要だ。

タイガらトライスクワッドやリク、それにレイトは以前に遊撃隊ベテラン勢の一人であるゼアスが自身の父から伝えられた言葉を教えてくれた事を思い出す。

――心を鍛えよ――

偉大な戦士であった父のこの言葉で奮起し、ゼアスは人間のまま特訓の末に見事トラウマを克服。

一度は敗北したウルトラマンシャドーを逆に圧倒して撃破するまでに成長したのだ。

その前の潔癖症克服も含めて、その事は光の国でも高く評価され『努力の勇士』として彼の名は宇宙に広まったのである。

そんな中、悪魔将軍は右手を差し出した。

所謂『握手』のポーズ。

互いの健闘を称えるのかとリアスらは納得するが差し出されたその手の真実を知るキン肉マンらはそうではない。

当然キン肉マンらと共に闘ったレジェンドもそれを知っているはずだが、忘れているのかそれとも知っていてそれでもなのか、悪魔将軍の握手に応じようとする。

「何でレジェンドは応じようとしてるんだ!?」

「え？何でって……むしろあれを拒否した方が失礼じゃない？」

「そうじゃない！この際だから言うが地獄の九所封じの八番目はパイルドライバーで、ラスト・ワンがさっきザ・マンが言った超人圧搾機だ！」

「「「「???」」」」

「だったら尚の事安心なのでは？」

焦るキン肉マンの言葉をいまいち理解出来ないリアスらオカ研メ

ンバーやソーナ達生徒会メンバー。
続くしのぶの言葉はもっともだ。
だが、次のキン肉マンの言葉で彼女らの顔色が一気に真っ青になる。

「確かにそうだ！それが本当ならな！」
「え……？」
「九所封じの７つ目までは今までので間違いない！だが実は九所封じの八番目はパイルドライバーではない！」

キン肉マンがそう言うのと同時に二人はガッチリ握手する。

「あの『握手』こそが九所封じの真の八番目なんだーっ!!」

バ　バ　バ　バ　バ　！　！

「「おおおおおっ!!」」

握手した二人の手から凄まじいスパークが巻き起こり、リングを眩

く照らす。
パワーを奪おうとする悪魔将軍の攻撃とパワーを奪われまいとするレジェンドの抵抗が拮抗し、スパークは一段と激しさを増していくが、やがてそれは落ち着いていき二人も自然と手を離す。
普通の観客らは何だと思った程度だが、悪魔将軍を知る超人達は別の意味で困惑している。

「ど……どういう事だ？」
「わからん。だがレジェンドのパワーを奪う事が出来なかったのは確かだな」

「お互い、良い気付けにはなったか」
「フッ……今のでやられるようならとんだ期待違いだったと吐き捨ててやるつもりだったが杞憂に終わったな」

『レッ……レジェンド超師匠と悪魔将軍、何事も無かったかのように復活ー!?って気付け!?アレが!?』
『……信じられん。あれだけお互いダメージや疲労が蓄積されている状況で平然としているとは』
『どうやら俺達の常識はもはやあの二人には通用しないぜ。残す九所封じはあのラスト・ワンのみ……!』

観客だけでなく実況や解説も二人の発言に驚いていた。
言うなればレジェンドは先の『握手』を態と受けたのだから。
そして会場や、テレビでこの闘いを見ている者達も悟る。
いよいよクライマックスだと。

「悪魔将軍、お前はかつてザ・マンとの闘いの時、敢えて奥義を受けにいったな」

「そうでなければ意味がなかったからだ」
「ならばこの闘いでは俺がその役目を果たそう。今のお前が出し得る最大の力と技をぶつけてみせろ。もし俺がそれで倒れたら所詮俺はそこまでだっただけのこと、お前を責めたりはしない」

レジェンドの言葉に観客は「おおっ!?」と驚愕の声を上げる。

「……ならば一つ言っておく。これからお前に放つ技はお前との闘いを想定して編み出した正真正銘、私の切り札だ。生半可な防御や覚悟では受け切れんぞ」
「望むところだぜ。逆に生半可な技であれば即座にカウンターで技が返されると思え……!」
「元より承知の上だ。私はこの技をもって――」

悪魔将軍は理解している。
レジェンド相手にもはや地獄の九所封じは通用しない。
元々それを前提にこの技を編み出したのだから。
そして悪魔将軍は知っている。
技の威力を高めるためには自身の実力や技の完成度だけでなく、その技に込めた想いや相手への気迫もまた重要であることを。

「お前を葬ってやろう」
『……え?』

レジェンド以外の観戦者全員が耳を疑った。
それに対し誰かが「今何を」と言おうとした瞬間、既に悪魔将軍はレジェンドをダブルアームで捕らえていた。
「私は今日のこの時、この瞬間の為に――」

そして悪魔将軍はそのまま回転する。
スピン・ダブルアーム――悪魔将軍の九所封じの一つであるスピン・ダブルアームソルトにも組み込まれている悪魔将軍の得意技だが、回転速度はその時の比ではなく、ウルツァイトハイパワーの闘気の炎と相まって強大な黄金の炎の竜巻が巻き起こっている。

「この技を磨き続けてきた!!」
『こっ……このムーブはーっ!!』
『悪魔将軍のフェイバリット!!』
『やはりあの技か!しかし……!』

実況のゼットも推測出来たのかテンションが上がっていき、テリーマンとジャスティスマンも予想通りと考えていたが、ジャスティスマンはその威力が桁違いに上昇しているのを竜巻の状態から予感する。

「ぬぅりゃあぁぁぁ!!」

悪魔将軍はレジェンドを竜巻に乗せて空中に放り投げる直前に身体を捻りながら投げる事で、レジェンドは錐揉み回転しながら黄金の炎の竜巻に巻き込まれて遥か空中へ飛ばされる。
悪魔将軍自身もドリルの如く身体を高速回転させつつ、竜巻を切り裂きながらレジェンドへと迫り、レジェンド同様に竜巻を突破した瞬間竜巻は消失。
そのまま悪魔将軍はレジェンドの首元へ左脚でローキックを放つ。
この時点で錐揉み回転状態だったレジェンドは、例えるなら高速道路を走っているスポーツカーが急ブレーキをかけたようなとんでもない衝撃を全身に受けながら回転を強制停止させられる。
そして悪魔将軍はグルリと身体を反転させ、左脚をギロチンの刃に見立てた体勢でレジェンドの首に当てたまま落下を開始。

『これはレジェンド様との合体技（ツープラトン）で見せた必殺技（フィニッシュホールド）!!』
『やはり地獄の断頭台!!』
『しかも直前の動作によるダメージも段違いに入っている！』

鬼灯の実況や解説にも力が入る。
だが、ここで悪魔将軍はさらなる隠し玉を見せた。

「ウルツァイトハイパワーッ!!」

悪魔将軍の叫びにその身体が一層強く輝き――

「フィニッシュチャージ!!!」

キュイィィィィィン!!!

その一声で悪魔将軍の全身の輝きや闘気の炎が収まっていったかと思いきや、突然悪魔将軍の四肢がウルツァイトハイパワー時よりも遥かに凄まじい輝きと闘気の炎を放ち出した。
それこそ、太陽のように。

『どっ……どういうことだーっ!?悪魔将軍の輝きと炎がいきなり凄まじいことになったぞー!?』
「このファイトの今までを見れば分かるがウルツァイトハイパワーを

もってしてもお前に決定打を与える事は出来ず、追い詰められた。だがそれも想定内だ!!」

悪魔将軍はさらに吼える。

「漸く会得したウルツァイトハイパワーをさらに限られた僅かな時間で超えるのはまず不可能！故に私はこの技を可能な限り強化する方法を試行錯誤し、その結果導き出したのがこの技を放つ時のみ四肢にウルツァイトハイパワーを集約、限定的に出力を上昇させる方法だ!!」

その輝きは尚も増し続け、レジェンドをも飲み込んでいる。

それを見たキン肉マンは顔を青ざめさせながら叫んだ。

「いかん!!悪魔将軍は本気でレジェンドを殺す気だ!!」

「「「「!?」」」」

キン肉マンの言葉に本気で焦り始めるリアスらであったが、ザ・マンが冷や汗を垂らしながらも制して説明する。

「……それだけの覚悟で望まねばレジェンドマンは倒せない。ゴールドマンはそう感じたのだろう。倒す気程度では自身が倒されるだろうとも感じてな。事実、先の九所封じもかけている最中に大技の反撃を叩き込んでくるようなレジェンドマンだ。一瞬のスキでさえ逆転決着の糸口を与えてしまう以上、それをさせないためにも完璧な一撃を叩き込みK．O．するしかない」

「でも……でも、もし本当にレジェンド様が……！」

ザ・マンの言葉を聞いたアーシアは涙ながらに言葉を振り絞る。

そんな彼女を気遣いつつ、カナエが優しく諭す。

「アーシアちゃん、大丈夫……って私が闘ってるわけじゃないから安易に言えないけど、信じましょう？レジェンド様を」
「カナエさん……はい」

しかし、そんな彼女らの希望さえ打ち砕くかのような、さらなる衝撃を悪魔将軍は巻き起こす。

『なっ……何だー!?落下速度が徐々に速くっ……』
『あれは……まさか加重力かっ!?』
「「「『『!?』』」」」

レジェンドが得意とする加重力戦法を悪魔将軍が使ったのである。

ゴ　オ　オ　オ　オ　オ

「レジェンドよ、この技がこのファイトにおいて私の最後にして最大最強の技だ。もしお前が真に私の上を行く存在だと言うのなら――」

悪魔将軍のウルツァイトハイパワー・フィニッシュチャージによる輝きと炎は最高潮に達し、光の神さえも霞む程のものとなっていた。

「これを乗り越えて見せろ――っ!!」

そして悪魔将軍はレジェンドの首にかけていた左脚の上に右脚を乗せ、さらに右肘で押さえつけつつ加重力によって最終加速し――

「地獄の断頭台・改、神威の断頭台のさらなる進化形!!」

キャンバスへの激突の直前に、残る左腕をその右腕へ上から握り拳で凄まじい速度で振り下ろす事でより強く、より深く、激しい衝撃と

ともに押し込む!!

「神滅の断頭台！！」

ガガァァァァァン！！！

決着!栄光の2大超人!!の巻

「神滅の断頭台!!」

ガガァァァァァン!!!

悪魔将軍の技が炸裂し、光が爆ぜた。
その光は会場から溢れ出し、天にさえ届かんばかりの光の柱さえ発生させた。
何かが割れる音と共に光が収まった時、観客達の目に入ったのは両手両膝をついて苦しそうに息をしている悪魔将軍と、仮面こそ割れていなかったがコスチュームの首元が完全に粉砕され、仰向けで倒れて微動だにしないレジェンド。

「ま……まさか……」
「敗けたのか……レジェンドが……!?」

誰もが信じられないような状況の中で、辛うじて声を出したのはスグルとアタルのキン肉マン兄弟だ。
倒れたまま動かないレジェンドを見ながら、タイガやレイトもまた愕然としつつ声を絞り出す。

「そ……そんな……!」
「おい、ウソだろ……あのデタラメな師匠が……!」

衝撃のあまり、レイトが普段は殆どそう呼ばない師匠呼びになってしまう程である。

『こ……これはやはり……!』
『悪魔将軍の新技、神滅の断頭台は完全に極まっていた……』
『ああ、間違いない……』

ゼットも眼前の光景を信じられない様子で、テリーマンとジャスティスマンはそれを信じざるを得なかった。
鬼灯は一度目を伏せ、決意と共に宣言する。
『勝負あり!!この闘い――
「待て!!!」っ!?』

しかしその宣言を止めたのは悪魔将軍。
あまりの迫力から鬼灯さえ驚き、言葉を中断してしまう。

「まだだ……」
「「『『『え……?』』』」」
「まだレジェンドは倒れていない……!」

悪魔将軍の発言に動揺が広まる。
多少は落ち着いたのか、肩で息をしつつフラつきながらもどうにか立ち上がった悪魔将軍はさらに言葉を続けた。
「今の我らにとって、ただリングに倒れただけでは倒した事にはならん……相手が敗北宣言するか、もしくは……相手が死した時のみ、真の決着がつく。そうだろう?レジェンドよ……」

「身動き取れず……声も出せない時は……死亡扱いになるんかね……冗談キツイぜ、くそったれ……！」

「『!!』」

レジェンドが声を出した。
苦しそうにではあるが、しっかりと。

「う……ぐ……」

震えながらも必死に起き上がろうとするレジェンド。
受けた箇所が箇所だけに力が思うように入らず、少し起き上がっては倒れを繰り返している。

「さすがに……今のは……本気で……意識飛んでたぞ……！」
「ザ・マンを下した神威の断頭台……それを発展させた神滅の断頭台をまともに受けてその状態の時点で、お前は明らかに異常だがな」
「やかましい……！１２００％のオーロラルレジェンドプロテクションを無理矢理ブチ抜いて……苦しそうにしていただけのお前が言うか……！」

やっとの思いでレジェンドも立ち上がり、喉元を押さえながら息を整えようとする。

その姿を見て会場は再び凄まじい熱気に包まれた。
『たーっ!?たたた立ち上がったあああああ!!レジェンド超師匠、あの間違いなく必殺の一撃をモロに直撃したにも関わらず大復活ー!!』
ワアアアアアア!!
『タフなんてもんじゃないぜ、あれは……!』
『体力はほぼ限界、おそらくは殆ど精神力だけで立っているのだろう……決して折れぬ、鋼の精神で!!』

☆

――京都・八坂の屋敷――

「光神様が!光神様が立ったのじゃー!!」
「なんかアルプスの少女みたいな台詞だな」
「おいそれ俺にツッコめってか?ていうか何でお前までここにいるんだよガイィィィ!!」
「細かい事言うなよジャグラー。俺だってレジェンドさんの本気の闘いは見たくてしょうがなかったんだ」

かつて共闘した縁で、八坂・九重の九尾母娘の屋敷にお呼ばれして試合観戦していたジャグラー……とウルトラマンオーブことクレナイガイ。
勿論、京都に住まう妖怪が大集合して観戦中だ。
……ついでにガイはレジェンドの復活に合わせて１０本目のラムネを開けていた。

「毎回毎回どんだけ飲むんだよお前は」
「そういうお前も牛丼食ってるだろ」

「俺のは自分で作ってるからいいんだよ。つかソレ俺が持ってきたやつだろーが!!」

そんな言い合いする二人にかつての出来事による険悪さは無く、むしろ「喧嘩するほど仲が良い」感じである。

「ったく」と言いつつ視線をモニターに戻すジャグラー。

ガイは八坂に対して「騒いでスイマセン」と謝っていたが、八坂は気にしなくて良いと微笑みながら応えた。

軽く礼をしつつ、ガイもまたモニターに向け最終局面となるレジェンドと悪魔将軍のファイトを見逃すまいと真剣な表情になる。

☆

――冥界・とある悪魔の屋敷――

「くそおおおっ!!俺はなんて馬鹿なんだ!!『どれほどのものか見極めさせてもらおう』などとこの御二方に対しておこがましい考えでチケットを買おうとさえせず、生中継で十分だと高を括っていた少し前の自分を叩きのめしてやりたい!!」

屋敷でそう吠えていたのは若手悪魔Ｎｏ．１と言われるサイラオーグ・バアル。

滅びの力どころか魔力さえ持たずに生まれた彼としては、鍛え抜かれた力と技で闘うレジェンドと悪魔将軍が正しく己の望む理想の姿であった。

「リアスや彼女の眷属はあの光神レジェンド様の眷属とも呼べる人物らに鍛えてもらっていると聞いた。ならば俺は!!」

何かの決意を込め、モニターから目を離さずにサイラオーグは遠出するような準備を始める。

漸く見つけた、師と呼ぶべき人物の元へ自らの眷属らと共に赴く為に。

「不正の規模があまりに大き過ぎてレーティングゲームは無期限中止……だからといってぬるま湯に浸かる気はない！俺はあの御方の元でさらに自分を鍛えるぞ!!……その前にこの闘いはちゃんと最後まで見なければ」

そうして視線をモニターから離さぬまま手を動かす彼の姿はシュールであった。

☆

生中継を見ている各所で盛り上がる中――

「お前の技には耐えた……！次は……俺の番だ……！」

激痛に苛まれながらもレジェンドは闘志に満ちている。

悪魔将軍が最強の技を出したならば、自分もまた自身の持ちうる、ウルティメイト・ギガバスターをも超える最強の必殺技（フィニッシュホールド）を出す時だ。

「その前に……一つ聞いておく。先のウルツァイトハイパワー……まだ発動可能か……？」

「当然だ。もっとも……そう長く維持出来る状態でもないが」

「それでいい……生憎と今の負傷状態では加減が出来んのでな……もし発動出来ないのならばマッスルスパークを使う他なかった」

レジェンドは満足げに言うが、キン肉マンを始め超人達は「むしろそんな状態で平然とマッスルスパークを放とうとする時点でおかしい」と思わざるを得なかった。

そもそもマッスルスパーク……しかもキン肉マンが完成させたクラッチ技の方は特に身体に凄まじい負担がかかる。
そんな技をレジェンドが最強の必殺技（フィニッシュホールド）を使えない場合に使う――その理由はマッスルスパークが『究極のみねうち』だからである。始祖（オリジン）に認められたとはいえ、その心は正義超人であろうとするレジェンドにとって、『試合』の中では可能な限り相手の命を奪うような事はしたくなかったのだ。
ちなみに無惨とコカビエルは呵責が主軸なので除外する。

「いいだろう……お前は今の私の持ちうる最強の技に正面から挑み、そして耐えた。ならば今度は私がお前の技を受け止めよう。ふざけた技ならば今度こそ葬るぞ、レジェンド……！」
「分かっているさ……！最初に言っておく、これはゼットがゴブニュに放ったゼスティウムバスター同様、俺一人では辿り着けなかった技だ！」
「ならば……！ウルツァイトハイパワー!!」

再び悪魔将軍の身体が金色に輝き黄金の炎を纏う。
それを確認したレジェンドは遂に動く。
その身体は、先程までと違い銀色の闘気に輝いていた。

「あれは……っ！」

カナエがそれに気付くも、レジェンドは悪魔将軍をダブルアームで捉える。

『おおっとこれは悪魔将軍さん得意のスピン・ダブルアームか!?』
「うおおおおお!!」

鬼灯の言葉通り、レジェンドはスピン・ダブルアームにより回転し、空中へ放り投げるまで全く同じ動作だった。

『どういう事だ!?まさか、レジェンドも同じ技を……』
『いや、だとしたら先のスピン・ダブルアームの威力が低すぎる！何か別の……あれは!!』

解説二人もレジェンドの動きが予想出来ず、様々な推測を立てていたがジャスティスマンが何かに気付く。

「私の技の模倣か、それともより強化したもので放つか……！いずれにしても拍子抜け……!?」
「セイヤァー!!」
「ヌウッ!?」

『あのセットアップは!!』
『れっ……連続腹筋ブリッジによる打ち上げぇ!?何だあのムーブはぁぁぁ!?』
『間違いない！アロガントスパークに似てはいるがマッスルスパークの方だ!!』
『ますますどうなってんだ!?スピン・ダブルアームからのマッスルスパーク!?』

腹筋ブリッジによる相手の抵抗力を奪うムーブはマッスルスパークやその原型ともなったアロガントスパークのスタートムーブだ。
そしてその後に続くのは――

「セイヤァーー!!」

ガキィィィィッ!!!

「グハァッ!!」

レジェンドは悪魔将軍の首を右脚で、右脚を左脚で、両手首を両手で固定しエビ反りになるようにクラッチする。

これこそキン肉マンが完成させた『マッスルスパーク天』である。

ここから体勢を変え地面に叩きつけるように落下する『マッスルスパーク地』をもってマッスルスパークは完全なものとなるのだが……

『やはりマッスルスパークか!!』

『だがスピン・ダブルアームからさらにマッスルスパークの下準備の為のセットアップで普段よりも遥かに高い位置にいるぞ!!先のセットアップも通常より回数が多かった!まだレジェンドは何かを隠している!!』

そうジャスティスマンが言った瞬間から、それは起こった。

なんと、レジェンドが無数の残像を残す程の速さで数多の技を悪魔将軍にかけ始めたのである。

タワーブリッジ、パロスペシャル、テキサス・コンドルキック、キャメルクラッチ……どれも観戦に来た超人達が得意とする技の数々。

関節技（サブミッション）でも一瞬で最大威力に達せられる、そして複雑な技も一瞬でかけられるレジェンドだからこその超連続技。

「今、この闘いを見ている全ての者に告げる!この技は俺の最強の必殺技（フィニッシュホールド）であると同時に、奥義でありながら永遠に完成しない、完成させてはならない奥義だ!!」

「『!?』」

その時点では誰も意味が分からなかった。

奥義であるならばいずれは完成する、させたいと思うのが普通だろ

う。
だというのに「完成させてはならない」奥義とは何なのか。
それは今も空中で技を繋げ続けているレジェンドの行動にこそ答えはあった。

「何故ならばこの奥義は即ち『友情の絆』そのものだからだ!!」
「『友情の絆!?』」
「たとえ俺との関わりを持ち、不老不死でなく不老長寿となった超人達もいずれは生を終える時が来るだろう!そして各々の魂や技……心は後継者へと受け継がれていくはずだ!だがそれらを未来へと受け継がせる事は出来ても、やがて記憶は消えていくかもしれない!!」

レジェンドの言葉を誰もが黙って聞いている。

「だからこそ、完全な不老不死である光神の俺がしなければいけない事はその英雄達が生きた証を忘れず、その生き様を後世へと伝え続ける事!そしてこの奥義はそれを形と成したものであり、これから生まれてくるまだ見ぬ超人達もまたこの技に刻まねばならぬものだ!!」

そしてこのレジェンドの言葉を聞いたキン肉マンは理解した。
何故完成させてはならないのかということを。

「そうか……あのレジェンドの奥義とやらの完成……それは即ち友情をそれ以上紡がないということ!完成しないという事は過去から未来へ、世代を超えて友情の輪が無限に広がっていく事を意味しているんだーっ!!」

キン肉マンの言葉にその闘いを見ていた者達がハッとする。
果て無き時を生き続け、そしてこれからも生きていくレジェンドによって世代だけでなく、世界を、次元を超えて紡がれ続ける超人達の

記憶と技。
そこに込められた想いや願いも受け継がれ、受け継いだ者がさらに次の世代へ。
それを聞いたリアスは思う。
（そうよ……純血かどうかなんて関係ない。先人達から大切なものを受け継ぎ、後世へと紡いでいくことが重要なの。改めて分かったわ、今の悪魔に必要なこと。伝統が悪いのではなく、それだけに拘り続けるのがいけないのね）
リアスだけでなくソーナも、将来有望な若手悪魔の二人が理解してセラフォルーも頬を染めながらレジェンドの言葉にうんうんと頷いている中、やはりというか冥界で渋々観戦していた老害悪魔は全く理解していない。
この連中には近々ダンブルドアと、光神陣営の中でもレジェンドに匹敵する規格外によって粛清されるのだがそれはまた後日に。
そして技を極め続けたレジェンドは、先程とは両手以外間逆…悪魔将軍の首と右脚をそれぞれ左脚と右脚でクラッチする２回目のマッスルスパーク天である『マッスルスパーク反天』を見せた。
「セイヤァーーッ!!」
ガカァァァァァ!!!
「グッ……グウッ……!」
『クラッチ技のマッスルスパーク２回目だと!?』
『なんて奴だ!!あの技は全身にかかる負荷がハンパじゃない!!それをあれだけの連続技をあの速度で放って既に尋常じゃない負担が身体にかかっているはずなのに躊躇なく出来るなんて!!』
他の観客が大歓声を上げる中、キン肉マンとアーシアはレジェンド

の身体に蓄積された負荷を懸念していた。

（いくらレジェンドでも、悪魔将軍の技を受け続けてダメージが溜まっているはず。その状態であのマッスルスパークを始め、あれだけの技を放てば当に限界など超えているはずだ。せめて……せめてこの闘いが終わるまでは頑張ってくれ!!）

（レジェンド様……どうか、どうか最後までご無事で……!）

遂にフィニッシュに入ろうとするレジェンドから、キン肉マンへ向けてメッセージが放たれる。

「キン肉マン!先程の答えはほぼ満点だが一つだけ加えなければならない事があるぞ!」

「なっ……何だってー!?」

「それは友情は無限に広がるが……その無限に広がる友情が齎す友情パワーは、無限をも凌駕するということだ!!」

「!!」

「そしてその名を冠した俺の最強の必殺技（フィニッシュホールド）!!」

レジェンドの奥義を締め括る最後の体勢、それは相手と背中合わせの姿勢で手足を固定し、相手の頭と体を地面に叩きつけるように落下するという『マッスルスパーク地』そのもの。

だがレジェンドはここに落下しながらその場で∞を描くような超高速回転を加え――

「完璧・特式奥義（パーフェクト・スペシャル）!!」

そして僅かに再度上昇するとその∞を貫くが如くさらなる超高速回転をしながら加重力を付与し落下する!!

「オーバー・ザ・インフィニティーッ!!!」

ズゴガァァァァァァッ!!!

「グァァァァァッ!!!」

レジェンドの『永遠に未完成』の奥義を受け、キャンバスに叩きつけられた悪魔将軍。

しばらくは両者そのままの体勢を維持していた。

『こっ……今度こそ決まったー!!レジェンド超師匠の奥義オーバー・ザ・インフィニティが悪魔将軍に決まったぁぁぁ!!』

ワァァァァァァ!!

……だが、悪魔将軍の拘束を解いてゆっくりと立ち上がったレジェンドは、そのままキャンバスへ音を立ててうつ伏せに倒れてしまう。

これに観客は騒然とする。

『な!?これはどういう事だーっ!?』
『まずい……！悪魔将軍だけでなくレジェンドにも遂に限界がきたんだ!!』
『それだけではない……！悪魔将軍はともかくレジェンドの様子がおかしいぞ!!』
「う……ぐ……がっ……！」

これには一誠やタイガも混乱していた。
彼らだけではなく超人らもだ。

「ど……どうなってんだよ!?決めたのはレジェンド様の方だろ!?」
「あの苦しみ方は普通じゃないぞ!?」
「……『身勝手の極意』。その反動よ」
「「「身勝手の極意!?」」」

カナエの呟きに近くの全員が聞き返す。

「リアスやしのぶ達も見た事があるでしょう？レジェンド様が銀髪になって凄まじい闘気を纏っていたのを」
「レジェンド様が銀髪って……！……あ」

プール掃除の時である。

「……プール掃除……」
「「「「あ」」」」
「「「「いや何でプール掃除!?」」」」

超人達総出のツッコミを受けたが、この中の面子ではカナエ以外だとレイトとリク、それにアーシアはそこ以外でも見た事がある。
ゼノヴィアとイリナがアーシアを侮辱したあの日、サーガらが必死に止めていたアレだ。

「そ、それでその極意はどういうものなんだ!?」
「私も詳しくはよく分からないけれど、発動中は身体が勝手に動いて無限に進化していくって。常時発動も出来るけど、レジェンド様は素の能力が規格外過ぎて普段は必要ないとかであまり使いませんけど」

ぶっちゃけ変なところで使いまくっているが、それはこの際置いておく。

「まるで火事場のクソ力だな……話を聞く限り攻防共に増していくようだが」
「ただ、デメリットとして極度の気の消耗に加えて凄まじい激痛が全身に降りかかるらしいんです。レジェンド様は体調が万全なら多少疲れる程度で済むみたいですが、今日は……おそらくダメージを始め様々なマイナス要素が蓄積された結果、本来のデメリットが発生したんじゃないか」

周囲の殆どは納得したが、まだ横文字に疎い小芭内と蜜璃は若干混乱していた。
しかし、そうこう言っている間もレジェンドは内側からくる激痛に必死に堪えている。

「ぐっ……くそ……最後の最後で……っ……!」
「……どうしたレジェンド。いつまで這いつくばっている」
「……!!」

大の字に近い格好で仰向けのまま動かない悪魔将軍が静かにレジェンドに語りかける。

「お前は私を倒した。だがまだ倒されてはいない。意味は分かるな？」

「悪魔将軍……」
「私はこの通りお前の奥義を受けてもはや身動き一つ取る事が出来ん……見事な奥義だった」

レジェンドは痛みに堪えつつ悪魔将軍の言葉を聞いている。

「だが、私と同じように地に伏している者に勝利を渡す程、私は甘くない。お前が勝者だと言いたいならば……立ち上がれ！ウルトラマンレジェンド!!」
「……!!」

悪魔将軍からの激励とも言うべき言葉。
それに衝撃を受けたレジェンドだが、それで終わりでは無かった。

レージェンド!!
レージェンド!!
レージェンド!!

会場中から巻き起こるレジェンドコール。
その中には実況である鬼灯やゼット、解説のテリーマンやジャスティスマン、そしてリアスらや超人達は勿論、あのザ・マンやネメシスも共にコールしている。
そして、レジェンドらに聞こえはしないが生中継を見ている者達もだ。
いつの世も自分達を奮い立たせてくれる声援に、胸が熱くなるレジェンド。
そんな彼の最後を後押ししたのは、今日この場で相対した最強の戦友（ライバル）だった。

「お前はスーパーヒーローだろう。ならば……応援には応えるのが礼儀ではないのか？」
「……ああ……そうだっ……な……！」

身を焼くが如く収まらぬ激痛に堪え、レジェンドは必死に立ち上がった。
足がガクガクと震えているという普段ならいくら外見が良くとも格好良いとは言えないその姿は、先の激戦を制した後では名誉の負傷と誇っていいものだ。
立ち上がったレジェンドを確認した悪魔将軍は満足そうに言葉を紡ぐ。

「改めて言おう……見事な奥義だったぞ、レジェンド。この闘いは私の敗け……

お前の勝利だ、レジェンド……!!」

ワ　ア　ア　ア　ア　ア　！　！　！

『今！この激戦の勝者が決定しました!!最後の勝利者は……ウルトラマンレジェンドーッ!!』

鬼灯の言葉にさらなる大歓声が上がり、同時にレジェンドも膝から崩れ落ちた。
そんなレジェンドに――

「レジェンド!!」

「レジェンド様っ!!」

キン肉マンとアーシアがリングに入って駆け寄り――

「将軍様!!」

同じタイミングでバッファローマンが悪魔将軍へと駆け寄る。
うつ伏せと仰向けになった二人は漸くついた決着に安堵しているのか、微動だにしない。
レジェンドはまだ少し呻き声を上げているが。
大歓声を上げながら観客が見守る中、三人はレジェンドと悪魔将軍を助けるべく行動を開始する。

「バッファローマン!・出来る限りレジェンドと悪魔将軍を近づけてくれ!・ついでにレジェンドを仰向けにしてくれると助かる」
「任せな!・将軍様、もう少しの辛抱です!」
「……バッファローマン……」

バッファローマンが二人を並べ、言われた通りレジェンドを仰向けにする。

「ようし完璧だ!・さて、アーシア。あとは私と君の仕事じゃい!」
「はい!」

アーシアはレジェンドと悪魔将軍の頭側に回り、目を閉じて精神を集中させる。

(卯ノ花先生に教わった回道と、神器の力を合わせて……)

アーシアを中心にレジェンドと悪魔将軍を包み込むような穏やかな光が溢れ出し、それを合図にキン肉マンは奇跡の業を披露する。

「フェイスフラーッシュ!!」
素顔に見えたそれは覆面(マスク)であり、ほんの少しだけ覗かせた真の素顔が放つ光は様々な事象を引き起こす。
かつて、精神世界でその輝きに傷を癒やされたゼットは尊敬の念をキン肉マンに向けていた。
アーシアとキン肉マン、二人の能力によってレジェンドと悪魔将軍は完全ではないもののある程度回復し、ゆっくりと上半身を起こす。
「レジェンド様、大丈夫ですか?!」
「ああ……ありがとうアーシア、スグル…とはいえもうしばらくはまともに動けんな……」
「うーむ、レジェンドは超人達の神という意味で超神ではなく、神を超えた存在という意味で超神だからな。増幅フェイスフラッシュでも完治までいかなかったのかも。ん?じゃあ悪魔将軍は?」
「俺の超強化防御を力技でブチ抜いてくる奴が神レベルで収まってるとは思えんな」
「そうじゃのう!ハッハッハー!!」
大きく笑うキン肉マンに、仮面で分からないがレジェンドも漸く安堵の笑みを零し、その雰囲気を感じたアーシアも柔らかく笑う。
キン肉マンに肩を貸され、アーシアに支えられつつ立ち上がったレジェンドの前に、同じくバッファローマンに肩を貸されながら立ち上がった悪魔将軍がいた。
未だかつての恐怖から悪魔将軍に苦手意識があったキン肉マンは一瞬驚いてビクッとしたが、さすがにレジェンドもいる事ですぐに落ち着く。
「レジェンドよ」
「どうかしたか?さすがに明日くらい休みは貰えるだろうが地獄での

仕事は中々にハードだぞ。出来るだけ早めに休んだ方がいい」
「分かっている。だがまだ私にはやるべき事が残っている……！」

そう言って悪魔将軍は空いている右手でレジェンドの左手首をガシッと掴む。
それを見ていた観客らは激しく動揺し、レイト達はいつでもレジェンドらの援護に向かえるように身構える。
……が、それは無意味だった。

「悪魔には悪魔の矜持がある。死力を尽くし、正々堂々と勝利を手にした者には――」

悪魔将軍は自身の右手でレジェンドの左手を――

「それを心から称えるのが私の矜持だ」

ゆっくりと、空高く掲げた。

威風堂々――まさにその言葉が似合う程、闘いに敗北したというのに悪魔将軍はレジェンドに負けないくらい輝いていた。
光神相手に互角とも言える闘いをし、地に伏したレジェンドを激励して立ち上がらせ、そして今……勝者たるレジェンドを祝福。
この生中継を見ていたサイラオーグが感動のあまり号泣する程、悪

魔将軍はレジェンドと共に『ヒーロー』であった。

パチパチパチパチ……

どこからともなく拍手の音が聞こえ、レジェンドらがそちらを向くとザ・マンが涙を堪えつつ笑みを浮かべて惜しみ無い称賛の拍手を送っていた。

それに続き、ネメシスやシルバーマン、実況席のゼット……次々に拍手が送られ、観客らからはレジェンドコールのみならず悪魔将軍コールも聞こえてくる。

最高の友の肩を借り、巫女に寄り添われながら、同じく後継者に肩を借りた好敵手から勝利の祝福をされし光神――

最後の最後まで感動を与え続けた栄光ある二人の超人と、それを支えた者達。

この闘いは、魔闘地獄最初にして最高の闘いとして永遠に語り継がれる事となる。

○ウルトラマンレジェンド
ＶＳ
悪魔将軍●
（オーバー・ザ・インフィニティ）

「白」の求めていた「力」

――何処とも知れぬ場所――

そこの通路を人間の姿のウルトラマントレギアと堕天司ベリアル、そして少し間を開きつつ前後を彼らに挟まれる形で不機嫌なヴァーリが歩いている。

「……」

「だから悪かったって。そんなに拗ねんなよ」

「私からも謝ろう。なにぶん彼にそう頼んだのは他でもない私なのでね。馬鹿正直に勧誘しても首を縦に振ってはくれないだろうと思い、あんな手荒な真似をしてしまう事になった」

「……もういい。それよりお前が本当にあのウルトラマンなのか？」

「勿論だとも。この姿の時は『霧崎』と呼んでくれたまえ」

トレギア――霧崎は少々戯けた感じでヴァーリに人間時の名を告げた。

そんな霧崎にヴァーリは問う。

「何故、俺を勧誘した？お前達ほどの実力者であれば今の俺の力など取るに足りない存在だろう」

「ふむ、最もな疑問だ。まあ、理由はいくつもあるが……分かりやすいものをピックアップして説明しよう。まず一つ目、単純に戦力は多い方が都合が良いからだよ」

これは分かる。

どれだけ実力があっても余程でなければ物量で負けることがあるからだ。

「二つ目は君の中にあるものの才能を見出したのさ」

「あるもの……？」

「それはもう少ししてから説明させてもらうよ。ここではそれ単体で解説してもいまいち理解しづらいだろうからね。そして三つ目だが……これは私が二つ目に準じているだけだ。そのあるものを開花させた君の行く末に興味があるのだよ」

結局、そのあるものとやらが関係しているというくらいしか分からないが、少なくとも力を望むヴァーリにとってちゃんとプラスになる事は間違いなさそうだ。

そしてある部屋の前で霧崎が立ち止まった事を怪訝に思ったヴァーリは再度霧崎に問おうとするが、先にベリアルが口を開く。

「なーる。サキさん、ちゃんとファーさんにも会わせとくわけだ」
「勿論だとも。我が盟友であり、アレらの開発者でもあるのだからね。それに君の創造主でもあるわけだし」
「くっはー……なーんか俺またファーさんに蹴飛ばされそう。甘いもの食べて期限良くなってくれないかね、ホント」
「彼は少々気難しいところがあるからね。しかし、地球人は脆弱だが娯楽に関しては素晴らしい。特にその筆頭に食べ物が来る。これは実に良い物だ」

そういうと霧崎はキャラメルを取り出して口に含む。
ベリアルが分けて欲しそうに見ていたので一つを軽く放り投げて渡すと、いつもの笑みで礼をしつつ食する。

「そうそうこれだよ。俺達天司……というか星晶獣は別に食べ物食べなくてもいいんだが、一度覚えるとクセになるんだよ、こういう味はさ。白龍皇もどうだい？」
「いらない」
「連れないねぇ。ま、それはそれとしてこれから会う人物は君にとっても重要な意味を持つ人物だ」

ベリアルが言う言葉の意味を理解出来なかったが、それはその人物と対面し……その名を聞いた瞬間に判明する。
ゆっくりと扉を開けると、そこは何やら実験室のような場所であり、その奥に一人の人物がいた。

「やあルシファー、進歩はどうだい？」
「『!?』」
「トレギアか。研究の進歩状況は悪くない。だが実戦データが取れなければいくら悪くないと言おうが結局盤上理論の域は出ない。今後の事を考えてどこかしらに送り込んでデータ収集を行うべきだな」
「さすがファーさんだ。念の為に聞いときたいんだが……俺の専用機ってのはあるかい？」
「ない。適当に乗っていろ」
「わお。予想通りの答えだ」

少しばかりコントじみたやり取りはあったが、ヴァーリとしてはそれどころではない。

（バカな！ルシファーだと!?あの男と俺以外に血族が……いや、この感じは悪魔ではない……しかし人間というわけでもなさそうだ。何なんだコイツは……!?）
「そいつがお前の言っていた白龍皇とやらか」
「ああ、君の作り上げたアレの操者として相応しいと思ってね」

人間界でも冥界でも天界でもない、勿論光の国のものでもない衣装を身に纏ったルシファーと呼ばれる人物はヴァーリをまじまじと見つめる。

「ところで、それが『星の民』とやらの服装かい？」
「どうもあの格好のままでは研究に意識が向かん。あれは戦闘時に限定して普段はこちらの服装でいた方が効率的だと判断しただけだ。仮にあのままでも意識が研究へと問題なく向くのならそのままでも構わなかった」
「サキさんはファーさんの事を褒めようとしたんだよ。そりゃイイ男がミステリアスな雰囲気と服装を兼ね備えていたならそそりた……痛っ！蹴らないでくれよファーさん」
「煩い。無利益な言葉しか吐く気がないのなら黙っていろ」

照れ隠しでも何でもなく、ただただ研究対象にのみ目を向けているルシファー。
そんなルシファーを諌めるでもなく、ベリアルを気遣うでもなく霧崎は笑っていた。

「さて、紹介しよう。彼はルシファー、星の民と呼ばれる異世界からの来訪者……流れて来た者と言った方が正しいかな？そこのベリアルを含む堕天司や天司という原初の星晶獣の創造主だ」
「天使や堕天使の……創造主だと!?」
「あ、白龍皇。字はこっちな、使じゃなくて司」

ベリアルが軽い声で宙に字を書きつつ言うが、それよりもヴァーリが衝撃を受けたのは別の方だ。

「命の創造……そんな事が出来るのは神しか」
「黙れ」
「!!」

一瞬、しかしその一瞬だけヴァーリ限定に放たれた殺気を受け、ヴァーリは腰を抜かした。

それだけ尋常じゃない殺気を浴びせられ、ヴァーリはベリアルに一方的に叩きのめされた時よりも明らかに恐怖している。

「二度と俺を神などと呼ぶな。元の世界の創世神といい、この世界の聖書の神といい、形は違えどホメオスタシスに巻き込もうとする連中の同類にされるのは虫酸が走る」

「確かにこの世界の聖書の神とやらは如何なる形になろうと元の姿に戻るべく、何かと事前準備をしていたようだからね。もっとも、それら全てを光神らに潰された挙げ句地獄送りにされたようだが」

「返り討ちにあってこの世界でいう神器ごと消されたんだったな。所詮はたかが一世界の一神に過ぎん存在が身の丈も理解せず格上に挑んで無様な結果になっただけだ。下らん」

明らかに聖書の神を下に見ている発言。

やらかした事を考えれば当然ではあるが、ルシファーは聖書の神などそもそも眼中にないかのような物言いだ。

「……っと。そうだ白龍皇、ファーさんはおたくらの姓やら称号と違ってちゃんと名前なんだよ。だから君もファーさんと痛ぁ!?」

「貴様は俺の被造物の分際で名前も普通に言えんのか」

「今本気で蹴ったよなファーさん……少しはサキさんみたく優しくしてくれよ」

「そうする必要性を感じない」

相変わらずベリアルへの態度が冷め過ぎているルシファーだが、そもそも星の民自体がドライな人種と言える程、一つの事に執着しない人物が大半である。

ルシファーが研究や実験に執着しているように例外もいるにはいる……というか、圧倒的に少ないので同族の中で目立つ上、さらに能力的に突出している場合が多い。

その中でもルシファーはさらに特別だったのだが、一先ずそれは置

いておこう。

「それより要件は何だ。ベリアルならいざ知らず、お前がただ紹介するためだけにそいつをここへ連れて来たわけではあるまい」
「先程も言ったが、彼には君が作り上げたアレを任せたいんだ」
「お前が乗るならばともかく、そいつがだと？『念動力』の片鱗さえ見えんそいつにアレが動かせるわけがない」

ルシファーに侮蔑の視線を向けられ、ヴァーリは睨み返すものの反論は出来ない。
先程ルシファーの言った念動力が何かも分からないし、何よりこちらに来てからアルビオンが何かに怯えている。
加えてルシファーの底知れぬ実力。
科学者……というかマッドサイエンティストらしいが、それだけであんな殺気は出せるものではない。

「その通りだ、ルシファー。今の彼にアレを操る事はおろか起動さえ不可能だろう。だが、間違いなく彼には念動力の素質がある。それこそ、赤龍帝とは別次元な」

赤龍帝と聞きピクリと反応したヴァーリを見て霧崎はさらに言葉を続ける。

「かなり深い位置で眠っているその力が目覚めるのは時間が掛かるだろう。だから覚醒を促すために厳しい訓練を受けてもらうが……改めて問おう。君にその覚悟はあるかな？」
「当然だ。俺は何があろうと前に進み続ける。その為に必要な力が得られるならどんな苦行にも耐えてやるさ」

その答えに霧崎は満足そうに笑うと、ルシファーやベリアルと共にあるモノがある場所へとヴァーリを案内する。

「アレは桁外れに巨大でね。専用の位相空間に隔離保管しているんだ」
「戦艦か何かなのか？」
「戦艦ではないよ。まあ、見てもらえばすぐに理解出来る代物さ」

霧崎やルシファー、ベリアルに連れられて辿り着いた場所にあったのは巨大な扉。
ゴゴゴ……と大きな音を立てて開いて行く扉の向こう側にあったのは広大なデッキ。
そして頭上にもデッキの下にも広がる隙間も無い雲海が広がっていた。
時折、雷鳴を轟かせて。

「ここは……雲と雲の間に位置しているのか？」
「そうだと言えるが、そうでないとも言える」
「……よく、分からない」
「確かに初見ですぐに察するのは難しいか。先程のようにあまり焦らすのも良くない。答えを述べよう」
霧崎が一呼吸置いて笑いながら告げた言葉にヴァーリの顔は驚愕に染まる。

「これはある一体の『龍』によるものなのだよ」

「なっ……!?」
『何だとっ!?』

ヴァーリのみならずアルビオンさえ声を上げた。
詳しい大きさは不明だが、少なくとも見渡す限りの雲海――というより暗雲――がたった一体の『龍』が原因だと言われても信じられない。
かの壬龍さえこれ程の力は無いだろう。

『出鱈目を言うな！グレートレッドやオーフィスならば分かるが、それ以外にこれ程の力を持つドラゴンなど俺でも聞いたことが無い!!』
「ドラゴンではなく龍だよ、白き龍」
「グダグダと煩い奴だ」

柔らかく訂正する霧崎に対して冷めた口調で言うルシファー。
ベリアルはいつも通りヘラヘラしている。

「その龍は天候を操る能力があってね。この風景もその能力が生み出したものさ。元々この場所は今我々がいるここ以外に何もない空間なのだから」
『だとしても規模がおかしすぎる！俺の見立てではここから遥か彼方までこの雲海は続いているぞ!!』
「それはそうさ。そういう大きさなのだから」
「『は……？』」
「だからな白龍皇、そんだけデカいんだよ。サキさんの言ってる龍がな」
『な……!?そんなバカな話があるか!!』
「……いい加減耳障りになってきた。この白き龍とやら、白龍皇から

引きずり出して始末するか」
「『!!』」

尚も納得出来ないからか反論し続けていたアルビオンに対し、ルシファーから出たのは始末という言葉。
神器を無理矢理取り出せば宿主が死ぬ事ぐらい彼が知らないはずはないだろうが、全く気にも留めていない。

『おい!?もし神器の所有者から無理に神器を引き抜けば宿主……この場合ヴァーリが……』
「知った事か」
「『なっ……!?』」
「貴様がこの調子で事ある毎に喚き散らしていては精神的にも効率的にも悪影響しかない。それが無くなるのならば、その結果この白龍皇が朽ち果てる事になろうと俺には何の問題も無いからな」

冷たく言い放つルシファー。
眉一つ動かさず命を何とも思っていない発言をするルシファーに対していよいよヴァーリだけでなくアルビオンも恐怖し始めた。
だが、霧崎がそれを諌める。

「まあ落ち着いてくれ、盟友よ。現物を見せてやればいいだけの話じゃないか」
「白龍皇の方はともかく、白き龍とやらは発狂してさらに喧しくなるかもしれんがな」

ルシファーの言葉に苦笑しつつ、霧崎はその『龍』を呼び出す為に念動力を解放する。
すると雲海全体が激しく鳴動し、雲海の各所から『龍』の胴体とおぼしきものが見え出した。

『な……んだ……あれは……』
「とてつもなく巨大な……いや、それだけじゃない」

ヴァーリとアルビオンは少しずつ姿を現していく『龍』から発せられる絶対的な力をその身で感じながら、それから目を離せずにいる。
やがて『龍』はその巨大過ぎる頭部を露わにする。

「これが君が受け継ぐ強大な力――」

その全長は万里の長城に匹敵するおよそ８０００ｋｍとされ、天候を自在に操りその鱗一つ一つが意思を持った武器の如く動くという蒼き龍――

「『四霊』の超機人の一体『応龍皇』だ」

「応龍皇……!?」
『超機人!?あれが機械だと!?』

霧崎の言葉を聞いたヴァーリはそれが自身と同じく龍皇と呼ばれる事に、そしてアルビオンは機械だという事に驚愕する。
後者に関しては正確に言うと半生体機動兵器なのだが。

「白龍皇と応龍皇、ピッタリだろう？」

そういう霧崎にヴァーリは気になった事を聞く。

「ん？四霊……？」
「なあ白龍皇、お前さんの仲間だった奴に闘仙勝仏ってのがいただろ。そいつからなんか聞いてないか？」

「……そういえば、四神が二つどうとか言っていたが」
「なるほど。四神の超機人に関してのみ一切の情報が手に入らない理由が分かった。おそらく光神……それも最高位に座する者が関わっている。既に彼によって作られていたのだろう」

ヴァーリの言葉を聞いた霧崎は何かを察するが、ルシファーは然程気にしていない。

「そもそも四霊の超機人は一体で事足りる。四罪と四凶は何かと扱いが面倒だ。超機人と言えど最下位にある四神は相性の良い強念の操者が運良く見つかれば分からんが、それでも真価を発揮するにはその条件に当てはまった上で最低でも二体以上揃う必要がある。放っておいても問題ではない」
「ふむ、確かに。それに光神が関与しているにしても逆に四神以外の情報は面倒だったとはいえ普通に得られたのが気にかかる。こちらも推測だが光神ではなく四神自らが情報を秘匿した可能性が大きいが、ここで考えても仕方がない。この話はここまでだ」

半ば強引な終わらせ方だったが、ヴァーリとしては別の事が気になったのでそちらを聞く事にする。

「先程受け継ぐ、と言っていたが……」
「その答えは簡単さ。今の応龍皇の主は私だからだよ」
「!!」
「先の話を聞いていれば分かるだろう?応龍皇の主になるには極めて強力な念動力者でなければならない。そもそも念動力者でなければ代わりに魂力……分かりやすく言うと生命力を吸われてしまってどうしようもないのでね」
「念動力……」
「安心したまえ。もし君がこの応龍皇を従えるだけの念動力を有することが出来たならば、主の座は君に譲ろう。応龍皇自身ともそう話は

ついている」
『なっ……!?こいつには自我があるのか!?』
「その通り。超機人は自身の操者を自ら選ぶ。余程強力な力があれば強制的に従えるのも可能ではあるが、この応龍皇のような四霊クラスともなれば彼自身に認められた方が早い。ついでに色々省エネだ」
「イイねサキさん。最後のジョークもキレッキレだぜ」

ベリアルの軽口はスルーして、霧崎の言葉にヴァーリは目を見開いた。
目の前に存在する絶対的な力、それが自分のものになるのだ。
元々念動力とやらを会得する気はあったが、今の言葉で俄然やる気が出てきたらしい。
欲望に忠実なところはさすが半分とはいえ悪魔と言ったところか。

「今の言葉、嘘じゃないだろうな？」
「勿論だとも」
「ならすぐにでも始めたい。どうすればいい？」
「そう焦ってはいけない。君の決意は分かったが、まだ先日の負傷の治療を終えたばかりだ。今日のところはゆっくり休みたまえ。明日から正式に念動力の覚醒訓練に入るとしよう」
「……わかった」

少々納得がいかない感じのヴァーリではあったが、霧崎の言う事も正しいのでおとなしく引き下がる。

「私はまだルシファーに用事があるからね、部屋まで自力で戻れるかな？」
「どうしてもってんなら、俺が案内してやろうか？」
「必要ない。自分で戻れる」
「あらら、残念。ま、俺もしばらくお休みしますよっと」
「そうか。では二人とも、暫し良い夢を」

ヴァーリとベリアルを見送り、応龍皇もまた雲海へと姿を潜めていく。
双方の姿が見えなくなると霧崎はルシファーへと向き直る。
「さて、二人はお休みになるようだし……アレはどんな状況かな？」
「あのシステムは致命的な欠陥がある……が、終末を望む俺達からすれば気にするレベルでもない。終末の成就まで俺達が無事であれば問題はない」
ついて来い、とルシファーは短く言うとヴァーリらが向かった所とは別の方向へと歩き出す。
霧崎も彼を追い、そちらに向かって歩いて行く。

辿り着いた部屋の中から何やらガチャガチャと音が聞こえる。
「相変わらず騒々しい奴だ。ここに入れられてだいぶ経つがまるで落ち着く気配が無い」
「ふむ。生命力は強いようだが」
「両眼を潰されているというのにまるで相手が見えているかのように悪態をつく。奴自身の能力も人間にしては高いほうだろう。それに追放されたとはいえ元の所属は教会だ。他の素材を集める為の情報源として役に立つ」
そういうとルシファーは扉を開け、霧崎と共に中へ入る。
そこにいたのは――

「いい加減に俺を解放しろよオラァ！これでもエクソシストの端くれだぞ！本気になればテメーらみたいな奴は残さずブチ殺せんだぞコラァ!!」
「フン……そのザマでよくも吠える。無様に負けて放置されていたのをベリアルに拾われてきた負け犬の分際でそこまで虚勢が張れるとはな。自称『スペシャル』のフリード・セルゼン……だったか」
「自称じゃねーんだよスカシ野郎!!俺様は正真正銘のスペシャゴスゥッ!!グボェッ!?ゴボッ!!ゲボッ!!」

かのエクスカリバー事件で裕斗・ゼノヴィア・カナエ、そしてガイによって打倒されたフリード。
両手両足を鎖で縛られX字に張り付けにされているが以前と変わらぬような発言をしてはルシファーに腹を思い切り蹴られ床に派手に嘔吐する。

「確かに今の言い様は腹が立つが……痛めつけても大丈夫なのか？」
「必要なのは回路の役割を果たす脳髄だ。そこが無事であれば構わん。それにあのシステムはそもそも欠陥品、狂っていようが当人の自我や意識はシステムに呑まれて消え去り、文字通り『ヒトという名の部品(パーツ)』に過ぎなくなる」

ルシファーの言葉が聞こえたフリードはさすがに恐怖を覚えた。
先の四人と戦った時も怒りはあれど恐怖など微塵も感じなかったフリードですら目の前の存在にはそれを嫌というほど全身に感じ始める。

「お……おい、ちょっと待てよ。脳髄？部品（パーツ）？一体俺様ちゃんに何を……」
「では盟友、これは――」
「ああ。あれの製造プラントは既にあの世界の人間界、ラグランジュポイントに配置した。まずは最初の被験体としてフリード（これ）を――

バルトールに組み込む」

フリードは一瞬固まり、次の瞬間歯をガチガチ鳴らせてガタガタと震えだした。
組み込む――どういう意味か分からないが、フリードを『部品（パーツ）』と呼んでいた以上ロクな事ではない。
「ま……まさか……」
「心配せずとも死にはしない。生きているとも言えん状態にはなるがな」
そう言って口元に僅かな笑みを浮かべたルシファーは、目で見えずともフリードにとって今まで生きてきた中で最も恐怖を感じる存在だった。
「い……嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ!!やめろやめろヤメロヤメロ!!やめてくれやめてくださいいいい!!」

「先程までとは打って変わって態度が変わったが、どうしようか？盟友よ」
「いつまでもこうして喚かれたり騒がしくされては精神衛生上良くないのでな。早急に手筈を整え組み込む事にする。引き続き他の事は任せる」
「わかった。物のついでに四神の超機人についても調べておこう。そちらはおまけだがね」
「構わん。どのみちしばらくは戦力の拡充が優先だ」
「あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝ぁぁぁ!!!」

これから自身の身に起きる最悪な出来事を想像し、泣き喚きながらガチャガチャと拘束された両手両足を動かすフリードを尻目に、ルシファーと霧崎は打ち合わせを始める。

彼らもまた動き出した。
彼らの目的――『終末』と『混沌』のために。

〈第5章へ続く〉

逆襲決戦のゴーデス、この星の明日のために
迫るぜ！夏休み！

地獄でのタッグマッチから数日が経った。
あの後、就任パーティーと同時に責任者である悪魔将軍の計らいにより、リングが開放されパーティー中は自由に使用出来る事になり多くの者がレジェンドと悪魔将軍の闘いに続くべくリングに上がった。
その中で、キン肉マンソルジャーことキン肉アタルは悪魔将軍の予想外の計らいでリングが使えた為、予てより予定していたゼットへの指導を行った。
スパルタではあったが、苛酷な特訓はレジェンドからも受けていたので苦ではなく、何よりアドバイス一つで明らかに変わっていく自分が嬉しいのかゼットはアタルの言う事に反発せず素直に聞いてメキメキと実力を付けていく。
それに触発され、一誠とタイガはキン肉マンとテリーマンに、フーマはザ・ニンジャに、タイタスはバッファローマンに稽古をつけてもらい、そしてゼロことレイトは完璧超人始祖の一人であり悪魔将軍をも唸らせるジャスティスマンに、ジードことリクはアイドル超人の筆頭たるロビンマスクによる特訓を受けた。
いずれも新米超人からすれば天上の人物（しかもレイトの相手であるジャスティスマンは始祖のためガチ）である面々に稽古をつけてもらったという事で漏れなく全員が羨望の視線に晒される事に。
そしてパーティーの解散時に別れを惜しみながら元の世界に帰る超人らにレジェンドは、しばらく後になるものの惑星レジェンドにおいて開催される『光神感謝祭』において、催し物の一つに『超次元超人チームトーナメント』があることを伝え、同時に招待状も渡す。
そこでの再会を願いつつ、ある者はレジェンドや悪魔将軍、果ては芥子へと挑戦へ闘志を燃やし、ある者は修行をつけた者を当日チームに迎えようと考えたりと様々な思惑を胸に抱き、元の世界へと帰還していった。

勿論、レジェンドと悪魔将軍を中心に集合記念写真を撮るのは忘れずに。

☆

そして今日、駒王学園ではちょうど期末テストの結果発表。
ある者は追試に怯え、ある者は結果に安堵する。
中には既に諦め、夏休み中補習地獄を覚悟した者さえいた。

「アーシア！結果どうだった？」
「はい！ちょっとミスはありましたけど、ほぼ全科目満点です！」
「「マジでッ!?」」

一誠、タイガ、フーマがハモる。
一応タイガも訓練校では成績優秀だったのだが……フーマはまあ事情が事情だけに仕方がない。

「イッセーさんはどうでした？」
「さすがにアーシアとは比べ物にならないけどさ、難なく突破！これで心置きなく夏休みは修行合宿に行けるぜ！」
「まさかレオがあれだけ勉強が出来たとは……」
『タイタス、何気にレオをディスるな』
「あ、そういえばイッセーさんにはゲンさんが教えて下さったんですよね」
「防衛チームに属してる時に、先輩の親父さんから徹底的に叩き込まれたらしいぜ。元恒点観測員……だっけ？そういう職業についてたからやっぱ頭良かったんだって」
「はわ～……」

二人で話し込んでしまったが、ふとゼノヴィアはどうだったのだろうと思って彼女の方を向くと、思いっきり気落ちしているゼノヴィア

の姿があった。

「……はぁぁぁ……」
「お……おいどうしたんだゼノヴィア？」
「ま……まさか、点数悪かったんですか!?」

アーシアがあたふたしながらゼノヴィアに聞くと、結果を見せてくるが……

「「「……へ？」」」
「あれ？」
「ふむ」
『……思ったより悪くないな。というか相棒より上のもあるぞ』
「ドライグ、一言余計だっての」

別段悪くないし、何故溜息吐いているのかと気になった一誠やトライスクワッドにドライグ、アーシアだったが理由はあっさり判明した。

「師範から、最低でも全科目8割以上の点は取ってこいと……取れなければ修行量3倍増し……!!」
「「「『うっわぁ……ご愁傷様』」」」

ただでさえハードな巌勝の修行が3倍増し。
軽く死ねる量である。
だが、彼らは知らない。
巌勝のパイロットとしての師であるアムロの特訓は肉体より精神をブッ壊すレベルでキツかったという事を。
ゼロがレジェンドから科せられた修行はガチで死が目の前にあったようなレベルでヤバかったという事を。
ついでに、異世界で修行する際、漏れなくオカ研メンバーはそれを

受けるハメになるという事を彼らはまだ知る由もない。

☆

――レジェンド一家仮住居前――

三人の乙女が大きな荷物を持って深呼吸している。

「すー……はー……よし、大丈夫大丈夫。ちゃんとお仕事に必要な物も持ってきたし、勝負下着も準備万端。ソーナちゃんには連絡済み！ガブちゃん、そっちは？」

「私も大丈夫ですよセラさん！イリナさん、貴女も準備出来てますか？」

「は……はいっ！」

セラフォルー、ガブリエル、そして紫藤イリナ。

彼女らは本日から光神陣営――正しくはダイブハンガーへと出向し、住み込みで働くことになっていた。

イリナに至っては夏休み明けから駒王学園への編入もあるし、想い人と一つ屋根の下で暮らすとなれば緊張だってするだろう。

仮住居にて合流してからダイブハンガーへ向かう手筈になっており、三人は頷きあって決意と共に仮住居のインターホンを鳴らす。

……しかし、三人が耳をすませていると中から聞こえたのはパタパタという音でもなければドタバタと荒い音でもない。

ガシャンガシャンという金属音っぽい音である。

「な……何かおかしくないかな？」

「まさか……禍の団の魔の手が既に……!?」

「お二人とも、ドアが開きますよ！」

ギィィィ……と音を立てて開いたドアの向こう側にいたのは……

「「「……え？」」」

「……」

「「「……ええ？」」」

「……」

何か二等身ぐらいのあちこち尖った人物（？）が出てきた。

「「「……」」」

双方暫し沈黙の後……

バタン。

相手がドアを閉めた。

「「「ちょ、ちょっと待って（下さい）!?」」」

キィィィ……

「何だ」

「いやまず君が何!?」

「人間でも天使でも悪魔でも堕天使でも亜人でもないですよね!?」

「ていうか異常に小さくない!?」

「ユニオン族だ。正確にはガンダム族だが種族的に希少だからユニオン族に分類されている。それからそこの娘、俺達はこの大きさが普通だ。小さくなどない。そもそも初対面の相手に異常に小さいなどと

は余程叩きのめされたいようだな……!!」
「えええええ!?よ、よく分かんないけどゴメンナサイいいい!!」

額に青筋を浮かべながら全てが青く輝く水晶状の剣を取り出してイリナを睨むトゲトゲ生命体（仮）。
いきなりの展開に訳もわからず謝るイリナと、さすがに止めなければとセラフォルーとガブリエルが焦り始めた時、奥から再びガシャンガシャンという音が聞こえてくる。
しかも今度は少し走っている感じで。

「ああーっ!?やっぱりこうなった！落ち着けゼロ！その真雷龍剣（ネオサンダーソード）をしまえ！」
「止めるなゼフィランサス！あの娘は俺の事を小さいと言ったんだぞ！俺が小さいイコールお前達やスペリオルドラゴンさえ小さいと言ったのと同義！しかも俺の雷龍感（サンダーセンス）が奴は剣士だと言っている！同じ剣士として相手を外見で判断する奴をそのままにしておけるか！俺は小さくなどないッ!!」
「いや結局小さいと言われたからに帰結してるだろ!!っていうか何だ雷龍感（サンダーセンス）って初めて聞いたぞ!?ともかく剣を収めろ！」

新しく奥から出てきた、これまた外見は違えど似たような体型の騎士っぽい生命体・ゼフィランサスが暴れるトゲトゲ生命体・ゼロを羽交い締めにして必死に止めている。
……ついでに、どことなくライザーやシックルに声が似ている。

「ハッ!?」
「お、漸く暴れるのをやめ……」
「……別に動けずともプラズマドラグーンがあったんだった」
「おいバカやめろ！本気でスペリオルドラゴンやレジェンド様にも迷

惑がかかるだろうが!!」

とりあえずヤバそうなのでセラフォルーとガブリエルが「やっぱり自分達も参戦しよう」と考えた瞬間、救いの手が差し伸べられた。

「揃いも揃って何の騒ぎだ？」
「あ、ゼロとゼフィランサス」
「え!?何!?ゼロ師匠と同じ名前でございますか!?」

いつものレジェンド、オーフィス、ゼットがトリオでセラフォルーらの後ろから現れた。

その手荷物から、どうやら各種買い出し（主に個人的なもの）の帰りらしい。

「む」
「おおっ！レジェンド様にオーフィス……と新入りか？ともかく助かった！ゼロを……」
「レジェンド様から肉まんの匂いがするぞ」
「食うか？」
「ありがたく頂戴させていただく」
「おいコラ私の労力返せこの野郎」

羽交い締めしたりして本気で止めに入ったのに、肉まん一つであっさり落ち着くゼロに青筋浮かべて文句を言うゼフィランサス。

まあ、仕方ない。

「「レジェンド様っ!!」」

パァァと笑顔になるセラフォルーとガブリエルに対し、助かったと安堵するイリナ。

「まあ、ここでは何だし……とりあえず全員ダイブハンガーへ向かうぞ。仮住居の戸締まりや家電の電源の確認してからな」

とはいうが、そちらはゼフィランサスがしっかりしていた。

王国出身の騎士はマメなのである。

「焦って出てくるから心配したぞ」

「その原因はお前が暴れる寸前だったからだ！」

……なんとなくゼフィランサスとゼロに、自分とノアを重ねてゼフィランサスの肩を叩くレジェンド。

「今度、休暇を入れてくれるよう俺の方で頼むから」

「是非お願いします……」

苦労人の絆は、種族と次元を超える。

☆

ダイブハンガー・作戦指令室。

現在そこにいるのはサーガとミカエル、そして仮住居にいたゼフィランサスとゼロに似た体型の三名。

一人は豪華な装飾が付いた鎧を纏い、一人は神秘的な鎧を纏っている。

そして最後の一人は全身がほぼ黄金の超ド派手な人物。

彼らは『システム』も含めてこの世界の天界を統べる神とその護衛として就任すべく訪れた者達である。

「サーガ、父上は何か緊急の用事が出来たのか？そうならばとりあえず詳細に関しての報告や打ち合わせは後日改めて行おうと思うのだが」

「いや、お前達が来るちょっと前に茶菓子や飲み物の追加を買いに行っただけだ。もうじき帰るとは思うが……オーフィスがいるから何かと強請られてる可能性もある」
「「ああー……」」

黄金の人物から話しかけられたサーガが答えた内容の最後に、残る二人も納得する。
和気藹々、とまではいかなくともフレンドリーに話す彼らに対し、ミカエルは若干肩身が狭い。
言うまでもなく会談の日の発言が原因だ。
と、そこへレジェンドらが漸く帰還した。
当のレジェンドは両腕にそれぞれセラフォルーとガブリエルに抱えられ、不機嫌なオーフィスが背中側から首にぶら下がる形で引っつかせて。

「ぷんすこー」
「いつも一緒に寝てるんだから怒るなよ」
「でも、会談の日までは夜いなかった。アーシアも」
「ウルトラすいません」
「あー……それはすまん」

微笑ましい光景ではあるが、サーガとミカエル以外の既に合流していた三名はゼフィランサスとゼロを見る。
ゼフィランサスはまだいい。
どこかリラックスしたような表情で、よく見ると兜の下に冷えピタが見えた。
気苦労の絶えない彼なのだから逆にそれぐらいはした方がいいだろう。
ゼロに関しては肉まんに続きコーラまで飲んでいた。
氷のたっぷり入ったプラスチック容器で。

「ああー!!」
「ん？」
「おいゼロ！そういうものは全員が揃ってから飲むものだろう!?」
「レジェンド様がいいって許可をくれたぞ」
「月にはそういう飲み物無かったんだからな!?独り占めはしてないだろうな!?」
「心配しなくても一人で他人のまで飲んだりはしない。無くなったらまた買いに行く」
「まだ飲む気か!?」

仮住居でのやりとりに続いてまた騒ぎ出す小さな騎士らしき人物達。
ちなみに黄金の人物も騒いではいないがチラチラとゼロのコーラを見ている。
やはり飲みたいらしい。

「ほらー、お前ら騒がずともちゃんとたんまり買ってきたから落ち着け。はい着席着席」

レジェンドの鶴の一声でピタリと静かになり席に着いていく小さな騎士達。
セラフォルーやガブリエルは「可愛い」と思っていたが、ミカエルを見てみると汗が滝のように流れている。
彼らについて聞かされていたのはミカエルだけなのでしょうがない。

「では、今回に関する主要人物が揃ったところで自己紹介させて頂こ

う。私は光神の一人、Ｕ（ウルティメイト）スペリオルドラゴン。もう一つの姿にＵスペリオルカイザーがあるが、とりあえずスペリオルドラゴンで覚えてくれれば結構だ。新しく天界にて、神として就任する事になった。宜しく頼む」
「その護衛を務める初代シャッフル騎士団のキングガンダムⅡ世だ。今は後継者に国を任せているが、ブリティス王国の元国王を務めた。此度は私の代の円卓の騎士らと共に護衛につく事になる。迷惑をかけると思うが、これから宜しくお願いする」
「同じくダバード王国出身のバーサル騎士（ナイト）ゼフィランサスだ。運命の三騎士と呼ばれている。他の二人も来ているがこの場にはとりあえず私だけだ。以後、宜しく」
「同じく月の王国出身の月光騎士（セレネスナイト）ネオガンダム。『月』絡みで神衛隊の厳勝殿とは個人的な親交がある。宜しくな」
「同じく雷龍体系（サンダーシステム）と聖龍大系（ゼロシステム）の伝承者、聖竜騎士ゼロガンダム。自慢ではないがこのメンバーの中では若い方だ」
「「せめてメンバー歴が短いと言え!!」」

スペリオルドラゴンは勿論、礼儀正しいキングⅡ世、控えめだがしっかりしているゼフィランサス、月の王国出身というぶっ飛びポジのネオに、さり気なく主以外では一番チートなゼロ。
最後のゼロの自己紹介を聞いたイリナが真っ青になって土下座した。
「あああああ!?ごめんなさい申し訳ありません!!かの光神様の眷属の一人たる御方とは露知らずあんな無礼な発言を!!」
「これに懲りたら相手を外見で判断するな」
「そういうお前は小さいと言われただけで剣を取り出すのをやめろよ……」

イリナに対して言い放つゼロに対して疲れた表情のゼフィランサスが注意するが、当のゼロはどこ吹く風でコーラを啜っている。

その後、彼らの経歴を聞いた。
例の如くミカエルどころかガブリエルやセラフォルーも驚きイリナに至ってはすっ転んで頭を強打し悶える程に。
そりゃあ、一騎当千の円卓の騎士を束ね滅ぼされた王国を復興し隆盛へと導き、神々の代理戦争みたいなものを制し、世界どころか月まで巻き込んだ因縁に終止符を打ち、トドメに自身以外のユニオン族が消滅した世界で仲間達とスペリオルドラゴンの力を借りて幻魔皇帝を倒したとか、どれもこれも伝説の英雄レベルの活躍である。

「す……スケールが違いすぎる……私が関わったエクスカリバー事件なんて井の中の蛙ですらなかった……！」
「天使といえば、スペリオルドラゴンが生み出した天使は鎧闘神とかいう神の最終兵器レベルになって、今はスペリオルドラゴンの後任だったな」
「か……神の最終兵器……」

同じ天使なのにこの扱い。
何を隠そう、あっちの天使は古代神相手に激闘を繰り広げた程なのだから仕方がない。
その世界において「え、誰？」「あー……何か聞いたことがあるような……」な名前が多いスダ・ドアカ十二柱神の中で、名前を言われただけで誰もが分かると言っていい程に信仰されていたのがスペリオルドラゴンだ。
『聖書の神』ぐらいにしか覚えられてない（しかも教会の連中とか限定）こっちのゲス神とは格が違う。

「にしても……」
「む？」

セラフォルーがスペリオルドラゴンを見ると、目をパチパチさせながら両手でコーラを飲みつつ首を傾げて見返してきた。

（（失礼だとは思うけど普通に可愛い！））

カッコカワイイのが彼らである。
この場にカナエや蜜璃がいたらもみくちゃにされていただろう。
光神とその護衛なのに。
そのスペリオルドラゴンだが、コーラを飲みながらもミカエルに話しかけた。

「ミカエル、だったな」
「は……はい」
「正直なところ、私達は父上と違い天界どころかこの世界については分からない事だらけで、ここでは半人前と言っても過言ではない。故に慣れるまで迷惑ばかりかけるだろうが、どうか今まで培ったもので力を貸してくれ」

ペコリと頭を下げるスペリオルドラゴンにミカエルは慌てふためく。

「な!?顔をお上げ下さい！貴方は私達の新たな主になられる方です！ましてや光神であるというのに私達などへ頭を下げるなど……」
「光神だからこそ、主だからこそ、下の者から信を得られる者でいなければならない。私は父上の背中からそれを学んだ。部下を持つのは一人でやれる事に限界があるからであり、その部下を蔑ろにして何が主か。ここにいるシャッフル騎士団も、私の手が回らぬスダ・ドアカの危機に命をかけて挑んでくれたりしたのだ。私は君達この世界の天使が、彼らと肩を並べるに値する存在だと信じている。……前任の神は論外だがな」

ミカエルは、まだ会って大した時間も過ごしていないのに信頼を寄せてくれているスペリオルドラゴンの言葉に感激した。

それはその場にいたガブリエルやイリナも同様。
かつての主は指示だけ出してすぐに引っ込んだり、かと思えば会談の日に聞かされた鬼畜の所業をやらかしたり……。
それに対してスペリオルドラゴンは護衛である初代シャッフル騎士団の手助けをしたり、スダ・ドアカに起きた『コロナ・ノバ』という現象を命を賭して解決したりと非常にその世界の人々と寄り添い、関わりを重視していた。
そんな彼だからこそ、自らが新たな神として就任する以上、天使を始めとする天界勢と寄り添っていこうと考えたのである。

（ああ、そうだ。この方ならきっと大丈夫だ。我々をより良い道へと導いてくれる。なんとなく、ではあるが）

ミカエルは周りを見てみると、シャッフル騎士団が既にガブリエルやイリナだけでなく、セラフォルーともちゃんと交流しようと積極的に話しかけている。
同じく王の立場にあるキングⅡ世はセラフォルーに鎧をコスプレの参考にしたいと全身観察され困惑しているし、イリナは運命の３騎士と称されるゼフィランサスを尊敬の眼差しで見つつ、彼の出世も絡んだエピソードに夢中。
ガブリエルはネオから聞く月での生活に興味津々で、ちょっと気難しいゼロはなんとオーフィスとゼットから「聖龍機ロードドラグーン」に興味を持たれた事で得意気に話している。

「皆さん、あまり壁を作らない方々なのですね」
「そういうわけではないだろうが、相手によるのかもしれないな」

この時、ミカエルは気付いていなかったがサーガが彼を見る目が漸く穏やかになっていた。
早速スペリオルドラゴンの影響が良い方に出てきたし、この調子であれば今までの行いを振り返って反省する事もしていくだろうと。

☆

後日、正式にスペリオルドラゴンが天界にて神として就任し、その護衛を務める初代シャッフル騎士団の経歴を映像記録で流したところ、満場一致で文句無しに認められた。

力自慢のウリエルが勝負を仕掛けたがシャッフル騎士団の四人中最もチートなゼロの雷鳴剣（サンダーバリアント）一発でK．O．。

この事もスペリオルドラゴンらを評価する一因となった。

こうして天界を皮切りに、会談の日から三大勢力も少しずつ変わり始めた。

レジェンドらはリアス達が夏休みに入ってから空の世界を始めとする異世界での修行のために、良い意味で大忙し。

だが、良い事ばかりではない。

長き潜伏の時を終え――

「……ゴーデス様の御心のままに……」

遂に『邪悪』が動き出した。

〈続く〉

狂気の傀儡

ある日のダイブハンガーの作戦指令室。
かつてレジェンドがチームＧＵＴＳのメンバーと共に幾度となく作戦会議やコミュニケーションを行ったそこは、現在レジェンドやサーガの光神としての仕事場や謁見の場として機能している。
先日のスペリオルドラゴンと初代シャッフル騎士団の来訪の際に集合場所として使われたのもそのためだ。
そんな作戦指令室に、現在レジェンド以外にスペリオルドラゴン、セラフォルー、そして何故かサーゼクスがおり、レジェンドはある報告書と嘆願書に目を通していた。

「ふむ……なるほどな。まずスペリオルドラゴン」
「はい、父上」

レジェンドを父上呼びするスペリオルドラゴンに当初は皆驚いたが、所謂ウルトラの父と同じ感じだと説明したら至極納得した。
だって下手すりゃお母さん扱いされかねないし。

「相変わらずサーガと並んで文句無しの仕事っぷりだ。今回の事に関して理由もしっかりしているし問題なく承認出来る」
「ありがとうございます」
「一つだけ気になった部分があってな。何故お前の護衛であるシャッフル騎士団の一人、という点だ。正直円卓の騎士から二、三人見繕う方がいいと思うが」
「その点に置きましては、キングⅡ世率いる円卓の騎士もまた天界の連絡網円滑化に協力して貰っているためです。彼らは元の立場故に迅速な報連相は必要不可欠であり、その経験を活かした新たな天界の連絡網を構築してもらっている最中なのです。今までは何かあればミカエルらセラフへと集中してしまい、その事でてんやわんやになって何かがおざなりになり、その結果別のところでも問題が、という事

になっていたのでその問題を解消するための政策として取り組み始めました」
「ふむふむ」
「現在はセラフ以下天使達の質も少しずつ上がってきており円卓の騎士達でも十分にフォロー出来るようになり、シャッフル騎士団の面々の手が空きつつあります。無論彼らの手を借りねばならぬ部分も今後は出てくるでしょうが、私に可能な限り近く、同時に父上達とも問題なく接する事が出来て実力がある、となると彼らをおいて他にはおりません。ガブリエルと共に天界との連絡役（パイプ）を父上達が異世界へ渡る前に最低あと1名はシャッフル騎士団から同行させたいのです」
「確かにな。既にセラフの一人であるガブリエルがこちらにいる以上、セラフをこっちに送るのはマズいし……そういう状況なら円卓の騎士を一人引き抜いて同行も無理か。今変に穴があくとそこから無用なトラブルが出来る可能性があるからな。わかった、同行するメンバーについてはこれから詰めていくことにしよう。あいつらの夏休みまでまだ少し時間がある。各種進行状況を考えつつ選定しよう」
「わかりました。こちらの我儘への配慮、重ね重ね御礼申し上げます」

ペコリと頭を下げるスペリオルドラゴンはやはり優秀だ。
ちなみにコレはガブリエルを含めミカエルやシャッフル騎士団の面々、円卓の騎士らとは既に話がついている。
スペリオルドラゴン自身が書類整理を始めとする仕事をミカエルと共にやり始めてから、前任の聖書の神がどんだけポンコツワンマン野郎か次々と発覚していったようだ。
これをミカエルや部下の天使達の愚痴も含めレジェンド経由で鬼灯へと伝えたところ、聖書の神の刑期がまた伸びた挙げ句、僅かな期間で地獄ＴＶの看板番組の一つ『魔闘地獄の呵責レスリング』を擁するまでになった魔闘地獄に正式にサンドバッグとして送られたらしく、悪魔将軍を筆頭に芥子や新しく入所した新人獄卒のサイラオーグ・バアルとその眷属などの技の実験台にされているとのこと。
そう、今回の三人はレジェンドらの異世界修行へ、各々の推すメン

バーの同行を願い出るためにこの場に来ていたのだ。
セラフォルーは一緒に暮らしてるけれども。
「続いてセラフォルー、こっちも構わん。とはいえ彼女らも生徒会という身分である以上、そちらの仕事との兼ね合いも考える必要があるが」
「ホント!?あ……本当ですか?」
「ああ、そこら辺はちゃんとしっかりしておけ。ついでにそんな畏まる必要ないぞ。公の場だけで構わん」
「はーい!えへへ……」

セラフォルーはソーナ達生徒会のメンバーを一緒に連れて行ってほしかったらしい、予想通りだが。
レジェンドとしても、真面目に困難な自身の目標の為に努力する彼女やそれを支える者達の経験になればと思っていたため即座に了承。
それを受けるかどうかはソーナ達次第ではあるが。

「……で、だ……」

レジェンドが溜息ついたのはサーゼクスの持ってきた嘆願書。
そこに書かれていたのは『ライザー・フェニックス及びその眷属の同行願い』。

「お前バカかバカだろバカでしかないな」
「三段バカ!?」
「なるほど……迫撃トリプルバカか」
「スペドラさん、それサーゼクスちゃんに大ダメージだよっ☆」

先代のアホの所為で若干ストレスが溜まっていたスペリオルドラゴンの容赦ない一撃と、それに同調したセラフォルーに手痛い一撃をブチ込まれサーゼクス・ルシファーは轟沈した。

「そ……そこまで言わなくても……」
「大体何で俺らがあの問題児とその眷属を連れて行かにゃならんのだ。あとこれ」

レジェンドが追加で見せた用紙には……
『サーゼクス・ルシファー及びその妻子同行願い』
まで書かれている。

「アホかお前」

レジェンドのシンプルかつ凄まじい威力の一言でサーゼクスは再起不能と化した。
頃合いを見計らってルミナシアが入室してくる。

「レジェンド様、この度は申し訳ありません。フェニックス家に関しては私の方から伝えておきますので」
「何というか……お前さんも大変だな」
「いざという時はまともなんですが普段はこんな感じで……何度ぶん殴ったりぶっ飛ばしたりしても一向に良くなりません」

もうこの夫婦に関しては王と女王の立場を交換した方がいいんじゃないかなと思いつつ、レジェンドは疑問に思った事を改めて聞いてみた。

「しかし本当に気になるんだが……自分達の同行願いは単なる興味本位から成るものだろうから別にどうでも良いとしてだ。何故レーティングゲームで自身らを叩きのめしたリアス達を擁する俺らにフェニックス家が同行したがる?うちの面々に不意討ち奇襲を狙ったところで逆に消し飛ばされるのがオチだと分かりそうなもんだが」
「どうやら先方としてもライザー様の敗北には思う事があったよう

で、逆に感謝されたのです。それに加え、お嬢様達を指導したのがレジェンド様を家長とする光神陣営の方々であると聞き、様々な面で鍛えて頂きたいと申されました」
「というか殆どの連中がトラウマ植え付けられてんじゃないのか？あのレーティングゲームで」
「はい。特にライザー様は女剣士、というだけで酷く怯えてしまう引き篭もりと化しています。おかげで彼が眷属にした『騎士』二人さえ拒絶しているようで……」
「今まで能力の万能性に胡座をかいて調子に乗ってたツケがまとめて降りかかってきたようなもんだな。お前さんが気に病む事はないぞ。連中に伝えてくれ、『貴様らが育てたバカ息子の尻拭いを他人にやらせるな』とな」
『騎士』二人には同情するが、と付け足してレジェンドは話を打ち切る。
ルミナシアとしても納得の答えだったのか、かしこまりましたと返事をしつつ頭を下げ、未だ意識沈没中のサーゼクスを引き摺りながら冥界へ帰っていった。
同じくスペリオルドラゴンも天界へと戻り、セラフォルーはソーナら生徒会へのプレゼン用の資料を作るべく自室へ。

一人になったレジェンドは本日分の仕事も終わらせてあるしどうするか、と頭の後ろで手を組んで目を閉じながら悩んでいると自動扉が開く。
……が、誰もいない。
故障かと思い少し扉に近づくと銀色のアホ毛が見えた。
「……何やってるんだ？ロスヴァイセ」
「ひうっ!?」

普通に声をかけたレジェンドだったが、ほんの少しだけアホ毛を掴んでみようかなと思ってたりもする。
さすがに可哀想なのでやらないが。

「あ、あのあのあの！実はその……」
「一旦落ち着け。深呼吸深呼吸」
「すー……はー……ふぅ」

ロスヴァイセは少し落ち着きそのまま踵を返し――

「いや本当に何しに来たんだお前は」
「ひゃあっ!?そ、そうでした！」

自室に戻ろうとして再びレジェンドに尋ねられて思い出した。

「じ……実はその、シミュレーターでの訓練にお付き合い頂きたいと思って……」
「何だそんな事か。構わんぞ、暇になって何するか悩んでたところだしな」
「ほっ……本当ですか!?実は束博士に言われて、同時運用を前提にした機体を私に任せるから、その前身となる機体で訓練しておくように言われたんです。それで、その機体の相方になる機体のパイロット役を探してて」
「オーケー理解した。ついでに聞いておくが他の人物では駄目なのか？」
「ええ、実はその相方というのが今度レジェンド様用に束博士が開発した機体で、そちらとのコンビネーションによって真価を発揮する機体らしいんです。もちろん単体でも相当高性能なんですけど」
「まあ、開発者が束だしな」

ネオ・グランゾンを苦もなく作り上げるお前は何なんだとツッコみたい。
ロスヴァイセは「ここで少しはアプローチしないと」とシミュレータールームに向かう間、レジェンドの腕に自身の腕を絡ませた。
やはりというか、先日セラフォルーとガブリエルに挟まれたサンドイッチ状態であろうと平然としてた彼には大して効果がなく、少々不満である。

「そういえば俺用の機体はともかくだ、ロスヴァイセの機体はどんなやつにしたんだ？」
「私はその……修理費用がかかるのが嫌なので高機動型のをお願いしました」

やはりここでも貧乏性というか、どんだけ低い賃金で重労働させられてたのかと不憫に思う。
別にレジェンド一家は被弾したから給料から差し引くような事はしないのに。
まあ、それで本人が何かしらやる気出すならいいかと黙っておいた。

「シミュレーターで使う方の名前は？ついでに俺の機体のも教えてくれると助かる」
「あ、はい。私のがヴァイスリッターで、レジェンド様のがアルトアイゼンです」

☆

「う～ん……」
「イッセー先輩どうしたんですかぁ？」
「ああ……部長には、先に帰って少しでも英気を養って今から異世界修行に備えるように言われたけどさ。やっぱり俺だけでも部長の傍

にいることにするよ。学園の部室まで戻るわ」
「つぅかよ、イッセーが戻ると必然的に俺らも引っ張られて戻る事になるからな」

まだやる事がある、というリアスを除いて全員で帰路についていたオカルト研究部員達。
その中で一誠はリアスの身を案じて一度通ってきた道を引き返した。
フーマの言葉に「そうだった」と小さく笑い、再び校舎へ向かう一誠とそれを見送る他の部員。

「あらあら、リアスったら想われてますわね」
「そうね～……ってリアスの今までの行動を分析してみたら結構大胆なのよね。ハッ!!もしやレジェンド様もその方向で攻めれば……!?」
「……!名案ですわカナエ!早速レジェンド様が一人でお風呂に入る時間帯を調査して突入を……」
「それやると好感度下がると思いますけど……」

何やらレジェンドの身に良からぬ事を考え出した二人を諌める小猫だったが、まさかの裕斗が爆弾を落としてしまう。

「誰だっけ……確かレジェンド様と一緒にお風呂に入った事のある女の人がいたって……あ」

ここまで口にして裕斗は気付いた。
とんでもない事を口走ってしまったと。
その証拠にレジェンドラバーズの面々がモロに視線を向けている。
目が笑ってない。

「裕斗君?ちょ～っと詳しく聞かせてくれる?」
「ええっと……」

「どなたと一緒に御入浴されたと仰ってました？」
「その……」
「か、隠さずに教えて下さいっ！」
「あ！僕今日父さん達と外食の予定あったので！お先に失礼します！」
「「あ！待ちなさい!!」」

乱菊直伝の瞬歩で即座にその場を離れる裕斗と、それを追う朱乃とカナエ。
アーシアも二人からだいぶ遅れながら追いかけて行き、その場には小猫とギャスパー、そしてゼノヴィアが残された。

「裕斗先輩の言ってた女の人って誰だろう……？」
「大方オーフィスあたりじゃないだろうか。まだ出会ったばかりの頃とか」
「ありえますね」

正解である。
最初はシャンプーハットが必要だったり、湯船の中でバタ足したり、石鹸ですっ転んだりと忙しなかったのだ。
ちなみに今はティアマットがそうなっており、彼女に対してオーフィスはドヤ顔状態。
オーフィスがやらかしてた時はスカーサハがドヤっていた。
賑やかで穏やかな時を過ごす彼女らだったが、この時まだ気付いていなかった。
邪悪の尖兵とかしたあの人物が一人の少女に迫っていた事に。

☆

「ふう……もうこんな時間。悪魔としてはもう少ししてからが活動本番なんだけど、世間じゃ夕食の席に着いている頃よね」

オカルト研究部の部室でトントンと書類を纏めたリアスが時計を見て呟く。
ここ最近の活動報告や夏休み中の活動予定を生徒会へ提出するために纏めていた彼女は、現時刻に漸くそれを終えた。
提出に関しては終業式前までに出せばいいのだが、一誠にも言った通り今から異世界修行に備えるため早め早めに用事を済ませているのである。

「さてと、早く帰らないとイッセーが心配しちゃうわね。ハリベル姉様やマリーダ姉様に教わった新作スイーツの味見をしてもらわないと」

部室を出て、足早に校門へと向かうリアス。

「御機嫌よう、リアス・グレモリー」

「……え？」
「愛する者に尽くす。それはとても素晴らしい事ね」

聞き覚えのある声。
もう聞く事はないはずの声がその姿と共にリアスの眼前にあった。

「な……んで……」
「ならば私も敬愛するあの方の為に――」
「何で、貴女が……」
「自らの役目を果たすとしましょうか」
「何で貴女が生きているのよ……

カテレア・レヴィアタンッ!!」

卯ノ花によって完膚無きまでに叩きのめされて絶命したはずのカテレア・レヴィアタン、五体満足無傷でリアスの前に存在していた。
彼女の死は自分だけでなくあの場にいた殆どの者が目にしていた筈だ。
死に様を見ていないならともかく絶命の瞬間を見ていた以上、見間違えるなどあり得ない。

「ねえ、リアス・グレモリー……」
「ッ……!」

「貴女も、ゴーデス様のモノになりましょう?」
そう言って彼女の笑顔は、かつてとは比べ物にならない狂気に染まっていた。

〈続く〉

悪夢からの使い

一誠は学園へと急いでいた。
よく分からないが悪い予感がして胸の奥がザワつく感覚に襲われる。

「急にどうしたんだ？イッセー」
「俺にも分かんねえけど……嫌な予感がするんだ」
「ふむ、悪魔とはいえ彼女もうら若き乙女だ。暗い夜道となるとよからぬ事を考える輩もいるかもしれないからな」
『今のリアス・グレモリーならば相手の心配をしてやった方がいいと思うぞ。当然の如く返り討ちにするだろうし』
「さすがにそりゃあんまりだろ」

タイタスやフーマ、ドライグはいつもの調子だが、一誠と感性が近いタイガはそうではなかった。
その証拠に、誰よりも先にある事に気付く。

「……！イッセー！」
「っ!?どうしたんだタイガ！」
「おかしい。まだ深夜どころか車だってまだ結構走ってても問題ないはずの時間なのに人はおろか、動物や虫の気配もない……！」
『……人払いの術式が辺り一面、広範囲に張り巡らされているな。逆にそれ以外は何もない』

タイガに続き、ドライグもまた異変に気付いた。
ここまでになるとさすがにタイタスとフーマも気付かぬはずがない。

「なんだってまたこんな広々と結界みたいなの張ってんだ？さっきから神経研ぎ澄ませてるけど、イマイチ強い気配とか感じねえんだよ」

「誰も近付かせないためか、あるいは何者かを閉じ込めるためか……その両方か。いずれにせよ、リアスのところへ急いだ方がよさそうだぞ、イッセー」
「ああ！」

タイタスの言葉に一誠は再び駆け出していく。
リアスの身に何も起こっていない事を願いながら。

☆

リアスは誰もいない夜の校舎の中を走っていた。

「ハァ……ハァ……！」

転移魔法の気配は感じず、急ぎ周りを見渡して身を隠し一息つこうと考える。
しかし……

「あら？もうおしまい？」
「ッ!?」

誰もいなかったはずのリアスの背後にカテレアが現れ、ニタァと笑う。

（転移魔法どころか魔法を使った形跡すらない……！一体何なの!?）
「そもそもどうして逃げるのかしら？私はただゴーデス様の素晴らしさを知ってほしいだけよ」
「ふざけないで……！そのゴーデスの細胞に散々な目に合わされてる私達にそんなものが理解出来るわけないでしょ！」

リアスは滅びの魔力を放ち、カテレアの眼前で爆発させ目くらまし

にして再度逃走する。
その最中、各種通信による救援を試そうとするも……
「駄目っ……スマホはともかくブレスレットの方も通じないなんて……！」

明らかにおかしい。
この時間帯ならソーナ達生徒会のメンバーが一人くらい残っているはずだが、気配さえ感じない。

（間違いない……カテレアの狙いは私！）
「ご名答」
「あぐっ!?」

またも突如として現れたカテレアに思考を読まれた上、リアスは首を掴まれ持ち上げられてしまう。

「あ……かはっ……！」
「と、言いたいところですが……それでは半分正解、もう半分が足りません」

力を強めはしないが弱めもしないカテレア。
ギリギリ息が出来るレベルで首を絞められ、リアスは苦悶の表情を浮かべる。

「本来の目的は別の者……貴女はもしもの時の為の保険です」
「ほ……けん……!?」
「そう、それは――」

何かを言おうとした瞬間、凄まじい一撃がカテレアの背中に直撃した。

「がはっ!?」

倒れ込む際にカテレアの手がリアスの首から離れ、リアスも軽く吹っ飛んでゴロゴロと転がる。

「いっ……たぁ……」
「部長！大丈夫ですか!?」
「あとリアス、手荒な真似して悪い！」
「イッセー、タイガ……！」

まさかの想い人と弟のように可愛がっているウルトラマンの救援に驚くリアス。

先程カテレアが受けた一撃はイッセーとタイガによるツープラトンドロップキックである。

キン肉マンとテリーマンにタッグで鍛えられた成果が早速発揮されたのだ。

「ふ……ふふ……やっと来ました……」
「マッスルハリケーンミキサー!!」
「ぎゃあああああ!?」

起き上がったカテレアは直後に猛突進してきたタイタスに背後から吹っ飛ばされ、空中で体勢を立て直そうとした時にさらなる気配を背後から感じるが、反応が遅かった。

「ザ・ニンジャ師匠直伝！背天田楽刺しッ!!」
「ごふ!?」

フーマによって空中で後頭部に重い延髄斬りを受け、勢いよく床に叩きつけられた。

「タイタス……フーマも！」
「どうだリアス！バッファローマン教官直伝のハリケーンミキサー、その私バージョンは！」
「あれだな、今度ヒカリ博士に作ってもらいたいものリスト書いとくか。束の姉ちゃんは何仕込むかわかんねーし」
『ミサイルだのレーザーだのはまず入ってくるだろうな。あとは火炎放射器とか』
「マジでやりそうだぜ、あの姉ちゃんなら」

リアスの絶体絶命の危機に、間一髪のところで一誠とトライスクワッド（あとドライグ）は駆けつける事が出来た。

「何でここに……ううん、そうじゃないわね。ありがとう、本気で危ないところだったの」
「間に合ってよかったです、ホント！」
「ていうかアレ誰だっけ……えっと……カ、カテ……」
「カラテマンだな！」
「いやどこの地属性・戦士族モンスターだよ」
『じゃああれだ、家庭的とは言えない無職』
「「「ぶはっ!!」」」
「ぷっ！」

先程までの危機的状況は何処へやら、即座にいつものノリにもっていく一誠やタイガ達。
この雰囲気が気に入っているリアスも一緒になってつい吹き出してしまう。

「無職がヘタレてる間に聞きたかったんだけどよ、何でリアス狙われてんだ？わざわざ人払いまでされてたぜ」
「人払い？そう……だからスマホもブレスレットも通じなかったの

ね」
「腐っても旧魔王、通信妨害も術式とやらに組み込んでいたのか」

リアスの方も漸く合点がいった。
そしてリアスが狙われた理由を話そうとした時、起き上がったカテレアが氷の蔦でリアスを捕らえて自身側に引き寄せ、氷で作られた刃をリアスの首に当てる。

「ふふ……捕まえた」
「部長!!」
「「リアス!!」」
「色々好き勝手やってくれましたが……私の狙いは最初から貴方ですよ、赤龍帝」
「お……俺!?」
「単刀直入に言います。リアス・グレモリーを解放してほしければ貴方の所持しているウルトラマンへの変身用アイテムをこちらに渡しなさい」
「「「「!!」」」」

一誠やトライスクワッドだけでなく、リアスも驚く。
カテレアが最初から言っていたように本命はリアスではなく一誠やタイガ達。

「他のウルトラマンも考えましたが、一人の中に三人という事は何かの拍子に三人同時に現れるとも限らない。そういう意味で貴方を封じた方が効率的には一番いい」
「て、てめえ……!」
「さあ、どうします?主をとるか、ウルトラマンをとるか……」
「う……!」
「部長!!」

リアスを捕縛したまま、カテレアが氷の刃をほんの少し首に突き刺すとリアスの首からツゥ……と血が流れる。
あまりに酷な選択。
リアスは想い人、タイガ達はもう親友あるいは血の繋がらない兄弟とも呼べる存在。
どちらかを選べと言われて選べるような付き合いはしていない。

「う……ぐぅぅぅ……！」
「イッセー……！」

タイガが自分達のことはいい、と一誠に言おうとした瞬間――

「イヤアァァァ!!」
ガゴォォォォォン!!!
「ぎべっ!?」
「きゃっ……!?」

フーマより早く、タイタスより重く、一誠とタイガよりキレのある一撃がカテレアにクリーンヒットし、カテレアは壁を突き破って落下していった。

「これでリアスちゃんもタイガ達も選ぶ必要がなくなったな、一誠。問題なく両方取ればいい」
「しっ……師匠ぉぉぉぉ!!」
「ええっ!?レオさんいつの間に!?」
「なあ……あんた本当は拳法家じゃなくて忍者だろ」
「そういえばバッファローマン教官達がこぞって『レジェンドの弟子の中でもレオというウルトラマンとは一度手合わせしてみたい』と口を揃えて言っていたな」

その一撃の主であるレオことおおとりゲン、何となく嫌な予感がしたというアーシアの言葉を信じ、アスカやジャックと夜食買いに行くついでに迎えに行こうとして異変に気付き、すっ飛ばして駆けつけたのである。
というわけで、遅れてアスカとジャックも到着。
二人は息も絶え絶えでゼェゼェ言っている。

「ちょ……ゲンさん速すぎだって……」
「僕も体力には……自信あったんだけどな……」
「ああ、二人とも悪かった。お詫びといっては何だが帰りのコンビニでは俺が奢ろう」
「じゃあ俺、ポカリで……」
「僕はよく冷えたコーヒーを……」

アスカにせよジャックにせよ、かなり鍛えているはずだが……どんだけのスピードを出したんだこの御仁。

「師匠!ありがとうございました!!」
「いやなに、あんな選択を迫られれば誰でも悩むさ。そういう本当に一人ではどうしようもない時にこそ、手を差し伸べるべきだろう?師匠というのは」

一誠とトライスクワッドの中でゲンの真・イケメン度が急上昇。
これは村山や片瀬らが惚れても仕方ない。
そんなところに懲りずにカテレアが復活してきた。

「よもやこれほど釣れるとは……」
「あれは……！」
「分かるぜ、俺には……！リョウみたいな凛とした美人でもなきゃ、マイみたいなマスコット系美少女ってわけでもない、残念な何かだ!!」
「「「「ぶふうっ!?」」」」

またもこき下ろされるカテレア。
プルプル震えているカテレアだったが、唯一吹き出していなかったゲンが更に追い打ちをかける。

「なるほど、合コンを成功させるためにキメまくって行ったはいいが、相手側全員ハズレかむしろ自分が全く相手にされないタイプの女性か!!」
「「「「ぼひゅっ!!!!」」」」

今日のゲンはキレッキレだった。
光神陣営が揃って変な声を出してしまう程に。
アスカと一誠、タイガにフーマは大爆笑。
ジャックやタイタス、リアスも何とか堪えているが何かの拍子に決壊しそうである。

「もうやめろ。行き遅れの嫉妬は見苦しいぞ！」
「違うわよ！」

遂に残りの三人も決壊した。
ちなみにゲンは割とマジで言っている。

「見たところそちらも独身でしょうが!!」
「まあ、我ながら修行ばかりで女っ気ないからな」
「お前と師匠を一緒にすんな！師匠はアプローチこそされないけど普通にモテてんだよ！」
「父さんから聞いたけど、レオさん地球にいた頃には恋人いたらしいぞ！お前みたいな外道のせいで故人になったとも聞いた!!」
「……ああ……円盤生物のせいで……同僚や恋人、知人の少女……皆、一度に失い……ゼロ、つまりレイトの父親である隊長も長らく行方不明に……」

ゲンとレジェンドにとって修行よりもトラウマとも呼べる出来事が掘り起こされ、ゲンの目から光が消える。
当時、レジェンドならどうにか出来たんじゃないかと思われたが、当のレジェンドはよりによって別の宇宙で起きたトラブルの解決に行っていた最中で隊員や知人の死に目にすら立ち会えなかった。
極限状態だったため可能になったセブンの次元を超えるウルトラサインで「レオをお願いします」と頼まれ、レオから事の顛末を聞き以後二人（＋アストラ）で戦っていくことにしたのである。
それが理由で今や二人は『円盤生物絶対殺すマン』と呼ばれる程、円盤生物と言われると殺意全開になるのだ。

「あああ!!すいませんレオさん俺が悪かったですゴメンナサイ!!」
「いや、気にするなタイガ……お前は悪くない。そう、悪いのはそこの行き遅れ外道円盤生物だ」
「!?」

ゲンがかつて初めてオカ研メンバーと模擬戦を行った時、カナエと小猫以外を瞬殺した後の状態になっている。
ここにあの二人がいたら今度は二人のトラウマが再燃しただろう。
タイガの発言のおかげでカテレアが何故か円盤生物として認識されてしまっているくらいだ。

恐らくはカテレアをぶちのめすまで収まりそうにない。

「……ヤバくね？」
「奴は確実に死んだな」
「いやもう既に一度死んでんスよ、あいつ」
「「へ？」」

そこはかとなく緊張感に欠ける会話だが、やはりゲンが先に動いた。

「円盤生物は残らず駆逐してやる！心臓なぞ死んでも捧げてやるか腐れ外道がああああ!!」
「だから円盤生ぶべら!?」

想像を絶する速度でカテレアの顔面に正拳突きが叩き込まれ、足払いを仕掛けられて転ばされたところに容赦無い踵落としが続けて顔面叩き込まれる。
さらに残像が残る程の速さで連続背負投げを決めた後、地獄車で再び壁を破壊しながらカテレアは外に放り投げられ、その後ド派手に地面に叩きつけられた音が聞こえてきた。

「フー……」
『……』

ドライグを含め、ゲン以外は皆真っ青である。

「つ……強え……！さすが師匠!!」
「か、彼女曲がりなりにも旧魔王の血族なんだけど……」
『何もさせる暇さえ与えなかったな……』

タイガ達は「今後レオを怒らせるようなマネは絶対にやめよう」と

心に誓い、アスカやジャックはセブンが「あいつ最近人間の時のステータスがおかしな事になってるから下手に突っつくなよ」と言っていた意味を理解した。
　と考えた直後にゲンが背後に裏拳をかます。

「ふん!!」
「ぺグ!?」
「「「「え!?」」」」

　先程ボコボコにされて地面に叩きつけられたカテレアがゲンを背後から襲おうとしていたのを返り討ち。

「何で!?たった今そこから吹っ飛んでいったはずなのに!!」
「やっぱり魔力の反応を全く感じなかった……魔法じゃないわ!?」
「何故、ガス化能力を得た私に反応出来る!?」
「ガス化……!?だからあんな神出鬼没な移動が出来たのね!!」

　漸くリアスは自分がどれだけ撒こうとしても撒けなかった理由がわかった。
　ガス化すればほんの少しでも隙間があるならそこを通過出来る。
　同時にそんな能力に対してカテレアが問うように何故ゲンは反応出来たのか？

「勘だ」
「「「「「『嘘だッ!!』」」」」」

　ゲン以外にハモられたが、実際彼の言っている事は嘘ではない。

「明確な殺意が感じる方向へ攻撃しただけなんだが」
「いや……それおかしくないスか？」
「ウルトラ兄弟は皆このレベルなのか……」

違います、本作のレオがおかしいだけです。
ゲンの色々ブッ飛んだ能力値が明らかになりつつ、リアスはカテレアに問いただす。

「カテレア・レヴィアタン……貴女の目的は旧魔王の血族による冥界の統治ではないの!?何故ゴーデスに……」
「冥界?そんなものがどうだというのです?」
「『!?』」
「あの御方の下にいれば私達は冥界どころか宇宙を支配する生命の一部となってこれから永遠に生き続けることが出来る。そして貴方達も……ゴーデス様こそ絶対なる存在なのです!」

もはや侵食は精神にまで及んでいると言っていい程、カテレアはゴーデスに狂信していた。

「間違いない、彼女は確かに死んだのだろう。それをゴーデスが自分の細胞で死んだ直後に適当な場所で蘇生させ、利用しているんだ」
「利用?何を言っているのです?確かにゴーデス様の細胞で蘇らせて頂きましたが、私はゴーデス様に自らの意思で従っています。だというのに邪推甚だしい」

笑いながらジャックの言葉を否定するカテレア。
だがその言葉すら彼女の意思が含まれているか怪しい。

「ですから……ここから出たいんですよ、リアス・グレモリー、赤龍帝、そしてウルトラマン。この体が邪魔なんです。完全にゴーデス様と一つになりたいのです……さあ撃ちなさい!その魔力で!神器で!!武器で!!この私を!!さあ!!」

笑いながら目を見開き、本格的に狂い始めたのかと思う程語尾を荒

げながら一歩ずつ近寄ってくるカテレアに、リアスは心底恐怖する。
「な……何なの……!?」
「この野郎……もうあん時の人格なんざちょっとしか残ってねぇ……!!」
「もう手遅れだ。ゴーデス細胞に蘇生されただけならともかく、ここまで侵食されてしまったらどうしようもない」
「つまりあいつの言う通り撃つしかないって事かよ……!」

ジャックの言葉に対し、アスカが応えると同時にガッツブラスターを構える。
しかし、いざという時の洞察力が並外れているアスカは咄嗟に先程までの事を振り返った。

（待てよ……？あいつの言葉をそのままの意味で受け取るとして、じゃあ何であの子達やゲンさんに攻撃したんだ？そのまま黙って倒されりゃいいだけなのに……あーもー！何か頭に引っかかるぜ！）

アスカは頭をブンブン振って再びガッツブラスターを構え直し、引き金に指を添える。

「漸くその気になりましたね!!さあ!!」
「皆は何かあった時すぐ対処出来るよう準備しててくれ！あいつは俺が撃ち抜いてやる！」
「アスカ、気をつけるんだ。僕も思い出したが、かつてゴーデスの手駒となった人物とやり合った後は……！」
「大体予想はつくぜ！その為の備えだよ！」

力強いアスカの言葉に、彼の後ろを固めるような陣形でゲンやジャック、そして一誠やリアス、トライスクワッドが有事の際に動けるようスタンバイする。

そしてアスカはそのままカテレアの心臓部分を狙い、引き金を引く。

「うおおおお!!」

「!!」

ガッツブラスターから放たれたビームは、確実に蘇生されたカテレアの心臓を穿った。

倒れていくカテレアはその笑みを崩す事なく満足げに言う。

「ふ……ふふ……これでゴーデス様の元へ……そして……グレ……」

何かを言いかけている最中にカテレアは粒子となって消え去った。

「……やったの？」

「……何も起きないな」

「気にしすぎだったのか？」

リアスらがそんな反応をした直後、地面から辺り一面に真っ赤なガスが出始めた。

それに見覚えがあるジャックは焦りながらも冷静に指示を出す。

「これは……！皆、このガスを吸い込まない様に高い所……ここなら屋上へと向かうんだ！赤いガスは毒ガス、そしてこれを発生させているのはゴーデスの手先である怪獣だ!!」

「「「「!!」」」」

「やっぱりかよっ!!」

「皆急げ!!」

ゲンに先導され、即座に屋上へと駆け出すリアス達。

この時、レジェンドやサーガがいればこの時すでに起きていたある

事に気付き、迅速に対処出来たかもしれない。

邪悪の恐るべき策は、もう始まっていたのだ。

〈続く〉

『赤』が齎すもの

――ダイブハンガー――

この世界に建造される際、新設された機動兵器用格納庫の特別スペースのハンガーにて、レジェンドは自身の専用機の調整を行っている。

「あいつは帰ってくるまでもう少々時間がかかる上、俺とアーシアが離れる場合はゴモラ共々護衛についてもらう事になる……それから束が開発中のアルトアイゼン・リーゼは相方との運用で真価を発揮する機体……ついでにウルティメイトオリジンは調整どころか一つ問題が解決するとまた問題が出て足踏み状態……やはりこのネオ・グランゾンが基本的な乗機になりそうだな」

これから頼むぞ、と笑いつつコンコンと軽くコンソールパネルを拳で叩くレジェンド。

束と同じで何だかんだ言いながらも自分の作り上げたものに愛着はあるのだ。

そこにひょっこり束と黒歌がコックピットに顔を突っ込んできた。

「レジェくんレジェくん!!何これ凄い凄い!!これレジェくんが作ったの!?もうアレだねこれラスボス感とか隠しボス感全開だよ!!さすが束さんの未来の旦那様!!」

「束の最後の発言はともかく、レジェンドこんなの作ってたにゃ!?ずるいにゃー!!私だってソウルゲインまだ出来てないのにー!!」

「俺は自分で自分の機体を作っただけだぞ。そもそも俺の専用機、完成の目処が立たないから別の方向にシフトしたにすぎん」

ぶっちゃけ妥協案にしても性能が規格外過ぎる気がするのだが、中身であるレジェンド自体が規格外とかそういうレベル軽く超えてるので気にしない。

「そういえば束、ロスヴァイセ用にもう一機機体作ってるとか言ってたがそっちはどうなんだ？」
「そっちは基本的にスタンドアローンでの戦闘を前提、加えてコンセプトとしては単体で完結してるからあとは調整だけ。一応完成してるよ、サイバスター」
「サッ!?サササ、サイバスター!?束、それも作れたにゃー!?」
「まー精霊との契約はまだだけどねー」

ロスヴァイセ優遇されすぎにゃー！と涙しながらにゃーにゃー泣く黒歌を放っておいて、レジェンドは束に尋ねる。

「操者としては？」
「一応現時点で及第点かな。今思い出したんだけどこれあの三人に対してシミュレーターで使った機体だよね？」
「ああ。縮退砲一発で終わったからヴァニシングプレッシャーやアンリミテッドグランレイとか全く試せなくてな」
「何か聞くだけでヤバそうな武器だねソレ」
「縮退砲よりは弱いぞ？」
「比べる対象が間違ってるよレジェくん」

あれトンデモ超兵器だよ、と言う束に対してそれもそうかと思い直すレジェンド。
束としてはこれＩＳにしたら他の機体根こそぎ全滅どころか消滅だなーとか考えている。
そこにさらに顔を突っ込んできた三日月。

「よかった、レジェンド様コックピットにいたんだ」
「ん？どうした、三日月」
「これさ、グランワームソードって剣持ってるよね。バルバトス用のやつ一本欲しいなって。デカくて強そうじゃん。ソードメイスだと、

結局叩き潰すのが主流になるし」
「まあ、構わんぞ。とりあえず束と黒歌を引き取ってくれ」
「わかった。二人ともいくよ」

むんず、と束と黒歌の襟首を容赦なく掴んで引きずっていく三日月と、ジタバタして抵抗している束に黒歌。
食事でエネルギー補給したばかりの三日月は強かった。
そんな三人を見送りつつ、ネオ・グランゾンの調整を続けながらバルバトス用のグランワームソードの設計を同時に行うレジェンドは、自身の経験から少なからず予感していた。

「……案外、早く使う事になるかもしれん」

☆

一誠とトライスクワッドにリアス、それにゲン、ジャック、アスカ。
彼らは漸く駒王学園の屋上へと辿り着く。
そこから下を見ると赤い毒ガスが校舎周辺を取り囲んでいた。

「町への被害は!?」
「そちらは心配いらないようだ。どうやら最初から僕らを逃がさないようにする為の手段だったらしい」
「そ……そうか、俺や部長はともかく師匠やジャックさん、アスカさんは変身しないと飛べないんだった」
「海の上とかなら走れるが空となるとまだ無理だ」
「「「「いやそれも十分おかしい!!」」」」

次々と明らかになるゲンの超スペックぶりはともかく、どうにかして脱出しなければと思考していた時、ジャックが何かに気付いた。
「……一番手っ取り早く分かりやすい方法が、あっちの方からやって

きたみたいだ。ありがたいような嬉しくないような、微妙な感じだけどね」
「まさか……！」

校舎周辺に充満していた赤い毒ガスが一点に集まっていき、それらはやがて巨大な一つの影を作り出す。
全身の穴から赤い毒ガスを放ち、翼状の器官も有するゴーデス配下の邪悪大怪獣。
毒ガス幻影怪獣バランガス。
かつてグレートが相対したときは今、姿を借りているジャック・シンドーの友人であったスタンレー・ハガードとの深い関わりがあった怪獣が一誠らの、そして再びジャック――グレートの前に姿を現した。

「あれがカテレアの……！」
「彼女が直接怪獣化したわけではないが、あの怪獣の一部になったのは間違いない。かつて僕が戦った時も似たような状況だった」
「ならジャックさんはあいつの弱点も！」
「一応、覚えているよ。ただ……魔王獣の亜種と化した時の前例もある。同じ手が通用するとは思わない方がいい」

以前、コカビエルとバルパーが融合して誕生したマガパンドンの亜種は、火炎のみならず光線も吐き出した。
色々あったがカテレアは旧魔王の血族。
おそらくマガパンドンの時と同じように何らかの変化を遂げていると考えた方がよさそうだ。
「何にしてもだ、どのみちあいつを倒さないとここも危なきゃ脱出も出来ないのは明確ってわけだ！」
アスカはガッツブラスターを仕舞い、代わりに懐から小さなウルト

ラマンの顔を模ったようなアイテムを取り出した。
リーフラッシャーと呼ばれる変身アイテムだ。
それに続いてジャックも胸元から中央に宝石の付いた三角形のペンダントを取り出す。
こちらもグレートのカラータイマーを模ったデルタプラズマーという変身アイテムである。

「少しは後輩の手本にならないとね」
「俺は遊撃隊としても先輩だしな。さあて！本当の戦いはこれからだぜ！」

二人はそう言うとそれぞれアイテムを使い、ウルトラマンの姿へと変身を試みる。

「……」

ジャックはデルタプラズマーを掌に乗せ、静かに目を閉じ精神統一をする。
それを感じ取ったデルタプラズマーが脈動するように微弱なプラズマを発しながら点滅し、次第にジャックとウルトラマンの姿が重なっていく。
それが最高潮に達した時、爆発と共にその中からウルトラマングレートが飛び出してくる。

「ヘァアッ!!」

ゴーデスを幾度となく打ち倒した勇士、ウルトラマングレート。
そして――

「ダイナァァァァァ!!」

居合抜きのような動作でリーフラッシャーを掲げ、クリスタル部分を展開する事で光のシャワーがアスカへと降り注ぎ、それを浴びてアスカはウルトラマンダイナに姿を変える。

「ジュワッ!!」

ネオフロンティアスペースに現れ、幾度となく他の宇宙でも活躍した英雄、ウルトラマンダイナ。

この世界の火星でレジェンドと共にゴーデスやスフィア、根源的破滅招来体の送り込んだ怪獣を退けた二人の偉大な先達が、次元を超えて今再び地球の大地に足をつけた。

「あれが、ジャックさんとアスカさんの……!」

「ああ! 対ゴーデス専門家のグレート先輩と、ネオフロンティアスペースにおいて伝説の英雄と呼ばれたダイナ先輩だ!」

「ダイナはゼロが盟友と豪語し、グレートは大抵の相手にタメ口であるゼロも先輩と呼ぶ程の人物だ」

「レイトさんを基準にすると……すごくわかり易いわね……」

「……? おいリアス、大丈夫か?」

タイガやタイタスはダイナやグレートの事を誇らしげに説明しているが、フーマはリアスの調子が悪そうな事に真っ先に気付く。

「皆に比べてカテレアに追われていた時間が長い上、こんな状況だから……ちょっと疲れたかな……?」

「あまり無理しない方がいい。ここまできて倒れたら元も子もないからな」

「師匠、部長をお願いします! 俺達はアスカさんとジャックさんの援護に!」

ゲンは一誠がリアスの近くにいた方が、と思ったもののあえて言葉を飲み込んで任せる事にした。
カテレアが一部となったバランガスに一矢報いたい気持ちもあるのだろうし、いざとなればゲンの身体能力ならリアス一人を抱えてここから脱出も可能かもしれない。

「……わかった。勝ってこい、一誠！」
「押忍！行こうぜ皆！」

『カモン！』

「相手の出方がわからない以上、さすがに私やフーマがいくのは悪手か」
「こういう時、安定してるタイガって強いよな」
「二人ほど特化してないけどな。よし、イッセー！」
「おう！」

今回は余程の事がない限り最後までタイガに任せる事にしたタイタスとフーマ。
その返事を聞いた一誠はタイガキーホルダーをリードする。

「光の勇者！タイガ!!」
『はあああああっ！ふんっ!!』
「バディイイイ！ゴオオオオオオッ!!」
『ウルトラマンタイガ！』
「シュワッ!!」

グレート、ダイナに続き、タイガもまた戦場へと降り立った。
3対1、戦況としては数だけでなく、かつてやり合った経験もあるグレートが存在するというだけでもアドバンテージがこちら側にある。

「これだけの状況だというのに町の誰も反応しない……余程強力な認識阻害が働いているらしいな」
「この際、何の為かは置いといて、早くコイツをどうにかした方がよさそうだぜ！」
「リアスの体調の件もありますし」
（どうも腑に落ちんな……奴の毒ガスを町に広めるなら分かるが、それをする気配はない。それに我々だけを閉じ込めるにしても、奴がガス化能力によるテレポーテーションを使って脱出する様子も見せない。何かの実験を兼ねているのか？）

ダイナとタイガはバランガスに集中しているが、唯一グレートだけは認識阻害の方を訝しんでいる。
レジェンドを除けばゴーデスの狡猾さを最も理解しているのはグレートだ。
だからだろう、ゴーデス絡みとなれば常に細かい事にも気を配る必要があると考えていた。

（とにかく、奴を早々に倒して調査した方がいいかもしれん。レジェンドに相談するのも一つの手だが）

そこまで考えて、グレートは再びバランガスへと意識を向け直した。

「先輩、以前のマガパンドンの亜種は堕天使を素体としたからか、炎のみならず光線も吐いてきました。さっきのカテレアは氷を使っていた……もしかしたら、あいつも氷関係の能力を使うかもしれません」
「毒ガス以外に冷凍ガスも……ってトコだな。なら奴のギアが入る前に速攻でいくぜ！続け、タイガ！」
「はい！」

ダイナは真っ先にバランガスへと突進し、ショルダータックルから組み合いに持ち込み、そこへタイガが飛び上がり両膝によるキックを炸裂させる。

「デヤアアアア!!」
「ガアアアア!?」
「これがテリーマン先生直伝のテキサス・コンドルキックだ!」

邪悪大怪獣は基本的に大柄であり、バランガスも例に漏れず巨体だった為に頭部への攻撃が容易であった。
そしてグレートの知るバランガスの弱点というのは、毒ガス攻撃を除けば体当たりや噛み付き、踏み付けなどの肉弾戦しか出来ないことだ。
確かにその巨体から繰り出される攻撃はそれだけでも脅威なのだが、同時に巨体故にスピードもガス化能力を別として考えればそう早いものではない。
そのため、バランガス相手には毒ガス対策こそ最優先事項。
逆に毒ガスを封じればテレポーテーションも出来なくなり、例を挙げるならエースなどは遠距離からギロチン技でスッパリいけてしまう。
だが、やはりというかここでバランガスは驚くべき方法をとった。

「ウッ!?」
「グッ!?」

ダイナとタイガが足元に違和感を感じて下を向くと、なんと足首まで地面もろとも氷漬けになっており、今も徐々に凍結が進行していたのである。

「まさか……毒ガスが囮かよ!」
「冷凍ガスになるかと思ったのに、直接凍らせてくるなんて……!」

既に膝下まで凍結が進んでいた二人だが、一歩引いて状況を観察していたグレートのフィンガービームの連射によって無事に脱する事が出来た。

「油断するな、二人とも。かつて私が相対した時、この怪獣……バランガスはゴーデス最強の刺客として現れた。この世界のバランガスもそう考えた方がいい」
「悪い、助かったぜ……！」
「すいません、グレート先輩」
「気にしなくていい。だが氷を操る事も出来るようになったという事は、以前に比べて格段に奴のとれる戦術が増えたということだ。厄介だな……」

毒ガスに加えて氷……むしろ冷気を操れるようになったとあれば苦戦は免れない。
先程のように動きを止められ、毒ガスを浴びせられ続けたりすればそれこそ危険だ。

「長期戦は間違いなく不利になる。短期決戦でいくぞ、スキがなければ奴自身に無理矢理作らせるだけだ」
「ラジャー！」
「すごいな、グレート先輩……数で勝っているのに慢心も焦りもなく冷静だ。俺も見習わないと」
「逆だぞ、タイガ。数で勝っているからこそ冷静になれるんだ」

絶対的優位なものがある、それだけでも少なからず心に余裕が出来る。
だからこそグレートはこの状況を分析するだけの冷静さが持てていた。
ダイナとタイガがバランガスに先行して挑まなければ冷気を使う

前に全員が餌食になった可能性があり、グレートが彼らを救出する事も出来なかっただろう。

「今、奴に出来ない連携を私達は取ることが出来る。それが私達の最大の利点であり武器でもある。互いにフォローし合いながら奴の戦術を一つ一つ潰していけば、私達とは逆に奴は取り乱すはずだ。そこを一気に叩く……！いくぞ！」

「よし！まずは俺だ！シュワッ!!」

そういうとダイナは敢えて高速移動せず、走りながらバランガスの左に回り込む。

ビームスライサーを何発も撃ち込みながら移動することでバランガスの意識を完全に自分へと向けさせた。

「次は俺だ！ハアッ!!」

タイガがバランガスの右へ跳躍し、その際に空中で身体を捻りながらハンドビームでバランガスの両翼を狙い撃ち破損させる。

「グォォオオオ!!」

翼をやられたことで激昂したバランガスは咆哮と共に毒ガスを周囲に噴射しつつ、小さな鋭い氷針を三人に対して無数に放出した。

まるで針を飛ばすハリネズミである。

グレートを始め、ダイナもタイガも各々の手段で難なく防御し、タイガの中にいる一誠達もハラハラしつつ万が一に備えていた。

『クソ、あの無職使ってるのに強え！』

『というかあの無職使ったから強いんじゃないのか？』

『こう無職無職連呼されるとさすがに不憫に……どうした、相棒？』

『この攻撃……全方位ってことは部長や師匠が！』

その一誠の言葉でタイガを含む四名はハッとしたが、それは余計な心配だったとすぐに思い直してしまう。
何故ならば二人に迫った氷針はゲンが全て木っ端微塵にしていたからだ。
代わりに校舎がボロボロだが仕方ない。

『……いやもう何なのあの人』
『神器で眠っていた俺を文字通り叩き起こした男』
『カナエさんが少し割るのにも苦労した瓢箪を一発でヒビ入れた全集中の呼吸修得未遂の、俺と先輩の師匠』
『なるほど理解した。レオは獅子の呼吸を会得しているのだな！』

当たらずとも遠からず。
縁壱も認めていたぐらいなのでそのうち本気で会得してくるかもしれない御仁である。
とにかく、先の攻撃を防がれたバランガスはグレートの目論見通り焦り始め、我武者羅に攻撃しだした。
狙っていたとはいえ、予想よりも苛烈な攻撃にダイナとタイガは怯むが、グレートは二人に意識が向きがちだったバランガスの一瞬のスキを突いて急接近し、正拳突きを叩き込んで続けざまにナックルシューターを撃ち込む。

「グゥォオオオッ!?」
「ダイナ！タイガ！体勢を立て直せ！もう少しだ！」
「ああ！」「はい！」

三人のウルトラマンとバランガスの戦いが大詰めになっている頃

「あ……ぅ……！はぁ……はぁ……っ……」
「しっかりするんだ、リアスちゃん！」

先程まで疲労かと思われていたリアスだが、いくら経っても回復しないどころか息がさらに荒くなっていた。

（おかしい……！いくら戦闘を含む運動をしたからといってもハリベルさんに鍛えられて体力も十分につき、しかも悪魔である彼女が夜に何もしないままここまで急激に弱るはずがない！しかも先の戦闘でのダメージ自体は然程でもなかった……ダメージ自体は……？まさか!?）

ここでゲンはある事に気付き、急いでウルトラマンとしての能力を使い、リアスを診てみるとあまりの出来事に衝撃を受けた。

「やはり……！」

二人に代わってバランガスをグレートが引きつけている間に、ダイナはストロングタイプへとチェンジし、タイガは赤龍帝の籠手を発現させた。

「相手も赤だがこっちも赤だ！パワー勝負なら負けないぜ!!」
「ダイナ先輩！一緒に上から！」
「おう！一発デカいのブチ込むぞ、タイガ！」

ダイナ・ストロングタイプとタイガは共に跳躍し、先程タイガがやったような捻りを入れつつ回転し、ダイナはドロップキックの、タイガは左肘でのエルボードロップの体勢をとる。

「ドライグ！肘でもブーストかかるのか!?」

『そもそも威力の倍加が基本だ。問題なく出来るぞ』
「よし！なら心配なしだ!!」
「行くぜ！」
『Ｂｏｏｓｔ！Ｂｏｏｓｔ！Ｂｏｏｓｔ！』
「「デヤアアアアア!!!!」」

ドガアアアアッ!!

「ガアアアアア!?」
「良い連携攻撃だ！決めるぞ、ダイナ！タイガ！」
「「ラジャー!!」」

三形態中最もパワーのあるストロングタイプのダイナのドロップキックと、倍加されたタイガのエルボードロップの同時攻撃を上空から受けたバランガスはさすがに倒れ込む。
寸でのところでバックステップで距離を取ったグレートはここが好機と二人に指示を出し、各々トドメの一撃の準備に入る。

「ハァアアアア……！」

ダイナは両拳を胸の前で打ちつけ、外側へ円を描くように腕を動かして光弾を作り出す。

「イッセー！オーブレットを！」
『よっしゃあ！』
『オーブレット！コネクトオン！』

タイガはかつてコカビエルやマガパンドンとの戦いで自分達を助けてくれたクレナイガイことウルトラマンオーブの力が込められたウルトラタイガアクセサリーを一誠にリードしてもらい、自身の得意技にオーブの力と赤龍帝の籠手の力を上乗せする。

「ヘッ！」

グレートは左手を軸に光の弓を、右手には光の矢を発生させて弓矢を引くような体勢になりつつ、光の弓と矢を合わせる。

その姿はまるでゼロがファイナルウルティメイトゼロを放つ姿に酷似しているが、グレートのそれはあくまで自身のエネルギーだ。

そしてバランガスが漸く起き上がった時、三人は同時にそれぞれの技を放った。

「デェアァァァ!!」

赤きダイナの一撃必殺超高熱光弾、ガルネイトボンバー。

『Ｂｏｏｓｔ！Ｂｏｏｓｔ！Ｂｏｏｓｔ！Ｂｏｏｓｔ！』

「ブーステッド！スプリーム……ブラスター!!」

オーブの力を借りたストリウムブラスターを赤龍帝の籠手で更に倍加したタイガの、ブーステッドスプリームブラスター。

「ヘァァァァッ!!」

そして、かつてもバランガスとの戦いで決め手となったグレートのアロービーム。

「ゴガァァァァァァァァァ……」

バランガスがガス化するより早く、三つの超エネルギーが寸分違わぬタイミングで同時直撃し、バランガスは断末魔の叫びを上げて爆散

する。

「よっしゃあ！見たか、俺達の超ファインプレー！」

「しかし……よくよく考えたら倍加５回分の俺の技と素で同等の威力出してるグレート先輩とダイナ先輩って……」

『こりゃ先輩が先輩呼びしたり盟友って呼んだりするわけだよな……俺、神器で倍加してやっとそこに立てるレベルってことじゃん……』

『いやそれ俺らもだからな？』

『ダイナの技の威力はストロングタイプというパワー重視だから納得出来るのだが』

『グレートのあれは威力おかしくないか？あいつバランス型、タイガと同じだろ。つまり俺、倍加出来なきゃフルボッコにされるじゃん。タイラントにやられた時の二の舞じゃん』

何か揃いも揃ってグレートをおかしく言っているが、伊達や酔狂でその名を持っているわけではないということだ。

アイテムもフォームチェンジも無しに戦ってきたウルトラ戦士の実力はやはり凄まじい。

地力が違う。

「喜ぶのはここまでにして早く帰ろう。リアスちゃんの容態も気になる」

グレートの戦闘後も変わらぬ冷静な面は見習わないと、とタイガが思った次の瞬間にゲンから三人と一誠らにウルトラ念力によるメッセージが送られてきた。

「三人共！急いでダイブハンガーヘリアスちゃんを運ぶぞ！事態は一刻を争う！グズグズするな!!」

「「!!」」

『師匠!?部長がどうしたんですか!?』

「……よく聞け、一誠……そして皆」

そしてゲンの口から最悪の事態が明らかになる。

「リアスちゃんが、ゴーデス細胞に感染した」

「『……え？』」

〈続く〉

決戦の足音

リアスがゴーデス細胞に感染した――

それは瞬く間にダイブハンガー、そしてそこで生活していた全員へと伝えられ、厳戒態勢が整えられた。

一誠によっておぶられながら帰って来たリアスは明らかに衰弱しており、卯ノ花を始めとした医療従事者や、先日の会談日以降正式に光神陣営に属することになった黒上博士、そして各方面に豊富な知識を持つ束が中心となって治療を行っている。

「卯ノ花様、束様……リアス様の容態は……？」

「正直、あまり良くありませんね」

「ゴーデス細胞、だっけ。それがりっちゃんの細胞を侵食しようとしてる最中なんだけど、りっちゃんは無意識に細胞レベルで魔力障壁を展開して何とか防いでるって感じ。はーちゃんの教えの賜物だね」

「しかし、その状態は分かりやすく言うなら体内と体外、摘出不可能なギリギリのラインで症状が起こっているようなもので、施術どうこうというレベルではないのです」

「ただ、まだ間もないとは言ってもレジェくんやサーくんら光神との関わりが出来たことで少なからず光気を浴びてることと、生まれが生まれだけに魔力の質と量に恵まれていたのもあって何とか症状の進行が遅いのだけは救いかな。それでも急がなきゃマズいのは確かだけど」

卯ノ花と束の助手をしていたクロエの質問に二人は今わかっている事を包み隠さず述べた。

このリアスの状態から下手な嘘は中途半端な希望にしかならず、最悪の事態へとなったときの絶望が尋常ではないからだ。

クロエは「そうですか」と表情を曇らせたが、もう一つの懸念もあった。

……のだが。

「でもりっちゃんも大したもんだね。細胞の方は無意識だけど、自身を極薄の魔力の膜で包んでゴーデス細胞が周囲に影響を及ぼさないよう、自分の中で食い止めてる。あの事件で逃げ回るだけだった無能連中とは全然違うよ。束さん達もお姉さんとして頑張るぞー！」

クロエの疑問……リアスの感染したゴーデス細胞が周囲の者にも感染する危険はリアス自身が必死に抑え込んでいた。

一誠を筆頭にオカ研メンバーも心配で何か手伝おうとしたり、せめて傍にいようとしたのだが大人達から「夏休み間近で短縮とはいえ授業があるだろう」と言われ断腸の思いで引き下がり、学園に登校することに。

（いくら抵抗出来る要素があっても、彼女は精神力と体力を同時に奪われているような状態……もって三日、下手をすればそれ以下の可能性もある。どれだけ手を尽くしても、やはり根本的な面で解決しなければどうにもなりませんか）

卯ノ花は険しい表情のまま、リアスの看病と治療に専念するのだった。

☆

――とある場所――

「ふーむ……怪しさバリバリじゃのぅ」

「何かありそうに見えて何も無い……と思ったらいきなりバーン！と何か出てきそうだけど現状何も出てこないにゃ」

「何じゃその表現は。『何』がゲシュタルト崩壊しとるぞ」

リアスのゴーデス細胞感染を聞いた時、シミュレータールームにい

た黒歌と夜一はある人物からダイブハンガーに来た通信を偶然二人だけで聞いてしまい、その人物から潜入調査の同行依頼をされた。
仙術による隠行が可能な黒歌と、元隠密機動総司令官たる夜一ならば余程の事でない限り成功するのは確実。
最初は渋っていた二人だが、協力してくれるならレジェンドへ二人のおかげで成功した、と大々的にアピールしてくれるというのでならばと決断。
で、現在無事潜入し調査を行っているわけだ。

「しっかし国外どころか南太平洋と南極海の境に来るなんて思わなかったにゃ。普通に考えて誰が来るのよ、こんな島」
「だからあやつも言っておったじゃろ。ここ数日の間に急に出現したと」

そう、彼女らがいるのは日本どころか国ではなく、突如出現したという謎の島なのである。
不可思議な事に衛星からも感知出来ず、島全体に強力なジャミングがかかっているとしか思えない状態……にも関わらず彼女らがここに来れたのはいくつか理由があり、まず一つは光神陣営故に各種機器が特殊な為、ジャミングも容易に突破出来ること。
二つ目は試作型の携帯式長距離転移装置（サイズ限界有り）の実験も兼ねており、それが無事成功したからである。
……失敗したらどうなるか？
知らない方が身のためだ。
ともかく、試作型のため転移装置は往復分しか使えないということもあり、可能な限り情報を集めようとこの二人ともう一人に別れて調査している。

「あまり奥まで進み過ぎて、いざ何かあってから対処出来ずにゲームオーバーは御免じゃ。ある程度調査したら合流して引き上げるぞ」
「それがベストね。仮に相手がいるとしたらこっちの戦力不足もいい

とこにゃ」
「ならば早急に離脱しましょう、黒歌隊員に夜一元総司令官。こちらは調査完了しました。ほぼ間違いありません」
「!?」

ビックーン!!と二人の猫耳やポニーテールが驚きのあまり逆立ってしまったが、声をかけた本人はどこ吹く風で転移装置を起動し、三人はその島から姿を消した。

☆

終業式と夏休みが近づき、補習に嘆く者、部活に精を出そうとする者など様々な思いを胸に夏休みを過ごそうとしている生徒が大勢の駒王学園では、やはりと言うべきか話題はリアスの病欠で持ち切りであった。

ここ最近は今まで以上に活力に溢れていたというか、活き活きして笑顔も増えていた彼女がいきなり欠席というのは当然の如く衝撃だったらしい。

「なあイッセー、お前なら何か知ってるんじゃないか？リアス先輩が病欠の理由」
「え？あ、ああ……何かさ、先輩もちょっと前まで気を張ってて……やっぱり無理が祟ったんじゃないかって」
「あー……そういや、リアス先輩部長だったよな。しかも三年とくればそうもなるよな」

松田と元浜も一誠の返答がまともだった為、それ以上追求するような事はしない。
ただ、遠目からその様子を見ているアーシアとゼノヴィア、そしてタイタスとフーマ、ついでにドライグは一誠が落ち込んでいる事に気付いている。

「……やっぱり、イッセーさん元気ありませんね」
「当然と言えば当然なんだろうが……というか、そこの二人はアストラル体のままで何で私達の方にいるんだ？」
「ああ……それなんだけどよ、ドライグの奴は神器だから仕方ないとして……タイガがな」
「イッセー同様落ち込んでいる。あの時、自分達がもっと早く駆けつけていたら、とな」
「レジェンドやサーガじゃあるまいし、あの距離をテレポート無しで瞬間移動ばりの速度なんて出せるわけないんだから気にすんな、とは言ったんだけどさ」

どうやらタイタスとフーマは一誠同様に落ち込んでいるタイガを刺激しないようにしているようだ。
下手な慰めで暴発して、周りと険悪な空気になってほしくない。
しかも非常事態な現状では尚更だ。
力を合わせなければ今の状況は打破出来ないだろう。

「しっかし……肝心要のあいつらがあんな調子じゃあな」
「二人ともリアスは自分達が守る、と常々意気込んでいたからな。自分達がいたのに彼女をあんな目に合わせてしまったと責任を感じているのだろう」
「……？イッセーさんはわかりますけど、タイガさんもですか？」
「ん？ああ、タイガのそれは恋愛感情じゃねーよ。なんつーか、アレだ。姉と弟みたいな」
「聞いたことがあるだろう？タイガはウルトラの父と母の孫で、ウルトラマンタロウの息子……そのビッグネームを親祖父母に持っているため殆どの者が『タロウの息子』などとしか見ていなかった事を」
「あ……」
「だからだろうな。同じように『グレモリー家のリアス』としか見られなかったリアスは、我々が見ている部分だけでもタイガをタイガ個人

として見ていた。その逆もまた然り、同じような境遇にいた者同士……恋愛とは違う信頼関係が出来ていたのだ」

タイタスの言葉にアーシアとゼノヴィアは納得した。

特にアーシアはリアスとライザーのレーティングゲームに参加したので彼女の思いもよく知っている。

「ともあれだ。時間はそう残っちゃいねえし、終わったらさっさと帰って打開策考えねえと」

「そういえば……黒歌さんと夜一さん、見かけませんでした？」

「いや、私は見ていないが……」

「私は今朝トレーニングルームにいたがそちらにも来ていないぞ」

その二人はそもそもダイブハンガーどころか駒王や日本にすらいないなど考えもしない四人だった。

ちなみに小猫だけには伝えられており、秘密にしてくれるよう頼んである。

タイムリミットは少しずつ迫っていく。

☆

学園から帰って来た一誠はリアスの様子を見に行くも、状況は好転しておらず束から「いつでも出れるようにしてから休んでおくように」とグイグイ追い出されてしまった。

修行しようとも思ったが、ゲンやレイトからも「今のお前の精神状態ではまともな修行など出来ない」とこちらも休むよう言われてしまい、タイガ共々ダイブハンガー内部から海の中を眺めながらボーッとしていた。

「……俺達、何やってんだろうな」

「ホント……そうだよな」

一誠とタイガは揃って溜息を吐きながら俯き、暫くするとまた海の中を見ては溜息を吐いて俯く、を繰り返している。

「なあ、タイガ……」
「ん？」
「よくよく考えたら……俺達って戦い以外で何の役にも立ってないよな……」
「ああ……言われてみたらそうだな。せめて機動兵器が操縦出来れば出来る事増えるかもしれないけど、そっちだってまだ訓練中だし……」

考えれば考えるほどドツボにはまっていく二人。
そんな二人に陽気な声で話しかける人物がいた。

「よう！どうしたんだ二人揃ってペガッサ星人でもないのにダークゾーン作り出してよ」
「あ……アスカさん……」
「ダイナ先輩……」
「まあまあ、この冷た～いコーラ飲んで頭シャキっとさせろって。あ、一誠はタイガに身体貸してやってくれな」
「あ……はい」

何となくアスカの纏う空気に一誠とタイガは軽く呑まれてしまう。
別に悪い事ではないが。

「ングッ……ぷはーっ！炭酸美味ぇーー！」
「……」
「ん？ほらほらどうした！グイッといけグイッと！別に酒の類じゃないんだし遠慮すんなって」
「あの！」

「お、どうした？」
一誠が声を張り上げたのを軽い口調で返すアスカ。
「アスカさんは……部長が心配じゃないんですか!?」
「リアスちゃんが？」
「だって……ダイナ先輩、この状況でそんな気楽にしてるなんて……！」
一誠に続く感じでタイガもアスカに意見するもアスカは普段の調子を崩さない。
「じゃあ二人に聞くけどさ、リアスちゃんが心配なら何でこんなとこでそんな暗い雰囲気作ってんだ？」
「それはっ！その……束さんや師匠達に休めって……」
「今の俺達じゃ、訓練出来るような状態じゃないとも……」
「なら休むしかないだろ」
アスカは二人に対してバッサリ言い切った。
一誠とタイガも正論であるが故に何も言い返せない。
「さっきさ、俺はリアスちゃんを心配じゃないのかって聞いてきたよな」
「……はい」
「心配だよ」
え？と二人揃ってアスカの方を向くが、アスカは依然としていつもの雰囲気を崩してはいない。
「けどさ、俺はお世辞にも頭が良いとは言えないし、そもそも医者の真似事なんてウルトラマンになってもオマケレベルでしか出来ない。

だからそういうのに無理矢理首を突っ込むより、自分に出来る事……自分にしか出来ない事をやった方がいいんだよ。周りのためにも自分のためにもな」
「自分にしか……」
「出来ない事……」

アスカは続けて二人に尋ねる。

「一誠とタイガは医者がするような事やれるか？」
「……いえ」
「じゃあ『これなら負けないぜ！』って何かあるか？」
「……」

アスカの質問に二人は暫し考え込み、一誠が先に口を開いた。

「部長を……部長を想う気持ちなら誰にも負けません!!」
「イッセー……」

一誠のハッキリとした口調で告げられた言葉に満足しつつ、アスカは頷きつつタイガにも尋ねる。

「で、タイガはどうなんだ？」
「俺は……」

一誠のバディ、というにはタイタスとフーマもいるし、かと言ってリアスへの親愛の情はあれど恋慕の情とかはあまり無い。
遊撃隊としての誇り、にしてもおそらくベリアルやゼロには及ばないだろう。
――俺には何も無いんじゃないか……？
そう思いかけたタイガに声をかけたのは、他ならぬ一緒に悩んでいた一誠だった。

「言ってやれよ、タイガ」
「イッセー……」
「俺はお前がどんな事を言ったって笑わねーよ。俺だって師匠や先輩に修行つけてもらうまでオープンスケベでどうしようもない野郎だったしさ。まだまだ今までの事が帳消しになるほど成長出来てないし……もしお前が言った事を笑われたら、たとえアスカさんでも俺がブン殴ってやるからさ！」

最後はだいぶ過激な内容だったが、当のアスカは別の意味で笑っている。
決して馬鹿にしているわけではない。
そしてこの言葉でタイガはもう一度自分を見つめ直す事が出来た。
――そうだ、あったじゃないか――

「俺には……イッセーと、リアスと……血の繋がりを超えた絆が!!」
「タイガ……！」

一誠もタイガの言葉に嬉しくなると同時に、リアスがタイガが地球のことについて勉強をしている時に率先して世話を焼いているのを思い出す。
自分もすぐ隣で見ていたが、嫉妬とかは全く起きなかった。
頑張る弟を後押しする姉のような二人を見て逆に微笑ましい気持ちになったのを覚えている。
その二人の答えを聞いたアスカは、文句なしと言わんばかりの笑顔で二人に言う。

「二人ともしっかり持ってるじゃんか。自信を持って言える『誰にも負けないもの』を」
「アスカさん……」
「ダイナ先輩……！」

「なら尚の事、リアスちゃんの為にもしっかり休んで万全の状態にしとこうぜ。きっとあの娘が一番信頼してるのはチーフやゼロじゃなければ、親しいハリベルさんやマリーダさんでもない。お前達二人なんだ」

ここで漸く気が付いた。

一誠とタイガにしか出来ない事を。

『兵藤一誠として、ウルトラマンタイガとして、リアスを救う』――これは彼らにしか出来ない。

そのためにはアスカの言う通り、しっかり休み体調を万全にしておく事が重要なのだと。

「……ありがとうございました!!」

「ん？何が？」

アスカは笑いながらコーラを飲んでいる。

多分彼にこのまま礼を言ってもはぐらかされるだけだろうと考えた二人はただ笑い合っていた。

と、アスカが思い出したように二人に言ってくる。

「あ！忘れてた忘れてた」

「な……何ですか？」

「まさか、何か重要な……!?」

「ああ……！俺、頭弱くて天才とか言えないけど……無敵だから。無敵のアスカ様だから、そこよろしく！」

真面目な顔から一転して再び笑顔になるアスカにポカンとした一誠とタイガだったが、やがて三人で声を出して笑ってしまう。

ひとしきり笑った後に一誠はある事を閃いた。

「あの、アスカさん」

「おう、どうした？」
「いや、あの……アスカさんって何かこう兄貴っぽい感じがするし、ギャスパーもリクさんを兄さんって呼んでるし……俺もアスカさんの事を兄さん、って呼んでいいですか？」
「おー！全然構わないぜ！よーし試しにタイガも一緒に言ってみよう！」
「え!?俺も!?」
「そう!!」
「「せーの……アスカ（ダイナ）兄さん!!……あれ？」」
「ッはははー！そうきたかー！どっちも俺だからいいんだけどさ！」

やはりというか、片や人間の、片やウルトラマンの名前で呼ばれアスカは大爆笑しつつ二人にサムズアップする。
それに釣られて一誠とタイガもアスカにサムズアップし、互いに笑い合ったところでダイブハンガー全域に放送が入った。

『ピンポンパンポーン！はろはろーレジェくんのお嫁さんのたゴッ!!!ばっ!?』
『真面目にやって下さい、東さん』
『痛いよれっちゃん！今のすっごく痛かったよぅ!!いいもん、あとでレジェくんに痛いの痛いのとんでけしてもらうから！』

「……何やってんだ？あの人達」
「「……さあ？」」

これにはアスカや一誠、タイガもそう言うしかない。

『ごほん！気を取り直して～……ダイブハンガーに在住の諸君！ウル

トラマンな人や神衛隊各分隊のまとめ役や機動部隊の人、あとレジェくん一家は作戦指令室へ来てね！他のメンバーはリフレッシュルームか格納庫へＧＯ！』
『リフレッシュルームと格納庫は作戦指令室との通信が可能になっています。加えてモニターも同期されるのでご安心下さい』
『皆ハリーアップ！何でって？レジェくん謹製のゴーデス探知機がゴーデスの居場所をキャッチ、偵察に出たメンバーからの確証も手に入ったからだよー!!』

「「!!」」

東から齎された情報に、三人は驚きと同時にやる気が漲ってきた。
いよいよゴーデスとの決戦の時が来たのだ。

「よぉーし……！漸く火星でのリベンジが出来るぜ！」
「早く行こうぜ、タイガ！アスカ兄さん！」
「ああ！」
「いいか二人とも！本当の戦いはここからだぜ！」
「おう!!」

伝説の英雄とも絆を深め、赤龍帝（一誠）と光の勇者（タイガ）は決意を新たに指令室へと向かう。
守るべきもの、そしてこの星の明日のために。

〈続く〉

誓いを君に

ゴーデスの居場所が判明した――

その放送を聞いたダイブハンガー在住の光神陣営やリアス以外のオカ研メンバーらなどは所定の場所に集合していた。

正確に言うとオカ研メンバーでウルトラマンと直接関係があるのは一誠だけなのだが、他の部員がどうしてもという事でオーフィス共々レジェンドが許可。

タイミング良く帰って来た矢的も交え、指令室だけでもかなりの大所帯だ。

現在、指令室にいるのは放送室から移動してきた束と機体整備を一先ず終えた大黒柱のレジェンドを筆頭に、ゲンや矢的らウルトラ戦士、カミナやオルガを始めとした神衛隊重鎮、そしてリアスの治療に当たっているレジェンド一家医療班を除く面々とオカ研メンバー。

コジローを始めとした整備班は格納庫に、ニアや恋雪ら基本的に非戦闘員なメンバーやクロガネの一般クルーなどはリフレッシュルームで参加している。

「さてと！とりあえず主要メンバーは揃ったね！」

「リアスの容態の事もある。時間も押してる以上、二度は言わん。一字一句聞き逃すなよ」

いつになく真剣なレジェンドの表情と声色は集まった者達が気を引き締めるには申し分ない迫力だった。

その雰囲気に満足した束は指令室のモニターに世界地図を映す。

「旦那、世界地図って事はゴーデスの奴は分散してるのか、それともとんでもなく分かりにくい場所にいるって事で間違いねえな？」

「ああ、そうだ。オルガの言うように今回は後者……おそらくウチの機器を使わなければ発見出来なかった場所だ。分散、という意味ならば先日までだな」

「つーと何か？今は一箇所に集中してんのか」
「そうだよキーくん。レジェくんやジャっくんの話だとゴーデス細胞は一体の怪獣に集中させた後、その怪獣が倒されてから再度別の場所で新たなゴーデスの肉体を構築するらしいんだよね」

オルガとキタンの疑問にレジェンドと束がそれぞれ丁寧に答える。
ならばバランガスを倒さなければ……と誰もが思ったが即座にそれが間違いだと考え直す。
放っておけば毒ガスは撒き散らされ、下手すればゴーデス細胞もまたあちこちへと撒き散らす可能性もあったのだ。

「ウチ……って言うと光神陣営の機器よね。でもそれだけで見つけた場所がゴーデスの本拠地とは言い切れないんじゃ……」
「ラフタ、ラフタ、ここにいる二人の凄腕隠密機動部隊をお忘れかにゃ？」
「ま、確たる証拠は儂らではなくもう一人の方が掴んだんじゃがな」
「あ、だから今朝居なかったのか！」
「この際、どうやってそんな早く調査終わらせて帰ってきたのかは聞かないでおく」

今度はラフタの疑問に黒猫ツインズが答え、不在理由に合点がいったフーマや突入と帰還に転移装置を使っていたとは思ってもいない昭弘も続く。
しかし気になるのはそこだけでなく……。

「もう一人って誰？」

三日月が気になるのは最もだ。
自画自賛だったが確かに黒歌と夜一はレジェンド一家ベストコンビの一角である。
それ以上の調査能力を持つという人物とは何者なのか。

『それは本人から詳細含めて話してもらった方がいいだろ』
「「「「おやっさん！」」」」

格納庫から通信でコジローが口を挟む。

『今後はこいつらも参加出来るよう、別のブリーフィングルームも増設した方がいいな、レジェンド様』
「そうだな、この戦いが終わって異世界修行中に増設プランを考えておく」
『御配慮感謝します。レジェンドチーフ』
「そ……その声はぁぁぁ!?」
「紹介しよう。九極天や神衛隊とも違う、ガッツィー・グランド・ガード……通称ＧＧＧ（スリージー）の諜報部及び機動部隊所属――」
『ボルフォッグです。以後、宜しくお願いします』

コジロー共々モニターに映ったのは忍者のようなロボット。
ある宇宙での決戦後、レジェンドに救出されて以来『勇気ある、大いなる守護者』という意味の新たな名を貰い、現在はレジェンドお抱えの組織として次元間レベルで活躍中の組織から先行して着任した心強い援軍。
それが超ＡＩを搭載した『勇者ロボ』の一機である彼の正体である。

「ホログラフィックカムフラージュという特殊な機能を持ったボルフォッグと仙術による隠行が得意の黒歌、そして隠密機動元総司令官の夜一……この三名による潜入調査によって、ある場所にゴーデスが潜伏している事が確認された」
「黒歌姉様、夜一姉様……それにボルフォッグさん、お疲れ様でした」
『私は私のすべき事を成しただけに過ぎません。しかし、その労いの言葉はありがたく受け取らせて頂きます、白音隊員』

隊員？とぱちぱち目を瞬きしながら首を傾げる小猫に黒歌やカナエが可愛い可愛いと悶えていたが、夜一としのぶに拳骨貰って別の意味でも悶え出した。

『役職付きで呼ぶのはコイツの癖みたいなモンだ……けどな、同時に役職付きで名前を呼ぶのはコイツが信頼してる証拠でもある』

「そうなんですね！私も宜しくお願いします、ボルフォッグさん！」

『こちらこそ、アーシア巫女』

レジェンドの巫女という重要な立場のアーシアは、やはり巫女呼びだった。

すぐさま役職名を付けられるあたり、超ＡＩとはいえ頭脳は相当な切れ者らしい。

何名か「自分はどう呼ばれるのか」と気になっている者がいるが、事態が事態なので今回はとりあえず置いておく。

「で、気を取り直してだ。どうしてそこにゴーデスがいるって分かったんだ？」

『順を追って説明します、オルガ団長。この二つを見比べて見て下さい。まず普段の世界地図はこちら』

ボルフォッグが出した世界地図の、ある部分を映す。

「見事に海だけだな……」

「まさか……海中とか」

『いえ。続いて、この地図に光神陣営で使われている機器で作成された別の世界地図を重ねます。島や大陸等を色分けしているのですぐに違いが分かる筈です』

ボルフォッグの言う通り、普段の地図では何もない場所に島が存在しているのが確認された。

「あ、何かある」
「ミカはいつも通りの反応だな……しかしまたえらく辺鄙な所に潜んでやがる」
『この島はこの世界の時間で僅か数日前に出現しました。外見上は岩壁が多く存在し、自然の少ない島ですが……私が得た内部の映像を御覧下さい』

ボルフォッグの報告の時点で色々怪しさ爆発の島だが、彼が入手した島内部の映像で確信に至った理由が判明する。

「何だ、これは……!?」
「濁った緑色に発光しながら、蠢いてる……」
「おそらくはゴーデス細胞が充満しているんだろう。これを見越して黒歌と夜一には島表面の調査をさせたな？」
『その通りです、レジェンドチーフ。ある程度予測出来ていましたし、この身体ならばゴーデス細胞に感染することが無いという点を利用して少々奥まで調査を敢行しました。無茶をした部分は謝罪します』
「「「「!?」」」」

レジェンドとボルフォッグの言葉に当の二人はどころか殆どの者が驚きを隠せない。
彼は元々「万が一、自分が合流地点に所定の時間にいなければ先に携帯用転移装置で帰還して下さい」とまで黒歌と夜一に伝えていた。
戻れない覚悟もした上でレジェンド達に有益な情報を届けるべく、命がけの深部調査を行ったのだ。
正に勇者である。

「な……何でそこまで……！」
『先程も申し上げた通り、私は私のすべき事をしただけです。この任務は、隠密行動に優れると同時に機械の身体を持つ私にしか出来ない

と判断しました。リアス研究部長が一刻を争う容態であると聞き、絶対に無駄足を踏ませてはならず、確証を得る必要があったのです』
「「「「!!」」」」

ボルフォッグはまだ顔を合わせた事すらないリアスのためにこれだけの情報を持ち帰ったのだと知り、朱乃らはさらなる衝撃を受けた。

そして彼女らのみならず、この事に感銘を受けた者達がいる。

『ご安心下さい。ゴーデス細胞は私の身体に付着してはいませんので』
「やるじゃねえかボルフォッグ！お前のその決死の覚悟、この『紅蓮』団長のカミナ様がしかと受け取ったァ!!あとなんか俺と声似てるし」
「何で最後だけ普通のテンションになるのよ!?」
「だが、ボルフォッグがそこまでやって手に入れてくれた情報を無駄にするような真似は出来ねえ！『羅厳』メンバーは全員この島に乗り込むぜ!!」

カミナとシモン率いる超次元グレン団である。

「おいおい、カミナ達のガンメンだけでそこまで行くのは一苦労だし時間的にも厳しいだろ。クロガネで近場まで転移して一気に殴り込みと行こうぜ」
「あの時の鳥モドキの元凶か。潰していいんだよね」
「おう、一切合切容赦いらねえ。本気でブッ潰せ、ミカ」

鉄華団の団長のオルガや戦闘隊長の三日月も俄然やる気だ。
もはや彼らの腹は決まっている、と言っていいだろう。
実際、彼らをここに招集したのは突入作戦の決行とその時刻を通知するためだった。
これならば心配は無用、そうレジェンドは判断し最終確認を行う。

「今更聞くのはどうかと思うが、今回の作戦は今までとは別次元の難易度となるだろう。リアスの身体のタイムリミット、ゴーデス細胞の危険性、島のまだ見ぬ脅威、そしてゴーデスそのものの戦闘力……降りかかる困難はこれらだけとも限らん。それを承知でゴーデスとの決戦に望む者は今から俺と束からの作戦概要を聞け。事が事だけに無理強いをする気は無い」

しかし、指令室だけでなくリフレッシュルームや格納庫も含めて誰もが引く気はなく、むしろドンと来いといった雰囲気を醸し出している。

レジェンドはふ……と小さく笑って目を伏せた後、再び真剣な表情で作戦の説明を開始した。

「まずは俺達ウルトラマンが先行して件の島に上陸・突入する。この作戦において俺とレイト……ゼロは機動兵器にて参加する事になる」
「いよいよ相棒のデビュー戦か！ここ一番の大勝負、ヘマするワケにはいかねえな！」
「これは俺のネオ・グランゾンの空間転移能力とゼロのダブルオーザンライザーのトランザム時の量子化能力が関係している。俺の機体に関してはまだ出力調整が途中なため、出力の殆どを空間転移に回す事である程度の範囲の機体を纏めて目標地点に転移させられる。その為だ。現地に到着後、俺は他の突入組の援護に回る」
「んで、ダブルオーザンライザーの方はその性能もさる事ながら量子化による移動が肝なんだよね。あの感じから島内部だと機動力制限がかかりそうだけどダブルオーザンライザーならその能力のおかげである程度自由に動けるの」
「おう！その為の訓練はしっかりこなしてきたぜ！変身時は相棒を仕舞うけどよ、いざとなれば自動操縦も出来るからな！」

なお、実のところネオ・グランゾンの出力に関しての問題は相変わ

らず『異常に高過ぎる』ことであり、レジェンドが周囲への影響を危惧しているが故に調整未完の今回では出力制限している。
逆に言えば、周りへの被害を度外視するというならば万全の戦闘が可能なのだ。
ゴーデス以上に地球がエラい事になる為する気は無いが。
おまけに出力問題もウルティメイトオリジン同様色々詰め込んだ結果というから笑えない。

「そしてゲン、矢的、ジャックはミライと共にガンフェニックストライカーに搭乗し、リク、そして一誠はアスカと共にガッツイーグルスペリオルⅢに搭乗、レイトのダブルオーザンライザーに同行しゴーデスの島内部へ突入だ」
「「「了解!!」」」
「ラジャー!!……ってスペリオルⅢ？チーフ、俺そんなの聞いた事ないんですけど」
「αスペリオルだけでなく、βとγも新造のスペリオル型にしたガッツイーグルの最新鋭機だ。αスペリオルだけバージョンアップして微妙にアンバランスだったガッツイーグルスペリオルの時よりも機体全体のバランスが取れた上、全性能が格段に上昇している」
アスカはなるほどー！と感心していたが、同時にある疑問も発覚する。
「あれ？そういやサーガがメンバーに入ってない気が……ゼットやタイガ達はチーフや一誠が行くと必然的に来る事になるけど」
そう、ウルトラマンであるサーガが出撃メンバーに入っていないのだ。
レジェンドがゼットと一体化している今、単体変身可能な彼が不動の最強戦力なのだが……。

「……俺はダイブハンガーで待機だそうだ」
『!?』

これにはレジェンド以外が驚きの表情になる。
束も聞かされていなかったらしく、何で何で!?というような表情でレジェンドを見ていた。

「今まで言わなかったが、サーガは惑星レジェンド等の一部の場所以外では変身に条件がある。無理矢理変身する事も出来なくはないが、変身及びその維持にかかるエネルギーが尋常ではないため余程の場合を除き条件が揃った時のみ変身するようにさせている。そのためサーガには俺が不在のダイブハンガーで指揮を取ってもらうことにした。烈はリアスの治療と看病に付きっきりだからな」

確かに他のウルトラ戦士が変身する中一人だけ……というのもあるし、卯ノ花が身動き取れない以上指揮を代わる人物が必要にもなるので生身でも戦えて指揮も可能なサーガが残る事になったのだ。

「とはいえ、残るのはサーガだけではない。そもそもゴーデスの島へ向かうのは俺達ウルトラマンを除けば神衛隊で機動兵器を運用出来るメンバーのみだ。加えてボルフォッグな」
「「「「ええっ!?」」」」

これに声を上げたのは一誠以外のオカ研メンバーや元鬼殺隊の柱、加えてレジェンド一家の一部。

「お館様、何で私達は駄目なの!?」
「此度の戦いは少なくとも怪獣サイズの大きさの敵との戦闘が主軸となる。生身で戦うとなるとそれこそ東方不敗や悪魔将軍並の戦闘力は要るだろう。加えてゴーデス細胞を弾き返せるだけの肉体と精神力も必要だ」

蜜璃の問いに返したレジェンドの回答は正に正論。
実力的にとんでもない人物二人の名を挙げられては彼女らも黙るしかない。
だが、レジェンドの回答の理由はそれだけではなかった。
「それにゴーデスかどうかは別として、俺達不在の間に何らかのアクシデントが発生した場合、対処せねばならない事も考えての事だ」
「道理でガリバーを扱える私がメンバーに入っていなかったわけだ。ウルトラマンに神衛隊まで総出となれば怪獣ないし宇宙人が現れた時、対抗出来るのは私くらいだからな」
「そういう事だ。一応ニアも機体はあるにはあるが、彼女自身が本来は前線で戦うような性格ではない」

さらにロスヴァイセも束に及第点は出されているとはいえ、この作戦に参加出来るレベルには程遠い。
実はもう一人、C．C．以外で機動兵器運用が出来て専用機を持つ者がいるのだがその人物もあまり前線に出ようとはしない。
故に彼女しかアテに出来ないのである。

「さて……だいぶ話は逸れたがある程度必要な事柄は説明出来たな。先行する俺達ウルトラ戦士の出撃は今から5時間後、そして神衛隊は整備と補給を万全にした上で現地にて合流だ。皆十分に休息を取って体調を整えておけ。出撃後はミスの一つも許されん状況だ」

周りを見渡した後、レジェンドは宣言する。

「本作戦はこれより『ゴーデス撃滅作戦』と呼称する！作戦決行までの過ごし方は各々に任せるが、作戦に支障をきたすような事だけはするなよ。整備班、キツいとは思うが各機を万全の状態に頼む」
『ああ、引き受けた！今は俺達が仕事する時だ。レジェンド様達は

しっかり休んでヘマしないようにしておいてくれ』
「分かっている……すまんな、面倒かけっぱなしで」
『そこそこ長い付き合いだろう？慣れっこさ』

そう笑いコジローは突貫整備するからと通信を切る。
それから程なくして解散し、指令室に残ったのはレジェンドと束、それからレジェンドの膝に座っているオーフィスのみ。

「ネオ・グランゾンの調整もしたいが……さすがに休まんとマズいな、今回ばかりは」
「ここ最近徹夜続きでねぇ、束さんもちょっとだけお休みしないと……ふぁ……」
「んにゅ……」
「やれやれ、オーフィスはいつもと変わらずか。肝が座っているというか何というか……」

苦笑しつつもレジェンドは片手でオーフィスを抱えつつ、フラフラしている束の右手を左手で握り指令室を出ると、申し訳なさそうな表情のグレイフィアが待っていた。

「レジェンド様、お休み前に申し訳ありません」
「どうした、グレイフィア。何か機器か機体に不具合でも起こったか？」
「……いえ、そうではありません。リアス様の容態を私からグレモリー家に伝えたところ、それを聞いた先方からの見舞いに来たいという要望を独断で許可しました」
「構わんよ。むしろ良くやってくれた」
「え？」
「家族の心配をするのは当然だろう。作戦を控えた俺の体調や精神状態を考慮してくれた事ぐらい俺にも理解出来るさ。こちらとしてもすまんが、連中の案内はグレイフィアに頼みたい。正直、ルミナシア

はお前の妹だけあって安心なんだが、父親と兄だけは俺の頭痛の種にしかならん気がしてな……」

溜息を吐くレジェンドに、かつて仕えていたグレモリー家の年長男二名の事を思い出したグレイフィアも頭が痛くなった。

「はい、勿論でございます。それから……御心労、激しく同意いたします」

「ちなみに俺の権限で迷惑の度合いによっては問答無用で叩き出す事を許可しておく」

「かしこまりました。ルミナシアと組んで徹底します」

そう言って頭を下げたグレイフィアに、寝ぼけ気味な束が軽く声をかける。

「グーちゃんも、ちゃ～んとお休みねぇ～……」

「束様……」

さり気ない気遣いに僅かに微笑んで下がるグレイフィアを見届け、レジェンドはオーフィスを抱き抱えつつ束の手を握ったまま自身の部屋で仮眠を取る事にする。

余談だが、自室のベッドにはアーシアだけでなくまさかのスカーサハとクロエまでスタンバイしており、いつも以上にすし詰め状態になってしまった。

ついでに例の如くオーフィスは寝ぼけつつも服を脱ぎ捨て、なんとスカーサハまでそれに倣ってしまい大変な事になった事も付け加えておく。

束とクロエは別に脱がなかったし、アーシアも普通の（？）開け具合だったのは僥倖というべきか。

ほんの僅かな、安らぎの時。

☆

先行部隊出発の時刻。
神衛隊やオカ研メンバー、レジェンド一家以外にもソーナ達生徒会やアザゼル、そしてサーゼクスを始めとするグレモリー家も格納庫に集合していた。
そこには移動式のベッドに横たわり苦しそうなリアスもいる。
彼女自身がどうしても見送りたい、と卯ノ花に頼んで何とか許可されたのだ。
しのぶや涼子らによってベッドで格納庫にやってきたリアスを見たジオティクスやサーゼクスの動揺は尋常ではなく、何度も大丈夫なのかとしのぶと涼子に問い詰めてはヴェネラナとルミナシアに本気の腹パンを叩き込まれ、強制的に黙らされていた。
黙って心配そうにリアスの片手を握っていたミリキャスは良い子である。
そして、遂にウルトラ戦士達が姿を見せる。
まず、ゼットを伴って現れたレジェンドはとある科学者の色違いの服装に着替えていた。
これを見た黒歌が「これもうレジェンド・シラカワにゃ」とか言っていたが、乗機も乗機だし納得である。
強者感全開と断言しよう。
ゲンや矢的、ジャックにミライ、そしてアスカは自分達が所属していた防衛チームの服装だ。
特にゲンは志半ばで亡くなった同僚達の思いを背負う意味で一際闘志に漲っている。
レイトはガンダムマイスター用のパイロットスーツを着用。
機体が機体だけにグラハムとお揃いの……と思いきや、赤が混じったり胸部にはゼロのカラータイマーと同じ形状の装飾が施され、ヘルメットは銀色。
まさに『ウルトラマンゼロ仕様』な特注品だ。
リクはというと彼は普段と同じジャケット姿。

だが元々遊撃隊以外では防衛チームに所属していた事もなく、専用機もまだ無い彼は逆に色々着飾るよりそのままの方が実に彼らしい。
そして、トライスクワッドと共に現れた一誠はダイブハンガー縁のＧＵＴＳ隊制服。
かつてウルトラマンティガであったマドカ・ダイゴと、同じチームのヤナセ・レナが恋人関係にあり、今の一誠とリアスに似た部分が多いからと当時のＧＵＴＳ隊で隊長のイルマ・メグミと同格だったレジェンドの許可を得て着用させてもらう事になった。
彼らが勢揃いした光景、正に壮観。
皆が見守る中、リアスの姿を確認した一誠とタイガは小走りに駆け寄る。

「部長……」
「……リアス」
「イッセー……タイガ……」

弱々しい声ではあるがしっかりと二人の名を呼び、顔を向けるリアス。
何とか右手を少し挙げると一誠がその手を握り、それに被せるようにタイガも握る。

「良く似合ってるわ……カッコイイわよ、イッセー……」
「部長……俺、いや俺達は必ず勝ってきます！」
「ええ……信じてるわ……タイガ、イッセーをよろしくね……」
「ああ！俺達とイッセーなら、ゴーデスに負けたりはしない！だからリアスも頑張れ！」

互いに励まし合う三人を見て、サーゼクスを始めとするグレモリー家の面々は瞼が熱くなる。
そしてそこに思いもよらぬ声が響き渡る。

「水臭いじゃないか、俺を置いていくなんて」

ハッとその声がした方向に向くと、そこには一人の男が普段と変わらぬ佇まいで立っていた。

「ガイさん！」
「オーブ先輩！」

そう、クレナイガイことウルトラマンオーブ。
彼もまたゴーデスとの決戦と聞き、急遽京都からダイブハンガーへと駆けつけたのである。

「ガイ、お前も来てくれたか……！」
「遊撃隊隊長のゼロさんや先輩のダイナさん、それに後輩達が命がけの戦いに行こうとしているのにこの星にいて一人だけ遊んでられませんよ、レジェンドさん」

レジェンドとガッチリ手を組み、レイトやアスカからは笑顔で肩を叩かれるガイ。

「待ってたぜ、勇者！」
「ガンフェニックストライカーの方は宇宙警備隊メンバーだ。っつーわけで、お前は俺やリク、一誠と一緒にガッツイーグルの方な！」

「了解……っと、ラジャー！」

総勢１３名……レジェンドはゼットに、一誠はトライスクワッドの誰かに変身するとしても凄まじいメンバーだ。

ここにさらに神衛隊やボルフォッグが加わる。

誰もがそのメンバーの豪華さに希望を抱く中、レジェンドはサーガと話し合っていた。

「先輩、言われた通りこちらも打てる手は全て打った。あとは間に合うかどうか……」

「いや、十分だ。良くやってくれた」

レジェンドは優しい笑顔でサーガを労い、ポンと肩を叩く。

「ダイブハンガーを頼むぞ、サーガ。こちらは意地でも勝ちをもぎ取って帰って来る」

「わかった、任せてくれ」

頷きつつ再度肩を叩くと、レジェンドは乗機であるネオ・グランゾンに向かいコックピットに入る。

それを皮切りにレイトらもそれぞれの乗機へと搭乗していくが、ダブルオーザンライザーのコックピットハッチを閉じる前にレイトが叫ぶ。

それは、かつて一体化したタイガ・ノゾムが決戦に向かう際にレイト――ゼロへと言った言葉。

「よぉーし!!

勝ちに行こうぜ！皆!!」

「「「

衛隊とボルフォッグ。
既にコックピットハッチを閉じていたレジェンドは目を伏せてフッと笑い、自身の中で他の者達と同じように返事をしていたゼットへ告げる。

「ゼット、一足先に出撃してあいつらを待つぞ。今からは気を引き締めろ。油断して勝てる相手ではない」
『了解でございます超師匠！』

ネオ・グランゾンは重力・空間操作を得意とするだけありカタパルト無しで発進する事も容易い。
先行出撃メンバー以外が一旦格納庫から出たところで、レジェンドはいよいよネオ・グランゾンを起動させる。
その双眸に光が灯り、動き出してからアーシアやオーフィスらが見守る方向へ機体を向け、ネオ・グランゾンは人差し指と中指で敬礼のような動作を行う。
――行ってくる――
そんな声が聞こえてくる気がして、アーシアは心の中でいってらっしゃいませ、と思いつつ無事を願う。
オーフィスはいつの間にか外に出ていたゴジラを抱き抱えつつ、ゴジラの片手を掴んで振らせている。
ゴジラはウンザリ顔だが振り払わないあたり、彼も多少なりとも心配しているのだろう――

（レジェンドが負けるわきゃねぇだろ）

――と思ったが良い意味で心配してなかった。
ネオ・グランゾンが転移準備の為に先行発進したのに続いて、レイトの駆るダブルオーザンライザーがカタパルトに乗り、そしてガンフェニックストライカーとガッツイーグルスペリオルⅢも発進準備を済ませる。

「ＧＮシステム、リポーズ解除！プライオリティをモロボシ・レイトへ！」
『ダブルオーザンライザー、リニアカタパルト接続完了。射出タイミングをレイト様へ譲渡いたします』
「了解！モロボシ・レイト！ダブルオーザンライザー、出るぜ！」

クロエのオペレートを受けつつ、待ちに待った愛機の初発進で気合い十分なレイトの返事と共に、ツインドライヴを輝かせながらダブルオーザンライザーがダイブハンガーから出撃する。
それに続くようにミライがメインパイロットを務めるガンフェニックストライカー、そしてアスカがメインパイロットのガッツイーグルスペリオルⅢも同時発進。
その際、発進前にはそれぞれが見守る者達の方へ向き力強い笑顔とサムズアップをしながら。
ダイブハンガーから少し離れた上空で待機中だったネオ・グランゾンと合流した３機はレジェンドから転移の為の指示を受ける。

「各機、本機を先頭にスクエアで陣形展開。ガンフェニックスとガッツイーグルをそれぞれライト・レフトに。ダブルオーザンライザーはバックスだ。これはあくまで転移用の陣形であって戦闘陣形ではない。転移後は俺が島への先制攻撃を行い、その後はレイトとポジションを替えて３機で突入しろ。援護は俺が３機分纏めて引き受ける」
「「「「了解!!」」」」
「では行くぞ……ウルティメイト・カバラ・プログラム発動、各種術式展開。続けてＤＣＷエクスプローラー起動。転移座標入力及び転移用空間の生成・安全を確保。これにより術式の一部を省略し――」

レジェンドは次々と難しい単語を早口で読み上げていくが、途中でゼットやフーマは頭から煙が出ていた。
ぶっちゃけアスカや一誠、タイガらも理解出来ていない。

「転移先をゴーデス島近海上空に指定。対象は本機並びに入力した周囲の３機……ゴーデスめ、こちらの転移に空間レベルで妨害を仕掛けてくるとは既にこちらの動きに気付いたか。だが甘い……！このネオ・グランゾンをただのアーマード・モジュールだと思うなよ……！」

何らかの妨害があったらしいが、そんなものお構い無しに転移準備を済ませるレジェンド。

「行くぞ……！向こうに着くと同時に戦闘開始だ。抜かるなよ……！」

レジェンドがそう言うと、ネオ・グランゾンと残りの３機は眩い光に包まれてその場から姿を消す。

遂に邪悪生命体ゴーデスとの決戦の火蓋が切って落とされた。

〈続く〉

突入！ゴーデス島!!

レジェンド達を見送った後、ダイブハンガーでは整備班が急ピッチで作業を行っていた。
束も束で『あるもの』の完成を急ぎ、クロエもその手伝いで奔走しており右往左往。
パイロットの面々は準備を終えていつでも出撃可能な状態になっており、クロガネの艦長であるオルガは艦長席で作戦書類に目を通し戦術の構築に専念。

「おやっさん！こいつはどうします!?」
「そいつはエネルギーバイパスの確認とブースターの最終チェックだ！向こうのやつは機体より武器を見ろ！ブラックゲッターは俺がやる！」
「「「「うぃーッス!!!」」」」

「クーちゃん、こっちは私が見るから『アレ』の方頼んでいい？この機体の最大の武器だからね！」
「かしこまりました、束様」

「クロガネのドリルなら地中潜行が可能だが、これに書いてある通りでいくなら島の地表が旦那の機体にある程度ぶっ壊されてるわけだ……クロガネ自体は外に待機して退路の確保をしておくか、それとも機動兵器の発進を遅らせてまずはクロガネで少しでもぶち抜くか……旦那の言う通りミスは出来ねえぞ、どうするオルガ・イツカ……！」

それぞれが己の出来る事をしている中、歯がゆい思いをしているのは出撃した一誠と予断を許さない体調のリアスを除くオカ研メンバーや生徒会メンバー、そして元鬼殺隊の面々や一部のレジェンド一家だ。

アーシアやしのぶはリアスの治療に当たっている事もあり、レジェンド一家入りして間もないロスヴァイセや、神衛隊に入隊したはいいがまだ機体が無い杏寿郎などは特に己の無力さを実感している。
万が一に備えて作戦指令室にはいるが、正直自分達がここにいても何も出来ないという思いから指令室全体が暗い雰囲気を醸し出していた。

「よもやよもやだ！お館様やゼット殿、グラハム教官殿……皆が決死の覚悟で巨悪との戦いへと挑もうとしているのに何も出来ぬとは！元柱として不甲斐なし！穴があったら入りたい!!」
「パ～ム～……」
「むしろその穴っぽいところに突っ込むのよね、レジェンド様達……」
「おい胡蝶姉、お館様達が向かったのは穴ではなく島だ。自分で言って何故顔を真っ赤にする」
「お館様大丈夫かしら……うぅ～……」

元柱のうちカナエは平常運転。
パム治郎でさえ少々落ち込み気味なのに。
オカ研や生徒会は一言も発さず、暗い雰囲気になっているし。
そんな中、いつもと変わらぬ様子で声を発したのは機動兵器運用可能なメンバーで唯一残ったC．C．だった。

「あいつが決めた事に今更グダグダ言ったところで仕方ないだろう？第一言った本人は既にこの場にはいないし、緊急の要件でもないのに通信を繋ごうものなら、それこそあいつらを危機的状況に陥らせるかもしれんからな。あいつに言われた通り、お前達は有事の際に備えて待機してればいい。それがあいつだけでなく全員の為になるだろうよ」
「あの……C．C．さんはレジェンド様が心配ではないのですか？」

朱乃の質問は彼女だけでなくオカ研や生徒会らも気になったこと

だが、C．C．は紅茶を飲みながら平然と答える。
「心配じゃないわけじゃないが、これでもここにいる連中の中ではあいつとの付き合いの長さは上から数えた方が早いんでな。経験上、本気になったあいつが敗けるビジョンがまるで思い浮かばないんだよ」
「え……」
「何なら今のあいつらがどんな状況にいるか見てみるか？今のままじゃ安心出来ないんだろ？」
「「「「見れるんですか!?」」」」
「こんなものピザが焼けるのを待つより簡単だ」
相変わらず例えがピザな彼女だが、その言葉に嘘はなく各種設定や出力準備をひょいひょいやっていく。
そして映し出されたモニターには……
「な……!?」
「そ、そんな……!?」
「……相手に先手を打たれていたらしいな」
周りが絶句する中、C．C．だけは冷静のまま。
彼女らの目にした光景……それは無数の宇宙球体スフィアによって包囲されている、ネオ・グランゾンを始めとした先行部隊の姿だった。
☆
――ゴーデス島近海上空――
「火星での出来事から予想は出来ていたがな。根源的破滅招来体が絡んでいるかまでは分からんが、空間レベルでの妨害干渉をされていた時点で気が付くべきだったか」

「チーフ！周囲一帯、スフィアの反応だらけです！」
「こいつら……！」
「んの野郎……！利害一致したからって今回は空気読めよ！」

転移後いきなり戦闘、は予想していたが完全包囲までは想定外としか言いようがないだろう。
そう、レジェンドを除いて。

「心配せずともネオ・グランゾンの歪曲フィールドとＧ・テリトリー、それにダブルオーのＧＮフィールドの合わせ技で連中の攻撃は完全にシャットアウトされているし、奴らが接近する事さえ不可能だ。とは言ってもこの状態を維持して包囲網を強行突破するのも相当困難だがな」
「でもこのままじゃ、部長が！」

さすがにこの状況に一誠は焦り声を荒げるが、レジェンドは落ち着いたまま驚くべき事を告げる。

「このスフィアどもは俺が殲滅する。その後、ゴーデスの島に報復がてら一発デカいのをブチ込む。そうすれば突破口の１つや２つ出来るだろう」
「「「「……は？」」」」

レジェンドがそう言うと、ネオ・グランゾンの周囲に無数のワームホールが出現する。
アスカやジャック、レイトなどはスフィアの増援かと警戒するが何かが現れる様子は無い……と思ったのも束の間、いつの間にか光球を胸部の前に出現させていたネオ・グランゾンが、その光球からビームを無数のワームホールへと連射した。

「ワームスマッシャー!」

実は先のワームホールはネオ・グランゾンによって作られたものであり、空間を超越して攻撃を行う為のものだった。

G・テリトリーとGNフィールドの多重バリアを隔てたネオ・グランゾンからの容赦無い攻撃は全包囲状態だと驕ったスフィア達を逆に全方位から葬っていく。

他の3機のパイロットが唖然とした表情で見ている中、瞬く間にスフィアを駆逐したネオ・グランゾンはさらにゴーデス島に接近する。

その時、思いもよらぬ存在が現れた。

キシャアアアアア!!

「超師匠ぉぉぉ!?何かちっこい翼竜というかマガバッサーの廉価版みたいのがものっそい大量にいぃぃぃ!!」

「あれは……!」

超古代怨霊翼獣シビトゾイガー。

ルルイエの遺跡でかの闇の三巨人（主にカミーラ）によって使役されていた怪獣が、何故かゴーデス島から多数出現したのだ。

（何故ゴーデスの島から奴らが出てくる……?まさかとは思うが……いや、それは後回しでいい。今の優先すべきことはゴーデスの討伐だ。奴らが排除対象なのはどのみち変わらん……!）

何かに気付くレジェンドだが、すぐさま思考を切り替え十分な距離をとった状態でネオ・グランゾンは静止し、右手を振るい自機の前方へワームホールを連なるように出現させる。

今度は何を、と若干ワクワクしている先行部隊と、あくまで本能で向かって来るシビトゾイガー。

「何が向かって来ようが、やるべき事に変わりはない……！」
先程のワームスマッシャー同様、光球を胸部から射出し――
「ディストリオンブレイク！」
光球から高出力のビームをワームホールへと発射。
それはワームホールを通る度に増幅され、シビトゾイガーの大群に直撃する頃にはそれこそとんでもない極太のビームへと変貌していた。
そしてネオ・グランゾンもバランスを取るべくスラスター出力を上げ、その場から自機が後退しないようにする。
ディストリオンブレイクはシビトゾイガーの大群をスフィア同様に一瞬で一体残さずチリにしつつ、ゴーデス島の地表に直撃し大爆発と共に巨大な空洞を作り出す。
「……すっげ……」
「そういえばアザゼルはシミュレーターの件で思い出したくないとか言っていたが……」
「……絶対、アレにやられたよな」
『納得……』
一誠、ドライグ、トライスクワッドはアザゼルの言っていた事を理解してしまった。
同時にレジェンドが『まだ調整が不十分』みたいな事を言っていたのを思い出し、さらに真っ青になる。
いや、ネオ・グランゾンは蒼いけど。
そうこうしているうちに、ネオ・グランゾンから3機に対して通信が入る。

「ダブルオー、ガンフェニックス、ガッツイーグルの3機、聞こえるか。あの空洞ではなく今から指定するポイントからゴーデス島へ突入しろ。あそこまで派手にやられて警戒しないはずがあるまい。現に中に残っていただろう連中の反応が多数こちらに向かって来ている。俺は当初の予定通りここで奴らを迎え撃つ。そちらは任せたぞ」
「ラジャー！行こうぜ皆！」
「おう！前衛は俺が引き受ける！そっちの2機は俺のフォローを頼んだぜ！」
「了解！」

普通ならば不安になるところだが、レジェンドの駆るネオ・グランゾンの圧倒的な戦闘力でその懸念は吹き飛ばされ、残る3機に乗っているレイト達もそれに勇気づけられ気合を入れ直す。
ダブルオーザンライザーを筆頭に、ガンフェニックストライカーとガッツイーグルスペリオルⅢもそれに続く形で指定のポイントからゴーデス島へと突入していく。
それを見届けたレジェンドは、再び迫りくるシビトゾイガーの大群を単身迎え撃つ。

☆

ネオ・グランゾンの戦闘を一部始終見ていたダイブハンガーの面々はその圧倒的戦闘力に唖然としていた。
あれでまだ出力調整が不十分……武装の威力が高過ぎるあまり使用制限しているというのだから絶句する他ない。
なお、別の場所で見ていたアザゼルとサーゼクスは以前の記憶がぶり返してしまい精神崩壊しかけているが、周囲の者達も別にいいかと放っておいた。
「何あれ日番谷隊長の氷輪丸の天相従臨よりタチ悪そうなんだけど。例えるなら一護と朽木隊長と日番谷隊長のハイブリッドなんだけど」

「日番谷冬獅郎を知っている私としては例えが非常に分かりやすい」
「……人というか怪獣がゴミのように蹴散らされておるな」
「一方的過ぎる、とはこの事か」
「……正に鬼畜性能」

増援に現れたシビトゾイガーはネオ・グランゾンのグラビトロンカノンでまとめて壊滅。
乱菊やハリベル、スカーサハの驚きや、必死に蒼き魔神へと立ち向かうシビトゾイガーに同情さえしてしまっている小芭内と小猫の呟きにも納得出来てしまう。
その後、なんとかつて８０、三日月、巌勝が相対したマガバッサーの亜種が出て来たが……

『貴様をネオ・グランゾンの支配する領域へ引きずり込む……！』

Ｇ・テリトリーの出力を上昇させて範囲も広げ、ネオ・グランゾンは両手に重力波エネルギーを集束して巨大な重力腕を形成、それでマガバッサーを鷲掴みにしＧ・テリトリー内へと強制的に引きずり込み、片手での鷲掴みから両手で押し潰すように挟み込む。

『跡形も無く潰れろ……！ヴァニシングプレッシャー！』

ネオ・グランゾンをも優に上回る巨体のマガバッサーさえ、Ｇ・テリトリー内で重力腕によって完全に叩き潰され大爆発、何重もの重力によって木っ端微塵にされ破片さえ残らなかった。

「……師範と三日月さん、矢的先生が三人がかりで倒した相手を瞬殺……」
「もうイジメよね、あれ……」
「ブ、ブラックホールクラスターとかは!?」
「今の出力調整不十分のネオ・グランゾンが使ったら突入したレイト

達どころかこの星の約七割が無くなるだろうな」
「「「「……」」」」
「ごめんなさい」

黒歌が興奮気味に口にした言葉はC．C．の冷静な返答を受けて皆からジト目で見られ、黒歌は素直に謝った。
アレは興味本位でぶっ放すような代物ではない。
というか、今使っている武装もリアルタイムでレジェンドが出力調整し続けながら使用している為、尋常ならざる負担がかかっているのだが、それを知っているのは束を始めほんの僅かな人物だけだ。

「ともあれ、これでハッキリしただろう？お前達の心配はともかく、今独断で勝手な事をすればあいつの邪魔になる事が」
「……確かに、その通りですわね」
「ええ……私がしのぶに言ったことだったわ。『おかえりなさいって声をかけてくれるだけでいい』って。待つのも大事な仕事よね」

朱乃やカナエだけでなく他の者も納得し、帰って来た彼らを快く出迎えられるよう準備しておく事にしたらしく、やれやれとC．C．も溜息を吐く。

「全く……世話の焼けるガキ共だ」
「吾から見れば、お主もまだまだその部類だがな」
「煩いぞロリババア」
「誰がロリババアだ!?」

ふんがー！と怒るスカーサハを気にもせず、紅茶を悠々と啜るC．C．。
レジェンド一家の大黒柱と古参のおかげで、暗かった指令室も少しずつ元の明るさを取り戻していく。

☆

レジェンドの駆るネオ・グランゾンが外で無双している頃、ダブルオーザンライザーとガンフェニックストライカー、ガッツイーグルスペリオルⅢは島の最深部を目指して内部を猛進していた。

「レジェンド側に全部向かっていったわけじゃないってのは分かってたけどよ！随分と残ってたもんだな！」

迫りくるシビトゾイガーを出力調節したＧＮソードⅡブラスターとＧＮソードⅢライフルモードのビームで薙ぎ払うダブルオーザンライザー。

その撃ち漏らしをガンフェニックストライカーとガッツイーグルスペリオルⅢが撃墜し、足を止める事なく最深部へと突き進む。

「束博士がボルフォッグからの情報提供で導き出したこの島の最深部までは現在地からそう遠くない筈だ。いよいよゴーデスとの決戦……改めて覚悟を決めろ、お前達!!」

「了か……前方に大型の熱源反応！これは……」

グギャアァァオオオッ!!

「詳細緊急検索……！ドキュメントＵＭＡにデータ有り！火炎火龍ゲルカドンです！」

「僕が戦ったのとは色が違うな……」

「あれは堕天使がゴーデス細胞によって怪獣化した時の個体と同じタイプだ！今チーフから連絡があったが、あっちにはマガバッサーが出たらしい。何もさせずに粉砕したらしいが」

「いやそれおかしくね!?亜種とはいえ魔王獣だろソイツ!!」

「さすがレジェンドさん、魔王獣など歯牙にもかけないとは！」

宇宙警備隊組やアスカ、ガイがそんな会話をしているとレイトから通信が入ってくる。

「こいつは俺が引き受けるから先に行け！この地形じゃ空中戦主体の戦闘機は全力で戦えねえだろ！」

「レイト！やれるのか!?」

「ヘッ！俺と相棒は伊達じゃねぇ！こいつをブチのめして華々しく相棒のデビュー戦を飾ってやるぜ！早く行けって！」

「おう！気をつけろよレイト！」

「先輩！武勇伝期待してますよ！」

「任せろ一誠！あとでリアスやタイガ達共々じっくり語ってやるからよ！」

不安がないわけでは無かったが、自信満々のレイトに背中を押される形で２機の合体戦闘機はダブルオーザンライザーにゲルカドンの相手を任せ、最深部へと飛び去っていく。

「こうもあっさり見逃すとはな……よっぽどお前らも自信があるのか、それともあいつらをナメてんのか知らねえが、一つだけ言っておいてやる」

ダブルオーザンライザーのＧＮソードⅢをゲルカドンに向けレイトはいつもの調子で吼える。

「俺と相棒が本気になったら、ウルトラギャラクシーが震撼するぜ!!」

言い終えると同時にダブルオーザンライザーは右手にＧＮソードⅢを、左手にＧＮバスターソードⅡを持ってゲルカドンへと突撃する。

対するゲルカドンは火炎弾を吐き応戦するが、ダブルオーザンライザーはバレルロールを織り交ぜた高機動回避を行いつつ急接近し、ゲルカドンの翼部分へすれ違いざまに斬撃を叩き込む。

「ガギャアアアア!?」

「こんなモンはまだ序の口だ!・フンッ!・」

レイトは手早くコントローラーを操作し、ダブルオーザンライザーをゲルカドンへ向けるとＧＮバスターソードⅡをマウントし直し、代わりにＧＮソードⅡロングを左手に持つ。

そして一度加速した後、敢えてブースター等を切り自由落下しつつＧＮソードⅡロングの刀身をワイヤー射出し、ゲルカドンへと突き刺す。

当然ゲルカドンは苦痛の叫びを発するもレイトは気にせず、突き刺さった刀身を軸に空中ブランコか振り子のようにぶら下がりながら、こちらもまたＧＮソードⅢをＧＮソードⅡブラスターに持ち替えて連続射撃を撃ち込んでいく。

「グワァァァアアアァウ!!」

「どうだ!?一回り以上小さい相手にボコボコにされる気分は!・戦いってのはナリだけで決まるもんじゃねえんだよ!・次でシメだ!!」

そう言うとレイトはＧＮソードⅡロングの刀身を戻して再マウント、ザンライザーからＧＮバスターソードⅢを両手に一振りずつ持ち、ＧＮドライヴ搭載機最大の特徴ともいうべきシステムを起動する。

「トランザム、発動!!」

Ｔ　Ｒ　Ａ　Ｎ　Ｓ　―　Ａ　Ｍ

機体内部に蓄積されていた高濃度圧縮粒子を全面開放する事で一定時間スペックの３倍まで出力を上昇させるトランザムシステム。
このシステムの発動の際、機体が赤く発光するのは関係者各位には有名な話であり、３倍と赤が組み合わさってアムロが反応してしまったのは言うまでもない。
それはそれとして、このトランザムシステム発動時に名称が別のもので呼称される機体が存在する。
ダブルオーライザーだ。
トランザムを発動したその機体は『トランザムライザー』と呼ばれ、それに肖ってレイトのダブルオーザンライザーはレジェンドと束によって『トランザムザンライザー』と呼称される事となった。
閑話休題。
トランザムザンライザーは桁外れの機動性を発揮し、手にしたＧＮバスターソードⅢでゲルカドンを抵抗させぬまま切り刻んでいく。
どうにか反撃しようとした瞬間、ゲルカドンの右腕が斬り落とされた。
何故だ、とばかりに凝視したゲルカドンだがトランザムザンライザーを見ると驚くべき事が発覚する。
ザンライザーから伸びたサブアームのようなもので、片やＧＮソードⅡを連結させた物を振るい、片やＧＮビームサーベルを振るっていた。
これがトランザムに並ぶダブルオーザンライザーの奥の手、通称隠し腕ギミックである。
そのコンセプト故に武装が多くなり、それらの殆どが近接戦闘用の武器であったダブルオーザンライザー・セブンソード／Ｇ。
スペックを最大限に発揮する為にどうしたらいいかと試行錯誤した結果、束はザンライザー側にサブアームを見た目では分かりにくく搭載することで外見的にも性能的にも見事な機体と相成ったわけだ。

「ブラックホールが吹き荒れるぜ!!」

高難度の訓練を重ねていたとはいえ、初の実戦だというのに恐るべき技量を見せつけるレイト。

決め台詞の一つを叫びつつ、本体の両手とザンライザーのサブアームを器用に使いこなしゲルカドンの各部位を斬り落とす。

トドメと言わんばかりにＧＮバスターソードⅢをゲルカドンの胴体に突き刺すが、ゲルカドンは死なばもろともの覚悟でその状態からトランザムザンライザーへと火炎を吐き出した。

……だが。

「!?」

火炎が直撃する直前に突如、トランザムザンライザーが粒子となって消え――

「うおおおおっ!!」

いきなり背後に現れたトランザムザンライザーが連結させたＧＮバスターソードⅢを振り下ろし、ゲルカドンの頭頂から真っ二つに斬り裂いた。

何が起こったか分からぬまま、断末魔の声を上げる間もなくゲルカドンは爆散。

トランザムザンライザーの最大の特徴、レジェンドや束の言っていた量子化である。

簡単に言ってしまえばワープ能力のようなものだが、ＧＮドライヴ搭載機でもこれを行えるのは限られた機体のみの為、詳細は未だ分かっていなかったりする。

もっとも、ウルトラ戦士もひょいひょいテレポーテーションするのであまり気にしてはいけない。

「へ……たかがゴーデスの送り込んだ再生怪獣如きが俺と相棒を倒そうなんざ、２万年早いぜ!!」

レイトの決め台詞と共に、トランザムを解除したダブルオーザンライザーがゲルカドンがいた場所に向けて逆ピースを決める。

ゼットがこの場にいたら歓喜のあまり発狂しそうだ。

「さてと……俺らも後を追いかけるか、相棒！」

余韻もそこそこに、ダブルオーザンライザーは２機の戦闘機を追って島の最深部へと進んでいく。

禍々しいゴーデス細胞とは違う、淡く輝く緑の粒子を周囲へと撒きながら。

☆

ダイブハンガーではネオ・グランゾンに続くダブルオーザンライザーの活躍で、生徒会メンバーのゼロファン達が黄色い声を上げ、ダブルオーと相対した事のあるグラハムもガッツポーズでレイトを称賛していた。

そこは良いのだが……

「ズールーいーにゃー!!」

「黒歌姉様、煩いです」

「全くじゃのう。レジェンドが活躍しておるんじゃし我慢せんか」

「私だって！私だってぇぇぇ！ソウルゲインがあれば同じくらい活躍出来るにゃー!!」

ソウルゲイン大好きお姉さん、黒歌の駄々である。
ダダじゃないぞ、駄々だ。

「はーい、そこのにゃーにゃー黒にゃんこっちカモン」
「ふぎゅおっ!?」

突然現れた束に尻尾をむんずと鷲掴みにされ引きずられて行く黒歌はちょっぴり可哀想だった。
何で束が黒歌を連れて行ったかは不明だが。
出撃準備が完了し、クロガネの発進準備も進められていくダイブハンガーだったが、彼らは気付いていなかった。

駒王町にある、仮住居が狙われている事に。

〈続く〉

狙われた仮住居

ゴーデス島の上空ではネオ・グランゾンが追撃に警戒しつつ待機していたが、マガバッサーの撃破以降はピタリと止み、未だ増援を送り込んでくる気配さえ無い。

「……打ち止めですかね？超師匠」
「わからん。戦力的にあの程度ではないと思うが……誘い込んでいるのか、それとも中に突入したあいつらが厄介でそちらに戦力を割いているのかのどちらかだろう。俺達も突入したいのはやまやまだが、突入したところを挟み撃ちにされるのだけは避けたい。何せ島内部となれば現状ネオ・グランゾンの武装の殆どが威力のあまり使えなくなってまともに戦えん」
「なんというか、味方として強過ぎても色々困りもんでございますね」
「全くだ。お前も中々分かってきたな、ゼット」
「あざっす！」
「俺達はこのまま敵味方双方の増援に備えるぞ。敵の増援には迎撃、神衛隊らが到着すれば突入支援だ。俺は少し気になるところを探ってみる。レーダーの方は任せたぞ」
「了解！シミュレーターのおかげでバッチコイでございますよ！」

何気にしっかりコンビしているレジェンドとゼット。
ゼロを師匠とすれば、レジェンドはゼットにとって保護者的な立場に見える。
シミュレーターでのゼットの成績を逐一報告されているレジェンドは安心してある事を探る。

（……シビトゾイガー、奴らがゴーデスに協力するとは考え難い。そもそもアレはカミーラに使役されていたはず……となればこの世界にもルルイエが沈んでいてゴーデスはそこの情報を元にシビトゾイガーをゴーデス細胞で再現したということか？）

レジェンドはゴーデスと接点のないシビトゾイガーがゴーデス島から出て来た事に疑問を持っていた。
スフィアや根源的破滅招来体は火星でゴーデス細胞となったゴーデスの逃走を支援していたから手を貸すのは理解出来るが、超古代文明絡みのシビトゾイガー……というよりその主はどちらも同胞でなければまず手を組まないような連中だ。

（もしくはカミーラないしそれに相当する何かが存在していて手を貸している……いや、存在しているかはともかくまともな思考ならばゴーデスに協力などしない。協力しているスフィアにせよ根源的破滅招来体にせよ、連中も共通の敵に対する一時的な停戦みたいなものだからな。特にグランスフィアが存在しているとすれば最終的な目的がだだ被りしている……少なくとも現時点では情報が少なすぎるか）

そこまで考えてそちらの方は中断し、レジェンドはもう一つ……ゴーデス島について外部から調べる事にする。
と、そこでゼットが声をかけた。

「超師匠」
「何か変化があったか？」
「変化っちゃ変化なんですが……島の方じゃなくてこっちに反応があるんですよ。どっかでみたような地形図……何だっけなコレ」
「ゴーデス島ではない？どこだ……!?」

ゼットが指差した複数のレーダーに映る地形図の一つを見たレジェンドは驚愕の表情を浮かべた。

「ここは……駒王にある俺達の仮住居だ！」

「何ですとぉっ!?」

☆

少しだけ時を遡り、ダイブハンガー。
旗艦たるクロガネを始めとした搭載した各機体の準備が整い、遂に発進する事になった神衛隊とボルフォッグ。

「おやっさん、あとはコイツだけですが……」
「コイツに関しては操縦系統がゴッドマスターとかとほぼ一緒でパイロット不在じゃ出来ん。束が連れてくるとか言ったが……」
「バコさーん!!」

整備班の一人とコジローが話していると、黒歌を引きずりながら笑顔の束が手を振りながら走ってくる。
相変わらず科学者とは思えぬスペックで。

「お待たせぃ！連れてきたよ！」
「そりゃよかった……と言いたいが大丈夫なのか？その娘は」
「うう……酷いにゃ……頭ならともかく尻尾掴んでズリズリゴツンゴツンしてるのに全く気付いてくれないにゃ……」

しくしくと泣く黒歌を立たせて埃を払う束。

「時間押してるからねー。押し問答始まる前に乗せたかったんだよ。そうじゃないと調整出来ないし、時間的にあとはバコさん任せになっちゃうから」
「調整？乗せ？」
「束さん頑張ったよー。これ含めて急遽いくつかの機体まとめて仕上げたからもうくったくた。補給したレジェくん成分使い切っちゃったからまた補充しないと」

頭にクエスチョンマークを乱舞させながら、ちょいちょいと束の指差した方向を向くと、黒歌は一瞬ポカンとしたあと大絶叫。

「んにゃあああああ!!」

「黒にゃん煩い」

「だ……だってこれ……これぇぇぇ!!」

その時、突如ダイブハンガー全体に警報が鳴り響く。

「はにゃ？」

「このクソ忙しいタイミングでどうした!?」

「鳴り方がパターンB……ダイブハンガー（こっち）じゃないね。問題が起きてるのは仮住居の方みたい。ちょっと待って」

束が空間ディスプレイを発生させ、素早く指をパネルに走らせていく。

ポチッとな、という言葉と共に出力された映像には、結界で防御されている仮住居が異形の存在から攻撃を受けている光景だった。

「あれって……！」

「今までのタイプとは違うが、どことなく雰囲気が似ているな。明確な違いとしちゃ『女型』ってところか」

「バコさんの言う通り。あれは――」

☆

同じくダイブハンガーの指令室。

そこにも映された光景と、それに映っていた存在に杏寿郎やカナエ、しのぶ、そしてオカ研メンバーも戦慄する。

何故ならば、その存在は……

「間違いない……！奴は『鬼』だ!!」
「「鬼?!」」
「女性型もいるんですね。ゴウエンマとかいうのが比較的人型でしたから人型か異形型かぐらいしか種別はないのかと思ってました」
「無惨が作り出したものにせよ、あのようにこの世界に現れているものにせよ、鬼に私達の常識なんて通用しないわ。今までの『鬼』同様、こちら側に現れるようになった鬼に会話は無意味と思った方がよさそうね」

元鬼殺隊の５人は鬼が攻めてきた事で一気に緊張感が高まっていく。
今は結界で防御出来ているが破られないとも限らないし、放置すれば最悪町の方へ向かう可能性もある。
先程までとは一転して緊迫感溢れる状態となったダイブハンガーですぐさま行動を起こしたのは杏寿郎とパム治郎だった。

「神衛隊の皆はお館様達の救援に向かうため、巌勝殿や狛治の手を借りるわけにはいかない！俺達で迎え撃つぞ、パム治郎！」
「パム！」

指令室を飛び出し、仮住居へのゲートへと向かう杏寿郎に唖然としたが、即座に気を取り直してカナエら元柱の四人も杏寿郎を追いかける。
一歩遅れる形でオカ研メンバーも彼らを追い、ソーナ達生徒会メンバーも追おうとするがグレイフィアに引き留められてしまう。
『鬼』と戦うためには特殊な武器や環境が必要だと告げられた彼女らは黙って引き下がる他なかった。

既に他のパイロット同様、出撃準備を終えていた巌勝は『鬼』の出

現に焦っていた。
あれ一体とも限らないし、もしかしたら鬼以外の新たな脅威が現れる可能性も捨てきれない。
だがゴーデスをここで逃すわけにはいかない……と悩んでいたところに杏寿郎から通信が入ってくる。

『巌勝殿！あの鬼には俺達が対処する！貴殿らはそのままお館様やゼット殿の元へ！』
「しかし、現状最もあの『鬼』らの知識を有しているのは私か狛治だ。どちらかが残った方が生存率や勝率は大きく上がる……」
『そこは数で補います。相手は敵地へ単身攻め込みに来ている状態、逆にレジェンド様達は敵地に少数で正面突破を仕掛けた状態……後者の方が明らかに危険度は上です』
『そういうわけで巌勝さんや狛治さんはゴーデスの方をお願いします。機動兵器を有していない私達ではそちら側では戦力以前の問題ですから』
『私も伊黒さんも、出発前にゼットさんが協力してくれてお館様から新しい日輪刀を受け取りました！』
『俺と甘露寺の新しい日輪刀ならば遠距離……それこそ空中に鬼がいてもある程度対処可能だ』

実は、事もあろうに相変わらず空の世界で入手した大量の玉鋼の処理に困っていたゼットがレジェンドを訪ねたところ、材料補充のナイスタイミングだったというわけである。
よくある『俺なんかやっちゃいました？』だがゼット本人は割と本気で困っていたので、ゼットに加えて小芭内と蜜璃の双方も得してまさに一石三鳥。
何故か鬼狩りからの好感度上昇が半端ないゼット。
そのうちゼットに日輪刀を、と元柱達からレジェンドへ懇願されるのも時間の問題かもしれない。

「……分かった。仮住居を襲っている鬼に関してはお前達に一任する。レジェンド様が新設した『鬼討組(おにうちぐみ)』の記念すべき初陣に総長たる私が参加出来ないのは心苦しいが……」
『『すいません後半が本音ですか』』

胡蝶姉妹が同時にツッコミを入れた。
鬼討組――エクスカリバー事件にて巌勝が遭遇したカゼキリを皮切りに、徐々に出現するようになった『鬼』に対抗すべくレジェンドが新設した、いわゆる『モノノフ』に相当する組織である。
総長に巌勝、剣術顧問に縁壱というだけで化け物軍団と予想出来るが、その二人に加えて元柱の5人が中心となっている以外はまだ少数かつ人員募集中だ。
近々向かう空の世界でメンバーを拡充する予定。

「ともかく、今回の鬼について教えておく。奴は『アマツミツツカ』見ての通り女性型の飛行能力を持った大型の鬼だ。属性は天、即ち雷撃系の攻撃を得意としている。見たところそこそこ高度にいるようだが、一度引きずり降ろせばあとは眼前の相手を倒し食らうまで滑空するような移動になり攻撃はしやすくなるはずだ」
『承知した!とにもかくにも地に落としてからが本番というわけだな!』
「そうだ。分かっているとは思うが、援護の要たるパム治郎は最優先で護れ。小型、中型はまだしも大型の鬼相手には援護役が如何に機能するかで討伐難度は大きく上下する」
『任せて下さい!パムちゃんには指一本触れさせませんので!そりゃもう視線向けたら目に向かって陽華突ぶち込む気でいますから!』
『姉さん、パム治郎君の事になるとやたら張り切るわよね』

可愛いは正義が信条のカナエ、そこだけはこの状況でもブレなかった。
そして元鬼殺隊改め鬼討組の面々は仮住居へのゲートを起動し、駒

王の仮住居へと転移する。
それから少しして朱乃を始めとした残りのオカ研メンバーも仮住居へと向かおうとゲートへ走ってきた。
厳勝はなんとなく予想出来ていたものの一応声をかけて止める。

「待て、何処に行くつもりだ」
『私達も『鬼』と戦いに行きます……！』
「やめておけ。確かにレジェンド様の仮住居近辺はレジェンド様の加護があって攻撃も通じるだろうが……御本人がいらっしゃらない以上、効果はあの事件の時より減衰する。治癒能力のあるアーシア殿ならばまだしも、戦闘重視のお前達では攻撃が効きにくく逆に足手まといになり味方を危険に晒しかねん」
『でも、イッセー先輩も、部長も……みんな、戦ってます』
「戦える者が戦えばいい。勇気と無謀を履き違えるな。あの事件において右往左往するばかりで大して役に立たなかった、三大勢力の護衛共の事を忘れたのか？対抗する術がない状態で下手に戦場を彷徨けば、最悪そのせいで味方が命を落とす事も有り得るのだぞ」
『それはっ……！』

朱乃や小猫、裕斗は言葉に詰まる。
確かにあの場にはゼットと一体化したレジェンドやサーガもおり、光神の影響力も強かったため彼女らも鬼と戦えたが、今回はウルトラ戦士や神衛隊がほぼ全員ゴーデスとの決戦に赴く。
そのためレジェンドは既に駒王どころか日本にはおらず、サーガはダイブハンガーで待機、オーフィスは気まぐれだし、厳勝にヴィラル、ロージェノム、そして狛治は神衛隊として準備を終えており、すぐにゴーデス島へとクロガネで出撃しなければならない。
何よりあの時のような閉鎖空間ではなく、あくまで認識阻害が働いているだけで下手すれば彼女らが悪魔であることが一般人に知られる可能性だってあるのだ。

『師範……それでも私達は』
「いい加減に我儘を言うなというのが分からぬのか！無事勝利を掴み戻ってきたレジェンド様や我々が、万が一お前達の訃報など聞かされたらどう思うかと少しは考えてみろ!!」

普段は戦闘でも冷静な厳勝が怒鳴るのを聞き、ゼノヴィアや朱乃らはビクッとする。
そう、今回ばかりはレジェンドどころか厳勝や卯ノ花らも頼れない。
アーシアという治癒のエキスパートもリアスにつきっきりで、その分の負担はパム治郎にかかることになる。
そこに自分達が行けば、おそらくはパム治郎のキャパシティーもオーバーし、彼を護るためにカナエらも必要以上に苦戦を強いられ、最悪は……。

『なら私も一緒に行くよ☆』
『『『『レヴィアタン様?!』』』』
「セラフォルー殿……!?」
『勿論、無茶しないように皆のブレーキ役としてだけどね☆それなら良いでしょミッチー☆』
「その渾名はやめて頂きたい。誰だそれを教えたのは……!?」

ここでまさかのセラフォルーが名乗りを上げた、というかついて来てたのか……。
なお、渾名については第3章のエクスカリバー編参照。
しかし魔王の一人が保護者役としてついて行き、かつ可能な限り援護に徹するならば何とかなるかもしれない。
「……はぁ……これ以上ここで押し問答している時間は無い。セラフォルー殿、あまりバカ継子共を甘やかさぬよう頼む」
『当然だよ☆レジェンド様を悲しませたくないもん☆』

『バカ継子って!?バカ継子ってそんな私をピンポイントで言わないでくれ師範!!』
「期末テスト全科目八割以上」
『はう!?』
「……夏休み、楽しみにしているぞ」
『うあああああ!!』
『……ゼノヴィア先輩がおかしいです』
『何でも期末テストで全科目八割以上取れなかったら異世界での修行量が3倍にされる約束だったそうですわ』
『そういえばイッセー君やアーシアさんが言ってましたね、そんなこと』

漸く雰囲気も穏やかになり、いよいよゴーデス島へ向けて神衛隊が出撃する時が来た。
同時にセラフォルーを加えたオカ研メンバーも仮住居への転移用ゲートの再起動準備を急ぐ。

「セラフォルー殿、そしてオカルト研究部?だったか。無茶だけはするな。それと……お前達の武運長久を祈る」
『そちらもお気をつけて。レジェンド様やイッセー君をお願いします』
『いってらっしゃい☆私達も頑張るよ☆』
「フッ……ゴーデスよぉぉぉ!!貴様の生体反応のデータを取りつつ、神の国への引導を渡してくれる!!精々足掻いてみせろやぁぁぁ!!」
『『『『!?』』』』

久々の厳勝・御大将モード。
突然の変貌にセラフォルーどころか知っている朱乃らオカ研メンバーも驚く。
御大将と化した厳勝を含む神衛隊を乗せ、遂にクロガネが発進する。

目指すはレジェンドらが既に戦線を切り開いているゴーデス島。
発進と同時に光気共鳴転移システムでレジェンドの光気を探知して転移していくクロガネを見送り、急ぎ朱乃らも仮住居に転移後突入するであろう戦闘の準備を整える。

既に転移していた杏寿郎ら鬼討組はアマツミツツカが撃ち込む光弾を結界が防いでおり、撃ち込まれる度にドーム状の結界表面で光弾が弾け飛ぶの目にしていた。

「さすがはお館様の張った結界！鬼の攻撃だろうとビクともしないか！」

「ち……近くで実際に見るとやっぱり私達が戦ってきた鬼と全然違う～！」

「甘露寺の言うようにまるで別物だ。俺達の知る鬼は少なからず会話が成立したが、あれはこちらが理解出来る言葉を発してさえいない……！」

アマツミツツカは他の鬼同様に鳴きはするが、明確な単語や会話が出来るような言葉は一切無い。
結界の予想以上の強靭さに一先ず安心した杏寿郎らだが、ふとカナエとしのぶが何かに気付く。

「……ねえ、しのぶ。あの鬼、私達から視線外して別の方を向いてない？でも町の方じゃなくて……」

「え？私達でも町でもなく……仮に他の人がゲートから出て来ても結界内だし、あの鬼の攻撃は……ッ!?」

しのぶは即座に理解した。
アマツミツツカが狙おうとしているのは結界のある仮住居周辺ではなく、あくまで認識阻害だけがかかっている仮住居への道や周囲の

森だと。
それを伝える間もなくアマツミツツカは先程までと同じように掌から天の力を凝縮した小槍のような光弾を放つ。
仮住居ではない周囲の森へと放たれたそれは着弾と同時に爆発し、森に火の手を上げる。
杏寿郎らが驚く中、アマツミツツカの光弾は次々と周囲の森を焼いていく。

（まるで私達の逃げ道を無くすような戦法……！逃げ道……？……ッ！拙い！）

しのぶはさらに燃え広がる炎を見てある事に気付いた。
それは即ち呼吸法を使う者にとっての致命的とも言える、煙による一酸化炭素中毒である。
アマツミツツカを攻撃するためには安全である結界内の仮住居周辺から出る必要があり、周囲の森は既に炎が拡がっている状況だ。
しかも認識阻害のおかげで町側は誰も火事に気付いていない……鬼や悪魔などの事が安易に広まらないという意味でなら良かったのだが、それが仇となって孤立してしまっている状態にある。
天を舞う鬼、加えて燃え盛る森によって全集中の呼吸を封じられるという悪環境……鬼討組は初陣にして今までを超える苦戦を強いられる事になった。
そして、さらなる別の魔の手が駒王町にそのものにも及ぼうとしていた。

☆

――とある場所――

「ほう？これを今からあの町に送り込むのかな？」
「雑兵代わりに使えるかどうかのテストだ。構造は完璧に把握した。

全滅したところで資材さえあれば再生産は出来る」
「バルトールの方はどうだい？ファーさん」
「試作機は完成している。あとはあの煩い奴を組み込むだけだ。相変わらず抵抗しているが、それを見るのも後僅かだ。もっとも……投入に関しては光神どもが一時的にこの世界を離れた後だがな」
「手堅く着々と確実にってワケか。光神サマが離れても一気に攻めないというのは中々通だねぇ」
「彼らが離れても代わりの者が少なからず来るだろうからね。宇宙人による侵略行為というのは得てして恐ろしく周到だったり、気付かれずに進んでいるものだよ。それこそ町が外見そのままに全く別のモノにすり替わっていたり……ね」
「おいおい怖い事言うね～サキさん、あの国はこれから夏だっていうし怪談話の一つに加わりそうな話じゃないの」

ルシファーやトレギアの本拠地ではあるものを駒王町に送り込む算段をしている。
だが雑兵代わりというものに紛れて一体だけ、別格の存在感を放つものがあった。

「ファーさん、アレも出す気かい？」
「あれはバリアのテストを行う。当初は一時間という稼動限界があったがそれも解決した。こいつらが全滅した場合の殿に使う」
「流石だね、ルシファー。ではこれらを送り込んだらそれを見ながらティータイムにしよう」
「お、いいね。ところでサキさん、白龍皇はどんな感じ？」
「少しずつだが片鱗は見えてきた。そう遠くないうちに乗れるくらいにはなるだろう。自在に扱えるようになるにはまだまだといったところかな」
「へえ……やるもんだ」

そんな会話をしながらも彼らは駒王へと『手駒』を送る準備を整え

ていく。
そしてそれが完了に近付くと、彼らに声をかける人物がいた。
「では僕は近くで見させてもらうとしよう。僕の興味を引く相手が現れるかもしれないし、場合によっては僕自身が直接確かめる事になるかもしれない」
「それは構わないが、君の興味を引く相手とは私達も気になるね」
「現れてみなければ何とも言えないさ。ただ、僕の勘が告げている……僕が狩るに値する者が現れるとね」
「じゃ、コイツは現地でのんびり味わってくれ。帰って来たら直に見た感想とか聞かせてくれよ?」
「ありがたく頂くよ、ベリアル。感想についても約束しよう。出来ればその時、白龍皇の彼にも同席願いたいな」
「そいつは俺も同感。付き合い悪いよなーアイツ」
では、と踵を返し愛機の元へ向かうその人物は、駒王……いや、レジェンドらに何を齎すのか。
今、駒王に最大の危機が訪れようとしていた。
〈続く〉
宇宙――遥か彼方より、地球を目指し光速を超えて突き進む六つの光。

「急げ！既に戦いは始まっている！」
「地球へ着き次第、君はそれをダイブハンガーへ！」
「ええ！」

ある艦の内部――仲間達に見送られ、かの者達の元へ駆けつけんとする二人の男女。

「私は準備完了よ！」
「よし、俺も準備完了だ！」
「我々はもう暫くかかりそうだ。だが、あちらにも心強い仲間……いや、勇者達がいる！二人共、頼んだぞ!!」
「了解!!」

あったのは絶望だけではない。
希望も、また――

悪を断つ剣

天空を舞う鬼・アマツミツツカ。
鬼討組は森林火災の影響により結界外での全集中の呼吸を封じられ、突破口を開けずにいた。
巌勝からの情報で一度でも地に引きずり降ろせれば光明が見えるものの、結界の外に出ては全集中の呼吸が殆ど使えなくなり身体能力が低下し、さらにその状態で高い位置にいるアマツミツツカに可能な限り接近して叩き落さねばならない。
それが可能なのはレジェンドから貰った日輪刀が特殊な小芭内か蜜璃ぐらいなのだが、それも全集中の呼吸が可能な場合の話である。

「けほっ……」
「甘露寺、大丈夫か!?」
「うん……まだ大丈夫よ、伊黒さん。少しむせただけだから」
(煙そのものは明確な害意がない気体だからか少しずつ結界内にも入り込んできている……今はまだしも、このままじゃ呼吸法を使う私達には最悪の事態になりかねない)

大半はしのぶの思った通りだ。
この状況ではそれが不可能であり、高所にいるアマツミツツカを狙うには飛び道具ぐらいしかないのだが……。

「パムパムパム……」
「む!?どうしたパム治郎!?」

杏寿郎がパム治郎の様子が変なことに気付き声をかけるが、パム治郎は両手を胸の前でグルグル回したかと思うと両手を思いっきりアマツミツツカへ向けて突き出した。

「パムー!」

「「「「!?」」」」

すると、なんとパム治郎の両手から光弾が発射され飛行していたアマツミツツカの顔面に直撃したのである。
威力はそれほどではないが、森への攻撃を中断させる事に成功し、アマツミツツカの視線はパム治郎に移っていた。

「今のは何だ……!?」
「パム～追駆(ついく)。遠距離攻撃ノタマフリ」
「なんと!?パム治郎、そんな事も出来るのか！」
「周囲への攻撃が止みました……あとはこの火災をどうにかさえ出来れば……！」

「それはこの魔法少女レヴィアたんにお任せ☆」
「「「「!!」」」」

突如として場にそぐわない声が聞こえたかと思えば、蝙蝠のような翼を生やしたコスプレ衣装を着たセラフォルーが仮住居の屋根の上でウインクしながらポーズを決めていた。
カナエとしのぶは目にした事があったが、杏寿郎と小芭内と蜜璃は何事かと驚いている。

「この火事をどうにかすればいいんだよね☆」
「セラフォルー殿！出来るのか!?」
「これでも魔王だよ、大丈夫大丈夫☆」
「……正直、不安しかないんだが」
「まあまあ伊黒さん、嘘だったら彼女には悪魔弾頭としてあの鬼に飛んでもらいましょう」
「しのぶちゃんそこは針千本飲ますじゃないの!?」

「しのぶ、あの授業参観の日から思考が過激になったような気がするわ」

普段と変わらぬノリのセラフォルーに一抹の不安を感じつつ任せようとしたところに朱乃、裕斗、小猫、ゼノヴィア、そしてギャスパーに加えてイリナまで到着。

「カナエ、皆さん……微力ながら私達もお手伝いしますわ」

「姫島少女、それにオカルト研究部とやらの皆もか！助かる！何分、俺達は今満足に全集中の呼吸を使えなくてな！」

「……でも、煉獄さんあんまり変わってません」

小猫の指摘に、ぶっちゃけ鬼討組の面々も「確かに」と思ってしまった。

そんな事は気にもせずセラフォルーは火災に対処すべく魔力を解き放つ。

「レヴィアたん☆アイシクルストーム！」

やっぱりポーズを決めながら小物と思われるステッキを振るうと夏だというのに周囲の炎が全て完全に凍りつく。

「どうどう？レヴィアたんの素敵魔法☆」

「素敵とステッキをかけてるのか知りませんが確かに凄いですね」

「うむ！名前の意味は分からんがとにかく凄いのは見て分かった！」

アマツミツツカは突然辺り一面氷だらけになった事に困惑して彼方此方を見回している。

これ幸いにと小芭内と蜜璃は勢いよく結界内から出てアマツミツツカの近くの樹氷を飛びながら限界まで近付くとそれぞれの日輪刀で攻撃を仕掛けた。

蛇の呼吸・参ノ型　塒締(とぐろじ)め!!
恋の呼吸・弐ノ型　懊悩巡る恋!!

さすが言うべきか、見事な合わせ技をアマツミツツカに浴びせる元柱の二人。

ここで説明しておくと、まず小芭内の新たな日輪刀は蛇腹剣であり、構造や強度上ロマン武器でしかなかったそれもレジェンドが打つと問題なく完全な形で完成。

一見便利そうに見えるも、それを完璧に扱うには高度な技量が必要であり、しのぶに次ぐ力の無さを余りある技量で補っていた小芭内にとっては相性抜群とも言える新たな刀である。

そして、蜜璃の日輪刀は刀身が光の刃となっており、刃の形状や長さなどを自在に調節する事が可能で、かつては定まった刀身故に乱戦時などは動きを制限されていた彼女の腕力を無理なく振るえるようになり心身共に負担が激減。

後にレジェンドから聞いた話では小芭内の日輪刀の姉妹刀であると聞き、二人揃って喜んだそうな。

この場でレジェンドの加護を受けられるのはレジェンド作の日輪刀を除けば仮住居周辺……そこから離れれば離れる程、効力が小さくなるので鬼討組以外がまともにダメージを与えられるようにするにはやはり叩き落とすしかない。

小芭内は日輪刀を鞭状にしてアマツミツツカの片腕に絡み付かせる。

蛇腹剣なので刃やワイヤーが表層に食い込みアマツミツツカの体力を徐々に奪っていく為、アマツミツツカはそれを外そうともがくがそれこそ囮。

同じように光の刀身を変形・伸縮しロープのような形状にした蜜璃はそれをアマツミツツカの翼に巻きつけて羽ばたく反動でさらに上空へと飛び上がり――

「せいやぁぁぁぁぁっ!!」
「キィアァァァァァ!?」

筋肉密度捌倍の豪腕による一撃を背中に見舞い、見事アマツミツツカを地上へと叩きつけるように落下させた。
小芭内は蜜璃が一撃を打ち込む直前にアマツミツツカから離脱し、わたわたと空中で焦っていた蜜璃の手を握り、蛇腹剣を巧みに使い樹氷を経由して華麗に2人揃って地上へと着地。
素晴らしきかな、二人の愛。

「おばみつ連携グッジョブ！レッツ☆袋叩き♪」
「「「「可愛く言ってても物騒だから!!」」」」

盛大にツッコミ食らったセラフォルーはテヘペロで笑ったが、直後に笑えない事が起こった。

ド　ド　ォ　ォ　ォ　ン　!!!

「「「「え？」」」」

突然の大きな地鳴り。
音のした町の方を見てみると、そこには信じ難い光景が拡がっていた。
駒王町に複数体のロボット、そして一際目立つ白いボディのドラゴンのようなロボット怪獣が同時に出現していたのだ。

帝国機兵レギオノイド。
シビルジャッジメンター・ギャラクトロン。

レギオノイドはベリアルがこの【エリア】においてカイザーベリアルとならなかった為、本来ならば存在しないものだが、例の現象によってこちら側へ弾かれてきた複数機を星の民ルシファーが解析し、量産した個体だ。
しかも陸戦型のα、宇宙戦型のβに加えて空戦型のγという新型まで投入されている。
そしてギャラクトロンはあのオーブですら敗北してしまう程の強敵。
サンダーブレスターの圧倒的パワーを持ってようやく勝利を手にしたというのだからその戦闘力は推して知るべしである。
あまりに予想外過ぎる事態に町の住民のみならず鬼討組やオカ研メンバー、セラフォルーさえ動揺してしまう。

「な……何かとんでもないの出て来ちゃったー!!」
「そんな……!今この事態に対抗出来るのは……」
『私ぐらいだろうな』
「「「「!!」」」」

全員のブレスレットから声が聞こえたかと思えば、同時に遥か上空から駒王町へとコンパチブルガリバーが到着した。
逃げ惑う人々の盾になるように青い機神がギャラクトロンと複数のレギオノイドの前に仁王立ちする。

「よもやC．C．殿か!?」
『あいつの言った通り私だけでも残っていて正解だったな。一人でどこまでやれるか分からんが……ま、精々抵抗させてもらうよ。そっちはそっちでどうにかしろ』
「お願いします!私達じゃ一体ならともかくその数は無理です!」
『一体だけなら対抗出来るというのもどうかと思うがな』

その言葉を最後に通信を終え、コンパチブルガリバー対ギャラクト

ロン＆レギオノイド軍団の激闘が幕を開けた。

☆

――ゴーデス島上空――

「ち……！鬼のみならずキングやノアから報告があったロボット兵器に加えて、よりによってギャラクトロンまで出てくるとはな……！」
「超師匠！アレがオーブ先輩でさえ苦戦したっていう奴でございますか!?」
「ああ。ゴブニュの件から何処のどいつが送り込んできたかはなんとなく予想がつくが、タイミングが最悪だ。ガリバーならギャラクトロン相手でも何とかなるが、それは相手が単体だった場合だ。今回は周りのレギオノイドとかいう奴の数が多過ぎる。ガリバー単機では町や住民を守りながらというのは無理だな」
「な、何か方法は……！」
「……無くはない。束が土壇場で完成させたあの機体ならばガリバーの相方を務める事が出来る。問題は俺がそっち方面であいつの面倒を見てやれなかったから、それを動かせるレベルに到達しているかという事だ」

☆

緊急事の避難所に指定されている駒王学園に続々と人々が避難していく中、C．C．の操るコンパチブルガリバーは単身レギオノイド軍団とギャラクトロンを相手取るも、圧倒的物量差に苦戦を強いられていた。
「あの両手がガンタイプの奴らはエネルギーフィールドで防御出来るからまだいいとして……ドリルの陸戦型とマシンガンの空戦型は面倒だ。おまけにこの……！」

「――!!」
「白い奴は無駄にしぶといっ……!」

レギオノイドはともかく、やはりギャラクトロンが手強い。
遠近の武器のバランスがいい上に非常にタフでパワーも相当なものだ。
しかもこのギャラクトロンを援護するようにレギオノイドが攻撃を仕掛けてくるのでうざったい事この上ない。
そんな時、突然レギオノイドγの一機が空中で爆発した。

「何……?」

C・C・が怪訝に思ってレーダーを確認しようとすると、猛スピードで白い機体が飛来し――

「あわわ……!えっと、空中制動空中制動……へうっ!?」

空中でフラフラしつつも何とか体勢を立て直した。

「誰だ?その機体に乗ってる危なっかしい奴は」
「わ、私です!ロスヴァイセです!」
「何?お前はまだ訓練中だっただろ。ましてやお前、レジェンドの乗る予定の機体との連携戦闘を前提で訓練してなかったか?」
「この機体……サイバスターはスタンドアローンでの戦闘を前提で作られたやつみたいで、こっちも訓練してたんです。私、まだ上手く扱えませんけど……」
「先程の腕を見る限りどうにか援護ぐらいなら出来そうだな。お前はあの空戦型を叩き落としつつ、他の奴らを空中から狙い撃ちしろ。間違ってもあの白い奴に喧嘩ふっかけるようなマネするなよ。お前にはまだ荷が重すぎる」
「わ……わかりました!」

まさかのロスヴァイセがサイバスターに乗って援軍に駆けつけたのだ。
C．C．から見ると正直な話、腕前的に無いよりはマシぐらいにしかならないと思っているが、猫の手も借りたいという状況なのでこの際、我儘を言っていられない。
レギオノイドをサイバスターに任せつつ、再びコンパチブルガリバーはギャラクトロンと相対する。

☆

駒王が一望出来る場所で、ある人物がその戦いの一部始終を見物している。
「あれは……フフ……そうか、やはり僕の勘は正しかったようだ。操者はまだ未熟のようだが……あのギャラクトロンが倒されたなら『アレ』が送られてくるタイミングで僕も出向くとしようか。僕をガッカリさせてくれるなよ……風の魔装機神、サイバスター」
その人物は、ベリアルから渡されたキャラメルを食べつつ笑みを浮かべて観戦を続ける。

☆

一方、仮住居の方でもアマツミツツカが体勢を立て直し、本格的な戦闘が始まっていた。
とはいえ、小芭内と蜜璃の連携攻撃で少なからず痛手を負ったアマツミツツカを迎え撃つのは鬼討組とオカルト研究部、そしてセラフォルーとイリナ……人数という点で圧倒的に優位である。
「皆さん、まずはあの翼をもぎ取ります。今はいいとしてもまた空に

逃げられては元も子もありません」
「しのぶ、中々過激なこと言うようになったわね」
「先に過激な戦法取ったのは向こうだもの。遠慮してやる必要はないわ」
「そうですわね。手痛いお仕置きをしてさしあげますわ……うふふ」
「あはは……朱乃さんのドS思考が思いっきり出て来ちゃったよ」
「ここで……ここでしっかり働かないと師範にまた叱られる……!!」
「ゼノヴィアってホント巌勝さんに弱いのね……」
「あ……!」

漸く心に多少なりとも余裕が生まれ、落ち着いて会話も出来るようになったが、その中で小猫がある事に気づいた。
ギャラクトロンが避難所である駒王学園を狙っている事を。
オーブが初めて相対した個体を考えれば納得がいくのだが、今回のギャラクトロンは生命体――即ち人間やそれに相当する存在を優先的に排除するようプログラムされていたのだ。
目の良い小猫は悪い意味で見通しが良くなってしまった仮住居周辺からそれを見つけてしまい、思わず口に出してしまう。

「あの白い怪獣……駒王学園を狙ってます！」
「「「「!?」」」」
「確かあそこは非常時の緊急避難場所に指定されていたはずですわ。この状況でしたら……まさか!?」
「あれはこの前のハシュマルとかいうのと同じように、人間を狙っているという事か!!」

アマツミツツカに吹き飛ばされながら杏寿郎が叫ぶ。
同時にあの時、マリーダに庇われたセラフォルーやイリナはレジェンド一家の思考を予想し、どうにかしようとするも距離があり過ぎる上に真っ昼間で人目につき過ぎるという二重の問題でどうにもならない。

そして、ギャラクトロンに動きがあった。
胸部から強力なエネルギーを発しつつ、後頭部から伸びるギャラクトロンシャフトと呼ばれるモノを天へと突き立てるようにして魔法陣を展開し、エネルギーを充填・胸部へと集束しながら上昇。
ギャラクトロンスパークという、ギャラクトロン最大の攻撃を放つ予兆である。
その威力たるや直撃すれば山一つを消滅させ、辺りを焦土に変える程凄まじい。
そんなものが避難所である今の駒王学園に撃ち込まれればどうなるかは誰もが想像出来るだろう。

「ダメ……！間に合わない！」
『ちいっ……！毎度毎度似たようなことを!!』
「C．C．さん!?」
『いいからお前達はそっちに集中していろ！一撃ぐらい何とかする！ロスヴァイセ！この木偶の坊共を足止めしておけ！出来なければ山程死人が出るぞ!!』
『は……はいっ!!』

サイバスターにレギオノイドを完全に任せつつ、コンパチブルガリバーは急ぎ駒王学園の前――しかし万が一に備えて少し離れた位置に立ち、同じく胸部にエネルギーを充填する。
かつてメビウスと共にアパテーを撃ち倒したガリバーバーストの最大出力で相殺に持ち込む気なのだ。
そして遂に――

「――!!」
「私が黙ってやられると思うな機械竜!!」

ガリバーバーストとギャラクトロンスパークが同時に発射され、空

と大地の狭間で光線同士が激突し凄まじい光が発生する。
それを見ていた者達は皆、目を覆うが直後に激突した場所で大爆発が巻き起こった。
ガリバーバーストの出力がギリギリ拮抗レベルに達していた事で、どうにか目論見通り相殺出来たのである。
安堵する者、喜ぶ者など様々だったがそれはまだ早い。
再び地上へ降り立ったギャラクトロンがギャラクトロンブレードを振るい、咄嗟に両腕をクロスさせて防御したコンパチブルガリバーは片膝をついてしまう。
先のガリバーバーストで出力を上げた事で、プラズマスパーク・エンジンによるエネルギー供給が間に合っておらず機体の出力が低下しているのだ。
このままではいずれ完全に力負けして撃破される可能性も出てきた。
「しぶといのは攻撃防御だけでなくエネルギー面でもか……ここまで面倒な奴とはな」
口調は変わらないが焦りつつあるC．C．。
――せめてあと一機、コイツと同じくらいのパワーがある機体がいれば――
C．C．の内なる希望を感じたからか定かではないが、アマツミツカと激闘を繰り広げる鬼討組やオカ研らのブレスレットに緊急通信が入る。
『大変な時にごめんね！きょーくん仮住居のとこにいる!?離れてない!?』
「俺は現在進行形で鬼と戦闘中だぞ束殿！如何なされた!?」

『すぐにダイブハンガーの格納庫まで戻って！このままだとしーちゃんも危ないし、こうなったら土壇場での火事場のクソ力でも何でも期待するしかないから！』
「何!?この状況で戻れと!?しかし!!」

　束が何を考えてるのか分からないが、状況的に戻れというのは理解出来ない。
　おそらくはC．C．を助ける手段があるのだろうが、自分がここを離れれば……という葛藤が杏寿郎にはあった。
　しかし、それを後押しするものがいた。

「パムパム」
「パム治郎……!?」
「ココ、僕ガ頑張ル」
「パムちゃんが頑張るならお姉さんも頑張るわ！」
「パム治郎君が頑張らなくても姉さんは頑張って。というかパム治郎君がいる事を前提に物事を考えないで最初から私達だけだったらどうすべきか考えるべきでしたね。煉獄さんや、一緒にいるパム治郎君に頼りすぎだった気がしますし」
「胡蝶……カナエ殿も！」
「大丈夫！煉獄さん……ううん、師範の分まで私が皆を守るから！」
「そして甘露寺は俺が死んでも……いや、俺も死なずに守り抜く。だから行け、煉獄！」

　己のパートナーたるパム治郎や鬼討組。

「こっちもレヴィアたんにお任せだよ☆というか元々保護者枠だし☆」
「私も副部長ですから部員を取りまとめる事ぐらいやってみせますわ。ですからどうか、C．C．さんやロスヴァイセさんをお願いします、煉獄さん」

自分達を危機から救ってくれたセラフォルーや、朱乃らオカルト研究部。
彼女らに背中を押され、杏寿郎は決意する。
「承知した！皆、この場を頼む！勿論パム治郎もだ！」
「パムー！」
行き掛けの駄賃とばかりにアマツミツツカを地面に叩き落とし、杏寿郎はダイブハンガーへの転移ゲートへと走る。
それを見届け、さらに一致団結した一同はアマツミツツカ討伐を再開する。
杏寿郎が二人と町を救う事を信じて。

☆

単身ダイブハンガーの格納庫へと戻って来た杏寿郎は、待ち構えていた束にすぐさま捕獲されある場所へと連行される。

「束殿!?」
「手荒でごめんね！割と急がないとマズイ感じだから手短に済ませるよ！質問その1！きょーくんはグラくんから機動兵器の操縦方法教わってるね!?」
「うむ！」
「その2！操縦形式はスーパーロボット……んと、特機とかいうやつだった!?」
「それで間違いない！」
鬼気迫る様子の束に、あくまで必要な事だけ答えていく杏寿郎。
「これで最後、その3！その特機形式の操縦でグラくんから判定はど

れ貰った!?」
「まだよく分からないが『えす判定』は頂いた！それから『接近戦、特に剣撃戦闘は素晴らしい』というお言葉も頂戴したぞ！」
「ビィィィンゴ!!束さんからも素晴らしいという賛辞をあげるよきょーくん！あと、これはそれに関するプレゼント！ライトォォォ！アァァァップ!!ポチッとね」

えす――つまり『S』判定。
それより上の評価はあるが杏寿郎に十分過ぎる能力を持っているという事がハッキリした束は格納庫の一角だったその場所の電源を入れた。

「こ、これは!?」

そこにそびえ立つ機体。
青・赤・金を主体としたカラーリングの巨体に背部の一対のドリルが目を引く特機。
グレンラガンやコンパチブルガリバー同様の人間のような顔を持つスーパーロボット。

「グラくんやれーくん、クーちゃんの意見を参考に黒にゃんの協力も得てレジェくんやサーくんと一緒に開発したきょーくん専用機！その名もグルンガスト参式!!ちなみに零式から弐式もあるよ」

束がゴーデスとの決戦に備えて完成させたものだが、アマツミツツカ襲撃により杏寿郎が迎撃に出てしまった為、クロガネに乗せずじまいだったのだが今回はそれが逆に吉と出た。

「さっきの質問で一つでも駄目なのがあれば譲渡するのは見送る予定だったんだけどさ、きょーくんは期待を裏切らなかったね！」
「束殿、かたじけない！お館様やサーガ様を始めとする皆には改めて

礼を言わねばならないな！これがあればゼット殿や皆とも共に戦える!!」
「そういうわけだから最初のお仕事！しーちゃんとろせちゃんのとこに転送するから、二人の救援だよ！それから、そっちに着いたらもう一個のプレゼント送るからね！」
「承知した！搭乗口はここだな！」

まるで分かっていたかのように搭乗する杏寿郎。
本来はGラプターとGバイソンに分離し、変形合体する機体なのだが彼の相方といえばパム治郎なのでその機能をオミットし、機体強度を増している。

「特機用転送システム起動準備よし！きょーくん！」
「良し！頼むぞ、グルンガスト参式!!改め……

頑治郎!!!」
「何それ!?」

グルンガストさんしき＋治郎で頑治郎。
頑強や頑張れの頑を使ったが、ぶっちゃけ竈門炭治郎の頭も頑丈過ぎたのでやっぱり炭治郎絡みだったする。
紡がれた絆は【エリア】を超えても切れはしない、ということなのかもしれない。

「まあ愛着持ってくれるならいいや！頼んだよきょーくん！それじゃ、グルンガスト参式転送!!」
「よし、行くぞ頑治郎!!」

さすがにパム治郎の時と違って元々の名前があるので杏寿郎も束のグルンガスト参式の呼び方を訂正しなかったようだが、おそらく彼は今後も頑治郎呼びなのだろう。
今、超闘士が駒王へと送り出された。

☆

敵味方共に驚愕を隠せなかった。
突如空が光ったかと思えばギャラクトロンを吹き飛ばすように三色カラーの巨体が現れたのだ。
倒れ込むギャラクトロンを尻目に、駆けつけたグルンガスト参式はコンパチブルガリバーへと手を差し伸べる。
敵ではないと判断したコンパチブルガリバーはその手を掴んでしっかりと立ち上がる。
「待たせてすまなかった！Ｃ．Ｃ．殿、それにロスヴァイセ殿！」
「お前……杏寿郎か？なるほど、束があれらと作っていたのはそれか」
「うむ！パム治郎に続く相棒、頑治郎だ!!」
「が……がんじろう、ですか？」
「グルンガスト参式、つまり頑治郎！」
「ああ、なるほど……」

一応略せるので何とか納得出来た二人。
それだともしガンダム系に乗ったらどういう名前になるか気になるところだが、それはさておき。
束の話ではまだ何かあるようだが、黙ってみているギャラクトロンではない。
起き上がり攻撃を仕掛けようとしたギャラクトロンだが、突進してきたグルンガスト参式による相撲の要領で放たれた二丁投げを受け再び倒された。

「わっしょい!!」
「いや、武器を使え武器を」
「アイソリッド・レーザー、ドリルアタッカーにブーストナックルとそれを合わせたというドリル・ブーストナックル、それからオメガ・ブラスター……どんな武装かさっぱりわからん！武器の説明を受ける前に出てきたからな！」
「おい待て、じゃあどうする気だ？ロスヴァイセは当然だがお前の機体まで決め手に欠けてたら正直現状打破なんざ夢のまた夢だぞ」
『そこはノープロブレムだよしーちゃん！』

束が通信してくるが、いまいち理解出来ないＣ．Ｃ．……とロスヴァイセ。

「あの木偶の坊軍団ならロスヴァイセが今も撃破していっているからともかくだ。この白い奴は決め手なしで倒せる程ヤワな相手じゃないんだが」
『だからだよ。きょーくんが一番得意な武器を送ってあげるの！ハンターズギルドの皆さーん、準備オッケィ!?』
『ええ。こちらは準備完了です』

ジェントの声が聞こえると、続けてラッシュハンターズの声も聞こえてくる。

『杏寿郎！今からお前にお誂え向きのモンを送ってやるぜ！』
「マグナ殿！」

ラッシュハンターズの一人であり、七星剣の一人でもあるマグナは同じく炎繋がりで杏寿郎とは即座に仲良くなり、共に鍛錬と称してハンティングに行く仲だ。
そんな彼がいう杏寿郎お誂え向きのモン……といえば一つしかない。

『ガルムの旦那！バレルっち！』
『俺が狙いを外すわけねぇだろ！任せとけ！』
『周囲は避難済みで人的被害の問題はない！いけるぞ！』
『では、射出して下さい』
『『受け取れぇぇぇ!!』』

その言葉と共にどこからか（多分ハンターズギルドがあるウルトラ警備隊秘密基地）射ち出された『何か』が超高速で天空より飛来し、レギオノイドの一体を貫通して爆散させつつ駒王の大地に突き刺さった。

「あれは!?」
『そう！あれがグルンガスト参式の最強装備！その名も参式斬艦刀！』
「参式斬艦刀！」
『普段は日本刀型の武器だけど、液体金属で刀身を覆うと斬馬刀みたくなるんだよ！ついでにある程度液体金属による刀身の形状は自由が効くからね！一番大きくする時は鍔の展開するように！』
「承知した！重ね重ねかたじけない！」

グルンガスト参式を動かし、突き刺さった参式斬艦刀を握った時、杏寿郎は不思議な感覚に陥った。

「ここは……!?」
「……来たか。我が参式斬艦刀を継ぐ者よ」
「貴殿は!?」

「俺の名はゼンガー・ゾンボルト。二つ名を悪を断つ剣という」

何もない、光だけが満ちた空間にいつの間にかいた杏寿郎は、目の前のゼンガー・ゾンボルトと名乗った人物と対話する。

ちなみに二つ名は自称だったりするのだが気にしてはいけない。

「お前に問おう。俺と同じく参式に乗り、そして俺と同じく参式斬艦刀を振るわんとするお前は、その力を持って何をする?」

「決まっている。罪なき者に牙を剥くものを断ち切る」

「……迷わず、即答か。ここまで決意と覚悟を備えた者を見るのはかなり稀だ」

そう言ったゼンガーはいつの間にやら手にしていた刀を抜き、杏寿郎に向けて構える。

「お前の意志は認めよう。ならばお前もお前の剣を抜け。真(まこと)の剣士ならば俺の言葉の意味が分かるはずだ」

杏寿郎はゼンガーが言わんとした事を理解して己が日輪刀を抜き、同じくゼンガーへと構えた。

「……一太刀だ」

「……承知した」

暫し間をおいた後に――

「チエエストオオオオオ!!」

「胴おおおおお!!」

互いに凄まじい気を発しながら相手へと得物を振るい、そして……。

「ふ……引き分けか」
「うむ！そうらしい！全集中の呼吸も使わずこれ程の腕前とは恐れ入った！どうやら俺もまだまだのようだ！」
「それはお互い様だ。それよりも気付いているか？お前の中には既に参式の知識が在る事を」
「ああ！先程剣を交えた瞬間、何故か頭の中に入ってきた！今なら頑治郎の事がよく分かる！」
「頑治郎？参式の事か」
「うむ！」

それを聞いたゼンガーは目を閉じて少し考える。
そして――

「良い名だ。それがお前の参式なのだな」
「おお！分かってくれるか！」

何か名前を肯定した。
一言言っておく、この御仁はマジだと。
武人として互いに通ずるものがあった二人だが、ゼンガーの身体が光の粒子となって消えていく。

「ゼンガー殿……!?」
「時間だ。そういえば俺は名乗ったがお前の名を聞いていなかったな」
「む！それは失礼した！俺は煉獄！煉獄杏寿郎だ！」
「うむ……煉獄か。悪を焼き尽くす良き名だ。願わくば、いつか共に肩を並べて闘いたいものだ」
「それは俺も同じだ！その時は是非背中を預けられる仲でありたいな！」
「今のお前ならば参式を思いのままに使えるだろう。その時は俺の二つ名とこの言葉を使うといい」

杏寿郎はその言葉を聞き、しっかりと頷く。

「では……別れは言わん。また会おう、剣友(とも)よ」
「ああ、必ず!!」

ゼンガーが消えると同時に、光はより一層輝きを増し杏寿郎を包み込んだ。

気が付くと杏寿郎はグルンガスト参式のコックピットにおり、グルンガスト参式は参式斬艦刀の柄を掴んでいた。
意識が飛ぶ前から時間が全くと言っていいほど経っていないらしい。
だが、そんな事はどうでもいい。
強いて言うなら被害が拡がっていない事は喜ばしいが。
参式斬艦刀を引き抜き、咆哮するギャラクトロンへとゼンガーから受け継いだあの言葉を叫ぶ。

「――「黙れ!!」!?」
「そして聞け!!」

その尋常ならざる迫力に、ギャラクトロンのみならずC・C・やロスヴァイセ、鬼討組や避難した人々、果てはアマツミツツカやレギオノイドらさえもグルンガスト参式を見る。

「我が名は煉獄！煉獄杏寿郎!!悪を断つ剣なり!!」

威風堂々、名乗りを上げ参式斬艦刀をギャラクトロンへと向けて言い放つ。

「貴様等は我が斬艦刀によって、今日この地で潰えるのだッ!!」

勝利宣告とも言えるそれを聞いたギャラクトロンは激昂するかのような咆哮を上げ、対する避難した人々は杏寿郎の力強い言葉に歓声を上げた。

迫りくるギャラクトロンに対し、グルンガスト参式は参式斬艦刀を両手で垂直に持ち直し、柄を引っ張り鍔を展開する。

悪寒を感じたギャラクトロンはその場で緊急停止し、一歩下がるがグルンガスト参式はそのままの体勢で参式斬艦刀を刃の向きが相手側から真横になるように持ち方を変えた。

すると液体金属が徐々に刀身を形成していく。

やがて完全に形成されたそれは、まさに天を突く巨大な刀……これこそ参式斬艦刀の真の姿である。

その圧倒的な存在感に誰もが息を呑み、グルンガスト参式はそれを気にせず、参式斬艦刀を振り下ろしつつ構える。

構えのために振り下ろしただけにも関わらず、身を強張らせる者が大半であったが、ギャラクトロンはチャージ不十分でも構わないとばかりに先程のギャラクトロンスパークを放とうとする。

だが、甘い。
グルンガスト参式は再び参式斬艦刀を持ち上げたかと思えば迷いなく全力でブースターを噴射。
ブースターのみならず、その顔の口の部分から炎が吐き出されているような雰囲気さえあった。
刮目せよ、炎の呼吸で振るわれし斬艦刀を。

「斬艦刀!!気炎万象!!」

ゴゴォォウゥゥゥッ!!!

ギャラクトロンが気付いた頃には時既に遅し。
身の丈を超える一太刀によってギャラクトロンは真っ二つにされており、認識出来たのはただ『自分が一刀のもとに両断された』という事だけであった。
驚愕も悔恨も叫べぬまま、ギャラクトロンは爆散する。

「我が斬艦刀に、断てぬものなし!!」

たった一撃でギャラクトロンを屠ったグルンガスト参式を同じ機械でありながら恐れたレギオノイド達だったが、そのスキを狙われサイバスターのカロリックミサイルやディスカッター、そしてコンパチブルガリバーのプラズマスピン・ナックルやガリバー・ブーメランで殲滅される。
３機以外が全て倒された事で避難していた住民から先程を上回る大歓声が巻き起こった。

「やれやれ……久々に割に合わない仕事をしたよ。レジェンドが帰って来たらピザをしこたま作らせるとするか」

「む!?C．C．殿、お館様はピザとやらを作れるのか!?」
「ああ。というかあいつがいるなら私はピザを自分で作らん。あいつに作らせるからな。お前達も強請ってみたらどうだ？」
「うむ！ならば手伝いする事を条件に頼んでみるとしよう！」
「お強請りですか!?あうう……でも、お店に頼むと高いし、でもレジェンド様にお強請りっていうのも……うううう……」
「やれやれ……どちらもクソ真面目だな。さてと、セラフォルー、そっちは？」

肩をすくめつつ、アマツミツツカと戦闘中で一番余裕がありそうなセラフォルーに通信してみるC．C．。

『順調ー☆パム治郎君と、それからリアスちゃんの『騎士』の子がまさかの大活躍☆』
「だろうな……ん？これは……！おい二人とも！まだだ！」
「え!?」「よもや!?」

C．C．の言葉に二人が反応した時だった。
再び光の魔法陣が天空に浮かび上がり、新たな一体のロボット怪獣らしきものが送り込まれて来た。
漆黒の身体の所々に青い箇所を持ち、右手には剣を備え、銃が一体化した左手を持つそれはギャラクトロン以上の存在感を醸し出す。

「何だ……コイツは……!?」
「少なくとも只者ではないな！」
「大丈夫です！一体だけなら落ち着いて私達全員で立ち向かえば……」

「君には僕の相手をしてもらおうか、サイバスター」

突如サイバスターに似ていると言えなくもない、翼を持った漆黒の人型機動兵器が凄まじい速度で飛来し、サイバスターへすれ違うようにして一太刀を浴びせる。

「きゃあああああっ!?」
「ロスヴァイセ!」
「ロスヴァイセ殿、大丈夫か!?」
「な……何とか……!」
「ほう……咄嗟に身をずらして直撃を避けたのか。大した反応速度だ」

新たなロボット怪獣に漆黒の機動兵器。
駒王での戦いはまだ終わりを見せない。

「サイバスターとその操者……君達はこの僕が狩る……!」

〈続く〉

蘇る邪悪

駒王や仮住居で死闘が続く中、ゴーデス島には遂にクロガネが到着。
追撃に備えて上空に待機していたレジェンドのネオ・グランゾンを発見し通信を送る。

「レジェンドの旦那！神衛隊とボルフォッグ！ついでにあと一人追加で到着だ！時間が掛かってすまねぇ！」
『気にするな。向かってくるシビトゾイガー共を片っ端から全滅させていたら急に来なくなってな。不謹慎だとは思うが暇で退屈だったところだ』
「いや俺もその様子を見てたけどよ、あんだけ一方的にねじ伏せられたら挑む気も失せるだろ」

ダブルオーザンライザーによるゲルカドン圧倒も凄かったが、ネオ・グランゾンのそれは正に蹂躙。
スフィア殲滅からシビトゾイガーの大群を瞬く間に第一波・第二波壊滅、そして魔王獣をも瞬殺……これでまだ全力とは程遠いのだから相手としてはたまったものではない。

「ともかく……予想以上にド派手な風穴空いてんな……こりゃクロガネが無理に突っ込む必要はねえ。クロガネが地表近くまで移動したら機動部隊は総員出撃！空中戦可能な機体は先行部隊を追い合流し、陸戦型の機体は地表付近で退路確保だ！クソ外道なゴーデスの野郎だ……島ん中でケリがつくとは思えねえからな！」
『同感だ。クロガネや陸戦型の機体は俺が守ってやる。地上班は先行部隊を始め突入組の退路確保に専念しろ』
「だとよミカ、皆！俺らの事は気にせず大暴れして来い！ただし暴れ過ぎて自爆みたいな感じで生き埋めにだけはなるなよ！」
『わかった。あと、レジェンド様』

『どうした？』
『バルバトスの新しい剣、ありがと。デモンワームブレードだっけ、呼べば出てくるところが気に入った』
『そいつは良かった。ゴーデス見つけたらそれで目玉ブチ抜いてやれ』
『うん、当然』

会話内容は物騒だが相手はゴーデス、慈悲など不要。
バルバトスの新武装・デモンワームブレードはクロガネ内のバルバトス用ハンガーに常時スタンバイされており、必要に応じて転送されるため普段はウェイトにならない点が特徴で非常に便利。
グランワームソードと違って母艦からの転送であるため若干のタイムラグはあれど、奇襲にも使う事が可能。
突入組になったのは以下のメンバー。
グラハムのガンダムアメイジングエクシアＧＦ、三日月のネオ・ガンダムバルバトスルプスレクス、竜馬のブラックゲッター、シモンとカミナのグレンラガン、そして厳勝のターンＸ。
当初はマリーダも修理完了したペーネロペーで、との意見もあったがいざという時は彼女に他のメンバーを率いてもらう必要があり、性能的な面を考慮してもバンシィの方が良いだろうという事になり地上班に回った。
よってマリーダのバンシィを含む他の機体は先行部隊と突入組の退路確保だけでなく、おそらく真の決戦となるであろう島内部での戦いから戻って来たメンバーを補給に向かわせている間に戦線維持を行うための温存戦力でもある。

「ヘマしないでよ、カミナ！シモン！」
「心配すんなヨーコ！そっちこそメンバー多いからって気ぃ抜いたりすんなよ！いくらバックにあのインチキスペックのネオ・グランゾンを駆る旦那がいるからってな！」

「シモン、俺もお前も帰りを待つ者がいる……勝手にくたばるなよ」
「分かってるさ、ヴィラル。帰ったら皆で宴会だと聞いてるからな！」
「ジェノちゃんのラゼンガンも完璧だ。キタンのガンメンと並んで問題なく前線を張れる」
「おやっさんどんだけ万能なんだよ!?」
「流石だなコジロー。儂らの出番がなければないで構わんが、そうやすやすと済むような相手ではないか」

紅蓮と羅厳、神衛隊の第一分隊と第二分隊が真っ先にスタンバイする。
そして同時に発進準備を完了させたのはやはりブラックゲッターを駆る竜馬だ。

「ほう、早いではないか竜馬殿！」
「直接見るのは初めてだがマジで性格や声のトーンが全然違うな、厳勝」
「今までの借りを返すのだ。多少は荒ぶっていてもよかろう！フハハハハ!!」
「ハッ！違いねえ！心なしか俺も昂ぶってきたぜ!!」

御大将モードの厳勝と竜馬は揃って戦意高揚しているらしく、正直今の厳勝はゲッターチームに紛れ込んでも違和感ない気がする。

「三日月、君も突入組に加わるのだな。頼りにさせてもらおう」
「あ、乙女座の人。今度シミュレーターで模擬戦付き合ってよ。折角だからバルバトスの新武装とエクシアの剣で打ち合いしたい」
「望むところだ。そのために、まずはこの世界を散々掻き回してくれたゴーデスを撃ち倒してからだ」
「うん。レジェンド様から新武装でゴーデスの目をブチ抜けって言われたし」

こっちもこっちで物騒だった。
グラハムは苦笑しているが、やる気があるのは良い事だ。
相手が相手だけにプレッシャーを感じていないか気になったが、その心配は杞憂だったらしい。

「そういやよ、昭弘……ラフタ、やっと新型機拵えてもらったんだって？」
「ああ。何でも色々考えた結果、クロエにヒントをもらったらしい。フリッケライ・ガイストとかいう機体だそうだ。確か……あれだな」
「……なんつーか、カラーとかバラバラじゃね？武器とかもクセありそうだしよ。いくらラフタでもあれじゃキツくねーか？」
「『継ぎ接ぎだらけの亡霊』……か。どうやら武器付きの両手や両足なんかはレジェンド様の搭乗する予定の機体の試作品をリペイントしたり、他にも使えそうな機体の予備パーツなどを使って急造で組み上げたそうだ。元々上半身は完成していたから、そこだけは救いだったみたいだが。基本的な機体性能は格別高いわけではないらしいが、動力源に特殊なものを使っているおかげで総合的に見ると高性能機……というのが束博士の弁だ」
「よく覚えてんな、昭弘……」

ラフタの新型機とあって、昭弘はかなり饒舌だった。
シノとしては『レジェンドが乗る予定の機体』の試作品を流用している辺りに不安を覚えたが。

「マリーダさん、出力調整こんな感じで大丈夫かな？」
「元の出力がどれほどかは見ていないから何とも言えないが、少なくともオーバーロードする事はないだろう」
「良かった～！フォース・レイが拡散ビームって聞いてからどうしようと思ったけど、そういえばクシャトリヤが拡散メガ粒子砲とか持ってなかったかなーって思い出したんだ。本当に助かったよ！」
「他の武装はミサイルにマシンキャノン、それに……リボルバー式の

杭打ち機？随分と特殊なものだな」
「ほら、昭弘のグシオンが重装甲接近戦重視だから、高機動接近戦を考えたらこうなっちゃって……一応、積みたかったビーム兵器は積めたし」

少々見た目はアンバランスだが、ラフタ的には気に入っているらしい。
ＭＳとは違いＰＴだが、乗ってみれば機体のクセはあれど然程変わらないそうだ。
そして――

「なーんーでーにゃー!!」
「仕方ないだろうが。この機体の操縦形式、最終的なシステムフィッティングはパイロットに合わせる必要があるんだ。それから細かい調整を行って漸く完了、サイズもシステムもその他諸々も手間が掛かるんだから少しは我慢しろ！」
「だってだって！いきなり引きずられてクロガネに放り込まれたかと思いきやこれが出来てて、やっと私もとか思ったらまだシステムがにゃんにゃん！」
「スパナで頭かち割るぞ」
「ごめんなさいイナバチーフ!!」

黒歌は機体の各種最終調整をこの場でやる必要があったのでまだお留守番。
我儘を言ったのでコジローがキレかけたが素直に黒歌が謝って事無きことを得た。
三日月いわく『キレたおやっさんの一撃はゲンさんのキックに匹敵する』らしい。
バコさん超スペック過ぎないか。
そしてクロガネが地表近くまで来たと同時に、機動部隊が順次発進

していく。
当然、突入組は優先して発進させ、先行部隊との一刻も早い合流を目指す。

「先行部隊の3機はどうなってる!?」
「広域レーダーに反応はある！3機とも健在だ！」
「なら、俺達は急ぐだけだね」
「旦那に続いて派手にやったなアイツら！おかげで追っかけんのが楽だぜ！」
「たとえ雑兵がいくら出てこようが我らにとってはカトンボに過ぎぬがなぁぁぁ!!」
「そういうこった！行くぜマイブラザーズ!!」
「「「「応!!」」」」

カミナの号令で一気に最深部まで突き進む突入組。
同時に地上班も足元に注意しつつ退路確保の為に分散、即座に離脱可能な状態で待機。
足元に注意するのは島内部で戦闘中、即ちゴーデスが現れるとすれば地下としか考えられないからだ。
これはかつて、グレートと共に戦った時にゴーデスの復活の際にそうだった事に加え、ネオ・グランゾンがゴーデス探知した結果次元の狭間や亜空間、雲の中などには探知出来なかった事が理由である。

『オルガ、海中も探知してみたが反応はない。やはり奴はあの島にいると見てよさそうだ』
「やっぱりな、どうする旦那？」
『……おそらく、島の最深部にはいないだろうな。というより島そのものにどこか違和感がある』
「島にいると見てんのに最深部にはいない？そんじゃ何か？そこら島中を動き回ってるってのか？」
『いや、そういう……待て。もしもだ、動き回ってるのが島だとしたら

……？』
「は？どういう事だ旦那、そりゃまるで……まさか!?」
『お前も気付いたか……！突入組は先行部隊と合流次第脱出しろ！もう時間はあまり残っていない！』

途中でダブルオーザンライザーと合流し、最深部らしきところで立ち往生していたガンフェニックス、そしてガッツイーグルとも合流出来た突入組はレジェンドからの通信をそこで聞く。

「どういう事ですかチーフ!?」
『どうもこうもない！どうやら奴は俺達が偵察を差し向ける事さえ計算づくだったらしい！』
『迂闊でした……！そもそもこの島自体が囮、ゴーデスの本体は別の場所です！』

ボルフォッグもレジェンドに続いて通信を入れ、全機の脱出を促す。
切羽詰まった様子の二人を声を聞き、嘘ではない事を悟った彼らは即座に脱出を図る。
それと同時に島全体が大きく揺れ、内部も天井が少しずつ崩れていく。

「急げ！生き埋めになるぞ！」
「くっそ……！今までの雑魚も中ボスも全部囮の無駄足かよ畜生！」
『いや……無駄足ではない』
「レジェンド!?それはどういう事ですか!?」
『今はともかく全員無事に脱出する事を考えろ！本当の戦いはそれからだ……！』

タイガの質問を一蹴する形で言い切ったレジェンドはそこで一旦

通信を切る。
時折落ちて来る岩盤を砕き、回避し……先行部隊と突入組は出口を目指す。

ネオ・グランゾンは揺れる島の地表へと降下し、レジェンドとゼットはネオ・グランゾンから降りてレジェンドのブレスレットに機体を収納してレイト達の脱出を待つ。
マリーダのバンシィを始めとする機動部隊地上班やクロガネも既に準備を終え、いつでも戦闘行動へ移行出来る。

「ウ……超師匠……」
「やはり緊張するか、ゼット」
「そりゃしますよ！何せ相手は全宇宙に悪名高い邪悪生命体ゴーデスでございますし！」
「まさかとは思ったが探知範囲を拡げてみたら案の定だ。海中ではなくさらに下……海底に潜んでいたとはな。おまけにそこからこの島を動かしてあたかも自分がこの島にいると思わせていた。ここ数日で急にこの島がこんな辺鄙なところに出現したのもそれが理由だ。奴は敢えてこの島を見つけさせたらしい」
「おびき寄せて一網打尽！……って感じで？」
「おそらくな。だが援軍のスフィアや、手駒のシビトゾイガーやマガバッサー亜種なんかまで壊滅させられたのは予想外だったんだろう。一向に数が減らない事にしびれを切らして島ごとどうにかする気になったってとこか」

そんな会話をしているレジェンドとゼットの元へ、島内部から脱出してきたダブルオーザンライザー、ガンフェニックストライカー、ガッツイーグルスペリオルⅢが着陸し、全員が降りてくる。
レイト、ミライ、アスカはそれぞれのブレスレットに機体を収納し、レジェンドらはいよいよ現れるであろう邪悪生命体に備え――その

時が来た。

海を劈き、それは姿を現す。

まず最初に現れたのは一本の触手の一部らしきもの……しかし、その大きさたるや想像を絶し戦艦をも凌駕する程。

続いて明らかになった触手の先端……そこにはゲルカドンやデガンジャ、マガバッサーにマガパンドン、そしてバランガスの頭部が。

それだけでなく、双脳地獣ブローズや古代怪獣ギガザウルスというかつてグレートとレジェンドが戦った怪獣の頭部までも存在し、ゴーデス細胞と関わりのあった怪獣の頭部が触手の全てにあると同時にゲルカドンとバランガスは二つあった。

二体に関連するレイナーレとカテレア、二人がそれぞれ堕天使と悪魔という以前とは異なった種族のものが関係しているからなのだろう。

そしていよいよ触手の大元が海底から空中へと浮上していき、その姿を露わにした。

歯ではなく牙が並び、禍々しい闇を纏った超巨大な髑髏。

そこから伸びていたのが先の複数本の怪獣の頭部付き触手であり、触手も含めた全長は数十ｋｍにも及ぶ、紛うことなき化け物。

邪悪生命体ゴーデス（第三形態）。

グレートとレジェンドが相対した第二形態よりもさらに醜悪で、強大な力を持った絶対悪が遂に復活を遂げた。

あまりにも巨大過ぎる敵にレジェンドや一部を除きウルトラ戦士や神衛隊らも言葉が出ない。

宇宙でならこれ以上の大きさの敵とも戦った者がそれなりにいるものの地球上で、というのは無い者が殆どだ。

「これが……ゴーデス……!!」
『何だこのバカげた大きさは……!?』
「……おそらくはこの世界の影響だろう。堕天使に魔王級の悪魔、ついでに天界にも関係する元教会関係者を吸収する事で三大勢力の力を手にし、火星での戦いから今まで潜伏してそれを蓄えてきた結果が今のゴーデスだ。ハッキリ言って今までやり合った邪悪大怪獣共の比ではないぞ。ここまで来たら残る道は二つのみ……奴が倒れるか、俺達が倒れるかだけだ……!」
「「「「はい!!」」」」
「「「「おう!!」」」」

ゴーデスを見て何とか声を出していた一誠やドライグも、レジェンドの言葉に他の者達同様力強く返事をする。
レジェンドを始めとするウルトラ戦士達はそれぞれの変身アイテムを手にし、各々の決意を込めた。

「レオォォォ!!」
「８０!!」

弟子や教え子、その家族が生きる世界を守らんとする者。

「……!!」
「メビウゥゥゥス!!」

宇宙警備隊として、邪悪生命体の所業を許せぬ者。

「ダイナァァァ!!」
「デェアッ!!」

遊撃隊の先達として、後輩達を導かんとする者。

『覚醒せよ！オーブオリジン！』
「オーブカリバー!!」
「ジィィィィド!!」
『ウルトラマン！ウルトラマンベリアル！
ウルトラマンジード！プリミティブ！』

この世界で出会った、新たな友との誓いの為に巨悪へと立ち向かう者。

そして――

「行くぜ皆！」
『ああ！俺達でゴーデスを倒して、リアスを救うんだ！』
『今までで一番気合入ってるな、相棒』
『ならば我々も茶化すような事は出来ないな！』
『タイガ、前回に引き続きお前に譲るんだ。この大勝負で負けたら本気でぶん殴るぞ！』
『それは勘弁してくれ！』
「やっぱり俺達はこうじゃなきゃな！」
『カモン！』
「光の勇者！タイガ！」
『ハァァァァ！フンッ！』
「バディィィィ！ゴオオオオッ!!」
『ウルトラマンタイガ！』

恋愛と親愛、それぞれの意味で愛する者の為に戦う者。

「ゼット！アルファエッジで行くぞ！ベータスマッシュへは状況に応じてチェンジする！」
『了解でございます！さあレジェンド超師匠、ウルトラメダルをセットして変身しちゃいなさい！』

「言葉的に尊敬してるのかそうじゃないのか分からんな！」
『ＺＥＲＯ！ＳＥＶＥＮ！ＬＥＯ！』
『ご唱和ください我の名を！ウルトラマンゼーット！』
「ウルトラマンゼェェェェット!!」
『ＵＬＴＲＡＭＡＮ―Ｚ！ＡＬＰＨＡ―ＥＤＧＥ！』

自分が目指すもののため、師と尊ぶ者と共に困難に立ち向かう者。

「ダアァァァッ!!」
「シュワッ!!」
「ヘアァッ!!」
「ハッ!!」
「ジュアッ!!」
「シェアッ!!」
「ハァッ!!」
「ゼアッ!!」
「シュアッ!!」
「デュアッ!!」

レオ、８０、グレート、メビウス、ダイナ、ゼロ、オーブ、ジード、そしてタイガ、ゼット。
集結した総勢１３名にも及ぶウルトラ戦士、そのうちの１０名がゴーデスとの決戦のためにウルトラマンとしての姿で大地に降り立った。

「こりゃ壮観だな。大将や旦那がいねえのが悔やまれるぜ」
「オルガ、サーガ様はともかくレジェンド様はいるでしょ」
「ゼットの中にな。ウルトラマンレジェンドとして顕現してないだろ」

「あ、そっか」

ゴーデスを前にして平常運転の三日月、正しく鬼メンタルである。

「宇宙空間ならコーウェンとスティンガーやインベーダー野郎なんかがやたらデカかったが地上じゃ初めてだぜ。真ドラゴンもここまでじゃなかったしな。こんだけウルトラ戦士や機動兵器が揃ってんのにちっとも奴の大きさに届かねえ……！」

「頭でっかちとはこの事かァ!!味方に当てさえしなければ的を狙うのに困らんなぁぁぁ!!」

「厳勝の言う通りだ！どんだけ相手がデカくても！俺とアニキとグレンラガンのドリルでブチ抜いてやるぜ!!」

「そういうこった！勝負ってのはナリじゃなくてノリなんだよ！誰かがそんな事言ってた気がするぜ!!」

「確かにな……！俺がお前達と初めてやり合った時、とんでもない発想からそのグレンラガンが生まれたのを目にした俺としては文句無しに同意する！」

超次元グレン団の面々もまた闘志を衰えさせたりはしていない。

「一見強大で圧倒的ですが、必ず何処かに綻びがあるはずです。最後まで諦めない勇気を持てば、突破口は開けます！」

ボルフォッグの激励もまた彼らの背中を後押しする。

それを嘲笑うかのようにゴーデスもまた口を開く。

『この姿を目にし、力を感じとってなお向かって来るというのか。やはりウルトラ族や光神に与する者達はつくづく愚かな存在だ。だが安心するがいい。そんな愚か者であろうと我は受け入れてやろう。我と一つになるのだ』

ゴーデスの傲慢な言葉に真っ先に反論したのはやはりゼロ。

「ヘッ！今の今まで逃げ腰だった奴が何と言おうが関係ねえ！宇宙の悪（ワル）は俺達がブッ潰す!!」

「「「「ウン!!」」」」

銀河遊撃隊隊長としてゼロは威風堂々ゴーデスに言い放ち、他のウルトラ戦士達も頷く。

カミナや三日月らも完全に戦闘態勢であり、ゴーデスの言葉を聞く気は微塵も無い。

『ならばその身で知るがよい。絶対なる神に仇なす者がどうなるかという事を』

『うるせえ髑髏野郎！その面ボコボコにして部長の苦しみをテメーにも味わってもらうからな！』

「覚悟しろ、ゴーデス!!」

一誠とタイガもゼロに続いて啖呵を切る。

「へのつっぱりはいらんですよ！勝つのは俺達がウルトラ大連合軍だ!!」

『咄嗟に付けたんだろうが、あの巌勝いわく頭でっかちのアイツにはそれぐらいシンプルかつダイレクトな名前の方が覚えやすいかもしれんな。もっとも……覚えたところで奴がそれを言う機会は今回限りだ……！』

サラッとゴーデスに毒を吐いてゼットの即席名付けを肯定したレジェンドは号令をかける。

『総員に告げる。ここでゴーデスとの決着をつけるぞ……！一切の出

し惜しみをするな!!』
「「「「ハイ!!」」」」
「「「「了解!!」」」」
「「「「応!!」」」」

今、ゴーデスとの最終決戦が幕を開けた。

〈続く〉

Ｂｌａｃｋ　Ｓｔｒａｎｇｅｒ

ウルトラ戦士＆光神陣営ＶＳゴーデス。
その決戦の火蓋が切って落とされた。
ゴーデスの復活によって地球全体が突然の暗雲に包まれており、世界各国ではこの異常事態に軍を動かすなどして警戒するが、戦いは彼らの知らぬ場所で既に始まっている。

「何となく予想は出来ていたがやはり基本となるのは空中戦だ！初期陣形はウルトラ戦士達を主軸に飛行可能機体で隙間を埋める形に展開！あのデカさじゃ闇雲にバラけて撃っても効果はねえ、陸戦型は触手を一本一本確実に破壊して主力を援護しろ!!特機、またはそれ準拠の機体は機動性によっては触手を足場代わりに利用してゴーデス本体に攻撃を仕掛けてもいい!!」
「「「「了解ッ!!」」」」
「クロガネ、全速前進！こっちは空中で援護する！地上に比べて手数が少ない分、火力で補うぞ！ホーミングミサイルと艦首魚雷発射管、全門開放！連装衝撃砲、及び副砲の照準合わせ!!弾薬もエネルギーも使い切る気でいけよ!!」

オルガの一切妥協を許さない指示が飛ぶ。
相手は次元を超えて悪名轟かす邪悪生命体、出し惜しみしている場合などではない。
格納庫ではこの戦いが始まった今も尚、黒歌の機体の調整が急ピッチで行われている。
可能な限り戦力を注ぎ込む。
そうしなければ勝てない相手だとこの戦場にいる全ての者が肌でそれを実感していた。
だが、敵はゴーデスだけではない。
別の場所で二つの『黒』が猛威を振るっていた。

☆

――駒王町――

レギオノイドとギャラクトロンを撃破し、仮住居を襲っていた大型の『鬼』アマツミツツカとの戦いも順調に進み、あと少しで一息つけるだろうと思ったところに新たなるロボット怪獣と機動兵器が現れた。

ロボット怪獣の方はともかく、機動兵器……というよりそのパイロットの方は何故かロスヴァイセの駆るサイバスターが狙いらしい。

「い……いきなり何なんですか貴方は!?」

「ふむ、そうだな。自分を狩る者の名前くらいは知っておきたいだろうし……いいだろう。僕はアサキム・ドーウィン、そしてこの機体はシュロウガだ」

「あ、ご丁寧にどうも……じゃなくて！どうして私を狙うんですか!?少なくとも私、貴方とはまるで面識無いですよ!?」

「それは当然だ。僕も君とはたった今初めて合ったばかりだからね」

「はい!?」

「だがその機体……サイバスターは別だよ。さて、これ以上は話したところで君には理解出来ない。潔く僕に狩られるか、それとも力の限り抵抗するか選ぶといい。僕としては是非とも後者を選んでほしいが」

ロスヴァイセとしては無論抵抗する気だが、初対面で奇襲された事に加えて上から目線なのは物凄く腹立たしくて仕方ない。

しかし、奇襲だったとはいえ相手は明らかに格上、しかも真の力を発揮したサイバスターならいざ知らず、現状どうにか戦える程度の力しか引き出せないロスヴァイセには分が悪過ぎる……いや、正直結果が決まっているような戦いだった。

「私を狙う理由はともかく、簡単にはやられてあげられません！」

「フフフ……そう来なくてはね。ただ一つだけ忠告してあげようか。今の君を狩る事など造作も無い」
「え……!?」
「魔王剣……ディスキャリバー！」

シュロウガは一振りの剣を出現させ、サイバスターへと猛スピードで斬りかかる。
なんとかサイバスターはディスカッターで防御するも、直後に一瞬で背後に回り込まれ、ヤクザキックを受けて地上へと叩き落された。

「きゃあああ！」
「ロスヴァイセ!?」
「あの者と黒い機体……相当な手練だ！」
「申し訳程度にしかサイバスターを扱えていない君が僕の相手をするには時期尚早過ぎる。特にＭＡＰＷだけでも使えたのなら先のレギオノイドやギャラクトロンとの戦いもどれだけ楽に済んだことか」

ＭＡＰＷ――大量広域先制攻撃兵器。
例えるならゴーデス島でシビトゾイガーに対してレジェンドのネオ・グランゾンが使ったグラビトロンカノンなどがそれに当たる。
サイバスターにも本機の代名詞的な『サイフラッシュ』というものがあるのだが、ロスヴァイセはまだ使う事が出来ない。
実際、彼女が使えているのはカロリックミサイルとディスカッターのみだ。

「それより君達は彼女より自分達と町の住人を心配した方がいい。その『惑星破壊神サタンデロス』もまたその特性上、そう簡単に傷つける事は出来ないのだから」
「惑星破壊神とは大層な二つ名だな……！」
「だが如何なる相手だろうと不屈の闘志を持って立ち向かえば起死回生の一手を見出す事が出来る！不退転！それが我が流儀!!」

グルンガスト参式は斬艦刀を仕舞い、機体に備えられていた武装を使用する。
町中である以上、あのサイズの武器をホイホイ振り回すわけにもいかない上、ゼンガーとの打ち合いによってグルンガスト参式の武装を理解出来ていた杏寿郎はそちらを使う事にしたのである。
背部のドリル・アタッカーを両手に装着・始動させ、サタンデロスへと構えるグルンガスト参式。

「貫け！ドリル・ブーストナックル!!」

高速回転するドリルを装着されたブーストナックルがサタンデロスへと迫る。
しかし……

ガキィィィン!!

「なんと!?弾かれた!!」
(今、奴の周囲にバリアのようなものが張られたが……ただの攻撃ならともかくドリルという強烈な貫通力を持つものを高速で打ち出したにも関わらず全く破れる気配が無い。対物理バリアかもしれん、試しにビームを撃ってみるか)

C．C．はそう考えてプラズマ・ビームを放ってみるが、やはりバリアによって無効化された。

「対物・対エネルギーなどの分類なし……完全なバリア・フィールドか。一番厄介なタイプだ」
「C．C．殿！あの時の胸から発射する光線は使えるか!?こちらにも同質の武器がある！一点集中の同時照射ならばあの防御膜を破れるやもしれん！」

「そちらも試してみる価値はあるか……いいだろう、タイミングを間違えるなよ……！」
「承知した！やるぞ、頑治郎!!」

ゆっくりと迫るサタンデロスに対し、コンパチブルガリバーとグルンガスト参式は共に胸部へとエネルギーを集束し、同時解放する。

「ガリバーバースト、照射！」
「オメガ・ブラスター、発射!!」

二つの閃光がサタンデロスへと伸び――

「――」

バシュウウウウウ……

またも防がれた。

「よもやよもやだ！これでも破れぬとは!!」
「いや……破れてはいるらしい」
「何っ!?」

杏寿郎はＣ．Ｃ．の言葉でもう一度サタンデロスを見ると、僅かだがバリアが破られているもののすぐに元通りになってしまう。

「あの修復速度……まるで十二鬼月上弦の再生速度だ！」
「ちっ……！破れた端から修復か！だがあれだけの高密度・高速修復となれば膨大なエネルギー消費が発生するはず……」
「言い忘れていたが、サタンデロスは当初その防御機構のおかげで１時間活動後に２３時間、エネルギー充填の為にバリア以外の機能を停止するインターバルが発生していた。そこを改修され、問題点は克服

……つまり君達がサタンデロスを打ち破るには文字通りどうにかしてバリアを抜き、本体を破壊する他無い。出来なければその高密度のバリアという強固な盾に守られながらサタンデロスはこの町のみならずこの世界を破壊し尽くすだろう」

アサキムはシュロウガの中でほくそ笑みながらC．C．と杏寿郎にそう告げた。

コックピットからシュロウガを睨む二人だがシュロウガはというと、再び斬りかかってきたサイバスターへの対戦に戻る。

先程の会話の最中に復帰したようだ。

「二人で駄目なら私も一緒に戦えばいいだけです！」

「今の君とサイバスターが加わったところで状況が良くなるとでも？満足に武装も使えず、その機体の真の力がどういうものかさえ理解していない君が！」

シュロウガはサイバスターを吹き飛ばし、機体の両肩と両足の付け根部分を紫色に発光させ――

「黒き獄鳥……トラジック・ジェノサイダー！」

そこから黒色の小さな鳥のようなモノを複数射出させる。

それは縦横無尽に飛び回り、サイバスターを全方位から斬り……いや、削り裂いていく。

「く……うぅぅぅッ!!」

「どうだい？微かな希望が音を立てて崩れ落ち！瓦礫となり！そして塵芥となって風化していく感覚は!!」

あまりに一方的な蹂躙。

機体のコンセプトが似ているのかもしれないが、それ故に搭乗者の

能力がモロに出ている。
サイバスターとシュロウガ、双方の性能差以前の問題なのだ。
トドメと言わんばかりの重い一撃を受け、またもサイバスターは地面を破壊しながら吹き飛び、仰向けの状態で横たわる。
「う……あぐ……っ……」
「……まさかここまで手応えがないとはね。期待外れだったよ」

☆

ダイブハンガーでは一人の少女が格納庫へ向けて走っていた。
（怒られるかもしれない。でも……）
少女に迷いなど無い。
大切な家族の為に――
「どこに行くのかな？クーちゃん」
「束様……」
その少女……クロエの前にはいつも通り笑顔な束が待っていたとばかりに手を後ろで組んで立っていた。
「ふっふーん。何で分かったんだって感じだね、クーちゃん。束さんはレジェくんとクーちゃん限定で何でも分かってしまうのだ！ねぇねぇ凄いでしょ!?」
えっへん！と胸を張る束。
対するクロエはバツの悪い表情になっている。
そんな彼女を見た束は表情こそ普段と変わらないが、至極真面目な声色で話しかけた。

「行きたいんでしょ？ろせちゃんやしーちゃん、きょーくんの所へ」
「……はい」
「クーちゃんが凄い技量持ってて凄く良い子なのも知ってるよ。でもクーちゃん一人加わってもあの黒いの二体に抵抗出来るとは思えない。あれらに対してろせちゃんは殆ど戦力になってないしね。それでもダメ元で行ってみる？サイバスターを捨ててでも、ろせちゃんを脱出させて逃がす方がいいと束さんは思うんだけどなー」

確かにそうだろう。
正直サイバスターを失うのはかなり痛手だが、ロスヴァイセを失った時のレジェンド一家を考慮したら断然彼女の命が最優先だ。
だが、クロエの答えは違った。

「ロスヴァイセ様は大切です。でも、同じくらいサイバスターも私には大切です」
「ん？どうして？」
「束様が作った機体ですから」
「へ？それだけ？」
「はい。私には十分過ぎる理由です」

ハッキリ言い切ったクロエに、束は目をぱちくりさせたあとにっこり笑う。

「よろしい！」
「え……？」
「クーちゃんも知ってると思うけど……私さ、たとえ世間的に優秀だったり有名だったりしても興味ない奴らの事なんか何がしたいか、何をしようとしてるのかわかったってどうでもいいし、他の事考えるのに邪魔だからすぽーん！って頭の中から放り出しちゃうんだ」

右へ左へとウロウロしつつ、束は続ける。

「けど逆に興味の対象の子の事はギュンギュン頭に入ってくるんだー！クーちゃんはさ、いつも私やレジェくんの事第一に考えてくれてるけど……もっと自分にワガママでいいんだよ。クーちゃんに恩を感じてほしくて助けたわけじゃないよ、私もレジェくんも。ただ私とレジェくんがそうしたかっただけ」

「束様……」

「だからそんな私達の娘のクーちゃんもしたい事すればいいのさ！たまには遠慮せずおねだりしてくれた方が親としては嬉しいんだよー」

ねっ？と笑顔で掌を合わせつつ子首を傾げる束は親というより甘えん坊の姉である。

篠ノ之束……彼女、生まれた世界では実妹には甘えてもらえず友人には割とぞんざいな扱いだった。

おまけに宇宙進出を見据えて開発したＩＳはその戦闘力しか見てもらえないし、巫山戯たデモンストレーションを強制され、本気で世界に絶望していたところに奇跡的にレジェンドと出会い、道を踏み外す直前に軌道修正出来たのだ。

それからクロエを救出してさっさとその世界に見切りをつけてレジェンドに付いてきたのだが、今まで束が関わった者達に比べてクロエは『良い子過ぎた』。

言われた事は絶対守るし、何かと世話を焼くが絶妙な匙加減で焼き過ぎはしない。

束の手の行き届かないところを率先して手伝い、忙しいレジェンドを気遣う。

勿論自分の事は二の次三の次で。

あまりに従順すぎて逆にレジェンドと束が心配してしまう程だった。

そんな彼女が言った先の言葉の真意を束は読んでいた。

『ロスヴァイセやサイバスターだけでなくＣ．Ｃ．や杏寿郎、そし

て彼らが駆る機体も助けたい』という彼女の思いを。

「おいでクーちゃん。レジェくんがクーちゃんにプレゼントしてくれたあの機体、持って来てるから」

「……!?あ、あれはドラガイトにある別荘に……!」

「クーちゃんってば『レジェンド様から送られたものだから何かあるといけない』と思って置いてくるんじゃないかと考えたから先回りして確認しに行ったらやっぱりだったよ～。いや凄いよねこの子。私達の元の世界だったら戦力や権力欲しさに低俗な馬鹿共が群がる事間違いなし。まーそんな事したら私もレジェくんも黙ってないけどさ」

束はるんるんとスキップしながら格納庫の隠しハンガーを稼働させる。

そこにあったのは父親（レジェンド）から送られ、母親（束）に調整してもらった彼女の愛機。

「クーちゃん」

「……はい」

「いってらっしゃい。気をつけるんだよ？」

「……はいっ！行って参ります！」

母に見送られ、父から受け取った力をその手に少女は戦場へと向かう。

彼女自身が願ったもののために。

☆

仮住居周辺におけるアマツミツツカとの戦いは大詰めを迎えていたが、サイバスターがシュロウガに圧倒され地上へと叩き落されるのを目の当たりにして動揺しているスキに、アマツミツツカがタマハミ

状態へと移行してしまい、駒王とその周辺の空が瘴気の影響で禍々しく変化する。

「うきゃあああああ!?何何何!?」
「胡蝶……これは何だ!?」
「落ち着いて下さい、甘露寺さんに伊黒さん。これはタマハミといってこちら側の『鬼』が魂の力を暴走させて強化されている状態です」
「でも厳勝さんの話によると、同時に鬼が限界に近い事を示しているという事らしいわ。加えてマガツヒ時同様にどこの部位を狙っても傷つけられるから、とどのつまりあと少しなので頑張りましょうってこと!」
「そういえば、あの時の鳥型の鬼や人型の鬼は大きく戦闘スタイルが変わりましたけど、あの鬼は然程変化ありませんわね」
「師範や狛治さんがいればもう少し詳しく分かったのかもしれないが……」
「倒してしまえば一緒です」
「パムー!」
「だね☆」
「「「「そこ凄く物騒!!」」」」

小猫と、それに賛同してるパム治郎とセラフォルーに総ツッコミが入る。
それと同時に再び束から通信が入った。

『あーあーこちら束さんこちら束さん、聞こえてたら誰でもいいからお返事ちょーだい!』
「聞こえてるよ束ちゃん☆」
『あ!はろはろーセラちゃん!そっちどう?』
「なんかね、鬼がタマハミって状態になった☆」
『ほうほう、ならもうちょいだね』

道端でばったり会った友人同士の会話のようなやりとりだが次の瞬間、束から衝撃的な事が伝えられる。

『黒くてデカいバリア付きはともかく、ろせちゃんは大丈夫だよ。クーちゃんが何とかするから』

「クーちゃん……クロエちゃん？もしかしてラピエサージュ出るの!?」

『違うよん♪』

「違うんですか？確か彼女はその機体でシミュレーターにおいて好成績を……」

『あれはあくまでシミュレーターでクーちゃんが引き当てた機体なだけ。本当のあの子の機体はレジェくんお手製の超高性能機だから』

「「「!?」」」

レジェンドお手製、という部分に朱乃、カナエ、しのぶ、そしてセラフォルーが反応するが、その時いよいよシュロウガが動いた。

ディスキャリバーを構え、未だ仰向けに倒れたままのサイバスター目掛けて突撃し――

横から紫色の超エネルギーを受けて吹き飛ばされる。

「「「「!!」」」」

『さ、初お披露目だよ。クーちゃんの専用機』

そしてそのエネルギーを発射したと思しき機体が、猛スピードでシュロウガの前に立ち塞がった。

「今のは……君がやったのか」

「はい。ロスヴァイセ様もサイバスターもやらせません。私とこのガリルナガンが貴方のお相手を務めさせて頂きます」

「ほう……どうやら彼女より君の方が面白そうだ。彼女のように僕を

失望させないでくれよ?」
「面白いかどうかは分かりません。ただ一言だけ」
「ん?」

「御覚悟を」

直後、クロエの機体――ガリルナガンの一撃がシュロウガに直撃した。

クロエの駆る黒き機体・ガリルナガン。
便宜上はハイ・パーソナルトルーパーに分類されているが、実際は全くの別物。
トロニウム・レヴという特殊な動力源を始めとするオーバーテクノロジーを凝縮した、彼女の専用機である。
遠近両用武器バスタックス・ガンや、背部のアクティブ・ウイング・ユニットなど外見でも目を引くが、特筆すべきは本機を扱うクロエの技量であった。

「先制攻撃とはやってくれる……!?」
「アクティブ・ウイング・ユニット、パージ。ユニット連結……トライ・スラッシャー!」
「迎え撃て、トラジック・ジェノサイダー!」

二つの戦輪と複数の黒き獄鳥がぶつかり合うも互角であり、ジェノサイダーは消失しスラッシャーはガリルナガンの元へ戻り再びウイングにドッキングする。
二機はそれぞれの得物を手に急接近し、先に続いてガリルナガンの持つバスタックス・ガンの斧部であるバスター・アックスとシュロウガの持つディスキャリバーが空中で打ち合いとなり、そのまま鍔迫り

合い状態になる。
約２２ｍのガリルナガンに対してシュロウガは約３０ｍ、約１．５倍の大きさだが得物に関してはバスタックス・ガンの方が大きく重量もある。
ガリルナガンは出力を上げてシュロウガを突き飛ばし追撃しようとするも相手もそうやすやすとやられはしない。
お互いに超高速機動を繰り返しながら斬り結び、ガリルナガンのバスタックス・ガンの重金属粒子砲とシュロウガのラスター・エッジが幾度となく飛び交う。
幾度も激突する『黒』と『黒』。
まさに一進一退の攻防戦が展開されている。

その光景を目にした人々は、今までアニメや漫画などでしか見る事がなかった巨大ロボット同士の激しい戦闘に興奮気味だが、忘れてはならない。
サタンデロスは未だコンパチブルガリバーとグルンガスト参式相手に優位に立ち、進行を止めていないのだ。

「クロニクル少女……！グラハム教官殿も言っていたが凄まじい技量だ！」
「まあ、レジェンドと束が事あるごとに自慢するからな。だが、おかげでコイツに集中出来る」
「うむ！クロニクル少女の頑張りに応えねば！さてどうしよう!?」
「先程見たところ、バリアはあの胸部の発生装置を破壊すればどうにかなりそうだが……あの面倒なバリアを破った上であれを破壊する必要があるわけだ。手間がかかるどころのレベルではないな」

サイバスターの方は一先ずどうにかなったが、それでも状況が好転したとは言い難い。
グレイフィアから送られてきた情報によるとレジェンド達も遂に

ゴーデスとの最終決戦が始まったそうだ。
向こう側から戦力を回してもらうわけにはいかないし、自分達だけでこのサタンデロスを対処しなければならない。
「全く……本当に割に合わない仕事だよ」
そうボヤくC．C．だったが、彼女はまだ諦めていない。
想い人が、家族が必死に戦っているのだから。

ロスヴァイセはサイバスターのコックピットでガリルナガンとシュロウガの激闘を眺めていた。
「すごい……」
機体のサイズ差を覆すパワーや、シュロウガに負けない機動性を有するガリルナガン、そしてそれを制御し使いこなすクロエに対しロスヴァイセは尊敬の眼差しを向ける。
同時に、自分の無力さに腹が立った。
同じく機動兵器での戦いに初陣の杏寿郎はギャラクトロンを一刀両断し、今もサタンデロスを食い止めている。
しかも通信を聞いた限りではグルンガスト参式の武装の使い方も全く知らない、文字通り初めて乗った状態でだ。
だというのに自分は連携前提とはいえレジェンドの指導まで受けてこの体たらく。
「私……不甲斐なさすぎですよね」
目に涙を溜め、唇を噛むロスヴァイセ。
今、この瞬間ほど力が欲しいと思った事は無い。
その願いは風と共に流れ――

――私の声が、聞こえますか――

〈続く〉

重なる絶望

――私の声が、聞こえますか――

ロスヴァイセの耳には確かにその声が聞こえた。

「え？・えええ!?・な、何!?・」

――落ち着いて下さい。私は貴女の敵ではありません――

「そもそも何処から話しかけてるんですか!?・」

――直接貴女の脳内に、です。レジェンド様がその場にいらっしゃらない為、『地球の意志』の力を借りてそちらに転移してる最中なのでこういう形になってしまっていますが――

「転移してる最中？・地球の意志??・」

京都での出来事同様に連続して分からない事だらけでパンクしそうになるロスヴァイセだったが、何とか気を取り直して一番聞きたかった事をその声の主に問う。

「そもそもどちら様ですか!?・」

――私はサイフィス……その機体、サイバスターの守護精霊となる上位精霊であり、精霊王の一柱でもあります――

☆

激動する駒王町から遠く離れたゴーデス島。

そちらでは駒王とは比べ物にならない激戦――総力戦が展開されていた。

「イヤァァァァ!!」

「デヤァァァァ!!」

ドオオオオオン!!

師弟の合体技・レオゼロキックがゴーデスの触手の一つに直撃するも大したダメージにはならず、他の触手から攻撃され地上へと叩き落される。

「グワッ!!」
「ガハッ!!」
「兄さん!・ゼロ!」
「メビウス!・合体光線だ!」
「ハイ!」

尚も追撃せんとする触手を迎撃すべく、８０とメビウスはそれぞれの最も得意とするサクシウム光線とメビュームシュートを触手へと同じタイミングで発射する。

「シュワッ!!」
「ヘアァッ!!」

ドガァァァァン!!

二つの光線が触手に着弾すると爆発し何とかその触手は弾けたものの、今度は別の触手の先端にあったマガパンドンの頭部から放たれた巨大な火炎弾に８０とメビウスは吹き飛ばされてしまう。

「「ウアァァァッ!!」」
「ゴーデス!・これ以上好きにはさせん!」
「俺達が相手だぜ!」

吹き飛ばされた８０とメビウスに入れ替わる様にグレートとダイナが駆け出し、ゴーデス目掛けて飛び上がる。

飛び上がりながら二人は頷き合い、グレートはバーニングプラズマの、ダイナはソルジェント光線のチャージに入り、ゴーデスの本体と思しき髑髏の正面から近距離で発射。

「シュアッ!!」
「ジュワッ!!」

スドオオオオン!!!

チャージして放たれた二つの光線はそのまま無防備なゴーデスの顔面に直撃し、先程の触手の時より遥かに大きな爆発を起こす。

「確実に入った……!」
「倒せはしなくとも今のは効いたはずだぜ！油断せずに一気に畳み掛け……」
『それこそが油断だ。神の裁きを受けるがいい』

ガカァァァァッ!!

「「グァァァァッ!!」」

近距離で直撃したにも関わらず無傷のゴーデスはその双眸を怪しく輝かせ、グレートとダイナに闇のエネルギーを爆発させてレオとゼロのように地上へと落下させた。

「グレートさん！ダイナさん！」
「ガイさん、やっぱり一つずつでも触手からどうにかしていかないと！」
「俺達も手伝います！俺はイッセーの神器のおかげでブーストが効く！」
「レオ大師匠とゼロ師匠、メビウス兄さん達が二人ずつでも駄目なら

その倍の四人でなら触手ぐらいはイケるはずでございます！」
「よし……！ジード！タイガ！ゼット！合わせろよ！」
「「ハイ!!」」

オーブ指揮の下、ジード、タイガ、ゼットの三人はそれぞれの必殺光線を放つ準備に入る。
その中でもタイガは赤龍帝の籠手を発現させ、一誠はオーブレットをリードしておく。

『オーブレット！コネクトオン！』
『いけるぜ、タイガ！』
「ああ！」
「よし、やるぞ！オーブスプリーム……」
「レッキング……」
『Ｂｏｏｓｔ！Ｂｏｏｓｔ！Ｂｏｏｓｔ！Ｂｏｏｓｔ！』
「ブーステッドスプリーム……」
「ゼスティウム……」

そして、呼吸を合わせ――

「カリバー!!」「バースト!!」
「ブラスター!!」「光線!!」

ズアァァァァァッ!!

同時発射する。
赤龍帝の籠手によって倍加されたスプリームブラスターに共鳴し、他の三つの光線も少なからず威力が上乗せされた状態になり一本の触手の根元に直撃。
そしてその触手は大きな音を立ててゴーデスから千切れ落ちた。

「よしっ!!」
「複数人で一点集中し触手を一本一本排除していけば活路が見えてくる!」
「千里の道も一歩から、でございますね!」
「今回はそこまで時間はかけられないけどな!」

漸く攻撃が効いた事に少しだが希望が見えた。

『浅はかなり、愚か者共め』

ゴーデスの言葉と共に千切れた触手がゴーデス細胞となり再びゴーデスに吸収され、触手が再生を果たす。
驚く一同を気にも留めず、触手先端のゲルカドンの頭部から火炎を放射しオーブら四人にカウンターを炸裂させた。

「「「ウアァァァッ!!」」」

爆炎に見舞われながら吹き飛ぶオーブ、ジード、タイガ、ゼット。
総勢１０人ものウルトラ戦士が手も足も出ない。
だが、何も戦っているのは彼らだけではない。

「うおおおっ!!」

「ハアアアッ!!」
「ぬぅおぉぉぉ!!」

ゴーデスの触手へと飛び乗り、本体へと爆進する三機の機動兵器。
ヴィラルのエンキドゥルガーとロージェノムのラゼンガン、そして先頭を突き進むのが狛治の機体・ガンダムゴッドマスターである。
拳士であるが縁壱の道場で師範代を務めていたこともあり、両手にゴッドデビル・スラッシュを一本ずつ持ち的確に攻撃を捌きながら確実に近付いていく。
それをカバーするように八本の腕を巧みに操り剣を振るうエンキドゥルガーと、素早い動きで格闘を行うラゼンガンが脇を固める。

「やるじゃねえか狛治!」
「久々だからってヴィラルもロージェノムのおっさんも張り切ってんな!俺達も負けてらんねえぞ、シモン!」
「ああ!あの憎たらしいツラに俺とアニキのドリルで風穴を開けてやるぜ!!」

ゴッドマスターの奮闘に続くようにブラックゲッターとグレンラガンも突撃する。
ゲッタービラストキャノンを撃ちつつ接近するブラックゲッターに、胸部のグラサンカッターを手にゴーデスへ斬りかかるグレンラガン。

「狙う必要ないよな。どこに攻撃しても当たるし」
「策士策に溺れるとはまさにこの事ォ!己の強大さを見せたかったようだが逆に的になるだけだったなあ!!」

三日月のバルバトスや巌勝のターンXもまた恐れる事なくゴーデスへと攻撃を仕掛ける。

「攻撃の手を緩めるな！触手が再生するというならばそこへの攻撃は最低限に留め、本体である髑髏部分へ火力を集中させろ！」
「作戦通り地上班は射撃武器にて前衛部隊を援護する事に専念しろ！あの巨体とそこから生み出される攻撃力はモビルスーツが受ければひとたまりもない！下手に前に出ようとはするな！」
「「「了解！！」」」

グラハムとマリーダの指示によって鉄華団は落ち着いて陣形を整えつつ、ウルトラ戦士や前衛部隊を支援。
正直、焼け石に水にしかならないかもしれないが、やらないよりはマシだろう。

そんな中、ボルフォッグは一人ホログラフィックカムフラージュを使い、姿を晦ましつつ何かを探っていた。
（ゴーデスはともかく、もう一つ別のエネルギー反応がある。エネルギーの流れからして何かが吸収しているような……）

ただでさえ激しい総力戦だというのに、これ以上厄介なモノがあってはいけない。
可能なら自分のみで対処しようとボルフォッグは考えていたのだが、彼が見つけたそれは予想を遥かに上回る代物だった。
（こっ……これは……!?）

クロガネの格納庫では黒歌の機体のセットアップが今尚進められていた。
「モーショントレースはどうだ!?」

「バッチリですよ！おやっさん！」
「よし！いよいよ最終チェックに入るぞ！」
「ど……どうするにゃ!?」
「お前が乗っている状態で起動し、それを確認して起きている各種誤差を修正する事で完了だ」

コジローの言葉を聞いた黒歌はやたら素早い動きでコックピットに入り、習った手順で機体を起動させる。

「起動したにゃ！どんな感じ!?」
「いくつか修正箇所はあるが……すぐに終わる。もう少しだけ辛抱しろよ！」

そう言うとコジローはすぐにプログラムの修正に着手し、目にも止まらぬ速度で作業を進めていく。

（あの反則髑髏相手じゃまともにダメージなんて入らないだろうけど……少しぐらい、負担は減るわよね。待っててね、旦那様！）

迎撃に徹していたゴーデスだったが、ウルトラ大連合の猛攻に対し遂に攻撃へと転じた。
それぞれの触手の先端にあるデガンジャ、バランガス、ギガザウルスの頭から竜巻や冷凍ガスを広範囲に吐き出すだけでなく、マガバッサーの力で周囲にも竜巻を多数発生させる。
地上班のみならず、空中戦を展開していたバルバトスらもゴーデスの急な逆襲に不意をつかれた。

「おわっ!?あっぶねえな！」
「ちっ！これじゃグシオンの装甲でも厳しい！迂闊に仕掛けられないぞ！」

「あたしのフリッケライなんか高機動型だからまともに食らったらアウトなんだけど！」

シノ、昭弘、ラフタが口々に文句を言うが、ゴーデスが気にするわけがなく、マガパンドンの頭から火炎弾を連射してくる。

「「「「うわあああ!?」」」」

団員達は何とか回避するも、続け様に火炎弾を放たれて万事休すのところを８０が彼らの前に立ち、ウルトラリバウンドミラーによって火炎弾を防ぐ。

「大丈夫か!?」

「ありがとうございます！」

「今のうちに後退して態勢を立て直すんだ！」

「了解です！」

８０が周りを見渡すと他のウルトラ戦士も一部を除き神衛隊とチームを組むように立ち回っていた。

そして、ふとゴーデスの本体近くを見ると……

「……！あれは！」

攻撃に転じたことでスキの出来たゴーデスの触手を駆け上がっていたゴッドマスター、エンキドゥルガー、そしてラゼンガンが本体部分へと到達したのだ。

「おおおおおっ!!」

「ヴィラル流！五月雨真空波ァァァ!!」

凄まじい拳撃と斬撃が一点集中で叩き込まれ、タイミングを見計ら

いラゼンガンが高く飛び上がり、下半身を超巨大なドリルにして2機が集中攻撃した部位へと突撃する。

「狛治とヴィラルが砕いた場所へとこの旋闘術を叩き込めばいくら貴様とて無事ではいられまい！我らが意地と魂、その身に刻めぃ!!」

ズガガガガガァァ!!

『矮小な存在にしてはやるものよ。だが』

ラゼンガンの旋闘術を受けながら何も感じないとばかりにゴーデスは一気にエネルギーを集束・解放し3機を吹き飛ばす。

「「ぐわぁぁぁぁっ!!」」

「狛治！」

「ヴィラル！ロージェノム！」

「野郎……！ロージェノムの旋闘術を食らってもビクともしねえ！バカげたレベルのタフさだぜ！」

しかし、吹き飛ばされた3機はすぐさま空中で体勢を立て直しつつ地上へと着地し、再び立ち向かっていく。

「細胞に核があるように、奴そのものを巨大なゴーデス細胞と考えればいい！おそらく奴の本体の内部には核に相当するモノがあるはずだ！」

「ならそれをぶっ潰せりゃ戦局は変わるわけだ！」

狛治の言葉に納得したのか、ゼロも共に立ち向かっていくが、それを嘲笑うかのようにゴーデスは告げる。

『悪くはない考えだな。しかしそれは間違いだ。我の内部に核はあれ

ど、それは我を構築している細胞全てに存在しているというだけのこと。即ち今の姿の我を破壊したところで元通りになるだけ……我を討つには我が細胞全ての核を滅さねばならぬ』
「「「「!!」」」」

ゴーデスから告げられたのは、ゴーデスを倒すためには数十キロにも及ぶ巨大な身体を構築しているゴーデス細胞全てをどうにかしなければならないということ。
現状の戦力ではあまりに厳しい事であったが、どうするかと悩む者達の中で唯一、タイガ……そして一誠やタイタス、フーマはすぐに攻撃態勢をとる。

『じゃあ細胞全部消し飛ばせるだけのエネルギーがありゃいいんだろ！赤龍帝の籠手で倍加しまくった必殺光線なら！』
『私達のエネルギーも使え！タイガ！』
『俺らの分も含めりゃ、四人分のエネルギーを使って超倍加出来るぜ！』
「ああ！行くぞ、イッセー！タイタス！フーマ！そしてドライグ!!」
『四人分の別々のエネルギー使って倍加するのは初めてなんだがな！これはこれで面白そうだ！』

タイガの中にいる一誠やタイタス、フーマのエネルギーを貰い受け、赤龍帝の籠手で倍加を開始するタイガ。

『Ｂｏｏｓｔ！Ｂｏｏｓｔ！Ｂｏｏｓｔ！Ｂｏｏｓｔ！Ｂｏｏｓｔ！Ｂｏｏｓｔ！Ｂｏｏｓｔ！Ｂｏｏｓｔ！Ｂｏｏｓｔ！Ｂｏｏｓｔ！Ｂｏｏｓｔ！Ｂｏｏｓｔ！Ｂｏｏｓｔ！Ｂｏｏｓｔ！』
「まだまだァァァ!!」
『俺達のスタミナは残ってるぜぇぇぇ!!』

かつてない倍加を重ねるタイガ達だが、そんな彼らを嘲笑うかのようにゴーデスは言葉を紡ぐ。

『大したエネルギーだ。それだけ凄まじい量ならば少なからず我に影響はあるだろう』

「イッセーが言っただろ！俺達のスタミナはまだ余裕がある！もっと倍加したストリウムブラスターをお前に……」

『だがそれだけのエネルギーなら、あれの良い餌になる』

ゴーデスの言葉に不穏なものを感じ取ったタイガらだが、ここで引けばゴーデスの思う壺だと考えた彼らは倍加を続行する。

しかし――

「タイガ先輩危ねえっ!!」

ドォン!!!

「痛っつ……！何するんだ！ゼッ……!?」

ゼットに突き飛ばされたタイガがゼットを問い詰めようとした時に見たもの、それは――

赤く発行する不気味な物体と、そこから伸びる無数の触手に捕らわれエネルギーを奪われるゼットの姿だった。

「う……があっ……！ぐっ……ううっ……」

「「「「ゼット!?」」」」
「あれは何だ!?」

殆どのものが突然現れたそれに驚く中、この場でそれを知るオーブは顔を青ざめさせる。

「バカな……！あれはマガオロチの卵だ!!」
「マガオロチだと!?」
『それって……先輩が倒したっていう魔王獣より上の奴じゃ……!?』
「そうだ……魔王獣を統べる大魔王獣！何故それの卵がここに!?」
『我が細胞によって変異した怪獣のルーツ……それを辿った結果見つけたモノを我が細胞を注入した上でこの島に置いたのだ。この島で貴様らが探知したのは我ではなくこのマガオロチの卵に注入した我の細胞だったというわけだ』

ゴーデスの口から語られた真相に驚愕する一同。
そこへ戻ってきたボルフォッグが補足する形でさらなる事実を告げる。

「奴の言う事は本当です。元々この島はこの位置には無く、別の場所でひっそりと存在していた緑溢れる島だったようです。ですが、知っての通りマガオロチは星の命を吸って成長する存在……ゴーデス細胞の持つエネルギーだけでは足りず、遂には島そのものの生命力を吸い上げ、このように荒れた大地と洞窟のみが残るようになったというわけです」

「まさか、俺達が最深部に行った時に何も無かったのは……!?」
「おそらくはその更に奥深くにマガオロチの卵があり、島のエネルギーを吸い尽くした所で崩落により周囲と隔絶され暫し休眠状態に相当する状態だった、というところでしょう。それが今のタイガ隊員らの発する膨大なエネルギーで覚醒し、それを狙った」

幸か不幸か、あの場で引き返して正解だったという事だ。
最悪、先行部隊と突入組のエネルギーが吸収されていたかもしれない。
しかし結果として今度はタイガが狙われ、そしてそれを庇う形でゼットが捕獲されてしまった。
これを聞いてタイガや一誠は激しく動揺する。

「そ……そんな……!」
『俺達が……調子にのった所為で、ゼットさんが……!』
『一つ教えてやろう。そのマガオロチの卵はそいつからエネルギーを吸収する代わりにあるものを注入している。もうわかるな?』

これを聞いてさらに一同は衝撃を受けた。
先程のゴーデスの言葉から察するに、注入しているもの……それは即ち――

「ゴーデス細胞か!!」
『憎きレジェンドと一体化した若きウルトラマンが怪獣となり、我が手足として貴様らに襲いかかる……最高の展開だとは思わんか?』
「ふっ……ざけんじゃねえぞ!てめえ!!」

ゼロもゴーデスの所業に遂にキレた。
彼だけではない、ウルトラ戦士のみならずその場の全員がゴーデスへの憤りを隠せない。
そんな中、タイガと一誠はますます自責の念に駆られるが、それを

払ったのは他ならぬゼット自身だった。

「タイガ……先輩っ……まだスタミナ残ってますよね……!?」

「ゼット!!」

「これでもっ……俺は遊撃隊員です……！グッ……！根性だけはっ……自信があるんで……ウゥッ！何とか……ゴーデス細胞くらいっ……抑え込んでやるでございますよ……!!だから……そっちはっ……任せ……」

そういうとゼットの目から光が消え、力尽きたように首がガクリとなる。

この瞬間もゼットからエネルギーは吸収されており、命を失ったわけではないだろうが危険な状態に変わりはない。

「『ゼット（さん）（殿）!!』」

「おそらくは仮死状態に近い形で体内のゴーデス細胞を抑え込んでいるのだろう。レジェンドもそこで対抗しているに違いない……！」

心配する一同に対し、グレートは先のゼットの言葉からまだゴーデス細胞と戦っている事を推測する。

そして、ゼットから後押しされたタイガは再び立ち上がり、倍加を再開し更に力を高めだした。

『Ｂｏｏｓｔ！Ｂｏｏｓｔ！Ｂｏｏｓｔ！Ｂｏｏｓｔ！』

「ゼットは俺達に託したんだ……！お前を倒すという思いを！なら俺達はそれに応える!!」

『男が命懸けで託したものを無下にしちまったら、それこそ男が廃るってもんだぜ!!』

『そうだ……一刻も早くゴーデスを倒し、ゼットを救出する!!』

『ゴーデスもマガオロチも両方ブチのめす！そうすりゃ万事解決だ

!!』

タイガの中の一誠やタイタス、フーマも残る力を振り絞り倍加を加速させ、その一撃に全てを賭ける。

『Ｂｏｏｓｔ！Ｂｏｏｓｔ！Ｂｏｏｓｔ！Ｂｏｏｓｔ！Ｂｏｏｓｔ！Ｂｏｏｓｔ！Ｂｏｏｓｔ！Ｂｏｏｓｔ！』

『『いけええ!!タイガァァァ!!』』

「ハイパーブーステッド……ストリウムブラスタァァァァァ!!!」

ズゴァァァァ!!!

幾重にも倍加し発射されたストリウムブラスターは、赤龍帝の名の如く赤い光線となっており凄まじいスパークを発生させつつゴーデスへと迫る。

『受けて立ってやろう』

ギュガァァァァ!!!

ゴーデスもまた、その髑髏の口を大きく開き紫色の光線を吐き出して対抗する。

二つの光線はぶつかり合って拮抗し、凄まじい衝撃を周囲へと齎した。

「ぐっ……ううううっ……!!」

「あんだけ倍加したってのに押されんのかよ……！皆！俺達も光線でタイガを援護するぞ!!」

「ああ、わかっ……うおあっ!?」

ゼロの指示でタイガを援護しようとするウルトラ戦士達だったが、

触手からの攻撃で妨害されそちらの対処で手一杯だ。
しかも砕き、切断した途端に再生するためウルトラ戦士と神衛隊らが揃っていても突破は容易ではない。
そして――
『散れ、未熟なウルトラ族よ』
「ううっ！ぐっ……！うあっ……！」
まるで今までの努力を嘲笑うかのようにゴーデスの光線は威力を爆発的に増加させ――
ゴオアアアアア!!!
「『うあああああ!!!!』」
ハイパーブーステッド・ストリウムブラスターさえも容易く打ち破り、ゴーデスの光線はタイガを直撃し大きく吹き飛ばす。
一度バウンドし、仰向きに倒れたタイガのカラータイマーは激しく点滅しており……
「う……あ……」
『ぐ……う……ぶ……部長……』
「リアス……ごめ……」

タイガは手を伸ばすも、カラータイマーの点滅は止まり――

その目とカラータイマーが光を失い、手は地に落ちた。

「『タイガァァァァァァッ!!』」

〈続く〉

RESTART

――空の世界――

レジェンド達が夏休みに向かい、活動拠点とするその世界を始め『時間の流れ方』が他の世界と違う世界も存在する。

それはそれとして、現在ウルトラ騎空団はポートブリーズ周辺で活動しており、エリアル・ベースもその島の港で停泊中だ。

リパルサーリフトに加えてミノフスキーフライトシステムなど、各種浮遊推進システムを兼ね備えたレジェンド製エリアル・ベースは以前と違い移動や活動場所に殆ど制限が無いのである。

そこの一室で、ジークフリートは我夢に教わりながらパソコンの使い方を学んでいた。

その周囲で騎空団の団員も多数見学している。

「よし、ゴー……デ、ス……と。これで『検索』をクリックか」

「うわっ!?何かキモい奴出てきよった！」

「ユエルちゃん、こいつはまだマシな方だよ。僕が戦った奴の中にはゴキブリと毒蜘蛛が混ざったようなゴキグモンっていう……」

「が……我夢はん、言わへんで……ウチ想像してもうた……」

「ふむ……ゴキグモン……と」

「ちょお待ちぃ！何検索してんねん!?ソシエもっとビビっとるやないか！ウチもやけど！」

「ちなみに繁殖目的で来たらしくてビルに大量の卵を――」

「いやあああああ!!」

「……二人とも頭良い分、こういう時タチ悪いわね」

狙ってるのか天然なのか分からないが、ジークフリートと我夢によってユエルとソシエの幼馴染コンビは恐怖に震えた。

それを見ていたゼタがボソッと言うも、いつもはすぐに何かを言ってくるバザラガが黙ったまま外を見ている事に気付き、声をかける。

「どうしたのよバザラガ。さっきからずっと外見て。組織からの任務が無いのが退屈、なんて言わないでよ」
「そうではない。どうも空……というよりこのエリアル・ベースとその周囲の様子がおかしい」

は？とゼタが疑問に思いつつ外を見てみると、何やらエリアル・ベースがオーロラに包まれているような状態になっていた。

「ちょっ……何よこれ!?」
「わからん。少なくとも星晶獣が原因ではなさそうだ」
「何でハッキリ言えんのよ？」
「勘だ」
「はあ!?レジェンドみたいな事言わないでよね！あっちは超能力とか超視力とかで信憑性高いから納得だけどさ！」

ゼタの大声に気付き、理由を聞いた我夢が簡単に答えを言い放った。

「これ、確かチーフのいる世界と一時的に時間の流れが同じになってる現象ですよ。原理は不明ですけど。このエリアル・ベースを覆うようになってる部分だけですが」
「いやもうレジェンド達と知り合ってから頭ブッ飛ぶような出来事の連続だわ……」
「我夢、何か届いたぞ。これはどうすればいい？」
「ジークフリートさん、ちょっと見せて下さい。うーん……こっちじゃパソコンが殆ど無いし、ウィルスやスパムじゃない……って！これはチーフが向こうで住んでるダイブハンガーって所からだ！」

我夢はそういうと急いで届いたもの……束からの映像コード付きメールを開いて確認する。
そして内容を読んだ我夢は切羽詰まった様子で映像コードを入力

していく。

「我夢、緊急事態か……!?」

「はい……!さっき検索したゴーデスについては先日教えましたけど……」

映像コードを入力しそれを出力すると、そこに映っていたのはタイガが倒れ伏し、何かに捕らわれたゼットがエネルギーを吸収され続ける姿。

そして途方もなく巨大な化け物に立ち向かっていく多数のウルトラマンや機動兵器……現在のゴーデス島の映像だった。

「なっ……!?」

「何やこれ……ゼットどないなっとんねん!?」

「あっちのウルトラマンと同じように目に光あらへん……」

「ちょっと待って!確かレジェンドとゼットって一体化してるって言ってなかった?って事はまさか……!」

最悪な事態を思い浮かべるユエル、ソシエ、ゼタの三人だったが、我夢が付随されていたメッセージからまだギリギリ無事である事を説明すると一安心する。

さらにバザラガが気付く。

「もう一つあるようだが」

「え?本当だ!こっちは……」

もう一つの映像コードを入力・出力すると今度は駒王側の映像、さらに各機動兵器にはパイロットが誰か分かるような映像も付けられている。

「ロスヴァイセとC・C・も別の場所で戦っとるん!?」

「でも、あっちの翼みたいのが付いた方は動かへんし、青くて重そうなのは黒い怪獣みたいなのに苦戦しとる……！」
「黒い奴……奴の身体も特別製か」
「んな事言ってる場合かって言いたいけどマジでそれっぽいし！」
「少なくとも分かるのは、どちらの戦場でも味方の状況は宜しくない、という事だな」
「はい……！おそらくはこっちの髑髏……こいつはゴーデスです」

我夢の言葉にその場の全員が戦慄するが、我夢の提案により可能な限り騎空団の団員に見てもらおうとエリアル・ベース内の全モニター・ディスプレイに出力する事にする。
願わくば、直接力になれずとも声援だけでも届いてくれる事を祈って。

☆

――宇宙空間――
遥かに彼方から飛んできた6つの光は、既に地球を肉眼でも確認出来る距離まで迫っていた。

「ここまで来れば目と鼻の距離だ！受け取った情報によると現時点で最も危険な状態の者が三名いる！」
「私達は彼らの元へ行く！君は一刻も早くダイフハンガーへ！」
「わかったわ！そちらも気をつけて……！」
「ああ！」

そう言って一つの光は地球近くで他の光から別れ、ダイフハンガーへと向かって降下する。
残る光は決戦の場であるゴーデス島へ。

（待っていて下さい、レジェンド、グレート、皆さん……！私達が、必

ず助けます！）

☆

タイガが倒れ、ゼットがマガオロチの卵に捕獲されてエネルギーを吸収・ゴーデス細胞を注入されているという非常事態はすぐさまダイブハンガー全域、そして駒王で戦っている者達にも伝えられた。

「っ!?」

「おや？急に動きが鈍くなったようだが、何か凶事でも起きたのかな？」

「貴方には関係ありません……！」

アサキムと戦闘中のクロエもその事を知って動揺し、少しずつ押され始める。

実を言うと、クロエもガリルナガンをまだ完全に扱えているわけではない。

これに関してはクロエが悪いわけではなく、そもそもガリルナガン自体がかなり特殊な機体であるからだ。

事実、クロエはガリルナガンの現状発揮出来る性能を限界まで引き出している。

（まだ『エシュ・アナフ・オート』を使用するシステム『メラフティー・ディーン』は調整が完了していない。束様がその方面の知識はレジェンド様の方が詳しいから、と仰っていましたが……もしや、サイバスターも本来の力を発揮出来ないのは同じような理由では？）

アマツミツツカと戦闘中のオカルト研究部や鬼討組も報告を聞き、複数人が多大なショックを受けている。

「お館様とゼットさんが……？」
「甘露寺、気を強く持て！」

出会ってまだ日が浅いとはいえ、自分達に良くしてくれていた二人の現状を知った蜜璃はポロポロと涙を流して両膝から崩れ落ち、それを心配した小芭内が駆け寄る。
セラフォルーは保護者として何とか普段通りに振る舞っているが内心は穏やかではなく、カナエやしのぶも同様だ。
さらに、オカルト研究部はリアスに続き一誠やトライスクワッドまで倒れたという事に愕然としていた。

「イッセー君やタイガ君が……!?」
「タイタスさん、フーマさん……！」
「このままじゃ、リアスに合わせる顔がありませんわ……」
「リ……リク兄さんや他のウルトラマンの方々はどうなってるんですか!?」
「何とかまだ健在のようだが、彼らの抜けた穴は予想以上に大きく徐々に追い詰められているらしい。師範達も無限に体力があるわけではないからな」

ギャスパーの焦り声にゼノヴィアが詳しく伝えるが彼女もまた表面上冷静に取り繕っているだけだ。
こんな状況ではまともに戦えるわけがなく、再び盛り返してきたアマツミツツカと形勢が逆転しつつある。
サタンデロスと相対しているC・C・や杏寿郎も少なからず動揺はあるが、片や付き合いの長さからの信頼が、片や数多の命を背負っている責任感が不安を上回り、どうにか己と機体のポテンシャルを落とさぬまま戦闘を継続出来ていた。
しかし、圧倒的な防御力を持つサタンデロスに成すすべがなく、状況を打破する方法が見つからない。
親しき存在に起こった凶事、それは予想以上に数多の者に影響を及

ぼしていた。

☆

レジェンド一家仮住居の結界前、認識阻害によって普段は気が付かない道に転移してきた二つの影。
いつもなら時間帯的に多少なりとも声が聞こえるだろうその道も、緊急避難命令が出された事で今や人っ子一人いなくなっている。

「無事に転移出来たみたいだな」
「うん、あっちでは機動兵器が戦闘中だし……何かの鳴き声とかがこっちから聞こえるから、ダイブハンガーへ続くゲートがあるのは多分この先、仮住居のある方よ！」
「よし！ならまずはそっちの救援だ！」

そう言うと二人は仮住居への道を駆け上がっていく。
道中、片方は金色のプロテクターか鎧のようなものを装着しながら。

☆

一方、ダイブハンガーでも緊急事態が起きていた。
一誠やトライスクワッドがゴーデスにやられた事を知ったリアスの容態が悪化したのである。
鬼討組としてアマツミツツカの討伐に赴いたしのぶを除き、卯ノ花を筆頭に涼子や束、グレイフィアとアーシア、さらには先日から光神陣営のブレインとして活躍してくれる事になった黒上博士も加わり、サーゼクスらグレモリー家やアザゼル、ガブリエルらを含めた彼女と親しい者が医務室に押しかけていた。

「うぅぅぅっ……！ああああ!!」

「まずいですね……先程の情報を聞いてから動揺してしまい今まで防げていた部分に綻びが出たのでしょう」
「こういう事が起きるかもしれないからってわざと外部の音を遮断する設備整えたのに！誰だよこの状況でりっちゃんに聞こえるように喋った奴は!?」

さすがに束も語尾が荒くなる。
例の如くサーゼクスやアザゼルだったりする。
束は既に気付いているものの敢えて知らないフリをして糾弾したが、涼子がそれを諌めた。

「束さん、そっちはそっちの関係者に任せて、私達は私達の出来る事をやりましょう？」
「りょーちゃんの言う事は最もなんだけどさぁ……！あーもう！元はと言えば全部あの腐れ髑髏バカのせいじゃん！世界中のＩＣＢＭハッキングしてブチ込んでやろうかなマジで！」
「貴女なら誇張じゃなくて本気でいとも簡単にやれるから笑えないのよね、それ」

ぶつくさ文句を言いながらも凄まじい早さで数多の空間ディスプレイを呼び出しては操作する束。
涼子も以前関わった細胞や菌の類のデータを洗いざらい調べ、似たようなものが無いか確認している。

「黒上博士、どうですか？」
「このゴーデス細胞というのは先日のＧ細胞より悪い意味で厄介だよ。あちらの細胞は単純に『細胞そのものが強力』なため、それに負けない強い意思があれば多少なりとも制御は可能だろう。だがこちらは『細胞そのものが意思を持っている』もしくはそれに近いものだ。例えるなら知性を兼ね備えたレトロウイルス……一度感染すれば抵抗は出来ても制御はほぼ不可能。除去する以外に方法は無いとみる

べきだろう」
「そんな……！」
「何とかならないのか!?」
「そこうっさい！喚くだけなら出てけ！」

　束の怒声にサーゼクスとジオティクスはビクリと身を震わせて黙り込む。
　魔王とその父親さえ一声で沈黙させるほど、今の束は切羽詰まっている。
　そこでサーゼクスがある事に気付く。

「……！そうか！滅びの魔力でゴーデス細胞を消しされば……」
「この阿呆！親族なられっちゃんから説明されただろ！りっちゃんが感染したゴーデス細胞はりっちゃん自身がギリギリのところでせき止めてたんだ！それをあの情報がりっちゃんにも聞こえるくらいの大声で叫んでくれた結果がこれだよ！既に細胞の一体化が始まってる状態のりっちゃんにそんなもん流し込んだらどうなるかぐらい簡単に想像つくだろうが!!」
「ッ!!」

　これが魔力ならば魔導人形など魔力を根源としない限り命は救われたのかもしれないが、細胞とは肉体を構成するモノ。
　ゴーデス細胞との一体化が始まりつつある状態のリアスの細胞に対し滅びの魔力なぞ使おうものなら、ゴーデス細胞を滅ぼすつもりでリアスの元々の細胞もまとめて滅ぼしてしまう……つまり彼女を殺してしまうことになる。

「あ……あの！私の神器や回道も併用したらどうでしょうか!?」

　そこに救いの手を差し伸べたのはアーシア。
　しかし……

「あーちゃんの申し出、普通ならイケるとは思うけどね。でもこの状態だとそれやったらゴーデス細胞まで再生させかねない。話に聞くフェニックスの涙とやらも今のままじゃ逆効果、下手すりゃゴーデス細胞が活性化して侵食が早まるよ」
「そ……それじゃつまり……！」
「早い話、くろ博士の言うようにゴーデス細胞を除去するワクチンなり何なりを投与する他ないね。もしくはゴーデス本体をブチのめすか。どちらにしても問題はりっちゃんの体力と精神力がそれまで保ってくれるかどうかだよ。正直絶望的過ぎるけど」

束の説明でアーシアは再び顔を曇らせる。
そんな時だった。

『諦めるな!!』
誰もが驚く程、大きな声がダイブハンガーに響いた。

☆

――レジェンド一家仮住居前――
戦局は再び覆された。
不安がその場を覆いアマツミツツカの逆襲に苦戦していた鬼討組とオカルト研究部＋α。
そんな彼らを救ったのは黄金のアーマーに身を包み、オレンジ色の長髪を靡かせた人物。

「諦めなければどんな絶望の中にも光は灯る！そしてその光が集まった時、まだ見ぬ明日への道が開く！諦めない心が生み出す、未来を掴む力！

それが勇気だ!!」

その人物は悪魔ではなく、そして全集中の呼吸を使っているわけでもないのにアマツミツツカよりも高く飛び上がり――

「ハアアアアッ!!」

ドガァァァァッ!!

「グギャアアアッ!?」

強烈なキックをアマツミツツカに見舞い、地上へと叩き落とした。

そのスキにもう一人はダイブハンガーへと繋がるゲートのある場所へと走り抜ける。

「え!?ちょちょちょ!?ちょっと待って！」

「ごめんなさい！私の自己紹介は後で！気をつけてね、凱！」

「ああ！こっちを片付けたらいよいよ本番だ！頼んだぜ、命！」

「もちろん！」

セラフォルーの静止を突っぱねてサムズアップを返し合う、凱と呼ばれた男性に命と呼ばれた女性。

命の方はすぐさまゲートを通ってダイブハンガーへと転移し、残った凱は叩き落としたアマツミツツカへと向き直る。

凱の背中を黙って見ていたカナエらだったが、それを中断させたの

は聞き慣れた声だった。

「ほれほれ白音、いつまでそうしてショック受けとるつもりじゃ？儂や黒歌が居らねば何も出来なくなったわけではあるまいに。さっさと立たんか」

「よ、夜一姉様⁉」

「裕斗もシャキッとしなさい！ジェントさんが見たらお説教されるわよ。ついでにゼノヴィアだっけ？巌勝から修行メニュー増やされたくなかったら早いとこ立って構え直す！あ、悪いけどあたしそっちは関わる気ないからね。とばっちりは御免だし」

「乱菊先生……！」

「死ぬ……！これ以上ハードになったら確実に死ぬ⁉」

「巌勝とか縁壱師範とか、ていうか鬼討組全員一度死んでんだし一回死ぬレベルじゃ止まんないでしょ」

「うあああああ⁉」

夜一はともかく、乱菊は思いっきりゼノヴィアを弄っている。

「からかい甲斐があるわね～」と笑っているが、巌勝はこと修行に関しては相当厳しいので本気で黄泉路に旅立つ可能性もある……かもしれない。

「ま、あんた達でやれるだけやってみなさい。フォローは私らがやってあげるし、それにこの娘達もいるから」

「我、捕まった」

「ちょっとおおお⁉何で私まで連れてくるんですかぁ！私が極度のビビリって知ってますよね⁉」

「あのねえ、ここいらで一度活躍しとかないと空の世界や異世界で何かと影薄くなるわよ？機動兵器に乗れるわけでもないし、使い魔ムーブもしてないしでチキンハート・ドラゴンって二つ名さえそのうち忘却の彼方へ消え去りそうなんだけど」

「だから何でチキンハート・ドラゴンが二つ名なんですか⁉天魔の業

龍ですよ!!カオス!カルマ!!ドラゴン!!!ですっ!!」
「ティアマット、頭の中ならカオス」
「オーフィスはやかましーですぅぅぅ!!」
「一番喧しいのはお主じゃバカタレ」

片手にそれぞれ引っ掴まれていたオーフィスとティアマットを見せながら軽く言う乱菊に少し安心したのか、彼女らのコントのようなやりとりが緊張感を解したのかはともかく、オカ研メンバーや鬼討組は立ち上がる。

「確かに、自分達からここに来たのに情けなかったですわ」
「父さんの後を継ぐ気なのに、この程度でヘタレてたら逆に父さんや他の七星剣の方々にも示しがつかないよね」
「……気持ちも戦いも仕切り直し、です」
「リク兄さんや皆さんも頑張ってるのに、僕だけ休んでもいられないですぅ……!」
「師範にシバかれる師範にシバかれる師範に……!」

約1名、理由がおかしい気がするがオカルト研究部は再び己らを奮い立たせた。
それを見た小芭内と蜜璃は顔を見合わせて頷き合い、カナエとしのぶに声をかける。

「カナエさんとしのぶちゃんは休んでて!」
「あの鬼は俺と甘露寺、あいつらで討伐する」
「え?伊黒君?蜜璃ちゃん?」
「何か考えがあるんですか?」
「単純に俺達も功績を挙げたい……というのもあるが、これからを踏まえてあいつらとの連携を試したいのが本音だ。幸い俺と甘露寺が中衛を務められる上、前衛と後衛も揃っている」
「カナエさんはあの子達や私達の中で一番強いから私達が頼り過ぎて

もいけないし、しのぶちゃんはこの後にお医者さんとしての仕事もあるだろうからあまり無理はさせられないから！それにパム治郎君も助けてくれそうだし大丈夫！」
「パムパム～」

かつて殆どの者を信用しようとしなかった小芭内の成長、普段の調子に戻った蜜璃、その二人を肯定するように周りをクルクルと飛び回るパム治郎。
二人と一匹を見てカナエとしのぶも頷き合い、それを了承する事にした。

「わかりました。お言葉に甘えて、後は皆さんに託します」
「危なくなったら私と即交代ね！それと、すぐにしのぶに診てもらうように！」

胡蝶姉妹の言葉にセラフォルーを含めて頷く中、一人浮かない顔をしている者がいる。
イリナだ。
ハッキリ言ってしまえばこの面子の中では彼女は圧倒的に力不足であり、経験不足。
鬼殺隊時代からの下積みされた経験がある小芭内や蜜璃、しのぶ、さらにカナエに至っては始まりの剣士であり九極天の一人の縁壱に師事している。
朱乃を始めオカルト研究部も控えている夜一や乱菊らに鍛えられ、最近ではゼノヴィアも厳勝に師事し厳しい修行を重ねており、セラフォルーは魔王。
ティアマットは五大龍王の一角でオーフィスは無限の龍神、おまけにオーフィスの連れているゴジラは怪獣王ときた。
（……私なんかじゃ、足手まといにしかならないんじゃないかな……）

心の中で自虐的になっていた彼女だが、そんな彼女の前に雷鳴と共に雷が突き刺さる。

「きゃあああああ!?」

「イリナ!?大丈夫か!」

「う……うん。でも、何でいきなり雷が……」

雷が落ちた場所を見ると、そこには水晶状の剣が一振り刺さっていた。

それも、イリナにとって丁度良い大きさで。

「こ……これって……!」

「何だ?新手の聖剣か?」

「何をしている紫藤イリナ!!初対面で俺に喧嘩を売るような事を言った時の貴様の度胸は何処へいった!!」

☆

仲間と別れ、ダイブハンガーへと辿り着いた一つの光はファンタジー物のような衣装に身を包んだ女性へと姿を変える。

格納庫らしき場所なのは理解したが、あまりに広くキョロキョロと辺りを見渡すが誰もいない。

「どうしよう……!早くしないと……手遅れになる前に……!」

円筒状のカプセルを両腕で抱きしめる女性。

直後、片腕を思いっきり引っ張られバランスを崩しそうになるが、何とか体勢を立て直す。

「きゃ!?な、何!?」

「医務室行きたいんでしょ?だったらこっちよ!」

彼女の手を引っ張りながら駆け出したのは先程仮住居から転移してきたばかりの命という女性だった。

「あの、貴女は……!?」

「詳しく自己紹介してる暇は無いから簡単にね!私は卯都木命(うつぎみこと)、レジェンド様お抱えの特別組織ＧＧＧの隊員よ!」

「レジェンドの!?」

「ほら、急いで!」

「は……はい!」

左手を引かれ、右腕でカプセルを抱え女性は命と共に医務室へと走る。

駒王とダイブハンガーに今、希望が到着した。

そして――

☆

タイガが倒れ、ゼットもまた絶望的状況にあるゴーデス島。

二人の若き戦士がやられた事で戦況はますます光神陣営が不利になっていた。

ゴーデスだけでなくマガオロチも卵の状態とはいえ出現し、そちらにも気を配らねばならない上にゴーデス細胞を注入されたゼットのタイムリミットも迫っている。

「ボルフォッグ!突破出来そうな方法はないか!?」

「あの様子ではかなり厳しいでしょう。あれだけの触手がある以上、たとえ切り離せたとしてもすぐに捕獲し直されます！」
「しかもアタシ達の機体のエネルギーも吸収されかねないってわけね！最悪だよ悪趣味髑髏！」

ボルフォッグは昭弘やラフタと共にゼット救出を敢行しようとするもマガオロチの卵の性質上、策もなしに飛び込めばゼットの二の舞いに成りかねない。
そこにゴーデスはさらなる追撃を仕掛けてきた。

『そういえばそのマガオロチの卵とそれに捕らわれた若造以外にも我の細胞を体内に持つ者がいたな。しかもこの感じ……少なからず抵抗しているようだ』
「……！リアスちゃんの事か！」
『この場から感じぬという事は貴様らの拠点かそれに準ずる場所にいるというわけか。では少しばかり貴様らがいう『侵食』とやらを加速させてやろう。結果、その者が怪獣となって貴様らの拠点や大切なものを破壊し尽くす光景……さぞや愉快なものになるだろう』

そう言うとゴーデスは両眼を禍々しく発光させる。

「ゴーデス！やめろ！」
「フハハハハ……無様だな、ウルトラマングレート。歴戦の勇士と呼ばれた貴様が何も出来ず、ただ仲間が力尽き、怪獣と化していく事を止められない。レジェンドもそうだ。あの若造と一体化などしなければこうしてここにいる者達が地に這いつくばる事もなかったろうに。つくづくお人好しで身と仲間を滅ぼす光神だ」
「てめえ……!!卑怯な手しか使えねえお前がグレート先輩をバカにしてんじゃねえ!!」
「確かにゼットはまだ未熟だ……けど彼には決してブレないしっかりした芯の強さと真っ直ぐな心がある！それを見抜いたからこそ、たと

え自分が辛くとも彼と共にある事を選んだんだ！」

ゼロとメビウスの言葉もゴーデスにとってはどうでもいいものでしかない。

『そろそろ貴様らに付き合うのも飽きてきたところだ。中途半端に生かして思わぬ牙を突き立てられる可能性もある。後顧の憂いはここで断たせてもらおうか』

ゴーデスはゆっくりと闇のエネルギーを集束しながら口を開いていく。

タイガを倒した光線――ダークデストリームを放つ気だ。

超倍加したストリウムブラスターさえ容易に打ち破るその光線を防ぐには余程の防御で防ぎ切るか、相殺するしかない。

しかし、ゴーデスの猛攻を防ぐために分散してしまったため一点集中の光線や防御で対抗することはほぼ不可能。

仮にこの一撃を凌げても、次が来るかもしれないし、マガオロチの卵も残っている。

正に絶体絶命。

ドオガァァァァン!!!

『ぬぐぅあああああ!?』

誰もがそう思った時、闇に覆われた空を貫き5つの光線がゴーデスの口内へと一点集中で撃ち込まれた。
今までどれだけの威力の攻撃を受けても怯みさえしなかったゴーデスが明確にダメージを受けた事、そして突如放たれた光線。
それらに驚くウルトラ戦士と神衛隊にボルフォッグ。
そして暗雲を突き抜け5つの光が彼らの、そしてゴーデスの前に舞い降りる。

最強最速の戦士・ウルトラマンマックス。
マックスの相棒・ウルトラマンゼノン。
グレートの盟友・ウルトラマンパワード。
ギャラクシーレスキューフォースの一員にしてパワードとグレートの弟子・ウルトラマンリブット。
そして彼らを率いてやって来たのは元科学技術局長官にしてウルトラ兄弟の一人・ウルトラマンヒカリ。
ゴーデスと戦うゼロ達を救うべく、光の国の精鋭達が遂に決戦の場へと駆けつけたのだ。

〈続く〉

地球からのメッセージ

ゴーデスとの決戦の場にマックス、ゼノン、パワード、リブット……そしてヒカリ。
同時に、彼らの攻撃を受けたゴーデスは先程までと違い苦しんでいる。
内部に攻撃を受けただけとは到底思えないその様子を見ていたゼロ達だったが、その理由はヒカリの口から明かされた。

「どうやら効果は抜群のようだな」
『貴様ら……！何をしたぁ!!』
「お前がレトロウイルスの集合体のようなものだとはレジェンドやグレートから聞いていた。お前の細胞に対するワクチンも開発していたが、同時にお前の力が強大になる事も想定し、レジェンドと日々連絡を取り合い『お前自身に直接打ち込む』ワクチンも研究していたんだ。それの完成が遅れたおかげで到着も遅れてしまったが、その副産物として感染者用のワクチンもデメリット無しで効力を上げられた。そしてサーガからの連絡を受け、有志を集い……こうして地球へとやって来たというわけさ」
『何だと……!?』
「やってくれるぜヒカリ博士!!」
「無駄にデカいだけの貴様の頭じゃ、ヒカリさんのような鮮明さは持っていなかったようだな!!」

ダイナとオーブが水を得た魚のように喜び、遂に逆転への道に光明が見えた。
レジェンドと共に積み上げられ、完成した研究成果はサーガの連絡によって地球へと齎され、今こうして彼らを救う。
光神達もまた、既に布石を打っていたのである。
そして、ダイブハンガーでもまた――

☆

ダイブハンガーではゴーデスが己の細胞を活性化させた事で、リアスの身体の侵食が早まっていた。
既に右腕の半分が異形化しており、今も徐々に進行している。

「あああああっ！ぐっ……うぅっ！」
「まずい……！急激な身体変化でリアス様は相当は痛みに襲われています！痛覚に意識が集中してしまえば当然抑えている方は疎かになり……」
「怪獣化も早まるという事か!?」
「くそっ！こんなんじゃ神器引き抜きの研究成果の一つも応用出来るレベルじゃなくなってきたぞ！それ以前に今から研究してたんじゃ間に合わねえ！」

グレイフィアがリアスの現状を告げるとサーゼクスはそれを察し、アザゼルもまた厳しい事実を口にした。
束もさすがに納得せざるを得ない中、黙っていたサーガが漸く口を開く。

「間に合わせ……にはなるだろう。俺の持つ光のエネルギーを全部注ぎ込んで一時的でもゴーデス細胞を抑え込み、同時に彼女の体力を回復させる」
「全部って……そんな事をすればサーガ様は……！」
「別に死にはしない。暫く意識を失い寝たきりにはなるだろうが……ここで彼女を失うより遥かにマシだ」

ガブリエルに対してもサーガは決して臆する事なく自らが倒れてでもリアスを救う意志を示す。
それに待ったをかけたのはアーシア。

「駄目ですっ！部長さんが助かってもサーガ様が倒れたら駄目なんです！部長さんを皆さんが心配しているように、サーガ様が倒れても心配する方がたくさんいるんですから！レジェンド様や神衛隊の皆さん、小猫ちゃんだってそうですよ!!」
「しかし、このままでは確実に保たない！もう少し、あと少しだけでも保たせられらばきっと……」

サーガの言葉からは何かを待っている事が推測出来るが、それでもアーシアはサーガが犠牲になってほしくない。

「着いた！ここが医務室よ！」
「ありがとうございます、命さん！」
そこへ、二人の女性が勢いよく駆け込んできた。

何事かと思い全員がそちらを向くと、束とサーガは顔を綻ばせた。

「みこっちゃあああああん!!」
「ソラ！間に合ってくれたか!!」
「久しぶり束博士！」
「遅くなってすみません、サーガ！命さんのおかげで医務室に辿り着けました！その娘のゴーデス細胞、除去します！」

ファンタジー物のような衣装の女性――ソラの言葉を聞いた束とサーガ以外の人物は驚愕するが、サーガが目を瞑りソラがリアスの服を開けさせると同時に束が怒鳴る。

「男性陣はサーくん見習って目を瞑るかりっちゃんから目ぇ離せ!!」
「「「はっ！はいいいっ!?」」」

サーゼクスとジオティクス、アザゼルとついでに匙は鬼気迫る束に言われて目を瞑る。
ミリキャスはサーガと共に既に目を瞑っていた。
ソラは開けさせたリアスの胸……心臓の部分に対ゴーデス細胞用のゴーデスワクチンが入ったカプセルを押し付ける。
するとカプセル内のワクチンがすぐにリアスの身体へと浸透していく。
禍々しいゴーデス細胞とは違う、安心感のある鮮やかな緑色の光はリアスの全身を巡りゴーデス細胞を取り除いていき、それに伴って異形化していた右腕も瘡蓋が剥がれるように異形となっていた部分が崩れ元のリアスの腕を取り戻した。
同時にリアスの呼吸も次第に穏やかになる。

「部長さんの腕が……！」
「これで大丈夫です……！このゴーデスワクチンは即効性で、さらにレジェンドの協力もあって効果が高められましたからゴーデス細胞の潜伏等もありません！」
「おおおおお!!凄いぞキミぃ！そしてレジェくんさり気なく先手を打っておくとはさっすがぁ!!」

切羽詰まっていた医務室は一気に歓声で満たされる。
ダイブハンガー全域に伝えられ、ニアや恋雪らも手を取り合って喜んでいた。
サーゼクスを始めグレモリー家はソラと命に何度も頭を下げ礼を言う。

「ありがとう……！本当にありがとう!!」
「娘が無事に……どれだけ感謝しても足りない」
「いえ、それがギャラクシーレスキューフォースに属する私達の役目ですから」

ここまで礼を言われる事に慣れていないソラは少々困り気味だったが、嫌がってはいないので卯ノ花達は笑顔で見守っている。
そこに、弱々しくもハッキリした口調でリアスが聞きてきた。

「ねえ、皆……イッセーは……？タイガは……？」
「っ……彼らは……」
「やられたのよね……でも、まだ負けてない」
「「「「!!」」」」
「だって……イッセーは私の自慢の眷属で……タイガ達は私達のウルトラマンだもの」

このリアスの言葉でサーゼクスはハッとした。
彼にとってはタロウが『自分のウルトラマン』だ。
セラフォルーはレジェンドやセブン、リアスの眷属のギャスパーはジード。
それぞれにとっての『ウルトラマン』がいる。
かつて、８０の教え子も彼をこう表現した……『８０、俺達のウルトラマンだ』と。
リアスにとって、一番のウルトラマンは強さなど関係なしにタイガ、タイタス、フーマの三人なのだ。

（……忘れていたよ、タロウ。私達が絆で結ばれてるように、リアスもまた君の息子やその仲間と絆を結べた。本当にリアスの為を思うなら、リアスが信じるものを私も信じなければならない……悪魔全体の為、と逆に視野を広げ過ぎていたんだな）

誰かが言った。
目の前の一人を救えないで全員を救えるのかと。
その一人救う事でその者も救う事に協力してくれるかもしれない。
そして、イナバ・コジローも言った。
自分の理想を簡単に捨ててはダメだと。

意外なものからそれを実現する術が見つかるかもしれない。

（私も信じよう、赤龍帝やタロウの息子だからではなく、兵藤一誠とウルトラマンタイガという可能性を。人も悪魔もウルトラマンも関係なく、絆を結べる事を見せてくれた新しい二つの光を）

サーゼクスはそう思い、取り出した小瓶の中の液体を半分だけリアスに振り掛け、再び蓋をしてリアスの手に握らせる。

幾分楽になったリアスは握らされた物を見て呟く。

「フェニックスの涙……？」

「この間のお詫びにとフェニックス卿がね。残りはリアスの手で無事に帰って来た彼らに使ってあげなさい」

「お兄様……！」

「へぇ……ちょっとは見直したよ。少しはそういう気遣い出来るんだね」

若干皮肉は込めたものの、褒める束に苦笑しつつサーゼクスは嬉しそうなリアスを撫でてやる。

これで憂いは無くなった。

そう考えた束は自らの頬をパンと叩くと気持ちを入れ替え声を張り上げた。

「うっしゃあぁぁぁ！残るは鬼とダブルブラックと性悪髑髏をブチのめすだけ！性悪髑髏はレジェくん達に、鬼はセラちゃん達に任せて私らはダブルブラックを担当しようじゃないか！必要なものはブレスレットに仕舞ってきたかい、みこっちゃん!?」

「もちろん！オペレート用の機材から各種ツールまで全部！凱も各種ガオーマシンをしっかりとね！ジェネシックは再調整中だけど、持ってきた方も全体的にバージョンアップ完了！」

「おっけぇい！ならばいざ行かん！我らが戦場、作戦指令室へ！レッ

ツゴー!!」

ドドド……と爆走していく束と、ちょっと遅れ気味だがしっかりついて行ってる命をポカンとしながら、卯ノ花は空間ディスプレイを現在戦闘中の４ヶ所分、拡大投影する。

それと同時にリアスの治療が完了した事も、現在戦闘中の面々へと通信で知らせるのだった。

☆

真っ黒の何も無い空間。

そこで一誠やトライスクワッド、ドライグは漂っていた。

正確には意識が、であるが。

（俺達は……負けたのか）

（ゴーデスの光線を受けて、成すすべもなく……）

（だが、我々が倒れたとしても他の者達まで倒れたわけではない）

（カッコ悪いって言われりゃその通りだけどよ……俺らの代わりにゴーデスを倒してくれりゃ万々歳だ）

（タイラントの奴にリベンジする前にくたばるとはな……まあ、奴はタイラントとは比べ物にならん化け物な事ぐらい俺にもわかる。せめて一矢報いるぐらいはしたかったが）

受け入れたくない結果だが、受け入れざるを得ないのもまた事実。

今まで以上の倍加を重ねたストリウムブラスターが容易く打ち破られ、そして力尽きた。

（悪い、タイタス、フーマ……二人が俺に任せてくれたのに）

（何を言う、タイガ。お前は出来る限りの事をやった。そんなお前を責めるわけがないだろう）

（ギリギリまで踏ん張ったんだ。胸を張れよ。ここで張っても俺らし

かいないけどな）
（違いない）
（けどさ……やっぱり悔しいよな）

一誠がそう思ったのは、今も苦しんでいるだろう想い人であるリアスの事。
勝って帰る約束をしたのに、その約束を守れぬままこうして倒れてしまった。

（すみません、部長……）
（俺達……ゴーデスに敵わなかった……）

二人がどれだけ悔しいか、残るタイタスやフーマ、ドライグは痛い程わかる。
しかし、現実ではもはやエネルギーも無く立つことも不可能であり、今こうしているここから出る方法もわからない以上、どうしようもない。
なるようにしかならないか、と思った直後視界が光に覆われ、気が付けば一誠達は先程とは違う真っ白な空間に立っていた。

「ここは……!?」
――光の勇者達よ――
「「「『!?』」」」

突如聞いた事のない声が彼らの頭に響き、辺りを見回すが自分達以外には誰も見当たらない。

「だ、誰だ!?」
「ここには私達以外に誰もいない……何処か別の場所から……いや、違う……!」
「旦那の言う通りだ……むしろこの空間全体が……!」

――そう、この空間そのものが私だ――
「な……!?」
『随分とデカい図体だな』

一誠やトライスクワッドは絶句するが、ドライグはそうでもないらしい。
声の主はそのまま続ける。

――ここに来てもらったのは他でもない。君達に地球の……この世界だけでなく平行世界や異世界の地球の為に戦ってもらいたい。その願いを伝えるためだ――
「地球の為に……？現在進行形で戦って……それで負けたんだけど、俺達」
「……最後の要らなかったな。情けなくて死にそう。あれ？俺達もう死んでるのか？」
「わからん。たとえ死んでいても私の筋肉は不滅だ！」
「うん、旦那はいつも通りだったわ」
『というか死んでるのに不滅って意味わからんぞ』
――……続けていいだろうか？――
「「「『あ、スンマセン』」」」

いつものノリで会話し始めた彼らに対し、ゴホンと咳払いして再度声の主は話し出す。

――今、この世界のみならず数多の世界の地球で異変が起こり始めている。今でこそ、この世界程ではなく小さなものであってもやがて手に負えないような大きな事態へと成りかねない。それを救えるのは光神の方々を除けば君達しかいないのだ――
「まあ、レジェンドやサーガ達がっていうのはわかるけど……どうして俺達なんだ？メビウスとか、ダイナ兄さんとか……俺達より相応しい人達はそれこそ星の数程いるだろ？」

タイガの疑問は最もだ。
特にゼロやティガなんかは過去の功績などを考えると適任だと思える。

――その理由は……君だ、兵藤一誠――
「へ？俺？」
――そう、人間から悪魔へと転生し、それでいて人間らしさを失わず、種族を超えてキズナを結び続ける君ならば、世界を超えてキズナを結び、これから起こりうる異変にその世界の地球で生きるものと共に立ち向かう事が出来る。かのレジェンドやサーガのように――
「一誠にレジェンドやサーガのような事が出来るって……」
『まあ、相棒は良くも悪くも自分に正直なところがあるからな。スケベな部分はその最たるものだ。隠し事を殆どせずに腹を割って話せる辺りにその素質は感じるな』
「良くも悪くもド真ん中のセリフは俺の黒歴史を肯定されてんだけど!?確かに年齢的には黒歴史期間の方が長いし自業自得だけどさあ!!」

ドライグの言葉で昔の自分を思い出して自己嫌悪する一誠に苦笑しつつ、タイタスは疑問に思った事を尋ねる。

「そういえば、貴方が何者かまだ聞いていなかったが」
――私は……この地球そのもの。言うなれば『地球の意志』とでも言おうか――
「……やべっ、早速迎えが来たみたいだ。せめて逝く前にグリージョちゃんとデートの一回もしてみたかったなぁ……」
「こんな事ならあの日、部長と一線超えとくんだったぜ……」
「フーマ!?イッセー!?衝撃的なのはわかるけど戻って来いって!!」
『タっちゃん……俺はとうとうタイラントに勝てなかったよ……』
「おいドライグ!?何で急にタっちゃんとか言い出すんだキャラ変わり過ぎだろ!!」

声の主のまさかの正体に錯乱気味のフーマ、一誠、ドライグにツッコむタイガ。
タイタスは地球の意志に自分のマッスルぶりを見せつけるべくポージングを繰り返している。
やがて落ち着き、一行が息を整えたのを確認した地球の意志は申し訳なさそうに言う。

――都合が良過ぎるのも、頼り切りなのも重々承知している。だがレジェンドを始めとする光神の方々は既に彼ら独自で動き始めており、これ以上の負担はかけられない。無茶な事を――
「別に良いぜ」

いとも簡単に応えた一誠に地球の意志は思わずポカンとしてしまった。
が、トライスクワッドやドライグは納得していたようで……

「まあ、夏休み入ったら異世界修行の旅だし」
「行く先が別の世界の地球だったりする事もあるだろう」
「俺達にその気が無くても自然と関わっちまいそうな気もするしよ」
『どのみち俺らは相棒と一蓮托生なわけだからな』

何とも受け入れるのが早いというか。
ともかく、地球の意志は一誠やタイガらが頼みを引き受けてくれる事をありがたく思う。

――ありがとう。無理を言ってすまない――
「別に気にすんなって。あんたの上で俺らは生きてるんだしよ。……アレ？合ってるよな？」
「え？いや、うん……多分」
「という事は……四六時中この私の筋肉を見てくれているという事

かーッ!!」
「うおあっ!?旦那が！旦那が残像を複数残す速さでマッスルポーズし始めた！」
『絵面にすると色々とんでもない光景だなオイ』

相変わらず賑やかな四人と一匹である。

――ところで、ここでは時間が止まっているとはいえ現実の君達は非常に危険な状態だ――
「「「『あ』」」」

思いっきり忘れていた。
今はゴーデスと戦闘中、まずはあの場を切り抜けねばどうにもならないが、相手が相手だけに打つ手がない。

――どうやらそちらの心配は少しばかり軽くなっているようだ。増援が来ているみたいだぞ――
「増援って……」
「あ……あれはヒカリ博士!?」
「それに彼はリブット……！しかもあの見事な体型はパワードか！」
「おいおいマックスさんにゼノンさんもいるのかよ！」
『他の四人はともかくだ、ヒカリとやらはアザゼルが待ち望んでいた奴じゃなかったか？』

あまりに豪華な面子にトライスクワッドは騒然とする。
しかし、それだけでどうにかなるとは思えないし、そもそも自分達はまだ倒れたままだ。
戦況は変わったとは言っても結局自分達の現状は変わっていない。

「いやマジどうすんべ」
「「『今度はタイガがおかしくなった!!』」」

確かに直接戦っていたのは彼だから仕方ないといえば仕方ない。
――そうなるだろうと思い、これからの君達の旅路を祈り、あるものを用意した――
そう地球の意志が言うと、彼らの目の前に光の剣が現れる。
「これは……？」
「剣……だよな。これを振るえっていうのか？」
――いや、そうではない。それをどうすればいいか、君達ならわかるはずだ――
「どうするかって言ったってよ……」
「皆目見当がつかんな。振るうわけではない……投げる？」
『結局そのまま使ってるだろ。神器みたいに宿主と融合「それだ!!」」ん？』
ドライグの言葉で何かに気が付いた一誠とタイガはすぐさまタイガキーホルダーを取り出す。
「この光の剣をタイガのキーホルダーに融合させれば……」
「それによりキーホルダーが変化したら俺にも変化が現れるかもしれない！」
「「……ん？」」
タイタスとフーマは揃って腕を組み考える。
タイガのキーホルダーに光の剣を融合させる→タイガが変わる→タイガのキーホルダーではなく自分達のキーホルダーに融合させる→自分達が変わる……
「「ちょっと待っ……！」」

時すでに遅し、地球の意志が用意した地球の持つ神秘の力を変化させて顕現させた光の剣はタイガキーホルダーと融合し、タイガキーホルダーを『フォトンアースキーホルダー』へと変化させた。

「あああああっ!!」
「うわっ!?な、なんだよ二人とも……」
「あと少し……!あと少しだけ早ければ……!」
「酷いぜ……こんなのってあんまりだぜ……!」
『タイガだけパワーアップしたっぽいのが悔しいみたいだぞ』
「あー……何かゴメン」

ノリでタイガのキーホルダーに融合させてしまったが、そのおかげで二人のパワーアップが無しになってしまい申し訳なさそうにしている一誠とタイガ。
それを見かねた地球の意志の一言でタイタスとフーマは復活する。

――それはあくまで『この世界の地球』の力。他の世界、他の場所で君達二人も新たな力を手に入れる事になるだろう――
「オラァ一誠!タイガ!さっさとあの腐れデカヅラをぶっ飛ばして異世界行くぞォ!!」
「私のウルトラマッスルは一つの宇宙では収まらない!新たな世界が私の筋肉を待っている!!」
『だから切り替え早過ぎだ』
「ま……まあ、いいんじゃねーか?やる気出た事だし」
「逆に俺らが圧倒されてるんだけど……」

そんな彼らにもう一つ、と地球の意志が伝えてきた。

――君達の手助けになればと、私や他の世界はこの『勇者の石』を生み出した。本来は何らかの物体を素体としてこれが宿る事で一つの

命……勇者となるのだが、今回は急がねばならない以上、こちらで素体を創り上げよう。私が生み出した勇者の石は、同じ勇者の石から生まれし勇者達のリーダーとなる者……その者に相応しい素体をイメージしてほしい――
「勇者のリーダー……の、イメージか」
「あれじゃないか？人形とかより乗り物とかの方が」
「勇者っつったら馬車だろ！」
『馬はともかく馬車は違……ああ、ドラクエか』
「何も馬だけとは限らないぞ。バイクというのもアリかもしれん」

やいのやいの言い出した四人と一匹だが、タイガか思い出したように閃いた。

「あ！そういえばこの星で警察が乗るやつがあっただろ！ほら、何だっけ……えーと……そうだ！パトカー！」
「お！いいじゃん！悪を許さぬ正義の味方って感じで！」
『相棒は『悪』魔だからある意味敵だけどな』
「いやマジで昔の俺よく刑務所行かなかったなって思ってるからやめてくれよ……」
――ふむ、なるほど。ではあと二つ、その勇者に力を与えるものの素体をイメージしてくれ――
「「「『あと二つぅ!?』」」」

やっとこさ決まったかと安堵したら、さらなる数を要求されて素っ頓狂な声を上げる一誠達。
しかし、ヤケクソになったからか次はえらい早さで決まってしまった。

「仕方ねえ！こうなりゃ分かりやすいテーマ決めようぜ！」
「なら速さは正義って事で速いものを挙げてくぞ！」
「飛行機！いや戦いもあるし戦闘機！」

「電車！いやもっと速く新幹線ってやつ！」
『異論は無いな？！』
「「「異議無し!!」」」
――……随分と雑だな……それでいてさり気なくしっかりした意見な辺りはさすがというか……――

決めだして一分足らずで即決。
変なところでもチームワーク抜群である。
一通り済んだ事で周りに粒子状の光が少しずつ現れ始めた。

――そろそろ目覚めの時だ。私と、そして君達で生み出した勇者は君達の声で目覚めるだろう。最後にこれを託す――

そう言って一誠の手に光と共に現れたのはスマホ程のサイズの一つの端末。

「これは？」
――ダイレクター。勇者達に各種指示を出す時に使う物だ。たった今から君が、君達が『地球』の勇者達の隊長だ――
「な……何か凄い事になってきたな」
「では私はマッスル隊長だ！」
「俺は疾風隊長な！」

何やら小学生のなりきりごっこ遊びみたいになっているが、地球の意志は大真面目である。

――あとは、頼む。もう一人、地球を守らんと自らの身体で地球への被害を食い止めている君達の仲間も、君達を待っているはずだ――

その言葉で一誠達はある人物を思い浮かべた。
自分達のせいでマガオロチの卵に捕らわれた後輩。

「そうだ、ゼットさん！」
「知っているなら教えてくれ！ゼットを助ける方法は!?」
――仲間とのキズナ。次元や世界を超えて紡がれしそれが、彼にもまた新たな力を与える――
「次元や世界……!?」
「もしかして、レジェンドやゼット達が調査に行った空の世界か!?」
――私に言えるのはここまでだ……君達の未来に、光あらんことを――

その言葉と共に、光が彼らを包み込んだ。
そして――。

☆

混戦極まるゴーデス島では――

「グゥうぅおあぁァァァ!!!」

エネルギーは十分と判断したのか、マガオロチの卵から解放され……ゴーデス細胞により凶暴化したゼットがウルトラ戦士や神衛隊らに襲いかかろうとしていた。

〈続く〉

目覚めよ勇者

エネルギーを吸収され、代わりにゴーデス細胞を注入されてしまい、怪獣化の兆候が凶暴化するという形で出始めてしまったゼット。
リアス同様、右腕が半分異形化しているが彼女とは違って多数のゴーデス細胞を注入されたからかもはや意識は無く、双眸は赤く染まり苦悶の声ではなく吠えるような声を上げていた。

「ガァァァァァァァ!!」

まるで獲物を見つけた肉食動物が如く、ゼットは最も近くにいたボルフォッグやグシオン、フリッケライ・ガイストへと猛進する。

「ちょっと!?アタシ達が狙われてる!?」
「手近な者から手当たり次第というわけか！」
「ゼット隊員！自分を取り戻して下さい！」
「ぐるァァあああ!!」

ボルフォッグの呼びかけも虚しく、正気を失ったゼットは異形化した右腕で彼らを狙う。
それを防いだのはゼロツインソードを構えたゼロだった。

「……っのバカ野郎……！ゴーデス細胞なんざに負けてんじゃねえ！」
「ぐぅオォお!?」

受け止めた状態で正面からゼットを蹴り飛ばす。
さすがに訓練ではなく、かつ経緯が経緯だけに心苦しかったがそのままにしてはおけない。

「なあ！あいつを戻す方法、何かないか!?」

「こんな事もあろうかと余分にゴーデスワクチンを持ってきておいた。彼のカラータイマーから投与すればすぐに効くはずだ」
「助かるぜ！カラータイマーからだな！」

ヒカリからゴーデスワクチンのカプセルを受け取ったゼロは、起き上がるゼットへと急接近する。

「ったく世話の焼ける奴だなお前は！とっとと……」
「グガァァァァ!!」
「うおっ!?……！やべえっ!!」

ゼロは何とかゼットを拘束するも、暴れたゼットによって持っていたカプセルを弾き飛ばされてしまう。
もしそれが失われたりすればゼット、そしてレジェンドは――そう思った時、一つの巨大な影がそのカプセルを空中でキャッチした。

「!?」

「レイト！じゃなかった今はゼロ！そのままゼットを抑えといて！」

「くっ……黒歌ァ!?」

まさかの乱入者に驚きつつも、ゼロはゼットを後ろから羽交い締め

にし、ゼットのカラータイマーをその巨大な影に向ける。

「これっ……でぇ!!」

ガキン!という音と共にカラータイマーにカプセルが押し付けられ、リアスの時同様淡い緑色の光がゼットの身体に浸透し異形化した右腕も殻が割れるように元に戻る。

赤かった目もいつも通りの輝きを取り戻し、漸くゼットの意識も元通りになった。

「う……あ……俺は……」

「間一髪だったにゃ」

「やれやれ……ヒヤヒヤしたぜ全く。おいゼット、頭ボケてねえだろうな?」

「あ……ゼ、ゼロ師匠!すみません!ホントに!俺、ゼロ師匠や皆に我を忘れて襲いかかって……それで、その……」

「今回は不可抗力だろ。その様子ならもう大丈夫だな。つーか黒歌、何だそりゃ!?」

さすがに経緯からいってゼットが襲いかかってきたのは仕方がない事だろう。

ゼロもそこは理解していたから別に責めるような事はせず、逆に黒歌が乗っているモノに焦点を定めた。

「ふっふーん!これぞ土壇場で調整完了した私の愛機!スーパーロボットのソウルゲインにゃ!私の動きをダイレクトでトレースするから見た目以上に俊敏にゃ!おまけに仙術にも対応!」

スーパーロボット・ソウルゲイン。

以前から黒歌が言っていた彼女お気に入りの機体、それが束によって開発され、コジローによって最終調整を行われ漸く実戦投入可能に

なったのだ。
一時はカラーリングを黒歌のイメージカラーの黒にしようかと迷ったそうだが、元の色のままがいいという彼女の要望を受けてそのまま青色になったという。
「まあ、まだ私が慣れきってないから機体性能を全部引き出せるわけじゃないけどね。レベルアップして能力解禁されていくのはよくある事にゃ」
「わかるわかる。俺も最初は相棒のトランザムとか使えなかったしよ」
ウンウンと腕を組んで頷くゼロだったが、さすがにいつまでも話し込んではいられない。
マガオロチの卵が何度か発光し、中から弾け飛ぶように卵が割れ――
「ゴォォアァァァウ!!」
遂に大魔王獣マガオロチが産まれてしまった。
「ちっ！コイツはさすがに放置出来ねえな！性質もそうだがほっとくとマガタノオロチになりかねないし、そもそもあの状態でも強いからゴーデスとやり合ってる最中に横入りされたらたまったもんじゃねえ！」
「しかも何かゴーデス細胞の影響か凶暴化、もしくはパワーアップしてるっぽいわね。初陣からＥＸハードはツイてないにゃ」
「俺が……俺が捕まったりしなければ……！」
「だからお前はバカなんだよ。お前が捕まんなかったらタイガが捕まって同じ事になってたんだ。いつまでもグジグジしてんじゃねえ！気持ちを切り替えろ！」
「は……はい！」

ゼロに叱咤され、背筋を伸ばすもガクリと片膝を着くゼット。
どうしたのかと思ったが、彼はマガオロチの卵にエネルギーを吸われ続けていた。
ゴーデス細胞の除去は完了したとしても吸収されたエネルギーまで元通りになるわけではない。

「くそ……！」
「しょうがねぇな……ゼット、お前は援護に回れ。その状態じゃ前線どころか戦闘だってキツいだろ。下がれって言ってもどうせ聞かないだろうし、少しでも体力回復させてから復帰しろ。少なくとも今のままじゃ的にしかならないからな」
「けど！……わかりました」
「……レジェンドに何か言われたか？」
『ちょっとだけ我慢してろ』と……理由は言われ……!?」

ゼットが大人しく引き下がった訳をゼロに話している最中、それまで全く反応せず戦線復帰どころか地球での活動自体が不可能かと思われていたタイガが眩く輝き出す。

「何だ!?タイガが……」

☆

「行くぜタイガ！あの焼き鳥野郎と同じぐらい腹立つ髑髏野郎をぶっ倒す！」
『ああ！そして皆で帰るぞ！リアスやオカ研の仲間達のいる場所へ!!』

インナースペース内で一誠は地球の意志から託された力をタイガキーホルダーに融合させる事で変化した、新たなる力・フォトンアー

スキーホルダーをリードすべくタイガスパークを再起動させる。

『カモン！』

まずはキーホルダーの青い部分に――

『アース！』

続けて黄色い部分に――

『シャイン！』

そして改めてフォトンアースキーホルダーを握る事でキーホルダーはウイングが展開され、本当の意味で生まれ変わったタイガキーホルダーが新たな形となる。

「輝きの力を手に！」

地球の持つ神秘の力、それがタイガスパークを介してタイガに鎧となって脚から順に装着されていく。

その力の影響でウルトラホーンも大きくなり、かつてないエネルギーが全身に満ち溢れる。

「バディィィィ！ゴォォォォォッ!!」

『ウルトラマンタイガ

フォトンアース！』

「ジュアッ!!」

光の勇者は今、さらなる高みへと飛翔する。

☆

眩い光と共に再び大地を震わせ舞い降りたタイガはその姿を大きく変えていた。
全身に纏った金と銀の鎧、インナーのような黒い体色……そして大きくなったウルトラホーンを含めてフェイスガードに近い形で縁取られるような装飾。
まるで一誠の禁手『赤龍帝の鎧』のタイガバージョンとでも言うべき荘厳なる勇姿。

ウルトラマンタイガ・フォトンアース。

新たな力を得て、タイガらは死の淵から蘇ったのだ。

☆

タイガの復活は当然、ダイブハンガーにも映し出されていた。
アザゼルは口をあんぐりと開けて汗をダラダラと流し、それとは対照的にリアスやサーゼクスらの喜び具合は尋常ではなかった。

「オイあれ神器か……？いや神器にしちゃリアルタイム映像とはいえ画面越しでもビンビン来るんだけど。もしかしてデフォルトで神滅具の禁手並のパワーだったりすんのか？おかしくねーかソレ……」
「お兄様！タイガが……タイガが！」
「ああ……！まるで闘士……いや、超闘士だ！」

リアスに至っては先程まで自身の陥っていた状況さえ忘れたかのように涙を流しながら笑顔になっている。

彼の復活は、即ち一誠やタイタス、フーマにドライグもまた共にいる事を示しており、幾重にも喜びが重なった。

「アザゼル！いつまで呆けてるんだ！矢的先生と一緒のオカルト研究部顧問になったんだろう!?そこに所属している部員達が頑張っているのにエールの一つも送らないのか!?」

「いや、そういうわけじゃなくて……」

神どころか地球そのものから託された、それこそ真のエクスカリバーと同クラスのとんでもない物を引っさげて復活するなど英雄の息子は赤龍帝に負けず劣らずぶっ飛んでいた。

サーゼクスからしてみればアザゼルの気にしている事など些細な問題、親友の息子が妹のために戦ってくれている事の方が重要なのだ。

そして、彼らはさらに驚く事になる。

☆

新たな姿・フォトンアースとなったタイガは内から湧き上がる力に驚きと感動を覚えつつ、もう一つ気になった事を思い出す。

「今までの俺とは違うのがすぐにわかる……！そういえば勇者の石が何とか言ってたけど……」

『素体がパトカーと戦闘機と新幹線だっけ。パトカーが本体か？』

『なるほど、パトカーを戦闘機と新幹線で援護するというわけだな』

『いや、戦闘機はともかく何もパトカーと新幹線がそのまま戦うのはねぇだろ』

『待て、新幹線が最大速度で突撃してくるのは立派な攻撃手段だぞ』

彼らが相談の末、勇者のイメージとして選び素体とやらになったはずの乗り物の数々。

用意する、と言っていたがこの場でそんなものを用意されても正直邪魔にしかならなさそうだが……。

――無事にこの星が渡した力を顕現させられたようだな――

「『『『『!?』』』』」

キョロキョロするタイガや彼の中の一誠らだったが、先程の声は彼らだけに聞こえたらしく、周りはどうしたのかと心配している。

新しい姿と力を得て混乱しているのかと思われているが、混乱しているのは合っているものの理由は全く別物だ。

――いきなり声をかけてすまない。私は……――

「タイガ！マガオロチがお前を狙ってる！気をつけろ！」

その声が何かを言おうとした時、ダイナが叫ぶ。

ゴーデス細胞に加え、ゼットの持つ光のエネルギーを吸収して強化されたマガオロチの爪牙がタイガに迫る。

「ゴーデスもだけど、コイツも放っておけないな！」

――その通りだ。その存在を放っておけばこの星はやがて死に絶えてしまう。私はその存在を始めとする脅威からこの地球、そして別世界の地球を守るためにこの星と……君達によって生み出された――

「生み出された……！まさか!?」

――今こそ、共に戦おう。ダイレクターを翳し、私の名を呼んでくれ。私の名は……――

告げられた名を聞くと、インナースペース内の一誠が持つダイレクターが展開可能となる。

一誠らは頷き合い、ダイレクターを掲げその名を呼ぶ。

地球、その危機に目覚めし勇者の名は――

「『『『ダ・ガーン!!』』』」

彼ら以外には一見、タイガが唐突に何かの単語を叫んだだけに見えただろう。
しかし、次の瞬間島の地中から光の玉が少しずつ姿を現し、徐々にその形を変えていく。
やがて光が収まり、その場所にあったのは青を基調としたスターマークが特徴の一台のパトカー。

「は……?」
「何だありゃ!?」
「仰々しく出てきたかと思ったらパトカーかよ!?」

三日月がマヌケな声を出し、オルガやシノもツッコんでしまう程、ある意味衝撃的だった。
しかしタイガらや、ボルフォッグは直感的に理解する。
あれは……いや、彼は勇者なのだと。
パトカーはライトを付け、マガオロチへ向かって走っていく。
無人パトカーが急に怪獣へと走り出す光景に誰もがギョッとする。

「ガァァァァァァァ!!」

マガオロチは自身の得意技であるマガ迅雷を吐いてそのパトカーを破壊しようとするが、パトカーは絶妙な動きでそれを回避しマガオロチへと近づいていく。
そして……

「チェェェンジ!ダ・ガーン!」

パトカーが一瞬で二足歩行のロボットに変形した。

「「『『は?!』』」」

一連の流れがさすがに理解不能であった。
タイガが新形態引っさげての復活はいい、その後に島の下から光の玉が現れてパトカーに変化したかと思えばマガオロチに突撃、見事な機動を見せたのに無人で、しかも極めつけがロボットへの変形。
……よくよく考えるとタイガが叫んでからであったため――

「オイ……説明しろタイガ」
「いやあのゼロ……隊長?顔近い顔近い」
『やべーよ先輩声低いんだけど。怒ってんの?普通に問い詰めてんの?』
『普通がコレなわけねーだろ。顔に陰出来てんだぞ』
『折角新形態の初登場なのに締まらんな』
『『そういう事言うなァ!!』』
『揃いも揃って状況わかってるのかお前ら!!』
「「『『すみませんでした!!』』」」

自由に戦えないレジェンドがキレ気味に怒鳴る。
彼を本気でキレさせたらヤバいのは周知の事実なのでその戦場にいる味方が即座に全員（真剣に戦闘中のダ・ガーン除く）謝罪した。
そんな中、ゴーデスはダ・ガーンから何かを感じつつもマガオロチに果敢に挑む姿を観察している。
直感で地球により生み出された存在……ガイアやアグルと同じ事に気付いていた。
ダ・ガーンマグナムやダ・ガーンナパームで対抗していたダ・ガー

ンであったが、やはり体格差やパワーの問題でスピードには分があるものの明確なダメージを与えられない。

（やはり効果は殆ど無さそうだ。かくなる上は……）

ダ・ガーンはマガオロチの攻撃を回避しつつ、ダイレクターを通して一誠へと通信を送る。

『一誠、聞こえるだろうか』

「うおっ!?い……いきなりでビビったけど聞こえるぞ！」

「つーかインナースペースとも通信出来んのか！コレがスゲーのかダ・ガーンの方がスゲーのかわかんねーけど」

「こちらマッスル隊長。ダ・ガーン応答せよ」

『オメーはノリノリだな!?』

インナースペースとしっかり通信出来る事に驚きつつ、何かあるのだろうと予想していた一誠達。

結果はまさにその通りである。

『こちらダ・ガーン。マッスル隊長、そして一誠達に頼みがある』

「『意外にノリ良いな!?』」

『私のサポートメカの呼び出し、それから私も含めた3機に合体指令を出してほしい』

ダ・ガーンの意外な一面を知ると同時に彼から紡がれた言葉に若干驚くも納得する。

地球の意志がさらに二つ、イメージさせたのはこのためだったのだと。

一誠らが展開されたダイレクターを見ると、そこには彼らがイメージした2つのメカ――新幹線と戦闘機の電子図がダ・ガーンのものと

一緒に映し出されていた。

「それで、どうやればいいんだ!?」

『イメージだ。君達が最もしやすいイメージと共にダイレクターを掲げ、念じるんだ。そうだ、言葉と一緒でもいい。一誠、君がウルトラマン達に己の身体を貸す時のように』

「タイガ達と同じように……合体……フォームアップ……」

「おお！」

「それじゃあ、いつものアレと組み合わせようぜ！」

『あの掛け声か』

『決まりだな！』

一誠やフーマの提案にタイガ、タイタス、ドライグも賛成する。

折角だから、と一誠は呼び出しだけ自分でやり、合体指令は全員で行う事にした。

「よぉーし！行くぜ、ダ・ガーン！カモン！アースジェット！アースライナー！」

ダイレクターを翳し、一誠はそう叫ぶ。

それに反応し、ダイレクターの『オーリン』は力強く輝いた。

タイガのカラータイマーが黄金に光ったかと思えば、遥か彼方から2つの何かが猛スピードでやってくる。

「今度は何だぁ!?」

「アニキ！片方はジェット機だ！」

「おお！なかなかイカした形じゃねえか！」

戦闘機が飛んで来たのはいい、しかしもう片方に度肝を抜かれる。

「ウルトラ珍妙な光景が目の前で起きちゃってます超師匠」
『よくある事だろ』
「ないにゃ！全ッ然よくあったりしないにゃ！何で新幹線が水上、しかもガチで滑空してる意味で光のレール発生させながら水上突っ走ってくるにゃー!?」

戦闘機と並走？並行？するように新幹線がやって来たのだ。
これこそ一誠達のイメージを地球の意志が具現化したダ・ガーンのサポートメカ、アースファイターとアースライナーである。
周りが騒ぎ立てる中、ダ・ガーンの頼みを叶えるべくタイガ、そして一誠らは彼らで決めた合体の合言葉を叫ぶ。
もうダ・ガーンも自分達の仲間だという思いを込めて。

『『『『ダ・ガーン、フォームアップ！
バディィィ！ゴォォォッ!!』』』』」
「おおおおッ!!」

合言葉と共にインナースペースで一誠が掲げたダイレクターのオーリンからより強い輝きが起き、それを示すかのようにタイガのカラータイマーも再度黄金の輝きを放つ。
それを受けたダ・ガーンの両目も強く輝き、咆える。
その咆哮に応えるかのようにアースライナーは光のレールから浮いて離れ、横向きになったかと思えば先頭と後頭のノーズを並行にするように二つ折りの状態になり、その状態のまま飛行。
「とうっ!!」
それを追いかけるように飛んだダ・ガーンはパトカーモードに変形

し更に乙状に可変、アースライナーの二つ折りになった部分に前部を収めるようにドッキングする。
アースファイターもバレルロールで反転しつつ機首を折り畳むように変形し、ダ・ガーンパトカーの後部を収めるようにドッキング。
アースライナーの先頭車両が軸になって全体が起き上がり、胸部分となるレリーフに地球が浮かび上がる。
そして黄金のアンテナが輝く頭部、腕部から手首も出現し、ダ・ガーンは遂に合体を完了させた。

「合体！ダ・ガーンＸ（エックス）！！」

アースファイターのウイング部分がＸ字に可変し、その名に相応しく巨大な勇姿を顕現する。
地球の勇者ダ・ガーンＸが今、光の勇者達と共に戦うべくマガオロチ、そしてゴーデスの前に現れた。

「『『うおおおお!!カッケェェェェ!!』』」
『うむ！ビルドアップでも良かったかもしれん！』
『それだと別の機体になりそうな気がしないでもないけどな！』

一誠やタイガらはダ・ガーンの新たな姿に興奮し、他のウルトラ戦士や神衛隊も驚きはするがタイガが関係しているともあって頼もしい味方だと理解し、士気が上がっていく。
対するゴーデスはただただ驚愕しかなかった。

『今のその輝き……！馬鹿な！この星そのものが貴様らに力を貸したとでも言うのか!?』
「ゴーデス！そしてマガオロチよ！この地球、そしてこの星に住むものに破滅を齎そうとするお前達を、私は許しはしない！」

強い意志の込められた言葉をゴーデスにぶつけつつ、ダ・ガーンXはゼットの方に向き直る。

「ウルトラマンゼット」
「うはぁい!?」
『動揺し過ぎだぞお前』
「命を賭してマガオロチからこの星を救おうとしてくれていた事、心より感謝する。これは私と地球からのほんの少しのお礼だ。受け取ってほしい」

そう言って胸のレリーフに地球が再び浮かび上がり、温かな光がゼットを包み込むと、失われたエネルギーが回復していき同時に彼の手元には一つの先端に弓が合体したような槍状の武器が現れた。

「これは……!?」
『あ、昔俺が振り回してたレジェンドスピア。形が変わってるけど間違いないな。レイブラッドをボコった時に使って以来なくなってたんだが……どうやらお前用に地球が調整・再構築してくれたようだ。元のままじゃピーキー過ぎて俺以外まず扱えん』
「その通りです、光神レジェンド。先のエネルギー回復は再構築の際の余剰エネルギーを使わせて頂きました」
「ってことは……ぶっちゃけ神器なわけになっちゃいますか!?」

顎が外れそうな衝撃と共におずおずとそれを掴むと、ゼットの身体が少しだけ発光する。

そして――

『ゼットお兄ちゃん頑張ってー!』
『立てぇぇぇ!立つんじゃゼット殿ぉぉぉ!!』
『約束しただろゼット!またこっちに来るからその時はまた拳で語り

合おうと！』
「この声って……まさか……！」

☆

ゼットの推測は当たっている。
空の世界にあるエリアル・ベース。
そこのブリーフィングルームや指令室等、モニターがある場所にはウルトラ騎空団のメンバーがほぼ勢揃いしていた。
束が送ったメールに添付されていた映像コードを入力し、映し出されていた映像を我夢がエリアル・ベース内の全モニターに出力した事でゼットらが直面している状況を団員達が知ったのである。
そして、届かぬとは思いながらも声を張り上げ応援したのを地球、そして『空の世界自身』が一時的・限定的に『異界繋ぎ』した事で声がゼット、いやゴーデスらと戦う者達へ届いたのだ。

「団長ちゃん、ゼットちゃんもちゃんと来てくんなきゃ駄目だよ！最近俺、ソーンとかニオからの圧がヤバくて依頼に逃げてる状態だからね！」
「やっぱり逃げてたのかお前……！馴染みがあってウルトラマンだからという理由で俺と我夢がどれだけ問い詰められたか知らんとは言わせないぞ……！」
「落ち着いてくれ藤宮！というかゼットが槍状の武器持ったからってシェロカルテに交換して貰ったゲイボルグをシエテに向けないでくれ!!」
「お願い団長ちゃん！絶対に勝ってこっち来てね!?いよいよ俺、博也ちゃんにも狙わりゃあああ!?」

本気で藤宮からゲイボルグで突き刺されそうになりギリギリ弓なりに身体をしならせ回避したシエテだが、他の者は別に気にしない。

「……自業自得、だな」
「ですね……よし、今なら彼にこれを送れるかもしれない」
「我夢、それは？」
「僕の……ガイアの力の一部を込めたウルトラメダルです。遊撃隊のメンバーはヒカリ博士から頼まれてたんです、ウルトラメダルにそれぞれの力を込めて彼に渡すようにと」

我夢の手にはガイアの横顔が描かれたウルトラメダルが握られていた。
どうやって……とジークフリートは思ったが、直後見知らぬ声がエリアル・ベースへ響く。

『僕が僕のメダルと共に届けよう』
「「「「!!」」」」
『僕自身まだそちらにも彼らの元にもいけないけれど、君達の思いと彼らの諦めない心……その二つの光があれば、ゼットに力を届けられる』
「え？え??誰なの？」

ナルメアが困ったように首を傾げると、我夢と藤宮がその正体を告げる。

「ティガです。ウルトラマンティガ。彼がこれを届けてくれるんです！」
「ティガ……我夢が言っていた超古代文明を滅ぼしたという邪神を打ち倒した巨人か！」
「ああ……！銀河遊撃隊最強の切り札とも呼ばれる男だ。最強形態にもなれば俺達が束になっても歯がたたん。模擬戦で一度拳を交えたが、最強形態になった途端攻撃がまるで通じなくなり我夢共々完敗した」
「ガイアとアグルが揃ってんのに完敗ってどんな化け物やねん!?」

ガイアがヴァージョンアップする前に叩きのめされ、続けざまにアグルもやられてしまったため、二人がヴァージョンアップ出来れば結果が変わる可能性もあったのだが技量面で差があり過ぎた。
ちなみに通常形態のままとはいえ、武器を持ったベリアルとゼロと三つ巴の模擬戦でただ一人素手だったにも関わらず引き分けに持ち込んだ逸話もある。

『さあ、皆の心を一つに。思いと力を光に乗せるんだ』
「心を、一つに……」
「思いと力を、光に……！」
団員達の身体が僅かに光ると、その光がガイアのウルトラメダルに集まり我夢の手から静かに浮いて虚空へと消える。
ガイアのメダルは光の中でティガのメダルと合流し、更にスピードを上げて突き進んでいく。

☆

空の彼方がキラリと光ると、時空を超え飛来した二種類のウルトラメダルはゼットの中に入り、レジェンドの手に収まる。
二つのウルトラメダルを一瞬で確認したダイナは頷き、自分の力を宿したウルトラメダルをゼットへと投げた。

「ゼット。こいつも受け取れ！」
「え!?おわっ！ちょっ……今手ぇ塞がっ……あ、カラータイマーに吸い込まれた……」
『喜べ、ゼット……！ティガとガイアがメダルを送ってくれた！今のダイナのも加えれば新形態になれるぞ！』
「マジですか超師匠!?ティガ先輩、ダイナ先輩、ガイア先輩！ありがとうございます!!」

ビシッと角度９０度の礼をするゼット。
そして、レジェンドは当然――
「興奮冷めないうちに次の興奮をくれてやるとするか！やるぞゼット！」
「サーイエッサー！」
レジェンドはティガ、ダイナ、そしてガイアのメダルを順にゼットライザーへセットし、いつものように彼らしく一気にスキャンする。
『ＴＩＧＡ！ＤＹＮＡ！ＧＡＩＡ！』
スキャンが完了し、インナースペース内にもゼットの姿が現れる。
「時空を超える、光の絆!!」
「ご唱和ください我の名を！ウルトラマンゼーット!!」
「ウルトラマンゼェェェット!!」
ライザーのトリガーを押し、現れるはティガ、ダイナ、ガイアの幻影。
『タァッ！』『デアッ！』『デュアッ！』
『Ｕｌｔｒａｍａｎ―Ｚ！Ｇａｍｍａ―Ｆｕｔｕｒｅ!!』
「ヘェアッ!!」
額にはティガやダイナの如きクリスタルを輝かせ、メダルの三人同様のＶ状のプロテクターを装着し、赤・青・金・銀のまさにヒーローカラーで現れた新たなる姿のゼット。
ウルトラマンゼット・ガンマフューチャー。

超能力に優れた形態となったゼットは、その力を確かめるように超能力で先程の槍を触れずに高速回転させながら上下左右に動かし、その手に収めた。

「レジェンドスピアとは超師匠が使ってこその力と名前。今のこの形と力ならば……ゼットランスアロー」

「「「「……えっ？」」」」

武器の名前はともかく、やけにクールなゼットに思わず間抜けな声が出てしまうゼロを始めとした面々。

「いや……ゼット？お前マジで大丈夫か？メダルに何か異常ないか？」

「心配無用、ゼロ師匠。マガオロチは俺が」

（いやいやいや心配無用って！実力よりお前の変わりようのが心配なんですけど!?）

ちなみにダイブハンガーではダ・ガーン関係でリアスらが喜んだり、このゼットを見て生徒会のゼットファンが鼻血出したりと大忙し。

☆

そしてゴーデス島だけではない。

「はあああああ!!」

「やぁぁぁっ!!」

裕斗の『騎士殺し』と瞬閃状態の小猫の蹴りがアマツミツツカに炸裂し、それに続くように小芭内と蜜璃の斬撃が放たれる。

「後衛！そのまま畳み掛けろ！奴は攻撃を属性軽減出来ても吸収は出来ない！小細工無しの真っ向勝負で押し切れ!!」
「どんどんいっちゃって！」
「おっけー☆」
「わかりましたわ！」
「やっぱり力強いいいい！早いとこお願いしますぅぅぅ!!」

藻掻くアマツミツツカを影で必死に抑えながらギャスパーが叫ぶ。
セラフォルーの無数の氷刃と朱乃の雷撃がアマツミツツカに突き刺さるが、まだ倒れない。

「なるほど、タフな奴だぜ！こうなったら……！」
「獅子王凱！お前は黒い怪獣と戦いに行け！この鬼はこいつらだけで何とか出来る!!」
「ゼロガンダム!?本気か!?」
「そこで燻っているバカを奮い立たせればいいだけの話だ。いざとなれば俺も手を貸す。早く行け！」

凱は少し迷うが、小猫がそれを後押しする。

「行って下さい、凱さん」
「……いいのか？」
「代わりに約束して下さい。煉獄さん達を絶対に助けると。私達も全員、無事に勝ちますので」

小猫だけではない、裕斗や朱乃達も笑顔で凱を送り出そうとしている。
ならば勇気ある者としてそれに応えぬ選択肢は無い。

「ああ！当然だ！皆で勝って、ゴーデス島に向かったレジェンド様達を迎えるぞ！」

彼ら同様笑顔で約束し、凱はサタンデロスと激戦を繰り広げるガリバーと参式の元へと向かう。
一度だけ振り返り「君達も勇者だ」と変わらぬ笑顔でエールを送りながら。

凱は仮住居に来た時の道を急速で戻りながら、自身のブレスレットから改良されたファントムガオーを取り出し、それに飛び乗って戦場へと急行する。
本来ならギャレオンを連れてくるところだが、真っ先に調整出来たギャレオンを基点として各種ジェネシックマシンの調整をしているため、ここにはいない。

「こちら凱！命、そっちの準備はどうだ!?」

☆

その命だが、束と共にダイブハンガーの作戦指令室に到着後、束が圧縮空間の一部を開放。
そこになんと専用のオペレートスペースを構築。
ついでに異世界修行についていく為にもう一組持ってきているらしい。

「これまた勇者王の専属オペレーターだけあってやる事派手だねみこっちゃん！」
「むしろそれを予測してスペース確保済みのレジェンド様と束博士の方が凄いんですけど！」
「あっはっはー！お互い想い人が凄いからねぇ！あ、みこっちゃん早速呼び出し来てるよん」

束に言われ、命は急いで通信を開く。

『こちら凱！命、そっちの準備はどうだ!?』
「ドンピシャよ！今終わったところ！」
『よっしゃ！こっちも鬼をあの子達が引き受けてくれたおかげで黒い怪獣の所へファントムガオーで向かっている最中だ！フュージョン承認を要請したいが、誰か出せそうな人物は!?』
「束博士！すぐ近くにいるっていうか長官代行してくれる気満々！」
「任せたまえよがっくん！こんな事もあろうかと日々発声とポージングの練習を重ねてきた成果を見せてあげよう！」
『文句なしの代行だ！頼むぜ、束博士！』

爆走したり圧縮空間の開放したりと色々しながらもゴーデス島の状況を確認していた束はテンション上がりまくり状態で、今現在もノリノリだ。

「それじゃあ早速ぅ！フュージョン、承おぉぉ認ッ!!」

☆

フュージョン承認を受け、凱はファントムガオーとフュージョンする。

「フュージョン!!」

ギャレオンとのフュージョン時と違い、少し控えめに言うのがポイントとは本人の弁だ。
ファントムガオーは凱を取り込んで変形し、戦闘機から人型のロボットへとその姿を変えた。

「ガオッ！ファァァァァ!!」

ガオファーは空中からガリバーと参式の間に落下し、戦闘態勢をとる。
突然の乱入に杏寿郎とＣ．Ｃ．は驚くも、Ｃ．Ｃ．は面識があったため即座に普段通りになった。

「む!?誰だ!?」
「凱か。いつの間にこっち来てたんだ？お前がソレ持ってこっちに来てるならお前の嫁予定のアイツもいるんだろ？」
「久しぶりだなＣ．Ｃ．！命はダイブハンガーでサポートしてくれてるぜ！っと、そっちには自己紹介がまだだったか。俺はＧＧＧ機動部隊隊長の獅子王凱！よろしく頼むぜ！」
「すりーじー……という事はボルフォッグ殿の上司か！俺は煉獄杏寿郎！鬼討組も兼任の新米神衛隊員だ！所属は現在検討中！」

お互い、さっぱりした性格のおかげかあっさり打ち解けた。
……が、今はそれを喜べる状況でないのが辛いところ。

「いきなり乱入してこんな事を言うのも何だが、奴の特徴を教えてくれ」
「ああ……攻撃力が高く機動力はそれほどでもない。だが問題は攻撃力ではなく、あまりに強固かつ修復速度の早すぎるバリアだ。元々はデメリットがあったようだが、奴を送り込んだ者が改良したようで今のところ一応破れはする、という事ぐらいしかわからん」
「何よりこのまま進行されれば避難所となっている駒王学園に奴が到達してしまう！そうなれば取り返しのつかない事になる！」

やはり、と凱はガオファーのままでは太刀打ち出来ない事が予想通りであったため、ダイブハンガーの指令室へある事を要請する。

「束博士！ガオファーからファイナルフュージョンの要請を確認！」
「待ってましたぁぁぁ！行くよみこっちゃん!!」

束のテンションはこの日、最高潮に達した。

「ファイナルフュージョン、承おぉぉ認んんん!!」
「了解！ファイナルフュージョン！プログラム……」

命は束の承認を受け、各種操作を行った後、一拍置き……

『ドラァァァァイブッ!!』

握り拳の下部で、ガラスパネルを粉砕しつつ起動ボタンを叩いた。

☆

それは即座にガオファーを含む、予め取り出しておいたガオーマシンに伝達された。

「ファイナルッ！フュゥゥゥジョォォォンッ!!」

凱の掛け声と共にガオファーが飛び上がり、遮蔽防御用電磁竜巻・ファントムチューブを展開。
その中をライナーガオーⅡ、ドリルガオーⅡ、そしてステルスガオーⅢに追加装備を加えたステルスガオーⅢαが飛んでくる。
ガオファーは胸部からリングを生成し、合体プログラムを更新しつつ合体態勢へと移行。

まずドリルガオーⅡの機首が開閉し、ガオファーの脚部を収める。
続いてライナーガオーⅡがサイドブースター部分を切り離し直線状へと展開後、ガオファーの腕部が背後に折り畳まれトンネル状になった胴を左右に抜ける様ドッキングし、固定。
最後にステルスガオーⅢαが背負われる様に背部にドッキングしボディと固定された後、ライナーガオーⅡから展開された二の腕にステルスガオーⅢαにあった腕部がドッキングし手首が回転しつつ現れる。
角付きの兜がガオファーに装着され、さらにマスクが装着されると最後に額から緑色のクリスタルパーツが現れ、『G』の文字が浮かび上がった。
そして、左手の甲に同じくGの文字を浮かび上がらせ、力強く叫ぶ。

「ガオー・ファイ!!ガァァァァ!!!」

時空を超え、あらゆる厄災から宇宙を護るため再臨したファイティング・メカノイド。
その名も勇者王ガオファイガー!!

「うおおお!!何だアレ！何だアレ！」
「また新しいロボットだ！」
「他の二体と同じく黒い所はあるけどイメージが全然違う！」

ウイングを展開したガオファイガーの雄姿に避難していた人々も不安が吹き飛ばされたように盛り上がっている。
そして、間もなく彼らは目にするだろう。
倒れていた翼が、真の力の一旦を発揮する瞬間を。

遂に光神陣営、反撃の時。

〈続く〉

烈風の戦乙女（ヴァルキリー）

駒王町方面とレジェンド一家仮住居。
二つの場所で戦う者達の状況に変化が現れた。
最も大きな変化はやはり光神陣営に強力な援軍、ガオファイガーが到着したことにある。
杏寿郎は機動兵器戦は初陣であり、C．C．もあまり自分から進んで戦おうとするタイプではなく、有事の際にのみ動くのが常だ。
そこに加わったのが百戦錬磨の勇者王とあれば戦力増加は明らかであり、専用のサポートも万全というからこれを心強いと言わず何と言う。

「各部異常無し！エネルギーの循環効率も断然良好！さすがクルーガー夫人、趣味と実益を兼ねた職業は伊達じゃないぜ！」
『あー！スーちゃんもマシンやエンジンの改良に協力してたんだぁ！道理で以前より数値が増してるのに消耗少ないと思ったよ！』
「おかけでガオファイガーの欠点だった長期戦に向かないというデメリットも解消だ！他にもガジェットツールを参考にした武装をステルスガオーⅢαにいくつか搭載してより様々な状況に対応可能になってるぜ！」

かつてガオファイガーはある理由からフルパワー時の稼働時間が短いなどの弱点があったのだが、修復された際にスワン・クルーガー協力の元、それの克服が出来たのである。
新たなガオファイガーは今までのデメリットを無くし、より汎用性を増していた。
そんなガオファイガーがファイナルフュージョン後に最初にやるべき事は一つ。

「命！奴の進行方向には避難所になっている学園がある！まずは奴をそこから引き離すと同時に俺達が存分に戦えるようにするぞ！」

『うん！あのツールね！』
『んじゃまいっくよー！ディバイディングドライバー、承認！』
『了解！ディバイディングドライバー……イミィィィッション!!』

コンソールパネルを操作後、背後に現れたパンチングマシーンのようなものにまたまた握り拳下部を裏拳のような体勢で叩きつける命。
相変わらずアグレッシブなオペレーターだ。
Ａ・Ｂパーツに分割状態のまま射出されたディバイディングドライバーⅡは駒王町上空のガオファイガーに近付きつつ空中でドッキングし、本来の形になった後に改めてガオファイガーの左腕に装着される。

「ディバイディングドライバァァァァ!!」
ズドォォォォン!!

ガオファイガーがディバイディングドライバーⅡを地面に突き刺すと、凄まじい衝撃波が駒王町を分断するように地走った後、半径数十キロにも及ぶ土地の凝縮移動が発生し戦闘用フィールド『ディバイディング・フィールド』が形成され、ガリバーと参式、そしてサタンデロスはその場へと降ろされた。
ガオファイガーもまたゆっくりとフィールドへと降下しＤ・Ｄモードを解除、ディバイディングドライバーⅡを分離し通常モードに移行する。

「これはどうなったのだ!?」
「ハイパーツールの一つ、ディバイディングドライバーで戦闘用のフィールドを作ったのさ。市街地じゃ、奴はともかく俺達は戦いにくいからな！」
「手っ取り早く説明するなら遠慮なく戦えるようになったというわけだよ。おまけに今のは町を破壊したわけではなく、そうだな……地面にチャックを付けてそれを開いたようなものと言えばわかるか？」

「何となくだが理解した！凄まじいな！だが、おかげで頑治郎も存分に斬艦刀を振るえるというわけだ！」

杏寿郎は感謝し、グルンガスト参式は通常形態の参式斬艦刀をその手に構える。

巨大刀剣形態は他の２機もいるため、いざという時の切り札だが通常形態でも杏寿郎の今の技量ならば問題はない。

ガオファイガーとコンパチブルガリバーも格闘戦の構えに入り、凱の指揮で戦闘を開始する。

「フィールドが維持出来るのは３０分だ！それまでに奴を倒す！行くぞ二人とも!!」

「承知した！この戦場ならば加減は不要！先程までのようにはいかんぞ!!」

「まずバリアを破らなければ突破口は開けん。逆を言えばバリアさえどうにか出来ればこの面子ならパワーで押し切れる……！」

「ならば分散せずに一点集中・波状攻撃だ!!」

ガオファイガー、コンパチブルガリバー、グルンガスト参式とサタンデロス。

不屈の闘志を持った勇者達と漆黒の惑星破壊神が激突する。

☆

その頃、クロエが駆るガリルナガンとアサキムの駆るシュロウガ……黒き二体の機動兵器による高機動空中戦はゼット、つまりは同時にレジェンドが無事であるとの報を聞いたクロエが再び巻き返していた。

「また動きが良くなった。どうやら君に何らかの影響がある事態が起こったようだね」

「何度も言わせて頂きますが、貴方には関係ありません」
「相変わらずつれない返事だ」

そういうアサキムだが、コックピットである以上クロエからは見えないものの笑みを浮かべたままだ。

「さて、しばし刃を交えて分かったが……君も彼女同様、機体の性能を発揮出来ていないらしい。とは言ってもサイバスターのように操者の技量不足ではなくその機体に何らかの制限が掛かっていると考えた方が良さそうだ」
「だとしたら何だというのですか？」
「焦らすのは嫌いだったか。失礼、同志にそれもプラスに考えられる人物がいてね。もう少し謎掛けなどをしたかったが君が嫌ならば仕方ない」

ちなみにその同志とは言わずもがな堕天司ベリアルのことだ。
アレはサドにしてマゾである。

「シュロウガの力の一端を見せてあげよう。エンブラス・ジ・インフェルノ!!」

アサキムの言葉が発せられた瞬間、シュロウガを中心に黒い光が全方位に放出され周囲を吹き飛ばす。
ガリルナガンもその影響で凄まじい衝撃を受け、咄嗟にバスタックス・ガンを盾にする形で緩和したものの大きく吹き飛ばされた。
そのスキを狙ってシュロウガが猛攻を掛ける。

「魔王剣……疾風の如く！」

恐るべき加速と異常な程に柔軟な機動性でガリルナガンへと接近し、盾にしていたバスタックス・ガンへと深々とディスキャリバーを突き刺した状態で更に上空へとガリルナガンを持ち上げ飛翔するシュロウガ。

「さあ、至福の悲鳴をあげろ！」

ディスキャリバーを引き抜くと同時に全方向から縦横無尽、驚異的速度でガリルナガンを切り刻む。

「う……くっ……！」

「苦しみ！もがき！そして、堕ちるんだ!!」

最後の一閃によって巨大な魔法陣が完成し、強い光を放つと大爆発する。

その光景を見ていたオカ研メンバー＋αやレジェンド一家、そして避難していた駒王町の人々の顔が青ざめる。

ガオファイガーの登場によって希望に満ちていた人々の心は、黒き狩人がその力の一端を見せた事で再び不安の方へと傾いてしまったのである。

煙が晴れると、損傷があり五体満足とはいかないものの健在なガリルナガンの姿があり、それを見た者達は少なからず安堵した。

「ほう、あれに耐えるとはさすがというところか。しかしその様子を見るに先程までの動きは不可能になったみたいだ」

（ガリルナガンの自己修復機能は正常に作動している……しかし、彼がこのまま見過ごすとは到底思えない。どうしましょうか……）

「サイバスターの方は君を狩った後にすぐ狩るとしよう。あちらは対して脅威ではないとわかったのでね」

「……少し、短角的ではないですか？」

「何？」

「如何なる時であろうと、得てして予想外とは起きるもの。常識に囚われ過ぎず、非常識もまたこの世の常と思うべし……レジェンド様から教わった言葉です」

クロエの言葉を聞くとさしものアサキムも怪訝に思う。

自信があるのか、もしくはただ諦めていないだけなのか……。

「何が言いたい？」

「貴方を倒す可能性があるのは何も私だと限った事ではない。そういうことです」

☆

各所で激戦繰り広げられる中、ロスヴァイセはサイフィスからサイバスターに関する事を聞いていた。

「えっ……と……つまりサイバスターはどのみち性能を十分発揮出来るような状態ではなかったと……？」

――簡単に言えばその通りです。本来、魔装機や魔装機神は精霊と契約することによってその精霊の加護を受け、各々異なった特徴を持つようになります。外見は契約予定の精霊の加護を受ける前提で作られることが多いのですよ――

「それじゃあ、何も私の操縦技術が不足しているとは限らないんですね」

――いえ、ぶっちゃけ下手くそです――

「オブラートに包む気もない言い方ですね!?」

容赦無く下手くそ認定されたロスヴァイセは涙目。

というのも実はサイフィス、サイバスターはレジェンドないしサーガが乗るものとばかり思っていた為、判断基準があの二人なのだ。

レジェンドはアムロと同レベル（ただし本人いわくスーパーロボッ

ト系向け)、サーガも相当な操縦技術を持っているぐらいだからそう感じても仕方ない。
比べられたロスヴァイセとしてはたまったものじゃないのだが。
――まあ、操縦技術に関してはこれからシゴいていくとして――
「鍛えるんじゃなくてシゴくんですか!?厳勝さんに師事してるゼノヴィアさんみたいな状況になるんですか!?」
――どちらにせよサイバスターと私が契約して私がサイバスターの守護精霊となり、その上で私が貴女と契約することで漸くサイバスターは本来の力を発揮出来るようになります。貴女は機動兵器戦闘に関してはまだ素人に毛が生えた程度の腕前なのでしばらくは私が補助につく必要がありますが――
「うううう……言い返したいけど事実だから言い返せません……」
サイフィスが予想以上にズバズバ言ってくるため、ロスヴァイセの涙腺が決壊し滝のような涙が流れている。
しかしながらこの場を形勢逆転出来る手段があったのは思いもよらぬ嬉しい誤算。
「と……ともかく!それじゃあ早く契約を!」
――急かさないで下さい。正直に言いますと、サイバスターと私の契約は元々想定されていた事なので手早く済みますし何も問題はありません。ですが貴女と私の契約は別です――
「え!?」
いきなり冷水をぶっかけられたような衝撃を受けた。
だが、その後のサイフィスの言葉でロスヴァイセはその意味を知る事となる。
――魔装機ならいざ知らず、魔装機神は本当の意味で操者に選ばれた場合、その者が死ぬかその魔装機神が完全に破壊されるまで契約は

続きます。そしてそのサイバスターは光神であるレジェンド様も手掛けた魔装機神……即ち光神の加護も受けている。つまりサイバスターの真の操者になるという事は正しくレジェンド様の眷属になるというのに等しい。それは同時に普通の人間として生きていく事が出来なくなる、ということでもあります――

今はギリギリ人間のラインだったロスヴァイセだが、契約すればレジェンド一家や惑星レジェンドに住まうもの達と同様に光神眷属となり、普通に生きて普通に老いて普通に生の幕を閉じる……それが出来なくなる。

逆に契約しなければ力は手に入らない代わりに、まだ光神の影響による不老長寿程度で済む。

二者択一、既に光神らと関わっている以上ある程度人間をやめている彼女だが――

「構いません。お願いします」

――そうですか。それも一つの選た……あれ？――

サイフィスも間抜けな声を出してしまう程、はっきり言い切った。

――えーっと……私の話、聞いてました？人間やめちゃうんですよ？正確に言うと光神眷属生命体っていうのになっちゃうんですよ？――

「はい。というよりもまだ私人間だったんですね」
――えぇー……――
「あの時、京都でオーフィスさんに拾われて……リクさんに勧められてレジェンド様の下で働く事になってから覚悟はしてました。ですから、人間でなくなっても構いません。今、私がいるここが私の居場所ですから」
――サイバスターのコックピットが?――
「レジェンド様のお傍ですよっ!!」

レジェンドとゼットに負けず劣らずのコントぶりを披露するロスヴァイセとサイフィス。
あまりに吹っ切れているロスヴァイセにサイフィスははー……と深い溜め息を吐く。

――……わかりました。誘導しようとしてもまた路線修正されるでしょうし、貴女の意志を尊重しましょう。改めて最終確認です。私と契約するということは正式にレジェンド様の眷属になるということ。それ即ち人間から昇華し光神と共にある生命として生き、文字通り悠久の時を過ごすということ。人間の友やそれに準ずるものが老いて朽ち果てようと己は老いも朽ちる事もない。それでも尚、この道を選びますか?――
「はい。それが私の生きる道です」
――汝の御意は神風と共に。今この時より我、サイフィスと汝、ロスヴァイセは『風』の盟約を結ぶ。我が風の守護を白き魔装機神に、風の魔装機神の力を戦乙女に、そして戦乙女の願いを我と魔装機神に――

サイフィスが言葉を紡いでいくと今まで足りなかったピースが嵌っていく様にサイバスターの出力が跳ね上がっていく。
「これが……!」

――これにて契約は完了です。しかし困りました。ただでさえライバルが多いというのにまた一人……他の世界にもいるみたいですし、あの方は天然ジゴロですし――

「……いや、あのこういう時ってもっとこう、ドラマチックな展開とか……」

――そんなもんアニメや漫画、ゲームとかの中だけですよ。実際はこんな感じで俗っぽいありふれた展開です――

「さっきぼんやり見えましたけど貴女精霊王の一柱ですよね!?何かぬいぐるみ抱えてましたよね!?」

――レジェンド様とサイバスターのぬいぐるみですよ。最高の組み合わせだと思いません?――

どうやら予想以上にサイフィスは俗っぽかったようだ。

一気に盛り上がる展開かと期待していたロスヴァイセも顔が引きつっている。

――まあ、そちらは後で自慢するとして――

「するんですか!?」

――今のサイバスターの状態は半・精霊憑依(ハーフ・ポゼッション)とでも言うべき状態になっています。私と正式に契約したことでサイバスターの基本スペックは跳ね上がっていますし、その上で半・精霊憑依が発動しているのでよりその能力は高まっています――

「ということはつまり……」

――今の貴女では私抜きだとまずまともに戦えませんね――

「……そろそろ本気で泣いていいですか?」

――ダメです――

「せめてスルーして下さいよ!?」

これまた厳しいサイフィスにロスヴァイセはツッコミを入れるが彼女はどこ吹く風だ。

風の精霊王だけに。

しかし、いつまでもこんなコントじみた事をしているわけにはいかない。
空ではクロエが、そしてディバイディング・フィールド内ではC・C・に杏寿郎、そして援軍として駆け付けてくれた凱が戦っているのだ。
サイフィスと契約した事によってサイバスターは漸く本当の力を発揮出来るようになった。
ならばすべき事はただ一つ。

――さて、確かサイバスターは今回がデビュー戦でしたね。初陣とはいえ私が守護精霊となったサイバスターがボロ負けしたまま戦闘終了というのは腹が立って仕方ありません。あの黒いのは個人的に気に入らないので撃墜しましょうか――
「思いっきり私情挟みまくりですね!?精霊王ってもっと平等みたいなイメージあったんですけど!」
――修理費払いたくないという理由から高機動型の機体選んでこういう状況に陥ってる貴女に言われたくありません――
「ふぐぅっ!?」
――ですが、そういう俗っぽいところは好ましいと思います。何の意志も持たずただ言われるがままの生き方より余程素晴らしく感じますよ――

突然真っ当な理由で肯定されたロスヴァイセはポカンとしたが、何度か瞬きした後に表情を引き締め、レバーを握った両手に力を込めた。
「でしたら、今まで好き勝手してくれたツケを彼に支払って貰いましょう!」
――ええ、当然利子付きで――
今、風の魔装機神（サイバスター）がその真の力の片鱗を見せる時が来た。

☆

戦場に、一陣の風が吹いた。
それは神風也。

ドカァァァァン!!

「ぐうっ!?」
「……!」
「綺麗に入りました!」
――今のサイバスターならば造作もありません。油断しているなら尚更です――

ガリルナガンにのみ集中していたシュロウガに対し、先程までとは比較にならない速度でサイバスターのディスカッターがシュロウガを斬り裂いたのだ。

「サイバスター……ロスヴァイセ様……!」
「クロエさん!任せっきりですみませんでした!もう大丈夫です!」
「機体と、貴女自身の雰囲気が……わかりました、それが貴女の……貴女達の選んだ答えなのですね」

長年惑星レジェンド圏内で過ごしてきたクロエはサイフィスの存在と、ロスヴァイセが本当の光神眷属となった事を理解する。
どんな事があったのかはともかく、彼女自身が選択した道をとやかく言う気はない。
今は目の前の存在をどうにかするのが先決だ。

「……まさか君に出し抜かれるとは思っても見なかったよ」

「油断大敵って言葉を知ってますか？」
「なるほど、少しはマシになったようだが……仮に機体が同等レベルまでその性能を引き上げられたとしても君と僕では経験、そしてそこからなる技量に絶対的な差がある。それを加味した上でその自信なのかな？」
「はい。正直、私の腕では貴方にまず敵わないでしょう。ですがそれは私一人ならの話です」
「そうか……つまりそこの彼女との連携で戦うというわけか。しかし、そんな君の技量で彼女との連携が取れるとは到底思えない。精々彼女が君に合わせる事で持ち味を潰してしまい……二人揃って僕に狩られるのが関の山さ」

アサキムは相変わらず上から目線の発言であったが、確かにその通りである。
故にロスヴァイセが選んだ方法はアサキム、そしてクロエさえ驚かせる事になった。

「クロエさん！あっちの黒い怪獣に向かって下さい！彼は私達が抑えます！」
「「!?」」

ロスヴァイセが一人で戦うと言い出したのだ。
否、一人ではない……サイフィスもいる。
それをわかっていたクロエは然程悩む事もなく頷き、ガリルナガンを動かしサタンデロスへと向かう。
シュロウガに乗るアサキムは焦った様子もなくそれを見送り、サイバスターと改めて対峙する。

「随分と思い切った選択をしたものだ。自分と一緒に犠牲になるくら

いならと彼女を離したのか。その自己犠牲の精神に免じて――」
「犠牲になるという前提からして間違ってますよ」
「何……!?」

ガキィィィン!!

「ぬっ!?」
「私達は勝ちます！」
――本気のぶつかり合いではこちらが不利になるのは明白、私と半・精霊憑依状態にあるサイバスターの速度ならばあちらを上回る事が可能である以上、それを活かした高速戦闘による速攻短期決戦しかありません――
「だったら剣一本では足りませんね！」

シュロウガと鍔迫り合い状態だったサイバスターは、シュロウガを一度吹き飛ばしディスカッターを仕舞った後、それとは別の二振りの片刃剣を取り出す。
形の違う剣を両手に携え、サイバスターは更に速度を上げシュロウガへ肉薄する。

「せぇいッ!!」
「ぐっ!?」
「まだですよっ!!」

大きめの剣と、それよりほんの少し小さいが十分な大きさのもう一振りの剣。
凄まじい速度で空中を縦横無尽に舞いながらその二振りの剣を機動力に負けない剣速で振るうサイバスターに防戦一方のシュロウガ。
予想を遥かに上回るロスヴァイセとサイバスターにアサキムは驚愕する。

「あの短時間で何故これ程のっ……!?」
「はあっ!!」
「っ……!しまっ……」

再び吹き飛ばされ、しかも今度は弾かれるような状態になり無防備な姿をさらす。
サイバスターはその機を逃さず、二振りの剣を一つに合わせる。

「行きます!バニティリッパー!!」

そして超加速でバレルロールしつつシュロウガに迫り、一閃。
慣性の法則で、そのまま地上……ガオファイガーやサタンデロスらから離れた場所に着地直後、何度も回転しつつ停止すると同時に、斬り裂かれたシュロウガが爆発する。

「サイフィス、どうですか!?」
――手応えはありました。ですが……――

「まさかここまでとは……」

爆発の中から、既に修復を開始しているシュロウガが姿を現す。
それを見ていた駒王町の住人らは恐怖するも、ロスヴァイセとサイフィスは何となくそれを予想出来ていた。

「嬉しくありませんけど予想していた通りですね」
――では、締めといきましょうか――
「はい!」

そう、バニティリッパーで仕留められればよし。

でなければ『あれ』を使うと二人は決めていた。
バニティリッパーを仕舞い再びディスカッターを抜くと、突如サイバスターの足元に魔法陣が発生する。

「行きますよ！アカシックレコードサーチ！」

サイバスターはディスカッターを二回三回と片手で回転させ、魔法陣に突き立てる。
するとそこから凄まじい炎が舞い上がり、今度は空に魔法陣が発生しそこから火の鳥が現れた。
驚く人々を尻目に、サイバスターはその姿を変える。

「サイバード・チェンジッ！」

サイバスターは高速巡行形態サイバードへと変形し、魔法陣より現れた火の鳥と一体化し、白き巨大な光の鳥へと変化し、シュロウガへと突撃する。
それこそ、サイバスターの必殺技の一つ。
その名も――

「受けて下さい！
アァァカシックバスタァァァァ!!」

クゥアァァァァァ!!!

巨鳥の咆哮のような音と共に急加速してきたサイバードを回避し切れず、シュロウガはアカシックバスターを受けて再び大爆発する。
爆炎の中からサイバードが姿を現し、サイバスターへと再変形し爆炎の方を向くと、そこには半身を失いながらも未だにシュロウガは存在していた。

「し、しぶとい……！」
――何でしたっけ、あの黒くてしぶとくてカサカサ動くの……――
「アレとは違いますよ!?……そう思いたいです」
――ですよねー――
「……どうやら僕は少々君達を見くびりすぎていたようだ。その点は謝罪しよう」

どうやらアサキムも健在らしい。
特に苦しい感じはしないので怪我などはしていないようだが、それ以上にまだ余裕があるように見える。

「さすがにその状態では仮に戦闘は出来ても十分に動けないはずです。投降してくれると助かるのですが……」
「投降か……確かにこのままでは厳しいな。それも一つの未来か」

何度もやられたのが効いたのか、おとなしくなったアサキムにロスヴァイセはホッと一息ついた。

「しかし壊れたら直さなければならないな」
「え？」

アサキムがそう言うとシュロウガを凄まじい光が包み込み、それが収まると先程までの損傷が嘘のように元通りとなっていた。

「そ……そんな!?」

「さて、仕切り直し……と言いたいがあの黒い機体の少女と君の頑張りに敬意を表し、この場は君達に勝ちを譲ろう」

「はい!?」

「先程の攻撃……見事ではあるがまだまだ機体に振り回されている感が否めない」

「う……」

図星をつかれて何も言えなくなるロスヴァイセと、うんうんと頷くサイフィス。

そんな様子の彼女らを見えているのかいないのか、アサキムは最初と変わらぬ調子で告げる。

「君達は僕に狩られるだけの資格を得た。今後のさらなる成長を期待させてもらうよ」

「え!?あ……ちょっと!?」

「願わくば君達以外にもシュロウガの『スフィアシステム』を目覚めさせるだけの存在が集まってくれる事を願って、今日は引き下がるとしようか。それではね、烈風の戦乙女(ヴァルキリー)」

そう言い残し、シュロウガはサイバスターに匹敵する速度で戦場から離脱していく。

最初は追いかけようとしたロスヴァイセだが、急に力が抜ける感覚に襲われ仕方なく断念する。

――プラーナの使い過ぎですね。少し休めば元通りになりますよ――

「プラーナ……?魔力みたいなものですか?」

――生命力よりの魔力といいますか、まあそんなところです。手っ取り早く補給したければ口移しですね。マウストゥーマウス、キス、接吻……――

「えええええ!?」

――それだけ騒げるなら問題ないですね。いつでも戦場を離脱出来るように準備しておいた方がいいですよ――

あたふたするロスヴァイセに対し、いつもの調子で飄々と言い放つサイフィス。

一先ず未知の強敵シュロウガとの激闘はサイバスターが勝利をおさめる形で決着した。

駒王町の戦いで残るはアマツミツツカと、難敵サタンデロス。

この時、ロスヴァイセはおろかサイフィスも気付いていなかった。

彼女らの諦めない心に反応し、ある人物の持つモノが僅かな輝きを灯した事を。

〈続く〉

勇気ある戦い

サイバスターとシュロウガの対決はサイフィスとの契約を行いその性能を大幅に増したサイバスターに軍配が上がった。
相手は何事もなかったかのように修復して撤退したが、それだけでも十分な結果と言える。
そしてプラーナの消耗によって戦闘続行が難しくなったロスヴァイセはサイバスターをディバイディング・フィールド外に着陸させ、ガオファイガーらの戦いを見守ることにした。
その戦いを見て彼女は知る。
御伽話の勇者ではなく、本当の勇者を。

☆

仮住居の方で繰り広げられている、アマツミツツカとの戦いも大詰めであった。

「ふーむ……儂らの出番はやはりなさそうじゃの」
「その方が面倒くさくなくていいんですけどねー。最近はトレーニングルームでしか身体動かしてないから鈍ってないか不安というか」
「そんなものぶら下げてるからですよぅ！ちょっとは養分分けていたたた!!オーフィス痛いです!!」
「ぷんすこー。ティアマットも結構あるから我やスカーサハの敵。乱菊は隠しボス」
「隠すどころか見せつけてるがの。というか乱菊が隠しボスならラスボスは誰じゃ？」
「ルート分岐で変わる」
「「何それ!?」」

援軍として来た四人（うち龍王と龍神は強制連行）だったが、奮起したオカ研や鬼討組らが怒濤の攻めで圧倒している為、手持ち無沙汰

になってしまいガールズトークによる暇潰しに移行している。
ただ一人、天界からやってきたゼロガンダムだけは同じく天界側に属する紫藤イリナに近付いていく。

「いつまでそうしている気だ。力不足だからとグダグダしているうちにあいつらは先へ先へと進んで行くぞ」
「……でも……」
「……スペリオルドラゴンからお前が悩んでいるようなら導いてやってくれと頼まれたが、やめだ。最初から強くなる気のない奴に道を指し示してやるほど俺は甘くない。そうだな……選ばせてやろう。剣も信仰も捨て一人の人間として今後我々と関わらず生きていくか、それとも最期まで剣士であるために今この場で俺に斬られるか」

ゼロガンダムの出した選択肢にイリナは驚きのあまり目を見開いて抗議しようとするが……

「そんな!?何で「それとも!!」ッ!?」
「今貴様の目の前にあるその雷龍剣(サンダーソード)を抜き、あの鬼を討ち倒して今までの弱い自分と決別するかだ!!」
「……!」
「大方周りの連中が予想以上に強い事で劣等感を持ったのだろうが強くて当然だ。優れた師がおり、その者が課す修行に真剣に取り組めばそうもなるだろう。殆ど独学だった貴様があいつらより弱かったとしてもそれは恥ずべきことではない。真に恥ずべきなのはあいつらより弱いからと逃げ腰になることだ」

今でこそ聖竜騎士であり初代シャッフル騎士団の一角という輝かしい栄光を持つゼロガンダムも、最初は魔竜剣士と呼ばれ未熟で騎士ですらなかったのだ。
そんな彼を導いたのが同門であったヴイスクエアや、洗脳され幻魔

王バイスガンダムとして彼の前に立ち塞がった父親のファルコガンダムである。
彼らだけではない、数多の人物との出会いの果てに彼はスダ・ドアカを救う程の英雄として成長を遂げた。
真の強さとは一人で掴むものではない。
それをゼロガンダムはよく知っている。

「もし貴様が最後の選択肢を選ぶというなら俺が直々に鍛えてやる。どの道異世界に行くんだ、貴様をその剣に恥じない騎士として徹底的にシゴキ尽くす！そして見事修行を終えた暁には聖竜騎士として認めてやろう」
「聖竜騎士……」

聖竜騎士――彼ら一族にとって最高位の称号。
彼の父・ファルコガンダムもまたその称号を持ち初代円卓の騎士に名を連ねた英傑だった。
光神となったスペリオルドラゴンに仕える彼は雷龍剣の後継者を独自路線で選ぶ事が出来るため、この世界ではイリナを後継者にしようと考えたのだ。
とは言っても情けない者を後継者にすればそれこそ一族の顔に泥を塗ることになる。
だからこうして発破をかけているというわけだ。
無論、最初から彼女の答えは決まっている。

「私は……！私はもっと強くなりたい！ううん、強くなる!!」

雷龍剣に手をかけ、思いきり引き抜くイリナ。
それを見たゼロガンダムは満足そうに頷き、師として最初の指示を出す。

「たった今からその剣の持ち主はお前だ。その雷龍剣であの鬼を斬り

伏せてこい！今日、この瞬間が新しいお前の門出となる！」
「はいっ！先生!!」

迷いを振り切ったイリナはアマツミツツカへと突撃する。
そんな彼女をゼロガンダムは――

「先生……か。悪くない響きだな」

――見ておらず先生と呼ばれて嬉しそうにしていた。

「よし……！破壊可能な部位は全て破壊し、鬼祓いもパム治郎が済ませた！最後まで気を抜くな！全力で押し切れ！」
「「「「はい!!」」」」

全体を指揮する小芭内が檄を飛ばす。
アマツミツツカの主だった部位は完全に破壊され、攻撃力を大幅に減少。
文字通り後は討つのみとなった。
人数が人数がだけに袋叩きであるが、鬼の危険性を考慮すればそれもまた当然である。

「ここで活躍しないと修行倍増ここで活躍しないと修行倍増……!!」
「なんか強迫観念っぽいのにかられてるね、あの子☆」
「え？え？巌勝さんの修行ってそんなに厳しいの？」
「心配するな、甘露寺。柱は皆厳しい鍛錬と実戦の繰り返しでその技量を上げてきた。それの延長線程度だろう」

小芭内の言葉に「そうよね！」と笑顔で返す蜜璃だったが二人は気付いていない。
縁壱考案の継国式はあの兄弟『が』日常的にこなすような難易度だ

という事に。
その焦りでゼノヴィアはミスを冒す。
「ギィアァァァァ!!」
「ぐっ!?」

両手を振り上げ、天の力を纏いそのまま振り下ろしたアマツミツツカの一撃を受けて吹き飛ばされるゼノヴィア。
咄嗟にデュランダルで防御したものの、あまりの衝撃に受け身も取れず地面に叩きつけられた。
「ゼノヴィア先輩！」
「拙い！あの位置であの体勢では追撃に対応出来ない！」
「縛道の六十一、六……!?」

小猫と裕斗が叫び、朱乃が六杖光牢を発動しようとした時、一つの影がゼノヴィアの背後から飛び出しアマツミツツカを大きく斬りつけた。
「やあぁぁぁぁ!!」
「イリナ!?」
「あの剣は……!?」

ゼロガンダムがイリナの為にと新たに作成した彼女用の雷龍剣は、アマツミツツカを容易に斬り裂き地に落とす。
「よしっ！」
「先程その剣士が言っただろう！最後まで気を抜くな！」
「先生!?」
「だが、良い一撃だった。次で決めるぞ、俺に続け！」
「はいっ！」

いつの間にか再び近付いていたゼロガンダムが真雷龍剣を抜き、その刃に雷を宿す。
そして起き上がろうとするアマツミツツカを見据え、一気に距離を詰め――

「雷鳴剣(サンダーバリアント)!!」
「はあああああっ!!」

ズシャアアアアッ!!

「ギィアアアアア……!」
「魂喰らう悪しき鬼よ、無(ゼロ)に還れ!」
「うえっ!?え、えっと……無に還れ!」

アマツミツツカを討ち、しっかり決め台詞まで言っているゼロガンダムに倣ってイリナも言ってみるが、タイミングがズレた上に言い慣れていない事もあって師となる彼と違いイマイチ締まらなかった。
最初は唖然とした朱乃らであったが、パム治郎がアマツミツツカの亡骸を鬼祓いして素材化したことでハッとなり喜びの声を上げる。
その一方で……

「ふ……ふふ……修行倍増確定……」
「案ずるなレディ・メッシュ。俺が厳勝には口添えしておく」
「……!ありがとう小さい騎士よ!」
「あ」

レディ・メッシュにツッコまれる前にゼノヴィアがゼロガンダムに対する禁句を言ってしまい、イリナはヤバいという表情になる。

「ちょっ……ダメ！ゼノヴィア、すぐ謝って！」
「ん？どうしたイリナ。そんなに焦っ……」
「爆雷剣（サンダーエクスプロージョン）！！」

ドオオオオン！！

「ぎゃあああああ!?」
「ゼノヴィアアアア!?」
「ちっ……避けたか。まあいい、口添えするが巌勝がそれで気を収めるかは別問題だからな。倍増どころか二乗三乗と乗算するかもしれんということは覚悟しておくことだ」
「え」

新技は回避されたがしっかりとトドメは刺したゼロガンダム。
ゼノヴィアはあっさり白くなって力尽きた。

「何というか……彼女、カナエさんの時も思ったけどさりげなく自ら自爆特攻しにいくタイプだね。しかも天然なのかそれに気付かない」
「あらあら……この光景も見慣れたものですわね」
「入部からあまり時間が経ってないのに見慣れる程こういう事態が起きてるのもどうかと思います」
「つ……疲れましたぁ～……」

ギャスパーを除くオカ研メンバーは多少の疲れはあるだろうがまだまだ余力はありそうだ。

「ハイ総員お疲れ～。けどまだ終わってないわよ」
「乱菊先生？」
「ぷんすこー」
「だからオーフィス痛いですってばぁ！ていうか何で私ばっかり狙うんです!?」

「我とティアマット、ドラゴンだから」
「そっちの二人は死神ですよ！元がつくかもですけど！同じ『神』の字が入ってますよね！龍神と死神で！」
「かみ、とじん、で違う」

え？終わってないってそっちの戦い？と思ったが違う事に気付く。
そう、送り出した凱や杏寿郎らがまだサタンデロスと戦っている。
そんな彼らのところにまたまた束から通信が入る。

『はろはろ～セラちゃん、そっち終わった？』
「うん☆聖竜騎士さんとイリナちゃんがズバッと決めたよ☆」
『おっけー！ろせちゃんも相手が撤退したみたいだし後は黒いバリア付きと陰湿髑髏だね。ブレスレットを通してそっちに映像回すから応援よろしくー！』

そういうと間髪入れずにブレスレットから映像が大きく映し出された。

☆

「ブロウクン！ファントオオオムッ!!」

ファントムリングを展開し、その豪腕を射出するガオファイガー。
当然サタンデロスはバリアを常時展開しているため防がれるものの、それは想定済み。

「まだだ！C・C・！杏寿郎！」
「言われずともっ！」
「承知したッ!!」

バリアのブロウクンファントムを弾いた部分へとコンパチブルガ

リバーのプラズマスピン・ナックル、さらにはグルンガスト参式のドリル・ブーストナックルが続け様に撃ち込まれる。

「ドリルニー!!」

そして右腕を戻したガオファイガーの右膝のドリルが唸りを上げガリバーと参式の腕をも弾いたバリアへと追撃を叩き込む。

「うおおおお!!」

凄まじい威力の連撃にバリアの出力を維持出来なくなったのか、遂にバリアが少しずつ破られていく。

いけるか、と思ったがガオファイガーを引き離すべくサタンデロスが反撃したことでガオファイガーは吹き飛ばされ、再びバリアが修復されてしまう。

「やはり一筋縄ではいかないか!」

「うむ!しかし先の攻撃で活路は見えた!」

「一点集中による攻撃であればそれに対する防御力を確保すべくエネルギーを集中させる必要があり、結果としてバリア形成の為のエネルギー供給が追いつかなくなり突破が可能になる……か。あとの問題はそれが出来るだけの攻撃力と、それと同時に発生装置らしき胸部のアレを破壊する手段か。欲を言えば、バリアを破ったら発生装置だけでなく奴自体もまとめてそのまま破壊出来ればいいんだがな」

ガオファイガーが加わった事による戦力増加の結果が目に見えて判明し、C．C．と杏寿郎の闘志はさらに燃え上がり、二人を引っ張る凱もまたそれに触発されるように闘志――いや、勇気を燃やす。

「俺に考えがある!」

「何?」

「本当か、凱殿!?」
「ああ！仮説にはなるが、おそらく奴のバリアは完全な自動防壁じゃない。少なからず奴自身の思考プログラムが反映されているはずだ。一度でいい……奴のバリアを完全に破壊出来れば、そのタイミングに合わせてヘル・アンド・ヘブンのＥ．Ｍ．Ｔフィールドで奴を拘束しバリア修復を封じつつ破壊出来る！」

つまりはプログラムによって動いている事を利用し、バリア破壊後にエネルギーによる拘束を行い、機体異常を認識させバリア修復から思考を逸らし、そのスキに一撃必殺のヘル・アンド・ヘブンを叩き込んで粉砕する。

「確かに奴が思考プログラムが存在しているのであれば望みはあるな。懸念はやはり思考プログラムではなく決まった行動をとるタイプか、もしくはプログラムされたものではなく奴自身で考える上に相当な切れ者だった場合だが」
「そう。本来ならバリアを破壊し、次に発生装置を破壊もしくは一時的にでも使用不可の状態にしてからが理想なんだが、奴のバリアの強度から考えて少なくともバリア破壊には２機必要だ。殆ど賭けに近いが……ディバイディング・フィールドの維持時間も迫っている以上、一か八かやるしかない！」
「その通りだ！やらずに倒れれば後悔しかない、しかしやれば出来るかもしれない！」

「でしたら、微力ですが私もお手伝いさせて下さい」
「「！」」

三人が声のした方向を向けば、修復をほぼ終えたガリルナガンが飛んでくる姿が見えた。

「クロニクル少女！いけるのか!?」

「はい。レジェンド様と束様の想いを宿したガリルナガン、あの程度で落とされはしません」

「だが、それだけ性能を引き出せているのはそれを知っている君がパイロットだからだ。二人の想いを大切にしている君が乗ってこそ、そのガリルナガンは如何なる困難も打ち破る力を発揮する！それが加わったのは心強いぜ！」

杏寿郎に応答しつつ、相変わらず励まし方の上手い凱にクロエも微笑みが零れる。

彼女の腕前を知っていたＣ．Ｃ．としてもガリルナガンの参戦はありがたかった。

そこに、さらなる頼もしいサポートが。

『話は全部聞いてたよ勇者ーズ！』

「何だその珍妙な呼び方は」

『まあまあ良いではないかしーちゃん！がっくんの仮設ね、束さん的にほぼ満点だよ。強いて言うなら、認識させるには一定以上の障害が必要ってことかな。バリアの修復、あいつには結構優先度高いみたいだから与える障害はその上を行かないといけないよ』

「なるほど！つまり!?」

『クーちゃんも加えて、がっくんの作戦を実行！バリア破壊とヘル・アンド・ヘブンの間にクーちゃんによる発生装置っぽいやつの破壊も混ぜ込むよ！発生装置じゃなくても身体の一部を破壊されたとなれば

そっちに意識は向くだろうからね！』

通信を聞いていた束によって告げられた、凱の作戦の完全版の実行。

バリアとその発生装置らしきものの破壊、そしてヘル・アンド・ヘブンによるサタンデロスの撃破。

全て成功すれば撃破確実なその作戦は各々のタイミングがよりシビアになる事も示唆されていた。

だが束、そして命は彼らに全てを押し付けるようなマネはしない。

『こっちでもリアルタイムで状況確認しつつタイミングをオペレートすれば、推測成功率は４０％まで上がるわ！』

『そして私達二人も含めて残りを１０％ずつ勇気でカバーすればジャスト１００％ぉ！』

「束博士、命……！そうだ、かつてガイガーの合体誘導用ビーコンが破壊された時も力を合わせて合体を成功させたんだ！足りない分は勇気で補えばいい!!」

もはやＧＧＧ上層部にいても違和感ないノリと化している束も含め、三人の言葉は他の三人を奮い立たせるのに十分過ぎた。

「やれやれ、束もいよいよ感化されたか。だが……嫌いじゃないぞ、こういうのも」

「うむ！これは負けていられないな！」

そこにクロエが少しばかり普段と違う反応を見せた。

「何かで見ました……こういう時は、えっと……勇者ーズ、ふぁいやー……？」

「「「ファイヤァァァァ!!」」」

「テンション上がりすぎだろ」

Ｃ．Ｃ．のみ冷めた反応だったが、クロエの言葉にやる気が上限突破した凱と杏寿郎、命に束の四人は大絶叫。
　束だけでなく杏寿郎もＧＧＧにいても……というか彼の場合、普通に主要メンバーとして混じっていても自然な気がする。

　そしていよいよ、その作戦を実行に移す時がきた。

『プラン最終確認！・フィールド維持可能時間も迫ってるから簡潔かつ手短にいくよ！・まずはきょーくんの参式としーちゃんのガリバーによる大威力攻撃の重ね打ちでバリア破壊！・続いて間髪入れずにクーちゃんのガリルナガンが発生装置を破壊！・そして仕上げにがっくんのガオファイガーの必殺技で黒い奴そのものを大粉砕！・ミッションコンプリート！・これが今回の流れだよ！・繋げるタイミングは迅速かつ正確かつ仲間に被害出ないように！』
『タイミングや状況はこっちでもオペレートするわ！・こっちは数値で、そっちは空気や視認で！・全員の力と勇気を合わせれば絶対やれる！』
「ああ！・やるぞ皆!!」

　凱の掛け声に同意するように杏寿郎が先陣を切る。
　斬艦刀を巨大刀剣状態にして構え、サタンデロスへと突撃。

「一意専心！・炎の呼吸壱ノ型・不知火!!」

　通常より遥かに大きく、重くなったにも関わらず普段と変わらぬ速度で斬艦刀による斬撃を繰り出す参式。
　サタンデロスのバリアに防がれるものの、押し返され弾き飛ばされぬよう機体下半身に力を込めるようにして固定しつつ威力を維持する。
　その様子を異常と判断したサタンデロスだが、攻撃しようとした瞬

間に別の巨大な影が追撃を仕掛けてきた。
Ｃ．Ｃ．のガリバーだ。
「ガリバー……トルネードッ!!」
本来ならば両手のプラズマスピン・ナックルを射出後、ガリバー・バーストを発射しそれらの直撃後、接近して膝蹴りで空中に蹴り上げてから放つガリバー・トルネード。
それを単発で放った理由はただ一つ。
ドガァン！という轟音が響き、エネルギーを纏ったガリバーの拳は斬艦刀を押し込むような体勢になっていた。
文字通りの一点集中、斬艦刀の重量に加え参式とガリバー、２機のスーパーロボットのパワーを上乗せした一撃がバリアに激突し火花を散らす。
サタンデロスは参式とガリバーを危険因子と判断し、バリアが破壊されそうにも関わらず２機を攻撃する。
しかし、２機は少しずつ損傷していくも攻撃の手は緩めない。
「おおおおっ!!」
杏寿郎のみならず普段はクールなＣ．Ｃ．まで吼えるほどに気迫の込められた一撃は、遂にバリアを粉砕しその衝撃でサタンデロスを後退させるが、勢いあまって参式とガリバーはそれぞれ左右に倒れ込む。
「ぐうっ!!」
「あとはお前たちの仕事だ……！」
「ああ、任せろ！」
『敵怪獣、本体の受けた衝撃よりバリア修復を優先する模様！バリア再構築反応有り！』
『あの出力のバリアは一度完全に破壊したら修復出来ても多少のタイ

ムラグはあるよ！クーちゃん!!』
「はい！バスタックス・ガン……シュート！」

サタンデロスがバリアの修復を始めるより早く、ガリルナガンはバスタックス・ガンの重金属粒子砲を放つ。
放たれたエネルギーはサタンデロスのバリア発生装置……と、首の付け根にそれぞれ半分ずつ命中する形で直撃した。
完全に破壊したわけではないが、バリア発生装置に異常をきたしつつ凄まじい衝撃を受け、サタンデロスは片膝をついた。

「外れたのか!?」
『いーやそれでオッケー！あれはクーちゃんの心遣い！』
『心遣い……あ！そういう事ね！』

実はガオファイガーは約３１ｍ……５０ｍを超えるガリバーや、６０ｍにも及ぶ参式やサタンデロスの約半分ほどの大きさしかない。
首が長いというのもあるが、サタンデロスに決定打を与えるための身長差を補正もしくは調整する意味で膝をつかせたのだ。

「俺にも分かったぜ！ベストポジションだ！皆が繋いでくれた勝利の鍵……それで俺が未来への扉を開く！ファイティングツール・パージ！ファイティングローブ、セットォ!!」

凱の掛け声に合わせ、ガオファイガーの背部に新たにマウントされていたパーツが分離し、グローブ状に変形してガオファイガーの両手に装着される。
これが新たなるガオファイガーの力、ファイティングツール……その一つであるファイティングローブ。
ガジェットツールを参考に、新たに開発された準ハイパーツールだ。
ヘル・アンド・ヘブンによる機体や凱への負担を大幅に軽減し、エ

ネルギー効率の改善及びE・M・Tフィールドの拘束力強化など、直接的な威力ではなくサポート面に特化したそれはほぼヘル・アンド・ヘブン用に開発されたものである。
そして、全ての準備を終えたガオファイガーは遂にその技を発動する。

「ヘル！アンド！ヘブン!!」

右腕に赤い攻撃エネルギー、左腕に黄色い防御エネルギーを集約するガオファイガー。

「ゲム・ギル・ガン・ゴー・グフォ……」

凱が呪文を唱えつつ、ガオファイガーは両手をゆっくりと近付けながらガッチリと組み、攻撃と防御の二つのエネルギーを融合させ、同時にE・M・Tフィールドをサタンデロスへと放射・拘束する。

「はあぁぁぁぁっ!!」
「――!?」

E・M・Tフィールドで片膝をついたまま反り返るような状態に拘束されるサタンデロス。
もし以前のままであればサタンデロスのパワーによって破られていた可能性もあったが、ファイティングローブのよって強化されたE・M・Tフィールドは凄まじく全く身動きが取れない。

「うおおおおっ!!」

Gパワーを最大まで高めて緑色に輝くガオファイガーが、組んだ拳を突き出し大地を砕きながらサタンデロスへと爆進していく。
仲間達によって繋がれた願い、そして託された想いをその身に宿

し、勇者王の拳は破壊神の胸を貫く。

ガキイィィィィッ!!!

しかし、ここで予想外の事が起こる。

サタンデロスがここにきて僅かに動き出したのだ。

「何ッ!?」

『うそぉっ!?』

『そんな……！E．M．Tフィールドの拘束力は以前より１８０％も増しているのに……！』

だが、彼らはそれをも超える驚愕に見舞われた。

右手でガオファイガーの左腕を掴んだサタンデロスが、自ら身体の中に押し込んでいくのだ。

まるで何かを取り出してほしいとでも言うような動きで。

それを察した凱はサタンデロスに導かれるまま、エヴォリュダー能力でサタンデロスの意志を感じ取り、体内にあったあるものを掴む。

（これでいいのか!?）

凱の心の問いかけに頷く動作を見せるサタンデロスから、ガオファイガーはそれを取り出しつつ融合させたエネルギーを一気に解放する。

「ふんっ!!」

ドガァァァァン!!!

サタンデロスは爆散し、周囲には遺された僅かな装甲やパーツ、そして破損しているがある程度原形を留めている頭部が散らばった。

それを駒王学園の校舎屋上から見ていた避難した人々や、ダイブハンガーにいる束や命、リアスらも歓声を上げるがガオファイガーは取り出したものを両手で持ち、それを見たまま動かない。

「やったな、凱殿！」

「ああ……」

「やる前は暑苦しいほどのテンションだったくせにどうした？お前が撃破していきなり感慨深くなるようなら只事ではないだろう」

純粋に喜んでいる杏寿郎に対し、C．C．は凱の様子を怪訝に思う。

普段の凱なら「皆のおかげだ！」と爽やかに言い切るだろうに、それどころかどこか気落ちしているのがすぐに分かった。

「凱様、それは……？」

「奴がこれを取り出してほしいと……俺に頼んできたんだ」

「なんと!?」

「普通の奴ならお前は何を言っているんだと言ってやりたいところだが……お前がその調子で言うと信憑性があるな」

その意味が分からず四人が神妙な面持ちでそれを見ていると、彼らの頭に一つの声が響く。

――アリガトウ――

「「「!?」」」

――コレデモウ何モ壊サナイデスム――

「この声は……!?」

「……あいつだ」

「何？」

「ヘル・アンド・ヘブンであいつの身体に拳を突っ込んだ時、少しだけあいつの記憶を垣間見た。あいつは元々は惑星守護神として生み出

されたんだ」
「惑星破壊神ではなく……？」

サタンデロスはかつてギガデロスと呼ばれ、凱の言う通り惑星守護神として複数が製造され、数多の星々を守り抜いた。
しかし外敵から星を守り抜き倒すべき敵がいなくなった後、突如ギガデロス同士で戦い始め結局最終的にはその影響で守るはずの星が滅んでしまったという。
そしてその原因となった黒幕によって、ギガデロスの一体が回収・改造されて駒王に送り込まれた……それがサタンデロスの真実であった。

『そんな、酷い事を……！』
『科学者として虫酸が走るね、そいつ……自分が利用したいがために同士討ちさせた挙げ句、一体捕獲して好き放題したわけだ』

命は悲しみに、束は怒りに震えている。

――ソレハバリア発生装置ノ『コア』。少シデモ君達ノ役ニ立テ……バ……――
「……ッ！そうだ、さっき頭部が！」
「凱殿、これだな！」

グルンガスト参式が抱えてきたサタンデロスの頭部の目が僅かに点滅している。

「クロエ、私とお前は使えそうなパーツを片っ端から拾うぞ。とはいえ私と凱は最後に一仕事あるから片手は開けておかねばならんが」
「はい！」
「しっかりしろ！まだ希望はある！」
――最期ノ……相手……勇者デ……良カ……――

言葉を言い切る前に、その目は光を失った。
「おい！返事をしろ！お前は一つの星を守り切った勇者だ！ガッツを見せてくれ！」
凱の言葉も虚しく、サタンデロスの頭部は完全に沈黙し物言わぬ骸となった。
「くそっ……」
「……凱殿」
「おい、もうじきフィールドが元通りになるぞ。早いところ脱出しないとえらい事になるし、やるべき事を済ませたらとっととダイブハンガーに帰還してこれを束に渡す。ま、レジェンドを丸1日貸せば文句言わんだろ」
「C．C．様、レジェンド様の人権を無視してませんか？」
凱と杏寿郎がそれぞれの機体を向けると、ガリバーとガリルナガンがそれぞれの武器を機体にマウントし、サタンデロスの残骸をゴッソリ抱え込んでいた。
ガリバーは片手でディバイディングドライバーをガオファイガーに投げ渡しつつ、さっさと脱出してしまう。
「ああそうだ、お前達二人が持ってる頭とバリア・コアも持って来い。一番重要な部位だからな」
「……？それはどういう……っと。いつまでも沈んでいられないな。やるべき事、やるとするか！脱出だ、二人とも！」
「うむ！」
「かしこまりました」
ガリバーに続き、ガオファイガーに参式、ガリルナガンもフィール

ドから脱出すると、自然とディバイディングドライバーで作ったフィールドが元通りになる。
そしてガオファイガーはディバイディングドライバーの前端部を交換し、ガリバーはスペシウム砲をスタンバイした。
「凱殿！C．C．殿！何をする気だ!?」
「まあ見ていろ……というか凱、お前のステルスガオーどれだけ単独進化してるんだ。ライナーガオーやドリルガオーが置いてけぼりくらってる感満載だぞ」
「はは……多分クルーガー夫人がガジェットガオーを参考にしたからそれに倣ってこっちについてるのかもな。さて、始めるか！今回の仕上げだ！」

ガオファイガーはサタンデロスの遺したバリア・コアをしっかり抱え込みつつ飛翔しドライバーを地上に向けた状態で静止する。
「こっちは準備出来たぜ、C．C．！」
「これはまだ改良が万全じゃない。一発撃ったらダイブハンガーなりで補給しないと使えないからミスはするなよ」

C．C．がそう言うとガリバーはスペシウム砲をガオファイガーのドライバーの先端部分に狙いを定めて発射準備に入る。
砲撃エネルギーをウルトラ戦士が使う『リカバリーオーラ』と同質のものに設定し、そして――
「リバイバルブラスター……発射ッ！」

穏やかな光が空に向けて発射された。
迫りくる光に対し、ガオファイガーは新たに換装したドライバーを起動させる。

「レイディアルドライバァァァ!!」

ドライバーの先端部を中心に極薄のエネルギーレンズが形成され、そのレンズに命中した砲撃は放射状に拡散・反射され破壊された駒王町全域、そして負傷した者や失われた自然をも癒やしていく。

まさに奇跡の所業、ウルトラマンと同じ力を行使した彼らへ駒王学園へと避難した人々を始め、駒王町各所から歓声が大きくなる。

「これで一安心だな！」

「あとはロスヴァイセ様とサイバスターを回収しないと」

「大丈夫です～……なんとか動かせますから～……」

――これで途中で落ちたら笑いものですよ――

「意地でも落ちませんっ!!」

「……本当に大丈夫みたいですね」

サイフィスの一言で中途半端だが復活したロスヴァイセに苦笑しつつ、凱は全員に通達する。

「皆、胸を張って帰ろう！俺達は勝ったんだ！」

「うむ！」

「「はい！」」

「仮住居の方も無事終わった様だし、これ以上騒がれて面倒になるのは御免だからな。早く帰還するぞ」

C．C．の言葉に頷き、帰還用の転移陣を展開してガオファイガーらはダイブハンガーへと転移していく。

そしてまた、仮住居周辺も自然が蘇り安心した朱乃らもゲートからダイブハンガーへと帰還し、駒王町での激戦は漸く終わりを迎えた。

そしてロスヴァイセの時と同じく、彼らの勇気に反応し、ある人物の持つモノが少しずつ輝きを放ち出した。

〈続く〉

どんなときも、ひとりじゃない

アマツミツツカの仮住居襲撃に始まり、レギオノイドとギャラクトロンの襲来、そしてアサキムとシュロウガの強襲にサタンデロスとの決戦は光神陣営の勝利という形で幕を閉じた。

死闘を制しダイブハンガーへと帰還した朱乃らは、リアスが無事ゴーデス細胞の除去を終えた姿を見て盛大に喜び、同時にタイガやゼットが新たなる力を手に入れ復活を果たし、ダ・ガーンという新しい仲間に加え、黒歌がソウルゲインを手に入れた事も合わせて知る事になった。

「それでね、あのダ・ガーンというロボットはタイガ達が呼んだのよ！」

「あらあらリアス、病み上がりなのに元気一杯ですわね」

「タイガさんとゼットさんの姿が変わってるのはいいとして……ゼットさん、何か武器持ってませんか？」

「あれはダ・ガーンが彼に渡していたよ。どうやらレジェンド様と関係あるらしいけど、私達は分からないから帰ってきたら聞いてみてはどうだろうか」

小猫の疑問に答えるサーゼクスの雰囲気が少し前とは良い意味で変化している事に気付くが、藪蛇になるといけないので黙っておく。

「彼らだけじゃない、次元を超えて光の国の勇者達も駆けつけてくれたんだ。束ねた勇気は何者にも負けないぜ！」

そう言いながら医務室に入ってきたのはサタンデロスとの激闘を制した凱達四人と命、そして束だ。

ちなみにロスヴァイセはどうにか帰還出来たものの限界がきてサイバスターのコックピットでぐったりしている。

どことなく巫女っぽい衣装を着た美女がつまらなそうにサイバス

ターの肩で足をぶらぶらさせていたのは気にしないでおこう。
彼らも共にゴーデス島の様子を見守る中、ソラだけがある事に気付く。
ある『光』――それが輝くまで、あと少し。

☆

――ゴーデス島――
そこで卵が孵化して誕生した、ゴーデス細胞によって強化されたマガオロチと相対するのは新たな姿・ガンマフューチャーと新しい武器・ゼットランスアローを手に入れたゼット……だけではない。
フォトンアースへとパワーアップを果たしたタイガ、合体して真の力を発揮出来るようになったダ・ガーンX、さらに黒歌の駆るウルトラ戦士顔負けの格闘戦能力を持つソウルゲイン、そしてボルフォッグもだ。
こう並べてみるとボルフォッグが力不足に感じてしまう。

「ん～……ボルフォッグ、大丈夫？ダ・ガーンだっけ、あっちはともかく明らかにその身体、戦闘向きじゃないわよ？」
「ご安心を、黒歌隊員。これは隠密行動用の基本形態であり、戦闘形態は別にあります。ガングルー！ガンドーベル！」
ボルフォッグの声に呼応し、ヘリコプター型のガングルーと大型二輪型のガンドーベル、二体のガンマシンがクロガネから自動発進しボルフォッグへと接近。
「三身一体！」
ボルフォッグが中心となり、ガングルーが左腕に、ガンドーベルが右腕に変形し、同じく変形したボルフォッグにドッキングする。

「ビッグボルフォッグ!!」

約２０ｍ弱とモビルスーツサイズではあるが、合体したことで一気に戦闘向けの姿になったビッグボルフォッグ。

「元々私は地上支援用です。マガオロチ相手にどれだけ通じるか分かりませんが、足手まといにはなりません」

「レジェンドお抱えの部隊の一人だろ？だったらむしろ頼りになるのは分かりきってるさ！」

「同じ勇者として、この星のために共に戦おう！」

「ありがとうございます、タイガ隊員、ダ・ガーンリーダー」

二人の激励にどことなく嬉しそうに応えるビッグボルフォッグ。

ゼットもいつもと違うが静かに頷き、黒歌も「にゃん♪」と返事をする。

『確かにマガオロチは強敵だが、こちらにはまだ出会って間もないとはいえ信頼による連携戦術がとれる。それぞれが特色の異なる面子だ、互いにフォローし合えば大魔王獣と言えど恐るるに足らず！力より心で負けるなよ！』

「「「おおっ！」」」

「当然にゃ！」

レジェンドからも力強い言葉がかけられ、一層気合を入れるタイガ達。

マガオロチの咆哮を皮切りに、勇者達と大魔王獣の死闘が幕を開けた。

☆

何も気合が入ったのはタイガ達だけではない。

彼らが復活したことでゼロ達ウルトラ戦士や神衛隊も再び盛り返しにかかったのだ。
しかし、着々と自身へと浸透していくゴーデスワクチンに苦しみながらもゴーデスは己の細胞を分離させ、邪悪大怪獣軍団を作り出す。
『思い……知るがいい……！所詮貴様らは……烏合の衆だとッ……！』
「ちっ！ここにきて雑魚祭りかよ！」
「いえ……！何体か細胞を多く有した強い個体が存在するようです！」
「下手にそいつから攻撃を受けたらキツイな……！」
だがこの状況を打破出来る男がこの場には存在する。
最強最速の二つ名を持つウルトラ戦士が。
「マックスギャラクシー！」
救援に駆けつけたウルトラ戦士の一人、マックスが右手を天にかざすと遥か空の彼方から鳥のような物が飛来し、マックスの右手装着される。
「どうだマックス？エネルギー貯蔵量の増えたマックスギャラクシーは」
「文句無しだ、ゼノン。これならば……ジュウアッ!!」
マックスが光に包まれたかと思えば、なんと無数に分身したのである。
それもその数は百人を遥かに超えていた。
「「「「何ぃぃぃぃ!?」」」」
「出たぜ……！マックスの多重影分身！」

「聞いたことがある……！マックスさんはあのバルタン星人の最強格、ダークバルタン相手に超分身して対抗したことがあると！」
「「「「雑魚散らしは私に任せろ！お前達は強力な個体とゴーデスを頼む！」」」」

もしマックスに執着しているスラン星人がここにいれば腰を抜かしていただろう。
何せマックスギャラクシーを装着した無数のマックスがズラリと並び、一斉に邪悪大怪獣へと向かっていくのだから。

「何この（敵にとっての）地獄」

三日月が言ったその言葉を否定する者は誰一人いなかった。

「こうなってきたら俺も出し惜しみ出来ねぇな！シェアッ！」

今度はゼロが左手を掲げるとウルティメイトブレスレットが光り、一度巨大な盾のようなものがゼロの左手に現れたかと思えば、それが分離してゼロに装着される。
これがレジェンドを介してノアから授けられたゼロの持つ神器、ウルティメイトイージスを装備した強化形態・ウルティメイトゼロ。

「ッしゃあ！万が一エネルギー切れ起こしたらあとヨロシク」
「「「「格好良さが台無しィ!!」」」」

だが、そんな茶目っ気もゼロの良さだ。

さらにメビウスとヒカリにも動きがあった。
正確にはメビウスが何かしようとしているのをヒカリが壁になって守っている。

「そう時間がかかるわけではないだろう！早く済ませるんだ！」
「ありがとうございます、ヒカリ！」

マックスが相手にしている怪獣軍団とは別の強い個体……マガパンドンの亜種が発射してくる火炎弾をヒカリが防御しつつ、メビウスは精神を集中する。

（リュウさん、サコミズ隊長……皆さん、見ていて下さい。どんな相手だろうと僕は負けません。ウルトラマンとして、そしてＣＲＥＷ　ＧＵＹＳの一員として！）

共に日常を過ごし、共に戦い、共に成長してきた今はなき仲間達を思い、メビウスの身体を炎が包み込む。

「ハァァァァ……シュアアアッ!!」

その炎を吹き飛ばして現れたメビウスもまた姿を変えていた。
その胸と背中に抱くは永遠に廃れぬ仲間達との絆の象徴ファイヤーシンボル、二つ名は『燃える勇者』。
メビウスバーニンググブレイブ。
ゴーデス細胞で作り出された偽りの魔王の炎を打ち破るべく、決して消えない勇者の絆の炎が立ち上がった。

「お待たせしました！」
「気にするな。相手は炎を操るが同時に炎にも強い。やれるか？」
「はい！この世界の地球に来て以来、その弱点を克服すべくチーフやレオ兄さんに修行をつけてもらいました！」
「よし！あのマガパンドンは俺とお前で抑えるぞ！」

炎に耐性を持ち身体能力に優れるメビウスバーニンググブレイブを、

知性に優れ技術と経験で勝るヒカリがサポートする。
息の合ったコンビネーションを繰り出すウルトラ兄弟の二人は魔王獣であっても止める事は出来ない。

「ハッ！シュアッ!!」
「グオォォッ!!」
「デェァァァァ!!」
「ギャオッ!?」
「ハァァァァァッ!!」

メビウスに気を取られたスキにマガパンドンは右腕をヒカリのナイトビームブレードで切り落とされ、そこから驚愕している間に続けざまにメビュームブレードで左腕を切り飛ばされる。

「「ハッ！ジュアァッ!!」」
「グゲェェェッ!?」

メビウスとヒカリ、二人の左右対称の側転からダブルエルボー、そしてキックを腹部に受けて倒れ込むマガパンドン。
両腕を失い防御も取れずくらった双撃は凄まじく、同時に脚だけでは起き上がれずジタバタともがいている。

「ヒカリ！仕留めます!!」
「ああ!!」

ヒカリは右腕を掲げナイトブレスのエネルギーを解放し、メビウスはメビウスブレスのエネルギーを炎に変換・解放しファイヤーシンボルへと集中させ巨大な火球を形成する。
そして二人は互いに頷き合い、各々の必殺技をマガパンドンへと発射する。

「シュアアアッ!!」

左手でナイトブレスに触れ、その左手を軸に右腕を回すように前に出して十字に組んで発射されるヒカリのナイトシュート。

「デアァァァァッ!!」

形成した火球を両手で勢いよく撃ち出すメビウスバーニングブレイブのメビュームバースト。

初速を計算して放たれた二つの必殺技は絶妙なタイミングで同時にマガパンドンに直撃し、大爆発を起こす。

ズドォォォォン!!

あまりの威力に嘆きの声さえ上げる間もなくマガパンドンは消滅した。

勝利のクロスタッチを決めた彼らを皮切りに各所で戦いを繰り広げている者達が奮起する。

いよいよ光神陣営の逆襲と快進撃が始まったのだ。

最強の邪悪大怪獣、バランガスの強個体と激突していたのはグレートとその戦友パワード、そして二人の弟子であるリブット。

数日前駒王学園でリアス達を襲った、カテレアの一体化した毒ガス以外に氷も使うその個体は毒ガスと冷凍ガスを吐き出してくるが、グレートからの情報で既に対策法が分かっている彼らには通用しない。

「リブットブロッカー!ブロッカーエフェクト!!」

グレートから授けられたリブットブロッカーからバリアが発生し、二種類のガスを完全に防ぐ。

そのスキを見計らってリブットの後ろからバランガスの左右へとグレートとパワードが回り込む。
先に仕掛けたのはパワードだ。

「ハァッ！デェヤァァァァ!!」
「グゥゥゥオォォォッ!?」

パワードの得意とする反重力フィールドを纏った掌底が連撃でバランガスに叩き込まれる。
正確には相手に当たる直前に反重力フィールドを纏わせているため、所謂『当てる直前に一気に力を込める』のと同様の技術だ。
衝撃で空間が歪む程の威力の掌底を連続で受けたバランガスは反対側へ大きく吹き飛ぶ。
そこにスタンバイしていたグレートは吹き飛んで来る位置を瞬時に計算して一番バランガスにダメージを与えられるポイントに狙いを定めた。

「ヘァァァァッ!!」
「ガァァァッ!!」

重く鋭い一撃がバランガスの脇腹へと打ち込まれ、バランガスは派手な音を立てて倒れる。
尚も起き上がりガスを噴射しようとするバランガスの頭上から、リブットがスプレッダーロッドを構えた状態で回転しつつ飛び掛かった。

「セェアッ！」
「ゴガァ!?」
「ハッ！フッ！ダァッ!!」
「グゥアァァァッ!!」
「ジュゥアッ!!」

ドガァァァァッ!!

「グギィ!?」

リブットがスプレッダーロッドの連続攻撃を仕掛け、バランガスが怯んだスキにグレートとパワードによるダブルジャンプキックを直撃させ、バランガスを大きく吹き飛ばす。

並んで着地した二人の横に、さらにリブットが加わりリブットはスプレッダーロッドをブロッカーに収納する。

「一気に畳み掛ける!パワード、リブット!」

「ああ、やるぞ!」

「了解です!」

グレートの号令に頷き、各々が最も得意とする技を放つためにエネルギーをチャージする。

そして三人はチャージしたエネルギーを一気に、一斉に解き放つ。

「ゼェアァァァァ!!」

カラータイマーの周囲のみなぎりメーターが点灯しつつ、身体を強く発光させながら十字に腕をクロスさせたパワードがメガ・スペシウム光線を。

「ダァァァァァッ!!」

前方へ上下に突き出した両手の間から凄まじいスパークを発生させながらグレートがバーニングプラズマを。

「ギャラクシウムブラスター!!」

そして円を描くような動きから両腕のＧクリスタルを輝かせＬ字型に腕を組んだリブットがギャラクシウムブラスターを発射し、バランガスへ寸分違わぬタイミングで直撃させた。

「ガギャァァァァ……！」

ドオオオオオン!!!

旧魔王の力を取り込み、さらにこの場において強化されていたバランガスを難なく撃破したグレート、パワード、リブット。

決して楽な相手ではないにも関わらず余裕の勝利を掴んだ三人は紛れもなく宇宙警備隊、そしてギャラクシーレスキューフォースの誇る精鋭であった。

奮戦しているのは何もウルトラ戦士だけではない。

グラハムとマリーダ率いる部隊もまた強個体のマガバッサー亜種と死闘を繰り広げている。

「前衛は私が一手に引き受ける！他の者はマリーダの指揮下に入り援護行動に専念しろ！」

「機動力重視の機体は中衛から後衛、支援重視の機体は後衛でポジショニングを維持！損傷したら無理せず後退、命を粗末に扱うな！」

「「「「了解!!」」」」

空中で白兵戦可能なエクシアＧＦを中心に戦術を即座に組み立て実行し、マガバッサーと渡り合う神衛隊。

とはいえエクシアＧＦのみというのもグラハムだけに苦労をかけてしまう、何か方法は無いかと考えていたマリーダに突然通信が入ってくる。

『マリーダ！今から示すポイントまでバンシィと共に翔べ！』
「イナバチーフ!?」
『とっておきのものを送ってやる！ゴーデスめ、俺と鉄華団のメカニックチームの意地を舐めるなよ！』

コジローから送られてきたポイントはマガバッサーとグラハムのすぐ近く、かなり危険ではある……しかし、先のコジローの様子から察するに余程のものなのだろう。
マリーダは意を決してそこまでバンシィのブースターを吹かせ上昇する。
当然マガバッサーはそれに反応するが、エクシアＧＦに阻まれバンシィには手が出せない。

「ポイントに到達……！とっておきとは何が……あれはっ!?」

マリーダが目を見開きながら驚いたのは格納庫にあるはずのペーネロペーがフライトモードでバンシィのいる場所へ向かって飛んできたからだ。
しかもフライトユニットのカラーのみ黒に変更されているという訳のわからない状態。
ニュータイプないし強化人間、もしくはそれに相当する能力が無ければ性能を十分に活かしきれないその機体に誰が乗っているのか。

「待たせたな、マリーダ！このフライトユニットを受け取れ！」
「イ……イナバチーフ!?」
「「「「おやっさんんん!?」」」」

そう、まさかのコジローがペーネロペーを操縦していたのである。

コジローはそう言うとペーネロペーからフライトユニットを分離させバンシィへと向かわせ、オデュッセウスガンダム単体となった機体はゴーデス島に着地。
マリーダはコジローを信じ、フルアーマー装備をパージして接近したフライトユニットへとバンシィを収めるようにすると無事ドッキングが完了し、同時に既にデストロイモードになっていたバンシィに反応してなんとフライトユニットが『変身』した。
言うなれば『バンシィ・ブラックフライヤー』とでも名付けようか。

「なっ……これは!?」
「元々ペーネロペーはお前用に開発されていたんだ。素材さえ揃っていればフルサイコフレーム化するのにそう時間は掛からなかった。今みたいにコイツに別のパイロットが乗るとしてもそれが決まる前で助かったってとこだな」

簡単に言うが割ととんでもないことをやってのけた神衛隊第４分隊チーフメカニックと鉄華団メカニックチーム。
フライトユニットをバンシィとシンクロさせてデストロイモードにすることで変形せずとも高速飛行、同時にファンネルミサイルも使える。
ついでにサイコフィールドを機体に纏い突撃も可能らしい。

「束博士はこの事を……？」
「知らんだろうな」

☆

「なぁぁぁにあれぇぇぇ!!バコさんペーネロペーをフルサイコフレーム仕様にするなら私も呼んでくれたらよかったのにー!!」
「今回はフライトユニットのみのようですが」
「こうなったらがっくんのガオファイガーをフルサイコフレーム仕様

にして超常現象勇者王に……」
「待ってくれ束博士!?俺はニュータイプじゃないぞ!!」
「エヴォリュダーだしいけるいける」
「今回ばかりは言わせてくれ！それは無理だあああ!!」

☆

「……経緯はともかく、ありがとうございますイナバチーフ。しかしオデュッセウス単体では十分な戦闘力が……」
「フッ……俺はゴーデスに対してこう言ったんだ。俺と鉄華団のメカニックチームの意地を舐めるな、とな。例のものを射出しろ！」
『了解おやっさん！ブラスティングアーマー、射出！』

クロガネから大型戦闘機のようなものが射出され、オデュッセウスは飛翔してそれに対して背を向ける。

「行くぞオデュッセウス！ブラスティングアーマー、ドッキング・ゴー!!」
「「「「は!?」」」」

なんと大型戦闘機に見えたそれは分離変形し、オデュッセウスガンダムの各部位に装着され全く別の形態へと変貌を遂げる。
巨大なツイン・バスターカノンを背負い、右腕にダブル・ビームガン、左腕にダブル・ガトリングシールドを装備しホバー走行を可能とした重装甲・重砲撃用オデュッセウスガンダム。
その名も……

「オデュッセウスブラスティア、合体完了!!」
「「「「いやいやいや!?」」」」

グラハム及びマリーダと組んでいた鉄華団メンバーが総ツッコミ

状態となり、マリーダすら「オデュッセウス単体ならイナバチーフの方が扱い上手いんじゃないか」と思い始める始末。
フライトユニットだけでは芸が無いと感じたコジローとメカニック班が悪ノリした結果出来上がった代物だ。

「よし、行くぞ！」
「駄目だ俺どんだけ年重ねてもおやっさんに勝てる気がしねえ」
「当たり前だろ。今はサーガ様の所属だけど昔はレジェンド様直属の部隊にいたんだぞ。エリアのトップ2に属した超ベテランに勝つなんてのはアムロ教官に勝てるかもしれない夢ン中だけにしとけ」
「バカ言え夢ン中でも撃墜され数更新してんだよ俺ァ！」
「夢ならマシだろ俺はシミュレーターやる度に瞬殺されまくってんだぞ?!開始直後に！」
「それシミュレーターやってねーのと同じじゃねーか！」

無駄口を叩きながらもフォーメーションを組み直す鉄華団メンバーはさすがと言ったところ。
マリーダもようやく現実を受け入れ、地上部隊をコジローに任せグラハムと合流しマガバッサーとの対決に望む。

「相変わらず我々の隊のチーフメカニック殿はやることが大胆だな！」
「グラハム副隊長も他人の事は言えないと思われます」
「フッ、違いない！ならばこの場ではそれらしく振る舞うとしようか！」

バンシィのファンネルミサイルによる援護を受けながらマガバッサーへと斬り込むエクシアＧＦ。
それを後押しするように地上からはオデュッセウスを始めとする機体の砲撃が絶え間なくマガバッサーへと撃ち込まれる。

「弾幕を張り続けろ！奴に攻撃するスキを与えるな！」
「「「「応!!」」」」

スターファルコンの時もそうだったが、コジローはオデュッセウスをいとも簡単に操りマガバッサーへと明確なダメージを与えている。
ブランクはあったにも関わらずそれを感じさせない操縦技術を見せる大先輩の指揮により、鉄華団のメンバーもより一層奮起しマガバッサーへと砲撃をお見舞いしていく。

「グギィィィアァァァ!!」
「今だ！トランザム!!」

遂にエクシアＧＦがトランザムを発動し、マガバッサーの全身を縦横無尽に切り刻む。
抵抗したくても地上からの砲撃に邪魔され、さらにはバンシィのファンネルミサイルによる援護も加わりマガバッサーはなす術もなく一方的にやられ、とうとう両翼を大きく斬られる。

「ギィアァァァァ!!」
「仕上げだ、マリーダ！最後は君が決めたまえ！」
「了解!!」

エクシアＧＦと入れ替わるようにバンシィがフライトフォームへと変形し、赤いサイコフィールドを纏いマガバッサーに突撃する。
両翼に致命的なダメージを負い、もはやまともに動くことさえ不可能だったマガバッサーに回避も防御もする力など残されていなかった。

「ここからいなくなれぇぇぇっ!!」

ズギャアアアアッ!!!

「グギャアアアア……」

サイコフィールドに包まれたバンシィの突撃で身体に風穴を開けられ、マガバッサーは断末魔の叫びを上げて爆散した。

それを見届けた後、バンシィはフライトフォームからＭＳフォームへと変形する。

「ターゲットの撃破を確認……！」

「よし、我々もゴーデスとの戦いに向かうぞ！」

「弾やエネルギー、それに根性が残ってる奴はついて来い！あの調子に乗った髑髏の怪物に一泡吹かせてやるぞ!!」

「「「「うっす!!」」」」

コジローの電撃参戦は士気高揚にも繋がり、鉄華団やグラハム、マリーダがさらなる闘志を燃やしていく。

強個体デガンジャと戦闘中のターンＸとガンダムゴッドマスター、そしてエンキドゥルガーにラゼンガン。

以前三大勢力会談で転移先にて鬼の討伐を行ったメンバーに加え、キングキタンＲＸとヨーコＭタンクもデガンジャとの戦闘に参加している。

「グオオォォォウ!!」

「随分と不格好な生体ガンメンだなァ！シャイニングフィンガーで爆発させてやろうか!?」

「いや！このネオキタンランサーで串刺しにしてやらぁ！」

「二人揃って物騒な事言わないの！」

厳勝とキタンは相手が何だろうと怯まない……のは良いが実行さ

れたらエグいものを見ることなりそうなのでヨーコが一応止めるが、手加減などしてる余裕が無いのも事実。

「奴は竜巻となり手からビームを撃てるらしい。しからば儂の旋闘術の出番よ！竜巻になるのならそれと逆回転の旋闘術で相殺してやればよい！」

「台風を消し飛ばすのと同じ要領だな！」

「狛治……お前そんなことしてたのか……？」

「俺ではなく老師がやっていた。だが任務の出先でピクニック出来なくなって恋雪さんが悲しそうにしていたのを思い出すと俺も出来るようになりたい」

何やってんだあの人……人か？アレ。

ちなみに縁壱も家族サービスが出来なくなりそうということで旅行先の星で台風を前述と同じ原理の斬撃により消滅させている。

大規模な自然現象を物理的（とほんの少しの科学的）に打ち消せるという、九極天のヤバさを意図せず再認識する羽目になった。

それはともかく、デガンジャに対抗する手段はある。

このメンバー、攻撃力ならピカイチなのだ。

筆頭のラゼンガンは当然として、ターンXも超高性能機であり、そしてこの場での最大戦力は狛治のゴッドマスター。

あのモードを発動した時、その拳はまさに一撃必殺の破壊力を誇る。

「最初に言っておくぞ、デガンジャとやら！実のところ先日から私は機嫌が悪い……理由はただ一つ！無惨様改め鬼舞辻無惨の発言が原因だァァァ!!」

「ゴォォアァ!?」

「故に貴様にはこのストレス発散の手伝いをしてもらう！ゴーデスの手先として生まれた己の不幸を呪うがいい!!」

地獄のタッグマッチにて無惨の発言で、表には出さないよう心掛けていた厳勝だったがここに来て御大将モードになったこともあって爆発。
バズーカを撃ちながら急速接近し、即座にガーベラストレートを抜いて片目に突き刺し、そのまま溶断破砕マニピュレーターを起動させてガーベラストレートを抜いた箇所に叩き込む。

「このターンX凄いぞぉぉぉ！さすがゴッドマスターの御兄弟!!」
「グギャアアアア!!」
「言った傍からやったわね……」
「相当フラストレーション溜まってたんだなアイツ。気持ちは分かるけどよ」
「……おい、よく考えたら狛治も……」
「既に手遅れだ、ヴィラル」

は？とロージェノムの言葉に怪訝な表情をするヴィラル他２名だったが、直後に理解した。

「でぇぇぇいやぁぁぁぁ!!」
「ゴグゥッ!?」

ゴッドマスターの飛び回し蹴りがデガンジャの鼻先に突き刺さる。
最初は恋雪や慶蔵のおかげでそうでもなかった狛治だが、厳勝に触発されて怒りが再燃したようだ。

「ちっ！連続で出遅れるたぁ超次元グレン団突撃隊長の名折れだぜ！俺も混ぜやがれ！」
「結局こうなるのよね！でもまあ、その方が私達らしいか！」
「貴様と違って顔のない面倒な奴を相手にした経験が俺達にはある！」
「竜巻化に怯える必要は無いぞ！そのために儂がいるのだからな！」

超次元グレン団の重鎮達もまたデガンジャへと攻撃を仕掛ける。
当然、デガンジャはセオリー通り竜巻化しようとするも初期段階でラゼンガンの旋闘術で阻まれ、解除されてしまう。

「能力である貴様と積み重ねられた鍛練と経験の結果である儂では格が違うわぁぁぁ!!」
「やるわねロージェノム!」
「おっしゃあ!続けて行くぜヨーコ!」

ラゼンガンと入れ替わるようにキングキタンＲＸとヨーコＭタンクが前に出てデガンジャに迫る。
ヨーコＭタンクの援護を受けながらキングキタンＲＸはターンＸが潰した目のもう片方をランスで貫く。

「ゴガアァァァ!!」
「ざっとこんなもんよ!」
「有言実行だなキタン!竜巻化はロージェノムに防がれ、両目は我らに潰された!残るは両手のビームのみ!!」
「ならばそれは俺に任せてもらおうか!!」

そう言って飛び出したのはエンキドゥルガー……ヴィラル。

「でぇりゃあぁぁぁ!!」

デガンジャの懐に飛び込み、エンキドゥルガーは複腕に携えた数多の刀を目にも止まらぬ早さで振るいデガンジャの両腕に無数の傷を付ける。

「たとえゴーデス細胞に生み出された怪獣といえど、痛覚や神経が存在していないわけではあるまい!」

「始末の準備は整った！さあ、殿はお前だ狛治！もはや今のお前は鬼舞辻無惨の配下だった頃とはまるで違う実力者だというところを、地獄にいる奴と目の前の奴に見せてやれ!!」
「ああ……！俺はやる!!」

狛治は気合を込め赤い左手『デビルフィンガー』を発動し、背部のゴッドフィールドを展開。
続けて……と右手側を発動しようとしたところ、ゴッドマスターが紫色の禍々しいエネルギーに包まれる。

「う……ぐ……おおおっ……!!」
「おい！どうした狛治!?」
「まさか知らぬ間にゴーデス細胞に……!?」
「違うな」

苦しむような狛治の声にキタンとヨーコが心配するが、ロージェノムは落ち着いた声で返す。

「どういうことです、ロージェノム様!?」
「あの機体には『アルティメット細胞』なるものが使われていると聞く。その細胞が狛治を試しておるのだ。真にあの機体を扱うに足る者かどうかをな」
「なんだと……！何もこんな時でなくたっていいじゃねえかよ!!」
「否!!この場でなくてはならん事だ!!」
「「!!」」

強く言葉を発したのは厳勝だ。
かつてカゼキリとの戦いの中、過去の己に打ち勝った彼は今こそ狛治がかつて鬼であった自分を乗り越える時だと確信している。
極限の状況下においてそれを成し遂げてこそ、本当の意味で新たな一歩を踏み出せるのだと。

「狛治！己の心を見失うな！今のお前が守るべきもの……それを強く意識せよ！」
「ぐっ……ううう……!!」
「己が心と共にあるものと全ての邪念を打ち払え！そうすることでその先にある扉が開く……限界を超えた力を引き出す、澄んだ心……明鏡止水の境地へと!!」

厳勝の激励は狛治に届いた。
かつて上弦の鬼であった頃も彼を超えんと鍛練を積み続けたが、炭治郎に頸を斬られる最期までそれは叶わなかった。
しかし、今ならばどうだろうか。
恋雪、慶蔵、オルガや三日月達鉄華団の皆、そしてレジェンドやサーガ達……守るべきものが大きく増え、傍にいる。
もう一人で立ち向かう必要はない。
一人で苦しむ必要もない。

――だがそれでも守れなければどうする？――
狛治にそう問いかけてきたのはかつて鬼であった頃の自分――猗窩座。
――守るべきものを多く得て、結果守り切れずに全てを失ったらどうする？また何もかも捨てて堕ちるのか？『俺』みたいに――
「守ってみせるさ、全部」
追い詰められたような声でも、焦るような声でもなく、穏やかな声

で狛治は猗窩座(じぶん)に告げる。

――命を捨ててでもとでも言うつもりか？――

「いいや、捨てない。命も『家族』もどちらもな」

――ではどうやって――

「互いに助け合い、補い合えばいい。俺が出来ない事を俺の家族が、俺の家族が出来ない事を俺が。恋雪さんや師範、団長、鉄華団の皆やサーガ様達……そして俺(お前)を討った鬼狩り達がそれを教えてくれた」

どんな時も、一人じゃない――そう理解した時、世界が拡がった。

もうあの時とは違う……愛する者が隣にいて、尊敬する人達に見守られ、新しい家族と騒がしい毎日。

そして、それは一人で守るものではない。

「どんな困難でも皆で立ち向かえばいい。今戦っているゴーデスにしてもそれは同じことだ」

――勝てるのか……いや、勝つ気でいるのか――

「当然だ。俺はもう一人じゃない」

――ならばもう負けるなよ、何者にも。そう、自分(俺)にもな――

その言葉を最後に猗窩座の気配が消えていく。

そしてそこから聞こえてきたのは水の一滴が落ちる音。

「見えた……！水の一滴!!」

遂に狛治は明鏡止水の境地へと達した。

禍々しいエネルギーはそのままだが、青い右手『ゴッドフィンガー』

を発動し――

「俺の両手が揃って吼える！」

両手を胸の前でガッチリと組む。

「限界超えろと！烈々叫ぶッ!!」

二つの拳が反応し合いエネルギーが増幅され、再び離した時、ゴッドマスターは禍々しいエネルギーから解き放たれ機体全体が金色に輝いた。

これが明鏡止水の境地を得た真のスーパーモード、いやハイパーモード。

東方不敗やその弟子のドモンも体得したその領域へ狛治は辿り着いたのだ。

「双ぉぉぉ極ッ!!ゴッドォ！デビル――フィンガァァァァ!!!!!」

右手に青の、左手に赤の闘気を纏わせた金色のゴッドマスターがデガンジャへと突撃し、左手をデガンジャの鼻先に叩き込む。

本来ならば頭部に放つそれはサイズ差やデガンジャ自体の頭部が異常に大きいためこういう事になったが、威力が凄まじい事に変わりは無い。

その状態でさらに右手を下から重ねるように叩き込み、重なった瞬間強大なエネルギーを解き放つ。

「ゴガァァァァァ……！」

マガパンドン、バランガス、そしてマガバッサーに続き強個体として生み出されたデガンジャも倒され、マックス軍団が相手をしている雑兵怪獣軍団も残り僅か……強化マガオロチはタイガやゼット達が

相手取り、残る強敵は元凶であるゴーデスのみ。
光神陣営の快進撃は止まらない。
勝利した者達からもほんの少しずつ光が出て空の彼方へと消えていく。
それは希望が消えるのではない。
『奇跡』を起こすための――

〈続く〉

この星の明日のために

「「「「ジュゥアッ!!!」」」」

ズドォォォォォン!!!

超分身したマックスのマクシウムカノン一斉発射がゴーデス細胞による複製怪獣軍団を掃討する。

不意打ちすべく潜んでいた最後の一体も、それを看破したゼノンに引きずり出されゼノニウムカノンで撃破された。

「よし……!」

「マックス、まだいけるな!?」

「ああ!ゴーデス相手なら分身を解除して力を集約し直した方が良さそうだ」

「マガオロチは後輩達に任せてこちらはゴーデスに専念するぞ。彼らは決して弱くない」

ゼノンの言葉にマックスも頷き、分身を消して既にゴーデスと戦い始めているゼロ達の元へと飛ぶ。

☆

ゼノンの言う通り、マガオロチと戦っているタイガやゼット達は見事な連携を披露していた。

マガオロチ自体そう早く動くわけではなく、フォトンアースとなって攻防共に増したタイガと特機ながらその操縦系統のおかげで機動力も高いソウルゲインが前衛を務め、それぞれのバディとしてタイガにはダ・ガーンXが、そしてソウルゲインにはビッグボルフォッグが付いている。

ゼットはというと、たった一人でそれら全員の援護を行う後衛とし

て普段以上の活躍を見せていた。

『ゼット、あの角の反応……そろそろ奴がマガ迅雷を放ってくるぞ。まともな防御では相殺出来ん。多重防壁で対抗しろ！』

「了解……！」

『黒歌！ボルフォッグ！機動力に優れるお前達はマガオロチの側面に回り込め！タイガ！お前はゼットの多重防壁を一身に受けられるからそのまま直進！ダ・ガーンはそのタイガの真後ろでマガ迅雷防御後にタイガに合わせて援護だ！』

「「了解!!」」

「オッケーにゃ!!」

指揮官としてマガオロチと幾度となく相対し討伐経験もあるレジェンドがいてくれる、それだけで全員がリラックスし落ち着いて対処出来ているのも大きい。

「ギュアァァァァ!!」

「ボルフォッグ！こっち側に大きく回り込むにゃ！」

「了解です、黒歌隊員！」

マガ迅雷の発射体勢に入ったマガオロチの右側へ大きく迂回するように大きく飛ぶソウルゲインとビッグボルフォッグ。

当然今更ターゲット変更も出来ず、マガオロチはタイガへと狙いを定め、マガ迅雷を吐き出した。

しかし、予めそれを読んでいたレジェンドの指示により防御のための技を準備していたゼットが、タイガとその背後のダ・ガーンXを守るべくそれを発動する。

「ガンマシャッフル……！」

カードやトランプをシャッフルするような動きから、それを放つよ

うに猛進するタイガから大きく離れた前方にマガ迅雷を遮るよう配置する。
さすがにマガ迅雷の圧倒的熱量を防ぎ切るには至らず威力を弱めつつも突破されてしまうがそれも想定内。
遠隔発生させていたゼットバリアがさらにマガ迅雷を弱めるが、大魔王獣の意地というべきか尚も突破してタイガへと迫る……が。

「本命はこっちだ……！」

ガンマフューチャー変身時に試していたゼットランスアローを超能力により遠隔操作する方法を使い、タイガの前方で高速回転させ多重防壁によって弱められたマガ迅雷を弾き飛ばす。
弾き飛ばしている間もゼットはタイガに合わせてゼットランスアローを動かし、一人と一機はマガオロチへと突き進んでいく。
遂にマガ迅雷は完全に防がれ、ゼットランスアローを退かすように移動させると同時に強化されたタイガの鉄拳・フォトンアースブローがマガオロチに連続で叩き込まれる。

「デヤアァァァァッ!!」
「グオォォッ!?」
「スキありにゃ！白虎咬!!」
「ガァァァァ!!」

マガオロチはタイガに対抗しようとしたところにソウルゲインに割り込まれ、エネルギーを溜めた拳による連撃を打ち込まれた後、そのエネルギーを発勁の如く解放されたことで大きく吹き飛ばされた。

「まだだ！アースバルカン!!」
「４０００マグナム!!」

起き上がろうとするマガオロチに牽制武器で追撃を仕掛けるダ・

ガーンXとビッグボルフォッグ。
サイズ差や元々の威力からあまり効いてはいないが、元よりそれらはあくまで接近するまでの時間稼ぎ。
「ダ・ガーンブレード！はあっ!!」
ダ・ガーンXは接近戦用の武器であるダ・ガーンブレードを取り出して跳躍する。
それを迎撃しようとダ・ガーンXへと意識を向けたマガオロチだが、それを狙って懐に飛び込んだビッグボルフォッグに喉元を狙われた。
「そこです！ムラサメソード!!」
「ギィアァァァァ!?」
左腕となったガングルーのプロペラ部分を使用したムラサメソードがマガオロチの喉元を抉る。
それにタイミングを合わせ、ダ・ガーンXがマガオロチの角をダ・ガーンブレードで攻撃し切り傷を付けた。
その事に激昂したマガオロチは尾による攻撃を仕掛けようとするも、いつの間にか背後に回り込んでいたタイガに尾を掴まれる。
「させるかっ!!」
「ギィアァァァァ!!」
「うおおっ!?」
掴んだ尾からマガ迅雷がタイガへと流し込まれてきたが吐き出すタイプより威力は弱く、そもそも防御力が増しているフォトンアースにはさして効果が無く多少ビリビリくる程度だ。
「この程度ならッ!!」

『にしてもさっきに比べて弱いどころか弱すぎねえか!?』
『ふむ、尻尾は鍛えていないのかもしれん！』
『いや旦那!?コイツ生まれたばっかで鍛えるも何も……』

マガ迅雷の弱体化した理由……先のタイタスとフーマの会話から一誠はその答えに辿り着いた。

『そうだ！角！』
『急にどうした相棒』
『あいつの角だよ！さっきダ・ガーンが角を傷付けただろ！いくらなんでもゼットさんがあんだけ厳重に防御する事で防げたのに尻尾からの攻撃になっただけで弱くなり過ぎなのは不自然だったんだ！タイタスやフーマが言ったように、生まれたばっかで鍛えていない……鍛えられない場所って言ったら角もそうなるだろ！』
「そうか……！ならまず狙うのは奴の角だな！」

一誠の考察を聞いたタイガはマガオロチの角をへし折るべく、さらに力を込めてマガオロチを引きずり倒そうとするも、やはり角が生命線であるのか相手もかなりの力で抵抗する。
それを手助けしたのはゼットとソウルゲイン。

「ゼアッ!!」

ゼットが初代ウルトラマンのキャッチリングのような光のリングで拘束する技・ガンマミラクルホールドを放ちマガオロチの四肢と首を拘束する。

「ガラ空きの胴にロケット腹パンにゃ！玄武剛弾!!」

そしてソウルゲインが大きく両腕を左右に開き、高速回転する両腕を発射しマガオロチの腹部に直撃させた。

衝撃に気を取られ、力が抜けたマガオロチをすかさずタイガは尾を引いて引きずり倒す。

「グオオオオッ!!」

「よしっ!シュアアアッ!!」

バキィィィン!!

「ガアアアア!?」

タイガのフォトンアースチョップにより角を折られたマガオロチの反応が明らかに違う。

「イッセーの推測が当たったみたいだな!」

『っしゃあ!後は一気に攻め込んじまえ!』

「ああ!」

勢いに乗るタイガ達だが、レジェンドから一つの警告が入る。

『それは良いが必要以上に攻撃を加えたり、時間を掛けたりすればマガタノオロチへと成長する可能性がある。ゴーデスとの決着も付けねばならない以上、一刻も早くマガオロチとはケリをつけないと後に響くぞ』

「そ……そうだった……!」

『先輩達が引き受けてくれてたから安心しきってたけどそんな甘い相手じゃないよな……!』

タイガと一誠はレジェンドからの言葉を受け、ゴーデスの件と同時に自分達が調子に乗った事でマガオロチの卵の覚醒を促し、結果的にゼットが捕らわれてしまったのも思い出して即座に踏みとどまり反省する。

そんな彼らに、レジェンドは一足先に朗報を伝える。

『ああ、それとな。サーガから光神専用の念話で伝えられたが……リアス、ゴーデス細胞の除去が完了したそうだ』

「『本当ですか!?』」

『援軍に来たヒカリ達以外にもう一人、ダイブハンガーに直行したらしい』

『おお！まだ援軍に来てくれていた人物がいたのか！』

『つーことは後はマジでこいつらをブッ飛ばすだけじゃねーか！グダグダやってねーでズバッといっちまえズバッと！』

まさかの吉報にタイガと一誠の声が弾み、タイタスとフーマも断然やる気が出てきた。

「ならここはそっちに譲ってあげるにゃ」

「リアス部長達もこの戦いを見ているかもしれません。そうでなくても我々がしっかりと勇姿をお伝えしますが、嘘を報告するわけにはいきませんので」

「援護は俺達が引き受けます、タイガ先輩」

黒歌、ビッグボルフォッグ、そしてゼットからの申し出に加え、ダ・ガーンXもタイガらを後押しする。

「やろう、タイガ、一誠、マッスル隊長、フーマ……そしてドライグ。我々の手でマガオロチを打ち倒すんだ！」

「皆、ダ・ガーン……ああ！力を貸してくれ！」

『今のタイガが赤龍帝の籠手使ったらどんな威力なんだろうな！』

『まあ、今までより強いのは確実だな』

『つーかどんだけ旦那のマッスル隊長呼びに拘ってんだよ!?』

『インパクトは大事だぞフーマ！』

もはやダ・ガーンの中ではタイタスがマッスル隊長で固定されかかっているのかもしれない。
確実に技を決めさせるべく、ゼット、ソウルゲイン、ビッグボルフォッグがタイガとダ・ガーンXの前に出る。

『さっきも言ったが時間を掛ければマガタノオロチへと成長する可能性がある。加えて中途半端な火力も逆利用されるかもしれん。俺達はあくまで牽制……タイガとダ・ガーンXの火力に全てを賭けるぞ』
「了解です」
「わかってるにゃ！」
「その分、ゴーデスとの戦いでは俺達が」
『そういうことだ。仕掛けるぞ……！』

レジェンド指揮の下、各々が一つの技を放ち、そこから繋いでいく形でタイガとダ・ガーンXへトドメを任せることになり、先鋒を務めるのはビッグボルフォッグ。

「必殺！大回転魔弾!!」

その場で飛び上がり、高速回転しながら４０００マグナムを連射するビッグボルフォッグ。
殆どの弾丸はマガオロチ周辺に狙って放たれ逃げ場を無くすと同時に、何発かはマガオロチへ直撃する。
あまり効果は無いが、それは想定済みだ。

「次は私！エネルギー充填！青龍鱗!!」

バトル漫画やアニメでありそうな、両手でエネルギーを集めて青い波動を解き放つソウルゲイン。
直接マガオロチを狙うのではなく、足元を狙って発射された閃光はゴーデス島の大地を破壊しマガオロチのバランスを崩した。

「ギュアァァァ!!」
『さすがにしぶといな。だが、そんな事は最初から分かっていた。タイガとダ・ガーンはそのまま、次のゼットの攻撃後に最大火力をもってマガオロチを仕留めろ!』
「了解!!」
『ゼット!』
「承知……!」

レジェンドの指示を受け、ゼットは両手にエネルギーを集中させた後、両手でゼットランスアローを握り赤と青の二つの光を発生させる。
本来ならば『ゼスティウムドライブ』と呼ばれる鞭のような光で攻撃するのだが、ゼットランスアローを用いる事で、かつてレジェンドが旅した世界で修得した技がゼットも使用可能となるのだ。

「ゼスティウム双龍破!!」

ゼットがマガオロチへ向けてゼットランスアローを高速で突き出すと、赤と青の二つの光が龍へと形を変えながら交差しつつマガオロチに突き進む。
それが直撃したマガオロチは仰向けになりながら盛大に吹き飛んだ。

『いやいやいや何だ今の!?』
『ふむ、そういえばゼットはウルトラ六兄弟随一の槍使いであるウルトラマンジャックから直接ウルトラランスの指導を受けたと聞く』
『先輩は3分の1人前とか言ってるけどぶっちゃけゼットさんって可能性の塊じゃねーの!?』
『まあ、普段は何かしら抜けてるけどな』

加えて言うなら、忘れがちだが今はレジェンドの身体も借りている。
レジェンドの能力をそのままゼットが使えるわけではないが、彼が旅した世界の記憶はそのままゼットも見る事が可能であるため、ゼットは暇なとき黙ってレジェンドの中でそれを閲覧していたりするのだ。
結果、それらの技が使えたりするのだが……まだゼットは修行中である以上、技の練度に関しては仕方ない。

『そこ！ボサッとするな!!』
『『『『は、はいっ!!』』』』
「この星に生きる全てのために！マガオロチ、お前を倒す!!」

レジェンドに叱咤された一誠やタイガ達に対し、ダ・ガーンXはマガオロチから視線を離していない。
融通は利くが己の使命も忘れぬ立派な勇者だ。

「イッセー、ドライグ！」
『おう！……ってそうだ！タイガ今鎧を纏った状態だろ！このまま赤龍帝の籠手装備出来るのか!?』
『言われてみればそうだな』
「そんなの無茶を通して道理を蹴っ飛ばせばいいだけだ！俺はやる！この戦いに勝って、皆で異世界修行に行くんだ！聞いたぞ、レオさんやゼロ隊長の厳しい修行をイッセーもやり遂げたんだろ！ならバディの俺が出来ないからと逃げたりなんかしたらそれこそイッセーや、引いてはイッセーに協力してくれた皆の顔に泥を塗る真似をすることになる！」
『タイガ……』
『案ずるなタイガ、私達も同じだ』
『いっつも土壇場でイッセーの力を借りてばっかじゃカッコつかねえよな。俺らのド根性、見せてやろうぜ！』

タイガの揺るがぬ決意にタイタスとフーマも賛同し、一誠の不安を吹き飛ばすように力強く応える。
彼らがこう言ってくれているのだ、ならばここで自分が引き下がるわけにはいかない。
一誠もまた彼らの意志を汲むように頷き、タイガに神器を発現させるべく意識を集中する。

『行くぜ、タイガ、タイタス、フーマ、ドライグ……！』
「ああ、頼む！」
『私達も内なるマッスルを解放するぞ！』
『そこは普通にパワーでいいじゃねーか！』
『そもそもこの神器を今までに複数人同時に所有し発現させた例が無いから、今回もその鎧と合わせるとどうなるか分からんぞ』
「元より覚悟の上だ！」
『やるぞ！赤龍帝の籠手（ブーステッド・ギア）アアア!!』

一誠がそう叫ぶと、フォトンアースとなったタイガの左腕が凄まじいスパークを放つ。

「ぐあああああっ!!」
『タイガ!?』
『やはりか……！俺の宿る神器と違い、タイガが纏う鎧はこの地球そのものから齎された言わば『神器の上位存在』！それの上に重ねようとすれば反発が起こるのは当然だ！』
『じゃあタイガが赤龍帝の籠手を使うにはフォトンアースを解除しなければならないということか!?』
『ここにきて二者択一かよ！』

苦しむタイガに一誠達はもちろん、近くにいたダ・ガーンXや彼らにトドメを託したゼットらも焦り始めた。

しかし、それを制したのは他ならぬタイガ。

「こんな痛みどうってことない……！」

『『『タイガ!?』』』

「俺はやる……！やって、みせる！神器だって、この鎧だって……使い方と心構え次第で変わるんだ！どっちが上かじゃない、どっちもこの地球を守る力なんだ!!」

スパークが迸り続けている左腕が発光し始め、同時に右腕も光り始める。

突然様相が変わった事にそれを見ていた者達は驚くが、レジェンド……そしてドライグはあることに気付く。

『あと少し、もう一押しでタイガは『至る』な。それも別の形に』

『相棒！タイタス！フーマ！タイガだけではあと一歩足りない！こういう時の為のお前達だろ!?』

『ッ！そうだ、俺達も出来る事をやろうぜ！二人とも！』

『よし！』

『踏ん張れよ、タイガ！』

ドライグの言葉に再び意識を集中し、一誠は神器の制御を、タイタスとフーマは自分達のエネルギーをタイガへと送り込む。

『『『うおおおお!!』』』

「俺は、やる……！俺達は！やるんだあああ!!」

その時、タイガの両腕から光が爆ぜた。

☆

ダイブハンガー・医務室。

タイガが放った眩い光が収まった時、モニターを見ていた者達の顔が驚きに染まる。
特に神器――赤龍帝の籠手とその禁手を知る者は尚更だった。
タイガ・フォトンアースの右腕には宝玉が菱形に変化しより鋭利に、かつ青くなった籠手が。
そして左腕にはより巨大で、より頑強になり宝玉も大きくなった赤と黒の籠手が装着されていたからだ。
『これが……俺の、俺達の新たな力！結集禁手（ユナイテッド・オーバー）『超龍帝の双甲（デュアル・グランド・ギア）』だ!!』

高々と宣言したタイガにリアスを始めとした面々のテンションは最高潮に達した。

「は……？はあああ!?何だよ結集禁手って!?長年神器の研究してててそんなもん一度も聞いたことねーぞ!?そもそも神滅具を複数人で所有して別々の禁手になること自体普通なら有り得ないんだが!?」
「そんなの決まってるじゃない！彼らが私達のウルトラマンだからよ！」
「そうだぞアザゼル！私にタロウが、お前にゾフィーがいるようにリアス達にとっては彼らがそうなんだ！それが理由でいいだろう！」
「理由になってねーよソレ!!」
「ならばこういうわけだ！守るべき者、守るべき約束の為に勇気を振り絞った時！限界を超える力が生まれる！それが勝利の鍵だ!!」
「こっちの兄妹に比べりゃ分かるけどまだよく分かんねー!!」

リアスとサーゼクスは殆ど個人的、凱の意見もぶっちゃけド根性式の精神論的なものなので、研究者思考なアザゼルには理解しにくい説明だったようだ。
まあ仕方ない。

「ドライグがああいうこと出来るなら私もレジェンド様とやれますよね！」
「ティアマットじゃレジェンドに付いていけない。ここは我の出番」
「オーフィスじゃスタイルの面で格差がいたたたたた!?噛まないで下さいよ!!」
「ぷんすこー」

相変わらず互いに煽り合っては喧嘩になるティアマットとオーフィスだが、未だ緊張感収まらぬ状況の中では微笑ましい光景である。
勇気と希望は伝染する。
そして、それは――

☆

『まさか本当に実現させてしまうとはな……やはり今回の宿主は、宿主達は過去最高に面白い奴らだ』
「やった……！これならいけるぞ！」
『よっしゃー！タイガ、ダ・ガーン！マガオロチとの戦いにケリつけようぜ！』
「ああ！」
「了解、一誠！」

タイガはフーマの『速さ』を右に、タイタスの『剛力』を左に備えた新たな神器にエネルギーを込める。

『ＢｏｏｓｔＢｏｏｓｔＢｏｏｓｔＢｏｏｓｔ！Ｄｕａｌ Ｂｕｒｓｔ!!』
『何か普通と違くね!?ブーストめっちゃ早ェ!!』
『しかも倍どころか感覚的に３倍倍加していってるぞ！イッセー、威力調整出来そうか!?』

『激ムズだけどやってやるぜ！これは俺達で完成させた力なんだ！だからタイガ！遠慮なくブッ放せ!!』
「ああ、皆を信じるぞ！やるぞ、ダ・ガーン!!」
「わかっている、タイガ！マガオロチをここで討つ!!」

タイガはダ・ガーンXと頷き合うと、己の最も得意とする技の構えをとる。

「これが輝きの力だ!!」

ダ・ガーンXもダ・ガーンブレードを収納し、胸部のレリーフ周辺の装甲を左右へと展開。

「受けてみろ！この星の輝きを!!」

そしてタイガとダ・ガーンX、一人と一機は同時にエネルギーを解き放つ。

「オーラムストリウム!!」

ストリウムブラスターの構えから発射されたのは、その小さな光一つ一つが剣の形をした、青と赤と黒、そして金色の光が混ざり合った光線。
正しく言うならばユナイテッド・オーラムストリウムだろうか。

「ブレストアースバスター!!」

合体時同様に胸のレリーフに地球を浮かび上がらせて放たれたのは地球の命の輝きとも言えるような黄金の閃光。
二つの異なる光は同じ速度、そして同じく凄まじい威力でマガオロチへと直撃した。

「ガギャアアアアア……!!」

ドォガアアアアアアン!!

直後、眼前が爆炎で覆い尽くされる程の大爆発が巻き起こる。

『……爆発、凄くね？』

『ゴメン、多分調整する時に範囲狭めたから代わりに爆発がデカくなったんだと思う』

『市街地など人のいる場所でなくてよかったな』

『全くだ』

「マガオロチは……!?」

「センサーに反応無し。次元を超えたり地中などに逃げた形跡も無い。完全に倒せたようだ」

ダ・ガーンXの言葉で漸くマガオロチを打ち倒せたと確信出来たタイガ達は喜ぶも、すぐに思考を切り替えた。

そう、大元がまだ残っているのだ。

「残るはゴーデスだけだ！」

『よぉぉぉし！やってやるぜ！』

「奴を野放しにすればこの世界の地球だけでなく他の世界の地球や、他の星も悲惨な末路を辿ることになる。それだけは何としても阻止しなければ！」

「それはいいけど私達のこと忘れてないにゃ？」

「まさに間一髪」
「ゼット隊員がテレポートを使えて助かりました」
「「『『『……あ』』』』」」
『お前らテンション上がりまくってマジで忘れてやがったなコノヤロー』

タイガ達はもちろん、ダ・ガーンXすら間抜けな声を出してしまう程、レジェンドの指摘はビンゴであった。

☆

一方マックスを始めとした複製怪獣を倒した面々も合流し、ゴーデスとの戦いは熾烈を極めていた。
ゴーデスワクチンによって弱体化させられているにも関わらず圧倒的な力を見せるゴーデスはさすが宇宙に名だたる存在と言わざるを得ない。

『羽虫共がァァァァァ!!』
「病んだ頭だけの癖にやけに強えじゃねえか！だがな！こちとら頭だ顔だって連中とは散々やり合ってんだよ!!」

ゴーデスに対し吼えるカミナと同じく、ウルトラ戦士達が攻撃を仕掛けていく。
その中でオーブとジードもまた別の姿となっていた。
オーブはセブンとゼロ、親子の力をお借りした『エメリウムスラッガー』に。
ジードはレオとアストラ、兄弟の力でフュージョンライズした闘魂たぎらせる『リーオーバーフィスト』に。
ダイブハンガーではそんな彼らを推している裕斗とギャスパーが盛り上がっていた。

「オーブ！俺とツーマンセルで行くぜ！」
「はい！ゼロさん！」
「ならばジードは俺と仕掛けるぞ！」
「了解！レオさん！」

それぞれがフュージョン元である人物と組み、ゴーデスの左右へと飛び上がり頷き合うとそのまま双方のタッグがダブルキックを放つ。

「「デェヤァァァァァ!!」」
「「イヤァァァァァ!!」」

ズガァァァァン!!!

『ぐぅおおおお!?』

ウルティメイトゼロを始めとした四人の勇士によるダブルタッグキックが炸裂し、ゴーデスへ明確なダメージを与える。

「やはりゴーデスワクチンの影響か再生速度が段違いに落ちている上、攻撃の効き方が違う！この機を逃さず攻め込むんだ！」
「「「「はい!!」」」」

８０の分析を交えた激が飛ぶ。
同時にここで三日月、昭弘、そしてシノのネオ・ガンダム・フレーム乗り達が動く。

「いよいよ来たぜ！三日月！昭弘！アレの用意だ！」
「アレの？別にいいけど、目は狙わないでよ。レジェンド様と約束してるんだ。バルバトスの新武装でゴーデスの目玉を貫くって」
「物騒な約束してるな三日月!?まあいい、外すなよシノ！」
「当たり前だ！ニール教官直伝の狙撃術を披露してやるぜ！」

（え？ニール教官直伝の狙撃術って言うけど……アレの方は確か狙撃じゃなくて戦略兵器みたいなものじゃなかったっけ？）

ラフタが疑問に思う『アレ』の種別だったが、それはともかくとしてバルバトスの巨大バックパックと同じようにグシオンリベイクやフラウロスも巨大バックパックを分離させると、フラウロスを先頭にバルバトス、グシオンの順に機体を連結させる。

さらに、各々の巨大バックパックが変形合体し超巨大な大砲となり、ネオ・ガンダム・フレームの３機が右肩に担ぐような形となった。

「うおっ!?何だありゃあ!?ヨーコの好きそうな大砲じゃねーか!!」

「私も聞いたことないわよ！」

デガンジャとの戦いを制したキタンやヨーコらも初めて見る鉄華団の兵器に驚きを隠せない。

鉄華団に所属していない者達も同じように驚愕している。

「三日月、昭弘、シノ！それが噂のアレか！」

「おうよ！狛治ばっかに良いカッコさせられねぇからな！俺ら先輩ガンダム乗りの底力、しっかり見ておきな!!」

一応聞いていたであろう狛治の問いに応えるシノは自信満々である。

しかし、それをみすみす見逃すゴーデスではない。

当然のように妨害すべく触手の一つから光線を放つが、それを防いだのはダイナ。

かつてはグランスフィアとの最終決戦でネオマキシマ砲に援護された彼は、今度は自分が守る番だとゴーデスの前に立ち塞がったのだ。

「来るなら来いよゴーデス！リベンジマッチと行こうぜ！俺がいる限

り三日月達には一発足りとも通さねえ!!」
「助かったぜアスカさん！」
「ちゃんと借りは返すから」
「よし！ダイナの支援を無駄にするな！確実に決めるぞ！」

尚も妨害しようとするゴーデスだが、ダイナに触発されたのか駆けつけたコジロー達や鉄華団別働隊も三日月達を守ろうと奮起し、ゴーデスからの攻撃を通さないどころか押し返していく。

「ここまでやってくれたならしっかりキメなきゃ男の恥だ……！三日月、昭弘！リミッター解除用のエネルギーストック、いくつ貯まってる!?」
「三つ。全部貯まってるけど」
「同じく三つだ。流星号はどうだ？」
「当然三つだ！なら合計九つ分のストック、全部回しても構わないよな!?」
「うん。ストックだし、別にバルバトスが動かなくなるわけじゃないし。動かなくなっても無理矢理動かすけど」
「こっちもいいぞ。フォローはラフタがしてくれるからな」
「三日月はともかく昭弘は羨ましいんだよチクショー！まあいいか、ならやるぜ二人とも！」

少しばかり本音が出たシノだったが、気を引き締め直して操縦桿を握り、各種操作をこなしていく。

「超大型連結砲、各部異常無し！」
「連結砲全基、シークレットジェネレーター開放……！」
「エネルギー伝達開始、及び伝達に問題無し！」

シークレットジェネレーター……それは超大型連結砲となった時のみ開放可能となるネオ・ガンダム・フレームの各機の巨大バック

パックに搭載された特殊なジェネレーター、小型スペシウム反応炉のことだ。
３基それぞれの反応炉が別々の役割を担っているため単機では使用不可能だが、その分連結時における効率は群を抜く。
そしてバルバトスら３機を連結させたのも、その反応炉が生み出す膨大なエネルギーを制御するためにそれ相応のエネルギー……この場合はエイハブ・リアクターが必要だったからだ。
最新型のエイハブ・リアクターを複数搭載したネオ・ガンダム・フレームが３機連結することで漸く制御可能といえばその威力は押して知るべし。
さらに――

「エネルギー充填完了！」
「各機反動用姿勢制御、準備良し……！」
「砲口部スペシウム・リダブライザー開放!!」
「!!」

それに反応したのはメビウスとヒカリ。
かつてエンペラ星人を打ち倒すために使われたファイナル・メテオール、それと同じ機能があれには備えられていた。
その理由とは彼らが、彼らの主に尊敬と感謝を忘れないため。
鉄華団を彼の……彼らの『家族』として迎え入れ、またかつての家族らと歩んでいけるよう配慮してくれた光神。
そんな彼への数多の思いを形として成したもの、それが鉄華団のスペシウム・リダブライザー。
再びそれを認識し、今連ねられた鋼より光は放たれる。

「「ウルトラギャラクシーカノン、発射!!」」

ズゴアアアアア!!!

スペシウム反応炉が生み出した超エネルギーをスペシウム・リダブライザーで増幅し、放たれた極太の閃光。
発射の衝撃は凄まじく3機で踏ん張っても後退していくが、オデュッセウスブラスティアやフリッケライ・ガイスト、ガンダムゴッドマスター、更には他の鉄華団のＭＳも支えに入る。
正しく鉄華団の魂の一撃とも呼べるそれはゴーデスに猛然と迫り――

ドガァァァァァン!!

『グガァァァァァ!!』

ゴーデスへと直撃すると、ゴーデスは一際大きな叫びを上げた。

「見たか！俺達の超ファインプレー!!」
「ダイナ兄さん！」
『遅れてごめん、アスカ兄さん！』
「タイガ、一誠！ってうお!?お前らどうしたその腕、特に左！」
『分かりやすく言うとパワーアップっす！』
「ＯＫすっげえ分かりやすいな！」

遂にタイガを始めとしたマガオロチ討伐組も合流し、いよいよゴーデスと戦うために集った全戦力が完全集結した。
同時に、ウルトラギャラクシーカノンを見た竜馬とカミナ、シモンはこちらもと言わんばかりにブラックゲッターの構えたゲッターレーザーキャノンをグレンラガンも共に構える。

「ここらで一発俺ら先輩勢もデカい花火打ち上げてやろうじゃねえか！なあシモン！竜馬！」
「ああ！おやっさんが用意してくれたお誂え向きのコイツがあるからな！気合入れろよ、カミナ！シモン！」

「分かってるぜ竜馬！俺とアニキの螺旋力、ゲッターレーザーキャノンに注ぎ込む!!」
「「うおおおおおっ!!!」」

カミナとシモンの発する螺旋力がゲッター線と混ざり合い、凄まじいエメラルドグリーンの光がグレンラガンとブラックゲッター、そしてゲッターレーザーキャノンから放出される。
ウルトラギャラクシーカノンによってダメージを受けた箇所にキャノンを構え、狙いを定めた三人はさらなる追撃をゴーデスへと撃ち込む。

「「くらいやがれ！スパイラルバスターキャノン!!!」」

ギュアァァァァァ!!!

ゲッタービームのマゼンタと螺旋力の緑が混ざったドリルの如き閃光がゴーデスを貫く。

『ご……おガッ……』
「オラァ！どうだ陰湿髑髏ォ!!」
「進化したいみたいだから食らわせてやったがよ、ゲッターはてめえを認めなかったらしいな！」

揃ってコックピットの中でゴーデスに対し中指を立てるカミナと竜馬。
ゴーデスの声色からかなり効いていることは間違いない。

『図に乗るな羽虫共がぁぁぁ!!』

ズドオオオオッ!!

「「「「ウワァァァァ!!」」」」

触手から雨霰と放たれた光線によってウルトラ戦士を始めとした光神陣営の戦士達が吹き飛ばされた。
あれだけの猛攻を受けて尚、ゴーデスには力が残っている。
しかし、明確な実体として存在していたその身体は全身が闇で構築されたような不安定なモノと化していた。

「野郎!どんだけ力有り余ってんだ!」
「へっ!もうビビる事はねえ!既にウルトラビクトリーキーは俺達の手にあるぜ!」
「ゼロ、せめてその言い回しぐらいは何とか出来ないのか」
「それだと何かビクトリーさんが使うアイテムかビクトリーさんの力を使うアイテムの名前っぽいよね」
「いっ……良いだろ別に!こういうのはこう……気持ちの問題っていうか」

レオとジードにツッコまれ、しどろもどろに応えるゼロだが、やはり当初に比べてかなり余裕が出てきていた。
それを証明するかのように先程吹き飛ばされた者達も次々と立ち上がってくる。

「ヒカリ、大丈夫ですか!?」
「ああ!咄嗟にお前が盾になってくれたおかげで殆ど無傷だ!待っていろ、今エネルギーを分け与える!」
「助かったぞ、リブット!しっかり使いこなしているな、ブロッカーを」
「貴方とパワードの教えの賜物ですよ、グレート!」
「もう一踏ん張りだ。やるぞ、二人とも!」

「ご無事で何より、お二方」
「いや、ありがとう。しかし以前会った時と雰囲気がどうも……」
『気にするな、マックスにゼノン。ウルトラメダルの影響でこうなってるだけだ』
「まあ、レジェンドが言うのでしたら」

互いに声を掛け合い、手を取り合って立ち上がり幾度となくゴーデスへと挑む闘志を燃やし続ける光神陣営。
それをゴーデスは理解出来なかった。

――何だコイツラは。何故それほどまでに我に向かってくる？勝ち目など無い。どれほど力を得ようとも。奇跡など起きはしない。どれほど立ち上がろうとも。結局は叩き潰されて終わるのだ。なのに何故今も抗う？何故……何故……何故……――

「もう一度やろうぜ皆！この星の明日のために！そして何より、俺達自身の未来のために!!」
「「「

奇跡は、起きる。

☆

ダイブハンガーの一室から、ダイブハンガー全体に及ぶほど凄まじい光が放たれた。

「時は、満ちた……!!」

〈続く〉

Ｌｏｓｔ　ｔｈｅ　ｗａｙ

今から遥か昔――
当時の光神達がざわつき、背を向けた一人へ問いかける。
「レジェンド様！本気なのですか!?」
「確かにレジェンド様と共通する点はございますが……！」
「別にお前達に面倒を掛けるつもりはない。この子が大きくなって独り立ちするまで俺が可能な限り一人で面倒を見る」
「しかし……！」
「ならば放り出せと？」
「そ……そういうわけでは……」
「誰もこの子の容姿ばかり気にしてその内に秘める可能性に目を向けようとしない。だからこそ俺が育てる。この子の輝きはいずれこの【エリア】に必要となるはずだ。この話はもう終わり……早く持ち場へ戻れ」

レジェンドの言葉に釈然としないまま光神達はその部屋から退出し、レジェンドとその手に抱かれた一人の赤子が取り残された。
「さて……名前は何にするか。そうだ、立場に因んだ名前にしよう。『神』が入っている方がいいか……ああ、ちょうど俺とも繋がるような単語があったな。よし、今日からお前の名は――」

――そして、今――

☆

ダイブハンガーの一室――医務室は凄まじい光に満たされていた。
「な、何!?」

「これは……!?」
「目が！目がぁーッ!!」
「アザゼル、そのネタはありきたりすぎるぞ！しかし……！」

その光の根源は……

「ソラン……さん……!?」

ソラン・セイエイ……真の名を、ウルトラマンサーガ。

「……皆が諦めない心で立ち向かってくれたから、エネルギーが溜まった。今回変身すればまた溜め直しになるが同時に確信も出来た……俺が戦わずとも、皆は未来を切り拓いていけると」
「……行くんだね、サーくん」
「ああ。今は、俺が戦う必要がある」

束にサーガはそう返し、光の根源……サーガブレスに触れる。
ゴーデスと戦っている者達は闘志こそ十分だが、体力は殆ど限界に近いだろう。
現に戦闘中に加わったダ・ガーンXも動きがどことなく悪い様に見える……先の凄まじいエネルギーを放った反動なのかもしれない。

「諦めない者に、光神は力を貸す。そして今がその時だ」

サーガはサーガブレスのある左拳を強く握りしめ、決意の眼差しで周囲にいる者達を見渡す。

「先輩達は誰一人欠けさせることなく、連れて帰る。もう少しだけ待っていてくれ」
「ソランさん！」

心配そうな表情で小猫がサーガへと駆け寄るが、サーガは優しい表情で告げた。

「心配しなくていい。俺も必ず戻る」

「……約束、ですよ？」

「ああ……ゼノヴィア、この子を頼む」

「へぇあっ!?え、あ、その……た、賜りまひたっ!?あう……」

いきなり自分が頼み事をされるとは思わずパニクってしまい噛んでしまうが、周囲は程よくリラックス出来たようでクスクスと笑っている。

ゼノヴィア本人は穴があったら入りたい程に恥ずかしがっているが。

「……行ってくる」

サーガが再び表情を引き締め直した事で、小猫は彼から少しだけ離れて見守る。

これから邪悪生命体を撃ち滅ぼすべく戦場へと赴く光神の無事を願って。

今、光の神がその真の姿を現す。

「サァァァガッ!!」

数多の心の光――その輝きの中で。

☆

それは一瞬だった。

ダイブハンガーとゴーデス島……いや、この世界の地球全土を照らすような光が溢れたかと思えば、光神陣営を守るように、そしてゴーデスの前に立ち塞がるように今までのウルトラマンとはまるで異なる姿の巨人が現れたのだ。
その姿はまさに、光そのものの具現化。

「え……？え？え??だ、誰!?どちら様にゃ!?」
「あれは、もしや……！」

黒歌は突然の登場に混乱し、ダ・ガーンXは誰であるかを理解した。
そして、その存在を見たゴーデスは驚きと恐怖に染まっていく。

『バ……バカな……貴様は変身不可能なハズだ……！何故だ！何故貴様が出て来る!?』
「諦めない心……それが、俺に力をくれた」
『そんな……そんなもので貴様はその姿になれるというのか！ウルトラマンサーガァァァ!!』

その存在こそ、レジェンドが後継者と認めた光神――ウルトラマンサーガ。

☆

ダイブハンガーでは誰もが息を呑みその光景を見ていた。
今までのウルトラマンとは違う、結晶が集まったような身体やグラデーションのボディカラー。
そして何より目を引く、身体の各所から溢れ出る凄まじい光……明らかに他のウルトラ戦士とは次元が違うであろう事を示していた。

「あれが、ソランさんの本当の姿……！」
「タイガ達とは全然違う……神秘的な感じね」

「この感じ……以前ゴウエンマという鬼を討伐した時と同じ！やはりあの時の不思議な力はサーガ様のものだったのか！」
「パムパムー！」
「さてさて驚くのはここからだよ。レジェくんが後継者と認めたサーくんの実力、両目を見開いてガッツリ見ておくよーに！サーくんが本気で動いたら早過ぎて見えないから」
「「「「……え？」」」」

間抜けな声を出したリアス達だが、束の言葉の意味をすぐ知ることになる。

☆

「来たぁ!!きたきたきた！待ってたぜ大将おぉぉ!!」
「マジかよ……！土壇場で仰々しく登場とはキメてくれるじゃねえか！サーガの大将!!」

カミナはテンションが最高潮に達し、オルガも笑みが零れる。
彼らだけではない、サーガを知るウルトラ戦士や神衛隊の誰もが歓声を上げて喜びを表現する。
圧倒的絶望の中で希望を信じ、戦い続けた彼らの前に奇跡を起こす存在が駆けつけてくれた――その事実が彼らの闘志を更に熱く燃やしていく。

『随分と遅い登場だな、サーガ』
「すまない先輩。遅れた分は働きで取り戻させてもらう」

そう言ってゴーデスへと向き直り……サーガの姿が消えた。

「え？」

黒歌が一言だけ声を出した瞬間――

ドガァァァァァン!!

『ゴォァァァァァ!!』

いつの間にかゴーデスの眼前にいたサーガの回し蹴りがゴーデスの顔面に炸裂し大爆発を巻き起こした。

「にゃあっ!?」

『ウソだろ!?師匠や先輩、ガイさんやリクさんがタイミング合わせて放った必殺キックと同じ威力を、一人で……!』

『何を言ってるんだ』

『え?』

『あれはただ普通に蹴っただけだ。必殺キックではない』

「「「『『『『!?』』』』」」」

一誠の驚きに対するレジェンドの返答に一誠やドライグ、トライスクワッドにゼット、そして黒歌とダ・ガーンXは驚愕する。

歴戦の勇士や若き精鋭が集結して放った合体技すら、サーガの一撃に届かせるのがやっとだということに。

「次元が、ウルトラ違い過ぎる……!」

ガンマフューチャーになったことで冷静な性格と化していたゼットすら普段の口癖が出てしまう程の衝撃をサーガは起こしていた。

「ウルトラ戦士と神衛隊……いや、ゴーデスを討つべくこの場に集った者達に告げる」

サーガは再び地に降り、その場にいた者全てに言った。

「……俺に続け!!」

「『オオォォォォォ!!』」

短く、しかしハッキリと力強く。

サーガの言葉は彼らしさと共に皆を奮い立たせるには十二分の効果があった。

☆

同じくダイブハンガーでもサーガの実力の一端を見たリアス達は唖然としたままだった。

小猫などの武闘派は目をゴシゴシと擦って何度も瞬きしている。

「あっはっはー!やっぱりそうなるよねぇ!いやぁ予想通りの反応だよ!」

「束殿!今サーガ様は何をされたのだ!?」

「しのぶ、小猫ちゃん、今の見えた?」

「ううん……何か光ったとしか」

「もしかして瞬歩……ですか?」

小猫の言葉になるほど、とサーガを知らぬ者達は頷くが束はあっさり否定する。

「んーん、ハズレ」

「え!?」

「アレは俗に言う瞬間移動だよ。サーガアクセラレーションって言っ

てね、確か身体を光か粒子に変えて移動するんだって」
「瞬間移動だあ!?あんな短距離をポンポン移動出来んのかよ!?」
「いや、レジェンド様が後継者と言うくらいだ。それぐらい出来ても不思議ではない」
「ほほー、そっちのスケベ総督と違ってちゃんと理解してきたねぇ魔王君」

アザゼルをディスりつつ、サーゼクスを褒める束。
漸く彼女もサーゼクスや、スペリオルドラゴンの下で少しずつ良い方に向かっているミカエルなどは評価するようになっている……手綱を取る役がいないアザゼルは別として。

「ま、サーくん自身強いけどさ、それ以上に神衛隊の皆から慕われてるのが一番の強さなわけ。私達がレジェくんを慕うのと同じようなものだね。親愛と恋愛の違いはあるけど」
「それは、今の様子を見ればわかります」
「でしょ?それにサーくんが危険になったらそれこそゼッくんの身体乗っ取ってでもレジェくんが出張ってくるだろうし」
「ゼットさんにとって二重の意味で笑えませんね」
「にゃははー、だから心配要らないよ小猫ちゃん。レジェくんもそうだけど、帰って来た時のおかえりなさいが何より嬉しがるからそれ言ってあげな」
「はい!……あと、黒歌姉様ズルいです」
「そこは儂も同意じゃのぅ。帰って来たら生身でリアルファイトじゃな」

☆

束がほんわかさせたと思ったら小猫自ら別の方をぶっ壊しにかかり、しかも夜一まで乗っかった。
この時、ソウルゲインの中で黒歌は身震いしたという。

サーガの拳がゴーデスに叩き込まれ、再び大爆発を起こす。
それを皮切りに次々と光神陣営の攻撃がゴーデスへと撃ち込まれていく。

「鉄華団総員！弾も体力も使い切れ！手にした刃が折れようが構えた銃が折れようが、俺達自身が折れなきゃ負けじゃねえ！決して折れない鉄の華、それが俺達鉄華団だ!!」
「「「「うおおおお!!」」」」

オルガの号令はサーガの参戦で沸き立っていた鉄華団を更に奮い立たせた。
コジローも若い世代が立派に育っている姿を見て小さく笑みを浮かべ、自分も負けていられないと操縦桿を握り締める。

「この激戦の中で戦意を失わないのは一人前の証拠だが、俺から見れば精神はともかく腕前に関してはまだまだ成長の余地がある。ついてこいヒヨッコ共！俺が実戦の中で指導してやる！」
「「「「押忍!!」」」」

かつてはグランド・フォースの鬼教官と呼ばれたイナバ・コジロー。
本職メカニックながらも幾多の戦場を最前線で戦った腕前は今もなお衰えを知らず。

「オルガもおやっさんも大将に続けてキメてくれるたぁ粋じゃねえか！」
「ここで俺達も気合を入れなきゃ超次元グレン団の名が廃るってもんだ！行くぜ、ダチ公！ゴーデスとの最後の戦いだ!!」
「「「「応!!」」」」

カミナとシモン、二人の団長の号令にキタン、ヨーコ、ヴィラル、

ロージェノム、そして巌勝は気合を入れゴーデスへと向かっていく。
「さてと！引き続きで悪いけど援護よろしくね、ボルフォッグ！」
「了解です、黒歌隊員」
「光神サーガのおかげかブレストアースバスターの反動による機能不全が完全に消えた……まだ私もやれる！」
「そっちもいけるみたいだな！こっちもこっちで行くとしようぜ、スーパーロボット軍団!!」

黒歌のソウルゲイン、そしてビッグボルフォッグとダ・ガーンXを率い、竜馬の駆るブラックゲッターが猛然とゴーデスへと迫る。
「ガンダム・フレームを含むガンダム全機は私に続け！後続のMS部隊の為に先陣を切る!!」

グラハムの指揮でターンXを除くマリーダ、三日月、昭弘、シノ、加えて狛治が先行してゴーデスへと攻撃を仕掛ける。
一番早くゴーデスに先制攻撃を仕掛けたのはグラハム……ではなく三日月。
バルバトスの手にはいつの間にかレジェンド謹製の大太刀『デモンワームブレード』が握られており、ゴーデスの眼前直前にギリギリ再度溜まったリミッター解除用のエネルギーを即座に解放。
「レジェンド様との約束だから。その目玉……潰すよ」

急接近したバルバトスはデモンワームブレードを逆さ向きにして両手で握り、勢いよくゴーデスの目の部分に突き立てた。
『ぐおおおお!?』
「まだだ……！」

刀を突き刺しただけに留まらず、かつて駒王学園にてマガバッサーを屠った超弩級メイスを構え叩きつける。
サイズ差故に通常ならば然程効かないであろうその一撃も、リミッター解除されたバルバトスが振るう速さと重さが両立されたものならば弱体化したゴーデスにとって大ダメージは避けられない。

「お……のれ……！調子に……!?」

ゴーデスは反撃しようとした時、あるモノに気付いた。
その機動力により一足先に到着したターンXが溶断破砕マニピュレーターを展開していることに。
そして……再び振りかぶった超弩級メイスの上に金色のガンダムゴッドマスターが両手を輝かせていることに。

「合わせろ三日月、狛治ぃぃぃ!!」
「そのまんま返すよ巌勝さん」
「これが俺達の絆だ！受けてみろゴーデス!!」

さすがに妨害しようとするゴーデスであったが、あくまで片目しか気にしていなかったことでもう片目の防御がおざなりになってしまい――

「うぅおおおお!!」
「ディアアッ!!」
「シュアッ!!」
「ハァァッ!!」

ウルティメイトゼロソード、ゼットランスアロー、メビュームブレードにナイトブレードの同時攻撃をもう片目に受けてしまう。

「今だ……！」

「双オオオ極ッ！ゴッド！デビル……」
「シャイニング……」
「フィンガァァァァァ!!」

四人のウルトラ戦士が作り出したスキを狙い、バルバトスの超弩級メイスに合わせてゴッドデビルフィンガーと溶断破砕マニピュレーターをゴーデスへと放つゴッドマスターとターンX。

『グガァァァァ!!』

両目部分へ立て続けに集中攻撃をくらい、もがくゴーデスだったがサーガによってさらなる追撃が加えられる。
サーガブレスから巨大な光の刃――サーガカッターを発生させ、両目を横に大きく？字状に切り裂く。

『ギィァァァァ!!』
「巌勝、カミナとシモンが呼んでいる。三日月と狛治も一端離脱しろ」
「了解！」
「うん、わかった」

彼らと入れ替わるようにオーブ、ジード、そしてタイガが８０とマックス、ゼノンに加えパワード、リブットの合体光線による援護を受けつつ飛んでくる。
ダイナは駒王学園でバランガスと戦った際に同行したレオやグレートと共にもはや我武者羅に暴れているゴーデスの攻撃から神衛隊らを守るべく大立ち回りしていた。
そんな三人のウルトラ戦士と共に鉄華団を守るのがラフタのフリッケライ・ガイスト。
「ターゲット、ゴーデス！フォース・レイ、当たれぇぇぇッ!!」

ツインアイを光らせると、上半身の各部が展開され複数のホーミングレーザーが一斉発射される。
いくつかの触手にダメージを与えて動きを鈍らせたスキにダイナのフラッシュサイクラー、レオのエネルギー光球、グレートのナックルシューターがそれぞれ別の触手を粉砕。

「タイガ！お前は可能な限り『速さ』と『力』をブーストしろ！見たところそれ、タイタスとフーマの力が混ざってそうだしやれるだろ？俺とジードで時間を稼ぐ！」
「わかりました、オーブ先輩！」
「ジード！俺達は今それぞれゼロさんとレオさんの力をフュージョン元の片方としてお借りしている。つまり……わかるな？」
「なるほど、あれをやるんだね！」

タイガを一歩下がらせ「Ｂｏｏｓｔ！」の声を聞きつつ、オーブが前方で空中に片膝立ちの状態でスタンバイし、同じくジードがその後ろに立つ。
それを見た一誠はかつて初めてタイガと共に戦った日に師と兄弟子が放った技を思い出した。

『まっ……！まさかあの構えは！』
「「ハァァァァ……デアッ!!」」

オーブとジードが共に気合を入れながら両手を真横に伸ばしながらエネルギーを集中し、オーブ・エメリウムスラッガーが頭上で合掌、ジード・リーオーバーフィストがそれを挟むように両手を重ね合わせる。

「Ｏ・Ｇダブルフラッシャー!!」

レオとアストラの兄弟、そしてレオとゼロの師弟で放った技をまさ

かのオーブとジードが繰り出したのだ。
　これにはダイブハンガーの裕斗とギャスパーも大盛り上がりし、しかも実際四人分のウルトラ戦士の力が乗せられているようなものである彼らのダブルフラッシャーの威力は尋常でなく、ゴーデスへさらなるダメージを与える。
　この機を逃すまいと光線直撃と同時にタイガが動く。

「右を『速さ』ブーストだけに……左を『力』ブーストだけに集中!!」
『タイタス、フーマ！』
『よし！』
『任せろ！』

　インナースペース内で一誠の右肩にフーマが、左肩にタイタスが手を置く。

『泣いて終わりにはしねえ！お前を泣かせて俺らは笑ってハッピーエンドだ!!』
『『速さ』ブーストは機動力にガン振りだ！直接殴んならその方がいいだろ！攻撃速度に割り振らなくても全身の機動力が上がればそっちも上がる！』
『ならば『力』ブーストは左腕のみに一点集中し威力を上げる！我らを支えてくれる者達を信じて、防御ではなく文字通り攻撃に特化させるぞ！』
『ＢｏｏｓｔＢｏｏｓｔＢｏｏｓｔＢｏｏｓｔＢｏｏｓｔＢｏｏｓｔＢｏｏｓｔＢｏｏｓｔＤｕａｌＢｕｒｓｔ!!』
「これが俺達の力だ！ゴーデス!!」

　タイガが拳を構えたかと思えば、突然急加速して赤く光る左腕を振りかぶり――
「ストリウムドラゴンインパクト!!」

ゴガァァァァ!!!

『ぬぐぅぉおおお!?』

数人と神器の力も借りているとはいえ、サーガに匹敵するであろう一撃をゴーデスにお見舞いした。

助けを借りたにしてもまだ若きウルトラ戦士が一人で今のゴーデスへ痛手となる攻撃を炸裂させたのは大きい。

先輩として負けてはいられない、そう思ったのはウルトラ戦士だけではなく、厳勝も合流しこの世界に来たメンバーが集結した超次元グレン団もだ。

さらに、先程合体攻撃を披露した竜馬とブラックゲッターもいる。

「ょぅし全員じゃねえけど全員揃ったな！」

「その言い方じゃややこしいわよ」

「全員じゃないのは合っているが」

「細けえこたあいいんだよ！こっちに来てる超次元グレン団のメンツは誰一人欠けちゃあいねえ！ここらで一発ガツンとキメてやろうってワケで竜馬を加えた合体技といこうじゃねえか！」

カミナは相変わらずその場のテンションで突き進んでいるが、実際それで華々しい戦果を上げまくっているので誰も文句は無い。

それどころかシモンを含め乗ってくる連中ばかりである。

「アニキ！それならうってつけのヤツがあるぜ！」

「おお!?マジかシモン！」

「もしや俺がドテンカイザンに乗っていた時に受けたあの技か……!?」

「察しがいいな、ヴィラル！その通りだ！」

かつて敵対していたヴィラルが言ったドテンカイザンとはダイガン……即ち戦艦級のガンメンの事である。
ドテンカイザンは４機のダイガンが合体して誕生するダイガンであり、東西南北・陸海空、三界四方に死角なしの完全要塞と呼ばれた程であった。
それを打ち破ったのがシモンの言う『うってつけのヤツ』。
その時に比べメンバーこそ少ないが、カミナ、ヴィラル、ロージェノムに巌勝が加わり、シモンやヨーコ、キタンもまた当時より遥かに成長している。
そこに今回は特別に竜馬まで参加するのだ。

「本当なら超次元グレン団全員でやりたかったが状況が状況だ、仕方ねえ！今ここにいるメンバーで今やれる全力をゴーデスにぶつける！」
「乗ったぜ、シモン。ついでに隼人や弁慶に良い土産話になりそうだ。今日、ここにいれなかった事を悔やむぐらいにな！」
「ならばキタン!!私達は甥姪に我らが武勇伝を持って帰る絶好の機会を活かすとしようではないか!!」
「おうよ！姪っ子達にゃ逞しい父ちゃんや優しい母ちゃんだけじゃねえ、強い叔父ちゃんがいるって胸を張って言えるよう気張ってやるぜ！」

シモンの言葉に竜馬や巌勝、キタンらが気合を入れる。
それに続くようにヴィラルとロージェノム、ヨーコもまた闘志を燃やす。

「強い叔父ちゃん、か……ならば俺は強い夫で父親とツーマとシアタが誇れる漢でなければならんな！」
「儂はいずれシモンとニアに子供……孫が出来た時に自慢になるような爺ちゃんにならんとなぁ!!」
「全く……こうなったら私だって踏ん張るしかないじゃない。ただし

！ヨマコ先生を怒らせるとどうなるか、目の前でデカい顔した出来の悪い生徒に身を持って教えてあげるってことだけどね！」
「おいおい最後の最後でおっかねえなヨーコ！まあそれはそれでよし！やる気十分だなお前ら!!」

キラリとサングラスを光らせカミナがニヤリと笑い、コックピットが見えていないにも関わらず打ち合わせしていたかのように全員も同じように笑みを浮かべる。
グレンラガンを中心にターンX、ブラックゲッター、キングキタンRX、ヨーコMタンク、そしてエンキドゥルガーとラゼンガンが集まり、準備は完了。

「っしゃあ！行くぜ、ダチ公!!」
「ギガァ！」
「ドリルゥゥ!!」
「「ブレイクゥゥゥ!!!!」」
『超次元グレン団ｗｉｔｈゲッタースペシャァァァァァル!!』

ギュガァァァァ!!!!

それぞれの機体とパイロットをイメージする光が各々の機体から発せられ、グレンラガンがそれをギガドリルに纏わせ突撃する。
彼らの思いと力を乗せたギガドリルは容易くゴーデスに風穴を開け、一箇所にとどまらずグレンラガンは縦横無尽に飛び回りゴーデスを貫き続け、再び空に舞った瞬間にゴーデスの各部から大爆発が巻き起こった。

『がああああ!!』
『す……すげえ!!』
『あれが噂に聞くスパイラルマッスルパワーか！』
『いや螺旋力だろ螺旋力！』

『男が筋肉質だらけのせいかタイタスの呼び方に納得してしまう自分がいるぞ……』
「いや、まだだ!!」

超次元グレン団と竜馬の合体技を受け、これまで蓄積したダメージは相当だというのにゴーデスは尚も攻撃を仕掛けてくる。

「正真正銘のバケモンだぜこいつは!」
「しかし底は見えてきた!皆、もう一息だ!」
「ここにいるのはそれぞれが異なる諦めない心を持った勇士達だ。その力を合わせれば必ず勝利を掴むことが出来る!」

どれだけ打ちのめされても互いに励まし合い、幾度となく立ち上がっては向かってくる。
自身に吸収され、一つになることこそ全てにとって幸福と疑わないゴーデスには理解不可能な事だった。

『何故だ!我と同化すれば全ての負の感情や痛みからも解放され至上の幸福と共に生き続けられるというのに何故それを拒む!?何故自ら苦しもうとする!?理解不能!!何故何故何故何故!?』
「何故人間やそれに準ずるもの達が苦しんでまで今の生き方をするのか、かつての俺も理解出来なかった」

荒ぶるゴーデスとは対照的に静かに答えるのはサーガ。

「だが、先輩を始め多くの者達と関わることでその答えを知った。彼らは悩みや苦しみを抱え、自らの進むべき道に迷うこともある。しかし、それは己の見る未来への通過点に過ぎない。自身を鍛え独力で乗り越える者、共に歩む者達と力を合わせ新たな道を切り拓く者。様々な方法で壁や障害を超え、その先に待つ最初の未来……『明日』へとその足を進めるんだ」

サーガが紡ぐ言葉をそこにいる者だけでなく、戦いを見ているダイブハンガーの者達も黙って聴き入っている。

「誰かの協力があってもいい、自分自身で掴んだ『明日』にこそ意味がある。お前と一体化し、お前が望む未来をお前の中で見る必要など無い。少なくとも人間は……お前に頼らずとも自らの意思で己の思い描く未来へと進むことが出来るんだ。そして……お前はある矛盾をしていることに気付いていない」

『矛盾など無い！悩みや苦しみ、嫉妬！それら負の感情が無くなることの何が悪い!?何がいけない!?』

「それだ。お前は何故と『悩み』、その答えが出ないが故に『苦しみ』、そして……今！こうして貴様へと衰えぬ闘志を向け、力を増し続ける俺達に嫉妬している!!俺達が貴様にとって取るに足らない存在ならば貴様お得意の力技や謀略で淡々とねじ伏せればいいだけの事!!それをせずにこうして問答している事が何よりの証拠だ!!貴様と同化すれば貴様の負の感情はそのまま同化した者にとっても負の感情、貴様の言う負の感情が無くなるなど全くの嘘出鱈目!!望まぬ同化の果てに望む未来などあるものかッ!!」

『あ……あ……あああ……』

あアアァァあぁあぁあ!!!』

サーガの指摘によってゴーデスの自我は崩壊寸前となり、もはやただ暴れるだけの知性の欠片も無くなりつつあった。

それを見たレジェンドとサーガはチャンスとばかりにゴーデスへの最後の攻撃を敢行すべく、その場の全員に檄を飛ばす。

「総員に告ぐ!!これからゴーデスへ最後の攻撃を仕掛ける!!各々の望み、願い、祈り、そして想い……それら全てを拳に込め、奴に叩きつけろ!!」
「それは分かったけどよ、飛べない奴はどうするんだよ!?」
『その為に俺が力を使う。精々序盤のネオ・グランゾンでの蹂躙と小隊指揮程度しかしていないんでな。少しは活躍させろ』
(いやレジェンドの旦那、その蹂躙が規模的にとんでもねえレベルだっただろ……)

ゼロの疑問に答えたレジェンドの発言にオルガが心の中でツッコんだ。
彼以外にもレジェンドとネオ・グランゾンの暴れっぷりを知っている者達は同じ気持ちである。
それはそれとして、レジェンドの身体を使っているゼットから巨大なレジェンドの幻影が現れたかと思えば、ビッグボルフォッグを始めオデュッセウスブラスティアなど飛行出来ない機体が光のオーラに包まれ宙に浮かぶ。
既に飛行しているウルトラ戦士や機体、クロガネも同様に光のオーラに包まれる。

「これは……!私も空を駆ける事が可能というわけですか……!」
「さすがだぜレジェンドの旦那ァ!!まさしくクライマックスじゃねえか!!ド派手に行こうぜ、ダチ公!!」
「魂全てを拳に乗せて!!明日への扉をブチ破る!!」
「『ウルトラ大連合軍、総員出撃ィィィィ!!』」

カミナとシモンの言葉に続き、クロガネのクルーも合わせた全員が一斉に叫ぶ。

「ウゥオオオオオッ!!」

ドゴォッ!!ゴガァァァァッ!!

「デェェェェアッ!!」

ズガガガガァァァッ!!

サーガパンチャーによって打ち上げたゴーデスを、さらに下からドリルキックを炸裂させより高く打ち上げるサーガ。

そして体勢を整え、右拳を強く握って突き出す。

サーガ最強の必殺技、サーガマキシマム。

だが今回は彼だけではない。

数多のウルトラ戦士や機動兵器もまたサーガと同じく右拳を突き出した体勢であり、クロガネも超大型回転衝角を起動させている。

レジェンドの加護を受け、全てのウルトラ戦士と機体がサーガを中心として同じ体勢・同じ速度でゴーデスへと迫る。

一人(レジェンド)の力は皆のために。

皆の力は一人(サーガ)のために。

皆を引っ張る者と皆を支える者。

二人の光神を中心として紡がれた絆は光となって一人一人を繋ぎ、やがて黄金に輝く巨大なサーガとなってゴーデスへと突き進む。

「『おおおお！』」

ゴーデスの我武者羅な攻撃を弾き――

「『おおおおお!!』」

ウルトラ戦士、神衛隊、レジェンド一家やそれに連なる者、この世界で生まれた者――

「『おおおおおお!!!』」

全てが一つの光となって――

「『おおおおおおおお!!!!』」

今、その拳はゴーデスへと突き刺さった。

『ア……あ……a……』

巨大な光が収まり、ゴーデスへと突き刺さっていたのはサーガを始めとしたウルトラ戦士や機体全ての拳、そして明日への道を切り拓くドリル。

そしてゴーデスは徐々にゴーデス細胞とは違う光の粒子となりながら崩れるように消えていく。

最後の一片が消えた時、闇に閉ざされた空は元の蒼さ……いや、鮮やかな夕焼けを取り戻した。

『やったのか、俺達……?』

『油断させといていきなりとかやめてくれよ……』

『気配は感じない。潜伏している可能性は?』

『最後の最後で予想外の攻撃で全滅は洒落にならんぞ』

「ダ・ガーン、反応は?」

「大丈夫だ、タイガ。ゴーデスの反応は完全に消えた」

一誠やタイガらの懸念を、穏やかにダ・ガーンXが否定する。
それを確実なものであると証明するようにレジェンドも告げた。
『火星での戦いのようにスフィアや根源的破滅招来体などによる転移の心配もない。それらの形跡も反応もなかったからな』
「つまりゴーデス細胞となって逃走もしていない……！」
「……ってことはようするに！」

かつてこの世界の火星でレジェンドと共にゴーデスと戦ったグレートとダイナの声が弾む。

「そうだ。俺達は……勝ったんだ」

ダイナの言葉に頷きながらサーガは静かに、しかしハッキリと勝利を告げ、同時にゴーデス島とダイブハンガー、そして空の世界のエリアル・ベースから大歓声が上がる。

地平線に沈む太陽と、それに照らされた赤く染まる夕焼けの空が、諦めずに戦い抜き勝利を掴んだ彼らを祝福する。
皆で起こした奇跡。
皆で掴んだ明日。

今……邪悪生命体との死闘は幕を閉じた。

〈続く〉

まだ見ぬ世界を目指して

ゴーデスとの死闘は新たな力や新しい仲間、頼もしい援軍……そして数多の者達の諦めない心によりその力を発現させる事が出来たウルトラマンサーガの力も加わり光神陣営が誰一人犠牲を出す事なく勝利を手にした。

しかし、直後に問題が浮上する。

それは――

「あ、予測した通りこの島沈むな」

『何イイイイ!?』

ゴーデス撃破の喜びを感じている中、揺れを体感したレジェンドが零した一言でゴーデス島にいた全員が焦り始め、勝利の余韻に浸ることも忘れ急遽人間の姿になったウルトラ戦士と機体をクロガネに格納。

一人悠々とネオ・グランゾンに乗り込んで空間転移の準備に入っていたレジェンドと、それを見て普段の調子に戻ったゼットは後にこう言った。

「いやまさかテンパった結果、超大型回転衝角を起動した状態で背後から突っ込んでくるとは予想外だったわ」

「ネオ・グランゾンなら平然としてたんじゃないかと思われますが、中にいる俺達は本気でミンチになるんじゃないかと戦慄したのでございました」

ちなみに、辛うじて回避したネオ・グランゾンがクロガネの甲板に乗り、無事転移は成功した。

ついでに事実としては別にテンパっていたわけではなく、この事態を予測しておきながらあっけらかんと言い放ったレジェンドへとお仕置き的な意味があったそうな。

つまり、ゼットはとんだとばっちりである。

☆

転移してダイブハンガーへ帰還したレジェンド達を出迎えたのは、文字通りダイブハンガーにいた全員だ。

真っ先に動いたのは一誠とタイガ、そして朱乃とカナエに支えられていたリアス。

一誠とタイガはリアスの無事な姿を確認するや否や『騎士』顔負けのスピードで彼女へと近付き、一誠は喜びながらリアスをお姫様抱っこする。

リアスは驚きながらも頬を赤く染めつつ一誠の首に両手を回し、タイガは一誠の肩に腕を組んで三人で笑い合う。

それに感化された他の者達も笑顔でそれぞれを待つ者達と喜びを分かち合った。

強いて問題を挙げるなら……

「なーんーでーにゃー!!」

「いや小猫ちゃんの普段の反応見てたら別におかしくないでございますよ」

「確かにそうだが俺はお前がそっちを理解出来てた事に驚きだぞ」

「え？……いや超師匠も凄い事になってるんですが」

サーガの方に駆け寄った小猫に黒歌は滝のような涙を流しつつ、ゼットの言う通りレジェンドは乱菊に膝枕……正確には本来の膝枕の位置に首、太腿の辺りに頭を置かせているのでまんま太腿枕（しかし胸を目の上に乗せられ前が見えない）されている。

加えて涙目で頬を膨らませたアーシアに右腕を、クロエに左腕を抱えられ、更には「ぷんすこー」なオーフィスが右足に引っ付いており、左足には夜一が関節技をかけている状態。

そして仕上げと言わんばかりにまさかのしのぶが俗に言う『ぺたん

座り』でレジェンドの腹に乗っかっている完全包囲網。

「前が見えない上に動けん」
「別に性的な事はしませんよー」
「いや目の部分はもろにセンシティブなんですが。っていうか誰だ俺の左足に関節技キメてる奴はァァァ!!」
「ぷんすこー」
「オーフィスか!?いや、声が聞こえたのは右側でしかも現在進行形で力が込められている!!」
「ふむ、確かスピニング・トゥ・ホールドとやらはここをこう……」
「ぐおおおお!?お前か夜一ィィィィ!!」

ハーレムと言えば聞こえは良いが、両足がヤバいことになっている上に全身拘束状態のレジェンドは絶体絶命。
ゴーデスなんぞよりよっぽど手強い連中がエンディングに待ち構えているとは夢にも思わなかった。

「ん～？あけちゃんとカナちゃん、セラちゃんはいいの？くろにゃんはあそこでにゃーにゃー泣いてるし」
「ええ、後でじっくり頂きますわ」
「しのぶに比べて私はレジェンド様との時間を多く過ごせてるし、今はいいかなって」
「というよりあそこに混ざってもあんまりレジェンド様を堪能出来ないよね☆束ちゃんもそう思ってるでしょ？」
「まーねー。で、しーちゃんは何で行かないの？」
「今日は余計な連中が次から次へと湧いて出たおかげで疲労困憊なんでな。ひとっ風呂浴びたらさっさと休ませてもらうよ。あいつには朝一で具沢山のピザでも作らせるさ」

今回の激戦で間違いなく功労者の一人に数えられるC．C．はひらひらと手を振り一足先に自室へと戻って行った。

確かにレギオノイドやギャラクトロン、そしてサタンデロスを相手にした彼女としては早く休みたい気持ちの方が大きいだろう。
セラフォルーの言うことも一理あるし……と、ここで束はあることに気付く。

「そういえばろせちゃんは？まだサイバスターのコックピット？」
「うう～……ここですよ～……まだ回復してなくて……」
「だからといって私に力を使って運ばせるのはやめてください。放り投げますよ」
「「……どちら様？」」
「ヤッホーさーちゃんお久しぃ！」
「惑星レジェンドにて風を司る精霊王やってるサイフィスです。サイバスターの守護精霊として以後よろしく……えい」

驚く三人を尻目にサイフィスが風を操りロスヴァイセをふよふよと浮かせながら運んで来て――宣告通りレジェンドの方へ放り投げた。
数多の悲鳴と共にレジェンドの絶叫が響く。
何がどうなったのかはご想像にお任せしよう。

☆

本来ならばその後は祝勝会、という予定だったのだが先の出来事でレジェンドがダウンし、功労者のＣ．Ｃ．もさっさと引っ込んでしまった上、他の戦闘参加者も気力体力共にキツいということで祝勝会は後日ということになった。
実際、リアスらは夏休み直前とはいえ学園もあるし、矢的も教職にいる立場だ。
一応ダウンさせた原因としてサイフィスがレジェンドを部屋まで運ぶ事になったので、全員渋々離れる。
……オーフィス以外。

「離れてくれないと重いんですが」
「嫌。我、レジェンドから離れない。我とレジェンドはセットで通ってる」
「セットなのはさっきの青いウルトラマンでは？」

重いとか言いつつもロスヴァイセの時同様にレジェンドをふよふよと浮かせて運ぶサイフィス。

レジェンドの部屋に着くとグレイフィアが既にベッドメイクを済ませており、すぐにでも休めるようにしてあった……のはいいが、布団の中にティアマットが潜り込んでいたがオーフィスとサイフィスのフィスコンビに引っ張り出されて床に放置された。

「私の扱い雑すぎませんかね!?」
「そういうのは正妻である我の役目」
「そもそも私は貴女のこと然程知りませんので」
「そっちの女性はまだしもオーフィスはレジェンド様の正妻じゃありませんから！」

ギャーギャー騒ぎ出す三人だったが、通り掛かった卯ノ花の笑顔と共に言われた一言で黙る。

「これでレジェンド様が起きたらしばらく口を利いてくれませんよ？」
「「ごめんなさい」」

レジェンド一家の裏ボスは強かった。

☆

翌日、昨日の疲労でぐっすり眠ってしまっていた一誠達が飛び起き

てきた。

「はよはよー、珍しいね。皆揃って普段より遅いなんて。まあ、束さんはこのあと二度寝するけどね！」

「くっそ羨ましい！じゃなくて部長も病み上がりで体調万全じゃないし少し早めに出ようってことだったんスよ！ゴーデスの野郎最後の最後でこんな副産物的な事態起こしやがって！」

「イッセー君、今回ばかりはゴーデス関係ないんじゃないかな」

「確かにそうかもしれねーけどさ！そう思わねーと無理だって！」

『あながち間違いとも言えんのが悩ましいな、相棒』

ドライグの言葉に仕方なく同意しつつ、予めグレイフィアが用意しておいてくれた朝食を急いで摂るオカ研メンバー。

そんな中、未だ夢の中のオーフィスを背負いレジェンドが姿を現した。

「昨日の今日だってのに元気だなお前らは」

「「「「昨日は御愁傷様です」」」」

「そう思ってるなら助けろコノヤロー」

「いや俺らも寝坊したおかげで結構急いでて……」

「束さんは二度寝しまーす！」

元気よく応えた束にオーフィスを押し付けて椅子に座るとレジェンドは急ぐ一誠達に告げる。

「そーいやダ・ガーンと凱とボルフォッグがお前らを学園まで送るとさ。祝勝会もあるし今日はリアスや生徒会メンバー含めてさっさと帰って来い。ん？そういやアザゼルの奴もまだ寝てたがあいつも教職だろ。矢的や涼子みたく早めに出なくていいのかアレ」

「「「「……はい？」」」」

祝勝会やアザゼル云々はさておき、件の三名が学園まで送ってくれると聞いてポカンとしたオカ研メンバー。
一緒に泊まっていたソーナ率いる生徒会メンバーは戦闘に参加していたわけではないので普通に登校したようだ。

「何でそれ最初に言ってくれないんですか!?」
「俺ちょっと前に部屋から出た時、凱に会って聞いただけだもん」
「ボルフォッグさんも合体以外に別形態あったんですか？」
「あるぞ。パトカーのビークルモード」
「ダ・ガーンもそうだけどパトカーに送られるって何か噂立ちそうな……」
「そこは認識阻害かけてるからノープロブレム」
「ついでに凱さんは何に乗るのかしら？」
「俺がＧＵＴＳ時代にもよく乗ったデ・ラ・ムだ。そっちも認識阻害かかってる」

しっかり返答してやるレジェンドだったが、少し考えてみる。
ダ・ガーンのパトカーモードにはおそらく一誠（とタイガ達）とリアス、デ・ラ・ムには凱を除いてあと三名ほど、そしてボルフォッグもビークルモードだと乗員は二名。
残っているのは朱乃、裕斗、小猫、カナエ、アーシア、ゼノヴィア、そしてギャスパー……二人も余ってしまう。

「……ちょっと詰めればデ・ラ・ムに一人は入るがどうやってもあと一人分は無理だな」
「レジェくんがガンドーベルなりなんなりで送ればいいんじゃない？」
「ありゃ相乗り出来るマシンスペックじゃないだろ。出来なくは無いがオカ研の連中で俺と相乗り出来そうなのはカナエくらい……はっ!?」
「なら私がレジェンド様と一緒に乗れば解決ね！」

「あら、私も六杖光牢で固定すれば問題無いわ」
「わ、私は……あうぅ……無理みたいですぅ……」

約一名縛道使ってまで一緒に乗ろうとしている者がいるが、そもそもまだレジェンドは送るとは一言も言っていない。
結局、仕方なく送ることになったのだが争わずに済むようにレジェンドが自身のスペックをフル活用し、ガンドーベルに裕斗を乗っけていくことになった。

「あの、レジェンド様……これだと僕が針のむしろなんですけど……」
「一時の辛抱だ我慢しろ。下手すりゃ斬撃と鬼道に雷飛び交う戦場が朝っぱらから作られる羽目になるぞ」

……それプラス、ソッチ向けの薄い本のネタにもされそうな気がしないでもないが、そこはスルーしておく。

☆

無事、一誠達を駒王学園へと送り届け、レジェンドと凱、それにダ・ガーン、ボルフォッグは仮住居で寛いでいた。
レジェンドと凱は縁側に寝転んでおり、ダ・ガーンとボルフォッグは庭でロボットモードで日光浴中。
下校時も迎えに行くため、時間になれば一誠がダイレクターでダ・ガーンへと連絡を入れる手筈になっている。
期末ゆえに午前中のみの短縮授業なのですぐ迎えに行けるよう、仮住居でダベっているわけだ。

「命とのデートはいいのか？」
「何でも女性の新メンバーと親睦を深めるための女子会だそうだ。デートに関しては空の世界とか別の世界でさせてもらうさ」
「そういえば空の世界と聞いたソルダートJが『私が行かず誰が行く

!?』と興奮気味でしたが却下されて膝から崩れ落ちていました」
「そのソルダートJという者は何か空の世界に思い入れがあるのか？」
「空の世界というか、空そのものだな。ま、そのうちあいつも来ることになるだろ」

つい昨日激戦を繰り広げたとは思えないような、のんびりした会話である。

「しっかしなぁ……学園着いた時に遠くから聴こえたが、何で俺と裕斗じゃなくて俺と凱で噂されるんだ？いやそういう噂されること自体アレだけど」
「ああ、あれじゃないか？『おまえらコンビ』」
「お前が中の人ネタ持ち出してくることは完全に予想外だったよ」
「???」

ダ・ガーンとボルフォッグは意味が分からず「？」マークを飛ばしている。
ふぅ……と息を吐いてからレジェンドは両腕を枕にし、再び空を見た。

「ま、今日のところはあの蒼い空でその変な記憶を上書きしますかね」
「その話、命が聞いたらどんな顔するかな……」
「やめておいた方がいい。何となく私の勘がそう告げている」
「ダ・ガーンリーダーに同意します、凱機動隊長」

四人揃って青空を見上げ、穏やかな時を過ごすレジェンド達。

「皆で守った空だな」
「ああ、私達が力を合わせて守ったものだ」

凱とダ・ガーンは小さく笑う。

「……お前達はどうして空は蒼いのか、考えたことはあるか？」
「それは現象としてでしょうか？それとも……哲学的に？」
「後者だよ。だが、覚えておくといい。今度の修行で拠点とする世界はその答えを探すのにうってつけだ」
「光神レジェンド、そもそもそれに明確な正解はあるのですか？」
「さあな。それはお前達自身が見つけることだ」

そういうとレジェンドは目を閉じる。
レジェンドに聞いてもこれ以上は何も言わないだろうと考えたボルフォッグは凱に聞いてみた。

「凱機動隊長は分かりますか？」
「俺にも分からないな。だから皆で探しに行こう。少なくとも俺はレジェンド様の言う答えとやらが一つだけとは思わない……ってことを言っておくぜ」
「つまり我々それぞれが違う答えに行きつく可能性もある、というわけだな」
「多分な。さてと……俺もレジェンド様を見倣ってたまには二度寝するかなー」
「今朝の言動を考えると東博士からレジェンドチーフに伝染し、凱機動隊長も触発されたと考えるのが妥当ですね」
「むう、二度寝というのは実はある種の感染症だったのか。記憶しておかねば」

何故か曲解しているダ・ガーンだったが、珍しくボルフォッグも訂正せずにのんびりしている。
――どうして空は蒼いのか――
その問いはこれから彼らの辿る運命を大きく動かすものであることを、彼らはまだ知らない。

☆

それから数時間後――
授業が終わり、それぞれが帰宅準備を始めている駒王学園。

「よっしゃ！準備完了！」
「私も大丈夫です！」
「こっちも終わったよ」

相変わらず美少女二人に囲まれて嫉妬されている一誠だが、彼の想い人はリアスであり、アーシアの想い人はレジェンドだ。
ゼノヴィアも先日から少しずつサーガを意識し始めている。

「明日の日曜日を挟んで来週入ったらすぐに終業式、それから夏休みか。二人はあっち行く準備終わってるのか？」
「はい、全部ではないですけど」
「そもそも私は持っていくにしても娯楽品とかは少ないし、服とかもあちらで調達出来ると聞いているからな。とりあえずデュランダル強化のためにヒヒイロカネやダマスカス鋼は欲しい」
「いや、それゼットが偶然ごっそり貰っただけで簡単に手に入る物じゃないってレジェンド言ってたよな」
「プロテインはあるのだろうか？」
「旦那、イッセーの身体借りて飲んでもイッセーがビルドアップするだけじゃねーの？」
「じゃあアレだ、ダンベルとか鉄アレイ持ってこーぜ」
「イッセー、旦那に染まってきてねーかオイ」

授業中は静かだったトライスクワッドの三人も加わり、一層賑やかになっていく。
さあ帰ろう、と思った時に大抵『非モテーズ』なる集団（中心人物・

松田＆元浜）が妨害しようとするのだが今回はそれも無かった。
何故ならば……

「イッセー！ギャスパー拾って帰るわよ！」
「皆揃っていますわね」
「小猫ちゃんは回収済みよ～」
「……カナエ先輩、脇に抱えるのはやめて下さい」
「イッセー君、彼には連絡したかい？」

そうそうたる顔ぶれが一誠らの教室に顔を出したからだ。
正直これに喧嘩売ったら学園どころか駒王町で生きていけないんじゃないかという錯覚さえ覚える。
実際に彼女らのバックには魔王のみならず光神に始まり宇宙警備隊や銀河遊撃隊の精鋭やら何やらが（個人的に）ついているし、下手すれば宇宙の片隅でも生きていけるか不安になるレベルなのだが。

「了解です部長！っと木場の言うとおりダ・ガーンに連絡しないと……」
「部室に一旦移動しながらにしましょ。ギャスパーも待ってるでしょうし」

そそくさと教室を出てダイレクターを取り出した一誠はリアスに言われて「それもそうか」と思ったがやはりこの漢が一肌脱いだ。

「マッスル隊長よりダ・ガーンへ。一誠らの授業は終了し、ギャスパーと合流のち校門へ向かう。Ｏｖｅｒ」
『こちらダ・ガーン。了解した、マッスル隊長。これより他３名と共に駒王学園へ向かう。Ｏｖｅｒ』
「「何でそんなにノリいいんだよ!?」」
「順調に現代に染まってるわね～」
「カナエ先輩と同じですね」

「え!?」
「この間、スマホで何かのお店調べてポイントカード持って自転車で走って行きました」
　驚くカナエだが、スマホ（ウルフォン）や転移用ゲートを当たり前のように使い、ポイントカードを複数持ってる彼女はそう言われても仕方ない。
　何気に自転車まで使いこなしているし。
「だってバーゲンやってるお得なお店は毎日違うのよ!?」
「カナエ、もう現代っ子というより思考が主婦のそれになりつつあるわよ」
「あらリアス、兼業にせよ専業にせよ、カナエのように主婦としての能力は必要じゃない」
「そういえば父さんも主夫スキル高かったなぁ」
「言われてみれば師範もだ……あれ？サーガ様は？」
「レジェンド様は一人で何でも出来ちゃいますし……」
　レジェンドやジェントは当然だが、惑星レジェンドにいる時は一人暮らしな厳勝も家事能力は高い。
　サーガは一通りレジェンドが教えてはいたもののウルトラマンとしての時だけであり、今のように人の姿をとった時はまだ不安なところはある……が、一人暮らしする分には十分。
　そんな他愛もない会話をしつつ、彼らは旧校舎にある部室へと足を進めて行った。
☆
　部室でギャスパーと合流し、校門まで行くと既にレジェンド達は到着していた。
　何故かレジェンドと凱は額に湿布か冷えピタを貼っていたが。

怪訝に思ったアーシアが聞いてみる。

「あのぅ……レジェンド様と凱さん、おでこどうしたんですか？」
「いや、何でもないぞ」
「レジェンドチーフと凱機動隊長は縁側で二度寝したのですが、起きる直前に寝返りし、うつ伏せの格好で地面に額から激突落下しました」
「おぉいボルフォッグゥ!?」
「言うなよ!?絶対、命には言うなよ!?」
「手遅れです。非常事態かと思ったダ・ガーンリーダーが既に連絡してしまいました」
「ダ・ガァァァァン!?」
「凱、君が無事だと聞いたら笑っていたぞ」
「いやそれ凱が無事とかじゃなくて俺らの醜態思い浮かべて吹き出しただけじゃね!?別の意味で無事じゃなくなっただろーが!!」

ビークルモードのボルフォッグに衝撃、もとい笑劇的な事実を暴露されテンパるレジェンドと凱を見て、オカ研メンバーは命同様に吹き出した。

「何か、さっきのイッセー先輩やカナエ先輩みたいです」
「ふふっ……確かにそうね」
「しかもダ・ガーンさんも間接的に関わってますものね」
「む、私が？」
「マッスル隊長とＯｖｅｒ」

リアスと朱乃が笑いながら言うとダ・ガーンもああ、と納得する。
何にせよいつまでもここにいては他の生徒やら迎えやらの迷惑になるだろうということで、今朝と同じ組み合わせでそれぞれ乗り込み、出発準備は完了。

「二人とも、シートベルトは忘れないでくれ」
「分かってるよ、ダ・ガーン」
「気になったのだけれど、アストラル体のタイガ達は大丈夫なの？」
「体幹Ｖｅｒｙ　Ｇｏｏｄ、Ｏｖｅｒ！」
「いやソレもういいから!!」

相変わらずなタイタスにタイガとフーマが同じタイミングでツッコミを入れる。
何気ない会話と何気ない日常。
夏休みに入れば数多の異世界へと修行に出るが、向こうでもこんな風にいられるだろうかと考えた一誠は、残っていた不安もすぐに吹き飛んだ。
隣には大切な人が、最高の相棒（バディ）達がおり、師匠や兄弟子を始め頼もしい仲間もいる。
如何なる困難が立ち塞がろうと、彼らと共に立ち向かえば乗り越えられると信じ、まだ知らない『明日』へと踏み出そう。

まだ見ぬ新しい世界に期待を込めて――
「よーし！ダ・ガーン、出発進行!!」
「了解!!」
彼らは、今日も一歩先へ進んでいく。

――第一部・終幕――

〈幕間・其ノ三へ続く〉

幕間・其ノ三
彼らのとある一日

祝勝会が盛大に行われた翌日。
日曜である本日が終われば明日は週明けと同時に終業式だ。
その後は準備の最終確認を経ていよいよ異世界……一先ずは我夢や藤宮のいる「空の世界」へと移動し、そこを拠点として様々な世界を巡りつつ修行を行う予定。
よって、彼らにとっては今日がこの世界でのんびり過ごせる最終日となる。
最終日とは言っても当面の間、異世界で過ごすためで帰って来ないわけではないが、余程ではない限り一時的に様子見で戻ることはあってもとんぼ返りするだろう。
そんな彼ら……今回は主にオカルト研究部のメンバーが今日という日をどうやって過ごすのか見てみよう。

☆

「ふう……『弾かれる』現象に関しては未だ解決の目処は立たず、か。今のところは落ち着いているがいつ何が起きるか分からんのも事実だな。引き続きこの件に関しては各方面で調査続行するとして……」

朝早く、それこそグレイフィアを筆頭とした生活班が朝食の準備をしている時間からレジェンドは一人、ダイブハンガーの作戦指令室にて書類を拝見している。
最高位光神は何かと忙しいのだ。

「おはよ～ございます～……」

寝ぼけ眼で目を擦りつつ作戦指令室へと入室してきたのはセラ

フォルーとガブリエル。
二人ともそれぞれ魔王とセラフという立場の上、こちらでも仕事する条件で同居しているのだからサボるわけにはいかない。
なお、ガブリエルはともかくセラフォルーは他の魔王同様趣味を優先しがちだったが、レジェンドと一緒に仕事をするようになってから割と真面目になったとレジェンドはソーナから感謝されている。

「レジェンド様、スペリオルドラゴン様からの報告書です」
「ありがとう、ガブリエル。どれ……『システム』権限その他の移行は全て完了。一先ずは目的を達成、後はミカエルや初代シャッフル騎士団らと相談の上、突き詰めていく感じ……か。妥当なところだな」
「こっちの報告書も出来ました☆」
「拝見しよう、セラフォルー。ふむ……三大勢力会談の時の事件に加えて先日のゴーデスとの決戦がプラスに作用してるようだ……が、やはりと言うか頭の固い連中はあれだけの成果を見ても尚悪魔こそが至高の種族という見解を変えんか。近々アルバスを交渉の場に赴かせるが、最悪の場合も想定していた方がいいぞ、セラフォルー」
「最悪の場合……？」
「ああ、アルバスから連絡があった。俺達の異世界修行に間に合うよう、あいつが先日帰還したらしい。交渉に向かうアルバスの護衛を務めると言ったそうだが、真の目的はアルバスが説得交渉をしてもその考えを改める気配が無いとあいつが判断した場合、その悪魔達は終焉を迎えることとなる。眷属や、下手すれば家族や部下を始めとするそいつの関係者全てがな」
「!?」

レジェンドの言葉にセラフォルーのみならずガブリエルさえ戦慄する。
実際のところ、悪魔至上主義を掲げている古参の悪魔は少なくはなく、その者らと関わり合いがある者も同様だ。
それら全てが終焉を迎えるとはどういう事なのか？

「俺からも抑えるようには言ってあるが、それでもその古臭い考えを捨て切れん連中の息がかかった奴らは根こそぎ滅ぼされるだろうな。十中八九、冥界の大改革は必要となる。早めに打診しておく事を勧めるぞ」
「……サーゼクスちゃんも言ってました。長い年月の中で凝り固まった思想を解きほぐすのはかなり厳しいって」
「事実だ。今回に限って言えば今まで自分達が信じていたものと丸っきり逆と言っても過言ではない。しかし、それを受け入れて未来を見据えねばならない時期が来たというわけだ。実際、天界でもあのアホの独裁政権から神と天使が協力してより良い方向へ人間達を導く……いや、共に歩もうという姿勢になって来ている。悪魔や堕天使も意識を入れ替えねば待つのは破滅だけだ」

現にセラフォルーは考えや態度を改めてよく働いている、とレジェンドが微笑みながら頭を撫でてやるとセラフォルーは頬を赤らめつつも嬉しそうに笑った。
その光景に少しばかりジェラシーを感じたガブリエルもレジェンドにさり気なく頭を押し付けると、困ったように笑いつつ同じように撫でてやる。

「それにだ、確かに冥界自体が大きく動く事になるだろうが、逆にそういう時にこそ他の勢力を頼ればいい。共に未来へと歩むためにという名目でな。まあ、多少なりとも見返りは必要かもしれんが」
「それの交渉はその時ですね☆」
「そういう事だ。備えておくのは悪いことではないが、それに捕らわれすぎて他に向ける視野が狭まっては元も子もない」

とりあえずはここまで、と書類を纏めてファイリングした後、レジェンドは今日何をしようかと考えて始める。

「……そういやロスヴァイセのファミリアも作らんとな」

この結果、しのぶがまた頭を悩ませる事になるとは思っていなかったレジェンドであった。

☆

そして朝食の時間。

ダイブハンガーでは朝の戦争の時間である。

基本的にダイブハンガーでの食事は各部屋に備え付けのキッチンで自炊するか、はたまた誰かが趣味で開く売店で買うかしない場合は食堂ないしリフレッシュルームでバイキング形式で取ることになる。

食材の確保手段は勿論、料理する人数も多いので用意する量は問題なく、残り物が出ることも少ない。

何故ならオーフィスやゴジラ、夜一に三日月などの大食い面子が余った料理を食べ尽くすからだ。

最近そこに杏寿郎や蜜璃などのメンバーも加わっている。

「むぐむぐ……」

『ガツガツ……』

「ずごごごご」

「はむはむ……」

「「「「ちょっと待て一人音がおかしいぞ!?」」」」

「うまい！うまい！うまい！」

「んむ～幸せ～」

最後の二人は片やパム治郎が傍でお茶漬けを食べ、片や小芭内がほんわかした表情で見守っていた。

この際、夜一が出していた謎の音は気にしないでおく。

「そーいや今日は全員揃って暇だよな。この後どうすんだ？」

レイトが厳勝に倣ってこんもりと葱を入れた納豆御飯を食べながらその場の面々に聞く。

☆

最初に応えたのはリアスだ。

「私達は昨日皆で話し合ったのだけど、異世界に行くまでは体調管理の為にダイブハンガーで過ごすことにしたわ。確かに異世界へ行けるのは楽しみだけれど、その目的は基本修行でしょ？初日から予想外の事態が起こらないとも限らないし、すぐに休めてある程度訓練も出来るダイブハンガーで過ごすのが一番良いのよ」

「まあな。トレーニングルームもシミュレーターもあるし」

「それに折角シミュレーターでシナンジュを引き当てたのだからマリーダ姉様やイッセー達と特訓したくて仕方ないの」

「「「「シナンジュゥゥゥ⁉」」」」

まさかのパイロット達にとって爆弾発言をあっさり言い放ったリアスに大半の者が驚愕した。

かくいう先日の体験時には使っていなかったはずだが……。

「ああ、そういやシミュレーターじゃ最初に引き当てたやつ以外に量産機はある程度使えたっけ。シナンジュってことはジオン系……あん時はリアス、ギラ・ドーガだかギラ・ズール使ってたよな」

「マジっすか部長⁉大当たりじゃないですか！」

「確かゼットから聞いたけど赤くて角付きって指揮官用かつエース機だよな……イメージカラーも含めて部長なリアスにピッタリだ」

「ありがとう、イッセーにタイガ。そういうわけだから、特訓付き合ってくれるかしら？」

「「勿論!!」」

「なら俺も隊長兼先輩として特別にコーチしてやるぜ。ビシバシ行くから覚悟しろよ！」

とりあえずレイトとマリーダ指導の元、リアスと一誠、そしてタイガはシミュレーターでの特訓をすることになった。

それが功を奏し、シミュレーター内での機体がそれぞれ、一誠は量産型ゲシュペンストＭｋ―Ⅱ改へ、タイガはゲシュペンストＭｋ―Ⅱ・タイプＳへと乗り換えることとなる。

「やったじゃない二人とも！イッセーのはバージョンアップ仕様で換装可能なのね。『兵士』の特性みたいで良いと思うわ。個人的にはタイプＧが似合うんじゃないかしら」

「タイガのやつは量産型じゃねえゲシュペンストＭｋ―Ⅱのスーパーロボット寄りのタイプか……やべえ、この『究極！ゲシュペンストキック』とかいうのすげえやりたいんだけど」

「では私のクシャトリヤとお前達四人で模擬戦してみるか」

「「「……え？」」」

本気のマリーダ相手にボコボコにされたレイト達であった。

そして最後まで生き残った彼はこう語る。

「何だよあのファンネルの数……」

ちなみにレジェンドや彼女の隊長であるアムロは平然と全て破壊するという。

やっぱりおかしいよあの二人。

ついでだが、バンシィ・ペルフェクティビリティに乗ったマリーダは更に鬼畜な戦闘力であることを彼ら四人はまだ知らない。

☆

次に、アーシアと朱乃はレジェンドにくっついて格納庫に来たが、そこで目にしたのは巨大なキャンピングカー。
ポカンとする二人を他所に、レジェンドは凄まじい速さでそのキャンピングカーを整備していく。

「完全な特注品だからちゃんと整備点検しとかないとなー……よし、車としては問題無し。あとは車内だな」
「あ、あの！私達もいいですか？」
「ん？別に構わん……というかそれ目的で付いてきたんじゃないのか？」
「全く分かりませんでしたわ」
「マジでか」

二人を伴って車内に入ると、そこはもはやキャンピングカーというより豪邸の一区画と言わんばかりの内装。
キッチンや冷蔵庫からベッドに至るまで、そこで暮らしたら下手したら外に出たくなくなるんじゃないかと思うほどの設備の充実ぶり。
ギャスパーあたりは本気で住み着きそうである。

「はわぁ……！」
「俺は立場上あちこちの異世界に行くからな。当然旅の途中で野宿することもある。そんな時に使おうと思ったのがキャンピングカーだ。こんな大きさだし、普通の世界ではあまり使えんのが欠点だが、その分性能は折り紙付きだぞ。ぶっちゃけると機動兵器に使っている技術や材質を適材適所で可能な限りぶっ込んだからな」

マジでなんつーとこに本気出してんだこの御仁……と、ここで朱乃が気になったことを聞いてみる。

「それだとお値段とか、凄いことになったのではないですか？」
「まあな。総額にして２５８億７８００万だ」

「えええええええ!?」

ロスヴァイセが聞いたら昇天しそうな金額である。

なお、現実で最も高額なキャンピングカーは約３億４０００万円。

……その約７６倍という一般人どころか大富豪でも買えるかどうか分からん代物だったりする。

そんな額を平然と言い放つレジェンドの財産が如何ほどなのか知るのが不安になってきたので、二人は今後そこには触れないよう誓ったそうな。

しかしやはりと言うべきか、早速このキャンピングカーを使う事態になるのはそう遠くないということを彼女らは勿論、レジェンドも気付きはしなかった。

余談だが、戦車一台１０億円と考えるとレジェンド所有の特注キャンピングカーがどれだけぶっ飛んだモノか御理解頂けると思う。

☆

小猫はサーガと一緒に束の元を訪ねていた。

「それでは既に機体は……」

「出来てるよ。どっちに乗るかわかんなかったから調整はまだなだけで、終わり次第すぐに戦線投入可能。まあ、あの戦闘能力で元が対話用だっていうのはにわかに信じがたいんだけどね」

「ダブルオークアンタフルセイバー……俺のこの姿のベースとなった人物が乗っていた機体の武装追加版か」

「レイトさんの機体と名前が同じダブルオーなんですね」

「元々ダブルオークアンタ自体ダブルオーライザーの後継機だからね。さっきも言ったけど対話の為の機体らしいんだよ。クアンタムシステムとかいうの作るの面倒くさかったなー」

結局作ったけど、と束は続けてカラカラ笑う。

一枚一枚資料を捲り熟読するサーガに対し、小猫は浮かない顔をしている。
姉である黒歌は新たにソウルゲインという力を手に入れ、レジェンドのネオ・グランゾンと共に戦うどころかウルトラマンとも肩を並べることが出来るようになった。
（でも、私は専用機どころか満足に操縦さえ出来ない）
以前の初めての訓練では量産型ゲシュペンストＭｋ―Ⅱをしっかり操縦出来ていたが、あれから他の機体やパイロットとのスペック差を見て愕然とした。
特にゼットなどは圧倒的性能差がある敵機に対して幾度となく勝利を掴み取った程であり、小猫も試しにやってみたところ、ノイエ・ジール相手では手も足も出なかったくらいだ。
それに対し、ゼットは先日遂にシロッコの駆るジ・Ｏをほぼ引き分けに近い形……戦闘不能になりつつもガンダムで撃墜するという偉業を成し遂げている。
「しろにゃんどーしたのー？あ、自分の力不足で悩んでるカンジ？」
「わかるんですか？」
「……見ればわかる。何より纏っている空気が普段と違う」
束に続いてサラッと言ったサーガに驚くも、また顔を俯かせる小猫。
「まーくろにゃんは前々からソウルゲインソウルゲインとにゃーにゃー言ってたしねぇ。それ動かしたいがために必死で訓練してたから」
「……私は黒歌姉様ほど情熱も無ければイッセー先輩やタイガさんのように操縦訓練に熱心なわけでもなかったので」
「そこは人それぞれだよ。やりたくないことを無理にやったところで

結果なんて出やしない。しろにゃんがくろにゃんの真似したところで成績差は火を見るより明らかだね」
「……はい」

　束の容赦ない指摘に更に沈む小猫だったが、見終わったのか資料のファイルを閉じたサーガに声をかけられる。

「守るべきもの、守りたいものもまた人それぞれだ。そして戦う理由も同じ、戦う者の数だけある。自分自身の守りたいものや戦う理由を理解して向き合い、自分にとっての答えを見つけた時、それが本当の第一歩となる」
「自分にとっての答え……」
「焦る必要はない。ここ数ヶ月は熾烈な戦いが多く激動の日々だった。これから少しずつ考えていけばいい」

　サーガに穏やかな表情でそう言われ、小猫は漸くいつもの彼女らしさを取り戻す。

「はい、頑張ってみます」
「ああ」
「悩むしろにゃんにシミュレーターでお試し体験！その名もフェアリオン！同型機にはアーちゃんを予定してるから、二人合わせてロイヤルフェアリー！」
「嫌です」
「あれぇっ!?」

　ノリよくぐるぐる指紋を見せつつサムズアップした束の案を一発で跳ね除けた小猫。
　しかも即答である。

「何でえ!?この時のために昨日の祝勝会でパワさんリブさんに踊って

もらったのに！」
「あのお二人に何させてるんですか!?」
パワさんリブさん……即ちケンイチ・カイの姿をとったパワードと青年リブットの師弟コンビのこと。
増援組は暫く滞在するヒカリを除き、レジェンド達が空の世界へと出立する日まで滞在することが決まったのだがその矢先にこれである。
なお、ジャック・シンドーことグレートは何かを察し光の速さで物陰に隠れていた。
「束、おそらくだがフェアリオンにはまだ足りないものがあるんだろう。俺が見たところそれは……」
「それは!?」
「猫耳と尻尾だ」
「なるほど！くろにゃんしろにゃんだもんね！」
「違います」
天然なおかげでサーガも大概であった。
☆
裕斗とゼノヴィアは先日ゼロガンダムに弟子入りしたイリナも伴って自主練するため、トレーニングルームの一室に来ている。
そしてそこにいたある者を見て裕斗を除く二人は戦慄した。
何故ならば……
「さすがウルトラ兄弟屈指の武闘家、次元が違う」
「生身でこれってもう反則じゃねーの？」
タイタスとフーマがある人物の出したパンチ力・キック力測定装置

の記録を見ていたからだ。
その記録を出した本人もそこにいる。
そしてその正体は……

○おおとりゲン
【パンチ力】　一回目：４４０．５ｔ　二回目：４５０．３ｔ
【キック力】　一回目：６４３．９ｔ　二回目：６５１．２ｔ

バグキャラだった。

「いやいやいやいやそれはおかしい!!」
「やっぱり凄いなあ、おおとり師範」
「!?」

ゼノヴィアとイリナは信じられないものを見る目で裕斗を見るが、裕斗としては初めて会った時に行われた模擬戦でゲンのチートぶりを体感しているので別にどうも思っていない。

「お、裕斗にゼノヴィアじゃん。あと……誰だっけ？」
「う～む……確か三文字だったはず……そうだ！ペドロ!!」
「イリナだよ!?」

裕斗達に気付いたタイタスとフーマだが、何故かイリナの名前をペドロと間違える始末。
イリナとしては消し去りたい程の黒歴史なのだが、ペドロそのものインパクトが大きすぎて消えてくれない。

「これではまだまだチーフの足元にも及ばんな。俺も修行を積まなければ」

「いや比べる相手が間違っ……ちょい待ち、レジェンドってそこまで化け物なのか!?」
「ああ。基本的に『本気のパンチやキック＝相手は死ぬ』の方程式が設立してしまうくらいだからな」
「「何その一撃ヒーロー!?」」

実際それでかのファイナルリセッター・ギガエンドラが一発で木っ端微塵になったのだからそう思われても当然だろう。
それからもう一つ。
あの有名な最高最善の魔王の基本スペックはパンチ力とキック力がそれぞれ１０８．３ｔと３２４．９ｔである。
そういえばゲンがブッ飛ばしたカテレアも旧が付くけど魔王の血筋だった。
魔王は魔王でも畑違いだが。

「これは赤龍帝が勝てないと言うわけだ……」
「イッセー君が変わった理由が分かる気がするわ」
「おおとり師範、父さんもやったことあります？これ」
「ジェントさんか。パンチ限定だがやったことあるぞ。人間大サイズで驚異の８８０．７ｔだ」
「「え〝」」

あの体格で七星剣の中でも大きい『破軍』を振るうのだしそれくらいでも別に変ではないが、教会出身の二人は顔色がヤバイ事になっている。
そして彼女らは後に思い知る。
ゲンを鍛えたモロボシダンことウルトラセブンのシゴキは常軌を逸した鬼畜レベルの難易度だと。

☆

最後にカナエとギャスパー、それにしのぶはリクにある話を聞いていた。

「「ポケットモンスター？」」

「うん。縮めてポケモンっていうんだけど、その生き物がいる世界で僕と父さん、レジェンドさんは冒険したんだよ」

「やっぱりモンスターっていうからには凶暴で怖かったり……!?」

「まあ、そういうのもいるにはいるけど全部じゃないよ。ほら、レジェンドさんがパートナーにしてたのはこのピカチュウっていうやつ」

リクのウルフォンにはそのピカチュウを肩に乗せたレジェンドが何か盛大に祝われている映像写真が映されている。

他にも何体かいるようだが。

「え!?何この子可愛い!!」

「ホントですぅ！あ、よく見るとリク兄さんともう一人……」

「こっちが僕の父さんね。で、こっちが僕のパートナーのカイリューのリュータ。こっちの黒いのが父さんのパートナー、サザンドラのザラキーマ」

「ものすごく物騒な名前なんですが!!」

「いやだってホントに父さんがこの子出すと確実に相手詰むからね。確か何処かのリーグでチャンピオン相手に初手から出して六匹全完封したぐらい強いから。伝説級でも太刀打ち出来ないし、勝てるのレジェンドさんのピカチュウだけじゃないかな多分」

なおレジェンドのピカチュウはこのベリアルのサザンドラにさえ圧勝する、もはや本当にピカチュウなのかすら疑問になる程の戦闘力を持つ生態系を無視したナニカであるという。

それピカチュウの革を被った新種のゴジラじゃないだろうな。

「レジェンド様、そういう方面でもおかしかったのね」

「あれ？そういえばさっきからしのぶさんが静かなんですけど……」
「ああ、多分しのぶは全身に毛の生えた動物が苦手だからこのピカチュウって子が……しのぶ？どうしたのあらぬ方向を……」

黙ってしのぶが顔色を青くして指差した方向には……

「あ、リクさん達こんにちは」
「フニャ～ァ……ンニャ……？」
「ロスヴァイセ、お知り合いニャ？」

見事にもふもふな猫を二匹、ロスヴァイセが抱えていた。
しかも片方なんか喋った。

「すいませんロスヴァイセさんその子達抱っこさせて下さいお願いしますふかふかスーハーしたいです」
「リク兄さん！カナエ先輩が壊れましたぁ!?」
「レジェンドさんのピカチュウの後だからなおさらだったかー……って、しのぶちゃんが消えた」

指差した本人は限界だったのか、脱兎の如くその場を離れてレジェンドを探しに行ってしまった。
元鬼殺隊最速は伊達ではない。
カナエの方はロスヴァイセから眠たそうな一匹を抱かせてもらってご満悦。

「はぁ～……幸せ……」
「ニャ～……」
「何かあそこだけ幸せ空間出来てるね。和むからいいけど……で、どうしたの？この子達」

「ええ、この子達は私の精神の一部を切り離して作ったファミリア……使い魔ですね。サイフィスに協力してもらって先程作りました」
「え？使い魔なんですか？」
「はい。悪魔が従えるのとは違い、自分の分身みたいなものなので主が命を落としたりすると生命活動が停止したりするらしいんです。あとはサイバスターの武器の一つを使うにはこの子達が必要だと」
「へえ……でもなんで猫？」
「ちょうどイメージしやすかったから、といいますか……北欧出身ですけど狼だと私らしくないみたいで」

早い話、色々とサイバスター絡みの結果らしい。
カナエに抱かれているのんびり屋なノルウェージャン・フォレストキャットの雄がハク、ロスヴァイセに抱かれたままのサイベリアン・フォレストキャットの雌がフウという名前とのこと。
予想外なところで家族が増えたが、二匹とも良い子だったため難なく受け入れられた。

「しのぶはやっぱり駄目みたいね」
「パム治郎君は平気になってきたけど……あの子達はまだ無理……！」
「パム～？」
「そういえばリク兄さん、リク兄さん達のポケモンは今どこにいるんですか？」
「実はガーディアンベースにポケモンスペースを増築中で、今は惑星レジェンドの島の一つで僕達がゲットした皆が暮らしてるよ。勝手に家とか旅館とか建ててた」
「「「技術力凄い!?」」」

だって、レジェンドとベリアルとリクのポケモンだもの。
ちょっぴりシリアスはあったが何もなく平和な、彼らのある一日の

出来事。

〈続く〉

ゴーデス戦後の各勢力

さて、前回とは違い今回はウルトラ戦士が属する光の国、銀河遊撃隊を中心に三大勢力以外の現状を見ていこう。

☆

――M78星雲・光の国――

「そうか、遂にやってくれたか」

『ああ。お前の孫でタロウの息子のタイガやセブンの息子のゼロ、俺の息子のジードも大層な活躍だったぜ。特にタイガは新形態に新装備まで引っさげて復活したからな』

「……復活？」

ウルトラの父はウルトラ六兄弟も伴ってベリアルからの通信を受けていた。

そんな中、ベリアルが言った単語にタロウが食いつく。

「ベリアルさん、タイガが復活って何ですか、何があったんですか!?マイサンタイガに一体何がァァァ!!」

「落ち着けタロウ！今こうして普通に通信しているということはタイガは無事だということだ！」

『あー……いやな、ゴーデスに一度仮死状態にまで追い詰められて』

「グゥォオオオオデェスゥゥゥウウウ!!!」

怒りのあまりタロウがウルトラダイナマイト状態と化した……いやソレ寿命二年縮まるけど大丈夫か？

と思ったがレジェンド効果で体力の消耗のみになっていた。

『すまねえ、言うんじゃなかった』

「いやむしろ黙ったままの方が悪化していただろう。とりあえず落ち着けタロウ！そのままだとタイガに嫌われるかもしれんのだぞ!?」

「……チーン」

「「「「タロウー!?」」」」

『効き過ぎだろ!?どんだけ親バカなんだよ！』

「いや、タイガの訓練生時代に『自分の息子だからと言われてほしくない』と厳しくした反動というか、宇宙警備隊に所属してくれるかと思ったら銀河遊撃隊に行ってしまって寂しくなってしまったからというか……」

『その点、セブンは笑顔で送り出したよな』

「我が子が晴れ舞台に上がったのだから、普通はそうなのだろうが」

セブンとタロウ（とついでに自分達）の温度差をしみじみと実感しつつ、一先ずスン……なタロウを放置して各種報告に移る。

『師匠の右腕からこっちにも礼が来てな、ゴーデスの奴は身体作られた挙げ句小さくされ、その状態で地獄の最下層に呪い付きでブチ落とされたそうだ』

「ああ、彼か。何となく目に浮かんでしまうあたりさすがお師匠の懐刀というべきか」

『亡者に容赦ねえからな、あいつ。逆に生きていようが外道に容赦ねえのが師匠だ。ついでに亡者にも容赦ねえあたりあいつより遥かにやべ……いや、外道以外にも容赦なかったわ師匠』

主に被害者でもあった弟子の二人は頷き合って終わりにする。

ゴーデスは地獄行き、それでいいのだ。

『それから師匠達の異世界行きの日程も大体決まった。確か世話焼いてる連中の終業式終わって最終準備してからとか言ってたから、遅くとも一週間以内にはこっちを立つ予定だな』
「空の世界、でしたね」
「聞いた限りでは空路が当たり前らしい。我々みたいな単独で飛行可能な者はだいぶ重宝されるようだ」
「それだと海を始めとする海路は？」
『大きい湖とかは割とあるが、あっちに行ったアグルからの情報じゃあいつの知る限り島単位で海があるのはアウギュステ列島とか言う所だけらしい。もっとも別の空域には行ってねえとか何とかでそこ以外にあるかもとは言っていたがな』

時間の流れが違うとはいえ、遊撃隊には我夢や藤宮から定期的に報告が届く。
それらに一通り目を通していたベリアルはそういった知識も交えて彼らに説明する。

『……それからそっちで悪い知らせがある』
「悪い知らせ……？」
『アグルの奴が向こうで得体の知れない怪獣や、根源的破滅招来体の送り込んだ金属生命体とやり合った。現地の守り神……星晶獣リヴァイアサンとかいうのと共闘してブチのめしたそうだが、連中の手はあっちにも伸びていると考えた方が良さそうだ。現に怪獣の方には金属生命体は手出ししなかったらしいからな』

ベリアルの報告にウルトラの父や、復活したタロウを含むウルトラ六兄弟は驚愕する。
そしてさらに凶事は続けられ――
『もう一つ、そっちやゴーデスとは別にトレギアの奴が見つかった。詳しい居場所は不明だが、相当イカれた連中と組んで色々やってるよ

うだ。こないだのゴーデスと同時期に師匠らの仮住居がある町を襲ったのもあいつらの派閥だとよ』
「!!」
（つたく予想通りの反応しやがって）

これにはタロウが酷く動揺した。
ベリアルとしては元々予想しており、タイガが宿主としている一誠……赤龍帝と対立している白龍皇を連れ去ったのもトレギアだということは伏せている。
それは明確にタイガとトレギア……息子と親友が敵対し、狙っているという証明になるからだ。
隠すのも遅い気はするが、これだけならまだタイガを狙っているとは思わないだろうというベリアルの細やかな心遣いであった。

「……そうですか……トレギアが」
『ウチのお人好しな鬼畜師匠は無理を承知で連れ戻す気だとよ。だから絶望すんじゃねえぞ、タロウ。その師匠に鍛えられたゼロもぶん殴ってでも正気に戻すと意気込んでるからな』
「お師匠の表現が色々とハチャメチャだな」
『仕方ねえだろ、あれをどう表現すればいいんだっつーの』
「違いないな」
『だろ？』

最初は悩んでいたタロウだが、一度は悪の道に落ちたベリアルも今はこうして父と笑い合い、銀河遊撃隊総司令官として平和のために尽力し息子と冒険したりしている。
ならば次は自分の番だな、とタロウは気持ちを新たに一人頷いた。
「……ではグレートらが戻って来た後、次に向かうのは私が――」
「「「「いや、お前は駄目だ」」」」
「何故に!?今の流れで完全に私が行く的な雰囲気じゃないですか!?兄

さん達に父さんも！」

トレギアについて綺麗に纏まったのはいいが、ここにきて別の事でまた揉め出した。

「だってお前筆頭教官だろ」
「そこはセブン兄さん代わって下さい」
「何で俺なんだ。俺は元恒点観測員だぞ。俺の父親が勇士司令部の長官だからって俺がエリートとは限らんぞ！」
「いや、ウルトラ六兄弟とか言われてる時点で我々はそう捉えられても仕方ないのでは？」
「そう！正にジャック兄さんの言う通りですよ！」
「というわけでヒカリと私の父のパイプ役が出来て、かつシェムハザの心労を軽減する為に私が向かいたいのですが」
「そこでサラリと自己主張するなジャック!?」
「とは言いますが、ゾフィー兄さんがいなくなってからアザゼルがやらかしまくってシェムハザはその火消しに西へ東へと大変だったようですよ」
（アザゼルうううう!?）

ゾフィーは心の中で親交を深めた友にツッコんだ。
確かに当時アザゼルの所業についてジャックに愚痴っては慰められるシェムハザを何度か目撃した事はあったが、まさかそこまでとは。

「父さん、一時的でいいので頃合いを見て私を行かせてくれませんか？順調に成長しているゼットを一目だけでも見ておきたいので」
「そうだな。検討しておこう」
「「「おいエース（兄さん）!?」」」
『あれだ、エースはお前らと違ってスポット参戦的な感じだからだろ。少しはマンの奴を見習え』

「いや、私はさしあたってすぐ訪問する理由も無いのですが。天界はスペリオルドラゴンがミカエルと共に良い方向へと改革しているようですし」
（あー……なるほど。そういやマンとエースは天界で世話になったんだったな。現状三大勢力で一番マシな進み方してる連中だから焦って突撃する必要も無いってわけか）

他の四人は、悪魔→派閥がごちゃごちゃしている上に問題が多い、堕天使→トップが自由過ぎて副総督以下が苦労して部下も勝手に動く……と、確かに天使に比べて些か面倒な勢力で世話になっていた。
冥界にはダンブルドアが赴く事になってるし、今回の件でヒカリも堕天使側へ向かったので幾分状況は変わると思うが……。

『まあ、何だ。あとは帰還してくる奴らを含めてそっちで話し合って決めてくれ。タイガ達とその宿主の事を考えてレオや８０、メビウスは現状維持だろ？元々８０は常駐確定してたけどよ』
「そうだな。正直、今行っている誰かを残すか、マンとエースどちらかを行かせた方が良い気がするんだが」
『ゾフィーはどうなんだよ？』
「そのアザゼルという人物のブレーキ役ぐらいにしかなりそうにない上、宇宙警備隊隊長までいなくなるのはマズい」
『そりゃそうだ』

ウルトラの父による、ある意味前半も合ってそうなゾフィーの評価にベリアルは苦笑しつつ「じゃあな」と通信を終え、ウルトラの父とマン、そしてエースは次は誰が行くかで言い争っている他の四人に頭を抱えるのであった。

☆

――ガーディアンベース――

通信を終えたベリアルは、休む間もなく次の予定を立てている。

「ティガは異世界で任務の真っ最中、ダイナとオーブは一度こっちに戻して各種報告をさせた後、休暇を与えて他の任務……っつーかオーブは自由にさせるか。最近あいつ師匠の周り彷徨いてるし。そんでガイアとアグルは引き続き空の世界での活動を続行して……問題は留守番役としてダイブハンガーに誰を送るかだな」

誰にするか……と書類片手に頬杖をつき悩むベリアルの元へある人物がやって来た。

「ベリアル総司令、今大丈夫だろうか？」

「お、ジャスティス。どうだったデラシオン側の返答は」

「ああ、この件について協力を惜しまない、とのことだ。規模が規模だけに宇宙正義として見過ごせないと」

「だろうな。【エリア】レベルじゃ師匠達だけだと手に余る。今は落ち着いちゃいるが何かの拍子に彼方此方で爆発するんじゃねえかとヒヤヒヤしてたところだぜ、『弾かれる』って現象はよ。不幸中の幸いかは知らねえがウルトラマンはその対象にならねえみたいだから他所のウルトラマンがこっちに来る事が無いのは救いだがな」

レジェンドがノアやキングと共に現在も調査中のこの現象に関して、調査範囲の拡大のためにデラシオンへと出していた協力要請は問題なく可決されたという。

「これでちったぁ肩の荷が下りたな。あとはこっちか」

「それは？」

「今度暫く師匠達がここ以外の世界で修行も兼ねて旅すんだろ？その間の留守番役でダイブハンガーに降ろす奴を選定してるんだが……」

色々と癖がある奴ばかりだからな、と続けてベリアルは書類を机に

置いた。
「まあ癖云々は俺が言えたセリフじゃねえけどな」
「私も自分の事ながら面倒な性格と自覚しているが……」
「ゼロやジードがいるとはいえタイガ達やゼットをそのままには出来ねえし。ダイナにしろオーブにしろ大仕事終えて戻ってくるんだから休暇の一つもくれてやらにゃマズいだろ。マジでどうすっかな……」

そんな時に人間用の扉が勢いよく開き、ある二人が入って来た。

「ならそこは俺達！」
「湊兄弟にお任せあれ！」
「チェンジで」
「「あれ!?ってジャスティスさん!?」」
「気付くの遅ぇよ」

湊カツミと湊イサミの通称ルーブ兄弟（別名・カップラーメン事件の元凶）。
そしてそれを追いかけて来たのが出自にちょいと訳ありな湊家の末っ子の湊アサヒ。

「カツ兄もイサ兄もベリアルおじ様に迷惑をかけちゃ駄目です！」
「いやその気遣いは嬉しいけどよ、せめて総司令かさん付け程度にしてくれ」
「え？駄目ですか？おじ様」
「最初は問題なかったんだがな、最近ケン以外の同姓同年代が血涙出して俺を見てくるから怖ぇんだよ」
「「確かにそれは怖い」」

こてん、と首を傾げるアサヒに申し訳なさそうに言うベリアルと、

その理由に納得してしまうイサミとカツミ、そしてジャスティス。
実際、過去色々あったとはいえ現在はウルトラの父と同格ながらも気さくで話しやすいなど、光の国でのベリアルの人気は高い。
加えてグリージョ……つまりアサヒの人気も高いため二重の意味でベリアルは嫉妬されているわけだ。
主に独身から。

「ったく今更俺は結婚もクソもねえってのに何で独身連中から代わる代わる嫉妬絡みの模擬戦挑まれなきゃならねーんだっつーの」
「悪循環だよねえ。結局そこでベリアルさんが格の違い見せつけてベリアルさんの人気が上がるだけなのに」
「……これ総司令とトレギア以外に闇堕ちウルトラ戦士が出てくる流れじゃね？」
「おいやめろカツミ。ノアかキングの【エリア】の俺はそうやって闇堕ちした気がする上にこっちでそんな理由で悪トラマンが現れたら俺はどんな顔すりゃいいんだ」
「笑えばいいと思うよ」
「よしイサミお前ちょっと黙っとけ」
「こういう時こそハッピーなことを考えるんです！ハッピーは全てを幸せにします！」
「何だろう凄く良い娘なのは分かるけど別の意味で暴走しそうっていうか……

ツッコミ足んねーよ!!」

さすがレジェンドの弟子、やはりツッコミ属性なベリアルであった。

この場で割と常識人なジャスティスはツッコミ力不足というか……それはさておき。

「で、何で駄目なんですか総司令？」

「まあちゃんと理由があってな。お前らはコンビで真価を発揮するタイプだろ、タイプチェンジ然りルーブ然り」

「うん」

「だとしたらトレギアの奴はそこを突いてくる。あいつは頭脳派だからな、弱点を当たり前のように狙ってくるぞ。それに対抗するには単独で戦闘能力が完結してる奴の方が望ましい」

「つまりＴＫＧ三羽烏の方々みたいな人ですね！」

「ああ、そう……ちょっと待てそれ言うならＴＤＧ！ＴＫＧは卵かけご飯の略だ！いやあいつらもソレ好きだけどな！」

これアサヒも天然ボケタイプじゃねーかとベリアルは額を抑えるが、そこに救世主と呼ぶべき者達が駆けつけた。

「何かベリアル総司令がやたらツッコミしてる声が聞こえてきたんだけど」

「……ってまたお前らか湊三兄妹」

礼堂ヒカルとショウ――即ちウルトラマンギンガとウルトラマンビクトリー。

二人はそれぞれが単体で戦力として完成しており、ビクトリーの方はナイトティンバーによる強化形態もある。

ギンガの方はタロウの助力が必要だが、別に強化形態にならずとも相当な戦闘力があり、ゼロ不在時はニュージェネレーションのまとめ役となっている。

「ちょうどいい。ヒカル、お前師匠達が異世界に行くのと入れ替わる形でダイブハンガーに滞在出来るか？」

「え？別に構わないですよ」
「俺はいいのか？」
「ショウの方はまだこっちだ。一応宇宙警備隊からも滞在赴任する奴が来るだろうし、ここの方が地球上で何かあった時ピンポイントでそこに向かえるからな」
「なるほど、理解出来た」
「お前らとは話が早くてホント助かるぜ……」

やっと一息つける、とベリアルがぐったりすると、さらに別の声が聞こえてきた。

「あの、総司令官」
「あん？どうした大地……とエックス」
「実はエッ『私はいつになったら出番が来るんですかベリアル総司令！あまりに暇過ぎてスペシャルファイティングポーズを考え始めてしまってるんですよ！』……クスが……こんな感じで」
「あー……今度師匠達んトコにショートステイさせる奴の候補に入れとくからそう喚くな。しかもエックス、お前は特戦隊か何か作る気か」
『いえ、機甲戦隊です』
「メンバー的にあとギンガとビクトリーかよ」
「え、俺ら!?あれか、絆の力お借りします的な!?」
「そんなポーズしたくないぞ！やるならゼアス先輩かナイス先輩に頼め！」
「ショウ、お前もサラリと二人をギャグ担当扱いすんな」

ゼロ達はいないものの、ニュージェネレーションが揃ってワイワイ始めてしまう。
仕事が一段落していたからいいものの、溜まっていたりしたらどうなっていたやら。

「そういやゼット用のプラズマスパーク・ブレスがまだ出来ねぇな。まあ、あいつの成長度合が予想以上に早いって理由だし、師匠には引き続きあいつのお守りを頑張ってもらうとするか。さーてティガはどんな様子かなっと」

そう言いつつ、騒ぐニュージェネレーションとそれを眺めるジャスティスを放置してティガの様子をモニターに映そうとするベリアル。

ガーディアンベースは概ね平和である。

☆

――日本地獄――

「鬼灯様、ゆで卵の差し入れなのでーすよ」

「おや芥子さん。変わった差し入れですね。ともかくありがとうございます」

仕事中の鬼灯の元に芥子が一風変わった差し入れを持ってやってくる。

そんな鬼灯の背後では閻魔大王が犬神家の一族状態で床にぶっ刺さっていた。

「もしかしてまたサボりですかー？」

「ええ。悪魔将軍さんのところに来たサイラオーグさんやその眷属の方々のファイトを観るために抜け出そうとしたのでジャーマン・スープレックスでリングに上がった気分にして差し上げました」

正確にはリングに上がってボコボコにされた気分（後半部分はガチ）にしたようだが。

亡者どころか上司（仮）にさえ容赦ない第一補佐官である。

そんな彼の所に訪問して来たのは芥子だけではなく……

「すまんが少々失礼させてもらうぞ、第一補佐官」
「これは珍しい。悪魔将軍さん、どうかしましたか？魔闘地獄も最近各方面で好調なようで、おかげさまで地獄も活気づいていますし無茶難題でなければ配慮しますが」
「なに、レジェンドが異世界修行とやらに行くタイミングで我々も異世界修行とやらをしてみようと思い立ってな。案ずるな、ファイトの予定はずらす気など無い。私を含む何名かが入れ替わりで魔闘地獄の番を行う」

まさかの悪魔将軍が訪問し、これまたまさかの異世界修行の話を持ち出してきた。
これが予定書だ、と差し出してきた分厚い書類を鬼灯は突っ返す事なく受け取り、ふんふんと頷きながら捲っていく。
「……なるほど、修行のマンネリ化を防ぐと同時に、壁にぶち当たった時に外部から刺激を与えるような意味での異世界遠征修行ですか。地獄各所への協力要請も根回し済み……さすがですね。ここまでしっかりしているなら問題なく許可出来ますよ。後ろでこっちにケツ向けて地面に刺さってる役立たずに見習わせたいくらいです」

鬼灯と悪魔将軍は相変わらず犬神家状態の閻魔大王を見て、同じことを思う。
（（コイツ寝てるんじゃないだろうな？））
悪魔将軍は黙って閻魔大王へと近づくと、片腕からソードをジャキンと出すと、それを……
ブスリ
「アッ――!?」

「フン、たぬき寝入りか」
「あ」
「たぬき寝入り……たぬき……タヌキ……タヌキ死すべしいいいい!!」
「ちょっ……待っ……ギャアアアアア!?」

何気なく言った悪魔将軍の一言がトリガーとなってバーサーカーモードを発動した芥子にボコられる閻魔大王を一瞥し、再び先程の話に戻る二人。

「ではこの予定書通り、レジェンド様達とは別の世界で、という事で間違いないですか?」
「うむ。偶然会ってしまうかもしれんがその時はその時だ。サイラオーグを始め見どころのある連中だからこそ様々な経験を積ませるべきだろう」
「確かに。今の悪魔では珍しく好感の持てる若人ですからね。代わりに彼と正反対の……誰でしたっけ?」
「ゼファードル・グラシャラボラスだ。第一補佐官もあんな小物の名など覚える気もないか」
「ああそうそう、そんな名前でした。まあ単なるチンピラの上位種程度ですし……先日こっちに押しかけては悪魔将軍さんを舐めてかかった挙げ句、眷属諸共全滅して強制送還されていたので印象には残ってますがね」

ゼファードル・グラシャラボラス……若手悪魔の一人だが、悪魔将軍いわく『サイラオーグと比べるのも馬鹿らしい』と吐き捨てられてしまった哀れな悪魔である。
悪魔将軍と彼による修行を馬鹿にしてきたことでサイラオーグやその眷属は当然烈火の如く怒ったのだが、それを制し悪魔将軍が直々にフルボッコにし、鬼灯がしたためた各種令状付きで冥界へ送り返した。

「……近々荒れるな、冥界は」
「もうじきダンブルドア校長が冥界で最後の説得を行う予定ですが、おそらく殆ど変わらないでしょう」

その後の結果は分かりきってますし、と鬼灯は続けると悪魔将軍の提出した書類に認印を押し、控えを悪魔将軍に返して彼が退出したことを確認した後、自分の仕事に戻る。
背後で芥子による閻魔大王折檻の爆音をＢＧＭにしながら。

☆

そして、空の世界――

「カタリナ・アリゼ中尉……本日付けで転属を言い渡す。新たな配属先は――」
（やはり二人と関わり過ぎたのがまずかったか……すまない……ルリア、アマリ……願わくば、君達を外の世界へと連れ出してくれる『光』が――）

一人の女騎士の願いは、やがて伝説の光と蒼の少女、藍柱石の術士を深く結び付けることとなる。

〈続く〉

白は堕ち、闇は深く

それは、別の世界で起こった出来事――

「返せ……この子の笑顔を……温かさを……未来をッ……!!」
「安心するといい。その女性は死んだわけではない。眠っているだけさ……いつ目覚めるかは僕にも分からないけどね」
「何だと……!?」
「しかし礼を言わねばならないな。彼女のおかげでこのシュロウガのスフィアシステムの一つ『夢見る双魚』は完全な覚醒に至った。返礼というわけではないが、彼女はその姿のまま死ぬ事も老いる事もない状態にしてあげよう」
「!!」
「本当に彼女の全てを取り戻したければ僕を追ってくるといい。追う追わない以前に追ってくること、僕を見つけることが出来るか……そして僕へと辿り着けた時に僕と戦う資格があるかどうかは別だが」
「お前っ……アサキムゥゥゥゥ!!」
「ハハハハハ!!」

一組の男女のうち、男の叫びを嘲笑いながらアサキムの駆るシュロウガは虚空の彼方へと消えて行く。

――そして時は過ぎ――

次元断層にある、トレギアやルシファーらの本拠地。
そこに宛がわれた自室でアサキムは目を覚ます。

「……少し懐かしい夢を見たな」

誰に言ったわけでもなく一人呟くとベッドから降り、いつも集合場所として使っている部屋へと向かう。
そこには普段と同じく霧崎の姿のトレギアと堕天司のベリアルが寛いでおり、今日は珍しく星の民ルシファーもそこにいた。

「お、キムさんおはよう。先日はご苦労さん」
「ああ、ベリアル。君から貰った菓子はあれを間近で見ながら美味しく頂いたよ」
「そいつは何より。ところで今日はいつもより遅かったが何かあったのかい？」
「いや……少しばかり懐かしい夢を見てね。そう時間は経っていないがちょっと余韻に浸ってたのさ」
「わお。ロマンティックだがソッチじゃないんだろ？」
「フフ……ご想像にお任せする……と言いたいところだがおかげで気分が良い。少しだけ話すと『彼』は今頃僕を血眼になって探しているだろうね。それこそ世界を超えて」
「おいおいマジかよ。キムさんも罪作りな男だな」

揃って悪そうに笑うアサキムとベリアルを一瞥し、ルシファーはコーヒーを啜る。

「……毎度思うが、これの何処をルシフェルは気に入っていた。脳を覚醒させる以外に用途があるとは思えん」
「最初はそういうものさ。しかしこういう娯楽や嗜好品というのは続けると段々ハマっていくのだよ」

「理解出来んな」

トレギア――霧崎の言葉の意味をルシファーはさして気にも止めずコーヒーをまた啜り、霧崎も口元を緩めつつ自身のコーヒーを口にした。

「さて、白龍皇は不在だが……現在の進歩状況と今後の予定について話そうか」

「ちなみに何故彼は不在なんだ？」

「心配することではないよ。むしろ嬉しい誤算だった……ここまで念動力の覚醒が早いとはね」

「ほう？それはつまり……」

「ああ。彼は応龍皇を扱えるだけの念動力を手にした。まだまだ発展途上ではあるが、彼の慣らしも含めて試運転という名目で少しばかり異世界へ出張中さ」

アサキムとベリアルの顔には霧崎同様に笑みが浮かび、基本的に淡白なルシファーも興味深く聞いている。

「驚く程の成長速度じゃないか。帰って来た時が楽しみだ」

「だな。それでキムさんはどうだい？こないだの白いのや黒いのとやり合って収穫はあったのか？」

「今後に期待、という形ではあるけどね。最初は黒い機体……ガリルナガンと言ったか。あちらのパイロットだけかと思ったが、サイバスターの操者も少しは希望を持てそうだ。おそらくはどちらかが『悲しみの乙女』を目覚めさせる鍵になる」

「アサキム……お前のシュロウガに搭載したスフィアシステムとやら、今はどれが覚醒している？」

「現状は『知りたがる山羊』『偽りの黒羊』『夢見る双魚』そして『尽きぬ水瓶』……この四つだ。先程ベリアルに話した夢というのはその『夢見る双魚』の覚醒にまつわる過去の出来事さ」

「夢見る双魚だけにそれ関連の夢を見たってワケか」

スフィアシステム……度々彼らが口にするそれはシュロウガに元々積まれていたものではなく、彼と出会った時にトレギアが何らかの理由で手にした『十二の鍵』を統合し、ルシファーがシュロウガに組み込んだものだ。

「しかし良かったのか？君達ならばこのスフィアシステムの価値を理解していたはずだ」

「俺達の目的を妨げる気が無いならば別に構いはしない。逆に俺達の目的を知って尚、お前が協力する理由の方が不可解と言える」

「ああ、その事か。僕としては君達が目的通り『終末』と『混沌』を迎えさせられたとしても、結果『無限輪廻』が失われればそれはそれで別にいいのさ。『太極』に至りたいのは僕の個人的な好みによる方法であり、最終的に無限輪廻から僕のまま解放されるなら終末になろうと混沌になろうと構わない」

「最期まで自分らしく……少なくとも私は君のそこが気に入っているよ」

「フン……揃いも揃って酔狂なものだな」

そう言うルシファーだが、悪い気はしない。

続いてベリアルからの報告が告げられる。

「こっちもこっちであらゆるトコで協力者が申し出てくれてるよ。一人例を挙げるとファーさんの『終末』に全面的に賛同してくれてるラウ・ル・クルーゼ。彼は己の出自とそれに絡んだ人間の欲に嫌気が差してるみたいでね、ヒトの行き着く先は滅びだ、と俺も思わず勃っちまう程のイイ感じに狂ってる。個人的に老化が早いってのは可哀想でな……一緒に終末を迎えるためにどうにかならないか？サキさんにファーさん」

「老化が早い……人間で言うところのテロメアの短さが問題か」

「……検討しておいてやる」
「マジか。サンキュー、ファーさん。彼に会ってみたら気に入るだろうぜ。何せその世界の人間、ナチュラルとコーディネイターとかいう二種類に分類されるんだが、そのどっちも滅ぼすべく色々暗躍してるんだよ。滅びに向かって一途に一直線とかサイコーだろ」

ラウ・ル・クルーゼという人物を思い出しながら、右手で頬杖をつきつつベリアルは恍惚とした表情で語る。
もはやこの場にいる者は狂人しかいないと言っても過言ではない。

「君はどうだ、ルシファー？」
「先日、あの喧しい部品（パーツ）をバルトールに組み込んだ。奴らが異世界に立ったと同時に行動を起こす」
「まずは何をするんだい？」
「部品（パーツ）の記憶していた教会を始め三大勢力とやらに絡んだ施設を襲撃させ、他のバルトールに組み込む部品（パーツ）を確保する。それからはバルトールの『ＯＤＥシステム』を通じて俺の開発したマザーベースへ戦闘データを集積・解析し今後の機体開発に利用させてもらう」
「もしバルトールが使えなくなったら？使う必要がなくなった場合もどうする？」
「不要品になれば廃棄するだけだ」

アサキムの質問に淡々と答えるルシファー。
彼が言うバルトールに組み込んだという部品（パーツ）……それは捕らえられていたフリード・セルゼンである。
人命すら彼からしてみれば己の目的を成就させるための道具に過ぎない。
『終末』を迎えれば全てが無に還るのだから。

「どのみちバルトールは繋ぎか雑兵に過ぎん。モニターで見ていたがもしあの蒼い機体が相手となればいくら数を集めたところで一網打

尽にされるのが目に見えている」

蒼い機体……即ちネオ・グランゾン。

無数のスフィアやシビトゾイガーを一方的に殲滅し、魔王獣マガバッサーの亜種を瞬殺した性能はバルトールとは比べるべくもない。

単機の性能面でバルトールが勝っているのは精々機動力や生産性、そしてあちらがその性能故に操者を選ぶことくらいだろう。

「あの白龍皇とやらも異世界からデータを持ち帰って来るだろう。バルトールが得たものと合わせてより強力な機体を作り上げていく」

「強力な機体に対抗するためにさらに強力な機体を開発する……かのウルトラセブンはこういうだろう、血を吐きながら続ける悲しいマラソンだとね」

「だがそれが世の常だ。そんなマラソンが嫌ならば抵抗や己を高めることなどせず潔く死を迎え入れればいいだけの話……綺麗事だけを並べて生きている連中は自分のしていることの矛盾に気付いていない」

「そう……いい例が光の国のウルトラ族だ。正義と悪という酷く曖昧なものに踊らされ光の使者を気取る。本来は光も闇もない、無と混沌こそが宇宙の真なる起源だというのに」

ルシファーと霧崎はそう言うとゆっくり立ち上がり、退出しようとする。

「さて、今暫くは水面下で行動するとしよう。無論、軽くなら彼らにちょっかいかけても構わないよ。そもそも我々はあくまで互いの利害の一致、そしてそれを尊重してこうしているわけだからね」

「それじゃ、勧誘しつつその世界で観光したりとか」

「必要以上に騒がなければ勿論それも自由だ。いずれ全てが無くなるのだとすれば、今のうちにしっかり楽しんでおくのもいいと思うよ、私は」

「では僕も当面休息や情報収集に回り……機会を見て空の世界へと渡ってみようか。これからもっと楽しいことになりそうな予感がしてね」
「なら俺もいくつかアポ取ったトコ行ったら彼のところで厄介になろうかね。特効薬が出来たら送ってくれるかい？」
「ああ、そのためか。是非宜しく伝えてくれたまえ」
「オーケー、んじゃ……二度寝してから行きますか」

残るアサキム、ベリアルも退出し彼らの集まりは一先ず解散となった。

自室に戻ったアサキムはある映像を見ていた。
その映像にはウルトラマンのような、しかしどことなく機械的な印象を持つ巨人が映っている。
これは以前シュロウガがその巨人と相対した時の記録映像だ。

「まさかそういう形で覚醒するとは思ってもいなかったよ……『揺れる天秤』。番たる彼女が『夢見る双魚』の覚醒を促したのだから君にそういった才覚がある事も必然だったというわけか」

まだ目覚めて間もない頃だったのか、その巨人はシュロウガに成すすべもなく撃退される。

「君があの時のまま……もしくは少し強くなった程度では君の目的を成就させることは夢のまた夢。何にせよ……僕をガッカリさせないでくれよ『オリジン』」

アサキムはその巨人の名であろう単語を呟き、暗い部屋の中で一人ほくそ笑んだ。

ルシファーと霧崎はルシファーのラボへと向かっていたが、途中で思い出したように霧崎が話し出す。

「そういえば盟友よ。先日話した四神の超機人……そのうちの二体について面白い事が判明した」

「ほう？」

「四体のうち、龍王機と虎王機は元々不明。それらはおそらく光神が保有していると見て間違いは無い。保有しているのがレジェンドやサーガとは限らないがね」

「それは元々判明していた。そうなるとお前の言う二体とは残りの雀王機と武王機の方か」

「流石にここまで開示すればわかってしまうか。ならば話が早い。その雀王機と武王機は闘仙勝仏が厳重に管理していたようだが……何者かに重症を負わされ奪取されたらしい。傍にいたその子孫は恐怖の余り腰が抜けて動けなかったそうだ」

霧崎が新たに得た情報……それは四神の超機人の二体、雀王機と武王機が奪われたという、ルシファーも眉を動かす事実であった。

何故闘仙勝仏の元にあったのかはともかく、その彼に重症を追わせる程の実力を持った者がいるというのもまた興味深く感じている。

「二体まとめて……か。どうやら奪った奴はあれらの真の性能に気付いているようだな」

「そう、そして……我々以外にも暗躍している者達がいるという証拠でもある。私が調べたところ、闘仙勝仏は管理というより監視……実際の封印はレジェンドが行っていたようだ。どういう経緯でレジェンドの手元を離れ闘仙勝仏の元にあったのかはさておき、こちらも戦力の拡充に本腰を入れる必要が出てきたな」

霧崎の言葉にルシファーは黙っていたものの、二体を奪った者がこ

ちらと敵対しないとも限らない以上、確かにその通りである。
「場合によってはあれの投入も検討する」
「あれとはもしや……」

「コアも含めて最近復元が完了した特異個体だ。識別コードは……『ギルバリス』」

☆

駒王町から遠く離れた沖縄の海。
太陽の光の差し込まぬ深く暗い海底に、突如金色のスパークが発生し、そこから黄金の巨人がゆっくりと現れた。
「この世界か……ウルトラマンレジェンドを始めとした光神共やウルトラ族が主軸としているのは」
そう呟いた黄金の巨人は、以前アグルが星晶獣リヴァイアサンと共に打ち倒した海神ムーバを生み出した存在である。
「それならば都合が良い。こちらに持ち帰るよりもこの世界で暴れてもらう方が手間も省けるか」
黄金の巨人はそう言うと視線の先の『あるモノ』を見る。
「この星の古代文明の一つ、ニライカナイ……環境汚染解決のために生み出したはずの生体浄化システムによって逆に滅ぶとは皮肉なものだな。だが安心するがいい、お前達の遺した『ダガーラ』は我々が有効活用させてもらう。そして三重連太陽系のある世界へと赴き『Z』の因子もまた手に入れた……あとは素材を集め、あれを復元すれ

ばいい」

誰にでもなくそう告げると、黄金の巨人は踵を返し再び黄金のスパークが発生する空間への扉を開き、そこへと消えて行く。

間もなく新たな舞台の幕が上がる。

『世界』という枠を超え、より大きく、より激しくなるその物語の結末は果たして――

〈第6章――第二部・異世界修行編へ続く〉

蒼穹世界のグランブルー、旅立ちの季節
古き悪魔の終焉

騒がしい休日が終わり、基本的に日本の学校では終業式が行われる本日。
それは、悪魔にとって永遠に忘れる事の出来ない一日になる。

☆

――冥界――

数多くの上級悪魔が何段にもズラリと並ぶ、議会用の会議場にてダンブルドアが中心に立ち、周りを見渡すように視線を動かす。
そんな彼の後ろには四大魔王が控え、有事の際に対処出来るようにスタンバイしている。
彼は光神陣営、それも最高位光神から直々に派遣された大事な客人なのだ。
もし彼に何かあったとあれば家族の情に厚いレジェンドらは確実に悪魔とは縁を切るだろう。
それだけは何としても阻止しなければと魔王総出で護衛に名乗り出たのだ……とは言うものの、実際はサーゼクスとセラフォルーしかやる気を出していない。
ファルビウム・アスモデウスは呑気に欠伸しており睡眠欲が勝りつつある状態、アジュカ・ベルゼブブは現在開催不可となっているレーティングゲームの事で頭がいっぱいと、ハッキリ言ってセラフォルーがブチ切れかねない態度をとっている。

（ねえサーゼクスちゃん、この二人何でここにいるの？何しに来たの？ファルビーもアジュカちゃんも氷漬けにされて日本地獄に送られて悪魔将軍さんに粉々にされたいの？ねえねえねえ???）
（落ち着いてくれセラフォルー!?二人も真面目にやってくれ！今日の

議題は悪魔の今後を左右する重大なものなんだぞ!!）
（重大って言われても僕がやる事っていつもと変わんないし～……）
（俺としては早くレーティングゲームを再開してほしいんだが）

マジで空気読め、と言いたくなるサーゼクスとセラフォルーだったが、直後に聞こえてきたダンブルドアの声で気を引き締める。

「……やはり、どうしても考え直してはくれぬのか」

ダンブルドアの声色から予想通りというか、落胆したという感じがした。

「くどい。伝統ある我々が変わる必要などない。この伝統こそ未来へ残すべきなのだ」
「左様。そもそも死ぬ筈だった命や貧弱な肉体しか持たぬ者が悪魔に転生することで救われるというのに何の不満がある？」
「むしろ感謝されて然るべき。人間は悪魔となってより長く生きられ、冥界もまた繁栄する。しっかり共存出来ているではないか」

口々に告げられるのは案の定そんな言葉ばかりであった。
しかし、実際は彼らのような身勝手な悪魔に事故や偶然を装って殺害され、半ば強制的に眷属化しているという情報を日本地獄の鬼灯からダンブルドアは知らされていた。
また、それを隠蔽するための記憶改変を広範囲に行う事もやっているためもはや今回のこの会談、いや説得は最後通告と同意義だったのだが……。

「お主らの言う伝統が大事だと言う事も分かる。代々受け継がれて来たものを次代へと残したいというのは至極当然。それに何も人間や他の種族に対してご機嫌取りをしたりへりくだったりしろというわ

けではない。お互いが平等な目線で、共に歩んでいくもの同士として」
「黙れ!!何を言い出すのかと思えば我ら悪魔を人間や天使などと平等?ふざけるな!!」

あくまで穏やかなダンブルドアとは違い、激昂する一人の上級悪魔の反論を皮切りにそれはますますヒートアップしていく。

「光神とはやはり我々の理解の外側にいるようだ。どんな加護を受けたか知らんがこんな人間の老いぼれを会談の場に送り込むとは」
「頭の出来も悪いようだから貴様でも分かるよう簡単に行ってやろう。我ら悪魔が上!その他である貴様らか下だ!」
「これ以上は時間の無駄だ!とっとと返って今の言葉を光神に伝えるがいい!もし戦争する気ならば受けて立つともな!」

その言葉と共に大笑いする古参の上級悪魔達に対し、ダンブルドアは残念といった表情で俯くのみ。
そして魔王のうちサーゼクスとセラフォルーはそれぞれ青い顔と赤い顔で会談に参加した上級悪魔達を見ていた。
当然、一人は恐怖で、一人は怒りでその顔色になっている。

(何ということだ……!目の前にいる彼ですら我々では到底及ばぬ領域にいる存在だと理解出来ないのか!?彼が……それにダンブルドア殿が一人である事をいいことにここまで高圧的になるなど……こんな、これほどまでに昔の思想から抜け出せなくなっていたとは……)
(レジェンド様達と戦争?ふざけた事言ってるの貴方達でしょ!!束ちゃんの技術力や烈さんの実力を目の当たりにしたらそんな事言わずにヘコヘコしそうな癖に、ダンブルドア校長先生が実力をわざと隠してるのにも気付かずおじいちゃんっていう見た目だけで判断して上から目線で偉そうに言って!!)

また、彼ら以外にもこの会談の場にはダンブルドアの考えに賛同する者が相当数いるのだが、それ以上に古い思想のままの古参悪魔が多いのである。
残り僅かなメンバーはどちらでも、流れに任せるといった考えの面々だ。
サーゼクスやセラフォルー、そして彼らが、ダンブルドアへの古参の上級悪魔の対応に様々な負の感情を抱いた時、その声は聞こえてきた。

――だから言ったのだ。所詮未来（さき）を見れぬ俗物どもだと――
「「「「!?」」」」

どこからともなくその声が聞こえた時、ダンブルドア以外の者は一瞬で全身から血の気が引くのを感じた。
誰も彼もが周りを見渡す中、ダンブルドアが静かに口を開く。

「予想はしておったよ。しかし、少しでも信じたかった。レジェンド様がそうであったように」
――その結果がこれだ。分かりきったことにほんの少しでも希望を持ったが故にその失意が身を覆うことになった。他の奴らならいざ知らず、お前の眼前で大笑いしていた下等な存在に関して我の予測は１００％当たると予め教えていただろう――
「……そうじゃな。そうなってしまった。そうなってほしくはなかった」

ダンブルドアの声が静まり返ったその場に響く。
心からそう願っていたであろう、現状を嘆くかのような悲痛な声で。

――当初の約束通り、この場において未来を見据えぬ者は全て――

滅　ぼ　す

「「「「なっ!?」」」」

これは魔王達……セラフォルーを除き、サーゼクスだけでなくアジュカやファルビウムさえ驚愕する。

それ即ち少しでも他種族への見解を改めなかった者全てへの抹殺宣言。

再度怒鳴ろうとした上級悪魔達であったが、何故か動きを封じられ、声すら出せなくなっていた。

ダンブルドアによる抵抗阻止の魔法が既に発動していたからである。

「約束を違える気は無いが、せめて選別させてはくれんかの。無論、選別するのは儂ではなく……」

その瞬間、冥界全土に先程ダンブルドアや他種族を侮辱する発言をした者達、そしてその息がかかった者達の行った所業の数々が空間ディスプレイによって一斉にデジタル表示された。

権力を傘に暗殺依頼、人身販売を始めとした強制的な隷属契約、不祥事の物理的なもみ消し……それらが白日の下に曝されたのだ。

「こ……これは?」
「このような事態になった時に備えて儂らが予め調査しておいた結果、それの開示じゃよ。権力を手にすれば抑えていた欲が噴き出してもおかしくはない。それを己で、もしくは誰かの協力によってしっかり抑制出来るか否かで上に立つ資格があるかは決まる。あの者達は長く権力を手にしすぎて、悪い意味で熟成してしまった。もはや他者の手には負えぬ」

ダンブルドアは先程までとはうってかわり、レジェンドが『魔導神』の称号を授けた偉大な魔法使いとしての顔になっている。

「本来ならば手を出す気はなかったのだが、あのモノが言ったように未来を見据えぬ者は今後冥界そのものの未来を無くす可能性がある。それこそ冥界という一勢力に対して我々光神陣営ほか、人間や天使に堕天使、日本地獄や神話勢が結託して一方的な蹂躙による戦争を起こす引き金にならぬとも限らぬ」
「それは……!」

確かにそうである。
そうなってしまえば確実に冥界は、悪魔は全て滅びるだろう。
光神陣営は元より、他の勢力にも飛び抜けた戦力は存在するし、最も最悪なのはレジェンドやサーガを始めとした光神が紡いだ絆によって他の世界から援軍が来る可能性さえあること。
そしてもう一つ……仮に戦争に勝ったとしても被害は計り知れず、現在進行形で問題となっているトレギアや堕天司ベリアルらの恐るべき戦力に自分達だけで対処しなければならなくなる。
当然それも不可能だ。

「サーゼクス殿、お主らが下してくれた英断を潰させたくはない。そして、まずは儂らが手を下すのではなくこれを見た民衆によって判断

してもらうことにしよう」

そしてその結果は……阿鼻叫喚。

元々統治に不満があったのか、それとも単純に気に入らなかった相手に手を出す口実が出来たからかは分からないが、その上級悪魔達が治める土地では瞬く間に暴動が起き、親族が軒並み捕まったり屋敷を焼かれたりと正に今までの報復が一度に行われたかのような凄まじいものとなった。

『ひい!?た、助け……!』

『うるせえ!テメーも一枚かんでたんだろうが!』

『私達の恨みを思い知りなさい!この外道!』

『ぎゃあああぁぁぁ!!』

「……民はこれほどまでに不満を溜め込んでいたのか……」

「まだこれはほんの一握り。突けばどんどん出て来るであろう。お主ら、これを見てまだ自分達は間違っておらぬと言い切れるか?お主らがやってきたことをお主らの土地に生きる者達が否定しておるのじゃぞ」

いつの間にか抵抗阻止の魔法を解かれ、動く事も喋る事も可能になった上級悪魔がした事……それは――

「くたばれ老いぼれ!!」

ダンブルドアへの魔法による攻撃だった。

サーゼクスやセラフォルーは驚きながら盾になろうとするが、それよりも早くダンブルドアへの全方位攻撃を一瞬で打ち消す者がいた。

「「「「!!」」」」

「やれやれ……まさかダンブルドア校長が煽りスキル持ちとは知りませんでしたよ」

「こういった場では駆け引き一つでガラリと変わる場合が多いからのう。しかしあの程度の魔法では儂に傷など付けられんが、助かったぞドギー君」
「いえ、アレとは別に護衛として名乗り出て正解でした」

伝説九極天が一人ドギー・クルーガー。
夫婦でギャラクシーレスキューフォースに出向中の彼がいざという時のために自ら護衛を買って出ていたのである。
突然の亜人の出現にその場の者達は戸惑っていたが、ダンブルドアはもはやこれまでと目を伏せる。

「あれを見せられて尚も己の意識を改めぬというのであれば改善の余地なし。鬼灯殿からはお主らの所業を鑑みて処分方法は問わぬと言われておる。日本地獄の恐ろしさをその身で味わわせるにはちょうど良い機会ともな」
「その凶悪犯罪ぶりに特例として、宇宙最高裁判所からも既に貴様らのデリート許可は下りている！大人しく投降するのならばその限りではないが、そうでなければその命を持って今までの罪を償う事になるぞ!!」
「やってみるがいい！たかがたった二人で何が出来るというのだ!?」
「先程は驚いたが、次は跡形も無く吹き飛ばしてくれる！」

やはり反省の色はまるでない。
ダンブルドアとドギーは顔を見合わせて頷くと、ダンブルドアがその上級悪魔、そしてその場から離れて待機いるその者らの眷属や配下の足下に魔法陣を展開する。

「何だこれは!?転移用魔法陣か!?」
「せめてもの情けじゃ。己の信の置く者らと共にあの終焉の魔神に立ち向かってみるがよい。あの魔神から認められればもしかすると助かるかもしれんぞ？」

「気付かなかったのか？貴様らが聞いていたのは俺の声ではない。俺が到着したのはつい先程だ。あの魔神は最初から校長と共にあり貴様らを監視していた」
「監視……それに魔神だと!?一体何が……」

全てを言い切る前に伝統派の上級悪魔やその縁者は別の場所へと飛ばされた。
飛ばされる直前に、ある言葉を聞きながら。

なんだと思う？

☆

飛ばされた者達は気が付くと何もない荒野に立っていた。
その数は有に数万人を超え、如何に腐敗していたかを証明する形となってしまったが、彼らにとって今それは問題ではない。
ちなみにこの光景はダンブルドア達からも見物されているというのは、当然連中も知らぬ事である。

「どこだ、ここは……？」
「まさかこれだけの数をあの場にいながら転送したというのか!?」
「認識を誤ったが……次はこうはいかんぞ！」

『次などあると思っているのか？』
「「「「!?」」」」

突如暗くなったかと思えば、頭上から転移前最後に聴いた声が聞こえてきた上を見上げると――

グシャアアアッ!!

直後、何かが潰れる音と共に地面が激しく揺れた。
その際近くにいた悪魔が何か飛んできたものに触れ、何なのかと確認する。

「これは……血？ひぃっ!?」

少し視線を動かすと、そこには巨大な足がありその下からは夥しい血が流れ出ており、辺りには勢いよく潰された衝撃で偶然千切れ飛んだであろう手足が幾つも転がっていた。

「な……何だ!?」
「こいつがいきなり降ってきて……」
「まさかコイツがあの老いぼれが言っていた魔神!?ただの機械ではないか……ッ!?」
『その驕り、我と相対しても捨て切れぬのが愚者の証』

老年の上級悪魔の一人が魔神の顔を見たとき――

「あ……あ……あひィィィィ!!」

腰を抜かし、涙を流して失禁。

周りは驚いていたが、彼は本能で知ってしまったのだ。

決して敵に回してはいけない存在を敵にしてしまったのだと。

そして、絶対に勝つ事は出来ないとも悟ってしまった。

『今更知ったところでもう遅い』

ゆっくりと魔神は口を開くとそこから恐るべき速さと量の酸の嵐を吐き出す。

数多の巨大な酸の嵐は近くにいた悪魔達を臓物さえ一片も残さず溶解させ、さらには天変地異さえも巻き起こる。

この時点で既に転移させられた、数万人いたはずの悪魔の残数は残り七割を切っていた。

「全員離れて散れ！近くにいればまとめてやられるぞ！」

一人の上級悪魔が指示を出し、それに従って魔神と距離を取り散り散りになって対策を練ろうとする。

しかし、それは無駄に終わった。

なんと魔神の身体から生えるように鋭利な刃が出現し、散り散りになった悪魔達を屠るべく放たれ凄まじい速度と追尾性能で次々と命を奪っていく。

「ぎゃあああああ!!」

「駄目だ！振り切れなっ……」

「やめろ！やめっ……」

いとも簡単に生命の光が失われていく。

悪魔が他種族の上に立つ者という矜持は、魔神の圧倒的な暴力の前に粉々に砕かれた。
だが、そんな傲慢不遜な連中にも意地はあるのか最大限の抵抗をしようとダンブルドアに行った全方位攻撃を仕掛けようとする。
（ふん……無駄な事を。そうだ、最も絶望する方法でやり返すとするか）
そう考えた魔神は腕を組んだままその凶悪な顔を悪魔達に向け仁王立ちになる。
全力で撃ってこいという意思表示だ。
「ふざけおって……！たかだか巨大な鉄クズが魔の神などと驕るなど!!」
「目にもの見せてくれるわ！総員、あの魔神とやらを蹂躙せよ!!」
号令と同時に膨大な質量の魔力弾が雨霰と魔神に放たれ、次々と直撃し魔神は黒煙に包まれていく。
悪魔達はそれに安心することなく撃ち続け、やがて黒煙が辺り一面へ広がったとき漸く攻撃は収まった。
「ここまでやればアレも無事では済むまい。さて、ここからは冥界に戻る方法を……」
そういった瞬間、その上級悪魔は周囲の者共々再び巻き起こされた酸の嵐によって無惨にもその命を散らす。
驚愕と恐怖の入り混じった表情で黒煙で覆われていた場所を見ると、魔神は傷一つなく腕組み仁王立ちという攻撃前と変わらぬ姿で存在していた。
『児戯だな。あの程度では我に傷付けるなど永遠の夢。もっとも傷が

付いたところですぐに修復してしまえるのだがな』

その魔神の思惑通り、生き残っていた悪魔達は膝から崩れ落ちる者や泣いて命乞いをする者なども出てくるほど、希望から絶望への落差が大きかったようだ。

だがその魔神は知っている。

それさえも一時のポーズにしか過ぎないだろうということ、そしてその者達は相手が今の自身らと同じ状況になった時に嘲笑いながら一蹴したことを。

『貴様らの面は見飽きた。そろそろゴミ掃除を終わらせて我が主たる者とそれが見初めた巫女の元へと向かうとしよう』

その魔神は背中の紅い『０』を模した飛行システムらしきものを光らせ中へ浮くと、身体を地表へと向けて静止。

一泊おいてから両拳を打ち付けると胸の放熱板らしき箇所にエネルギーを充填する。

『この捨てられた星ごと貴様らの墓標としてやる。だがこれにこの星が耐えられるとも思わんがな』

その言葉と同時に、放熱板からあり得ない程の異常な熱量と放射範囲の熱光線が放たれ、途中何度もスパークしつつ生き残っていた悪魔全てを飲み込み消滅させると地表に直撃したことで『捨てられた星』すらも火達磨に変えてしまった。

『やるべきことはやった。見聞きしているのだろう、ダンブルドア。我はこれよりレジェンドの元へ向かう。後の説明は任せるぞ』

そう言い残し、魔神は燃え上がる捨てられた星を一瞥し虚空へと消えていった。

☆

その光景を空間ディスプレイで見ていた会議場の悪魔達は愕然としていた。
殆どの者はその恐怖によって身動きが取れず、ガチガチと歯を鳴らして青い顔になっている。

「やはり容赦ありませんでしたね、アレは」
「元々主と認めているのはレジェンド様だけじゃからのう。シン・ゴジラと違い鬼灯殿すらもまるで手に負えぬと言った程の存在。そんなモノがレジェンド様を侮辱する発言を聴こうものならこうなるのは当然じゃろう」
「ダンブルドア殿……アレは、一体……!?」
「……あれこそがレジェンド様の本来の愛機。原初にして終焉の魔神『マジンガーＺＥＲＯ』。並行世界の事象すら予測し、因果律さえも掌握出来る、絶対的な力を持った意思を持つ機動兵器じゃ」

それを聞いていたサーゼクスらはこの日一番の衝撃を受けた。
何せネオ・グランゾンの時点で規格外だったというのにそれすらも上回る機体が存在し、しかもそれが意思を持つというのだから。

「ＺＥＲＯは今まで『終わってしまった世界』を無に還す役目についておったのだが、それが一通り済んで帰還していたところに今回の話が舞い込んだ。何はともあれ、思考が昔止まりであったとはいえ、議会での発言力や影響が大きかった悪魔達は根こそぎ消滅した。これから暫く冥界は慌ただしくなろう。本当の意味で悪魔が新たなスタートを切る時じゃ。一致団結して問題に立ち向かうんじゃぞ」

ダンブルドアの表情は普段の優しい顔に戻っており、周囲を見渡して軽く頷くと惑星レジェンドへと帰還することにする。

同じタイミングでドギーもまたギャラクシーレスキューフォースへと戻るようだ。
そして、帰り際にダンブルドアはアジュカ・ベルゼブブへと忠告する。

「ところでお主はアスタロト家の出で間違いないかの？」
「え……ええ、それが何か？」
「今回の過程でお主の弟……ディオドラ・アスタロトについて調べてみた。しっかり御せねばレジェンド様がお怒りになる事態を招きかねん事をしでかしておるぞ。注意しておく事をお勧めする」
「……!?」
「それではな。次会う時は穏やかに過ごせる事を祈っておるよ」
「俺としても毎回毎回、到着早々攻撃を斬り払うような事態は御免被るぞ。しつこく口出しする気は無いが、常識的な教養だけはしっかり学ばせておいてくれ」

それぞれの意見を軽く述べ、ダンブルドアとドギーは各々の帰る場所へと戻って行った。
残されたのは四大魔王や他種族肯定派の悪魔達。

「確かにこれから大変だな。彼の言っていたように一致団結して問題に取り組まねば」
「あ！私はレジェンド様やソーナちゃん達と異世界修行に出るから書類だけ送ってね☆そっちでやるから☆」
「何!?ズルいぞセラフォルー！私だってリーアたんや未来の義弟と冒険したいのに！」
「レジェンド様からＯＫ貰ったもん☆それから今までサボってた分、ファルビーとアジュカちゃんも頑張ってね☆」
「えぇ～……って言いたいけど仕方ないよね、こんな状況じゃ」
「……すまん、俺はディオドラを調べてからにしたい」

いつものノリに戻った他の魔王と違い、ただ一人アジュカだけは真剣な表情で答える。
ダンブルドアの言っていた事が事実ならば、レジェンドに関わる何かでディオドラが地雷を踏む可能性があるということ。
先の映像を見せられた身としてはこれ以上光神の逆鱗に触れるような事態は阻止しなければ。
各々別の思いを胸に抱き、その場は解散となった。

後にこの日は『大粛清の日』と呼ばれ、悪魔達が己の行いを顧みる日としても歴史に組み込まれることになる。

〈続く〉

再会、不死鳥の少女～Ｚな最新鋭機～

先日の大粛清は終業式を終えて帰宅したリアスやソーナ達にも伝えられた。

最初は驚きはしたものの、割とすぐに受け入れたリアス達を見てサーゼクスは改めて本当の意味で悪魔が次の時代へと進もうとしているのを感じた。

ついでにセラフォルーが、粛清された悪魔達がソーナの夢である「誰もがレーティングゲームについて学べる学校」の開設を馬鹿な話と嘲笑っていたのを知っていたため、ぶっちゃけスカッとしたと物凄い笑顔で言ったのにはソーナも若干引き気味だったらしい。

さて、ウルトラ戦士を始めとする光神陣営との交流や短期間でとんでもないスケールの激戦を連続で乗り越えたオカ研メンバーやソーナら生徒会メンバーが強靭なメンタルを入手出来たのは良しとしよう。

実は祝勝会の日、レジェンドはサーゼクスやジオティクスらにあることを伝えていた。

それはフェニックスの涙の件を顧みて「フェニックス家ないしその眷属一人だけならば異世界修行への同行を許可する」という事である。

まさかの言葉にしばしポカンとしたグレモリー家ではあったが、理解した後は何度もレジェンドへ頭を下げていたのは祝勝会に参加した者であれば目にしているだろう。

それらをフェニックス家に伝えた結果、ライザーは未だ引きこもりでユーベルーナはそれを献身的に支えている状態……そこで白羽の矢が立ったのは『トレード』によってライザーの眷属ではなくなった彼の妹であるレイヴェル・フェニックス。

以前のレーティングゲームでは眷属に組み込まれていたためリアス達が短期間に凄まじい成長を遂げたことを実感していること、そして彼女がフェニックスの血筋であることを考慮して決定したのである。

加えてレジェンドが「誰が同行するにせよ、オカルト研究部の修行風景をライザーの眷属一同見学しに来い」と伝えろと言われていたことも合わせて告げた。
驚きの連続ではあったものの、彼らが強くなった理由を知るには絶好の機会とユーベルーナ以外の眷属はそれを承諾、フェニックス家もライザーのためになるのならばと快く送り出した。

☆

そして今日がその日……必要なものを詰め込んだバッグやキャリーケースを持って、緊張した面持ちでレイヴェルはサーゼクス及びルミナシア同伴の上、ライザーの眷属共々レジェンド一家の仮住居の前にいた。
何でもこの日は「勉強部屋で揃って異世界へ赴く前の最終調整をする」ということでダイブハンガーではなくこちら側で合流することにしたわけだが……。

「そう緊張しなくても大丈夫だよ。個性的ではあるが皆礼儀さえ間違えなければ良い人達だ」
「そういうサーゼクス様は初訪問時、ここの入口で結界を破壊しようとしたそうですね？そのおかげで九極天の一柱から大層お怒りの言葉と圧を頂いたと姉さんやお嬢様から聞きましたが」
「ルミナシア!?それは言わないでくれ！あれについては私も反省してるんだ……」

もはや懐かしい、縁壱にガチで斬られるかもしれなかったあのレーティングゲーム後の出来事。
リアスにさえ見放されて色々な方面からの信頼を回復するのにどれだけ時間がかかったか。
「ま……まあ何にせよ、そう心配することはないということさ。それ

じゃあ改めて……」

サーゼクスがインターホンを鳴らすとパタパタと誰かが走ってくる音が聞こえ、玄関のドアが開くとそこには――

「ヤッホーサーゼクスちゃん☆レジェンド様の新妻(ごっこしてる)セラフォルーちゃんだよ☆」

エプロン姿でお玉を手にしたセラフォルーに笑顔で出向かえられた。

予想外の事に固まっているとその後ろからガブリエルもひょっこり顔を出す。

「あ、お客様ですか～？」

まさかのセラフの登場にレイヴェルやライザー眷属は凍りつくが、それ以上に魔王とセラフがやけに仲良く、しかもセラフォルーはガブリエルをライバル視しているという情報まであったのに、そんな事はまるで無いという雰囲気である。

そしてそれに加えて、マリーダがアイスを咥えつつ何かを運んでいるのも見えた。

ついでにその後ろにくっつきながら真面目に手伝いしているオーフィスも。

「ん」

「どうしたオーフィス……あ」

くいくいと服を軽く引っ張られて振り向いたマリーダに、オーフィスはサーゼクスらを指差して言う。

「元不法侵入者と身の程知らず」

「ふほぉっ!?」
「「「「みのっ!?」」」」
「不法？身の程？私は知らないが何があったんだ？」

当然だが、マリーダがこちらに来たのはレーティングゲーム後なのでぶっちゃけ何があったのか聞いてもいないし知るわけがない。

「ここの結界壊して入ろうとしたのがサーゼクス・ルシファー、後ろにいるのがリアス・グレモリーとその眷属を甘く見て返り討ちにあった連中」
「ああ、なるほど……」

サーゼクスとしては会談の日に守ってくれたのもあり、正直マリーダには頭を下げるばかりなので、尚の事身が縮こまっている。
その妻であるルミナシアとしては自業自得とはいえ夫の事であるため頭痛の種として未だ消えず。
レイヴェルとライザー眷属に関しては自信満々で挑んだこちらが全滅、対してリアス率いるオカ研は全員健在でまさに完勝という結果なのでぐうの音も出ない。
更に言うなら今日はそのオカ研メンバーの修行風景の見学に来たので文句など言えないという二重苦だ。

「それはそれとして本日は何用で？」
「あ……ああ、実はレジェンド様から――」

サーゼクスは事情を説明し、熟考の結果レイヴェルが選ばれた事を告げるとマリーダは普通に納得してくれた……というか他の人物のクセが強過ぎるだけで、ぶっちゃけ彼女は現在のレジェンド一家＆サーガ組の中でも至極まともな方である。

「そうか、理解した。だからリアス達はこちらの勉強部屋というとこ

ろで修行していたのか」
「「「「勉強部屋？」」」」
「私も聞いていたがその勉強部屋というのはどこの部屋だろうか？確かに立派な三階建ての家屋ではあるが、この大人数を入れるような部屋は……」
「あそこから行ける」
「「「「え？」」」」

サーゼクスやレイヴェル、ライザー眷属はオーフィスが指差した方向を見ると、勉強部屋に通じる床から……

「ナイストゥーミーチュー。私は、ウルトラマンゼット」

ゼットが頭だけ出して見ていた。

「「「「きゃあああああ!?」」」」
「「「「うわあああああ!?」」」」
「うるさい」
「あ、ちょい待ちでござりんす。よっこいせ」

オーフィスはサーゼクスらの絶叫にぼそりと呟き、ゼットは勉強部屋への隠し通路の床を動かしてのそのそと出て来る。
相変わらずレジェンドの間近にいる面々は頭一つ抜けて個性的で

あった。

「や……やあゼット君。君がいるということはレジェンド様も？」

「超師匠なら勉強部屋でアーシアちゃんを指導中でございます。俺もゼロ師匠と……と思ったんですけどレオ大師匠相手に一誠やタイガ先輩達とチームを組んで挑んでる真っ最中なので、一人だとやることないから束博士やアムロ師匠に言われたことをしようと思って勉強部屋から出てきた次第であります」

「……は？」

つい間抜けな声を出したのはサーゼクスではなく、かつてレーティングゲームで一誠にやられたライザー眷属の一人、ミラだ。

あんな爆発的成長を遂げた相手がチームを組んで一人の相手に向かうとは何の冗談だと、彼女のみならず一誠にやられた面々が怪訝な顔をするが……。

「リアスいわく、カテレア……と言ったか？リアスがゴーデス細胞に感染させられた時にゴーデスの配下として蘇ったあれを一方的に叩きのめしたそうだぞ、おおとり師範は」

「「「「え、」」」」

サーゼクスすら顎が外れた。

これ以上は説明しても埒が明かないと思ったマリーダは『勉強部屋に行けば分かる』とゼットに案内を頼む。

マリーダ達は差し入れを持って降りると言い、オーフィスもレジェンドの傍にいたいがためにゼットと一緒に行く事にする。

「こんな場所が……！」

「あっち着いたらもっと驚く」

「もうアレは室内と思えないからな～」

何だそれと思いつつ最下層に到着後、扉を開けると――

ドドオオオオン!!

「「「「ひっ!?」」」」

何かが近くの壁に轟音を立てて激突した。
そしてその正体とは……

「ってェ……!おい一誠、まだやれるか!?」
「当然だぜ先輩!っつーか師匠また強くなってねーかアレ!?」
「素のパンチで数百トン出したらしいぜ、あのバグトラマン」
「数百!?そのうち四桁行っても不思議じゃねーよな」
「イヤァ!!」

ドゴゴゴゴォッ!!

「「「ギャアアアアア!?」」」
「タイガァァァ!?タイタスゥゥゥ!?フーマァァァ!?」
「ヤベーぞ!アイツらだけじゃ対処出来ねえし一人でも欠けたらまず勝てねえ!急いで戦線復帰するぞ!」
「お、おう!」

ゲンにぶっ飛ばされた一誠とレイトだった。
残るトライスクワッドは天高く打ち上げられており、弧を描いて落下しており、おまけに一誠は禁手状態。
この5人を相手に生身で圧倒しているというのに傷一つないゲンはもう色々おかしかった。
早速サーゼクスらは言葉を失っている。

「ゲン、絶好調」
「でございますなあ」

もはや日常茶飯事なのかアッサリした感想の二人はとりあえずレジェンドを探すと衝撃的なものを見てしまう。

「はーいレジェくんアーちゃん！たららーらーらーらー♪」

束に左右対称のダンスを指導されてるレジェンドとアーシア。
例のフェアリオンに乗せる気満々なのが分かる……というか小猫が嫌がったからと片方にレジェンド乗せる気かこの天災兎。
そもそもアーシアを指導してるはずのレジェンドが何で踊ってんの？

「我もやるー」
「では俺はアムロ師匠をこき使った連邦に対して反省を促すダンスでも」

もうカオスである。
しかもゼットの動きがキレッキレなのは何故だろうか。
あと、オーフィスもダンスするならオーフィスとアーシアでやった方が絵面的に良い気がする。

「いやオーフィスやるなら俺やってる意味あんのコレ」
「新しいモーションの参考になるかも。あと見てて面白いし」
「タワーブリッジィィィィ!!」
「痛い痛い痛ーい!!ごめんなさいレジェくん悪ふざけしすぎましたぁぁぁ!!」

女性だろうが容赦ないレジェンドであった。

レジェンドは束にタワーブリッジをかけつつ、入口を見ると呆けた顔でこちらを見ているサーゼクスらに漸く気付く。

「お、やっと来たか」

「その前に束さんの解放をお願いしまーすぁ痛ぁぁぁぁぁ!!」

「はわわわ……束さんが、束さんが！」

『おふざけが過ぎた代償がこれとは割に合わんだろうな。が、やめないのも今更だ』

「「「「!!」」」」

突然聞こえた、最近聞いたばかりの声に驚くサーゼクスや、よく分からない悪寒に襲われたレイヴェルとライザー眷属。

その原因は今までアーシアの影に隠れて分かりにくかったある存在が原因だった。

ふよふよと浮かびながらアーシアの近くまで飛んできたのは先日数多の上級悪魔とその眷属を一方的に嬲り殺しにした最強最悪の魔神。

「まっ……！マジンガーＺＥＲＯ……!?」

『ほう。やはり我クラスともなれば初対面であろうと名を知られているようだな』

「「「「何故にその大きさ!?」」」」

『ふん。レジェンドの巫女ということは即ち我の巫女も同然。この巫女は我と初対面でありながら『よろしくお願いします、魔神様』と礼儀正しく挨拶してきたのだぞ。レジェンドから守護を頼まれていたが頼まれずとも守護する気になった』

そう、マジンガーＺＥＲＯがそれこそＳＤサイズ、高く見積もっても三等身ぐらいの大きさまで縮んでいるのだ。

一応彼の特殊能力『魔神パワー』の一つに変態という質量保存の法則をガン無視して自身の形を変えるものがあるが、アレは縮小化も出

来たのだろうか？

「いや、元々アーシアの護衛を頼むつもりで呼び戻してたんだよ。それでタイミング的に重なったからダンブルドアの手助けをしてもらったら案の定ああいう結果になったからなぁ。他種族を下に見て驕り高ぶった挙げ句舐め腐った相手に蹂躙されるとは思っても見なかったろうに」

『言われたとおり、あくまで『こちらに仕掛けてくる気配のある連中』だけを滅したからな。例え悪魔至上主義だろうが、こちらに害が無ければ今後の動向を監視する程度に留めておくという約束は果たしたぞ』

「ＯＫ、パーフェクトだ。あとはそれでも連中が何かしでかしてきたら……」

「『神罰だ』」

一人と一体、悪い笑顔である。

サーゼクスらはだらだらと汗を垂らしまくっているが、あの暴れっぷりを見せられそんな会話を聞かされればそうもなるわな。

「それで？お前達がここに来たということは同行するメンバーは決まったんだろ？」

「え？あ、はい。さあ、レイヴェル」

「は……はい……」

前に出ながらガチガチに緊張しているレイヴェルに対して、レジェンドは解放したもののぐすぐす泣いたままの束とオーフィス、さらにアーシアをひっつかせたまま頭上にはマジンガーＺＥＲＯが胡座をかいて腕組みし乗っており、その背後ではまたまた暇になったゼットがやけに上手いムーンウォークをしていたりとやっぱりカオスだった。

「あ、あの……フェニックス家のレイヴェル・フェニックスと申します。この度は光神レジェンド様のお慈悲とご厚意により、あの、その……」
「はいヨロシクね」
「……へ？」

あまりに簡単に受け入れられて思わず目が点になってしまったレイヴェルとライザー眷属。
そんな彼女らを見ながらレジェンドはくっついている束の背中をポンポンと叩いたり、アーシアとオーフィスを交互に撫でたりしている。
いよいよゼットはブレイクダンスからエアマイク状態でトップアーティスト顔負けのダンスパフォーマンスを始めてしまった。
お前それで食っていけんじゃないのか。

「まあ、元凶のライザーはカナエがぶちのめしたそうだし、俺はそれ以外さしてお前さんらには悪感情ないし、そう難しく考えなさんな」
「え……あ……」
「というわけで総員修行一時中断！新しい子紹介するから集合～……ってゼットお前どこのアイドル事務所でレッスンしてきたソレ」
「自己流です」
「いくらゼロ追っかけてたといってもなんでお前が遊撃隊に押しかけ入隊してきたのか一瞬悩んだぞ。進む道間違えてないか？割と本気で」

そんなこんなで集合したオカルト研究部＋αと師匠組にレイヴェルを紹介するレジェンド……なのだが、オカ研メンバーは約半数がゼェゼェとバテかけていた。
無事なのはアーシアを除けばギャスパーくらい、あとはカナエとイリナが多少息は上がっててもまだ余裕がありそうというレベルだ。

「ふぅ……ふぅ……あの時の……」
「ハァ……ライザーの……ハァ……妹の……」
「ん～？ん～……あ！そうか私が最終決戦であれと戦うときにフェニックスの涙とかいうのを渡した子！」
「は、はい。その通りですわ」

そこそこ覚えていたのか、割とすぐ思い出してもらえたレイヴェルと違い、ぶっちゃけミラ以外の眷属はユーベルーナぐらいしか覚えていなかった。
仕方ない、パワーアップしたオカ研大暴れだったたし。
しかも一誠がトライスクワッドと一体化したり、レオとゼロも無双したりと別の目玉イベントが目白押しだったから。

「ともかくそういうわけだから仲良くするよーに。お互いにな」
「「「「はーい！」」」」
「わ、わかりました」
「……」
「あの……そちらの方は大丈夫ですの？」
「心配無用だ。この程度はいつものことなのでな」
((((いつも!?))))

レイヴェルに心配されたのは当然の如く巌勝と修行中だったゼノヴィアである。
真っ白な状態でデュランダルを手に巌勝に俵抱きにされていれば誰だって気にするだろう。
それが当たり前だと言われたライザー眷属はさらに驚く。

その後、セラフォルーやガブリエル、マリーダにクロエが差し入れ及び昼食を持ってきたのでそのまま勉強部屋で食事することになった。

「そういや、俺らが留守の間は誰がこっち来るんだ？遊撃隊からはギンガが来るって聞いてるけどよ、警備隊から誰が来るかはベリアルも知らされてねーって言うし」
「割と揉めてるみたいだぞ。マン兄さんやエース兄さんはそうでもないが、他の四人がな……」
「他の四人……って親父まで混じってんのかよ。いや待てそれって最低でも六兄弟の誰かが来んのか!?」

マリーダ作のサンドイッチにかぶりつきながらレイトとゲンがそんな会話をしていると、レイトの最後の言葉にほぼ全員が乗っかってきた。
ちなみにほぼ、というのはレジェンドとオーフィスとゴジラ、マジンガーＺＥＲＯに束、それからクロエは平常運転だったからである。

「ホントにクーちゃん料理上手くなったねぇ。あ！出汁巻き卵美味しー！」
「元々勤勉だからな。真面目にやって変なアレンジしなければちゃんと上達するさ。唐揚げの大きさ良いなコレ」
「おかわりー」
『あ！ＺＥＲＯてめえオレ様のハンバーグ食うんじゃねえ！ってかロボットだろてめえは！』
『我は食物も問題なくエネルギー変換出来るのだ。そういう貴様こそ我が食そうとしたコロッケを奪っただろうが！』
「御二方、まだありますから。オーフィス様もどうぞ」
「わーい」
『うっしゃあアァァ！』
『うむ。殊勝な心掛け、褒めてやろう』

こっちは割と平和なのだが……。

「え!?セブンおじ様来るかもしれないの!?」
「タロウは!?タロウはどうなんだ!?」
「え、父さんも!?うわ……どうしようイッセー」
「なあタイガ、仮に親父さん来たとして俺達異世界じゃね？」
「あ、そうか」
「そもそも私達が異世界に行っている間の留守番役なのよね。それなら例外がないと顔を合わせる事は難しいんじゃないかしら」
「警備隊から、というとジョーニアスやエレク、ロトは来ないのか……仕方ない、彼らはＵ４０の要だ」
（グリージョちゃんは出来たら留守番よりこっちに来てほしいんだけどなぁ……無理だろうなぁ、多分兄貴達がついてくるし……はぁ）
「そもそも兄さん達も候補に入っているだけで確実とは言い切れんし、他にも候補が上がっている。スコット・ベス・チャックで構成されたウルトラ・フォースや勇士司令部のネオスとかな」

そう言ってゲンが食後のお茶を飲んでいると、レジェンドが気になったことをゼットに聞く。

「そういやゼット、お前が束やアムロから言われたことって何なんだ？俺も全く聞いてないが」
「あ……」

レジェンドに聞かれると、ゼットはいつもの調子から急に暗くなった。
明らかに普段とは違うゼットの様子にさしものゼロも真面目に心配する。

「おい、ゼット。お前マジでどうした？」
「……ゼロ師匠、シミュレーターでは自分の機体を戦績に応じて入手した資材で強化する事が可能なのは知ってますよね」
「そりゃあな。今後の改造プランなんかの参考にもなるからって束や

クロエが定期的に使用者のデータ確認に来てるしよ」
「そだよー。こういうのって個人のクセとか性格とか分かるから便利なんだよね」
「だよなー。俺は相棒でも分かるようにガチ白兵戦重視に改ぞ……まさか」

ここでレイトはゼットが暗くなっている理由に気付いた。

「もうアレ以上、ガンダムは改造不可能なんです。元々ハードポイントシステムを積んでるわけではないし、手持ち武器を変えるにしても限界だと」

つまり、ジ・Ｏを倒した時のガンダムは極限まで強化された状態で、それでどうにか自機の戦闘不能と引き換えに撃破したというわけだ。
これ以上は戦闘についていけないらしく、たとえシミュレーターとはいえずっと使い続けてきた愛機を手放さざるを得ない状況になったことでゼットは気落ちしているのである。

「そこでね、束さんはあっくんに連絡とってゼッくん用の新型ＭＳを合同開発することにしたわけ」
「「「ゼット用のＭＳ!?」」」

レイトとトライスクワッドが揃って声を上げ、ギャスパーの訓練に付き合って勉強部屋にいたリクもさすがに言葉を失う。

「ゼッくん、一つの機体を大事に乗ってたし、それで凄い戦果もあげてたし。それにあっくんが初めて乗ったＭＳをゼッくんがずっと使い続けてたことにあっくん自身感銘を受けたみたいでね、ゼッくんの戦い方が徐々にコックピット外して戦闘不能にする方法にシフトしていったのも合わさって今回のことに行き着いたんだ。『彼ならどんな力でも間違った方向には使わないだろう』って。今後、赴いた異世界

でこういうのが必要になってくるかもって予感もするしさ」
「それで、今はデザインを考えてる途中なのでございます。ある程度決まってはいるんですけど」

ゴソゴソとゼットが取り出したのはＶ作戦のファイル……ではなくそれを模したもの。
そこにはしっかりと細部まで描かれた一機のＭＳのラフスケッチがあった。

「……これヒカリ博士に見せたら確実にスカウトされるな。科学技術局の方に」
「これガチでスゲーやつじゃん……」
「なあゼット、お前なんでこんな才能あるのに遊撃隊に来たんだよ」

タイガやフーマ、果てはレイトさえ認めるような詳細まで書かれており、ゼット本人いわく『興味が湧くととことん調べるタイプ』が実証される結果となったそれは、レジェンドや束さえも納得の内容。

「……見た感じ、参考にしたのはνガンダムとＺガンダムか。いや、それ以外にもあるな」
「当たりです超師匠。νガンダムとＺガンダム、加えてリ・ガズィカスタムをベースに、更に肩部の参考はガンダムデルタカイ、アンテナの形状とかちょっとしたところはゼロ師匠の乗ってるダブルオーで、カラーリングはガンダムを意識してるでございます」

つまり正確に言うと『アムロ絡みの機体をベースに個人的に気に入った機体の要素を盛り込んだハイブリッド機』がコンセプトのＭＳである。
丸々同じもののミキシングではなく、それらを参考にアレンジして調和させたのは見事というほかない。

「コックピットハッチの開閉の仕方に始まり各部関節やバインダーの稼働角度、スラスターの位置、各種武装の詳細からマウント方法なんかも完璧だね。正直これでちゃんと完結してるけど何か足りないとこあるの？」
「いや……俺はニュータイプじゃないしサイコミュ関連の装備とかは別にいいんですけど、やっぱりＺガンダムとかリ・ガズィカスタムもベースにしてると変形させたいんです。けどどうもここからまた弄るのは気が引けて……」
「あーなるなる。大丈夫だよーここまで出来上がってるならあとは束さんがこれを崩さないレベルでアレンジ可能だから。というより、さっきゼッくんが言ったハードポイントシステムで外付けユニットとして追加装備くっつけるか支援機と合体させれば解決だよ。あっくんが乗ってたリ・ガズィは外付けのＢＷＳで擬似的に変形してたから」

ただしあちらは分離すると戦場では再接続出来ない欠点があり、それを解決したのがリ・ガズィカスタムだ。

「よし束、折角だから長距離高速巡航形態用以外にも強襲突撃用装備とか色々作るか。素体がここまで完成度高けりゃ割と何でもいけるだろ」
「いいねぇ！確かにνガンダムもＨＷＳ装備とかあったしフルアーマーもありだね！それじゃあ任せたまえゼッくん！束さん達がこれをしっかり形にしてあげよう！あ、一応ファイルごと借りとくね、ちゃんと返すからそこは安心して」
「マジでございますか!?よろしくお頼み申します！」

相変わらず綺麗に曲がった礼をするゼット。
オーフィスが「我も見たい」とぴょんぴょん跳ねながら言うので、彼女を含むほぼ全員がそれを見たら絶句していた。

「……間違いなく超高性能機な感じ出まくってるよね、これ」
「何というか、ロボットアニメの終盤で満を持して登場した主役機の最終形態的な雰囲気があるぜ」
「ゼットさん、絵がお上手なんですね！」
「アーシアちゃんはそこなのね……」

何故かウルトラ戦士より別方面でやたら多才ぶりを発揮しているゼットであった。

「それで、この機体の名前とか考えてるのか？」
「勿論でございますよ！最初は『ガンダムゼット』とかにしようかと思ったんですけど」
「ごめん、凄い機体なのにその名前で凄さ半減した」
「いや違いますってタイガ先輩！それじゃ俺と名前がほとんど一緒だから変えましたって！ただ、どうしてもＺ絡みの文字は入れたかったんで、こう名付けました」

機体名『ガンダム・エクシード・ゼータ』。
通称『ＥＸ（エクシーズ）―Ｚガンダム』。
正式名称はリ・ガズィっぽく、そして通称はＥｘ（イクスエス）―Ｓガンダムに似せて真面目に付けられていた。
ＥｘではなくＥＸという表記なところも微妙な違いである。

「「「「至極真っ当な名前だ……！」」」」
「ちょっ!?皆様方酷くないですかね!?」
「いや、うん。最初の名前が名前だったから……」

タイガの一言に皆が頷くとゼットは「ウルトラショック……」と凹む。

そんなこんなでゼットまで専用機、それも最新鋭機が譲渡されることになり、小猫も覚悟を決めたのか当初は嫌がったフェアリオン用のダンスを習得することにした……のは良かったが……。

「うん、それじゃあしろにゃん以外の猫娘なそこの二人と双子なそこの二人、あとついでにゲン師範にれーくんもレッスンしてみようか」
「「「えええ!?」」」
「いや何で俺とゲンまで!?」
「レジェくんはアーちゃんとやったよ?」
「なるほど、これは息を合わせるための特別な修行方だというわけか。やるぞ、レイト」
「うおおおい!?マジでやんの!?つかそこの二人×2はともかく俺とゲンの組み合わせに関しては完全に束が反応愉しんでるだけじゃねーか!!」

なんとライザー眷属であるニィとリィ、イルとネルに加えてゲンとレイトまでやる羽目になってしまい、ますますおかしな光景になってしまうのだった。
同時にリアスらが各々の師より受けていた修行の苛烈さや濃密さに触れたレイヴェルやライザー眷属はその後、とある人物に修行をつけてもらう事になる。
そう、かつてジープでゲンを追い回したり滝を切れと言ったりした伝説のあの人物に……。

〈続く〉

――おまけ――

「あ、それからフェアリオン用のこのモーションね、ファイナルブレイクするときにパイロットはゴスロリファッションに変身するから」

「「「「!?」」」」
「つっ……つまりっ……ゴスロリ白音!?ヤバい鼻血出そうにゃ。束、それ録画出来る!?特に変身シーン!!」
「出来るよー。セラちゃんもやってみる?」
「いいの!?やりたいやりたい！」
「あのさ、皆……それってつまりレジェンドとかレオさんもそうなるってことじゃないのか……？」

タイガの一言にイメージしてしまい、一部以外の吹き出した面々にレジェンドが怒ったため、レジェンドＶＳ吹き出し組で模擬戦をやった結果……言うまでもなく惨敗した吹き出し組は罰として男性はメイド服、女性は紋付袴で一日過ごさせられることになったそうな。

「ウルトラマッスル……にょ!!」
「頼むからその衣装でマッスルポーズはやめてくれ旦那ァァァ!!」
「魔法……魔法少女ミルたん……うわあああ!!」
「どうしたんだイッセー!?」
『この世の不条理を改めて認識しただけだ』

約束の空へ～七番目の恐怖～

レイヴェルがダイブハンガーへ来た翌日。
いよいよ異世界への修行の旅へ出発する日がやってきた。
既にメンバーは荷物をまとめてクロガネに乗艦を始めており、見送りに来た者達も大勢いる。
ダンブルドアもダイブハンガー全域にハウスキーピングの魔法をかけるべく、わざわざ惑星レジェンドから出向いてくれていた。

「レジェンド様、ご武運を」
「ああ。しかしすまんな、面倒をかけて」
「いやいや……こういう平和な魔法の方が使っていて気が楽ですからな」

二人がそんな会話をしている時、傍でソワソワしていたゼットにある人物が声をかける。

「やあゼット、久しぶりだな」
「へ？あ……貴方はっ！アムロ師匠!!お久しぶりでございます!!」

相変わらず礼の角度が見事なゼットに苦笑するアムロと、彼の名が呼ばれたことで多くの者が反応し驚愕の表情を向けた。

「うお!?マジでアムロ教官じゃねーか!!」
「俺らを見送りにこっちまで来てくれたのか！」
「それよかゼットさん普通に名前呼ばれてたぞ!?」
「バッカおめー当然だろ！俺らがシミュレーターで四苦八苦してやっとこさ倒した相手を性能差ある機体で撃破したエースパイロットだぜ！まだ機体ねーけど」
「そういや東の姐さんやバコさんが教官と組んでゼットさんの専用機開発するとか昨日言ってたぞ！」

「おいおいおいソレハイスペック間違いねーわ。漸くかって感じだけどな、今まで専用機無かったのがおかしいくらいだし」

鉄華団のメンバーが騒ぎ立てるのも気にせず、二人は気楽に話す。

「先程束から君の専用機のスケッチを見せてもらったよ。あれは大したものだ。ちょっと前まで全くＭＳに関わっていないとは思えないクオリティだった」

「今の俺の持ちうる知識と情熱を全て叩きつけました！ホントなら装甲材質とか出力とかも細かく決めたかったんですけど、俺頭あんまり良くなくて……」

「そこは開発しながら突き詰めていくから心配ないさ。君だけでなく俺達が望む最高の機体を完成させるから、楽しみに待っていてくれ。そして、シミュレーターの記録で君が見せた優しさを忘れないでくれ」

優しさを忘れないでくれ――ゼットが六兄弟の中でも飛び抜けて尊敬しているエースがかつて言ったのと同じ言葉を聞き、ゼットの胸に熱い何かが込み上げてくる。

エースはＡと表記されることもあり、アムロのエンブレムもまた赤いＡと一角獣が合わさったものであるという似通ったところがあることもまた数奇なものだ。

「はい！」

「良い返事だ。出発までまだ時間はあるようだし、少しばかり俺が見てあげようと思うんだがどうだろう？レジェンド様から許可は貰っているし」

「是非ご教授お願いします！」

まさかのアムロ直々の教導申し出に辺りがざわめき、こういう時だけ地獄耳を発揮するレイト他パイロット勢が一気に押しかけてきた。

「なあ！俺も相手してもらっていいか⁉」
「ちょっとレイト！私だって白音と旦那様にいいトコ見せたいにゃ！」
「黒歌じゃまだ瞬殺されそうなんだけど。アムロさん、俺にもリベンジさせてよ」
「私も久々にお手合わせして頂きたく」

レイトに加えて黒歌や三日月、巌勝といった面々が次々に声をかけてきてアムロは苦笑するも、ゼットを一通り指導してからということで落ち着く。

そしてその結果――

「ありがとうございました！ＥＸ―Ｚガンダムでは肉弾戦も積極的に仕掛けたかったので凄く参考になりましたアムロ師匠！」
「反応速度は悪くないし、咄嗟の閃きもいい。あとは機体性能が高くなれば余裕が出来て周囲を今以上によく見れるようになるはずだ。落ち着いて自機だけでなく戦場全体の状況を把握することを常に意識するんだぞ」
「了解であります！」

褒められると同時にアドバイスも受け敬礼で応えるゼットに対して、三日月と巌勝はまだしもレイトと黒歌は真っ白な状態になっていた。

「ヤベーってアレ……開始十秒で武装全壊、そこからさらに十秒で撃墜って何なんだよ……」
「こっちなんて玄武剛弾を容赦無く粉砕されてコックピットに集中砲火食らったにゃ……」
「巌勝さん、フィン・ファンネルどれくらい落とせた？俺五つ」
「私は四つだ。やはり私のみならず教官殿もまた操縦技術は今なお上

がっているようだな」

案の定レイトと黒歌はボコボコだった。

三日月と厳勝は以前よりフィン・ファンネルが落とせなくなっていたのは予想範囲内らしく更に精進する事を決める。

「どうしたゼロ。変身してるわけじゃねえのに何でヘバッてんだ？」

「ヘバッてんだって……その声は」

「父さん！」

レイトに声をかけた人物の姿を遠目で見たリクがギャスパーの手を引きながら走ってくる。

黒のロングコートに薄い水色のセミロングヘア、そして右目に縦一線の傷を持った男性。

某満足町の町長がより筋肉質になったようなその人物はかの銀河遊撃隊総司令官、ウルトラマンベリアルであった。

「「「「ベリアル総司令!?」」」」

「おう、元気そうだなお前ら」

そんなベリアルの隣にはウルトラマンギンガこと礼堂ヒカルも立っていた。

「よっ！皆久しぶり！」

「ヒカルさん！」

「「「ギンガ先輩!?」」」

「留守番役のギンガを連れてくるついでに見送りに来たぜ。あともう一人、ガーディアンベースを出て宇宙で合流した奴がいる。ソイツが宇宙警備隊側の留守番組だ」

「お、そうなのか。一体誰……!?」

ベリアルがそう言ってレイトが興味津々になった時、その人物は現れレイトと、加えてゲンまで固まる。

「俺がその留守番組だ。俺が見ていないからと怠けるなよ？ゼロ、そしてレオもな」

「親父イイイイ!?」
「隊長オオオオオ!?」
「セブン大大師匠オオオオオ!?」
「「「「えええええ!?」」」」

かってシトリー家で世話になった事もある伝説のウルトラ六兄弟の三番目にしてレオの師でありゼロの父親、ウルトラセブンことモロボシダンが、ＭＡＣの隊長だった頃の姿で現れた。

「セブンおじ様ー！」
「おお、セラフォルーさんか。俺とチーフの記録は気に入ってくれたかな？」
「うん☆私は悪魔だから特に夜が舞台のお話を毎回ワクワクしながら見たよ☆」
「俺達は毎回気が気じゃなかったが、そう言われると苦労も報われた気になるものだ。そうでしょう、チーフ？」
「まあそうだな。二人揃ってシャドウマンに小さくされてお前はコップで蓋されて、俺はロッカーに閉じ込められたのとか懐かしい思い出だよなぁ」
「あとマックス号をゴドラ星人に占拠されて宇宙空間へ運ばれた時も二人で救出に行きましたね。あの時、よくよく考えてみれば殆ど生身で宇宙遊泳状態だったフルハシ隊員やソガ隊員、タケナカ参謀はさすがウルトラ警備隊と地球防衛軍だと感心しましたよ」

わりかしとんでもないエピソードを笑いながら話す二人だが、聞いている側としては冷や汗しか出ない。
レジェンドが、この世界に建造したウルトラ警備隊秘密基地がハンターズギルドになっていることを教えると、あとで訪問してみると答えるダン。
「いや、親父やレジェンドのヤベー過去話はいいけどよ……どういう経緯で親父に決まったんだ？」
「ん？どういうって
力づくに決まってるだろう」
やはり武闘派であった。
というか隊長のゾフィーやあの半ば暴走状態のタロウとかに勝ったのかウルトラ警備隊七番目の男は。
「伊達に狡猾な宇宙人とやり合ってはいないからな。心理戦もお手の物さ」
「マンとエースは？」
「二人とは戦ってませんよ。連絡を取り合って予定合わせをしたあとにちょっと顔を出すと言ってましたので」
「ジャックはどうした？」

「ああ、ジャックはですね。アザゼルに釘刺しとくことを条件に譲ってもらいました」
「!?」

アザゼルがかつてプール開きの時にヴァーリがなった顔……即ちエ○ル顔でショックを受けていた。
それを間近で見てしまった束、セラフォルー、ガブリエルが吹き出してしまう。

「ぷっ……!セブンおじ様ナイス発言☆」
「私の胸を揉もうとした事もありましたよね～」
「え、マジで？レジェくーん、ちょっとソイツ束さんのアストラナガンで虚空の彼方に消し去っていい？」
「アストラナガン？」
「束さんの愛機だよー。レジェくんに作ってもらったやつでね、クーちゃんのガリルナガンはそれを元に作ったんだって。だからレジェくんのネオ・グランゾンと束さんのアストラナガンはクーちゃんのガリルナガンのお父さんとお母さんなのだ！」
「それより謝るしもうやろうとも思わないんで虚空の彼方に消し去るのは御勘弁頂けませんかね!?」

アザゼルが懇願する傍ら、黒歌が「アストラナガン？」とクエスチョンマークを飛ばしている。
余談だが、彼女はスパロボＯＧｓ～第２次スパロボＯＧの知識しかない事を書き記しておく。
……レジェンドのネオ・グランゾン、ガリルナガンより完成は後じゃなかったか？
それはともかく、セブンが同時にレジェンドからライザー眷属のコーチを頼まれていた事も聞かされ、彼女らはさらに驚く……が、約四名は違う反応だった。

「えー！ミライお兄ちゃんがいい！」
「お姉ちゃんと同じくー！」
「ミライお兄ちゃん優しいしー」
「ご飯美味しいしー」
「あはは……。ニィちゃんにリィちゃん、それにイルちゃんとネルちゃんもそう言わないで。セブン兄さん、特訓は厳しいけどちゃんと結果がついてくるから」
「「「やだー!!」」」

ほぼ一日で双子組に懐かれてしまったヒビノミライことウルトラマンメビウス。
その様子にミラを始め他のライザー眷属は顔を引きつらせている。
「何だ何だ光の国同様こっちでも人気者じゃねえかメビウス。タロウの奴も教え子がここまで愛されキャラになって鼻が高いだろうよ」
「からかわないでくださいよベリアル総司令」

和やかな雰囲気であるが、その後デモンストレーション代わりに見せたセブン流スパルタ修行はかの鬼師範厳勝すら絶句させた。

「やめて下さい隊長！死んでしまいます！今回は本気でエェェ!!」
「そうだぜ親父！俺達の戦いはこれからだって言った直後に終わる漫画宜しくエンディングまでストレェェェト!!」
「修行なのコレ!?修行なのかコレェェェ!?」
『スパルタとかそんな次元じゃねーよ!!』
「セブンさん！鬼畜なコーチ心に負けないで下さい！」
「タイガ！何かそのセリフは早い気がするぞ！」
「セリフじゃなくて動き早くしねーと負けるぞ！主に生死の境の競り合いにィィィ!!」

あのゲンすらもガチで逃走するほどの恐怖。
何故ならそれは……
「甘いぞお前達!!相手が遥かに巨大などよくあること、そんなものは対処出来て当然だ!!チーフの戦いを思い出せ!!」
「「「「比べる相手が間違ってるんですがァァァ!?」」」」

カスタムされたガンタンクに搭乗したダンに超高速で追い回されているからだ。

いやガンタンクの出せる速度じゃねーべ。
しかもドリフトや急旋回・急制動・急発進するという、真ゲッターもビックリな挙動に竜馬も唖然。
ちなみに作ったのはあろうことかイナバ・コジローであった。
「ありゃガンタンクじゃなくてガンゲッターじゃねえかよ」
「火力も半端ないよね、あれ」
「あ、レイト君が空を舞いましたね」

竜馬と三日月、しのぶはもはや他人事と決め込んで達観することにした。
生身とはいえ遊撃隊隊長さえ簡単に吹っ飛ぶ修行場には絶対混ざりたくない。

「先輩イィィィ!?」
「くそっ！こうなったら意地でもぶっ壊してやる！」
「漸くやる気になったか！だが遅い!!」

そう言うとダンはある戦法を取る。

「レッグスマッシャー、発射!!」
「皆！何かが発射され……」
「「「『え？』」」」

なんと、ガンタンクの上半身が分離し、何基ものロケットブースターを展開したガンタンクの下半身＝キャタピラが先程とは比べ物にならない速度で突撃してきたのである。

「「「『ぎゃあああああ！』」」」

ドオオオオオオン!!

「イッセェェェェェ!?」
「タイガさぁぁぁん!?」
「タイタスゥゥゥ!?」
「フーマさんんんん!?」

割と冗談抜きで死んだんじゃないのかアレ。
しかもガンタンクの方はまともに動けなくなるどころかジオングよろしくコアファイターのブースター部分を器用に使い空中戦を展開……下手なＭＡより強いぞこいつ。

「くっ！残りは俺だけか！だがお前達の師として俺は隊長に勝ってみせるぞ!!ダァァァッ!!」

ゲンは地上からガンタンク目掛けて遥か高く飛ぶ！
しかし！

ガ　コ　ン

「ムッ!?……は？」
「誰が俺自身は武装していないと言った」

ガンタンクの頭部ハッチを開いて現れたのはフルアーマーユニコーンばりに超武装しまくったダン。
一瞬で血の気が引いたゲンだったが、直後に集中砲火を浴びて落下。
……ゲンまでまさかの敗退。
奇策に次ぐ奇策でゲンを含むレイトや一誠、トライスクワッドまで全滅させてしまったダンにライザー眷属はガタガタと震え出した。

「俺にとって訓練・特訓・修行はそれぞれ別の意味を持つ。訓練とは日々こなす、いわばジョギング。特訓とは己の新たな領域を広げるために行うもの。そして修行は己を死と隣り合わせの状況に置き、己の限界を超えるために行うものと俺は考えている。よってライザー・フェニックスの眷属には修行を行ってもらう！覚悟しておくように!!」
「「「やだぁぁぁぁぁ!!」」」

ミライに引っ付き本気で泣き出してしまうニィとリィ、イルとネルの姉妹二組。
さっきの光景を見ればそういう反応してもしょうがない。

「俺による修行を恐れているようではチーフが連れて行く彼らに勝とうなど１００万年早い！ありとあらゆる事態を想定して考えうるか

ぎりの地獄に突き落とすチーフの本気の修行を体感するであろう彼らを超える気があるなら四の五の言わず壁を乗り越えろ!!」
「「「「……ゑ?」」」」

ダンの一言にわ行の発音が出てしまうオカ研メンバー他異世界修行組。
ついでにベリアルは遠い目をし、レイトは両手両膝をついて涙する異常事態に。

「なあ……お前ら知ってるか？強制的にウルトラマンからこの姿にされた挙げ句、ヤベェ怪獣蔓延る星で約一年サバイバルさせられるとな、視えないはずのモンが色々視えてくるんだよ」
「俺は……生き残った……！生き残れたんだよ！親父と和解出来たと思ったらあんな……あんな、トコに……行かされたけど……！あああああ!!」

何この状況。
光の国最強戦力に数えられる二人がこんな状態になるって何したのと思いつつ、リクやギャスパーに呼びかけられるベリアルや、ゲンと一誠、加えてトライスクワッドの三人に本気で背中擦られながら未だ泣き止まぬレイトを見てリアスはこう思った。

（壁を乗り越える前に死にませんように……！）

彼女のみならず、ほぼ全員同じ思いである。
そんな彼らもそろそろ乗艦し、いよいよ出発というときに最後の見送り客にしてライバルとも言うべき者が姿を現した。

「お互い、一応出立前に顔見せは出来たようだな」
「「「「悪魔将軍（さん）!?」」」」

無論、彼の傍らには――

「私もお師匠様とご一緒なのでーすよ」

「久しぶりだな、リアス。以前冥界で会った時より面構えがまるで違う」

「貴方……サイラオーグ!?何で悪魔将軍や芥子さんと一緒にいるのよ!?」

「それは当然、俺が将軍様の下で己を鍛えているからだ」

まさかの従兄弟の登場に驚きを隠せなかったリアスだが、彼の境遇や性格を考えてすぐに納得する。

彼女自身がレジェンドと悪魔将軍の闘いを間近で観たからこそ分かるのだ、魔力を使わず鍛えた力と技で光神に肉迫した悪魔将軍が彼の理想の体現だと。

「……!」

そんな中、一誠はただ一人息を呑む。

リアスと同年代ながら、今の自分より明らかな格上が放つその闘気を肌で感じている。

(戦闘態勢じゃないのにこの気迫……そこそこ自信はあったけどあの人は半端じゃねえ……!)

「将軍様は素晴らしい御方だ。俺は身の上の話をしたが『それがどうした』と一蹴され、俺の努力を肯定してくださった」

「フン……魔力の有無云々でお前を評価する連中の頭の中は腐ったモノしか入っていないと思ったにすぎん。真に評価しなければならないのは積み重ねられた鍛錬の結果、才能など二の次三の次だ。よく『才能の持ち腐れ』と言われるように才覚の高さ故それに溺れ、命を落とす者もそう珍しくはないのでな」

悪魔将軍は真摯に努力を重ねた者を正しく評価する。
落ちこぼれと言われ続けた彼にとって悪魔将軍から太鼓判を貰ったときは歓喜の涙を流した程であり、彼の下に集った眷属もまた彼同様今や悪魔将軍自慢の弟子達だ。
ついでに、サイラオーグやその眷属は地獄における一番弟子の芥子を『先輩』『姐さん』と呼び慕っており、先日のチンピラ（ゼファードル）強制送還騒動においてボス以外を一匹で全滅させた彼女に尊敬の念を向けている。

「貴方も心から師と呼べる人が出来たのね」
「それに芥子先輩から呵責のやり方も学んでいる。『とりあえずタヌキは潰せ』と教えられた」
「「「「それ思いっきり個人的なこと混じってません!?」」」」

確かに私怨全開だがサイラオーグや彼の眷属は信じて疑わない。
鬼灯から彼女の過去話を聞かされて全員同意してしまったぐらいだし。

「お前達も旅立つと聞いたが、あっちは大丈夫なのか？正直あまりＴＶ見ない俺としてはお前のとこの『激闘！魔闘地獄!!』がここ最近唯一楽しみな番組なんだぞ」
「我も見てる。この間のは凄かった」

なお、オーフィスの言う『この間』の時の呵責対象はなんと童磨であった。
どういうわけか無惨に続いて弾かれたこいつがこっち側の日本地獄にいると聞いてカナエとしのぶはぶった斬りに行こうとしたのだが、その直後レジェンドがつけたＴＶにて悪魔将軍の超人圧搾機が炸裂しているところを見て落ち着く……わけでもなく悪魔将軍に熱狂的なエールを送っていた。
当の童磨は胡蝶姉妹がこちら側にいることを知らされて歓喜して

いたが、鬼の力が無くなった状態でしのぶでもカナエでもなく悪魔将軍に後ろから組み付かれ全身の骨を砕かれるという、しのぶにやった事をほぼそのまま返されて絶望したらしい。
せめて可愛い女の子なら良かったのに。
そう言った童磨はダブルニークラッシャーならぬダブルボールクラッシャーで股間を粉砕された上、地獄の断頭台を食らい首がすっ飛んだ。
そして悪魔将軍トドメの一言。
「生憎貴様の想っている娘達はどちらもレジェンドにお熱のようだがな」
その瞬間、すっ飛んだ童磨の頭が浮かべた表情はこの世の終わりのような、それこそ地獄甲子園的な顔だったという。
まあ、それはいいとして。
「心配せずともお前が広めた技術で、その日に必要なメンバーはいつでも戻れるようになっている。ファイト日程に狂いは無くただ普段は魔闘地獄にいないだけだ」
「じゃあお前とあの淫獣の激突（という名の一方的蹂躙）も見れるんだな。何せアーシア達をナンパしようとした不届き者だからド派手にシバくのを期待してるぞ」
淫獣とは即ち白澤（はくたく）のことである。
東や卯ノ花、果ては残る二人の九極天の片方とその傍らにいる三人（いずれも外見ロリ）にも手を出そうとしてレジェンドと鬼灯から容赦無い折檻を受け、今なお心象は最悪。
神だろうと何だろうと関係ない悪魔将軍のファイトは見ていてスカッとするので僅か短期間で日本地獄の名物の一つになっている。

そして全ての準備が完了し、出発する時刻を迎える一行。

「よし！乗りっぱぐれや忘れモンはないだろうな⁉」

「「「「うぃーッス!!」」」」

「オルガも食べる？スルメとスポーツドリンク」

「おう。ありがとよ、ミカ。気の抜き過ぎはいかんだろうが張り過ぎも良くねえよな。つか美味ぇなこのスルメ」

クロガネのブリッジでスルメを齧る鉄華団のトップ二人の図はえらくシュール……でもない。

多分大体三日月の所為だろう。

一方、女性用のシャワー室ではロスヴァイセがファミリアであるハクとフウのブラッシングをしており、猫ベースでありながら2匹とも暴れたりしない辺りお利口さんである。

もっとも、ハクの方は性格的にのんびりし過ぎているぁけだろうが。

「くァァ～……」

「ハク、もう少し我慢してて下さいね」

「ニャ」

目を瞑りジッとしているハクに対し、フウの方は何故かニアや蜜璃、カナエにブラッシングされている。

「動いちゃめっ！ですよ」

「大丈夫だから早くしてほしいニャ」

「じゃあちゃっちゃと済ませてドライヤーしてフカフカしましょ！ニアさん蜜璃ちゃん！」

「はい！」

このあと、ハクとフウはかの有名なケツドライヤー猫と同じ目に合

うのだった。
……ついでにパム治郎も。

「パァァァァ!?」
「ニャァァァァ!?」
「ニャ〜……」

約一匹まるで効果が無いようなやつがいたが。
多くの者に見守られつつ、クロガネはエリアル・ベースにて我夢と藤宮が待つ空の世界への時空転移を行う。
しかし、彼らは知らなかった。

――この願いが届くなら……私の代わりにあの子達に、外の光を……空の蒼さを――

たった一つの願いが、一人の光神と二人の少女を運命の出会いへと導く事を。

〈続く〉

二つの出会い

ある女騎士の無念、そして願い――
壁を、世界を超え、まだ見ぬ場所へ。
光の神は、安寧の終わりに現れた。

☆

クロガネが無事転移を終え、空の世界に到着すると外を見ていた者達から感嘆の声が聞こえ出す。

「おおお！マジで惑星レジェンドの浮遊大陸よろしく浮きまくってんじゃねぇか！穴倉生活してた昔を思いだして冒険心が疼いてきたぜ!!」

「懐かしいなアニキ！ラガンを見つけて地上に出た頃の気持ちが戻って来たみたいだ！」

「そうね～……思い返すとあの時は私達３人だけだったのに、今じゃ次元まで超えてこんなにいるもの。大グレン団じゃないけど」

カミナ、シモン、そしてヨーコはジーハ村を出た頃を思い出しつつ、当時感じたものを再び胸の内から湧き上がらせている。

「よぅし！甲板出てちょっくら外を直で見てくらぁ！空の世界で最初にドリルに乗るのは俺だァ!!」

「ちょっとカミナ!?あんたドリルに乗るってあっちに来た時にクロガネに乗ってたところ……ってもう。相変わらずこういう時はホントに早いんだから」

「ま、気持ちは俺も分かるぜ。しっかし絶景じゃねえか。自由に来れるようになったら姪っ子達も連れて来てやりてえな」

苦笑するヨーコの隣に立ったキタンは出立前に届いたダヤッカ夫

妻とその娘であるアンナからのメッセージ付き写真を見ながらニヤけていた。
　ゴーデスとの戦いは惑星レジェンドにも逐一伝えられており、その勇姿を見た彼ら一家から慰労と激励の言葉が添えられた写真を受け取ったキタンはそれはもう喜びまくって祝勝会で自慢しまくっていたのは記憶に新しい。
　そしてブリッジにはレイトが顔を出しに来ていた。
　ＭＳ、それも畑違いではあるが同じくガンダム乗りのレイトは、何気にウマの合う巌勝や三日月と共に行動や訓練するうちに自然とオルガとも親密になっていた。
　正直、レイトが鉄華団のメンバーと言われても違和感がない。

「おーいオルガ、ちょっといいか？」
「ん？レイトじゃねえか。珍しいなブリッジまで来るなんてよ」
「俺もワクワクはしてるけどよ、コイツの艦長で鉄華団の団長には頼みたいってか言っとかないといけない事があってな」
「お前が一人でブリッジまで来て巫山戯た話はしないだろうしな、何だ？」
「レジェンドから聞いてると思うけど、こっちに先行してる俺達遊撃隊のメンバー……ガイアとアグルがいるえーっと……何だっけな、団体名」
「ウルトラ騎空団じゃなかったか？俺も自信ないけどよ」
「ああ！そうそうそれだ！そいつらが活動拠点に使ってるエリアル・ベースと、確かポートブリーズってとこで合流する手筈になってるんだ。悪いけどまずはそっちに向かってくれ」

　オルガ自身も聞いた、レジェンドが先遣隊として向かった時にいつの間にか結成されていたという『ウルトラ騎空団』。
　そこで活動しているガイアとアグルこと我夢と藤宮に先日連絡がついており、合流して紹介や情報交換等を済ませてから行動しようと話がついていたのである。

やはりレイト……ゼロも一組織を引っ張る隊長なんだなと思いつつオルガは了承。
送られてきた地図……この世界では空図を元に座標を特定し、クロガネをポートブリーズへとその進路を向けた。
「こちらブリッジのオルガだ。これより本艦は進路をポートブリーズと呼ばれる島群に向ける。そこで銀河遊撃隊のメンバーが所属してるらしい、レジェンドの旦那が団長の騎空団って団体と合流し、今後は活動していくことになる。悪いんだが旦那はいつでも出れるよう……」
『オルガ、俺だけど』
「ミカか。どうした？せめて最後まで言わせてほしいんだが」
『ごめん。だけどそのレジェンド様なんだけど
オーフィスとかオカ研？のメンバーとか何人かと一緒に姿が見えないんだよね。クロガネの艦内全域探したけど』
「は？」
三日月の言葉にオルガとレイトは間抜けな声を出し、一拍おいてからブリッジには二人の絶叫が木霊した。
到着早々、大波乱である。
☆
時に場所はフェードラッヘ。

以前ケロニアの襲撃があり、我夢ことガイアの活躍とそれを支えたジークフリート、そしてランスロット率いる白竜騎士団の奮闘は、然程時間が経っていないのにフェードラッヘで絵本が出てしまうほど有名な話になっていた。
ガイアの銅像が短期間で完成し、あの日が『巨人と騎士が手を取り合った日』として記念日になってしまったくらいである。
そんな王都フェードラッヘの城、その謁見の間にリアス達オカルト研究部その他はいた。

「……というわけなんです」
「ふぅむ……それはまた難儀な」

彼らの顧問である矢的がカール国王に事情を説明すると、我夢とも顔見知りな白竜騎士団の団長ランスロットと副団長となったヴェインが挙手し発言する。

「陛下、もし許可を頂けるのなら彼らを少しの間、このフェードラッヘに滞在してもらってはどうでしょうか？聞けば彼ら……正確には我夢と知り合いのようです。私とヴェインも我夢の所属する騎空団に出向する事が決まってはいますがまだ引き継ぎの方が完了していない以上、フェードラッヘを離れられませんし、連絡によると向こうから迎えに来てくれるとのことです。せめて私達の出立に合わせて彼らを連れて出るようにしたいのですが……」
「お……私からもお願いします！」
「ランスロット、ヴェインよ。そう気を張り詰めずともよい。我夢殿の件もそうだが何も害を成していない彼らを無理に追い出そうなどと儂も微塵に思ってはおらぬ」
「「では……！」」
「うむ。この城の空き部屋もまだ十分にある。ランスロットの出立の日までこのフェードラッヘに滞在してもらって構わん。無論、そちらが良ければの話ではあるが」

「いえ、寛大なお心遣いに感謝しつつ、お言葉に甘えさせて頂きます。ありがとうございます、カール国王陛下」

髭を撫でながら優しい表情で告げるカール国王にリアス達は顔を見合わせて笑顔になり、矢的も頭を下げた。

一応アザゼルもいたのだが、彼に対応させていたらどうなっていたのやら。

かくして、オカルト研究部＋αは少しの間フェードラッヘにて過ごす事になったのである。

「一時はどうなるかと思ったがどうにかなったな」

「けどいくらここに滞在出来るとしても、それに甘えて何もしないわけにはいきませんわ。ご厚意で受け入れて下さったのですから私達に何か出来る事があるなら率先して引き受けませんと」

「「「「……」」」」

「な……何ですの？」

安堵するアザゼルに対し、レイヴェルの発言を聞いたレーティングゲーム参加組はポカンとした表情で彼女を見ていた。

「いや……悪いけど俺、あん時『コイツも兄貴同様に傲慢不遜かよ』とか思ったんだけど、今のがお前の素なのかそれとも成長したのか悩んじまって……」

「私は根は良い子なんじゃないかと思ってたのよね～」

「とりあえず家族思いではあるんじゃないかなって」

「……ブラコンじゃないだけ良いと思います」

一誠、カナエ、裕斗、小猫の順に今のレイヴェルの感想を述べていく。

レイヴェル自身、あの時はフェニックスというだけで調子に乗って

いたと自覚しており返す言葉もないが、少なくとも現在は悪く思われていないと安心する。

「それはそうと、同じオカルト研究部でもアーシアちゃんやダ・ガーンさんがいませんし、タイガ君達は……」

「あ、俺達は何かあるとマズいからアストラル体になってるんだ」

『私はアースライナーやアースファイターと一緒に一誠のブレスレットの中にいる。咄嗟のことで伝え忘れてしまっていたが』

「あらあら、そうでしたのね。つまり貴方達はイッセー君と基本一緒だから有事の際もそこは変わらないと。万が一があっても一人じゃないというのは安心ですわね」

朱乃がいつもの調子で言い、アーシア以外のオカ研メンバーはしっかり揃っていることを確認した。

そしてアーシアの代わりにオカルト研究部と共にフェードラッヘに転移していたのはイリナの師である聖竜騎士ゼロガンダムと前述のレイヴェル、加えてロスヴァイセとそのファミリアであるハクとフウ。

なぜこの面子なのかは不明だが、カナエをも遥かに凌ぐ実力者のゼロガンダムや、いざとなればウルトラマン以外でサイバスターを駆り巨大戦が可能なロスヴァイセがいたことは心強い。

ついでにサイフィスはサイバスターの中でお昼寝状態……なんともフリーダムな精霊王である。

「しかし何故アーシアだけ……？レジェンド様との関わり合いで言うならカナエやロスヴァイセさんも該当するでしょうし」

「確かに……先生も直属ではないにしろ結構長い付き合いなんですよね？」

「ああ。おそらくだが、このフェードラッヘという国は竜と関わり合いが深いのかもしれん。そうであれば赤龍帝である兵藤一誠と関わり合いがあるレイヴェル・フェニックスや俺がこちら側にいる事も説

明がつく。そして……ロスヴァイセに関しては分からん。一応オーフィスとはこの面子の中ではそれなりの付き合いの長さだろうが、だとすればオーフィスの側にいる方が納得がいく」

言われてみればランスロットと言う名はかの円卓の騎士として有名であり、彼自身も白竜騎士団の団長という騎士職にある。

「もしかしたらあの時のブラッシングが原因でカナエさんとの繋がりが深くなったとか……」

「まさかの私!?あれ……じゃあニアさんは？」

「あの方はシモンさんという旦那さんがいますし、そちらとの繋がりが強かったのではないかと」

「天元突破した螺旋の男だからな」

ニアを取り戻すべくアンチスパイラルの本拠地に殴り込みをかけた男をちょっとやそっとでどうにか出来るわけがない。

「あ、そういやタイガ」

「何だイッセー？」

「我夢さんって確か銀河遊撃隊のベテラン勢にいた『ガイア』ってウルトラマンなんだよな？」

「ああ、それからその相方が藤宮さん……ガイアさんと対を成す『アグル』ってウルトラマンだ」

「なんか俺とヴァーリみたいな感じだな、それ」

「まあ、昔はガチでやり合ったみたいだぜ？あの二人」

「それで紆余曲折の後に再び手を取り合ったそうだぞ」

へー、とトライスクワッドの話を興味深く聞いていた一誠だが、本題はそこではなく。

「それで、ガイアさんがどうしたんだ？」

「いやさ……こういう場合って遊撃隊だけの特別なネットワークとか使って通信出来ないのかなって。どうも俺らのブレスレット、この世界だとある程度の距離までしか通信出来ないみたいなんだよ。それにオルガさんのクロガネとロスヴァイセさんが言ってた……その、エリアル・ベースだっけ？そっちの近い方に合流した方が手っ取り早いだろうし」
「確かにそうね。知り合いが片方だけだと不安があるけど、ロスヴァイセさんやタイガ達は顔見知りがいるわけだし待っているよりも動けるならこちらから動いた方がいいかもしれないわ」

一誠の案にリアスも賛成し、期待の眼差しでタイガ達をみるオカルト研究部一同。

「う～ん……やってみるけど過度な期待はしないでくれよ。ウルトラサインで通じるかな……」
「言われてみれば彼らは光の国の出身ではないからな。まだ学んでいる最中かもしれんぞ」
「あれ？ウルフォンはどうなんだ？ロスヴァイセなら登録してるんじゃねーの？」
「実はあの時のメンバーで彼らの番号を登録してるのはレジェンド様を除けばリクさんやグレイフィアさんぐらいで……」
「まあ、普通はクロガネん中からこんなとこに転移するなんざ予想出来るわけねーよなあ……」

とりあえずウルトラサインを飛ばすだけ飛ばしてみよう、とタイガが思った時に扉がノックされ、神妙な面持ちのランスロットとヴェインが入ってくる。
タイガ達はアストラル体とはいえ即座にソファーの背後に隠れ、そろ～っと頭を少しだけ出した。
「すまない……少し、いいだろうか」

「あ、はい。ランスロットさんとヴェインさん、ですよね」
「ああ、自己紹介が遅れてしまったな。白竜騎士団の団長、ランスロットだ」
「同じく副団長のヴェインだ。といってもなってからまだ日が浅い新米副団長だけどな！」

どちらも好青年といった二人だが、重役を担うこの二人はまだ不在時の職務の引き継ぎ作業中だろうに一体何の用件でこちらに訪ねて来たのだろうかと思ったのだが……。

「もしかして何か緊急事態が……!?」
「ああ……ある意味緊急事態だ」

ランスロットの引き締まった表情にその場の全員も気を引き締める。

「出来るのなら頼む……
このウルフォンの使い方を教えてくれ!!」
「「「「……は？」」」」

目が点になるリアス達だったが、ランスロットの隣ではヴェインが「この通り！」と頭を下げつつ拝むように両手を合わせている。

「我夢やジークフリートさんの番号とやらを登録してもらったやつを受け取ったのはいいんだが、取扱説明書が……その……」
((((ああ、なるほど……))))

日本語で読めなかったらしい。
言葉は通じても文字の読み書きまで通じるわけではないと改めて認識し直したオカルト研究部だったが、一筋の光明が見える発言をランスロットはしていた。
ジークフリートという部分ではなく――

「……ちょっと待って！ランスロットさん今我夢って人の番号が登録してあるって……」
「え？ああ、少し前に色々あってな。近くに来た時に寄ってくれてその時に貰ったんだ。我夢からも教わるはずだったんだが、ちょうど俺達は遠征、向こうは依頼で時間が押していたから取扱説明書だけ貰ったんだよ。言い方は悪いが、君達が来てくれたのは渡りに船とでも言おうか……」
「いや！こっちこそ渡りに船ですよ！」
「え？え??ランちゃん、どゆこと？」
「いや……俺にもわからない」

思わぬところで連絡方法を入手出来たオカルト研究部は、ランスロットとヴェインに操作方法を教えるついでに我夢へと連絡を取り、無事出立までフェードラッヘで焦ること無く過ごせるようになった。
なお、タイガ達に関しては割とあっさりバレてあっさり受け入れられるという、なんともあっさりした結末であったという。
そして――

☆

――帝都アガスティア――

エルステ帝国の首都である、同島の名を冠した都の一室。
そこで幽閉されている二人の少女の目の前では理解不能な出来事が起こっていた。
それはある意味非常事態であり、一見すると珍妙な光景というか……

「はうぅぅぅ！ゴモちゃんゴジちゃん魔神様手伝って下さいぃぃぃ！」
「レジェンドとゼット、逆さまに床に刺さってる」
『何でこうなってんのー？』
『オレ様が分かるわけねぇだろうが』
『どうせいつものレジェンドの不憫が炸裂しただけだろうがな』

マジンガーＺＥＲＯの言葉通り、レジェンドの不憫が変なタイミングで発動し、その巻き添えをくったゼット共々頭から床にぶっ刺さった、所謂犬神家の一族状態で転移していたのである。
そりゃ目の前にこの人数で突然現れてこんな状況になろうものなら反応に困るだろう。
だが縦糸と横糸は紡がれた。
この日、蒼と藍は光と運命の出会いを果たし、新たな風を受けた物語は大きく動き始める。

〈続く〉

Ｄｅｐｅｎｄ　ｏｎ　ｙｏｕ

グレートとダイナとオーブ、そしてヒカリを除いた光の国からの増援部隊はレジェンド達が空の世界へと向かう早朝に各々の所属する部隊の拠点、即ち光の国とガーディアンベースへと帰還していた。
特にダイナ＝アスカは「またすぐ会えるだろうけど、それでも別れが辛くなるから」とレジェンドに言伝だけを託したあたり、僅かな期間でもしっかりと絆を結んだようだ。
そこまでは良かったのだが、帰還して間もなく転移したクロガネ、正確にはレイトからレジェンドやオカ研メンバー他何名かが行方不明になったとの報が入った。
当然彼らも大慌てである。

「チーフと一誠やタイガ達が行方不明だあ!?何でだよ一緒にクロガネって戦艦に乗ったんだろ!?なのにどうやったらそんなことになるんだよ!?」
「落ち着いてアスカさん！行方不明でも危険だと決まったわけじゃないし！」
『大地の言う通りだ。よし！今こそ私達が空の世界へと赴き新たな技・エックススペシャルで颯爽と……』
「それお前が行きたいだけじゃねーか!!」
『誰だって出番は欲しいだろう!!』
「ごめんエックス少し黙ってて」

本気で心配するアスカと欲望だだ漏れなエックスに挟まれた大地は御愁傷様。
それから、こういう時真っ先に出て来そうな湊兄弟は末っ子のアサヒが「早くレジェンドさんやゼロさんに会いたいなー」と言い出した事にショックを受けて真っ白な屍と化していた。

「カツ兄……アサヒが……」

「言うなイサミ……あの二人に喧嘩売ったら返り討ちに合うのなんて分かりきってるだろ……特にレジェンドさん」

敢えて言おう。

リクやフーマにも触れてあげて。

そして、案の定光の国でも……

「タァァァイガァァァァァ!!待ってろ！父さんが今行ってやるからなァァァァァ!!」

「落ち着かんかタロウ！今のお前を見たらあの子もドン引きすると分かるだろう!!」

「分かりません父さん！」

「いやそれじゃ駄目だろ!?」

（ああ……ベリアルとまではいかなくてもセブンくらいの冷静さを持ってくれたら）

親バカタロウの大暴走である。

そんな彼を必死に止めるウルトラの父と、友人であるベリアルや甥にあたるセブンが息子のジードやゼロを信じ各々の職務に勤しんでいる姿を思い出して頭を悩ませるウルトラの母。

遂には残りのウルトラ六兄弟まで出動するハメになったが……

「お前一度ゼアスに心を鍛えてもらってきなさい」

我慢の限界がきたマン兄さんが一撃でタロウを仕留めてしまった。

やはり偉大な御仁、レジェンドさえ『困った時のウルトラマン』と称した彼の本気は尋常ではない。

ぶっちゃけ大変なのはタイガ達ではなくレジェンドやゼットの方なのだが、それは彼らの預かり知らぬところである。

☆

別の意味で鮮烈な転移を果たしたレジェンドとゼットは、それを目撃した（させられた）二人の少女の助けもあり、どうにか犬神家状態から脱出する事が出来た。

「いやスマン助かった。もういい加減どっかで祓ってもらうべきなのかもしれんが、そもそも最高位の光神である俺に憑いてるような奴を他の連中に祓えるのか疑問に思えてな」

「最近俺は俺が不幸というより、単に巻き添えなだけなんじゃないかもと思うようになってきた次第でございます超師匠」

「なんか悪い」

「いやいやこっちこそ独り立ち出来ない未熟者で」

何か謝罪し合い始めた二人のウルトラマンを眺める美少女達とマスコット（でいいのか？）。

さすがにそのままというわけにもいかず何とか口を開こうとした二人の見知らぬ少女達だが――

「「ところでここどこ？」」

「「分からないんですか!?」」

レジェンドとゼットまでハモり見事少女らがダブルでツッコんでしまった。

「いや俺らクロガネっていう戦艦に乗ってたんでありまして、気が付いたら全くわかめの分からんところに」

「おいゼット、それを言うならわけわかめだ。わかめの分からんところってそれ無惨のことか？それなら納得だ。奴の頭の馬鹿さ加減は分からん部分だらけだからな」

「わかめラーメン食べたい」
『何言ってんだ。特盛わかめそばのがいいに決まってんだろ！』
『バカめ、わかめ入り卵焼きの旨さを知らんな？』
『わかめご飯、美味しいよー』
「『『よし採用!!』』」
「わーい」
『やったー』
「皆さんお話が別の方向に行っちゃってますぅぅぅ!!」

アーシアの必死なツッコミで元の路線に戻されたレジェンド一行、この面子……レジェンドがボケに回るとツッコミがアーシアだけで心許ない。
アレ、何か違う？

「で、改めて聞くがここは何処だ？見たところ普通の部屋……いや、女子二人が過ごす部屋にしては少々殺風景だ」
「それは……」
「生活に必要なもの以外、娯楽品の類があまりありませんね……」
『例えるなら籠の中の小鳥とでも表現すべきか』

マジンガーＺＥＲＯもふよふよ浮かびつつぐるりと周りを見て評するが、ベッドに座っていた二人の少女は両手を膝の上で握りしめ俯きながら悲しげな表情を浮かべる。

「私達は……ここで、保護された立場ですから」
「あまり贅沢は言えないんです……」
「保護……か。とてもじゃないがそうは思えんな。大方お前達が常人とは違う能力なり何なりを持っていて、その研究のために最低限の生活を保証されているようにしか見えん」
「！」

「図星か。どういう類の力を持っているかは聞かんが、何故甘んじてこんな生活を続けているのかは疑問が残る」

レジェンドはなんとなくではあるが、二人の少女がその気になればこの部屋を出ることなど容易いだけの力を保有していることに勘づいた。

しかしそれにも関わらず黙ってここで生活していることを不可解に思ったのである。

確かにここを出られたとして上手く逃げ続けられるかどうかは別問題ではあるのだが。

「まあ、お前達がこの生活を望んでいるのならそれはそれで構わん。何でここに転移したかは知らんが、俺達は合流しなければならん連中がいるのでな。見つかって騒がれる前にさっさと退散させてもらう」

「どうやって？」

「……この辺りは妙な力の干渉で俺とマジンガーＺＥＲＯ、多少無理をすればオーフィスとゴジラはともかくアーシアやゴモラ、それにゼットの空間転移に支障が出そうだ。転移自体は問題ないがまたバラけて転移する可能性がある。そうなってしまえばゼットはエネルギー不足、アーシアは『輝煌なる祈り』による絶対防御のみ、ゴモラに至っては小さければ力不足で元の大きさだと怪獣……最悪の場合、魔物扱いされる危険も考えられる」

つまりレジェンドの言う力の干渉を振り切れるだけの能力を持っている必要があるというわけだ。

前述の四名は言わずもがな、元々アーシアは戦闘に長けているわけでも膨大な魔力の類を有しているわけではなく、ゼットは当初より大きく力をつけているとはいえまだウルトラ戦士としては未熟。

経験も踏まえるとゴモラはギリギリいけるかどうかだが、怪獣であることを考えると仮に単独転移してしまった時の問題が大きい。

一番安全かつベターなのはやはり揃って転移することなのだ。

「ただ、ここから離れれば転移は出来そうだから、そこで適当な場所に転移してから当初合流予定地に定めていたボートブリーズに向かえばいい」

干渉のせいで通信もままならん、と零してレジェンドは己の専用ブレスレットを見て嘆息する。

そんなレジェンドを見て、片方の少女が少しずつ喋り出した。

「私……ここに連れて来られるまでの記憶がなくて……ずっと一人でした」

「「「……」」」

「それからアマリが連れて来られて、私達の世話係としてカタリナが来て……それからはここでの生活も少しずつ楽しくなってきた気がしました」

『『『……』』』

「でもっ……カタリナがある日から来なくなって……気になって聞いたら遠くの島に行ったって……！」

「ルリア……」

余程そのカタリナという人物に心を許していたのだろう、涙を堪えながら膝の上で裾を強く握り締めるルリアと呼ばれた少女とそれを気遣うアマリと呼ばれた少女。

「いつか三人でここを出て……たくさん外の世界を見ようって約束したのに……」

「……それでお前は、お前達はどうしたいんだ？」

「「「え……？」」」

レジェンドの問い掛けにルリアとアマリだけでなくアーシアとゼットまで反応してしまう。

「お前達が俺の推測通りここに連れて来られた者だということは理解した。そしてその世話役を任されていた者を慕い、その者と離れ離れにされてしまったのもな。おそらくはお前達に長く関わり過ぎて、研究対象に感情移入してしまったことか何かを理由にして上の連中がお前達から離したんだろう。そこは同情する」

レジェンドは淡々と言葉を紡いでいく。

「だが、聞いている限りお前達はそいつが連れ出してくれるのを待っていた。つまり受け身一辺倒というわけだ」

「受け身、一辺倒……？」

「何故自ら出ようとしない？」

「!?」

「ただ待つばかりで自分から行動をせず、そいつが連れ出せない状況になったら落ち込む。そこから気持ちを切り替えられれば良かったがそうして今も悲しんで落ち込んでを繰り返している。満足か？そんな変化のない世界で……俺は嫌だな」

アーシアやゼットが二人を庇うべく声をかけようとするも、レジェンドの発する雰囲気の前に黙り込む。

「じゃあどうすれば良かったんですか……！私やルリアだって出来るのならカタリナを引き留めたかった！でも、私達の力なんかじゃ、どうにも……」

最初はしっかり反論してきたアマリもまた、徐々に声のトーンが落ちていく。

ここでレジェンドは改めて気がついた。

目の前の少女達は自分に自身がないのだと。

自らの置かれた境遇がそれに拍車をかけている……強大すぎるか

らか、それとも力が足りないからなのか。
「では聞こう。それはカタリナとやらに頼らねば出来ないことなのか？」
「え……？」
「もっとざっくばらんに言うと誰かに頼らねば出来ないのか？お前達は自覚出来ているはずだ。自分達の力がどのようなものかを」
「でも、もし大きな力を使えたとして、制御出来なかったら……」
「この際ハッキリ言ってやる。お前達の現状を考えたら制御なんざ今はクソくらえだ」
「「「!?」」」

またもルリアとアマリだけでなくアーシアとゼットをも驚かせるレジェンドの発言。

「ちょっ!?ちょちょちょ超師匠!?何言っちゃってるんでございますか!?超師匠はいつも『力の制御は最優先事項、暴走させない事が一番大事』って言ってるのに矛盾もいいとこじゃないですかソレ!?」
「ゼット……それはちゃんとした環境下でのことだ。今の二人の置かれた状況を考えてみろ。制御と言っても精々お互いを傷付けないようにする程度で十分、あとは……そうだな。家具が勿体無いな。ベッドや机に罪は無い」
「そこですかっ!?」
「いや割と重要だぞそこは。ふかふかでなくても布団に包まって寝たいだろ？」
『たりめーだ』
『うむ、是非もなし』
『ぐっすりー』
「あとレジェンドがいれば完璧」

先程までのシリアスな雰囲気を吹っ飛ばしてしまうような連携発

言にルリアとアマリは言葉を失ってしまうが、その後のレジェンドの言葉でハッとなる。

「お前達は周りに迷惑をかけたり被害を出したりすることを恐れているのだろうがそんな道徳など今は虚空の彼方へ消し去ってしまえ。お前達が今日、今の今までされてきた事への鬱憤を晴らす気で思い切りやってみろ」

『光神やウルトラマンとしてあるまじき発言だな』

「知ったことか。少女二人を保護の名目で監禁研究してるような奴らを庇う【エリア】なら光神であることもウルトラマンであることも捨ててやる。俺は今からただのレジェンドだ」

『ならば我はそのレジェンドの愛機だ。【エリア】全域が敵になろうが我らが揃えば相手にならん。我らはただ我らの道を征くのみよ』

遂にはブッ飛んだことまで言い出す一人と一機に唖然とする残りの一同。

しかもどちらも本気な上に有言実行出来るだけの実力があるから尚更タチが悪い。

「……そうですよね。私も同じ気持ちです！ちょっとぐらいワガママな子になっちゃってもいいんですよ！」

「『そーだそーだー』」

「我、ずっとレジェンドと一緒。【エリア】かかってこーい」

「『まとめて返り討ちにすっぞオラー』」

『おう楽しくなってきたなオレ様も混ぜろや』

「「『いいともー』」」

何だこれ。

ガチで【エリア】全域を敵に回して超戦争起こしそうな気がしてきた……コカビエルなんぞ目じゃない極大規模の争いだ。

たった二人の少女のためにそこまでやらかそうとしてるとは正気

に思えないが、レジェンド達ならば本気で実行してもおかしくない。

「え……えっと……」

「あの……」

『あなた次第です』

「「え？」」

混乱しているルリアとアマリに声をかけたのは、先程は参加していなかったゼット。

二人が彼の方を向くと、穏やかな声色で二人に話しかける。

「俺が聴いたことのある曲名を訳した言葉なんですけどね、歌詞と相まってピッタリでお気に入りなのでございますよ。今まさに君達にとってはそうじゃないですかね？」

「今まさに……」

「超師匠はですね、誰にでもポンポン力を貸したりはしないのでございます。そりゃもう規格外も規格外でぶっちぎりのミラクルウルトラパワーなんで。超師匠が力を貸すのは最後まで諦めず困難に立ち向かう者に、なんであります」

「最後まで、諦めない……」

レジェンドのみならず大抵の光神はそうであるが、その中でもレジェンドやサーガ、スペリオルドラゴンはそれが顕著であり、ノアとキングもそれに該当する。

つまりレジェンドとしては「自分が後ろ盾になってやるからお前達自身で一歩踏み出してみろ」と発破をかけているのだ。

他の誰でもない、自分の意思で自分の望む未来へ少しでも進んでみろと。

「……私、やってみる」

「アマリ？」

「正直、まだ自信なんてないけど……カタリナがいなくなって、二人で不安になったままじゃいけない。カタリナだって今の私達を見たら、きっと自分を責めると思うわ。私はそんなことをさせたくない。カタリナが出来なくなったなら、私がルリアに外の世界を見せてあげなきゃ」

まだ少し震えてはいるが、ハッキリした口調で言ったアマリは先程とは違い決意を秘めた目をしていた。

そんな彼女を見て、ルリアも同じく決意する。

「じゃあ、アマリには私が見せてあげます！だって私はアマリのお姉さんですから！」

唐突なお姉さん発言にアマリだけでなくレジェンド達もポカンとしてしまったが、ハッとなったアマリは慌てて反論した。

「待ってルリア！お姉さんは私の方！なんとなくだけどほら、体格とか……」

「わ……私がお姉さんですよ！だって先にここにいたし、その……む、胸は関係ないです！」

「そーだそーだ絶壁だって関係ないー」

「絶壁!?」

「でもそっちもアーシアより小さい」

「!?」

そこにオーフィスまで参戦してさらにややこしくなってしまい、おまけに胸の話までし始めてしまったから少々荒れてしまったものの……

「ふふっ……」

「えへへ……」

漸く二人の少女は笑顔になった。
そんな二人の少女へ、レジェンドは穏やかな顔で両手を差し出した。
まるでお姫様に王子がするように。
「お前達は前に進むことを決めた。そして、別々の道を歩むのではなく互いに手を取り合い、助け合っていくことも。ならばお前達が望むのなら俺は……いや、俺達はお前達に手を差し伸べよう。この手を取るもよし、二人で頑張るのもよし。どちらを選ぶのかは――」
「『あなた次第です』よね？」
そう言ってゼットの方を向いたルリアとアマリに、ゼットはハッとしたあと恥ずかしそうに頬をかく。
そんなゼットを見てクスリと笑ったあと、ルリアとアマリはお互いに頷き合い、それぞれレジェンドの右手と左手にそれぞれの手を乗せる。
「それじゃあ私達と――」
「外の世界へ――」
「一緒に行ってもらえますか」
疑問系ではなく、まるで確信しているかのような穏やかな二人の声と表情にレジェンドは――
「その願い、俺が聞き届けた」
優しく二人の手を握り、そう返した。
花が咲いたような笑顔になるルリアとアマリ。
そんな彼女らの空いている手を握る感触があった。
ルリアの手はオーフィスが握り、彼女に抱えられたゴジラがそれに

重ねるように手を置き、アマリには同様のことをアーシアとゴモラが。
最後にレジェンドに握られた二人の手に、ルリアにはゼットが、アマリにはマジンガーＺＥＲＯがその手を重ねる。
一人の女騎士との別れを乗り越えた二人の少女は、光の神やその家族と共に未知なる世界へと踏み出すことを決めた。
これから先、どんな景色が、出会いが、運命が彼女らを待ち受けているのか。
ただ一つ言えること、それは……
もう昨日までの彼女達ではないということだ。

〈続く〉

旅立ちの季節

レジェンド一行が二人の少女を一家の一員に迎えた頃、無事にクロガネはエリアル・ベースと合流。
同時に我夢の方へ知り合いから連絡があり、そちらでオカ研や一部のメンバーを保護しているとの情報もありクロガネの乗員一同は安堵のあまり一気に脱力。
何人かはお餅状態になっている。

「あ〜〜……出だしから疲労がフルバーストだぜ……」
「同感だ……こりゃもう片方も合流したら修行前にバカンスに洒落込みたいな。どうせそのバカンス中だってトラブルの一つや二つだろうしよ。……主に旦那の不憫で」
「違いねえ。しかもそのくせ基本的に自分一人であっさり解決出来ちまうあたり、感性が相当鈍ってるかもしれないぜ？んな厄介事当たり前に起こるようなもんじゃねえっての」

レジェンドがこの場にいたら間違いなく強制修行へと連れて行かれるだろう台詞を笑顔で言い合うオルガとレイト。
しかし、エリアル・ベース……いや、ウルトラ騎空団において『レジェンドやゼットがいない』というのは致命的なことであることを彼らは知らなかった。
その理由はとりあえず顔合わせという名目で最初の交流が行われた時に発覚した。

「ねえ、どうして団長がいないの？」
「団長の旋律が何処からも聞こえない……」

「ソーンもニオもちょっと落ち着いてくれない!?今回は俺関係ないよね!?俺の責任じゃないよねええ!?」

ソーンとニオにそれぞれの武器（ただしニオは琴で直接攻撃するわけではないのでビットみたいなモノ）を突きつけられ汗を滝のように流しながら弁明している十天衆頭目にして団長代理のシエテ。

なお、レジェンドをちゃん付けして甘やかしたがるナルメアは合流したクロガネでクロエを見つけてレジェンドに代わる甘やかし対象に認定したためまだよかった（のか？）。

他にもアンスリアやクラリスが目に見えて落胆したり、ユイシスなどは「頭（かしら）を攫った奴らを突き止めたら問答無用でカチコミをかける」とまで言い出してそれに賛同する者（しかも大半が女性団員）が大勢出たりと天然ジゴロなレジェンドのおかげで大変な事態になりつつある。

そしてある意味それよりヤバいのはゼット絡みであった。

ヤイアや十二神将の一人であるアンチラを始め、子供達はまだゼットに会えないと知って泣き出す子がいたりするくらいだからいい。

問題は……

「おのれぇぇぇ……！この儂の修行相手を務めてくれると言ったゼット殿を拉致するとは!!このガンダゴウザが拳をもってその腐った性根を叩き直してくれようぞ!!」

巨大な隕石を拳でぶっ壊す古今無双の大拳豪ガンダゴウザがブチ切れて。

「あたしもやるぞー！そいつらまとめてぶっ飛ばしてやる!!」

それに便乗して怪力乱神な十天衆のサラーサまで参戦。

これだけでまず並の一国の軍隊を容易に壊滅出来るのだが他にもフェザーやらランドルやら次々と武力ないしメンタルがヤベー面子

が名乗りを上げ勢揃いして捜査に乗り出してしまう。

「ゼットの奴、何でこんなヤベー奴らと親しそうになってたんだ……!?」

「まあ、彼は特に子供達に人気あったし」

「ガイアってか我夢も落ち着き過ぎ……何だその格好!?」

「ああ、今の僕のジョブは『ドクター』だから。ちなみにあそこで虎視眈々とシエテさんの尻を槍で狙ってる藤宮は『アプサラス』のジョブだよ」

「ジョブって何!?それよりソイツ団長代理だろ!?何で藤宮はソイツの尻を狙ってんだよ!?」

「色々あったんだ、うん」

その色々も結局レジェンド絡みとは言えない。

レイトの事だから薄々勘づいてはいるだろうけど。

ジョブに関しては他の皆と合流してからと言われたが、オカルト研究部その他はともかくレジェンド達との合流はしばらく掛かりそうな気がする。

「我夢、少しいいか」

「ジークフリートさん、どうかしましたか？」

「ああ。実はまたフェードラッヘに起こっている不可解な事件があってな。ここからだと時間がかかるからせめて知恵だけでも借りたいとランスロットから連絡があった。……ただ、今回は俺よりも我夢の方が手助けになれそうな案件でな」

「もしかして怪獣関係で？」

「そう決まったわけではないが、可能性はある。俺達との合流までにあちらは一波乱あるかもしれん」

我夢は隣にいたレイトとも顔を見合わせて頷き合うと、ジークフリートから詳しい事を聞く。

後にフェードラッへで御伽話として伝わるようになるその事件はこう呼ばれた。
『血を吸う花は少女の精』と。

☆

ルリアとアマリ、二人の少女が外の世界へと旅立つ決意をしたアガスティアでは、改めて互いに自己紹介を行っていた。

「まずは俺か。ウルトラマンレジェンド、この世界を含む【エリア】を全てを統括している光神だ」
「手っ取り早く言うとあらゆる意味で一番偉いウルトラ凄い御方なのでございますよ。そして俺が！ご唱和ください我の名を！ウルトラマンゼーット！」
「???お二人ともウルトラマン？なんですよね。なんで貴方は私達と同じ人間の姿なんですか？」
「こっちの方が普段の生活で便利な上、今はコイツと一心同体みたいなものなんでな。まあ、そこは追々説明していく」

ルリアが頭から？マークを飛ばしながら小首を傾げ、人差し指を顎に当てて考えつつ質問してくる。
うん、可愛い。

「次は私ですね。アーシア・アルジェントです。レジェンド様の巫女をやらせて頂いています」
「我、無限の龍神オーフィス。レジェンドの嫁」
「「お嫁さん!?」」
「違うからな。俺はまだ独身だ」

表情一つ変えずに淡々と言い放ったレジェンドを彼女は最近の定番「ぷんすこー」しながらポカポカと叩く。

ルリアとアマリは微笑ましく見ているが、後にオーフィスがここまで感情を出すようになったのも比較的最近だと知って驚くことになる。

「それからこっちの、今は小さくて愛嬌あるが真の姿はもう『ダメだ俺こいつに勝てねーわ』と絶望させるほどラスボス超えて隠しボスの親玉張れる雰囲気出しまくる俺の愛機……」

「魔神様です！」

『マジンガーＺＥＲＯだ。巫女と同じく我を尊ぶならば我がこの無敵の光子力を持って守り抜いてやろう』

ちっこいままでドーン！と効果音が付きそうな腕組み仁王立ちをするマジンガーＺＥＲＯ。

レジェンドが乗った場合、ＺＥＲＯスクランダーを土台に相手を見下ろしたりするから半端ない威圧感になる。

ついでに以前はＺＥＲＯスクランダーを乗ったまま巨大化させて下にダイナミックファイヤーぶっ放しながら、ルストハリケーンを吐きまくりつつＺＥＲＯスクランダーをそのまま高速横回転……つまりコマのような状態にして恒星に匹敵する大きさの要塞をそりゃもう無残な形にしたこともあるバケモノだ。

「よろしくお願いします、魔神様！」

『うむ、良き返答なり。レジェンド、式での我の席は当然最前列で頼むぞ』

「あいよー。……ん？式？」

最前列、というからにはめでたい式だろうが何の式かはレジェンドは気付いていない。

やれやれと主の将来に若干不安になりつつマジンガーＺＥＲＯが肩をすくめていると、最後にアーシアは笑顔で、オーフィスはドヤ顔でゴモラとゴジラを抱えて見せた。

「それから私達のカプセル怪獣です！この子は古代怪獣ゴモラのゴモちゃんです！」
『よろしくー』
「我の方はゴジラ。怪獣王ゴジラ。きょーじんむてきさいきょー」
『粉砕玉砕大喝采ー！フハハハハ!!ってやらすんじゃねえよ』

とは言うが某社長の言ったことを実現出来る能力があるからとんでもない。
ぬいぐるみのような扱いの２匹にルリアもアマリも抱っこさせてほしそうな目をしている。
なお、マジンガーＺＥＲＯ同様本来の姿はデカいことを教えたら案の定驚いた。
ルリアに至ってはゴモラを抱えながら「小さいままの方がいいです！」と力説するほどに。
そしていよいよ二人の番。

「もう知ってると思いますけど、私はルリアっていいます。これから、よろしくお願いします！」
「絶壁仲間ー」
「ま、まだ成長期です！ご飯もいっぱい食べますし……」
「……我もご飯たくさん食べる。我も成長期？」
「そうです！オーフィスちゃんも成長期です！だからきっと身長とか胸もぼーんっ！て大きくなりますよ！」
「ん、我とルリア成長期ー」

わー、と二人手を取り合い喜ぶ絶ｐ……貧ｎ……純粋コンビ。
彼女ら、騎空団との合流時に凹むんじゃなかろうか。

「私はアマリです。アマリ・アクアマリンがフルネームです」
「綺麗なファミリーネームですね！それに猫耳みたいなリボンも可愛

いです！」
「まあ何故ルリアにファミリーネームが無いのかはこの際どうでもいいか。気のせいかどっかの姉妹のピンクな方と声が似ているように聞こえるな」

レジェンドは九極天の一人が星の再生を手伝いに行った原因の一つというか一人を思い出す。
あと、先日束とセラフォルーがその姉妹のコスプレしてたし、ガブリエルはなんか黒いハイレグみたいなやつで男子がほぼノックアウト。
凶悪なスタイルがさらに強調されて破壊力が凄まじ過ぎた。

（そういえば「そろそろ終わるので帰りますー」とあの娘は嬉しそうに連絡してきたな。他の三人も含めると……ナルメアあたりは間違いなく世話を焼きたがるだろう）

更に修羅場化待ったなしの状況になるなど全く思ってもいないのはプラスなのかマイナスなのか。

兎にも角にも自己紹介は終わり、次に考えなければならないのは脱出方法。

「どうしましょう……入口は一つしかないし、部屋の近くに見張りはいないみたいなんですが」
「そういえば先程から気になっていたが俺達がやたら騒いでいようとまるで誰かが来る気配も無いな。それもカタリナとやらが言ったのか」
「はい。レジェンドさんの言うように私達と深く関わって余計な感情を持つ事がないように、という理由みたいでしたけど……」
「仮に世話係がその余計な感情を持ったら理由を付けて離せば済むか

ら、といったところか。気にくわんな」
『加えてこの娘らの性格では逃亡など考えないと高をくくっているのだろう。でなければ見張りでなくとも巡回なりはするはずだ。そんな様子も無いというのはよほど舐め腐っているということだな』

マジンガーＺＥＲＯの言葉でレジェンドは脱出方法の構築が完了した。

「そうか、逃亡出来ないと思っているのか。ならば奪ってやるとしよう」
「「「「え？」」」」
「さて、実行する前にこの部屋のものは全て頂いて行くか。何せここを吹き飛ばすわけだし、勿体無いし」
「「「「えええええ!?」」」」

ニヤリと笑ったレジェンドは彼女らに作戦の概要を話し、予備の収納用ブレスレットを二人に渡すとベッドやら本棚やらも全て収納し、いよいよ実行に移す。

ドカアアアアアン!!!
「な!?何事ですネェ!?」
「ポ……ポンメルン大尉！例の二体の研究体のいる棟が爆発して、それで……！」
「ええいまどろっこしい！要点だけを手短にハッキリと言うんです

ヨォ！」
「で、でしたらあれをご覧下さい!!」
「一体何が……あっ!?あれは!?」

エルステ帝国の軍人であるポンメルンが見た光景、それは空に禍々しい魔法陣が浮かび上がり、そこに気絶したルリアとアマリが光の球体に包まれ引き寄せられているというものだった。

「あ……あれは一体何なんですネェ!?いや、それよりも早くあの研究体を奪還するんですヨォ!!」
「それが、あの魔法陣の下には何らかの防御結界のようなものも展開されているらしく近付く事さえ出来ないようです!!」
「んなァ!?」

打つ手無しのポンメルンを始め右往左往する帝国兵。
そんな時、アガスティア全土に低く、威圧感のある声が響き渡る。

「己が目的のためにうら若き乙女達へ卑劣な行いを繰り返す者共よ。今この瞬間よりこの乙女達は神々のモノと相成った」

ギョッとしたエルステ帝国の軍の事などいざ知らず、声の主は言葉を紡ぐ。

「今後一切この乙女達に危害を加える事は許さぬ。先程の光は天罰と知り、己が行いを悔い改めよ」

ポンメルンだけでなく数多の兵士が棟を見てみると、そこにはルリアとアマリが隔離幽閉されていた部屋が無残にも吹き飛ばされ、もはや原型を留めておらず声の言っていることが嘘ではないと信じさせるには十分であった。
呆然とする彼らを嘲笑うかのように、魔法陣はルリアとアマリを呑

み込み小さくなりやがて消失する。
エルステ帝国の最重要研究対象であった二人は神々の元へと送られて行ったのだ。

……というのも強ち間違いではない。

「よしよし、効果覿面だな。今のうちに正規ルートで脱出するぞ」
「アイアイサー！」
「いえっさー」
「「は……はいっ！」」
『認識阻害も問題なく発動している。障害は周囲数十キロの範囲まで存在しない。余計な騒ぎさえ起こさねば何事もなく行動可能だ』
『早く行こー』
『こんな辛気臭ぇトコとはさっさとおさらばしようぜ』

先程の魔法陣はおろかルリアとアマリも完全に幻影であり、本物やレジェンド達はまだそこから殆ど動いていなかった。
つまり、神々の元へという意味でならレジェンドの元へということで合っているが、他にやったことは文字通りあの部屋を盛大に吹き飛ばしたことぐらいで、あれらは全てでっち上げである。
天の声的なものもアマリの魔法で一時的かつ適当に変えたレジェンドの声でそれっぽく言ったにすぎない。
かつて小芭内が『大規模な幻術』発言をしたことを思い出したレジェンドがそれを実行に移したというわけだ。

「灯台もと暗しという。あれだけ大々的にやってやればまさかその場にまだ二人がいるとは思わんだろう」
「しかし超師匠、あんまりグズグズしてるとこういう場合『跡地を調査して何か有益な情報を手に入れろ』的なことを連中がしてこないとも限らんですよ？」
「そのための認識阻害、そして――」

レジェンドが意味深に言いつつ取り出したのは……

「ダンボールだ」
「「「何故にっ!?」」」

オーフィスやマスコット状態の三体以外が一斉にツッコんだ。

「古来よりダンボールは荷作りの必需品にして最強の隠密兵装と言われている」
「前半はともかく後半は聞いたことないんですけど!?」

メタルギアソリッドならぬメタルギアレジェンドをやろうとしているのかこの光神。
何気に語呂もいいのはどうでもいいか。
こんな複数人がダンボールで身を隠しつつ移動したらそれはそれで奇妙なものにしか見えないと思う。

「まあ何だ、騙されたと思って装備してみろ。実力行使は最終手段としても穏便にいけるならそれに越したことはない。転移出来そうな場所までの辛抱だ」

「本当に大丈夫なんでしょうか……」
「アーシアさんの心配は最もなんだけど……ルリアは楽しそうね」
「はい！今までこういう事したことなかったし、楽しいですよ、アマリ！」

ダンボールを被りニコニコするルリア。
早速現状を楽しむとは意外とメンタル強いのではないだろうか。

「よし、行くぞ。認識阻害を過信するわけではないが、敢えて人通りのない場所ではなく人通りの『少ない』場所を目指す。全くない場所はそれゆえ逆に調査される危険もあるということも今後の為に頭に入れておけ」
「「「はいっ！」」」
「ん、わかった」

「マジでウルトラ有能な隠密兵装だったぜ……！」
「フッ……ありきたりな物に認識阻害をかけ、更に俺達自身にも認識阻害をかけた二段構えの作戦だ」
「ダンボールにもかけてたんですか!?」

何事もなく無事人通りの『少ない』路地裏に来れたレジェンド一行。
監視や尾行などをされている形跡や気配もなく、正しく隠れ込めている。
認識阻害ダンボール超有能。

「ふむ……ここからならどうにか転移出来そうだな。念のためにここに入る前に人払いの術式を発動したのも功を奏したか」

「……ってことは」
「ああ。さて二人とも……ここからは文字通り何が起こっても不思議じゃない未知の世界だ。それこそ気を抜けばすぐに命を落とすような事態が起こるかも分からん所へ行くかもしれん」
「それでもです！私、ずっとカタリナに甘えてました。だから今日はここだけじゃなくて、今まで甘えていた自分ともさよならするんです！」
「私も今まで自分に自信がなくて、いつも一歩踏み出せなくて……でも、今日ルリアと二人で頑張ってみたら簡単に出来て。一人じゃない、でも一人でも出来るようになりたい。変わりたい。だから今日、私はここから旅立ちます。自分自身の意思で、自分のために。そしてルリアと、私達を思ってくれていたカタリナのために」
「俺が最後まで言う前にそう言い切るとはな。ならば何も言わん。いや、違うか……俺についてこい」
「「はいっ!!」」

二人の力強い返事にゼットやアーシアも笑みが溢れ、転移を行うべく全員が手を握り合う。

「何かドキドキしますね、アマリ！」
「そうね、とりあえず普通に島の大地に足が付けばあとはなんとかなるかしら」
「超師匠、不憫の発動はナシでお願いしますよ！」
「おい不安になるような事言うなよゼット。俺だって好きであんな目に合ってるわけじゃないんだぞ」
「我とアーシアとルリアとアマリも刺さる？」
「「初対面をぶり返さんでヨシ!!」」

そんな会話も程々に、レジェンドは皆を連れ転移を敢行する。
光に包まれた彼らが転移し光が収まると、認識阻害や人払いの術式も自然に解除され少しだが人が通るようになっていく。

かくして、二人の少女は光の神とその家族に連れられ、未知なる世界へと足を踏み出した。

旅立ちの季節――新しい自分を始めるために。

〈続く〉

北の大陸から

認識阻害と転移によって無事アガスティアを脱出したレジェンド一行はある場所にいた。

そこはアガスティアの北にあるノース・ヴァストと呼ばれる島……というより巨大大陸。

ファータ・グランデ空域において最北に位置するそこは大部分が未開の地。

特にエオニオ山脈を象徴とする白風の境は一部が瘴流域にかかっておりファータ・グランデ空域で最も過酷な地と呼ばれているところでもあり、あのケロニアの円盤群はここを通ってフェードラッヘへと襲来したと思われている。

さて、最北といえばどういうことか分かるだろう。

辺り一面雪が積もっており、また一吹雪来そうな天気である。

転移失敗でも不慣でもないがレジェンド一行はいきなり来るような場所ではないところにそこに来る時の格好ではない服装で来たため、レジェンドとマジンガーＺＥＲＯ以外はガタガタと震え出した。

「さっ……寒いです～!!」

「えっと、えっと、こういう時役立つドグマは……うう……集中出来ない……!」

アーシアとルリアは純粋に寒がり（しかもルリアに至っては裸足）、アマリは独自の魔法体系『ドグマ』をどうにか発動しようと頑張るもやはり寒さが邪魔して集中出来ない。

『なーんか眠くなってきたー……』

『ヤベーゼコイツぁ……冬眠しねーと』

「ゴモラァァァ!?ゴジラも今寝たら凍りつくでございますよ!?」

「我も冬眠したい。レジェンド、ぎゅーして」

「ゴモラゴジラはまだしもお前冬眠なんかしたことないだろうが。炬

燵占拠して誰より鍋焼きうどん食ってたろ」
『仕方あるまい。我がブレストファイヤーでこの雪と雪雲を滅してやろう』
「暖かくなるどころかこの世界が火達磨になるな。やめとけ」

本気で冬眠しそうな二匹とそれをさせまいとするゼット、寒さにかこつけてレジェンドに甘えようとしたオーフィスはバッサリ切られてぷんすこーモード。
しかしそうこうしている間にもチラチラと雪が振り始める。

「このままでは危ないのも事実だな。アーシアは『輝煌なる祈り』を纏っておけ。あとルリアとアマリには……これだ。無いよりマシだろう、羽織っていろ」
「あ、ありがとうございます！はわ～……温かい……」
「助かりました……何か、落ち着く……」

ルリアにはレジェンドが以前から人間の姿でいる時になっていた服のマント側を、アマリには羽織側を渡して羽織らせておく。
ちょっぴりジェラシーを感じたアーシアだが、彼女の纏っている服はレジェンドお手製の専用装束なのを思い出してほんの少し優越感に浸る。

「ずるいー」
「俺はともかくオーフィスちゃんには何かないんですか超師匠!?」
「慌てるな。あっちに森がある上、森の中に開けた場所が見える。加えて魔物や住民の姿や気配も無い……あそこならばあれらが出せるか」
「あれら？」
「ああ。この面子の中でいえば片方だけならアーシアは一度目にしたことがあるものだ」
「私が、ですか……？」

「全員そう身構えんでも別に変なものではない。この状況下ではこの上なく助かるものだぞ。さ、もう少しだけ頑張れ。あそこに着いたら俺がとびっきりに良いものを用意してやる」

自信満々に言うレジェンドに困惑しつつ、徐々に勢いを増していく雪から逃れられるなら、とアーシア達もレジェンドに続く。

そして例の森の開けた場所でレジェンドが出したものとは……

「レジェンド様、これって……！」

「そうだ。これのここを今から出すもののある部分と合わせて通路にするように――」

「わあー！凄いです！」

「こんなものまで仕舞ってたなんて……」

「我、もうすぐ限界」

「超師匠、俺もカラータイマーが鳴らずにぽっくりしそうでございます」

「よく頑張ったな、オーフィス、ゼット。普段とは面子が違うし人数も少ないがすき焼きやるぞ」

「やったー」

「うぉっしゃー!!」

そこには先程まで無かった巨大なモノが存在していた。

☆

レジェンド一行が何かをしているのとほぼ同時刻、ウルトラ騎空団に身を置きつつ『組織』に属しているゼタは同僚のベアトリクスと共

にノース・ヴァストでの任務を完了させて帰還しようとしていたが、運悪く吹雪に合ってしまい現在吹雪をやり過ごせる場所を探していた。

「あーもう！何だってこんなタイミング悪いんだよー!!へっくし！」
「文句言ってないでともかく探す！参ったわね……こりゃこの吹雪長くなりそうよ。何とかしてやり過ごせる場所を見つけないとマジで洒落にならないわ」
「んん!?」
「どうしたのベア!?」
「あっちの森に何か光が見えた！誰かいるのかも！」
「あ！ちょっとベア！ったく、一か八かになるけど文句言ってられないか！」

一縷の望みを賭けて、ベアトリクスは光が見えた森へと足早に駆けていく。
ゼタもベアトリクスを追いかけて森に突入し、少し進むと開けた場所に出る。
そこで目にしたのは……

「「大きなログハウス……と、何これ!?」」

彼女らが言う通り、二階建ての大きなログハウスと見たこともない

乗り物?が一緒に存在している光景だった。

「ログハウスはともかくあっちのは何なんだ?」
「あたしが分かるわけないでしょ。ともかく、もしかしたら入れてもらえるかもしれないし、早いとこ住んでる人に声かけるわよ」
「そ、そうだな!おーい誰かいないのかー!!」
「こら!ちょっとは控えめになりなさいって!」

形振り構っていられないとベアトリクスはログハウスのドアをドンドンと叩き大声を出すが、ゼタに窘められる。
そしてドアがゆっくりと開かれ――

「グッドアフタヌーン。アイアムウルトラマンゼット」

マフラーとちゃんちゃんこ装備のゼットが現れた。

「ひいっ!?ヒューマンでもエルーンでもドラフでも、ハーヴィンですらないっ!?」
「ゼット!?ってことは……」
「あれ?ゼタじゃないでございますか。どうしてこんな辺鄙な……寒っ!!」

バ　タ　ン　ッ　！　！

「ああーっ!!」
「ちょっと待ってあたし達も吹雪で限界だから入れてお願いっていうかその発言まんま貴方達にブーメランしてんだけど!!」
「その台詞、言葉足らずだったらアウト手前だったな」
「ッ!?その声はやっぱり……」

ゼタが聞き覚えのある声に反応して背後を向くと――

「ソイヤー・ソイヤー・ソイヤー・ソイヤー・
セイィィィヤァァァァァ!!」

猛吹雪の中、赤褌一丁で乾布摩擦を行っているレジェンドがいた。

((えええええええ!?))

寒さとは別の意味で真っ青になる二人。
そりゃ自分達は鎧まで着てても凍えそうだというのに目の前の人物はさも当然と言わんばかりに褌一丁で平然としているなどと目の錯覚としか思えない……というか思いたくない。

「ゼタ! 何だあれ誰だあれ!? こんな時にあんなバカな事してるバカは誰なんだよ~!!」
「あのねべア……あんたが世話になってる騎空団の団長をあんまバカバカ言うのやめなさいよ。まあ、さすがにあたしも今回ばかりは同意するけどね」
「団長!? あれが!? 我夢や藤宮が言ってるチーフな団長!? 嘘だろ!?」
「おいそこのドジっ娘属性持ってそうな青い奴。殴り合いしたいなら受けて立つぞコラ」

散々好き放題言われてさすがのレジェンドも頭にきたのか乾布摩擦はやめていないもののゴキゴキと首を鳴らしながら額に青筋浮かべてゆっくりと猛吹雪の中を裸足でやって来るのは割とガチで怖い。

「ひいいいいっ!?よく分かんないけどやるっていうなら相手に寒っ!!」

「だからやめなさいって言ってんの!吹雪で体温奪われて力なんかろくすっぽ出せないし、ましてやレジェンド相手に喧嘩売ったらあんた確実に死ぬわよ!!」

もし本気でベアトリクスが挑む気なら……うん、自分は逃げよう。どこをどう考えてもレジェンドに勝てるビジョンの見えないゼタは即座にその答えに辿り着いた。

「そ……そんなに強いのかこの変人……」

「身の程知らずの馬鹿に変人呼ばわりは心外だな」

「こんな吹雪の中で褌一丁なんて変人以外の何者でもぶえっくしゅ!!」

「鍛え方が足りん」

「お願いレジェンド、ベアをあんま煽んないで。この子、負けず嫌いだからレジェンド相手でも張り合っちゃうから……勝ち目まっっっったくないのに」

「そこまで言うかぁ!?」

同僚のゼタにさえハッキリ言われて涙目のベアトリクスだが、ゼタの次に放った一言で本気で驚愕することになる。

「つくしゅ!そもそもね、あんたがあっさりあしらわれた十天衆の頭目、あれを一撃で気絶させたのレジェンドの弟子の子よ。しかも全然本気じゃないし」

「へ……？」
「オーフィスだな。あいつも中にいるぞ」
「あ、やっぱりレジェンドとゼットとオーフィスちゃんってセットなのね」
「もうセット扱いでいいよチクショー」

相変わらず乾布摩擦をしながら、ログハウスに入ろうとするレジェンドを見てベアトリクスは漸く当初の目的を思い出した。

「へきしっ!!そうだ、なあ！お前ここに住んでるのか!?」
「ここに住んでるわけじゃないがこのログハウスと接続してあるキャンピングカーは俺の持ち物だ」
「何でもいいから頼む！中に入れてくれ！寒くてもう身体が限界で……！」
「散々馬鹿にした相手に頼み事など恥ずかしくないのか？」
「う……」
「ごめんレジェンド、あたしからも謝るから。ほら、知らなかったっていっても先に言い出したのベアでしょ」
「うう……わかったよぉ……バカとか変とか言って悪かった……」

ゼタに促され、やっとこさ謝罪したベアトリクスにやれやれと溜息を吐き、レジェンドは二人の手を握りログハウスへと入る。

「ふえっ!?ちょ、ちょっと……！」
「俺と違って手が悴んでまともに動かんだろう。伊達に猛吹雪の中で乾布摩擦をしていたわけじゃない。お前達の片手を温めるぐらいの体温はある」
「あ……」
（こういうとこが天然ジゴロって言われるのよね。珍妙な事や発言をしたと思えばグッとくるようなことするし）

先程のレジェンド同様、今度はレジェンドに対してゼタが苦笑しつつ溜息を吐く。
ベアトリクスの方は寒さからかどうなのかは分からないが頬が赤くなっていた。

ログハウスの中はしっかり暖められており、入口近くに設置してあった浴室に二人を押し込み女性用のバスローブを用意したレジェンドは、自身もアーシア奪還作戦以降もはや普段着になったジャケット姿に着替えてリビングに行くとそこではゼット指導のもとガンプラ作りが行われていた。

「はわ～……ゼットさん凄い上手です！」
「いやぁ、これでも上手く作れるのと作れないのがあるんでございますよ」
「アマリさんもお上手ですね！初めてじゃないんですか？」
「いえ、初めて……だと思います。記憶が無くなる以前に作っていた感覚もありませんし」
『つかオーフィスは改造まで始めやがったぞ。コイツ初心者じゃねーのかよ』
「黒歌がよく作ってたから覚えた。最近は束とかセラフォルーも作ってる」
『束はまだしもあの魔王娘もか』
『まあいいんじゃないのー？ふわぁ……』

外は猛吹雪だというのに、そんなことは気にせず温かい雰囲気のゼット達。
ちなみに作っているものはそれぞれ、ゼットはＲＸ―７８―２　ガンダム、ルリアはＺガンダム、アーシアはキュベレイ、アマリがサザビー、オーフィスに至っては完成したガンダムデュナメスを余ったパーツで改造し始めている。

ゴジラはレジェンドが外に乾布摩擦しに行く前に作ったウインナーを独占しつつ見物しており、ゴモラは半分夢の中。
マジンガーＺＥＲＯはやはりレジェンドの愛機というか、フルスクラッチで何処かで見たというハルファスベーゼ　ハルバードを作成中。

「おい一体だけクオリティの次元が違うやつ混じってんだけど」
『本来ならばバルバドロというやつでも作ろうかと思ったんだがな』
「それサイズが半端ない気がするんだが」
「あ！おかえりなさい、レジェンド！」
「レジェンドさん、お疲れ様」

にこやかに言ってくれるルリアとアマリ。
どうやらだいぶ二人もレジェンドに心を許したようだ。
特にゼットはさん付けなのに対しレジェンドは普通に呼び捨て……アマリも少しずつだがレジェンドに敬語無しで話し出している。
良い事だ、とレジェンドは一人頷いて自身も混ざることにした。

「超師匠は何を作るんです？」
「ん？最近惑星レジェンドで発売されたばかりのネオ・グランゾンだ。やはり乗機のプラモは作りたいからな」
「ああ～なるほど。あれ？そういえば超師匠、俺のＥＸ―Ｚガンダムももしかしたら……」
「発売されるだろうな。多分かなり人気出るぞ」
「マジっすか!?予約とかって出来ます!?」
「やっといてやるぞ。武装外骨格はどう発売されるか気になるところだが」

慣れた手付きでヒョイヒョイと組み上げ、プロビルダー顔負けの速度とクオリティで簡単に作り上げてしまったレジェンド。
ちょうどそのタイミングでゼタとベアトリクスが風呂から上がっ

てきた。

「あー！生き返った!!サンキューな、団……何だ普通の服あるじゃんか！そっちのが断然良いぞ！」

「ベア……いくらレジェンドでも四六時中あんな格好してるわけじゃないって」

「あ、ゼタ」

「ヤッホー、オーフィスちゃん久しぶり。って、ゼット以外初めての子ばっかりね」

ゼタはレジェンド以外、オーフィスとゼットは以前空の世界に調査に来た際に出会っているが、その時はゴジラも外に出しておらずアーシアやゴモラもいなかったし、ルリアやアマリはそもそも加入したばかりである。

当然、レジェンド達がダイブハンガーや駒王町へ帰る時にまだ加入していなかったベアトリクスはレジェンドやゼットとも先程が初対面。

それからざっと互いの自己紹介と状況報告をし合い、漸く一通りの情報交換を終えたレジェンド達は再びのんびりしていた。

「しっかしまぁ……何でも出すわね、レジェンドって」

「何でも出そうと思えば出せるが出さん。スキンヘッドのボディビルダーを全裸で大量に出して欲しいのか」

「何よその悪夢通り越して地獄の光景」

「え？超師匠、地獄に右腕な方がいらっしゃいますし」

「「はい？」」

言わずもがな鬼灯である。

ちなみにゼットは鬼灯本人から実況時は相棒認定されているが、本

人もそれに乗り気だ。
タッグマッチの実況を見聴きしていれば納得というもの。
「いや、改めて自分のタッグマッチ時の記録映像を見ている時の実況に笑った笑った。お前の気合いの入ったコケコッコーで飲んでたコーラ吹き出して鼻が痛くなったよ」
「コケコッコーって何!?」
「俺と相方の対戦相手の名前」
『いやちげーだろ。コケコッコーじゃなくて……アレ?誰だっけ。オレ様から見てもザコモンスターにしか見えねえから覚えてねーや』
『ん～……コカトリス?』
『それは石化してくる鳥だ。我はその時まだこちらにいなかったから分からんが、巫女かオーフィスならば分かるのではないか?』

ゴジラもゴモラもどうでもいい相手としか認識していなかったらしく、マジンガーＺＥＲＯによっていきなり振られたアーシアとオーフィスは何とかして思い出そうとするがなかなか出てこない。
「うぅ～ん……結構重要な方だったような……」

真面目なアーシアでさえこれである。
つまりオーフィスは……
「黒焦げチキン」

こうであった。
それもう食べ物じゃねーか。
しかも失敗作。
「あっはははは!やっぱり傍から見てて面白いわレジェンド達って!
やー最近任務任務で疲れ困憊だったし、良い息抜きになるわ」

「なあゼタ、こいつらっていつもこんな調子なのか？」
「ん～……あたしもそう付き合い長いわけじゃないけどさ、なんていうか……一度会ったら忘れられない、みたいな？慣れちゃうと多分なくなった途端一気に寂しくなりそうな感じかしら。それにレジェンド、我夢や藤宮の話だと真面目になると掛け値なしに凄いらしいし」

どう凄いのか分からないけど、とゼタは続けて用意されたジュースをストローで吸いつつ別の話題にシフトしたレジェンドらを頬杖つきつつ眺める。

ベアトリクスも釈然としないまま同じようにレジェンド達を見るが、何を思ったのかルリアが突拍子もないことを言い出した。

「私、ここで皆さんと一緒に寝たいです！」
「ルリアちゃん？」
「え？」
「ルリア、言い出したら聞かないし……レジェンドさん、家具とかの移動って出来たりとか……」
「出来るぞ。直接動かせなくもないがこの人数分ならレジェンドキネシス使った方が早いな」
「ええっ？」
「お布団ぬくぬくでゲームする？」
「こっちでも『鬼』が出て来る可能性を考えて例の鬼討ちゲームでございますか？俺、ゼットランスアローの件もあって槍か弓使いたいんですが」
「我は手甲。どりるぶーすとなっこー」
「ドリルもないし飛ばないからな」
「えええっ？」

いつの間にか全員一緒にリビングで布団を敷いて寝る方向に話が進んでいることに驚くゼタとベアトリクス。
しかもレジェンドやゼットは男性なのだが……

「我とアーシアはレジェンドといつも一緒。気にしないどころかいないと駄目」
「あ、俺これでも寝付き良い方なんで」
「アーシアは服を開ける方だからまだいいがオーフィスは全部脱ぐからな。ダイナミックに」
「「「!?」」」
『あー自分から言いやがったよ。オレ様は知らねーぞ』

レジェンド自らの爆弾発言でアーシアは真っ赤になりオーフィスは何故かドヤ顔。
何食わぬ顔でレジェンドキネシスを使い家具を移動させているレジェンドや布団を用意しているゼットを尻目に女性陣はヒートアップ。

「オーフィスちゃん、全部脱ぐってまさか……」
「我、レジェンドと寝るとき何も着ない」
「えええええっ!?だ、駄目ですよ!風邪引いちゃいます!」
「違うわルリア!論点はそこじゃない!」
「も……もしかしてルリアちゃんやアマリさんも一緒に寝たいとか」
「アーシアさん!?そういう意味じゃ……」
『ぐぅ……』
「あ、ゴモちゃん駄目ですよ。ちゃんとお布団入りましょうね」

色々と混沌としていたが、ゼットが持ってきたカプセル怪獣サイズ用の籠にゴモラを入れてやり毛布をかけてやるアーシアはまるでお母さんだ。
既にゴジラもマジンガーＺＥＲＯも寝ている……というか後者も普通に寝ているのが驚きである。
しかも寝相もいい。

「ほれ、全員分敷いたぞ。俺らはまだ眠れないから布団に入って討鬼伝やるぞ。武器何を使うかなー」
「あ、俺と超師匠は男なんで端っこに行きますんで。超師匠、巌勝さんが戦ったっていうヤトノヌシの上級に挑みたいんですけど」
「我はアマツミツツカ。我、この間は戦えなかった」
「何だ何だ？我夢達がやってたそっちの世界のゲームか？私も混ぜろよ～」
「初心者一名追加、コイツのために先ずは適当なやつ狩るぞ」
「「うぇーい」」

レジェンドやゼット、オーフィスの輪にベアトリクスも混ざり――

「ルリアちゃんはどんな本が好きなんですか？」
「えへへ……私はですねー」
「何かごめんなさい、無理矢理みたいで」
「ん？ああ、気にしないで。アマリちゃん……だっけ？いきなりで戸惑ったけど悪いことじゃないし。ベアもベアで楽しんでるみたいだしさ」

布団に入ったまま和気藹々としてる面々を見渡しながらゼタはくすりと笑う。

「あー！ヤバいヤバい！誰か助けてくれー！」
「槍衾のタイミング合わねぇぇぇ！」
「レジェンド、手甲使いにくい」
「揃いも揃って前衛しかいない上に攻スタイルのミタマしか装備してないのか！万が一に備えて銃＋癒で来てて正解だったな！なんで回復か攻撃かの両極端なんだこのメンバー!?」

携帯ゲーム機を手に一喜一憂しているレジェンド達、ゼタにアマリも混じってルリアやアーシアは愛読書談義に花を咲かせ、ゴジラ達マ

スコット組は騒いでも敵意が無いなら気にせず爆睡。
あと二、三日は続くかもしれない猛吹雪に見舞われたノース・ヴァストの森の一角。
様々な結界や加護で護られた彼らの寝床は、それとは関係なくとても温かかった。

〈続く〉

予告
フェードラッヘにひっそりと咲く赤い花。
血を求め闇を這う恨み花。
連続する吸血殺人事件の真相は何か？
狙われたオカルト研究部と白竜騎士団。
タロウを知る少女の正体は何？
次回『血を吸う花は少女の精』
「お兄ちゃんのお父さんも同じだった」

血を吸う花は少女の精（前編）

――王都フェードラッヘ――

オカルト研究部＋αが事故により誤って転移して来てから三日目。

白竜騎士団団長のランスロットや副団長のヴェインがウルトラ騎空団に赴き見聞を広めてくるということで職務の引き継ぎをしている最中、メンバーの中で比較的レジェンドと付き合いの長いカナエやゼロガンダムから『書類仕事であれば、転送用の装置を設置することで騎空団にいても職務をこなせる』と言われ思いもよらぬ形で引き継ぎ量が減り時間が出来た彼らは見回りを行っていた。

「お、ランちゃんあそこ！裕斗やゼノヴィア、イリナも混じって団員がゼロガンダムから稽古つけてもらってるぜ」

「ああ、三人とも大したものだ。それにゼロガンダム……とんでもない腕前だな。少なくともジークフリートさんと同等……もしかしたらそれ以上かもしれない。一体どんな激戦をくぐり抜けてきたんだ？」

「いいか！相手を見てくれだけで判断するな！戦場では相手を侮った瞬間に命を落とすことも少なくはない。用心することを臆病などと言う奴がいたら勝手に言わせておけ。そういう奴はいざという時バカを見る。戦場では常に『大丈夫だろう』ではなく『何かあるかもしれない』という心構えで望め！」

「「「「はいっ!!」」」」

「よし、まずはイリナ！俺に遠慮なく打ち込んでこい！」

「胸をお借りします、先生！」

割とマイペースと言われていたゼロガンダムだが、いざ真剣に指導するとなればさすがスペリオルドラゴン直属の初代シャッフル騎士団の一人というべきか、経験に裏付けされた力強い指示が出る。

体格差を物ともせずかの三人を含めて全員相手にして軽く捌き、息を切らせてもいないゼロガンダムはやはり凄腕の騎士だ。

次に見かけたのは……

「お前らにやったんじゃねーのに何でそんなにキレてんだよぉぉぉ!?」

「当然でしょう!!貴方のやったセクハラが原因で私達オカルト研究部や矢的先生、レイヴェルにゼロガンダムさんやロスヴァイセさん、ついでにハクやフウまで信頼されなくなったらどうする気なのよ!!」

「うふふ……ふふふふふ……」

「あらあら、カナエってばここぞとばかりに日輪刀を振るってますわね。堕天使のトップが代わるのも時間の問題かしら」

「お前らや矢的、あと三人はともかくとして俺の評価は猫以下か!?」

「あの子達は凄く良い子なのよ!セクハラする強制顧問(恥)と一緒にしないで頂戴!朱乃!カナエ!この機会にハリベル姉様から教わった虚閃(セロ)を試すわ!」

「では私は最近卯ノ花先生から教わったばかりの破道の八十八『飛竜撃賊震天雷炮』を撃ってみようかしら」

「朝まで舞おう、日の呼吸拾参ノ型……うふふふふ……」

どうやらアザゼルが何かやらかしたらしく、オカ研最強女子軍団に追い回されていた。

次に言われた技、リアスはまだともかくとして朱乃の鬼道は範囲が広く、カナエはマジで殺しにきている。

本来ならばランスロットやヴェインも止めようとするのだが、カナエの雰囲気が恐ろしすぎてスルーすることに決めた。

「……ヴェイン、騎士としては駄目なのかもしれないが、罪に対する罰のようだし見なかったことにしよう」

「だな。さー次に行こうそうしよう！」
「オォォイ!?助けてくれよォォォ!!」

街に出てみると、小猫とロスヴァイセがそれぞれハクとフウを抱えて買い物をしていた。
先程リアスが言っていたように勝手に行動せずおとなしく抱えられており、子供達から撫でられても軽く鳴くだけだ。

「この子すっごいふわふわー！」
「こっちの子ももふもふだー！」
「ニャー」
「ファァァ……」

例の如くハクは眠そうだが、逆にこの場では可愛さを際立たせていただけである。
目があったら軽く会釈されたので手を上げて応えると、子供達も気付いたのか驚いた後に勢いよく手を振られた。

「二匹と違って子供達は元気だな！」
「確かに。ただあっちのハクって猫の方は元々あんな感じだそうだ。いつの間にか俺の執務室にも紛れ込んでたよ。静かだから寝心地がいいんだと」
「あ～なるほどなあ。ランちゃんは集中してると独り言は言っても大きな声出さないし納得だ」
「え？俺ってそんなに独り言言ってたか？」
「ああ。けど節々から団員やその家族のことも考えてるって分かるから、別にいいんじゃないか？」
「う～ん……そういうもんかな」

最後に見たのはオカルト研究部の顧問である矢的と一誠、そしてギャスパー（紙袋装備）とアストラル体で小さくなっているトライスクワッド、さらにレイヴェル。
近くには白竜騎士団の団員達もおり何かを話しているようだ。
さすがに団員と真剣な表情で話し合っているのならば無視は当然、挨拶だけしてというわけには団長副団長という立場上出来はしない。

「矢的教諭、それに一誠とレイヴェル……だよな」
「ああ、お疲れ様、ランスロット団長にヴェイン副団長」
「どうも！あ、それと矢的先生は団長とか副団長って呼ばなくて構いませんよ。ほら、客人扱いですし……で、何があったか聞く前にこっちの紙袋について聞きたいんですけど……」
「ひっ？ぼ、僕です！ギャスパー・ヴラディですぅ！」
「いや何で紙袋？」
「実はギャスパー、ちょっと前まで極度の人見知りというか対人恐怖症というか……リクさんがいればこうならなかったんだろうけどなあ……」

一誠が頬を掻きながら苦笑しつつ言うと、ランスロットもヴェインもなるほどと納得してそれ以上追求しなかった。
矢的は二人とも人の気持ちを汲み取れる素晴らしい者達だと自然と笑顔になり、それを見た二人も同じく笑う。

「んじゃ改めて……何があったんですか？」
「ああ……本来ならば白竜騎士団を束ねる君達に判断を仰がなければと思ったんだが……昔の性かな、独自に調査を始めてちょっと前に町を散策していた兵藤達に会って、協力してもらっていたんだ。最近このフェードラッヘで起きている『吸血殺人事件』について」
「……！そうだったんですか。しかし、昔の性とは？」
「これでも昔はＵＧＭという特捜チームに所属していてね、怪奇事件や怪獣関係にはよく出動したものさ」

「特捜チーム！そういや我夢もＸＩＧって組織に所属してたって言ってたな。あとアルケミースターズだっけ？」
「ああ。つまり矢的教諭もこの手の問題のスペシャリストというわけだ。むしろこちらから早めに協力を頼むべきだったかな」

ランスロットとヴェインは頷き合って、先程の団員達から仕入れた情報を矢的達と共有する。

「またか……今月に入ってまだ日が経っていないのに今日で五人目だ。ただでさえケロニアの件で吸血する類のものには細心の注意を払いつつ行動しているが、下手人は全く分からない」
「襲われた人々に共通点は？」
「それが身分や職業、家族構成まで調べたがバラバラで、遠縁やかつての同僚かとも思ったがその線もなかった」
「通り魔的犯行……みたいなことッスか？」
「多分な。だが、通り魔だとしたら団員が遭遇していてもおかしくない。事件が起き始めてから、団員達を二人以上を一組として配置しているがそれでも掴めないのは何か規則性があるんじゃないかと俺は思ってるんだ」

規則性と言われて一誠達はう～んと悩むが、どうにもピンと来ない。

「実はこの件でジークフリートさんに連絡をとったところ『我夢の方が詳しいんじゃないか』って言われて相談したんだ。そうしたら、何でもいいから気になったものの画像を送ってくれれば解析してみると言ってくれてな。矢的教諭達も何かあったらそうしてほしい」
「わかった。気をつけてみよう」
「お願いします！しっかし……あのケロニアといい今回といい、血を吸うやつが多いよなぁ。魔物にもそういうやつはいるけどその場合は外傷でどの魔物がやったかは大抵目星が――」

「それだ！」
「うおっ!?ランちゃんも矢的先生もどうしたんだ？」
ヴェインが言った何気ない一言で頭の回転が早い二人はあることに気付く。
「そう、外傷だ。ケロニアの習性が衝撃的だったから今まで吸血という部分しか見ていなかったが、ヴェインのおかげで気付けたよ」
「一口に吸血と言ってもその手段は様々だからな。噛み付いて吸う場合もあれば蛭のように皮膚にくっついてで吸う場合もある。それを調査すればある程度犯人は絞り込めるだろう」
新しい調査の方向性を見出した二人。
一誠はそんな二人から目を離すと赤い花を持った少女がこちらを見ていることに気が付いた。
周囲に親らしき人物もいなかったため、迷子だろうと思い声を掛ける。
「なあ、どうしたんだ？もしかしてお父さんやお母さんとはぐれちゃったのか？」
「……」
少女は何も答えず、黙ったままジッと一誠を見るばかりで一誠はどうしようかと頭を掻く。
タイタスやフーマも頭を悩ませる中、ただ一人タイガだけは違った。
（一瞬だけど、俺を見た。アストラル体では同族か特殊な能力が無いと視認出来ないはずなのに）
そんなタイガの思考をよそに一誠は少女と手を繋いで家か家族を

探すべく、矢的に声を掛けた。
「矢的先生、俺この子を家まで送ってきます」
「あ、あのその……僕もついていきます。やっぱり一人だと心細いので……」
「私も同行しますわ。年端もいかない女の子ですもの、同性がいた方が気が楽になるでしょうから」
「そうか。なら三人とも、十分に気をつけてな」
「「はいっ！」」

力強い返事を聞いた矢的は笑顔で頷き、ランスロットやヴェインと事件の対策に乗り出す。
優しい先生から頼もしい隊員へと表情を切り替えた矢的を見て、やはりゲンと同じく自身の目標とする人物の大きさを実感した一誠は、自分が言い出したことに全力を尽くすべく、少女の手を引いて町に繰り出した。

……まではよかったのだが。
「なあ……ホントに家は何処なんだ？」
「違う家に始まり、お店や私達がお世話になってるフェードラッヘのお城まで……」
「故意に振り回されてる気がしますぅ……」
少女が自分の家をちゃんと言わないため、一誠達はほとほと困り果てていた。
そんな疲労困憊の一誠達に、遠くから声が掛けられる。

「お～い！」
「あれ？ヴェインさん？」
「ふぃ～……やっと見つけたぜ。その子の家、探してたんだろ？どっかで見たことあるなって思ってランちゃんに聞いてみたら、白竜騎士団の訓練光景の見学に来た施設の子供だったんだよ。そこ、親に捨てられた子供ばかりいる施設でさ……それから里子に出されて、今は……そうだ、ロックスポッド夫妻の養子になってるんだ」
「じゃあその人達が住んでる家に行けば……」
「ああ！無事解決ってわけさ！それを教えたくてさっきまでフェードラッヘ中を駆け回って探してたんだよ」

フェードラッヘ中、と聞いて一誠らは驚くが、当のヴェインは「体力だけはあるから」といつも通り笑っている。

その後、フェードラッヘ近郊に豪邸を構えるロックスポッド邸まで送り届けると、お手伝いさんに何度も頭を下げられた。
お手伝いさんに促されて奥に引っ込む前に、少女――サナは初めて笑顔で「さよなら」と一誠らに告げ、邸宅に入っていく。

「なんだ、ちゃんと笑えるし挨拶も出来るじゃんか。ってかすげぇ富豪んちの子かよ……」
「ま、自宅に着いた安心感ってのもあるんだろうな。よし！そんじゃ俺達も帰るか！」

ギャスパーとレイヴェルも二人に同意し帰ろうとしたとき、偶然帰ってきたロックスポッド夫人に何か用かと尋ねられて事情を話すと先程のお手伝いさんと同じように頭を下げられた。
サナはどうやらしょっちゅう家を抜け出しては迷子になるという。
その上で、彼女について尋ねると夫人はこう語る。

「あの子はどう言うんでしょうか、ちょっと変わったところがありましてね。うちでもほとんど口を利かないんですの……自閉症って言うんですか、そんな病気にでもなったら大変だと……ともかく、ヴェイン副団長も皆さんもこの度はありがとうございました」
「いえいえ！何かあったら、遠慮なく白竜騎士団へご連絡下さい！では！」

この時、またタイガだけが気付いていた。
サナが去り際にタイガを見ていたことに。

（まただ……見えないはずの俺の方を見てた。何だ？俺はあの子とは初対面だし……）

そしてもう一つ……

「あれ？レイヴェル、その花」
「これですか？あの子に貰いましたの」

この花が事件と大きく関わっているとはまだ誰も知らない……そう、ただ一人を除いて。

☆

食後に集まった、オカルト研究部＋αのメンバーとヴェインは孤児問題について話し合っていた。
矢的とランスロットは事件の対策会議をしているらしく、代わりにヴェインがリアスらの様子を見に来たというわけだ。

「身寄りが無い子供を引き取ったと言えば聞こえが良いけどさ、よくよく考えたら今の家に納得してたら家を抜け出したりしないよな。

あんな豪邸なら不便なことなんてないだろうし」
「愛されてないとか……世間体でも気にして引き取って偽りの家族か何かでもやっているのかしら」
「今の私達とは違いますね」

ヴェインとリアスに続いた小猫の言葉にオカルト研究部の皆は納得する。
リアスはハリベルやマリーダを姉と慕い、同様に小猫も実姉の黒歌だけでなく夜一とも仲が良い。
その究極点とも言うべきなのがレジェンド一家やサーガ組、ひいては惑星レジェンドに生きるもの達。
血の繋がりどころか種族や生まれ育った世界が違うのに家族として当たり前に過ごしている。

「そうね……私もしのぶも、カナヲやアオイ達と当たり前のように姉妹として暮らしていたけど、皆が皆そうとは限らないのよね」
「たださ……やっぱり捨てる親が悪いよな。子供が出来ると大変なのは分かってただろうに作ったんだから」
「一概にそうとも言い切れませんわ。予期せぬアクシデントで子育てが困難になってしまうこともありますし」
「けどまあ親はいなくても子は育つって言うしよ、要は環境さえ整ってりゃどうにでもなるんだよ」
「「「……」」」」

最後に発言したアザゼルをじと～……っと見る一行。

「な……なんだよ」
「発言内容はさておき……何で貴方はここにいるのかしら？」
「……矢的先生は私達を守るために今もランスロットさんと打ち合わせしてます」
「アザゼル先生さあ……なんつーか、顧問として意識低いんじゃねー

の？」

狙い澄ましたようなフーマの一言が、アザゼルに特大ダメージを与えた。

「お……お前らな……！俺がそうならそっちの副団長もそうじゃねえか！」

「俺、ランちゃんや矢的先生に頼まれたんですよ。自分達が事件対策でこっちまで手が回らないから面倒見てくれって。ただ、皆を見ると面倒より護衛的な部分が強いかな。一応白竜騎士団の副団長だからある程度権限も持ってるし」

「完敗だなアザゼル。お前はもう少し年長者としての振る舞いを身に着けたらどうだ？」

「うるせー！そういうお前は寛ぎすぎだろ聖竜騎士！」

既に枕を抱えて横になっているゼロガンダムに怒鳴りながらアザゼルは頭をぐしぐしと掻く。

このまま続けても埒が明かないので、事件に関しては矢的とランスロットも含めて明日改めて相談することに決め、今日は寝床につくことにする。

そして、それは真夜中に起きた。

殆どの者が寝静まったフェードラッヘ。

城の一室ではレイヴェルとゼノヴィア、そしてイリナが眠っており、彼女らのベッドから少し離れた所にはサナに貰った花が生けてある。

『それ』はゆっくりとドアから忍び寄り、その花と合体し、最も近くにいたレイヴェルへと少しずつ近付いていく。

「っくしゅん！……ん……ッ!?」

偶然にもくしゃみしてしまい少しだけ目が覚めたレイヴェルは何かの気配を感じた方を見ると――

サナに貰った花と合体した何かの『蔦』が目の前まで迫っていた。

「きゃあああああ!!」

「ッ!?何だ!?どうした!?」

「ふぇ!?何何!?何があったの!?」

レイヴェルの悲鳴にゼノヴィアとイリナも飛び起き、すぐさま目にしたのは入り口のドアから侵入していた蔦。

さすがに他所様の城の部屋で炎を使うわけにもいかないとレイヴェルは布団を乱暴にバサバサと扇いで払おうとしており、ゼノヴィアもイリナもそれぞれの剣を使って斬ろうとするも新たに現れた蔦に阻まれて手にする事が出来ない。

「くそ！何だこれは!?」

「先生に貰った雷龍剣（サンダーソード）を返しなさいよっ！」

少しずつ追い詰められ、壁にぶつかる三人。

「っ!?」

「まずい……！もう後がない！」

「ホントに何なのよこれっ！」

想像以上の力で迫りくる蔦に成すすべもなく、三人はやられてしまい――

「雷撃砕(ライトニングブレイク)!!」

――そうになった瞬間、雷が一閃。

蔦は全て力無く地に落ちた。

「三人とも無事か!?」

「先生ッ!!」

「聖竜騎士様!?」

「ゼロガンダム殿!?」

三人の危機に駆けつけたのは「嫌な予感がする」と寝室から外に出て自主的に見回りをしていたゼロガンダム。

城の外から蔦が侵入していたためおかしいと思った直後にレイヴェルの悲鳴が聞こえ、彼女らにあてがわれた部屋へ急いだのである。

「助かりましたぁぁぁ!!面目ありません～!!」

「そう泣くな。無事で何よりだ」

「ですが本当に危機一髪でしたわ。ありがとうございました」

「なあイリナ……彼と師範、一日でいいから交換しないか……?」

割と本気で言っているゼノヴィアはさておき、ゼロガンダムは今し

がた斬り落とした蔦を見る。
その蔦からは黒い液体が流れ出していた。
「これはっ……!?」
「……採取するぞ。その花と蔦共々、すぐに連絡して調べてもらった方がいい」

ゼノヴィアらが驚いている間にもゼロガンダムは花と蔦、そして黒い液体をケースに入れる。
それから程なくして、ランスロットとヴェインを始めリアスらも駆けつけた。

「どうした!?」
「大きな悲鳴が聞こえたわよ!?何があったの！」
「ランスロット様にリアス様……皆様も」
「何だこりゃ!?何でこんな蔦が城内に!?」
「それにこの黒い液体は……」
「……何処かで嗅いだことあります、この匂い」

その言葉に一斉に振り向き、小猫はビクン！と驚いたからかぴょこんと猫耳と尻尾が出てしまいカナエに抱きしめられ高速で撫でられる。

「やっぱり可愛いー！わしゃしゃしゃしゃ！」
「ふにゃあああああ!?」
「マズいわね……しのぶさんもレジェンド様もいないからカナエのストッパーを誰も出来ないわ」
「黒歌の姉ちゃんがいないだけマシじゃね？って言ってる場合じゃねーな」

とりあえずカナエを小猫から離し、小猫から話を聞いてみると意外

なことを言い出した。

「これ、普通ならこんな黒い色じゃないと思います」
「え？どういうことなの、小猫」
「だって……この匂い、血の匂いですから」
「「「「!?」」」」
「まだ確証はありませんけど……多分間違いないです」

小猫の言ったことが合っているとすればここのところの事件解決に大きく前進するかもしれない。
それを知ったランスロットは緊急事態とすぐさま我夢に連絡をとったところ、もしサンプルがあるなら送ってほしいと言われ、どうすればいいのかと悩む……が、それはすぐに片がついた。
ゼロガンダムを始めスペリオルドラゴンの眷属たる者達は科学的なもの以上に魔法を使用するため、片道転送にはなるがある程度の物体であれば瞬時に送れる転移陣を描けるとのこと。

「俺が採取したばかりの花と蔦、それにこの黒い液体をそちらに転送する。すぐに調査を頼めるか」
『わかりました、明日朝イチで連絡します』
「ランスロット団長、ベッドがより複数ある部屋はないか？こうなった以上、一度切り落としたとはいえ再度狙われない可能性が無いとは言い切れん。出来る限り人数を多くして互いのカバーが出来るようにしておいた方が安全だ」
「確かに……」

そこに矢的とアザゼルが駆け込んできた。

「皆！それにランスロットさんとヴェインさんもいてくれたか！」
「矢的先生、それにアザゼル先生もどうかしたんですか？」
「実は……っ!?それは！」

「どうやらこの蔦が意思を持っているかのように城内に侵入して――」
「――最悪だな。おい、お前らも心して聞け。たった今白竜騎士団の団員の一人が遺体で、しかも城内で見つかった。案の定吸血事件と同じような状態でな」
「「「!!」」」

アザゼルの言葉に全員が絶句した。
特にランスロットとヴェインは自分達の団の者が亡くなったとあって冷静にはいられない。

「それは本当なんですか!?」
「ああ……しかも苦し紛れだったのかは分からんが、その蔦と同じものが少しだけ切られて残っていた。俺が声をかけた時にこれが事件解決の手掛かりになるかもしれない、とお前に渡すように言って事切れたよ」
「ッ……」
「ランちゃん……アザゼル先生、そいつの名前、分かりますか?」
「リムロス……だったはずだ」
「……そいつは、去年入団したばかりでした。田舎出身らしくて、いつか有名になって自分の育った村をアピールするんだって意気込んでました。だから騎士としての職務に熱心で……なのに、こんなに早く……!」

団員の遺した手掛かりを握り締めながらランスロットが怒りと悲しみに震えつつ言葉を絞り出す。
何を隠そうランスロット、そしてヴェインも貴族や名門の家系ではなく、村出身の騎士である。
同じ騎士団の仲間としてだけでなく亡くなった団員の境遇と似ていたこともあったのだろう、団員の命を奪った犯人を必ず突き止める意思が感じられた。

「おい、レイヴェル」
「は、はい……」
「これについて何か知らないか？聞けば最初に狙われたのはお前みたいだが」
「いえ、皆目検討が……あっ……！」
「何でもいい、言ってみろ」
「花ですわ！昼間、迷子の子を送り届けまして、その時に花を……」

アザゼルに聞かれ、レイヴェルが思い出したのはサナから貰った赤い花だ。
思えばあの蔦はその花と合体してレイヴェルらへと襲いかかっていた。

「……！ランちゃん！そういや昨日リムロスも迷子の子を送り届けて花を貰ったとか言ってなかったか!?」
「ああ……！小さな事でも良い事をするのは良いもんだと言っていた。蔦の伸びてきた方向から考えるとあいつの部屋は遠め、おそらくここ最近に近くまで来ていたんだ！そして今日、レイヴェルさんを襲うタイミングであいつも襲った……！」
「送り届けて貰った花が原因で蔦に襲われた、か……偶然とは思えねえ。その子供が何か鍵を握ってそうな気がするぜ。それに考えたくはないが、最悪その子供が狙ってやってる可能性も無いとは言い切れねえぞ」

さすがにそれは、と言おうとして一誠やレイヴェルは口を噤む。
数多の犠牲者が出ている上、状況が状況だけにおいそれと違うと言い切れないのも事実だから。
そしてまさかの追撃がタイガから放たれる。

「こっちも確証が無いけど……あの子、俺達の姿が視えていたかもし

れない」
「「「「!?」」」」
「は!?ウソだろ!?」
「それが事実だとして、何故タイガは気付いたんだ?」
「……俺の方を見ていたんだ。タイタスでもフーマでもなく、俺だけを」

これを一般人が言ったなら「なんだこのナルシスト」で済むが、アストラル体のタイガが顔を俯かせながら言うと真剣味がまるで違う。

「何でタイガだけなんだ?位置的にはどうだった?」
「俺はその時、少し奥に引っ込んでいて一番あの子の目につくのは普通ならタイタスだったと思う。でもあの子はずっと俺を見ていた。俺は初対面……何よりこの世界に来たのだって初めてだし、何だったらあの世界に限らず地球に来たのだってつい最近だ!心当たりなんて全く……」
『落ち着くんだ、タイガ。誰も君を責めてはいない。君の持っている情報から少しでもあの少女の正体を掴みたいだけだ』

不安からなのか、若干混乱して声を荒げるタイガを優しくダ・ガーンが諭す。
それでタイガも落ち着いたのを確認し、矢的がその場を締める。

「とにかく、今日は皆で集まって寝よう。明日の朝には調査結果が届くはずだから、それから今後の予定を考えるとしよう」
「俺は他にあの花を貰った者がいないか調べてみる。ヴェイン、すまないが……」
「あいよランちゃん、気にすんなって。衝撃的なモン連続で突き付けられて目が冴えちまってさ。まだ真夜中、二人で急いで確認して回れば寝る時間もあるって」
「矢的教諭は明日に備えてもう休んで下さい。俺達は花の件が終わっ

たらそのまま就寝しますから戻ってこないので、何かあれば……」
「大丈夫、心配はいらない。これ以上僕の生徒達には手出しさせないさ」
「お願いします。それでは」
「ランスロットさんもヴェインさんもお気をつけて」
「サンキュー、ようしランちゃん！俺達も明日に備えるのと被害拡大を防ぐためにさっさと回っちゃおうぜ！」
「ああ……！リムロス、お前が遺してくれた手掛かりを無駄にはしないぞ！必ずこの事件は解決してやるからな！」

ランスロットとヴェインは志半ばでこの世を去った若き団員に誓い、部屋を駆け出していく。
リアスらはまだ不安があったものの、矢的やゼロガンダムらも同室ということで幾分安心したのか漸く再び眠りにつくことが出来た。
ただし……

（……タイガ達はいつもいるからいいとして、イッセー以外がいるから服が脱げないじゃない）

オーフィスと同じく寝る時は服を着ないリアスは少しばかり寝付きが悪かったそうな。
とはいえ、寝不足は捜査に差し支えると自分に言い聞かせて何とか眠るのだった。

〈後編へ続く〉

血を吸う花は少女の精（後編）

翌日、ウルフォンのモニターモードで我夢から連絡を貰った矢的らは予想通りの結果報告を受けていた。

『ケロニアとは全く別物ですが、吸血植物に違いありません。花と、それからあの黒い液体から大量のヘモグロビンが検出されました』

「やっぱりか……」

「う～ん……」

「ヴェインさん？」

「ん？ああ、いや……あの花なんだけどさ、どっかで見たことあるんだよな……あの子が持ってたもの以外に何処かで……」

思い出せねー！とガシガシ頭を掻くヴェインだが、こうなったら直接サナに聞いてみようということになり、先日訪問したロックスポッド邸に向かうことにする。

しかし、既に事件は起こっていた。

「あ……が……あ……！」

昨日の晩、レイヴェルや騎士団員を襲った蔦はロックスポッド夫人を絞殺し、花から伸ばした管を耳から体内へと侵入させ、夫人の血を残らず吸い取ってしまう。

その光景をサナは窓の外から黙って見た後にフェードラッヘの町へと足を進めた。

物で釣るのはどうかと思いつつ、とりあえず何か持って行こうと町の商店を見ながらロックスポッド邸に向かう一行。

「何がいいかな～」
「何て言うかさ……あの子、何かをあげて喜ぶようなタイプじゃない気がするんだよな」
「そん時はそん時……って話してもらえなきゃ駄目か」
「ねえ、その子ってどんな子なの？」
「ん～……どんなって言われてもあんま喋んないし、他人を信用しないような空気を纏ってる感じっていうか」
「……それ、こんな人数で行って大丈夫なのかい？」

裕斗の意見はもっともである。
他人を信用しないような子が大人数で来た彼らを受け入れるとは到底思えないし、逆に印象が悪くなるだけの気もするが……。

「それじゃあ……近くまで行ったら、俺が先行し……!?」
「イッセー君、どうしたんですか？」
「朱乃さん、皆もあれを見てくれ！」
「どうし……あれ！あの花!!」

一誠が指差した先には、井戸端会議しているだろう主婦らしき女性達……そしてその手には先日彼らを襲った原因の一端である赤い花が握られていた。
急いでヴェインは女性達に声をかける。

「すいません！ちょっといいですか!?」
「あら、ヴェイン副団長。どうされました？」
「その花、一体どこで……!?」
「これですか？これだったら通りすがりの女の子に貰ったんですよ。ほら、まだあそこに……」
「それは吸血植物の一部なんです！城でもそれが原因で団員が殉職しました！すぐに捨てて下さい！」

普段は明るく笑顔を絶やさないヴェインの必死な呼びかけで、冗談ではないと理解した女性達は小さく悲鳴を上げたあと花を捨てていく。

ヴェインがホッとしている間に一誠はまだ近くで花を配っていたサナを捕まえて問いただす。

「なあ、どうして花を配ってるんだ？まさかとは思うけどあれが人を襲う花だって分かって配ってるんじゃないよな？そもそもあの花を何処で摘んできたんだ!?」

「イッセー、ちょっと落ち着きなさい！焦る気持ちは分かるけど……」

徐々に語尾が荒くなる一誠を諌め、リアスが後を引き継ごうとするがサナは手にした花バサミをカチカチ鳴らしながら睨みつけるだけ。

（こう言ってはなんだけど……私達悪魔よりよっぽど悪魔的な表情してるわよね……）

リアスは溜息を吐きつつ、どうしたものかと考えていると「お～い！」とランスロットと矢的が駆け寄ってきた。

「ランちゃんに矢的先生、また緊急事態か!?」

「緊急事態と言えば緊急事態なんだが……ヴェイン、あの花に見覚えはないか？」

「へ？ああ……城以外のどっかで見たのは覚えてるんだけどさ……いまいち記憶があやふやっていうか」

「やっぱりか……今は誰も近付かないから詳しく覚えてなくても当然だ」

「詳しく……？もしかしてランスロットさん場所が分かったんですか!?」

裕斗の言葉にランスロットは頷き、既に何かあった時の為に白竜騎

士団は各所に配備済みと告げた。
そしてランスロットと矢的を加え、一行はその花の群生地と思しき場所へと急行する。
前述の何かあった時に備えて、同行する白竜騎士団はランスロットとヴェインのみだ。

そこは、フェードラッヘ郊外に建てられた教会と墓地……その境内の奥。
こんなところに教会が建っているのも稀だが、その奥地には一つの塚があった。

「これは……」
「この塚は昔、捨てられて死んだ子供達を供養する為に建てられたそうだ。おそらく、土葬にされた死体を食い尽くした蔦が地上の人間まで襲うようになったんだな。しかし恨み花とは良く言ったもんだ。原因が分かったことだし、早く除去してしまおう。これ以上被害を広がらせるわけにはいかない」
「だな！んじゃ、力仕事は俺の出番ってわけだ！」
「頼むぞ、ヴェイン。俺達は引っこ抜いた蔦を即座に焼却出来るよう準備しておく」

そういうとランスロットは持ってきた道具箱をヴェインに渡し、自身はすぐに焼却準備に取り掛かる。
テキパキと用意を進めるランスロットに、道具箱から鉈を取り出して現在地上に出ている蔦の茎の部分に叩きつけるヴェイン。
一誠らも何か手伝おうとした瞬間、視線を感じてその方向を向くと墓地にサナが立っていた。
彼ら――タイガを見ながら。

「あの子は……！」

「お兄ちゃん達のバカ！」

いきなりなんだ、と思ったがランスロットは一誠達を止め首を振る。

「あの子には可哀想なことかもしれないが、あの子のためだけにこの命を奪う蔦を残しておくわけにいかないんだ。このまま放置すれば後々にはフェードラッヘのみならず他の村や町にも被害を及ぼすかもしれない。すまないがそれを分かってほしい」

「そう……ですよね。もう被害が出てるんだしこのままってわけには……」

「お兄ちゃんのお父さんもそうだった」

「「「「え？」」」」

突然サナがハッキリと喋り出した。

しかも意味深な言葉を口にし、全員がサナを見る。

「お父さんって……誰だ？このメンバーじゃお兄さんだらけだろ」

「ちょっと待って、少なくとも私達は面識ないはずよ。だとするとランスロットさんかヴェインさんじゃないの？」

「いや、俺もヴェインも実家はフェードラッヘからかなり離れてるし、両親も育ったのはそこだ。俺達と面識があるならまだしも、俺達の父親と面識があるのはあの子の年齢だとそれこそ物心付いたころにあった計算になるぞ」

「それ以前にフェードラッヘには俺やランちゃんの親は来てないし、俺達の故郷にはこんな吸血植物なんて無かった。というか、俺達が子供の頃あの子はまだ産まれてないだろうし」

ランスロットもヴェインもリアスの疑問を否定し、彼らの家族も身に覚えがないだろうことも告げる。

しかし、ただ一人気にしていた人物がいた。

「お兄ちゃんのお父さんもそうやって他の人と一緒にその蔦を切ったり引っこ抜いたりした。幸せに、普通に暮らしてるから今の世の中のことがわからないんだ。口では優しく言っても本当は捨てられた子供のことなんてこれっぽっちも考えてくれないんだ！生きていく力もないまま放り出された子供の気持ちなんてわかろうとしてくれないんだ!!」

（……まさか、あの子の言うお父さんっていうのは……！）

「お兄ちゃんも……ウルトラマンタロウと同じなんだ!!」

「「「「!!」」」」

「ウルトラマン……」

「タロウ？ガイアとかじゃなくて？」

タロウの名が出た瞬間、ランスロットとヴェイン以外は衝撃を受けた。

何故、一度もこの世界に来ていないタロウのことを彼女が知っているのか。

同時にタイガはかつて父であるタロウからある話を聞いたことを思い出す。

捨て子塚――そこにまつわる話と、そこで起きた事件。

そしてそれが今回の事件と酷似していることに気付く。

「捨て子塚……」

「「「「えっ!?」」」」

「ランスロットさん！ヴェインさん！早く離れてくれ！その蔦は……」

「……？この蔦がどうし……!?」

「な……何だあ!?」

突如地震が起きたかと思うと、塚の周辺が隆起していく。

一誠達はすぐさま退避するも途中で残してきてしまったサナのこ

とを思い出し、すぐそちらを見てみるとサナはその姿を消していた。
地面が隆起した原因、それは――

「ア゛ア゛ア゛ァァァ!!」

蔦の本体――蔦怪獣バサラが地中から姿を現したためでだった。
あの蔦はバサラの体毛だったのである。
ケロニアに続き、未知なる生物が突然現れたことにフェードラッへに住まう人々はやはり混乱に陥った。

「何だあれは!?」
「蔦だ!蔦の化け物だあああ!!」
「どうなっちまったんだよこの世界は!」

急いで戻ってきたランスロットとヴェインは白竜騎士団の団員に手早く指示を出す。
遅れてリアス達も戻ってくるが、一誠やトライスクワッドは同行していなかった。

「第一から第三分隊は住民の避難だ!緊急事態だが民は皆混乱している以上、我々が焦ってはならない!」
「第四から第六分隊!あいつも植物なんだ、我夢が作ってくれたファイヤーバスターが役立つハズだ!ただし住民の避難が済んでることを確認してから使えよ!各分隊の使用者一名を護衛するように陣形を組んで攻撃開始!」
「全く、我夢の先見の明には驚かされる……!避難が完了次第、第一から第三分隊もファイヤーバスターを用意!俺とヴェインが最前線で奴を引きつける!やれるか、ヴェイン!?」
「当然だぜ!伊達に病み上がりでケロニア相手に松明山程抱えて突っ

込んだわけじゃない、しぶとさには自信があるんだ！」
「待って二人とも！」
「リアスさん、危ないから下がって……あれは!?」

リアスに呼び止められたランスロットとヴェインがオカルト研究部のメンバーに下がるように言うが、直後に新たな驚きが巻き起こる。

「チェェェンジ！ダ・ガーン!!」

バサラの前にパトカーから変形したダ・ガーンが立ち塞がり、アースライナーが撹乱しアースファイターが上空より攻撃を始めたのだ。
無論、ダ・ガーン自身が一誠に頼んで出してもらい、続けて二機のマシンも出して援護に加わらせたのである。

「ア〝ア〝ア〝ァァァ!!」
「お前もまたこの地に生きるものなのだろう。しかし、だからといってお前だけが生きるために他者を犠牲にして良いわけではない！ダ・ガーンマグナム！」

アースファイターの援護を受けつつ、ダ・ガーンはバサラへの攻撃を開始する。
対するバサラも蔦を伸ばして応戦するが、ダ・ガーンは攻撃力こそ低いものの機敏に動き蔦による攻撃を回避しつつ、マガオロチにはあまり効果が無かったダ・ガーンナパームをバサラに炸裂させた。

「ア〝ア〝ア〝ァァァ!?」
「よし……！やはり火薬攻撃は有効だな！」
「ア〝ア〝ア〝ア〝ア〝!!」
「何ッ!?」

ダ・ガーンナパームに耐えたバサラは激昂してダ・ガーンを蔦で絡め取り、その蔦に電撃を伝わらせてダ・ガーンへと反撃する。

「ぐわあぁぁぁっ!!」

ゴーデス戦後、束やコジローに耐電処理をしてもらったダ・ガーンだが、怪獣クラスが持つ電撃を浴びせられて平気ではいられない。

しかし彼は引き下がるわけにはいかなかった。

悩みを抱えながらも、主達が戦おうとしているのだから。

一誠やトライスクワッドはダ・ガーンとバサラの戦っている場所から少し離れた位置にいた。

無論、ランスロットやヴェインはともかく一般人にウルトラマンへと変身するところを見られないためだ。

「ここなら……!」

「イッセー!早くしないとダ・ガーンもやべえぞ!合体してんならまだしも分離したままじゃ……!」

「待て!誰かいるぞ!」

フーマに急かされるもタイタスの言葉でそちらを向くと、やはりと言うべきかサナが一誠……正しくはタイガを睨んでいた。

「なんで邪魔をするの?」

「やっぱりわざとやってたのか……!」

「なんで子供を捨てた大人達を守るの?そんな大人がいるから私達みたいな子供が増えるんだよ?だからいなくならさなきゃいけないんだよ!」

「ふざけんな!さっきのお前の言葉は重く響いたぜ……けどな!今の

言葉はそこら辺にいる悪ガキの我儘をさらにタチ悪くしたもんじゃねーか！」

一誠が返した言葉にも怯まずサナは睨み続けるも、一誠もまた臆したりしない。

「確かにな！お前の言う通りやることやって子供が出来たら捨てるような親はクズだよ！けどな、親になろうと頑張ってる人もいるし、何より親がいなくても必死にその日その日を生きてる人だっているんだ！誰も彼もがお前みたいな考えだと思ってんじゃねえ！」

親になろうとした――これはゴーデス戦後、サーガから詳しく聞いたレジェンドのこと。

育児に関して右も左も分からなかった当時の彼は数多の者からアドバイスを聞きつつ、時には立場など関係なく頭を下げてまで教えを乞い、サーガをあのように立派に育て上げた。

そして後者は尊敬する師であるおおとりゲンことウルトラマンレオ。

故郷であるＬ７７星を失い、父は目の前で己を庇って死に、母は行方不明。

双子の弟のアストラとも長い間生き別れ状態であった上に、同僚や親しい人々、果ては恋人さえも亡くしながらも地球を守るために日々命を賭して戦い続けた、真の意味で強い男。

他にも矢的やレイト、リクを始め多くの者達の凄まじい生き様を一誠は短期間の間に知る事となった。

その中で両親に愛され、友や愛する人と笑い合えていた自分がどれだけ恵まれていたのかも自覚した。

だから彼はサナに同情しつつも自分達だけが悲劇のヒロインのような言い草が許せなかったのだ。

両親が共に訳ありなタイタスやフーマもまたそれに当て嵌まる。

二人も既に両親はおらず、大切な者も失った。

「そうだ……！幸福を願えとは言えないけど、自分が不幸だからって他人まで不幸にしちゃいけない！」

タイガも一誠と同じ意見であったが、それがサナには気に食わなかったらしく更に反論してきた。

「お兄ちゃん達は大切にされてたからそう言えるんだ！愛されてもいなかった私達のことなんか分かりっこない！」
「ああ分かんねえよ！愛されていなかったからって、誰かを愛してみようとも考えないで『原因全部無くしちゃえ』としか考えない奴の頭ん中なんてな！俺は馬鹿だから！」
「勇気を持って一歩踏み出せば出来るかもしれないことを、やりもせず否定するようにだけはなりたくない。だから俺達は君の言うことに納得することは絶対に無い！イッセー!!」
「おう！行くぜタイガ!!」

もはやサナと押し問答する気は無い。
たとえどう思われようと、彼らは決して曲げることのない信念を持っている。
一誠はタイガスパークを出現させ、待機状態にする。

『カモン！』
「光の勇者！タイガ！」
『はあああああっ！ふんっ！』
「バディィィィ！ゴォォォォッ!!」
『ウルトラマンタイガ！』
「シュアッ!!」

ウルトラマンタイガ、彼の空の世界においてのデビュー戦が幕を開

けた。

その光景を見ていたランスロットを始めとする白竜騎士団やフェードラッへの民はタイガの登場に驚き、リアス達は一誠やトライスクワッドが無事であったことに安堵しつつ、その戦いを見守ることにする。

まだ自分達に怪獣と戦う力が無いため、下手な加勢をして足手まといにはならないよう考えてのことだ。

「私達ならサイバスターで……」
「あれに突っ込んで蔦に絡め取られる気か？」
「うっ!?」
「否定出来ないニャ、ロスヴァイセ」
「ンニャアァァァ……すぴー……」
「この子寝始めてしまいましたわよ!?」
「あらあら、肝が座ってるというか緊張感が無いというか」
「ロスヴァイセさんその子貸してその子貸して」
「……もう一人いたわね、緊張感不在の人物」

相変わらずカナエはハクをロスヴァイセから受け取って至福の一時。

絶賛猫吸い中。

「ダ・ガーン、あとは任せろ！」
「すまない……！私はアースファイターやアースライナーと共にフェードラッへの防衛にまわる！」
「ああ、そっちは頼んだ！行くぞ！」
「ア゛ア゛ア゛ァァァ！」

ダ・ガーンを救出すると同時に下がらせ、バサラと戦闘を開始するタイガ。

「フッ！デェヤッ！」
「ア゛ア゛ア゛ァァァ!!」

タイガはバサラに組み付き、大振りにパンチをお見舞いする。
バサラのスピードが大したことはないと見抜いた上で威力重視の先制攻撃だ。
しかし一撃、二撃、そして三……と思ったときにバサラが口から蔦を吐きタイガに絡み付かせ、ダ・ガーンに浴びせたように電撃を浴びせる。

「ウァァッ！だけど、この程度なら！シュァッ!!」
「ア゛ア゛ア゛ァァァ!?」

タイガは絡み付いたバサラの蔦を手刀でやすやすと切り離し、バク転後にタロウ譲りのスワローキックをバサラの脳天に炸裂させた。

「よし！」
『蔦は厄介だけど直接的な戦闘力はあまり高くないみたいだな！』
『だが、油断してはいけない。あの手の怪獣は何かしら特別なものを持っているのがセオリーだ』

タイガと一誠は調子づくが、タイタスに軽く諌められて気を引き締めると、吹っ飛んだバサラをすぐさま追撃。
起き上がろうとするバサラを両肩に担ぐように持ち上げ、その場で三回転した後にぶん投げる。

「ア゛ア゛ア゛ァァァ！」
「ヌンッ！デリャァッ!!」

今度こそ起き上がって反撃に出たバサラだが、タイガに受け止められ顔面にニーキックを叩き込まれ、尚も組み付こうとしたところを屈まれて外したと思えばタイガは己の背中を転がすようにバサラを再び投げ飛ばす。

「やるじゃないかタイガ！」
「確かにあの怪物は動きこそトロいけど、タイガは技のバリエーションに富んでるな！」
「どうかしら？私達のウルトラマンの一人は。ランスロットさん達にガイアってウルトラマンがいるように、私達のウルトラマンも自慢の仲間で部員なのよ」
「ウルトラマンが部員なのか!?」
「そうですわ。矢的先生に至ってはウルトラ兄弟という大変な名誉を持ってらっしゃいますし、イッセー君やギャスパー君は個人的にもウルトラマンな先生が指導されてますから」
「リク兄さんはウルトラマンジードなんですぅ！」
「ウルトラマンジードってあの……」
「我夢達の総司令官のベリアルっていうウルトラマンの息子の!?」
「あとはイッセー君、師範がウルトラ兄弟随一の拳法家で、兄弟子が遊撃隊隊長、最近だと伝説の英雄まで兄貴分になってたわね」
「「物凄い面子じゃないのかそれ!?」」

ランスロットとヴェインが驚くのも無理はない。
レオにゼロ、ダイナと言えば最早現在の光の国では知らない者はいないウルトラ戦士だ。
先に言われた８０もウルトラ戦士としてだけでなくウルトラ学校教師陣のトップと言っても過言ではなく、光の国で彼を知らないと答えてしまえばウルトラ族の子供達から大ブーイングされるだろう。
ギャスパーの慕うリクことジードは彼らも知っての通りベリアル

の息子。
しかも遊撃隊隊員の座は実力で得た、親の七光りではない立派なウルトラ戦士であり、文明監視員にその人ありと謳われたマックス直々に勧誘された程。
こっちは彼を悪く言おうものなら父ベリアルに加えてマックスやゼノンといったトンデモ連中がお礼参りに来そうである。
ついでに裕斗もガイことウルトラマンオーブからしっかり認められた者、そしてロスヴァイセやカナエや朱乃はレジェンドと、小猫やゼノヴィアはサーガと個人的な繋がりがあったりする。
おまけにイリナはウルトラマンとこそまだ繋がりはあまりないものの、師であるゼロガンダムはサーガと同格の光神スペリオルドラゴンのお付きの一人。
リアスはトライスクワッド、特にタイガと仲が良く、実質殆ど光神やウルトラマンと個人的な繋がりが無いのはレイヴェルや、こちらにまだ来ていないソーナ達生徒会くらいだろう。
もっとも、グレモリー家とシトリー家、ついでに現在も含めるならフェニックス家というだけでタロウやセブンという光の国屈指のビッグネームと関わり合いがあるのだが。
そんな会話をしていると、いよいよタイガとバサラの対決は決着がつきそうだ。

「フンッ!デアッ!!」
「ア゛ア゛ア゛ァァァ……!」

バサラの片腕を掴み、グルグルと回転させて突き飛ばすと、更に背後からドロップキックをお見舞いする。
既に体力の限界だったらしいバサラは豪快に前面から倒れ込んだ。

『タイガ、赤龍帝の籠手はどうする!?』
「いや、今回は無しでいく!下手に倍加させたら被害も大きくなりそ

うだ！」
『確かにそれもそうだな。近くの森は当然、下手すれば草原まで焼け野原になるかもしれん』

ドライグの言葉に一誠も納得し、万が一に備えていつでも発現可能にはしておくものの今は使わないことにする。
そしてタイガは己の得意とする光線技をバサラへのトドメとして放つ。

「ストリウム！ブラスター!!」

ドカァァァァァン!!
満身創痍であったバサラは倒れたまま、ストリウムブラスターの直撃を受け盛大に爆発した。

「よっしゃあああ!!」
「折角のファイヤーバスターだが使う暇が無かったな。まあ、我夢も使わないに越した事は無いとも言っていたし」
「……何かしら、この声……」
「……これは、読経……!?この国に不釣り合いな、まして教会がある場所で!?」
「確かに妙ですわ……！それはそうとカナエ、台詞は真剣でも猫吸いしながらという時点で台無しよ」

朱乃のツッコミに「だって……」と言いつつ居眠りしているハクを抱きかかえて猫吸いを止めないカナエはさておき、ファンタジーな世界にいきなり読経が聞こえてくるのは不自然にも程がある。
すると突然、七色のシルエットが蠢いたと思えばいきなりバサラが復活した。
まさかの事態にランスロットやヴェイン、リアス達はもちろんタイ

ガ達も驚きを隠せない。
しかしバサラはその目から閃光を発し、教会に火をつけて焼き尽くすと、まるで役目を終えたかのように自ら爆発を起こし自分も燃える。
読経はバサラが燃え尽きるまで聞こえ、教会とバサラが焼け落ちたのはほぼ同時刻であった。
吸血殺人事件は謎を残しつつ、元凶であるバサラの焼滅という形で幕を閉じたのである。

☆

あれから数日後――
不幸中の幸いと言うべきか、城や街から離れた場所で戦闘は行われたため、件の事件は別として戦闘での被害は教会の全焼とダ・ガーンが多少電撃で損傷した程度で済んだ。

「ダ・ガーン、ホントに大丈夫か？」
『心配はいらない。この程度ならばプラネットエナジーの恩恵で少し休めば完全に回復する』
「「「「プラネットエナジー？」」」」
「……なんか、また分からない単語出てきたわね」
『プラネットエナジーとは……そうだな、分かりやすく説明すると星そのものの命と思ってくれればいい。それが全て失われた時、それは即ち星の死だということだ』

またもあんぐりと口を開く、むしろ顎が外れそうになるリアス達とヴェイン。
地球に生み出された勇者が明らかにした事実はスケールがぶっ飛んでいた。
「いや……なんつーかさ、お前らスゲー事に関わってんだな」

「ん～……俺達はゴーデスとやり合ってるから『そういうもんなのか』くらいにしか感じないんですけど」
「言われてみれば私達も魂を喰らう『鬼』とやり合ってるし、改めて思い返せばそのスケールも納得かしら」
「前言撤回、スゲー事に関わり過ぎて感覚麻痺してないか？俺も割と波乱万丈な方だとは思うけどお前ら俺より年下だろ。どんだけ濃い人生送ってんだよ」
「ちなみにヴェインさんはお幾つなんですか？」
「俺か？俺は２５、んでランちゃんは２７だったな」
「いやそれで騎士団の団長副団長って凄くね？」
「そうかあ？」
「ヴェインさん、貴方感覚麻痺って言葉が華麗にブーメランしてるわよ」

騒動も一段落したからか、ほのぼのとした雰囲気である。

「ああっ!?待ってロスヴァイセさん！もうちょっと！もうちょっとだけ！」
「駄目です！長毛種の猫は毎日しっかりブラッシングしてあげないといけないんですよ！フウも待ってるんですから！ハクも少しはこっちに協力して下さい！」
「ニャ～……」
「……あそこは平和ね。それでいてカナエは私達オカルト研究部最強というから世の中分からないものだわ」
「え、あの子そんな凄いのか!?」
「はい、元々相当な実力者だったのですが、少し前に規格外の先生に御指導頂いた結果、人間をやめました」
「朱乃!?変なこと言わないで!?」
「……否定出来ないわ」
「カナエ先輩、あの会談があった日の翌日は『猫は液体』状態になってました」

「リアスと小猫ちゃんまで!?」

ガーン!とショックを受けるカナエ。

それを見た一誠らも苦笑したりしており和やかな雰囲気の中、ランスロットと矢的が入ってきた。

しかし、その表情は神妙な面持ちだ。

「お、ランちゃんお疲れ!……何かあったのか?」

「ああ、ヴェイン……いや、何かあったというか、何もなかったというか……」

「???」

「……皆、心して聞いてくれ」

矢的が意を決した声色でその場の者達を見渡しながら言う。

この状態の彼はふざけた事を言うはずが無いと思ったリアス達はすぐさま静かになる。

「あの怪獣の花を配っていた少女を覚えているか?」

「ええ、確か自分からまた施設に戻ったのよね?」

「何もお咎めは無かったんですか?」

「ああ。確かに俺達はあの子があの場で言った事を聞いてはいたが、あの場にいなかった者達から花と蔦の関係を知らずに偶然そうなっただけかもしれないと言われてな……加えて、子供だからと。事が事だけにさすがに無罪放免はどうかと俺は主張したんだが……」

陛下は理解してくれたんだが、と溜息を吐くランスロット。

カール国王はランスロットだけでなく客人扱いだった矢的や被害者の証言なども考慮して、特別監視をつけるなどの案を出してくれていたのだが、多くの保守派が事なかれ主義だったため仕方なく元の施設へと送還するということで落ち着いてしまったというわけだ。

「だが、彼女は施設に戻る日になって忽然と姿を消してしまった」
「忽然と？一人で戻ったとか？」
「そうじゃない。施設には戻っておらず、街の外にも出た形跡はない。地下なんかも捜索したがそちらにも通ったような跡はまるで見当たらなかった」
「なっ……どういうことだよそれ」
「隠れている……というわけでもなさそうだな。いくら子供とはいえあの事件の事後処理のために騎士団員の町に出ている人数が増えている上、まだ何かあるかもと神経を張り詰めている団員が多い中を隠密技能もない子供がいつまでも姿を眩ませていられるとは思えん」
「ゼロガンダムの言う通り、それこそ『最初からそんな子供はいなかった』とでも言うんじゃないかと思うくらい痕跡も残さず彼女はいなくなったんだ」

さすがに気味が悪くなってきたリアス達。
そこにやってきたアザゼルが更に追い打ちをかけることになる。

「よう、全員揃ってるな」
「アザゼル先生、今までどこに？」
「いや、こんな事態になっちまったしよ、この際だからあの悪ガキの事をあらゆる観点から調べてみたんだよ。そうしたら度肝を抜かれるような結果にぶち当たってな」
「度肝を抜かれ……？」
「ああ、まず最初にあのガキは消えた時と同じように突然何事もなく現れたそうだ」
「それだけで度肝を抜かれるとか思ってねえよな？」
「当たり前だ。で、その次にあのガキがロックスポッド家に里子に出される前のファミリーネームはエルメキア」
「まさかその家って実は大金持ちとか!?」
「違う。だったら余程人格が腐ってなきゃ捨てはしねえだろ」

確かにそうだ。
ふう、と一息つくとアザゼルは続ける。
「で、だ。そのエルメキアって家系がここいらに無いか調べてみたら驚くほど簡単に見つかったぜ。なんせ一ヶ所に集中してたからな」
「マジで?!」
「それは何処なんですか!?」

「文献だよ」

「「「「……え?」」」」
「エルメキア家は当の昔に根絶やしにされてる。数千年前……確かこの世界で『覇空戦争』ってのが起こった頃にな」

覇空戦争――今よりずっと昔、空の世界で起きた空の民と星の民による大きな戦争。
アザゼルの言う通りそれは数千年前の出来事であり、当時を知る者はそれこそ星晶獣を除けば人外ないし超越した能力を持って何らかの手段で生きながらえている存在しかいない。
故に人間でそれだけの力があるならば何かしら噂になるはずだ。
「いや、ちょっと待てよ!?じゃああいつ、あの姿のままずっと生きてたってことか!?」

「あのなあ……さっき言ったばかりだろうが。その覇空戦争ってのでエルメキア家は全滅してるんだよ。当時の最後の当主……サナ・エルメキアも含めてな」
「「「な……!?」」」

サナ・エルメキア――サナと同じ名、里子に出される前と同じファミリーネームを持つエルメキア家最後の当主。
果たしてこれは偶然なのか。

「ど……どういうことなの？ただの偶然……にしては出来過ぎよね？」
「ああ、出来過ぎってのはあながち間違いじゃない。なんせエルメキア家ってのはある理由からその家名はタブー視されてるからな。辺境にでも住んでなきゃ名乗った途端この世界じゃ異端者扱いされるだろうさ」
「何故ですか、アザゼル先生」
「……エルメキア家は魂に干渉する特異な魔術、もしくは呪術を扱う家系だったと言われている」

アザゼルに続いたのは空の世界出身であるランスロットだ。

「魂に干渉って……？」
「ざっくばらんに言っちまうとな、未だ成仏出来ずに彷徨ってる霊魂だのを利用したり出来るとんでもない代物だ。こういうのはバラキエルの娘の……」
「姫島朱乃ですわ」
「朱乃だな、お前のが詳しいだろ。ついでにお前の師匠の死神だっけ？あの連中はもっと踏み込んだ知識があるんだろうが、タイミングが悪いっつーかここにはいねぇしな」

確かに卯ノ花や夜一、乱菊ら元護廷十三隊の隊長格に加えて元十刃

のハリベルはそちらの専門家であるが、生憎この場にいないので仕方ない。

「先の話を正しく例を挙げる本来ならばこの世にいないはずの者達を使用・使役して超常現象を引き起こすことに長けていたというわけですわ。シャーマンやネクロマンサー……特に前者に近い能力ですわね」

朱乃がアザゼルの説明に補足する形で解説する。

そんな中で、トライスクワッドはある事件を思い出した。

そう、闇のベリアルが引き起こした第二次ベリアルの乱……その最中怪獣墓場で闇のベリアルがプラズマスパーク・コアとギガバトルナイザーを用いて凡そ１００体の怪獣を復活させたあの事件だ。

「……その家系って怪獣の魂とかにも干渉出来たのか？」

「「「「!!」」」」

「おそらくはな。とはいえこの手の魔法や呪術は大抵術者の技量如何によって規模だの何だのは大きく変わるもんだ。怪獣レベルに干渉するとなればそりゃ相当な実力者だろう。加えて、その怪獣が強ければ強いほどな」

確かに怪獣使い――レイオニクスのレイやグランデ、そしてベリアルはレイオニクスの中でも最上級だ。

そのサナ・エルメキアがどれ程のレベルだったのかは不明だが、仮にあの少女がサナ・エルメキア本人だったとしてバサラを使役する程の実力者だったのだろうか？

「まあ、そんな感じで死者を冒涜するような術を当たり前のように使う連中が異端視されない訳がなく、同時に敵としては脅威だが味方に取り込んじまえばこれとない戦力となる。早い話が兵士が死んでもエルメキアの術がありゃ鎧なり人形なりに死者の魂を定着させて戦

わせることが出来るからな。実質無限戦力の出来上がりだ」
「死んでも戦わせるって……」
「しかも出身の空の世界じゃ異端視されてるんだぜ？星の民側につかないはずがない……連中はそう思ってたんだろうがその目論見は外れた。恐るべきはエルメキアが異端視された真実、実際は死者の魂どころか生者の魂にさえ干渉出来たことさ」

その場にいた者は絶句する。
それは即ちエルメキアの者がその場にいるだけで生殺与奪の権利を完全に掌握されていると言っても過言ではない。
抵抗可能な者はいるだろうが、誰でもというわけではないだろう。

「エルメキアを手に入れようとした星の民は支配下にあった星晶獣を脅しに使い恭順させようとしたが、それが裏目に出た。エルメキアは脅しに使ってきた星晶獣の魂に干渉し、逆に星晶獣を奪いそれを使って油断していた星の民の一軍を壊滅。これに危機感を覚えた星の民は星晶獣ではなく極めて原始的な方法でエルメキアを全滅させたのさ。つまり、大量殺戮兵器の導入……こっちで言う毒ガスや核みたいなモンを使ったんだろう」
「なんて壮絶な……」
「ただまあ、もうだいぶ前の話だからな。文献も全部が全部本当かは眉唾ものだが、今回の事件を踏まえると信憑性はかなり高いぜ？あの怪獣が一度復活するとき読経とか言うのが聴こえただろ。俺も寺に顔出しするから良くわかるんだよ……おい、どうした揃いも揃って固まって」

一通り説明をしたアザゼルを全員が驚きの表情で見ていた。
それもそのはず。

「「「「あのアザゼル（先生）が物凄い真面目かつ詳しい調査と説明をしていた……!?」」」」

「さすがに泣くぞお前ら!?お前らの中で俺は一体どんな奴になってんだよ!?」
「セクハラ総督」
「不真面目教師」
「駄目上司ですわ」
「「1ターンキル」」
「どれもこれもロクでもないじゃねーか!そしてそこのウルトラマン三人は何でその単語をっていうか何であの事を知ってんだ!?」
「え、レジェンドと束博士が言ってたけど」

上からカナエ、リアス、朱乃にトライスクワッド。
しかもトライスクワッドに至ってはシミュレーターで瞬殺されたことまで知られていた。

「ったく……結論から言うとだ、あのガキが件のサナ・エルメキアかどうか分からん以上、今回の件はここで終わり。これ以上深入りしたところで泥沼にハマるだけだ」
「じゃあ……あの子がタイガの親父さんのことを知っていたのは?」

そう、誰もが気になっていたことだ。
何故空の世界を訪問したことのないウルトラマンタロウを彼女が知っていたのか。

「俺もそこが分からねえ。怪獣の方は怨霊云々でもまあ納得は出来るが、そもそもウルトラマンと無縁だったこの世界で何でタロウの名前が出てくるのか皆目検討がつかん」
「そういえばタイガ……貴方、気になることを言ってたわね。捨て子塚って」
「あの塚のことか。確かにピッタリなネーミングだな」

ランスロットは腕組みして頷くが、そこでハッとなる。

あの時、タイガはそれを言った直後に怪獣の出現を知っていたように蔦から離れろとも言った事を。

「待てよ……！タイガ、君はあれが怪獣の一部と知っていたのか？」

「知っていたっていうより、状況が積み重なって昔父さんが話してくれた自分の体験談を思い出したんだ」

「状況が積み重なるだ？タロウは今回と同じような事件に関わった事があったってのか？」

「多分だけど」

タイガはタロウが話してくれた実体験を皆に話す。

岩坪かなえという、サナと似た少女の経歴やしたこと、そして現れた怪獣や事件の顛末までも同じだったことを。

「何だよそれ……！今回の事件と殆ど一緒じゃねえか！」

「岩坪かなえ……か。私と同じ名前ね」

「カナエ、今はそこじゃ「ただ、私は恵まれた方みたいだけど」え？」

「ほら、私としのぶの両親は鬼に殺されたって話したでしょ？でもその時に私達を助けてくれた人がそのまま私達を引き取ってくれたの。おかげで私やしのぶは鬼狩りになれたわ。でも、その子はそうじゃない。引き取られた先でも上手くいかなかったのよね」

誰も彼もが引き取られたとして幸せになるとは限らない――改めてその現実を突きつけられた。

身近な存在だとパム治郎。

サーガに助けられ、杏寿郎という熱く優しい新たな主に引き渡されたが、これが二人ではなく欲にまみれた悪人であればどうなっていただろうか。

「にしても、それだけでタロウを知っているというのは少し弱いのではないか？」

「旦那の言う通……あれ？タイガの親父さんが地球に留まって活躍したのってかなり昔だよな。さすがにその子は死んで……」
「おい、まさかその岩坪かなえってのが転生してサナ・エルメキアになって、それで今回の事件を引き起こしたってのか？」
「確かにそう考えれば辻褄は合うが……」
「いや、死んだその子の姿をサナってのが借りて心を代弁したとかは……」
「だからそもそもあの子がそのサナ・エルメキア本人と決まったワケじゃ……」
「あーもう！余計にわけわかんなくなってきた！もう終わり！おしまい！」

さすがに場が収集つかなくなりそうだったことも含めて、一誠が強制的に話を打ち切った。

「たださ、どっちの子にも言えることはどっちも世の中を憎んでたってぐらいかな」
「憎んでた？」
「片方はその能力故に異端視されて、もう片方は親の都合で捨てられて……どっちも生きていく上での自由や権利を奪われてるようなものだしさ」
「それで他人のそれを奪っちゃいけないけど……そこは同情、いやこれから生きていく上で俺達が取り組まなきゃいけない問題だと思う」

直接サナから言葉をぶつけられた一誠とタイガは、彼女のやり方こそ否定しても彼女が内に秘めたものは少なからず理解していた。
自分達が恵まれていたのは確かに事実だと。
そんな彼らを見てその通りだと皆が頷く。
謎を幾つも残したままとはいえ、とりあえず事件が終わったことにホッとする一行。

だが、カナエがボソリと呟いた一言で、変な方向に問題はシフトする。

「けど今回はホントに怪奇事件だったわね～。まさにオカルト……ん？私達オカルト研究部よね、表向きにしろ」

「ええ、そうよ。本来は悪魔稼業のための隠れ蓑的なものだったんだけど」

「い～ことに気が付いたなあ、お前ら」

アザゼルが先程までとは打って変わり嫌らしい笑顔になったことで、またロクでもないことを考えていると踏んだリアス達だったが……。

「一応にせよ何にせよ、そういう名前で部活として届け出てる以上、それに見合った活動実績は残す必要がある。ましてや元の世界の学園には夏休み期間中丸々合宿って言ってあるんだからちゃあんと結果も出さなきゃならねえ」

「な、何が言いた……まさかぁっ!?」

「察したみたいだな。そういうわけだ、この異世界修行中に遭遇したオカルト事件は全て、自分達の考察を含めて記事として纏めろ！マジで年単位の長期に渡る修行でそれこそ忘れた頃に元の世界の夏休み終了後の新学期に提出出来るようにな!!」

「「「「ぎゃあああああ!!」」」」

普通の夏休みの課題はあれど問題はなかったが、まさかある意味最も難易度が高いものが追加されて絶望するオカルト研究部一行。

「カナエ！どうするのよ！貴女の一言でとんでもない課題が出されたじゃない！」

「私が言わなくても絶対出されてたっていうか、最悪夏休み終了間際

に言われてたわよ!?」
「はは、参ったな……」
「修行、集中出来るか分からなくなりました……」
「師範のことだ、やらないとまた修行がハードに……!」
「あらあらうふふ」
「畜生……!朱乃さんの鋼メンタルが羨ましい……!」
「ちなみにライザー・フェニックスとのレーティングゲームに備えてお前らが修行していた間は矢的が一人で代筆してくれてたそうだぞ」
「やるわよ皆!矢的先生にこれ以上負担はかけられないわ!!」
「「「「おおーっ!!」」」」
「だから矢的が絡むと何で急に反応変わるんだよお前らは!?」

アザゼルが何度目か分からぬ自分と矢的の扱いの差に嘆きつつ、漸く本当の意味で元の彼らが戻ってきた。
今回の事件で残った謎がいつか解決されるのか、それとも迷宮入りするのか……今はまだ分からない。
ただ一つ分かるのは……

窓の外に浮かぶサナが笑顔ではなかった事だけだ。

〈続く〉

天翔る龍、来たる「店長オオオオオ!!」

――時はレジェンド達がアガスティアを脱出した頃まで遡る。
空の世界の宇宙……その遥か彼方。
そこを漂う人の形をした石像に、同じく漂う暗礁がぶつかってヒビが入り、そこから光が溢れる。
やがてそれは全体へと広がり、石像は粉々に砕け散った。
……否、それを覆っていた石のみが砕けた。

「トォォリガァァァァァ!!」

それ……女性のようなフォルムを持った金と銀、そして黒を基調とした巨人はその手から光の鞭のようなものを発生させ、苛立ちをぶつけるように周囲の暗礁を破壊する。
そうすることで落ち着いたのか、呼吸を整え飛び去っていく。
その目的地は、空の世界――そこのザンクティンゼルと呼ばれる島。

☆

フェードラッヘで事件が終息を迎えた頃のノース・ヴァスト――漸く吹雪が収まったそこでは、先刻まで出していたログハウスとキャンピングカーを再収納し、厚着になったレジェンド一行が森を出て雪原に立っていた。

「瘴流域の影響でこっちはちと薄暗いが向こう側は晴れているな。やっと本当の意味でアマリとルリアに外を見せてやれそうだ」
「私、すっごく楽しみです!」
「私もそうだけど、人が多い場所とかはちょっと不安かも……」
「そういう時はレジェンドを頼る。二人のことなら多分、変なことじゃなきゃ断らない」

アマリの不安を払拭しようとオーフィスが言う。
アーシアも横で笑顔で頷いており、彼女らからレジェンドへの信頼が改めて見て取れたのか、アマリも笑顔で頷き返した。
『で、貴様はいつまでグズっている』
「だぁぁってさぁ！ルリアもアマリもあんまりじゃないかぁ！あんなとこにずっと研究体とか言われて監禁されてさあ！」
ベアトリクスは涙をだばだばと流しながら二人から聞いた境遇に嘆いている。
さすがに思うところがあったのか、ゼタも今回は止めていない。
「まあ、エルステ帝国が色々きな臭いことをしてるのは知ってたけどね。まさかあんな年端も行かない娘達にそんなことしてたなんて……性的なことをされてないのは不幸中の幸いかしら」
「してたら今頃アガスティアが光になってるでございますよ」
「あはは、そりゃそうか。それでこっからどうやって合流するの？ある程度歩くにしてもこの雪じゃ、私らはともかくあの子達は前線で戦うタイプじゃないだろうし、体力的に厳しいんじゃない？」
ゼタの質問にゼットが答えようとした時、空の一部が光ったかと思えばそこから一隻の戦艦が現れた。
突き出た艦首がまるで龍の首のような、真っ赤で大きな船体。
「な……何だあの戦艦!?」
「思ったより早かった上に場所も的確だな。ドライストレーガーでもあの艦でもなくヒリュウ改で来るとは思わなんだが」
「ヒリュウ改!?ちょっと待って、今思ったより早かったってあれもしかして帝国の追手!?」

レジェンドの言葉に反応したゼタと、彼女が言った追手発言にビクッとするルリアとアマリだったが、それは即座に否定される。
「ん？この世界ではあんな戦艦作れんだろう。いや、作れなくはないが相当限定される上に建造資金もバカにならんだろうな。現実的じゃない」
「へ？」
「え？」

あっさり言い切るレジェンドにゼタとベアトリクス、続けてルリアとアマリも間抜けな声を出してしまった。
彼はしっかりと「ドライストレーガーでもあの艦でもなく」と赤い戦艦――ヒリュウ改の名を言う前に全く別の艦の名を言っており、少なくとも誰が来るかは知っていたようだ。

「じゃ……じゃああれは……！」
「ログハウスの中で俺が呼んでおいた救援だ。惑星レジェンドから直接来たみたいだな」
「マジで!?」
『……なーんか知ってる奴が何人か乗ってそうな気配がすんだよな……』

レジェンドの用意周到さに驚く二人とは裏腹に、ゴジラは不安ではないがそんな感覚を覚えていた。

☆

同時刻、ヒリュウ改からクロガネ宛にメール通信が届く。
内容は『レジェンド様、並びに巫女様と同行者の無事を確認。レジェンド様指示のもと貴艦との合流を目指す』とのこと。

「やっぱり無事だったか。これで漸く一安心ってとこか」
「一誠やリアス達の方も一悶着あったっていうしな。ま、欠けた奴がいないのは何よりってこった」
「ハハッ、違いねえ」

ブリッジでハンバーガーを食べながらオルガとレイトが談笑する。
自身の師や後輩が無事だったのだ、レイトも自然と笑みが零れるのは仕方ないだろう。

「んじゃ俺らは最初の予定通りポートブリーズに行きゃいいんだな？」
「おう、一度依頼とかで離れてる奴らに連絡して拾ったあと、到着したらそこで時間を潰せばいいし」
「規模的に娯楽とかは不自由しないからな、俺らの艦は。たまには俺もシミュレーターやってみるかぁ……」

予定より多くの者が行方不明状態になっていたため、彼らを捜索する意味も込めて一度エリアル・ベースとは別行動しているのだが、そうする必要もなくなった。

「そういや、束がなんか張り切ってたがオルガは理由知ってるか？レジェンドが無事なことかと思ったんだけどよ」
「いや、そもそも姐さんは旦那の無事をハナっから信じ切ってたしその線はねぇし、そうなると見当がつかねえな」

そこへ、フランクフルトを齧りながら三日月がやってくる。

「ねえ、オルガ……あ、レイトもいたんだ。ちょうど良かった。格納庫に見たことない機体があったんだけど二人は何か聞いてない？」
「ああ、そういうことか……」
「え、何？」

なんの気無しに三日月が聞いてきた質問で、疑問の答えが分かってしまうオルガとレイト。

((新機体の開発と格納スペースの確保かよ……))

ヒリュウ改の到着で後者の目処がついたから、元々控えめだった前者が捗ってるのだろう。

変なもん造らなきゃいいが、と揃って頭を悩ます二人に？マークを飛ばす三日月。

到着したのがヒリュウ改ではなくドライストレーガーや、もしくはあの艦であればサイズ的に束の遠慮など虚空の彼方に消えていたかもしれない。

☆

エリアル・ベース――

レジェンドやゼットが無事でありこちらやクロガネとの合流を目指して動き始めていると聞いた団員達は本気で狂喜乱舞状態であった。

「やっと！やっとだよ！つい立候補しちゃったけど漸く肩の荷が下りるよ！いやぁ俺寿命を待たずに衰弱死か過労死するんじゃないかと思ってたんだよね」

「レジェンドさんの人気を考えれば引き受ける前にすぐ気付けたと思いますがね」

「仕方ないよ、カトル。あの人の人気って短期間で爆発的に好いてる人が増えるレベルだったし、浸透するのが並外れてたから」

「そうだぞ～カトル。俺もある程度は予測してたよ？けどエッセルの言うようにレジェンドちゃんの人気がそれを遥かに超えて凄いことになってたんだって。おまけにゼットちゃんは子供とか熱血組に人

気高いしさ……」
「……そういえばゼットさんは星屑の街の子供達のために、帰り際に様々な生活用品をしこたま置いていってくれましたね。弟や妹達が大変感謝してましたし」
「ん……レジェンドさんはレジェンドさんでマフィアを手当たり次第見つけては末端の構成員からトップまで根こそぎ殲滅してたよね」
「初めて会った時は突っかかってしまったけど、今は反省してますよ。あれは十天衆でも太刀打ち出来ない」

シエテと話しているのは同じく十天衆のカトルとエッセルの姉弟。
……なんかサラッとゼットの株が上がってレジェンドの武勇伝も増えてるんですが。

「え、何それ……お兄さん初耳なんですけど」
「ん……だって大小様々な、十を超えるマフィアを一夜にして殲滅だよ？島を隔てたマフィアもあったのにそれすら壊滅させたなんて、にわかには信じられないし」
「根も葉もない噂ってことでしばらくは放置されてたんですよ。けど蓋を開けてみればご覧の通りですからね」

彼らは知らないが、レジェンドとオーフィスとゴジラで禍の団を壊滅させて回っていたのだしこの程度は序の口である。
ましてやマジンガーＺＥＲＯやネオ・グランゾンの力を持ってすれば万単位の大規模組織だろうが瞬く間に消し飛ぶだろうし、生死問わずならとりあえずスパークレジェンド撃っときゃ問題無い。

「そういやこの前に新しく合流したレジェンドちゃんのご後輩の乗ってるクロガネ……だっけ、アレは戦力が明らかにおかしいからねぇ……。オクトーが目を見開くような使い手、えー……継国巌勝って言ったっけ。あれ普通に最低でも十天衆以上だよ。ホントどうなってんのレジェンドちゃんのとこは」

「あの方はレジェンドさんの後輩であるサーガさんの部下だそうですよ。その弟さんの方がレジェンドさん直属の精鋭だそうで」
「何ソレあんなのがまだいるの!?」
「うん、エルステ帝国のものより遥かに高性能かつ巨大な戦艦何万隻も生身かつ単純な武力で壊滅させる武闘家もいるって」
「あとあれですね、文字通り地獄の鬼神。その方はレジェンドさんの右腕らしくて亡者に一切の容赦もないらしいですよ。その方ぐらい知ってるでしょう?この前、映像記録で見せてもらったレジェンドさんの超人レスリングとかいうのをゼットさんと一緒に実況してた方ですよ。さすがに僕と姉さんも吹き出しましたね、アレは」

言わずもがな、上から継国縁壱、東方不敗マスターアジア、そして鬼灯である。

卯ノ花や束は先日とりあえずと顔合わせは済んでいるし、ドギーやダンブルドアの事はまだ話していない。

残る二名の九極天も同様だ。

しかし鬼灯とゼットによる実況、すこぶる好評らしい。

地獄式運動会の時はどうなることやら。

「それはそれとして、レジェンドちゃんの方も相当バタバタしてたみたいだしね。殆どは送られてきた手紙で分かったけど、リアルタイムであのゴーデスとかいうのと戦ってるの見た時は俺も強張っちゃったよ」
「いつもあれぐらいビシッとしていればいいんですけどね」
「カトル、そういうこと言っちゃ駄目だよ……私もそう思うけど」
「……俺、泣いてもいいよね」

なんかアザゼルやサーゼクスと同じ扱いになってる気がしないでもない十天衆頭目にしてウルトラ騎空団団長代理のシエテ。

中の人がサーゼクスと一緒だからという理由で納得しちゃ駄目だぞ!

☆

フェードラッヘでは、いよいよ明日一誠達と共に出立するランスロットとヴェインが最後の引き継ぎを行っていた。

「それでランスロット団長、この隊の配置は……」
「ああ、それは南南東の……ここだ。それから……」
「一応訓練の基礎メニューは作っといたから、あとはそっちの方で上手く調整してくれよ。ただ、無茶して身体を壊したりするのは絶対ダメだからな！」
「分かってますよ、ヴェイン副団長」

「お前ら、特にリアスはよく見とけよ。あれが上に立つ者のあるべき姿だ」
「お前が言っても説得力が無いな」
「そりゃどういう意味だ聖竜騎士!?」
「堕天使のトップという立場でありながら好き放題して部下を困らせているお前も、あの者達を見習って自分の行いを顧みたらどうだ？」

ゼロガンダムの指摘にうんうんと頷くリアス達。
……割とゼロガンダムもゼフィランサスを振り回してたりした気がするがこの際無視しよう。

「彼らの職務に対する姿勢や行動は、今後君達が同じような立場になったときの参考になる。指示の仕方、部下との接し方……全部とは言わず、自分に必要なところを率先して模倣していくようにしよう」
「「「「はい！」」」」
「……もう反論する気力もねえよ……」

なんというか、偉そうだったアザゼルの言い方に対し矢的の場合はしっかり有用性やポイントを押さえるように言うため、リアス達も素直に聞く。
駒王学園とウルトラ学校、双方で『教わりたい先生Ｎｏ．１』の実績は伊達ではない。

「なんか俺に対して反抗的過ぎやしねーか、あいつら……」
「まずは胡蝶カナエへのセクハラ、堕天使レイナーレ一派による兵藤一誠の殺害並びにアーシア・アルジェントからの神器抜き出し未遂、堕天使コカビエルによる駒王町壊滅未遂、三大勢力会談時の事件において部下による神衛隊の侮辱行為、ついでに神衛隊第四分隊員マリーダ・クルスの軽負傷の原因の一端でもあったな」

ゼロガンダムに列挙された事案の数々にアザゼルは言葉を詰まらせる。
こういった部下の不始末の責任は上が取る、ということを知っているから反論しないのだが、ここまで来ると部下に無関心じゃないかと思われても仕方ないのではないか。

「とにかくアイツらの中ではお前の評価は未だマイナスだろう。特に一誠はな」

自身が一度は殺され、アーシアもそうなる直前だったのだ、全く恨んでいないとは言い切れないだろう。
……アーシアの方はそう言いそうだが。

「何にせよ、汚名返上名誉挽回に全力を注ぐことだ。それにはまずハメを外すにしても節度を守るなどから始めてみろ」
「いきなり俺にとっちゃ難易度が高いもん来たな……」
「これも出来んならレジェンド様に頼んで去勢してもらえ。もしくは鬼灯、あいつなら躊躇なくその場ですぐやってくれる」

「勘弁しろよ再会したらマジでやってきそうなんだぞ!?」

リアス達がランスロットらを見学する傍ら、ゼロガンダムに説教されるアザゼル。

鬼灯は最近金棒のみならず巨大なブツ切り鋏まで持ち出すようになってきたらしい。

原因は大体かの淫獣だ。

「はぁ～……とりあえずは明日の出立まで何も起こらない事を祈るだけだぜ」

「それには全く同感だ」

☆

近くまで降下したヒリュウ改に、レジェンドが全員を引っ付かせたまま艦内の格納庫まで転移する。

いきなりな事に驚くゼタとベアトリクスだが、驚くかもしれなかったルリアとアマリはアガスティア脱出で慣れたのか周りを見渡している。

「うわあっ!?何だここ何処だここ!?」

「もしかして、ヒリュウ改って戦艦の中？」

「ああ。レジェンドシフト、ウルトラ念力を利用した俺の瞬間移動。あの時、ルリアとアマリを連れて使ったのもこれだ」

「ウルトラ六兄弟の皆さんですら瞬間移動はエネルギーを使うんでございますが、超師匠は全然疲れてませんね」

「一星雲を丸々瞬間移動させるならともかく、人間大のものを複数移動させる程度で疲れもクソもないだろ。知ってるか？キングの奴は誕生日が来たってだけで宇宙繋げるわ、ノアなんかあいつの神使が」

「海で泳いでリゾートホテルに泊まりたい」と零したら自分の星の近くに適当な海のあるリゾート惑星を引っ張ってくるわ、しかもそれを

平然と話すんだぞ？」

念力や移動のレベルが別次元過ぎる。

聞いてるだけで顔が引きつっているのが自覚出来るぐらいにゼタはドン引きしていた。

「そのキングとかノアって、団長の知り合い……よね？」

「ああ。俺の今までの苦労は大抵あいつら絡みだ」

「そういえばノア様は少し前、眷属の方々とさり気なくダイブハンガーでの晩御飯の時に混じってましたよね」

「「さり気なく混じる!?」」

当然の如くレジェンドにぶっ飛ばされたが。

「従者はゴリラと前髪∀とドSだった」

「ゴリラさんがいたんですか!?」

「ねえ、オーフィスちゃん……ちゃんとした名前は？」

「我、覚えてない。ただゴリラがストーカーだっていうのは覚えてる」

「いやそれどういう状況!?」

彼女自身は気付いていないだろうが、ベアトリクスはすっかりレジェンド一家の空気に染まっている。

格納庫から動かずワイワイやってると、いつまでも会いに来ないからしびれを切らしたのか、一人の女性が格納庫にやってきた。

「もう！乗艦したなら報告に来て下さい、レジェンド様！」

「ああ、すまん……ん？お前、ミツバか？」

「はい、お久しぶりです。ミツバ・グレイヴァレー中佐、この度ヒリュウ改の艦長としてレジェンド様達にご同行させて頂くことになりました。本艦共々、以後よろしくお願いします」

どうやら艦長はレジェンドの知り合いらしい。
それも惑星レジェンドの民だからとかそういうのではなく、個人的にだ。

「子供の頃に俺の所に来たときはドタバタ走り回っていたあのお転婆娘だったというのに、今や見目麗しい美人艦長とは、人は移ろうものだと実感するな……」
「む、昔の事は忘れて下さい！あ、いえ忘れてほしくない事もありますけど……ともかくそれは脳内から削除！消してください！」
「おいやめろ頬に両手当てて頭揺らすな」

顔を真っ赤にしつつレジェンドの両頬に手を当ててガクガクと揺らすミツバだが、傍から見たらラブコメやってるカップルにしか見えずオーフィスやアーシアが頬を膨らます。

「ぷんすこー」
「ぷ、ぷんすこーですっ」
「え……えっと、私もぷんすこーです！なんとなく……」
「ルリア、真似しなくていいのよ。……ぷんすこー」
「あ！アマリもやってます！」

ついでにアーシア以外が見てるのはミツバのある部分……ご立派なモノをお持ちで。

「京都の時とはメンバーが違うが相変わらず馬鹿騒ぎしてるな、レジェンド」
「「！」」

「あ！言い忘れてましたが本艦には同行者が同乗してるんです」

レジェンド、オーフィス、ゼットが知っており、京都で縁がある人物といえば……。

「ジャグッラァァァァァ!!」
「店ッ長ォォォォォ!!」
「てんちょー」
「何でアンタとゼットはそんなに叫びに気合い入ってんだよ。オーフィスの呼び方は逆に気が抜けるが」

そう、かの京都に本店を構える丼物屋『蛇倉苑』店長のジャグラスジャグラー、人間名ヘビクラショウタである。

「ど、どうしたんだ団長。やけに驚いて……」
「戦士の」「頂」「盛り」
「「如何ほどに!?」」
「どうなった？」

目を輝かせて聞いてくる三人に気を良くしたジャグラーは自信満々に答える。

「フン……あれから更にバージョンアップした『トリニティスペシャル』が完成した。具材・飯・つゆだく度がそれぞれ戦士の頂盛りの3倍だ。戦士の頂盛りを完食し、かつ余裕があった奴だけが注文・挑戦権を得られる現時点で蛇倉苑最強最大のメニューさ」
「つゆだく度まで増しているだとッ……!?」

「あのオーブ先輩すら食しきれなかった戦士の頂盛り……その３倍!?」
「……じゅるり……」
「……じゅるりあ……」
「「「ルリア（ちゃん）!?」」」

レジェンドやオーフィスに紛れてルリアまで涎を出し始めた。

「っと、期待度が限界突破したのは良いとして、何でお前がこっちにいるんだ？」
「決まってんだろ。蛇倉苑チェーン店計画の一環だ」

どうやらジャグラーは宇宙どころか空の世界……次元を超えて店舗数を増やす気らしい。
そのために副店長に本店を任せ、オーナー兼本店店長として出張った来たという。
とんでもない規模になりつつあるが、レジェンドとしては本気でやりたい事を見つけた(しかも平和的)ジャグラーを応援する気満々だ。
美味い飯食えるし。

「つまり蛇倉苑の店舗を建てる場所を探しつつ、人材のスカウトもするわけか」
「そういうこった。ここで料理長も兼任してやるから、まさか断らないよな？」
「「いいですとも!!」」
「店長のご飯ー」

ジャグラーの料理の腕を知っている三人は即座にＯＫサインを出す。
さらにいざという時は戦力としても協力してくれるそうだ。

「やるわね、ジャグ。とっくにレジェンド様の胃袋は確保済みだったわけか」

ふと声がした方を向くと、服こそスーツではないがキャリアウーマン的な雰囲気を持つ可憐な美人が立っている。

その後ろには二名、女性が姉妹のように並んでいた。

片方は茶髪でスタイルが良く、もう片方はサイバーパンク的な雰囲気があり、どことなく小猫にも似ている感じがする。

「いや、今度はどちら様？あたしらから見ると全員初対面なんだけど……」

「そういえばそうよね。私はサギリ・サクライ、惑星レジェンドの民間企業『クルーガー・インダストリー』特務一課所属で主任やってるわ。よろしく」

「クルーガー……？確か、レジェンド様直属の一人にドギー・クルーガーさんって方が……」

「そ。その奥さんのスワン社長が各方面への技術的バックアップを行うために個人で起業したのがウチの始まり。最初はホント民間企業って感じだったんだけど、ただでさえ社長が九極天の奥さんってだけで十分ネームバリューだっていうのに社長本人もあの技術力、そりゃ爆速で大きくなるのも当然っちゃ当然よね」

今はその社長がギャラクシーレスキューフォースへと出向しているが、しっかり社長抜きでも回るよう社員教育をした上で育成マニュアルまで用意してあるという周到ぶりなので、何ら経営に問題ないらしい。

「で、後ろの二人も特務一課所属のルーキーよ。ちょっと前まで神衛隊第四分隊に出向して経験も積んだから期待してくれていいわよ」

「はじめまして、如月千歳です。えっと……一応、機動兵器ヴァングレイのパイロットやってます」

「ナインです。外部から姉さんとヴァングレイのアシストが主な仕事です」
「気になってるだろうから教えておくと、ナインはガイノイドよ。アンドロイドの女性版ね」
「アンド……？」
「分かりやすく言えば機械少女、ロボットだ」

レジェンドが説明するとルリアやアマリ達は勿論、アーシアやオーフィスも驚く。
それはそうだろう、雰囲気こそ独特だがナインの見た目は普通に少女だ。
球体関節というわけでもない。

「私、社長と束博士のおかげでかなりアップグレードされてますので」
『久しいな、ナイン。我がゴミ掃除に旅立って以来か』
「はい、マジンガーＺＥＲＯ。というか『終わった世界』の後始末をゴミ掃除とか言えるの、貴方かレジェンド様くらいですよ」

スワンと束によるアップグレードとか魔改造されてんじゃね？とレジェンドは思ったが口にしないでおく。

「つかヴァングレイってアレか。武器庫に手足くっつけたようなぶっ飛び機体。お前よく動かせるな、あれ」
「私というより、サポートしてくれるナインが優秀なので……」
「束博士から送られてきたシミュレーターのデータ見ましたけど、ガチガチの重装甲で近接特化の突撃型かつ実弾兵器しか積んでないアルトアイゼンでおかしい動きをするレジェンド様が言います？」

控えめに言う千歳に対し、あのレジェンド相手にジト目でバッサリ言うナイン。
ナインの言うようにレジェンドはどれだけ重装甲だろうが重装備

だろうが変態機動をやってしまうトンデモパイロットである。
そりゃアムロぐらいしか対抗出来ないわ。
「ああ、そうそう！ジャグ、彼女達のこと言わなくていいの？」
「言わなくてもレジェンドを見かけりゃ嬉々として突撃してくるだろ。ほれ、言ったそばから」
サギリの問いにジャグラーはレジェンドの後ろを指差し薄く笑う。
何だと思ったレジェンドが目にしたのは――

「こーじーんさまー!!」
ドゴォォォン!!
グキリ
「はうあ!?」

金色だった。
そしてそれを受け止めたレジェンドの腰が逝った。
「光神様！お久しぶりなのじゃ！……光神様？」
「い……いよいよ俺も年か……！」
「超師匠の腰からウルトラ嫌な音が聴こえたでございます」

「レ、レジェンド様!?今治しますぅ!!」

若い外見なのに急遽うつ伏せに寝かされてアーシアに治療されるレジェンドに最高位光神の威厳はあるのだろうか。

「……で、確かに久しぶりだな……九重」
「へぅ!?あの、その……ご、ごめんなさいなのじゃ……」
「気にするな。狙ってやったのなら拳骨の一つもくれてやっただろうが、お前がそういうのは関係なしに喜んで飛びついてきたのくらい分かっている」

穏やかに言うレジェンドに感激する九重だが、うつ伏せのままゼットにマッサージされつつアーシアに治療されるレジェンドの格好で台無しである（九重以外）。

「全く……嬉しいのは妾も理解出来るが飛びかかるなと教えたであろうに」
「母上！」
「まあ当然、八坂もいるよな」
「お久しぶりです、光神様。この度は娘が粗相を……」
「いやいや気にするなと言ったばかりだからな。アーシア、ゼット、もういいぞ。助かった」

よっこいせ、と立ち上がって伸びをすると今度は誰だとルリアやアマリ達も気になっている。
……ルリアやアマリの視線が八坂の、先程見ていたミツバのある部分と同じ所を凝視しているが。

「京都のリサーチに行った時に世話になった八坂・九重の九尾母子だ。何でここにいるかは俺も知らん」
「「九尾!?」」

ゼタやベアトリクスは「ユエルとソシエが騒ぎそう」と思いつつ、レジェンドも知らないここにいる理由を尋ねると……。

「俺が誘ったんだよ」

「「店ッ長ォォォォォ!?」」

「いやだから何でアンタら叫び方にそんな気合入ってんだ」

犯人はジャグラーだった。

どうやら純然たる厚意からのようだが、さり気なくレジェンドの慌てふためく姿を見たかったような気がしないでもない。

慌てなかった代わりに腰をやってしまったけど。

「さて……軽く顔合わせが済んだところで、とりあえず他の方々と合流しましょう。レジェンド様、行き先はポートブリーズでよろしいですか?」

詳しいことは移動しながらでも出来ますし、と続けるミツバだが、レジェンドは首を振り目的地の変更を伝える。

「その前に寄ってほしい島がある。多少迂回することになるが、そこを寄ってもポートブリーズには問題無く着けるからな」

「それは構いませんが、他の場所の皆さんが騒ぎそうですよ?」

「俺から直々に通信を入れておく。待ちきれなければ向こうから自ずと向かって来るはずだ。ポートブリーズからそう遠くもない島だ」

「分かりました。その島の名前と場所は?」

ミツバはレジェンドの意見を尊重し、予め登録しておいた空の世界のファータ・グランデ空域の地図を空間ディスプレイに投影する。

レジェンドが指し示したのは――

「このポートブリーズの北にある島……ザンクティンゼルだ」

――かつてレジェンド一家の一部のメンバーと共に先行調査に来た際、何かを感じ取った島……ザンクティンゼルであった。

〈続く〉

光を繋ぐもの

ザンクティンゼルに向かうヒリュウ改。
その艦内の倉庫に一人の少女がいた。

（あまり揺れないんだ、この船……普通なら快適なんだけど、場所が場所だし……仕方ないよね）

少女はざっと言ってしまえば密航者。
同じように偶然惑星レジェンドへと向かう船に密航し、今回もそうしたら彼女の知らない内にヒリュウ改は空の世界へ転移したというわけだ。
元々惑星レジェンドはそこに住まうものへの悪意を持つものこそ徹底的に遮断するが、そうでないものには割と寛容である。
故に、この少女は別段惑星レジェンドで悪事を働くとかそういうことをしないと確信されたため、各種セキュリティもわざと見逃していた。
きゅうぅぅ……と軽く腹が鳴る音がして少女は両膝を抱えてバレないように倉庫の奥の隅へと隠れる。

（……お腹、空いたな……）
「最近の栄養食は馬鹿に出来んな。カロリーメイト美味いんだけど。お前は何味派だ？俺はフルーツ味派」
「私もフルーツ味……えっ？」

何故か会話が成立していることに少女が気付くと、隣ではレジェンドが少女を見つつ胡座をかいてカロリーメイト（フルーツ味）を頬張っていた。

「ッ!?」
「安心しろ。俺は別にお前をどうこうする気はないし、密航者だろう

が気にしない。敵意を感じないからな」
「え……」
「奇遇にも同じフルーツ味派だったお前にはコレを分けてあげよう。腹鳴ってたぞ、飲み物もあるから食べとけ」
「……」

レジェンドが懐からカロリーメイトを取り出して少女に差し出す。
少女は若干警戒しつつ、おずおずとそれを受け取ると言った通りレジェンドは次に飲み物まで渡してきた。

「……本当に、いいんですか？」
「腹が減ってちゃ戦も話もなかろうに。それ飲み食いしたらミツバに話つけに行くぞ。全く……そんな綺麗な顔して何でこんなとこにいるのか知らんが、俺が口添えしてやるから堂々とここにいれば良い」
「あの……何でこんなところにって意味では貴方にそのまま返ってきてますけど」
「いやー……何となくこれから行くとこで一騒動ありそうなんで少しばかり静かな所で過ごしたかったんだがな。俺の周りは何かと騒がしいし」

甘くないミルクティーも悪くない、とそれを飲みながらレジェンドは少女に返答する。

（それにしても綺麗、か……嬉しいけど複雑。本当は傷だらけなのに）
「スネに傷持ってるのか実際に怪我して傷持ってるのか知らんが、俺にとっては滑りも躓きもせんような小石に過ぎん」
「!!」
「言っただろう、気にしないと」

読心術でも使えるのかと少女は思ったのだが、正解であり不正解でもあった。

単にレジェンドは深刻な雰囲気ほどやたら敏感なだけで、少女の反応が分かりやすかったからである。

「……食わんのなら仕舞っとけ。やったんだからそれはもうお前の物だ」

「え？あ……」

「ほれ行くぞ」

少女の手を握り、倉庫を出るレジェンド。

そういう経験が無かったからか、微かに頬を染めつつおとなしく従う少女。

「そういや名前、まだ聞いてなかったな。俺はレジェンド、光神のウルトラマンレジェンドだ」

「貴方が……私は、アズ。アズ・セインクラウス」

「ぷんすこー」

「!?」

突然背後から聞こえてきたオーフィスの声に驚いた二人は、結局ミツバの所までオーフィスと追いかけっこするハメになってしまった。

「な、何で逃げるの？」

「あいつは最近ぷんすこーモードだと技をかけてくることがある……！何故なのか俺にも分からん」

☆

――ザンクティンゼル――

長大な山脈に囲まれ、以前は殆ど外界との交流が無かった小さな島。

住民は島中央部のキハイゼル村に約２０世帯程しか在住しておら

ず、観光名所的なものも無い。
　しかしながら温暖な気候で四季や特産品があり、決して悪い環境という所ではない。
　その小さな島で育った、空の果てを目指して旅立とうとした双子の兄妹と小さなドラゴンが三人の男女と共に今、危機的状況に陥っていた。

「いきなり何なんですか貴方達は!?」
「別に財産を要求したりはしませんヨォ。我々はエルステの軍人ですからネェ。この島の地下遺跡、そこに行く方法を教えてくれれば脱走兵のカタリナ中尉のことも見逃してあげますヨォ」
「こんな大人数で囲んでおいて何言ってんだか」
「ちょっ!?ジータ!」
「グラン!ここで舐められちゃダメ!あんなのにビビってたらあの育児放棄クソ親父をぶん殴れないよ!」
「いや僕は父さんを殴ろうとかそういうのは……」
「グランくんとジータちゃんのお父さん、育児放棄してたんだ」
「そうなんですよムサシさん!ムサシさんのところみたいに信頼の元、家族の了解を得てこうしてるのとは違っていつの間にかいなくなってたんです!浮気バレとか他所で出来た子供がいるとかそういうのはどうでもいいけど年端もいかない子供を放ったらかして出て行くなっつーの!!」
「あはは……」

　茶髪の少年グランと、金髪の少女ジータ。
　そして彼らと共にいるのが銀河遊撃隊・ベテラン勢の一員、春野ムサシ――ウルトラマンコスモス。
　それともう片方には……

「脱走兵って何したんですかカタリナさん!?何かの発注数間違えたとか、男の人の着替えを覗いたとか!?」

「いやそれでここまでやらねーだろアサヒの姉ちゃん！」
「あ……ああ、そうじゃなくてちょっと私が世話役だった少女二人のことでいざこざがあってだな……」
「まさか……！誰かがその子達をピーしたとか!?」
「な……何だとっ!?」
「ちょっと待てよ何で姐さんまでアサヒの姉ちゃんの影響受けてんだよ……」

赤い小ドラゴンのビィと、かつてルリアとアマリの世話役だったカタリナ・アリゼ、最後に若干暴走気味な銀河遊撃隊・ニュージェネレーションの一員の湊アサヒ。
この6名はエルステ帝国の兵達とそれを束ねるポンメルン大尉に包囲されている……のだが、ジータとアサヒのメンタルが強過ぎてこの状況でも動じていない。
後者は別の方で動じているが。

「そもそも地下遺跡って何？ここ、不思議な感じの森はあってもそんなもの聞いたことないんだけど」
「我輩も詳しくは聞かされていなくてですネェ……ともかく地下遺跡への行き方を調べろとしか言われてないんですヨォ」
「なんだそりゃ……」

ビィが呆れたように呟き、ジータは「使えないなぁ」と冷めた視線をポンメルンへ向けた。

「まぁ本当に知らないようですし、武力行使するしかありませんネェ……」
「もう武力行使してるじゃん。バカなの？アホなの？」
「いちいち煩いんですヨォ！この小娘！」

ジータ、鋼メンタル過ぎる。

グランの方は何が来るかと警戒しているのに。

「武力行使とは即ち！直接掘り出してしまえばいいということですネェ！クジャン隊、出番ですヨォ!!」

クジャン隊？とジータ達５人に加えエルステ帝国の軍人であったカタリナも首を傾げる名前が出てきた。

おそらくはカタリナが脱走してから出来た部隊なのだろうが……。

すると突然周囲が暗くなり、全員が上を向くと巨大な人型の機械人形が複数降下してくる。

「うわっ!?何だこれ!?」

「私も見たことのない兵器だ……！ポンメルン大尉！」

「当然ですヨォ、彼らはカタリナ中尉が脱走してから配属された新顔なんですからネェ」

しかしただ一人、この中でこれらを知っている者が６人の中にいた。

ムサシである。

（これは……ＭＳ!?ダイゴさんが乗ってるやつとはだいぶ違うけど……）

そう、ＭＳ。

ムサシは現状銀河遊撃隊ベテラン勢で唯一、レジェンドからＭＳを受領したマドカ・ダイゴ＝ティガの機体と似通った雰囲気から理解出来た。

そして、それを指揮していた部隊長は――

「今こそ拾ってもらった恩義に報いる時！セブンスターズ、イオク・ク

ジャン！見事任務を完遂させて見せよう!!」

昭弘やラフタを中心に鉄華団の面々がブチ切れそうなコイツである。

よりによってコイツなのとか何でエルステ帝国に属してんのとか言いたい事は多々あるが、やはりというか元の世界で最期にほんの少しだけマシになったのはどこへやら、ここでもやらかした。

味方が避難し切っていないのに、容赦無く地面に炸裂弾の装填されたバズーカを向けて連射。

当然、衝撃で他の兵士達は吹っ飛んでいく。

「お……お助けぇぇぇ!?」

「俺はこの仕事が終わったら彼女にプロポーズする予定だったのにいぃぃ!!」

「休暇！これが終わったら休暇だったんだぁぁぁ!!」

ちなみにイオクは任務に集中するあまりこれには気付いてない。

またもポンコツと化したイオクを見たらラスタル・エリオンらはどう思うやら……。

そうしているとグランが衝撃でバランスを崩し続けざまに爆風で打ち上げられるように吹き飛ばされ、空けられた穴に落ちて行ってしまう。

「うわあああああ!?」

「「グラン!!」」

「何ということを……！」

「アサヒちゃんは皆を頼む！僕は彼を助けに行く！」

「ムサシさん、お気をつけて！」

落ちたグランを追い、ムサシもまた地面に空けられた穴へと自ら飛び込んでいった。
そんなことは露知らず、イオクが乗る機体――レギンレイズはなおもバズーカを連射中。
弾切れまで撃つ気なのか。

「す、少しは周りへの影響を考えるんですネェ!!」

ポンメルンの言葉も虚しく、レギンレイズは止まらない……かと思われたが。

ガガァァァン!!

「ぐわあぁぁぁ!?」
「「「「!?」」」」

凄まじい速度でレギンレイズに何かが激突し、レギンレイズはバズーカを手放しながらド派手に吹っ飛ぶ。
そしてそれは同じく轟音を立ててザンクティンゼルの大地に着陸する。
赤と白を基調とし、その顔は……

「バカな……見たことのないガンダム・フレーム……!?」
「そいつは違うぜ、ド下手くそのお坊っちゃん」
「な……何ぃ!?」
（あの声って……！）

アサヒがほんの数回だけ聞いたことのある響きの声。
それはガイやリク、そしてレジェンドとゼロもよく知る人物のも

の。

「コイツはガンダム・フレームじゃなくてマスターフェニックス。そして俺はジャグラスジャグラーだ。その足りない頭に叩き込んどきな」

まさかのジャグラーが特注の専用機を引っさげ、ザンクティンゼルへと先行してきたのである。

「ジャグラーさん！」
「あん？お前……ああ、リクが言ってた3兄妹の末っ子か。こっちに来てたのは初耳だが話は後だ。周りの雑魚共を掃除しないとな」
「ぐ……このクジャン家の嫡男、イオク・クジャンに舐めたマネを……！」

挑発的な台詞を口にするジャグラーに対し、起き上がりＭＳ戦を挑もうとするイオクのレギンレイズ。
加えてジャグラーのマスターフェニックスは敵陣のド真ん中に飛来したため、完全に包囲されている状態。
だが彼にとってこの程度はハンデにさえならない。

「フン……四方八方全部敵か。余計な手間が掛からなくて丁度いいぜ」

「この状況で臆さぬ態度は褒めてやろう。だがそれがいつまで」
「まずはァ!!」

ジャグラーの叫びに呼応し、マスターフェニックスの両手に炎が発生すると自身を包囲していたレギンレイズ部隊の一角に驚異的な速さで突撃し――

「4体」
「……は?」

いつの間にか手にしていた主兵装・クロスバインダーソード二振りを両手に携え瞬く間に4機を一刀両断。
コックピットや動力源を避けたおかげで爆発も無くパイロットも無事だ。

「な、何だ今の速さは！いや、あれだけ大型の武装に加え見たところ内蔵火器は見当たらない！距離をとって――」
「その甘い考えがド下手くその理由の一つだよ」

イオクの指示でレギンレイズ部隊の一角が遠距離から攻撃しようとするも、マスターフェニックスはクロスバインダーソードの持ち方を変え、大型のライフルとして使用。
ナノラミネートアーマーのおかげでダメージこそ抑えられたが、その衝撃は予想を遥かに上回るものであり、怯んだスキに接近を許し先の4機同様両断される。

「……凄い」
「ンなぁ!?ななな何なんですネェあの赤いのは!?」

唖然とするジータらや、慌てふためくポンメルンらエルステ帝国の

軍人達。
ついでにイオクはあまり役に立ってない。
☆
レギンレイズが作り上げた穴に落ちたグランは、星の島と呼ばれるイスタルシアを目指すべく日々鍛えていたため僅かな時間意識を失っていたもののすぐに目を覚ます。
「いっ……つつ……僕はどうしたんだ……？そうか、あの機械人形が穴を開けて、そこに落ちたんだっけ」
立ち上がって埃をはたき落としたグランは周りを見渡すと人工物らしき場所であることが分かる。
「もしかして、ここが地下遺跡ってやつなのかな……？」
グランは剣を鞘に収め、何となく周りを散策してみようと歩を進めた。
自身は気付いてないが、何かに導かれるようにある場所を目指して。
☆
「くっ……くそぉ……！」
「はっ！ザマァないな。えらく強気だったと思えば蓋を開けたらこの程度かよ」
そういうジャグラーの眼前のモニターには、両腕を失い倒れているレギンレイズが映っていた。
同時に他のレギンレイズも全滅し、唯一マスターフェニックスのみ

がクロスバインダーソードを地面に突き刺して腕組みし仁王立ち。
まさに格の違いを見せつけたジャグラーとマスターフェニックスによる蹂躙であった。

「すげぇ……!あの赤いやつ、全部倒しちまった!」
「ねえ、アサヒさん。あの人知り合い?」
「まあ私は軽く知っている程度で、そう表現するとしたらお世話になっている方々の方だと思います」

とりあえず当面の危機は去ったと見ていいだろう。
エルステ帝国の軍人に関しても、もしジャグラーが本気になれば生身でも一網打尽にしそうだし。
しかし、エルステ帝国とは別の脅威が訪れた。

「ん?レーダーに反応……うお!?」

遥か空の彼方より飛来したそれは、かつてウルトラマンティガと激闘を繰り広げたゴルザとメルバという二体の怪獣が融合したような姿の怪獣だった。

「グギャアアアォォオ!!」

超古代闇怪獣ゴルバー。
エルステ帝国とは比べ物にならない巨大な災厄が、平和なザンクティンゼルを絶望の嵐を巻き起こした。

「何だこのファイブキングの出来損ないは。あいつらが来るまでもう少し……か。いいぜ、ちょっと遊んでやるよ」

ジャグラーは笑いながらマスターフェニックスを動かして地面に

突き刺していたクロスバインダーソードを引き抜き、ただ一人ゴルバーとの戦いに赴く。

（ジャグラーさんが……私も加勢に行きたいけど、この状況じゃ……！）

アサヒも……いや、サイズ的にはアサヒが対処するのが一番なのだが、ジータらを放っておくわけにもいかない。

そして、キハイゼル村では住民達が集まりその光景を眺めていた。

その中の一人である老婆はある事を思う。

（遂に、恐れていた事が現実となってしまった。あの『運命の子』が目覚めてくれるかどうか、それにこの島の……いや、この空の世界の未来がかかっておる）

☆

地上の衝撃は地下遺跡にいるグランにも及んでいた。

「うわっ!?何だこの揺れ!?」

パラパラと天井から砂や小さな瓦礫が落ちてくる事に危機を覚えたグランは急ぎそこから離れるべく駆け足で奥まで走り抜けた。

その後、急に大きく開けた場所に出たと同時にグランの目に入ったものは――

「巨人!?……の、石像かぁ」

最初は驚くもふぅ、と深く息を吐いて安堵するグラン。

「でもこの島にこんなものがあったなんて気付かなかった。にしても大きいな～どれくらいあるんだろ」

「おやおや、まさか人間がこんなところにいるとはねぇ」

「ッ!?誰だ!?」

突如聞こえた声に、グランが剣を引き抜いて構えつつ辺りを見回すと、一つの影が現れた。

それは金銀の体色が目を引く、空の世界では目にするような事が無い人型の存在。

声とボディラインから女性だと分かるものの、それ以外はグランにとって全く未知の存在であった。

「な……何だ……!?」

「まあ、どうしてここにいるかはどうでもいい。『トリガー』にはそれ以上近付かないでもらうよ。あたしの獲物だ」

「トリガー?何のことだ!?」

グランは問うもその存在は手から光の鞭を発生させ、縦横無尽にグランを攻め立てる。

何とか防御するも異常な力の強さで軽々と吹っ飛ばされ、床に叩きつけられると同時に剣が手元から離れてしまう。

「がはっ!!」

「防ぐのは予想外だったけどねぇ……それが人間の限界さ。さて……」

その存在は石像を忌々しげに見る。
グランがどうにか立ち上がると、漸く見つけ出したのかムサシがその場に到着した。
「グランくん！……お前は……!?」
「ムサシさん、気をつけて下さい！そいつは……」
「お前……！そう……石化してなお仲間を呼ぶとはね、トリガー……！」
「トリガー……!?」
ムサシも怪訝な表情になるが、そこにあった石像を見て愕然とする。
（ティガ!?いや、よく見ると所々で違うし、つい最近もダイゴさんと通信で会話したばかりだ。そんなことより今は！）
ムサシがグランを守るように立ち塞がると、地上から何かが叫ぶ声が聞こえてきた。
「この声……！」
「フン、ゴルバーが暴れ始めたようだね。遅れてくるとは鈍臭い奴だよ。何のために翼が付いてんだか」
「ゴルバー……暴れる……まさか怪獣か！」
「ああそうさ。トリガーの仲間だけあって察しがいいねぇ。本当ならあいつに暴れさせて引きつけさせてるうちにって予定だったんだけど、そこの人間に邪魔されて台無しだよ」
グランを指差しながら存在はそう言うが、当のグランは先程から自身に何かおかしさを感じている。
しかし今はそれを気にしている余裕は無い。

「地上にはジータやビィが……！」
「ああ、そうかい……そりゃ残念な事になってるだろうさ。早く行けば死体ぐらいは残ってるかもしれないよ」
「何だと……！」
「少なくとも今のお前の実力ではゴルバーには到底対抗出来ない。今言った二人もおそらくは良くてお前と同等ぐらいか……だとすればゴルバーに立ち向かったところで無駄死に、逃げ延びたとしてもこの辺りは悲惨なことになるだろうねぇ」

そう言ってその存在はせせら笑った。
ムサシはそれを睨み、グランは己の力の無さを嘆く。

「そんな……僕にもっと力があれば……」
「何を言ってるんだい？お前がどれだけ力を付けたところでたかが人間に出来ることなど限られてるんだよ」
「そんなことはない！確かに人間に出来ることは限られてる……でも！諦めなければ夢を叶えることも、不可能を可能にすることだって出来る！」
「黙りな!!」
「うわっ！」

グランを庇うように叫んだムサシに激昂した存在は光の鞭でムサシを狙うが間一髪ムサシはそれを回避する。

「ムサシさん！くそっ……僕があの時ここに落ちなければムサシさんも巻き込まなかったのに……！」
「それは違うよ、グラン君……！」

光の鞭を避け続けながら、ムサシはグランへと微笑む。

「僕は巻き込まれたわけじゃない。自分の意思でここまで来たんだ。君は僕に対して何も悔いることも責任を感じることもない！」
「ムサシさん……」
「お父さんの待つ星の島に行くんだろ！だったらこんな所で立ち止まって、諦めちゃ駄目だ！信じる心、その心の強さが不可能を可能に……ぐあっ!!」
「ムサシさん!?」
「随分しぶとかったねぇ……さすがトリガーの仲間だよ」

遂にムサシが吹き飛ばされた。
吹き飛ばされた時に背中を強く打ち付けたのか、咳き込んでいるムサシに駆け寄るグラン。

「ムサシさん！しっかりして下さい！」
「グラン君……地上への道を探すんだ。僕なら大丈夫、伊達に修羅場を何度もくぐり抜けたわけじゃない」

そういうムサシだが、先程の攻撃を受けて無事なハズがない……そう思ったグランはさっきとは逆にムサシを守るようにその存在の前に立ちはだかった。

「何のつもりだい？脆弱な人間風情が」
「駄目だグラン君！逃げるんだ！」
「ならムサシさんも一緒にです！一人で逃げたら絶対に後悔する！ムサシさんは巻き込んだことを悔いる必要はない、って言ってくれたじゃないですか。だから僕は後悔しない選択をしたんです!!」

力強くそういうグランに、ムサシはかつての自分を思い出す。
チームＥＹＥＳに入隊して間もない、がむしゃらに怪獣保護ばかり考えていたあの頃のことを。

「この遺跡を作ったのが誰なのか知らないし興味もないけど……遺跡なら不思議な力の一つや二つあるだろ！僕の大事な人達を守るために、それを僕に貸せっ!!」
「結局神頼みならぬ遺跡頼みかい。所詮人間は……!?」

吼えるグランに呆れたその存在は、直後に輝き始めた石像、そしてそれと共鳴するかのように同じく輝き始めたグランに驚きを隠せない。

「これは……まさか……！」

同時にグランは光の中である感覚に見舞われていた。
まるで自分に足りなかった何かが埋まっていく……むしろ今まで足りなかった何かに自分が本来あるべきものとして戻るような感覚。
石像とグラン、二つの場所から放たれた光はその場を覆い尽くす。

今、光を繋ぐものが目覚める。

☆

「思ったより硬いな。ヒリュウ改はまだ……何だ!?」

ゴルバーに対して孤軍奮闘していたジャグラーとマスターフェニックスだが、サイズ差やジャグラー側が大威力の切り札を周囲に配慮して使わなかったことでどうにか食い止めているところだった。
ヒリュウ改……レジェンド達の到着までどうするかと考えていた時に地中から凄まじい光が溢れ出す。
誰もがその眩さに目を閉じ、それが収まった時そこにいた存在に目を見開いた。

額にクリスタル、プロテクターとそれに合わさった額のクリスタルとほぼ同じ形状のカラータイマー。
銀・赤・紫を基調としたカラーリングとシュッとした顔。
何よりゴルバーに匹敵するその巨体。
地下遺跡で石像だったそれは光を取り戻し、空の世界を迫りくる闇から救わんと今再び立ち上がる。
その名をトリガー。
未来を築く、希望の光。
ウルトラマントリガー。

（これは……あの石像だったもの……!?これが、僕の今の姿なのか!?）

トリガー＝グランは目の前で暴れるゴルバーを見たあと、自身の両手を見ながら驚愕する。
地下遺跡からいきなり地上に出た事もそうだが、自分が石像と一体化して新たな力と姿を得たなどあまりにも急展開過ぎると思うのは当然だろう。
だが、彼はすぐに思考を切り替えた。
眼前の巨大な災厄と戦うすべが今の自分にはある。
ならばすべきことは一つだ。
軽く辺りを見回すとジータやビィ、カタリナにアサヒがいるのを確認する事が出来た。
見慣れぬ赤と白の機体もいたが、ゴルバーと戦っていたような様子やジータ達を守ってくれていたことを推測し敵ではないと思うことにする。

「チャァッ!!」

トリガーが地を蹴り、ゴルバーを肉迫。

がむしゃらに全身を使って応戦するゴルバーに対し、確実にパンチやキックを叩き込むトリガー。
粉塵を巻き上げ、ザンクティンゼルの大地を揺らし、蒼い空の下二つの巨体が激突する。
グランは星の島を目指して旅立つべく、日々ジータやビィと共に修行にあけくれていた。
それが功を奏し、トリガーとなった今も活かされているのだ。

「テヤァ!!」
「ゴアァァァ!?」

側転からのハンドスプリングを利用したドロップキックがゴルバーに炸裂し、ゴルバーは仰向けに倒れる。
そのまま追撃しようとしたトリガーだったが、突如背後から攻撃を受け、腕で首を締められた。

「ウアッ!?」
「トリガー……あたしに会うために人間を取り込んで復活したのかい？ずいぶん情熱的じゃないか」

それは巨大化した、地下遺跡で遭遇した存在だった。

「ウ……グ……！」
「あたしを忘れたわけじゃないだろう？このカルミラのことをね！」

その存在――カルミラは腕を離してトリガーの首を解放するとそのまま背中を蹴りつけ、光の鞭・カルミラウィップでトリガーを打ち付ける。

「グアッ！」
「ほらほらどうしたトリガー!?３０００万年前の勢いはどこいったん

だい!?」

３０００万年前、というキーワードにその場にいた者達は驚くも、カルミラはトリガーへの攻撃の手を緩めず、さらにゴルバーも起き上がる。

カルミラとゴルバー、二つの災厄に挟まれて万事休すのトリガー。

しかし、彼らは知らなかった。

レジェンドの力の一端をその身に宿した『慈愛の勇者』がその場にいることを。

「コスモォォォス!!」

力強いムサシの声と共に――

「シュワァッ!!」

トリガーの時と同じように、地中から凄まじい光が溢れたかと思えば青い巨人がゴルバーを吹き飛ばしながら現れたのだ。

（あ……あれは!?今、ムサシさんの声が……もしかして!!）

「やっぱりあの程度でくたばるわけがないか……予想通り出てきたねぇ、トリガーの仲間ァ!!」

「フッ!!」

青い巨人――ウルトラマンコスモスは握り拳ではなく、両手を開いたまま構える。
カルミラの放つカルミラウィップに対し、極薄の光の膜で両手を包みそれを華麗に捌くコスモス。
「ちいっ！どうやらかなり出来る奴みたいだね……ゴルバー！何を何度も寝てるんだい！とっとと起きな!!」
銀河遊撃隊ベテラン勢に名を連ねるコスモスの参戦はカルミラにとって分が悪い。
トリガーだけでも始末するべくゴルバーへ檄を飛ばし、少しでも有利に事を運ぼうとする。
（どうする……！せめて、剣が……それに似たものでも使えたならッ……！）
トリガー＝グランは主に剣を使った修行を行っていたため、格闘よりもそちらを得意としていた。
他の武器も一通り使えるが、やはり得意武器を使えるか使えないかでは大きく違う。
彼がそう望んだ時、地下遺跡から一つの光がトリガーの手元に飛来し、ある物の形を作り出す。
（これは……少し変わった形状だけど、剣か！）
それを握りしめたトリガーの脳裏にある記憶が流れ込む。
手にした武器――サークルアームズを振るう今の自分……トリガーの姿。
ハッとなってコスモスの方を向くと、コスモスは頷く。

――こっちの相手は任せて――

そう聞こえたような気がしたトリガーはコスモスに頷き返し、手にした新たな力・サークルアームズを構え、向かってくるゴルバーに自身も向かっていき、すれ違いざまに斬りつける。

「テヤァァァ!!」

「ガァァァァ!!」

脇腹から激しい火花を散らしながらゴルバーは叫ぶ。

さらに、振り向きながらトリガーはサークルアームズをクルクルと高速回転させながら連続で斬りつけ、最後に思い切り袈裟斬りをゴルバーに炸裂させた。

ボーパルブレード――グランとジータ、二人の奥義でもあったそれを受けたゴルバーは再び倒れ込んだ。

トリガーの動きを見たジータとビィは思わず叫んでしまう。

「おい!見たかジータ、今のアイツの動き!」

「うん!間違いない、今の技……ボーパルブレード!私とグランで一生懸命練習したやつだよ!」

「何だって……!じゃああの巨人は彼、なのか……!?」

「きっとそうです!だって、あっちのコスモスさん……青い巨人はムサシさんですから!」

「んなぁっ!?」

アサヒの容赦ない大暴露にビィが驚きの声を上げ、ジータも目を見開き、カタリナも言葉を失う。

「おい湊家末っ子、ンな簡単にバラすなよ。ベリアルに叱られても俺

やレジェンドは庇わねぇぞ」
「ええっ!?バラしちゃいけなかったんですか!?だってあのウルトラマン、グラン君だと思うし!」
「いや普通にポンポンそんなこと言っちゃ駄目なことぐらい理解出来るだろ……」

近くに来たマスターフェニックスに乗っているジャグラーは、天然なアサヒに額を押さえ溜息を吐く。

(こりゃレジェンドやベリアルが愚痴るわけだ)

実はビオランテ戦後、お忍びでベリアルも蛇倉苑に行っていたのだが、その際アサヒを「良い子ではあるんだが発言が色々無防備過ぎる」と頭を抱えつつ評し、ジャグラーに愚痴っていたのである。

それはさておき――

『おーいジャグラー、何かティガにそっくりな奴いるんだけど。アイツいつの間にイメチェンしたの』
「ありゃティガじゃねえ。わかってやってんだろアンタ」
『まあな。というかコスモス来てたのか……お父さんは何も聞いてませんよ!』
「聞いてなかったのかよ。つーかお父さんってアンタ……いやあながち間違いじゃないか」

遠くにヒリュウ改が漸く到着したのが見え、レジェンドからの通信を受けたジャグラーは、レジェンドの妙なテンションを怪訝に思いつつ律儀に対応した。

「で、アンタは何でそんなテンションなんだ?」
『ヒリュウ改の倉庫で美少女拾いました』
「どうしてそんな所で変なトラブルに巻き込まれてんだよ!?もう不憫

になってるというか不憫に自分から突っ込んでんじゃねえのか!?」

ジャグラーのツッコミがマスターフェニックスのコックピットに響き渡った。

……ごもっともです、店長。

サークルアームズの入手によってトリガーとゴルバーの戦いはトリガーに戦況は傾き、コスモスとカルミラの戦いもまたコスモスが優勢となっていた。

相手が攻撃を捌くだけならば幾らでも戦法は思いつく、と高をくくっていたカルミラだったが、一気に旗色が悪くなる。

コスモスがコロナモードをすっ飛ばし、エクリプスモードへとモードチェンジしたからだ。

既にムサシと強い信頼によって阿吽の呼吸が出来ていたコスモスはルナモードから一段飛ばしでモードチェンジすることが可能となっていたのである。

突然苛烈かつ壮絶な攻撃を叩き込まれ、カルミラは大きく吹っ飛ばされた。

「ディィィアッ!!」

「グハッ!?」

ゴルバーの後ろまで吹き飛ばされたカルミラを見たあと、トリガーに並ぶように立つコスモス。

コスモスの姿が大きく変わっていた事に驚くトリガーだったが、またも聞こえてきたムサシの声で冷静さを取り戻す。

『グラン君、次で決めるよ。いけるかい？』

『やっぱりムサシさんなんですね！何となくですけど……頭に戦い方が流れてくる感じで……やれます！』

コスモスとトリガーは互いに頷き合い、それぞれの必殺技の構えに入る。
コスモスは腕を握り拳のまま胸の前でクロスさせた後、ゆっくりと両腕で左右から大きな円描くように。
そしてトリガーはサークルアームズを地に突き刺し、頭に思い浮かんだ記憶からティガの最も得意とする光線技・ゼペリオン光線と同様の動作……両手をクロスさせながら突き出し、ゆっくりと左右に広げながら。
それを見たカルミラは技の危険さを瞬時に察知し、即座に起き上がり、同じく起き上がりつつあったゴルバーを掴んで自身の前に盾のように突き出した。
そしてコスモスはエネルギーを集中させていた右拳を突き出し、トリガーは両腕をL字型に組み、同時に必殺光線を発射する。

「デェァァァァァ!!」
「チャァァァァァ!!」

コスモス・エクリプスモードのコズミューム光線とトリガーのゼペリオン光線、二つの凄まじい光の奔流は寸分の狂いもなく同タイミングでゴルバーに着弾。

「グォォォギャァァァァ……!」

ドゴォァァァァァン!!!

ゴルバーは断末魔の叫びを上げながら爆散する。
爆炎の後ろにいたカルミラはこれ以上は負け戦にしかならないと撤退することにするが、同時に楽しそうにも笑う。

「こうでなくちゃ面白くないねぇ。今日のところは引き下がるよ、ト

リガーとその仲間。まだやることもあることだし」

そう言って飛び立つカルミラ。

トリガーは勿論、コスモスもそれを追おうとはしない。

コスモスはともかく、トリガー……グランにとってはウルトラマンとして初めて戦ったばかりなのだ。

加えて、家族や仲間の安否の確認もある。

トリガーが初陣を勝利で飾り、同時にヒリュウ改も到着したことでザンクティンゼルにおける戦闘は一先ず終息の時を迎えた。

エルステ帝国も撤退しており、残ったのはマスターフェニックスによって破壊されたレギンレイズの残骸のみ。

しかし、これはまだ始まりに過ぎない。

ウルトラマントリガーの新たな物語と戦いは、レジェンドらとの邂逅によって大きく動き出す。

空の世界だけでなく様々な世界を巡り、数え切れない不可思議な出来事を経験することなど、今のグラン達には想像も出来るはずがなかった。

〈続く〉

若き騎空士の旅立ち

ザンクティンゼルに襲来したエルステ帝国、そして怪獣と謎の巨人との戦い。
ジャグラーの駆るマスターフェニックスの介入と、覚醒した超古代の戦士ウルトラマントリガー＝グラン、加えて銀河遊撃隊より出向していたウルトラマンコスモス＝春野ムサシの活躍によりゴルバーの撃破と謎の巨人カルミラの撤退、さらにエルステ帝国もＭＳ部隊壊滅という結果から撤退を余儀なくされたことで一先ずは勝利という形に落ち着いた。
遅れてやってきたヒリュウ改に身構えるトリガーであったが、コスモスやジャグラーに「敵ではなく味方」と制されると緊張の糸が切れたのか一気に脱力して片膝を付く。
自然な形でそれぞれが人間の姿に戻ると、グランの足元には何かの道具のような物が二つ、転がっていた。

☆

とりあえずヒリュウ改を乗り降りしやすい所へ停泊させて何名かでキハイゼル村に向かうことにしたレジェンド一行。
なお、アズに関してはミツバがレジェンドの話を聞いてから彼共々保護者になってくれるとのこと。
ちなみに部屋はレジェンドのすぐ隣。
何かあれば即座にかけ込めるようにとの配慮だったが、結局オーフィスとアーシアに続く就寝時突撃組の一人になってしまったらしい。
それはさておき、キハイゼル村に着いてからレジェンド達は様々な再会と出会いが待っていた。

「「カタリナ!!」」

「ルリア！アマリも……！二人ともアガスティアから神に連れ去られたと聞いたが……」
「えっとね、それは間違ってないんだけど……」
「言われてるほど大仰なわけじゃなくて、本当は……」

まず、世話役だったカタリナと、ルリアとアマリが紆余曲折の果てに再び出会えたこと。
確かに神に連れ去られた、の部分は合っている。
実際は光神であるレジェンドに後押しされ、自らの意思でアガスティアを脱出した。
ついでにその時の無駄に凝った演出の事も説明すると、カタリナは心底安堵したのか力なく座り込んだ。

「……では別にピーされたわけではないと」
「ピー？」
「ルリアもアマリも深く考えんでよろしい。さて、俺としてはムサシとアサヒがいるのが予想外だったんだが」
「お久しぶりです、チーフ」
「レジェンドさん、お元気でしたか？ハッピー！」
「はいはいハッピー。で、お前達がいるのはベリアルからの指示か？」
「ええ、まあ。誰が行くかで揉めたんですが、結果として僕とアサヒちゃん、あともう一人になりました。最後の一人はチーフもよく知っている人です」
「……ああ、あいつか。さっきそのそっくりさんがいたようだが？」

レジェンドがそう言いながら見たのはグラン。
変身したところは見ていないものの、ウルトラマンの中でも別格のレジェンドは一目で彼がトリガーだと見抜いたようだ。

「ええ、事情が事情というか……」

「――というわけなんです」
「……ふむ。ダイゴの時も似たような感じだった。そこまで似てくると因果関係を辿りたくなるが、そもそもティガは武器を使わんし、そのカミーラの姉妹かと思ってしまいそうな奴が使役していたのがゴルザとメルバの融合体のような怪獣……シビトゾイガーではない。こういうのはティガに直接聞いた方が早いだろう。知らないなら知らないで構わんしな」
「ですね。僕らで考えて正解が出たとしても、重要なのは彼自身の意思です」
「そういうことだ。それからもう一つ、これは一応でいいから頭の片隅に留めておけ」
「何ですか？」
「ここまでお前の話を聞く限り、あのカミーラ似の奴……カルミラがあのトリガーとやらと因縁があるとすれば、他に少なくともあと二人はカルミラ側に巨人が入るはずだ」
「ダーラムとヒュドラ……でしたっけ」
「そうだ。ティガはカミーラとその二人の力を吸収・変換し己の力としていき、お前も知る3つのタイプを得た。先のトリガーがカルミラに対するタイプだとすれば、他に二人の巨人が存在しそれに対するタイプをトリガーも有している可能性がある。現時点ではそこまでティガそっくりだとは断定出来んが、まず間違いなさそうだ」

レジェンドが腕組みして目を伏せながら告げると、ムサシも頷きグランを見る。
そんな彼の手には何やら二つのアイテムが手にされており、どうやらどう使えばいいのか悩んでいるらしきことが見て取れた。

「グラン君、どうしたんだい？」
「あ、ムサシさん……実はあのトリガー、とかいう姿から戻ったら足元にこんなのが落ちてたんですけど……経緯的に僕に関わるものじゃ

ないかとは思うんですが、どうやって使えばいいのか……」
「どれどれ……!?」
「……銃の形ではあるが、ここが開くのか。しかもこの形状、ますますアイツのスパークレンスそっくりだな。しかしこのＵＳＢメモリみたいなものは……そうか、ここに差せばいいんだな」

ヒョイっとグランの手からレジェンドがそれを取って色々見てみると、ハイテクになってはいるがダイゴの持つスパークレンスに似たものであることが分かり、メモリのようなものを持ち手の下の部分に差し込んでみた。

「あっ！ちょ、ちょっと!?」
「えーと、これでここを開いて、ポーズを決めて叫びつつトリガーは……お、あったあった。ここを押して変身と……何で３０００万年前なのにこんなハイテクなんだよ。ダイゴのやつは普通にトリガーポチで終わったんだぞ」
「いやだから！返して下さいよ！」
「ん？ほら」
「……え？」
「え？じゃなくて早く受け取れ。お前のものだろう。俺が持っていたところで単なるメモリ式のスーパーガンでしかない。これはトリガーであるお前が持ってこそ真の力を発揮する」
「あ……えと……ありがとうございます……？」

突然奪ったと思えば一通り見物したらあっさり返すレジェンドに困惑するグランだが、レジェンドの説明を聞いてはいたため使い方はなんとなく理解出来た。
動作を見ていれば分かるのだが、実はレジェンドはある動作を忘れていた。
それをしない……というか知らないと後々様々な場面で不発に終わってしまうのだが、とりあえず今は放っておく。

「さて、そこの新米ウルトラマンを含めて自己紹介が遅れたな。俺はウルトラマンレジェンド。今も昔もムサシの上司で、今はアサヒの上司でもある光神だ。ついでにウルトラ騎空団の団長の立場でもある。なし崩しに決まっただけだがな」
「俺はジャグラスジャグラー、この姿の時はヘビクラショウタとも名乗ってる。いずれ全宇宙どころか全【エリア】規模の丼物チェーン店となる蛇倉苑の開業者兼本店店長だ。今はあのヒリュウ改で料理長兼遊撃手やってるぜ」

サラリと言い放った二人にグランやジータ、ビィとカタリナはあんぐりする。
レジェンドは先の戦いで見事な戦いを見せたコスモスの上司にあたると言われ、ジャグラーはあれだけ無双しておきながら本職店長で料理長。
一応、その後にオーフィスやアーシアらも自己紹介しているのだが、最初の二人のインパクトが大きすぎてあまり頭に入らない三人と一匹であった。

「……皆、レジェンドとジャグラー店長ばっかり見てる。ぷんすこー」
「オーフィスちゃん、今回は仕方ないですよ？私達全然何もしてないですし……」
「あたしとベアも何もしてないし」
「えええ!?やっただろ、私とゼタであの戦艦の……えーと……操縦、操舵……どっちだっけ？」
「だから遅かったのかよ。何で見るからに初心者な奴に戦艦動かさせたりしてるんだ。つーかサギリ、普通はお前が出るもんだろうが。結局俺がＭＳ全機蹴散らしちまったんだぞ」
「まだちょっと遠かったからね。知ってるでしょ、ジャグ。私の機体は二人乗りだから、相方の経験値に合わせたのよ」
「あうう……ごめんなのじゃ……」

「え？ちょい待ち。サギリ、お前の相方って九重？」
「あれ？レジェンド様も聞いてないの？」
「全くの初耳なんだけど」

サギリのバディがまさかの九重。
これにはレジェンドもポカン状態である。
いくら何でもキツすぎる気がするのだが、見たところ無理矢理というわけではなさそうなので一先ず様子見。
しばし間をおいてハッとなった三人と一匹は慌てて挨拶し返す。

「あ！すいません！僕はグランです！それで、えーっと……トリガー？っていう名前もある……のかな」
「私はジータです！グランの双子の姉です！」
「ちょ……！ジータ、僕の方が兄でジータが妹でしょ!?」
「えー！私の方がお姉ちゃんだよ！だっていざって時に慎重になり過ぎなグランをいつも後押ししてるじゃん！お姉ちゃんムーブだよねこれ！」
「後押しっていうかジータが怖いもの知らずでガンガン突き進んでるだけだよね!?いつもそのフォローしてるの僕じゃないか！」
「う～！」
「おいおい……これじゃ先に進まねぇって……あ！オイラはビィっていうんだ！こう見えても……うん？」

どっちが兄か姉かで争っているグランとジータを尻目に自己紹介を済ませようとするビィに、てくてくとオーフィスが近付いていく。

「じー」
「な……なんだよぅ？」
「我、オーフィス。無限の龍神（ウロボロス・ドラゴン）オーフィス。……同族？ドラゴン？」
「おお！お前分かってんじゃねぇか！そう、オイラはこれでもドラゴンなんだ！でもよぅ……殆どのやつはトカゲって言うんだぜ？」

「え、ドラゴンだったんでございますか？俺はてっきりメルバの幼体かなんかだと思ったんだけど」
「メルバってなんだ？」
「「さっきの怪獣の融合元の片割れ」」
「オイラは怪獣じゃねぇ！」

レジェンド、ゼット、ジャグラーに怪獣呼ばわりされて「トカゲじゃねぇ」の別バージョンが出来てしまったビィ。

「……我も怪獣？」
「お前は暴食魔神だな」
「ぷんすこー」
「君達は兄妹みたいに仲が良いな。ルリアとアマリのようだ」
『それでお前は何者だ？』
「いやその台詞はそのまま返したいんだが!?魔物の新種か!?」
「あ、この方は魔神様で、本当の名前はマジンガーＺＥＲＯって仰るんです！」
『巫女のありがたい言葉によるありがたい紹介だぞ。忘れぬよう記憶の奥深くまで浸透させるがいい』

どーんという効果音が聞こえてきそうな腕組み仁王立ち（ただしマスコットサイズ）でカタリナを見るマジンガーＺＥＲＯ。
その光景にカタリナは苦笑しつつ、最後に自己紹介する。

「私はカタリナ・アリゼ中尉……いや、元中尉だな。エルステ帝国の軍人だった。今は見ての通り脱走兵だ」
「見ての通りって、その格好じゃ脱走兵っぽくないわよ？オンオフの切り替えと同じでメリハリつけないと」
「め……めりはり？」
「簡単に言うと、鎧を脱いでカジュアルな格好になるとか。どっちにしろそのままだとまた何処かで見つかって追い回されるわね。仕方

ない、サギリお姉さんがコーディネートしてあげましょうか！」

何故かノリノリのサギリにカタリナがコーディネートされる話になってしまい、ルリアとアマリに助けを求めようとするも二人までサギリと一緒になって実行しようとする始末。

「サギリさん、カタリナをどんな感じにするんですか？」
「そうね、まずは騎士のイメージを取っ払うことから始めるわよ！」
「騎士のイメージを……面倒見の良いお姉さんとか」
「ＯＫ！その線で行きますか！」
「い、いや！私はこのままで……」
「ルリアちゃんにアマリちゃん！確保!!」

楽しそうな二人と慌てふためく一人、女三人集まれば姦しいとはよく言ったもんだと思いつつ、レジェンドは本題に入ることにした。

「星の島イスタルシア、ねえ……」
「あれですかね。ほら、デデデデーンデデデデーン、デーデーデッデーデーデッという前奏から始まるウルトラ六兄弟のアツいテーマソング！」
「それはウルトラマン物語～星の伝説だ。しかも六兄弟のみならずケンとマリーが父母呼びで入ってるからな」
「さり気なくレジェンドを訳した単語が入ってる」
「あ、そういえばそうだ。これ歌詞変えて曲をアレンジしたら銀河遊撃隊のテーマソングになるんじゃね？」
「あの、チーフ……いきなり脱線しちゃってるんですけど」

ムサシがツッコまないとすぐに雰囲気が彼らに飲まれてしまう。
恐るべしレジェンド一家。
咳払いして改めてグラン達と向き合い、目的を再確認する。

「お前達はそのイスカンダルを目指すため修行を積み、準備を整えたが今日あんな出来事に遭遇してしまった。おそらくエルステ帝国がお前達やこの島に目をつけていることはほぼ間違いない」
「「……はい」」
「図らずもとんでもないハードなスタートになったわけだが――」
「ちょっと待って下さいレジェンド様。サラリとイスタルシアではなくイスカンダルと言いましたね？」
「だってアイツそこ行ったじゃん。きっとイスタルシア＝イスカンダルなんだよ。コスモリバースする気なんだよ」
「レジェンド様のおかげで話題の脱線がリバースしてるんですが」

ミツバが額を押さえて溜息を吐く。

「とまあ冗談はさておきだ。このままお前達だけで旅に出たとして、確実にエルステ帝国や怪獣、そしてこの間の巨人……カルミラとかいう奴とその同族を相手にすることになる。正直、今のお前達では奇跡が積み重ならん限り旅を続けていけるレベルではない」
「「……」」
「グラン、ジータ、ビィ君……」

レジェンドの言っていることは正しい。
エルステ帝国が拾った（？）イオク・クジャン率いるレギンレイズ部隊でさえ、ジャグラーによる介入があって退けられたのだし、トリガーになれるとは言っても怪獣や巨人にグラン一人で立ち向かい続ければいずれ限界がくる。
その時、ジータとビィに何が出来るというのか。

「だがまあ、エルステとやらはともかく……あの巨人の方は何処にいようがお前らを、正確にはグランを追ってくるだろうさ。トリガーってのに相当深い因縁があるみたいだからな」

「それはっ……」
「とどのつまり何が言いたいのかって言うとだな、それを覚悟でお前達だけで旅に出るか、それともレジェンドや俺らと一緒に寄り道しまくりながら星の島を目指すかって聞きたいんだよ」
「……いやジャグラー、前者はいいとして後者は何で俺らが巻き込まれてんの？何で俺らまでオルタンシア目指すことになってんの？」
「オルタンシアってアンタまた名前変わってんぞ。決まってんだろ。蛇倉苑のリピーター早期確保が本当の狙いだ」
「マジで料理人かつ商売人の鑑だよ畜生!!」

本当なら適当な世界まで送るぐらいに落ち着かせようとしたのだが、ジャグラーがそう言ってしまった手前断りにくい。
しかも……

「え、そんな……ただでさえ初対面で迷惑をかけたのに」

グランは控えめだからまだいい。
問題は他の二人。

「あ、それじゃご一緒させてもらいまーす！」

ニコニコ笑顔でピーンと右腕を挙手して答えたジータ。

「イスタルシアに辿り着く前に死んだら元も子もねぇよな！よろしく！」

オーフィスがドラゴンということも相まって乗り気のビィ。

「えええええー!?」
「遠慮もへったくれも無いなそこの二名!!ちょっとは悩むとかしないのか!?」

グランとレジェンドの反応は当然である。
……アレ？二人分振り回されるってグランとレジェンド似た者同士じゃね？

「だってあのクソ親父に鉄拳制裁するためなら手段は選んでられないし、別に会いに行かなきゃいけないって訳でもないからどれだけ待たせてもいいよね☆」
「うっわぁ何この娘すっごいキラキラ笑顔なんだけど」
「すみません……ジータって父さんに対して怒りしか感じてないっていうか……」
「この際母親に関しては聞かないでおくが、面倒だから父親についてもスルーしとく」
「お気遣いありがとうございます……それで、ビィの方は」
「ドラゴンと理解してくれる奴がいるからだろう。今はロリっ娘だがアイツも立派な……というかオーフィスはドラゴンで言うなら最上位に位置するからな。うちの団、というより我が家にはドラゴンがあと二人いるし」
「レジェンド、マダオもドラゴン」
「言われてみりゃそうだったか。そいつ一誠とかタイガ達ぐらいしか基本会話してないだろうしすっかり忘れてた」

オーフィスにくいくいと裾を引っ張られながら言われ、ＨＡＨＡＨＡと笑いながら思い出したレジェンドを見て、何となくレジェンドとオーフィスを自分とビィに置き換えてみると笑みが零れた。

「もうこうなったらヤケだ。あっちの世界が夏休みである間、異世界修行の一環で来ている身だから彼方此方行ったり来たりする事になるが、それでも良ければ面倒見てやる。ジータいわくクソ親父とやらの度肝を抜いてやりたいなら俺らについてくることを勧めるぞ」
「そう……ですね。どれだけ背伸びしたって結局僕達はまだまだ子供

なんだって分かりますし」
「自分が子供だと理解してるならマシな証拠だ。ロクな経験も無いのに大人ぶって、いざという時に役に立たない奴と違いよっぽど見込みがある」
「あはは……それじゃあ、改めてこれからお世話になります」
「よっしゃー！俺にもいよいよ後輩が！」

ゼットが何やら喜んでいるが、一応トリガーは３０００万年前に活躍していた、それこそティガ並みに大先輩な筈なのだが敢えて言わないでおこう。

「それはそれとして、ルリアとアマリはどうする？」
「「え？」」
「カタリナとやらに再会出来た以上、選択によっては俺達と共にいる必要は無い。カタリナと三人で旅をするも良し、何処かでのんびり暮らすも良し……好きな道を選ぶといい」

確かに、予想外とも言えるほど超速で再会した三人だが、元々ルリアとアマリを自由にするのはカタリナが当初目的としていたこと。
図らずもレジェンドがそれを叶えた上に再会出来たのだからレジェンド達に付き合う必要もない。
そもそも、その立場上レジェンドについてくるとすればエルステ帝国にいたときとは比べ物にならない困難と幾度となく遭遇することになるだろう。
二人の今までを考えるとレジェンドとしては自らそんなことに突っ込んでほしくはないのだが、既に二人は答えを出していた。

「あのね、カタリナ……アマリとも話し合ったんだけど……」
「私とルリア、レジェンドさんについていこうと思ってるの」
「ルリア、アマリ……そうか、色んな理由があるのは二人の表情を見れば言わなくても分かる。ちゃんと自分達で決めたんだな」

「うん」
「ずっとお世話になって、我儘ばかりだけど……」

気にしないでいい、と少し寂しげだが笑いつつ二人を撫でるカタリナに、これまたゼットの一言がクリティカルヒットすることになる。

「じゃあいっそアレだ、次はグランジータビィ三人衆……あれ？一匹はドラゴンか。ともかくその三名の保護者としてついてくればいいんじゃないですかね？」
「「!!」」

カタリナ、ルリア、アマリの三人は衝撃を受けるが、言われた三名の方を向くと三者三様笑顔である。
むしろ引き受けてくれと言わんばかりの空気を振りまいているというか。

「私は……いやしかし……」
「……可愛いものが好きだそうだな」
「何故それを……ッ!?」

ニヤリと笑みを浮かべたレジェンドが見せた写真には、杏寿郎と戯れるパム治郎やカナエにお持ち帰りされそうなハクやフウが写っていた。

「カナエがハクとフウ連れ去ろうとしてる」
「あ、腰にロスヴァイセさんがしがみついてます」
「安定で草」
『パム治郎の方がいつも通りなおかげでそいつらの方に目が行きがちだな』

カタリナは本気で悩み出したが、あと少しだと踏んだレジェンドが

陥落させる一言を叩きつけた。
「さらに俺の実家にはそりゃもう愛らしい姿のポケモンなる生物が――」
「うむ！何かあったときに頼れる大人が身近にいないのは不安になるだろうな！迷惑をかけて申し訳ないが私も同行させてほしい！」
（（（（落ちたー!?））））
「で、これがポケモンの参考写真」

カタリナと、ついでにルリア、アマリ、さらにオーフィスやアーシアなど他の女性陣が覗き込んだ写真には、何かの大会で優勝したのだろう。
ピカチュウとトロフィーを抱えながら笑顔のレジェンドがリクやベリアル、その他三人の手持ちであろう多くのポケモンと集合写真のように写っていた。

「ちなみにこれ、チーム戦で全勝した時のやつな。写真は俺ら三人がそれぞれ持ってて、トロフィーが俺で盾はベリアル、賞品はリクが持ってるぞ」
「あ！この子、私の髪の色に似てます！」
「こいつはリクの手持ちのパチリスだな。何故かレッキングバーストを撃てるあたりヤバいぞ」
「超師匠、こっちのゴジラっぽいのは？」
「バンギラス、ベリアルの手持ちの一匹だ。噛み砕くでベダニウム合金を平然と粉々に粉砕したパワー型」
「それこのサイズでキングジョーに勝てるってことでございますか!?ウルトラ強過ぎじゃね!?」

レジェンド、ベリアル、リクに育成されたポケモンは皆おかしかった。
まあ、ビジュアルが変わらなかっただけよかったのかも。

「いずれ惑星レジェンドにも一度帰るし、その時会わせてやるから。その前にこっちに何匹か呼び寄せるか？今はいいか」
「ムサシさんのご家族も今そちらにいらっしゃるんですよね！」
「そうだよアサヒちゃん。チーフにお願いして、ポケモンアイランドってところで連れてきた何匹かの怪獣と一緒に滞在してもらってるんだ。あとで映像連絡しないと」
「……やっぱりクソ親父とムサシさん交換してほしい。でもムサシさんのご家族の方々に迷惑かけるしなー」
「ジータが黒いぜグラン……」
「仕方ないよビィ……」

家族揃って怪獣と仲良く、家庭円満かつウルトラマンとしての仕事にも理解のあるムサシの家族。
特に妻のアヤノはかつての同僚であり、同じくレジェンドにとっては部下だったためよく知っている。

「銀河遊撃隊ってあっちこっちから集まってて時間軸バラバラだからなぁ……」
「お前実年齢そこそこだけど、夫婦揃って俺の影響なくても若いままだっただろ。どうなってんのお前といいアヤノといい」
「え、それチーフが言います？」
「俺は元々ウルトラマンで光神だからいいんだ」

口を尖らせるレジェンドにそこかしこから笑い声が聞こえ出す。
かくして、グラン＝トリガーを筆頭にジータとビィ、カタリナを新たな仲間に加え彼らは再び合流の場・ポートブリーズへと向かう。
なお、旅立ちの際に村の人々に暫しの別れを告げ、とある親しい老婆の元へ訪れたときにグランとジータはこう言われた。

『お前さん達は、これからそれぞれ異なった大いなる運命が待ち受け

ておる。決して一人で背負い込むのではなく、お前さん達を受け入れてくれたあの光神様達を頼りなさい』

その言葉の意味を知るのはずっと後。

今必要なのは「一人で背負い込むのではない」「レジェンド達を頼れ」という部分だ。

そしてもう一方――

フェードラッヘでは、アサキム・ドーウィンとオカ研メンバーが邂逅し、謎のウルトラマンまで現れた。

「見つけたぞ、アサキム……!!」

「久しいね、前宮流。いや……ウルトラマンオリジンと呼んだ方がいいのかな？」

〈続く〉

――おまけ――

「というかミツバ、操艦初心者なベアトリクスとゼタに任せてよくここまで来れたな……俺ブリッジにいなかったけど」

「いえ、途中アズに変わってもらいましたよ？まあ元々ワンマンオペレーション可能になってますし」

「どさくさに紛れて何アズにやらせてんだオメーは!!しかしアズ、何処で操艦方法知ったんだ？」

「……知らない」

頬を赤らめつつ視線を外すアズ。
うん、可愛い。

「「「ぷんすこー」」」
「オイそこのアーフィスルリアマリなんでご機嫌斜めなんだ」
「いや一人一人呼ぶのが面倒だからって繋げて略すなよ超師匠な兄ちゃん……」
「なら私達は『グラビジー』でどう!?」
「「「シンプルに言いやすいな」」」
「そこじゃねえよ。『グラビティ』……重力って意味を持つ単語に似過ぎだろソレ」

あの蒼い空へ

――ファータ・グランデ空域――

騎空艇や戦艦とは違う一つの乗り物が、ポートブリーズを目指して飛行していた。

その乗り物とは――

『体調に異常を感じたらすぐに言ってくれ。近くの島に着陸する』

「ありがとう。今のところ問題ないわ、ダ・ガーン」

そう、ダ・ガーンである。

正しくはダ・ガーンジェット――ダ・ガーンパトカーとアースライナー、そしてアースファイターが合体したもう一つの姿で、パトカーや新幹線、戦闘機がベースとなっているため騎空艇や戦艦ほどではないにしろ乗員人数には困らない。

「すまないな、俺達まで乗せてもらって」

「いえ、ランスロットさんやヴェインさんにはフェードラッヘでお世話になりっぱなしで」

「そういうなら、あの吸血植物の一件ではタイガやダ・ガーンに頼りきりに近い形であったし、その後のあの黒い機械人形との一件では……」

そう言いつつランスロットが見た方向には、ヴェインとギャスパー、小猫ともう一人――

「うお!?何か凄い感じの出た！」

「ヴェインさん、それXレアのパラレルですぅ！」

「はい、カードプロテクターです。こうやって入れて、傷が付かないようにするんですよ。流さんもどうぞ」

「ありがと、小猫ちゃん。これでよし、と……彼女にも後で普及しよっ

と」
「なあ、流は何か気に入ったのあるか？」
「そうだなあ……俺はこれ！スピリットじゃないし元がマスターレアだけどパラレルだって。ウルトラマンタロウ！」
「「何ですと!?」」
「うわっ!?ちょっ……どうしたの三人とも!?」

タロウの名が出た瞬間、トライスクワッドが一気に詰め寄ってきた。
そのまま見せて見せてという三人に苦笑しながらもそれを見せている青年こそ前宮流――ウルトラマンオリジン。
一応言っておくが、大変……それこそそっくりさんとして応募したらどちらが本物か分からないほどに、メダルで変身する仮面ヒーローの主人公に似ているが別人である。
明日のパンツにこそ執着していないが、当初はホスト感バリバリな服だったものをリアスが（ライザーを思い出して）嫌悪感全開になるため、何故かエスニックファッションに着替えさせたから尚の事瓜二つになってしまったが、気にしちゃいけない。
性格も最初は服装のせいでチャラい野郎と思われていたが蓋を開けてみればこの通り、社交性抜群。
短期間で馴染んでしまい、今やこうしてヴェインらとバトスピに興じるほどの仲の良さだ。

「あ。そういえば似たようなウルトラセブンってカードも引けたんだった」
「「「『うおあああああ!!』」」」
「えええ!?何!?今度はどうしたの!?」

案の定、セブンの名を出した瞬間にトラウマが再燃し始めた一誠とドライグ、トライスクワッド。
詳しく説明すると流のみならずヴェインまで真っ青になる。

「よく生きてたね、それ……」
「駄目だ、俺潰される未来しか考えられねえ」
ここで何故彼らがダ・ガーンジェットでこんなに和気藹々とポートブリーズを目指しているかを説明しよう。

結論から言うと、フェードラッヘにて遭遇したアサキムとシュロウガを追うように出現した流、即ちウルトラマンオリジンの戦いは互角のものであったが、フェードラッヘに被害を及ばさないようにと無意識のうちに防御に回りがちだったオリジンに対し、距離をとったシュロウガが撤退する形で勝敗は決した。

「以前とは比べ物にならないが、僕にはまだ及ばない。とはいえ、シュロウガがスフィアシステムを解放していない状態であることを差し引いても、ここまでやれるとは目覚ましい成長だ。是非そのまま力をつけて『揺れる天秤』を覚醒まで導いてくれることを願っているよ」

さらにロスヴァイセに対しても、また会おうと一言だけ残して例の如く凄まじいスピードで空の彼方へと消えていったのだ。
その後は前述の服装問題を経て、彼がアサキムを追いながら彼方此方の世界を渡り旅をしてきたことを伝えられ、その理由がアサキムが何かをしたことによって老いず、死ぬこともないまま今も眠り続けている婚約者を目覚めさせるためだという。
ちなみその婚約者、リアスを黒髪にしたようなスタイル抜群の大和撫子。
前宮流……勝ち組である。

そんなわけで、現在共に行動しているロスヴァイセやクロガネにいるクロエをアサキムが狙っていると聞き、同行させてくれるよう頼み

込まれ承諾した結果こうして共にポートブリーズを目指しているというわけだ。
　最終的な決定権はレジェンドにあるが、まあ大丈夫だろうと。
「そういえばついさっき聞いたんだけど、何かレジェンド様の方にも新しいウルトラマンが加入したそうだよ。確か、トリガーって言ったかな」
「え!?それマジか木場!?」
「うん。何でも生身でもウルトラマンの時でも剣を使うらしくて、すぐ頭に入ってきたんだ」
「それと……他にもメンバー増えてるみたいです。レジェンド様が引き込んだ女の子とか、知り合いの人とか」

　狙ったかどうか定かではないが、小猫の一言でビシリと場の雰囲気が冷たくなった。
　原因は主にカナエと朱乃で、ロスヴァイセは大人しいフウと違いフリーダムなハクの世話に四苦八苦している。

「えーと……ランスロットさん、ヴェインさん、何でこんなに張り詰めた空気になったんです?」
「いや、俺達も何が何だか……」
「この二人、レジェンド様……今から合流する一番偉い人に想いを寄せてるの。しかも当の本人が無自覚天然ジゴロだから……」
「なるほど、好きな人がモテ過ぎて大変なんだな」

　はあ、と溜息を吐くリアスにヴェインは納得したように頷く。
　しかしながらモテるという方にばかり目を向けてそれ以上に不憫さが増しているということに気付いてあげないのは如何なものかと思う、オカ研顧問にしてウルトラ兄弟の一人である矢的。
　そして――

「……俺、昔と違ってモテねーんだけど」
「スペリオルドラゴンにレジェンド様、そしてサーガ。相手が悪いな、諦めろ」
「お前聖竜騎士じゃなくて実は邪竜騎士じゃねーのか!?」

相変わらず漫才のようなやり取りをしているゼロガンダムとアザゼルであった。

☆

そして、修羅場はやはり一足先にポートブリーズで合流していたクロガネとエリアル・ベースでも発生していた。

「なーんーでーにゃー!!」
「懐かしいのう、何話ぶりじゃ？それ」
「夜一！そんなこと言ってる場合!?レジェンド、また誰かオトしたって!!」

哀れレジェンド、噂が（狙ったわけではないが）事実とはいえあまりに広がる速度が早すぎではなかろうか。
エリアル・ベースではシエテがお約束というかソーンとニオに八つ当たりされ、アルベールは不機嫌なユエルにビリおじ連呼、シミュレーターを設置しに行った束によって何人かが強制参加させられる始末。

「何か最後が一番残酷そうに見えるんだが」
「竜馬様、次はコア・ファイターでバードンを倒して下さい」
「おい難易度極端に上がりすぎだろ!?なんでヴィラ星人の円盤を真イーグル号で倒せからそうなるんだよ!?」

クロエも何だかんだ言って不貞腐れ状態。

そのシミュレーター近くでは『ジムでキングジョーブラックを討て』『ティエレンでアントラーを完封しろ』などという、無茶にも程があるミッションをやらされ（当然クリアできるわけもなく）力尽きた昭弘やシノが倒れている。

「だ……誰があんなのクリア出来るんだ……!?」
「だよな、そう思うだろ……？レジェンド様やアムロ教官ってそれを平然とこなすらしいぜ……」
「「「「ですよねー……」」」」

バケモノパイロット二名を常識に当てはめるべきではない、そう再認識させられるハメになった犠牲者たちの心は一つになった。
それから……

「無理無理無理！きゃー!?」
「回避出来ませんー!?」
「もしもーし、大丈夫ですかー？」
「お前さんだけだな、損傷判定出てないのは」

しのぶはシミュレーターにて、セラフォルーとガブリエルを絶賛フルボッコ中のコジローとただ一人まともにやり合えていた。
シミュレーターだとしてもヒュッケバインボクサーとオデュッセウスブラスティアの激突は相当な盛り上がりだったらしい……撃墜直前のセラフォルーとガブリエルは放置で。

「しのぶちゃん凄いのね！」
「うむ！正面から正々堂々と挑んでいるな！感心感心！」
「機体、とやらの相性もあるのだろうが……あちらの御仁、かなり出来るな。甘露寺の言うように胡蝶の操縦も大したものだ」

元柱の三人も熱中しており、パム治郎はお昼寝中。

純粋にレジェンドらの無事を喜べているからなのだろう……しのぶやセラフォルー、ガブリエルはそれ以外にもありそうだが。

☆

そしてヒリュウ改――

レジェンド一行はザンクティンゼルで一泊してからポートブリーズへ向かうことに決めた後、ミツバに集められ惑星レジェンドより持ってきた機体を始め、様々なものの説明を受けていた。

「それから、レジェンド様」

「ん？」

「レジェンド様の専用機の一つであるグランティードという機体もお持ちしたのですが、あれは二人で乗ることによって真価を発揮する機体と聞いたんですけれど」

「ああ、あれか。最後に乗ったのいつ、誰とだっけ……」

んー、と腕組みしながら考えるものの全く思い出せない。

別に記憶障害でも何でもなく単にド忘れしているだけなのでそこまで深刻でもない。

「つーか、アンタと相乗り出来る奴いるのか？」

「そこよね。レジェンド様って変態機動の常習犯だし」

「我ー」

「「え」」

ぴょんぴょん飛び跳ねて自分が乗る、とアピールしてくるオーフィス。

しかし他の面々も黙ってはいなかった。

「わ……私、訓練頑張るから！」

「ああっ！アマリずるいです！えっと、えっと……私も乗ってみたいです！」
「はわ!?ルリアちゃん、それだと乗りたいだけになっちゃいますよ！私も似たようなものですけど……」
「……私も、戦艦よりそっちがいいな」
「「!!」」

アズの発言に「また増えた」と衝撃的な表情になるアマリ、ルリア、アーシア。
さらには……

「戦艦よりはそっちの方が動かしやすそうよね」
「なあ団長、それって剣みたいなのあるか!?」
「ん？剣というかランサーだけど剣っぽいというか、テンペストランサーというのがあるが」
「じゃあ私も立候補だ！団長のパートナー役！」
「え、槍なら俺の出番じゃないですか超師匠」

ゼタはまだしもベアトリクスは普通に立候補してくるし、そんな中自己主張してくる唯一の男性たるゼットは空気読め状態だが、変なところでアホの子属性が発揮されているのか気付いていない。
結局レジェンドが出撃する際に選ぶということで話がついたのだが、何名かは不満気味。

「ちぇー……ん？何だあれ。なんか変わったやつあるぞ」
「どれよベア？」
「ほら、あれだよあれ。なんか頭にバッテンが三つくっついたような」
「ホントだ。何か継ぎ接ぎっぽい感じっていうか、補修した感じね」
「あれはヒュッケバイン３０ですね。レジェンド様が最初作ってまして、そこから束博士に変わって、最後にスワン社長が開発担当者になったことであちこち合わない箇所が出てるらしくて。結果あんな

感じになったそうですよ。ちなみに名前の３０の由来ですが、Ｘ＝１０が三つ並んだ頭部に加えて開発担当者が三人かつ一人で十人分を超える作業量の末に開発されたから、という意味からだそうですよ」

ミツバが説明するとゼタとベアトリクスはへえーとその機体――ヒュッケバイン３０を眺めていた。

そんな三人……ではなくヒュッケバイン３０を、アズも遠くから見つめている。

（あちこち傷だらけ……私と同じね）

「どうした？」

「ひゃうっ!?え、あ……レジェンドさん……」

「またネガティブになってるな？」

そう言うとレジェンドは目にも止まらぬ早さでアズの口に持っていたカロリーメイト（フルーツ味）を突っ込んだ。

「むぐ!?」

「無理に笑えとは言わん。だがそんな表情になるなら一人で悩むのはやめろ」

そのままスポーツドリンクをアズの口に流し込んでいくレジェンドはある意味鬼畜である。

「他の奴に胸の内を吐露するのに抵抗があるなら俺に愚痴ればいい。少しは身近な奴のことを考えてみろ。今までどうだったかは知らんが今は俺やミツバがいるんだぞ」

そう言われると何も言い返せなくなるアズ。

ただ、自分を思ってくれていることは気付いていたので、なんとなく嬉しさと申し訳なさを感じつつ小さく頷く。

「よし。で、何でヒュッケバイン３０を持ってきたかはいいとして……どうしてゼルガードまであるんだ？あれは特殊な素質が必要な上、起動及び戦闘可能になるラインがバカ高いって理由でホグワーツに保管してあったはずなんだが」
「これはダンブルドア校長先生が自らお持ちになりましたよ。何でも『きっとこの機体を扱える子が出てくるだろう』って仰ってました」
「何その漠然とした理由」
「レジェンド様が言います？それ」

ミツバが溜息を吐きつつ言うも、レジェンドが気にしたのは別のこと。

そう、サギリと九重の乗る機体である。

「そういや、サギリ。お前と九重の機体はどれだ？確かティラネードだか何だかって機体を開発中だとか言ってたのを覚えてるんだが」
「そっちはサイゾウとか別の課のメンバーに丸な……任せてきたわ」
「オイお前今丸投げって言おうとしただろ」
「気にしない気にしない、私と九重ちゃんが乗るのはこっちのベルゼルートよ」

サギリは別のハンガーを指差し、そこを見ると青くスマートな機体が鎮座している。

「接近戦のことを頭に入れてなさそうな機体だな。あんな装備で大丈夫か？」
「大丈夫よ、問題ないわ。そもそも逆に接近戦しか頭に入れてないようなアルトを使うレジェンド様に言われたくないわね」
「皆そう言うけどちゃんとネオ・グランゾンは射撃武器あるからな!?」
「確かにそうだけど、あれってどうやっても超威力武器の方が目につくでしょ。射撃というより戦略兵器じゃない」

レジェンド相手にカウンターしまくるサギリ。
『どんな時でも私らしく』をモットーとするキャリアウーマンは相当な手練であった。
こりゃ今何を言ったところで反論されるだけだな、と思ったレジェンドが最後に見たのは先刻説明されたヴァングレイという、千歳とナインの操る機体。

「やっぱりガチガチの武器庫だな、コイツ。装甲が厚かったり火力重視だったりとベルゼルートとは真逆だ。ふむ……空戦可能で高機動なのは一緒だが、機動性はベルゼルートのが上か。コンセプトからしてそれは仕方ないな」
「単機での戦闘も可能ですが、本領発揮はやはり援護や支援かと」
「だろうな。下手に単独で前線に投入するより誰かと組ませた方が輝くタイプだ。サーガのフルセイバーとかな」
「……何でサーガ様とその専用機を引き合いに出したんです？」

何となく理由は分かるものの、とりあえず聞いてみたミツバだったがレジェンドは軽く笑いながら「さあな」と答えるだけ。
まあいいかと思い、大きな用事としては最後に――

「えーっと……ウルトラマンゼットさん？」
「ん？何でございましょう？」
「アムロ大佐から何かの機体データが入ったディスクを預かってるんです。確か……『今までの機体と違って出力が桁違いだから、シミュレーターの方で少しでも慣れておくように』と」
「マジ話でありますか!?」

いきなり身を乗り出したゼットにビクッとしつつ、ミツバはケースに入ったディスクを差し出すと、おそるおそる受け取ったゼットはラベルを確認する。

そこに書かれていたのは『ＥＸ―Ｚ　ＤＡＴＡ　ＩＮＳＴＡＬＬ　ＤＩＳＣ』……ゼットがデザインしたオリジナルＭＳのシミュレーター用データが記録保存されていることを示していた。

「イィィィエァァァァァ!!!」

「「「「!?」」」」

その場の全員が驚いてゼットを見ると、プラ〇ーンのポーズでケースに入っディスクを掲げていた。

どんだけ嬉しかったのかはポーズ以前に発した声でよく分かるだろう。

「ど……どうしたんだよ青銀の兄ちゃん!?」

「あー……ありゃ喜びがウルトラ天元突破してるんだろ」

「ウルトラ天元突破……!?よく分かんないけど凄そう!」

「例えるなら……そうだな。ジータまでウルトラウーマンになった途端、お前達の父親が涙鼻水垂れ流しで帰ってくるぐらいの衝撃だな」

「クソ親父による衝撃はいらねぇ」

「「「ジータ!?」」」

父親のことになるといつもの愛らしい笑顔から一転、ゲス野郎を見るような表情になるジータに、声こそグランとビィとカタリナだけ発したが全員がドン引きしている。

そこまで嫌なのか父親のこと……と思ったが、レジェンドはサーガを立派に育てたし、ムサシは現在進行形で円満家庭の父親やってるしで尚更ムカつき度が上がったのかもしれない。

それから一通り今後の打ち合わせを済ませ、明日の為にその1・寝るべしを実行しようとした彼らだが、案の定レジェンドには不憫が降りかかった。

「お邪魔します」

「お……お邪魔します……」
「むぅ～……」
「ぷんすこー」
「……俺が死ぬのは戦場ではなく、自室のベッドで知らぬ間にかもしれない」

どことなく不機嫌なアーシアとオーフィスに、いつもの調子でアズを連れてきたミツバと、枕を抱きかかえつつ恥ずかしげなアズ。
傍から見れば羨ましい限りだが、レジェンドからしてみれば明日にもルリアやアマリらが不機嫌になり、そのご機嫌取りしなければならなくなるためげんなりするだけ。
案の定というか、二人に加えベアトリクスまで加わって翌日出発前に責め立てられ、レジェンドは燃え尽きていた。

「おいレジェンド、生きてんのか」
(燃え尽きたよ……真っ白だ……)
「ヤバいですよ店長！このまま超師匠が消えたら物語が続かな……」
「次回から『ジャグラーが行く！蛇倉苑繁盛サクセスストーリー』にタイトル変更だな。ジャンルは飯テロモノだ」
「店ッ長オオオオオ!?」

メタ発言で馬鹿騒ぎしつつ、彼らの果てなき旅路が本当の幕を開ける。
数多の世界を見て、彼らは何を思い、どう成長していくのか――今はそれを知るすべは無い。

〈第7章へ続く〉

とある世界――
オーブ連合首長国と呼ばれる国にて――

「ではシモンズ主任、アストレイレッドフレームの運用はそちらにお任せします」
「それは嬉しいのだけど……本当にいいの？貴方の上司の方から賜ったものだと聞いているけれど」
「チーフからは好きにしていいと言われていますので構いませんよ。訓練用の一機を貰っただけですし、僕には『彼女』がいますから」
「そう……なら、ありがたく今後の機体の参考にさせてもらうわ。本当にありがとう、ダイゴさん」

彼女――エリカ・シモンズが頭を下げると、続けて穏やかだが威厳のある人物が前に出る。

「マドカ・ダイゴ殿……我がオーブのために技術的支援やパイロットの育成、誠に感謝する。カガリもそなたによく懐いて、先日までは行ってほしくないと駄々をこねておってな」
「あはは……随分お世話になりましたし、強いて言うなら、あの技術を悪用されるようにだけはしないで下さい。あの機体や、あれに使われている技術はこの世界に危機が迫ったときに使われるべきものです」
「無論だ。そなたの言う怪獣や宇宙からの侵略者がどのような力を持って現れるかは未知数だ。それ故に我らはナチュラルとコーディネイター、連合とＺＡＦＴなども別れて戦争をしている場合ではない。互いに手を取り合って未曾有の危機に立ち向かわねばならん」
「はい。一度僕はこの世界を離れますが、今度は仲間達と一緒に戻ってきます。その時は、どうかまた」
「うむ。身体に気をつけてな」
「カガリ様だけじゃなくてあの娘達のことも気にかけてあげて頂戴ね」

「ええ、今度来た時はまた訓練に付き合うと伝えて下さい」
「分かったわ。貴方の機体……マスドライバーである程度まで打ち上げればいいのね？」
「はい、そこからは自力で大気圏離脱出来ますので」
「本当に呆れたスペックだわ……こっちのＭＳがその出力に到達するまで一体何年かかるのかしら」
「まあ、作ったのチーフですし……では、お二人もお元気で」

そう言って頭を下げ、男性――マドカ・ダイゴは己の愛機へ向かう。

「さ！行こうか『ＲＥＮＡ（レナ）』」
『ええ、いつでも行けるわ、ダイゴ』

「マドカ・ダイゴ、Ｇクルーザー発進!!」

ウルトラマンティガ＆ウルトラマントリガー　光の世界の戦士たち
新しい日々

様々な出会いと出来事を経て、ヒリュウ改にクロガネ、エリアル・ベースとダ・ガーンジェットは無事誰一人欠けることなく合流を果たした。
予想通りというか、レジェンドはもみくちゃにされ、ゼットは子供達に囲まれ、シエテはオーフィスの八つ当たりでドロップキックされる始末。

「ちょっ!?俺の扱い変わんないんだけど!?」

トリガーことグランや、オリジンこと前宮流を中心に新メンバーの紹介を終えて彼らがまず取り掛かったのはグランやジータらがメインに使う騎空艇の確保。
これはポートブリーズにあったグランサイファーと操舵士のラカムを紆余曲折の末、加入させることに成功。
さらに勢いに乗って、バルツ公国でイオという魔法使いの少女を、アウギュステ列島でオイゲンというベテランの銃士を、そしてルーマシー群島ではロゼッタという美女まで仲間に引き入れる。
その後、城塞都市アルビオンでカタリナをお姉様と慕うヴィーラが、ゾンビ（なのに妙に明るい）ばかりが住んでいた霧に包まれた島では幽霊少女（だけど普通に物に触れたり出来る）フェリを、さらにガロンゾという職人の島ではグランサイファーを作ったという人型の星晶獣のノアまで加入（名前のおかげでレジェンドや一部の者が騒いだのは言うまでもない）。
一気に団員が増えたこともあり、それぞれがメインに生活する艦艇が以下のように決まった。
まず、レジェンド一家やオカルト研究部関係者はヒリュウ改が拠点

となる。
親衛隊や遊撃隊の所属ではないため、ここに更に凱や命、ボルフォッグらＧＧＧや流＝オリジンも同乗。
続いて、クロガネにはサーガやその直属の神衛隊の乗艦となり、彼らと親しいレイト＝ゼロやミライ＝メビウスもこちらに乗ることに決定。
エリアル・ベースは我夢や藤宮、シエテが中心となりそのまま空の世界出身メンバーによって運用されることになった。機動兵器の格納数が少ないため、人数が多くても何ら問題がないからである。
そしてグランサイファーはその名の通りグランをリーダーに、ジータやビィ、カタリナを軸に上記の加入メンバーで構成され、そこにムサシとアサヒも加わる。
各艦艇間は転送装置によって自由に行き来が可能だが、部屋に関してはレジェンドや一部の者が各々のメイン艦艇以外にも持っている場合を除き、それぞれメイン艦艇のみに存在。
一応、部屋主の承諾があればお泊り自由。
当然のようにエルステ帝国には目をつけられるも、ザンクティンゼルの時とは次元が違うレベルの戦力やコネのある彼らウルトラ騎空団を相手にまともに戦えるわけもなく、見過ごされるようになっていた。
喧嘩売ったら壊滅必至だから。
さて、そんな彼らだが実はグランが自らの意思でトリガーに変身するとき、例の如くというか、トラブルがあった。
都合良くレジェンドや流がグランサイファーに来ているときにその瞬間が訪れたわけなのだが、順を追って説明していこう。

「まずはこれをここに差し込んで……！」

ティガと関わりがあるレジェンド命名による、ＧＵＴＳハイパーキーをＧＵＴＳスパークレンスにセット、ボーパルブレードの要領で

軽く回転させた……のだが、差し込みが甘かったのか、ＧＵＴＳハイパーキーがすっぽ抜けた。
しかも見事にここは空の上、すっぽ抜けた先は……即ち。
「わあああ!!ちょっと待っ……てうおあああ!?」
「「「「グランんんんん!?」」」」
飛びつきキャッチしたが、空の底へとダイビング……する直前に。
「させん！」
「超師匠！」
「３人とも！」
グランの足をレジェンドが掴み、続けてゼット、そして流の順に足を掴んでトーテムポール状態に。
そのまま手すり部分から若干身を乗り出すくらいの流に比べ、残りの三人は下手すりゃ空の底へダイビングしかねないような宙ぶらりん。
何というか、パー○ンみたくなっている。
「死ぬ！死にますよねコレ!!」
「グランんんん！絶対にソレ離すなよ！冗談抜きで離すなよォォォ!!」
「超師匠もグランの足離さないで下さいよォォォ!!」
「さ……三人分はこの体勢だとキツッ……」
「「「頑張れオリジンんんん!!!」」」
「普段は流って呼んで下さ……ちょっ、そろそろヤバ……」
「レジェンドとゼット、空飛べる」
「あ」
「え？」
レジェンドにくっついて来たオーフィスが言った一言でレジェン

ドとゼットは思い出した。
最近生身ないし人間大サイズで飛んでいなかったからすっかり忘れていたが、そもそも二人は前回来た時にオーフィスとゼットがやらかして空の底へレジェンド諸共落ちていく直前だったのだ。

「「シュワッチ!!」」
「「「「えええええ!?」」」」

ゼットはレジェンドの足を離して両手をピンと伸ばし、レジェンドはグランの片足を掴んだまま普通に空を飛ぶ。
グランはあまり変わらないが、今度はゼットの足を掴んでいた流がゼットにぶら下がる格好になってしまう。

「おおおおお!?俺飛んでる変身しなくても飛んでるってそうじゃなくてえぇぇ!!」
「すみませんレジェンドさん……僕ちょっと……頭に血が……」
「「あ、ヤベ」」

すぐにグランサイファーの甲板に降りたのだが、やはりそこで「飛べるなら最初からそうしろ」と責められることに……なったのだが、普段は多少なりとも謝るレジェンドがこの日、ここ最近のストレスの積み重ねによって爆発した。

「唯一ちゃんと助けようとした上に最後まで踏ん張ってた流に言われるならまだしも、お前達はアタフタしていただけだろうが!!俺にあーだこーだ言う前にすべきことがあるんじゃないのか!?あ゛!?」

その迫力はグランが変身しようとした理由である、現れた怪獣のギコギラーすら怯み、攻撃を一時中断してしまう程で、これはマズいとレジェンドに謝るも……

「俺じゃなくて助けが必要だったグランや一人甲板で踏ん張ってた流にだ!!!」
『四人ともすみませんでしたぁっ!!!』

ここで二人にだけだとまた何か言われそうなので、全員が素直に四人に謝ることでことなき事を得たという。

「……それから、ゼットはよくやった」
「あ、ハイ。どうも……で、仕切り直し変身しません？」
「だな」
「下手に格好つけるのやめときます……」
（あれ？何か忘れてるような……？）

とりあえずギコギラーも空気を察して別の艦に攻撃を仕掛けに行ったのは良かったのだが、今度は別の問題が巻き起こる。
しっかりとＧＵＴＳハイパーキーをＧＵＴＳスパークレンスにセットし、ゆっくりと前方に半円を描くように見せつつ、左腕を右腕に乗せ――

「未来を築く、希望の光！ウルトラマントリガー!!」

カチッ

「「……あれ？」」

カチッカチッ……カチカチカチカチ

「そんな！何の反応もない!!」
「バカな！プロセスは完璧のハズだぞ!?」
「トリガーとかハイパーキーも問題ないでございます！マジでコレはイカれてないスかね!?」

「……あ」

騒ぎ出した三人を見て、流は忘れていた何かとやらを思い出した。
彼もＧＵＴＳハイパーキーとＧＵＴＳスパークレンスに似た感じの変身アイテム『メモリーキー』と『マジックギアレンズ』を使うのだが、それが功を奏したというべきか、グランのそれが動かない理由に心当たりがあったのである。

「ちょっといいですか」
「ん!?どうした!?」
「えーっと……とりあえずハイパーキー抜いて……こう」

カチッ
『Ｕｌｔｒａｍａｎ―Ｔｒｉｇｇｅｒ　Ｍｕｌｔｉ―Ｔｙｐｅ！』

「「「あ」」」
「やっぱりそうだ。ここ、ここ。ここ押してキーを起動して待機状態にしないと駄目なんですよ。俺のもそんな感じだし。これでもう一度セットしてみて」
「あ、はい」
『Ｂｏｏｔ―ｕｐ！Ｚｅｐｅｒｉｏｎ！』

もはや三人は（ 。 д。）の表情で顔を見合わせ、そのまま流の方を向いて彼を本気でビビらせてしまう。
そんな彼ら三人の背後ではＲＰＧでレベルアップ時にかかるような短いＢＧＭがオーケストラアレンジされて流れ出しており、彼らから目を反らし……もとい、離しているギコギラーにとってそれは処刑用ＢＧＭ一歩手前な代物。

その後、無事アイテムを使った初変身を遂げたトリガーが、変身時

の勢いを殺さずギコギラーの背中に蹴りを叩き込むと、ギコギラーは島に落下。

するかと思われたが、位置がズレて島どころか空の底、赤き地平まで落下していった。

さすがにそこまで降りたくはないので放っておいたのだが、元々弱点が背中だった上にそこへ不意打ちしたこともあり、ついぞギコギラーは戻って来ず。

近くの島に着地したトリガーはチラリとギコギラーが落ちた辺りを見て静かに佇んでいた。

その背中は少しばかり哀しげだったという。

こうして、初登場ではビシッと決まったのに、初変身では何というか……勝ちはしたものの、哀愁漂う結果になってしまったトリガー。

初登場時、プラズマスパーク・ブレスを忘れて、地球来訪直後に人間大で正座したままカラータイマーを鳴らすハメになり、レジェンドと一体化することで窮地を脱したゼットよりはマシかもしれない。

「今日の教訓……ＧＵＴＳスパークレンスはクルクルさせてはいけない」

「俺とゼットの見せ場なかったな。せっかくベルトにメダルセットしてスキャンするとこまで来てたのに」

「超師匠、何でゼットライザーじゃなくてベルトにセットされてんですかね」

「だってそこに明日のパンツいるんだしオマージュしないとダメだろ」

「オマージュどころかウルトラメダルである以外まんまなんですけど!!」

「それより俺どうして明日のパンツとか言われてるの!?」

「だってお前タロウ・トレギア・バロッサ星人のメダルでタトバコンボになるんだろ?」

「物凄くバロッサ星人だけ浮いてるんですが!!」

味方なら誰であろうと自分達の日常に引き込んでいくレジェンド一家、既にグラン達や流までその空気にどっぷりハマってしまっている。

☆

とある日のエリアル・ベース。

束の八つ当たりによって何名かが放り込まれて強制訓練させられた機動兵器シミュレーターだが、レジェンドらが合流してからは一気に好評となっていた。

理由としては、まあ大半がレジェンド絡みだが、店長ことジャグラーのザンクティンゼルでの無双ぶりに触発された者や、一足先に合流していたクロガネ組の訓練風景から興味を持った者、更にはウルトラマンとして闘う我夢を手助けしたいというジークフリートのような者などが頻繁に利用しているからである。

「ふんふん、なるほどなるほど～……へえ、やるもんだねぇ」

「束、そろそろ降りてくれ」

「えー!?だってここ数日レジェくん不足なんだよ!?だからもうちょい!」

現在、束はレジェンドの膝に座ってシミュレーターの成績データを確認中。

ウルトラ騎空団メンバーで空の世界出身者のみに絞ってチェックしているが、数名抜きん出た成績保持者がいる。

前述のジークフリートはその筆頭だ。

「上位陣のスコアは接戦だけど、彼は十分合格レベルだね。殆どがMSとか使ってるのに特機かあ……確かにウルトラマンと並んで立つ

なら大きい機体の方がベターかな」
「こうして見ると空の世界出身は特機、それ以外はＭＳやＰＴに寄る傾向が見受けられる。藤宮はともかく我夢も特機寄りだ」
「ふ～ん……あ、ゼッくんにアレ届いたんだよね？スコアの伸びがとんでもないことになってるよ。やっぱ自分で考えた機体が現実のものになるとかマックスハイパーテンションになっちゃうもんね～」

　束が操作した全シミュレーター総合成績で見ると、神衛隊勢や専用機持ちを除くとゼットがいつの間にかトップに載っかっていた。

「他の子も結構伸びてるね～ってか、しのちゃんホントに大正から来たの？いやきょーくんにも言えるけどさ。普通にスコア高いんだけど」
「適性の問題だろうな。小猫のフェアリオンのスコ……あ？何だこれ相方レイヴェル？アーシアじゃなくなったのか」
「アーちゃん元々戦闘向きじゃないし。主に性格がね」
「シミュレーターでデュラクシール引き当ててたけどな」

　そんな会話をしながら二人はあることを決める。

　あくる日の正午、レジェンドがヒリュウ改から、束がエリアル・ベースから『第一回レジェくん＆束さんのウルトラ騎空団・新パイロット選抜結果発表会』なるものが放送され始めた。
　シミュレーターのスコアを中心に各種項目を審査し、総合的に優秀だった者が晴れて機動兵器を扱う機動部隊の一員になれるというものである。

『なお、私のアシスタントにクーちゃんが！そしてぇ！』
『俺のアシスタントにはミツバが参加してくれている』
『『よろしくお願いします』』

『んじゃま早速行ってみよう！まず見事機動部隊入りが決定したのは～……ジーくん！』
「「「「誰？」」」」
　束お決まりのあだ名呼びであった為、大半の者が？マークを浮かべてしまう。
『ジークフリート様です』
「「「「あ、納得」」」」
　クロエのフォローのおかげで理解出来た団員達は、頷きつつ「さすがジークフリートさん」という声が聞こえてきたがいつものことなので割愛。
『乗機はあとで発表するからね！あと、選抜メンバーは束さん枠とレジェくん枠があるから』
「何か違うのかな？」
『束が時間欲しがってるから俺の方は一括開示する。詳しく聞きたければ個別に聞きに来るように』
【機動部隊入隊許可・レジェンド枠】
◎特別推薦枠［ウルトラマンゼット］
○今回最優秀枠［朝倉リク］
○優秀枠［胡蝶しのぶ］
○候補枠［リアス・グレモリー］
［兵藤一誠］
［ウルトラマンタイガ］
「ん？特別推薦枠？」
『神衛隊第四分隊機動部隊隊長にして神衛隊最強と呼ばれるアムロ・レイ大佐直々の推薦状がある。加えて束とコジローのもな。それに

元々こいつの成績はほぼトップ争いレベルだ。問題ない』
「アムロ教官殿直々とは……やるな、ゼット殿」
「やられて精神的にキたりしなかった？」
「へ？いや俺なんかまだまだペーペーの新米パイロットですし、負けたら負けたで次どうすっかなーぐらいにしか思ってませんでしたけど」

アホの子ポジティブ補正がいい感じに働いていたらしく、レイトや黒歌と違ってプラスに捉えていたようだ。
厳勝や三日月らと話が弾んだらしく、「ファンネルどうした？」「狙っても避けられるんでこっちも避けに徹しました」など早速お互いの戦闘を振り返っている。

「リク兄さんおめでとうございますぅ！」
「あはは、ギャスパー君ありがとう。僕と合った機体使えるようになってからかなぁ、成績伸びたの」

リクが最近シミュレーターで使用可能になった機体、ガンダム試作3号機。
スーパーロボットをも超える圧倒的スケールと、それに見合った大火力に予想外の機動性を兼ね備えた化け物である。
先日の対戦モードでジータやアルベール、ユエルらを一方的に蹂躙し、ジータからは「ずるーい！」、ユエルからは「何やの、あの星晶獣よりタチ悪いデカロボは⁉」などと文句を言われるぐらいの。

「わー！しのぶちゃん凄い凄い！」
「煉獄もかなりのもののはずだが、何故名前がない？」
「それはおそらく既に頑治郎があるからだな！加えて一応俺は神衛隊所属でもある！」
「しのぶが入ってたのは嬉しいけど、私がかすりもしてないのはどうしてぇ⁉」

「姉さん、あの日リアスさん達とシミュレーターしに来るまであまりやってなかったでしょ？」

元鬼殺隊の面々は総じて良い成績を残しているが、やはりしのぶは抜きん出ている上、レジェンドの調べで念動力の資質もあったようで、本格的なヒュッケバインＭｋ―Ⅲのパイロットデビューも遠くないかもしれない。

ちなみに彼女の次に上手いのは小芭内。

カナエお姉ちゃんはもっと頑張りましょう。

「イッセー！リアス！俺達の名前が！」

「うっしゃー！候補枠だけど頑張った甲斐あったぜ！」

「三人で何度もコンビネーションの練習したものね。努力が実を結んだわ！」

タイタスとフーマはＭＦ枠なので、名前が入ってなくとも気にならないらしい。

タイタスは最近やたら砲丸投げしたがるし、フーマはやたら回転しまくっていて不安にはなるが。

それはともかく、彼ら三人の近くでは先輩として、はたまた教官として成長を見守ってきたレイトやマリーダも喜んでいる。

「一人一人じゃまだまだだが、あいつらはコンビネーションで光るからな。これで個人で一人前になれりゃ文句なしってとこか」

「機体の特性が上手い具合にバラけていて、役割分担がハッキリしているのが彼らの長所だ。伸ばすならそこの方がいい」

しかし、喜ぶ者がいれば落ち込む者もいる。

肩を落とすものや、奮起する者など様々であったが、レジェンドが付け足した一言が皆に希望の光を灯す。

『言っておくが、今の発表は規定の合格ラインに『達した』者の発表にすぎない。呼ばれなかった者達も訓練の積み重ね次第で随時入隊出来る可能性がある』

要は教習所みたいなもんだ、と締めくくったレジェンドに歓声が聞こえてくる。

ザンクティンゼルでの闘い以降、これから戦力になる者はいくらいても困ることがないからだ。

他にも堕天司やトレギアなど、多くの難敵と戦うことにもなるだろうし、戦力が多いに越したことはない。

『レジェくんのが終わったみたいだし、次に残りの束さん枠ねー。まずセラちゃんとソーちゃんの姉妹でワンツーフィニッシュ！』

「え……？」

「やったあああああ!!」

先日合流したばかりの生徒会メンバー、その筆頭たるソーナと、姉で魔王で束のマブダチなセラフォルーが見事機動部隊入り確定。

ソーナもしのぶ同様、念動力の資質が確認されたのでそっち方面も育成していく方針らしい。

『あ、セラちゃんの機体はレジェくんの担当ね。ファービュラリス、あれエレメント系だから私よりレジェくん向き』

……もうセラフォルーが喜びのあまり鼻血噴出。

駄目だこの姉何とかしないと。

『それからねー、ゼルガードはアマちゃんルリぴっぴ、ヒュッケ３０がアズにゃん』

「「ええっ!?」」

『何故だ……アズにゃんと聞くと小猫がイメージされるのは』

『……アズに猫コスさせます？』
「!?」

レジェンドの呟きに対するミツバの一言にアズが戦慄した。
だが戦慄するにはまだ早い……このウルトラ騎空団、ファッションおもちゃにしてくる面子が多過ぎるのだ。
乱菊然り、セラフォルー然り、サギリ然り。
その日、就寝時にアズはレジェンドの部屋に入った瞬間ロックをかけ、レジェンドにしがみついて震えながら寝たらしい。
翌日落ち込んでいるミツバが見られたそうな。
閑話休題。

『ちょっちその2機特別でねー、理由は追々機会を見てお話しするので今回はスルーで！』
「アマリ、理由って何でしょう？」
「気になるわね……星晶獣絡みならルリアだけだし」
「我と同じでぺったんこー」
「!!」

何がとは言わないが、小さストップからオーフィス≒ルリア＞アマリ＞アズ≒アーシア＞＞＞ミツバ。
大体こんな感じである。

「うん、私は大丈夫……」
「アズさん！何が大丈夫なんですか!?わ、私はぺったんこじゃないです！」
「ルリアさん、貧乳はステータス、です」
「小猫ちゃん!?」

もはやガールズトークに突入してしまっている面々も出てきたため、その後は搭乗機体の説明をざっとするだけで第一回は終了。

当然、空の世界出身で初のパイロットとなるジークフリートの乗機がグルンガスト零式と判明した時は大反響だった。

その日から数日後、彼らはとある怪獣を迎撃すべく奮闘することになる。

同時にそれは、空の世界にとって恐るべき脅威が訪れる前兆でもあった。

〈続く〉

星の世界より来るもの

星の世界――他の世界では宇宙と呼ばれるそこから、一体の怪獣が空の世界目掛けて突き進んでいた。
月の近くまで来たその怪獣は、いざ空の世界に降りようとした時、何かからの攻撃を受ける。

「こちらガンフェニックストライカー、ヒビノミライ！怪獣と接敵、データ送ります！」
「同じくグラハムガンダム二世、グラハム・エーカー！敵怪獣は堅牢な外骨格状の皮膚を有している模様！攻撃に反応はしたが効果は薄い！各艦並びに機動部隊は大気圏内戦闘の準備に入られたし！」

怪獣の接近を察知したレジェンドによって、自力で大気圏離脱可能な中で機動力に優れたガンフェニックストライカー、そしてガンダムアメイジングエクシアＧＦとそのパイロットであるミライとグラハムが偵察、可能ならば撃退するために先行して宇宙に上がってきたのだ。
しかし、外骨格のようなものに包まれた皮膚は凄まじい防御力を発揮し、２機の攻撃を受け付けない。
ガンフェニックストライカーはともかく、エクシアＧＦは接近戦でその真価を発揮する機体。
ＧＮソードのライフルモードは接近戦へと持ち込むための武器としてぐらいの威力しかないので攻撃力不足は当然である。

「予想よりも飛行速度が早い……！やはり大気圏内戦闘になるぞ！ミライ殿、宜しいか!?」
「はい！既にグラン君……トリガーが戦う気でいます。空の世界は自分達が守ってみせると」
「勇ましいな。だが私達から見れば、まだ芽吹いたばかりの若草。しっかりフォローしてやらねばな」

「はい。グラハムさん、怪獣が大気圏に突入！こちらの予測コースとほぼ一致！」
「よし！我々も追跡しつつ、本隊と連携行動に移る！」
「了解！」

☆

大気圏を突入したその怪獣は、雲海を抜けてすぐにウルトラ騎空団・空戦機動部隊と交戦に入っていた。
『空の底』に落ちぬよう、トラブルがあってもフォローし合えるよう三機以上がチームになっており、今回その中核となっているのはロスヴァイセの駆るサイバスター。
随伴機にガリルナガン、さらにいざという時のために備えてレイトがダブルオーザンライザーで同行している。

「見た目通り硬いのに早いっ……！」
「あいつは宇宙有翼骨獣ゲランダってやつだ。ダイナが戦ったってガーディアンベースのデータベースで閲覧したからな」
「どうでもいいですがベースが二回続くと何か言い難いですね」
「そうだな……っとぉ！けどまあ俺達の役目はあの人気の無い島の陸地ないし上空までの誘導だ。あんまり俺らが出しゃばっちゃ、後輩の出番がねえからよ！」

ダブルオーザンライザーはＧＮカタールを投擲するが、文字通りのかすり傷しか付けられない。
しかし、それでいい――何故ならば狙いは目的の島の上空へと移動する自身へと向ける事にある。
それに続いてサイバスターもハイファミリアを、ガリルナガンもトライ・スラッシャーをダブルオーザンライザーと同じ方向へと飛行しつつ射出し、ゲランダの意識を集中させていく。

『ニャニャ～』
「ギシャァァァァァ!!」
「何かハクって煽りスキル高くありません!?」
「ですが、おかげで目的地への誘導は完了しそうです。あとは彼に任せましょう」

そう言うクロエの乗るガリルナガンへとゲランダが狙いを定め、突撃――

「未来を築く、希望の光！ウルトラマントリガー!!」
『Ｕｌｔｒａｍａｎ―Ｔｒｉｇｇｅｒ！Ｍｕｌｔｉ―Ｔｙｐｅ！』

ドガァァァァッ!!

「ギィエェェェェ!?」

――する前に、グランがトリガーへの変身と同時に繰り出したパンチを下方から食らい、ゲランダは回転しながら島の地表に落下。
空中で体勢を整えて構えるトリガー。
ゲランダはド派手に地表に激突して土煙を上げるも、それが晴れるとまるで何でもないと言わんばかりピンピンしており、広げていた翼を折り畳む。
トリガーは島の地表へと着地し、ゲランダと組み合い本格的な戦闘へと移行。
グランサイファーやエリアル・ベースから仲間達の声援が聞こえてくる中、トリガーは幾度となく打撃をゲランダに打ち込むも強固な外骨格によってダメージを軽減され、思うように事が進まない。

（なら！）

『Ｃｉｒｃｌｅ―Ａｒｍｓ！』

トリガー＝グランが念じると、ゴルバーを打ち倒した時に手にした剣、サークルアームズがその手に収まる。

いつの間にかレジェンドから渡されたブレスレットに収納されていたそれは、トリガーの意思一つで手元に収まる上にグランの時でも使用可能となっていた。

「チャアッ!!」

「ガァァァァァ!!」

トリガーがサークルアームズ・マルチソードを振り上げ、ゲランダを切り裂くと先程よりダメージが入っている。

決定打にならなくとも痛手が与えられるなら、とサークルアームズで着実にゲランダにダメージを積み重ねていくトリガー。

だがここでゲランダも反撃に出る。

トリガーを引き離すべく、口からジービームを吐きトリガーに距離を取らせる行動をさせたのだ。

側転やバク転を駆使して回避するが、結果としてゲランダの思惑通り離されてしまったトリガーだが、ここで彼は今まで打撃や斬撃では決定打にならなかったことや、ある程度距離が離されたことで一気に勝負を決めてしまおうと考えた。

サークルアームズを地面に突き刺し、両手を腰で握り、それから腕を伸ばしたままでクロスさせ、左右に開いていくと凄まじい光が集約されていく。

そしてそのままＬ字型に腕を組み――

「チャアァァァァッ!!」

トリガー必殺のゼペリオン光線が発射された。

まさか距離を離したことが仇になるとは思わなかったのか、ゲラン

ダは避けることなど出来ずゼペリオン光線に直撃、同時に大爆発する。

「ようし！すっかり様になっちまったな、グラン！」

「タイガとかゼットとか、色んなウルトラマンがいるけど、あたし達のウルトラマン……トリガーも負けてないんだから！」

「一番はレジェンド、これは我も譲らない」

ラカムがグランサイファーを操舵しつつ笑い、イオが自慢げに言ったことに負けじと遊びに来ていたオーフィスが言い返す。

微笑ましい光景であったが、直後のレイトの声でその空気は吹き飛んだ。

「終わってねえ!!油断すんな!!」

「「え？」」

「グガアァァァァ!!」

「グゥアッ!?」

爆炎の中から、炎に包まれたゲランダが飛行しつつ突進してきたのだ。

無傷ではなくても五体満足な姿でいきなり突撃してきたゲランダに虚をつかれ、トリガーは直撃こそ免れたが大きく吹き飛ばされてしまう。

「ウソ!?」

「野郎、なんて硬い野郎だ!!」

それを見ていたレイトはちょっとヤバいか、と変身出来るようにス

タンバイしたが、それは予想外の出来事で不要になる。
トリガーが起き上がり、再びゼペリオン光線を打ち込もうと発射動作を始めた。

「そこだ、行け！トリガー！」
「……何か来る」
「オーフィスちゃん、何かって……!?」

オイゲンがエールを送った直後、オーフィスが何かを察知したことにロゼッタが尋ねるが――

ズゴアァァァァァ!!!

「「「「!?」」」」
「ガァ……!!」

突如、トリガーの背後上空から凄まじいエネルギーが放射され、ゲランダを跡形も無く消滅させてしまったのだ。
あまりに急な出来事に全員が呆気に取られるが、発射された方向を向くとこちら側に向かって来ている一隻の戦艦が見えた。

「何だ、あれは……!?」
（明らかに空の世界の技術力だけで作れるものではないですね……）

カタリナが驚くのも、クロエがそう思うのも無理はない。
材木が一切使われておらず、普通の鋼ではないであろうその装甲、トリガーのゼペリオン光線にも耐えたゲランダを一撃のもとに屠る威力のエネルギー砲、そして何より電子制御されているだろう様相。
それら全てが合わさっているとなれば、星の世界ならともかく今の

空の世界では作成不可能だろう代物だ。

「エルステの新兵器か!?」

「だったらこちらにも攻撃を仕掛けてくるはずでは……？」

ラカムの言葉にロスヴァイセがもっともな意見で返す。

ウルトラ騎空団の評判の良さから表立っては仕掛けてこないものの、何故かエルステ帝国は彼らを目の敵にしているため他の騎空団や人目がつかない所では遠慮なく仕掛けてくるのだ。

だが、状況的に攻撃を仕掛けるには絶好の場にも関わらずそれをする気配が無い。

即ちエルステ絡みではないということ。

「ん……？船体に何かエンブレムが……あのエンブレム、何処かで……」

「あれは……『スカイ・ガーディアン・エージェンシー』のエンブレムだ！」

「……？我、知らない。それ何？」

「簡単に言ってしまえば、最近設立されたばかりの防衛組織みたいなものね。出処の分からない技術とかを使ってるって噂だけど……」

オイゲンやカタリナがエンブレムに気を取られているが、それを知らぬオーフィスに対しロゼッタが分かりやすく説明する。

「スッゲェな、ジータ！……ジータ？」

「……何か気に食わないなあ。あれ、人が動かしてるような動きじゃない気がする」

「へ？」

ビィはポカンとするが、生まれながらにして直感力に優れている彼女は何かを察している。

そしてトリガーもまた同じ。
突然現れ、怪獣を消滅させた戦艦を黙って見つめていた。
彼らは知る。
それは来たるべき脅威との戦い、その前哨戦に過ぎなかったことを。

ウルトラマンティガ
&
ウルトラマントリガー
光の世界の戦士たち

クリオモス島～刷り込まれる恐怖

謎の戦艦がトリガーの代わりにゲランダを吹き飛ばして数日後、多くの騎空団の元にある島への招待状が届いた。
差出人は『スカイ・ガーディアン・エージェンシー』の重役。
当然、多方面で目覚ましい活躍のウルトラ騎空団にも届いたが、レジェンドは島の名前を聞くなり露骨に眉を顰め、自分は用事があるから行かないと拒否の姿勢を崩さず。
アーシアのお願いや、オーフィスのおねだりも珍しく効果がなく、仕方なくオカルト研究部関係者とグランサイファー組の面々で参加することにした。
その島の名はクリオモス島。
かつてレジェンドがネオフロンティアスペースにおいて、ある事件に遭遇した場所と全く同じ名の島である。

☆

オカルト研究部関係者、及びグランサイファー組以外にロスヴァイセ、そしてレイトも今回の招待に同行していた。
来訪時の歓迎もほどほどに、施設へと案内される招待された騎空団の面々。
驚くべきことに今の空の世界ではあり得ない、それこそ矢的やレイトが知る防衛チームのような設備がクリオモス島には満載であった。
「こんなに技術が進んでるなんて……！」
「そうね、純粋に驚きだわ」
イオの言葉にロゼッタも同意する。
しかし、矢的やレイトはそうは思わない。
「なあ、8……矢的先生。いくら何でもこの島だけ進み過ぎじゃねえ

か？ここだけとは限らないけどよ、少なくとも俺もちょっとはこの世界がどんなところか分かったつもりだぜ？」
「ああ、レイトの言う通りだ。良くて現代の日本、それも普通の生活レベルなら『ここら辺は進んでるんだな』程度で済むがここは違う。明らかに外部から何かの干渉を受けているような感じがする」

頭の回転が早い矢的、そして直感的に訝しく思うレイト……二人の実力者はクリオモス島のおかしさに気付く。

「レジェンドが嫌がるのも納得だぜ……どうも空気が好きになれねぇ」
「……レイト、今ならまだ間に合うだろう。グランサイファーでゼロガンダムと共に待機しててくれないか？この雰囲気、他の騎空団はともかく……このクリオモス島で何かが起きないとは思えない」
「分かったぜ。一誠達には上手く言っといてくれよ」

頷く矢的に対して頷き返し、レイトは「忘れ物した上にちょっと用足してくる」と言いグランサイファーへと戻って行った。
それを見送り、矢的は再び案内される施設の奥へと進んでいく。

☆

――ヒリュウ改・レジェンドの自室――

「レジェンド、何してる？」
「グランサイファーの改良案を模索している。いずれ宇宙が舞台となったとき、常にあれだけを空の世界に残すと不公平だろう。実際、あっちの面子からも説明したらゴネられたからな」

オーフィスに聞かれたレジェンドがそう答えると、定位置であるレジェンドの膝の上に座り、いくつかの案が書かれた計画書を覗き込

む。

「我、これがいい」
「こら、遊びじゃないんだぞ」
「うー」
「私、こっちがいいです！」
「私は……う～ん、これかな？」
「だから……いやちょっと待てオイ。何でルリアとアマリまでいるんだ？」
「？」
「二人して首を傾げてもダメです。部屋の扉のロックどうなって……」

突然の二人の出現に戸惑うレジェンドだったが、入り口を見ると――

「こ、こんにちは……」
「艦長権限でこじ開けました」
「……」

もう自分専用の艦を持ってこないと、プライバシーもクソもないと実感したレジェンドであった。
アズとミツバまで押しかけてきたので、もうどうでもいいや状態になったものの、アマリからある質問をされて真面目な表情になる。
「そういえばレジェンドさん、クリオモス島……だっけ。そこへの招待、いつにも増して頑なに拒んでたけど」
「……まあな。名前からして良くないことが起こるとしか思えん。起こらなければそれはそれでいいんだがな」

レジェンドが自分の多目的ブレスレットからあるファイルを取り

出してアマリに手渡す。
渡された瞬間は目をぱちくりさせていたアマリだが、とりあえず中を見てみることにした。
ルリアやオーフィス、アズも覗き見しつつ読み進めていくと、オーフィス以外の三人の顔が青くなっていく。

「レジェンド様、彼女達に何を見せたんです？」
「俺とアスカ……ダイナが同名の島で遭遇した事件が事細かに記してあるものだ。俺まで行って、何かあればそれこそ一大事だからな。それに束もＥＸ―Ｚの件で惑星レジェンドとクロガネを行ったり来たりしててこの艦にはいない。いざという時、今この艦でまともに機体の整備や修理が出来るのは俺しかいないだろ」

ゼットの専用機であるＥＸ―Ｚガンダムのロールアウトが迫っているため、束も忙しなく動いており今のヒリュウ改では整備班が人手不足なのだ。
特にヒリュウ改は、あまり機動兵器を積んでいないエリアル・ベースやそもそも機動兵器が無いグランサイファー、それに積んでいても本職メカニックのコジローを筆頭に整備班が充実してるクロガネに比べ、ヒリュウ改に搭載している機動兵器は特殊なものが多い。
ワンマンオペレーション可能な艦のため、整備関係を始め各所である程度自動化されているとはいえ、細かい所はやはり詳しい人物でなければ出来ないだろう。

「念の為レイトやロスヴァイセも付けたが、クロエは束のお付きでもあるから無理に同行はさせられん。後はあいつらと、イリナ絡みで同伴したゼロガンダムに任せる他ない」
「クロガネとエリアル・ベースは依頼が立て込んでますものね。有名になって喜ぶべきなんでしょうけど」
「故に緊急事態になったとき、せめてヒリュウ改……最悪俺だけでも動けるよう、可能な限り手空きにしておきたい。四六時中自由にとは

いかなくてもな」

そう言うレジェンドだったが、長年の勘からか彼は不安を拭い切れていなかった。

そしてそれは現実のものとなってしまう。

☆

若干薄暗い、クリオモス島に建設された施設の最深部――そこにオカルト研究部やグランサイファー組を含む騎空士達は案内された。

「この度は我々スカイ・ガーディアン・エージェンシーの招待を受けて頂き、まずは感謝の言葉を述べさせてもらいたい。招待させてもらった理由だが、これから貴殿らに見て頂きたいモノがある。ウルトラ騎空団の方々はおられるか？」

「我々です。団長は諸事情で訪問出来なくなってしまったため、代理として私達が伺わせて頂きました」

そう答えるのは矢的だ。

当初はオイゲンやアザゼルも考えたが、前者は親しみやすさが、後者は胡散臭さが勝ってしまうため、ウルトラ兄弟の一員として貫禄もある矢的に白羽の矢が立ったのである。

「いや、誰が来られても大丈夫だ。あの招待状は騎空団に出したもの、そこに所属されているのならば問題ない。さて本題だ……先日星の世界から、世間を騒がせている『怪獣』が落ちてきた話は聞いていると思う。そしてウルトラ騎空団が迎撃に当たったということもな。何より最近噂の『ウルトラマントリガー』も現れたそうだ」

「殆ど彼に甘える形になってしまいましたが」

初めて現れたウルトラマンであるゼット（人間大）、それに続き

フェードラッヘでガイア、アウギュステでアグルと本来の大きさでウルトラマンが立て続けに現れ、他にも最近では多発する怪獣被害を抑えるべくタイガ以外にも何名か変身していたりする。
その結果、正体はともかくウルトラマンの存在は空の世界でも浸透しつつあった。
トリガーもその一人だ。

「しかし、そのウルトラマントリガーでさえ、星の世界からやってきた怪獣を倒すことは出来なかった」
「!!」

突然聞こえてきた女性の声に、誰よりも早く反応したのはグラン。
それに釣られるようにその場の全員がそちらを向くと、歳の頃は三十代前後といったところか、科学者風の格好をしたヒューマンの女性が立っていた。

「貴女は……？」
「これからお見せするモノを開発した科学者、エルミデ博士だ。そして……これが貴殿らに見せたかった――」

薄暗かった施設がライトアップされ、その全貌が明らかになる。
１５０ｍを超える船体と、既存の空の世界の騎空艇や戦艦とは一線を画したフォルムのそれは、ゲランダを一撃のもとに屠った戦艦。

「あれはっ……！」
「電脳巨艦『コアトリクエ』だ。ウルトラ騎空団の方々は一度目にしていると思う」

コアトリクエ――アステカ神話の神の一人と同じ名を冠した、空の

世界には似つかわしくない……否、文明的にあり得ない性能の戦艦。
少なくとも、リアス達の世界ですらこれだけの技術はまだ確立されていない。
レイトが言ったように、明らかに進み過ぎているそれを見た他の騎空団の者達も動揺している。

「おいおい何だこりゃ……」
「騎空艇としちゃ小型だが、逆に小回りが効くとすればデメリットじゃないな」
「やっぱり武器付いてんだろ？あそこに機関砲とかあるし」

ただ、他の騎空団と違いウルトラ騎空団の面々はむしろこの組織がこれだけの技術力を有していることに不自然さを感じていた。
グランやジータも今でこそ慣れたとはいえ、レジェンド達と知り合わなければコアトリクエは勿論、これだけの設備などにも驚きを示しただろう。
だからこそ、逆にレジェンド達を除けば星の民ぐらいしか持たないであろうレベルの技術を空の世界の民が有していることに不信感があったのだ。

「こいつは……あの時の怪獣を木っ端微塵にした……」
「あれはただのリハーサルに過ぎません」
「リハーサルだ？」

アザゼルは普通に聞き返したが、エルミデ博士の言葉に苛つきを覚えたのは主にウルトラ戦士達。
リハーサル、などと言ったが実際に戦っている方としてはこれとない侮辱だ。
常に命がけであり、周りへの被害なども考慮して戦わなければならないなど、制約もあるというのにそんな言葉を使ってほしくはない。
そしてそれを間近で見てきたリアス達も同様の気持ちだった。

「リハーサルって言うけどトリガーがピンチになるまで出てきませんでしたよね～？こ～んなご立派な設備あるならあの怪獣が来ることも予測出来たでしょ？何で私達に先んじて怪獣と戦わなかったの？何で後から来たくせに偉そうなの？少なからずトリガーが弱らせた怪獣を横取りするような感じで倒して鼻高々？」
（（（（ジータァァァ!?））））

煽りスキル全開のニコニコ笑顔、しかしその可愛らしい笑顔には青筋が幾つも浮かんでおり、相当苛立っているジータ。
相手が年上だろうが立場がどうだろうが知ったこっちゃない、と言わんばかりの怒涛の質問攻めに、重役は顔を引きつらせている。
対してエルミデ博士は涼しげだ。

「遅れたのは否定はしません。ですが、怪獣を一撃で倒した……それだけで性能の立証には十分でしょう」
「えー？私達の団長なら怪獣一体どころか何十体もまとめて一撃必殺なんですけどー？」
「詳しく知りたいですね」
「それは本人に直接聞いてください。私からだと情報漏洩になっちゃうしー」

怖いもの知らずのジータ、相変わらずレジェンドは己の知らぬ所で引き合いに出されていたりする。
しかしながらその堂々とした態度はリアスらには好意的に取られていた。

（……欲しいわね、彼女。あそこまで肝が座ってるなんて中々いない逸材よ。最近タイガと仲が良いみたいだし）
（あらあら、私に負けず劣らずな娘ですわね。将来が楽しみですわ）
（ビィ君可愛い）

駒王学園三大お姉様も納得の……いや、一人だけ全く関係ないことを思っていた。
何かとカタリナとウマが合うカナエだが、そのせいかヴィーラから嫉妬の念を向けられていたりもする。
なお、カナエと赤トカゲ（※ビィ）はくっついてしまえ、と考えているヴィーラも……

（そうすればお姉様と一緒にお兄様にあんなことやこんなことを……うふふふふふ）
（ニャー）

ハクに見られているとは知らず、変な妄想をしては恍惚な表情になってしまっていた。
ちなみにお兄様とは当然レジェンド。
女性に囲まれていながらもそれに邪な感情を抱かないレジェンドに、ヴィーラは即落ちしたらしい。
まあ主人公でありながらそもそもラッキースケベが起きる確率が限りなく低い上、無理矢理取ってつけたような理由で不憫に陥るレジェンドは、ハーレム云々よりまず平穏に暮らせるかどうかが重要だからだが。
閑話休題。
ジータがエルミデに突っかかりつつも、一行はコアトリクエ内部へと案内される。

ブリッジ……いや、コックピットブロックらしきところに案内されると、そこはカプセルのような機器が二つあるだけの非常に簡素な造りであった。

「おいおい、操舵室はどこだ？機械化するにしてもこれはちとやりす

ぎだろ。狭くて仕方ねえ」
「まるで人が乗ることを想定していない作りだな……」
「その通りです。この戦艦は操舵手を必要としません。もっと言うなら、クルーそのものが不要なのです」
「はあ!?ってことは何か?この戦艦は全部自動で動いてるってのかよ!?」
「ええ。優秀な騎空士の思考をインプットすることで、この艦は常にその思考を反映し、完全な無人運用で戦闘行動を行うことが出来ます。そしてこの艦は思考パターンの蓄積も可能……インプットすればするほど、より強化されていくのです」
(……何でそこでいきなり騎空士って敷居が広くなるのかしら。普通なら操舵手、もしくは砲撃戦メインになるのだからせめて狙撃手とかそっちに限定されるんじゃないの?)

エルミデ博士の言葉にラカムが驚きの声を上げる。
他の者達も声にこそ出さないが同じ気持ちであった……が、二人ほど別の感情を抱いたものがいた。
相変わらず鋭いカナエと、艇造りを司る星晶獣、ノアである。
その名の通り騎空艇を始め、各種船造りを司っているのだが、そんな彼はコアトリクエを目にした時から奇妙な感覚に襲われていた。
(これは……敵意?僕に?いや、違う。この場にいる全員に……?でも敵意を向けられていない人物が一人だけ……彼女が造ったからなのかな)

艇の声を聞くことが出来る彼はコアトリクエの声を聞こうとするも、何故か声が聞こえなかったのだ。
代わりに感じ取れたものが、敵意。
開発者であるエルミデ博士以外への明確な敵意が感じ取れたのである。

そのまま説明を続ける重役とエルミデ博士を見ながら、ノアはラカムを近くに呼んで自分の感じたものを伝えた。

「なるほどなぁ……しかし敵意ってのも妙な話だが、俺としちゃ全自動化ってのが信じられないぜ。むしろ全部機械任せなのが、敵意を感じるようになったとも考えられるよな」

「そうだね。でもそれなら、全自動化を前提に開発したあの人にも敵意を感じるんじゃないのかな」

「言われてみりゃそうか。ああくそ、ますます分かんなくなってきちまったぜ」

そんな二人を余所に、コアトリクエについての話題は更に大きくなる。

そして、リアスがちょうど二人が思っていたことを重役とエルミデ博士にぶつけた。

「確かに凄いけれど……ちょっと機械に頼り過ぎじゃないかしら？」

（おっ！いいこと聞いてくれたぜ！）

「リアスの言う通りだな。いくら何でもコイツはちょいと過ぎた兵器（オモチャ）な気がするぜ」

アザゼルも同意して続ける。

このコアトリクエに搭載され、ゲランダを一撃で倒した『ネオマキシマ砲』……遊撃隊所属のムサシやアサヒ、それにギャスパーについてきたリクはアスカから聞いたことがある武装だ。

何故空の世界にウルトラ騎空団以外でそんな技術を有しているのかはこの際どうでもいい。

あの威力の武器を完全に機械による制御をさせていいのか、というのが問題なのだが――

「何を言う、これこそ空の世界……いや、人類に必要な力だ。この艦が

完成し、量産に成功すれば、ウルトラ騎空団の方々を始めとした騎空団が、危険を冒してまで怪獣、更には星晶獣と戦う必要も無くなる」
『なあ、このオッサン見通し甘くねーか？まず星晶獣が全部敵とは限らねーし、そもそも大きさもバラバラ。何か概念っぽい能力だってあるし』
『うむ、幾度となく直接戦ったことがある私達だからこそ、この考えは間違いだと断言出来る』

重役の言葉は確かに説得力こそあるが、それは星晶獣……そして怪獣の真の恐ろしさを知らない者だから言えるようなもの。
ここでやはりしっかり言ったのは矢的。

「危険や被害が無くなる……確かにそれは素晴らしいでしょう」
「ならば……」
「ですが、人間は考える生き物です。自らの力で困難に立ち向かうからこそ、『何故こうなったのか』『どうするべきだったのか』と反省し、それを糧により良い未来へと進むことが出来るのではないでしょうか」
（矢的先生カッケェェェ!!）
（８０先生の言う通りだ。後悔するより反省をしろ、父さんからも口を酸っぱくして言われたっけ）

尊敬する恩師の言葉に感動している一誠とタイガ。
身近に教師が居なかったグランもキラキラした目で矢的を見ており、案の定ジータは矢的と実父を比べ、（やっぱりうちのクソ親父、欠陥人間じゃん）と実父への怒りを沸々と沸き上がらせていた。
だが、それを否定するかのようにエルミデ博士は語る。

「しかし、ウルトラマンが倒せなかった怪獣をコアトリクエが倒したのは事実です。それはコアトリクエがあればウルトラマンは不要となるでしょう」

――この発言に、一誠がキレかかった。

「不要ってなんだよ。ウルトラマンをモノみたいに扱うんじゃねえ!!大体なあ、ウルトラマンだって生きてんだ!!たまには油断したり――」

「この戦艦は油断したりしません。……絶対に」

最後の小馬鹿にしたような言い方に、遂に一誠の我慢の限界が突破、更にはタイガ、グランもそれに同調。

「部長!・矢的先生!・協力してやりましょうよ、そのインプットってやつに!!」

「イッセー!?」

「そこまで言うんなら見せてもらおうじゃねーか!機械に頼りっぱなしの戦艦が、ホントにそんな性能発揮出来るのかどうかってよ!!」

『俺もイッセーと同じだ!・俺達は助け合って今まで戦ってきたんだ!それをいきなり全部機械任せの戦艦を見せられて、不要呼ばわりされて黙っていられるか!!』

「彼らのおかげで助かった人達だって、空の世界には大勢いるはずです!・むしろこんな心無い戦艦、怪獣は倒せても人を助ける為に動けるとは思えない!!」

「お、おいグラン……」

「ところで～……この戦艦、全部機械の判断任せだけど、暴走した場合とかはどうするの?」

相変わらずニコニコ笑顔で追及するジータ。

だが、確かにそれは最もな質問だろう。

完全な無人機であるならば暴走したとすれば、外部からどうにかするしかない。

それこそ人が乗っていたなら違和感を感じた時点で対処可能な異

常に気付かず、結果最悪の事態に陥る可能性もある。
　そんなジータの質問に、前述の三人（ただし、タイガは現在アストラル体のため特定の人物以外見えていない）の意見に先んじてエルミデ博士は答えた。
「ご安心を。この戦艦は油断だけでなく暴走の心配もありません」
　この場にレジェンドや束といった、機械の専門家がいたなら真っ先に反論しただろう。
　あまりにハッキリした返答に他の者がざわめく中、ジータは予想外の追撃を仕掛ける。
「ほうほう、それではもし暴走したりすれば、それは予め仕組まれていた暴走ってわけですね？」
「「「「!?」」」」
（ほお……この嬢ちゃん、結構なキレ者じゃねえか。そう誘導するとはな）
　この質問には殆どの者に動揺が走るが、アザゼルはジータに感心していた。
「そうなりますね。何者かが意図的にそうしたと考えるのが妥当です」
「ふーん……」
　これまたあっさり返されるも、ジータにとって不信感を強める答えであったのは間違いない。
（そう返すんだ。やっぱり何かきな臭いね、これ）
（一瞬動揺したように見えたが……何にせよ、信用ならねえ連中だぜ）

ジータとアザゼルはますます怪しむだけだった。
そして――

☆

――グランサイファーの甲板――
レイトとゼロガンダムは暇を持て余していた。

「８０先生に言われて戻って来たけど、何もすることねーな……」
「面倒事はない方がいいんじゃないのか？」
「ああ、面倒事はな。けどあまり暇過ぎるのも何ていうか、こう……アレだ、逆に落ち着かない的な？」
「ならば互いの武勇伝でも聞かせ合うか。普段戦う場所が違う者同士、感じ方も違うだろう」
「お！面白そうだな。じゃあお前の修行時代とかそういうのから聞かせてくれよ」
「いいだろう。まずは俺が騎士ですらない、魔竜剣士だった頃からだ」

施設内では何やら不穏な空気であるが、二人の『ゼロ』はお互いの過去の戦いや冒険の話で盛り上がる。
災厄が迫っているということも知らずに……。

☆

再びコアトリクエ内部。
カプセル型の装置の中には片方に一誠（とタイガ）、もう片方にグランが入っており、一誠はピースしているし、グランは眠そうに欠伸していた。
何とも緊張感に欠けた表情である。

「全くもう……」

「言い出したら余程じゃない限り聞かないからなぁ、兵藤は。ただ、今回は気持ちが分からなくもないが」

困ったような、呆れたような表情のリアスに、苦笑する矢的。
なお、タイタスとフーマはお預けされたようでフーマが少しばかり拗ねており、ムサシの肩に乗り足をぶらぶらさせている。
タイタスの方は上体起こし中、即ちいつも通り。

『ちぇー……また俺らはお預けかよ』
（まぁまぁ）

彼らがそんな調子なら、当然もう片方も――

「はぁー……グランって私のフォローとか言ってるけど、時々こうして私より突っ込んでいくところあるんだよね」
「でも、このままこの装置動かしても大丈夫なんでしょうか……」

ジータはグランの感情に任せた行動に溜息し、アサヒは拭い切れぬ不安があるからか、未だ心配げな声を出す。
そんな風に見守る面々を尻目に、一誠とタイガ、それにグランは普段の調子を取り戻していた。

「さ、早く済ませちまおうぜ。この中、結構窮屈だし」
『だよなあ、ゼロがくれたアストラル体の俺ら用の布団籠なんて小さくても寝心地良いのに』
「何か新鮮な感じだなー。明日以降も忙しくなりそうだし、早めにお願いします」
「ええ、すぐに終わります。

ト　リ　ガ　ー　、

タ　イ　ガ」

「『「……え？」』

エルミデ博士は今何と言った？

今アストラル体のため、特定の人物以外に見えるはずのないタイガだけならまだ分かる。

問題は、トリガーの名を言ったことだ。

まだグランがトリガーだというのはウルトラ騎空団、ついでにカルミラぐらいにしか知られていないはず。

意味深に小さく笑いながら、カプセル型の装置を起動させると、少しずつ装置の内部が光に満たされていく。

「ちょっ……！待っ!?」

『何だこれ！開かないっ！くそ!!』

「今何てっ……!?」

「『「うわあああ!!」』」

グラン――トリガーは暗い闇の中、初めてトリガーとして戦ったときを思い出していた。

コスモスの力を借りて、ゴルバーを倒しカルミラを退けたあの時を。

（そうだ、この日から僕はレジェンドさんやムサシさんと同じくウル

トラマンになったんだ）

それから色々な事があった。

初めての変身では流のおかげで無事変身出来たが締まらなかったり、暴走したティアマトを鎮めたり、霧に包まれた島でもセレスト相手に先輩のゼロ、加えてアサヒが変身したグリージョから援護されながら戦った。

そして……怪獣と戦うことも増えてきた。

ゲランダとの戦いも、トドメをさせなかったのは怪獣との戦いの経験が少なかったからだろう。

あの時、ゲランダをコアトリクエが倒した瞬間が思い出される。

（そうだ、コアトリクエだって同じじゃないか。経験が少ないから、僕達の経験を必要としてる）

向かってくるコアトリクエを見つめるトリガー（グラン）。

何故か、ゲランダを消滅させたネオマキシマ砲がチャージされ始め、トリガーも自然とゼペリオン光線の構えを取る。

（僕はまだまだスタートラインから走り出したばかりなんだ……！こんなところじゃ終われない！）

そしてネオマキシマ砲とゼペリオン光線が同時に発射され、激突するも瞬く間にゼペリオン光線は押し返され、そのままトリガーを飲み込み――

『うあああああ!!』

跡形も無く消滅させた。

そして、一誠とタイガは――

「そんな……！どうして貴方が!!」
『嘘だろ……？何かの間違いだろ!?』

ある人物と相対していた。
その人物は容赦無く構え、タイガ[一誠]に向け――

「『うわあああ!!』」

光を、撃ち込んだ。

〈続く〉

望まれぬ来訪者

「『「うわあああああ!!」』」

一誠とタイガ、グランは同じタイミングで叫びながら目を覚ます。

「……あれ？」

『カプセルの中じゃない……何処だ、ここ？』

「医務室……にしては薬品の匂いとかもないし……適当な部屋みたいですね」

三人がそんな話をしていると、横から話しかけてくる声があった。

「イッセー君、大丈夫？」

「……イリナ？え、何で？」

『そりゃないだろイッセー。イリナの嬢ちゃんな、お前のことずっと気にかけてたんだぜ？』

『フーマの言う通りだぞ、イッセー。ちなみに私はタイガの添い寝係をしていた』

『フーマはいいとして、タイタスの発言に俺はどう反応すればいいのか分からない』

「全くもう！すぐ相手の言葉に乗せられたりするんだから！」

「そういうイオもよくロゼッタの言うことを鵜呑みにしてるよね。……あれ？イオ？どうしてここに？」

「どうしてって、心配して付き添ってあげてたに決まってるでしょ！感謝してよね！」

頬を染めながら「ふん！」と言うイオに少しだけグランは安堵し、他の二人はまだ若干戸惑っている。

まあ、タイガに関しては納得だが。

「そうか、そういえば俺達はあの装置に入って……何か凄い光で……」
「あの装置が不良品だったのよ。矢的先生とリアスさん、それにムサシさんが凄い剣幕で怒ってたわ。矢的先生なんて普段の落ち着きや敬語も忘れて『僕の生徒を殺す気か』って。アザゼル総督に羽交い締めされてたし……あとジータちゃんは青筋全開でネチネチ言ってたわね。きっと四人共、今も博士に文句言ってるわ」
『多分あれ、伊黒の兄ちゃんがいたら倍以上凄いことになってたぜ。あの博士はどこ吹く風だったけど、ラカムとかオイゲンも引くぐらいの責めっぷりだったもんな』
「そうよね。グランのこともだけど、何かタイガのこともバレないようにしつつ気にかけるようにあの博士を糾弾してたもの」

三人が気絶してからの事をイリナ、フーマ、イオが詳しく説明してくれた。
あのリアスやムサシはともかく、あの温厚で落ち着きのある矢的がそこまで怒るというのは相当なのだろう。
確かにあれだけ大口を叩いておきながらこの結果ではそれも当然だろう。

「……そういやガキの頃、俺がバカやらかして風邪ひいた時もイリナがこうして看病してくれたよな。色々間違ってたけどさ」
「!!憶えててくれたの!?」
「え？お……おう。正確には思い出したって感じだけど」
『ふむ、私のように添い寝したのか？』
『俺、別の意味で忘れられなくなったんだけど』
『そらそうなるわな、ドンマイタイガ』
「間違ってたって何したの？」
「僕は熱出したとき、ジータにネギ突っ込まれたよ……尻に」
「「『『『うわあ……』』』」」

影のある表情で呟くグランに、他の六人は同情を禁じえなかった。

ちなみに、イリナはネギを使ったがよりによって『ネギを枕替わりにする』という訳の分からん方法を取っていたらしい。

「じゃ……じゃあさ、その時……約束したこと憶えてる？」

両手の指をチョンチョンと突き合わせながら、上目使いで言うイリナだったが、一誠の答えは予想を裏切るものであった。

「約束……？何かあったっけ？俺あの時からしばらく『ネギ坊主』呼ばわりされてたぐらいしか記憶にねーぞ」

『でも看病してくれただけいいんじゃないか？俺はそういう病気とかかったことないけど、もしかってもそういう人いないかも。父さんや爺ちゃん、婆ちゃんも忙しいしさ』

「そっか……タイガ、サラブレッドだもんね」

『別に、そんなんじゃないって』

一誠の台詞にイリナは愕然とした後、プルプルと震えているが、タイガがフォローに入る。

なお、タイガはこういうが……おそらく、あの隠れ親バカなタロウがタイガの一大事に黙っているはずがない。

ウルトラの父やウルトラの母はまだ分別があるのだろうが……。

イオもタイガの家系について聞いていたが、タイガ自身はサラブレッドであることを否定する。

実際、それなら銀河遊撃隊総司令官であるベリアルの息子のジードや、同じく父がウルトラ六兄弟で祖父が勇士司令部のトップ、かつ師匠はＬ７７星の王子と最高位光神という完璧布陣のゼロの方が相応しい。

更に言うなら、ゼットと縁のある人物もまたウルトラ六兄弟の一人、そしてコスモスとジャスティスなどレジェンドの息子と言っても過言ではなく、サーガなど諸にそれだ。

『……うちサラブレッドいすぎじゃね？』
『『全面的に同意する』』

忘れがちだがオカ研トップと副部長もお嬢様である。
ついでにかの獅子王凱も父が世界十大頭脳の一人、母が木星探査船のメンバー……どちらかというと、サーガ側の方が鉄華団や超次元グレン団（ただしロージェノムやニア除く）のように特別な家系でなかったりする。
厳勝や縁壱も戦国時代では珍しくない武家の出であるし、狛治も貧困層だったし。
そんな話をしていたら遂にイリナが爆発した。

「何で一番重要なこと憶えててくれないの!?どうでもいいことは憶えてて肝心なことはいつも……」

ドカァァァァン!!

「「『『『うわっ!?』』』」」
「「きゃあああっ!?」」

突然、大きな振動が施設全体を襲う。
何事かと思った一誠達だが、直後にレイトから通信が入った。

『おい！聞こえるか一誠!?』
「先輩!?」
『無事みたいだな、一安心だぜ。それはいいとして、嬉しくねえお客さんのお出ましだ！』
「『!!』」
『俺とゼロガンダムが迎撃に出てるが、ボス格の奴が雑魚を大量に引き連れてきやがった！どうにも手が足りねえ！』
『お前達のいる施設を守りながらではどうしても俺達が不利になる。

一刻も早く、全員を連れてグランサイファーに帰還しろ！』
「せ……先生……！」

ゼロガンダムがそう言うと同時に通信は切れる。
今、強大な悪意が動き出す。

☆

ウルトラ騎空団他、招待されていた騎空団は数多の電子モニターが映る司令部らしき場所にいた。
そこのモニターで見たものは、植物で出来たエイのような宇宙船らしきものを筆頭に、数多の宇宙船がクリオモス島の自動防衛システムを次々と破壊、無力化している光景だった。

「バカな……！この島の防衛システムが全く役に立たないだと!?」
「これが真実よ。宇宙からの侵略者や怪獣は、いつだって私達の予想を超えてくる……！全部機械任せにしたら予測不能な事態に対処なんて出来るわけないわ！」

重役は驚いていたが、反論したリアスからしてみればこんなのは序の口だ。
今までで最も強大な存在だったゴーデスなど、己の細胞一つで他の存在を怪獣や傀儡へと変える程だった。
そしてルシファーやトレギアが送り込んだであろうサタンデロス……ガリルナガンにコンパチガリバー、そしてグルンガスト参式とガオファイガーが総力を結集することでやっと倒せたロボット怪獣もまた異星の産物。
重役の読みは甘過ぎたのだ。
次に映ったのは、ウルトラ騎空団は勿論、他の騎空団も最近目にすることが多くなったダブルオーザンライザー・セブンソード／G、そしてその二周りほど小さい――強いて言うなら、C・C・の出身世界

にあったＫＭＦぐらい、約６ｍ前後の大きさの、両目に瞳がある機動兵器……聖竜騎士ゼロガンダムの乗機、聖龍機ロードドラグーンである。
　その二機が無数の円盤群に対し、防衛システムの代わりに迎撃・撃破している光景。
「あっちのはレイトのダブルオーザンライザー……！ってことはもう一体はゼロガンダムのか！」
「当人の身長を考えると確かに妥当なサイズですわね。それにしても……大きくサイズ差のある相手をあんなに圧倒する雷を……！」
「空の世界的にはゼロガンダムさんの機体の方がピッタリ感あるわね」
「カナエ先輩、今はそこじゃないと思います。同意しますけど」

　そんな話をしていたら、矢的やリアスのブレスレットへと通信が入ってくる。

『おい！そっちにロスヴァイセいるか!?』
「レイトさん!?ええ、いるけど……」
『すぐサイバスターに乗せてこっちに寄越してくれ！こいつら単体じゃ大したことねえが、ワラワラ出てきて２機じゃとても捌ききれねえ！』
『他に機動兵器持ちがいればいいが、資格はあれど機体が無い者ばかりだ。サイバスターによる救援もそうだが、他の者もすぐに騎空艇まで戻れ！そこにいられては何かあっても対処出来ん!!』
「……と、言うことよ皆！イッセー達にも連絡は行ってるでしょうし、私達もすぐに行動するわよ!!」
「「「「はい!!」」」」

　矢的はこういう緊急事態であろうと冷静に対応出来るように成長してきている自分の生徒達に微笑み、すぐに表情を引き締めデスクに

座って両肘を付き指ぐみポーズのまま平然としているエルミデ博士へと言い放つ。
「文句の続きはこの危機を脱してからにします」
そう言って司令部を後にした矢的達に続いて、他の騎空団の者達も慌てて各々の騎空艇へと駆け出していく。
☆
――クリオモス島上空――
「うぅぅおぉぉぉぉぉ!!」
ダブルオーザンライザーのＧＮバスターソードⅢを振るい、円盤群を両断し――
「はあぁぁぁぁぁっ!!」
ロードドラグーンが新たな武器『スペリオルハルバード』に纏った雷を放ち、円盤群を爆散させる。
「ちっ！最初に比べりゃ減ってるが……」
「耐久力が高い奴を相手にする時と同じだな。防御に特化した奴や数にモノを言わせる奴ほど面倒だ」
「全くだぜ。おまけに奥にいる植物で出来たような奴だけ無駄に性能が良いときた。近くに何も無けりゃトランザムライザーソードで周りのザコ諸共一網打尽に出来るんだけどよ」
「……ひょっとしたら、俺達はこの島に誘い込まれたのかもしれん」
「ん？それはどういう……お、サイバスター！」

二人が戦闘しながら会話をしていると、ロスヴァイセがサイバスターで到着。

「すみません！遅くなりました！」

「いいや、ちょうど俺達の周りに群がってるタイミングで良かったぜ。サイフラッシュ一発ドカンとかましてくれ！」

そう、サイバスターのＭＡＰＷであるサイフラッシュならば、広範囲であろうと敵のみを識別し、ダメージを与えて撃破へもっていける。

円盤群の耐久力が然程ではないと二人は体感していたため、サイバスターの力がこれとないほど活かせる場なのだ。

「了解です！ハク、フウ！」

「ニャニャ～」

「プラーナコンバーター、その他各種問題無しニャ！」

「行きます！サイフラァァァッシュ!!」

青白く光ったサイバスターがディスカッターを天に掲げると、無数の青い雷が円盤群を凄まじい勢いで破壊していく。

まさに鎧袖一触、殆どの円盤がサイバスターの一撃で叩き落された。

「よし！レジェンドは落とせてねえけど円盤の落としっぷりはさすがだぜ!!」

「はうっ!?」

グサッと精神的にクる一言をレイトに言われ、ロスヴァイセ涙目。

「流れはこちらに傾いた……一気に押し切るぞ!!」

☆

「これが……噂に聞くウルトラ騎空団……それもまだほんの一部の戦力でしかないというのか……」

重役はあまりの格差に愕然とする。

コアトリクエは確かに高性能だが、あの3機とまともにやりあえば容易に撃沈されるのではないかと。

そんな重役のことなど知らぬとばかりに、エルミデ博士はゆっくりと立ち上がり、重役に気付かれぬよう司令部を出ていった。

☆

一誠とトライスクワッド、グラン。

それにイリナとイオは別ルートでグランサイファーへと向かっていた……わけではなく、円盤と戦うべく円盤群の攻撃で爆発を繰り返すクリオモス島の地上部分を、岩陰に隠れながら進んでいた。

「くっそー！アイツら好き勝手しやがって!!」

「やってることが魔物と変わらない！知性がありそうな分、尚更タチが悪い!!」

『向こうが力づくで来るならこっちだって!!』

一見普段と変わりない三人だが、イオはともかくイリナとタイタス、フーマはそれなりに付き合いが長い為、一誠とタイガの様子がおかしいことに気付く。

「ちょっと！イッセー君どうしたの!?」

「何だよ!?」

「何か苛ついてない!?」

「別に、俺はいつも通りだよ！それよりイリナ、お前はイオちゃんを連

れて早くグランサイファーへ行け！」
「何で!?先生に鍛えてもらってちょっとは――」

一誠がこんな感じなら――

『おい、タイガ！ちょっと落ち着けって』
『落ち着いてる！だからあのままにしておいたらダメだって分かるんじゃないか！』
『確かにそうだが、少し焦り過ぎだぞ』

タイガもこんな感じで――

「イオはいざって時に飛べたりするわけじゃないだろ？早くグランサイファーへ戻って皆と合流するんだ！」
「何言ってるのよ！あたしだって少しは役に――」

グランもこれであり、しまいには――

「「足手まといなんだよ!!」」
「「ッ!!」」

普段の二人なら滅多なことでは言わないであろう一言をイリナとイオに叩きつけた。

『おいおいおい！マジでおかしいぞ、二人揃って！いや三人か!?ともかく今のは言い過ぎだろ！』
『一体どうしたんだイッセー、グラン！タイガも何とか言ってやれ！』
『二人とも、あの植物っぽい円盤を撃墜するぞ！』
「おう！」「はい！」
『『タイガ!!』』

そんな二人のことなどお構い無しに、侵略者への対処を優先するタイガと、それに同調する一誠とグラン。
タイミングが悪いというか、ここらでブレーキをかけられるレジェンドらはここにはいない。
ショックを受けている二人を置いて、一誠とタイガ、グランは更に突き進み、タイタスとフーマも二人を気にしつつも三人を追いかける。

「何よ……私だって成長してるのに」
「……グランのバカ」

二人の少女の呟きは、お互いしか知らない。

五人は先程までの場所から離れ、一誠とグランはそれぞれの変身アイテムをスタンバイしていた。
しかし、彼らの脳裏には先刻のイメージが深くこびり付いている。
それを吹き飛ばすかのように頭を振るい、二人は変身を決意した。

「そんなはずない……！いくら機械任せだって、味方を撃つようなことはないはずだ！」

グランはコアトリクエが敵にならない事を、正しくはネオマキシマ砲にトリガーは負けないことを信じ。

「あんな事、あるわけがねぇ！あの人が俺達の……！」
『ああ！所詮一時の悪夢なだけだ！行くぞイッセー!!』
「おう！」
（旦那……イッセーとタイガ、何見たんだ……？）
（分からない。少なくとも二人とかなり親しい人物が関わっていそうだが）

フーマとタイタスの不安を余所に、一誠とタイガはそれぞれ自分に言い聞かせるように。

『Ｕｌｔｒａｍａｎ―Ｔｒｉｇｇｅｒ　Ｍｕｌｔｉ―Ｔｙｐｅ！』

グランはＧＵＴＳハイパーキーを起動し――

『Ｂｏｏｔ―ｕｐ！Ｚｅｐｅｒｉｏｎ！』

ＧＵＴＳスパークレンスに装填、そして――

「未来を築く、希望の光！ウルトラマントリガー！」

前方をスライドさせるような動きからＧＵＴＳスパークレンスを掲げ、トリガーを押す。

『Ｕｌｔｒａｍａｎ―Ｔｒｉｇｇｅｒ　Ｍｕｌｔｉ―Ｔｙｐｅ！』

「チャァッ!!」

同じく一誠もタイガスパークを出現させ――

『カモン！』

「光の勇者！タイガ！」

『はあああああっ！ふんっ！』

タイガ用のウルトラタイガアクセサリーをリードする。

「バディィィィ！ゴォォォォォッ!!」

『ウルトラマンタイガ！』

「シュアッ!!」

気合を入れて右腕を掲げると、一誠はタイガへと変わり巨大化する。
若き二人のウルトラマンは、星の世界からの侵略者を迎え撃つべくクリオモス島へと降り立った。
しかし――

「タイガ……！じゃあイッセーは無事なのね！」
「トリガーもいるっつーことはグランも問題無かったみたいだな！」
「イリナとイオは……？」
「ざっと見たがここいらにはいねえな。まだ施設ん中か？」
「かもしれないわね。でも、逆に施設でも島の地下にある部分ならそちらの方が安全……!?」

ロゼッタがそう言いかけた時、クリオモス島からコアトリクエが浮上・発進した。

「何だあ!?今更出撃だと!?」
「嫌になるなあ。ウルトラマンが出て来たら出撃して、自分達の凄さを見せつけるつもり？未然に被害を食い止めようとしないのに何がガーディアンだっての」
「ジータ、相変わらず辛辣だよな。気持ちはわかるけどよぅ」
「……でも何か様子が変じゃない？」

カナエの言うように、コアトリクエの艦首は円盤ではなくトリガーとタイガの方へ向けていく。
そして船体両翼の機関砲をトリガーとタイガへ向けて一斉発射した。

「「「「!?」」」」

「チャッ!!」
「デヤッ!!」

トリガーとタイガはそれぞれハンドスラッシュとタイガスラッシュで放たれた弾丸を相殺する。
ウルトラ騎空団だけでなく、退避していた他の騎空団からも「どういうことだ」「ウルトラマンを敵と認識したのか」という声が聞こえてくるほど、異常な事態に皆が困惑していると、その場にいる者達にある声が響いてきた。

『この戦艦は我々が掌握しました』
「「「「!!」」」」
「おい、今の声……」
「エルミデ博士か!」
『我々はモネラ星人。この個体の身体を使って貴方がたにメッセージを送らせて頂きます』

エルミデ博士の口から語られたのは、彼女の意思は既に侵略者――モネラ星人よって奪われていたという衝撃の事実。
「……どうやら嬢ちゃんが言ったように仕組まれていたらしいな。それも、最初から……!」

ジータが挑発気味に聞いた質問が、まさかのドンピシャであったことに歯軋りしながらアザゼルが呟く。
『空の世界の者に我々と会話をする資格はありません。貴方達に許されるのは、これから見せる我々の兵器(オモチャ)に恐怖し、絶望するだけです』

そう告げると、モネラ星人の円盤――モネラシードから光線・モルージョンがコアトリクエへと照射され、コアトリクエは分離……い

や、ほぼ分解に近いレベルで変形を開始する。
右腕は巨大な鋏状に、左腕には機関砲が集約されガトリング砲のように。
全身は大幅に変わり、銀一色のステンドグラスのような姿へと。
唯一コアトリクエらしさが残っているのは頭部――顔に相当する場所にコアトリクエの艦首下部にあった電光掲示板のような部分が付いていることぐらい。
それは見るもの全てを戦慄させるには十分過ぎる威圧感を放ちながら、空中で変形を終えゆっくりと地上に着地する。
電脳魔神デスフェイサー。
空の世界を守るために生み出されたはずの戦艦は、モネラ星人の手によって空の世界侵略者の尖兵と化してしまったのだ。

「ちっ……！アイツが出て来たってことはトリガーやタイガ、一誠の思考パターンは読まれてると見てよさそうだな……仕方ねえ、後輩に活躍どうこう言ってる場合じゃなくなった！」

レイトは以前アスカからデスフェイサーのことを聞いており、その危険性を理解していた。
同時にその特性も把握していたため、今回は自分が対処しようとウルティメイトブレスレットからウルトラゼロアイを取り出し、ダブルオーザンライザーを自動操縦へと切り替える。

「グランサイファーや他の騎空艇を頼むぜ、相棒。シェア！」

ウルトラゼロアイを装着し、本来の姿であるウルトラマンゼロに戻るレイト。

「シェアッ!!」

トリガーやタイガとデスフェイサーの間に割って入るように現れたウルトラマンゼロ。

「待たせたな!!」
「ゼロ隊長!?」
「チャッ!?」
「コイツはお前らには荷が重い！コイツの相手は俺がする!!」

だが、モネラ星人からさらなるメッセージが送られてきた。

『貴方の介入は予想出来ていました、ウルトラマンゼロ』
「ほぉ……？生憎だが、データを集めた程度でやられるほど、俺はヤワじゃねえ。隊長の肩書を背負ってるのは伊達じゃねえってことを見せてやるぜ!!」
『ええ、ですから素晴らしいゲストを二名、用意させて頂きました』
（ゲスト……!?まさかっ……！）

モネラ星人の言葉に、タイガはあの時のことが再び脳裏によぎる。そしてその内の一人がいつの間にか現れたようで、ゼロが動きを止めた。

「……何だよ、お前は」
「……」
「ダンマリか。答える気がねえのはまあいい、だがな……！」

ゼロが語気を強め、騎空艇に乗った者達も『それ』の姿を見て息を呑む。
『それ』はゼロの頭上、真上で腕組みして浮遊し、微動だにしない。
「テクターギアなんか付けたままってのは、ナメ腐ってるにも程があ

るんじゃねえのか!?」

そう、かつてはゼロも着けていたテクターギア。
動きを大幅に制限するそれを付けたまま、漆黒の戦士はゼロの頭上で沈黙を守り、佇んでいた。
さらに、轟音と共にもう一人が姿を現し、そちらを向いたタイガやトリガー、そしてゼロは驚愕する。
特にタイガの動揺は尋常ではなく、ゼロも同じ。
加えて、『彼』を知る者はあり得ないものを見るような反応を示す。

「嘘……でしょ……？」
「そんな……どうして……」
「何かの間違いです……あの人が……」
「おい！どうしたんだ!?」
「彼女達の様子がおかしいぞ！矢的殿、アザゼル殿……!?」

リアスやアーシア、小猫が信じられないような表情をしていることに異変を感じたオイゲンとカタリナか二人に問うも、その二人も同じような状態。

「何故だ……！そんなこと、あるはずが……」
「笑えねえにも程があるだろうが……！」

二人だけではない……ムサシ、リクも同じ気持ちであり、アサヒに至っては首を横に振りながら目に涙を溜めている。

「……何で……あんたがそこにいるんだよ……」

ゼロが絞り出すように声を出すが、『彼』は応えない。

『こんなん信じられるかよ……！』

『きっと、何か事情が……！』
『それよりも問題は相棒とタイガだ……！』

フーマ、タイタス、そしてドライグも混乱しており、一誠は――

『ただの……夢だろ……あんなの、ただの夢だったはずだろ……』

目の前の光景を誰よりも信じられず、それはタイガも同じことで
『彼』に問い詰める。

「どうして……どうして貴方が……！答えて下さい！」

彼らの前に立ち塞がった存在――

「ダイナ兄さん!!!」

伝説の英雄、ウルトラマンダイナに。

〈続く〉

嘆きの空

コアトリクエが変形したデスフェイサー、テクターギアに包まれた存在、そして……ウルトラマンダイナ。

未知なる強敵と良く知る実力者の三体を相手にすることになったゼロ、タイガ、トリガー。

その中で、早くもタイガ、それに一誠は戦意を挫かれ始めている。

混乱収まらぬ中、遂に三対三の戦いが始まった。

この戦場において、現状ダイナを知らなかったトリガーは唯一未だモチベーションを維持出来ている。

本来ならばデスフェイサーの相手を引き受けるはずだったゼロはテクターギアを着けた相手と、共に戦うはずのタイガはダイナと戦闘開始しており、必然的にトリガーがデスフェイサーと相対していた。

「チャッ!!」

鋭いチョップで先制攻撃を仕掛けるトリガーに対し、デスフェイサーは腕をクロスさせて防御。

間髪入れずに右フック、左ストレートを放つも同じく右腕、左腕で防御され、弾くような動作でトリガーを吹っ飛ばした。

「グアッ!!」

軽くバウンドしつつも起き上がったトリガーに向けて、デスフェイサーは左腕のガトリング砲を容赦無く連射する。

トリガーの周辺に爆撃されたかのような爆炎が巻き起こり、その中にトリガーが消えてしまう。

しかし――

『Ｕｌｔｒａｍａｎ―Ｔｒｉｇｇｅｒ　Ｓｋｙ―Ｔｙｐｅ！』

「――!!」

身を縮こませて高速で回転しながら、先程までとは違う紫色を基調としたカラーのトリガーがデスフェイサーの真横をすり抜け、頭上を陣取った。
暴走したティアマトを止める際に目覚めたトリガーのスピード重視形態、スカイタイプだ。

『Ｃｉｒｃｌｅ―Ａｒｍｓ！』

その手に収まったサークルアームズは、マルチタイプの時の剣の形――マルチソードではなく、弓状のスカイアローという形に変形している。
機械相手に効果があるかは分からないが、太陽を背に視界的な優位にたったトリガーは、決められずとも有効打にはなるだろうと予想し、スカイアローを使った必殺技を放つべく、グランがインナースペース内でスカイアローにＧＵＴＳハイパーキーを装填。

『Ｍａｘｉｍｕｍ―Ｂｏｏｔ―ｕｐ！Ｓｋｙ！』

スカイアローに光の弦が出現し、それを引くと光の矢が徐々に形成され――

『Ｒｕｎｂｏｌｄｔ―Ａｒｒｏｗ―Ｓｔｒｉｋｅ！』
「シャァッ!!」

青白い巨大な光の矢が放たれた。
その狙いは正確にデスフェイサーの頭部を捉えている。

「決まったァー!!」

ラカムがそう叫び、ロゼッタやオイゲンらもそれを確信するほど、

トリガーの放った一撃は見事なもの。
……そのはずだった。
だがトリガーのランバルトアローストライクはデスフェイサーの反射技ジェノミラーによってそのまま撃ち返され、不意を突かれたトリガーは間一髪回避するも、それすら読んでいたデスフェイサーが先回りして回避先に右腕・デスシザースを射出、トリガーの首を掴み地面に勢いよく叩きつける。

「ウグァッ!!」

倒れたトリガーに追い打ちでガトリング砲を連射するデスフェイサー。
戦況は明らかにトリガーが不利であった。

「やることなすこと全部無力化されちまう……!どうなってやがんだ!?」
「グランさんと一誠さん、そしてタイガさんはあのクリスタルで出来たカプセルに入ったわ。コアトリクエの戦力増強に繋がるのならと、殆ど意地みたいなものだけれど。でも、最初からそれが相手の狙いだったみたいね」

ロゼッタの言うように、最初からモネラ星人はウルトラマンにターゲットを絞っていた。
そうでなければトリガーやタイガは元より、ゼロがテクターギアを着けた戦士と戦っていることはなく、デスフェイサーと戦っていたはず。
そして彼らは思う。
自分達では本当の意味でトリガーを助けることは出来ないのかと。

☆

ゼロとテクターギアを着けた戦士による戦いはまさに互角、一進一退を繰り返していた。
相手は制限がかかるテクターギアを着けたままだが、全力を出していないのはゼロもまた同じこと。
「なるほどな。確かに格闘戦は強いみたいだが……」
戦いながら相手を見極めていたゼロは、ゼロスラッガーを飛ばし相手を撹乱したあと、ウルティメイトブレスレットになってから使っていなかったウルトラゼロランスを使い、テクターギアの戦士を大きく吹き飛ばした。
「ナメたまま俺を倒そうなんざ、2万年早いぜ!!」
ゆっくりと起き上がったテクターギアの戦士だが、直後に左腕を掲げたかと思えば自身の胸の辺りを勢いよく打ち付けた。
それに反応してテクターギアが弾けるように解除され、その正体が露わになる。
ゼロと全く同じ姿――強いて言うなら両目がジードのように青く、体色に青がない代わりに黒があるという違いがあったが、頭部のゼロスラッガーもカラータイマーも存在する、ゼロの双子かと思うような外見。
「俺の名は……ウルティノイドゼロ」
「ウルティノイド……ゼロだと!?」
ウルティノイド――同種の名をウルトラマンノアの模造品であるダークザギがかつて持っていたとレジェンドから教えられていたが、まさか自身と同じ名を持つウルティノイドが存在したことにゼロは驚く。

「何処のどいつが俺を模してお前を作ったのかは知らねえが……模造品に負ける俺じゃねえ！」

ゼロはウルティノイドゼロへと突撃し、やはり互角の格闘戦を繰り広げる。

あくまで模して造られたはずのウルティノイドゼロが、オリジナルであるゼロと互角に渡りあえていてもおかしくはない……が、ゼロの成長度合を考えるとそれはおかしい。

特にここ最近は一誠らも交えた特訓でよりパワーアップしたはずだというのに、それ以前に造られたであろうウルティノイドゼロが食らいついて来るのはあまりにも不自然。

そう考えたゼロは、ウルティノイドゼロを確実に倒すべくウルティメイトイージスを装着。

「お前には悪いがな、お前だけに構ってる時間はねえ！タイガの方が明らかに不利だろうし、一気に決着をつけさせてもらうぜ！」

「……」

そう言い放ったゼロに対し、ウルティノイドゼロはその双眸を光らせ、力を溜めるようなポーズをとる。

「親父のネオワイドショットと同じ、俺のワイドゼロショットの強化版か？けど……!?」

ゼロの予想は大きく外れた。

何故なら、弾け飛んだテクターギアが分解・再構築され、ウルティメイトイージスのような形となってウルティノイドゼロへと装着されたのである。

名付けるなら重装ウルティノイドゼロ。

「ウルティメイトイージスだと……!?いや、エックスの奴が俺と同じ

アーマーを纏えることを考えりゃあるかもしれなかったが……」
「驕るな、ウルトラマンゼロ」
「何だと？」
「お前は今日、ここで倒される」
「……やれるもんならやってみやがれ!!」

己のコピーにここまで言われて黙っていられるゼロではない。
一気に距離を詰め、ウルティメイトゼロソードで斬りかかるゼロに対し、同じようにウルティノイドゼロソードで受け止め、反撃する重装ウルティノイドゼロ。
巨人同士の凄まじい剣戟戦闘は予想通り、再三に渡ってなお互角。
だが、こうなってくるとどうしてもある部分で差が出てきてしまう。
体力と精神的余裕――この場で二人の『ゼロ』にある差は経験を除けばそこにある。
ウルティノイドゼロはゼロに対してのみ注力すればいいが、ゼロの場合はデスフェイサーに動きを完璧に読まれているトリガー、そしてタイガにも気を配らなければならず、それをウルティノイドゼロに阻まれていることもあって焦りが生まれている。
その結果、時間をかければかけるほど「早く二人を助けに行かなければ」という気持ちによる焦りがゼロの攻撃から冷静さを奪い――

「デアッ!!」
「グゥアッ!?」

最初にウルトラゼロランスで吹き飛ばされた時とは逆に、ゼロが一撃をもらって吹っ飛ばされることになった。
（くそっ……予想以上に強えな。トリガーとタイガに気を向けてたらコイツには勝てない……だが二人をこのまま放っておくことは……）

ウルティメイトゼロソードを支えに立ち上がろうとするゼロを、さらに追撃するウルティノイドゼロだったが――

『ウルトラマンジード！プリミティブ！』

「デリャアアアアア!!」

ドガァァァァッ!!

「グゥオッ!?」

ゼロの危機にいても立ってもいられなくなったリクがジードに変身し、ウルティノイドゼロへ横から一撃を叩き込んで吹き飛ばしながらクリオモス島へと降り立った。

「ッ……ジード！」

「コイツは僕が抑えるから、ゼロはタイガの方を！相手が相手だけに戦えてない！僕はゼロと過ごした時間も長いし、あの姿にも少しは対抗出来る！それにダイナさんと過ごした時間は僕よりゼロの方が長い！僕よりもゼロの方が適任のはずだ！」

「すまねえ……！あっちはどうにかする！奴は強えぞ、気をつけろ!!」

ジードにこの場を託し、ゼロはウルティメイトイージスを装着したままタイガの救援へと向かう。

起き上がり、ウルティノイドゼロソードを構える重装ウルティノイドゼロに、ジードは敢然と立ち向かっていった。

☆

リアス達も何故、どうしてと混乱しながら、ダイナと戦う――いや、一方的にやられるタイガを見ていた。

「デアッ!!」
「ウアッ!!」

ダイナによる正面から腹部への強烈なキックを受け、タイガはバウンドしながら吹っ飛んだ。
さらに、起き上がろうとするタイガの両足を抱え込み、ジャイアントスイングで投げ飛ばすダイナ。

「ダアァァァァッ!!」
「ウッ……グァァァァッ!!」

投げ飛ばされて近場の岩に叩きつけられ、悶絶するタイガ。

「グッ……カハッ……ダイナ兄さん……何でッ……」
『何をしているタイガ!やられっぱなしだぞ!』
『イッセー!いつまでウジウジしてんだ!止めるも倒すもどっちにしたってやる気出さなきゃ始まんねぇだろうが!』
『分かってるよ!けど……』
『相棒!今はでもけどだってと言っているヒマはない!相手が相手、やらなければやられるだけだ!!』

タイタス、フーマ、ドライグの叱責も、ショックが大きすぎる二人にはあまり効果がない。
どうしたものかと思ったとき、フーマがある考えを思いつく。

『……そうだ!あのダイナ先輩は偽物かもしれねえぞ!ロボットとか!』
『!!』
『ロボットだとしたら先輩の十八番の一つ、タイプチェンジが出来るとは思えねえし、タイプチェンジしても見てくれだけか、チェンジ中にメカっぽいのが見えるかも!』

タイタスやドライグもそれだ！とフーマの案に乗る。
ダイナが本人でないと分かれば、逆にダイナを利用したとタイガと一誠なら怒りに燃えてパワーアップするだろう、と三人は考えた。
確かに実際そうなのだが――
眼前のダイナはそれを読んでいたかのように、戦法を変えてきた。

「ンンンンン……シュワッ!!」
「『『『『!?』』』』」

なんとダイナは額のクリスタルを輝かせ、ミラクルタイプへとタイプチェンジを行ったのである。
驚くタイガを余所に、ダイナはウルトラ念力を使ってタイガを空中へと持ち上げ、勢いよく地上へと叩き落とす。

「グハッ!!」
『ちょっと待てよ！偽物が何でタイプチェンジとか使えてんだよ!?』
『しかも見掛け倒しではなく、能力もそのままだ……！』
『これはいよいよヤバいな……おい、相ぼ……!?』
『……やっぱり、あれはアスカ兄さんなんだ……！何でだよ……何でなんだよ……』

いよいよ戦意が喪失しかかっている一誠、そしてそれはタイガも同様だった。

「う……うう……ダイナ兄さん……」

痛みに苦しみながら震える手をダイナに伸ばすタイガだったが、ダイナは飛び上がり太陽に背を向け、かつてはデスフェイサーに放ったこともある技、シャイニングジャッジを放つ――

「デェェェェアッ!!」
「グワッ!?」

――直前、援護に駆けつけたゼロのショルダータックルを受けてクリオモス島に落下した。
ゼロもまた、倒れたままのタイガの前に降り立ち、ウルティメイトゼロソードを構える。

「ゼ……ゼロ……」
「タイガ、お前は下がってろ。アイツは俺がぶん殴ってでも正気に戻す!もし正気だってんならとっ捕まえて無理矢理にでも理由を吐かせてやる!うおおおお!!」

ダイナを傷つけたくないタイガと違い、ゼロは盟友との戦いを躊躇していない。
ウルティメイトゼロのままダイナと戦っているのが何よりの証拠だ。
猛攻を仕掛けるゼロに対し、攻撃も程々に捌きや回避を主軸におくダイナ。
両者の激突は意外にも早く決着がつきそうだった。

「ッ……ぐ……!」

互角の実力を持っていたウルティノイドゼロとの戦いでエネルギーを消耗し、ウルティメイトイージスを長時間纏っていた上、さらにウルティノイドゼロから重い一撃を食らっていたゼロの体力が限界に近づいてきていたのだ。
彼とてダイナが敵にまわったことにショックを受けていないわけではない。
だが、迷う後輩達の前で先輩であり隊長でもある自分が戸惑っていてはいけないと気丈に振る舞っていた。

多方面からくるプレッシャーで精神的に疲弊していたゼロは、それによって攻撃に必要以上に力を込めてしまい、知らず知らずのうちに通常より多くの体力を使っていたため――

「シュアッ!!」

「グウッ!!」

ダイナの高速移動による撹乱から脇腹への一撃を受け、吹き飛ばされてしまう。

（ぐっ……！さっきの一撃が響いてやがる……！）

吹き飛ばしたゼロを一瞥し、ダイナはフラッシュタイプへと戻ると、胸に両手を添えたあと大きく右腕を右上に、左腕を左下に開いてエネルギーを収束する。

「まさか……!?」

「いけませんわ！ダイナさんは……アスカさんはタイガ君を確実に仕留める気でいます!!」

「アスカさん、やめて下さい！」

裕斗と朱乃が顔を青くさせ、アーシアが涙を流しながら叫ぶもダイナは振り向きもしない。

辛うじて片膝立ちまで持ち直したタイガだが、ショックが抜けきっていないのか動きが遅く、とてもじゃないが避けれる状態ではなかった。

「タイガ！しっかりしなさい！」

リアスも叱咤するが、彼女も悲痛な表情であり涙を必死に堪えてい

るのが目に見えて分かる。
そんな彼女らの叫びも虚しく、満足に動けぬタイガに向けて――
「シュゥワッ!!」
腕を十字に組み、ダイナの代名詞的必殺技であるソルジェント光線が発射された。
しかし――
「グアァァァァッ!!!」
「「「「!!」」」」
『せ……先輩ぃぃぃ!!』
「『『ゼロ隊長おぉぉぉッ!!』』」
タイガとダイナの間にゼロが割って入り、タイガの代わりにソルジェント光線の直撃を受けたのだ。
幸いにもウルティメイトイージスは破損しなかったものの、ウルティメイトゼロであっても消耗した状態でダイナのソルジェント光線をもろに受ければただでは済まない。
遂にウルティメイトイージスも解除され、ゼロのカラータイマーがけたたましく点滅する。
さらに、他の戦場でも戦局が決しようとしていた。
☆
勢いよく援護に来たはいいが、やはりプリミティブのままでは重装

ウルティノイドゼロの相手は厳しく、ジードは苦戦を強いられていた。
別形態にフュージョンライズしようにも、相手の攻撃が激しくそれをやれるだけのスキがない。
（せめて、少しでも気が逸れてくれれば……！）
「……」
重装ウルティノイドゼロが急に攻撃を止め、別の方向へ意識を向けた。
チャンス、と思うジードであったが、突如ウルティノイドゼロがある方向へ飛び立ち、空中で静止。
さらにウルティノイドゼロソードが中心から左右に割れ、結晶が埋め込まれた銃口らしきものが現れた。
そして、その先には――
「……ッ！グランサイファー!!」
そう、重装ウルティノイドゼロはグランサイファーを排除しようと考え、ウルティノイドゼロソードに秘められた次元放逐砲ディメンション・ゼロを起動。
キングの【エリア】で造られたダークロプスゼロとは違い、重装ウルティノイドゼロはウルティメイトイージス型の装備を身に着けているため防御力が段違いであり、また攻撃力も増しただけでなく運動性も落ちていない。
放たれたが最後、確実にグランサイファーと乗員はディメンションゼロを受け、別次元へと飛ばされるだろう。
そうはさせないと、ジードは飛んだ。
発射には間に合わないだろう。
そう確信して、グランサイファーへ。

「おい！あのゼロもどきこっちを狙ってやがる！」
「ラカム！急いで舵を切れ！このままじゃ直撃するぞ！」
「分かってる！けどこれが限界だ！」
「全員、急いで船内に入るか何かに掴まって！」

アザゼルの指摘にオイゲンとラカム、ムサシがグランサイファーで指示を飛ばす。
矢的やアサヒ、ジータはダイナの所業とゼロの負傷にショックを受けているリアス達を何とか船内に連れ込もうと四苦八苦している。
ロードドラグーン、サイバスター、そして自動操縦となったダブルオーザンライザーは増援で現れた円盤群の対処のため、運悪くグランサイファーから離れてしまっていた。

（仕方ない……！この騒ぎなら僕が変身してもバレないかもしれない。いや、バレたとしても生徒達の命には代えられない！）

矢的は８０へと変身するべくブライトスティックを取り出そうとするが、それより先に凄まじい衝撃が船体を襲い、同時にディメンションゼロが放たれた。
ガアァァァァァン!!

「「「「うわあああああ!!」」」」
「この衝撃はあいつの攻撃じゃねえ！あいつがズレて……違う、この船がさっきまでいた所から大きく吹き飛ばされるように……!?」
「え……？」

アザゼルの言葉で誰より先に衝撃の原因を目にしたのはギャスパー。
先程までグランサイファーがいた場所には肩を上下させるジードがいた。

ダメージを受けていなかったとしたとしても、全長数百mのグランサイファーを動かすのは容易ではない。
さらに、ダメージを受けていたジードはそのまま動かそうとしても力が満足に込められず、自分共々グランサイファーもディメンションゼロの餌食になってしまう。
そう考えたジードは、グランサイファーが壊れない程度に飛行速度を上げ、体当たりで突き飛ばしたのである。

――ギャスパー君――
「リ……リク兄さん!!」
――今の君なら大丈夫。皆を、頼んだよ――

そのテレパシーによるメッセージをギャスパーへ残し――

「ウワアアアアアア……」
「ウルトラマンジードオオオ!!」

ジードは、虚空の彼方へと飛ばされた。

☆

トリガーとデスフェイサーの戦いもまた、決着の時を迎える。
デスフェイサーが一方的に有利な戦いを展開し、重装ウルティノイドゼロやダイナの戦いがほぼ勝利と言って差し支えなくなったことを確認し、デスフェイサーはクリオモス島での戦いを締めくくるべく、ジェット噴射で空へと飛び上がり、胸部からキャノン砲を展開。
ゲランダを一撃で消滅させたネオマキシマ砲である。
それをトリガーへ向けてチャージするデスフェイサーに対し、トリガーもマルチタイプにタイプチェンジし、ゼペリオン光線で迎え撃つべく発射準備に入った。

……しかし。

「……ッ!!」

L字型に組む直前、トリガーの脳裏にはあの光景が鮮明に浮かび上がる。

ゼペリオン光線とネオマキシマ砲がぶつかり合い、簡単に押し負けて消滅する自分の姿が。

「どうした!?トリガー撃て!!」

「何か様子が変ですわね……」

カタリナがそう言うも、ヴィーラの言うようにトリガーはゼペリオン光線を撃たず――ネオマキシマ砲が発射された。

ズゴアアアアア!!!

「ッ!!」

トリガーが、何か動作を行い――

「っ……しまっ……!」

「くそっ……たれぇ!!」

傷ついた身体に鞭打ってゼロがタイガを抱え――

――そして――

ドガアアアアン!!!

「「「「うわあああああ!!」」」」

「「「「きゃあああああ!!」」」」

クリオモス島の地上施設は跡形も無く吹き飛ばされた。
その凄まじさはギリギリで離脱していた多くの騎空艇にも余波が及ぶほどのもので、グランサイファーも例外ではない。
それを嘲笑うかのように、エルミデ博士……いや、モネラ星人からメッセージが流される。

『ウルトラマンゼロ、ジード、タイガ……そしてトリガーは消滅しました。今後のことは追って連絡します。残された僅かな平穏を楽しむといいでしょう』

そのメッセージが終わると、デスフェイサーとモネラシード、円盤群、ダイナと重装ウルティノイドゼロは揃って空の彼方へと飛び去っていった。

辛うじて無事だったクリオモス島の地下施設では、重役が悔しさと絶望に打ちひしがれていた。

「なんてことだ……っ……なんてことだっ!!」

平和を守るための兵器が、平和を脅かす兵器に――やはり全自動化が裏目に出てしまった。
この日、スカイ・ガーディアン・エージェンシーは大打撃を受け――
ウルトラ騎空団は、敗北した。

〈続く〉

突き付けられた現実～宣戦布告

その日、ウルトラ騎空団は緊急事態ということで三艦一艇が集合していた。
用事があると言って最も合流が遅れたのはヒリュウ改。
合流するや否や、ゼット、そして生徒会の面々はエリアル・ベースの医務室に急行する。
その他、多くの者が彼らの後に続き、レジェンドだけはただ一人ゆっくりと向かっていた。
（……恐れていたことが現実になってしまったか。しかも以前に増して最悪な形で）
静かに目を伏せながら、レジェンドもまたエリアル・ベースの医務室へと足を運ぶ。

☆

「ゼロ師匠!!」

肩を上下させつつ、勢いよく医務室に入ってきたゼットの目に映ったのは、首から腰の辺りにかけてまで包帯を巻かれ、人工呼吸器を着けられている痛々しいレイトの姿。
その近くにはレイト程ではないにしろ、包帯を巻かれている一誠やグランの姿もあった。
ネオマキシマ砲が放たれたとき、トリガー、ゼロ、そしてタイガはギリギリの状態で退避し、エリアル・ベースが滞在していた島に急遽ゼロのテレポートで転移していたのだ。
その後、限界がきたゼロを始め人間の姿になった三人を、依頼を終えて帰ってくる途中の我夢とジークフリート、パーシヴァルの三人が保護して医務室に運び込まれたというのがことの顛末である。

そんな三人……加えてトライスクワッドも含めた六人以外にも、オカルト研究部やグランサイファーのクルー達が集まっている医務室に到着したゼットらはあまりの惨状に愕然とした。
レイトはウルトラ族であるため、レジェンドの主治医である卯ノ花主導のもと涼子やしのぶが治療に当たっている。
本来なら束やクロエもいるのだが、間の悪いことに惑星レジェンドに行っているため不在。

「命には別状ありませんが、しばらくは絶対安静が必要な怪我です。話によるとウルティメイトイージスを纏っていたそうですが、おかげでこの程度で済んでいると言っていいでしょう」
「っ……」

タイガがそれを聞いて拳を握り締める。
自分がダイナと戦うのを躊躇し、攻撃を受け続けてダメージが蓄積、満足に動けなくなったところを狙われ――ゼロに庇われた。

「……俺が、躊躇わなければ……」
「タイガ……」
「……タイガだけじゃない。俺もアスカ兄さんが相手だって分かったら……呆然として力が抜けちまった。その結果がこれだ。それだけじゃねえ、あのコアトリクエが変形した奴だって、俺達がバカなことを言い出さなけりゃあそこまで強くはならなかった……!」
「イッセー、過ぎたことを後悔しても仕方ないわ。今は――」
「分かってます!!分かってるけど……俺は……」

まだ、踏ん切りがついていない。
そんな一誠とタイガを困ったように見つめるリアス達だが、漸くやってきたレジェンドが重大な情報を提示する。

「……リク以外……いや、ギャスパーもいない、か。それ以外でクリオ

モス島に行った面子は揃っているな」
「レジェンド様……」
「まず言っておくことがある。お前達がクリオモス島に向け出発直後、ベリアルから通信があった。休暇も兼ねてこちらに向かっていたダイナが突如消息を絶ったとな」
「「「「!!」」」」

レジェンドから告げられたそれに衝撃が走る。
それはつまり、クリオモス島で現れたダイナが本物である可能性が更に高まったことを示していた。

「消息を絶ったって……!?」
「そのままの意味だ。詳しい理由は分からん。ハッキリしているのは、お前達が遭遇したダイナが本物にせよ偽物にせよ、討つことも視野に入れねばならんということだ」
「『なっ……!?』」
「ウルティノイドの方はともかく、ダイナは正しくウルトラマンだ。もし放置して被害が出ようものなら、ウルトラマンの信用そのものに関わってくる以上、無視は出来ん。酷だとは思うが、最悪の事態を想定して然るべきだろう」

その場にいる者達が驚愕する中、レジェンドは淡々と述べていく。
確かに正論ではあるのだが、頭では納得していても心では納得出来ない。

「待って下さいチーフ！きっと何か理由があるはずです！」
「あいつがそういう素振りを見せたのか？」
「いえ……それは……」
「倒す以外の方法があるならそれに越したことはない。だが、タイガの言葉に耳も貸さず、ゼロがウルティメイトイージスを装着してなお重傷を負うほど本気で撃ってくる奴が、そう簡単に話に応じると思う

のか？連中が再度侵攻してくるまでそう時間は残されていない。覚悟を決めろ」

ムサシの言葉すら、レジェンドはバッサリと切り捨て厳しく言い放った。

おそらく被害がここまででなければレジェンドも何らかの策を練っただろうが、こうなってしまった以上見過ごすことは出来ない。

そして、レジェンドによってその場にいた全員――特にオカルト研究部とグランサイファー組にさらなる衝撃が巻き起こる。

「それから卯ノ花、スペースの方は？」

「確保してあります。ちょうど二人分」

「そうか、助かる。すぐに運び込む」

そう言ってレジェンドが表に出て声をかけると、ゲンに誘導されながら、二人の重傷患者が運び込まれる。

その二人は――

「「イリナ!!」」

「「「「イオ!!」」」」

一誠やグランと共にいたはずの、イリナとイオ。

下手をすればレイトより酷いのではと思うような大怪我を負っており、しかも意識不明の状態。

「島の地下施設内に他の連中共々取り残されていたらしくてな、そのおかげでどうにか命は取り留めたようだ。どうやってパスコードを解除したかは知らんが、イリナの方はＸＸバズーカと同じものを抱えていたぞ。おそらくはそれでタイガやトリガーを援護しようとしたんだろう」

「……そんな……」

「これから彼女らの治療に入ります。皆さんは室外へ出て下さい」
「すまんな、烈。世話をかける」
「お気になさらず。レジェンド様も無理をなさらぬよう。私が彼らに付きっきりだと貴方に何かあった場合、満足に治療出来ませんから」
「ああ、肝に銘じておく」

レジェンドと卯ノ花は周りの重苦しい空気を気にせず、普段通りに会話し、その後はしのぶから「はいはい皆さん、退出ですよ～」と一部がグイグイ押し出されながら退出することになった。
そして落ち込むオカルト研究部を始めとした面々を含む全員に、レジェンドはこのあと緊急ミーティングをエリアル・ベースにて行うと告げ、その場を後にする。
残された者達はただただ俯くしかなかった。

☆

エリアル・ベース内のミーティングルーム。
そこには各艦艇の艦長及びそれに準ずる者とレジェンド、サーガ、そして一部の責任者達が勢揃いして着席している。

「……以上がクリオモス島で起こったことです」

矢的が話し、アザゼルも俯いて強く拳を握り締めており、他の者達も険しい表情だ。

「ゼロの負傷にジードは行方不明、おまけに一誠やトライスクワッド、そんでトリガーが自責の念やら何やらで使い物にならねえときたか……いっぺんにウルトラマンがここまでやられちまうとはな」
「しっかしそのモネ公、人の褌で相撲をとるようなマネして偉そうにぬかすたぁ腹立つぜ！おまけにゼロのパチモン、どういう訳か知らねえがアスカの奴まで同伴だ？ちったあテメー自身で喧嘩しに来やが

れってんだ!!」

冷静なオルガに対し、カミナは相当頭にきてるようで青筋を浮かべながらテーブルをバンと叩く。

「モネラ星人とゼロもどきはブッ飛ばすとして……問題はアスカ……ダイナだな。洗脳されてるのか自分から従ってんのか分からねえ」

「説得も効果なし、おまけにレイトちゃん……というかタイガちゃんに全力光線だからね。正直、後者の線は薄いんじゃない？俺はこのダイナってのに一度もあったことないけど、評判を聞く限り快男児って感じじゃないか」

シモンの意見にシエテは普段のおちゃらけさは微塵もなく、落ち着いて映像を見ながら意見を述べた。

「近々、この空域の騎空団を可能な限り招集して対策会議を開くそうです。場所はアマルティア島……秩序の騎空団の拠点としている島ですね」

「あそこか……そうなると脛に傷持ってそうな連中は集まらなさそうだ。第一、俺達と違って他の連中は星晶獣の相手だってそうポンポンとするこたぁねえからな。今回の相手はハッキリ言って規格外が過ぎるぜ」

ミツバが見ながら説明した、各騎空団宛に送られてきた手紙には『これは強制ではなく、あくまで協力要請であり、断ってくれても構わない』と締めくくられており、グランの代理として出席しているオイゲンはあの場にいた者の一人としての意見を述べる。

「出席するしないにしても、依頼は舞い込んでくる。そちらを疎かにするわけにもいかない」

「……モネラ星人の件に関しては俺達ヒリュウ改のメンバーと、グラ

ンサイファーで対応する」
「「「「!!」」」」

サーガの言葉に続いたレジェンドの一声で、全員の視線が驚きと共にレジェンドへと集まる。

「ちょっと待てよ旦那ぁ！ここは総力戦って展開だろうがよ!!」
「旦那のいるヒリュウ改はともかく、グランサイファーの連中じゃムサシの兄さんやアサヒを除くとこの手の相手と戦う経験が浅すぎるだろ」

カミナやオルガはそう言うが、サーガに制された。
それからレジェンドによる説明が行われる。

「お前たちの言う通り、総力戦というのが本来ならばベストだろう。だが、俺達ウルトラ騎空団にくる依頼の数や内容は半端ではない。サーガも言っていたが、それを蔑ろには出来んのでな……故に、俺を含めたウルトラマンや機動兵器等、単艦で戦力が充実しているヒリュウ改、及び事件に遭遇したグランサイファー組がこの件に当たり、エリアル・ベースとクロガネには各依頼を捌いてもらう」
「エリアル・ベース側は千差万別、この空の世界出身の様々な方々がおり所属人数は現在一番多く、またクロガネは機動兵器の搭載数や優秀なパイロットが多数所属していますから、大規模な依頼でもこなせるだけの戦力があります。加えてサーガ様は別として、レイトさんが負傷しているとはいえ、ミライさん、我夢さん、藤宮さんと、戦闘可能なウルトラマンが三名もいるため対怪獣・宇宙人戦力も充実していますし」

レジェンドに続く形でミツバが補足し、あまりに正論でぐうの音もでなくなる団長達。
戦力外どころか、大きく評価しているからこそ依頼関係を一手に引

き受けてほしいという願いであった。

「つたく相変わらず持ち上げんのが上手いな旦那。とりあえず俺達はいいとしてだ、ウルトラマンの三人は向かわせた方が良くないか？」
「それも考えたが、あの陰湿なモネラ星人のことだ。何かしてこないとも限らん。実際、ゼロの乱入も予想していたぐらいだからな」
「だろうな。テメーの手を汚さずなんて考えるような連中がやってくるのは大体卑怯な手って相場が決まってるもんだ」
「で、有事に備えてってわけか。そうするとそっちにいるのは旦那とサーガ様を除けば……」

オルガ、カミナ、シモンも漸く納得し、モネラ星人と戦うウルトラマンを数えると――
レジェンド、ゼット、トライスクワッドの三人（戦闘時は一人）、トリガー、レオ、８０、コスモス、そしてグリージョとオリジンの計１１名。
一応、レジェンドとゼットはセット扱い。
つまり同時に巨大戦闘可能なのは８名。

「……結構いけんじゃね？」
「バグキャラと旦那以外にチートラマンが紛れ込んでるからな」

言わずもがな、バグキャラがレオ＝ゲンでレジェンド以外のチートラマンがコスモス＝ムサシである。
さらに、ここに凱のガオファイガーやジャグラーのマスターフェニックスなどの機動部隊が加わるので、戦力不足はないだろう。

「……正直、この空の世界においてあれらに対抗出来る戦力があるのは俺達ぐらいだろう。他の騎空団は招集したとしてもまともな戦力になるかどうかさえ怪しい」
「俺達十天衆もこの騎空団に集結しちゃってるからね。戦力が偏りす

ぎな気がしないでもないけど、下手にバラけて指揮系統がめちゃくちゃになるよりはいいんじゃないかな？今回みたいにさ」

レジェンドを後押しするような意見を出すシエテ。

とりあえず、予定通りヒリュウ改とグランサイファーが今回の件に当たること、及び対策会議に出席することが決定し、その場は解散となる。

☆

翌日、グランサイファーは期日までエリアル・ベースやクロガネと共に行動させ、ヒリュウ改は対策会議に出席するべくアマルティア島に赴いていた。

本来であればリアスらオカルト研究部もヒリュウ改に所属しているため同乗しているのだが、大半が未だショックから回復していないということで、レジェンドがエリアル・ベースにて休養をとっておけと半ば無理矢理置いてきた。

出迎えてくれたのは、秩序の騎空団・第四騎空挺団の船長代理であるモニカ・ヴァイスヴィント、並びに船長のリーシャ。

「ご足労ありがとうございます、ウルトラ騎空団の方々ですね？」

「ああ。一応団長の立場のレジェンドだ。それからこちらがあの艦の艦長と副長」

「ヒリュウ改の艦長、ミツバ・グレイヴァレーです」

「同じく副長の八坂じゃ。宜しく頼む」

「それで……すまんがどちらが上司だ？俺としてはそちらのツインテールが元上司で補佐役をしてそうな感じがするんだが」

初対面のレジェンドにズバリ言い当てられ、驚くモニカとリーシャだが、レジェンドの経験の賜物であることには気付いていない。

「よく分かったな。貴公の言う通り、私は元船長で今はリーシャが船長だ。そろそろ経験も積ませねばと思っていたところだしな」
「まあ、一応知っておこうと思っただけで他意はない。会議前に聞いておきたいが、集まり具合はどうだ？」
「……ハッキリ言って、あまり良くはありません。『ウルトラマンが束になっても完封された』――この事がやはり大きく響いてるようです」
「予想通りか。とにかく、現状集まった連中でどうにかするしかあるまい。俺達がミスれば次は他の連中だ。いつまでも高みの見物だの逃げ腰だのではいられんだろう」

不安などない、と言わんばかりに堂々としているレジェンドを、リーシャは尊敬の眼差しで見つめていた。
ちなみに彼女は御年２１歳。
世界によってはキャンパスライフを謳歌していてもおかしくない年齢である。
つまり――

「それでは案内をお願いしますね、お二人とも」

――何かを察したミツバが柔らかく言うと、リーシャは慌てて「こ、こちらへ！」と三人を先導する。

（まだ初対面じゃ。いきなり芽吹くようなことはないじゃろう？）
（分かりませんよ、副長。レジェンド様に限って言うなら、初対面かつ一言でも落としかねませんから）

何やらミツバと八坂が密談しているが、レジェンドは別に気にしていない。

会議室に案内されると、どうやら一番最初だったらしくまだ誰も居らず、リーシャが「お好きな所にお掛け下さい」と言ったため、レジェンドを挟むようにミツバと八坂が着席。
レジェンドはそのまま腕を組んで瞑想に入り、ミツバと八坂は出されたお茶を飲みつつ静かに待つ。
そして、モニカとリーシャは……

（（き……気まずい……））

普段のレジェンドならそうはならなかったのだろうが、生憎と事が事だけに本来の性格――クールで寡黙なレジェンドになっているので纏っている空気が違う。
こんな状態で話し掛ける猛者は彼と親しい人物くらいしかいない。
おまけにミツバと八坂まで一言も発しないため、モニカにせよリーシャにせよ話し掛けるのを躊躇っていた。
そんな時に他の団員が参加する騎空団の代表を連れてきたことで、やっと会議が始められるとともに重苦しい空気が少しは解消される、と安堵する二人だったが……。

いざ会議が始まるとそんな訳がなかった。
多くの騎空団の代表がやたらとレジェンド達に突っかかるのだ。
やれ何故全員でクリオモス島に行かなかっただの、やれあの場で全力で食い止めておけばどうたらと、自身らは何もしなかったにも関わらずウルトラ騎空団を責め立てる。
正直、ミツバや八坂も相当頭にきていたし、モニカやリーシャは勿論、一部の騎空団の代表はウルトラ騎空団に責任追及するのはお門違いだと反論するが聞きはしない。
確かに一誠やタイガ、グラン＝トリガーのデータは取られたがあくまでデスフェイサーによる彼らに対する対策が成されただけで、実際はそれ以外への明確な被害はない……というより、一般的にタイガや

トリガーの変身者がバレていないのだから、他の騎空団ではなくむしろ彼らが属するウルトラ騎空団自身の方が悩む問題である。
　さらには――
「あの場で自爆特攻でもしておけば良かったのだ!!」
　これにはさすがにリーシャ達が怒る……前に、最悪なことにレジェンドの限界を超えてしまった。
「おい」
「何だ？今更弁解を――」
「お前らは何をしに来たんだ」
「何？」
「他人に対して罵詈雑言を浴びせるためだけにここに来たのか。だったら会議の邪魔だ。とっとと失せろ」
　代表達はあまりの言い分に一気に沸騰するが、ミツバと八坂はレジェンドがブチ切れていることを察して黙っている。
　モニカは歴戦の勘というか、レジェンドと共にいる二人が黙っていることに気付いて「これはヤバい」と理解したのかリーシャにも二人に倣って静かにしているよう耳打ちした。
「貴様……！その態度は何だ！」
「何も出来なかった連中の頭が偉そうに！」
「俺達が何も出来なかったなら、お前らは何もしようとすらしなかっただろうが」
「「「「ッ!?」」」」
「加えてもう一つ……あのクリオモス島壊滅事件の後、地下施設内の救助活動を行ったのは俺達以外では秩序の騎空団、そして今お前達に反論した騎空団の者達だ。お前らは何をしていた？」
「わ……我らにも他に仕事が……」

「俺達の忙しなさはお前達も知っているはずだ。仕事云々は通用しない。効率よく分担すればいいだけのこと、現に秩序の騎空団はそうしている。もう一度聞く、お前らは何をしていた？」

凄まじい勢いで威圧感が増していくレジェンドに対し、彼らに罵声を浴びせていた代表達はガタガタと震え出す。

プレッシャーは彼らにのみ叩きつけられており、モニカやリーシャ、本当の意味で勇士と言える騎空団の代表達には全く影響はない。

「俺達をこき下ろしたいならそれでも構わんが――」

――相応の覚悟はしておけ――

圧倒的なプレッシャーを前に、その代表達は情けなく気絶した。

中には白目をむいたり、痙攣したり、果てには失禁している者までいる始末。

「大口を叩いておきながら小物じゃの」

「八坂副長、彼らは何もせずこちらを責めるような臆病者ですよ？レジェンド様の殺気に耐えられるわけありません」

（（（（殺気どころか消す気満々に感じましたが!!））））

最後の最後でレジェンドのそれを感じ取ったモニカ達は、汗をダラダラ垂らしながら満場一致でそう思った。

それでも連中と違って気絶した者はいないあたり立派である。

「……さて、会議妨害する連中が黙ったところで改めて対策会議本番といこうか……ん？」

レジェンドがそう言うと、突然会議室が真っ暗になる。

まだ昼間だし窓もある、天気も快晴なのに――そう思った瞬間、会

議室の中心にエルミデ博士がスポットライトと共に現れた。
「「「「なっ!?」」」」
「どういうことだ!?警備は厳重にしたおいたはずだぞ!?」
「駄目です、モニカさん！外側との連絡が取れません！」
「どうやらこの空間だけ閉鎖されたようだな。いざとなれば俺がどうにかする。今は一先ず奴らからのリアクションを待とうじゃないか」
「光神様、落ち着いておられますね……」
「似たような事態にクソほど遭遇したからな。慣れた」
「普通はそれほど遭遇することもなく、なれるような事でもないんですけど……」

堂々としているレジェンドに溜息を吐くミツバと八坂。
どんだけ不憫な目に合ってるんだこの人。
二人だけでなく、モニカやリーシャ……他の騎空団の代表達もこの状況で冷静さを全く失わないレジェンドを感心すると共に、こんなことに日常的に遭遇しているということをどうかと思っていた。
それはさておき――

「お集まりの皆さんに通達させて頂きます。明日の正午、ロアーヌ島より――人類抹殺を開始します」
「「「「!?」」」」
「……」
「貴方達が如何なる抵抗をしようと、無意味であることを実感することになるでしょう。それでも来るというのならお待ちしています」
淡々と宣戦布告をしてきたエルミデ博士、もといモネラ星人。
「それから、この身体はお返しします――」
そう言うやいなや、いきなりその場で力尽きるように倒れ込むエル

ミデ博士。
リーシャが急いで駆け寄り、エルミデ博士を揺らすもどうやら気絶しているだけらしく、すぐに医務室へと運ばれていく。
「対策会議などしている場合ではなくなったな。明日の正午、ロアーヌ島……そこがモネラ星人との決戦の地だ。戦う気がある者は準備を整えて現地集合。奴らが言っていたように参加は任意、戦う気の無い者を無理矢理参加させる気はない。そういう連中を戦場に引っ張り出したところで役に立たん。むしろ足手まといだからな」
「「「「……」」」」
「俺達はこれから準備があるから失礼する。では、明日ロアーヌ島で」
そう言い残し、レジェンドはミツバと八坂を伴って退室していく。
残された者達はレジェンドの態度から察する。
彼は――否、彼らは自分達に何かを期待するようなことはないと態度で示していた。
普通ならば「団結して乗り切ろう」「改めて会議しよう」といった協調性のある言葉で返すのだろうが、レジェンドら三人はそれをしなかったからだ。
先程のような事が起きればそれも当然だろう。
レジェンド達は『また何か言われるくらいなら自分達だけで十分だ。腑抜け共は来るな』ということをその背中で語っていた。
「モニカさん、私達は……」
「当然向かうしかない……と言いたいところだが、今の私は船長代理だ。最終決定権はリーシャにある」
「ええっ!?」
驚くリーシャを「何事も経験だぞ」と笑いながら言うモニカだが、笑い事ではない事態にリーシャはアタフタしている。
そして、このモネラ星人の宣戦布告はレジェンドを始めとする騎空

団の団長らによって各々の騎空団へと通達され、翌日の正午へ向けて準備が進められることとなった。
……ちなみに……レジェンドらに対して罵声を浴びせていた騎空団の団長達は、気絶から目覚めるなりそれを伝えられ、案の定「急過ぎて予定が」「メンバーが休暇で」などと言い訳を始めてモニカやリーシャ達から冷めた視線を向けられた上、自分の騎空団にも失態が知れ渡り離脱する者が大勢出たそうな。

☆

エリアル・ベース内に一時的に割り当てられた自室で、ギャスパーは明かりも付けずベッドで蹲っていた。

「うっ……グスッ……リク兄さん……」

自分の手を引っ張ってくれた、敬愛する兄のような人物を目の前で失った彼は以前の状態に逆戻りしてしまっている。
リアスらはおろか、杏寿郎やしのぶでさえも連れ出すことが不可能なほど、外に出ることを拒んでいた。
泣きながら彼が見ているのは、最近団内で開催されたバトスピタッグトーナメントで見事リクと共に優勝したときの、二人揃って笑顔の記念写真。

「リク兄さん……僕、全然大丈夫じゃないです……」

そう零し、膝に顔を埋めるギャスパー。
そんな彼の近くに、何処から入ったのか青い光の玉が近づいていた。

――子供……？こんな子供が本当に『勇気』を持っているのか？――

〈続く〉

決戦に向けて～『光』と『克服』

モネラ星人の宣戦布告――

それを受けた後のレジェンドの行動は迅速であった。

ダイダロイトベルトでの各種依頼を消化していたエリアル・ベース、クロガネ、そしてグランサイファーに緊急連絡及び召集を行い、ガロンゾ島にて合流。

アマルティア島の会議室で起きたことを話し、その上で対応策を考える。

「明日ァ!?」

「急過ぎる……!あと3日、せめて2日だけでもあれば今ある依頼の殆どを終え、クロガネかエリアル・ベースの片方は参加させられたかもしれないというのに!」

「お館様……逆にヒリュウ改から何名かを派遣しつつ、残りの3隻でそちらに当たってもらうのは?」

小芭内の提案に蜜璃を始め何名かが賛同するも、レジェンドは難しい顔で腕組みしつつ、自分達に罵声を浴びせてきた騎空団の者達を思い出して却下する。

「俺の能力的にそれも考えたんだがな……さっき会った連中が揃いも揃ってクズ思考の奴らだった、秩序の騎空団や一部の者は違ったが。もし明日、想定時刻にロアーヌ島に俺がおらず、外で鉢合わせしようものならまたグダグダギャーギャー喚くかもしれんし、最悪あることないことでっち上げで悪評を広める可能性もある。一応シェロに根回しを頼んであるが、ああいう連中に限って悪知恵だけは無駄に働くからな。事が終わるまで油断出来ん。皆が築き上げてくれたこの団への信頼を崩れさせる訳にもいかんしな」

そう、ミツバや八坂もキレそうになった役立たず団長共のことであ

る。

「おまけに『自爆特攻しろ』ですよ？彼らがレイトさんやゼロガンダムさん、ロスヴァイセさんを犠牲にしろと、あまりにふざけた事を言ったおかげでレジェンド様本気でキレましたし」

「何ですって!?ロスヴァイセさんが犠牲になったら……ハクくんやフウちゃんも犠牲になるじゃない！」

「姉さん少し落ち着いて。色んな意味で」

「似た声だからかは定かではないが、あの場にいたのがお主であってもキレておっただろう。妾とて久々に腹が立ったわ」

「……サギリ、母上が怖いのじゃ」

「まあ、副長も自分とレジェンド様……と艦長がいっぺんにあーだこーだ言われて頭にきてるんでしょ。九重ちゃんも下手に突っ付かないようにね」

何かズレているカナエをしのぶが諌めつつ、八坂も未だに怒り冷めやらぬといった感じだ。

そんな母に怯えている九重にアドバイスするサギリ。

「そういうわけで、当初の予定通りヒリュウ改とグランサイファーでこちらは対処する……が、クリオモス島で事件に遭遇した者達は覚悟が決まった者のみ参加しろ。迷いながら戦って勝てる相手ではない」

突き放すような言葉を口にしたレジェンドだが、実際ダイナと戦っていたタイガはその迷い故に追い詰められ、ゼロを負傷させる結果になってしまったのだ。

しかも――

「あの……」

「どうした、アマリ」

「ロアーヌ島ってどんな所なの？何もない島とかならいいんだけど

……」
「……運悪く、逆だ。クリオモス島と同じく、やけに文明が進んでいる」
「それってつまり……」
「ざっと見てみたが、俺達の世界の東京や京都みたいな都会になってやがる。スカイ・ガーディアン・エージェンシー謹製のシェルター施設とかもあるらしいな」

アザゼルがそう伝えると、ヒリュウ改のクルーとグランサイファー組が一斉に眉を顰める。

「……こんな町中で戦闘かよ」
「シェルターどうこうではなく、町への被害が甚大なものになるのは間違いない。逃げ遅れがいなければ御の字といったところだな」

竜馬がボヤき、厳勝が冷静に分析。
実際それぐらいしか考えている余裕はない。

「とにかく、ヒリュウ改とグランサイファーはこれからロアーヌ島に向かい明日の正午を見据えた下準備に入る。エリアル・ベースとクロガネは出来る限り依頼を片付けつつ、余裕が出来たら駆けつけてくれ」
「了解、レジェンドちゃん」
「分かったぜ、旦那。時間的にまだ余裕はあるし……一度オカルト研究部をそこまで同行させたらどうだ?それでも駄目そうならこっちに送り返せばいい。現場に着きゃ覚悟決まるかもしれないぜ?」
「……試してみる価値はあるか。オルガの案を採用しよう。もしかしたら送り返すというか、迎えを頼むかもしれんが」
「お安い御用だ。こっちから誰か派遣するわけでもないし、それぐらいやらせてくれ」

かくして、オルガが出した案に乗り、既にグラン以外が覚悟を決め、決戦に参加する気だったグランサイファー組の他に、リアスらオカルト研究部も同行が決定。
この時点で参加する気があるのはカナエと矢的、アザゼルという、顧問二人に部員一人のみ。
他のメンバーはレジェンドが会議に赴く前に告げた発言で、まだ決めかねている様子。

ロアーヌ島に向かう道中、レジェンド達は参加メンバー……正確には、機動部隊として参加するメンバーの確認をしていた。

「ゼット」
「はい！超師匠！」

敬愛するゼロの仇討ちと言わんばかりにゼットは気合いが入りまくっており、ウルティノイドゼロを「ゼロ師匠の空マネ野郎」、ダイナの方は「気絶させて確保」と中々に過激だが、やる気十分で迷い無しと他の者達に見習わせたい程である。

「グランティードを出す。俺がメインなのは変わらんが、今回のパートナーはお前だ。複座機のイロハを今回で一気にモノにしろ」
「ネオ・グランゾンの時とは勝手が違うんでございますか？」
「あの時は『いてくれて楽になった』という感じだが、グランティードは当初から二人乗りを想定している。やる事が増えるから予め学習しておけ」

そう言ってレジェンドは要点だけを纏めたファイルをゼットに投げ渡し、そのまま続けてメンバーのリストアップをしていく。
○グランティード（レジェンド／ゼット）
○サイバスター（ロスヴァイセ）

○ソウルゲイン（黒歌）
○コンパチブルガリバー（Ｃ．Ｃ．）
○ロードドラグーン（ゼロガンダム）
○マスターフェニックス（ジャグラー）
○ダ・ガーン／ダ・ガーンＸ　※
○ガオファイガー（凱）
○ボルフォッグ／ビッグボルフォッグ
○ヴァングレイ（千歳／ナイン（外部より））
○ゼルガード（アマリ／ルリア）
○ベルゼルート（サギリ／九重）
○ヒュッケバイン３０（アズ）
ダ・ガーンがまだ参加不参加ハッキリしない――一誠やトライスクワッドが絡むため――が、それでも相当な戦力だ。
何よりレジェンドが直接前線に赴くため、士気が段違いに高くなる。
ゲンや矢的、ムサシもいざとなれば戦闘機で出撃可能で、機体が無いものの機動部隊参加資格を得た者もおり、控えパイロットとして申し分ない。
一通り確認を終えたメンバーは、明日に備えて休む者や最終確認を行う者など思い思いの方法で余暇を過ごす。
そんな中、ルリアとアマリ、そしてアズのところをレジェンドが訪ねた。

「あ、レジェンド！」
「ルリア、思ったより緊張していないみたいで何よりだ」
「えへへ……こういうのは初めてですし、本当はちょっと怖いんですけど……レジェンドとアマリがいてくれるから平気です！」
「……だとさ、アマリ。どうやら俺達は別方面でも責任重大らしい」
「そうね、レジェンドさん。でも嬉しいかな、こうしてルリアに頼られて」

二人は一緒かつレジェンドが傍にいるということで、然程緊張していないようだ。
そちらは問題無い。
気になるのはアズの方だが――
「……」
少し顔を俯かせている。
レジェンドはアズのその様子と纏った空気から、戦えるかというより上手くやれるかという不安に駆られているのを感じ取れた。
「失敗が怖いか？」
「……うん。私は傷つく事に慣れてるから。でも……」
「自分のせいで味方が傷つくかもしれない、か。悩んでいるところ悪いが、うちには故意なフレンドリーファイアでなければ、ありがちな失敗したところで酷く言う輩はいないぞ。好きな風にやってみろ。お前の性格は大体把握したからな、何かあれば俺がフォローする」
優しく声をかけるレジェンドに、初対面の時と同じく自然と顔が赤くなるアズ。
それはいいのだが、その近くでは面白くなさそうなルリアとアマリがいることを二人は忘れてないだろうか。
「むうぅ～……レジェンド、アズさんに甘い気がします」
「私もそう思うわ。必要以上にベタベタしたりとかはないけど、何か空気がピンク色――」
「ぷんすこー」
「「「!?」」」
そしてルリアとアマリ以上に忘れていないだろうか。
レジェンドいる所オーフィス有り。

アマルティア島での会議に同席出来なかったからか一緒に行動していたオーフィスを、一緒にいるのが当たり前だったレジェンドもすっかり忘れていて――

「な、何かデジャヴが……！」

「初対面の時もこんな感じだったな……！今二人ほど増えているが!!」

オーフィスに連れられて、ルリアとアマリもレジェンドとアズを追い回すことになったそうな。

☆

そんなラブコメ展開中のレジェンド達とは裏腹に、グランはグランサイファーの甲板で空を観ていた。

そこへジータがのんびりやってくる。

相変わらず鋼のメンタルなジータは、「モネラ星人ぶっ潰す」とエリアル・ベースの我夢から最新のジェクターガンを貰ってきていた。

「んー！気持ちいいねぇ！明日は激動間違いなしだから、こういう時ぐらいのんびりしないと」

「うん……」

「……ふぅ。何があったのとか、何考えてるのとか聞かないけどさ。一人で抱え込むよりいっそ周りに暴露しちゃった方が楽にならない？タイガもそんな感じだしさ。リーダーだからって気を張り詰めすぎると――」

「僕は!!……きっとリーダーに向いてないんだ」

声を張り上げたグランに一瞬驚いたジータだが、顔を俯かせたまま船内に戻ろうとするグランに強く言い放つ。

「もう一度言うけど明日の正午！ロアーヌ島で私達は今戦えるメンバーの総力を上げて連中と激突する！ハッキリ言って、これでも心配なくらいだよ。団長がいてくれるけど何か起きそうな気もするし……でも私は！私達の勝利を信じてる!!」

ジータの言葉をその背で受け止めつつ、グランは船内に消えた。

☆

同じ頃、一誠とタイガも悩んでいた。

またダイナと相対した時、自分達は彼に拳を向けられるのかと。

タイタス、フーマ、ドライグ、そしてダ・ガーン……彼らと共にいる者達もまたそれが心配でもある。

「旦那……今回ばかりは仕方ないんじゃねーか？」

「しかし、そうも言っていられれん状況だ」

『だがこれでは明日の正午までに覚悟が決まるかと言われれば難しいだろうな』

『せめて、何かきっかけでもあれば……』

二人と二体が話し合っているところに、調子を取り戻した雰囲気のリアスがやってくる。

「皆、調子は戻ったかしら？」

「部長……」

「リアス……」

「……やっぱりイッセーとタイガが辛そうなままね。無理もないわ、貴方達が一番彼を慕っていたもの」

リアスは二人の前の椅子に腰掛け、深呼吸した後に口を開く。

「私達は、ギャスパー以外参加する事を決めたわ。このまま黙って引き下がったら、それこそグレモリー家の名折れよ。でもね……イッセー、タイガ。ギャスパーにも言ったのだけれど、今回は貴方達の判断に任せるわ。勘違いしないでほしいのは、貴方達が足手まといとかそういうわけじゃないということ。今のまま戦って、もし貴方達まで失ったら……きっと私は立ち直れない」

迷ったまま戦いに出て、命を落としてほしくない――想い人と、弟のように可愛がっている者だからこそ、今の状態で戦場に出て最悪の結果になることは避けたいのだ。

タイタスらも黙ってそれを聞いている。

「だからね、さっきオーフィス達から逃げ回ってたレジェンド様に聞いたの。戦うことが怖くなったらどうしたらいいのかって」

「「「『また何でそんな目に合ってんのあの人!?』」」」

『ある意味二人よりも深刻だな』

ダ・ガーンの言葉に「ホントだよ」とげんなりした様子で賛同するフーマ。

そんな彼らに、リアスはレジェンドの力を借りて一つの道を示した。

「ま、まあそこは置いといて！レジェンド様に相談したら、自分よりも適任がいるから、ってエリアル・ベースに呼んでくれたみたいなの。だから、その人に会って貴方達の進むべき道を見つけてほしい。簡単じゃないと思うけれど、私は貴方達を信じてるわ。辛さを乗り越え、恐怖を克服してくれることを」

それからリアスは「行く時は気をつけて」と笑顔で言い残し、準備するべく席を立った。

一晩考え、彼らはエリアル・ベースへと向かう事にする。

自分達のこれからを見つけられることを信じて。

☆

翌日、ロアーヌ島――

クリオモス島同様、空の世界には似つかわしくない高層ビルやアスファルトが大半を占めるその島では現在、ウルトラ騎空団以外の騎空団によってシェルター施設への避難誘導がされていた。

『自分達の戦力では足手まといにしかならない。だけど出来る事を精一杯やりたい』と、クリオモス島で救助活動を行った騎空団達が駆けつけてくれたのだ。

おかげでレジェンド達は戦闘準備に全力が注げ、レジェンド自身「喚いていただけの腑抜け共と違って、真に模範にすべき者達」と彼らの姿勢を高く評価している。

また、秩序の騎空団・第四騎空挺団も参加。

こちらは援護主体となるだろうが、戦闘より負傷者救援に当たってくれるということでまた一つ問題が解決。

ウルトラ騎空団は戦闘に集中出来ることになった。

そんな中でグランは、一人陸橋で相変わらず悩んでいた。

「……ハァ……」

「お兄ちゃんどうしたの？」

「え？」

唐突に声をかけられ、そちらを向くとまだ１０歳にも満たないだろう少女がぬいぐるみ片手に見つめていた。

「もしかしてお兄ちゃん騎空士さんなの？じゃあこの島を守ってくれるの？」

「うん、騎空士だよ。でも……僕よりすごい、たくさんの人達が守ってくれるよ」

少女に目線を合わせるために屈んで、自嘲気味にそう言って少し俯くグランだが、その少女の抱いているぬいぐるみを見て少し気になった。

「それ……ウルトラマントリガー？」
「ううん、ウルトラマンティガ！」
「ティガ……？」

ディフォルメされているためトリガーに似ているが、確かに似ているだけでトリガーとは別のウルトラマンだ。

「私のお姉ちゃん、昔『神隠し』っていうのにあったんだって。そこですっごい怖い怪獣が出てきて、世界がなくなりそうになったの。そんなとき、ティガが現れて、みんなで一緒に光になってその怪獣倒したって、お話してくれたんだよ」
「皆で、光に……」

普通ならば御伽話で済まされるそれは、自分がウルトラマンになったこと、そしてレジェンドを始めとした周囲のウルトラマン達がとてつもなく輝かしい実績をもっていたことから、グランはそこに『光』を見出した。
（『ティガ』のことを良く知れば、あの機械巨人に勝てるかもしれない。でも、この島にいる皆は忙しいし……そうだ！）

グランもまた、行動を開始した。
一誠らと共にエリアル・ベースへと向かい、彼はそこでティガの強さを知る。
超古代の光の巨人――トリガーと同じく３０００万年の時を経て復活し、戦い抜いた……銀河遊撃隊の切り札たる存在の、本当の強さを。

☆

その頃、エリアル・ベースに残っていたギャスパーは、ある存在と対面していた。

あの青く輝く、ボール大の光の玉と。

「ど、どちら様ですかぁ!?」

「私は……バーン。聖勇者の一人だ」

一誠、タイガ、グラン……そして、ギャスパーもまた、新たなる転機を迎えようとしていた。

〈続く〉

恐怖を乗り越えて

正午までは時間がある――

そう考えた一誠達は、ダ・ガーンに頼んでダ・ガーンジェットでエリアル・ベースへと向かうことにした。

出発直前、グランに呼び止められ自分も連れて行ってほしいと頼まれたので、彼を連れエリアル・ベースへとダ・ガーンジェットは飛ぶ。

そして、エリアル・ベースでは作戦に参加しなかったギャスパーが、聖勇者と名乗る光・バーンと邂逅していた。

☆

その頃、スカイ・ガーディアン・エージェンシーが建設したシェルター施設にて、かの重役が避難してきた住民達に説明している。

その隣には、何かを思い詰めるような表情でエルミデ博士が俯いていた。

そして――

「皆さん、大丈夫でしょうか……」

「大丈夫。レジェンドがいる」

『こちらも問題はあるまい。何故なら我がいるからな』

万が一、シェルター内で何かあった時に備え、一般人に紛れ込んでアーシア、オーフィス、マジンガーＺＥＲＯがスタンバイしている。

一応ゴモラとゴジラもいるが、場所的にも下手に出したら混乱を招きそうなので今回はお休み。

「このシェルター内にいれば絶対に安心です。ですので――」

重役はコアトリクエの件の汚名返上をするべく、いかにこの施設が安全かと説明しているが、アーシアとしては一度クリオモス島でネオ

マキシマ砲の威力を目にしている。
あれを直接撃ち込まれでもしたらひとたまりもないのではないか……そう思わずにはいられない。
（勝利すること以上に……皆さんが無事でありますように）

☆

「改めて見ると圧巻ですね、ウルトラ騎空団……」
「ああ……しかもこれで戦力の一部に過ぎないらしい。我々秩序の騎空団でも太刀打ち出来ないのがひしひしと伝わってくる。味方で良かったというしかないな」

リーシャとモニカがそう話していると、グレイフィアとセラフォルー、ガブリエルにティアマットが飲み物を配りにやってきた。
「お疲れ様です、お二方。冷たい飲み物をお持ちしましたので、戦前に一息入れて下さい」
「甘いお菓子もあるよ☆」
「逆に甘さ控えめのもありますよ～」
「それはともかくオーフィスがいませんね。まさかと思いますがグランティードに隠れてるんじゃ……!?」

ティアマットが何やら言っているが、彼女がグースカ寝てる時に一通り説明を受けていたグレイフィアらはスルーしている。
モニカが少し周りを見渡してみると、ウルトラ騎空団の……というよりレジェンド一家の女性陣の姿が多い。
「しかし……何というか、女性の比率が多くないか？」
「ヒリュウ改に乗艦しているのは殆どがレジェンド様縁の方々ですので。男性の方もいらっしゃいますよ」

ほら、とグレイフィアが指差した先には既にＩＤアーマーを纏い、その状態で命と一緒に食事をとっている凱、同じくジャグラー作の牛丼を揃って食べているサギリとジャグラー本人。
さらに、ニコニコ笑顔で弁当を頬張る蜜璃を優しく見守る小芭内に、何よりレジェンドの周りにはアマリ、ルリア、アズを中心に黒歌や夜一、ロスヴァイセなど女性だらけ、しかも美女美少女ばかりときた。

「……リーシャ、目的までの距離は遥かに遠いぞ」
「ええっ!?いきなり何ですかモニカさん!?」

ちなみに何かを感じたアーシアとオーフィスが、シェルター内でダブルぷんすこーモードになっていた。

☆

エリアル・ベースに到着した一誠やグラン達は、それぞれ目当ての人物の捜索に入る。
グランが探している人物は普段クロガネにいるのだが、レイトの様子を見る為にエリアル・ベースに出入りしているとオルガに聞いたのだ。
そして、その人物とは――

「……いた!すみません!」
「ん?グラン君?チーフ達とロアーヌ島に行ったんじゃ……」
「そうだったんですが、どうしても聞きたいことがあったんです!ミライさん!」

ヒビノミライ――ウルトラマンメビウスである。

「僕に聞きたいこと？」
「はい！ティガの……ウルトラマンティガのこと、僕に教えてくれませんか!?」
「え？」

☆

同じ頃、エリアル・ベースの別の場所では、一誠とトライスクワッド（主にタイガ）がリアスの言っていた人物を探していた。

「……なあタイガ、そっちは部長から誰が来たのか聞いてるか？俺はその……レジェンド様に聞こうと思ったけど、とてもそんな空気じゃないし」
「いや、俺も……何か『会えばすぐに分かる』って、リアスはレジェンドから言われたらしいけど、それ以上のことは……」
「とは言うが、エリアル・ベース内はかなり広い。とても全区画を探し回っている時間は無いぞ」
「だよなあ……うっし！じゃあ二手に別れようぜ！俺と旦那で組んで探すから、そっちはイッセーとタイガな！」
「え!?ちょっ……待っ……！」
「健闘を祈る！」
「頑張れよー！」

何故か猛スピードで走り去っていくタイタスとフーマを見ながら、一誠とタイガは互いに顔を見合わせ溜息を吐く。

「……地道に探すか」
「そうだな……」

肩を落として二人が歩き始めて少しすると、売店が見えてくる……が、そこでその売り子を見てタイガが指差して驚いた。

「あああああ!!」
「うわっ!?いきなり何だよタイガ!マジでビビったぞ今の!」
「わ、悪い……でも!あそこにっ……!!」
「え?あそこって売店……」
「いらっしゃいませー!!」

そこで声を張り上げてお辞儀していたのは――

「何やってるんですか!?ゼアス先輩!!」
「へ……?先輩……?」

朝日勝人――銀河遊撃隊ベテラン勢に名を連ねる、ウルトラマンゼアスその人であった。

☆

一方、指定時刻の迫るロアーヌ島では、モニカやリーシャら秩序の騎空団を始めとした他の騎空団に見守られながら、レジェンド達が最終確認と準備を進めている。

「デスフェイサーは俺がグランティードで応戦する。他の機体は少なくとも空の世界で一度は出撃しているため、奴らに情報が行っている可能性が高い。グランティードはこの世界において初出撃となる上、サイズ的にもデスフェイサーと互角だ」

トリガーを圧倒したデスフェイサーに対抗するのはレジェンドとゼットの駆るグランティード。

「次に、ウルティノイドゼロとやらの相手はコンパチガリバー。攻防に優れ単独で空中戦が可能な機体というとガオファイガーと迷った

が、単機で射程面も問題無いガリバーの方に任せたい」
「妥当なところだな。ガオファイガーはどちらかというと近接戦闘に持ち込んでからが勝負だから、あの高機動な奴とは相性が悪い」

ウルティノイドゼロの相手はＣ．Ｃ．の操るコンパチブルガリバー。

「そして一番の問題であるダイナ……その相手を務めるのはソウルゲイン。パイロットの動きをダイレクトにトレースするソウルゲインならば、ダイナのタイプチェンジにも臨機応変に対処出来るはずだ」
「責任重大にゃ。頑張ったら御褒美出るにゃん？」
「頑張りと褒美内容によって考えんでもない」

そしてウルトラマンダイナと激突するのはゴーデスマガオロチとの戦いでも奮闘したソウルゲイン。
この３機が相手の主力を相手取り、他のメンバーはその援護か円盤群らの対処に回ることになる。

「ロードドラグーンは機体性能もパイロットの腕も文句無しのエース機だ。機動力もあるため空中・地上の遊撃に回ってくれ。サイバスターはその随伴だ」
「心得た」
「わかりました！」

両機とも高水準でトータルバランスが優れているため、ロードドラグーンとサイバスターは遊撃部隊に。

「マスターフェニックスとベルゼルートはコンビネーション前提で開発されたわけではないが、見事な連携が光る。この２機は組んで行動してもらう」
「ＯＫ！さすがレジェンド様、話がわかるわね」

「まあ、素人と組むよりサギリと組まされる方が好きにやれるしな」
「……何というか……私の疎外感が半端ないのじゃ」

そんな九重をレジェンドが撫でて慰めつつ、ジャグラーとサギリは（とりあえず）打ち合わせ開始。

「ガオファイガーはビッグボルフォッグ、そしてヒュッケバイン３０を随伴させ、地上での迎撃を頼む。逆に空中は先に言った遊撃部隊やジャグラーとサギリに任せる形になるからな」
「了解！俺からも頼むぜ二人とも！」
「お任せ下さい、凱機動隊長。アズ隊員もよろしくお願いします」
「は、はい。よろしく……」

まだ若干緊張気味のアズだが、ヒリュウ改で過ごした日々から凱やボルフォッグが悪い人ではないと理解しているため、幾分気は楽である。

「最後にヴァングレイとゼルガードはヒリュウ改の護衛だ。飛行可能で射程的にも様々な局面に対応可能な２機は、パイロットがまだ実戦慣れしていないことも考慮してそちらに回ってもらう。とはいえ、皆の帰る場所を守る重要な役目であることを忘れるな」
「「は、はいっ！」」
「今回、私はヴァングレイだけでなくセルガードのバックアップにも回ります。姉さん達は戦闘に集中して下さい」

レジェンドの指示に千歳、アマリ、ルリアは身を強張らせて返事をし、それを解すようにナインがフォローを入れた。
そして一通り指示を出し終えたレジェンドは周りを見渡し、一誠やグラン達が不在なことを確認して目を伏せる。
（……やはりダ・ガーンがいない。まだ戻ってきていないか。戦闘終

了まで戻らんと思った方がいいかもしれん）

目を伏せる直前、リアスを始めとしたオカルト研究部やジータらグランサイファー組の様子を見たところ、やはりというか大半が沈んだままだ。

ただ、リアスやジータといったリーダー格の者はしっかり元の調子を取り戻している。

メンバーをまとめなければという使命感や責任感からなのか、それともここにいない彼らを信頼しているからかは分からないが、理由はどうあれ気力が戻っているなら問題はない。

（俺達は俺達の成すべきことを成す。お前達はお前達が望む答えを見つけ出せ。それが今やらねばならんことだ）

レジェンドはネオ・グランゾン搭乗時のコート姿ではなく、もはや見慣れたジャケット姿でグランティードのコックピットへと向う。

若き勇士達が舞い戻ることを信じて。

☆

――エリアル・ベースの一室――

ギャスパーはバーンと名乗る光の玉と会話している。

「君の名前は？」

「ギ……ギャスパー・ヴラディですぅ……」

「そうか、ギャスパーか。では、ギャスパー……今この【エリア】で起こっている事態の数々を解決するため、君の力を貸してほしい」

「えええええ!?無理っ！無理ですぅ！僕には出来ませぇん!!」

そう言って毛布に包まりブルブル震え出すギャスパー。

あまりの怖がり様にバーンも困惑するが、根気よく説得を続ける。

「頼む、ギャスパー。君にしか頼めないことなんだ」
「絶対に無理ですぅ！・そもそも何で僕なんですかぁ!?この騎空団には僕なんかより凄い人が山ほどいるのに!!」
「君でなければならない理由……それは君が『勇気』を持っているからだ。ただの勇気ではなく、私と同じ波長……『勇気』を司る聖勇者である私と同じ波長を持つ君でなければ、私は力を発揮することが出来ない」
「!!」

勇気を司る聖勇者――彼の勇者とは、オーブやタイガのようなウルトラマン達ではなく、ダ・ガーンや凱達を例えるのと同じニュアンスで彼は言っているのだろう。
ギャスパーとしてはそう言われて驚きと、少しの嬉しさがある反面、自分にそんなものはないと思っている。

「……僕は、勇気なんてありません。今まで外に出れたのだってリク兄さんがいてくれたから……リク兄さんが引っ張ってくれたからだったんです」
「……」
「でも……！・色んなものをくれたリク兄さんがやられた時、泣き叫ぶばかりで僕は何も出来なかった！・そんな僕に勇気なんてあるはずないんですっ!!」

黙って聞いていたバーンだったが、ある時ある存在に言われた言葉を思い出す。

――バーン、『優しさ』もまた勇気の一つだ。心が強くなければ優しくはいられない。仮初の優しさではなく、心から誰かを思いやれる優しさを持つ者は、即ち本当の勇気の持ち主……『勇者』であることを覚えておけ――

マントを翻し、大いなる存在はそう彼に教えた。

「ギャスパー、よく聞いてほしい。私はかつてある人物からこう言われたのだ。優しさは勇気……そして、心から誰かを思いやれる者は勇者だと」

バーンの言葉に顔を上げ、涙を流しながらもバーンを見るギャスパーに、バーンは続ける。

「君は今、そのリクという者のために涙を流している。自分のためではなく、他人のために、心から。それは紛れもなく優しさ……つまり勇気を持っている証になる」

他人のために――そう言われたギャスパーは、バーンがある存在から教わったことを思い出したように、リクからの言葉を思い出した。

――皆を、頼んだよ――

思えば、ギャスパーの優しさに誰より早く気づいてくれたのはリクだった。

優しさは勇気――リクはそれに気づいていたのだろう、だからこそあの言葉と共に、皆を託した。

ここでまた引きこもれば、それこそリクを裏切ることになるのではないか――そう考えたギャスパーは、一歩踏み出してみる。

「僕は、一人じゃ何も出来ません……」

「ギャスパー……」

「……だから……」

――僕と一緒に頑張ってくれますか？

ギャスパーが続けた言葉にバーンは感無量であった。
そう、この言葉を待っていたのだ。
自分もまた一人では万全の力を発揮出来ない、故に必要なのは助け合い、共に戦う者。

「勿論だ。私もまた、一人ではこれからの戦いをくぐり抜くことは出来ない。君が私の力になってくれるように、私も君の力になろう」
「……ありがとうございますぅ」

まだ目に涙を堪えた状態ではあるが、ギャスパーが毛布から出てきた。
そんな彼に、バーンはまずある提案をする。

「そうだ、まず私が活動するための身体をイメージしてほしい。このままでは満足に戦うことも、君をサポートすることすら出来ない」
「身体をイメージ……」

そう言われてギャスパーに思い浮かべたのは一誠……というか、彼絡みの勇者であるダ・ガーン。
青いボディでパトカーに変形し合体もする巨大なロボット……そして主はドラゴンに因んだ神器を――。

「……わかりましたぁ！」

その後、ギャスパーがイメージした姿で実体化したバーンは、ギャスパーと一緒に至極満足していた。
後は、共に進むのみ――。

☆

ミライに買ってもらったコーヒーを飲みつつ、グランは対面するよう、テーブルを境にして椅子に腰掛けた。

「それで、僕に何を聞きたいのかな？僕よりチーフや、同じ遊撃隊所属のメンバーに聞いた方が参考になると思うけど」

「それは……レジェンドさんは今一番忙しいし、最初はムサシさんにお願いしたんですが、そうしたらミライさんに聞いた方がいいと。えっとヨコハマ……とかいう場所でティガと一緒に戦ったって」

「ああー……」

ヨコハマ――つまり横浜での戦いと言えば、黒い影法師やギガキマイラと戦ったことを思い出したミライ。

平行世界でのティガ――即ちダイゴのことが絡んでいるのだろうと予想したミライは、改めて何が知りたいのか問うと……。

「……もし叶うなら、僕はティガに会いたい。会って直接問い質したいんです。どうして世界を滅ぼすような相手に勝てたのかと。何故そんな無敵のような強さを持っているのかって」

「……僕は彼じゃないから何とも言えないけど、ただ一つ言えるとしたら彼はきっとこう言うよ。『僕は決して無敵なんかじゃない』」

「え？」

どうして、という顔をしているグランに、ミライはあの時の戦いを思い出しながら続ける。

「ティガが勝てたのは、その本質が『光』だったからだって、チーフは言っていたよ。僕もそれをあの戦いで実感した。そしてもう一つ……」

ミライは地球に来たばかりの頃、何度か変身して怪獣と戦ったあたりでレジェンドから叱責されたのだ。

――自惚れるな！まだ地球での実戦経験の浅いお前が、一人で全部守れるとでも思ったのか!!――

自分はウルトラマンだから――そう思って身の丈に合わぬ無茶をしてレジェンドに窮地を助けられ、延々と説教されたのは今や懐かしい思い出。

「彼もだけど、僕も……そして、君も。『一人じゃない』ってことをちゃんと理解することが一番だと思う」

「一人じゃ、ない……でも、僕は」

「ウルトラマンだから」

「ッ！」

「僕も最初はそう思ってた。でも、チーフに言われたんだ。戦ってるのはお前だけじゃないって」

そう言ってミライが懐から取り出して見せたのは、コーティングしてまで大切に持っている一枚の写真。

ミライとレジェンド、そしてＣＲＥＷ　ＧＵＹＳの皆と取った思い出の一枚だ。

「この人達は……？」

「僕やチーフと一緒に戦ってくれた仲間達だよ。多分……もう二度と、会えないだろうけど」

グランはミライの目が少しばかり潤んでいるのが見えた。

「会えないだろうけど……サコミズ隊長やリュウさん、皆との思い出は決して僕やチーフの記憶からは消えない。消させもしない」

――サコミズ隊長もコウガミチーフも、何で揃って耳かきしてるんですか？――

――ミライ、お前時々すっごいストレートに聞くよな――

――耳が聞こえないと困るだろ？っていうのは建前でこの耳かき棒が奥に届く感覚がこう……――

――サコミズに同じ。よし、本日はＣＲＥＷ　ＧＵＹＳ耳かきデーということで全員耳掻きな――

――ちょっチーフ!?何がよしなんですか!?――

――お前らは知らんだろうがな、タロウと共に戦ったＺＡＴはこんなん日常茶飯事だぞ。カツ丼食ったからってその日のスカイホエールでのパトロールに駆り出された俺が言うんだ、間違いない――

――何ですかその理由!?――

――テッペイ、お前でも初耳だったのか――

――チーフ、リムエレキングの耳ってどこですか？――

――そしてコノミは何聞いてんの!?――

真面目な時もあれば、レジェンドとサコミズがタッグを組んで妙なことをしたり、色々あった。

一人では体験出来ない経験ばかり……それはやはり仲間がいたから。

「グラン君、君にもいるよね。大切な仲間が」

（そうだった……ウルトラマンになったことで僕は変に気負い、自惚れ、慢心して……一人で何でも出来ると思い込んでた。でも違うんだ）

生身でもウルトラマンとしても雲上の存在なレジェンドやサーガを筆頭に、他のウルトラマンと比べて自分はまだまだ未熟もいいとこだ。

なのに、自分を助けようとしてくれていたイオにキツいことを言って大怪我を負わせるような事態を招き、それが原因で拗ねて、ジータにも反論した。

結局、ジータや皆が言うように一人で背負い込んでいただけ。

「……決まったみたいだね」
「……はい」
「最後にあと一つだけ。どれだけ小さな光でも、集まればどんな闇をも吹き飛ばすことが出来るんだ。君には共に歩み、支えてくれる人達がいる。支えるだけじゃない、支え合うことこそが、本当の仲間だってことを忘れないで」
「はい！ミライさん、ありがとうございました！」

勢いよく頭を下げて礼を言い、晴々とした表情で部屋を飛び出すグラン。

（戦いはまだ終わっちゃいない！今度は……皆と一緒に!!）

☆

一誠とタイガは、店番を交代してくれる人物に売店を任せた勝人と、飲み物片手に話していた。

「何か僕もチーフに呼ばれてこっちに来たけど、何があったの？あ、君は初対面だよね。僕は朝日勝人、ウルトラマンゼアス」
「あ、俺は兵藤一誠です」

軽い自己紹介の後、一誠とタイガは口籠る。
だが、勝人は似たような経験をしたからか二人が抱えている問題を言い当てた。

「もしかして、何かと戦うことが怖いってところかな？」
「!!」
「当たった。割と当てずっぽうだったのに」

何故か言った本人が一番驚いていた。

そこらへんがゼアスらしさというか、何というか。

「ど……どうして分かったんですか？」

「僕もね、以前一度負けてそんな状態になった事があるんだ」

あれはウルトラマンシャドーとの初戦。

最初は互角の戦いだったが、シャドーメリケンパンチで片目にダメージを食らわされ、続く光線技対決で撃ち負けた。

光線技の撃ち合いはともかく、パンチの方はゼアスにとってトラウマとなり、同じ動作をした子供にさえ怯えるぐらいだったのだ。

そんな時に出会ったのが、正道会館。

「昔から僕は自分に自信が持てなかった。ああなったらどうしよう、こうなったらどうしようっていつも考えてた」

「「……」」

「そんな僕に、父さんはこうメッセージを伝えてきた。『心を鍛えよ』」

「心を……」

「鍛えよ……」

二人は勝人が言ったそれを反芻する。

「それから僕はある場所である人達に出会い、特訓して……やっと自分の力を信じれるようになったんだ。僕ならやれるって」

有り得ない高さの玉を蹴りで割れ――それこそレオのような格闘家でもなければ、タロウのような恵まれた身体能力を持つわけでもなかった、しかも生身でそれをやれと言われた勝人は当然無理だと思った。

だが、彼にそれを命じた師範はなんと人間の身でありながらそれを実践してみせたのだ。

「やれば出来る」

その言葉を胸に、何度も折れそうになったことはあったが――勝人はやり遂げた。
実はこの朝日勝人、あのバグキャラ呼ばわりされているゲンを、なんと正攻法で追い詰めた人物なのである。
亡き偉大なる師範代から着想を得て、得意技となった踵落としたるや一撃でゲンの意識が飛びかける程だったという。

「僕がまた自信を持てたのは特訓だけじゃない。僕を信じ、応援してくれる人達がいたからなんだ。たとえ笑われても、バカにされても、その人達がいるから頑張れる」
「応援してくれる、人達……」

一誠の言葉に、タイガもまた考える。
リアスは今のような状態になっても自分達を見捨てなかった。
それどころか、こうして勝人――ゼアスと会わせ、現状を打破する切っ掛けになればと考えてくれている。
彼女だけではない。
タイタスやフーマ、ドライグにダ・ガーン、そしてオカ研のメンバーを始め、二人を信じて待っている者達が大勢いるだろう。

「自分達だけで乗り越えなくたっていい。逆に皆で乗り越えれば、苦しみだけじゃなく喜びだって分かちあえるはずだよ」
「!!」

自分達だけじゃなくていい――勝人の言葉は二人にとって本当の切っ掛けになった。
何故、自分達だけがダイナと戦わなければなどと考えていたのか。
自分達がダイナと――アスカと親しくなったから止めなければ、戦わなければと無意識に考え過ぎていた。
洗脳されているなら解除が可能な者に解いてもらえばいい、人質をとられているなら自分達が囮になって時間を稼ぎそのスキに救出し

てもらえばいい……助け合えばいいという簡単なことだったのだ。
「そう……だよな。駄目だなあ、俺……いっつも強くなったら思い上がっちまう」
「俺も……何で、どうしてって考えるばかりで、自分達で何が出来るのかは考えても、他の皆が何が出来るのかって考えてもいなかった」
「……もう、大丈夫だね」
「はい！ありがとうございました、勝人（ゼアス）先輩!!」

笑顔とガッツポーズで返してくれた勝人に、二人もまた同じように返す。

「よし！今から急いで……」
「あ、待って二人とも！」
「？」
「行く前に、会っていった方がいい人がいるんじゃないかな」

勝人は変わらぬ笑顔で言う。

二人がそこを訪れた時、そこにはタイタスとフーマ、グラン、そして――

「「ギャスパー!!」」
「イッセー先輩、タイガさん……僕も……僕達も行きます！リク兄さんに、胸を張って『おかえりなさい』が言えるように！」
「よく言ったぜギャスパー！……で、その肩に乗ってるダ・ガーンみたいなのは？」
「ギャスパーのパートナーになった、バーンだ。以後よろしく頼む」
「もしかして勇者系か！」

心強い仲間が意図せず増えた事に一誠らは喜ぶが、それも程々にやってきた場所――イリナ、イオ、レイトのいる病室へと入室する。
中ではイリナとイオが未だ意識不明のままであり、レイトは――
「よう……ちょっとはマシな顔になったじゃねえか……」
弱々しくだが、声をかけてくれた。
「先輩……！」
「ゼロ隊長……すみませんでした！」
「あんまデカい声出すなよ……結構傷に響くんだぜ……」
笑いながらそういうレイトに、また少しばかり心が軽くなった。
「俺のことは気にすんな……自分が望んでやったことだし、お前らが悩んで当然だと思ってる」
「「……」」
「そんなお前らに朗報だ……今度アイツが出てきた時、アイツの腕を見てみろ。そこにお前らが望む答えがある……！」
「「!?」」
レイトが言った言葉に二人が、いやタイタスらも含め全員が目を見開く。
そんな彼らを見つつ、レイトは続けた。
「アイツにやられて……その瞬間、頭が妙に冴えちまったんだよ。俺やタイガのはウルティメイトブレスレットやタイガスパークに一体化してる上、当たり前のものだったからすっかり失念してたぜ……！」
「先輩のや、タイガのは一体化……？」
「「……まさか……！」」

トライスクワッド三人はレイトが言っている意味に気がついた。
「あとはお前ら自身で確かめな……その方がいいだろうし……時間も迫ってんだろ」
ちゃんとそっちにも挨拶していけよ、と言うとレイトは目を伏せる。
そっち――つまり、イリナとイオだ。
一誠とグランは頷き合い、それぞれと関係する少女に告げる。
「行ってくるぜイリナ。この間のこと、ちゃんと謝りたいからさ。俺達も勝ってくるから、お前も負けんなよ」
「イオ、僕はもう逃げないよ。自分からもあいつらからも。それに……君に怒られたり、嫌われたりすることからも。しっかり向き合うから、次は起きててほしい」
二人がそう言い終わると、タイタスやフーマが声をかけた。
「皆、覚悟は決まったな。格納庫でダ・ガーンが待っている」
「へへっ、やっとやる気になったのかよ。こっちは待ちくたびれたぜ」
そんな二人は来た時と同じく、我先にと格納庫へと走って行き、一誠らも負けじと急ぐ。
格納庫ではタイタスの言葉通り、ダ・ガーンがダ・ガーンジェットのまま待機していた。
いつでも飛び立てるように――そして彼だけではない。
「や、一誠ちゃんにタイガちゃん。それにグランちゃんにギャスパー

ちゃん……と、誰……？」
「バーンだ」
「オッケー、バーンね」
「シエテ団長代理!?」
「何で!?」
「いや、ちょっと連れて行ってほしいメンバーがいてね。皆腕利きばかりだから、立派な戦力になってくれるはずだよ」

格納庫で待っていたシエテから紹介されたのは、フェードラッヘで世話になったランスロットにヴェイン、それにレヴィオン騎士団団長のアルベール、加えてレジェンドガチ恋勢の一角で十天衆クラスの実力を持つナルメア。
たった四人だが全員が紛れもなく凄腕の面々だ。

「相手が相手だけに俺達が行って役に立つとは言い切れないが……」
「あの時の怪物相手に使わなかったファイアバスターを使う時が来たぜ！」
「機械の相手なら俺の天雷剣が効果的なはずだ。大きさ的にどうなのかは分からんが、やらずに引き下がるよりマシだからな。奴らに空の世界の底力を見せてやる」
「レジェンドちゃんが頑張ってるんだもの、エリアル・ベース女性陣の代表として精一杯頑張るわ！」

自分達が悩んでいた間も待ってくれていた勇姿達の姿に、一誠らは胸が熱くなる。

「一誠、タイガ……君達の目がその輝きを取り戻すのを信じていた！」
「悪かったな、ダ・ガーン。随分待たせちまった」
「もう大丈夫だ。俺達はもう戦うことを迷わない」

二人はダ・ガーンへとそう返し、集まった全員を見渡して告げる。

敬愛する、アスカの――ダイナがよく使う台詞を。

「「本当の戦いは、これからだぜ!!」」

〈続く〉

ウルトラ騎空団ＶＳモネラ軍団

ロアーヌ島では、予告時刻まであと僅かということで既に準備を済ませたウルトラ騎空団が臨戦態勢で待機していた。

合体ロボを見るのが初めてだっただろうモニカやリーシャらなど、ガオファイガーのファイナルフュージョンで腰を抜かしたりとちょっとしたトラブルはあったが、概ね予定通りである。

「……モニカさん、ああいうのがウルトラ騎空団では当たり前だそうです」

「一体どんな修羅場をくぐり抜けてきたんだ彼らは……」

ＥＩ―０１だのＺマスターだのソール１１遊星主だの、ＧＧＧだけでも相手にした連中の規模がとんでもないし、つい最近ゴーデスという最悪の悪魔とやり合ったばかりなのだが、こんなことを聞かせようものなら彼女らは卒倒するだろう。

そんな彼女らを尻目に、レジェンドはウルトラ騎空団専用の秘匿回線を使って参加しているメンバー全員に通達する。

「さて、もうじき奴らの指定した時刻だが……俺の予想が正しければ奴らは地中からデスフェイサーのガトリングで奇襲をかけてくる可能性が高い。今回に限ってはそうと言い切れんが、空中だけでなく足元にも気を配れ」

「超師匠、それ経験からの判断でございますか？」

「まあな。おかげで以前はＴＰＣの地上部隊は一撃目でほぼ全滅、出鼻をくじかれたからかガッツイーグル各機も撃墜される結果になった。同じ轍は踏まん……と言いたいが、奴らの戦力を考えるとまだ何か仕掛けてくる気がしてな。抜かるなよ、ゼット」

「了解！」

そしてヒリュウ改よりロアーヌ島全域にミツバからメッセージが

流された。
『間もなく指定時刻です。各戦闘員はそのまま臨戦態勢を維持、補給・救護等支援人員は速やかに後方へ退避して下さい』
残り数分――そして指定時刻となり、それを知らせる鐘がロアーヌ島に響き渡る。
鳥達が羽ばたき、空へと飛び立つもロアーヌ島には何ら変化がない。
「……来ませんね、モニカさん」
「もしや、あのメッセージは陽動で実はこちらではないのではないか？」
そんな会話している二人だが、ヒリュウ改のブリッジではミツバ、八坂の他に総括オペレーターとして命を筆頭に、サブにナイン、更に臨時クルーとしてグレイフィアやガブリエルもいるため異常はすぐに感知出来た。
「ロアーヌ島地中より高エネルギー反応！」
「レジェンド様の読み通り……！初撃が来ます！陸戦部隊は予測された射線上より退避――」
「いえ、上空からも熱源反応多数……！来ます！」
『!?』
ナインからさらなる情報が齎され――
地中からは空に向かって連続して光弾が、上空からは手当たり次第に光弾が放たれる。
スカイ・ガーディアン・エージェンシーが配置した防衛兵器が瞬く間に壊滅し、コンクリートの大地を突き破りながらデスフェイサーが地上へと姿を現す。

さらに上空から無数の円盤群が飛来し、続けてあるものが大量に降下してくる。

「あれは……！」

「駒王町に現れたロボットですわ！それじゃあモネラ星人は……」

「いや……飛行型がいない。奴らがあの連中と繋がっているなら、この世界であれがいないのは不自然だ。大方奴らも拾って解析して量産してるんだろうさ」

カナエや朱乃がアサキムらとモネラ星人の繋がりを予想するが、C．C．がそれを否定する。

確かにその通りだが、続けてギャラクトロンまで出て来たことにC．C．は舌打ちした。

「また面倒な奴を……！」

「待て！まだ何か出て来るぞ！」

凱が言ったように、様々な形状の円盤群から何かが光と共に降下してくる。

むしろ落とされた、という表現が正しい。

それらはゆっくりと立ち上がり、ゆらゆらと揺れながらまるでゾンビのように歩きながら進軍してきた。

その姿はモネラ星人が完全に人型になったかのような外見をしており、その動きも合わさって非常に不気味な事この上ない。

名付けるなら『モネラクリーチャー』。

そんな化け物が大勢侵攻してきたのだ。

あまりに異形かつ大量に攻めてきたとあって、モニカやリーシャすら小さい悲鳴を上げてしまう。

「何だあの魔物は!?」

「ゾンビみたいね……ゾンビではなさそうだけれど」

「とりあえず、元人間ではない鬼だと思いましょ。あれ？そう考えたら割といけそうな気がしてきたわ。煉獄君もしのぶも巌勝さんもいないし、いつもより気張るとしましょうか」

カナエの言う通り、巌勝や杏寿郎は神衛隊所属でもあるため現在はクロガネに、しのぶは卯ノ花の手伝いのためにエリアル・ベースにいる。

つまりここにいる鬼討組はカナエ、小芭内、そして蜜璃の三人だけだ。

あくまで鬼討組は、なので他のメンバーも当然いるからそこは問題無い。

「どれ、どのくらい頑丈なのか確かめておこうかの」

軽い調子で言った夜一は、次の瞬間遠く離れていたモネラクリーチャーの一体を思いきり蹴り飛ばす。

防御してなかったからか元々なのかはハッキリしないが、モネラクリーチャーは面白いくらい錐揉み回転しながら吹っ飛んでグシャリ、と潰れた。

「ふーむ……動きだけでなく耐久力や防御も然程良くないのう。こ奴らは文字通り使い捨ての駒みたいなものじゃな。数は厄介じゃが戦力自体はそう警戒するほどでもなさそうじゃ」

一体蹴り飛ばして再び戻ってきた夜一はそう言い、「お主らもとっとと構えんか」と手をヒラヒラさせる。

伊達や酔狂で『瞬神夜一』と呼ばれていたわけではないということをまざまざと見せつけた彼女に、ウルトラ騎空団以外は唖然としていた。

「お見事です、夜一姉様」

「うむ。まあアレじゃな、最初が肝心という……む？」

夜一が何かを察して空を見上げると、小さな光が弾けてロアーヌ島全域へと広がる。

「んー？何アレ、レジェンド様何か準備してたっけ？あんなやつ」

「いや、そんな話は聞いていない。此度の戦いにおける重要事項は、先刻の打ち合わせで全て説明されているはずだ。だとすれば――」

「……まさか今のも連中の策略ってわけ？」

「考えたくはないがな」

乱菊とハリベルはそんな会話をしていたが、まさにその通りであった。

しかもそれは、この場において最悪とも呼べる事態を引き起こす。

ムサシとアサヒは普段同様、ラカムらと共にグランサイファーにいた。

何かあった時に、他の騎空団など人目につかず変身可能な上、地上の様子を逐一確認出来るからである。

「何か地上、怪しい変態がたくさん蠢いてます！」

「いやアサヒちゃん、怪しい変態って……」

苦笑しながらムサシも地上を見ると、あちこちでモネラクリーチャーが進撃し始めていた。

（チーフや黒歌さん達もそろそろ戦闘に突入するはず。念の為にいつでもコスモスになれるよう……!?）

バチッ!!

「いっ……!!」
「ムサシさん!?」

コスモプラックを取り出し、いつでも変身出来るようスタンバイしておこうとした途端、コスモプラックから凄まじい電流が流れ、ムサシは思わずコスモプラックを手放し床に落としてしまった。

「何だ今の……っ……!?」

床に落ちたコスモプラックを拾うと何ともないが、変身の意思を示すとまたもや凄まじい電流が流れ出す。

「ぐあっ!!」
「ムサシ殿、さっきからどうしたんだ!?」

心配したカタリナがやってくるが、近くで見ていたアサヒは「まさか」とルーブジャイロを取り出し、クリスタルを装填してレバーを引き回転させようとするも、ムサシと同じくレバーを引く寸前で凄まじい電流に襲われる。

「きゃっ!?」
「アサヒさん、大丈夫!?」
「ロゼッタさん……はい、何とか。でも……!」

電流を受けた衝撃でルーブジャイロを手放しながら後ろに倒れ込んだところをロゼッタに受け止められ、アサヒは異常事態であることを確信する。
それが起こったのはムサシとアサヒだけではなかった。

「８０、どうだ!?」
「駄目です……！無理に変身しようとすれば流れてくる電流が一気に強まってしまう！」
「仮に変身出来たとしてもかなり消耗した状態になるか……！仕方ない、俺達はあのゾンビみたいな連中をどうにかするぞ！ロボット兵器はチーフ達に任せるしかない……！」

ウルトラ兄弟に数えられる実力者のゲンと矢的も。

「流さん、一体何が!?」
「くっそ……！マジックギアレンズにメモリーキーを装填するまでは出来ても、いざ変身しようとすると妨害するように電流が流れ出すんだ！こんな機能付いてないはずなのに！」
「もしかして……さっきの光が原因じゃ……!?」

レジェンドとはまた違った形で特殊なウルトラマンである流も。
そして――

「あだだだだ！痛っ！痛いってこれ!!あ゛ぁぁぁ!!」
「ゼット！今はゼットライザーになる意思を捨てろ！どうやら奴らは『ウルトラ戦士』への対策を万全にしていたらしいな……！先程爆ぜた光はアンチディファレーターによるものだ。ロアーヌ島全体にそれが拡散された!!」
「っつぅ～……アンチディファレーターってことは……！」
「ああ……！光神かつ極めて特殊な部類である俺はともかく、あの光が爆ぜた時にロアーヌ島にいた他のウルトラ戦士は変身が一時的に出来なくなっているはずだ。おそらくは今回の戦闘が終わるまで効果は続く……！お前はウルトラマンの姿のままだったから、ゼットライザーになろうとしなければ平然としていられるだろうが、実質ウル

トラフュージョンとそれに伴う巨大化が封じられた……どうやら当初の予定通りこのままやり合うしかなさそうだ」

レジェンドとゼットまで。

正確にはレジェンドだけは現状でも変身可能なのだが、強制分離すればゼットの命が失われるのはほぼ確定的であるため、その選択肢は除外。

（フィールドのように形成されているわけではない。つまりあのアンチディファレーターの影響はあの時すでにこの島にいた者達に限定されているということか。ならば、外部から救援として来たならば変身は可能……）

その時レジェンドが思い浮かべたのは先刻、エリアル・ベースへと向かった若き勇士達。

（やはり、勝利の鍵はあいつらか）

一誠やトライスクワッド、そしてグラン――トリガー。

この状況をひっくり返すには彼らの力がいる。

無論、レジェンドが本気になってしまえばどうとでもなってしまうが、それでは彼らやこの世界に生きるもの達のためにならない。

文字通り、ウルトラマン達でも覆せないような事態になった時……その時こそ自分が真に力を行使する時だとレジェンドは常々思っている。

そう考えていると、遂に彼が現れた。

――ウルトラマンダイナだ。

「ダ……ダイナ先輩……!!」

「いよいよダイナも来たか……！ウルティノイドとやらはまだのようだが……」

そこでレジェンドとゼットは何か違和感を感じる。
「超師匠、何がとはハッキリ言えないんですけど……ダイナ先輩変じゃないですかね？」
「お前も感じたか、ゼット。俺もどうも気になるというか……ちっ、こんな状況でもなければゆっくり思考出来たんだがな」
軽く舌打ちしつつ、レジェンドはゼットにソウルゲインへと通信を繋げさせた。
「黒歌、予定通りダイナの相手を頼む。行動不能にさせるのが最優先だが……いざという時の判断はお前に一任する」
『りょーかいにゃ。でも、白音がお引越しの時にお世話になったアスカ相手に、いざという時なんてやらかさないわよ』
「……そうか。無事終わったら二人きりでの晩酌ぐらいは付き合おう」
『ホント!?断然やる気出てきたにゃ！あ、性的な事はちゃんと結ばれてからにするから、そこは安心してくれていいにゃ』
声を弾ませる黒歌に少しだけ気が楽になり、レジェンドは今もガトリング砲を撃ちまくっているデスフェイサーをモニター越しに睨みつけ、操縦桿を握る。
「仕掛けるぞ。準備はいいか、ゼット」
「押忍！サイトロン・コントロールもバッチリでございますよ！」
「よし……モネラ星人、生憎と俺達がウルトラマンとしてしか戦えんなどと思っているなら、その考えが浅はかだということをその身で味わわせてやる……！」
玉座機グランティードと電脳魔神デスフェイサー――二つの鋼の

巨体が今、ロアーヌ島で激突する。

「さてさて、レジェンドの話だと青い姿だと超能力がヤバいらしいし、その姿になる前に無力化させてもらうにゃ」

「シュアッ!!」

ソウルゲインは握り拳で、ダイナは逆に両手を開いて構えを取る。

一瞬の静寂の後、同時に飛び出した二体は相手に近づくとそれぞれの右腕を振るい、双方の顔面に一撃を叩き込みあった。

「うっぐ……!乙女の顔に、何すんのよー!!」

「デアッ!!」

フィードバックされる痛みで涙目になりつつ、黒歌のソウルゲインとダイナの拳は再び交差する。

☆

シェルター施設の中では、外の様子――ウルトラ騎空団とモネラ星人率いる軍勢の戦いがリアルタイムで映し出されていた。

ガオファイガーのブロウクンファントムやビッグボルフォッグのムラサメソードがレギオノイドを打ち砕き、円盤群をロードドラグーンとサイバスターが軸となり撃墜していく。

その光景を見たロアーヌ島在住の人々はウルトラ騎空団に希望を見出し、反対にスカイ・ガーディアン・エージェンシーの重役は苦虫を噛み潰したような顔をしていた。

――本来ならばこの視線を受けるのは自分達だったはずなのに――

空の世界の守護者として、コアトリクエを運用し大々的に活動するはずであった。

だが、事もあろうにコアトリクエは侵略の駒にされ、守護者としての立ち位置は図らずもウルトラ騎空団が担っているようなもの。
デスフェイサーと戦っているグランティード、あれがあれば自分達が――そう考えている重役だが、彼は気付くのだろうか。
たとえグランティードや、それを超える力を持った機体を手に入れたとしても、今の彼らではウルトラ騎空団の足元にも及ばぬということを。

（ふん、案の定レジェンドの乗るグランティードを忌々しく見ているな。空の世界の守護者などと名ばかりの自己顕示欲の塊のような奴らでは、如何なる力を持ったところで結果は変わらん）

マジンガーＺＥＲＯは冷たい視線を重役に向けている。
アーシアはハラハラしているが、オーフィスはアーシアの膝の上にうつ伏せに寝転んでいた。
どうやら退屈らしい。

「うーうー」
「オーフィスちゃん、今日は我慢しましょうね」
「むー」

頬を膨らませてむくれるオーフィスをちょっと微笑ましく思いつつ、再びモニターに顔を向ける。
予想外に良い動きをするアズのヒュッケバイン３０や、ヒリュウ改の防衛担当であるアマリとルリアのゼルガード、それにナインのサポートもあり３機の中では最も戦果を挙げている千歳のヴァングレイも見逃せない。
そして一番注目を浴びているのはジャグラーのマスターフェニックスと、サギリ・九重のコンビが乗るベルゼルートの息の合ったコンビネーションだ。

円盤群どころかレギオノイドを立て続けに撃破していく様は見事の一言に尽きる。
地上では……なんと今までビビりまくっていたティアマットが大暴れ。
見た目が風の王国の王女だからか槍を作り出して振り回し吹き飛ばしていく姿にオーフィスもポカンとしてしまった。

「……あんなのティアマットじゃない」
「オーフィスちゃん、そんなこと言っちゃめっ！ですよ」
『普段のチキン具合を知っている身としては納得の反応なのだがな』

更にもう一人、スカーサハも大奮闘。
問題は奮起してる理由が「割と最初の頃からいるのに最近出番が少ない」からという思いっきりメタいことなのだが、この際それはいいとしよう。
ドラゴン三娘のうち二人が活躍していることでまたもオーフィスはむくれる。

「我も混ざりたい。オーフィスびーむ撃ちたい」
『確実に巻き添え食らう奴が出るだろう』

その後の乱菊や夜一（こっちはまだマシか）、ハリベルなど、どこがとは言わないが揺れる人物が映し出されたときは、オーフィスが本気でモニターにオーフィスびーむを撃ちそうになった。
アーシアが止めたけど。

☆

ヒュッケバイン３０のバランスの取れた性能を活かし、ガオファイガーとビッグボルフォッグの支援に回っていたアズだったが、ふと違和感を感じて各計器類を確認する。

「レジェンドさんやゼットさん、黒歌さんが戦ってる相手が健在なのはともかく、結構倒してるはずなのにあまり熱源反応が減少してないのはなんでだろう……」

調べていくうちに、アズはある規則性に気付く。

モネラクリーチャーは倒された傍から円盤群より補充される、それはまだいい。

問題は別の所にあった。

「ッ!!ミツバ艦長!それにアマリさんにルリアさん、飛行可能な機体に乗ってる人達、聞こえますか!?」

『アズ?どうしたの?』

「ミツバ艦長、レジェンドさんの機体……グランティードの周辺に敵戦力が集中してませんか!?」

『え……!?』

『はわわ……!えっと、えっと……何処を見れば……』

レジェンドの名が出た瞬間、アマリが驚き、ルリアがテンパってしまう。

そこにサイバスターに乗っているロスヴァイセから切羽詰まった声で全機に通信が送られた。

『皆さん!グランティードに……レジェンド様とゼットさんに攻撃が集中してます!!』

「『!!』」

モネラ星人の狙い――それはウルトラ騎空団の戦力的・精神的支柱であるレジェンドを真っ先に排除することにあった。

本来であればクリオモス島でレジェンドをカプセルに入らせる予

定であったが、それが読まれていたのか入ったのは一誠やタイガ、グランという比較的若いウルトラマン。
ここで計画に狂いが生じたモネラ星人はデスフェイサーのみならずウルティノイドゼロ、そして切り札のダイナを一気に投入することでウルトラ騎空団に揺さぶりをかけた。
結果、レジェンドは既に覚悟を決めていたからか当人にダメージは殆ど入らなかったが、銀河遊撃隊最強戦力の一人であるゼロ、そしてベリアルの息子であるジードを戦闘不能、及び次元に放流することが出来たのは嬉しい誤算。
そしてこのロアーヌ島での戦い、幸いにもウルトラ騎空団が総集結することがなく、戦力不十分な状態で迎えたのもモネラ星人にとって吉と出た。
予め用意していたアンチディファレーターと、モネラクリーチャーやレギオノイドなどを惜しみなく投入すれば戦力は必然的に分断される。
最初から総戦力を投入するのではなく、あたかも互角、あるいは相手が押しているように見せかけて、そのスキにレジェンドの乗る機体を鹵獲ないし破壊してしまえば、ウルトラ騎空団の指揮系統が瓦解し軍配はモネラ星人側に上がる――はずだった。
だが、モネラ星人は失念していた。
レジェンドはパイロットとしてもずば抜けており、さらに元々スタンドアローンでの戦闘を得意とするタイプだということを。
加えて、偶然アズがモネラ星人の策に気付いたことでウルトラ騎空団――というかレジェンドガチ恋勢――が彼とゼットの救援に乗り出したのも予想外。
レジェンドと彼女らを合流させない為に、モネラ軍団によるグランティードへの攻撃は更に激しさを増す。

「超師匠！右に3機、左に2機！加えて後方にも2機のレギオノイドを確認！距離も間隔もバラバラでまとめて対処するのは厳し……更

に増えたああ!!」
「最初から俺が狙いだったとはな。道理でデスフェイサーに容易に近付けんわけだ。あれの戦闘部類は中距離攻撃型、近距離戦に持ち込めば勝機はある……!」
「ダイナ先輩やギャラクトロンは黒歌ちゃんやC・C・ちゃんが食い止めてます!こうなったら虎穴に入らずんば何とやら、強行突破するが吉で御座候!!」
「お前も言うようになったな。その通りだ……!ダメージ覚悟で正面突破、デスフェイサーに至近距離でオルゴナイト・バスターをブチ込む!!」

オルゴナイト・バスター――グランティードの武装・必殺技の一つであり、簡単に言えば『胸ドリル』。
シモンやカミナが推しまくりそうなモノだが、至近距離でしか有効でないのが欠点。
だが、破壊力は抜群……しかも至近距離での防御方法の無いデスフェイサーは、食らってしまえばひとたまりもない。

「超師匠、クラッシュ・ソーサー準備良し!」
「道を開けろ、木偶人形共……!」

脚部から射出されたパーツを組み合わせ、ヒュッケバイン３０のリープ・スラッシャーに似た手裏剣のようなものを投げ、デスフェイサーの周囲にいたレギオノイドを撃破し、グランティードはデスフェイサーへと急接近。

「踏み込みの速度なら負けん!」

有言実行、デスフェイサーのガトリング砲を数発受けつつも速度を落とさず……むしろ加速し、遂にグランティードはデスフェイサーに組み付き、大地を抉り砕きながらそのパワーで持ち上げた。

あまりに思い切った戦法と、逆境をものともしない戦いぶりに蜜璃など「お館様凄い凄い」と小芭内の手を握って喜んだほど。

「まだだ！」

「オルゴナイト形成完了！回転開始ぃぃぃ!!」

グランティードの胸部の宝石部分にドリル状のオルゴナイトが形成され、高速回転を始める。

デスフェイサーは脱出を試みるもグランティードの出力が予想以上に高く、もがく事しか出来ない。

「ネオマキシマ砲ごとその図体に風穴を開けてやる！オルゴナイト・バス……」

ドガァァァァァン!!

「ぐうっ!?」

「おぅわっ!?」

いよいよ仕留められるかと思った瞬間、横から重い一撃が直撃し、グランティードはデスフェイサーを離してしまい、しかも形成されたオルゴナイトまで砕けた。

轟音を響かせながら倒れ込むグランティード。

『レジェンド様！ゼットさん！』

「問題無い……！今の攻撃は何処から……」

そしてレジェンドが見たものは倒れた状態で顔と手をこちらに向けていたダイナ。

『レジェンド！ゼット！ごめんにゃ！白虎咬でダイナを吹っ飛ばした

んだけど、まさかそんなことするなんて……』

どうやらデスフェイサーの近くに吹き飛ばしたダイナが、デスフェイサーを援護したらしい。

この件に関しては黒歌に責任は無いに等しい、殆ど偶然だった。

「仕切り直しか……だがここからどれだけ巻き返せるか分からんな」

「オルゴン・エクストラクターは問題無いですけど、エネルギーを結構使ってしまってるでございます。大技はやれてもあと一発分ぐらいしか……ん？」

「何だゼット、ここまでやられたら多少の機体不調程度では驚かんぞ」

「いや、何か急に電圧計が相当な数値を観測して――」

雲一つない快晴のロアーヌ島に、突如としてそれは落ちた。

「エレクトロンブレード!!」

ズバオオオオオン!!

とてつもなく巨大な雷が一直線に何発も落ち、多くのレギオノイドが爆散する。

「何、今のは!?」
「朱乃、何か召喚した!?」
「してないわ！でも、何て凄まじい雷光……！」
雷の巫女という二つ名を持つ朱乃さえ驚愕し――
「今の一撃、俺に匹敵し得る実力者だな」
真雷龍剣（ネオサンダーソード）を有するゼロガンダムをして実力者と言わせる腕前。
レギオノイド達が爆発で発生した煙の向こう側――そこに正体があった。

巨大な一つの影とその方に乗っていた一人の人物、そして巨大な影の足元からモネラクリーチャーを打ち倒しながら現れた複数の影。
「まさかこれ程とは……凄まじいな。赤龍帝からの贈り物（ブーステッド・ギア・ギフト）、だったか？」
「いや素の威力がおかしいアルベールさんも大概なんですけど」
「ビリビリ兄ちゃんスゲーな……怪獣サイズのロボットをまとめてブチ壊しやがった」
「いい感じに筋肉がついているからな！筋肉は全てを解決する！」
「お、そうなのか！じゃあ俺やランちゃんはどうだ!?」
「……筋肉がつくことで書類仕事が楽にならないかな」
「ランスロットさん、どうしたんですかぁ!?」
「なるほど、人間にとって書類仕事というのはかなり困難な相手のようだな、ダ・ガーン」
「いや違うぞ、バーン。書類仕事自体はそれほどでもない。その書類の内容が問題なのだ」
「何か分かる気がする。僕も書類仕事手伝ったけど、最初は頭パンク

しそうになったし……ジータは早々にほっぽり出したけど」

決戦の場に不釣り合いな、賑やかな声。

誰よりも待ち望んでいたリアスは嬉し涙を流し、ジータはやっと来たかと苦笑しつつ肩をすくめた。

そして、それはレジェンドも同じ。

「レジェンドちゃーん!!お姉さん達が助っ人に来たよー!!」

ぶんぶんと手を振り笑顔を見せる女性――ナルメアの姿を確認し、残るメンバーもまた笑顔で剣やハルバードなどを掲げ、彼らへと合図を送った。

エリアル・ベースを立った一誠やグラン達がレジェンド達の絶体絶命の危機を前に、遂にロアーヌ島へと到着したのである。

〈続く〉

二つの赤い爆発力

待ち望んでいた救援。
信じていた想い人、兄妹、仲間達。
その期待に潰されぬ強い心を取り戻し、彼らは再び戦いへと舞い戻った。

「遅れた分取り戻すぜ！っつーかこんだけデカいのいんのにウルトラマン一人もいない、いやアスカ兄さんいるけどともかくおかしくねーか!?」
「何か変身封じられてるとか……ほら、前に皆でやったゲームだとスキル封印みたいなのあったじゃないだろ？」
「だが甘いな。私達にはこの鍛え上げた筋肉がある！変身出来ずとも私達が戦えないということではない！」
「そういや忘れてたけど、旦那って俺やタイガと違って変身状態だったじゃねーか」
『あれだろ。ウルトラマンタイタスとウルトラマンタイタス・ウルトラマッスルは違う的なやつ』
「え!?タイタスさんも僕みたいにタイプチェンジ出来たんですか!?」

ウルトラマンと直接関連している５人と１体はモネラクリーチャーをブッ飛ばしながらいつもの調子で会話している。
そんな彼らを微笑ましく見ながらもモネラクリーチャーを倒す速度を落とさないランスロットとヴェイン。
騎士団所属でもある、アルベールを含めた三人の任務はまずギャスパーとバーンをオカルト研究部の元へ送り届けることだ。
ナルメアは一足先にレジェンドの元へと無数のモネラクリーチャーを斬り捨てながら爆進中、愛は強し。

「ダ・ガーン、俺達はギャスパーを送らなければならない。後は大丈夫か？」

「勿論だ。一誠やタイガ達と共にこちらは引き受ける。彼らを頼んだぞ」

ダ・ガーンXが片膝をつきつつ、右手にアルベールを乗せて地上に下ろす。

すぐさまモネラクリーチャーに襲われるがそこは雷迅卿と呼ばれた男、あっさり瞬殺してしまう。

「その程度では俺の早さに一生ついてこれないな」

「いやあの人マジでどうなってんの？悪魔じゃないのに木場並か、下手すりゃそれ以上に早くね？」

「落ち着けイッセー、ガンダゴウザを思い出すんだ」

「悪い、タイガ……そっちもおかしいわ。倍加した俺の一撃をそのまま拳で正面からカウンターして気絶させるとか、この世界魔境なんだけど」

「……それもそうか。あとは……東方不敗って人」

「ああ、うん……つーかレジェンド様直属の人って例外なく希望を絶望に変えてくるよな、敵対したらだけど」

改めて自分達が井の中の蛙であることを実感する一誠とタイガ。

ただ、レジェンドを中心に化け物が集まっていると思えなくもない二人は、若干今後どんな連中がやってくるのか楽しみにしていたりする。

それはそれとして、四人と一体（バーン）と別れたが状況としてはあまり良くないようだ。

「ダイナ兄さんの相手をしてるのは……ソウルゲイン、黒歌か。てっきりレジェンドが相手するのかと思ったけど、元・戦艦の方とやり合ってるし」

「うちの隊長もどきがいねーな。そこも用心しないとだろ、代わりにギャラクトロンいるけどガリバーにボコられてるから別にいいか」

フーマの言うように、ギャラクトロンはＣ．Ｃ．のコンパチガリバーに圧倒されており、撃破されるのも時間の問題だ。
そもそも駒王町での戦いも性能的には十分対処可能だったので、不利だったのは邪魔が入っていたから。
今回は空と陸で援護を受けており一対一の状況になっているため、特機であるガリバーの強みが活かせている。

「だが、ソウルゲインはともかくレジェンドが乗っている機体は少しばかり厳しそうだ。意外ではあるが」
『大方一番厄介だと思われて総リンチされてたんだろ。むしろまだやれそうなことに驚くぞ』

ぶっちゃけ、ダイナの横槍が無ければデスフェイサーは今頃鉄屑となっていた可能性が高い程、レジェンド（とゼット）は奮戦していたのだ。

「しかし、どちらにせよ救援は必須だろう。何よりそれが私達が駆けつけた理由なのだから」
「うん。僕達が……本当の意味で前に進むために！」

今も尚、デスフェイサーと多数のレギオノイドに囲まれながらもレギオノイドを片っ端から粉砕しているグランティードを見て、ダ・ガーンはそう言い、グランもＧＵＴＳスパークレンスを取り出しハイパーキーを起動する。
『Ｕｌｔｒａｍａｎ―Ｔｒｉｇｇｅｒ　Ｐｏｗｅｒ―Ｔｙｐｅ！』

基本のマルチタイプではなく、バルツ公国における事件を解決した際に目覚めた『力』。
それをグランは迷わずＧＵＴＳスパークレンスへとセットした。

『Ｂｏｏｔ―ｕｐ！Ｄｅｒａｃｉｕｍ！』

グランが戦うべき存在――グランティードを右手のデスシザースで突き飛ばし、それに備え付けのテスシザーレイでグランサイファーをも狙わんとするデスフェイサーへと視線を向け、彼は叫ぶ。

「勝利を掴む、剛力の光!!ウルトラマン……トリガーッ!!」

一方、一誠やドライグはトライスクワッドからあることを聞き、ダイナを注視していた。

「そういや師匠や矢的先生も……！」

『レジェンドはどうなんだ？』

「「あの人に必要だと思うか？」」

「『うん、要らないな』」

全員で何かに納得し、頷き合うと一誠はタイガスパークを出現させ、待機状態にする。

『カモン！』

「二人とも、いいのか？俺ばっかり……」

「しっかりケリつけたいんだろ？ま、礼なら今度の飯リクエスト権、俺のが優先でいいぜ」

「では私は筋トレに付き合ってもらおう。何はともあれ、私やフーマが解決してしまうとお前が立ち上がった意味が無いからな」

「……わかった、ありがとう！」

「やっぱりタイガでいいんだな!?」

「ああ！待たせたな、行こう！イッセー！」

「うっしゃあああ！」

タイタスとフーマに背中を押され、決意を固めたタイガの力強い返事に、一誠もまた気合を入れる。

「光の勇者！タイガ！」
『はあああっ！ふんっ!!』
「バディィィ！ゴォォォォォッ!!」
『ウルトラマンタイガ！』

一つの光は、デスシザーレイでグランサイファーを狙っていたデスフェイサーを下から持ち上げながら、その姿を現す。

「ジュゥアッ!!」

ウルトラマントリガー・パワータイプ――赤き身体の超古代の巨人は、持ち上げたデスフェイサーを大きく投げ飛ばし――

『Ｃｉｒｃｌｅ―Ａｒｍｓ！』

サークルアームズを呼び出し、形態をパワータイプに最も適した『パワークロー』へと変形させ、構え直す。

もう一つの光は、ソウルゲインを吹き飛ばし追撃を仕掛けようとするダイナに、上空から一撃を叩き込んだ。
その、左手に顕現させた『赤龍帝の籠手（ブーステッド・ギア）』で。

「デェアッ!!」
「グワッ!?」

予想外の攻撃をもらったダイナはトリガーに投げ飛ばされたデスフェイサー同様、大きく吹っ飛んだ。
しっかり着地したタイガは、自身の中にいる一誠やタイタス、フーマにドライグと共に、ダイナの腕を見た。
そして――

「『お前は……ダイナ兄さんじゃない!!』」

怒りに燃える声で、一誠とタイガは叫んだ。

☆

リアス達はタイガがしっかり戦おうとしていることに安心した次の瞬間に愕然とする。
「ダイナじゃない」――彼らの口から出た言葉は衝撃的だったが、タイガの声色から彼――彼らの怒りが感じられた。
それはそうだろう、もしそうだとすれば本物のダイナが空の世界で生き辛くなり、何より自分達が敬愛する人物を侮辱されたのと同義なのだから。

「タイガさん、今アスカさんじゃないって……」
「でもタイプチェンジとかいう能力も使っていましたわ。見せかけだけでなく、実際に能力も変化していたようですし……」
「だとすると一体何処でそう判断したんだろう?」

小猫や朱乃、裕斗はタイガの叫びに対し、徐々に減っているモネラクリーチャーを倒しつつ疑問に思う。
そこで、現場班でレジェンドと付き合いの長いスカーサハとC・C・があることを思い出す。

「……そういえば、レジェンドは別であったが……ウルトラ族というのは、少なくとも地球において巨人の身体では活動時間に限界があったのではないか？」
「ああ、確かに言っていたな。我夢と藤宮……ガイアとアグルのような例外はいるようだが。それを補う為にレジェンドが『プラズマスパーク・ブレス』とかいう――」
「ああっ!!」

二人がそこまで言うと、カナエもまた何かに気付いたらしい。

「カナエ!?いきなりどうしたのよ？」
「皆！あのダイナの腕を見て！念の為に両方!!」
「両方の腕……？何も無いけど……」
「そう！何も無いのよ!!」

リアス達はカナエが何を力説してるのか分からなかったが、ここでスカーサハとC．C．の会話の内容が合わさる事で彼女らは漸く答えに辿り着いた。

「まさか……!?」
「お主らも分かったようだな。元々ブレスレットなどを腕に着けている者達はそれと一体化させているようだが、そうでない者は腕に各々異なったデザインのプラズマスパーク・ブレスを着けているのが現在のウルトラ戦士達の常識らしい」
「でなければ長時間の戦闘や任務でエネルギー不足という、いつ見舞われるやもしれない不測の事態に対処出来んからな。現にあのダイナ、そこそこの時間戦闘している上、割とダメージを受けているだろうがカラータイマーは点滅も鳴りもしていない。殆ど見た目だけの飾りだろうよ」

スカーサハとC・C・が告げたように、言われてみれば妙な話であった。
もしプラズマスパーク・ブレスが無かったとしても、カラータイマーが点滅し鳴り響いていれば違ったのかもしれないが。
ダイナが敵として現れ、かつタイプチェンジで能力も相応に変化するという衝撃が強過ぎてそこまで気が回らなかったが、落ち着いて見ると確かに相違がある。

「……強制的に外された、という線は無いの？」
「いや、それは無い」
「おおとり師範！矢的先生も……」
「あのプラズマスパーク・ブレスはそれも考慮されていて、当人の意思無く取り外しは不可能なんだ。だからモネラ星人がダイナからそれを奪うことは出来ない。解析に関してもチーフとヒカリが厳重なセキュリティを開発して搭載してるから、最低でも束博士並の頭脳と高速解析技術、そしてそれが可能なスペックの機器があって漸く可能なレベルになる」
「……難易度高過ぎますね、それ」

合流したゲンと矢的から齎された情報で、プラズマスパーク・ブレスが奪われた可能性も消えた。
もはやこれ以上考えるのは不要だろう。
理由や方法はどうあれ、今眼前にいるダイナはダイナであれど『アスカ・シン』ではない。
彼らにとって本物のダイナはイコールアスカなのだから。

「イッセー君も怒ってるね、アレは。僕も父さんやガイさん……オーブがそんなことされたら冷静でいられないし」
「レジェンド様の偽物をあんな風に出してきたとしたら、私を含めて大量に堪忍袋の緒が切れる方が出てきますわね」

裕斗や朱乃も自身の推しを例に挙げ、今の一誠やタイガの怒りがどれ程のものか分かりやすく告げた。
グランティードとソウルゲインはギャラクトロンを粉砕したコンパチガリバーやガオファイガーらに救援され、他の機体と共にトリガーとタイガの邪魔をさせぬよう敵の残存兵力を殲滅にかかる。
トリガーとデスフェイサー、そしてタイガとダイナ。
クリオモス島での戦い――そのリベンジマッチがいよいよ幕を開けた。
あと一体……ウルティノイドゼロは未だ現れず。

☆

トリガーは起き上がったデスフェイサーに対し、小手先の戦術や捻った戦法など使わず真っ向勝負を仕掛ける。
下手に頭を使っても読まれて対処される――それならばとグランが考えたのは、考えるのをやめてひたすらぶつかっていくことだった。

「ジュワッ!!」

相手の得意な距離を一気に突破し、パワークローで相手の左腕を、左手で右腕を掴み、組み合いへと持ち込む。
だが、相手もただではやられない。
デスフェイサーはその状態から一歩、また一歩とトリガーを後ろへと後退させるほどの馬力を発揮する。
しかし、そこにトリガーは活路を見出す。
この状態であれば取れる戦法は限られるため、トリガーは自身とデスフェイサーの間を潜らせるように足を持ち上げ、踵落としの要領でデスフェイサーの左腕の関節部へと足を振り下ろし、二の腕より下の部分を『蹴り千切った』。

「デェェアァッ!!」

勢いに乗ったトリガーは自由になった右手とパワークローで、デスフェイサー残る左腕の二の腕を掴んで固定すると、同じようにそこから下を力任せにもぎ取る。

両腕を奪われてよろめくデスフェイサーに、もぎ取った右腕を後ろへと投げ捨てトリガーは正面から強烈なキックを叩き込んで吹っ飛ばす。

その光景を現場で見ているジータを始めとしたグランサイファーの面々、さらに映像で見ていたシェルター施設内の人々も大いに沸き立つ。

無論、活躍はトリガーだけではない。

怒りに燃えるタイガの猛攻。

それはかつて父・タロウがウルトラ兄弟を破ったタイラントへ挑んだ時を彷彿とさせる凄まじさであった。

「ウオオオオ!!」

「ジュワッ!?」

連続パンチでダイナの体勢を崩し、前屈みになったところを脇に抱え――

「デヤアアアアア!!」

「グアッ!!」

レジェンドが得意とするプロレス技のブレーンバスターを炸裂させた。

さらに、ダウンしたダイナの両脚を掴んでジャイアントスイングで投げ飛ばし、起き上がろうとしたところに赤龍帝の籠手を顕現させた

左腕で強烈な一撃を見舞う。
　それは正しくクリオモス島では混乱とショックで戦えなかったことを払拭せんばかりの攻めっぷり。

「お前がモネラ星人側についている理由は知らない……けど！どんな理由だろうと、ダイナ兄さんを陥れ、侮辱するような行動をとったことは許せない!!」
『望む望まない関係なく、その姿を貰ったならちゃんとそれ相応の振る舞いをしやがれ!!』
『案の定キレまくりだな二人とも……』
『当然だろうな。私もジョーニアスに偽物がいたという事を聞いた時は通常の三倍ぐらい筋肉が怒りで膨れた覚えがある』
『その三倍ってどんだけ巨大化したんだお前』

　フーマとタイタス、ドライグは普段通りだが一誠とタイガは烈火の如き怒りをそのままダイナに叩き込んでいた。
　日頃ゲンと死にものぐるいの模擬戦を重ね、キン肉マンやテリーマンともタッグトレーニングをしたおかげで、体力に関して半端ない上がり方をした二人はこれだけ苛烈な攻撃をして尚、有り余るスタミナを有している。

「ダイナ兄さんだけじゃない……！」
『不甲斐ない俺らを命がけで庇ってくれた先輩や、俺らが真面目にやってれば今もいてくれたはずのリクさんの分!!』
「『全部まとめてブチ込んでやる!!!』」
『Ｂｏｏｓｔ！Ｂｏｏｓｔ！Ｂｏｏｓｔ！』
「『ウォラァァァァ!!!』」
ドゴォォォォォン!!
　倍加されたタイガの一撃をモロに受けたダイナは、ビルをいくつも

なぎ倒しながら吹っ飛んでいく。
まだ倒れていないようだが、ダメージは相当なものだろう。
そしていよいよ、彼らの戦いは決着に向かう。

☆

既に武装を搭載した両手を失い、パッと見は丸腰となったデスフェイサー。
しかし、最後にして最大の武器がまだ残されている。
トリガー――グランにトラウマとなるイメージを刷り込んだネオマキシマ砲。
それがまだ胸部に残されていたデスフェイサーは、市街地であろうと躊躇なく開放し、チャージを開始する。

「まずい！あんなものをこんな所で射たれたら……！」
「シェルターだって下手すりゃ意味を成さないぜ！」

カタリナとラカムが焦り、他の者達も不安を隠せない状態だ。
モネラ星人が連れてきた円盤群やモネラクリーチャー、レギオノイドなども残り僅かだが、デスフェイサーの邪魔はさせないとばかりに最後の足掻きを見せており、グランティードを始めとする機動部隊は足止めをくらっている。
グランサイファーの砲撃ではどうにもならず、ヒリュウ改の場合は艦首超重力衝撃砲ならば対抗可能だが、やはり場所が場所だけに使用すればロアーヌ島に被害が出るだろう。
やはり、トリガーに全てを託すしかない。

「け……けどよぅ、グランは大丈夫なのかぁ？」
「ビィ、そんなに心配？」
「だってよぅ……一度それにエラい目に合わされたんだぜ？そう簡単に……」

「いざとなったら私より突っ走るあのグランが、転ばされてタダで起きると思う？それこそ、転ばせたら足掴んでスタート地点まで戻すくらいしなきゃ」
「ジータ、表現が物騒すぎだろ!?でも……そうだよな！アイツが二度もそんな事になるワケねぇ！」

トリガーを、グランを信じることに決めたビィに笑顔で頷きつつ、ジータはトリガーを見守る。
――そして、時は来た。
チャージが完了する寸前にトリガーが動いたのだ。

（僕は――）

パワークローを投げ捨て、力強く拳を握り。

（僕は――！）

遂にチャージを完了させたネオマキシマ砲が今放たれ――

（僕は、もう逃げない!!）

「デヤアッ!!!」

――爆発した。

トリガーや一誠、タイガの行動パターンを記録していた、カプセルが。
トリガーの繰り出した右腕が、ネオマキシマ砲ごと――デスフェイサーの身体を貫いて。
その光景に一瞬誰もが言葉を失い、いち早く我に返ったフェリが呟

いた。

「逃げず……真っ正面から飛び込んだ……！」

前回とまるで違い、未だ無傷のタイガと満身創痍のダイナ……二人の勝負の決着はやはり光線技でつけられる。

両腕をそれぞれ右手を斜め上、左手を斜め下に伸ばしエネルギーを集中するダイナ。

対するタイガはエリアル・ベースを出る時にゼアスから託されたものを使うことにする。

それは当然――ウルトラタイガアクセサリー。

「イッセー！ゼアス先輩から受け取ったアレを使う時だ！」

『よっしゃあ!!』

一誠が念じることによってそれは左手に装着され、それをかつてフーマがスラン星人を倒したときのようにタイガスパークにかざし、リードする。

『ゼアスレット！コネクトオン！』

赤き不屈の闘士、ウルトラマンゼアスの幻影が一瞬現れタイガに重なる。

このゼアスレットはある条件を満たした時使用可能になる特殊なものであり、その条件とは即ち『恐怖を乗り越えること』。

自分達が頑張っても出来なければ仲間を頼ればいい、そして逆に仲間に出来ないことは自分達が手を差し伸べればいい――何も自分達だけで抱え込むことはないのだと、不安や恐怖は一人で超える必要はないと理解した彼らは、ゼアスレットを使う資格を得た。

ちなみに、ゼアス＝勝人という良き好敵手を見たゲンが強く頷いた

のは言うまでもない。
タイガはゼアスの得意技であるスペシュッシュラ光線の前動作のように、大切なものを抱えるような動きからストリウムブラスターの構えをとり――

「シュアッ!!」
「シュワッ!!」

いつもと違い、技名を叫ばずにストリウムブラスターを発射した。
同じくダイナもソルジェント光線を発射し、互いの光線は市街地で激突、激しく火花を散らす。
しかしダイナの方が素の威力が高かったのか徐々にストリウムブラスターを押し始める……が、タイガは焦る様子は無い。
そして、その瞬間誰もが驚く事が起こる。

「……ッ!シュアッ!!」

なんと、タイガの口が開いたのだ。
リアスとジータなど、同じようにガコーンと顎が外れるほど驚きようであったが、これはゼアスレットを使用したオマケ効果のようなもの。
その真の効果は別にある。
タイガはストリウムブラスターの構えから瞬時に腕を?字型に組み直すと、ストリウムブラスターとは比べ物にならないエネルギーが放射される。
それはさながら、タロウのネオストリウム光線。

「クロストリウム!!ブラスタァァァァァ!!」

ゼアスのクロスペシュッシュラ光線と同じように、?字に組んだ腕全体から放たれるその威力たるや、ストリウムブラスターの十倍とい

う凄まじい威力。

（ゼアス先輩は……こんな大技を戦いの土壇場で編み出したのか!!）

改めてタイガはゼアスを心から尊敬した。

同時にこのアクセサリーを託してくれた彼に心から感謝し、気力を振り絞る。

努力によって数々の苦手を克服した偉大なる先輩と、力強く自分達を引っ張ってくれた兄貴分……二人から受け継いだ力を胸に。

クロストリウムブラスターとソルジェント光線のぶつかり合いは瞬く間にクロストリウムブラスターが押し切り、ソルジェント光線を打ち破るとそのままダイナに直撃、大きく吹き飛ばした。

「ウアッ……」

倒れたダイナは宙に手を伸ばすが、やがて力無くその手を地に下ろすと、その目から光が失われる。

そのカラータイマーはついぞ、点滅することはなく光ったまま……C．C．の言ったように飾りだったのかもしれない。

トドメと言わんばかりに、トリガーは機能停止したデスフェイサーを両肩に乗せるように抱え上げ、その場で回転し勢いをつけて一気に空高く投げ飛ばす。

ある程度の高さに到達すると、デスフェイサーは大爆発し木っ端微塵になった。

ダイナもまた、徐々に光となって消えていく。

ただし、アスカの姿になるわけではなく、純粋にただ消えていくだけ。

ダイナが完全に消え去った後、シェルター施設内……そして円盤群やモネラクリーチャー、レギオノイドやギャラクトロンも殲滅し終

わったロアーヌ島市街地でも大歓声が巻き起こる。
ウルトラマン、そしてウルトラ騎空団は勝ったのだ。
圧倒的不利な状況でも諦めずに戦い、またリベンジに挑んだ二人も見事それを果たした。

「一時はどうなるかと思ったね～」
「お兄様が集中砲火を受けていると聞いた時は血の気が……!?お兄様は!?」
「落ち着くんだヴィーラ、彼が乗っているグランティードならソウルゲインに肩を貸されているものの健在だ」
「あっちもそうだが……やっぱりトリガーは無敵の巨人でグランサイファー組のリーダーだな！」

ヴィーラがちょっと暴走気味だったが、ラカムの言葉に自然と笑みが零れるグランサイファー乗員一同。

「ねえ、ナイン。話に聞いてたウルティノイドゼロ……とかいうの、最後まで出て来なかったわね」
「はい。それにモネラ星人が乗ってる宇宙船も出て来ませんでした」

千歳とナインがそんな話をしていると、凱から通信が入ってくる。
「俺達がここまでやるとは考えてなかったとかで、いざという時のために切り札として残しているのかもしれない。一度潜伏して機を窺うということも考えられる」
「何にせよ、相手の次の一手には十分注意しておきましょう」

ミツバの言葉に誰もが頷き、一先ず当面の危機は去ったのだと漸く安堵する。

そんな中、レジェンドだけはレーダーを注視しつつ周囲に警戒していた。

「超師匠、何か問題ありました？」
「今は無い……が、まだ終わってはいない」
「え？」

「……ダイナ兄さん」
『さっきのがアスカ兄さんじゃないとしたら、一体何処に行っちまったんだ……？』
『分からんな。ともかく、今日のところは休むとしよう』
『しっかしプラズマスパーク・ブレスかぁ……当たり前のように感じてたけど、そもそもこれの発明ってつい最近だったんだよな。盲点だったぜ』
『というかあのゼロもどきも何処にいるんだ？』

そんなやりとりを一頻りやった後、トリガーとタイガは共に飛び立った。
次の戦いに備えて体調を万全の調子に整える為に。

だが、それは叶わなかった。
タイガとトリガーがある程度島から離れた時、太い蔓のようなものがそれぞれの身体に巻きつけられたのだ。

「ウッ！グゥウッ！」
「クソッ！解けないっ！」

人々の悲鳴がシェルター施設や市街地で聞こえる中、その蔓の正体であるモネラシードが姿を現す。
それも、一隻ではなく……アスファルトを突き破りながら、何隻も。
十隻は優に超えるだろうモネラシードが現れ、次々と二人のウルトラマンに蔓を巻きつけ拘束していく。

「……そうか。そういうことか……今になって全てに合点がいった……！」

レジェンドが何かに気付いた……否、気付いていたが確信に変わったというべきか。
皆が『何が』とか『どういうこと』と口々に聞いてくるのでレジェンドは分かりやすく述べる。

「よく考えてみろ。一個人ならともかく、何故この空の世界でロアーヌ島やクリオモス島が島レベルでここまで発展していると思う？ヒントはスカイ・ガーディアン・エージェンシーだ」
「スカイ……？う～ん……」
「ロアーヌ島とクリオモス島、それからスカイ・ガーディアン・エージェンシー……島２つと防衛組織の共通点……」
「……モネラ星人？」

ルリアとアマリが悩んでいると、アズが言った単語に全員がああ！と納得した表情になる。
それに合わせてレジェンドが答え合わせとばかりに続けた。

「そう、モネラ星人だ。このロアーヌ島と、クリオモス島及びそこを拠点としていたスカイ・ガーディアン・エージェンシーが発展しているのはモネラ星人の技術によるものだ。奴らはコアトリクエという戦

艦に予めデスフェイサーへと可変させるプログラムを仕込んでいたように、傀儡にしていたエルミデ博士を通じてクリオモス島に自動防衛システムを開発・配備しておきながら自分達が対処しやすいレベルに設定しておく。この時点で既にクリオモス島におけるモネラ星人の第二の侵略作戦は達成されたも同然だ」

第一の侵略作戦は勿論、ゲランダによる力押し。

この時、ゲランダをコアトリクエがネオマキシマ砲で消滅させたことが、あのクリオモス島に招待する理由――つまり第二の作戦によって、増長したスカイ・ガーディアン・エージェンシーを利用し、集まった騎空団、特にウルトラ騎空団を殲滅する手筈だったが、ここでもまだ満足のいく結果に終わらず。

そして満を持して行うことにしたのが、第三にして最大の作戦……このロアーヌ島。

「奴らは第一、第二の作戦を始める以前から人知れず空の世界へと飛来・潜伏し侵略の準備を密かに進めていた。最初からウルトラマンが妨害してくることを前提として、アンチディファレーターを事前に仕掛けられたのも、それが発動まで俺ですら気付かなかったのも、このロアーヌ島そのものが奴らに都合が良いよう作り変えられた、言わばアウェーもしくは腹の中というべきものだったからだ」

故に、あれだけのモネラシード、そして内部にいるであろう大量のモネラ星人が今この瞬間まで発見・探知されずに潜伏出来ていたのだろう。

恐ろしいまでに用意周到な連中だ。

先程からヴァングレイやベルゼルートがモネラシードを攻撃しているが、強固なバリアに阻まれダメージが通らない。

そして――タイガとトリガーを捕獲したまま、モネラシード内部のモネラ星人達は、溶けるようにモネラシードと融合していく。

さらにモネラシード同士も溶け合うよう融合し、その姿をモネラ星

人でもモネラシードでもない、全く別の何かに変える。
かつてレジェンド達が戦ったクイーンモネラではない――腹部の檻こそ共通しているがそのクイーンモネラより何倍も巨大で、上半身はモネラ星人やゲランダと同様の外骨格を纏った女性的なフォルムになり、長い両手と爪を持ち、その背後から見える分だけでも夥しい数の触手が蠢く異形の化け物。

「Ａｈｈｈｈ――」
超進化植物異形体・モネラマザー。
その外見同様、まるで女性のような高い声を響かせ、悪意を束ねる『母』がロアーヌ島に根を張りながら降誕した。

〈続く〉

人の光～ＴＩＧＡ

モネラマザー――全長１ｋｍを超える異形の化け物の出現はウルトラ騎空団以外の騎空団、そしてシェルター施設にいる者達を一目で戦慄させた。

その両手と背部の無数の触手から放たれた光線『ヴァーミリオンフレア』によってウルトラ騎空団機動部隊へと大打撃を与え、そのスキに捕らえていたタイガとトリガーを腹部の檻へと叩きつけるように閉じ込め動きを封じると、かつてダイナにやったように、しかしそれとは比べ物にならない程の威力を持った『Ｍ２アブゾーブサンダー』を二人へと浴びせ始めた。

「ウッ……！ウアアアア!!」

「ガッ……！力が抜けっ……！ぐあああ!!」

Ｍ２アブゾーブサンダー……それは二人から吸収したエネルギーをそのまま電撃破壊エネルギーへと変換し、直接体内へ逆流させるという最悪なもの。

如何にエネルギーが残っていようと、吸収とダメージを同時に受けることになり急激にそのエネルギーは失われていく。

さらには全身から放たれたビームが何重にも屈折しながら地上へと降り注ぐ『ディザスターミーティア』は現代的な町並みだったロアーヌ島を瞬く間に焦土へと変える。

ウルトラ騎空団機動部隊は一部の機体を除き損傷はともかくエネルギーが危険域に近づきつつあり、特にレジェンドやゼットの乗るグランティードは最も激戦状態にあったことも相まってほぼ限界状態であった。

☆

依頼のため、ロアーヌ島から遠く離れた島に停泊中のエリアル・

ベースとクロガネ。
　各艦の各所にあるモニターでは捕らわれたタイガとトリガー、そしてグランティードを始めとした機動部隊を蹂躙するモネラマザーの姿が映し出されていた。

「な……何やの、あのバケモノ……!?」
「それよりタイガとトリガー以外のウルトラマン出て来ぃへんやん！どうしてや!?」
「多分、モネラ星人の策略だと思う。そうじゃなければ、チーフが操縦してるらしい白い特機はともかく、他のウルトラ戦士が変身していてもおかしくない状況で誰一人現れないのは不自然すぎる」
「我夢の言う通りだ。それに相手が常識的な大きさならまだしも、あの星晶獣でも殆どいないレベルの巨大な敵を前に変身無しでというのは無茶にも程がある。やはり何らかの理由で変身出来ないと考えるのが妥当だな」

　ソシエの呟き、ユエルの疑問に我夢とジークフリートが冷静に分析する。
　レジェンドはケンやベリアルにそういう修行させたし、自身もそういう連中相手に生身で無双していたりするのだが、今はそれどころではない。
　よく見れば機動部隊は皆大なり小なり損傷が見受けられるが、グランティードは四肢も繋がっているし失われている部分は無いものの全体的に一番損傷が激しい。

「ねえ、ちょっとあれ……レジェンドが乗ってるってやつじゃない？」
「嘘だろ!?だって団長、シミュレーターとかいうのじゃ私達が束になってもまるで敵わなかったじゃないか！」
「……間違いない。画面を通してだけど、団長の旋律に加えてゼットの旋律も聴こえる」

ゼタの発言にベアトリクスが否定しようとするも、ニオの一言で黙らざるを得なくなる。
そこへ――
「すまないが頑治郎を運べるだけの船はないか!?お館様や甘露寺達を助けに行かねば!!」
「パムー!パムー!」
杏寿郎がパム治郎を肩に乗せ、鬼気迫る表情で聞いてきた。
焦ってはいるものの冷静さもあるのだろう、生身では太刀打ち出来ないと考えグルンガスト参式を持っていこうとするのはいいのだが、一応特機も数機分なら収納ブレスレットに格納出来るのを忘れているあたり、やはり完全に落ち着いてはいないようだ。
「……我夢、最速どれくらいでロアーヌ島へ辿り着ける?」
「ここからだと一番早い機体でも間に合うかどうか……チーフ達の現状を見る限り、僕達が辿り着く前に壊滅、そうでなくてもチーフが万が一やられたりすれば、その場で士気は一気に失われ……勝負は決まってしまう。特別な方法でもないと……」
こうしている合間にも、何とか現状打破しようと奮戦するウルトラ騎空団機動部隊。
遂に、タイガとトリガーのカラータイマーが点滅し始めた。
☆
現地にいるヒリュウ改ではその様子がハッキリと見えている。
機動部隊や二人のウルトラマンの消耗状況、モネラマザーの状態まで。
「ウルトラマン二名のエネルギー消耗率、さらに増加!」

「機動部隊各機、稼働率低下……！特にグランティードは機体の状態が危険域に到達しています！このまま戦闘を続行すれば最悪の事態になりかねません！」

グレイフィアとナインの焦りを含んだ声がブリッジに響き渡る。
グランティードは今、レジェンドの操縦技術のおかげでどうにか撃墜されずにいるような状態であり、デスフェイサーとの戦い時同様にモネラマザーから集中砲火を受けていた。

「このままでは拙いかもしれぬ。どうされる、艦長？」
「ヴァングレイとゼルガードも前線へ。本艦の護衛よりグランティードの援護並びに回収を最優先とします」
「他の機体は……!?」
「特機を中心に陣を組み、タイガとトリガーの救出を。少なくとも檻は強固と考え、特機は可能な限りエネルギーを温存し、その他の機体で突破口を開いて下さい。同時に、これより本艦もモネラ星人撃滅のため前線に赴きます!!」

母艦であるヒリュウ改を動かすことを決めたミツバ。しかし、ここでこちらはともかくグランティード側に別の意味で最悪な事態が起きてしまった。

「……ッ！レーダーに反応！これは……」
「命さん、どうしました!?」
「ウルティノイドゼロ！グランティードの近くに襲来!!」
「「「「!?」」」」

この瞬間まで現れなかったウルティノイドゼロ――しかも重装形態――がグランティードを狙い、現れたのである。

「ちっ!!色々面倒な時に厄介事が連続で起きる!!」
「あのゼロ師匠のパチモン野郎!!こんな時に出てくんなよ!!」

グランティードのコックピットでレジェンドとゼットが悪態をつく。

そんな二人の言葉など知ったことかと言わんばかりに重装ウルティノイドゼロは斬りかかってきたが、紙一重で防御に成功するグランティード。

「諦めが悪いな、ウルトラマンレジェンド、ウルトラマンゼット」
「生憎とウルトラマンは諦めが悪いと相場が決まっているんでな……!!」
「超師匠の言う通り!ネバーギブアップ精神だ!!」
「それが無駄だと理解しろ」
「「やかましいんだよポンコツ野郎!!」」
「!?」

レジェンドとゼットの声がハモったかと思えば、急にグランティードの出力が増し、重装ウルティノイドゼロを押し返す。

突然のことに驚くが、すぐに冷静さを取り戻し距離をとる重装ウルティノイドゼロ。

「まだそれだけの余力を残していたか」
「やかましいと言ったぞ紛い物……!」
「その面に一発俺自身でブチ込みたいところだけど、ここはウルトラ我慢して譲るとするぜ!」

ゼットの言葉に疑問を持った重装ウルティノイドゼロだが、直後グランティードを守るように前に降り立ったソウルゲインを見て納得した。

「これでも私とレイトは訓練仲間にゃん。それに旦那様をこれ以上傷つけられるのは黙ってられないし。ついでにゼットも」
「俺はついで!?」
「旦那様呼びを受け入れ始めている俺がいる……末期か。いや、単に諦めただけか？我ながらよく分からなくなってるな」

ほんの少しの和みを経て、グランティードに代わりソウルゲインが重装ウルティノイドゼロと対峙する。

モネラマザーの攻撃によって大打撃を受けたのは機動部隊のみにあらず、リアスらも同様。
全員が所々汚れつつもどうにか無事であることに安堵したのも束の間、タイガとトリガーが危険な状態にあるのを目の当たりにした。

「あのままじゃ、タイガ達が……！」
「待ってリアス！策も何も無しに向かったら、今度こそ私達は全滅よ！」
「でもっ!!」
「お館様の機体も限界に近い……煉獄や巌勝殿がいないのがここにきて大きく響いてくるとは……！」
「神衛隊が全くおらんのが厳しいのぅ……騎空団の信頼より此度の戦を切り抜けることの方を優先すべきじゃったな」
「だが信頼というものは失うのは簡単でも得るのは難しい。どちらが正解とは一概には言えぬ。それよりもこれから吾らはどうすべきか考えねばならぬだろう」

焦るリアスをカナエが諌め、小芭内や夜一、スカーサハが口々に意見する。
その近くではソーナや匙ら生徒会メンバーが他の騎空団の救助を行っていた。

「あーもー！せっかく私もたまには頑張らないとって思ったのに、あんなの出て来るなんて聞いてませんよぉ!!」
「そんなのあたしだって聞いてないわよ。おまけにレイトもどきまで追い打ちかけてきたし、いよいよマズいんじゃない？」

喚くティアマットに対して、声色はいつもと変わらないが乱菊も冷や汗を垂らしている。
その言葉を裏付けるように、モネラマザーがタイガとトリガーへ放っているＭ２アブゾーブサンダーの威力が更に上がった。
二人のウルトラマンから聞こえる苦悶の声が大きくなり、地上にいるリアスやグランサイファーにいるジータも今にすぐにでも動こうとしては朱乃やカタリナに止められる。

「離してッ!!一誠が！タイガがっ!!」
「冷静になりなさい、リアス！私達だけでどうやって彼らを助け出すというの!?」

「ジータ！まさかここから飛び降りる気か!?」
「事実は小説より奇なり。あのゆぐゆぐの失敗作みたいな奴、まさか私がこんな方法とるなんて考えないでしょ」

冷静に言っているジータだが、その表情と雰囲気は冷静さを感じない。
しかし、カタリナやフェリ、ヴィーラにまで止められ渋々中断せざるを得なかった。

そして――

「ウッ！グゥッ……」
「ぐあっ……！うぅっ……」
二人の声色が弱々しくなり、一際強烈なＭ２アブゾーブサンダーが食らわされ――
「「ウアアアアッ!!」」
凄まじい電撃が二人の全身を襲い、カラータイマーから光が空へと上るように光を失い、同時にその目からも輝きが失われ静かに頭を垂れる。
苦しむことも、抵抗することもなく沈黙するタイガとトリガー。
二人のウルトラマンは、モネラマザーに捕らわれたまま……力尽きた。
「タイガとトリガーが……！」
「……死んだ……!?」
「……嘘よ……」
誰がそう呟いたのか、目の前の光景を信じられぬリアスは――
「嘘に決まってるわ!!」
溢れる涙を拭いもせず、そう叫んだ。
☆
シェルター施設内は、まるで通夜のような空気となっていた。

タイガとトリガーは力尽き、ロアーヌ島に来たウルトラ騎空団の壊滅も時間の問題……もはや人々の心からは希望が消えかけている。

「……人間のかなう相手じゃない。星晶獣だって」

「うっ……うぅっ……」

老夫婦の呟きは、今や全員が思っていることであった。

いや、この状況でも諦めていない者達がいる。

「……」

スカイ・ガーディアン・エージェンシーの重役や、エルミデ博士までもが無言の中、三人の少女がエルミデ博士の近くまでやってきた。

「貴女は……」

「この子がお話があるそうです」

「え……？」

アーシアとオーフィス、そして――グランが出会った、ぬいぐるみを持つ少女。

年端もいかないその少女の目には、この絶望的状況の中にあってなお、光を失っていなかった。

「あのね……私のお姉ちゃんは昔、光になったの」

☆

タイガとトリガーが命の輝きを失い、グランティードはほぼ限界。

さらに、重装ウルティノイドゼロと戦っているソウルゲインも徐々に押され始め、ガオファイガーを始めとするその他の機動部隊も消耗が激しく、地上部隊も同じような状況――だというのに、ウルトラ騎

空団は誰一人撤退しようとしなかった。

「超師匠！タイガ先輩とトリガーは!?」

「タイガは光になっていないし、トリガーも石像にさえなっていない……！まだ望みはある！少なくともボロボロでエネルギーも僅か、更に逃げ場も無い俺達とこの機体に比べればな！」

やはりその先陣を切っていたのは限界にも関わらず、異常なまでのしぶとさを見せるグランティード、そしてそのパイロットであるレジェンドと、コ・パイのゼット。

それに触発され、他の機体やパイロット、地上部隊もまたモネラマザーへと立ち向かっていく。

他の騎空団の者達は理解出来ない。

何故勝ち目の無い戦いに挑むのか。

そう思った時、どこからか声が聞こえてくる。

――光の道標を――

誰もが困惑する中、ただ一人……レジェンドだけはその声の主の正体を理解し、少女へと念を飛ばす。

己（レジェンド）を想い続けてくれる大切な巫女へ。

この場に奇跡の光を呼び込むために。

ソウルゲイン――黒歌と重装ウルティノイドゼロの激闘は、例によって消耗状態にあった黒歌が劣勢に立たされていた。

加えて、EG装甲なる特殊な装甲材質によって自己修復能力を有するソウルゲインだが、重装ウルティノイドゼロの苛烈な攻撃に対して修復が追いつかなくなってきたのも原因の一つだ。

（このレイトもどき、能力だけなら一級品にゃ）

「よくここまで粘ったものだ。称賛に値する」
「本心でもないくせにいけしゃあしゃあとっ……！」
「だが、次で決まる」

そう言うと重装ウルティノイドゼロは以前ジードを次元放流へと陥れた、ディメンションゼロを展開、チャージし始めた。
場所が場所だけにもし回避しようものならネオマキシマ砲以上に被害が出かねない。
そして何より、レジェンドや夜一、白音が――そう考えた時、黒歌の中で何かが切れた。

「あんたといい、このキモい化け物といい、さっきの連中といい……！」
「！」
「揃いも揃って私の家族に何とんでもないことしてくれてんのよ!!」

――Ｓｏｕｌｇａｉｎ　Ｌｉｍｉｔ―Ｂｒｅａｋ――

まだ黒歌の技量が規定値に達していないにも関わらず、一時的にソウルゲインのリミッターが解除される。
それは即ち、ソウルゲイン最大の必殺技の発動が可能となった合図でもあった。

「ソウルゲイン、フルドライブ！」

青龍鱗を放つ時のように両手にエネルギーを溜め、高く跳躍したソウルゲインは思い切り両腕を振り上げた後、無数の気弾状の青龍鱗を重装ウルティノイドゼロへと連射。
その数は実に百発以上。

「くっ！」

高速で迫る異常な量の青龍鱗を防御するべく、一度ディメンションゼロのチャージを止め防御の構えを取る重装ウルティノイドゼロ。
青龍鱗は一発残らず命中し、どんどんと黒煙が広がっていくが、これで終わりではない……むしろ始まり。

「んにゃあっ!!」

ソウルゲインはその黒煙へと飛び込み、姿が見えなくなると黒煙の中から凄まじい打撃が金属に何発も打ち込まれる音が聞こえたかと思うと、重装ウルティノイドゼロが吹き飛ばされる形で姿を現す。
そこへ間髪入れずにソウルゲインが連撃を叩き込む。

「はっ!」

更に通常より重い拳打。

「せいっ!」

アクロバットに回転しながら肘も交えて追撃。

「でぇいッ!」

そして白虎咬の動きの一部でもある、超高速の連打。

「んにゃあああああ!!」

最低でも実力が夜一クラスでなければ見切れないほどの連打の後、肘打ちで更に重装ウルティノイドゼロを吹き飛ばし、ソウルゲインはクリスタルを輝かせながら両腕をクロスさせた。

「コード麒麟!!」

黒歌がそう叫び、ソウルゲインがクロスさせた両腕を解き肘を背後へ突き出すような動作を行うと、ソウルゲインの両肘にある刃が凄まじいスパークを起こしながら飛び出るように展開。

「この一撃で決めるっ！」

その体勢のまま、怒涛の連撃を受けて無防備な重装ウルティノイドゼロへ一気に跳躍し――

「でぇぇぇやぁッ!!」

右腕で逆袈裟に一閃。

そのまま着地すると、重装ウルティノイドゼロは大爆発を起こす。

「はぁ……ッ……はぁ……ちょっと、これ以上はキツいにゃ……何でか麒麟やれたけど限界かも……」

実妹の小猫や、レジェンド一家の中では仲の良い夜一を始めほぼ全員が唖然としていた。

突然動きが変わったソウルゲインが一方的に重装ウルティノイドゼロを叩きのめし、撃破してしまったのだからそうもなろう。

「……姉様、凄いです」

「見た感じ限界そうじゃが、十分お釣りがくる活躍だったのう。残るはあのバケモノだけ……」

……のはずだった。

ガガァァァァン!!

「ッきゃあああ!!」

「「「「!!」」」」

片膝をついていたソウルゲインが吹っ飛ばされた。

その正体は、爆発の中からキックの体勢で突っ込んできたウルティノイドゼロ。

ウルティメイトイージスに相当する重装形態の鎧は破壊されていたが、本体は未だ健在であった。

「認識を改めよう。お前はウルトラマンレジェンド同様最優先排除対象と認識した」

「……最っ悪……あんた、絶対モテないタイプにゃ……」

黒歌は忌々しげにウルティノイドゼロを睨みつけつつ、半ば意地だけで己の身体とソウルゲインを立ち上がらせる。

「こうなったらとことんやってやるわよ。レイト本人ならまだしも、紛い物なんかにそう何度もやられたりしないっての！」

「その虚勢もじきに言えなくなる」

ソウルゲインとウルティノイドゼロ――激闘、再び。

☆

一誠、ドライグ、グラン、そしてトライスクワッド……彼らはそれぞれ別の、真っ暗な空間を彷徨っていた。

（俺達……どうなったんだ……？）
（身体に力が入らない……僕は、死んだのかな）
（……あれは……）

その漆黒の空間に映された映像……そこにはボロボロになりながらもモネラマザーに立ち向かうウルトラ騎空団の姿があった。
リアスもまた涙を流しつつも懸命に戦っており、ジータやビィは大型のロケットランチャーまで持ち出している。
（ジータは……相変わらずだな。男の僕より逞しいんだから）

そんな中、アザゼルがまさかの発破をかける声が聞こえた。
『ウルトラマンがいなくたってなぁ！俺達が頑張らないでどうすんだ！今こうしてこの世界で生きてる奴が頑張らないでどうすんだぁ!!』

普段飄々として、ゼロガンダムに手痛いツッコミを入れられたり、何かやらかして追いかけられたりしている彼からは信じられない、重く大きな意味を持つ言葉。
（皆……ウルトラマンがいなくても、ウルトラマンになれなくても必死に戦ってるんだ）

そして、その映像はゆらりと別のものに変化する。
一誠やドライグ、トライスクワッドにはダイナ――アスカが光を奪われ、命の危険に晒されながらも立ち上がり、諦めず戦う姿が。
途方もない大きさの暗黒惑星に、仲間と共に挑む兄貴分の姿が。
グランには、迫りくる邪神ガタノゾーアが。
そして……石化したティガの元へ数え切れない程の小さな光が集まって一体化していく光景が。
その中で一際輝く、一人の女性が。

☆

「お姉ちゃんが言ってたの！私も光になれるって！諦めなければきっと光になれるって!!」

胸に抱いたティガのぬいぐるみを強く抱きしめながらハッキリと言ったその少女に目線を合わせるように屈んで、エルミデ博士は問う。

「私も……光になれるかな？」

それを聞いた少女は、笑顔で頷いた。

「きっとなれるよ！」

笑顔の少女とエルミデ博士に、アーシアも嬉しそうに笑う。

それに水を差したのはやはり、スカイ・ガーディアン・エージェンシーの重役。

「……バカバカしい、何が光だ！」

「……私もそう思ってた。平和を守るために必要なのは感情ではなく、力だと」

「そうだ!!だから感情などに左右されない、完璧な兵器を作ろうと……」

「でもそれは間違ってた!!感情を捨てた兵器なんて、何の意味もない！今、気付いた……一番大切なのは、心だって」

重役すら黙らせるような迫力を出しながらエルミデ博士は反論し、続ける。

「こんな小さな子が諦めず、希望を捨てていないのに……私達がこのまま終わっていいはずがない!!」
「っ……だが、あのウルトラマン達は既に力尽き、頼みの綱のウルトラ騎空団さえ全滅は時間の問題……この状況で何が出来るというんだ……!」

重役はそう零すが、少女に感化されたエルミデ博士の目に宿った光は消えはしない。
それを見た避難民達は、少しずつ顔を上げる。
「皆、諦めちゃ駄目。まだ私達に出来る事があるはず……諦めなければ、きっとあの怪物を倒す事ができる!」

そんなエルミデ博士を見ながら、重役はさらに口を挟もうとするも

『そうだ。光の神は諦めぬ者にこそ手を差し伸べる』
「「「「!?」」」」

アーシアの纏う『輝煌なる祈り』のフード部分に隠れていたマジンガーＺＥＲＯが姿を現し、ふよふよと浮かびながらアーシアとオーフィスの前で静止する。
「魔神様……」
『巫女よ、既にレジェンドから念は送られていよう。この地に光を呼び込むために巫女の力が必要だと』

マジンガーＺＥＲＯの問いにアーシアは決意を込めた表情で頷き、それをマジンガーＺＥＲＯは満足そうに見ながら告げた。
『巫女、我、そしてオーフィス……巫女が有した『輝煌なる祈り』に秘

められしレジェンドの力で全ての時間軸を参照し、オーフィスが『無限』の可能性の中より我らが勝利する未来を見つけ出し、そして我が因果を結ぶ。しかし、勝利する未来と因果を結び――光の道標をこの世界に繋げるには、この空に生きる者達が『今』諦めず戦う意思を持たねばならん』
「がんばるー」

マジンガーＺＥＲＯの言葉の重さに対し、オーフィスは程よく気が抜けるような返事をしつつ両手を上げる。

「お姉ちゃん、魔神様？私達は何すればいいの？」
『諦めるな。光を信じ、戦う意思を持て。それだけだ……巫女よ』
「はいっ！」

アーシアはフードを被り直し、祈るように両手を組んで目を閉じる。
すると淡い光がアーシアの周囲から立ち上り始めた。

「これは……」
『やはりまだ足りぬか。オーフィス、やるぞ』
「ん、わかった」

オーフィスがマジンガーＺＥＲＯと共に力を行使しようとした時、一つの声が上がる。

「私は光になったわけじゃないけど……神隠しにあったとき、光が助けてくれたの！『銀河』の光が！」

銀河の光――それを聞いた青年が、更に続く。

「俺を助けてくれた光は何か逞しかった！『勝利』って感じの！」

それに触発され、次々と声が上がっていく。
「僕が会ったのは今までに見たことないような『未知』の光だった！」
「あたしは勇者様みたいな光に出会った！『宝珠』みたいに神秘的で！」
どんな光に出会ったのか、それぞれ口にしながら立ち上がり、それは一つの思いへと集約される。
「頑張れ、ウルトラマン！」
「負けるな、ウルトラ騎空団！」
今、モネラマザーに立ち向かっている者達への声援。
それを見たマジンガーＺＥＲＯが、何かを掴んだかのような反応をする。
『巫女、そしてオーフィス』
「はい？」
「ん、何？」
『二人と、ここにいる者らのおかげで……どうやらサプライズ出来そうだ』
「「???」」
何も分からない二人を尻目に、マジンガーＺＥＲＯはオーフィスの力と、アーシアが受けたレジェンドの加護、それらを使って因果を結び、あるものを発現させた。
マジンガーＺＥＲＯが眩く輝き出し、その輝きの向こう側から淡く光る数人がアーシアやオーフィスへ歩いてくる。
「貴方達は……！」

アーシアは彼らを見たことがある。
レジェンドが見せてくれたアルバムに、彼と共に笑顔で写っていた。

マドカ・ダイゴ。
ヤナセ・レナ。
イルマ・メグミ。
ムナカタ・セイイチ。
シンジョウ・テツオ。
ホリイ・マサミ。
ヤズミ・ジュン。

皆、レジェンドと共に戦った、特捜チーム『ＧＵＴＳ』の仲間達だ。
淡い光を纏った彼らは、アーシアやオーフィスの近くに来ると励ましの言葉をかける。

――チーフのこと、頼んだよ――
――あの人、放っておくとダイゴより無茶するからね――
――貴方達なら、大丈夫よ――
――己に出来る事を精一杯やり遂げろ――
――お前さん達は、一人じゃないからな――
――俺らもついとるで、安心せえや――
――出来れば、一緒にＧＵＴＳ隊で仕事したかったね――

優しい言葉、力強い言葉――彼らからそれを受けたアーシアは涙を流しつつも笑顔で頷く。
そして彼らは光となってアーシアの放つ光と混ざり合い、より強い輝きを放つ。
だが、それだけではなかった。
ＧＵＴＳのメンバーが消えると、さらに別の者達が黄金の光が集

まった姿で現れたのだ。
その中の一人が先んじて、ぬいぐるみを持った少女に近づき、片膝をつきながら目線を合わせると、少女は驚いた顔をしつつも一番の笑顔を見せた。
――その光は、少女が信じ続けたもの。
他の光も、先程発言した者達の傍へと歩みを進める。

「嘘……！」
「あ……！」

『銀河』の光、ウルトラマンギンガ。
『勝利』の光、ウルトラマンビクトリー。

「ッ……！」
「わぁ……！」

『未知』の光、ウルトラマンエックス。
『宝珠』の光、ウルトラマンオーブ。
他にもまだ見ぬウルトラマン達の姿を黄金の光が形作り、出会ったことのある者達の傍らに並び立つ。
すると、彼らはＧＵＴＳメンバーと同様に完全に光となって少女や青年らと一体化し、一体化した者達から黄金の光が立ち昇っていく。
決して諦めない心、それがいくつも連なりシェルター施設内は黄金の光で溢れかえる。

「馬鹿な……！こんなことが……!!」

驚く重役とエルミデ博士の前に、光が一人の女性の姿をとって現れる。
キサラギ・ルイ博士――かつてエルミデ博士同様、モネラ星人に傀儡にされ、開発したプロメテウスをデスフェイサーへと変えられてし

まった人物。
そして、エルミデ博士同様……過ちに気づき、諦めない心を取り戻した女性。
――貴女も、自分で気づけた。それなら、貴女もきっと――
その言葉と共に、キサラギ博士は光となりエルミデ博士と一体化する。
「人は、光になれる――」
エルミデ博士……彼女からもまた、光が立ち昇る。
「私達皆の光を、あの方達に――!!」
アーシアの祈りが、全ての光を束ね――
☆
一誠が、タイガが、タイタスが、フーマが、ドライグが、そして――グランが、叫ぶ。
『光よぉぉぉぉぉ!!!』
☆
シェルター施設から溢れ出た無数の凄まじい黄金の光は、渦巻くように一つ一つが一点に集まり巨人の姿を成していく。
勇ましげな顔のトリガーとは違って、優しげで……しかしながらト

リガーによく似た、光の巨人。

「あれは……!?」

「トリガー……!?いえ、似ているけど違う！」

ジータとロゼッタを始めとしたグランサイファー組が初めて見るその姿に驚愕し――

「ねえ、あのウルトラマンって……！」

「ええ……！あの会談の時にレジェンド様が見せてくれた映像の中で、銀河遊撃隊結成時に真っ先に呼ばれていた……！」

「銀河遊撃隊最強の一角にして切り札……!!」

まだ涙は止まらぬものの、リアスか朱乃やカナエと共に思い出し――

「ついに来たか……！彼が!!」

「はい……！マン兄さんと並び称される、ベリアル総司令や隊長のゼロも一目置く超古代の光の巨人……！」

ゲンや矢的にすら笑顔を取り戻した。

「今、光の道標は成され――あいつがこの空へと辿り着いた」

激戦の最中でありながら、レジェンドが穏やかにそう告げ――ゼットが万感の思いを乗せ彼の名をご唱和する。

「ティガ先輩ィィィ!!!」

かつて無数の光と共に邪神を打ち倒した光の化身、ウルトラマンティガ――その彼が今、空の世界へ。
諦めぬ心は光となって、奇跡を起こした。

〈続く〉

帰ってきた男たち!!

満身創痍のウルトラ騎空団、そして光を失ったタイガとトリガーという絶体絶命の状況の最中、人々の諦めぬ心は無数の金色の光となって『光の道標』を成し、もう一人の超古代の巨人――ウルトラマンティガを空の世界へと呼び寄せた。

「はわ!?アマリ、あのウルトラマン……トリガーに似てます!」
「もしかして、トリガーの御先祖様とか……」
『御先祖様かどうかはともかく、あのウルトラマンはティガと言うそうです。その実力はレイトさんが隊長を務める銀河遊撃隊でも最強クラスだと』
「え!?ナイン、それ何処からの情報!?」
『レジェンド様とゼットさんからです』

情報元が信憑性抜群のおかげで一発で納得してしまうルリア、アマリ、千歳。

そのティガは、彼の身長の二十倍以上もあるモネラマザーに対し構え、臆することなく敢然と立ち向かっていく。

まず狙うは、トリガーの救出。

触手から放たれるヴァーミリオンフレアを巧みに避けながら、あっという間にトリガーが捕らえられた腹部の正面まで到達。

その勢いを殺さぬまま、外骨格状の檻を粉砕し、トリガーが脱出可能な状態にすると、直感的に地下からティガを捕縛しようとした触手をバク宙で回避。

着地したティガは額のクリスタルとカラータイマーにエネルギーを集中すると、それをトリガー分け与えるように一直線に放射した。

それによってトリガーの目やカラータイマーは光を取り戻し、同時に意識も復活する。

(僕は……あれは!)

目の前に存在するティガに驚きつつも、邪魔をしていた檻が破壊されていることに気付いたトリガーはパワータイプの持つ剛力で強引に拘束していた蔦を引きちぎり、檻の残っていた部分を破壊しつつ、モネラマザーから脱出した。
すると、ティガがテレパシーでトリガーに語りかける。

『身体は大丈夫そうだけど、まだやれるかい？』
『は……はい！でもまだタイガさん達が……』
『心配ないよ』
『え？』

ティガのテレパシーを聞いたトリガーはどういうことか尋ねようとするがその直後、空に黄金の光が現れるとその中から一機の機動兵器が飛び出してきた。

「超師匠！アレはまさか……！」
「さすがに宇宙世紀ベースでシミュレーターを使っているお前ならすぐ分かったか。そう、お前の思っている通りアレはGクルーザー、ティガ……ダイゴの機体であり、パートナーでもある」

そう、飛び出してきた機体は先日ある世界を旅立ったGクルーザー……レジェンドの言ったようにティガが来たということは、必然的にパートナーたるあの機体も来るということに他ならない。
そしてヒリュウ改から全員に向けて通信が入る。

『総員、あの光から高エネルギー反応!!気をつけて下さい!!』
「いや、その必要は無い」
「はい？」

ただ一人、レジェンドは目を伏せ口元を緩めながら呟き、ゼットが聞き返せば――

「英雄のお帰りだ」

グランサイファーの甲板ではティガがトリガーにエネルギー与えて復活したことに沸き立っていた。

「なあなあ！ムサシの兄ちゃんにアサヒの姉ちゃん！あのトリガーに似たやつは何なんだ!?さっきから二人ともすげー喜んでるしよぉ！」
「ビィ君、あの人は僕達にとっても憧れの人なんだ」
「銀河遊撃隊に所属してる私達だけじゃなくて、光の国でもすっごい有名な方なんですよ！」
「二人がそれ程力説する御仁なのか……！」
「まあ、グランをあっさり救出して復活させるぐらいだしねぇ。あれで無名はありえないよ」

カタリナも驚くが、うんうん頷きながらよりゴツくなったロケットランチャーをスタンバイしてるジータに一同はドン引きしている。

「いやジータ、お前なんてモン担いでんだよ……」
「何言ってんのビィ、次はタイガ救出でしょ。あの可愛くないゆぐゆぐモドキの腹にデカイのブチ込まなきゃいけないんだから」
「ジータちゃんって男女問わず姐さんとか呼ばれそうだよね……」
「でもムサシさん、地上でも流さんがレールガン構えてますよ」
「「「「え？」」」」

アサヒに言われて地上を見てみれば、オリジンになれないならとばかりに火野え……もとい、前宮流がいつの間に持ち込んでいたのか、大型レールガンを構えてモネラマザーに狙いを定めている。

「いやいやいや!?一応あの人もウルトラマンだろう!?何故ジータと同じ思考に!?」
「変身出来ないからじゃない？諦めたらそこで試合終了だよ」

フェリのツッコミにジータは普段の調子で言い放ち、ロケットランチャーを構え直すが……

「……あれ？」

ジータが気になって見た黄金の光から赤い光が飛び出し、一直線にモネラマザー……いや、捕らわれたタイガへと突き進んでいく。
それは徐々に人の形を成していき、その姿を見たある者は驚愕し、ある者は混乱し――ある者は笑顔になる。

「ちょっ……!?」
「おい、ありゃあ……!」

笑顔になった者達――言わずもがな駒王町、正確にはダイブハンガーで生活していた者達だ。
何故ならその光の正体は――

「……ダイナ……!ウルトラマンダイナだ!」
「ちゃんとプラズマスパーク・ブレスもある!もう片方にも何か着けてるけど……」
「じゃあ、あれは!」
「はい、本物のダイナ……アスカさんです」
「一誠やタイガが兄と慕ったあの人が……彼らを助けに来てくれたのね!」

リアスが涙しつつも笑顔になる。
彼女の言葉を体現するかのように、今のダイナはストロングタイプ……かつてモネラ星人と戦った時の姿であり、同じくティガに助けられた時の姿でもある。
ダイナは一切スピードを落とさず、そして脇目も振らずタイガの捕らわれた檻へと飛ぶ。
レジェンド、ティガに続き、ダイナというモネラ星人にとって宿敵とも言える三人のウルトラマン（一人は生身）が集結したこともあり、モネラマザーはタイガ救出を妨害せんとダイナへとヴァーミリオンフレアを連射する。
しかし、モネラマザーは今のダイナを甘く見ていた。
ヴァーミリオンフレアが何発か直撃したにも関わらず、ダイナは怯むことも速度を落とすこともせず、むしろグングン加速してくるのだ。

「シュワッ!!」

両腕を伸ばした飛行体勢から右手を突き出すような体勢、即ちパンチの構えになり、ダイナ……いやアスカ持ち前のド根性によって檻に当たる直前で更に一気に加速し、檻を木っ端微塵に粉砕する。
その衝撃たるや大地に根を張ったモネラマザーが大きく揺れてしまうほどであり、混乱に乗じてダイナはタイガを拘束している蔦を容赦無く引きちぎり、プラズマスパーク・ブレスとは別のもう一つのアイテム――ウルトラコンバーターをタイガの腕に装着する。
コンバーターに充填されていたエネルギーが急速にタイガへと供給され、タイガの目とカラータイマーに光が戻った。

「う……お、俺は……」
「しっかりしろタイガ！闘いはまだ終わっちゃいないぜ!!」
「……!!ダ……ダイナ兄さん!?」
『アスカ兄さん!?マジモン!?』

「マジもマジだ！マジ無敵のアスカ様もといダイナ様だ！」

タイガの肩を叩きながらサムズアップをするダイナを見た一誠とタイガは確信する。

紛れも無く目の前にいるのは本物のダイナだと。

「よく頑張ったな。モネラ星人の奴ら、俺を次元牢獄に幽閉しただけじゃなく、その状態の俺からエネルギーを奪い取って、それを素に俺のコピーなんて造りやがったんだ！そいつもここら辺にいそうなんだが……」

「やっぱり……！それなら俺達が倒しました！」

「マジか!?」

『マジっす！』

「強くなったなあ！超ファインプレーだぜ！」

和気藹々としている彼らだが、破壊したとはいえまだここはモネラマザーの檻の中。

混乱から立ち直ったモネラマザーがＭ２アブゾーブサンダーを放とうとしてきたが、ストロングタイプのダイナと赤龍帝の籠手でブーストをかけたタイガが息の合ったダブルパンチを檻の中でモネラマザーにブチ込んだ。

「「『オオオオラァァァァァ!!!!!』」」

たった二発のパンチなのに、内側からに近い攻撃ということもあってモネラマザーは文字通りの大打撃を受けた。

そのスキにダイナとタイガは脱出し、ティガとトリガーの隣へ並び立つ。

「よし……！」

「そういえばダイナ兄さん、さっき次元牢獄に幽閉されてたって言っ

てたけど、どうやって脱出を……」
「おお、それはな……」

「きゃあっ!!」
「「「!!」」」

女性の悲鳴が聞こえたかと思えば、声のした方を向くとソウルゲインを吹っ飛ばしたウルティノイドゼロが四人のウルトラ戦士達へと構えていた。

「ウルトラマンティガ、そしてウルトラマンダイナ……ウルトラマンレジェンドと並び最優先排除対象。そして……ウルトラマンダイナ、何故次元牢獄から逃れられた」
「何でって?タイガにも聞かれたし教えてやるぜ。何故も何もお前が原因なんだよ!」
「「「!?」」」

ダイナが告げた事実にタイガらだけでなくウルティノイドゼロ自身も驚きを禁じ得ない。
自分が原因とはどういうことかと問い詰めようとするも、ダイナが一足先に先手を打つ。
「意味が分からないなら直接聞いてみりゃいいだろ?あっちの方な!」

地上側で一悶着起きている頃、ヒリュウ改では新たに黄金の光から高エネルギー反応が発せられていることを感知。

「ミツバ艦長、空の黄金の光から再度高エネルギー反応……え!?」
「どうしました!?」
「そんな、この波長は……でも……ううん、可能性は……」

混乱していた命だが、その混乱は絶望や焦りからではない、むしろその逆だ。

「この高エネルギー反応の識別は――」

ダイナが告げ、命が見たエネルギーの識別――それは他の者達もそうだが、何よりもウルティノイドゼロにとってイレギュラーが過ぎた。

黄金の光より現れたのはダイナであった赤い光とは真逆の青い光、それが地上に近付くと一瞬で巨人、即ちウルトラマンの姿になってソウルゲインの、そしてウルティノイドゼロの前に降り立ったのだが……その姿が衝撃的だった。

まるでジャケットを着ているかのような上半身を始め、外骨格に覆われたとも言える外見と、光が示した青と紺がメインの体色、何より――一度見れば忘れないであろう、特徴的なその『目』を持つ顔。

「嘘……あれって……!」
「姿が全然変わってるけど、あの顔……!」

黒歌とロスヴァイセが他の者達の心を代弁したように口を開いたが、彼女ら以上に衝撃を受け、その表情が花開いたように涙しつつも笑顔になる人物がいた。

当然それは『彼』に憧れ、慕い、そして兄と呼ぶようになった少年。

「ギャスパー、あれは……!?」
「バーン、あの人は――」

万感の思いを込め、ギャスパーは『彼』の名を呼ぶ。

「リク兄さん……ウルトラマンジードです!!」

「フゥアッ!!」

ウルトラマンジード・ギャラクシーライジング――ウルティノイドゼロに次元断層に放流されたはずのジードが、新たな姿と力を手に入れ空の世界へと帰ってきたのだ。

全身の各部を一瞬強く発光させ、周囲にデジタル光のようなものを発生させつつジード・ギャラクシーライジングは構えを取り、ウルティノイドゼロへと粉塵を巻き上げながら大地を駆け抜け向かっていく。

「デアッ!!」

「ヌウッ!?」

ジードの先制攻撃を寸でのところで防御に成功したウルティノイドゼロだが、予想以上に攻撃が重く、そして早い。

「アアアアアッ!!」

「グゥアッ!?」

連続ラッシュによってウルティノイドゼロの防御を崩し、ボディに何発も叩き込んだところでジードはウルティノイドゼロから回し蹴りによる反撃を食らい、よろけて背後を取られる形になってしまう。

この機を逃すまいとヘッドロックをかけるウルティノイドゼロだったが――

「ギャラクシーカッティング!!」
「ガアッ!!」

ジードの腕の突起部分が黄色く発光し、光の刃となった状態での両肘打ちがウルティノイドゼロに叩き込まれた。
予想外の攻撃は威力抜群であり、拘束を脱したジードは気合を入れるかのように咆哮する。

「ウゥアァァァァ!!」

光の刃となった突起を利用し、怒涛の連続攻撃を仕掛けるジードと、それをまともに受け続けるウルティノイドゼロ。
そんな光景を見ている彼を良く知る人物らは驚きと共に興奮を隠せない。

「あのリクが変身したというウルトラマン……強いぞ!」
「動きのキレが前より全然良くなってる……!たった数日と、新しい姿を得るだけであそこまで変わるものなの!?」
「忘れておるかもしれぬが、あの者の父親であるウルトラマンベリアルは歴史を書き換えんとした者と一対一で闘い、闘いの中で進化し見事勝利した程の実力者。その息子であるジードもまた同じような事を成そうと不思議ではあるまい」

アルベールとカナエに、京都からの付き合いであるスカーサハが言う。
ベリアルはエタルカオスとの死闘の果てにカオティックオーバーの姿を得て、エタルカオスを圧倒し正面から撃破した――そして、ジードもまた京都においてキリエロイドⅡと戦いの最中、シャイニングミスティックの力を手にして見事打倒した経験もある。
やはり生まれが特殊であろうと血筋なのだろう。

「何故だ……！何故お前が……！」

いよいよ余裕が無くなってきたウルティノイドゼロが焦りを含んだ声でジードへと問う。

対してそんなウルティノイドゼロへ、ジードははっきりとした声で答えた。

「あの時、僕はお前の放った一撃で次元断層へと放逐された――」

クリオモス島での戦い――そこでグランサイファーを庇い、ジードはディメンションゼロを受け次元断層へと放逐されたのだが、奇跡的にも放逐された先がダイナの幽閉されていた次元牢獄のある場所だった。

次元断層に放り込まれたジードは勢いが弱まらぬまま、これまた偶然次元牢獄に激突。

実はモネラ星人の作った次元牢獄、内部からの攻撃には滅法強かったのだが、場所が場所だけに見つけることが不可能に近いということもあり……外部からの衝撃に弱かった。

これにより次元牢獄は崩壊し、ダイナは脱出。

負傷していたジードを連れて一度ガーディアンベースへと帰還し、十分な治療と休息を終えた後、別の世界から戻ってきたティガを加えて三人と一機で空の世界へと向かったというわけだ。

一応モネラ星人はこれにも対策を練っており、クリオモス島での一件以降この世界に外界から侵入されないよう遮断フィールドで次元断層に壁を作っていた。

だが本質が光であり、三人中唯一突破出来る可能性があったティガがGクルーザーから出て先行する形でアーシアらが作った光の道標を通りこの場に顕現したことで遮断フィールドが弱まり、Gクルーザーによる強行突破を皮切りにダイナとジードもこちらへと来る事

が出来た、というのが事の顛末である。
そう、ダイナが言っていたようにウルティノイドゼロが放ったディメンションゼロが、ジードを次元放流させるどころかダイナを解放し、ジードに新形態・ギャラクシーライジングを得る機会を与えてしまったのだ。

「まさか、そんなことが……!?」
「ベリアル総司令に協力してもらって、ギリギリまで隠してもらってたんだよ。敵を騙すにはまず味方からってな」

つまりベリアルがレジェンドに言ったという『ダイナが消息不明になった』――クリオモス島の事件後にレジェンドからウルトラ騎空団に伝えられたその情報は、ほぼ同じタイミングで『消息不明になっていたダイナが、ジードを連れて帰ってきた』に変わっていたということ。
そしてそれをベリアルはダイナ達の頼みもあり、モネラ星人を欺くために敢えてレジェンドへ伝えなかった。
結果はこの通り大成功。
幾重にもモネラ星人が策を用意していたことは驚きだったが、レジェンド&ゼットを筆頭にタイガやトリガー、黒歌らの奮闘によってそれも粉砕。
この世界に生きる者達が諦めなかったことでアーシア達の尽力も実を結び、ティガ達を空の世界へと呼び込めたことで遂に戦局が逆転し始めた。

「認めはしない……!お前達はここで朽ち果てさせる!」
「中途半端に難しく言ってるからか、ゼロのような迫力をまるで感じないな。ゼロなら『だったらお前ら全員まとめてブッ倒す!』ぐらい強く言い切るのに」

ウルティノイドゼロに対してジードは逆に余裕が出てきている。

何故ならギャラクシーライジングはギンガ・エックス・オーブのウルトラメダルを使用した強化形態であるがそれだけではない。
この戦いに駆けつけ問題なくその力を振るうべく、ジードは先輩であるビクトリーに加えて父・ベリアルから短い期間ながらこの姿で特訓を受けてきた。

「お前に辛酸を舐めさせられた人達は大勢いるんだ……お前はここで僕が倒す！ここにいないゼロの代わりに!!」
「ジェアッ!!」
「フッ!!」

ジードの言葉にウルティノイドゼロはエメリウムスラッシュで返事を返し、ジードは大きくバックステップで回避しその勢いでアスファルトを砕きながら後退する。
ウルティノイドゼロスラッガーで追撃するもジードは冷静に対応。

「プラズマ光輪!!」

一つでは弾けないかもしれないと念を入れて一つのスラッガーに対し、四つ発生させたプラズマ光輪をそれぞれ二つずつ放って弾き飛ばす。

『リ……リクさんすげぇ!!』
『ヤベーよあの形態、青くて光輪使うって俺の出番取られそうなんだけど!?』
『それを言ったら赤くて超パワーを発揮しているダイナやトリガーに活躍の場を奪われている私はどうなるんだ！』
『ジードにもあるだろ、赤くて超パワー。ついでにあいつ、ある形態だとお前のような体色に下手したらお前以上の筋肉になるらしいぞ』
『!?』

純粋にジードを尊敬の眼差しで見ている一誠と、出番や活躍を心配しているフーマやタイタス、ついでにタイタスに追い打ちをかけているドライグ。

「これが、本当に一流のウルトラ戦士……！」

タイガは自身より年下ながら銀河遊撃隊創設時にメンバーとされたジードの凄さを改めて実感する。

周囲のプレッシャーを跳ね除け、遊撃隊員の座を勝ち取った、ニュージェネレーションの先輩の力と心を強さを。

仕掛ける攻撃を悉く捌かれ、ウルティノイドゼロの焦りは既に臨界点になっていた。

ならば、と弾き飛ばされ戻ってきたスラッガーを掴み、カラータイマーの左右へと装着する。

ゼロの得意技であるゼロツインシュートの模倣技もウルティノイドゼロは使用可能なのだが、それを見たジードも決着をつけるべく自身の新たな必殺技を発動。

「ハァァァァァ……！」

突如ジードの背中から炎が発生し、それは翼のような形を形成する。

それを見たオカルト研究部の面々はあるもの――レイヴェルが零したものを連想した。

「……フェニックス……!?」

不死鳥（フェニックス）――敗北から不屈の闘志で立ち上がり、力を増して帰ってき

た彼に相応しい名。
兄も彼のようにいつか舞い戻ってほしいと願いつつ、レイヴェルは他の者達同様、ジードから目を離さない。
衝撃で大地の破片が巻き上がり、両目と全身から光を放ちながらエネルギーを集中するジード。
やがて一つの光が形成されると背中の炎と共にジードに吸収され、一瞬強く輝き――

「レッキング・フェニックス!!」

ズゴオォォォォォ!!!

L字型に組まれたジードの右腕から、レッキングバーストとは比べ物にならない威力の光線が発射された。
余波で瓦礫が宙を舞い、激しくスパークしながらウルティノイドゼロに突き進むそれに対し、ウルティノイドゼロもゼロツインシュートを放ち対抗する。
やがて二つの光線は激突。
一見拮抗しているかに見えたそれは実のところ、クリオモス島で焦りがあったゼロと同じ状態のウルティノイドゼロが押されており、「皆のためにも必ず勝つ」という強い思いを持ち、迷いの無いジードは一歩も下がらない。

「リクさん頑張って！」
「ブッ飛ばせぇ！ウルトラマンジード！」
「今の君ならそいつに絶対負けはしない！」
「勝って皆をハッピーにして下さい！」

グランサイファーからジータ、ビィ、ムサシ、アサヒの声援が聞こえる。
そして――

「いっけぇぇぇ！ジィィィィドッ!!」

あの怖がりだった弟分が自らこの戦場に出て、後押ししてくれる――ならばそれに応えよう。

生まれが特殊であり、一人ぼっちだと思っていた自分を引き取って厳しくも愛情深く育ててくれた父のベリアル、自分を助け何かと面倒を見てくれた兄貴分のゼロ、優しく見守りつつ手助けをしてくれることもあった、父の師であるレジェンド……彼らだけではなく、多くの者達に支えられ、たくさんの笑顔を貰った。

これからは自分が笑顔をあげる番だ――タイガやゼット、トリガー……そしてまだ見ぬ後輩達へ。

今も支え合う仲間達へ。

その一歩――自身が尊敬するゼロを貶すような行動をするウルティノイドゼロをこのままにはしておけない。

「ハァァァァァ!!」

ジードが気合を入れると、再びジードの全身が一瞬強く光を放ち、レッキングフェニックスの威力が上昇する。

何故なのか理解出来ないウルティノイドゼロはゼロツインシュートを撃ちながらも狼狽えており、一気に押し切られ遂には――

「グゥァァァァァ!!」

ウルティノイドゼロに、レッキングフェニックスが直撃した……にも関わらず、僅かながらに堪えている。

「あの野郎！どんだけしぶといんだ!?」

「いや、様子がおかしい！」

ヴェインが悪態をつくが、ランスロットは何かに気付く。
そしてウルティノイドゼロが口を開いた。
「忘れるな……！『皇帝』は既に……動き……っ……!!」
ドオオオオオン!!!
意味深な言葉を遺してウルティノイドゼロは爆発し、消滅。
言葉の意味は後々考えるとして、漸く強敵であったウルティノイドゼロを打ち倒せたことにウルトラ騎空団は更に沸き立った。
残るは此度の首魁……モネラマザー。
ダイナとタイガによって大打撃を受けていたモネラマザーもウルティノイドゼロの敗北と共に漸く本調子を取り戻したようで、ティガを始めとするウルトラマンやレジェンドの駆るグランティードを睨みつける。
……が、モネラマザーにとってさらなる凶事が舞い降りた。
「ジャアアアアッ!!」
「ディアアアアッ!!」
突如再び赤い光と青い光が現れたかと思うと、なんとガイアとアグルが土煙をド派手に舞い上げながらロアーヌ島に降臨したのである。
これにはモネラマザーは勿論、ティガどころかレジェンドすら度肝を抜かれた。
さらに、よく見るとガイアの手は杏寿郎とパム治郎、さらにジークフリートにパーシヴァルまでいる。
ガイアは静かに三人と一匹を降ろすようにロアーヌ島の地へとその手を下げた。

「煉獄さん!?」
「ジークフリートさんにパーさん!?」
「パムちゃーん！」
「とりあえずカナエは空気読みなさい」

驚く蜜璃とヴェインに紛れてカナエが嬉しそうな声を上げるが、リアスにペシリと頭をはたかれる。

「甘露寺！伊黒！お館様は健在か!?」
「う、うん！」
「誰よりも前線で戦っておられる。健在ではあるがこれ以上は危険だ」
「そうか！ならば俺達が来たのは間違いではなかったようだな！お館様は俺に任せろ！パム治郎、皆を頼むぞ！」
「パムー!!」
「行くぞ頑治郎!!」

この状況でも相変わらずなコンビに少しだけ緊張感が解れた。
杏寿郎はすぐさま収納ブレスレットからグルンガスト参式を呼び出して搭乗し、グランティードの元へ向かう。
そしてランスロットとヴェインは、ジークフリートとパーシヴァルから手短に理由を聞いていた。

「つまり特別な方法でもないと間に合わないから……」
「我夢と藤宮が変身してジークフリートさん達を連れてきたと……」
「あまり大勢だと二人もスピードを出せんだろうからな。資格ももらったことだし、俺達も機動兵器とやらで初陣ということになったのさ」
「「……俺『達』？」」
「フン、駄犬はともかくランスロットまで鳩が豆鉄砲食らった顔をす

るとはな。俺もジークフリート同様、先日団長から合格を貰い、さらにこの炎帝パーシヴァルに相応しい機体を用意してくれたのだ」
「「「「何ィィィィ!?」」」」

これには白竜騎士団の二人のみならず近くにいたウルトラ騎空団の殆どが大絶叫。
そんなことはレジェンドからこれっぽっちも聞かされていない。
「ちょ……!?パーさんいつの間に!?」
「その話は後にしろ！今はあの化け物を骨の髄まで焼き尽くすのが先決だ」

そう告げるとパーシヴァルは己の剣を抜き、刃に炎を纏わせながら天へと掲げる。

「炎の上位精霊にして精霊王が一柱グランバよ！我が愛機にその加護を与え、今こそ共に悪鬼羅刹を討たん！来たれ！炎の魔装機神、グランヴェール!!」

やけに気合いの入った詠唱と共に、パーシヴァルを周囲諸共炎が包み込み、炎が晴れると一体の機動兵器が鎮座していた。
それこそがパーシヴァルの機体にして、ロスヴァイセのサイバスターと同じ魔装機神の一体、グランヴェール。
唖然とするランスロット達を一瞥し、ふふんと笑いグランヴェールへと搭乗するパーシヴァル。
「では俺も我夢をサポートするために行くとしよう」

唯一落ち着いて機体を呼び出したのはジークフリート。
託されし機体・グルンガスト零式に急ぎ搭乗し、ガイアの隣に並び立つ。

その光景、誠に壮観。

「あの、超師匠。何か対モネラ星人特効みたいな機体が出て来たんですけど」
「四体しかない魔装機神の一体、グランヴェールだ。しかし……このままでは団長の立場にいながら立つ瀬がないな」
「いやいや超師匠、ウルトラ頑張ってますからね。ジード先輩が目立ってたかもしれませんけど超師匠も凄かったですからね」
「……俺もちょっとした『奇跡』でも見せてやるとするか」
「はい？」
「まだ今回限りだがサプライズには十分だろ」

ゼットが間抜けな声を出したが、直後にレジェンドがやらかしたことはこれまたぶっ飛んでいた。

突然、タイガの身体が淡く発光し出す。

「ッ!?な……何だ!?」

タイガだけでなくダイナやトリガーも混乱するが、ティガだけは何が起こっているのか予想がついていた。
そしてレジェンドマントを羽織ったウルトラマンレジェンドの幻影が大きく現れ、光となってタイガとその周辺を包む。
光が弾け飛び、そこにいたのは――

「あれ？タイガ？」
「……え？」
「サイドチェストォォォ!!」
「『『全然ブレな……！はい？』』」

現在一人ずつしか変身出来ないはずなのに、タイガ、タイタス、フーマの三人が並び立っていた。
しかも、全員が赤龍帝の籠手を装備しているという光景に、神器（セイクリッドギア）を知る者は皆それぞれブッ飛んだ驚きに襲われる。
「なぁにぃぃぃ!?どういうことだそりゃ!?同じ神滅具（ロンギヌス）が幾つも存在するとか有り得ねぇぞ!?マジでどうなってんだよ!?」
「さっすがレジェンド様ミラクル☆……で流しちゃっても良いよねソーナちゃん☆」
「それでいいと思います。あの方の規格外ぶりは常軌を逸していますから」

アザゼルはパニック状態になり、セラフォルーとソーナはもう気にしないことにした。
レジェンドが本気になったら、やることなす事何でもあり状態なのはもはや周知の事実。
実際、朱乃など「あらあら、勢揃いですわね」とあっさり順応してしまっているし。
「まあ、こんなものだ」と言い放ったレジェンドにゼットはこうツッコんだ。

「……タイガ先輩が来た時点でやってあげればよかったんじゃ……？」
「最悪二人もモネラ星人に捕まって、もっと大変な状況に陥ってたぞ」
「ごもっともでございました」

レジェンドもちゃんと考えていたようだ……取ってつけた理由かもしれないが。
そして――この場を締めくくる援軍は『彼女』。

もうじき光の道標が消える――つまり、次元断層に再びモネラ星人の遮断フィールドが発生するだろう。
そうなった場合、残る解除方法はモネラマザーを倒しその遮断フィールドを崩壊させるしかない。
ただ、この光の道標が開かれていることで、あるものが正常に作用していなくなっている。
風船に小さな穴が空いている状態、とでも言えばいいのだろうか。
そう、アンチディファレーターのことだ。
完全に消えたわけではないが、今ならこの場にいるウルトラ戦士の変身アイテムをリンクさせ、変身反発電流によるダメージを分散させることでどうにか一人は変身させることが可能だと矢的が突き止めた。

「本当か、８０!?」
「はい、レオ兄さん。しかしあの光の道標とやらが消えるまでの時間や分散させるダメージ量を考慮しても、やはり一人の壁は超えられない。誰を変身させるか、考える時間もそう長くは――」
『僕に提案があります』

そう通信を送ってきたのはムサシだ。
なるほど彼なら、と思ったゲンと矢的だったがムサシの提案は予想外の人物を挙げてきた。

『アサヒちゃんを変身させて下さい』
「「は!?」」
『ええっ!?』
『……どういうことだ、ムサシ』

背後でゼットが騒いでいるのを流しつつ、レジェンドが落ち着いて尋ねる。

『エネルギーを分け与えられて救出されたとはいえ、タイガやトリガー、それに突撃戦法でタイガを救出したダイナにはダメージが残ってます。この状況で回復可能なのは僕が知る限りではチーフか僕、そしてアサヒちゃん……ウルトラウーマングリージョだけ。しかもチーフはゼットと一体化してる以上、必然的にゼットにならざるを得ないし、僕とコスモスも回復はモードチェンジしてから可能になるしで、基本形態のまま出来るとすれば彼女ぐらいなんです』
『まあ、今リカバリーオーラを使っている時間もないし、使っている最中にやられかねんしな』

しかも、レジェンドが教えたリカバリーオーラは得手不得手があるときた。

そうなると確実に回復出来る方が優先度は高い。

加えて、グリージョ――アサヒはレジェンドから回復・防御特化で特別な訓練を受けたため、ウルトラ戦士の中でもサポート能力は屈指のものなのだ。

『俺は異論は無い。どのみち俺は俺でこのまま指揮を取らねばならん』
『頼んますよ、グリージョの姐さん！』
「俺の弟子達を、君に託す！」
「僕も信じよう。君の可能性を！」
『当然僕もね、アサヒちゃん』
『皆さん……』

次々と上がる声にアサヒは嬉しさ、そして使命感が心の底より湧き上がってくる。

さらに、彼もがアサヒを後押しした。

『俺の分も頑張ってね、アサヒちゃん！』

『流さん……!』
『君が伸ばした手で誰かを助けられるんだ。だったら後悔する前にやった方がいい。ウルトラマンは助け合いでしょ』

戦闘力のみで言えば彼女より流を含めた他のウルトラ戦士の方が高い。
だが、全員が無事な状態でこの戦いに勝つためには、後ろで支える者も必要不可欠。
だからこそ彼らは彼女に託すのだ。
皆で明日を迎えるために。

『分かりました!・皆さん、お願いします!』

グランサイファーの甲板でアサヒはルーブジャイロを再び取り出した。
アンチディファレーターの機能が阻害されているとはいえ、そのまま変身しようとすれば少なからず先刻のように電流が流れてくるだろう。
レジェンドを始めとしたウルトラ戦士達が変身アイテムをリンクさせ(例の如くゼットは痛がったがド根性でなんとかした)、それぞれのアイテムが淡く発光し出すとルーブジャイロにあった違和感が無くなる。
今しかない、皆がくれたチャンスを無駄にしないために――託された願いを叶えるために、アサヒは亡き友から受け継いだルーブジャイロを三回、回転させた。

「星まで届け、乙女のハッピー!」

『ウルトラウーマングリージョ!』

ガイア、アグルに続いてタイタス、フーマの実体化……その後に現れたのは初めて見るだけでなく、空の世界で初めて現れた女性ウルトラ戦士。
さすがに驚くなと言う方が無理というもの。

「グッ……グリージョちゃん!?」
「はい！レジェンドさんやたくさんの人達に後押しされて、ウルトラウーマングリージョ……皆さんをお助けします！」
『……フーマの気持ちがよく分かるぜ。こいつぁアイドルだ……！』
「分かってくれるかイッセー……！」

元気一杯なグリージョに、一誠がフーマと同調してしまう。
地上ではそれを察して少しばかり嫉妬でむくれるリアスやレイヴェルがいたのだが、むしろ彼女の兄二人に目をつけられるかもしれない一誠を心配するべきだと気付くのはもう少し後のようだ。

――役者は揃った。
ウルトラ騎空団とモネラマザー。
ゲランダの襲来に始まったモネラ星人との戦い、その終止符を打つ時が来たのだ。

〈続く〉

光の世界の戦士たち

ティガやダイナ、ジードが外界より駆けつけ、ガイアとアグル、レジェンドの力により一時的に実体化出来たタイタスにフーマ、そしてグリージョという新たなウルトラ戦士が現れた。

加えてGクルーザー、グルンガスト参式と零式、グランヴェールの四機の機動兵器が増援として出撃したことで、残る最大最強の敵であるモネラマザーとの決戦の準備は整った。

『レジェンド様は後退を。機体状況から推測するとこれ以上の戦闘は……』

「難しいだろうな」

「仕方ないでございますね」

『はい、ですから――』

「「……単体戦闘だった場合なら」」

『え？』

レジェンドとゼットの言葉に、ミツバが「何を言ってるんだ」と聞こうとしたところ、それを言わせずレジェンドが先回りした。

「さっき流がこう言った。ウルトラマンは助け合いだとな」

「ということは、もっと拡大して『ウルトラ騎空団は助け合い』にすれば万事解決というわけでござるでしょう!!」

『えええ!?』

ドヤ顔なゼットにレジェンドもうんうんと頷き、驚くミツバを置き去りに話を進めてしまう。

何となくこうなることが分かっていたグレイフィアは、苦笑しつつもレジェンドの意思を尊重することに決める。

「ここで俺が退けばそれこそウルトラ騎空団のメンツに加え、俺が俺

自身を許せなくなる。諦めるなと言っておきながらその張本人が真っ先に離脱などふざけ過ぎだろう」
『いえ、レジェンド様は結構な戦果あげてますけど』

ナインがジト目でツッコミを入れてくる。
確かに敵陣真っ只中に単機で突っ込んで無双した上、敵からの集中砲火を食らっておきながら未だ健在なのは大したものなのだが……。

「心配なされるな、ミツバ殿！」
「「お？」」
『はい？』
「お館様とゼット殿は、この煉獄杏寿郎と頑治郎が命に変えてもお守りする！」

いつの間にやらグランティードを庇うように、グルンガスト参式が通常形態の参式斬艦刀を手に立っていた。
そして、彼だけではない。

「俺達も忘れちゃ困るぜ！ＧＧＧは今やレジェンド様直属の組織、俺達がやらずに誰がやるんだ！」

凱とガオファイガーも当然の如く名乗りを上げる。

「最近貸しが溜まってきたな。そろそろ少しは返さんと婚姻届を書かせるかもしれんぞ？」

本気なのか冗談なのか、判断に難しいことを言ってくるＣ．Ｃ．とコンパチガリバー。

「あのレイトもどきの親玉、ムカつく顔に一発叩き込まなきゃ気が済まないにゃ」

ウルティノイドゼロとの戦いで、グランティード同様ほぼ限界だろうにまだ立ち向かわんとする黒歌とソウルゲイン。
少なくともこの四機がグランティードと組めば互いにカバーし合うことで万が一は起きないだろう。
他の機動部隊はそれぞれウルトラマンやヒリュウ改、そして地上部隊の援護に回る。
もはや自分が言うだけ無駄、と思ったミツバは溜息を吐き仕方ないと自身を納得させた。

『全く……相変わらず強情なんですから。分かりました、ですがレジェンド様と煉獄さん達はチームで行動、単独行動は厳禁です！』
「言われなくてもこの状況じゃタイマンは自殺行為よ」
「ゴルディオンハンマーが使えればと思ったが……ん？ウルトラマン、スーパーロボット、光線……」
「どうした、凱？」
「……これはここ一番であのツールが役立つかもしれないぜ！命、ガトリングドライバーをいつでも射出出来るように準備してくれ！」
『え!?どういう……なるほど！任せて！』

凱の言葉に何かを察した命、それにツール名を聞いたことでレジェンドとビッグボルフォッグもある程度予想はついた。
勝利の鍵――その準備を進めつつ、レジェンドはウルトラ騎空団へと号令をかける。
「総員、大詰めだ……！モネラ星人の野望、ここで終わらせるぞ!!」

――地上部隊――

「お館様達はやる気満々、それはいいんだけど……」

「あの大きさの敵相手に俺達が役に立つのかというところが疑問だな……」

小芭内の言葉にコクコクと首を縦に振り同意する蜜璃。

確かにその懸念は最もだが、ここでもアザゼルが助け舟を出した。

「何もあの超弩級の怪物相手に挑むことだけが戦うってことじゃねえさ。お前らもなんちゃらの呼吸ってのが使えるだろ？どうせあのモネラ星人って奴は触手使ってウルトラマンや機動部隊を妨害するだろう。俺達はその妨害を更に妨害仕返してやればいい。前線で戦う連中のサポートをしてやりゃ、結果的にあいつらの負傷や損害が減って、逆にモネラ星人は自分が思うようにならず冷静さを失って付け入るスキが出来るってワケだ」

「「「「……」」」」

「いや何で黙るんだよ」

「だってアザゼルがまともなこと言ってるんだもん☆」

「オメーに言われたかねーよ!!」

普段の言動とは似ても似つかないマジな台詞に対し、セラフォルーが全員の気持ちを代弁。

……その後のアザゼルのツッコミも割と当たっている。

とりあえず、今日のアザゼルは年上らしさをしっかり出しているということで良しとしよう。

「それで、どうするんですか？道路がこんな状況じゃ車の類は使えないし、触手の強度や大きさを考えると剣や刀で斬ることが出来るのはカナエ先輩ぐらいしか……」

「ねえ裕斗君、さり気なく私を人外扱いしないでほしいんだけど」

「悪魔だらけのオカルト研究部で最強の座に君臨している貴女が言っても説得力無いわよ？」

朱乃の一言がクリティカルヒットして凹んでいるカナエの所に、杏寿郎と共に来たパム治郎が飛んできた。

「パムパム～」

「ハク君がいない今、私の癒やしのパムちゃへぶっ!?」

「いい加減状況を見ろ」

スパァン！という綺麗な音と共にハリベルがカナエの頭を引っ叩いた。

素晴らしい笑顔でサムズアップするリアスに少しだけ微笑みつつサムズアップを返すハリベル。

実にクールビューティー。

そんなやりとりはさておき、会談の時に現れた『鬼』と相対したときにやった首輪コンコンを再びパム治郎が行うと、大きめのアタッシュケースが出てくる。

「パ～」とパム治郎が見つめたのはハリベル、どうやらパム治郎は真面目に話が通じると判断した彼女に開けてもらいたいらしい。

何人かがショックを受けていたが、気にせずハリベルが開け、リアスが覗き込むとそこには――

「……レジェンド様も持っていそうなスーパーガンタイプの銃に、これは……カートリッジか」

「パム～、コレ、ウルトラマンノミンナ、力コメタ」

「「「「!!」」」」

「アト、魔力トカ上乗セデキル、パム～」

パム治郎、とんでもないものを持ってきた。

さすがサポート能力万能マスコット。

「カナエトカ、刀剣専門ノミンナ、ボクサポート」

つまり、『鬼』を討伐したときのようにタマフリを使って援護するということ。
それを理解したリアス達は頷き合い、しっかりと人数分あったスーパーガン、加えて手近にあったカートリッジを全員が取っていく。
一応、万が一にとレジェンドやミライが銃の使い方を教えていたのがここにきて活かされたようだ。

「ありがとう、パム治郎。おかげで私達も援護の一つくらい出来るということね」
「えーと、俺達のサポートはそのパム治郎……だっけ、そいつがしてくれるんだよな？」
「パム～」
「ナルメアはどうする？既に団長の方に向かっ……心配いらなそうだ」

アルベールが見た方向では、グランティードに迫らんとするモネラマザーの触手を片っ端から斬り捨てているナルメアの姿があった。
サイズ差を無視して一心不乱に触手をぶった斬りまくるドラフの斬姫の姿は、ぶっちゃけ恐怖の対象でしかない。

「ナルメアさん……だったわよね、彼女。何あれカナエ二号？」
「リアス、お願いだから私を基準に考えないで！というか向こうの方が年上だった気がするし、何より蜜璃ちゃんやしのぶとはどうして比較しないの!?」
「今更ですわ、カナエ。甘露寺さんを例に出せば伊黒さんが黙っていませんし、しのぶさんは確かに凄いけれど医療方面の方が目立つのよ」
「そういうわけで、日と花の二つの呼吸を使用出来て、身体能力が馬鹿げている貴女を例えにした方が一番分かりやすいの。卯ノ花先生や束博士だと次元が違い過ぎるし、そもそも貴女オカルト研究部の部員だし」

三大お姉様のやり取りはオカ研名物だ。
まだまだ騒ぎたいところだが、あとはモネラマザーを倒してからということになった……のはいいがここで問題が発生した、というかもう一つの問題が解決していなかったという方が正しい。
「……で、道路問題は？翼出して飛びましょう、はアウトなんじゃろう？」
「……あ……」
「ならば私がどうにかしよう」
「バーン？」
「今、あの姿になっている時間はないが、瓦礫の除去や足場代わりくらいにはなれる。その為にはギャスパーの力が必要だ」
そう言ってギャスパーの肩に乗っているバーンが指差したのは、ギャスパーに託したバーンブレス。
「ジードというウルトラマンが現れてから、君の中の勇気が飛躍的に高まったのを感じた。そのバーンブレスに勇気を込め『ブレイブチャージ』と叫んでくれ。今の君ならば、そうすることで私が力を発揮出来るようになる」
「勇気を込める？どうすればいいんですか？」
「ただ、念じればいい。何者にも負けない強い意志で」
「強い意志で、念じる……」
正直、まだ自分が戦力になるとは思えない。
だけど、皆のために何かしたいと思う気持ちがギャスパーを動かし、それは勇気という形でバーンブレスへと宿る。
バーンはスポーツカー形態になり、ギャスパーの手の中に収まってその時を待つ。
そして――

「ブレイブ……チャァァァジッ！」
「おおっ!!」

スポーツカー形態のバーンを前方へ走らせるように投げながらそう叫ぶと、バーンとバーンブレスは共に光を発し、バーンは約１０ｍほどの大きさになり、再びロボット形態に変形する。

「よし、成功だ！やったぞ、ギャスパー！」
「わあ……！凄くかっこいいですぅ！」
「ありがとう。しかし、私はまだ本当の力を発揮出来ていない。今回は時間的な問題もあるが……だがギャスパー、君のその勇気があれば、そう遠くないうちに私はその力を使うことが可能になるはずだ。『バーンガーン』として君と共に彼らと肩を並べて戦うようになるのも、然程時間はかからないだろう」
「バーンガーン……」

二人が話し込んでいる間に――

「丁度いいわソーナ、彼……バーンもオカルト研究部のメンバーに追加で登録お願いするわね」
「何故か学園の生徒以外ばかり増えてる気がしますけど……まあいいでしょう、彼らは品行方正みたいですから」

早速バーンがオカ研メンバーにされていた。

「よし、身体能力に自身がない者は私に乗ってくれ」
「落ちないように、僕が影で固定しますぅ！」

巨大化したバーンと、既に普段とは逆にバーンの肩に乗っていたギャスパーに言われ、リアスや朱乃ら一部のメンバーはバーンの肩や

手に乗り、残りは――

「心配しなくても俺達には一番立派なモンが残ってるぜ！こいつだ!!」

白竜騎士団の副団長にしてパワー自慢のヴェインが、自身の足を叩きながら笑う。

各々その手に武器を携え、彼らもまたモネラマザーとの最終決戦へと望む。

「よぉぉぉし！い「いっくよー皆☆」被せんじゃねーよ一番いいところで!!」

折角真面目にやっても、今度は周囲に台無しにされるアザゼルであった。

☆

集結したウルトラ戦士とウルトラ騎空団による、最後の敵モネラマザーの打倒。

その火蓋が切って落とされた。

「まずまだ治ってない皆さんの回復からです！グリージョキュアバーストッ！」

先制攻撃を仕掛けんとした触手を吹き飛ばしつつ、ダイナ、タイガ、トリガーの三人を始め、周囲の負傷者達を回復させるグリージョ。

「サンキュー、グリージョ！」

「ありがと……うっ!?」

嫉妬の視線を向けるフーマが目に入り、モネラマザーより恐ろしいんじゃないかと錯覚したタイガ。
トリガーも回復してもらったのだが……。
（うわぁ……ジータが笑顔なのに嫉妬オーラ全開だよ……っていうか何で？誰に？僕じゃないみたいだけど）
妹（姉？）の視線にドン引きしていた。
そんなことはさておき、これで準備は整った。
「今の僕達なら負けはしない。皆、この世界と……僕達を支えてくれている命のために、モネラ星人を倒す!!行くぞ!!」
「「「「「おお!!」」」」」
「「「「はい!!」」」」

互いにカバーし合うため、ツーマンセルの５組に分かれるウルトラ戦士達。
ティガとトリガー、ダイナとタイガ、ガイアとタイタス、アグルとフーマ、そしてジードとグリージョ。
それぞれ、超古代の巨人、兄貴分とその弟分、赤いパワーファイター、青いスピードファイター、そして比較的付き合いが長く最も連携しやすい二人。
フーマがグリージョと組みたがったのは言うまでもないが、「まあジード先輩ならいいか」と割と簡単に納得。
ジード、謎の安定信頼感。
「僕に続くんだ！」
「は……はい！」

真っ先に先陣を切るのはやはり彼、ティガ。
トリガーに指示を出してモネラマザーへと突貫する彼だが、ここで

トリガーや他のウルトラ戦士、そしてウルトラ騎空団は彼の戦闘技術の真髄を目の当たりにした。
なんと、以前は予備動作――腕をクロスさせて額のクリスタルを光らせる――をせず、瞬時にマルチタイプから今のトリガーと同じパワータイプへとタイプチェンジを行ったのだ。
遊撃隊に所属して以来、激戦と研鑽を積み重ねてきたティガは、高速タイプチェンジという特技を新たに会得。
実はこの高速タイプチェンジ、チェンジ後の僅かな時間がチェンジ前のステータスのままという欠点があるのだが、逆に言えば相手の意表をつけることもあり、ティガ自身欠点とはまるで思っていない。
従来通りの方法でタイプチェンジすることも出来るし、何より欠点だとしてもフォローしてくれる者がいる。

「チャアァァァ!!」

そのまま勢いを殺さず、かつてシルバゴンへと炸裂させたティガ・バーニングダッシュのマイナーチェンジ版である『ティガ・ライジングブレイズ』を発動。
アッパーカットの体勢でモネラマザーの胴体に突撃し、直撃と同時に大爆発が起こるとモネラマザーは怯み、さらに爆発の中から既に予備動作を済ませていたスカイタイプのティガがランバルト光弾を連射しながら飛び出してくる。
大技を連続して放ちながらも見事な動きを見せるティガに触手が迫るも――

『ダイゴはやらせない!』

ティガの近くに飛んできたGクルーザーが変形し、MS形態であるEx―Sガンダムの姿へと移行すると同時にビーム・サーベルで迫る触手を一閃。
続け様にティガフリーザーで凍らせた触手の数々をビーム・スマー

トガンが粉砕。
　人と共にあったウルトラマンと、人の心を宿した機動兵器――その絆が生み出す見事なコンビネーション、それは人、機械、そしてウルトラマンが調和した理想の形の一つと言えるもの。

『すっげ……』
「お互いが次にどう動くか知り尽くした、完璧なタイミングの良さだ……！」

　一誠とタイガはティガとＥｘ―Ｓガンダムの連携に驚いていたが、ここでそれに感化されたのがサギリ……と、仕方なくそれに付き合うジャグラー、それからコ・パイであるが故に無理矢理突き合わされる九重。

「あんなの見せられて黙ってられないでしょ！ジャグ！九重ちゃん！アレ行くわよ！」
「この状況で張り合うなよ……ったく」
「ア、アレって何な……のじゃあああああ!?」

　急加速したベルゼルートとマスターフェニックス。
　ちなみに通信がＯＮになっていたので、九重の悲鳴は各機に丸聞こえ。

「ブーストアップ！アプローチスタート！」
「あ、あぷぅ!?」
「狐っ娘、口閉じてな。ここからは俺らのステージだ」

　なんか違うような、と九重は思ったがそんなことを言える状況ではない。
　マスターフェニックスはそのまま加速してソード・メガ・ビーム・キャノンを放ちながら突撃するが、ベルゼルートの方はマスターフェ

ニックスを中心にバレルロールしながらオルゴン・ライフルを連射。
しかもかなりの速度で行われているため、九重は目が回ってサポートをしてる余裕がなかった。

「回り過ぎなのじゃあああああ!!」
「まだまだこれから!シフトB!ジャグ、フロント!」
「バックス、ちゃんとやれよ!」

上半身部分に連続射撃を受けたのも束の間、モネラマザーはマスターフェニックスとベルゼルートから追撃を受ける。
今度はマスターフェニックスが接近戦を仕掛け、ベルゼルートはオルゴン・ライフルをブレード・モードにして鞭のように光の刃を叩きつけた。

「フィニッシュブロー、決めるわよ!ジャグ!九重ちゃん!」
「わ……わかったのじゃ〜……」
「オイ、狐っ娘大丈夫か?サギリ、お前相乗りしてるんだからレジェンドみたいな変態機動控えろよな」

九重の様子からジャグラーがサギリに注意するのだが――

「レジェンド様なら加速度ブッ飛んだ機体でやるし、元々この機体はそういう機動も前提の一つに開発されてるの。一応九重ちゃんもその方向で訓練してたんだけど、ちょっと早かったわね」
「……後で何か奢ってやれ」
「コンビネーションやってるジャグも同罪よ。そんなわけでジャグはメイン、私はデザートを奢るからあとちょっと辛抱してね、九重ちゃん!」
「もうこうなったらヤケじゃ!最後までどんとこいなのじゃ!!」

結局付き合わされることになり、諦めが勝った九重は吹っ切れた。

「そうこなくっちゃ！モード・アブソリュート、やるわよ！」
「うむ！ベルゼルート、リミッター解除じゃ！」

ベルゼルートが最大稼働モードに入ったことでイミッション・スリットが開放され、スラスターが展開。
オルゴン・エクストラクターによって発せられる緑色の光がベルゼルートの全身から噴出する。

「こっちも行くぜ、マスターフェニックス。リミッター解除！クロス・バインダー・ソード、モードＦスタンバイ！」
「ＧＯ!!」

ジャグラーとサギリが二人同時に叫び、先程よりも更に早く、更に苛烈な連撃がモネラマザーを襲う。
モネラマザーもヴァーミリオンフレアで二機を狙うが早すぎてかすりもしない。

「さあて、仕上げと行きますか！」

ベルゼルートのオルゴン・ライフルが変形し、二丁のショート・ランチャーが上下に合体することで弓状の形――アブソリュートモードへ移行する。

「サイトロン・サイティング問題なし！」
「ＯＫ！デカい分だけ的にしやすい！」

銃口部分にエネルギーが集約され――

「オルゴン・マテリアライゼーション！なのじゃ！」

レジェンドの駆るグランティードがデスフェイサーへと放とうとしたように、緑色(オルゴナイト)の結晶が巨大な矢の形になって銃口部分にセットされる。

「アブソリュート!・いっけぇぇぇ!!」

放たれた結晶はモネラマザーの腹部に突き刺さり、砕けると同時に大爆発を起こす。

さらにそこへ――

「ソード・クロスアップ!・お前には効くだろうぜ、こいつはな!」

マスターフェニックスが二振りのクロス・バインダー・ソードをドッキングさせ、両刃の大剣にすると刀身から炎が噴き上がった。

パーシヴァルや杏寿郎が反応したが、それにはお構いなしにモネラマザーへと斬りかかる。

「バーニング・ソォォォド!!」

燃え上がる刃の大剣による一撃を受けたモネラマザーは、その一撃のダメージを抑えるべく全力で再生能力を攻撃された部位に集中させた。

そうしなければたちまち燃え広がるだろう。

だが、それはウルトラ騎空団に連続攻撃を許す切っ掛けにもなる。

『タイガ!・フォトンアース(あれ)行くぜ!・』

「ああ!」

『アース!』『シャイン!』

『輝きの力を手に!・バディィィィ!・ゴォォォォ!!』

『ウルトラマンタイガ　フォトンアース!』

ゴーデスとの戦いで得た形態・フォトンアースになるタイガだが、タイタスとフーマが分離しているからか、赤龍帝の籠手はゴーデスマガオロチを倒した時の『超龍帝の双甲（デュアル・グランド・ギア）』ではなく別の形――赤龍帝の籠手のバージョンアップ版というべき形になっている。
ただし、ちゃんと両腕に装備されているのは変わらない。

『何か神器の形違くね？』
『あれはタイタスとフーマあっての禁手だったようだな。それでも十分過ぎる気がするが』
「ならこの形は『赤龍帝の閃甲（ダイナミック・ギア）』にしよう！」

ダイナの名前をもらい、閃甲には『閃光』とそれに連なるダイナのフラッシュタイプと、フォトンアースの『シャイン』という複数の意味を持たせたネーミング。
一誠やドライグも納得だ。

「お、ゴーデスの時のあれか！なら俺もそっちに合わせるか！ハァァァッ!!」

ダイナもフラッシュタイプにタイプチェンジし、本格的にモネラマザーへとリベンジを仕掛ける。

「ダイナ兄さん！俺達が壁役になります！この姿なら機動力は下がってもそれを補って余りある攻撃力と防御力がある！」
「分かった、頼むぜ！けど無理はするなよ！」

タイガが前衛となり、ダイナはそれに続く形で駆け出す。
ティガに加え、同じく最優先で対処しなければならない者の一人であるダイナが動き出したことに危機感を覚えたモネラマザーはヴァーミリオンフレアでダイナを狙うが、そこでフォトンアースと

なったタイガが盾になりその鎧で耐えながら二人は突き進む。
『あいつ、デカさと攻撃力は凄いけど、攻撃方法に関しては限られてるみたいだな！』
『しかもあの形状のおかげで攻撃の大半が触手に依存している。警戒するとすればあの全身から発した光線だが、あれもそう簡単に連射出来るものではないらしい』
「なら、突破口は見えてきた！」
「逆に触手にさえ気をつければ正面からでもやり合えるってわけか！」

ダイナとタイガはヴァーミリオンフレアを回避すると、小細工無しの真っ向勝負。
ダイナのド根性パワーアップとタイガのブーストを合わせたフライング・ダブルパンチをモネラマザーの顔面に叩き込んだ。
「「デアァァァァァ!!」」

激突時に大爆発を巻き起こしつつ、モネラマザーに大打撃を与えたダイナとタイガはティガとトリガーに合流、更に連携をとってモネラマザーにダメージを重ねて与えていく。

ガイアとタイタス、そしてアグルとフーマはそれぞれ更に、グルンガスト零式とグランヴェール、サイバスターとロードドラグーンの援護を受け、地上と空中からモネラマザーを攻めたてる。
「ダアッ!!」
「ブーストナックル!!」
ガイアのガイアスラッシュとグルンガスト零式のブーストナック

ルがモネラマザーに直撃し――

「ハァッ!!」
「ハク、フウ！お願いします!!」
「ンニャ～」
「ハク、気を抜き過ぎニャ……」

アグルがアグルセイバーで斬撃を飛ばし、サイバスターがハイファミリアを放つ。

「やっぱタフだなこの野郎！こうなりゃ根比べだ！光波手裏剣！」
「いざとなったら『アレ』を出さねばならんかと思ったが、その必要はなさそうだな」

フーマの援護をしているゼロガンダムが言ったアレとは、かつてザンスカール帝国の最終兵器・嵐暴機神ストームサンを撃破した、ロードドラグーンの更に上をいく『切り札』。
確かにあれであれば単機でモネラマザーへの対抗手段となるだろうが、さすがにひょいひょい出すわけにもいかないので、ここにいる者達の奮闘は助かったというべきか。
ここでモネラマザーが攻勢に出るべく、手始めにタイタスの動きを封じようと右腕に地下から出した触手を巻き付けた。

「む!?」
「そう来るか……！少し待っていろ！」
「いや、心配は無用だ！ぬおおおおお!!」
『Ｂｏｏｓｔ！Ｂｏｏｓｔ！Ｂｏｏｓｔ！』
「宇宙に届け！ブーストマッスル!!」

何だそりゃ、と誰もがツッコんだが、パーシヴァルの援護を制してタイタスがやったことに見ていた者全員が驚愕する。

タイタスの右腕を拘束していた数本の触手を、パワーを倍加させた左手でまとめて掴み、地下から引っこ抜きつつ引きちぎるという豪快な方法で拘束を逃れたのだ。
シェルター内ではその後にマッスルポーズを決めたタイタスへ、ドラフを始めとする筋肉系男子から「兄貴」コールが飛び交ったほど。
「見たかモネラ星人！これが新たなるウルトラマッスルの形だ!!」
「色々と言いたいことはあるが……結果が出ているのならば文句はない。俺も俺でやらせてもらうとするか、行くぞ！グランヴェール!!」
タイタスの心配がいらないと証明されたからか、パーシヴァルはグランヴェールの主武装であるフレイムカッターで迫りくる触手を文字通り焼き斬っていく。

そんな様子をゼルガードから見ていたアマリとルリアだが、ここでルリアが意外なことを言い出した。

「……！」
「ルリア、どうしたの？」
「いえ……もしかしたら、え～と……サイバスター、それからグランヴェール？でしたよね。あと助けに来てくれた、え～と、え～と……あの赤と青の二人の……」
「ガイアとアグルらしいわ」
「そう、そのお二人の四人分……あれ？二人と二機……でも実際は四人で……あうう……なんて言えばいいんでしょうか……」
「と、ともかく！ガイアとアグルに、サイバスターとグランヴェールが何かあるの？」
何やら混乱し出したルリアの思考を半ば強引にアマリが軌道修正し、改めて問いかけた。

「はい、ガイアが土で、アグルが水だとしたら……地水火風ってことでティアマト達の力を合わせられるかもしれないんです。ただ、星晶獣四体分だと召喚にちょっと時間が……」
「なら、その間は私達がサポートするから！」
『ゼルガードが動き回るわけではないでしょうから、逆に守りやすくなります』
「どのみち私のヒュッケバイン３０はまだ決め手にかけるみたいだから」
「凱機動隊長はレジェンドチーフの支援に回り、あるタイミングを狙っています。私もゼルガードの防衛に回りましょう」

ルリアの提案に、ヴァングレイを操る千歳とナイン、ヒュッケバイン３０を駆るアズ、そしてビッグボルフォッグが援護を名乗り出た。
幸いモネラマザーはウルトラ戦士を始めとした前線組に気を向けているため、十分注意すれば問題なく実行可能なはず。

「あ……ありがとうございます！」
「ルリア、ゼルガードは私が一人で何とかするから、今のうちに召喚を！」
「はい！一体ずつじゃなくて、四体一度に……！」

ルリアは精神を集中させて、ティアマトを始めとする星晶獣達を召喚しようとするが、力が高まっていくに連れてゼルガードが強く光りを発してしまい、モネラマザーに気付かれてしまう。

『モネラ星人が気付きました！全方位に注意して下さい！』
「こういうときこそ、ヴァングレイの火力の見せ所！」
「ロシュセイバーとリープ・スラッシャーのおかげで斬るものには困らない……！」
「アマリ隊員とルリア隊員には近付かせん！」

奮闘する三機だったが、ヴァングレイはともかく他の二機はどちらかと言えば機動性重視の為、触手の迎撃には手数がかかり、そのスキを突かれゼルガードへの攻撃を許してしまった。
……と、思われたがここでモネラマザーにとって予想外の出来事が起こる。

「グリージョ・バーリアッ!!」

ゼルガードに迫りくる触手の前に立ち塞がってバリアを展開し、触手を弾き飛ばすグリージョ。

「プラズマ光輪!!」

そして弾き飛ばした触手を含め、追撃しようとしていた触手も切り裂き爆散させるジード。
彼らは他の四組八人が前衛を張っているのに対し、有事の際に対応しやすいよう予め後衛に下がっていたのである。
バランスの良いジード・ギャラクシーライジングと、防御と回復に優れたグリージョという組み合わせだからこそとれた戦法だ。

「守るのは私に任せて下さい！」
「他の三機はグリージョとゼルガードを囲むように、僕を含めて円陣に展開！ヴァングレイはそのまま空中から、ビッグボルフォッグは周囲と地下からの襲撃に備えて！ヒュッケバイン３０は状況に応じて援護を！僕は二の次で構わないから、最優先はゼルガード！」
「は……はい！」
「了解しました！それと……見事な小隊指揮です、ジード隊員」
「お褒めに預かり光栄だよ、っと！ギャラクシーカッティング!!」

ジードという実力者が中心になってくれたことで、ゼルガードの護

衛はより頑強なものとなり、ルリアは感謝しつつ召喚の準備を整えた。

「皆さんおかげで……準備、出来ました！」
「ルリア、早く！」
「はい、アマリ！お願い、ティアマト！コロッサス！リヴァイアサン！ユグドラシル！」

ゼルガードのコックピットの中が光で満たされ、ゼルガードの周囲に四体の星晶獣が顕現し、それぞれが光となってサイバスター、グランヴェール、アグル、そしてガイアと一体化していく。

『魔装機神二機とウルトラマン二体から高エネルギー反応です！』
「やりました！」

（これは……似ている、かつて怪獣達の光をもらったあの時に……！）
（この感覚は二度目……いや、三度目だな。どうなるか分からないが、やってみるか）

ガイアとアグルは互いに頷き合い、まずはガイアが両手を頭上に掲げ、光を発生させるとその光をライフゲージから取り込むと、赤く凄まじい輝きがガイアから発せられた。
それだけではなく、ガイアから発せられたその光をアグルが取り込むと、今度はアグルから青く激しい輝きが放たれる。

「ガイアと……」
「アグルが……」
「「変わる!!」」

グルンガスト零式に乗っているジークフリートと、リアスらと共に

いるアルベールが同時に叫ぶ。
光が徐々に収まっていくと、そこにいたのは肩にプロテクターが追加され、体色の変わったガイアとアグル。
特にガイアの方は体格も変化し、筋肉質になっておりタイタスが尊敬の眼差しを向けていたが、今回はそれに留まらない。
今のガイアとアグルにはそれぞれヴォイニッチ・サークルと呼ばれる魔方陣と、青輪と称される水の天輪がその背に浮かび上がっている。
どちらも各々に一体化した星晶獣が『マグナ』となった時に得たもの。
故にガイアは『スプリーム・ユグドラシル』、アグルは『スプリーム・リヴァイアサン』、二人纏めて名付けるなら『スプリームヴァージョン・マグナ』とでも言うべきさらなる進化を遂げたのである。

「ダァァァァ!!」

進化を遂げたガイアが大地を殴ると、モネラマザーの足下より溶岩が噴き出しモネラマザーの各部を焼いていく……ユグドラシル・マグナが使用する『ネザーマントル』という技だ。
モネラマザーには効果抜群なその技だがまだ終わりではない。

「ディヤァァァッ!!」

アグルが通常よりも巨大なアグルセイバーを発生させ、モネラマザーに突き刺し『何か』を大量に送り込むと、突然モネラマザーは苦しみ出した。

モネラマザーが苦しむ様子は誰もが困惑していた。
あの巨体であればちょっとやそっとのエネルギーを送り込んだところでダメージは無いだろうし、毒の類などそもそも効くのか分から

ない、それ以前にアグルが毒付与攻撃など持っているとも思えない。
どういうわけかと悩んでいたが、ここで気付いたのがアウギュステ育ちのオイゲン。

「……！そうか、海水だ!!」
「「「「海水？」」」」
「海水ってのは塩分を含んでいるからな、海藻の類ならともかく普通の植物にとっちゃ大量に吸収しようもんなら毒にしかならねえ。つまり枯れる要因になっちまうんだよ」

そう、モネラ星人の別名は宇宙植物獣人――植物から進化した生命体であるため、塩分を多量に含む海水はオイゲンの言う通り毒になるのだ。
確かに巨体とそれ相応の生命力故に少量なら問題ないが、スプリーム・リヴァイアサンとなったアグルの送り込んだそれは対モネラマザー用のものであり、塩分濃度がとてつもなく高い。
そんなものを直接体内に送られようものならたまったものではないだろう。

「Ａｈｈｈｈｈ……!!」

ガイアの一撃で燃え上がった分を補填すべく水分が必要だったとはいえ、海水はお呼びでないと言わんばかりの絶叫をするモネラマザー。
いよいよ勝負を決める時が来た。

モネラマザーは苦し紛れにヴァーミリオンフレアを連射するが、ティガとトリガーは連続バク転で回避し、タイガはフォトンアースの防御力に物を言わせて耐え抜き、ダイナに至っては千切れた触手を拾い、それをぶん投げて身代わりにするというブッ飛んだ方法で対応。

「『ダイナ兄さん豪快過ぎる!!』」
「俺のエネルギーぶん取ってコピー作られたんだし、こんぐらいはやり返さないとな！別に千切れて神経通ってなさそうだからいいんじゃね？」

アスカらしい考えであった。
だが最早形振り構わなくなっていたモネラマザーが地中から大量の触手を伸ばし、ティガとトリガー、そしてダイナとタイガを捕獲、そのうち数本を首に巻き付け絞め上げてくる。

「「グアッ!!」」
「「ウグッ!!」」

どうにか解こうとするが、両手どころか両足にもガッチリと巻き付けられており身動きが取れぬまま、四人は首を絞められ絶体絶命――ではあったが、ここで駆け付けたのがリアス率いるオカルト研究部にソーナ率いる生徒会メンバー、そしてウルトラ騎空団のメンバーにグランサイファー組。

「全員、銃にカートリッジを装填して魔力を込めなさい！私達オカルト研究部はタイガを解放するわよ!!」
「生徒会はダイナさんを解放します。射撃用意!!」
「トリガーは私達がやるよー！オイゲン、大砲スタンバイ!!」
「あいよ！つーかジータ、お前の持ってるもんがグランサイファーじゃ一番物騒なんだけどな!!」
「俺達はティガというウルトラマンを解放するぞ。白竜騎士団の二人や団長の関係者らも準備はいいか!?」
「ああ！俺やヴェインはまだ機動兵器は無いが、やれることがないわけじゃない!!」
「おうよ！なんせこのパム治郎ってのがサポートしてくれるしな!!」

「パムパム～」
「こういう時、朽木隊長とか日番谷隊長の斬魄刀が役に立つんだけどね～……あいつ植物系だし」
「あやつの雀蜂雷公鞭もあれだけ的が大きくて動かなければ効果覿面なんじゃがのう」

何人かはボヤいているが、ほぼ全員がやる気に満ち溢れている。
直接的な戦力にならずとも、誰かの助けになることは出来る――それを証明し、皆が無事に勝利を手にするために。
それに気付いたモネラマザーは両手から光線を放とうとするも――

「ホーミングミサイル及び対艦ミサイル発射管全門開放！ミサイル並びに主砲照準、モネラ星人!!撃てッ!!」

ここまで戦闘は控えめだったヒリュウ改が砲撃を開始。
やはり戦艦、その巨大な船体から発射されるビーム砲と、その合間を縫うように飛んでくる無数のミサイルはモネラマザーの上半身部分へ見事にさせ、大ダメージを与える。
加えてさらなる追撃。
ティガ達だけでなく、ガイア達他の六人のウルトラマンも一箇所に集結する時間を稼ぎ、かつスキを作るべく動いたのはグルンガスト零式と参式……斬艦刀を持つ二体の特機と、それを操るジークフリートに杏寿郎。

「我夢達が最後を締め括るなら俺達はその前座。とはいえ派手にやらせてもらおう」
「お館様を執拗に狙った報い、その身で受けてもらうぞ!!」

零式が零式斬艦刀を、参式が参式斬艦刀を大剣状態にしてそれぞれ両手で構え、ブースターを全力で吹かし空高く飛び上がる。

ここで零式と参式の違いが出てくる。
零式斬艦刀には姿勢制御用のブースターがあり、それを利用することでより威力を増した斬撃を叩き込めるのだ。
それに対して参式斬艦刀は液体金属によって刀身をある程度自由に変えられるため、幅広い戦法がとれる。
ついでに参式は全集中の呼吸に対応しており、トレースするタイプでないにも関わらず動きが通常の特機よりも機敏。
空高く飛び上がったことでその重量に物を言わせた、それもブースターによる加速も交えたものと、全集中の呼吸を組み合わせたもの――二振りの斬艦刀による比類なき一撃がモネラマザーに炸裂する。

「シュヴァルツ・ファング!!」
「炎の呼吸、参ノ型！気炎万象(きえんばんしょう)!!」

各々の得意技を、それぞれが搭乗するグルンガストの斬艦刀にて放つ……その威力はモネラマザーの両腕を付け根から斬り落とし、モネラマザーは声にならない叫びを上げた。

「――――!!!!」

そちらに意識が向いたのを見計らい、ゲン、矢的、アザゼル、そしてハリベルが指示を出した。

「今だ！総員、ティガ達の解放に全力を注げ!!」
「銃を持った者は可能な限りビームをクロスさせるんだ!!」
「まずは首の触手を狙え！弱りつつあるあの野郎の触手なら手足の触手はあいつら自身で引き千切れる可能性もある!!」
「パム治郎、タマフリを頼む。ティガの解放はＥｘ―Ｓガンダム(あの機体)も手伝ってくれるようだ。私達は手足に巻き付いてる触手を断ち切るぞ」
「パ～ム～！」

リアスらはその指示に頷き、各々武器を握り触手を狙う……が、モネラマザーは尚も足掻く。
なんと胸部がゴバッと音を立てて開き、体内に存在していた核らしきモノを露出させると、凄まじいエネルギーを集中しだした。

「ここまできてッ……！」
「あのエネルギーはやべえぞ！」
「もう少し……！もう少しなのに！」

今回何度目か分からぬ危機……ここで遂にグランティードを始めとする、ガオファイガーやグルンガストを除いたスーパーロボット部隊が前に出る。

「一発分ぐらいなら今のグランティードでも何とかなる。ただし他の機体との連携という条件が付くがな」
「ウルトラフュージョンも巨大化も出来ないんだし、この見せ場ぐらい俺達に譲ってもらいますよ！」
「やれやれ……毎度の事ながら撃ち合いとなると私とガリバーは常に駆り出されるな、全く……」
「そっちはまだ威力あるからマシでしょ。ソウルゲインの青龍鱗は牽制とかそっち向けの武装なんだから」
「奴の攻撃は私達が耐え凌いでみせる！一誠、タイガ、リアス……後は頼むぞ!!」

レジェンド、ゼット、C．C．、黒歌、そしてダ・ガーンX……一歩間違えれば最悪彼らが犠牲になりかねないというのに引く素振りは一向に無い。
あまり気乗りしていないC．C．でさえ溜め息を吐いてはいるが後退する気は無さそうだ。

「チーフ……！」

「締めの一撃……指揮は任せたぞ、ティガ」

その言葉にティガが決意を込めて頷いたのを確認し、グランティードを中心にコンパチブルガリバー、ソウルゲイン、ダ・ガーンXが集う。

「さて……お前達、コイツをブチのめした後のバカンス、何処に行きたい？」
「マジでバカンスでございますか超師匠!?」
「私は海！アウギュステ!!」
「……シーフードピザもアリだな」
「そうなると私はボディにしっかりコーティングが必要になるか」

彼らは負ける未来など考えていない。
自分達が力を合わせて立ち向かったとき、勝てぬ相手などいないと信じているから。
そんなレジェンド達が癪に障ったのか、モネラマザーは更にエネルギーを集約し、一気に解き放った。
対するグランティードらもそれに対抗すべく、各機のエネルギー放射武装を発射する。

「超師匠!!」
「やってみせろ、グランティード！オルゴン・スレイブ!!」
「ガリバー……バーストッ!!」
「青龍鱗！最大出力ぅ!!」
「ブレストアース……バスタァァァ!!」

色とりどりの光が放たれ、モネラマザーの超エネルギー波とぶつかり激しく押し合うが、やはりグランティードやソウルゲインは強敵相手の連戦による消耗が尾を引き、徐々に押され始める。

「案の定、といったところだな……」
「超師匠、予定通りでございますね」
「ゼット……お前、気付いてたのか」
「アムロ師匠から落ち着いて周りを見るように言われてましたんで。そりゃ、ハナっから真っ向勝負したら今のグランティードやソウルゲインじゃコンディションの問題で太刀打ち出来ないでありますよ。ガリバーやダ・ガーンがいても焼け石に水でしょうし」

お前、焼け石に水とか難しい言葉使えたんだな……とレジェンドは思っていたが、話のキモはそこではない。

「お前の言う通りだ。俺達はあくまで時間稼ぎが目的……ただし、俺達が犠牲になる予定などない」

満身創痍なのは今のモネラマザーも変わらない。
触手も殆どを失い、両腕さえ斬り落とされている……つまり、今レジェンド達を攻撃しているこの瞬間こそ、モネラマザーはスキだらけなのだ。

「行きますっ！アァァカシック！ディザスタァァァ!!」
「貴様を焼き尽くす業火の波動、その身に受けろ！プロミネンスマァァァッシュ!!」

この機に乗じて渾身の一撃を叩き込んだのが、ルリアの召喚したティアマトとコロッサスの力を取り込んだサイバスターとグランヴェール。
アカシックバスターとカロリックスマッシュの強化版となる技を無防備なモネラマザーの背後から炸裂させ、大打撃を与えると共に超エネルギー波を強制中断してしまうという、ダイナも「超ファインプレー」と表現するような活躍を成し遂げた。
これにより、撃ち合いから解放されたグランティードらはエネル

ギーが底をついたが、ティガ、ダイナ、トリガー、タイガもリアス達によって触手から解放。
そこに漸くガイアやアグル達も合流し、最後の攻撃に出る時がきた。

「イッセー!・タイガ!・タイタス!・フーマ!・思いっきり消し飛ばしてやりなさい!!」
「トリガー!・下手やらかしたら尻ロケットランチャーやるからね!!」
「「「「そこはもうちょっと優しい言葉かけてやれよ!?」」」」

リアスはいいとして、ジータの言葉に慌てるグランサイファー組やトリガー。
そんな彼らを見てティガは穏やかで懐かしい気持ちになった。

「よおし!・レジェンド様や皆が繋いでくれた勝利への道!・ゴールへの最後の扉を開く鍵は俺とガオファイガーにある!・行くぞ、命!・ガトリングドライバーを射出してくれ!」
『了解!・ガトリングドライバー……イミィィィッション!!』

事前に承認されていた、ディバイディングドライバーのベッド部分を換装したガトリングドライバーがヒリュウ改より射出され、空中でガオファイガーとドッキング。

「ガトリングドライバァァァ!!」

そのままガトリングドライバーを前方に突き出しながら起動し、全エネルギーを使い特大の重力レンズを形成。
改良されたガトリングドライバーは、重力レンズからガオファイガーやドライバーが離れてもエネルギーが形成した重力レンズに残っている限り、持続するようになっている。

「こっちも準備は整った！後は託すぜ、光の世界の戦士たち!!」

凱がそう言うと、ガオファイガーも片膝をつく。
数多の人々の願いを背負い、この戦いに決着をつけるため……ティガはウルトラ戦士達に号令を出した。

「これからモネラ星人に最後の一撃を撃ち込む！全員、残っているエネルギーを使い切るつもりで撃つんだ！」
「「「了解!!」」」

それぞれが必殺光線の予備動作に入り、エネルギーが集まっていくのを戦場にいる者は勿論、シェルター内の人々やエリアル・ベース、クロガネのモニターで見守るウルトラ騎空団の面々もまた目を離せずにいる。
しかし、モネラマザーはこの状況においてもまだウルトラ戦士とウルトラ騎空団を葬るのを諦めていなかった。
あっぱれと言うより往生際が悪いと言う方が正しいそれは、予てより撃ってくるだろうと予想していた全方位破壊光線ディザスターミーティアを放とうとしている。
だが、即座に撃てた初回と違い、レジェンド達の総攻撃によって消耗していたモネラマザーは全身にエネルギーを送ることに手間取っているようだ。
この好機を逃してはならない――ティガ達の心は一つとなって、合図をせずとも絶妙なタイミングで光線が一斉に発射された。

「ハァァァッ……！ジャァァァァ!!」
「フッ！ハァァァッ……ディィァァァ!!」

スプリームヴァージョン・マグナとなったガイアとアグルはそれぞれヴォイニッチサークルと青輪を輝かせ、強化されたフォトンストリームを。

「レッキング・フェニックス!!」
「グリージョショット・ヤアァァァ!!」

ジード・ギャラクシーライジングはウルティノイドゼロを撃破したレッキングフェニックス、グリージョは唯一とも言える必殺光線のグリージョショットを。

『『Ｂｏｏｓｔ・Ｂｏｏｓｔ・Ｂｏｏｓｔ・』』
「マッスルプラニウム・バスター!!」
「極星光波手裏剣・烈波ァァァ!!」

タイタスとフーマは赤龍帝の籠手で倍加されたプラニウムバスターと極星光波手裏剣を。

「ジュウアァァァァ!!」
『Ｂｏｏｓｔ・Ｂｏｏｓｔ・Ｈｙｐｅｒ!!』
『ブチかませ・タイガ!!』
「ハイパーブーステッド・オーラムストリウム!!」

ダイナは気合で出力アップしたソルジェント光線を、タイガは赤龍帝の閃甲でさらに倍加増幅したオーラムストリウムを。
そしてトリを務めるのはこの二人。

「「チャァァァァ!!!」」

ティガとトリガーは共に超古代の光の巨人同士だからなのか、共鳴によるとてつもない増幅をされたダブルゼペリオン光線を。
十の光はガトリングドライバーが作り出した重力レンズで一点に集中され、巨大な黄金の輝きとなってモネラマザーに直撃する。

「Ａｈｈｈｈｈｈｈ!!!」

苦しみながらも光線に耐え続けるモネラマザー。

しかし、ティガ達は驚くこともなく光線を撃ち続ける。

「『いけぇぇぇぇぇ!!』」

戦場、シェルター、遠く離れた艦……場所を問わず見守る誰もがそう叫んだ。

やがて――

「Ａｈｈｈｈｈ……」

光線の着弾した場所から、モネラマザーは徐々に光となって消滅していく……千切れた触手も、斬られた両腕も。

禍々しく、おぞましかったその姿からは想像出来ないような輝き――ウルトラ戦士とウルトラ騎空団、そして諦めなかった人々の思いがそうさせたのだろうか。

最後の一欠片が光になって消えるまで、ウルトラ戦士もウルトラ騎空団もそれを眺め続けていた。

モネラ星人が送り込んできたモノも、全て撃破し――たった今、モネラマザーも消滅した。

巻き起こる大歓声、溢れる涙と笑顔。

ゲランダの襲来に始まったモネラ星人との戦いは、漸く終わりを迎えたのだった。

〈続く〉

SHININ’ ON LOVE

星の世界からの侵略者・モネラ星人との戦い――日にして数日ではあるが、歴史に残るであろう大きな出来事は決して勝利を諦めず、不可能を可能にしたウルトラ戦士とウルトラ騎空団、そして空の世界に生きる人々の勝利で幕を閉じた。

モネラ星人との戦いこそ終わったが、ウルトラ戦士にとってはまだ最後の仕事が残っている。

「……で、残るはこのロアーヌ島の惨状をどうするかってことだが……」

「これだけの規模の損害を、消耗した我々のリカバリーオーラで修復可能かというのが問題だな」

「しかし、やらなければならない。僕達は戦いを終えたけれど、この町……引いてはこの島で生きる人々がこれからも暮らしていけるように、出来得る限りのことをしなければ――」

ティガがそう言うと同時に――

――その役目は私が引き受けよう――

突如、島全体にある声が響く。

ウルトラ戦士達やウルトラ騎空団の者も驚くが、この場においてレジェンドとゼロガンダム、そしてガブリエルだけはその声の主が誰なのか気が付いた。

そして、凄まじい黄金の光が空に輝き、中から姿を現したのは――

「ガン……ダム？」

「そうであり、そうでないとも言える」

レジェンドがそう言い、ゼロガンダムはロードドラグーンを動かし、ロードハルバードを眼前に縦に構えさせ、ガブリエルはヒリュウ改の中で自然とその存在に跪く。

「貴方は……？」

「私は光神が一人にしてとある世界の天界を統べるもの、名をスペリオルカイザーという」

トリガーの問いかけにその存在――スペリオルカイザーは静かに答える。

正確には U（ウルティメイト） スペリオルカイザーなのだが、今そこは別段重要ではない。

（スマン、スペリオル。聴いている一般人が多いから、俺のことはスルーで頼む）

（了解です、父上。確かにバレると後々面倒になりますし）

光神専用のテレパシーでそんな会話をしていたレジェンドとスペリオルカイザー。

チラリと目線だけグランティードへ向け、すぐさま視線を戻し改めてウルトラ戦士やウルトラ騎空団、そして秩序の騎空団を始めとした有志達を見渡す。

「此度のお前達の戦い、とても素晴らしいものだった。空に生きる者達、星の獣、鋼の勇者……多くの者達が手を取り合い、諦めず、未来を信じ戦い抜いた結果と言えよう。それはこれから先の未来、如何なる困難が立ち塞がろうとも、力を合わせ乗り越えていける可能性があることを示している」

「これから先の、困難……」

「自分だけではなく、他者を尊重し、助け合うことこそが、この世界だ

けでなくあらゆる世界において今後必要となってくる。これは、その手本となってくれたこの島に生きる者達への……ほんのささやかな礼と贈り物だ」

スペリオルカイザーはゆっくりと両手をロアーヌ島に翳し、淡い光で島全体を包み込む。

ロアーヌ島を包み込んだ光はやがて少しずつ天へと昇っていき、光が離れる代わりにロアーヌ島は被害を受ける前の姿を取り戻していく。

それだけではなく、ウルトラ戦士や機動兵器、そして参加した騎空団の団員達……彼らの傷や損傷、エネルギーさえ完全に回復した。

レジェンドを除くウルトラ戦士のものを遥かに超えるリカバリーオーラ。

まさしく神の所業を目の当たりにした空の世界の人々は、名乗ってもいないのにスペリオルカイザーを称号名である『黄金神』と呼び始める……無論、様付けで。

「今一度言おう。諦めず、他者と手を取り合い、共に困難に立ち向かうことを忘れるな。たとえ一人で成し遂げられぬものであっても、力を合わせれば成し得るかもしれないのだ。私は……私達はいつでも見守っているぞ」

そう告げると、スペリオルカイザーは再び光りに包まれて消えていった。

「……何から何まで驚くことしかなかった上、結局私達はあまり役に立たなかったな……」

「そうですね、モニカさん……」

「せめて後始末ぐらいは私達が引き受けよう。ウルトラ騎空団に何もかも押し付けるような形で終わるのは、秩序の騎空団としても面目丸

潰れになるからな」
「はい！」

多くの者がウルトラ戦士を見ている中、彼女らはウルトラ騎空団のメンバーや機動兵器を見ていた。
未曾有の危機に人間（ではない者がかなりの数いるが）として立ち向かった彼らを見習わなければならない、そう心に決めた二人は事後処理に走ることになる。

「ところでリーシャ」
「何ですか？」
「……その、ウルトラ騎空団の団長は既婚なのだろうか……？あの日に来た艦長と副長はとても美人でスタイルも良かったし、どちらかと結納を済ませているのでは……だとするとわたっ……いや、リーシャに靡くかどうか……」
「……えっ？」

気が付けば夕暮れ――ロアーヌ島に立ち並ぶ総勢十名のウルトラ戦士達。
その中の一人であるティガから各々へ、光の道標を通った際に受け取った人々の光が託される。
光神と同じく本質が光のティガだからこそ、ただ通るだけに留まらず光をその身に取り込めたといっても過言ではない。
その中で特にトリガーはティガと似ているためか、多くの光を託された。
これから先の未来、数多の出来事に立ち向かわねばならない若き新たな光へ、偉大な光からの贈り物。
無論、彼だけではなくトライスクワッドやジード、グリージョらもダイナやガイア、アグルより多くの光を受け取っている。
伝説の英雄達から新世代の勇者達に受け継がれていく光の絆。

無数の黄金の光が舞う、夕暮れ時のロアーヌ島。
その光景を見た者は、決して今日という日を忘れないだろう。
世界を超えて起こした奇跡――ロアーヌ島では、この日を一つの記念日にすることが後日、島民全員の賛成を得て決定したという。

☆

秩序の騎空団や他の騎空団に後の事を任せ、ロアーヌ島を立ったウルトラ騎空団。
案の定レジェンドが挨拶に来たとき、モニカとリーシャの両名が何やら顔を真っ赤にしてもごもご言っていたが、当のレジェンドは何かを察したオーフィスから「ぷんすこー」とポカポカ叩かれていたため、よく聞いていなかった。

「最近、レジェンドの隣にいつも誰かいる。我の場所なのに」
「そう？れるな。近いうちにアウギュステにバカンスに行くから」
「……海の幸？」
「そうだ。今までの労いも含めてな。もう少しの辛抱だ」
「ん、わかった。我頑張る」
『アウギュステか。おいレジェンド、オレ様ちょっとカツウォヌスに喧嘩売ってくるわ。モドリカツウォヌスの踊り食いしてやるぜ』

どうやら一先ずオーフィスの機嫌は直ったし、ゴジラが何かやる気（食欲）に満ち溢れている。
ちなみにモドリカツウォヌスの一匹に、ゲンに真っ向勝負を仕掛けたとんでもない猛者がいた。
言っておくが、カツウォヌスは単なる魚でモドリカツウォヌスはそのバージョンアップ版。
もう一度言う、カツウォヌスは単なる魚だ。

エリアル・ベースやクロガネと合流し、各艦が再び賑わいを見せている。

「部長！イリナが目を覚ましたって本当ですか!?」
「ええ。イオ共々無事意識が戻って、今は安静にしているわ。面会も漸く解禁されてるし、行ってきたらどうかしら」
「ハイ！行こうぜタイガ！」
「ああ！」

二人でリアスに頭を下げて、走り去っていく一誠とタイガ。
タイタスとフーマは現在別行動中……と言っても深刻なものではなく、ブーストマッスルに感銘を受けた団員と筋トレに励んでいたり、二人がいないということで一足先に布団に潜り、就寝カゴを独占しているだけ。
そんな一誠とタイガを見送り、軽く息を吐いてリアスは苦笑する。
「ホント、最初の頃から見違えるくらい立派になったわね……あれじゃモテても仕方ないわ。けど……イッセーの正妻の座は渡さないわよ、イリナさん」
「あ、じゃあタイガは貰ってもいい？」
「!?」

突然隣に現れてニコニコ笑っているジータに、リアスは一瞬心臓が止まるかと思うほど驚いた。
髪の毛が全部逆立って別人に見えたぐらいだ。
「い……いつからそこにいたの!?」
「ん？あの二人をリアスさんが送り出したあたりから。私もグランの尻にロケットランチャー突き付けてさっさとイオのとこ行って来いっておど……焚き付けたんだよね」
「脅すって言いかけなかった？」

「『踊り場から蹴落とそうとした』って言いかけた」
「尚更悪いわよ!?あ……でも私もお兄様やお父様に似たようなことしていたわ……」
「へぇ～……リアスさんのとこもダメ兄貴とダメ親父？」
「駄目ではないけど、シスコンかつ親バカかしら」
「そりゃ苦労するねぇ」
「でしょう？」

クスクス笑い合ってから、リアスはジータに微笑みながら告げる。

「人間とウルトラマン……この種族の壁、恋愛するとしたら結構厚くて高いわよ？」
「御心配なく。伊達に十数年間クソ親父ボコるために鍛えてないから。立ち塞がるモノ全てブッ壊して幸せ掴む気なので」
「ふふっ……余計なお世話だったみたいね。私は応援するわよ。是非とも私の結婚式では二人で最前列に並んでほしいわ」
「そっちもね、盛大なやつ期待してるから」

一誠とタイガの知らぬ間に、乙女の同盟が完成していたが別に良いだろう。
レジェンドの方は何かと面倒しか起きていないし。

☆

イオの見舞いに行ったグランは彼女が意識を取り戻していたのを見るなり、思い切り謝った。
彼女も自分自身に思うところがあったのか、謝り返して後日買い物に付き合うことで遺恨もなく解決。
それからグランはミライのもとを訪れる。

「ミライさん」

「グランくん……見せてもらったよ、君の勇姿と覚悟」
「僕も見つけました。僕自身が望む、進むべき光と道を！」

ハッキリ言い切ったグランに、ミライは笑顔で頷き返す。
そこへ、一人の男性が歩いて来るとミライは驚きつつも頭を下げ、グランも振り向く。
彼らの前にやってきたのはマドカ・ダイゴ――正確には、ダイゴの姿を借りているティガ。

「君がチーフの言っていたトリガーだね」
「もしかして、貴方は……！」
「ウルトラマンティガ。この姿の時はマドカ・ダイゴって名乗ってるから、そっちで呼んでほしいな」

自分を助けてくれた恩人が、改めて目の前にいるのだと理解してミライ同様頭を下げるが、ダイゴは笑って制す。

「いいって、そういうのは。こっちに来れるかも半ば賭けに近かったし、無事で何よりだよ」
「いえ、でも……」
「……なるほど、うん。僕が力を貸していた人物にそっくりだな。主に心とか」
「え？」
「いや、こっちの話。何はともあれ、これからは長い付き合いになるんだし、よろしく。この姿での戦い方は格闘技術とか銃とか……後はマシンの操縦技術かな。それぐらいしか教えられないけど、ウルトラマンとしては先輩だし、偶然かどうかは別として色々と僕に似ているようだから、各方面で面倒を見てあげられると思う」

ダイゴが同行するというのもそうだが、様々なことを教えてくれることにグランだけでなくミライも驚く。

ゼットあたりもまた騒ぎそうな気がするが、まあ良しとする。

「あまり僕も人に教えるということが上手ではないんだけれど、こういうことは教える側も勉強だから。お互い頑張っていこう」

「は……はいっ！よろしくお願いします、コーチ！」

いきなりコーチ呼びになったことで目を丸くするダイゴだが、とりあえずは歓迎されていると理解して右手を差し出すと、グランもそれを握り返す。

そして、ミライが頃合いを見計らって――

「二人とも、この後の食事はカレーだそうですよ」

ダイゴとグランはキョトンとして顔を見合わせた後、ミライも一緒になって笑い合った。

☆

恒例となった大決戦後の祝勝会、主役となったのはやはり大活躍のウルトラ戦士達や機動部隊。

特にダイゴ＝ティガはウルトラマンでありパイロットでもあるということで瞬く間に話題の中心となった。

しかも、搭載しているＡＩは同じ防衛チームの一人をベースにしたとあっては盛り上がらない訳がない。

他にも少しの間とはいえ彼らのもとを離れ、絶体絶命の危機に颯爽と現れタイガを救出したアスカ＝ダイナ、やられたと思いきやパワーアップして帰ってきたリク＝ジードなども同じくもみくちゃにされるほど歓迎された。

そんな賑やかな場から一人、レジェンドは卯ノ花やしのぶが手を貸してくれたことで祝勝会に参加出来たイリナやイオと違い、まだ安静にしていなければならないレイト＝ゼロの病室へと足を運んでいた。

「悪いな、レジェンド。あんたもあっちでバカ騒ぎしたかっただろうに」
「構わんさ。お前のおかげで一誠やタイガは助かり、同時にコピーダイナを撃ち破る切っ掛けもくれたわけだしな。そこまで身を砕いて勝利に貢献したお前を放っておいては、それこそ師匠として最低だろうが」

レジェンドがレイトに持ってきた料理や飲み物は全て作りたてだ。
たまには師弟二人だけでの食事も良いだろうと考えて持ってきたものだが、ふとレイトは疑問に思う。

「そういや、師匠って言ったらゲンもだし、あんたはゼットを（一応）弟子にしてるだろ」
「ゲンは一誠やタイガの復活祝いも兼ねてミライやダイゴ、グランも交えてカレーを食い漁ってるし、ゼットはムサシに押し付けてきた」
「オーイ、ゼットはともかくもう一人の師匠は俺を放置でカレー祭りかよ。アストラはいないけど」
「案ずるな。俺がこっちに持ってきたのは俺達の分だけのマーボーカレーだ」
「マジで!?うっし、冷めたり他の連中が嗅ぎつける前に食っちまおうぜ！」

何気にカレーの探知能力がずば抜けていたミライや、当然の如くオーフィスや三日月らフードファイターを出し抜いて持ってくるのは骨が折れたし、ここまで喜んでもらえるのは料理人冥利に尽きるというもの。
キンキンに冷えた水も持ってきたし、と二人はしっかり「頂きます」をしてから食べ始める。

「くっはァー！辛いけど美味え！しかもちゃんと大盛りで持ってきてくれるとは、さすが師匠。俺のこと分かってんな！」
「俺の地獄の超怪獣ラッシュサバイバルを見事生き抜いたぐらいだからな。否が応でも理解するさ」
「いやアレはマジで後半どうやって過ごしたか分かんねえんだけど。意識飛んでた気がするぜ、俺」
「逆にそれはそれで大したものだろ。無意識で生き抜いたわけだし」

今の一誠達が挑戦したら、冗談抜きで確実に何名か死人が出そうなレジェンドの修行。
そんな理不尽な修行も今や笑い話の一つに出来るほどに、レイトは立派に成長した。

「お前が見事に生還した時、セブンとレオがガチ泣きしたもんなぁ……」
「ついでに俺も泣いたぜ。さすがにアレが終わった後じゃ隠す気もねえよ。マジで帰ってこれた感が一気に爆発したもん。つーか、アレを大隊長やベリアルもやったんだよな……」
「あいつらは最後の方、逆に怪獣達が怯えて逃げるほど強くなってたぞ。ベリアルなんて『逃げんなテメーが今日の晩飯だオラ』とかもう狩人と化してたっけ」
「簡単に想像出来ちまうんだけどソレ」

なお、その日ベリアルとケンの腹の中に収まったのはかの有名な何でも腹で食う宇宙大怪獣。
実際は某コスモイーターを捕獲しようとしたそうだが、二人の殺気を感じ取って即逃走したらしく、逃げ遅れたその宇宙大怪獣が餌食になったそうな。

「我ながら自分と弟子の事だけでネタには事欠かんな」
「師匠の濃さが弟子に遺伝してんじゃねーか？俺もそうだけど……

で、他にも何があるんだろ？」
「相変わらず察しがいいな、ゼロ。あのお前モドキをジードが倒す直前、気になることを口にしていた。『皇帝』と」

ここでレイトの顔色が変わる。

「皇帝、だと……!?あれだけの強さの奴を作れて、かつ制御出来るような奴でそう呼ばれるとしたら……」

ウルトラマン絡みで『皇帝』と呼ばれるほどの力を持つのは約二名。うち一人はレジェンドの【エリア】において正しく闇も受け入れて光の道を歩んでいるため、除外される。
故に、必然的にもう一人の方に絞られる。

「暗黒宇宙大皇帝――エンペラ星人。かつてケンがウルティメイトブレードを手にして漸く引き分けに持ち込めた存在にして、ベリアルが『家族』を失い闇に墜ちる原因を作った奴だ。メビウス達の尽力で討たれたはずだが……ゴーデスの件もある。今の【エリア】の状況的に何が起きても不思議ではない」
「親父やレオから聞いてる。レゾリューム光線とかいう、対ウルトラマン特効の光線持ちだってこともな」
「俺にはレジェンドプロテクトやオーロラルパワー無しでも効かんがな」
「いやもうホント何なのあんた」

レイトがそう言っても仕方ない。
レゾリューム光線はウルトラマンを分解・消滅させてしまうというとんでもないものなのだが、どういうわけかレジェンドには効かないらしい。光神だからか？

「それはそれとして、単純な能力も桁違いだ。念動力一つでメビウス、

ヒカリ、そしてサイコキノ星人をまとめて圧倒し、何より倒した時には『アーマードダークネス』を纏っていなかったこともメビウス達が勝てた要因の一つだ」

暗黒魔鎧装アーマードダークネス――明確な意思を持ち、正当な主でなければ装着者を闇で食らうというとんでもない鎧。

エンペラ星人がそれを纏った状態であれば、あの時の戦いの結末は違ったかもしれない。

「どちらにせよ、奴が復活してさらなる力と戦力を蓄え、虎視眈々とこの世界……いや、この【エリア】全土の征服のために準備を進めているとすれば、こちらも対抗策を講じなければならん」

「俺達もそうだが……鍵はあいつらだな。大隊長にタロウ、教え子にはなるがメビウスときて次にタイガ……か。加えてベリアルの息子であるジードも関係があるっちゃあるな」

「ただ戦いに強くなるだけではない。今行っている異世界修行は多くの事をその目で見て、己自身で体験し、本当の意味で成長することが目的だ。エンペラ星人との戦いまでにどれだけ今より成長出来るかで運命が決まる。いつでも都合良く奇跡が起きるとも限らんしな。俺も常に付いてはいられん」

目を伏せ、腕を組みながらそう言うレジェンドに、レイトはマーボーカレーを頬張りながら自信満々に答える。

「ま、何にせよ始まったばかりでこの先難題だらけな異世界修行だけどよ、たった一つだけ言い切れることがあるぜ」

「ん？」

「宇宙（エリア）の悪（ワル）は俺達がブッ潰す!!」

ハッキリと言ってのけたレイトにレジェンドは一瞬鳩が豆鉄砲を食ったような表情になるが、ふ……と笑い――

「……そうだな。お前はそういう奴だった」
「今は今だ。エンペラ星人が本格的に攻めてくるまで時間はあるだろ。ならそれが命取りだってのを後々になって分からせてやりゃあいいんだよ。あんたの課す修行をマジでやりゃ、あいつらは相当化けるぜ」
「無論、お前にも付き合わせるがな」
「おう！っつーわけで、今はこれ食ってゆっくり休んで、とっとと治さねえとな。あ、コーラとかあるか？」
「当然だ。水だけでなくこっちも冷えてるぞ。二人揃って1リットルのやつが」
「っしゃあ！」

重苦しい雰囲気はレイトが振り払い、再び二人だが賑やかな――

「我の分は？」
「ああ、万が一を考えてあと2リットル分は……」
「は？」
「レジェンドとレイト、ずるい。我もレジェンドのマーボーカレー食べたい」

――食事になるかと思いきや、まさかのオーフィス乱入。

「いやお前いつの間に来たの」
「ついさっき」
「どこから聞いてた？」
「ブッ潰す、のあたりから」
「……レイトはまだ怪我人だ。取って食べるなよ」
「じゃあレジェンドのを分けて」
（（何言ってんのこの娘オオオオオ!?））

レイトは図々しいなくらいにしか思っていないが、レジェンドは『アレ？これ間接キスにならね？』と考えた直後、既にレジェンドのマーボーカレーはオーフィスに食べられていた。

「美味しい。今度はいっぱい食べたい」
「って何食ってんだオメーは!!」
「こいつ、レジェンドに修行つけてもらって上がったスペックをどうでもいいところで発揮してんな!?」
「コーラも飲んでいい？」
「あーもー……飲んでいいから俺とレイトの分残せ。ほらこのデカいやつやるから」

わーい、と抑揚のない声で喜ぶオーフィスは、自称我の特等席というレジェンドの膝の上に陣取ってコーラを飲み始める。
そんなオーフィスを苦笑しつつ、二人もコーラを開けて飲み始めた。
祝勝会の方はまだまだ賑やかで終わらないだろう。
少し休んだらまた依頼と修行の日々だ。
そして、彼らはそう遠くないうちに舞台を新たな世界へと移すことになる。
ナチュラルとコーディネイター……二つの人種が存在し、争うその世界――そこで彼らは何を思い、何を成すのか。
ただ今は、ほんの少しだけの安らぎの時を過ごすのだった。

〈幕間・其ノ四へ続く〉

幕間・其ノ四
空へと宛てた手紙

モネラ星人との壮絶な戦いから数日後。
迫るバカンスを完全休暇にすべく、先日の大事件から然程時間を置かず依頼や仕事を捌ききったウルトラ騎空団はというと――

「あ゛〜……まだ疲れが取れん」
「ウルトラしんどいでございますよ……」
「ばたんきゅー」

レジェンド、ゼット、オーフィスを筆頭にへばっていた。彼らの近くではアーシアやアマリ、アズが突っ伏しており、ルリアも疲れているのか普段ほど食欲が無い。ただしオーフィスは普通に食べている。
ちなみにミツバは一番ブッ倒れそうだったので、レジェンドが部屋までおぶったそうな。

「これではある程度回復しないとバカンスどころじゃない……少し早いがバカンスの準備期間に入るぞ。体調整えんと行った矢先に倒れかねん」
「「「は〜い……」」」
「んじゃ俺が他の艦にも通達出来る全艦放送で呼びかけとくでございます。何人か病み上がりもいるから、皆納得してくれるでしょうし」
「レジェンド、おんぶー」
「ゼットはありがたいが、オーフィスはいつもと変わらんな……」

歩くのも辛いのか、浮遊霊のように飛びながら部屋を出ていくゼットを眺めつつ、オーフィスを始めアーシアらも部屋まで運んだレジェンドは、いざ自分も休もうとすると直接彼の元へ手紙が転送されてきた。

「惑星レジェンドから直接転送郵便だと?このタイミングで面倒ごとじゃないだろうな……で、差出人は誰……あ」

手紙の裏に記載されていた差出人の名前を見たレジェンドは短く呟き、しばし考えたあと珍しく悪そうな笑みを浮かべる。

「ふっふっふ……サプライズも兼ねてたまにはサーガを驚かせてやるとしようか。俺みたいに修羅場や不憫に殆ど遭遇してないし、これぐらいは構わんだろ」

ふんふんと上機嫌でその場をあとにしたレジェンドだったが、この時はまだ彼自身も被害者になるなど誰が予想しただろうか。

「……じぇっとん」

とりあえず、偶然それを見たハイパーゼットンは、先代主になんとなく合掌していた。

☆

所変わってエリアル・ベース。

サーガがオカルト研究部や生徒会と交流を深めたいということで、リアス達は(小猫からの圧がとてつもなかったため)文句無しで承諾、ソーナ達も二つ返事で了承。

一応護衛でゼノヴィアの師である巌勝や、イリナの師であるゼロガンダムも出席。前者は正しく護衛を兼ねているが、後者は単純におやつが食べたかっただけである。

なお、当然の如くリクがギャスパーと一緒にいるのはもはや見慣れた光景なので何も言わない。

「先生って割とフリーダムですよね」
「元々一人旅をしていたからかもしれん。下手に肩肘張るよりはいいだろう？」

先日の事件で負傷したイリナも、イオ共々すっかり完治して積極的にクエスト（依頼）に参加し経験を積んでいた。

「時にゼノヴィア」
「な……何でしょう、師範？」
「お前は料理を作れるのか？」
「料理!?う……いえ……」

厳勝から突然問われたゼノヴィアは口ごもる。
かくいうこの継国厳勝、あのニア・テッペリンの料理の腕を人並みレベルまで引き上げた御仁だったりする。彼はその時を思い出す度にリアルタイムで急激にやつれていくため、カミナやキタンからは「マジでよくやってくれた」「お前は俺達の英雄だ」とまで言われた。ヨーコが後で聞いた話によると、相当な激戦だったらしい。
そんな師範を前にしてゼノヴィアは嘘などつけるはずもないが、意外にも厳勝は軽く息を吐いただけ。

「なるほど、お前も他の二人と似たようなものか」
「「「「え？」」」」

他の二人――イリナとアーシアかと思ったが、イリナは知らないがアーシアはレジェンドに手料理を振る舞うべく日々精進しているようで、たまに食卓に彼女が作った料理が出てくるレベルまで成長している。だとすると、他にゼノヴィアと接点があり料理下手ないしそれに準ずる評価の者は誰だろうか。
試しにオカルト研究部を見てみよう。
リアスと朱乃はお嬢様だがちゃんと花嫁修業もこなしているため

問題なく出来る。
カナエは料理どころか特売セールで良品を見抜くことすら可能、自転車を漕いでスーパーをはしごするぐらいなのだから食材選びすら一流。
裕斗や小猫も長らく一人暮らしだったので一通り作れるが、専門的なものは無理。
一誠やトライスクワッドは……言わずもがな。特にトライスクワッドの三人は食事せずとも問題なかったので、仕方ないといえば仕方ない。……ドライグ？そもそも対象外。
ギャスパーやダ・ガーン、バーンは精々レシピ検索するぐらいだろう。というか後者二名はまず食事自体するのかどうかも問題だが。
ただ、最近ギャスパーがエプロン着けてキッチンに立ってる時があるとかないとか……。
リクも一応料理は出来るが、彼の場合他に料理出来る人物がいる場合、もっぱらカップラーメンしか作らない。
アザゼルの場合、誰かが持ってくるか外食の時が殆どのため、料理が出来るかどうかすら不明。
ゼロガンダムは……周囲の話ではちゃんと出来るようだが基本的に彼は食べる側である。
割と上手い下手が分かれていた。
ついでに言うと他にオカ研メンバーと濃い関係のウルトラマン勢の腕前は、レジェンドは文句無し、そのレジェンドに教わったサーガもそれなりに作ることが可能。ゲンは精進料理なら完璧、矢的は何故かダイエット食にも詳しく、実はアスカも人並みに出来るし、レイトは……まさかのイタリア料理が得意ときた。

「あ……あの、師範？他の二人って……」
「おー、よかったよかった。アーシア以外のオカルト研究部や生徒会メンバーもいるな。手間が省けた」
「先輩？」

ゼノヴィアが気になったことを質問しようとした時、タイミングがいいのか悪いのかレジェンドがやってくる。そんなレジェンドはサーガを見つけるとニヤリと笑い、先程届いたばかりの手紙を取り出した。

「お前宛てに手紙が届いたぞ」

ヒラヒラと手紙を見せるレジェンドだが、サーガを始め数名は怪訝な顔をする。

「……それは先輩宛てじゃないのか？俺宛てなら直接俺に届くはずだが……ましてやそれは惑星レジェンドからなのだろう？尚更おかしいぞ」

「そうよね……何か企んでないかしら？」

「サーガ……確かに俺宛てに届いたが、それは『俺の手からお前に渡してほしい』というメッセージだと、差出人を見れば分かる。ついでに……リアス、お前も恋する乙女なら分かるはずだ」

「ッ!?」

「差出人？どういうことだ……？」

訝しみながらもレジェンドから手紙を受け取ったサーガだが、裏面の差出人が誰か分かった途端、目を見開いてすぐに開封し、一心不乱に読み始めた。

「ソランさん……？」

「……」

「レジェンド様、この手紙は誰から？」

「厳勝が言っていたのが聞こえていたが、お前達が気になっている『他の二人』からだぞ」

「「「「ええっ!?」」」」

この時点でレジェンドの心の中ではしてやったり（第一段階）という状態。現在驚いていないのは、レジェンドを除けば顔合わせしたことがある巌勝とゼロガンダムぐらいである。

「じゃ……じゃあレジェンド様も知ってる人なの!?」
「んー？まあ、お前達がしていた話が料理絡み、しかもゼノヴィアが料理出来なくて巌勝が『他の二人と似たようなもの』と言えば候補は自ずと限られるからな」
「それで誰なんですか、レジェンド！」
「もしやプロテイン主食で野菜をそのままかじるような者達か!?」
「いやソレもおかしいだろ旦那！」
『この料理云々の場でも筋肉絡みとは……』
『待て、もしかしたら新しい勇者かもしれない！』
『そうか！ダ・ガーンの言うことも一理ある！』

タイガ達も興味津々だが、レジェンドはここで惑星レジェンドで暮らしている者しか分からないフレーズで答える。

「ここへと宛てた手紙、それがキーワードだ」
「「「「は？」」」」
「……あっ」

殆どの者が間抜けな声を出す中、自身の手持ちポケモンが惑星レジェンドで暮らしているが故にたまに遊びに行くリクだけは気付いたらしい。

「ここって……エリアル・ベース？」
「乙女の集い？」
「カナエ、それだとイッセー君達が除け者扱いですわ」
「空の世界？」
「あ、小猫ちゃん惜しい」

小猫とリクが言った台詞から……何故かアザゼルか答えを言い当てた。

「空へと宛てた手紙、ってか？」
「「「「ちいっ!!」」」」
「何で揃いも揃ってド派手に舌打ちすんだよ!?」
「空気を読め、スケベ総督」
「お前は気遣い覚えろ邪竜騎士!!」

アザゼルとゼロガンダムのやり取りは既にお馴染みと化している。レジェンドとしては一番近かった小猫か、もしくはゼノヴィアあたりに当ててほしかったのだが……。

「……とりあえず、そのスケベが正解だ」
「総督とすら付けられなくなった!?」
「けど、何でその言葉が関係あるんですか？」
「まあまあ、それは追々説明する（かもしれん）が……サーガ、何が書いてあったんだ？」

レジェンドがいつの間にやら笑顔になっていたサーガに尋ねると、サーガは嬉しそうに答える。

「どうやら新しく入った二人への指導がある程度済んだようで、残りの訓練や教育は他の場所に任せてこちらに合流するらしい。近日中にも到着するとのことだ」
「ほう、近日中というと大体の目処はついているのか」
「バッチリ狙って～……」

サーガがその質問に答えようとした時――

「「どーん!!!」」
「うわっ!?」

グキリッ!!!
「ぐはあっ!!」

二つ分の何かに激突されたサーガはどうにか踏ん張れたが、何故かレジェンドの方にも一つ激突し――レジェンドの腰が逝った。

「ぐ……おおお……!」
「おい今レジェンドの腰からヤベー音聞こえたぞ!」
「アーシアは!?」
「現在お休み中じゃなかったかしら?」
「なんて間の悪い……」

突然のことに驚くも落ち着きを取り戻していくリアス達だったが、レジェンドとサーガに飛んできた物体を見てまたも驚きがぶり返す。

「親方!どっかから美少女が!」
「親方って誰よ!?というか字は違うけどお館様はレジェンド様よね!」

天空の城な台詞を口にしたタイガにリアスがツッコミを入れた。実に絶妙なタイミング。

「「……でけえ……!」」
「「そこ!どこを見てるの!!」」

偶然にも目に入った、サーガに抱きついていた一人のある部分を見て一誠と匙が呟き、間髪入れずリアスとソーナの叱責が飛ぶ。リアスの方は嫉妬も混じっている。

そして――

「……」

『小猫の出力が急上昇中だ。そちらでは何が起こっている、一誠！』

『生憎私達は格納庫だ。ギャスパー、状況を教えてくれ』

「たゆんたゆんがロケット頭突きだ！」

「レジェンド様の腰が逝ったみたいですぅ！」

『『なるほど分からん!!』』

もはやダ・ガーンやバーンもレジェンド一家の空気に染まり、ボケやツッコミが出来るようになってしまっている。恐るべしレジェンド一家（だいたい家長のせい）。

「んふふ～サプライズ大成功～♪」

「ボク達只今到着ー！」

サーガに抱きついていた、一誠いわく「たゆんたゆん」な少女と、紫色のロングヘアが特徴的なボクっ娘が元気よく叫ぶ。

一方、レジェンドに激突した方は――

（（（（何か三人増えてるー!!））））

激突したであろう青い（もしくは水色）髪のツインテールの少女が、茶髪の少女と銀髪の少女から正座で説教を受けていた。もう一人、ウェーブのかかった金髪ロングヘアの少女は倒れているレジェンドの背中に乗っかって腰をマッサージ中。

「この馬鹿者！力と速さに特化した貴様が全力で突撃すればこうなることぐらいわかっておっただろうに！」

「お兄様も戦闘中であれば問題なかったのでしょうが、さすがにこの場ではそうもいきません」

「うう……ごめんなさい……」

……よりによって四人とも見たところ１０歳前後なので、何か可哀想になってくる。現在ある意味レジェンドを独占中の金髪少女だけは心なしか嬉しそうではあるが。

「もうあれは孫にマッサージしてもらってるおじいちゃんにも見えるわね」

「ま、孫じゃありませんっ！」

リアスの発言に、金髪少女が反応した。

「孫じゃなくて、およっ……お嫁さ……うぅ……」

「リアス、この娘お持ち帰りしていいかしら？」

「カナエ、そろそろ自重しないとしのぶさんから手痛いお仕置きが飛んでくるわよ」

なんとか恥ずかしがりながら『お嫁さん』と言おうとしている金髪少女を眺めつつ、カナエの問題発言にリアスは額を押さえながら溜息を吐く。

「ところで、二人とも……いえ、レジェンド様の方は仕方ないわね。とりあえず、その二人はサーガ様とどういう関係なのかしら？それから小猫、その殺気を収めなさい」

「……はい」

主に言われ渋々殺気を引っ込めた小猫だが、さり気なくサーガの両隣に座った彼女らを見て、またも再燃。一誠を始め、トライスクワッドや裕斗、アザゼルに匙はサーガと同性だからかハラハラしっぱなしだ。

元々マイペースなゼロガンダムや、リクがいるから別に気にしてな

いギャスパーはともかく、リクに至っては内心この修羅場の行く末を楽しんでいる。
　ちなみにレジェンドはまだ金髪少女に腰をふにふにされていて、ぶっちゃけ戦力外。
（（（（頼みの綱があれかよォォォ!!））））
　頼みの綱であり、被害者であり、今回の全ての元凶……と属性てんこ盛りなレジェンドであった。
「そ……それで、貴女達はサーガ様とどういう関係なのかしら？」
「あっちには聞かないの？」
　一誠いわく『たゆんたゆん』な方がレジェンド……というかその上に乗っかって腰をマッサージしている金髪少女を指差す。
「話はベッドで聞かせてもらうわ」
「カナエ、それ貴女の台詞じゃ無い気がするわ（主に中の人的に）。ついでにベッドでって、そっちの意味？それとも病人的な意味？」
「リアス……物語によくあるでしょ、入院中の患者が看護婦さんといい感じになる展開が！」
「ああ、しのぶさんや卯ノ花先生と仲が進展しそうになりそうなアレね……入院したぐらいでレジェンド様があの二人に手を出すかしら？ついでにその逆も」
「そこで私という選択肢がまるで無くなるのはどうしてぇ!?」
　そんなリアスとカナエのやり取りを見ながら、サーガを挟んで座った二人の少女は笑っていた。
「ふむ、このままではグダグダで話が進まなそうだ。私が説明するとしよう。と言っても私も頻繁に会ったことがあるわけではないから

簡潔になるがな」

茶を啜りながらそう言ったのは巌勝。この時点で何となくだが、何名かは先程巌勝が言っていた『他の二人』だということを察する。

「まず、二人とサーガ様の関係だが……単刀直入に言おう。この二人はサーガ様の『御使い』だ。つまりゼノヴィア、お前の先輩にあたる」

「「「「えええええ!?」」」」

「あー、そういえばサーガさん、御使いが一人とは言ってなかったよね。レジェンドさんの方は巫女一人、アーシアちゃんだけって言ってたけど」

「スペリオルドラゴンはそういうのがいないがな。まあ、これは当人達の自由だ。俺達が口出すことではないし、口出ししたところで俺達の付き人になるわけでもない」

「またオカルト研究部のメンバーが新しく御使いになったわけではないですし」

口出すメリットが無い、と付き人の件をバッサリと言い切りクッキーを頬張るゼロガンダムと、別に気にしていなかったリク、それからリクに釣られて徐々にメンタル強化されているギャスパー。この三人は然程驚いていないが、他の面々はそうではない。

「みっ……みみみ御使い!?ということは私だけではなくアーシアにとっても先輩ということに……」

「属している方が違う。そもそもレジェンド様が巫女をとられたのはアーシア殿が初と聞いている。何よりお前とアーシア殿ではまず付き人としてのベクトルが違うだろう」

「横文字バリバリ使うとこは縁壱君と違うよね～巌勝君」

「「「「巌勝『君』!?」」」」

縁壱と巌勝をまさかの君付けで呼ぶたゆん少女に目を見開く一同

（一部除く）。そんなことはどうでもいいとばかりに自己紹介しだす二人。

「まずボクからね！紺野木綿季、享年１５歳！ユウキでいいよ！」
「え……？」
「享年って……」
「んー、そこは話し出すと長くなっちゃうから、また今度ね。それから日本人名なのにファンタジックな格好なのは、この姿がボクがプレイしてたゲーム内のアバターの姿だから。この格好の方が精一杯生きたっていうのをいつでも思い返せるし、沢山の思い出があるって言ったらレジェンド様がこっちの方の身体にしてくれたんだ～。ところで……レジェンド様大丈夫？」

紫紺の少女――ユウキが目を向けると、金髪少女に腰をマッサージされてるレジェンドに、説教する二人の少女と説教されて涙目の少女が未だそのまま放置されている。

「最近この姿で腰が逝きやすくなってる気がするぞ……あ、ユーリそこそこ」
「ここですか？んっしょ、んっしょ……」
「大体貴様の暴走で兄上は勿論、我やシュテルがどれだけ……！」
「分かったからもう許してよ王様～!!」
「ユウキ、アカネ。こちらはもう少しかかりそうなので、どうぞそのまま続けて下さい」

シュテルと呼ばれた少女はそう言うと、再びツインテール少女にお説教。

「……レジェンド様はともかく、レヴィの方が駄目っぽいかも」
「ディアーチェも容赦無いもんね」

ユウキに加え、アカネと呼ばれた少女によって、とりあえずレジェンド側の少女達の名前は判明した。
一番落ち着いているのがシュテル。
お説教を受けているのがレヴィ。
王様と呼ばれていたのがディアーチェ。
そしてレジェンドをマッサージしているのがユーリ。
一先ず彼女らのことは置いといて、とアカネが自己紹介をする。

「私は新条アカネだよ～サーガ君の御使い第二号。よろしく、え～と……オカマ研究部？」
「「「「オカルト研究部!!」」」」
「何が楽しくてオカマを研究するんだよ……」
「む、知らんのかフーマ。最近のオカマは素晴らしい肉体だと聞いているぞ！」
『どうでもいい……いやよくないな。ビジュアル的に……アレ？なんかしっくりくるんだが何だコレ』

変な部活名にされてほぼ全員がアカネにツッコミを入れ、フーマはげんなりし、タイタスが何故か変なところを力説、トドメにドライグはイメージして混乱し始めた。

「あ、一号はボクだよ！あと三号と四号もいるけど、現在教習中！ボクとアカネはその子達が一通り必要なこと覚えたから、こっちに合流したんだ。サーガ様宛ての手紙にはそう書いてたハズだけど」
「ということは……私は五号か？」
「「……え？」」
「え？」

ユウキとアカネは目が点になる。ゼノヴィアは割と本気で何なのか？マークを飛ばしていた。
その理由だが、別に御使いが増えていたことではなく別のところに

ある。

「巌勝君が言ってたけど、サーガ君の御使い五号って本当にキミなの？」

「ボクはてっきりこっちの子も実は御使いで、こっちが五号かと……」

そう言ってユウキが指差したのは……小猫。

「……えっ？」

しばらく固まった後、小猫は急速に顔を赤くして小さくなってしまう。

「ち……違いまひゅっ!?」

噛んだ。可愛い。そんな思考と優しい視線が小猫に注がれ、更に恥ずかしくなった小猫は体育座りで顔を隠す。

「んふふ～これは退屈しなさそう」

「アカネ、見て楽しむのはいいけどからかっちゃダメだよ」

見るならいいのか、とツッコみそうになるがそもそもレジェンド一家からして常識がおかしいので、それに連なるサーガ組もちょっと変わっていても納得出来てしまうのは如何なものか。

そんな彼女らの方も一段落したところで……腰の逝ったレジェンドとその関係者の四人組を見た。

「すまんがこのままで済まさせてもらう」

いや、そんな格好でキリッとされても……と思ったのは全員の総意だが、口に出したら終わりそうな気がするのでやめておく。賢明な判

断である。

「さて、誰から紹介……」

レジェンドがチラッと四人を見ると、例によって自分から先に紹介してもらいたいという視線をビシバシ送ってきている。本来なら『彼女』から紹介するのが筋なのだろうが……。

「まず、茶髪の娘……シュテルだ」

「「!!」」

「シュテル・スタークスです。以後宜しくお願いします」

ガーン！と効果音が聴こえそうなぐらいショックを受けている三人に、礼儀正しくお辞儀した後は三人にドヤ顔するシュテル。何か雲行きが怪しくなってきた。

「お兄ちゃん！何でシュテるんが一番最初なの!?」

「ここは我がトップではないのか兄上!?」

「立場的には私が一番ですよ!?」

「一番落ち着いてて他の奴からの質問があった場合にも冷静に対処出来そうだったからだ」

レヴィ→動きが軽やかだが、同じように割と頭が軽い。

ディアーチェ→まともではあるのだが、態度的に誤解される可能性大。

ユーリ→同じくまともだが天然が爆発したり、パニクったりしそう。

……とまあ、クセの強い面々の中で一番大人なのがシュテルだった。彼女も彼女で怒るとヤバいのだが、それは仕方ない。

「三人とも、時間も押してますし、早く自己紹介して下さい」

「うっすら笑みを浮かべながら言うでないわぁ!!」

勝者（何の？）としての余裕なのか笑っているシュテルにディアーチェの怒号が飛ぶが、シュテルはどこ吹く風といったところ。

「うぐぐ……！仕方あるまい。我はディアーチェ・K（キングス）・クローディア、尊敬と畏怖を込めてロード・ディアーチェと呼ぶが良い！」

「フルーチェ？」

「誰が食べ物かぁ!!」

ああ、この娘ツッコミ属性か……と誰もが思ったが、間髪入れず青い娘が自己紹介してくる。

「ハイハイハーイ！ボクはレヴィ！レヴィ・ラッセル!!人呼んでレヴィ――」

「レヴィア☆たん参上☆」

「「「わあああ!?」」」」

今度はいいところでセラフォルーが乱入し、いよいよレヴィがぺたん座りで泣き出してしまう。

「う……うわあああん!!せっかくボクがカッコよく名乗ろうとしたのにいいぃ!!」

「え？あれ？」

「お姉様、反省なさって下さい。彼女はレジェンド様と関わりのある方ですよ」

「にぇ!?」

どっかのポンな巫女っぽい声を出して驚いたセラフォルーだが、謝る前にレヴィはレジェンドによって慰められていた。

「よしよし、今度戦闘時に名乗ろうな。ちゃんと強い奴相手に。弱いと名乗ってる最中にそいつが他の奴に倒されちゃうから」
「ぐすっ……うん……」
（ぬう……さり気なく一番いいポジションを……）
（偶然とはいえやりますね、レヴィ）
（……私、ハードルが上がっちゃいました……）

そうして最後に残ったのが――

「えと……ユーリ・エーベルヴァインです。伝説九極天の一人で紫天の盟主です」
「「「「はい？」」」」

……今、この娘とんでもないこと言わなかった？そんな空気が場を支配した。後半の紫天の盟主はまだいい、問題は前半だ。

「ねえ、もう一度役職を聞いていい？」
「伝説九極天の一人で、紫天の盟主です」
「「「「えええええ!?」」」」

オカ研や生徒会は勿論、リクや巌勝も固まっている。実はこの四人組――通称・紫天一家と呼ばれる、ユーリを中心とした彼女達は長らく『エルトリア』という星の復興作業を手助けしていたため、惑星レジェンドにいなかったのだ。
故に惑星レジェンド全体から見ると比較的最近来た巌勝や、頻繁に来るといってもポケモンアイランドぐらいにしか行かないリクは初対面。運良くエルトリアに行く前に会えたのは、ユウキやアカネを除くとゼロガンダムのみ。

「レジェンド様、九極天の判断基準おかしくない!?」
「むしろそっちのディアーチェって娘かと思ったってかそう思っても

変じゃないですよね!?」
「全員ロリじゃねーか！あ、なるほど。アンタがそっち好きだからオーフィスも……」
「バカッ！それ以上はよせ！アザゼル!!」
「へ？」

「うぅ……やっぱり信じてくれません……」
「オイ、ユーリ（うちの娘）が九極天で何がおかしい？ちゃんと相応の実力持ってるし実績もあるぞ。見た目だけで何勝手に判断して好き放題言ってくれてんだ？ああん？」

完全復活したレジェンドが、額に青筋浮かべながらバキ！ベキリ!!ゴキリ!!!と指の骨を鳴らしつつ睨みつけていた。例の如くアザゼルに視線が向いていたため――

「「「「さらばアザゼルマン」」」」
「お前ら逃げながら最終回っぽく言うな!!」

その日、エリアル・ベースの一箇所から悲鳴と大爆発が上がり、レジェンドとアザゼルは卯ノ花にこっぴどく叱られたらしい。

「解せぬ」
「俺は被害者じゃねーかよ……」
（（（（いや、戦犯だろ……））））

なお、ユーリを九極天と思わなかっただけならともかく、信じようとしていなかった面々についてはサーガからこんこんと説教されて、漸く納得した。だって卯ノ花より先輩だもの。

かくして、また濃ゆいメンバーが加入……というか合流したウルトラ騎空団だが、後日更に増えることになるとは思わなかっただろう。しかも、その二人が揃って月の関係者だということも。

〈続く〉

――おまけ――

「そういえば師範……私の料理の腕は二人と似たようなものって言ってましたけど……」
「ユウキ殿はそもそも食べる専門、アカネ殿はインスタント食品が主だ」
「「「「あー……」」」」
「だってボク、あっちでもあんまり料理したことないし」
「食べられるならよくない？」

この二人に対し、紫天一家はというと。

「ディアーチェは種類選ばずプロ級、シュテルも難なくこなせるし、ユーリでも普通レベルだ。苦手なのはレヴィだけだな」
「「「「最後がイメージ通り過ぎる」」」」
「ちょっとぉ！どーゆー意味さ!?」
「爆発させないだけマシでしょうね」
「冒険（アレンジ）はするがな……」
「が……頑張れば上達しますよ、レヴィ！」

この後、レヴィの現在の腕前を半ば強制的に披露されたところ、食べたレジェンドが顔色を悪くし、厳勝とディアーチェ、ついでにジャグラーがブチ切れたという。

「レヴィ!!貴様あれほど言ったのにまたレシピを無視しおったな!?」
「基本を笑うものは基本に泣く……武芸も料理もそこは変わらぬ!!」
「お前は明日から俺らがみっちり指導してやる。言っておくが店を構えてる以上、俺は一切手加減しないからな」
「そんなぁ〜!!」

※ジャグラーの料理の腕前は一部レジェンドを超え、その他はレジェンドより下ぐらい。分かりやすく言うとウルトラ騎空団ナンバー2の実力。

月づくし～リターン・ザ・兎

ヒリュウ改のブリーフィングルーム。
そこに艦長であるミツバと、ウルトラマンオリジンこと前上流、そして何というか……うまぴょいに似たような人物（？）がいた気がする見た目の女性と、仮面にボロボロな黒マントというぶっちゃけ悪の組織の幹部と言われるかもしれない男性が座っている。そんな彼らの視線はある二人に向けられていた。
片やアーシアに治療されているウルトラマンゼット。片やしのぶに肩の傷を消毒され、包帯を巻かれているレジェンド。
何故このような状況なのか、順を追って説明しよう。

☆

事の始まりはユウキやアカネ、紫天一家がウルトラ騎空団に合流した翌日――アーシアを除くオカ研や生徒会のメンバーと騎空団の者達が、近々アウギュステでバカンスをするための用意として街への買い出しなどに出ていた時。
サーガがユウキとアカネに無理矢理引っ張られて行ったことを皮切りに、自分達は珍しく遅起きだったからか殆どのウルトラ戦士もバカンス準備のために街に出てしまったことを知らなかったレジェンドとゼット。
そこへ突然現れた兄弟怪獣のガロンとリットルを迎え撃つべく、これまた明日のパンツを洗濯中という、お前やっぱり火野映司じゃないのか的なことをしていた前宮流と共に変身・巨大化して戦っていたのだが、そこへ円盤で飛来し漁夫の利を狙っていたシャドー星人がガブラを乱入させ、加えて空気を読まないバド星人まで襲来。
三つ巴どころじゃないと考えたあたりで、いきなり見たことのないウルトラウーマンが次元をぶち破って現れたと思ったら、今度は未確認の宇宙船が同じく次元に穴を開けて飛来。しかもそこからエースキラーが出撃し、戦場は大混乱かつ混沌としてきた。

ガロンとリットルはオリジンとゼットの連携で撃破、ガブラは謎のウルトラウーマンに倒され、バド星人に至ってはエースキラーに敵う筈もなくフルボッコ。そこまでは良かったのだが、いきなりの乱入に不穏な空気が漂い始めた時にそれは起こった。

かつてセブンがされたように、謎のウルトラウーマンにすっ飛ばされたガブラの首をシャドー星人が遠隔操作し、そのウルトラウーマンに噛みつかせようとしたところをゼットが庇った結果、肩に深々と噛みつかれてしまったのである。

その後、オリジンがシャドー星人を宇宙船ごと木っ端微塵にしたのだが、ガブラは元々強烈な毒を有する怪獣であり、当然の如くゼットはダウンし、一体化していたレジェンドも同じく倒れてしまったというわけだ。

ではゼットはともかく何故無敵そのものと表現してしまえるレジェンドまで倒れたかというと、それはゼットと一体化していたから。

レジェンド自身がチートラマンの中でも桁外れにブッ飛んだ能力の持ち主なので忘れがちだが、一体化している状態で変身した場合、ゼットの受けたダメージがレジェンドの能力如何に関わらずダイレクトに反映してしまうという欠点があった。なまじゼット自身の回復力や神経の図太さが相当なものであったことと、上記のレジェンドのスペック故に通常はそれ程ダメージがあとを引かず、当のレジェンドも平然としていた為に誰もが……それこそ本人達も忘れてしまっていたのである。

しかも依頼や仕事を山程片付けたばかりに加え、バカンス準備の真っ最中だったというダブルパンチもあってこうしてダウンしてしまった、というのが事の顛末だ。

そういうわけで、ここまで関わってしまったからと事情説明しようと謎のウルトラウーマンが人間の姿に戻り、エースキラーの主が宇宙船から姿を見せるとまたも二人揃って固まる始末。ついでにウルトラウーマンだった女性はレジェンドの姿を見るや懲りずに再三フリーズするという状況になったので、とりあえずヒリュウ改にまとめ

てブチ込んで宇宙船をワイヤー牽引しつつ、こうして話し合いの場を持ったのであった。

☆

「……」

「超師匠、俺すっごい気不味いんですけど。部屋帰っていいですかね？」

「何言ってんだ。原因の一端、いや発端か？まあどっちでもいい、そのお前が逃げ出してどうする」

「レジェンドさん、それ言ったら俺はただ戦っただけなんですけど。一番場違い感半端ないし。確かに戦闘したけど、俺はその直前パンツ洗ってただけですよ!?」

「何とかなるって。婚約者の写真と明日のパンツさえあれば」

「何とかなるってそっちの意味!?」

（え？そっちってどっちでございますかね。口にしちゃいけない気がするけど）

そうだゼット、君にはまだ早い。

それはさておき、片方――女性の方が漸く口を開いた。ただし、今度は今度でゼットではなくレジェンドに向けて。

「……久しぶり、先生」

「あ？」

「「へ？」」

「「「はい？」」」

「……？」

レジェンドだけじゃなく他の面々、仮面の不審者（仮）さえも訳がわからない。

「先生？俺はウルトラウーマンの弟子を取った覚えはないぞ」
「あれじゃないですか？養成学校でたまにやってた特別講義。俺よく寝てましたけど」
「おうゼット、俺の講義で当たり前のように寝てた自白するとは、勇気ある大暴露だなコルァ」
「ハッ!?すっ……すすすスミマセン超師匠!!いやあの決して悪気があった訳ではなくてですね、むしろ楽しみにしてて寝てなかったから当日眠くなって睡魔にウルトラ敗北したという――」
「テキサスクローバーホールドォォォ!!」
「あ〝ァァァァァッ!!!」

治療したばかりなのに大技を極めるレジェンドと極められるゼット。特にレジェンドなんかは傷口が開く可能性もあるのだが……。

「まあこのまま話させてもらうが、今も言ったように俺にウルトラウーマンの弟子はいない。ついでにゼットの言った講義で知ったならそもそも光の国か、それに連なる惑星の出身の筈だ」
「覚えていないのも無理はないわ。先生は忙しいし、彼処にいたのもほんの数週間。何より私は今よりずっと小さかったもの」
「彼処？数週間で今より小さい……」

んー……とレジェンドはゼットに技を極めたまま悩む。ゼットが苦しみながら「ネバーギブアッ……あ、ダメだムリムリギブギブ!!」などとやっているが、今のレジェンドには聞こえていない。こういう時は――

「あ、あのっ！レジェンド様、そろそろゼットさんが……」
「仕方ないな。アーシアに感謝しつつ今後は気をつけろよ」

レジェンド絡みで困ったらアーシア頼み。解放されたゼットはそのままその場でパタリと力尽きた。

一応しのぶが苦笑しながらも湿布を患部に貼ってやる。
一向に分からないレジェンドだが、その女性が何やら頭に手を当てて――

「……ぴょん」
「「「「……？」」」」

見た目的にうまぴょいじゃないのかと思ったが、彼女は普通の耳だし尻尾もない。というかそもそも表現が馬じゃない気がする。

「レジェンド様、何か思い出しました？」
「分からん。ただ可愛いということぐらいしか」

この場にオーフィスがいたなら、今のレジェンドの言葉で自分もやり始めただろうが、生憎と紫天一家やルリアら『ぺたん娘同盟』でバカンス準備にお出かけ中。
しかし毎度のことながら、変なところで気が付くのがこのウルトラマン。

「そういやムーンプリズムデスティニーな魔女っ子が対話するアニメの主人公が兎とか何とか」
「何だその色々混じったようなアニメは……兎？兎……小さい、数週間……あ」

レジェンドがここで漸く思い出したようだ。

「まさかと思うが、お前……沙耶か？」
「正解。短い間だけど、私の今まで生きた時間の中でも凄く濃い日々だったわよ？レジェンド先生」

先程の動作はウサ耳を模したものだったらしい。本人は少しばか

り恥ずかしそうにしていたが、可愛かったので良しとする。
「それじゃあ、改めて……私は月神沙耶。月星人で、一応立場上は女王よ」
「「「「……はい？」」」」
「まあ、普通はこういう反応だよな。一世界とはいえ月のトップがアグレッシブに彼方此方飛び回ってぴょんだもん」
「それは先生も……ってぴょんは仕方なく……」

お忍びにしても何にしても、やんごとなき身分の方がいきなりドーンと現れたらそりゃ唖然とする――

「でも今さらでしたね、全【エリア】トップがこうですし」
「おいミツバ、どういう意味だソレ」
「おおとり師範も確か王族でしたよね？」
「魔王の妹もいらっしゃいますし、魔王の一人もいますよー」
「ていうかここじゃ身分とかよりも、ここに順応出来るかどうかにかかってるでございます」
「神クラスと関わったり、星晶獣と戦ったりして身分なんて飾りみたいなものだし。団長のレジェンドさんが色んな意味でトップに君臨してるから、落ち着いて考えたら別に気にするほどのことでもないかな」

――わけでもなかった。
ミツバ、アーシア、しのぶ、ゼット、そして流が口々に発した言葉に沙耶はポカンとした後、レジェンドを見たら平然とポッキーを囓っている。流石はブッ飛んだ立場の人物には慣れたものなウルトラ騎空団、驚いたのは一瞬だ。
「……メンタルの強度が異常じゃないかしら」
「ウチは経歴に訳ありな面々が多くてな。そもそも王女が恋人にいる

奴とか所属してるし」

言わずもがな、矢的猛ことウルトラマン８０である。ちなみにこれを聞かされたアザゼルは「同じ顧問なのに何でこう違うんだ」と嘆いたが、ゼロガンダムから「彼は品行方正、あとは分かるな？」と言われ撃沈した。容赦ない。

「それから……久しぶり、という意味なら貴方もね」
「……そうだな」
「え、何？お前ら知り合いか？俺は知らんぞ、そっちのは」
「先生が知らなくて当然よ。彼は私が女王に即位してから採用された科学者だもの」

レジェンドは「あー」と納得していたが、他の五人は何故それで久しぶりと言われるのか疑問に思う。だがそれは当人達によってすぐ明らかにされた。

「貴方が出奔してだいぶ時が経ったけど、凄い偶然ってあるものね。まさか修行に出た先で先生と貴方の二人にまとめて再会するなんて思わなかったわ」
「そのままそっくり返そう。そちらの御仁とは初対面だが、存在は知っていた」
「あ、そうなの。それでおたくは誰よ」
((((か……軽いッ……！))))

あまりに緊張感の無いレジェンドにミツバ達は若干焦っている。というのも沙耶の立場を顧みて、そんな彼女とタメ口で喋っている者も結構な地位にいる……否、いた存在だと思ったからなのだが。
……ここで、レジェンドがあることに気付く。レジェンドを除くと、言われなければ同種の存在でしか分からないだろうことに。

「……おい」
「何だ？」
「お前、レイブラッド星人だろ」
「「「「ッ!?」」」」
「正確にはレイブラッド星人へと変貌したレイオニクス、ってところか。相当奴の因子が高かったようだな。加えて戦闘経験も豊富だろう。その二つが揃わなければ肉体の変異は有り得ない。俺は同じような変化をした奴を知っている」
「……流石は宇宙伝説において『燦然と輝く宇宙の神』と称されたウルトラマンレジェンドだな。いとも簡単に見抜くとは」

男性は隠しも言い訳もせず、レジェンドの言うことを肯定するように言った。全員が衝撃を受けるが、とりわけレイオニクスについてこの中でレジェンド以外で知るゼットと、何らか関係があった沙耶はかなり動揺しているようだ。

「超師匠……！レイブラッド星人とレイオニクスってベリアル総司令も因縁のある……」
「ああ、ベリアルは光の国のレイオニクスだ。実際には闇のベリアルの方がな。尤もあいつは怪獣より自分が戦った方が強いし手っ取り早いが」
「そんな……どうして貴方が……もしかして出奔した理由もそこにあるの？」
「無くは無い、というところだ。一番の理由は私の作った物が奪った命に対する贖罪だな。そして、今はあるモノを追っている。アレは放って置くにはタチが悪過ぎる存在だ……特に科学者にとっては」

かなりシリアスな雰囲気になってきたが、ここでとんでもない人物が乱入してくる。一応、その付き人は非常にまともではあるのだが、付き人がまとも＝ブレーキをかけられる、というわけではないことを付け加えておく。

「束さんとクーちゃん、久方ぶりに只今ご帰宅ぅ!!」

バァァァァァン!!

「えっと……レジェンド様、束様とクロエ・クロニクル只今戻りました」

(((((何を仰ってるの兎さん!?)))))

「お帰り、束にクロエ」

そう、ゼットの専用機絡みで惑星レジェンドに行っていた束とクロエが、シリアスをブチ壊すが如く堂々としたやってきたのである。主に束が。

「うん!やっぱりここにいたねレジェくん!この束さんのレジェくんセンサーは今日も調子良好!というわけでレジェくん成分補給開始ー!!」

相変わらずのテンションの束に苦笑しつつ、レジェンドは抱きついてきた束に頬ずりされている。アーシアやミツバ、しのぶは面白くなさそうだが、クロエもちゃっかりレジェンドの服の裾を掴んでいた。こっちはまあ、微笑ましい。

「えーっと……」
「……続けていいか？」
「「「「あ、どうぞどうぞ」」」」
「ゴホン！」

男性は咳払いすると、漸く自己紹介に移る。

「色々話す前に私も名乗らねば礼を欠くか。月影勇治だ。私の事は別に覚えなくていい。しがない月の科学者の一人に過ぎない上、今は頭に『元』がつくからな」
「月の科学者……だからお二人は面識があったんですね」
「元がつく、ということは今は科学者もしくは月の住民ではないと……あ、出奔したって仰られてましたか」

月に人が住んでいることには誰もツッコまない……というか、かくいう空の世界も島が空に浮いているのが当たり前だし、さして気にするほどでもないらしい。
銀河遊撃隊の移動拠点であるガーディアンベースの方がよっぽどだと思う。

「しがないという部分には語弊があるわ。彼は自分から成果を誇示しなかっただけで、科学者としては歴代の月出身の者の中でも有数の天才よ。先生が別の世界へ行く前に託してくれたあの設計図、暗号を解析して開発出来たのは彼のおかげだもの」
「あれを？やるもんだな。表向きはエネルギー循環装置でしかなかったんだが」
「あんなものを表向きと言い切れるその神経が私には理解出来ない。あれは簡単に思いついて図面に出来るものでもないぞ。それに……あの設計図に隠されていたもの――『機甲神』の開発方法なんて規格外にもほどがある」

機甲神――それはゼロガンダムの同僚であるネオガンダムの故郷、即ち沙耶や勇治とは違う月の王国・セレネスで建造された、スダ・ドアカにおいて現代の機兵を上回る7体の機兵のこと。レジェンドはスペリオルドラゴンやネオガンダムの許可を得て、同じ月である彼女らの故郷にそれを託したのである。ただし六機分だけ。

「一つ気になったが、機甲神のことが先程の贖罪とやらに関係しているのか？」
「いや……そもそも強奪されたのは一機だけだからな。それに奴に操縦資格があるとは思えない。奴は月出身ではなく、ほんの少し滞在していたというだけ。とはいえ、あれを悪用されれば貴方や機甲神を託してくれた者達に申し訳が立たない。それに、私の追っている奴があれを利用しないとも限らん」
「……待て、強奪された？」
「いきなり穏やかじゃなくなりましたね」

レジェンドが疑問に思ったことを聞くと、勇治から出た言葉はとんでもないものだった。『機甲神の一機が強奪された』それだけでも十分過ぎる出来事だが、強奪した者とは別に勇治が追っている者も利用しかねないという。

「詳しい話は省くが、私はその二つを追って偶発的にここに来たというわけだ」
「ふむ、まあ詳細は後々聞くとしてだ。沙耶が修行……ってお前職務どうしてんだ」
「ちゃんと送ってもらってるわ」
「それならいいが……で、勇治だっけか。お前さんは機甲神の奪還と何かの追跡……と」
「そうだ。一応名前を教えておく。機甲神強奪犯の名はリゼヴィム・リヴァン・ルシファー」

「何だと!?」
「「「「!!」」」」

いつの間に近くへ来ていたのかアザゼルが驚愕の表情でブリーフィングルームに入り、勇治の肩を掴んで大きく揺さぶる。

「おい！今リゼヴィムって言ったよな!?何でリリンがお前らのところにいやがった!?」
「……いきなり何だ……!?」
「やめろアザゼル。何の用があってここに来たのか知らんが勇治はむしろ被害者だ。手を離せ」
「ッ……悪い。リリンの名を聞いて頭に血が上っちまった」
「……その様子からして、あの男はやはりロクでもない奴だったみたいね。胡散臭いから私は元から信用していなかったけど」

レジェンドの制止によって冷静さを取り戻したアザゼルを見て、沙耶は女王として直感的にリゼヴィムは信用ならないと感じていたようだ。そして、それは事実となった。

「いきなり乱入して済まなかったな。俺は堕天使総督のアザゼル、あんたらの言ったリゼヴィムとは一応知り合いだ。嬉しくないことだけどよ」
「お前がそこまで反応するというと、やはり白龍皇に関係ある奴か。確かヴァーリ・ルシファーとか言ったな、あのパーシヴァルに似た声の奴」
「ああ。リゼヴィム……リリンはヴァーリの実の祖父だ。タチが悪い祖父だぜ、あいつは。とりあえずこの場ではそれで勘弁してくれ」
「構わんさ。普段とは違う反応をするお前を見れば、そいつのやらかしは大体想像がつく。ついでに勇治に聞いておきたい。奪われた機甲神はどれだ？」
「……『月』の機甲神、アルテイヤーだ」

「よりにもよってエルガイヤーと並ぶ機体か……」

沙耶曰くリゼヴィムが『ロクでもない奴』だというのをアザゼルに肯定され、また強奪されたのはネオガンダム達の世界で失われた7体目の機甲神……かつてネオガンダムが搭乗したアルテイヤーということも知らされる。実は、このアルテイヤーがある機甲神を造られる切っ掛けになってしまうため、レジェンドはそれを危惧していた。

「一先ずリゼヴィムとアルテイヤーのことは置いておこう。で、追っている者の方は？」

「セレブロ。他者に寄生し、『文明自滅ゲーム』という最悪の行為を楽しむ外道。発展した自星の科学でその星の文明が自滅するように仕向け、それを笑いながら見ては更に引っ掻き回すような奴だ」

「……へえ？ソイツ腹立つね。捕まえて解剖してやろうかな」

勇治の言葉に、自分の発明を利用された束も反応する。束ならマジでやるから大変だ。視覚的な意味で。

「そういえば他の光神からの報告にそんな名前があったな。そいつ自身の戦闘力はあまり無いみたいなことが書かれていたが……なるほど、寄生生物ならそいつの戦闘力が無かろうが関係ないか」

「何にせよ悪趣味にも程がありますね。それだけのことをして笑って見てる……童磨を思い出します」

かなり真面目な話なのだが、しのぶが額に青筋浮かべつつ笑顔で拳を素振りしているの光景は相変わらずシュールであった。

それぞれの情報の開示も終わり、今後の予定を決めることになったわけだが――

「先生。確認しておくけど、先生達は修行のために彼方此方の異世界を回るのよね？」

「ああ。一応、拠点はこの空の世界にするのと、時折ダイブハンガーや……そうだな、惑星レジェンドにも顔を出すか。そういうことをしたりするが」
「なら都合がいいわ。私も御一緒させてもらおうかしら」
「あ、来るの？俺は別に構わんが」
「「「「軽くて早っ!?」」」」
「理由はさておき戦力としては十分だろ。何か俺の知らん間に変身出来るようになってるし」

あっけらかんと言い放つレジェンドに、ミツバは「こういう人でした」と額を押さえるハメになった。確かに彼女の戦闘力は十分魅力的だが、もっとこう……考えるとかしないのかと。

「……まあ、レジェンド様がこう仰られてる以上、私達は拒む気はありません。ただし、ここで生活する上でのルールはちゃんと守って頂きます」
「郷に入っては郷に従え、その点は理解しているわ」
「でしたら問題ありませんね。詳しくは追々説明するとして、そちらの方はどうされます？」
「……私はもう二度と大きな組織には属さないと決めた。だから――」
「超師匠、ウルトラ騎空団って大きな組織というか、大きな組織に属してる連中の寄せ集めプラス気付いたら何か色々集まって適当に出来た集団じゃないですかね」
「ゼット……お前、時々身も蓋もないこと言うよな」

勇治が何やら重い話をしようとしたところ、ゼットが遮るように意見を述べた。言っていることは事実なのだが、もう少しオブラートに包めと……いや、ゼットには無理かもしれない。
忘れがちだが、ウルトラ騎空団が出来た原因の大半はレジェンドを筆頭にゼット、我夢、藤宮、そしてリクである。

「まーそんなわけで、ウルトラ騎空団は組織というかご近所さんというか移動住宅街というか、そんな感じなのでございますよ」
「表現が独特過ぎるだろ。いや強ち間違いでもない、か……？」
「それに機甲神ってのをパクって逃げる奴とか次元を超える寄生生物とか、どうやっても一人じゃ限界があって無理っぽいし、仮に見つけてもまともにやり合えるか疑問が残るし。だったらここは人海戦術でいくのがベストでござるでしょう！」
「おー、何かゼッくん今日はまともな意見出してるねぇ」
「そうでなくてもうちは戦力的にも充実してるし、技術的にもブッ飛んでるから、ソイツらの興味をひく可能性だってあるんじゃないかと」
「ゼットさん、凄いです！」
「普段の武闘派から一転して理知的に……ゼットさん、何か悪い物食べました？」
「しのぶちゃん酷くね!?」

　束やアーシアには褒められるが、しのぶからは頭の冴えっぷりから逆に心配されてしまうゼット。レイトがここにいたら恐らくはしのぶと同意見になるだろう。

「何故そこまで私を……私達を気に掛ける？お前とレジェンドの肩の傷は女王を守って出来たもの、そして機甲神強奪は私達の危機管理能力の甘さが引き起こした結果だ。恨まれはすれど、安々と受け入れられるようなものではないと思うが……」
「恨むだけで万事解決するなら世の中イージー天国でございますよ」
「！」
「ゼットさんの言う通りだよ。俺もハッキリ言ってここにいるのは俺自身のためだし、ここにいる人達はそれくらいじゃ恨みつらみを言ったりしないって。例外はいるかもしれないけどさ」

ゼット、そして今まで静観していたほぼ巻き込まれただけの流が告げる。

「大体巻き込まれるなどと言ったら、俺は実際ゼット(こいつ)が馬鹿やらかしたおかげで、こいつが地球に来てから今に至るまで色々あったんだぞ？」

「ウルトラすいません。けど最近だと俺も超師匠の不憫に巻き込まれがちなんですが」

「そっちはすまん。というか不憫は俺だってなりたくてなってる訳じゃない」

思い返してみれば、プラズマスパーク・ブレスを忘れたおかげでレジェンドはゼットと一体化したことで、一緒に空の底へ落ちかけるわ、一定の距離以上離れられないわと何かに付けて問題はあったが、最近ではそれとは関係なくセット扱いされている程になっている。この二人のやり取りは半ばレジェンド一家、引いてはウルトラ騎空団の名物だ。

「それにうちは面倒事の一つや二つ抱えてるのなんざ当たり前でな。今後も増えそうな気がするし、申し訳ないと思うなら参加して手を貸せ。別に宇宙警備隊や銀河遊撃隊に入隊しろとか言ってるわけじゃないんだ。あまり重く考えるな」

「私も自分の心に正直になりました。だから勇治さんもそうしていいと思います」

レジェンドやアーシアも、ゼットや流に続いて勇治に諭す。彼のバックグラウンドがどれ程のものかはまだ聞いていないが、規模が規模だけに一人で抱え込む範疇を超えているのは確かである。

「……」

『マスター、彼らの申し出をありがたく受けるべきと判断します』

「「「「どちら様!?」」」」
『マスターの持つブレスレットから通信で失礼します。私はマスターの宇宙船に搭載されたＡＩのシエルです。以後よろしくお願いいたします』
「は……はぁ……」

ミツバは本気で溜め息をついた。これ、また拗れたりするんじゃないかと思い、早く休みたい反面適当なことを言えばエライことになる可能性も考え、気が重くなっていたのだが――

『マスターはいい加減クーデレを治すべきだと、常々進言していますが一向に改善されません』
「おい!!何を言っている、シエル!!」
『本当は嬉しいのに、その性格のせいで素直に礼を言えず、礼を言えぬなら離れるしかないと堂々巡りになっていることを私は理解していますので』
「あー、そういう奴なのか。仮面も嬉しさを隠すためかコレ……シスみたく仮面取ったら恥ずかしがったりテンパったりするのかな」
「ちなみに勇治には隠れファンが多かったわ」
「レジェンドも女王も変なことを言うな!」
「変なこととは心外ね。少なくとも私の侍女の一人が貴方のファンクラブ会員ナンバー３１５なのは事実よ」
「自分じゃなくて他人の情報暴露すんなよ、月の女王さん……」

ギャーギャーと騒いで賑やかになっていくブリーフィングルーム。結局勇治及びシエルもウルトラ騎空団の所属となることに、なし崩し的に決定した。

そんな二人に、ある意味最初の試練が待ち受けていた……正確には勇治の方に。それはレイオニクス――怪獣使いの宿命というべきか、

エレキングを所有していたからと言うべきか……。

「とりあえず、俺のカプセル怪獣の技術を普段のネオバトルナイザーに応用出来ないのか試したところ……こうなりました」

「何やってんだアンタは!?」

勇治のエレキングがリムエレキングとなってしまい、カナエに掻っ攫われて行ったのだ。

「可愛いー!!ハクちゃんやフウちゃん、モスちゃんと合わせてお部屋で愛でよーっと!!」

「おい待て私のエレキングを返せっ!!」

「伊黒君にそっくりな声の人、この子しばらくお借りします!!」

「貸すわけないだろう!!だから止まれ!!そして返せ!!」

ドタドタと走り去っていく二人を見た面々はこう思った……『多分彼が機甲神強奪に責任を感じている暇は無いんじゃないか』と。ウルトラ騎空団にいる限り、その通りになりそうである。

そして――

「あ、うさぴょい。ゆーくんどうなった?」

「うさぴょい……?よく分からないけど『店長』って呼ばれてる人がもの凄い笑顔で引きずっていったわ。何でも支店長候補とか」

あろうことか、軽く作って出した料理がジャグラーに目をつけられる理由となり、『蛇倉苑』支店長候補として別の技術まで叩き込まれるハメにもなっていた。

更に余談だが、うさぴょいこと沙耶の方は束、セラフォルー、ガブリエルに捕獲されコスプレをさせられることになる。セラフォルーとガブリエルだけならどうにかなっただろうが、伝説九極天の一人である束には抵抗出来なかったらしい。

「さあうさぴょい！今日から束さんをトレーナーと呼ぶがよいっ！」
「……何なの、ここ……」

彼女がそう思うのも当然である。
月神沙耶と月影勇治、そして勇治の使役する怪獣やシエル――彼らがウルトラ騎空団、もといレジェンド一家の雰囲気に染まるまで、そう時間はかからないだろう。

〈続く〉

――おまけ――

レジェンド達が話し合いをしていた頃、ある三人組の手によってエルステ帝国の機動部隊がまたも壊滅に追いやられていた。その三人とは……。

「ようド素人丸出しのお坊ちゃん。大して強くなってもいないのに、懲りずにやってくるとは諦めが悪いのか単なる馬鹿なのかどっちだろうなぁ？」

ジャグラー＆マスターフェニックス。

「その機動兵器のパイロット！命乞いをしてそのマシンから降りろ！」

厳勝（御大将モード）＆ターンＸ。

「あのさあ……俺、今凄く機嫌が悪いんだ。完全にあんたのせいなんだけど。ていうか何であんた生きてんの？」

三日月＆ネオ・バルバトスルプスレクス。

「くそぉぉぉ！覚えていろ、ウルトラ騎空団！」

『月』に因んだ三人とその愛機によって、イオク・クジャン率いる部隊は性懲りも無く敗走していった。

何故この三人が一緒なのか？それは料理長、料理人、荷物運び役で買い出しに出たうちの一組だからである。三人とも機動兵器を扱える上に生身でも強いため、クジャン隊は運が悪かったとしか言えない。誰に当たっても同じかもしれないが。

頭アウギュステな休息とこれから

沙耶と勇治がウルトラ騎空団に加入し、束とクロエが帰還した翌日

「「「「うーみー!!」」」」

紆余曲折あったが、新メンバーも含めてアウギュステでのバカンスを開始したウルトラ騎空団。今回のバカンスを終えると彼らは修行の舞台を一先ず空の世界から、ダイゴが任務で赴いた世界……コズミック・イラと呼ばれる世界へと移すことになる。

今のところ、全員がそちらに行くというわけではないが、それでもこうして無事に騎空団全員がバカンスを過ごせる機会などなかなか無い、との理由から殆どのメンバーははしゃぎまくりだ。

ではそんな彼ら・彼女らのバカンス具合を少しばかり覗いてみるとしよう。

☆

○オカルト研究部＆生徒会＋α

遊ぶのも良いが、やはり異世界修行という本筋も忘れてはならないということで、遊びつつ修行が出来る方法をまさかのゲンが発案。ちなみに、やはりというか脱いだ彼はガッチリしていた。

「うお、師匠身体スゲー……！」

「そりゃお前、生身で親父に無茶な特訓させられて、それを切り抜けてきた漢だぜ？当然だろ」

一誠と、完全復活したレイトが会話しているとトライスクワッドは何やら話し合っている。

「遊びながらやれる修行って何だろ？」
「うむ、マッスルポーズを海中でどれだけ長時間やれるか、ではないか？」
「いやいくら海中では動きが制限されるからってそりゃねえだろ」

しかもそれはタイタスにとって修行どころか、単なるご褒美のような気がしないでもない。

「よし！オカルト研究部と生徒会は全員揃ってるな？参加は希望者のみだが、見学は自由。修行も兼ねているが、息抜きになるようにもするから安心しろ。まず今回協力してもらう煉獄杏寿郎君とパム治郎だ」
「パム～」
「よろしく頼む！しかし、こうして砂浜ごしに海を見れるとはよもやよもやだ！お館様や皆との出会いに感謝せねば！」

煉獄カラーの海パンを装備した杏寿郎と、麦わら帽子に加え専用のライフジャケットを装備したパム治郎。なお、例の如くカナエがパム治郎を見て悶えているのはお約束。

「さて、今回はな。最初に男女に別れてもらう。やることが変わってくるからな」
「おおとり師範、パム治郎君はどうするんですか？一応オスですけど」
「いや、杏寿郎君とパム治郎は独立……むしろ彼らを確保するのが目的となる」
「へ？それじゃあ流石に煉獄さん達が不利過ぎじゃ……」
「そう思うだろうが、条件として彼らは全集中の呼吸やタマフリは使用可能。反対にお前達はあくまで身体能力のみで確保してもらう。加えて、男子が杏寿郎君、女子がパム治郎をそれぞれ確保し、双方確保出来て初めて達成とする」

予想以上にハードだった。なにせここは砂浜、いつもと違い砂に足を取られやすく、さらに相手は全集中の呼吸で身体能力が桁違いに上がっていたり、パム治郎は空まで飛んでいる。一応飛べる高さに制限はつけられたが、それでも砂に足を取られないだけでもアドバンテージはあちらが上。

「それから、当然パム治郎以外が空を飛ぶのも禁止だぞ。あとフィールドの範囲としてはここからあそこ、海の部分は水位の浅い場所……海水が足首に当たる程度の場所までだ。大体あの辺りだな」

「つまり煉獄さんの身のこなしや、パム治郎の飛行能力を考えつつ、呼吸法やタマフリにも警戒しなきゃいけないってことか……！」

「ビーチフラッグの特別版みたいなモノね。面白そうだけど、やるからには全力でやるわよ！」

勝負事には全力なリアスが燃えている。相変わらず見事なスタイルを披露しており、空の世界基準でもヒューマン（悪魔だけど）かつ年頃にしては発育が良過ぎなこともあって、何かと視線を集め気味。

ついでに今回のバカンス、かのベネーラビーチをアウギュステ側が貸し切りにしてくれており、他の客の迷惑にはならないのでそこも安心だ。

「私はカナエの方が心配ですわ。確保対象がパム治郎君と知ってから、変にやる気を出していますもの」

「パムちゃんパムちゃんパムちゃんパムちゃん……」

「「「「怖っ!?」」」」

「ストッパーとしてしのぶさんも呼ぶべきだったのでは……？」

朱乃の言葉に全員がカナエを見てみれば、呪詛のようにパム治郎の名を繰り返しながら手をワキワキさせるカナエの姿が。小猫の呟きは最もだ。

かくして、『炎柱とムーキットをゲットせよ！』修行が幕を開けたの

であった。

「よし！ここで……うわっ!?」
「くっそ！木場の機動力でも厳しいか！」
「マズイぞイッセー！タイタス、いつの間にか下半身が砂浜に埋まってて上半身だけでポージングしてる！」
「いやどんな状況だソレ!?」
「お前らはまずタイタスを引っこ抜け！俺は……わぷっ!?」
「今度はゼロ隊長が海水でスブ濡れになってんぞ！」

「パムちゃーん!!へぶっ!?」
「カナエの飛びかかりを華麗に避けた!?」
「危機察知能力が増してますね」
「あらあら……こうなるとここは『戦車』の小猫ちゃんが活躍するのでは？」
「ちょっと厳しいです。カナエ先輩を避けたとなると私でも捕まえられるかどうか……」
「何としても捕まえなければまた師範に……！ん？そういえば師範は？」

☆

○サーガ＆神衛隊

海にはやはり海の家、定番である。そこである一人の人物が焼きそばを作っていた。
アロハシャツにサングラス、ハーフパンツといった服装で料理しているのは何を隠そう継国巌勝。こんな服装で料理をしている姿を見たら、元の世界の鬼狩りやら鬼やらは彼がかつての十二鬼月・上弦の

壱など言われても信じられるだろうか。

「よし……カミナ、三日月。完成だ」
「うっしゃあ！待ったぜ巌勝!!」
「良い匂いがする。巌勝さん、あれは？」
「急かすな三日月、しっかり準備してある」

巌勝は仕上げとばかりに三日月の焼きそばに満遍なく辛子マヨネーズをかけ、カミナの焼きそばにはたっぷりの胡椒。もはや二人は流れ出る涎を隠そうとすらしない。

「早速頂くとするぜ！」
「うん。いただきます」

テンションが正反対の二人だが、凄まじい速度で焼きそばを啜っていくのはそっくりだ。その合間に既に用意していた白米も食していく光景は一種のフードファイト。

「くぅ～！胡椒が効いてて飯が進むなあ、オイ！」
「野菜に絡む辛子マヨネーズが良い感じ。やっぱり辛いものは正義だ」

そんな二人を笑って見守る巌勝だが、彼らの他にも海の家で寛いでる者達は大勢いる。シモンとニア、ヴィラル親子、狛治と恋雪……ってリア充ばかりじゃねーか。
彼らから少し離れたところでは、グラハムが冷やし中華と格闘し、竜馬は何故かデストロイモードに変形した特大スイカとタイマンで戦っており、マリーダはそれを見て呆然としている。そらそーだ。

「そういや大将はどーした？ユウキとアカネが来たっつーことは十中八九あいつらに振り回されてんだろ」

「カミナのアニキ、ズバッと言ったね」
「事実だがな。サーガ様は先程までアカネ殿にオイル塗りをしたあと、ユウキ殿や他のメンバーとビーチバレー。そろそろゲン殿監修のオカルト研究部や生徒会合同訓練に顔を出す頃だろう」
「ここまで来て訓練たぁアツくなってんじゃねえか。ちょいと俺も付き合ってやるとすっか！それと厳勝、こいつぁ差し入れだ」

ヒョイとカミナが軽く投げたのは良く冷えたスポーツドリンク。厳勝は難無くキャッチし、一気に飲み干すといい感じに身体が冷えてくる。

「礼を言う。もう少しで私も上がるのでな、夕餉の仕込みをしたら軽く一眠りさせてもらおう。因みにいよいよ今日はコジロー殿が冷凍保存していた、あのマグロを捌くそうだ」
「マジかァ!?こいつは腹空かせとかねえとな！」
「俺も行くよ、カミナのアニキ。バコさんのマグロ解体ショー、あれ凄すぎだしマグロも美味いんだよね。ちゃんと沢山食べれるよう運動しておこう」
「っしゃあ！行くぜ三日月！紅蓮のトップと鉄華のエース、特訓場に殴り込みだぁ!!」

グラサン装備で三日月を引き連れ、一誠やリアス達のいる場所へ突っ走っていくカミナ。その後ろ姿を笑みを浮かべて見送りつつ、新たに来た人物に焼きそばを作る厳勝。

「さて、量の希望は？」
「我、爆盛」
「私もです！」
「ボクもー！」
「三人とも、夕飯食べられなくなるぐらい食べちゃ駄目よ？」

オーフィス、ルリア、レヴィのレジェンド一家大食い娘三人衆とその保護者役のアマリ、御来店。

☆

○グラサイ組＆ムサシ＆アサヒ

「んじゃグラン、私はタイガ達のとこで一緒に訓練してきまーす！」
「オイラは団長の兄ちゃんのとこにいるメイドの姉ちゃんにリンゴジュース作ってもらう約束してるんだ！また後でなー！」

準備の出来たジータとビィはそそくさと目的の場所へ突撃。オイゲンは何やら褌装備、ヴィーラはカタリナの水着姿を見て色々ヤバい。

そんな中で唯一人、彼だけは留守番を申し出た。

「しかし、良いのかムサシ殿……一人だけ留守番させてしまって」
「気にしないで下さい。ちょうど妻や息子と通信しながら近況報告したかったし、チーフのおかげでこの騎空艇の防備やセキュリティも強化されてますから、あまり苦じゃないですよ」

確かに既に飲み物が多数入ったクーラーボックスや軽食などをスタンバイし、まったりしながら次元間通信する気満々なムサシ。単身赴任だが理解ある家族に恵まれた彼にとって、画面越しとはいえ妻子との一時は何より英気を養える方法なのだ。

「すみません、ムサシさん」
「いいって。イオちゃんの快気祝いも兼ねてゆっくりしてくるんだよ、グラン君。このバカンスが終わったら今度は別の世界で修行だからね。あ、グランサイファーはちょっとやらなきゃいけないことがあったか」

「やらなきゃいけないこと？」
「確かグランサイファーはそのままだと行けないから、グランサイファー本体をそのままコアにして、外部装甲みたく新しい船にするんだって。チーフが東博士と相談してたよ」
「グランサイファー本体をコアに、ってことは別に解体するとかそういうワケじゃねぇんだよな？」
「はい。ただ、騎空艇の上半部と下半部をピッタリくっつけられるようにとか、細かな改造はするみたいですけど、外観上はあまり変化しないようにすると。思い入れがあるだろう艇を大きくいじったりはしないそうです」
「それを聞いて安心したぜ。どっちにせよ、グランサイファーは機動力はあっても武装とかはトリガーの援護にもならねぇ威力だしな。相手が今までと違うってのもあるけどよ」

ムサシの説明にラカムがホッと胸を撫で下ろす。近くにいた艇造りの星晶獣にしてグランサイファーを造った存在であるノアも同じ気持ちのようだ。

「ま、その話は後にして行った行った！何にせよ休める時に休んで、遊べる時に遊んどかないと」
「え、あ……ハイ！」
「それじゃあ私も行きますね、ムサシさん！ハッピー！」

グランサイファーから出ていってオカルト研究部らのところに合流しようとするアサヒにフーマが反応したのが見えた。彼女を皮切りに、イオに手を引かれたグランや、それを微笑ましく見つつゆっくりと歩いていくロゼッタ、幽霊だけど大丈夫か不安なフェリなどもそれに続く。

「昔は僕もスキューバダイビングとかやったよなぁ……やらされたのか、あれは」

シャウやジーンと出会った時を思い出しつつ、ムサシは寛ぎながら通信を始めるのだった。

☆

○エリアル・ベース組

「どうかな？俺の水着は！」

堂々と言い放ったシエテが装着しているのはブーメランパンツ。細マッチョ体型なおかげで似合ってるのは褒めていいのだろうか……。

「それを俺達に見せつけてどうする気だ？ただゲイボルグで尻を狙いやすくなっただけに見えるが」

「まだ狙ってんの博也ちゃん!?」

「ちゃん付けやめろ」

ジト目でカウンターを放った藤宮にシエテは愕然とする。どうやらまだ以前の事を根に持っているらしい。

「我夢は藤宮同様にビーチには行かないのか？」

「ええ、まあ。ただ仕事するとかじゃなくて、折角だからこの機会に空の世界で手に入れた本でも読もうかと思って。ジークフリートさんのおかげでこの世界の言葉も大分読めるようになりましたし」

「すげーな我夢……俺なんてまだまだ勉強中なのに」

「そのジークフリートはどうした？」

「チーフから本を借りてこれから一緒に読書するんです。確かチーフの冒険譚を記した『マルディアス戦記』を可能な限り読破するって言ってたなぁ」

我夢はジークフリート以外の三騎士……ランスロットにヴェイン、パーシヴァルと話していた。
ここにいないジークフリートが借りたというマルディアス戦記とは、その名の通りレジェンドがマルディアスという異世界を冒険した記録が事細かに小説として書かれたもので、惑星レジェンドでは人気の一品。なお、巌勝が継承した鬼神刀はそのマルディアスで手に入れた物だ。

「それ、何巻あるんだ？」
「確かＡ４版サイズ……大体このくらいで、チーフ直筆の挿絵や解説付き各５００ページ、上中下全三巻」
「そんなのを執筆出来るって、あの人の出来ないことって何だ……？」
「分からん。ジークフリート並に何でもやるからな」

『さすがジークフリートさん』で有名な彼も相当だが、レジェンドはそれに輪をかけた万能ぶり。なお、彼らは知らないが、誰かが聞いた『レジェンドがナンパは苦手』と言っていた理由は本人いわく「ナンパしてる自分をイメージした瞬間、鳥肌が立って拒否反応を示すから」とのこと。

「あ！我夢、頭（かしら）知らない？多分エリアル・ベースにはいないと思うから、これからヒリュウ改に行ってみようと考えてるんだけど」
「チーフならユイシスさんの予想通りヒリュウ改に残ってるそうですよ。なんでもダベりながら惑星レジェンドと映像通信するって言ってたし」
「そう、ありがとう！ジャグラー店長のところに新人来たっていうし、時間があればそっちにも皆連れて行こうかしら」

言わずもがな、先日ジャグラーに捕獲された勇治のことである。それから、リムエレキングはあの後レジェンドの手助けで無事奪還さ

れ、現在勇治の部屋の充電器の上で充電してるらしい。
そうなるとうさぴょい……沙耶やますます火野映司化してきた流は？

☆

○一部のウルトラ戦士や関係者

「……シーフードカレー、大盛りだ」
「ありがとう、月影さん」
「勇治でいい」

ヒリュウ改の食堂にて、ジャグラーと一緒に料理していた（させられていた）勇治は、涼し気な服装でわざわざカレーを食べに来たミライに料理を提供していた。

「むぐむぐ……おお、そういや今日は晩飯にマグロ出るってよ。あと誰かカツオ？じゃねえ、カツウォヌスだ。ソレ取りに行くとか言ってたし、その分の腹残しとけよ」
「アスカさん、そう言っていながら普通に大盛り食べてますよね」
「いやだって美味いんだもん」

その隣ではアスカが天丼を食べている。
そして何というか……。

「戦士の頂盛りにリベンジするために胃を鍛えないとな。ジャグラー、まずは玉子丼大盛り」

「だぁかぁらぁぁぁ!!何でお前はいつの間にか紛れ込んでんだよガイイイイイ!!」

やっぱりガイがいた。ジャグラーの言う通りいつの間にヒリュウ改に乗ってたんだこの人。ちなみに近くにいた艦長(ミツバ)も、ガイを見て飲んでた水を噴き出した。

「何言ってんだよ。俺とお前の仲だろ?」

「そもそもここは戦艦だぞ!?ほら見ろ!お前のせいで艦長が水噴いて咳き込んでるだろうが!」

そんなミツバの背中をアズが心配そうに擦っているが、ミツバは内心アズに擦られて幸せ状態。もう一人、レジェンドがいればと思っていたところにガイが何やら紙を取り出した。それにはこう書かれている。

【ウルトラマンオーブ=クレナイガイ。ヒリュウ改にて専用機を受領し、コズミック・イラにおけるオーブ連合首長国の当面の間の守護に当たるべし。レジェンド属するウルトラ騎空団も向かうため、任期並びに以後の活動はそちらと合流後、指示を仰がれたし。】

……最後には銀河遊撃隊総司令官ウルトラマンベリアル、と書かれてあった。つまり正式な指令文書である。

これを見せられたミツバはテーブルに勢いよく突っ伏すみたく頭、というか額を激突。本気でアズが心配しはじめたが、さすがに今のミツバにそれを喜ぶ余裕は無い。

「この間、束博士が帰ってきた時に新型機を持ってきたとか言っていましたが……貴方のだったんですね……」

「ミツバ艦長大丈夫ですか？」
「ええ、大丈夫ですよアズ。そうなるとレジェンド様……は、今回知りそうにないですね。だとすると束博士かクロエさん、むしろ後者はしっかり報告するでしょうから……はぁ」

例によって束の報告不足ということである。というのも、ジャグラーがレジェンドから専用機を貰ったということを知ったガイが、それを羨ましがったことでベリアルと通信中の束が聞き、張り切ってしまった結果だ。
レジェンドには自分から伝えておく、と言った束を信用したベリアルには罪は無い（というより最初はベリアルがレジェンドに直接言うつもりだった）。

「ふふん」
「得意気な顔すんな。こっちはもう戦果上げてるし、何よりこっちじゃ先輩だぞ」
「そりゃ、ジャグラー先輩のように彼女は出来てないけどな」
「オイコラ今何つった彼女って誰だ彼女って」

ニヤリと笑ってガイが指さした先には……。

「ジャグ、今日も絶好調ね！」
「サギリは本当によく食べるのじゃ……」

サギリと九重がセットで食事中。九重がレジェンドに恋慕しているのをガイは知っているため、必然的にサギリを示していることになる。

「ジャグ、ってお前いつの間にそんな渾名貰ったんだよ？しかもお前、普段はヘビクラとか名乗ってなかったっけ？それなのに本名の方の渾名を貰うってことはもう……コレだろ」

「小指立てんじゃねえええ!!さっさと食ってレジェンドんトコ行ってこいオラァ!!」

激昂しながらも調理の手を止めるどころか加速し、かつ味を落とさずという点ではさすが店長。ガイはニヤニヤしつつも、しっかりいただきますと言って食べ始めた。

「……なあ、ホントに大丈夫か？艦長さん」

「一応僕の方からもチーフに連絡しておきますので……」

「……ありがとうございます、アスカさんにミライさん」

二人のバカ騒ぎっぷりに気の毒になったのか、アスカとミライからも心配されるミツバ。今の彼女には覇気が無い。

後日、卯ノ花のところへカウンセリングに通う彼女の姿があったとか。

☆

○レジェンド＋α

レジェンドはヒリュウ改の自室で寛ぎながら、惑星レジェンド――正確にはそこに属するスペースコロニーに出向中の、ある人物と映像通信している。

「それで、コロニーでの生活には慣れたか？」

『うん。ありがとう、無理を聞いてもらって』

「気にするな。俺にせよアムロにせよ、この程度で無理とも迷惑とも思わん」

『それでもだよ、養父（とう）さん』

レジェンドを養父と呼んだのは、カナエ達が『弾かれ』てきた頃と

ほぼ同じ頃に魂が偶然惑星レジェンドに流れ着いた、皇（すめらぎ）ライという青年。C・C・の出身世界の並行世界の人物だ。

「しかしまあ、元の世界で色々あったのにまた戦場に出んでもいいだろう？お前もモニカも家庭を持ってのんびりすればいいというのに」
『家庭持ってのんびり、は魅力的だけど……結局僕達が父さんに出来る恩返しはこれぐらいしかないし。それにさ、家庭持ちながら戦ってる人もいるでしょ？特に神衛隊側に』
「そりゃあなぁ……畜生、リア充爆発しろ」
『それ父さんも盛大に大爆発するからね』

キノコ雲出来そうなくらい、と苦笑しつつライが言うもレジェンドは理解出来ない。そんなレジェンドの首の後ろ辺りに柔らかいモノが当たり、頭に腕が乗せられた。

「なんだ、珍しい奴と通信してるじゃないか」
「C・C・……この際だから体勢は別にどうでもいいが、この状態でピザを食うな。俺の頭に零れたらどうするんだ」
「安心しろ。ピザに限ってそれはない」
「コーヒーとかだったら零すかもしれなかったってのかオイ」
『あははは、『こっち』のC・C・は相変わらず向こうより活き活きしてるね』

薄着のC・C・がレジェンドとライの通信に割り込んできたのである。ピザを片手に。

「『そっち』の私がどうだったのか知らないが、私は私だからな。尤も……私やレジェンドがあっちを離れる前に少しだけ見た、あの全身黒ずくめで珍妙な仮面を被った奴と私が共犯、と聞いた時には別の意味で絶望したが」
「ああ、アレか……どことなくメフィラス星人に似てるような似てな

いような怪人」
『怪人って……いや、否定出来ないや』

ルルーシュ・ランペルージことルルーシュ・ヴィ・ブリタニア扮した『ゼロ』のことである。散々な言われようだが、確かにゼロはゼロでもウルトラマンな方があれを見たら発狂しそうな気も……自称弟子もか。

「それにしても、よく彼女と上手く行ったよな、ライ。敵同士だったんだろ？」
『そうだけど、あまり面識なかったし。最後にモニカを撃墜したのスザクだから、恨まれるとしたらあっちかなぁ』
「レジェンドが説明したとはいえ、その『ゼロレクイエム』とやらの人柱になったのならば、少なからず悪名はあったのだろう？そこを踏まえてもよくやるよ、お前は」
『どっちかっていうと一応そうなったの一通り決着がついてからだしね。教えはしたけど、気にしないって』
「畜生リア充爆発しろ」
『父さんそれ今日二回目。しかもさっき言ったばかりだし、むしろ今の父さんの状況モロにそれだからね？』
「しかも義理とはいえ息子に何を言ってるんだ」
「羨ましくなんかねーぞコノヤロー」
『逆だから。父さん羨ましがられる側だから』

C．C．も交え、賑やかな会話をする三人だが、ふとライが気になったことを聞く。

『ところで今度行く世界、ＭＳがあるんだって？』
「ああ。ダイゴが一足先に行っていたが、どうやら現状だと陣営によってＭＳとＭＡか主軸が分かれるらしい」
「つまりその二種類はほぼ同格と扱われてるのか。シミュレーターで

相手にしたＭＡは化け物揃いだったがな」
『さすがにノイエ・ジールとかクィン・マンサみたいなのが当たり前な世界じゃないとは思うけど』
「そうだ。ダイゴに見せてもらったが、ぶっちゃけボールよかマシといったところだな」
「動く棺桶よりマシって何だそれは」
『言った機体に届かないどころか、さすがにそれは貧弱過ぎない？』

なお、その機体の名前はメビウス……同じくメビウスの名を持つウルトラマンとは雲泥の差だ。量産型だしそこは仕方ないのかもしれない。

「そんな世界だし、せっかく決意してくれたのなら少しでも戦力が欲しくてな」
『なるほど、だから僕に近況報告がてら連絡してきたんだね』
「だが、一つ問題が起きた」
『え？』
「アムロが指導したからか、もしくはお前達の素質が元々ずば抜けていたからかは分からんが、お前達の成長度合に見合った機体が無い。専用機を一から造るにしても時間も無いし、ついでと言っちゃ何だがモニカの得意とする接近戦重視の機体は用意するのが更に難しい。ＰＴや特機ならともかく、ＭＳだと一年戦争時代ならいざ知らずそれ以降やグラハム達の出身世界では限られるからな」
「適当な機体を見繕って、当分の間はそれで我慢してもらうというわけか」

元々ライにせよ、モニカ……元ナイトオブラウンズのモニカ・クルシェフスキーにせよ前線で活躍していたのだ。生半可な機体では思うように動けず、返って危険な目にしか合わない。
そこでどうするか考えたところ、ライの方は割と簡単に候補が絞れたのだが、相方のモニカの得意な分野が接近戦……ライとのコンビで

考えるなら相性は文句無しなのだが、如何せん接近戦型の機体が少ないため選択に困る。

「デカい刀や剣の一つでもあればな……エクシア系列はあれもあれでクセがあるし」

「ライの方は何にする気だ？」

「以前ゼットが言ってたデルタカイだ。ナイトロ外して適当な補助を突っ込めば良い感じに仕上がるだろ」

『となるとやっぱりモニカの方かぁ……』

『私がどうしたの？ライ』

ひょこっとライの横からモニカが顔を出した。この二人、現在同棲中。

「お、ちょうど良いところに」

『あれ？レジェンド様と通信してたのね。ご無沙汰しております、レジェンド様』

「ああ。せっかくだし本人の希望も聞いておくか」

その後、モニカから出た言葉は『接近戦が得意だけど割と何でも大丈夫』だった。伊達にナイトオブラウンズという称号を持っていたわけではない。

結果として、リ・ガズィカスタムがモニカの専用機として一先ず用意されることになった。ビーム・サーベルがハイパー・ビーム・サーベルになっていることもあり、デルタカイ同様に変形も可能という部分から選択され、運用方法も両機がある程度似ていることで組ませやすくなる。

「あとはあっち側で参考に出来るものがあればいいんだがな。そこは追々詰めていくか」

「そもそも今はバカンス中なのに、そこまで真剣に話し込んでどうす

る。あっちも見たところ似たような状態だぞ」
「……ちなみにライ、モニカ……今コロニーの何処で何してる？」
『『ホテルで夕食待ち』』
「Ｃ．Ｃ．のピザと合わせて腹減ってきただろうがコノヤロー」
『いや僕達悪くないでしょ!?』
『ていうかＣ．Ｃ．！貴女レジェンド様の頭の上に腕乗せてピザ食べるのはやめなさい！』

結局最後はグダグダな会話になったが、逆にそれが今までの疲労が溜まっていた身体を癒やす結果になった。
合流に関しては二人の当面の専用機であるその２機が完成してから、ということに落ち着き、アムロや皆によろしくと伝言を頼み通信を終える。

「さて……夕飯までまだ時間があるな。どうするか……」
「どうするも何も決まっているだろう？私を構え」
「構えったって何を……」
「頭ー！」

するんだ、と言いかけたところで笑顔のユイシスがレジェンドの部屋にやってきた。しかも、シュテルやしのぶ、さらに珍しく涼子まで連れて。

「しのぶと涼子なら医者という括りで分かるが、そこにシュテルやユイシスまで絡むとはよく分からん組み合わせだな」
「ユイシスさんに誘われたのよ。まあ、バカンスといってもこれと言ってやることは無かったし」
「レヴィもそうですが、ディアーチェとユーリも出かけてしまいましたので」
「卯ノ花先生も今日はお休みだそうです。その関係で私もお休みを頂いたのですが……」

「そういうわけで、頭も誘って食べ歩きしようかなって。あ！勿論、夕食が豪華になるらしいから程々にだけど」
「そうか……偶にはいいか」
「そうなると必然的にゼットもついてくるんじゃないのか？」
「ああ、位置がある程度はっきりしていて、かつ距離もそれなりまでなら離れても大丈夫だと最近判明した。その証拠に今あいつはベネーラビーチにいるが、以前はそんなに離れられず一緒に空の底に落ちかけただろ？」
「そういえばあったな、そんなこと」
「そういうわけで、御一緒させてもらおう」

レジェンドのその一言でユイシスは喜び、シュテルやしのぶも顔には出さないが嬉しそうだった。そこに更にＣ．Ｃ．は勿論、偶然通りかかった沙耶やニオも加わった大所帯になり、レジェンド達は夕食前までアウギュステの街を散策がてらぶらつく事にする。
その際、基本的に問題はなかったのだが、ある珍事件？が発生した。とはいってもレジェンドとシュテルには見慣れた光景ではあったのだが。

「にゃー」「にゃー」「にゃー」
「みゃーん」「うにゃあ～」「みぃ～」
「「「「……」」」」
「「「「にゃーん」」」」
「相変わらず猫に好かれるな、シュテル」
「私も何故か分かりませんが……」

シュテルの後ろに猫が大量についてきており、さながら大名行列。町中でも目立つことこの上ない。

「にゃ～ん」
「もふもふ……ふわふわ……」

そのうち一匹を沙耶が抱きかかえていた。どうやらこの手の動物に弱いらしく、一番は兎とのこと。
それから……珍しく、レジェンドの不憫が炸裂しなかった。
「余計なお世話だコンチクショー」

☆

そして、いざ夕食の時刻。
以前来た時に世話になったカッタクリという老漁師も加えて夜の海の家（シェロカルテ所有。彼女も参加する条件で借りた）及びその周辺ではウルトラ騎空団による食事会が開催された。
ここで出たのが三大種族会談以降、待ち焦がれていたイナバ・コジローによるマグロ解体ショーである。
惑星レジェンドにおいてサーガが拠点とするアクアエデン、その周辺のみで僅かに捕れる超高級魚『トゥインクルマグロ』。部位の光沢さえ素晴らしいそれは調理にも特殊な技術を要する食材であり、かつ大きさも数mという特大サイズ。
コジローはそれを捌ける数少ない人物なのだ。
眼鏡がキラリと光り、コジローは自前の特製包丁二刀流を凄まじい早さで振るい、通常の板前では表面を傷付けることさえ不可能なトゥインクルマグロを瞬く間に捌いていく。

「え、何アレ全集中の呼吸使ってんの？」
「使えてても凄いが使ってなかったらもはや超人だろ」
「レジェンドちゃんレジェンドちゃん、お姉さんがあれやったら褒めてくれる？」
「切れても上手く調理出来ないだろうからやめときなさい。アレ一匹で数百万するからな……いや、大きさ的に数千万か」

レジェンドの呟いた額に大半の者の顎が外れ、ロスヴァイセが失神寸前に陥った。そんなものを平然とサクサク解体するコジローは、流石かつてレジェンドお抱えの部隊に属していただけのことはある。

「ようし終わったぞ。では……マグロ、ご賞味下さい！」

「「「「うおおおおお!!」」」」

早速争奪戦が始まったが、コジローはある程度皿に分けていてくれたようで争奪戦に加われないメンバーもちゃんと食すことが出来そうだ。あの一瞬で恐るべき気配り上手。

そこで、レジェンドがまたもやらかした。ただし、これは良い方かつ画期的なことを。

「これでよし……と。ヒリュウ改とかウルトラ騎空団所属の艦や艇にはちゃんと施したし、この場も包み込んだ」

「何です？レジェンド。あまり待たせるとイッセー達に悪いし――」

「タイガ、お前とゼットがその姿でまずマグロ食ってみろ。あ、米は用意した方がいいぞ。あとワサビはお好みで」

「ええっ!?」

タイガとゼットの声に周りが何だ何だと振り向くが、二人はそれどころではなかった。その姿――つまりウルトラマンのまま、レジェンドや一誠に身体を借りずに食べてみろなどと言われても不可能だろう……そのはずだったが。

「いやいや超師匠それはさすがに無茶過ぎません？口元に箸がぶつかるだけっぽいんですが」

「普通ならそうだろうな。ま、騙されたと思ってチャレンジしてみろ」

「わかりました……」

まずタイガがレジェンドに食べ方を教わり、ワサビ醤油を赤身につ

けて口元に運ぶと、マグロが光になってタイガの口の部分に吸い込まれる。周りが驚く中、一番驚いたのはタイガ自身であった。

「……!!」
「おい、タイガ……？」
「わかる……！」
「わかるんだ、イッセー！このマグロの味や食感が！ちゃんと味わえてるんだ！ウルトラマンのままで!!」
「「「「えええええ!?」」」」

それを聞いたゼットもマグロを同じようにワサビ醤油につけ、それを白米の上に乗せて口元に掻き込むと、それも光となってゼットの口部分へと吸い込まれていく。

「ウルトラ美味いぜー!!」
「「「「何ですとぉぉぉ!?」」」」

幻でも何でもなく、ガチだった。
誰もがレジェンドを見ると、案の定得意気な表情でまぐろたたき丼を作って食べている。

「ちょっとレジェンド様！一体何をどうやったの!?」
「アレをコレしてウルトラマンのまま食事を可能にしました。俺、凄くね？」
「凄いどころか前代未聞ですよチーフ!?」

彼の話によると、特定の範囲内にウルトラ族に対応した特殊なフィールドを形成することで、料理を光に変換、さらに吸収する際に味や食感を残したままにすることが可能となり、こうして共に食卓で料理を味わえるということらしい。まだまだ改良しなければならない点があるためフィールド形成可能な場所は限定されているが、将来

的には光の国でもウルトラ族が食事する光景が見られるかもしれない……とのことだ。
　どうやらタイガは一誠の身体を借りるのではなく、いつか自分の身体で一誠やリアスと共に食事をしたかったらしい。正にそれが叶って泣いてしまい、それに釣られてタイタスやフーマ、それに一誠やリアスまで嬉し泣きするという、ある意味大惨事になってしまったがこれは別に良いだろう。

「レジェンドさんってホント何しでかすか分かんないね」
「おーうリッくんや。ギャラクシーライジングを手に入れて帰ってきたわけだし、実際のギャラクシー消し飛ばしたらどうなるか試してみようか」
「本気で出来るだろうからやめて下さい」

　レジェンドはキレたらガチでやる、リクは既にそれを学習しているので深くは追求しない。ノアと技の撃ち合い（殴り合い）しただけで宇宙一つ消し飛ばした前科があるし。

「……リク、戦争に参加したことのあるベリアルを父に持つお前には先に言っておく」
「レジェンドさん？」
「次の修行の舞台となる世界、そこでは今までより遥かに凄惨なものを見る事になるだろう。人と人とが理不尽な理由で殺し合う光景を目にするかもしれん」
「……」
「こんなことを言いたくもないし、そうならんよう立ち回る気ではいるが……最悪、この場の誰かが命を落としてもおかしくない。戦争とはそういうものだ。望む望まぬを関係なく、命の光を奪っていく」
「……でも、彼らには必要なことでしょ？悪魔、天使、堕天使……そして人間、他にも色々な種族が生きている世界なら、戦争したくないと言っても全員が全員そういうわけじゃない」

ティガ――ダイゴから休養している時に一足早く、リクはその世界について聞いていた。人と、そして人によって遺伝子操作されて生まれた人による戦争が起きている世界。ダイゴは理解ある人物達に出会えたが、そもそも彼が出会ったのはあの世界に生きる人々のほんの僅かでしかない。

「そうだ。コカビエルのような奴がいないとも限らん。心を持つ者の数だけ、思想というものは存在する。ある男が言った……人が、人を許さない限り、争いはなくならないと」
「……その通りだ、先輩。俺がモデルにした人間……イノベイターはこう考えていた。『示さなければならない、世界はこんなにも簡単だということを』と」
「……サーガ」
「俺達が手を貸し過ぎてはいけないというのは分かっているが……それでも手を貸さずにはいられない。人が諦めなかったからこそ、顕現出来た……俺達だから」

いつの間にか近くに来ていたサーガが迷い無く告げる。レジェンドとリクも彼と思いは同じ。

「そのためのシステムが俺の機体にはある」
「クアンタムシステムか」
「だが、システムだけに頼ってはいけない。そこに生きる者達が分かり合おうという気持ちを持たなければ」
「なら、その手助けくらいしても問題ないよね」
「そういうことだ。まあ、力技になるときもあるだろうが」
「先輩の場合、機体が機体だけに力技一発でも致命傷になる気がするが」
「そういうお前のダブルオークアンタも似たようなもんだからな？」

少しシリアスにはなったものの、漸く彼らもまた笑うことが出来た。そんな彼らのもとへ、彼らが良く知る者達がやってくる。

「リク兄さん、たまには夜食にカップラーメンでもいいと思います」
「ギャスパー、食べ過ぎは駄目だぞ。リク、君からも――」
「よしギャスパー君、シーフードヌードルいこう」
「ジィィィドッ!?」

カップラーメンに釣られたリクとギャスパーに、バーンの叫びが炸裂し。

「ソランさん、お刺身どうですか?」
「サーガ様ってベジタリアンじゃなかったよね?ボクが取ってきたからたくさん食べよう!」
「ユウキってばサーガ君のためにマグロ争奪戦でしっかり確保してもんね~」
「ありがとう。もらお……ゼノヴィア、どうした?」
「……周りが異常に強過ぎて……」

ゼノヴィアは料理が絡みバーサーカーと化したウルトラ騎空団(今回は三日月や竜馬が特に)相手にマグロ争奪戦を挑むも惨敗だったらしい。相手が悪かった。

「超師匠ォォォ!!沙耶ちゃんとアーシアちゃんが大変なことにィィィィィ!!」
「何だと!?何があった!?」
「誰かが間違って酒の類を飲ませたらしくて、今にも服を脱ぎ出しかねない状態でございます!!」
「何ィィィィ!!つーか沙耶は酒に弱かったんかい!!」
「ついでにミツバ艦長も酔ってアズちゃんを襲いかけてます」
「何サラッととんでもない事言ってんだオメーは!?そっちも一大事だ

ろーがァァァ!!」
「あとオーフィスちゃんとルリアちゃんがフードファイト始めて、アマリちゃんも酒飲まされたけど泣き上戸だったそうで、カタリナさんに愚痴りながら泣いてるでございますよ」
「結局カオスじゃねーかバカヤロー!!どいつもこいつも『彼女らを止められるのはただ一人、俺だ!』状態にして俺に丸投げするなよ!!あと沙耶とアーシア、それにミツバを止めずもっとやれ的なことを言ってる奴ら目潰しするから覚悟しろコルァァァ!!」

長らく控えめだった分、久々にレジェンド怒涛のハイテンションツッコミが炸裂。まずシラフなアズを救出し、ミツバに抱きつかれながらアーシアに近付くと、逆に沙耶と一緒になって衣服を剥ぎ取ろうとしてくる。

「おいコラ何やってんだ!アーシアちゃん沙耶ちゃんミツバちゃんやめなさい!レジェンドさんは屈しませんよ!!」
「嫌れす!レジェンドしゃまが構ってくれないのがわるいれす!」
「呂律回ってないぞアーシア!沙耶は兎のぬいぐるみでももふもふしてなさい!ほら特大の!」
「もふふ〜……」
「ミツバは今更脱ぎ出すな!」
「暑いんですもん」
「ジャグラー&勇治&明日のパンツ!とびっきり冷たいお冷プリーズ!!」
「ったくガイ、お前も手伝……って!!面倒事が起きてる時だけ風来坊スキル発揮して逃げんなよあの野郎!!」
「私は給仕係じゃないんだが……!?」
「俺だけ変な呼び方されてる!っていうかあの呼び方で俺のことだって自分でも分かり出してててどうしよう!?」

結局いつものバカ騒ぎが展開され、ウルトラ騎空団によって夜のベ

ネーラビーチはいつにも増して賑やかであった。

〈続く〉

――おまけ――

「ね……猫の大名行列……!?」
「何それすごく見たい」
「姉さん、見れなかったからって絶望的な顔しないで」
「……沙耶、アウギュステには保護猫施設があるからそこへ連れて行きなさい」
「……先生、どうしても飼っちゃ駄目……?」
「「「「にゃー」」」」
（一匹ならまだしも五匹だぞ……!?）

※結局ダーントが嬉々としてお世話を引き受けたことで飼う事になりました。皆良い子で手が掛からないそうです。

暗躍する者たち

ウルトラ騎空団が束の間の休息を過ごしている頃、コズミック・イラの世界では二つの出来事が起こっていた。

まず一つ目は――

☆

「よお、調子はどうだい？ラウさん」

「やあ、ベリアル。お陰様で、この身体で過ごす残り僅かな時間も悪くなくなったよ。尤も……あちらの身体になった時を思い浮かべる方が良いのだがね」

「そいつは二重の意味で良かった。ファーさんが気合い入れてたからな、珍しく。それでそっちの方は？」

「そう難しくはなかったさ。何せ評議会にはパトリック・ザラというタカ派がいるのでね、適当に『ナチュラルに恨みを持つ、腕利きの友人がザフトに参加したいと言っている』と言えば喜んで承認したよ」

「おいおい大丈夫かそいつ？だってラウさん……『ナチュラルに恨みを持つ』とは言っても、コーディネイターに恨みが無いなんて言ってないのにな。で、俺の立ち位置はどんな感じになるんだ？」

とある場所では堕天司ベリアルがザフトのラウ・ル・クルーゼと密談していた。先日、ルシファーやトレギアに同志として迎え入れられたクルーゼは、来たるべき時に備えつつ着々と準備を進めている。その一つが『ベリアルをザフトに入隊させる』ということである。

「一応、私への監視を兼ねたオブザーバー的なものになる。まあ、実質副官のような立場だと思ってくれて構わんよ」

「なるほど、ダブルスパイってやつか。もしラウさんを疑って俺に何かさせようとすれば、必然的に同志であるラウさんにもその情報が入るわけだ」

「そうさせんためにここまでのし上がったわけで、そちらは殆ど心配していないがね。機密レベルが上がると現場部隊には情報が回ってこないことも多いのだよ」
「ああ……だから上層部に深く関われそうな立場が幾つも必要なわけか。俺達派の数が多けりゃいいが、悲しいかな理解されないもんなぁ」

そう発言している割に、普段と同じ笑みを浮かべたままのベリアルは悲壮感など微塵も漂わせてはいない。当然、クルーゼも同様だ。

「ま、そこは野となれ山となれってことで。こっちからもまたまたすごいもんをプレゼントだ。なんとギアさんが俺とラウさんに試作機を回してくれたんだよ」
「ほう?それは願ってもないものだな」
「こいつが資料だ。名前はエゼキエル、こっちのラヴァンがラウさん用で、シャホールってのが俺用だそうだ。何でもヘブライ語ってやつでそれぞれ白と黒って意味らしい」
「ふ……我々に似合いのネーミングだな。カタログスペックも素晴らしい。今のザフトではこの機体を超える機体は作れまい」

現在のザフトの主力モビルスーツであるジンやシグーを優に超える性能を持った、モビルスーツではない機動兵器。逆にこんなものを持ち込めば普通は怪しまれそうなものなのだが……。

「それはそうとベリアル、君に伝えておかねばならない情報があってね」
「なんだいラウさん、改まって」
「先ほど話したパトリック・ザラなのだが……どうも普通ではなさそうなのだよ。話している時も『我々は進化した種族』『さらなる進化を遂げねば』などとやけに『進化』という単語を口にしていてな」
「進化ねえ……」

「本来そのまま戦うことが主となる君なら問題ないとは思うが、近付く場合は十分に注意してくれ」
「了解、ラウさん。俺も終末を見る前に自分だけ終末になりたくはないんでね」

そう言って彼らは次なる策を練る。
しかし、彼らも薄々勘付いていた。自分達以外にもザフトに別の場所から根を張り始めている存在がいることに。

☆

場所を移して地球。
『青き清浄なる世界のために』をスローガンとし、反プラント・反コーディネイターを掲げる集団、ブルーコスモス。その盟主たるアズラエル財閥の御曹司ムルタ・アズラエルは今――
「な……何だこいつは!?うわあああああ!!」

ある異形と邂逅し――

「キエテ（いい）　カレカレータ（気分だ）」

その身を奪われた。

☆

所変わってリアス達の世界の冥界、フェニックス家の屋敷。その一

室にはライザーが相変わらず引き籠っていた。他の眷属が修行でダイブハンガーにいる中、ユーベルーナだけが彼の世話をしている。

「ライザー様、お食事置いておきますね」

「……ああ、すまん……」

未だ再び立ち上がる気配を見せぬライザーを気遣いつつ、ユーベルーナは部屋を後にした。それがライザーの運命を変える存在を招くことになるとは知らずに。

ライザーは一人になっても俯いていた。

（大分マシにはなったが……ダメだ。ふとした拍子にあの女の姿が頭に浮かんで身体の震えが止まらなくなる。フェニックス家始まって以来の才児がなんてザマだ……クソッ）

フェニックス家という名家に生まれ、遺憾無くその才能を発揮していたライザーは、胡蝶カナエによってフェニックスとしての誇りと、自身の能力ゆえの驕りを纏めて木っ端微塵にされ、しかもよりによってそれでレーティングゲームで初の敗北を喫した。

それ以来こうして引き籠もり状態のままだが……ほんの少し、ほんの少しずつ改善されてきてはいる。それは彼が心の中に残った微かな『希望』を信じているからだ。『これを乗り越えれば自分は新たな領域に辿り着ける』……しかし実際頭で分かっていても、やはり心の奥底には『絶望』がこびり付いて離れない。

そこを狙われたのだ。

――これは良い器だ――
「な……何だこれはっ!?」
――使わせてもらうぞ、この身体――
「や……やめろ……!」

うわあああああ!!

ライザーの悲鳴が聞こえたユーベルーナは、焦りながらライザーの部屋まで駆けていき、失礼とは思ったが緊急事態と判断して思いきり扉を開ける。

「ライザー様っ!!……!?」

ユーベルーナの目に入ったのはまるで魔王のような格好になり、顔の右側に緋色の目の仮面を装着したライザーの姿。
否、ライザーではない。

「ライザー……? 誰だそれは」
「え……!?」
「俺は絶望の勇者ギルティ! ライザーなどと云う者は知らん!!」

普段なら厨二病でも発症したのかと思うだろうが、ほんの数分前まで重度の引き籠もりだったライザーがいきなりこうなるのは明らかにおかしい。何より闇のオーラのようなものが視認出来るほど立ち上っている。

「おい貴様」
「は……はいっ!」

やはりおかしい。ユーベルーナを名前で呼ばず貴様と言うことなど引き籠もりの時でも無かったというのに。

「『聖勇者』というものを聞いたことはあるか？」

「聖勇者……？」

「知らぬようだな。使えん奴だ。もういい、俺が直接見つけに行くとするか」

「ライザー様！お待ちを……」

「来い！ギルディオン!!」

ライザーもといギルティがそう叫ぶと、突如としてライザーの部屋に巨大な機械の腕が壁をぶち壊しながら現れる。小さな悲鳴を上げて尻餅をついたユーベルーナのことなど気にも止めず、その掌にギルティが乗ると巨大な腕が引き抜かれ、破壊された壁から見えたその腕の正体は全長１０ｍほどの、赤と黒を基調とした巨大ロボット。

「あ……ああ……」

「さて……まずは何処から探すか」

何だかんだ言いつつも眷属を大事にしていたライザーの姿はもはや無く、『聖勇者』とやらに固執する闇の戦士がそこにいた。騒音と衝撃のおかげでフェニックス家の者が次々と集まって来ては、ライザーの変貌ぶりと未知なるロボットに愕然とする。

「待っているがいい、聖勇者バーン……貴様の息の根はこのギルティとギルディオンが止めてくれる!!」

そう言い残し、ライザー……ギルティとギルディオンはフェニックス領を飛び去り、引いては冥界より姿を消した。この事は瞬く間に冥界中へ広がり、魔王達の耳に入ることになる。

上級悪魔すら抵抗出来ない闇が現れた、と。

☆

同じく冥界において、一人の悪魔が必死に逃げ回っていた。その者の名はディオドラ・アスタロト――アジュカ・ベルゼブブ縁の者にして上級悪魔の一人……正しくは一人だった者。

かつてダンブルドアが告げたように、アジュカが真剣になって彼の動向や経歴を細部まで調べると、案の定というか悪魔らしいというべきか、彼が眷属としていた元シスターの悪魔達が追放等を受けたのはディオドラ自身が仕組んだものだと判明したのである。

そうなれば当然、今はレジェンドの巫女であるとはいえ元シスターのアーシアを狙わぬわけがない。もしそんなことをすれば、最悪冥界のみならずこの世界の各地に存在する悪魔が殲滅されかねない事態も予想される。

そうなる前にとアジュカが手を回し、自身も連帯責任を負う覚悟でディオドラの所業を公表。冥界全土に指名手配することにした。一応アジュカ個人は魔王退陣等のペナルティは無かったが、アジュカが退陣後アスタロト家は魔王の座につけなくなり、それの元凶となったディオドラは同家の関係者からも恨まれている状態だ。

それだけでなく、自分達を救ってくれたディオドラが自分達を陥れた元凶でもあると知った眷属達からは上級悪魔が引くほどの殺意を向けられ、こっちもこっちではぐれ覚悟の一揆が起こった。

まさに孤立無援。

ディオドラ・アスタロトは絶体絶命の危機に瀕していた。自業自得だが。

「何でッ……何で僕がこんな目に遭わなくちゃいけないんだ……！僕は迫害されたシスター達を救ったんだぞ!?なのにあんなことを聞かされただけで簡単に手の平返しで……」

このディオドラ・アスタロト……全然反省していなかった。どちらかと言えばイオク・クジャンの方がまだマシなレベル（どっちもどっちな気がするが）で、この悪魔はとことん外道でゲス野郎としか言えない。

「やはり僕にはアーシアしかいない……！ああ、今どこにいるんだい？僕のアーシア……」

レジェンドやマジンガーＺＥＲＯが聞こうものならスパークレジェンドとか光子力ビームが容赦無く飛んできそうな台詞をほざくディオドラ。当のアーシア自身も最近メンタルが強化されてきたので、涙目になりながらも光気を纏わせた平手打ちを叩き込みそうだが。

「お前の望み、叶えたくはないか？」

「!?」

突如金色のゲートのようなものが発生し、中から現れたのはウルトラ戦士に似た金色の存在。だがディオドラは直感的にウルトラ戦士とは違うことに気付くと同時に、自分では決して敵わぬ存在だと一瞬で理解した。

「お……お前は……!?」

「我は究極生命体、アブソリューティアンの戦士……アブソリュートタルタロス」
「アブソリューティアン、だって……!?」
「お前の運命を変えたくはないか？己の望むものを手に入れたくはないか？」
「僕の運命……望むもの……」

直後、その存在――アブソリュートタルタロスはディオドラに手を翳し、あるビジョンを見せる。アーシアを捕らえるも、ある時は一誠に、またある時は別の者に、そしてまたある時は更に別の者に……相手は違えど、決まって最後はディオドラが徹底的に叩きのめされ――消滅という形で死を遂げる結末だった。

「ここではない並行世界でもお前は必ず敗北する。その理由は至極簡単、力が無かったからだ」
「そんな……」
「私と共に来い。そうすれば運命を打ち破る強大な力を与えてやろう。その力を持ってお前の望むものをその手で掴み取るがいい」
「強大な力……僕のアーシアを……」

アーシアが自分のものになる未来をイメージし、ディオドラは下卑た笑みを浮かべながらタルタロスについていくことを決めた。そしてディオドラは金色のゲート――ナラクと呼ばれるそこへ、タルタロスと共に姿を消す。
この事がレジェンド達にとって、さらなる壮大な出来事の引き金になるとは誰も知らなかっただろう。
そして――

（こんな小物でも多少は役に立つかもしれん。そうでなくても相手の戦力を測る捨て駒程度にはなるだろう）

タルタロスは、ディオドラに殆ど期待していなかった。

数多の思惑が交錯しつつ、舞台はコズミック・イラへと移り――新たなる物語が今、幕を開ける。

〈第8章へ続く〉

平穏崩壊のヘリオポリス、新たなる旅の始まり
新たなる世界へ

バカンスを終え、数日後には新たな修行の地となる異世界――コズミック・イラの世界へと旅立つことになっているウルトラ騎空団。その最終準備を進めている最中なのだが、今日は珍しい訪問者がやってきた。

その人物とは――。

「どうやら私の教えをしっかり守っているようだな、ゼット。初めて修行をつけたあの日とは雲泥の差だ」
「ありがとう……ございますっ……！アタル師匠！」

キン肉マンソルジャー、真の名をキン肉アタル。
地獄のタッグマッチ後にレジェンドに頼まれていたとはいえ、自らゼットの修行相手を買って出た漢。レジェンドの光気の影響で他の超人達同様、肉体が全盛期の頃に戻った彼の実力・技量は正義・悪魔超人その他を統合しても最高クラス。
今もロックアップ状態だがゼットは必死にも関わらずアタルは平然と維持。実はこの日、ゼットの修行をつける少し前にタイタスがその肉体を見て是非にと挑んだものの、必殺のナパーム・ストレッチをまともにくらい完封ノックアウト。
これには一誠やタイガ、フーマの血の気が一瞬で引いた。これまた早起きしていたしのぶが今も看病している。

「ヤバ過ぎだろあの人……！あの旦那が真っ向勝負であっさり撃沈って」
「うう……」
「タイタスさんだから無事だったようなものですね。両手両足の関節を極められた上で胸部を強く叩きつけられる……最悪肋骨が全部粉

砕骨折ですよ？」
「よ……よくカラータイマー壊れなかったな」
「そんな人にゼットさん稽古つけてもらってんのか……！」

なお、レジェンドの必殺技であるウルティメイトギガバスターはこのナパーム・ストレッチより遥かに危険な技で、ウルツァイトハイパワーを発動した悪魔将軍だから耐えられたとしか言えないほどのもの。以前超人帝王なる相手（例の如くバド星人、他よりは強かった）に炸裂させた時は、両手両足粉砕骨折・首背骨骨折・頭蓋骨陥没骨折・各部筋肉断裂などを一度に起こし、更に内臓も飛び出しかけていて即死だった。
マジで悪魔将軍半端ねぇ。

「おー、やってるなアタルにゼット」
「つーかタイタスあの人に勝負挑んだのかよ。あの人、俺のコーチしてくれたジャスティスマンって人も認めるぐらいスゲー人だぞ」

そこへ二人の様子を見に来たレジェンドとレイト。レイトをコーチしたジャスティスマンは完璧超人始祖……その中でも屈指の実力者。派手さより堅実さを重視し、徹底して基礎となる身体能力を鍛え上げ、シンプルながらも効果的な技を使用する骨太超人だ。

「あいつ目立った弱点ないからな。文字通り連続して大ダメージ与えることで畳み掛けるくらいしか勝つ方法ないぞ」
「だよなあ……それだけじゃなくて無茶苦茶硬いんだよ。ウルトラキック戦法試したけどロクに通じなくて、『素の硬さと捻り、加速も足りん』ってボロクソに言われて叩きのめされてさ、そっからアドバイスもらったんだ。その結果生まれた技がゼロマッハキックなんだぜ」
「防御されたとはいえ、あのゲンが吹っ飛んだもんな」

なお、ゼロマッハキックは試しに空の世界の魔物に打ち込んでみた

ところ、吹っ飛んでる最中に爆散。そんなもんを食らって吹っ飛んだ程度で済んでいるゲンは何なのかと小一時間悩んだ結果、考えるのをやめた。
　そんなことを話しているとゼェゼェと本気で疲れているゼットに肩を貸しながらアタルが特訓用リングから下りてくる。
「やっぱウルトラハードだけど……アタル師匠の特訓は自分が上に上にと行ってる実感がするぜ……！」
「小さい事からコツコツと、だ。欲張っていきなり強くなろうとすれば必ず何処かでその反動がくる。ウルトラマンとして、お前はまだまだ若い部類なのだろう。焦る必要はない」
「はい！」
「……なんかアザゼル先生より顧問してほしいんだけどこの人。矢的先生とツートップ張ったら無敵じゃね？」
　一誠の呟きにその場にいた殆どの者が頷く始末。頑張れアザゼル、毎回毎回比べる相手のレベルが高過ぎるのはある意味不幸だろうけど。

☆

　一日とはいえ「自分にとっても修行になる」という理由で直弟子のゼットを始め、多くの者をみっちり鍛えたアタルはレジェンドから沢山の土産とゼットを筆頭とした教え子達から感謝の言葉を貰い、「光神祭を楽しみにしている」という言葉を返して元の世界へと帰っていった。
　彼の教えを心と身体に刻みつつ、今日はレジェンドとダイゴから新たな異世界であるコズミック・イラについ説明がされることになる。事前に情報を共有していたレジェンドとダイゴだが、続々と集まる団員達を前に二人はある懸念を抱いていた。

「チーフ……彼らは戦争というものをどれだけ知っているんでしょうか？」
「一応、うちの団には大なり小なり戦争を経験した奴がいるがな。そこら辺は当人達が遭遇した戦の規模や状況によるだろうし、何より聞いた程度で体験していない連中の方が大半だろう。実際普通の戦いと戦争では似ているようでいて大きく違う」

彼らは戦争を直接体験していない者達が、戦争を単なる『大きな戦い』としか認識していないことを危惧している。これから向かう世界では正しく戦争真っ只中、発言次第では一瞬で周りの者が全て敵になりかねない状況にだってなりうる世界だ。
実を言うと、アムロとの関わりやシミュレーターに没頭していたこともあり、意外にもゼットはそういった面で他の戦争非体験者より理解出来ている。例外としては戦争を体験した父から直接聞いたリクなどもそうだ。

「俺がいつでも力を振るえば万事解決、というわけではないことを理解させなければ、身体より先にまず心が壊れるような事態が多々あるだろう。戦争とは人伝に聞くことと体験することに大きく違いがあるからな」
「……そうですね」

ダイゴ――ティガとしても、超古代文明において巨人同士の戦争を目撃、いや闇の巨人として参加したことがあり、その経験からくるものがあるようだ。目の前で命を落とし、積み上げられる多くの屍。燃え上がる大地。勝敗如何に関わらずそこかしこに爪痕を残すもの、それが戦争。

「何にせよ、行き先の世界情勢を説明してから改めて覚悟を問う。聞いた限りではナチュラルよりもコーディネイターと言った場合の風当たりが強そうだからな。何だそのブルーコスモスとかいう、

ウチの息子（コスモス）に喧嘩吹っ掛けるような名前の団体は」
「僕は寧ろチーフに喧嘩売ってるような名前だと思いましたけどね」
「主義主張を声高にほざくのは結構だが、コーディネイターというだけであーだこーだ言った挙げ句命を狙うような連中が清浄などと片腹痛い。俺から言わせてもらえばそいつら自身が汚物にしか見えんし、そんなものが闊歩している時点で清浄もクソもあるか」

このレジェンドのどこか怒りの含んだ発言は、彼の治める惑星レジェンドが種族生まれ関係なく全てのものが平等であり、助け合って生きていることから来たものだ。少なくとも先代九極天のモスラは怪獣、鬼灯は鬼神、ドギーはアヌビス星人、ユーリら紫天一家に至っては当初プログラム（今はレジェンドのおかげでそれぞれが一つの命だが）であり、最近モスラの後任で九極天に就任した卯ノ花も死神ときた。

ついでと言ってはなんだが、同じく惑星レジェンド在住であるサーガの神衛隊はまだ獣人とかでマシな方で、スペリオルドラゴンの所などＳＤガンダムだらけ……おそらく惑星レジェンド全体を調べれば他の種族もわんさかいるだろう。ポケモンとか。

「まあ、こちらから手を出すとしたら余程の場合に限る。無論、仕掛けてきたら地獄に叩き込んでやるがな」
「彼らの罪状を見た鬼灯さんが纏めて適当な地獄にぶち込みそうなんですが」
「それでも構わん。正直、鬼灯を日本地獄の最高責任者にしつつ、ちゃんとした環境を整えて人材を揃えた方が、今よりストレスなくなって仕事も上手く循環しそうな気がするくらいだ」

他はともかく閻魔大王マジ仕事しろよ、とレジェンドは深く溜め息をつき、そんな彼をダイゴは苦笑しつつ眺めていた。

☆

レジェンドとダイゴはヒリュウ改のブリーフィングルームにおり、そこからクロガネ、エリアル・ベースのブリーフィングルームのモニターへとリアルタイム通信状態にして説明は行われる。グランサイファーはまだ内部を徐々に改装している段階なので、その機能はまだ搭載されていない。新旧の良さを織り交ぜた騎空艇にするため、色々と試行錯誤中なのだ。

説明に関しては事前にダイゴから報告を受けていたレジェンドが主だって行い、ダイゴが補足するという形でつつがなく進んだ。質問に関しては説明後に受け付けるということで、まずは一通り話を聞いてもらう。

「――以上がダイゴの調査による『コズミック・イラ』の情勢だ」

「向こうの方ではオーブという国の重鎮の方と協力関係を結ぶ事が出来ました……が、やはりと言うべきか国相手である以上、一枚岩ではないでしょう。僕がいた頃とは状況が変わっていることを念頭に置いておく方がいいと思います」

「オーブ、ねえ……クセがありそうな名前だな？」

「俺を見ながら言うなよジャグラー」

先日からかわれた仕返しなのか笑いながらガイに視線を送るジャグラーと、ムッとした表情のガイ。とはいえ、その国――オーブ連合首長国がクセのある国であるというジャグラーの推測は間違いない。5大氏族はまだしも宰相家のセイラン家が厄介そうだ、というのが現時点でのダイゴの判断。もう一つ、サハク家も懸念材料ではあるが……養子だという姉弟、弟はともかく姉の方はまだ話が出来そうなのでそこはレジェンドにどうにかしてもらう算段だ。

レジェンドの事だからまた何か不憫な目に合いそうではあるが……。

「遺伝子操作で生まれた人種……僕とは違うの？」

「リクの場合は遺伝子を用いて生み出されたわけだから、元々生まれてくる者の遺伝子を弄っているというわけではない。似ているようでいて実際は全く違う」

どちらかというとリク＝ジードは試験管ベビーに近い。遺伝子を組み替えたりしているわけではなく、あくまでベリアルの遺伝子を使って生まれただけである。彼の場合、似た存在としてはクローンがそれに当たるだろうが、テロメアの問題等がないため完全な上位互換と言っても差し支えない。

当然そんな存在のリクは非力だった頃に狙われまくっていたのだが、ベリアルとゼロが容赦無く返り討ちにしまくっていた（ついでにレジェンドが後始末としてその連中の拠点を虱潰しに消滅させていた）。

「それにしても……戦争なんて」

「実感沸かねえ……って思ったけど、レヴィアタン様とかガブリエルさん、あとアザゼル先生はレイブラッド事変の時に経験してるんだよな」

「それだけじゃねえが、まあ今考えてもアレが一番とんでもなかったぜ。俺らはゾフィー達に助けられたクチだが、それでも死んだ奴の数が半端じゃない。正直聖剣だの何だのを向けられるより死を覚悟したね、俺は」

一誠の発言に応えたアザゼルだが、普段と同じ口調とは裏腹にその表情は真剣そのものだ。究極生命体の二つ名に加え、無数の怪獣超獣宇宙人を従えて二天龍を始め戦場にいた者達を蹂躙したレイブラッド星人の恐ろしさを直に感じたからだろう。勇治がレイブラッド星人（と同じ身体）と知った時など本気で顔が青褪めていた。

「それも戦争における一つの形だな。蹂躙、それならまだマシな方かもしれんが虐殺というのもある。一番タチが悪いのは軍が無抵抗の

一般人に対してそれを行う場合だ」
「「「「!!」」」」
「とりわけ、コズミック・イラではナチュラルとコーディネイターという、人種間の差別は当たり前のように存在する。戦争の原因の一つでもあるからな、そこは。そしてその結果起きたのが『血のバレンタイン』と呼ばれる事件だ」
「それって歴史にもあった『聖バレンタインデーの虐殺』というものかしら？」

リアスがレジェンドに言ったのは西暦１９２９年２月１４日に起きた事件のことであるが、それとはまた別物。レジェンドにそれではないことを告げられ、その後を引き継ぐ形でダイゴによる解説が行われた。

「ナチュラル側とコーディネイター側、両軍の戦闘が宇宙での交戦中に、地球連合軍……ナチュラル側の軍隊が農業プラントであるスペースコロニー『ユニウスセブン』に核ミサイルを撃ち込んだことで、そこに住むおよそ２４万人の民間人が犠牲になりました」
「「「「ッ!?」」」」
「農業プラントというくらいだ、あったとしても戦力なと申し訳程度だろう。何より敵味方入り乱れる戦場で核を平然と使う神経が俺には理解出来んな。もはやコーディネイターの殲滅には何をしても構わないという思考なのやもしれん」

その日がＣ．Ｅ．７０年の２月１４日、即ちバレンタインデーであったことから上記の呼び名が付けられたのである。これを聞いて悲痛な表情をする者、激しく憤る者、思い悩む者など、聞いていた者達に様々な感情が巻き起こった。

「何でだよ……！何でそこまでするんだよ!?そいつらが何かしたのかよ！ただ普通に暮らしてただけだろ!?」

「連中にとっては何の害も無い一般人だろうが憎しみの対象なんだろうさ。コーディネイターというだけでな」
「そんなの……間違ってるわ」
「お前達はそう考えていても、連中はそうは思わないんだろう」

一誠やリアスの言葉に冷静に返していくレジェンドだが、納得のいかない面々に対してダイゴと相談していた『覚悟の是非』を問う。

「これから行く世界では他にもこういった出来事に遭遇する可能性はある……寧ろ高い。下手すればそれ以上のものを目にする事だって有り得る」
「「「「……」」」」
「故に俺は行く事を強制しない。行ったところで得るものがあるかは本人次第だし、逆に失うものがわんさか出るかもしれん。尤も、俺とダイゴが行くことは決定事項だが」

そのレジェンドの言葉に真っ先に反応したのは、まさかのゼットだった。これだけ聞かされても普段のポジティブシンキングな精神は健在らしい。褒めるべきかどうかは別として。

「俺は行きますよ超師匠！」
「……やる気満々なのは結構だが、お前の手で人間を撃つことになるかもしれんぞ」
「そこ、最初は悩みましたけど……よく考えたら俺ら既に似たようなことしてませんかね」
「ほう？」

ゼットの発言に興味を引かれたのか、レジェンドがその理由を知りたそうにしていると、それを察したゼットが発した言葉はその場にいたウルトラ戦士を中心とする者達が愕然とするものだった。

「だって人間だって怪獣や宇宙人と同じ、命じゃないですか。そう考えると平和を守るって名目で、俺達もう人殺し的なことをしてるのと同義だと思うんでございますよ」
「「「「!!」」」」
「なるほど……よくそこに気が付いたな。あまり難しいことは考えずに動くタイプだと思ったが」
「超師匠ヒデェ!?」
「それはともかく……ゼットの言うように命に色は無い。力の有無は関係なく、俺達は既に命を奪った経験があるということを自覚しろ。『相手が凶悪な怪獣や宇宙人だから』『超常的な存在だったから』などと線引をするな。命は等しく命だと頭に叩き込んでおけ」

自分が命を奪ったことを自覚し、それでも前に進む事を止めぬ者だけが付いて来い――レジェンドはそう言いたかった。次の世界では否が応でも戦争と関わっていくことになるだろう。確実に命のやり取りをすることになるのは分かりきっている。ならばこそ生半可な心構えではいられない。

「俺と神衛隊、それからユウキとアカネは同行する」

サーガが迷いなく告げた。そもそも神衛隊は戦争経験者が大半であり、鉄華団などその最中に命を落とした者ばかり。さらに、ユウキやアカネも人の生き死にはわりとよく見ている。サーガに付き添って彼方此方行ったからとはいえ普段ならそう頻繁に見るものでもないのだが。

「ヒリュウ改の搭乗メンバーはほぼ全員レジェンド様と共に行きます」

ミツバが告げた『ほぼ全員』の中にはルリアやアマリなども含まれている。一人じゃない――それだけで彼女らは前に進む事を恐れな

かった。レジェンド一家は悩む必要など殆ど無かったようだが……。
「エリアル・ベースは基本空の世界においておくんだろ？なら定期的に入れ替わりで団員をそっちに送るよ。何事も経験だからね。勿論、人選はしっかり考慮して決めるからそこは安心してよ、レジェンドちゃん」

何だかんだ言いつつもウルトラ騎空団団長代理として上手くやっているシエテ。あとの懸念はヒューマンはともかくエルーンやドラフ、ハーヴィンその他の種族の外見的問題だが……それはその時考えよう。認識阻害など手段は豊富なのだし。

「僕達も、旅に出たときからそういう覚悟は決めてます。ただ、話を聞くとグランサイファーは宇宙ってとこには行けないみたいで……」
「それに関してだが、グランサイファーは一度惑星レジェンドに送り、そこでグランサイファーを核とした戦闘母艦への回収を行う。この先トリガーと共に戦う以上、戦力の増強は必須なのでな。だからしばらくグランサイファーは使用不可になる上、操舵士のラカムと……そうだな。ノアもそちらに同行してくれ」
「分かったぜ団長。待ってなグラン、お前を助けられる力をグランサイファーと一緒に手に入れて戻ってくるからよ！」

力強いラカムの言葉にグランも笑顔で頷き、ジータは「口だけだったら『ラカムゥゥゥ!!』させるからね！」と半ば脅迫じみたことを笑いながら言っていた。なお、ラカムゥゥゥ!!とはとどのつまり爆発である。
そして、最後は――
「……行くわよ、皆。そもそも私達は修行に来たんでしょう？困難が絶えず降り掛かってくるなんて予想出来たことじゃない。こういう時こそ一致団結して乗り越えるべきよ」

「部長の言う通りだぜ！そりゃ、一人だったらガクッときそうだけど……」
「そういう時は支え合い、だよな！」

オカルト研究部の中心的存在のリアス、一誠、タイガに賛同する形でオカ研や生徒会メンバーも覚悟を決めた。これ以上のことはその時にならねば分からないだろうが、一応誰一人欠けることなく全員が決意し、同行する。とりあえずエリアル・ベース組は入れ代わり立ち代わり、という形を取ることになるが。

「ところでティガ先輩、話はまたどんな世界かに戻りますけど……ニュートロンジャマー、でしたっけ？それ、俺らの機体とかエネルギーの面で大丈夫でございますかね？」
「ああ、それは大丈夫。僕のＥｘ―Ｓガンダムも問題無く稼働してたし、先刻チーフに聞いてみたら僕達の機体とか戦艦とかはチーフ達の特別製だから、装甲材質とかそういうところでマイナス面に耐性とかプロテクトがかかってるから平気なんじゃないかってさ」

まあ、そうでなくてもレイトのダブルオーザンライザーやサーガのダブルオークアンタフルセイバーのようにＧＮドライヴとか使ってる機体や、サイバスターはフルカネルリ式永久機関、ネオ・グランゾンなど対消滅エンジンに加え、最近何やらとんでもないものまでレジェンドは搭載したらしい。別に核融合だの何だのをしなくても問題無いのだ。
最も強引な解決手段として、地球の地底へと撃ち込まれたニュートロンジャマーをレジェンドが物理的に取り出してしまう方法もあるが、それをやったら核がまたバカスカ撃たれまくる可能性が無きにしもあらずなのでやろうとは思わない。

「何にせよ、こっちの戦力はちゃんと運用出来るってことでそこは安心していい」

「やっぱりウルトラ騎空団は魔境なんだなってつくづく思うわ……」

リアスの呟きに反論する者は誰一人いなかった。団長のブッ飛び具合、そしてそれを周囲が容認している弊害かもしれない。天災兎容認するどころか互いに共鳴しあってよりヤバいことをしでかすが、とりあえず今回は放置。

かくして二日後、レジェンド率いるウルトラ騎空団はコズミック・イラへと旅立った。その際、エリアル・ベースとグランサイファーからの同行メンバー選定に一悶着あったのは言うまでもない。

――おまけ――

一悶着というのは大体こんな感じ。

「レジェンド君。どぞ、よしなに」

「……はぁ」

自力で宇宙に行く事を夢見るハーヴィンの少女であり十二神将の一人、マキラ。彼女にニコニコされながら服を掴まれているレジェンドは溜め息を吐く。

だが、彼女はまだマシな方で。

「グランサイファーが改修のために不在となったら、まともにこっちじゃ身動きとれないので私達も行きまーす！」

元気よく言い切るジータとその後ろで申し訳無さそうに頭を下げるグラン。とりあえずジータは少しでいいからグランを見習おう。

この兄妹（姉弟）もまあ、理由としては納得だ。
問題は――

「話を聞くと目が良い方がいいわよね。私とシルヴァならその点、安心よ？」
「そんな世界だとやっぱり色々大変だろうから、レジェンドちゃんもお世話してもらった方が疲れを取れると思うの。お姉さん、張り切っちゃうから！」
「いざという時、機動兵器に頼れないかもしれないし……しっかり頭を守れる人が必要じゃない？あ、その……私、精一杯頑張るから、選んでくれたらな～なんて」

上からソーン、ナルメア、ユイシス……他にもレジェンド絡みで同行したがる者多数（例外なく女性）。ぶっちゃけ全員コーディネイターよりヤベー実力者。
男性陣も立候補しようとしたがその大半は女性陣の迫力に飲まれ辞退。結局卯ノ花が本気でキレかけて、ことなきことを得たそうな。

「これ以上争うなら日本地獄で鬼灯さんにお仕置きしてもらいますよ」
「「「「ごめんなさい!!」」」」

コズミック・イラ

次元の扉をくぐり抜け、ヒリュウ改とクロガネはその世界の宇宙に姿を現した。エリアル・ベースは空の世界に残り、グランサイファーは惑星レジェンドに送られているためこの二隻だけなのだ。

「ここが、コズミック・イラ……？」
「ダイゴ、どうだ？」
「間違いありません。な、ＲＥＮＡ」
『ええ。ダイゴの言う通りです、チーフ』

簡単に言ったが、Ｅｘ―Ｓガンダムのマン・マシーン・インターフェースを務める彼女は到着後すぐさま世界座標の特定を行ったのだろう。ベースとなった彼女同様、とても優秀だ。

「うおおおお!?スゲー！地球が！地球が見えるぜ！地球は青かった！ブルーウォータァァァ!!」
「イッセー!?」
「ブルーウォーターってそれじゃ『ふしぎの海のリアス』になっちまうぞ」
「何故その作品を知っているんだフーマ」
『そういうマッスル隊長も知っているようだな』

何かテンションがおかしくなった一誠にタイガ達がツッコミを入れるが、フーマはタイタスに、そしてタイタスはダ・ガーンにツッコミを入れられた。もはやタイタス＝マッスル隊長はダ・ガーンの中で決定事項らしい。
ついでに本来その作品は『リアス』の部分に別の名前が入る。

「東さんはねー、スペースコロニーのこうして宇宙が見える場所で結婚式したいな～。レジェくん考えといてね？」

小首を傾げる束は可愛いが、それに便乗してセラフォルーやガブリエル、何故かロスヴァイセまでやり始めたので途中で収集がつかなくなる前に話題を切り上げた。

「では一先ず進路はオーブ連合首長国を目指せばいいのか？」

「はい。既にＲＥＮＡがこの世界の大まかな地理を各艦各機にインプットしてくれたそうなので、検索も可能になってるはずです」

「ホントに優秀だなオイ」

自分のパートナーを褒められて嬉しそうなダイゴを見つつ、レジェンド一行は進路をオーブへと向け、この世界の地球に降下するのだった。

☆

オーブ連合首長国――南太平洋ソロモン諸島に存在する島嶼国であり、地球上においてナチュラルとコーディネイターが共存する数少ない国家である。ウズミ・ナラ・アスハによって中立宣言が出されて以降は急速に中立国として連合とＺＡＦＴ（以後はザフトと記載）の争いには介入しないよう努めてきた。

その理由の一つに彼がダイゴと出会い、【エリア】の存在と【エリア】全域レベルで起きている異変にこのＣ．Ｅ．の全てが一致団結して当たるべきだと考えたからだ。とはいえ、中立国という立場上双方に使者を送れどまともな交渉になるはずもなく、どちらも二言目には「協力してほしければまずはオーブが連合ｏｒザフトに協力すべき」と言われるだけ。

確かにこちらの話は荒唐無稽かもしれないが、眼前の相手を必要以上に敵視しすぎではないかとウズミは溜息を吐く。

「それに……まさかダイゴ殿より頂戴したアストレイが新たな火種の

切っ掛けになってしまうかもしれぬとは……これは彼に責められても仕方あるまい」

ダイゴが置いていったアストレイレッドフレーム……それに目をつけたサハク家がその機体を元にＧＡＴ―Ｘナンバー、及びＡＳＴＲＡＹシリーズを独断開発に踏み切ってしまった。尤も、国防用ＭＳ――そして対地球外侵略者用ＭＳの必要性を感じて黙認した自分も同罪。ウズミはそう考えていた。

そんな彼のもとに、正確にはオーブにある信号が届く。それは彼と親交を結んだダイゴがオーブから旅立つ際に、彼からウズミへと渡された識別コードであった。

ダイゴが事前に色々と動いてくれていたおかげで、本来ならば怪しまれて然るべきなヒリュウ改とクロガネは難無くオーブへ入国出来た。無論、そこから滞在手続などをする必要はあるが、そっちはレジェンドやダイゴ、ミツバやオルガら責任者及び艦長に任せ、それが終わるまでリアスや一誠達は待機。

「どんな話をしてるんだろ……」

「冥界とは勝手が違うから悩むわね」

「ダイゴさんは『これからこの世界で活動することに関しては、マイナスになる事はない』って仰ってましたけど……」

やはり心配というか、不安が残る。そんな彼らの心の内とは裏腹に、ウズミと対談中のレジェンド達は――

「まさか初対面の挨拶も程々にいきなり頭を下げられるとは思わなかったんだが」
「それは僕もですよチーフ……ウズミさん、どうか頭を上げて下さい。大体の予想は僕も着いてます」

応接室で顔を合わすなり、オーブの首長――今や元がつくが――であるウズミ・ナラ・アスハに謝罪を受けたレジェンド一行は突然の出来事に混乱していたが、ダイゴは何となく察していたようで怒りなどはないようだ。ダイゴの性格的な部分もあるのだろうが。
聞けば懸念していたサハク家が、案の定アストレイレッドフレームを元にＭＳの開発を独断専行したらしく、自身もそれを黙認してしまったと。そこはまだいい。問題は連合のＭＳ開発にモルゲンレーテ社を協力させたということだ。当のモルゲンレーテ社はサハク家との繋がりが強く、この事は避けられぬ運命だったのかもしれない。

「サハク家が懸念材料とは聞いていたが……そういうことか。で、俺はその家と何をどう交渉しろと？アストレイを託した意味を話して協力を取り付けたいんだろうが、難しいぞ」
「やれるだけやってみて下さい。失敗してもその時はその時、仕方ありませんから」
「ダイゴ、お前俺に平気で無茶振りさせるようになってきたな……」
「ドンマイ、旦那」
「さすがにいきなり銃を向けて撃たれはしないでしょうから……撃たれても銃弾掴んで投げ返しそうですけど」
「オルガはいいとしてミツバは少しぐらい俺の心配をしろよ」

嘆息するレジェンドを見て、ウズミは殊更申し訳なく思うが、交渉は件のサハク家とだけするのではない。

「してダイゴ殿、それからレジェンド殿……でよろしいか？」
「ああ」

「オーブとして、そしてダイゴ殿との縁がある者として受け入れは出来たが、如何せんオーブはその理念故にただそのまま客人として長期間滞在を許可するには、そなたらの組織の規模が大きい」
「これでも大分限定してるんだがな。まあ、仕方ない」
「よって我々が互いに譲歩し合った交換条件を提示し、それを飲んでくれるのならばという形にしたいのだが……如何だろうか？」

既にサハク家との交渉をレジェンドが引き受けるハメになっている以上、オーブに残る必要があるのだから交換条件を飲む飲まないと聞かれたところで前者しか選択肢がない気がするのだが……ウズミの人となりを知るダイゴから然程厳しいものは出ないだろう、と言われてまずは相手の条件を提示してもらうことにした。
○あくまで滞在という名目であり、居住権を求めることはしない。（レジェンド達は住む場所に困ってたりしないので別に問題ない）
○立場上はオーブと契約を結んだ『何でも屋な組織』というものになる。仕事毎に報酬も支払うとのこと。（ウルトラ騎空団自体がそういうものなのでこれも問題無し。報酬が出るなら万々歳）
○オーブ国内の宿や施設、食事を無償で提供することは出来ないが、代金を支払って一般人や観光客と同じように利用する事は可能。（そもそもレジェンド達はヒリュウ改やクロガネで寝泊まりする気だった上、割と気軽に空の世界や惑星レジェンドなどに帰れるので懸念することでもない。また、娯楽も下手したらレジェンド側の方が豊富な可能性までである）
他にも細かな決め事はあるが、直訳すれば『オーブに牙を向くようなことさえしなければ割と自由。依頼を受ければ収入も得られる』ということである。かなり太っ腹な条件であり、断る理由もないのですぐさま承諾。
実際問題、この世界での貨幣をどう入手するかがウルトラ騎空団では悩みの種（ただしショッピングとかそっちの目的で）だったので、渡りに船とは正にこの事。

「思いのほか、すんなり決まっちまったな。てっきり話が進むに連れて険悪なムードになるもんかと思ったが……」
「俺は憂鬱だぞ。そのサハク家やらとの会談をいつの間にかこの後すぐにさせられるよう決まってたんだからな。手回し良過ぎだろ、全く」
「ところでウズミさん、カガリの姿が見えませんし、やって来る気配もないのですが……何かありましたか？」
「すまぬ、ダイゴ殿。そなたもその身で実感しているだろうが、そなたに懐いていたあれは今回の出来事に憤慨しておってな。しかも何処で手に入れたのか、我がオーブのコロニーであるヘリオポリスで連合がＭＳ開発を進めているという情報を聞いて確かめに行くと飛び出して行ってしまった。じゃじゃ馬娘もいいところだ」

ふう、と溜め息を吐くウズミと、その光景があっさり思い浮かんでしまい苦笑するダイゴ。近くで聞いていた三人のうちレジェンドはサハク家との交渉をどうするかでそれどころではなく、オルガとミツバはじゃじゃ馬娘という部分で『ああ、娘がいるのか』と思ったぐらいだ。
その後、ウズミから彼らに最初の依頼として『ヘリオポリスへ赴き、情報の真偽を確かめてほしい。ついでに、可能であれば娘のカガリも連れ帰ってくれると助かる』と言われ、とりあえず了承。とにかく全てはレジェンドのサハク家との交渉、及びその合否を待ってからということになり、その場はお開きとなった。
そして――

☆

「レジェンド様、物凄く憔悴してない？」

その日の夜、サハク家と交渉を終えたレジェンド（とゼット）は帰って来るなり真っ白に燃え尽きた。やはり交渉は失敗か、と思われたが

……あのウズミとの会談からそれほど間をおかず始められたレジェンドとサハク家の交渉は数時間にも及ぶものとなったものの、見事成功したという。

「いやマジかよ旦那!?」

「さすがお館様！相手がどういった人物かも分からぬ上、ある意味相手の土俵という状況だったにも関わらず成し遂げるとは！よもやよもやだ!!」

「……」

「それにしては浮かない顔をしてらっしゃいますね。ゼットさん、レジェンド様に何があったんですか？」

「……それはでございますね」

徐ろにゼットが口を開いた。普段明るい彼がこんな雰囲気を醸し出すとは余程の事なのだろう、そう思って全員が気を引き締める……が、確かに余程の事なのだがそれは別の方面にという前置きがつく。

「実は超師匠……

サハク家の女傑、ロンド・ミナ・サハク女史と婚約することになったのでございます」

――沈黙――

「『えええええ!?』」

当然、こんな反応にもなろう。訳を説明すると、ロンド・ミナ・サハク自身も当初は全くその気は無く、交渉開始時もそれは同様であった。弟のギナ共々、彼女の目的は世界を支配することだったのだが、開発の元にしたアストレイレッドフレームが彼の下で開発されたものであること、そしてアウェーという状況……それこそ命を奪われるか、良くて人質にされる可能性があるというのに堂々としており（開き直ったとも言う）、そして自分の意志を曲げないレジェンドに興味が湧いたそうだ。

「最初は定期的に顔を出すという約束程度だったんですけど……どうもミナ女史は自身の立場や能力を加味して、生涯独身覚悟で結婚相手に妥協したくなかったそうで。んで、そこに超師匠という媚びぬ引かぬ省みぬ的な相手が流星の如く現れて結局あれよあれよとこういう事態になってしまったのでございますよ。しかもこれが協力の条件ということで、もはや退路も塞がれ受けるしかなかったワケで」

「つまりあれか、レジェンドのビシッとした態度が変な方向に上手く働いちまったと」

「ですです、ゼロ師匠」

そりゃどうしようもねーわ、とレイトは頭をガシガシ掻きながら諦めた。レジェンドの妙な所に惹かれたなら文句の一つも代弁してやろうと思ったが、まともな所を見てそうなったならなるべくしてなったとしか考えられない。だが、それに納得しないのは別の面々である。

「だっ……駄目ですぅぅぅ!!」

「ぷんすこー!」

アーシアは勿論、普段抑揚のない声のオーフィスですら怒り気味。さらにアズやアマリ、ルリアなんかはまだ可愛い方で、ナルメアやユ

イシスは得物に手をかけている始末。このままではサハク家が存亡の危機に陥るどころか、多方面に色々と不都合が起きかねないと感じた卯ノ花はある策に出た。

「落ち着いて下さい皆さん。皆さんはレジェンド様の御婚約は認められないと？」

「だ……だってレジェンド、あんまり嬉しそうじゃありません！」

「まあコイツの性格から予想すると、自分に好意を向けてくれている相手が多数いるから一人を選ぶと不公平になるとか他の奴に申し訳が立たないとか考えてるんだろうさ。他にも色々あるだろうが大半はそこだろ」

ルリアが応え、C．C．がバッサリとレジェンドの思考を言い切った。ピンポイント直撃。ここまで言うと、卯ノ花の弟子であり同じような手段で引き込まれた朱乃は気が付いた。

「別にレジェンド様に全員貰って頂けばいいだけの事ですよ。ほら、この通りの条件を満たす者であれば惑星レジェンドにおいて一夫多妻婚が認められるということを、レジェンド様自らが記されています。見てもらえばお分かりになるかと思いますが、レジェンド様はこの条件に文句無しで当て嵌まっていますし」

※幕間『オカルト研究部の新たなる出発』参照

これを見てレジェンドに懸想している女性陣の目の色が変わった。それこそ肉食獣、というかそれすら裸足で逃げ出すレベルに。正直こんな時に言わんでもいいだろうと思わずにはいられないが、今はこうでもしなければコズミック・イラに来て早々にマイナスな意味で有名になってしまう。

そんなわけで、世界平和（色んな意味で）とレジェンドの平穏は天秤にかけるまでもなく、世界平和のためレジェンドには人柱ならぬ光神柱になってもらうことにした。ハーレムと言えば聞こえは良いが、

レジェンドの場合人数が人数だけに洒落にならず、おまけにその人数に比例して彼が受ける不憫も爆上がりするという悲惨なことになるので喜べという方が無理な話だ。
なお、後日ロンド・ミナ・サハクにそれを伝えたところ笑いながら承諾、寧ろ歓迎された。さすが大物。

「オイ俺の知らんところで話が大きくなってるんだけど。つーかヘリオポリスに行くメンバーの選定はどうなったんだよ」

あまりに衝撃的過ぎて、ツッコむ気も無くしつつあるレジェンドの口から出た『ヘリオポリス』の単語にダイゴ、オルガ、ミツバはハッとなった。忘れてたんかい。
なお、レジェンドの事に関しては『誰でも結婚出来るチャンスがあるので、アプローチを頑張ってレジェンドのハートを射止めましょう』ということに落ち着いたらしい。確かに何でもかんでも本人の意志を無視してというのは拙い（キレたら【エリア】が終わりかねないという意味でも）ので、それで良かったのだ。多分。

☆

かくして、ヘリオポリスへと向かう選抜メンバーは決まったのだが……そこでこれから先、縁が続いていく新たな出会いがあり――膠着状態だった戦局が再び動き出す場面に遭遇するなど、誰もが予想していなかった。

〈続く〉

偽りの平和

紆余曲折はあったものの、ヘリオポリスへ向かうメンバーは何とか決まった。

○レジェンド／アルトアイゼン・リーゼ
○ゼット／Ｚガンダム
○ダイゴ／Ｓガンダム
○ロスヴァイセ／ライン・ヴァイスリッター
○アマリ＆ルリア／ゼルガード
○アズ／ヒュッケバイン３０
○一誠／量産型ゲシュペンストＭｋ―Ⅱ改
※ダ・ガーンも同行するが勇治の宇宙船で待機
○タイガ／ゲシュペンストＭｋ―Ⅱ・タイプＳ
※タイタスとフーマは現状専用機なし
○リアス／リバウ（変形・分離機構オミット）
○しのぶ／ヒュッケバインＭｋ―Ⅱ
○サーガ／ダブルオークアンタ
○三日月／ネオ・ガンダムバルバトス
○沙耶／ガンダムＸ
○流＆勇治（＆シエル）／勇治の宇宙船（というかグレードアップしすぎてもはや戦艦）

無論、このメンバーに決まるまでというか決まってからも不満の声はあった。一応この中で特別なのは流と勇治で、宇宙船のステルス性能を使い緊急事態に備えつつ、ヘリオポリスのシークレット・ポートで待機する役割がある。ヒリュウ改やクロガネにはそういった機能が無い（クロガネにはドリルを使った潜航能力があるが）ので、ここは外せない。

レジェンドを筆頭にダイゴとサーガ、並びにレジェンドと一体化しているゼットは立場上問題無く、技量も文句無し。卯ノ花からレジェンドが怪我した場合の治療法を学び、かつ卯ノ花が機動兵器を有していないため専用機を受領したしのぶも分かるし、神衛隊所属でエース

パイロットの三日月がサーガの護衛に当たるのも納得だ。
そうなるとやはり他のメンバーの選定に物申したくなるのは当然といえば当然かもしれない。レジェンド達を除けば、トライスクワッドは別としても大人が沙耶のみ（ロスヴァイセはリアスらと同年代らしい）、しかも最近機動兵器に乗れるようになった者ばかりときた。ロスヴァイセは乗機がレジェンドの機体と連携を前提にしているためまだいい。アマリやルリア、アズは各々の乗機でモネラ軍団との激戦を経験をしているから納得はしきれずとも理解は出来る。
問題は一誠、リアス、そしてタイガらトライスクワッド。そのうちタイタスとフーマは未だ専用機がなく、あくまでもタイガ共々一誠と一体化している関係上なので仕方がない。しかし、乗機を受領した三人はまだ機動兵器での実戦が無く、しかも最近漸く候補から昇格したばかり。これでは不満というか不安しかないのも当然だろう。
しかし、レジェンドは深く理由を語らず押し通した。ただ彼と付き合いの長い者は気付いただろう……彼がその背で語った真の理由――若い世代で今後最も過酷な道を行くであろう者達へ、理想と現実の差をその身で実感させようとしていることに。

☆

ヘリオポリスへと向かう当日、選抜メンバーと万が一の時に備えて追加で選出したメンバー、そしてロンド・ミナ・サハクはヒリュウ改で宇宙ステーション『アメノミハシラ』へと赴いていた。ミナが今後ウルトラ騎空団が活動する上で拠点として使えるよう、彼女自らがウズミへと頼んだのである。プライドの高い彼女が自分に頼みに来ることに驚いたウズミだが、それが巡り巡ってオーブのためになることだとも理解し、快く承諾。
その結果、アメノミハシラを中継地点にすることにしたというわけだ。
「こちらとしては色々助かるが……良かったのか？かなり無茶を言っ

た気がしないでもないというか」
「構わん。どの道、我がサハク家は何れ活動拠点をこのアメノミハシラへと移す予定だった。それが早まっただけのこと、お前達が気に病むことではない。それにこの件に関しては私自ら言い出した事、無茶を言ったのはお前達ではなくこの私だぞ」

凛とした態度を崩さぬミナに、待機メンバーとして選出された人物の一人であるソーナがキラキラとした視線を向け、時折「ミナお姉様」と呟いている。どうやら実の姉と比べて見たところ、明らかにミナの方が立派だと思ったからのようだ。近くでセラフォルーが滝のような涙を流しているし。普段が普段なので文句は言えないぞ、頑張れレヴィアたん。

アメノミハシラへと到着後、選抜メンバーは勇治の（無理矢理改造された）新たな宇宙船……もとい戦艦『ペガサスＡ』に乗艦し、ヘリオポリスへ向かいシークレット・ポートより入港。その後、内部を視察しつつ件の依頼を遂行……というのが今回の流れだ。
なお、初お披露目となるペガサスＡは――

「うッおぉぉぉォォォ!?ウルトラすげぇ！アルビオン！アルビオンじゃねーでありんすか!!」

そう、外見が宇宙世紀００８３に活躍した戦艦・アルビオンとほぼ同じなのだ。細かな箇所はアレンジされているものの、全体的なフォルムはあまり変わっていない。ゼットがハイテンションな理由はシミュレーター絡みといえば御理解頂けるだろう。
最初は宇宙船を改造することに難色を示していた勇治だったが、いざ完成してみると悪くなく、ＡＩ（シェル）も喜んでいるので結果良ければ全て良しで済んだ。

「さて、そろそろ向かうとするか。マジンガーＺＥＲＯ、アーシア達を頼むぞ。オーフィス……と紫天一家、そうむくれるな」
「ぷんすこー」
「だって、やっとレジェンドと合流出来たのにまた離れ離れなんですよ？」
「帰って来たらちゃんと時間作ってやるから」

オーフィスとユーリに服を掴まれながら文句を言われたが、シュテルとディアーチェはまだ我慢出来たらしく、レヴィだけが騒ぐだろうと予想したシュテルによってルベライト（つまりバインド）で拘束されていた。

「何でボクだけこんな扱いなのさぁー!?」
「合流時にお兄様の腰を逝かせたのは誰ですか」
「今、兄上に何かあれば悪い意味（主に不憫）で験担ぎになりかねんのでな。少し我慢しておれ」

シュテルはともかくディアーチェもよく聞けばレジェンドをディスってるような気がしないでもないが、一先ず置いておく。彼女らをレジェンドが宥めている時、サーガはユウキを宥めていた。小猫やゼノヴィアは己がまだ力不足（特にゼノヴィアは厳勝からきつく言われている）なのを自覚しており、相方とも言えるアカネは――

「私って直接戦うタイプじゃないし。指揮官とか～、軍師や参謀って感じ？」

ということらしい。そのおかげかどうかはともかく、ユウキがなかなか納得しないのだ。サーガの御使いであることを差し置いても、彼女は生身での戦闘力が相当なもので、専用機はまだ無いが機動兵器の操縦訓練も欠かしていない。涙目でしがみつかれているサーガはどうしたものかと困り顔、こういう時は強引でも収められるレジェンド

が羨ましい……と思っていたら。

「おい」

「うぅ～……何、レジェン「受け取れ元気爆発娘」ドさまぅあぁぁっ!?」

声をかけるやいなやディスクの入ったケースをヒョイと投げるレジェンドに対し、大事なものかもしれないと急いでキャッチするユウキ。

「いきなり何投げるの!?」

「それにお前用の専用機のデータが入っている」

「「「「!!」」」」

「シミュレーターにダウンロードして訓練しておけ。全く……同じサーガ絡みの神衛隊所属であるコジローではなく、俺や束を頼って毎日毎日来るから仕方なく用意することにしたんだ。おまけにダブルオークアンタと合わせる機体といえば俺の新しい専用機として開発されるはずだった『アレ』しか思い浮かばなかったから、最終的にはそれを渡さざるを得ないし……」

ハァ……と溜め息を吐いたレジェンドを、先程とは違いオーフィスとユーリがポンポンと叩いて慰めた。同様に今度はユウキが萎縮してしまう。それはそうだろう、レジェンドの専用機予定だった機体となればコスト度外視のワンオフ機だろうし、性能などどれだけのものやら。

「え……そ、そんな凄いモノ受け取れないよ。だって……」

「あのなあ、アーシアを見ろアーシアを。俺の真の愛機であるマジンガーＺＥＲＯと仲良くやってるだろ。俺のがどうとか言う気ならそんな事は頭の片隅に置いておく程度でいい。機体性能を十二分に引き出して、サーガを支えられるように努力を積み重ねろ。それが俺の専用機をお前に譲る条件だ。守れるな？」

最後の部分を言った時のレジェンドの顔は優しかった。ユウキは訳あって両親の顔を知らず、かといって捨てられたというわけでもないのだが、親の愛情というものを知らない……知らなかったというべきか。そんな彼女にとって、サーガの御使いになってからはレジェンドが父親みたいなものである。惑星レジェンドに来て最初の頃、ちょっとしたことでサーガと言い合いになって家出した時などは決まってレジェンドの所に転がり込んできたりしたものだ。

レジェンドにとって見れば惑星レジェンドに住まうものは等しく我が子のようなものだが、彼女のようにもはや本当に義理の娘と呼べる者も少なくない。皇ライのように養子となった者もいるくらいだし。

閑話休題。

そんなレジェンドは我儘を言う娘に折れてしまった父親のような雰囲気であり、ユウキは渡されたディスクケースをしばらく見つめた後、漸く笑顔で頷いた。

「……うん、わかった！ボク、その機体を譲ってもらったことに恥じないパイロットになるね！」

「おう。それから、そのディスクに入ってるのはあくまで『仮の状態』の機体だ。勿論現実でもその機体から乗ってもらうが……最終的にその機体をベースに当初予定していた機体を開発するからな。今のうちにクセを掴んでおけ」

「はーい！」

「すまない、先輩……俺が何とかしなければならなかったのに」

「別に気にしていない。それに俺はスーパーロボット派でな。ネオ・グランゾンもアレ個人的にスーパーロボット寄りだと思ってるから。マジンガーＺＥＲＯなんてお前王道だろ」

『フフン』

ドヤ顔のマジンガーＺＥＲＯとレジェンドだが、マジンガーＺＥＲ

Ｏのチート超え性能を知る者達は内心『王道っぽいのは武器の名前ぐらいだろ』としか思えなかった。アーシアはレジェンドの言葉にコクコクと嬉しそうに頷いており、マジンガーＺＥＲＯがまたまた機嫌を良くしている。暴れる姿を見た時、彼女の純真が壊れぬ事を祈りたい。

☆

紆余曲折はあったがペガサスＡは無事ヘリオポリスに到着し、シークレット・ポートへと入港……と言ってもシークレットというだけあって無人なのだが。そのまま流と勇治以外の選抜メンバーは多目的ブレスレットに各人必要な物を収納し、ヘリオポリス内部へと向かう。一部の者は途中で私服に着替え直し、通路を抜けた先にあったものは人工物の内部とは思えぬ、自然と文明が調和した光景。

「すっげ……！マジでコロニーなんだ！」
「この世界においてこういった形のコロニーは殆どなく、専ら砂時計型の『プラント』の方が主流らしい。このヘリオポリスがオーブに属するものだから、という理由もあるかもしれんが」

相変わらずＴＶなどの中でしか見たことのなかったものを実際に見た一誠はハイテンション。そんな彼の周りやレジェンドの隣にはアストラル体のトライスクワッドやゼットがいる。というのも彼らが人前に出るには、この世界の文明が進んでいるとはいえ、空の世界ほど種族に寛容な世界ではないからだ。寧ろ種族関係に厳しい方と言える。

「ここからはチームに分かれて行動するぞ。警備班と任務遂行班、あとは……視察というか散策班か？」
「はいはいはーい！私とアマリは散策班がいいです！」
「ちょっとルリア、私達は遊びに来たわけじゃ……」

「いいぞ」
「いいのっ!?」

アマリの驚きを他所にルリアは「わーいわーい！」と飛んで喜んでいる。そのままレジェンドは彼女ら以外のメンバーもパッパと分けていく。

「トライスクワッドとゼットは俺や一誠と同行することになるのは確定だから……となると、俺とダイゴ、それからロスヴァイセが遂行班。それから警備班はサーガと三日月……あと沙耶、いけるか？」
「大丈夫よ先生、問題ないわ。ＭＳとかいうのの操縦に関しては……まだちょっと不安だけど」
「あとは散策班だ。好きなように見て回って構わんが、必ず連絡取れるようにしておくことだけは守れよ」

散策班の「はーい！」というやけに元気な返事を聞きながら、やれやれと肩を竦めるレジェンド。少々心配ではあるが、しのぶがいるのでまあ大丈夫だと思うことにする。こちらがやることをやってさっさと合流すればいいだけだ、と考えていたのだが……この時はまさかあんな事態になろうなど誰が予想出来ただろうか。

☆

――宇宙・ヘリオポリス周辺――

そこにザフトの艦であるナスカ級・ヴェサリウスが潜伏していた。そのヴェサリウスで指揮を取るのはかのラウ・ル・クルーゼ、そしてベリアル。その二人にヴェサリウスの艦長であるアデスが問いかける。

「隊長、本当に宜しかったのですか？評議会の返答を待ってからでもよかったのでは……」

「遅いな。私の勘がそう告げている」
「得てして望まぬイレギュラーってのは起こるもんでね。例えば……突入部隊に死者が出るとかな」

クルーゼの近くに立っていたベリアルが普段と変わらぬ調子でそう言うと、アデスは眉をしかめた。最近やってきたベリアルを怪しんではいるものの、実力や功績は本物であるため、クルーゼが傍に置きたがるのも一応は理解出来るのだが……。

「確かに突入部隊の実行班は年若い者ばかりですが、主要メンバーは皆赤服です」
「そりゃあ彼らは赤服、エリートだ。だけどイレギュラーってのはそういうの関係なしに起きちまうのさ。そもそもあのヘリオポリス、連合じゃなくてオーブの持ち物だろ？連合、オーブ、それに俺達ザフト……色んな要素集まり過ぎて何があっても不思議じゃないぜ」
「全くだ。いつでも動けるように準備しておけ、アデス。それから、私のエゼキエルもだ」
「隊長自ら出られると……!?」
「なに、エゼキエル・ラヴァンの実戦テストも兼ねてな。それに感じるのだよ……奴の気配を」

クルーゼの言う奴とは連合に属し、『エンデュミオンの鷹』の異名を持つムウ・ラ・フラガのことだ。どういうわけかこの二人、互いの存在を感知する能力的なものがあるらしい。そんなクルーゼに付け加えるようにベリアルが発言する。

「それに、あんまし時間をかけ過ぎるとザフト（うち）の方からもあの部隊が嗅ぎ付けてくるかもしれないからな。こういうのは電光石火、さっさと仕掛けることに限るのさ」

☆

――再びヘリオポリス内部――

「何というか……平和だったわね」
『だよな。一応チラホラ戦争の話題は出てたけど』
「……」
『イッセー、いい加減機嫌直せって。そりゃリアスにラッキースケベが起こるなんて思……いや割と起こりそうだわ』
『リアスの方もよく引っ叩かず我慢出来たな』

こんな話をしている散策班の一誠・トライスクワッド・リアスのオカ研メンバー。実は少し前、このヘリオポリスでゼミに通う少年が躓き、偶然にもリアスの胸に顔面ダイブしてしまうという珍事件が起こったのだ。わざとではなく相手側も物凄い勢いで謝り、側で茶化していた友人らしき人物はその彼女と思しき少女に拳骨をかまされていたため、リアスも普通に許したのだが……。

「ちっくしょう……俺だって部長の胸にバーニングダッシュキメてぇよ……」
『『久しぶりに聞いたなイッセーのスケベ発言』』
『相棒の場合、リアス・グレモリーに頼んだら簡単にＯＫされそうな気がせんでもないがな』
「分かってねぇなドライグ……こういうのはな、ラッキースケベだから意味があるんだ！」

ここにアザゼルがいたら同意しそうなものだが、生憎と彼は今アメノミハシラだ。しかし彼は忘れていないだろうか……この場にいる散策班はオカ研だけではないことを。

「アマリ、らっきぃすけべって何ですか？」
「ルリアは覚えなくていいことよ」

「???」
「ルリアさんはそのままでいて下さいね。それからアズさんは何故自分の胸を触ってるんですか？」
「……レジェンドさん、大きい方が好きなのかな。大きいとしたらどれくらい――」
「はいはいそこまでです。レジェンド様は大きさなんて気にしないでしょう」

リアスと比べて自分の胸のサイズを気にしていたアズだが、彼女もしのぶも少なくとも普通以上はあるので然程悩む必要はないし、そもそもリアスはかなり大きい部類に入る。それを言ったらアマリは小さいし、ルリアは絶ｐ……いや、何でもありません。
そんな時、突如としてヘリオポリスが揺れ、ザフトの主力量産ＭＳであるジンが襲来。手にしたアサルトライフルで工場らしき場所を銃撃し始めた。

☆

「クルーゼ隊長とベリアル参謀の言った通りだな」
「突けば慌てて巣穴から出てくるって」
「しかし妙だな……報告では五機あるはずだが」
「恐らくはまだ工場の中だろう。そっちは俺とラスティで行く。そちらは任せたぞ」

ジンの銃撃を受け、工場らしき場所からトレーラーで運び出される三機のＭＳを遠目で見ながら、ザフトの突入部隊であろう少年達が行動を開始する。それを更に遠目で見ている者達がいることに気付かぬまま。

「超師匠、あそこで何かやってません？」

「まあ、中立国のコロニーで連合のＭＳ開発なんてやっていれば、どこかしらで嗅ぎ付けられてあんなマネされるのも無理ないわな」
「レジェンド様もゼットさんも落ち着きすぎです！」
「技術協力は仕方ないとしても、何でオーブのコロニーで……！連合もせめて自分達の基地で行うとかすれば、こうして民間人に被害は出なかったのに！」

やけに落ち着いているレジェンドとゼットとは対照的に、焦り気味のロスヴァイセと怒りを覚えるダイゴ。本来ならば警備班が遭遇しなければならない事態に、何故か彼ら遂行班が直面してしまった。
そして、それだけではなく――

☆

偶然にもサーガ、三日月、そして沙耶はこの騒ぎの中、とある場所を通っている最中に二人の少年少女と出会い、成り行きで共に行動していた。

「何でお前達までついてくるんだ！早く逃げろ！」
「って言うけど、俺達の方があんた達より強いし」
「身のこなしからして少しは動けるみたいだけど、まだまだね。独学でやってない？一度でいいから達人に教わってみなさい。先生みたいな人はオススメしないけど」
「そもそも先輩の修行方法は人間がやれるように出来ては……いや、東方不敗や縁壱は喜々としてやっていたか」
「んだとぉ!?」
「いや、あの……君もだけど、貴方達は落ち着きすぎていませんか……？」

金髪の少女が怒っているが、茶髪の少年はサーガ達にロスヴァイセと同じように聞いている。無理もない、断続的に聞こえる爆音や振動

を物ともせず、平然と会話している時点で肝が座り過ぎだろう。彼らの経歴を考えたら当然なのだが。

「ともかくお前達は逃げろ！私には確かめなければいけないことがある！」

「……あれ？これって俺達じゃなくてレジェンド様達がいないといけなかったんじゃないかな」

「ねえ、貴女まさか……って待ちなさい！」

三日月と沙耶が何かに気付くも、少女は再び走り出してしまい、それを追いかけるように他の四人も走り出す。そして彼らが辿り着いた場所では、灰色の二機のＭＳが横たわっており、その近くでは連合とザフトによる激しい銃撃戦が展開されている。その光景――銃撃戦ではなく、二機のＭＳを見た少女は手摺を掴みながらゆっくりと崩れ落ちた。

「そんな……ダイゴ兄様と約束したのに……！

お父様の裏切り者ぉぉっ!!」

その声に反応し、ザフトの兵士がサーガ達の方を向き銃を撃ってくる……が、少年と少女には偶然で済んだが三日月と沙耶は平然と回避し、サーガに至っては撃たれた銃弾を全て掴んで握りつぶしてしまい、見ていた連合とザフト双方の兵士を唖然とさせた。

「やるね、サーガ様」

「そんなことするの先生だけかと思ってたわ」

「先輩ならここからパンチの衝撃波だけであの二機諸共この場を木っ端微塵に破壊する」

「「それもどうなの？」」

ちなみに東方不敗も同じようなことをする。そんなことを言っている間に、どうやら少年少女は避難したようだ。一言声をかけてくれればいいだろうに、と思ったがそれよりもやるべきことがあると三人は思考を切り替えた。

「俺は多分外で暴れてるだろうＭＳを潰すよ。適当な所でバルバトスに乗るから、サーガ様と沙耶さんはこっちの方をよろしく」

「わかった。他の班もこの騒ぎには気付いているはずだ。やることをやったら一度合流し、今後の事を話し合おう」

「……お誂え向きに一人、銃で撃たれてて放置は危険な人物がいるわね。ザフト側だけど」

三日月はさっさと行ってしまっており、どうする？と聞いてくる沙耶にサーガは「決まっている」と短く答えると、階下へと飛び降りすぐさまその人物を抱えて退避。他の者は既に事切れており、悲痛な表情を浮かべる沙耶だったが、長くここに留まれば今度は自分達もこうなると自身に言い聞かせ、サーガと共にその場を離脱した。

その背後では、先程逃げたと思ったはずの少年が戻ってきており、連合の女性士官に半ば無理矢理ＭＳのコックピットへと押し込まれた。

工場施設が燃え上がる中、それは目に光を灯しゆっくりと起き上がる。また、別の場所でも同じように『新たなる悪魔』が起動。

それは平和の終わり、未知との邂逅……そして、長き旅路――冒険の始まり。多くの出会いと別れに先んじて、二機の『ガンダム』が出会おうとしていた。

〈続く〉

ストライク、イージス、ネオ・バルバトス

サーガ達が工場内で行動している頃、遂行班と散策班は一足早く合流していた。特に三機のＭＳ――デュエル、バスター、ブリッツと呼ばれる機体がザフト側に奪われる場面に遭遇し、一誠やタイガは叫ぶ。

「あいつら……あれだけのためにこんな強盗紛いのマネすんのかよ！」

「レジェンド！俺達に追跡戦闘の許可を！」

「駄目だ」

「どうして!?」

「今ここでブレスレットから機体を出してみろ。ただでさえ連中がＭＳを持ち出してまであの三機を奪いに来てるんだ。今の状況で俺達も機体を出そうものなら余計混乱を招く上、連中の仲間扱いされ最悪捕らえられて情報を引き出すために拷問だの自白剤投与だのをされたりするかもしれん」

拷問のくだりでうっと顔を顰める一誠とタイガ。この世界、一般的にはまだコーディネイターしかＭＳを十分に使えていないのだ。十分に、なのでナチュラルでも使えなくはないが、動かすことすら四苦八苦しているのが現状である。もし大々的に機体を出して操縦しようものなら良くも悪くも色々な意味で目立ってしまう。

尤も既に住民の大半は避難しているだろうが……。

そこに爆発する工場から二機のＭＳが飛び出した。片やセブンのアイスラッガーのようなトサカが特徴的な機体、ＧＡＴ―Ｘ３０３イージス。片やダブルオーに似た形状のアンテナや顔の機体、ＧＡＴ―Ｘ１０５　ストライク。

当然この二機を見た一誠やリアスらは驚くが、レジェンドとしのぶは予想通りといった表情だ。

「あれ……！先輩が乗ってるダブルオーってのに似てねぇか!?」
「まあ、顔はな。見た感じあれが素体、ハードポイントによって戦い方を変える機体か」
「そこまで分かるの!?」
「確かに先程の三機や今現れたもう片方と違い、そのままでは少々心許ないですね」

しかし、彼らはその後すぐに起こった光景に目を疑う。ストライクの方が覚束ない足取りで歩いたかと思えば躓くように倒れ込んだ。

『な……何やってるんだ？あれ……』
『さては準備運動を怠ったな？』
『いや違うだろ……』

ツッコミを入れるフーマだが、ある意味タイタスの指摘は間違っていない。何せＯＳがまだ未完成なのだから。先の三機も奪取したパイロット達がそれぞれ扱いやすいようにＯＳを書き換え、再設定したからまともに動くことが出来たのである。

（さっきのはキラ……いや、あいつがあんな所にいるはずがない。他人の空似だろう……だが）

奪取したイージスのコックピットで、実行部隊の一人であるアスラン・ザラはかつて別れた友人であるキラ・ヤマトを思い出す。工場で同僚のラスティ・マッケンジーが撃たれ、連合の士官をその仇として撃たんとナイフを構え近づいた時、まさかの再会を果たすことになってしまう。
……が、その連合の士官に銃を向けられその場を離れるしかなく、ラスティの亡骸を回収することも出来ぬままイージスに乗り込んであの場を脱出せざるを得なかった。そこへ同じく同僚のミゲル・アイ

マンがジンに搭乗したまま通信を繋げる。

「無事だったか、アスラン。ラスティはどうした？」
「ラスティは失敗だ。あの機体には連合の士官が乗っている」
「……そうか。ならあの機体、俺が捕獲する。お前は先に戻って――」
「待て、ミゲル！まだ別の場所に反応がある！」
「何っ!?」

ドオオオオオン!!

爆音と煙が上がった方を見れば、そこには金色の大型アンテナを頂き、一部フレーム剥き出しのボディに緑の双眸を輝かせた機体……神衛隊に知らぬ者なしと言われたＭＳ、ネオ・ガンダム・バルバトスが獲物を狙う獣が如くジンとイージスへとその視線を向けていた。

「まだ新型を隠していたのか!?」
「いや……それにしては妙だ。連合どころかザフトの機体とも明らかに違う。頭部は連合の試作機と似ているが、ああもフレームが剥き出しなど――」

そこまで言いかけて、アスランは背筋が一瞬で寒くなる程の悪寒を感じ、無意識に操縦桿を握りイージスを動かした。直後、バルバトスがクローでイージスが立っていた場所を抉る。

「アスラン!!」
「だ……大丈夫だ！（何だ今の速度は……!?）」

眼前の機体から発せられる、今まで感じたことのないプレッシャーにアスランは冷や汗をかき、急いでイージスを始めとした五機の試作機に搭載された『フェイズシフト装甲』を起動させる。これにより、イージスはその機体色をグレーから赤に変え、見ている者達を驚かせ

た。

「アスラン、何だそれは!?」

「こいつらはフェイズシフトという特殊な装甲を持つんだ。一度展開すればジンの武装のような実弾攻撃では掠り傷一つ付けられない」

そうは言ったものの、アスランは目の前のバルバトスがフェイズシフト装甲の有無だけでどうにか出来るとは思えなかった。異常な速度で攻撃してきたこともそうだが、この機体……たとえ物理攻撃が通じなかったとして諦めるだろうか?

(やはりあれは連合の機体じゃない。だとしたらオーブの……?)

同じく戦場にいるストライクのコックピットで、突如現れたバルバトスに連合の士官であるマリュー・ラミアスは、避難させる意味で強引にコックピットに同乗させたキラ・ヤマト共々混乱していた。

「何なの、あの機体……!?攻撃した以上、ザフトのものではないし……連合でもあんな機体を作っているという報告もない。何よりあの動きは一朝一夕でやれるようなものじゃないわ……!」

そう零していたら、いきなり通信が入ってくる。どうやったのかは不明だが、三日月がバルバトスからストライクへと無理矢理通信を繋げたのだ。

『ねえ、その機体に乗ってる人』

「なっ……!?子供!?」

「君は……!さっきの!」

『あ、何か金髪の子に押され気味だった人。何でそれに乗ってんの?』

別にいいけど、と三日月に言われて少しばかりキラは凹んだ。マリューとしては言いたいことや聞きたいことがあったが、それは三日月の台詞で潰される。

『あのさ、邪魔だからあんまり動かないでよ』

「なっ……!?」

『ザクみたいなやつも色が変わったやつも、俺とバルバトスでやるから。そんな動きじゃ足手まといだし』

顔色一つ変えずバッサリ言い放った三日月に絶句する二人だが、先の動きを見ると言い返すことが出来なかった。ふと気になったキラがストライクのＯＳを無理矢理見てみると、明らかに合っていない。

「無茶苦茶だ……！これだけの機体をこんなＯＳで動かそうなんて！」

「まだ調整中だったのよ……仕方ないでしょう！」

「どいて下さい！」

「え？」

「早く！」

有無を言わさぬ迫力を放つキラに気圧され、マリューは自分が後ろに回ってキラを操縦席に座らせる。するとキラは凄まじい速度でストライクのＯＳを書き換えていく。あまりの速さにマリューはまたも驚くが、同時に凄まじい振動が伝わってきた。

「うわっ!?な……何が……!?」

「……ッ!?」

キラとマリューの目に映るのは、辛うじて撤退するイージスと……片手片足、そして頭部すらも無理矢理もぎ取られ、地に倒れるジンの姿。まるで肉食獣のようなバルバトスを見た二人は戦慄する。

「本当に何なの、あの機体は……まるで鉄の体に血が通ったかのような戦い方をして……」
「これを、彼が……」

どうやらジンのパイロットは脱出したようだが、確実にトラウマになったのではないかと思われる惨状の中、バルバトスは勝利の咆哮を上げるような動作をするのだった。
なお、これを見たあとでマリューは緊張が切れたのか気を失ったことを付け加えておく。

☆

「……で、あっちを三日月に任せてお前達はソレを拾ってきたと」
「その表現はどうかと思うが間違ってはいない」

あれからストライクを停止させ、キラがマリューを抱えて降りると彼の学友らしき人物達が駆け寄ってきたので、一先ずあちらは任せて三日月はサーガや沙耶も合流していた場所(すぐ近く)に自身も急行。お疲れ様です、としのぶから渡されたおにぎりと飲み物を礼を言ってすぐに頬張り始めた。

「そうだ、サーガ様。あれに工場みたいな所で会った、将来結婚相手の尻に敷かれそうな人が乗ってたよ」
「ああ、あの少年か」
「サーガ、俺の表現がどうだか言ってるがお前の部下も結構アレだし、これで理解出来るお前もお前だぞ」
「……否定出来ない」

その説明で分からなかった一誠やリアス達が「どんな人?」と聞いてきたので三日月が指をさすと、一誠は大声で叫ぶ。

「あああああ!!部長の胸にダイブした奴!!」
「オイ何か今日揃いも揃って表現の仕方が雑なんだけど。というかお前はほぼ毎日同じベッドで寝てるだろーが」
『そういう超師匠は最近紫天一家も加わって、一緒に寝るためのローテーションが更に複雑になったとあちこちから聞いてますけど』
「それはもはや諦めたがな、ロスヴァイセの時はハクとフウが付いてくるから決まってカナエも乱入してくるんだよ……」
「姉がすみません。いや本当に」

しのぶが頭を下げるも、相変わらず怒っている時に右拳で素振りをするのは体勢的にかなりシュール。とりあえず、アメノミハシラにいるカナエが悪寒を感じて身震いしていることは、ここにいる誰も知らない。
そんなほのぼのとした雰囲気の中、少し離れた場所――キラ達がいるであろう場所から銃声が聞こえた。

「な……何だあ!?」
『あっちから聞こえたぞ!』
「ふう……こちらも怪我人の治療してる最中だというのに、穏やかじゃありませんね」
『大方あの機体を見たから軍事機密がどーたらこーたらってやつじゃありません? 超師匠』
「……お前ちゃんとそういうこと考えられるのに、宇宙警備隊の訓練校で筆記の成績悪かったの何でだよ」

何故かＭＳ絡みだとやけに冴えまくるゼットに溜息を吐きながら、レジェンド一行はそちらに向かうことにする。

☆

その頃、『黄昏の魔弾』と呼ばれる腕利きのパイロットのミゲルがジンを失う、それも一方的な戦いでという結果を聞いたクルーゼは予定通り自らが動くことを決めた。それに、少し前に撃沈した連合の艦からムウ・ラ・フラガが駆るメビウス・ゼロが発艦し、ジンを撃墜していることも考慮している。

「さすがに普通の兵では奴の相手は務まるまい。私が出よう。ついでと言っては何だが、ヘリオポリス内に残っている機体の様子も見てくるとしようか。後は頼むよ、ベリアル」

「オーケー、ラウさん。ま、ラウさんの技量とエゼキエルの性能が合わされば余程の化け物でも出ない限り問題無いだろ。強いて言うなら……どうもあの部隊がウチのやってることに勘付いてこっちに来るらしい。捕獲するにせよ、破壊するにせよ、はたまた撤退するにせよ早く動いた方がよさそうだ」

「フッ……まるでハイエナだな。尤も、彼はコロニーに手を出したことを責めるために来るのだろうが」

「ホントこっちを監視でもしてんじゃないかってぐらい嗅ぎ付けてくるからな。ストーカーは良くないと思うぜ、俺は」

レジェンド一行がいたら「お前のどの口が言うか」と不快感を露わにして文句を言うだろう台詞を口にするベリアルだが、クルーゼは「同意するよ」と口元に笑みを浮かべつつブリッジを後にする。

「さーて……案の定イレギュラーが起きて一名作戦成功成らず……こりゃ『特異点』が絡んでるかもしれないな」

特異点、という言葉に首を傾げるアデスだが、突っ込んで聞いてものらりくらりと躱すだろうとそれ以上追求することはしなかった。

「ったく！ザフトとドンパチやるハメになるわ、乗ってきた艦は落と

されるわ！今日は厄日か!?」

そう言いながらもムウのメビウス・ゼロは有線式誘導兵器・ガンバレルを巧みに使い、ジンを撃墜していく。ジンを全て撃墜し終わったかと思いきや、突如何かが迫ってくる感覚に見舞われる。

「この感じ……！ラウ・ル・クルーゼか！」

「やはり一般兵にお前の相手は荷が重すぎたようだな、ムウ・ラ・フラガ！」

やはり、と思ったムウであったが現れた機体に目を見開く。シグーではなく、重厚な鎧を纏ったようなフォルム、そしてＭＳより一回り大きな白い機体。

「貴様！何だその機体は!?」

「知人から頂いたものだよ。この機体の初の実戦テストに付き合ってもらおうか」

クルーゼの駆る機動兵器エゼキエル・ラヴァンは左腕からレーザー・ブレードを発生させ、メビウス・ゼロにある程度の距離まで接近するとブレるように瞬間移動し、ガンバレルの一つを斬り裂く。

「何っ!?」

「フフ……素晴らしい。この大きさでありながら実に機敏な動きが出来る」

「だが大きいって自覚してるなら的になることも予想出来てるんだろうな！」

残り三基のガンバレルとメビウス・ゼロ本体に取り付けられたリニアガンの一斉射撃でエゼキエル・ラヴァンを狙うも、エゼキエル・ラヴァンは回避しようとしないどころか動くことすらしない。それを

怪訝に思ったムウであったが、次の瞬間その理由が判明する。なんとエゼキエル・ラヴァンに当たる直前、時空が歪むような現象と共に一斉射撃が全て無効化されたのだ。

「今何かしたのかね、ムウ・ラ・フラガ」

「この野郎……！そんな反則的な機体！持ち出してくるんじゃねえ！」

無効化されたのは防御フィールドであるグラビティ・テリトリー――通称G・テリトリーと呼ばれるものに阻まれた事が原因だ。このG・テリトリーの突破方法は至極簡単、力押しするだけでいいのだが……フィールドの強度が機体本体の強度を参照するもので、エゼキエル・ラヴァン自体の防御力が高いためG・テリトリーもそれに連動して無効化能力が高くなっている。

即ちメビウス・ゼロの攻撃力ではどう足掻いても突破が不可能なほど強固なのだ。更に、G・テリトリーを突破してもエゼキエル・ラヴァン自体の装甲を抜くことが出来ねば意味がない。

つまり、この時点でムウは詰んでいた。

「ちっ！こうなったら猫の手でも何でも借りるしかない！せめて一機だけでも残っていてくれよ、新型！」

「ヘリオポリスへと逃げ込む気か。中立国のコロニー内部を戦場に選ぶとは、やはり貴様も連合の一員だな」

皮肉を込めた言葉を口にしながら、クルーゼはヘリオポリス内へ逃走したメビウス・ゼロを追跡するため、エゼキエル・ラヴァンをヘリオポリスの中へと向かわせる。

☆

ヘリオポリス内ではマリューが学生達へ銃を突きつけていた。

ゼットの言う通り、ストライクを目撃したことによって機密保持のために同行してもらう、ということなのだがやはりキラ達は納得出来ない。反論するもすぐに返されてしまう。

「無茶でも何でも、戦争をしているんです。中立だから巻き込まれないとか、まさか本気で――」

「はーいそこまで。一般人を守るはずの軍人が一般人脅してどうするんだ」

「「「「!?」」」」

突然マリューの隣に現れたレジェンドがヒョイと拳銃を取り上げ、クルクルと回転させながら軽く説教をかます。いきなり現れたこともそうだが、女性かつ手負いとはいえ軍人からあっさり銃を取り上げたことに驚きを隠せない。

「貴方は……!?ッそれより返しなさい！」

「やなこった」

ふん、と鼻を鳴らして口笛を吹き出すレジェンドにマリューも苛ついたのか、肩を怪我してるからということで立ち位置的にレジェンドの弁慶の泣き所を蹴るが――尋常じゃない硬さだったおかげでダメージが自分に丸々返ってきただけである。

「ッ～～～!!」

「やべー、この子見てて面白いんだけど」

『超師匠、何か今日性格悪くないですか？』

正直、涙目で右足を押さえるマリューを学生どころか到着したサーガ達も哀れんだ。

「先生に生身で喧嘩しかけるなんてバカの極みね」

「「「「沙耶（さん）辛辣ぅ!!」」」」

……沙耶だけは冷めた目で見ていたが。伊達に幼少期にレジェンドから鍛えられたわけではない。今の彼女は少なくとも、どこぞの世界の細胞を集めて造られた人造人間と真っ向から殴り合い出来るスペックを生身で有している。

「それはそれとして、相手が中立国だろうと軍人だって言うならまだ話は分かるがな。軍兵の養成学校生どころか、明らかに普通の学生相手に銃振り回して言うこと聞かせようなんざ真っ当な軍人のやることではない」

「それは、私にも分かっているわ……！でも今は状況が――」

その瞬間、レジェンドは誰もが予想しなかった行動に出た。取り上げた拳銃をマリューに向け、頬すれすれに撃ったのだ。まさかの行動に彼をよく知るサーガさえ絶句したが、周りの反応など知ったことかと、レジェンドは無表情になり言葉を紡ぐ。

「お前は我がウルトラ騎空団の重要機密である機体を目撃した。従って然る場所に連行し、判断を仰ぐため以後の行動は共にしてもらう。お前に反論する権利はない」

「!?いきな……」

再び発砲。学生達からは悲鳴が上がり、マリューは顔色が悪くなっていく。本来なら声を荒らげて文句を言うだろう一誠やリアス、タイガも普段とあまりに違うレジェンドの雰囲気に呑まれ、若干体を震わせている。

「反論する権利はないと言った。状況がどうであれ、お前が重要機密を目撃したのは事実。選択肢は二つ、言う通りにするか、ここで自決するかだ。俺はどちらでも構わん」

「……」

青褪めたまま、何も言えないマリュー。彼女どころか殆どの者がレジェンドの威圧感の前に口を開く事すら出来なかった……のだが。

「……と、さっきのお前の言葉はこんな感じで圧迫面接もかくやというような脅迫だったんだぞ。こんなもん未成年の一般学生がいきなり言われて反論出来ると思ってんですかコノヤロー」

「「「「はい？」」」」

またも突然雰囲気が変わったレジェンドに間抜けな声を出す一同。どうやらマリューがやったことを本人にやってみただけらしい。

「あ……え……でも、機密……」

「うちじゃ別にバルバトスは機密でも何でもない。バレたところで簡単にやられるわけはないし、逆に返り討ちにして相手の持つ機密情報を絞り出してくれるわ。なあ、三日月？」

「あ、うん。昨日食べた晩御飯とか」

「「「「それ機密情報ッ!?」」」」

「何言ってんだ他所の家庭事情を聞き出すなんざ立派な機密情報だろーがァァァ!!」

力説するレジェンドに毒気を抜かれ、全員が安堵の吐息を漏らす。しかし、レジェンドにしてみれば喧嘩両成敗にする気なので、これで終わりではない。

「それからお前ら」

「「「「は、はい!!」」」」

「興味があるのは結構だがな、一応コレが軍事機密にあたるのは間違いないんだ。好奇心に負けてあまりベタベタするもんじゃない。それこそさっき言われたように戦争をしているのだから、そういう行動

はお前達自身で戦争に首を突っ込んでいくようなものなんだぞ。それを肝に銘じて行動には気をつけろ」
「「「「すみませんでした……」」」」

キラも含め、学生達は気を落として反省の言葉を口にした。これで少しはマシになるか、と軽く息を吐きレジェンドはマリューの方に向き直る。

「とはいえ、行動は共にせざるを得ないだろうな。見たところもうシェルターの類は残っていない。少なくとも安全な所に預けられるまでは彼女に同行した方が得策だ」
「で……でも」
「くたばりたくば好きにしろ。生き延びたくば共に行け。それだけだ」

レジェンドの言葉は非情に聞こえるが、確かにその通りなのだ。身を護る術の無い彼らでは、再度戦闘に巻き込まれれば今度こそ命の安全は保証出来ない。レジェンドの表情からそれを察した学生達は、仕方ないながらもマリューに協力する事を決めるのだった。

☆

ヘリオポリス内部へと続く艦艇用通路で、メビウス・ゼロとエゼキエル・ラヴァンの戦闘は続いていた。戦闘というより狩るものと狩られるものに近く、たった今最後のガンバレルもエゼキエル・ラヴァンに破壊され、メビウス・ゼロの残る武装はリニアガンのみ。

「ちいっ！いよいよマズいな、こりゃ！」
「この辺で消えてくれるとありがたいんだがね、ムウ」

圧倒的な攻撃力と防御力を併せ持ち、機動性も十分に備えたエゼキ

エル・ラヴァンの前にムウは焦りを見せるが、反対にクルーゼは余裕の表情である。
そんな正反対の二機と二人は、徐々にヘリオポリス内部――レジェンド達がいる場所へと近付いていく。

☆

一方、レジェンド達は奇跡的にストライクの装備が無事であったことが確認出来たため、キラとその学友……トール、ミリアリア、カズイ、そしてサイに手伝ってもらいつつ、トレーラーを動かしたりして装備を搬出していた。なお、マリューはしのぶが治療中。本当に彼女を同行させてよかったと思うのはレジェンド他選抜メンバー全員だ。

「あれでいいんですよね？」
「ええ、ありがとう」
「しっかしよく無事だったよな。あれだけ別の場所で整備してたんですか？」
「ストライクは他の機体と違って装備の殆どが外付けなのよ。パワーパックの問題もあるから別の区画で調整していたのだけれど……今回はそれが功を奏したわ」
「俺のゲシュペンストと似てるな、あのストライクっての」

一誠がそう呟くと、技術畑だったからかマリューが興味を示すがキラの声で意識を戻される。

「どれですー!?パワーパックって！」
「武器とパワーパックは一体になってるの！そのまま装備して！」

「……だ、そうだ」
「分かりましたけど……そんな所にいて大丈夫なんですか？」

「少しでも掴まる所があるなら問題無い」

レジェンドはストライクのコックピット周辺に掴まり、キラの操縦の様子を間近で見ている。チラッと確認したが、本気モードの自分や束ほどではないにしろキーボード操作がかなり早い。

（天才……というよりコーディネイターか、この子は。それも相当優秀な部類だな）

一目でキラがコーディネイターだと見抜いたレジェンドだったが、別段色目を使ったりはしない。そもそも、これがまだ彼の全力でないにしろ簡単にねじ伏せられるようなスペックの持ち主など、ウルトラ騎空団を始め様々な場所にわんさかいる。彼と似たようなステータスの割り振りで言うなら束が最たる例だ。

「あの……」

「ん？」

「もしかして、気付いてますか？僕がその……コーディネイターだって」

「まあな。それがどうかしたか？」

「どうかしたって……」

「お前がコーディネイターだからなんだ。生憎とそんなことで目くじらを立てるヒマなんぞ俺には無いのでな。大体ナチュラルだのコーディネイターだので争うこと自体、俺には馬鹿馬鹿しくて理解出来ん。する気も無いが」

この世界ではどれだけレジェンドと同じような人物がいるかは不明だが、少なくとも惑星レジェンドの関係者やウルトラ騎空団、そしてウルトラ戦士達は彼と同じ考えだろう。

「……ん？」

「何かあったんですか？」
「ああ……キラと言ったか。早く換装した方がいい。一悶着ありそうだ」
「え？」

レジェンドの言うことを理解出来ず首を傾げたキラだったが、直後にヘリオポリス内部へと遂にメビウス・ゼロとエゼキエル・ラヴァンが突入してきた。

「なっ……あれは!?」
「片方はダイゴが言っていた機体か。もう片方は初めて見るが……ストライクでは少々分が悪いかもしれん」

エゼキエル・ラヴァンのレーザー・ブレードがメビウス・ゼロの最後の武装であるリニアガンの砲身を切断し、もはやメビウス・ゼロは丸腰状態。どうにか回避は出来ているが、撃墜は時間の問題だ。

「もはや打つ手が無くなったようだな。潔く散ったらどうだ？」
「うるせえ！無様だろうと何だろうとそうやすやすと死んでたまるか！」

そう啖呵を切るも、はっきり言って自身だけでは打つ手が無いという点ではクルーゼに同意せざるを得ない。そんな彼の目に入ってきたのはランチャーストライカーを装備したストライク、そして――

「堕ちろよっ……！」
「む!?」
「おぅわっ!?」

凄まじい跳躍で地上から両機の間に割り込むバルバトス。ＶＡＥ

ユニットはオーバーホール＆機能追加するために束に預けており、代わりに装備したレンチメイスを両手で持ち振り下ろすバルバトスと、その一撃を両腕で受け止め落下するエゼキエル・ラヴァン。途中で弾き飛ばすように腕を払ったエゼキエル・ラヴァンにより、両機は少し間合いを離して大地に着地した。

「やっぱり挟んで削るんだった。硬いな、こいつ」

「なるほど、ミゲルの報告にあった異質なＭＳか。連合の試作機に似てなくもないが、明らかに別物だな」

睨み合う二機は少し間をおいた後、再度激突する。エゼキエル・ラヴァンのガイスト・ブローをバルバトスは平然と受け止め、お返しとばかりにレンチメイスを片手で振るうがこちらも片腕で防御された。至近距離で放たれたフォトン・バルカンを恐るべき反応速度で回避し、バルバトスがバックパックにマウントしていた滑空砲を構えて撃つもやはりＧ・テリトリーに阻まれる。

「近付いた時に感じた違和感ってそれか。直接潰そう」

「やれやれ……随分と物騒なことを言う」

そんな一進一退の攻防を繰り広げる二機を上空から見下ろしつつ、ムウは独りごちる。

「俺が見た資料じゃあんな機体はなかった……戦闘力もそうだがマジで何なんだありゃ……!?」

☆

「あの白くてデカい奴、パイロットの方も中々だな。機体の能力を理解しつつ的確な行動をしている。恐らく指揮官機か」

「じゃあそんな落ち着いてる場合じゃないでしょう!?ちょっと離れる

かコックピットに入ってシートの後ろに――」
「やめとけ。その装備じゃ三日月の邪魔になるだけだ。それにその長身砲、もし外したりすればこのヘリオポリスに風穴が開くぞ。ざっと出力を計算してみたがそれぐらい出る」
「なっ!?」
「別の装備、何かあるか？高機動戦重視とか接近戦重視のやつ」
「えっと……確かブースターとか剣のやつとかがあったような……」
「なんだソレ別物か？高機動プラス接近戦とかならベストだったんだが」

レジェンドとキラがそんな話をしていると、再三バルバトスとエゼキエル・ラヴァンがぶつかろうとした次の瞬間、爆音と共に巨大な煙が横から舞い上がる。

「ッ……今度は何が……!?」
「んー？何だあれ、ホワイトベースっぽいの出てきたんだけど。どっちかっていうとアルビオンか？」
「だから何でそんなに落ち着いてるんですかっ!?」
「くぐってきた修羅場と地獄の違いだ」

そういう会話をしている二人――いや、その場にいる者達が目にしたのは、大天使の名を冠した白い巨大戦艦。強襲機動特装艦アークエンジェルが、岩壁を主砲でブチ破りながらその威容を全員の前に現した。

〈続く〉

カウントダウン

ヘリオポリスのシークレット・ポートに停泊中のペガサスＡでは、流と勇治に加え、勇治の所有怪獣であるエースキラー、アリゲラ、エレキングが寛いでいた。エレキングが（レジェンドのせいで）リムエレキング化したように、他の二体も同じような体型になっているのは喜ぶべきなのか……。

「何をどうしたらこうなるんだ……」

「まあ、戦うときは元に戻るみたいだし、いいんじゃないですか？」

勇治は頭を抱えるが、当の怪獣達はちょこちょこ動き回り何ら問題なさそうである。むしろ活動範囲が広まって嬉しそうに見えなくもない。

そんな彼らは、ヘリオポリス内部で現在起こっている出来事を全く知らなかった。

☆

岩壁をブチ抜いてその全容を露わにしたアークエンジェルに目を奪われる一行。リアス達がそれに気を取られている間に離脱しようとするクルーゼのエゼキエルだったが、レジェンドと三日月がそれに気付く。

「逃げるなよ、白くて硬い奴……！」

「生憎と私にも事情というものがあるのだよ」

ブースターを噴かせて追ってくるバルバトスに対し、エゼキエル・ラヴァンは背部から何かを取り出して構える。するとそれは伸身し数秒で巨大な長身砲となり、バルバトスへと狙いを定めた。

「悪いが道を開けてもらおうか」

エゼキエル・ラヴァン――引いてはエゼキエル系の最大武装オルガ・キャノンである。一応言っておくが鉄華団の団長の名が入っているが彼は関係ない。

オルガ・キャノンから放たれた強力なエネルギーはバルバトスに回避されるが、それはクルーゼにとって想定内。むしろ避けてくれなければ困るものだ。バルバトスに命中しなかったそのエネルギーは、ヘリオポリスに命中し大きな風穴を開けてしまう。

「「「「ッ!?」」」」

「フ……連合の開発したMSに新造艦、それに所属不明のMS。そんなものが中立国のコロニーにあった以上、こうすることの大義名分は十分だな」

「最初からこうする気だったんだ」

「その機体とやり合っては、エゼキエルといえどエネルギー問題でジリ貧になるのが目に見えていたのでね。一先ず撤退するとしよう。また会おう」

三日月にそう言い残し、クルーゼの駆るエゼキエル・ラヴァンは開けた穴からヘリオポリスを脱出する。三日月が追おうとするもサーガに制止され、仕方なく帰投。エゼキエル・ラヴァンによって傷付けられたヘリオポリス崩壊のカウントダウンは、既に始まっていた。

☆

キラを始め、ヘリオポリスで出会った学生達はマリューの指示によりストライクと共にアークエンジェルへと着艦することになった。レジェンド達とはお別れ……のはずがマリューによって同行を頼まれた。まさか頭を下げられるとは思わなかったことに加え、ストライクが(一応)軍事機密であったことも踏まえると断るわけにもいかず、

ついでにダイゴが『切り札』を持っていると聞かされた以上同行する他ない。

「……で、レジェンドさん以外はバルバトスの手に乗せてもらっているのだけれど……」

「レジェンド、どうしてストライク……でしたよね。あれのアンテナの先の上に腕を組んで立っているんでしょう？でも、バランス感覚凄いです！」

「違うわルリアそうじゃないから」

（サーガ様、あれ絶対老師の影響だよね）

（ああ……いや、元々なのかもしれない）

相変わらずのレジェンドの奇行にキラやその友人、マリューもあんぐりとしているし、ルリアはズレた意見を口にしてアマリにツッコまれていた。東方不敗がこの場にいようものなら同じような事をしていたに違いない。

流と勇治には「成り行きで連合の艦に乗ることになった。一応外見データを送るので、先にアメノミハシラへ帰還するかステルス機能を発動したまま同行するかはそちらの判断に任せる」と連絡しておき、ついでにヘリオポリスがそう長くは持たないだろうことも教えておく。

連絡を受けて一瞬の静寂のあと、二人と三体が驚いたの当然だと言えよう。

案の定というべきか、格納庫にはクルーが勢揃い（ただし正規の艦長他クルーは多く戦死している）状態で待ち構えており、マリューは比較的歓迎されたがキラ達学生は驚きと少々の警戒を持って迎えられた。

そこまでは良かった。

問題はレジェンド達ウルトラ騎空団の面々だ。こっちもこっちで

悪い意味でなのだが、案の定銃を一斉に向けられ警戒というより敵意丸出しに近い状態。まあ、連合どころかザフトのものでもない、それどころかこの世界のＭＳとは違う様相の機体を有し、ジンどころかザフトの新型と互角以上の戦闘を繰り広げたとあれば無理もないのだが。

しかし、無理もないとは言ってもマリューに頭を下げられて同行した結果これでは、レジェンド以下団員達も納得は出来ない。

「いくら何でもこれはないんじゃないかしら？私達は頼まれたから同行しただけなのに」

「そうですね。私達はちゃんと『ではここでお別れですね』と言いましたよ？」

沙耶としのぶが青筋を浮かべながらマリューを糾弾すると、彼女自身は申し訳無さそうにするが、同じ連合の士官であろう黒髪の女性が声高に叫ぶ。

「お前達！何が目的だ！得体の知れない機体で許可もなくアークエンジェルに着艦するなど――」

「バジルール少尉！彼らは二度の戦闘で私達を助けてくれました。機体の件もそうですが、同じくストライクの目撃者でもあるため私の判断で着艦したもらったんです。少なくとも敵ではないでしょう。銃を下ろして頂戴」

「ラミアス大尉！しかし……」

「すみません、よろしいでしょうか？」

そう言って一歩前に出たのはダイゴ。何なのかは知らないが、ダイゴが切り札を持っていると聞かされていたレジェンドはそれを使うのだろうと予想していたものの、出された切り札は予想以上にとんでもないものだった。

「オーブ連合首長国・特務大使のマドカ・ダイゴです。そちらの読み方にすればダイゴ・マドカでしょうか……この度、我がオーブ所有のコロニー・ヘリオポリスの査察に赴いたのですが意図せず今回の事態に遭遇しました。つきましては何故中立国であるオーブのコロニーで連合の兵器開発が行われていたのかも含め、御説明頂きたく自分達もマリュー・ラミアス大尉に同行を決めた次第です。なお、今回の査察はこの通り、ウズミ・ナラ・アスハ前首長からの指示で行っています」
(えげつないな、ダイゴ……というかあのアスハとやらもグルか。食えん奴だな)

まさかのウズミ直筆の文書まで見せつけ、ダイゴは「なんで連合がウチのコロニーで好き勝手してんだオラァ」と合法的に責め立てた。よもやそんなものを出されるとは思っていなかったマリューらは青い顔をしており、もはや言い逃れ出来ない状況。それに加え、レジェンドが追撃する。

「ダイゴ、お前アスハの令状預かってたのか。俺もサハクの令状預かってんだけど。ほれ」
「「「「!?」」」」

これには連合側だけでなくダイゴも驚いた。こんな事もあろうかと、ミナが出発直前にレジェンドへ持たせておいたのである。何という慧眼、恐るべしロンド・ミナ・サハク。

「あ……あの、手にとって拝見させて頂いても……?」
「どうぞ」
「構わん」

レジェンドとダイゴから受け取った令状を読み、マリューは気が遠くなって倒れる寸前、先程の女性士官――ナタル・バジルール少尉に受け止められた。

「ラミアス大尉!?気を確かに!」
「え……ええ、ありがとう……ごめんなさい」

それがどういう意味での謝罪なのかはともかく、重苦しい空気の格納庫に割と明るめな声が響く。

「こいつは驚いた!新型にせよ、そっちの機体にせよ、操縦してたのが子供なんてな」
「貴方は……」
「地球連合軍第七機動艦隊所属、ムウ・ラ・フラガ大尉。よろしくな」
「まさか『エンデュミオンの鷹』……!?」

いつの間にか着艦していた、メビウス・ゼロのパイロットのムウ・ラ・フラガであった。クルーの一人が驚きの声を上げるとムウ自身は「俺はあんまそう呼ばれるの好きじゃないんだけどな」と苦笑する。

「俺のメビウスがこんな有様でね。着艦許可を欲しいんだが……この艦の責任者は?」
「先の襲撃で艦長以下、主要なクルーは皆戦死しました。よって現在はラミアス大尉がその任にあると思われます」
「ええっ!?」

驚きの声を上げるマリューだが、この場の階級で言えばムウとマリューが同じく大尉であり、アークエンジェルの関係者でもある彼女がその職に就くのも何ら間違いではない。これも戦時中であれば有り得ることなのだ。

「そうか……悪いこと聞いちまったな。ともかく、着艦許可をくれよ。俺が乗ってきた艦も、あいつらに落とされちゃってさ」
「え……ええ。着艦を許可します」

「ありがとう。にしてもとんでもない機体だな、どっちも。ところで君達……コーディネイターだろ」
「あ……はい」

キラがそう答えると一斉に銃を向けられる。しかし、三日月はあっけらかんと答えた。

「俺コーディネイターとかいうのじゃないけど」
「……は？」
「つーかウルトラ騎空団にコーディネイターいないからな。似たようなのはいるけど」
「ちょっと待った！ってことは何か？この機体はナチュラルでも使えるＭＳ……」
「バルバトスは新生阿頼耶識に対応してないと動かせないよ。もう完全に俺専用になってるから対応してても無理だけど」
「阿頼耶識……？」

周囲（連合と学生）がどよめき出すのも気にせず、三日月は上着を脱いで背中を見せると、三つの斑点があった。元々は『ピアス』と呼ばれる、阿頼耶識に対応させるために施術で埋め込まれた物があったのだが、見た目的にも生活的にもアレだろうと思ったレジェンドとサーガによって『共鳴斑』に変化させることで各種リスクを無くしている。

尤も、大分前に説明されたが三日月や他の者達は仰向けに寝れるようになったことが一番ストレス解消になったようだ。

「それは……」
「今はこうなってるけど、以前はここにピアスがあったんだ」
「ピアスってアクセサリーの？何でそんな所に――」
「違う。こういうものだ」

そう言ってサーガはブレスレットから光を投射し、三日月の斑点と周囲に当てるとかつてのピアスがあった頃の三日月の背中が映し出される。三本の突起状に背中の皮膚が盛り上がっており、それを見たマリューらは絶句した。

「こ……これって……!?」

「もういいか？こちらとしても大人の勝手な都合で使い捨てにされる為にこんな施術を施されたこと、これ以上思い出させたくはない」

サーガが言った言葉に連合・学生達は唖然とした。『大人の勝手な都合で使い捨て』――特にマリューは先刻、戦争だからと学生達に銃を向けたことでその言葉を重く受け止めた。彼女自身は連合の中でも良識人の方なのだ。

「そういうわけだから、俺はコーディネイターってのじゃないけど、仮にコーディネイターだったら何なの？」

「何なのって……」

「……バカらしい」

「「「「っ!?」」」」

沙耶が呟いた言葉にアークエンジェルのクルー達が一斉に彼女に銃を向けるが、彼女は驚きなどしない。彼女にしてみれば百の銃より眼前の師（つまりレジェンド）の方がよっぽど脅威なのだから。

「そもそもコーディネイターを作り出したのはナチュラルで、ナチュラルがいなければコーディネイターは生まれず繁栄もしなかったのでしょう？自分の生み出したものと自分を生み出したもの、その間柄で戦争をして優劣を決めるなんて頭の中どうなってるのかしら」

「何だと貴様っ！」

「もういいわ。貴方達が戦争したいなら勝手にやっていればいい。ただ、そんな争いなんてどうでもいい私達や、彼らのような一般人を巻

き込むのはやめてくれる？」

煽りスキルが半端ない沙耶と、割と沸点の低いナタルでは相性が悪すぎるため、仕方なくレジェンドが仲裁に入ることにした。

「そこまでにしておけ、沙耶。そっちも事ある毎に銃を向けるな。そうやって攻撃的な行動をするから要らぬ誤解を招くんだぞ」

「彼の言う通りよ、バジルール少尉。他の者達も銃を下ろしなさい」

「ぐっ……了解しました」

「……で、白いのにボコられたそこの金髪」

「ちょっ!?それって俺かぁ!?」

「当たり前だ。何でこの場で諍いを起こさせるようなことを聞いた？内容次第では俺自らこの艦ごと貴様ら全員沈めるぞ……！」

途中までは普段と変わらぬ口調だったが、後半は凄まじい気迫が込められており、その場の全員が立ち竦む程であった。レジェンドは生身でそれが可能なだけでなく、実はネオ・グランゾンも持ってきている。余程のことがない限りまだ使う気はないが、いざとなればその力を振るうことも辞さぬ覚悟だ。

「あ……いや、深い意味はなかったんだ。ただ、戦闘の様子を見てな。コーディネイターは子供でもＭＳの操縦が出来るのかって思ったんだよ。興味本位で聞いて悪かった」

「……ふん」

次はないぞ、と言いたげなレジェンドの様子を見て、一段落しただろうと踏んだダイゴはレジェンドに続く形で自身の意見を口にする。

「オーブは国としてコーディネイターを受け入れています。キラ君……でしたね、オーブに住んでいる彼がコーディネイターだったとして何もおかしいことはないでしょう。そうだよね？」

「え……あ……はい。僕は第一世代のコーディネイターですから」

先のレジェンドの怒りと今のダイゴの優しい笑顔と声掛けで幾分緊張が解れたのか、素直に答えるキラにダイゴは頷く。

「じゃあご両親はナチュラルなんだ。きっとご両親は君に幸せになってほしいからコーディネイターにしたんだろうね。だから君は自分はコーディネイターであることを卑下する必要なんてない。それに、君自身や君の友人を見ていれば、君が優しい人間だって分かる。コーディネイターだからといってその人の性格まで遺伝子操作で出来はしない。その優しさは君が持つ本質だから、無くさないようにね」

「そうだって！ちょっと抜けてるけど、お前が気にすることないってば！」

「トール、抜けてるはいらないでしょ」

「でもさ、そういうところがナチュラルもコーディネイターも一緒だってことじゃないかな」

「っていうか、ナチュラルみたいなのにコーディネイターよりヤバい雰囲気の人がそこにいるんだけど」

ダイゴに続けて、トール、ミリアリア、サイ、そしてカズイもキラを擁護する。特にカズイの発言は一誠やリアス、それにしのぶ達も声を殺して笑っていた。確かにこの中で一番ヤバい。色んな意味で。

「先輩、拗ねないでくれ」

「俺の何処がヤバいんだ」

「戦闘力」

「圧」

「経済力とパイプ」

「女子力」

「お父さん力」

「天然ジゴロパワー」

「「「「その他諸々」」」」
「よーし上等だ全員表出ろコルァ」

このやり取りに漸くキラも笑顔になり、学生達も大笑いしていた。トールは「後半のやつ何それ」と特に笑い、ミリアリアは「女子力!?」と驚きと少しの羨望を含んだ表情でレジェンドを見ているし。

そこでやっと置いてけぼりだった連合側……というかムウが再び口を開いた。マリューとナタルが女子力の辺りでどことなく落ち込んでいるがこの際無視しておく。

「あー……改めて悪かったな、変なこと聞いて。ここに来る途中、Gのパイロット候補生の訓練を見ていたんだけどさ。あいつら動かすのも四苦八苦してたぜ。それから、今ここを狙ってるのはラウ・ル・クルーゼの部隊だ」
「あのラウ・ル・クルーゼ……!?」
「あいつはしつこいぞ～？出るなら早くした方がいい。尤も見逃してくれるとは思えないけどな」

そう言って、ムウは一先ずパイロットスーツから着替えるべくその場を後にする。結局、今後のことも定まらぬままレジェンドやキラ達はアークエンジェルの一室に案内されることになった。

「あ……でもウルトラ騎空団？の方々はこの人数じゃ……」
「あー気にせんでいい気にせんで。後で圧縮空間の技術使って広げるから」
「……え？」

ついでに、今更ながら意識が戻らないザフト兵をサーガが担いでいたことに気付き、一悶着ありそうだったがレジェンドの殺気を思い出し、連合側はウルトラ騎空団が監視することを条件に黙認したそうな。

☆

「では、間違いないのか？」
「ああ。形は変わっているが動きや戦い方はそのままだ。俺がコカビエルって奴と行動していた時に出てきたのと同じだろうな。形が違うのは改修というよりメンテナンス中なんだろう、外した方の部分を」
「アレでもかなり厄介なのだがな」

ヴェサリウス内ではクルーゼが戦闘データをベリアルに見せ、バルバトスに心当たりが無いか聞いたところ見事にヒット。クルーゼはバルバトスの性能を直に体験し、それでもパワーダウンしている状態だと聞いて内心驚きを禁じえなかった。

「ならば尚の事そのままにしておけんな。奴らが連合についてしまっては後々面倒になる」
「ただなぁ……光神サマの性格的に連合とは合わなそうなんだよね。むしろやらかしようによっては連合を撃つことも考えられるくらいさ」
「仮にそうなったとして、ザフトにつくとも思えん。不安な要素は早目に摘み取ってしまうに限るよ」
「ご尤もで」

☆

アークエンジェルのブリッジ。マリュー、ムウ、ナタルの三人は今後のことについて話し合っていた。

「さっきも言ったが外にいるのはクルーゼ隊だ。最近やたら頭の切れる参謀がついたってことで第七艦隊でも何かと噂になってたぜ」

「ラウ・ル・クルーゼ自身もかなりの知略家と聞いています。ヘリオポリスを出るには向こうが動いていない今しかありません！」
「それは分かっているわ。でもこちらは圧倒的に戦力不足よ。もし仕掛けてきたら殆ど抵抗出来ない」
「俺のメビウスは修理中だし、頼みの綱はあのストライクって新型だけだが……」

そう言ってムウが口籠る。一応自分が乗れないか確認してみたが、ＯＳを見たときストライクの出せるスペックを全部引き出していると言っても過言ではないものになっていた……のだが、その代わりにナチュラルでは操作出来るような代物ではなくなってしまっていた。

「……？ストライクは大尉が乗られるのでは？」
「あのなあ、あの坊主が弄ったＯＳを見たか？あんな機体、まともに扱えるわけないだろ」
「では、ＯＳを元に戻して――」
「そんでのろくさ出て行って的になれって？」
「それはっ……ともかくコーディネイターの、それもあんな子供にストライクを任せるわけにはいきません！」

ナタルを発言を聞いたムウとマリューはレジェンドやダイゴがここにいないことに安堵した。今の発言を聞けば確実に二人はブチ切れるだろう。しかし、その片割れであるレジェンドは割り当てられた部屋から地獄耳（レジェンドヒアリス）でしっかり聞いていたのだが、今自分が動くと面倒になりそうなので黙っていたらしい。

「じゃあどうする？ウルトラ騎空団って言ってたか、彼らに頭下げて頼むか？まだ隠し玉を色々持ってそうだからな」
「っ……何処の馬の骨とも知れない連中の力を借りるなど……」
「だが見ただろ、あの機体の戦闘力もパイロットの能力も。おまけにクルーゼの野郎、シグーがオモチャに見えるような新型を使ってきや

がった。あれに対抗するには結構な戦力が必要になるぜ」

ここまで言われてはナタルも反論出来ない。仮にキラをストライクで出撃させたとして、クルーゼがまたエゼキエル・ラヴァンで出て来たとしたら、どれだけ戦えるだろうか。ましてやメビウス・ゼロはムウの言う通り修理中……アークエンジェルも現在の人員では援護もままならない。

マリューは溜息を吐きつつ、静かにある場所へと赴く。

アークエンジェルの一室ではレジェンド達が寛いでいた……と言っても一部の者のみ、レジェンドやサーガ、三日月に沙耶などだ。一応ゼットとしのぶも寛いでいるのだが、彼らは一誠やリアスらを気遣って静かにしている。

「これからどうするのかしら、この艦」

「分からん。最有力としてはヘリオポリスを脱出して友軍と合流……というのがベストなんだろうが、位置が位置な上に連合はザフト以上に一枚岩じゃないからな。同じ連合でもハズレを引けばエライことになるぞ」

沙耶とレジェンドは冷静にアークエンジェルの今後を予想している。やはり上に立つ者であるからにはこういう時こそ冷静にならねばならない。サーガと三日月はサンドイッチを摘まみながらドリンクを飲んでいる。

「もう少し種類を増やすべきだったか」

「そんなことないよ。俺、量も大事だと思うし」

カツサンドを頬張る三日月を微笑ましく思うサーガ。

だが彼らと違い、一誠やリアス、タイガ達は戦争というものの一端

を目の当たりにして沈黙していた。レジェンドや三日月は相手が人間だろうと躊躇無くその行動に踏み切ったが、自分達はいざという時に引き金を引けるのか。

「……俺、ずっと戦争は嫌だ、戦争は反対ってしか思ってなかった。でも実際はこんなに複雑なんだな」

「爺ちゃんや婆ちゃんにざっと聞いたぐらいだった。悪い宇宙人や怪獣が光の国を襲って、それでたくさん犠牲者が出たって。だから俺も戦争は悪いことなんだと漠然としか認識してなかったよ」

「イッセー、タイガ……」

リアスは俯きながら言う二人に慰めの言葉をかけようとするも、自身も似たようなものであるため口にすることは出来なかった。『人間』を『悪魔』に置き換えてみれば自分も精々キラ達より少し経験がある程度でしかない。コカビエルが望んだのはこんなのが当たり前の世界なのか、と改めて戦慄する。

「ゼットさんはあまり動じてませんね」

「「!?」」

「知ってますか、しのぶちゃん。あのシミュレーターの超高難度モード、ＣＰＵでもダイレクトに感情をぶつけてくるんでございますよ。自分がシミュレーターのミッションで撃った相手も記録されてるので、『兄の仇だ』とか『お前さえいなければ俺の家族は』とか言われたときは本気でシミュレーターやめようかって思うぐらい精神ウルトラ追い詰められたぜ」

このゼットの言葉に一誠やリアス、タイガのみならず、フーマやロスヴァイセ、それにアマリ、ルリア、アズも大きな衝撃を受ける。そのシミュレーターで放たれたＣＰＵの敵の言葉は、今後自分が実際に受けるかもしれないものなのだ。

唯一、タイタスだけは出生やその立場上体験していたため然程

ショックはなかったが。

「ところで、ティガ先輩がいない上に俺らこうして実体化してますけど大丈夫なんですかね？」

「バレたらバレたでその時だろ。っつーかよく考えたらいつかバレそうだし別に問題無くね？」

「レジェンド様、普通に問題あると思いますよ？」

そんなことを話していると――

「貴女達はこれ以上、彼に何をさせようというんですか!!」

部屋の外からダイゴの、怒りの込もった声が響いてきた。

〈続く〉

崩壊の大地（前編）

――アメノミハシラ――

「レジェンド様達は大丈夫でしょうか……連絡が全く無くて心配です」
「戦闘になろうとあの男がそう簡単にやられるわけがあるまい。案ずるな、アーシア・アルジェント」
「あ……ミナさん」
「ふ……大抵の者は私と二人きりになると萎縮するというのに、清楚な見た目からは想像も出来ぬ胆力の持ち主だな。レジェンドが気にかけているのも頷ける」

まさか褒められるとは思わず、アーシアは頬を染めつつも軽く礼をする。話してみて分かったが、どうやらロンド・ミナ・サハクは強い信念を持つ者を気にいる傾向があるらしく、ウルトラ騎空団は彼女にとって理想の集団だという。

「便りが無いのは元気な証拠とも言う。お前はお前の信じる者のために今出来ることをすれば良い」
「……はい！それじゃあ私、訓練してる人達に差し入れ作ってきます！」
「うむ。私も後で顔を出そう。束がアストレイゴールドフレームをベースに改造した機体をシミュレーターで試してみたい」

どことなく千冬に似た雰囲気があったからか、ミナは束と意気投合。ミナ専用機としてガンダムアストレイゴールドフレーム天津神（アマツカミ）なるバグった機体を一から作り上げてしまった。本来ならばゴールドフレームを改修して天（アマツ）となるはずが、アストレイシリーズの名前だけ貰った明らかな別機体として誕生したとのこと。
ついでに、後ほどシミュレーターで彼女と天津神に挑んだゼノヴィ

アとイリナ、あとセラフォルーはコテンパンに叩きのめされたらしい。

「うあああ!!エネルギー吸収されたと思ったら急に逆流させられて爆散したあああ!!」

「何で特機の装甲を平然と貫通してくるのおおお!?」

「わあああん!!ソーナちゃんにお姉ちゃんの凄いとこ見せたかったのにいいい!!」

そんな光景を見ながら、アカネは先程訓練を終えて食事中のユウキに聞いてみる。

「それで～？ユウキの方はどんな感じ？」

「レジェンド様の用意してくれたデータのこと？」

「そうそう、エクスバイン・アッシュだっけ。ヒュッケバイン３０に頭が似てるやつ」

「良い感じ！必要な武器は一通り揃ってるし、Ｔ―ＬＩＮＫセイバーって武器なんてボク好みのやつだもん」

笑顔でピースするユウキ。元気だね～と思いながらアカネはジュースを啜っている。悲鳴や泣き声が背後から聞こえてくるが気にしない。

「んじゃ～私がシミュレーターのシチュエーション設定してあげる。すっっっごく強い怪獣と戦うこともあるかもだし？」

んふふ～と笑うアカネは、ヒーローに理解こそ示すようになったがやはり怪獣大好きっ娘。故にカプセル怪獣達はお気に入り。

「アカネが設定するならホンモノの強力怪獣なんだろうなぁ……開発中のＶＲゲームで上級以上のクエストを作成してるぐらいだし。よ

し！お願い！」
「任されました～。ど～れを設定しよっかな～？」

非常に楽しそうなアカネだが、彼女の性格を知っていれば設定される怪獣や超獣がハンパじゃないものだとすぐに分かる。逆に理解していない場合――

「私も参加させてくれ！」
「私もっ！相手は違うけどリベンジしたい！」
「レヴィア☆たんも参戦するよ！」
（大丈夫かなあ……アカネ、絶対ウルトラマンを一度は倒した怪獣出してくるよ……）

と、ユウキが懸念するもやる気に満ち溢れる者が出てくる。そして案の定――

「ちょっ……まっ……!?」
「いやあああああ!?」
「何これえええええ!?」

なんとアカネが設定したのはかのウルトラマンマックスを倒した機械獣ギガバーサーク。そりゃ初心者どころか上級者でも数人がかりじゃまず勝てないような相手である。

「あー……少しは善戦出来ると思ったんだけどなぁ」
「仕方ないよ。大きさが違いすぎるし、スーパーロボットでも数体程度じゃあビクともしない機動要塞みたいな怪獣だからね」

……言っておくが、レジェンドやアムロはこれをタイマンで普通に撃破する。バケモノ通り越してキチガイとしか言えない気が……。
そんなほのぼのとしているアメノミハシラとは反対に、ヘリオポリ

スは今まさに激動の真っ只中であった。

☆

時はほんの少しだけ遡り、アークエンジェルの一室。キラ達学生に割り当てられた部屋に、ダイゴは一人訪れていた。五人の中で唯一キラだけは浅く眠っていたのだが、ダイゴが来るやいなや一瞬で起きたためトール達は本気でビビったらしい。

「ホント心臓に悪すぎだって」
「ご……ごめん」
「でも眠れるっていうのは良いことだよ。疲れてるのに何かしら頭にこびりついてしまって、寝たくても寝れないときとかあるからね」
「あ！それすっごい分かります！明日出る新作スイーツが食べたい、けど体重が……とか！」
「ミリィ、それ何か違う気が……」
「いや、彼女の言うような事態で悩んだ子って結構いるんだよ。チーフのとことかにも」

ええーっ！と声を上げるキラ達男性陣と、ほらあ！と笑うミリアリア。先の格納庫では重い雰囲気だったのだが、ダイゴの人当たりの良さや気遣いのおかげで彼らはすっかり打ち解けていた。
そこへマリューが一人で訪ねてくる。そして……。

「貴女達はこれ以上、彼に何をさせようと言うんですか！」

マリューはキラに第八艦隊との合流までストライクのパイロットを頼んだのだが、ここでダイゴの怒りが爆発した。彼の沸点はかなり高いのだが、半ば強制的な同行に始まり、コーディネイターというだけで銃を向け、そこまでしておきながらあまつさえ自分達が危ないと

分かるや、戦闘訓練も受けていない学生を戦場に駆り出そうとすることが彼の逆鱗に触れたのである。

「都合のいいことを言っているのは分かっています。ですが――」

「お断りします！」

マリューの言葉を遮るようにキラがハッキリと言い切った。ダイゴはキラと目を合わせると、ちゃんと意思表示が出来たことに微笑んで頷き返す。

「もう十分でしょう⁉いきなり銃を向けられて、命令されて、無理矢理戦艦に乗せられて……これ以上どうしろっていうんですか！」

「キラ君の言う通りです。確かに軍事機密を見てしまった以上、同行させるのは仕方のないことかもしれません。ですが、戦うことと戦えることは別問題です！」

そう言われてしまうと、マリューは反論出来ない。そこへ、まさかの人物が顔を出した。

「何事でございますかティガ先輩⁉」

「おいバカ今実体化してんのにいきなり……あ……」

「「「……え？」」」」

「あっちゃあ……」

ゼット。そう、ウルトラマンゼット。レジェンドが止めるのも聞かず、まんまその姿で駆けつけてしまい、周りが硬直してしまう。当のゼットはというと、今になって漸く自分が何をしでかしたか気付いたらしい。ダイゴに至っては額を押さえてガックリしている。

「……ん？あれ……？もしかして皆さん、俺見えてます？」

「え……ええ、一応……」
「うええっ!?あ、ヤベ……こういう時は……ゴホン！ナイストゥーミーチュー、私はウルトあだっ!?」
「このバカタレ!!いつも一時のテンションに身を任せて行動するなと言ってるだろうが!!」

ゴガァン!!と、とんでもない音を立ててレジェンドがゼットの頭に拳骨を落とした。ゼットは頭を押さえつついつもの「ウルトラすいません」を炸裂させているが、キラやマリュー達は予想外過ぎる存在に頭が追いついていかない。

「いや……その、貴方は一体……」
「くっそ、ゼットがバカやらかしたおかげでさっき会話していたことが一時間と持たず現実のものになってしまったか」
「一時間どころか十分も経っていないわよ、先生」
「えっと、えっと……な、なしとみるくー！私はルリア……」
「ルリア！真似しなくていいから！ちゃんと言えてないけど！」

沙耶にルリア、アマリまで駆けつけカオスになりつつあったが、ここでいきなり警報が鳴り響く。

「はわっ!?な、何ですか!?」
『ラミアス大尉！聞こえるか!?』
「フラガ大尉!?」
『連中が仕掛けてきた！至急ブリッジに上がれ！君が艦長だ！』
「私が……!?」
『先任大尉は俺だが、この艦のことは分からん！』

ザフトの再襲撃が始まったこと、そして自身が艦長になった……というかされたことに戸惑いを隠せないマリュー。しかし、ここでこうしている間にもザフトのＭＳは迫ってきている。だがキラがストラ

イクに乗るのを拒んでいる以上、無理に乗せるわけには……そう考えて思考が堂々巡りになっていたとき、救いの手を差し伸べたのはゼットであった。

「なら！俺が出る！」

「「「!?」」」

「出るって……貴方がストライクを操縦するというの!?」

「違うって！まあ、出来なくもないかもしれないけど……とにかく！俺には俺の機体があるんだ！それにアムロ師匠からも、コロニー内での戦闘や注意しなきゃいけないことはしっかりレクチャー受けてるし復習もしてる！超師匠！」

「……いいだろう」

少しだけ考え、レジェンドはゼットの出撃を許可した。最初は自分が出ることも視野に入れていたが、元々この異世界修行は次代を担う者達の心身成長を見越して行い始めたもの。ならばこそ、やる気があるうちにやらせた方がいい。

それに、ゼットはウルトラ戦士としてはまだまだだが、パイロットとしてなら既に第一線で活躍出来るレベルの実力がある。

「マリュー・ラミアス、格納庫と発進カタパルトを借りるぞ」

「え!?でもストライク……そういえばさっき自分の機体って……そもそもどこに――」

「ここで押し問答をしているヒマはない。行くぞ、ゼット」

「了解！」

「あ！ちょっと！」

マリューの制止も聞かず、レジェンドはゼットを伴って格納庫へと走っていく。そんな二人の後ろ姿を見ながら立ち尽くしていると、続いて沙耶にアマリ、ルリアまでも彼らを追いかけて格納庫へと走り出す。

「私も行くわ。一応、あの機体は必要な武装一式揃ってるし」
「私達も行きましょう、アマリ！召喚は使えないと思いますけど……」
「少しは隠してね、ルリア……ゼットさんがそのままの姿で顔出ししちゃったし、もう遅いと理解してるけど」

沙耶はまだしもルリアは召喚とはっきり口にしてしまっており、アマリが溜息を吐いて肩を落としている。これではトライスクワッドがバレるのも時間の問題。あの三人も然程困らなそうだが。
マリューは次々と格納庫に向かうウルトラ騎空団の者達に何も言えず、ただ見送るだけになってしまった。
ありがたいといえばありがたいのだが、彼らは『仲間が乗っているから』戦おうとしているだけだ。そうでなければ中立国のコロニーで戦闘しようとする自分達やザフトの味方などしないだろう。
だが、ここでゼット達の行動に触発されたのが、あろうことかキラであった。

「……この艦を守ることがトール達や、ダイゴさん達を守ることになるんですよね」
「……！キラ君、貴方……」
「勘違いしないで下さい。僕は……あの人達のように守りたいもののために力を使わせてもらうだけです。もし降りろとか乗るなとか言うなら、勿論僕は従います。でも、次にそう言ったときは二度と僕はあの機体に乗りません！誰が、何と言おうと!!」

少し気弱なところがあったキラがここまで強くはっきり言い切ったことにトール達は驚くが、それはほんの少し前までダイゴが心を解してくれたこと、そしてゼットが我先にと艦を守るべくレジェンドと駆けていったことが理由だ。
自分達を庇ってくれた人達が危険な戦場に赴かんとするときに、自分に出来ることは何か――そう考えたとき思いついたのは自分が乗

ることを拒否したストライクに乗り、戦場に出て少しでも彼らの負担を少なくすること。
しかし、彼らのフォローをするとしても自分のことが疎かになっては本末転倒。だが、そんな彼の懸念を払拭する声が。
「ならば俺もダブルオークアンタで出る。他の機体よりはフォローという面において問題ないはずだ」
「貴方は、レジェンドって人を先輩と呼んでた……」
「ソラン・セイエイ、以後よろしく頼む」
「あ、はい。キラ・ヤマトです。あの……ダイゴさん、すみませんでした。せっかくああ言ってくれたのに、僕の方から乗るって言い出しちゃって……」
申し訳無さそうに頭を下げるキラの肩を叩き、ダイゴは微笑みながら首を振る。
「気にしないでいい。だって、今の選択は君が自分でしっかり考えて決めたじゃないか。僕達大人が出来るのは君達にいくつもの選択肢をあげること。勿論、その中から選ばず別の選択を見つけ出してもいい。大事なのは自分というものを見失わないことだよ」
「ダイゴさん……」
「僕は立場上、簡単には戦闘に参加出来ないけど……気をつけて」
「はい！」
ダイゴの優しさを受け、キラは迷いなく返事を返す。ダイゴはそんなキラを笑顔で見たあと、サーガを見ると「彼は任せろ」とサーガは頷いてくれた。あとは眼前で呆けている艦長を現実に戻してブリッジに行かせるだけだ。
「彼らは自分の出来る範囲でやるべきことを、自分の意志で決めて動き始めました。貴女はどうするんですか？」

「え!?あ……すみません、マドカ特務大使！自分は一旦失礼致します！」

いきなり声をかけられたマリューは一瞬ビクッとすると、ダイゴに向かって敬礼しブリッジへと駆けていった。それから学生達がダイゴの後ろからひょこっと顔を出す。

「大丈夫かな、キラ……あの艦長さんも」
「何でだろ、艦長さんの方が心配になるのは……」
「トールもか？俺もなんだ」
「キラの方はほら……何か凄い人達と一緒だし」

アマリやルリア、沙耶はまだ初心者を脱したくらいだが、ゼットはエースパイロット級の腕前、サーガに至っては勝てる相手となるとレジェンドやアムロなど最強クラスのパイロットの中でも頂点に君臨する面子ぐらいの技量を誇る。

そんな人物にフォローされれば敵機の撃墜は出来ずとも撃墜されることもまず無いはず。

マリューを始め、生き残った者達の寄せ集めなブリッジの方が遥かに危うい。

それに近くの部屋では――

「……姉さん、ハクくんとフウちゃんがいないだけでそこまで落ち込むことなの？」
『だって！ヒリュウ改どころかアメノミハシラ、果てはそっちにもいないと思ったらエリアル・ベースに残ってるっていうんだもんんん!!』
「ダーントさんがお世話してくれるというのでお任せしたんですが……」
「……」
「アズさんもしゅんとしないで下さい」

……ウルトラ騎空団で残った者達が専用秘匿回線を使い、アメノミハシラにいる待機メンバーと会話中。一誠達はまだショックが抜けきっていないのに、しのぶやロスヴァイセ、アズは割と平気そうである。通信先のカナエは平常運転……大丈夫かオカルト研究部。

アークエンジェルのブリッジでは、ナタルを始めとする生存したメンバーから急遽選抜したクルーと、乗機が修理中で出撃不可能なムウが、攻めてきたザフトを迎撃すべく各システムを起動させている。
そんな中、ムウは戦線投入されているジンの装備を見て驚愕した。

「あれは拠点制圧用のD装備じゃないか！あんなもんをここで使う気か!?」
「どうやら相手は本気で我々を潰す気のようです」
「たく、こっちにはオーブの特務大使が乗ってんだぞ？俺らもそうだが、これじゃプラント側だって大目玉を食らうんじゃ……って、この艦が落ちちまったら終わりか。ホントに嫌なヤツだなクルーゼ！」

相手の指揮官を知るが故の悪態をつくムウだが、そこにマリューが漸く到着する。

「遅くなりました！」
「どうだった？」
「乗りはするけど守りたいものを守るために借りるだけと……あとは次に降りろとか言われたら、頼まれても二度と乗らないとまで言われたわ」
「おいおい、どうしたんだあの坊主？パッと見そんな強気発言しそうには見えなかったが……まあ、取り扱い注意とはいえ戦力になってくれるなら文句なしだ」
「それから……えーっと……」

「艦長！事態は急を要します、伝達は迅速に！」

ムウはともかく、ナタルから叱責されたが先の衝撃的映像を伝えてもいいものがどうか……とりあえず、ウルトラ騎空団から何名かが手助けしてくれることを伝えよう、そう考えて説明することにした。

「……ウルトラ騎空団から数名、本艦の護衛のために力を貸してくれるとのことです」

「なっ……!?」

「よっしゃ！願ってもないことだ。けど機体はあるのか？まさか生身でやりあうってんじゃないだろうな」

ムウの懸念は尤もだが、よりによってそれが普通に出来る面子（ドグマや召喚さえ使用可能ならアマリやルリアも）が出撃メンバーなのはいかがなものか。

すると、格納庫から通信が入ってきた。

『ブリッジ！ちょっといいですかい!?』

「どうした!?」

『いや、どうしたもこうしたもいきなりあのウルトラ騎空団の団長がわけのわからない――』

『だからウルトラマンゼットだって名乗ってるでございますよ！ハンガーを一つ貸してくれって言ってるんだ！』

「「「「はあ!?」」」」

「そういえばあの時、そのまま走っていったわね……」

ムウやナタル以下ブリッジクルーはゼットの姿に目を見開き顎が外れ、マリューはもはや遠い目をしている。現実逃避には早いぞ、艦長。

「何だ、あれ……」

「コスプレか？にしちゃあまりに自然過ぎるし」
「ファスナー付いてんのかな」
『聞こえてんぞォ！何で俺の身体にファスナーなんて付ける必要あるんだよ！』
「……マジかよ。いや本当に何なんだ？」
「貴様！ふざけた格好で――」
『何だと!?今の発言は聞き捨てならねぇ！それは俺達ウルトラマン全員に対する侮辱だぞ!!』

本気でゼットが怒っていることにナタル達はビクッとしたが、レジェンドがそこに割り込んでゼットを諌める。かくいうレジェンドもナタルの言葉に青筋を浮かべたが、ここでキレても意味がないと圧だけかけておく。

『やめろ、ゼット。今は売られた喧嘩を買っている場合ではない』
『でも超師匠！』
『おいブリッジの連中、ついでにここにいる整備班にも言っておく。我がウルトラ騎空団は種族や生まれのみならず、世界や次元を超えて手を取り合い共に生き、戦う騎空団だ。先の発言はその理念を害するものであり、今後は控えて頂こう。事と次第によっては即座に敵対することも視野に入れる』

ただ諌めるだけではなく、しっかり釘を差しておいたレジェンド。マリューやムウは三日月とバルバトスの戦いを見ていたため、あれらを敵に回すくらいならと心にしっかり刻んだという。

『それはそれとして、そちらからも許可が欲しい。前程も言ったがハンガーを借りれれば問題ない。機体は俺達個人個人で既に有しており、場所を食うからそれぞれが個人ごとに収納しているだけだ』
『私とアマリのはちょっと特殊ですけど……』
『基本的な所有権は私にあるけどね』

『早くしないと狙い撃ちにされるだけよ。私は何もせず沈むのを待つなんて御免だわ』
『出撃させてもらえれば迎撃及び艦の防衛はこちらで引き受ける』

レジエンドに続き、ルリアやアマリ、サーガも到着し許可を待っていた。キラなど「今は緊急事態なんでしょう、迷ってる場合ですか」と少し前までの彼とは違う雰囲気さえ纏っている。

「分かりました。Gの試作機の数上、ハンガーは少なくとも五機分あります。そちらを使って下さい」
「艦長!?」
「バジルール少尉、今は借りれるものは何でも借りなければならないのが本艦の現状よ。ただでさえ正規の戦力はストライクのみ……フラガ大尉の言うようにクルーゼ隊にはGを超える機動兵器もある。ここで本艦とストライクが無事に本隊と合流するためには、彼らの力を借りる他ないわ」

マリューの言葉にナタルは黙るしかない。ムウのメビウス・ゼロでは勝てなかった、ぐらいならまだ希望はあったが、太刀打ち出来ないレベルのエゼキエル・ラヴァン相手にマウントを取れる力がアークエンジェルにあるとすれば、やはりウルトラ騎空団保有の戦力だけ。
彼女の言う通り彼らの力なくして状況の打破は不可能だろうと、渋々ナタルは納得する。

『許可を感謝する。ゼット、アマリにルリア、沙耶、そしてサーガ。それぞれZ、ゼルガード、X、ダブルオークアンタをハンガーに出せ。ゼルガードは……サイズ的にいけるか?』
『ゼルガードは他の三機より少し大きいから最後に出した方がいいかも』
『あの白いのよりちょっとだけ大きいかもしれませんから』

クルーゼのあれよりデカいってなんだよ、とムウは思ったが口には出さない。レジェンドが二人の言葉に頷き他の三人を見ると、彼らも頷いた後に多目的ブレスレットを操作して各々ハンガーに機体を出していく。

確かバルバトスもそんな感じで逆にしまっていたなと思いつつファンタジーのような、はたまたどこぞの猫型ロボットがやりそうな技術にも驚くが、現れた機体を見て更にアークエンジェルのクルーは絶句する。

奪われた四機のGに似た頭部の、バランスが取れたフォルムを持つZガンダム。

背面に身の丈程のキャノン砲を持った、ストライクに近い頭部のガンダムX。

そして他の機体に比べ、より左右非対称で強い存在感を放つダブルオークアンタ。

それぞれがG兵器と似つつ、しかしバルバトス同様にG兵器とは違う存在感を持った三機を彼らは凝視した。

『パイロットスーツを着ている時間はない。そのまま乗り込んで準備しろ』

『『了解！』』

『沙耶は渡したGコントローラーを忘れるなよ。あれが無いとGXは起動すら出来ん』

『分かってるわ、先生』

レジェンドと沙耶の会話を聞き、マリューはG兵器のセキュリティの甘さを痛感する。他にもダブルオークアンタはあるものを登録されたパイロットでなければ起動不可能だ。あるものとはサーガがベースにした人物の機体と違い、サーガ自身の光気。つまり、いくらサーガと似た人物などが乗ろうと動かせないのだ。

唯一Zガンダムはそういったものがないものの、その性能の全てを引き出すにはOSがどうこうという問題ではない。

『スペース的には……あまり余裕はないが問題なさそうだな。一応少しだけ圧縮空間の技術を応用しておくか。いいぞ、二人共』
『『はい！』』

そう応えたアマリとルリアは、ルリアがアマリの収納ブレスレットに触れる形でゼルガードを出現させる。この方法はルリア考案によるものだ。
エゼキエルのような、ＭＳとは違う機体が出たことにクルー達は本日何度目か分からぬ驚きに見舞われるが、マリューとムウはもはや慣れつつあった。

「慣れていく自分が怖いわ……これから先も似たようなことが起こりそうだけど」
「クルーゼがあんな機体を使ってきた時から覚悟はしてたけどな……」

マリューの予感は的中するとだけ言っておく。

☆

ヴェサリウスにて、今回クルーゼは出撃せず指揮に専念している。ベリアルもまた同様。

「さて……件の機体はまた出てくると思うか？」
「五分五分、というトコかな。もしかしたらあの機体以外の機体が代わりに出てくる可能性が無きにしもあらずだ」
「それはそれで興味深いが、そちらに気を取られて作戦失敗となるのはいかんな」

そりゃそうだ、とベリアルが肩をすくめるとアデスが何かに気付

く。どうやらアスランが奪取したばかりのイージスで出撃しようとしているらしく、アデスは止めようとするがそこでクルーゼはアデスを逆に制止。

「構わん。行かせてやれ、アデス」

「隊長!?よろしいのですか？」

「何か確かめたいことでもあるのだろう。いざとなれば私が連れ戻せばいいだけの話だ」

「優秀だけど若いねえ、全く」

ベリアルもそう言いながらクルーゼと同じくアスランを止める気はなく、普段のように頬杖をついてモニターを見ている。隊長と参謀の二人に言われたアデスは仕方なく、出撃するイージスを見送らざるを得なかった。

（あの場所にいたのがキラなのか、何としてでも確かめなければ……）

「どうした、アスラン！お前の任務はそいつの奪取だろう、後のことは俺達に任せておけ！」

「確かめたいことがある！ミゲル達の邪魔にはならないつもりだ」

「……分かった、だがそれが終わったらすぐに戻れ！あの時のバケモノＭＳがまた出てこないとも限らないからな！」

先に出撃し、他のジンと共にアークエンジェルへ攻撃を仕掛けていたミゲルの指示に頷きつつ、アークエンジェルに接近しようとしたところ、カタパルトらしきものが見えた。その先にあったのは、バルバトスとは違う機体――ゼットの乗ったＺガンダムだ。

「何だと!?また新型か！」

「連合は予め新型をいくつかあの戦艦に運び込んでいたのかもしれない。そうならばこれだけ立て続けに情報のない新型が姿を見せるの

も納得がいく」

アスランは一周回って逆に冷静になっていた。アスランとしては新型よりもストライクとキラの関係性が気になっているため、然程気に止めていない。バルバトスがあまりに異質な機体だったとはいえ、今見えたZガンダムは他の試作機とよく似ていることから少なくとも互角ぐらいだろう、アスランはそう予測している。

それが大きな間違いだと知らずに。

☆

真っ先にカタパルトに乗せられたZガンダムのコックピットでゼットは深呼吸していた。

いよいよMSに搭乗して初の実戦。今まではレジェンドのコ・パイであったが、今回は自身の単独操縦であり彼の助けを借りることも出来ない……否が応でも緊張するというもの。

『今回がお前の初陣だが……落ち着いていけ、ゼット。シミュレーターをやっているうちにお前なりの覚悟は身についているだろう。それとアムロからアドバイスの一つや二つも受けているはずだ』

「は……はい！」

『戦いは攻めるより守る方が難しいとよく言うが、この艦……アークエンジェルと言ったか。こちらの護衛はサーガがストライクのフォローをしっつやってくれる。お前は自由にやってみろ。戦場の空気を直に感じ取れ』

レジェンドなりに後押ししてくれているのが分かり、ゼットは少しばかり緊張が解れ、いつもの調子が戻ってくる。

――敵を殺さないように戦うというのは素晴らしいことだが、それより大事なのはまず自分が死なないことだ。相手の命を尊重するあまり、自分の命を散らしてしまっては元も子もない。たとえ誰に何と

言われても、生き残ることを放棄するんじゃないぞ――

ゼットが心に留めた、師と尊敬する一人であるアムロから教わった言葉。数多の命が目の前で散っていく、大きな戦争を幾度となく経験したアムロの言葉はとても重い意味を持っていた。

「……よし！」

『心と身体、そして機体の準備も出来たようだな。本来ならばブリッジから指示が出るんだろうが、状況が状況だから俺がここでやってやる。もう一度聞くぞ、準備はいいか？』

「ウルトラスタンバってます、超師匠！」

――貴方ならやれますよ、ゼットさん――

「――!!」

ふと誰かに声をかけられたのかと思い、横を向くと――そこには薄っすらと光る、ノーマルスーツのカミーユ・ビダンがゼットに笑顔を向け、サムズアップをしていた。

何故彼がこんな形で自分に語り掛けてきたかは分からない。ただ一つ言えるのは、そう言ってくれた彼の期待に応えるだけだ。

そう思ったゼットは無言で頷きつつサムズアップを返し、それに満足したのかカミーユは穏やかな笑みを残し再び光となって消える。

『カタパルト接続完了。Ｚガンダム、発進用意！』

レジェンドの声が格納庫に響き、改めてゼットは操縦桿を強く握り締め――

「ウルトラマンゼット！Ｚガンダム、行くぜ！」

ペダルを踏み込むと同時にカタパルトが作動し、Ｚガンダムが今アークエンジェルの外へと飛び立った。

〈続く〉

崩壊の大地（後編）

一足先に出撃したゼットのZガンダムに続き、沙耶もガンダムXに搭乗しGコンをセット。これは起動するためだけでなく、ある兵器を使うためのトリガーも付属しているため、色々な意味でこの機体の生命線なのである。

『次は沙耶の番だ。無事起動出来たようだな』

「出来なかったら開発者側の責任よ？」

『違いない』

ゼットとは違い、然程緊張していない沙耶。ちなみに沙耶が美人なのは言うまでもなく、そんな彼女と何食わぬ顔で会話しているレジェンドはマードック軍曹他アークエンジェルの整備班から羨望の目を向けられている。当人達は知ったこっちゃないという雰囲気だが。

『一応言っておくが、お前に渡したスペックノートの通りあの武装はここで使うなよ。あれは強力過ぎる』

「そうは言っても、使う使わない以前に使えないのだけれど」

『状況的にな。そういうものだ』

強力過ぎる――おそらくは背中のキャノン砲の事だろうとマードックは推測するが、そんなに言うほどのものなのか疑問に思う。しかし、後に彼だけでなく乗っている沙耶も含めその威力を見た時に目撃者全員が戦慄することになるのは、この場においてレジェンド以外は予想打にしなかった。

『準備は整っているな？カタパルト接続、GX（ジーエックス）発進スタンバイ！』

「月神沙耶、ガンダムX……発艦します！」

背面のリフレクターを輝かせ、Zガンダムに続きガンダムXもヘリ

オポリスの空へと躍り出る。
残るはダブルオークアンタ、ストライク、そしてゼルガード。やはりゼルガードは少々大きかったらしく、圧縮空間の技術で少し格納庫を広げて正解だったようだ。

『サーガは言うまでもないな。ではソレスタルビーイングの形式に則るか』
「了解。ＧＮシステム、リポーズ解除。プライオリティをソラン・セイエイへ」
『ダブルオークアンタ、カタパルト接続。射出タイミングをサーガへ譲渡する』
「ソラン・セイエイ、ダブルオークアンタ出る！」

ＧＮドライヴが緑色に輝く粒子を放ちながら起動し、その手にＧＮソードＶを携えダブルオークアンタがアークエンジェルより発進する。

『さて、次はストライクだが……』
「大丈夫……って言い切れませんけど、やってみます。僕が自分で決めたことですから」
『フッ……戦争だからどうこうと周りに流される連中より余程肝が座っている』
「僕達だけだったら流されるだけだったと思います。でも……僕の背中を押してくれた人達がいるから」

キラの指す人物は自身の友人達だけでなく、ダイゴやサーガ、それに先んじて出撃したゼットや沙耶、今回は最後に出撃するアマリとルリア、そして……今、会話しているレジェンド。彼らはキラの心に寄り添おうとしてくれた。
だから彼は自分の意志で一歩踏み出す決意をしたのだ。彼らに誇れる、彼らが誇れる自分であるために。

『サーガに言われただろうが、無理に前に出る必要はない。あいつと一緒にこの艦の護衛に回れ。あの少尉達は知らんが、俺達は軍属でも戦闘訓練もしていない民間人に率先して相手を撃たそうなどとは思わん』
「はい、ありがとうございます」
『自分から相手を撃ちに行くのは覚悟を決めてからにしろ。それまでは専守防衛、意地でも死んでたまるかと考えればいい。つまり正当防衛だ、正当防衛』

真面目なのか緊張を解そうとしているのか分からなかったが、レジェンドのアドバイスに少しばかり笑ってキラは頷く。
『よし。では気を取り直して……ストライク、発進スタンバイ！』
「キラ・ヤマト……ストライク、行きます！」

近接戦闘用ストライカーパックであるソードストライカーを装備したソードストライクガンダムが、ダブルオークアンタを追うように発進し、待っていたダブルオークアンタと合流。そのままアークエンジェルの護衛にあたる。
『最後にゼルガード……やっぱり広げといてよかったなここ』
「一回り大きいもんね、ゼルガード……」
「でも、レジェンドのグランティードはもっと大きいです！」

ニコニコしながら言うルリアだが、ぶっちゃけアークエンジェルの格納庫はそのままのサイズだとグランティードは入らない。ゼルガードの倍以上の大きさだから。カタパルトも規格がまるで合わないし……不要かもしれないが。
『……ゼルガード、カタパルト要らないよな。別に俺の管制官的な補

助も必要な――』
「ええーっ!?」

不満丸出しなレジェンドメインヒロインズ（二人一組枠）。声を上げた後に八の字眉＋涙目×２のダブルアタックでレジェンドの良心に訴えかけ、結果見事にレジェンドを説得（？）成功。

『進路クリア！ゼルガード、発進スタンバイ！』
「ゼルガード、行きます！」

どことなく弾んだ声の二人と共に発進していくゼルガードの後ろ姿に、レジェンドはちょっとだけ「やってよかった」と思ったそうな。そんな彼の後ろでは、出会いが無さそうな整備班が涙を拭っている。

……これ、ウルトラ騎空団集合時にはどんな反応になるんだろうか。

合計五機の機体がアークエンジェルより発進を終え、戦局は一変する。

☆

次々と未知の新型を発進させた上、ＭＳとは全く異なる機体まで出てきたことに、もはやアスランを含むザフト側は唖然としていた。アスランの推測では、Ｚガンダムを始めとする機体は予め運んでおいた新型という認識だったのだが、ゼルガードという例外中の例外が出てきたことでそれも覆される。アークエンジェルの格納庫に収まっていたとは思えない大きさだからだ。

「おい！どうなっているんだ、あの新造艦は!?」
「分からない……！こうなってくると他の機体は連合の――」

新型とは無関係なのでは、と口にしようとした瞬間、一筋のビーム

がイージスを襲う。辛うじて回避したものの、目の前に現れたのはゼットの駆るZガンダム。

「最初に出てきた奴か！」

「お前ら！中立国のコロニーに直接攻撃をしかけるなんてウルトラどうにかしてるぜ！」

「連合の新型を作ってた時点で中立も何もないだろうが！」

ゼットの言葉に反論したのはミゲル。ジンのM69バルルス改・特火重粒子砲をZガンダムへと発射するが、避ければヘリオポリスに危害が及ぶと考えたゼットの判断でシールド防御により無効化される。

「こいつッ……！」

「あの機体や他のストライク以外の機体はフェイズシフトを搭載していないらしい。狙うならそこだろう、ジンの武装でも対抗出来るはずだ」

「ならば！」

出撃する瞬間を見ていたアスランは、Zガンダムらが連合の新型に搭載されているフェイズシフト装甲を持たないことに気付きミゲルにアドバイスを送るが、彼は大きな思い違いをしている。

何故Zガンダムのシールドは対ビームシールドでないにも関わらずジンの特火重粒子砲を防ぐことが出来たのか？そこに目を向ければ簡単に辿り着くであろう答え――Zガンダムの別形態ウェイブライダー、その要であるZのシールドは非常に強固なのだ。それこそ、ビームサーベルを受け止められるほどに。

何より素のスペックがジンはおろかイージスよりも上……例えるなら、ストライクの汎用性とイージスの可変機構、さらにイージスと同じく奪取された四機うちの一機であるバスターの豊富な武装を兼ね備えた機体、それがZガンダムだ。

「調子に乗るなよ！ナチュラルごときがぁぁぁーッ！」
「そんな動きでやられるか！チェストォォォ！」

よもや相手がナチュラルどころか宇宙人などと思わないだろうが、ミゲルのジンは重斬刀の一撃をZガンダムに軽くいなされ、簡単にビームサーベルによるカウンターで片腕を奪われる。
シミュレーター上とはいえ、ゼットは今の乗機であるZガンダムよりスペックが大幅に下のＲＸ―７８―２　ガンダムでノイエ・ジールやジ・Ｏを撃破した、まさにスーパーパイロット。どちらもパイロット、機体共にアスランやミゲルの遥か上の強者だったのだから、油断さえなければゼットが負ける要素は無い。

「何だとっ!?」
「ミゲル！くっ……ストライクへ辿り着くにはこいつをどうにか……ッ!?」

眼前のZガンダムを睨みつけるアスランだが、同時に目に入った光景に愕然とする。

重斬刀をシールドバスターライフルで防御し、至近距離でのブレストバルカン連射、繋げて大型ビームソードによる一閃でジンを横一文字に両断するガンダムX。
「シミュレーターで戦った白いザクの方が俄然強かったわね。あっちは動きが早い上に狙いも正確だった」

普段と変わらぬ落ち着きを見せる沙耶は、やはり場数を踏んでいるからだろう。爆散するジンを見ても覚悟を決めていたからか、動揺することはなかった。

アークエンジェルを狙って飛んでくる数多のミサイルは、前衛にゼルガード、後衛にダブルオークアンタとソードストライクという陣形で三機が完璧に防いでいた。

「アマリ、また来ました！」
「ミサイルは実弾、火薬が詰まってるなら一つ爆発させて残りを誘爆させればいい……あれ？ルリア、召喚の中で使えるのある？」
「どうでしょう？う～ん……あ！ありました！プロバハ（バハムート）です！何でか、分かりませんけど……」
「それヘリオポリス（屋内）じゃ駄目なやつね！あの時の白いのと同じ結果になるわ！」

アマリの脳裏に「汝の名はバハムート！」とルリアが召喚したプロトバハムートがゼルガードの後ろから相手に対して『大いなる破局（はかいこうせん）』をぶっ放しジン諸共ヘリオポリスを崩壊させる光景が浮かんでしまった。
ついでに通信が繋がっていたらしく、サーガとキラからも反対の声が上がる。

「せめて援護型の召喚にしてくれ」
「よく分からないけど、ヘリオポリスを壊すようなことはしないで下さいね!?」
「はうぅぅ～……ごめんなさい……」
「でもこのままじゃヘリオポリス、どの道保たないわ。幸い住民達は避難し終わってるみたいだけど……」

ダブルオークアンタがＧＮソードビットを射出し、ソードストライクのマイダスメッサーと共にジンをまた一機撃墜する。
しかしながらアマリが言ったようにヘリオポリスは既に崩壊を始めており、現状止める術は無い。

アスランとミゲルは出撃した機体が自分達以外全滅したことに気付き戦慄する。対して相手は一機も撃墜どころか損傷すらしていない。アークエンジェルは別として、一番大きなゼルガードすら無傷。

「バカな……！ナチュラルにこんな一方的にやられるなど！」
「ミゲル、下がれ！その機体でそれ以上は無理だ！」
「下がるのはお前だ、アスラン！今回の作戦の目的は連合の開発した試作機の奪取、お前がこれ以上ここにいて万が一奪い返されたらどうする！」
「しかしっ……！」
「早くしろ、アスラン！」

先輩であるミゲルに叱咤され、アスランは歯を食いしばりつつも仕方なくヴェサリウスへと帰投することにした。ストライクに乗っているのがキラかどうかを確かめたかったのだが、ストライク以外に現れた相手が明らかに格上であり、下手に攻め込めばミゲルの言う事態になりかねないと判断したからだ。

（他の機体はいざ知らず、ストライクという機体は連合の試作機に間違いない。おまけに奪取したばかりのイージスはＯＳが滅茶苦茶だった以上、あちらもそうに違いないはずだ。ならばナチュラルに操縦することはほぼ不可能……そうなると、やはりキラが……？）

自問自答しながらアスランはイージスを離脱させ、残ったのは片腕を失ったジンに乗るミゲルのみ。

「やれやれ……全く頑固な奴だな、アイツは。待たせたな、というか待ってくれてたのは予想外だ」
「覚悟を決めた奴を後ろから撃つなんて、俺のプライドがウルトラ許

さないからな！」
「そのプライドのせいで後々後悔することになるかもしれないというのに甘い奴だ……だが、俺は嫌いじゃない」

最初はナチュラルと蔑んでいたミゲルだが、ゼットの心意気を認め半壊状態のジンのコックピットで笑みを浮かべる。彼とて軍人である前に一人の男。傭兵部隊『サーペントテール』のリーダー、叢雲劾と真っ向勝負で引き分けたこともある。

正々堂々と戦い、それで負けても文句はない。

「生憎とこのままじゃ帰れないんでな。悪いが最期まで付き合ってもらうぞ、青い奴。アイツと同じ色とは奇縁だな」
「……何でそうやってナチュラルだろうと相手を認められるあんたが、こんなマネしてんだよ……」
「コーディネイターの……いや、正直に言おう。家族のためさ。俺の家族は母と、歳の離れた弟……おまけに弟は病弱でな、いうなれば俺が大黒柱みたいなもんだ。大黒柱が見を粉にして稼いでも不思議じゃないだろ？軍人なら清濁併せ呑むしかない。適当な理由をつけて自分を奮い立たせないとやっていけないんだよ、戦争してる以上はな」

ナチュラルを嫌悪するような台詞も彼の本心ではなく、戦争をしていく中でそうせざるを得ないようになってしまっただけ。そうでなければ心がどうにかなってしまうのだろう、それが戦争なのだと改めてゼットは実感する。

「話し込んでしまったが、決着をつけようか。俺の名はミゲル・アイマン、お前の名を聞いておこう」
「銀河遊撃隊隊員、及びウルトラ騎空団団員のウルトラマンゼットだ！」
「ウルトラマンとやらが何かは知らんが、ゼット……Zか。ザフトの

頭文字の名を持つ相手とはな。今日は吉日か凶日か分からん」

効かないだろう、そう分かっていながらもミゲルのジンは再び重斬刀を構える。機体の状況的にそう長くは持たない――だからこそ一撃が勝負。とはいえ、仮に勝ててもヴェサリウスに戻れる確率は限りなく0だ。

(だが奴と相まみえるのはこれが最後だろう……悪いな、アスラン。今回だけは我儘を許してくれよ)

きっと後輩(アスラン)にもこの戦場でやりたいことがあったのだろう、上官ではないのに撤退を強要したことを心の中で詫びつつ、眼前の強敵を覚悟とともに見据える。

対するZガンダムもビームサーベルを抜き、敢えてシールドをバックパックにマウントし左手には何も握らない。

「無理に俺に合わす必要はないぞ。片腕を奪われたのは俺がお前を侮ったツケだ」

「男と男の勝負はフェアが基本だ!」

「やっぱりお前は変わった奴だな」

「そういうお前だってこうして喋ってる間に『スキあり!』ってやればいいじゃないか」

「そうしたら勝てるって保証も無いだろ」

敵同士だというのに、互いの心が軽くなっていくのが分かる。もし味方だったならいい友人になれたはず、ミゲルはそう思うも残された時間をこれ以上こうして過ごすわけにはいかない。

「行くぞ、ウルトラマンゼット!」

「いつでも来い、ミゲル・アイマン!」

沙耶にアマリ、ルリア、そしてサーガやキラも邪魔しようとはせず、アークエンジェルもナタルがジンを撃つように指示しようとした瞬間、レジェンドの殺気を感じて身動きが取れなくなった。
そして――

「づあぁぁぁぁぁぁ!!」
「どおおぉぉりゃああ!!」

互いに同じタイミングで得物を相手の機体へと突き出した。結果は――

「……ウルトラギリギリだったぜ」
「よく言うぜ。最初からそうする気だったろ」

重斬刀はZガンダムに触れるスレスレの所を抜いており、対してZガンダムは身をよじらせるような体勢で重斬刀を回避し、ビームサーベルがジンのコックピットの近くを貫通していた。
あの状態のジンでこれだけの動きをしたミゲルは間違いなくエースパイロットだ。

「俺の憧れる漢の一人が言っていた。そのMSの性能のおかげだというのを忘れるなと。俺が乗ってたのがこの機体で、そっちの機体が損傷してたのが勝因だな」
「勝因とは言うが、この損傷だってお前とその機体が付けたもんだろうに。機体性能もそうだがお前も自分の腕に少しは自信を持てよ。この黄昏の魔弾を真っ向勝負で負かしたんだ」
「え、何それ黄昏の魔弾ってウルトラかっけーんだけど」

シリアスな雰囲気はゼットの一言で吹き飛んだ気がする。ゼット

とミゲルの性格が相性的に良かったのか、それとも別の何かが原因かは分からないが、まだ戦場だというのに二人の間の空気は穏やかだ。
しかし、そんな空気も長くは続かない。
度重なる攻撃で限界を迎えていたヘリオポリスはいよいよ完全に崩壊しつつあった。

「アマリ！ヘリオポリスがっ……！」
「ダメ！もう保たない！」
「各機は可能な限りコロニーの外壁から離れて固まれ！下手に外壁周辺に近付けば宇宙へ放り出されるぞ！」
「は、はい！」

ルリアとアマリ、サーガにキラが慌てる中、沙耶は一人通信を行う。無論、シークレット・ポートに待機中のペガサスA……即ち勇治と流にだ。
「それから、っと……勇治、流も聞こえてる？」
『問題なく聞こえているぞ、女王。一体何がどうなっている？』
『勇治さん落ち着きすぎ！っていうかこれちょっと前に誰かしら言ってなかった!?』

レジェンドが度々言われていた台詞を流が叫びながら言うも今はそれどころではない。

「ザフトの襲撃の結果よ。間もなくヘリオポリスは完全崩壊するわ」
『完全崩壊!?沙耶さんも落ち着きすぎじゃない!?何これ俺がおかしいの!?』
『むしろお前が落ち着け明日のパンツ』
『違うから！俺は前上流だから！確かに今俺達が動いたところで崩壊がどうにかできるわけじゃないのは分かってるけどさ！』
「慌てていてもしっかり考えてるわね。貴方の言うようにこの状況で打つ手があるのは先生くらい、そして先生もそうポンポンと力を使っ

て甘やかす真似はしないはず。一先ずシークレット・ポートから出て、先生が予め出していた指示通りに行動しなさい。姿を隠して同行するか、アメノミハシラに向かうかは貴方達の判断に任せるわ」

こういう状況でも冷静に指示を出せる沙耶は正しく女王と言える。まあ、普通は流のようなパニクり具合が普通なのだろうが。

『どの道このシークレット・ポートも崩壊するだろう。何をするにしても、女王が述べたようにまずはヘリオポリスからの脱出が先決だな』

『ああ……そういえばレジェンドさん達は全員アークエンジェルとかいう戦艦に乗ってるんだっけ』

「まあ、先生は生身で宇宙空間放り出されようがブラックホールに叩き込まれようが太陽に打ち付けられようがビッグバンの中心にいようが無事だろうけど」

『『いやそれはスケール大きすぎ!!』』

「ノアとかいう同格とパンチのぶつけ合いだけで宇宙一つを消し飛ばした前科持ちよ？他にも色々あるし」

……何故に彼女はここまで肝が据わっているのだろうか。彼女の幼少期にレジェンドは一体どんな修行をつけたのやら……それはともかく、勇治はシエルに指示しペガサスAを緊急出港させる。

ついでにリムエレキング、ぷちエースキラー、ミニアリゲラがちょこちょことお手伝い。カナエ他可愛いもの好きが見たら発狂しそうな光景だったと映司（前上流）―2は語っていた。

『何か別人のようなガンダムのようなルビ付けられた気がするんだけど!?』

『喜べばいいだろ。お前もガンダムだ』

『それ声的にレイト君やサーガさんが言うべきじゃないかな!?特にサーガさん！』

サーガは人間の姿のベースにした人物がそうだった。性格的もそっくりである。
閑話休題。
彼らがそんな会話をしていたとき、それは起こった。ミゲルのジンが限界に達し、失った片腕の部分とビームサーベルで貫かれた部分から小規模な爆発を繰り返す。

「ミゲル！」
「くそ！死ぬなら潔く死にたかったが、こんな機体の不調による時間差爆発でそうなりそうだとはな！」
「早く脱出しろ！命あっての物種だろ！」
「そうは言うがな、今の爆発でコックピットが変形した上、しかもそのおかげで足が挟まれた。抜け出せんことはないが、それまでに機体がどうにかなって巻き添えで御陀仏だ」
「ッ……！待ってろ！今俺が出してやる！」
「バカかお前は!?お前まで巻き込まれるぞ！」
「バカ上等！俺はバカだから巻き込まれることなんて考えねぇ！二人とも助かることしか考えてないんだよ！」

あまりにもハッキリ言い切ったゼットに唖然とするミゲル。ゼットはZガンダムをジンに寄せ、コックピット部分をビームサーベルで切り離そうとするが、ヘリオポリスの崩壊が進んだことでそれを行う前にジンがヘリオポリスの外へと放り出されてしまう。

「うわあああああ!!」
「ミゲルッ！まだだ！まだウルトラ終わらないぜ!!」

Zガンダムをウェイブライダーへと変形させ、ゼットは放り出されたジンを追って宇宙へと飛び出していく。
C．E．71年1月25日――ヘリオポリスは完全に崩壊した。

〈第9章へ続く〉

逃避航行のアークエンジェル、追う者と追われる者

サイレントラン

ヘリオポリスの崩壊――それを一誠達はアークエンジェルの中から目の当たりにして言葉を失った。長い時間を掛けて作られ、大勢の人々が生きていた場所……それがほんの僅かな時間で廃墟と化すという事態に身体が震える。

「な……んだよこれ……」

「いくら新型が脅威だからってここまでするの……!?」

「これが、戦争……」

呆然とする一誠らであったが、この場において頼りになるレジェンドとサーガはまだ戻っていない。しのぶも「規模が大きすぎて自分ではフォローしきれない」と考えつつ、サーガと沙耶が救出した（拾った）赤服のザフト兵の治療と看護を行う。ロスヴァイセとアズも少なからずショックを受けているようだ。

（鬼と戦っていた頃はこういった被害より人的被害の方が多かったのだけれど……）

コロニー一つ……それ即ち都市一つか、下手すれば国一つが無くなったようなものだ。しのぶはザフト兵の治療をしつつも鬼殺隊の柱として生きていた時と違う規模の、人と人との争いが起こすものに向き合わねばならないと改めて実感する。

レジェンドが戻ってきたのはそれから少ししてからの事だった。

☆

その頃、アマリとルリア、沙耶にサーガ、そしてキラは完全に崩壊

してしまったヘリオポリスを見て愕然としていた。特にキラはほんの数時間前まで戦争とは無縁だったこともあり、一番強い衝撃を受けている。

「そんなっ……ヘリオポリスが……！」

「気を強く持て、キラ・ヤマト。ショックを受けるなとは言わないが、ここで呆けていても事態は好転しない。俺達がやらなければならないことを考えるんだ」

「ッ……は、はい……」

「今起きたことを飲み込めない気持ちは理解出来るわ。だから貴方は無理せず、自分の心に従いなさい」

声色は変わらないものの、沙耶が気遣ってくれていると分かり少しだけ落ち着けたキラは、レーダーにあるものを捉えた。ダブルオークアンタ、ガンダムX、ゼルガードがいてくれることで冷静になれたのか、キラの指は迷いなくコンソールを操作し映像を拡大すると救命ボートであることが判明。

「これって……！推進装置が壊れてるのか？」

「どうした？」

「えっと、ヘリオポリスの救命ボートが一機漂流しているんです。多分推進装置が故障か何かで機能していないんじゃないかと……」

「はわっ!?それじゃ、ここに取り残されてるってことですか!?」

「まだザフトも離れたか定かじゃないのに放って置いたらどうなるかわからないわ……！」

キラはアマリやルリアが自身と同じ考えであることに胸を撫で下ろす。サーガも同じだが、彼らは立場が立場なため安易に救助したくても出来ないことを忘れていない。故に、沙耶が代弁する。

「……問題は救助したとして、あの艦の面々が受け入れるかどうかね。

艦長はまだしも、副長の方はガチガチの軍人タイプ……貴方がストライクに乗ることにも難色を示してたくらいだから難癖をつけて拒否しそうだわ」
「でも、だからといってこのままには――」
「いざとなったら『彼ら』を頼りましょう。シークレット・ポートから出てまだそう経ってないだろうし、それほど遠くには行ってないはずよ」

沙耶の言う彼らとは勇治と流（とダ・ガーンやエースキラー達）のいるペガサスA。無論、連合所属のアークエンジェルに似ているためマリュー達からは何かと聞かれるだろうが、そのときはその時だ。
自分の意見が採用されたことに若干喜びの笑顔を浮かべつつ、ストライクを始めとする四機は救命ボートの救助に乗り出した。

宇宙に放り出されたミゲルのジンをウェイブライダーで追っていたゼットは、もはやデブリと化したヘリオポリスの残骸が漂う宇宙で漸く目的のジンを見つけ出す。
自分がウルトラマンの状態で実体化したままであることなど知ったことかと、急いで外に出てジンのコックピットハッチを開くと幸いにもミゲルはまだ生存していた。しかし、爆発と放り出された時の衝撃で壊れたであろう内部の破片の一つが脇腹に刺さっており、そこから流血している状態。
このままでは危険だと判断したゼットは応急処置として破片を手早く抜き、苦手ながらもリカバリーオーラを当てる。

「しっかりしろ、ミゲル！」
「お……お前、ウルトラマンゼットか……？」
「ああそうだ！すぐに医者のとこに連れて行ってやるからな！頑張れよ！」
「こんな御時世だから何が起きても驚かないつもりだったが……ぱっ

と見でナチュラルやコーディネイターではない奴など初めてだ」
「お前達にとって俺らウルトラマンは宇宙人だろうしな！喋って力むと傷口開くから休んでろ！俺回復系の技へタクソなんだ！」

ゼットはミゲルに肩を貸しつつ再びコックピットに戻り、万が一にとしのぶが持たせてくれていた救急セットでもう一度応急処置を済ませてシートの後方へ座らせ、あまり速度を出さず衝撃を少なくするためウェイブライダーをZガンダムに変形。デブリを退かしつつアークエンジェルへと帰還する。

一方、先程救命ボートを抱えてアークエンジェルへと先に帰還したダブルオークアンタ、ガンダムX、ゼルガード、そしてストライクだが……案の定救命ボートの処遇で揉めていた。

『だから何度も言っているだろう！本艦にそんな余裕はない！』
「でも、推進装置が壊れてるんです！」
『じきに軍の救命艇が来る！』
「それは確実なものなのかしら？」
『何？』
「ここまで崩壊しきった状態のコロニーを、果たして今の連合が救助活動しにくるかということよ。仮に来るとして、そもそもヘリオポリス崩壊の報が軍に通達されるまで一体どのくらいかかるのかしら？フラガ大尉とやらの話では彼が乗ってきた艦は撃沈、ヘリオポリス宙域全土で残っている連合の士官達は全員アークエンジェルに乗艦済み……そんな状況で連合の他の隊へどうやって情報を伝えるというの？」

相変わらずズバズバものを言う沙耶である。しかし、実際彼女の言う通りだ。それに通達されたとして、このヘリオポリスの状態を見たら早々に捜索や調査を切り上げて撤収しないとも限らない。アーク

エンジェルや、ストライクを始めとするG兵器は連合でもトップシークレット扱いのため知っている者が僅かであり、それを知らぬ者が捜索・調査部隊として派遣された場合、単に『中立国のコロニーがプラント側の理不尽な攻撃で破壊された』としか思わない可能性がある。
つまり、救命ボートを見落としてしまうかもしれないというわけだ。

「……まあいいわ。確かに民間人をおいそれと軍艦に乗せるわけにはいかないわよね」

沙耶のこの言葉に通信していたナタルは「漸く分かったか」と言わんばかりの溜息を吐く……が、マリューとムウは沙耶がどんな人物なのか多少なりとも理解していたようで、少し考えると「しまった」的な表情になる。

「じゃあ『連合は中立国オーブに属するコロニー、ヘリオポリスで兵器開発を行い、ザフトと戦闘してヘリオポリス崩壊の原因を作り、あまつさえそこで暮らしていた者達の乗っている故障した救命ボートを見殺しにした』と正直に話させてもらうわ。幸い証人に事欠かないし、何よりその艦にはオーブの特務大使もいる。それが世の中に大々的に公表されたら連合プラス貴女達の印象は最悪になるわね」

月神沙耶、鬼である。ナタルは金魚のように口をパクパクさせているし、マリュー・ラミアス以下アークエンジェルのクルーは真っ青だ。ちなみに格納庫にいたはずのレジェンドはこの沙耶の通信を盗み聞き（というか単なる地獄耳）しつつ三日月らとＵＮＯに興じていた。

「レジェンド様、沙耶さんって朱乃みたいなＳ？」
「そうでもないとは思うが、あいつ色々知識あるから理論攻めしてくるんだよな。変なことしなければ攻撃しないから、どちらかというと

逆襲してくるタイプだ。結婚して嫁イビリされようものなら相手は悲惨な末路にしかならんだろう」
「レジェンド、それは冗談に聞こえないぞ」
「あの姉ちゃん肝座りすぎじゃね？」

この状況でＵＮＯ出来るタイタスやフーマも肝座ってると思うのだが。そして例えがアレというか……何にせよ、これで駄目なら救命ボートはペガサスＡに収容すればいい。
そうしていると続けてゼットからも通信が。

『こちらウルトラマンゼット！要救助者一名を収容中！至急治療の必要があるので搬入許可を！』
「……一名？」
「あれじゃないかな、俺がボコボコにしたザクっぽいのに乗ってた人とか」
「いやいやまさかそんな――」
『名前はミゲル・アイマン！ザフト所属の兵士！』
「うっわーお……」
「多分当たりかな。もしかしたらそれの知り合いかも」
「三日月さん、怪我人をそれ呼ばわりしてはいけません！」
「あ、ロスヴァイセさん復活したんだ」

レジェンド達は「これまた一悶着あるな」と思うも、何とかなるだろと再びＵＮＯをやり始めた。どんだけ好きなんだ。ついでに三日月からあまり気に留められていなかったロスヴァイセはさめざめと泣き出した。しっかりとレジェンドに抱きつきながら。
「ロスヴァイセさん離れましょうね～」
「他の人が見たら嫉妬しちゃうかも……私もそうだから」

落ち着いているしのぶとアズだったが、ロスヴァイセをレジェンド

から引き剥がす腕力は尋常ではなかった。特にしのぶはその腕力で何故鬼が斬れなかったのかと疑問になるくらいに。

『なっ……!?ふざけるな！ザフトの兵を収容するのは許可出来ない！』

「ふざけてんのはどっちだ！別にコイツは危険人物でも何でもない！何より怪我人にザフトも連合も関係あるかってんだよ！」

『民間人ならともかくザフトはプラントの軍、つまり軍人だ！安易に収容すれば何かあった際に情報漏洩の危険もある！』

「だったら俺が監視役をする！なら文句無いだろ！」

『そういう問題ではない！』

やはりというか言い合いになるゼットとナタルだが、二人とも気付いていないのだろうか。ゼットは別に構わないだろうが、言い合いになればなるほど沙耶が交渉する上で有利な材料を得て、反対に連合側の旗色が悪くなることに。

「……怪我人、それも重傷者を救助者諸共見殺しにする、も追加ね」

『『『!!』』』

「え、沙耶ちゃん俺殺されんの？超師匠に？」

「先生なら殴りかからない限りそんなことしないし大丈夫よ。しかし困ったわね、ここまで融通が利かないなんて。仕方ないわ、私達は別行動しましょう。ストライクも含めて、ね？」

「あ、はい」

キラまで沙耶の発案にあまり悩まず返事をした。トール達はどうするのかと思われるだろうが、実は出撃直前にコックピットへダイゴ（を経由したＲＥＮＡ）から「君の友人達は任せて」とメッセージが送られてきている上、しかも彼らまで了承済み。ついでに今残っているレジェンド達は自力で脱出出来るだけの実力もある……と、キラが無

理してアークエンジェルまで戻る必要もないのだ。
とはいえストライクのことが問題になることも想定済みである。
『ちょっと待て！ストライクは――』
「貴方達地球連合軍か開発したものかもしれないけど、ヘリオポリスにおけるザフトとの戦闘は、この機体やその戦艦をあそこで開発していた連合側が発端であり、かつ戦闘の結果ヘリオポリスが崩壊したことによる賠償金代わりとして、このままオーブに引き渡します。乗っているのも避難民だし文句はないわね？」
『『なっ……』』

賠償金代わりにしては少な過ぎる気もするけど、と沙耶は付け足し、マリュー、ムウ、ナタルの顔はもはや真っ青通り越して土気色。元々月の女王であり政治や交渉事はお手の物だった沙耶に死角はなかった。本来ならば今の沙耶自身は言っているような権限は無いのだが、オーブの特務大使たるダイゴがウルトラ騎空団所属であり、そのウルトラ騎空団の団長がレジェンド。そして二人がそれぞれオーブ五大氏族の令状を持っていることが重なって今回のようなことが言えたのである。一応、有事に備えてレジェンドとある程度打ち合わせはしておいたが、殆ど彼女のアドリブだ。
なおキラとしては救命ボートを救助出来て友人達のことも問題無く、そして自分も良い方に転ぶため沙耶の判断を批難する気などサラサラ無い。彼が沙耶を見る目は既に『マジでデキる上司ｏｒ姉』レベル。
ちなみにこれはダイゴの多目的ブレスレットでトール達にも伝わっており、ミリアリアなど「沙耶お姉様」などと呼び出す始末。何故にレジェンドと直接的に関わり合いのある人物は何かと人誑しなのか。サーガに始まる光神やウルトラマン然り。
『……仕方ないわ。双方許可します。ザフト兵に関しては先の条件を守って頂戴』

「マジでございますか!?モチのロンであります！」
「あら？嫌嫌やらなくても構わないわよ。こっちには伝手があるし」
『こちらの態度はお詫びします。しかし、ストライクはヘリオポリスで戦死した者達のためにも、必ず本隊に届けなければならないのです』
『艦長!?』
『バジルール少尉、こんなところで時間を食うわけにもいかないわ。この艦と交戦したのがクルーゼ隊ならまだこの宙域にいるはず。今言ったばかりだけど、私達は残されたストライクとアークエンジェルを何としても本隊に届けなければならないのよ』

マリューの言葉にナタルは反論出来ない。同じくブリッジにいたムウや他のクルーも同様だ。沙耶の方も今回は納得したらしく、一先ず問題は収束した。

☆

一仕事終えて帰ってきたゼット達が見た光景は、王様ゲームしているレジェンド達。しかもフーマが言った番号プラス命令が『正面から抱きつくこと』だったため、その番号だったアズがレジェンドに抱きついている状態……つまり、アマリとルリアの目撃はレジェンドにとって修羅場。

「あー！アズさんズルいです！」
「え、あ……これは、その……」
「レジェンドさん、ちょっと燃えようか」
「アマリちゃん落ち着こう。似たような状況になって『お兄ちゃん、ちょっと頭を冷やそうか』なんて言われたことあるけどそれより明らかに物騒だからね。あっちは収束砲ぶっ放してきたけど」
「いやそっちのが物騒です超師匠」

膨れるルリアとあたふたするアズはいい、しかしアマリは三日月すら青褪めるほど怖かった。一誠やタイガは抱き合って部屋の隅で震えているし、しのぶは笑顔で拳の素振り、ロスヴァイセは対抗策を模索中。リアスが一誠とタイガを慰め、元凶のフーマは狸寝入りでタイタスはと言うと一人筋トレ。

「相変わらず先輩の周りは賑やかだな」
「……女性ばかりなのはどうかと思うけど」

ちょっぴりジェラシーしてる、アヤベさんのそっくりさんな沙耶。だが彼女はまだ分別のある方だったりする。とある世界の母港、レジェンドが指揮官を務めるそこではヤベーやつだらけだし。

「それはそれとしてそいつがミゲル・アイマンか」
「っとそうだった！超師匠、しのぶちゃん！コイツの治療お願いしてもよかですか!?」
「構いませんよ。応急処置は……してありますね」
「赤いのの隣に寝かせるか。いや～あってよかった圧縮空間技術」

そう言って二人はサーガと沙耶が助けた赤いパイロットスーツの少年の隣にミゲルを寝かせ、レジェンドが処置したあとにしのぶが後処理を行うことで一先ずは治療完了。これを聞いてゼットも漸く肩の荷が下りた。

「ダイゴはまだあっちか」
「みたいだね」

あっち、とはキラ達がいる避難民居住区。助けた救命ボートの中に彼の友人の婚約者であるフレイ・アルスターがいたということだが、キラはテキパキと行動・案内してダイゴとの会話に入ったらしい。

「こりゃグランと取り合いになるかな、あいつ。お兄さん役は大変だ」
「先輩は父親役だからな」
「娘が嫁に行くとき大変になるね」
「やかましーわバカ息子ども」

ちょっと前の修羅場空気はどこへやら、彼らの部屋は穏やかな空気と笑いに包まれた。
ちなみにこの後、ムウがキラにストライクの整備云々言いに来たらしいが、一緒にいたダイゴが「じゃあ貴方も工具持ちましょうか。キラ君、君の方は僕も手伝うよ」とムウにずっしり重い工具箱を無理矢理持たせ、ダイゴとキラはにこやかに話しながら格納庫まで必要な分を二人で分けて持っていったそうな。

「俺、この艦に乗ってから貧乏クジ引きまくってる気がするんだけどなぁ……」

この程度、貧乏クジ引きの先輩であるレジェンドには到底及ばぬことを彼はまだ知らない。

☆

一方、ヴェサリウスでは――

「ではあのストライクと呼ばれる新型、それに君の友人が乗っている可能性があると？」
「はい……確証はありませんが」
「そうは言うけどな、生憎と既にうちには損失が出てるんだ。特にラスティ・マッケンジーとミゲル・アイマンのＭＩＡ、これらにあの新造艦が関わってるとなったらとてもじゃないがそんなこと気にしてる余裕はないぜ」
「それはっ……」

クルーゼによって前回の出撃の件を問い質されていたアスラン。ベリアルが現状を説明するとさすがにアスランも黙るしかない。暫し考えるような素振りを見せるクルーゼだが、小さく頷くとアスランに向き直る。

「仮に君の言う通り友人がストライクに乗っていたとして、どうするつもりだ？」

「あいつを……キラを説得します。あいつはコーディネイターなんだ、きっと優秀なのを連合に利用されているだけなんです！」

「まあ、今回の連合のやり口を考えたら無くもないよなぁ」

ベリアルも顎に手を当ててアスランの言い分に理解を示す。それを聞き、クルーゼはアスランへと指示を出した。

「よし、ではストライクの件は君に任せるとしよう。私としても友人同士戦わせるのは忍びない」

「隊長……！」

「ラウさんが言うなら俺は反対しないが……もし、キミの言葉でもその友人とやらが首を縦に振らなかったりしたときはどうするんだい？」

「その時は……私が撃ちます」

強く握り拳を作りながら、絞り出すようにアスランは決意を口にした。それを見たベリアルは満足気に笑みを浮かべる。

「オーケー、アスラン。どうやらキミの覚悟は本物のようだ。疑って悪かった。そのお詫びといっちゃ何だが、次の出撃は俺が露払いを務めよう」

「なっ!?ベリアル参謀自ら!?」

「ラウさんも一度出撃したわけだし、俺もシャホールの調子を見てお

きたいんでね。な～に、退き際ぐらい弁えてるよ」

軽く言うベリアルだが、シミュレーター上ではアスラン以下クルーゼ隊の面々にはクルーゼを除き全勝していることから、その実力は折り紙付き。

「さてと……ラウさん、アスラン。仕掛けるなら早い方がいいぜ。あの部隊もじきにこっちに到着する。そうなったら説得前にストライク、落とされちまうかもしれないからな」

「あの部隊……まさか！」

「やはりその二つ名の通り早いな。ヘリオポリス崩壊から然程時間が経っていないのにもう察知したとは。ならば……そうだな。このヴェサリウスとガモフで挟み撃ちにしよう。あちらに搭載した残り三機も投入する。連中はおそらくアルテミスへと進路を向けるだろう。あそこの防御は酷く厄介だ……その前に叩く」

相手が相手だけに出し惜しみは出来ない、そう考えたクルーゼは今出来る布陣を即座に組み上げる。隊長と参謀から激励を受けたアスランは敬礼をした後に退室し、格納庫へと向かう。

「しかし説得ねえ……あんまし期待出来ないな。ラウさんはどう思う？」

「私も同じ意見だよ、ベリアル。しかし君が出撃すると自分から言うとは」

「何となく感じてね。あの機体が出てきたなら、あの世界の特異点も出てくるんじゃないかってさ。どれくらい成長したか少し遊んでやろうと思ったんだよ。それから連中、策を突破するとしたらこのヴェサリウスの方を狙ってくるんじゃないかな。前門の虎、後門の狼なら迷わず突っ込んで来ると思うぜ。例として言うなら……あのメビウス・ゼロとやらで艦底から奇襲とかな」

「ほう……さすが『狡知』と呼ばれるだけあって鋭い読みだ」

「お褒めに預かり光栄。で、どうする？」
「ふむ……そのままアルテミスへ行かせ、内輪もめしてるうちに漁夫の利を狙っても良いが……少々ムウにも絶望を味わってほしくてね。あの部隊にも噛んでもらうとしよう」

破滅を望む二人は隊長室で静かにほくそ笑んだ。

☆

アークエンジェルのブリッジではマリュー、ムウ、ナタルの三人が今後の進路について話し合っていた。

「さて、これからのことなんだけど……目的は第八艦隊との合流とはいえ、このまま無事に済むとは思えないわ」
「艦長、私はアルテミスへの寄港を提案します」
「ユーラシアの軍事要塞、『傘』のアルテミスか……しかし受け入れてくれるかね？この艦もストライクも、連合じゃトップシークレット扱いだろ。ザフトの艦と間違えられて後ろからズドン！とかはゴメンだぜ」
「ですが、ここから本艦の進路上で補給可能な場所はそこしかありません」

一枚岩ではないのは承知の上だが、連合は個人の派閥以上に件のユーラシア連邦や大西洋連邦など組織内であまり融和でない場合が多い。国の連合という形式上仕方ないことかもしれないとはいえ、これはプラント側より問題だ。
そんな時、ブリッジに入るわけにはいかないと思っているのか、ブリッジへの扉の向こう側からレジェンドが声をかけた。

「おーい、ちょっといいかー？」
「え？」

「ああ、団長さんか。別にいいんじゃないの？ブリッジに入れてもさ」
「フラガ大尉！部外者をブリッジに入れるのは――」
「そうは言うけどな、既に彼のところの団員が二度も助けてくれてるんだ。部外者ってのは筋違いだろ。それにこれは俺の勘だが……あの団長さん、相当修羅場をくぐってるぜ。団員と和気藹々しちゃいるが、常に周りを見てる。ああいうタイプの意見は割と貴重だと思うぞ、俺は」

いつもの口調ではあるが、説得力のある言葉でナタルを諌めるムウとそれに黙るナタル。それを不本意とはいえ納得と見たのか、マリューはレジェンドにブリッジへ入ってもらうことにし、大まかな進路を告げた。

「――というわけで、私達は一先ずアルテミスへ向かおうと考えてるの」
「んで、ここで一つ歴戦の猛者の風格があるウルトラ騎空団団長さんの意見を聞きたくてね」
「アルテミス、か。位置的には戦略的価値が殆ど無い。故に狙われ難く補給にはもってこいか。となると問題は今追ってきてるというクルーゼ隊という連中だな」

やっぱりそっちに目が行くか、とムウは呼んで正解だったと軽く息を吐きつつ頬を緩める。

「ちょっと前に参謀だかが新たに配属されたらしくてな。こいつが曲者で敵対した部隊は毎々やられてるって話だ」
「そのクルーゼとやらも結構な指揮官のようだがな。その参謀の名前か何かは聞いたことがあるか？姿は見たことがなくともそこまでの戦果を上げてるなら名前の一つぐらいは広まってるものだと思うが」
「まあな。姿とファミリーネームは不明だが、名前だけは分かってる。ベリアルとかいう奴だ」

「……何だと？」

レジェンドが違う反応を見せたことに三人は驚く。これは何かある、と多少突っ込んでマリューが聞いてみることにした。

「その名前に心当たりが？」

「ああ、人名なら三つある。一つは家名だがまずザフトにいることはありえん、すぐさま除外だ。二つ目は俺の弟子がその名だが、あいつは別の場所で総司令をやっている。これも除外」

一つ目の家名……即ち一誠やリアス達の世界において冥界の上級悪魔の一門。一応、異世界転移・転生的なことがあればそうなる可能性はあるが、この世界情勢で悪魔が一人生きていけるかと言われれば否だ。

二つ目は当然、銀河遊撃隊総司令官のベリアル。基本的にガーディアンベースにいるので、それがこの世界にない以上こちらに来ていないのはすぐに分かる。

総司令が弟子ってこの人何なの？と三人は本気で冷や汗を流し始めたが、ナタルが尋ねた。

「では、最後の三つ目は何だ？」

「考えたくないが、これが一番当たっているかもしれん。俺達ウルトラ騎空団と明確に敵対している奴の名もベリアルだ。しかも一番タチが悪い」

レジェンドは腕組みしながら目を伏せた。一番タチが悪い、と言うからには余程因縁があるようだが、そこには触れずムウが聞く。

「そんな奴がクルーゼと組んだってのか」

「恐らくな。あの歩く十八禁は何をしでかすか分かったもんじゃない。ロクでもないというのはブレんのだが」

「あ……歩く十八禁……？」
「戦闘中に『俺と姦淫しないか？』とか『達する達する』とか言う奴だぞ、あいつ」

マリューとナタルが一瞬で真っ赤になったのは言うまでもない。ムウはちょっと話してみたいとか思ったが、それを察した二人に若干蔑みの視線を向けられお手上げポーズ。

「何にせよ、そいつが敵にいるとしたら厄介だ。あいつは無駄に口が上手く頭も回る。クルーゼって奴の能力も鑑みて、相手の戦力は数値以上と考えたほうがいいだろう。バカ正直に進むのは勿論、ちょっとした奇襲でもすぐバレる。奴自身が奇襲や不意打ちを好き好んでやるからな」
「そんな……」
「一つ尋ねるが、この艦は高速艦に分類されるのか？」
「ええ……しかし、相手にも高速艦のナスカ級がいるわ」
「速度的にはどっこいどっこいか。武装の威力はこっちのが上だとは思うが、戦艦であることと形状的に３６０度対応出来るわけではない……ベストはデコイを放ちつつデブリ帯を最大船速で突っ切ることだが、これには操舵士の技量が相当なものでなければならんし、おまけにそこを攻撃された場合に捌けるだけの戦力も必要だ。しかも最大船速で航行するこの艦に追随しつつそれが出来るだけの機体でな」

ぶっちゃけ、後者はどうにでもなる。サーガのダブルオークアンタやロスヴァイセのライン・ヴァイスリッターなど対応可能な機体は事欠かない。ロスヴァイセはデブリ帯であの機動力を制御することに少しばかり不安があるのだが。
「無難な方法はやはり可能な限り見つからないよう、デコイに引き付けつつ静かにやり過ごしながら安全圏まで抜けた後、一気に速度を上げてアルテミスに急行、これしかない。正直相手が相手だけにバレる

のは時間の問題だろうが、迎撃準備の時間ぐらいは稼げるだろ」
「やはり攻撃されるのを前提として考える必要があるのね……」
「クルーゼならそうするだろうさ。とはいえ良い意見が聞けたぜ、団長さん。無粋というか図々しいのは承知の上だが、ここまで言ってくれるってことは戦力としてアテにしてもいいのかい？」
「うちのダイゴがキラをやたらと気にかけてる以上、複数の意味であいつの上司である俺がそれをほっぽり出すわけにもいかんだろう。あいつの出撃如何は指示出来んが、他のメンバーなら多少の融通は利かせられる。時と場合によっては俺も出るからな」

この言葉でマリューやムウは大分気が楽になった。ナタルはまだ納得していない感じだが、艦長であるマリューが決めたことなら仕方ないと了承。予定通りユーラシア連邦の軍事要塞・アルテミスへとアークエンジェルは進路を向ける。
デコイを出した後、特装砲と呼ばれる陽電子破城砲・ローエングリンをデブリ帯へ発射し、あたかも進路上のデブリを破壊し突き進むかのように見せかける。それによってデコイの方へとザフトを誘き寄せ、そのスキにある程度距離を稼ぐ……これが当面の戦力で考えた作戦だ。
ウルトラ騎空団に頼り切りでは、いざというときに満足に戦えないなどと情けないことになるかもしれない、故にまず自分達で出来ることをやろうとマリュー達は決意したのである。

「さてと、アルテミスまでのサイレントランニング……何事もなく無事に済めばいいけどな」
（……例のクルーゼとやらやべリアルとは違う別のプレッシャーらしきものが接近している。似たような感覚を何処かで……）

ムウの言葉を聞き流しつつ、レジェンドは迫りくる『何か』を感じ取っていた。同時に彼程ではないが、ウルトラ騎空団のうち数名もそれを察知する。

特にゼットにとってはよく知るモノだった。

☆

「高熱源反応確認！この位置は……デブリ帯です！」
「どう見る？ベリアル」
「確実にデコイも交えた囮だね。よく考えられてるし俺やラウさんじゃなきゃ通用したかもな」
「やはりな……予定の変更はない。『足つき』をヴェサリウスとガモフで挟撃する。ＭＳ各機は出撃用意！」

やはりクルーゼとベリアルには看破されていた。クルーゼの指示により、キラの説得に燃えるアスランのイージスを始めとしたＭＳが発進準備を開始し、同じ頃ガモフでも奪取されたデュエル、バスター、ブリッツが発進準備に入る。

「作戦時間はそう長くは取れん。既にザフト最精鋭部隊がこちらに向かってきているのでな。あちらが間に合えば我々はお役御免になるやもしれん、諸君らの健闘に期待する」
「最精鋭部隊……あの!?」
「ちょっとばかし騒ぎすぎたみたいでね、異名も変えた方がいいんじゃないかと思うほどの迅速さだよ」

ざわめくヴェサリウスクルー……否、クルーゼ隊の面々。彼らがこれ程までに驚く部隊とは何なのか。
驚きを隠せぬまま、遂にヴェサリウスとガモフからＭＳが発進する。

☆

だが、アークエンジェルにもレジェンドという百戦錬磨の団長がい

る。元々目が良い彼は遥か前方に構え、ＭＳを発進させていくヴェサリウスがハッキリ視えていた。

「案の定バレたか。予想よりも早かったがこれも想定内だ。艦長、機動部隊発進後に正面突破を仕掛けるぞ。モタモタしていると前後から集中砲火を浴びることになる。多少のリスクは覚悟して突っ切った方がいい」

「それしかなさそうね……大尉のゼロは？」

「ハンガーからどうにか出られるようになったと報告を受けています」

「あとはうちのメンバーか……」

少し考えた後、レジェンドは出撃メンバーを決め居住区にいるサーガ達に通信を繋げる。

「サーガ、全員揃ってるか？」

『先輩、先程キラが呼ばれて行ったみたいだが……』

「また一戦交えるぞ。今から出撃メンバーを言うからそいつらを格納庫へ向かわせろ。相手が相手だけに今回は俺の出撃も視野に入れる」

『……！分かった、それで今回の出撃は誰を？』

「一誠、リアス、タイガ。それからゼットを三人のフォローに。サーガもいつでも出れるようにしておけ。そして、最後にロスヴァイセもだ」

ゼットからは「了解！」と元気な声が聞こえてきたが、他の四人はビクッとしたようだ。とはいえ、ロスヴァイセは一瞬だったらしくそれからすぐ「わ、分かりました！」という返事が返ってくる。

やはり問題はオカルト研究部の三人。

「今更何を緊張してるのか分からんが、Ｃ・Ｅ・には遊びに来たわけじゃない。はぐれ悪魔や怪獣、宇宙人なら命を奪っても良い、人間は

駄目などという偏った考えは今すぐ捨てろ。俺は言ったはずだ、命は等しく命だとな」

マリュー達ははぐれ悪魔や怪獣という単語に？マークを飛ばすが、レジェンドはそれもいずれバレるというか話さねばならないだろうと気にするのをやめている。

それに彼が一誠やリアス、タイガに厳しい言葉をぶつけるのは将来の彼らの立場を考えてのこと。特にリアスはグレモリー家の当主になる以上、命に優劣をつけるような真似をすれば、それこそマジンガーＺＥＲＯによって粛清された悪魔達の二の舞になるかもしれない。

『……分かったわ。逃げてばかりじゃ、私達は何も出来ない』
『俺も行きます！まだ、気持ちに整理ついてないけど……』
『俺だってついてないさ。けど、俺達は先に進まなきゃいけないんだ』

三人はそう言うと居住区から出て格納庫へ向かい、その遠ざかっていく足音をレジェンドは通信機器から聞いていた。時を同じくして、ブリッジにキラの友人達が連合の制服を来て入ってくる。

「あ、団長さん！」
「ん？お前達、何でここに来たんだ」
「志願したんです。キラばっかり戦わせて、俺達は何が出来るんだろうって考えたら、これしかなくて」
「……戦艦は艦の性能のみならず、ブリッジクルーや整備班など艦内人員の充実具合で戦力が決まると言ってもいい。このアークエンジェルは慢性的な人員不足のようだし、やる気があるならそれに越したことはない。俺も今はアドバイザー的な立ち位置だからここにいるが、本来は全く違うからな……彼らの勇気、大切にしろよ。ラミアス艦長」
「ええ。無理矢理同行させておいて、更にこんなことをさせるのも何

だけど……ありがとう」

第一印象は良いものではなかったが、彼女の本質に触れたトール達はマリューからの礼に少しばかり頬を緩ませた。だがこのままでいてはいけないとナタルから指示を飛ばされ、急いで彼らは言われた席に着く。

彼らもまた、一誠達同様に本当の意味で戦争に関わっていくのだった。

例によって一誠達が各々の機動兵器を出すことと、タイガの姿を見たマードック達がビビったのは当然だが、今回はリアスの機体を見て目を見開いた。

リバウはその形状、というより頭部のモノアイがザフトの機体に似ているため一瞬ザフトのものかと思ってしまったのだ。しかし、サイズが違うためそうではないとすぐに認識を改める。

程なくしてキラとムウも到着、キラは気にしなかったがムウの方はやはりリバウに反応した。

「うおっと!?……悪い、てっきりザフトのあいつかと思っちまった」

「あいつ？」

「ザフトの今のトップエースだよ。俺も直接やりあったことはないが、とんでもない凄腕って話だ。さ、雑談はここまでにして出撃準備するぞ。ゼットだっけか、お前さんは問題ないだろうが、キラやそっちの……いや何かゼットみたいのがいるけど……三人は生き残る事だけ考えろ」

「了解！」

「「「はい！」」」

「よし！連中に見せてやろうじゃないの、俺達が黙ってやられるわけがないってな！」

初見ではデリカシーがないとか軽そうとか思ったものの、いざというときは頼りになる兄貴分……ムウの評価が一誠達の中で上がった瞬間である。

奇襲は読まれているかもしれない……しかし、やってみなければわからないこともある、とレジェンドはムウともう一人に作戦を告げていた。そのために、彼は真っ先に出撃し先行する必要があるので、いち早く愛機のコックピットに座る。

他の者も各々の機体のコックピットで出撃の時を待つ――と、ブリッジから通信が入ってきた。

『ヤッホー、キラ！』

「ミリィ!?」

『これからは私がＭＳやＭＡの管制官を務めます。よろしくね♪』

『よろしくお願いします、だろ』

上官となるクルーから訂正され、怒られちゃったと軽く舌を出すミリアリアにキラも笑みが溢れる。程よく緊張も解れたところで、早速彼女は一仕事だ。

『それでは……進路クリア！メビウス発進、どうぞ！』

「ムウ・ラ・フラガ、出る！戻ってくるまで墜ちるなよ！」

修復を終えたメビウス・ゼロが虚空へと飛び立っていく。続いてカタパルトに乗せられたのはウェイブライダー。ミゲル救助後、デブリをどかした後に再度変形し帰還したため、まだＭＳ形態に戻っていなかったのだが……ゼットにしてみればどちらでも問題ない。

「よっしゃ！頼んますよ、ミリアリアちゃん！あ、この形態の時はウェイブライダーでよろしく！」

『ふふっ、宇宙人っていうよりお隣さんみたい。では、進路クリア！ウェイブライダー発進、どうぞ！』

「ウルトラマンゼット！ウェイブライダー、行くぜ！」

ビームライフルだけでなく、ハイパー・メガ・ランチャーも装備した状態で、ウェイブライダーは発艦する。その後はいよいよリアスのリバウ。ゼットとタイガを除き全員がパイロットスーツに着替えており、リアスは『袖付き』のノーマルスーツ……敬愛するマリーダと同じタイプの色違い。

「ふう……いよいよね」
『あの、大丈夫ですか？』
「心配してくれてありがとう。私も貴女達と同じで初めてだから、必要以上に気を張り詰めちゃってたみたい。管制、頼むわよ」
『はい！進路クリア！リバウ発進、どうぞ！』
「リアス・グレモリー！リバウ、出るわよ！」

カタパルトによって射出され、彼女のイメージと合った機体色のリバウが宇宙に飛び出した。彼女のあとを追うのは一誠の量産型ゲシュペンストＭｋ―Ⅱ改と、タイガのゲシュペンストＭｋ―Ⅱ・タイプＳ。今回は連携のため、一誠は敢えて汎用性重視のタイプＮを選択。なお、一誠のパイロットスーツはスパロボＯＧにおける鬼教官らが着ているものと同じだがやはりというか、色が赤を基調としたものになっている。

「俺達も遂に実戦か……」
「ここまで来たらやるしかないぜ、タイガ。タイタスとフーマは留守番……って、ゼットさんと同じである程度までしか俺達は離れられないから、必然的に組んで戦闘になるんだよな。この戦艦からも離れられないし、深追いは無しだ」
「何だかんだ言って結構落ち着いてるな、イッセー」
「んなことねーよ、マジで心臓バクバクだって」
『二人共、ちょっといいですか？』

「「ん？何？」」
『えーっと……どっちもゲシュペンストって機体みたいですけど、量産型とかタイプワイルドとか色々あって、なんて呼べばいいかなって』
「ああ、別にどっちもゲシュペンストで構わね……いやちょい待ち！タイプワイルド!?」
「いや違うから！タイプNとタイプS！タイプワイルドはレジェンドとかの方だと思う！何でか分からないけど！」

彼らだけでなく、何故かミリアリアの脳内にもレジェンドが見覚えのある電気ネズミと草原を走っている映像が流れ出し、ミリアリアに至っては「皆もポケモンゲットで、だいじょーぶ！」などという声まで聞こえてくる始末。ミリアリアはぶんぶんと頭を振り、気を取り直して管制を行う。

『でっ……では！進路クリア！ゲシュペンスト各機、発進どうぞっ！』
「っと！兵藤一誠！ゲシュペンスト、出るぜ！」
「同じくウルトラマンタイガ！ゲシュペンスト、出るぞ！」

赤と青、二機のゲシュペンストがリバウを追って宇宙へと飛び出す。残るはキラが乗るストライク……高機動戦闘用のエールストライカーパックを装備したエールストライクガンダム。

『キラ、無理しないでね』
「うん。ありがとう、ミリィ」
『それでは……進路クリア！ストライク発進、どうぞ！』

キラは改めて、ディスプレイに映った単語の頭文字をとったものであり、自身を後押ししてくれたゼットや沙耶が乗る機体と同じ名を口にする。本当の意味で彼らと並べるように――決意を込めて。

「キラ・ヤマト！ガンダム、行きます！」

〈続く〉

フェイズシフトダウン

メビウス・ゼロ、ウェイブライダー、リバウ、量産型ゲシュペンストＭｋ―Ⅱ改・タイプＮ、ゲシュペンストＭｋ―Ⅱ・タイプＳ、そしてエールストライクガンダム――計六機の機動兵器が発進したアークエンジェルのブリッジでは、マリューら連合所属のクルー達に衝撃が走る。

「前方よりイージス！さらに後方よりデュエル、バスター、ブリッツが本艦に接近中！」

「奪ったＧを全て投入してきたというの……!?」

「ウルトラ騎空団（ウちんトコ）の戦力を見せつけすぎたか……いや、連中の指揮官を顧みるとはなっから全力で攻めてくる気だっただろうな。艦長、この艦は後方への攻撃手段はあるか？」

「一応バリアントなら砲撃可能だけれど、相手がＭＳ……それもＧ相手では当てることはほぼ不可能よ」

「当てる必要はない。そもそも向こうがこっちの位置を認識して向かってきている以上、回避されるのは分かりきってる。後ろから来てる三機を二手に分散出来れば十分だ。理想はあのスタンダードタイプと、砲撃重視＆特殊装備付きっぽい奴に分かれてくれたら一番だが、そこまで贅沢は言わん」

外すこと前提で指示を出すレジェンド。マリューやナタルがどういうことか聞く前に、彼はウルトラ騎空団に属する四機へと通信を送る。

「リアス、一誠、タイガ、そしてゼット。アークエンジェル後方から追ってきてる三機はお前達で対処しろ。リアス達は三機でいずれか一機を狙え。卑怯だと思うな、連携戦闘と考えろ。ゼットは残った二機だ」

『え!?』

『それじゃあゼットさんの負担が大きすぎじゃないですか！』
「お前ら三人のお守りをしながら戦うよかよっぽどやりやすい。逆にお前らを分散させると危ないんだよ。まだ三人揃っての連携戦闘をこなせてどうにか及第点レベルなんだからな、お前達は」
『……レジェンドの言う通り、俺達はまだ未熟だ。大人しく指示通りにしよう、イッセー、リアス』
『……そうね』
『仕方ないよな……』

レジェンドの指示に納得いかなさそうではあるが、事実な上にタイガから言われてしまえば一誠やリアスは従うしかない。ぶっちゃけここにキラのストライクを混ぜてもまだゼットの方が有利。
話が纏まったところで残るはストライクの役目だが――

「……おい、何故指示を出さない」
「「え？」」

マリューとナタルは揃って首を傾げる。

「散々ストライクは機密がどうのこうの言ってただろうが。つまりストライクに関して指示する権利はお前達地球連合軍にあるんだろう？」
「え、あ……それは、まあ……」

「だったら自分のとこの機体とそれに乗ってるパイロットぐらい、自分達で面倒を見てやれ大馬鹿者共!!」
「「もっ、申し訳ありません!!」」

突然大声で叱責され、その剣幕のあまりマリューとナタルは思わず

謝りながらその場で頭を下げてしまう。他のクルーも本当の上官のように錯覚して顔を青褪めさせるほど、レジェンドの怒号は凄まじかった。

「消去法で考えろ！メビウス・ゼロはナスカ級とやらへ奇襲のために先行！デュエル、バスター、ブリッツにはリバウ、ゲシュペンスト二機、ウェイブライダーことZガンダムが対処！残っているのは何だ！」

「こ、こちらにはストライク、相手にはイージスとローラシア級が……」

「ローラシア級とかいう戦艦はこの際無視！ストライクをイージスの迎撃に回せ！通信は全機、常にアクティブにさせろ！機動部隊は問題無いが、この艦が挟み撃ちにされて状況的に不利なことに変わりはない！状況把握・情報共有は迅速に行え！ミスを犯せばそこから一気に崩される可能性があることを忘れるな!!」

「「「「は、はいッ!!」」」」

もはや誰が艦長なのか分からないとか、むしろこの人が連合の指揮官なら戦局を覆せそうだとか思いつつあるクルー一同（マリュー含む）。確かにレジェンドは別の所で指揮官やってるけども。

学生達は逆に尊敬の眼差しでレジェンドを見つめていた。将来大物になりそうな気がする。

☆

レジェンドによって士気が高まっているアークエンジェルのブリッジから五機に先程の指示通りの通信が送られ、ゼットを除く四人は再び緊張感が高まる。キラの場合は戦闘云々よりもイージスのパイロットが友人だったアスランかもしれない、という理由からだが。

「アークエンジェルの砲撃が合図だ。運良く当たって……なんて考え

ないほうがいいな」
「ゼットさんすげーな……一番キツそうなのに全然動じてねえ」
「機体のベクトルは違うけど、シミュレーターではヤザン隊にクモの巣戦法やられたりしたからな！あれに比べりゃパイロットの腕も連携の練度も対処可能レベルだし、問題なのは機体性能くらい。それだってどうにでもなるでございます」
「そういやゼロ隊長も凄腕だし、ジード先輩も結構やるんだよな……ティガ先輩なんてスーパーエース級らしいし、銀河遊撃隊もそのうち機動兵器持ちが当たり前になるかも」

ついでに最近ガイ＝オーブも専用機を受領した。タイガの発言は割と現実味を帯びているが、それはそれとしてリアスはキラを気に掛ける。

「貴方は一対一だけどやれる？操縦経験はあまり無さそうに見えるし……」
「いえ、いいんです。確かめたいこともあるし」
「確かめたいこと？」
「……もしかしたら、あのイージスという機体に乗ってるのは僕の友人かもしれないんです」
「「!?」」

ゼットを除く三人は目を見開いて驚き、特に一誠は友人同士が戦う――否、殺し合うような状況に成りかねないことに異を唱える。

「ウソだろ……!?じゃあ尚更変わったほうがいいじゃねえか！」
「そうなると超師匠の指示を破ることになるし、キラ自身も言ってたろ。確かめたいって」
「でも……！」

一誠やリアスがゼットに反論する中、タイガはよく似た状況を思い

出していた。祖父（ケン）とベリアル、そして父（タロウ）とトレギア……それぞれが友と袂を分かった自分の親族。ベリアルは奇跡的にも光の道を再び歩めたが、トレギアとは現在進行系で敵対している。

（ベリアル総司令と戦った時の爺ちゃんも……キラと同じような気持ちだったのかな）

かつての友人と刃を向け合う――これがどれだけキツいことなのか、まだタイガだけでなく一誠らも完全には分からない。しかしながら、やらなければならないことでもあるのだ。己の大切なものを守るために。

「キラ、こっちは任せとけ。代わりにイージスってのは任せたぜ！」
「はい！ゼットさん、ありがとうございます。えっと……一誠さん、リアスさん、タイガさんも、僕のせいで御迷惑をお掛けしますが……」
「お前が自分で決めたんなら俺らがとやかく言うことじゃねえよな。じゃあ俺達は俺達の仕事をきっちりこなすとしますか！」
「ええ！」
「ああ！」

五人の意思は今まさに一つとなった。そろそろアークエンジェルに装備されたリニアガン・バリアントが合図として発射されるだろう。それに備え、Ｚガンダムは新しく折畳式に改良され、より汎用性を増したハイパー・メガ・ランチャーを構える。

「あれ？ゼット、攻撃はアークエンジェルが合図してからだろ？」
「そうでございますよ、タイガ先輩」
「じゃあ何で……」
「こういう状況では予定通りいかないのが定石なんだぜ、リアスちゃん。あくまでも保険さ」

何かを考えているゼットに一誠は「何かカッケーじゃねーか……」とちょっとばかり嫉妬したらしい。言った相手がリアスだからなのだが。

Ｚガンダムが頭部をストライクに向けると、ストライクは頷いて接近してくるイージスの迎撃に向かう。

そして――

『バリアント！てーっ！』

いよいよ本当の意味で戦闘の狼煙が上がった。

☆

アークエンジェルより放たれた砲撃は案の定三機に回避されるが、それはレジェンドの狙い通り。強いて言うなら分かれ方がデュエル＆バスターとブリッツになってしまったぐらいだ。

「ふん、やはりナチュラルは考えが浅いな。この距離で砲撃など弾道が丸見えだ」

「ま、こっちはやりやすくていいけどさ」

デュエルに乗るイザーク・ジュールとバスターを駆るディアッカ・エルスマンは小馬鹿にしたように言うも、残るブリッツを操るニコル・アマルフィは怪訝に思う。

（二人はそう言うけど、本当に迎撃するつもりで撃ってきたのだろうか……？この機体や他の三機も元は連合が開発したものなのに、性能を理解していないような砲撃を――）

その時だった、彼らを予想外の砲撃が襲ったのは。

「……足つきから少し離れた場所より高熱源反応!?イザーク！ディアッカ！」
「ッ!?」

デュエルとバスターをまとめて狙うようなビームが遠距離から放たれ、ギリギリで二機は回避するもレジェンドが望んだような分かれ方になる。つまり、デュエルは単機、そしてバスターとブリッツがコンビという形だ。

「何だ今の砲撃は!?足つきからじゃないぞ！」
「ウソだろ……!?このバスター並みに遠距離攻撃を可能な機体が、足つきにはまだ残ってるのか!?」

それからもう一射、更にバスターをブリッツ側に寄せるが如くビームが発射されてきた。

「うわっ!?このっ……ナチュラルのくせに！やることがセコいんだよ！」

ディアッカが悪態をつきながらガンランチャーとライフルを連結させ、『超高インパルス長射程狙撃ライフル』状態でビームが放たれた方向へと銃口を向けるも、凄まじい速さで接近してきたウェイブライダーに一瞬怯み、そのスキにZガンダムへと変形されビームサーベルで斬りかかられる。

「チェストオオオオオ!!」
「なっ!?」
「ディアッカ！」

辛うじて横からブリッツがビームサーベルで受け止めるも、Zガンダムはまさかの右膝蹴りを繰り出し受け止めたブリッツの腕を蹴り

上げ、続けざまに左腕からグレネードランチャーを発射してバスターに直撃させる。無論、実弾系武装であるためフェイズシフト装甲を持つバスターにはほぼ無効化されるが、あまりに鮮やかな連続攻撃でディアッカとニコルは恐怖を感じた。

「何だこの動き……！本当にナチュラルか!?」
「さっきの遠距離攻撃もこの機体が……」
「カミーユ先輩のアイデアで完成したこのZガンダムを舐めるなよ！」

そう、ゼットは三機がバリアントによって望む形に分かれないだろうことを見越し、ハイパーメガランチャーによる狙撃で分かれ方を『修正』したのである。
相手が二人でも、ゼットにとって何ら問題はない。今のやり取りで多少なりとも認識は改めただろうが、未だこちらを下に見ている部分がある二人の対処は然程難しくもないのだ。

「ディアッカ！ニコル！くそっ！」
「テメーの相手は俺達だァ！」
「何ッ!?」

バスターとブリッツの救援に向かおうするデュエルに、量産型ゲシュペンストMk―Ⅱ・タイプNがショートレンジモードのF2W（フォールディングツーウェイ）キャノンを連射しながら突撃してくる。間一髪回避するも、ここでゲシュペンストだけでなく一誠にとってもお得意の、左腕の一撃が炸裂。

「フェイズシフトだかフェミニストだか知らねえけどな！そんなもん、強引にぶち破る！」
「何を！」
「ジェット・マグナム！オラァァァァァ!!」

左腕のプラズマ・バックラーが唸りを上げ、咄嗟に防御したデュエルの対ビームシールドに叩き込まれ、大爆発を起こす。機体自体は無事だったものの、シールドはたった一発（プラズマ・バックラーは三基なので正確には三発）で使い物にならなくなってしまった。

「馬鹿な!?どういう出力だ、これは!!」

「いつまで驚いているのかしら？イッセーが言ったでしょう、貴方の相手は俺『達』だって」

「ッ!!」

追撃してきた機体に目を見開くイザーク。しかしリアスの駆るリバウは容赦なくデュエルへとビームアックスを振り下ろし、デュエルはそれをどうにかビームサーベルで受け止めた。

「やっぱりそう簡単にはいかないわねっ……！」

「貴様っ！その機体は!?」

「あの人もそうだったけど、リバウがどうしたっていうのよ！」

鍔迫り合い状態ではあるが、機体サイズと出力差から徐々にリバウが押し始める。それに危機感を覚えたイザークはデュエルでリバウを蹴飛ばして距離を取った……が、リアスはそれも読んでいた。

何故なら――

「今よ！タイガ！」

最後の一機、ゲシュペンストＭｋ―Ⅱ・タイプＳが絶妙なタイミングで『必殺技』を放つ準備を終えたからだ。

「究極ゥ！ゲェェェシュペンストォ!!キィィィィィック!!」

ゴガアァァァァン!!!

「うわあああああ!!」

「イザークッ!!」

ブースターを吹かしているわけでもないのに異常じみた速度で文字通り蹴りを叩き込んできたＭｋ―Ⅱ・タイプＳ。その一撃でデュエルは大きく吹っ飛んでいく。物理攻撃のためフェイズシフト装甲でダメージは殆ど無い……わけがなかった。表面上はそうでもないが、内部のフレームや機器はとんでもない衝撃を受けて深刻な状況になっている。

フェイズシフト装甲と言えど、内部機器まで効力が及んでいるわけではないのだ。

☆

「……凄い」

「あの三人も一人一人では未熟だが、見ての通り連携戦闘において光るものがある。しかしゼットの奴、なかなか考えるじゃないか」

「私はそれよりあの青いゲシュペンストとやらの動きが気になったのだが……」

「アイデアを出したのは黒歌（うちの団員）だ。結局モーションパターン構築したの俺だけど」

何度も回りながら飛び跳ねて、身を縮こませたかと思えば蹴りのポーズのまま天高く消えたかと思えば急降下してくるゲシュペンスト。こんな特撮ヒーローのような技を見せられれば当然だろう。マリューもナタルも、他のクルーも唖然としている。

奪われたＧがまるで子供扱い（乗ってるの子供だけど）。ウルトラ騎空団の圧倒的な実力を彼らは目の当たりにした。

――だが、ここで彼らにとって最悪の事態が起こる。

「……まずいな」
「え？」
「今見てみたが、この間の白い奴と同型機の黒い奴が出てきた。おそらくベリアルだ」
「「「「なっ!?」」」」

クルーゼの相談役にして隊の参謀、そしてクルーゼにとって真の同志の一人とも言えるベリアルが出撃してきたのだ。

☆

ベリアルが出撃する少し前――

「キラ……！キラ・ヤマトか!?」
「アスラン……!?アスラン・ザラ!?やっぱり……」
「何故お前が地球軍に……！そしてその機体に乗っている!?」
「君こそどうして！戦争なんて嫌だって、君だって言ってたじゃないか！」
「……状況が変わったんだ。キラ！ザフトに来い！お前はコーディネイターなんだ！」
「コーディネイターだから何だって言うんだ！そんな考えじゃいつまでも経っても戦争は終わらない！」
「キラ……!?」

戦場で再び相まみえたストライクとイージスはお互い相手のパイロットがかつての友人であると確信し、舌戦となっていた。しかし、控えめだったはずのキラがハッキリと自分に意見してくることにアスランは困惑している。

（何だ……!?全くしなかったということは無かったが、キラはここま

で自分の意見を堂々と主張するような性格じゃなかったはず……やはり連合に何か吹き込まれたのか！）

少し離れた間に変わってしまった友人を見て、アスランは間違った方向に解釈してしまう。連合には吹き込まれたというより何かとグチグチ言われるくらいなので、キラにはストレス源にしかなっていない。

代わりにダイゴやゼットらとの会話は彼にとって清涼剤である。

「ヘリオポリスのことだってそうだ！君達程の実力なら連合がその機体やこの機体をあの艦に乗せて、ヘリオポリスを出てから奪取することだって可能だったはず！それをＭＳを持ち出してまで強引に奪おうとしたから民間人に被害が出て、その結果がヘリオポリスの崩壊……確かに発端は連合かもしれないけど、それを誘発したのは他でもない、君達じゃないか!!」

「ッ……！」

アスランは知る由もないが、ダイゴらとの触れ合いによってキラは大きく成長している。最初は優柔不断だった彼も優しく背中を押されることで自信を程よく付け、僅か短期間で内面が相当強化されたのだ。

まさか気迫の込められた正論をかまされるとは予想しなかったアスランは言葉に詰まり、遂には――

「とにかく！お前はあの艦にいるべきじゃない！意地でもこちらに来てもらうぞ、キラ！」

「横暴だよアスラン!?」

考えるのをやめた。

「アスランは昔からそうだったよね！僕が反論して君が言葉に詰まっ

たら最後は決まって腕ずくだった！」
「なっ……！」
「あの頃はまだ子供の戯れ合いで済んだ。でも今は違う！今君が言ったこと、それを実行するなら君は誘拐犯！れっきとした犯罪者だ!!」
……他が割とシリアスな戦闘をしているのに、何故かここだけ間抜け（主にアスランが）に見えるのは気の所為だろうか。一応『考えるのをやめた』あたりから戦闘はしているのだが、こんな会話の内容なので微妙に緊迫感に欠ける。
――そんな彼らが本気でシリアスにならなければならない相手が到着するのはそれからすぐだった。

「おいおい、説得どころかまさか口喧嘩に発展してるとは思わなかったぜ」
「「ッ!?」」

ヘリオポリス内でバルバトスと戦った、クルーゼのエゼキエル――その同型機。黒を基調としたカラーリングの機体、エゼキエル・シャホール。ベリアルが戦場に到着したのだ。

「ベリアル参謀……！」
「まあ難しい年頃だし、相手があんなオモチャを持ってたら仕方ない。どれ、宣言通り露払いするから君はその後に話をするといい」
「参謀、それは――」
「そういうわけだ。ストライクだったか？俺にちょっとばかり付き合ってもらおうかな」

戦闘に乱入したエゼキエル・シャホールはすぐさまレーザー・ブレードでストライクに斬りかかり、ストライクもビームサーベルを抜

き受け止める。しかし、ストライクの出力をもってしても徐々に押されていくほど、相手の出力は凄まじい。

「ぐっ……！」

「ホラ、もうちょっとしっかり踏ん張れよ。じゃないと真っ二つにしちゃってアスランに怒られるだろ、俺が」

「知りませんよ……！そんなことっ!!」

「お？」

一瞬だけ出力を上げて押し返し、即座にその場から後退するストライク。それを見計らったかのようなタイミングで、デュエルをふっ飛ばしたオカ研の三人が合流する。

「キラ！無事か!?」

「一誠さん！こっちは何とか……ただ、いきなりあの黒い機体が……」

「ハハハハハハハ!!」

「「「!?」」」

突然ベリアルが笑い出し、一誠達はおろかアスランさえも驚きと困惑に見舞われた。

「アスランの友人もそうだが次に向かってきたのはまさかの特異点かよ！コイツは傑作だ！ヤバい、達する達する！」

「ど……どうしたんですか!?ベリアル参謀!?」

「「ベリアルッ!?」」

「おっと、悪いなアスラン。君がストライクのパイロットと因縁があるように、俺の方もあっちの機体のパイロットとは顔見知りなんだよ」

ここで初めて一誠、リアス、タイガはエゼキエル・シャホールにベリアルが乗っていることを知る。

「貴方が何でザフトにいるのよ!?」

「例によってグレモリーの姫も御一緒か。それで、そろそろ散らせてもらったかい？」

「っ……！毎ッ回毎回貴方はもう!!いい加減にしなさい!!」

「???」

ベリアルの発言の意味が分からず、タイガとキラは頭からハテナマークを乱舞させていた。大丈夫、別に知らなくても問題はない。タイガはジータが何かしてきて知る羽目になりそうな気もするが。

「こりゃほっとくと面倒くさいことになるな。アスラン、俺はあの三機の相手をしよう。最後まで面倒を見てやれなくてすまないな」

「い……いえ！ご武運を！」

「ああ。そうそう、もし連行するならヴェサリウスじゃなくてガモフの方もありだ。君のイージス、捕獲にもってこいの形態があるだろう？」

「……！了解！」

ベリアルに後押しされ、イージスは再びストライクへと向かっていく。ストライクと共に迎撃しようとした一誠達だが、ベリアルのエゼキエル・シャホールに妨害され、彼らは眼前の強敵と戦わざるを得なくなってしまった。

「さあ、やろうか」

「くそっ……！お前に構ってる暇はないんだよ！」

「つれないねえ、特異点。それと一つ君は思い違いをしてるようだ」

「何だと!?」

次の瞬間、量産型ゲシュペンストＭｋ―Ⅱ改・タイプＮはエゼキエル・シャホールのガイスト・ブローで殴り飛ばされる。

「ぐあああ！」
「イッセー!!」
「君達は構う側じゃない。俺に構われる側なんだよ」

ベリアルのバカにしたような言い草に、リアスやタイガも激昂する。リアスの感情の赴くまま、リバウはビームアックスでエゼキエル・シャホールに斬りかかるも――

「このぉぉぉっ！」
「悪くない動きだ……が、この程度じゃ特異点と大して変わらないぜ？リアス・グレモリー」

機体を少しずらすだけで回避したエゼキエル・シャホールはリバウの腕を掴んで量産型ゲシュペンストＭｋ―Ⅱ改の方へ投げ飛ばし、更に蹴りを叩き込んで二機を激突させる。

「きゃあぁぁぁ！」
「うぐっ！ぶ、部長！」
「あっけないねえ。ん？」

残るタイガのゲシュペンストＭｋ―Ⅱ・タイプＳがエゼキエル・シャホールへとメガ・ブラスターキャノンを放とうとしているのに気付いたベリアルは、ニヤリと笑う。

「その機体に似合わない武装だな、そいつは」
「別にお前には関係ないだろ！くらえ！メガ・ブラスターキャノン!!」

ゲシュペンストＭｋ―Ⅱ・タイプＳの胸部から高出力のビームが発射されるが、ベリアルは少しも焦らない。
「そんな目立つ動きで発射、しかも足を止めてなんて避けてくれって言ってるようなもんだろ」
これも難なく回避し、エゼキエル・シャホールはお返しとばかりにスパーク・トピードーを発射。メガ・ブラスターキャノンを発射したばかりのゲシュペンストＭｋ―Ⅱ・タイプＳに直撃する。
「うあああ！」
「う～ん……思った以上に手応えがないな。あっちの変形する機体の方が面白そうだ」
そう言ってベリアルが見たのは、一誠達がその場を離れたため復帰したデュエルも含めて三機のＧを相手にしているゼットのＺガンダム。
ベリアルは意地の悪い笑みを浮かべながらそれを見ると、エゼキエル・シャホールがオルガ・キャノンを取り出しＺガンダムへと狙いを定める。
「あれはっ……！」
「キラ！いい加減にしろ！」
「それは君の方だ、アスラン！君は何であんな人に従っているんだ！」
「ベリアル参謀は優秀だし、そもそも俺は軍人だ！上官に従うことの何がいけない!?」
「何がって、あの人の態度で分かるだろ！」
ゼットや一誠達の救援に向かいたいのに、アスランがしつこく追ってくるためキラのストライクもそちらに行くことが出来ない。

ゼットの方は三対一というハンデを背負いながらも互角以上に戦えている。シミュレーターとはいえほぼ現実と同じものに加え、彼を指導したのはかの英雄アムロ・レイ。機体スペックと経験が二重でプラスに働き、エリートであるザフトレッド三人と相対しても問題がなかったのだ。

「こっの……バケモノめ！」
「イザーク、あまり無理は……」
「煩いッ!!俺はあの赤と青のゴーグルタイプの機体に借りを返さなきゃならないんだ!!」
「同感だね！ここまでコケにされて黙っていられるかよ!!」

クルーゼ隊の中でも好戦的なイザークとディアッカは目の前のＺガンダムが予想以上に粘るため苛立ちを募らせていた。

「そんな闇雲に動いてバカスカ高出力武器を撃ちまくってたらガス欠起こすぜ！見せてやるぜ、カミーユ先輩の編み出した戦法を！」

Ｚガンダムはビームサーベルを三機目掛けてブーメランのように投げつける。が、そもそも距離があるため届くまで時間が掛かりすぎる……というか届くかも分からない。拍子抜けしたイザークとディアッカはこれ幸いと笑みを浮かべた。

「フンッ！さすがに向こうも焦りだしたか！」
「今更な気がするけどな！」

イザークとディアッカは近接武器がＺガンダムの手を離れたことで一気に攻め込もうとする。しかし、ここでニコルがまたも悪寒を感じ、それは現実のものとなった。

「……！イザーク！ディアッカ！すぐに回避運動を！」
「臆病者はとっとと下が……!?」

Ｚガンダムがビームライフルを構え、投げたビームサーベルのビーム部分目掛けて連射する。

「ビームコンフューズ!!」
「何だと!?」
「何だこの戦法っ……ぐあっ!?」
「こんな戦い方が……！」

ビーム同士がぶつかり拡散し、雨のようにデュエル、バスター、ブリッツへと降りそそぐ。予想だにしなかった攻撃方法に戸惑いを隠せず、怯んだ三機は続けざまに放たれたビームライフルの直撃を受けてしまう。

「こいつ、なんて戦い方を！」
「くっそおおおお!!」
「ただのナチュラルじゃない……！洗練された戦闘技術だ！」
「よし！このまま撃墜とはいかなくても戦闘不能までは……ん!?」

何かを感じたゼットは気配がした方を向くと、エゼキエル・シャホールがオルガ・キャノンを構えてこちらを狙っていることを確認し、急遽行動を変更。

「ヘリオポリスをぶち抜いたあれか！ウルトラやべえ!!」

ゼットは追撃を止め、放たれたオルガ・キャノンの回避に専念することでことなきことを得た。

☆

アークエンジェルのブリッジではエゼキエル・シャホールの参戦により、今までの流れが戻されクルーに焦りが出始める。

「Ｚは問題無いがオカ研メンバーやストライクがマズいな。特にストライクの方は動力がバッテリー、エネルギー切れも懸念材料だ。それはイージスも同じだが」

「フラガ大尉の方は!?」

「予想以上にデブリが多く、もう少し時間がかかりそうです！」

「……仕方ない。気配の正体がハッキリするまでは控えるつもりだったが――」

その時、ブリッジに通信機からある声が響いた。

『チーフ、僕とＲＥＮＡが行きます』

「ダイゴか？」

「「マ……マドカ特務大使!?」」

「「「ダイゴさん!?」」」

レジェンドは冷静に、しかしマリューとナタル、キラの友人達は驚きの声を上げる。急いで確認すると、既にＧＵＴＳの隊員服とヘルメットに身を包んだダイゴが何かのコックピットでスタンバイを終

えていた。

『サーガは別件でスタンバイしているんですよね。機動力の面や経験を考えれば僕達が行く方が確実です』

「しかし、それではオーブがこの戦闘に介入するということに……」

『連合の援護に出るわけではありません。この艦に救助されたヘリオポリス……オーブの民を守るためであり、ストライクに乗っているキラ君もオーブ国民。そしてもう一つ……僕はウルトラ騎空団所属でもあり、キラ君とフラガ大尉以外は皆同じ騎空団に属する者達です。つまり、僕達はオーブの、そしてウルトラ騎空団の仲間を守るために出撃するんです』

「ウルトラ騎空団はそもそもオーブに雇われてるわけだからな。そっちの所属で答えりゃ問題ないか。分かった、お前に任せる。それとサーガ」

ダイゴに続き、スタンバイしていたサーガがパイロットスーツ姿で映し出される。連合ともザフトとも、オーブとも違うそのスーツ姿は彼らがどことも違う独立した勢力であることを改めてアークエンジェルに知らしめた。

『こちらはいつでもいける』

「タイミングを外すなよ。しくじれば連中は即座に立て直してくるぞ」

『了解』

短く答えると、サーガはそのまま通信を切る。レジェンドはミリアリアの近くまで行くと、ダイゴの機体の管制を頼む。

「あいつの腕前は教導隊クラス……文句無しのエースパイロットだ。おまけに唯一無二のパートナーもいるからな。心配せず合図を頼む」

「あ……は、はい！えっと、機体名は……」

「ふむ、あいつのは……今はGコアか。近くの二機、GアタッカーとGボマーは随伴機のようなものだから気にしなくていい。それだけ呼んでやってくれ」
「了解しました！ダイゴさん、気をつけて！」
『キラ君達と戻ってくるよ、ミリアリアちゃん』
「カタパルト接続、進路クリア！Gコア発進、どうぞ！」
『マドカ・ダイゴ！Gコア、テイクオフ！』

ある機体のコアブロックたるGコアが発進し、それに追随するようにGアタッカーとGボマーも発進していく。
この世界の未来を担う、そしてこれから【エリア】全域を股に掛け冒険を共にする仲間を、守るために。

☆

「まさかかわされるとは思わなかったが……ま、いいか。アスラン、早いとこ済ませないといけないから俺も手を貸すぜ。もう時間もエネルギーもヤバいだろ」
「は……はい！」

ここに来てまたエゼキエル・シャホールとイージスがタッグを組んで襲いかかってきた。イージスだけならどうにか対処出来ていたストライクだが、性能もパイロットの技量もイージスより上のエゼキエル・シャホールが加わったことで一気に不利になり攻撃は勿論、防御でも大きくエネルギーを消費することになってしまう。
その結果、ストライクはエネルギー切れを起こし機体色がグレーのディアクティブモードに戻ってしまった。
――フェイズシフトダウン。
土壇場で最悪の事態になってしまったのである。

「くそっ！パワーが……」

「よぉしイイ感じだ」
「ご協力感謝します、ベリアル参謀！」

未だ態勢を立て直せていない一誠らを無視し、アスランはイージスを変形させ、クローでストライクを拘束――

ドカァァァァン!!
「うわっ!?」
「お？」
「「!?」」

――出来なかった。
突如として飛来した三機の戦闘機がイージスを攻撃し、ストライクを捕獲させなかったのだ。

「あの戦闘機は……!?」
「キラ君、無事かい？そっちの三人も」
「「ダイゴさん!?」」
「ティガ先輩!?」

まさかの人物が救援に来てくれたことに驚くキラ達。しかしながら戦闘機で大丈夫なのかという不安も残る。

「あともう少し、皆で力を合わせて切り抜けよう」
「は、はい！でもダイゴさん、その機体じゃ……」
「このままだと厳しいね。やろう、ＲＥＮＡ！」
『ええ、ダイゴ！』
「Ｓガンダム、合体シークエンス！」

ダイゴの掛け声と共に、Ｇコアを中心にＧアタッカーとＧボマーがそれぞれ変形・合体し上下半身を構成。本来この機体のドッキングは格納庫内で行うのが原則なのだが、ダイゴ、そして専用のマンマシンインターフェースにして人工知能であるＲＥＮＡの双方が超高レベルの操縦能力を持つが故に戦場でのドッキングも問題なく可能。

そして完成したその形態こそ三機のＧメカの真の姿、スペリオルガンダム――通称Ｓガンダムだ。

「うおおお!!カッケー!合体ガンダムだ!!」

「そういえばこのリバウも変形合体機構があったのよね……私ではまだ扱いこなせないからってオミットされたけど」

「あれがダイゴさんの……!」

キラ達とは裏腹に、アスランとベリアルの顔色はあまり宜しくない。見た目からして明らかに他の機体とは違うのが丸分かりなＭＳだからだ。アスランはイージスをＭＡ形態から再びＭＳ形態に変形させ直し、Ｓガンダムを警戒する。

「ドッキングするＭＳ!?装備ではなく機体そのものが!?」

「こりゃ本格的にマズいかもな。時と場合によっちゃストライクの確保は止めにするぞ、アスラン」

「しかしっ……」

「さすがにこの状況じゃあワガママを聞いてやれそうにない。何せ――」

そう言いかけた瞬間、ベリアルのエゼキエル・シャホールは爆発とともに吹き飛ばされた。

「うおっ!?」

「ベリアル参謀!?」

そう、Ｓガンダムの主兵装であるビーム・スマートガンのビームがエゼキエル・シャホールのＧ・テリトリーをぶち抜きダメージを与えたのである。強固な防御フィールドを容易に貫通してくるＳガンダムにアスランは恐怖を覚え、ベリアルは相変わらずの笑みを浮かべた。

「参謀や隊長のエゼキエル、生半可な攻撃では防御フィールドすら破れないはず……！それをあんな簡単に……!?」
「焦るなよ、アスラン。今までがイージーだっただけさ。とはいえ、難易度一気に上がり過ぎだけどな」

ダイゴが駆る、ＲＥＮＡのサポートを受けたＳガンダムがビームサーベルを抜き、想像を絶するスピードでイージスへと迫る。一回り大きいというのに凄まじい速度で向かってくるＳガンダムにプレッシャーを受けるアスランだが、腕からビームサーベルを出し受け止めようとしたが、受け止められたものの突進力を殺すことまでは出来ず薙ぎ払うような動作で無防備にされた挙げ句、その巨体のタックルを叩き込まれた。

「うわあああああ!!」
「なんてアグレッシブな……!?」

さらにエゼキエル・シャホールをＳガンダムの頭部から射出されたインコムが襲い、牽制している間に吹き飛んだイージスをビーム・スマートガンで狙い撃ちにする。数発受け止めただけで、イージスのシールドは木っ端微塵になってしまった。

「すっげえ……」
「私達とは差がありすぎるわ……」
「……もっと頑張らないとな」

タイガの言葉に一誠とリアスが頷き、キラはダイゴを尊敬の眼差しで見ている。ダイゴは何で察したのか、イージスのコックピット周辺は狙っていない。代わりにエゼキエル・シャホールには容赦なくビーム・スマートガンやビームカノンによる攻撃が繰り返されている。
変態死すべし慈悲はない（ｂｙ・ＲＥＮＡ）。
そしていよいよ、この戦いを締めくくる作戦が大詰めを迎えようとしていた。

☆

――ヴェサリウスのブリッジ――

「あの私が対峙した機体以外にあれ程の性能とパイロットの腕が合わさった厄介なモノがいるとはな。メビウス・ゼロの進路は？」
「約１０……いえ！本艦下方より急速に接近！」

「うおりゃあああああ!!」

ムウのメビウス・ゼロがヴェサリウスの艦底を狙って奇襲し、ガンバレルを全機展開し一斉射撃を行う。
しかし、ベリアルによってそれを予測していたクルーゼはエゼキエル・ラヴァンをヴェサリウスに接続し、艦底へ部分的にＧ・テリトリーを発生させることでこれを完璧に防ぎきった。

「フッ……予想通りとはな。何の成果も上げられぬまま帰還するがいい、ムウ・ラ・フラガ」

「やっぱりかよ！どうせ予想通りとか思ってんだろうなクルーゼの奴

！けどな、こっちもそれは同じなんだよ！締めは頼むぜ、副団長さん！」

「か……艦前方にＭＳ反応！」
「何……!?」

奇襲は防いだはず――そう思っていたクルーゼさえも驚かす、その正体は――

「うおおおお！」

――ＧＮソードビットで量子ワープしてきたダブルオークアンタ。元からメビウス・ゼロのみによる奇襲が失敗するだろうと予測していたレジェンドは、予め二段構えの奇襲を狙っていた。メビウス・ゼロの奇襲はそれこそ囮であり、ダブルオークアンタの量子ワープを使った奇襲こそが本命。奇襲とは油断しているところを突いてこそなのだ。

ダブルオークアンタはＧＮソードＶによる斬撃を何度もヴェサリウスへと叩き込み、推進部をＧＮソードビットで破損させるとメビウス・ゼロと共にその場から離れていく。

「完全にしてやられたか……アデス、信号弾だ。ガモフにも打診しろ。一旦引いて態勢を立て直す。それに……どうやら彼らも間に合ってしまいそうだからな」
「ハッ！信号弾を放て！」

ヴェサリウス、そしてガモフが信号弾を放つ中、クルーゼは一人ほくそ笑む。

（さて……あの男の部隊が奴らを落とせればそれでよし。そうでなく

ともこちらが立て直すだけの時間は稼げるだろう。精々奮闘するがいい……奴の部隊も、足つきもな）

☆

信号弾による合図は戦闘中の全員が目にする形となった。

「もうそんな時間か。アスラン、撤退するぞ」
「くっ……了解しました」
「そう焦るな。まだ機会はあるんだ。漁夫の利を狙うことも考えようぜ」

ヴェサリウスへと撤退するイージスとエゼキエル・シャホール。そして……。

「くそっ！良いようにやられておめおめと引き下がるなどっ……！」
「ああ……けどこっちもパワーがヤバい……！」
「仕方ありません。撤退命令ですから」
「分かっているさ、そんなこと！あのゴーグルタイプの機体！今度は必ず俺が落としてやる!!二機ともな!!」

デュエル、バスター、ブリッツもまたローラシア級のガモフへと戻っていく。ゼットはそれを追わず、ふう……と溜息を吐いた。

「や～れやれ……漸くかぁ。ウルトラしんどかったぜ」

しかし、彼が出撃前に感じた気配はあのG兵器の四機どころかベリアルでもない。寧ろ、今も近付いてきている。

☆

「ふう～……さすがだな、副団長さん」
「いや、そちらの決死の囮行動あってこそだ」
「そう言ってくれるとこっちも頑張った甲斐があったってもんだ。それじゃ、さっさとアークエンジェルに……ん？この反応……！こ……こいつは!!」
「何があった!?」

☆

戦闘を終えたはずだというのに、何故か警戒態勢を解く気になれないアークエンジェルと機動部隊に、ムウから未だかつてない焦りを含んだ声で通信が送られてきた。

『アークエンジェル！坊主達！今すぐここを離れるぞ!!』
「フラガ大尉？」
『最悪だ！どうやら俺達はヤバい連中に目をつけられてたらしい！一難去ってまた一難どころじゃない！もうすぐ近くまで来てる！』
「俺からしてみればあの歩く十八禁がいるクルーゼ隊よりヤバい連中など想像もつかないんだが」
『冗談言ってる場合じゃないっての！恐らくヘリオポリスが崩壊したことが原因だろうな！俺達を狙ってるのは――』

ムウが口にしたその名はマリューら地球連合軍だけでなく、レジェンド達も驚愕することになる。

『赤い彗星！シャア・アズナブルだ!!』

〈続く〉

赤い彗星

ラスティ・マッケンジーは任務に失敗し、連合の銃弾に倒れた……はずだったが、何の因果か一命を取り留め、どこかのベッドで目を覚ました。

「……ここは……」

「……よう、お前も目が覚めたかラスティ」

「ミゲル!?あい゛っ!?てぇ……っ……」

「無理するなよ。弾は貫通してたらしいが、撃たれたことに変わりないんだからな」

隣でミゲルも横たわっていたことに驚くも、同時にここがザフトの艦でないことにも気付く。

「なあ、まさかここって……」

「連合の艦だ。俺も我を通してボロ負け、我ながらとんでもない連中に喧嘩売ったもんだぜ」

「何でそんなに落ち着いてんだよ!?一刻も早く脱出……」

ベッドから出ようとミゲルがいる方とは反対を向いたラスティが見たものは――

――真っ黒い尻(タイタスの)だった。

「うおわあああああ!?」

☆

アークエンジェルのブリッジに衝撃が走る。

「あ……赤い彗星……！」

「シャア・アズナブル……！何でこの宙域に!?」

（どういうことだ？確かそいつはアムロやマリーダ同様、宇宙世紀出身……コズミック・イラには存在しないはず。同姓同名かと思ったが二つ名まで同じというのはさすがに出来すぎている）

マリューやナタルら連合所属のクルー達は顔色が悪いものの、学生達は相手がどれほどのものか分からず、レジェンドは既に思考を切り替えていた。

（もし、シャア・アズナブルが俺の知るシャアであるならば今戦場で対抗出来るのはダイゴかサーガ、次点で食いつけるのがゼット、といったところか。だがダイゴは一誠達の、サーガもフラガのお守りがある。せめてあいつらだけでも格納出来たなら――）

「……っ！ＭＳの反応がこの宙域に急速接近！は、早い!!通常の三倍の速度でこちらに向かってきています!!」

「……当たってほしくない予想が当たったか」

そして遂に、その人物は戦場にその姿を現す。己の存在を主張するような、二つ名に相応しいパーソナルカラーで染め上げた機体を駆って。

☆

赤い彗星、シャア・アズナブル。

本名キャスバル・レム・ダイクン――ジオン・ズム・ダイクンの遺

児にしてアルテイシア・ソム・ダイクンの実兄である。U・C・００９３の３月に起きた第二次ネオ・ジオン抗争の末、アムロ・レイと共に行方不明となった彼はアムロが東方不敗によって惑星レジェンドへと招かれ、新たな力や仲間を授かりそこで暮らすようになったのと時を同じくして、理由は不明だが単身このコズミック・イラへと転移し、同時に幾分か肉体が若返るという不可思議な事態に見舞われた。

しかしながら記憶や今まで培ったＭＳの操縦技術等は失われず、救助してくれたプラント側のためにその力を使わんと考えたところ、ナチュラルとコーディネイターの戦争が勃発。かつての世界でアースノイドとスペースノイドによる戦争を経験していた彼は宇宙に生きる者としてコーディネイター側につくことを選択し、ザフトに入隊。その超人的技量によって瞬く間にネビュラ勲章を授与され、一部隊の指揮官まで上り詰める。

コズミック・イラではナチュラルに相当する彼ではあったが、その働きと生来のカリスマ性でコーディネイターからは一部を除き好意的に受け入れられ、敵味方ともに畏怖を感じさせるその機体色と圧倒的強さから、奇しくも生まれた世界と同じ『赤い彗星』の二つ名がつけられる結果となった。

そして、今――

☆

「崩壊したヘリオポリスの現状を見に来たのだが……よもや木馬に似た艦や、まさかＺを見ることになるとはな。カミーユが乗っているわけではないようだが、この感覚……それに他のガンダムも私の記憶にあるものとは違った方向性を持っているようだ」

シャアはモニターに映る、メビウス・ゼロを含めた七機の機体を見たあとに自身を追随してきている母艦や部下に指示を出す。

「アポリー、ロベルトはＺを任せる。ただし無理はするな、あの機体の

性能はアポリーも分かっているだろう」
『了解です、隊長』
『かつてと同じ轍を踏むことがないように、自分も警戒します』
「それでいい。たとえ臆病者と言われようがチャンスとは生きているものにこそ与えられるものだ。シャリア・ブル、ミダラーンは宙域から少し離れて待機してくれ。元よりこの戦いで決まるとは思っていない」
『了解しました。信号弾のタイミングは？』
「そちらに任せる。先の戦闘を見る限り厄介なのは、あの粒子を放出している機体と合体型の機体、そしてZだ。特に粒子を放出している奴は移動方法も得体が知れん。私も深追いする気はない、判断を見誤るなよ」
『ハッ！』

アポリー・ベイ、ロベルトことリカルド・ヴェガ、そして旗艦ミダラーンの艦長のシャリア・ブル……皆、宇宙世紀出身でジオン縁の人物達だ。既に大規模戦争を経験した歴戦の勇士達が集う部隊、それこそがザフト最強部隊と名高い『アズナブル隊』である。

「さて……見せてもらおうか。別の世界のガンダムの性能とやらを」

☆

「あ……赤い彗星、シャア・アズナブルだって!?アムロ師匠のライバルその人じゃねえか！どうしてここに……ってそんなこと考えてるヒマはねえ！油断すりゃすぐに撃墜される、冷静じゃいられないけど冷静に、だ……！」

ゼットはリアルシミュレーターモードでその技量を敵味方双方の場で知っているからかすぐに気持ちの切り替えが出来たものの、他の面々はダイゴとサーガを除いてそうもいかない。

「ティガ先輩とサーガ超先輩はストライクをアークエンジェルへ！何かパワーダウンしてるストライクを守りながらじゃまともに戦える相手じゃござらんす！」
「確かに、あの雰囲気は普通じゃない……！頼むよ、ゼット！」
「俺は超先輩なのか……それはいいか、了解した」

この場における最大戦力の二機を離脱させることは相手を考えれば半ば自殺行為に近い。しかし、戦闘がほぼ不可能な状態のストライクを戦場に居させることの方が全員にとってデメリットになると考えたゼットは、自分が相手取る覚悟でストライクの帰還を優先させた。

しかし、彼にとって予想外なのは随伴機――リック・ディアスの発展型と思われる二機が自分の相手だったことだ。

「リック・ディアス!?いや違う！強化型か後継機!?」
「リック・ディアスを知っている……？ならエゥーゴの関係者もしくは協力者か。声の感じからしてやっぱりカミーユじゃない」
「Ｚガンダム……この目で見るのは初めてだが、良い機体だな」
（おい、ウソだろ……!?あの声、まさかアポリーさんやロベルトさんか!?）

アポリーとロベルトの乗る機体――スーパーディアス改は、殺意こそ無いものの本気でＺガンダムへと向かってきた。リック・ディアスに比べ遥かに性能を増した機体と、それを操る熟練のパイロットにゼットは苦戦する。

「リック・ディアスよりデカいし早い！まだ機動性はこっちに分があるけど向こうは装甲が分厚いな！」
「やるな、Ｚのパイロット！」
「単機なら逆にやられていたかもしれんが、こちらには長年培った連

携がある！」
「相手が相手だけに振り切れねえ！これじゃあっちの援護に行くヒマがっ！」

Ｓガンダムとダブルオークアンタがストライクを連れてアークエンジェルへと向かい、戦力が大幅ダウンした一誠、リアス、タイガ、そしてムウの四人はシャアが駆るサザビー・リビルドの相手をしていた。

サザビー・リビルドはコズミック・イラの技術ではファンネルの再現が不可能……ではないが難しく、ならばとアズナブル隊が知恵を出し合って考えたサザビーの新しい形だ。ファンネルと腹部の拡散メガ粒子砲を廃止し、その分のエネルギーを他の武装に回すことで武装全体の出力増加を図り、プロペラントタンクやスラスターの増設によって継戦能力や機動力を強化。さらにマウントラッチも設置することで汎用性も増した、全局面対応のまさに指揮官機として申し分ない性能の超高性能機。

そんな機体をかのシャア・アズナブルが駆るとあっては、彼を知る人物であるなら余程の者ではない限り逃げ一択だろう。尤も、この場で逃げられるものなど限られている上、その限られたものはアークエンジェルにいるため無意味だが。

「こなくそっ！あんな図体でＭＡより早いとか反則にも程があるだろうが！」
「ガンバレル付きのメビウス……エンデュミオンの鷹か。悲しいかな機体の性能がパイロットの才能を殺しているようだな」

サザビー・リビルドのビームショットライフルがいとも簡単に修理したばかりのガンバレルを貫いていく。その一発一発が的確であり、シャアのパイロットとしての技量が並外れたものであることを証明している。

「格闘戦なら負けねえ！」
「連携も組み合わせればっ！」
「一撃の重さならこっちが上だ！」
「思い切りはいい。しかし少々考えが浅はかだぞ」

迫りくる量産型ゲシュペンストＭｋ―Ⅱ改・タイプＮのジェット・マグナムを左腕で振り上げるように払い除け、サザビー・リビルドは右腕でコックピットの辺りにアッパーを叩き込み量産型ゲシュペンストＭｋ―Ⅱ改・タイプＮをふっ飛ばす。
更にリバウのビームアックスをビームトマホークで受け止め振り払うように弾き、ショルダータックルをぶちかまして吹き飛ばすと、最後に仕掛けてきたゲシュペンストＭｋ―Ⅱ・タイプＳの一撃を回避、お返しとばかりに土手っ腹にキックをブチ込んだ。

「「うわあぁぁぁ!!」」
「きゃあああ!!」

まるで歯が立たない。ベリアルのエゼキエル・シャホールもそうだったが、今回はムウのメビウス・ゼロも加えているだけでなく、それぞれが相手に合わせた戦法で戦い、かつ圧倒されている。ジェット・マグナムにはアッパー、ビームアックスにはビームトマホークというように。

「どうやら私はつくづく少年兵や少女兵に縁があるらしい。熟練度的にあの灰色の機体に乗っていたのも恐らくは最初のアムロやカミーユぐらいの子供かもしれん。しかし、あの二機が帰投してくれたのは僥倖だったな」
「あのベリアルの機体も強かったけど……この赤い奴はデタラメだ……！」
『こっちも一応赤龍帝、同じ赤なんだが』

「張り合ってる場合かよ！」
「おい！誰と会話してるのか知らないが巫山戯てる場合じゃないだろ！このままじゃ冗談抜きで全滅だぞ！」
「そんなこと言っても、この状況じゃ私達だけで打開策なんて考えられないわ！」
「けどゼットも二対一で戦っててこっちには来れない……俺達だけでどうにかしないと……！」

現在戦闘中のメンバーで最も戦力になるゼットは二機のスーパーディアス改と激戦を繰り広げており、救援は期待出来ない。
絶体絶命の危機。
その時、遂に彼が動いた。

☆

アークエンジェルのブリッジはシャアを始め圧倒的な戦闘力を誇るアズナブル隊の戦いを前に絶望しつつあった。Ｓガンダムやダブルオークアンタを再度出撃させればどうにかなるかもしれないが、確実というわけではない。単純な話、スーパーディアス改が足止めを行い、サザビー・リビルドがアークエンジェルを撃墜しても構わないのだ。それに、アズナブル隊の戦力があの三機だけとも限らない。

「……あの四人に勝ち目はない。ゼットが加われば　どうかとは思うが、部下らしき二機もかなりの手練だ。焦ってミスを犯せば撃墜される可能性もある」
「そんなっ……！」
「……艦長、ストライクは収容しました。彼らが戦闘している間にこの宙域から離脱することを進言します」
「「「!?」」」
「バジルール少尉!?彼らを見殺しにしろというの!?」
「幸いアズナブル隊はあの三機しか出撃していません。ここで尻込み

すればそれこそ追撃され、本艦を直接攻撃される危険もあります！」

確かにナタルの言葉も一理ある。もしかすると高性能ＭＳが更に投入されてくることも十分に考えられるのだ。ウルトラ騎空団の総員を出撃させれば容易に撃退は可能だろうが、彼らがアークエンジェルを離れた時のことを考えるとあまり力を借り過ぎるのも良くはないし、彼らもアークエンジェルの正規戦力と思われ、彼らがいることを前提にした過剰戦力を差し向けられるかもしれないことも懸念される。

「……許可出来ません！フラガ大尉、並びに本艦護衛に参加してくれたウルトラ騎空団の有志の方々を見捨ててこの場を脱するなど、艦長として認めるわけにはいきません!!」

「しかしっ!!」

「……ロスヴァイセ」

『は、はいっ!?』

ここでレジェンドが待機中のロスヴァイセに声を掛ける。格納庫ではキラがまた出撃させてくれと言っているようだが、何とかダイゴとサーガが抑えているらしい。

「出撃してゼットの援護に向かえ。ライン・ヴァイスリッターの機動力なら余程のバカをやらん限り攻撃は当たらん」

『わ……分かりました！』

「それからシャア・アズナブルは俺が対処する。俺が交戦し始めたら他の四機はアークエンジェルへ帰還させろ。あれを相手にそんな数のお守りは出来ん」

「「「「!?」」」」

この発言に場が騒然とした。ロスヴァイセに出した指示は分かる。しかしあの四機を相手に手加減してなお圧倒しているシャアと一対

一で戦おうとするレジェンドを、マリューやナタルは信じられないものを見る目で見ていた。

「なっ……本気で言っているの!?相手は……」

「似たようなレベルの相手とよく模擬戦をしている。そいつの方が上だと思うが、そいつとの戦績は五分五分だ。ハンデが無ければやり方次第でどうにでもなるだろ」

もはや絶句するしかない。目の前の人物は少なくともシャアと互角に戦える実力があると公言したのだ。奇行や高い指揮能力が目立ったため操縦技術がどれほどのものか分からなかったとはいえ、これは完全に予想外。

呆然とするマリューらを放置し、レジェンドは急ぎ格納庫に向かう。

格納庫ではロスヴァイセが既にスタンバイを終えてコックピットで待機しており、どうにか落ち着いたキラ共々ダイゴやサーガが整備班とライン・ヴァイスリッター出撃のために一時退避している。

「しっかしまあ今度の機体はなんつーか、半有機物っぽいもんじゃないですかい」

「そうらしい。おかげで整備に一苦労だと製作者がボヤいていた」

マードックとサーガはそんな軽口を叩いているが、キラはまだ気落ちしている。機体の都合とはいえ自分だけがこうしてダイゴやサーガに連れられて戻ってきたことに納得出来ていないのだ。

「ダイゴさん、僕は……」

「キラ君が本当はあそこに残って戦いたかったのは僕も分かるよ。ただ、さすがに状況と相手が悪すぎた」

「でもっ……!そのせいで、ゼットさん達が……」
「大丈夫。ゼットの方はロスヴァイセさんが助けに行くって言うし、それにほら」

ダイゴが微笑みながら指を差した方向。そこにはまた見たことのない、赤く分厚そうな装甲に包まれた機体が立っており、コックピットにレジェンドが乗り込むところだった。

「今のって!」
「チーフが出るんだ。フラガ大尉達もきっと帰ってくる」

優しい言葉をかけるダイゴ。しかしマードックはライン・ヴァイスリッターと違い、今レジェンドが乗り込んだ機体を見て驚きに染まる。

「何だありゃあ……!分厚い装甲なのはパッと見で分かるが、あからさまにバランスが悪すぎるぜ!一応普通にしてりゃ問題は無さそうだが、戦闘になったらまともに動けるか怪しいぞ!?」

マードックの言葉を聞いてキラも不安になるが、そこでサーガが反論した。

「心配ない。逆にあれぐらいピーキーな方が先輩にとっては扱いやすいそうだ」
「はあ!?扱いやすいったって……」
「見ていれば分かる」

短い言葉に隠された、絶対なる信頼。実際にシミュレーターでその戦いぶりを見た彼らだからこそ言えるのだ。『レジェンドが出れば大丈夫』と。

「ロスヴァイセ、今回の目的はあくまで敵の撤退だ。無理に撃墜を考えたり追撃しなくていい。欲を出せば命という対価を支払うことになるぞ」
「分かりました……あの、もし早く撤退させられたらそちらに向かったほうが……？」
「いや、そのままゼットと共にアークエンジェルへ帰還しろ。俺もあちらと交戦し出したら四機を帰還させるよう艦長らに指示してある」

本来ならここで反論なりなんなりするだろうが、ロスヴァイセは敢えてそうしなかった。レジェンドが自ら出撃するということ、それ自体が緊急事態に匹敵するというのはゴーデスやモネラマザーとの戦いで彼女も実感している。

「あの、レジェンド様」
「何だ？」
「……ご武運を」
「ああ。墜ちるなよ、ロスヴァイセ」
「はいっ！」

どことなく優しい声色で言われ、ロスヴァイセの心配も少しばかり晴れた。そして、僅かな希望を信じたミリアリアの管制通信が聞こえる。

『カタパルト接続、進路クリア！えっと……ライン・ヴァイスリッター、発進どうぞ！』
「こちらロスヴァイセ！ライン・ヴァイスリッター、行きます！」

カタパルトによって射出され、宇宙に出るとその純白の悪魔のような四枚の翼を広げ、一瞬でZガンダムと二機のスーパーディアス改が激突する宙域へと消えていく。

『嘘……凄い速度……！』
「ミリアリアと言ったな。こちらも頼む」
『あ、はい！どうか、お気をつけて』
「連中が帰ってきたら労ってやってくれ。俺の方は心配いらん」

何故だろうか、付き合いもまだ大してないというのに、レジェンドの声はミリアリアに安心を与えた。ブリッジで見た頼もしさだけでなく、不思議と安心感も感じさせてくれるこの人ならやってくれる――そう思ったミリアリアは普段の調子に戻り、彼と乗機を送り出す。

『カタパルト接続、進路クリア！アルトアイゼン・リーゼ……発進、どうぞっ！』
「アサルト1！アルトアイゼン・リーゼ、出る！」

コールサインと共に告げられた機体の名。アサルトブースターとサイドウィングを展開し、恐るべき加速でアークエンジェルの格納庫から飛び出したアルトアイゼン・リーゼは、重量級の機体にとってある種の救いとも言うべき無重力の宇宙空間を突き進む。

☆

Zガンダムと二機のスーパーディアス改は、突如凄まじい速度で現れたライン・ヴァイスリッターに混乱しつつもどうにか冷静さを取り戻し、戦闘を継続するが――

「何だっ！この機動性は!?」
「こちらの常識が通用しない、全く未知の技術が使われているとでも言うのか!?」

その通りである。異常な速度で宇宙を飛び回り正確に長身銃ハウ

リング・ランチャーを撃ってくるライン・ヴァイスリッターに翻弄される二機のスーパーディアス改。おまけに高出力の上、連射してくるためとてもではないが攻撃する余裕がなく、防御か回避に専念している状態だ。

「ゼットさん！今のうちにハイパー・メガ・ランチャーを！」
「お……おいっす！」

突然声をかけられ動揺したものの、すぐさまハイパー・メガ・ランチャーを展開して構え、スーパーディアス改を狙撃するZガンダム。二対二の状況ではあるが、救援に来た機体が明らかに普通ではないことで一気に形勢が逆転されたアポリーとロベルトは、ここらが潮時かと考える。

そして、一誠らとシャアの戦闘にも――

突如、赤い重機動型の機体が四機と一機の間を割り込むように突貫してきた。

「うわあっ!?」
「今度は何なんだったく！」
「ちいっ！」

予期せぬ乱入者を五人は警戒する。しかし、その直後の通信でシャアの除く四人が驚愕と安心感を得ることになった。

「ウルトラ騎空団の三機、並びにメビウス・ゼロ、全機問題無いか？」
「「レ、レジェンド（様）!?」」
「まさかの団長さんかよ!?」
「無さそうだな。シャアの相手は俺がする。お前達は直ちにアークエンジェルへ帰投しろ」

「すまん！任せっぱなしで悪いが機体がこの状態じゃ役立たずもいいとこでな！」
「ッ……俺達はまだやれます！面と向かってやり合えなくても援護くらい――」

アルトアイゼン・リーゼで駆けつけたレジェンドの指示を正しく受け止めたのは、やはりというか軍人であるムウのみ。一誠ら三人はレジェンドが来てくれたなら総掛かりで立ち向かえば勝てると思っているが、そんな甘い相手ではない。

「ハッキリ言っておく。邪魔だ」
「「「ッ!!」」」
「援護とはする側だけでなく、される側も気を配らねばならない。奴と雲泥の差があるお前達が俺の援護に入ったところで最悪フレンドリーファイアの危険もあるんでな。ゼットとロスヴァイセにも撃退出来たらさっさと戻れと言ってある」

自分達よりも上の技量を持つゼットやロスヴァイセの援護すら不要と言うレジェンド。確かに二人なら邪魔にはならないだろうが、かと言って助けになるとも限らないというわけだ。そうこう言っているうちに、サザビー・リビルドがアルトアイゼン・リーゼへとビームショットライフルの銃口を向ける。

「なるほど、救援か。見たところ強襲に特化した機体のようだが、その手の機体は乗り手を選ぶ。果たしてどれほどのものか、試させてもらおう」
「生憎だが試させてもらうのはこちらの台詞だ。止められると思うなよ……！」

一誠らの返事を聞く間もなく、アルトアイゼン・リーゼとサザビー・リビルドは戦闘に突入する。

ビームショットライフルを発射するサザビー・リビルドに対し、アルトアイゼン・リーゼは再びブースターを吹かし一気に加速、真っ向から挑みにかかった。放たれたビームを最小限の動きで紙一重に回避しつつ、左腕に備えられた5連チェーンガンを連射しサザビー・リビルドを狙うがこちらも回避行動をとる。

「外れたか……だが、それは予想通りだ」
「見た目からは想像も出来ん見事な動きだな。機体の性能もそうだがパイロットが相当な腕と見える」
「撃墜は無理でも戦闘不能にはさせてもらうぞ、シャア・アズナブル……！」

背後に回らんとするサザビー・リビルドだが、アルトアイゼン・リーゼはシャアの予想を遥かに超える……否、予想などしようがない動きをとった。サイドウィングやブースターの出力をリアルタイムで微調整しつつ、全身のスラスターなどをフル活用し、新体操のように回転捻りを行いながら無理矢理軌道を変えてきたのである。

「何!?」
「俺に定石通りの戦法が通じると思うな！」
「ぐうっ!?」

そのまま回転の勢いを乗せて蹴りを繰り出すアルトアイゼン・リーゼと、それをシールドで防御しふっ飛ばされるサザビー・リビルド。重量級の機体だけあってパワーは凄まじく、立て直しに若干の時間を要したサザビー・リビルドはアルトアイゼン・リーゼに追撃のチャンスを許してしまう。

「この距離……とった！」
「……！」

シールドで防御したままの体勢のサザビー・リビルドに、アルトアイゼン・リーゼの代名詞とも呼べる右腕の武装――リボルビング・バンカーが炸裂する！

ガキィィィン!!

その一見時代遅れに見える、無骨かつ扱いにくいであろう武装。しかし、裏を返せば使いこなせれば接近戦において無類の威力を発揮するということでもある。現にリボルビング・バンカーはシールドごとサザビー・リビルドの左腕を貫いていた。

だがまだ終わりではない。

「どんな装甲だろうと！」

その名の通り、リボルバー式の弾装を持つその武器は、相手に打ち込んでからが本番だ。装填されたカートリッジを炸裂させ、その衝撃によって相手の内部構造を破壊するというそれは、武器自体の大きさやアルトアイゼン・リーゼの馬力もあってまさに一撃必殺。ガキィィン！ガキィィン！と大きな音を立ててサザビー・リビルドのシールドと左腕にダメージを蓄積させていく。

（このままでは腕やシールドのみならず、他の部位どころか本体が損傷するかもしれん……！やむを得んか！）

シャアは想像以上の武器の威力、そしてレジェンドの腕と思い切りの良さにある方法をとった。

「撃ち貫くのみ！」

「やらせんっ！」

刹那、最後の六発目のカートリッジが炸裂し、大爆発を起こす。

木っ端微塵になったシールドと左腕が辺りに飛び散り、アルトアイゼン・リーゼはシリンダーから空になった薬莢を排出し新たなカートリッジを装填する。

「バカな！隊長が⁉」
「ち……超師匠、無茶苦茶強え……!!」

「俺達が四人がかりで戦っても、手加減されて一方的に叩きのめされたのに、たった一人で……」
「はは……何があっても驚かないようにしてたけどな。不可能を可能にするどころか、あの団長さんに不可能なんて無いんじゃないのか？」

「ほ……本当に、勝ってしまったわ……」
「何者なんだ、あの男は……」

敵味方共に唖然とする中、レジェンドだけは未だ空気を張り詰めたまま、警戒していた。

「……！」

咄嗟に左腕で防御動作を行ったアルトアイゼン・リーゼを、煙の中から一筋の光が襲う。それはアルトアイゼン・リーゼの左腕の武装、5連チェーンガンごと左腕を貫き、先のサザビー・リビルドと奇しくも同じような状態になった。さらに、続けざまに煙の中からビームが数発放たれ、うち一発が左腕に当たり、吹き飛んだりはしなかったものの関節をやられたらしく左腕が稼働出来なくなってしまう。

「やはり仕留め損なったか……！」

アルトアイゼン・リーゼの左腕に突き刺さっていたもの――ビームサーベルを引き抜いて投げ捨てると、晴れていく煙の中から左腕とシールドを失ったサザビー・リビルドが姿を現し、やはり双方の陣営にどよめきが起こった。

「最後が炸裂する直前にシールドと左腕を文字通り斬り離すことで脱出するとはな……肉を切らせて骨を断つつもりだったようだが」

「そう簡単にはいかんか。こういうところで重装甲型の機体だと実感させられる」

不幸中の幸いでカートリッジ装填済みのリボルビング・バンカーがある右腕が健在なのは良かったが、問題は今度六発使い切った場合、左腕が稼働しないためカートリッジの再装填が出来なくなってしまったこと。チェーンガンが使用出来ないのは然程問題はないのだが、バンカーはアルトアイゼン・リーゼの主兵装。こうなると使い所を見極めねば――レジェンドがそう思った時、信号弾が発射された。ミダラーンからだ。

「どうやら今日はここまでのようだな。――シャリア・ブル、良いタイミングだ」

「今回は引き分け……ということか。二回目など御免被るが」

「……今が私を撃つ好機かもしれんぞ？」

「間の悪いことに弾の補充をする手段をお前に断たれたんでな。この状態で深追いし、弾切れを起こして集中砲火を浴びるのは勘弁させてもらう」

「フッ……アムロの技量とブライトの戦略眼を兼ね備えているようなものだな。素直に撤退させていただこうか……名を聞いておこう」

「レジェンド。偽名でゼロ・コウガミというのもあるが、好きに呼んで

構わん」

　レジェンドの名を聞き、満足そうなシャアは「また会おう」と小さく告げ、アポリーとロベルトを連れミダラーンへと帰還し宙域から離脱していく。レジェンドは勿論、ゼットやロスヴァイセも追撃を行わず、Ｚガンダムとライン・ヴァイスリッターは左腕を損傷したアルトアイゼン・リーゼを支えながらアークエンジェルへと帰投する。

「ゼット、ロスヴァイセ……良く持たせた」
「いやいやまさかアポリーさんとロベルトさんとやり合うなんて思いもしなかったでございますよ！」
「多少はダメージを与えられましたけど、やっぱり経験って大事ですね……」
（その二人も宇宙世紀の生まれ……それも両名とも戦死していると聞いた。呟くように言われたシャリア・ブルという名にも同じことが言える。どういうわけか知らんが、俺達もこの戦争と本格的に関わらざるを得なくなってきたということは確かだな）

　レジェンド達ウルトラ騎空団の力を借りたとはいえ、ザフト最強部隊であるアズナブル隊を退けたという事実はアークエンジェル、引いては連合全体に士気高揚の効果を齎すだろうが、結果としてレジェンド達が凄まじい力を持っていると判明し警戒対象になってしまったことも意味する。
　この世界そのもの、そしてこの世界での自分達の行く末を案じつつ、レジェンド一行はアークエンジェルと共に再びアルテミスを目指す。
　そこでもまた、一悶着ありそうだと薄々感じながら。

〈続く〉

消えるガンダム

クルーゼ隊、そしてアズナブル隊の撃退はアークエンジェルのクルー……特に連合所属の者にとって信じられないものだった。何せ活躍した者達のうち、ムウ以外はキラを始めとした学生やレジェンド率いるウルトラ騎空団に属する者達だ。

特に多くの相手を手玉に取ったゼット、エゼキエル・シャホールとイージスを同時に相手取り圧倒したダイゴ、そしてシャアのサザビー・リビルドを小破させ、同時にこの世界で無敵と言われたシャアを相手に初めて引き分けたレジェンド……この三人はいずれもウルトラ騎空団所属（かつウルトラマン）。

まさに『ウルトラ』な面子である。

帰ってきて早々もみくちゃにされるかと思ったレジェンドだったが、そうされる前にコックピットから降りてきてどことなく具合が悪そうにふらついてるロスヴァイセを抱き止めた。

「……やはりいきなり実戦であの加速は堪えたか。サイバスターよりも激しく動いてたからな」

「すみません……戦闘中はどうもなかったんですけど、終わってここに戻ってから急に……」

「あれじゃないですかね、戦っている間はアドレナリンがどーたらこーたらで」

「かもしれん。ともかく、今はゆっくり休め」

ライン・ヴァイスリッターの変態機動は案の定ロスヴァイセにはまだ早かったらしい。二重の意味で。

なお、加速度で言うならアルトアイゼン・リーゼの方がヤバい。後にレジェンドが最新のシミュレーターですら「（実際にかかるGが）足りない」と言い切り、ガチでかかるGを設定したところ……三日月が苦悶の表情になった程だ。正直、耐えられる三日月も相当凄い。ついでに試したサーゼクスは失神、アザゼルは吐いた。

それはそれとして、格納庫に集まっていた今回の出撃メンバーからは称賛と謝罪を口にされる三人。謝罪は一誠、リアス、タイガ、そしてキラからだ。オカ研の三人は相手を侮って窮地に陥ったからだと分かるが、キラは多少ゴネたもののちゃんとダイゴやサーガの言う通りに帰還し、無理に再出撃もしなかったというのに。

「僕は……戦い方もなっちゃいないのに、あの赤いＭＳと戦おうとしてて、それで……」

「自惚れるなよ、キラ」

「！」

「元々、多少戦い方を覚えたぐらいでどうにかなる相手じゃない。仮にお前がストライクを使いこなしたとして、奴は本気で墜としにくるだけだ」

まだアルトアイゼン・リーゼは左腕が稼働できなくなっていたが使っていない武装と弾薬を残していたし、サザビー・リビルドも同じく左腕とシールドを失ったものの他の武装はマウントしてあった。アムロと互角にやり合えるレジェンドが手加減してもこれなのだ、今のキラが一人前になったとしてもさすがに経験の差は埋められない。

「一人で戦局が決するような力を持つ者は少ない。あまり自分を追い込み過ぎると、知らず識らずのうちに焦りで取り返しのつかないことをしでかすぞ」

「は……はい」

「甘えられるうちは甘えておけ、過度でない程度にな」

「そうそう、お前さんはまだ子供なんだ。そう悲観すんな、俺なんてキャリアもあるのに手も足も出なかったんだぜ？ま、俺の機体にはハナっから手足は無いんだけど」

ムウが戯けて言うと、漸くキラも含めて笑顔になった。何だかんだあってもムウの本質は面倒見のいい兄貴分ということなのだろう。

初対面の印象は良くなかったが、話していくうちに彼の人となりが分かったレジェンドもそう邪険にはしない。だからブリッジでも彼に悪態をついたりはしなかったのだ。

「それでだ、休む前に君達にちょっとやっておいてほしいことがあってな」
「機体のプロテクトだろう？」
「さすが団長さんだ。そう、機体を君達以外が動かせないように……それも厳重に頼む。ストライクも含めて」
「ストライクもですか？」

キラだけでなく、ゼットやロスヴァイセらも首を傾げる。俺達は仕舞えばそれで終わりだが、とレジェンドは続けるもアルトアイゼン・リーゼの左腕は本気で修理の必要があるため、他の機体のように収納ブレスレット内で自動修復に任せるわけにもいかない。

「……まさかとは思うが、派閥が違うのか」
「ああ、相変わらず察しがいい。その通り、艦長から聞いたがこの艦は大西洋連邦に属し、これから向かう軍事要塞アルテミスはユーラシア連邦に属してる。正直、組織内で潰し合いしていないだけマシでな、あまり仲が良いってわけじゃない。そこへトップシークレット扱いのこの艦とストライクが来たとなっちゃ、力づくで接収しようとしてきても可笑しくないのさ」
（そういうところは悪魔や堕天使と同じなのね）

ムウが説明すると、リアスは改めて悪魔や堕天使も人間と変わらないのだと認識した。堕天使はコカビエルが例外だったのだろうが、悪魔の方は今も多くの派閥が存在している。逆に天界の天使の方はスペリオルドラゴンの下、一致団結して新たに歩み始めているのだから頭が痛くなる話だ。

「ましてや団長さんは赤い彗星を撃退した張本人、アルテミスまでの距離を考えると恐らくそれは向こうも確認してるはずだ」
「俺をユーラシア連邦とやらに取り込もうとしてくる可能性も考えられるわけだな」
「つーかレジェンド様は拉致られても壊滅させながら自力で脱出してきそうだよな」
「「「「否定出来ない」」」」

一誠の意見に満場一致で納得され、レジェンドは若干むくれる。何にせよ、レジェンドとキラ、それにダイゴは機体にプロテクトを掛けることにした。尤も、アルトアイゼン・リーゼは認証が必要なタイプになっているし、Sガンダムの方はそもそもＲＥＮＡがダイゴ以外許さないだろうが。

割り振られた部屋に戻ってきた彼らが見たものは――

「ぎゃあああああ!?」
「はーい、ちゃんと神経通ってますね」

額に青筋浮かべながら影を落とした笑顔でラスティの脇腹を掴み、メキメキと締め付けているしのぶだった。頼みの綱の三日月はカップ麺の出来上がりをミゲルと共に待っており見て見ぬ振り、ルリアやアマリ、アズは恐怖で隅に寄っており、沙耶は読書中。タイタスとフーマはエクササイズしているという混沌とした光景。

「おお！目を覚ましたんだな、ミゲル！」
「ん？ああ、ウルトラマンゼットか。覚悟してたのに全部無駄になったが、まぁなんだ……世話になってる？ってのが正しいのか、今は」
「気にすんなって。で、これどういう状況？」

「これか？これはつまり斯々然々で――」

「つまりそこの奴が完治していないのにベッドから抜け出そうとしたらタイタスの尻見て絶叫したところ、しのぶに見つかって診察も兼ねた制裁を行ってるわけだ……しのぶ、鬼の頸は斬れなかったかもしれんが握力腕力常人超えてないか？」
「どうでしょう？レジェンド様から賜った日輪刀の効果もあるかもしれませんし」
「こういうの見ると、ナチュラルだのコーディネイターだの考えてた頃の自分がバカみたいに思えてくるぜ」

レジェンドとしのぶのやりとりを聞きながら、ミゲルは三日月と一緒になってカップ麺を啜っている。まだ万全じゃない怪我人が食べていいものか心配だが、それはさておき。

「ウルトラマンゼットには先に名乗ってあるが、ミゲル・アイマンだ。救助と治療の件で世話になったな」
「ラスティ・マッケンジー……ってだからミゲルは何でそんなに落ち着いてんだよ。ここ、連合の艦なんだろ」
「そこは心配いらん。お前達二人の処遇に関しては俺達ウルトラ騎空団が全て受け持っている」

ウルトラ騎空団？と聞いてくる二人にレジェンドは周りの者達を見るとどうやら彼らも納得しているようで、二人に自分達がどういうものなのか、そして現状がどうしてこうなったのかを説明する。同時に、他言無用と念を押して。
最初は信じられないようなミゲルとラスティであったが、ミゲルの方は直接戦ったZガンダムの性能やゼットのリカバリーオーラなどで耐性がついていたからか割と早く理解してくれた。ラスティが納得したのは……言わずもがな、タイタスの尻としのぶの診察（拷問）。

何故だろう、釈然としない。

「「っていうか何でタイタス(旦那)の尻が決め手の一つなんだよ!?」」

「いきなりあんなの見せられたらそうなるっつーの！」

「それこそどういう状況だったのよ……」

一誠、タイガ、フーマのツッコミは尤もだし、額を押さえるリアスもお馴染みになりつつある。しのぶが関わった方は分かる、ナチュラルなのにコーディネイターより強いんじゃないか的な握力を直に受けたからだろうし。

「おかげで艦内の一室がブリーフィングルームじゃないのにここまで広いのも理解出来た。そりゃジンじゃ太刀打ち出来ないわけだ」

「それにしても、多種多様の種族が色々な垣根を超えて……か。ありえないよな、俺達の世界じゃさ」

頭の裏に両手を回しながらボスンと枕に倒れ込むラスティ。確かにナチュラルとコーディネイター、二つの種族で争っている今のコズミック・イラでは夢のような話に聞こえるだろう。

「けどよ、こうして話してみるとそうでもないんじゃないか？ラスティだっけ、俺ら普通に話せてるじゃん」

「あれ……？言われてみればそうだな」

「ただ世の中の情勢から敵だと決めつけ、分かり合うことを拒絶する……何処かで相手を知ろうという気持ちがあればまた違った道が見えてくるはずだ」

一誠とサーガの言葉を聞いたラスティ、いやミゲルも含めてその場にいたレジェンド以外の者は感慨深くそれを聞いていた。言葉の通じない存在との対話を成功させた人物を人間としてのベースにしたからか、特にサーガの言ったことは重みがある。

そんなとき突然ドアが開かれ、連合の兵らしき者が二人で銃を突きつけてきた。

「全員動くな！」

「「「「は？」」」」

「おい、何だこの部屋！明らかにスペースが合ってないぞ!?どうなってるんだ!?」

「分からん！ともかく全員来い！そこの奇怪な奴らやザフトの捕虜もだ！」

奇怪な奴ら、と言われてカチンときたタイガやタイタス、フーマにゼット。加えて相棒や兄弟と言っても過言ではない彼らをそう言われた一誠やリアスも頭にきたようで、銃を向けられているというのに思い切り反論する。

「テメーらの方が奇行してるくせにタイガ達をそんな風に言うんじゃねえ!!」

「いきなりやってきて強盗みたいなことやってる貴方達に従う理由なんてないわ！」

「なんだと!?」

「いいから来い！ほら！」

「痛っ……！」

兵士の一人が近くにいたアズの腕を強く掴んだことで、ぶちっと何かが切れる音が聞こえた。

その直後――

ドゴオオオオオン!!!

「ゴベェェェッ!!」
「「「「!?」」」」

アズの腕を掴んだ兵士が顔を拉げさせながら壁に激突し、白目を剥いて気絶した。気が付けばレジェンドがアズを片腕で抱き寄せつつ、もう片手の拳がバチバチとスパークしている。

「あ……」
「大丈夫か、アズ」
「う……うん。ちょっと強く掴まれたけど」
「貴様！何を――」

そう言いかけた兵士の持っている銃が粉々になる。

「貴様らこそ何のつもりだ？突然押し入って来て銃を向け脅迫、挙げ句は婦女暴行か。何処の軍だか知らんが犯罪者もいいとこだな。あ、？」
「な……わ、我々は！ゴキィッ!!ぼげ!?」
「謝罪以外聞く気は無い。する気が無いなら黙れ」
(((((謝罪すら聞く気無くね？)))))

もう一人の兵士を拳と壁で挟むように容赦無く横っ面を殴り飛ばし、同じく白目を剥きながらズルズルと力無く床にずり下がったそれをレジェンドは、騒ぎを聞きつけやってきた連中に人間ブーメランとしてぶん投げた。

「「「「ぎゃあああああ!?」」」」

纏めて吹っ飛んで壁に激突しては気絶していく兵士達。ミゲルや

ラスティは口をあんぐり開けたまま、それを見て固まっている。
　レジェンドに抱き寄せられているアズはというと、頬を染めながらさり気なく両手をレジェンドに添えてみたりと、傍から見れば明らかにヒロイン状態。今もアメノミハシラでぷんすこー娘が何かを感じ取りぷんすこーしていることだろう。

「ゼット、お前の超師匠……だっけ？とんでもないな……」
「あんなん序の口でございますよ、ミゲル」
「殴っただけだもんな。マッスルリベンジャーってのとかやらない分、良心的じゃねーか？」
「下手すりゃタワーブリッジで背骨終わるかもしれないし」
「……ナチュラルってなんだっけ……？」

　ラスティが何か哲学について考えだした。無理もないとは思うのだが……。

「まさか、こいつらが格納庫で言ってたアルテミスに駐在してるユーラシア連邦の兵士か？いつの間にアルテミスに着いてたんだオイ」
「……？確かユーラシア連邦って連合所属じゃ……」
「フラガの話だと上層部が出し抜きあってるんだと。ナチュラルだのコーディネイターだの喚く前にこういうとこちゃんとしろというのに全く……」
「俺達がこんなことをされたということは、他の避難民達も拘束されている可能性が高いな」

　呆れ返るレジェンドと、冷静に分析するサーガ。実際その通りで、ダイゴやキラ、トール達も食堂に集められている。マリュー、ムウ、ナタルのみがアルテミス内に招かれ、軟禁されている状態なのだが彼らはそれを知らない。

「……どうする、先輩」

「決まっている。こちとらある世界じゃ初代奪還屋の一人として色々取り返してたんでな。アークエンジェル、中から取り返してやろうじゃないか」
「寧ろこのメンバー、明らかに生身での戦いの方が得意そうだもの」

沙耶の意見、完全同意である。レジェンドやサーガ、沙耶は変身せずとも強いのだ。前者二人は光神だし、沙耶の場合、母親である先代女王がぶっ飛んでた（しかも原因の一端がレジェンド）ことに始まり周囲の者達も似たようなものだった上、レジェンドにほんの少しとはいえ修業をつけてもらった……つまり環境がアレだったから。

「よし、今から徐々に制圧していくぞ。ミゲルとラスティは部屋で休んでろ。護衛は……ゼット、お前が一番二人が気を許しそうだ」
「了解！そっちはお任せしますでありますよ！」
「ああ。よし、お前達……相手が男なら股間を狙え」
「「「「攻撃容赦無さ過ぎだろ!!」」」」

しかもデモンストレーションで気が付いた兵士の一人の股間を思いっきり踏み抜いたレジェンド。その場にいた男子全員が顔を青くして股間を押さえつつ内股になるくらい凄まじい一撃だった。なお、踏み抜かれた兵士のアレは当然の如く潰れたらしい。南無。
ちなみにレジェンドはその部分まで超防御。割と腰は逝きやすいのに何なんだこの御仁。
かくして、アークエンジェル逆制圧作戦がヤベーやつらによって実行に移された。

☆

アークエンジェルの食堂ではダイゴがキラ達やクルー、避難民達と共に座らされて軟禁状態にあった。不安がるミリアリアと、それに寄り添うトール。他にも未だ困惑しているカズイなど、やはり現状を理

解しきれない者達の方が多数だ。そんな中、ムウから話を聞いていたダイゴとキラは小声で相談する。

「ダイゴさん、やっぱりこれって……」

「うん、フラガ大尉の言う通りだったんだろうね。ただ、チーフ達が連れて来られてないから……多分、独自に動き出してると思う」

そもそも、あの面子が銃を向けられた程度で動じるとも思えないし、返り討ちにするのが簡単に予想できる。その後はやはり報復に動くだろう……とダイゴは考えており、正にそれが現在進行系で実行されているとまでは予想していなかった。

そこへ、空気を読まないというか、命知らずというべきかアルテミスの司令官であるジェラート・ガルシアが護衛を引き連れてやってくる。

「この艦に配備されているストライクとやらのパイロットは誰だ？それに他の機体の所在とパイロットは？」

「ストライクの方はフラガ大尉ですよ。他の機体に関しては我々の協力者の管轄ですので、こちらでは分かりかねます」

アークエンジェルの操舵士を務めるアーノルド・ノイマンがそう応対するも、さすがにそこまでバカではなかったのかガルシアはメビウス・ゼロが出撃していたことを指摘し、キラが乗っていたことがバレるのも時間の問題になってしまう。

そこでやはりダイゴが矢面に立つよう、ガルシアの前に立ち塞がった。

「何だ貴様は？」

「オーブ連合首長国の特務大使、ダイゴ・マドカです。ストライクはともかく他の機動兵器はオーブが雇い入れているウルトラ騎空団という団体の個人所有物であり、こちらの艦には成り行きで同乗していた

ことで有志として御助力頂きました。よって、そういったことの交渉は彼らの方にお願いします」

オーブの、と聞いてガルシア他護衛達は顔色が悪くなるも、ならばストライクというＭＳはと聞いてくるがここでダイゴはこう答える。

「あれは僕がテストパイロットを務めています。連合へ技術協力を行う代わりに、連合が開発したＭＳのデータの一部をモルゲンレーテ社に譲渡することになっていました。本来なら奪取された他の四機も含めた中から一機を選ぶ形になるはずだったのですが、残されたのがストライクだけだったので、止む無くこういうことになったわけです」

（ダイゴさん……!?）

「なるほど、確かにそれならば納得がいく」

銀河遊撃隊の切り札は頭の回転も早かった。Ｓガンダムのパイロットが誰かは相手方に判明しておらず、かつ上手くモルゲンレーテと絡めることで自身がストライクのテストパイロットであると信じさせたのだ。

無論、ここでそのままガルシアに話を続けさせるダイゴではない。何かの拍子に相手が不審に思うようなことになればそこから崩されかねないため、こちらから相手を自分のペースに持ち込む。

「それで、ここまで赴いたということは何かストライクに関して知りたい、もしくは既に調べて不可解な点があって問い質しに来たということでしょう？」

「あ……ああ。こちらとしても情報はおろか、上から連絡の一つもなかった艦とＭＳが計らずもこのアルテミスにやって来たのだ。補給と引き換えに少しでもこちらのプラスになるものが欲しいと思うのは当然だろう、特務大使殿？」

補給と引き換え、という言葉にノイマンらクルーは歯軋りする。ガルシアの嫌らしい笑みを見て、情報開示等を行ったとして本当に補給を受けられるかどうか信用ならないからである。

だが、ダイゴは内心「掛かった」と考えていた。こういう輩は目先の利益（エサ）に弱い。しかも、ガルシアがアークエンジェルやストライクの技術をどうにかして少しでも手に入れたいと思っていることを即座に見抜き、そこを重点的に攻める。そうすることで「誰がパイロットか」から「どうやってこのパイロットから情報を引き出すか」へと狙いをシフトさせたのだ。

「分かりました。この艦にはザフトの捕虜もおり、万が一脱走されて奪われるかもしれないと機体にプロテクトを掛けていましたが、この艦で保護している避難民の方々の事もあります。補給を受けさせて頂けるのであれば、プロテクトを解除して僕が今まで蓄積したストライクのデータをそちらに譲渡しましょう」

「おお！さすが特務大使殿、話が分かる御方だ。では早速そのＭＳの元へ向かうとしよう」

静かに席を立つダイゴを心配そうに見つめるキラ達に対して、ダイゴは「大丈夫」と変わらぬ笑顔で返す。彼が言ったことはハッタリの時間稼ぎだ。ガルシアが補給を素直に行うなどハナっから思っていない。彼が信じたのはアークエンジェルの制圧に動いているであろうレジェンド達の方である。

（キラ君や皆をお願いします、チーフ）

☆

一方、ヴェサリウスを欠いたままアルテミスを目前にしたガモフは一時後退することを選択した。正確には離れた場所で待機している。というのも、アルテミスの防衛機構である『アルテミスの傘』と呼ば

れる全方位光波防御帯は、内側からも攻撃不可能という欠点こそあれ、外部からの攻撃を完全に遮断する厄介なもの。
それを突破する手段がブリッツにあるというニコルの案に乗り、アルテミスの索敵範囲外からその機能――ミラージュコロイドを使用し、アルテミスの傘を解除させた状態でアルテミス内部に侵入。そのまま陥落させるという作戦だ。
イザークやディアッカは「臆病者には丁度良い」と笑っていたが、この場にベリアルがいれば『狡知』たる彼のこと、大層称賛しただろう効果的な戦法。
何故ならばアルテミスに駐在している連合の将兵は、ガルシアも含めて皆アルテミスの傘の防御能力を過信して油断しやすいのである。

「ぶっつけ本番で上手くいくかどうか……」

ガモフから単機出撃したブリッツのコックピットで、ニコルはミラージュコロイドを展開するべくコンソールを叩く。このミラージュコロイド、フェイズシフト装甲の展開との選択になるため、片方展開中はもう片方が展開出来ないという欠点がある。同時にフェイズシフト装甲同様、バッテリーを食うため長時間の展開も不可能。
故に、失敗すれば二度も通じるか分からない以上、必ず成功させねばならない。臆病者とイザークやディアッカに言われる彼だが、責任感の強さはクルーゼ隊でも随一。
無事ミラージュコロイドを展開し、姿形はおろかレーダーからも反応を消したブリッツは静かにアルテミスへと忍び寄る。鉄壁の要塞と言われたアルテミスが陥落するまで、あと僅か――。

☆

その頃のアークエンジェル――

「マッスルインフェルノーッ!!」

「アーッ!?」

レジェンドのフェイバリットホールドの一つがアークエンジェルを制圧した連合の兵士に炸裂する。……が、流石にキン肉族三大奥義が一つたるマッスルインフェルノはやりすぎだと思う。

そう思われたのだが……。

「私が受け継いだのはハリケーンミキサーだけではない！受けるがいい、私のウルトラマッスルを!!超人十字架落としーッ!!」

「ドゥアーッ!?」

「光線ばかりじゃ芸がないからな！くらえ、空気手裏剣!!」

「おわあああ!?」

タイタス（コイツ）とフーマ（ら）も大概だった。

それぞれ師となったバッファローマンとザ・ニンジャの技を遠慮なく軍人とはいえ人間相手に叩き込むのは如何なものか。というよりゼットやタイガに続いてバリバリ人前に姿を晒しまくっているが、もはやレジェンドは諦めた。そう、自身が名乗った己の人間名をあらゆる面で殆ど呼ばれないと分かった時と同じく。

「な……何だこいつらは!?」

「まだ拘束出来てない奴らがいたのか！すぐ――」

「させませんっ！」

「隙だらけですね」

「「あぴゅんっ!?」」

兵士が銃を構えるも、引き金を引かれるより圧倒的に早くロスヴァイセとしのぶが意識を刈り取った。レジェンドが言ったように、二人して兵士の股間を鋭い突きで狙って。

そういえば、ロスヴァイセはともかくしのぶは方法こそ違えど似たようなことをした前科があった……三大種族会談でギャスパーが狙

われた時だ。あの時の相方はマリーダだったが。

「ッ……また来た！」
「はわわ……！」
「ＩＧＥＮＥＳＴッ!!」
「アバァァァァァッ!?」

こちらでもアマリのドグマが兵士に炸裂した。当然股間にだ。とりあえず男の象徴が物理的に燃えてるのは見ていて青褪める光景だろう。

「……よしっ！」

アズとルリアは思う。『ある意味アマリが一番容赦無いんじゃないだろうか』と。まあ、今アレが燃えてる兵士は彼女らを舐め回すように見て下卑た笑みを浮かべていたので、良からぬ事を考えていたのは間違いないから自業自得でいいか。

「うおおおおっ！」
「どけよ、お前らっ……！」
「邪な視線をこっちに向けないで」

サーガと三日月は勇ましく兵士をぶっ飛ばし、沙耶は回し蹴りで兵士の尻を蹴飛ばすたびに「ありがとうございます！」と言いながら壁に激突し、恍惚とした表情で気絶していく兵士達を冷たい視線で見下ろしていた。

「……私が倒した連中が漏れなく変態ばかりなのだけれど」
「……ドンマイ」
「この場合、御愁傷様とどちらに言えばいいのかしら」

近くで一人の兵士にダブルボンバーを叩き込んでいた一誠とタイガは慰めの言葉を口にし、リアスはぶっ飛ばされた側とぶっ飛ばしたのが変態だった側のどちらに憐れみを向ければいいのか悩む。アルテミスにいる兵士は一定の割合で変態なのかと。

沙耶が攻撃する部位が尻なのもおそらくその原因の一つだろうが、それはさておき。

襲ってくる（というか逆に襲ってる）兵士達を千切っては投げ、ガチでアレを千切りかけたりとしているうちに、キラ達が集められている食堂に到達したレジェンド一行。

「な……何だ貴様は!?」

「何だツミはってか。そうです、俺がウルトラ騎空団団長です。ウアタァ!!」

「あべし!?」

大勢が見ていようがお構い無しに兵士の顔面へ鉄拳を打ち込み顔を変形させるレジェンド。倒れたところに無慈悲な鉄槌（玉潰し）を躊躇なく行い、戦意と意識を喪失させる。ついでに兵士の別のモンも無くなった。

「レジェンドさん!?」

「お、キラ。友人達も無事そうで何より……ん？ダイゴはどうした？」

「それが……」

（（（（今の光景スルー!?））））

色々と衝撃的なモノを見せられたのに平然としているキラ、順調にメンタルアップしているようだ。

そんな彼から事の顛末を聞いたレジェンドは少し考えた後、彼とサーガを連れてストライクの元にいるであろうダイゴと合流すべく動くことにした。その他の面々はアークエンジェルのコントロールの奪還、並びに侵入してきたアルテミス所属兵の追い出しに当たる。

なお、レジェンド達がやってきた方向を見た全員が戦慄したのは言うまでもない。

☆

ガルシア以下護衛を連れ、ストライクの元にいたダイゴはコックピットでプロテクト解除と譲渡するデータの選定……ではなく、そう見せかけた即席の偽造データを作成していた。その完成度はかなり高く、あたかも本当にストライクの戦闘データに見える。尤も、詳しい者が見ると「ん？」と気になる箇所が意図的にバラして作成されているのだが、自分にプラスになることしか考えていないガルシアがそれに気付くことはない。

「ふう……とりあえず、まずは一段落です」
「見事な手際の良さですな、特務大使殿」
「戦場では一刻を争う場面が多いので。とはいえ、こうして落ち着いて作業が可能なのもアルテミスの防御機構のおかげです」
「ご理解頂けて何より。このアルテミスの傘は何者にも破られぬ鉄壁の守り。安心して作業の続きをして欲しい」
（……今はそれを稼働させていないのか。もし相手にペガサスＡのようなステルス機能を持った機体や戦艦があれば簡単に攻め込まれるぞ。見たところ内部はそう防衛能力に優れているわけじゃなさそうだ）

アルテミスの傘の性能に慢心し、ストライクのデータを手に出来ると思い込んでいるガルシアに、ダイゴは内心アルテミスは間もなく墜ちるだろうと予測している。
フェイズシフト装甲同様、アルテミスの傘は膨大な電力を消費するのは少し考えれば分かること。そんなものを常時展開しているはずがなく、おまけに大した防衛設備が無いとくれば、位置的にもこのアルテミスの戦略価値は良くて連合の艦が航行する上での中継地点程

度でしかない。もしくはアルテミス自体が傘の実験施設という意味合いを持たせられているのか……。
どちらにせよ、自分達が相手にしているのはザフトでもトップクラスに厄介な連中。アルテミスはそう長くないだろうと、ダイゴは目的の行動を起こすタイミングを狙っていた。
そして、その時が遂に訪れる。
ミラージュコロイドを展開し、接近していたブリッツがいよいよ攻撃を仕掛けてきたのだ。アルテミスの傘を稼働させたとしても、既にその効果範囲内に侵入しているため無意味な状態。強固な外壁に守られている場所ほど内側は脆い、とはよく言ったもの。満足に弾幕どころか対空砲火さえ不可能なアルテミスは姿を消したブリッツによって徐々に痛手を受けていく。

「な……何だ!?まさか敵襲か!?どういうことだ、まさかアルテミスの傘が突破されただと!?」

正確にはアルテミスの傘を突破されたのではなく、警戒を緩めすぎたのが原因なのだが……言ったところでこの男には分かるまい、そう思いダイゴはほとほと呆れてしまう。
先刻の戦いを確認していたならば、デュエル、バスター、ブリッツとの戦いでハイパー・メガ・ランチャーを攻撃ではなく分断修正に使い見事戦法を成功させたゼットを少しは見習ってほしいとも思った彼だが、今はこの混乱に乗じて為すべきことがある。

「あ」

「……!?特務大使殿、何が――」

ダイゴが何かに気付いて声を上げると、その瞬間ガルシアは――

「イヤァッ!!」

「ふぉあぁぁぁぁぁ!?」

ドゴオオオン!!

ラリアットの体勢で突っ込んで来たレジェンドによって、アルテミス内壁にクレーターを作る羽目になった。そのままグイグイと頭を壁に押し付けられ、衝撃のあまり気絶してしまうガルシア。

何というか、レジェンドがかつて赴いた世界で伝説のなんちゃらと同族の王子が同じ事になってそうな気がする。

「ガ……ガルシア司令ッ!?ハッ!?」

「(物理的)対話!!」

「ぶげぇ?!」

ガルシアに気を取られた隙に、サーガによって護衛も排除される。それにしても、物理的にぶん殴るのはそもそも対話とは言わない。俗に言う「拳で語れ」は話し合いではないと思う。

ともかく完全に自由になったダイゴは、レジェンドとサーガに同行したキラと対面。

「ダイゴさん!」

「キラ君!ナイスタイミングだ!」

「すみません、僕がちゃんと名乗り出ていれば……でも、感情的になって出しゃばったらダイゴさんが考えてることを無駄にしてしまうような気がして……それで……」

「でも君は僕の意志を汲み取って、最後まで我慢出来た。だからこうして僕が時間稼ぎしてる時に、チーフ達が間に合ったんだ。君の優しさを考えれば僕が言っている間にあれに言いたかっただろう、よく我慢してくれたね」

沈黙して逃げたと思われても仕方ないはずなのに、逆にダイゴはキラを笑顔で褒めた。しかもガルシアをあれ呼ばわり。あくまで自分のことを考えてくれているダイゴにキラは目に涙を滲ませつつも、しっかりと頷いて返す。

「二人共よくやった。軽くレジェンド(俺)クリア(の)で視(目)てみたが、どうやらブリッツとかいう機体のようだな。特殊な光学迷彩か何かで機体を覆ってるんだろう」
「視えるんですか!?」
「俺には鮮明にな。大した機能だが俺には通じん。何にせよチャンスには違いない、どのみち補給なんてこの状況じゃろくすっぽ出来んだろ。とっとと脱出するぞ」
「了解です、チーフ。キラ君、操縦交代頼めるかい?」
「はい!任せて下さい!」

ダイゴは座席の後部にまわり、キラが改めてストライクのシートに座る。そして凄まじい早さでプロテクトを解除して起動、幸いにもアルテミス内部ということでソードストライカーを装備してあったのが吉と出た。
レジェンドはアルトアイゼン・リーゼを取り出しすぐさま搭乗、同じくサーガもダブルオークアンタに乗り込み、作戦を伝える。

「クアンタはアルテミスの外で待ち構えてるだろう敵艦の警戒、ストライクはいつも通りアークエンジェルの護衛だ。相手がブリッツだけならそう難しくはあるまい、混乱に乗じて脱出してくるだろうラミアス艦長らの乗艦とブチのめした兵士らをほっぽり出し終わったら即座に出港するぞ」
「あの、レジェンドさん。まだその機体は左腕が……」
「修理は完全ではないが、カートリッジ交換のために動かす程度なら問題ない。ブリッツへの攻撃は俺が担当する」

これを聞いて三人はブリッツのパイロットを憐れに思ったが、敢えて口にしない。姿を消して奇襲してくるぐらいだし、バレたら集中砲火される覚悟はあるだろう。

アークエンジェルのブリッジも占拠されていたものの、ロスヴァイセとしのぶが超神速の斬撃で意識を刈り取り、他に漏れず沙耶が叩きのめすと満足げな表情で倒れた。

「……もう、嫌……」

本気で泣きそうな沙耶を全力で慰めるロスヴァイセとしのぶ。同性として色々来るものがあるのは十二分に理解出来る。というかここまでやられたら男でも嫌になるぐらいだ。

気を取り直し、クルーが席に着いた後は鬱憤を晴らすかのように沙耶は指示を出す。

「相手の姿が見えないけど、ザフトにそんな機体はあるの？」

「いや、聞いたことはないな」

「なら奪取されたG兵器ね。あの手のステルス機能は攻撃まで不可視にすることは出来ないわ。ましてやバッテリー消費型の機体では尚更。友軍でストライク以外で確認出来る機体は？」

「アルトアイゼン・リーゼ、ダブルオークアンタと呼ばれてる二機だ」

「だとしたらあと一人はストライクに同乗してるのかしら。ともかく、出港準備を急いで。艦長さん達が戻り次第、機関最大で脱出よ。先生でもそうするはずだから」

伊達に女王の立場にあるわけではない。レジェンドや先代女王にはまだまだ及ばないものの、指揮の一つや二つ問題無く出せる。

準備を進めていくうちに、案の定アルテミスのどこかに閉じ込めら

れていたマリューやムウ、ナタルがブリッジに入ってきた。

「……！貴女は……」

「思ったより遅かったわね。皆発進準備を終えて貴女達を待ってたわよ」

「そう……ごめんなさい。少し迂闊だったわ」

「別に気にしてないわ。私が気にしてるのは、この要塞の兵士が変態ばかりだったことよ」

そのことを話す沙耶はどんよりとした空気を纏い、一瞬でその美しくも可愛いとも言える顔がげっそりやつれる程に憔悴していた。ブリッジに残っていたロスヴァイセとしのぶがまたもメンタルケアをすることになり、理由をしのぶから聞かされた三人は本気で沙耶を気遣ったという。

「何というか……私達がアルテミスに向かおうなどと言わなければこんなことにはならなかったと思うと、やるせないわね……」

「ここの連中、男として可哀想なことになっちまってたしな……」

「それをやったのは先生の指示だからよ。私はそっち以外を狙って攻撃した結果があの始末」

いや確かに月世界の女王様だけども。ちなみに先代女王の場合、こんなに優しくはない。レジェンドを見習ってニコニコ笑顔の鉄拳で壁にめり込ませるぐらい普通にやる。

「ともかく、アルテミスから脱出します。出ている機体の収容準備を！」

「機関最大！アルテミス共々落とされる気はないぞ！」

マリューとナタルも指定の席に着き、やっとクルーが揃った。ムウはというと、機体（というか主に武装）がまた損傷したため整備班を

手伝うことにしたらしい。

☆

外をダブルオークアンタ、アークエンジェルをストライクに任せ、アルトアイゼン・リーゼはミラージュコロイドを展開したままアルテミス内部に侵入してきたブリッツをピンポイントで狙う。当然、ブレなく一直線に自分に突撃してくる赤い機体をニコルは驚愕の表情で見た。

「まさか……見破られてる!?」
「相手が悪かったな」
「ッ!この機体、アズナブル隊長を退けた……」
「判断が遅い……!」

ニコルは相手が何者かを理解し、ミラージュコロイドの解除とフェイズシフト装甲の展開を行おうとするが、その驚異的な加速で迷いなく突撃してきたアルトアイゼン・リーゼのリボルビング・バンカーが容赦無く右腕に撃ち込まれる。

カートリッジが炸裂し、衝撃で内部構造にダメージが入ったことで、ブリッツの右腕――即ち攻盾システム『トリケロス』が装備されている方を破壊されてしまう。

「しまったっ……!」
「こちらに似て右が主兵装なのはすぐ分かった。アルテミスの連中はその『傘』とやらの性能に胡座をかいていたようだが、お前も似たようなものだったな。ブリッツのパイロット。光学迷彩一つで手練のいる戦場を掌握出来るほど、戦いは甘くないぞ……!」
「くっ……今は撤退するしかないっ……」

背中から撃たれるかもしれないとは思ったものの、いつまで経って

も追撃が来ないことを怪訝に思うニコルだったが、直後にメッセージが送られてくる。無論、送り主はレジェンドであり、そこには「拾った命、精々無駄に使わんことだ」と短く書かれていた。

「……見逃してくれた、ってことなのかな」

どちらにせよ、自分の敵う相手ではない。専用機に乗ったシャアを退けたということは、そのシャアにアカデミー時代双方訓練機だったにも関わらず、一対複数でコテンパンにされたメンバーの一人であるニコルが単体で勝てるはずがないのだ。

残りのメンバーだが、言わずもがなアスラン他現クルーゼ隊の赤服（ラスティ含む）である。

そんなレジェンドに見逃されたことで、悔しさ以上に別の感情が入り交じったニコルは元来の性格もあって素直にガモフへと帰還する。

レジェンドの方も「まだアルトアイゼン・リーゼの左腕が万全でない以上、不用意な追撃は控えるべきだった」と言い訳も利くのでブリッツ撃退後はそのままアークエンジェルへと帰還。そのままストライクやダブルオークアンタも回収され、アークエンジェルはアルテミスから出港し、全速で離脱した。

☆

時を同じくして、ある存在が皇帝の命を受け、コズミック・イラの世界に災厄を解き放つ。

「行け、スコーピス共……」

堕天司、プラントとブルーコスモス双方の重役の異変……そしてそこに今、新たな勢力が加わり、コズミック・イラはさらなる激動の時代となる。

〈続く〉

宇宙の傷跡

アークエンジェルがアルテミスから脱出した頃、アメノミハシラでは地上のオーブから緊急の通信が入り、その内容に戦慄していた。

その内容とは、三大種族会談以降音沙汰が無かった『鬼』が現れたというもの。

ただ存在するだけで異界化を進行させ、瘴気を生み出す『鬼』は通常の兵器……それこそＭＳの攻撃や戦艦の砲撃でさえ精々怯ませるのがやっとでダメージを与えることは不可能。この世界で対抗するにはウルトラ騎空団の鬼討組やパム治郎、或いはレジェンドかサーガの協力が不可欠であり、彼ら抜きで連合やザフト、果ては民間のジャンク屋では最下級さえ討伐出来ないというから緊張も高まるのは当然。

よりによって総長の巌勝と筆頭戦力のカナエ、それにヒリュウ改に属している小芭内と蜜璃がアメノミハシラにいる上、しのぶは今アークエンジェルで最も遠い……幸いにも神衛隊所属でもある杏寿郎とパム治郎がいたため、一人と一匹を中心に生身で戦闘可能な者で討伐隊を急遽結成。

雷迅卿・アルベールや十天衆の一人・ソーン、そしてソーンと和解出来た狙撃手シルヴァなど空の世界出身の寄りすぐりの実力者と、相手が然程強くないミフチであったこともあってどうにか被害はほぼ無かった。しかし初めて見る異様な存在に、討伐隊参加者は魔物とは違う恐ろしさをその身で実感したという。

「……このような化け物がいるとは。尚更ナチュラルとコーディネイターで争いをしている場合ではないな」

ロンド・ミナ・サハク以下、アメノミハシラにいるメンバーは緊急対策会議を開き、地上部隊が送ってきた映像を見て『鬼』の危険性を改めて理解する。戦闘力云々よりもまず攻撃が通じない、というのが

厄介極まりない。下手をすれば核攻撃を受けてなお無傷の可能性があるのだ。無論、ニュートロンジャマーのおかげで今の所は無いだろうが。

「私達は既に何度か討伐しているが、どれも手強かった。何より鬼祓いが出来ねば部位再生すら行う為、それが可能なレジェンド様やパム治郎抜きでは一気に倒し切る以外に明確な攻略法が無いのも問題でな」

「今はその鬼祓い他、鬼に有効な戦闘方法を皆で習得している最中なんです」

厳勝とカナエによってミナに説明され彼女も彼女なりに対抗策を思案するも、件の相手を直接見ていないため限界がある。かといってそうポンポンと現れられても困るだろう。

「戦う術が限定されるのもそうだが、やはり神出鬼没というのは一番の問題だ。抵抗出来ぬ者達がいる場所に出られては打つ手がない。法則といったものが定まっていない以上、どうしても後手に回ってしまう」

「ミナお姉様の言う通りです。会談の時もでしたが、予期せぬタイミングで出現することが一番の驚異でしょう。ゴーデスとの戦いの時ではレジェンド様の仮住居が狙われましたし」

（ミナ『お姉様』!?）

ガーン！とセラフォルーがソーナの一言にショックを受けているが、そんなことを気にしている場合ではないのでスルー。

「……これは私の勘だが、脅威はその『鬼』だけではないかもしれん」

「ミナさん？」

「如何なる存在がこの世界を脅かそうと、ナチュラルとコーディネイターの争い……血のバレンタイン以降、溝が深くなっているがゆえ、

急には止まるまい。今はこの事態の危険性を理解し、同時に協力・連携がとれる同志を増やすことに注力すべきであろう。私も伝手を辿って呼びかけてみる」

ミナの提案に異を唱える者はいない。かくして、この世界で起きうる脅威に対抗すべく、本格的な活動が始まったのである。

☆

そんなことになっているとは露知らず、アークエンジェル内のレジェンド一行は……。

「シューティング・クェーサー・ドラゴンの攻撃！天地創造撃！ザ・クリエイション・バースト!!」
「俺のヒートライオオオオ!?」

決闘（デュエル）していた。

割といつも通りの光景である。無論、場所が場所なのでテーブルデュエルであってデュエルディスクやD・ホイールは未使用。

「駄目だ、全然歯が立たねえ……！」
「リアス、タイガ、フーマに私ときてイッセーまで敗北するとは……！」
「くっそこうなりゃバトルロワイアル形式でやるぞ！全員で総攻撃すりゃどうにかなるだろ！」

フーマの提案を採用するも、連続攻撃で瞬く間に返り討ち。トライスクワッドからは魂が抜け出ていた。

それを見ながら、やってきたキラとダイゴはレジェンドから貰ったパックを開封してデッキ構築しているし、珍しくゼットは先生役とし

てミゲルやラスティ、更にはアマリ、ルリア、アズにロスヴァイセも加わった面々にルール説明中。沙耶はサーガ、三日月と共にしのぶからバトスピ講座を受けている。
この部屋だけ、やたら平和だ。
そこへやって来たのがマリューとムウ。ナタルが来たらまた何かと怒られそう……なのだが、多分今の一誠らは邪魔されたらキレるかもしれない。

「失礼し……え？何なの、この広さ……」
「また例の『謎の超技術』ってやつだろ。あんまり深く考えんなよ、艦長。しっかし楽しそうだな～」

とりあえず、死屍累々のトライスクワッドには触れないでおく。思えばこの部屋にいるウルトラ騎空団（ダイゴ除く）、食事の時も出てこないし一体どうしてるのだろうか。

「どうした？何か問題でも起きたのか」
「ああ、戦闘とは関係なく死活問題だな。ざっくばらんに言っちまうと、一番の問題は水不足ってところだ」
「アルテミスで補給出来ると踏んでいたけどあの結果でしょう？だから本隊と合流する前に本艦の物資……特に水が底を尽きそうなのよ」

確かに死活問題である。……が、実はレジェンド達が割り振られた部屋はもはやレジェンドの圧縮空間技術で一軒家レベルに拡大されている上、電力は自家発電もとい自力発電（自転車型発電機にレジェンドが跨って漕いでいた）、水は……ぶっちゃけレジェンドのウルトラ水流にて補給。働き過ぎな気がする。
食料などは持ち込みの他、収納ブレスレット内に定期的に補充されたりと、別にアークエンジェルの物資には負担を掛けておらず、食事もレジェンドが「自分達の分は自分達で用意するから必要無い」と言い切ったため、彼らの分は食堂では用意されていない。

「……ということで、俺達の方はそちらに負担をかけてないことを予め説明しておく」
「開いた口が塞がらないとはこのことね……」
「もはや何でもありだな」
「じゃなきゃどうにもならんだろ。自給自足とは究極のライフスタイルの一つと思え。ただこの場合、食料だけは自給自足と言うには微妙な気がするが」

それはいいとして、シャワーを浴びたばかりであろう、沙耶とロスヴァイセをじろじろと見ていたムウにレジェンドが目潰しを炸裂させ、ムウがのたうち回るハメになった。本人達にやられないだけマシなのか、本人達にやられた方が御褒美に……いや、アルテミスでの一件を考えればレジェンドでよかったと思う。お互いの精神的に。

「んで、何処か補給の目処がついたものの、そこが問題でもあるとかそんなんだろ」
「ええ……補給するというより、勝手にさせてもらう、という表現が正しいのかしらね」
「……先刻とは違う位置のデブリ帯か」

マリューの言い方からレジェンドはすぐさま目的地を導き出した。
デブリ帯、又はデブリベルトは宇宙で起きた様々な事例の残骸が集まる場所。中には物資を積んだまま何らかの理由で廃棄された輸送船がそのまま流れ着くなど、ある意味宝の山とも言える。当然、そういうことが頻繁に起こるわけはないが、今のアークエンジェルにとっては唯一の希望。
一応、レジェンドに協力してもらい、ウルトラ水流を出しまくって補給という手もあるにはあるが、そんなことをすればレジェンドどころかウルトラ騎空団、果てはキラ達、最悪オーブさえ敵に回す可能性があるので問答無用の大却下。

「その先は大方予想がつく。機動兵器持ちの俺達に物資の搬入作業を手伝ってほしいってところか」
「ええ……作業用の小型艇はあるけれど、どうしても細かい作業はＭＳに比べて粗くなってしまうのよ」
「こういうのってバルバトス向けだよね。あとガオファイガーとかのＧＧＧ系、それにグレンラガンや真ゲッター２とか」

三日月が言ったことに首を傾げるマリューだが、ガオファイガーはツールが正にそれで、残りの二機はドリル持ち……あ、ガオファイガーも膝にドリル付いてたか。
何にせよ、今いない機体の方がそういった作業には向いているのだが、バルバトスも今の形態ならレンチメイスがある。アルトアイゼン・リーゼのリボルビング・バンカーでカートリッジを炸裂させなければ破砕作業に十分使えるときた。これらを使わない手はない。

「そもそも俺らウルトラマンはこのまま宇宙空間で活動出来るし」
「……え？」
「そういえば俺を救助した時もそのままだったな」
「あ、そういやそうだった」
「ええええっ!?」

タイガが言った一言に続いてミゲルの証言、ついでに思い出したゼットの返事でマリューはさらに驚愕。しかしながら、レジェンドやサーガは見た目人間の状態で平然と宇宙空間を飛び回るし、おまけに東方不敗も同じことをやらかしている。ウルトラマンが宇宙を股に掛けて活躍するのはまだいいが、光神二名はともかく東方不敗までそんなことが出来る時点で色々ヤバい。恐るべし伝説九極天。

「まあ、船外活動について学ぶにも良い機会だろうし、機動兵器を使うのは俺とサーガ、三日月の三名のみだ。他の者はノーマルスーツを着

用して宇宙へ出てみろ。あ、ゼットやトライスクワッドは要らないか、ノーマルスーツ」

そう告げたレジェンドは伸びをするとデッキをケースに仕舞ってブレスレットに収納、のんびりと格納庫へと向かう。サーガと三日月もそれに続き一足先に部屋を出て行くが、彼らはただ準備しに行くわけではない。

「向かう先のデブリ帯、俺の予想が正しければそこにはアレがある」
「……ユニウスセブンか」
「残ってるかな。物資とは違うモノ」

三日月が言ったモノの答えを、一誠らはその目で見ることになる。

☆

一方、プラントへ戻り最高評議会に出廷したクルーゼとベリアルは、ヘリオポリス崩壊の経緯と顛末を説明し、さらにそこで遭遇した連合以外の未知の戦力――ウルトラ騎空団についても証言していた。

「……以上が、我々が戦闘を行い得た情報です」
「連合は既にそれほどの技術とパイロットを……!?」
「いえ、あれは連合のものではないでしょう」
「ベリアル、それはどういうことだ？」

プラント国防委員長のパトリック・ザラ――つまりアスランの実父はベリアルが断言したことについて追求する。

「私は過去にやり合ったことがあるのですが、まず動力がバッテリータイプではありません。奪取した四機がバッテリータイプの動力で

あったことを考えれば、試験的に導入したわけでもない」
「ふむ……」
「加えて機体構造に一貫性がありません。ＭＳと思われるのはこの内の六機程……他は似ているもののＭＳとは違う種類の機動兵器と考えるのが妥当ではないかと」
「確かに、全てをＭＳと断定するには些か奇抜なデザイン過ぎるな」

二体のエゼキエルも似たようなものだろうとは思うが、自軍に属する機体をディスる気はなさそうだ。とはいえその殆どが未だブラックボックス同様のエゼキエルも警戒してはいるのだが。

「どちらにせよ、我らの『進化』の妨げになると見て間違いなかろう」
（また進化か……愚者の極みだな、パトリック・ザラ。コーディネイターは能力こそ進化したと言えても命としては退化……いや、劣化した存在だというのに）
（近くにいると分かるけど、ラウさんの言うようにやたらめったら進化進化言うんだよねぇ。おまけにこの場にいないあの二人……俺を見る目が明らかに『研究対象』を見るようなものだったし。キナ臭さが全開だ……勃ったモンも萎えちまうぜ）

内心パトリックに毒づくクルーゼとベリアル。結局最高評議会が連合に対して徹底抗戦に傾倒しつつある、ということで今回は終わった。

「さて、ベリアル。君は今回の最高評議会……どう思ったか聞かせてくれるか？」
「構わないぜ、ラウさん。やっぱりどうも国防委員長、妙な気配がするんだよな。だからか知らないが、変なプレッシャーを発してててさ。タカ派の連中はそれを感じて引っ張られてるってトコか」
「やはり君もそう感じたか。何となく……ではあるが、私が以前目に

したことのある、人にしては異様な外見の二人組に目をつけられたりしなかったかね？」
「そこまでお見通しか。当たりさ、あの二人が国防委員長と何か話したのは聞いているが、詳しいことはサッパリだ。今は下手に藪をつついて蛇を出したくないから、あまり突っ込みたくはないし」

クルーゼの自室に戻ってきた二人は最高評議会でのパトリックの様子を語り合っている。どうやらパトリックと関連のある二人組とやらがカギを握っているらしいが、ベリアルも近付くのを躊躇う者だという。

「それもそうだな。それに奴らが勝手に自滅しようが我々には関係のないこと、寧ろそうなってほしいぐらいなのだし、現状維持でいくとしよう。足つきとその協力者の件もある」
「そうそう、ギアさんからの情報でね。俺達以外にも幾つかの勢力がこの世界で暗躍してるみたいだぜ。どうもここ最近、ブルーコスモスの上の方にいる奴の様子がおかしいだとさ。プラントといい、その連中といい、上に行けば行くほど自己管理がなって無さ過ぎじゃないか？自身が安全だと過信している連中ほど、狙われたらひとたまりもないと普通は気付くもんだが」

ほう……とクルーゼは笑みを浮かべる。狂気に染まった彼にはこの世界がいくら混乱し、滅んでいこうが望むところ。手間が省けた、ぐらいにしか考えていないのかもしれない。

「いずれにせよ、当面の予定は変わらんさ。進化どうのと声高に叫ぼうとパトリック・ザラの根幹にあるのはナチュラルの殲滅。その障害となる足つきやウルトラ騎空団とやらは間違いなく排除対象に認定するだろう」
「考えているようで思いっきり単純だからねぇ、タカ派の連中。ちょっと情報を開示してやればすぐに駆逐だ殲滅だと喚き出す。そ

ういう思考の方が危険極まりないってのに」
「それが分からぬのだよ、自分達が優れた種だと思い込んでいる愚か者共はな」
「全くだ。それはそうとラウさん、ファーさんとギアさんがラウさんの新しい身体の最終確認と移行タイミングを設定・リンクさせたいから一度顔出してほしいってさ」
「いよいよそこまで来たか。君達にはどれ程の礼を言っても足りん。休暇もそう遠くないうちに取れるだろう。その時に伺わせてもらうよ」
「オーケー、ついでに俺達の新型もギアさんが準備してくれてるらしいし、ゆっくり今を楽しもうじゃないか」

『終末』を望む者達は、混迷していく世界すら嘲笑う。

☆

デブリ帯に決まった位置は無い。それは世界毎によって差異があり、傾向としては宇宙開発が進んだ世界ほど、その結果としてデブリ帯が出来てしまうことが多い。これは宇宙開発を行う過程で発生したものがデブリとなってしまう場合が多々あるからだ。
宇宙世紀などがその最たる例だろう。そして宇宙世紀と似たコズミック・イラも同じ。宇宙開発が進めば進むほど、比例してデブリ帯も増える。
しかし、デブリ帯が生まれるのは何も宇宙開発によるものだけではない。アークエンジェルの目の前に存在するそれは――ユニウスセブン。
戦争による犠牲――この世界でそれを象徴する悲劇が起きた場所。血のバレンタインで核を撃ち込まれたコロニー……その残骸が、アークエンジェルが補給の望みをかけたデブリ帯の中に存在していた。
戦争が残した大き過ぎる爪痕を誰もが言葉を無くして見る中、レジェンドは一人思う。

「……このまま戦争が長引けばこれ以上の悲劇が起こるのは想像に難くない。だが、ナチュラルとコーディネイターの間に出来た溝もまた、簡単に修復出来るものでもない……ままならんな」

レジェンド、サーガ、三日月を除くウルトラ騎空団の面々、そしてダイゴとキラ、マリュー以外のアークエンジェルのメインクルーはユニウスセブンを調査する。当然、物資が残っているかを調べるためであり、機動部隊はレジェンドの指示で周囲の哨戒を行っていた。

しかし、ユニウスセブンに残っていたのは物資だけではない。

「「きゃあああああ!!」」

ナタル主導で行われた調査でミリアリア、アマリ、ルリアが悲鳴を上げる。声こそ出さなかったが、沙耶やしのぶ、ゼットなど一部の者を除いた、ウルトラ騎空団を含む調査メンバーもそれを見て凄まじい衝撃を受けていた。

――血のバレンタインの犠牲となった人々。その遺体がそのまま残されていたのだ。

中には赤子を抱いたまま母子共に事切れ放置されているものもあり、その光景はヘラー軍団との戦争を経験したタイタスすら言葉を失うほど凄惨なものであった。

「あそこの水を!?本気ですか!?」

一通りの調査を終え、受けた衝撃も冷めやらぬまま告げられた言葉

にキラは声を上げる。調査に赴いたメンバーやウルトラ騎空団が集合しての話し合いでマリューらが出した決断はやはり補給すべきというもの。
　ユニウスセブンにはまだ1億トン近い水が凍る形で残されており、アークエンジェルに必要な当面の水を十二分に補給出来る文字通りの希望であった。
　しかしながらあの光景を見た身としてはそれを行うことに抵抗を覚える。それも仕方のないことだろう。

「あの、レジェンド……」
「……何だタイガ」
「その……何とかなりませんか？」
「ならんな。俺がどうにか出来るのはウルトラ騎空団の分だけだ。それ以上は俺の方がもたん」

　嘘である。その気になればレジェンド一人でアークエンジェルに乗っている全員分、水や食料その他を生み出すことなど造作もないし、然程苦でもない……面倒ではあるが。
　しかし、ここで甘やかしてしまえばこの先も『レジェンドに頼めば解決する』と思いかねないことをレジェンドは危惧していた。
　命を繋ぐこと……その重さを彼らは知らなければならない。

「けど、あそこにはまだ……」
「私達も何も奪おうというわけではないわ。ただ、分けてもらうのよ……私達が、生きるために」
「俺達はまだ生きてるんだ。生きてるってことは、生きなきゃならないってことなんだよ」

　マリューとムウの言葉に反論出来る者はいない。いるにはいるが、それは既にウルトラ騎空団の団員のために身を削り自分達の分だけとはいえ補充しているレジェンドぐらいだろう。そのレジェンドも

腕組みしたまま目を瞑り壁に寄りかかっているだけ。
「……レジェンドさんも、同じ意見なんですか？」
「補給せず進むことは出来る。俺らはともかくお前達がどれだけ持つかは知らんがな」

キラの問いにレジェンドは突き放すような答えを返す。実際、レジェンドやサーガ、そしてトライスクワッドにゼットは食事や水分補給をせずとも平気なのだ。
だからこそ彼らは自分達で決断しなければならない。『生』を取るか、『正』を取るか。
そして、彼らが選んだ道は――。

☆

地上、オーブ連合首長国。
そこに在留しているウルトラ騎空団所属のクロガネ。エリアル・ベースが空の世界に残り、グランサイファーは惑星レジェンドに送られているため、アメノミハシラに行っているヒリュウ改やヘリオポリスに向かったペガサスAが不在の今、オーブの守りの要は彼らに託されていると言っても過言ではない。
「やれやれ……『鬼』が出た時はどうなることかと思ったが、煉獄やパム治郎のおかげで何とかなったな」
「だがこれでこの先も安心なんて出来なくなった。奴らは神出鬼没らしいからな、インベーダーばりにどこから現れるか分かったもんじゃねえ」
クロガネの食堂でオルガと竜馬が先日の鬼騒動について話し合っている。
一応、空の世界から戦力として何名か来てくれてはいるが、そもそ

も鬼を討つには特定の条件が必要であり、ただ戦闘力に優れているだけではどうにもならないのだ。

「頻繁に現れたりしないのは良いんだが……」

「真ドラゴンの方は仕方ないとしてだ。真ゲッター……隼人や弁慶もまだ来ねえ。どんだけピーキーに調整しやがったんだ束はよ」

「まあ、束の姐さんだしな」

「それで片付いちまうからとんでもないぜ」

ご尤もな意見である。

何にせよ、相手が相手だけに戦力は多い方がいい。レジェンドの養子とその彼女が近々こちらに来るらしいが、もう一つ――オカルト研究部とその関係者が訓練を終えて戦力になってくれることを願いつつ、二人は食事を終えた。

ブリッジに戻るオルガを見送り、竜馬は一人考え込む。

（このコズミック・イラって世界に来てから嫌な予感が収まらねえ……こいつは確実に何か起きやがる）

☆

キラ達は生きる道を選択した。

代わりに、自分達なりに追悼をしてからにしたい、と意見したところ珍しく反対されなかったのは素直に驚きだ。あのナタルさえ、一言も文句を言わなかった。一緒に調査した者として思うところがあったのかもしれない。

アークエンジェルのクルー、避難民、そしてウルトラ騎空団……全員で、千羽鶴を折ってユニウスセブンへと撒く。ささやかなものではあるが、彼らから死者への手向けである。

避難民とアークエンジェルを代表してミリアリアが、そしてウルトラ騎空団からはルリアがそれぞれ千羽鶴を撒く役目を任され、ユニウ

スセブンが一望出来る場所から二人がそれを撒き、皆が黙祷を捧げた。
戦争というものの現実を、改めてその身に感じながら。
レジェンド、サーガ、三日月……そしてダイゴとキラは各々の機体のコックピットでそれを眺めていた。

「……ダイゴさん」
「なんだい、キラ君」
「どうして、戦争なんてしなきゃいけないんでしょうか。ただ意見をぶつけ合うだけなのに、武器を持って、相手に敵意を向けて……相手のことを何も知ろうとしないまま相手を撃つことだけ考えて……」
『血を吐きながら続ける悲しいマラソン』
「「「！」」」

キラの言葉に続くように発したレジェンドの一言に、通信を繋げていた機動兵器に乗っている四人は目を見開く。
これはかつてレジェンドとダン――つまりゼロの父親であるセブンがウルトラ警備隊に所属していた頃、同僚のフルハシとの言い合いでダンが言ったものだ。
強力な兵器を用いて相手を攻め、その反撃・報復として更に強力な兵器で返される……それがいつまでも行われることを嘆いたダンはそう言った。
まさにこの世界はそれが現実であると言っていいだろう。ユニウスセブンへの核攻撃に始まり、地球各地へのニュートロンジャマー打ち込み、そしてG兵器の開発……連合、対抗するプラント、そしてまたそれに対抗する連合とイタチごっこの状態。
「ある男が言った言葉でな。『地球を守るためには何をしてもいいのか』という問いかけから問答を繰り返して最終的に出たのがこれだ。相手を撃つことだけを考えたところで戦争に終わりなど来ない。それこそ相手を根こそぎ殲滅するまで」

「殲滅って……」
「そうさせないために、相手を知る……知ろうとすることが必要なんだ。その気持ちをお互いに持つ……それが分かり合うということ」

レジェンドに続き、サーガが言葉を紡ぐ。その言葉の意味こそ即ち『対話』。

「言葉にすると簡単に聞こえるけど、実際は凄く難しい。戦争というものが相手に対する先入観を作り上げてしまっているからね。でも、キラ君はサーガが言っていたことが出来ているじゃないか」
「え？」
「立場としては敵だったミゲル君やラスティ君と仲良く話していたでしょ？」
「それは、話しているうちに彼らの人となりが分かって……あ……」
「そう、まずは話してみないと分からない。言葉が通じ、話が出来るならそこから始めないと」

ダイゴが言ったようにキラはミゲルやラスティと親しくなっていた。コーディネイターだからではなく、捕虜になったからでもない。ここ数日で顔を合わせ、会話をしているうちにいつの間にかキラも、トール達と共にウルトラ騎空団の部屋に入り浸りになるぐらい親交を深めている。

「だから、敢えて難しく考えないで『どんな人なんだろう？』って思いながら話し始めればいいんじゃないかな」
「あと、好きな食べ物とか。そういえば店長、いずれオーブにも支店出す気満々なんだって」
「よし、あっちに戻ったら即刻土地押さえるぞ。あの味をこっちでいつでも堪能出来るというなら投資しても惜しくはない」

シリアスな雰囲気は何処へやら、三日月とレジェンドがそんな会話

を始め、自然と他の三人も笑みが零れた。
間もなく、物資の搬入作業が始まる。

アークエンジェルに搭載してあるストライクや小型艇だけでは手間だった搬入作業だが、ウルトラ騎空団に属するアルトアイゼン・リーゼのリボルビング・バンカー（炸裂なし）やバルバトスのレンチメイスにより作業効率は格段に上がった。他の機体はビーム兵器主力の機体が大半の為、砕くのはその二機が担当（ゼルガードはそもそも武器を持たないし）。

「なあ、三日月。俺らここまで働いてるんだし、後でかき氷作っても許されるよなコレ」
「だよね。俺はイチゴ味がいいな」
「俺はグレープにするか……ん？」
「レジェンド様、何か変なもの見つけた？」
「いや、ちょっとな……（もう少しで搬入作業は終わり、ならその後でも構わんか）」

レジェンドが見つけた『あるもの』。状態からしてつい最近のものだろうと考えた彼は、さっさと搬入作業（彼と三日月は掘削作業）を済ませて回収しようとペースを上げる。
同じ頃、キラも周囲を哨戒中、ジン長距離強行偵察複座型を発見していた。どうやら見つけた船を調べているようだが、何もないと分かるとそこから周囲を警戒しつつ離脱しようとする。

「よし……そのまま気付かないでくれ……！」

そんなキラの願いはいとも簡単に打ち砕かれる。トール達の乗る小型艇が偶然にもストライクの前に出たことでジンの索敵範囲に入ってしまったのだ。当然、反応のあった場所に向けてジンは武器を構えたまま向かってくる。

「ッ……バカ！なんで気付くんだよ！」

キラがついこんな口調になってしまうのも当然だろう。ジンを撃つしかない――キラが覚悟を決めた時、信じられない出来事が彼を、いや彼らを襲う。

「……!?レーダーに別の高熱源反応!?戦艦じゃないけどかなり大きい……何なんだ……!?」

その直後、禍々しい光弾が周囲のデブリに直撃し、それら全てが砂に変わる。キラやトール達、さらにジンも驚くがそれは長く続かなかった。

何故ならば――。

ギシャアアアアアッ!!

身の毛がよだつ鳴き声と共に、先程とは違う光弾がジンを直撃、一発で爆散させたからだ。

「なっ!?一体何が……!?」

あまりに急な出来事でキラは混乱するも、間を置かずしてその原因が判明し戦慄した。

彼が見たものは凡そ５０ｍを超えるであろう巨大な身体を持ち、翅

を羽ばたかせ高速で宇宙空間を飛行し迫りくる異形の生命体――スコーピス。それが二体。

コズミック・イラに生きる者達は今、異次元の脅威と邂逅する。

〈続く〉

来たりし厄災

――ほんの少し前のペガサスＡ――

「……まずいな」

「どうしたんです、勇治さん。……まさか！『実は俺、本当は月影じゃなくて木場って姓なんだ』とバラそうとしてたけどタイミングを逃し――」

「誰が馬の怪人だっ!!」

アークエンジェルから少し離れた位置で、相変わらずステルス機能を存分に発揮し同行しているその戦艦。これまた勇治のツッコミが冴え渡るブリッジには彼と彼の所有怪獣、そして流が勢揃い……というよりこのメンバーしか乗艦していないが。あとは戦艦（元宇宙船）ＡＩのシエル。

それはともかく、勇治は神妙な面持ちでレーダーと何やらにらめっこしている。同時にデータベースらしきものも開いており、何かを照らし合わせているようだ。

「真面目な話、何か緊急事態ですか？」

「ああ、割と信じたくないことだ」

「……懲りずにバド星人がやらかしたとか」

「だったら全然良か……いや良くはないが、俄然マシだった。よりによってその予想は悪い方向に外れている」

勇治が調べていたそれを流に見せると、キョトンとした顔のままそれを覗いてみた流は瞬時に真面目な表情になった。

――怪獣兵器スコーピス――

レジェンドに更新してもらったデータベースに載っていたその情報は、これからの戦いが激しさを増すことを暗示しているのと同時に、映し出されている存在がアークエンジェルへと迫っていることを

示していた。
そして、それは現実となり――。

☆

ユニウスセブンでの物資搬入作業中に襲撃してきた二体のスコーピス。ジンを爆散させ、次なる獲物を探し――目についたのは、トール達が乗る小型作業艇。

「ギシャアアアア!!」
「な……何だよこいつ!?」
「巨大な虫……違うっ！化け物!?」
「ッ!!やめろおおおおっ!!」

友人達が狙われていることに気付いたキラは、即座にビームライフルをスコーピスへと連射する。命中すれど効果は無い……が、どうにか注意を引き付けることは出来たようでスコーピスはストライクへと狙いを変えてきた。

「くっ……この装備じゃ歯が立たない！アグニなら少しは効くかもしれないけど、このままじゃ……」
「ギィィィィッ!!」
「うあっ!?」

ストライクの倍以上の巨体でありながら、その機動力はエールストライカーを装備したストライクと同等以上……その突進をギリギリで回避したストライクだが、相手は二体。すぐさまデブリを砂に変えた光線がもう一体から放たれるも、どうにか避けることが出来たものの、キラは重大なことに気が付いた。

「もしあの光線がユニウスセブンの氷や物資に当たったら……！」

――また補給が出来なくなり、今度こそマズいことになる。それだけではなく、あそこには皆で折った千羽鶴を撒いたばかり……それらを無に還させるわけにはいかない。
自分に対抗出来るとは思えないが、何もせずに逃げたりはしたくない――そう思い二体のスコーピスをどうにかここから離そうと、キラは単身未知なる異形に戦いを挑む。

一方、アークエンジェル他ウルトラ騎空団にもそれは迅速に伝わっていた。キラが僅かな希望を信じ、即座にメール通信を行っていたからだ。さらにそこに、難を逃れたトール達の報告もあり、事態は急を要すると理解する。

「巨大な虫の化け物……!?」
「そうなんです！何かデブリを砂にする光線を吐いたり、ＭＳの倍以上大きくて！」
「キラがストライクで応戦しているけど、あのままじゃ……」

そこまで聞いたレジェンドは、悩むことなく即座に指示を出した。

「俺とダイゴ、ゼットで行く。サーガを始めとした他の面々は引き続き搬入作業だ」
「なっ……待ってくださいよ！もし怪獣だったら俺達も――」
「数を割けばいいというわけではない。それに、万が一アークエンジェルやこちらの方に別動隊が攻めてきた場合の対処もある」

レジェンドの言葉に一誠やタイガ達は反論出来ない。沙耶もいるとはいえ、今の自分達を狙っているのは何も怪獣達だけではないのだ。クルーゼ隊やアズナブル隊がいつまた仕掛けてくるかも予測不可能な為、必要以上に戦力を分散させるのは悪手。

トール達の情報だけで相手がスコーピスだと判断出来たレジェンドは、普通に考えれば恐ろしい相手ではあるものの単体の戦闘力は然程でもないと考え、十分に対抗しうる戦力を選抜したのである。

「こうしている間にストライクがやられては目も当てられん。すぐに行動を開始するぞ」

「了解！」

アルトアイゼン・リーゼとZガンダム、Sガンダムはストライクが戦闘している宙域へと急行。一誠らはまだ釈然としないようだが、搬入作業も必要な事であると理解しているので黙って指示に従う。

彼らは後に、レジェンドの判断は間違っていなかったことをその身で実感することになる。

宙域に近付くにつれ、スコーピスの鳴き声やブースターを吹かす音が大きくなっていき、時折宇宙に砂が漂っている。スコーピスの腐食光線ポイゾニクトによるものだろう。

レジェンドはそこに向かう途中、当初最後に回収するはずだったものを再発見し、それを回収するとゼットに渡しアークエンジェルへ向かうよう指示した。

「へ？これって……救命ポッド!?これまたなんつータイミングでなんつー場所に……」

「さあな。本来なら搬入作業が終わった最後に、と思ってたんだが状況が状況だ。後回しには出来ん」

「何故に最後？ってまだ大分新しいな。そうすると補給してからでも遅くないし、補給の方を疎かにすると後々トラブルがまた起きそうですしおすし」

「そんなところだ。アークエンジェルへ届け次第こっちに戻れ。戻ってくる時にウェイブライダーになればどうにかなるだろ」

「了解！落とされんで下さいよ御二方！」
「誰に物を言っている。早く行け」
「こっちは可能なら僕達だけで片付けるから」

要らない心配だったと思いつつ、ゼットはZガンダムで救命ポッドを抱え、衝撃を最小限に抑えるようにしながらアークエンジェルへと帰投する。
それを見届けたレジェンドとダイゴは各々の乗機のブースターを一気に吹かし、ストライクとスコーピスの戦闘している宙域へと急行した。

ストライクの方はスコーピス二体を相手に初見ながらも善戦している。尤も、善戦とは言っても損傷を受けていないだけであり、ダメージ与えているわけでもないのだが。とはいえ怪獣、それも二体同時に相手にして無傷で持ち堪えられているのはキラの操縦センスのおかげだろう。
しかし、そんな状況も長くは続かない。

「くそっ……残りのエネルギーが……！」

そう、相手が相手である以上、フェイズシフト装甲を展開し続けざるを得ない為、バッテリーの問題が出てくるのだ。しかも二体、それも怪獣という巨大な存在で攻撃があまり効いていないということで手数を増やしていたこともあり普段以上に消耗が早かった。
そして遂に、ビームライフルがガス欠したかのような反応を起こし、機体色がグレーのディアクティブモードになってしまう。

「ッ!?こんな時に！」

こうなってしまうと動くことは出来ても戦力としては殆ど使い物

にならない。実弾系武器の一つでもあれば良かったのだが、生憎とイーゲルシュテルンやアーマーシュナイダーではスコーピスに有効打を与えられないのはビームライフルがあまり効かなかったことからも明白。
迫る二体のスコーピスにキラは「やられる」と本気で恐怖するが、ここで間一髪。

「キラ君！」

Ｓガンダムのビーム・スマートガンによる高出力ビームが一体のスコーピスの片目を直撃し――。

「ぶつけるのは得意でな……！」

同じくアルトアイゼン・リーゼのリボルビング・バンカーがもう一体のスコーピスの片目に突き刺さり炸裂し、爆発と共にダメージを与えた。

「ダイゴさん！レジェンドさんも！」
「一人で良く頑張ったね、キラ君！もう大丈夫だ！」
「奴らの特性を見極め、ユニウスセブンから離した上で耐え抜くとはな。良い判断だ」

今アークエンジェルにいるメンバーでも最強と言える二人の増援に漸くキラも表情を綻ばす。アルトアイゼン・リーゼはストライクに接近すると何かを探すようにストライクの様子を確認する。

「あの、何を……」
「ストライカーパックはパワーパックと一体だと言っていたからな。外部からバッテリーチャージを行うためのコネクタの類は無いのかと……あった。ここか」

アルトアイゼン・リーゼはエールストライカーの一部を開けると、そこにあったコネクタらしき部分に持ってきた小型のエネルギーカートリッジを接続し、そこから急速にストライクのエネルギーを充電していく。
完全とはいかないまでも戦闘を行うには問題無いレベルにまで補給出来たストライクのエネルギーゲージを確認し、レジェンドやダイゴから指示を出される前にキラは再度ストライクのフェイズシフト装甲を展開する。

「やはり良い判断だ。やれるか？」
「はい！でもエールストライカーじゃ攻撃力不足みたいで……」
「仕方あるまい、元よりＭＳ戦は想定していてもこんなところで怪獣とやり合うとは予想外だろう。……が、こんな事もあろうかとカートリッジタイプの大口径メガビームライフルを用意してある。それを使え」

何だかんだ言っても用意周到なレジェンドであった。アルトアイゼン・リーゼの腰部にマウントしておいた大口径メガビームライフルをストライクへと手渡す。カートリッジタイプなので、バッテリー式の動力であるストライクも安心して使用出来る。

「カートリッジは装填済みの三つに予備の三つ、合計六つ用意してあるが、最大出力で撃った場合は一発につき一つ分丸々消費する。使い所を見誤るなよ」
「ありがとうございます！」
「前線は俺とダイゴ、ＲＥＮＡで受け持つ。武器の性質上、お前とストライクは俺達の援護に回った方がこちらとしてもやりやすい」

ＲＥＮＡについてはダイゴから聞かされていた為、受け入れるのは何ら問題はない。しかし、三人で受け持つと言うがアルトアイゼン・

リーゼとSガンダムの二機しかない時点で言い方が気になった。そんなキラだが、考えた直後にダイゴからの通信でその理由が発覚する。

「キラ君、今から君に僕の本当の姿……僕の正体を見せようと思う」
「え……？」
「君はＲＥＮＡのことを話した時、笑って受け入れてくれた。良いことだと、そう言ってくれた」

ダイゴがキラにＲＥＮＡの話をした時、彼は、
『確かに不思議かもしれないですけど、僕はそういうのとても良いことだと思います。人工知能とか、ベース人格とか、そんなこと関係無く想い合えるって凄いじゃないですか』
――笑顔でそう答えた。偽りのない、心からの言葉で。
そんなキラに、ダイゴはこの世界における未来への光を見た。相手が何だろうと差別せず、どんな立場の者にも優しさを向けられる彼こそ、この混迷していく世界を照らす光になるだろうと。
だからこそ、自分も隠し事無しでぶつかろう。ダイゴはそう決意し、覚悟を決めた。

「僕の本当の名前はティガ。銀河遊撃隊筆頭隊員ウルトラマンティガ」
「ウルトラマン……ティガ。そういえば、ゼットさんが先輩って」
「うん。彼もそこに所属してるんだ」
「ついでに言っておく。俺はウルトラマンレジェンド。立場は……まあ、ティガのずっと上だと覚えておけばいい」
「ええっ!?」

驚くキラだが、レジェンドやサーガ、おまけに沙耶の正体を完全に知ったら腰を抜かすだろう。それに今は然程重要ではない……と思う、多分。

どちらにせよ、スコーピス二体をどうにかしなければならない為、これ以上長話をしているヒマは無い。

「あともう一つ……この姿はね、僕が一体化していた人物の姿を僕が借りているだけなんだ」

「でも、借り物の姿だって、ダイゴさんの……ティガさんの性格は借り物じゃない。ティガさんも言ってくれたじゃないですか、コーディネイターだからって性格まで遺伝子操作出来ないって」

「キラ君……はは、そうだね。一本取られたな……一体は僕が相手をする。だからキラ君はチーフやＲＥＮＡと一緒に、もう一体の相手を頼みたい」

『勿論よ、ダイゴ。よろしくね、キラ君』

「はい、任せて下さい！ＲＥＮＡさんも改めてよろしくお願いします！」

既にダイゴ――ティガとキラの間には確固たる絆が出来ていた。これならば心配はないと一人頷くレジェンドは、この場の全員がやる気に満ち溢れていることを確認しスコーピスを睨む。

「全員戦意に関しては問題なさそうだな。ダイゴ、恐らくだがスコーピスは何らかの強化がされている可能性が高い。油断せず一気に攻め立てていけ」

「はい！」

「ＲＥＮＡ、そしてキラ。前衛は俺が務める。キラが後衛、ＲＥＮＡは動き回って必要な方を優先的に援護だ。最初はキラを完全援護にと思ったが、覚悟を決めた今のお前なら俺の背中を任せてもいいだろう」

『凄いじゃない、キラ君。チーフって一人で何でもこなすから、背中を任せるなんて殆ど言わないのよ』

「それは……あの赤い彗星って人との戦いを見たのでなんか分かる気がします」

「だよねぇ」

そう言って笑う三人にレジェンドは「全くお前らは」と苦笑する。何というか、ティガとＲＥＮＡ――ダイゴとレナのどちらかの弟がキラだと言われたらこちらも納得しそうな空気を醸し出していた。

「話は一旦お仕舞いだ。さて、やろうか……！」

「『了解！』」

レジェンドの言葉に三人から返事が帰ってくる。そして、ダイゴはＳガンダムのコントロールを全てＲＥＮＡに任せ、自身は本来の姿へと戻るべくスパークレンスを取り出す。

今こそ超古代の光が絶望の闇を打ち払う時だ。ダイゴは表情を引き締め、口を開くことなく迫るスコーピスを見据え、スパークレンスを起動させるとＳガンダムのコックピットから光が溢れ出し――。

「チャアァァァァァッ!!」

光の中から巨人――ウルトラマンティガがスコーピスの一体へと体当たりを仕掛けながら現れた。

「あれが、ダイゴさんの本来の姿……」

キラはティガの穏やかで、常に傍で見守ってくれているような顔を見つつ、その勇姿から発されるオーラに頼もしさを感じる。同時にやはりダイゴとして接してくれていた雰囲気も消えてはいない。

その視線に気付いたからかどうかは不明だが、ティガはストライクの方を向くと頷き、対するキラもストライクの頭部を頷かせるように動かす。

「たとえ強化されていようが、一対一ならばティガがスコーピスごときに遅れを取ることはない。そして――それは布陣が整っている俺達も同様だ」

僅かな期間しか過ごしていないというのに、全幅の信頼をおいてくれるレジェンドに、キラは二人の『ウルトラマン』の器の大きさを感じ取る。

彼らだけではない、ゼットやタイガ、それにタイタスやフーマもそうだった。更に言うなら、沙耶もそうらしい……彼女は姉のような感じだが。

「「ギシャアァァァァ!!」」

「そう喚かずとも相手をしてやる。俺達に喧嘩を吹っ掛けた代償はお前達の命だがな……!」

アルトアイゼン・リーゼとティガが構えた事が合図となって、三機と一人によるスコーピス二体の撃滅戦が開始された。

☆

救命ポッドをアークエンジェルへと持ち帰ったゼットは案の定揉めていた。

『だからこれ以上は不可能と言っているだろう！物資を補給したと言っても無限ではないんだぞ！』

「じゃあヘリオポリスの時と同じように放置しろってのかよ！あーもう！今すぐじゃなくていいから考えといてくれ！早く戻らないと超師匠にティガ先輩、それにキラも危ないんだ!!」

『どういうこと？報告にあった虫の化け物とやらと関係があるの？』

「えっとだな！うぅ～……説明ウルトラ面倒くせー！これが証拠映像

だ!!」

考えるのを止めたゼットはレジェンドのアルトアイゼン・リーゼの現状とリンクさせ、現在の彼らの映像を流すと、そこには銀色の巨人――ティガと共にスコーピスと戦う三機の姿があった。

「「「「なっ!?」」」」
「ティガ先輩!?」
「あれはスコーピスか!?しかも二体もいるぞ！」
「片方がティガ先輩と戦ってて、もう片方はレジェンドとキラと……あれ？何でSガンダム動いてんだ？」
「フーマ……貴方、それダイゴさんに聞かれたら怒られるかもしれないわよ。ＲＥＮＡさんが動かしてるんでしょう」

リアスの指摘にフーマはヤベッという表情になるが、ダイゴなら軽く注意する程度で済ませてくれるだろう。別に悪く言ったわけではないし、菩薩と呼ばれる優しさで銀河遊撃隊においてコスモスと双璧を成す善人だし。

ウルトラ騎空団の面々はティガが変身していることに、アークエンジェルの面々はそもそも全部に驚いているが、そこで事態はより悪い方向へと動く。

それは――。

ギシャアアアアア!!
「「「「!!」」」」

更に二体のスコーピスがアークエンジェルやウルトラ騎空団を狙って飛来したからだ。

「嘘だろ!?あっちに二体いるじゃねえか！」
「イッセー！スコーピスは機動兵器で言うと量産型みたいなものなんだ！」
「タチ悪いなんてもんじゃねーぞソレ!?あんなん量産型とか、誰だよ作り出した悪趣味な奴は!!」

デブリを砂に変えるというスコーピスの恐ろしさは既に知られているが、ウルトラ騎空団はまだしもアークエンジェルに乗っている者達はスコーピスの巨体に戦慄する。ＭＡはおろかＭＳより遥かに大きく、それでいて機動力も上回っているという常軌を逸した存在。

「くそっ！せめて俺らが揃ってアークエンジェルの中にいれば自動操縦操作をしなくてもよかったのに……！」
「アークエンジェルを攻撃していないのは良いとして、これじゃ自動操縦に切り替えてる隙がない！」

ここで機体が別々であること、そして……変身に手間がかかることが裏目に出た。翳して起動、というお手軽な変身アイテムと違い、最近のウルトラ戦士は何かとプロセスが必要な為、このような事態に陥ると変身するのも一苦労。ましてや今アークエンジェルにいるメンバーで簡単に変身出来るのはサーガのみ……そのサーガは変身に条件付き。
条件付きなのはレジェンドもだが、あれは別に変身せずとも問題ないので一先ず置いといて。

「そういや先輩ってニュージェネレーション率いてる割に変身アイテムがシンプルで早くなかったっけ!?いや全員の変身方法分かるわけじゃないけどさ！」
「ああ！セブンさん譲りで早い！」
「ホント彼か矢的先生、アスカさんのうち誰か一人だけでも同行してもらうべきだったわ！」

一誠、タイガ、リアスのお馴染みトリオは愚痴るもそれで事態が好転するわけもなく。そこでレジェンド達の元に行きそびれたゼットは訓練仲間の三日月と共にスコーピスへ応戦を始めた。それを見た沙耶は三人に言う。

「ウダウダ言ってる暇はないわ。言葉も話も通じない、かつ普通に攻撃してくるなら応戦するしかないでしょう？」

「「御尤もです沙耶（サヤ）さん!!」」

「ぶん殴るわよ」

あまり表情を変えない沙耶だが、アルテミスで遭遇したのが変態ばかりだったことに加え、どこぞの一等星な娘に似ていることばかり言われた挙げ句名前までそんな感じで呼ばれりゃキレるのも当然だろう。

アマリらも漸く準備が整ったのか、スコーピスへと攻撃しようとしたところ、それは現れた。

ビカアアアアアッ!!!

「「「「っ!?」」」」

「「ギィッ!?」」

眩い黄金の光に身を包んだ、ティガと同じく巨人が突然アークエンジェルやウルトラ騎空団を守るように出現したのだ。

「な……何なの!?」

「あれは……」

突如として現れた存在に、異変に気付いて外を見に来た避難民達も

口々に「あれは何だ」と指差しながらお互いに尋ね合う。
だが、一誠やリアス、そしてトライスクワッドやゼットらはその存在を知っていた。何故ならば彼もまた銀河遊撃隊に所属し、レジェンドにとって我が子も同然な『正義』の名を頂くウルトラ戦士。

「ジャスティス先輩!!」

ウルトラマンジャスティス――コスモスと対を成す、コスモスペース出身のウルトラマンだからだ。

「オオォォォ……!デェアァァッ!!」

ジャスティスは光の波動・ライトエフェクターでいとも簡単にスコーピスを二体纏めて撃破する。スコーピスは断末魔の悲鳴さえ上げる間もなく爆散し、見ていた者達にその圧倒的な力と存在感を示した。
しかし驚くなかれ、ライトエフェクターはジャスティスの最強技ではない。

「すっげぇ……!」
「あれがコスモス先輩に並ぶと言われたベテラン勢の一人、宇宙正義の代行者……ジャスティス先輩の実力!」

ジャスティスは静かにタイガ達の方を向き――。

『気を付けろ、若き勇者達よ』
「「「「!」」」」
『この世界には数多の悪意が蠢いている。そしてまた、蘇ったサンドロスがこうしてスコーピスを送り込んできた。奴がこの世界で直接挑んでくるかは分からないが、そうなった時は一人で戦おうとするな。お前達には信じ合える仲間がいる。手を取り合い、共に厄災へと

立ち向かえ』

そう告げると、ジャスティスは再び強い光を発しその姿を消した。

☆

アークエンジェルらのいるデブリ帯から離れた場所で行われているアルトアイゼン・リーゼ、Ｓガンダム、エールストライクガンダムとティガによる二体のスコーピスとの戦闘は、レジェンドとティガは元よりＧＵＴＳのエースパイロットだったレナをベースに構築されたＲＥＮＡ、そして類稀なる操縦センスを持ったキラの能力もあって有利に進んでいる。

スコーピスも強化されてはいたようだが、百戦錬磨のティガや、神衛隊、ひいては惑星レジェンド最強のパイロットであるアムロ・レイと互角の実力を誇るレジェンドが主軸とあっては太刀打ち出来るわけがなかった。

「チャアァァッ!!」

「ギィィィッ!?」

ティガのドロップキックが真上からスコーピスの背中に直撃する。本来こういった機動力の高い相手にはスカイタイプか、カウンターと一撃必殺狙いでパワータイプで対抗するのがかつての定例。

しかし、修行と研鑽を積み重ねたことで基礎スペックの底上げがされたティガであれば、今やタイプチェンジせずともこの程度の相手を打ち負かすことなど造作もない。

「ギシャァァァッ!」

ドロップキックで吹き飛ばされたスコーピスは態勢を立て直し、再

度ティガに向かってくる。
だが、ティガは先程Sガンダムの射撃で潰された片目とは逆の、もう一つの目にハンドスライサーを放ちスコーピスの視界を完全に潰す。

「ギシィッ!?」

当然、どうにか視えていた目が潰されれば真っ暗になり、更に運悪く尖ったデブリに頭から突っ込み深々とそれが刺さってスコーピスは二重の意味で悶え苦しむ。
ここでティガは勝負を決めることにした。それと同時に、彼自身も尊敬するウルトラ6兄弟の二番目……即ちウルトラマンから教わったある技を試す絶好の機会だと思いその技を放つ。
かつてガイアも戦ったケロニア、それとの戦いでウルトラマンが放った技を。

「ハアァァァ……!」

両拳を引きながら腰に当て、丹田に力を込め――。

「チャアァァァァァッ!!」

正拳突きのように右手を突き出すと、右腕からリング状の光線が連なるように放たれる。
ウルトラアタック光線――ウルトラマンが考案した、ケロニアやアントラーを打ち倒した光線技だ。

「ギィアァァァァァ!!」

ティガの放ったウルトラアタック光線を受けたスコーピスは、身体の内部から焼け付くような痛みを感じつつ、ジャスティスが仕留めた

個体らと違い断末魔の叫びを上げて爆散した。

もう一方のスコーピスは、自分の半分もない大きさのアルトアイゼン・リーゼの恐るべき加速が生み出す突進力に苦戦。しかも、スキあらばSガンダムとストライクから急所を狙った射撃が撃ち込まれるという、スコーピスにとって予想外の運びになっていた。

「ギシィッ!?」

「大した強化が出来ないのか、そもそも偵察か調査が目的なのか知らんが、俺達を見誤ったようだな」

レジェンドがそう言うと、アルトアイゼン・リーゼの両肩の装甲前部が展開される。

そこに隠されていたのがリボルビング・バンカーと並ぶアルトアイゼン・リーゼの武装『アヴァランチ・クレイモア』。

「一発一発がチタン合金製の特注品だ……!」

レジェンドの言う通り、アヴァランチ・クレイモアは指向性地雷――チタン合金のベアリング弾を前方広域にバラ撒く武装だ。しかも、火薬入りのチタン弾である為、見た目以上に強烈。

「受け取れ……!」

アルトアイゼン・リーゼの双眸が一瞬輝き、クレイモアが容赦無く連射され、その巨体が仇となり全弾漏れなくスコーピスに直撃する。

「ギィアァァァァ!?」

「まだだ!」

苦しむスコーピスに最大加速で突っ込み、その速度で威力を上乗せしたリボルビング・バンカーを土手っ腹にブチ込むレジェンドのアルトアイゼン・リーゼ。さすがにいくら巨体であろうと、急所に凄まじい速さの乗ったバンカーを食らってはスコーピスもタダでは済まない。

何発か炸裂させたところで、スコーピスはアルトアイゼン・リーゼへとポイゾニクトを撃ち込もうと口を開くが――。

「読み通りだ……！RENA！キラ！撃ち込め!!」

「『了解！』」

これで始めてスコーピスはレジェンドの狙いに気付いたが時既に遅し。

「これでっ！」

『終わり！』

カートリッジ丸々一つ使用した、最大出力の大口径メガビームライフル、そしてビーム・スマートガンの同時攻撃を口の中へとピンポイントで撃ち込まれ、スコーピスは体内を焼かれつつ身体を貫かれた。それに留まらず、リボルビング・バンカーがカートリッジを炸裂させてトドメの一撃。

その衝撃で吹っ飛んだスコーピスはそのまま爆散する。

「やった……！」

「奴は多数出てくるが再生能力は無い。ミッションコンプリートだ」

『今の、少し特捜チームみたいだったかも』

漸く一息つけるとキラも安堵していると、もう一体のスコーピスを片付けてきたティガが飛んでくる。

三人がスコーピスを仕留めたことを確信して頷くと……。

「チャッ！」

三機を見渡してサムズアップをするティガ。レジェンド、ＲＥＮＡ、そしてキラも笑い合い、ティガに対してアルトアイゼン・リーゼ、Ｓガンダム、ストライクもサムズアップを返す。

Ｚガンダムや他の機体が迎えに来たのは、それから少し後のことだった。

☆

そして、再度救命ポッドのことになったわけだが、ゼットとは言い合いになっていたナタルもレジェンドの圧倒的威圧には為す術もなく、結局回収することに。

いざ開ける、となった時にレジェンドが待ったをかけた。

「見つけた責任だ。俺が開ける」

「開けるったって、あとはこのボタンを操作するだけですぜ？」

「開けること自体がトラップとなっている可能性もある。正規の手段で操作されることが前提で……な」

それを聞いて格納庫に集合していた面々が「ええっ!?」と驚きの声を上げる。三日月は銃（しかもバルバトスの無反動砲の人間サイズ版）の準備をしたり、しのぶは日輪刀を抜いたり、タイタスはマッスルポーズをして警戒……最後だけなんか違う気がするが。

「タイタスいつでも平常運転過ぎねーか？」

『まあ、ダ・ガーンいわくマッスル隊長だからな。いや、あれはタイタス自身のリクエストだったか……』

一誠の一言に周りが頷くもドライグだけはマッスル隊長呼びはタ

イタスが言い出したことを思い出す。もはやそれも良い思い出になっている。

「……で、予想はつくがどう開けるんだ、先輩」

「腕力は全てを解決する」

「「「「は？」」」」

「へッ!!」

バキィ!!!

「「「「はあ!?」」」」

レジェンドは短く叫ぶと手刀をポッドの開閉部分に突き刺し（この時点で色々おかしい）――。

「フンッ!!」

ゴベキャアッ!!!

無理矢理に開閉部分を抉じ開けた（というか千切り取った）。なんという脳筋プレイ。

「「「「えええええ!?」」」」

「これで万事解決だ」

「よし……来い、今日の晩ご飯」

「三日月さんも出てくるのが動物か何かだと決めつけてるんだけど!?」

「解決してもいないし動物が出てくるとは限らないのよ!?」

一誠とリアス……レジェンドが突っ込みをやらないとこの二人にその皺寄せが来てしまうらしい。更に三日月まで加わるから大変だ。

しかし、中から出てきたのは……。

『ミトメタクナーイ！』

ゴッ!!!

「ぶごっ!!」

「レジェンドさん!?」

ピンクの球体――それがレジェンドの顔面に直撃。周りに被害はなかったが久々に不憫がリボルビング・バンカーよろしく炸裂してしまい、後ろに倒れ込むレジェンドを近くにいたアマリとアズが支える。

そしてその球体を偶然掴んだゼット。

「……ハロ？にしちゃ小さいな。アムロ師匠の作ってたハロはもっとこう……抱えるような大きさで」

「御苦労様です」

透き通るような声が格納庫に響き、救命ポッドの中から一人の少女が出てくる。

その少女こそ、現プラント最高評議会の議長であるシーゲル・クラインの娘――ラクス・クラインであった。

〈続く〉

敵軍の歌姫

スコーピス、それも四体ほぼ同時襲来という危機を乗り越え、アークエンジェルとウルトラ騎空団は搬入作業を無事終えて一息ついていた。

とはいえ、別の意味で無事だったわけではない。現プラント最高評議会議長シーゲル・クラインの娘であるラクス・クラインが乗せられていた救命ポッドをレジェンドが発見し、ゼットトにアークエンジェルへ持って帰らせたことで知らぬ間にまた面倒事を抱える羽目になる。

どうやら血のバレンタイン追悼式典の為に慰霊団団長としてユニウスセブンの視察に赴いていたそうだが、連合の艦と鉢合わせ、いざこざになり彼女だけが救命ポッドに乗せられ脱出させられたという。

キラが見た船はその慰霊団のものだったのだ。しかし、ジンの様子からもはや他の乗員の生存は絶望的だろう。ラクスも一歩間違えればスコーピスによって救命ポッドごと命を落としていたかもしれない。

こればかりは運が良かったと言える。

そんな彼女は結構な立場にいるとはいえ、民間人扱い……マリューやムウ、ナタルが扱いに困り頭を悩ませている間も、ラクス自身はふわふわというか、ぽわぽわしてるというか……何というかマイペース。

やはりそこで白羽の矢が立つのは……。

☆

「いやさァ、確かに見つけたのも拾ったのも俺だし、ゼットトに届けるよう言ったのも俺だよ？けどさァ、何ていうかさァ……『困ったらとりあえず俺らに押し付けとけ』みたいな考えやめてくんない!?つーか見てたよねおたくら！俺の顔面にピンクハロが思っきし激突したの！そんな被害受けた俺がいる部屋に連れてくるってどーいうことオオオ!?」

やはりこうでなくては、と思わせるほどキレッキレなレジェンドのツッコミ。一誠やリアスは「これだよこれ」みたいな笑顔で頷いている。
マリューやムウは申し訳無さそうな表情なのだが、二人の後ろから顔をひょっこり出したラクス……とハロはいつも通り。

「いやまあ……悪いとは思うけどそこはほら、拾った人の責任ってことで一つ……」
「犬猫じゃないんだぞ、そこの桃色は」
「私は桃色ではなく、ラクス・クラインですわ」
「アレ？何だろうこの娘、どことなくノアのバカ思い出すんだけど。デュナミストとか言われたら信じちゃいそうになるんだけど」

天然なラクスに何故かノアの姿を重ねたレジェンドは額を抑えて溜息をつく。この手のタイプは予想もつかないタイミングで頓珍漢な返答をしてくるので、実はレジェンドにとって苦手なタイプだったりする。オーフィスのような純粋無垢ならともかく、そこに天然が混じるともうアウトらしい。
これも全部ノアが悪いんだ、とはレジェンドの談。

「どっちにせよ、ノーと言ったところでここに置いていく気だろお前ら」
「「……」」
「オイこっち向けコルァ」
「はい、何でしょう？」
「桃姫はクッパ城で赤い配管工を待ってなさい」
「???」

それは別の姫だ、とサーガはツッコミそうになったが経験上この場合黙っていないとラクスは何かと聞いてきそうな為、沈黙を貫き通

す。
結局、同じく純粋枠のルリアにお願いされ、レジェンドは渋々承諾した。
ただ忘れてはいないだろうか。彼らの部屋には――。
「ラクス様⁉」
「あら？マッケンジー様！それと……そちらの方は、もしかしてアイマン様でしょうか？アスランがよく言っていた……」
ザフト所属のラスティとミゲルもいることを。とりあえず、彼らがアークエンジェルにいることは、もしプラントに戻れても秘密にしておいてくれるらしい。
それからというもの……。

「ご唱和ください我の名を！ウルトラマンゼーット！」
「ウルトラマンゼーット！（ですわ！）」
ラクスは滅茶苦茶馴染んでいた。
「おいイイイ⁉ちょっとは混乱しないの⁉ルリアはいいけどゼットは見た目明らかにナチュラルでもコーディネイターでもないよね⁉つーか馴染むの早ッ！どんだけコミュ力高いのこの娘⁉」
「団長さんってアスランとかより反応面白いよな。ツッコミのレパートリー広いし」
「アスランって良くも悪くもパターン通りの反応だから」
またしてもツッコミを入れるレジェンドに、ラスティがキラとデュ

エルしながらアスランを酷評する。ついでにキラもそれに同意。
当のラクスはあっさり似たようなタイプのルリアと同調し仲良くなり、ゼットも日常ではあまり深く考えないので相性が良かったというか。
他の面々もあまり気にしていないらしく、味方がいない状態のレジェンドは不貞寝モードでガヴァドン寝袋に入り込み、周囲から自身をシャットアウト。

「あぁっ！駄目ですレジェンド！寝ないで下さい！このあとデッキとかいうのの作り方教えてくれる約束じゃないですか！」
「ゼットに教えてもらえ。今の俺はガヴァドン。ただ寝るだけの怪獣（の寝袋）だ」
「まあ！とても可愛らしい寝袋ですわ！」

俺に構うなオーラを出しているというのに、ラクスはまあまだ良いとしてハロはガヴァドン寝袋に入ったレジェンドの上でポンポンと跳ねている。
しかもガヴァドン寝袋に入った途端、もふもふ好きの沙耶が抱きついてきて、もふもふかふかするから二重の意味で眠れない。

「もふもふ……」
「あ、私も……」

更にアズまで参戦。これはこれで良いのかもしれないが、レジェンドはここ最近ドタバタしっぱなしであまり休んでいないため、このままでは不機嫌も追加されてしまう、とサーガが止めに入る。
幸いアズは何とか武力行使に出る前に割と早く納得してくれたが、沙耶がどうしても剥がれない。

「沙耶、いい加減に離れろっ……！」
「嫌」

「先輩が怒ってもいいのか!?」
「もうちょっと」

もふもふが絡んだ沙耶は予想以上に手強かった。しっかり寝袋を掴んでおり、無理に引き剥がすと寝袋が破けてレジェンドがブチ切れる可能性もあるため、サーガはあまり強引に剥がせない。
しかも何やらラクスが笑顔でじーっと見てくるのでどうにもやり難いという二重苦。今なら先程のレジェンドの気持ちが分かる。

「サーガ様と沙耶様は大変仲がよろしいのですね」
「……は？」

二人どころか場の空気が固まった。レジェンドだけはこれ幸いにと急速睡眠。

「何処をどう見たらそう思う？」
「だって、そんなにピッタリくっついてますもの。きっとお互いを大切に想ってらっしゃるのだと感じましたわ」

確かに沙耶を引っ剥がそうとサーガが羽交い締めにしているのだが、どうやらラクスにはそれが……まあ、何というか恋仲的なものに見えたらしい。二人の発言を聞けば違うことが分かりそうなものなのだが、彼女には通じなかったようだ。
兎に角この誤解は双方にとってもマズいのでそれを解かねばならないのだが……。

「サーガさん、離れて」
「まずお前が先輩の寝袋を離せ」
「嫌」

これである。沙耶の優先順位は、もふもふ（実質レジェンド付き）＞

誤解を解くこと。もうレジェンドが起きて寝袋を渡すしかないんじゃないか？
結局サーガは頑なに沙耶が何をしてもガヴァドンなレジェンドを離さないので、諦めて放置することにした。
「……まさか沙耶がここまでふわもふなものに執着するとは……」
「あの、キラ様とダイゴ様で間違いありませんか？」
「あ、はい」
「何か困ったことがあったのかな？」
自分の頑張りをスルーされたことで、本格的にレジェンドと同じ感覚になったサーガも不貞寝しだした。さすがレジェンドに育てられただけあって、やることが一緒だ。
そんな彼らに苦笑しつつ、ダイゴとキラは改めてラクスに何かと尋ねると……。
「私、喉が渇いてしまいまして。それにこういうことを言うのもどうかとは思いましたが、些かお腹も空いてしまって。何か頂けるとありがたいのですけれど……」

☆

プラントではラクスが乗っていた視察船シルバーウインドが消息を絶ったニュースで持ちきりだった。
最高評議会の件でヴェサリウスが帰還していたこともあり、アスラン以下ヴェサリウス所属のクルーゼ隊は皆休暇を取っていたのだが、件の事件があったことで捜索に駆り出されることに。
「しかしまあ、言いたい事だけ言ってさっさと退散しちまうとはな。もうすぐ息子もここに来るってのに、そんなにあの奇妙な二人との会合が大事なのかね、国防委員長殿は」

「さあ……？我々には関係ないことさ。パトリック・ザラがあの連中と何を仕出かそうが。とは言っても、本来こういう急を要する捜索にアズナブル隊を使うべきだとは思うがね」
「同感だ。おかげでファーさんやギアさんとの久しぶりの顔合わせがおじゃんになったんだしさ。まあ、今はキムさんも彼方此方飛び回ってるし、白龍皇だってそんな感じだから、どのみち全員集合とはいかないのはアレだけど」

やれやれとベリアルは溜息を吐き、クルーゼが時間を見ているとアスランが到着する。

「お！お姫様のナイト様がご到着ってな」
「ナイト……？もしや、ヴェサリウスの発進が早まったのは……」
「お察しの通り、俺達はラクス・クライン嬢の捜索に行くことになったのさ。ま、アスランとしては足つきをどうにかしたいところだろうが、上の命令だし我慢してくれ」
「あ、いえ……大丈夫です。しかし、民間船ですし何かあったと決まったわけでは」

アスランがそう言うと、クルーゼは少し考えるような素振りを見せ、何やら頷いた後に口を開く。

「……言い難い事だがアスラン、偵察に出たジンが戻らぬ上、視察船が向かったデブリ帯……つまりユニウスセブンがある場所に、巨大な何かが向かっていくのを確認したという情報がある」
「なっ!?」
「艦船にしては早過ぎ、そしてＭＳにしては大き過ぎるということは判明しているが、詳細は未だ不明瞭。最悪の事態も覚悟しなければならないかもしれんな」
（……ラクス……）

クルーゼが言っているのは当然、スコーピスの事である。彼らは正体を知らないのはともかく、確かに最悪の事態になる寸前であったことに間違いはない。
ティガやジャスティスの事は目撃者がアークエンジェルの乗員とウルトラ騎空団に限られるのでまだ知られていないが、どうやらスコーピスは見られようとお構い無しに飛んでいたようだ。
一頻り会話をした三人はヴェサリウスに乗り込む。果たして命令通りラクスの捜索に向かうのか、それとも――。

薄暗い会議室。そこでパトリック・ザラは二人の人物と会話していた。いや……『二人』と表現していいものかどうかは疑問に残るが。
「大方視察船は連合がどうにかしたのだろう。劣等感の塊で我らのように進化を見据えぬナチュラル共は考えが単調過ぎる」
「その通りだよ、パトリック君。進化し、より高みを目指すのではなく他者を引きずり下ろそうとは実に野蛮だ。そう思うだろう？スティンガー君」
「う、うん。そうだね、コーウェン君。結局時代に取り残された古い生命体なんだ。宇宙に適応した『僕ら』こそ選ばれた存在だよ。パトリック君は理解を示してくれて良かった。君もまた、選ばれた存在だ」
片や、サングラスをした２ｍはあろうかという大男・コーウェン。片や、青い顔をした男・スティンガー。
彼らがクルーゼやベリアルの言っていた二人組である。パトリックに近しい人物（アスラン除く）ならば、パトリックが何かと彼らに相談をしているのはよく見る光景だったりするのだが、何故か今日は

誰にも見られぬよう会議室の明かりを消し鍵まで閉めていた。

「それで、そちらの準備はどうだい？パトリック君」

「うむ。秘密裏に作り上げた新しい小型プラントに、少しずつ移動させている。無論、ナチュラルの捕虜もな」

「さすがだ、パトリック君。我らが同胞の為にそこまでしてくれたことを感謝させて頂こう」

「それはこちらにも言えることだ。進化を促す『ゲッター線』、君達に聞かされねば発見は疎か気付きもしなかっただろう。地球で踏ん反り返っているナチュラル共には理解出来んだろうな、あれの素晴らしさは」

そう言うパトリックの目は狂気を帯びていた。それがナチュラル憎しから来るものなのか、それともゲッター線なるものを見つけた喜びからのものなのかは本人にしか分からない。

そしてコーウェンとスティンガーはそんなパトリックを異様に信頼している。しかし、かつての彼を知る者であれば不審に思うだろう。コーディネイター至上主義ないしナチュラルを徹底して排除する考えであった彼が、ナチュラルなど取るに足らない……どうでもいいなどと考えることに。

同時にこう思うかもしれない。

――あれは本当にパトリック・ザラなのか――

「ゲッターに選ばれぬ旧生命体に進化の資格なし！」

「今に縋る者達に進化の兆しなし！」

「そして進化しようとせん連中に未来なし！我らコーディネイターこそがこの宇宙で至高の存在なのだ!!」

「「そう、進化！進化!!」」

プラントは戦争以上に、恐るべき計画へと巻き込まれようとしていた。

☆

フレイ・アルスターは気に入らないことがあった。婚約者であるサイから、友人のキラがコーディネイターと聞かされた時は動揺したものの、別段彼が何をしてくるでもなし、精々ＭＳに乗って戦っているぐらいで、後は優秀だという以外はあまり騒がないし問題はなかった。

彼女にとって気に入らないのはまずダイゴのこと。付き合いが浅いというのにキラは当然としても、サイを始めとする学生達と驚くほど早く仲良くなっている。

今までは自分が話題の中心になることが多かった為、これだけならただの嫉妬で済むだろう。

しかし、彼が属しているというレジェンド率いるウルトラ騎空団、この存在が彼女にとってアウトだった。

一度見たが列挙していくと、まずタイガらウルトラマンの、ナチュラルでもコーディネイターでもない容姿。これはまあ理解出来なくもない。

続いて、リアスそのもの。赤髪でスタイルが良くお嬢様……まんまフレイと被っているが、どうやら本当の意味で彼女の中にあるカリスマを本能的に感じ取ったらしい。正直、リアスもレジェンド一家やタイガ達と出会わねばフレイと似たような状態になったかもしれないのだが。

そして何より、団長であるレジェンド。アルテミスの一件以来、その活躍を目にした避難民達の噂が彼を中心にしたものばかりになったからだ。キラが懐いているダイゴすら全幅の信頼を寄せ、傍から見るだけでも男女問わず慕われているレジェンドはまるで自分の立場を掻っ攫った元凶に見えていた。

ぶっちゃけ、今まで注目の的だったが故の嫉妬が大半である。

ただでさえそんなドロドロとした感情が渦巻いている場所に、さらに拍車をかける出来事が起きた。

例によってレジェンドがラクスの救命ポッドを拾った（ただし届けたのはゼット）ことだ。
これにより、元々コーディネイター嫌いのフレイのストレスは一段と加速する。
その結果――。

「コーディネイターのくせに、馴れ馴れしくしないで!!」

食堂にラクスを連れてきたキラやダイゴ、そしてどんなメニューが出されているのか気になってついてきた三日月の前で、キョトンとしているラクスにそう怒鳴りつけた。
……しかし……

「俺、嫌いだよ。あんたみたいな奴」
「「「「!?」」」」

三日月から予想もしないカウンター。
ダイゴやレジェンド達との出会いや、ザフトに所属しているミゲルやラスティとの触れ合いを通じ、メンタルが強化されまくっているキラは「あ、彼女は僕と合わないや」とかつての淡い想いなど木っ端微塵に吹き飛んだのだが、よもやフレイと接点の無い三日月が容赦無く言った台詞にラクス以外が皆固まっている。

「な……何を言っ……!?」
「もういいよ。これだけじゃ足りないでしょ。レジェンド様やサーガ様のご機嫌取りして何か作ってもらおう。あの部屋キッチンあるし」

ひょいっとラクス用の食事のトレーを手に取ると、フレイや近くにいたミリアリア、カズイを無視して食堂から出ていく三日月。それに倣う形でキラやダイゴもラクスを押して出ていってしまう。
ハッとなるミリアリアとカズイに対し、フレイは自分が何を言われたのか未だ理解出来ず口をパクパクさせたままだった。

四人がウルトラ騎空団に割り振られた部屋へと戻りながら話していると、三日月がまた不意に口を開く。

「キラと……ラクス、だっけ。二人共よくあれで手が出なかったね」
「え？」
「はい？」
「だってコーディネイターのくせにって言ってたじゃん、あいつ。俺より二人の方が先に反論すると思ったけど」

間髪入れずに三日月がカウンターかましたからだとは思うが、かくいう二人もどうとも思っていないらしい。キラは周りに支えられ、ラクスは天然故に悪意をスルーし……フレイに敢えて言おう、レジェンドやしのぶでなく三日月で良かったなと。あの二人はあんな事を言われたら恐ろしい報復が待っている。

「多分、昔の僕ならショックを受けて引きずってたかもしれません。でも、僕は僕でいいんだって……そう思えるようになったから」
「沢山の人がいれば、それだけ心の形も様々です。あの方がコーディネイターに対しああいった感情を向けてしまうのも仕方のない事だと思います。それに、貴方達は優しいでしょう？私はそれだけで十分嬉しいですわ」

笑いながらそう言う二人にダイゴも笑顔になり、三日月も「ラクスって、クーデリアみたいだな」と、分かりにくいが少し笑っていた。

そんな三日月だが、部屋の前に立つと急に表情を引き締める。

「……」

「……？三日月さん？」

「どうかされましたか？あ！三日月様もお腹が空いてたんですのね！」

「いや、それは……いつもの彼を見てると強ち間違いじゃないかも……」

キラ、ラクス、ダイゴが口々に三日月の様子を気に掛けるが、返答はまさかの……。

「この匂い……麻婆炒飯だ……！」

ラクスが正解だった。何かこの娘凄くないか？別の意味で。三日月は多少息を荒らげて涎が垂れそうになっている。辛い物好きの彼に麻婆メニューは思いっきりぶっ刺さるのだ。

「当たってましたわ」と無邪気に喜ぶラクスに、キラとダイゴは苦笑しつつ、中に入るとミゲルやラスティも混じって食事の用意中なレジェンド一行。

ルリアやアマリはいつの間にかエプロンを着けてお料理モード、ゼットなんかやけに美味そうな出汁巻卵を作っているし……レジェンドは身勝手の極意＋赤褌という謎仕様。プール掃除の時といい、彼の身勝手の極意が真面目に使われたのは悪魔将軍とのファイトぐらいしか思いつかない。まあ、そもそも元が規格外過ぎるのでそうホイホイと実戦で使われても困るのだが。

「「いやいやいやいや!?」」

「あら？キラにダイゴさん、おかえりなさい。でもリアクションが駄

目ね」
「部長、俺はラクスって子に大物感を感じるんですけど」
『相棒の今の姿もソレだからな。歴代で初めてだぞ、大根切るのに禁手使う宿主は』

そう、一誠もまた禁手化（バランス・ブレイク）している。油ハネなどから身体を防御……いや少しずつレジェンドの思考に侵食されつつあるのは気の所為か？

幸いにもタイガはフォトンアースになっていない。

「一誠君も大概だから！チーフが一番アレだけど！」
「姿形はツッコミません！それにツッコんだら絶対に終わらなそうなので！」
「私、こんなに楽しそうな場所始めてですわ！それは何ですの？」
「俺、味見役していい？」

あまりにカオス過ぎる食卓。何やらタイタスやラスティはレジェンドの鍛え抜かれた肉体に尊敬の眼差しを向けている。つーか褌装備してるだけマシだが、服着ろ。

「レジェンドさん、吹雪の中でもその格好で乾布摩擦してたものね」
（（（（何それ!?））））

キラ達は当然だが、しのぶらウルトラ騎空団の一部の者も、かつて空の世界でルリアとアマリを連れ出したばかりの頃、レジェンドが行った奇行をアマリの発言で知り別の意味で戦慄するのだった。

☆

――アズナブル隊母艦・ミダラーン――

『すまぬな、シャア。いつも面倒事ばかり押し付けておきながら、君達に休暇の一つも満足に与えてやれない己が嫌になる』
「クライン議長、気にしないで頂きたい。今の我々にとっては下手に休暇を貰うより、こうして宇宙に出ていた方が気が休まるというものだ」

シャアは自室にてシーゲル・クラインと通信していた。何を隠そう、コズミック・イラで彷徨っていた彼を拾ったのはシーゲルであり、続け様に他のアズナブル隊のメンバーをも拾ったのだ。加えて、シーゲルはナチュラルとコーディネイターを差別しない。
そんな姿勢のシーゲルをシャアは高く評価している。甘い部分も人情味があるみればそこも良く映ると言えるだろう。

「しかしラクス嬢の乗った民間船がデブリ帯で行方不明とは穏やかではありませんな」
『うむ……ただでさえナチュラルとコーディネイターの確執が日に日に強まっている今、民間船とはいえ不測の事態に巻き込まれる可能性は元から懸念してはいたが……嫌な予想だけはこうも当たる』
「では、我々もその捜索に？」
『私としてはそのつもりだったのだが、既にパトリックがクルーゼ隊に打診したらしい。あの部隊にはラクスの婚約者のアスランもいる。それを考慮した上か、別の理由があるのかは分からんが……』

この言葉にシャアは眉をしかめる。シーゲルから、ここ最近パトリックの様子がどうもおかしいとは聞いていたし、シャア自身もすれ違った時に妙な感覚を覚えたぐらいだ。
アスランが所属しているのはいいとしても、態々本国まで戻らせたヴェサリウスをそちらに向かわせるより、デブリ帯に近い自分達の部隊を向かわせた方が時間的にも戦力的にも効率が良いはず。実際、ベリアルもそれで愚痴っていた。

『いずれにせよ、君達はこれまでと同じく自由に動いてくれて構わん。自分で言うのも何だが、軍の運用に関してはあまり得意でなくてな』
「了解した。こちらも足つきを追いつつ、それとなくユニウスセブンへと向かってみよう」
『すまんな……改めて君達の休暇に関しては何とかもぎ取れるよう、こちらでも申告しておく』

こちらを少しでも休ませようとするシーゲルに苦笑しつつも、心遣いをありがたく思い、シャアは通信を切る。

「彼はいい、信用出来る人物だ。しかし、ラウ・ル・クルーゼとその友人とされるベリアル、そしてパトリック・ザラはどうも得体が知れん。何よりパトリック・ザラが作り上げているという新たなプラント……内部に入ってみたいと連絡を入れても返答はなく、直接赴けば門前払い。どうもキナ臭いな」

しかし現状の戦力では調査を強行して窮地に陥った場合、この部隊のみでその状況を脱せるかどうか怪しい。相手側の戦力にもよるだろうが、今はまだ動く時ではないだろう。下手を打てば自分達どころか味方してくれているシーゲルも巻き込んでしまう。

「事はプラント、ひいてはこのコズミック・イラ全体に降り掛かってくるやもしれん問題だ。私達だけでどうにかなるとは到底思えん。アムロ……今の私を見たらお前はどう思うだろうな……」

シャアはアクシズショックで生死不明となった宿命のライバルの名を呟き、静かに目を伏せる。彼の脳裏に浮かぶのはアムロとブライト……幾度となく激突し、時には共に戦ったことのある二人と同じ空気を持った男。
初対面でありながら、自分もそうだったとはいえ本気でないにも関わらず自分と互角に渡り合ったレジェンドのことだ。

話を聞いてくれるかは分からないが、話してみる価値はあると考えたシャアはブリッジへと向かった。

☆

――スペースコロニー・ドラガイト――

「ライ、どうだ？実際動かしてみて」
「良い感じです、アムロ教官」
「やはり無理にサイコミュ関係を積むよりフレーム等の基礎スペックから見直したのが上手く作用したか。元々ナイトロ自体あまり褒められたシステムではないし、レジェンド様の案を採用して正解だったな」

機動兵器用のドックではコズミック・イラへと向かうライ、そしてモニカの為のガンダムデルタカイとリ・ガズィカスタムの調整がアムロ全面監修で行われていた。
当初の予定では既に出発しているはずだったのだが、二人（特にライ）が予想以上に成長していた為に機体の再調整を余儀なくされたのである。

「……でもこれだけ私達向けに調整しても教官には手も足も出ないんですよね……」
「シミュレーターならそれなりにやれるんだけど……」

二人は「この人ならギアスの呪縛状態のスザクをカウンターで叩き落とすことさえ造作もなくやるんだろうな」と考えていた。実際、彼とタイマンでやり合えるのはレジェンドだけだ。大抵はシミュレーターで心を折られ、直接やり合うと機動兵器に乗りたくもなくなるとさえ言われるぐらいに絶望的な力の差を叩きつけられる。
よくよく考えるとこんな人物に訓練をつけられて精神が折れな

かった巌勝やゼットらはその時点で凄まじい。

「そう簡単に超えられては年長者として立つ瀬が無いしな。仮にも教官職と隊長職も兼任してる以上、醜態を晒すと教え子や部下達も低く見られてしまう。無様な結果は出せないさ」

「ホント教官と互角に戦える父さんって何なんだろう……」

「そのへんでやめてくれ、二人共。俺はさすがにあの人みたいな滅茶苦茶な動きは出来ないぞ」

「「それ、どの口が言いますか」」

すれ違いざまに組み付き、四肢を使ってクラッチを固めつつ機体の頭部を引き千切るという、あり得ない動きをνガンダムでやらかしたアムロにハモって言い返すライとモニカ。さすがカップルだ。

何にせよ、機体の調整は今度こそ最終段階に入ったのでそう遠くないうちに出発出来るだろう。

ただ、それでも限界が来るだろうし彼ら用に一から専用機を作る必要があるのは変わりない。コズミック・イラで何か良い案が出ればと思いつつ、アムロは二人と共に機体の調整を急ぐ。

☆

レジェンド達は賑やかな食事を終え、案の定カードゲームをプレイ中。今度はちゃんとレジェンドも服を着ている。

「――そういうわけだから、何も強いカードばかりデッキに組み込めば強いというわけではない。他者から見れば弱小カードであっても、そのデッキ、そしてそのデュエリストにとっては勝利への1ピースだ」

「シンクロとかエクシーズとか、一体一体は弱くても力を合わせることで逆転の可能性を秘めたモンスターを呼び出すことも出来るんでございますよ」

「トワァァァァ!!」

レジェンドとゼットが真面目に説明しているところにフーマの絶叫が響く。それエースの掛け声のひとつじゃね？

「わあ！勝てましたわ、キラ様！ダイゴ様！」
「これはまた、えげつないというか……」
「初心者だから禁止カード一枚ＯＫルールにしたら……」
（（何こんなモンスター平然と出してるの彼女!?））

彼女のフィールドに存在していたのは悪名高き超魔導竜騎士―ドラグーン・オブ・レッドアイズ。調べればその鬼畜性能ぶりは御理解頂けるだろうモンスターで、容赦無くフーマを蹂躙したらしい。一誠やタイガさえ真っ青なワンサイドゲームだったようだ。

「何なんだよコイツ……インチキ効果も大概にしろよ……」
「そのセリフ、色的に別の人が言うべきじゃ……と思ったけどそう考えるよな、確かに」
「デュエルモンスターズ界のマジンガーＺＥＲＯだろコレ」

口々にそう言われるもラクスは嬉しそうに笑っている。単純に心から喜んでいるようだ。
その後ろでは沙耶がレジェンドからぶんｄ……譲ってもらったガヴァドン寝袋に包まって幸せそうな寝顔で爆睡中。三日月はタイタスと一緒に『お願いマッスル』の歌に合わせてマッスルポーズしているという、相変わらず混沌とした状況。

「……超師匠、たまにはガンプラ作りません？」
「そうだな……紛れてサンダーボルトしてそうなＺＺガンダム作るか」
「何すかその名前だけで分かる鬼畜重武装ＭＳ」

一応、平和である。
同時にブリッジでは、アークエンジェルに暗号パルスで通信が入っていた。地球連合軍第８艦隊……知将ハルバートンと呼ばれた連合でも屈指の人格者デュエイン・ハルバートン准将旗下の部隊からだ。これにはクルー達も沸き立っており、少しは楽になると喜びを隠せずにいる。
しかし、彼らは知らない。

「ウジュイカ、レエガミヨ……」

新たなる悪意が迫っていることを。

〈続く〉

消えていく光

遂に連合の部隊――本隊ではないが――と合流出来るとの情報が艦内に通達され、アークエンジェルではクルー・避難民問わずお祝いムードになっていた。

――レジェンド一行を除いて。

「合流はともかく、絶対俺ら目えつけられるよな」

「フーマの言う通りだろうな。連合でもザフトでもない集団が、未知の技術で作られた機体を多数保有し、パイロットも腕利きとなれば尚更だ」

「僕がオーブ所属であることを告げたとしても、最悪矛先がオーブに向かうことになりかねません。おそらくチーフがミナ女史と婚約関係にあると分かれば、そこもついてくる可能性もあります」

「アークエンジェルにとっては味方なんだけどさ。こんな憂鬱になる合流なんて、これから先あんま無いんじゃねーか？」

一誠のボヤキにレジェンド一行は全員同意する。同室かつウルトラ騎空団の受け持ち捕虜なミゲルとラスティも同意見だが、案の定ラクスはポヤポヤしてて何がいけないのか理解していない。

「皆さん、何故嬉しくないのでしょうか？」

「いやラクス様……今の俺ら、立場的に色々ヤバいんですよ」

「一応捕虜だしな、俺とミゲル」

ウルトラ騎空団預かりとはいえ、ラクスはともかくミゲルとラスティは捕虜扱いとなっている。マリューらはまだしも、他の連合の者まで同じ扱いをしてくれるとは到底思えない。

一先ず様子見、最悪の場合は強行突破で脱出してペガサスAに移動することも視野に入れ、レジェンド一行はそのままでいることに決めた。

☆

一方、ヴェサリウスはアークエンジェルとの合流せんとする連合の艦を捕捉し、対処方法について検討している最中。

「……ってことは、やっぱりやるかい？ラウさん」

「ああ。連合の艦というだけなら放っておいてもさして問題はないが、足つきに補給を運ぶ艦であるとしたら話は別だ。足つきにはあの厄介な連中までいるからな」

そういうクルーゼだが、よもやレジェンド一行は自給自足しているなどと思うはずもなかった。精神的な部分を別として考えれば、仮にアークエンジェルの面々が限界でもレジェンド一行……つまりウルトラ騎空団は何ら問題などない。

それにまだしのぶのヒュッケバインＭｋ―Ⅱやアズのヒュッケバイン３０は一度もアークエンジェルから出撃しておらず、他の機体もまだ全力を出していないのだ。

故に彼らが本気で抵抗すれば、ヴェサリウスはひとたまりもなく確実に墜ちる。本腰を入れられる前にアークエンジェルを墜としてしまおうという案は悪くはないのだが、如何せん相手が相手。

クルーゼも口では上記の事を言っているが、実際はアークエンジェルやウルトラ騎空団のコンディションを落とせれば御の字ぐらいにしか考えていなかった。

「仕掛けるんですか？しかし、我々には……」

「アスラン、俺達は軍人だぜ？お姫様だけに構っていられる立場じゃない」

「そういうことだ。ラクス嬢の捜索任務を受けてはいるが、あの艦をみすみす見逃すわけにもいかんのでな」

一刻も早くラクスを見つけたいアスランに対し、クルーゼとベリアルの二人は厳しい言葉をかける。確かにその通りである為、アスランは焦る気持ちを抑えつつ従うしかなかった。
――その結果、あんなものを見るなど彼はおろかクルーゼとベリアルすら思ってもいなかっただろう。

☆

普段ならのんびり過ごしているレジェンド一行だが、刻一刻と迫る連合の艦との合流に内心ハラハラしっぱなしで、全員が文字通り休んでいるだけの状態。
ミゲルとラスティも空気を読んで静かにしている……が、やはり彼女とハロは黙っていない。

「では質問です。私達はどうすればいいでしょう?」
「ハロ!ゲンキ!」
「うふふっ」
「元気だな桃姫はよぅ……」
「まあ!レジェンド様、私は桃姫ではラクス・クラインですと何度も申し上げておりますのに。言ってみて下さい。ラークース、はいっ」
(おい勘弁しろよこの状況でニコニコされながら近付いてこられると突き放し難いだろーが。つーかダイゴその優しい視線やめろキラはどうしたキラは。この桃姫の御守りはあいつが適任だろ)

相変わらずのラクスにレジェンドは若干辟易している。元々担っている重責の違いもあるだろうが、彼女はもう少し自分の立場と危機感について理解すべきだと思う。
サーガはそんなラクスを見て「随分箱入りというか平和な環境で育てられたんだな」と一人納得しているが、横になっているところをゆさゆさ揺らされたレジェンドの額に青筋が浮かびつつあることに気付かない。

さながら、兄（父）に構ってほしそうな妹（娘）という構図。

「あ！私もやります！」
「え？ちょっとルリア!?」

アマリが止める間もなくルリアまで参戦してしまい、いよいよレジェンドから何やら闘気が立ち昇り始めて漸くサーガ達はヤバいと気が付いた。
さすがにこれ以上はまずい、と思い止めようとした時にアラート音とブリッジから戦闘配備の指示がアークエンジェル艦内に響き渡る。

「何だ何だ藪から棒に。つくづくこの艦は俺の平穏を妨げるトラブルに見舞われるようだな」
「あ、レジェンドさん起きた」
「散々揺すられた挙げ句、耳障りなアラートまで聞かされりゃ否が応でも起きるっての」

アズの頭をポンポンとやりつつ、首をゴキゴキ鳴らして立ち上がったレジェンドは、案の定不憫に見舞われた。

『それからストライク、及びメビウス・ゼロとウルトラ騎空団の機体は至急出撃準備！』
「「「「は？」」」」

ガンッ!!

「「レジェンドさん!?」」

さも当然といった感じでウルトラ騎空団まで出撃メンバーに組み込まれていたことに殆どの面々（＋ミゲル、ラスティ）は間抜けな声を出し、レジェンドはズッコけると同時に顔面を壁に強打。アズとア

マリが揃って心配するも、壁に顔を打ち付けたままズルズルと力なくレジェンドはずり落ち、全く動かなくなる。

「お……おい、団長さん大丈夫か？」
「打ち所悪かったらヤベーぞ……！」
「「「「いつものことだから」」」」
「「いつもなのかよ!?」」

先日、ラクスのハロが顔面に激突したばかりだというのにこの有様。コズミック・イラに来てから何かと顔面に（嫌な）縁があるレジェンドであった。

「野ッ郎ォォォ……！俺達はほぼボランティアで出撃してたようなもんだぞ!?何出撃して当たり前と言わんばかりな指示出してんだァァァ!!」
「ちょっ……先輩、何処に行くんだ!?」
「ブリッジの馬鹿共に説教かましてくる！いつまでも俺らに甘えるなコルァァァ!!」

物凄いスピードで爆走し、ブリッジへと突撃していくレジェンドを呆然と見送っていると、格納庫へ向かうキラが声をかけてきた。良いタイミングで入れ違いというべきか、何というか……。
レジェンドがいなくなってしまったので出撃するメンバーをサーガが選定。その結果、タイタスとフーマは当然として、しのぶとアズはまだ乗機を隠しておく意味で留守番、沙耶はガヴァドン寝袋から出てこないし、ロスヴァイセもレジェンドのフォローが必要。
そういうわけで前述のメンバーに加え、ミゲルやラスティにラクスの護衛も考慮して三日月、それに特務大使という立場上頻繁に出撃するわけにはいかないダイゴも残し、サーガ、ルリア＆アマリ、オカ研トリオにゼットで出撃することに決定。

キラを加えたウルトラ騎空団は格納庫へ向かう最中にフレイに呼び止められる。三日月やダイゴはいなかったものの、キラはまた何か言われるんだろうと顔を顰めた。
どうやら襲撃されたのはアークエンジェルではなく先遣隊……つまり合流予定の部隊らしい。しかもその艦にはどういうわけかフレイの父親であるジョージ・アルスター大西洋連邦事務次官が乗っているとのこと。
正直、サーガは「そいつは馬鹿なのか」としか思わなかった。
戦闘力の無い政治家タイプの人間が、向かった先が戦場になるかもしれない軍艦に乗るなど何を考えているのやら。
特務大使であるダイゴは生身でも戦えるし機動兵器の操縦も可能、いざとなれば一人でもどうにか出来る。だが全ての者がそういうわけではない。

「パパの船、やられたりしないわよね？ね!?」
「ＭＳの機動力に対抗可能な戦艦は限られている。懐に入られれば連合の艦では確実に墜ちるだろうな」
「ッ!?」
「サーガさん!?」

フレイの懇願を込めた問いにサーガは普段の調子で答えると、フレイは顔を強張らせた。アマリもそんなサーガの返答に驚きを隠さない。
しかしサーガがベースにした人物――刹那・Ｆ・セイエイの記憶とサーガ自身の経験から生半可な気休めは遅効性の毒にしかならないと理解している。
ならば正直に告げた方がいい。ましてアークエンジェルが狙われているならばまだしも、狙われたのは先遣隊側……しかも既に交戦状態であるならば、結果は悪い方に傾く可能性が高いだろう。

「そんな……何とかしてよ！あんた達ならあいつらをやっつけられるんでしょ!?」
「相手による。シャア・アズナブルが出てきたらまともにやりあえるのは今回の面子なら俺しかいない」
「ッ……ならあのレジェンドって男はどうしたの!?あいつそのアズナブルって奴を追い返したんでしょ!?何でいないのよ!!」
「元々俺達は連合と何の関係もない。ただ偶然乗り合わせただけだ。それをあたかもアークエンジェル所属のように言われて頭にきたらしく、ブリッジまで説教しに行っている。説教というより文句だろうが」
「何よそれ!?そんなことより――」
「いい加減にしろ!!」
「「「「!!」」」」

突然の怒声にフレイのみならず近くにいたキラ達までもビクッとなる。サーガは強く言うことはあれど、実はレジェンドより沸点が幾分高い。そんな彼がここまで大声かつ怒りを含ませる事は殆ど無いのだ。

「お前は何とかしろ何とかしろと他人に頼るばかり……！だというのに殊勝な態度どころか『自分に関することが優先』とばかりに他者を無理矢理動かそうとする！戦うということが……命のやりとりをするということがどれだけ覚悟を伴うことなのか、分かっているのか!?」
「そ……それは……」
「戦えなくてもいい、戦える者が戦えば問題はない。だが戦わないから自分に責任はない、何を言っても構わないなどと言うわけでもない。言葉は時として兵器にも勝る危険な力を持つ、それを頭に入れておくんだな」

行くぞ、とサーガは他のメンバーを急かして格納庫へと走る。当の

フレイはその場にへたり込み、キラはそれを一瞥するとサーガ達の後を追った。

――アークエンジェル・ブリッジ――

「巫山戯るのもいい加減にしろ!!このタコ!!」

サーガに続き、レジェンドの怒声がアークエンジェルのブリッジに響き渡る。連合所属のクルーは本気で身を震わせ、学生達も怯えており、ミリアリアなどは涙目になっていた。言っておくが彼女や学生らは悪くない。

「非常事態なのは理解したが此方側、せめて俺に連絡の一つも入れるのが筋だろうが!!」

「も……申し訳ありません!ですが――」

「戦闘宙域という死と隣り合わせの場所へ、責任者の許可なく送り出そうとしたことにグダグダと言い訳を重ねるな大馬鹿者!!」

「「「すっ……すみませんでした!!」」」

……もうマジでレジェンドがアークエンジェルの最高責任者じゃないのかと錯覚しそうなぐらい、マリューどころかナタルさえも立ち上がって頭を下げていた。

レジェンドが一誠達に指示を出すのと、マリュー達が一誠達に指示を出すのでは大きく意味が違ってくる。

レジェンドが出す場合は『組織として』で済むが、軍属であるマリューらが彼らに指示を出した場合は『(一応)民間組織への命令』になってしまう。おまけに彼らが属するウルトラ騎空団の団長であるレジェンドの許可を得ずに行ったとあればそれこそ大問題だ。

「戦力が少ないことぐらい今までの戦闘で十分理解している。フラガ

にでも伝言させて頼めば俺も無下に断るような真似はしない。命を預かっているのはお前達だけでなく俺もだということを忘れるな」

彼とて冷酷無情なわけではない。礼儀には礼儀を持って返しているだけで、今こうしてブリッジまで怒鳴り込んできたのは不義を働いたからである。

でなければアルテミス到着前にシャアが攻めてきた時、ウルトラ騎空団の面子だけを連れてペガサスＡへと移動して早々に離脱していただろう。

怒鳴ったことで一先ず落ち着いたのか、まだビクビクしているクルー達にレジェンドは冷静な声色で叱咤する。

「いつまでそうしている気だ。さっさと気持ちを切り替えろ！状況報告！」

「「「「は、はいっ!!」」」」

かつてレジェンド指揮の下、惑星レジェンド防衛戦が行われた時に出撃したアムロが彼をこう評したことがある……『あの方は乗機が無いなら下手な機体に乗せるより、指揮官として旗艦から指示を出した方が勝率的にも士気的にも良いだろう』と。実際、アークエンジェルもウルトラ騎空団に所属しているわけではないというのに、クルーは素直に指示を聞いている。

……かの母港ではレジェンドの指揮で逆に昂ぶり過ぎてポンコツ化するような面々もいたぐらいだが、その話はまた今度。

「成程、イージスが出ているものの残りはジン……出撃メンバーにもよるが、さして危険視するようなレベルの相手ではないな。ベリアルも出てくる気配はない……別の任務のついでか？」

『こちらサーガ。先輩、落ち着いたか？』

「ああ。世話をかけてすまんな」

『俺達を思ってのことだと分かっている。事は迅速に行う必要がある

というのは理解した。都合良く俺以外にゼットも出撃メンバーに入れておいて正解だった』
「いい判断だ。ゼットはウェイブライダーで先行し撹乱。大方先遣隊とやらをアークエンジェルへの補給を行う艦だと考えたんだろう、連中はどうやっても先に先遣隊の艦を墜とすことを優先するはずだ。出来る限り意識をこっちに向けさせろ」

ゼットの「了解！」というハッキリとした返事を聞いて、他のメンバーは誰なのかもサーガから伝えられたレジェンドはテキパキと指示を出した。
ゼルガードをアークエンジェルの護衛に回し、一誠とリアス、そしてタイガはチームを組ませ、ある程度自由に動いてもらう。その為、今回は量産型ゲシュペンストＭｋ―Ⅱ改は一誠が最も得意とするタイプＧへ換装。リアスの援護を受けつつ、タイガとコンビで前線を張る。

「格納庫より通達！全機の発進準備完了、とのことです！」
「よし、ダブルオークアンタとＺを優先して出撃。ゼルガードは護衛だから一番最後で構わん、アークエンジェルの距離が相手とは大分離れているからな」

☆

ヴェサリウスの方でもアークエンジェルの乱入は確認されていた。
「本命のご登場だ。雑魚にあまり時間をかけるなよ！ベリアル、君はどうする？」
「連中の到着とあらばジンは勿論だがイージスだけじゃ厳しいな。俺もちょいと出張ってくるよ」
「そうか。シャホールの準備を急がせよう」
「助かるぜ。それとこいつは俺の勘だが……どうも良いことと悪いこ

とがいっぺんに起こりそうな気がする。ラウさんも周りに気を配っててくれ」
「ほう……？了解した、くれぐれもそちらも注意してくれ」
「オーライ」

そう返事をして格納庫に向かうベリアル。アデスもクルーゼ同様それを見送ったが、彼は気付いていない。確かに「良いことと悪いこと」とベリアルは告げたが、問題は『彼らにとって』だということを。

☆

アークエンジェルから先行して出撃したダブルオークアンタとZガンダムによって、ジンとイージスは護衛艦の一隻であるバーナードを沈黙させたあたりで攻めあぐねていた。
ウェイブライダーに変形したZガンダムの撹乱は元より、ダブルオークアンタがGNソードビットを展開しGNフィールドを形成したことで残るモントゴメリとローに攻撃が通らなくなってしまったのだ。

「何だこれは!?」
「アスラン！何か知らないのか!?」
「あの粒子を放出している機体はまだ不明な点が多い。それにイージスと同じ可変機構を持つ機体……奴はミゲルをやった奴だ！」
「何だって!?くそっ、ならミゲルの弔い合戦だ！」
「気をつけろ！奴はデュエル、バスター、ブリッツの三機を同時に相手して圧倒した程の手練だぞ！」

アスランの警告に三機のジンのパイロットは愕然とする。補充要員として乗艦した彼らはそんな奴がいるなど初耳だった上、件のストライクや他の機体まで出てきたとあっては一気に旗色が悪くなった……と思いきや、ベリアルの駆るエゼキエル・シャホールが到着。

「「「ベリアル参謀！」」」
「オーケー全員生き残ってるな。上々上々、連中の相手はマトモにやったらバカを見るぜ。程々にして撤退するぞ。残りの艦を意地でも墜とそうとして俺達やヴェサリウスがやられちゃ洒落にならない」
「しかし、足つきが補給を受けたりすれば……」
「おいおいどうした、アスラン？当初お前さんはこの攻撃に異を唱えたじゃないか。どんな心境の変化だ？」
「それは……」
「ま、それはどうでもいい。どっちにしろ、足つきから出てきたのが連中の全戦力じゃない。撤退しなきゃ御陀仏になるだけさ。ここでそうなるのは御免だろ？」

ベリアルの言うように、自身とベリアルを同時に相手をしたSガンダム、ヘリオポリスで見たバルバトスやガンダムX、それにアズナブル隊を退ける活躍をしたアルトアイゼン・リーゼにライン・ヴァイスリッターも出てきていない。特にアルトアイゼン・リーゼのパイロットは明らかに格上だ。それが分からぬアスランではない。
アスラン達は知らなかったが、クルーゼとベリアルは事前に打ち合わせしていた。『一度引いたように見せかけて再度強襲する』――そのために撤退すると。

ベリアルが加わったにも関わらず、先程までとは打って変わって消極的な戦い方になるザフトをゼットは怪訝に思う。
「どうもウルトラ腑に落ちないぜ……自爆撃墜覚悟で突貫してくるわけじゃなし、かといってすぐにスタコラ逃げ出すでもなし。何考えてんだ？」
こういうのを見る度にレジェンド達は「普段からそうやって考え

ろ」と思うのだろうが、生憎言って直るようなゼットではない。
しかしこういう時、しかもＭＳに乗っている状態のゼットは異様に勘が冴えるのだ。
「押しても駄目なら引いてみろ……で、引いてから押す作戦か？」
正にその通り。何という洞察力。よもや狡知の二つ名を持つベリアルも、普段が普段だけにゼットが見抜くなど予想外だろう。
とりあえず、ウルトラ騎空団専用の回線を使い、団員全員へ連絡しておくゼット。
「あーあー、こちらウルトラマンゼット。皆さん聞こえますです？」
『どうした？』
「あ、超師匠。実はですね、これ多分ザフト一旦引いて、ダブルオークアンタが展開したＧＮフィールドを解除したらまた攻め込んでくるんじゃないかと」
『そういうことか。あのゴツい奴のキャノン砲なら撃ち抜ける可能性が無くもないが、構えてから撃つまで防御が疎かになる上に、あくまで『可能性がある』だけだ。奴らが一度撤退したら代わる形で俺や三日月が出る。付け入るスキが無ければ奴らもすぐには攻め返しては来ないだろう。イージスのバッテリー問題もあるからな』
奪われた機体がバッテリータイプで良かったと考えるのはどうかと思うが、まあそれで助かっているのだから文句は無い。
暫くするとジン三機とイージス、エゼキエル・シャホールは撤退していき一先ず窮地は脱した。すると間髪入れずにモントゴメリから通信がアークエンジェルへと入ってくる。
『アークエンジェル！見事な働きだった！いや、大したものだ！』
『ランデブー中止の命令を無視したことは褒められたことではないが……助かったのも事実だ、感謝する。しかしストライク以外はこちら

でも把握していない機体のようだが』
「諸事情からアークエンジェルへ同乗している方々独自の機体だそうです。ですからあまり追求しないで頂きたいのですが……」
『無論だ。気になるかどうかで言えば気になるがな。助けられた側である以上、無理に問い詰めたりはしない』

モントゴメリ艦長のコープマン少佐がジョージ・アルスターと共に労いの言葉をマリューらに掛ける。一時はどうなるかと思ったが、無事に合流出来たことにマリューやナタルも漸く安堵の息を吐いた。
しかし、まだ完全に安心することは出来ない。クルーゼ隊が形振り構わず突撃してくる可能性もあるし、アズナブル隊が強襲してくるかもしれない。
そうマリューらが考えていた時、ブリッジでどこかを見ていたレジェンドが叫ぶ。

「おい先遣隊!!今すぐ可能な限り小型艇に乗り込んで脱出しろ!!」
『は?何を言っ「早くしろと言った!!間に合わなくなるぞ!!」……いきなりどうしたと言うんだ?』
「どうしたもこうしたもない!!今は俺の言葉を信じろ!!でなければお前達は食われる!!」

戦闘時の冷静な時や日常でツッコミを入れる時でもない、切羽詰まった表情で言うレジェンドだがそれを信じたのはウルトラ騎空団のメンバーやキラ、そしてムウやマリューなど極僅か。
他の者は意味が分からないという反応や、この状況で何を心配しているのかと笑うようなもの。そこへ、やはり心配で我慢出来なかったフレイがアークエンジェルのブリッジへ入ってくる。

「パパは……!?」
『おお!フレイ!』
「パパ!良かった……無事だったのね!」

『勿論だとも！この通りだ！もうすぐ――』

それは、その時に現れた。
いや……当にすぐ傍まで来ていたのだ。
そしてそれは――

モントゴメリとローに覆い被さるように突如としてその異形の姿を現した。

「「「「!?」」」」
『『『『うわあああああ!!』』』』

異形の化け物の触手によって近くに引き寄せられていたモントゴメリとローは、その化け物に少しずつ呑み込まれていく。戦艦の外壁やブリッジ部分を触手が力任せにぶち破り、内部の人間へと魔の手を伸ばす。火花が散り、爆発が起こり、悲鳴が木霊する地獄絵図。
離れていたアークエンジェルやウルトラ騎空団は被害を受けていなかったが、その光景はあまりにも壮絶すぎた。

「いやあああああ!!パパ!!パパァァァ!!」
「何だ……!何なんだあれは?!」

フレイは泣き叫び、ナタルすら恐怖で身をすくませ、他の者達も吐き気を催したり歯をガチガチと鳴らしたりと眼前で起こっている事態を飲み込めずにいる。

『総員退艦!脱出だ!!』
『総員退艦!!脱出!!脱出ーッ!!』

既にローは呑み込まれ、僅かに見えた隙間から乗員が黄色い液体で溶かされる光景を目にしたアークエンジェルのクルー達が口元を抑えつつ必死に艦を動かそうとするも、恐怖のあまり全員手元が震えていた。

ヴェサリウスでも異形の化け物にモントゴメリとローが『食われて』いく様は確認されていた。
アークエンジェルと同じく、クルーの誰もがその悍ましい光景に戦慄している中、クルーゼとベリアルだけは冷静な面持ちでそれを見ている。

「あれが噂に聞く『怪獣』とやらかな?」
「そう……と言いたいが、何というか別のカテゴリに見えるんだよな。後でギアさんに聞いてみるよ。この手のことに関してはウチでも随一だから」

アスランとアデスすら畏怖する化け物を前にして、尚この二人は普段と変わらなかった。

モントゴメリの格納庫――メビウス数機と小型艇数機が発進しようとしている。もはやモントゴメリの乗員で生き残っているのは今ここにいる者達だけ。あとの者は既に『食われた』。
辛うじて格納庫まで来れたコープマン少佐やアルスター事務次官らは無事であったメビウスや小型艇に急いで乗り込んだのだ。

「一体何なんだあれは!?何の情報も無かったのかね!?」
「あるわけ無いでしょう!あんなもの、連合のデータを遡って調べても存在しません!」
「では何だと言うのだ!?」
「それが分かればこんな事にはなっていません!ともかく今は脱出することが最優先です!!」

コープマンとアルスター事務次官の言い合いはコープマンによって強制的に終了。納得がいかないアルスター事務次官ではあったが、確かにその通りであるため黙らざるを得ない。

「発進!」
「発進ッ!」

次々とメビウスや小型艇が発進する。命というものは危機的状況で信じられない力を発揮するものだ。

だが、現実はそれをいとも容易く打ち砕く。
発進口は既に触手が先回りしており、発進したメビウスや小型艇は絡め取られてしまう。

「うわあああ!!」
「駄目だ！力が予想より遥かに強い!!」

もはや太刀打ち出来ないと思い知らされた連合の兵士達は抵抗を止め、次々と食われていく。コープマンとアルスター事務次官の乗った小型艇も餌食にならんとしたその時、触手が何かによって斬り裂かれた。

「ううっ!?」
「何だ!?何が起こった！」

「うおおおおっ！」

先の戦いでモントゴメリとローを守っていたダブルオークアンタが触手をＧＮソードＶで斬り裂きながら小型艇へと到着したのだ。
触手の再生速度や量が多い為、出撃していた各機の援護を受けながら突き進み、どうにかここまで到達出来たのである。

「誰でもいい無事なら返事をしろっ!!」
「おお……！あの機体は!!」
「こちらモントゴメリを脱出した小型艇！本機は……本機だけはまだ健在だ!!」
「たった一機だけか……！だがそれでもッ!!」

ダブルオークアンタはＧＮソードビットを射出し、小型艇をＧＮフィールドで覆いつつ、迫りくる触手を切り払いながら小型艇と共にその場を脱すると、同時にモントゴメリが化け物にゆっくりと呑み込まれる。
その光景を見てゾッと身の毛がよだち、しかし本当に助かったという安堵感がコープマンやアルスター事務次官らを包んだ。

直後、何かがダブルオークアンタや小型艇とすれ違うようにその化け物へと凄まじい速度で向かっていく。

「今のは……!?」

『サーガ様！レジェンド様が止める間も無くアルトアイゼン・リーゼで……』

「何っ!?」

アルトアイゼン・リーゼで出撃したレジェンドは異形の化け物に対し、普段からは信じられない程の怒りと憎しみを込めた視線で睨みつけつつも冷静であった。

ガキン！とリボルビング・バンカーの撃鉄を起こして構え、ブースターを開放し加速度を上げたアルトアイゼン・リーゼは、他の何も気に留めず一直線に化け物へと突撃する。

「貴様は……貴様らだけはただでは済まさん……！円盤生物!!」

そう、レジェンドの怒りと憎しみの原因は相手が円盤生物……それも、ある意味最も因縁深い相手とも言える『シルバーブルーメ』であったからだ。

アルトアイゼン・リーゼはシルバーブルーメの小さな本体部分目掛けて寸分の狂いなくリボルビング・バンカーをブチ込み、六発分のカートリッジを全て炸裂させる。

苦しみながら触手で迎撃してくるシルバーブルーメだが、アルトアイゼン・リーゼは明らかに常人では不可能な動きで回避行動を取りつつ、両肩のアヴァランチ・クレイモアを全弾発射。ここで本体は兎も角触手の量と大きさが仇となり、シルバーブルーメに全弾直撃する。

しかも本体が傷付いていたとあって再生速度が低下していたのか、5連チェーンガンで追い打ちを掛けられたシルバーブルーメは勝ち目が無いと理解し逃げることを選んだ。

「逃さんっ!!」

レジェンドはアルトアイゼン・リーゼのリミッターを解除し、さらなる加速を持って追撃・撃破しようとするも、円盤形態のシルバーブルーメはそれすらも凌駕する速度で振り切り地球へと向かっていった。

加えてゼットと一体化している為、互いに一定以上の距離を離れられないこともあり、シルバーブルーメを逃してしまう。

「くそ……!抜かった……ッ……!」

悔しさに歯を食いしばり、操縦桿を強く握り締めて震えるレジェンド。だが彼も転んでもただでは起きない。即座にアメノミハシラと地上のオーブ、二箇所に緊急で通信文を送りシルバーブルーメの脅威を伝える。

かつてのＭＡＣと同じく宇宙にあるアメノミハシラが心配になったが、先のダメージに加え進行方向が地球であったことを考えると、そちらへ向かうことはまず無いだろう。となればやはりシルバーブルーメとの戦いは地上にいる者達に託すことになる。

自分の不甲斐なさ、そして自身の指示をまともに取り合おうとしなかった連合に苛立ちを隠せぬまま、レジェンドはアークエンジェルへと帰投する。

さらに、案の定再度攻勢に出たヴェサリウスに対し、ナタルがラクスを人質代わりにして攻撃を中止させたことを知ったのも、彼が帰投したのとほぼ同じタイミングであった。

〈続く〉

分かたれた道

――アメノミハシラ――

先日の『鬼』に続いて出現した新たな脅威『円盤生物』……レジェンドより齎された情報を見たゲンは、厳勝ら強者さえも息を呑む程の怒りを静かに放っていた。

(円盤生物……それも『奴』が連合の艦と乗組員を捕食し、チーフの機体による猛攻を凌ぎ地球へと向かった……俺には分かる。チーフがどれ程無念だったかを)

かつてＭＡＣが全滅した際、唯一脱出することが出来たゲン＝レオと、不在だったことで難を逃れたレジェンド。奇しくもあの時とは立場がそのまま変わった形である。

ただし、今回は脱出というより遭遇したのち本格的な直接戦闘をしたのがレジェンドのみ(サーガは救出活動、他はその援護だった為)ということだが。

あの時はその場にいれば、そして今度は変身出来ていれば――レジェンドはそう思ったはずだ。ゼットと一体化したのは自分の意志だと言っていたし、その点でゼットを責めるような事はしないだろうが、逆にその事でゼット自身が気に病む可能性もある。そのフォローはさすがにレジェンドに頼む他ない。

(だが円盤生物、貴様はミスを犯した。あの時と同じ個体が蘇ったのか、それとも別個体なのかは知らんが……俺もチーフもあの時より成長している上、こちらの戦力も以前の比ではない。たとえ地球に行こうと好き勝手やれるとは思うなよ……!)

――この後、シミュレーターにてゲンはレジェンドから『万が一に』と託されていた自身の機体・ゴッドガンダムのデータをインストールし、鬱憤を晴らすかのようにサバイバルモードで無双したという。

レイトいわく『頭部を破壊する技が、頭部を基点として全身爆発させてくるヤベー技になってた』らしい。

☆

時は少し遡り――アークエンジェルの格納庫。

シルバーブルーメにより、人員も含めほぼ全滅に近い形になってしまった先遣隊。生き残ったのはコープマン少佐とアルスター事務次官を含めて僅か数人という大惨事。

そしてその小型艇を受け入れている最中に、やはりザフトは仕掛けてきた。このままでは救出した彼らの命が失われてしまうと思ったマリューらはどうにかしようとするも、よりによって格納庫で受け入れ作業をしておりアルトアイゼン・リーゼも離れていた為に万事休すの状態。

そんな時、何を血迷ったのかフレイがラクスを無理矢理ブリッジまで連れてきて『これ以上攻撃するならこの子を殺すと言え』と言ってきたのだ。

恐らくやっと助かった父親が死んでしまうかもしれないという恐怖から起こした行動なのだろうが、彼女はこの時点で二つのとんでもないことをしでかしていた。

一つは文字通り『民間人を盾にした』こと。

もう一つは――ラクスを連れ出す際、止めようとしたダイゴを突き飛ばし机に後頭部を強打させ、しかもぶつけた時に少し切ってしまったようで流血もあった。あまりに予想外の行動だった為、三日月達も咄嗟に反応が出来ず後手に回ってしまい、フレイの暴挙を許してしまうこととなったらしい。

特に二つ目はその場にいなかったレジェンドやサーガ、キラ、それにアークエンジェルに乗っていないとはいえグランの怒りを買うこと間違いなし。しかもレジェンドはシルバーブルーメの件で気が立っている。ついでにサーガは先刻説教したばかり。

そんなことは露知らず、ナタルはこの機に乗じてラクスを保護して

いる（保護したのも面倒を見ているのもウルトラ騎空団だが）ことを宙域に放送し、言い方を柔らかくしたとはいえフレイの言ったことをヴェサリウスへと伝えた。
結果として攻撃は一時的に止めさせられたものの、シルバーブルーメの件に続き多くの者の心に傷を残す事になってしまう。
……この時点で浮かれていたのは、アルスター父娘ぐらいであった。

☆

「一難去ってまた一難……どころじゃないか。こりゃ連合のイメージがますます悪くなっていくな」
「そんな軽口を叩いてる場合かよ！あの子はアイドルっつってもガチの民間人だろ!?」
「少なくとも副長はそう考えてないみたいだぜ？確かに現プラント最高評議会議長シーゲル・クラインの娘ってだけで、普通の民間人とは言えないってのは合ってるが」
「けど！」

尚も食い下がる一誠にムウはどうしたもんかと困り顔で頭を掻く。考えてみればザフトのミゲルとラスティにせよ民間人のラクスにせよ、元々ウルトラ騎空団が拾ってきて面倒を見ているわけで。
いくら状況が状況だったと言っても、特務大使のダイゴに傷を負わせてまでラクスを連れ出し殺す発言をしたフレイは勿論、それに便乗したナタルも恐らくタダでは済まないだろう。
（俺達が弱いからこうなった、なんて考えてたが……ウルトラ騎空団はコープマン少佐達の救出やあの化け物の対処でてんてこ舞いだったしなあ……というか俺らが責められても仕方ないだろ、これ）

正直フレイが余計な事をせず、マリューらも落ち着いて対処してい

れば三日月とバルバトスが出撃し、ジン三機撃墜とイージス戦闘不能はほぼ確実だったはず。
最近出番無いとぶーたれてたぐらいだし、下手したらベリアルのエゼキエルすら墜としてた可能性すらある。

「……何の騒ぎだ、これは」
「「「「!!」」」」

そんな会話をしているうちにレジェンドが戻ってきたものの、普段の彼でも戦闘中の彼でもない、静かな怒りを燃やしているような雰囲気を纏っていた。
当然、シルバーブルーメ関係で苛立っている状態なのだが……タイミングが最悪すぎる。
仕方ないとリアスがレジェンドに一連の出来事の説明を行う。

「実は――」

アークエンジェル全体を圧倒的な何かが支配した。言うまでもなく、レジェンドの怒気である。何かあっても対処出来るようにと事前策を用意しており、三日月もスタンバイしていたにも関わらず、勝手な行動を取った連中……それに対する怒りを収めろというのは無理な話だ。

「例によってあの我儘娘か……！」

今回ばかりは皆サーガの意見に同意。父親が心配でもやっていいことと悪いことの区別くらいつくだろう、という考えが甘かったのは認めるが、行動が斜め上過ぎた。
ちなみに当のアルスター父娘は再会を喜んでいるが、そんな姿を今のレジェンドが見たら割と冗談抜きで鉄拳を飛ばしかねない。

「ブリッジでその放送をしたのは誰だ」
「へ？」
「誰だと聞いている」
「ヒッ……！た、多分バジルール副長かと……」

整備班の一人が怯えながらレジェンドの問いに答え、それを聞いたレジェンドはゆっくりとブリッジに歩を進めていく。
――あれはヤバい――
付き合いの長いサーガはそう思ったが、自業自得だとマリューらを見捨てることにした。一番逆鱗に触れたのはナタルだろうが、それを（半ば強制的に）許したマリューにも雷が落ちる確率は高い。
尚、他の面々はレジェンドのブチ切れ具合を見たことで逆に怒りが収まり、返って冷静になれたらしい。良いのか悪いのか……。

☆

ヴェサリウスではラクスがアークエンジェル（というよりウルトラ騎空団）に保護されていると聞き、やむを得ず攻撃中止したもののどうにか奪還出来ないのかと頭を悩ませていた。
ただし、クルーゼとベリアル以外。この二人にとっては彼女の無事如何など些末な問題でしかない。
（あの娘が乗っていると知らない間に墜とせていたら楽だったんだけどなあ……ラウさん）
（全くだ。その方が後々の面倒も省けたし、良いプロパガンダにも

なったのだが）

あわよくば偶然を装って始末し、その死を利用しようと考えている。弟であるガルマ・ザビの死を利用し士気高揚の策とした、かのギレン・ザビと同じ思考……いや、ジオンの勝利という目的があったあちらと違い、この二人は連合もザフトも被害を被ってしまえ的な思考なので尚の事タチが悪い。

「ん？ちょっと待てよ……そういやあの足つきに乗ってるぶっ飛び軍団、月艦隊と合流されると連中にとっても面倒なんじゃないか？」

「ベリアル参謀、それはどういう意味ですか？」

ベリアルの言葉にアデスが気になったように尋ねる。アスランも訳が分からず首を傾げるが、クルーゼだけは理解した。

「よく考えてくれ。元々連合はアークエンジェルとストライクさえ秘匿して作っていたぐらいだ。そこにあの連中が偶然とは居合わせて乗艦したわけだが……」

「連合とて一枚岩ではない。未知の技術を使った未知の機体と、それを扱う凄腕のパイロット……そんなものが徒党を組んで自軍の艦に同乗していたとあればタダでは返すまい。そうだろう？」

「ビンゴ。さすがラウさん、よく分かってらっしゃる」

パチンと指を鳴らし、御名答とクルーゼを指差すベリアルにクルーゼも口角を上げる。

「まさか……！ラクスを見捨てるんですか!?」

「そうは言ってないさ。ただ、ある意味合流されたとしてもチャンスがあるってことだ。アスランも知ってるだろうが俺も連中とは因縁があってね、もし強制的に従わせようとしようものなら連中は逆襲するだろうさ。で、混乱に乗じて強襲し、お姫様を奪還しつつ二重の意

味で慌てふためく連合をドカン！……てな」

ベリアルの案では確実に乱戦になるだろう。混乱に乗じて行動出来るのはザフトだけではなく、独自の目的があるクルーゼやベリアルもなのだ。

戦場がそういう状況であれば流れ弾だの何だのでも十分言い訳が通用するし、『作戦を無視した隊員が命令違反をした結果こうなった』と報告することだって出来る。運良く奪還して無事に帰っても問題は無し……つまりクルーゼとベリアルはこの策を実行して得をすることはあれど、デメリットは殆ど無い。

「そういうわけで、焦って考えるなよ。お姫様が心配なのは分かるが、無茶な奪還を強行して目も当てられない結果にはなりたくないだろ？」

（そう、どう転ぼうが私達にとっては問題ではないのだよ）

渋々引き下がるアスランと、ガモフとの連携を考慮に入れて再度考えるアデスを余所に、狂気を秘めた二人は静かにほくそ笑んだ。

☆

割り当てられた部屋よりダイゴ達ウルトラ騎空団の部屋に入り浸っているキラは、パイロットスーツから着替え終わると、偶然出歩いていた三日月と一緒に部屋へ向かっていた。

途中、フレイの蛮行を聞いて「やっぱり僕と合わないと思ってたけど、さすがに酷過ぎる」と苛立ちを隠さずまたも三日月と仲良くなる。

そして食堂の前を通ると話題のアルスター父娘がサイや他の学生と話し込んでいたので、そのままスルー。サイやトール達はいいのだが、アルスター父娘と顔を合わせるとダイゴやラクスの事が絡んで嫌な気持ちになるのは間違いないからだ。

しかし、そういうときに限って――。

「あ！キラ！……と、三日月……さん？」
「キラ、どうしよう。俺ついでみたいに言われたんだけど」
「ぶっちゃけ僕より三日月さんの方がキャラ立ってると思うんですけどね」

ミリアリアに声をかけられた。扱いに不満気な三日月と苦笑するキラを前にして、フレイはバツが悪そうな表情になる。少なからず罪悪感があったのはまだマシなのだろうが、キラとしては早くダイゴの見舞いに行きたい。

「ごめん、ミリィ。僕達やらなきゃいけないことがあるから。それじゃ、また後で」
「え？あ、うん。引き止めてゴメンね？」
「大丈夫だよ。行きましょう、三日月さん」
「うん。あ、キラは辛子とわさび、どっち派？」
「う～ん……メニューによるかな。でもおでんに辛子は必須ですよね」
「分かってるじゃん」

和気藹々と話しながら去っていく二人に「私達より仲良くなってる気がする」とミリアリアも笑う。キラがどうこう言わないし、自分達が蒸し返すのも良くないだろうとアルスター父娘以外の面々は無言で意思疎通。

許したわけではない、というか許す理由が思いつかないぐらいだが、キラは勿論として藪をつついて蛇を出すどころか悪魔を出してきそうな三日月を下手に刺激する必要も無いだろう。

そんなほんの少しだけ穏やかな艦内――

――なら良かった。
別の区画ではレジェンドが異常な怒気を隠さずマリューやナタルを問い詰めていた。助けられた側のコープマン少佐は隅で小さくなっている。

「お前達は聞いていたはずだ。俺や三日月が代わる形で出るとな。俺だけ先行して出てしまったのは反省すべきだとは思うが、何故小型艇の搬入作業を冷静に行えない？」
「そ……それはラクス嬢の身の安全と――」
「脱出してきた連中の安全も確保したかった、と？ならば尚の事その場であの我儘娘を取り押さえて三日月の出撃を待てばよかった。不測の事態があったらしいが、それでもあいつは自分の受けた指示を実行しようとスタンバイしていた。だというのにお前達が馬鹿げた放送をしでかした結果、それが無駄になり状況は悪化したんだ」
「「あ、悪化!?」」

マリューとナタルは驚きの声を上げ、コープマンもどういうことかと目を見開く。

「人質は無事だから意味があるんだ。もしあの桃姫に何かあってみろ。それこそこの艦、ひいては地球連合軍全体が『自分達が助かるためなら民間人を躊躇なく人質にし、犠牲とする連中』というレッテルを貼られ、そこいらの一般人からも敵意を向けられかねないんだぞ。『何かあれば自分達も盾や交渉材料に利用されるかもしれない』という疑心暗鬼状態になって、最悪『やられる前に殺れ』と極端な思考にならんとも限らん。こんな御時世だしな」

そうなれば補給云々どころではない。日常的に一分一秒一瞬でも気を抜けば銃弾が全方位から飛んでくることも極論では有り得てし

まうのだ。正直アークエンジェルの面々にそんな覚悟があるとは思えない。戦争において人質作戦というのはそれこそ成否関係なく軍全体に影響が出るものである。
かのデラーズ紛争にてシーマ・ガラハウがエギーユ・デラーズを人質にし、降伏を迫るもデラーズ自身が死を覚悟して指示を出して撃たれたものの、逆にデラーズの死がデラーズ・フリートの士気を高めた。
結果としてコロニー落としは成功するなど、相手に闘志を燃やさせることになる場合も多く、大抵は失敗して相手の怒りを増幅してしまうだけ。
故にレジェンドはそういった方法を好まず、相手に人質作戦を取られようものなら自身の規格外スペックをフル活用して真っ向から無力化と奪還を行ってしまうぐらいである。

「しかもよりによってあの悪知恵の回るベリアルと、やけに頭の切れるクルーゼとやらの隊にやったのもマズイ。人質が桃姫だからといって、あいつらがこのままバカ正直に矛を収めていると思うのか？」
「「え？」」
「クルーゼの方はいざ知らず、ベリアルは適当な理由を付けて桃姫ごとこの艦を撃沈することも考えられる。そんなベリアルを参謀にするような奴だし、クルーゼとやらも似た者同士な気がしないでもないが」

そんな馬鹿な事を、とマリューらは思うも因縁があるらしいレジェンドの言葉は説得力がある。ましてや彼女らはベリアルと直接会ったことがない為、それはないなどと言い切ることも出来ない。
「ついでにだ。これは別にお前達が悪いわけではないが……今後の事を考えて忠告しておく。先のザフトの一時撤退から円盤生物……あの化け物の襲撃による先遣隊全滅、そしてザフトの再襲撃。一連の流れから目撃した連中が今回の事で口を滑らせた場合、『あの化け物は

プラントが作り出した新しい生物兵器』と連合側が誤解するかもしれん。もしそうなれば今以上に泥沼化するぞ。早めに箝口令を敷くなり何なりしなければ、この手の話は恐ろしいほど急速に広まるからな」

言いたいことだけ言ってレジェンドは踵を返す。何やら呼ばれているが、後の事は自分達で考えろとばかりに無視して退出する。怒鳴られるより迫力があったものの、どうにかその場を乗り切った……と安堵する間もなく、自分達の置かれた境遇に頭を悩ませるマリュー達であった。

ちなみにその後、空気が読めずあっけらかんとしたムウが入室した際、マリューとナタル、おまけでコープマンは少し苛ついたらしい。

☆

一方、隠れてアークエンジェルに追随しているペガサスAでは、不穏な空気が漂っていた。その理由とは……。

「……チッ」

「な……何か勇治さん、機嫌悪くない？」

『マスターは軍というものが嫌いなのです。特に先の戦闘で放送したような、民間人を盾にするような軍人は尚更。無論、全ての軍や軍人が嫌いというわけではありませんが』

「理由は……聞かない方がいいみたいだね」

『お心遣いに感謝します』

勇治の機嫌が仮面越しにも分かるほど悪いからである。先のように舌打ちしたり、片手で頬杖をつきながらもう片手の人差し指でコンソールパネルをカンカンと凄まじい速度で叩いている。何かを操作しているわけではなく、単純に苛立ちを表す動作だ。

これには彼の過去が由来しているのだが、おそらくアークエンジェ

ルにレジェンド一行が乗っていなければ、確実にクルーゼ隊より先に撃沈させていたんじゃないかと思われるくらい腹を立てていた。

「……シエル」

『何でしょうか、マスター』

「今度あの船からふざけた放送が流されたら最大出力のメガ粒子砲を叩き込め。ブリッジに撃ち込んでも構わん」

『了解しました』

「ちょっと待ったあああ!?あれにはレジェンドさん達乗ってるよね!?シエルもなんで了解しちゃってんの!?」

「心配ない。連中がバカやらなければいいだけのことだ」

「やらないと言い切れないから心配なんですが!!」

なんとまあ信用のないアークエンジェルのクルー達。仕方ないといえば仕方ないが、先刻の出来事の発案が民間人だとしてもレジェンドや勇治より更にお人好しと言われる流にまで『やらないと言い切れない』と思われているのは如何なものか。

連中が勇治の地雷をこれ以上踏まないよう祈りつつ、ご飯待ちしてるアリゲラに食事を用意する流であった。

ちなみにエースキラーは就寝中、リムエレキングは充電器に乗っかって充電中。盛大にやらかしたシルバーブルーメとは違い、実にほのぼのした光景だ。

☆

アークエンジェルの一室、ウルトラ騎空団に割り当てられた部屋ではダイゴがしのぶから治療を受けている。傍にいたのにフレイを止められなかったとアズが落ち込んでいるが、沙耶はガヴァドン化してたのでそう落ち込むこともないと思う。

「はい、これでよし。暫くは安静になさってくださいね」

「ありがとう。しかし僕も鈍ったかな……」
「敵意はあっても完全に敵というわけではなかったので仕方ないですよ。私も咄嗟の事で動けませんでしたし。ロスヴァイセさんとアズさん、それに沙耶さん……は、アレどう言えばいいんでしょうか……」
「チーフが言っていたんだけど、あれは人をダメにする寝袋みたいだね」

加えて沙耶のふわもふへの執念。それが今回悪い意味でファイナルフュージョンしてしまったらしい。未だに起きない。
そこへ次々と出撃したメンバーが帰ってきて、最後にレジェンドと三日月、キラが到着。すっかりウルトラ騎空団の一員と言われたら納得してしまうほど馴染んでいるキラはさておき、明るかったラクスが顔を俯かせている。ダイゴが怪我をした責任を感じているようだが、彼女は利用されただけで原因はフレイの方だ。

「申し訳ありません、ダイゴ様……私の所為で、お怪我を……」
「君の所為じゃない。僕の油断と、鍛え方が足りなかったんだ。仮に僕の代わりにチーフだったらまず突き飛ばされないだろうし、机にぶつかったくらいじゃ怪我もしないだろうから」
「待て、ティガ。先輩では例えが極端過ぎる。ここはレオを引き合いに出した方が的確だ」
「いやスンマセンサーガ様、師匠も例に挙げちゃ駄目じゃないかと思うんだけど。俺が未熟過ぎだったっていっても神器で倍化した一撃を顔面に食らったのに、無傷でカウンターしてくるんスよ？」

円盤生物に殺意を抱く人物ツートップは何やら理不尽な例えにされている……が、事実だから何とも言えない。つーんと拗ねているレジェンドをアマリが宥めている。ルリアはラクスの方をだ。
そんな彼女を見て、キラは一人決意する。彼女をここに置いていては駄目だと。
ウルトラ騎空団は良いのだが、彼女にとっては一歩ここを離れれば

敵陣も同様の状態。何かあってからでは遅い、そう考えたキラは反対されることを承知でレジェンド達に自分の思っている事を告げた。

「あの……皆さん」

「む、どうした？もしや細めの身体に筋肉を付けたいと思ったのか？」

「さすがにこの状況でそれはねぇだろ旦那……キラは確かに細いけどさ」

「そろそろ沙耶さんを起こしたほうが良くないかしら？」

タイタスとフーマのやり取りはともかく、リアスの言う通りだろう。どうやって起こすかと一行は考えていたら、レジェンドが無言で沙耶の鼻をつまんだ。

「……」

「……うう……」

「「「「地味だけど効果覿面……！」」」」

中々シュールな絵柄だった。改めて言っておくが、沙耶は月王国の女王である。女王がそんなでいいのかと思うだろうが、先代女王も色々はっちゃけたりしているので言うだけ無駄だとレジェンドは判断。実力行使で叩き起こすのが一番らしい。

「俺ではあまり効果が無かったが……」

「団長さんだからじゃねーの？」

「「「「ああ……」」」」

サーガの呟きにラスティが言った一言は周りを納得させるのに十分だった。シンプルイズベスト。愛は強し……いやこの行為が愛かどうかは疑問だが。

それはさておき、漸く起きた沙耶も交えてキラの話を聞くことにする。

「僕は……彼女を、プラントへ帰そうと思います」
「キラ様？」
「貴女はここにいるべきじゃない。ダイゴさん達は違うけど、ここにいれば貴女はまた利用されてしまうかもしれない。僕は嫌なんだ！こんなの……」
「駄目よ」
「「「「!?」」」」

ミゲルやラスティはキラの判断を讃えようとしていたが、反対の声がまさかの沙耶から出たことに殆どの者は驚きを隠せない。

「ッ……どうしてですか!?彼女は民間人で！」
「落ち着きなさい。私は別に彼女を帰すことに反対してるわけじゃない」

……と思ったらそうではなかった。毒気を抜かれたキラや他の者達がポカンとする中、沙耶は反対した真の理由を話す。

「貴方は仮ではあっても一応地球連合の預かり。彼女を返すにしても独力では不可能だからどうしてもストライクを使うことになる」
「軍とは色々面倒でな。軍のものを勝手に持ち出して違反しようものなら最悪銃殺刑は免れん」

銃殺刑、という言葉にその場の誰もが真っ青になるが、ミゲルとラスティは軍属のためそれが当然であることに納得している。ましてアークエンジェルやストライクは徐々に連合内部に知られ始めているとはいえトップシークレット扱い……そんなものを持ち出せばどうなるかは一目瞭然だろう。

「でも、脱出ポッドに乗せるのだって結局はバレてしまうし……」

「安心しなさい。私が送り届けるわ」
「「「「!!」」」」
「ウルトラ騎空団である私なら連合に属しているわけではないし、異性とコックピットに二人きりというのもアレでしょう？他の子は戦力的に隠しておきたいとか、フォローが必要とか色々あって厳しいみたいだし、その点私なら単独で問題ないもの」

それに元々ラクスはウルトラ騎空団預かり。ならばウルトラ騎空団所属の沙耶が彼女を引き渡そうが何の問題もない。レジェンドが締め上げた上で忠告したわけだし、また今度難癖をつけてこようものなら今度は本格的に脅しに移行するだけ。特に沙耶の煽りスキルは半端ないため、こちらにとってプラスになる言質を引き出しそうでもある。

そんなこんなでドンドン決まっていく『ラクス返還計画』。キラは自分と同じ気持ちを持つ人々がいることをありがたく思いつつ、これだけは言っておこうと口を開く。

「ありがとうございます、沙耶さん……ただ、一つだけ」
「何かしら？」
「その格好（ガヴアドン寝袋）のままだから台無しです」

キラの言葉にレジェンドを含む一同、満場一致で頷いた。

「……だって、ふわもふなんだもの……」
『トリイ！』
「「「「は？」」」」
「「「「え？」」」」

機械的だがどこか可愛らしい鳴き声が聞こえ、発信源を探すとすぐに見つかった。意外に近い場所――キラの背中辺りから、緑色の小さなロボット鳥が姿を現したのである。

幼年学校時代にアスランからキラへ送られた鳥型のロボット『トリィ』――まんまなネーミングだが、可愛いので良しとしよう。

「わあ！可愛いです！」

早速ルリアが食いついた。ビィみたいだからもあるだろうが、その動作はごく自然なもので本物かと思うような出来だ。

「ほう？小型で精巧、かつ飛行出来るロボットか。飛行出来るロボットというのは色々難しくてな。小型であればあるほどその難易度は上がる。これを作った奴は大した腕だ」

その飛行可能なロボットをポンポン作るレジェンドや束はどうなんだとツッコまれそうだが、レジェンドがアスランのくれたものを褒めてくれたことにキラは嬉しくなった。

「これはアスランが……昔とても仲が良かった友達がくれたものなんです。あのイージスって機体に乗ってた……」

「アスラン……もしかして、アスラン・ザラですの？」

イージスの事を聞いて事情を知っている一誠やリアス、タイガにゼットは俯く。ゼットもあの場では問題なく振る舞っていたが、彼としても思うところはあったようだ。

それはそれとして、ラクスが何故アスランを知っているのかが疑問である。一応クルーゼ隊が有名だと言うのは分かるが、彼女の感じからして親しい人物のような雰囲気を感じた。

「アスランを、知っているんですか？」

「アスラン・ザラは私がいずれ結婚する方ですわ。優しいけど、とても無口な人」
「はわっ!?」
「この世界って婚約が流行ってるのかしら」

まさかの衝撃発言にルリアは驚き、沙耶は冷静に見えてレジェンドとミナの事があったばかりなので内心穏やかではなかった。
かくいう沙耶自身、立場上縁談は多かったのだが……養母である先代女王を始め、その側近であるヤプールや排熱大公、妖精騎士らが問答無用で握り潰していたので沙耶自身はそれを知らない。
様々な呪縛から解き放たれた先代女王らが「沙耶にも普通の恋愛をしてほしい」と願っていたからだが、何処その大企業のトップが年齢を考えずに『自分が』縁談を申し込んできた時は本気でブチ切れてしまい、『はや辿り着けぬ理想郷(ロードレス・キャメロット)』をぶっ放したそうな。絶妙な力加減のおかげで死にはしなかったものの、そのトップは全治数ヶ月の重傷を負った。
閑話休題。
皆が驚く中、プラントの事情を知るミゲルとラスティが理由の一端を語る。

「プラントでは婚姻統制ってのがあってさ。俺達コーディネイターは世代が進むに連れて出生率が低下してるんだ。だから好む好まない関係なく、定められた者同士で結婚して子孫を残し、コーディネイターという種の存続と繁栄を狙ってるらしい」
「……他人事とは思えないわね」

リアスも当初はライザーとの結婚を『悪魔社会のため』と無理矢理させられるところだった。それを一誠やカナエの活躍もあって白紙に戻され、今はこうして『自分達が得たものを未来へ受け継がせていく』ことのために異世界修行へ赴けるほど自由に生きている。

「婚姻統制でも当人同士が文句なかったり、望んでいれば問題は無いんだがな。生憎俺は家族を養うことばかりで無縁だったが」
「え？ミゲルってそういうのいないのか？面倒見いいし、モテると思うんだけど」
「さっきも言ったが家族を養うので手一杯、しかも就職先が軍だぜ？仮にそういう相手が出来ても、ろくすっぽ会えなくて婚約取消とかになる可能性だってあるんだ」

むしろハズレ物件だろ、とミゲルは言うがラスティとしては「相手も軍人なら良いんじゃね？」と考えている。

「しかし婚姻統制……そこまでしないと子供が出来んとは……その点で言えばミナは子供の有無は気にしなかったな」
「ミナって誰？」
「ロンド・ミナ・サハク、俺の婚約者だ。成り行きでそうなったが、意外にも馬が合ってな。ウルトラ騎空団の面々も割とあっさり受け入れた」

今度はキラにミゲルやラスティ、ラクスが驚くことになる。よもやオーブの五大氏族として有名なサハク家の女傑と、目の前の人物が婚約しているとは予想出来るわけがない。

「は!?いや、え、ちょっ……マジで!?サハクって言ったら俺らでも聞いたことあるぞ!?」
「ゼット……お前の超師匠、ホント何なんだ？」
「いや何なんだって言われても……」
「ダイゴさん、本当なんですか？」
「うん。最初はチーフも頭抱えてたけど、少ししたら普段の調子に戻ってさ」
「まあ！お二人共大変仲が宜しいんですのね！」
「「「「最後だけ何かズレてね？」」」」

良いのか悪いのか、ラクスはそれを聞いてもいつも通り。だからなのかもしれない。その後に出てきた彼女の言葉は、キラとって心の清涼剤になるようなものだった。

「お二人が戦わないで済むようになれば、いいですわね」

☆

「――よし、これで準備完了だ。ライ、モニカ。世界座標を入力すれば、レジェンド様の光気を辿って近くまで次元転移出来る」

「ありがとうございます、アムロ教官。ていうか束博士に近付いてきてますよね、教官の技術力」

「これで生身での戦闘力まで上がったらそれこそ九極天レベルですよ？」

「さすがに老師達のレベルには辿り着けないさ」

「「あの人と比べちゃいけません」」

苦笑するアムロだが、二人の言うように東方不敗は今や宇宙空間でも問題なく生身で活動し、星間連合の一個師団を壊滅させる正真正銘の化け物である。あの縁壱でさえ「老師と素手でやり合いたくはない」と零すほどだ。

何にせよ、ライ専用のガンダムデルタカイとモニカ専用のリ・ガズィカスタムの準備は終わった。あとは持っていく荷物をまとめて出発すればいい。

二人は一刻も早くコズミック・イラへと向かうべく、ホテルに戻り出立の準備を始める。

「父さんからの定時連絡だと向こうにも怪獣が出たらしい。そもそも地球外生命体に対してあまり耐性がないみたいだし、向こうでそっち方面に戦力となるのは父さん率いるウルトラ騎空団か、もしくはダイ

ゴさんが縁を結んだオーブって国ぐらいだってさ」
「奇しくもウルトラマンの一人と同じ名前の国なのね。でも、国一つしか対抗戦力が無いとなると余程の技術力や人材が無いとすぐに限界が来るわ。おそらくはウルトラ騎空団に所属してるメンバーがテコ入れしてはいるんでしょうけど……」
「どっちにせよ、早急に戦力の拡充が必要だってことだね。あっち側で参考になる機体があれば外見映像だけでも送って欲しいって言われてるし、俗な言い方になるけど僕らの専用機の元になるような見た目の機体が出てくることを願うよ」
「それで敵じゃないなら万々歳よ」

翌朝、改良型デヴァイサースーツに着替え専用のヘルメットを用意してドラガイトのドックへと向かったライとモニカは、アムロだけでなくニールにも一緒に見送られドラガイト……そして惑星レジェンド系を暫定的な専用機で飛び立った。

☆

皆が寝静まり、一部の者以外が交代で番をしているアークエンジェル。ウルトラ騎空団とキラによる『ラクス返還計画』が実行に移される。手順としてはこうだ。
①ラクスをパイロット用更衣室まで連れ出し、着替えさせる（無論女子が）。
②直接実行メンバーである沙耶、及び仮の追撃役であるキラがラクスを連れて格納庫まで向かう。他のメンバーは一部を除き、万が一に備えて三名が無事見つからずに格納庫まで到達出来るよう、他者の注意を引く。
③沙耶がラクスと一緒にガンダムXのコックピットに入り起動シーケンスを終えると同時に、彼女らに追随した一部メンバーで発進口を開け、リニアカタパルトをスタンバイ。その合間にキラが「沙耶がラクスを連れ出そうとしている。自分は止めたが生身では力及ば

ず」という体でストライクによる追跡を願い出る。
④理由が理由だけにキラの申し出は断られないだろうし、ガンダムXをあくまで形式的にストライクで追跡する。沙耶の方はヴェサリウスの方へラクスの引き渡しを告げ、条件として引き渡しに来させる者をアスラン・ザラに限定。かつその他の条件諸々も合わせて告げる。ストライク到着後は「今撃てばラクスに当たって大事になる可能性がある」とライフルを構えたまま二機は待機。
⑤ラクス引き渡し後、キラとアスランを会話させる。選んだ道にもよるが、あとはガンダムXとストライクが揃って帰投。マリューやナタルらが何かを言ってきたら「元は自分達が保護して面倒を見ていた」点を突いてレジェンドが物申す。ついでにそれにも関わらずラクスを人質扱いしたことも問い詰める。
※場合によっては避難民その他も合わせてペガサスAへの移動も考える。
これでミッションコンプリートというわけだ。運頼みな部分もあるが、ある意味今回では敵地内からのスタートみたいなものだし仕方ないだろう。
早速沙耶はラクスを連れて更衣室へと入る。その周辺をさり気なく他の女性陣が行ったり来たりして警戒。幸い、人が通らなかったことでそっちの方は問題なかったのだが……ラクスの衣装はスカートが大きめのふんわり仕様だったため、脱いだあとに無理矢理お腹の辺りに押し込んだら「何ヶ月？」みたいな外見になってしまった。

「ルリア様、アマリ様、それにアズ様もありがとうございました。また一緒に遊んで下さいね」
「はい！ラクスさんもお元気で！」
「それは無事に帰れて、また会えたときにね？」
「レジェンドさん達も用意してるから……二人とも、気を付けて」
「ええ。あとは任せて」

短い間にすっかり仲良くなったルリアはラクスとの別れを惜しみ

つつも、笑顔で送り出す。アマリとアズも気遣いながら沙耶とラクスの無事を祈った。
それから同じくパイロットスーツに着替えたキラと合流するが、予想通り一瞬ポカンとしたあと頭を振って正気に戻り格納庫へと向かう。
整備目的ということで事前にガンダムXは格納庫に用意してあり、コックピットも開けてある。整備班も眠りこけており、敵意さえなければ大きな物音を立てない限り起きないだろう。
三人を待っていたのはレジェンドとダイゴ、そして万が一ラクス引き渡し後に予想外の事態が起きた際、即座に出撃出来る戦力として三日月。

「さ、もう少しだよ……と、最後にチーフからラクスちゃんにプレゼントがあるんだ」
「私にですか？」
「お前、キラやダイゴと一緒にデュエルモンスターズやってただろ。その時に作ったデッキと予備カード、それからデッキ強化の為のパックやストラクチャーデッキその他諸々が入ってる。向こうに帰ってから怪しまれて勝手に没収されないよう、中が分かるクリアケースだから中身云々は問題ない」
「しかもパックってBOXのままじゃん。いいな、それ」
「ハロも一緒だが持てるか？一応固定用のホルダーも付いてるから、無理そうなら後で沙耶に付けてもらえ」

何かと面倒をかけられたレジェンドだが、結局彼は口では何だかんだと言いつつ優しいのだ。キラやダイゴとワクワクしながら組んだ思い出が残るそれが入ったケースをしっかり抱き締めつつ、ラクスは三人へ礼を告げた。
「ダイゴ様、三日月様、そして……お兄様、僅かな時間でしたがとても楽しかったです。他の皆様にもどうか元気でとお伝え下さい」

「チーフ、お兄様だって」
「日に日に増えてくね、妹枠。ラクスは純粋に妹的感情みたいだけど」
「三日月、後半どういう意味だオイ」

ユーリ達紫天一家を始め、兄呼びで恋愛感情持ちが多いからなのだろうが……最後までいつものノリの彼らにラクスは小さく笑い、同時にもうこの掛け合いが見れなくなることを寂しく思う。
しかし、いつまでも感傷に浸ってはいられない。沙耶はラクスを連れコックピットに入り、それを見届けたレジェンド達も最後の準備に入る。
ここで定石通りマードック軍曹達整備班が目を覚ました。

「あ……!?おい！何してる!?」
『悪いけどちょっと出掛けてくるわ』
「はあ!?」

ここで漸くキラの出番だ。

「マードックさん！」
「坊主！」
「あの、沙耶さんがあの子を返すって……！勝手にやったら問題になって、貴女の立場が悪くなるからって言ったんですけど……あの人も身体能力が凄くて振り切られたんです！」

（演技で）少し息を切らせながら言うキラをマードック他整備班も信じたのか、その後に続いたストライクでの追撃許可を現場の判断で出すことに。
エアロックを開けるレジェンドが「計画通り」とほくそ笑んだのは内緒だ。それはサーガやレイトがすべきことのような気がする。何故かは分からないが。

ブリッジでもそのことはすぐさま伝えられた。アドバイザーとして先の先遣隊の生き残りであるコープマンもそこにいる。

「沙耶さん？が出ようとしてるですって？」

『しかも嬢ちゃんまで一緒なんだと！俺が格納庫についた頃には準備が終わって、坊主がそれを追いかけようと……駄目だ！もうエアロック開けられちまった！』

「何だと!?」

「その沙耶という人物は？」

「ウルトラ騎空団所属の人物です。妙に弁が立つというか、我々にあまり良い感情を持っていないと言いますか……」

マリューからそう言われたコープマンは、先の事態から尚の事こちらには悪印象しか無いだろうと推測する。この場合、下手に止めればアークエンジェルを標的にしかねない。

「……ブリッジから呼び掛けるより、ストライクに追跡を任せた方が無難かもしれん。ウルトラ騎空団……彼らは生身でも各々が十分過ぎる戦闘力を持つのだろう？もし彼女の行動が彼らの総意だった場合、妨害すれば逆に彼ら全員を敵に回す可能性もある」

「それはっ……でしたら、団長であるレジェンドという人物を問い詰めて――」

「バジルール少尉、先刻の事を忘れたのか？既に我々は人命優先という名目で彼らが保護した民間人の少女を許可なく人質同然に扱っている。これ以上ことを荒立てれば、それこそ取り返しのつかない事態へと発展するぞ」

コープマンに言われマリューもそれに同意、格納庫のムウも納得する。正直、ウルトラ騎空団を敵に回したとすれば間違いなくアークエンジェルは敗北・撃沈もしくは奪取されるだろう。しかもキラが離反

する可能性だってある。それを考慮したナタルは、仕方なくストライクへと望みを託すしかない。
尤も、キラもこの引き渡しに関わっている以上、その望みが叶うわけが無いのだが。

☆

「足つきからのＭＳ発進を確認！」
「はあ？」
「ストライクではなく、ヘリオポリスで確認された機体です！」

相変わらずストライク以外で出てくる機体が定まらない、訳の分からん艦だとアデスは思う。今回に限っては出撃タイミングも理由も不明……ますます頭を悩ます案件だ。
戦闘配備を打診しつつ、ＭＳ部隊に発進準備をさせようとしたところ、発進してきた機体――ガンダムＸから放送が伝わる。

『こちらウルトラ騎空団所属のＭＳ、ガンダムＸ。ラクス・クラインを同行、そちらに引き渡すわ』
「「「「!?」」」」
「おや、アレのパイロットが女性とは予想外だ」

まさかの事態にヴェサリウスのブリッジは騒然とするが、何処ぞ発禁天司は機体のパイロットが女性であることに注目していたりする。脈無しなのは分かりきってるだろうが、本人もそこはどうでもいいらしい。

『ただし、ナスカ級は艦を停止。イージスのパイロットが単独で来るのが条件の一つ。破られた場合、彼女の生殺与奪の権利はそちらが放棄すると見なし、引き続きウルトラ騎空団の方で預かることとする』

そこで終われば引き渡し後に間髪入れず攻撃を再開出来ただろうが、月王国の女王である沙耶はそこまで甘くない。

『それから引き渡し後、ナスカ級はイージスのセンサー範囲外まで後退。さらに本機や本機を追ってきているストライクがアークエンジェルへと帰投するまで、イージスはその場で待機。これも条件よ。安心しなさい、引き渡し後はこちらもこの場では攻撃しないし、させもしない。尚、この条件開示後、イージスが出撃してきた場合はこれを呑んだものとする。しっかり考えてから答えを出しなさい。迅速にね』

「……こいつは一本取られたな」

「ああ。どうやっても我々には追撃させない気らしい。あのパイロット、女性とはいえ駆け引きというものを知っている」

敵なのが惜しいな、とクルーゼは呟く。艦長のアデスとしては完全に信じることは出来ないのだがラクス、そしてキラも来るということを聞いたアスランが黙っていられるわけもなく、行かせてほしいというのでクルーゼやベリアルは行かせることにする。

ここで別の策を強行して今後の動きを制限されるより、今回ばかりは引き下がろうと考えたのだ。

同じ頃、アークエンジェルでもガンダムXを囮にザフトへの攻撃を進言していたナタルだが、運悪くブリッジに入ってきたレジェンドに聞かれ――ブリッジ全体にレジェンドが殺気を充満させつつ、額に青筋を浮かべて彼女の胸ぐらをつかむという事態が巻き起こっており修羅場になっていた。それを彼らは知る由もない。

☆

程無くしてヴェサリウスからイージスが発進し、引き渡しのためのポイントへと向かうとガンダムXは静かにシールドバスターライフルを構える。同じくして到着したストライクは、ビームライフルを構

えつつも予定通りラクスに当たると大事になるとアークエンジェルへ伝え、一時的に通信を切った。

「コックピットを開き、名を名乗りなさい」

沙耶のその言葉に、アスランは素直にイージスのコックピットを開いて所属と名前を名乗る。

「ザフトのクルーゼ隊所属、アスラン・ザラだ」
「キラ、彼がアスランで間違いないかしら」
「はい」
「次は貴女ね。ちゃんと話して、自分が本物だと証明なさい。偽物や影武者と思われて撃たれでもしたら大変でしょう」
「分かりましたわ」

キラとラクスの声にアスランは少しだけ身を強張らせるも、ガンダムXのコックピットが開いてその中からクリアケースとハロを抱えたラクスがいつもと変わらぬ笑顔で声を掛けてきた。

「こんにちは、アスラン。お久しぶりです」
「ッ……確認した」
「なら彼女を連れていきなさい……ってこのままじゃ少し不安かしら。ラクス、軽く押し出してあげるから彼に受け止めてもらいなさい。貴方もいいわね？」
「え？あ、ああ……」
「お願いします、沙耶様」

まさか敵にそんなことを言われるとは思わず、素っ頓狂な声を出したアスラン。それを見ていたキラはクスッと笑い、ラクスは沙耶に押されて宇宙空間をゆっくりと進みアスランに受け止められた。やっぱりお腹の部分を見て驚いたのは言うまでもない。

「色々とありがとう。キラ、ウルトラ騎空団の皆様……それにアスラン、貴方も」
「次からはしっかり護衛を付けなさい。今回のような運の良いことになるとは限らないのだから」
「はい、肝に銘じます」

にっこり笑うラクスと、本当に分かっているのか不安な沙耶を見つつ、キラは沈黙を守る。そんなキラに対し、アスランが呼び掛ける。

「キラ！お前も一緒に来い！」
「……！」
「お前が連合……地球軍にいる理由がどこにある!?それに貴女も！危険を承知でラクスを引き渡しに来てくれるような貴女が地球軍にいる必要はない！俺も全力で弁護を――」
「僕だって……君とは、戦いたくない。だけど……」

キラの脳裏に浮かぶのは、共に学んだトール達学友。複雑な立場にいる自分を肯定し、真っ先に庇ってくれたダイゴ。そしてレジェンドを始めとするウルトラ騎空団や、捕虜的な立場ながら親交を深めたミゲルやラスティ。
まだ出会い、過ごした時間は長くはない……しかし、とてつもなく濃密で充実した時間。そんな彼らがいるアークエンジェルをキラは見捨てたり出来るわけがない。

「あの艦には守りたい人達が……友達が、大切な人達がいるんだ!!」
「ッ……ならば仕方がない……次に戦う時は、俺がお前を撃つ！」
「僕もだっ……！」

お互いに譲れぬものがある。守りたいものがある。故に、手を取り合いたくとも出来ない――そんな状況に歯痒さを感じつつ、沙耶も返

事を返す。

「私もそちらには行けないわ。でも一つだけ勘違いしないでほしいのは、私達は成り行きで貴方達と戦っているけれど地球連合に協力してるわけじゃない。ただ降り掛かる火の粉を払っているだけよ」

「それは……」

「貴方も見たでしょう？あの化け物を。きっとこれから先、貴方達はこれからあんな化け物を何度も見ることになるわ。私達ウルトラ騎空団はあれらと戦うためにこういった戦力を保持しているの」

「何だって……!?教えてくれ！あれは何なんだ!?」

「先生は円盤生物と言っていたわ。気を付けなさい。あれはナチュラルやコーディネイターなど関係なく襲ってくる」

それだけ言って沙耶はガンダムXを反転させ、ストライクを伴いアークエンジェルへと帰っていく。

アスランとラクスは沙耶に告げられた事実に衝撃を受けつつ、小さくなっていく二機を見えなくなるまで見つめていた。

この日――キラとアスランは袂を分かつ。

同時にアスランは知る。この世界に現れ始めている恐るべき存在（モノ）達を。

〈続く〉

宇宙（そら）と月

ラクスを引き渡し、ストライクと共にアークエンジェルへと戻った沙耶は案の定呼び出しを――されなかった。

ナタルの発言を聞いたレジェンドは、尋常ならざる怒気と共に「アークエンジェルを避難民等の一部乗員を除き敵対艦及び組織として認定する」とまで言い出したのだ。それを聞いてマリューやコープマンは一瞬で血の気が引き、ナタルを諌めると同時に他のクルー共々ブリッジで土下座するという、傍から見たら実に珍妙な光景を作り出すこととなった。

勿論、度重なる出来事で臨界点を突破したレジェンドの怒りが収まることはなく、ここで一部情報開示――沙耶がやんごとなき身分の者であることを告げ、今回の出来事をそちらに報告する、と『警告』。

ぶっちゃけあの親バカ炸裂の先代女王、これを聞けば確実にレジェンドから教わった『次元間超越魔法』を駆使してアークエンジェルを撃沈するべく動くだろう。

ただし、レジェンドや沙耶らが降りた瞬間。

沙耶も沙耶でレジェンドが受けた被害を伝えるだろうし、そこまでされたら側近や護衛を引き連れ先代女王自ら乗り込んでくる可能性もある。

ヴェサリウスの追撃を一先ず避けられたアークエンジェルであったが、己等のしでかしによってそんなものが可愛く思えるような『借金』を抱えることになった。状況故にナタルは現状維持となったものの、マリューとコープマンから散々責められ肩身の狭い思いをすることになる。

ついでにヘラヘラしてたムウは、通りかかったしのぶから青筋浮かべた笑顔の突きを一発股間に受け、暫く悶絶＋男として機能しなかったらしい。

ラクスがいなくなったことに一抹の寂しさを感じながら、ウルトラ

騎空団に割り当てられた部屋に戻ったキラを待っていたのは、ザフトに属しているミゲルやラスティからの感謝の言葉だった。

「ラクス様のこと、ありがとな。大変だっただろ、冷たい飲み物でも飲んで緊張解せよ」

「お疲れさん。俺もミゲルも何もしてやれなかったけど、キラが無事で良かったぜ」

アイスココアを差し出して労ってくれるミゲルと、背中をポンポン叩き帰還を喜んでくれるラスティ……二人の言葉は今のキラにとって何より嬉しい。

「部屋、戻りづらいだろ。団長さんがここにいていいってさ」

「あの人は……また、ああなったけど」

そう言ってラスティが親指で差す方向には、再びガヴァドン寝袋に収まる沙耶がいた。あまりに幸せそうなので、苦笑しつつ三人はダイゴも交えてデッキ談義を始める。

それから少し経ってからだろうか。フレイを除き、トール達キラの学友らがウルトラ騎空団の部屋を訪れるようになった。最初は緊張していた彼らだが、ミゲルとラスティの人となりやウルトラ騎空団のアットホームぶりを直で感じると、瞬く間にそれも無くなっていく。

「わあ～……沙耶お姉様可愛い。ふふっ」

ミリアリアはガヴァドン寝袋に収まって眠る沙耶を見ながら笑い、トールはラスティに羨ましがられた。

「良いよな～美少女が彼女でさ。俺らなんて出会いの一つもないし、

あったとしても婚姻統制絡みで自由恋愛なんて出来ないし。くっそ、アスラン次会ったらジャーマンスープレックスしてやる」
「え？そのアスランって人、もしかして婚姻統制でも勝ち組？」
「そう！そうなんだよ！」

何やら白熱している二人。確実にアスランはラスティと再会した時、プロレス技をかまされることになるだろう。
一方、サイとカズイはミゲルの話を聞いて感慨深く感じている。身の上に感じるものがあったのだろうが、ミゲルはそんなことを気にせずキラにしたのと同じく飲み物を渡す。

「二人とも、紅茶はいけるか？俺はちょっとばかりこれには煩くてな」
「大丈夫です。頂きます」
「あ……お、俺も」
「熱いから気を付けろよ。ま、紅茶は淹れたてが一番なんだが、そこは人によるだろうし」

サイとカズイに紛れて三日月も飲んでいた。しかも腰に手を当ててグイーッと。「いやそれ違うだろ」とミゲルも加えた三人は爆笑。
レジェンドは『食は世界を救う』をモットーの一つとしているが、今の光景は正にそれだ。ナチュラルとコーディネイター、連合とザフトの壁も関係なく笑い合えている。

「そろそろ飯にするか」
「はいはーい！私、ピザが食べたいです！」
「ウソ!?ここってメニューリクエスト出来るの!?」
「ミリアリアさん、そこに食いつくの!?」
「あ、その……たまには、好きなもの食べたいな～って……」

あはは、と笑うミリアリアにルリアも「ですよね！」と笑顔で返す。いや、割りかしルリアは何でも食べるので、何が好きなのか未だに

ハッキリしないが。
アマリも「それもそうか」とアークエンジェルの食事に思うところがあった様子。一応、ラクス用の食事を見てみたが栄養は考えられているものの、まあ給食みたいなものだった。
仕方ないと言えば仕方ないが、ヒリュウ改を始めウルトラ騎空団の各艦ではジャグラーを筆頭に腕利きの料理人が存分に腕を振るっていたので尚更差を感じてしまうのだ。

「やっぱり、あそこは凄かったんだね。前はレジェンドさんやオーフィスちゃんと一緒にうな重食べたし」
「「「「うな重!?」」」」

アズの発言で四人とミゲル＆ラスティは「戦艦内の食事でうな重出るの!?」と驚く。いや、後者二人は既にその一端に触れている。先日、この部屋で食事の支度をした時に。

「ジャグラー店長の丼物ヤバイから、ミゲルとラスティも機会があったら食べてみなよ。多分、軍艦の食事メニューとの差が大きすぎて絶望するから」
「絶望すんのかよ!?」
「いや、ラスティ……もっと別のところに目を向けろ。さっき三日月は店長って言ったぞ？何だよ戦艦に店長って……」
「目指せ全宇宙全次元の極大チェーン店、丼物屋『蛇倉苑』のオーナーで本店店長。そしてウルトラ騎空団の総料理長を務める男だ」
「「何でそんな人乗ってんだよ!?」」
「そりゃお前、各地から人材集めと店舗開発でチェーン展開するために決まってんべよ」

しかもレジェンドもその計画に噛んでいるときた。他にもぶっ飛んだ面子が集まるウルトラ騎空団、彼らが対面した時どういう反応するか楽しみではある。

何せメンバーには猫や犬、鳥なんかもいるし、カプセル怪獣も含めるとびっくり動物園でも出来そうな面々だから。

「何か、聞く限り魔境みたいなところなんだな……」
「その魔境のボスがこのレジェンド様よ」
「ちょい待ちリアス、俺は何か？ＲＰＧゲームのラスボスか何かなのか？」
「隠しボスより強過ぎるラスボスよね。エンディング見させる気無いレベルの」

一誠やトライスクワッド、ゼットまで納得してしまう。悪魔将軍との本気のファイトで実力の一端を知っている身としては、喧嘩吹っ掛けたら全身粉々にされそうだ。ダイゴは苦笑するだけだったが、逆にその気遣いがレジェンドの精神にダメージを食らわせている。
そんな時、珍しくレジェンドに直接映像通信が入った。久しく話していなかった気がする束からだ。

『ヤッホー、レジェくん！レジェくんだけのアイドル篠ノ之束だよー！繋がってる？繋がってる??』
「おう繋がってるぞ。そっちの通信機器グレードアップし過ぎだな」
『なんせこの束さんが手掛けてるからね！えっへん！』

何やらハイテンションな女性の登場にキラやミゲル達は興味津々。近くにはオーフィスもいるのか、ひょこひょこ顔を出す。癒やしである。

『レジェンドー我もいるー』
「オーフィス、良い子にしてるか？」
『ん、してる。だから合流出来たら久しぶりにハンティング行きたい。まだサンダービートスター狩ってない』
「そういやそうだな。無事合流して休み取れたら一狩り行くぞ」

『わーい』

ハンティングはともかく、サンダービートスターとかいう何となく名前だけでもヤバそうなものを狩りに行くというレジェンドとオーフィス。

キラ達は大丈夫なのかと心配したが、キラだけは「あ、レジェンドさんと親しい子なら大丈夫か」と自己完結。メンタルアップに加えてレジェンドのスペックと行動に慣れてしまった結果だ。

「それはそれとして、テストで通信してきたわけじゃないだろう。何かあったか？」

『正確にはそっちに何かあったからこっちにもあった、ってのが正しいかな』

いつもの調子の束から、真面目な雰囲気に変わりレジェンドやサーガも気を引き締める。

『レジェくんから通信で送られてきた円盤生物、シルバーブルーメの件だけど……アイツ、オーブ近海に落ちたみたい。オーブ軍全体に特殊レーダー渡して、海に近づけさせないようにしつつ全力で探知してるってオッくんから連絡あったよ。ついでにそれを知ったゲン師範がゴッドガンダムで単独降下したから』

「し、師匠が!?」

「マジっすか!?大師匠自ら!?」

「さすがオルガ。俺も頑張んないと」

円盤生物シルバーブルーメの件と聞き、その場の全員が身を強張らせる。しかもオーブ近海に落ちたと聞き、ヘリオポリス在住だったキラ達は騒然とした。

それとは別にゲンがシルバーブルーメを追い、単独で専用機と共に地球へ降下したことに一誠とゼットは驚く。専用機を持っていたこ

とにも。

「ゴッドガンダムって確か……」

「狛治のガンダムゴッドマスターの原型機だ。一応、それとは別にゲン専用のスーパーロボットの開発も進めている」

そちらもパイロットの動きをトレースするタイプだ、と聞いた一誠らは思う。冗談抜きで過剰戦力じゃないのかと。

九極天の縁壱が認めるほど、生身でもパワーアップしているゲンことウルトラマンレオ。彼にそんなもの渡したら鬼に金棒どころか、ガイにレジェンドとサーガのウルトラフュージョンカードを渡すようなものだ。

「普段クロガネにいるレイトもヒリュウ改で宇宙に上がっていたからな。今地上にいるのはミライのみ……ゲンが降りたのは正解だったかもしれん」

先日現れた『鬼』討伐に参加したメンバーや、追加で来たメンバーと入れ替わる形でグラン＝トリガーやジータ、ビィが一旦空の世界へ帰還している。そのため地上にはウルトラ戦士がミライしかいない状況だった。

レオならば実力・経験共に文句無し、更に円盤生物と何度も相対したことがある。これ以上ない適任だろう。

一見すると過剰戦力かもしれないがレジェンドが想定・推測している相手を考えるとまだまだ足りない。自分達の敵は一勢力だけではないのだ。

例を挙げて言えば円盤生物にしてもシルバーブルーメは氷山の一角に過ぎず、既に別の円盤生物が地球に降りて潜伏している可能性もある。そもそもアレがブラックスターから来たとは限らない。

状況が状況だけに考えれば考えるほど不安要素が湧き出てくるのだが、どれもこれも『考えていても仕方がない』レベルを通り越して

いる。
　ままならないものだ、と溜め息を吐きつつレジェンドは雑談へと移行している束らを見ながら目を伏せた。

☆

――とある世界の月――
　コズミック・イラでは地球連合軍の基地がある月だが、その世界においては月そのものが一つの国家、女王が統治する王国となっている。
　月王国（ルナ・ブリテン）――レジェンドに救われたモルガンによって治められていた国。今は養子である沙耶にその座を譲り、留守の間だけ政務を手伝っているのだが、沙耶自身が仕事を出先に転送及び処理して返送してくるのであまり彼女に回ってこない。
　そんな彼女は今日も慎ましやかにティータイム……をしているわけもなく、全力で娘及び自分への縁談を護衛である妖精騎士らと握り潰していた。

「またですか……沙耶だけでなく、いよいよ私まで狙うとは」
「どうなさいますか、先代陛下」
「コイツ、あのグエルって奴の親父じゃん。『アスティカシアの惨劇』引き起こしてお母様の顔に泥を塗ったあの連中の一人の。ふざけんじゃねーっての」
「もういっそドカーンっていっちゃおうか。お休み前にこんなの見たくなかったよ」

　アスティカシアの惨劇――勇治が両親を失い、レイオニクスとして覚醒するに至った月王国史上最悪の事件。その発端となったのは勇治が開発した医療用のナノマシン。モルガン自身が脊椎損傷による重傷を負った際、ヤプールの技術力にレジェンドの協力をもって完成

した『ＧＵＮＤフォーマット』により助かったこともあり、そういった医療関係の発展は大いに喜ばしいと考えていた。本人は一科学者として、とは言っていたものの学生の身分で既に博士号を幾つも取得していた勇治は間違いなく天才。

彼が隠された暗号を解析し、開発された六体の機甲神。本来は五体の機甲神が無人機、そして有人機であるエルガイヤーにモルガン、そしてアルテイヤーに沙耶が操縦者として想定されていた。アルテイヤーのみが設計図にあったのはエルガイヤーが核となって機甲神全てが合体するため、有事の際に奪われないようレジェンドないし彼から勅命を受けた者が開発・起動に立ち会うことにするからだった。

――だがアルテイヤーが完成し、そこに隠されていたレジェンドからのメッセージを確認後連絡しようとした時にそれが起きた。

同時進行で勇治が個人的に開発中だった、医療用ナノマシンを兵器として転用する実験をアスティカシアの町で敢行した結果、まだ調整中であったそれは本来の用途とは違うプログラムへと書き換えられたことで人体の細胞破壊促進を行う大量殺戮兵器へと変貌。月面の街一つが丸ごと全滅するという事態を引き起こす。

それを行ったのがモルガンら元妖精國の者を除く当時の月王国上層部と軍・各々一部に加え、月王国の一大企業と言われたベネリットグループ。

本人らはこれを開発者たる勇治に全ての罪を被せようとするも、人望の差で圧倒的に優位だったためベネリットグループに属する会社の重役の息子娘が挙って告発。更にモルガンも医療関係の研究を悪用しようとしたことに激怒し、これに関与した政府側要人は粛清。ベネリットグループ側は信用を大きく失う。

機動兵器に関してはモルガンとヤプールがレジェンドに頼み、クルーガー・インダストリーがベネリットグループに変わる提供元の一つになることが決定。今はＭＳやＦＡ以外に量産型ゲシュペンストＭｋ―Ⅱや量産型ヒュッケバインＭｋ―ⅡなどＰＴも徐々に増えつつある。

しかし凶事は重なり、漂流者であったリゼヴィム・リヴァン・ルシ

ファーを助けた上層部の一人が、セレブロによって寄生された奈落の虫――オベロン・ヴォーティガーンの甘言に惑わされてリゼヴィムを完成したばかりのアルテイヤーの元へ案内した結果、その人物は殺害されアルテイヤーは強奪。先の事件の後始末に追われていたモルガンや、即位したばかりの沙耶も対処することが出来なかった。

その二つのことが原因となり、勇治は最年少で採用されて間もなかった王国科学技術庁を辞任。セキュリティに関しては己の不始末でもあるとし、セレブロを追って月を出奔し各世界を転々としたところ、ウルトラ騎空団に遭遇・所属することになったのだ。

長くなってしまったが、この事件があってからというものモルガン達のベネリットグループの経営陣への印象は最悪通り越して即座に処刑ないし国外追放してしまいたいぐらいなのだ。沙耶の一声で『針のむしろ状態にしたほうが精神的苦痛を味わうし、暫くはそのまま』と言われなければモルガンが直々に処断していただろう。

……にも関わらず懲りずに何度も縁談の申し込み。割とのんびりしてるメリュジーヌすら苛立つほどなので、親バカやシスコン拗らせたモルガンとバーヴァン・シーはそろそろガチで潰しに動きかねない。

「何が良くてこんな陰険ヤロー共に沙耶をやらなきゃなんないんだよ。もうこれ何人か見せしめにしてやった方がいいんじゃない？お母様」

「それも一理ありますね。俗物にはそれぐらいしなければ分からないのかもしれません。ふう……何かいい報せはないものか……」

憂鬱なモルガンの横ではバーヴァン・シーが制裁案として『連中をドラゴン形態のメリュジーヌに食わせる』とか書いており、「僕はあんなの食べたくない！」と真っ先に反論されていた。他には『日本地獄に送って阿部高和に掘ってもらう』『レッドファイッ』など、如何に

嫌っているかを物語る案ばかり。
　そこで今まで静かだったバーゲストがおずおずとあるものを差し出した。

「実はヤプール殿から渡された物で、沙耶様から先代陛下宛にと荷物を預かっているのですが……」
「許可します開けなさいバーゲスト」
「あ、ハイ……」

　何という復活の早さと思う程、荷物をガン見するモルガンとバーヴァン・シー。メリュジーヌはぐでーっとテーブルに上半身をくっつけて駄弁っている。
　開けてみればモルガン達それぞれに宛てた手紙やちょっとした贈り物、そしてウルトラ騎空団に入団してから撮った写真……どうやらコズミック・イラへ行く前に撮ったものらしく、アウギュステでバカンスした時のもののようだ。

「……バカ共の悪行で荒んでいた心が浄化されていきますね」
「へぇ～良い感じに涼しそうなハイヒールじゃん！さっすが私の妹はセンスあるぜ」
「……じぃ～……」

　喜ぶ二人とは違い、何やら一枚の写真を見つめるメリュジーヌ。その写真にはウルトラマンの姿のまま食事が出来るようになったトライスクワッドや、師匠のゲンと共にバーベキューを美味しそうに頬張る一誠が写っている。

「どうしたランスロット。怪しいものでも見つけたのか？」
「違うよガウェイン。なんかこう……僕のドラゴン直感がキュピピーンでブッピガン！って」
「なるほど全く分からん」

頭ドラゴンな彼女の感覚を理解するには頭ドラゴンになるしかない。バーゲストは早々に諦めた。

今更だが、妖精騎士達はそれぞれガウェイン、トリスタン、ランスロットと呼ばれているが本名はそれぞれバーゲスト、バーヴァン・シー、そしてメリュジーヌ（彼女には『アルビオン』という名もある）である。

そして極めつけは沙耶が何やら勝負服っぽいものを着て、恥ずかしがりながらもルリアやオーフィスと一緒に『うまぴょい伝説』をダンス付きで熱唱する録画映像。

それを見たモルガンとバーヴァン・シーは『うまぴょい』と書きつつオルガの「止まるんじゃねぇぞ」体勢で尊死状態に。

何故かメリュジーヌは何度もそれを見ながら一緒に踊って歌い、何やら届け物に来たたぬきときつねで表せそうな二人まで巻き込む始末。

唯一冷静だったバーゲストは……。

「あ、沙耶様の抱えてる猫もふもふで可愛い……犬はいないのでしょうか」

素が出ていた。他に比べればマシだが彼女も気が緩みまくっている。尊死状態から復活していない二人や、たぬき娘ときつね娘を巻き込んでうまぴょいダンスしてるドラゴン娘は言うに及ばず。

宇宙（コズミック・イラ）の娘（沙耶）と、月の母（故郷モルガン）達。例え遠く離れた地にいようとも、培われた絆は途切れはしない。

〈続く〉

ちなみに、沙耶とルリア、オーフィスに振り付け指導を行ったのはゼット。恐ろしい程にキレッキレだったという。

目覚める刃

アークエンジェルが比較的平和な時間を過ごしている頃、ラクスを別の隊に任せるべく一時的にアークエンジェル追撃から離れたヴェサリウスに変わり、ガモフが先行してアークエンジェルを追っていた。

イザーク、ディアッカ、そしてニコルは作戦会議（と呼べるほどのものではない）をしているが、血気盛んな二人はニコルのことを臆病者というばかりで冷静になれていない。自分達でアークエンジェルを落とす、と意気込んでいる。

「確かに時間にして１０分、ですがもし本気になったらそこまで時間はかかりません」

「ふん、分かってるじゃないか。だったら――」

「僕達はおそらく5分と持たないでしょう。個々の実力だけで僕達全員が束になっても敵わない相手が、足つきには複数いるんです」

上げて落とすとは正にこのこと。以前の事を思い出したのかイザークもディアッカも口を噤む。ゼットのZガンダムを始め、サーガのダブルオークアンタやダイゴのSガンダム、極めつけはシャアと一対一で戦い引き分けたレジェンドのアルトアイゼン・リーゼ。

それ以外にも三日月のネオ・バルバトスなど一騎当千の戦力がどういうわけかアークエンジェルに集結している。奇襲にも対処してくるような連中相手に今の戦力で攻め込むのは自殺行為に等しい。

「それにヴェサリウスから送られてきた映像データを見たでしょう？あのような化け物がまた現れないとも限らないんですよ！」

「っ……だったらこのまま足つきが本隊と合流するのを黙って見逃せとでも言うのか!?戦力補充は間に合わず、足つきが本体に合流するまでの時間もあまりない！ならば俺達だけでやるしかないだろう!!」

「仕掛けるのはいいとして、引き際も明確にすべきです！足つきの艦

長なのか、それとも別の人物なのかは分かりませんが向こうにもクルーゼ隊長やベリアル参謀に匹敵、もしくはそれ以上の戦略家がいるのは今までの戦闘でも明らか……無闇に突撃しても『懐に飛び込む』のではなく『袋叩きにされる』ことになります!!」

臆病者と罵られたニコルだが、ここに来てイザークやディアッカが怯むほどの気迫を見せた。それもそのはず、この中で彼だけはレジェンドと直接相対し実力差をまざまざと見せつけられたのだ。

実際受けてみて分かったが、あのリボルビング・バンカーは下手すればフェイズシフト装甲すら力づくで無理矢理ぶち抜いてくる可能性だってある。更に、この間のシルバーブルーメとの戦いで明らかになったアヴァランチ・クレイモア……あれを至近距離で浴びればダメージ過剰で瞬く間にバッテリー切れを起こしかねない。

そしてフェイズシフトダウンした瞬間、コックピットを――そんな考えがニコルの脳裏をよぎった。

「あの化け物のおかげで足つきは警戒レベルを上げていると考えていいでしょう。アルテミスで僕が対峙した機体のパイロット、彼はミラージュコロイドを展開したブリッツを完全に補足していましたから奇襲もほぼ通じません」

「チッ……八方塞がりかよ。どうなってるんだあの戦艦は」

普段なら「俺達ならやれる」というであろうディアッカも、ゼットの乗るZガンダムに三機まとめて圧倒されたことを思い出して歯軋りする。イザークもまた、拳を強く握り締めて下唇を噛んでいた。

そこへある人物から通信が入る。

『こちらミダラーン、ガモフ応答せよ』

「「!!」」

ミダラーン――ザフト唯一のサダラーン級にしてアズナブル隊の

母艦。その性能たるやナスカ級やローラシア級の比ではなく、ＭＳの搭載数も多い。正しく名実共にザフト最強部隊と言われるアズナブル隊に相応しい戦艦。

そのミダラーンからの通信とあっては出ないわけにはいかない、そして通信を開くとまず最初に映ったのがシャア・アズナブル。彼自らが送ってきたことに驚き、イザーク達は慌てて敬礼する。

『我々アズナブル隊はガモフとの共同作戦を申し込む。貴公らの目的は足つきの撃沈だろう。そちらの目的に協力する代わりに――』

シャアの発言はイザーク達にとってさらなる衝撃を与えることになる。

『相手の隊長機……あの赤い強襲機を拿捕するための協力を頼みたい。叶うなら彼の部下全員まとめて、というのが理想だが』

☆

合流が迫る中、レジェンド達ウルトラ騎空団はこれからの行動について会議していた。キラや他の学生達はいないものの、ミゲルとラスティはウルトラ騎空団預かりのため聞かざるを得ない。

「やはり一度ペガサスＡに移動してアメノミハシラなりオーブなりに行くのが無難だな。一応、俺達の今の立場はオーブお抱えの傭兵集団ということになっているし、何より円盤生物の件もある。いつまでもこうしてこの船に厄介にはなれん」

「シルバーブルーメに関してはまだ地球降下以降、見つかっていないらしい。先輩のアルトにあれだけのダメージを与えられた以上、何処かに潜伏して回復に専念しているんだろうが……」

「……何にせよ、もうじきこの船ともお別れね。色々な思い出が出来たけど……出来たけど……ろくなことが大半だったわ……」

「アルテミス駐在兵大量変態事案とかな」
「変死事件じゃなくて変態事案なのがもう……」

今でも即座に思い出せる、沙耶にブチのめされた兵士が軒並み変態ばかりだったアルテミス要塞。嫌な意味で記憶に残ってしまったそれは黒歴史もいいところだ。救いといえば（フレイ以外の）学生達が良い子だったことだろうか。

「そういやあの赤いの、こっちに接触してこねーな」
「赤いのって……この船に関わる赤って沢山あるぞ、フーマ」
「赤い姉ちゃんだよ、トラブル起こしまくった」
「ああ……親父さんとの時間で忙しいんじゃねーか？ていうか俺も『赤龍帝』で赤かったわ」
「面倒がないならそれに越したことはない。あとはペガサスＡとの合流・移動のタイミングだな」
『穏便に出来ればいいが、状況を考えるとほぼ無理か。御誂え向きなシチュエーションにでもなれば別だが』

一誠、ドライグ、トライスクワッドは一誠がいるだけで会話が出来てしまう大所帯。似てるところはあれど全員の性格が違うので様々な意見が出せる上、気兼ねなく言い合えるため傍から聴いていて非常に有用。

タイタスとドライグの言う通り、現状何の問題もなくペガサスＡへ移動乗艦することは不可能に近い。ギリギリまでステルス機能を作動させたペガサスＡに接近してもらい、そこで全員がそちらに機動兵器ごと移動する……というのが理想といえば理想なのだが、それでも確実に一波乱起こるだろう。

「ミゲルとラスティは？だいぶ治ってきてるって言っても怪我人だしさ。乗せる機体は選ばないと……レジェンド様のアレはナシ、死ぬから絶対」

「マシンスペックやアズナブル隊長、それにあの化け物とやり合ったデータ見たよ……おかしすぎだろ、あの機体！」
「加速時にかかるGが、訓練を受けたコーディネイターの許容範囲すら軽く超えている。その状態であんな無茶な機動とか、普通なら気絶とかしてても当然なんだが……」
「コンセプトは『圧倒的火力をもって正面突破を可能とする機体』だ。あれだけの火力で迅速な正面突破を行うには重量をカバーするだけの加速が必要になるからな」
「それを平然と行ってるアンタが一番変なんだよ！」

ザフトのエースからも変人扱い……とはいえ妥当な認識である。本人は納得していないようだが。
そんな中で、突如警報が艦内に鳴り響く。第一戦闘配備との放送も流れ、続いて『可能であればウルトラ騎空団にも出撃を頼みたい』との放送が流れる。
多少なりともまともになったな、と思いつつレジェンドはブリッジに通信を入れた。

「おい、相手は誰だ？」
『団長さん!?その質問は、御協力頂けると思って宜しいのでしょうか？』
「相手による。そのために聞いてるんだ」
『先の事態からナスカ級は一時離脱、本艦を狙っているのはローラシア級よ。既にデュエル、バスター、ブリッツの出撃を確認しているわ』
「合流前ということで居ても立っても居られなくなったか。だが逆に言えばその三機さえ捌ければどうにでもなる。アルテミス要塞前の戦闘と同じくゼットとリアス達三人、それから防御面で万全を期す為にサーガも出撃だ。技量や機体性能的にダイゴも欲しいところだが、あいつは特務大使としての立場が明確だから安易に戦闘は参加させられん。お前達の奮闘に期待する」
「「「「了解！」」」」

最初は尻込みしていたリアスらも、何度かの出撃を経験して度胸がついたとでも言おうか。レジェンドは内心「あまり慣れてほしくはないが」と思いつつも成長を実感し、彼らを見送ると沙耶にテレパシーを送る。

『沙耶』

『テレパシー……？どうしたの、先生』

『ペガサスAに打診しろ。そろそろ姿を現す準備をしておけとな。ナスカ級はともかく、連中に動きがないのが気にかかる。最悪この状況で仕掛けてくるぞ』

☆

「団長さんの指示から予想すると、出てくれるのはアルテミス到着前の戦闘で出撃したメンバーね。防御に専念するなら油断さえなければ――」

「新たにグリーンチャーリーに熱源反応！こ、これは……サダラーン級！」

「何ですって!?」

「サダラーン級……！ここに来て赤い彗星の部隊が仕掛けてきたのか!?」

「すぐにウルトラ騎空団に連絡を！あの部隊の隊長機はストライクや大尉のメビウスでも対処出来ないわ！可能であれば団長さんへ出撃依頼を！」

「は……はい！」

ガモフに続き、ミダラーンまでほぼ同時に仕掛けてきたことに戦慄するアークエンジェルのブリッジ。こちらにはアドバイザーとしてコープマンがいるとはいえ、彼もアズナブル隊との戦闘経験は無い。あればこの場に、いや先遣隊にもいなかっただろう。確実に落とされ

ているからだ。
「何としても持ち堪えて！ここを凌げば本隊との合流よ！」
「問題は赤い彗星が直接出てくるかだが……これまでの戦歴からまず確実に出てくるだろう。僚機がどれだけいるか、そこも気を付けなければならない」
「前回遭遇時にはGに匹敵する機体が二機、随伴していましたが……」
「ザフト最強部隊がそれだけということはあるまい。ここが正念場だぞ、ラミアス大尉」

☆

『隊長、足つきからストライク、ガンバレル付きのメビウスに加えて前回の四機、さらに前回は早期撤退したビット兵器持ちが一機出ています』
「ふむ、堅実だな。ストライクというガンダムとメビウス以外が我々の標的だが、最優先目標は赤い強襲機だ。あれは一筋縄ではいかんのでな、あれが拿捕出来れば一先ず他の機体は見逃して構わん。下手に欲を出せば足元を掬ってくる連中なのは相対してよく分かった。撤退のタイミングは任せるぞ、艦長」
『了解です。ご武運を』
「ああ、ありがとう。さて……」

シャアは修復されたサザビー・リビルドのコックピットから他の隊員達に声を掛ける。今回はアポリーとロベルトだけではない。さらにベテランパイロットが二人出撃し、万全を期すつもりだ。

「ランバ・ラル、ノリス・パッカード。両名も問題無いか」
「いつでもいけますぞ、隊長」
「私の方も問題ありません。新しいグフもよく馴染んでいます」
「それなら何よりだ。あの赤い強襲機のパイロット、おそらくアムロ

と互角の腕だろう。あれが出てきたら例の作戦に移行する。そのためには二人の腕とグフの装備が必要不可欠だからな」
「はっ！……ご立派になられましたな」
「平和が似合わん男だったということさ、ランバ・ラル。その結果こういうことだけが得意になってしまった、アムロいわく情けない奴というわけだ」

自虐気味に言うシャアであったが、彼の幼少期を知るものとしてランバ・ラルの先の感想は嘘偽りのないものであった。

「よもや一度命を落とした私が、別の世界でかの赤い彗星の下で戦うことになるとは……運命とはかくも不可思議なものです」
「私とて同じ感想だ、ノリス・パッカード。とはいえ、貴公のような実直な人物が部下で良かった。何分政治的なことをやった身としてはどうも疑り深くなってしまってな」
「それは当然のことでしょう。その思慮深さがなくては指揮官や隊長職は務まりますまい」

実はラクス捜索にアズナブル隊が出るべきではと進言したのはこのノリスであった。かつて仕えたサハリン家……そこの令嬢であったアイナ・サハリンをラクスに重ねたのかもしれないが、結果としてラクス絡みでウルトラ騎空団と再度遭遇出来たのは僥倖。
そこまで読んでいたかは定かではないが、彼の意見がこの状況を呼び込んでくれたと考えても強ち間違いではない。

「よし、各機出撃！まずはあの機体をあぶり出す。それ以外の機体が出てくることも考えられる、十分に注意しろ」
「「「ハッ！」」」

彼らが狙うは、アルトアイゼン・リーゼ。ウルトラ騎空団の大黒柱たる団長、レジェンドとその乗機。

☆

「赤い彗星だって!?くそ、こんな時に！」

デュエル、バスター、ブリッツと戦闘中のムウはシャア率いるアズナブル隊の襲撃を聞き、焦りが出始めた。今のアークエンジェルでかの部隊と戦えるとしたらウルトラ騎空団、それも上位にいる者だけだ。特にシャアの相手が出来るのはレジェンド、もしくはサーガぐらいだろう。そしてサーガのダブルオークアンタはアークエンジェルの防衛に回っているため、必然的にレジェンドしかいないことになる。

「この反応……！やっぱり直接出て来た……おいおいマジかよ!?この間から二機増えてるだぁ!?いい加減にしろっての！」

当然、その情報はリアス達にも届く。特にシミュレーターによる訓練を徹底したゼットは見過ごせない機体を発見した。

「あれはグフ!?地上用だった機体を宇宙用か、汎用型に改造……いや一から作り直したやつか！こないだのリック・ディアス系列の機体といい、手強そうな気迫をウルトラ感じるぜ！」

デュエル他二機はストライクとメビウス・ゼロ、それにリバウとゲシュペンスト二機で十分対処可能だ。ならば自分はあちらの相手を優先すべきだとゼットは考え、アズナブル隊へと向かっていく。

「さすがに俺一人じゃどうにもならないけど、少しでも持ち堪えれば超師匠が何とかしてくれるハズ！頼んますよ超師匠！そしてウルトラファイトだ俺！行くぜぇぇぇ！」

「この感覚……！そうか、あのＺからか！」
「隊長、Ｚガンダムは自分達が抑えます」
「ラル殿とパッカード殿を連れて足つきへ向かって下さい」
「頼むぞアポリー、ロベルト。ただし気を付けろ。アムロの再来がカミーユならば、そのカミーユの再来があのパイロットかもしれん」
「了解！」

向かってくるＺガンダムに対し、前回と同じく二機で挑むスーパーディアス改。ぶつかり合う三機を若干迂回するように避けつつ、サザビー・リビルドと二機の新型グフ――ＲＦグフカスタムはアークエンジェルを目指し猛進する。

「サザビーと随伴機！更に接近！」
「何としても近付けるな！艦尾ミサイル発射管、一番から六番までコリントス装填！同時に全ミサイルを近接信管に変更！直接当てようなどと考えるな！」
「良い判断だ、バジルール少尉。赤い彗星の部隊が運用している機動兵器は重装甲ながら高い機動力を持つ。見た目で判断して直接狙おうものなら難なく回避され撃沈だ」

コープマンは直接相対したことはなくとも、アズナブル隊の情報は嫌というほど見返している。緊迫した状況の中、一筋の希望がブリッジに齎された。

「ハンガーより入電！アルトアイゼン・リーゼ、出撃準備完了したとのことです！」
「……！団長さんが出てくれるの!?」
『アレの相手が出来るのは俺ぐらいだ。サーガにはこの艦の防衛、そ

して可能なら青い二機の迎撃をやってもらわなければならん』

ブリッジに映ったアルトアイゼン・リーゼのコックピットに座るレジェンドの引き締まった表情からマリューは、前回見なかった二機も相当な腕前のパイロットが乗っていると判断した。

『今回は俺と一緒に三日月も出る。前回のような早まったマネはするなよ』

「分かりました。くれぐれも気をつけて」

『無論だ。万が一に備えて事前策も用意してある。厳しい状況だろうが冷静さを忘れるな』

レジェンドはそう言うと通信を切った。三日月とバルバトスは戦力として申し分ない。そこは心配ないが事前策というものが気になるのは仕方ないことだろう。

しかし、信じると決めたマリューは雑念を捨て、再び檄を飛ばす。

「相手は強敵だけど撃墜目的でなければ凌げる可能性が出てきたわ！本艦の速度は落とさず、機動部隊各機は本艦から離れすぎないように！本隊の射程内に入れば援護も受けられます！」

カタパルトから出撃したアルトアイゼン・リーゼ、そしてバルバトスを確認したシャアはレジェンド同様表情を引き締める。

「出てきたか……！しかし、随伴機にまた私の知らないガンダムが出てくるとはな。やはりあれらは連合のものではなく個人……いや、別組織のものと考えていいだろう」

「見たところかなりのパイロットですな。動きにブレがない」

「あれを無視して隊長機の拘束は厳しそうです。どうしますか、隊長」

「クルーゼ隊の働きに賭けるしかないな。無理そうであればこの場は

退く。まだここは命を捨てる戦場ではない」

一応バルバトスの情報はシーゲル経由で聞いていたものの、バルバトスが戦闘したのは最初の一戦のみであとはザフトと交戦しておらず、さらに交戦したミゲルのジンは大破しアスランのイージスもその時はすぐに場を離れてしまったためバルバトスと戦ったのはクルーゼだけ。しかもその時の映像はクルーゼが大部分を秘匿しているので明確な戦闘力が分からない。

（あのガンダム……本来の性能ではあるまい。ラウ・ル・クルーゼが何を思って秘匿したかは知らんが、その情報も一時的なものにしかならんだろう）

しかしながらシャアはこれまでの経験から察していた。バルバトス――ネオ・バルバトスルプスレクスの今の姿は本来あるべき姿と性能ではないと。事実、束によってメンテナンス及びアップグレードされている背部のＶＡＥユニットや可変式超大型メイスを有しておらず、手持ち武器も改良されたレンチメイス、背部にマウントされた滑空砲。それでも十分過ぎる戦闘力を持つのは基本性能と三日月の技量の高さにある。

「さて……私も本気でやらねばな。アムロ以来のライバルになろう男に！」

今、再び二つの『赤』が激突する。

「うおおおおっ！」

「そんな動きでぇぇぇっ！」

一誠のゲシュペンストＭｋ―Ⅱ改・タイプＧのジェット・マグナム

を危なげなく回避するイザークのデュエル。コンビネーションこそ彼らを上回っているといっても、一誠やタイガ、リアス個人の技量はイザークらザフトレッドに劣る。機体の性能差である程度はカバー出来るものの、逆を言えば気を抜くとすぐにやられるということ。

まだブリッツが抜けている分、三対二でどうにかなっているが……。

（マズいわね……思ったより相手二機の連携が悪くない。多分パイロットの相性が良いんでしょうけど、このままじゃジリ貧になるわ）

「グゥレイトォ！」

「くっ！」

「確かに早いがアズナブル隊長ほどじゃない！」

「じゃあ殴り合いならどうだ！」

「うおっ!?」

リアスのリバウもディアッカのバスターに少しずつ押され始めていた。こちらはタイガのゲシュペンストＭｋ―Ⅱ・タイプＳが接近戦に強く、また単純に装甲も厚いためタッグで挑めていることが功を奏し、何とか優位に保っている。

とはいえ、片方が抜ければ形勢逆転されるのが目に言えているのも事実。

そして、先立って出撃したストライクとメビウス・ゼロは――

「くそっ！やっぱあの赤い彗星の部隊だけあって重装甲高機動か！火力ある奴より厄介なんだよな、こういうのは！」

「うっ……く……！」

「さすがエンデュミオンの鷹！それにこのガンダムも中々やる！」

Ｚガンダムと戦闘中だったスーパーディアス改のうち、ロベルトの駆る機体と二対一で戦闘中。アポリーと相談し、Ｚガンダムを彼に任

せてロベルトはこの二機を抑えることにしたのだ。
数で言うなら確かに厳しいかもしれないがロベルトも歴戦のパイロット、それに今回は撃墜目的ではなく時間稼ぎと隊長機の拿捕。執拗に追い詰める必要もない。

「こんな奴がゴロゴロいるアズナブル隊はマジでとんでもない連中の集まりだな、ったく！」

ムウが悪態をつきながらスーパーディアス改を攻撃するも、その分厚い装甲でまともに効かない。そんな状況にキラは焦りを感じていた。
戦場を確認してみれば――

「二度も好きにはさせんぞ赤い奴ーッ!!」
「くっ……！この野郎！」
「さっさと墜ちろよ！サザビーもどき！」
「このっ！盗んだ機体で好き放題してっ！」
「落ち着けってリアス！」

「ただ自分を守るだけならばともかく、艦もとなるとこの状況ではさすがに厳しいか……！」
「あんな小型の兵器でこんな強固な防御フィールドを形成出来るなんて……！」

「前も戦ったが、一対一だと尚の事カミーユを思い出させるようなパイロットだ。これは後々大化けするぞ！」
「歴戦の勇士なアポリーさんに褒められるのは物凄く嬉しいんですが、ぶっちゃけ今は退いてくれる方がありがたいでございます！」

「悪いな！軍人である以上それは出来ない！というか名乗ったか？俺もロベルトも」
「リック・ディアスといえばクワトロ大尉・アポリー中尉・ロベルト中尉の三人と決まってるでしょ！」
「そういうことか！全く……その腕前、エゥーゴにいた頃に欲しかったぞ！どれだけ戦果を上げてたやら！」

「このグフもどき、強い……！」
「一応グフなのだがな。しかし荒々しさの中に繊細な技術がある。惜しいな」
「ジンとは違うのだよ！ジンとは！」
「パイロットも桁違いだ。踏ん張るぞ、バルバトス」

「大人しく話を聞いては貰えんようだな、レジェンド！」
「聞いてほしくば軍人だろうがそれなりの態度があるだろう、シャア・アズナブル……！部隊を引き連れ、ＭＳを持ち出し、あまつさえ貴様らの所属する組織の別部隊と交戦中にそれをされたとあらば大人しくなどと何の世迷言だとしか思えん！」
「正論だ。だがそうしなければお前を引きずり出せんと思ったのでな。手荒だがそうさせてもらった」
「何……？」
「私の目的は最初からアークエンジェルやストライクではなくお前だということだ。正確にはお前と、そこに属する者達だが」
「随分とダイレクトにプレッシャーを感じると思ったが、やはりそうか……！」
「何にせよ共に来てもらわねば話せることも話せん。今更だが力づくでも同行してもらう！」
「本当に今更だな……！生憎、力づくが得意なのは貴様のサザビーより俺のアルトの方だ……！」

互角、或いは苦戦――各所で繰り広げられる激闘に、キラの焦りは次第に強まっていく。
もし何処かで誰かが負けたら？
もしアークエンジェルが墜とされたら？
――もし、ダイゴやトール達学友、ミゲルにラスティ……そしてウルトラ騎空団の皆が命を落としたら？
目の前が真っ暗になり、思い浮かぶは友や恩人の笑顔。彼らがいなければ自分は色々なことが積み重なって押し潰されていただろう。
それが、消える――そう思った時。

頭の中で、何かが弾けた。

「アークエンジェルを……沈めさせやしない！」

その瞬間、突然ストライクの動きが激的に変化した。スーパーディアス改の攻撃を掻い潜り、懐に飛び込むとビームサーベルで片腕を斬り落とす。

「な……何っ!?」
「っ!!」
「うおっ!?」

怯んだスーパーディアス改を両足で蹴り飛ばし、その反動で後方へ飛ぶと同時に加速。アークエンジェルへと急行し、ブリッツにシールドバッシュを浴びせて吹き飛ばした。

「うわあああああ!?」

「ニコル!?」

今まで別の相手と戦っていたはずのストライクがいきなりブリッツを吹き飛ばしたことでイザークとディアッカも動揺し、動きが鈍る。そして、その瞬間を一誠は見逃さなかった。

「今のゲシュペンストの十八番がマグナムだと思ってんじゃねえだろーなァ!!」

「なッ!?」

「うおおおおりゃあああぁぁぁぁぁ!!」

タイプGは両腕のプラズマ・バックラーを打ち付けると、エネルギーを充填し一気呵成にデュエルへと連続格闘攻撃を叩き込む。フェイズシフト装甲だろうとお構いなし、装甲へのエネルギー供給が間に合わないほど苛烈な物理攻撃がデュエルを襲う。

「うおおおおお!?」

「コイツがタイプGの必殺奥義ィィィィィ!」

ふっ飛ばしたデュエルを先回りして狙いを定め、渾身のプラズマ・バックラーを使用したアッパーカットが炸裂する!

「ジェット・ファントムだァァァ!!」

「うわあああああ!!」

「イザークッ!!」

殴り飛ばされ、爆発を起こすデュエルだったがギリギリまでフェイズシフト装甲が機能していたらしく、損傷はあれど原型を留めていた。

だが、パイロットまで無事とはいかない。

「イザーク！大丈夫ですか!?イザーク!!」
「ニコル、イザークは!?」
「それが……！」

イザークは爆発の余波でヘルメットが破損し、それが原因で目の近くから出血しており激痛に苛まれていた。

「痛い……！痛い……痛い……ッ！」
「イザーク……！」
「ディアッカ、撤退です！敵艦隊が来る！イザークを！」
「くっそー！あのサザビーもどきと青いゴーグルがいなければ！」

悔しそうに声を上げながら、ブリッツとバスターはデュエルを確保しガモフへと引き上げていく。下手に追う必要はない、と事前に言われていたためリアスらはそれを追撃せずにアークエンジェルへと向かう。

そしてロベルト機が損傷したと聞いたアズナブルも、更にガモフ撤退の通信を受け作戦を切り替える。

「よもやロベルトを退けるとはな……ストライク、あれもまたアムロやカミーユのような者が乗っているということか」
「俺との戦闘中に他所見とは随分嘗めたマネしてくれるな、シャア！」
「ちいっ！」

凄まじい速度で肉迫してくるアルトアイゼン・リーゼに気付き間一髪受け止めるサザビー・リビルドだったが、加速と重量で勝るアルトアイゼン・リーゼの勢いを殺すことは出来ず組み合う状態になる。
しかし、元よりこの攻撃で墜ちるとなど思ってもいなかったレジェンドは、敢えて二機が至近距離で向き合った状況を作り出すのが目

的。
「この距離でこの量なら外れん……！全弾、持っていけ！」
「何!?」
そう、両肩のアヴァランチ・クレイモアを組み合った状態で放ったのだ。爆薬付きのチタン合金製指向性地雷をモロに食らったサザビー・リビルドがただで済むわけがない。
「うおおおお!?」
「まだだ！」
すかさずリボルビング・バンカーで追撃しようとしたアルトアイゼン・リーゼだが、その両足に片方ずつ何かが巻き付けられ高圧電流が流し込まれた。ＲＦグフカスタムのヒートロッドだ。バルバトスから逃れた二機がアルトアイゼン・リーゼを拘束したのである。
「ぐっ……！」
「まさか隊長を正面突破で退けるとは……！」
「だが仕方ないとはいえ隊長にばかり注力していたのは迂闊だったな！」
「ち……！三日月を撒いたか！」
「よくやってくれた、二人とも。当初の予定通り――!?」
どうにか動けるシャアのサザビー・リビルドであったが、このままアルトアイゼン・リーゼを連行しようとした時に強烈な悪寒を感じた。同時にミダラーンのシャリアより緊急通信が入る。
『隊長！戦闘宙域内に高熱源反応！戦艦クラスです！』
「何だと……ッ!?ラル、パッカード！今すぐそこを離れろ!!」
「!!」

さすが一年戦争時代の猛者というべきか、シャアの言葉の信憑性を即座に理解しヒートロッドを放してその場を離脱する。直後に――凄まじい砲撃が二機がいた場所を通過した。

「戦艦の砲撃!?どこからだ!?」

「いや、我らがここまで接近されて漸く気が付くことも驚異的なステルス機能だ……!どのような艦が……」

「そこか!……木馬だと!?いや、違う。足つきよりは似ているが別物だ……!」

「……私もシミュレーターで一度も勝てたことはなかったが……やはり戦艦の砲撃では奇襲でも当たらないか」

「すいません勇治さん操舵砲撃索敵全部俺一人でやってるから全然脳のリソース足りないんですけど。この状態であんなのに当てろとか無理でしょ絶対!!ていうかシエルとの連携でワンマンオペレーション出来るよねこの戦艦!!何でやんないの!?」

レジェンドの危機を救ったのは沙耶から連絡を受けた勇治の宇宙船改め機動戦艦ペガサスA。現在、ブリッジクルーは艦長の月影勇治、サポートAIのシエル、ウルトラマンオリジンもしくは並行世界の火野映司もとい前宮流。あと勇治所有の怪獣三体（リムサイズ）。

ぶっちゃけ全然足りないし、実際は勇治とシエルのみで動かせるのだが何故か流がほぼ一人で全作業を担当。これでは流の文句も納得だが……。

「今覚えておくと後々助かってくるぞ」

「今助かんないと意味無いんですが!!」

流もツッコミのキレが増している。時々ぶっ飛んだ行動をするけ

れど。やけくそ気味にこなしているとはいえ、正直やれと言われても簡単に出来ないことをしっかりやれている流も色々とんでもない。

「どちらにせよ、ここまでか……全機、撤退するぞ！」
「「了解！」」

シャアの指示で先に帰艦しているロベルト以外の三人も含めたアズナブル隊は引き上げていく。レジェンドとしては少しでも数を減らしておきたいところだが、今はペガサスＡとの合流や……キラのことの方が気がかりだ。

（戦闘中、ストライクの動きが目に見えて変わった。バーサーカーシステムの類が搭載されていないのは判明しているが……）

ここで考えても仕方がない、とレジェンドはＲＦグフカスタムを逃してしまったことを謝ってくる三日月に気にするなと言いつつアークエンジェルへと帰艦する。

「第８艦隊だ！」

そう喜ぶトノムラの声を聞きつつ、マリューは映し出されているペガサスＡを見た。アークエンジェルに似ているが、ミラージュコロイドとは違う高性能ステルス機能を持ち、ウルトラ騎空団に関係するであろう戦艦。

そして今まで遭遇した化け物――スコーピスとシルバーブルーメ……明らかにこの世界では何かが起き始めている。自分達の想像を超える何かが。

それぞれが胸の内に何かを秘めつつ、アークエンジェル、そしてペガサスＡは地球連合軍第８艦隊との合流を果たす。

〈続く〉

――アメノミハシラ――

「さてと……一足早いが俺も合流しに行くとするか」

今、一人の風来坊が愛機と共に宇宙へと飛び出しペガサスＡへと急行する。

試される覚悟

地球連合軍第８艦隊――デュエイン・ハルバートンが率いる艦隊の旗艦メネラオスにアークエンジェルは横付けする。そのアークエンジェルに横付けするのがペガサスＡ。

避難民達は良い意味で盛り上がるが、レジェンド達は即座に行動を開始した。まずはミゲルとラスティをペガサスＡへ移送。とりあえずアークエンジェルで使っていた部屋は、無いといいがもしまた厄介になる必要が出てきた時に使えるようそのままに。それからレジェンドとゼット、そしてダイゴを残し他の全員もペガサスＡに乗り移る。

彼らが残ったのはせめてもの礼儀。どんな状況であれ、今までアークエンジェルで世話になったのは事実。それに対する礼をすべく、彼ら三人は部屋で待機していた。

「何か名残惜しいでございますね」

「すぐにそんなことを言ってられなくなるぞ。問題は山積みだ。スコーピスの件に始まり、シルバーブルーメ、シャア・アズナブル……この世界に来てから起きた案件だけでも面倒なものばかり。加えてこの世界以前からの事だってある。気持ちを切り替えろ」

「は、はい！」

レジェンドの言葉にゼットは背筋を伸ばす。ダイゴも何かを考えているのか先程から黙ったまま。

そこへ訪ねてきたのはマリューだ。

「ああ、良かった……まだ残っていてくれたのね」

「ラミアス艦長？」

「貴方達に伝えなければいけないことがあって」

「な……何でございましょう!?」

「そんな身構えないで。別に何かしてもらおうとか、そういうんじゃ

ないの」
　そう言うやいなや、マリューは三人に向かって頭を下げた。
「今までこの艦を……私達を守ってくださり、ありがとうございました」
「うえっ!?」
「俺達は降りかかる火の粉を払い、自分達のために戦ったにすぎん。守ったのはついでだ」
「チーフ、時々ツンデレになりますよね。本来はクーデレなのに」
「ダイゴお前それ誰の影響だ!?」
『ふふー、私でーす』
「お前かいＲＥＮＡァァァ!!」

　人数の大半がいなくなったというのにこの盛り上がり。マリューは微笑ましく思う反面、もう見れないとも思いゼット同様名残惜しくなってしまう。
　だが、彼らはあくまで善意によって共に行動してくれていただけの別組織。特にダイゴはオーブの特務大使でもあり、いつまでも連合の艦に乗せておくわけにもいかない。

「本当なら、他の人達にも言いたかったんだけどね。相変わらず行動が早くて」
「こちらにも事情があるからな。先遣隊を襲った奴は早急に見つけ出して始末する必要がある」
「……あの海月とイソギンチャクの合わさったような怪物ね。ということは貴方達も地球へ？」
「ああ。元々俺達は騎空団全体でオーブに協力している状態でな、そこを拠点に活動しているわけだ」
「だからヘリオポリスにいたのね。オーブとの繋がりがあるのは知っていたけれど」

実際にはさらに色々あるのだが、必要以上にべらべら喋ることもない。ともかく今はアメノミハシラにいるヒリュウ改の面々やオーブにいる神衛隊中心のメンバーと合流し、今後のことを相談しつつ現状に対処していくことになるだろう。

彼らは戦争の恐ろしさなどをリアスらに教えるためコズミック・イラへ来たとはいえ、四六時中戦争と関わり合わせたいわけではないのだ。

「そっちはどうするんだ？」

「それはこれからハルバートン提督と打ち合わせ。十中八九、アラスカへ行くことになるでしょうけど」

「じゃあやっぱりここでお別れでございますか」

「仕方ないだろう。俺達とは目的地が全く違う」

「ええ。だからせめて、団長さん達と別れる前にこれだけはどうしても伝えたかったの。失ったものも多いけれど……守れたもの、得たものもあるわ。本当にありがとう」

マリューの言葉に他意はなく、純粋に感謝のみだ。レジェンド達三人もアークエンジェルの艦長が彼女で良かったと本気で思う。怒ったりしたこともあったが、それは巡り巡って彼女が『戦争をする兵器』にならず『人』で在り続けるため必要なものとなる。

「軍人の本質を忘れるなよ、マリュー・ラミアス。戦は討つためだけにあらず、守るためでもあることを絶えず心に留めておけ」

「はい。そちらもご武運を」

時にアドバイザー、時にトップエース。二つの立場で生存に貢献し、まるで本当の上官のような雰囲気を纏っていたレジェンド。

「思えば貴方との初顔合わせが一番衝撃的だったわ。どうかその明る

さと優しさを失わないで」
「ラミアス艦長も、人情と度胸を忘れずに！ウルトラ頑張って下さい！」

しっかり握手を交わすのは、ウルトラ騎空団のエースパイロットとして幾度も窮地を助けてくれたゼット。

「地球連合全体はともかく、僕は貴女がこの艦の艦長……責任者で良かったと思っています。お元気で、マリュー・ラミアス大尉」
「迷惑や失礼なことばかりだったというのに……優しいお言葉、ありがとうございます。マドカ特務大使」

キラを始め、不安ばかりだった学生や避難民達のケアを一手に引き受け、艦内の雰囲気を穏やかにしてくれたダイゴ。
彼らとの出会いは、短い間にも関わらずマリューを精神的に成長させた。ここからはそれぞれの戦いだ。

「何かあればオーブへ。先程も言ったように連合全体とはいかなくとも、アークエンジェルと貴女達であれば便宜を図れるよう、上に進言しておきます」
「何ならウルトラ騎空団でも構わんぞ。尤も、ウチの全容見たら腰抜かすかもしれんが」
「猫とか犬とかが普通に団員扱いでございますし」
「その時はどうか御容赦の程を。って猫や犬も？」
「もふもふでありんすよ！」
「いいわねぇ……癒されそう」

最初はお世辞にも良いとは言えなかったヘリオポリスでの遭遇。そんなものは過去の事と気にせず、四人は時間の許す限り談笑するのだった。

☆

ラクスを別の艦に預け、再びアークエンジェル追撃に戻ったヴェサリウスはガモフ、ツィーグラー、更にはミダラーンと合流し、アークエンジェル及び第８艦隊に対する作戦を練っていた。
当然、その中核を担うのはクルーゼとベリアル。あくまでシャアを始めとするアズナブル隊は協力者というだけだ。

「ふぅ……共同作戦なんだから、顔見せて知恵の一つでも披露してほしいんだけどねぇ。ウチとことん相性悪いな、赤い彗星サマは」
「だが言い返せば我々の作戦に文句を言わず従うと捉えてもいいということだ。精々役に立ってもらうとしよう」

元よりアズナブル隊はいないものと考えている二人は当初の予定通り攻撃を仕掛ける気でいる。アデスからの報告ではツィーグラーはジンが六機、ヴェサリウスはクルーゼとベリアルのエゼキエルにアスランのイージスを含め六機、ガモフは先刻のイザーク負傷によりバスターとブリッツが出られる。
また、アズナブル隊はシャアのサザビー・リビルドとロベルトのスーパーディアス改が修復中のためラルとノリスのＲＦグフカスタム二機、そしてアポリーのスーパーディアス改の三機のみ。しかしながらその三機だけで他三隻の戦力と同等以上の戦力だというから正にアズナブル隊驚異のメカニズム。

「普通に言えば難なく殲滅出来そうなんだけどな。あっちにはまだ連中がいる。おまけに戦艦まで持ち出してきたみたいだぜ？」
「しかし、イザーク達の奮戦のおかげで連中にも弱点が見えた。脅威となるのは指揮官機である強襲機、粒子機、そして変形するＧ型の機体二機、それから獣のような戦い方をする機体だ。あとは食い止める程度なら問題ない。もしくは――」

クルーゼがモニターに映したのはゲシュペンスト二機とリバウ――リアス、一誠、タイガの機体。
「チームでなければさしたる障害ではないものだよ」
そう言いながら、クルーゼはほくそ笑んだ。
☆
――ペガサスＡ・ブリッジ――
「――それで流さんが伸びてるんですね」
「だって俺、乗れるのバイクと良くて車だよ?!いきなりやれって言われてもマニュアルも無しじゃ無理にも程があるって!!」
「いやマニュアル無しの初実戦でやり遂げたアンタも大概なんですが!!」
「鬼畜仮面と明日のパンツ、か。何かヒットしそうな映画の名前だね」
「「何言ってんだミカァ!!」」
気心知れたメンツで集まったことにより、ウルトラ騎空団らしい馬鹿騒ぎが発生していた。ルリアやアマリ、アズは久しぶりのリムサイズ怪獣達と触れ合い御満悦。レジェンドに代わりまとめ役として一足先にペガサスＡに乗艦したサーガは、勇治や沙耶と今後の方針について話し合っている。
「ヒリュウ改もこちらの降下に合わせてオーブへ戻るそうだ。ロンド・ミナ・サハクも一緒らしい」
「アメノミハシラはどうするの?」
「東がセラフォルー他、魔法・魔術関係が得意な者に協力してもらい全方面セキュリティを完成させたから問題ないそうだ」

長らく離れていたウルトラ騎空団が再結集するのも近そうだ、とサーガは呟く。堕天司ベリアルの介入、シャア・アズナブルらの存在、鬼の出現。更にスコーピスのやシルバーブルーメの襲来……これらの事態に本格的な対策をしていかなければならない。
しかも、グラン達もまだ空の世界から帰ってきていないし、エリアル・ベースもあちらにあるのだから戦力が十全とは言えないのも辛い。幸いにも今回は神衛隊がヒリュウ改と一緒であるため、必要戦力の最低ラインを大きく上回っているのが唯一の救いだ。
すると、ブリッジにレジェンドから通信が入る。

『俺らを除く全員は無事移動出来たか。ミゲルとラスティは？』
「二人とも俺のダブルオークアンタに乗せて運んだ。今は部屋で寛いでるはずだ」
『そのまま乗せていたらラミアス艦長はともかく、地球連合の上層部が身柄を確保しようと手荒な真似をしそうだからな。それで、まあ……何だ。直接的な問題ではないが、ある意味大きな問題が起きてしまったというか』
「……？どういうこと、先生」
『あの赤いお転婆がいたろ。あれがどうやら軍に志願したらしくてな。おまけに父親まで後押ししたと』
「「「「はあ!?」」」」

リムサイズ怪獣と戯れていた三人は何事かと驚くが、一誠やトライスクワッド、リアスやしのぶ達は声を上げて驚いた。
箱入り娘というか、甘やかされたというか……ラクスとは違った意味で戦いとは無縁な人生を送るだろうと思われていたフレイ、それにその父親のジョージ・アルスターに何があったのか。
『だろうな。そういう反応するだろうとは思っていたよ。おまけにそれを心配したのか、それとも触発されたのか知らんが学生達まで軍に志願する形で残るとさ』

「「「「はあああああ!?」」」」
『キラは分からん。あのブリッジクルーとお転婆は残るがキラは別の所にいたようだ。まあ、十中八九残るだろうが……何となくだが一誠やリアスが影響を及ぼしたかもと思えんこともない』

自分達と然程年齢の変わらない一誠やリアスが何度もアークエンジェルを守っていたことに何か感じるものでもあったんじゃないか、とレジェンドは推測している。そして、彼らがこれからも戦い続けることを知ったことも、その一因ではないかとも。

(あのコーディネイター嫌いをそんなすぐに矯正出来るとは思えんが……今日までのこともある。少しくらいは希望があってもおかしくはない……か)

それに今のキラは利用しようとしても不可能だろう。ダイゴを始めとした交流によって強靭なメンタルを手に入れた彼の意志はちょっとやそっとで揺るがない。

『何れにせよ、ここからはあいつらが選んだ道。俺らが口出しするのは無粋というものだ。俺達は予定通り地球に降下し、オーブでヒリュウ改及びクロガネと合流。各種問題の対応に取り掛かる』

レジェンドはそう言うと『後の事は追って指示する』と通信を切った。ブリッジは何とも言えない空気になってしまったが、それを勇治が振り払うように告げる。

「お前ら、出られる奴はすぐ格納庫へ行け」
「「「「え?」」」」
「ザフトが攻めてきたぞ」
「そんな大事な事をあっさり言うなよ!?」

☆

第８艦隊を攻め落とさんとするザフトの一隻、ガモフではイザークが先刻の戦いで傷を負ったにも関わらず出撃をしようとしていた。

『よせイザーク！お前はまだ……』
「煩い！さっさと誘導しろ！」
『イザーク！』
『いいんじゃないか？怪我はしたんだろうが命に関わるモノじゃないんだろ？』
『ベリアル参謀!?』

通信を入れてきたのはベリアルだ。イザークの状態を一目見ただけで、彼は即座に判断を下す。

『ここで連中をみすみす逃す方が精神的にも完治の妨げになると思うけどね、俺は』
『ですが……』
『どうだい、イザーク。君はやれるのか？』
「無論です！あの赤いゴーグルは俺が叩き落とします！」

怒りと闘志を燃やしながら返答するイザークに、ベリアルは満足そうに頷く。

『オーケー、俺の権限で出撃許可だ。ついでにそのゴーグルの機体名はゲシュペンストってことも教えとくぜ。青いのもそう言うらしい』
「ゲシュペンスト……亡霊か」
『それじゃ、出撃だ。無理だけはするなよ』
「ハッ！ありがとうございます！」

イザークの返事を聞いたベリアルは通信を切り、クルーゼの腹心で

ある彼が許可したのなら仕方ないとガモフのオペレーターも諦めることにした。もはや彼を止めるものは存在しない。
ヴェサリウスから真っ先に出撃したイージスを見ながら、イザークは量産型ゲシュペンストＭｋ―Ⅱ改に乗ったまだ見ぬパイロット――一誠への憎しみを募らせる。
（赤いゲシュペンスト……！アサルトシュラウドが貴様に屈辱を晴らす！）

ミダラーンでも既にラルとノリス、アポリーが出撃準備に入っていた。
『正直、この状況では先の作戦を再度実行するのは不可能だ。あくまであちらの戦力把握に留めるだけでいい』
「確かにあの強襲機のパイロットは相当な腕です。それに周りの随伴機もかなりの手練が多い」
「では、我々の相手は連合ではなくて良いというわけですな？」
『ああ。クルーゼ隊にとっても彼らを抑え込めるというのはそれだけで十分な利だろう』

元々シャアはアークエンジェルなど二の次、目的はウルトラ騎空団である。いつでも墜とせると高を括っているわけではなく最優先目標との関係上、敵ないし味方として今後も遭遇するだろうし、その時に見極めようと考えているからだ。
正直なところ、今の連合で脅威なのはアークエンジェルとストライクだけ。それも現段階ではウルトラ騎空団が絡まぬ限りどちらも手強い相手とは言えない。
（ロベルトが言っていた『ストライクの動きが急に変わった』というのが気になるが、油断や慢心をせねば撃てぬ相手ではあるまい。当面の

問題は連中だが……戦艦も保有していたとあれば、あの戦力が全てではないはず。また難易度が跳ね上がったか……）

――不幸なことはやたら当てる、ある意味レジェンドと同類なシャアであった。

そんな彼の心を知ってか知らずか、ＲＦグフカスタム二機とスーパーディアス改がミダラーンより発進する。アークエンジェルではなく、ペガサスＡに向けて。

☆

まだアークエンジェルに残っていたレジェンド、ゼット、ダイゴは最後の仕事のつもりでザフトを迎え撃つべくそれぞれの愛機に搭乗し出撃準備に入る。ペガサスＡでも同様だが、こちらでは更に二機のヒュッケバイン……Ｍｋ―Ⅱと３０もスタンバイしていた。つまり、今まで留守番だったしのぶとアズも含めての総力戦。

「タイミングとしては絶妙だ。大気圏突入時を狙うとは」

『やられた方はたまったもんじゃないけどな。それよりいいのか、団長さん達』

「散々人のケツ追いかけ回してくれたんだ。地球へ降りる前に行き掛けの駄賃として、バンカーの一発でもブチ込んでやらねば気が済まん」

『ひぇ～おっかねえ！ま、確かにそれぐらいはしないと帳尻が合わないか』

『僕はこれから発進するだろう避難民を乗せたシャトルの護衛として協力します。無事にオーブへ彼らを送り届けなければ』

『戦艦じゃ小回りの効くＭＳの相手はキツいでしょう！俺らウルトラ騎空団機動部隊の出番ってわけだ！』

アークエンジェルに残った三人はやる気に満ち溢れている。ムウ

やマリューらにとってこれ程心強い助っ人はいない。聞けばペガサスAに移った面々も総出らしく、何というかザフトを哀れんでしまう。

アルトアイゼン・リーゼの出撃を皮切りに、メビウス・ゼロ、Sガンダム、Zガンダムが次々と発艦していく。その光景を見ていたキラは、軍――アークエンジェルに残るトール達から渡された除隊許可証を握り締めながら己に問う。自分はこのまま戦場から離れていいのかと。

（ダイゴさんやレジェンドさんはそれでいいって言ってくれるんだろうな……）

彼らなら「無理はするな」とか「やりたくないことを流されてやったところでろくな結果は出ない」とか言って、キラの除隊（形式上）を後押しするだろう。

しかし今の彼には誰に流されるわけでもなく、このまま友人や恩人を放っておいて自分だけここを離れようとは思えなかった。会って間もないというのに、辛い時に心の支えとなってくれたダイゴを始め多くの人々に助けられてきた自分が今出来ること――やりたいことは何なのか。

彼の心は決まっている。アルテミスにおけるダイゴの行動から、除隊許可証を破り捨てることなく「持っておけばいざというとき何かの役に立つかもしれない」と考えて懐に仕舞う。

そして彼がシャトルに乗ると思っている連合の下士官から急かされると、強い決意を持って告げる。

「僕は乗りません！行ってください！」

ストライクのハンガーへと向かう彼の後ろ姿には、かつての気弱な彼はもういなかった。

☆

――トレギアやルシファーらの本拠地――

久々に帰還したアサキムは、通路で話しているトレギア――霧崎とルシファーを発見し声を掛ける。

「やあ二人とも、久しぶり」

「おや？お帰り、アサキム。成果はどうだい？」

「残念ながらね。既に解放されたスフィアシステムのであれば何人かは見つけたが」

「不良品を掴まされるよりはマシだと思え」

「それはそうだ」

フレンドリーな霧崎に対しドライなルシファーであるが、彼なりの慰めや労いだというのはそれなりの付き合いになるから理解出来ていた。

「二人はこんなところで何をしていたんだ？」

「いや、ベリアルから何処かの座標が送られてきてね。盟友が復元した『あるモノ』のテストを兼ねて転移投入を行ったんだよ」

「あれを生み出した奴の美的感覚は理解出来んが、使い捨てならば上出来な部類だ。奴が送ってきた座標に何があるかはどうでもいいが、あれの使い勝手を見るには丁度良い」

「ほう……」

興味深そうに笑うアサキムにルシファーも若干気を良くしたのか、これから一息入れつつそれを見て見るところだと言うとアサキムも同席を決める。

「ベリアルは仕方ないとして、白龍皇は相変わらずかな？」

「ああ。慣れてきたからか外で暴れている方が良いらしい」

「奴の本質を考えれば納得だがな」

どうやらヴァーリはまた別世界にて応龍皇と共に猛威を振るっているとのこと。戻ってくるのはもう暫く後のようだ。そして、彼らはルシファーの言う『あるモノ』を送り込んだ場所の座標データから割り出した、現地の映像を見る。

その場所とは――

☆

『緊急事態！緊急事態！アメノミハシラ全域に異形の化け物が多数出現！尚も増殖中、生存者は直ちに……あ……あ……！ぎゃあああああ!!』

ヒリュウ改が在留しているオーブ所有の宇宙ステーション・アメノミハシラ。そこは今、後に遭遇する驚くべき脅威の一端により――地獄と化していた。

〈続く〉

「ｑｋｄｅ！ｑｋｄｅ！ｇ@，ｆｆｆｆｆｆｆｆｆｆｆｆ！」

アメノミハシラ陥落

――それは、あまりに突然であった。
何の前触れなしにアメノミハシラ内部で彼方此方が光り輝くと、その光の近くにいた職員が何かに身体を貫かれ絶命したのだ。
光が徐々に収まっていき、そこにいたのは――

「???」
「???」
「ｂｂｆ？ｂｂｆ？」

あまりにも人からかけ離れた『ナニカ』だった。クモのような鋭い四本脚と、ヒトデに人間の口を掛け合わせたような頭部らしき部位――生理的嫌悪感を放つ見た目のそれは、何やら少し混乱した後に行動を開始する。
――虐殺という行為を。

☆

『く……来るな！来る……』

身体を貫かれる音。

『助けてくれ！頼む！たすっ……』

身体を引き裂かれる音。
通信先より聴こえる悲鳴や断末魔、そしてその実行犯であろう存在の不気味な笑い声。アメノミハシラ中枢部でミナや共にいたアーシア、朱乃とカナエは戦慄していた。束によって各種セキュリティは万全、魔術的防御にも対応していたにも関わらずアメノミハシラへと侵

入してきたという事実だけでも驚きだが、それが複数ということが何より恐ろしい。

「このアメノミハシラに来ている他のウルトラ騎空団はどうか!?」

「今のところ全員無事のようですが、アメノミハシラの全域に分断されていて合流は困難ですわ!」

「そんな……!」

「よりによって厳勝さんを始めとした主戦力が出撃した直後にこんなことが起きるなんてっ……!」

ミナは舌打ちしながらモニターを見ると、外部――アメノミハシラの周辺でも戦闘が繰り広げられていた。

☆

グラハムのブレイヴ（指揮官機）を中心に、マリーダのクシャトリヤ、厳勝のアストレイレッドフレーム、クロエのガリルナガン……他にもリクがＧＰ０１フルバーニアン、レイトがダブルオーライザーで出撃しており、ジャグラーのマスターフェニックスとサギリ＆九重のベルゼルートに加え、千歳もヴァングレイで出ている状態だ。どうやらガオファイガーやソウルゲインなど一部の機体は出撃していないようだが……。

戦っている相手は、数多の目玉を持ち二足歩行やヒトデ型など不定形の黒い身体の存在。

――インベーダーと呼ばれるモノ。

それが夥しい数でアメノミハシラへと押し寄せていたのだ。戦力がコズミック・イラ各所に分散しているだけでなく、今後に備えて本来の機体ないし装備をオーバーホール・バージョンアップするため大半が全力を出せないという圧倒的不利な状態での戦い。辛うじてガリルナガンとマスターフェニックスがフルパフォーマンスによる戦闘を行えているのだが、ガリルナガンに関してはまだレジェンドによ

るプロテクトが掛けられた部分があり完全とは言い切れない。あくまで現時点でと頭につく。つまり本当にフルパフォーマンスなのはジャグラーとマスターフェニックスだけなのだ。

「「「「ギシャアアアアア!!」」」」
「ちぃ！こいつら！」
「ファンネルッ!!」

マスターフェニックスのバインダー・ソードとクシャトリヤの無数のファンネルがインベーダーを次々と駆逐していくが、焼け石に水の状態。数が違いすぎる。

「ナイン！黒歌さんと凱さんは!?」
『姉さん、それがっ……！アメノミハシラ内部に異形の生命体が突然大量発生して、二人とも他の未出撃メンバーの救出に奔走してるんです！既にウルトラ騎空団以外の内部職員は半数以上が犠牲になっていて……』
「「「「!?」」」」

千歳は勿論、他のメンバーにも衝撃が走る。インベーダーは一匹たりとも通していない。では一体何なのか？

『現在は急ピッチでヒリュウ改の発進と生存者の搬入を行っています！卯ノ花先生がヒリュウ改を護りながら戦っているのでこちらは問題ありませんが、まだ戦闘向きでないメンバーがドックから離れた場所に残されているんです！』
「マジかよ……！生身で戦闘可能なメンバーはエリアル・ベース組が一番多い上、クロガネに優先して転移されるよう転移装置が設定されてるってのに！」
「先刻、ガイさんもアメノミハシラを立ったばかりで呼び戻す時間もありません。どうにかして現存しているメンバー、職員を収容してこ

こを離脱しなければ……」

ナインの切羽詰まった通信にレイトやクロエも焦りが出てくる。まして分断されているとあれば非戦闘員で固まっている場合も考えられるのだ。そう時間はかけられない……しかし突破口を開くにしても相手の数に任せた攻撃が絶え間なく襲いかかり、冷静に考えてる余裕もない。

そんな八方塞がりの彼らに、馴染みある声が聞こえてくる。

『クーちゃんを総リンチ状態とか、ムカつくことしでかしてるキモい集団がいるねえ。束さん激おこぷんぷん丸だよ』

☆

アメノミハシラ内部では各所に分散したウルトラ騎空団のメンバーが生き残りを連れて必死でヒリュウ改のある格納庫に向かっていた。

凱は命とボルフォッグのナビを受けつつ、アスカやC．C．、ギャスパーにバーンと行動している。

「こういう時は死なない身体が便利だな」

「だからって真っ先に突っ込んでいくなよ！あんたそんな熱血キャラじゃないだろ！」

「当然だ。タバスコの辛さで舌がヒリヒリするならまだしも、身体を貫かれる痛みなど真っ平御免だぞ」

「信頼されてるっていうのは分かるけどな！はあぁぁぁっ！」

凱がエヴォリュダーとしての超人的身体能力を駆使し、ウィルナイフで生命体を切り裂いていく。

『凱！もう少し先に数人分の反応よ！大丈夫、敵性体じゃないわ！』

『むしろ追いかけられているようです。早急に救出活動を』
「分かったぜ、二人共！行くぞ、皆！」
「ラジャー！」
「わ、分かりましたぁ！」
「援護は任せてくれ」
「やれやれ……」

小芭内と蜜璃は幸いにもイリナ、ゼノヴィアの二人組と合流出来たため、生存者を救出しつつ順調に進んでいた。更に、途中でゼロガンダムとアザゼルの二人とも合流、より強固な戦力でヒリュウ改のあるドックへと突き進む。

「さすがはお館様が認めし光神の護衛の一人。見事な腕前だ」
「お褒めに預かり光栄だ。こちらも非戦闘員をそちらが守ってくれているから安心して前衛に集中できる。しかし……こいつらはバイスタランチュラを巨大化させたような外見だが性質は全くの別物か」
「バイスタランチュラ？」
「俺が戦ったザンスカール帝国の皇帝、アサルトバスターの体内にいたモンスターだ。俺の父もそれに寄生されて操られ、幻魔王バイスガンダムとして俺の前に立ち塞がった」
「寄生って……！それじゃあ先生のお父さんは……」
「……」
「ご……ごめんなさい……」
「気にするな。俺が勝手に言い出したことだ」

イリナだけでなく、普段はボケとツッコミの関係のアザゼルすら黙っている。ゼロガンダムは父を呪縛から解き放つために討たざるを得なかった。彼もまた、傷付きながらもスダ・ドアカのために戦い抜いた真の勇者。怒りと悲しみを力に変え、今もこうして戦っているのだ。

「何にせよ奴らは寄生能力を持たん。その方面は気にしなくても大丈夫だ」
「あんなのに寄生されるとか心底勘弁だしな」

アザゼルもやる気を出したのか、自慢の魔力で謎の生命体を吹き飛ばしていく。
ヒリュウ改は目前だ。

黒歌、夜一に乱菊、そしてハリベルは小猫やセラフォルー、ガブリエルらに加えソーナ達生徒会メンバーという大人数と合流を果たし、無事にヒリュウ改へと到達。卯ノ花が単独で無双しているドックの現状を目の当たりにする。

「「「「うっわあ……」」」」
「やはり懸念するようなことはなかったのう。伊達に初代十一番隊隊長を務めていたわけではないということじゃな……というかお主レジェンドの直属眷属になってから儂らよりパワーアップの桁が段違いすぎじゃろうが!!」
「おや、夜一さん。皆さんも早くご乗艦下さい。アメノミハシラ内部はこの状況、おそらく外もあまり良くないようでつい先程束さんがアストラナガンで出撃されました。こちらの収容が終わり次第発進、アメノミハシラは放棄するとのことです」
「束がアストラナガン……ってあのシミュレーターにあったとんでもない機動兵器!?アレ束専用機だったにゃ!?」
「ええ。彼女が直々に戦場へ赴いた以上、勝ち負け云々はともかく機動部隊に犠牲は出ないでしょう」
「束ちゃんの機体、出鱈目に強いんだよね。ビット兵器にＭＡＰＷ、光の羽を飛ばしたりする上に防御フィールド持ち、特機クラスの大きさなのに化け物じみた機動性で自己修復機能まで付いてるっていう」

「……お姉様、シミュレーター上でそれを相手に全滅した私達の前で詳細言いますか？」
「わあああ!?ゴメンねソーナちゃん!!」

安心感からかいつもの調子に戻りつつある彼女らを見やり、ハリベルは卯ノ花に気になったことを聞く。

「どれくらいのメンバーが残っている？」
「殆どのメンバーはこちらへ向かってきているのが確認出来ます。アメノミハシラの職員に関しては、あの生命体が出現した直後に大半が命を落としてしまったようで運良く合流出来た者以外は絶望的かと」
「そうか……殆どのメンバー、というのは？」
「万が一にと束さんが設置してくれていたサーチャーから確認したところ、中枢部にいたミナさんやアーシアさんらが少し離れたところにいるようです。距離が距離な上、あちらはミナさん、アーシアさん、朱乃さんにカナエさん……途中で何名か合流出来たようですが、非戦闘員ないし場所の都合で存分な力を発揮出来ない者が多いらしく……」
「思うように進めていない、ということか。紫天一家やユウキ、アカネの姿が見えないが」

まさか、とハリベルが思ったことを先に卯ノ花が告げる。

「アカネさんはヒリュウ改に乗り込んでいますが、ユーリさん達やユウキさんは彼女らの救援に赴きました」
「やはりか……いや、待て。アーシアがいるということは――」
「ええ、いますよ。かの魔神様も」

☆

伝説九極天が一人、篠ノ之束。彼女の駆る黒い人型機動兵器アストラナガンによって戦局は覆された。今も尚インベーダーは増援とい

う形で増えているが、一度ほぼ全滅させられてまた少しずつ援軍として来ているというのが正しい。

「これで多少の時間稼ぎは出来たね」
「……チートじゃね？それ」
「レジェくん謹製の私専用機だからね！ちょっと中身弄ったけど」

レイトの呟きに笑顔で返す束。彼女の『ちょっと』が一般人の感覚とは違うことなど、その場にいた全員が知っている。

「さてと、私達も撤退準備だよ。このまま戦っても体力的にジリ貧だし、これから出てくるヒリュウ改の防衛も考えたらまず押し切られる可能性が高いから」
「ヒリュウ改……！そうだ、アメノミハシラは⁉」
「放棄するってミナちゃんが言ってた。ったく誰だよあんなゲテモノを次元跳躍転移で送り込んできたクソッタレは。何となく予想つくけどさ！」

悪態をつきながらも束の内心は冷静だ。犠牲になった者達はレジェンドやサーガでもない限りもはや救うことは叶わない。ならば今生きている者達を、まずは明日に向かわせなければ。

「もすもす？ひねもす？お、サハっち。みっつんに今の状況聞いて～。ふんふん……おっけー、もうちょい頑張っとく」
「今の通信相手はスカーサハ殿か。ミツバ艦長は何と？」
「あのね、ウルトラ騎空団は今のところ全員無事。生き残ったアメノミハシラ職員もほぼ収容完了。あとはミナちゃん組と、それを救援に行ったユーリたん一家とユウキちゃんだけ。あのメンバーなら心配要らないよ」
「……確かに」
「まあ、薄い本だとこういう場面でアレな展開になるんだけどね！」

「「「「縁起でもないこと言うな天災兎ィ！」」」」

☆

　束の言う薄い本的な展開などなるはずもなく、サーガの御使い筆頭たるユウキの活躍に加えて九極天最高クラスの防御性能を誇るユーリによって損害も全く無い状態で、やっとこさミナ達と合流した彼女らだが意外にもピンピンしていた。
　理由というなら一つしかない。

『ふん、愚物共が。貴様らが我が巫女に触れようなどとはおこがましいにも程がある。視界に入れることさえ不敬と心得て死ね』

　基本護衛ということでアーシアと共にいる、ＳＤサイズのマジンガーＺＥＲＯがチートすぎたのだ。離れていてもサザンクロスナイフでハリネズミ状態にし、大きさ調節したアイアンカッターで纏めて真っ二つ。近付こうものならステゴロでミンチ。ブレストファイヤーや光子力ビームは威力が凄まじ過ぎて使用出来なかったが、それでも十分過ぎた。攻撃を受けようがかすり傷さえ付かず、カンっと軽い音がしただけ。

「一番大ピンチかと思ったら一番イージーだったんだね……」
「むしろここに来るまで何度かレヴィがピンチになりました。主に無策突撃が原因で」
「シュテるん!?」
「紙装甲のくせに飛び出すからそうなるのだ全く！罰として貴様は三日間おやつは抜きだ！」
「えええええ!?王様酷いー!!」
「と……ともかく無事で良かったです！」

　レヴィの嘆きは一先ず置いといて、合流を喜ぶユウキらだがどうも

アーシアの顔色が悪い。何があったのか聞いて見ると、ミナが説明してくれた。

「……ここに来るまでに奴らが職員を殺す場面に遭遇した。殺すと言っても突き刺して終わり、ではない。足の先から丁寧に引き裂いたり、頭から真っ二つに引き裂いたりと酷いものでな……アーシアにはそういう方面の耐性がなかったのだろう」

私とて見せられてすこぶる気分が悪い、とアーシアの背中を擦りながら手を握るミナはカナエ以上に姉のようだった。実際、朱乃も内心はかなりキツく、鬼との戦いで鍛えられていたカナエがどうにかというレベルの惨たらしさ。あまりに衝撃的なものを間近で見たために神器を使うことさえ叶わず――いや、仮に使ったとしても職員は助からなかっただろう。既に絶命していたのだから。

『それよりも急げ。ああして倒したはいいが、まだ泥が残っている』

「「「「え？」」」」

『気付かなかったのか？我らが奴らを倒しても倒しても数が減らぬ理由に』

マジンガーＺＥＲＯは全員を見渡し、本気で分からないといった顔にやれやれと肩を竦める。魔術関係に触れて然程間がないミナはいざ知らず、せめてユーリやユウキらには分かってほしかったと思う。

『そもそも転移反応は最初のみだ。そして我らは奴らと遭遇した場合、倒すか倒されるかしかない。前者は我ら、後者は職員だな。では何故我がこう言うか、考えてみろ』

「……まさか……！」

『ほう、すぐに気付いたようだな。ロンド・ミナ・サハク』

ミナが気付いたこと。それは謎の生物が単為生殖――否、『単為発

生』を行える可能性があるということ。そうであるなら、一体でも残っていれば時間をかけてまた増えていく。

「……確かにこうしているわけにはいかぬ。残るは私達だけだということ、一刻も早くアメノミハシラを脱出し注意喚起をせねばなるまい。外の化け物共のことも含めてな」

（……加えてもう一つあるが……それはあまりに酷か。特に巫女はそれに敏感に反応するだろう。それは我としても望まぬ事ゆえな）

泥になった謎の生命体――それには単為生殖の他にももう一つ、増える方法があるのだが……マジンガーＺＥＲＯは余計な混乱を起こすまいと胸の内にしまい込んだ。そのこととは別に、ユウキが戦っているうちに重要なことに気付く。

「あのさ……何か戦っていくうちにほんの少し、ホント少しなんだけど……何となく強くなっていく感じがあったんだよね。ボク達じゃなくて、あいつらが」

『当然だ。奴らは個にして全、全にして個というべき存在。一個体が得た情報を他の全個体と共有する能力を有する。尤も、情報伝達から直接作用するまで個体ごとのタイムラグはあるだろうがな』

「「「「!?」」」」

マジンガーＺＥＲＯから明かされた情報に全員が戦慄する。それはつまり無策で戦えばそれらによって得た経験で謎の生命体が強化されていくという、悪夢のような出来事に他ならない。

「単独増殖と情報統制による進化……なるほど、ここに留まることが危険だとよりハッキリしましたね」

未だ冷めやらぬ衝撃からいち早くシュテルが冷静さを取り戻して告げると、彼女らは即座にヒリュウ改のあるドックへと駆け出す。

ここで終わるわけにはいかない。
今日、ここで命を落とした者達に報いるために、世界が一丸となってこの異常事態に立ち向かわなければならないのだと。

「全員、乗艦しましたね？ミツバ艦長」
「はい！卯ノ花先生もお疲れ様でした！グレイフィアさん、ナインさん、八坂副長！」
「各部異常なし、アメノミハシラ内にはここ以外敵性体反応のみ！」
「起動音を聞きつけてあの生命体がドックに近付いてきています！」
「残る問題はあのハッチかの。さて、如何される艦長」

八坂はミツバがどうするか既に分かっているが敢えて問う。ミツバもミナから許可を貰っているため、一切合切容赦なく指示を出した。

「操作しなければ開かないというのなら、そうすればいいだけです」
「……と、言うと？」
「仕方ないのでぶっ飛ばします！破壊という操作を持って入口を抉じ開けて出港！」
「「了解!!」」

一言言っておこう。ウルトラ騎空団は女傑だらけであると。徐々にドックへ迫りくる生命体など目もくれず、ドックの扉へ向けて連装ビーム砲の照準を定める。

「外で戦闘中の全機へ通達！これより本艦はアメノミハシラを脱出し、地球へ降下しオーブ連合首長国にてクロガネと合流します！速やかに本艦に追随、着艦し大気圏突入に備えてください！」
「謎の生命体、ドックに侵入してきました！」
「連装ビーム砲、撃てーッ!!」

放たれたビームがドックの扉をぶち抜き爆散させると、空気が漏れ出すのと同時に謎の生命体も外へと吐き出される。アレが宇宙でまともに生命活動を維持出来るかはさておき、自由に動くことは出来ないはず。少なくとも、今は。

「機関最大！ヒリュウ改、出港！全機帰投せよ！」

☆

「よし！全機撤退するぞ！私に続け！」

グラハムのブレイヴが変形し、トライパニッシャーで射線上のインベーダーを排除し先陣を切る。ダブルオーライザーを始め、それに続いて離脱していく味方機を守るために殿を務めるのはマリーダのクシャトリヤ。膨大な数のファンネルを使い、追ってくるインベーダーを一体も通さない。

「東博士のアストラナガンに散々消し飛ばされたというのにこいつら……しつこいッ！」

「もう十分だ、マリーダ！君も早く！」

「そうしたいのは山々ですが、せめて奴らの攻撃が一度でも途切れなければ――っ!?」

戻りたくても戻れない、と続けようとしたマリーダだが、突如飛来した二つの影がインベーダーを撃破しながらインベーダーとクシャトリヤの間を猛スピードで通過していく。

「あの二機は――！いや、今は撤退が先だ……！」

マリーダは判断を誤らず、急ぎファンネルを戻しクシャトリヤの最

大出力でヒリュウ改へと帰投、無事に地球へと向かい降下準備を進める。
クシャトリヤを救援し、即座に離脱した機体は――

「マリーダさん、無事に離脱出来たみたいね」
「よくあの巨体であれだけ動けるなぁ……さすがマリーダさん、略してさすマリ」

――ＭＡ形態の、ライのガンダムデルタカイとモニカのリ・ガズィカスタムだった。彼らはガイの向かった方向……レジェンド達もいる、地球連合軍第８艦隊とザフトによる戦闘の火蓋が切って落とされた宙域へと全速力で機体を飛ばす。
アメノミハシラは謎の生命体とインベーダーの襲撃によって陥落し、ウルトラ騎空団や生存者を乗せたヒリュウ改はオーブへと舵を取った。
レジェンド達に先んじて、彼らは新たに判明した脅威に対抗すべく戦力を集結させる。
コズミック・イラ――その世界で起きたナチュラルとコーディネイターによる争いが発端の戦争は、もはや人知を超えた生物も交えた戦いへと姿を変えつつあった。

〈続く〉

宇宙に降る星～ゼータの発動

「全艦、密集陣形にて迎撃体勢！アークエンジェルは動くな！……!?待て、フラガ大尉！出撃命令は出していないぞ！」
『申し訳ありません、閣下。ですが彼らが我々のために戦ってくれる以上、ただ見送るだけでは不義でしょう。何より本来であれば我々のみで対処すべきことを偶然乗り合わせただけとはいえ、今この瞬間まで共に解決せんとしてくれる彼らに甘えてばかりでは連合のメンツにも関わります』
「ウルトラ騎空団という者達か……！」
『ただ最もなところ、こうしているのは彼らとこれまで一緒にいた『情』によるものなんですがね』

戦闘の火蓋が切って落とされた宇宙と地球の間――メネラオスのブリッジで二人の男が言葉を交わす。地球連合きっての智将デュエイン・ハルバートンとアークエンジェル隊所属となったムウ・ラ・フラガ。
ムウが出撃したことに驚くハルバートンであったが、彼の意見は的を得ていたしその後に続く言葉も彼らしいものだった。そこへ更にアークエンジェル――マリューからの通信も入る。

『無礼を承知の上で申し上げます、閣下。私もフラガ大尉と同意見です』
「マリュー・ラミアス!?」
『先程、ウルトラ騎空団団長殿より本戦闘における共闘の返事を貰いました。彼らとしても今までのことで腹を据えかねていたようで、特に団長殿はシャア・アズナブルを単独で退けるほどの実力者。手を貸してもらえるならそれに越したことはなく、また指揮官としても非常に有能です』
『私もラミアス大尉に同意します、ハルバートン閣下』

「コープマン少佐もか!?全く……先の訪問にて出会えなかったのが悔やまれるな、それほどの人物とは。だが、いいだろう。貴公らの判断を信じよう!」
「閣下!?」

副官のホフマンが驚きの声を上げるが、ハルバートンは笑みを浮かべたまま発言の撤回をする様子はない。

「危険すぎますぞ!報告通りなら、あれだけの戦力を持っていながら今まで世界のどこでも全く話を聞かなかった一団です!腹にどんな一物を抱えているやも――」
「そうかな?確かによく分からん集団かもしれん。だがラミアス大尉の報告では容易く数人で艦の制圧さえこなせる猛者が多く存在するというらしいぞ。私も直接見たわけではないが、避難民達を含めそれを目撃した者が大勢いる。そんな連中がアークエンジェルを狙う気ならとっくに彼らのものになっていると思わんかね」
「それは……」

そう、ハルバートンの言うとおりレジェンド達にしてみればアークエンジェルを狙うメリットなどない。技術は当然、人員にしてもブリッジクルーはぶっちゃけ無理矢理ほぼ全ての作業を一人でやらされた流の方が有能だったり、ましてやパイロットなど一番顕著に現われている。地上や空の世界にも戦力を有するウルトラ騎空団が今のアークエンジェルを戦力として必要とする理由は皆無だ。
単純に、団長のレジェンドがしたいことに団員が乗っかっただけのこと。したいこととは当然『ザフトのホームグラウンドである宇宙にて、連中の鼻っ柱をへし折ってやる』ことである。

「我々にやらねばならぬことがあるように、彼らにもそれがあるのだろう。それに、言い換えれば彼らも我々を『何か悪巧みしているやも』と思っていても不思議ではないということだ。違うかね?」

ハルバートンの言葉にぐっと口ごもるホフマン。モニターに視線を向け、ハルバートンは戦場の最前線にいる赤い機体――アルトアイゼン・リーゼを見ながら呟く。

「願わくば、無事この場を切り抜けて対面したいものだな」

☆

予定ではヴェサリウス、ガモフ、ツィーグラー、そしてミダラーンの４隻で攻略に当たるはずだったが更に２隻が急遽参加してくれることになったザフト側。

「ウェゲナーとパスツールの参加はありがたい。足つき、というよりあの混成部隊を相手にするには数がいくらあっても足りないからな」

「おまけにアズナブル隊は最強戦力が出れず、さらにもう一機も出れないときた。これじゃ、あのツノ付き強襲型を仕留めるのは厳しそうだ。一番どうにかしたい相手なんだけどねぇ」

「まともに相手をしたくはないが、かといって野放しにすればこちらの戦力を根こそぎ壊滅されられるかもしれん。私達で時間稼ぎをするしかあるまい」

「だよなぁ。なあラウさん、俺ら今ザフトで一番働いてると思わないか？」

「一番働いてるかは分からんが、一番面倒事を押し付けられている感はあるな」

「同感。これが終わったら休暇の一つも貰わないと割に合わないって」

軽口をたたく二人だが、エゼキエルを動かす手に曇りはない。連合の艦から発進してきたメビウスを難なく撃墜しながら進むと、彼らは遂に接敵する。

「お？早速おいでなすったか光神サマ」
「随分とグローバルな活動をしているようだな、発禁天司……！だが追いかけ回す相手を見誤っているぞ！」
「それは俺も反省すべき点だ。けどま、この場じゃ好都合」
「君には一度会ってみたかったところだ。そして出会って早々で申し訳ないがご退場願おうか」
「その言葉をそのまま返す……！無事に済むと思うなよ！」

エゼキエル二機に対して単独で挑むアルトアイゼン・リーゼ。一見すると不利に見えるそれは、しかしてその実全くの逆。白と黒、二機の『ナイト』を一機の『孤狼』が喉元を噛み砕かんと迫る。

ゼットのZガンダムと相まみえるはやはりアポリーのスーパーディアス改。そしてRFグフカスタムと激突するのはサーガのダブルオークアンタと三日月のネオ・バルバトスルプスレクス。六人とも実力者であり、連合や他のザフトの者達から見てもその戦いは正に熾烈という他なかった。

「チェストォォォォ!!」
「うおっと!?良い踏み込みだ！今のは危なかったな！」
「ホントそんな重機動型でよくそこまで動けますねアポリーさん！」
「簡単にやられたら立つ瀬がないからな、俺も！」

お互い敵同士ながらも憎しみはないゼットとアポリー。ゼットはアポリーを称賛し、アポリーもまたゼットを褒める。二人ともこうして敵でなければ良き先輩後輩として切磋琢磨出来ただろう。

「ぬぅん！」

「この……！」

ランバ・ラルのグフカスタムと激しい接近戦を繰り広げているのは三日月のバルバトス。武器であるレンチメイスがその大きさ故に取り回し難いと思われたバルバトスだったが、レクスネイルによるクローでの接近戦は歴戦の猛者たるラルも舌を巻いた。

「ふっ……やるな、獣のようなガンダムのパイロット。この状態で恐れなどないというのがその爪を通して伝わってくるわ」

「あんたもね。バルバトスの戦い方を見たら大抵のやつは接近戦に及び腰になるのに」

互いに弾き飛ばすよう離れ、滑空砲と5連装機関砲による射撃戦へと移行するバルバトスとグフカスタム。その根幹にある狙いはどちらも再度接近戦を仕掛けるタイミング。

「この一瞬一瞬が緊張に満ちた空気、これが戦（いくさ）というものよ」

「うおおおお！」

「ふんっ！」

ダブルオークアンタのGNソードVとグフカスタムのヒート・サーベルが激突し火花を散らす。こちらの二機もやはり接近戦での対決だ。出力は依然としてダブルオークアンタが上なのだが、受け止める角度や衝撃の逃し方が絶妙なグフカスタムもまた一歩も譲らない。

「手強いッ……！」

「少しでも気を抜けばたちまちスクラップだろうな、あの剣の切れ味は！」

かくいう二人もまた武人として戦いに臨んでいる。ダブルオークアンタはＧＮソードビットを使わず、グフカスタムもヒート・ロッドやガトリング・シールドを使用していない。正々堂々、一騎打ち。今の彼らの邪魔をすれば、即座に屍を晒すことになるだろう。

「人の生は何を成したかで決まる。ここで終わってくれるなよ、剣（つるぎ）のガンダム！」

ザフトにとって見慣れぬ機体があった。アズナブル隊の報告にあったライン・ヴァイスリッターでもなければ、確認されている中で一番特異なゼルガードでもない。言うなればＧ兵器に似ているがどうにも違和感が拭えぬ機体、といったところか。しかもそのうち一機はかなりの腕のパイロットが乗っているらしく、的確に戦力を奪っていく。

「はい、それじゃあ早いところ戻ってくださいね～」

「うあああああ!?」

――しのぶの機体、ヒュッケバインＭｋ―Ⅱのチャクラムシューターがジンを削るように切り裂き、ギリギリコックピットのパイロットを傷付けないレベルの損傷を与え戦闘不能にする。

……しかし、この乱戦で戻れと言われても機体を放棄して生身で母艦まで戻るのは不可能ではないかと思う。

「行けっ！リープ・スラッシャー！」

同じくアズのヒュッケバイン３０がリープ・スラッシャーでジンを切り裂く。こちらは有線式ではないため距離の取り方などが重要になってくる。だがアズはそれを自在に使いこなし、かつスラッシャー自体もかなり高速で動くので命中率はほぼ１００％。

「ふぅ……こっちは、制圧出来た……！」
「お疲れ様です、アズさん。他の人達と合流に動きましょうか」
「了解です、しのぶさん」

正直、ミツバ艦長と間違えられるかと思いきやちゃんと呼んでくれた。同時に実の妹を間違えかけたカナエはどうかと思うしのぶであった。

「悪いけど、私は姉様やお母様からよく言われているの。『明確な殺意を持ち襲いかかってくる連中には、それ相応の報いを受けさせなさい』って」
「う……うわあぁぁぁ!?」

ガンダムXの大型ビームソードがジンの胴体をコックピットごと両断する。レジェンドやサーガらのように覚悟が決まっている沙耶は、彼ら程の技量を持たないためコックピットを外してという芸当がまだ出来ない。それ故に手加減をしないのだ。自身の実力をよく理解しているからこそその戦法を取らない。

（……さっきから撃墜するとチクチク頭が痛むわね。何かしら、この感覚……）
「沙耶さん、大丈夫ですか!?辛いなら帰投したほうが……」
「心配しないで、ルリア。多分静電気か何かだと思うから」
「静電気？」
「ルリア、今はこっちに集中して！沙耶さんがそう言っているのに無理に聞き出す必要も余裕もないから！」
「はわっ!?ご、ごめんなさいアマリ！」
「ある意味大丈夫じゃなさそうなの私かもです！多分これ戦闘後に帰投したら二日酔い的な頭痛に苛まれそうで！」

「サイバスターは……ってメンテナンス中でしたっけ」

ガンダムXと共に戦闘中のゼルガード、ライン・ヴァイスリッターがそれぞれフォローし合う形で陣形を組んでおり、女子同士ということもあって会話も弾む。沙耶が何かを感じたが、その理由はもう少し後……地球へ降りてから知ることになる。

(怪我……とかじゃないわね。あの寝袋で寝過ぎただけかしら)

リアス、一誠、そしてタイガはムウと、さらに出撃してきたストライク――キラと共にチームを組んで迎撃していた。

「本当にいいの!?」

「レジェンドさんが渡してくれたメガビームライフルもありますから、ソードやランチャーと同じように一撃必殺の術も問題ありません!」

「いや、それはいいんだけどさ。その……俺らが言うのもアレだけど」

「そちらも大丈夫です。僕には守りたいものがあるから、だからこうしてここにいるんです。僕が僕らしくあるために」

「自分らしく……か」

「この状況、普通ならさっさと逃げたいと考えるもんだからな。それを跳ね除けて前線に経ったんだ、除隊許可証まで貰って戦争と関わることなく生きれただろうに……だから期待させてもらうぜ、坊主!」

「はい!」

本来であればキラとムウ、そしてオカ研メンバーで別々のチームとなっていただろう。もはや彼らは五人で一つのチームと呼べるものになっている。

そんな彼らと相対したのはやはりクルーゼ隊の四機。

「見つけたぞゲシュペンストォォォ!!」
「あれは……デュエル!?装備が……」
「ゼットがよく言ってたフルアーマーってやつか！」

イザークの駆る、新装備アサルトシュラウドを纏ったデュエルが一誠の量産型ゲシュペンストＭｋ―Ⅱ改・タイプＧへと突撃してきた。重装甲ながら機動力も増したデュエルがビームサーベルを抜き、対する量産型Ｍｋ―Ⅱ改もＨｉビームカッターで受け止める。

「この傷の礼！たっぷり返してやる!!」
「ぐっ……！」
「イッセー！」
「お前の相手は俺だ！サザビーもどきが！」
「バスター！やっぱりそう来るのね！」

デュエルに続きバスターの来襲で、早くも得意のスリーマンセルから離されてしまうリアス達。フォローに入ろうとするゲシュペンストＭｋ―Ⅱ・タイプＳを、ブリッツが妨害する。

「クルーゼ隊長とベリアル参謀から提案された作戦です。そちらをチーム戦にはさせません！」
「やるしかないか……！パワーと装甲はこちらが上、行くぞ！」

残るイージスがストライクと激突し、援護に来るジンをメビウス・ゼロが迎え撃つ。

「キラ……！」
「僕は逃げないぞ、アスラン！」
「Ｇを相手にするよりマシだがな、こうも数が多くちゃ煩わしいことこの上ないっての！」

各所で激化する戦場。そこにある変化が――それも、最大級のものが巻き起こる。

ペガサスＡ――計器類が極大の次元震を感知する。

「ちょっ……!?勇治さん！シエル！何これ!?」
「分からん！何かが来るぞ！しかもデカイ奴がな!!」
『マスター、本艦の攻撃能力を全て防御に回します』
「すぐにやれ！無いよりはマシだ！」

次元震が大きければ大きいほど、その脅威も比例することを宇宙船で旅してきた勇治はよく知っている。やがてそれを周りも認識した時、全機を凄まじい衝撃眩い光が襲う。

ズガァァァァァァ!!
「「「「うわぁぁぁぁぁ!?」」」」

――そして、衝撃と光が収まった時――

「随分と騒々しいな」

――３００ｍに届かんとする程、銀色で巨大なケンタウロス型の機動兵器が存在していた。

☆

「アレは何だ!?解析を急がせろ！」

「ザフトの新型か!?」
「いや、向こうも混乱しているぞ！」

地球連合が混乱しているように、ザフトも同じ状態であった。そもそも、この世界には未だ戦艦サイズの機動兵器など存在しないのだ。
だが、それを知る者が唯一人この場には存在している。レジェンド――ではない。

――堕天司ベリアルだ。

「おいおい……お遊び訪問には過ぎたモンだぜ、それは……ファーさん」

☆

「……スキエンティアのテストに出てみれば有象無象の集まる場所だとはな」
『ヤッホー、お疲れ。どうしたんだい、ファーさん』
「ただの性能検証テストだ。これも通過点に過ぎんが、あってもマイナスにはならん」
『そりゃそうだけどな。じゃあアレだ、俺が所属してる方だけは撃たないでくれよ?』
「知らんな。墜ちたくなければ自力で避ければいい。俺が気を遣う必要が何処にある」

秘匿回線で繋いできたベリアルを、その機動兵器――スキエンティアを動かす者……星の民ルシファーはいつもの調子であしらう。

「次元転移は問題ない。では次に武装威力の検証だ」

ルシファーはそう言うと、スキエンティアの両腕にエネルギーを集中させ胸部装甲を展開。レジェンドを始めとした面々は一瞬でヤバいと判断するが、連合やザフトは即座に動くことが出来なかった。

「死の安息が欲しいだろう。これがお前達にとって救済の光になる。サルース・ルーメン、放射」

その言葉と共に――救済とは名ばかりの、破壊の光が放たれた。

☆

「「「「う……うわあああああ!!」」」」

「「「「あ、あ……あぁぁあ……!!」」」」

連合の第８艦隊の艦とＭＡが。ザフトのＭＳが。スキエンティアの放った極大の破壊光にて断末魔の叫びを上げながら次々と爆散していく。

「嘘……！そんな……」

「冗談にも程があるだろ……！」

リアスやムウは驚愕と恐怖を一度に味わう。

「こ……こんな……っ……こんなことって……!!」

「あ……ぐぅ……っ……！（さっきとは比べ物にならないくらい頭がっ……！私はどうしたっていうの……!?）」

アマリは絶句し、沙耶はさらなる頭痛に襲われる。

「少なくともこの世界の兵器ではないな……！」

この状況においてもレジェンドは焦ることなく冷静であった。

そしてもう一人、彼と同じく冷静さを失わないものがいる。デュエイン・ハルバートン提督だ。

「マリュー・ラミアス！地球へ降下しろ！」

『閣下!?』

「避難民の乗ったシャトルも降下させる！このままでは全滅だ！それだけは断じて許されん！アークエンジェルとストライク、何としてもアラスカまで届けなければならんのだ！」

既に第８艦隊は艦隊としての体を成していない。ＭＡどころか艦も先の一撃でほぼ壊滅してしまった。あの巨大兵器がこの場を離れたとして、残るザフトを相手取るには厳しい。ウルトラ騎空団の方も多くが動揺しており、まともに戦えるのは片手で数えて余るくらいだろう。

「ウルトラ騎空団の者達に通達する！今まで共に戦ってくれたことに心から感謝を述べたい。もう十分だ、あとは我々が引き受ける」

『『『『『!?』』』』』

「統一性のない機体を始めとする傑出した戦力、それは今目の前にいるような存在と戦うために集まったのだろう。ここは苦渋を飲んで撤退し、来たるべき時に備え戦力を整えるのだ」

ハルバートンの言葉は即ち、自分達が囮になってでも時間を稼ぐという意思表明に他ならない。それはたった今、眼前で多くの命を失ったばかりの彼らにとって頷くことが出来ないものだ。

『待って下さい！相手は巨大ですが、付け入るスキがないわけじゃ

……』
「モニター越しでも分かるぞ。そんな震えた状態で何が出来る！」
『！』
「冷静になりたまえ！アレがそんな簡単に倒せるような相手でないことは私とてすぐ分かる。ましてや恐怖を抱いたままでは尚更な」

リアスを叱咤しつつ、ハルバートンは続ける。

「君達はまだこれからなのだ。ここで立ち止まるな、そして折れるな。君達を待つものはこの世界だけではないのだから」
『っ……』
『ハルバートン閣下……』
「閣下！ザフトの生き残ったＭＳが動き始めました！」
「さあ行け！ザフトめ、ここは何があっても通さん！第８艦隊の意地を見せてくれる!!」

「フン……死に損ないが奮起したか。神も命も、何もかもがくだらん。興醒めな上、元々性能検証しに来ただけだ。俺は引き上げるぞ」
『はいよ、ファーさん。ギアさんにもヨロシク。ついでに今度新型を取りに帰るから』
「取りに来る前に無様な屍を晒すな、それだけ言っておく」
『相変わらずだな……ま、安心したよ。了解だ』

簡単な会話後、スキエンティアは再び姿を消す。これ幸いにとザフトは残った者達でメネラオスを始めとした連合の残存戦力に攻撃を仕掛ける。
――が、直後に彼らの間を凄まじい威力のビームが横切った。

「くっそー！今度は何だ!?」

「もう、これ以上は……！」
『……いや、猫の手も借りたいような土壇場で間に合ったようだな』
「「「「え!?」」」」

そのビームの発射元を探るように辿ると、猛スピードで接近する鳥のような機体、そしてその遥か後方から更に二機の機体が向かって来ていた。

その機体こそ、クレナイガイが駆るウイングガンダムと先のアメノミハシラでマリーダを救ったライとモニカのガンダムデルタカイとリ・ガズィカスタム。
スキエンティアの行いによって衝撃が抜け切らぬウルトラ騎空団の危機に、間一髪駆け付けることが出来たのだ。

「ウルトラ騎空団！全機無事だな!?」
「オーブ先輩！」
「そちらの二機は!?」
「レジェンド様、モニカ・クルシェフスキー並びに皇ライ到着しました！只今よりそちらの指揮下に入ります！」
「デブリだらけ……父さん、何があったの？」
「実は「「「「父さん!?」」」」お前ら少し黙っていろ……！仕方ない、話は後だ！これより俺達は大気圏突入を行う！各機はペガサスA、もしくは――アークエンジェルへと帰投せよ!!」

その指示にウルトラ騎空団のみならず、マリューらアークエンジェルクルーも驚く。
「位置的に全機がペガサスAまで戻るのは不可能だ！それにハルバートンとやらの願い、多少なりとも汲んでやらねばならんというのもあるのでな！」

それはどういう、と出かけた言葉も全員が飲み込んだ。今はそれどころではない。命がけで自分達を逃がそうとしてくれている第８艦隊の生き残り達の思いを無駄にしてはいけないと、彼らは即座に行動を開始。

同時にメネラオスからシャトルが地上へ向けて発進準備を開始する。避難民を乗せたシャトルを護るべく、Ｓガンダムが可能な限り近くまで接近・護衛を行う。

そんな状態にも関わらず、ザフトは攻撃を止める気配を見せない。

「逃がすかぁぁぁ!!」

「いい加減にしろよテメェ!!」

特にイザークは並々ならぬ執念で一誠の量産型Ｍｋ―Ⅱ改を攻め立てている。対する一誠もさすがに先の光景を見せつけられて尚も追いかけてくるデュエルに苛立ちを隠せなかった。

同じくバスターもリバウを追いかけるが、火力重視のバスターは本来後方より射撃を行い、遠距離で敵機を撃墜することをコンセプトにした機体。よって機動力自体は他の機体に劣る以上、地球へ近付けば近付くほど――

「マズい、地球の重力に捕まった！駄目だっ……戻れない！」

当然、こうなってしまう。

「アスランとニコルは戻せ！今から追っても何も出来ん！」

「エネルギー的にもヤバそうだしな。下手すりゃコッチまで地上に引きずり降ろされるぜ」

クルーゼとベリアルも引き際と考え――

『ラル、パッカード、アポリー。これ以上彼らを追う必要はない、撤退しろ。あの機動兵器に加え、新しく合流してきた機体についても調査しなければならん』
「「ハッ！」」

シャアもまた三人を引き上げさせ、戦争が新たなる局面を迎えることを感じつつ撤退する。
しかし、ガモフだけは最後まで――否、最期まで撤退せずメネラオスへと攻撃しつつ前進していく。
――特攻だ。

「ローラシア級！本艦に尚も接近！」
「刺し違えるつもりか……！」
「アークエンジェルだけではない。ウルトラ騎空団の艦にも傷一つ付かせはせんぞ！シャトルも降下させろ！連中の大半が退いた今がチャンスだ！」

ハルバートンの覚悟は当に決まっている。己の意志と願いを後世に託す――彼が望んだレジェンドとの対面は果たせないだろう、しかし彼は『ハルバートンの願いを汲む』と言ってくれた。それで十分だ。
時代を憂いつつ、智将は最後の敵を迎え撃つ。
片や、満身創痍ながらも突き進んでくるガモフ。片や、守るべきもののために仁王立ちするかの如く動かず砲撃を止めぬメネラオス。

「ハルバートン提督！」
「ゼルマン艦長！」

それぞれの艦長の名が各々の軍に叫ばれる中、ガモフとメネラオスは双方共に轟沈。最後まで己の艦と共に殉じた彼らへ、軍属の者は涙

を堪え敬礼にて見送った。

「……閣下……」

恩師の生き様を焼き付けたマリュー。

「……逝ってしまったか。実直で、ザフトでも信頼出来る人物がまた一人」

シャアもシャリアと共に、ミダラーンのブリッジにて敬礼でガモフを見送る。

アークエンジェルは既に大気圏突入を開始し、ストライクとメビウス・ゼロの他、ダブルオークアンタとバルバトス、ヒュッケバイン二機にガンダムX、そしてリバウ、ゲシュペンストMk—Ⅱ・タイプSを収容済み。

反対にペガサスAはライン・ヴァイスリッターとゼルガード、ウイングガンダムのみだ。

まだ、量産型Mk—Ⅱ改とアルトアイゼン・リーゼ、Zにデルタカイ、リ・ガズィカスタム、そしてシャトルの護衛をしているSガンダムが残っている。

タイタスとフーマは万が一に備えてアストラル体となり一誠と共にあり、ダ・ガーンも同じく一誠のブレスレット内にペガサスAの方から移動していた。

「こいつぅぅッ!!」

「しつこいにも程があるっつーの!!」

地球の重力に引っ張られながらも戦闘を継続している量産型Mk—Ⅱ改とデュエル。レジェンドは全機が帰投してから戻るために殿

として、残る４機は変形機構と高出力により最寄りの艦まではどうにか自力移動可能なので、いざという時の保険として各々が自主的に残っていた。特にＳガンダムは当初の目的が避難民を乗せたシャトルの護衛。せめてシャトルの安全が確保出来ねば。

「オラァッ!!」

「ぐっ!くっそぉぉぉ!!何度も何度もぉっ!!」

ジェット・マグナムを叩き込まれ、吹っ飛ぶデュエルだが尽きぬ執念で再び攻撃を仕掛けようとしたところを、遮るようにメネラオスから発進したシャトルが降下していく。

「あの戦艦から出たシャトル……ってことは……!」

「このっ……!よくも邪魔を!」

一誠との戦いに水を差されたと感じたイザークは、激情のままにシャトルを狙いビームライフルを発射する。大気圏での戦闘ということもあり機体が安定しないため命中しなかったが、もし当たってしまったら――

「ふざけんな!それに乗ってんのはお前らが原因で――」

「逃げ出した腰抜け兵がぁぁーッ!!」

デュエルの放った何度目かのビームが遂にシャトルを貫く――

――ことは、無かった。

「あっぶねえ！ウルトラ危なかった！ナイスアクション俺!!」
「ゼットさん！ウルトラファインプレーだぜマジでエェェ!!」
「貴様ァ……！」

間一髪、Ｚガンダムがビームサーベルにも耐えるシールドで割り込み防ぐことが出来たのだ。一誠だけでなくアークエンジェルに帰投していたキラや、近くまで来ていたダイゴもガッツポーズしてしまうほどの功績。そして、さらにそれが功を奏しシャトルは無事安全圏へと離脱。

「ティガ先輩！一誠をアークエンジェルへ！そこからじゃペガサスＡは遠い！」
「分かった！」
「すいませんゼットさん！ホントに！マジでありがとうございましたっ!!」
「おお！早く行けでございます！」

Ｓガンダムの手を借り、量産型Ｍｋ―Ⅱ改はその場を離れアークエンジェルへと帰投する。

「逃がす……ッ!?」
「お前、何してんだよ……！」

まだ諦めず二機を追おうとしたイザークだったが、凄まじいプレッシャーを感じてＺガンダムの方を向くと、大気どの摩擦熱ではない赤い光を放つＺガンダムがあった。

「撃つ気もなきゃ撃たれる気なんてある訳ない、無抵抗の避難民が乗

るシャトルを狙いやがって……！」
「何だと……!?避難民!?」
「お前みたいな相手を撃つことしか考えない奴ばっかだから、こんな戦争が終わらないんだ!!」

ゼットの叫びと共に、Ｚガンダムの放つ光がより一層激しさを増していく。

「隊長！この感覚は……！」
「ああ……！しかし、これ程までに早く覚醒するとは！」

シャアとシャリアはモニターに映るＺガンダムと、ゼットが無意識に放っているプレッシャーを離れていながら感じ取っている。
彼らが同じニュータイプだからというからだろうか。

「な……何だあれはっ!?」
「一発ぐらいお仕置きをブチ込まなきゃ気が済まねえ！」

Ｚガンダムがビームサーベルを抜き――

「ウルトラ反省しやがれぇぇぇぇぇ!!」

思いきり振るうと、それは予想を遥かに超える長大な光の鞭というべき形となり、デュエルに迫る。

「う……！何で……何で動かない！このっ！何で！う……うわあああああ!?」

何故かイザークの操縦を一切受け付けなかったデュエルは、殆ど棒

立ちのまま長大なビームサーベルで袈裟斬りに切り裂かれて吹き飛ばされた。
しかしコックピットまでは損害が及んでおらず、デュエルはバスター同様そのまま地球へと落ちていく。
Ｚガンダムはアルトアイゼン・リーゼに救助され、デルタカイとリ・ガズィカスタムがＭＡ形態で一時的にそれぞれと接続。四機を受け止めるべく下方へ回り込んだペガサスＡへと無事帰投した。
計らずも別れて乗艦し、また望む場所ではないところへと降下することになったウルトラ騎空団とアークエンジェル。新たなる脅威から受けた傷も癒えぬまま、彼らの戦いの舞台は地上へと移る。

〈第１０章へ続く〉

苦戦必至のツインロード、出会いと別れの積み重ね
移りゆく戦場

低軌道会戦――後にそう呼ばれる地球連合宇宙軍第８艦隊とザフトの戦闘は、星の民・ルシファーの駆る大型機動兵器スキエンティアが介入したことにより双方多大な損害を受けた。
ほぼ痛み分けに近いが、連合はアークエンジェルを除きメネラオスを含めた艦隊とＭＡが壊滅。ザフト側はガモフが特攻により轟沈し、艦載機もアズナブル隊並びにエゼキエル二機とＧ兵器以外が全滅。
損害は連合が大きいものの、アークエンジェルを降下させるという目的を達成した連合側が結果として勝負には勝った形だ。
唯一損害の無かったウルトラ騎空団は戦力を意図せず分断された形になり、奇しくも約半分はアークエンジェルと再度行動を共にすることとなる。
合流した新たな戦力であるライとモニカ、そしてウイングガンダムという愛機を得て駆け付けたガイ＝ウルトラマンオーブはレジェンドやゼット、ロスヴァイセ、アマリにルリアらと共にペガサスＡへ乗艦し、アークエンジェルとは別の場所へと降下。戦力的には合流した三人の技量の関係でペガサスＡ側が若干上、というところ。
しかしながら問題は戦力よりも降下した場所の方だ。アークエンジェルはザフトの勢力圏内に、そして――ペガサスＡはマルマラ海の港、その一つの近辺へ。前者は単純に所属陣営が絡むだけだが、後者の問題は別のところにある。
ペガサスＡが降下した地点の近くにあるラボ……そこは連合の、引いてはコズミック・イラにおけるヒトの『罪』がある場所であった。

☆

――オーブ連合首長国――
辛うじてアメノミハシラを脱出したヒリュウ改は、地上の別働隊と

合流。ミナがオーブ政府上層部にアメノミハシラでの出来事を説明開示するということでその場に居合わせていたヒリュウ改の面々は勿論の事、現状把握の為にクロガネの面々も同席することになった。

「――以上がアメノミハシラで起きた出来事だ。おかげでアメノミハシラは放棄せざるを得なかった。おそらくまだ内部には奴らが闊歩している可能性が高い」
「何だこれは……!?まさかザフトの生体兵器か!?」
「いや、そう決めつけるのは早い。もしかすると連合のとも考えられる」
「しかし……かくも悍ましき姿よ。発している言語もよく分からぬ」

映像を交えて説明するミナと、恐怖や困惑といった感情を隠せないオーブ首脳陣。ウズミも真剣な表情でそれを見据えている。

「内部だけではない。宇宙に出現したあの獣のようなものもまた未知なる脅威だ」
「……そいつらはインベーダーだ」

声がした方向を向くと、竜馬がその目に闘志を宿しインベーダーの映像を睨みつけている。

「インベーダー……!?」
「ああ。アメノミハシラの中に現れた奴らは違うだろうが、宇宙空間でウチの騎空団がやり合った連中はインベーダーに間違いねえ。こっちに来てから何か嫌な予感がしっぱなしだったが合点がいったぜ」
「では、あれが君達ゲッターチームが戦ったという……生き物や機動兵器に寄生し、その名の通り侵略を行う化け物ということか」
「「「「なっ……!?」」」」

グラハムの言葉に竜馬が黙って頷くと、その場にいた全員が戦慄する。生き物というカテゴリにはつまるところ人間も含まれており、しかも機動兵器にすら寄生する存在など聞いたことがない。先日の鬼に続き円盤生物、そして謎の生命体とインベーダー……もはや頭痛の種しか出てこないような状況だ。

しかし、連合やザフト――プラントは間違いなくこれらを知ったとしても『相手側の新たな生体兵器に違いない』と決めつける可能性が高い。俗な言い方になるが、そんな泥沼化しないオーブのアメノミハシラが狙われたのはある意味幸いだったのかもしれない。

更にそこへ凶事が流れ込んでくる。

「……今、レジェンド様とサーガ様より別々の場所から片道通信があった。地球連合軍第8艦隊が全滅したそうだ。その原因の一つが所属不明の超大型機動兵器による連合・ザフト双方の多大な損害とのことだ」

「「「「!?」」」」

厳勝から告げられた情報に、その場にいた者は残らず戦慄した。ここに来て連合とザフトでもない新たな勢力の介入……それも他の勢力とは別次元の技術力を持っているとあればその反応も納得というもの。

そして何より――

「なぁ厳勝よぉ、ちっとばかし気になったんだが旦那と大将が別々の場所からってのはどういうこった？」

垂れもが気になったことを厳勝にとって上司にあたる神親衛第一分隊・紅蓮の団長のカミナが代表して聞いてみる。別に責めているわけではない、そもそも厳勝はアメノミハシラにおいてウルトラ騎空団の団員全員生存に尽力してそれを成し遂げた。

無論、それを巌勝も理解しているので得た情報を正直に話す。
「どうやらザフト側は件の機動兵器によって損害を被ったにも関わらずそのまま連合への攻撃を敢行し、その結果大気圏突入の折に分断され、連合の新型強襲揚陸艦アークエンジェルにサーガ様や三日月らが、我々ウルトラ騎空団の新型艦ペガサスAにレジェンド様やアマリ、ルリアらが別れて乗艦することになった上、ギリギリまでザフト側も粘ったらしく降下地点が大きくズレたようだ」
「つまり例の機動兵器はレジェンド様達がいても尚第8艦隊やザフトの戦力の大半を奪ったってわけか。とんでもない相手なのは確かだな……」

巌勝の報告を聞き、ゾンダーやソール11遊星主らという数々の脅威と戦ってきた凱が呟く。確かにそんな相手ならヘリオポリス行きということで戦力が分断されているレジェンド達、それも本来の機体でなければ厳しいのも理解出来る。実際、アメノミハシラ側は束のアストラナガンのおかげで初期攻撃隊やある程度の増援は殲滅されたぐらいだ。

「いずれにせよ、レジェンド様とサーガ様はそれぞれ独自に我々と合流すべく動き始めるだろう。ならば私達は敢えてオーブに留まり今起きている問題解決に力を注ぎ、可能な限り戦力増強を行うことを第一と考えるべきだと思うのだが」
「まあ確かに、闇雲に掘り進みゃ良いわけでもなさそうだしな。あれだな、『可愛い子には旅をさせよ』だっけか、それの大人版だと思えばいいだろ！」
「その例えはどうかと思うけどな……とはいえ旦那も大将も簡単にくたばったりしないだろうし。特に旦那は」

巌勝とカミナの意見に賛同するオルガ。ベアトリクスやゼタから『レジェンドはノース・ヴァストで猛吹雪の中、褌一丁で乾布摩擦を平

然としていた』などと聞いたらそう思わざるを得ない。冬場ならともかく猛吹雪の中そんなことをやらかす彼がちょっとやそっとでやられるわけがない、と誰でも納得するだろう。
　そんな時、ミナが何かに気付きウズミに声を掛けた。

「ところで俗な質問をするが構わないか、ウズミ・ナラ・アスハ」
「構わぬ。何かな、ロンド・ミナ・サハク」
「貴公の娘のカガリ・ユラ・アスハの姿が見えぬ。このような場には可能な限り出席させ、場の空気を学ばせるようなことを言っていたと私は記憶しているが」
「……やはり、そこに気が付くか。あれは戦争を終わらせるために自分も戦うと飛び出して行きおった。すぐにキサカを付けたが……全くあの跳ねっ返りは誰に似たのやら」

　ため息を吐きながらウズミはカガリがオーブから出ていったことを告げる。主に重役は口を開けっぱなしだが、ミナから見れば己の信念のもとに生きている部分は好感が持てる。政治に関わる者としてはアウトだろうが。

「あの……私達が捜索に出ましょうか？」
「ミツバ・グレイヴァレー艦長、申し出はありがたいが貴殿らにばかり頼るわけにもいかぬ。あれが少しでも世界の現状をその目で見て何かを学び戻るならそれも良し。何より、貴殿らにしてみれば団長殿の捜索にこそ出たいであろう」

　ミツバ個人としては正しくその通りだったりするのだが、カミナやオルガといった先達らが既に行動方針を提示しているのだし、強行して行き違いたくもないので黙っておく。

「では、今回はこれにて会議は終了ということで宜しいな？ウルトラ騎空団の方々は引き続きオーブで活動なさると」

「おう、まあメンバーに関しては入れ代わり立ち代わりするけどよ」
「そういやグランやジータの方はどうなんだ？噂に聞く闇の巨人とやらも最初の闘い以来姿を見せていないらしいけど」

アスカの心配だが、通信によれば向こうは多少のトラブルはあれど大きな事件は無いらしくカルミラ達も襲ってきていないという、こちらに比べて平和な報告に一同は安堵した。こちらの現状が現状だけに精神的にもありがたいといったところだ。

「グランサイファーをコアとした新型はもう少しかかるらしい。まあ、バコさんや東の姐さんがこっちにいるし、スワン社長もボスと一緒にギャラクシーレスキューフォースに出港してるときた。技術ぶっ飛びトップ3が全員惑星レジェンドにいなきゃ仕方ないってもんだろ」

一応、アムロなども技術力は相当なものだが、今挙げた三名があまりにも飛び抜け過ぎなのだ。これはオルガの言う通り仕方ないで済んでしまう。急いでは事を仕損じると言うし、グランサイファーはグランやジータにとって大事な艇。戦場においても信頼と安全は何よりも重要なものでもある。
何にせよ、レジェンドやサーガらに関してはそれぞれで解決してもらう、ということに落ち着いた。

「リアス達、大丈夫かしら……」
「ロスヴァイセさんも……せっかくダーントさんがハクくんとフウちゃん連れて来てくれたのに」
「……で、何でその2匹をカナエ先輩が抱っこしてるんですか？」
「そこに可愛いがあるからよ！」
「ニャ」
「それって理由になるのかニャ……？」

ドヤ顔で言い放つカナエだが、しのぶがこの場にいれば確実にお仕置きされる案件。かくして、ウルトラ騎空団は各々の場所で今後の戦いや冒険に備えて準備を行うこととなった。

☆

――月王国（ルナ・ブリテン）――

「では、当初の予定通り超機甲神ガンジェネシスは――」

「アルテイヤー無しでの運用を視野に入れます。幸い他の機甲神や現在開発中のエルガイヤーは無事ですし、機甲神側での合体機構の中枢はエルガイヤーが有していますから。奪われたアルテイヤー……奪還可能ならばよし、しかしながらあの愉快犯のようなリゼヴィム・リヴァン・ルシファーがそのまま五体満足でアルテイヤーを所持し続けている可能性は限りなくゼロに近いでしょう」

先代女王のモルガンとその側近たるヤプールが重要な会話しているのは、よりによって喫茶リコリコ。しかも二人とも変装など全くしていない素の状態。おまけに真っ昼間。

だが、これには理由がある。ここで働いているウエイトレス二名が沙耶の護衛候補だからだ。片方はアカネの姉妹とか言われたら信じてしまいそうな程、容姿が似ているがそれはさておき。

その会話の内容はレジェンドより齎された機甲神のことだ。少し前にレジェンドから次元間通信が来て内心舞い上がっていたモルガンだったが、沙耶以外にも勇治がウルトラ騎空団に合流した関係でエルガイヤーの設計図と同時に機甲神へのプロテクト強化の方法が書かれた書類が送られてきたことで本格的に最後の機甲神、即ちネオガンダムも搭乗しているエルガイヤーの開発を開始したのだ。それと並行して行われている各機甲神へのプロテクト強化――これは奪われたアルテイヤーを元にした機兵が開発され、他の機甲神を奪われないようにするための処置である。

「ところで操縦者は誰に？予定通り先代陛下が乗られますか？」
「そこです、問題は。私か沙耶が乗ることも考えましたが沙耶も我が夫から機体を賜ったようですし、私はスーパー系ならば我が夫と相乗りと決めていますので」
（ああ……つまり当初は陛下が一緒だから乗る気だったのか、ガンジェネシス……）
「バーヴァン・シーはまず乗りたがらないでしょう。そうなると中々良い人選がいません。まずクソ虫やマーリンは論外です」
「まあ、奈落の蟲は名前が似ているオーヴェロンが気に入っているようですし、そもそもマーリンは機動兵器の操縦が満足に出来るのかも疑問ですからな」

ちなみにマーリン、シミュレーターにて無謀通り越して負け確定なマジンガーＺＥＲＯを相手に選択し、戦闘開始と同時にブレストファイヤーで蒸発するという最短撃破『され』記録更新という不名誉な栄光を手にしたらしい。この時、モルガンは彼を『グランドバカ野郎』と評したという。

「そういうわけで、今後はエルガイヤーの操者選定も進めていきます。我が夫が託してくれたもの、それをこれ以上貶めるような真似はさせません」
「畏まりました。時に先代陛下」
「何です？」
「アルトリアはどうなのです？彼女はシミュレーターをしているところさえ見かけませんが」
「ああ……あれは無理です。何故かシミュレーター絡みだと以前のサボり癖が出て逃げ出しますから。腕前もマーリンよりはマシ、程度ですし」

なるほどと理解する反面、そんなアルトリアよりも下の『これは一

体どういうことなの』とツッコミ待ちレベルの腕前なマーリンは何なのかと思うヤプールであった。
　そんな時、入り口のドアが開かれる。
「やあ千束ちゃん、たきなちゃん。相変わらず可愛いね」
「あ、マーリンさん。いらっしゃいませ」
「とりあえず今日のオススメを――えっ」
（あ、やっぱり先代陛下とヤプールさんに気付いたんだ）
「そこで立ち止まんなマーリン。とっとと入れよ」
　しかも更に、ゲシっとマーリンにヤクザキックをかましつつ漸く謹慎が解かれたオベロンがブランカを肩に乗せて来店。その際、オベロンはモルガンを見て「げ」と発してしまい――
「人の顔を見るなり『げ』とは相変わらず品がないな、クソ虫」
「いきなり喧嘩売ってくる『元』女王よりはマシだと思いますけどぉ～？つーかいつまで固まってんだよマーリン、元はと言えばお前が原因だろ」
「私!?いやいや私は別に狙ってなどいないぞぅ！ただ長らく謹慎状態だった君を連れ出してあげようとだね！」
「それでこんな結果になったなんて笑えないんだよ！」
　ギャーギャー騒ぎ始めた二人に冷たい視線向けるモルガンを見たからか、それともこれから放たれる何かを察したヤプールに手招きされたからか、一先ずブランカだけはパタパタと羽ばたいてそこから離れる。
「はや辿り着けぬ理想郷（ロードレス・キャメロット）」

月王国（ルナ・ブリテン）の一角で、今日も宝具が炸裂した。加減がされていたとはいえ、毎回被害を受ける喫茶リコリコの関係者は泣いていい。

「修繕費用は沙耶に伝えてクソ虫とグランドバカ野郎の給与から差っ引きますのでご心配なく」

（というか先代陛下ー！うち修繕する度に強度とか色々上がってるのに平然と吹っ飛ばしてるんですけどー!?どんな威力出してんですかー!!）

（そのうち喫茶リコリコが要塞リコリコになりそうです）

……既に泣いていた。ついでに一応月王国（ルナ・ブリテン）で給与貰ってるオベロンとマーリンも泣いていい。後者はやらかしが多過ぎてアレだけど。

とりあえず……こちらは比較的まだ平和である。

余談だが、この時も珈琲を飲みに来た七星剣の一人・ナックル星人ブランケが巻き添えを食らったため、元凶のオベロンとマーリンを無表情・無言で追い回したらしく揃ってトラウマになったらしい。

「……」

「いやいやいや死ぬ！死ぬってアレに追いつかれたら絶対！マーリン生け贄になれよお前！」

「嫌だ！確実に酷い目に合うし夢魔とか関係なく死にそうだからね！ここは……ってギャー!?また速度上がった！ヘルペス！ヘルペスミー！」

「ヘルプミーだバカ！」

〈続く〉

――■■■へ。もうじき自分の命の灯火は消えるだろう。故にこのメッセージを送る。この世界の人間■■■■・■■■は■■■■■■■である。■■■■・■■■は人間達が■■■■■■と呼称する我々の遺伝子を持つものである。つまり■■■■・■■■は■■■■■■の■■である。よって■■■■■■■■■は■■■■■■の■■である――

それぞれの想い

地球へと降下したアークエンジェルとペガサスA。しかし、直前の戦闘が原因で双方とも降下地点がズレ、かつ離れ離れになってしまった。

それはいい。元々所属が違うのだからどのみち何れは別れることになるのだから。問題はウルトラ騎空団のメンバーが仕方なしとはいえ何名かがアークエンジェル側に再度乗艦することになったこと、そして互いの降下地点が面倒事に巻き込まれる確率の高い場所だったことだ。

☆

――ペガサスA――

トルコの内海、マルマラ海……北の黒海、南のエーゲ海とそれぞれボスポラス海峡、ダーダネルス海峡を通じて繋がっているそこの港。その一つの近辺にペガサスAはステルス機能を使い停泊していた。

というのも周囲の状況把握に加え、先の戦いにおいてゼットがZガンダムで起こした不可思議な現象の反動か体調を崩してしまったため、休息を取るためにそうせざるを得なかったのだ。

「すいません皆さん……俺が不甲斐ないばっかしに……」

「気にするな。それにお前は不甲斐なくなんかない。避難民が乗ってたってシャトルを守り抜いたんだからな」

「オーブ先輩……」

「俺なんて駆け付けたタイミングが遅いし、撃てたのも一発だけだ。それも精々脅しにしかならなかったし」

今、ラムネを飲みながらゼットにスポーツドリンクを渡しつつ看病しているのは先刻合流したガイ。彼はそう言うが、実はライやモニカが真っ直ぐこちら側に合流出来たのは彼のおかげなので、こちらの戦

力アップにおいても十分貢献したと言える。

「とりあえず……全員無事なんで良しとしようか。正確には全員、じゃないが」

「……第８艦隊の皆さん……」

最後まで、自分達を守って散ったメネラオス――ハルバートン。そして地球連合宇宙軍第８艦隊。最後に聞いたハルバートンの言葉は確かにゼット達の心に届いていた。彼らに託されたものを背負い、自分達は進まなければならない。

「俺、もっと頑張ります」

「ああ。俺も後輩に負けてられないからな」

「……あ！後輩だけど、ＭＳの操縦ならオーブ先輩の先輩ですよ！俺！」

「言い方がいまいち分かりにくいぞ、それ。まあいいか、ただ寝てるだけだと暇だろう。そうだな……ヒストリーモードだっけか？ゼットがそれで体験したことでも話してくれよ」

「あ、それ俺達も混ぜてくれよ！」

「！」

ゼットとガイがその声に驚き振り向くとミゲルとラスティが扉から顔を覗かせた。この二人もウルトラ騎空団預かりということでペガサスＡに移っていたのだが、色々あって今まで割り振られた部屋に籠もりっぱなしだったのだ。

「よっ！そっちの人は初めましてだけど」

「皆、外に出掛けたり休んだりしてて俺達も暇でな。一応捕虜扱いなわけだし、許可なく艦外行動とかは拙いだろうと思ったら面白そうな話が聞こえてさ」

捕虜扱いとは言ったものの、彼らも驚く程制限のハードルは低かった。反抗・逃走等の意志さえ見せなければ基本艦内では自由行動。外出も許可が下りれば問題無く行える。既にウルトラ騎空団の空気に心地良さを感じていた二人が対立行動をするはずもなく、彼らの性格もありこうして一クルー同然に話しかけてくるのだ。

「そっちのシミュレーター、マジでその時代その戦場にいるかのような状況を再現出来て、しかも会話まで出来るんだろ？今度俺達にもやらせてくれよ」

「ちょっと前に見てみたがジンやシグーに似た機体とか色々あって興味深いな。個人的に『ガンダムキュリオス』ってのが気になるが」

「おぉ、それは変形機構持ちのウイングに乗ってる俺も興味あるぞ。さ、動けないんだから観念しな。ゼット『先輩』？」

「うへぇ……そういやオーブ先輩ってからかいもプロ級だったっけ。仕方ねえ、腹を括るぜ！」

待ってましたと三人で顔を見合わせて笑うガイ達。その後、和気藹々と話を聞きながら彼らは賑やかな休暇を過ごすのだった。

レジェンドはルリアとアマリ、ロスヴァイセを連れて近くの街に物資補給に出ていた。綺麗所三人を連れているレジェンドに嫉妬の視線が絶え間なく注がれるも、大抵は纏う雰囲気に撃沈。それでも諦めない者はレジェンドの尋常ならざる殺気をピンポイント直撃させられ、恐怖で涙を流し泡を拭きながら失神。そいつらの股が湿ってたような気もするが至極どうでもいい。

「わあ～！オーブもそうでしたけど、空の世界とはやっぱり違うんですね！あ、あれ美味しそうです！」

「ルリア！一人で進んじゃ駄目だってば！」

「レジェンド様！あちらで特売やってるみたいです！購入に一家族何

個とか制限ある場合もありますし早急に向かいましょう！」
「……保護者か俺は。こう騒がしくては補給の片手間に調査の一つも行えん」

ルリアとアマリの反応は、まあ当然だろう。何せ二人ともレジェンドらに連れ出される前は幽閉状態にあったのだから。ルリアの世話をアマリが焼いてるのもいつも通りの光景だ。
ロスヴァイセも元々百均巡りが趣味で、長年薄給だったことで染み付いた貧乏性はそう簡単に抜けないことを証明する形になってしまった。身に合わない贅沢をして破滅とかしてしまわないから良いのかもしれないが。

（しかし……あの出来事の後だ、空元気なのかもしれん。それとも既に受け入れて進もうとしているのか……どちらにせよ、気落ちしているよりはマシだな）

先の戦いで謎の機動兵器による虐殺とも言える蹂躙。彼女らの目の前でそれが行われた。ヴァルキリーだったロスヴァイセはともかく、まだ戦闘自体そう多く経験しているとは言えないルリアとアマリには相当堪えたのだろう。レジェンドがゼットやライ、モニカと帰投した際に泣きながら抱き着かれた。戻ってくるか不安だったという。

（それにしても、ライとモニカの話ではインベーダーがアメノミハシラを襲っていたというが……戦力的に言うなら余程強力なインベーダーでもない限り撃退出来る戦力が残っていたはず。にも関わらず、ヒリュウ改はアメノミハシラを脱出した……しかも束まで出撃しただと？どう考えてもアメノミハシラ内部で何かあったと考えるのが妥当だ。これに関しては合流してから聞かねばならんか）

立場上、頭痛の種とは常時付き合っていなければならないようなレジェンドだが、嘆く時間などない。

「何にせよ、まずは当初の目的を済ませるか。一応休暇の体を取っているわけだし、その後のことは追々考えていくとしよう。どの道目指すのはオーブなわけだが……懸念すべきはアークエンジェル側にいる沙耶の体調だな。降下直前サーガにメッセージを入れてあるが、俺の予想が正しければ……」

そう思ったレジェンドだが、ふとペガサスAで感知した、ある施設のことが頭を過る。またも思考の世界に入り込もうとした時に、ルリア達に呼ばれ意識を戻されると一先ず施設のことは置いておき彼女らの方へと歩を進める。それに沙耶の方はしのぶもいるし、もしかすればこちらより安心かもしれない。

レジェンドの気にしたその施設がコズミック・イラにおいて重大な意味を持つものだと彼らが知るのは、もう少しだけ後のこと――。

ペガサスAのブリッジでは残る流とライ、モニカに艦長の勇治がブリーフィングを行っていた。本来ならレジェンドが同席すべきだろうが、先の三人のことも考えると彼を同行させた方が色々都合が良いのである。

……トラブルに巻き込まれた結果、町中で「汝の名は、バハムート！」されたりするのは勘弁してほしいし。

「「特機用トレーニングプログラム？」」

「ああ。話に聞くインベーダーや大型の怪獣などに対抗するとなると、MSのサイズではかなりの火力が必要になる。まあ、ウルトラ騎空団にはそれを生身で出すような色々おかしい面子だらけだが……」

団長であるレジェンドや、副団長のサーガなどその典型だ。他にも分かりやすい部類なら普段はレジェンドにくっついている無限の龍神オーフィス、神衛隊なら厳勝や狛治、空の世界出身のサラーサやガ

ンダゴウザなど。
ここに別行動中の九極天、即ち東方不敗らを加えると更に増える。
「ともかく、そうなると色々と考えなければならないことが多くなるため、それも視野に入れるにしてもまず一番手をつけやすい『単純に高い火力を持ちやすい機体』……つまりスーパーロボットの開発を進めることにしたわけだ。開発に関してはレジェンドに一任している。私はもっぱらＭＳサイズが主流なんでな」
「確かに、父さんはスーパー系だよね……色々と」
「ライ、あの方を単純にスーパー系の括りに入れるのは違う気がするわ。機動性重視の高性能ＭＳ相手に手加減した上で変態機動を行うマジンガーＺＥＲＯは果たしてスーパー系と言えるのかしら？」
「じゃああれだ、鬼畜チート系」
「いやだから真面目な話してるのは分かるけど俺にペガサスＡの操舵通信火器管制その他ブリッジ関係全部任せるとかやめてほしいんだけど!?今は停泊してるから楽でいいにしても、シエルどうしたのシエル！超高性能ＡＩ!!」
流の必死な叫びにハッとなる三人。別に忘れていた訳じゃないぞ。……多分。もしそうなら逆襲でメダルの代わりに魂粉砕してきそうだけど。彼の元の職業的に。
「少しばかり気になることがあってな。そちらの解析にまわしている」
「しょうもないことだったら今この場で変身して内側から巨大化しつつペガサスＡブッ壊すんで」
「やめてください流さん!?」
もう彼も結構キていたらしい。さすがにここで誤魔化したら確実に流はキレると確信した勇治は冷や汗を垂らしつつ正直に答えた。

「降下時にこの近くで妙な建築物を見掛けたんだ。何というか……科学者としての直感というべきかな。その建築物……何らかの施設だとは思うが、そのまま野放しにしてはいけない気がしたんだ」
「施設？あれじゃないですか？ここってほら、場所的に水産業とか盛んそうですし。それ絡みとか」
「だとしたら鮮度などを考えてもっと近くに建設するだろう。その手の施設にしては建設位置が遠過ぎる」

その施設は港の近くではあるが、海の近くではないのだ。であるならば何の施設なのか。別にスルーしてもよかったが、彼の勘が告げた。もっとよく調べるべきだと。いまいち腑に落ちない流であったが、とりあえず休める時に休んでおこうとブリッジを出て部屋に向かう。

勇治の勘は正しかったのか。それはもうじき明らかになる。

☆

――アークエンジェル――

当初の予定と違い北アフリカの砂漠地帯に降下した彼らもまた、状況把握などの各種事情を兼ねた休息を余儀なくされていた。

というのもまだ殆どマークされていないペガサスAに対しアークエンジェルはザフトにとって明確なターゲットであり、ザフトの勢力圏内に降下したことで迂闊な行動はとれない。

加えてあちらのゼットと同じように沙耶が体調不良で倒れたことも関係している。幸いというべきか医者であるしのぶがこちらにいたことでアークエンジェル所属の軍医に頼ることなく、ウルトラ騎空団に割り当てられた部屋で診ることが出来た。

「……外傷的なところはありませんね。やはり精神的な負担が原因かと」
「そうか……命に別条はない、ということでいいのか？」

「そうですね。とりあえず、ではありますが」

とりあえず、か……とサーガは溜め息を吐く。沙耶に限って「実は覚悟が決まっていなかった」ということはないだろう。精神的なと聞いて心当たりが無いわけではない。ゼットがあの時Ｚガンダムで見せた現象……ある意味あれと似たような状態なのかもしれない。

しかしこればかりは同種ないし似たような能力を持たなければ何とも言えないのだ。イノベイターであった刹那・Ｆ・セイエイを人間態のベースにしたサーガだから少しはそういった方面に知識はあっても、見た限り沙耶はイノベイター側というよりニュータイプ側だろう。

だとしたら今のウルトラ騎空団で言うなら元強化人間・現ニュータイプのマリーダ、おそらく先の戦闘で明確にニュータイプとして覚醒を果たしたゼット、素養自体はあるが未覚醒のリアスぐらいしか同類はいない。一番良いのは神衛隊最強とも名高いアムロに見てもらうことだろうが……。

ちなみにレジェンドは除外。あれは逆に超が付くほど万能過ぎて、下手したら解決にとんでもなく無茶な方法を取りかねない。

「あの、沙耶さんは大丈夫なんですか？」

「ああ。ここに来て疲れが一気に出たんだろう。アルテミスのアレも結構なものだったからな」

「確か……沙耶お姉様の叩きのめした相手が悉く変態だったあの基地ですね」

沙耶の見舞いにはキラやミリアリアらも訪れている。というより、学生達にとってウルトラ騎空団との触れ合いはもはや息抜きの一つだ。何名かとは別れてしまったが、それでもダイゴなどがいてくれるのはありがたかった。

「それはそれとして、この辺ザフトの勢力圏内なんだろ？あんましの

んびりし過ぎても良くないんじゃねーか？」

フーマが言ったことは事実。一時ペガサスＡに乗艦していたのでダ・ガーンらを同行させられたのは幸いだが、彼らは孤立無援の状態で敵陣真っ只中に放り込まれた（飛び込んだとも言う）わけなのだし、気を抜き過ぎると寝首をかかれかねない。

ましてやここは砂漠。通常の地形とは様々な面で違うのだ。

「キラはともかく、お前達はシミュレーターでの砂漠戦闘経験は？」

「俺はあんまり……」

「私も……」

「俺もです、サーガ。一応、市街地戦なら重点的にやったんですが……」

他にもタイタスやフーマも当然少ないという。三日月は然程問題なく、ダイゴ自身はいいとして機体が大きさ……重量的な問題と主武装がビーム兵器なのもあって砂漠ではあまり力になれなそうだとのこと。

寝ている沙耶は……生身ならいざ知らず、機体に乗ってだとおそらくはないだろう。アズも未経験だった。

と、ここで意外にもしのぶの経験値が高かった。

「ほら、シミュレーターで使ってたボクサーはホバー走行も可能だったので、特殊な地形での戦闘を結構試してたんですよ」

「ボクサーって……」

「しのぶ先生って、実はアグレッシブ……？」

「しのぶ、カナエに関節技決めてたりしたよな」

「フーマさんも逝ってみます？」

「すいません謝るんで笑顔のまま指バキバキ鳴らさないでください」

サイやトール、カズイもビビっているが、相変わらずミリアリアは

目を輝かせ「今の時代、女も強くないといけないわよね！」と力説している。強いとは物理的になのか精神的になのか悩む光景なのだが。

「なあ、やっぱり砂漠とかで戦闘になったときに注意することとかあるのか？俺達生身でなら割とそういうの得意なんだけどさ……」

「そうですね……空を常時飛んでいられるような機体ならまだしも、大地に足をつけるような機体だと接地圧が重要かも。あとは摩擦とか……あ、一番確実なのはＯＳを砂地用に書き換えることです」

「ゲシュペンスト、モロに受けんじゃん影響……」

「というかイッセー、プログラムの書き換えとか出来るのか？」

キラのアドバイスを聞くが、一誠にせよタイガにせよ機動兵器のＯＳ書き換えはまだ勉強していない。一応サーガやダイゴは可能なのだが、二人とも乗っている機体が特別な上、Ｓガンダムの方はＲＥＮＡが自動でやってくれるため生憎と力になれない。

「……あれ？そういえばバルバトスは？」

「ん？俺のバルバトスは新しく束博士が一から作ってくれた全領域対応型だから、そういうのは必要なくて経験さえあればどうにかなるんだ」

「そうなのか!?凄いな、あのＭＳ」

「ある意味パイロット依存、って言われたらそれまでだけど」

「それでも余計な手間がかからないＭＳってハンパじゃないよな」

これからの事、それ以外の事も含めて、彼らは多くの犠牲の上に成り立つ今の生を噛みしめつつ、穏やかな一時を過ごす。

「マニュアルは昨夜見たけど、中々楽しそうな機体だねぇ。ま、ウルトラ騎空団の皆様方の機体の方が乗ってみたいとは思うけどな」

「そうはいいますけどね、大尉……いや少佐。こっちにいるメンバー、

特務大使や副団長さんの機体はまずパイロット認証でアウト。バルバトスって機体は特殊なシステムに対応してなきゃアウト。でもってあのヒュッケバインとかいう二機も性能をフルで発揮させるには特定のパイロットが必要みたいで、乗れても精々あのゲシュペンストってのが関の山ですぜ」
「次点であの豊満な嬢ちゃんが乗ってる赤い彗星専用機みたいなのってとこか。ん？今倒れてる娘の機体は？」
「それが、どうやら操縦自体は誰でも出来そうなんですが、相変わらずブラックボックスがある上にどうやら操縦桿が別途必要みたいで、それが無いと起動さえ出来ないみたいなんですよ」

格納庫ではムウとマードックが機体の整備をしながらウルトラ騎空団の機体について談笑していた。戦時特例ということでムウは大尉から少佐に、マードックは軍曹から曹長に昇進。給料が上がるのはいいが、この状況で何時使うんだとはムウの弁。因みにマリューやナタルらもそれぞれ昇進している他、キラは少尉、他の学生は二等兵となっている。

「操縦桿が必要だぁ？随分手の込んだセキュリティ積んでんだな、この……ガンダムX？って奴は」
「それだけの機密を持ってんでしょうな。下手に突いて藪蛇は勘弁してくださいよ、少佐」
「大丈夫、分かってるよ。下手に触っていきなり自爆、ドカーン！なんて起きたりしたら俺だって嫌だしさ」

☆

――陛下、どうやらこの子はレジェンド様の圧倒的な力を目の当たりにした者達の手によって造られた人工生命体、その唯一の成功例のようです――
――そうでしたか……他には？――

――いえ、この子だけでした。それ故、かなり苛烈な実験をこの子一人に……――

――……我が騎士達に命じます。この施設、徹底的に破壊して証拠も全て応酬し、関係者は全て粛清します。このような汚点、我が夫が託してくれた私の、私達の新たな国に不要。一切合切、容赦無く蹂躙なさい――

――はっ！――

――……おねえさん、だれ……――

――もう大丈夫です。何も心配ありませんよ。貴女の名は？――

――『製造ナンバー３８』そう呼ばれてた――

――……命とさえ認識されていなかったなどと……我が夫が聞けばここは即座に消し飛ばされていたでしょう。今日から貴女も私の娘です。名前は……そうですね――

それは、忘れ得ぬ遠い記憶――。

☆

砂漠の一角――そこにアークエンジェルを双眼鏡で見る一団がいた。

「図面でしか見たことはないが……間違いないだろう。あれはヘリオポリスで建造された地球軍の新型強襲機動特装艦、アークエンジェルだ！」

金髪の少女が仲間にそう伝えると、他の仲間から無線による通信が入る。

「どうした？」

『虎がレセップスを出た。バクゥ５機を連れてその船に向かっているぞ！それだけじゃない、ホバータイプに換装させたドートレスも６機

！』
「なっ……!?」
「賭けになるな。あの艦がやられるか、それとも……『砂漠の怪物』が嗅ぎ付けてくるか」

バンダナを巻いた髭面の男性がそう告げると、周囲の者達は顔を強張らせる。
今、地球に降りたアークエンジェルに『虎』と……そして『怪物』と呼ばれる存在の牙が迫りつつあった。
今宵は雲一つない空と、そこに浮かぶ立派な満月が見える――。

〈続く〉

月は出ているか？

北アフリカの砂漠の一角――

一人の男が珈琲を片手に、双眼鏡でアークエンジェルを見ている部下に声をかけた。

「どうかなぁ、噂の大天使の様子は？」

「は！依然何の動きもありません」

「地上はＮジャマーの影響で電波状況が滅茶苦茶だからなぁ。ただアズナブル隊とか、最近だとオーブで活動してるっていう謎の傭兵団も頭一つ抜けた技術力を持ってるって話だし、油断は出来ないか。ん!?」

「何か!?」

男が何かに気付き、それに反応し通信先の士官も身を強張らせる。しかし、その理由はアークエンジェルとは別のところにあった。

「いや、今回はモカタマリを５％減らしてみたんだがね、こりゃあいいなぁ。ラルさんとか気に入ってくれるといいんだが」

「驚かせないで下さいよ……いつもの珈琲ですか」

肩をすくめる部下に笑いつつ、男は指示を出す。

「では、これより地球軍新造艦アークエンジェルに対する作戦を開始する。目的は、戦艦及び搭載ＭＳ……いやＭＳじゃなさそうなのも混じっているらしいから、艦載機でいいか。それの戦力評価である」

「倒してはいけないのでありますか？」

男に問いかける部下の兵士、そしてそれにつられて他の兵士からも笑い声が上がる。別に男を馬鹿にしているわけではなく、自分達ならそれが造作もないと言わんばかりの自信からだ。部下達の反応に、男

は「んー」と顎に手を当てて少し悩み――。

「その時はその時だが……あれは遂にクルーゼ隊が仕留められず、ハルバートンの第８艦隊がその身を犠牲にしてまで地上に降ろした艦だぞ？それを忘れるな。一応、な」

そこから更に男は本題だと言わんばかりの真剣さを持って続ける。

「それからもう一つ、あの艦にはアズナブル隊を退けたというとんでもない連中……降下時に分断されたらしいから全部ではないだろうが、そいつらも乗っているとの情報もある。個人的にはそっちが要注意だ。なんせ下手すりゃ機体性能も技量もアズナブル隊を上回るんだからな。一応救いと言っちゃ何だが、あのサザビー・リビルドを負かしたって奴はあそこにはいないそうだ。ま、逆に言うとそれぐらいしかこっちのプラスになる要素は無いってことだからな。妙な動きをしたら無理に突かず生き残ることを優先しろ。では、諸君の無事と健闘を祈る！」

「総員、搭乗！」

男の言葉に続き、部下――おそらくは副官なのだろう人物の号令を聞き、すぐさまＭＳ……バクゥとドートレスに搭乗していく。ドートレスは正確に言うとドートレスＨＭ（ハイ・モビリティ）〝ファイヤーワラビー〟……つまり性能向上版だ。

無論、男も部下と共にジープに乗り込む。

「ん～、珈琲が旨いと気分がいい。さ、戦争をしに行くぞ！」

男――砂漠の虎と呼ばれたザフトの名将、アンドリュー・バルトフェルドは軽く、しかし重い言葉でその場を締め括った。

☆

アークエンジェル・ウルトラ騎空団部屋――

「……ん……」

身をよじらせながら目を覚ましたのは、先刻まで意識を失っていた沙耶。凄く懐かしい夢を見た気がするが、とりあえず現状把握しなければと思い、気怠さが残る身体を起こすと――。

「煉獄龍オーガ・ドラグーンで攻撃！煉獄の混沌却火（インフェルニティ・カオス・バースト）！」

「俺のヒートライオオオオ！二回目エエエ！」

やっぱり決闘（デュエル）していた。今回は一誠とキラ。

「畜生何でヒートライオだけフィールドに残ってると決まって相手が大型モンスター出してくんだよ！フラグか!?敗北フラグなのか俺のヒートライオ!?」

「もう台詞でそれっぽくなってるわよイッセー」

「マジすか部長!?」

「いや何度かパイロ・フェニックス出せる機会あっただろ」

「そうなんだけどさ……あれは相手もリンクモンスター使ってないと本領発揮出来ねーし」

「あー……」

ガックリ肩を落とす一誠に対し、ハイタッチしてるダイゴとキラ。ちなみにタッグデュエルしたところ、ダイゴとキラが誇るWインフェルニティデッキの異常なまでの回転率で一誠とタイガはフルボッコにされたという。

いつも通りの光景だ、と納得した沙耶はアズが持ってきてくれた卵粥を食べつつ現状を把握する。

（先生は……そうか、あの時……）

ウルトラ騎空団において入団時に知己の者はレジェンドと勇治のみ。勇治は度々侍女が話題にしていたし、その功績から知っているぐらいだが、レジェンドは別だ。

母親のモルガンとも親しく、妖精騎士達さえ頭を下げる程の人物にして僅かな期間だったが指導されたことがある。ついでに本気モードのメリュジーヌを拳骨一撃でダウンさせたのを見た時は自分だと死ぬんじゃないかと恐怖した。

つまり、月王国規模でそこそこ親密な付き合いだったわけだ。

パイロットとして、指揮官として、単純に経験豊富な先達として……正直レジェンドに頼りがちだったと自分でも理解している沙耶だが、状況が状況だけにそれも仕方のないことだろう。

だがいつまでも気落ちしてはいられない。レジェンドだけでなく、ウルトラ戦士としては「三分の一人前」と呼ばれているもののパイロットとしては間違いなくエース級なゼットもいないのは痛手だ。レジェンドと一体化（もはやそう言っていいのか判断に困るが）している以上、当然ではあるのだが。

（あの機体……デュエル、だったかしら。かなりの執念だったし……そっちほどではないにしても、バスターも）

おそらくだがゼットには然程執着しないかもしれない。なにせ不可思議な力場で身動き取れなくされたところに手痛い一撃を叩き込まれたのだ。苦手意識が刷り込まれた可能性が高い。

……が、一誠とリアスはそうもいかないだろう。バスターの方は単純に何度もやり合って仕留められなかったから、が妥当か。こちらはまだいい。

問題はデュエル。元々血気盛んなのか、一度一誠のゲシュペンストに凄まじい一撃をブチ込まれ撤退させられてからその執念に拍車がかかったように見えた。

沙耶が思考を巡らせていると、キラ以外はどうやらブリッジで交代の時間だったらしく「また後で」と部屋を出ていく。

「そういやパイロットは哨戒任務とか無けりゃ待機なんだよな。今のうちに少し横になっとこうぜ」

「そうだね。明かり消して、タオルをアイマスク代わりにしたりして仮眠を取っておこうか」

「さっきまで寝てた沙耶さんは？」

「大丈夫……だけど、あれは体調不良で仕方なく、だったから。一応普通に寝ておきたいわね」

とりあえず、満場一致で仮眠を取ることに決まり、明かりを消すとそれぞれ布団に入って各々の方法で眠ろうとする。

――彼らが警報によって叩き起こされるハメになるのは、全員が眠りに落ちてから少し経ってからのことであった。

ミリアリア達が交代としてブリッジに入り、計器類を見ていると何やら不可思議な反応を確認する。

「……？何かこの辺り磁場がおかしくないですか？」

「何？」

同じくブリッジにいたナタルが確認すると、誤差範囲内ではあるが計器類に異常が見られた。

「砂漠の熱対流などでそんなことが起きるなど聞いたこともないが……警戒しておくに越したことはないな。もしさらなる異常を感知したらすぐに報告しろ。くれぐれも自分達で何とかしようとは考えるなよ」

「了解しま……あっ！」

磁場関係で発見が遅れてしまったが――

「本艦、レーザー照射されています！照合……測的照準と確認！」

アークエンジェル側もザフトが仕掛けてきたことに漸く気付く。静かな夜は終わりを告げた。

ブリッジよりアークエンジェル全域に第二戦闘配備が発令される。無論、これにより休息を取っていた面々も急遽起こされることとなった。一応ウルトラ騎空団は客員扱いであるため強制されることはないのだが、大音量で鳴り響けばそれこそ超弩級メンタルでもない限り寝ていられるわけがない。

「っんだよ、良い感じに眠れたとこだったのに！」

「第二戦闘配備……!?」

苛立つ一誠や困惑するキラらを尻目に、起こされてブリッジに入ったであろうマリューから新たな指示が出された。

『第一戦闘配備発令！機関始動！フラガ少佐、ヤマト少尉は搭乗機にてスタンバイ！』

「！」

「二人に指示……ってことはザフトだね。俺もスタンバっとくよ、サーガ様」

「頼む、三日月。地上戦、特に熱対流も気にしなければならない地形では物理攻撃主体のバルバトスが要となる」

「となると、他にまともな活躍が出来そうなのはダブルオークアンタぐらいじゃないかしら……」

「ビームでも出力が並外れた武装であればあまり問題はないだろうが……どのみちそれだけの威力を持つ武装は限られているからな。先輩のアルトやアマリとルリアのゼルガードがいればこの状況にうってつけなんだが、無い物ねだりしても仕方がない」

全武装が実弾なアルトアイゼン・リーゼ、ドグマによる特殊な攻撃方法を持つゼルガードは正しくこの場で真っ先に欲しい戦力だった。特にゼルガードは常時飛行可能な点もアドバンテージである。

「ともかく、搭乗機にてスタンバイと言われたからには現状があまり宜しくないということだろう。一応三日月以外の者も何かあったら対処出来るよう準備をしておいてくれ」

そう言うとサーガは三日月とキラを連れて格納庫へ向かう。

「俺、援護射撃とか苦手だしな……誤射しそうでさ」
「イッセーもか？俺も中距離とかならいいんだけど」
「しのぶさん、私達のヒュッケバインはそこそこやれそうだと思うけど……」
「決定打に欠けるので母艦の防衛が精々でしょうね。こちらはまだGインパクトキャノンもありませんし」

そういった会話に集中していたこともあったのだろう。沙耶が部屋を出ていったことに気付いたものは、その時誰もいなかった。

ブリッジでは既に数多の指示が飛び交っており、そこへ出撃準備を終えたサーガから通信が入る。

『こちらダブルオークアンタ、サーガだ』
「副団長さん!?」

「「「「！」」」」
『準備完了させてからで済まないが、俺は先輩のような指揮官としての能力は恥ずかしながらあまり持ち合わせていない。良くて小隊長クラスだと自分では思っているからな。俺のクアンタなら相手の攻撃にもＧＮフィールドである程度何とかなる。敵戦力を見定めるためにも俺が先行しようと思う』
「本当に何から何までお世話になりっぱなしね……分かりました、お願いします」
『了解した。おそらく敵はこの地形で有利な機体を寄越してくるはずだ。警戒を怠らないでくれ』

マリューが頷くと、ミリアリアはナタルからの指示を受けハッチを開放。続けて発進をオペレートする。

「えっと……ツインドライヴ正常稼働、粒子放出状況ノープロブレム、それから……ダブルオークアンタ、発進タイミングをサーガさんに譲渡します！どうぞ！」

いつもと違うアナウンスをしたミリアリアにマリューらはハテナマークを飛ばすが、サイやトールなどは話を聞いていたため納得。

『了解。ダブルオークアンタ、出撃する！』

ストライクやバルバトスに先んじて、ダブルオークアンタが砂漠の夜空へと緑の粒子を放ちながら飛翔した。

☆

ダブルオークアンタの出撃、無論その様子はバルトフェルドらにも確認されている。

「あれは……名称不明ですが報告にあった粒子を放つ機体ですね。降りてくる前はパッカード教官と近接戦闘で互角にやり合ったとか」
「いきなりとんでもない奴が出てきたな。にしてもブースターや飛行ユニットらしき装備も無しにどうやって単独飛行を行ってるんだあれは」

疑問に思うバルトフェルドだが、それを気にしてばかりでは作戦が進まないと考え部下に指示を出した。

「噂のストライクでないのは残念だが、まあいい。バクゥを出せ！反応を見たい。ドートレスはそのまま待機、ただしエンジンは暖めておけ」

バルトフェルドの指示を受け、猟犬をイメージしたかのような四足型のＭＳバクゥが一斉に飛び出し、一直線にアークエンジェルへと向かっていく。

「あれは……変形したフラウロスと同じ四脚型……！地上戦特化のＭＳか！」
『ザフト軍ＭＳ、バクゥと確認！』
「やはりか……！」

砂漠をホバーで高速移動するバクゥに対し、ダブルオークアンタは常時空中で戦闘を行うことで地形によるディスアドバンテージを無くしている。とはいえ、砂漠という地形はそれ自体を武器とすることが可能だ。砂塵で目くらましなど常套手段。

「あの機体、あの剣がライフルにもなるのか。それにしても、この状況下で威力が然程減衰しないライフル級のビーム兵器なんざ尚更珍し

い。こりゃあ技術班が捕獲してこいとうるさそうだ」
「シールド?に装備されているアレは何でしょうか?」
「さてな。バクゥも飛びかかる形で空中へ攻撃は出来るが……常時滞空ってのはやっぱり厄介だ。しかし向こうも攻めあぐねているのは同じ……ん?」

バルトフェルドが双眼鏡を覗くと、アークエンジェルからバルバトスとソードに換装したストライク、ついでにメビウス・ゼロの代わりとなるスカイグラスパーが出撃した。尤も、スカイグラスパーは偵察目的なのだが。

「戦闘機はいいとして……漸くお出ましか、ストライク。だがヤバそうなのはあっちのフレームが一部剥き出しの獣みたいなMSだ。ドートレス各機、戦闘用意!油断するなよ、こいつは勘だがストライクと一緒に出てきた奴は並じゃない!身の危険を感じたら機体捨ててでも逃げろ!戦争ってのは命あっての物種だ!」

「剣にしたんだ、装備」
「はい。アグニは強力だけど、バッテリー消費が激しくて……敵MSのあの動きを見たら確実に当てられる自信もないし」
「良い判断だと思うよ、俺は。ああいう奴って、カウンター狙いが一番だしね」

そんな会話もそこそこに、二人は迫るバクゥを見据える。

「キラは向かってくる奴だけを狙えばいいよ。無理に突っ込まなくても連中の動きって早いけど限定されてるから」
「確かに……形状を考えると人型以上に可動域制限があります」
「そういうこと。アークエンジェルは任せた」

短く告げると、バルバトスは人型であるにも関わらず機敏な動きで砂地を駆け抜けバクゥを肉薄する。
「なっ!?バカな!ここでバクゥを人型が捉えるなど――」
「うるさいよ、お前」

敢えて砂漠を狙ってレンチメイスを振り下ろし、足元を吹き飛ばしてバランスを崩させるとレクスネイルでバクゥの頭部を容赦無く突き刺し、力任せにぶん投げると途中でパイロットが脱出。無人となったバクゥは砂漠に叩きつけられると爆発を起こす。

「あのＭＳ……バクゥ相手に自分から接近戦へと持ち込み、かつ捉えて瞬殺するとは。強いて言うなら獣人型とでも言うのかね、あのバクゥ以上に獰猛な機体は」
「落ち着いてる場合じゃないでしょう!?どうします隊長、今のままじゃ奇襲とか裏をかこうとしても無理ですよ!」
「分かってる。焦って頭の中をごちゃまぜにするな。ドートレス、総員発進!バクゥと連携を取りつつ現状を打破しろ!それからレセップスに打電だ。戦艦を主砲で攻撃させろ!噂の連中、まだ出撃せず艦内にいるかもしれんからな!」

待ってましたと言わんばかりに、待機していたファイヤーワラビーが出撃する。ホバークラフト搭載の脚部で砂漠を滑走し、バクゥに続いてアークエンジェルとウルトラ騎空団を攻め立てていく。

「あれは……新型か!?」
「人型で砂漠を自在に動けるＭＳ!?」
「頭部を始めとした全体の形状が、今までのザフトの機体とはまるで違うな。技術が進んでいるのは地球軍側だけではないということか

……！」

ノイマンやトールが驚き、ナタルもライブラリから照合するも似たような機体が存在しない、新しいカテゴリの機体だと知るとモニターのファイヤーワラビーを睨みつける。

そして、そこへ長距離砲撃が叩き込まれてきた。

「うわあぁぁぁ！」

「くぅぅぅっ！」

『ラミアス艦長、大丈夫ですか!?』

「ええ……！本艦の近辺に着弾したけど、直撃はしてないわ。砲撃してきた相手との距離は!?」

「南西、２０キロの地点と推定！」

（ダブルオークアンタのトランザムライザーソードならやれないことはないが……）

「本艦の攻撃装備でも対応出来ません！」

他の機体でも厳しい距離だ。サーガが考えているようにダブルオークアンタのトランザムライザーソードであれば問題無く届く。ただ確実性で言うならこちらにいないゼットのＺガンダムがウェイブライダーである程度まで近づき、ハイパー・メガ・ランチャーで狙撃するという戦法が無難……本当に向こう側に欲しい人材が集中してしまったというか。

『俺が行って、レーザーデジネーターを照射する！それを目標に――ん!?』

ムウが打開策を提示しようとした時、新たにアークエンジェルから戦場へと現れた機体があった。

沙耶のガンダムＸだ。

「あれは……！彼女はまだ病み上がりでしょう!?」
「沙耶お姉様!?下がって下さい！」

「私……何で出撃したのかしら……こんな地形での戦闘なんてウルトラウーマンとして以外で行ったことないのに。それとも――!?」
――貴女と、そのガンダムなら出来る――

沙耶の頭に聴こえてくる謎の声――声の感じからして少女だろうか。

「出来るって……!?」
――力を怖がらないで。貴女が、貴女とそのガンダムがどうあろうとするかは貴女次第だから――
「私、次第……」
――大丈夫。月は、いつもそこにある――

その言葉を最後に声は聴こえなくなるが、同時にモニターには『フラッシュシステム』の文字が表示される。

「フラッシュシステム……?それがこの機体のブラックボックス……違う、まだ先がある。これは……」

『サテライトシステム』

「サテライト……月……まだよく分からないけど、月が絡むのであれば私の能力は問題無くいけるはず……！」

沙耶は月にまつわる様々な力を己が能力で行使することが可能。この機体に何か月が関係するシステムを搭載しているのであれば、レジェンドが自分にこれを託したことに納得がいく。

「この状況を打破する可能性……！背中のキャノン砲、今なら……！」

ガンダムＸ――いよいよその切り札が紐解かれる。

背部のリフレクターがＸ状に展開され、長身砲を肩に担ぎつつ展開されたグリップを掴むガンダムＸ。そして突如、月から何かのレーザーがガンダムＸの胸部へと当てられる。

その光景はアークエンジェル側だけでなく、ザフトや……レジスタンスである『明けの砂漠』の者達にも見えていた。

「あれは……何だ!?」

「分からない！私もあんな機体は知らない、少なくともヘリオポリスで開発していた機体ではないぞ！」

「そんなものが何故アークエンジェルに……」

「隊長、あの機体……何をしようとしているのでしょうか」

「今のレーザー、何かの信号か？だとすれば……！」

バルトフェルドは歴戦の猛者の勘とでも言うべきか、ガンダムＸがこれから行おうとしていることの恐ろしさを直感的に感じ取った。

「レセップスに急いで打電だ！その場から後退するように動け！だがそのまま後退ではなく左右どちらでも構わんから横に避けろとな！」

「隊長!?」

「拙いぞ……！俺の勘が正しければあいつはとんでもないものを撃ってくる!!」

『ならばその前に叩けばいいだけの話です！』

『連合の新型か何か知りませんが、所詮ナチュラルが乗った機体！す

ぐに落としてみせます！』
「いかん！よせ!!」
バルトフェルドの制止も聞かず、ザフトのＭＳ部隊は真正面からガンダムＸへと迫る。

一機のＭＳに対し複数で迫るＭＳ。普通に考えるなら余程高性能かパイロットの腕が優れているかしなければまず助からないのは誰でも分かることだ。
「次、４．０３秒後にマイクロウェーブ……次元貫通!?」
マイクロウェーブ云々はともかく、それが次元貫通で送信されてくることに驚く沙耶。先のレーザー……照準用レーザーもそれであった。
このガンダムＸに搭載された『サテライトシステム』は、惑星レジェンドの存在する宇宙・星系にある月に建造されたマイクロウェーブ送信施設から送信されるスーパーマイクロウェーブを使用する。そのシステムを使うための機体登録認証に使うのが『フラッシュシステム』（尤も、これだけの用途ではないが）だ。
そういった事情もあって、次元間使用が可能なそのサテライトシステムはその世界の月を媒介にして次元間転送送信を行うため、月が出ていなければ使用が出来ない欠点があった。
そしてその封印が今、解き放たれる。
他の者には月そのものから光がガンダムＸへと照射されたかのように見えただろう。マイクロウェーブ送信施設から送信されたそれは、月と地上を結ぶ巨大青き光の柱となってガンダムＸへと降り注ぐ。
それは背面のリフレクターによって膨大なエネルギーへと変換され、急速に砲身へと充填されていく。

「マイクロウェーブ、エネルギーへ変換及び充填完了……！これでっ！」

バクゥ、そしてファイヤーワラビーの猛攻にも怯むことなく、ガンダムXはその場から一歩も下がらない。既にチャージは完了され、あとはトリガーを引くのみ。

――サテライトキャノン。

ガンダムXに搭載された最強最大の決戦兵器。レジェンドから概要を聞いていたサーガは三日月やキラ、ムウへと急遽通信を送る。

『各機！急いでガンダムXの射線上から大きく離脱しろ!!』

『っ……！』

『何だか分からんがヤバそうだな！』

三日月はサーガの言葉故に疑うはずもなく、キラとムウも直感的にその言葉の意味を理解し、バルバトスとストライクはガンダムXの背後へ、ダブルオークアンタはスカイグラスパーが退避しきれないかもしれないと考慮し、急ぎ抱えて急速離脱。

そして――

「いっ……けえええええ!!」

ズギュオオオオオン!!!

MSの――否、戦艦でさえも大抵持つことの叶わぬ圧倒的な光の奔流がサテライトキャノンより放たれた。予想外どころではない、想像さえつかなかった――『暴虐の光』とも言うべきそれに、ザフトのMSは絶望するしかなかった。

「な……何だこの兵器は!?」
「駄目だ！耐えられ……！」
「範囲が広過ぎる！回避が……」
「い……嫌だ……！」
「「「うわあああああぁぁぁ……!!」」」」

光に飲み込まれ、爆散していくバクゥとドートレスＨＭ『ファイヤーワラビー』。さらに光はその爆発さえも消し飛ばし、威力を殺さぬままレセップスへと向かう。事前警告もあり、間一髪レセップスは小破で済んだものの、レジスタンスが仕掛けていた地雷諸共大きく砂漠を抉ったサテライトキャノンのビームは、戦闘中のバクゥとファイヤーワラビーを全て消滅させてしまった。

☆

「な……あ……」
「……戦力評価に来たつもりが、全滅……いや、殲滅とはな。しかもこちらがされる側。大目玉なんてもんじゃない、甚大な被害を被った。ダコスタ、撤退だ。散っていった部下達に弔いや黙祷を捧げてやりたいが、ここに留まっていれば第二射が撃たれるとも限らん。そうなれば次はレセップスか、俺達か……」

部下――ダコスタはバルトフェルドの表情を伺う。さすがに今の光景……サテライトキャノンの威力に加え、部下達がまとめて消滅という形で戦士したことに強い衝撃を受けたのか、冷静ではあるが暗く意気消沈しているのが見て取れた。

「……了解です、隊長」
「戦争とはいえ、割り切れんもんだな。こっちが仕掛けた側なんだが……ああも簡単に命を消し飛ばされるのは」

満月の浮かぶ夜空を仰ぎ、バルトフェルドは腕で目元を隠す。それで隠すのは涙か、悔恨の念か――。

☆

あまりの光景に絶句していたアークエンジェルとウルトラ騎空団。ふとしたことでミリアリアが気付く。沙耶がかの低軌道会戦にて不調を感じ始めたのは敵機を撃破してからだと。それを思い出したミリアリアは急ぎ沙耶へ通信を試みる。

「沙耶お姉様！大丈夫ですか!?」

『あ……あ……』

懸念は現実のものとなった。明らかに沙耶の様子がおかしい。すぐに全機に通信を共有した瞬間、それは同時に起こった。

『あああああああ!!』

「「「「!!」」」」

沙耶の絶叫が木霊する。彼女は命を奪う覚悟などとうの昔に決めていた。であればそれでこの叫びは異常だ。

『おい！あの嬢ちゃんどうしたってんだ!?苦しみ方が尋常じゃないぞ!!』

『まさか、これは……！』

『ヤバイよサーガ様。とりあえずガンダムXを収容するから』

『沙耶さん、しっかり！落ち着いて！』

出撃したムウ、サーガ、三日月、キラが口々に沙耶を気に掛ける。素早い判断でバルバトスとストライクが、キャノンを戻して棒立ち状態

のガンダムXを支えつつアークエンジェルの格納庫へ収容した。
そして、その直後――
キシャアアアアオォン!!

虹色の光が砂漠の下から放たれたと思うと、少し離陸していたアークエンジェルは再び砂漠へと着陸させられ、徐々にそこへと引き寄せられていく。

「どうした!?」
「計器類に異常！強力な磁場がこの先に……!?」
「何が……あ、あれは……!?」

マリューを始めとしたクルーが見たもの、それはアークエンジェルが徐々に引き寄せられている場所には大きな凹み……所謂蟻地獄のようなものが出来ており、そこからあまりにも巨大な鋏のようなものが突き出ていた。

「ま、まさか俺達……あれに粉々にされるとかないよな……!?」
「何だあれは……!?地球上にあんな巨大な生命体など存在するはずが……」

そこまで言ってナタルは気付く。宇宙空間で遭遇したスコーピスやシルバーブルーメ……あれと同類なのではないかと。特に前者の方に。

『くそ！偵察目的だったからまともな武装を積んじゃいねえ！』
『させるか！』

スカイグラスパーは武装が使用不可、そのためダブルオークアンタがＧＮソードＶをライフルモードにして銃撃すると、一時的に虹の光――磁力光線が遮断されるが、何故か今度はアークエンジェルがその場で砂漠の下へ沈んでいく。まるで何かに導かれるように。

『アークエンジェル！どうした!?』
「分からないわ！ノイマン少尉！」
「駄目です！先の磁力とは違う何かで、操舵を受け付けません！」
「何ですって!?」
「艦全域を隔壁閉鎖！重要区画の安全を最優先に確保しろ！」

ナタルが間髪入れず指示を出す。そのままアークエンジェルは砂漠へと完全に飲み込まれ、通信さえも繋がらなくなってしまった。

「なんてこった……こりゃ向こうだけじゃなく俺らもヤバいぜ。こんなとこで立ち往生なんてどれだけ保つか。緊急出撃だから万が一の時のサバイバルキットも積んでねぇぞ」
「こちらはともかくそちらの燃料も心配だ。せめて落ち着ける場所だけでもあれば……」

残されたムウのスカイグラスパーとサーガのダブルオークアンタ。今後以上に現状直面した問題をどうすべきか頭を悩ませているとき、地上から声を掛けられた。

「おーい！そこのＭＳとＭＡ！困ってるならこっちの話を聞かないかー!?」
「！」
「今からアジトまで案内する！少なくともあんた達は『虎』と敵対しているみたいだしな！ついて来い！」
「渡りに船ってのはこのことか？ま、仮に死ぬにしても野垂れ死にか

殺されるかの違いだろうし、行ってみようぜ。副団長さん」
「ああ。アレについても聞かなければならないからな」
「……さっきの蟻地獄っぽいのにいた奴のことか」

ジープに案内され、スカイグラスパーとダブルオークアンタはその場を後にする。
アークエンジェル――反応消失（ロスト）――

〈続く〉

地底国家バラージ

――ペガサスＡ・居住区画――

今後のことはさておき、レジェンド達は休息を取っていた。先の戦いまで激動の日々であったし、休める時に休んでおかねばいざという場面で役に立たない等のこともあり得る。

「つうかさ……一応俺ら捕虜だよな、ミゲル」
「まあ、そうだな」
「制限緩すぎじゃねーかなって思うよ。すっごい今更なんだけど」
「いやホント今更だぞそれ」
「でも確認したくならない？捕虜でこんな待遇そうそう無いぜ」

用意された台湾まぜそばと炊きたての白米、更に氷入りの天然水を頂きつつそんなことを言うミゲルとラスティ。その隣ではロスヴァイセが安さと手軽さ、そして調理バリエーションの多さに感激した豆腐を食べている。

「そのまま食べてよし、ちょっとトッピングかけてよし、本格的に食材の一つとして調理に使ってよし！凄いですよね、豆腐！」
「そりゃお前、豆腐は人間が生み出した物の中でも最強クラスの汎用性を持ってるモンだからな。俺個人の主観だが」

そういうレジェンドは大分回復したゼットやガイと共に納豆をかき混ぜていた。無論、辛子とネギは忘れない。

「超師匠！生卵も必需品でございますよ！」
「当然だ。醤油も忘れるな」
「食べ慣れるとクセになりますね、レジェンドさん」
「だろ？味噌汁と合うんだこれが」

ちなみにミゲルとラスティは勿論だが、ルリアとアマリ、ロスヴァイセはまだ納豆の匂いが苦手なのはご愛嬌。元々日本出身の流や、惑星レジェンドではよく食べていたためライとモニカも普通に食べれる。

そして――

「オイコルァ勇治！飯はちゃんと食えと言ってるだろうが!!」
「いや、もう少し……」
「お前いい加減にしないと仮面かち割んぞ」
「わかった！わかったから力込めるな！本当に割れる!!」

科学者として飲まず食わずで研究に没頭しやすい勇治はレジェンドによって強制的に食事を摂らされていた。そうしなければゼリー飲料だの栄養食だので済ませそうだし。あの束ですら食事はしっかり摂る。

なお、同類に近い月のヤプールは摂りたくても摂れない。時折やらかすモルガンや妖精騎士（意外にもバーヴァン・シーはあまり面倒事を起こさない。母に迷惑をかけたくないとのこと）、あとマーリンの後始末などで奔走するためだ。実はオベロンは自分から問題を起こすことがあまりなかったりする。養子のエランや同僚のウッドワスが持って来てくれる差し入れがぶっちゃけ最後の生命線。そのウッドワスも月の飲食店関係の総元締としてアルトリアのドカ食いに悩まされているのだが……。

アークエンジェルの現状を知らない彼らは、とりあえず今のところ平和であった。

☆

――アークエンジェル――

「……」

「……ッセー……い、イッ……」
「……う……？」
「しっかりしろイッセー！」
「タイガ……？」

どうやら気絶していたらしい一誠は、タイガの声掛けで意識を覚醒させた。周りを見てみるとリアスやアズ、タイタスにフーマも気を失っている状態で、しのぶとダイゴが一先ず四人をベッドに運んでいる。……ダイゴはよくタイタスを持ち上げられたな。

「えーっと……俺達……ってかアークエンジェルはどうなったんだっけ……？」
「よく分からないけど、なんかこう……落ちていく感覚があったよな」
「一応通信で沙耶さんを連れて三日月君とキラ君が急遽帰投したのは覚えてるけど、まずは部屋の外に出てみようか」
「開けたら砂が一気に……は勘弁してほしいですね」
「しのぶさん、それ洒落になんないス」

一抹の不安を残しつつ、警戒しながら扉を開けるとどうやら直前のナタルの指示通り隔壁閉鎖がされているらしく、同時に落下（？）の衝撃で一時的に電源も落ちていた。

「……何でこの部屋明かりついてんだろ」

おそらくレジェンドの仕業だろう、設備の電源まで独立させていたようだ。本当にどうやってそんなことを可能にしたのか……。

「格納庫とかどうなってんのかな……」
「隔壁閉鎖って言っても格納庫にもメカニックとかいるだろうし、キラ達だって戻ったばかりのはずだったろうし」
「そもそもこの艦の重要区画ってどこを指してんのかいまいち分かん

ねぇんだよな。艦長さんと副長さん、性格的に……正反対とまではいかなくても結構差があるだろ？」
「常識的に考えると居住区とか機関部、あとはやっぱりブリッジとか……戦力も考慮するとさっき言った格納庫もだよな」

う～ん……と二人で腕組みしつつ頭を悩ませていると、ブレスレットに通信が届く。

『あ、繋がった。一誠、そっち無事？こっちは何とか。沙耶さんが気絶してるけど』
「三日月さん！つーか最後それいつもの調子で言っていい台詞じゃなくね!?」
「とりあえず、タイタスとフーマ、あとリアスとアズがまだ気を失ってしのぶとティガ先輩が見てくれてる。そっちは電源とかどうなってる？」
『キラも無事だし、軍曹だか曹長だかと他のメカニックも気絶してるけど問題なさそう。何よりあの状況で砂とか全く……じゃないけどあんまり入ってきてないんだよな』
「「……は？」」

どういうことだろうか。砂漠の中へ引き込まれる事態に陥ったのは分かったが、三日月の言うようにそんな状態では多少砂が艦内に入り込んでもおかしくない。いや、むしろ入り込んでいない方がおかしいのだ。

「これ、早く外見た方がいいんじゃないか？」
「ああ、くそ！こういうときに隔壁閉鎖されてるから通行止め状態の通路ばっかでまともに動けねぇ！というよりブリッジではまだ誰も気がついていないのかよ!?……師匠や先輩なら隔壁を力任せにブチ破りそうだよな……」
「おい落ち着けイッセー!?気持ちは分かる、凄く分かるけど!!」

『そうだ、一誠！感情に身を任せるだけではいけない！御両親やお世話になっている人達に迷惑がかかってしまうかもしれないぞ！』

タイガのフォローとダ・ガーンの説得でどうにか踏み止まる一誠。しかし閉鎖的空間というのは図らずもストレスを溜めてしまう要因であり、早急にどうにかしなければ他の者が同じ方法をとってしまうかもしれない。しのぶとかタイタスとか、三日月もか。

「せめて外がどんな様子か分かれば、ちょっとは気が楽になるんだけどなあ……」

『それならこっちで分かってるよ』

「「ウソぉ!?」」

だったら早く言ってくれとも思ったが、また脱線しては面倒なので黙っておく。

『何か広い空洞みたいなとこに落ちたとおもったんだけど』

「「だけど？」」

『大きな町みたいなものがあるっぽい』

「「……はい？」」

☆

――一方、サーガとムウ。

レジスタンス『明けの砂漠』の誘導に従い、彼らのアジトへ向かった彼らだが、サーガにとって思いもよらぬ出会い……再会があった。

「あっ！お前！」

「ん？お前は確か、ヘリオポリスでキラと一緒にいたはずの……何故ここにいる？」

「それはこっちの台詞だ！何故お前があんなものに、それもモルゲンレーテさえ知らないような機体に乗っている!?」

掴みかかってきたその人物をひらりと避け、軽く足をかけてみるとド派手にすっ転んだ。

「あぐっ!?っつぅ……！」

「……なあ、副長さん。いいのか？あんなことして」

「正当防衛だ。それに足は出したが蹴ったわけでもなく、突っ込んできたのは向こうなんでな」

（ああ……確かにこりゃ、あの団長さんとこの副長さんだ）

ムウは苦笑するが、サーガの言っていることは事実なので下手に口出ししない。今はサーガ以外のウルトラ騎空団どころかアークエンジェルも不在なのだ。この状況で上手く弁が回るだろうダイゴもいないのである。

「それで、俺達をここに案内した理由は？」

「ああ……虎のことは一先ずおいておくぞ。あんだけ手痛い一撃を貰ったんだ。早々派手な動きはしないだろうしな。問題はあの『砂漠の怪物』だ」

「「砂漠の怪物……」」

「あんた達も見ただろう？あの虹色の光を放つ蟻地獄を。そしてそこから出ていた巨大過ぎるハサミのようなものを。奴の前じゃ金属系統の兵器なんざまともに使えねぇ。おまけにそれでいて爆薬だろう

が何だろうがまともに攻撃を通さない。俺らどころかザフトの連中も奴が出て来ちまえば尻尾巻いて逃げるしかねぇのさ」

バンダナを巻いた髭面の男――明けの砂漠のリーダー格、サイーブ・アシュマンは口惜しげに語る。既に何度か相対したことがあるのだろう。

「だとしたら俺のスカイグラスパーや、副団長さんのダブル……何だっけ？」

「ダブルオークアンタだ」

「ダブルオークアンタってのも影響を受けるんじゃないのか？」

「そこだ。スカイグラスパーってのはどうかしらんが、ダブルオークアンタってＭＳはあまり影響を受けていたように見えん。特殊な加工が施されているのかどうかはこの際どうでもいい、あの機体なら砂漠の怪物に対抗し得る戦力になるんじゃないかと思ったのさ」

（確かにこの機体は束が作ったものだが……）

サーガは束が今回のようなことを見越して作ったとは思えない。おそらくいつもの調子で容量が許す限りバンバン機能を詰め込んだ結果がこれなのだろうから。

つまり、明けの砂漠は先の怪物を倒すためにサーガの力を借りたいらしい。……オマケ扱いだったムウは少し凹んでいた。

☆

――アークエンジェル――

漸く全員気が付き、マリューの指示の下閉鎖していた隔壁を解除しブリッジ等から外を見てみると、かなり巨大な空洞と呼べる空間であった。一部の天井？からはサラサラと砂漠のものらしき砂が落ちているところがある。

「砂漠の下にこんなところがあったなんて……」
「通信機能はどうか？」
「駄目です。機能自体は問題無いですが、ここ自体が特殊なのか外部との通信が出来ないんですよ」
「それじゃあフラガ少佐や、副団長さんと連絡を取ることも……」
「……あ！そういえばウルトラ騎空団の皆さんは独自の連絡方法で連絡を取り合えるって！」
「……！本当か？ハウ二等兵」
「はい、副団長さんも言ってましたから」

さすがぶっ飛びぶりに追随を許さないウルトラ騎空団、こんなところでもそれを見せ付けてくれるとは。そう思ったマリューだが、直後にダイゴから通信が入った。

『何となく喜んでいる理由が分かりますが喜んでいるところすみません、ラミアス艦長』
「マドカ特務大使？」
『実は僕達が普段通信に使っている多目的ブレスレットなんですが、どういうわけかこちらも範囲的にここいら一帯以外とは通信が不可能みたいなんです。磁場とかそういうものではなく、何か別のもので阻害されているような』
「阻害……？ということは、こちらから援軍を要請することは……！」
『おそらく、ほぼ不可能でしょう。何かの拍子にチーフが本気でも出せば変わるんでしょうが……』

いや、本気出したら遠く離れててもこの状況を理解して救援に来れるあの人マジで何なんだよ、とマリューやナタルらも思ってしまった。仕方ない、レジェンドだもの。

『それから、三日月君からの情報によるとこの空洞に大きな町があるようで』

「こちらでも確認しているわ。一応、何人かでそこへ向かってみようと思ってるの。どうしてこんな場所に町があるのか、そして何故地底なのに周りが見渡せるほど明るいのか……そもそもここは何処なのか、その疑問が少しでも解消出来ればいいのだけど」
『でしたら僕と、それにリアスちゃんや一誠君達が同行しましょう。御心配なく、彼女らは等身大での戦闘こそ本領発揮出来るので』
「すみません、御迷惑をおかけします」
『いえ。ではこちらも準備が出来次第、格納庫へ向かいます』
「了解です」

そう言うと通信を切り、ふう……とマリューは一息入れる。ダイゴがいることの安心感は半端ではない。これが踏んできた場数の違いということか。

「申し上げます、ラミアス艦長。艦長自ら出向くことはないのではないでしょうか？未知の場所にある町、警戒して然るべきです」
「ええ、ナタルの言うとおりよ。でも力になってくれるかどうかは別として、敵意がないことの証明にはなるわ。今のこの状況、猫の手も借りたい程だということは貴女も理解しているでしょう？」
「それは……そうですが」
「それに彼も言ってたでしょ？リアスさん達は直接戦闘こそ本領発揮出来るって。アルテミスでの出来事を思い出すと納得よね」

だから大丈夫、と言うマリューにナタルは渋々引き下がる。後はお願いとも言われ、ナタルも艦長不在の間は自分が纏めねばと意識を新たにした。

「徒歩で行くんですか？」
「ええ。ただでさえこんな目立つ戦艦で落ちてきたんだもの、これ以上相手を混乱させるような方法で行くのは避けたいわ」

「まあ、そうだよなぁ。つーか俺らは見た目的にアレだけど」
「問題ない。いざとなれば筋肉対話をすればいいことだ！筋肉は万物の生命に存在する。それを最大限に活かせばきっと思いは通じるはずだぞ！」
「それはタイタスだけだよな」
『だが、双方同じものを持っていて、それを対話のツールとして使うことは有用だろう。マッスル隊長の案も一理ある』

突然その場にいない者の声が聞こえたことにマリューはビクリと肩を震わせた。しかも中々威厳がありそうというか、そんな感じの声の主を探して周りをキョロキョロする彼女に悪いと思ったのか、一誠らはダ・ガーンのことを説明する。

「――ってわけで、ペガサスＡから出撃する前にこっちに移ったんですよ」
『自己紹介や説明が遅くなってすまない。改めて私はダ・ガーン。宜しく頼む、ラミアス艦長』
「そうだったの……てっきり誰かに監視されているものかと思って焦ったわ」
（こりゃドライグのことも言っといた方がよくね？）
（相棒、確かにそうかもしれんがこの様子じゃ俺を紹介した途端ぶっ倒れかねん。もう暫く後でいいだろ）

実際ウルトラマンだけでも結構な衝撃ではあるので、これ以上はマリューの精神が限界に達しそうなのでやめておく。何よりこれから全く未知の場所へ少数調査を行いに行くわけだから、マイナス要素は出来る限り減らしておきたい。
「いやマジでティ……ダイゴ先輩いなかったら詰んでたな俺ら」
「ぶっちゃけ俺達って主に肉体言語だし」

マリューがいるのでティガ呼びを急ぎ修正したフーマと、師や兄弟子が武闘派な所為か拳で語り合う（空の世界ではフェザー式対話とも言う）ことに特化しかけている一誠がそう話すとダイゴは苦笑した。

「町につくまで、道すがら貴方達のこれまでについて聞きたいのだけど……いいかしら？あ、秘密にしたかったら無理にとは言わないわ」

「……ティガ先輩、艦長ならいいんじゃないでしょうか？」

「あ、タイガ！お前、俺がわざわざ言い直したの速攻で意味無くすんなよ！」

「まあバレるのも時間の問題だと思うが」

「旦那ァァァ!?」

「確かに、ラミアス艦長なら大丈夫かな。ラミアス艦長、これから話すことはヘリオポリスで保護した学生達と、以前までアークエンジェルに乗艦していた捕虜扱いのザフト兵二人以外には内密にお願いします」

ダイゴの真剣な眼差しにマリューもそれだけの内容だと察し、しっかりと頷く。それを見たダイゴ達もこれならばと安心して話し始めた。

「――堕天司、ベリアル……クルーゼ隊の副官は人間でさえなかったのね」

「原初の星晶獣、だっけ？あの発禁天司」

「だから天司が原初の星晶獣ってヤツだろ。星晶獣ってのは星の民が作ったっていうやつの総称だって」

「ロゼッタがそうだったのはビビったけどな。あとゆぐゆぐ」

「彼女はすぐ分かったけどね。それからりっちょとか」

「ロゼッタ……って人？はともかく、ゆぐゆぐと……りっちょ？」

「「「ユグドラシルとリッチ」」」

「な、なるほど……」

マリューが聞かされた話は凄まじく濃いものだった。クルーゼ隊副官にして参謀、ベリアルの正体やそれを作り出したという星の民の存在。これはまだほんの一部に過ぎないが、それだけで彼らの今までの旅路が想像を絶するものであったことは想像に難くない。

「それで、沙耶さんは別世界の月の女王様……ごめんなさい、胃薬とかって持ってる？」

「しのぶさん持ってそうじゃね？ほら、カナエ先輩絡みで」

「間違いなく持ってるわね。帰ったら聞いてみましょ」

「……そのカナエさんという方は？」

「しのぶの姉で……」

「「「オカ研の最終兵器」」」

ダイゴとマリューを除く全員が声を合わせて一部の狂いもなく言い切った。オーブでカナエがド派手なくしゃみをしていたことは言うに及ばず。ついでにそのくしゃみが抱えていたハクに思いっきりかかり、お返しに本気猫パンチ（推定威力１５０ｔ）でカウンターされたのも付け加えておこう。

一誠達の話が気になりついつい話し込んでしまっているうちに、一行は町に到着。そこは廃墟ではなく、むしろ生活感のある場所ではあったが、往来を行き交う人々は誰もおらずひっそりと静まり返っていた。

「誰もいない……？」

「いえ、気配は感じます。おそらくは何らかの理由で家屋に引き籠もっているんでしょう。原因は僕達か、それとも別の何かがあるのか……」

「もしかして、俺達が原因とか」

「あながち間違いじゃねえかもな」

マリューの疑問にダイゴが答え、タイガの意見にフーマが賛同している時、タイタスとダ・ガーンは不思議な感覚に陥る。

(何だ、これは……)
(この感覚……もしや、ここに『勇者の石』があるというのか?)
「ん?どうかしたのか、二人共」

一誠から心配されるが、二人は「何でもない」と返す。訝しげに思いながらも何だかんだ言って賢明な二人を信じ、一誠はそれ以上追求しなかった。

暫く進んでいくと、一人の人物が一誠らを出迎えた。その身なりからかなり高い身分にいる人物だということを見て取れる。

「ようこそ、異邦人の方々。いえ、お待ちしておりました、が正しいでしょうか」
「地球軍第8艦隊所属、マリュー・ラミアス少佐です」
「ウルトラ騎空団所属、及びオーブ連合首長国特務大使マドカ・ダイゴです。唐突な訪問で申し訳ありません。貴女は……?」
「私はチャータム。この地底国家バラージの女王を務めております」
「「「「地底国家バラージ!?」」」」

さすがにダイゴ以外が声を上げて驚いた。つまり、一般的どころか普通に調べるぐらいでは分からないような国がまだこの世界の地球には存在していたのだ。

「なぁ、バラージって聞いたことねーか?」
「うーん……確かマンさんがそんな国に行ったことがあったとか、父さんから聞いたことあるけど、そこは普通に地上だったらしいから……」

「あるぞ」
「「タイタス……!?」」

「人を……人の持つ可能性を、俺は信じたい！」
※ＢＧＭ・ＵＮＩＣＯＲＮ　ＧＵＮＤＡＭ

「「それバナージ（別人）だアアアアア!!」」
「マリーダ姉様が自分がいなくなった後の故郷の世界を見てみたいってお願いしたら、そんな映像が流れたって言ってたわよ!?ていうかそれじゃ国じゃなくて人でしょ!!」
『だが確かに似ているな。ナとラの違いだけで母音も同じだ』
「いや冷静に言うことじゃねーだろ!?」
「あああああ！スイマセンスイマセン何か変な誤解で盛り上がってゴメンナサイ女王陛下!!」

一誠とトライスクワッド、リアスにダ・ガーンのテンパり具合をチャータムはクスクスと笑いながら見ており、ダイゴは苦笑した。ちなみに、マリューは何故かタイタスの迫真のモノマネがツボに入ったらしく、笑いを堪えていたりする。

「お気になさらず。とても愉快な方々ですね。脅威に怯えるこの国に元気をくれそうな明るさ、とても眩しい」
「いやウルトラ騎空団のいつものノリでバカやってるだけなんスけど」
「待って下さい。脅威とは？」
「それについてはこれからご案内する場所へ向かう道すがら、お答えします。疲れているところ申し訳ありませんが、どうか御足労を」

そう言うとチャータムは背を向けて歩き出し、一誠らも慌ててその

後を追う。

「私達の国、バラージも初めは地上にあったのです。ある時、異常気象によって私達の祖先が生きる大地ごとここに落ち、そのまま塞がるように天井が出来たと伝えられています」

「何か勝手に塞がるオカルトじみてんな……」

「フーマ、私達はオカルト研究部よ」

「俺らの修行の旅ってそんなことばかりだから、感覚麻痺してきてるんじゃないか？」

「どういうわけか陽の光が当たらずとも昼夜で明るさが変わり、農作物も育ち水も問題なく存在する……それ故に、私達はこの地底にてバラージを存続し続けていられるのです。あの怪物……アントラーさえ目覚めなければ」

ここでマリュー達が遭遇した怪物……否、怪獣の名が判明した。

磁力怪獣アントラー。かつて別世界にてウルトラマンが苦戦した怪獣で、強固な外殻は必殺のスペシウム光線さえ無効化したという。更に、科特隊に甚大な被害を齎したこともあり、レジェンドが光の国においても教本に加えるよう指示した程だ。

「アントラーはかつてこの地を襲った際『ノアの神』によって封印されたと聞きます。それが、ある時を境に封印が解け、今の世に再び解き放たれてしまいました」

まずはその原因の元へとチャータムが案内した場所へ辿り着くと、マリューとダイゴは驚愕した。

「まさか……！」

「これは……！」

そう、ニュートロンジャマーがあったのだ。

「ニュートロンジャマー……！」
「私達地上人の戦争の所為で、アントラーの封印が解けてしまったなんて……」
「これはニュートロンジャマーと仰るのですか？」
「はい。ただ、この国は見たところコレに阻害されるようなものは無さそうなので、今のところ害は……いえ、アントラー復活という特大の害を起こしてますね……」

マリューとダイゴは申し訳なく思う。二人、特にダイゴに至っては別世界の出身であり彼らが悪いわけではないのだが、二人共真面目で責任感が強い性格なので気に病んでしまっている。

「……これさ、絶対知られたら『コーディネイターが悪いんだ』『いいや、ナチュラルが核ミサイル売ったのが悪い』って始まるよな……」

タイガの言葉はチャータム以外の全員が思っていたことだ。しかし、チャータムは気にしていない。

「封印が解けてしまった以上、もはやこれに関しては過ぎてしまったこと。これのことを責めるよりも大事な事があります」
「アントラーをどうするか、ですね」

「その通りです、ダイゴ様」

こちらへ、と再び足を動かし進んでいくチャータムについて行き、神殿らしき建物の中に入るとそこで目にした巨大な石像にさらなる驚愕を覚える一行。

「な……この石像って……！」

「これは本当に聞いたことがある！【エリア】を統べし光神は光の三超神と呼ばれており、我らのよく知るレジェンド、こちらとよく似ている【エリア】の主キング、そして――」

「この石像の……ウルトラマンノア、それが三超神の名だというのはウルトラ学校じゃ基本中の基本として最初に習うことの一つだ！」

トライスクワッドの発言……ダイゴの表情を見ればそれが事実であると証明している。三超神の一人がかつてこの地を訪れ、アントラーを封印しバラージを救った――そのことも驚きだが、その石像の手元にある石と、石像を中心に四方へ置かれている石にダ・ガーンは反応した。

『あの四つの石……！間違いない！一誠、あれは勇者の石だ!!』

「何だって!?じゃあ、あれにダ・ガーンの仲間が！」

こちらも驚きだが、チャータムはまず挨拶をと祭壇へ登ると、こちらへ背中を向け石像へと祈りを捧げていた女性へと声をかける。

「皆様をお連れしました」

「御足労です、女王チャータム」

チャータムの声で振り向いたのは、褐色の美女……美少女でも通じるかもしれない若い女性。ただし、似てはいるが衣装はバラージのものと違い、強いて言うなら古代エジプトのものに見える。

(((((アザゼルとかいなくてよかった……！)))))
「誰かしら……チャータム女王より上の立場らしいけど」
「分かりません、ただ……」
「ただ？」
「チャータム女王よりも、ノアの方と関係がありそうな――」
「ええ、そうです。超古代の光」
「「「「!!」」」」」

ダイゴがティガであることを話していないにも関わらず、それを見抜いた――只者ではないことを感じ取った一誠らに、女性はその名を名乗る。

「初めまして、光神に連なる者達。私はファラオ・ニトクリス。この地に召喚されたサーヴァントにして、光神ウルトラマンノアと関わりのある者です」

〈続く〉

――本来ならば人の出入りはアークエンジェルの時のような例外を除き有り得ない地底……そこに、いるはずのない人物がいた。

「やれやれ、一人称をいちいち変えるのも面倒で仕方ない。まあ、おかげで資金には困らないからそこは助かるんだが」

フード付きのロングコートでその身を隠している人物は、その手に

持ったメダルを眠っているアントラーへと放り投げる。そのメダルはアントラーの中へと入り込み、静かに覚醒の時を待つ。

「コシ（ょ）カレカレ（しぃぃ）ータ（ぞ）。この世界に来る途中に拾ったものから得た細胞をメダルにしてみたが、問題なさそうだな。さて、この『自己再生・自己増殖・自己進化』……三大理論を備えた細胞がどう怪獣に作用するか、じっくり見物させてもらおうか」

フードから覗く赤き相貌を持つ者は、愉しそうに笑っていた。

結ばれた縁

――オーブ連合首長国・クロガネ――

オルガやカミナの意見もあって、現在レジェンド・サーガの二組を除くコズミック・イラに滞在中のウルトラ騎空団はオーブに集結している。有事の際はそこから出動する形だ。

ジャグラーがヒリュウ改と共に宇宙から戻ってきたことで、時折クロガネの食堂にも出張してくることもありクロガネの食堂は大賑わい。

「ヘビちゃん、今日も大盛況だな。いつものやつ頼む」

「おう、バコさんお疲れ。悪いな、マスターフェニックスの整備頼んで」

「気にするな。俺とお前さんの仲だろう。ついでといっちゃ何だが、ベルゼルートの方もやっといたぞ」

「後でサギリと嬢ちゃんに礼を言わせに行く……っと、はいお待ち」

コジローはジャグラーが店を始めた頃からの常連だ。一時期惑星レジェンドのアクアエデンにいたジャグラーは、一通り修行を終えた後にそこで小さな店を持ったのだが初めての客がコジローだったのである。

「午後も仕事があるからな。ヘビちゃんがいるならこの機会逃さず、特製うな重食べとかにゃならん」

蛇倉苑の様々なメニューを食べてきたコジローだが、初めての来店で初めて食べたそれはやはり思い入れがあるようで、基本的に彼が昼に食べるのはそれだ。

「しかし、よもや次元を股にかけた超大規模チェーン店計画とは……でっかくなったな、ヘビちゃん」

「ま、まだまだ始まったばかりだぜ、バコさん」

タイミング良く交代時間になったジャグラーも、同じくタイミング良く入ってきたサギリと自分の分の昼食を持って席に座る。

奇縁とはいえ紡がれた確かな絆を感じつつ、三人は和やかに食事を進めるのだった。

☆

――地底国家バラージ――

サーヴァントが何なのかはさておき、この場所にあるウルトラマンノアの石像、そしてそれと関わり合いのあるという女性・ニトクリスに驚きつつもダイゴ達は尋ねる。

「何故、僕達を光神に連なる者と……？」

「かのウルトラマンノアより、それを見抜く力を授かりましたので。そしてもう一つ……そこの３人を見れば、ウルトラマンノアと関わった者として自ずと分かります」

「あ、そうか」

「いやいやそれでもほら、出身地とか違う可能性があるだろ。旦那のＵ４０と俺のＯ―５０とか……アレ？ノアの出身ってどこだっけ……？」

「分からんな。レジェンドならば知って……ん？レジェンドの出身地は？」

「あの人、惑星レジェンドはあくまで拠点なわけで……そういやレジェンド様の出身地も不明じゃねーか!!」

「実際この【エリア】、だったかしら。それかどうかさえも定かじゃないから尚更不明過ぎるわ」

一誠とリアス、トライスクワッドは最終的にレジェンドの事でパニックになってしまった。当の本人はここにいないというのに、相変

わらず話題になる光神である。
と、ここでマリューがニトクリスについて思い出し、声色を変えた。
「いえ、そんな……有り得ないわ。だって、彼女は……」
「ラミアス艦長？」
「彼女が本物のニトクリスだとしたらここに存在するのはおかしいわ。そもそも実在したかがハッキリしていない上、もし実在したとしたら彼女はエジプト第６王朝のファラオ……つまり――」
マリューは少しばかり荒くなった呼吸を整え、ハッキリと言い放つ。
「紀元前二千年以上も前に生きた人物、本来ならば既にこの世に存在しないはずなのよ！」
「「「「紀元前⁉」」」」
驚愕に染まる一誠らだが――。
「「紀元前……って何だ？」」
トライスクワッドの発言でズコーッとド派手に倒れるダイゴ、一誠、リアスにマリュー。ついでにニトクリスも。
そう、光の国や他の二星でも紀元前という言葉は使われていない。いきなり言われても三人は分からなかったのだ。そういえばそれは教えていなかった、とタイガの勉強を見たリアスは思い出す。
「そうよね……私が当初人間界のことをあまり知らなかったように、いきなり地球の歴史どうこう言われても分からないわね」
「タイガ達、めちゃめちゃ馴染みまくってたから俺もそういうのを忘

れてました部長」
「あ、いや……何かゴメン」

一応、地球の歴史は光の国のウルトラ学校にて多少なりとも習ってはいるのだが、何分かのウルトラ6兄弟のマンが地球で活躍した頃からの歴史しか教わっていないのだ。こればかりは仕方がない。
まあ、兎にも角にも人間として生きていられる年齢ではないということは理解したタイガ達。ただし、それを加味してもケンやらベリアルやらは既に十万歳を軽く超えているので然程驚きもないのは内緒。

「てかさ、あの姉ちゃんサーヴァントとか何とか言ってなかったか？サーヴァントって何だ？」
「直訳すると召使って意味だけど……この地に召喚された、ということとはそれと違うみたいね。そもそも使い魔とかその手の類だとしても――」
「それについては簡単に私から説明しましょう。この場合のサーヴァントは英霊、則ち英雄の霊を指します。召喚には基本的に魔力リソースとして聖杯が必要になるのですが、それに含まれない特例も存在するのです。今回の私の現界はそれですね」

現界という聞き慣れない単語が出てきたが、読んで字の如く召喚に応じて現れることのようだ。
マリューはまだ少々混乱しているが、元々そういった方面にいるリアス達や経験が物を言うダイゴは概ね理解した。

「しかし、そうなるとエジプトの地に召喚されるならわかりますが、何故このバラージで召喚されたのでしょうか？」
「それは先程も申し上げたように私がウルトラマンノアと関わりがあったことで、あの方が光臨したこのバラージが危機に陥ったとき、紡がれた縁を辿りこの地に現界したのです。実を言うならファラオ・オジマンディアスの方がこの地にファラオとして呼ばれるに相応し

いのですが……」

ファラオ・オジマンディアス――太陽王と名高き偉大なファラオ。かの人物もまた、ウルトラマンノアと関わり合いがあるとのこと。さすがというか、最高位光神だけあって知り合いもビッグネームがポンポンと出てくる。

「なあ、ラミアス艦長が倒れそうなんだけど」

「無理もないわ。ニトクリスにオジマンディアス……ラーメス2世の名前が立て続けに出てきたんだもの。オカルト研究部の部長として少なからず世界の歴史を学んでいる私だってそんな大物と出会えるなんて普通思わないわ」

『現代における科学技術を駆使した戦争に参加しているとはいえ、その方面に疎い彼女では既に脳がオーバーフローしつつあるということか』

「もうしてんじゃね？」

数々の神秘的、もしくは超常的な事件と遭遇しまくってきた一誠達からしてみれば驚きこそすれ受け入れられないわけではない。そもそも、忘れがちだが別の【エリア】からの『弾かれ者』であるカナエや杏寿郎などもいるわけで。

「と……とにかく！私、ニトクリスはアントラーをどうにかして討ち滅ぼし、バラージを救うべく召喚されたわけですが、見ての通り相手は怪獣……しかも強固な防御を誇るアントラー。いくらサーヴァントとはいえ、キャスターである私では如何せん攻撃力不足なのです。確かにキャスターでも絶大な威力の魔法を行使したりする者はいますけど」

ニトクリスは少々悔しげに言う。これがオジマンディアスならピラミッドをそのままぶつけるような攻撃で叩き潰すかもしれないが、

生憎と彼女はどちらかというと呪いとかそっち方面が得意分野なのだ。

「どうしたものかと悩んでいたところ、地上で貴方達が戦っていたので何とか協力を仰げないかと思っていたのですが、貴方達をアントラーが狙っていたのであれを倒すことは利害一致になるのではと考えて私が魔術でこの地底世界まで誘導しました。強引な手ですみません」

「……まあ、確かに強引だけどさ。こんなん見せられて、地上でも暴れてるアントラー……だっけ？あいつを野放しには出来ねえよ」

「今のバラージは紛れもなく国レベルで戦争の被害者だもの。静かに暮らしていたところに地上の戦争で放たれたニュートロンジャマーが彼らの生活を一変させた。暮らしそのものはともかく、怪獣の復活なんて下手な災害よりとんでもないわ」

一誠やリアスはニトクリスに協力的だ。当然、ダイゴやトライスクワッド、ダ・ガーンも。ただ、マリューも個人的には協力したい気持ちがあるのだが、今や一部隊を預かる者として独断で決めるわけにはいかない。

そこで、ニトクリスにアークエンジェルまで出向いてもらい直接説明を頼むことにした。無論、彼女に何かあるといけないので一誠らが護衛も兼ねるという条件で。

とはいえそのまま帰るのは……と思ったところ、タイタスが残ると言い出したのだ。悪く言えば人質という体なのだろうが、タイタス自身気になることがあると言う上、一誠と一体化（と言う割にかなり自由度が高くなっている）しているため必然的に一誠やタイガ、フーマもあまり離れられない。

しかも普段とは何かが違い、場所が分かっているならある程度離れられるようになっているはずなのに、どういうわけかバラージ近辺……大体アークエンジェル～バラージ程度までしか離れられないという。その上基点がバラージらしく、それ以上離れようとするとかつ

て空の世界でゼットに引っ張られる形でレジェンドが空の底に落ちかけた感じになるとのこと。
嫌な例えにされるレジェンド変わりなく不憫。

☆

そんなこんなでアークエンジェルまで戻った彼らを待っていたのは――

「艦長！何やら妙なものが艦内を！」
「何ですって!?」
「今、あそこに……」

ナタルやマードック、他の主要クルーが焦った表情でマリューに報告した『それ』を一誠やマリューらが見ると……。

「「何じゃありゃあああああ!?」」
「え!?えええええ!?」
（あ……あれは……）

上から一誠とタイガにフーマ、リアス、そしてニトクリス。マリューとダイゴ、ダ・ガーンはポカンとして開いた口が塞がらない状態。
そんな彼らが見たものの正体、それは――。

「――――」

白い布に目が付いた、足を少しだけ出したナニカであった。
そんなものがストライクの足に隠れて半分だけ顔を……というか全身を丁度縦半分出している。何だこれ。

「何だアレ!?何だアレェェェ!?」
「どっかで見たことあるようなないような!?大人にしては小さいし子供にしても小さめ……アレ？」
「そもそも今アークエンジェルに乗ってて最年少なのはキラ達あたりだろ！」
「……中身どうなってんのかな」
「「「何言ってんだミカァ!!」」」」

三日月のあまりの平常運転ぶりに揃って渾名呼びしてしまう一同。しのぶでさえ警戒しているというのに……そんな格納庫へ、沙耶がアズに支えられつつやってくる。

「……これ、何の騒ぎ……？」
「沙耶お姉様！」
「沙耶さん、意識戻ったのか！」
「ええ……心配かけてごめんなさい。ところで――」

何か言おうとして沙耶はそのナニカと目が合った。まだ若干ボーッとしている沙耶の方は「何かしらアレ」程度にしか思っていないが、他の者は少なからずそれから圧を感じていた。

「……」
「――」

「……」
「――――」

キラーン☆と何か目元が光ったような音が聞こえ、リアスが思い出したように叫ぶ。

「ッ!!そうよ、何処かで見たことがあると思ったら――」
「――メジェド様です」
「「「「え？」」」」

リアスに続く形でニトクリスが呟くと、全員が揃って彼女の方を向く。何やら大量の汗を垂らす彼女にワケを聞いてみると……。

「その……私は何というか、ホルス神に因んでいまして、ホルス神がそのメジェド様……メジェド神と関連があるのでその影響といいますか、えっと……だから……」
「そう！メジェド神よ！エジプトの死者の書に描かれた謎の神！もう見た目からして謎だらけ！分かっているのは心臓を食べるってことや目からビームが出るってこと、そして不可視だってことぐらいよ!!」
「「いやめっちゃ視えてます部長!!」」
「「「「心臓を食べる!?」」」」

……目からビームはどうでもいいのか。いやまあウルトラ族もウルトラ眼光とか目からビーム出すのいるけども。不可視は……何か丸出し過ぎて目を逸らすってことにしておくとして、やはり反応が大きかったのは心臓を食べるという見た目とは裏腹なとんでもない情報。

そして沙耶を見て目を光らせた。つまり――。

「沙耶お姉様逃げてぇ!!」

「狙われてます！沙耶さん狙われてますよっ!!」
「だ、大丈夫ですよ！メジェド様は新鮮な心臓が……」
「「「「尚の事危ないでしょうが!!」」」」

大勢にハモられビクッとするニトクリス。そんな沙耶を守るべく、彼女をアズが庇うように両手を広げた状態でメジェドの前に立った。すると……。

「――」
「……え？」
「――――」（キラーン☆）
「「「「アズにゃーん!?」」」」

今度はアズが、いやアズも沙耶もまとめて狙われた。だが、ここで唐突にメジェドがピタリと動きを止めたと思えば物凄く滝汗を流し始める。

「……？どうしたんだ？」
（……あ）

しのぶがよく見てみると、アズと沙耶の更に後ろにウルトラマンレジェンド（レジェンドマント装備）が腕組み仁王立ち、しかも顔の部分が暗いシルエットになってて目だけ光らせてる幻影が。光神は神の上位存在であり、その光神のトップに君臨しているのがレジェンドなのだからそりゃメジェド神だろうと畏怖するだろう。
それから駄目押しとばかりにある人物の横槍も入ってきた。

「お困りのようだね、女王陛下」
「「「「!!」」」」

声がした方向を全員が振り向くと、フード付きのファンタジー風衣装を身に纏う整った顔の青年。

「お前は!?」
「おっとそう熱り立たないでくれたまえ。少なくとも君達の敵ではないよ、寧ろ味方さ。私のことはそこの女王陛下がよく知っているよ。無論、君達ウルトラ騎空団の団長である彼もね」
「何ですって……?」
「……どうしてここにいるの?」
「いや何、私がハッピーエンドを望むのは君も知っての通りだろう?今後の長いお付き合いになるだろうからせめて顔出しも兼ねて、ほんのちょっぴりだけ今回は手を貸しに来たんだ。しかし艦長さんといい、そこの和服のお嬢さんといい、青髪ツインテールの子といい、ここは正に桃源郷だね!私のテンションもＵＬＴＲＡ　ＨＩＧＨさ!そういうわけでそこの紅髪ナイスバディなお嬢さん、今度一緒に食事でもどうだろう?」

突然現れた青年は沙耶やレジェンドの関係者らしいが、マリューやしのぶ、アズを褒めるとリアスまでナンパし始めた。

「いきなり何なの!?」
「スイマセン部長とりあえず師匠直伝のハンドスライサーでコイツの首切り落とすんで」
「「『イッセー!?』」」

ガチで一誠がキレていることにダ・ガーンもビビる。ちなみにゲン、手刀の極意として『砕け、貫け、斬り飛ばせ』などと一誠へ伝授していた。誰もがお前さんのように出来るわけじゃないというのに。

「いい加減にしなさい。お母様と先生に言いつけるわよ」

「おっとそれは勘弁してほしい。出来れば陛下のお義姉さんにも言わないでもらいたいな」

「だったら真面目にやって。貴方は真剣になると凄い立派なんだから」

「御心のままに。クーデレ系美人女王陛下に褒められてやる気を出さないのは男子にあらず!ということで君達に一つ、先のバラージで君達が得た情報を更に突き詰めて教えようと思う」

そこで青年の雰囲気が変わる。沙耶の言う真面目モードに入ったのだろう。

「今更だが、私のことは『花のお兄さん』とでも呼んでくれたまえ。真名は今暫くお預けだ。女王陛下や団長さんに聞くのも出来れば遠慮してほしいな」

「……で、貴方は何を知っているのかしら。メジェド神がいつの間にか消えているのは……まあ、今はいいとして」

「そうだね。まずは君達が聞いた、アントラー復活の原因がニュートロンジャマーによるものだということからおさらいしよう」

花のお兄さんと名乗る青年の口から聞かされた事実は、既に聞いていた一誠らを除く全員にとって衝撃的過ぎる事実であった。

当然一悶着あったのだが、それはまさかのキラが黙らせた。

「やめてください!!そんな責任の押し付けなんて……バラージの人か

らしたらどちらに否があるとか、そんなの関係無いじゃないですか!!」

そう、キラの言うように全部引っくるめて『地上人の責任』なのだ。ナチュラルもコーディネイターも関係なく、ただただバラージは被害者。ヘリオポリスで暮らしていて、否応無しに戦争へと巻き込まれた彼らだからこそ言える。キラに続き、トールやミリアリアらも同調したことで一先ず起きた騒動は沈静化。

次にサーヴァントとして召喚されたファラオ、ニトクリスのこと。そして彼女がアークエンジェルへ来た目的や、ウルトラマンノアと勇者の石のこと。

「あれ?ちょっと待てよ?勇者の石って四つだったよな、ダ・ガーン」
『ああ、その通りだ。何か気になることでもあったのか、一誠?』
「いやさ……あそこ、五つ石があったんだよ。で、タイタスが残ったのって、その石が気になったからじゃないのかなって」
『成程……しかし、勇者の石は間違いなく四つだ。残る一つが何なのかは私も分からない。少なくとも悪いものではなさそうだが、今の時点では何とも言えないな』

う~ん……と悩みつつもとりあえずそれは置いておき、一番に大事なアントラー討伐に協力するか否かの話へと移行。当然、ダイゴを含むウルトラ騎空団は協力の姿勢だ。ニトクリスと花のお兄さん（仮）もつい笑みを溢してしまう。

ただ、やはりというべきか……。

「ラミアス艦長、僭越ながら私は速やかにこの場を去るべきだと進言します」
「「「!?」」」
「……理由を聞かせて頂戴、ナタル」
「確かにニュートロンジャマーによる被害は地上からのもので我々に

非はあると思いますが、そのアントラーは遥か昔から存在しており今回の誘導に関して言えば我々が被害を被った形です。ここはこれ以上要らぬ諍いを生まぬために、早急に地上へと帰還しこの地域から離脱するのが賢明かと」

マリューはその意見に頭を悩ませる。ナタルが言ったことはある意味で的を得ており、これまでのことを顧みて相互不干渉にしようというのは一つの正しい選択でもある。実際アークエンジェルのクルーでバラージに赴き、話を直接聞いたのはマリューのみ。全体で言うと殆ど関わっていないのだ。

「それに、地上へ残してきたウルトラ騎空団副団長とフラガ少佐のことも考えねばなりません」

「……!ええ、分かっているわ……」

ここにいない二人のことが出たことで、ナタルの言葉がより説得力を増す。特にサーガはその立場上何かが起きてからでは遅い。いくら実力があると言っても、レジェンド程放置していられるわけではない。九極天がいないこの場において、神衛隊であり最も高い位にいる三日月もそれは理解している。

だが――。

「あのＭＡ乗りはともかく、サーガ様はこの状況を放っておいたら逆に怒ると思うんだよね」

「「「「！」」」」

「あの……サーガというのは？」

「レジェンド様の息子みたいなもので俺達の直属の上司。主っていうのが正しいかな。ノア様と御神隊みたいな関係だよ」

つまり、三日月が恩人らと同等の地位にいる人物であると理解した彼女は慌てて頭を下げようとするが、別にいいと彼はニトクリスを制

した。三日月は相手より自分が格上だろうと特に立場を気にしない。
キラやトール達も協力しようとしたが、案の定軍の規律どうこうで反対されてしまいぐうの音も出ない……かと思いきや、キラが「ちょっと待ってて下さい」と格納庫から駆け足で出て行った。そして少しして戻ってきたキラは、なんと私服姿。さらにその手には――。

「はい、これ」
「これって……！」
「「「「除隊許可証?!」」」」
「紙だし、捨てたりするのは勿体無いし、ダイゴさんもいざというときに役立つと思うからって言ってたから保管しておいたんですが……早速役立ちそうで」

ニコニコと差し出してくるキラにナタルは唖然としている。その後ろでは花のお兄さん（仮）も素晴らしい笑顔でサムズアップ。

「いざというときは私が責任持ってオーブまでお送りしよう！何、観光も兼ねてと思えばどうということはないさ！安心して君がしたいことをすればいい！」
「ありがとうございます、花のお兄さん」
「うん、やっぱり希望に満ちた心は良い！凄く！」

……何か組んじゃいけない新たなコンビが出来てしまった気がする。

「ど……どうします、艦長？」
「……はぁ……」

相変わらず板挟みで悩むマリューに、ダイゴやリアスは心で合掌した。最悪、本気で花のお兄さん（仮）にキラを頼まざるを得ないこと

になりそうである。
一先ず、協力はウルトラ騎空団に加えてキラと花のお兄さん（仮）で、アークエンジェル組は保留。
そして、最後にと言わんばかりの衝撃が花のお兄さん（仮）の口から明らかにされた。

「さて、話が一通り纏まったところで私が最初に言った『更に突き詰めた情報』を伝えようと思う」
「あ、そういや割とドタバタしててすっかり忘れてたけどそんなこと言ってたっけ」
「ゴホン！それはニュートロンジャマーがバラージに落ちてきた話に関係することなんだけど――」

咳払いを入れて花のお兄さん（仮）が告げた情報、それは――。

「ニュートロンジャマーはバラージに落ちてきたわけじゃない。バラージに落とされたんだ」

「「「「……え？」」」」

誰もが耳を疑った。ニトクリスでさえも。彼の話が事実だとすれば、ニュートロンジャマーはバラージを狙って放たれたことになる。それも今や地図上どころか知っている者がどれだけいるか分からな

い、この地底でバラージが現存していることも知っているということ。

「それだけじゃない。そのニュートロンジャマー、あまりにアントラーを封印している場所にピンポイント過ぎると思わないかい？」
「まさか……！」
「そう、バラージが存在していることだけじゃなく、アントラーが封印されていること、そしてその位置までも完璧に把握した上で特別なニュートロンジャマーは放たれた。この地底世界の、バラージにあるアントラーを封印した場所目掛けてね」

衝撃的事実を聞かされて唖然とする一行。いち早く冷静になった沙耶が尋ねる。

「一体誰が？」
「それは私も分からないし、分かっていても話せない。君達が自分達で辿り着かなければならないのだから」
「何でだよ!?」

噛みつくように叫ぶ一誠をタイガらが制すると、花のお兄さん（仮）はレジェンドと似たような言葉を口にした。

「確かに私は情報収集力に自信があるが、それにばかり頼っていては君達が甘えてしまう。それでは駄目なんだ。どんなに辛い旅路でも、最終的に君達自身が学び、己の糧とすることに意味がある」

レジェンドが異世界修業をさせる理由、まさにそのままだ。かくいうレジェンド自身も己に制限を課し、普段以上に自分を鍛え上げている。『お前達にそうさせるからには自分もやる。だが自分もやる以上、お前達も逃げるな』と強制的にやらされている気もするが、実のところレジェンドはエンドコンテンツ並のことを日常生活レベルで

やっているため、実際他者がやろうとすると下手したら一日も持たない。日々是精進。

これ以上の問答はあまり効果がないと判断したダイゴは、最後に気になったことを聞く。

「最後に一つだけ聞いてもいいですか？」

「あまりネタバレにならないことならね」

「貴方は先程『落としたのが誰かは分からない』と言いましたが、何故落としたということは分かったんです？」

「ああ、そのことか。それならお答えしよう。単純に『あからさま過ぎた』からさ。見ての通りここの天井はしっかりと厚い岩盤になっていて、簡単に突き破れるものじゃない。これが『天井からニュートロンジャマーが少し生えている』程度ならともかく、普通にぶち抜いてアントラーを封印していた場所の『ド真ん中』に落ちた。こんなに素材が丸出しになってるんだ、少し考えれば簡単に分かることだよ」

言われてみればそうだ。砂漠の下にあって砂もあまり落ちてこないとあれば当然岩盤は存在する。地底世界ということで色々驚き過ぎてそういったことが頭から抜け出ていたことを反省すると同時に、沙耶は溜め息を吐きつつ頭を抱えた。

「本当に貴方は……そうやって真面目にやるとここまで出来る男なのに何で普段はああなの……」

「いや、だって楽園は楽園だけど暇過ぎる楽園なんだよ！だから条件付きとはいえ、彼処で働けてありがたいくらいでね。しかし喫茶リコリコの看板娘であるあの子達はいいね！あ～……早く二人と女王陛下が一緒にいるところを見たい。激写して家宝にするとも！」

さっきまでの真面目な雰囲気を吹き飛ばす花のお兄さん（仮）。さり気なく女王とか言ってるけど、大半の人物は色々な情報がてんこ盛り過ぎて頭に入ってこないらしい。不幸中の幸いというか。

受理するしないは別として除隊許可証を無理矢理ナタルに渡したキラと花のお兄さん(仮)を連れて、ウルトラ騎空団は一足早くバラージへと再び赴く。

マリュー達アークエンジェル組の心は未だ迷いの中にあった。

〈続く〉

――番外編――

「おや、珍しいですね。マーリンから私に次元超えの――」

※ぴょんぴょんポーズのニトクリスと沙耶(恥ずかしモード)、ちょいアップで一緒に写ってるキメ顔のマーリンの写メ

「……ヤプール、我が魔槍を持て」

「モルガン先代陛下!?」

手に手を取って

アークエンジェルを出てバラージへと戻り、チャータムを再度訪ねるウルトラ騎空団&キラと花のお兄さん（仮）。案の定ナンパ目的で声を掛けようとする花のお兄さん（仮）に容赦無く裏拳を叩き込む沙耶。

「どぅはぁっ!?」
「初対面の相手、それも結構な身分の方に失礼な真似は止しなさい」
「うぐぐ……いやいや陛下、むしろ声を掛けない方が失礼に――何でもないですゴメンナサイ」

花のお兄さん(仮)は沙耶に首根っこ掴まれ、更に鼻の穴に指をフック状態で突っ込まれて本気で危機感を覚えた。ここで一旦停止してくれるだけ彼女はまだ優しい。レジェンドなど沙耶でいう裏拳の段階で豪快に鼻フックデストロイヤーをブチ込んでいる。

「すみません、チャータム。やはりあちらの軍人らは私の誘導をあまりよく思っていなかったようで……」
「いいえ、ニトクリス様の所為ではありません。それに、先刻よりも人数が増えているようですが」
「ええ。光神様縁の方々が手を貸してくれるそうです。それから、有志で来てくれた……」
「キラ・ヤマトです」
「花のお兄さんと呼んで頂きたい」
「なげーからフラワー男、略してフラ男でいいんじゃね?」
「「「「ぶっ!?」」」」

ニトクリスによる紹介の最中に言ったフーマの一言でウルトラ騎空団の全員が吹き出した。

「さすがにそれはあんまりじゃないかい!?」
「だってフラワーマンとかだと超人っぽいしさあ。やっぱり超人つったらザ・ニンジャ師匠とか、こう……ビシッとした感じじゃねーと」
「そういやキン肉マン師匠とテリーマン師匠も本気になったら空気違うもんな」
「ゼットの師匠なキン肉マンソルジャー……キン肉アタルさんだっけ？あの人なんかいるだけで身が引き締まるっていうか、もうウルトラ6兄弟クラスだよあの人」
「じゃあさ、あの花の人と悪魔将軍じゃどっちが威厳あると思う？」
「「「「悪魔将軍（さん）」」」」
「比べる相手が間違ってるよ!!」

三日月の問いに対してしのぶも含めてハモると花のお兄さん（仮）は反論するが、実際雰囲気負けしまくりである。仕方ないといえば仕方ない。あちらはルールや能力セーブがあったとはいえ、あのレジェンドと互角に渡り合う熱い激闘を繰り広げた実力者にして魔闘地獄の主。カリスマの格が違うのだ。
それはそれとして、タイタスとも合流したが彼の方は何の進展もなかったようで少々落胆していた。

「気にすんなよ。そもそも推測の域を出てなかったし」
「あの5つめの石が何なのかは追々分かるだろうぜ」
「……しかし、前回と違い町に人が溢れている。これは一体？」
「光の勇者達が訪れたことで彼らも災厄に立ち向かう覚悟が出来たのです。ほんの僅かな希望、それを信じて未来を掴むために」

チャータムが指をさした方向を見ると、岩石を射出するような装置を作っている様子が確認出来た。原始的ではあるが、製作に携わっている者達は皆屈強な体格をしており十分効果は期待出来そうだ。
「無いよりはマシでしょうが、我々もただ黙ってやられる気はありま

せん」
「むう！あんなものを見せられては悄気げてなどいられんな！私も手伝ってこよう！」

先程まで意気消沈していたのが嘘のようにタイタスはやる気を取り戻し、すぐさま投石機の製作に協力しにいく。瞬く間に仲良くなり、自慢のマッスルポーズを見せ合う姿は暑苦しくも微笑ましい。

「おお！実に素晴らしい二の腕だ！」
「そちらの大胸筋はもはや芸術品の域ですな！」
「いやいや私もまだまだ！お互いさらなる高みを目指していこう！では御一緒に!!」
「「「「サイドチェストォォォ!!」」」」

種族の違いなど知ったことか、と言わんばかりの同調ぶり。筋肉による相互理解を実現させたタイタスはやはり賢者と言えるだろう。
……他者の怒りを買うことに無類の才能を発揮する何処かの花の魔術師は見習ったほうがいい。

「アントラーは今休眠しているはずです。地上から戻ると暫し休眠し、再びこの地底から地上へと向かい獲物を狙うらしいので」
「え？まだバラージ狙われてないんですか？」
「おそらくはウルトラマンノアの石像近辺にあった５つの石を警戒して、力を蓄えているからかもしれませんね」
「４つの勇者の石と、謎めいた５つめの石か……」
『勇者の石はともかく、最後の石が我々にとってマイナスでないことを祈るしかないな』

話が一段落すると、一誠はよーしと腕まくりして指を鳴らす。
「師匠達との特訓で体力は付きまくってんだ。アントラーが動き出す

までにやれることをやろうぜ！」
「じゃあ俺も力仕事かな」
「三日月さんって身体動かすとき上着脱ぐのが普通なの!?」
「何か昔の阿頼耶識の関係で癖になってるのかも」

確かに以前の阿頼耶識ではそうしなければならない理由があったわけだが、今の新生阿頼耶識はそういうものが不要。しかしそれで当時激戦を繰り広げていた三日月はその癖がまだ抜けないらしい。

力仕事組とその他の仕事組に分かれてさあ始めよう、という時になって予想外の声が掛かった。

「何とか、間に合ったみたいね」
「「「「ラミアス艦長!?」」」」
「俺達もいるぜ！」
「トール！サイ達も……」
「やっぱ、これを見て見ぬ振りって良くないもんな」

そう、マリューやトール達らヘリオポリス脱出組が手を貸しに来たのである。特にマリューはザフトのヘリオポリス襲撃の際に着ていた技術者としての服装。気合十分といったところか。

「こんな立場だからクルー全員に強制することが出来なくてね。力不足だとは思うけど、手伝わせて頂戴」
「とんでもない！力不足？いや、貴女がいるだけで仕事場に花が咲く！ついでに私の周りにもいつもの3倍増しで――」
「ふんっ!!」

魔力を死なない程度に込めて、思いっきり花のお兄さん（仮）へ腹パンする沙耶。股間や尻でないだけ有情なのかもしれないが、炸裂し

たとき『バキッ』ではなく『グォリュウッ』と捻じり砕いた感じの音だったのは逆に恐怖を煽る。現に殆どの者が顔を青褪めさせているし。

「お……ぐっふァ……!?」

「貴方はスキあらばナンパしようとする上に相手が美人なら見境無いから、事が起きる前に実力行使で止めなさいとお母様や先生から言われてるの」

（いや、今の私じゃなかったら本気でヤバい一撃だった！武者修行の旅に出ていたらしいけど成長し過ぎな気がするよ！身体は……まあ、元からスタイル良かったし然程成長していないけどまあいい――）

ゴ　ッ　！　！

「ッッッッッ!!」

どうやら性的に邪な考えに限り読心術が自動発動するらしい沙耶が花のお兄さん（仮）の思考を読み取り、ディスられたのを感知して背後から股間を蹴り上げた。花のお兄さん（仮）が宙に軽く浮かぶ程だからその威力は想像に難くない。お兄さんのムスコさんは大丈夫か？

「うっわぁ……アレってタイタスが匙の股間にマッスルボール直撃させたのと同じくらいキツくね？」

「女性にやられたから尚更ダメージくるだろうな。肉体的にも精神的にも」

「ありゃ暫く使いもんになんねーな。俺らでカバーしようぜ」

一誠とタイガ、フーマの言葉はほぼ全員の総意だろう。股関を押さえて悶絶している花のお兄さん（仮）を見ながら作業に向かう一行。

「ち……ちょっと待って……誰か回復……回復を……！」
「じゃあ取っちゃおうか」

ホッケーマスクならぬバルバトスマスクを装着した三日月が、何処から取り出したのか電動チェーンソーをギュイイイイン！と音を立てて起動させながら花のお兄さん（仮）へと近付いていく。身体能力を考えても恐怖しかない。あまりの光景にチャータムどころかサーヴァントのニトクリスさえ青褪めている。

「うわあああああ⁉ストップ！ステイ！ヘルプ!!何か花のお姉さんとか別にいる気がするからさ、ほらキャラ被り良くないって言うしね！だから待ってごめんなさいィィィ!!」

結局渾身の謝罪によってどうにか許された花のお兄さん（仮）だったが、どちらにせよ暫く使い物にならなかったのは言うまでもない。

☆

――ペガサスＡ――

「んー……やはりパッとしないな……」

全員での食事を終えた後、レジェンドは自室にて自分がＭＳに乗る場合の専用機について模索していた。

一応自身の専用機として開発中の機体『ウルティメイトオリジン』が存在するのだが……如何せんあれもこれもと特殊機能を詰め込みまくった（因みに現在進行系でますます増えているらしい）ため開発が更に難航。とりあえず現状以上の能力付加を止めて一先ず完成させようと思ったものの、束が「レジェくんの専用機に妥協なんて出来ないよっ!!」と力説したので当初のコンセプトのまま開発続行……したのに一向に開発が進まないのは本末転倒の気がするが。

そんなこともあってウルティメイトオリジンとは違う自身の専用ＭＳを考えてみたが、己好みのＭＳが中々思い浮かばず己の趣味に走れば結局ＭＦないしＰＴへとシフトせざるを得なくなってしまうのだ。

「……駄目だ、ウルティメイトオリジン以外じゃどう考えてもゲテモノＭＳが脳裏に浮かぶ。これ以上は考えるだけ無駄か」

もうウルティメイトオリジンを完成させることだけ考えよう、とレジェンドは伸びをして立ち上がる。自分以外の全員が寝静まった頃にとある場所へ出向こうと思っているレジェンドだが――。

「え？ミゲルこのハルートってやつ使わねぇの？キュリオス系列の発展形だぜ？」

「そいつは操縦系統が複座型で、その前のアリオスもＧＮアーチャーって奴と連携戦闘を考慮されてるだろ。シングルで完結してるキュリオスが一番俺に合ってるんだよ」

またシミュレーターをやってその後の休憩中なのか、食堂で飲み物片手に談義しているミゲルとラスティ。

「さ、次はお前の番だぞラスティ。どの機体を気に入ったんだ？」

「それがいくつか候補があってさ～。このラファエルガンダムかガンダムＭｋ―Ｖがいいなって思ってるんだよ」

「Ｍｋ―Ｖは分かるが……ラファエルの方はバランス悪くないか？地上じゃまともに動かせなさそうだぞ」

「ん～……まあ、アレじゃね？ＧＮドライヴのおかげで空飛べるから無問題とか」

別の場所では――

「……で、俺はセブンさんとゼロさんに修業をつけてもらってエメリウムスラッガーを修得したわけだ」
「やっぱりただ力をお借りするだけじゃ駄目なのか……！ゼロ師匠やレオ大師匠、セブン大大師匠から直接修業をつけてもらえればアルファエッジがさらなるパワーアップを――」
「レオさんやセブンさんはともかく、今のままじゃゼロさんがお前に修業つけてくれる可能性ほぼ皆無だぞ」
「ぐはあっ!!」

休憩所で同じようにガイとゼットが語らっていた。がっくり膝をつくゼットに対して、ガイは内心「ＭＳの操縦どころか設計まで含めたらゼロさんが教わる側になるかもだけど」と考えているが、口にしたらゼットが調子に乗りそうなので黙っておく。
ルリアとアマリ、ライとモニカの相部屋組はもう就寝しており、ロスヴァイセと流もそれぞれ自室にて過ごしている。全員が眠るまであと少しだろうが……。

「ここをこうして……いや、これでは安定してもエネルギー効率が……」

このワーカーホリック気味の艦長（勇治）が中々寝ない。だから予めシエルに「勇治が夜更ししようとしたら『休まないと強制的に電源を落とす』とでも脅して休ませろ」と伝えておいた。無論、主第一のＡＩ（シエル）はこれを了承。もう間もなく実行されるだろう。
そう考えていれば――。

「あああああ!!おいシエル！本当に！まさか本当にやったのか!?折角ある程度固まったのに！」
『言っても聞いてくれないマスターが悪いんです』

絶望に打ちひしがれる勇治の叫びと、少々お怒りなシエルの音声が聞こえてきたのでやる気を削がれた勇治はそろそろ寝床に入るはず。シエルには「休んでからも勇治は見張っておけ。下手したら夢の中でヒントを得た場合、ふと目を覚まし現実に持ち出して研究再開しかねん」とも告げておいた。確証はないが、あの男ならやりかねない。

一通りの見回りをこなし、レジェンドは件の施設を直接調査するための準備を始める。そこで彼すら予測し得ない出会いがあろうなど、誰が想像出来ただろうか――。

☆

「そっちは角度を狭く！そう、それくらいで！そこの部分は幅を広く持たせて！」

元が技術士官であったマリューの指示により、投石機を始めとした各種装置の製作が円滑に進んでいくバラージ。ストライク以外の機動兵器による運搬なども相まって、作業効率は驚く程良好だ。その筆頭は当然バルバトス。

「結局上着脱いだ意味殆ど無かったな」

「その発言、脱ぎたくて仕方なかったみたいに聞こえますよ」

「ノア様の護神隊には一瞬で下着諸共脱げる人がいるらしいよ。しかも複数」

「……何でそんな人達を直属にしてるんでしょうか……」

それぞれバルバトスとヒュッケバインＭｋ―Ⅱに乗り作業しながら、三日月としのぶが会話に花を咲かせている。声の感じから無一郎を思い出させる彼だが、話してみると案外話しやすいことにしのぶは気付いた。特に食べ物の話題には高確率で食いついてくる。

「出ませい！出ませい！」

「「――」」」
「ちっさいメジェド様だー!?」
「しかも複数ー!?」

ニトクリスが何やら小さいメジェドを呼び出して投石用に岩を砕いている。ズラリと横一列に隊列を組んで突撃していくメジェドは実にシュールな光景である。尤も、沙耶やアズを狙っていた時を思えばそんなものが複数現れるだけで普通は背筋が寒くなるものだが、不可視のレジェンドオーラがあるので大丈夫らしい。
……不可視ってメジェド神の方じゃなかったっけ……？

「……よく見ると可愛いわね、アレ」

――何かメジェドーズの頬がちょっぴり紅くなった。沙耶の一言が嬉しかったようだ。

「チェストォォォ!!」
「やるわねイッセー！あのレーティングゲーム用に特訓していた時の事がここに来て役立つとは思わなかったわ！」
「もしかして師匠はこういうことも想定して俺にあの時あんな特訓を課したんじゃ……!?」
「さすがにこれは偶然……いえ、ゲン師範のことだから案外そうなのかも……」

幾多の冒険を経てそこそこの岩なら神器無し・プロモーション無しで砕けるようになった一誠。厳しく指導するも出来たらしっかり褒めるゲンのおかげか、あの頃が懐かしく思える程目覚ましい成長だ。

「部長」
「何、イッセー？」
「師匠ならアントラーを素手で倒しそうだと思っちまったんですけ

ど」
「さすが出来ない……とは言い切れないわね、あの人の場合。復活したカテレアを一方的にボコボコにしてたんだもの」

当時の事を思い出し、冷や汗を垂らす二人。弟子のピンチに颯爽と現れてレヴィアタンの血族たるカテレアを完膚無きまでに叩き潰したブチ切れモードのゲンは、レジェンドいわく『怒りのハイパーモード状態』。簡単に言うと、フィンガー技使わず腹パン一発でそこいらのＭＦは木っ端微塵に吹き飛ぶレベルとか。

そんな感じで各所が様々な盛り上がりを見せていると、バラージの入口に一台のジープが止まりナタルが降りてきた。

「キラ・ヤマト、アークエンジェルへ戻れ」
「お断りします。僕は僕の出来ることをやるためにここへ来たんです」
「……言葉が足りなかったな。そういう作業はストライクを使って行った方が効率的だ」
「「「「……へ？」」」」

突然やってきて相変わらずの軍人目線で指示してきたかと思えば、まさかのストライク使用許可。しかも、乗ってきたジープにはマードックらメカニック班も乗っていた。

「ナタル、貴女……」
「ラミアス艦長、やるならば早急に問題の解決を。ここでの問題だけが解決しても地上の問題には殆ど変化がありません。ヤマト少尉、作業はディアクティブモードでも可能だ。ＰＳ装甲の展開はバッテリーを消費するからいざという時まで使用するなよ」
「は……はい！」

いつも通りの彼女ではあったが、彼女なりに気遣ってくれたのだろ

う。少しばかり頬が紅くなっていたのが遠目で確認出来た。

「ボウズ！ストライクはいつでも動かせるぞ！あー……装備すんならソードにしとけ！」

「ありがとうございます！ダイゴさん、すみません。ちょっとだけ抜けます」

「大丈夫、早く行ってストライクを持っておいで」

ダイゴの温かい言葉に送り出され、マードックらと変わる形でジープに乗り込みアークエンジェルへ戻るキラ。マードックはマリューも現場で指揮を取りつつ作業しているのを見ると気合を入れる。

「よぉ～しお前ら！艦長も踏ん張ってんだ！地上のメカニックの維持を見せてやるぞ！」

「「おお!!」」

ここにきて、漸く本当の意味で結束出来たことに感動を覚えるチャータムとニトクリス。花のお兄さん(仮)も笑みを浮かべている。未だ股間を押さえながらというのは些かカッコ悪いが。

「しかしあの副長さん、ガードはかなり堅いけど崩せれば結構可愛いんじゃ……」

「サテライトキャノンは使いたくないけど、ブレストバルカンならたっぷりくれてあげるわ」

「いやいや遠慮するよ女王陛下。本当にモルガン先代陛下に似てきたね……あとお義姉さんにも」

「これ以上ない褒め言葉よ」

休憩時間ではニトクリスもしのぶやアズと談話しながら食事。二人は今後の事を考えて噂のファラオ・オジマンディアスについて聞くと彼女は意気揚々と、しかし分かりやすく教えてくれた。

「……という御方なのですが、御理解頂けましたか？」
「光輝の複合大神殿（ラムセウム・テンティリス）……可能なら直接目にしてみたいですね」
「私はスフィンクスをどうやってお世話してるのか気になるかも」
「あぁ……そちらは、その。だいぶ放し飼いされてます」

申し訳なさそうに言うニトクリスに、彼女も苦労してるんだなぁと思うしのぶとアズ。

「ではこちらからも……貴女方縁の光神様であるレジェンド様とはどういった方なのです？」
「そうですね……みんなのお父さん、お兄さん、お師匠さん、といった感じでしょうか。あとはやることが一々大きい」
「私は初対面は倉庫で、その時に栄養食とドリンクを貰いました」
「何で倉庫!?」

――忘れがちだが、当時のアズは密航者である。一人になりたいからと倉庫に来るレジェンドもレジェンドだが。

「フルーツ味、美味しかったな……」
「何というか、人々の暮らしに寄り添っている方なんですね」
「あの方、自分で厨房に立つのが当たり前ですし」

伸ばされた手を繋ぎ、縁は紡がれていく。
彼方よりの脅威が目覚めんとする中、対する世界を超えし絆もまたより輝きを増していくのだった。

アントラーが目覚めるまで、あと数時間――。

〈続く〉

熱情の律動（リズム）

出来うる限りの準備を終え、アントラーとの決戦に備え休息を取る一誠達。バラージの町は現代にある文明の利器等は無かったものの不便の言うことはなく、むしろ地底であったからか気温は特に快適で新鮮さを感じるくらいだった。

「あと数時間でアントラーの活動時刻か……」

「ちょっと寝とこうぜ。いざってときに役に立たないとかシャレになんねーし」

「今回の要は我々だからな。まだティガ先輩はこの世界であまり大っぴらに変身出来ず、ディアナである沙耶もまだ病み上がりだ。ついでに地上のサーガも立場や特性上、おいそれと変身出来ない」

タイタスの述べたように、今回はトライスクワッドが戦いの軸となり彼らを他の者が援護する形を取る。唯一、アークエンジェルはその武装故に戦闘は不参加だ。ローエングリンは元より、各種ミサイルや主砲も地底かつバラージのことを考えると派手に撃つことが出来ない。対空砲は使えるが、それがアントラーに通用するかと言われたら疑問が残る。そもそも対空砲であるがゆえに射程が短く、角度の問題もあるのだから現実的ではない。

このように武装制限もあるため、今回の戦闘で出撃する機動兵器は三日月のバルバトスとソードストライカーに換装したキラのストライク、そしてアークエンジェルの面々には初のお披露目なダ・ガーンのみとなる。他の者は後方支援が主となり、魔法や魔術を使える者――リアスやニトクリスが中心になって彼らの戦闘サポートを行う手筈に決定した。

（アントラーに関する資料はガーディアンベースで閲覧したことがある。多少の想定外があろうと、こちらの戦力は十分だ。しかし何だ、この胸騒ぎは……）

他の者が気を落ち着かせている中、タイタスだけは己の内から湧き上がる不安を隠せない。
そして、それは現実のものとなる――。

――事態が、動いた。

「……！」

沙耶が何かを察知すると、その直後振動が彼女らを襲う。

「うわっ!?」
「何、地震!?」
「いえ、これは……アントラーです！アントラー活動開始の合図です！」
「いよいよか」

チャータムの言葉で三日月は即座に行動を起こし、バルバトスのコックピットへと滑り込む。それに続くようにキラもストライクへ搭乗、一誠もダ・ガーンをブレスレットから外に出し迎撃準備を整えた後にタイガスパークを出現させる。

「それって……！」

スコーピス遭遇時にダイゴの件で知っているキラならばともかく、マリューらは突如一誠の右腕に出現したタイガスパークを見て驚く。
「一誠、今回は私が行こう。アントラーの防御力は高いが、私のウルトラマッスルならば通じるはずだ！」
「タフなだけならまだしも、防御力高いヤツって俺と相性悪いしな

……」
「特化してるやつ相手だとタイタスかフーマが適任だしさ」
「おし！頼むぜタイタス！」
「任せてもらおう！皆、私の援護をお願いする！」
「え？え？」

　頷くリアスやダイゴ達に対し、マリューはまだ混乱中。戦うと言っていたが、まさかそのまま……とここである存在を思い出す。アークエンジェルがスコーピスに狙われた時、助けに現れたジャスティスのことだ。

「あの巨人とタイガさん達は似ている……まさか！」
「その通りさ、艦長さん。君は、君達は彼らの本当の姿を今から見る事になる！」

　何故貴方が得意気なの、と花のお兄さん（仮）にツッコみそうになるマリューだが今はそれどころではない。

　キシャアァァァオン!!

「出てきたぞ、アントラーだ！」
「やるぞ！怯える日々は今日で終わりだ！」

　穴ぐらからアントラーが雄叫びを地底に響かせ姿を現す。見るからに硬そうな皮膚と、凶悪な破壊力を持つのが一目で分かる大顎。そして予想通りＭＳの倍以上に大きい巨体。ニュートロンジャマーによって呼び起こされた、バラージに災厄を振り撒くもの。
　その姿を確認した一誠はすぐさまタイガスパークを待機状態にする。

『カモン！』
「力の賢者、タイタス！」
『おおおおっ！ふんっ！』

いつの間にかトライスクワッドもアストラル体になっており、既に変身準備は完了。
そして――

「バディィィ！ゴォォォッ!!」
『ウルトラマンタイタス！』
「フンッ!!」

力強い掛け声と共に、巨大化したタイタスが地底にてその勇姿を顕現する。しっかりと両足で大地を踏みしめて着地した後、行うのは相変わらず何故効果があるのか未だに不明なマッスルポーズ。

「ムゥン!!」

マリューらが唖然としている中、タイタスと心を通わせたバラージの熱き漢達から「兄貴」コールが飛び、彼らもまたマッスルポーズを行っている。一応緊張感漂うはずの場面なのだが、如何せんシュールに見えてしまう。

「えっ……と……一誠君達が消えて、タイタスさんが巨大化してマッスルポーズとって……つまりどういうこと？」
「あれが彼ら本来の戦闘スタイルなんです」
「マッスルポーズを取ることが……？」
「いえ、そうではなく――」

ダイゴの説明も、色々衝撃的過ぎたマリューには理解するのに時間が掛かっているようで、その間にアントラーが咆哮を上げタイタスへと突撃してきた。

「キシャァオン！」
「ぬぅん！」

その大顎で挟み込もうとしたアントラーだが、タイタスはそれを両腕で防ぎ一度弾くとガラ空きになった胴へ剛拳を叩き込む。

「オオオッ!!」
「ギシャァッ!?」

凄まじい衝撃にアントラーは堪らず仰向けに倒れ、バラージの民から歓声が巻き起こる。

「アントラー相手に先制で反撃したぞ！」
「真っ向勝負で押している！さすがタイタス兄貴だ！」

普段はノリの良い紳士、それでいて戦場では勇猛果敢な武人。それが彼らのタイタスへの印象だ。マリューや学生達、マードックらも今まで人間大のサイズで賑やかに過ごしていた彼らとは違う……本来の姿を見て言葉を失っている。

「彼らは本来、ああいった怪獣などとの戦いが主流なんです。一誠君とは少し込み入った事情があって一体化していますから、一誠君とトライスクワッド残りの二人であるタイガとフーマ……彼らもまた眼前のタイタスと共に戦っているんです」
「つまり……命の共有、かしら」

「そんな感じですね」

まるでＴＶの特撮ヒーローだ、と誰かが口にしたが正しくその通りなので余計なことは言わない。今目の前で起こっているのはその特撮ではない、現実（リアル）なのだと実感させるために。

「どちらにせよ、今の状況で詳しく聞いている時間はないわね。この時のために準備したのだから、今は私達に出来ることをやりましょう」

たとえ気になることがあっても、ちゃんと切り替えが出来るマリューをダイゴは高く評価する。彼女に倣い、トール達もバラージの民と共に作り上げた投石機を稼働させタイタスの援護をすべく動き出す。

更にバルバトスとストライクも戦闘準備を終え、いつでも戦闘可能になったところで――。

「『『『ダ・ガーン、フォームアップ！バディィィ！ゴォォォ！』』』」

「おおおっ！」

ロボットモードで待機していたダ・ガーンが一誠やドライグ、トライスクワッドの合体指令を受け、アースファイター及びアースライナーと合体を行う。

「合体！ダ・ガーンＸ!!」

いきなり戦闘機や新幹線が現れたのもそうだが、それらが合体して巨大ロボになったことに度肝を抜かれるマリュー達。さすがに今回はニトクリスも驚愕している。

「何だあれ!?スッゲー！」

「確かに凄いな。元が戦闘機とか新幹線って言われても信じられないよ」

トールやサイが目を輝かせてダ・ガーンを見る。彼らにとって喋って合体する巨大ロボはロマンなのだろう。ミリアリアは「男子っていつもこうなんだから」と溜め息を吐いていた。

「よし！行くぞ三日月、キラ、ダ・ガーン！」
「わかった……！」
「はい！」
「了解！」

タイタスの指示に頷き三機はそれぞれレンチメイス、シュベルトゲベール、ダ・ガーンブレードを構えアントラーを迎え撃つ。バラージを守り因縁に終止符を打つべく、彼らは古よりの災厄と激突する。

☆

アントラーとの戦いが本格的に始まると同時に、チャータムはダ・ガーンを見てから彼の言葉を思い出す。今までバラージの守護石としていた石のうち、四方に配置されたものは『勇者の石』であると。

この言葉とダ・ガーンの姿から、もしやあの石には彼の仲間ないしそれに準ずる存在が封じられているのではと考え、彼女はそれをこの場に持ち出すことを決意する。元よりアントラー討伐成功時にはあの石を彼らに渡す気だったのだ、それが少し早まるだけのこと。

「ニトクリス様、皆様。この場を少しだけお願いします」
「チャータム？」
「あの方はバラージの守護石を勇者の石と仰られました。もしかすると、今の状況を近くで感じさせれば突破口を切り開く鍵となるやもしれません」

「良いんですか？あれはバラージの……」
「アントラーが倒せてから、ということではありましたが元々貴方がたにお渡しするつもりでした。地上ではここ以上に厳しい戦いが待っているのでしょう。私達に出来る、ささやかなお力添えと思って下さい」

そう微笑むチャータムに、マリューは彼女のような心をナチュラルもコーディネイターも関係なく持ってくれればと思ってしまう。到底叶わぬことと分かってはいるが、あまりに彼女が眩しいのだ。

「私だけでは全てを持ち出すのに時間がかかります。何名かバラージの者を付き添わせ、早急に戻って参りますので、どうかその間だけ耐え忍んで下さい」
「ええ、何としても耐え抜いてみせます。投石機、装填！彼らの攻撃が途切れそうな瞬間を狙って援護射撃！アントラーにこちらのスキを見せないように！」

チャータムとマリュー、二人の女傑は互いを信じ成すべきことを成すため行動を開始した。チャータムは未知の石である五つ目も含めて全てここへ持ち運ぶべく、四人程バラージの民を召集。彼らはタイタスと心を通じ合わせた、この場においても信のおける者達だ。チャータムの提案を快く了承し、急ぎノアの祭壇へと向かう。
この場の皆が未来を掴む可能性を信じて。

☆

アントラーに対してこちらはタイタスと三機、即ち1対4という圧倒的優位に立ちながらも未だアントラーは倒れず何度も向かってくる。マリューらの投石援護も相まって結構なダメージが積み重なっているにも関わらず。

『なあ、アントラーってここまでタフだっけ？』
『さあ？』
『タイガもフーマもどんくらいアイツがしぶといか分かんないのか？』

やはりというべきか、タイガは訝しんでいる。怪獣に関してそういった施設で勉強していないフーマや、そもそも怪獣とは縁が無かった一誠が知らないのは無理もない。ついでにドライグはタイラントぐらいしか覚えてる余裕など無かったのでこれも仕方ないと言える。

「何か違和感があるんだよな」
「三日月さんもですか？僕もこう……手応えはあるけど向こうがそれを感じてないっていうか……」
「これは私感だが、まるで痛覚を麻痺させているかのように感じる」

ダ・ガーンXの言葉に何となく同意する三日月とキラ。痛みを別にどうとも感じていないような動きをするアントラーだが、それならばいずれ身体が言うことを聞かなくなるはず。しかし、そうなる様子を全く見せないのも不可思議だ。

「ふんっ！」
「キシャァァッ！」

今もタイタスの一撃をまともに食らったのに間をおかず反撃してきたアントラー。明らかに体力の限界を超えている――誰もがそう考えている。

「こうなれば一気に決着をつけるしかあるまい！」
『やっぱそれっきゃねえな！』

タイタスの意見に賛同した一誠が神器を発現させようとした時、事

態は急変した。

「ギ……ギシ……！」

「……!?アントラーの様子がおかしいぞ！」

『でもこれってチャンスじゃないか!?』

「というか、今どうにかしないとヤバい気がする」

「はい！とてつもなく嫌な予感が……！」

「急げ！総攻撃だ！」

タイタスのアストロビーム、バルバトスの滑空砲、ストライクのマイダスメッサー、そしてダ・ガーンXのアースインパルサーが同時に炸裂するが、アントラーは小刻みに震えながら目を赤く発光させるだけで先の攻撃は殆ど効果が無い。

あまりに異様な光景に誰もが警戒する。

そして、三日月やキラの予感は的中してしまう。

「ギジャァァァァァ!!」

「「「「!?」」」」

タイタス達だけでなく、アントラー自身も知らなかった。ある存在に埋め込まれたメダル……それに秘められた力によって、アントラーはこの危機的状況を打破せんと自己再生と自己進化を行なったのである。

身体全体が一回り大きくなり、皮膚を突き破り肩や膝から棘が出て鋭角的なフォルムへと変化。顎のハサミ部分は今まであった部位は大型化、その上下にそれぞれ一対の小さなものが出現し計三対に。更に昆虫らしい巨大な翼が四枚、そして……ともすれば二本合わせれば本体よりも巨大なのではないかと思う程の腕が背中から生えた、全く別の存在と言っても過言ではない姿。

ＥＸアントラーなどと生易しいものではない。
悪魔の細胞（DG）の力によって変異した、相手を絶望の底へ叩き落とすモノ。
捲土重来ディスペアントラー。
掴みかけた希望をその名の通り絶望へと変えるべく、巨大なる魔性は再び進撃を開始した。

☆

遠目でもアントラーの変異は確認された。予想外が過ぎる事態に、チャータムは連れてきた四人を急かし祭壇へと到着。すぐさま石を持ち出すべく指示を出す。

「最早一刻の猶予もありません。急ぎ勇者達のところへ、この五つの石を――」

「漸く見つけたぞ……ディステニィストーンに代わる新たな力の依代……」

何者かの声が聞こえた瞬間、チャータムや他の四人の意識は刈り取られた。

☆

ディスペアントラーの戦闘力の上がり方は異常であった。先程は圧倒的に優勢だったタイタス・バルバトス・ソードストライク、そしてダ・ガーンＸの四機が逆に劣勢になっている。三日月のバルバトス

には及ばずだが、キラのストライクの動きにさえ反応してくるディスペアントラーは攻撃力と防御力も段違いに上昇しておりタイタスを容易に吹き飛ばす。

「ギジャァ！」
「ぐぅおっ!?」

突進から大顎による打ち上げをくらい、タイタスの巨体が宙を舞い地底の大地へと叩きつけられた。続けてディスペアントラーは迫るバルバトスとストライクの攻撃を両腕で受け止めると、直後に思いっきり振り払う。変異したことで二機の三倍以上の体格を持つディスペアントラーのパワーを受けきれるはずもなく、呆気ないぐらい簡単にバルバトスとストライクはふっ飛ばされた。

「うわあああああっ！」
「くそっ……この虫……！」

残るダ・ガーンXだが、単独での接近戦は不利と理解しアースバルカンやアースカノンによる遠距離攻撃を重視し、タイタスと二機が体勢を立て直すだけの時間を作る作戦へと転換する。

（悔しいが、私はおそらくブレストアースバスター以外であの変異したアントラーにまともなダメージを与えられない。やはり要となるのは彼らの方だ）

……だが、ここでディスペアントラーは予想外の攻撃を披露してきた。背中から新たに生えた三本指の巨大な両腕から『拡散粒子弾』を放ってきたのだ。不意をつかれただけでなく、あまりに広範囲な攻撃にダ・ガーンXも反応が遅れてしまう。

「何だとッ!?」

直撃こそなかったものの、ダ・ガーンXもまたタイタスらと同様に痛手を負ってしまう。むしろ攻撃としては彼に放たれた拡散粒子弾が威力的に最も高い。
怪獣どころか魔獣へと変異したディスペアントラーの猛攻は更に苛烈になっていく。そして、その光景を遠くから眺めている人物は一人ほくそ笑む。
「コシ（よし）カレカレ（いい）ータ（ぞ）。やはりあのメダルはかなり有用だ。だとすれば回収した本体の方はより強力だということも実証されたことになる」

戦いが激化する中、戻って来ないチャータム達を訝しむマリュー。この状況下で会話したからこそ分かることだが、彼女は嘘を付くような人物ではない。彼女が連れて行った人物らもだ。そして、あの石も力を発揮させることは別としても持ち運び自体は難しくないはず……だとすれば導き出される答えは一つ。
（まさか……彼女らに何かあったの……!?）
「艦長さん、私達が迎えに行きましょう」
「貴女は……胡蝶しのぶさん？」
「はい。御存知の通り、私達の殆どは生身での戦闘に長けてますし。ついでに私自身、早さには自信があるんですよー」

緊張を解すためか、にこやかに答えるしのぶ。もはやヒュッケバイン二機では今のアントラーにダメージを与えることは不可能と言ってもよく、かといって装甲もスーパーロボットのように分厚くないので下手を打って攻撃を受けようものなら最悪の事態になりかねない。ならばこういうことにこそ、本来の実力――元・蟲柱としての戦闘力の高さを活かさずしてどうするのか。

「リアスさーん、私達の出番ですよー」
「やっぱり緊急事態のようね！分かったわ、しのぶさん！」

判断が早くて助かります、とはしのぶの弁。そんな彼女らをマリューも信じ、チャータムらの様子を見に行ってもらうことにする。
既に彼女も確信していたのかもしれない。あちらでも一悶着――今のこちら側のような状況になるのだろうと。そうなればますます自分では役に立たない。

「お願いね、ウルトラ騎空団の皆さん。彼らの方は私達が出来うる限りの力で援護します」
「はい、タイタス達をお願いします！」
「私も同行します。これでもサーヴァントですので、直接戦闘ともなれば少しは役立てますから」
「なら私もお供しよう。そろそろ名誉挽回・汚名返上しないと立つ瀬がないからね」
「……一誠とトライスクワッドが変身しているから、戦える人数は一気に減ってるわね。三日月さんも結構生身での戦闘力は高いみたいだし」

沙耶の言う通り、元々ウルトラ騎空団全体でトップクラスの実力者であるサーガとも離れてしまっている上に一誠とトライスクワッド、それに三日月がディスペアントラーとの戦いに参加しているため一気に主戦力が減ってしまっている。
様子を見に行くのはリアス、しのぶ、アズ、沙耶にダイゴ。そしてニトクリスと花のお兄さん（仮）。
……メインとなる前衛がしのぶ（次点で格闘が可能なダイゴと沙耶、アズも身体能力はそこそこ高いらしい）しかいないと思うのは気の所為だろうか。まあ、一誠とトライスクワッド（ついでに三日月）が前衛担当なので彼ら不在である以上仕方ないといえばを仕方ないの

だが……。

「おおっと君達、安心してくれたまえ！これでも私は剣術を扱えるからそこは頼ってくれて構わないぞう！」

「花束を振り回すのは剣術と言いませんよ、明るい冨岡さん？」

「いや違うからホントに使えるから！ていうか何その明るい冨岡さんって!?」

しのぶのあまりの言い草に必死で否定する花のお兄さん（仮）。一応、沙耶からの進言もあったのでとりあえず彼にも前衛を――。

「しかし私の本職は援護！というわけでバフマシマシでお助けするのが私のお仕事さ！」

「えっと……私が行きましょうか？」

「アズの健気さを見て何も思わないのね。だから貴方は先生と違って本当に気に入った相手から見向きもされないのよ」

「えっ!?」

沙耶の言葉に「そうだったの!?」みたいな顔をしている花のお兄さん(仮)。さすがに本気で戦えば相手が確定で死ぬ、援護に回れば気分次第でチート支援をやってくるレジェンドと比べるのはどうかと思うが。

軽口を叩きながらも彼女らはペースを落とさず、祭壇へと駆け抜けていく。

祭壇に到着したリアス達の目に入ってきたのは、倒れたチャータムや有志として彼女に同行したバラージの民。

そして――。

「ふん……随分と厳重に対策が施されていたな。まあ良い、この場でどうにか出来ずとも持ち帰れさえすれば一先ずの目的は果たされる」

バラージの民ではなく、地上人……いや、人であるかどうかも疑わしい存在。全身を真っ赤なローブで包み、髪かローブか判別に困る頭部も赤い。顔も不明瞭であり、唯一確認出来るのは片目だけ。先程発した声色から性別は男性に思えるが、上記の通りあまりにも怪しすぎるためもはや性別もどちらか……むしろあるのかさえ疑わしい。

何より、その存在が手にしているのは――。

「ッ……勇者の石！」

「やれやれ、手間取っていたら余計な奴らまで来てしまったな。どのみち簡単には済まないと予想出来ていたが」

「お前は何者ですか!?チャータム達に何をしたのです!?」

「吼えるな、使い魔風情が」

「……！」

明らかに見下すような物言いでニトクリスへと罵声を浴びせる黒ずくめならぬ赤ずくめの存在。睨み返すニトクリスやリアス達に対し、一呼吸置いてから赤ずくめの存在は答えた。

「覚えたところで無意味になるだろうが名乗ってやろう。我が名はミニオン、個体名を合わせるとミニオン・ラースとなる」

「ミニオン……!?」

（ミニオン……最近、何処かで見聞きしたような……それに、個体名……）

新たな敵であろう存在に驚愕するリアス達の中で、唯一アズだけはミニオンに既視感を抱いていた。無論、直接合ったことなどは無い。しかし何となく覚えているのだ。眼前の存在のことを。

だが、思考をそのまま続けさせてくれるほどミニオン・ワースは甘くない。

「前回のミニオンもあの忌まわしい光神に妨害され目的を果たせなかったと記憶にあるのでな。こうして貴様らの会話に付き合ってやる時間も惜しい。早々に蹴散らしてこの石を持ち帰らせてもらう」

「させないわよ……！イッセーやタイガ達が命がけで戦っている最中、必要なものを横から掠め取るようなコソ泥なんかにその石は渡さないわ！」

「命がけだからどうした？」

「「「「!?」」」」

「そんなものはかけて当たり前、誇るようなものでもない。我が命もまた、この世に生を受けた時点で我が主たる神へと捧げられているも同義。凄んで言うことではなかろう」

――何だこいつは。

他者の命を軽く見るだけならただ怒りが増すだけだっただろう。しかし、今の発言を聞くに自分の命すら軽んじている。というよりもある存在のためならば命など惜しくはないと聞こえる。狂信的と表現すべきか、それとも別の意味を持つのかは現時点で判断し切れない。

ただ一つだけ言えることは――。

「貴様らの理由など知ったことではない。これは我らが頂いていく。我らが神の復活のために」

――ディスペアントラー同様、眼前の存在とは予想通り戦わねばならないということだけだ。

〈続く〉

――次回予告――

絶望の大顎、憤怒の魔術。

古代から続く厄災と、未知なる厄災はウルトラ騎空団とキラ達に容赦無く襲いかかる。

戦いの最中、目覚めし大地の輝きは賢者に新たな力を宿し、光神の遺産が最後を見届けるべく目を覚ます。

次回、異世界修業編

『ＷＩＳＥ　ＭＡＮ，Ｓ　ＰＵＮＣＨ』

絶望の未来、打ち砕け！タイタス！

WISE MAN’S PUNCH

ディスペアントラーとミニオン・ラース……それぞれに立ち向かうウルトラ騎空団とアークエンジェルのクルー達は苦戦を強いられていた。

リアスらと戦っているミニオン・ラースの放つ『術』は威力もさることながら、恐ろしいほどに発動が早くほぼ連射状態で撃ってくるのだ。術としては下級に分類される『ヘルファイア』『シャドウボルト』等も立て続けに撃ち込まれればさすがに危険。しかも下級術であるがゆえに燃費もいい。

「ふぅむ、これは中々に厳しいな！私もある程度は警戒していたが予想以上だ！」

「笑いながら言う事かしら!?」

「いや失礼、しかし参った。これでは近付くことさえ一苦労だぞ！」

辛うじて花のお兄さん（仮）の魔術で防御出来ているため被害は殆ど無いが、あまりの猛攻に仕掛けるスキも無いのが現状だ。ほんの少しでもどうにか出来たなら、凄まじい速さを持つしのぶが一気に斬り込めて活路を見出だせるのだが……。

「う～ん……ダイゴさん、そのＧＵＴＳハイパー……でしたっけ。それで狙い撃ちとか出来ます？」

「出来なくはないけど、良くて命中させるのが精一杯かも。それも魔術障壁とかそんな感じのもので防がれる可能性があるし」

「それでも構いません。少しの間でも気が引ければどうにかなりますから」

こう言い切れるのは元鬼殺隊最速とまで言われたからだろうか。彼女の姉は歴代女性柱最強とまで言われ、今や日の呼吸まで体得したオカ研の決戦兵器なのだから血筋を考えると当然かもしれない。

「ならここで私の滅びの魔力が役に立ちそうね。私の滅びの魔力を、ハリベル姉様に教わった『虚閃（セロ）』に混ぜ込んでアイツに放つわ。仮に障壁とかで防がれても、障壁そのものは無効化出来る」
「それを狙って僕がＧＵＴＳハイパーで奴を撃つ」
「最後にそれで出来たスキをついて私が一気に踏み込み、型を打ち込む……現状出来る最良な戦法ですね」
「そうなると他のメンバーは援護ということになるかしら。私もお母様やお姉様のような高等魔術が使えなくはないけれど……得意なのは白兵戦だし、補助その他はまだしも戦闘用は対怪獣戦を想定した大規模なやつが殆どなのよ」
「それを言われると、私は沙耶さんよりも得意じゃないから……魔術とかもウルトラ騎空団に来るまで全くの無縁だったし」

アズが少々落ち込み気味だが、ぶっちゃけ彼女は悪くない。というかこういう状況に当たり前に対処出来るウルトラ騎空団自体が異常なのであってアズはむしろまともな方だと言える。

「ともかく今はあの勇者の石を取り返すのが最優先です！倒すことは二の次にしましょう！」

ニトクリスの言葉に全員が頷く。

「何か決まったかい!?なら早いとこお願いするよ！今は防御出来てるけど、古傷が痛み出してね！」
「古傷!?貴方、どこか怪我を――」
「まあ実はそんな大袈裟にするものではないんだが、先刻女王陛下に思いっきり蹴られた股間が――」
「知ってる？私の変身アイテムは近接武器にもなるの。腕次第だけどスティックカットやボールカットだって出来るってこと、その身に直接教えてあげましょうか？」

「あ、今どことなく先代陛下っぽく聞こえたぞぅ！それはそれとしてカットは勘弁していただきたい！」

度重なる発言で割とマジになっている沙耶の怒りを感じたか、戦闘に集中し守りを固める花のお兄さん（仮）。右手を突き出して魔力を集束し虚閃の発動準備を行うリアスと、タイミングを合わせるべく照準を合わせるダイゴ。しのぶも呼吸を整え、すぐに駆け出せるように意識を集中する。

「私とアズ、ニトクリスは援護だけど……この作戦においてまともに援護可能なのはニトクリスだけね」

「ごめんなさい、何か役立つアイテムとか空の世界から持ってきていれば……」

「気を落とさないで下さい。この状況でしっかりと冷静に周囲を見れるということは、足手まといにはならないということですから」

ニトクリスの言う通り、闇雲に動かないだけでも十分な貢献だ。それに沙耶やアズが周囲に気を配ってくれれば、しのぶ達は目の前のミニオン・ラースに集中出来る。特に二人とも何かと勘が良いので警戒にうってつけなのだから。

そして、遂にその時がきた。

「何かをしようとしているようだが、待ってやる義理も必要もない。さっさと――」

「準備完了！行くわよ、ダイゴさん！しのぶさん！」

「了解！」

「あちらも言っていますし、さっさと済ませましょうか」

リアスが放った『虚閃』は真っ直ぐにミニオン・ラースへと向かっていく。バカ正直にフェイントもなく放たれたそれにミニオン・ラー

スは警戒し、魔術障壁を強化するが……そもそもリアスの狙いはその魔術障壁の方だ。滅びの魔力を付与された虚閃は障壁に直撃すると、いとも簡単にそれを消滅させる。これにはミニオン・ラースも驚きを隠せない。

「……何!?」
「よし、定石通り!ダイゴさん!」
「……ッ!!」

間髪入れず、ダイゴのＧＵＴＳハイパーがミニオン・ラースを狙う。
ここで魔術障壁を強化したことが裏目に出た。強化するということはそれに対するリソース（この場合、魔力）が多く必要となり、もし破られた場合のデメリットも大きくなる。
とどのつまり、消費した魔力が大きく再び障壁を張るための魔力の補給が間に合わなかったのだ。最低限の障壁ならば展開可能だろうが、それでは怪獣相手に撃ち込んでいたようなＧＵＴＳハイパーを防ぐことなど到底不可能。
ＧＵＴＳハイパーがミニオン・ラースに直撃し怯んだのと同じタイミングでしのぶが一気に駆け出す。普通の人物なら間に合わないかもしれないが、呼吸剣士であり元・鬼殺隊最高位の『柱』……その中において最速であったしのぶならば問題ない距離だ。

「早っ!?彼女サーヴァントとかじゃないよね!?」
「先生いわく『弾かれ者』らしいし、向こう側では死亡したって話だから似て異なる者じゃないかしら」
「っとぉ!話し込んでたらまたお叱りを受けそうだからブーストブースト!さあ、蝶の剣士よ!遠慮なく行きたまえ!」

花のお兄さん（仮）の魔術により、一時的に身体能力を増したしのぶが想像を超える速度でミニオン・ラースを肉迫。しのぶはミニオン・ラースを既に鬼と同じく討つべき存在と認識している。

故に、狙うは一撃必殺。

「レジェンド様から賜ったこの専用日輪刀があれば、やれる……！」

「貴様ッ……!!」

「蟲の呼吸　鞘翅（こうちゅう）ノ舞――」

速度と突きを重視していた蟲の呼吸において、専用日輪刀の補助を得たことで実現可能となった初の『斬撃』の舞。

「穿天甲角（せんてんこうかく）!!」

カブトムシが角を突き上げるが如き、今までのしのぶからは考えられぬだろう豪快な一閃。それを受けたミニオン・ラースは血の代わりなのか傷口からドス黒い闇を噴き出し片膝を着いた。

「グッ……！」

小柄な女の細腕、そう思い油断したのだろう。予想外の痛手を負ったミニオン・ラースの手から勇者の石がこぼれ落ちる。それを見計らい、ここまで目立った動きをしなかった沙耶とアズがニトクリスの援護（実行はメジェドーズ）を受けて即座に勇者の石を回収。

「出ませい！出ませい！」

「ヌウ……！」

「三つ、確保……！アズ！」

「こっちも二つ、確保しました！」

「この……小娘共がァァァァァ!!」

よりによって奪ったはずの勇者の石を全て取り返され、遂にミニオン・ラースはその名にあるように憤怒を露にした。まだ近くにいたアズに向け、術を放とうとした瞬間――。

「!!」
「……え？」
「……バカな……この世界に、おられるはずが……!?」

アズを近くで見たミニオン・ラースが何故か驚愕と恐怖に震えだす。当のアズ本人はどういうことか分からず、首を傾げながらもチャンスだと思い即座にその場を離れる。
一応言っておくが、別にアズは記憶喪失だったりとかそういうことはない。過去に色々あったが、今までのことはちゃんと憶えている。だからこそ、ミニオン・ラースがあのような反応する理由が思い当たらないのだ。
とにかく、勇者の石を奪還出来たリアス達だが……もう一つの戦場は厳しい状況であった。

☆

圧倒的攻守を兼ね備えたディスペアントラーと正面から戦えるのはもはやタイタスのみ。しかし、そのタイタスですらその戦闘力の前に追い詰められていた。

「ギジャァオッ!!」
「グゥアッ!!」

ディスペアントラーの背から生えた巨腕で吹っ飛ばされるタイタス。鍛え上げられたタイタスでさえこうなのだ。ダ・ガーンXはギリギリ耐えられるかもしれないが、バルバトスやストライクは特殊な装甲であるとはいえMSであることとサイズ差を加味すると一撃で戦闘不能……最悪スクラップにされないとも限らない。

「せめて、効果がある部位でも分かれば……!」

「死中に活を求めるとかいうけど、逆にそれを狙って無策で突っ込んだら死ぬしかないよね、アレは」
「地理的にも奴に有利だ。何より我々には守るべきものがあるが、奴は奴だけしか優先すべきものが無い……！」

いよいよもって焦りが出てきた彼らだが、追撃せんとするディスペアントラーの目に高速で何かが直撃し、短く悲鳴を上げて後退った。その何かとは、マリューの指示によってタイミングを合わせ撃たれた投石機による岩。関節すら狙っても効果が無いだろうと思ったマリューは、難しいことは覚悟の上でディスペアントラーの目を狙い撃つことを決め、実践し……見事成し遂げたのだ。

「助かった……！今のうちに立て直すぞ！」
「でも、今のパワーじゃ誰もアイツに決定打を与えられない。もっと強烈なのがないと」
「沙耶さんの機体のあれ……いや、駄目だ。逆に威力が高過ぎるし、範囲も広い。それに見た感じ月の有無が関係ありそうだからそもそも使うこと自体出来るかどうか……」
「ともかく、試せる方法を手当り次第やってみるしかない。戦力不足な現状では――!?」

ダ・ガーンXがそう言いかけてディスペアントラーの行動を凝視した。何故なら、攻撃の矛先がマリューやバラージの民へと移行しているからだ。どうやら先の攻撃で彼らもディスペアントラーにとって脅威ないし障害だと認識されてしまったらしい。
――これはまずい。
自分達でさえ食らいつくのがやっとのディスペアントラー、生身のマリューらがどうやっても敵う相手ではない。もし逃げ遅れでもすれば……そんな思考を中断させるかのように、ディスペアントラーは翅を羽ばたかせてマリューらへと飛んで突撃していく。

「ッ……総員退避！急いで!!」

マリューが急ぎ指示を出すも、ディスペアントラーは巨体にそぐわぬ速度で彼女らを屠らんと迫る。バルバトスやストライク、ダ・ガーンXの攻撃では勢いを殺すことさえ叶わず……遂に――。

「ギジャァァアア!!」
「「「「ッ――!!」」」」

――間に合わなかった。

――バルバトス、ストライク、ダ・ガーンXは。

「グッ……グゥッ……！」
「「「「タイタス（さん／兄貴）!!」」」」

そう……三機は間に合わなかったが、タイタスだけは間に合ったのだ。ディスペアントラーに背後を向けるようにしてマリューらやバラージの民をその身体で庇っていた。今も大顎の元からあった巨大なハサミは何とか防げているが、その上下に増えた二対のハサミがタイタスの身体に食い込んでいる。

「ギィィィ!!」
「グ……ウゥゥゥ!!」

タイタスの鍛え抜かれた身体にさえ、ディスペアントラーの鋭利なハサミが更に食い込む。流血こそしていないが、傍から見ても激痛が奔っているだろうことは想像に難くない。

「タイタス兄貴……俺達を守るために……！」
「あのアントラーを刺激したのは私達……彼は、その巻き添えを――」
「そうでは、ない……！」

苦しみながらもタイタスは自責の念に駆られているマリュー達に語り掛ける。カラータイマーが点滅し出しており、プラズマスパーク・ブレスの補助があるためエネルギー不足ではなくダメージによる体力の消耗の激しさを示していた。
だが、そんなことはどうでもいいとばかりに彼は胸の内を吐露した。

「私は……かつて、私の心の弱さ故……兄弟同然に育った友を、マティアを失った……！」

マティア――タイタスが養子として引き取られたＵ４０の高官・ザミアスの息子。彼はヘラー軍団のＵ４０侵攻の際にレジスタンスとしてタイタスと共に活動し……パルナスオス山における突入作戦で合成獣キシアダーによって殺害された。
当時、己の存在意義と戦う意味を見出だせず、変身可能でありながら変身を躊躇ったタイタスを庇って。
マリュー達の状況はキシアダーに対抗出来ずタイタスを残し壊滅したレジスタンスと似ていた。予想外のパワーアップを遂げたアントラーと、突如現れたキシアダー……ケースは違えど力及ぶ相手ではないということは共通している。そして、無謀にもそれに挑んだことも。

「彼は私にこう言った……『戦う理由とは何かを守ること』……そして……！」

激しい痛みに耐えながら、タイタスはディスペアントラーの大顎を弾き飛ばすように腕を思い切り広げてその危機を脱した。

『私の心は、私だけのものだ』……！今の行動はただ『私が君達を守りたい』……そう思ったからこその結果だ！何も君達は責任に感じること必要などない！」

痛みが残る身体に鞭打って、タイタスはディスペアントラーへと向き直り――咆える。

「さあ、来なさい！どれだけ苛烈な攻撃をしてこようとも、彼らには触角の先さえ触れさせんぞ!!」

――力の賢者の信念、そして決意。それこそが『大地』を目覚めさせる最後の引き金（トリガー）だった。

☆

ミニオン・ラースが奪い返された勇者の石を再び奪わんとした時、沙耶とアズが確保していた勇者の石が眩い輝きを放ち始めた。それだけではない。

「な、なに!?」

「あれは……！」

「ウルトラマンノアの石像が、光ってる……!?」

勇者の石と共鳴するかのように、石を祀られていたウルトラマンノアの石像も輝き出したのだ。この時を待っていた――そう言わんば

かりに。

――託すべき者は現れた――

「「「「!!」」」」

――大地の輝き、今ここに――

何処からともなく声が聞こえると、沙耶とアズの手元から勇者の石が飛び立っていく。その声の告げた託すべき者、即ちタイタスの元へと。

それを見たミニオン・ラースは短く舌打ちすると、霧状になって消えていく。

「これ以上の戦闘は無意味だな。やはりあの光神の縁者共、ああ忌々しい……怒りが収まらん……が、所詮ディステニィストーン本体ではなく代替品。別のモノを用意出来れば問題無い」

「ッ！待ちなさい！」

「フン……代替品は持ち帰れなんだが、他のミニオンと共有せねばならない情報が手に入ったのは僥倖だった」

そう言って消え行くミニオン・ラースは未だ混乱気味なアズを一瞥して完全にその場からいなくなってしまう。それと入れ替わるようにチャータムらが呻きつつも起き上がった。

「う……皆さん、何が……」

「チャータム！」

「勇者の石は……!?」

「託すべき者、とか聞こえたわね。それに――!?」

焦るチャータムへ沙耶が現状説明しようとした時、さらなる衝撃が巻き起こる――。

☆

タイタスの内、即ちインナースペースにて一誠の持つダイレクターが迫る勇者の石に呼応して輝きを放つ。

「おわっ!?」
「何だコレ、ダイレクターが！」
「あれ……何か聞こえないか？」

タイガが言うように、ダイレクターから声が聞こえてくる。ダ・ガーンの声ではない。全く別の声が、それも複数。

『おい、聞こえてんのか!?……っかしーな、まさかあっち壊れてんじゃねえだろうな』
『俺達が壊れてるって線は？』
『だとしたら俺らのが使いもんにならねーだろ！あってたまるか！』
『そもそも、そうだとしたら俺達やどこが壊れてるってんだ？』
『『……頭？』』
『言ってて悲しくならねーのかテメーら!?』
『しかもよく考えたらその頭もねーよな、まだ身体が無いんだしよ』

何かワイワイやっている『彼ら』に一誠やタイガ達は一瞬でこう思った――。
(((……めっちゃ気が合いそう!!)))

ボケもツッコミもいけそうな、おそらく四人分の声を聞き一誠らは即座にガッツポーズ（しかも真顔）。最近ボケが増えつつありツッコミが足りなくなって――って、今はそれどころじゃなかった。

「こっちは聞こえてるぜ！」
「お前ら頭の方は大丈夫か!?」

「フーマお前物凄く失礼なこと言ってるぞ!?」
『おお!?やっぱ通じてんじゃねーか!返事が遅ぇーんだよ!』
『とりあえず頭は問題ねえ。……俺だけは』
『何一人だけ抜け駆けしてんだテメー!?』
『しかも何クールぶってんだ!お前バリバリのスピード狂だろうが!』
(((((何だろうこの親近感……!)))))

――どうやら、全員(ただしタイタスは戦闘に集中しているため不在)の心が一つになったようだ。切っ掛けはどうしようもなくヘボい気がするが。

『っとぉ!こうしちゃいらんねえぜ、大将!』
「た、大将……?俺が?」
『他に誰がいるんだよぉ、このスットコドッコイ!』
「いや……ほら、タイガとかフーマとか、戦ってるタイタスとか。あと(一応)ドライグ」
『何か含みあったろ、相棒』
『『『……』』』

どうやら彼らは一誠達が一心同体だと今初めて気付いたらしい。『どうすんだ』とか『今までこんな例は見たことも聞いたこともねーぞ』とか、そんな感じの声がダイレクターの向こう側で飛び交っている。

そしてその結果――。

『まあ、大将は大将ということで良しとする!!』
『『『応ッ!!』』』

ものすごい雑だった。いいのかそれで。

『何にせよ、大将達が今ピンチなのは分かる！今そっちに向かってるからな！』
「え……!?」
『けど、さっきも言ったが今の俺達には身体が無い。いや、有るには有るが、何というかこう……石だし』
「「『あぁ～……』」」
『そんなわけで、俺達の身体をイメージしてくれ！出来たらパワフルな感じで！』
『四人分な、四人分。そこまで言えば、あとは分かるだろ？』

やっと一誠らは理解した。彼らこそ、勇者の石に封じられていたダ・ガーンの仲間だと。身体をイメージする、というのも彼を顕現させた時と同じ方法だ。
それは良いとして、石は五つあった。なのに声から言われた数は四人分……あと一つは？
しかし、今は一刻も早くディスペアントラーをどうにかしなければならない。彼らは五つ目の石のことを頭から離し、彼らの身体をイメージする。

「何ていうか、喋り方からして土方仕事の親方チックな感じがしたんだよな……やっぱトラック、いやキャリアカーがリーダーっぽくないか？」
「じゃあ今回は陸地関係か……ドリル戦車？そうだ！ガオファイガーのドリルガオーⅡみたいな！」
「パトカーはダ・ガーンだろ、あとボルフォッグ。ってことはスポーツカーはどうよ？」
『ここまでミキサー車とかは無し……そういえば聞いた話だとＧＧＧにそういうロボがいるらしいから、Ｆ１カーなら被らんだろう。多分』

タイタス抜きではあったが、ちょうど一人一つ考える感じで簡単に

決まった。奇しくもそれが良い感じにはまったのは僥倖と言えるだろう。
一誠らは頷き合うとダイレクターを通して四人分……車なので四台分のイメージを向こう側へ飛ばすように念じる。
『来た来た来た！お、俺はこのデカいのだ！』
『俺はこいつだ！正に漢のボディ！』
『うし決めた！俺はこのイカした奴な！』
『消去法になっちまったが、こりゃ俺も文句無しだ！トップは譲らんぜ！』

こっちもこっちで揉める事無く決まったようだ。口調は荒いが、ダ・ガーンの仲間だからか基本的に良識はあるということが分かる。まあ、一誠らと心底同調してそうな面子ばかりだし……。

『じゃあ、折角身体をもらったんだし改めて自己紹介といくぜ！俺はビッグランダー。自慢じゃねえが力なら誰にも負けやしねえぜ！』
『俺の名はドリルランダー。土の中なら俺の専門だ。イメージには大将達のとこにゃ他にもドリル関係者がいるらしいな、会うのが楽しみだぜ！』
『俺の名はターボランダー！全開バリバリ、そっちの青い大将とは気が合いそうだ！』
『俺の名はマッハランダー。大将、早速だけど命令を言いなって！』

それぞれにイメージが重なり身体を得たことで名前もハッキリした。誰も彼もが力強い意思に満ちている。
最後に名乗ったマッハランダーが言った――命令を言え、と。下す命令は一つしか無い。
今、表で戦っているトライスクワッド最後の一人……ここにはいないタイタス、そして共に戦う仲間達。
彼らが相対しているのは恐るべき進化を遂げたディスペアント

ラー。

『俺達『ランダーズ』の初陣だ！景気良く頼むぜ、大将！』

「……よし！ランダーズ！今アントラー……ゴツい怪物と戦っているタイタスや皆を助けるんだ！」

『『『『おう!!』』』』

一誠の迷い無き指示を受け、いよいよ彼ら――ランダーズが戦場に立つ時が来たのだ。

☆

勇者の石がタイタス達の下へと迫ってきていたのはマリュー達の目にも確認出来た。その光景だけでも十分ファンタジーじみているが、そのうち四つが一つになったかと思えば突如勇者の石がより強く輝きドリルカー・スポーツカー・Ｆ１カーを積んだキャリアカーへと変化したことに目を丸くする。

「は？え？な……何なの、あれは!?」

「すいません艦長、俺らにも何が何だか……」

しかもその後、積まれた三台の車がキャリアカーより発進し――。

「「「「チェェェンジ！ランダァァァズ!!」」」」

――ダ・ガーンよろしくロボットに変形。相変わらずトール達は目を輝かせているが、マリューやマードックは顎が外れた。石が光りながら飛んできて、一つになって、車になったらロボットに変形した――こんな事が立て続けに起これば常人ならマードックの言う通り『何が何だかよくわからない』状態になるだろう。

唯一つ、分かることは――。

「……とチェンジしたとこまではいいけどよ、相手もやたらゴツくねーか!?」
「「よし行けパワーファイター！」」
「ふざけんな！お前らも道連れだ!!」
「この感じ……！やはり私と同じか！」

カッコ良く出てきたのにコントを始めたランダーズにダ・ガーンXはツッコミを入れることなく真面目に主観を述べる。一応リーダーであるビッグランダーはダ・ガーンXの存在にこれ幸いだと言わんばかりに食いついた。

「おお！細かい自己紹介は大将何人かと済まちゃいるが、とりあえずあの野郎をどうにかしようぜ！」
「しかし、あの変異したアントラーの防御力は並大抵の攻撃ではビクともしない。防御を無視する攻撃か、或いは単純に防御力を上回る攻撃力がなければ……」
「それに関してはどうにか出来る。んで、それには大将達の協力が不可欠っていうか大将達が主軸になるっていうか……まあ、そんなとこだ！」

ダ・ガーンに何とも曖昧な返答で返したビッグランダーは、辺りを見回してタイタスの姿を見るや他のランダーズに指示を出してタイタスへと駆け寄る。

「よう大将！あんたが大将達と一体化してる大将だな！一目見て分かったぜ！」
「おいビッグランダー、大将がゲシュタルト崩壊してんぞ」
「つーか大将すげぇ筋肉だな！」
「中の大将達、聞こえてるか？」

矢継ぎ早に捲し立てるランダーズに困惑しながらも、タイタスは今自身の中にいる一誠達からの情報でランダーズの事を知らされる。

『――ってわけなんだ！』

「なるほど、事の顛末は理解した。何よりこの状況は一人でも多く味方が欲しかったところだ」

「おうよ！任せてくれ！って言いたいのはやまやまなんだが……どうにもあの野郎は俺達がバラバラのままじゃ悔しいが太刀打ち出来ねぇ」

「バラバラのまま……ダ・ガーンの仲間……勇者……！つまり！」

タイタスの声色に一誠らも気付き、ランダーズもそれを見てニヤリと笑う。ここまでくれば答え合わせなど必要ない。ランダーズの願いを察した彼らは心を一つにする。かつて、ゴーデスとの決戦の折にダ・ガーンを今の姿へと変えたように――。

「『『『『ランダーズ、合体（フォームアップ）！

バディイイイ！ゴオオオオッ!!』』』』」

「「「「おう!!!!」」」」

一誠の持つダイレクターから指示が送られ、返事と共にランダーズは合体シークエンスへ突入。

まずリーダーのビッグランダーが変形し下半身全てを形成。そこへ上半身と下半身を繋ぐ部位としてマッハランダーが覆い被さるようにドッキング。その上に胴体を形成するターボランダーが重なり、最後にドリルランダーが分離し両腕を形成する。

然る後に猛牛が如き角を持った頭部が出現。

「合体ッ！」

最後にキャノン砲がガシン！と両肩に背負われるようにセッティングされ――。

「ラァァァンドバイソォォン!!」

ここに、ダ・ガーンXに続く新たな『陸の四体合体』ランドバイソンが誕生した。

『『おおお!!マッシブタイプの合体ロボォォォ!!』』

「うむ！実にガッシリしていて良い！」

「ありがとよ大将！さてと……俺のもう一つの仕事を先にやるとするぜ。アンタを見た瞬間に分かった。コレはアンタの為にあったんだってな」

合体した姿を褒められたランドバイソンは、気を良くしつつも彼に託されたあるものを一誠達――正確にはタイタスへと譲渡する。

それは、残された最後の石。

ここで彼ら――ゴーデスとの戦いに参加した者、見守っていた者達は気が付いたのだ。あの決戦の場にてダ・ガーンの復活は何と共にあったのかを。

『まさか、それは……ッ!!』

「今こそ、勇者――否！賢者へとこの大地の力を！」

☆

最後の石が砕けると、その中から現れた光はタイタスの中へと吸い込まれるように消えていき、インナースペース内の一誠の持つタイタ

スキーホルダーが眩く輝き出し――タイガ・フォトンアースキーホルダーのようにタイタスキーホルダーも変化した。

「タイタスのキーホルダーが……！」
「旦那もパワーアップするってのか!?」
「……ってことは、もしかしてフーマのもあるってことじゃ……」
『何にせよ、今が好機だぞ！相棒！』
「うぉっしゃあああ!!」

新たな仲間、新たな力。ここまでテンションが上がる事が起きて黙っていられる一誠ではない。当然、タイタスの新たな姿を発現させるべくタイガスパークを再起動。

『カモン！』

まずは新たに追加された赤い部分――。

『マッスル！』
「「『へ!?』」」

まさかのマッスル名のフォームになりそうなことに間抜けな声が出てしまった三人と一匹だが、即座に気を取り直し次は同じく追加された銀の部分を。

『ギガント！』

今度はちゃんとそれっぽい単語が出てきた。これならばと生まれ変わったタイタスキーホルダーを掴むと、タイガ・フォトンアースキーホルダーがウイングだとすればこちらはアーマーを展開した形になる。

「大いなる大地の鼓動を！」

フォトンアースと同じ様に、タイタスの身体へ鎧が装着されていく。タイガのフォトンアースはまだスマートさがあったが、タイタスの場合はより重厚な物だ。しかしながら筋肉を圧迫せずに柔軟な動きが出来る形状。

それだけでなく、装着が終わると同時に一瞬タイタスの身体が光りほんの少しだけ全体的に大きくなったように感じる。

「バディィィィ！ゴォォォォォッ！」

《ｌｅｆｔ》『ウルトラマンタイタス《／ｌｅｆｔ》グランドマッスル！』

「ヌゥゥン!!」

「「『フォーム名マッスル入りィィィィ!?』」」

グランド――その表現は『大地』のみにあらず、『冠位』也――。

☆

新たな力――グランドマッスルの姿となって現れたタイタスは凄まじい闘気……いや、筋肉に満ち溢れていた。新しく装着されたヘッドギアもその雄々しさ引き立てており、クィン・マンサのショルダーバインダーを小さくしたようなショルダーアーマーも迫力を醸し出す。

息を呑むダ・ガーンＸ達と、警戒するディスペアントラー。そして――タイタスが動いた。

「ムゥン！」

――そう、お決まりのマッスルポーズ。それだけなら変わらないのだが、タイタスがポーズを決める度に一瞬身体全体が輝くのだ。『この筋肉を見よ！』と言わんばかりに。
普通ならズッコケるだろうが、タイタスと絆を育んだバラージの漢達や三日月、そして新たに加わったランドバイソンは違う。ある者はその場で、ある者はコックピットで。共にマッスルポーズを決めていく。

「「「「兄貴！　兄貴！　兄貴！」」」」
「イカしてるぜマッスル大将！俺達はこんな大将を待ってたんだ！」
「よし、後で昭弘に自慢しよ」

世界も人種も立場も、果ては生身と機械の違いという垣根さえ取っ払って団結した――筋肉の絆。言葉にするとアホっぽく聞こえるが、基本的に誰もが持ち得るものによって紡がれた『その気になれば誰とでも結べるもの』である。
無論、インナースペース内でも一誠らがしっかりマッスルポーズを行っていたりする。

『師匠や先輩と修行してて、いつの間にか筋肉付きまくってた今の俺の身体はどうだ！』
『父さんの細マッチョぶりが羨ましいし、爺ちゃんの大胸筋も凄いぞ！』
『俺もやっぱ細マッチョ路線で……いやいや、グリージョちゃんはどんなのがタイプかな……』

更には――。

「ところで女王陛下、私がこう……ビシッとムキッとしたらどうだろう？」

「先生と違って気持ち悪くしか見えないわ」
「ぐふっ!!」

花のお兄さん（仮）も影響を受けたが沙耶の一撃でダウンした。沙耶の母親や姉が今の台詞を聞いたら本気で仕留めにかかりそうだ。想像した結果、気持ち悪さで。

ランドバイソンの加入と、強化形態タイタス・グランドマッスル――味方の戦力は大幅に上がったが、もし可能なら後ひと押し欲しい、そう願った時――。

――言の葉を紡げ――
――□―□□□□――

「「「「!?」」」」

何処からともなく聞こえた声と、宙に映し出された何かの文字を入れるだろう暗号文のような文面。チャータムやバラージの民すら首を捻るそれを、マリュー達が分かるはずもない。

「何かの文字を入れるのでしょうけど、そもそも何の文字を入れるのかってことから考えないと……」
「……いえ、何となく分かります」
「ニトクリスさん？」

ここで予想外の返事をしたのはなんとニトクリス。もしやエジプトに関する文字なのかと思ったが、その答えは別のところにあった。そもそも何故彼女がこのバラージに呼ばれたのか……それが今まさに、目の前の暗号を解く最後にして最大のヒントだったのだ。

「かつて、かの光神より教わりました。多くの者が集いし戦場において、逆境の跳ね除け勝利を手にするために必要なものは何か」
「必要なもの……気合いとか、気迫？」
「確かにそれもありますが、多くの者が集った……つまりただ一人だけ強ければいいわけではない、というところが重要なのです」
「……私、分かった気がする」

ここでアズも気付く。答えはもうこの場で出ていたということを。
「今のニトクリスさんの言葉で私も分かりました。何より、正しく今のタイタスさんがそれを体現してくれてますしね」

しのぶも微笑みながら答えに辿り着いたことを告げる。奇しくも、しのぶとアズはニトクリスと特に親しくなった者達だ。
そこにまさかの花のお兄さん（仮）が最後の決め手となる一言を付け加える。

「ウルトラ騎空団、そしてアークエンジェルのクルー諸君。あの暗号文に入る文字、それは既に大なり小なり君達が手にしているものさ。特にウルトラ騎空団なんかはね」
「「「「……！」」」」
「君達の大いなる旅路はまだまだ始まったばかり。これから歩んでいく上で困難に直面した時、これに勝るものは無いだろう。そしてこれは――あの光神を表す言葉でもある。それに関しては君の方がよく知っているはずだよ、ファラオ・ニトクリス」

そう言ってニッと笑う花のお兄さん（仮）は、飄々とした感はあれど雰囲気は至極真面目。
――もはや、答えを疑うべくもない。『彼ら』に救われ、共に戦い、そして別れ……かの光神との思い出を胸に、彼女はこの地に召喚された。全てはこの時の為に。

そんなニトクリスの左右の手を握ったのは、しのぶとアズ。ファラオであろうとした彼女だから気付く。かつて先に逝ったカナエのようになろうとしたしのぶ、先のミニオンとの戦いにおいて気付かされた――何かのとてつもないものを背負っているだろうアズ。

彼女らは本当の意味で出来たニトクリスの『友達』であると。

「我、ファラオ・ニトクリスが言の葉を紡ぐ――」

二人の友に背中を押され、支えられ――多くの者が見守り、願う中……揺るぎない決意と自身を持って、彼女は叫ぶ。

「絆―ネクサス―!!」

その言葉にウルトラマンノアの石像が反応し――石像より光が飛び出す。その光はディスペアントラーへと近付くと、光は徐々に姿を変える。

それは、かの光神が遺した希望。

バラージが平和であれとの願いを込めて遺した己が影法師。

――ウルトラマンネクサス。

【エリア】という壁を超え、絆の巨人はバラージとそこに生きる者達を守るために顕現した。

〈続く〉

それは、受け継がれてゆく魂の絆

――それを知るものは誰もが目を疑った。

ウルトラマンネクサス――ノアのダウングレード形態であるその巨人は本来レジェンドの【エリア】で目にすることは叶わない。それは勿論ネクサス＝ノアであるからなのだが、かつてコズミック・イラのバラージに顕現したノアは万が一アントラーが復活し、そしてそれによって未曾有の危機がバラージに再び訪れた時のセーフティ・システムとして相応のエネルギーを自身の石像に人知れず封印し遺しておいた。ニトクリスが唱えた先の言葉をアンロック・プログラムにすることで。

まあ、問題点として『ノアないしネクサスと関係のある人物が一人もいなかったらどうするのか？』というものがあったわけだが……結果オーライということで今回は良しとしよう。

☆

「バカな……！ウルトラマンネクサスだと!?」

フード付きのロングコートを纏った人物は予想外の巨人の出現に驚きを隠せなかった。

現れたのがレジェンドだったならばまだ納得がいく、そもそも【レジェンドエリア】は実質全て彼の庭のようなものなのだから。だが、ネクサスは別だ。

（まさかここであんな奴が現れるとは……！ただでさえあのウルトラマンが強化変身した挙げ句、わけのわからないロボットまで出てきたというのに……いよいよ旗色が悪くなってきたな）

その人物は最悪アントラーに仕込んだメダルの回収だけでも出来れば御の字と思っていたが――。

「ふむ……見たことのない人物だけど、私の知っているモノだね」
「な、貴様……！」
「はじめまして、それとも久しぶり……どちらがお望みかな？」

――いつの間にか花のお兄さん（仮）がその人物の直ぐ側まで来ていた。それも臨戦態勢で、だ。

「……いつから花の魔術師は使い走りになったんだ？それとも貴様らしく女であれば誰にでも尻尾を振るというだけか」
「おっと！私とてそうする相手は選ぶし、ましてや今の女王一族に関してはかの光神様一筋みたいだからね。私の愚痴を聞いてくれるのはヤプールぐらいだよ。例えば、君に関することとか」
「随分根に持っているんだな。たかだか他所から受け取ったものを俺が持ち出しただけだ」
「少しも悪びれないとは何とまあ……それが取るに足らないものであれば先代陛下も見逃しただろうね。でも狙ったものが悪かった。機甲神アルテイヤー、あれは光神から託された希望の一つ。何より愛するものからの贈り物を奪われたとあれば、先代陛下が怒るのも納得さ」

お互い淡々と言葉を紡いでいくが、片や捕縛、片や離脱のタイミングを狙っている。
――だが、ここでフードの人物は切り札の一つを提示した。

「しかし貴様も調査に関してはまだまだ素人らしい。このバラージはいざ知らず、地上で争っている人間ども……ナチュラルとコーディネイターについて何も知らないようだな」
「うーん、私としては一個人が気になる場合は少ないのだけれど……」
「貴様の趣味嗜好はどうでもいい。『ハッピーエンド』などこの世界にありはしない。この世界においてナチュラルは既に大罪を犯し、コー

ディネイターはその存在そのものが罪の象徴。そもそも単純に遺伝子を組み替えただけで生命体が優秀になると思うか？」
「さっきから何を――」
「優秀な生命体は優秀な遺伝子を持つ。ファーストコーディネイターのジョージ・グレンは大層な天才だったそうだが、その出自はデザインベビーであったこと以外謎に包まれたままだ。調べてみたらどうだ？尤も――」

――それを知ればこの世界への認識が変わる。
そう言われ、若干動揺した花のお兄さん（仮）のスキを突いてフードの人物はその場を離脱する。慌てて探知しようとするも、この短時間でそれを誤魔化す手段を編み出したのか全く探知出来なくなってしまった。

「やれやれ……これじゃあまたロンゴミニアドが飛んできそうだなぁ。大目玉だよ。……しかし」

最後の最後で気になる情報を残してくれたのは嬉しい誤算だ。彼はそう思っていたが、後日……その意味を知った彼はこう思い直した。
――知るべきではなかった、と。

☆

「あれは……！」
『タイタスや二人は知ってんのか!?』
『ああ！あれはウルトラマンネクサス……ノアが何らかの理由で本来の力を出せない、又は出さない時の姿だって教わってる！』
『……ってことは光神自ら出向いてきたということか……!?』
『いや……アレは純粋に力が形を作ったみたいな……なんつーかレジェンドとは違う、自動防衛機構って感じだな』

フーマの意見にタイガやタイタスも同意する。一誠やドライグも言われてみれば何かレジェンドや、一度だけ人間態でダイブハンガーにて出会ったノアとは纏っている空気が違っていることに気付く。
しかし、予想外の心強い援軍であることに変わりはない。
ランドバイソンに加え、ネクサスが手を貸してくれるならパワーアップしたタイタスと合わせて一気に戦力が増したことになりディスペアントラーとの戦いに勝利への希望を見いだせる。
「よし……！流れはこちらに傾いている、ここで勝負をかけるぞ！」
『『『『おう！』』』』

今、ディスペアントラーとの最終決戦が幕を開けた。

☆

パワーアップしたタイタス――タイタス・グランドマッスルは再び滑空し迫りくるディスペアントラーに対し、腰を落としてどっしりと構える。
そして――

「ギジャァァァァァ!!」
「ふんっ!!」

――真っ向から挟み込もうとする顎を、両腕で事も無げに受け止めた。それも、微動だにせずだ。そのままヘッドギアをディスペアントラーの顔面に打ち付けるようにして更に前進を阻む。
ラインマン、という単語を知っているだろうか。普段は架線作業員を指す言葉であるが、今回はアメリカンフットボールにおけるラインマンのことである。
アメフトにおいて花形ポジションは司令塔の役割を持つクォー

ターバックであり、数が多いラインマン……特にオフェンスラインは地味だと言われているが、実はここがしっかりしていないと始まらないと言われる程ハード。特にセンターはそれが顕著だ。
そう、正に今のタイタスは『攻勢に出るためのラインマン』としてディスペアントラー相手に一歩も引かず立ち塞がっている。
何より、ディスペアントラーは全力でタイタスを倒しに来ているがタイタスはそれに動じず、先程までのような辛さも感じさせない。言わば『筋肉の城塞』。
これには誰もが感嘆の息を漏らす。

「スゲェ！タイタスの兄貴全然ビクともしねえ！」
「あの鎧の力か!?」
「けどそれだけじゃないだろ！兄貴の鍛え上げられた筋肉があるから鎧も十二分に効果を発揮してるんだよ！」
「「「「兄貴！　兄貴！　兄貴！」」」」

バラージの益荒男達によるタイタスへの兄貴コールが止まらない。実にシュールな光景だが、それを納得させる頼もしさが今のタイタスにはあったのだ。
そしてディスペアントラーを正面からタイタスが完全に封殺しているということは、正面以外は隙だらけだということ。近付いて攻撃するとなると万が一反撃され、それが直撃だったりすれば大惨事だがそこで頼りになるのがタイタスやディスペアントラーとほぼ同サイズのネクサスと長距離攻撃もパワー重視なランドバイソン。
ネクサスとランドバイソンを主軸にバルバトス、ダ・ガーンX、ソードストライクの援護を組み合わせ左右から波状攻撃を仕掛けていく。

「今まではあのパワーに押されていたけど、パワーアップしたタイタスさんのおかげでアントラーが抑えられてるからスキが出来てる！」
「背中から生えてるデカい二本腕が邪魔だな。硬すぎてレンチメイスでも時間掛かりそうだし、その間に反撃されそうでもあるし」

「やはり腕は無視して腕の攻撃が来にくい位置から本体を攻撃した方が良さそうだ」

戦闘力と数では互角ないし有利に立てているが、ディスペアントラーの防御力は相当なもので少しずつしかダメージを与えられない。耐久力・再生力も並外れており、こちらが息切れしようものなら再び形勢逆転される恐れもある。

――だが、この場においてまだ全力を発揮していない……否、出来ていない者がいる。もしそれが出来たのなら勝利は確実なのだが、本来とは異なる出現の為ほぼ不可能。

☆

一先ずの危機は乗り越えたが、ディスペアントラーが健在である以上、本当の意味で危機が去ったわけではない。何とかして討ち果たしたいが、あの強固な防御力を抜き本体へダメージを与えられそうなのは今のタイタスぐらい……そのタイタスが抑え込みを担当しているため一番のダメージソースが攻撃に参加出来ないのはかなり厳しかった。

「とはいえ、この強化アントラーを抑え込めるのは私以外にいない……！」

『けどよ！パワーアップしたって言っても、いつまでもタイタス一人で耐え続けるわけにはいかないだろ！』

『……なあ、確かネクサスって単独フォームチェンジ出来なかったか？しかも割と早く変身するとかレジェンドが言ってた気がするんだけど』

『そういやそうだな。基本形態がアンファンスだっけ。で、何か一体化したデュナミストってのごとにジュネッスって形態に……あああああっ!!』

『どうしたタイガ!?』

『そうか！あのネクサス、デュナミストが一体化してないんだ！だからジュネッスになれなくて、本来の力を発揮出来ない！』
『『何いいいいいっ!?』』

戦闘に集中しているタイタスの中で残る四人が絶叫した。そう、タイガが言ったように今顕現しているネクサスはバラージが緊急事態に陥った際の保険としてノアが遺した防衛機構……十分な戦闘力は備えているものの、それはあくまで普通の場合であって今回のようなケース、つまり敵が予想外の強化をされた時は想定されていなかったのだ。

そもそも文明的にも技術的にも地上より遅れているバラージを、態々地中まで探して狙う理由が無いのだから当然といえば当然である。

それに、もしデュナミスト云々を言うにしてもこのネクサスという防衛機構を知る人物が今の今まで誰一人いなかったという点でも対策不可能。

……いや、正確には方法が無いわけではない。文字通りデュナミストないしその代わりになるものが存在すればいいのだが、このバラージにはそれが存在しなかったのだ。

――今までは。

☆

ダイレクターが起動状態だった為、ダ・ガーンXとランドバイソンには一誠達の会話が聞こえていた。

「つまり、あのウルトラマン……ネクサスだったな、彼が本来の力を発揮出来る状況になればいいと」
「だがそのデュナミストって奴の条件が分からねえ！大将達は何か知らないのか!?」

『いや、俺はネクサスとかデュナミストとか初めて聞いたし……』
『俺も漠然と諦めない心としか……』
『まあ、諦めたら駄目なのは当たり前だからな。尚更分からん』
『んー……ネクサス、って名前にヒントとかねえかな……』
「ネクサス……繋がり……」
「！」

ディスペアントラーを抑えつつ呟いたタイタスの一言に、ある一人が驚きと納得の意を示す。
ネクサスではないが、この場においてその本来の姿たるノアと明確に関わりのある、関わりがあった者がいる。
――そう、彼女が――。

☆

「繋がり……そうでしたか。私がここに呼ばれた理由、それが漸く分かりました」
「ニトクリスさん？」

アズがニトクリスを見ると、彼女は先程タイタスが呟いた言葉を反芻している。そして一人頷き、その場にいた全員を見渡して口を開いた。

「アズ、しのぶ、チャータム、そして皆さん」
「どうしました？」
「ニトクリス様、何かお気付きに？」

「どうやら、お別れの時が来たようです」

「「「「……え？」」」」

ニトクリスが何を言っているのか分からなかった。まさか自爆覚悟で突破口を開くつもりなのか？いや、そもそも彼女はその類の宝具を持っていない。何よりそれは威力的にも不可能だろう。

彼女が得意とする呪術関係もディスペアントラーに効くか定かではなく、賭けをするには分が悪過ぎる。レジェンドあたりはそれでも賭けるかもしれないが。

「あの……お別れって……」

「この霊基に残っている魔力を全て、光のエネルギーに変換しネクサスへと譲渡します。私は『本来の』ネクサスと短い時期でしたが共闘したこともありますので、少なくともここにいる面々の中では明確な繋がりという点でも問題ありません」

「霊基に残っている魔力……まさか」

「そちらの方は理解しているようですね。この霊基自体が魔力によって維持されているわけですから、その全てを変換するということは即ち『私』の消滅を意味します」

沙耶の言葉に対するニトクリスの答えにマリュー達は絶句した。戦闘時の情報伝達を円滑にする為、通信機の電源を入れていたのでキラや三日月にもそれは聞こえている。

「消滅って……そんな！」

「私はサーヴァントです。元より死せる存在、いずれはこうなる運命でした」

「リクさんじゃないけど。覚悟、決めてたんだ」

キラの悲痛な叫びにもニトクリスは動じず、三日月はそんな彼女にかつて自身が命を賭してバルバトスの阿頼耶識システムのリミッター解除を行なったことを思い出した。こうなると外野が何を言お

うと無駄であるとも。

「でも……」

「それでも勝てるとは限らない、ですか？」

「「「「……！」」」」

「大丈夫です。何故なら――」

アズが口にしようとした言葉を先に言ったニトクリスは、笑顔で言い放った。

「明日を目指す、貴女達がいますから」

今を生きる者達がいる。未来を目指す者達がいる。たとえ自分が消えても、彼らがいる限り自分の想いは受け継がれまだ見ぬ明日へと紡がれていくだろう。

いずれ子を成し、親となった時に今日のことを伝えてくれるならいいのだが、それはさすがに未来過ぎるか。

子でなくてもいい、弟子や知り合いといった者でも構わない。

受け継がれる『魂』の絆。それこそが『ネクサス』の名に込められた想い、願い。

「とはいえ、先の戦いで少々魔力を使いすぎました。そういうわけで、ちょっとした後押しをお願いします……アズ」

「わ……私？」

涙の滲む目でニトクリスを見つつ、彼女はアズへと頼み事をする。

「緊急かつ暫定的ですが、貴女が私のマスターになってください。そして令呪にて命を下すんです」

「マスターって……」

「サーヴァントは本来、召喚したマスターと契約することでその力を

発揮します。マスターの有無はサーヴァントにとって重要なことであり、中でも令呪は特に大事なもの。サーヴァントに対して絶対的な命令権であり、それを使われれば余程でない限り抗うことは出来ません」
「絶対的な命令権……」
「はい。それを使い、貴女の中の膨大な魔力を私の霊基が許容する限界までこちらに回して下さい。あとは先程言ったように、それを全変換してネクサスに譲渡しますから」

アズの中の膨大な魔力、という発言にまたも驚かされるマリュー達。同じく魔力を持つ悪魔であるリアスや、養母が途方も無い魔力を有し自身も桁外れの魔力を持つ沙耶ですら感知し得なかったアズの魔力。てっきりその二人が担当するかと思ったが、予想の斜め上をいった。

「アズの中に魔力、それも膨大な……!?」
「ええ。本人は気付いていなかった……というか、私も何故なのかは分かりません。その辺りは契約すれば漠然とでも分かるでしょうし、あとは純粋にしのぶとアズが一番親しくなったからですね。サーヴァントとマスターは相性も重要ですから」

後半の方はすぐに納得出来た。主にバラージでニトクリスと共に過ごしていたのはチャータムを除けばその二人だったから。少し考えたがアズは了承し、ほんの僅かな時間……彼女はニトクリスのマスターとなる。

（……！アズ、貴女は……）
「ニトクリスさん……？」
「いえ、何でもありません。ちょっとだけ、感傷にふけてました」

ニトクリスはアズをマスターとした瞬間、彼女の魔力の源泉を感じ

取った。『それ』はあまりに想像を絶するモノであり、何故彼女の中に存在しているのか分からないが決して解き放ってはいけないモノだと一瞬で理解する。

「ではお願いします、マスター」

「っ……」

契約した時に右手の甲に現れた紋章――令呪。それを使えば例外を除きサーヴァントへあらゆる命令を実行させるもの。それを使えば……。

アズは決して邪な願いを実行させたりしない。ニトクリスに頼まれた事以外を命ずるとすれば「自身を犠牲にせず、皆と共にアントラーを討て」といったところだろう。だが、それは叶わない。今のままではディスペアントラーに勝てないのはアズにも分かっている。

故に、命ずるしかない。

「令呪をもって、命ずるッ……」

もはや溢れる涙を拭わず、必至に堪えながら言葉を紡ごうとするアズから、リアスやマリュー達、チャータムを始めとするバラージの民、そしてニトクリスは目を離さず見守る。

「私の中の魔力を、受け取れる分だけ受け取って……！」

「はい、マスター」

直後にアズとニトクリスの身体が輝き、魔力の譲渡が行われる。

「重ねて、命ずる……その全てを光へと変換し、ネクサスへと届けて」

その言葉を受けてニトクリスは即座に全魔力を光へと変換。霊基の消滅が始まり、ニトクリスの周囲に金色の粒子が浮かんでくる。

「ニトクリスさん……！」
「まだ最後の一画分、残っていますよ」

アズが持たされた令呪は三画。あと一画分令呪を行使出来る……と言っても消滅が始まった以上、もはや出来ることは限られているが。そこで迷うアズへと、ニトクリスは最後の言葉をかける。

「アズ」
「っ……」
「貴女のサーヴァントになった瞬間、貴女が知らず、背負っているモノを感じました。きっとこれから想像も出来ない困難と幾度となく遭遇するでしょう」

彼女の言葉をアズだけでなく、リアス達も黙って聞いている。

「でも心配しないで下さい。貴女は一人ではないのですから」
「ニトクリスさんっ……！」
「……私は、生前友達と呼べる者がいた記憶がありません。ですから、貴女やしのぶと親しくなれたこと……とても嬉しかったです」

消滅が進む中、笑顔のままそう告げたニトクリスにアズだけでなくしのぶやリアス、マリュー達も涙を流す。

「今もあの特異点で戦っている『私』は貴女達を知らないでしょうが……この記憶は、必ず座へと持ち帰ります。だからどうか……別の所でサーヴァント召喚をする時は、私を呼んで下さいね」
「はい……必ずっ……!!」

アズの言葉に満足出来たのか、ニトクリスの目にも涙が滲む。しかし、笑顔は崩さない。

『さよなら』ではなく『またね』と言うために。

「さらに……重ねて、命ずる……！」

――そして紡がれる、最後の令呪を伴った言葉。

「私達皆が明日を掴むために……

私達と、ネクサスと共に戦って!!」

「御心のままに、マスター！……ありがとう、アズ、皆さん」

光一粒一粒にニトクリスの魔力と心が重ねられ、一つの光の玉へと変化していく。

「光神の遺産たる巨人、ネクサスよ！我が魔力、我が霊基の全てを汝の糧とする！その光を一欠片も残さずその身に宿し、我が友人（マスター）らの未来に希望の風を!!」

その言葉を最後に、バラージに呼ばれたニトクリスは消滅する。同時に、彼女の全てを集約した巨大な光の玉はただ一点……ネクサスのエナジーコアを目指し猛スピードで飛ぶ。

本能でそれが己にとって危険だと感じ取ったディスペアントラーは生やした巨腕から拡散粒子弾を放ち光の玉を撃ち消そうとするも、意思を持つが如く動きまるで当たらない。

そして今――ネクサスに、本当の火が入った。

☆

ニトクリスの霊基、アズの魔力、そして多くの者達の願いが込めら

れた光を受け取ったネクサス。本来ならばただの緊急時における防衛機構としての役割しかなかった巨人は、有り得ざる奇跡をその身に宿したことで真なるウルトラマンとして立ち上がった。

「フッ……ジュアッ！」

ネクサスが左腕を胸の前にかざし、振り下ろすような動作をするとその姿が変化する。上半身はプロテクターが装着されたようになり、エナジーコアにはコアゲージが追加。更にほぼ銀と黒であった体色は青、そして金色も加えた今までのジュネッスとは一線を画したものに。

ニトクリスが己と引き換えに託した光によって生まれた新たなる力――言うなれば『ジュネッスファラオ』の顕現である。

『資料で見たフォームチェンジと色が違うぞ!?』

『そういやネクサスって、デュナミストごとにフォームチェンジ後のメインカラーが違ってて、基本銀と黒にプラスあと一色なんだっけ……』

『いやどう見てもアレ銀と黒と青と、金色まで混ざって豪華なんだけど』

タイタスの中でタイガ、フーマ、一誠が若干混乱気味になっている。ネクサスを知っていた弊害かもしれないが、今のネクサスの姿は通常のジュネッス系統には無い要素……一色多く、かつ目立つであろう金色が混ざっている。金色のウルトラマンといえば、代表的なものでグリッターティガやジード・ロイヤルメガマスターなどが挙げられ、どちらも桁違いの戦闘力を持つ。

この新たなる姿のネクサスもそれに準ずるが如く滅茶苦茶強いのでは……とタイガとフーマは期待する。その期待は外れなかったが、ジュネッスファラオの真価は別のところにあったのだ。

「ジュア！」

ネクサスはジュネッスファラオへと変化したことで、ジュネッス系統時に発動可能になる不連続時空間（メタフィールド）を右腕のアームドネクサスより発動・展開し、戦闘中だったタイタスやストライク達を含めてバラージごと覆い尽くした。

「こ……これは、結界なの？」

「メタフィールド……不連続時空間。先生に聞いたことがあったけど、見るのは初めてね」

「メタ……不連続？」

「まあ、結界という認識で然程間違いじゃないわ。でも、これは……」

「いやあ、とんでもない超密度の結界だよこれは！私もここまでのものは久しく見たことがない！」

「……今まで何処に行ってたの、フラ男」

「この場面でそう呼ぶの!?」

何故かタイミング良く現れた花のお兄さん（仮）をジト目で見つつ、フーマ提案のフラワー男・略してフラ男呼ばわりな沙耶。なお、話していたリアスも似たような目で彼を見ている。

「ゴホン！それはともかく、言った通り恐ろしく密度の高い結界だ。恐らくキャスターとして呼ばれたニトクリスが絶妙な程にあのウルトラマンの能力とマッチしたんだろう」

サーヴァントのクラスの一つ、キャスター。そのクラスで呼ばれたニトクリスは当然の如くクラススキルを有していた。その一つが『陣地作成』。本来は魔術工房を作成するためのスキルだが、霊基を譲渡したことで性質がネクサス用に僅かに変異し『専用のフィールドの作

成』へと変化。
　つまり、かつてないほどメタフィールドを作成しやすくなった上にデメリットである展開時間＝活動可能時間……即ち三分間という制限まで撤廃されるという、ただでさえ強かったネクサスが更に強化されたのである。
　サーヴァントがデュナミストとなる場合、ネクサスと相性が良かったのは最優と言われるセイバーではなく、かといってルーラー等のエクストラクラスでもない。言わば余程でない限り直接戦闘が得意ではなく、逆に直接戦闘型であるネクサスをサポート可能なクラスでメタフィールドの作成・維持を容易にするキャスターこそが最適だったのだ。

「これも先生に教わった事だけれど、ネクサスはメタフィールド内でこそ、その力を十分に発揮出来るらしいわ。分かりやすく言うと、強いから周りに被害を出さないようにすると必要以上にパワーダウンしてしまうような状態だったのよ」
「夜一さんや乱菊さん、卯ノ花先生が言っていた『限定解除』に似てますね」
「そしてつまり、それが解き放たれたということは――」

――本当に、勝機が訪れたということだ。

☆

　封じられていた力が解放されたネクサスは、メタフィールドを張り終えるとすぐさま駆け出し、タイタスと組み合っていたディスペアントラーに飛び蹴りを炸裂させた。この時点で明らかにアンファンス時より戦闘力が違うことが分かる。
「助かったぞ、ネクサス！しかし、これは……」

礼を言いつつ、タイタスは自分に感じる違和感に気付く。といってもマイナスではなくプラスの方向に、だ。
鎧を纏ったことによるパワーアップではなく、何と言うか自然に少しずつ力が増していく感覚。
ネクサスがメタフィールドを発生させてから感じるようになったそれはタイタスのみならず、ダ・ガーンやランドバイソン、更にはＭＳであるバルバトスやストライクにも現れていた。

「……？バルバトス、いつもより調子良いな」
「これは……ストライクのエネルギーが少しずつだけどリチャージされてる!?どういうことなんだ!?」
「私達もエネルギー出力が増している……ソレに何となくだが、身体も動かしやすい気もするな」
「良く分からねえが、多分あのネクサスって奴が張った結界が作用してるんだろうぜ！何にせよマイナスじゃなくてプラスならこの際何だって構わねえ！」

――そう……実のところジュネッスファラオは他のジュネッスに比べ、素の能力はアンファンスからそれほど上がっていない。しかし、それと反比例するかのようにメタフィールド内では戦闘力が爆増するという、言わば『メタフィールドでの戦闘を前提としたジュネッス』なのである。
陣地作成スキルによるメタフィールド形成・維持の容易化に加え、戦闘力大幅上昇。そして更に、ジュネッスファラオのメタフィールドはフィールド内の仲間を強化する効果も有している。流石にネクサス本体ほどではないが……。
以上の事から、ジュネッスファラオを相手にした場合……メタフィールドを張られた上、フィールド内にネクサスの仲間が存在したならばもはや詰み。
それともう一つ――ジュネッスファラオにはさらなる力が隠されていた。

「派手に行くぜ！ラァァァンドカノォォン!!」

強化されたランドバイソンのキャノン砲が火を吹く。さすがに本能で察したのか、ディスペアントラーは間一髪回避に成功――

「嘘だろ!?」

「まずいぞ！あの威力ではもしかするとメタフィールドに影響が――」

「デアッ!!」

――しなかった。ネクサスが腕を振るうと、突如巨大な鏡が現れてランドカノンの高密度ビーム弾を反射し、ディスペアントラーへと直撃させたのだ。

「「「「え……？」」」」

「ギジャァァァァァッ!?」

あまりの出来事にディスペアントラーどころか全員が目を点にした。

そう、これが『ニトクリスの鏡』に纏わるネクサス・ジュネッスファラオの能力――『ヴァリアブル・ミラー』。ネクサスの意思によって出現・展開され、エネルギー系統の武器や技を反射させる。反射させる技を持つウルトラ戦士はいるが、ネクサスのそれはそこそこ離れた場所でもいきなり展開可能な上、反射したエネルギーはネクサスの指定した目標へと必ず再発射される……つまり、本来は角度的に無理があろうが法則を無視してターゲットへと放たれるのだ。

こうなったらレジェンドのように完全な全身防御か吸収、もしくはどうにかして打ち消すしか対抗策は無い。

限度があるだろうが、ネクサスのこの能力によってタイタスらは文字通り火力重視の戦闘が可能になったのである。

さらに、ここで戦力増加が起きる。アークエンジェルが戦線まで航行してきたのだ。

「え……アークエンジェル!?」

『ラミアス艦長、あの巨人が先程砲弾を反射させたことはこちらでも確認しました。ローエングリンは使用不可だとしても、ゴットフリートならば支援砲撃として効果的と思います』

「バジルール少尉……ええ、確かにその通りね。あとは――」

マリューがネクサスを見ると「任せろ」とでも言うように頷いてくれた。しっかりと意思疎通が出来た上に、先程の通信も聴き取ったのかと少し驚いたが心強いことこの上ない。

ふと見るとダイゴの姿が見えないが、彼の性格からして一人だけ避難したとは考えられないし、乗機も大型だし……と思ったら普通にアークエンジェルからSガンダムが発進した。

『ラミアス艦長、バラージの民や同じウルトラ騎空団を守るため、そしてウルトラマンの援護のために僕も出撃させてもらいました』

「ふふ……確かにそれなら大義名分は立ちますね。アークエンジェルは『偶然』守られただけですから」

何とも動きの早い人だ、と思いながらもマリューはダイゴの優しさに心のなかで感謝した。Sガンダムのビームスマートガンはストライクのアグニ程の威力は無いものの、それに迫る威力を持ちながら燃費も良い。射程も十分なので援護にうってつけだ。

だが、ダイゴがSガンダムで出撃した理由はそれだけではない。

「ＲＥＮＡ、あとは頼んだよ。援護、期待してる」

『任せて、ダイゴ。皆をお願いね』

ウルトラマンとＡＩ、それぞれが元にした人物の影響を受けた結果、種族どころか存在の違いの垣根を超えて想い合える程の絆を持つに至った二人は、短い会話の中で互いの思惑をすぐに理解出来た。

今こそ好機とみたダイゴはスパークレンスを取り出し、最前線で戦うキラ達を救うため今再び光となる。

眩い光と共に地底に降り立ったのは、スコーピスとの戦いでキラを助けてくれたダイゴのもう一つ――本来の姿、ウルトラマンティガ。

ネクサスが数々の衝撃を与えてくれたお陰で変身する余裕も出来たことで遂に変身し駆けつけられたのだ。

「おお!!」

「ティガ……ダイゴさん……!」

タイタスとキラは歓喜の声を上げる。片や偉大な大先輩が、片や自分の慕う兄貴分がここぞとばかりに救援に来てくれたのは頼もしい以外に何があるだろうか。しかも、ティガはかつてアントラーと似た性質を持つ『甲獣ジョバリエ』を防衛チームの援護はあれど単独で撃破した経験もある。

「また新しいウルトラマンってのが出てきたぞ!」

「でも、何だろう……初めて見たはずなんだけど初めて会った気はしないっていうか、ずっと見守ってくれてたような……」

（……鋭いわね、この娘）

ティガに興奮気味なトールとは逆に、ミリアリアはティガの雰囲気から何かを感じ取っており、リアスも口には出さなかったが感心した。

何にせよ、いよいよ決着の時だ。遥か昔から続くバラージとアントラーの因縁、そして現代……ここに招かれたウルトラ騎空団やアークエンジェルとディスペアントラーの激突。それら全てに終止符を打つべく、光の巨人と勇者達が絶望の魔獣へと立ち向かう。

☆

タイタス、ネクサス、そしてティガが並び立ち、構えを取りディスペアントラーの咆哮に合わせて同時に駆け出す。三体の巨人が地底世界の大地を踏みしめる度に土砂が巻き起こり、ディスペアントラーの背に生やした巨腕から放たれる拡散粒子弾もそれに拍車を掛ける。

ネクサスが一足先にジャンプし、体を捻りつつ絶妙なタイミングでディスペアントラーの左右巨腕の間をすり抜けるようにして背後へと着地。ウルトラ戦士による挟み撃ちの陣形が整った。

『ゴットフリート照準！外す前提で撃つな！万が一外れても保険がある程度に考え、確実に直撃させるつもりで狙え！てーっ!!』

ポジショニングを完了させたことを確認したナタルの指示で、アークエンジェルからゴットフリートが放たれる。

「ジュアッ！」

片方が命中、もう片方は僅かにズレたもののネクサスがヴァリアブル・ミラーを展開し軌道修正することで連続直撃。ギリギリで気付いたのでは遅い為、確実にズレることを先読みした上での行動……やはり分体とはいえ光神の一形態、格の違いをまざまざと見せつけた。

「この面子ならあの腕、切り離せるかも。そうしたほうが楽になりそうだし」

「そうすると軸になるのはソードストライカー装備のストライクと、

えっと……ダ・ガーンさん」
「さんはいらないぞ、キラ・ヤマト。私達は共に戦う仲間なのだから」
「あ……はい！ありがとうございます」
「バルバトスとそっちのランドバイソンのパワーで揺さぶりをかけて、そのスキに二人の剣で切り落とす。再生とかされるかもだけど、その時はその時だ」

三日月の案に「えらくアバウトだな」と思う面々だったが、ここまできたら下手に細かく作戦を練るよりさっと考え即実行したほうが効果的だ。グズグズして対策を行われる前に行動に移す。早い話、やられる前に殺れ戦法。戦法もへったくれもない気がするが。
既にネクサスとアークエンジェルに続き、タイタスとティガもディスペアントラーと真正面からぶつかり合っている。さらにＲＥＮＡの操作するＳガンダムもビームスマートガンをネクサスが反射させ易い位置に放ち、様々な角度からディスペアントラーを攻め立てていく。

「ネクサスとアークエンジェル、Ｓガンダムがサポートに回ってくれているからかこちらには余裕がある！今こそ、この新たな力を真に発揮する時だ！」

そう言うとタイタスは右手を強く握り締め、右腕全体に力を込めつつドッシリと腰を低く落とす。一見隙だらけに見えるがアークエンジェルとＳガンダムの支援射撃とネクサスの反射、そしてティガの妨害によってディスペアントラーはタイタスへ攻撃を届かせることが出来ない。しかもいつの間にかティガはスカイタイプへのタイプチェンジを果たしており、ティガフリーザーでディスペアントラーの動きを阻害している。
そしてストライクとバルバトス、更にダ・ガーンＸとランドバイソンも何かをするためにタイミングを見計らっているようだ。
これに応えずして何が力の賢者か。

「賢者の――」

握り締めた拳からミシミシという音が聞こえてくる。それだけならば割とよくあることだった。違うのはタイタスが身に纏う鎧、腕に纏った部分がバチバチとスパークしていること。

「拳は――！」

スパークが更に激しさを増し、いよいよディスペアントラーも本能的な直感で危険さを理解するも、ティガやネクサスらの妨害でタイタスを阻むことが出来ない。

唯一つ言えるのは、これから放たれる一撃は『赤龍帝の籠手』による影響を一切受けていないということだけ。

「全てを砕く!!」

ドゴオオオオオン!!

タイタス・グランドマッスルが放った渾身の一撃はディスペアントラーの腹部に直撃し――ディスペアントラーは宙を舞った。その光景に誰もが唖然とする。

そのまま数百メートル吹っ飛んだディスペアントラーは落下後も暫く砂埃を上げながら倒れたまま地面を滑っていく。

なんという威力。ただのパンチがこれ程までに強くなったのかと、普段のタイタスの戦闘力を知っている者達は戦慄した。

――実は、タイタスが纏った鎧そのものに直接的な攻撃力上昇効果無い。なのにこれだけの威力が出せたのは鎧のおかげでもある。つまりどういうことなのかと言うと、手っ取り早く説明すれば某身体は

子供、頭脳は大人でサラーサとやけに似た声の名探偵の持つキック力増強シューズと同じ原理なのだ。鎧全体から電気と磁力によってタイタスの全身のプラスになるツボを刺激し、彼の身体能力を高めているというわけである。

結論を言うと、タイタスが普段から鍛え続け完成されていた肉体があったからこそ、鎧の効力が十二分に発揮され凄まじい威力のパンチを生み出したということだ。

この強化型ワイズマンフィスト、匹敵するパンチを繰り出せるのはガイア・スプリームヴァージョンなど極僅かな面々しかおらず、実にとんでもない威力であることも記しておく。

……レジェンドやノア、サーガのようなパンチ一発滅死の素レベルな規格外は除くことも伝えておこう。

「これが……ウルトラマッスルだ!!」

モストマスキュラーからフロントダブルバイセップスへとポージングを決め堂々と言い放ったタイタスに、バラージの漢達の『兄貴』コールが再開される。あんな光景を見せられれば魅せられる、というものだ。

そしてディスペアントラーにさらなる追い打ちがかかる。あまりの強撃に立ち上がれどまた手と膝を付いてしまうディスペアントラーだが、背部の巨腕は自在に動かせるため拡散粒子弾を放とうとするも――。

「行くぜ、ワイルドなツノ付き!」
「手を抜かないでよ、猛牛ロボ」
「当然!ラァァァンドクラァッシュ!!」
「ぶっ飛べよ……!」
「ギッ……!?」

ランドバイソンがドリルを突き出しながら全身で、バルバトスがレ

ンチメイスを突き出してフルブーストで二体同時に突撃してきたのだ。いくら強固な防御力を持っていたとしても、あのパンチを受けて消耗したディスペアントラーでは受け切れず吹っ飛びはしなかったが後ろへとよろめく。

「ダ・ガーンブレード！一文字斬り!!」

「だあぁぁぁ!!」

そのスキを狙い、次はダ・ガーンXとストライクがそれぞれダ・ガーンブレードとシュベルトゲベールで片方ずつ巨腕を切り落とした。それを見てリアスやマリューらも歓声を上げる。

――その光景に呼応するかのように、静かにネクサスの中の『光』が輝きを増していく。

いよいよ、決着の時だ。タイタスを中心にネクサスとティガが並び立ち、ディスペアントラーを肉薄する。

「これで決める！二人とも、力を貸してくれ！」

ネクサスもティガも力強く頷き、共に得意とする必殺技の構えを取る。ティガはマルチタイプへと戻り御存知ゼペリオン光線の、ネクサスはジュネッス最大の技オーバーレイ・シュトロームを更に強化したバグレベルの大技……ジュネッスファラオの特性であるメタフィールド内での強化倍率が凄まじいことが故に可能な固有技『ギガバーストレイ・シュトローム』を。

そして、タイタスはグランドマッスルとなったことで手に入れた新必殺技――気を溜めるような動作から、プラニウムバスターの時のようにエネルギーを自身の前に収束させる。しかしその大きさと密度

は明らかに違う。
よく見ると左腕に赤龍帝の籠手……否、それと鎧が一時的に融合したようなガントレットが装着されていた。どうやらそれの力でエネルギーを倍加させていたらしい。

『何かナチュラルに融合発現させてたー!?』
『俺の時は物凄く苦労したのに!?』
『さすがってレベルじゃねーよ!痛覚麻痺してねーか旦那!?』
『……何故か分からんがボディービルポーズを取りたくなってきたぞ……』
『『『ドライグー!?』』』

タイガ・フォトンアースの時と違い、ドライグの言う通り何故かは不明だがタイタスの影響を受けつつあるようだ。恐るべしマッスルシンクロ。

「受けるがいい!私の新たな必殺技!!」

誰もが期待する新技だが、一誠達はあることに気付く。かつて技名に『マッスル』を躊躇なくぶっ込んだことを思い出し、まさか今回もと青褪めた。この盛り上がりを台無しにだけはしないでほしいと願うが――。

「プラニウム!ノヴァ!!」
『『『すいませんまともですありがとうございましたー!!』』』

シンプルに、しかしより凄絶に。さらなる進化を遂げたプラニウムバスターがディスペアントラーへと放たれた。プラニウムバスターより高密度に圧縮され、それでも更に巨大なエネルギー球がグランド

マッスルとなったタイタスの拳にて撃ち出され、ディスペアントラーに一直線。
そしてそれにタイミングを合わせ、ティガとネクサスも必殺光線を放つ。

「チャアッ!!」
「ジュアッ!!」

ゼペリオン光線とギガバーストレイ・シュトロームが同時に放たれると、ガイアとアグルの合体技・バーストストリームの如く交差地点で一つの凄まじい光線となりプラニウムノヴァ目掛けて突き進み、やがて追いつくとその勢いでもってプラニウムノヴァを更に押し出す。
膨大なエネルギーを受けた巨大光球、そんなものを満身創痍のディスペアントラーが受け切ることや避けることなど叶うはずもなく――。

「ギジャアアアア……」

ズドオオオオオン!!

後に『グランドノヴァ・トリニティ』と呼ばれる合体技により、遂にディスペアントラーは断末魔の叫びと共に大爆発を起こし撃滅された。
ゆっくりと構えを解いた三体の巨人。勝利が確定した瞬間に大歓声が上がる。漸く、バラージにとって遥か昔から続いた因縁に終止符が打たれたのだ。
――しかし――

☆

「有用性が証明された以上、回収はしっかりしておかなきゃな……ん？」

花のお兄さん（仮）から逃げ延びたフードの人物は、倒された直後にディスペアントラーから排出されたメダルを人知れず回収していた。

だが、ディスペアントラーが倒されたというのにメダルはまだ宿主が生きているかのような発光を続けている。

ここでフードの人物は気付く。このメダルが宿した機能はもう一つあったことを。

「そうか……途中で宿主がいなくなったことにより『元々増えるはずだった数』一回分しか発動出来ないのか。だが――連中が絶望するには十分だろう。自己再生と自己進化は見たが、まだ最後の一つ……自己増殖は見ていなかったからな」

フードの人物がほくそ笑むと、メダルがその輝きを増し……そして――。

☆

刹那――勝利の喜びは驚愕と絶望へと反転した。

突如として大きな光が爆ぜ、先程倒したばかりのディスペアントラーが出現したのだ。それも十数体。

「な……!?」

「嘘でしょ……!?」

マリューとリアスが驚きの声を上げ、他の者も絶句する。当然だろう。総力戦の果てに漸く倒したディスペアントラーが、膨大な数に膨

れ上がり再度現れるなど誰が予想出来ようか。
「そんな……皆があれだけ頑張ったのに……」
「……悪足掻き、してみようか」
「復活したばっかで終わりとはツイてねえな。だが黙ってやられるのは癪だ。ぶっ倒れるまでやり合ってやるぜ！」

キラも諦め気味になったが、三日月とランドバイソンはまだ戦う気でいる。彼らだけではない、ダ・ガーンXやタイタスにティガもカラータイマーが点滅し始めるが再び構え直し闘志を燃やす。
最後の瞬間まで諦めはしない――しかし、そこへネクサスが待ったをかけるように一歩先に進んで左手で制した。

「ネクサス……!?」

タイタスが怪訝に思うと、ネクサスはアークエンジェルを指差し、同時にストライクやマリューらを見渡し頷く。

――行け――

「まさか……一人であれと戦う気なのか!?」
「無茶だ！一体一体の戦闘力が尋常じゃないんだぞ！」
「……いいえ、行ってください」
「「「「チャータム女王!?」」」」

ネクサスを肯定し、アークエンジェルへと向かうように促したのはまさかのチャータムであった。しかし彼女の目に諦めの色はない。
「貴方達はもう十分にバラージのために戦ってくれました。そして貴方達には地上で待つ人々がいるはずです。かの巨人があのように促すのは、貴方達を地上へと戻す術があるということでしょう。ここで

私達はお別れです……ありがとうございました、皆さん」
「でも！」
「貴方達には成すべきことがあるのでしょう？この場は私達が引き受けます。御安心下さい、死ぬつもりは毛頭ありませんし」
「兄貴！元気でやれよ！」
「ここは俺達の故郷だ！俺達が最後まで戦わないでどうするって話だよ！これ以上アンタ達に甘えられねえって！」

タイタスと友情を育んだバラージの漢達を皮切りに、次々とバラージの民達が生きるべく戦意を示す。この状況でも彼らは絶望を跳ね除けたのだ。
そんな彼らを残して自分達だけ逃げていいのだろうか。

「――貴方達は逃げるのではなく、新たな戦場へ向かうのです。何も後ろめたいことはありません」
「チャータム女王……」
「さあ、早く！幸いあちらはまだ本調子ではない様子、あの船に乗るタイミングは今しかありません！」
「……ここでの出来事は決して忘れません。私達の方こそ、世話を焼いて頂き……ありがとうございました」

第八艦隊のハルバートンに続き、自分達のためにその命を散らさんとするチャータムやバラージの民に、涙を堪え敬礼で返すマリュー。それに習いトールらも敬礼し、タイタスやダ・ガーンXらと共にアークエンジェルへと急ぎ走って行く彼女らを見送り、チャータムとバラージの民、そしてネクサスは迫りくるディスペアントラーの大群を見据える。

☆

「バジルール中尉！」

「ラミアス艦長、地上への帰還方法は……!?」
「私も分からないわ。あのネクサスと呼ばれている巨人が何らかの方法を取るらしいけれど……」
「そんな予測不能で不確定な――」
「信じるしかないわ！チャータムさんやニトクリスさん達の、バラージに生きる人々の思いを無駄にすることは出来ないのよ！」

鬼気迫るマリューの言葉にナタルを始めとするクルーは黙るしかなかった。彼女が艦長席に座ると同時にトール達他のブリッジクルーも到着する……が、そこにはキラや、一誠やリアス、ダイゴ達も勢揃いでブリッジへと入ってくる。既にダ・ガーンやランダーズは収納済みのようだ。

「なっ……!?」
「すみません！罰なら後で受けます！」
「だから、せめて今は……今だけはここで見届けさせてください！」
「……分かりました。許可します」
「艦長!?」
「ナタル、短い間とはいえ私達は彼らの過ごし、こうして共に戦ったわ。他の人から見たらとても小さい……でも、私達と彼らの間には確かな『絆』が出来ているの。だから今だけ、許して頂戴」

第八艦隊と恩師ハルバートンを亡くして間もないというのに、また同じような光景を見せることになるかもしれないことを覚悟した上でそう言うマリューにナタルは何も言えなくなった。
そして遂に進撃を始めたディスペアントラー軍団。悪夢の軍勢からバラージの民達を守るようにネクサスが一歩前に出ると、あろうことかメタフィールドが解除される。解除されて発生した光がアークエンジェルを徐々に包んでいき、やがて球体型バリアのように包み終わるとゆっくりとアークエンジェルは地上へ運ばれるように舞い上がっていく。

「メタフィールドが……！」
「オイ、ヤバいんじゃないのか!?ネクサスはあのメタフィールド内でこそ真価を発揮出来るんだろ!?」

ブリッジの空気が焦燥に染まった。己の固有結界とも言うべき領域を解除してまでアークエンジェルを逃がそうとするネクサス、そしてそれを見て尚ディスペアントラーへの戦意を失わないバラージの民。
彼らは本気で自分達を犠牲にしてでもマリュー達を地上へと送り出そうとしている――そうとしか思えない行動。
――だがその次の瞬間、彼らは目にすることになる。彼らだけではない、バラージの民……そしてフードの人物と花のお兄さん（仮）も。

かつて無いほどの衝撃を引き起こす、奇跡を。

☆

迫りくるディスペアントラーの大群。
その矢先に立ったネクサスの身体が凄まじい光を放つ。皆が皆目を覆う程の光の中で、それに包まれたネクサスのシルエットが徐々に変化していく。
その背に背負うは伸縮自在の一対の翼。天を衝くが如き様相のそれを背負い、エナジーコアを除けば全身銀一色というあまりに特異な姿。正しく神秘の体現。
数多の縁が紡いだ絆。

――今、ネクサスは真の姿を取り戻す。
レジェンドやキングと並ぶ最高位光神の一柱、伝説の超人とも呼ば

れし大いなる光。
その名を、ウルトラマンノア。
「ジュゥアッ……！」
☆
「「「「!!」」」」
「「「「!?」」」」
それを見た誰もが絶句する。いや、しないほうがおかしいだろう。タイガを始めとするウルトラマン達は知っていても大抵その姿を直接見ぬまま生を終えるほどにこの【エリア】ではお目にかかれない存在を、そしてマリュー達やチャータムらバラージの民は太古よりノアの神と呼ばれ石像が作られた伝説の存在を、そして……フードの人物はつい先程までの余裕が一転して絶望へと反転するほどに予想外すぎる存在を目の当たりにしたからだ。
「ネクサスが、また姿を……」
「違う！ネクサスじゃない！」
「え……？」
「あれはノア……ウルトラマンノアだ！」
「「『はあ!?』」」
驚愕の声を上げたのは一誠とリアス、ドライグだ。かつてダイブハンガーで会った時はレジェンドからツッコミという名の制裁を何度も叩き込まれていたため、変な意味で印象に残ったが……今、ディスペアントラーの大群の前に立ち塞がっているノアは迫力や存在感がまるで別人である。
「えっと……あのウルトラマン……は、そんな凄いのかしら？」

「凄いなんてもんじゃねーっての！あれとガチタイマン張れるの同格二人ぐらいなレベルだぞ!?」

即ちレジェンドとキング。どちらも別次元のパワーを持ち、未だ底知れぬ超神秘的存在。フーマはぼかしたが、目の前に顕現した存在と先日までこのアークエンジェルに乗ってウルトラ騎空団を取り纏めていたレジェンドが同格だと、後にクルーが知った時の反応は凄まじかった。

「……だとすると……！」
「バラージとそこに生きる彼らは助かるかもしれない！」
「頼んだぞー！ノアー！」

「あれは……」
「神様だ……ノアの神様が助けに来て下さったんだ！」
「お前ら神様に頼り切るなよ！俺達のバラージは俺達で守るんだ！」

たとえノアが顕現しても、バラージの民は自らのすべき事を放棄しない。

――地球は地球人の手で守るべきだ。

かつてゾフィーはウルトラマンを助けに地球へ赴いた時、彼にそう伝えた。ゾフィーの願いでもあったそれは、別の地球においてもこうして体現されている。

（私達はこれからも助け合い、縁を紡ぎ未来へ歩んで行きます。だからどうか、今はそのお力をお貸しください……ノアの神、そしてニトクリス様……！）

チャータムはノアの降臨を目にし、改めて決意した。自分達の我儘によって理不尽にバラージへと連れて来られたにも関わらず、バラー

ジのために生命を賭して戦ってくれたアークエンジェルとウルトラ騎空団に誓って。

「バカなバカなバカな!!有り得ない!!奴はこの【エリア】にはいないはずだ!!ましてやこんな辺境の地底に現れるなど!!」

フードの人物は絶望と混乱のあまり発狂していた。本来であればかの人物が絶望を与え、悦に入るはずだったのだがノアの出現によって全く逆の立場になることとなった。

別の場所でも花のお兄さん（仮）が冷や汗をかきつつノアを見つめている。

「ウルトラマンノア……最高位光神たるレジェンドと同格と言われる存在。なるほど、これはＯＲＴ封印時に彼女がレジェンドのことを呟くわけだ。夢の中に逃げ込んでも消し飛ばされそうな感じがするよ」

Ｏｎｅ　Ｒａｄｉａｎｃｅ　Ｔｈｉｎｇ――ＯＲＴ（オルト）。『究極の一』と呼ばれた超常的存在の一体。月王国のある世界の南米においてウルトラウーマンディアナ――沙耶が立ち向かったが、既に優れた能力を有していた当時の彼女でも太刀打ち出来ず、彼女に加えて先代女王を含む月王国と現地神を含めた現地の者達の総力戦の末に漸く『封印』することが出来たとてつもない脅威。その戦いの後に先代女王が呟いたのが……。

『この場に我が夫がいてくれれば瞬く間に終わっていたでしょう』

つまり究極の一たるＯＲＴすら歯牙にかけない程の力を持つのがレジェンドであり、ノアはそれに比肩する実力者だということ。

花のお兄さん（仮）もＯＲＴ封印総力戦に参加していたから分かるのだが、あれの戦闘力は想像を絶していた。それを瞬く間に終わらせるような存在と同格――そんなものが眼前に現れたなら驚くなというのが無理である。

ネクサスの時点でメタフィールドという固有結界みたいなものを当たり前に展開するあたり、魔術師視点で見てもブッ飛んだウルトラマンなのだが。
しかし、彼らはそこから更にとんでもない光景を目にすることになる。

本来の姿を取り戻したノアはディスペアントラーの大群へと躊躇なく猛スピードで近付き、拳で一撃。次の瞬間、ディスペアントラーの一体が跡形もなく吹き飛んだ。

「「「「……は……？」」」」

揃いも揃って間抜けな声が出た。三人のウルトラマン（しかも強化フォーム含む）に加えてアークエンジェルや機動部隊まで総動員して漸く倒せたディスペアントラーを、目の前の存在は拳一発で軽々と倒してしまったのだ。
このウルトラマンノア、パンチやキックに重力波を付与しているだけでなく、その温度実に一兆℃とかいうふざけた炎を纏わせた『ノアインフェルノ』なる技を持っている。ちなみにレジェンドの『アブソリュートレジェンド』は爆散ではなくその名の通り氷が割れるように相手が砕け散るパンチ技で温度はマイナス一兆℃。ノアと対になる技だ。ちなみにキングは『キングサンダーフィスト』なる技があるらしい。
兎にも角にも初手からいきなり度肝を抜いたノアだがそんなものは最高位光神にとって序の口の技。
続く左右両手からのグラビティノアによって同じく左右にいたディスペアントラーもそれぞれ一撃で粉砕。一気に襲いかかってきたディスペアントラー達も鉄拳で、蹴りで、光弾で次々と倒していく。
――強すぎる。

「……すげえ……」
「これが、最高位光神……」

一誠とリアスは驚きのあまりそう言うのが精一杯だったが、他の者も同様だった。恐ろしく早い討伐も終幕に近づいたようで、ノアは近場の一体を倒すとバク宙で華麗に一歩下がり構える。

「ハァッ……！」

静かな掛け声からエナジーコアをイメージしたかのように炎を発しながら腕を広げ、左手を握り拳のまま、指を伸ばした右腕を立てつつその肘の部分に合わせ――。

「ヘェアッ……!!」

ノアの代名詞的必殺技、超絶稲妻光線『ライトニングノア』を放った。放つだけでノアの周囲に盛大な粉塵が舞い上がり、一体のディスペアントラーに直撃したあとはそのまま薙ぎ払うように放射し続け、残数残り十体程を纏めて爆散させ遂に全滅。

圧倒的蹂躙。そんな言葉しか思い浮かばないぐらいに一方的な勝利。最高位光神の実力の一端を目撃した彼らはただただ息を呑むだけであった。

「俺、初めてノアが戦ってるとこ見たけどさ……どんだけバケモンなんだよあの人……!?」
「割れた銀色の腹筋が素晴らしい……！」
「ホントブレないよな、タイタス!?」

最近フーマの常識人度が増している気がするのは気の所為だろうか？

そう思っているうちにアークエンジェルはバリアに包まれたまま、

いよいよ天井から地中を経て再び地上へと向かう直前だ。最後にとバラージを見ると、ノアが頷きながらこちらを向いているのと同時にチャータムやバラージの民が笑顔で見送ってくれていた。
アークエンジェルは再び激動のコズミック・イラを戦っていくことになる。だが、遥か地底での出会いと別れは彼らにとって大きな意味があった。

ノアが再び光となり、石像の中へと還っていく。アークエンジェルも船体がバラージの民達の視界から完全に見えなくなってから、チャータムは指示を出した。

「皆、今日の出来事を壁画に遺しましょう。地上から来てくれた勇士達と、ニトクリス様、そしてノアの神……私達と共に未来を手にするために戦ったあの方々との縁を、いつまでも忘れぬように」
「おーし、やるぞ皆!アントラーの脅威も無くなったんだ!」
「俺にはタイタス兄貴を描かせろ!あのウルトラマッスルボディを完璧に描いてやるぜ!」
「オメー、ミカヅキの乗ってたワイルドビーストを忘れんなよ!」
「バルバトスだろバルバトス!ストライクって奴と一緒にしたら無礼だぞ!」

恐怖に打ち勝つ苦労ではなく、子孫と未来へ遺すため……そのための苦労は皆が笑顔になって一丸となって取り組めるだろう。

――そして遠い未来。偶然バラージへと来てしまった者達が見た光景の中には、一人の神に見守られながら巨大な悪魔に立ち向かう三人の巨人と五体の機兵、巨大な船に加えて多くの人々の姿が描かれた壁画があったという。

フードの人物は悔しそうに、そして花のお兄さん（仮）は安堵の表情で、それぞれいつの間にかバラージから姿を消していた。

いずれもこれから先、ウルトラ騎空団やアークエンジェルと大いに関わる人物だということは、今はまだあまり知られていないのだった。

〈続く〉

カガリ再び

「大した装備も無いのに砂漠を飛んでもなあ……あの砂漠の怪物が出たら副長さんの機体しかまともに動かなくなるんだろ？」
「だがアークエンジェルは可怪しい沈み方をしていた。彼処には何かあるかもしれない。それに……」
「ん？」
「いや、何でもない」

ムウのスカイグラスパーとサーガのダブルオークアンタはアークエンジェルが砂漠の下へ沈んだ場所に来ていた。目的はアークエンジェルの捜索……と言いたいところだが、彼らの機体では砂漠を掘り進むことなど出来ないし大出力武器で目標地点をふっ飛ばすなんてやったら怪物に気付かれる可能性もある。一縷の望みをかけてひょっこり出て来てくれたらなどと考えていたが、世の中そう甘くはない。

「しかし何だってまたそんな奴らが出始めたんだ？　宇宙じゃユニウスセブンで襲ってきた虫みたいな奴や先遣隊を壊滅させたクラゲみたいな奴に加えて、第８艦隊とザフトを見境無く消し飛ばした所属不明の機動兵器……おまけに地上に降りた途端これだ」
「一つだけ言えるのはナチュラルとコーディネイターで争っている場合ではない。それだけだ」
「ま、あんなん見せられた身としてそれも納得なんだがね。悲しいことに俺らだけがそう考えても……!?　何だ、砂漠が盛り上がって……！」
「奴か……!?　いや、熱源反応はかなり大きい、それもこの反応は！」

突如、砂漠が盛り上がりその中の巨大な熱源反応を察知すると、砂が落ちていくに連れて中のもの――アークエンジェルが姿を現した。

「アークエンジェル!?　何がどうなって……いや、そんなことは後回しだ。こちらムウ・ラ・フラガ！　アークエンジェル、応答しろ！」
『こちらアークエンジェル、マリュー・ラミアスです。ご心配をおかけしました、フラガ少佐』
「マジか……色々聞きたいことはあるが、とりあえず無事で良かった。一先ず俺達についてきてくれ。積もる話はそっちでしよう」
『了解しました』

お互い無事だったことに安堵しつつ、スカイグラスパーとダブルオークアンタの後を追い、アークエンジェルはレジスタンス『明けの砂漠』のアジトへと移動する。

☆

――明けの砂漠のアジト――

「地底の国ぃ？　そんな夢おとぎ話みたいな……」
「まあ、そういう反応をするわよね……ナタル、あの時の記録は？」
「戦闘時のみになりますが、残してあります」
「オイオイ……またどエラい話かよ」

マリューとナタルからまず簡単に話を聞き、参ったと言わんばかりで頭を掻くムウ。先程サーガと似たような話をしていたが、まさか帰って来たアークエンジェルの艦長と副長からもブッ飛んだ話を聞かされるなど予想出来るわけがない。いや、ここ最近の出来事から多少は想定していたが。
一方、タイガ達はサーガ相手に興奮気味に話している。その様子をレジスタンスが凝視しているが仕方ない。何せウルトラマンの姿など彼らは見たことがなかったのだから。
「で、ネクサスがノアになって俺達を地上へ戻してくれたんだ！」

「そうか……やはりあの時の感覚はノアか。相変わらずというか何というか、本体でないだけマシだったな」
「……ちょい待ち、本体じゃないって……本体だとアレより強いのか!?」
「いや、確かに元が防衛機構のようなものならばそれも納得だ。しかしノア本人はあれよりも更に強いとは……」

とはいえ、彼らはまだいい。問題はとある二人の方だ。明けの砂漠のリーダー格であるサイーブに言われ、ストライクのパイロットであるキラを呼び寄せたのだが……。

「ああっ！」
「あれがパイロット？　まだガキじゃねえか」
「つっても、他の機体も似たようなものらしいぞ」
「あの青い剣のＭＳに乗ってたのは立派な大人だろ」
「あぁ……お前っ！　お前が何故あんなものに乗っているっ！」

明けの砂漠の面々が口々に呟く中、一人の少女がキラに掴みかかったのだ。しかし当然ながら黙ってやられるキラではなく、その腕を掴んでキョトンとしている。
この少女は気が強いというか短気というか……サーガに同じ事をして躓かされたのに学習していないのだろうか？

「……あっ！　君はあの時、ヘリオポリスにいた……」
「ッ……離せ！　このバカッ！」

振り払おうとしてキラの顔に拳が当たろうとしたその時、バシッと少女の拳が誰かに受け止められる。

「……ふぅ、間一髪」
「ダイゴさん！」

「ダイゴ兄様!?」
「「「「え?!」」」」

ダイゴの乱入はともかく、まさかの兄様呼びに周囲は騒然とするのであった。

☆

――ザフト・ジブラルタル基地――

『両名とも無事にジブラルタルに入ったと聞き、安堵している。先の戦闘では御苦労だったな』
『ぶっちゃけ俺達よりも良く頑張ってくれたよ。こっちは赤い強襲機相手に良いトコ無しだったからさ』

クルーゼとベリアルから送られてきた映像付き音声メッセージを再生している、どうにかジブラルタル基地に降下出来たイザークとディアッカ。あの状況で無事だったのは偏に機体性能のおかげではあったが、結果的に良かったのでこの際それは置いておく。

「死にそうになりましたけど」
『残念ながら足つきとストライクを仕留めることはできなかったが、君等が不本意とはいえ共に降りたのは幸いかもしれん。足つきは今後地球駐留部隊の標的となるだろうが、君達もしばらくの間だ。ジブラルタルに留まり、共に奴等を追ってくれ。無論、機会があれば討ってくれてかまわんよ。ただし、同乗していた部隊……あれらに関しては無理はしないように。映像を見る限り戦力は分散されたのだろうが、新たに未確認機が三機確認された』
『幸いっちゃ何だが、足つきの方にあの厄介な可変機や赤い強襲機はいないらしくてな。代わりに連中の母艦らしき艦にその三機共々収容されたようだ。ぶっちゃけそっちは放っといていい。君達二人も

知っての通り、あの二機はやたら腕が立つ上に三機の未確認機も詳細がまるで分からない。寝ている熊を態々起こして返り討ちに合う必要もないだろう』

クルーゼとベリアルは言葉を選んで告げていたようだが、色々あって苛立っていたディアッカには皮肉のように聞こえたらしい。

「宇宙には戻ってくるなってこと？　俺達に駐留軍と一緒に足つき探して地べたを這いずり回れって言うのかよ。あん？　おい、イザーク！」

ディアッカを一瞥すると、イザークは前回の出撃時からしていた包帯を外す。そこにはくっきりと傷が残されていた。

「機会があれば、だと？　討ってやるさ……次こそ必ず！　この俺がな!!」

短期間に幾度となく辛酸を嘗めさせられた屈辱からか、元々プライドの高いイザークはアークエンジェルとウルトラ騎空団……特に一誠の乗る量産型ゲシュペンストＭｋ―Ⅱ改に強い執着を抱いていた。それが単なる負けん気からなのか憎悪からなのかはさておき。

そんな二人に声をかけた人物がいる。

「逆境にあってなお闘志は衰えず、ひたすら燃え上がるのみ。大人としては戦場に駆り出してしまい情けないと思うが、実に逞しい若人よ」

「！」

その人物はアズナブル隊のランバ・ラル。アークエンジェルの降下地点を解析したシャアの指示によって、かつてガンダムに乗ったアムロを追い詰めた実績のある彼が先んじて地球に降下することになっ

たのだ。
「あ……貴方はアズナブル隊の！」
「猛将ランバ・ラル殿……！」
「フ……そう持ち上げんでほしい。私とて未だ連中とやり合って勝ち星の一つも挙げられん男だ。貴公らの気持ちもよく分かる」
ラルの表情は真剣ながらも何処か穏やかさがあり、何を考えてるか分からないクルーゼやベリアルに比べ二人も少しばかり緊張が解れる。
叩き上げの軍人であるラルは将来性のある若きザフトレッドの二人に道を示す。
「しかし敗北もまた先へと進むために必要なことだ。そこで終わるか、立ち上がりまた前を向くか……貴公らはここで終わる気はないだろう？」
「勿論です！」
「うむ。その返事を聞けて何よりだ。このランバ・ラル、元はゲリラ戦を得意とし砂漠での戦闘経験もある。微力ではあるが先達として、貴公らに地上での戦いの助力をしよう。連中に一泡吹かせてやるぞ！」
「はっ！」
直属の上官とは違う、力強い激励と後押しにイザークとディアッカは敬礼で返す。正直、この人が上官だったらと思わずにはいられなかった。
「よし、まずは機体の砂漠におけるＯＳ適応化から始めるぞ！　ただでさえ重力の関係で宇宙とは違う戦い方を要求される地上だが、砂漠や密林ではそれが顕著になる。一つ一つの積み重ねが勝利を手元に手繰り寄せるのだ。人型のＭＳが砂漠で戦う場合、特に気を付けなければならんのは接地圧や熱対流。砂という不安定な足場をモノにし、

ビームの減衰の原因となる熱対流の対策をする。地上での戦いとは、自然という巨大なものを制することが出来るか否かで変わってくるということを覚えておけ」

――かつてあのアムロが純粋に「勝ちたい」と思った男ランバ・ラル。その経験に裏付けられた的確なアドバイスは、逆に経験に乏しい二人を新たなステージへと引き上げることになる。

☆

レジスタンス『明けの砂漠』の拠点へ招かれたアークエンジェルとウルトラ騎空団は、サーガとムウ以外へ自身らが遭遇した出来事を事細かに話していた。

「……まさか言い伝えにあったバラージが本当にあったとはな。しかも地底にとは」
「おまけにそこの連中と協力して、その……アントラー、だったか？砂漠の怪物をぶっ倒したと」
「ええ……ただ、いきなり変容したのは予想外だったけれど。それに――」
「サーヴァント・ニトクリスに謎の敵……」
「アンタは何か知ってるのか？」
「聞いたことはあるが、俺はそちらにあまり詳しくない。敵に関しては何とも言えないが、サーヴァント云々は先輩の方がよく知っているはずだ」

実のところ、レジェンドはサーヴァントのみならずミニオンについても知っているどころか因縁があると言っても過言ではない。
兎にも角にも一応は解決した問題をぶり返して時間を取るわけにもいかないと、サイーブは話題を変える。

「そういや、アンタ達の中に変わった制服らしきものを着た優男がいただろ。アイツは誰だ？」
「変わった……？　副団長さんじゃなくてか？」
「ムウ・ラ・フラガ、後で話がある」
「待て待て悪かった！　そういう意味じゃなくてな」
「マドカ特務大使のことかしら」
「おそらくそいつだ。あいつが……カガリが兄と呼んでて気になってな」

「まあ、カガリがオーブの外にいたのは聞いていたけど……予想外過ぎる場所にいるんだもんなぁ」
「そういうダイゴ兄様こそなんで!?　アークエンジェルに乗艦してるなんて聞いてないぞ！」
「成り行きでそうなっただけだし、そもそもそっちに通信連絡さえ出来ないのに報連相は無理だって」
「うっ！　うぅ……」

そうだった、と思いカガリは言葉に詰まる。ダイゴはそんなカガリを苦笑し軽く息を吐くと、その護衛として付いてきていた傍らに立つ男性にも同じように苦笑した。

「あとキサカさんもブレーキ役ならやることは選んで下さいよ。体格が立派なお陰でレジスタンスとか言われたら一発で信じちゃいますよ、普通」
「いや、すまんな。偶然とはいえ、まさか君がここに来るとは思ってもみなかったんだ。それはお互い様だったようだが」

彼はレドニル・キサカ一佐（正確には一等陸佐）――つまりオーブ軍所属の高官である。故郷がこの地のタッシルであるため、彼が彼女をここに連れてきたとのこと。

「何にせよ、無事だったならいいさ。ただ……」
「「ただ？」」
「カガリはウズミさんからのお説教か、平手打ちの一発は覚悟しておいた方がいいかな」
「うええっ!? ダイゴ兄様、弁護の一つもしてくれないのか!?」
「あっちを出る前にカガリはどうしたのか聞いちゃったからな～……それにウズミさんの場合、『すまぬがこれは親子としてだけでなく、上に立つ者として必要な事。いくらそなたでもこれだけは譲れぬのだ』とか言って僕も黙らざるを得なさそうなんだよね」
「……下手したら一言一句そのまま言われそうだな」

ウズミからの信頼も厚いキサカも太鼓判を押す程にダイゴの予測発言は的を得ていたらしく、カガリはがっくりと肩を落とした。
彼女の名は『カガリ・ユラ・アスハ』――そう、ウズミ・ナラ・アスハの娘である。
以前、先んじてこの世界に来たダイゴがオーブの協力を得た時に僅かな時間とはいえ彼女の世話をしてからというもの、彼の――彼らのこれまでの戦いを事細かに話しているうちに懐かれたのだ。
無論彼がティガであることを知る数少ない人物であり、カガリとしては『人としてウルトラマンとして地球の危機に立ち向かった、今のこの世界にとって手本にすべき人物』と尊敬している。
故に、彼が今のコズミック・イラに起きている事件の数々に対抗可能な戦力――ガンダムの技術を齎してくれたというのにそれが戦争の道具となったことを許せず、情報の真偽を確かめるべくヘリオポリスまで来ていたということだ。
その後は知っての通り……キラによって救命艇に乗せられた彼女は紆余曲折の末、キサカに連れられこうして明けの砂漠に参加しているというわけである。
「けど、僕からはお説教とかそういうのは無し。ちゃんとカガリなり

に考えての行動なんだろうし、自分の目で世界を見ることは悪いことじゃない。感情的に行動して突っ走るところは、将来政治に関わるだろう立場を考えると褒められたものじゃないけどね」
「う……」
「飴と鞭の使い方が絶妙だな、君は」
「何分、本来の職場に破天荒な後輩が多いもんで」

この言葉でオーブ在留のクロガネやヒリュウ改にいるレイトやリクが盛大にくしゃみをしたことは言うまでもない。
この後、カガリは「あのパイロットに話さなきゃいけないことがあったんだ」と慌ててその場を離れ、ダイゴとキサカは顔を見合わせ苦笑した。

☆

マリュー達はサイーブから情報を聞きつつ、今後の進路について話し合っていた。その中で、アークエンジェル在留のウルトラ騎空団代表として参加したサーガは一人別の思考を張り巡らせている。

（ノアが依代を媒介に力の一端をこちらで使用したのは別にいい。問題はアントラーが突然変異したことだ。聞けばスフィアやゴーデスのようなものは現れておらず反応もなかったと言うし、アークエンジェルがこちらへ帰還する直前……つまり最後の曲面においてまるで増殖したかのようにいきなり多数現れた。少なくともアントラーにそんな力は無く、外部から何らかの干渉があったのは火を見るより明らかだ。ならば――）
「副長さん……おい、副長さん！　ったく、副長じゃなくてちゃんと副団長さんて呼ばなきゃダメなのか？」
「……っ！　何だ？」
「何だ、って……まあ放ったらかしにしてた俺達も俺達だけどな。これからの航路をどうするか、副長さんの意見を聞きたいんだよ。正直

なところ、副長さんのダブルオークアンタが俺達の中の最高戦力だしさ」
「何だって？　あの戦略級のビーム砲を持ってる機体じゃないのか？」
「ええ、ちょっと色々訳ありなのよ。あの武器も、それを使ったパイロットも」

サイーブはムウの発言に尤もな疑問で返す。だが、ガンダムXのサテライトキャノンの威力はともかくパイロットであった沙耶が使用後に不調をきたしたことや、そもそも月が出ていることが使用条件であることを踏まえるとそうは言えないのだ。
何よりあの戦い以降、沙耶自身サテライトキャノンの使用を忌避している。彼女の身に起きたことを考えればそれも納得だろう。

「そうか……あんな威力だ。分かってて使ったんならそんな風に言うはずねえ。起死回生に放った一発が相当予想外だったんだろうな」
「それで、当面の案は？」
「ジブラルタルを突破するか、紅海を抜けてインド洋から太平洋へ出るかって二択だよ。正直、団長さんやゼットがいれば前者を選んでたんだけどさ」
「この間の戦いで見たところ、今までのザフトのMSとは規格が違う機体が混じっていたようだが」
「ああ、ドートレス系列の機体だ。よく分からんが、どうもザフトに手を貸すスポンサーみたいのがいるらしい」
「そこの開発した機体ってことかよ。次から次へと悩みのタネが尽きないね、全く」

ムウが溜息を吐き、やれやれと頭を掻く。サーガは顎に手を当てて少し悩み、疑問に思ったことを尋ねた。

「……紅海を抜けるルートの場合、障害となるのは？」

「バナディーヤにいるレセップス……砂漠の虎だ」

☆

――レセップス・艦長室――

「ダコスタです」
「んー？」
「失礼します……うっ！　隊長……換気しませんか？」

先の完敗というべき敗走から少し経ち、バルトフェルド達も調子を取り戻しつつあった。艦長室へやってきたダコスタは、バルトフェルドの趣味のコーヒーによる匂いが充満した部屋に眉をしかめる。

「そんなことわざわざ言いに来たの？」
「い、いえ……そういうわけでは……出撃準備、完了しました！」
「ご苦労さん。あんまりキツイことはしたくなかったんだけどねぇ。ま、仕方ないか」

ダコスタを労いつつ、バルトフェルドも重い腰を上げる……が、ダコスタの表情は晴れない。

「ですが隊長……本当にやるんですか？　確かにレジスタンスには抵抗されていますが、まだそこまでのことでは……何より、スポンサーが送ってきたあの男は胡散臭過ぎます」
「ダコスタ君の意見は尤もだよ。だがさすがにザフトの大口スポンサーの意見もまた無下には出来ない。既にあの時、彼らから受領した機体を一気に消し飛ばされてしまったからな」

忘れもしない、ガンダムXのサテライトキャノンで機体諸共部下を大勢失った先の戦い。そのスポンサーから受領したドートレスのバ

リエーション機を根刮ぎやられてしまったのだから。

「それは……そうですが」

「ただ、あの男が胡散臭いってのは同意かな。見た目もそうだが、まず言動がどうもね」

☆

「ほほう、あれが噂のタッシルとやらですか。拙僧、これでもＭＳの操縦を覚えて以来、訓練は欠かさず行っていると自負しておりまして」

レジスタンスに参加している者達の故郷の一つ、タッシル。それを遠目に見ている者が一人。

「さて、砂漠の虎も作戦を了承したことですし、一足早く仕事をこなすと致しましょう。拙僧の愛馬、凶暴なれば！」

今、無辜の民に肉食獣が牙をむく――！

☆

一誠達はバラージでの出来事を思い返しつつ、そこで遭遇した事について考えていた。

「そのミニオンって一体何なんだ？」

「忌まわしい光神って言ってたけれど……もしかしてレジェンド様のことだったりしないかしら？　前回のミニオン……とかよく分からないことも言ってたし」

「我らが神の復活……神って聖書の神とか？」

「それはないだろう。あの世界の天界勢に次元を超える手段は無いはずだ。それに空の世界とも別の気がする」

「いつの間にかあのフラ男もいなくなってるしさ」

リアスやアズ達が遭遇したミニオン・ラース……その存在があまりに謎に包まれ過ぎて悩むばかり。悩むと言えばアズの事もだ。その謎だらけのミニオンがアズを見た途端、激しく動揺しだした。

「でもよ、アズは記憶喪失とかじゃないんだろ？」

「うん、ちゃんと記憶はある。でも……あんなのに会ったことなんてない」

「それ以上の追及は止めましょう。アズ自身が分からないのに追い詰めるようなことをするのは良くないわ」

当の本人が全く分からないのを無理に問い詰めて亀裂など出来てしまうのは良くないと、リアスがパンと両手を叩いて中断させる。

「それにしてもアントラーの方もおかしいだろ。アントラーって進化とかすんのか？」

「レイオニクスの力を借りて怪獣が進化するようなことは聞いたことあるけど」

「レイオニクスって勇治みたいなレイブラッドの遺伝子を持ってる奴のことだろ？　そんな奴がバラージにいるってことは、今もバラージはヤバいってことじゃ――」

「でもそれだったらとっくにバラージは壊滅してるはずよ。それとは別の何かがあったと考えるのが妥当ね」

「何にせよ、これらの情報は私達だけでは理解しきれませんし、判別も出来ません。もしかするとレジェンド様なら何か分かるかもしれませんから、記録として残しておきましょう」

しのぶの言葉に頷き、リアス達はバラージでの出来事を覚えている限り細く書き記すことにした。サーヴァント、というものについては後日沙耶が教えてくれるらしい。そしてそのサーヴァントが彼らに

とって掛け替えのない存在となっていくのは、そう遠くない日である。

☆

「ではこれより、レジスタンス拠点に対する攻撃を行う。気は進まんだろうが、スポンサーからの進言だ。既に現地ではそのスポンサーから送られてきた者が用意を済ませているそうだから、合流次第開始するぞ」

「目標はタッシル！　総員、搭乗！」

（何だろうな……物凄く嫌な予感がするぞ）

ジープに乗りながらバルトフェルドは胸の内に生まれた不安を拭えぬまま、タッシルへと向かう。

☆

――一方、オーブにて――

「人が突然消えた？　何だその抽象的な説明は」

「いえ、僕もそう聞いただけな上にそうとしか表現出来ないようで……」

ゲンはミライからとある事件の報告を受けていたが、何とも言えない報告にミライ自身が戸惑っているようだった。

（あの円盤生物……シルバーブルーメは消すのではなく溶かすタイプだ。だとすれば奴ではない。ならば別の怪獣か……もしくは宇宙人の可能性が高い）

己の師の一人であるセブン――ダンが狡猾な宇宙人達と戦ってき

たように、彼も動機不明な多くの宇宙人と戦ってきたため、そういったことに敏感なのだ。

「ミライ、今いる宇宙警備隊と銀河遊撃隊のメンバー総出でライブラリを調べてくれ。怪獣ではなく、宇宙人の仕業である可能性が濃厚だ。放っておけば被害が拡大するのは目に見えている、急げよ」

「G．I．G．！」

「俺は直接現場を調査する。これでもチーフから『事件は情報だけでなく、五感をフル活用して足で追え』と教わったからな」

「はい、僕もそう教えられました。レオ兄さん、気をつけて下さい」

「分かっている。ミイラ取りがミイラになるなど笑えん冗談だ、特に今回のような事件は」

ゲンは笑ってはいたが、纏った空気に一部のスキもなかった。ミライは矢的やこちらに来ていたムサシ、そしてアサヒの力も借りつつ過去の類似事件を調べていくことになる。

☆

「もう寝静まる時間ですね」

「そのまま永久に眠りについてもらおう……なんて言わないよ、僕は」

「はぁ……」

このアンドリュー・バルトフェルドという男は冷酷な指揮官ではない。生きてさえいれば希望はあると考え、いたずらに命を奪うことはしないのだ。

だが――。

「警告15分後に攻げ……何だ……!?」

「隊長！　タッシルが……！」

そう、突如としてタッシルの街に爆発が起き出したのだ。無論、バルトフェルド達の攻撃ではない。

「何が起きている！　攻撃命令はまだ出していないぞ！」
「隊長、アレを！」
「あれは……！」

彼らが目にしたものは、空からタッシルの街に降り立つ鋼の機体――ＭＳ。それも『ガンダム』であった。
そのガンダムは鉤爪状の腕で街を破壊し、爪の間から放たれるビームで街を焼き……その巨体で家屋を潰していく。

「何だあのＭＳは……!?　まさか！」
『おや？　御到着でしたか。あまりに遅かったので作戦を棄却されたのかと思い、この拙僧……単独で開始してしまいました』
「何だと……!?」
『砂漠の虎と呼ばれた貴方なら御理解しているでしょう。彼らが生き延びたとしても食料や水がなければ存命は絶望的……であれば！　一思いにその命を摘み取ってやることこそ慈悲であると！　かくいう拙僧も最初はそちらの作戦の方が良いのでは？と思いもしましたが今後の事も考えまして、このように』

悪びれもなくそう告げたのはあのガンダムのパイロット。彼からの通信がバルトフェルド隊全てに繋げられていた。

「どういうつもりだ！　いくらスポンサーからの遣いであっても作戦ではこちらの指示を――」
『生憎と拙僧、此度の件につきましては上から『すべき事したなら自由にして良い』と指示されております』
「!!」

穏やかに、しかし残酷な一言を告げられるバルトフェルド達。スポンサー側の者である以上、こちらの命令に相手への強制権はない。それもザフト側へ直接的な被害があるわけでもないので尚更だ。
さらに――。

『ンンンンン！　しかしこのままでは逃げ延びた烏合の衆が武器を手に取り蜂起する可能性が無きにしもあらず。であれば！　見せしめというのは多少なりとも必要でしょう！』
「な……！　やめろ！」

そのガンダムは逃げ惑う人々をビーム砲にて『焼き払った』。断末魔の悲鳴、恐怖の叫び。タッシルの街はたった一機と一人によって阿鼻叫喚の地獄と化した。

『ははははは！　ははははははは!!』
「貴様……何ということを……！」
『おや？　何を仰いますかバルトフェルド殿。相手の戦意を削ぐ、戦争なれば当然のことでありましょう。ましてやナチュラルとコーディネイターの溝、簡単に埋まるものとでも？　もはや戦う他ありますまい、そう……どちらかが滅びるまで!!』
「……！」

それは、バルトフェルドが悩んでいた事である。それを通信先の相手はさも当然と言ってのけた。そのものに言われてバルトフェルドは更に悩む。何が正しいのか、何がすべきなのか。
目の前の凶行を止められず、今もこうして怒りつつも呆然としているだけ。
破壊と殺戮は今もなお続けられていた。

☆

一度キラとしっかり話したカガリだが、また名前を聞くのを忘れたということで彼を探し回っている時に今度は三日月と遭遇。

「あれ？　あんた、ヘリオポリスの」

「やっぱりお前もか。なら一緒にいたあいつもここにいるのか？」

「一緒にいたあいつ……ああ、沙耶さんのことかな」

「この調子でいくとあいつもパイロットなんだろ」

「そうだけど。　ガンダムXっていうこの間の戦いで凄いビーム撃ったやつの」

「!!」

三日月がそう言うと、咄嗟にカガリは飛び掛かるが身体能力と経験の差で三日月に敵うはずもなく、あっさり組み敷かれる。

「いっ……！　は、離せ！」

「だって離したらまた掴みかかってくるんだろ。離すわけないじゃん」

見たところ自分と同じくらいの年齢なのに、その体格からは予想も出来ない力で押さえつけられカガリは藻掻くことも不可能。超人レスリングで関節技に興味を持った三日月は密かに学んでいたらしい。

「あんた、サーガ様にも同じように掴みかかったらしいね。ここでどんな扱いを受けてるか知らないけど、俺の優先順位は変わらないから。もし俺の大事なものに害を為すようなら――」

――潰すよ。

予想外の圧倒的なプレッシャーを放つ三日月に、カガリは心底恐怖した。見た感じの年齢は然程変わらないだろうに、その迫力は歴戦の猛者のそれだ。

無論、元の世界で死亡後、惑星レジェンドにて再度オルガ達と共に

生を得てからも幾度となく激戦をくぐり抜けてきたからであるわけだが。

「二人共、そこで揉め事？」
「！」
「あ、沙耶さん。ちょっとね」
「やり過ぎないように。私は先生ほど生身で規格外じゃないから、止めるとしたら大抵大規模魔術でドカンするしかないし」
「それは物凄く痛そうだ。気を付けるよ」

そういう問題じゃない、とカガリは思ったが口にしない。ふと見ると、沙耶は頭を押さえて少々辛そうにしていた。

「沙耶さん、まだ調子戻らないんじゃない？」
「いいえ、何か……頭が痛くなったのはほんの少し前からなの。地球への降下前、あの時もこんな感じで……」
「お……おい、お前……大丈夫か？」

少しだけ息は荒いが沙耶の意識も足取りもしっかりしている。とはいえさすがにカガリも心配なのか声を掛けた。沙耶も息を整えた後、大丈夫と頷いて返事をした直後……。

「どうした！」
「空が燃えてる！　タッシルの方向だ！」

それが聞こえた者達は愕然とする。

☆

そして、オーブでも――。

「ユウナ・ロマ・セイランが行方不明になった!?　……で、ソイツ誰なのみっつん」

「ホント興味ないことは頭に入ってないんですね、束博士……」

驚愕の表情から一転してあっけらかんとハテナマークを飛ばしつつ聞いてきた束に、ミツバはがっくりと肩を落としつつ「そこから説明しないといけないのか」と思ったがやって来たミナのフォローが入る。

「ウナト・エマ・セイランの息子だ」

「あ、ミナちゃん」

「一度会ったことはあるが、何というか……そうだな。矜持はあれどそれ以上に欲が強いと評するべきか」

「ほうほう。ミナちゃんも会ったことがある……その情報も加えて考えるなら身の程知らずのボンボンってとこだね」

「束博士、ちょっとは言葉を――」

「いや、強ち間違いでもないな」

「ええ……」

一度会ったきりのミナにも肯定されるほどのダメ男なのか……とゲンナリするミツバ。というか、それなら何故にそこまで大事みたいな感じになっているのだろうか？

「端的に言えばセイラン家が宰相家だからだ。そんな家系の嫡男ならば、たとえバカ息子でも不測の事態に見舞われれば否が応でも話題になる」

「ったくこれだから能無しのボンボンは困るんだよねぇ」

「全くだな。しかも、そのバカ息子の行方不明という事態を以て漸くウズミ・ナラ・アスハ以外の主だった氏族が腰を上げたらしい。アス

ハや我がサハク、そしてモルゲンレーテのエリカ・シモンズなどは以前から言っていたのだが……まさかアメノミハシラの件を伝えてもまだ生温い考えだったとは私も頭を抱えたぞ」

聞けばそのユウナ・ロマ・セイランとやら、護衛も付けず夜の街に繰り出した結果、例の事件に巻き込まれたとか。

「さすがバカだね」

「うむ、バカだ」

「お……お二人ともそこまでバカバカ言わなくても……」

「みっつんもバカ連続で言ってるよ」

散々な言われようだが仕方ない。それはともかく、いよいよ被害が無視出来なくなったのは事実らしい。オーブ側も本腰を入れて捜索隊を結成し、行方不明者の捜索に当たるらしいが……ミナから見ても無駄足になるだろうとのこと。オーブではこういった怪奇事件の前例が少な過ぎて対処らしい対処も出来ないということだ。

「すまんな、態々そちらにマニュアルまで用意してもらったというのに連中はロクに読んでなかったようでな……今、継国巌勝に徹底指導してもらっている」

「……それだいじょぶ？　訓練生死なない？」

「ギリギリまで追い詰めてアーシアに治してもらうマラソン形式らしい」

「つ……継国式デスマーチ……！」

そんな彼女らの心は露知らず、事件解決と今後のオーブの守りの為に巌勝特別トレーニングは更に苛烈になっていた。

それからすぐに行方不明者リストにある名前が加わることになる。

『ウルトラ騎空団・グランサイファー隊所属――』

コズミック・イラにジータやビィ共々訪れていた、グラン……ウルトラマントリガーが事件に巻き込まれたのだった。

〈続く〉

渦巻く悪意

――空が、タッシルが燃えている。

それを聞いた明けの砂漠の団員達は急ぎ準備を終え、出発しようとしていた。

一方でアークエンジェル組やウルトラ騎空団は次に取るべき行動を冷静に考えている。敵の敵は味方だからというわけではないが、いたずらに首を突っ込んでいいものか……。

「どう思います？」

「んー……砂漠の虎は残虐非道、なんて話は聞かないけどなぁ。でも、俺も彼とは知り合いじゃないしね。それでどうする？　俺達も行くか？」

「アークエンジェルは動かない方がいいでしょう。確かに別働隊の心配もあります。少佐、行っていただけます？」

「あ？　俺？」

「副団長さんのダブルオークアンタを除けば、スカイグラスパーが一番早いでしょ？」

「宇宙だったらリアスって子のシナンジュ……だったか。アレも相当なもんだけどなぁ」

正直、大気圏内……つまり地上戦においては三日月のバルバトスは別として、別れて降下したペガサスA――レジェンド側に有効な戦力が集中していたのだ。

ビームの減衰に対して実弾武器で固められたアルトアイゼン・リーゼ、抜群の機動力と射程を持つライン・ヴァイスリッター、豊富な武装と変形による臨機応変な対応が出来るZガンダム、そしてドグマを使用した地形に左右されない攻撃が可能のゼルガード……。

更にここに、パイロットの連携によって絶大な戦闘力を持つガンダムデルタカイとリ・ガズィカスタム、サテライトキャノン程ではないが一撃必殺の威力と長射程を有し汎用性に勝るバスターライフルを

備えたウイングガンダム（ＥＷ）も増援として加入している。しかもこの三機も変形機構持ち。
この状況において、せめて一機でいいからあちら側の変形持ちが欲しかったと言わざるを得ないマリューであった。
……だが、彼らは知らない。
燃えてるのはタッシルの街だけでなく、人々もだということを。
そしてそれは砂漠の虎でも、ましてやザフトでもなくたった一人の……いや、『獣』によって行われていることを。

☆

燃え盛るタッシル。
焼け焦げ、老若男女分からぬ屍の山。
砂漠の虎――アンドリュー・バルトフェルドは絶句していた。彼だけではない……出撃したレセップスに属するザフトの全員がその惨状に言葉を失い、それを実行した悪魔のようなガンダムを呆然と見つめている。
彼らはそこまでする気はなかった。確かに街を始め、食料や武器、燃料は焼き払う予定ではあったが……それは警告後、住民が避難する時間を与えた上で実行する手筈になっていた。
だが目の前のガンダムとそれを操る者はそんなことなど一切考えず街を焼き、逃げ惑う人々を容赦無く殺戮し――笑っていたのだ。
「た……隊長……」
「普通なら止めるべきだろうな。だが……やり過ぎているとはいえ、奴がやっていることと似たようなことを我々はやろうとしていた。ただ直接命を奪うか否か……違いはそれだけだ」
レジスタンスによる目立った被害は受けていない。先日の戦いでレジスタンスが仕掛けていた地雷に関しては、彼の部下の機体共々ガンダムＸのサテライトキャノンで諸共消し飛んだ。もし地雷で被害

が出ていたのならばもう少し気分に変化もあったのだろうが……バルトフェルドの表情は晴れない。

「彼らにしてみれば連合もザフトも変わらんのだろうな。宇宙からやってくるか、同じ地球の何処かからやってくるかの差しかない。しかし……これでレジスタンスがこちらに向けるのは憎悪しか無くなるだろう。ここまでされて黙っているとは思えん。ダコスタ、撤収する。あの機体にもそう伝えろ。もう十分過ぎるほどやったとな」

「は……え……」

「復唱!!」

「は、はいっ!!　総員、撤収!!」

珍しく語気を荒らげたバルトフェルドに驚きつつ、ダコスタは撤収の指示を出す。

「おや、もう撤収とは。ンンンンンン～……拙僧、些か消化不良気味ですが仕方ありますまい。あまりはっちゃけ過ぎて主に迷惑が掛かるのは望ぬので。ええ、ええ、そうですとも。拙僧にとって一番優先すべきは主でありまする。そして何より主自身が一番でなければ気が済みませぬゆえ！」

バルトフェルド達に続き、悪夢を引き起こしたガンダムとそのパイロットも引き上げる。

その地に無数の瓦礫と骸を、人々の心に癒えぬ恐怖と傷を残して。

☆

――オーブ――

宰相家たるセイラン家の嫡男ユウナ・ロマ・セイランとウルトラ騎空団グランサイファー隊のリーダー格たるグラン……オーブとウル

トラ騎空団の双方にとって見過ごせない人物が事件に巻き込まれた。
これによりウズミが今まで提唱していた『地球圏外からの、悪意を持った侵略者』というものが現実味を増し急遽対策会議を開くことになったのだが、結果は言わずとも分かるだろう。
元よりダイゴから齎されたこの情報を真摯に受け止め、考えていたのはウズミとカガリ親子にエリカ・シモンズなどごく僅か。
他の政府関係者はウズミからの又聞きのため、大半が夢絵空事か妄想としか捉えなかった。
その結果、ウルトラ戦士達が戦ってきた世界に存在していた防衛・特捜チームに比べて準備する機会や技術に恵まれていたにも関わらずその方面の対策が不十分だったのだ。
それでいて戦争のことに関してはダイゴの齎した技術で連合に肩入れする者がいる始末……これではウズミが頭を悩ませ、カガリが怒りに震えるのも分かるというもの。

（ただ話されるだけでは信じられぬのも無理はない。だがダイゴ殿……彼は自分が持たされたもの――あのＭＳに使われている技術を提供してまで脅威に立ち向かってほしい旨を訴えてきた。あの機体性能は今のこの世界のＭＳ、いや総合的な技術の面でも遥かに上をいくものだとすぐに分かる。それを目先の利益に使い、こうして懸念していた事が起きても本来の目的に全くと言っていいほど使えていなかったツケが今になって回ってきたのだと、何故この期に及んでまだ理解出来ぬのか）

実際、今飛び交っている意見は『外出を控える』『パトロールを強化する』などごくごく当たり前の方法……外出を控えるなどいつまでも出来ることではないし、大した装備も無くパトロールを強化したところでアメノミハシラに現れたという怪物みたいなものが出てきたらどうしようもない……逆に被害が増すだけだ。
この場において数少ない同士であるロンド・ミナ・サハクを見てみると、視線が合ってすぐに溜め息を吐き『こいつらではダメだ』とで

も言うように首を振ってやれやれ感を出している。
そして――。
「此度の事件、我々だけでは手に余る。ここは彼ら――ウルトラ騎空団の手を借りるのが最善だと、私は意見する」
――ウズミの求めていた答えを発言してくれた。
「何だと……!?」
「確かに彼らはオーブ在留の傭兵団(※ということになっている)だが……」
「今までの実績があるとはいえ、これ以上――」
「これ以上被害が拡大するのを指を咥えて見ているとでも言うのか?」
ギロリと官僚を見渡すミナに、ウズミを除く誰もが息を呑む。かのアメノミハシラにて得体の知れぬ怪異と遭遇し、ウルトラ騎空団に救われ生き延びた彼女だからこそ今回の事件の恐ろしさを深く理解している。
実を言えば彼女はレジェンドと婚約してからすぐ、レジェンドにかつて彼が遭遇した宇宙人関連の事件を幾つかピックアップして書物化してもらい頭に叩き込んでいた。レジェンドの書き方が上手かったのもあり、ついつい何度も読み返し熟読、夜更ししてしまったりもしたのだがそれはまたいずれ。
「下らんプライドでは自分達を守れても、国民とそこからの信頼は守れんぞ。お前達が何のためにこの場でその椅子に座っているか、今一度思い返してみよ」
ミナの言葉に黙るしかない官僚達。彼女がウズミへと視線を向けるとウズミは感謝しつつも決意に満ちた表情で頷き返した。

（後は任せたぞ、ウズミ・ナラ・アスハ）
（会議の風向きを変えてくれた事を感謝する、ロンド・ミナ・サハク）

レジェンドとダイゴ＝ティガ……二人のウルトラマンとそれぞれ繋がりのある二人によって、『人間消失事件』と名付けられたこの事件はウルトラ騎空団とオーブの合同捜査が行われることとなった。

「――というわけだ。頼りきりですまんが、どうにかお前達が合理的に捜査出来るまで持ち込めた」
「さっすがミナちゃん！」
「ああ、お陰様で諸手を挙げて現場に出向けるのはかなり助かる。なんてったって、この手の事件の専門家が総出で調べてくれるんだからよ」
「あとは種と仕掛けさえ分かりゃこっちのモンってな！　今の俺達が出来んのは被害者を減らす為に、俺らの中でも戦闘が得意な連中で固まってパトロールってことだ！」

ミナが直々にウルトラ騎空団へ会議結果通達を行い、束やオルガ、カミナは喜びの声を上げる。
オルガとカミナの言う通り、現場を調べる名目で一足先に捜査兼パトロールに出ているゲンを除き、ウルトラ騎空団所属でコズミック・イラに来ている宇宙警備隊及び銀河遊撃隊に属するウルトラ戦士達が過去のデータから類似事件を洗い出している最中だ。
更に、戦闘面においてはナチュラルだのコーディネイターだの以前に次元が違う連中だらけのウルトラ騎空団ならパトロールも立派な戦術になる。

「それにグランの件もある。あれであいつは結構腕が立つ……なのに行方不明ってことはそれ以上の腕前か、もしくは何か特殊なやり方で

陥れたってことだ」
「おまけにトリガーだしね」
「そこだぜ、問題は。グランの技量なら余程じゃなきゃいざとなったら変身出来るだろ。オルガの言ったことも踏まえると、変身してもどうにもならねえ状況か……それか変身する間も無かったかってことも一緒に考えられるぜ」
「ならばこそ腕の立つ複数人パトロールとやらか」
「おうよ！　一人より二人、二人より三人！　塵も積もれば山となるってな！　尤もウチには塵どころか最初っからエベレスト級が山程いるけどよ、本家が山脈だけに！」

「俺も含めてな！」と親指で自分をドンと突きながらドヤ顔でサングラスを光らせつつ言うカミナだが、彼を知るものならばそれが事実だと彼同様胸を張って言える。何より不気味な事件が起きている中でこのカミナの自信に満ちた力強い発言は、周りに安心感をも与えてくれた。

「旦那がいねえ？　大将がいねえ？　それが不安ならそんなもん宇宙の果てまでぶん投げちまえ！　あの二人や一緒の奴らが帰ってきた時、俺達の武勇伝の一つも聞かせてやるのが神衛隊……いいや！　ウルトラ騎空団ってモンだ！」

マントを翻し、刀を携え不敵に笑うカミナは改めて告げる。

「事件は今んトコ全部夜に起きてる！　ってことは昼間より夜の方が手掛かりは掴みやすいってこった！　勝負は真夜中!!　相手の策に完全武装で飛び込んでやろうじゃねえか!!」

☆

サイーブを始めとした『明けの砂漠』構成員とカガリ、それにアフ

メドという少年はタッシルに到着するとまずその惨状に愕然とした。

「街が……」

「み……皆は……」

同時刻、スカイグラスパーで出撃したムウもタッシルの状況を空から確認していた。

「あぁ……酷え……彼処に転がってんのは遺体か？　原型があるかないかギリギリのラインで焼いてやがる……偶然じゃない、狙ってやったってことか。やりすぎとかそういうレベルじゃねえぞ、こりゃあ……」

焼き払われたのは街のみならず、人も。それから少しして発見した生存者は予想より多くいたものの、既に元凶の姿は影も形もない。

それを通信で聞いたマリューは訝しんだが、今すべきことはそれではない。ナタルや医師、他数名をバギーで送り出しはしたがその状況では人手が足りるかどうか……そういえばウルトラ騎空団のしのぶは医師じゃなかったかと思い出したところ、今度は別の所から通信が入る。

その声の主は……。

『おう、美人艦長！　ビッグランダーだ！』

「え……!?」

『俺らもちょっとばかし行ってくるからよ！　乗りたい奴はさっさと格納庫に来いって言っといてくれ！　あと十分ほどで出るからな！　んじゃ！』

「あ、ちょっと！」

言いたいことだけ言って通信を切ったビッグランダー……先のバラージにてウルトラ騎空団入りしたランダーズのリーダー。彼のビークルモードはキャリアカートラックであり、ナタル達が搭乗したバギーより格段に大きく積載容量も多い。確かに彼が――彼らが行ってくれるのなら心強いことこの上ないのだが……。

「まさかと思うけど、彼らだけで勝手に出ようしてるわけじゃ……ないわよね」

ダ・ガーンから聞いたところによると、一誠や彼と（もはや一応と付くが）一体化してるトライスクワッドはダ・ガーン達の隊長もしくは指揮官の立場にあるようで、基本的に彼らの指示抜きであまり勝手な行動は取れないらしい。らしいというのは今までダ・ガーンしかおらず、そのダ・ガーンも品行方正で真面目な為そういった前例が全く無かったからなので、これは仕方ない。

しかし、その心配はアークエンジェルを出る時の通信でちゃんと出発メンバーを告げられたことで杞憂に終わることになった。

「ようし大将、全員乗ったな!?」
「おう！　タッシルまでの道は大丈夫なのか、ビッグランダー!?」
「あたぼうよ！　伊達にランダーズのリーダー名乗ってるわけじゃねえからな！　長距離移動は任せとけ！　行くぜェ!!」

そういうとビークルモードのビッグランダーはアークエンジェルの格納庫から勢い良く発進する。その荷台にはしっかりとドリル・ターボ・マッハランダーが格納されていた。

最初は『ダ・ガーンジェットでも良かったんじゃ』と思った一誠だがビークルモードとはいえ合体に一手間かかるのでランダーズに頼むことにしたらしい。

出発メンバーだがダ・ガーンやランダーズを別として、一誠とトライスクワッドは当然、更に医者であるしのぶに加えて沙耶とアズが同行することになった。
そこへアークエンジェル側から何名かが追加、彼らもランダーズに関してはバラージで知っていたため問題はない。トライスクワッドは車内スペースを確保するためにアストラル体になって一誠の傍にいる。

「そういえば、しのぶは分かるとして沙耶とアズは何で一緒に行く気になったんだ？　てっきり俺はリアスが来るかと思ったんだけど」
「タイガの疑問は尤よね。私がリアスに頼んだの、代わってくれないかって。何というか……行かないといけない気がしたのよ」
「ふむ……ではアズは……いや、私も分かったぞ。私達はアントラーと戦っていたから見ていないが、バラージで遭遇したというミニオンのことだな？」
「ええ。あのミニオン、どうしてかアズに対して驚いたような……それか恐怖している素振りを見せたわ。アズ自身は身に覚えは全く無いって言うし、誰かしらが傍にいたほうがいいと思ったのよ。それも生身でも戦闘可能なレベルな人がね」

ついでに言うなら、バラージと違って地上の砂漠なら沙耶も遠慮なく養母仕込の大規模攻撃魔術が使えるのでミニオンにも遅れは取らない。アークエンジェルに残ったままだと、最悪侵入でもされたらバラージの時以上に身動きが取れないこともアズを連れ出した理由だ。

……ちなみに今アークエンジェルに残っているサーガ達だが……。

「出撃命令があるかもしれないし、軽く何か食べておこうか」
「あ、俺は卵焼きサンド。デカいやつで、辛子マヨネーズマシマシ」

ダイゴにより、キラを含めた待機中のメンバーで軽食を取っていた。

「何でだろ。偶に俺、飯を食べる側じゃなくて提供する側な感じの時がある気がするんだ。何か米と……おみおつけ？ってやつなんだけど」

「おみおつけ……？」

「ああ、味噌汁の丁寧語バージョンって言えば分かるかな。実は先に生まれたのはそのおみおつけって言い方なんだよ」

「ダイゴさん物知りー！　しかも簡単で分かりやすい！」

「分かりやすいのはそれしか意味がないからだから、僕の説明どうこうじゃないんだけどね」

無論、学生チームも一緒だったので声を上げたミリアリアと同じことをトールやサイも思っていたりする。

それから……それを言い出したら三日月が二刀流でとんでもない剣技をバンバン放ちそうな気がしてきたが、スルーしよう。

現場に到着してみれば先に現場に行っていたムウとナタル達――正確にはムウと現地住民＆カガリが何やら気まずい、というかムウが気まずそうにしており……。

「おう、鷹の兄ちゃんどうした？」

「「「「車が喋った!?」」」」

「あん？」

ビッグランダーが口を開けば案の定カガリや住民達から驚きの声が上がった。ナタルはともかく、元凶とも言えるムウまで頭を抱えたが……。

「……貴方の不謹慎発言が原因じゃないの？」
「ホントいきなりピンポイント爆撃してくるねお前さんは!?」

沙耶の直球どストレートな正論で撃ち抜かれた。それからすぐに実体化したタイガ達にも驚かれたが、彼らがランダーズに積んでいた補給物資を持ってきてから警戒は薄れる。特にタイタスはやはりその筋肉から子供達に大人気だった。

「あんたよりあっちの方がよっぽどマシみたいだな！」

気性が荒いとはいえ、カガリがここまで言うとは何を言ったんだと思う沙耶だったが、まずはタッシルに起きたことを聞いていく。その中で気になったのはやはり『悪魔の如きＭＳ』という発言。

「ザフトにそれっぽい機体はあるのかしら？」
「いや、そんな機体があるなんて聞いた話……はないが、決めつけるのは早いな。クルーゼの野郎やその参謀が乗ってたあのゴツくて早い奴だって情報が無かったんだ。ザフトが新型を開発していても――待てよ？」

そこでムウが思い出したのは先日目にしたドートレス系列の機体。ザフトとは規格が異なるＭＳだったが、もしやそれと関係あるのではないか。

「ザフトのスポンサーがどうとか……」
「あのジンとは違うＭＳのことですか？」
「ああ。規格が違うにしたって、いくら何でも変わり過ぎだろ。考えつくのはそこと関わりのある機体なんじゃないのかってことだ。そもそも砂漠を根城にしてる奴が、この地形じゃバランス取り難い二足歩行の機体をいきなり投入してくるってのが気になったんだよ。そのスポンサーとやらが寄越した機体のスペックが余程良かったのか

ねぇ。確かに実際見た限りじゃ相当だったが……」

それも簡単に全滅させちまったし、と口に出さずムウは思った。先日のファイヤーワラビーはその性能を見せつける前にガンダムXのサテライトキャノンで纏めて消滅させられ、跡形もなくなっている。

だがそれでも砂漠を高速で駆け抜ける人型の量産型MSは衝撃的だったのだ。

そんな話をしている時――サイーブが明けの砂漠の団員らと何やら口論する声が聞こえてきた。

どうやらバルトフェルド達が撤収してそう時間が経ってないことに気付いた団員が追撃しようとしているらしく、それを止めるサイーブと衝突してしまったらしい。

「まさか俺達に、虎の飼い犬になれって言うんじゃないだろうな!?サイーブ!!」

「うっ……」

さすがに止めるべきかと沙耶が思った瞬間、背筋が凍るような気配がして――。

「すみませぬがほんの少しだけお時間を頂けますか?」

声のした方を皆が向くと、そこにいたのは奇抜な格好で大柄な男性。中々に鍛えられた身体だ。

「何だお前は?　俺達はこれから砂漠の虎を追うんだ!　邪魔をするな!」

「いえいえ、邪魔はいたしませぬとも。ただ一つだけお尋ねしたい事がありまして……それだけ教えて頂ければ満足です故」

丁寧な言葉遣いではあるが、その喋り方とは裏腹に纏う空気が不穏なものだとこの場において気付いているのは沙耶だけ。大抵の者はやはり姿格好にばかり目が行っている。

「その手にした銃火器類、人の身には多大な効果を発揮するでしょう。しかしながら機動兵器には余程のものでなければ無意味ではないですか？　苦渋を飲み、生きる道を選ぶのもまた戦いなのでは？」

「そんなことをして何の意味がある！　見ろ、街がこんなにされて黙っていられると思うのか!?」

「もうタッシルでは暮らせない……！　ならせめて虎に一矢でも報いてやるだけだ！」

「つまり……ここまでされて情けをかけられるなら、死んだ方がマシだと？」

「ああ、そうだ！　納得したならさっさと退け!!」

その男性は団員に怒鳴られ、軽く溜め息を吐く。

そして――。

「分かりました。

では、死んで頂きましょうか」

「は――」

ド　ス　ッ　！　！

――時が、止まる。

気付いた時にはその団員の身体を――男性の手刀が貫いていた。血に濡れた男性の右手が団員の背から生えており、そこから滴り落ちる血が砂漠へ染み込んでいく。

言うまでもなく、団員は絶命していた。

「きゃあああああ!!」

「う、うわあああああ!?」

「エドル!!」

混乱に陥るタッシルの生き残った人々。ムウやナタル、それに一誠やタイガ、しのぶらも突然の出来事に絶句していた。

「な……き、貴様！　どういうつもりだ!?」

「ンンンンンンン？　どういうも何も、死にたがっていたようなので殺して差し上げただけですが？」

「何だと……!?」

まるで「はて？」と人の死を気にも留めない様子で平然と言い放った男性に、ムウとナタルは戦慄する。

「このような装備でＭＳに挑んだところで無駄死には目に見えておりまする。であれば！　先程この方は『死んだ方がマシ』仰られましたので、拙僧が介錯したまでのこと。ユニウスセブンを撃ったことや、地球へニュートロンジャマーを撃ったことと何の違いがありましょう？」

「「「「!?」」」」

「こうすればよかったのです。人を撃つ覚悟がある者、命を捨てる覚悟がある者だけを狙うなら核やニュートロンジャマーもまた違った見方をされたでしょう。しかし!! 撃たれたのは無辜の民!! 撃たれる謂われのなかった人々!! 何故です!? 何故撃ったのですか!?
何故何故何故!?」

鬼気迫る問い掛けを放つ男性の纏う雰囲気に呑まれ、反論する者――出来る者はいない。
尚も男性は続ける。

「ユニウスセブンに何らかの理由でナチュラルがいることを考えなかったのか!? 地球で暮らすコーディネイターのことは考えなかったのか!?」
「「「!!」」」
「いいえ! いいえ! そんなことはどうでもいい!! そう! もはやその時点で『如何にして相手を滅ぼすか』それしか考えられなくなっていたのです!!」
「な……それは……!」
「――ですが、それはもう過ぎた事。撃ってしまった事実は変えようがなく、犠牲になってしまった人々のことも仕方がない。貴方々もよく使うし、好きでしょう? この言葉を」

先程までの雰囲気とは一転し、再び現れた時と同じ空気を纏う男性。表情も柔らかいものだが、返ってそれが不気味であり先の言葉と合わせてムウや一誠達の心を抉る。

「結局、如何なる場合でも強い者、勝った者が正しいのです。そうでなくてもそうなってしまう。いい例がレーティングゲームでしょう」
「……!! お前、何で……!?」
「何で知っているか? 実は拙僧とマスター、幸か不幸か偶然にも一端の上級悪魔に出会って言われたのですよ。『自分が勝てばその女は

妻、貴様は下働きになれ。そちらが勝てば望みを叶えてやる』と」
「!!」

周囲の者はレーティングゲームやら上級悪魔やら急に訳の分からない単語が出てきて困惑し始めるが、それが何かを知る一誠やタイガ達はより警戒を強めた。

「いやはや劣勢も劣勢、悪辣にも程がある。相手はフルメンバーで強者揃い、対してこちらは拙僧とマスターのみ。これのどこがゲームと言えましょうか？　故に些か本気を出してしまいまして」

一呼吸置いて――。

「拙僧、相手の『王（キング）』を含めて皆殺しにしてしまいました。一方的でしたが」
「「「「!!」」」」

大半の者は皆殺しという言葉に、一誠やタイガ達は『一方的に、それもおそらく目の前の男性がたった一人で』ということに戦慄する。
相手が一般人等ならまだ『この男性が裏社会の者だった』などと納得は出来るが、どの程度の力を持っていたか定かでないとはいえ上級悪魔と（男性いわく）強者揃いな下僕フルメンバーを一方的に皆殺し……即ち虐殺とも言える結果で勝利したということは、眼前の存在は相当な実力者。それも命を奪うことに躊躇いのないというイヤなオマケ付き。

「……ウルトラ騎空団所属の者以外は下がりなさい。この男は普通じゃない。アズ、貴女も――」
「おや？　おやおや？　もしや貴女様はかの月王国（ルナ・ブリテン）先代女王の御息

女の一人にして現女王陛下？
　ンンンンン!!　僥倖ッ!!」
「「「「!?」」」」
「よもやと思いましたがその反応！　本人に間違いありますまい！
まさかこんな場所で会えるとは!!　実は拙僧のマスター、貴女様の御母上と少しばかり因縁がありまして。立場もありますでしょうし手荒なことはしたくありませぬ故、自らの意思にて何卒ご同行を――」
「お断りするわ」
「ンンンンン～即答ですか。一筋縄ではいかぬと想定していましたが、あまりに早い拒絶……拙僧、只今悲しみにうち震えておりまする」

　およよ～と目元を隠す男性だが、逆に白々しすぎて沙耶はイライラしている。養母仕込の大規模魔術を本気でブチかましてやろうと思い始めた時……。

「まあ衝突は起こりざるを得ないと予想済みでしたし、遅いか早いかの問題だったのですが。予定通り腕尽くにて」
「分かりやすい反応をありがとう。尚更行く気が無くなったわ。ただ、名前くらいは聞いておこうかしら」
「ンンン～申し訳ありませぬが、拙僧も立場上真名は明かせませぬ故。そうですな……別人格（アルターエゴ）・辺獄（リンボ）とお呼びください」

　相手も互いに相容れぬ存在だと予め予測していたらしく、即座に戦闘態勢へと移行した。
　ミニオンに続く、新たな正体不明の敵との戦い。しかも一誠達はムウやナタルらに加えてタッシルの街の生き残りである人々も守らねばならない。

　一誠達ウルトラ騎空団と未知なる相手――リンボの最初の死闘が今、幕を開ける。

☆

――???――

「う……あれ、僕は……ッ！　スパークレンスとハイパーキーは!?
……ある。よかった……」

行方不明とされているグランは気が付くと訪れたオーブと全く違う場所に倒れており、辺りには同じく多くの人々が倒れていた。
万が一を恐れ、自身にとってもはや必要不可欠となったＧＵＴＳスパークレンスとＧＵＴＳハイパーキーの所在をすぐさま確認し、全種しっかりあったことに安堵して再び仕舞う。

「ここは何処なんだ……？　見た感じ、エリアル・ベースとかヒリュウ改の中に似ているけど、少し暗くて不気味だな」

どうやら鉄か金属で作られた部屋の中のようで、とりあえずグランは今倒れている人達が大丈夫かどうか起こしてみることにする。

「君、しっかりして！」
「うぅ……何だよマユ、充電器ならいつもの場所に……」
「いや僕マユって子じゃないから！　充電器とかいいから起きて！」
「……うえ？　うわっ!?　あんた誰……ってここ何処だよ!?」
「えー……あんまりあからさまに驚いて離れられると結構傷付くんだけど……」
「あ、はい……何かすみません」
「僕はウルトラ騎空団所属のグラン。君は？」
「ウルトラ騎空団ってあの……あ、俺はシン。シン・アスカです」

――新たなる光になった少年は、近い未来……新たなる輝きとなる少年と出会う。

〈続く〉

C・E・２０２０年の挑戦（前編）

何処かの部屋で出会ったグランとシン。
彼らの出会いは偶然か、運命か。

☆

――夜のオーブ首都・オロファト――
ウルトラ騎空団はこちらの世界（コズミック・イラ）に来ており、かつ生身での直接戦闘が可能なメンバーをいくつかの班に分けてパトロールを行っていた。
事件が起きやすいのはオーブ本島であるヤラファス島と、モルゲンレーテ本社がありオーブ在留中のウルトラ騎空団が拠点とするオノゴロ島の二つ。
他の島にも万が一に備え少人数派遣してはいるが、やはり本島と軍事の中心地たるオノゴロ島は最も重要な場所であるため、ウルトラ騎空団もそれを考慮し優先的に人数を割いている。

「やっぱ例の事件を警戒して、あまり町中に人影はねえな。時間的に家屋の明かりは結構点いてるからそれほど暗くないのは助かるけどよ」
「うむ！　古来より火は魔除けとして言い伝えられているからな！灯火と言うように明かりは安心感を与えてくれる！」
「パム～」
「怪しい人影を見たらまずは俺に任せな。親父仕込のウルトラ眼光で宇宙人が化けてないか見抜いてやるぜ！」

竜馬・杏寿郎＆パム治郎・レイト＝ウルトラマンゼロの三人と一匹によるチームはオロファトの町中を歩いていたが、一応呼びかけも効果があったらしく外を出歩いている人の姿は見えない。あっても国防軍の関係者か警察官ぐらいで、敬礼や会釈を返してくれる程度だ。
これに関しては先の会議におけるミナの意見に賛同する声が多

かったことに加え、ウルトラ騎空団のアメノミハシラでの活躍、そしてそのウルトラ騎空団のトップであるレジェンドとミナが婚約者同士かつ互いがしっかり信頼しあっているという多くの要素が積み重なって成し遂げられた結果だ。
当のミナはというと、有事の際に備え束・クロエと共にオノゴロ島のモルゲンレーテ本社にて寝泊まりしつつ、M1アストレイの性能向上・安定化の協力とゴールドフレーム天津神の調整に勤しんでいる。
「そういや、事件の方はともかくだ。下手すりゃ『鬼』も出てくるかもしれねえ。そういうことも考えた上でお前ら鬼討組を分けたってことか」
「お館様やサーガ様が不在な今、『鬼』に直接対抗するには俺達の新たな日輪刀か巌勝殿の鬼神刀、そしてパム治郎の援護しかないからな！」
「そのパム治郎は基本的に杏寿郎と一緒に動いてるしよ。出てこないのが一番だけどな、来るなら鬼討組がいる班とぶつかってほしいぜ」
……そう、敵は何も件の事件の犯人だけではない。まだシルバーブルーメも発見報告は無いし、上述の通り『鬼』が現れる可能性も有り得るのだ。
どちらも質が悪い相手ではあるが、攻撃の通用するシルバーブルーメは戦力さえ十分ならまだどうにか出来る。
問題となるのはやはり『鬼』の方で、小型ないし中型までなら鬼討組が一人でも問題無い。だが大型はそうもいかず、鬼討組複数人もしくはどうにかして攻撃を通す手段が必要。
そして現在後者でそれが可能なのはレジェンドとパム治郎、つい最近ここに追加されたサーガの三名……そのうち二名が居ないというのは大きい。更に残るパム治郎はレイトの言うように基本杏寿郎とセットであるため、現状取れる手段がかなり限定されているというわけだ。

「『鬼』に関しちゃここでどうこう言ってもどうにもならねえ。対抗出来ないワケでもねえし、そん時考えるぞ。にしてもレイト、お前は先輩や後輩と一緒に調べ物しなくてよかったのか？」
「まあな。俺はレオと同じく現場を走り回ってるのが性に合ってんだよ。その方が、見つけてすぐブッ飛ばせるだろ？」
「成程、そりゃそうだ」

ニヤリと笑う竜馬とレイト。これではどちらが悪役側か分かったものではない。
そんな時だった――。

「た……助けてくれえ!!」
「「「!!」」」

悲鳴が聞こえてきた方向へ急いで駆けつける竜馬達であったが、距離的にそうであろう地点に着いても人っ子一人居やしない。

「やられた……！　クソッ、何処にいやがる!?」
「よし、離れすぎないようにしつつ周囲を捜索するぞ！　声を上げたらすぐ姿を晒せるぐらいがいい！」
「パム……？」
「おう！　見つけたらすぐ言えよ！」

竜馬・杏寿郎・レイトが散開して捜索に入る中、パム治郎はパタパタと空を飛びつつ……その場に残っていた奇妙な液体を眺めた。
今日は雨どころか雲一つない晴天、しかも夜は人通りが無い状態で何故こんなものがあるのか？
なんとなく訝しんだパム治郎は杏寿郎にそれを伝えるべく、少し離れたところにいる杏寿郎の元まで飛び肩を引っ張った。

「パム～パム～」
「む、どうしたパム治郎？」
「ヘンナ液体、ミツケタ。今日、雨降ッテナイ」
「何？　それは……」
「……！　パムー!!」
「うおっ!?　今度は何だ!?」

突如パム治郎が思い切り引っ張ったことに驚く杏寿郎だったが、信頼しているパム治郎が悪戯でこういうことをしないと知っている杏寿郎はすぐに冷静になって尋ねると、パム治郎はその手で『それ』を指す。
そこにはパム治郎が見た液体が少しずつ動いて杏寿郎に向かって来ていた。

「これは……!?」
「パムパム！　動イテル！　サッキノ場所カラ！」
「何だと!?　もしやこれが件の事件の犯人か！」

「うおおおお!?」

「!!」

杏寿郎とパム治郎が聞いたのは竜馬の声。一人と一匹はその液体に触れぬよう、飛び越えて竜馬の声が聞こえた方角へと走る。

「杏寿郎！　パム治郎も無事だな!?」
「レイト殿！　貴公にも聞こえたのだな！」
「ああ、あいつがやられるとは思えねえが……嫌な予感がしやがる！」

「こちらはパム治郎が怪しい液体を発見した！　俺も危うく触れるところだったが、パム治郎のおかげでどうにか触れる前に気付けたのだ！」
「パムパム！」
「液体だと……!?　ともかくまずは竜馬だ、確かこの先から……！」

角を曲がると、そこには何もなかった。
パム治郎が見たものと、同じ液体以外には。

「「!!」」

その液体は妙な音を発しながら杏寿郎達が見たもの同様、少しずつ迫ってくる。

「レイト殿！　これだ！　俺達が見たものと同じ……!?」
「パムー！」
「おい、あれじゃねえのか……お前らが見たってのは!?」

パム治郎とレイトが声を上げると、杏寿郎は自身らが走ってきた方向を見るとそちらからも液体がゆっくり迫ってきていた。どうやら液体は複数箇所に存在していたようだ。

「くそ……今はまだ数が少ねえ、一度退却するぞ！　このままじゃ全員やられる！」
「やむを得んか！　だが解決へは一歩進んだ！　この情報を何としても他の仲間達に伝えねば！」

二人はパム治郎を連れ、驚異的な身体機能をフル活用しその場を離脱する。
残された液体は、妙な音を発しつつも彼らの姿が見えなくなると静かに消えていった。

☆

その翌日、竜馬がやられたという衝撃の事実にウルトラ騎空団は震撼する。種類にもよるが、プラズマ怪獣をソロ討伐出来る彼がグランに続きやられたというのはそれ程に大きなショックだったのだ。

「冗談だろ……!?」

「俺達も直接見たわけじゃねえが、少し離れた時にやられたみたいだ。しかも俺と杏寿郎、パム治郎も危うく同じ目に合う寸前だったぜ」

「杏寿郎さん達程の実力者が危機に陥ったとは、やっぱりカミナさんが予想した通り……」

「うむ！　恐らくは戦闘能力で解決出来るものではないかもしれん！　今ミライ殿や矢的殿の協力で似たような過去の事件を洗ってもらっている！　何でもお館様が遭遇したことのある事件かもしれないとのことだ！」

杏寿郎の言葉にその場の全員が納得する。レジェンドはこの場のみならず、他のウルトラ戦士とは事件の遭遇・解決数が別次元で多い。そんな彼は後進の育成にと自身が経験した各種出来事を複数のデータベースにアーカイブとして残していた。

これにより助けられたウルトラ戦士や防衛チームは数知れず、まだ未熟であった頃の沙耶や、怪獣や宇宙人との遭遇も殆どなく対処に四苦八苦していた月王国女王即位時のモルガン達も恩恵に預かっている。

「たとえその場にいなくても、俺達が自らの手でどうにか出来るように事前策を用意しておいてくれる……お館様はさすがだ」

「うん！　お館様もしのぶちゃんもいないけど……その分、私達が頑張ろうね！　伊黒さん！」

正体不明の相手は、元の世界の鬼との戦いで慣れている。ある意味あちらも似たようなものだからだ。
そこへ矢的に『聞きたいことがある』と呼び出されたミナがやってきた。立場的に多忙だろうが疲れをまるで見せない彼女に舌を巻くウルトラ騎空団。
ソーナがセラフォルーより「お姉様」と慕うのも無理はない。むしろセラフォルーはもうちょっと頑張りましょう。

「此度の事件について進展があり、それに因んで尋ねたいと言われたから赴いたのだが……かなり事態は深刻らしいな。それで、私に聞きたいのはどういったことだ？」
「ええ。この事件で最初に行方不明となった人物はどういった方なのか、もし可能ならその人物の自宅ないし仕事場に行きたいのですが……」
「情報を渡すだけならさして問題ではない。しかし事態が事態とはいえ仕事場はまだしも自宅は……ふむ……よし、分かった。私の権限で許可、及び案内しよう。私が同行しているとなれば人数に制限はあれど都合はつけられる」
「「「「おお!?」」」」

正にデキる女傑、ロンド・ミナ・サハク。己が頼んだことである以上、自らも率先して事件解決に尽力する様はかつての野心家だった頃とは良い意味でまるで違う。

「そうなると、やはりミナ女史を護衛しつつ万が一の事にも対応出来る少数精鋭が必要だ」
「ならばそのうち一人は俺が行こう」
「ジークフリートさん!?　いつの間に!?」
「空の世界も少し込み入っていてな。そちらの対処を我夢に任せる代わりに俺がこちらへ来たというわけさ。本来ならこの手の事件は我夢の方が適任なんだが……」

銀河遊撃隊が誇る天才、我夢の相棒ポジションを確立したジークフリートが真っ先に名乗りを上げた。黒龍騎士団の団長も務め、一騎当千の実力を持つ彼なら問題無いだろう。

「あとは僕と……」
「ぼ……僕も行きますぅ！」
「ギャスパー君!?」
「ギャスパーが行くなら必然的に私も行くことになるな」
「バーンも……！」
「僕の神器ならいざという時に時間を止められますから、せめて逃げる時間くらいは稼げます！」

彼なりに何が出来るのか考え、自分から立候補したギャスパー。初めてリクとあった頃から大きな進歩を見せた彼をリクは嬉しそうに見つめている。

「ミナさんを筆頭に専門家の矢的先生、戦闘でズバ抜けた実力を持つジークフリートさん、サポート役に最適なギャスパー君とそれを守るバーンさん……十分とは思うけどあと一押し欲しいところだな」
「なら俺が行くぜ！　俺なら機械関係で何かあってもエヴォリュダー能力でどうにか出来るかもしれない！」
「非常時には私がオペレート出来るしね！」

最後のメンバーは凱。命のサポートも専属で受けられる彼は戦闘力・報連相両方の面で頼りになる。
こうしてウルトラ騎空団はミナの案内によって、選抜メンバーが最初に行方不明となった者の自宅へと向かうことになった。

☆

グランとシンは協力して同じ部屋にいた人々を起こして回り、出来るだけ密集してもらっている。
シンの方は妹・マユや両親もいたことで安堵していた。どうやら家族で食事するために外出していたところをやられたらしい。幸い、身体に何かされてはいないようだった。

「思ったより多いな……どういう目的で集められたんだろう？」
「一つだけ共通しているのは皆『人間』だということだけだ。犬猫一匹すらいやしない」
「貴方は……？」
「俺はオーブ軍のトダカというものだ。君は……恐らくだがウルトラ騎空団の関係者かな？」
「は、はい。グランです」

この状況においても冷静な軍人――トダカの存在はグランにとってありがたかった。これが慌てふためく新米兵であれば、この場はさらに混乱と恐怖が渦巻いていただろう。
逆にトダカも、年若いとはいえ身のこなしや落ち着きから年齢にそぐわぬ修羅場をくぐって来たと分かるグランがいてくれたのは心強い。
そして自分もそうだろうに必至でマユの不安を拭おうとしているシンもだ。

「うぅ……お兄ちゃん……」
「大丈夫だって。ほら、あの軍人さんもいるし、今噂になってる凄腕のウルトラ騎空団の人だっているんだ。マユが泣いてたらあの人達も心配になって、全力が出せないだろ？」

彼の両親も不安を隠せないというのに、大丈夫と笑顔を作る彼の何と健気なことか。
それに比べ、本来ならば凛としなければならない立場にいながら喚

き散らす者がいた。

「何なんだここは⁉　僕はセイラン家のユウナ・ロマ・セイランだぞ!!
　こんなことしていいと思ってるのか!!」

　そう、ミナをしてバカと断言された男……オーブ宰相家たるセイラン家の嫡男、ユウナ・ロマ・セイランである。
　彼の立場的にこういう時こそ人々を落ち着かせて少しでも不安を取り除こうとリーダーシップを発揮すべきであるが、如何せん度胸も能力も不足しており……予想外の事態が起きたらこのパニクり具合。実際トダカも額を押さえて溜息を吐いている。
　そもそもユウナは自業自得でここにいるようなものだが。

「おい！　お前オーブの軍人だろ！　早く何とかしろ！」
「そうしたいのは山々ですが、何分状況が完全に把握出来ていません。下手に考え無しの行動を取ればそれこそ取り返しのつかないことになるやもしれませんよ」
「うっ……」
「トダカさん、この部屋にトダカさん以外で軍属の方は？」
「三人、だな。この場の人数的な割合を考えると心許ない。せめて後二人……特に戦闘に強い者がいればまた変わったのだが」

　そうですか……と残念そうにしながらも策を模索しているグランをどうしてもユウナと比べてしまうトダカ。彼の落ち着きと度胸の少しでも眼前のバカ息子が持っていたならと思わざるを得ない。
「ウルトラ騎空団のメンバーに連絡が付けばいいんですが……機器の調子が悪いのか、それとも阻害されてるのか繋がらなくて。うちの戦闘メンバーの一人でもいてくれれば」

　グランがどうしようか悩んでいると、ドサッと何かが落ちる音がし

て全員がそちらを向くと……。

「う……ここは……？」

「クソ！　俺ともあろうものが姑息な手にやられちまうとはな……だがタネは割れた。次に見かけたら……」

「竜馬さん！」

「っ!?　グランか！　やっぱり無事だったな！」

オーブにて謎の液体にやられたであろう、オーブの軍人が一人と竜馬が倒れていた。まさかここで同じ騎空団の仲間、それもバリバリの戦闘メンバーに再会出来ると思ってもみなかったグランは自然と笑みが溢れる。

立ち上がり武器を構え直した竜馬はグランに詳しい事情を聞くと、すぐさま戦列に加わってくれた。元より口より先に腕が出るタイプの彼だから当然か。

さらに、オーブの軍人も快く了承。グランと竜馬が先頭に立ち、トダカらオーブ軍人がシン達を守るように囲いつつ移動することになった。

「お……おい！　本当に大丈夫なんだろうな!?　何かあったらタダじゃ……」

「う　る　せ　え　！　！

偉そうに踏ん反り返っておきながら国民の一人も守ろうとしない腰抜け坊主は黙ってろ!!」

「ひいっ!?」

相手がお偉いさんだろうが、自分が納得しなければ敬意なんぞクソも持たない竜馬の怒号にユウナはビビりまくり。グランやシン、果てはトダカらオーブ軍人すらも心の中で竜馬に盛大な拍手を送った。

「さて、まずはどうやってこの部屋から出るかだか……」

「人数が人数ですし、力づくで出るのは決定事項ですけど……正面突破か、それとも適当な壁をぶち抜いて奇襲も兼ねた無理矢理な強行突破かですね」
「おう、分かってるじゃねえか。すっかりウチの騎空団の一部隊を預かるリーダーだな」

グランの物騒な発言に驚くトダカ達であったが、竜馬は見る人によっては凶悪にも見える笑みを浮かべてグランの肩を叩く。

「相手がどんな戦力か分かってりゃ遠慮無く強行突破するんだがな。さすがにこっちは一般人を守りながらの、言うなれば移動防衛戦……守るのは攻めるより難しいと隼人から散々言われてんだ。俺らがおおとり師範ばりのブッ飛びスペックならいざ知らず、そうじゃないのにこの人数を抱えて冒険はあまりお勧め出来ねえ」
「となると、ここは敢えて狭い入口らしき場所から堂々と――!?」

竜馬とグランがそんな話をしていると、突如入口と思しき扉が開く。
そして、そこにいたのは――!?

「ヴォッフォッフォッフォッフォ……」
「ブゴォォォォォ……」

☆

ミナに先導され、辿り着いたのは一軒の屋敷兼研究所。不在の理由は何となく予想がつく。
しかも比較的整理整頓がされており、いなくなったのはつい最近のようだ。

「ここはミストル・ゴーデンという科学者の屋敷であり研究所だ。

ゴーデンが此度の件で最初に行方不明になった人物でな、当初は出奔しただの出張取材に行ってるだの、はたまた単に旅行に出掛けているだけとも噂されたが……ゴーデンは本も出していて、その中の一つに今回の事件とよく似た内容の物があったから少々気になって調べてみたのだ」
「その著書の名は？」
「確か……『Ｃ．Ｅ．２０２０年の挑戦』だと思ったが」
「！」

矢的はそのタイトルを聞いて何かに気付く。レジェンドは時折光の国を訪れてはウルトラ戦士が地球にいなかった頃、自身もウルトラマンであり光神でもあることを隠し当時の人々と共に戦っていたことを講義で話してくれた。その当時はまだ『ウルトラ兄弟候補生』であった矢的＝８０は、そんな人々の勇気と知恵に感動すると同時にそういった不可思議な事件への関心もあったため、マイナスエネルギーの調査も兼ねてかつて地球へとやってきたのだ。

閑話休題。

そんなウルトラ戦士が地球に訪れる前に起きた事件が今回の事件と酷似していた。そしてレジェンドの話では、その時も同じように一冊の本から相手が何者かを特定したという。

「どのような内容だったか、覚えていますか!?」
「矢的殿、何か分かったのか？」
「もしかしたら、チーフがかつて解決した事件と同じ犯人……正確には同じ種族の可能性があります。僕がチーフに聞いた話と今回の事件、似ているところがとても多いんです！」
「２０２０年の挑戦……っ！　俺も分かったぜ、矢的先生！　レジェンド様のところでＧＧＧが働くようになってから、俺も命や長官達とレジェンド様の過去の記録を見させてもらってるんだ。楽しんで見ることもあれば、見たメンバーで色々考察したりすることもあるんだが……」

ジークフリートの質問に答えた矢的と、レジェンド直属の部隊の機動隊長として活躍していた凱は揃って相手が誰なのか予想出来ていた。

「えっと……バーンは何か分かった？」
「いや……しかし、私はその著書のタイトルから怪獣ではなく、何か目的を持った『宇宙人』の方ではないかと考えた。例えば、モネラ星人のような」
「その通りだぜ、バーン。ただし俺達が戦ったモネラ星人とは目的がかなり違うし、手口もかなり狡猾だ」
「……！　凱、やはり君も『彼ら』だと思うんだな？」
「ああ。液体の件といい、この条件全てに当て嵌まるのは『奴ら』だ！　もし直接ではないとしても、少なからず間接的には関わっていると見て間違いないはず……っ!?　ギャスパー、バーン!!」
「「え？」」

凱が直感的に天井を見ると、驚きの表情と共に声を張り上げた。何かと思いギャスパーと、その肩に乗っていたバーンが上を見ると――。

二人目掛けて、例の液体が落ちてきた。

☆

――かの世界――

「すまんな、急にこちらを全て任せることになってしまって」
『全然！　元からそのつもりだったし、俺達の隊長達を宜しく！　大先輩！』

「そちらも頼むぞ。大隊長と総司令には既に連絡し、代わりの増援を送ってくれると返答もあった。無論、何かあれば駆けつける」

そう言って彼が通信を終えると、後ろから声をかけられた。

「全員、準備が整いました。合図があれば、いつでも出立出来ますわ」

「そうか」

短い返事の後、振り向いた先にいたのは一人の女性。

「君が来たということで息子から聞いていた彼が再起したかと思えば、まさかの変質とはな……」

「はい……あの時のあの方は、まるで別人でした。私のことすら忘れたように……いえ、それどころか最初から知らないような振る舞いで」

俯きながらそう話す女性に、彼は改めて確認する。

「まずはチーフ達の部隊……確かウルトラ騎空団だったか？　そこと合流だ。詳しい話はそれからにしよう。そして、これからの旅路は君達、いや……君にとって過酷なものになる。いいんだな？」

「はい。どうか御助力ください、『真紅の武神』様」

「いつの間にそんな二つ名が付いたのやら。そういえば、アイツにも似たようなのがあったか。ともかく、決意のほどは理解した。彼の方も正気に戻ったら鍛えてやるとしよう」

「ど……どうか御容赦を……あの特訓、あの方の家系的に肉体は問題無いかもしれませんが、本当に精神的に終わりかねませんので……」

そんな彼女の言葉に苦笑しつつ、彼は準備した『艦』へ乗り込むようにと彼女を促した。彼女が艦の中に入ると、彼は懐から一つのアイテムを取り出す。

そして――。

「デュワッ!!」

それを両目に被せるように当てると徐々に姿が変わり、彼は真の姿へと戻る。
同時に聞こえてくるエンジン音。当然、艦からだ。

「えっと……全システム、オールグリーン!」
「マキシマオーバードライブ、始動!」

もはや後戻りは出来ない。する気もない。
これから始まるのは、大切なものを取り戻すための果てしなき旅。

「ジャアアアッ!!」
「アートデッセイ号、発進!!」

赤き闘士（ファイター）に導かれ、光神が遺した希望は乙女達を乗せ……今、遥か彼方へ――。

〈続く〉